

# 国定読本用語総覧<sup>11</sup>：第六期『こくご』『国語』 昭和二十二年度以降使用 て～ん

|       |   |
|-------|---|
| 著者    | 国立国語研究所   |
| ページ   | 3-1000  |
| 発行年月日 | 1996-06   |
| シリーズ  | 国立国語研究所国語辞典編集資料；11  |
| URL   | <a href="http://doi.org/10.15084/00001624">http://doi.org/10.15084/00001624</a> |

国立国語研究所  
国語辞典  
編集資料  
11

# 国定読本用語総覧 11

第六期〔てゝん〕

○『こくご』『国語』昭和二十二年以降使用

国立国語研究所編



## 刊行のことば

国立国語研究所は、その事業項目として国語辞典の編集を掲げている。その一つは歴史的辞典であるが、日本語の展開発達を記述する基礎をなすものとして、我々は日本大語誌とも名づけるべきものを構想した。文献の上にたどられる限りの日本語の足跡を、用例として収集し、整理しようとするものである。

時代をかりに三百年、百五十年、五十年等に区切つて見るとき、一八五一年以後の時期は、日本語が近代的発展をとげた、著しい一時代である。そして一九〇一年からの五十年は、現代語の基礎の確立した時期と見ることができる。我々は、まずこの五十年にしばって、用例収集の作業にとりかかった。ここに取り上げる六種の国定読本は、ちょうどこの時期に使用されたものであつて、この時期の国語教育の基本教材であり、その用語は、それ自身発展しつつ、国民的な現代語の成立の基礎をなすことができる。

ここで国定読本というのは、明治三十七年四月から昭和二十四年三月までの間に使用された文部省著作の小学校用国語教科書六種のことである。その六種を使用時期に従つて示すと次の通りである。

- 第一期 明治三十七年より使用『尋常小学読本』（今日イエスシ読本と俗称）一～八
- 第二期 明治四十三年より使用『尋常小学読本』（今日ハタタコ読本と俗称）卷一～十二
- 第三期 大正七年より使用『尋常国語読本』（今日ハナハト読本と俗称）卷一～十二
- 第四期 昭和八年より使用『小学国語読本』（今日サクラ読本と俗称）卷一～十二
- 第五期 昭和十六年より使用『ヨミカタ』一～二『よみかた』三～四『初等科国語』一～八（今日アサヒ読本と俗称）

- 第六期 昭和二十二年より使用『こくご』一～四『国語』第三学年（上下）第四～六学年（各上中下）（今日みんないいこ読本と俗称）

第一期国定読本については、『国定読本用語総覧1』一冊にまとめ、第二期国定読本から第六期国定読本まではそれぞれ二分冊とする方針で刊行を進めてきている。このたび刊行するのは第六期国定読本の用語総覧の第二分冊であり、「てゝん」の部を収めるものであり、総集編を除く本編の最終巻となる。

この作業は、もともと、この時期の用語を採集する方法の検討のために、国語辞典編集準備室において試験的に行ってきたものであるが、昭和六十三年十月に国語辞典編集室が新設され、その室の事業として引き継がれた。作業方法については、最初手作業で行っていたものを、第三期からコンピュータ利用方式に切り換えるなどしたが、結果はほぼ当初の内容と体裁を踏襲してきた。今後とも内容については一貫した方針を保持するつもりであるが、第五期より体裁を部分的に改めた。すなわち、約一万三千の見出しのうち、特に使用頻度の高いもの（五期では度数二〇〇以上、六期では二五〇以上）約五十語についてのみ、文脈を固定長方式にした。いわゆるKWIC方式である。四段組を三段組に改めたのは、右の変更に伴うものである。文脈範囲指定に費やす研究者の時間を節約するのが目的であり、読者諸賢の御理解をお願いする。

この『国定読本用語総覧11』の編集作業及び諸本の調査にあたったのは、室長 木村睦子、調査員 林大（名誉所員）、貝美代子、久池井紀子、山田雅一、乾とねである。

国定読本の諸本の調査にあたっては次の機関及び諸氏のお世話になったことを記して謝意を表する。

国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館、東書文庫、財団法人教科書研究センター附属教科書図書館、山形県立博物館教育資料館、千葉県総合教育センター、筑波大学附属図書館、日本女子大学附属豊明小学校、国立国語研究所名誉所員 芦沢 節、文化庁文化部国語課主任国語調査官 安永 実、財団法人教科書研究センター特別研究員 中村紀久二、山形大学教授 石島庸男

また前十巻にひきつづき印刷刊行を引き受けられた三省堂にも謝意を表する。

平成八年四月

国立国語研究所長

水 谷 修

## 凡 例

- (一) 内容 (二) 底本 (三) 用語採集の範囲 (四) 見出し語の立て方 (四・一) 単位 (四・二) 読み (五) 見出し語の注記 (五・一) 見出し (五・二) 漢字 (五・三) 品詞 (五・四) 人名・地名などの注記 (五・五) 度数 (五・六) 表記 (五・七) 活用形 (六) 見出し語の排列 (七) 用例と所在 (七・一) 用例文 (七・二) 所在 (七・三) 層別

## (一) 内 容

本書は、昭和二十二年度から用いられた第六期国定読本『こくご』『國語』（いわゆるみんないいこ読本。全十五冊。）の全用語を五十音順に排列し、その全用語のうちテからの部までを収めたものである。

## (二) 底 本

各種機関または個人の所蔵本を底本として用いた。詳しくは巻十所収の解説参照。

これまでは底本に忠実にしたがうことを宗とし、編纂趣意書によって改める以外に手を加えることをしなかった。しかし、この第六期国定読本は、戦後の混乱の中で非常に急いで編集され、印刷されたものらしく、随所に誤植らしきものが見られる。これまでの例にしたがって初年度使用本を底本にしたところ、多くの誤りが目についたため、其の部分については二十三年度本を参照し、改められている場合はそれに従った。

## (三) 用語採集の範囲

底本のうち、

- ① 目録  
② 本文  
③ 図版

の部分を用語採集の対象とした。ただし、③のうち、判読しがたい語は除いた。表紙・扉・ページを示す数字・奥付などの部分は、用語採集の対象としない。

なお、六期については編纂趣意書も教師用書も存在せず、したがって読み方を指示するような資料はすくなくとも公には出されていないが、編集者らが調査した新出漢字と読み替へは、本書の巻末にまとめて付録とする。

## (四) 見出し語の立て方

## (四・一) 単 位

自立語は原則として文節から助詞・助動詞を切り離したものを一単位とし、助詞・助動詞は、『現代語の助詞・助動詞——用法と実例』（国立国語研究所報告3）を参考にして単位を決定した。ただし、

- ① 形容動詞は立てない。形容動詞の語幹にあたる部分を「形状詞」として一単位とし、語尾にあたる部分を助動詞とする。

- ② サ変動詞「する」、および「いたす・くださる・なさる・もうしあげる」など意味上ほぼサ変動詞「する」にあたるものが、体言または体言相当のものにじかに接続している場合は切り離さない。

格助詞（格助）  
副助詞（副助）  
係助詞（係助）  
接統助詞（接助）

並立助詞(並助) 準体助詞(準助) 終助詞(終助) 間投助詞(間助)

また、動詞は活用の種類によって分かち、次のように示した。

四段(四) 五段(五) 上二段(上二) 上二段(上二) 下二段(下二) 下二段(下二) カ行変格(カ変) サ行変格(サ変) ナ行変格(ナ変) ラ行変格(ラ変)

#### (五・四) 人名・地名などの注記

見出し語の意味・用法について、必要に応じて、「人名・地名・課名・話し手名」などの注記を加えた。なおその場合には品詞は省略した。

#### (五・五) 度数

見出し語ごとに、その使用度数(用例の数)を記した。

#### (五・六) 表記

その見出し語の全用例について、片仮名・平仮名・漢字や、振り仮名の有無などの表記の異なりを列挙した。二種類以上の表記がある場合は、次の順とした。

- ① 片仮名
- ② 平仮名
- ③ 変体仮名
- ④ 漢字(片仮名の振り仮名つき)
- ⑤ 漢字(平仮名の振り仮名つき)
- ⑥ 漢字(振り仮名なし)
- ⑦ アラビア数字
- ⑧ ローマ字

#### (五・七) 活用形

活用のある見出し語の用例について、活用形の異なるものを列挙し

た。ただし、ここである活用形の異なりとは、未然形・連用形などの別ではなく、語形上の異なりをさす。

活用形を列挙する際、活用しない部分(見出しで、中点・より前の部分)は「」で記し、活用する部分を、原文通りの仮名遣いで、片仮名によって示した。

また、二つ以上の活用形がある場合は、五十音順に並べた。

#### (六) 見出し語の排列

見出し語の排列は現代仮名遣いの五十音順とする。ただし、片仮名は平仮名に、濁音・半濁音は清音に、小字(アイウエオ つやゆよ)は普通の仮名に、長音符号「ー」は直前の仮名の母音に、それぞれ置き換えたものとみなして、一字目から順次、五十音順に排列する。

同じ仮名の連なりとなった見出しは、次の各項を一字目から順に適用して排列する。

- ① 清音→濁音→半濁音
- ② 小文字→大文字 すなわち、拗音→直音、促音→直音
- ③ 普通の仮名→長音符号

以上によっても排列の決らないものは、次の各項を順に適用して排列する。

##### ① 次の品詞順とする。

名詞→代名詞→形状詞→副詞→連体詞→接続詞→感動詞→助詞→動詞→形容詞→助動詞

a 名詞のなかでは次の順とする。

課名→話し手名→人名→地名→それ以外の名詞

b 助詞のなかでは次の順とする。

格助詞→副助詞→係助詞→接続助詞→並立助詞→準体助詞→終助詞→間投助詞

c 動詞のなかでは次の活用順とする。

四段↓五段↓上二段↓上一段↓下二段↓下一段↓カ変↓サ変↓ナ変↓ラ変

② 漢字表記の付けられるもの、付けられないものの順とする。

a 漢字注記の付けられるものについては、字数の少ないものから多いものの順とする。字数が同じ場合は、一字目の画数順とし、一字目が同画数の場合は、『康熙字典』の順に並べ、同字はまとめたうえで、二字目の画数順とする。

b 漢字表記の付けられないものについては、平仮名↓片仮名（外来語）の順とする。

## (七) 用例と所在

### (七・一) 用例文

用例は、仮名遣い・分かち書きなどまで、できるだけ原文通りとした。漢字字体は、対応する普通の明朝活字体とした。

用例の長さおよび体裁は、巻8から見出し語により二通りに分けた。すなわち出現頻度の高い語（主として助詞・助動詞）はKWIC形式とし、それ以外のは、従来通り可変長とした。用例文の中間の一部を省略する場合は、〈略〉のように示した。

同一見出し語に含まれる用例は、底本における出現順に排列した。

用例中、見出し語にあたる部分は太字で示した。

なお、五十音図・いろはは、本文ではそれぞれ一部分を示すにとどめ、付録に全体の形を示す。

### (七・二) 所在

用例は、見出しにあたる語のはじまる位置によって、底本の巻・ページ・行の順で所在を示した。第六期国定読本は、学年によって書名の表

記が『こくご』と『國語』に分れるが、巻番号は通して数える。すなわち、『こくご』一〜四が巻一〜四に、『國語』第三学年上下が巻五・六に、『國語』第四学年上中下が巻七〜九に、第五学年上中下が巻十〜十二に、第六学年上中下が巻十三〜十五にあたる。

なお、図版中の語は、



### 五 36 図

のように記し、図版中の語であることが分かるようにした。

### (七・三) 層 別

用例文の文体上の性格を次の三類八種に分類した。

- ① 口語文 文語文 候文
- ② 散文 韻文 手紙文
- ③ 地の文 会話文

以上のうち、口語文・散文・地の文については注記せず、それ以外は、上記の分類の第一字目によって、  のように区分を示した。ただし第六期には候文は出てこない。

なお、目録と図版中の語については、原則として層別の表示を行わない。

## て

て「手」(名) 208 て 手 ↓ あいて・いたで・いろ

いろなあいて・うらて・おくのて・かたて・かみて・かみてはんぶん・こて・しもて・しもてはんぶん・せんで・はなしあいて・ひだりて・ひらて・みぎて・やつて・ゆくて・よみて・りうて

— 84 罫 むすんで、ひらいて、てをうって、むすんで、

— 87 罫 またひらいて、てをうって、そのてをうえに。

— 88 罫 そのてをうえに。

— 162 じをかくときには、てをつかいます。

— 226 「おててつないで」のところで、おともだちとてをつなぎました。

— 235 「うたをうたえよ」では、くちに てをあてて、らっぱのようにしました。

— 23 10 「はれた おそらくつがなる」では、てをうえにさしあげました。

— 292 手は二ほん、みぎひだり。

— 296 手となかのいいことは。

— 307 この手で、なにをもったでしょう。

— 311 この手で、なにをもつでしょう。

— 488 わたくしは、おばあさんの 手をとってあげました。

— 574 きしやからかけおいて、手をとりにあいました。

— 624 「へ略。」といって、わたくしの手にたまをおつけました。

— 639 おんがくに つれて、みんなが 手をとっておどりました。

— 331 罫 いや、目でみなくても、手でさわったことがあるかい。

— 45 10 罫 手の上にごむまりをのせているね。

— 478 手に大きなりんごをもっています。

— 488 いちろうは、りんごをだして、じろうの手にわたします。

— 529 おかあさんは、本をおいて、りんごを手にとります。

— 82 罫 さあ、手をつなごう。

— 83 罫 手をつなごう。

— 161 はちをもった手が、するするとおしゃかさまの目のまえにのびてきました。

— 165 罫 だれの 手だろう。

— 168 罫 これははんたかの 手でございます。

— 16 10 罫 あれは門の そとにいますので、このはちをわたくしにとどけようとして、手をこ

こまでのぼしたのです。

— 413 この町の 手となり足となって、はたらいしています。

— 416 おかしをしっかり手にもってねんねした。

— 417 おかあさんの 手の上につかまってひいた。

— 418 そこで、おかあさんの 手の上で、力いっぱいひいた。

— 420 罫 みんなで 手をつないで、わをつくりました。

— 632 かっちゃん、なかまの 手をとって、い

そいでとんで かえりました。

— 477 お—おにさんこちら、手のなる方へ。

— 499 うらしまは、おかねを子どもたちの 手に、それぞれわたしてやります。

— 1008 かめは、手で なみだをふきながら、なんども おじぎをします。

— 1063 かめは、うらしまの 手をとって、そこら

をぐるぐるとあるきまわります。

— 1128 おもしろい、おもしろい。」手をたたいてよろこびます。

— 11610 うらしまは、たまてばこを手にもって、

— 1183 かめが、うらしまの 手をとって、でて

いきます。

— 1185 みんな、手をふってみおくりします。

— 1222 罫 それから、みんなの手で、そだてられ、長い長い でんせんをつたわって、ここまでた

びをしてきたのです。

— 202 私もその人の手ににぎられながら、あちら

こちらへまわりました。

— 209 みつおさんがよろこんで、私を手にとりあげました。

— 445 罫 世界の友よ、手をつなぎ、なかよくとんであそぼうよ。

— 534 「へ略。」えらいわね。」といって、手をたたいてやりますと、まさこも、まるくふとった手をたたきました。

— 535 まるくふとった手をたたきました。

— 631 罫 こやしをやったり、手をやったりしたじゃありませんか。

— 867 りょうかんさんは、ほうきの手をとめて、

— 88 罫 こうして右の手でだいてな、左の手でか

かえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

— 88 罫 左の手でかかえてさ、

— 637 手をあらって、しゃぼんを水の上へおいた

ら、つるつとすべった。

七六五 〔手だよ。〕といいながら、この手が動かないから、やはり雪だるまは命がないのかなと思いました。

七六六 この手が動かないから、

六九二 〔ほら、左のむねのところに手をあててごらんさい。〕

六九一 左の手に、めがねのたまを持って、目から遠くはなした。

六四四 右の手に虫めがねを持って、

六四七 とらさんが手をのぼして、一びきのうさぎさんのせなかをおさえました。

六四四 そのあいだに、うさぎさんたちは、手をつないで、そこをにげました。

七六九 手をつないで校門をでていく子ども、

七七五 〔なんども手をふりながら、先生にさようならをして走って帰る子ども。〕

七一二 〔手がよごれていますよ。〕

七一一 〔手がつけられません。〕

七一一 〔手がたりない。〕

七一一 〔同じ「手」ということばにも、いろいろなつかいかたがあります。〕

七一一 じょうずなできばえをみたとき、感心して、思わず手をたたきます。

七一一 このときの「手」は、てのひらをさしています。

七一一 〔手をうつ〕の「手」も、〔手をあわせる〕の「手」も、これと同じつかいかたです。

七一一 〔手をうつ〕の「手」も、

七一一 〔手をあわせる〕の「手」も、

七一一 〔手をあわせる〕の「手」も、

七一一 〔かごの手〕とか、「なべの手」となると、

人の手ではありません。

七一二 〔なべの手〕となると、

七一二 人の手ではありません。

七一二 〔あさがおに手をやりましょう。〕というときの「手」は、またすこしちがいます。

七一二 〔「略」〕というときの「手」は、またすこしちがいます。

七一二 これは、あさがおのだしている手のことではありません。

七一二 〔「きゅうりの手」や「豆の手」なども、同じです。〕

七一二 〔「きゅうりの手」や「豆の手」なども、同じです。〕

七一二 〔「だいぶ手があがった。』このときの「手」は、文字を書くことをさしていますが、〕

七一二 このときの「手」は、文字を書くことをさしていますが、

七一二 どうして、「手」ということばが、文字を書くことになってきたのでしょうか。

七一二 〔手をつくす。〕

七一二 〔「いますこし、手をいれてみよう。』

七一二 〔新しく手をつけた。』

七一二 このようなときの「手」は、どんなふうにつかわれているのでしょうか。

七一二 〔「まいの手」といったり、〕

七一二 〔「この手でやってみよう。』とかいったりします。〕

七一二 私どもの手が、さまざまなたらきをするように、

七一二 〔「手」ということばも、さまざまなたらきをしてくれます。〕

七一二 つぎの「手」は、どんなつかいかたでしょうか。

うか。

七三四 〔「すばらしいものを手にいれたね。』

七三四 〔「そんなに、手をやかせるな。』

七三四 〔「ちょっと、手にあまるしごとだな。』

七三四 〔「手」だけではありません。〕

七三四 私、さぶろうの手をしっかりとにぎり、さぶろうは、私のからだにすがりついていました。

七三二 私、さぶろうのかたに手をかけて、〔「略。』ときいてみました。

七三〇 私のよこのわかい男の人が、〔略、両方の手でもどわくをおしています。〕

七三〇 しかし、弟の手をひいているので、ひとあしすむにも、よいいではありません。

七二八 かなり早く走っているのに、青年のからだはゆれていたが、ひく手にくるいはなかった。

七二四 しかし、青年は、ひく手をやめないで、いっしんにひきつづけていた。

七二四 そこで、老人は、自分のかぶっていたぼうしを、そばの人の手に渡した。

七二四 ぼうしは、つきつきと人々の手を渡り、お金がその中にたまった。

七二四 わたしの手にさわったものが、みんなこがねになったら。

七二四 こんなひとりごとをおっしゃって、そこらの木の葉や花にみんな手をおふれになりました。

七二四 王さまは、ご病氣をなさって長いことお苦しみにりましたが、いくら手をつくしても、よくおなりになりません。

七二四 王子は手をうって、〔略。』と喜んで、

七二四 みんな手をあげて、〔略。』と、汽車によびかけた。



八八七 たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、  
 おかみさんは手をたたいておこった。  
 八九二 子どもたちは、手をたたいておどりまわった。  
 八九六 ういたもみがあったので、手ですくってみ  
 ますと、かるいもみともみがらばかりでした。  
 八九七 いねこききかいをつかわずに、手でいねこ  
 きをした人もいました。  
 九二一 いく千というつばめたちは、人をおそれず、  
 へやにはいつてくる人があると、たちまち、その  
 九三六 手にとつて口へいれると、つめたくてあ  
 まい味がしました。  
 九三八 高くて手のとどかないかれ枝は、  
 九四八 大きなかきが、ころころと二つ三つ落ち  
 ているのをみたときは、思わず手にとりあげます。  
 九五四 すると、りすは、木の上からひたいに手  
 をかざして、いちろうをみながら答えました。  
 九五六 せいひのひくい、おかしなかつこうの男が、  
 ひざをまげて、手に皮のむちを持って、  
 九六八 やまねこは、「略」、ひたいのあせをぬぐい  
 ながら、いちろうの手をとりました。  
 九八二 ぼくらは、ときどき手をとめて、そこをの  
 ぞきにいつてみると、  
 九八八 みんなはほる手をとめました。  
 九八八 一のししやしかの角などに手を加えて、  
 なにかの道具につかった物があつたでしょう。  
 九八八 ぼくだっていやだ。」と、つかまれている  
 手をふりはなそうとする。  
 九八九 ふたりともむきになつて、友だちの手から  
 ぬけだそうともがく。  
 九九七 やまだの手をひっぱって、「略」。

九三九 首がいたいらしく、手でさすっている。  
 九四一 みんなは思わず手をたたいた。  
 九四九 父は、その泉の水を手ですくって、いくど  
 もうまそうに飲んでから、私にいった。  
 九五三 私は手をいれて、それをすくおうとすると、  
 九五九 くもが、手でさすっているあいだに、  
 九六四 くもは、長い手をのばして、わけなく白い  
 ちようちよをとらえました。  
 九六六 おかあさんときいて、くもは、手をうんと  
 のばして、とりすがろうとしました。  
 九六八 くもは、そつと自分の手をのばし足をのば  
 してみました。  
 九七三 ふしくれた手、とがった足、うすきみのわ  
 るいかたち、いままでこの手で、この足で――  
 九八四 いままでにこの手で、この足で――  
 九八八 「略」と、おとうさんが頼みましたら、  
 少女たちは、手をとってとんでいって、  
 九八八 これを人の手によらず、機械の力で動かす  
 ようにしたかった。  
 九八八 小学校をただだけのかれには、手のとき  
 そうもない空想になりがちであつた。  
 九八八 かつて、パリーの眞珠商たちが、幸吉の手  
 になる養殖眞珠は、まがいものであるといった。  
 九八八 そのとき、いままでかたにかけていたすい  
 とうをはずして、手に持つといひます。  
 九八八 かたにかけると重いから手に持つのだと、  
 ませたことをいって、歩きだしました。  
 九八八 そうしたら、二年生の男の子が、ふくろう  
 のからだを手でいじりました。  
 九八八 「ほら、のんのさん、のんのさん」と  
 いって、月の方へ手をやつたら、  
 九八八 こしをうしろにひき、せんすの手だけをま

えにつきだして、あおきつづけていました。  
 九八八 まきをとりに山へいく、そのいき帰りに、  
 いつもその本を手からはなさず、  
 九八八 看護婦がふたり、手にくすりびんを持っ  
 て、へやを歩きまわっていました。  
 九八八 一方の手で、ふとんの上におかれたまま  
 動かずにいる、うでをつかみました。  
 九八八 そのとき、少年は、かるい手がふとかた  
 にさわつたので、びつくりしてとびあがりました。  
 九八八 医者は、手を少年のかたにかけました。  
 九八八 「略」と、医者は、もう一ど少年の  
 かたに手をかけながら答えました。  
 九八八 病人のふとんをなおしたり、ときどきそ  
 の手にさわつてみたり、はいを追つたり、  
 九八八 看護婦がなにか飲み物を持ってくる、  
 コップなりさじなりをその手から取つて、  
 九八八 飲み物やくすりや、少年の手からでなけ  
 れば飲まないようになりました。  
 九八八 みると、一方の手にあつくほうたいをし  
 たひとりの男が、  
 九八八 チチロはまた、病人に飲み物を飲ませた  
 り、ふとんをなおしたり、手をさすつたり、  
 九八八 少年は病人の手をにぎりました。  
 九八八 そのとき、少年は、病人が自分の手にな  
 ぎりしめたような気がしました。  
 九八八 「ぼくの手をにぎつた。」と、少年は  
 さげびました。  
 九八八 一方の手で花たばを取りながら、一方の  
 手で目をふきました。  
 九八八 一方の手で目をふきました。  
 九八八 道灌は、その花の枝を手にはしましたが、  
 なんのことだかその意味がわかりません。

- 十二109 ポケットに手をいれましたが、とりだしてみせたものは、ガラスのかげらばかりでした。
- 十二123 リビングストンがちよっとそとにでかけたるすにやってきて、その書物を手にとりました。
- 十二153 そうして、文雄が手をのぼすと、すばやくあなの中へかくれてしまった。
- 十二272 たった九十センチぐらいのところでも、〈略〉、すぐに手をついて、いざり歩きになります。
- 十二334 先生は、私の手に、「人形」という文字をつづられました。
- 十二358 私は、〈略〉、新しい人形を手にとって、ゆかにたたきつけました。
- 十二3611 だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をこの口の下へやりました。
- 十二371 冷たい水がいきおいよく流れているあいだに、別の手に、はじめのはゆっくりと、次には早く、「水」という字を書いてくださいました。
- 十二3712 私の手にふれるあらゆるものが、生命をもつて動いているように感じはじめました。
- 十二411 サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひとりのようになって、勉強をはじめたのです。
- 十二415 手のひらに文字を書くことから、進んで手と手をにぎりあい、そのにぎりかたによって「ことは」をとりかわすようになりました。
- 十二415 手と手をにぎりあい、
- 十二4511 図 いまいった文樂は手づかうのだが、
- 十二521 3 手の作りかた。
- 十二527 4 着物の作りかたと手のつけかた。
- 十二534 (4) 手は、手さきのほうをいれて、穴に糸を通してぬいつける。
- 十二536 (5) 顔と手をつけた着物を裏返すことができ

- 十二738 子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようとしています。
- 十二739 あられはその手にはのらないで、
- 十二851 見物人は、いよいよ手にあせをにぎりました。
- 十二938 文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんども書きなおすことができる。
- 十二951 花を手にいっぱいつんで帰ったことを思う。
- 十二1069 二ひきのうさぎが、うしろから手をふり足をふって、おうえんをはじめました。
- 十三503 元気でゆかいに、手をつなぎましょう。
- 十三537 その下の白いところに、先生の手で、こう書いてありました。
- 十四491 寒さに氣を失って、またから手をはなさないように、
- 十四5611 図 ごらんさない、私のこの足を、手を。
- 十四9311 女の子は、手にマッチの小さなたばを一つ持っていた。
- 十四964 女の子は、手にもえつくしたマッチを持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。
- 十五64 文 図 家を出て手をひかれたるまつりかな
- 十五92 圖 こどもら手をつないだ中を日ぐれのうまが通る
- 十五223 女の子は、〈略〉、とかく家庭教師の手からはなれて行きそうにしていました。
- 十五333 女の子は、にこにこわらって、この自分のすくい主へ手をさしだしていました。
- 十五464 ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵のはちを手にとって、かれは、びっくりした。
- 十五544 博士は、しずかに歩みよる私が手にしているしうかい状に目をそそいで、

- 十五732 やがてすがたをあらわした博士の手には、〈略〉、なつかしい数々の写真があった。
- 十五758 自動車のドアに手をかけた老博士が、
- 十五766 別れの手をさしのべると、
- 十五8611 チルチルの方へ手をさしだしながら、  
ふと「チルチルさん、ごきげんよう。」  
幸福
- 十五885 図 ふたりとも手はパンのしんだし、目はものジャムですよ。
- 十五893 (チルチルの手をにぎりながら) まあ、おいでなさい。
- 十五8910 (ふたりの子どもに手をだしながら) さあ、どうぞ。
- 十五1041 図 『冬の日の幸福』は、こえた手のために、きれいなむらさき色のマントを開きます。
- 十五1096 図 手をひろげてこちらへかけてくる。
- 十五1099 「母の愛の喜び」の手をたいてむかえます。
- 十五1136 図 それから、これもおかあさんの手だ。
- 十五11312 図 この手でおまえのせわをしているときは、いつだってこんなに白くなって、
- て (格助) 4 テ て
- 三685 図 「風はなんていつてるの。」
- 十491 図 アンヨナメテルワ——クツケルヨ  
——フツテ——
- 十5012 図 「フツテ」と、ひとりごとをいきました。
- 十三596 図 なんというか、ただのおかあさんではなくて、キリストのおかあさんという感じが、
- て (接助) 645b テ て で ♪あなたのおもっていることは・あらためて・いずみをもとめて・いたって・いねをそだてて・おててつないで・かえって・きまてて・きわめて・けつして・こうして・こころにいきっていることば・したがって・せめて・そうし

て・たいして・といて・どういたしまして・どうして・として・なっていない・なっていないもの・はじめて・はじめてのおかね・はたして・ひかりをもとめて・みてとる・むすんでひらいて・やってくる・わけても

— 82 圃 ひらいて むすんで、ひらいて、てを  
— 83 圃 すんで、ひらいて、てをうって、  
— 84 圃 て、てをうって、むすんで、また  
— 85 圃 うって、むすんで、またひらいて、  
— 86 圃 、またひらいて、てをうって、  
— 87 圃 て、てをうって、そのてをうえ  
— 18 6 圃 さぎ、なにみてはねる。十五や  
— 19 2 圃 おつきさま みてはねる。ひらいた  
— 21 2 圃 「おててつないで、のみちをいけば  
— 21 5 圃 ことりになつて、うたをうたえば  
— 22 3 圃 かつてにかんがえて おどりました。わ  
— 22 5 圃 「おててつないで」のところ、お  
— 23 2 圃 いことりになつて」のところはこま  
— 23 5 圃 、くちにてをあてて、らっぱのように  
— 24 2 圃 「ばんの「はねて おどれば」のそこ  
— 32 1 圃 、つぎつぎと かいて みました。ただお  
— 34 3 圃 は、なにになつて みたいとおもいま  
— 34 7 圃 へ。「かぜになつて、どこでもどんど  
— 34 8 圃 どん ふきまわつて みたいのです。」へ  
— 35 4 圃 いなはなにになつて、おへやをかざり  
— 36 1 圃 へ。「うみになつて、せかいじゅうの  
— 36 6 圃 かい 木にとまつて、うたをうたいた  
— 37 6 圃 ます。川がながれて います。川が、さ  
— 37 7 圃 さらさらとながれて います。ちいさな  
— 38 1 圃 さらさらとながれて います。いぬがは  
— 38 2 圃 す。いぬがはしつて きます。しろい  
— 38 3 圃 ろい いぬがはしつて きます。しろいこ

— 38 6 圃 げるように はしつて きます。あさがお  
— 39 5 圃 んときしゃにのつて、お月さんのとこ  
— 42 3 圃 。みんなもうごいて いますよ。木もは  
— 42 4 圃 ますよ。木もはえて いますよ。せんせ  
— 43 6 圃 さんがそばに たつて いました。「略」  
— 43 8 圃 くんだよ。いそいで でかけよう。「略  
— 44 3 圃 。ふたりで いって いらっしゃい。」と  
— 44 7 圃 ふたりはいそいで えきに いきました  
— 44 10 圃 かくせいきが よんで います。「略」  
— 45 10 圃 もちものを しらべて います。かたなだの  
— 46 2 圃 んな とりあげられて しまいました。(へ  
— 46 5 圃 た。かぼんを あけて なかを みせますと  
— 46 8 圃 やで、こしを かけて まつて いますと、  
— 46 8 圃 こしを かけて まつて いますと、おおき  
— 47 3 圃 しめがねで のぞいて みながら いまし  
— 47 8 圃 「略」そう いって、おとうさんの も  
— 47 9 圃 おとうさんの もつて いた 四かくなか  
— 48 1 圃 おきなはんを おしてくれました。(四  
— 48 5 圃 「きしゃは すいて います。ごじゅん  
— 48 8 圃 んの にもつを もつて あげました。わた  
— 48 9 圃 あさんの 手をとつて あげました。よに  
— 48 10 圃 よにんが むきあつて、なかよく こしを  
— 49 2 圃 いなはなが かざつて ありました。ぴい  
— 49 8 圃 (五) きがついて みると、さつきの  
— 50 9 圃 ようさんが まわつて きて いいました。  
— 50 10 圃 さんが まわつて きて いいました。「略  
— 51 6 圃 には もたれあつて、ぐうぐうと ねて  
— 51 7 圃 て、ぐうぐうと ねて しまいました。(へ  
— 52 1 圃 いかげが ふきこんで きたので、目がさ  
— 52 3 圃 おきな 川がながれて いました。「略」  
— 52 7 圃 なほしが ひかつて いるでしょう。」お  
— 53 2 圃 「ひとつ ひろつて いって おかあさん

— 53 2 圃 つひろつて いって おかあさんのおみ  
— 53 10 圃 いしころに なつて しまいました。「略  
— 54 5 圃 のなかに いれて もらえます。「略  
— 54 10 圃 っこうには いって、べんきようして  
— 54 10 圃 て、べんきようして くるのです。そう  
— 55 4 圃 んのくへい いて もらえます。「略  
— 55 7 圃 そのたまを もつて いますか。「略」  
— 55 8 圃 へ。「ここに もつて います。」とい  
— 55 9 圃 「略」といって、ぽけつと からう  
— 56 2 圃 をひとつ とりだして、わたくしに みせ  
— 56 5 圃 おべんとうを たべて、ちよつとうとう  
— 56 7 圃 きしやは もう ついて いました。まどの  
— 56 10 圃 、たくさん ならんで いました。しろち  
— 57 4 圃 しゃから かけおりて、手をと りあいま  
— 57 10 圃 ちゃんのみを みて きました。「略  
— 58 3 圃 しろいぬを おつて くださなかつた  
— 58 5 圃 たら、どう なつて いたか わかりませ  
— 58 8 圃 「略」といって、おれいを いいま  
— 58 10 圃 。それから、そろつて しろちゃんのうち  
— 59 4 圃 つきみそうの さいて いる おはなばたけ  
— 59 9 圃 、みんな よろこんで、めいぶつのおだ  
— 60 1 圃 もちを、ごちそう してくれました。(十  
— 60 3 圃 のおうちに おいて いただいた おかけ  
— 61 1 圃 もんどを ひろつて きたのですね。「へ  
— 61 5 圃 もんどを とりだして、「略」とい  
— 61 7 圃 のおみやげに してください。」とい  
— 61 10 圃 いしころに なつて しまわなかつたら  
— 62 4 圃 「略」といって、わたくしの 手に  
— 62 8 圃 いたのかとおもつて みまわすと、山の  
— 63 8 圃 。おんがくにつれて、みんなが 手をと  
— 63 9 圃 みんなが 手をとつて おどりました。お  
— 64 1 圃 わの なかに はいつて、おはなばたけを

645 こしかけにもたれて、うとうとしまし  
 648 さんのよくねていること。」おかあ  
 658 にふたつひかっていますよ。」とい  
 659 「略。」といって、おかあさんは、わ  
 6510 のうえにだきあげてくれました。あ  
 44 みんなであつめてみましょう。「あ  
 59 のなをかんがえて、ごらんないさ。」  
 65 「よくかんがえて、ごらんないさ。ま  
 75 ものを、あつめてみましょう。」あ  
 91 、みんなかきとめておきました。(三  
 93 れをごらんになって、「略。」「とおた  
 95 やごちゃになって、そろえることは  
 95 す。なんとかして、そろえることは  
 112 えどおりに、わけてごらんないさ。そ  
 116 がえどおりにわけてみました。わけて  
 117 てみました。わけていけるうちに、その  
 118 いろいろにかわっていききました。はじ  
 122 木のはをならべてみました。かたち  
 125 にたものをならべてみました。ちがっ  
 126 がつたのをならべてみました。いろい  
 127 た。いろいろかえてならべました。お  
 135 けみどりいろをしていきました。おさ  
 136 た。おさらのせてかざりました。太  
 142 した。あめがやんで、にじがでした。  
 145 やぼんだまをふいてあそびました。赤  
 175 かんがえものをしてあそびました。「へ  
 176 た。「口からたべて、おなかからだす  
 177 れたきものをきて、かわくとぬぐも  
 192 ときにいらなくて、いらないうきに  
 194 「略。」「ねむっていても、みえるも  
 201 んじゅんにつづけて、あそびました。よ  
 213 くもがすをかけていました。しまい

213 しまいまでみていたいとおもいま  
 215 なったので、やめてきました。「略」  
 231 で、はとをだいていたら、たいへん  
 235 、ゆりの花にきていましたよ。「略」  
 237 花が、さきかけてしほみました。み  
 237 しほみました。みてください。「略」  
 244 っとぶらさがっていました。あんま  
 245 んまりいろがにているので、ぼく、  
 247 たくさんとまっています。これから  
 252 に、おはなしをしてきました。きよう  
 262 くつがながれてきました。きゆう  
 263 ゆうりがながれてきました。きゆう  
 274 た。「きみ、どいてくれたまえ。」と、  
 279 。きみこそどいてくれたまえ。」と、  
 283 つのを、おしあてていました。そのう  
 284 、どぶんとおちてしまいました。「  
 288 ぶたが、そろって川をわたりました  
 291 した。きをつけてわたりましたから、  
 293 。きしにあがってから、かずをかぞ  
 294 、かずをかぞえてみました。一ぼん  
 302 んはしんばいして、もう一どかぞえ  
 302 もう一どかぞえてみました。「略」  
 309 わたしがかぞえてみよう。」とんちゃ  
 310 ちゃんが かぞえてみました。やっぱ  
 312 、ぼくが かぞえてみよう。」ころちゃ  
 313 ちゃんが かぞえてみました。けれど  
 315 、ぶうぶういってさわぎたてました。  
 319 「略。」といって、大さわぎをしま  
 335 や、まだ、さわってみたこともない。  
 337 んなはなしをしていけると、どしんど  
 338 いうおとがしてきました。「略」  
 339 っとそこをどいてください。ぞうが

343 ものに、さわらせてくれませんか。「へ  
 347 『じゃあ、さわってごらん。』とい  
 348 「略。」といって、ぞうをとめまし  
 3410 うのそばによってきました。はじめ  
 351 のおなかをなでて、こよいいました。  
 354 のきばにさわって、こよいいました。  
 356 うよ。つるつるして、とがったものじ  
 357 のはなにさわって、「略。」とい  
 3510 は、耳にさわって、「略。」とい  
 361 きなうちわににているよ。」とい  
 363 らは、足をなでて、「略。」とい  
 367 、しっぽをもつていました。「略」  
 372 らいながらいってしまいました。「  
 376 に、ゆきがふつていけるのをみつけま  
 378 小ぞうがとんできた。」とうたい  
 379 いながら、かえっていききました。空は、  
 392 んが、山へのぼってきます。たろう「お  
 429 とうだとも。いってごらん。」たろう  
 444 た、かげえをして、みせてください。  
 444 えをして、みせてください。「略」  
 453 どうさんをみせてください。「略」  
 456 わたくしがやってみましょうか。「へ  
 4510 ごむまりをのせているね。「略」  
 467 が、くもからでてくるところです。  
 476 んいろうがでてきます。「略」  
 479 きなりんごをもつています。うれしそ  
 483 へやへいこうとして、きゆうにたちど  
 484 しろをふりかえって手まねきをします  
 486 こへ、じろうがでてきます。「略」  
 488 は、りんごをだして、じろうの手にわ  
 494 じろうは、よろこんで、りんごをもつて  
 495 で、りんごをもつてとびまわります。

二497 ります。上にながてはうけ、うけては  
 二498 げてはうけ、うけては上にながて、よ  
 二498 うけては上にながて、よろこびます。そ  
 二501 ども、それをやめて、しばらくかんが  
 二502 しろをふりかえって、手まねきをしま  
 二504 んさちこが、走ってでてきます。「略」  
 二504 ちこが、走ってでてきます。「略」  
 二509 なりのへやへいってしまします。五  
 二514 うにおどりをやめて、しずかになりま  
 二516 て、きゆうに走ってたちさります。  
 二522 、いすにこしかけて、本をよんで  
 二522 かけて、本をよんでいらつしやいます。  
 二529 さんは、本をおいて、りんごを手にう  
 二5310 「略」。こういって、さちこは、じろう  
 二542 す。じろうが、走ってでてきます。「略」  
 二542 ろうが、走ってでてきます。「略」  
 二545 「略」。こういって、いちろうをよび  
 二546 。いちろうが、走ってでてきます。おか  
 二546 ろうが、走ってでてきます。おかあさ  
 二548 を、しずかになでてやります。八  
 二553 、ねどこにはいってから、こんなこと  
 二564 なことをかんがえているうちに、いつ  
 二566 のまにか、ねむってしましました。ゆ  
 二571 、いちめんにさいていました。ちよう  
 二572 ちようちよもとんでいきました。わたく  
 二576 たいながら、あるいていきました。そこ  
 二578 のおじいさんがでてきました。みると、  
 二586 「略」。といいて、にこにこなさい  
 二589 なさんのつかっているつくえも、こ  
 二591 あいだはたらいできました。二年生  
 二603 た。先生は、つづけておっしゃいました。  
 二605 一年生がはいってきます。そうして、

二607 けを、かわいがってやりましようね。  
 二613 みんなでかんがえて、やりましよう。  
 二647 冬の「略」もすぎていく。「みんな」す  
 二649 く。「みんな」すぎていく。「みんな」あ  
 二652 かいがえがふいてくる。「みんな」ふ  
 二653 る。「みんな」ふいてくる、あたたかい  
 二657 があかるくなってきた。「みんな」あ  
 二659 な「あかるくなってきた」。「みんな」あ  
 二661 すみがたなびいてくる。「みんな」た  
 二662 みんな「たなびいてくる、きれいな  
 二686 る。しずかにして。もつとしずかに。  
 二689 は、ひくくつづいてる。(三) し  
 二703 だ。「みんな」よんでみよう。「し  
 二705 あん。」すこしたって、かげのほうで、「  
 二101 下とをゆびさして、お立ちになつて  
 二102 お立ちになつていらつしやる。  
 二104 くでおちやくんで、かけてあげま  
 二105 くんで、かけてあげましょ、おし  
 二115 かさまは、どうかしてはんだかをりつば  
 二116 りつばな人にしてやりたいと、おお  
 二118 かのところへやって、いろいろもの  
 二125 しがはなしをしてみよう。」とおっ  
 二126 へ。」とおっしゃって、はんだかをおよ  
 二128 とをおぼえなくてもよろしい。ただ  
 二1210 は目をかがやかせて、おしやかさまの  
 二141 ない心からうまれてくるものだとい  
 二142 いな心からうまれてくることもわか  
 二144 かさまのおしえてくださったことは  
 二149 さんのでしをつれて、王さまのごてん  
 二151 さまのはちをもつて、でしの中にまじ  
 二152 でのの中にまじっていました。ごてん  
 二153 さんがはんだかをみて、「略」といっ

三156 「略」といいて、とおしてはくれ  
 三156 といいて、とおしてはくれません。し  
 三162 目のまえにのびてきました。それを  
 三163 人々は、びくりしてしましました。王  
 三1610 とどけようとして、手をこまでの  
 三174 にごてんにあがつてきました。はんだ  
 三178 きれいな光がさしてました。三  
 三196 えました。手わけして、そのかたちや色  
 三201 ました。えをかいいていくうちに、花の  
 三202 も、だんだんふえてきました。先生が、  
 三217 んなおもしろがつてみました。四  
 三224 、ぐんぐんとのびていきました。なん  
 三229 は四方にひろがつて、どこからどこま  
 三231 らどこまでつづいてるのか、わから  
 三237 日があたらないで、こまつたものだ。  
 三2310 村でも、こういって、この大きな木を  
 三254 んなはびくりして、「略」といい  
 三255 きな木を、切つていいものでしやう  
 三263 長いあいだかかって、やつと切れたお  
 三268 さんが、「くりぬいて、ふねをつくるが  
 三2610 のだいくをあつめて、ふねをつくるこ  
 三271 たなん年かかかって、とうとう一そ  
 三274 した。海にうかべて、大ぜいのせんど  
 三277 す。かいをそろえてひとかき水をか  
 三278 大なみをのりきつて、鳥のとぶように  
 三282 せんどうたちも、みている人々もいい  
 三291 、麦や、豆をつんで、海をわたりまし  
 三294 で、日かげになつてこまつていたた  
 三294 げになつてこまつていたたきさんの  
 三297 だんゆたかになつていったというこ  
 三304 いところへいって、そこでかいいて  
 三305 て、そこでかいいていらつしやい。」と

三三六六 ます。火がもえています。おゆがわ  
 三三六六 ます。おゆがわいています。ゆげがも  
 三三六六 もうもうとたっています。大きな  
 三三六六 やかんがかかっています。大きな  
 三三六六 「うさぎをかつてあるところにき  
 三三六六 の中でねそべっています。かなあみ  
 三三六六 つけるようにして、ねています。と  
 三三六六 ようにして、ねています。ときどき  
 三三六六 どき目をひらいて、わたくしをみます  
 三三六六 ようかをうたっている声が、オルガ  
 三三六六 ルガンにまじってきこえてきます。  
 三三六六 まじってきこえてきます。先生が  
 三三六六 で、ひばりがなっていました。ぼくら  
 三三六六 さはら道のあるいて、かえりました。ぼ  
 三三六六 くらは、かたをくんで、くさはら道をあ  
 三三六六 さはら道のあるいて、かえりました。き  
 三三六六 、やわらかで、光っていて、おかいこさ  
 三三六六 らかで、光っていて、おかいこさんで  
 三三六六 、右の方にまがって、いってしまいまし  
 三三六六 方にまがって、いってしましました。ぼ  
 三三六六 らはふたりになって、麦のほとすれす  
 三三六六 みが、小人になって、とんでいました。  
 三三六六 小人になって、とんでいました。「略」。  
 三三六六 のかたからはなれて、麦ばたけのよこ  
 三三六六 三かく、またきて四かく。」ひとりぼ  
 三三六六 とりぼっちになってしましました。ぼ  
 三三六六 ぐをわきにかかえて、とんでん走って  
 三三六六 て、とんでん走って、かえりました。  
 三三六六 こうのりくへいって、みたいと思いまし  
 三三六六 る日、はまべにでてみると、わにざめ  
 三三六六 これはいいと思って、「略」といい  
 三三六六 多いか、くらべてみようではないか

三三六六 ます。火がもえています。おゆがわ  
 三三六六 ます。おゆがわいています。ゆげがも  
 三三六六 もうもうとたっています。大きな  
 三三六六 やかんがかかっています。大きな  
 三三六六 「うさぎをかつてあるところにき  
 三三六六 の中でねそべっています。かなあみ  
 三三六六 つけるようにして、ねています。と  
 三三六六 ようにして、ねています。ときどき  
 三三六六 どき目をひらいて、わたくしをみます  
 三三六六 ようかをうたっている声が、オルガ  
 三三六六 ルガンにまじってきこえてきます。  
 三三六六 まじってきこえてきます。先生が  
 三三六六 で、ひばりがなっていました。ぼくら  
 三三六六 さはら道のあるいて、かえりました。ぼ  
 三三六六 くらは、かたをくんで、くさはら道をあ  
 三三六六 さはら道のあるいて、かえりました。き  
 三三六六 、やわらかで、光っていて、おかいこさ  
 三三六六 らかで、光っていて、おかいこさんで  
 三三六六 、右の方にまがって、いってしまいまし  
 三三六六 方にまがって、いってしましました。ぼ  
 三三六六 らはふたりになって、麦のほとすれす  
 三三六六 みが、小人になって、とんでいました。  
 三三六六 小人になって、とんでいました。「略」。  
 三三六六 のかたからはなれて、麦ばたけのよこ  
 三三六六 三かく、またきて四かく。」ひとりぼ  
 三三六六 とりぼっちになってしましました。ぼ  
 三三六六 ぐをわきにかかえて、とんでん走って  
 三三六六 て、とんでん走って、かえりました。  
 三三六六 こうのりくへいって、みたいと思いまし  
 三三六六 る日、はまべにでてみると、わにざめ  
 三三六六 これはいいと思って、「略」といい  
 三三六六 多いか、くらべてみようではないか

三三六六 、「略」といって、すぐになかまを  
 三三六六 かまを大ぜいつれてきました。白うさ  
 三三六六 うさぎはそれを見て、「略」といい  
 三三六六 ぞえながらとんでいくから、むこう  
 三三六六 りくまでならんで、みたまえ。」とい  
 三三六六 ぞえながら、わたって、いきました。もう  
 三三六六 くは海をわたって、きたかったのだ。  
 三三六六 「略」といって、わらいました。わ  
 三三六六 うさぎをつかまえて、からだのけをみ  
 三三六六 みんなむしりとってしましました。白  
 三三六六 白うさぎはいたくて、たまりません。は  
 三三六六 べで、しくしくなっていました。そのと  
 三三六六 いとおりになつて、「略」とおた  
 三三六六 まえはなぜなっているのか。」とお  
 三三六六 、海の水をあびて、ねているがよい  
 三三六六 水をあびて、ねているがよい。」と  
 三三六六 つそうひどくなつて、とてもたまらな  
 三三六六 いふくろをせおつて、いらつしゃつたの  
 三三六六 とも、「なぜなっているのか。」とお  
 三三六六 からだをあらつて、がまのほをし  
 三三六六 がまのほをし、その上にねるが  
 三三六六 つゆをふくんで、さきました。かほ  
 三三六六 ぜみも目がさめて、かぜにゆれゆれ  
 三三六六 めがねをかけて、石を切る、目も  
 三三六六 目もとをすえて、石を切る、あせ  
 三三六六 あせをながして、石を切る。かっ  
 三三六六 ちゃん日にくれて、火花がみえる  
 三三六六 かばの木にはねて、「略」といい  
 三三六六 たすきにならんで、がんがかえる。  
 三三六六 。おびになつて、ひもになつて、  
 三三六六 、ひもになつて、がんがかえる。  
 三三六六 ころまでのぼつてみよう。」と、ジュ

三60 1 どうきまるかまっています。みんなの  
 三60 3 んがおいでになって、「略。」とおき  
 三61 2 わにこしをおろして、どうきまるかお  
 三61 4 も、こしをおろして、まっています。  
 三61 4 をおろして、まっています。そのと  
 三61 6 ころまでのぼってさ、それからさっ  
 三61 7 つさとかけおいてみずうみへいこう  
 三61 10 はそうおっしやって、ジュデーにおき  
 三62 10 んなも声をそろえて、へんじをしました  
 三63 1 、いっしょになって、丘の大きな木の  
 三63 3 おもしろくあそんでから丘をおりて  
 三63 3 んでから丘をおりてみずうみへでまし  
 三63 5 はポートがうかんでいました。みんな  
 三63 8 うさんがこしかけて、ポートをおこぎ  
 三65 5 は、ポートをこいでぐるぐるぐるぐる  
 三66 1 。「心があわなくてはだめ、だめ。」お  
 三66 2 うさんはそういって、またぐるぐるま  
 三66 5 いか、風にきいてみようよ。」と、い  
 三67 7 じゃあ、雲をみてごらん。そうして、  
 三67 8 がどちらへふいてるか、みてごら  
 三67 8 いてるか、みてごらん。」と、おと  
 三68 1 な、白い雲がとんでいました。雲は、  
 三68 3 かにしずかにとんでいきます。「略。」  
 三69 5 めにもりへいって、それからたきへ  
 三69 9 ゆうごはんをたべていました。そのと  
 三70 10 なんだかつまんでみよう。」デビッド  
 三71 3 ました。「つまんでごらん。」おかあさ  
 三71 5 ドはいすからおりて、つまんでみまし  
 三71 7 おりて、つまんでみしました。けれど  
 三71 9 たしがはきだしてあげよう。」パーバ  
 三72 2 た。「では、はいてごらん。」おかあさ  
 からほうきをもってきてはきました。

三72 2 ほうきをもってきてはきました。けれ  
 三72 3 はりゆかにのこっています。「略。」  
 三74 3 おり道をさがしてみしよう。」と、  
 三74 5 んなはいすをおりて、その光の中を  
 三74 6 光の中をあるいていって、まっすぐ  
 三74 6 中をあるいていって、まっすぐにまど  
 三74 7 まどからのぞいてごらん。あの丘の  
 三74 8 かあさんがおしえてくださいました。  
 三75 4 なるか、きをつけてみていなさい。」  
 三75 4 、きをつけてみていなさい。」その  
 三75 7 丘のかけへしずんでいききました。「略  
 三76 4 お日さまがつれていってしまったの  
 三76 4 まがつれていってしまったのよ。」お  
 三76 8 ます。「丘をこえてね、よその國へい  
 三77 4 あなたたちがねているあいだ、お日  
 三77 7 ら、あさになつて、お日さまがあな  
 三77 8 ところへかえってくるのです。だか  
 三77 10 はきつとかえってくるの。」  
 三78 1 つとかえってくるの。」と、デ  
 三78 3 お日さまをとってしまふのはいや。  
 三78 6 まいあさかえってきますよ。だれに  
 三78 7 せん。雲さえでいなかたら、ま  
 三79 2 のすなばであそんでいます。すなで、  
 三79 3 や、道をこしらえています。むちゅう  
 三79 3 むちゅうであそんでいますので、だ  
 三79 10 をいっばいにしてもらうんだから。」  
 三81 1 えんがわまでにげていききました。その  
 三81 2 に、雲は雨をつれて、空をすすんでい  
 三81 2 れて、空をすすんでいききました。そこ  
 三83 3 んがえんがわにでていらっしやいまし  
 三84 2 んだんにじもきていきます。ピータ  
 三84 4 があるのをみつけて、「略。」といい

三88 9 にまわる。まわってうなる。じぶんの  
 三89 1 ひびきを、かきとってみましょう。てい  
 三91 1 ます。いぬも走っていきます。わたく  
 三92 2 す。くさをちぎっていらたり、かみき  
 三92 3 子がいたら、とめてやりましょう。こ  
 三92 5 の心をたのしませてくれます。「略」。  
 三92 6 す。「花をおらないでください。みにき  
 三92 8 人が一本ずつおってしまえばいまい  
 三93 1 にみんななくなってしまうでしょう。  
 三93 2 。どうぞおらないでください。」この  
 三93 9 さずにかわいがってください。」お月さ  
 三97 9 一つのまにかきえてしまいますが、紙  
 三98 2 は、そのままきえてなくなりますが、  
 三98 7 を、どこへおくってあげましょう。ど  
 三99 2 、字やえをはこんでくれます。先生が、  
 三99 5 だいにしまつておきなさい。みな  
 三99 6 んが大きくなつてから、それを見る  
 三100 3 おじいさんがすんでいました。おじい  
 三100 7 はやく山にいて、「略。」と、竹や  
 三100 9 竹やぶをみまわしていますと、ねもと  
 三101 1 た。ふしぎに思つて、その竹を切つて  
 三101 2 て、その竹を切つてみますと、小さな  
 三101 3 ひめさまがすわっていました。おじい  
 三101 6 いさんはよろこんで、「略。」と、ての  
 三102 1 、てのひらにのせてかえりました。そ  
 三102 2 、かごの中にいれて、おばあさんとふ  
 三102 5 びこがねがはいっていました。おじい  
 三102 8 すくとせいがのびて、ふつうの人の大  
 三103 8 、「略。」といつて、まいにちまいば  
 三103 8 まいばんあつまつてきて、おじいさん  
 三103 8 ばんあつまつてきて、おじいさんの家  
 三103 10 上からのびあがつてみたり、へいのす

三104 3 会 ちは、「どうかして、あんなにきれい  
三104 5 「略。」と思つて、みんないっしょ  
三105 2 「略。」といつて、どんなりっぱな  
三105 3 、みんなことわつてしまいました。た  
三105 4 の人は、あきらめてしまいました。が、  
三105 7 かしいことをいって、それができたら  
三106 2 どがおききになつて、「略。」と思  
三106 5 会 をごてんにつれてきたら、おまえに  
三106 6 会 くらいをさずけてやろう。」とおつ  
三106 8 このことをつたえてたびたびすすめま  
三106 10 「略。」といつて、かぐやひめはや  
三107 1 ごそうだんになつて、ある日、かりの  
三107 4 した。家にはいつてごらんになると、  
三107 5 ひめさまがすわつています。「略。」  
三107 8 「とお思ひになつて、すぐごしょにつ  
三107 8 すぐごしょにつれてかえろうとなさい  
三108 1 はびっくりなさつて、「略。」とおつ  
三108 2 会 て、「では、つれていくのはやめよう  
三108 6 」とお思ひになつて、そのままおかえ  
三108 10 へんじをさしあげておりました。ある  
三109 2 めは、空をながめてはためいきをつき  
三109 4 ました。あきがきて月がうつくしく  
三109 7 とうとう声をたててなきだしました。  
三109 8 あさんはおどろいて、そのわけをたず  
三110 2 会 になるかと思つて、いままですまっ  
三110 2 会 いままですまつていましたが、ほん  
三110 4 会 からむかえがきて、かえらなければ  
三110 7 ないことばをきいて、おじいさんもお  
三110 9 会 した。「どうかして、かぐやひめを月  
三111 3 り、こしもまがつてしまいました。み  
三111 4 とをおききになつて、たいへんかわい  
三111 6 けらいにいいつけて、まもつてくださ

三111 6 いいつけて、まもつてくださることに  
三112 3 かぐやひめをだいていました。おじい  
三112 4 いり口でばんをしておりました。夜中に  
三112 5 した。夜中になつて、お月さまが一ど  
三112 9 足の力がなくなつて、なにをすること  
三112 10 ともできなくなつてしまいました。そ  
三113 2 たちが、雲にのつておりてきました。  
三113 2 、雲にのつておりてきました。すると、  
三113 2 。すると、しめきつておいたくらの戸  
三113 4 おばあさんがだいていたかぐやひめの  
三113 5 すうつとそとへでてしまいました。も  
三113 8 会 でもおそばにいて、こうこうをした  
三113 10 会 月夜には月をみて、わたくしのこと  
三114 1 会 ことを思ひだしてください。」とい  
三114 2 「略。」といつて、きていたうわぎ  
三114 3 会 といつて、きていたうわぎをぬ  
三114 4 いたうわぎをぬいで、おばあさんにわ  
三115 3 「略。」といつて、みかどへおわか  
三115 5 た。天人は、いそいでかぐやひめにはご  
三115 9 よういの車にのつて、しずかに天への  
三115 9 ずかに天へのぼつていきました。みか  
三117 8 までもたちのぼつていきました。それで、  
三117 8 、いちいち知らせてくれます。こうえ  
三117 8 のそうじなどもしてくれれます。もし、  
三117 8 つみなどをおくつてくれます。いそぐ  
三117 8 、でんぼうをうつてくれます。どんな  
三117 8 ころへでもとどけてくれます。もつと  
三117 8 でんわをとりついでくれます。「略」  
三117 8 略。」と声をかけて、話ができます。  
三117 8 もちものをまもつてくれます。もつと  
三117 8 なからだをまもつてくれます。火事が  
三117 8 ように、氣をつけてくれます。こんざ

四8 1 きちんとせいりしてくれれます。まい子  
四8 4 までおくりとどけてくれます。こは、  
四8 8 木がたくさんうえてあります。よくみ  
四9 7 ンカンとはたらいしています。こはび  
四11 4 がみんなあつまつてきます。こくご、  
四13 4 となり足となつて、はたらいしていま  
四13 4 なつて、はたらいしています。町ぜんた  
四13 6 が、ひとつになつて生きています。  
四13 6 とつになつて生きています。二にわ  
四14 3 ぶのはつぽをたべている。風がふくと  
四14 7 すきのもさもさしてるところから、  
四15 3 「みんなじつとしていたけれども、な  
四15 5 、鳥ごやにかくれていた。たまごを生  
四15 6 た。たまごを生んでいるのをみてい  
四15 6 生んでいるのをみていた。えつ子がわ  
四15 8 なにかにおをつてねんねした。おか  
四16 1 しゃかり手にもつてねんねした。せな  
四16 5 が、月にてらされて、水をくむ。くろ  
四16 6 くらいかげがついてる。おかあさん  
四17 2 中に月がうつっている。お星さん、  
四17 5 が手ぬぐいをもつて、おふろへいくの  
四17 8 が、石うすをひいていらつしやつた。  
四18 1 手の上につかまつてひいた。石うすは、  
四19 7 あいての人をきめてから、文を書きま  
四20 1 かあさん」にきめて、つぎのような文  
四20 3 会 ねこねずみをしてあそびました。み  
四20 4 会 なで手をつないで、わをつくりまし  
四21 7 会 きよろきよろしています。わたくし  
四21 9 会 しさんをねらつて、わの中へもぐり  
四21 10 会 「略。」といつてしゃがみます。あ  
四22 1 会 あちこちまわつているうちに、ぴょ  
四22 2 手 みたちは、あわててわのそとへにげ



四二七 四二七 「にいさん」にあてて文を書きました。  
 四二八 四二八 んのえか、あててごらんさい。ぼ  
 四二九 四二九 いもうと」にあてて書きました。「略  
 四三〇 四三〇 んがいなくなつてから、もう半年も  
 四三一 四三一 ぼまでさんぼしてきました。おみや  
 四三二 四三二 めもどきをとってきました。そうし  
 四三三 四三三 、そこにすわっているようです。わ  
 四三四 四三四 ゃんが空をとんでいるだろうと、と  
 四三五 四三五 、どこかで休んでいると思います。  
 四三六 四三六 うしばらくないでくれたら、かごか  
 四三七 四三七 かごからはなしてあげよう。」たろう  
 四三八 四三八 い雲さん、光ってきれいだな。ぼく  
 四三九 四三九 な。ぼくをのせてきれいだな。ぼく  
 四四〇 四四〇 。ふわふわとして、氣もちがいいだ  
 四四一 四四一 だろう。山にいつて、くりひろいす  
 四四二 四四二 んのところへいつて、あそんでくるこ  
 四四三 四四三 へいつて、あそんでくることかな。お  
 四四四 四四四 さんのうちへいつて、いもほりのてつ  
 四四五 四四五 、うさぎをもらつてくることかな。じ  
 四四六 四四六 んでじぶんにきいてみても、なかなか  
 四四七 四四七 きりした返事をしてくれない。」せつこ  
 四四八 四四八 人みんな」にきいてもらいたいとい  
 四四九 四四九 もらいたいといつて、文を書きました。  
 四五〇 四五〇 びょうきで休んでいます。それで、  
 四五一 四五一 おてがみを書いてもいいし、えをか  
 四五二 四五二 いし、えをかいてもいいと思います  
 四五三 四五三 ちのにわにさいているコスモスの  
 四五四 四五四 知らせたいといつて、つぎのような文  
 四五五 四五五 とき、雨がふっていました。わたく  
 四五六 四五六 しがかさをさしていくと、むこうで  
 四五七 四五七 の男の子がなっていました。どこか  
 四五八 四五八 の生徒さんがきて、なっているわけ

四三九 四三九 んがきて、なっているわけをきき  
 四四〇 四四〇 のはなおが切れてあるけなかつたの  
 四四一 四四一 のはなおをすけてやりました。雨が  
 四四二 四四二 かさをさしかけてあげました。その  
 四四三 四四三 は、それをはいて、元氣よくかけて  
 四四四 四四四 、元氣よくかけていつてしまいまし  
 四四五 四四五 よくかけていつてしましました。女  
 四四六 四四六 『略』といつて、わかれていきま  
 四四七 四四七 いて、わかれていきました。」四  
 四四八 四四八 四四八 にこうたずねられて、みんなは、もう  
 四四九 四四九 だ、かさをさしてあげたのですね。」  
 四五〇 四五〇 のことが、ひびいてきたのです。わか  
 四五一 四五一 のことが生きていたということ  
 四五二 四五二 は、しばらく考えていました。そのと  
 四五三 四五三 、「略」といつて、つぎのような話  
 四五四 四五四 そうにじゅくしていました。わたく  
 四五五 四五五 くしは、たべたくてしょうがありません  
 四五六 四五六 でした。思いきつて、となりのおばさ  
 四五七 四五七 やしいまねをしてはいけませんよ。」  
 四五八 四五八 たくしは、だまつてうちへかえつて  
 四五九 四五九 てうちへかえつてきました。「略」  
 四六〇 四六〇 うをもらわないで、かえれたのでしょ  
 四六一 四六一 ことが思ひだされてきました。「略」  
 四六二 四六二 とばを思ひだして、ころしませんでした  
 四六三 四六三 とばに氣がついてやめました。「略」  
 四六四 四六四 生になつたりしてくれました。あなた  
 四六五 四六五 にち、北へむかつてたびをつづけて  
 四六六 四六六 つてたびをつづけていました。ものさ  
 四六七 四六七 ろえたようになつてとんだら、まがつ  
 四六八 四六八 とんだら、まがつてつりばりのように  
 四六九 四六九 、かきなりになつて、空をひっかける  
 四七〇 四七〇 、ばらばらになつてしまうことはあ

四四三 四四三 四四三 つてに早くとんでいつちゃあこまる  
 四四四 四四四 いにいましめあつて、ぎょうぎよく空  
 四四五 四四五 んばんにならんでとぶことにしよ  
 四四六 四四六 がおしまいにしてくれていったか  
 四四七 四四七 されるかと思つてさ。それに、きけん  
 四四八 四四八 なにかおっかけてきやしないかと  
 四四九 四四九 しないかと思つてね。「略」。「略  
 四五〇 四五〇 んせんとうにしてくれつていったの  
 四五一 四五一 十五ばんめにして、とぶことにしよ  
 四五二 四五二 んは、一列になつてとんでいきました  
 四五三 四五三 一列になつてとんでいきましたが、や  
 四五四 四五四 大きな木がしげつていたので、そこを  
 四五五 四五五 ので、そこをよけてとびました。よく  
 四五六 四五六 上を高くとびこえて、たににさしかか  
 四五七 四五七 、みんなをだましてびつくりさせるの  
 四五八 四五八 るのだろうと思つて、べつに氣にもか  
 四五九 四五九 に氣にもかけないでとびつづけました。  
 四六〇 四六〇 にかのようにおちていきました。「略」  
 四六一 四六一 ぼうの音がひびいてきました。二十九  
 四六二 四六二 のがんは、あわててかつちゃんのとこ  
 四六三 四六三 かつちゃんのおちていくのを、下から  
 四六四 四六四 り、さきになりして、はげましはげま  
 四六五 四六五 うの音が、ひびいてきました。下から  
 四六六 四六六 。下からねらわれていたときには、ば  
 四六七 四六七 、ばらばらになつて、はなれてとべば  
 四六八 四六八 になつて、はなれてとべば安全なので  
 四六九 四六九 、ばらばらになつて、にげようとする  
 四七〇 四七〇 、ぼくがかわつて、かついでいこう。  
 四七一 四七一 かわつて、かついでいこう。「略」。  
 四七二 四七二 とぶ力がなくなつてしましました。お  
 四七三 四七三 になり、おんぶしているがんもおち  
 四七四 四七四 うふのようになつて、かつちゃんをさ

四53<sub>1</sub>、高い山がそびえていました。がんの  
 四53<sub>7</sub>うから、風がふいてきました。あせを  
 四53<sub>8</sub>せをいっぱいかいて いる がんたちには  
 四54<sub>5</sub>ていねいにあらって やりました。ほう  
 四54<sub>6</sub>。ほうたいをもつて いた がんが、手早  
 四54<sub>9</sub>のつけねをうたれて いました。かつち  
 四54<sub>9</sub>ちゃんねつがでてきたので、みんなが  
 四55<sub>1</sub>、あたまを ひやして やりました。島に  
 四55<sub>8</sub>小鳥たちが、ねぼけて とびまわる 音でし  
 四55<sub>10</sub>つがずつとさがつて、まぶたをすこし  
 四56<sub>4</sub>、みんながはこんでくる たべものも、  
 四56<sub>8</sub>のあさ、出発しても いいよ。ぼくた  
 四57<sub>2</sub>ゃんが、立ちあがつて はばたきをしたの  
 四58<sub>3</sub>みんなの かおをみて、にこにこしました  
 四58<sub>5</sub>うをするよ。ねて いるうちに、いい  
 四58<sub>7</sub>「略。」こういつて、かつちゃんはた  
 四58<sub>7</sub>ちゃんはたのしんで いました。二十九  
 四59<sub>8</sub>、ぼくがさがしてくる。」かつちゃん  
 四60<sub>7</sub>うちに、夜になつて しまいました。し  
 四61<sub>1</sub>がびつしよりぬれて いました。いんそつ  
 四61<sub>2</sub>んが、口をひらいて、「略。」みんなは  
 四61<sub>4</sub>く食事をすませて。「みんなはしを  
 四61<sub>7</sub>なかまをたすけてください。」と、お  
 四62<sub>2</sub>した。みんなのねて いる ひまに、かつ  
 四62<sub>5</sub>らぬけだそうとして、もがいて いると  
 四62<sub>6</sub>うとして、もがいて いるところだ。  
 四63<sub>2</sub>なかまの手をとつて、いそいでとんで  
 四63<sub>2</sub>をとつて、いそいでとんで かえりまし  
 四63<sub>3</sub>て、いそいでとんで かえりました。み  
 四63<sub>4</sub>んなは、それをみて、およろこびでし  
 四63<sub>6</sub>「略。」あんしんして、たのしいあさ「  
 四63<sub>9</sub>略。」こういわれて、かつちゃんは、き

四65<sub>2</sub>じゅんにたすけて いる。」三十ばの  
 四65<sub>6</sub>だやかにたなびいて いました。がんの  
 四65<sub>8</sub>に、みえなくなつて きました。六  
 四66<sub>3</sub>いことをみつめて、それをまちがえ  
 四66<sub>4</sub>れをまちがえないで、早くいつてあそ  
 四66<sub>5</sub>ないで、早くいつてあそぶのです。「か  
 四66<sub>7</sub>れは、上からよんでも 下からよんでも  
 四66<sub>8</sub>んでも 下からよんでも、おなじになる  
 四67<sub>6</sub>たくさん ころえて おきましょう。一  
 四68<sub>2</sub>みひよこ、あわせて ひよこひよこむ  
 四69<sub>8</sub>。「ゆうだちと かけて、なんととく。ポ  
 四70<sub>4</sub>。」「ラジオと かけて、なんととく。あき  
 四70<sub>7</sub>略。」「すずと かけて、なんととく。か  
 四70<sub>10</sub>「い」の字と かけて、なんととく。て  
 四71<sub>4</sub>「ろ」の字と かけて、なんととく。あさ  
 四73<sub>4</sub>れをあつ紙に書いて、えもつけて、あ  
 四73<sub>4</sub>書いて、えもつけて、あそべるように  
 四75<sub>7</sub>しっかり 氣をつけて。を——「を」の  
 四78<sub>1</sub>——けつせきしないで 学校へ。ふ——ふ  
 四81<sub>7</sub>どもにうたわれて、きょうは、エス  
 四82<sub>7</sub>の木の 枝を立てて、色紙で おったつ  
 四83<sub>2</sub>が、「これもさげて ちょうだい。」と  
 四83<sub>3</sub>、「略。」と いて、一まいのえをだ  
 四83<sub>7</sub>た。赤いふくをきて、三かくほうしを  
 四84<sub>1</sub>んがぶらんこして いるよ。」といっ  
 四85<sub>1</sub>が、それにあわせて おどりました。お  
 四85<sub>3</sub>ごにみかんをいれて、もつていらつし  
 四85<sub>4</sub>んをいれて、もつて いらつしやまし  
 四86<sub>6</sub>みんなは よろこんで もらいました。弟  
 四86<sub>4</sub>ほど 雪に つもられて、だまっている。だ  
 四86<sub>4</sub>つもられて、だまっている。だいこんを  
 四86<sub>5</sub>。だいこんをぬいて いると、みそさざ

四87<sub>2</sub>きたので、よろこんで ないた。おとうさ  
 四87<sub>4</sub>さんは、町へいつて、まだ かえらない。  
 四87<sub>6</sub>ろうか。風がふいて きた。すみがまの  
 四87<sub>8</sub>まの上に、雲がでて います。あの 白い  
 四88<sub>1</sub>だれかが、ちぢまつて いるようです。ち  
 四88<sub>7</sub>からすが いそいで かえつたよ。から  
 四89<sub>8</sub>あさ早く はねおきて、そとにとびだし  
 四89<sub>9</sub>、そとにとびだして、雪かきをなさる  
 四90<sub>1</sub>。どんなに つもつて いても、おかつて  
 四90<sub>3</sub>てからはきはじめて、かいどうへぬけ  
 四90<sub>4</sub>、かいどうへぬけて、おとなりまでは  
 四90<sub>4</sub>おとなりまでは いていく。学校へ かよ  
 四90<sub>7</sub>たちのことを 思つて、おもてのとおり  
 四91<sub>1</sub>人のことを 思つて、ゆうびんがいれ  
 四91<sub>4</sub>く。ひとはきはいて、うちに あがつて  
 四91<sub>5</sub>て、うちに あがつて おいでになると、  
 四91<sub>8</sub>はあせがつたわつて いる。けれど、  
 四92<sub>1</sub>白だ。しかし、降つてくる 雪は、まっ黒  
 四92<sub>4</sub>どから かおをだして 空のほうを みあ  
 四93<sub>1</sub>空のほうを みあげて、降つてくる 雪を  
 四93<sub>1</sub>を みあげて、降つてくる 雪をながめ  
 四93<sub>6</sub>降る。風に ふかれて、うずを まいて、  
 四93<sub>6</sub>れて、うずを まいて、どんどん 降つて  
 四93<sub>6</sub>て、どんどん 降つてくる。降つてくる  
 四93<sub>8</sub>降つてくる。降つてくる 雪は みんな  
 四94<sub>1</sub>かかるのも わすれて、高い 高い 空の  
 四94<sub>4</sub>まかいものが とんで いる。あばれまわ  
 四95<sub>1</sub>いる。あばれまわつて いる。ひろがつた  
 四95<sub>2</sub>わとながれたりして、だんだん 下にお  
 四95<sub>2</sub>だんだん 下におちてくる。よくも あん  
 四95<sub>4</sub>あるものだ。降つて いる 雪を上から  
 四95<sub>4</sub>からみると、白くて、黒くはない。大

四九五 六 のかたちはきまっていない。風にふか  
四九五 六 ない。風にふかれてとんでいるうちに  
四九五 六 風にかかれてとんでいるうちに、いつ  
四九六 五 のかめをとりまいて、あそんでいま  
四九六 六 とりまいて、あそんでいます。子ども「  
四九六 七 かめをころがしてあそぼう。」子ども  
四九七 六 かめをころがしてあそぼうよ。」子ども  
四九七 八 そんなことをしてはいけません。かわ  
四九七 九 うだから、はなしておやり。」子ども四  
四九八 一 までも、ゆるしておやり。」みんな「  
四九八 六 このかめをうってくれないか。」子ども  
四九八 八 ども三「ころがしてあそぼうよ。」子ども  
四九九 二 「この人にうってあげようか。」みんな  
四九九 六 「うらしま」うってくれるかね。それ  
四九九 八 、それぞれわたしてやります。みんな「  
四九九 一〇 、あつちへいってあそぼう。」子ども  
四九九 二 いいながら、いってしまします。うら  
四九九 五 かめをだきおこして、せなかをさすつ  
四九九 六 、せなかをさすつて、うらしま「かめさ  
四九九 二 をとおりかかってよかったね。さあ、  
四九九 五 あ、元氣をだしておかえり。」かめは  
四九九 七 ねいにおじぎをして、海の方へいって  
四九九 八 て、海の方へいってしまします。うら  
四九九 五 、海でつりをしてきます。そこへか  
四九九 六 。そこへかめがでてきます。かめ「うら  
四九九 二 っしんにつりをしてるので、氣がつ  
四九九 三 すぐそばまでいって、大きな声で、「へ  
四九九 六 のあいだ、たすけていただいたかめで  
四九九 八 よ。元氣になってよかったね。」かめ  
四九九 一 れしようと思つて、ここまでまいり  
四九九 二 おもしろい。つれていってもらおうか  
四九九 三 い。つれていってもらおうかな。」か

四九九 三 らしまの手をとつて、そこをぐるぐ  
四九九 九 んだんちかづいてくる。」三のぼめ  
四九九 五 しかけが二つおいてあります。そこへ、  
四九九 六 しまをあんないしてはいってきます。  
四九九 八 んないしてはいってきます。かめ「こ  
四九九 三 くしさに、おどろいています。かめ「さあ  
四九九 九 いろいろな魚がでてきてならぶと、そ  
四九九 一〇 ろな魚がでてきてならぶと、そのう  
四九九 一 けくさいまして、ありがとうござ  
四九九 二 ゆっくりあそんでいってくださいま  
四九九 三 りあそんでいってくださいませ。」お  
四九九 五 ごちそうをはこんできます。おとひめ「  
四九九 六 なくめしあがつてください。」うら  
四九九 一 おどりを、おどつてもらいましょう。」  
四九九 三 ちが、たくさんでてきて、にぎやかな  
四九九 五 、たくさんでてきて、にぎやかなおん  
四九九 七 おんがくにあわせておどりはじめます。  
四九九 八 ろい。」手をたたいてよろこびます。  
四九九 九 のことを思い出して、きゆうに家へか  
四九九 一 かなおどりを、ごらんにいれま  
四九九 二 わつたことをして、おなぐさめいた  
四九九 五 すので、かえらせていただきます。」お  
四九九 七 しい思いをさせていただきました。」  
四九九 八 たまげばこをもつてきます。おとひめ「  
四九九 九 、おあけになつてはいけませんよ。」  
四九九 一〇 ていただきまして、ありがとうござ  
四九九 一 しま「これをあけてはいけません」とい  
四九九 二 もそのままだしておいていただきと  
四九九 三 ままにしておいていただきとうござ  
四九九 四 う。お氣をつけて。」かめが、うら  
四九九 五 らしまの手をとつて、でていきます。

四九九 四 の手をとつて、でていきます。みんな  
四九九 六 みんな、手をふつてみおくります。  
四九九 八 らしまは、あけてみました、たまた  
四九九 一 の人が、はたらいしていることではし  
四九九 三 ガラスは、どうしてこしらえたのでし  
四九九 五 たのでしょうか。光っている、ほそい糸の  
四九九 七 せんをつたわつて、ここまでたびを  
四九九 九 こまでたびをしてきたのです。けれ  
四九九 一 ど手かづがかかっていることではし  
四九九 三 この世に生まれてくるまでは、なん  
四九九 五 しました。もえてある火をもつて  
四九九 七 いる火をもつてあるくかわりに、  
四九九 九 わたくしをもつてあるきます。」十  
四九九 一 めすいすいとんでいく。空にかす  
四九九 三 みほのまつ原へでてきます。りようし「  
四九九 五 とれながらあるいていますと、どこか  
四九九 七 、よいにおいがしてきます。みると、  
四九九 九 なものが、かかっています。りようし「  
四九九 一 しは、そばへよつて、よくみます。り  
四九九 三 とがない。もつてかえつて、うちの  
四九九 五 。もつてかえつて、うちのたからに  
四九九 七 そのきものをもつていこうとします。  
四九九 九 、ひとりの女がでてきます。女「もし、  
四九九 一 たつたのです。もつてかえつて、うちの  
四九九 三 もつてかえつて、うちのたからに  
四九九 五 ろもと申しまして、あなたがたには、  
四九九 七 しそうなかおをして、空をみあげます。  
四九九 九 、このようすをみて、りようし「お氣の  
四九九 一 人のまいをまつて、みせていただけ  
四九九 三 をまつて、みせていただけませんか。  
四九九 五 まわすにかえつておしまになるで  
四九九 七 天人は、それをきて、しづかにまいま

四一三 五 鯛 会 みんなそろってまいじょうず。  
 四一四 三 さん 天へのぼっていきます。右に  
 四一五 二 鯛 すみにつつまれて。かもめすいす  
 四一六 三 鯛 めすいすいとんでいく、空にほん  
 五五三 さあ、はいはいをして、たちして、村に  
 五五三 いをして、たちして、村にでましよう、  
 五五七 ころころ、ころがして、いの上からとび  
 五五八 わの上からとびおいて、さかなとジャブジ  
 五五九 ヤブジャブはしやいで、川は山からかけお  
 五六一 友だちとあくしゅして、川はだんだん大き  
 五六三 なる。ダムにせかれていけになり、水力電  
 五六七 流。川は野原におりてくる。野原をゆっく  
 五六八 原をゆっくあるいていく、水車をくるく  
 五七一 はたけにも水をまいていく。川ははたら  
 五七四 、ゆっくりとながれていく。汽船や荷船が  
 五七七 ないどぶ水をながして、海のおくにして  
 五七九 いく。川はだまってはたらく。一一 私  
 五八六 会 ん、汽車がはいってきたよ。」シュ、シ  
 五八八 会 おりるかたがすんでから、ごじゅんにお  
 五九四 会 っちゃん、乗ってきたよ。じろう、せ  
 五九六 会 ちゃん、せきをあけて、あのぼっちゃんを  
 五九八 会 ちゃんをかせさせてあげ。」「略。」  
 五九九 会 さんで、苦勞をしてほってくださいさった  
 五九九 会 、苦勞をしてほってくださいさったトネル  
 五九九 会 けんめいに走らせているからさ。」「略」  
 五九九 会 、「どこで走らせているの。」「略。」  
 五九九 会 、いつも氣をつけているよ。ほら、あそ  
 五九九 会 ルだよ。あれをみて、汽車が、とまった  
 五九九 会 ぶをはいけんさせてもらいます。」「略」  
 五九九 会 略。」「まちがって乗っている人がいな  
 五九九 会 、「まちがって乗っている人がいないか、  
 五九九 会 、「まちがって乗っている人がいないの。」「略」。

五二二 一 会 「略。」「とまってから、おりるんだよ  
 五二二 三 会 いさん、もうおりていいの。」「略。」  
 五二二 九 会 さん、わざわざきてくださったって、すみま  
 五二二 九 会 わざきてくださったって、すみません。」  
 五二二 二 会 、みつおさんにあてて書いた手紙です。私  
 五二二 四 会 むねのところに書いてありますから、まち  
 五二二 六 会 ません。切手をはってもらいます。これ  
 五二二 八 会 、遠い、近いによって、ねだんがちがいま  
 五二二 三 会 配たつをする人がきて、「略。」といつて  
 五二二 五 会 て、「略。」といつて、私たちをみんなな  
 五二二 七 会 で、わかりにくくて心配さ。」「略。」  
 五二二 八 会 とゆくさきは知っているが、うそ字だか  
 五二二 九 会 やられるかと思つて、びくびくしている  
 五二二 一 会 、「略。」といつて、びくびくしているところだよ。」  
 五二二 三 会 かたはしらしらべていって、北の方へい  
 五二二 五 会 しからしらべていって、北の方へい友だ  
 五二二 七 会 ひとかたまりにわけてくれました。」「略」  
 五二二 九 会 なふくろにいれられて、かきをかけられま  
 五二二 一 会 こんなにだいにしてくれましますから、おち  
 五二二 二 会 ちは、汽車につかれて、どんどん、南へは  
 五二二 四 会 自動車につかれて、ある町のゆうびん  
 五二二 六 会 ころの中からだされて、ほっとしていると  
 五二二 八 会 だされて、ほっとしていると、こんどは、  
 五二二 九 会 は、自てん車に乗って走りましました。私のな  
 五二二 一 会 の花のきれいにさいている家に、はいりま  
 五二二 二 会 つおさんがよろこんで、私を手にとりあげ  
 五二二 四 会 やくをいっばい乗せて、終点につきました  
 五二二 五 会 ました。あまりこんでいきましたので、みん  
 五二二 七 会 がら、出口の方へでいきました。しかし  
 五二二 九 会 、たいへんよろこんで帰っていった子ども  
 五二二 一 会 へんよろこんで帰っていった子どもがあり  
 五二二 三 会 じいさんにおあいして、おもちゃ、まっ白

五二二 四 会 がきなどをいただいて、たいへんかわいが  
 五二二 五 会 んが、かわいがってくださいだったのでしょ  
 五二二 六 会 電車はともこんでいたんです。それで  
 五二二 七 会 に、もたれかかっていると、こしをかけ  
 五二二 八 会 ると、こしをかけていた知らないおじさ  
 五二二 九 会 、「略。」といつて、かけさせてくれた  
 五二二 一 会 いて、かけさせてくれたんです。そこ  
 五二二 二 会 くは、はつと思つて、すぐ立つて、その  
 五二二 三 会 思つて、すぐ立つて、その人をすわらせ  
 五二二 四 会 その人をすわらせてあげました。」「略」  
 五二二 五 会 の人が立ちあがって、「略。」といつて  
 五二二 六 会 、「男の人は立つてください。」といつ  
 五二二 七 会 、「略。」といつて、みんなを立たせ、  
 五二二 八 会 、ぼくに氣がついて、「略。」といつて  
 五二二 九 会 、「略。」といつて、せきをすこしあげ  
 五二二 一 会 せきをすこしあげてくれました。けれど  
 五二二 二 会 、「略。」といつて、とうとうかけなか  
 五二二 三 会 でにらめっこをしているようだったのに  
 五二二 四 会 みんなににこにこして、友だちのようにな  
 五二二 五 会 うになかよくなってきました。ほんとう  
 五二二 六 会 さんも、にこにこして帰ってきました。駅  
 五二二 七 会 、にこにこして帰ってきました。駅の出口  
 五二二 八 会 ると、でむかえにきていたおねえさんをみ  
 五二二 九 会 ぎました。といつて、かるくあたまをさ  
 五二二 一 会 かるくあたまをさげて、そこをましました。  
 五二二 二 会 まで、一日でいって帰ってきたのですも  
 五二二 三 会 一日でいって帰ってきたのですもの。ど  
 五二二 四 会 くんは、電車をおりてから、元氣にあるい  
 五二二 五 会 から、元氣にあるいて帰りました。」「略」  
 五二二 六 会 でそろばんをはじいていました。」「略」  
 五二二 七 会 店に品物をとどけて、受けとりをもらっ  
 五二二 八 会 受けとりをもらって帰ってくるちゅう  
 五二二 九 会

五28 10 ㊦ りをもらって帰ってくるとちゅう、よそ  
 五29 3 ㊦ なんです。店をでてすこしくると、どこ  
 五29 4 ㊦ 、荷物を二つ持って、あせをふきふきあ  
 五29 5 ㊦ をふきふきあるいていました。一つは大  
 五29 5 ㊦ た。一つは大きくて、ぼくなんか、と  
 五29 6 ㊦ 物、一つは小さくてかるそうな物です。  
 五29 9 ㊦ すから、一つ持っていったあげましよう  
 五29 10 ㊦ 、一つ持っていったあげましよう。と  
 五30 3 ㊦ 『「略」』。といって、小さいほうの荷物  
 五30 3 ㊦ の荷物を、わたしも持っていました。その  
 五30 5 ㊦ くは、かたへへせて持っていました。  
 五30 5 ㊦ かたへへせて持っていました。駅につ  
 五30 11 ㊦ 、やりたいと思っていましたが、なかなか  
 五31 5 ㊦ からこの本をだして、『「略」』。とい  
 五31 7 ㊦ どものが書いてありますよ。』とい  
 五31 9 ㊦ 『「略」』。といって、ぼくにくれました  
 五32 3 ㊦ ポ——「汽車が走っています。まっ黒なけ  
 五32 4 ㊦ りをもうもうとはいって、どんだん走って  
 五32 5 ㊦ いて、どんだん走っています。おや、むこ  
 五32 8 ㊦ 米を、たくさんつんでいます。この汽車は  
 五32 9 ㊦ 汽車は、なにをたいて走っているのしよ  
 五32 9 ㊦ 、なにをたいて走っているのしよ。こ  
 五33 3 ㊦ ったりさがたりして、荷物を積みこんで  
 五33 3 ㊦ て、荷物を積みこんでいます。この荷物の  
 五33 5 ㊦ んじゅなどがはいっています。船は、なん  
 五33 7 ㊦ とつがたたくさん立っています。どのえんと  
 五33 9 ㊦ くむくとたちのぼっています。ここは工場  
 五34 3 ㊦ いせつな品物を作っています。この工場の  
 五34 5 ㊦ 場のきかいを動かしている力は、なんでし  
 五34 7 ㊦ ごはんのしたくをしていらっしやいます。  
 五34 10 ㊦ から、ゆげがふきでています。ガスこんろ  
 五35 1 ㊦ い火は、ガスがもえているのです。あのガ

五35 3 ㊦ でしょう。なにをしているところでしょう  
 五35 4 ㊦ これは、石炭をほっているところ。ま  
 五35 6 ㊦ のかべに、石炭がでています。さかんに、  
 五35 7 ㊦ かいで石炭をくずしてとっています。とれ  
 五35 7 ㊦ 石炭をくずしてとっています。とれた石炭  
 五35 9 ㊦ は、トロッコにつんで、そへはこびだし  
 五36 1 ㊦ 、山のようにつまれています。この石炭が  
 五36 7 ㊦ は、石炭は、どうしてできたのでしょうか。  
 五37 3 ㊦ ような木が、たおれて土にうずまり、長い  
 五37 4 ㊦ 、長いあいだかかって石炭になったのだ  
 五37 7 ㊦ の中にたくわえられていて、いまそれが、  
 五37 7 ㊦ にたくわえられていて、いまそれが、私た  
 五37 9 ㊦ のために、生き返ってはたらいっているの  
 五37 9 ㊦ 生き返ってはたらいっているのです。五  
 五38 4 ㊦ で、やはり先生をしていらっしやるのです  
 五38 5 ㊦ 、こんなことが書いてありました。『「略」  
 五38 6 ㊦ 三年生を受け持っている。こんど、ぼく  
 五38 7 ㊦ ちに、手紙を書いてもらって、きみの受  
 五38 7 ㊦ 紙を書いてもらって、きみの受持の子ど  
 五38 8 ㊦ ちに、それを送ってあげよう。そうすれ  
 五39 3 ㊦ きです。冬がすぎて、春がきたからです  
 五39 4 ㊦ 、まだ雪がのこっています。けれども、  
 五39 6 ㊦ になるにしたがつて、木のみどりがこく  
 五39 6 ㊦ みどりがこくなつてみえます。茶色の木  
 五40 4 ㊦ しの花です。白くてゆつたりとさく、ひ  
 五40 6 ㊦ ま、たくさんさいています。』『「略」』  
 五41 2 ㊦ も、まきばにだしてやりました。のびは  
 五41 4 ㊦ れしそにあるいていました。子うしは  
 五41 11 ㊦ みんなだいじにして、こくばんのところ  
 五42 1 ㊦ のところにならべてあります。私は、ま  
 五42 4 ㊦ とうに、一どいてみたいと思います。  
 五42 8 ㊦ 、なえはこびをしています。つばめが、

五43 1 ㊦ ゆうてつだいをして、うちに帰るころは  
 五43 2 ㊦ たりはくらくらしています。きのう、は  
 五43 4 ㊦ わへおよめにいっています。ぼくはねえ  
 五43 5 ㊦ よくうたをおしえてもらいました。ねえ  
 五44 6 ㊦ 、なかよくとんであそぼうよ。明か  
 五44 7 ㊦ るい世界の空とんで、平和のうたをう  
 五46 10 ㊦ 通ったら、もう鳴いてはいなかった。た  
 五47 6 ㊦ も。たんぽぽがさいいてたり、すみれがさ  
 五47 7 ㊦ たり、すみれがさいいてたり、名まえは知  
 五47 9 ㊦ 、きれいな花がさいいてたり。おや、こん  
 五48 8 ㊦ いっぱいながれこんできた。いい氣持がし  
 五49 1 ㊦ きた。いい氣持がして、たのしくなった。  
 五49 8 ㊦ ふんやそよ風のせてでる。子どもや荷  
 五50 1 ㊦ 子どもや荷物のせてでる。のたりのた  
 五50 4 ㊦ 。かげをちらして岸をでる。海へ  
 五52 1 ㊦ 。ひつじになつて わいてくる、わ  
 五52 2 ㊦ じになつて わいてくる、わいてくる  
 五52 3 ㊦ いてくる、わいてくる。七 星 ゆ  
 五52 6 ㊦ さこをうば車に乗せて、はるおと大通りに  
 五52 9 ㊦ ーと、あいさつをしていく人もあります。  
 五53 1 ㊦ みると、日がしずんでももない空に、大き  
 五53 2 ㊦ に、大きな星が光っていました。『「略」』  
 五53 4 ㊦ た。『「略」』。といって、手をたいてやり  
 五53 4 ㊦ いて、手をたいてやりますと、まさこ  
 五53 9 ㊦ は、南東の空で光っていました。『「略」』  
 五54 1 ㊦ な星がちらちら光っていました。『「略」』  
 五54 6 ㊦ うさんが、かけよつてきて、『「略」』空の  
 五54 6 ㊦ んが、かけよつてきて、『「略」』空のま  
 五54 8 ㊦ に、大きな星が光っていました。それから  
 五54 10 ㊦ ほんのりと明かなくて、つぎの星をみつ  
 五54 11 ㊦ おかあさんにわたして、食事をすませてか  
 五55 1 ㊦ して、食事をすませてから、またちよつと

五五1 つと、家のまえにでてみました。三十分ぐ  
 五五2 十分ぐらいしかたつていなかったのに、も  
 五五3 すっかりくらくらなっていて、空いちめんに  
 五五3 かりくらくらなっていて、空いちめんに、星  
 五五3 いちめんに、星がでていました。「略。」  
 五五4 た。「略。」と思って、西の空をみました  
 五五6 先生がおいでになって、「略。」と、さそ  
 五五8 みせますよ。いつてみませんか。」と、  
 五五9 「略。」と、さそってくださいました。私  
 五五10 んにこのことをいつて、ごろうさんをさそ  
 五五11 ごろうさんをさそつて、はるおといっしょ  
 五五1 の人々が、あつまっていました。「略。」  
 五五2 そこに大きく光っている星ですよ。」私  
 五五7 んがきたので、みせていただきました。「へ  
 五五11 えさん、早くみせて。」はるおにさいそ  
 五五1 るおにさいそくされて、ばんをゆずりまし  
 五五2 。はるおは、のぞいていましたが、かげん  
 五五3 す。「あわてないで、しずかにごらん。  
 五五4 」。私は、こういつて、はるおのかたをそ  
 五五1 「あんまり長くみていないで、さあ、お  
 五五1 り長くみていないで、さあ、おかわり。  
 五五3 」はるおは、まだみていたようでしたが  
 五五4 、やと目をはなして、ばんをごろうさん  
 五五6 青い水の中にういているようだ。「略」  
 五五9 ちは、まもなく帰ってきました。ごろうさ  
 五五10 どの星もみんなみてしまいたいな。」と  
 五五4 した。私は、いまみてきた土星を、紙にて  
 五五4 紙にていねいにかいておこうと思いました  
 五五9 こは、それをみつめて、「略。」といいま  
 五五3 つの花が、そろってしんききゅうしてい  
 五五3 てしんききゅうしているようにみえます  
 五五5 」。あとで写生してごらん。おまえが、

五五2 の色を空色にそめてくれたのは、だれで  
 五五2 こは、なんとこたえていいのか、わからな  
 五五4 か、わからなくなつてしましました。あさ  
 五五3 略。「せわはしてやりました。けれど  
 五五5 そばでおききになって、「略。」といつて  
 五五7 て、「略。」といつて、おわらいになりま  
 五五8 まれたときは、ねてばかりいたのが、は  
 五五9 あるくようになって、いまは、もうこん  
 五五3 ときからせわはしてきたが、日に日に大  
 五五9 あさんも、こうして、まいにち、たつし  
 五五10 、たつしやで生きていけるのは、だれの  
 五五11 ろう。さあ、考えてごらん。」九 金  
 五五3 おばあさんが、住んでいました。ふたりは  
 五五4 るい小さな家に住んでいました。おじいさ  
 五五8 さんは、糸をつむいでくらししていました。  
 五五8 糸をつむいでくらししていました。ある日、  
 五五10 じいさんは、海にでてあみをなげました。  
 五五1 金のさかながつかつてきました。金のさか  
 五五3 たしを海へはなしてください。お礼はた  
 五五8 」。とやさしくいつて、はなしてやりまし  
 五五8 しくいつて、はなしてやりました。おじい  
 五五9 さんは、うちへ帰つて、おばあさんに、こ  
 五五11 それが、海へ帰してくれ、お礼はいくら  
 五五2 、青い海へはなしてやったよ。」おばあ  
 五五5 の一つも、もらつてくればよかったのに  
 五五6 、すっかりこわれてしまつていたんだも  
 五五6 りこわれてしまつていたんだもの。」と  
 五五6 た。海はすこしあれていました。おじいさ  
 五五10 よびますと、すぐでてきて、「略。」とき  
 五五10 ますと、すぐでてきて、「略。」とききま  
 五五3 けがほしいといつています。「略。」  
 五五5 さん、心配しないでお帰りなさい。帰る

五五7 新しいおけができていますよ。」おじい  
 五五8 「おじいさんが帰つてみると、おばあさん  
 五五9 、新しいおけを持っています。ところが  
 五五11 なのところへいつて、家をもらつておい  
 五五11 って、家をもらつておいで。」おじいさ  
 五五1 ました。海はにごつていました。おじいさ  
 五五2 よびますと、およいできてきました。「へ  
 五五2 ますと、およいできてきました。「略」  
 五五7 さん、心配しないでお帰りなさい。家は  
 五五8 家はちゃんとできていますから。」おじ  
 五五11 、りっぱな家がたつていました。おばあさ  
 五五2 なのところへいつて、たのんでくれ。  
 五五2 へいつて、たのんでくれ。わたしは、  
 五五6 きました。海はあれていました。おじいさ  
 五五9 金のさかながおよいできました。「略」  
 五五11 さん、心配しないでお帰りなさい。」お  
 五五3 、けがわのふくをきて、ぴかぴか光るずき  
 五五5 め、赤いくつをはいていました。めしつか  
 五五2 れから三日ほどたつて、おばあさんはおじ  
 五五5 りたいつたのんでおくれ。」おじいさ  
 五五6 いさんはびっくりして、「略。」「略」  
 五五2 きかたも知らないで——國じゅうのもの  
 五五10 いわずに海へいつておいで。」おじいさ  
 五五1 。海はまっ黒になつてあれていました。お  
 五五1 まっ黒になつてあれていました。おじいさ  
 五五6 になりたいといつています。「略」  
 五五7 さん、心配しないでお帰りなさい。おば  
 五五10 。おじいさんが帰つてみると、どうでしょ  
 五五11 んとごてんができていて、おばあさんは  
 五五11 とごてんができていて、おばあさんは女王  
 五五11 あさんは女王になつていて、おばあさんは女王  
 五五2 っぱなけらいもつています。おじいさん

五七四八 んには目もくれないで、けらいに、「略」  
 五七四九 、「あちらへつれていけ。」というつけ  
 五七五〇、おじいさんをよんでいいました。「略」  
 五七五二 、「おじいさんたのんでおいで。わたしは女  
 五七五三 かなをけらいにしてやりたい。」おじい  
 五七五四 海はまっ黒になって、波が高く、ゴーゴ  
 五七五五、ゴーゴとうなっています。おじいさん  
 五七五六。金のさかなは、できていいました。「略」  
 五七五七のさかなは、できていいました。「略」  
 五七五八王はいやだといっています。海のぬしに  
 五七五九 いにしたいといっています。「金のさか  
 五七六〇 は、なにもいわないで、しっぱでビシャリ  
 五七六一 ビシャリと音をさせて、海の中へおよいで  
 五七六二、海の中へおよいでいってしまいました  
 五七六三の中へおよいでいってしまいました。おじ  
 五七六四みると、まえに住んでいた、ふいふい小  
 五七六五るい小い家がたっていました。入口にお  
 五七六六おばあさんがすわっていました。こわれた  
 五七六七けが一つ、ころがっていました。十学  
 五七七八の花が、三本かざってありました。かおよ  
 五七七八すね。だれがいてくれたのですか。こ  
 五七八〇ちのわから、持ってきてくれたのです。こ  
 五七八一にわから、持ってきてくれたのです。こ  
 五七八二たけのむこうを流れている小川のところに  
 五七八三。そうして、川をみて氣のついたことを書  
 五七八四たり高く鳴っていました。「略」  
 五七八五いつまでも高く鳴っています。「略」  
 五七八六「つたりさがたりして、流れていきます。  
 五七八七がつたりして、流れていきます。「略」  
 五七八八びたりちんだりしています。「略」  
 五七八九、魚のようによいいます。「略」  
 五七九〇から水がわきあがってくるようです。「へ

五七九一に、らくらくと流れていきます。「略」  
 五七九二石と石とが、おどっています。「略」  
 五七九三「略」。「水が光って、とんではねていま  
 五七九四「水が光って、とんではねていま  
 五七九五光って、とんではねています。「へ  
 五七九六「水が光って、とんではねています。  
 五七九七せなかがあつくなってきました。七月十  
 五七九八ほうきをむすびつけて、てんじょうのくも  
 五七九九た。むすびめがとけて、ほうきがおちまし  
 五八〇〇りさんはびっくりして、「略」  
 五八〇一「略」といってとびあがったので、  
 五八〇二ラスもきれいになって、そとのけしきがよ  
 五八〇三からだに氣をつけてください。じゅくさ  
 五八〇四まきをきちんとして、ねびえをふせぐこ  
 五八〇五、運動場にあつまって、先生をまん中にし  
 五八〇六、先生をまん中にしてならびました。先生  
 五八〇七、いっぺんにわらってしまいました。そこ  
 五八〇八文を書くんだといって、よろこんでいまし  
 五八〇九といつて、よろこんでいました。いのうえ  
 五八一〇んは、國語の本にでていることばを、五十  
 五八一〇ばを、五十音にわけてみるといいました。  
 五八一〇きれいにそうじておこう。」りようか  
 五八一〇がら、ほうきを持って、木の葉をはきよせ  
 五八一〇とよびながら、走ってきました。「略」  
 五八一〇お、みんなそろってききた。おや、おま  
 五八一〇のようにふしをつけてよびながら、ひとり  
 五八一〇、ほうきの手をとめて、「略」  
 五八一〇もひいたかと思つて、「略」  
 五八一〇のけがふさふさして、まるい目が二つあ  
 五八一〇るい目が二つあつて、「略」  
 五八一〇つもあるかと思つていたよ。あはははは  
 五八一〇な赤いおびをしめている。いいおびだ。

五八八一な。ちょっとかしておくれ。「略」  
 五八八二「もりのしかたをしてみせてあげよう。さ  
 五八八三しかたをしてみせてあげよう。さあ、こ  
 五八八四ました。「こうして右の手でだいてな、  
 五八八五して右の手でだいてな、左の手でかかえ  
 五八八六、左の手でかかえてき、それから、うた  
 五八八七コップといただいて、こんなにいいおば  
 五八八八「略」  
 五八八九「略」  
 五八九〇「略」  
 五八九一「略」  
 五八九二「略」  
 五八九三「略」  
 五八九四「略」  
 五八九五「略」  
 五八九六「略」  
 五八九七「略」  
 五八九八「略」  
 五八九九「略」  
 五九〇〇「略」  
 五九〇一「略」  
 五九〇二「略」  
 五九〇三「略」  
 五九〇四「略」  
 五九〇五「略」  
 五九〇六「略」  
 五九〇七「略」  
 五九〇八「略」  
 五九〇九「略」  
 五九一〇「略」  
 五九一一「略」  
 五九一二「略」  
 五九一三「略」  
 五九一四「略」  
 五九一五「略」  
 五九一六「略」  
 五九一七「略」  
 五九一八「略」  
 五九一九「略」  
 五九二〇「略」  
 五九二一「略」  
 五九二二「略」  
 五九二三「略」  
 五九二四「略」  
 五九二五「略」  
 五九二六「略」  
 五九二七「略」  
 五九二八「略」  
 五九二九「略」  
 五九三〇「略」  
 五九三一「略」  
 五九三二「略」  
 五九三三「略」  
 五九三四「略」  
 五九三五「略」  
 五九三六「略」  
 五九三七「略」  
 五九三八「略」  
 五九三九「略」  
 五九四〇「略」  
 五九四一「略」  
 五九四二「略」  
 五九四三「略」  
 五九四四「略」  
 五九四五「略」  
 五九四六「略」  
 五九四七「略」  
 五九四八「略」  
 五九四九「略」  
 五九五〇「略」  
 五九五一「略」  
 五九五二「略」  
 五九五三「略」  
 五九五四「略」  
 五九五五「略」  
 五九五六「略」  
 五九五七「略」  
 五九五八「略」  
 五九五九「略」  
 五九六〇「略」  
 五九六一「略」  
 五九六二「略」  
 五九六三「略」  
 五九六四「略」  
 五九六五「略」  
 五九六六「略」  
 五九六七「略」  
 五九六八「略」  
 五九六九「略」  
 五九七〇「略」  
 五九七一「略」  
 五九七二「略」  
 五九七三「略」  
 五九七四「略」  
 五九七五「略」  
 五九七六「略」  
 五九七七「略」  
 五九七八「略」  
 五九七九「略」  
 五九八〇「略」  
 五九八一「略」  
 五九八二「略」  
 五九八三「略」  
 五九八四「略」  
 五九八五「略」  
 五九八六「略」  
 五九八七「略」  
 五九八八「略」  
 五九八九「略」  
 五九九〇「略」  
 五九九一「略」  
 五九九二「略」  
 五九九三「略」  
 五九九四「略」  
 五九九五「略」  
 五九九六「略」  
 五九九七「略」  
 五九九八「略」  
 五九九九「略」  
 六〇〇〇「略」

五九一 合 の、ひろっていった、かってみよう。」  
 五九一 合 っいて、かってみよう。」さんちゃん  
 五九二 さんちゃんがひろって帰ると、おとうさん  
 五九三 合 すりをこしらえて、たべさせてみよう  
 五九三 合 らえて、たべさせてみよう。」とおつし  
 五九四 合 略。」とおつしやって、たまごのきみです  
 五九五 合 ずりをこしらえて、たべさせてやりま  
 五九五 合 しらえて、たべさせてやりました。ひなは  
 五九六 合 えるように元気がでて、だんだん大きな  
 五九六 合 になるまで、かってやりましようね。」  
 五九六 合 まかせなかにかけて、き色がかった美し  
 五九六 合 ひわ、ひわといっています。いまにいい  
 五九六 合 のおじさんがおしえてくれました。夏休み  
 五九六 合 ごの中をとびまわっていました。「略。」  
 五九六 合 ね。かごからだして、にがしてやりまし  
 五九六 合 らだして、にがしてやりましようか。」  
 五九六 合 いとどこまでとんでいくことはできない  
 五九七 合 「略。」そういつているうちに、秋にな  
 五九七 合 たり鳥のむれがとんできます。その中には  
 五九七 合 での枝で休んだりしていききました。「略」  
 五九七 合 よ。このままかっておいたらいでしょ  
 五九八 合 。あした山へつれていって、はなそうと  
 五九八 合 た山へつれていって、はなそうと思つて  
 五九八 合 、はなそうと思つていのです。」その  
 五九八 合 、みんながとびおきてみると、どこかのね  
 五九九 合 ねこが、しのびこんで、ひわをとろうとし  
 五九九 合 、ひわをとろうとしていました。「略。」  
 五九九 合 、ねこは、おどろいてにげていってしま  
 五九九 合 は、おどろいてにげていってしまいました  
 五九九 合 どのにげていってしまいました。が、ひ  
 五九九 合 のところにけがをして、ころがってしま  
 五九九 合 がをして、ころがっていました。さんちゃん

五九九 合 たり、くすりをつけてやったりしますと、  
 五九九 合 のように元氣になつて、かごの中をとびま  
 五九九 合 ごの中をとびまわっていました。「略。」  
 五九九 合 たらしい。にがしてやれなくなつたよ。  
 五九九 合 おとうさんにいわれて、よくみると、ねこ  
 五九九 合 た羽がふらりとなつて、半分しかひろげら  
 五九九 合 てもかわいがつてやるよ。山へはなし  
 五九九 合 るよ。山へはなしてやりたかつただけ  
 五九九 合 は、ひわによくいつてきかせました。ひわ  
 五九九 合 へんな声でさえずつて、さんちゃんの本を  
 五九九 合 と、ひわもよろこんで、「略。」と、早く  
 五九九 合 かえでの木につるしておきます。人がとき  
 五九九 合 す。人がときどききて、水道をつかいます  
 五九九 合 ジャーと、音をたてて流れているのをきい  
 五九九 合 と、音をたてて流れているのをきいて、ひ  
 五九九 合 流れているのをきいて、ひわは、そのまね  
 五九九 合 わは、そのまねをして、「略。」と、すず  
 五九九 合 かえでの木につるしておくと、いろいろな  
 五九九 合 が、「略。」と鳴いてみせました。すずめ  
 五九九 合 と、さわがしく鳴いてみせました。すずめ  
 五九九 合 すずめは、おどろいてとんでいってしま  
 五九九 合 は、おどろいてとんでいってしまいました  
 五九九 合 どのにげていってしまいました。みそ  
 五九九 合 は、「略。」と鳴いて、木のかげにかくれ  
 五九九 合 ゆうからがやつてきて、「略。」と、いい  
 五九九 合 「と、いい声で鳴いて、おしまいに、「略」  
 五九九 合 までもその声をきいていました。しじゅう  
 五九九 合 らは、どこかへいつてしまいました。が、ひ  
 五九九 合 いつもそのまねをしては、ひとりよろこん  
 五九九 合 は、ひとりよろこんでいました。「略。」  
 五九九 合 ちのまつの木におりてきました。ひわは、  
 五九九 合 こびで、声をあわせてうたいました。旅の

五九九 合 よにむこうへとんでいこうよ。空はひろ  
 五九九 合 うよ。空はひろくてもおもしろいよ。」と  
 五九九 合 めだから。こうしていつまでも、ここに  
 五九九 合 略。」ここにいて、なにか、おもしろ  
 五九九 合 「略。」そういつて、ハーモニカのまね  
 五九九 合 んが学校から帰つてきました。旅のひわ  
 五九九 合 のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の  
 五九九 合 まつの木の上へにげていききましたが、かご  
 五九九 合 きみ、きみ。おりてこないかい。ぼくの  
 五九九 合 わは、そのままとんでいつてしまいました  
 五九九 合 そのままとんでいつてしまいました。近い  
 五九九 合 ころに製材所ができて、のこぎりのやかま  
 五九九 合 た、こまつたといっていました。しかし、  
 五九九 合 をどんだんおぼえていく。」おとうさん  
 五九九 合 んのほめるのをきいて、さんちゃんは、ま  
 五九九 合 の中にしまひこまれていた、小さな鉄のね  
 五九九 合 セットにはさまれて、明かるいところへ  
 五九九 合 。ねじは、おどろいてあたりをみまわした  
 五九九 合 、だんだんおちついてみると、ここは時計  
 五九九 合 った。自分のおかれていますのは、しごと台  
 五九九 合 しごと台の上ののっている小さなふたガラ  
 五九九 合 んまいなどがならんでいる。きりや、ねじ  
 五九九 合 台の上によこたわっている。まわりのかべ  
 五九九 合 計がたぐさんならんでいる。カチカチと氣  
 五九九 合 あれこれとみくらべて、あれはなんの役に  
 五九九 合 のだらうなどと考えているうちに、ふと、  
 五九九 合 もそれぞれががつてはいるが、どれをみ  
 五九九 合 れをみても大きくてえらそうである。ひ  
 五九九 合 どの役目をつとめて、世の中の役にたつ  
 五九九 合 このように小さくて、なんの役にもたつ  
 五九九 合 バタバタと足音がして、小さな子どもがふ  
 五九九 合 、おくからかだしてきた。男の子と女の



六77 はそこらを見まわしていたが、男の子は、  
六71 はただじつとみつめていたが、やがてこの  
六81 小さなねじをみつめて、「略。」という  
六85 うと、すぐにおとししてしまった。子どもた  
六86 しのかげにころがっていった。このとき、  
六87 時計屋さんがはいつてきた。時計屋さんは  
六88 「ここであそんではいけない。」とい  
六89 、しごと台の上をみて、だしておいたねじ  
六89 台の上をみて、だしておいたねじのないの  
六91 じはもうなくなつて、あれ一つしかない  
六94 「ねじはこれをきいて、とびあがるほど  
六96 ころにころがおちてしまつて、もし、み  
六96 ころがおちてしまつて、もし、みつからな  
六97 れがまた心配になつてきた。親子はそうが  
六910 略。」とさげびたくてたまらない。三人は  
六102 いままで雲にかくれていたたいようがかお  
六104 いっぱいにさしこんできた。すると、ねじ  
六105 ねじがその光を受けて、ピカリと光った。  
六107 そばで、ふさぎこんで下をみつめていた女  
六108 ぎこんで下をみつめていた女の子が、思わ  
六111 でねじをはさみあげて、だいにものふ  
六113 いちゆう時計をだしてそれをいじっていた  
六113 だしてそれをいじっていたが、やがて、ピ  
六114 ットでねじをはさんで、きかいのあなにさ  
六116 で死んだようになっていたかいちゆう時計  
六1110 と思うと、うれしくてたまらなかつた。時  
六111 をちよつと耳にあててから、ガラス戸だ  
六121 りさげた。一日おいて、町長さんがきた。  
六124 ねじが一本いたんでいましたから、とり  
六125 たから、とりかえておきました。ぐあい  
六128 、「略。」といつてわたした。ねじは、  
六1210 んとうに役にたっているのだ。」と、心

六134 のを運びながら歩いてくると、のどがかわ  
六135 、そばに小川が流れていました。ありは、  
六136 川の岸で、うつむいて水をのもうとしまし  
六138 足がつるりとすべつて、「略。」というま  
六138 まに、川の中におちてしまいました。「略  
六139 いました。「助けて、助けて。」ありは  
六139 「助けて、助けて。」ありは大きな声  
六141 りは大きな声をだしてさげびました。けれ  
六143 けれども、だれもきてはくれません。「略  
六144 れません。「助けて、助けて。」ありは、  
六144 「助けて、助けて。」ありは、いっし  
六148 た。はとは、いそいで木の葉をとつて、あ  
六149 そいで木の葉をとつて、ありのそばにおと  
六1410 ありのそばにおとしやりました。木の葉  
六1411 葉は船のようになつて、ありのそばを流れ  
六153 、「ありはそういつて、すぐ木の葉の船に  
六156 葉の船は波に流されて、川の岸につきまし  
六1510 木の葉の船が流れてこなかつたら、どう  
六1511 たら、どうなつていたかしれない。」  
六162 りうどが弓矢を持って通りました。そのか  
六164 ゆうに歩くのをやめて、弓に矢をつがえて  
六165 て、弓に矢をつがえて、木の上をねらいま  
六166 一わのほととぎすがついていました。はとは、  
六167 。はとは、ねらわれていることを知らずに  
六168 た。ありは、いそいでかりうどのすねには  
六1610 りうどもびつくりして、「略。」と、大き  
六172 した。その声をきいて、はとが下の方をみ  
六173 りうどが矢をつがえているではありません  
六175 か。「略。」といつて、大いそぎで木から  
六175 ぎで木からとびたつていきました。あり  
六178 すが大いそぎであつまつて、音楽会をしていま  
六181 まつて、音楽会をしています。あるきりぎ

六181 はバイオリンをひいています。あるきりぎ  
六182 りすはチェロをひいています。あるきりぎ  
六183 ぎりすはふえをふいています。そのほか、  
六183 、ハーモニカをふいているもの、オルガン  
六184 の、オルガンをひいているもの、たいこを  
六184 の、たいこをたたいているもの、シロフォ  
六185 シロフォンをたたいているもの、そのうし  
六186 ろに合唱隊がならんで、うたをうたつてい  
六186 んで、うたをうたつています。まん中に、  
六187 トをいっしんにふつています。しばらく音  
六187 ばらく音楽がつづいてから終わります。しき  
六1810 そうにしき台をおりてきて、あせをふきま  
六1810 にしき台をおりてきて、あせをふきま  
六198 われの音楽をほめてくれる。」ふえのき  
六201 い、おおいにひいて、この夏の日を樂し  
六2010 のまわりにあつまつて、まるくなりま  
六2010 には、お茶が用意してあり、くだものが、  
六2011 くさんおさらにもつてあります。みんな、  
六214 ことばをみんな喜んできいています。その  
六215 をみんな喜んできいています。そのとき、  
六217 三びき、ゆつくりでできます。大きな荷物  
六218 荷物を、力をあわせて運んでできます。たい  
六219 、力をあわせて運んでできます。きりぎりす  
六224 ははじめて氣がついて、あり「あ、だれ  
六228 な大きな物を持つてさ。」あり「三うちへ  
六231 。いまあそばないで、いつあそばうとい  
六235 をひとたたきたいで、「略。」バイオリ  
六237 リンをちよつとひいて、「略。」たいこの  
六239 をドンドンとたたいて、「略。」あり「一  
六2310 がひょうしをとつてあげる。ここで樂し  
六2310 こで樂しくあそんでおいで。」あり「せ  
六241 らくやくそくをしているのです。」チェ

六243 ㊦ ときにあそばさないで、いつあそばうとい  
六244 ㊦ 樂しむために生きているんじゃないか。  
六247 ㊦ かけよう。」といって、あり一、二をさそ  
六248 ㊦ 「と、かけ声をかけて持ちあげます。しき  
六2410 ㊦ 樂しさも知らないで、氣のどくなありさ  
六254 ㊦ はなんにもいわないで、おもい足どりでか  
六254 ㊦ どりでかみてにさっていきます。しきしや  
六261 ㊦ て半分はそとになっています。雪がちらち  
六262 ㊦ 。雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近い  
六262 ㊦ がちらちら降っていて、夕ぐれに近いころ  
六263 ㊦ まどからそとをみて、「略」。あり二  
六263 ㊦ みて、「雪が降ってきた。」あり二「今夜  
六265 ㊦ 」。あり三「風がでてこなければいいね。  
六2610 ㊦ にたきぎをあつめておいて、よかったね  
六2610 ㊦ ぎをあつめておいて、よかったね。」あ  
六271 ㊦ 夏のころはあつくてたいへんだった。」  
六275 ㊦ でさ、いまこうしてあたまることもで  
六282 ㊦ りすが二ひきたずねてきます。ぼうしもか  
六283 ㊦ らず、がいとうもきていません。きりぎり  
六285 ㊦ 「まあ、おねがいしてみよう。」きりぎり  
六2810 ㊦ や、だれかたずねてきたらしい。」あり  
六291 ㊦ 一、二が戸の方をみています。あり三「お  
六293 ㊦ はいり。」戸をあけて、きりぎりす一、二  
六293 ㊦ りす一、二がはいってきます。あり三「き  
六297 ㊦ りすつかりよわって。」きりぎりす二「な  
六298 ㊦ 一「なにかめぐんでください。」きりぎ  
六299 ㊦ もいいから、わけてください。」あり一、  
六303 ㊦ 「花のみつをわけてあげよう。」あり一  
六304 ㊦ らみつをびんにいれてもってきます。それ  
六304 ㊦ をびんにいれてもってきます。それをきり  
六307 ㊦ なんともお札をいってたちさります。雪が  
六307 ㊦ 。雪がたくさん降ってきます。——まく——

六317 ㊦ の顔で、風に向かって立っている。きもの  
六318 ㊦ 、風に向かって立っている。きものすそ  
六3110 ㊦ る。3 雲がちぎれてとぶ。4 木が大ゆ  
六329 ㊦ に、空にすいこまれていくかし。10 か  
六3210 ㊦ の子が、びつくりしてすからとびだし、空  
六331 ㊦ すが、羽をさか立てて、子からすをすにひ  
六333 ㊦ げの雲が風に流されている。13 風を受け  
六339 ㊦ か。かし「助けて——雲のおじさん。  
六3310 ㊦ どれいた。生まれてはじめての大風だ。  
六341 ㊦ 山のかげにかくれて、ここからはみえな  
六344 ㊦ 雲のひげがおおられて長くのびる。かし  
六346 ㊦ るが、もんどりうって、また、ひげの中に  
六3410 ㊦ 。口をもぐもぐさせている——声がでない  
六358 ㊦ げ、のびるだけのびてちぎれてしまう。17  
六359 ㊦ だけのびてちぎれてしまう。17 くるく  
六3510 ㊦ くるまいるがらおちていくかし。18 大  
六362 ㊦ のおばさん、助けて。」すぎあら、子ど  
六364 ㊦ に。根の方へおいていらっしやい——あ  
六364 ㊦ ーああ、またふいてくるよ。早く、早く  
六368 ㊦ 20 高くふきあげられて、空にきえていくか  
六368 ㊦ げられて、空にきえていくかし——点に  
六369 ㊦ かし——点になって、おしまいにはみえ  
六369 ㊦ いにはみえなくなってしまう。21 風の音  
六3610 ㊦ くなる。それにつれて、空がうす赤くなっ  
六3611 ㊦ 、空がうす赤くなってくる。夕やけ雲がう  
六3611 ㊦ 。夕やけ雲がうかんではいる。22 ビルディ  
六371 ㊦ イングが立ちならんでいる町。ラジオの音  
六373 ㊦ た屋根にひっかかっているかし。24 顔  
六3711 ㊦ きりなしにゆききしている。26 立ちなら  
六381 ㊦ だから、とびあがつてくる親子のつばめ。  
六386 ㊦ あ、の屋根にとまっているのは。」親つば  
六389 ㊦ ぬけ、また、もどつてきてかかしの近くに

六389 ㊦ 、また、もどつてきてかかしの近くにとま  
六399 ㊦ がわるい虫をとってそだてたいねを、こ  
六401 ㊦ ある。心配しないでまっていられっしやい  
六401 ㊦ 心配しないでまっていられっしやい。すぐ  
六402 ㊦ しゃい。すぐ帰ってきますから。」29 親  
六403 ㊦ め、子つばめをつれてさる。30 のこされ  
六408 ㊦ た思い出が、うかんではきえていく。32  
六409 ㊦ が、うかんではきえていく。32 日がくれ  
六415 ㊦ 、かかしの方へとんでくる。35 親つばめ  
六424 ㊦ 、えんりよしなくてもいいのよ。さあ、  
六4210 ㊦ なる。それがほぐれて、一列にビルディ  
六4211 ㊦ 列のまん中にはいっている。37 しずんで  
六431 ㊦ ている。37 しずんでいくお日さまをお  
六431 ㊦ いくお日さまをおつて、町の上を列車のよ  
六434 ㊦ ひとかたまりになつてとぶつばめのむれ。  
六436 ㊦ 列が空にすいこまれていく。それをつつむ  
六437 ㊦ れをつつむようにして日がくれる。美しい  
六441 ㊦ 42 木の枝にとまっている二わの子がらす  
六442 ㊦ らす「ほら、みてごらんよ。ほんとう  
六443 ㊦ あのかかしが帰っているだろう。」子が  
六444 ㊦ ったいだれがつれて帰ったんだらうね。  
六449 ㊦ うの山の方へとんでいったんだよ。」子  
六453 ㊦ なんべんもさげんでいたよ。」43「への  
六455 ㊦ かしが、むねをはって、目をむいて、たん  
六455 ㊦ をはって、目をむいて、たんぼをみわたし  
六456 ㊦ 、たんぼをみわたしている。かかしの目の  
六459 ㊦ 、いちめんにつづいていく。四 空のう  
六466 ㊦ んばらばら かけていく。からから、  
六475 ㊦ 屋のきまでたれて、かきはすすなり  
六493 ㊦ たち、いつもでてくる小人たち。ふ  
六513 ㊦ みんなきれいに光っていました。ふみおと  
六514 ㊦ 人が、かげふみをして遊んでいました。そ

六五四 かげふみをして遊んでいました。そのうち  
 六五五 きゆうにくらくなって、かげがみえなくな  
 六五六 三人は遊ぶのをやめて、空をみあげました  
 六五九 月さまが早く走っているね。」と、よし  
 六五二 月はいま雲からでて、大いそぎではなれ  
 六五三 、大いそぎではなれていきます。そうして  
 六五五 の方へどんどん走っていきます。けれども  
 六五七 、じつと月をみつめていると、月は動かな  
 六五八 ると、月は動かないで、雲が大いそぎでと  
 六五九 雲が大いそぎでとんでいくようにもみえま  
 六五二 ないわ。雲が走っているのよ。」と、み  
 六五三 方のいうことをきいていました。「略」  
 六五三 はお月さまが走っているといったね。み  
 六五四 こさんは雲が走っているっていうの。「  
 六五五 月さまをじつとみていると、雲が動いてい  
 六五五 まをじつとみていると、雲が動いてい  
 六五六 が大いそぎでとんでいくでしょう。」「へ  
 六五七 ね、雲をじつとみていると、雲が動いてい  
 六五七 雲をじつとみていると、雲が動いてい  
 六五八 まがずんずん動いていくのがよくわかる  
 六五九 あ。お月さまをみていると、雲が動いてい  
 六五九 ていると、雲が動いていくし、雲をみても  
 六五九 いていくし、雲をみているとお月さまが動  
 六五九 とお月さまが動いていく。いったいどつ  
 六五九 ふみおは、こういって、空をみあげました  
 六五九 「略」といいあっているのをききながら  
 六五九 みおはふと気がついて、まえの方にある木  
 六五九 らく枝ごしに月をみていましたが、「略」  
 六五九 たが、「ここへきてごらん。ほら、よく  
 六五九 りは木のそばへ走っていきました。「略」  
 六五九 た。「ここに立って、お月さまを枝のあ  
 六五九 枝のあいだからみてごらん。」ふたりは

六五四 りはそのとおりにしてみました。すると、  
 六五四 のあいだにじつと走っています。雲はさつ  
 六五四 、雲はさつと走っています。よしおが  
 六五二 やっぱり雲が走っているんだね。「略」  
 六五五 から、三人はわかれて、それぞれ家へ帰り  
 六五五 きれいにはれわたっていました。ふみおは  
 六五五 きのことを思いだして、また、にわの木  
 六五五 にわの木の下へいってみました。動かない  
 六五五 た。動かないと思つてみた月は、もうさつ  
 六五五 枝のあいだにはなくて、木をずつとはずれ  
 六五五 、木をずつとはずれてしまっていました。  
 六五五 つとはずれてしまっていました。六か  
 六五五 のは、みんな集まって、どんなものにしよ  
 六五五 ました。手わけをして、やつとつぎのよう  
 六五五 、はき物に雪がついてころびました。その  
 六五五 ようしに足をいためて、歩けなくなりまし  
 六五五 った人が、おんぶして学校までつれてきま  
 六五五 ぶして学校までつれてきました。この人は  
 六五五 ずが、五か七になつていました。「空の  
 六五五 空のうた」をしらべてみました。ウスム  
 六五五 らつたのを思いだして書いてみました。  
 六五五 のを思いだして書いてみました。カボチ  
 六五五 き、私はおもしろくてなりませんでした。  
 六五五 。みなさん、ためしてみてください。(は  
 六五五 なさん、ためしてみてください。(はらだ  
 六五五 一口話 川が流れていました。くつが流  
 六五五 ました。くつが流れてきました。そこへき  
 六五五 こへきゆうりが流れてきました。きゆうり  
 六五五 んはゆたんぽをいれている。わたしもせき  
 六五五 いなあ。手をあらって、しゃぼんを水の上  
 六五五 すべった。つかまえて、たなにあげたら、  
 六五五 たら、あぶくをだしておこった。どうして

六五八 った人は、紙に書いてかべ新聞がかりのも  
 六五九 がかりのものにだしてください。つづき  
 六六三 お話のつづきを書いてください。第三号を  
 六六六 です。そのようにして、どこまでもお話を  
 六六六 までもお話をつづけてみましょう。どんな  
 六六六 ふうにお話がすすんでいくか、楽しみでは  
 六六六 かってにつぎを考えてください。つづき  
 六六六 びきの子ぐまが住んでいました。お友だち  
 六六六 だちと遊ぼうと思つて、山の谷を歩いてい  
 六六六 っ、山の谷を歩いていきました。すると  
 六六六 、さるは子ぐまをみてこわがつて、「略」  
 六六六 ぐまをみてこわがつて、「略」といって  
 六六六 て、「略」といって、木の上にするする  
 六六六 にするするのと、ぼつていってしまいました  
 六六六 するのと、ぼつていってしまいました。子ぐ  
 六六六 子ぐまはまた歩いていきました。この  
 六六六 た。それを切りとって新聞にはりつけまし  
 六六六 の人がみんな考えてこしらえたまんがで  
 六六六 一ばん遠くから通っている子ども名や家  
 六六六 をじょうずにくぎつて、きれいに、むだの  
 六六六 えといっしょになつて、大きな雪だるまを  
 六六六 こへ、中学校に通っているねえさんが、帰  
 六六六 るねえさんが、帰ってきました。「略」  
 六六六 ばいいて、いっていったところよ。「こ  
 六六六 「略」これをきいて、ねえさんはわらい  
 六六六 はるえは本氣になっていました。はるえ  
 六六六 、なにかお話をしあげたらどう。「へ  
 六六六 んのうたをつくつて、うたつてあげよう  
 六六六 つくつて、うたつてあげようか。「略」  
 六六六 の雪だるまは、死んでいるのか、生きてい  
 六六六 んでいるのか、生きていますのか。もちろ  
 六六六 のか。もちろん生きていますとは思わな

六727 とは思わないが、死んでいるとも思えない。  
 六728 とも思えない。死んでいたら、ころがって  
 六728 でいたら、ころがってたおれるわけだし、  
 六729 し、目だつてつぶってしまふだろうし、あ  
 六7210 氣のいい顔つきもしていないはずだ——」  
 六7211 、「なにを考えこんでいるんだね。」おと  
 六731 うさんにたずねられて、「略。」と、とん  
 六737 、「雪だるまは生きているのでしょうか、  
 六738 でしょうか、死んでいるのでしょうか。  
 六742 、「ごろうさん。生きているものには、みん  
 六753 、「略。」ときかれて、ごろうは、「略」  
 六758 ち、おまえが生きているんだから、わか  
 六762 、「はるえはそれを見て、「略。」ときま  
 六769 、「りするから、生きているでしょう。」  
 六771 、「ことをきいたりして。」略。」「略」  
 六772 、「から、それを考えているんです。ぼくた  
 六773 、「くなるから、生きているんでしょう。」  
 六774 、「大きくふたりしているものは、みんな  
 六776 、「しないし、息もしていませんね。」略  
 六7710 車や、水車は、動いていても息をしないか  
 六783 、「、日に日にそだっていく。たとえ動かな  
 六784 、「草でも、命をもっているのだよ。とにか  
 六787 、「あなたは、ねむってしまったら動かなく  
 六7811 ではないことをきいて、なるほどと思いま  
 六793 、「ところを手にあててごらんさい。どき  
 六793 、「どきんどきんやっていますよ。しん  
 六795 、「を動かそうと思って動かしているの。ち  
 六795 、「うと思って動かしているの。ちがうでし  
 六797 、「、あなたがねむっているときでも、どき  
 六798 、「どきんどきんやっていますよ。」ごろう  
 六805 、「さんは毎日海へで、魚をとっていらっ  
 六805 、「へで、魚をとっていらっしやるが、私

六806 、「私は毎日山へいって、鳥やけものをとつ  
 六806 、「鳥やけものをとっていますね。」ほでり  
 六814 、「私につりをさせてくださいませんか。  
 六817 、「山へいらっしやって。」ほでりの「そんな  
 六824 、「大きなたいをつつてみたいのです。」ほ  
 六825 、「いよ。でも、つてみるがいいさ。わた  
 六828 、「のつりざおを持っていくがいい。」ほお  
 六8210 、「この弓と矢を持っていらっしやい。」二  
 六837 、「らしい。ひきあげてみよう。よいしょ。  
 六841 、「糸がぷつりと切れて、魚はにげる。ほお  
 六851 、「けのないことをしてしまいました。」ほ  
 六854 、「ぼりを魚にとられてしまいました。」ほ  
 六859 、「どんなことでもして、おわびいたします  
 六8511 、「つりばりをなくしてしまふなんて。おま  
 六861 、「まえからいいだしておいて。」ほおりの「  
 六861 、「いいだしておいて。」ほおりの「  
 六862 、「にいいさん、ゆるしてください。」ほでり  
 六868 、「ことは、海でなっている。そこへひとり  
 六869 、「ひとりの年よりがでてる。年より」もし  
 六871 、「は、どうしてないでいらっしやるのです  
 六873 、「ぼりは魚にとられてしまふし、にいいさん  
 六874 、「かられるし、困っていないでいたのです。  
 六874 、「るし、困っていないでいたのです。」年よ  
 六875 、「がいいことを教えてあげましょう。そこ  
 六8710 、「そばにいがあつて、そのそばには、大  
 六8710 、「大きな木が立っています。あなたは、大  
 六8711 、「大きな木にのぼつて、まっていられし  
 六8711 、「にのぼつて、まっていられしやい。」ほ  
 六884 、「といいことを教えてください。」ほ  
 六885 、「乗りなさい。おしてあげますから。」五  
 六887 、「に、大きな木が立っている。ほおりのみこ  
 六888 、「ことは、木をみあげて、ほおりの「はあ、

六889 、「の木だな。のぼつてみよう。」木にのぼ  
 六891 、「よう。」木にのぼつて、下をみる。ほおり  
 六895 、「そこへ女の人がでてきて、いどの水をく  
 六895 、「こへ女の人がでてきて、いどの水をくも  
 六897 、「する。いどの水を見て、女「まあ、りっぱ  
 六899 、「たが、水にうつっているわ。」女の人  
 六904 、「女の人、水をくんで、ほおりのみことに  
 六905 、「ぐつとおのみになつて、ほおりの「ああ、お  
 六908 、「海の神がこしをかけていらっしやる。そこ  
 六909 、「さっきの女の人がでてくる。女「海の神さ  
 六918 、「みことをあんないしてでてる。海の神」  
 六918 、「とをあんないしてでてる。海の神」さあ、  
 六926 、「は、海でつりをしていたら、つりばりを  
 六927 、「つりばりをとられてしまったのです。」  
 六9211 、「なので、私も困ってしまいました。そこ  
 六931 、「たかたがあらわれて、私に海のごてんへ  
 六932 、「いくようにと教えてくださいました。そ  
 六935 、「さつそくさがさせてみましょう。」女  
 六936 、「。女の人に向かって、海の神「魚どもを、  
 六939 、「たちをたくさんつれてでてる。女「魚ど  
 六939 、「をたくさんつれてでてる。女「魚どもを  
 六9310 、「女「魚どもをよんでまいりました。」海  
 六942 、「だけは、病氣でねておりますので、ここ  
 六944 、「、ここへはまいておりません。」海の  
 六948 、「のつりばりをとっていったものはないか  
 六955 、「ずだ。だれか知っているものはないか。  
 六9510 、「ばらくお考えになつて、女の人に、「略」  
 六961 、「よつとここへよんできてくれないか。」  
 六961 、「とここへよんできてくれないか。」女「は  
 六963 、「の人は、たいをつれてでてる。たい「な  
 六963 、「は、たいをつれてでてる。たい「なにか  
 六966 、「をのどにかけまして、たいへん苦しんで

六九七 、「たいへん苦しんでいるところござい  
 六九六 、「女の人に向かって、海の神」たいのの  
 六九六 、「つりばりをとっておやり。」女「はい。  
 六九七 、「つりばりを水であらって、海の神にさしあげ  
 六九八 、「海の神」みつかって、ほんとうによろし  
 六九七 、「とは、それにあわせておどりをおどる。  
 六九八 、「りばりが、でてきて神さまお喜び。  
 六九八 、「りが、でてきて神さまお喜び。い  
 六九八 、「、いたいとないていた、たいも喜び  
 六九八 、「ひきだしをかたづけられていると、いつか、お  
 六九八 、「おとうさんにかつていた小な虫  
 六九八 、「小さな虫めがねがでてきた。「略。」と思  
 六九八 、「べつべつにしたりして、つくえの上をみた  
 六九八 、「しきをのぞいたりしていた。そのうちに、  
 六九八 、「めがねのたまを持つて、目から遠くはなし  
 六九八 、「けしきを、大きくしてみようと思つて、右  
 六九八 、「くしてみようと思つて、右の手に虫めがね  
 六九八 、「手に虫めがねを持つて、のぞいてみた。ど  
 六九八 、「ねを持つて、のぞいてみた。どこかの屋根  
 六九八 、「いっばいにひろがつて、ついそこにあるよ  
 六九八 、「百メートルもはなれて、向こうの家の  
 六九八 、「は、もう、じつとしていらなくなつた。  
 六九八 、「らいの大きさにまいて、その一方のはしに  
 六九八 、「糸できりきりとまいて、動かないようにし  
 六九八 、「らいの大きさに作つて、そのはしに、虫め  
 六九八 、「とりつけた。こうしてできた二本のつは  
 六九八 、「うまきはまりあつて、長くのぼしたりち  
 六九八 、「がら、そとをのぞいてみた。長い物がぼん  
 六九八 、「ちめたり、かげんしているうちに、はつき  
 六九八 、「あいだから顔をだしている。いそいで、お  
 六九八 、「だしている。いそいで、おかあさんのとこ  
 六九八 、「「おかあさん、きてごらんさい。早く

六九八 、「んは、目をまるくして、「略。」「略。」  
 六九八 、「ん。大きな声をして。「略。」「略。」  
 六九八 、「でもいから、きてください。」「ぼくは、  
 六九八 、「をひっぱるようにして、つれてきた。そう  
 六九八 、「るようにして、つれてきた。そうして、ぼ  
 六九八 、「くの望遠鏡をのぞいてもらった。「略。」  
 六九八 、「人、人がこつちをみている。森の木のきれ  
 六九八 、「この望遠鏡をのぞいて楽しんだ。(二)  
 六九八 、「ねつはないので、ねているわけではない。  
 六九八 、「ただ、はながつまっているだけだが、その  
 六九八 、「が、「略。」といつて、みんなで大わらい  
 六九八 、「弟のことばをまねて、「略。」といつた  
 六九八 、「くもひとつまねをしてやろうと思つた。な  
 六九八 、「おりはないかと思つていたら、ちょうど、  
 六九八 、「うばくおんがきこえてきた。弟のだいすき  
 六九八 、「くは、ここだと思つて、「略。」といつた  
 六九八 、「。」「といった。いつてから、すこしふしぜ  
 六九八 、「んなもありわらつてくれない。弟が、「へ  
 六九八 、「。弟ははながつまっているために、あるこ  
 六九八 、「く発音でなくなつてきている。しかし、どん  
 六九八 、「、夜、勉強をすましてから、ひとりで、な  
 六九八 、「るのだらう、と考えてみた。そのわけは、  
 六九八 、「のだらう。そう思つて、「ナ」、「ノ」、「ネ」  
 六九八 、「、と自分で声をだしていつてみると、いか  
 六九八 、「分で声をだしていつてみると、いかにもは  
 六九八 、「にもはなから声でているような気がする  
 六九八 、「自分で声をだして、はなのあなから息  
 六九八 、「がもれないようにして、「ナ」、「ノ」、「ネ」  
 六九八 、「「ミ」、「ム」といつてみた。苦しい。はな  
 六九八 、「自分で声をだして、いかにもはな  
 六九八 、「いながら、耳できいてみると、まるで「ダ  
 六九八 、「まるで「ダ」といつていようだ。弟は、

六九八 、「は、こんなふうにして、「はな」といつて  
 六九八 、「て、「はな」といつていようだと思つた  
 六九八 、「、「ダ」だ」といつてみると、いかにも弟  
 六九八 、「は、思わず声をだしてわらつてしまった。  
 六九八 、「ず声をだしてわらつてしまった。よし、あ  
 六九八 、「あしたはうまくやつて、みんなをわらわ  
 六九八 、「、みんなをわらわせてみせるぞと思つたが  
 六九八 、「はどうでもよくなつてしまった。弟がいえ  
 六九八 、「ぎょうの中にはいつていよう音ばかりではな  
 六九八 、「ヌ」といふ音がぬけていよう音である。そ  
 六九八 、「あらためて声をだして「ヌ」といつてみた  
 六九八 、「だして「ヌ」といつてみた。これもはな  
 六九八 、「もはなから声でぬけていようだ。ねん  
 六九八 、「めに、はなをつまんで、「ヌ」といおうと  
 六九八 、「んぶはなの音でできていることがわかつた  
 六九八 、「ぎょうの中にはいつていよう。ここで、もし  
 六九八 、「こで、もしやと思つて、はなをつまんで「  
 六九八 、「つて、はなをつまんで「マ」、「メ」、「モ」  
 六九八 、「「メ」、「モ」といつてみた。これらは  
 六九八 、「じゅんじゅんにいつてみたところが、ふし  
 六九八 、「らつたからよく知つていようが、いままでは  
 六九八 、「もの」ぐらいい思つて、それ以上ふかく考  
 六九八 、「それ以上ふかく考へてみたことはなかつた  
 六九八 、「であることがわかつて、びつくりしてしま  
 六九八 、「かつて、びつくりしてしまつた。カキク  
 六九八 、「ちがつた性質をもっているにちがいない。  
 六九八 、「と、弟のまねをしてみんなをわらわ  
 六九八 、「てみんなをわらわせてやろうなどという  
 六九八 、「、どこかへふつとんでしまった。それより  
 六九八 、「ことをみんなに話して、びつくりさせてや  
 六九八 、「して、びつくりさせてやろうと考えたから  
 六九八 、「骨が二本しかつていないたこです。は

六114 6 が、「略。」といてわらいました。けれ  
六114 6 た。けれども、あげてみると、なかなかよ  
六115 1 も、「略。」といて感心しました。ただ  
六115 3 会 よつと糸を持たせて。」といました。  
六115 4 、海外からひきあげてきた子で、來年小学  
六115 7 は、「略。」といてにこにこしました。  
六115 8 しかり糸をにぎっています。「略。」と  
六116 2 会 りなので、「作ってあげようか。」とい  
六116 3 だしちゃん喜んで、「略。」と、「元氣  
六116 4 会 で、「うん、作って。」と、元氣のいい  
六117 2 ました。うちへ帰って、そのたこをみて、  
六117 2 つて、そのたこをみて、作りかたを考えて  
六117 3 て、作りかたを考えてみました。材料は、  
六117 9 かおかあさんに教えていただきましたから  
六118 6 き生きとうきあがってきました。つぎに骨  
六119 1 たすじがたについています。そのすじに  
六119 2 。そのすじにあわせてひごを切り、小さな  
六119 7 つけるのも、まがっているのめんどろで  
六119 8 いろいろにくふうして、うまくはりつけま  
六119 10 さんのところへとんでいって、「略。」と  
六119 10 ところへとんでいって、「略。」といて  
六120 1 て、「略。」といておみせしました。お  
六120 3 、「略。」と、ほめてくださいました。「へ  
六120 7 会 そうつとかわかしておきなさい。」ば  
六120 8 に本ばこの上のにせておきました。「略」  
六120 9 会 たら、糸目をつけて、ただしちゃんのと  
六120 10 会 んのところへ持っていくてあげるんだ。  
六120 10 会 ころへ持っていくてあげるんだ。「ぼく  
六121 11 」ぼくは、うれしくてたまりませんでした  
六121 7 トボールをしたりして遊びました。そこへ  
六122 6 とおさるさんにながてやりました。おさる  
六122 10 が、ころころと落ちていました。うさぎさ

六123 1 は、くるみをひろって、石でわってたべる  
六123 1 ひろって、石でわってたべることにしまし  
六123 3 会 このくるみを持っていて、山のてっぺ  
六123 3 会 るみを持っていて、山のてっぺんでた  
六123 6 チン、カチンとわっている、そこへちょ  
六123 9 会 さぎさん、なにしているの。「略。」  
六123 10 会 「くるみをわっているんだよ。」「略」  
六123 11 会 「略。」「かたくて、うまくわれないだ  
六124 1 会 。」「石でたたいて、わっているのさ。  
六124 1 会 だたたいて、わっているのさ。」「略」  
六124 7 に、くるみをにぎって、おいしそうにたべ  
六126 1 会 へ。「あなをほって、トンネルをこしら  
六126 1 会 ンネルをこしらえて遊ぼうよ。」「略」  
六126 5 した。まえ足でほって、うしろ足で土を  
六126 6 はずんずん長くなっていききました。「略」  
六127 3 声でじゃんけんをして、おにをきめました  
六127 5 おにが、目をつぶって、「略」とさげび  
六127 8 トンネルの中を走っていききました。「略」  
六128 3 。おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさ  
六128 5 、こちらからまわっていくと、みんなはあ  
六128 7 たりました。かくれているうさぎさんたち  
六128 8 ら、「略。」といて、うまくにげました  
六128 9 さぎさんが、あわててにげたので、トンネ  
六128 10 か道に足をすべらせて、ころころと、下の  
六128 11 の方へころがりこんでいききました。「略」  
六129 2 新しいおにがきまって、またはじめようと  
六129 4 きさんは毛をぬらしてなにかあわてていま  
六129 4 らしてなにかあわてています。「略」  
六129 6 会 さぎさん、かくしておくれ。ちよつとか  
六129 6 会 。ちよつとかくしておくれ。「略」  
六129 8 会 ねに追いかけられているんだ。きつねが  
六129 9 会 。きつねがおこって、追いかけてくるん

六129 9 会 こつて、追いかけてくるんだよ。」  
六129 11 会 こでわいわいやっているのは、すぐぼくが  
六129 11 会 わいわいやっているのは、すぐぼくが、き  
六130 1 会 きつねにみつかったしまうから、どこか  
六130 1 会 ら、どこかへいってこれたまえ。ぼくひ  
六130 3 会 じつとじつかにしたいんだよ。」た  
六130 4 さんが、ま顔になつていうので、うさぎさ  
六130 9 うのやぶの方へいってしまいました。それ  
六130 11 いました。それをみて、たぬきさんは、「へ  
六131 3 会 はきつねに追われてなんかいやしないん  
六131 6 下で、まるくならんで、話をしました。「へ  
六131 8 会 こんどはなにをして遊ぼう。」「略」  
六132 11 会 このなかにいれてくれたまえ。」「略  
六133 5 は、のっそりと立つて、山の方をみあげま  
六133 11 会 。どうだ、こうしては。」しかさんは、  
六134 3 会 、この角を、おつてしまつてもいい。  
六134 3 会 を、おつてしまつてもいい。」うさぎさ  
六134 5 ぎさんたちは、困つてしまいました。どう  
六134 6 足の早いことにかけては、しかさんにな  
六134 7 角で、つきあげられてしまわなければなり  
六135 9 中、やぶの中をとんでいきます。のぼりざ  
六136 2 す。しかさんも負けてはいません。角をふ  
六136 6 「しかさんがおこって走ると、こんどはた  
六136 7 にトンとけつまずいて、すってんころりと  
六137 2 赤いクレヨンで書いてありました。「略」  
六137 5 会 、ひとをばかにしている。ようしゃはな  
六137 6 会 らない。角でついてやる。」しかさんは、  
六137 11 一つのまにかはぐれてしまいました。やが  
六138 7 、とらさんがねむっていたのです。うさぎ  
六138 9 らさんは、晝ねをしていたのですが、うさ  
六139 1 るので、目をさましてしまいました。「略  
六139 3 、そつと首をのぼして、うさぎさんたちの

六139 5 り、足をもんだりしていました。とらさん  
六139 10 にべたんとうつぶしてしまいました。「略  
六139 11 会」「いいところへきてくれた。おながべ  
六140 2 のそり、そばに歩いてきました。うさぎさ  
六140 5 はできません。助けてくださいと、お願い  
六140 5 たところで、ゆるしてくれるみこみもあり  
六140 7 らさんが手をのばして、一びきのうさぎさ  
六140 9 は、いっしんになって、神さまにおいのり  
六141 5 会 から、あとをつけてきたのだ。「略」  
六141 7 会 いまたべようとしていたところだ。よこ  
六142 4 たちは、手をつないで、そこをにげだしま  
六142 8 ました。谷川にそって、山のふもとにでて  
六142 8 て、山のふもとにでてきました。やつとし  
六142 10 の光がいっぱいさしています。クローパー  
六142 10 花が、まっ白にさいていました。おなかの  
六143 2 みつばちさんがとんできて、「略」と、  
六143 2 ばちさんがとんできて、「略」と、うた  
六143 4 会 ろです。よ。安心して、ゆっくりおあがり  
七42 夜明けの風が流れてくる。中庭のキャベ  
七47 の木は、目をさまして、しずかにしんこき  
七52 会 チャカチャカ鳴らして、走ってくる男の子  
七52 会 ヤ鳴らして、走ってくる男の子かな。」  
七53 の光がななめにさしてきた。校舎の半分が  
七55 ら、光の中をおよいでいたが、こんどは、  
七56 、思いきり高くとんで、屋根をこえて、う  
七56 とんで、屋根をこえて、うすべに色の空に  
七58 会 、ぼうしをかぶっているな。赤い運動ほ  
七59 カチャカチャ鳴らして、げたばこのかげに  
七61 ちこちのまどがあいて、教室も目がさめた  
七67 、風もないのにゆれている。「もう帰る子  
七69 会 生だ。手をつないで校門をでていく子ど  
七71 会 つないで校門をでていく子ども、かたを

七72 会 ども、かたを組んで話しながらでていく  
七72 会 んで話しながらでていく子ども、ならっ  
七74 会 、大きな声で歌っていく子ども、なんと  
七77 会 にさようならをして走って帰る子ども。  
七77 会 うならをして走って帰る子ども。一どで  
七710 会 かをすうと通ってみたり、かいだんを  
七710 会 をトントンあがってみたり、こうどうを  
七711 会 こうどうをのぞいてみたり、みんなが勉  
七711 会 する教室にはいって、こしかけてみたり  
七81 会 いって、こしかけてみたり——」かしの  
七84 。学校のにおいがしてくる。しおがひくよ  
七86 学校からいなくなってしまう。教室のま  
七89 夕やけの空をながめている。しゅくちよく  
七91 からラジオがきこえてくる。星のちらばっ  
七93 会 「わたしをうえてくれた卒業生たちは  
七93 会 は、どこにどうしているだろう。もう、  
七910 会 しのそばからさっていった。」おぼろ月  
七911 ぼろ月が空にかかっている。さくらの花が  
七101 の花が、白くうかんで見える。「略」し  
七103 会 の岸へ、船をこいでいく。渡し終ると、  
七104 会 と、またひき返して、新しい子どもを乗  
七107 えた。夜つゆがおりてきた。かしの木は、  
七108 は、あくびを一つして、しめっぽくなった  
七109 から、ねむりにおちていった。——手と  
七112 とば「手がよごれていますよ。」「略」  
七117 をみたとき、感心して、思わず手をたたき  
七119 は、てのひらをさしています。「手をうつ」  
七125 は、あさがおのだしている手のことではあ  
七127 まきつくように立ててある、竹や木のこと  
七1211 字を書くことをさしていますが、どうして  
七131 字を書くことになってきたのでしょうか。「へ  
七134 ますこし、手をいれてみよう。」「略」

七136 んないみにつかわれているのでしょうか。そ  
七139 り、「この手でやってみよう。」とかいっ  
七1311 ざまなはたらきをしてくれます。つぎの「  
七142 に、まつの木が立っています。」「略」  
七1411 「略」。「腹に思っていることと、いうこ  
七151 略」。「腹をかかえてわらった。」「略」  
七164 の音楽が、ひびいてくる。学校の運動場  
七165 子どもたちが集まっている。子ども先生、  
七171 会 が、たくさんとんでいよう。」「先生、  
七172 会 先生「よくおぼえていたね。風のない日  
七175 の唱歌が、きこえてくる。(二) 女の  
七177 会 り、なの花がへっているわ。」「女の子三  
七1710 会 の子三「花がちって、実がつきはじめた  
七185 会 ない。よくみのつてから、油をとるんだ  
七195 会 は、どこにかくれているんですか。」「先  
七197 会 らの中に、かくれているのさ。」「子ども  
七1911 会 すか。」「先生「知っている人——」子ども  
七204 会 そうだ。よく知っているね。」「きしもと  
七206 会 、一本だけのこしておきましたら、それ  
七208 会 んな白い花をつけています。」「先生「それ  
七209 会 先生「それで知っているんだね。」「女の  
七210 会 ちようちよがとんできた。」「男の子三「白  
七213 会 も。」「先生」とまっているちようちよが、  
七213 会 んなかつこうをして、みつをすうか、よ  
七215 会 ばらばらにわかれて、そっとね。」「子ど  
七219 ふたりで、本をよんでいる。日曜日はれ  
七2110 会 た、すずめがおりてきたよ。」「兄「しずか  
七221 会 。」「兄「しずかにして、みていてごらん。  
七221 会 しずかにして、みていてごらん。」「すず  
七221 会 かにして、みていてごらん。」「すずめは、  
七222 、ぴよんぴよんとんで、庭のはたけの中を  
七223 会 だいこんの葉をみているよ。」「ささやく

七三八 五 ろのおばさんがいってくれましたので、私  
 七三八 六 のあいだをかきわけていこうとしました。  
 七三八 七 かし、弟の手をひいているので、ひとあし  
 七三九 五 さぶろうを受けとって、つぎの人に渡しま  
 七三九 八 「「略。」と、送ってくれました。はじめ  
 七三九 九 ろうは、足をちぢめて、心配そうに私の方  
 七三九 一〇 配そうに私の方をみていましたが、三人め  
 七三九 一一 ルのように送られていくうちに、にこに  
 七四〇 一 しそうに、声をたててわらいました。乗客  
 七四〇 二 、高いところを渡っていくさぶろうを、お  
 七四〇 三 ろそうに、みおくらっていました。私は、い  
 七四〇 四 した。私は、いそいで、さぶろうのあとを  
 七四〇 五 は、だれかにゆずってもらった座席の上に  
 七四〇 五 った座席の上に立って、「略。」と、私を  
 七四〇 七 と、私を手まねきしています。私は、さぶ  
 七四一 二 、腹までふりまかれて、ちょうど、かふん  
 七四一 三 つばちのようになつて、汽車でねむってい  
 七四一 三 っ、汽車でねむっていた。ふいに、はく  
 七四一 五 ひとりの青年が立っていた。かれは、むね  
 七四一 六 アコーデオンをだいて、ワルツの曲をひき  
 七四一 七 は、かなり早く走っているの、青年のか  
 七四一 七 青年のからだはゆれていたが、ひく手にく  
 七四一 七 た。青年は、つづいて日本の子もりうたを  
 七四一 一〇 であつたが、旅をしてきた私には、しみじ  
 七四一 一一 、ひく手をやめないで、いっしんにひきつ  
 七四二 五 っしんにひきつづけていた。トンネルをで  
 七四二 六 ちよつと話をさせてください。」車中の  
 七四三 二 心さびしい旅をしていました。けれども  
 七四三 四 、楽しい旅行をしております。どこのど  
 七四三 五 しい音楽をきかせてくださる心持を、ほ  
 七四三 六 人は、自分のかぶっていたぼうしを、そば  
 七四三 七 しがきた。私も喜んで、いくらかのお金を



七四七 は、「略。」といて、青年のまえにすす  
 七四二 なるうとは、思っています。ま  
 七四六 「略。」そういつてから、老人にぼうし  
 七四一 で、「略。」といて、おじぎをした。「  
 七四二 略。」これをきいて、みんなは、または  
 七四七 そこを自轉車に乗って走る中学生、たがや  
 七四六 中学生、たがやしている父と子、きりの  
 七四九 た。青年は、すわって、アコーデオンを黒  
 七四三 作文 (二) 思っていることを、はっき  
 七四五 んだんくわしくなっています。どこまで  
 七四八 。心はつきりとしていますと、文章も、  
 七四九 しします。心がくもっていると、いくらな  
 七四二 いたのとを、くらべてごらんさい。二回  
 七四三 回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人  
 七四八 も、せんしゅになつて、いっしょうけんめ  
 七四九 センターが外野へでてしまったので、あ  
 七四九 なたのほうに勝つてしまった。第二回め  
 七四四 な、運動場に整列して、式をあげた。は  
 七五〇 たちは、コートへでていった。たかやま先  
 七五〇 略。」と、元氣づけてくださった。「略」  
 七五二 園 「じゃんけんをして、いいほうのボール  
 七五五 た「略。」と鳴って、しあいがはじま  
 七五六 、どんどんあてられて、センターまで、外  
 七五八 ターまで、外野にでてしまった。ぼくもあ  
 七五八 のセンターが、喜んで、「略。」とさけん  
 七五五 た。むちゅうでやっていると、「略。」と  
 七五五 らが勝つたかと思つて、心配していると、  
 七五七 かと思つて、心配していると、十一たい十  
 七五二 よくあいてにあたつて、ちよつとのあいだ  
 七五三 略。」と、はげましてくださった。なんだ  
 七五三 せんしゅは、大きくて強そうだ。「略。」  
 七五九 んの音が耳にひびいてくる。センターが、

七五三 一にれんらくをとつて、どんどん、あてに  
 七五二 ールがビュッととんできた。ぼくは、しつ  
 七五四 、しつかり受けとめて、すぐセンターに渡  
 七五四 ぼくのところにとんできた。ぼくはよこだ  
 七五四 また運動場に集まつて、終りの式をした。  
 七五四 。ぼくは、うれしくて、胸がどきどきして  
 七五四 て、胸がどきどきしていた。式をすまして  
 七五四 ていた。式をすまでもどつてくると、た  
 七五四 式をすまでもどつてくると、たかやま先  
 七五四 みんな、にこにこしていた。(二) しか  
 七五四 文章がみじかくなつていくことがあります  
 七五五 は、ちりほどもあつてはなりません。五年  
 七五五 場で、たいそうをしています。一年生の唱  
 七五五 年生の唱歌がきこえてきます。つばきの花  
 七五五 の花がまっかにさいています。根もとに、  
 七五六 とに、ぼたぼた落ちています。海がみえま  
 七五六 だに、ほそ長く光っています。明かい月  
 七五六 そこらで、虫が鳴いています。つむじ風が  
 七五七 わたしのまえを走つていく。紙が、くるく  
 七五七 、くるくるまいをしてとんでいる。ろうか  
 七五七 くるまいをしてとんでいる。ろうかを曲が  
 七五七 、ふつと、風がふいてきた。おかあさんの  
 七五七 庭のはつばがうつつている。ほたるを三び  
 七五七 えました。雨がはれて、にじが大きくでま  
 七五八 ラジオの音楽をきいています。ほそい雲が  
 七五八 色いようがとまっています。こんなのは  
 七五八 、くもの巣にかかつてゆれている。土の上  
 七五八 の巣にかかつてゆれている。土の上、一セ  
 七五八 で。ボタンと音がして、まりが、そこから  
 七五八 、そとからとびこんできた。よつちゃんた  
 七五八 へりをひとまわりして、帰つていった。よ  
 七五八 とまわりして、帰つていった。よく落ちる

七六一 、ざわざわと、動いている。うす黒い雲は  
 七六一 雲は、どこかへいつてしまったのに。まよ  
 七六一 きの木につきあたつて、バタバタやつて、  
 七六一 っ、バタバタやつて、にげていった。ひ  
 七六一 タバタやつて、にげていった。ひとところ  
 七六一 かしら。すみをすつていく。めじろの音が  
 七六一 めじろの音がきこえている。雨が降る。風  
 七六一 さくらの木が、ぬれてゆれている。四年生  
 七六一 の木が、ぬれてゆれている。四年生の樂し  
 七六一 さくらの花をしらべてみたり——どの花も  
 七六一 も、みんな空を向いている。日がてつてい  
 七六一 いている。日がてつてい。なの花ちらほ  
 七六一 小さな虫がかたまつて、顔のところとん  
 七六一 、顔のところとんでいく。豆のつるがま  
 七六一 豆のつるがまきつて、まきつくものがな  
 七六一 。夏の風がふきこんで、新聞など動かして  
 七六一 で、新聞など動かして、ふきぬける。しず  
 七六一 。しずかに波がよせている。みんな、おべ  
 七六一 、おべんとうをたべている。ふえの音、虫  
 七六一 日月さん。毎日書いてきたあさがお日記。  
 七六一 かりのさくらになつて、毎日はれ。波の音  
 七六一 れ。波の音がきこえている。子どもの声が  
 七六一 子どもの声がきこえている。あつちでもこ  
 七六一 ん、どんどん、うえていく。みんなそろつ  
 七六一 いく。みんなそろつて、うえていく。もや  
 七六一 んなそろつて、うえていく。もやのかつ  
 七六一 ポンポン船がでかけていく。雨あがりの麦  
 七六一 どもと子どもとかけていく。もみじがまつ  
 七六一 で、山のいもをほつていいる人が二三人。ふ  
 七六一 さん。雲一つうかんではいる。青々とはれ  
 七六一 ている。青々とはれて、すすきすししゆれ

七六四、すすきすこしゆれている。うら山に、み  
 七六五山に、みかんを持って遊びにきている。よ  
 七六五んを持って遊びにきている。よい天気。う  
 七七一うちで、ふとんほしてある。炭を切る音も  
 七六二声も、夕がたになつてゐる。(三) 人の  
 七六七め骨組みをこしらえておいて、それにねん  
 七六七みをこしらえておいて、それにねんどで  
 七六九、その人の顔にせていくやうかたです。  
 七六八せきや木材をけずっていつて、だんだん、  
 七六八木材をけずっていつて、だんだん、その人  
 七六八、その人の顔にせていくやうかたであり  
 七六八しく書きたすのになつてゐます。あとのやり  
 七六八は、文章をきりつめていくのと同じです。  
 七六八な川にまで、あふれている、あふれている  
 七六八ふれている、あふれている。くれがたの庭  
 七六八それがすむのをまっていたのか、すぐうし  
 七六八なく、のっそりとでていた。もやが深い  
 七六八りが一つ、さえずっている。うまよ、そん  
 七六八んな大きななりをして、子どものように、  
 七六八、からだまであらつてもらつてゐるのか。  
 七六八、からだまであらつてもらつてゐるのか。  
 七六八、水のおいをかいてゐる。ぼさぼさの  
 七六八る。ぼたんでもさいているのかと思つたら  
 七六八あ、子どもがわらつていたんだよ。みんな  
 七六八にか、ものをさがして歩いてくる。甲「ど  
 七六八ものものをさがして歩いてくる。甲「どこへ  
 七六八まに、いなくなつてしまつた。さて、ど  
 七六八ら。」ふたりそろつて、遠くをみまわす。  
 七六八いっしょにふり返つて、甲「はいはい。  
 七六八は、なにかさがしておいでのようなだが—  
 七六八ら、さがしつづけているのですが。」旅  
 七六八、らくだをにがして、それをさがしてい

七六四、て、それをさがしていらつしやるのでは  
 七六九は、なおびつくりして、甲「まったくその  
 七七一だすようなふうをして、旅人「そうして、  
 七七一左の足が一本短くて——それから——」  
 七七一それから——」といつてから、ちよつと考  
 七七一乙ふたりがみてとつて、なにか、こそそ  
 七七一え菌が二三本ぬけてはいませんか。」ふ  
 七七一いよいよびつくりして、乙「それにちが  
 七七一、それには答えないで、また思いだしな  
 七七一いるか、早く教えてください。」旅人「い  
 七七一、また顔をみあわせていたが、甲「どうも  
 七七一を、どこかへつれていったのにそういな  
 七七一、いっしょにいつてもらおう。」旅人「そ  
 七七一で、あかしをたててもらおう。」ふたり  
 七七一をとる。むりにつれていく。二の場面  
 七七一人と甲乙が、ならんでゐる。裁判官がはい  
 七七一る。裁判官がはいつてくる。裁判官「いつ  
 七七一けたらくだをつれて、さばくを通つてい  
 七七一て、さばくを通つてゐましたが、とちゅ  
 七七一ゆうでひと休みしてゐるうちに、つい、  
 七七一に、つい、ねむつてしまひました。」裁  
 七七一た。」乙「目がさめてみると、らくだがい  
 七七一ません。おどろいて、方々をさがして歩  
 七七一て、方々をさがして歩きましたが、みあ  
 七七一、それはよく知つております。」裁判官  
 七七一んなことを、知つてゐるのかね。」乙「だ  
 七七一あることを知つてゐました。そのとお  
 七七一であることも知つてゐました。しかも、  
 七七一を、ちゃんと知つてゐるのです。」裁判  
 七七一ほかにまだ、知つていたかね。」乙「はい  
 七七一。」乙「はい、知つてゐました。らくだの  
 七七一菌が、二三本ぬけてゐることまで。」甲「

七八二「そのうえ、つけていた荷物の品まで、  
 七八二物の品まで、知つてゐるじゃありません  
 七八二かった。」旅人をみて、裁判官「なにか、  
 七八二私がさばくを旅してゐますと、砂の上に  
 七八二の足あとがつづいてゐました。それなの  
 七八二はどこからにげてきたたではないかと  
 七八二わの草ばかりたべてあつたからです。」  
 七八二おきにあさくなつてゐましたので。」裁  
 七八二は、まえ菌のぬけてゐるということは、  
 七八二と、かみきれないで、のこつてゐる葉が  
 七八二れないで、のこつてゐる葉がありました  
 七八二、菌が二三本ぬけてゐるにちがいないと  
 七八二た。」裁判官「きいてみれば、いちいち、  
 七八二なら、荷物をつけてゐることが、どうし  
 七八二、それを、しらべていただこうござい  
 七八二道に、麦がこぼれてゐたからです。」裁  
 七八二はない。もう帰つてもよろしい。」旅人  
 七八二たりのものに向かつて、裁判官「あなたが  
 七八二いまの答で、知つてゐたわけがはっきり  
 七八二と思う。早くいつてらくだをさがしなさ  
 七八二甲乙ふたり、いそいでたちさる。八う  
 七八二さぎを、かごにいて持つていらつしや  
 七八二、かごにいて持つていらつしやいました  
 七八二草を、いちばん喜んでたべるか、しらべて  
 七八二でたべるか、しらべてみることにしました  
 七八二、すこしもじつとしてみせん。いつも、  
 七八二も、どこかを動かしてゐます。五月一日  
 七八二じんを、とても喜んでたべました。五月  
 七八二と白が、けんかをしました。五月  
 七八二ときのように、喜んでたべました。五月  
 七八二は、新しい草をいれてやると、そればかり  
 七八二と、そればかりたべて、まえにたべのこし

七902 もり 24度 よくみていたら、ねこが顔を  
七903 足で、耳や顔をなでていました。 5月31  
七907 ぐ、まえ足をおろしてしまいました。 6  
七910 んを、水の中へいれてみたらうきました。  
七914 るいをやるようにして、ぬれた草はやらな  
七915 らないように注意しています。 7月9日  
七918 うさぎの上に乘って、たべました。 7  
七923 すとき、みんな喜んですぐでましたが、1  
七924 ぎは、おくへはいつてでてこないの、小  
七924 、おくへはいつてでてこないの、小屋へ  
七924 で、小屋へ頭をいれて、だきあげて、そと  
七925 をいれて、だきあげて、そとへだしました  
七926 らを足でけつたりして、あばれました。  
七928 ぎの毛の長さを計ってみました。 白は2cm、  
七9210 うじをしようと思つて、首のところを持っ  
七931 、首のところを持って、かごの中へ入れた  
七933 晴 29度 朝、いつてみたら、右から四ば  
七934 さぎが4ひき生まれていました。 8月4  
七936 色のうさぎがはいっているへやに、えさが  
七937 の鉄ぼうを、かじっていました。 子うさぎ  
七943 。しばらく動かないで、いたそうにしてい  
七943 いで、いたそうにしてみました。 9月6  
七945 さぎのところへいつてみたら、暑いのでね  
七946 ら、暑いのでねむっていました。 あと足を  
七947 あと足を長くのぼして、まえ足を胸の下に  
七947 え足を胸の下にいれていました。 10月23  
七952 しろで戸をこしらえてやりました。 11月  
七954 19度 けさ、いつてみたら、左がわのへ  
七955 、毛がたくさんぬけていました。 よくみる  
七957 巣のようにふくらんでいて、その中に、わ  
七959 が、いっぱいはいっていました。 その毛に

七959 。その毛にくるまって、うさぎの子が7ひ  
七9510 のは黒っぽい色をしていました。 11月13  
七95図 るときはまるくなつて いました。 おや  
七963 の中で、元氣に動いています。 1ぴきのこ  
七967 の4ひきは、生まれてから12日めのきよう  
七972 うさぎは、親について、はじめて、巣から  
七973 て、巣からはいだしてきました。 草のそば  
七973 した。 草のそばにきて、口をくつつけまし  
七976 きようは、巣からでて歩いていました。 そ  
七976 は、巣からでて歩いていました。 そうして  
七977 かそうな葉を、たべていました。 黒の子う  
七978 、ちちをのうとして、親うさぎのちに  
七979 うさぎは、足でけつて、のませませんでし  
七9710 。 うさぎは、人がみていると、ちちをのま  
七983 13度 朝早くいつてみたら、子うさぎは  
七983 うさぎは果の中であつて、親うさぎだけ  
七983 ぎは果の中であつて、親うさぎだけが、  
七984 ぎだけが、草をたべていました。 お晝ごろ  
七985 ひきとも、果からでて歩いていました。  
七985 も、果からでて歩いていました。 12月1  
七987 子うさぎが生まれてから、きようで20日  
七988 さぎのめかたを計ってみました。 母うさぎ  
七996 さぎは、頭をそろえて、なかよくにんじん  
七997 よくにんじんをたべていました。 よいぐあ  
七998 んな元氣よくそだつていたので、安心しま  
七998 どと、早がつてんしてはいけませんよ。 い  
八44 ある晩、一家そろつて、ぎんざの大通りを  
八52 んざの大通りを歩いていました。 あるデ  
八53 に、大ぜい人が立つていたので、なんだろ  
八54 なんだろうとのぞいてみると、ひとりの小  
八55 屋が、夜店をひろげていました。 小鳥屋と  
八57 おじろだけしか賣っていなかったのですか

八59 一わずつつかみだしては指さきへとまらせ  
八62 すつかりひきこまれて、しばらく見物した  
八63 なボールばこにいられてもらつて、だいいじに  
八63 ばこにいられてもらつて、だいいじに持つて帰  
八64 つて、だいいじに持つて帰りました。 その晩  
八66 した。 だんだんたれて、指さきへもかたへ  
八69 びあがり、とびついて、じょうずにえさを  
八610 り、「略。」とよんでひざをたたくと、ひ  
八71 りしました。 客がきてるときなど、あま  
八75 んだんあらずさりして、うしろに氣づかず  
八78 一日の幸福を予言してくれるようです。 思  
八79 す。 思わずおきだして、「略。」とほめた  
八711 「とほめたり、なでてやつたり、「略。」  
八82 「略。」と、きいてみたりするのです。  
八89 ようなことばをもっているのだそうです。  
八811 ろうと、それを知つてから、よけいにピオ  
八92 まそとのろじへだしてやつても、すぐまい  
八92 も、すぐまいもどつてきます。 ろじどころ  
八96 上へ飛行機でもとんでくると、そのあわて  
八97 ません。 びつくりして茶のまへにげこみ、  
八97 こみ、そこにすわつている私のひざのあい  
八101 るどころか、向かつていこうとさえるの  
八103 ると、赤い口をあけて、私たちをおどした  
八105 どうかすると、歩いてるとき、追いか  
八105 いるとき、追いかけてきて、かかとや足の  
八105 とき、追いかけてきて、かかとや足の指を  
八109 小さなかつこうをしていながら、毎日な  
八1010 ったことをしてかしては、みんなをおどろ  
八1011 後、おなかをすかして学校から帰つてきた  
八111 かして学校から帰つてきたすえの女の子が  
八111 茶のまのドアをあけて、ひよいとふみこん  
八112 わでむじゃきに遊んでいたピオを、かた足

八113 才を、かた足でふんでしまったのです。「  
 八116 のものがびっくりして、いそいでピオをひ  
 八116 っくりして、いそいでピオをひろいあげま  
 八117 ちばしから血をだして、目さえあけたりと  
 八118 あけたりとじたりして、からだをふるわせ  
 八118 、からだをふるわせてもう虫の息です。「へ  
 八1110 略。」みんなあわてて、口々によんで、元  
 八1110 わてて、口々によんで、元氣づけるやら、  
 八122 ました。みんなないて——ことに、すえの  
 八125 らだをわたにつつんで、小ばこにいれて、  
 八125 んで、小ばこにいれて、庭さきの、いちば  
 八128 の木の根もとにうめてやりました。そうし  
 八1210 小さなせきを立ててやりました。かわい  
 八131 ったのが、かなしくなりませんでした。  
 八132 すが、でも、信用してくれていたものを、  
 八132 でも、信用してくれていたものを、あやま  
 八138 「略。」だのと鳴いているほおじろの声を  
 八139 がりありとうかんできて、思わずなみだ  
 八139 りありとうかんできて、思わずなみだぐみ  
 八1310 とをと、わらわないでください。この思い  
 八146 たい皮にあなをあけて、ていねいに生みつ  
 八146 ていねいに生みつけておいてくれましたの  
 八146 いに生みつけておいてくれましたので、寒  
 八1410 ちゅうが、はいだして、あおぎりのふとい  
 八151 ふといみきをつたって、地面に向かって、  
 八151 って、地面に向かって、すべったりころが  
 八152 たりころがったりしておいていきました。  
 八152 ろがったりしておいていきました。地面に  
 八155 かいところをさがして、地の中にかくれて  
 八156 て、地の中にかくれてしまいました。地の  
 八1510 さぐりさぐりもぐっていきます。そこは木  
 八161 あい、かさなりあってはえています。あお

八161 かさなりあってはえています。あおぎりの  
 八162 たちの木の根ものびています。だから、虫  
 八163 いいかげんにすんでいっても、なにかの  
 八165 多い木の根をさがしてあるきます。虫は、  
 八166 ど、親ぜみによくにて、ほそいとがった口  
 八167 いとがった口をもっています。その口のさ  
 八167 を根の中につきさして、木のしるをすい  
 八173 それは、だれも教えてくれたことではあり  
 八173 をじょうずにつかちをのむのと同じ  
 八175 れでじょうずに生きていくのです。虫は、  
 八177 のようなかたちをしています。大きくな  
 八179 、大きくなるにつれて、六本の足がだんだ  
 八1710 も、トンネルをほっていかなくてはなりま  
 八184 ルをほっていかなくてはなりません。それ  
 八184 たいそうほねがおれて、このうえなくふべ  
 八186 の中に生みつけられて、わずか二三ヶ月で  
 八1811 三ヶ月で大きくなって、皮をぬぎかえて地  
 八191 っで、皮をぬぎかえて地の上へでていきま  
 八192 ぎかえて地の上へでていきます。しかし、  
 八192 るをわずかずつづっているせみの子たちは  
 八194 いへん生長がおそくて、ように大きくな  
 八196 はあさいところにいる、ほそい木の根のし  
 八1911 木の根のしるをすっています。大きくな  
 八201 、大きくなるにつれて、だんだん地のそこ  
 八201 こふかくもぐりこんでいきます。七年の月  
 八202 そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日を  
 八205 で地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をま  
 八205 す。上からつたわってくるあたたかと、  
 八206 、よい天気がつづいていることなどを知り  
 八207 なあなを地表に向けてほっていき、あたり  
 八209 を地表に向けてほっていき、あたりのくら  
 八209 タぐれをみはからって、思いきって土をか

八2010 からって、思いきって土をかきわけて地上  
 八2010 きて土をかきわけて地上にはいだします  
 八212 虫が、こしを高くして、ひょっくりひょっ  
 八213 くりひょっくり歩いていくのは、ほんとう  
 八214 です。皮がこわばっていて不自由だし、目  
 八214 。皮がこわばっていて不自由だし、目もよ  
 八216 本のささだけがはえていました。せみは、  
 八217 いくなかつこうをして、それにはいあがっ  
 八217 、それにはいあがっていききました。地表か  
 八219 ろに、小枝がわかれていました。虫は、そ  
 八221 くそれにしがみついて、動かなくなつてし  
 八221 いて、動かなくなつてしまいました。もう  
 八226 のからだはみだしてきました。せなかが  
 八2211 うだけが皮にかくれています。虫はぐつと  
 八232 とそり返るようになり、頭をうしろにさげ  
 八236 っかり皮からはなれていました。みるまに  
 八239 らだの色もこくなつていきます。虫は、す  
 八241 日が山の上にのぼって、明かるい光がさつ  
 八242 、ぶるぶるとふるえて、色も、もうも、  
 八243 うも、はつきりとしてきます。黒いところ  
 八244 とところは茶色になって、いかにもあぶらぜ  
 八247 きゅうに元氣になって、そろそろと歩きだ  
 八248 した。はばたきをして、すつととびたつた  
 八249 と思うと、その鳴いているなかまのそばへ  
 八249 かまのそばへ、とんでいってとまりました  
 八249 そばへ、とんでいってとまりました。そこ  
 八2410 こへなかまが集まってきて、にぎやかな音  
 八2410 なかまが集まってきて、にぎやかな音楽会  
 八252 むかしの人がうたっています。そのとお  
 八254 なる、みんな死んでしまつて、あたりも  
 八254 みんな死んでしまつて、あたりもひっそり  
 八256 は、ありたちがよつてたかつてひいていき

八二五 六 たちがよってたかってひいていきますが、  
 八二五 六 よってたかってひいていきますが、あのぬ  
 八二五 八 にかたくすがりついています。三 天の  
 八二六 四 頭びきの馬車が走ってきます。中には天帝  
 八二六 五 。中には天帝が乗っておいでです。馬車は  
 八二六 八 り橋を音もなく渡って、草花のさきみちて  
 八二六 九 て、草花のさきみちている野原へおりてき  
 八二六 九 ちている野原へおりてきました。そこには  
 八二七 四 、花つみをしたりして遊んでいました。天  
 八二七 四 みをしたりして遊んでいました。天帝は、  
 八二七 五 、あたりをみまわして、なにかさがすよう  
 八二七 九 のすがたを、もとめておいでになるのですし  
 八二八 一 はふたび走りだして、草原をよこぎって  
 八二八 一 て、草原をよこぎっていつてしまいました  
 八二八 一 原をよこぎっていつてしまいました。やが  
 八二八 三 ようがしずかにういていました。川岸にそ  
 八二八 四 ました。川岸にそって車を走らせていくと  
 八二八 四 にそって車を走らせていくと、林の中にこ  
 八二八 四 の中にこてんがあつて、中から、はたをお  
 八二八 五 たをおる音がひびいてきます。天帝は、そ  
 八二八 六 た。すると、さがしていたはたおりひめが  
 八二八 七 つしんにはたをおっていました。そのおり  
 八二八 一〇 ちは、野原で遊んでいるのに、うちのむ  
 八二八 一〇 むすめは、こうしてはたらきつづけてい  
 八二八 一〇 てはたらきつづけているのは感心なこと  
 八二九 一 ばなむこをさがしてやろう。」こうお考  
 八二九 二 、そのままそとへでて、また馬車を走らせ  
 八二九 三 、また馬車を走らせて、天の川の西の岸を  
 八二九 三 の川の西の岸を通っていらつしやいました  
 八二九 四 たり、ふえをふいてくる、わかい男にで  
 八二九 六 いけだかさがこもっています。「略。」天  
 八三〇 二 の男のうでをためしてみようと考えて、黒

八三〇 二 めしてみようと考えて、黒うしのしっぽの  
 八三〇 五 黒うしは、おどろいて、大あばれにあばれ  
 八三〇 七 んぎゅうはおちついて、ふえをふきつづけ  
 八三〇 七 、ふえをふきつづけていました。黒うしは  
 八三〇 一〇 うまくふみとどまっつて、おとなしく草をた  
 八三一 一 ふえに心をうばわれていました。天帝は、  
 八三一 三 いうでまえにうたれて、むすめのむこにも  
 八三一 七 をおることをわすれてしまいました。けん  
 八三一 九 ゆうも、はたけにではたらかなくなりま  
 八三二 一 へんおおこりになつて、はたおりひめを天  
 八三二 二 岸のごてんにもどしてしまい、けんぎゅう  
 八三二 三 ゆうを西の岸に帰しておしまいになりました  
 八三二 五 うすをごらんになつて、「略。」とおっし  
 八三二 七 〇 あうことをゆるしてやろう。」とおっし  
 八三二 九 。一年の月日がたつて、いよいよその日に  
 八三二 一〇 うは、黒うしに乗つて、ふえをふいてきま  
 八三二 一〇 乗つて、ふえをふいてきました。ふたりは  
 八三三 三 う星がかさなりあつて、あのように、ぼう  
 八三三 四 のような光をはなっているようにみえるの  
 八三三 九 ルという単位を用いてきよりを計りますが  
 八三四 一 きな単位をもとにして計ります。それは、  
 八三四 三 光年は、光が発してから、一年かかつて  
 八三四 四 てから、一年かかつてとどくきよりをさし  
 八三四 四 とどくきよりをさしていいいます。光の速度  
 八三四 一〇 「光年」を単位として計算しなければなら  
 八三五 八 光年のところに光っている星があります。  
 八三五 一〇 光年の星もちらばっています。夜になつて  
 八三六 一 ています。夜になつて天の川をみると、な  
 八三六 四 きそく正しく運行しているという事です  
 八三六 五 は、いったいどうしてたもたれているので  
 八三六 六 いどうしてたもたれているのでしょうか。  
 八三七 四 ひとりの王女もあつて、なにひとつ不足な

八三七 五 ねを集めようと願つておいでになりました  
 八三七 七 色のたんぽぽをつんでくると、王さまは、  
 八三八 一 中で、宝物をかぞえておいでになると、み  
 八三八 二 み知らぬ人がはいつてきました。「略。」  
 八三九 六 〇 の願いどおりにしてあげました。「へ  
 八三九 九 のままだこかへいつてしまいました。あく  
 八四〇 一 ねどこからとびおきて、まず、いすにおさ  
 八四〇 八 りごとをおつしやつて、そこらの木の葉や  
 八四〇 九 た。庭の草木は、みているうちに、ぴかぴ  
 八四一 〇 光ったこがねになつていきました。王さま  
 八四一 六 とき、王女がはいつてきました。「略。」  
 八四一 一〇 「略。」こういつて、王さまにだきつき  
 八四二 三 きたいこがねになつていたので。王さま  
 八四二 五 女は、王さまにとっては、世界じゅうのこ  
 八四二 六 〇 困つたことになつてしまつた。もし、ひ  
 八四二 八 〇 〇。そうおつしやつて、おくやみになつて  
 八四二 八 て、おくやみになつていらつしやると、き  
 八四三 七 〇 いけの水をすくつて、こがねになつたも  
 八四三 九 「王さまは、いそいで庭のいけの水をすく  
 八四四 一 のいけの水をすくつて、王女のからだにお  
 八四四 一 「王女は、こういつて、王さまにすがりつ  
 八四四 五 は、ご病氣をなさつて長いことお苦しみに  
 八四四 一〇 たしの病氣をなおしてくれたものには、國  
 八四五 一 は、國の半分をわけてやる。」というおふ  
 八四五 三 ました。これをきいて、ちえのある人た  
 八四五 三 、みんなより集まつて、どうしたら王さま  
 八四五 六 おすというものができしました。その人は  
 八四五 八 〇 幸福な人をみつつけて、その人の着ている  
 八四五 八 〇 けて、その人の着ているシャツを王さま  
 八四五 一〇 「略。」これをきいて、王さまはたいへん  
 八四六 一 くけらいたちを集めて、「略。」と、おい  
 八四六 二 〇 福なものをさがしてきてほしい。そうし

八四六二(金) ものをさがしてきてほしい。そうして、  
 八四六三(金) のシャツをもらってくるように。」と、  
 八四六九 不自由もなくくらししているかと思うと、友  
 八四七一 ちは、足をぼうらしてさがしまわりました  
 八四七二 王子も、なんとかして父の病氣をおした  
 八四七二 をなおしたいと考えて、幸福な人をさがし  
 八四七四 した。どんどん歩いていくと、さびしい村  
 八四七六 くさがそうと、歩いていきました。ところ  
 八四七八 から人の声聞きこえてきます。王子はふと  
 八四七〇 子はふと立ちどまって、その声に耳をかた  
 八四七二(金) いっぱいはたらいて、晩ごはんもいただ  
 八四八四(金) 王子は手をうって、「略。」と喜んで  
 八四八五(金) そ、さがしもとめていた人だ。」と喜ん  
 八四八七 て、「略。」と喜んで、つかつかと小屋の  
 八四八八 と小屋の中へはいっていききました。中には  
 八四九〇 らいひが一つともっているだけでした。ひ  
 八四九一 りと横になろうとしているところでした。  
 八四九二 いろいろな家へたずねていききました。だれで  
 八四九三 ねても、みんな喜んでむかえてくれるにち  
 八四九四 めんな喜んでむかえてくれるにちがいあり  
 八五〇〇 なまずしいなりをしていても、それでも、  
 八五〇一 、自分をよくむかえてくれる人があったら  
 八五〇二 ところへ幸福をわけておいてくれるつもりで  
 八五〇三 へ幸福をわけておいてくれるつもりでした。  
 八五〇四 いろいろな家をたずねていきますと、いぬの  
 八五〇五 ますと、いぬのかつてある家がありました  
 八五〇六 その家のまえにいて、「幸福」が立ちま  
 八五〇七 のまえにいるのをみて、「略。」とたずね  
 八五〇八 戸をピシャンとしましてしまいました。おま  
 八五〇九 に、その家にかつてあるいぬが、おそろ  
 八五一〇 いる家のまえへいつて立ちました。そのこ  
 八五一一 知らなかったとみえて、いやなものでも家

八五二二 たように顔をしかめて、「略。」とたずね  
 八五二二 た。それから、かつてあるにわとりに氣を  
 八五二二 きのようなものがきて、にわとりをぬすん  
 八五二二 、にわとりをぬすんでいきはしないかと思  
 八五二二 用心ぶかい声をだして鳴きました。「幸福」  
 八五二二 どは、うさぎのかつてある家のまえへいつ  
 八五二二 ある家のまえへいつて立ちました。「略」  
 八五二二 、その家の人がでてみると、まずしいこ  
 八五二二 のが、おもてに立っていました。その家  
 八五二二 さけのある人とみえて、台所の方からおむ  
 八五二二 むすびを一つにぎってきて、「略。」とい  
 八五二二 びを一つにぎってきて、「略。」とい  
 八五二二 て、「略。」といつてくれました。黄色な  
 八五二二 そのおむすびにそえてくれました。「略」  
 八五二二 は、高いびきをかいて、さも楽しそうに晝  
 八五二二 樂しそうに晝ねをしていました。「幸福」  
 八五二二 それをうれしく思つて、その家へ、幸福を  
 八五二二 の家へ、幸福をわけておいていききました。  
 八五二二 、幸福をわけておいていききました。五  
 八五二二 台 朝早くはまにでてみると、目のどく  
 八五二二 すぐな足あとをつけてみようと思つて歩き  
 八五二二 つけてみようと思つて歩きました。すこし  
 八五二二 だした。すこし歩いてからふり返つてみる  
 八五二二 歩いてからふり返つてみると、足あとが曲  
 八五二二 と、足あとが曲がついてる。そこで、向こ  
 八五二二 つの木を目あてにして歩きました。まえの  
 八五二二 のかめが目について、それに氣をとられ  
 八五二二 、それに氣をとられて、わきみをしたあた  
 八五二二 たあたりが横にそれている。こんどは三ど  
 八五二二 り目あてをみさだめて歩いてみよう。五百  
 八五二二 てをみさだめて歩いてみよう。五百メー  
 八五二二 どさきに、ひきあげてある小船がある。よ

八五七四 あれを目じるしにしてやってみよう。小船  
 八五七四 目じるしにしてやってみよう。小船にい  
 八五七四 う。小船にいきて、それにもたれて、  
 八五七四 いて、それにもたれて、いま歩いてきた足  
 八五七四 もたれて、いま歩いてきた足あとをみると  
 八五七四 りした足あとがついてる。ぼくはうちへ  
 八五七四 。ぼくはうちへ帰つて、おじいさんにその  
 八五七四 が目のまえにひらけてくる。いままでのぼ  
 八五七四 る。いままでのぼつてきた方をふり返つて  
 八五七四 てきた方をふり返つてみると、足もとの森  
 八五七四 車が、けむりをはいて走ってくる。みんな  
 八五七四 けむりをはいて走ってくる。みんな手をあ  
 八五七四 る。みんな手をあげて、「略。」と、汽車  
 八五七四 略。」とおっしゃって、さきに立つてお歩  
 八五七四 やつて、さきに立つてお歩きになった。み  
 八五七四 。みはらし台に立つてみると、目のまえに  
 八五七四 に高い山々がそびえて、ずつとつづいてい  
 八五七四 えて、ずつとつづいてる。下をみると、  
 八五七四 きな川が遠くへ流れている。ぼくは、みは  
 八五七四 はらし台にすえつてある望遠鏡をのぞい  
 八五七四 ある望遠鏡をのぞいてみた。すると、向こ  
 八五七四 の山の谷まにのこっている雪が目についた  
 八五七四 きとおるようすにみえている。飛行機の上か  
 八五七四 のことを先生に話してみたら、先生は、「  
 八五七四 は、長い赤い足をして歩きまわっていた。  
 八五七四 足をして歩きまわっていた。田や野原のま  
 八五七四 岸の、ごぼうのはえてるところに、一わ  
 八五七四 わのあひるがすわっていた。それは、たま  
 八五七四 は、たまごをかえしているのであつた。け  
 八五七四 あひるは、ひながでてくるまえに、もうつ  
 八五七四 に、もうつかれきつていた。それに、たず  
 八五七四 た。それに、たずねてくれるものも少ない

八六<sup>一</sup><sub>六</sub> たちはすぐとびだしてきた。そうして、み  
八六<sup>一</sup><sub>九</sub> はみたただけみさせてやった。「略。」と  
八六<sup>二</sup><sub>一</sub> 々が世界だと思ってるのかい。世界は  
八六<sup>二</sup><sub>二</sub> うがわまで廣がっているのだよ。さあ、  
八六<sup>二</sup><sub>五</sub> まごがまだのこっている。いつまでかか  
八六<sup>二</sup><sub>七</sub> 、ひとりごとをいって、しをおろした。  
八六<sup>二</sup><sub>九</sub> 〈略〉。」と、たずねてきた年よりのあひる  
八六<sup>三</sup><sub>八</sub> されたことがあってね、そのひなには苦  
八六<sup>四</sup><sub>一</sub> にしても思いきってはいるようにしてや  
八六<sup>四</sup><sub>一</sub> てはいるようにしてやるのができなか  
八六<sup>四</sup><sub>三</sub> る。』といったりして教えたのだが、だめ  
八六<sup>四</sup><sub>三</sub> れ、たまごをみせてごらん。ははあ、そ  
八六<sup>四</sup><sub>四</sub> そんなものはほっておいて、ほかの子ど  
八六<sup>四</sup><sub>四</sub> ものはほっておいて、ほかの子どもに、  
八六<sup>四</sup><sub>五</sub> およぐことを教えてやるがいいよ。」「へ  
八六<sup>四</sup><sub>六</sub> 、もうすこしだいてみましょう。いまま  
八六<sup>四</sup><sub>六</sub> う。いままでだいていたのだし、あと四  
八六<sup>四</sup><sub>九</sub> あひるは、そういって、どこかへ行ってし  
八六<sup>四</sup><sub>九</sub> って、どこかへ行ってしまった。それから  
八六<sup>四</sup><sub>一〇</sub> 。それから二三日して、とうとうその大き  
八六<sup>五</sup><sub>一</sub> 」。と、ひなは鳴いて、はってでた。それ  
八六<sup>五</sup><sub>一</sub> ひなは鳴いて、はってでた。それは、ひど  
八六<sup>五</sup><sub>五</sub> こんなすがたをしていない。ほんとうに  
八六<sup>五</sup><sub>六</sub> にしろ、水にいられてやらなければなるま  
八六<sup>五</sup><sub>八</sub> ごぼうの上をてらしていた。親あひるは、  
八六<sup>五</sup><sub>九</sub> のひなをみんなつれて、水のところへおり  
八六<sup>五</sup><sub>一〇</sub> 、水のところへおりていった。さっと水の  
八六<sup>六</sup><sub>三</sub> すぐにうかびあがつてきて、うまくおよい  
八六<sup>六</sup><sub>三</sub> にくかびあがつてきて、うまくおよいだ。  
八六<sup>六</sup><sub>五</sub> も、いっしょになっておよいだ。「略。」「  
八六<sup>六</sup><sub>一六</sub> せいといいのをみてわかる。これはわ  
八六<sup>七</sup><sub>二</sub> ろ。わたしについておいで、大きな世界

八六七 3 会 界の鳥小屋へつれていつてあげるからね  
 八六七 3 会 小屋へつれていつてあげるからね。だが  
 八六七 4 会 のそばにくっついてね。人にふまれない  
 八六七 4 会 らねこに氣をつけてね。」そこで、みん  
 八六七 7 頭のことであらそっていた。そうして、親  
 八六七 8 れたひなたが通つていくと、一わの鳥が  
 八六八 1 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくい  
 八六八 1 一わの鳥がとんできて、そのみにくいあひ  
 八六八 3 会 みつた。「ほつておいでください。だ  
 八六八 3 会 た。「ほつておいでください。だれにも  
 八六八 6 会 あんまり大きすぎてみつともないから、  
 八六九 7 会 まくおよぐといつてもいい。大きくなれ  
 八七〇 1 は、「略。」といつてかばつた。みにくい  
 八七〇 5 からだをふくらませて向かつてきた。「略  
 八七〇 5 ふくらませて向かつてきた。「略。」とい  
 八七〇 5 た。「略。」といつて、顔をまっかにして  
 八七〇 6 て、顔をまっかにしてやつてきた。あわれ  
 八七〇 7 あひるの子は、立つていたほうがいいか、  
 八七〇 7 ほうがいいのか、歩いていたほうがいいかさ  
 八七一 4 会 は、ねこにくわれてしまえばいい。」と  
 八七一 6 会 「遠いところに行つてくれさえすればいい  
 八七一 9 、かきねをとりこえてにげだした。すると  
 八七一 10 にいた小鳥がおそれてとびたつた。「これ  
 八七二 2 が、またさきへとんでいった。こうして、  
 八七二 4 そこにはかもが住んでいた。あひるの子は  
 八七二 5 横になった。つかれて、氣がしずんでいた  
 八七二 5 かれて、氣がしずんでいた。朝がた、かも  
 八七二 9 しの中で、横になって休みたいと思つた。  
 八七二 10 、ぬまの水をのませてもらいたいと思つ  
 八七二 11 たが、それもゆるしてもらえそうもなかつ  
 八七三 1 ここにそつとかくれていた。すると、そこ  
 八七三 3 たまごからはいだしてまもないものであつ

ハ73 7 会 いっしょにでかけて、渡り鳥になる考え  
ハ73 11 は、ぬまの中に死んで落ちた。「略。」と  
ハ74 1 んのむれが、そろってあしのあいだからと  
ハ74 4 わりにまちぶせをしていた。あしの上に廣  
ハ74 5 。あしの上に廣がっている木の枝にものぼ  
ハ74 5 る木の枝にものぼっていた。青いけむりが  
ハ74 7 ヤとぬま地へはいってきた。あわれなあひ  
ハ74 8 した。頭をねじ曲げてつばさの中にいたた  
ハ74 10 そのすぐそばに立っていた。したは口から  
ハ74 11 。したは口からたれて、目はみにくく光つ  
ハ74 11 、目はみにくく光っていた。はなをあひる  
ハ75 1 子のそばにつきつけて齒をむいた。それか  
ハ75 3 ヤと、どこかへいってしまった。「略。」  
ハ75 10 、じつとしずかにしていた。そのあいだも  
ハ76 1 つばうはひきつづいて火ぶたをきった。し  
ハ76 2 きった。しばらくして、やっとひっそりし  
ハ76 4 た。なん時間もたつてから、ようやくあた  
ハ76 5 け早くぬま地をにげていった。田や野原を  
ハ76 5 た。田や野原をこえて、どんどん走ってい  
ハ76 6 えて、どんどん走っていった。(三) く  
ハ76 8 くれがたになつて、あひるの子は、あ  
ハ76 9 。小屋はひどくあれていて、どつちにた  
ハ76 9 屋はひどくあれていて、どつちにたおれる  
ハ77 2 できず、すわりこんでしまわなければなら  
ハ77 4 すますはげしくなってきた。あひるの子は  
ハ77 6 口の戸がすこしあいているのをみつけたの  
ハ77 7 そこから中へはいっていった。中には、お  
ハ77 10 りといっしょに住んでいた。ねこは、せな  
ハ78 4 いがった。朝になつて、よそからきたあひ  
ハ79 1 会 いが、まあ、かつておいてみよう。」と  
ハ79 1 会 まあ、かつておいてみよう。」と、おぼ  
ハ79 3 ばかりためしにおいてもらった。しかし、

八79 5 ちがった考えをもっていた。にわとりは、  
 八79 10 口をださないでほしいね。」すると、  
 八80 4 たちがものをいっているときに、自分の  
 八80 6 、すみっこにすわってばかりいた。そこへ  
 八80 7 空気が日の光が流れてきた。あひるの子は  
 八80 10 さん、なにを考えているの。」と、にわ  
 八81 3 とは考えなくなってしまうよ。」「略」。  
 八81 5 、水の中へもぐってそこへいくと、それ  
 八81 6 だよ。ねこにきいてごらん。水の上をお  
 八81 8 おばあさんにきいてごらん。世界じゅう  
 八81 10 なたは、私のいっていることがおわかり  
 八82 3 かしいとは思っていないだろうね。う  
 八82 4 ろうね。うぬぼれてはいけないよ。人が  
 八82 4 人がしんせつにしてあげるときは、喜ぶ  
 八82 5 かなへやにはいってさ、ものごとを教え  
 八82 6 、ものごとを教えてもらえる人たちのな  
 八82 9 さんのためを思っているのですよ。いや  
 八83 1 ことを、せいでして勉強するのだね。」「  
 八83 2 界へでたいと思っているのです。」「略  
 八83 4 あひるの子はでかけていった。そうして、  
 八83 9 られや雪で重くなってひくくたれていた。  
 八83 9 くなってひくくたれていた。ある夕ぐれ、  
 八84 2 ほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもつ  
 八84 2 よく曲がる首をもっていた。それはくち  
 八84 4 みずうみへと、とんでいった。高く高くと  
 八84 5 た。高く高くとぼっていった。あひるの子  
 八84 5 の子は、それを見て、ふしぎな気持ちにな  
 八84 11 どんぞこまでもぐっていった。あひるの子  
 八85 1 の名も、どこへとんでいったのかというこ  
 八85 4 して、あの鳥のもっているような美しさを  
 八85 7 てがすっかりこおってしまったわにように、  
 八85 9 だんだん小さくなっていった。あひるの子

八85 10 子は、あながこおってしまったように、  
 八85 10 、いつも足をつかっていたなければならないか  
 八85 11 とうとうつかはれて、こおりの中にとじ  
 八86 1 身動きもせずたおれてしまった。あくる朝  
 八86 3 あひるの子をみつめて、木ぐつでこおりを  
 八86 3 くだき、うちへつれて帰った。すると、あ  
 八86 5 じめられるかと思っ、おそろしさのあま  
 八86 7 みさんは手をたいておこった。そこで、  
 八86 8 子は、バターのいれてあるたるの中へとび  
 八86 9 たこなおけにはいってしまった。おかみさ  
 八86 11 をつかまえようとして、ころげまわって、  
 八87 1 して、ころげまわって、わらったりさけん  
 八87 3 。おりよく戸があいていたので、あひるの  
 八87 6 そこで、つかれきって横になっていた。あ  
 八87 6 くれきって横になっていた。あひるの子が  
 八87 7 むらの中で横になっていた。美しい春であ  
 八88 2 、大きな庭の中にきていた。そこには、た  
 八88 6 流れる水の上にのびていた。ここは、ほん  
 八88 7 の喜びがみちあふれていた。ところが、木  
 八88 10 くちようがあらわれてきた。はくちようは  
 八88 11 るく水の上をおよいでいた。あひるの子は  
 八89 1 のみごとな鳥を知っていた。そうして、な  
 八89 2 しい思いがこみあげてきた。」「略」。  
 八89 3 鳥のところへとんでいく。私のような  
 八89 4 めんもなく近づいていくのだから、ころ  
 八89 9 。「略」。「そういって、水の中にとびこみ  
 八89 10 ようのほうへおよいでいった。はくちよう  
 八89 11 うして、羽をひろげてゆつたりと近づいて  
 八90 1 てゆつたりと近づいてきた。」「かわ  
 八90 8 分のすがたのうつつているのをみた。それ  
 八91 1 ようのたまごであってみれば、あひるの小  
 八91 3 ちょうは、その受けてきたまづしさとし

八91 6 ちは、そばへおよいできて、くちばしでか  
 八91 6 、そばへおよいできて、くちばしでかるく  
 八91 7 ちばしでかるくなくてくれた。小さな子ど  
 八91 8 。小さな子どもがきて、水にパンや麦をな  
 八91 8 水にパンや麦をなげてくれた。いちばん小  
 八92 3 たちは、手をたいておどりまわった。お  
 八92 4 さんのところへ走っていった。もらったき  
 八92 4 ところへ走っていった。もらったきたパン  
 八92 5 について、もらったきたパンやおかしを  
 八92 6 パンやおかしをなげてよこした。みんなは  
 八92 11 くちようのまえにきて頭をさげた。新しい  
 八93 1 、すっかりはにかんでしまった。どうして  
 八93 1 でした。どうしていいのかわからない  
 八93 9 のほそ長い首をあげて、心のそこから喜ば  
 八94 6 たので、手ですくってみますと、かるいも  
 八94 8 ばいれ、ふたをして日かげにおき、とき  
 八94 9 と、なわしろにまいてから、早くめがでる  
 八95 4 うがすこしふくらんでいました。 5月5  
 八96 2 。種もみひたしをしてから、ちようど10日  
 八96 4 、根が下へのびすぎて、あとでなえがよく  
 八96 5 。水のすむのをまて、むらのないように  
 八96 7 べつにしるしをつけておきました。いつ、  
 八97 4 らも、やとめができてきました。水にひた  
 八98 1 えが、だんだん育っていきます。どこの田  
 八98 2 ざくがたにでそろってにぎやかです。 6  
 八98 5 いねがよく根をはって育つように、小石を  
 八98 6 のかたまりをくだいてこまかくしました。  
 八98 6 まきのときとちがって、こんどは深くたが  
 八99 4 たのと二とおりにして、くきの数のふえる  
 八100 2 ずつ新しいなえができてきました。これで、  
 八100 6 なえも生き生きとしています。根が横へは  
 八100 9 しい葉がたくさんでできました。新しい葉



八101 1 しい葉は、まるまってでてきます。ずっと  
八101 1 葉は、まるまってでてきます。ずっと日  
八101 5 、いきおいよく育っていきます。5 かぶを  
八101 5 す。5 かぶをのこして、ほとんど85 cmにな  
八102 1 ほのさがふくらんで、いまにもほがでそ  
八102 3 めました。葉のついていいるものとところか  
八102 8 ものがたくさんはえていました。花のさい  
八102 8 いました。花のさいているほもみつけれま  
八102 9 した。やくは、白くてにおいもなく目だち  
八103 2 ましたら、まださいていませんでした。3  
八103 4 時間には、もう閉じてしまっていました。  
八103 4 、もう閉じてしまっていました。花のさく  
八104 1 すんだあとをさわってみると、いままでべ  
八104 1 ったさが、ふくれてかたくなっています  
八104 2 ふくれてかたくなっています。二つにわ  
八104 3 ました。二つにわって見たら、中に、青い  
八104 3 のがまるくふくらんでいました。これが、  
八104 9 まごが生みつけられていました。先生にお  
八105 2 だんだん黄色くなっています。9月29  
八105 8 すっかり黄色になつておじぎをしています  
八105 8 になつておじぎをしています。1 かぶのく  
八105 9 ぶのくきの数を数えてみますと、大きな  
八106 1 数をみんなでしらべてみました。1本ずつ  
八106 2 、ほか10ぐらいついていました。3本ずつ  
八106 4 した。両方をくらべてみて、あまりちがわ  
八106 4 。両方をくらべてみて、あまりちがわ  
八106 6 。もみの数をしらべてみました。1本のほ  
八106 7 80ぐらいずつついていました。ですから  
八108 2 いだにいねをはさんでこいたらよくとれま  
八108 4 むしろの上にひろげてほしました。11月  
八108 8 れ、ゴリゴリこすつてもみがらをほじきま  
八108 9 。きれいなお米がでてきました。11月19

九109 2 もり 18度 のこつていたもみを、1日、  
九109 2 日光にかんかんほして、すぐにもみすりを  
九109 3 すぐにもみすりをしてみました。どんどん  
九109 3 した。どんどんすつていたら、こんどはす  
八109 4 が、くだけた米もでてきました。ほしてす  
八109 4 でてきました。ほしてすぐ、もみすりをす  
九14 7 に、みどり色をぬつてみると、また、ちが  
九15 5 色、五色と数をまわしてあげば、その感じは  
九15 8 で一つの音だけひいてきいても、その音に  
九15 9 、ある感じがこもっているものです。この  
九15 10 とをいっしょにひいてみると、ままとはち  
九16 2 、四音と組みあわせてみると、さらにちが  
九16 6 、いっしょにあわせてひいてみたらどうで  
九16 6 しょにあわせてひいてみたらどうでしょう  
九16 8 美しいひびきとなつてきこえるにちがいあ  
九17 7 ったものがあらわれてくるでしょう。この  
九18 3 おたがいにとけあつて、一つの感じをつく  
九18 8 ほかのこぼをつけてみましょう。「風」  
九18 9 風」を「朝風」として、これにいろいろな  
九18 10 いろなことばをつけてみましょう。おしま  
九19 1 ことばを組みあわせてみましょう。二つか  
九19 4 ごちやごちやになつて、まとまりがつかず  
九19 5 ず、心の絵がみだれてしまいます。これは  
九10 4 のたたきかたによつて、いろいろな心持を  
九11 1 が、じつさいにきいてみると、たしかに水  
九11 1 川の水の音をたいてきかせてくれた。川  
九11 3 音をたいてきかせてくれた。川波がザワ  
九11 7 けるところをきかせてくれた。ドドンドド  
九11 8 よせる波の音をきいているようであつた。  
九11 10 うことばであらわしているが、それをたい  
九12 1 もしろい。よくきいていると、たしかに風  
九12 2 たとき、さつとふいてくる風であり、竹や

九12 2 あり、竹やぶを流れてくる風であり、町の  
九12 4 、せんとく物をふいている風である。風の  
九12 6 ったのは、雪の降つてくるころをあらわ  
九12 7 く、こまかくつづけてうち鳴らすのである  
九12 8 んしんと降りしきっているような気がした  
九12 9 そのうちかたによつて、水の音にもなり、  
九14 1 しばいで、ゆめをみていた人が、にわか  
九14 8 るだけの心持をもつていないからであらう  
九14 9 音楽のねうちが生きてくることになろう。  
九15 3 五六ばぐらいならんでとまっているのを、  
九15 3 らいならんでとまっているのを、よくみか  
九15 4 も、ずらりとならんでいいることがありま  
九15 6 が、たくさんまじっています。もう大き  
九16 4 えあります。こうして、大ぜいのつばめ  
九16 4 のつばめが、ならんでいいるのをみると、な  
九16 5 にかしら相談でもしているようにみえます  
九16 6 ます。まもなくさつていかなければなら  
九16 6 に、なごりをおしんでいるのかもしれない  
九16 8 のことを、話しあっているのかもしれない  
九16 10 そろそろ日本をさつていき、十一月のはじ  
九16 11 がたをみせなくなつてしまいます。つばめ  
九17 5 金ぞくのいたがついていました。それによ  
九17 6 みに、しるしをつけてはなしたものだとい  
九17 8 っともつと南へとんでいくのです。南洋の  
九17 9 ら、さらに海をこえて、遠いオーストラ  
九17 11 、こんなふうに渡つていきますが、ヨーロ  
九18 2 南ヨーロッパを通過して、遠くアフリカまで  
九18 3 アフリカまでもいって、冬ごしをします。  
九19 1 めが、きゆうに落ちてきたことがあります  
九19 2 の年は氣候がわるくて、九月の中ごろ、き  
九19 5 雨にずぶぬれになつて、身動きもできなく  
九19 5 動きもできなくなつてしまつたのです。ウ

九一九 でのことを知らせてきました。協会では  
 九一八 た。協会では、喜んでつばめのせわをする  
 九一九 寒氣のために苦しんでいるつばめのせわを  
 九二〇 つきりなしにかかって、つばめを集めてい  
 九二〇 っていることを知らせてきました。そのつば  
 九二〇 時にも、よわりきっているつばめたちを運  
 九二〇 るつばめたちを運んできました。さいわい  
 九二〇 に、そのとき、あいていた家が一けんあつ  
 九二〇 した。へやはいそいであたためられ、たく  
 九二〇 がねがはりまわされて、つばめたちのとま  
 九二〇 れず、へやにはいつてくる人があると、た  
 九二〇 めがはじめて運ばれてきたのは、九月十七  
 九二〇 こやみなく雨が降っていました。晩の十時  
 九二〇 千ばのつばめをつんできました。そこで、  
 九二〇 に、アルプスをこえてヴェニスへとんでい  
 九二〇 えてヴェニスへとんでいきました。それで  
 九二〇 れでも運びきれなくて、九月十九日の晩に  
 九二〇 した貨車を一つつけて送ったほどでした。  
 九二〇 の人たちがひき受けて送ったつばめを加え  
 九二〇 そのいたでがなおっていないころでした。  
 九二〇 なに高い教養をもっているかを世界じゅう  
 九二〇 めは、同じ家に帰ってくるといわれていま  
 九二〇 帰ってくるといわれています。つまり、こ  
 九二〇 た、同じ巣へもどってくるというのです。  
 九二〇 なのです。近年になって、いろいろな方法で  
 九二〇 でこのことをしらべてみますと、やはりそ  
 九二〇 たまらず、北をさしてすすむのです。その  
 九二〇 美しさを思いうかべているのでしょう。あ  
 九二〇 づらしいお客の帰ってくるのをまちこがれ  
 九二〇 くるのをまちこがれています。ちらりとつ  
 九二〇 と、「略」といって喜びます。わけても

九二五 家へいそいそと帰ってきたつばめをむかえ  
 九二四 プールの水がゆれている 草原に一本あ  
 九二四 こう花火のゆれている 大空にのびか  
 九二四 の電燈のたまみでおりぬ さるすべり  
 九二四 に声もなし ぐれていく巣をはるくもの  
 九二四 長らくごぶさたしています。こちらへき  
 九二四 ます。こちらへきてから、もう四ヶ月に  
 九二四 っかり落ちつくして、秋も終り近くなり  
 九二四 くは、こちらへきてから、おとなといっ  
 九二四 らだもしっかりしてきました。ぼくがい  
 九二四 に湖の中にうつって、ぐくにいた油絵  
 九二四 に美しくかがやいてみえます。この湖へ  
 九二四 。らいぎよがふえてからは、ほかの魚が  
 九二四 魚がだんだんへってきたそうです。まえ  
 九二四 に、大きな、黒くてひらたい貝がとれま  
 九二四 す。三びきもとつてくると、うちの家族  
 九二四 らと、いつも思っています。せめて、貝  
 九二四 みせたいと思っています。せんだって  
 九二四 ら七本も八本もでていて、それが、深い  
 九二四 本も八本もでていて、それが、深いのに  
 九二四 あまりも根をはっていました。また、ち  
 九二四 っかりとりのぞいておかないといけない  
 九二四 いけないといわれて、ほねをおりました  
 九二四 やくかいこんされて、三日めにやつと、  
 九二四 て、近所からわけてもらったさつまいも  
 九二四 なえを、手わけして植えていきました。  
 九二四 、手わけして植えていきました。いもな  
 九二四 は、深い谷になっていきます。ここからは  
 九二四 しみずが、せかれて、たきになり流れに  
 九二四 になり流れになって、村の中を通り、田  
 九二四 、湖にまでつづいています。夏のあいだ  
 九二四 、たきぎをせおって山からおるとき、

九三六 まの流れにはいつて、頭から水をあびる  
 九三六 ました。手にとつて口へいれると、つめ  
 九三六 れると、つめたくてあまい味がしました  
 九三六 くわの葉につつんで持つて帰ったことも  
 九三六 葉につつんで持つて帰ったこともありま  
 九三六 がいちめんにはえていて、なにかででき  
 九三六 ちめんにはえていて、なにかでできそう  
 九三六 ていて、なにかでできそうです。なん十  
 九三六 すぎやまつのはえているところは、晝で  
 九三六 あのようにぬれていきます。かれ枝なら  
 九三六 木の枝でも、おつてよいことになってい  
 九三六 てよいことになっていきます。高くて手の  
 九三六 つかまをくりつけて、ひっかけるように  
 九三六 つかけるようにして、下から力をいれて  
 九三六 、下から力をいれてひきおろします。ポ  
 九三六 キンという音がして、ガサガサと落ちて  
 九三六 、ガサガサと落ちてくると、うれしくな  
 九三六 ざおにかまをつけてやる方法を知らなか  
 九三六 枝のたくさんついている高い木をみつけ  
 九三六 もとの枝をおろして、やつとおりてくる  
 九三六 して、やつとおりてくると、からだじゅ  
 九三六 、根もとからかかっている高さ十五メー  
 九三六 足もとをよくみて、氣をつけてね。氣  
 九三六 みて、氣をつけてね。氣をつけてね。  
 九三六 てね。氣をつけてね。」とか、「略」。  
 九三六 から、早くおりておいで。」などいわ  
 九三六 、ぼくはがんばっておりませんでした。  
 九三六 こし氣がおちついてから、ぼくはあたり  
 九三六 分ばかり顔をみせていました。また、下  
 九三六 ないが、下を向いて登ってくるのがみえ  
 九三六 、下を向いて登ってくるのがみえます。

九四一(手) 炭やき小屋があつて、ゆるいけむりのあ  
 九四三(手) ました。秋になって、ぼくは山へいくの  
 九四一〇(手) たくさんまいおりにていましたが、いつの  
 九四一(手) のまにどこへ渡っていったのか、いまは  
 九四二(手) まにかがなが渡ってききました。かももき  
 九四六(手) しました。苦勞してかいこんした畑のい  
 九四八(手) つになる妹もつれて、うちじゅうがみん  
 九四九(手) のはだが地われしているのをほりおこす  
 九四二(手) はむちゅうになつていもをひろいました  
 九四三(手) 。ぼくたちのかりていやるしきのまわり  
 九四三(手) す。朝早く庭にでて、つやつやした大き  
 九四三(手) ると二つ三つ落ちているのをみたときは  
 九四三(手) 、母がかわをむいて竹ぐしにとおし、の  
 九四三(手) 、のき下につるしてくれます。妹は、か  
 九四四(手) 「略。」といつてひろい集めては、ま  
 九四四(手) いってひろい集めては、ままごとをして  
 九四四(手) は、ままごとをして遊びます。母やおば  
 九四四(手) まい一まいならべて、この色がよいとか  
 九四四(手) 色がよいとかいつてながめています。い  
 九四四(手) とかいつてながめています。いつのまに  
 九四四(手) っかり落ちつくしてはだかになった木の  
 九四六(手) がすずなりになつているのをみると、い  
 九四七(手) 、いまにものぼつてとりたくなります。  
 九四九(手) ととき、ぼくもいつていつたのでした。ぼ  
 九四九(手) はみなさんにあつてお話がしたいと思ひ  
 九四四(手) だけお目にかかつてすぐ帰りました。お  
 九四五(手) 「小公子」をよんでもらいました。おほ  
 九四五(手) 「小公子」の話にでてくる、セドリツク少  
 九四五(手) おとうさんのやつていたパン屋のしごと  
 九四五(手) んにやろうと思つています。兄は、大き  
 九四五(手) 兄は、大きくなって農業をするために、  
 九四五(手) 家でみならいをしていいます。「小公子」

九四六(手) きよのことを話していますけれども、ぼ  
 九四六(手) みなさんにお話してあげてください。ぼ  
 九四六(手) んにお話してあげてください。ぼくは、  
 九四六(手) もまえから、喜んで書きだしました。も  
 九四六(手) が、ゆかいに遊んでいるだろうと思ひま  
 九四六(手) しく元氣で勉強してください。さような  
 九四七(手) び道具を持たないでください。やまね  
 九四八(手) 、すみもがさがさして指につくくらいでし  
 九四九(手) いろろうはうれしくてたまりませんでし  
 九四八(手) 校のかばんにしまつて、うちじゅうを、と  
 九四八(手) た。ねどこにもぐつてからも、やまねこの  
 九四八(手) のようすなどを考えて、おそくまでねむれ  
 九四八(手) っかり明かるくなつていました。おもてに  
 九四九(手) ました。おもてにでてみると、まわりの山  
 九四九(手) きれいにありあがつて、まさにお空の下  
 九四九(手) お空の下にならんでいました。いろろう  
 九四九(手) いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷  
 九四九(手) そいではごはんをたべて、谷川にそつた小道  
 九四九(手) 道を、上の方へ登つていきました。すきと  
 九四九(手) はくりの木をみあげて、「略。」とききま  
 九四九(手) よつとしずかになつて、「略。」と答えま  
 九四九(手) で、東の方へとんでいきましたよ。」と  
 九五〇(手) かく、もつといつてみよう。くりの木、  
 九五〇(手) くりの木は、だまつてまた実をバラバラと  
 九五〇(手) 、小さなあながあいていて、そこから水が  
 九五〇(手) さなあながあいていて、そこから水がふえ  
 九五〇(手) がふえのように鳴つてとびだし、すぐたき  
 九五〇(手) し、すぐたきになつて、ゴウゴウと谷に落  
 九五一(手) ゴウゴウと谷に落ちていきました。「略。」  
 九五一(手) で、西の方へとんでいきましたよ。」「へ  
 九五一(手) 、もうすこしいつてみよう。ふえふき、  
 九五一(手) 、へんな樂隊をやつていました。いろろう

九五二(手) は、からだをかためて、「略。」とききま  
 九五二(手) で、南の方へとんでいきました。」と答  
 九五二(手) 、もうすこしいつてみよう。きのこ、あ  
 九五二(手) へんな樂隊をつづけていました。いろろう  
 九五二(手) びよんびよんとんでいました。いろろう  
 九五二(手) は、すぐ手まねきして、それをよびとめて  
 九五二(手) て、それをよびとめて、「略。」とたずね  
 九五三(手) したいに手をかざして、いろろうをみなが  
 九五三(手) で、南の方へとんでいきましたよ。」「へ  
 九五三(手) 、もうすこしいつてみよう。りす、あり  
 九五三(手) は、もうほそくなつてきてしまひました  
 九五三(手) うほそくなつてきてしまひました。そう  
 九五三(手) しい小さな道がついていきました。いろろ  
 九五三(手) うは、その道を登つていきました。かやの  
 九五三(手) つ黒にかさなりあつて、青空は一きれもみ  
 九五三(手) は、顔をまっかにして、あせをほとほと落  
 九五三(手) ぱつと明かるくなつて、目がちくつとしま  
 九五三(手) の木の森でかこまれていました。その草地  
 九五三(手) の男が、ひざをまげて、手に皮のむちを持  
 九五三(手) 手に皮のむちを持って、だまつてこつちを  
 九五三(手) ちを持って、だまつてこつちをみていたの  
 九五三(手) だまつてこつちをみていたのです。いろろ  
 九五三(手) したが、びくくりしてたちどまつてしまひ  
 九五三(手) くりしてたちどまつてしまひました。その  
 九五三(手) 、足もひどく曲がつてやぎのようですし、  
 九五三(手) 、なるべくおちついてたずねました。「略  
 九五三(手) でいろろうの顔をみて、口を曲げて、にや  
 九五三(手) 顔をみて、口を曲げて、にやつとわらつて  
 九五三(手) て、にやつとわらつていいました。「略」  
 九五三(手) ぐにここへもどつておいでになるよ。き  
 九五三(手) いろろはぎよつとして、ひと足うしろにさ  
 九五三(手) と足うしろにさがつて、「略。」といひま

九五七二 ㊦ うしてそれを知っていますか。」といい  
 九五七 ㊦ と、男は、下を向いて、かなしそうにいい  
 九五七 ㊦ うは氣のどくになって、「略。」といいま  
 九五七 ㊦ ました。男は、喜んで、息をハアハアさせ  
 九五七 ㊦ 息をハアハアさせて、耳のあたりまでま  
 九五七 ㊦ 、着物のえりを廣げて、からだに風をいれ  
 九五八 ㊦ 、いちろうはあわてていました。「略」  
 九五八 ㊦ と、男は、また喜んで、顔じゅう口のよう  
 九五八 ㊦ じゅう口のようにして、にたにたわらって  
 九五八 ㊦ て、にたにたわらっていました。「略」  
 九五九 ㊦ おかしいのをこらえて、「略。」とたずね  
 九五九 ㊦ ゆうにまじめになって、「略。」といいま  
 九五九 ㊦ き、風がどうとふいてきて、草はいちめん  
 九五九 ㊦ 風がどうとふいてきて、草はいちめん波  
 九五九 ㊦ は、おかしいと思つてふり返つてみますと  
 九五九 ㊦ と思つてふり返つてみますと、そこに、  
 九五九 ㊦ おりのような物を着て、みどり色の目をま  
 九六〇 ㊦ の目をまんまるにして立っていました。や  
 九六〇 ㊦ まんまるにして立っていました。やつぱり  
 九六〇 ㊦ やまねこの耳は立ってとがっているな、と  
 九六〇 ㊦ の耳は立ってとがっているな、と思ひなが  
 九六〇 ㊦ な、と思ひながらみっていると、やまねこは  
 九六〇 ㊦ げをびんとひっぱって、腹をつきだしてい  
 九六〇 ㊦ っ、腹をつきだしていいました。「略」  
 九六〇 ㊦ 「きようはよくきてくださいました。じ  
 九六〇 ㊦ あらそいがおこつて、ちよつと裁判に困  
 九六〇 ㊦ ました。びっくりしてかかんでみますと、  
 九六〇 ㊦ びっくりしてかかんでみますと、草の中に  
 九六〇 ㊦ のが、ぴかぴか光っているのです。「略」  
 九六〇 ㊦ とみんななにかいっているのです。「略」  
 九六〇 ㊦ やもたいへんあわてて、こしから大きな  
 九六〇 ㊦ きななまをとりだして、ザックザックとや

九六三 ㊦ どもがきらきら光つてとびだして、もうワ  
 九六三 ㊦ ざら光つてとびだして、もうワアアアいっ  
 九六三 ㊦ 、もうワアアアいっていました。ぎよしや  
 九六三 ㊦ 長いしゅすの服を着て、どんぐりどものま  
 九六三 ㊦ どものまえにすわっていました。ぎよしや  
 九六四 ㊦ れでもむりにいばつていいますと、どんぐ  
 九六四 ㊦ っ、頭のとがっているのがいちばんえ  
 九六四 ㊦ がいちばんとがっています。「略」  
 九六五 ㊦ だよ。おしあいてきめるんだよ。」も  
 九六五 ㊦ ガヤ、ガヤガヤいって、なにがなんだか、  
 九六五 ㊦ びんとひげをひねっていました。「略」  
 九六六 ㊦ こが、ひげをひねっていました。「略」  
 九六七 ㊦ 、「いちろうはわらつて答えました。「略」  
 九六八 ㊦ いうようにうなずいて、それから、いかに  
 九六八 ㊦ の着物のえりを開いて、黄色のじんばおり  
 九六八 ㊦ おりをちよつとだして、どんぐりどもに申  
 九六八 ㊦ てんでなつてなくて、頭のつぶれたよう  
 九六八 ㊦ どもは、しんとしてしまいました。それ  
 九六八 ㊦ はそれはしんとして、だまつてしまいま  
 九六八 ㊦ いんとして、だまつてしまひました。そこ  
 九六八 ㊦ いしゅすの服をぬいで、ひたいのあせをぬ  
 九六八 ㊦ 一分半でかたづけしてくださいました。ど  
 九六八 ㊦ めいよ判事になつてください。これから  
 九六八 ㊦ たら、どうかきてくださいませんか。  
 九六八 ㊦ おれはどうかとってください。わたしの  
 九六八 ㊦ ちろろのどと書いて、こちらを裁判所と  
 九六八 ㊦ ばらくひげをひねって、目をばちばちさせ  
 九六八 ㊦ 、目をばちばちさせていましたが、とうと  
 九六八 ㊦ 頭すべし、と書いていいでしょうか。」  
 九六八 ㊦ 「いちろうはわらつていいました。「略」  
 九六八 ㊦ ねつたまま下を向いていましたが、やつと  
 九六八 ㊦ が、やつとあきらめていいました。「略」

九七二 ㊦ は、さけの頭でなくてまあよかったという  
 九七二 ㊦ リットル早く持つてこい。二リットルに  
 九七二 ㊦ のどんぐりもまぜてこい、早く。」ぎよ  
 九七二 ㊦ んぐりをますにいれて、はかつてさげば  
 九七二 ㊦ すにいれて、はかつてさげばました。「略」  
 九七二 ㊦ 、大きくのびあがつて、目をつぶつて、半  
 九七二 ㊦ がつて、目をつぶつて、半分あくびをしな  
 九七二 ㊦ かたちのうまがついていいます。「略」や  
 九七二 ㊦ た顔つきで遠くをみていました。馬車がす  
 九七二 ㊦ がすすむにしたがつて、どんぐりはだんだ  
 九七二 ㊦ だん光がうすくなつて、まもなく馬車がと  
 九七二 ㊦ のどんぐりにかわつていきました。そうして  
 九七二 ㊦ 一どにみえなくなつて、いちろうは、自分  
 九七二 ㊦ をいれたますを持つて立つていきました。そ  
 九七二 ㊦ たますを持つて立つていきました。それから  
 九七二 ㊦ り、「略。」と書いてもいいといえよか  
 九七二 ㊦ 生が、町角までいって、待つていようように  
 九七二 ㊦ 角までいって、待つていようようにとおし  
 九七二 ㊦ 移植ごなどを持つて、角のむきみ屋のと  
 九七二 ㊦ 屋のところに集まつていきました。おかみさ  
 九七二 ㊦ っせと貝をこじあけて、むきみをつくつて  
 九七二 ㊦ て、むきみをつくつていきました。みるまに  
 九七二 ㊦ こやかごなどをのせておいでになりました  
 九七二 ㊦ いまでもこうやつて、人は貝をたべてい  
 九七二 ㊦ て、人は貝をたべています。むかしとい  
 九七二 ㊦ などをおもにたべていたときがあつたら  
 九七二 ㊦ 九七二 ㊦ 「略。」先生について、五十人のなかまが  
 九七二 ㊦ くれないうように歩いていきました。平らな  
 九七二 ㊦ ました。しばらくして、その主人といつ  
 九七二 ㊦ 主人といつしよにでておいでになりました  
 九七二 ㊦ 畑をすこしほらせてもらふことにします  
 九七二 ㊦ や、かごなどを持つてきて、かしてくれま



九七九 ちよつとたかぎをみて、「略。」たかぎ  
 九八三 の木をひとまわりして、そつとやまだに近  
 九八四 、「じようぎひろつてやつたじやないか。  
 九八八 、「すみをみつめてやつたじやないか。  
 九八八 、「くは二つなぐられて、三つきみをなぐつ  
 九八八 、「もう一つなぐつてやる。」と、げんこ  
 九八八 、「と、げんこをかためて右手をふりあげる。  
 九八八 、「たかぎ、頭をかかえてにげるまねをする。  
 九八八 、「ちよつとたかぎをみて——」たかぎ「いっ  
 九八八 、「きみ、うちによつて、ねえさんにそのボ  
 九八八 、「そのボタンをつけてもらわない。」やま  
 九八八 、「かい。」たかぎ「してもいいさ。」やまだ「  
 九八八 、「やまだ「そう、してもいいね。」たかぎ「  
 九八八 、「がら、「でも、みてあげよう。」たかぎ「  
 九八八 、「しい先生につれられて、山のスキー場へい  
 九八八 、「ツクツクをせおつて、スキーをつけ、二  
 九八八 、「と、からだかほつてあせがでる。みんな  
 九八八 、「でる。みんなだまつて、あえぎながら登つ  
 九八八 、「あえぎながら登つていった。スキーの雪  
 九八八 、「さあ、元氣をだして。」と、大きな声を  
 九八八 、「その声にはげまされて、ぼくたちは、いっ  
 九八八 、「ようけんめいに登つていった。まつ林の中  
 九八八 、「。まつ林の中を通過していくとき、だれかが  
 九八八 、「える。みんなは喜んで、きゆうに元氣をだ  
 九八八 、「しゃが、長くつづいてる。「略。」「略  
 九八八 、「先生、まだすべつてはいけませんか。」  
 九八八 、「生、もうすべつてください。」と、み  
 九八八 、「たいものはすべつてよろしい。」といわ  
 九八八 、「四人は、列をはなれて、ま一文字にすべり  
 九八八 、「スキーも一つになつて、ビュウとうなる。  
 九八八 、「空中かつそうをしているようだ。ふもと  
 九八八 、「ようだ。ふもとへきて、急停止すると、ば

九八八 、「小鳥のようにおりてくる。とちゆうでこ  
 九八八 、「。とちゆうでころんで、雪だるまになつて  
 九八八 、「で、雪だるまになつておきあがるものもあ  
 九八八 、「こわいながらおりてくるもの、まじめな  
 九八八 、「まだ上へ上へと登つていかれたが、三百五  
 九八八 、「ころで、つえをあげて、「略。」というあ  
 九八八 、「、みんなつえをふつて、それに答えた。の  
 九八八 、「さきに、すぐつづいていし先生がすべら  
 九八八 、「すべりぶりにみとれていしと、先生たちは  
 九八八 、「つ。雪けむりがきえて、先生のお顔がうか  
 九八八 、「、ぼくたちは、登つていしつてはすべり、お  
 九八八 、「たちは、登つていしつてはすべり、おりては  
 九八八 、「つてはすべり、おりてはまた登つた。ジャ  
 九八八 、「がわるジャンプをしている。「略。」と、  
 九八八 、「んだ。両手をひろげて高くとばれるすがた  
 九八八 、「生は、はちまきをして、すべりだされた。  
 九八八 、「美しくちゆうをとんでいく。「略。」と、  
 九八八 、「ートルも空中をとんで、先生は地上の人と  
 九八八 、「九八八 、「午後は、先生について、ひとりひとり、正  
 九八八 、「いすべりかたを教えていた。帰りは  
 九八八 、「の坂道だ。林をぬつて長いきよりをすべる  
 九八八 、「き歩みいそがせてちよ紙かいにゆく月  
 九八八 、「ぐる 着ぶくれて歩かされいし女の子  
 九八八 、「遊ぶ赤きかにいてすきの山しずか 青  
 九八八 、「き葉のかげにきておる たべのこしの  
 九八八 、「うつる日を追いて ふくじゆそののつ  
 九八八 、「ろりの火にあてており 金色の小さき  
 九八八 、「き鳥のかたちしていちちようちなるなり丘  
 九八八 、「きを口にくみて鳴らすごとかわずは  
 九八八 、「。私は父につれられて、近くの高い山に登  
 九八八 、「の帰りに、近道をして谷をおりてくると、  
 九八八 、「近道をして谷をおりてくると、そこに小石

九八八 、「泉の水を手ですくつて、いくともうまそう  
 九八八 、「どうもまそうに飲んでから、私にいった。  
 九八八 、「だ。この水を飲んでごらん。これは、名  
 九八八 、「ブツブツと音をたててわきだして、一方の  
 九八八 、「音をたててわきだして、一方のかけたとこ  
 九八八 、「さらさらと流れだしていた。私は手をいれ  
 九八八 、「いた。私は手をいれて、それをすくおうと  
 九八八 、「、おく山の雪がとけてそのまましみてきた  
 九八八 、「とけてそのまましみてきたかと思われるよ  
 九八八 、「た。「そこに流れているのがまつ川だ。  
 九八八 、「のまつ川からひいてあるのだ。」泉をあ  
 九八八 、「は、さらさらと走つて、やがて、すぐ下の  
 九八八 、「大きな川に流れこんでいた。帰り道で、父  
 九八八 、「は次のような話をしてくれた。むかし、ひ  
 九八八 、「である。なんとかしううまい水のわきでる  
 九八八 、「じゆうを歩きまわつて、うまそうな水や名  
 九八八 、「高いいど水をためてみたけれども、どう  
 九八八 、「川の中流の水をくんで、それで茶をたてて  
 九八八 、「で、それで茶をたててみると、いままで味  
 九八八 、「ついた。舟をやとつてこぎのぼりながら、  
 九八八 、「では、その味がきえてしまふことがあつて  
 九八八 、「支流のほうにはなくて、遠い上流にあるの  
 九八八 、「ではないから、やめて帰ろうといった。し  
 九八八 、「いろな困難をしのいで、みんなをばげまし  
 九八八 、「、みんなをばげましては上流へたどつてい  
 九八八 、「しては上流へたどつていった。大きな支流  
 九八八 、「味がわからなくなつてしまふ。あともどり  
 九八八 、「まう。あともどりして飲んでみた。ずつ  
 九八八 、「あともどりして飲んでみた。ずつと上流  
 九八八 、「、ずつと上流へいってためてみた。深  
 九八八 、「上流へいってためてみた。深  
 九八八 、「いとこの水をとつて飲んでみた。深

九一二五 ろの水をとって飲んでみたりしなくてはな  
 九一二五 飲んでみたりしなくてはならなかった。茶  
 九一二六 くっせず、求め求めて、いつか、いまのし  
 九一二八 名高いところもすぎて、四十キロあまりも  
 九一二九 四十キロあまりもきてしまった。ここまで  
 九一二四 よほど水かさがへっていた。ここで茶人の  
 九一二四 りゅう川に流れこんでいるところの近くま  
 九一二五 の岸のほとりを流れていた。ためしにまつ  
 九一二五 しにまつ川の水をにて飲んでみると、たい  
 九一二五 つ川の水をにて飲んでみると、たいへんう  
 九一二七 流の本流の水を飲んでみると、もうそれは  
 九一二四 近づいたことを知って喜んだ。茶人たちは  
 九一二五 は、ここで船をすて、岸にそって上流に  
 九一二五 をすて、岸にそって上流に向かって歩き  
 九一二五 そって上流に向かって歩きながら、ときど  
 九一二五 きとき水をふくんで泉をさがしていっ  
 九一二五 くんでは泉をさがしていった。はじめの八  
 九一二五 どは、村ざとがあって川べりに道もあった  
 九一二七 まはそれもなくなつて、大きな岩がごろご  
 九一二五 、すこしさかのぼって水を飲んでみると、  
 九一二五 かのぼって水を飲んでみると、いい味は、  
 九一二五 た。そこで氣をつけてみると、右岸からさ  
 九一二六 がある。そこをくんで飲んでみると、それ  
 九一二六 。そこをくんで飲んでみると、それこそま  
 九一二六 とわきでる泉があつて、それでもう終りで  
 九一二六 をつくり、泉をくんでつれの茶人と茶をた  
 九一二八 れの茶人と茶をたて、心から楽しんだと  
 九一二八 ち、おなががすいてしまった。」(ここ四  
 九一二八 ちゃんのなき声がしています。子もり歌も  
 九一二八 。子もり歌もきこえてきます。くもは、そ  
 九一二八 ら、光る星をみあげていました。そのとき  
 九一二八 くもは、きつとなつてその方を見つめまし

九一二五 ぶが、足をひっかけて、ブンブンいって  
 九一二六 けて、ブンブンいっているところだ。く  
 九一二七 いきなりとびかかっているところだ。く  
 九一二八 っぽい羽ばたきをして、すいとにげていき  
 九一二八 をして、すいとにげていきました。おまけ  
 九一二九 に大きなあなをあけてしまいました。「略」  
 九一二九 もは、足をふんばって身がまえました  
 九一二九 なんだんきれいに光ってききました。あかち  
 九一二九 だしたようにふいてくるので、あみがゆ  
 九一二九 音がだんだん近づいてきます。「略」く  
 九一二九 じいつと息をこらして待っていると、みつ  
 九一二九 と息をこらして待っていると、みつばちは  
 九一二九 ものあみを知らないで、まっすぐにとんで  
 九一二九 で、まっすぐにとんできました。ブンブン  
 九一二九 といつなをとりだして、みつばちのからだ  
 九一二九 は、そのつなをさけてにげようとした  
 九一二九 ました。ぐずぐずしている、そのままた  
 九一二九 はだいい針をだして、くもをねらつて、  
 九一二九 して、くもをねらつて、ちくりとつきさし  
 九一二九 くもが、手でさすっているあいだに、みつ  
 九一二九 ちは、つなをほどこいて、あみをくい切つて  
 九一二九 て、あみをくい切つて、にげていってしま  
 九一二九 をくい切つて、にげていってしまいました  
 九一二九 切つて、にげていってしまいました。ゆう  
 九一二九 た。ゆうゆうととんで、にげていくみつば  
 九一二九 ゆうととんで、にげていくみつばちのうし  
 九一二九 のうしろすがたをみていましたが、くもは  
 九一二九 自分のからだははれてくるし、いたいし、  
 九一二九 、いたいし、苦しくてどうにもなりません  
 九一二九 ばらく、目をつぶってしずかにしていると  
 九一二九 つぶつてしずかにしていると、また、パタ  
 九一二九 という羽音がきこえてきました。「略」。

九一二八 きんなくつこうをして、こちらにとんで  
 九一二八 して、こちらにとんできます。あみにつ  
 九一二八 。あみにつきたつてはたいへんと、くも  
 九一二八 は、すっかりやぶれて、くもはそのまま地  
 九一二八 へ。」くもが氣がついてみると、あたりに  
 九一二八 らが、たくさんさいいていたのです。いいに  
 九一二八 。いいにおいをかいてみると、いつのまに  
 九一二八 らだのいたみもきえていきました。目のま  
 九一二八 えのぼらの花が動いています。おかしいな  
 九一二八 など、ふしぎに思つてよくみると、それは  
 九一二八 は、長い手をのびして、わけなく白いちよ  
 九一二八 た。大きな口をあいてたべようとしたとき  
 九一二八 九一二二 さん。ちよつと待つてくさい。」と頼み  
 九一二八 頼まれると、だまってたべしまうわけに  
 九一二八 ると、だまってたべしまうわけにもいき  
 九一二八 くもは、首をねじつて上の方を見あげまし  
 九一二八 月が、しずかに光っていました。「略」  
 九一二八 九一二二 さんのところへいつてみたいと思いません  
 九一二八 かあさんをさがしてくるのです。「略」  
 九一二八 九一二二 「略」といわれて、きゆうになつかし  
 九一二八 るように思ひだされてきました。「略」  
 九一二八 九一二二 さん、今夜は助けてください。「略」  
 九一二八 とをちゃんと知っています。いましがた  
 九一二八 みつばちにさされて、苦しんだことも知  
 九一二八 しんだことも知っています。だから、わ  
 九一二八 ら、わたしをたべてもいいと思つてい  
 九一二八 べてもいいと思つているんだけど。「へ  
 九一二八 九一二二 れまで、命を助けておいてください。」「  
 九一二八 九一二二 命を助けておいてください。」「略」  
 九一二八 九一二二 。さあ、早くとんでいくがいい。」「ちよ  
 九一二八 九一二二 ど白ばらの花がとんでいくように。くもは  
 九一二八 九一二二 うに。くもは、とんでいくちよちよをみ

九四〇 九もは、おなががすいているのに気がつき、  
 九四一 のまま手足をちぢめて、じつとすわつてい  
 九四二 めて、じつとすわつていました。あたりに  
 九四三 らの花のおいがしていました。くもは、  
 九四四 うつらとねむくなってきました。「略」。  
 九四五 らだを小さくまるめて、ころつと横になり  
 九四六 が、くもの頭をなでています。上をみると  
 九四七 上をみると、わらっているではありません  
 九四八 たしの顔ばかりみて、おかしいこと。」「  
 九四九 おかあさんときいて、くもは、手をうん  
 九五〇 、手をうんとおぼして、とりすがろうとし  
 九五一 はもう頭の上まできていました。つゆが木  
 九五二 ゆが、しずくになつて、ボタリボタリと落  
 九五三 ボタリボタリと落ちてきました。くもは、  
 九五四 。くもは、目がさえてなかなかねむれませ  
 九五五 くもは、なんといつて返事をしたいかわ  
 九五六 んといつて返事をしたいかわからないの  
 九五七 で、そのままだまっています。自分は、  
 九五八 を一つ一つ思いだしているうちに、心持が  
 九五九 が、しだいにかわってきました。ちょうち  
 九六〇 しずかなくらしをしているのだらう。なん  
 九六一 だやかなくらしをしているのだらう。それ  
 九六二 ろう。それにくらべて、自分は、なんとあ  
 九六三 らつぽいくらしをしていることだらう。あ  
 九六四 あみをはり、かくれていて、ほかの虫がひ  
 九六五 をはり、かくれていて、ほかの虫がひっか  
 九六六 、いきなりとびついてかみころすなんて、  
 九六七 んとひどいことをしてきたものだらう。く  
 九六八 をのぼし足をのぼしてきました。ふしくれ  
 九六九 らおそろしく思われてきました。白ばらの  
 九七〇 た。ぐつすりねむってしまったのでしょう  
 九七一 りと光りながら落ちてくる夜つゆをみてい

九四九 ちてくる夜つゆをみてみると、風がふいて  
 九五〇 ていると、風がふいてきました。風と思っ  
 九五一 のは、そうではなくて、つばめがすいとと  
 九五二 つばめがすいととんできたのでした。くも  
 九五三 れたまま、空をとんでいきました。くもは  
 九五四 た。夜明けが近づいて、東の空が、ほんの  
 九五五 んのりとしらみかけてきました。「略」。  
 九五六 で、みにくいと思っていた自分のからだも  
 九五七 んのところへとんでいったあの白いちよ  
 九五八 木が大きく枝をはって、わかめをだしかけ  
 九五九 だ空の中にとけこんでいる。じつに美しい  
 九六〇 美しい。小鳥が鳴いている。風が、かすか  
 九六一 すかな音楽がきこえてくるようだ。どこか  
 九六二 、どこからかきこえてくる。美しいものは  
 九六三 を、われわれは失っている。毎日の生活の  
 九六四 の中に、それを失っている。しかし、われ  
 九六五 めずらしそうにつけてきて困りました。そ  
 九六六 らしそうにつけてきて困りました。そうい  
 九六七 。おとうさんの歩いていくそばを、足ばや  
 九六八 、足ばやにかけぬけていって、てんでに、  
 九六九 やにかけぬけていって、てんでに、おとう  
 九七〇 んなにうるさくついてこられたときには、  
 九七一 ので、子どもをさけて通ったこともありま  
 九七二 すが、なわとびをして遊んだりします  
 九七三 なわとびをして遊んでいたりと、そ  
 九七四 そのなにかまわりをして、なわをまわしてや  
 九七五 して、なわをまわしてやったこともありま  
 九七六 とうさんを呼びとめて、「略」。」といひな  
 九七七 、おとうさんにわけてくれる少女もありま  
 九七八 とげしたいがわかれて、じゅくしたくりの  
 九七九 た。その少女のわけてくれたくりは、むじ  
 九八〇 なかの子どもにとっては、もっとも楽しい

十〇一 ても、遊びたわむれている子どもにあいま  
 十〇二 という石の橋があつて、イエヌという川  
 十〇三 川が、その下を流れていました。岸にある  
 十〇四 とうさんもよくいつてこしかけた。そ  
 十〇五 その葉をひろい集めて、橋のたもとに石が  
 十〇六 石がきのところへきては、遊んでいました  
 十〇七 ころへきては、遊んでいました。おとうさ  
 十〇八 屋のまえにこしかけて、コーヒをわかし  
 十〇九 、コーヒをわかしもらっていますと、  
 十一〇 ーをわかしもらっていますと、きまつて  
 十一一 少女たちも遊びにきています。いづれも、  
 十一二 集めた落ち葉を持ってきて、おとうさん  
 十一三 た落ち葉を持ってきて、おとうさんに  
 十一四 いたへでもはさんでおきたいのです。な  
 十一五 ちは、手をとりあつてとんでいって、小  
 十一六 手をとりあつてとんでいって、小さなを  
 十一七 りあつてとんでいって、小さなをえらん  
 十一八 、小さなをえらんで、ひろつてきてくれ  
 十一九 をえらんで、ひろつてきてくれました。こ  
 十二〇 らんで、ひろつてきてくれました。こうし  
 十二一 とうさんのそばへきて、さまたなことを  
 十二二 が、おとうさんをみてそっくりしました。「へ  
 十二三 つしよにお話をしておくれ。ちょうどあ  
 十二四 自分國のこしておいてきました。わ  
 十二五 國のこしておいてきました。わたしは  
 十二六 の少女に、歌を歌ってほしいと頼みました  
 十二七 おとうさんは、きいて知っていましたから  
 十二八 さんは、きいて知っていましたから。少女  
 十二九 とうさんのこしかけていますそばで、コーヒ  
 十三〇 ー茶わんのおいてあるテーブルをかこ  
 十三一 るテーブルをかこんで、いなかの歌を歌  
 十三二 、いなかの歌を歌ってきかせてくれました



十13 9 の歌を歌ってきかせてくれました。なんと  
 十14 1 いらしい子どもがいて、なかよしになつて、  
 十14 1 なかよしになつてくれたからです。ピ  
 十14 3 の人たちが、ならんでせんたくをしていま  
 十14 3 らんでせんたくをしていました。フランス  
 十14 5 が、川の水にうつっていました。その川の  
 十14 9 とうさんのそばへきて、あいさつをしてか  
 十14 9 きて、あいさつをしてから、「略。」とた  
 十15 9 うさんが、力をいれて答えました。この返  
 十16 7 と、太郎がそばへきて、外国ではどんなこ  
 十16 10 、おとうさんがいつてきかせました。「略  
 十17 7 になります。こうしておまえたちに話すよ  
 十17 8 回は、外国でくらしてみ、つくづく、わ  
 十17 8 回は、外国でくらしてみ、つくづく、わ  
 十17 9 回は、外国でくらしてみ、つくづく、わ  
 十17 11 回は、外国でくらしてみ、つくづく、わ  
 十18 2 愛することを、勉強したら、どん  
 十18 6 下で、きよとんとしているあまがえる。3  
 十18 10 下で、雨やどりをしているにわたりのむれ  
 十19 3 ことばの愛」を読んでる声が、きこえて  
 十19 3 ている声が、きこえてくる。5 ひとりの  
 十19 4 りの子どもが、立って本を読んでいる。友  
 十19 4 が、立って本を読んでいる。友だちの顔、  
 十19 6 のつぎの一節を読んでいる声がきこえる。  
 十19 8 たまま、点字を読んでいる。ほかの生徒の  
 十19 9 く点字の上をすべっていく。7 オルガン  
 十19 10 オルガンがひびいてくる。窓をあける女  
 十20 2 円形ののじがかかっている。「にじの歌」  
 十20 6 光線ですが、わけてみると、こんなにさ  
 十20 10 光線ですが、わけてみると、こんなにさ  
 十21 1 チなどが、風にゆれている。その下を、あ  
 十21 2 を、あひるがならんで通っていく。そのあ

十21 2 ひるがならんで通っていく。そのあとから  
 十21 3 が、よちよちと歩いてくる。母親が、両手  
 十21 4 親が、両手をのぼしてついでくる。11 病  
 十21 4 両手をのぼしてついでくる。11 病院の庭  
 十21 6 護婦がもうふをほしている。男の子がベッ  
 十21 7 子がベッドにすわっている。「略。」窓に  
 十21 8 あさん、雨がはれてきれいな。窓に花  
 十21 10 ごらん、にじがでているよ。窓をのぞ  
 十22 2 お友だち、どうしているかな。12 ひと  
 十22 4 水えのぐで写生をしている。光る白い雲、  
 十22 8 つしよに種まきをしている。きれいにたが  
 十22 10 れた畑。田をならしている農夫。14 ひと  
 十22 11 友だちは、妹をつれて、つつみの上でつみ  
 十22 12 みの上ですみ草をしている。「春の小川」  
 十23 1 小川」の歌がひびいてくる。小川の水、き  
 十23 7 つしよに汽車に乗っている。窓からみえる  
 十23 11 ンネル。17 ひらけて、海。長い海岸線、  
 十24 2 きな車輪が、まわっている。トロッコをお  
 十24 3 る。トロッコをおして、炭坑にはいつてい  
 十24 3 して、炭坑にはいつていく工員。ヘッドラ  
 十24 4 ッドライトにたよって現場に近づく。地下  
 十24 6 機やつるはしを持って、石炭をほっている  
 十24 7 持って、石炭をほっている。19 あせまみ  
 十25 1 炭の山。おしだされてくるトロッコ。こう  
 十25 3 員がしごとをすませて、坑内から地上にで  
 十25 4 、坑内から地上にでくる。まぶしい日光  
 十25 7 足どりで、家に帰ってくる。道ばたにさく  
 十25 9 うちよ。立ちどまって、両手をひろげて深  
 十25 9 づつ、両手をひろげて深呼吸。23 「略」。  
 十25 11 ぶ声。その声をきいて、にっこりとわらう  
 十26 4 が、むちゅうになつてかけてくる。工員は男の子  
 十26 4 ちゅうになつてかけてくる。工員は男の子

十27 3 「を、ずっとつづけていきたいと思ひます  
 十27 6 ものを、よくしらべてみる心がまえを、つ  
 十27 9 。トマトが畑に植えてあれば、そののびか  
 十28 1 かたなどを、しらべておきたいと思ひます  
 十28 5 世界なども、しらべていきたいと思ひます  
 十29 2 ということを、考えてしらべたいと思ひ  
 十29 2 てしらべたいと思ひます。たとえば、  
 十29 5 ったのか、よく考えてみたいと思ひます。  
 十29 9 ことも、心にうかべてみたいのです。もよ  
 十29 12 な単位からなりたっているか、それをさが  
 十30 1 るか、それをさがしてみようと思ひます。  
 十30 3 そのわけをよく考えていつてみようと思ひ  
 十30 3 けをよく考えていつてみようと思ひます。  
 十30 4 もとのことをしらべていくような心がけを  
 十30 8 たちのめんどろをみてやり、兄や姉の手助  
 十31 5 友だちとなかよくして、助けあつていき  
 十31 5 よくして、助けあつていききたいと思ひます  
 十31 7 たいし、自分のもつていいところを、  
 十31 7 を、えんりよしなであらわし、友だちの  
 十31 8 ろを、すなおに学んでいききたいと思ひます  
 十31 9 をだましたりしないで、ありのままのすが  
 十31 10 すがたで、つきあつていききたいのです。ほ  
 十32 4 の部分、部分があつての全体、というつな  
 十32 5 ながりをわすれないで、あいての人をうや  
 十32 9 はたばかりいじつていて、おかしなやつ  
 十32 9 ばかりいじつていて、おかしなやつだ。  
 十32 10 人々から、こういつてあざけられた。佐吉  
 十33 1 大工のしごとを助けてはたらいいたが、  
 十33 1 とを助けてはたらいいたが、ひまさえあ  
 十33 2 ことをしらべつづけていたのである。村じ  
 十33 3 かいにされるのをみて、父は、「略。」と  
 十33 4 のことを考えないで、みっちりしごとを

十 33 5 ㊦ ちりしごとをやってくれ。」とさとした  
 十 33 8 の大工の家にあずけてしまった。このあい  
 十 33 9 。このあいだに立って、佐吉をはげました  
 十 34 1 つしてゆるがせにしておかれない。いま  
 十 34 2 めのの織りかたをしていたのでは、やがて  
 十 34 3 早く織機を進歩させておかなければならな  
 十 34 6 て糸のあいだをぬっていく横糸であつた。  
 十 34 6 。横糸はおさによつて、右から左、左から  
 十 34 10 のがずんずん織られていくからである。佐  
 十 34 11 は、しだいに高まっていったが、小学校を  
 十 35 2 た。佐吉は、上京して機械館へ毎日かよっ  
 十 35 3 きものように動いていた。かれは、その  
 十 35 4 のりっぱな機械をみて、感心するとともに  
 十 35 8 は、もう、じつとしていられなくなり、設  
 十 35 8 なり、設計図をひいては組みたて、組みた  
 十 35 9 組みたて、組みたてでは動かしてみた。だ  
 十 35 9 組みたてでは動かしてみた。だが、思うよ  
 十 35 11 の小屋に閉じこもつて、いっしんに考えぬ  
 十 36 1 はますますわらわれて、だれひとりあいて  
 十 36 2 れひとりあいてはしてくれなくなり、まづ  
 十 36 2 さはいよいよせまってくる。かれは、勇氣  
 十 36 3 勇氣をふるいおこして、夜も晝もなく考え  
 十 36 4 のもとをとりのぞいて、新しい設計図をこ  
 十 36 6 きあがつた。ためしてみると、はたしてよ  
 十 36 7 めのをみごとに織っていく、ふしぎな機械  
 十 36 11 ㊦。「へ略。」といつてほめたたえた。試運  
 十 36 11 その織機をあやつつて、りっぱにぬのを織  
 十 36 12 りっぱにぬのを織つてみせたのは、佐吉の  
 十 37 7 新しい出発にあたつても、この自動織機が  
 十 38 2 珠をてのひらにのせて、大きなゆめをえが  
 十 38 3 大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか  
 十 38 5 ふしぎな宝石とされてきたが、しらべてみ

十 38 5 れてきたが、しらべてみると、けつして、  
 十 38 8 とともに大きくなって、天然眞珠となるこ  
 十 39 6 ほどの核をこしらえて、それを、母貝の体  
 十 39 6 貝の体内にさし入れてみた。うまく貝の中  
 十 39 11 核をそこにはきだして、受けつけなかった  
 十 40 1 のでも、あとで開いてみると、もとのまま  
 十 40 1 、もとのままになっていた。同じことをな  
 十 40 2 をなんどもくり返してみたところで、かわ  
 十 40 3 かも、核をさし入れてから、眞珠になるま  
 十 40 4 、その助力者となつてくれたのは、つまの  
 十 40 10 、「へ略。」こういつて、失望にせず幸吉  
 十 41 1 海水いちめんふえて、海水が茶色にかわ  
 十 41 3 に、母貝はみな死んでしまった。これは、  
 十 41 5 れは、まったく考えてもみなかったことで  
 十 41 5 、新しく母貝を求めてきて、やりなおしに  
 十 41 6 しく母貝を求めてきて、やりなおしにかか  
 十 41 6 わる口のためとなつて、幸吉をかばい、苦  
 十 41 9 ばい、苦しみにあたえて、なん年かをすごし  
 十 41 10 、母貝の中をしらべているうちに、一つの  
 十 41 11 は、まえにさし入れておいた核によつて発  
 十 41 12 れておいた核によつて発生した半円眞珠で  
 十 41 12 なども、はつきりしてきた。半円眞珠が思  
 十 42 7 とまづこれを加工して、かざり物として、  
 十 42 9 めが、この世をさつてしまった。そのうえ  
 十 42 12 たび、赤しおがよせてきた。そのため、母  
 十 43 1 貝は、ほとんど死んでしまった。その数は  
 十 43 1 、「ていねいにしらべていった。すると、か  
 十 43 2 い眞円眞珠が、光っているではないか。幸  
 十 43 5 ちがいのようになって、死貝をどんどんみ  
 十 43 8 、死貝をどんどんみていった。すると、五  
 十 43 10 め、おまえも喜んでくれ。やつと眞円眞  
 十 43 12 ㊦ めのれいにささげて、その成功をしらせ

十 44 3 しらがの老人になつていた。よる年なみに  
 十 44 5 とうまくを切り取つてきて、一種の手術を  
 十 44 5 まくを切り取つてきて、一種の手術をほ  
 十 44 8 幸吉は、自信をもつて母貝を海中にはな  
 十 44 8 いに、赤しおもよせてこなかった。海水の  
 十 44 9 た第一の母貝を開いてみた。はたして、眞  
 十 44 11 、眞円眞珠がやどつていた。第二、第三と  
 十 44 11 、第三と母貝を開いていくと、どれにも眞  
 十 44 12 きよらかにかがやいているではないか。大  
 十 44 12 ロン島をはじめとして、オーストラリアや  
 十 45 4 一生の苦心がひそんでいる。かつて、パリ  
 十 45 9 の学者の研究によつて、天然眞珠とまつた  
 十 45 11 、日ごろそんけいしていたエジソンのもと  
 十 46 1 ソンのもとをたずねて、養殖眞珠のつくり  
 十 46 2 ソンはたいへん喜んで、こういつた。「へ略  
 十 46 3 自然をあいてとして、眞珠を世界の人々  
 十 46 10 ㊦ ケ月になる妹をつれて、さんぽにでました  
 十 47 6 のので、そこへつれていこうと思つたので  
 十 47 8 を、なんでもみつめて、それに話しかけた  
 十 48 3 の氣のすむようにして、つれていきました  
 十 48 6 むようにして、つれていきました。ためし  
 十 48 6 に、私は、妹のいつていることばを、紙き  
 十 48 9 、紙きれに書きとめてみたのです。クロイ  
 十 48 10 ノ——オハナシシテ——ワンワン——ミ  
 十 49 2 ㊦ ———スイトウモツテ——オモタイカラ  
 十 49 6 ㊦ モタイカラモツテ——アゲルノヨ  
 十 49 7 ㊦ カラモツテ——アゲルノヨ——ワ  
 十 49 11 きのいきさつを知っている私には、このこ  
 十 50 1 かります。家からでてしばらくいくと、道  
 十 50 2 いぬが一ぴきすわつていました。「クロイ  
 十 50 3 の黒いいぬに近よつてみると、ひふ病にか  
 十 50 4 と、ひふ病にかかつていて、顔のあたりの

十504 ひふ病にかかっていて、顔のあたりの毛が  
 十504 あたりの毛が、ぬけていました。「キタナ  
 十507 で、妹はびっくりして、「アンヨ ナメテル  
 十507 ナメテルワ」といって、私に知らせたので  
 十508 うしろ足をもちあげて、せなかをかくよう  
 十5011 みのようなことをして、「フツ」と息をは  
 十511 した。母がこしらえてくださったパンを、  
 十512 ふくろからとりだして、いぬにやりながら  
 十517 イライノ」といって、いぬにたずねてい  
 十518 って、いぬにたずねているのです。やはり  
 十5110 会 に、「オハナシシテ」という心らしいの  
 十5112 っと、うしろを向いてしまったわけです。  
 十523 モット」ここで遊んでいたと、私にねだ  
 十524 うといいだしたりしていました、やつと  
 十526 かちゃんをおんぶして、そばを通りました  
 十529 の門の中へ、はいっていきこうとします。そ  
 十529 とき、私をふり向いて、「ゴメンクダサイ  
 十5212 した。門からもどってきて、道にでたとき  
 十5212 。門からもどってきて、道にでたとき、あ  
 十531 、地べたに横になつてねそべっていました  
 十532 横になつてねそべっていました。「ワンワ  
 十532 ネットルワ」といっていると、いぬがもっ  
 十534 タッチシタ」といって喜びました。「オス  
 十535 の動作をこばにして喜びました。そのと  
 十536 いままでかたにかけていたすいとうをはす  
 十536 たすいとうをはずして、手に持つといいま  
 十538 、ませたことをいって、歩きだしました。  
 十539 いぬは、立ちあがって、のそりのそりと、  
 十5311 ろでした。あきらめて歩きかけると、水お  
 十5312 ほど、きれいにさいていました。妹は、そ  
 十541 。妹は、そこへいって、水おけのふちにつ  
 十541 けのふちにつかまって、水の中のをのぞきま

十542 き、すいすいとういてきたかと思うと、ま  
 十545 ことをいいあらわしています。自分で、「  
 十546 「イコウ」ときめてあるきかけると、道  
 十547 わきで、たき火をしていました。そのけむ  
 十551 、ありありとうかんでいます。七五三の記  
 十551 じたり、考えたりしていることは、ちが  
 十557 なふうゆきづまってきたのでしょうか。思  
 十558 とがどんどんと書けていたまえのころが、  
 十559 く、すらすらと書いていることでしょう。  
 十561 ぐんぐんと書きつけているその力に、おど  
 十562 かいこが、皮をぬいで新しく成長してい  
 十563 ぬいで新しく成長していくように、私も、  
 十564 文のからをぬぎさつて、新しい世界にふみ  
 十565 しい世界にふみだしていこうと思います。  
 十5610 、目をくりくりさせて、とまり木の下にお  
 十5610 とまり木の下におりていつてしまいました  
 十5610 木の下におりていつてしまいました。男の  
 十572 は、「略。」といつて喜びました。コス  
 十583 ちようの木にのぼつて、いちようの葉をた  
 十584 の葉をたくさん落していただきました。み  
 十586 ました。うちに帰つて、十まいづつたばに  
 十587 十まいづつたばにして、赤いひもでいわえ  
 十587 、赤いひもでいわえて数えました。そうし  
 十588 たら、たばが十あつて、五まいあまりまし  
 十592 が、「略。」といつて、学校から帰ると、  
 十594 会 「、ごはんをたべてから、すきを取っ  
 十594 会 ら、すきを取つておいで。」とおし  
 十596 った。ごはんをたべてから、山の方へい  
 十597 から、山の方へいって、たくさん取つてき  
 十598 っ、たくさん取つてきた。えんがわにつ  
 十5910 がわにつくえをだして、その上にすきを  
 十601 をかざった。月がでてきた。まんまるくて

十601 できた。まんまるくてきれいだ。おかあさ  
 十602 会 んに、「そとへで、あかちゃんにも、  
 十602 会 ちゃんにも、みせてあげて。」といった  
 十602 会 にも、みせてあげて。」といったら、お  
 十603 かちゃんをだっこして、おもての通りへで  
 十604 、おもての通りへでいらつしやう。そ  
 十608 も、「略。」といつて、月の方へ手をや  
 十611 たけのこが一本はえてきました。私は、た  
 十612 けのこのそばにいつて、せいくらべをした  
 十616 は、私のせいをすぎて、おにいさんのせい  
 十622 。きのう、風がふいて、ガサガサ音がした  
 十623 、なんだろうと思つて、二階の窓からそと  
 十624 な竹がによつきりでていたので、びっくり  
 十625 じくらしいに高くなつて、風にゆれていまし  
 十625 くなつて、風にゆれていました。七ぶ  
 十631 、そのうたいにつれて、役者が美しい舞を  
 十636 べにでけしうをして、その役らしく顔を  
 十6310 れぞれの人物によつて、それぞれのめんが  
 十641 めんの藝術とくらべて、研究されています  
 十641 くらべて、研究されています。日本の絵画  
 十644 ろのあるものとなっています。みなさんも  
 十645 自分たちの國が持っているこのよい藝術を  
 十649 うとするのちがって、狂言は、ひにくや  
 十6410 やかしなどで、できているといつてもよく  
 十6410 、できているといつてもよく、それをみて  
 十6410 てもよく、それをみていると、世の中のう  
 十656 れず、そうかといつて、なにをしてもにく  
 十657 もしろい人物になっています。狂言「ど  
 十661 と、ひとりてくらしていました。あるとき  
 十666 会 『ぶす』といつて、おそろしいどくが  
 十667 会 しいどくがはいっている。そちらからふ  
 十667 会 。そちらからふいてくる風にあたつても

十667 会 てくる風にあたっても、たちまち死ぬと  
 十668 会 ふたりとも用心して、そばへもよらぬこ  
 十6611 会 じやは、声をそろえて返事をしました。そ  
 十6612 会 ぬようなことになってはつまらないから、  
 十672 会 も向けないようにしていました。でも、こ  
 十675 会 たちも、そつといつてみようということに  
 十676 会 風がどつきを運んできてはたいへんだか  
 十676 会 どつきを運んできてはたいへんだから、  
 十677 会 、せんすであおいで、風を向こうへやっ  
 十677 会 風を向こうへやってくれ。「略」。次  
 十681 会 をあいずのようにして、ぬき足さし足で、  
 十683 会 かじやが、思いきって、からかみをひきあ  
 十6812 会 けをまえにつきだして、あおぎつづけてい  
 十691 会 して、あおぎつづけていました。そのうち  
 十693 会 だいじそうにしまつてあつた、一つのまる  
 十694 会 やのまん中にかかえてきました。「略」。  
 十695 会 。「なにかはいつてみるとみえて、重た  
 十695 会 いつてみるとみえて、重たい。」「略」。  
 十697 会 、どつきにあたつて死んでゐるはずじゃ  
 十697 会 きにあたつて死んでゐるはずじゃないか  
 十699 会 。「ふたを取ってみようか。」「略」。  
 十6910 会 もとの場所において、あつちへいこう。  
 十6911 会 こう。ぐずぐずしているうちに、どつき  
 十702 会 「略」。」「思いきって、ふたをあけてみま  
 十702 会 きつて、ふたをあけてみました。べつにど  
 十703 会 なあまいにおいがして、黒っぽいものは  
 十704 会 つばいもののはいっていました。「略」。  
 十705 会 い。ひとつ、たべてみようじゃないか。  
 十707 会 「それだけはよしてくれ。なみたいてい  
 十709 会 ない、おれはたべてやる。」ひきとめる  
 十7011 会 ばやく指をつつこんで、すぐそれを、口に  
 十7011 会 ぐそれを、口に持っていきました。「略」

十713 会 せんすをほうりだして、自分も指をつつこ  
 十716 会 まい、うまいとなめているうちに、つぼが  
 十717 会 が、からつぽになつてしまいました。「略」  
 十724 会 んならんぼうをしては、いっそうしから  
 十726 会 。」「まあ、まかせておけ。それから、お  
 十727 会 んながだいじにしているあの湯飲み茶わ  
 十728 会 こう、さしずをされて、しかたなく、ずつ  
 十729 会 、ガチャンとくだいてしまいました。そこ  
 十7211 会 こへ、だんなが帰つてきました。すると、  
 十7212 会 おいおい大声をあけてなきだしました。次  
 十731 会 やも、そのまねをして、おいおいなきだし  
 十733 会 は、あつけにとられてたずねました。太郎  
 十736 会 は、すもうをとつて遊んでいました。私  
 十736 会 もうをとつて遊んでいました。私が負け  
 十736 会 ました。私が負けて、ドサリとこのま  
 十738 会 のとおりひきさいてしまいました。次郎  
 十739 会 飲みをはねとばして、こなみじんにいた  
 十7310 会 りとも、命をすてておわびをしようと思  
 十7312 会 い『ふす』をたべて死ぬのが、いちばん  
 十741 会 ままでおいおいにいたいたくせに、きゅう  
 十742 会 こりわらい顔になつて、次郎かじやといつ  
 十7410 会 。だんなは、おこつて、「略」と追いか  
 十743 会 は小高い丘があつて、そこからおきをな  
 十744 会 船がけむりをはいて、長いかけをひいて  
 十745 会 、長いかけをひいて通つていくのがみえ  
 十745 会 かけをひいて通つていくのがみえるし、  
 十747 会 が、なん本も立っているのがみえる。長  
 十748 会 長いかだを組んで、材木を遠くの山か  
 十749 会 遠くから運んでくるのもみえる。な  
 十751 会 つもここで練習していることだ。川口の  
 十753 会 ごっこをしたりして遊んでいるが、それ  
 十753 会 をしたりして遊んでいるが、それにあき

十754 会 のボートをながめては、いろいろな話を  
 十754 会 いろいろな話をしあつて楽しむ。きょうも、  
 十755 会 は話に花をさかせている。ついせんだつ  
 十756 会 て、大学生に頼んで乗せてもらつたうれ  
 十756 会 学生に頼んで乗せてもらつたうれしさで  
 十756 会 だむちゅうになつてゐるのである。「略」  
 十759 会 ぐいぐいとこいでみたいな。」「略」。  
 十7512 会 ぎゅうとしなつて、船は、ものすごい  
 十763 会 にあいてをぬいてしまふ。それを思う  
 十764 会 ぼくが力をいれて、一本バックをやる  
 十766 会 トは向きをかえて、あぶないところか  
 十767 会 るからぬけだして、新しい方向に進ん  
 十767 会 しい方向に進んでいく。ぼく、これが  
 十7710 会 じょうずになつて、みんながさせてく  
 十7710 会 、みんながさせてくれたら、コックス  
 十7711 会 のまえにすわつて、整調をやつてみた  
 十7712 会 て、整調をやつてみた。ぼくはか  
 十782 会 糸みだれずこいでいくと、乗り組んで  
 十782 会 くと、乗り組んでいる者が、みんなそ  
 十783 会 、みんなそろつて、一つの生きものみ  
 十783 会 のみたいに進んでいく。これこそ、い  
 十786 会 、きみはだまつてゐるけれど、ぼくは  
 十789 会 心持をよく知つてゐる。ぼくらのはり  
 十7810 会 くらのはりきつてゐるとき、ぼくらの  
 十7810 会 ぼくらのつかれてゐるとき、ぼくらの  
 十7811 会 でもよくわかつてゐる。ただ、わかっ  
 十791 会 。ただ、わかつてゐるだけではないに  
 十792 会 そのうえを考へていて、いいことをは  
 十792 会 うえを考へていて、いいことをはつき  
 十793 会 は、きみについていきさえすれば、だ  
 十794 会 。」「そういわれて、自信をもつて、よ  
 十794 会 て、自信をもつて、よしやろうという

十一 9 7 ㊦ 大きな船が通っていくよ。あれはどこ  
 十一 10 3 ㊦ は、実力があって、力いっぱいしたら  
 十一 10 5 ㊦ 、四ぼんをこいでいる、ぼくたち強い  
 十一 10 7 ㊦ で責任をしょって立つ、トップをこぐ  
 十一 10 9 ㊦ なることにきめているのさ。」「略」。  
 十一 11 1 ㊦ 正しい方へつれていくのさ。」「略」。  
 十一 11 2 ㊦ 足なみをそろえてくれるにちがいない  
 十一 11 4 ㊦ 」と、ふえが鳴って、ふいに一そうのボ  
 十一 11 5 ㊦ のボートが近づいてきた。「略」。「子ど  
 十一 11 7 ㊦ ートだよ。頼んで乗せてもらおう。」  
 十一 11 7 ㊦ ㊦ よ。頼んで乗せてもらおう。」「子ども  
 十一 11 8 ㊦ ボートの方へかけていった。」「めい  
 十一 12 3 ㊦ 丘の上 春がさって夏がくる。たんぼぼ  
 十一 12 4 ㊦ わた毛が遠くとんでいく日だ。あげはの  
 十一 12 6 ㊦ つのかげから舞ってでる。まつの木では  
 十一 12 9 ㊦ 太陽の下でわらっている。休みもなく、  
 十一 13 5 ㊦ は、長くおをひいて消えていく。ああ、  
 十一 13 5 ㊦ くおをひいて消えていく。ああ、われわ  
 十一 13 7 ㊦ 、遠い國から旅してきた旅人のような氣  
 十一 13 9 ㊦ の上の草にすわって、いつまでも小鳥の  
 十一 13 10 ㊦ 鳥の鳴く声をきいていよう。あれは、あ  
 十一 14 6 ㊦ いめいの歌を歌っている。一つの太陽の  
 十一 14 10 ㊦ わた毛も遠くとんでいく。唱歌 先生  
 十一 15 7 ㊦ 小鳥が、はばたいででて、くるくる、く  
 十一 15 7 ㊦ が、はばたいででて、くるくる、くるく  
 十一 15 10 ㊦ が、一まいこわれていて、やがて、小鳥  
 十一 15 10 ㊦ 一まいこわれていて、やがて、小鳥たち  
 十一 15 12 ㊦ から遠い空へにげていった。おかあさ  
 十一 17 4 ㊦ ま、わたしが知っているいいことと、正  
 十一 18 2 ㊦ され、やしなわれて、のびていく命のわ  
 十一 18 3 ㊦ しなわれて、のびていく命のわか葉。わ  
 十一 19 2 ㊦ のかやま村といって、さかわ川にそった

十一 19 6 ㊦ 村の人たちが困って頼みになると、氣持  
 十一 19 7 ㊦ 持よく、物をわけてやったり、お金をか  
 十一 19 7 ㊦ たり、お金をかしてやったりしました。  
 十一 19 9 ㊦ 、からだがよくて、よく働けませんが  
 十一 19 11 ㊦ かびんぼうになって、その日のくらしに  
 十一 19 12 ㊦ んは、なんとかして、からだをじょうぶ  
 十一 20 1 ㊦ だをじょうぶにして、身代をもとのよう  
 十一 20 2 ㊦ だと、ほねをおっていました。そうい  
 十一 20 3 ㊦ 、金次郎が生まれてきたのです。だから  
 十一 20 6 ㊦ 家の手つだいをしてくよく働きました。ま  
 十一 20 9 ㊦ 分でわらじを作って、お金をもうけたり  
 十一 20 12 ㊦ いほう工事があって、どの家からも、お  
 十一 21 1 ㊦ 毎日ひとりずつで働くことになりました  
 十一 21 3 ㊦ 、父親が病気でねてしまったので、金次  
 十一 21 5 ㊦ ったし、働きつけているので、役にた  
 十一 21 7 ㊦ んだりむだ話をしているのに、金次郎は  
 十一 21 12 ㊦ 。毎晩、家に帰ってくる、晝まの働き  
 十一 21 12 ㊦ 働きでつかえきつていながら、わらをた  
 十一 22 1 ㊦ ら、わらをたたいてわらじを作ること  
 十一 22 2 ㊦ した。これを持って、朝早く工場へい  
 十一 22 3 ㊦ は、わらじの切れている人もあります。  
 十一 22 4 ㊦ わらじをさしだしていいました。「略」  
 十一 22 6 ㊦ ん、これをはいってください。わたしが  
 十一 22 8 ㊦ お役にたたないで、すみません。どう  
 十一 22 10 ㊦ のかわりにはいってください。おとな  
 十一 22 12 ㊦ 人たちはおどろいて、すぐには受けてく  
 十一 22 12 ㊦ て、すぐには受けてくれませんでした。  
 十一 23 1 ㊦ しまいには、喜んではいってくれました。  
 十一 23 1 ㊦ には、喜んではいってくれました。金次郎  
 十一 23 4 ㊦ でも、父親の生きているあいだは、みん  
 十一 23 5 ㊦ んなはずましあって、どうにかこうにか  
 十一 23 5 ㊦ こうにか切りぬけてきましたが、いまは

十一 23 7 ㊦ 、金次郎と相談して、すえの子どもを親  
 十一 23 7 ㊦ もを親類にもらってもらいました。「略」  
 十一 23 10 ㊦ どもをよそへやってから、夜になると、  
 十一 23 11 ㊦ ため息ばかりついてねむれせん。「略」  
 十一 24 1 ㊦ 「おちちがはって困るの。」「三日した  
 十一 24 2 ㊦ みちゃんを返してもらいましょう。ひ  
 十一 24 3 ㊦ たしが山へいって木を切ってきてもう  
 十一 24 3 ㊦ いて木を切ってきてもうけますよ。  
 十一 24 3 ㊦ いて木を切ってきてもうけますよ。」「金  
 十一 24 6 ㊦ えをくり返し話して、母親にすすめま  
 十一 24 7 ㊦ なら、今夜いって、返してもらってき  
 十一 24 8 ㊦ 夜いって、返してもらってきましよう  
 十一 24 8 ㊦ ㊦ 、返してもらってきましよう。」「母親  
 十一 24 11 ㊦ の晩のうちにいって、子どもをつれてき  
 十一 24 11 ㊦ て、子どもをつれてきました。そうして  
 十一 25 5 ㊦ 暗いうちからおきて、遠い山へいって、  
 十一 25 5 ㊦ て、遠い山へいって、しばをかったり木  
 十一 25 6 ㊦ り木を切ったりして、村の人に買って  
 十一 25 6 ㊦ て、村の人に買ってもらいました。その  
 十一 25 7 ㊦ たが、四人が生きていくにはじゅうぶん  
 十一 25 9 ㊦ 、くたくたになってたおれるところを、  
 十一 25 11 ㊦ 格もりつぱになっていきました。金次郎  
 十一 25 12 ㊦ は「大学」といって、かん文で書いたむ  
 十一 26 6 ㊦ 一まいめをめぐって、くり返しくり返し  
 十一 26 6 ㊦ 返しくり返し読んでみると、りっぱな人  
 十一 26 7 ㊦ は、学問をしなくてはならないと書いて  
 十一 26 7 ㊦ はならないと書いてありました。金次郎  
 十一 27 2 ㊦ 子は、どうかしているのではないだろ  
 十一 27 5 ㊦ いかぐらがまわってききました。たいこ  
 十一 27 6 ㊦ 。たいこをたたいて、家から家へやっ  
 十一 27 7 ㊦ おもしろい藝をしてみせてくれます。中  
 十一 27 7 ㊦ ろい藝をしてみせてくれます。中には、

- 十一 27 10 ん。母親と相談して、戸をしめきって、  
 十一 27 11 て、戸をしめきって、息をころして、だ  
 十一 27 11 っ、息をころして、だれもないふう  
 十一 27 11 もいないふうをしていました。金次郎の  
 十一 28 1 五日の病気で死んでしまいました。おま  
 十一 28 2 わ川がまたあふれて、のこっていたわ  
 十一 28 2 あふれて、のこっていたわすかの田や畑  
 十一 28 3 田や畑も、流されてしまいました。この  
 十一 28 8 たが、そこへいつてからは、いよいよ  
 十一 28 11 ぶらの種をかりて、かわらへいつて、  
 十一 28 12 て、かわらへいつて、あき地にまいてお  
 十一 28 12 て、あき地にまいておきました。あくる  
 十一 29 1 、黄色い花がさいて、たくさんの実がつ  
 十一 29 1 。これを油にかえて、本を読み続けまし  
 十一 29 3 、また、人がすてておいたいねのなえを  
 十一 29 3 ねのなえをひろって、大水でいたんだ田  
 十一 29 4 の水たまりに植えてみました。すると、  
 十一 29 7 びょうをもとにして、困っている人にか  
 十一 29 8 もとにして、困っている人にかしてやっ  
 十一 29 8 っている人にかしてやったり、植える  
 十一 29 9 るところをふやしていつたりするうちに  
 十一 30 1 、親類の家からで、もとの自分の家に  
 十一 30 3 のことを身につけて、やがて、村をすく  
 十一 30 7 梅みなちりはてて、ひがんすぎれば  
 十一 31 3 にさくらがさいて、野山をかざると  
 十一 31 5 赤く、畑にさいて、れんぎょうは、  
 十一 31 6 ねを黄色にそめていく。青い空には  
 十一 31 7 はかすみがかめて、ひばりは朝から  
 十一 31 9 まめみな花つけて、羽音高くみつば  
 十一 32 2 こすくすのびて、しずくすおうと  
 十一 32 5 のほわたがとんで、麦のはしりほか  
 十一 32 7 上を、海こえてきたつばくろが、  
 十一 32 9 げんげがさいて、なの花ちつて、  
 十一 32 9 て、なの花ちつて、かきのわか葉に  
 十一 33 4 らむを待ちかねて、だいこんの花に  
 十一 33 7 すき・くわ持つて野にいそぐ。夏  
 十一 33 9 追う夜も重なって、麦のとりのいれこ  
 十一 34 5 、家内そろって田植える。きの  
 十一 34 6 畑は水田となつて、晩にはかえるが  
 十一 34 8 はみどりにすんで、日ましに日ざし  
 十一 34 10 、あぜまめのびて、ふくすず風に夕  
 十一 35 7 ずまに、続いてひびくらの音。  
 十一 36 1 くわをかついで田をみまわれは、  
 十一 36 2 日はまた照つて水たつぷりと、い  
 十一 36 5 あせもおさまつて、夕風ふけばたい  
 十一 37 2 えすすしくなつてきた。さやまめ・  
 十一 37 4 いももふとつてくるようす。あま  
 十一 38 5 きの人もえ顔して、その足どりのい  
 十一 38 10 おりも高くはえてくる。かえでにう  
 十一 39 2 く黄色く色づいて、冬のしたくをと  
 十一 39 6 ぎの種まきすんで、そらまめ・えん  
 十一 40 1 葉みなちりはてて、青くしげるはま  
 十一 40 5 たむく日につれて、光はまともにえ  
 十一 40 9 色雲がたちこめて、さとはしぐれが  
 十一 41 2 小屋はみぞれして、うらの山には白  
 十一 41 4 もちつきすませて、しめなわをはり、  
 十一 42 6 ふきのとうで、すいせんにおい、  
 十一 43 4 私が、母にかわつてました。正面のテ  
 十一 43 6 なかびんがかざつてありました。ようち  
 十一 43 7 となくこしかけています。園長さんが  
 十一 44 2 氣のいい返事をして立ちます。それをみ  
 十一 44 4 いっしょに呼ばれているようす。みん  
 十一 44 5 んな読みあげられてから、おめんじよう  
 十一 45 4 そこからでなおして進みました。こんど  
 十一 45 6 長さんのまえにでて、だんをあがり、両  
 十一 45 7 をずつとさしのべて、おめんじようをい  
 十一 45 7 じようをいただいて、ささげ持つように  
 十一 45 11 ことだからといって、ごまかさなかつた  
 十一 46 3 たとき、思いきつてやりなおした、その  
 十一 46 10 もぼっかりとういていたえぞ富士。あの  
 十一 47 2 が津鯉海峡をこえて内地にきたのは、ぼ  
 十一 47 4 いみどり色にゆれて、ぼくは、船のかん  
 十一 47 5 んとふたりで立っていた。北海道の家に  
 十一 47 7 、ぼくによくなれていた。うちではパタ  
 十一 47 11 、いつも本を読んでいた。ぼくのいすは  
 十一 49 1 す。北海道へいつて、じゃがいもをつく  
 十一 49 3 、ちちうしをかつて、自分でバターをつ  
 十一 50 5 あさんをおつれして。デンマルクの農  
 十一 50 6 業のことを勉強して、ぼくは、いい農夫  
 十一 51 3 なつてもまだ続いていた。庭のあさがお  
 十一 51 5 んな下向きになつてしまった。私は、か  
 十一 51 6 私は、かさをさして電車の停留所までで  
 十一 51 8 すぐかさをつぼめてしまった。雨にうた  
 十一 51 9 車のくるのを待っていた。電車は、くる  
 十一 51 10 な満員の札をさげて、とまらずに走つて  
 十一 52 1 、とまらずに走つていつてしまふ。やっ  
 十一 52 1 らずに走つていつてしまふ。やつと一台  
 十一 52 2 うな乗客にまじつて、どうやら乗車口へ  
 十一 52 6 にぼたぼたと落ちてきたりした。けれど  
 十一 52 8 うに車の音をたてて、あらしの中をつき  
 十一 52 9 しの中をつき進んでいく。一停留所ごと  
 十一 52 11 んまり乗らないでください、満員です  
 十一 53 4 たがいにおしあつて、しゃしゅう台まで  
 十一 53 5 でいっばいになつてしまった。そのとき  
 十一 53 6 なみだをこぼしています。そんなにお  
 十一 53 6 んなにおさないでください。」といつ

十一 53 9 そのことばをきいて、そのらの乗客は思  
 十一 53 10 した心でおしあつていた人たちも、きゅ  
 十一 54 2 う語がかかげられていたのをみた。「略  
 十一 54 6 圃 おたがいにつめて、座席にもうひとり  
 十一 54 9 圃 なみだをこぼしています。」といった、  
 十一 58 6 いくどもくり返しているうちに、太郎は  
 十一 58 9 太郎は得意になって、「略。」という  
 十一 59 3 圃 いことばを知っているよ。」と答えた。  
 十一 60 5 圃 、けつして渡ってはいけない。」とか  
 十一 60 6 とかたくとめられていたのである。が、  
 十一 60 8 ちからすめられて、ことわりかねてし  
 十一 60 9 て、ことわりかねてしまった。そうして  
 十一 60 12 はまん中からおれて、三人は、川の中へ  
 十一 61 1 い近くの田で働いていた村の人たちに助  
 十一 61 2 人たちに助けられて、みんな、ぬれぬず  
 十一 61 2 ずみのようになって家に帰った。父は、  
 十一 61 5 圃 あぶないといっておいた、あの橋を渡  
 十一 61 7 し、太郎はだまっていた。その夜、また  
 十一 61 8 きびしくただされて、太郎は、やるとき  
 十一 61 11 圃 くは、とめられているから渡らない。  
 十一 62 2 圃 よわ虫だといつてわらうのです。ぼく  
 十一 62 4 圃 からさきになって渡ってしまったので  
 十一 62 4 圃 きになつて渡ってしまったのです。」  
 十一 62 11 圃 氣まりがわるくて、そういえなかった  
 十一 63 3 (一) 雨の降っている三月のある朝、  
 十一 63 5 ぐつしよりとぬれて、わきの下に着物の  
 十一 63 6 圃 ばんのまえへいって、一通の手紙をみせ  
 十一 63 8 圃 ぶかそうな目をしていました。少年は、  
 十一 64 1 、イタリアへ帰ってきて、ナポリに上陸  
 十一 64 1 タリアへ帰ってきて、ナポリに上陸し  
 十一 64 2 かに病氣にかかつて入院したので、家族  
 十一 64 5 たんな手紙を書いて、帰ったことと、病

十一 64 11 はちのみ子もあつて、家をあけることが  
 十一 65 1 の手紙をひと目みてから、看護人をつ  
 十一 65 1 ら、看護人をつんで、少年をその父親の  
 十一 65 2 親のところへつれていくようにといいま  
 十一 65 8 圃 、外國から帰ってきた——と、看護  
 十一 65 12 圃 、外國から帰ってきたのです。」  
 十一 66 4 は、しばらく考えていましたが、ふと思  
 十一 66 10 は、少年をながめて、それには答えない  
 十一 66 10 それには答えないで、ただ、「略。」と  
 十一 66 11 圃 「わたしについておいで。」といった  
 十一 67 1 しごだんをのぼって、長いろうかのはず  
 十一 67 2 のはずれまで歩いていきました。そうし  
 十一 67 5 ドが二列にならんでいました。「略。」  
 十一 67 9 氣をふるいおこして、その後からついて  
 十一 67 10 、その後からついていきながら、おどお  
 十一 67 11 目を右に左に向けて、青ざめた、やせこ  
 十一 67 12 やせこけた顔をしている病人たちをみま  
 十一 68 2 み開いた目をあけて、じつと空間をみつ  
 十一 68 2 つと空間をみつめている者もありました  
 十一 68 3 のようにうなづいていました。看護婦が  
 十一 68 5 においがただよっていました。看護婦が  
 十一 68 6 くすりびんを持って、へやを歩きまわ  
 十一 68 6 へやを歩きまわっていました。その大き  
 十一 68 8 の方に立ちどまつて、カーテンをあけて  
 十一 68 8 、カーテンをあけて、「略。」といいま  
 十一 69 1 たのところへさげて、一方の手で、ふと  
 十一 69 5 年ほ、身をおこして父親の方をみました  
 十一 69 7 と、かなしくなつてきました。病  
 十一 69 9 げと少年をみつめて、いくらかわかつた  
 十一 70 1 、顔ははれあがつてどんより赤く、ひふ  
 十一 70 2 ち切れそうになつていました。ただ、ひ  
 十一 70 3 には、どここといって父親らしいところは

十一 70 8 圃 がいなかからでてきたんですよ。おか  
 十一 70 9 圃 んです。よくみてください。ぼくがわ  
 十一 70 10 圃 かひとこといってください。」けれど  
 十一 71 4 、身動きもしないで、苦しうに息を続  
 十一 71 4 しそうに息を続けていました。少年は、  
 十一 71 5 、いすをひきよせて、目を父親の顔から  
 十一 71 5 顔からはなさないで、こしをおろして待  
 十一 71 6 で、こしをおろして待っていました。「  
 十一 71 6 しをおろして待っていました。」  
 十一 71 7 圃 者さんがみにきてくださるだろう。」  
 十一 71 11 ろいろと思ひ返していました。去年、み  
 十一 71 12 。去年、みおくつていて、最後に船の  
 十一 71 12 、みおくつていて、最後に船の上でわ  
 十一 72 1 楽しい希望をかけていたことや、手紙の  
 十一 72 4 ので、びっくりしてとびあがりました。  
 十一 72 12 圃 「心配しないでいらつしやい。先生  
 十一 73 2 にもいわずにいってしまいました。半時  
 十一 73 4 とりの助手をつれて、へやの向こうのは  
 十一 73 5 うのはしはいってききました。さつきの  
 十一 73 6 の看護人とがついていました。その人た  
 十一 73 7 しんさつをはじめて、一つ一つのベッド  
 十一 73 8 まりました。待つているそのあいだが、  
 十一 74 7 病人の上にかがんで、みやくをみたり、  
 十一 74 8 、ひたいにさわつてみたりして、そうし  
 十一 74 8 さわつてみたりして、そうして、二こと  
 十一 74 12 者はちよつと考えるから、こういまし  
 十一 75 3 氣をふるいおこしてたずねました。「略  
 十一 75 5 圃 「心配しないでおいで。」と、医者  
 十一 75 8 圃 ある。氣をつけておあげなさい。きみ  
 十一 76 1 した。医者はいつてしまいました。そこ  
 十一 76 2 ほかになにといつてすることもできませ  
 十一 76 3 きその手にさわつてみたり、はいを追っ

11764 たびごとにかがんでみたり、そうして、  
 11765 にか飲み物を持ってくると、コップなり  
 11766 をその手から取って、看護婦にかわって  
 11766 、看護婦にかわってそれを飲ませたりし  
 11768 ンカチを目にあてているときには、じっ  
 11769 は、じっとみつめていました。こうして  
 117611 いすを二つならべて、その上でねむりま  
 11778 た。医者とは二どきてみて、いくらかよく  
 11778 医者は二どきてみて、いくらかよくなっ  
 117712 、自分をなぐさめて望みをかけはじめま  
 11783 婦りを待ちこがれていたことなどを――  
 11784 と長々と話しかけて、そうして、あたた  
 11788 っと耳をかたむけているようにみえたか  
 117811 うけんめいになっていました。一日に二  
 117812 ど、看護婦が持ってきてくれる、すこし  
 117812 看護婦が持ってきてくれる、すこしばか  
 11794 えながら氣をもんで、心を休めるような  
 11797 たえずはらはらしていました。ところが  
 117912 ったりと身を落して、すすりなきしまし  
 11804 を少年の上にすえて、うれしそうな色を  
 11806 をいおうとでもしているように、いくど  
 11809 人のうでをつかんで、「略。」といつて  
 118012 「略。」といつて力づけました。(三)  
 11813 かない希望をもって、いっしんに看護し  
 11813 いっしんに看護していたときでした。そ  
 11814 とに足音がきこえて、やがて、「略。」  
 11819 そのへやにはいつてきました。少年は、  
 118110 どいさげびをあげて、その場に立ちすく  
 118111 た。男はみまわして、ひと目少年をみる  
 11823 「男はそういつて、少年の方へとんで  
 11824 、少年の方へとんできました。少年は、  
 11827 たが、胸がせまって息もつけませんでし

11829 、助手がかけよってきました。少年は、  
 11832 少年にはおずりしてからいきました。「へ  
 11834 のところへつれていかれたのだな。わ  
 11836 なにがっかりしていたかわからないよ  
 118310 あさんはどうしているの。それから、  
 118311 みんなはどうしている。わたしは、い  
 11842 とことばをはさんで、家族のようすを話  
 11848 少年はふり返って、病人の方をみまし  
 118410 と、父親はあきれてうなりました。少  
 118412 のとき、目を開いて、じっと少年をみつ  
 11853 とうさん。待ってください。ぼく、い  
 11855 つでもぼくをみています。ぼく、あ  
 11856 くすりを飲ませてあげるので。いつ  
 11858 すから、ゆるしてください。ぼく、と  
 118510 しここにいさせてください。ほら、あ  
 118510 んなにぼくをみています。どうか、こ  
 118511 、ここにいさせてください。ねえ、お  
 118512 つと少年をみつめていましたが、やがて  
 11867 す。ここへつれてきたときには、もう  
 11868 わからなくなっていて、口もきけな  
 11868 なくなっていて、口もきけなかった  
 118611 こだと思ひこんでいるようです。すよ。  
 118612 つと少年の方をみていました。父親はチ  
 11873 いくらもいなくてもいいでしょう。」  
 11875 ぐにうちへ帰って、おかあさんを安心  
 11876 さんを安心させてあげよう。じゃあ、  
 11876 に二円だけおいていくから、こづかい  
 11878 「父親はそういつてでいてきました。  
 11878 親はそういつてでいてきました。(四)  
 11885 、ずっとつきそっていました。そのつぎ  
 11889 いよいよせわをして、ちよつとのまも、  
 118812 くちびるを動かして、なにかものをいい

11892 しだいに暗くなってきました。その晩  
 11893 どおしそばについて、病人をみまもつて  
 11893 、病人をみまもっていました。あかつき  
 11894 から白くさしこんできたとき、医者が、  
 11895 婦と看護人をつれてはいってきました。  
 11895 人をつれてはいってました。「略。」  
 11898 病人は、目を開いて少年をじっとみて、  
 11899 て少年をじっとみて、そうして、また目  
 11902 のあいだうつむいていましたが、やがて  
 11905 ました。「死んでしまった。」と、少  
 11909 はすんだ。帰つてしあわせにおくらし  
 119010 がきみをまもってくださいさるだろう。さ  
 119012 わきのほうにいつていた看護婦が、小さ  
 11912 ップの中から取ってきました。そうして  
 11917 院の記念に持っていられしやい。「へ  
 11919 」と、少年はいつて、一方の手で花ば  
 11921 、遠い道を歩いていくんですから、し  
 11921 すから、しぼんでしまいます。」そう  
 11922 「略。」そういつて、すみれをベッドの  
 11925 んだ人にのこしていきます。看護婦さ  
 11928 で死人の方へ向いて、「略。」といつて  
 119210 「略。」といつて、名をなんと呼ぼう  
 119210 と呼ぼうかと思つているうち、五日のあ  
 119211 のあいだ呼びなれてきた名が、しぜんと  
 119211 ぜんと口のにぼつてきました。「略。」  
 11931 「略。」そういつて、少年は、その小さ  
 11933 た。夜は明けかけていました。1 ト  
 11944 アメリカを発見して帰ったとき、イスパ  
 11947 かわるがわる立つてコンプスの成功を  
 119410 へ西へと航海して陸地にであつたのが  
 11952 「略。」といつてあざわらいました。  
 11953 プスは、つと立つて、テーブルの上のゆ



十二五五 ㊦ ブルの上に立ててごらんさい。」と  
 十二五九 と思いながらやってみましたが、もとよ  
 十二六一 ーブルにうちつけて、なんの苦もなく立  
 十二六一 んの苦もなく立てていました。「略」  
 十二六六 近くの家をたずねて雨具をかりることに  
 十二六九 ㊦「略」。「こういって戸をたたきますと、  
 十二七〇 ひとりの少女がでてきましたので、「略」  
 十二七一 ㊦で、「雨で困っております。雨具をか  
 十二七三 ふと庭さきにさいていた黄色なやまぶき  
 十二七三 ぶきの一枝をおつてきて、それをしずか  
 十二七三 の一枝をおつてきて、それをしずかにさ  
 十二七八 れからのちになって、道灌は少女の心が  
 十二八三 した。家をはなれて勉強にをかけていま  
 十二八三 れて勉強にをかけていましたが、ある日  
 十二八五 校から家へもどってきました。「略」。  
 十二八七 ㊦「略」。「といて、母のそばへかけよ  
 十二八八 、母ははたを織っていました。孟子の  
 十二八八 みると、つと立って、そばにあった小が  
 十二八八 孟子がびっくりしていると、母は、いま  
 十二八八 孟がなでち切つてしまいました。孟子  
 十二九一 ㊦。孟子はおどろいて、「略」。「とたずね  
 十二九六 ㊦うとで家に帰ってくるのは、ちょうど  
 十二九六 ㊦ら、なにかさがしては、それをひろつて  
 十二九六 ㊦は、それをひろつてポケットにいれてい  
 十二九六 ㊦てポケットにいれていました。そのよう  
 十二九六 ㊦。そのようすをみていたじゅんさが、老  
 十二九六 ㊦老人のそばによつてきて、「略」。「とた  
 十二九六 ㊦のそばによつてきて、「略」。「とたずね  
 十二九六 ㊦「なにをひろっているのですか。」と  
 十二九六 ㊦したが、とりだしてみせたものは、ガラ  
 十二九六 ㊦なものをひろつて、どうするのですか

十二一二 廣場の方を指さして、「略」。「と答えま  
 十二一三 ㊦あゝの廣場で遊んでいる子どもたちをこ  
 十二一四 ㊦い。くつをはいている子どもはひとり  
 十二一四 ㊦もしげがでもしてはかわいそうですか  
 十二一四 ㊦フリカを探けんしていたときの話です。  
 十二一四 ㊦かげで書物を読んでいた。それをみ  
 十二一四 ㊦ばらした力をもっているものだと考えま  
 十二一四 ㊦たるすにやつてきて、その書物を手にと  
 十二一四 ㊦ページをはぎとつて、たべてしまったと  
 十二一四 ㊦はぎとつて、たべてしまったということ  
 十二一四 ㊦すえ、がかを立てて写生をはじめた。そ  
 十二一四 ㊦ざくろの木があつて、夏じゅう美しい花  
 十二一四 ㊦う美しい花をつけていたが、あらかた  
 十二一四 ㊦が、あらかたちつて、あとにくつかの  
 十二一四 ㊦くつかの実がなつていた。それが、めき  
 十二一四 ㊦ごろは、きわだつて美しいつやつした  
 十二一四 ㊦たしゅの色がさしてきた。文雄は、それ  
 十二一四 ㊦から大きくのぞいてるのいい。だが  
 十二一四 ㊦三つ四つかたまってしだれているところ  
 十二一四 ㊦かたまってしだれているところもい。  
 十二一四 ㊦、あれこれと考えていたが、根もとをか  
 十二一四 ㊦ころ、草とりをしてつみ重ねておいたか  
 十二一四 ㊦りをしてつみ重ねておいたかれ草が、す  
 十二一四 ㊦が、すっかりくちていた。文雄はそれが  
 十二一四 ㊦はそれが氣になつてしかたがなかった。  
 十二一四 ㊦をとりかたづけてやろうか。」ひとり  
 十二一四 ㊦がびき頭をだしていた。そうして、文  
 十二一四 ㊦あなの中へかくれてしまった。「略」。  
 十二一四 ㊦。そのままにしておいてやろう。」文  
 十二一四 ㊦ままにしておいてやろう。」文雄は、  
 十二一四 ㊦りのけるのをやめて、また下がきにかか  
 十二一四 ㊦しつかりとつかんで、日のあたるところ

十二一六 ㊦たいものだと思つて、しきりに木炭を動  
 十二一六 ㊦りに木炭を動かしていた。下がきすむ  
 十二一六 ㊦から絵のぐをだして、色をぬりはじめた  
 十二一六 ㊦じさんからゆずつてもらったもので、子  
 十二一六 ㊦スの上にぬりつけてみると、思いもよ  
 十二一六 ㊦らない色になつてしまふ。かきなおし  
 十二一六 ㊦し、ぬりなおして、かいていくうちに  
 十二一六 ㊦なおして、かいていくうちに、ひとと  
 十二一六 ㊦文雄は立ちあがつてすこしはなれたとこ  
 十二一六 ㊦きやくにこしかけて、またふでをとつて  
 十二一六 ㊦、またふでをとつてかきはじめた。(二)  
 十二一六 ㊦なりたと思つてゐるのですが――あ  
 十二一六 ㊦短い羽を動かしてピッピッと鳴いて  
 十二一六 ㊦ピッピッと鳴いていたときには、ほん  
 十二一六 ㊦にはだれも教えてくれるものがありま  
 十二一六 ㊦ふと羽を動かしてみたら、ピッピッと  
 十二一六 ㊦るんだなと思つてやつてゐるうちに、  
 十二一六 ㊦なと思つてやつてゐるうちに、だんだ  
 十二一六 ㊦かまだなと思つてよくきいてみると、  
 十二一六 ㊦思つてよくきいてみると、じょうずな  
 十二一六 ㊦ある。毎晩鳴いてゐるうちに、すこし  
 十二一六 ㊦じょうずになつていくようです。「へ  
 十二一六 ㊦散歩にいらつして、あなたの鳴く声に  
 十二一六 ㊦に耳をかたむけて、たいへん感心して  
 十二一六 ㊦たいへん感心してゐましたよ。」「略」  
 十二一六 ㊦わりでいやがつておいでだろうと思  
 十二一六 ㊦もなん年も生きていますからね。一年  
 十二一六 ㊦ことをかえりみて、來年はもつともつ  
 十二一六 ㊦げは黄色くぼけてゐるでしょう。わた  
 十二一六 ㊦そこで絵をかいてゐる文雄さんがいっ  
 十二一六 ㊦大きな木になつて、美しいりっぱな実  
 十二一六 ㊦びしい氣持がでているので、人の心を

十二 22 3 心にけいこをして、じょうずになった  
 十二 22 5 理想をめざして、いっしょうけんめ  
 十二 23 2 姉たちがひきあげてきました。せまい家  
 十二 23 3 気のどくだといって、いつもえんりよが  
 十二 23 3 えんりよがちにしています。母をはじ  
 十二 23 6 ゆうが歓声をあげているといつも、い  
 十二 23 6 あげているといつも、いっすいではあ  
 十二 23 9 ときのことを考えて、近所の荒地を三  
 十二 23 9 ばかりかいこんして、さつまいもや野菜  
 十二 23 10 野菜を作ったりしていたので、さしあた  
 十二 24 2 のは、父母にとつてのことですが、わた  
 十二 24 6 がたいへんおくれていて、かわいそうで  
 十二 24 6 いへんおくれていて、かわいそうです。  
 十二 24 9 やんをなんとかして早く歩くようにして  
 十二 24 9 早く歩くようにしてやりたいものです。  
 十二 24 11 つものをいいかけていますが、ちよつと  
 十二 24 12 が、ちよつときいてもらえません。姉  
 十二 25 1 ななことをいっています。わたしも早  
 十二 25 3 す。学校から帰ってくると、わたしは民  
 十二 25 5 をさせたままほっておくと、民ちゃんは  
 十二 25 5 こらをはいまわっています。わたしは時  
 十二 25 6 しは時間をはかっています。そとさ寒くな  
 十二 25 7 、ものかげへつれていって、用をたさせ  
 十二 25 7 かげへつれていって、用をたさせるよう  
 十二 25 8 はじめはいやがっていた民ちゃんも、よ  
 十二 25 8 ちゃんも、よごれていないほうが氣持が  
 十二 25 12 くなるようにしてみせます。「略」  
 十二 26 2 つけがでなくなつて。「民ちゃんは、つ  
 十二 26 7 すぐに立ちあがつて、そのまわりをぐる  
 十二 26 9 。ちゃぶ台をだして、食事の用意などを  
 十二 26 10 事の用意などをしていっていると、とりつて

十二 26 11 いると、とりついてぐんぐんおしていっ  
 十二 26 11 いてぐんぐんおしていって、かべぎわに  
 十二 26 11 んぐんおしていって、かべぎわにおしつ  
 十二 26 11 べぎわにおしつけてしまつたりします。  
 十二 27 2 、すぐに手をついて、いざり歩きになり  
 十二 27 3 かた足をなげだして、おしりでいざつて  
 十二 27 3 、おしりでいざつて歩くのです。たいへ  
 十二 27 5 次のへやにはいっているというように、  
 十二 27 9 の包みをこしらえて、「略」  
 十二 27 10 さん、これ持って学校へいきましよう  
 十二 27 11 「略」といって、民ちゃんに持たせ  
 十二 27 11 民ちゃんに持たせてみました。「略」  
 十二 28 2 うれしそうにいつて、その包みをとりあ  
 十二 28 8 へ。たもとをひいてやると、民ちゃんは  
 十二 28 10 そこへすわりこんでしまいました。「略  
 十二 29 1 さん。さあ立つたして。」立ちあがると、  
 十二 29 3 。こんなふうにして、毎朝おべんとうを  
 十二 29 3 んとうをこしらえて持たせているうちに  
 十二 29 3 こしらえて持たせているうちに、民ちゃん  
 十二 29 5 日、学校から帰ってくると、姉が大さわ  
 十二 29 5 、姉が大さわがしてました。「略」  
 十二 29 7 さんから地面におりて、わたしのげたをひ  
 十二 29 7 げたをひっかけ、正男のあとを追っ  
 十二 29 8 あとを追っかけて道まででていたのよ  
 十二 29 8 かけて道まででていたのよ。「略」  
 十二 29 11 、このごろふとてきて愛らしくなつた  
 十二 29 11 のごろふとてきて愛しくなつた民ちゃん  
 十二 29 11 た民ちゃんをだいてやろうとすると、か  
 十二 29 12 と、かぶりをふって、「略」というの  
 十二 30 11 のには、おどろいてしまいました。四  
 十二 31 3 私の一生を通じて、わすれることので  
 十二 31 4 サリバン先生がきてくださった日であり

十二 31 8 んかにたらずんでいました。午後の日  
 十二 31 9 らのしげみをもれて、みあげる私の顔に  
 十二 31 10 の顔に降りそそいでいました。もう、め  
 十二 32 1 たくわれをわすれてなでていました。私  
 十二 32 1 れをわすれてなでていました。私は、ど  
 十二 32 2 ふしぎが私を待っているのか、すこしも  
 十二 32 4 た。私は、近づいてくる足音を感じまし  
 十二 32 6 とばかり思いこんで、両手をさしだしま  
 十二 32 11 らゆるものに向けて開いてくださるため  
 十二 32 11 ものに向けて開いてくださるため、いい  
 十二 32 12 を愛するためにきてくださった——その  
 十二 33 3 私をおへやに呼んで、一つの人形をくだ  
 十二 33 4 くその人形と遊んでいますと、先生は、  
 十二 33 7 がおもしろくなつて、それをまねようと  
 十二 33 11 という字をつづつてみせました。そのと  
 十二 33 12 、ことばをつづつてみせました。そのと  
 十二 34 7 生がおいでになつてからいく週間もたつ  
 十二 34 7 らいく週間もたつてからのことでした。  
 十二 34 9 新しい人形を持って遊んでいますと、サ  
 十二 34 9 人形を持って遊んでいますと、サリバン  
 十二 34 10 のひざの上において、「人形」という字  
 十二 35 3 がその中にはいつているものであること  
 十二 35 3 た。先生は失望して、一時やめていらつ  
 十二 35 5 望して、一時やめていらつしやいました  
 十二 35 5 んしやくをおこして、新しい人形を手  
 十二 35 7 い人形を手にとつて、ゆかにたたきつけ  
 十二 35 8 たすみにはきよせておいでになつてい  
 十二 35 10 せておいでになつていようすを感じま  
 十二 35 11 した。しばらくして、先生がぼうしを持  
 十二 36 1 生がぼうしを持ってきてくださったので  
 十二 36 1 ぼうしを持ってきてくださったので、私  
 十二 36 2 かけるのだと知つて、おどろきあがりまし

十二 36 5 どの小屋をおおっているすいかずらのあ  
十二 36 8 いにおいにひかれて、庭の小道をおりて  
十二 36 9 、庭の小道をおりてきました。だれか  
十二 36 11 が水をくみあげていましたので、先生  
十二 36 12 いきおいよく流れているあいだに、別の  
十二 37 2 「という字を書いてくださいました。私  
十二 37 3 指の動きにそいでいました。ところが  
十二 37 4 なにかしらわすれていたものを思いだす  
十二 37 5 するような、めばえてこようとする心のは  
十二 37 7 かた手の上を流れているふしぎな冷たい  
十二 37 12 のが、生命をもって動いているように感  
十二 37 12 生命をもって動いているように感じはじ  
十二 38 2 れは、先生が與えてくださった新しい目  
十二 38 5 のことを思いだして、いろいろのかたすみ  
十二 38 5 たすみに走りよってかけらをひろいあげ  
十二 38 8 ったので、生まれてはじめて、くやむ心  
十二 38 10 ました。全部覚えてはいませんが、その  
十二 39 1 ったこの日もくれて、小さなベッドに横  
十二 39 2 た喜びを思い返していたときの私ほど幸  
十二 39 4 う。私は、生まれてはじめて、きたるべ  
十二 39 9 たものです。よんでわかるように、ケラ  
十二 40 1 ケラーは、生まれて一年半ほどたったと  
十二 40 1 き、大病にかかって、みるはたらき、き  
十二 40 5 親は、なんとかして、すこしでももの  
十二 40 6 かる子どもに育ててやりたいと念じて、  
十二 40 6 てやりたいと念じて、もうあ教育に経験  
十二 40 7 サリバン先生にきていただくことにしま  
十二 40 9 いケラーをしつけていくのには、なみな  
十二 40 10 らせることによって、そのまっ暗なさび  
十二 40 12 き、もの心がついて、学校にいくよう  
十二 41 2 とりのようになって、勉強をはじめたの  
十二 41 5 くことから、進んで、手と手をにぎりあ

十二 41 7 にぎりかたによって「ことば」をとりか  
十二 41 10 生なしには、生きていけません。先生も  
十二 43 9 会 が夜中に集まっておどろき話があり  
十二 43 10 会 たあとで、動いているのかもしれない  
十二 44 3 会 あ、人形にきいてごらん。はははは  
十二 44 7 会 は、文楽といつて、りっぱな人形し  
十二 44 9 会 ましいがはいっているように動くよ。  
十二 44 10 会 ものを、どうして動かすんでしょう。  
十二 44 11 会 いわれる人がいて、ものによって、  
十二 44 11 会 て、ものによって、三人がかりで  
十二 45 1 会 れぞれ手わけしているんだが、まゆ毛  
十二 45 4 会 わり説明がついている。ほら、分家の  
十二 45 5 会 。あれにあわせてしばいをするんだ。  
十二 45 8 会 しばいとちがつて、みていると別世界  
十二 45 8 会 とちがつて、みていると別世界にい  
十二 46 7 会 絵しばいができている。ジャワのもの  
十二 46 9 会 牛皮を切りぬいて、美しい色がつけて  
十二 46 10 会 美しい色がつけてある。これに光をあ  
十二 46 10 会 これに光をあてて影絵にしてみせるの  
十二 46 10 会 あてて影絵にしてみせるのだが、人間  
十二 46 11 会 、動物などもでてくる。それが音楽や  
十二 46 12 会 楽や歌にあわせてしばいをするわけだ  
十二 47 2 会 どんなにちがつていても、心にあるこ  
十二 47 6 会 うままに動かして、喜びや、悲しみや  
十二 47 11 会 しろさが生まれてくるのだ。たとえば  
十二 47 12 会 絵のぐをつかって時間をかけて絵をか  
十二 47 12 会 いて時間をかけて絵をかくより、写真  
十二 48 6 会 し、自分で作って自分で動かすのは楽  
十二 48 8 会 もひとつ、作ってみるといいよ。」「へ  
十二 48 10 会 作りかたを教えてあげよう。お友だち  
十二 48 11 会 お友だちとやってごらん。」一雄の手  
十二 49 7 会 はがきを横にまいて、ひとさし指のふと

十二 49 9 いとも八つに切って、そのうち一まいだ  
十二 49 10 会 ほかのはよくもんでのぼしておく。(3)  
十二 49 10 会 よくもんでのぼしておく。(3) 正方形の  
十二 50 2 会 まいにのりをつけてつつかぶせる。(4)  
十二 50 4 会 ところだけのこして、もんだ紙にのりを  
十二 50 5 会 にのりをつけないで、上から上からかぶ  
十二 50 8 会 ほうからもかぶせてまるくしてから、細  
十二 50 8 会 かぶせてまるくしてから、細長く切った  
十二 50 10 会 新聞にのりをつけてとめる。(6) 鼻や耳、  
十二 50 12 会 も、古新聞で作って、のりでとめる。(7)  
十二 51 2 会 本紙を細長く切って、一まい一まいによ  
十二 51 3 会 によくのりをつけてはりかためる。(8)  
十二 51 4 会 (8) よくかわかしてから、絵のぐで、顔  
十二 52 3 会 ンチくらいに切って、まん中にあなをあ  
十二 52 5 会 両わきを切りこんで、手さきをまるめ、  
十二 52 10 会 らいにつぎあわせて、図の形に切る。こ  
十二 52 11 会 (2) 二まいあわせて、図の点線のところ  
十二 53 2 会 からさかさにいれて、首を着物にぬい  
十二 53 4 会 さきのほうをいれて、穴に糸を通してぬ  
十二 53 5 会 て、穴に糸を通してぬいつける。(5) 顔  
十二 53 11 会 だけを舞台へだして、つかう人の顔や頭  
十二 54 6 会 くえやいすを重ねて、つかう人のかくれ  
十二 54 10 会 で、木や家を作っておく。六 傳説  
十二 55 6 会 いだにおりこまれているからである。傳  
十二 55 8 会 章に書きつづられて有名になったものも  
十二 55 9 会 だで語り伝えられているだけで、そうい  
十二 55 10 会 のなくなるにつれて、順々に消えていっ  
十二 55 10 会 けて、順々に消えていってしまうものも  
十二 55 10 会 順々に消えていってしまうものもある。  
十二 56 1 会 いた話を思いだして、書きのこしておく  
十二 56 2 会 して、書きのこしておくことは、  
十二 56 4 会 を廣く全国で調べてみると、よくにたよ

十二 56 6 くつかの例をあげてみよう。みそ五郎ごろう  
 十二 56 9 雲仙雲仙岳にこしかけて、ひなたぼっこをし  
 十二 56 10 うのを樂しみにしていた。雲仙岳の中ほ  
 十二 57 6 んの石だんができていた。すばらしい大  
 十二 57 8 おくにおにが住んでいて、毎年村にあら  
 十二 57 8 におにが住んでいて、毎年村にあらわれ  
 十二 57 8 毎年村にあらわれては、田や畑を荒らす  
 十二 57 9 て、おにに向かって、一つの難題をもち  
 十二 58 1 、「けっして村へでてきてはならない、も  
 十二 58 1 つして村へでてきてはならない、もしそ  
 十二 58 2 に人間をくわせてやるというのであつ  
 十二 58 4 は、これを承知して、ある夜、石だんを  
 十二 58 8 に工事がはかどつて、九十九の石だんが  
 十二 58 10 ちばんどりが鳴いて、東の空が明かるく  
 十二 58 11 。おにはおどろいてすがたを消してしま  
 十二 58 11 いてすがたを消してしまった。おには約  
 十二 58 12 は約そくをまもつて、そののちはもう田  
 十二 59 7 のことを鼻にかけて、わがままをしはじ  
 十二 60 1 く、朝から集まつてきた。長者は、なん  
 十二 60 3 きよう一日で植えてしまえといいつけた  
 十二 60 4 おとめの数をまして、田植え歌勇ましく  
 十二 60 6 ありさまをながめて、得意になつていた  
 十二 60 6 めて、得意になつていた。ところで、も  
 十二 60 8 はや西の山に傾いて、くれそうになつて  
 十二 60 8 、くれそうになつてきた。このとき、高  
 十二 60 8 き、高どのに立っていた長者は、日のま  
 十二 60 9 るのおおぎをあげて、しずみかけた日を  
 十二 60 10 中ほどまでもどつてきた。それで、のこ  
 十二 60 12 植えも無事にすんで、長者の望みはとげ  
 十二 61 2 と、高どのは消えてしまつてあとかたも  
 十二 61 3 のは消えてしまつてあとかたもなく、き  
 十二 61 5 る大きな池となつていた。家具の岩屋

十二 61 10 はいつもここへきて、岩屋の入口で頼ん  
 十二 61 11 うしてよく日いつてみると、頼んだ品物  
 十二 61 11 がちゃんとそろつてならんでいた。その  
 十二 61 11 とそろつてならんでいた。そのことが評  
 十二 62 1 判になった。だれもかれもかり  
 十二 62 2 中にわるい人がいて、かりた家具をかり  
 十二 62 3 かりっぱなしにして返さなかつた。その  
 十二 62 4 と頼んでも、かしてくれなくなつたとい  
 十二 62 8 が山でしごとをしていると、のどがかわ  
 十二 62 9 と、のどがかわいてきた。水を飲もうと  
 十二 62 10 水を飲もうと思つて小川の岸にでみる  
 十二 62 10 小川の岸にでみると、美しい小魚  
 十二 62 11 しい小魚がおよいでいる。八郎はその魚  
 十二 62 11 郎はその魚をとつてやいてたべた。小魚  
 十二 62 11 の魚をとつてやいてたべた。小魚はし  
 十二 62 11 で、のどがかわいてたまらない。そこで  
 十二 63 1 だんだん長くのびて、おしまいにへびに  
 十二 63 5 まいにへびになつてしまつた。家にはひ  
 十二 63 5 八郎は思い切つて、水ぞこにとびこむ  
 十二 63 9 、小川がひろがつて、みるみるうちに湖  
 十二 63 10 みきは高くそびえているが、根はちつと  
 十二 64 5 け、深く廣くのびていく。のびていく根  
 十二 65 5 のびていく。のびていく根のさきをさえ  
 十二 65 6 い根が、深くのびてみきをささえ、廣く  
 十二 66 2 ささえ、廣くのびて枝をやしなひ、それ  
 十二 66 3 ようにからみあつて、葉を育て花をさか  
 十二 66 5 。みえないが深くて長い。深くて長い根  
 十二 66 8 深くて長い。深くて長い根の上に、みこ  
 十二 66 9 な草や木がしげつていく。のこぎり  
 十二 66 10 齒のようにとがつて、一つおきに右と左  
 十二 67 4 左にすこしよじれて、二十も三十も続い  
 十二 67 5 二十も三十も続いている。五十も六十も

十二 67 7 五十も六十も続いている。のこぎりのほ  
 十二 67 9 つもやすりをかけて右と左によじつてお  
 十二 67 10 て右と左によじつておかないと、なんの  
 十二 68 3 は、あつみをもつていた。大きなかたい  
 十二 68 3 りのはは、大きくてあつみ。小さなやわ  
 十二 68 4 りのはは、小さくてうすい。糸のこは糸  
 十二 68 5 、廣いはばをもつていた。こびきの大の  
 十二 68 8 さしわたしをもつていた。はたらきのあ  
 十二 68 10 ったのこぎりににている。しかし、いつ  
 十二 69 2 し、いつも勉強してみがきをかけていな  
 十二 69 3 してみがきをかけていないと、じき、役  
 十二 69 3 良という人が住んでいました。曾良は、  
 十二 70 2 芭蕉のことをきいてから、その弟子にな  
 十二 70 4 ったひとりで住んでいて、なにかにつけ  
 十二 70 6 ひとりで住んでいて、なにかにつけて不  
 十二 70 6 て、なにかにつけて不自由であらうから  
 十二 70 7 いろいろ手傳いをしてあげたい。下男のよ  
 十二 70 7 のように住みこんであげてもいいけれど  
 十二 70 8 に住みこんであげてもいいけれども、芭  
 十二 70 8 ひとりしずかにしているのがすきだとい  
 十二 70 9 所に別に家をかりて住むことにしました  
 十二 70 10 して、毎朝早くきては、芭蕉のおきない  
 十二 71 1 た。このようにして芭蕉につかえなが  
 十二 71 4 ばこそ、毎日教えてもらえるので、これ  
 十二 71 5 のうちに、冬がきて、くもつた空がひく  
 十二 71 7 くと待ち遠しがつていました。そのあた  
 十二 71 10 其のあたりに遊んでいる子どもたちも、  
 十二 71 11 其のあたりに遊んでいる子どもたちも、  
 十二 71 12 。まだなにも降つてきもしないのに、「へ  
 十二 72 3 どと、はやしたてていました。芭蕉は、  
 十二 72 10 も遊び友だちにして遊ぶの。」「略。」「  
 十二 73 1 園 たら、なにをして遊ぶの。」「略。」「  
 十二 73 3 園 じさんも手傳つてあげよう。」話をし

十二<sup>73</sup><sub>4</sub> 「「略。」」話をしてるうちに、パラバ  
十二<sup>73</sup><sub>4</sub> パラバラと音がして、白い小さなつぶつ  
十二<sup>73</sup><sub>5</sub> つぶのものが落ちてきて、子どもたちや  
十二<sup>73</sup><sub>5</sub> のものが落ちてきて、子どもたちや、芭  
十二<sup>73</sup><sub>6</sub> 蕉の足もとに落ちて、はね返ったりころ  
十二<sup>73</sup><sub>8</sub> 手をしゃくしにして、受けようします  
十二<sup>73</sup><sub>9</sub> の手にはのらないで、顔にあたったりふ  
十二<sup>73</sup><sub>10</sub> 、にっこりわらって立っていました  
十二<sup>73</sup><sub>10</sub> 、にっこりわらって立っていました  
十二<sup>73</sup><sub>11</sub> 子どもたちのかけていく方に、自分もい  
十二<sup>74</sup><sub>4</sub> くれがたから降ってきました。みるみる  
十二<sup>74</sup><sub>7</sub> 水をたくさんくんでおいてくれたし、ま  
十二<sup>74</sup><sub>7</sub> くさんくんでおいてくれたし、まきもた  
十二<sup>74</sup><sub>8</sub> きもたくさんとってきてくれた  
十二<sup>74</sup><sub>8</sub> たくさんとってきてくれた  
十二<sup>74</sup><sub>9</sub> んとってきてくれた  
十二<sup>75</sup><sub>8</sub> は、毎日ききなれてる曾良の声です  
十二<sup>75</sup><sub>11</sub> ひとりです  
十二<sup>76</sup><sub>2</sub> 、「火をたきつけておくれ。」やがてい  
十二<sup>76</sup><sub>6</sub> 、えんがわにいつてなにか持たしてき  
十二<sup>76</sup><sub>6</sub> てなにか持たしてき  
十二<sup>76</sup><sub>7</sub> 上に、雪をまるめてこしらえたうさぎで  
十二<sup>76</sup><sub>8</sub> ぎの目らしくいれてありました。曾良は  
十二<sup>77</sup><sub>5</sub> 美しくひるがえって、きょうの戦いを物  
十二<sup>77</sup><sub>5</sub> うの戦いを物語っています。スタンドに  
十二<sup>77</sup><sub>7</sub> ユニホームをつけて、練習のためにコー  
十二<sup>77</sup><sub>8</sub> かり手ならしをしてから、休けい場にも  
十二<sup>77</sup><sub>9</sub> 休けい場にもどつてくると、中国人らし  
十二<sup>78</sup><sub>1</sub> にえい語をつかって頼みました。私は、  
十二<sup>78</sup><sub>2</sub> 、その少年の持っていたペンをかりて、  
十二<sup>78</sup><sub>2</sub> ていたペンをかりて、サインをしてやり  
十二<sup>78</sup><sub>2</sub> りて、サインをしてやりました。少年た

十二<sup>78</sup><sub>4</sub> たちは、これを見て、うれしそうに、え  
十二<sup>78</sup><sub>5</sub> は、きつと勝つてくたさい。」とい  
十二<sup>78</sup><sub>9</sub> ったので、よくみていますと、どこかし  
十二<sup>78</sup><sub>11</sub> にっこりとわらって、「略。」とはつき  
十二<sup>79</sup><sub>3</sub> 、日本語を知っているの。「略。」  
十二<sup>80</sup><sub>9</sub> ことばに力をいれて答えました。そのひ  
十二<sup>80</sup><sub>12</sub> いう色があらわれていました。日本とい  
十二<sup>81</sup><sub>3</sub> 勝つことをいわれていたことを知  
十二<sup>81</sup><sub>3</sub> とをいわれていたことを知  
十二<sup>81</sup><sub>3</sub> ていることを知って、胸がいっぱいにな  
十二<sup>81</sup><sub>3</sub> れました。たおれてはおき、おきては戦  
十二<sup>81</sup><sub>9</sub> れてはおき、おきては戦  
十二<sup>81</sup><sub>10</sub> 一心におうえんしている少年のことを  
十二<sup>81</sup><sub>10</sub> 少年のことを思っている、ふりたつて戦  
十二<sup>81</sup><sub>10</sub> ては、ふりたつて戦  
十二<sup>82</sup><sub>2</sub> の四ヶ月にわたって、十一ヶ國のテニス  
十二<sup>82</sup><sub>11</sub> のコートを目がけて集まりました。まっ  
十二<sup>83</sup><sub>3</sub> さんと降りそそいでいました。そこへ両  
十二<sup>83</sup><sub>12</sub> ものようになって、はねとびました。  
十二<sup>84</sup><sub>1</sub> ボールを中心にして、両選手はとぶ鳥の  
十二<sup>84</sup><sub>3</sub> た。かたずをのんで試合をみていううち  
十二<sup>84</sup><sub>3</sub> をのんで試合をみていううちに、早くも  
十二<sup>84</sup><sub>6</sub> かいのようになって、大きなチルデン選  
十二<sup>84</sup><sub>10</sub> う然とたちなおって、電光のようなボー  
十二<sup>84</sup><sub>11</sub> ン選手の間、続いて第四回めもチルデン  
十二<sup>85</sup><sub>5</sub> 足をふみすべらせてしまいました。そう  
十二<sup>85</sup><sub>11</sub> も、もうあきらめていたときでした。清  
十二<sup>86</sup><sub>1</sub> ルをやわらかくして、しかも受けやすい  
十二<sup>86</sup><sub>1</sub> いところに、送ってやったのであります  
十二<sup>86</sup><sub>4</sub> げしいものになっていきました。つぎつ  
十二<sup>86</sup><sub>5</sub> はしのぎをけずって戦いました。夕日は  
十二<sup>86</sup><sub>6</sub> 日はすっかりおちてしまいました。わず

十二<sup>86</sup><sub>8</sub> 。ネットをはさんで、両選手はかたいあ  
十二<sup>87</sup><sub>4</sub> が、「水を持っておいで。」という。  
十二<sup>87</sup><sub>6</sub> え木の手入れをしている父にこういわれ  
十二<sup>87</sup><sub>7</sub> 水をいっぱい持って持っていくだろう。  
十二<sup>87</sup><sub>7</sub> っぱいいれて持っていくだろう。手紙を  
十二<sup>87</sup><sub>8</sub> 手紙を書こうとして、すずりばこをあけ  
十二<sup>87</sup><sub>9</sub> 水さしに水を入れて持っていくだろう。  
十二<sup>87</sup><sub>9</sub> に水を入れて持っていくだろう。ふろ場  
十二<sup>87</sup><sub>10</sub> で湯をかきまわしている父にこういわれ  
十二<sup>88</sup><sub>1</sub> 水をいっぱい持って持っていくだろう。  
十二<sup>88</sup><sub>1</sub> っぱいくんで持っていくだろう。ことば  
十二<sup>88</sup><sub>3</sub> 声や身ぶりによって、いろいろにその意  
十二<sup>88</sup><sub>4</sub> る。「水を持っておいで。」という簡  
十二<sup>88</sup><sub>7</sub> けをよくききわけて、それによろかなう  
十二<sup>88</sup><sub>8</sub> なうようにしなくてはならない。もし、  
十二<sup>88</sup><sub>12</sub> 、相手の人のいっていることばをよくき  
十二<sup>89</sup><sub>4</sub> ように、氣をつけて話さなければならな  
十二<sup>89</sup><sub>6</sub> 感謝の心持をこめていうときと、ただと  
十二<sup>89</sup><sub>7</sub> いいかたもかわってくるであろう。食事  
十二<sup>89</sup><sub>11</sub> の力がうしなわれていく。それは自分の  
十二<sup>90</sup><sub>2</sub> 、ただ口まねをして、おうむのようにと  
十二<sup>90</sup><sub>3</sub> むのようになえていたのでは、そのこ  
十二<sup>90</sup><sub>10</sub> ざまな氣持をこめていかにちがいない。  
十二<sup>91</sup><sub>1</sub> 、弟やいぬをつれていったこと、くりが  
十二<sup>91</sup><sub>2</sub> りがたくさん落ちていったこと、カサカサ  
十二<sup>91</sup><sub>3</sub> サと落ち葉をふんでいったこと、小鳥が  
十二<sup>91</sup><sub>4</sub> こと、小鳥が鳴いていたこと、帰ってお  
十二<sup>91</sup><sub>5</sub> ていたこと、帰っておかあさんにゆで  
十二<sup>91</sup><sub>5</sub> おかあさんにゆでていただいたこと、み  
十二<sup>91</sup><sub>9</sub> 中にたたみこまれていたにちがいない。  
十二<sup>92</sup><sub>1</sub> 中にたたみこまれていたことは、太郎と  
十二<sup>92</sup><sub>1</sub> 、太郎とはちがっている。となりの友だ

十二 92 2 友だちにさそわれていったこと、くりは  
十二 92 3 と、りすをみつめて追いかけたこと、も  
十二 92 4 もみじの枝をとってきたこと——そんな  
十二 92 5 なことがふくまれていた。ほかの人がこ  
十二 92 10 がそれぞれがっているもの、やはりこ  
十二 92 11 し、たみこまれているなみはそれぞ  
十二 93 1 に通じる力をもっている。そこにことば  
十二 93 3 話すこととちがって、その場のようすが  
十二 93 5 そう氣をつけなくてはならない。前後の  
十二 93 5 ぐあいをよく考えて、ことばを選び、ひ  
十二 93 10 ことばがみがかれてくる。(三)「赤と  
十二 94 1 「赤とんぼがとんでいる」「赤とんぼ」  
十二 94 2 という文字をとおして、すいすいとびま  
十二 94 3 がきます。「とんでいる。」で動いてい  
十二 94 3 。「略。」で動いているようすがすぐわ  
十二 94 5 んぼ」「が」「とんでいる。」——このよ  
十二 94 6 と、だれでも読んで、すぐにそのわけが  
十二 94 8 もが思いだされてくる。太郎は、秋の  
十二 94 9 を赤とんぼがむれてとんでいる景色を思  
十二 94 9 んぼがむれてとんでいる景色を思い、す  
十二 94 10 んなところについて遊んでみたいと思  
十二 94 10 ころについて遊んでみたいと思う。正男  
十二 94 12 す。弟にせがまれて、赤とんぼをとり  
十二 95 1 たに野はぎがさいていたの、赤とんぼ  
十二 95 1 手にいっばいふんで帰ったことを思う。  
十二 95 4 この学校にうつってきたときのことを思  
十二 95 6 ぼりと校庭に立っていると、赤とんぼが  
十二 95 7 分のまわりをとんでいた。「略。」こん  
十二 95 8 「赤とんぼがとんでいる。」こんな短い  
十二 95 9 が、読み手によって、三人三よう、それ  
十二 95 11 。いったん読まれてしまうと、読み手の  
や心持にとかされて、その人その人の生

十二 95 12 生活や経験によって生かされてくる。  
十二 95 12 によって生かされてくる。十一 ある  
十二 96 5 いさんの写真がでていたり、あなたがた  
十二 96 7 の写真帳をひろげてみると、あなたがた  
十二 97 2 ようか。これを見て、どんなことを感じ  
十二 97 8 のことを思いだしてください。貝づかか  
十二 98 2 どをたくさんたべていたようです。この  
十二 98 11 の貝づかを発見してからのことでありま  
十二 99 2 したものをならべてみましょう。石の矢  
十二 100 11 へんよくまとまっています。この式の土  
十二 101 2 名まえがつけられています。はにわ  
十二 101 4 は、はにわといって古代人のはからほ  
十二 101 9 すがたをあらわしています。手首やむね  
十二 101 11 たまなどががさざってあります。このやさ  
十二 102 1 なさい。これを見て、平和を愛した古  
十二 102 11 夢殿の観音といって、いまでも、多くの  
十二 103 1 々からたつとばれている作品です。は  
十二 103 4 です。いまつかっているお金とずいぶん  
十二 103 5 四角なあながあいていたり、クロスワ  
十二 103 6 文字があたりして、おもしろいお金で  
十二 103 8 ったときにくらべて、お金ができてから  
十二 103 8 べて、お金が増えてからはどれほど便利  
十二 104 6 にほうおうがついているからだといわれ  
十二 104 7 るからだといわれていますが、屋根の形  
十二 104 10 すがたがあらわれていることに氣がつく  
十二 105 4 とをふたりつれていきます。この人たち  
十二 105 6 とずいぶんちがっています。向こうがわ  
十二 105 9 かの毛皮がひろげてあります。くだもの  
十二 106 1 にかきあらわされています。絵巻物  
十二 106 4 さぎの耳をくわえて、得意の足かけをし  
十二 106 9 手をふり足をふって、おうえんをはじめ  
十二 107 3 ら鎌倉時代にかけての藝術の中で、とく

十二 107 10 ても、力があふれています。仁王さまは  
十二 108 2 まは寺の門に立って、ほとけさまをおま  
十二 108 6 は運慶だといわれています。ふたつとも  
十二 108 10 や、手ぶりによって、このお面は、生き  
十二 109 8 機も外國から渡ってきていましたから、  
十二 109 8 外國から渡ってきていましたから、こん  
十二 109 11 のことばになおしてローマ字で書いてあ  
十二 109 11 てローマ字で書いてあります。外國から  
十二 110 1 物が新しくはいってくることは、外國人  
十二 110 2 うな心をとりにいれて、どんどん育ってき  
十二 110 3 て、どんどん育ってきました。まき絵  
十二 110 5 は、茶だんすににっています。そうでは  
十二 110 9 や銀のこなをまいて、もようをあらわし  
十二 110 11 や貝が光をはなっているのは、なんとも  
十二 111 4 人にもはやされてきました。浮世絵  
十二 112 2 っぱなものとなつて生まれたのです。  
十二 112 10 からだがどうなっているか、ほとんど知  
十二 112 11 、ほとんど知られていなかったのですが  
十二 112 11 が、この本によって、日本の医学は、は  
十二 113 3 い学問をきり開いていくときは、いつの  
十二 113 11 、日に日に進歩しています。そうして、  
十二 114 5 からここに集まって、いろいろなことを  
十二 115 3 うな歩みをたどってきた日本を、これか  
十二 115 3 からどうもりたてていけばいいでしょう  
十二 115 5 ほんとうに生かしていくよりほかに道は  
十二 115 5 の命はわきあがって、まるで、息をこら  
十二 115 6 るで、息をこらしてしずかにしている、  
十二 115 7 らしてしずかにしている、子どもたちの  
十二 115 7 ひじをつつきあって、ことばのないかれ  
十二 115 8 、ささやきかわしているけはい。春は、  
十二 115 8 にもちらちらとして、あさい水には、あ  
十二 115 10 春は、希望の帰ってくるとき。新しい勇

十三五<sub>11</sub> 勇氣や空想をもって、春は、また、楽し  
十三六<sub>3</sub> 國からここに帰って来て、私たちの頭上  
十三六<sub>3</sub> らここに帰って来て、私たちの頭上に  
十三六<sub>9</sub> らもせいぞろいして、かげろうのたいま  
十三六<sub>10</sub> のたいまつをたいて、おしよせて来る。  
十三六<sub>10</sub> たいて、おしよせて来る。ああ、そのさ  
十三六<sub>12</sub> 、よにもあらわれて、目に見えぬかすみ  
十三七<sub>1</sub> のようにたなびいている、のどかな午前  
十三七<sub>2</sub> 空のおくで、鳴いているからすの声も、  
十三七<sub>4</sub> うにのんびりとして、ゆめのように、眞  
十三七<sub>5</sub> った小山をめぐって、聞えてくる。ああ  
十三七<sub>5</sub> をめぐって、聞えてくる。ああ、季節の  
十三七<sub>7</sub> ずかな午前にあつて考える、「へ略」。  
十三八<sub>4</sub> たり、調べたりして、しだいにましてい  
十三八<sub>5</sub> て、しだいにましていく。一人まえの人  
十三八<sub>6</sub> のつとめをはたしていくために、知識を  
十三八<sub>9</sub> 々の器械をつかつて観察したり、実験し  
十三八<sub>10</sub> いくどもくり返してたしかめ、すでに知  
十三九<sub>1</sub> たことを材料として、考えをおし進め、  
十三九<sub>2</sub> 関係を明らかにして、きまつた法則を知  
十三九<sub>4</sub> われる法則を知って、ととのつた知識と  
十三九<sub>8</sub> ようなくふうをして、その実験を重ね、  
十三九<sub>11</sub> むかしは、星を見て世の中がみだれると  
十三十<sub>3</sub> した考えがのこっている。たとえば、移  
十三十<sub>5</sub> まえの字面を数えて、運がよいとかわる  
十三十<sub>6</sub> 生まれた年によって、その人の性質や運  
十三十<sub>6</sub> 運命をきめたりしている。しかし、よい  
十三十<sub>7</sub> いった方角へ移って困った人もあれば、  
十三十<sub>8</sub> いった方角へこして、つごうのよくなっ  
十三十<sub>10</sub> いへん不幸になっている。漢字で名まえ  
十三十一<sub>6</sub> 普通の知識によって知られ、むずかしい  
十三十一<sub>7</sub> 科学的研究によって調べられる。もとよ

十三十一<sub>8</sub> ても、まだ知られていないことはたくさ  
十三十一<sub>9</sub> がいろいろに考えて、原因と結果との関  
十三十一<sub>10</sub> 関係調べきわめてい。よいことやわ  
十三十一<sub>12</sub> 、知識をもととして考えなければならな  
十三十二<sub>1</sub> 人は、道理によって動かなければならな  
十三十二<sub>3</sub> どれほど害をなしているかれない。知  
十三十二<sub>4</sub> め、学問を研究して、迷信をまつたと  
十三十二<sub>4</sub> まつたと去つてしまふようになれば  
十三十二<sub>9</sub> ら西の空に向かって動きます。地面は平  
十三十二<sub>10</sub> 東から西へまわっているように思われま  
十三十三<sub>1</sub> かたがもとになって、東洋でも西洋でも  
十三十三<sub>3</sub> き、地はじつとしていて動かないとい  
十三十三<sub>3</sub> 地はじつとしていて動かないという、い  
十三十三<sub>4</sub> る天動説が行われていました。しかし、  
十三十三<sub>6</sub> ことが、目についてきたのです。熱心な  
十三十三<sub>9</sub> 大きく輪をえがいて、まわっていること  
十三十三<sub>9</sub> えがいて、まわっていることがわかり、  
十三十三<sub>11</sub> のまわりをまわっている星の一つだ、と  
十三十三<sub>12</sub> 対に、地動説が出てきました。これを最  
十三十四<sub>3</sub> です。しばらくして、ドイツ人でケプ  
十三十四<sub>5</sub> たり研究したりして、そういう星——こ  
十三十四<sub>6</sub> 、だえん形であつて、太陽はいつもその  
十三十四<sub>10</sub> 望遠鏡を組みたてて、それで天体を観察  
十三十五<sub>2</sub> せん。自轉といつて、一晝夜に一度づつ  
十三十五<sub>3</sub> また、公轉といつて、自轉をしながら、  
十三十五<sub>4</sub> まつた輪をえがいて、一年に一回、太陽  
十三十五<sub>7</sub> は、天動説を信じていたしたので、ガリ  
十三十五<sub>8</sub> その説を人に教えてはならない、とい  
十三十五<sub>10</sub> ばかりは、だまつて研究を続けていま  
十三十五<sub>10</sub> まつて研究を続けていましたが、だまつ  
十三十五<sub>10</sub> ましたが、だまつていられず、本を書  
十三十五<sub>10</sub> られず、本を書いて、地動説を強くとな

十三十五<sub>12</sub> ーマに呼びだされて、自分でも信じては  
十三十六<sub>1</sub> て、自分でも信じてはならぬ、人にも説  
十三十六<sub>1</sub> らぬ、人にも説いてはならぬといわれ  
十三十六<sub>2</sub> レオは、年をとつてもいたし、めくらに  
十三十六<sub>2</sub> くらにもなりかけていたので、やむを得  
十三十六<sub>3</sub> たということにして、ゆるしてもらいま  
十三十六<sub>4</sub> とにして、ゆるしてもらいました。では  
十三十六<sub>5</sub> ため、考えをかえてしまったのかとい  
十三十六<sub>7</sub> 。「へ略」。」と信じて、死ぬまで眞理を求  
十三十六<sub>7</sub> めまで眞理を求めていたのです。三  
十三十七<sub>5</sub> 三つの島からなっている、小さな、しず  
十三十八<sub>2</sub> すから、いかにして、國運をもとどおり  
十三十八<sub>9</sub> 大事業をなしとげて、さかえるのであり  
十三十八<sub>11</sub> き、希望をいだいてたちあがつたひとり  
十三十九<sub>1</sub> ほほえみをたたえて、つるぎで失つたも  
十三十九<sub>8</sub> 現する誠意にみちていました。ユート  
十三十九<sub>9</sub> の半分以上もあつて、その三分の一以上  
十三二十<sub>4</sub> 土地は、年を追つてやせおとろえ、つ  
十三二十<sub>5</sub> ついに、あはれてしまつたのです。こ  
十三二十<sub>6</sub> のは、みぞをほつて水をそそぎ、平野の  
十三二十<sub>12</sub> 育つだろうと思つて、実際に試験してみ  
十三二十<sub>12</sub> て、実際に試験してみると、もみの木は  
十三二十<sub>1</sub> 年ならずしてかれてしまいました。ユ  
十三二十<sub>1</sub> 地力さえ、のこしていませんでした。し  
十三二十<sub>1</sub> かならず解決してくれるにちがいない  
十三二十<sub>7</sub> の小もみを移植してみたらどうか、とい  
十三二十<sub>9</sub> のもみの間に植えてみると、両種のもみ  
十三二十<sub>9</sub> 、たがいにならんで生長し、年がたつて  
十三二十<sub>10</sub> たつてもかれないで、よくしげりました  
十三二十<sub>10</sub> 氣は、年々高まつてきました。しかし、  
十三二十<sub>2</sub> 問題はまだのこっています。みどりの野  
十三二十<sub>2</sub> 長は、これによつてはたされなかつたの

十三二二九、「略。」といって、かれにせまりまし  
 十三二二八は、父の質を受けて、植物の研究がすき  
 十三二三二のそばにならべておくからです。もし  
 十三二三三ある時期になって、小もみを切りはら  
 十三二三四をひとりじめして、生長するにちがい  
 十三二三六を、実際にためしてみると、そのとおり  
 十三二三八うながす力をもっているが、それをこえ  
 十三二三九ルガス親子によって、発見されたのであ  
 十三二三二発見と努力によってもたらされた、よい  
 十三二三七が、植林が成功してから以後の農業は、  
 十三二三五のねだんがあがって、あるところでは、  
 十三二三八戦いによって失われたシュレスウ  
 十三二三九すでにつくなわれて、なおあまりあるこ  
 十三二三三熱誠な共力によって、あれ地をみどりの  
 十三二三六の目のように通じている。ホートンとい  
 十三二三八いを立てめぐらしている。小路は、  
 十三二三九土べい続きになっている。あまり廣くも  
 十三二三三、ずっとのびだしている。それで、ホー  
 十三二三五ネルのようになって、どこまでもつな  
 十三二三六こまでもつながっている感じがする。一  
 十三二三九るが、ここに住んでいる子どもたちにと  
 十三二三九子どもたちにとっては、かけがえのない  
 十三二三二もたちがたむろして、日だまりを樂しみ  
 十三二三一風の通り場で遊んでいる。遊ぶといつて  
 十三二三二や絵本などを持って遊ぶわけではない。  
 十三二三三面にこしをおろして、あなをほったり、  
 十三二三五くの方からひびいてくる、いろいろなも  
 十三二三六をかたむけたりしている。ものである。もの  
 十三二三八もの賣りが鳴らして来る鳴りものの音が  
 十三二三八びんぼうでかついでやって来る。かた手  
 十三二三二、鉄ぼうをにぎって、ときどき、毛

十三二八二ぼうをにぎって、ときどき、毛ぬき  
 十三二九三つるつるにそられている。糸屋が来る。  
 十三二九四ら、ゆっくり歩いて来る。でんでんだい  
 十三二九五のつづみを鳴らしてやって来る。「チャ  
 十三二九七の人たちが集まって来て、糸屋さんをと  
 十三二九七たちが集まって来て、糸屋さんを取りま  
 十三二九八入れた荷をかついでいる。前の荷の上に  
 十三二九八ふんどうをつるしておく。歩いて行く  
 十三二九八るしておく。歩いて行く荷がゆれて、  
 十三二九八て行く荷がゆれて、しげんにふんどう  
 十三二九八大小さまさまあつて、音色もちがうし、  
 十三二九八のうらかたによって、調子がちがう。「へ  
 十三二九八ちばんさわがしくて、大きな音をたてて  
 十三二九八、大きな音をたててやって来るのは、さ  
 十三二九八、はげしくたいておいて、てのひらで  
 十三二九八しくたいておいて、てのひらで、きゅ  
 十三二九八。これを聞きつけて、子どもが大ぜい集  
 十三二九八うできよんととしてやめてしまったり、  
 十三二九八よんととしてやめてしまったり、とんで  
 十三二九八する。それが、見ている人には、かえっ  
 十三二九八ものをつかわないで、呼び声でやって来  
 十三二九八ながら、ふれ歩いて来る。やつと目がさ  
 十三二九八こんなことをいって通る。アイスクリー  
 十三二九八一けん、水を運んで行かなければならな  
 十三二九八だから、車の動いている間、たえまなく  
 十三二九八が美しい。月が出ていけば、出ていたで  
 十三二九八が出ていけば、出ていたで美しく、星の  
 十三二九八な星がばらまかれて、一つ一つがかがや  
 十三二九八の舞台をこしらえて、そこで、人形あや  
 十三二九八もの心をひきつけてやまない。夜のふけ  
 十三二九八けるのも知らないで、見とれてしまう。  
 十三二九八らないで、見とれてしまう。ふと氣がつ

十三三三七う。ふと氣がついて、子どもたちは、あ  
 十三三三七もたちは、あわてて家にもどって行った  
 十三三三七わてて家にもどって行った。ホー  
 十三三三七「れん」が書かれてある。れんは、め  
 十三三三七ばな文字で書かれてある。小さな子ども  
 十三三三七で、れんをながめている。それが、だ  
 十三三三七んだん大きくなって、文字であることが  
 十三三三七字の意味がわかってくると、いつそうそ  
 十三三三七ぶえが天から鳴ってきて、ホートンをに  
 十三三三七が天から鳴ってきて、ホートンをにぎわ  
 十三三三七ふえをむすびつけてとばすのであるが、  
 十三三三七とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。ふ  
 十三三三七はとがむれになってとんで来ると、ふえ  
 十三三三七むれになってとんで来ると、ふえの音が  
 十三三三七庭のあんずがさいて、花びらがホートン  
 十三三三七へちらちらと降ってくるのも、このころ  
 十三三三七なくたくさん舞ってくる。小さな光つた  
 十三三三七ふわとまるくなくて、風がふいてくると  
 十三三三七なつて、風がふいてくると、ころころと  
 十三三三七れをつかもうとして追いかける。大通り  
 十三三三七がぞろぞろと歩いて行く。あひるが、「  
 十三三三七「ガア」とさわいで行く。花よめ行列の  
 十三三三七そちらの方へ走って行く。五 電話  
 十三三三七、電話がとりつけてある。左手につくえ  
 十三三三七が鳴る。だれも出て来ない。一どとぎれ  
 十三三三七ない。一どとぎれて、また鳴りはじめる  
 十三三三七ったままとびこんで来て、受話器をとる  
 十三三三七ままとびこんで来て、受話器をとる。三  
 十三三三七んかんがしまつていたから……はい、  
 十三三三七ごろちつとも来てくだらないじゃな  
 十三三三七日曜ね。(わらって) いらない。ごち  
 十三三三七ほんとうにつれて行ってくださいよ……



十三三三七(会) うにつれて行ってくださいよ……ええ  
 十三三三八(会) ん、ぼくの知っている人……だれかし  
 十三三三九(会) ……じらさないでいて……え、おと  
 十三三三九(会) らさないでいて……え、おとうさん  
 十三三三九(会) じゃあ、かわってください。(受話器  
 十三三三八(会) 持ったまま、待っている。その間に、ぼ  
 十三三三九(会) ちゃん、帰って来たんですか……い  
 十三三三九(会) はい。早く帰ってくださいね……(わ  
 十三三三九(会) だもの……行ってもいいでしょう……  
 十三三三九(会) えの方へ走りよって、ひきだしをあける  
 十三三三九(会) んが書きのこしていった手紙を、とり  
 十三三三九(会) 手紙を、とりだして読む。読み終ると、  
 十三三三九(会) ……真二を呼んでいただきたいのです  
 十三三三九(会) のかかるのを待っている。その間、かた  
 十三三三九(会) の手紙をくり返して読む。はい、はい  
 十三三三九(会) みんなで心配していた……うん、そう  
 十三三三九(会) いまここに持っている。なんべんもく  
 十三三三九(会) べんもくり返して読んだよ。電話番号  
 十三三三九(会) 電話番号が書いてあったんだから……  
 十三三三九(会) が、寝とまりしているんだよ。ぼくの  
 十三三三九(会) をお客さんにして、ハイキングにつれ  
 十三三三九(会) イキングにつれて行く……ねえ……  
 十三三三九(会) ねえ……(わらって、) いいじゃないか  
 十三三三九(会) 品だから、とっておいたほうがいいよ  
 十三三三九(会) ん、楽しみにしているよ……おじさん  
 十三三三九(会) 舞台のまん中に出て来る。三郎手紙を  
 十三三三九(会) がら、「生きて帰って来ました——  
 十三三三九(会) 「生きて帰って来ました——か。(へ  
 十三三三九(会) か。(顔をあげて、そのことばを味わ  
 十三三三九(会) うに、)生きて帰って来ました……  
 十三三三九(会) 生きて帰って来ました……」しば  
 十三三三九(会) ……」しばらくして、うらの方で、もの

十三三三九(会) 、それに気がついて、三郎「おあさん、  
 十三三三九(会) 真ちゃんが帰って来たんだってね。よ  
 十三三三九(会) から組みたてられています。ところが、  
 十三三三九(会) ばい、舞台に出て来る人が、ただひと  
 十三三三九(会) も、しばいになっていきます。ただ、あい  
 十三三三九(会) シンシュウから帰って来た真二くん、おし  
 十三三三九(会) ずから、舞台に出ている人は、四人の人  
 十三三三九(会) 四人のひと話をしているわけですよ。こ  
 十三三三九(会) の四人の声は、見ている人には聞えませ  
 十三三三九(会) とそれぞれ話をしているようすを、見せ  
 十三三三九(会) うすを、見せなくてはなりません。そこ  
 十三三三九(会) いてがなにかいっているわけですよ。す  
 十三三三九(会) 、文字にあらわれないわけですよ。す  
 十三三三九(会) てのことばを考えて、それによって、「  
 十三三三九(会) えて、それによって、「……」を時間的  
 十三三三九(会) たり長くしたりして、電話の話らしくし  
 十三三三九(会) のいうことを聞いて、それから三郎くん  
 十三三三九(会) ちようの羽をひいて行く。ああ、ヨット  
 十三三三九(会) に、しかがすわっている。そのせなかに  
 十三三三九(会) あぶがーびきとんで来る。はるかな谷川  
 十三三三九(会) るかな谷川を聞いてその耳もとに。  
 十三三三九(会) かれぎくをたいていく。とやへ追われ  
 十三三三九(会) る。とやへ追われて行く、白いレグホン  
 十三三三九(会) わらいながら走っていく。空気までが、  
 十三三三九(会) いい口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわら  
 十三三三九(会) れいな鳥がわらっている。さあ、元氣で  
 十三三三九(会) を、そうじに行つて来るよ。ちよつと落  
 十三三三九(会) 、水がすむまで見ているかもしれない。  
 十三三三九(会) れない。すぐ帰って来るんだから、きみ  
 十三三三九(会) をつかまえて行つて来るよ。母うしのそ  
 十三三三九(会) んだよ。すぐ帰って来るんだから、きみ  
 十三三三九(会) でなければ、死んでいたい。おさな子は

十三三三九(会) 一日と、むすばれていくように。七  
 十三三三九(会) まるく原色ですつてあります。まだわか  
 十三三三九(会) あちゃんをだいていて、その右の方に  
 十三三三九(会) ちゃんをだいていて、その右の方に、も  
 十三三三九(会) どもがよりかかっている絵です。その下  
 十三三三九(会) の手で、こう書いてありました。「略」  
 十三三三九(会) ナ」といわれています。これを見て  
 十三三三九(会) ます。これを見て、どう思いますか。  
 十三三三九(会) を、だれかに話してみたくてたまらなく  
 十三三三九(会) かに話してみたくてたまらなくまし  
 十三三三九(会) ろ、世界をまわって来た人です。だから  
 十三三三九(会) 物をごらんになっているだろうと、思っ  
 十三三三九(会) さいで、本を読んでいらつしやいました  
 十三三三九(会) 「略」。そういつて、喜んでむかえてく  
 十三三三九(会) そういつて、喜んでむかえてくださった  
 十三三三九(会) て、喜んでむかえてくださったので、先  
 十三三三九(会) た絵はがきをだして見せますと、「略」  
 十三三三九(会) 、「略」といつて、一まいの絵をひき  
 十三三三九(会) ひきだしから出して、見せてくださいま  
 十三三三九(会) から出して、見せてくださいました。ぼ  
 十三三三九(会) すりものとくらべてみると、ずいぶんち  
 十三三三九(会) 、ずいぶんちがつているのにおどろきま  
 十三三三九(会) そう生き生きとして、その着物やはだの  
 十三三三九(会) にちがうといつてもいいな。「略」。  
 十三三三九(会) 絵画館にかざつてあるよ。ラファエル  
 十三三三九(会) 絵のけいこをして、たいへんじようず  
 十三三三九(会) う天才の集まつていた、美術の中心の  
 十三三三九(会) スで、研究しているうちに、たいそ  
 十三三三九(会) エルは、前後して、そこからローマに  
 十三三三九(会) からローマに出て、へき画をかいたり  
 十三三三九(会) じつによくかけている。「おじさんは、  
 十三三三九(会) がら、目を細くして、ありありとその絵

十三579(会) たいへん美しく、いかにもおかあさ  
 十三571(会) 心持が、よく出ているね。絵は、写真  
 十三586(会) たいに、旅行して来なくちゃだめです  
 十三589(会) それはそうとして、ラファエルのかい  
 十三5811(会) わったのを見せてあげよう。」おじさ  
 十三5812 じさんはそういつて、同じひきだしから  
 十三591 一まいえらびだして、見せてくださいまし  
 十三591 らびだして、見せてくださいました。「へ  
 十三593(会) ナナ」といわれている。これはどう思  
 十三594 がキリストをだいて立っていると、老人  
 十三594 ストをだいて立っていると、老人のぼう  
 十三595 その前にひれふしている絵でした。「略  
 十三597(会) あさんではなくて、キリストのおかあ  
 十三598(会) 感じが、よく出ているんじゃないでし  
 十三5911(会) の長いがおいてあったが、見物の人  
 十三5912(会) んこにやってくる、あいているときが  
 十三5912(会) ってくる、あいているときがなかった  
 十三604 ながら、目をあげて、かべにかかっていた  
 十三605 て、かべにかかっている一まいの絵を見  
 十三6012(会) 一部だ。くらべてみて、うまさからい  
 十三6012(会) だ。くらべてみて、うまさからいうと  
 十三614(会) んばいをしていので大家になり、自由に  
 十三614(会) にふでをふるって、りっぱな作品をた  
 十三616(会) んなことを考えて、きみも勉強を続け  
 十三619(会) 絵はがきを送ってくださいださったん  
 十四42 のわが國に知られている人は、けっして  
 十四45 別なひびきをもって、私たちの心をうつ  
 十四46 品の中にみなぎっている大きな愛の氣持  
 十四47 持、そこからさしてくるとい光のた  
 十四48 しいもの、苦しんでいるもの、ふしあわ  
 十四53 ずふり返らせないではない強い眞実の  
 十四53 実の力が、こもっているのです。それと

十四57 をいろいろとなめていたからのことだし  
 十四511 ためにパリーに出て、市役所のガス係と  
 十四62 は、遠く海をこえて、私たちの胸にまで  
 十四62 の胸にまでせまってくるではありません  
 十四66(会) きました。たつて以来、一分間も、お  
 十四67(会) ことを考えないでいられますんでし  
 十四68(会) ん、おわかれしてから私がいちばんつ  
 十四69(会) んがかなしがっていらつしやると思  
 十四71(会) をお考えになってください。そうして  
 十四72(会) もたちがのこっている、子どもたちは  
 十四73(会) じゅうぶん愛していてくれる、だから  
 十四73(会) うぶん愛していてくれる、だから、自  
 十四75(会) 、お考えになってください。どうして  
 十四711(会) 、私たちの手本になってくれ  
 十四711(会) ての手本になってくれるでしょう。お  
 十四82(会) それは私にとって、このうえもないた  
 十四86(会) いのをがまんして生きていきます。ど  
 十四86(会) がまんして生きていきます。どうして  
 十四88(会) んがかなしがっていらつしやるとい  
 十四89(会) も、勇氣をだしてわすれてしまおうと  
 十四89(会) をだしてわすれてしまおうと思いに  
 十四811(会) は、わかりきっているのですから。け  
 十四812(会) ども、力をだしてしごのことをお考  
 十四92(会) をお考えになって、この世の中には、  
 十四92(会) だ幸福のこっている、なぜかといえ  
 十四93(会) かあさんを愛しているからだ、こ  
 十四93(会) んが力をおとしておしまいになつたら  
 十四95(会) が、ちゃんとしていてくださって、ど  
 十四99(会) ちゃんとしていてくださって、ど  
 十四99(会) ていてくださって、どつちみちさける  
 十四910(会) ったことに対して、しつかりしたかく  
 十四911(会) り、自分を愛してくれる子どもたちの

十四912(会) ちのことを思つて、安らかに生きてい  
 十四912(会) 、安らかに生きていてくださるのだと  
 十四912(会) らかに生きていてくださるのだと、思  
 十四102(会) いいことを教えてくれました。くぎへ  
 十四107(会) 書きつけがついているはずです。よく  
 十四107(会) す。よく説明しておもらいになるとい  
 十四109(会) てべんりにできています。では、おか  
 十四112(会) んのことを思っているのです。じきに  
 十四119(会) ご自分でなさってごらん下さい。調子  
 十四126(会) ランプをつかっているというのが教え  
 十四127(会) というのが教えてくれたことなのです  
 十四129(会) プに満足しきっているそうです。小包  
 十四131(会) うなものがついていて、どこまでコー  
 十四131(会) ものがついていて、どこまでコー  
 十四132(会) コーヒーを入れていいの、おわかり  
 十四135(会) んのことを思つておられます。夜をどう  
 十四135(会) す。夜をどうしてすごしておいでし  
 十四135(会) どうしてすごしておいでしうか、  
 十四137(会) の心をかたむけて、さようなら。ルイ  
 十四1310(会) んのことを思つています。あなたがた  
 十四1311(会) この手紙を書いているつくえの上、私  
 十四141(会) 、私の前においであります。おとうさ  
 十四141(会) とうさんに対しては、このうえなくま  
 十四142(会) 思い出がのこっています。おとうさん  
 十四144(会) き写しで、生きておいでになったとき  
 十四149(会) れほどはなれてはいないのだ、もう  
 十四1411(会) んを幸福にしてあげしよう。」と、  
 十四1412(会) なことが思われてくるのです。おかあ  
 十四152(会) をお考えになって、力をとりな  
 十四153(会) 力をとりなしておくださるようとい  
 十四153(会) ようにといのつていきます。おかあさん  
 十四154(会) 、いつでもとんで行きます。おかあさ

十四155(手) こそ、私にとっては、いちばんとうと  
十四159(手) なようになさってください。おかあさ  
十四161(手) まごころを書いてお送りして、せめて  
十四161(手) 書いてお送りして、せめてものおなく  
十四162(手) にしたいと思っています。私がそばに  
十四164(手) いつもこう思っていてください。あな  
十四164(手) もこう思っていてください。あなたが  
十四165(手) なたが私を思ってくださいるとき、私も  
十四167(手) んのことを思っていると。ランプがお  
十四168(手) プがお氣にいつて、うれしく思いまし  
十四169(手) しこみいりすぎていますとお考えではな  
十四1610(手) ないかと心配していました。パリーに  
十四1612(手) なくおっしゃってください。夜が長す  
十四173(手) か。どんなにしていらいっしやいますか  
十四175(手) 時間になにをしていらっしやるか、こ  
十四182(手) 校で、そうじをしているとき、高山くん  
十四187(手) 、窓ガラスをふいていた田中さんが、「へ  
十四1810(手) った。これを聞いていた野村さんが、「へ  
十四191(手) で、なんといっていたんでしょう。」  
十四195(手) んが答えられないでいると、高山くんが  
十四1912(手) 話をお聞きになって、「へ略。」とおし  
十四203(手) で、みんなは急いでそうじをすませた。  
十四204(手) 、私たちのつかっていることばの中で、  
十四205(手) 、外國からはいってきたことばが、いろ  
十四205(手) 、いろいろまじっていることをくわしく  
十四206(手) とをくわしく話してください。そうし  
十四207(手) 例だとおっしゃってこくぼんにお書きに  
十四211(手) 「へ略。」といつて、みんながおどろい  
十四211(手) みんながおどろいていたが、先生は、つ  
十四2112(手) がいっぱいになってしまった。「へ略。」  
十四224(手) だとはかり思っていました。」と、さ  
十四228(手) が長い間つかっているうちに、すつか

十四228(手) 、すつかりなれてしまつて、日本語に  
十四229(手) りなれてしまつて、日本語になったと  
十四229(手) になったと考えていいだろう。」とお  
十四237(手) 外國からはいってきたことばは、英語  
十四238(手) いろいろはいってきた。たとえば、こ  
十四238(手) いろはいってきた。たとえば、こ  
十四241(手) ア語だといわれている。そのほかのこ  
十四243(手) 先生のお話を聞いているうちに、私は、  
十四245(手) るな國からはいってきた、日本語になっ  
十四245(手) 國からはいってきた、日本語になったの  
十四246(手) と、ふしぎになってきた。それで、私は  
十四2410(手) 、外國と交通をして、日本になかった品  
十四2411(手) いっしょにはいつてきたので、たとえ  
十四253(手) ことが心にうかんできた。ものとことば  
十四254(手) 、いっしょになつていくということは、  
十四256(手) のが世の中にできると、ことばも、  
十四257(手) ぼも、それにつれて、新しく生まれるも  
十四259(手) くれそうな氣がしてきた。それから、外  
十四2510(手) のことばがいつてきたのは、品物から  
十四2511(手) 学問などが傳わつてきたときに、そのこ  
十四2512(手) いっしょに傳わつてきたのちがいない  
十四2512(手) がない。そうしてみると、このあいだ  
十四261(手) ら、日本にはいつてきた西洋医学は、は  
十四263(手) とから考えあわせてみると、コレラは、  
十四264(手) ンダ医学がいつてきたときに、また、  
十四266(手) イツ医学がいつてきたときにそれぞれ  
十四2610(手) 西洋音楽がいつてきたときに、いっし  
十四2610(手) いっしょに傳わつてきたことばであらう  
十四2612(手) 洋の油絵がいつてきたときに傳わつて  
十四271(手) きたときに傳わつてきたのだということ  
十四273(手) なことばがはいってきたのだらうかと思  
十四277(手) い時代にはいつてきて、長いあいだつ

十四277(手) 代にはいつてきて、長いあいだつかつ  
十四277(手) いあいだつかつていくうちに、もとも  
十四278(手) のように思われてきたのだ。」とおつ  
十四2711(手) だけたくさん調べてみたいと思った。そ  
十四282(手) 國語辞典をひいてみると、だいたいわ  
十四283(手) かたかなで書いてあることばは、たい  
十四284(手) たことばと思つていい。たくさん出て  
十四284(手) い。たくさん出てくるよ。それから、  
十四287(手) ような氣持になつて、家に帰ってきた。  
十四288(手) なつて、家に帰ってきた。三 星の光  
十四292(手) あなたがたに見てもらいたいのがある  
十四293(手) があるのです。見てもらいたいのなどい  
十四293(手) 、どこかにしまつてあるもののように聞  
十四296(手) は、空にかがやいている星です。どうも  
十四297(手) 星に親しみをもつていなかったようす  
十四299(手) 、花がたえずさいていたために、天上の  
十四304(手) のものしか見ないで、遠いもの、大きな  
十四307(手) 小さな島國に住んでいたために、氣持ま  
十四308(手) げけなものになつてしまったのでし  
十四311(手) えは、大きくなくてはいいけません。なん  
十四311(手) るかのように考えて、世界全体を見わた  
十四312(手) たすことをわすれていたのは、よくない  
十四315(手) 世界の中にはたつていいけません。あなた  
十四316(手) からの日本にとつてだいいけなかつたで  
十四3111(手) る力が大きくなつていけば、日本は、見  
十四3112(手) りっぱな國になつていくのです。さて、  
十四323(手) まりにかけはなれているために、自分た  
十四324(手) えんがないと思つていいる人もあるでし  
十四328(手) 哲学も、ふかまつていったのです。よそ  
十四3210(手) 人間は、星によつてみちびかれ、星によ  
十四3211(手) びかれ、星によつて生きていいるといつて  
十四3211(手) 、星によつて生きていいるといつてもいい

十四 32 11 生きているといつてもいいすぎではあり  
 十四 32 12 、太陽を中心として回轉していることを  
 十四 33 1 中心として回轉していることを知ってい  
 十四 33 1 ていることを知っています。この一むれ  
 十四 33 3 つう太陽系とよんでいます。しかし、こ  
 十四 33 8 、地球をとりまいてる天の川の内がわ  
 十四 34 3 のです。こうなっていると、うちゅうと  
 十四 34 10 うちゅうにくらべては、太陽もごく小  
 十四 34 12 の地球の上に住んでいる人間などは、バ  
 十四 35 4 それだからといって、すこしもかなしむ  
 十四 35 11 大空の星をながめていると、はてしのな  
 十四 37 1 動から研究を進めて、ついにラジウムを  
 十四 37 3 もつらい思ひをしています、そんなこ  
 十四 37 3 ことにへこたれてはいけません。ひく  
 十四 37 4 ん。ひくつになつてはいけません。心を  
 十四 37 4 。心を大きくもつてくだささい。世界全体  
 十四 37 6 す大きな目をもつてくだささい。そうすれ  
 十四 37 8 、しぜんにわかつてくるはずです。もし  
 十四 37 9 天上の星を見あげてください。星は、き  
 十四 37 10 がたに力をあたえてくれるにちがいあり  
 十四 38 3 な「一人の人」の見ている方を遠く見つめ  
 十四 38 7 の人立ちあがって、「略」。「二人の人」  
 十四 38 8 が明かるくなつてくる。「三の人」朝が  
 十四 39 9 遠くの方を指さして、「略」。「四の人」  
 十四 40 3 大空がほおえんでいる。ばら色にわら  
 十四 40 4 ばら色にわらっている。「三の人」おほ  
 十四 40 11 自由の光がさしてくる。「みんな」平和  
 十四 41 4 人「喜びにみちてかがやく光」。「みん  
 十四 41 5 人」みんな、かたまつて、「略」。「二人の人」  
 十四 41 6 人「朝風がふいてきた」。「一人の人」山も  
 十四 41 7 もはつきり見えてきた。「三の人」わた  
 十四 43 1 れが明かるくしてくる。くちびるに

十四 43 10 それが元氣にしてくれる。他人のため  
 十四 44 2 なやみ、苦しんでいる他人のために  
 十四 44 4 れを、こう話してやるのだ。くちびる  
 十四 44 8 だつてふつとんでしまふ。くちびる  
 十四 45 1 期船につきあつて、ちんぼつしてしま  
 十四 45 1 ちんぼつしてしまひました。千九  
 十四 45 2 のことです。乗つていた百四人のうち、  
 十四 45 5 ケンナも、しずんでいく船からほうりだ  
 十四 45 5 からほうりだされて、黒い波の間をおよ  
 十四 45 6 い波の間をおよいでいました。助け船は  
 十四 45 6 ったい、なにをしているのだらう。かれ  
 十四 45 8 した。助けを求めてなきさげ声も、い  
 十四 45 9 ごとく波にのまれてしまつたように、死  
 十四 45 12 きれいな歌が流れてきました。それは女  
 十四 46 1 も、調子もみだれていなければ、ふるえ  
 十四 46 1 なければ、ふるえてもいけません。まるで  
 十四 46 3 いの來客を前にして、客間で歌つてい  
 十四 46 3 して、客間で歌つていものと、ちつとも  
 十四 46 3 この歌に聞きほれていました。かれは、  
 十四 46 7 といひ氣持になつて、自分が水の中にひ  
 十四 46 10 が水の中にひたつていものと、わすれ  
 十四 46 11 ることも、わすれてしまつたほどでした  
 十四 46 12 どこかへけしとんでしまつて、すつかり  
 十四 46 12 けしとんでしまつて、すつかり、よみが  
 十四 47 2 なりました。歌っている人は、どうい  
 十四 47 2 にあつてふためていて、そのためにかえ  
 十四 47 7 えて波にのまれてしまつたのに、こん  
 十四 47 8 分なんか、およいでいるだけがせいぜい  
 十四 47 12 美しい歌に送られて、死んでいきたい  
 十四 48 4 に送られて、死んでいきたいものと思  
 十四 48 5 、その方におよいで行きました。近づい  
 十四 48 6 きました。近づいてみると、船がしづむ

十四 48 7 の婦人がつかまつて、立ちおよぎをして  
 十四 48 8 、立ちおよぎをしていました。歌を歌  
 十四 48 8 ました。歌を歌っているのは、その中の  
 十四 48 11 、平氣で歌を続けていました。助け船の  
 十四 48 12 、寒さに氣を失つて、またたから手をは  
 十四 49 2 いように、こうして元氣をつけていたの  
 十四 49 2 うして元氣をつけていたのです。「略」  
 十四 49 6 は、この歌を知つていたかどうか知りま  
 十四 50 1 ッケンナがおよいで行つたように、やが  
 十四 50 2 トが、やみをぬつて助けにきてくれまし  
 十四 50 2 をぬつて助けにきてくれました。やはり  
 十四 50 3 声を手がかりにして。そうして、マッケ  
 十四 50 4 も、その歌を歌つていたおじょうさんも  
 十四 50 9 われの耳にひびいてくるように感じられ  
 十四 51 4 ごちそうをたべて、たいへんゆかいで  
 十四 51 6 話しあいをやつてみたら、おもしろい  
 十四 52 8 け、め花がさいて、はじめて、かぼち  
 十四 53 2 、葉さん、いつてごらんさい。」葉  
 十四 53 6 根もとがふくれて、そんな大きな実  
 十四 53 9 いいところに出て、じりじりと暑い日  
 十四 53 10 養分をこしらえて、送つてあげたから  
 十四 53 10 しらえて、送つてあげたからです。よ  
 十四 53 12 ら、黄色くなつて落ちてしまつたたく  
 十四 53 12 色くなつて落ちてしまつたたくさんの  
 十四 54 1 ぼちやの花を見えています。あれは、私  
 十四 54 9 中から吸いとつて、送つてあげたもの  
 十四 54 9 いとつて、送つてあげたものです。み  
 十四 54 10 地の上でくらししているかたには、土の  
 十四 54 12 も、ごろごろしています。そこへ細い  
 十四 54 12 細い根をのぼして、水と養分を吸い  
 十四 55 1 分とを吸いとつて、夜も晝も送つてあ  
 十四 55 2 夜も晝も送つてあげるの、たいへ

十四五六二会、せっかく吸ってくださった地の中  
 十四五六四会をお吸いになって、養分におこしらえ  
 十四五六四会でも、私が運んであげなかったら、り  
 十四五六七会が、そこへつれて行ってあげるのは、  
 十四五六七会こへつれて行ってあげるのは、この私  
 十四五六九会ら、それについている葉でも、花でも  
 十四五六九会でも、なりかけている実でも、みんな  
 十四五六一〇会も、みんなかれて、くさってしまいま  
 十四五六一〇会かれて、くさってしまえます。ごらん  
 十四五六一二会きなきずができていますが、私は、い  
 十四五六一二会いそれをなおして、あなたがたがかれ  
 十四五六一三会れないようにしてあげたのです。だか  
 十四五六四会どやどやとはいってきたものがあります  
 十四五六六会、戸の外で聞いていると、あなたたち  
 十四五六七会てなことをいってしまいましたね。あなた  
 十四五六七会をゆたかに送ってやったからです。さ  
 十四五六一二会分のことをいっていらつしやいました  
 十四五六一三会葉さんではなくて、私ですよ。そうい  
 十四五六三会うことを考えてみたことがあります  
 十四五六五会「略」。水が続いていました。「略」  
 十四五六八会たり死んだりしてしまいます。この大  
 十四五六一〇会つて、水にとけているから、根から実  
 十四五六一二会から実まで運んでいけるのですよ。そ  
 十四五六一三会つたことを考えてごらん下さい。」土  
 十四五六四会かし、土にはえていないかぼちやなん  
 十四五六五会から問題になっている養分だって、み  
 十四五六六会みんな私がわけてあげたのです。水だ  
 十四五六七会水だって、ためておいてあげたのです  
 十四五六七会て、ためておいてあげたのです。ほか  
 十四五六一一会くがとびまわって、かふんをなかだち  
 十四五六一一会んをなかだちしてあげなかったら、実  
 十四五六二会のものだといつてもいいのです。しか

十四六〇一〇るも、首をひねって考えていました。し  
 十四六〇一〇首をひねって考えていました。しばらく  
 十四六〇一〇した。しばらくして、根がいました。  
 十四六〇一〇した。人間が来て、まいてくれたのだ  
 十四六〇一〇人間が来て、まいてくれたのだ。も  
 十四六〇一〇人間がせわをしてくれなかったら、私  
 十四六〇一〇つるも、うなずいて、「略」。「略」。  
 十四六〇一〇ね。公平にいて、みんなのものです  
 十四六〇一〇わすれずにまいてもらうことができさ  
 十四六〇一〇かり人間にあげてしまつても、さしつ  
 十四六〇一〇にあげてしまつても、さしつかえない  
 十四六〇一〇がいっぱいはいておられます。ただそれ  
 十四六〇一〇が、よく氣をつけて見ていると、だんだ  
 十四六〇一〇よく氣をつけて見ていると、だんだんに  
 十四六〇一〇うたがいがおこつてくるはずですよ。た  
 十四六〇一〇、白い湯げがたつています。これは、い  
 十四六〇一〇熱い水蒸氣がひえて、小さなしずくにな  
 十四六〇一〇、無数にむらがつているので、ちょうど  
 十四六〇一〇日なたへ持ちだして、日光を湯げにあて  
 十四六〇一〇黒いぬのでもおいてすかして見ると、し  
 十四六〇一〇でもおいてすかして見ると、しずくのつ  
 十四六〇一〇は、日光にすかして見ると、湯げの中に  
 十四六〇一〇赤や青の色がついて見えます。これは、白  
 十四六〇一〇になるものがあつて、そのまわりに、蒸  
 十四六〇一〇りに、蒸氣がこつてくつつかつて、もし  
 十四六〇一〇者の研究でわかつてきました。そのしん  
 十四六〇一〇んにたくさんういていいます。空中に  
 十四六〇一〇す。空中にうかんできた雲が消えてしま  
 十四六〇一〇んでいた雲が消えてしまったあとには、  
 十四六〇一〇のぼかりがのこつていて、飛行機など  
 十四六〇一〇かりがのこつていて、飛行機などで、横  
 十四六〇一〇で、横からすかして見ると、ちょうど、横

十四六四九、けむりが廣がっているように見えるそ  
 十四六五二湯げの温度が高くて、まわりの空氣にく  
 十四六五二りの空氣にくらべてずつとかるいために  
 十四六五二いる自分でためしてみると、おもしろい  
 十四六五二空氣の温度によつてもちがいますが、お  
 十四六五二れがまた、よく見ていると、なかなかお  
 十四六五二むりがゆらゆらして、いくつものうず  
 十四六五二がり、入りみだれて、しまいに見えなく  
 十四六五二いに見えなくなつてしまします。茶わん  
 十四六五二大きなうずができて、それが、かなり早  
 十四六五二りながら、のぼつていきます。これとよ  
 十四六五二、前日雨でも降つて、土のしめつてい  
 十四六五二つて、土のしめつているところへ日光が  
 十四六五二ろへ日光があたつて、そこから白い湯げ  
 十四六五二に、よく氣をつけて見えてごらん下さい。  
 十四六五二よく氣をつけて見えてごらん下さい。  
 十四六五二氣をつけて見えてごらん下さい。湯げ  
 十四六五二びに、横になびいては、また、たちのぼ  
 十四六五二ようなものになつて、地面からなんメー  
 十四六五二に、空中におこつてい大きなうずです  
 十四六五二かい空氣がのぼつていくあとへ、入れか  
 十四六五二が下からふきこんできて、大きなうずが  
 十四六五二からふきこんできて、大きなうずがで  
 十四六五二みがずつと大きくて、うずの高さも、四  
 十四六五二た、見かたによつては、茶わんの湯と、  
 十四六五二くにたものと思つてさしつかえありませ  
 十四六五二に、らい雨をあげてみたのです。湯げの  
 十四六五二はこのくらいにして、こんどは、湯のほ  
 十四六五二い茶わんにはいつている湯は、日かげで  
 十四六五二湯は、日かげで見えては、べつにかわつた  
 十四六五二日なたへ持ちだして、じかに日光をあて  
 十四六五二んのそこをよく見てごらん下さい。そこ

十四701 ようのようになって、ゆるやかに動いて  
 十四702 、ゆるやかに動いているのに気がつくで  
 十四704 、電燈の光をあてて見ると、もっとよく  
 十四707 ますから、よく見てごらんさい。それ  
 十四710 げるためだと思っていいます。もし、  
 十四711 やんとふたでもしておけば、ひやされる  
 十四711 では、湯は、ひえて重くなり、下の方へ  
 十四712 り、下の方へ流れて、そこの方へ向かっ  
 十四712 その方へ向かって動きます。その反対  
 十四713 に上の方へのぼって、表面から外がわに  
 十四714 ら外がわに向かって流れます。だいたい  
 十四717 、湯の中にうかんでいる小さな糸くずな  
 十四718 などの動くのを見ていても、いくらかわ  
 十四718 の動くのを見ていても、いくらかわか  
 十四719 を、ふたをしないでおいっぱいには、  
 十四721 そのあとへ向かって流れ、それが、おり  
 十四721 くじぶんにはひえて、そこからおります  
 十四722 。こんなふうにして、湯の表面には、水  
 十四723 面には、水のおりているところ、のぼ  
 十四724 ところ、のぼっているところとがほう  
 十四726 いろに入りみだれてできてきます。これ  
 十四726 入りみだれてできてきます。これに日光  
 十四728 らず、むらになって、茶碗のそこを照  
 十四728 です。日のあたっているかべや屋根をす  
 十四721 べや屋根をすかして見ると、ちらちらし  
 十四732 した空気がふくれてのぼる、そのときで  
 十四732 を、日光にすかして見ると、湯のおもて  
 十四736 がひと皮かぶさっており、それが、ちょ  
 十四738 にたて横にやぶれて、そこだけがとう明  
 十四739 あまりよくわかっていないようです。し  
 十四746 の水が、冬になって、表面からひえてい  
 十四746 て、表面からひえていくときには、どん

十四748 なことにも関係してきます。そうすると  
 十四741 とえんがつながってきます。地面の空気  
 十四751 めにあたためられてできるときはむら  
 十四752 は、飛行家にとつて、たいへんあぶない  
 十四759 り、森ではくだつています。それで、畑  
 十四7510 、畑の上からとんできて、森の上へかか  
 十四7510 の上からとんできて、森の上へかか  
 十四763 海との間に行われております。それは、  
 十四764 、海陸風とよばれているもので、書間は  
 十四765 、反対の風がふいています。これと同じ  
 十四766 と谷との間にあって、山谷風と名づけら  
 十四767 谷風と名づけられています。これが、も  
 十四768 り大じかけになって、たとえば、アジア  
 十四7612 、これくらいにしておきましょう。ハ  
 十四773 、竹を割つたりして、なにかしらえよ  
 十四774 こしらえようとしていっていると、祖父が来て  
 十四774 いると、祖父が来て、「木もと竹うら」  
 十四775 うことわざを教えてくださいました。この簡  
 十四779 ぐにこれをためしてみましたが、ほんと  
 十四782 から横の方へそれてしまつて、一方は太  
 十四782 方へそれてしまつて、一方は太く、一方  
 十四782 、一方は細くなって、まっすぐに割るこ  
 十四782 先のほうから割ってみると、もとまで、  
 十四785 ののち、氣をつけて、おけ屋さんなどの  
 十四789 屋さんなどのやつているところを見ると  
 十四7810 かるく四つに割つて、あとは、十文字の  
 十四791 な木ぎれをはさんで、チョンチョンとた  
 十四792 ンチョンとたたいて、みごとに割つてい  
 十四792 て、みごとに割っていました。木のほう  
 十四793 とのほうを上にして、上からはものをう  
 十四794 、まっすぐに割れて、けつしてそれるこ  
 十四798 会 「水になげこんでごらん。しずむほう

十四799 、「略。」と教えてくださいました。「木も  
 十四7910 単なことを、知っているのといないので  
 十四802 う前からつくられて、子に、まごとに傳  
 十四804 民族から教えられて、それからいい傳え  
 十四805 からいい伝えられているものもあるかもし  
 十四807 代もなん代もやってみた結果、とうとう  
 十四808 あのような、短くて調子のいい、氣のき  
 十四825 せいくらべ。なくて七くせ。二階から目  
 十四834 人たちが雪と戦っているようすを、映画  
 十四835 る。雪が降りだしてから、だんだんつも  
 十四836 い雪の中で生活している人々、春の光が  
 十四837 春の光がさしそめて、雪どけ水が流れた  
 十四838 をうれしそうに見ている雪國の子どもな  
 十四839 じゅんじょをおつて、とりあつたも  
 十四841 の一ひらをとらえて映画にしたものであ  
 十四842 にきれいな形をしていること、しかも、  
 十四843 たけっしょうをしていること、その美し  
 十四844 上から地上へ降ってくることをを写し  
 十四845 ることなどを写している。また、どうし  
 十四849 ざまな條件によつて、雪のけっしょうが  
 十四8410 映画的手法によつて、よくわかるように  
 十四8412 った。空から降ってきた雪の一ひらを受  
 十四8412 一ひらを受けとつて、それをくわしく観  
 十四851 をくわしく観察してみると、その雪が、  
 十四851 で、どのようにしてできたか、どんな天  
 十四852 空を旅して降ってきたか、おのずから  
 十四852 んなことばによつて、映画は私たちに説  
 十四855 は私たちに説明してくれた。一ひらの雪  
 十四855 一ひらの雪によつて、はるかに高い天空  
 十四856 。ふんだんに降ってくる雪の中から、一  
 十四8511 ひらの雪をとらえて、それをいろいろな

十四 86 1 な角度からながめてみることは、つつま  
 十四 86 2 の草花を見いだして、それをたんねんに  
 十四 86 4 をながねんかかつて調べるのも、ごくさ  
 十四 86 4 感情をひろいあげて、一首の歌をよむの  
 十四 86 10 、こごえ死にさせてしまうことすらある  
 十四 87 1 ことばなどによって、かなり生き生きと  
 十四 87 5 の表情をあつかっても、おもしろいと思  
 十四 87 8 、第一の人が歩いて行く。その人の足あ  
 十四 87 9 、第二の人が歩いて行く。やがて第三の  
 十四 87 12 とをたよりに通って行く。ぼつりぼつり  
 十四 88 3 くねくねとゆがんでいる。歩く人は、お  
 十四 88 4 つのまにか曲がってしまう。どうしてこ  
 十四 88 6 足がつめたくなつて、立ちどまったため  
 十四 88 7 中で考えごとをしていて、思わず方向が  
 十四 88 7 考えごとをしていて、思わず方向がちが  
 十四 88 12 年も雪にとざされていた地上に、ぼちっ  
 十四 89 2 い土の上に集まって、足でトントンとふ  
 十四 89 2 でトントンとふんでみたり、しゃがんで  
 十四 89 3 みたり、しゃがんで土のにおいをかいだ  
 十四 89 3 、てのひらでなでてみたり、耳を地べた  
 十四 89 4 を地べたに近づけて、なにかもの音でも  
 十四 89 5 独特の手法によって、おもしろく編集で  
 十四 89 7 あつかう人によって、文章は、どのよう  
 十四 89 10 ながめた人によって書かれた文である。  
 十四 90 2 っきりなしに降ってくる。寒いことも寒  
 十四 90 2 つを足にひっかけていた。その上ぐつは  
 十四 90 8 で、この子にとっては大きすぎた。二台  
 十四 90 9 けるために、急いで道を横ぎったときに  
 十四 91 10 その上ぐつはぬげてしまった。かたほう  
 十四 91 4 の男の子がひろって行ってしまった。そ  
 十四 91 4 子がひろって行ってしまった。その男の  
 十四 91 9 たくはだしになってしまった。だから、

十四 92 1 。寒さがしみこんで、足は赤く、青くな  
 十四 92 1 は赤く、青くなつていた。おおみその  
 十四 92 4 チをすこしも賣つてはいなかった。一は  
 十四 92 5 た。一はこも賣つてはいなかった。思い  
 十四 92 6 かった。思いきつて、その屋根うらの家  
 十四 92 8 まだ一銭ももうけてはいないので、父親  
 十四 92 10 くしかるにきまつていた。かわいそうに  
 十四 92 11 は、おなががすいて、こごえて、身をひ  
 十四 92 11 がすいて、こごえて、身をひきずって歩  
 十四 92 12 て、身をひきずって歩いていった。その子  
 十四 92 12 をひきずって歩いていった。その子のきれ  
 十四 93 5 とかなしげに通って行きながら、その小  
 十四 93 5 は、窓々をとおして、ちらちらとかがや  
 十四 93 7 なたばを一つ持っていた。ぼろぼろの前  
 十四 93 11 とたくさんはいっていた。女の子は、ど  
 十四 94 2 それで火をともしてみたかったことだろ  
 十四 94 2 った両足をそろえて、ぼろぼろの着物の  
 十四 94 8 の着物の下で重ねて、どうかして、あた  
 十四 94 8 重ねて、どうかして、あたためようとし  
 十四 94 10 でほとんどこごえていた。その両手をあ  
 十四 95 1 かべにこすりつけて、火をつけた。まあ  
 十四 95 1 。それがもえ続けている間、大きなろの  
 十四 95 9 なるの前にすわっていた。そのろの中に  
 十四 95 10 き、ほのおは消えてしまいい、ろはなくな  
 十四 96 3 い、ろはなくなつてしまった。女の子は  
 十四 96 4 したマツチを持って、つめたく、いん氣  
 十四 96 5 人氣そうにすわっていた。女の子は、ま  
 十四 96 5 、またそうしないではいられなくなつて  
 十四 96 6 はいられなくなつて、もう一本のマツチ  
 十四 96 6 本のマツチをとってかべでこすった。そ  
 十四 96 10 ようにうすくなつて、その女の子は、中  
 十四 97 2 たかいいきをたてて、テーブルの一方に

十四 97 3 ルの一方におかれてあった。そのとき、  
 十四 97 6 ブルからとびおりて、ゆかの上をよたよ  
 十四 97 6 上をよたよた歩いて、その女の子の方へ  
 十四 97 7 の方へずつとよってくるではないか。あ  
 十四 97 8 ヌチはもえつくしてしまつて、女の子の  
 十四 97 8 えつくしてしまつて、女の子のそばには  
 十四 97 9 いかべしかのこつていなかった。女の子  
 十四 97 12 の木の下にすわっていた。いかにも大き  
 十四 98 1 が美しくかざられていた。たくさん的小  
 十四 98 3 の間からかがやいて、ちかちか、ちかち  
 十四 98 6 な人形が見おろして、マツチ賣りのむす  
 十四 98 7 賣りのむすめを見てわらいかけた。女の  
 十四 98 8 ヌチはもえつくしてしまつた。けれども  
 十四 98 9 うそくはもえ続けていて、それが、高く  
 十四 98 10 くはもえ続けていて、それが、高く、高  
 十四 98 10 、しだいにのぼつて、大空の星のよう  
 十四 99 2 た。じつと見つめているうちに、一つの  
 十四 99 2 とき、空を横ぎつて長い光のおをひいた  
 十四 99 3 た。この子にとって、ただひとりのしん  
 十四 99 5 のところへのぼつていくのだと、話して  
 十四 99 7 いくのだと、話してきかせたことがあつ  
 十四 99 8 うとつくにわかれて神さまのおそばへ行  
 十四 99 12 せつなようすをしていた。けれども、前  
 十四 100 2 そうなようすをしていた。「略。」と、  
 十四 100 3 んが見えなくなつては困ると思つたので  
 十四 100 6 思つたので、急いで、たばの中にあつた  
 十四 100 6 いっしょにつれて行ってください。ね  
 十四 100 8 よにつれて行ってください。ねえ、い  
 十四 100 8 いっしょにつれて行ってください。」  
 十四 100 9 よにつれて行ってください。」と、女  
 十四 101 7 子をうでにかかえて、ふたりは、いっし  
 十四 101 10 面から高くはなれて、もう、寒さも、ひ

十四102 1 かのようのぼって行った。小雪の降つ  
 十四102 8 で、元日をむかえているかを知らないの  
 十五6 4 文 なら 家を出て手をひかれたるまつ  
 十五8 3 文 人が子を歩かせて、かわずだまりて人  
 十五8 4 文 かわずだまりて人の足大きくすぐる  
 十五9 4 文 さから耳をだして、まんじゅしゃげお  
 十五9 5 文 しゃげおりすてある道のまんじゅし  
 十五10 1 文 れんげつみて子といる母の黒いこ  
 十五10 8 文 さき虫の出でてとぶ見ゆ 人の家に  
 十五11 2 文 ス戸の外に來て鳴け病む人のために  
 十五11 4 文 もゆる庭に來てすずめあさりてとな  
 十五11 4 文 すずめあさりてとなりへとびぬ ガ  
 十五11 6 文 ガラス戸すきてたみにうつりぬ  
 十五12 6 文 の影のうつりて見え 紙をもてラ  
 十五13 7 文 ば家ゆるがして汽車ゆきかえる ば  
 十五14 4 文 る 目をあけてつくづく見ればばら  
 十五15 1 文 に おどろきてわが身も光るばかり  
 十五15 3 文 の花おどろきて見ればその花動く  
 十五15 5 文 く ひるすきていよにあかきばら  
 十五16 3 文 野にはたらきて、土ぼこり顔よごす  
 十五17 2 文 つつあきないて、つづれ着るとも  
 十五19 5 山々がならび立っています。その中で、  
 十五19 5 だんと高くそびえているのが、このユン  
 十五19 8 植物のさきみだれているけいしや面を、  
 十五19 9 言の流れをきざんでいる深い深い谷の上  
 十五19 10 がわれわれを運んでいってくれます。そ  
 十五19 10 われを運んでいってくれます。その登山  
 十五20 1 かの停車場があつて、そこには、氣持の  
 十五20 2 ここかしこに立っています。ある夏のこ  
 十五20 5 カ人の一家族が來て、しばらくとまって  
 十五20 5 、しばらくとまっています。両親と子  
 十五20 8 の家庭教師がついていました。朝の十時

十五20 10 庭教師につれられて、散歩に出て來るの  
 十五20 10 られて、散歩に出て來るのです。ニュ  
 十五21 4 つけた少女の立っているようなけわしい  
 十五21 6 らうようにそびえているのです。ある  
 十五21 8 庭教師につれられて、めずらしい草花を  
 十五21 9 をそろそろと歩いていました。男の子は  
 十五21 10 は、小石を見つけては深い谷の中へなげ  
 十五21 10 谷の中へなげこんで、それがコトコトと  
 十五21 11 トコトと音をたてて下の方まで落ちてい  
 十五21 11 て下の方まで落ちていくのを、おもしろ  
 十五21 12 おもしろそうに見ていました。女の子は  
 十五22 1 下の方にちらばっているひつじのむれを  
 十五22 1 師の手からはなれて行きそうにしていま  
 十五22 4 れて行きそうにしていきました。そのとき  
 十五22 4 頭の上が暗くなって、なんだか大きなあ  
 十五22 6 んなが、おどろいてその音の方へ顔を向  
 十五22 10 音の方へ顔を向けて見ると、三メートル  
 十五22 11 という羽音をたてて、空中に風をまき起  
 十五23 1 中に風をまき起して、みんなの上へ舞い  
 十五23 2 なの上へ舞いおりて來ます。「略。」と  
 十五23 2 「という声をたてて、みんな草の上へひ  
 十五23 3 に、思わずたおれてしまいました。しば  
 十五23 4 した。しばらくして、ふと氣がついてみ  
 十五23 4 て、ふと氣がついてみると、いまだ先  
 十五23 6 す、両親があわててあたりをかげまわる  
 十五23 7 方へゆったりとんで行く大きなやまわし  
 十五23 7 のつめにつかまれて、女の子はばたばた  
 十五23 8 の子はばたばたしているではありません  
 十五24 1 のせにしがみついて、両足で鳥の腹をし  
 十五24 1 めつけるようにしています。だれでしよ  
 十五24 3 地に、草のしげっている場所を見つけて  
 十五24 4 いる場所を見つけて、そこへひつじをつ

十五24 4 こへひつじをつれておりて來ていますと  
 十五24 4 つじをつれておりて來ていますと、急に  
 十五24 4 をつれておりて來ていますと、急に目の  
 十五24 5 の女の子をつかんで舞いおりて來ました  
 十五24 6 つかんで舞いおりて來ました。いまそれ  
 十五24 7 子は、どこへ持って行かれるかわかりま  
 十五24 8 ないこともわすれて、思わず鳥のせにと  
 十五24 12 の上へ乗りうつて、両足で鳥の腹をし  
 十五25 1 りと鳥のせにつけて、右手で鳥のつばさ  
 十五25 2 左手を長くのばして、鳥が大づめでつか  
 十五25 2 が大づめでつかんでいる女の子のからだ  
 十五25 11 たえられなくなつて、羽ばたきも苦しげ  
 十五26 1 るように舞いおりて行きました。けれど  
 十五26 5 谷底の地面へおりてしまわなければなら  
 十五26 11 地を上からさがしているような氣持で、  
 十五26 12 き大きな声をだして人々を呼んだり、と  
 十五27 1 文 うぶだ、安心しておいで、私がいま  
 十五27 2 文 私がいますくつてあげるから。」とい  
 十五27 3 が、下につかまれている女の子は、あき  
 十五27 4 それともおどろいて氣でも失ったのか、  
 十五27 5 もせず、じっとしています。もう呼吸も  
 十五27 6 少年の氣にかかつてきました。とにかく  
 十五27 9 、少女を下にさげて、ずんずん、落ちる  
 十五27 10 、下へ下へとおりて行きました。もう、  
 十五27 11 「略。」といっている人々の目には、  
 十五27 12 しか見えなくなつてしまいました。その  
 十五28 4 るところを目がけておりて行きました。  
 十五28 4 るを目がけておりて行きました。すると  
 十五28 8 で、右手をはなして、手早く、自分のこ  
 十五28 8 自分のこしにさしていた短刀をぬいて、  
 十五28 9 ていた短刀をぬいて、鳥がそのあき地へ  
 十五28 12 、鳥のせ骨をさけて一つつき通し、鳥



十五 29 2 うげきにおどろいて、思わず羽ばたきす  
十五 29 3 とともに、つかんでいた女の子をはなし  
十五 29 3 た女の子をはなして、あおむけにたおれ  
十五 29 8 はすぐにとび起きて、きずのいたみもか  
十五 29 9 少年にとびかかって來ました。両方とも  
十五 29 11 い、昔の物語に出てくる英ゆうのように  
十五 29 12 相手を待ちかまえていました。大わしは  
十五 30 2 だこうと、向かって來ました。けれども  
十五 30 6 まき起すようにして、少年の周囲をおお  
十五 30 7 いきおいでせまってきた。その目、  
十五 30 9 にかばうようにして、すこしあらずさつ  
十五 30 9 すこしあらずさつ、岩角へ身をよせか  
十五 31 1 ルほどまでせまって來たこのあくまの胸  
十五 31 1 くまの胸をめがけて、全身の力をこめて  
十五 31 2 、全身の力をこめて投げつけました。ね  
十五 31 3 いたでにおどろいて、ぱっと一まず舞い  
十五 31 4 が、まだこりないでやって來ました。そ  
十五 31 8 はさげび声をたてて、苦しきまぎれに、い  
十五 32 1 苦しい戦いを続けていました。そのとき  
十五 32 2 という人声が聞えてきました。少女の両  
十五 32 4 じかいたちを頼んで、大急ぎでおりて來  
十五 32 4 で、大急ぎでおりて來たのです。ようや  
十五 32 4 うやく道を見つけて、この鳥と少年との  
十五 32 4 鳥と少年との戦っている岩角近くまで來  
十五 32 5 。けれども、戦っている人と鳥とはむち  
十五 32 6 。血まなこになって目の前のてきを相手  
十五 32 6 のてきを相手にしているものには、なん  
十五 32 7 でむちゅうになつて少年目がけてとびか  
十五 32 9 なつて少年目がけてとびかかっていた大  
十五 32 9 がけてとびかかっていた大わしは、空中  
十五 32 10 くるくる舞いをして、下の方へ、谷の中  
十五 32 11 へ、谷の中へ落ちて行きました。少年は

十五 32 11 。少年はほつとして、思わず後へたおれ  
十五 33 1 つじかいが集まって來ており、父親のう  
十五 33 1 かいが集まって來ており、父親のうでに  
十五 33 2 、にこにこわらつて、この自分のすくい  
十五 33 3 主へ手をさしだしていました。そのとき  
十五 33 10 少年をほめたたえていたようでした。  
十五 34 8 には、なわを結んで、その結びかたや、  
十五 34 9 の太さなどによつて、いろいろな考えを  
十五 35 4 どでしるしをつけてしめすことも行われ  
十五 35 7 んだんりやくされてきたものが、文字と  
十五 36 1 がだんだん變つて、しだいに形のきま  
十五 36 2 になつたといわれている。漢字 漢字  
十五 36 2 は、線を横に引いて、「・」をその線の  
十五 36 9 したにおいたりして表わした。「上」「下  
十五 36 10 ともと形をうつしてできたものであるが  
十五 37 2 、それに線を加えて、「も」とか、「す  
十五 37 3 文字を組みあわせて表わすこともくふう  
十五 37 5 と「月」をあわせて「明」が作られ、「  
十五 37 6 木」を二つならべて「林」、三つ重ねて  
十五 37 7 「林」、三つ重ねて「森」が作られた。  
十五 37 7 側に「木」を書いて、「えだ・いた」な  
十五 37 8 「支・反」をおいて、「シ・ハン」とい  
十五 37 10 み」などをつかつて、その漢字の意味に  
十五 38 2 った日本語をあてて読むこともした。こ  
十五 38 3 ふたとおりに読んできたが、中國の発音  
十五 38 4 しかも、字によつては、いくつかの音の  
十五 38 8 たをちよつと考えてみただけでも、この  
十五 38 10 った漢字をつかつているうちに、その漢  
十五 39 3 字の一部分をとつて作つたもので、たと  
十五 39 6 日本文化にとつて、ほんとうに大きな  
十五 39 11 てこのかなによつて書かれた作品である  
十五 40 3 字の長所をいかして、かなに漢字をてき  
十五 40 4

十五 40 5 表わしかたとなつてゐる。ローマ字  
十五 40 10 の大半につかわれている文字である。ロ  
十五 41 3 フェニキアに移つてフェニキア文字とな  
十五 41 4 ギリシアに傳つてギリシア文字となり  
十五 41 5 字がローマに移つて、現在のような形に  
十五 41 8 ローマ字を利用して、発音のちがつてい  
十五 41 8 て、発音のちがつてゐる多くの國々のこ  
十五 41 9 ばが書き表わされている。日本のことば  
十五 41 11 と、字数が少なくてすむばかりでなく、  
十五 41 12 表わすことができて、標準語の教育に役  
十五 42 5 類の文字をつかつており、そのうえ、ロ  
十五 42 6 の教育にも努力している。しかし、考え  
十五 42 7 る。しかし、考えてみると、世界のどこ  
十五 42 8 もの文字をつかつてゐる國があろうか。  
十五 42 10 をもつとよく考えてみよう。四 めぐ  
十五 43 4 しょうこうが歩いてゐたが、ふと、ある  
十五 43 5 インドにかざられてあるさらやちを、  
十五 44 8 店の主人はあわてて、「たいへん焼物が  
十五 45 1 がね——」といつて、すすめられたいす  
十五 45 1 られたいすにかけて、樂しそうに語りだ  
十五 45 3 りが、明治になつてすつかりようすを變  
十五 45 4 かりようすを變えてしまつたので、それ  
十五 45 5 えむずかしくなつてきた。そこで、日本  
十五 45 6 新しい方法を學んで、つぎつぎと近代的  
十五 45 7 工業の道をたどつていくようになった。  
十五 45 9 本政府から頼まれて、鉄ぼうのうちかた  
十五 46 1 をひとりで散歩してゐた。ひくい屋根も  
十五 46 2 、のき先にかかつてゐるおもしろいかん  
十五 46 3 る小さな店先に出ていた一まいの赤絵の  
十五 46 4 のはちを手にとつて、かれは、びつくり  
十五 47 1 ときどき焼いては、この店に持つて  
十五 47 1 〇、この店に持つて來ますが、なにぶん

15478 は、お庭焼といって、自分の家であつかう  
 15479 焼物とかを作らせていたが、そのお庭焼  
 154711 、いちばんすぐれていたという。このお  
 15481 十数人かかえられていた。そのほかに、  
 15483 田に赤絵町を作つて住み、この赤絵製作  
 15484 ように、保護されていた。ところが明治  
 15485 ころが明治になって、はん主の保護がな  
 15486 と赤絵屋がわかれてしごとをしていたた  
 15486 かれてしごとをしていたため、ひとりで  
 15488 の技術をどうかして残したいと考え、自  
 154811 黄色くなつたりして、失敗に失敗を重ね  
 154811 失敗に失敗を重ねていった。職人のちん  
 154910 がこれに目をとめて買うことがあるとい  
 154911 ということを聞いて、作品を東京や箱根  
 15501 つかくうけついでできたこのしごとは、  
 15502 とは、ぜひ続けてください。この焼物  
 15503 ものが一つ消えてしまうことになりま  
 15505 外国人にも話してあげましょう。どう  
 15506 衛門さんに伝えてください。」これを  
 155012 物にひきつけられていろいろな焼物を集  
 15511 年の月日をへだてて、いま、まごたちに  
 15511 、まごたちによってふたたび結ばれるこ  
 15524 オード大学に学んでいた私は、一年半の  
 15526 あげた論文を持って、その出版の用事か  
 15527 ぼった。真心こめて教えてくださった世  
 15527 。真心こめて教えてくださった世界的魚  
 15528 士は、別れに際して、各地の大学者たち  
 155210 ろいろてはずをしておいたから、ぜひカ  
 15533 と無事に旅を進めて、カーネギー博物館  
 15536 守衛にみちびかれておくまった館長室の  
 15537 たのち、意を決して大きなドアをコソコ  
 155311 いいながらうたせているしらがの老しん

15541 時代からそんな敬していたあの有名な「ち  
 15544 みよる私が手にしているようないかい状に  
 15545 い状に目をそそいで、「略。」と、私が  
 15547 ン博士からいつてきていた日本の学徒  
 15547 士からいつてきていた日本の学徒、大  
 15549 うちに先手をうって、かたわらにあった  
 155412 者がだれものぞんでいるカーネギー博物  
 15551 分の論文を出版してもらうことで、恩師  
 15552 くらすすめられていた。あいさつを終  
 15552 。あいさつを終つて、用事をきりだすと  
 15553 と、話に聞きいつていたホランド博士は  
 15558 それはそれとして、きようはきみがま  
 15559 日本の話をさせてもらおう。私が日本  
 155512 なもよおしをしていたものだ。そのこ  
 15563 角測量が行われていなかったで、富  
 15564 、小手をかざして足の下にひろがる駿  
 15565 の角度を目算して紙上計算してみたが  
 15566 して紙上計算してみたが、その際算出  
 15568 はるばるたずねてみたあなたへのご  
 155610 について話をしなう。そうそう  
 155612 私がまだわかつてアムスト大学の助手  
 155612 の助手をつとめていたころ、寄宿舎で  
 15571 きの室をつかっていた。ところがある  
 15572 教授がやつて来て、きみは室を二つも  
 15572 室を二つもつていてるようだが、その  
 15573 青年をとまらせて、そのせわをしては  
 15573 、そのせわをしてはくれまいかと、や  
 15576 さつそく承知して、はじめて見る東洋  
 15579 アメリカといつて、たがいに向かいあ  
 155711 スチャンになつていたが、ある日のこ  
 15581 り日本語を教えてください、その申し出  
 15582 し出でを承知して、私はすぐに授業に

15585 遠い昔を思い出して、ひとりそのときの  
 15586 の思い出にふけていられるようすだっ  
 155810 地質等をこのんで勉強す。」とある  
 155812 しろいた。こうしてなお語り続けようと  
 155812 る博士をさえぎつて、「略。」と、あり  
 15591 私はいく知っています。私は小さい  
 15594 きみたちが知っていますはずがない。」  
 15596 のあくほど見つけていた博士は、つと立  
 15597 、つと立ちあがつて、「略。」と、あつ  
 15599 本人が舞いこんで来たものだ。それな  
 155912 、あつけにとられていたタイプストをし  
 15601 に、げんかんに出て、横づけにしてあつ  
 15601 出て、横づけにしてあつたりつばな自動  
 15603 だいに胸にだいてはぐくみ育てていた  
 15604 いてはぐくみ育てていた新島のおじさん  
 15604 幌のこう外に養つていたのは、明治二十  
 15606 士の精神のやどつていた札帳立教会を  
 15607 教会をつかさどつていた私の父とは、心  
 15609 満ぼう」でとおつていた私は、そのとき  
 15610 に、長男に生まれて父母の愛を一身に集  
 15611 の愛を一身に集めていた身にとつては、  
 15611 めていた身にとつては、天下におそるべ  
 15611 っぱいにふるまっていた。新島のおじさ  
 15612 「略。」といつて私をかわいがつた。  
 15613 った。京都に帰つてから父に送った手紙  
 15615 と、必ず書きそえてあつたのを見ても、  
 15615 えてあつたのを見ても、その愛されかた  
 15617 った家につれられて行つても、思うぞん  
 156110 の用意をととのえて、「略。」と、私を  
 156111 いところへつれて行つてあげるから、  
 156111 へつれて行つてあげるから、さあ、  
 15621 げんかんへ出かけて、ふみ石の上にそろ

十五 62 2 み石の上にそろえてある大小二つのくつ  
十五 62 3 まちふくれあがってだをこねだした。  
十五 62 7 「略。」といって、おじさんはおぼさ  
十五 62 8 おぼさんについてごらん。」小さな声  
十五 62 10 んは、腹をかかえてわらいだした。「略  
十五 62 11 んのくつは光っているのに、ぼうやの  
十五 62 12 はいやだといっているのですよ。なん  
十五 63 5 んは、きちんと着ていた上着をかなぐり  
十五 63 6 着をかなぐりすてて、かた手に小さなく  
十五 63 9 なブラシをつかんで、力のかぎりみがき  
十五 64 1 だされたくつを見て、にこにこわらっ  
十五 64 4 はそのあとを追って出て来られたが、門  
十五 64 4 のあとを追って出て来られたが、門を出  
十五 64 5 られたが、門を出て十メートルとは行か  
十五 64 7 ステッキを持っておくれ。」おじさん  
十五 64 8 道ばたにしゃがんで、自分のせをたたき  
十五 65 1 さん、早く歩いてよ。」と命令した。  
十五 65 5 しかけながらついていらっしやった新島  
十五 65 6 私の胸にやきついていいる。秋たけりん  
十五 65 7 いている。秋たけりんごのみのるころ  
十五 65 8 目についたといつて、車のついたみごと  
十五 65 9 もちやを私に送ってくださった。喜んで  
十五 65 11 ねむりをさまたげてしかたがない。そこ  
十五 65 12 ついたものは送ってくださったなど、くじ  
十五 66 2 むしや人形にそえて、ご両人の名まえ入  
十五 66 3 へと名ざしで送ってくださった。それか  
十五 66 5 その人形をかざって、ありし日をしのぶ  
十五 66 7 された願いによって、私の父は、同志社  
十五 66 8 、北海の地をすてて、京都にすまいを移  
十五 66 10 とり父につれられて、景色の美しい京都  
十五 67 1 んは廣島におられて、学校のいきかえり  
十五 67 2 、かたくとざされてあった。そのうちに

十五 67 3 マスの日がめぐってきた。新島家のとな  
十五 67 5 るのを待ちかまえていた老婦人が、「略  
十五 67 7 略。」ときげんで、しつかと私をだき  
十五 67 12 あるかねがつるしてあつて、これでた  
十五 67 12 ねがつるしてあつて、これでたけとい  
十五 68 1 、しゅもくがそえてあつた。「略。」と  
十五 68 4 もなくドアがあいて、半身をだした老婦  
十五 68 5 。みんな早く出ておいで、満ぼうが来  
十五 68 10 おじさんが生きていたら、どんなにか  
十五 69 1 ままに、顔をあげてへき面を見あげると  
十五 69 3 いなしかやわらいで見え、その口もとが  
十五 69 3 口もとがほころんで声さわやかに「略  
十五 69 7 が日夜ふでをとっていられたという大き  
十五 69 8 の写真がかざられてあるではないか。あ  
十五 69 9 を京都までもつれて来て、朝夕かわいが  
十五 69 9 都までもつれて来て、朝夕かわいが  
十五 69 10 、朝夕かわいがつてくださったのだ。手  
十五 69 10 びごとに、どうしているかとたずねられ  
十五 69 12 眞の主が、こうしておじさんを見あげて  
十五 69 12 おじさんを見あげているのに、おじさん  
十五 70 1 だ。暗い心になって、じっとおじさんの  
十五 70 6 いすにこしかけてごらん。」とおし  
十五 70 9 赤インキがおいてあるでしょう。おじ  
十五 70 11 んは、年とられてから目がわるくなっ  
十五 70 11 目がわるくなつてね、手紙でもなん  
十五 70 12 ンキで書かなくては見えないようにお  
十五 71 1 のペンをにぎってごらん。おじさんの  
十五 71 2 すにこしをかけて、ペンをにぎって  
十五 71 3 ペンをにぎっている。このすがたを  
十五 71 4 たら——といつて、おぼさんは声をく  
十五 71 5 よにお寺へ行って来ましよう。そうし  
十五 71 12 「略。」といつて、私をひきよせた。

十五 72 10 った。ドアをおして、つかつかと中にす  
十五 73 1 は書さいはいって、しきりにさがしも  
十五 73 1 にさがしものをしておられたが、やがて  
十五 73 4 い思い出にうたれていいる私の目の前で、  
十五 73 6 「略。」といつて、日記をくりひろげ  
十五 73 6 くえに白線をひいて「國境」をつくつた  
十五 73 9 さをどこかにさけて、家の中はがらんと  
十五 73 9 の中はがらんとしていた。やがてお書ど  
十五 73 12 てその名を知られていた老博士は、きよ  
十五 73 12 は、きょうにきて、アメリカの考えか  
十五 74 1 ついて熱意をこめて語られた。——親の  
十五 74 3 がどんなにちがつていようと、かわい  
十五 74 3 はみな同じであつて、そこになんのけじ  
十五 74 5 のちがいは別として、一方が先に生まれ  
十五 74 6 とで、それによって兄が特権を與えられ  
十五 74 8 、同じ機会を與えて、社会に果だたせた  
十五 74 12 が、ここからわいてくるのだ——と、テ  
十五 75 1 テーブルをたたいて立ちあがった老博士  
十五 75 4 、「と、力をこめてさげびながら、その  
十五 75 5 、満面べにをさして語られたホランド博  
十五 75 8 のてんまつを傳えてくれといひながら、  
十五 75 11 の意味をときかかえていた私のようすを見  
十五 75 12 た私のようすを見て、大きな声でわらわ  
十五 76 3 なお満ぼうを守つていてくださったのだ  
十五 76 3 満ぼうを守つていてくださったのだ。私  
十五 76 5 、停車場まで送つてくださった博士のこ  
十五 76 5 う意をふかく謝して、別れの手をさし  
十五 76 6 間の考えとちがつていても、その発表を  
十五 78 1 の発表をためらつてはならない。はじめ  
十五 78 2 世間の人間にとつて眞実であるものは、  
十五 78 4 とりの人間にとつて眞実であるものは、  
十五 78 7 のは、他人にとつても眞実だからである  
十五 78 8

1578 11 ような身ぶりをしてはならない。すなお  
 1579 6 親しくおたずねして、町や、家や森や、  
 1579 8 ということを学んでいる日本の子どもさ  
 1579 11 が、いつもおかれてあります。歴史の上  
 1580 5 らず、世をすごしてきたばかりでなく、  
 1580 7 おそれあったりしてきました。友愛の精  
 1580 9 ともっとひろがっていきますように。そ  
 1582 4 でいちばんふとっている「幸福」(ぜい  
 1582 6 ねむりこけたりしています。みんなびっ  
 1582 7 ないほど、ふとっていて、びろうどや、  
 1582 8 ほど、ふとっていて、びろうどや、にし  
 1582 9 頭にいっぱいつけています。チルチルと  
 1582 10 は、はじめはいつて来たとき、すこしは  
 1582 11 、すこしはに cand、みんな右手の前の  
 1582 11 に、光をとりまいてかたまっています。ま  
 1582 11 りまいてかたまっています。ねこは  
 1582 12 方のおくへ向かって歩いて行って、黒い  
 1582 12 くへ向かって歩いて行って、黒いまくを  
 1583 1 かって歩いて行って、黒いまくをあけて  
 1583 1 、黒いまくをあけて、すがたをかくして  
 1583 1 、すがたをかくしてしまします。チルチ  
 1583 2 2 をたくさんたべて、うれしそうにして  
 1583 3 うれしそうにしているふとった人たち  
 1583 7 まにまよいこんでいないともかぎらな  
 1583 8 ンドを、まわしてはいけけないよ。ほん  
 1583 9 間の方をさがしてみよう。」チルチル「  
 1583 10 、あそこへ行っていいの。」光「いい  
 1585 2 ルの光栄になっているさとうがしを。  
 1585 2 うがしを。いってみれば、すばらしく  
 1585 3 ばらしく美しく、この廣間のなにも  
 1585 3 ものをもおさえている。いや、どこの  
 1585 4 ものをもおさえている。あのさとうが

1585 7 福のような顔をしているなあ。あれ、『  
 1585 7 キャット』といっている。わらいこけて  
 1585 8 いる。わらいこけている。歌を歌ってい  
 1585 8 いる。歌を歌っている。なんだか、あ  
 1585 10 テーブルをはなれて、大きなおなかを両  
 1585 11 かを両手にかかえて、たいぎそうに、子  
 1586 2 う。それを受けてはいけけない。なにも  
 1586 2 い。なにも受けてはいけけない。でな  
 1586 3 用むきをわすれてしまからね。」チ  
 1586 6 1586 6 の氣持をくじいてしまからね。」チ  
 1587 1 1587 1 チルびっくりして、「略」。ふとった  
 1587 1 た、ぼくを知っているの。あなた、ど  
 1587 6 うなおなかをしています。これが『み  
 1587 8 あがった顔をしています。(「みたされ  
 1587 9 『のどのかわいていないときに物を飲  
 1588 7 口は耳までさけているし、だれもそれ  
 1588 10 こし横の方に立っているひとりの「幸福  
 1588 10 「幸福」を指さして、チルチル「それか  
 1588 11 まにはいらなくて、せなかをむけてい  
 1588 12 、せなかをむけているのはだれです。  
 1589 6 さんがたを待っていたのです。あのと  
 1589 7 さんがたを待っていたのです。あのと  
 1589 8 ちしょうかいしてはいられない。なに  
 1589 11 やんと席がとってありますよ。」チル  
 1590 2 、たいへん急いでいるのです。青い鳥  
 1590 3 青い鳥をさがしているのです。たぶん  
 1590 4 、どこにかくれているか、ごぞんじな  
 1590 7 かそんな話をしていたつ。なんでも  
 1590 8 なんでも、たべてはうまくない鳥だそ  
 1591 1 なかまにはいって、わたしたちのする  
 1591 11 チルチルに向かって、「略」。こんな話  
 1592 1 「こんな話をしてるまに、「ふとっ

1592 2 、パンをときつけて、えん会の中にひき  
 1592 2 中にひきずりこんでしまいました。チル  
 1592 3 くテーブルについて、飲んだり、たべた  
 1592 4 はねまわったりしていました。チルチル  
 1592 11 そこでなにをしているんだ。」パン口  
 1593 1 ことばをつかってもらいたいのです  
 1593 3 かおまえについているな。それから、  
 1593 4 で、「物をたべているときは、だれに  
 1593 5 だれにもかまっていられませんか。なに  
 1593 9 あ、きみを待っているのだ。おことわ  
 1593 11 やでも幸福にしてしまおうじゃないか  
 1593 12 もたちをひきずって行くとする。その  
 1594 6 幸福」どもがにげて行くのを見ながら、  
 1594 8 ころへにげてこんでしまのさ。」チル  
 1594 9 そこらを見まわして、「略」。光「同じ  
 1595 10 の子たちを知っているの。」光「みんな  
 1595 11 光「みんな知っているよ。」チルチル「  
 1596 3 。あれだけ残っていればいいや。」光「  
 1596 7 った来た。かけて行って会おうよ。」  
 1596 7 た。かけて行って会おうよ。」光「むだ  
 1596 9 の者にまで会っているひまはないよ。  
 1596 12 おくからかけだして来て、子どもたちの  
 1596 12 からかけだして来て、子どもたちのまわ  
 1596 12 わりで、わになっておどります。チルチ  
 1597 1 だ。どこから出て来たのだろう。だれ  
 1597 4 ルチル「話をしてもいいの。」光「まだ  
 1597 9 いほつたをえているのだろう。なん  
 1597 10 いらしい服を着ているのだろう。この  
 1598 6 んができなくなつて、「略」。光「それ  
 1598 9 が青い鳥を持っていないことは、わか  
 1598 10 ことは、わかっているのだからねえ。  
 1598 11 、大急ぎに急いでいる。ごらん、もう

十五 98 11 会 らん、もう行ってしまった。やはり時  
 十五 99 3 会 間の中かけこんで来て、ありったけの  
 十五 99 3 会 中かけこんで来て、ありったけの声を  
 十五 99 3 会 けの声をはりあげて、「略」と歌い、  
 十五 99 4 会 もたちをとりまいて、陽気なおどりをし  
 十五 99 6 会 た、ぼくを知っている子がいる。(光  
 十五 99 7 会 だん人に知られてくるね。(幸福に向  
 十五 99 11 会 チルすこし困って、「略」。幸福「お  
 十五 100 11 会 。あなたの知っているのは、ぼくたち  
 十五 101 2 会 、息をしりして、くらしているの  
 十五 101 2 会 りして、くらしているのですもの。」  
 十五 101 4 会 名まえを聞かせてくれたまえ。」幸福  
 十五 101 11 会 幸福』でつまっているじゃないの。ぼ  
 十五 102 2 会 喜びをこしらえているのですよ。でも  
 十五 102 3 会 たちがなにをしていますが、あなたには  
 十五 102 9 会 んどすきとおっています。これは、『  
 十五 102 10 会 み色の着物を着て、いつでもすこし悲  
 十五 102 11 会 し悲しそうにしているのは、だれもふ  
 十五 102 11 会 だれもふり向いてくれないからです。  
 十五 103 1 会 い色の着物を着ていますし、これは、  
 十五 103 2 会 どの着物を着ています。外へ出れば  
 十五 103 4 会 ド色の着物を着ていますし、これは、  
 十五 103 5 会 いたまの色をしています。」「チルチル」  
 十五 103 10 会 ぴかの着物を着てついています。それ  
 十五 103 11 会 着物を着てついています。それからお  
 十五 103 12 会 をいっばいつけています。それから、  
 十五 104 11 会 いさげび声をたて、なにかにぶつかり  
 十五 104 11 会 チルチルに近づいて来ます。鼻を指では  
 十五 104 12 会 く足でけたりして気がいのように  
 十五 105 2 会 チルびっくりしてひどくおこって、「へ  
 十五 105 2 会 してひどくおこって、「略」。幸福「な  
 十五 105 4 会 らあなからにげて来た」とてもたまた

十五 105 6 会 きら光る着物を着て、そろそろとやって  
 十五 106 1 会 つもにっこりしています。でもぼくは  
 十五 106 6 会 幸』をなぐさめてやるのがすきな  
 十五 106 9 会 めなものになってしまふのです。右の  
 十五 106 11 会 る喜びが立っています、あれは、  
 十五 107 1 会 幸福』をさがしているのです。」「チル  
 十五 107 3 会 なかまにはいつてしまった。」「幸福」そ  
 十五 107 4 会 れはわるくなつてしまったのです。わ  
 十五 107 5 会 かまとつきあつていたものだから、す  
 十五 107 6 会 すっかりくさつてしまったのですね。  
 十五 107 7 会 それを妹にいつてはいけません。する  
 十五 107 8 会 しに行きたがつて、つまり、ぼくたち  
 十五 107 9 会 のがいなくなつてしまふわけですから  
 十五 107 12 会 しい光線を加えていくのです。」「チル  
 十五 108 2 会 、つま先で立つて、やつと見えるくら  
 十五 108 5 会 うあなたがやつてみたつて、あれをす  
 十五 108 8 会 で、ちつとも出て来ないのは。」「幸福  
 十五 108 10 会 にをしようとしているの。なぜ横つち  
 十五 108 12 会 喜び』をむかえているのですよ。その  
 十五 109 5 会 ん底におちつけて、よくごらんさい  
 十五 109 6 会 人、あなたを見えています。そら、手を  
 十五 109 6 会 ら、手をひろげてこちらへかけてくる  
 十五 109 6 会 てこちらへかけてくる。あれが、あな  
 十五 109 9 会 。」方々から急いでかけよつて来た「喜  
 十五 109 9 会 ら急いでかけよつて来た「喜び」たちは  
 十五 109 9 会 び」を手をたいてむかえます。母の愛  
 十五 110 1 会 よう、ここにいて、それはさびしかつ  
 十五 110 2 会 あさんにだかれておくれ。なにが幸福  
 十五 110 2 会 にか幸福といつて、これほどの幸福は  
 十五 110 4 会 おかあさんににているけれども、ずつ  
 十五 111 10 会 と日の光がさしてきてね。」「チルチル」  
 十五 111 11 会 の光がさしてきてね。」「チルチル」おも

十五 112 1 会 をどこにしまつてあるの。それは、お  
 十五 112 3 会 なの中にはいつてあるの。」「母の愛」  
 十五 112 4 会 てこの着物を着ているのよ。けれど、  
 十五 112 6 会 のは、目を閉じていると、なんにも見  
 十五 112 12 会 しそうな顔をしてるときでも、ほお  
 十五 113 1 会 、ほおずりをしてもええ、すぐその  
 十五 113 2 会 の中の星になつてしまふのですよ。」「  
 十五 113 6 会 さな指をはめてみる。おまけに、い  
 十五 113 12 会 まえのせわをしているときは、いつだ  
 十五 114 1 会 んなに白くなつて、光がさすのね。  
 十五 114 5 会 まり用が多すぎて、ひまがないのだよ  
 十五 114 7 会 小さな家に帰つて、私がぼろぼろの着  
 十五 114 8 会 ぼろの着物を着ていても、わかるだろ  
 十五 115 1 会 の上まであがつて来たのは、これから  
 十五 115 1 会 れから下へ帰つてから、どういうよう  
 十五 115 4 会 まだけ天國に來ていると思つてけるけ  
 十五 115 4 会 來ていると思つてけるけれど、おまえ  
 十五 115 10 会 さんをよく覚えて、だいにすること  
 十五 115 11 会 ることをわすれてはなりませんよ。で  
 十五 115 12 会 こまであがつて來られたの。人間が  
 十五 116 1 会 地上に住みついてからこのかた、いつ  
 十五 116 1 会 もたずねあぐんでいた道が、どうして  
 十五 116 3 会 しくすこしさがっている「光」を指さし  
 十五 116 3 会 「あの人がつれて來てくれたの。」「母  
 十五 116 4 会 の人がつれて來てくれたの。」「母の愛」  
 十五 116 8 会 りをかわいがつて、たいへんしんせつ  
 十五 116 9 会 んしんせつにしてくれるそうだね。で  
 十五 116 10 会 なに顔をかくしているの。あの人、顔  
 十五 116 12 会 うつて、心配しているのですよ。」「母  
 十五 117 2 会 いぶん待ちわびていることを、知らな  
 十五 117 5 会 』がとうとう來てくれました。」「物の  
 十五 117 11 会 、あなたを求めていた「正義であるこ

十五118 2 会、あなたをすいている『美しいものを  
 十五118 7 会 私たちは、強くて、純潔です。』光い  
 十五118 8 べールをかぶって、「略。」母の愛  
 十五118 9 会 いいつけを守っているのです。ときは  
 十五118 11 会 もおそれず帰って来ます。さようなら  
 十五118 12 会 んな起きあがってお別れしましょう。  
 十五119 7 す。やがてはなれて顔をあげますと、ふ  
 十五119 7 にはなみだが光っていました。チルチル  
 十五119 8 チルびっくりして、「どうしてないて  
 十五119 8 会 「どうしてないているの。(ほかの「  
 十五119 9 会 や、みんなないているのだな。でも、  
 十五119 10 会 いなみだをためているの。」光「まあ、  
 十五119 12 会 「まあ、だまっておいでよ、いい子だ  
 十五120 2 先生のお話を聞いていると、ずっとまえ  
 十五120 3 ことが思い出されてきた。はじめてこの  
 十五120 4 、はつきりうかんできた。在校生たちが  
 十五120 5 に送別の歌を歌ってくれた。その歌を耳  
 十五120 6 級生をかわいがっておけばよかったなと  
 十五121 1 会 この学校を愛してくれ。」私が答辞を  
 十五121 4 とがすこしも書けていないことに気がつ  
 十五121 6 いと思った。読んでいるうちに先生がた  
 十五121 8 感謝の念があふれてきた。それはなんと  
 十五122 1 会 あえ。愛しあって生きていけ。これが  
 十五122 1 会 愛しあって生きていけ。これがこの級  
 十五122 4 ような氣持をだいて、この日記のふでを  
 十五122 7 が、私にも書かせてください。きょうの  
 十五122 9 みんなで、合唱してくださった校歌や、  
 十五123 5 年の思い出を残してくれたこの運動場、  
 十五124 3 門出、希望をもって。校門のかしの木よ  
 て (終助) 1 て  
 三83 5 会 「あなたたち、にじが みえて。」とお  
 ききに なりました。

て 1 て  
 四78 8 て——てん手まりをつきましよう。  
 で 「出」(名) 1 出いおもいで・かどで・ふなで  
 十五103 9 会 『星の出を見ることの幸福』が、  
 で (接) 1 で  
 十一87 11 少年がベッドのそばのほと場所に戻る  
 と、病人はほつとしたようにみえました。で、チ  
 しろはまた看護をはじめました。  
 で (格助) 973 じゃ でいそこで・それで・それで  
 は・ところで・なんで  
 一17 9 う。せみがどこかでなぎだした。九  
 一22 5 ないで」のところで、おともだちとて  
 一23 5 うたをうたえ」では、くちにてをあ  
 一23 7 た。「くつがなる」では、あしぶみをし  
 一23 10 らにくつがなる」では、てをうえにさ  
 一28 8 会 なたは、その目でなにをみましたか  
 一28 9 会 のう、そのみでなにをききました  
 一30 7 ませんか。この手で、なにをもつたで  
 一31 1 でしょう。この手で、なにをもつたで  
 一31 3 でしょう。この足で、どこへいったで  
 一31 5 でしょう。この足で、どこへいくでし  
 一41 2 たる。うちのなかではなした。でんと  
 一41 5 だ。はしらのかげで、ぴかり、ぴかり、  
 一44 2 ききますと、どこかで、「略。」という  
 一44 3 会 るすいよ。ふたりでいっていらつしや  
 一45 8 した。へやのなかでは、しろいきもの  
 一46 8 した。つぎのへやで、こしをかけてま  
 一47 3 くしをむしめがねで、のぞいてみながら  
 一54 3 会 お月さんのくには、一ねんに一ど  
 一55 2 会 しのたまひろいで、きれいなたまが  
 一60 3 会 ただいたおかげで、しろちゃんは、げ  
 一60 10 会 みんな、あまの川で、だいやもんどをひ

一64 3 を、おおきなこえてうたいました。「へ  
 一64 9 おかあさんのこえて目がさめました。  
 二44 4 ことばを、みんなであつめてみましょ  
 二69 9 会 さんが、「あとで。」といいました。  
 二83 3 、「と、へんなこえていったので、みん  
 二22 2 会 もみじのはっぱで、いろはあそびを  
 二27 2 会 のはしのまん中で、であいました。『へ  
 二28 2 会 せまいはしの上で、つのおしあつ  
 二33 1 会 した。『いや、目でみなくても、手で  
 二33 1 会 みなくても、手でさわったことが  
 二40 2 ながめます。どこかで、かつこうが、「略  
 二40 3 と、とおくのほうでも、「略。」とな  
 二40 4 ろうが、大きな声で、「略。」とさけ  
 二40 6 と、むこうのほうで、「略。」とさけ  
 二42 6 会 きれいなことばでいえば、あちらだ  
 二43 9 かつこうが、とおくでしずかになきま  
 二45 4 会 長い竹のさおで、ふねをこぎます。  
 二59 3 会 二年生も、これでべんきょうをし  
 二59 5 会 三年生も、これでべんきょうしまし  
 二61 2 びかけです。みんなで、かんがえて、やり  
 二66 10 会 しょう」どこかで、春の音がするよ  
 二67 2 んなは、小さな声で、「しゅしゅしゅし  
 二67 5 とき、かげのほうで、「略。」という  
 二69 4 とき、かげのほうで、「略。」「略。」  
 二70 5 っ、かげのほうで、「略。」「略。」  
 三56 6 会 ろいはたけの中で。」さぶろう「たねま  
 三103 3 会 小さなひしゃくでおちやくんで、  
 三15 8 こりました。ごんでは、おしやかさまが  
 三22 3 いへんないきおいで、ひるもよるも、  
 三23 10 略。」あちらの村でも、こちらの村でも  
 三23 10 村でも、こちらの村でも、こういって、  
 三28 5 会 のいいくすのきでつくったふねだも

三293 した。そのおかげで、日かげになって  
 三302 学校」というだけで、作文をすること  
 三304 へいって、そこで かいていらつしや  
 三308 わかれました。あとで、できた 作文を、  
 三343 生の きょうしつでは、花の しやせい  
 三354 。

三356 。

三361 。

三375 。

三392 道 海のような 空で、ひばりが ないて  
 三404 しようかを、大声で うたいながら ある  
 三4410 した。もう ひと足で りくへ あがろうと  
 三463 まりません。はまべで しくしく ないて  
 三486 だ。早く 川の水で からだを あらって  
 三513 。

三552 。

三572 。

三588 。

三633 。

三705 。

三762 。

三769 。

三773 。

三791 。

三792 。

三891 。

三893 。

三894 。

三895 。

三896 。

三897 。

三945 。

三964 できます。クレヨンで かくことも でき  
 三964 できます。えんぴつで かくことも、ふで  
 三965 かくことも、ふでで かくことも でき  
 三982 ものこります。口で はなしたことは、  
 三102 ばあさんと ふたりで だいに そだてま  
 三111 矢をもった 人たちが、いくえにも とり  
 三1110 やねの上まで、人で いっぱいになりま  
 三1122 めきつたくらの中で、しつかりと かぐ  
 三1124 んは、その いり口で ばんをしていま  
 三1173 、「その 山の上で、ふしの くすりと  
 四710 んざつする 町かどでは、きちんと せい  
 四93 うです。こは、町でも ひょうばんのか  
 四157 がわたしの せなかで ねんねした。わた  
 四189 かあさんの 手の上で、力いっぱい ひい  
 四204 びました。みんな 手をつないで、わ  
 四216 たちは、わの 中で きよろきよろして  
 四224 た。もう すこしで つかまりそうにな  
 四2310 いっしょに、ふねで はたらきたいと思  
 四253 ことを、みんな でお話ししたい日は  
 四258 ふると、どこかで 休んで いると思  
 四261 。

四266 。

四278 。

四297 。

四306 。

四307 。

四317 。

四325 。

四342 。

四415 。

四4310 。

四442 。

四4910 。

四502 。

四551 。

四554 。

四595 。

四6010 。

四624 。

四677 。

四732 。

四815 。

四824 。

四827 。

四829 。

四835 。

四844 。

四844 。

四852 。

四859 。

四968 。

四972 。

四1008 。

四1025 。

四1033 。

四10310 。

四1042 。

四1221 。

四1222 。

四1336 。

四1338 。

五103 。

五109 。

五1010 。

五146 会 「きつぷを改札口でおだし。」「略。」  
 五158 すが、私は、三十銭でどこへでも旅をする  
 五1610 会 「「略。」」こんな話で、かばんの中にはぎ  
 五1810 わかれてした。そこで、私たちは、じょう  
 五271 会 て、電車のおかげで、あんな遠いところ  
 五272 会 ところまで、一日で帰ってきたの  
 五272 会 ですもの。どこかでありがとうといった  
 五283 会 のおとうさんは、店でそろばんをはじいて  
 五336 会 す。船は、なんの力で走るのでしょう。え  
 五341 会 は工場町です。ここで、きかいや、ひりょ  
 五347 会 さんが、だいどころで、ごはんのしたくを  
 五356 会 。さかんに、きかいで石炭をくずしてとつ  
 五384 会 たは、ほっかいどうで、やはり先生をして  
 五399 会 「略。」「こちらでは、さくらの花も、  
 五422 会 けれども、お手紙でよくわかります。ひ  
 五426 会 「略。」「こちらでは、田うえがはじま  
 五433 会 けました。そちらでも、ほたるはとびま  
 五437 会 すから、花ばたけで、よくいっしょにう  
 五462 会 と、しずかな空で光ろうよ。やぶう  
 五465 会 通ったら、おくの方でうぐいすの音がした  
 五474 会 しい小道だ。ひとりで通るときも、みんな  
 五475 会 通るときも、みんな通るときも。たんぼ  
 五537 会 「略。」大きな声で、はるおが、東の空  
 五539 会 「それは、南東の空で光っていました。」  
 五557 会 今夜、学校のわで、ぼうえんきょうで  
 五557 会 、ぼうえんきょうで星をみせますよ。い  
 五605 会 「略。」「あとで写生してごらん。お  
 五626 会 はんるとき、はただけではじめてとれたきゅ  
 五635 会 んは、この話をそばでおききになって、「へ  
 五6311 会 りは、自分ひとりで、大きくなったので  
 五641 会 やおかあさんの力で、大きくなったと思  
 五656 会 おじいさんは、あみでさかなをとり、おば

五719 会 のおくさん、これであなたもまんどくで  
 五744 会 「女王さま、これで、あなたもごまんぞ  
 五754 会 い。あのひろい海で、金のさかなをけら  
 五758 会 ず、力のない足どりで、海へやってきまし  
 五766 会 りたい、ひろい海で、あなたをけらいに  
 五7610 会 いわないで、しっぽでビシャリと音をさせ  
 五787 会 れたのでした。これで教室が明るくなり  
 五795 会 。
 五827 会 かんかんてるるところで長くあそばないこと  
 五842 会 にをするか、みんなて話しあいました。た  
 五846 会 海岸のおじいさんの家で、海の作文を書く  
 五8811 会 「こうして右の手でだいてな、左の手で  
 五8811 会 だいてな、左の手でかかえてさ、それか  
 五9111 会 うえんの下のいたで、あたまをコツンと  
 五954 会 って、たまごのきみですりえをこしらえて  
 五958 会 とうさん、ひとりだとべるようになるま  
 五964 会 す。いまにいい声でさえずりますよ。」  
 五9610 会 早いようだ。自分でえさをとったり、遠  
 五978 会 ったり、かえでの枝で休んだりしていきま  
 五984 会 かなふうちに、自分でもさえずりはじめま  
 五986 会 「ひわが、いい声でさえずりはじめまし  
 五1007 会 と、人なつっこい声で鳴きました。さんち  
 五10011 会 略。」と、へんな声でさえずって、さんち  
 五1028 会 。
 五10410 会 。
 六83 会 、男の子はゆびさきでそれをつまもうとし  
 六88 会 屋さんは、「ここであそんではいけない  
 六98 会 。親子はそうがかりでさがしはじめた。ね  
 六107 会 た。しごと台のそばで、ふさぎこんで下を  
 六111 会 さっそくピンセットでねじをはさみあげて  
 六114 会 やがて、ピンセットでねじをはさんで、き  
 六115 会 、小さなねじまわしでしっかりとめた。

六136 会 た。ありは、川の岸で、うつむいて水をの  
 六137 会 ました。もうすこして口が水にとどきそう  
 六175 会 といつて、大いそぎで木からとびたつてい  
 六2210 会 きりぎりす」ここでいっしょに音楽会を  
 六2310 会 っであげる。ここで楽しくあそんでおい  
 六254 会 いで、おもしろい足どりでかみてにさつていき  
 六274 会 り「そのおかげでさ、いまこうしてあ  
 六286 会 ぎりす」ふたりでたのめば、なんとか  
 六317 会 へのへのもへ」の顔で、風に向かって立つ  
 六4110 会 子つばめ「みんなできみをおんぶするん  
 六421 会 かかし「みなさんで。」親つばめ「南へひ  
 六484 会 り。海 どこかでだれかがめくつて  
 六523 会 からで、大いそぎではなれていきます。  
 六528 会 いで、雲が大いそぎでとんでいくようにも  
 六535 会 い。雲が大いそぎでとんでいくようにも  
 六562 会 かべ新聞 私の学級では、来週から、かべ  
 六564 会 新聞第一号は、一組でつくることになりま  
 六573 会 こんど私たちの学級で、かべ新聞を発行す  
 六585 会 子が、学校にぐる道で、はき物に雪がつい  
 六621 会 「ねこは、こたつでまるくなる。」一口  
 六629 会 じかい文 朝日の光で、アルコールのびん  
 六652 会 ぞ 一世界じゅうで、いちばん力のつよ  
 六685 会 それは、むしめがねでよくみながら書いた  
 六687 会 。一組の人がみんな考えてこしらえたま  
 六718 会 、まえに「こくご」でならった「よみかき  
 六7410 会 動いても、それだけでは命があるとはいえ  
 六768 会 した。ごろうが学校で、「略。」「略。」  
 六799 会 、いつか「こくご」でならった「あさがお  
 六867 会 りのみことは、海べでなっている。そこへ  
 六925 会 こと「じつは、海でつりをしていたら、  
 六9311 会 た。」海の神「これでみんなか。」女「はい  
 六942 会 たいだけは、病気でねておりますので、



六九二(会)。「たい」あ、これですっかりらくになり  
 六九三(会)の人はつりぼりを水であらって、海の神に  
 六九六(会)たち、みんなでもうやら、うたうや  
 六九七(会)であった。「これで、いつか、おとうさ  
 六九八(会)とき、また紙を糸できりきりとまいて、  
 六九九(会)いようにした。これで、一本のつがで  
 七〇〇(会)「といって、みんなで大わらいをした。弟  
 七〇一(会)で、みんなは、これで大わらいとなった。  
 七〇二(会)ぼくは、このおかげで、おもしろいことに  
 七〇三(会)ましてから、ひとり、なぜはながつまる  
 七〇四(会)ミ、「ム」と自分で声をだしていつてみ  
 七〇五(会)そこでぼくは、自分ではなをつまんで、は  
 七〇六(会)しかとなった。自分ではなをつまんで、「  
 七〇七(会)「といいながら、耳できいてみると、まる  
 七〇八(会)弟がいえない音の中で、「ナ」「ノ」「ネ」  
 七〇九(会)「という五十音の中で、ナニヌネノという  
 七一〇(会)は、ぜんぶはなの音でできていることがわ  
 七一一(会)はいつている。ここで、もしやと思って、  
 七一二(会)の性質を考えたうえで作ったものであるこ  
 七一三(会)ました。たこが青空で右や左にゆれると、  
 七一四(会)「と、元氣のいい声でいきました。たろう  
 七一五(会)しました。クレヨンで色をつけ、バックを  
 七一六(会)ごを切り、小さな紙で上と下とまん中をは  
 七一七(会)。じっさいに紙の上でいろいろとまげぐあ  
 七一八(会)さんは、まつ林の中で、まつかさで、まり  
 七一九(会)林の中で、まつかさで、まりなげをしたり  
 七二〇(会)は、くるみの木の下で遊びました。そこに  
 七二一(会)るみをひろって、石でわってたべることに  
 七二二(会)て、山のてっぺんでたべよう。」そうい  
 七二三(会)「略」。「石でたいて、わって  
 七二四(会)じめました。まえ足でほって、うしろ足  
 七二五(会)ほって、うしろ足で土をはじきだしまし

六二六(会)りました。「ここで、かくれんぼしよう  
 六二七(会)んたちは、大きな声でじゃんけんをして、  
 六二八(会)ネルの入口のところで、だれかの声がしま  
 六二九(会)きみたが、ここでわいわいやっていて  
 六三〇(会)「略」と、大声でわらいました。「略  
 六三一(会)たたかいトンネルで、今夜、ゆつくりと  
 六三二(会)大きなけやきの下で、まるくならんで、  
 六三三(会)たら、このしかの角で、うさぎさんたちを  
 六三四(会)の大きなするどい角で、つきあげられてし  
 六三五(会)とが、赤いクレヨンで書いてありました。  
 六三六(会)やはならない。角でついでやる。」しか  
 六三七(会)ぎさんたちは、ここでゆつくり休むことに  
 六三八(会)あらわれる。どこかで小鳥が鳴いた。チチ  
 六三九(会)唱歌を、大きな声で歌っていく子ども、  
 六四〇(会)「いたり、「この手でやってみよう。」と  
 六四一(会)てんぶらは、これであげるんだ。」女の  
 六四二(会)しもと「私のうちでは、だいこんを、庭  
 六四三(会)るおくと、ふたりで、本をよんでいる。  
 六四四(会)るか、みんな自分でしらべるようにと、  
 六四五(会)「なんでも、自分でみつけていきましたよ  
 六四六(会)つきから、おもてで遊んでいますよ。」  
 六四七(会)はるお、おかしな声で、はるお「おや、ひ  
 六四八(会)「汽車の中は、人でいっぱいでした。「へ  
 六四九(会)いし、二時間ほどでつくのですから。」  
 六五〇(会)すようにと、心の中でいっていました。  
 六五一(会)た。「略」。「頭の上で声がしました。すぐ  
 六五二(会)ごみのうすぐらい中で、さぶろうは、元氣  
 六五三(会)もせずに、両方の手でまどわくをおして  
 六五四(会)「せいっぱいの力で、すきまをこしらえ  
 六五五(会)の人たちに、心の中でお礼をいしました。  
 六五六(会)ようになつて、汽車でねむっていた。ふい  
 六五七(会)たとき、向こうの席で、「略」と、大き

七四五(会)った。「略」。「ここで、ちよつとことばを  
 七四六(会)た、こんなつもりでひいたのでもありま  
 七四七(会)「青年は、大きな声で、「略」といって  
 七四八(会)コードオンを、両手でぐつとひろげたか  
 七四九(会)が、わずかのちがいで勝った。ぼくは、う  
 七五〇(会)ぼくは、うれしさでいっぱいになった。  
 七五一(会)ぼんの先生のあいで、ぼくらは場所をこ  
 七五二(会)いると、十一たい十で、ぼくらのほうが勝  
 七五三(会)。五年生が、運動場で、たいそうをして  
 七五四(会)い月夜です。そこで、虫が鳴いています  
 七五五(会)ました。たんぼの上で、つばめがちゅう返  
 七五六(会)センチほどのところで。ボタンと音がして  
 七五七(会)いった。ひととこで、からすが鳴くと、  
 七五八(会)すが鳴くと、あつちでもこつちでも鳴く。  
 七五九(会)「あつちでもこつちでも鳴く。こんなに、  
 七六〇(会)まて、顔のところでとんでいくくがた  
 七六一(会)こえている。あつちでもこつちでも、だ  
 七六二(会)「あつちでもこつちでも、だつこく機。麦  
 七六三(会)がさく。方々のうちで、ふとんほしてある  
 七六四(会)いて、それにねんどでだんだん肉づけをし  
 七六五(会)のずつと高いところでは、ひばりが一つ、  
 七六六(会)は、びつくりした顔で、甲乙「そうです。  
 七六七(会)ちつたことばつきで、旅人「そのらくだ  
 七六八(会)ません。」甲「どこでみましたか。」旅人  
 七六九(会)乙「いや、あちらで、あかしをたてても  
 七七〇(会)したが、とちゅうでひと休みしているう  
 七七一(会)しあるなら、ここで、はつきりいうがい  
 七七二(会)れども、いまの答で、知っていたわけが  
 七七三(会)やいました。私たちで、めかたを計りまし  
 七七四(会)うさぎは、みんな、13びきになりました  
 七七五(会)うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでい  
 七七六(会)うさぎがうしろ足で立ちました。が、す

792 5 すときに、わらを足でけったりして、あば  
 795 2 なったので、むしろ戸をこしらえてやり  
 796 3 、わらの中の毛の中で、元気に動いていま  
 797 9 と、親うさぎは、足でけて、のませませ  
 798 3 、子うさぎは巣の中でねていて、親うさぎ  
 798 7 まれてから、きょうで20日めです。子うさ  
 798 9 うさぎは、おもいで320g、かるいの  
 798 9 320g、かるいので260gでした。  
 85 10 乗せたり、てのひらで遊ばせたり、口さき  
 86 11 事に、テーブルの上でおしようばんしたり  
 87 1 あまりテーブルの上できょうぎのわるいま  
 87 4 もきかなければ、指で追ったりしました。  
 88 3 のは、同じ日本の中でも、土地土地ではお  
 88 3 の中でも、土地土地ではおじろの鳴きかた  
 88 4 かたがちがうと、本でよんだためです。た  
 89 4 たちの家のうち、中でも茶のまほど、すき  
 89 10 が、どうして、一方では、とてもむてつぽ  
 810 8 れません。小さな家で、小さなかつこうを  
 811 2 だとたん、うちがわでむじやきに遊んでい  
 811 3 いたピオを、かた足でふんでしまったので  
 814 5 くとがった口のさきで、かたい皮にあなを  
 815 9 自分の小さなまえ足でトンネルをほりなが  
 816 4 、虫たちは、なおいで知ること、なんで知  
 816 4 いで知ること、なんで知ること、手ごろな  
 817 6 そなわったかしこさで、これじゃようずに  
 817 7 たかしこさで、これじゃようずに生きてい  
 819 1 て、わずかに三ヶ月で大きくなって、皮を  
 819 7 ません。あぶらぜみでは、七年もかからな  
 820 4 のふしぎなかしこさで、もう大きくなりき  
 820 6 さと、かわきかたで、いまが夏だという  
 821 10 くと、まえ足のつめでかたくそれにしがみ  
 824 5 れいのおおぎりの木でも、ほかのあぶらぜ

826 3 の川 (一) たまでかざった、きれいな  
 828 10 ⑤ すめたちは、野原で遊んでいるのに、う  
 831 10 ふたりは、毎日野原で楽しく遊びつづけま  
 832 11 。ふたりは、天の川で楽しくあうことがで  
 833 7 い」という考えだけでは、この遠いきより  
 833 10 になりますと、これでは、もうまにあいま  
 834 5 半します。この早さで計算しますと、太陽  
 834 8 が、光のとどく時間ではかると、あの星と  
 838 1 さまは、宝ぐらの中で、宝物をかぞえてお  
 840 6 ⑤ しは、世界じゅうでいちばん美しい庭を  
 843 3 ⑤ と一きれのパンとでは、「へ略」。「へ略」  
 850 2 ん。けれども、それでは人の心がよくわか  
 851 6 ⑤ びんぼう「はうちじゃおことわりだ。」  
 851 8 ぬが、おそろしい声で追いたてるように鳴  
 852 8 ⑤ びんぼう「はうちじゃたくさんだ。」と、  
 853 6 「はまた、その家でもごめんをこうむり  
 858 1 ある日、ぼくは遠足でみはらし台へいった  
 858 8 ⑤ 。みんなその元気でのぼろう。」とおつ  
 861 2 るどもは、みずうみでおよぎまわるほうが  
 861 7 て、みどりの葉の下で、あたりをみまわし  
 863 7 ⑤ たしも、一どそれだまされたことがあ  
 867 7 のうなぎの頭のことであらそっていた。そ  
 871 8 くれるむすめには足でけとばされた。そこ  
 872 4 あひるの子は、ここで一晩横になった。つ  
 872 9 子は、このあしの中で、横になって休みた  
 873 10 る。「へ略。」と、空で鳴った。そうして二  
 881 9 ⑤ らん。世界じゅうで、あの人ほりこう  
 883 9 。雲は、あられや雪で重くなってひくくた  
 884 7 方へさしのべ、自分でもおどろくほどへん  
 886 3 をみつめて、木ぐつでこおりをくぐり、う  
 886 10 をはりあげ、火ばしであひるの子をうった  
 887 6 はいりこんだ。そこで、つかえきつて横に

887 10 に苦しんだか、ここで話すにはあまりにも  
 888 2 、ぬまの草むらの中で横になっていた。美  
 891 7 いできて、くちばしでかるくなでてくれた  
 893 4 えた。それが、いまでは、すべての鳥の中  
 893 5 は、すべての鳥の中で、いちばん美しいと  
 894 6 みがあったので、手ですくってみますと、  
 896 4 へのびすぎて、あとでなえがよくとれない  
 899 2 とつたなえをみんなでわけました。あいだ  
 8101 4 もり 25度 みんなで植えたなえが、いき  
 8101 8 が、いちばん多いので15本になりました。  
 8102 7 の1つぶを虫めがねでみると、毛のような  
 8105 1 ことでした。みんな虫とりをしました。  
 8105 4 のち雨 23度 病気でせいのびないね  
 8106 1 ぶのほの数をみんなでしらべてみました。  
 8106 3 は、いちばん多いので16、ほかのは、だい  
 8107 4 いをつかわずに、手でいねこきをした人も  
 8108 3 した。風のくる場所で、目の高さぐらいの  
 8109 6 やく12平方mの土地で、41のげん米がと  
 814 5 ますと、赤い色だけでは感じられなかった  
 815 8 (二) オルガンで一つの音だけひいて  
 817 3 を耳にしたり、文字でよんだりしますと、  
 817 6 ますか。「月」だけで思いだした心の絵と  
 8110 2 このあいだ、ラジオで、「劇場音楽の話」  
 8110 3 「をきいた。その中で、たいこのたたきか  
 8110 9 た。水の音をたいこであらわすことなどは  
 8111 6 。おしまいに、海岸で波のくだけるところ  
 8111 10 ウ」とかいうことばであらわしているが、  
 8111 11 るが、それをたいこであらわすというのだ  
 8114 1 しぎである。しばいで、ゆめをみていた人  
 8117 2 ロもあるフィリピンで、ある年の十月のす  
 8117 5 たま縣のあるところで、ころみに、しる  
 8118 1 ヨーロッパの北の方ではんしくしたものの

九一八 四。つばめは、鳥の中でも、たいへん早くと  
九一八 十 トリアの都ウィーンのできごとです。約  
九一八 七 ら、はじめて、電話でこのことを知らせて  
九一八 八 せてきました。協会では、喜んでつばめの  
九一八 九 それと同時に、協会ではすぐに、寒氣のた  
九二〇 九 んあったので、協会では、おおいそぎで、  
九二〇 九 会では、おおいそぎで、その家をつばめた  
九二一 一 しました。航空会社では、お金をとらずに  
九二二 六 した。汽車や飛行機で送られた数は、だい  
九二二 七 月二十四日 飛行機で 二千二百二十五日  
九二二 九 千二百二十六日 汽車で 五万二千二百九  
九二二 一〇 ば 二千九日 飛行機で 一万二千二百九  
九二二 一〇 ば 十月一日 飛行機で 一千六百百二日  
九二四 二 としある家ののき下で巣をつくったつばめ  
九二四 四 て、いろいろな方法でこのことをしらべて  
九二六 三 中 上ばきを自分でつくるわらしごと  
九三三 八 どもがきょうそうでとりにいくので、た  
九三六 六 妹と、ぼくの五人で、三日間かかりまし  
九三五 七 もなえは、ぜんぶで三百五十本ありまし  
九三九 九 八日でしたが、村でいちばんおおい植え  
九三九 三 トルもある木の上で、なたで枝をおろす  
九三九 三 る木の上で、なたで枝をおろすのは氣が  
九三九 四 どんなに大きな声で話しかけられても、  
九三九 一 たりしました。下では、兄や、母や、お  
九四二 五 した。ぼくのうちでは、五日めごとにひ  
九四二 八 ちじゅうがみんなでもいほりをしました  
九四四 八 の夏、一ど、用事でおぼがそちらにでか  
九四五 一 いま知りあいの家でみならいをしていま  
九四六 八 廣い学校の運動場で、先生とみなさんが  
九四九 九 ら、けさ早く馬車で、東の方へとんでい  
九五一 四 なら、さつき馬車で、西の方へとんでい  
九五二 三 ら、けさ早く馬車で、南の方へとんでい

九五三 六 らいうちに、馬車で、南の方へとんでい  
九五五 三 プ色のかやの木森でかこまれていました  
九五七 七 と、その男は、横目でいちろうの顔をみて  
九六一 二 も、毎年この裁判で苦しみます。」その  
九六一 四 いちろうは、足もとでパチパチおのはね  
九六二 六 まねこは、大いそぎでぎょしゃにいつけ  
九六三 八 どは、草むらをむちで三べん、ヒューパ  
九六三 一〇 判も、もうきょうで三日めだぞ。いいか  
九六六 二 判も、もうきょうで三日めだぞ。いいか  
九六七 四 判も、もうきょうで三日めだぞ。いいか  
九六八 四 判も、もうきょうで三日めだぞ。いいか  
九六八 一〇 判も、もうきょうで三日めだぞ。いいか  
九六九 二 判も、もうきょうで三日めだぞ。いいか  
九七〇 一 わたしだ。この中で、いちばんばかで、  
九七三 二 を、まるで一分半でかたづけてください  
九七三 五 夕鳴りました。そこで、やまねこは、大き  
九七四 三 白い、大きなきこでこしらえた馬車が、  
九七六 二 は、とぼけた顔つきで遠くをみていました  
九七六 六 七 貝づか みんなで、学校から四キロほ  
九七八 四 が、店の人とふたりで、せっせと貝をこじ  
九七八 四 「略。」もうすこしで貝づかに着くという  
九八四 四 トルぐらいのはばで、東西に四五十メー  
九八四 一 ならぬで、ひとりでたんねんにほってお  
九八三 三 へ。「略。」「骨で作ったものらしいよ  
九八三 八 みつけたね。あとでよくみてあげるから  
九八四 四 貝づかからでる物では、いちばん多い土  
九八四 九 めました。「これで三十分ほりました。  
九八四 一〇 が、みなさん自身で、だんだんいろいろ  
九八五 四 どがあります。石で作ったもの、それに  
九八八 八 やまだくん、これでひきわけだ。」やま  
九八八 一 うともがく。みんなでそれをおしとめる。  
九八八 二 の男の子、大きな声で、「略。」と数えな

九八二 三 数えながら、大またでびよんびよんかけて  
九八二 四 かけてきて、「十」ととまる。うしろを向  
九八三 二 、さがし物のようすで地面をみながらで  
九八三 七 もさがし物のようすですてくる。首がいた  
九八三 八 がいたらしく、手でさすっている。その  
九八五 三 かけるが、舞台はして足をとめる。やまだ  
九八五 六 れた。はじめは二列ですすんだが、谷あい  
九八五 六 すすんだが、谷あいでは一列になったので  
九八五 一〇 かかると、まえの方で、のだ先生が、「略  
九八七 三 と、のだ先生がつえでさされる方をみると  
九八七 七 りてくる。とちゅうでころんで、雪だるま  
九八七 九 るもの、まじめな顔でやってくるものなど  
九八八 一 トルも登ったところで、つえをあげて、「  
九八八 一 登った。ジャンプ台では、じょうずな人た  
九八八 一 になったので、雪の上で楽しくおべんとうを  
九八八 四 くと、そこに小石でかこまれた美しい泉  
九八八 五 は、その泉の水を手ですくって、いくども  
九八八 一〇 こんでいた。帰り道で、父は次のような話  
九八八 一〇 の水をくんで、それで茶をたててみると、  
九八八 一〇 がら、ところどころでその水でお茶をたて  
九八八 一〇 ころどころでその水でお茶をたてる。する  
九八八 一〇 、もつと遠いところを感じられる。右岸や  
九八八 一〇 られる。右岸や左岸では、その味がきえて  
九八八 一〇 があっても、中ほどでは、いい味はたえな  
九八八 一〇 うきょうという景色で名高いところもすぎ  
九八八 一〇 がへっていた。ここで茶人のしたには、ま  
九八八 一〇 。茶人たちは、ここで船をすて、岸にそ  
九八八 一〇 る泉があつて、それでもう終りであった。  
九八八 一〇 をほりくぼめ、小石でどてをつくり、泉を  
九八八 一〇 だしました。どこかであかちゃんのなき声  
九八八 一〇 ーンと、遠いところで羽音がしました。そ  
九八八 一〇 「略。」くもが、手でさすっているあいだ

九四五 夜は、ばらのかけでねむることにしよう  
 九四四 、いままでにこの手で、この足で——くも  
 九四四 にこの手で、この足で——くもは、自分な  
 九六五 ある。心がけひとつで、われわれは、どん  
 八八二 がすきですから、道で子どもたちが、なわ  
 八八五 月半ばかり、いなかでくらすうちに、おと  
 八八九 子どもの中には、道でおとうさんと呼ばれ  
 一〇九 タナスのなみ木の下で、おとうさんは、三  
 一三三 と頼みました。方言でできた小歌のあるこ  
 一三七 こしかけているそばで、コーヒー茶わんの  
 一四五 ました。その川の岸で、おとうさんは、ひ  
 一六六 がそばへきて、外国ではどんなことを話  
 一六八 りゃあ、フランスではフランスのことば  
 一六九 ことば、イギリスではイギリスのことば  
 一七二 太郎よ、フランスでは、さかな屋さんで  
 一七四 も、日本のことばでは通じません。『略  
 一七八 』。わたしは、外国でくらしみて、つく  
 一八六 たるしずく。その下で、きよんとしてい  
 一八八 落ちる雨水。その下で、雨やどりをしてい  
 二〇五 かべに、プリズムでわけた光を写してい  
 二一二 「早く、あの野原で、遊びたいな。」「へ  
 二二三 友だちは、水えのぐで写生をしている。光  
 二二二 つれて、つつみの上でつみ草をしている。  
 二三五 一」の文を大きな声で歌う。自轉車に乗っ  
 二三六 学生が、ふたりづれでなの花畑を横ぎる。  
 二四〇 ける石炭、シャベルですくう石炭。20 み  
 二五六 つくりとした足どりで、家に帰ってくる。  
 三〇八 たいと思います。家では、弟たちのめんど  
 三一一 のでしょうか。学校では、組の友だちとな  
 三三六 いと思います。かげで人のわる口をいわな  
 三三六 ありのままのすがたで、つきあっていきな  
 三三二 ぽくは、この学校では、かけがえのない

三三八 によらず、機械の力で動かすようにしたか  
 三三八 にしたかった。機械で動かせば、もっと早  
 三三八 珠、これを、人工で作りたいことはでき  
 四〇一 ないものでも、あとで開いてみると、もと  
 四四七 発見した。「これで成功しなければ。」「  
 四六五 わたしが、研究所でどうしてもできな  
 四七五 三つになる——まんでいうと二年三ヶ月に  
 四七九 ころが、私たちの足では十二三分のところ  
 四八四 話しかけたり、そこで遊んだりしたからで  
 五二四 り、「モット」ここで遊んでいたい、私  
 五四三 わしています。自分で、「イコウ」ときめ  
 五四五 かけると、道のわきで、たき火をしていま  
 五四七 らしく、妹は、ここでまた、いろいろなも  
 五四九 ように、私も、ここで、いままでの作文の  
 五五九 ころうのからだを手でいじりました。ふく  
 五八二 に、先生が、はしごでいちようの木にのぼ  
 五八七 ばにして、赤いひもでいわえて数えました  
 五八七 は、ふつうのしびいでは、役者がおじいさ  
 六三六 は、おしろいやべにでけしようにして、そ  
 六三六 のですが、能のほうでは、めんをつけます  
 六四三 すが、能は、その中でも、もっとも日本ら  
 六四三 きや、ひやかしなどで、できているといっ  
 六五〇 で、ずつと、ひとりであらうしていました。  
 六五二 このだんなは、用事で、となり村までいか  
 六六五 れから、きびしい声でいきました。『略』  
 六六六 んなおそろしいどくで、死ぬようなことに  
 六六六 おまえは、せんすであおいで、風を向こ  
 六八七 して、ぬき足さし足で、そつとおくのへや  
 六八七 略。』と、ふるえ声でいいながら、いつで  
 六八七 にげだせるかっこうで、こしをうしろにひ  
 七二九 わんを、ふみ石の上で、ガチャンとくだい  
 七二九 やは、きゆうに両手で顔をおおい、おいお

一五一 ートがいつもここで練習していることだ  
 一五二 ちは、いつも砂原で、すもうをとったり  
 一五六 もらったうれしさで、まだむちゅうにな  
 一五七 ろう。その体格で、思うぞんぶん、長  
 一六一 すごいスピードで走るだろう。みるみ  
 一六六 コックスが大声でいうだろう。『略』  
 一八八 おりだ。ぼくらですいせんしようよ。  
 一八八 ときに、ひとり責任をしょって立つ  
 二〇七 あいだのレースで勝ったボートだよ。  
 二一六 てでる。まつの木では、きょうからせみ  
 二二九 な海は、太陽の下でわらわっている。休み  
 二二九 おりから、港の方でふえが鳴る。ふえの  
 二四七 一つの太陽の下で、みんながめいめい  
 二四七 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちよ  
 二六四 がやくものの中で、いちばん清らかな  
 二六四 とがすきで、一代でりっぱな身代をこし  
 二九四 、さかわ川の大水で、田や畑をみんな流  
 二九四 買うために、自分でわらじを作って、お  
 三〇三 とき、父親が病気でねていたので、  
 三一二 ると、晝まの働きでつかれきつていなが  
 三一二 といつて、かん文で書いたむずかしい本  
 三二六 しくり返し、大声で読みながら歩まし  
 三二六 が、金次郎のうちでは、その十二文さえ  
 三二九 が、四五日の病気で死んでしまいました  
 三二九 す。その油を自分でとりたいと思い、と  
 三三九 をひろって、大水でいたんだ田の水たま  
 三三九 たちは、自分の席で立ちあがります。子  
 三三九 は、すこし大またで四歩ほどまえに進み  
 三三九 略。』と、大声でいきました。弟は、  
 三三九 大ぜいの目のまえで、『略。』とさけん  
 三三九 かあさんとふたりで立っていた。北海道  
 三三九 なれていた。うちではバターもつくった

11 47 9 ったし、こむぎこで、おいしい、やわら  
 11 47 10 がパンをやくそばで、ぼくは、いつも本  
 11 48 6 花が風にゆれ、畑では、いちごがでさか  
 11 49 4 しをかって、自分でバターをつくりまし  
 11 52 4 いがぬれたからだで、おしたりおされた  
 11 53 10 くとげとげした心でおしあっていた人た  
 11 54 7 園 れたときの氣持でゆずりましょう。」  
 11 59 9 と一雄と三人づれで、学校から帰るとき  
 11 61 1 さいわい近くの田で働いていた村の人た  
 11 69 2 さげて、一方の手で、ふとんの上におか  
 11 70 11 年をみつめたあとで、目を閉じました。  
 11 71 12 て、最後に船の上でわかれを告げたこと  
 11 76 12 ならべて、その上でねむりました。そう  
 11 77 7 いとねむったあとでは、目を開いたとき  
 11 78 4 のこもったことばで、しっかりとするよう  
 11 79 6 な失望とのあいだで、たえずはらはらし  
 11 83 1 方をつめたあとで、いくども少年にほ  
 11 87 4 た、看護人が小声でいきました。「略」  
 11 91 9 いて、一方の手で花たばを取りながら  
 11 91 11 ながら、一方の手で目をふきました。「へ  
 11 92 8 ら、「略」。」そこで死人の方へ向いて、  
 11 94 6 る日、祝賀会の席で、人々がかわるがわ  
 11 95 12 も人のしたあとでは、なんのぞうさも  
 11 97 1 園 したので、「雨で困っております。雨  
 11 98 11 ぬのを、小がたなでたち切ってしまう  
 11 99 5 園 学問のちゅうとで家に帰ってくるのは  
 11 99 7 園 織物をちゅうとでたち切ると同じこ  
 11 99 11 ある町角の廣場で、ひとりのみすばら  
 11 11 3 園 て、「あの廣場で遊んでいる子どもた  
 11 11 10 グストンが木かげで書物を読んでいます  
 11 16 8 し、パレットの上でみたときは、ずいぶ  
 11 18 9 園 となりの草むらでも、遠くの草むらで

11 18 10 園 、遠くの草むらでも、ピッピツという  
 11 20 2 園 のに、このごろでは、いつも美しい実  
 11 20 8 園 、「ほら、そこで絵をかいている文雄  
 11 23 5 です。ひさしぶりで、姉やふたりのまご  
 11 23 5 に、同じ屋根の下でくらせるのですから  
 11 24 5 んは、二つ、満でいえば一年三ヶ月で  
 11 25 9 わからないことばで、わたしに知らせる  
 11 27 3 げだして、おしりでいざって歩くのです  
 11 29 6 園 ちゃんがひとりでおかつて口から地面  
 11 30 3 でした。おとなりで、このごろ白いいぬ  
 11 31 7 くものを待つ氣持で、じつとげんかんに  
 11 33 11 かけおり、指さきで人形という字をつづ  
 11 35 1 のみ」と「水」とでたいへん苦しんだあ  
 11 37 2 せず、立ったままで、全身の注意を先生  
 11 38 2 ださった新しい目で、すべてをみるよう  
 11 41 12 園 、「私が命がけでせわをすれば、ケラ  
 11 42 3 学をりつぱな成績で卒業し、はかせにま  
 11 43 10 園 しずまったあとで、動いているのかも  
 11 44 12 園 は、三人がかりで一つの人形を動かす  
 11 45 11 園 いった文樂は手でつかうのだが、その  
 11 45 12 園 、そのほか、指でつかうもの、ぼうで  
 11 45 12 園 かうもの、ぼうでつかうもの、糸であ  
 11 45 12 園 つかうもの、糸であやつるものなど、  
 11 46 5 園 「略」。「日本ではあまりさかんでは  
 11 46 6 園 ったが、アジアでもヨーロッパでも、  
 11 46 6 園 でもヨーロッパでも、りつぱな影絵し  
 11 47 3 園 にか美しいものであらわそうとする氣  
 11 47 10 園 利とか不便だけで物事を考えないとい  
 11 48 6 園 しろいし、自分で作って自分で動かす  
 11 48 6 園 分で作って自分で動かすのは楽しいも  
 11 48 7 園 だよ。こうえんでも教室でも、どこで  
 11 48 7 園 うえんでも教室でも、どこでもやれる

11 48 7 園 教室でも、どこでもやれるからね。き  
 11 49 8 つつを作り、のりでとめる。(2) 古新聞  
 11 50 12 園 の形も、古新聞で作って、のりでとめ  
 11 51 1 園 聞で作って、のりでとめる。(7) 日本紙  
 11 51 4 してから、絵のぐで、顔をかいたり頭の  
 11 54 9 ころを作り、まぐでかくす。2 舞台  
 11 54 10 は、紙やいたぎれで、木や家を作ってお  
 11 55 9 ただ人々のあいだで語り傳えられている  
 11 56 4 。傳説を廣く全國で調べてみると、よく  
 11 56 5 が、あちらこちらで発見される。その中  
 11 56 9 ながら、まえの海で顔をあらうのを樂し  
 11 58 10 だんというところで、いちばんどりが鳴  
 11 60 2 の田をきよう一日で植えてしまえとい  
 11 60 7 ずかというところで、日ははや西の山に  
 11 61 10 きて、岩屋の入口で頼んだ。そうしてよ  
 11 62 8 のこと、八郎が山でしごとをしていると  
 11 70 6 焦はたつたひとりで住んでいて、なにか  
 11 75 11 園 生は、おひとりどうしていられるか  
 11 78 4 しそうに、えい語で、「略」といいま  
 11 79 5 園 「略」。「どこで生まれたの。」「略  
 11 79 6 園 「セントルイスで。」「略。」「略」。  
 11 81 8 。なんどもコートでたおれました。たお  
 11 81 11 とうとう五セットで勝つことができまし  
 11 82 5 スカップを、日本では、はじめてもらう  
 11 84 4 、第一回は七―五で清水選手が勝ち、第  
 11 84 7 すごさは、ことばではあらわすことがで  
 11 86 7 ずかな点のちがいで、清水選手の負けと  
 11 87 6 略。」「という。庭で植え木の手入れをし  
 11 87 10 ろう。ふる場の中で湯をかきまわしてい  
 11 89 7 としていうときでは、いいかたもかわ  
 11 89 10 たら、ただ口さきでいうだけのことにな  
 11 91 6 いたこと、みんなでたべたこと――樂し

十二 92 9 「という同じ文題で書いても、書かれた  
十二 94 3 きます。「略」で動いているようすが  
十二 98 4 です。このほか魚では、たい、さば、ま  
十二 99 8 す。しかの角などで作ったつり針もあり  
十二 105 11 の風景で、大和絵でやわらかにかきあら  
十二 107 3 かけての藝術の中で、とくにすぐれたも  
十二 109 11 なおしてローマ字で書いてあります。外  
十二 112 6 体のことを絵いりで説明した本を、いま  
十二 112 7 十年まえに、日本で出版したものです。  
十二 113 4 みなみのどりよくでなしとげられるもの  
十二 113 8 日、はじめて日本で東京横濱間を走った  
十二 114 10 法は、この議事堂でたんじょうしました  
十二 115 2 いのことば これで、日本の面影を写し  
十二 115 3 いかれらのことばで、なにごとか、ささ  
十二 117 2 はるかな空のおくで、鳴いているからす  
十二 8 3 えられたり、自分で本を読んだり、考え  
十二 10 10 になっている。漢字で名まえを書かぬ國の  
十二 13 2 となつて、東洋でも西洋でも、天は動  
十二 13 2 て、東洋でも西洋でも、天は動き、地は  
十二 13 5 かし、この天動説では、どうしてもかた  
十二 14 10 をしました。自分で望遠鏡を組みたてて  
十二 14 10 組みたてて、それで天体を観察し、数学  
十二 14 11 体を観察し、数学でこまかに計算した結  
十二 15 2 に一どずつ、自分で西から東へ一回轉し  
十二 15 5 まわります。これで、夜と晝とがあるわ  
十二 15 12 びだされて、自分でも信じてはならぬ、  
十二 19 1 たたえて、つるぎで失ったものを、すき  
十二 19 2 ったものを、すきでとり返そうと決心し  
十二 22 5 でのびると、そこで生長をとめました。  
十二 23 10 ます。このおかげで、ユートランドのあ  
十二 25 2 砂丘を、海岸近くでくいとめました。し  
十二 25 5 っ、あるところでは、百五十ばいにな

十三 28 1 選び、風の通り場で遊んでいる。遊ぶと  
十三 28 4 なをほったり、土でおだんごのようなも  
十三 28 10 を、てんびんぼうでかついでやって来る  
十三 28 12 、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく  
十三 29 2 がとまると、そこでは、どこかの子ども  
十三 30 7 ぐわかる。その中で、いちばんさわがし  
十三 31 1 おいて、てのひらで、きゅうにどらをお  
十三 31 4 輪になったその中で、さがさまさまな  
十三 31 6 さるは、とちゅうできよとんととしてやめ  
十三 31 11 わないで、呼び声でやって来る者もある  
十三 31 12 朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ歩  
十三 33 2 水に不便なペキンでは、一けん一けん、  
十三 34 2 こしらえて、そこで、人形あやつりがは  
十三 34 11 な、りっぱな文字で書かれてある。小さ  
十三 34 12 ざりのような氣持で、れんをながめてい  
十三 36 11 パの音が、どこかでびく。子どもたち  
十三 38 8 だったか、遠足で行きました……お客  
十三 38 11 うしをぬぎ、指先でくるくるまわしなが  
十三 40 10 ったよ。みんなで心配していた……う  
十三 41 5 会、いまだこの家でも二けんぶんも、三  
十三 41 6 会 を、ぼくひとりでつかうのは、ぜいた  
十三 43 5 くして、うらの方で、もの音がする。三  
十三 45 1 んの声と動きだけで、四人とそれぞれ話  
十三 45 8 くんのことばだけで、すっかりようすが  
十三 49 2 の森が、喜びの声でわらい、波だつ小川  
十三 49 4 かいなじょうだんでわらい、みどりの丘  
十三 49 5 りの丘が、その声でわらいだす。牧場が  
十三 49 6 き生きしたみどりでわらい、きりぎりす  
十三 49 7 、楽しい景色の中でわらう。メアリとス  
十三 50 2 と、その木のかげで、きれいな鳥がわら  
十三 51 3 で、母うしがしたでなめると、よろける  
十三 52 7 、自然をしたう心で、一日一日と、むす

十三 53 3 方に、まるく原色ですってあります。ま  
十三 53 7 ころに、先生の手で、こう書いてありま  
十三 54 11 がなく、しょさいで、本を読んでいらつ  
十三 56 1 たが、おじさんで見ると、いつそう生  
十三 56 8 心というところで見ると、早くから絵  
十三 56 12 心のフロレンスで、研究しているうち  
十三 57 3 さんかいた。中でも、ラファエルは、  
十三 57 11 ね。絵は、写真で見ただけでは、明暗  
十三 57 11 写真で見ただけでは、明暗はかなりわ  
十三 61 3 二か三のわかさで、せんぱいをしのい  
十三 61 8 、「そんなお氣持で、この絵はがきを送  
十四 6 6 い旅をしたあとで、七時にパリーに着  
十四 11 9 かたは、ご自分でなさってごらんなさ  
十四 11 11 ぶん、とちゅうでこわれるだろうとい  
十四 12 1 べたら、そちらでわけなくかわりをお  
十四 12 2 プは、かさなしでもりっぱに役にたち  
十四 17 7 きようはこれでお話をやめます。が  
十四 18 2 きたことば 学校で、そうじをしている  
十四 19 1 などは、日本語で、なんといっている  
十四 20 5 ていることばの中で、外國からはいって  
十四 23 9 げたことばの中でも、クレヨン、ズボ  
十四 27 10 。私は、自由研究で、外國からきたこと  
十四 27 10 らきたことばの中で、西洋からきたこと  
十四 28 3 わかる。その中で、かたかなで書いて  
十四 28 3 中で、かたかなで書いてあることばは  
十四 31 4 うちっぽけな考えでは、とても世界の  
十四 31 8 がたの考えひとつで、日本はよくもわる  
十四 34 6 せん。博士の計算では、うちゅうのさし  
十四 38 5 のままのかっこうで、「略」三の人  
十四 43 3 ほかからかな調子で。日々の苦勞に、よ  
十四 44 10 の西岸のおきあいで、ローマン号という  
十四 46 3 を前にして、客間で歌っているのと、ち

十四467 しんみりした氣持で、この歌に聞きほれ  
 十四4710 けんのせまった中で、なんというおちつ  
 十四481 こんな海のまん中で、よくあんな美しい  
 十四506 たマッケンナの話で、あきらかになった  
 十四523 根さんのご指名で、私から申します。  
 十四527 根が、それだけでは実はずきません。  
 十四5410 明かるい地の上でくらししているかたに  
 十四568 私の私がとちゅうで切れたりしたら、そ  
 十四573 ったとき、高い声でわらいながら、どや  
 十四574 れは、頭のぼうしで、日、水、土、はち  
 十四576 いま、戸の外で聞いていると、あな  
 十四5712 それがこの日本でできるためには、私  
 十四591 ああ雨のおかげで、かれるのが助かつ  
 十四644 とが、学者の研究でわかってきました。  
 十四645 、ふつうけんび鏡でも見えないほどの、  
 十四649 いて、飛行機などで、横からすかして見  
 十四655 ら、いろいろ自分でためしてみると、お  
 十四678 、たいへんな早さで回転するのを見るこ  
 十四6710 んの上や、庭さきでおこるうずのような  
 十四699 いる湯は、日かげで見ても、べつにかわ  
 十四706 はんのおぜんの上でもやれますから、よ  
 十四711 んに接したところでは、湯は、ひえて重  
 十四713 わんのまん中の方では、ぎやくに上の方  
 十四716 アルコールランプで熱したときの水の流  
 十四727 ところとのさかいで、光が曲がるために  
 十四758 められるので、畑では空氣がのぼり、森  
 十四759 空氣がのぼり、森ではくだっています。  
 十四765 すこし高いところでは、反対の風がふい  
 十四7612 ありますが、ここでは、これくらいにし  
 十四7911 いるのといないのでは、たいへんちがい  
 十四836 うす、深い雪の中で生活している人々、  
 十四851 、その雪が、どこで、どのようにしてで

十四862 はない。野原の中で、一本の草花を見い  
 十四886 それとも、心の中で考えごとをしていて  
 十四889 であろうか。雪國でいちばん楽しいもの  
 十四892 上に集まって、足でトントんとふんでみ  
 十四893 いだり、てのひらでなでてみたり、耳を  
 十四941 どんなにか、それで火をともしてみたか  
 十四948 ろぼろの着物の下で重ねて、どうかして  
 十四9410 両手もまた、寒さでほとんどこごえてい  
 十四9411 に、一本のマッチで——ほんのたった一  
 十四9412 った一本のマッチで、火をともしることが  
 十四967 ツチをとってかべてこすった。それがゆ  
 十四9911 のマッチの火の中で、もうとつくにわか  
 十四1024 。あの子は寒さでこごえ死んだのだ。  
 十四1027 神さまの樂園の中で、元日をむかえてい  
 十五195 ています。その中で、一だんと高くそび  
 十五2011 ーヨークの大都会で育てられた子どもた  
 十五2112 、あぶない足どりで、山の上の方に、ま  
 十五241 がみついて、両足で鳥の腹をしめつける  
 十五2412 りうつつて、両足で鳥の腹をしめつけ、  
 十五2512 せにつけて、右手で鳥のつばさのつけね  
 十五2512 して、鳥が大づめでつかんでいる女の子  
 十五252 て、からだの重さで上からぎゅうぎゅう  
 十五255 とおしつけ、両足でいっそうはげしく鳥  
 十五257 いおりとちゅううで、高い木の上へでも  
 十五262 もしまたとちゅううで、このわしが大きな  
 十五266 が大きくくちばしで女の子の頭でもつつ  
 十五2611 ているような氣持で、少年は、ときどき  
 十五2710 。もう、がけの上で「略」。といって  
 十五287 上帯にかけたままで、右手をはなして、  
 十五291 うにするいきおいで、ぱつと、地面へす  
 十五296 は、必死のかくごで、すばやく女の子を  
 十五299 そろしいいきおいで少年にとびかかって

十五2910 ふりかざし、左手で女の子をかばい、昔  
 十五301 めの最初の一げきで少年の頭をくだこう  
 十五303 時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たち  
 十五307 おい包むいきおいでせまってきた。  
 十五3012 を持ちかえた右手で、その石を取るが早  
 十五319 かかります。羽風で空氣がゆれ動き、ち  
 十五3110 と、鳥のくちばしでつき殺されます。ま  
 十五3112 りました。その中で、女の子を後にかば  
 十五324 を頼んで、大急ぎでおりに来たのです。  
 十五337 、それはいまここのいうまでもありません  
 十五351 や、あさなわなどであんだひももつかい  
 十五353 どに、はものなどであるしをつけてしめ  
 十五366 ものは、この方法では表わすことができ  
 十五3712 えであるが、日本では、「山」を「サン」  
 十五384 のように、日本では一つの漢字をふた  
 十五3811 と考えてみただけでも、このことがすぐ  
 十五392 う。かな 日本では、中國から傳わっ  
 十五401 このかなのおかげで、日本のことばを、  
 十五404 る。しかし、いまでは漢字の長所をいか  
 十五417 ローマ字は、全部で二十六字である。こ  
 十五411 とばも、ローマ字で書くことができる。  
 十五424 しかた いま日本では、漢字と、かたか  
 十五434 、ふと、ある店先で立ちどまった。ウイ  
 十五446 じょうずな日本語で話しかけた。店の主  
 十五454 の考えかたや商賣では、ふだんの生活さ  
 十五4511 やら覚えた日本語で、町をひとり散歩  
 十五461 語で、町をひとり散歩していた。ひく  
 十五4612 「略」。「どこで作りますか。」「略  
 十五478 いて、自分の家であつた食器とか、お  
 十五4710 、そのお庭焼の中でも、「色なべしま」  
 十五487 いたため、ひとりこの焼物を作ること  
 十五489 たいと考え、自分でまず、焼くしごとか

十五55 12 ㊤ ずねた外人の中で、富士山や磐梯山の  
 十五56 7 ㊤ た。そんなわけで、私と日本とはふか  
 十五56 12 ㊤ たころ、寄宿舎で二間続きの室をつか  
 十五57 8 ㊤ ん中にチョークで線をひき、向こうは  
 十五57 12 ㊤ 書をギリシア語で読みたいといひだし  
 十五59 11 ㊤ うは、もうこれではとやめだ。さ  
 十五60 9 ㊤ ふつう「満ぼう」でとおつていた私は、  
 十五62 9 ㊤ 「略」。小さな声でうったえる私のくり  
 十五63 11 ㊤ 「満ぼう、これでどうだ。おじさんの  
 十五64 5 ㊤ 私は、道のまん中で、無言でつっ立った  
 十五64 6 ㊤ のまん中で、無言でつっ立ったまま動か  
 十五65 8 ㊤ の道すがら、小樽で目についたといつて  
 十五66 3 ㊤ 満ぼうへと名ざしで送ってくださいだ。  
 十五67 10 ㊤ 私は、ひさしぶりで窓のあけはなれた  
 十五68 1 ㊤ してあって、これでたけといふように  
 十五68 3 ㊤ 「とよんだつもりで、私はかねをカーン  
 十五70 2 ㊤ ながら、私は無言で頭をびよこんとさげ  
 十五70 12 ㊤ んでも赤インキで書かなくては見えな  
 十五73 4 ㊤ ている私の目の前で、博士は、「略」。一  
 十五75 12 ㊤ を見て、大きな声でわらわれ、こんどは  
 十五76 1 ㊤ を、カーネギーで出版することは、ひ  
 十五80 1 ㊤ ります。歴史の上で、いろいろな國の人  
 十五82 2 ㊤ 大理石のまいる柱でできた大廣間のよう  
 十五82 3 ㊤ は、この地球の上でいちばんふとつてい  
 十五82 5 ㊤ たかなえなどの間で、たべたり、飲んだ  
 十五83 4 ㊤ れがこの世の中でいちばんふとつただ  
 十五87 3 ㊤ は、幸福なままでいちばんふとつた『  
 十五89 5 ㊤ ころです。これでけさから十二どめで  
 十五92 11 ㊤ といった。そこでなにをしているんだ  
 十五93 4 ㊤ 、テーブルのすみで、「略」。さとう  
 十五93 10 ㊤ 。さあ、みんなで、力ずくで、いやで  
 十五93 10 ㊤ んなで、力ずくで、いやでも幸福にし

十五96 12 ㊤ どもたちのまわりで、わになっておどり  
 十五97 10 ㊤ ろう。このへんでは、みんなお金持な  
 十五98 4 ㊤ ものは、地の上でも、天の上でも、い  
 十五98 4 ㊤ 上でも、天の上でも、いちばん美しい  
 十五101 11 ㊤ っぱい『幸福』でつまっているじゃな  
 十五104 3 ㊤ だなかまのうちでいっとういいのをし  
 十五104 7 ㊤ きたちのなかまでいっとう快活なので  
 十五104 12 ㊤ て來ます。鼻を指ではじいたり、ひら手  
 十五104 12 ㊤ じいたり、ひら手でたたいたり、いそが  
 十五104 12 ㊤ り、いそがしく足でけつたりして氣力が  
 十五106 7 ㊤ 。そういうわけで、あれにうつちやら  
 十五108 2 ㊤ の中に、つま先で立つて、やっと思え  
 十五109 1 ㊤ は、たぶんここでいちばん純潔なもの  
 十五110 10 ㊤ えないが、ここでは、なにかも見え  
 十五110 11 ㊤ は、まあ、なんでこしらえたの。きぬ  
 十五111 5 ㊤ めと、だつこと織つたのですよ。お  
 十五112 11 ㊤ 愛は、喜びの中でも、いちばん美しい  
 十五113 9 ㊤ ようだよ。ここでは、うちにいるとき  
 十五113 12 ㊤ たかい。この手でおまえのせわをして  
 十五114 6 ㊤ よ。さあ、これで、おまえたち、私に  
 十五120 5 ㊤ 校生たちがみんな、私たちのために送  
 十五121 11 ㊤ 佐藤先生と、教室でお別れをした。先生  
 十五122 9 ㊤ 先生がたがみんな、合唱してくださいさ  
 十五55 5 ㊤ (接助) 1 で  
 十五55 5 ㊤ 遠くそののち かの木に、矢はま  
 だおれでとどまりぬ。  
 であう「出会」(五) 7 であう『イ・ウ・  
 ーッ』  
 二27 2 ㊤ 二ひきのやぎが、そのはしのまん中  
 でであいました。  
 四40 4 ㊤ あなたがたは、これから、りっぱなこ  
 とばにいろいろであうでしょう。

五18 9 ㊤ おたがい、であったと思つたら、すぐお  
 わかれてした。  
 六67 5 ㊤ すると、一ひきのさるにであいました。  
 七80 9 ㊤ そのとき、この人にであつたのです。  
 八29 5 ㊤ すると、黒うしにまたがり、ふえをふいて  
 くる、わかい男にであいました。  
 十二5 1 ㊤ 大洋を西へ西へと航海して陸地にで  
 あつたのが、それほどの手がらだらうか。  
 てあし「手足」(名) 3 手足  
 三112 9 ㊤ 手足の力がなくなつて、なにをするこ  
 ともできなくなつてしましました。  
 九132 2 ㊤ みつばちは、そのつなをさけてにげようと  
 しました、どうしても手足がうまく動きません。  
 九140 11 ㊤ それで、そのまま手足をちぢめて、じつと  
 すわっていました。  
 てあたりしだい「手当次第」(副) 1 手あたりしだ  
 い  
 九80 8 ㊤ もし、手あたりしだいにやつて、ぐあい  
 よくなくなかをほりあてたらいいが、  
 てあて「手当」(名) 2 てあて 手あて  
 八11 11 ㊤ くすりをのませるやら、あたためるやら  
 十一75 2 ㊤ いままでどおりのてあてを続けなさい。  
 デイディーティー(名) 1 D・D・T  
 七41 1 ㊤ 私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、  
 せなかから、腹までふりまかれて、  
 ていえん「庭園」(名) 1 庭園  
 十64 2 ㊤ 日本の絵画や、庭園や、建築にも、外國と  
 はおもむきのちがつたおもしろいものが、たくさ  
 んありますが、  
 ていきせん「定期船」(名) 1 定期船  
 十四44 11 ㊤ ローマン号という小さな汽船が、十ばい



もある定期船につきあたって、

ていしー ↓きゅうていしーきゅうていしーする

ていしーじょう「停車場」(名) 3 停車場

八五八 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺

の屋根や停車場が目についた。

一五二〇 その登山電車のとちゅうにはいくつかの

停車場があつて、

一五七五 私は、停車場まで送ってくださった博士

のこう意をふかく謝して、

ていしーば「停車場」(名) 2 ていしーば

三八九 ていしーばでは、どんなひびきがきこえ

るでしょう。

三九三 このていしーばもみんなのものです。

ていねい「丁寧」(形状) 9 ていねい

四四五 一わが、きず口を ていねいに あらつて

やりました。

四四六 かめは、ていねいにおじぎをして、海の

方へいつてしまします。

五五九 私は、いまみてきた土星を、紙にていねい

にかいておこうと思ひました。

六二五 きりぎりす ていねいにおじぎをしながら、

「略」。

八四六 親ぜみが、あのほそくとがった口のさきで、

かたい皮にあなをあけて、ていねいに生みつけて

おいてくれましたので、

九五九 そのとき、風がどうとふいてきて、草はい

ちめんに波だち、ぎよしやはきゅうにていねいな

おじぎをしました。

一四三 研究のため、死目を一つ一つ、ていねいに

しらべていった。

一五二九 博士は、別れに際して、各地の大学者た

ちへのていねいなくいかい状をくださったうえ、

一五八六 〇 ていねいに、しかしきつぱりと、こと

わりなさい。

ていぼうこうじ「堤防工事」(名) 1 ていぼう工事

一二二〇 さかわ川のていぼう工事があつて、どの

家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで

て働くことになりました。

ていまいたち「弟妹達」(名) 1 弟妹たち

一五八六 十の春をむかえた私は、母や多くの弟妹

たちをあとに残し、「略」京都に移った。

でいりぐち「出入口」(名) 1 でいりぐち

三二九 〇 でいりぐちには、げたばこがたくさんあ

ります。

ていりゅうじょ「停留所」(名) 1 停留所 ↓いち

ていりゅうじょごと

一一五九 私は、かさをさして電車の停留所までで

かけた。

ていれ「手入れ」(名) 2 手入れ

一二八六 庭で植え木の手入れをしている父にこう

いわれたら、バケツか、じょうろに水をいっばい

いれて持つていくだろう。

一三二〇 切りとるばかりで手入れをおこたつた

めに、土地は、年を追ってやせおとろえ、

テーブル (名) 23 テーブル

四六〇 しかたがないので、二十九わの がんは、

テーブルのまわりにあつまりました。

六二〇 テーブルのまわりにあつまって、まるくな

ります。

六二〇 テーブルには、お茶が用意してあり、くだ

ものが、たくさんおさらにもってあります。

八六一 三三どの食事に、テーブルの上でおしよ

うばんしたりしました。

八七一 客がきているときなど、あまりテーブルの

上でぎょうぎのわるいまねをすると、

八七六 あとずさりして、うしろに気づかず、テー

ブルのはしからころげ落ちたりしました。

一三三八 少女たちは、「略」テーブルをかこんで、

いなかの歌を歌つてきかせてくれました。

一一四三 正面のテーブルには、赤いうめの花をい

けた、大きなびんがかざってありました。

一二五三 これをきいたコロンブスは、つと立って、

テーブルの上のゆでたまごをとり、

一二五五 〇 みなさん、こころみにこのたまごを

テーブルの上に立ててごらんください。

一二五〇 このときコロンブスは、コッソリたまご

のはしをテーブルにうちつけて、

一二二六 民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、

なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがつて、

一四九七 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴ

か光るさらをならべたテーブルが見えた。

一四九七 2 まるやきの鳥が、ほかほかとあたたかい

いきをたてて、テーブルの一方におかれてあつた。

一四九七 5 やいた鳥は、肉を切るナイフとホークと

をせなかに立てたまま、テーブルからとびおりに

一五七五 1 テーブルをたたいて立ちあがった老博士

は、

一五八二 3 テーブルのまわりには、「略」「幸福」

(ぜいたく) たちが、「略」食べたり、飲んだり、

一五八五 1 〇 あのとおりテーブルの光栄になつてい

るさとうがしを。

一五八五 一〇 「いちばんふとった幸福」が、テーブル

をはなれて、「略」、子どもたちの方へやって來ま

した。

一五九〇 9 〇 とにかく、そいつは、一どもわたしした

ちのテーブルのぼったことはないようです。

十五923 チルチルがふと見ると、かれらはみんな  
となかよくテーブルについて、

十五925 みんなは、テーブルにすわりこんでる  
よ。」光呼び返さない。

十五934 いぬぶつぶついながら、テーブルの  
すみで、「略。」

ておけ「手桶」(名) 6 手おけ

十五919 手で、手おけの水をかけてやると、た  
けのこがよろこんで、のびるわ、のびるわ。

五936 「略。」といって、手おけをさげて、う  
らのいどばたに立ちました。

十二8710 ふろ場の中で湯をかきまわしている父に  
こういわれたら、手おけに水をいっぱいくんで  
持っていくだろう。

十四198 8 パケツはね、手おけさ。

十四199 9 手おけ、手おけはちよつとおかしいわ  
ね。

十四199 9 手おけはちよつとおかしいわね。  
てがかり「手掛」(名) 1 手がかり

十四503 一そののボートが、やみをぬって助けに  
きてくれました。やはり、その美しい声を手がか  
りにして。

でか・ける「出掛」(下一) 30 でかける 出かける  
《ケ・ケル》

一438 10 いそいで でかけよう。

二615 10 さあ、春をむかえに でかけましょう。

二617 10 でかけましょう。

三588 ある日、みんなであそびに でかけまし  
た。

四599 かっちゃんは、どんでんでかけました。  
四637 10 「さあ、でかけよう。」  
五153 私も、いまから旅にでかけます。

六246 6 さあ、おそくなるからでかけよう。  
六1282 おにも、とんとこ、とんとこさがしにで  
かけました。

七166 6 先生、早くでかけましょう。

七167 6 じゃあ、でかけよう。

七657 もやのかかったおきの鳥、ポンポン船がで  
かけていく。

八473 王子も、なんとかして父の病気をなおした  
いと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

八676 そこで、みんなは鳥小屋にでかけた。  
八737 10 どうだ、われわれといっしょにでかけて、  
渡り鳥になる考えはないかね。

八834 そこで、あひるの子はでかけていった。  
九448 8 この夏、一ど、用事でおぼがそちらにで  
かけるとき、ぼくもついていったのです。

九1053 10 さあ、でかけよう。

十275 わざわざ遠くにでけなくとも、ふだん自  
分の身のまわりにあるものを、よくしらべて

十523 「モット」ここで遊んでいたい、私にね  
だったり、そのくせ、でかけようといひだしたり

十663 でかけるとき、太郎かじゃ、次郎かじゃと  
いうふたりの下男に、「略。」といひつけ、

十一516 私は、かさをさして電車の停留所までで  
かけた。

十一816 のどまででかけたさけびを、じつとおさ  
えながら。

十二64 ある日、太田道灌は、たかがりにでかけ  
ました。

十二83 家をはなれて勉強にでかけていましたが、  
ある日のこと、母親がなつかしくなり、

十二122 リビングストーンがちよつとそとにでかけ  
たるすにやってくる、その書物を手にとりました。

十二362 先生がぼうしを持ってきてくださったの  
で、私は暖かい日なたにでかけるのだと知って、

十二9412 弟にせがまれて、赤とんぼをとりにでか  
けたが、

十五6111 満ぼう、いいところへつれて行ってあ  
げるから、さあ、出かけよう。

十五621 げんかんへ出かけて、ふみ石の上にそろ  
えてある大小二つのくつをちらと見た私は、

てかす「手数」(名) 1 手かず  
四1229 ただ一本のマッチでも、これを作りあ  
げるまでには、どれほど手かずがかかってい  
ることでしょう。

でかす 11 しでかす  
でかせぎにん「出稼人」(名) 2 でかせぎ人

十一658 10 「年よりのでかせぎ人ですか、外国か  
ら帰ってきた」と、看護人がききました。

十一6510 10 でかせぎ人です。」と、少年は、ます  
ます不安をおぼえながら答えました。

てがみ「手紙」(名) 32 てがみ 手紙 1 おてがみ  
三917 うちの人のかいたてがみや はがきを、  
ここに いれます。

三1153 みかどへ おわかれの手紙と ふしのくす  
りをのこしました。

三1163 ふしのくすりと手紙は、かえってかな  
しみをます たねになるばかりでしたので、

三1174 10 その山の上で、ふしのくすりと手紙  
をやきすてよ。

四58 手紙や 小づつみなどを おくつてくれま  
す。

五152 私は、としおさんが、みつおさんにあてて  
書いた手紙です。

五208 10 「としおくんから手紙がきたよ。」

五三三 けさ、先生に、先生のお友だちから手紙がきました。

五三八 手紙の中に、こんなことが書いてありました。

五三九 こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手紙を書いてもらって、きみの受持の子どもたちに、それを送ってあげよう。

九四〇 ぼくは、この手紙を数日もまえから、喜んで書きだしました。

一〇六一 少年が、〈略〉、病院の門ぼんのまえへ行って、一通の手紙をみせ、父親をたずねました。

一〇六四 にわかに病氣にかかって入院したので、家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。

一〇六五 門ぼんは、その手紙をひと目みてから、

一〇七二 手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど——

一一八三 『チチロをやりました。』って手紙がきたきり、おまえがこないから、

一二八八 手紙を書こうとして、すずりばこをあけた父にこういわれたら、

一三三九 手紙が、はい……二番めのひきだしの……上……はい。

一三四〇 眞ちゃんが書きのこしていった手紙を、とりだして読む。

一三四七 その間、かた手に持ったさっきの手紙をくり返して読む。

一三四八 手紙がだせるようになったら、いっしょに、そのマンシウの子どもに、お札の手紙を書こうね……

一三四九 お札の手紙を書こうね……

一三五一 また、手紙を読みながら、舞台のまん中

に出て来る。

一三六二 三郎 手紙を読みながら、「生きて帰って来ました——」か。

一四〇一 ふるさとにのこした母へ送ったつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。

一四一三 おふたりの写真は、いま、この手紙を書いているつくえの上、私の前においてあります。

一四二〇 おかあさん、これからたびたび手紙をあげることにしましょう。

一四二七 一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、たしかに空からの手紙にちがいない。

一四三三 父に送った手紙のどれにも、「〈略〉。」と、必ず書きそえてあったのを見ても、

一四四一 これから車のついたものは送ってください。など、くじょうの手紙を京都へ送ったりした。

一四四九 手紙のたびごとに、どうしているかとたずねられたのもそのはずだ。

一四五七 手紙でもなんでも赤インキで書かなくても見えないようにおなりになったのですよ。

てがら 『手柄』(名) 1 手がら

一五〇一 大洋を西へ西へと航海して陸地にであつたのが、それほどの手がらだらうか。

てがら 『手懸』(形状) 1 手がる

一五〇八 そのうえ、手がるでおもしろいし、自分で作って自分で動かすのは楽しいものだ。

てがら 『的』 1 へいいがてきしゅう・かがくてきけんきゅう・かがくてきしき・きんだいてきこうぎょう・じかんでき・じんしゅうてき・せいしんてき・せいかいてき・せかいてきぎよるいがくしや・せかいてきめいしゅう・だいひょうてき

てがら 『敵』(名) 1 てき

一五二七 血まなこになって目の前のてきを相手にしているものには、なんにも耳にはいりません。

てがら 『じょうてき』

てがら 『出来上』(五) 13 てきあがる

《一ッ・一リール》

一五二六 てきあがったものをうしろのかべにはりました。

一五二七 なん年か かつて、とうとう 一そうのふねが てきあがりました。

一五三三 はなおが てきあがると、男の子は、それをはいて、元氣よくかけていって

一五三九 まっ白な あこひげをつけた サンタクローズのおじいさんが てきあがりました。

一五四三 これが てきあがるまでには、どれほど苦心をした ことでしょう。

一五五九 手わけをして、やつとつぎのようなものが てきあがりました。

一五六八 これで、一本のつづが てきあがった。

一五七五 そこでやつと、思いどおりの機械が てきあがった。

一五八五 そこでさらに、七年間のくふうがつづけられ、みごとに、自動織機が てきあがった。

一五九二 かきなおし、ぬりなおして、かいていくうちに、ひととおりで てきあがった。

一五九七 (5) 顔と手をつけた着物を裏返すと てきあがる。

一六〇五 みるみるうちに工事がはかどって、九十の石だんが てきあがった。

一六一〇 そのしごとと簡単に てきあがるものではなく、白く焼けるはずのものが黒くなったり、

てがら 『出来方』(名) 1 てきかた

一六二一 もっとも、らい雨の てきかたは、いま

いったようなばあいばかりでなく、だいぶようすのちがったものもあります。

できごと「出来事」(名) 4 できごと

九1810 しょうわ六年の秋、オーストリアの都ウィーンのできごとです。

九238 この國の人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた大きなできごとでした。

十二391 できごとの多かったこの日もくれて、

十五773 きょうのできごとを、あすまでのぼすな。できとう「適当」(形状) 1 てきとう

十五404 しかし、いまでは漢字の長所をいかして、かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文章のふつうの書き表わしかたとなっている。

できばえ「出来映」(名) 1 できばえ

七117 じょうずなできばえをみたとき、感心して、思わず手をたたきます。

できる「出来」(上二) 242 できる《キーキル》じじつげんできる・はつおんできる・へんしゅうできる

一342 能ににでもなることができるなら、ただおさんは、なにになつてみたいとおもいますか。

二95 能 そろえることはできませんか。

二141 にわに川ができました。

二148 赤や青やむらさきのたまができました。

二151 ふたごもできました。

二154 大きな、あかるいお月さまは、どうしたらえにかくことができるでしょう。

二328 能 わたしたちはめくらだもの、みることも、なんかないよ。

三155 能 おまえさんのような おろかものは、こ

をとおすことはできない。

三238 能 お米がはんぶんもできない。

三264 長いあいだかかって、やっと切りたおすことができました。

三308 あとで、できた作文を、ひとりびとりよみました。

三716 つまむことはできません。

三722 はきだすこともできません。

三946 一まいの紙で、いろいろなものをおろすことができます。

三947 ふねをおろすこともできます。

三951 ピアノやふくすけをおろすこともできます。

三953 きつねや、だましぶねや、紙ふうせんなどもおろすことができます。

三958 この一まいの紙に、えをかくことができます。

三961 おとうさんのかおも、先生のつくえもかくことができます。

三963 にわの花も、空の雲も、とおい山も、ちかい家も、かくことができます。

三964 クレヨンでかくこともできます。

三965 えんぴつでかくことも、ふででかくこともできます。

三967 また、この一まいの紙に、字をかくこともできます。

三969 大きな字でも、小さな字でも、かくことができません。

三971 はやくかくことも、ゆっくりかくこともできます。

三974 ひらがなをかくことも、かたかなをかくこともできます。

三975 かん字をかくこともできます。

三976 ローマ字をかくこともできます。

三1057 それで、かぐやひめは、その人たちにとってもむずかしいことをいって、それができたらおよめにいくといいました。

三10510 けれども、かぐやひめのいうようには、だれもすることができませんでした。

三11210 手足の力がなくなつて、なにをすることもできなくなつてしまいました。

三1136 もう、ひきとめることもどうすることもできません。

三1162 みかどは、〈略〉、かぐやひめをおわすれになることができませんでした。

四66 「〈略〉」と声をかけて、話ができません。

四125 ここから、とおいとおい町へいくことができます。

四194 能 お話が あいて なしには できないように、文も あいて なしには 書ける ものでは ありません。

四528 かっちゃんを ささえながら、 できるだけ 早く とびました。

四579 すっかり 用意が できると、 みはりぼんのがんたちも あつめました。

四733 たくさん おもしろいのが できました。

四1159 能 なんのおかまいも できませんでした。

四1226 能 けれども、ただ一つのこのでんきゅうがないと、光ることができません。

四1311 能 天人のはごろもなら、なおさらお返しはできません。

四1313 能 それがないと、天へかえることができません。

四1326 能 でも、そのはごろもがないと、まう

ことができません。

五15 5 このままでは旅はできません。

五15 9 私は、三十銭でどこへでも旅をすることが  
できます。

五20 11 私は、ぶじに、としおさんの心を、そのま  
まみつおさんにおつたえすることができました。

五30 11 図 まえからも、やりたいと思っていました  
が、なかなかできなかったのです。

五36 6 私たちは、石炭なしには、くらすことがで  
きません。

五36 7 石炭は、どうしてできたのでしょうか。

五54 10 空は、まだ、ほんのりと明かるくて、つぎ  
の星をみつけることは、できませんでした。

五62 10 図 たねはおかあさんがまいたのだけれど、  
こんなによくできたのは、おかあさんの力ではあ  
りませんよ。

五68 7 図 帰るまでには、新しいおけができていま  
すよ。

五69 8 図 家はちゃんとできていますから。

五73 11 ちゃんとごてんができていて、おばあさん  
は女王になっているではありませんか。

五75 7 おじいさんは、口ごたえもできず、力のな  
い足どりで、海へやってきました。

五84 10 図 いのうえさんの字びきができますね。

五96 11 図 自分でえさをとったり、遠いところまで  
とんでいくことはできまいよ。

五105 4 それで、ひわは、すっかりそのまねがで  
るようになりました。

五105 9 図 まあまあ、この鳥は、いくつものげいがで  
きるのね。

五106 11 図 ぼくはおともができないのさ。

五108 10 近いところに製材所ができて、

六11 9 ねじは、自分がここにはいったために、こ  
の時計ゼンたいが、ふたたび活動することができ  
たのだと思うと、うれしくてたまらなかった。

六15 8 ありは、ぶじに岸にあることができまし  
た。

六27 5 図 そのおかげでさ、いまこうしてあたた  
まることもできるし、

六50 4 図 考えこともできそうな、ああ、おおらか  
な書の中。

六71 1 図 「まあ、よくできたのね。」

六86 4 図 いや、ゆるすことはできない。

六100 11 図 これで、いつか、おとうさんのお話にき  
いた望遠鏡が、できるかもしれない。

六102 1 こうしてできた二本のつつは、

六102 2 二本のつつは、うまきはまりあって、長く  
のぼしたりちぢめたりすることができ。

六102 3 図 さあ、できたぞ。

六107 8 発音できることばと、できないことばとが  
ある、ということに気がついたのである。

六108 3 はながつまつたために発音ができなくなる  
ような音は、

六111 11 図 そうすると、ナニヌネノという一ぎようは、  
ぜんぶはなの音でできていることがわかった。

六116 11 けれども、いっしょうけんめいに作つたら、  
できないことはないだろうと思いました。

六117 7 のりは、ごはんつぶをよくねると、いいの  
りができました。

六117 10 なが四角から、ま四角に切る切りかたは、

〔略〕、うまくできました。

六119 9 やつとできたので、おかつてにいらつしや  
るおかあさんのところへとんでいって、

六119 11 図 「やつとできましたよ。」といっておみ

せしました。

六120 2 図 「まあ、よくできましたね。」

六134 10 しかさんに勝つたところで、あの角をおる  
などということはできません。

六139 2 図 「いいごちそうができた。」

六140 4 うさぎさんたちは、もうにげようと思つて  
もにげることはできません。

七28 10 図 あおむしがさなぎになったところを書い  
たのが、よくできたつて。

七34 9 私と弟のさぶろうは、乗るには乗つたもの  
の、動くことさえできません。

七52 11 ちよつとのあいだに、勝つことができた。

七55 3 文章は、くわしくしええすれば、はつきり  
写しだすことができるとはかぎりません。

七59 2 みじかくなつた文ですが、まだ、みがきあ  
げられたことばということではできません。

八12 3 もうどうすることもできませんから、

八14 7 寒い冬もぶじにこすことができました。

八17 1 虫たちは、どうしてこんなことができるの  
でしょう。

八19 8 あぶらぜみでは、七年もかからないと、親  
になることができないといひます。

八22 3 あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、  
われめができました。

八32 11 ふたりは、天の川で楽しくあうことがで  
きました。

八33 8 ただ「遠い」という考えだけでは、この遠  
いきよりは、おしはかることはできません。

八40 7 図 さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん  
美しい庭をもつことができます。

八45 4 どうしたら王さまのご病氣をなおすことが  
できるかと、相談をはじめました。

八64 ㊦ どんなにしても思いきつてはいるようにしてやるができなかった。  
 八64 ㊦ いままでだいていたのだし、あと四五日はすわることもできますから。  
 八76 ㊦ できるだけ早くぬま地をにげていった。  
 八77 ㊦ 風がひどいので、あひるの子は立つこともできず、  
 八77 ㊦ ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだすことさえできた。  
 八79 ㊦ 「おまえさんは、たまごを生むことができるかい。」  
 八80 ㊦ せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだしたりすることができると。  
 八84 ㊦ あひるの子は、あの美しい、しあわせなはくちようをわすれることはできなかった。  
 八85 ㊦ どうして、あの鳥のもっているような美しさをもつたらなど望むことができよう。  
 八88 ㊦ すると、とつぜん、あひるの子は、つばさをばたつかせることができた。  
 八88 ㊦ まえより強く空気をうち、とぶことができた。  
 八88 ㊦ ですから、1つづの種もみから、やく1500つづもみができただけです。  
 九03 ㊦ 二つか、三つのことばの組みあわせだと、すぐ心にものを思いうかべることができですが、  
 九10 ㊦ たいこのたたきかたによって、いろいろな心持をあらわすことができるし、  
 九10 ㊦ さまざまな情景を写しだすこともできるという話がおもしろかった。  
 九14 ㊦ 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、心持まであらわすことができるものらしい。  
 九19 ㊦ おりから南へ飛行中だったつばめは、食に

うえ、つめたい雨にすぶぬれになって、身動きもできなくなってしまうのです。  
 九33 ㊦ 三びきもとつてくると、うちの家族七人が、じゅうぶんだべることができます。  
 九49 ㊦ まわりの山は、みんな、たつたいまできたばかりのように、きれいにありあがつて、  
 九76 ㊦ みるまに、貝がらの山が家のまえにできます。  
 九128 ㊦ ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、あみもはることはできませんでした。  
 九133 ㊦ にげていくみつばちのうしろすがたをみていましたが、くもはどうすることもできません。  
 九144 ㊦ たまたま、あの白いちょうちんにあうことができた。  
 九144 ㊦ いいゆめをみることもできた。  
 九144 ㊦ いままた、ばらの花のやさしいことばをきくこともできた。  
 九147 ㊦ もがけば、あるいは、つばめのくちばしからころげ落ちることができたかもしれせん。  
 十66 ㊦ 心がけひとつで、われわれは、〈略〉毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができた。  
 十87 ㊦ 二月半ばかり、いなかでくらすうちに、おとうさんには、子どものお友だちができました。  
 十95 ㊦ 知らない外国人どうしでも、こんなに親しみをもちことができるものかと思ひました。  
 十135 ㊦ 方言でできた小歌のあることを、おとうさんは、きいて知っていましたから。  
 十132 ㊦ ぼくがいるために、うちの中が明るくなるように、できないものでしょうか。  
 十134 ㊦ ぼくがいるので、みんな楽しい氣持になるようにできないものでしょうか。  
 十33 ㊦ 「略。」とさとしたが、佐吉のもえるよ

うな研究熱は、どうすることもできなかった。  
 十34 ㊦ 機械で動かせば、もっと早く織ることができると、  
 十38 ㊦ これを、人工で作りますことはできないものだろうか。  
 十39 ㊦ もし、母貝の中に、核をさしいれることができたなら、眞珠が発生するにちがいない。  
 十43 ㊦ やつと眞円眞珠ができたよ。  
 十46 ㊦ わたしが、研究所でどうしてもできなかったことが、二つあります。  
 十64 ㊦ 狂言は、ひにくや、あてこすりや、すつばぬきや、ひやかしなどで、できているといつてもよく、  
 十94 ㊦ そういわれて、自信をもって、よしやろうということができた、うれしい。  
 十121 ㊦ しごとがじゅうぶんできないので、金次郎は、ほかの人たちにすまないと思ひました。  
 十129 ㊦ すると、秋の終りには、一びょうあまりの米を自分のものにすることができました。  
 十129 ㊦ 三年めには、二十びょうの米をとることができました。  
 十130 ㊦ やがて、金次郎は、親類の家からでて、〈略〉一家をふたたびおこすことができました。  
 十152 ㊦ あふれそうな乗客にまじって、どうやら乗車口へもぐりこむことができた。  
 十152 ㊦ その足も動かすことはできなかった。  
 十154 ㊦ 「略。」といった、しゃしようさんのことばをわすれることができない。  
 十162 ㊦ おまえのようなよわ虫には、ひよっとすると命を失うようなあぶないときでも、いいだすことのできないほど、『いいえ』ということばはいいにくいのだ。

十一 64 11 母親は、〈略〉、家をあげることができないので、

十一 76 2 が、ほかになにといつてすることもできませんでしたから、病人のふとんをなおしたり、

十一 82 11 少年は、まだ声をだすことができませんでした。

十二 19 11 さんだことをかえりみて、來年はもっともつとよくしたいと考えることができます。

十二 20 2 今のごころでは、いつも美しい実をならせることができるようになりました。

十二 20 12 今あれがあれば、どんなかげのところで、美しい色にできますがねえ。

十二 24 4 おいの正男ちゃんは、五つですから、もうひとり遊びができますが、

十二 26 1 今そがしいものだから、ついしつけができません。

十二 26 12 かんじんの歩くことはまだできません。

十二 27 6 すこしもゆだんができません。

十二 27 7 立ちはじめには、物を持たせると立つことができると、だれかがいったことを

十二 29 6 今ゆだんができません。

十二 31 3 私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな日は、

十二 35 4 私は、いつまでたっても区別ができませんでした。

十二 40 2 みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、

十二 40 3 みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、

十二 46 7 今日本ではあまりさかんでなかったが、アジアでもヨーロッパでも、りっぱな影絵しほい

十二 48 2 今ここで人形しほいが、これは人間にできないことでも平氣でやれる。

十二 48 9 今きみもひとつ、作ってみるといいよ。」「できるかしら。」

十二 48 10 できるとも。

十二 57 6 ふしぎなことに、神山のほうには、昔から九十九だんの石だんができていた。

十二 57 11 もしそれができなかったら、これからのちは、けつして村へでてきてはならない、

十二 58 2 もしそれができたら、毎年ひとりずつ、おにに人間をくわせてやるというのであった。

十二 69 8 どんなにはたらきがあつても、それにあつみと廣さがなかったら、正しくりっぱに世の中をわたることができない。

十二 76 5 今句か、まだできない。

十二 81 11 五セットで勝つことができました。

十二 81 12 私はいまでも、あのときのことをわすれることができません。

十二 82 4 この決勝戦に勝つことができた、

十二 84 8 大きなチルデン選手を追いつめるものすごさは、ことばではあらわすことができません。

十二 86 3 やわらかなボールだったので、無事に受け返すことができた、

十二 89 2 そうでない、相手の人に満足と興えることができないし、また自分の誠意も通じない。

十二 90 6 今話すことばは、その場その場にあらわれるその人の面影ということもできよう。

十二 93 8 文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんども書きなおすことができる。

十二 93 9 なんども書きなおすことができる。

十二 103 8 お金がなかったときにくらべて、お金ができてからはどれほど便利になったか、

十二 103 9 どれほど便利になったか、考えることができますか。

十二 109 10 いんさつ機も外國から渡つてきていたから、こんなりっぱな本ができました。

十二 110 6 江戸時代にできたまき絵書だなです。

十二 115 9 こうして、みんなの歩調がそろったときに、はじめて、日本が正しい、美しい國となることができるでしょう。

十三 17 10 戦いに敗れ、賠償として、〈略〉、作物のよくできる二州をとられました。

十三 18 9 この苦しいときにうちかつことのできる國民だけが、

十三 19 10 その三分の一以上が、作物のできない土地であります。

十三 22 3 みどりの野はできたが、

十三 24 9 北ヨーロッパ産の農作物で、できないものはないまでもなりました。

十四 8 7 どうしてもなれることのできないことがあるとしたら、

十四 8 11 ともわすれることのできないのは、わかりきっているのですから。

十四 9 10 どちらみちさけることのできなかったことに對して、

十四 10 3 調節ができるとか、ほのおがゆれたりしないとか、

十四 10 9 いたってべんりにできています。

十四 25 6 新しいものが世の中にできてくると、

十四 27 11 西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと思った。

十四 35 8 人間の力というものは、〈略〉、すばらしいものだといふことができるでしょう。

十四 56 12 今こんなに大きなきずができていますが、

- 十四5712 ㊦ それがこの日本でできるためには、私  
が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。  
十四617 ㊦ しかし、いちばんいい種を、來年もわ  
すれずにまいてもらうことができさえすれば、  
十四643 ㊦ もし、そういうしんがなかったら、きり  
は、たやすくできないということが、  
十四659 ㊦ つぎに、湯げがのぼるときには、いろい  
ろのうずができます。  
十四667 ㊦ 茶わんの湯げなどのぼあいだと、もう、  
茶わんのすぐ上から大きなうずができて、  
十四6611 ㊦ これとよくにたうずで、もっと大きなの  
が、庭の上などにできることがあります。  
十四676 ㊦ そうして、大きなうずがで、  
十四685 ㊦ 入れかわりに、そのつめたい空氣が下か  
らふきこんできて、大きなうずができます。  
十四711 ㊦ ところどころ特別につめたいむらができ  
ます。  
十四724 ㊦ 湯の表面には、水のおりているところと、  
のぼっているところがほうほうにできます。  
十四726 ㊦ 熱いところと、わりあいぬるいところ  
とが、いろいろに入りみだれてできてきます。  
十四733 ㊦ そのときできる氣流のむらが、光をおり  
曲げるためののです。  
十四741 ㊦ 湯がひえるときにできる、熱さをつめた  
さとのむらが、どうなるかということ、  
十四751 ㊦ 地面の空氣が、日光のためにあたためら  
れてできるときは、  
十四783 ㊦ 一方は太く、一方は細くなって、まっす  
ぐに割ることができなかったのに、  
十四787 ㊦ 竹の先のほうから割ってみると、もとま  
で、きれいにまっすぐに割ることができました。  
十四846 ㊦ どうして雪のけっしょうができるか、

- 十四851 ㊦ その雪が、どこで、どのようにしてでき  
たか、  
十四852 ㊦ どんな天空を旅して降ってきたか、おの  
ずから知ることができるといふのである。  
十四861 ㊦ 一ひらの雪をとらえて、それをいろいろ  
な角度からながめてみることは、つつましい心な  
しにはできるものではない。  
十四872 ㊦ ばんそうの音楽や、〈略〉によって、か  
なり生き生きと表現することができそうである。  
十四927 ㊦ 思いきって、その屋根うらの家へ帰るこ  
ともできなかった。  
十四9412 ㊦ 一本のマッチで、火をともしることができ  
たならば、どんなによからうか。  
十四9611 ㊦ その女の子は、中のへやをすっかり見と  
おすことができた。  
十五2610 ㊦ 発動機にこしようにできた飛行機乗りが、  
十五366 ㊦ 形のないものは、この方法では表わすこ  
とができない。  
十五372 ㊦ 木は、もともと形をうつしてできたもの  
であるが、  
十五402 ㊦ このかなのおかげで、日本のことばを、  
たやすくしかも自由にうつすことができるように  
なった。  
十五4110 ㊦ 日本のことばも、ローマ字で書くことが  
できる。  
十五4112 ㊦ 発音のこまかなところまで書き表わすこ  
とができて、標準語の教育に役だつ。  
十五494 ㊦ やがて、思いどおりのものを作ることの  
できる日がきた。  
十五543 ㊦ いまその大先生にお会いすることができ  
た私は、なんというしあわせ者であらう。  
十五786 ㊦ ほどなく、みかたができるだろう。

- 十五802 ㊦ 友だちとして心のかよったおつきあいが  
できるようになったのは、  
十五822 ㊦ 高い大理石のまろい柱でできた大廣間の  
ようなものがあらわれまゝ。  
十五938 ㊦ おまねきをいただきながら、そうあた  
ふたとおいとますることもできませんからね。  
十五9310 ㊦ おことわりはできませんよ。  
十五951 ㊦ 私たちはやっと、物の眞実を見ることが  
ができるのだよ。  
十五976 ㊦ まだ、お話はできないのだよ。  
十五983 ㊦ それを見わけることはできないよ。  
十五986 ㊦ チルチル がまんがでなくなつて、  
「〈略〉」。  
十五128 ㊦ きょうの感謝会はわすれることはできま  
せん――  
てく (助動) 2 テク 《テク》  
十494 ㊦ ゴメンクダサイツテ——ハイツテクノヨ  
十5210 ㊦ 「ゴメンクダサイツテハイツテクノヨ」  
と、おとなびたことをいいました。  
でぐち 「出口」(名) 3 出口  
五217 ㊦ あまりこんでいましたので、みんな、ぶつ  
ぶつとこごとをいいながら、出口の方へでていき  
ました。  
五259 ㊦ 駅の出口までくると、でむかえにきていた  
おねえさんをみつめました。  
十一544 ㊦ 「え顔の入口、感謝の出口。」  
てくび 「手首」(名) 1 手首  
十二1019 ㊦ 手首やむねなどには、まがたま、まるた  
まなどがかざってあります。  
てごろ 「手頃」(形状) 2 手ごろ  
八165 ㊦ 虫たちは、〈略〉、手ごろな、皮のうすい、



しるの多い木の根をさがしてあるきます。  
十五3010 ちようどそこに、手ころなごった岩の  
かけらが目にはいりました。

でさかり「出盛」(名) 1 でさかり

十一486 アカシヤの花が風にゆれ、畑では、い  
ちごがでさかりだった。

でさき「手先」(名) 3 手さき

十二525 (2) あなの両わきを切りこんで、手さき  
をまるめ、指の線をほる。

十二534 (4) 手は、手さきのほうをいれて、穴に  
糸を通してぬいつける。

十二1077 大きな目、のびた手さき、しっかりふま  
えた両足、どこをみても、力があふれています。

でざわり「手触」(名) 1 手ざわり

三55 (金) かぜの手ざわり。

でし「弟子」(名) 5 でし 弟子

三112 おしやかさまにはんたかという でしが  
いました。

三117 そこで、まいにち かしこい でしをひと  
りずつ、はんたかのところへやって、

三149 おしやかさまはたくさんのでしをつれ  
て、王さまのごてんにまいました。

三151 はんたかも おしやかさまのはちをもつ  
て、でしの中にまじっていました。

十二704 曾良は、信州の人で、歌がたいそう  
じょうずでしたが、芭蕉のことをきいてから、そ  
の弟子になりました。

でしたち「弟子達」(名) 1 でしたち

三159 でしたちはそのわきにならびました。

てじな「手品」(名) 1 手品

十五1210 石井先生の手品や、森田先生と西野先生  
のバイオリンとピアノ合奏など、

デシリットル ↓さんてんごデシリットル・やくさん  
てんろくデシリットル

です (助動) 1326 です 《デシ・デシヨ・デス》

一119 (金) どちらもおなじでしたね。もう 一ど

一166 だあります。なんでしよう。八 あさ

一175 んなえがかれるでしよう。どんなじ

一176 んなじがかれるでしよう。だれがか

一177 よう。だれがかくでしよう。だれがよ

一178 よう。だれがよむでしよう。せみがど

一308 で、なにをもつでしよう。この手で、

一312 手で、なにをもつでしよう。この足で、

一314 で、どこへいったでしよう。この足で、

一316 足で、どこへいくでしよう。十四 ひ

一349 (金) わってみたいのです。「略」。「略

一355 (金) かざりたいからです。「略」。「略

一362 (金) うかべたいからです。「略」。「略

一365 (金) 」。それはなぜですか。「略」。「

一368 (金) うたいたいからです。十六 だんだ

一451 (金) んさがあるようですね。「略」。「こ

一466 (金) せますと、「いいですよ。さあ、あちら

一502 い目のうさぎさんでした。「略」。「略

一522 ました。もうあさでした。おおきな川

一526 (金) これはあまの川ですよ。それ、ところ

一527 (金) がひかっているでしよう。「おとうさ

一529 (金) さなほしみたいですね。「略」。「へ

一531 (金) なだいやもんですよ。「略」。「と、

一537 (金) なだいやもんですよ。しんせつな

一538 (金) と、だいやもんですよ。いじのわる

一541 (金) ようしてくるのです。そうして、つき

一573 にいたきようだいです。きしやからか

一587 (金) のちのおんじんです。」といって、お

一608 (金) した。おかげさまで。」と、おじいさ

一611 (金) ひろってきたのですね。「略」。「お

一612 (金) 、よくござんじですね。ここにいろ

一613 (金) ひろったなかまですよ。「おじいさん

一622 (金) 、みんないい人ですよ。どなたが

一623 (金) はやっぱりたまですよ。」といって、

一629 (金) さんがでるところでした。「略」。「と

一633 (金) んたのおくにですよ。それであん

一635 (金) なにおおきいのです。」と、おじいさ

一52 (金) 略」。「ふるあめですか。たべるあめ

一53 (金) か。たべるあめですか。「略」。「へ

一54 (金) 」。たべるあめです。「略」。「略

一133 。ひとつはまつかでしたが、ひとつは、

一144 した。大きなじでした。しゃぼんだま

一154 かくことができるでしよう。三 こと

一228 (金) ました。どうしてですか。「略」。「へ

一232 (金) ようきではないでしようか。「略」。「略

一236 (金) 「先生、たいへんです。だりやの花が、

一241 (金) あれ、ただの水でしようか。「略」。「略

一246 (金) きがつきませんでした。「略」。「こ

一248 (金) うかいをするのですね。」五 おはな

一254 、この五人のぼんです。(一) いちろ

一344 (金) 略」。「おねがいです。」と、六人のめ

一3710 (金) んとうに青い色でした。」六 山びこ

一435 (金) っしやるとおりですね。」おとうさん

一459 (金) 」。これはなんですか。「略」。「へ

一462 (金) 」。「略」。「そうです。「略」。「略

一467 (金) でてくるところです。」(二) てる

一526 (金) がします。「ここですよ、さちこさん。

一544 (金) からもらったのです。」こういって、

一562 どんなかただったでしよう。こんなこ

一581 によくにたかたでした。わたくしは、

一612 これはよびかけです。みんなでかん

二七六(会)、「はい、ここですよ。」「略。」「  
 三二四(会)がよいえませんでした。おしやかさま  
 三二五(会)ました。そのときです。ふしぎなこと  
 三二六(会)までのぼしたのです。とおつしやい  
 三二七(会)『どんな花がすきですか。』『くみの人  
 三二八(会)切つていいものでしょうか。』といい  
 三二九(会)大きな木のことですから、切るのにも  
 三三〇(会)るのにも大きすぎでした。なん十人、な  
 三三一(会)ない、大きなふねでした。海にうかべ  
 三三二(会)ふねの早いことです。かいをそろえ  
 三三三(会)いったということ。五 学校「  
 三三四(会)。「ここはろかです。長くまつすぐ  
 三三五(会)ほんしつのまえです。ほそ長いびん  
 三三六(会)でいそがしそうです。」「略。」「略  
 三三七(会)へやはあたたかです。大きなかまど  
 三三八(会)かわいらしい目です。しょうかをう  
 三三九(会)てもたべたいようです。かぜがふくと  
 三四〇(会)たのおとうとさんです。にいさまがたの  
 三四一(会)おなりのなつたのです。おおくにぬしの  
 三四二(会)なかほどにあるのです。それで、おりれ  
 三四三(会)げへしむとこでした。」「略。」「略  
 三四四(会)はもうみえませんでした。」「略。」「お  
 三四五(会)その國へいくんですよ。」「略。」「こ  
 三四六(会)に光をあけるのですよ。」「略。」「へ  
 三四七(会)お目にかかるのです。あなたたちが  
 三四八(会)をあげにくのです。それから、あさ  
 三四九(会)かえってくるのです。だから、だれに  
 三五十(会)とよがあるのです。」「略。」「と、  
 三五一(会)ひまもありませんでした。にわかにパ  
 三五二(会)ながめました。雨でした。」「略。」「パ  
 三五三(会)ーターは赤がすきでした。」「略。」「マイ  
 三五四(会)ルはみどりがすきでした。」「略。」「ジュ

三二四(会)ユデーは青がすきでした。」「略。」「パー  
 三二五(会)ひびきがきこえるでしょう。学校では、  
 三二六(会)どんな音がするでしょう。かいがんで  
 三二七(会)かいがんではどうでしょう。こうぼでは  
 三二八(会)。「こうぼではどうでしょう。みなとでは  
 三二九(会)。「みなとではどうでしょう。風の日に  
 三三〇(会)しはみんなのものです。ばしやとお  
 三三一(会)ともみんなのものです。うちの人のか  
 三三二(会)なくなつてしまふでしょう。どうぞお  
 三三三(会)ぼもみんなのものです。このでんしや  
 三三四(会)やもみんなのものです。このしばふ  
 三三五(会)ふもみんなのものです。やわらかなも  
 三三六(会)も、みんなのものです。十一「まい  
 三三七(会)にたのしいものですよ。」「とおつしや  
 三三八(会)た。ある日のことです。おじいさんが、  
 三三九(会)ことができませんでした。かがやひめの  
 三四〇(会)つぱりききませんでした。みかどは、お  
 三四一(会)ことができませんでした。そうして、ふ  
 三四二(会)たねになるばかりでしたので、あると  
 三四三(会)こは、町やくばです。あかちゃんか  
 三四四(会)はゆうびんきよくです。手紙や小づつ  
 三四五(会)ちあつかうところ。こはけいさ  
 三四六(会)こはけいさつしよです。人々のたいせ  
 三四七(会)水のきれいないけです。まわりには、さ  
 三四八(会)にはめこんだよう。こは、町でも  
 三四九(会)ぼんのかじやさんです。あさからぼん  
 三五十(会)こはびよういんです。こはしょう  
 三五一(会)はしょうぼうしよです。こはえいが  
 三五二(会)こはえいがかんです。こはとしよ  
 三五三(会)こはとしよかんです。こはわたく  
 三五四(会)たくしたの学校です。町じゅうの友  
 三五五(会)ます。こはえきです。となりの町と、

四一三(会)こも、この町の目です。この町の耳で  
 四一四(会)です。この町の耳です。この町の手と  
 四一五(会)のおなじことです。お話があいて  
 四一六(会)びきは、わたくしです。先生が、『略。』  
 四一七(会)、「用意はいいですか。」「とおつしや  
 四一八(会)、「はい、いいです。」「こたえまし  
 四一九(会)うちをかいいたのです。やねも、かべも  
 四二〇(会)ねからおかえりですか。そのときは、  
 四二一(会)わっているよう。わたくしは、み  
 四二二(会)おひめさまのよう。たみおさん  
 四二三(会)あるけなかつたのです。その生徒さん  
 四二四(会)さしてあげたのです。」「略。」「へ  
 四二五(会)。「略。」「そう。」「略。」「略  
 四二六(会)うさんのことばです。」「略。」「みん  
 四二七(会)に気がついたのです。おとうさんが  
 四二八(会)ひびいてきたのです。わかりますか。  
 四二九(会)うがありませんでした。思いきつて、  
 四三〇(会)あさんのことばでした。『略。』と  
 四三一(会)略。』という声でした。わたくしは、  
 四三二(会)いで、かえれたのです。」「略。」「こ  
 四三三(会)ばがとめたからです。」「略。」「こ  
 四三四(会)。「略。」「そう。」「こまで話  
 四三五(会)て、ころしませんでした。」「略。」「へ  
 四三六(会)いろいろであうでしょう。」「五 がん  
 四三七(会)ことはありませんでした。」「略。」「略  
 四三八(会)ころで、ねむつたのです。」「略。」「と  
 四三九(会)たのは、かっちゃんでした。」「略。」「略  
 四四〇(会)うちをされるからです。山の上を高く  
 四四一(会)てとべば安全なのですが、いまは、かっ  
 四四二(会)えないいい氣もちでした。みずうみの  
 四四三(会)かな、星の光る夜でした。かさかさと  
 四四四(会)けてとびまわる音でした。つぎの日の

四573 んなは大よろこびでした。そこで、その  
四597 「とこたえるだけでした。」「略。」「かっ  
四626 がいているところです。かつちゃん、  
四634 みて、おおよるこびでした。」「略。」「あ  
四665 くいつてあそぶのです。」「かいぶんあそ  
四671 を考えだすあそびです。」「なぞあそび」  
四722 わん」というわけです。」「略。」「略  
四725 略。」「というわけです。」「略。」「略  
四728 せん」というわけです。」「略。」「みん  
四731 略。」「というわけです。」「みんな、  
四834 それはふじ山のえでした。ねえさんが、  
四881 ちまっているようです。ちらちらち  
四895 四八 だいぶつもあるでしょう。」「すずめ親  
四976 四九 ろがしているのです。」「うらしま「そん  
四106 一〇 たやねがみえるでしょう。」「うらしま「  
四110 一〇 しま「はい、そうです。」「おとひめ「よく  
四111 一〇 かったところでした。」「おとひ  
四114 一〇 いつもこうなのです。」「うらしま「す  
四115 一〇 ももうたくさんです。」「おとひめ「それ  
四117 一〇 いもできませんでした。」「うらしま「い  
四117 二 けないといいのですか。」「おとひめ「そ  
四117 二 四一 「おとひめ「そうです。いつまでもそ  
四119 八 かしむかしの話です。十一 一つの  
四120 八 た一つのでんとうですが、この光をだ  
四121 二 たらいていることでしょう。こんな小  
四121 二 四二 ころな小さなものですが、これができ  
四121 四 四三 苦心をしたことでしょう。でんとうの  
四121 六 四四 してこしらえたのでしょう。光つてい  
四121 七 四五 ようなものはなんでしょう。光がでる  
四121 九 四六 光がでるのはなぜでしょう。」「略。」「た  
四122 一 四七 たくしはでんきです。とおいとおい  
四122 二 四八 で生まれたものです。それから、みん

四122 四 四九 びをしてきたのです。けれども、ただ  
四122 七 五〇 わたくしのかおです。」「ただ一本の  
四122 九 五一 かつていることでしょう。」「略。」「  
四123 一 五二 たくしはマッチです。わたくしがこ  
四130 一 五三 しひろったのです。もってかえつ  
四131 九 五四 うし「お氣のどくですから、はごろもを  
四132 八 五五 おしまになるでしょう。」「天人「天人  
五103 三 五六 略。」「トンネルですよ。こは、みな  
五104 四 五七 ださったトンネルですよ。」「略。」「へ  
五123 三 五八 」。ぼうや、こですよ。おりましょ  
五137 七 五九 す。このつぎの駅ですね。」「略。」「へ  
五138 八 六〇 」。」「略。」「そうです。」「略。」「略  
五152 二 六一 にあてて書いた手紙です。私も、いまから  
五156 六 六二 手をはってもらうのです。これは、汽車の  
五157 七 六三 のと、おなじことです。汽車のきつぷは  
五161 〇 六四 ばんの中はにぎやかです。まもなく、私た  
五171 一 六五 。そこは私たちの山です。」「略。」「略  
五177 七 六六 だから、なお心配ですよ。」「略。」「そ  
五189 九 六七 たら、すぐおわかれでした。そこで、私た  
五212 二 六八 ある日のゆうがたでした。一だいの長い  
五221 〇 六九 ってくださいたのしょう。」「略。」「  
五234 四 七〇 てもこんでいたんです。それで、どこか  
五237 七 七一 けさせてくれたんです。ところが、ぼく  
五242 二 七二 わかい人がいるんです。ぼくは、はつと  
五251 一 七三 は、もう大きいんですから。』といつて、  
五257 七 七四 でうれしかったんです。」「はるこさん  
五272 二 七五 って帰ってきたのですもの。どこかであ  
五285 五 七六 とでもうれしんですよ。」「略。」「略  
五287 七 七七 人からもらったんです。」「略。」「それ  
五293 三 七八 「それはこうなんです。店をですこし  
五296 六 七九 くてかるそうな物です。そこで、ぼくは  
五298 八 八〇 へおいでになるのしょう。ついでです

五299 四 八一 でしょう。ついでですから、一つ持って  
五302 二 八二 」。『だいじょうぶです。ぼくにも持てそ  
五302 二 八三 ぼくにも持てそうですから。』といつて、  
五304 四 八四 なかおもかったのですが、ぼくは、かた  
五3010 四 八五 いいえ、はじめてです。まえからも、や  
五3011 四 八六 かできなかったのです。ぼくにはすこし  
五311 四 八七 こしおもかったんですが、とてもうれし  
五311 四 八八 ともうれしんですよ。これからも、い  
五3111 四 八九 どうにうれしんですよ。」「四 石炭「  
五3210 四 九〇 たいて走っているのしょう。これは貨物  
五331 四 九一 よう。これは貨物船です。かんぼんのクレ  
五336 四 九二 、なんの力で走るのしょう。えんとつが  
五341 四 九三 ます。こは工場町です。こで、きかい  
五345 四 九四 している力は、なんでしょう。おかあさん  
五351 四 九五 ガスもえていんですよ。あのカスは、な  
五352 四 九六 は、なにか作るのしょう。なにをして  
五353 四 九七 にしているところでしょう。これは、石  
五355 四 九八 をほっているところです。まわりのかべに  
五362 四 九九 のきかいを動かすのです。ガスも石炭から  
五368 四 一〇〇 、どうしてできたのしょう。みなれない  
五371 四 一〇一 は大むかしのけしきです。このような木が  
五374 四 一〇二 って石炭になったのです。大むかしのたい  
五379 四 一〇三 てはたらいっているのです。五 心と心  
五385 四 一〇四 していらつしやるのです。手紙の中に、こ  
五392 四 一〇五 ぼんたのしいときです。冬がすぎて、春  
五393 四 一〇六 て、春がきたからです。山のてっぺんに  
五404 四 一〇七 花は、こぶしの花です。白くてゆつたり  
五405 四 一〇八 く、ひんのいい花です。この花がよくさ  
五409 四 一〇九 黒ぶちのちちうしです。なかに、子うし  
五436 四 一一〇 ねえさんはいい声でした。ぼくのうちは  
五436 四 一一一 ぼくのうちは花屋です。ですから、花ば  
五438 四 一一二 な花は、あさがおです。空色のあさがお

五43(9) 手。空色のあさがおです。それから、まっ  
 五43(10) 手 なカーネーションです。そのたねをこん  
 五54(11) ことは、できませんでした。まさにおか  
 五55(5) たが、わかりませんでした。そこへ、受持  
 五56(2) 今夜みるのは土星です。あそこに大きく  
 五56(2) きく光っている星ですよ。「略」。私は、  
 五57(2) んがわからないですよ。「略」。私は、  
 五57(9) た。「略」。「星ですよ。「略」」。ま  
 五58(3) まだみていたいようでしたが、やっと目を  
 五59(8) ました。どれも空色です。あやこは、それ  
 五60(2) ましたね。いい色ですこと。「略」。「  
 五60(5) 、たねをまいたのでしたね。「略」。「  
 五60(7) 」。『略』。「そうです。この春まいたの  
 五60(7) 。この春まいたのです。たねをまいたか  
 五60(9) こんなにさいたのですね。「略」。「へ  
 五61(5) しが水をやっただんですもの。「略」。「  
 五62(3) くれたのは、だれでしょう。「あやこは、  
 五62(9) あさがおとおなじですよ。たねはおかあ  
 五64(1) 、大きくなったのしょうが、わたしは  
 五67(11) きて、「なんの用ですか、おじいさん。  
 五69(4) した。「なんの用ですか、おじいさん。  
 五69(6) がほしいというのです。「略」。「おじ  
 五70(11) なりたいというのです。「略」。「おじ  
 五71(10) あなたもまんぞくでしょう。」といいま  
 五73(3) なは、「なんの用ですか、おじいさん。  
 五73(10) 帰ってみると、どうでしょう、ちゃんご  
 五76(3) した。「なんの用ですか、おじいさん。  
 五77(9) かおよりも大きな花です。先生が、「略」  
 五78(1) 、「やあ、きれいですね。だれがいて  
 五78(2) がいてくれたのですか。ごこのずが工  
 五78(7) 持ってきてくれたのです。これで教室が  
 五79(10) きあがってくるようです。「略」。「略

五82(1) こんなに休んだのしょう。みんな、か  
 五83(5) 友だちが、「いいですか、写しますよ。  
 五86(10) ぎょう、かわいいでしょう。「略」。「  
 五87(2) うでも、目は二つですよ。「略」。「へ  
 五88(2) めになると、へんでしょう。「略」。「  
 五90(2) 。あれはどうしてですか。」とたずねま  
 五92(8) 、たけのごはんですよ。「略」。「へ  
 五93(7) のぼってくるころでした。「略」。「りょ  
 五94(5) なっておちていたのです。「略」。「略」  
 五95(10) ちゃんは大よろこびでした。ひなはずめ  
 五95(11) ずめではありませんでした。ひばりでもあ  
 五95(11) ばりでもありませんでした。あたまたからせ  
 五96(2) らしい。ひわの子ですよ。ほんとうは、  
 五96(3) 、まひわというのですが、ふつうは、ひ  
 五98(7) っておいたらいいでしょう。「略」。「  
 五98(9) うと思ってるのです。「そのぼんこの  
 五98(10) 」。『略』。「そのぼんのことでした。バタバタと昔  
 五99(9) 元氣になったようですね。「略」。「お  
 六12(7) たのは、そのためでした。」といってわ  
 六22(5) 、きりぎりすさんでしたか。「あり二、  
 六22(9) へ帰るところなんです。「バイオリンの」  
 六23(11) あり「せつかくですが、わたしたちは  
 六24(1) そくをしてるのです。「きりぎりす」はた  
 六24(6) ときにはたらくのですよ。さあ、おそく  
 六29(5) がら、「しばらくでしたね。」あり「お  
 六29(6) 」。あり「お元氣ですか。」きりぎりす  
 六31(3) 、まんのシナリオです。1 はげしい風。  
 六33(11) しのたんぼはどこでしょう。「雲、山のか  
 六38(4) おかあさん、なんでしょう。あの屋根に  
 六38(11) まあ、かかしさんですね。どうしたの、  
 六39(2) ふきとばされたんです。きょうの大風に  
 六39(10) たがたがまもるんですもの。」かかし「そ

六51(2) 雲 月の明かるい晩でした。屋根も、木の  
 六53(6) そぎでとんでいくでしょう。「略」。「  
 六54(3) しぎでたまりませんでした。ふみおはふと  
 六59(1) の組のまつもとさんです。七と五と 私  
 六59(4) ばの声のかずのことです。うたうたは、  
 六59(8) か七になつてゐるのです。「空のうた」を  
 六61(4) しろくならないませんでした。また、ふしぎ  
 六61(5) ふしぎでなりませんでした。みなさん、た  
 六61(8) けさの温度は五度です。毎朝、このらん  
 六66(5) たそのつぎを書くのです。そのようにして  
 六68(6) くみながら書いたのです。まんがもいま  
 六68(8) てこしらえたまんがです。クロスワーズパ  
 六69(5) いはりあわせたものです。そんなに大きく  
 六69(7) は、むずかしいことでした。第二号がどん  
 六69(8) うになるか、楽しみです。七 だれの方  
 六73(2) 「雪だるまのことです。」と、とんでも  
 六73(7) まは生きてゐるのしょうか、死んでい  
 六73(8) か、死んでゐるのしょうか。「略」。  
 六74(5) 命って、動くものではないか。「略」。  
 六76(10) ら、生きてゐるのしょう。「略」。「  
 六77(2) れを考へてゐるんです。ぼくたちは、だ  
 六77(3) ら、生きてゐるのしょう。「略」。「  
 六78(8) たら動かなくなるのしょう。けれども、  
 六78(8) れども、息はするのしょう。だがそう  
 六79(3) ときんやつてゐるのしょう。しんぞうの  
 六79(4) しんぞうのこどうですよ。あなたが、そ  
 六79(6) ているの。ちがうでしょう。息と同じよ  
 六81(1) 「お願いがあるのです。」みこと「どうい  
 六81(11) 一日だけいいのです。」みこと「いくら  
 六82(2) どつりがしたいのです。」みこと「そんな  
 六82(4) をつてみたいのです。」みこと「そうう  
 六84(7) ものがなかったんですか。」みこと「おま

六849 ㊦ いえ、つれませんでした。つれないどころ  
 六872 ㊦ ていらつしやるのですか。」みほとりの「つり  
 六874 ㊦ っていないのです。」年より「では、  
 六877 ㊦ いなごてんにつくでしょう。」みほとりの  
 六878 ㊦ と「なんのごてんですか。」年より「海の  
 六879 ㊦ 「海の神のごてんです。そのごてんの門  
 六882 ㊦ と」木にのぼるのですか。」年より「そう  
 六883 ㊦ か。」年より「そうです。すると、海の神  
 六884 ㊦ を教えてくださるでしょう。さあ、早く  
 六921 ㊦ 、ほおりのみことです。」海の神「あ、さ  
 六927 ㊦ られてしまったのです。」海の神「つりば  
 六9210 ㊦ ね。」みほとりの「そうです。兄のだいじなつ  
 六933 ㊦ やつてきたところです。」海の神「そうです  
 六934 ㊦ す。」海の神「そうでしたか。それはお困  
 六934 ㊦ か。それはお困りでしょう。では、さつ  
 六957 ㊦ 魚たち「ほんとうです。」海の神「おかし  
 六977 ㊦ あ、これだ。これです。」海の神「みつか  
 六1032 ㊦ るくして、「なんです、まさおさん。太  
 六1041 ㊦ でも、よくみえるでしょう。」「略。」  
 六1143 ㊦ かつていないたこです。はじめてあげに  
 六11610 ㊦ を作るのははじめてです。けれども、いっ  
 六1175 ㊦ 、たこ糸やのりなどです。紙は半紙でいい  
 六1188 ㊦ つぎに骨のとおりつけです。骨は、たて骨と  
 六11810 ㊦ て骨とよこ骨の二本です。まず、たて骨か  
 六1195 ㊦ へ弓なりにまげるのですから、めんどうで  
 六1195 ㊦ ですから、めんどうでした。じつさいに紙  
 六1198 ㊦ ているのでめんどうでしたが、いろいろな  
 六1205 ㊦ しちゃん、大喜びでしよう。でも、のり  
 六12011 ㊦ しくてたまりませんでした。 十一 うさ  
 六1294 ㊦ 。それはたぬきさんでした。たぬきさんは  
 六1322 ㊦ さんたちのおとくいです。「略。」「略」  
 六1342 ㊦ つきあげるといいます。「略。」「うさぎ

六三六 1 とくいとするとこゝろです。しかさんも負け  
六三六 11 さんたちはいませんでした。そうして、木  
六三六 7 んがねむっていたのです。うさぎさんたち  
六三六 8 すこしも知りませんでした。とらさんは、  
六三六 9 、晝ねをしていたのですが、うさぎさんた  
六四一 3 う一びきのとらさんでした。「略。」「略  
六四四 4 会、しずかなところですよ。安心して、ゆ  
七一一 10 れと同じつかいかたです。ところが、「か  
七一二 7 や木のことをいうのです。「きゅうりの手  
七一二 8 の手」なども、同じです。「略。」「略」  
七一三 1 ことになってきたのでしよう。「略。」「へ  
七一三 6 につかわれているのでしよう。それとよく  
七一四 1 、どんなつかいかたでしようか。「略。」「  
七一五 4 いを、しめしたものです。「略。」「略」  
七一七 1 会くさんとんでいるでしよう。」「先生よく  
七一七 10 つきはじめてからでしよう。」「女の子四  
七二八 2 会実はなににするんですか。」「先生「そんな  
七二八 8 会子」「あら、そうですか。」「男の子」「あ  
七二九 3 会よがでなかつたんですね。」「女の子」「そ  
七二九 6 会にかくれているんですか。」「先生「しげつ  
七二九 9 会は、なんのはたけですか。」「先生「知つて  
七三〇 3 会「だいこんばたけです。」「先生「そうだ。  
七三〇 5 会に二十本うえたんです。そのうち、たね  
七三六 6 会を、話していたんですよ。」「母「そう、そ  
七三六 7 会う、それもお勉強ですね。あなたは、き  
七三六 8 会くかわつてきたんですよ。」「母「はつぱと  
七三六 4 会みつからないたためですよ。」「兄「あ、そう  
七三六 2 会さなぎになつたのですよ。先生は、あお  
七三七 5 会おっしゃただけです。」「母「先生は、い  
七三七 9 会から、どうかわるでしようね。」「兄「観察  
七三〇 5 会生にはめられたんですつて。」「はるお「い  
七三〇 11 会。母「どうしたんです。そんな大きな声

七三九 ㊦ ような、美しい羽ですこと。」兄「あの羽  
 七三二 ㊦ るのは、はじめてですよ。もんしろちょ  
 七三四 ㊦ 中は、人でいっぱいでした。「へ略。」「へ略  
 七三四 ㊦ おしたって、だめですよ。」むりにわり  
 七三五 ㊦ かと、思われるほどでした。私は、ありつ  
 七三五 ㊦ 、「だいじょうぶです。おばさんのうち  
 七三五 ㊦ ったことがあるのですもの。それに、乗  
 七三五 ㊦ 時間ほどでつくるのですから。」とうけあ  
 七三五 ㊦ ろうをつれてきたのですした。「へ略。」「へ略  
 七三八 ㊦ らえてくれていたのです。私は、思わず、  
 七四三 ㊦ しでがましいことですが、わたしにちょ  
 七四三 ㊦ みなさん、いかがでしょう。」はくしゅ  
 七四五 ㊦ 、思っていますでした。また、こんな  
 七四五 ㊦ まぎれにひいたのです。せつかくのおこ  
 七四五 ㊦ くのおこころざしですが、このお金はい  
 七四七 ㊦ 心の鏡のようなものです。心がはっきりと  
 七五六 ㊦ ます。明かるい月夜です。そこで、虫が  
 七五九 ㊦ 、みじかくなつた文ですが、まだ、みがき  
 七五九 ㊦ せん。つぎはどうでしょう。なにかの花  
 七六九 ㊦ にせていくやりかたです。もう一つは、だ  
 七六八 ㊦ つめていくのと同じです。やりかたはいろ  
 七六八 ㊦ やりかたはいろいろですが、ねらいどころ  
 七六八 ㊦ ねらいどころは一つです。心に思ったこと  
 七七〇 ㊦ 「はいはい。なんですか。」旅人「あなた  
 七七一 ㊦ が――」甲「そうです。」乙「さきほどか  
 七七二 ㊦ しつづけているのですが。」旅人「もしや  
 七七六 ㊦ 顔で、甲乙「そうです。そうです。」旅  
 七七六 ㊦ 「そうです。そうです。」旅人は、おち  
 七七六 ㊦ ったくそのとおりです。」乙「かた目なん  
 七七八 ㊦ 。」乙「かた目なんですよ。」旅人は、思  
 七七八 ㊦ 旅人「その荷は表でしょう。」甲「たしか  
 七七八 ㊦ に、たしかにそうです。」乙「どこにいる

七七八(会) おききになったのですか。「旅人「いいえ  
 七八〇(会) の人であつたのです。」裁判官「それか  
 七八一(会) んと知っているのです。」裁判官「ほかに  
 七八二(会) いかと、思ったのです。」裁判官「なるほ  
 七八三(会) 人「それは、こうです。道のかたがわの  
 七八四(会) たべであつたからです。」裁判官「なるほ  
 七八五(会) うしてわかつたのでしょうか。」乙「そうで  
 七八六(会) しょう。」乙「そうです。それが麦だとい  
 七八七(会) 、なぜわかつたのでしょうか。裁判官どの  
 七八八(会) こぼれていたからです。」裁判官「よしよ  
 七八九(会) けがはつきりしたでしょう。もう、うた  
 七九〇(会) の日は、きらいなのでしょう。茶うさぎ  
 七九一(会) ぎのふんはまんまるです。6月28日(木)  
 七九二(会) 2cm、茶は1・5cmでした。そうじをしよ  
 七九三(会) のうさがかんだのです。しばらく動かな  
 七九四(会) おやうさがしたのです。もくろく「一  
 七九五(会) 白、もう1ぴきは黒でした。ねずみ色の4  
 七九六(会) が、草はたべませんでした。11月26日  
 七九七(会) えて、のませませんでした。うさぎは、人  
 七九八(会) をのませたくなかったです。うさぎは、人  
 七九九(会) ら、きょうで20日めです。子うさぎと母う  
 八〇〇(会) かるいので260gでした。12月2日  
 八〇一(会) cm、ねずみ色は6cmでした。12月4日  
 八〇二(会) といわれるほおじろです。どうして、ピオ  
 八〇三(会) 賣つていなかったのですから……。それが  
 八〇四(会) の人だからだったのです。私も、すっかり  
 八〇五(会) 、ことに美しいものです。まるで、一日の  
 八〇六(会) 予言してくれるようです。思わずおきだし  
 八〇七(会) きいてみたりするのです。「略。」という  
 八〇八(会) と、本でよんだためです。たとえば、「い  
 八〇九(会) もっているのだそうです。なんとこんな  
 八一〇(会) っぽうなきかんぼうでした。たとえば、近

八一一(会) いこうとさえるのです。うちの中にいる  
 八一二(会) うは、さるそっくりです。また、どうかす  
 八一三(会) つついたりするのです。ピオのゆうかん  
 八一四(会) でふんでしまったのです。「略。」と、女  
 八一五(会) るわせてもう虫の息です。「略。」みんな  
 八一六(会) なしくてなりませんでした。ころしたのは  
 八一七(会) 、もちろんあやまちですが、でも、信用し  
 八一八(会) いいようのないものでした。それから十年  
 八一九(会) く一生なくならないでしょう。一 あぶ  
 八二〇(会) 、たまごはそのままでした。暑い夏がやっ  
 八二一(会) 中ほどこもまっくらです。せみの子どもた  
 八二二(会) ます。そこは木の下ですから、大小の木の  
 八二三(会) いわくしごくなことですが、せみの子から  
 八二四(会) んなことがでるので、それは、だ  
 八二五(会) うずに生きていくのです。虫は、はじめは  
 八二六(会) このうえなくふべんですが、そのかわり、  
 八二七(会) てこないから、安全です。同じ地中に住む  
 八二八(会) んという氣長なことでしょう。せみの子た  
 八二九(会) 皮をぬぐ日をまつのです。上からつたわっ  
 八三〇(会) とうにおかしなものです。皮がこわばつて  
 八三一(会) けられたらたいへんです。地上には、一本  
 八三二(会) るのが、うれしそうです。朝日が山の上に  
 八三三(会) 天帝が乗つておいでです。馬車は、七色の  
 八三四(会) めておいでになるのです。けれども、み  
 八三五(会) も、みあたりませんでした。馬車はふたた  
 八三六(会) ぎゅうというものです。「略。」「略」  
 八三七(会) んぎゅうというのですか。「略。」天  
 八三八(会) いるようにみえるのです。この星は、一つ  
 八三九(会) つきりとみえないのですから、ずいぶん、  
 八四〇(会) 「光年」という単位です。一光年は、光が  
 八四一(会) いのきよりにあるのでしょうか。二十光年の  
 八四二(会) 星は、二九・五光年ですから、今夜のはた

八四三(会) しているということです。このきそく正し  
 八四四(会) てたもたれているのでしょうか。四 幸福  
 八四五(会) なことはありませんでしたが、もつとたく  
 八四六(会) 、あなたは金持ですね。」と、そのみ  
 八四七(会) ではないのですか。「略。」「へ  
 八四八(会) れば満足なさるのですか。「略。」「へ  
 八四九(会) 。
 八五〇(会) か。たしかにそうですか。「略。」「へ  
 八五一(会) にそのようになるでしょう。」み知らぬ  
 八五二(会) がねになつていたのです。王さまは、おか  
 八五三(会) いせつであつたからです。「略。」「そうお  
 八五四(会) 。
 八五五(会) 。
 八五六(会) あ、かわいいひめです。」「略。」「王さ  
 八五七(会) もとどおりになるでしょう。」王さまは、  
 八五八(会) いう考えはでませんでした。そこへ、王さ  
 八五九(会) まにお着せするのです。そうすればすぐ  
 八六〇(会) はりみあたりませんでした。王子も、なん  
 八六一(会) を通りかかったときでした。中から人の声  
 八六二(会) つともっているだけでした。ひとりの男が  
 八六三(会) うとしているところでした。王子は、いま  
 八六四(会) いことはやまやまですが、わたしには、  
 八六五(会) う「だというつもりでした。そんなまずし  
 八六六(会) ておいでくるつもりでした。この「幸福」  
 八六七(会) おまえさんはだれですか。」とたずねま  
 八六八(会) おまえさんはだれですか。」とたずねま  
 八六九(会) しないかと思つたのでしょうか。「略。」と  
 八七〇(会) おまえさんはだれですか。「略。」「へ  
 八七一(会) たとは知らないようでしたが、なさけのあ  
 八七二(会) のおくは知れるものです。それをうれしく  
 八七三(会) にご長かかるとすよ。なかなかわれ  
 八七四(会) いことをしないのですから。」と、親あ

八六九(三) ほんとうにいいんです。それに、ほかの  
八六八(三) れば美しくもなるでしょう。たまごの中  
八六九(三) ふうになっただけですよ。」といつてか  
八八四(三) ぐのは、いい氣持ですからね。それに、  
八八四(三) かりにならないのです。「略」。「略」  
八八五(三) ときは、喜ぶものですよ。あたかなへ  
八八五(三) なさ。ほんとうですよ。おまえさんの  
八八五(三) めを思っているのですよ。いやなことを  
八八五(三) いと思っているのです。「略」。「略」そこ  
八八五(三) う」というのだそうです。やく3・6dlの  
八八五(三) みともみがらばかりでした。水をいっぱい  
八八五(三) めがでるといふことです。5月2日(水)  
八八五(三) んとうにめになるのでしょうか。5月7  
八八五(三) ら、ちょうど10日めでした。ほんごとにな  
八八五(三) がよくとれないそうです。水のすむのをま  
八八五(三) た。いつ、めがでるでしょう。5月15日  
八八五(三) でそろってにぎやかです。6月15日(金)  
八八五(三) いよきようは田植えでしたので、みんなう  
八八五(三) 、みんなうれしそうです。よいお天気で  
八八五(三) 、風もなくあつい日でした。なわしろから  
八八五(三) 、もうだいじょうぶでしょう。7月13日  
八八五(三) をやるとうれしそうです。9月7日(火)  
八八五(三) いまにもほがでそうです。9月22日(水)  
八八五(三) ら、ちょうど60日めです。9月1日(土)  
八八五(三) まださいいていませんでした。3時間めの終  
八八五(三) 度 きようは雨降りでした。花は、1日開  
八八五(三) は、1日開きませんでした。9月14日  
八八五(三) 、きつと実になるのでしょうか。9月21日  
八八五(三) たまごだということでした。みんなで虫と  
八八五(三) 、だいたい12ぐらいでした。両方をくらべ  
八八五(三) ももみができたわけです。10月25日(木)  
八八五(三) のげん米がとれるのですから、これは平年

九四九 ぬったら、どうなるでしょう。むらさきの  
九五二 ぬったら、どうなるでしょう。これは二つ  
九五三 つの色の組みあわせですが、三色の組みあ  
九五六 じはまたふかくなるでしょう。(一) オ  
九五九 がこもっているものです。この音と、ほか  
九六六 てひいてみたらどうでしょう。音をうま  
九七八 のがあらわれてくるでしょう。この「水」  
九八八 とばを加えたらどうでしょう。色の組みあ  
九八八 ばあいでも同じことです。一一 音という  
九八八 けは親つばめと同じですが、まだ、口ばし  
九八八 遠い南の海のかたです。とうきようから  
九八八 と南へとんでいくのです。南洋の島々から  
九八八 のがあるといふことです。日本のつばめは  
九八八 たいへん早くとぶ鳥です。汽車や自動車も  
九八八 わないくらい早さですから、なん百キロ  
九八八 イーンのできごとです。約十万ばのつば  
九八八 くなつてしまったのです。ウィーンの動物  
九八八 民が、加わったほどです。協会へは、電話  
九八八 たのは、九月十七日でした。その日はたい  
九八八 つつけて送ったほどでした。汽車や飛行機  
九八八 いたいつぎのとおりです。九月二十四日  
九八八 計は、約八万九千ばです。このほかに、オ  
九八八 なおっていないころでした。しかし、この  
九八八 せた大きなできごとでした。また、飛行機  
九八八 どつてくるというのです。近年になって、  
九八八 北をさしてすすむのです。その小さな胸に  
九八八 思いうかべているのでしょうか。あの家のの  
九八八 古果がなつかしいのでしょうか。春になると  
九八八 んなにうれいことでしょう。四 タや  
九八八 は夏の暑いさかりでしたが、いまはもう  
九八八 みなさんもお元氣ですか。ぼくは、こち  
九八八 九三二(三) の中の小さな農家ですが、家のまえをち

九三二(三) いちばんの楽しみです。ふながたくさん  
九三三(三) んへって来たそうです。まえば、もつと  
九三三(三) るな魚がいたそうです。このほかに、大  
九三三(三) たいそうにぎやかです。らいぎよは、大  
九三三(三) ルあまりのところですよ。母と、おぼと、  
九三三(三) 、七月二十八日でしたが、村でいちば  
九三三(三) んおせい植えつけました。たきぎをとり  
九三三(三) 五六分ほど登るのですが、そこは、深い  
九三三(三) あびるのが楽しみでした。また山へ登る  
九三三(三) きではありませんでした。だいいち、じ  
九三三(三) なにかでできそうです。なん十メートル  
九三三(三) らだじゅうがあせです。一ど、すぎの木  
九三三(三) ばつておりませんでした。木が動くので  
九三三(三) たたき落せませんでした。なたをふりお  
九三三(三) 鳥がみつかるからです。ぼくたちがこの  
九三三(三) く、うれいことでした。いちばん小さ  
九三三(三) のかきはしづがきですから、ほしがきに  
九三三(三) もついていったのです。ぼくはみなさ  
九三三(三) そうで、けつこうです。あした、めんど  
九三三(三) して指につくらうでした。けれど、い  
九三三(三) しくてたまりませんでした。はがきをそつ  
九三三(三) くまでねむれませんでした。けれども、い  
九三三(三) 「ふえふきのたき」でした。「ふえふきの  
九三三(三) りすはもういませんでした。ただ、くるみ  
九三三(三) ちよつと光っただけでした。いちろうがす  
九三三(三) こちをみていたのです。いちろうは、だ  
九三三(三) た。その男はかた目でした。そうして、み  
九三三(三) 曲がつてやぎのようです。ことに、その  
九三三(三) うなカタチだったのです。いちろうは、き  
九三三(三) きみがわるかったのですが、なるべくおち  
九三三(三) き、ぼく、いちろうです。けれど、どう  
九三三(三) 九三二(三) た。それでした。「略」。「略」と、

九五九 かなかうまいようでしたよ。」といいま  
 九五八 ました。「うまいですね。四年生だっ  
 九五五 んなには書けないでしょう。」すると、  
 九五八 え、大学の四年生ですよ。」すると、男  
 九五九 子、あなたはたれですか。」とたずねま  
 九六〇 しいと思いましたが。まあ、ゆっくり  
 九六一 かぴか光っているのです。よくみると、  
 九六二 百でもきかないほどでした。ワアワアとみ  
 九六三 ながかいてるのです。「略。」やまね  
 九六四 。「いいえ、だめです。なんといいたっ  
 九六五 ちばんえらいのです。そうして、わた  
 九六六 りのがえらいのです。いちばんま  
 九六七 るいはわたしです。「略。」「略」  
 九六八 「いいえ、だめです。なんといいたっ  
 九六九 ちばんえらいのです。「略。」「略」  
 九七〇 るいはわたしです。「略。」「略」  
 九七一 「いいえ、だめです。頭のとがったの  
 九七二 た。「このとおりです。どうしたらいい  
 九七三 でしょう。」どうしたらいいでしょう。い  
 九七四 ちろろ、はがきのもんです。これからは、  
 九七五 し、と書いていいでしょう。」「い  
 九七六 あ、なんだかへんですね。それは、やめ  
 九七七 やめたほうがいいでしょう。」「やまね  
 九七八 こできょうのお礼ですが、あなたは、こ  
 九七九 ど、どちらがお好きですか。」「略。」や  
 九八〇 のどんぐりが好きです。」「やまねこは、  
 九八一 きは、もうきませんでした。やっぱ、  
 九八二 うはときどき思うのです。七 貝づか  
 九八三 れからいく貝づかですよ。」先生につ  
 九八四 いのりえだつたのです。そう、あの向  
 九八五 ちらちらとみえるでしょう。あれが貝づ

九八二 う。あれが貝づかです。」もうすこしで  
 九八三 話していた貝づかです。この土の上に白  
 九八四 ろいろな貝のからです。むかしの人は、  
 九八五 かることがあるのです。ひとつこれから  
 九八六 て、どんなところでしょう。」「略」  
 九八七 う。これがふつうですよ。」「略」  
 九八八 、ここは貝ばかりですよ。」「口々にこん  
 九八九 いちばん多い土器です。とっておきな  
 九九〇 かった物があつたでしょう。それには、  
 九九一 がと思うような物ですが、これはたいせ  
 九九二 へひとりもありませんでした。四人が話しあ  
 九九三 う。先生、もういいでしょう。」「略」  
 九九四 のついた大きなくもです。ある日の夕  
 九九五 ることはできませんでした。星が光りだ  
 九九六 しいところでは、くもが、いきな  
 九九七 り歌もきこえませんでした。風が思  
 九九八 じくさんさいていたのです。いにおい  
 九九九 れは白くちやうちよでした。「略」くも  
 一〇〇〇 をさがしてくるのです。「略」くも  
 一〇〇一 たことはありませんでした。また、口にし  
 一〇〇二 たこともありませんでした。いま、ちやう  
 一〇〇三 けたのは、ばらの花でした。「略」くも  
 一〇〇四 た。「もう夜ふけですよ。おやすみな  
 一〇〇五 ねむってしまったのでしょう。くもが、月  
 一〇〇六 すいとんできたのでした。くもは、この  
 一〇〇七 だそうとはしませんでした。つばめは、麦  
 一〇〇八 日本人もいかなのです。日本人をみたこ  
 一〇〇九 もと遊ぶことが好きですから、道で子ど  
 一〇一〇 りの笑の落ちるころでした。おとうさ  
 一〇一一 らしい愛情のしるしでした。ちやうど、ブ  
 一〇一二 もつとも楽しい季節でした。どこへい

一〇一〇 た景色のよいところですから、橋のたもと  
 一〇一一 ばかりの子どもたちでした。ある日のこと  
 一〇一二 さんでおきたいのです。なるべく、小さ  
 一〇一三 になつてくれたからです。ピエンヌとい  
 一〇一四 校の下の学年ぐらいたしでしよう。おと  
 一〇一五 の学年ぐらいたしでしよう。おとうさん  
 一〇一六 、どちらがきれいですか。」「とたずねま  
 一〇一七 本の海はどんな色ですか。」「略」  
 一〇一八 きとおった青い色ですよ。」「と、おとう  
 一〇一九 きとおった青い色ですか。」「と、日本  
 一〇二〇 そうな目つきの少年でした。自分の國  
 一〇二一 すかとたずねるものですから、「略」  
 一〇二二 みんなフランス語です。えんぴつ一本買  
 一〇二三 どんなにしあわせてしょう。」「三 日の  
 一〇二四 みえる太陽の光線ですが、わけてみると  
 一〇二五 略。」「もうじきですよ。」「略」  
 一〇二六 まかにしらべたいのです。トマトが畑に植  
 一〇二七 じうかべてみたいのです。もようをみた  
 一〇二八 子どもになりたいのです。そうして、うち  
 一〇二九 うに、できないものでしょうか。ぼくがい  
 一〇三〇 ようにできないものでしょうか。学校では  
 一〇三一 きあつていききたいのです。ぼくは、学校の  
 一〇三二 ようになりたいのです。いつも、全体の  
 一〇三三 いま一つは、眞珠でした。あなたが自然  
 一〇三四 星にもあたらないでしょう。」「六 私  
 一〇三五 ていこうと思つたのです。ところが、私  
 一〇三六 は十二三分のところですが、妹にはそうは  
 一〇三七 はそうはいきませんでした。四十分もか  
 一〇三八 で遊んだりしたからでした。私は、べつに  
 一〇三九 ぐこともありませんでしたので、妹の氣  
 一〇四〇 書きとめてみたのです。クロイワンワ



十49 10 おそらくわからないでしょうが、そのとき  
十50 3 とさげんだことばです。その黒いいぬに  
十50 5 ったのは、そのためです。黒いいぬは、ま  
十50 8 て、私に知らせたのです。いぬは、うしろ  
十50 10 「略。」というのです。そのとき、いぬ  
十51 8 ぬにたずねているのです。やはり、いぬは  
十51 11 「という心らしいのです。とうとう、くる  
十52 1 向いてしまったわけです。「ワンワンチャ  
十52 7 チャンネテルワ」でした。妹は、また、  
十53 10 どこかへいくところでした。あきらめて歩  
十54 10 なものをながめるのです。わずかのことば  
十54 11 す。わずかのことばですが、この中には、  
十55 1 も、思いではななるでしょうが、ことばの  
十55 8 ゆきづまってきたのでしょうか。思うことが  
十56 1 らと書いていることでしょうか。すこしのこ  
十62 1 んなに早くのびるのでしょうか。きのう、風  
十63 1 、きいたことがあるでしょう。能は、その  
十63 3 さをしたりするものですが、かぶきや、ほ  
十63 7 をこしらえあげるのですが、能のほうでは  
十64 12 ばも、能は、ゆう美ですが、狂言はそうで  
十65 1 言の中の有名なものです。狂言には、よく  
十66 3 なければなりません。でかけるとき  
十68 9 ずっとおくびよう者でした。それで、いよ  
十73 12 早道と想ったのです。が……。」と、  
十116 6 はおかあさまの愛です。わたしをまもる  
十119 2 かわ川にそった村です。この村に、ぎん  
十119 6 いへん情ふかい人でした。村の人たちが  
十119 8 人が金次郎の父親でした。りえもんは、  
十119 9 、よく働けませんでした。そのうえ、さ  
十120 3 が生まれてきたのです。だから、金次郎  
十120 12 次郎が十二のころです。さかわ川のてい  
十121 6 ことはありませんでした。それどころか

十121 8 土や砂を運ぶほどでした。しかし、なん  
十121 9 といっても子どもです。しごとがじゅう  
十123 1 受けてくれませんでした。おしまいに  
十123 3 は、そのとき二つでした。どんなに病氣  
十123 12 」。どうしたのです。おかあさん。」  
十125 7 多くはありませんでしたが、四人が生き  
十125 7 くににはじゅうふんでした。夜になると、  
十126 4 いたむずかしい本でした。その一まいめ  
十127 9 さえもありませんでした。そんなわずか  
十127 12 んなにもびんぼうでした。ところで、そ  
十128 4 次郎はたった十六でした。そこで、ふた  
十128 7 ことのない金次郎でしたが、そこへいっ  
十144 4 呼ばれているようです。みんな読みあげ  
十144 8 れました。弟の名でした。私は、自分が  
十145 5 はまがいませんでした。園長さんのま  
十152 11 ください、満員ですから。」と、声を  
十159 1 は、ほかにないでしょうか。」という  
十159 5 んということばですか。」「略。」「へ  
十162 2 いてわらうのです。ぼくはくやし  
十162 4 ってしまったのです。」「略。」「略  
十162 11 いえなかったのです。」「略。」九  
十163 9 ある村からきたのです。少年の父親と  
十163 10 ランスへいったのですが、数日まえ、イ  
十164 12 ポリへよこしたのです。門ばんは、そ  
十165 7 を思いだせませんでした。「年よりので  
十165 8 りのなかでせき人ですか、外国から帰っ  
十165 10 ました。「そうです。でかせぎ人です  
十165 10 す。でかせぎ人です。」と、少年は、  
十165 12 よりではないのですが、外国から帰っ  
十166 12 ら帰ってきたのです。」「略。」「略  
十166 2 一つ入院したのですか。」「略。」看  
十166 8 いへんわるいのでしょうか。どうなん

十166 8 うか。どうなんでしょうか。」と、少  
十166 12 」。といっただけでした。ふたりは、は  
十168 9 みのとおうさんですよ。」といいまし  
十169 4 病人は動きませんでした。少年は、身を  
十169 10 らかわったようでしたが、くちびるは  
十169 11 びるは動きませんでした。こうもかわれ  
十169 12 ても思われませんでした。かみの毛は白  
十170 3 ころはありませんでした。息をつくのも  
十170 4 のもやつのようでした。「略。」と、  
十170 7 ました。「ぼくですよ。わかりません  
十170 7 せんか。チチロですよ。チチロがいな  
十170 8 からでてきたんですよ。おかあさんが  
十170 8 んがよこしたんです。よくみてくださ  
十171 1 い、どうしたんですか。ぼくは、おと  
十171 2 うさんの子ともですよ。おとうさんの  
十171 3 子どものチチロですよ。」病人は、身  
十172 5 た。それは看護婦でした。「略。」と、  
十172 6 父はどうしたんでしょう。」と、少年  
十172 8 たのおとうさんですか。」と、看護婦  
十172 10 ました。「そうです。それでぼくがき  
十172 10 でぼくがきたのですが、どこがわるい  
十172 10 どころがわるいのでしょうか。」「略。」  
十173 11 めな顔をした老人でした。医者が、まだ  
十174 2 人のむすこさんです。きょう、いなか  
十174 4 父はどうしたのでしょうか。」「略。」  
十175 7 くが顔にでたのです。だいぶんわるい  
十175 10 がわからないんです。」「略。」少年  
十175 12 たが、いえませんでした。医者はいつて  
十176 2 こともできませんでした。病人のふ  
十176 8 ようすはしませんでした。でも、ハンカ  
十178 8 ようにみえたからです。そうして、二日  
十179 1 とんどたべませんでした。少年は、父親

十二 80 3 ようにみえたことです。病人は、だんだ  
 十二 80 10 会 しっかりするんですよ。しっかりする  
 十二 80 10 会 しっかりするんですよ。もうすこしの  
 十二 80 11 会 すこしのあいだです。から。」といつて  
 十二 81 2 日の午後四時ごろでした。ちょうど、少  
 十二 81 3 看護していたときでした。そのへやのす  
 十二 82 7 て息もつげませんでした。看護婦や、看  
 十二 82 11 ことができませんでした。「略。」と、  
 十二 85 3 会 く、いけないんですよ。ここにあのおじ  
 十二 85 6 会 ませてあげるんです。いつも、ぼくが  
 十二 85 7 会 いといけないんです。あの人、いま、  
 十二 85 8 会 ひどくわるいんですよ。から、ゆるしてく  
 十二 85 9 会 思いきれないんですよ。ぼく、あしたう  
 十二 86 2 会 ました。「だれですか、あの人は。」  
 十二 86 4 会 、いなかのかたですがね。」と、看護  
 十二 86 7 会 に、入院したんです。ここへつれてき  
 十二 86 9 会 きけなかったんですよ。たぶん、遠い  
 十二 86 9 会 に家族があるのでしょう。どうやら、  
 十二 86 11 会 んでいるようですよ。」病人は、や  
 十二 87 3 会 いなくてもいいでしょう。」と、また、  
 十二 88 2 しもかわりませんでした。チチロはまた  
 十二 88 6 わるくなるばかりでした。顔はむらさき  
 十二 88 10 からはなしませんでした。病人はしげし  
 十二 92 1 会 を歩いていくんです。から、しぼんでし  
 十二 71 1 会 具をかりたいのですが。」とたのみま  
 十二 77 みくらべるばかりでした。それからのち  
 十二 82 まだ子どものころでした。家をはなれて  
 十二 93 会 どうなさったのですか。」とたずねま  
 十二 98 会 るのと同じことです。」といいました。  
 十二 106 会 ひろっているのですか。」とたずねま  
 十二 10 スのかけらばかりでした。じゅんさは、  
 十二 10 12 会 て、どうするのですか。」とききまし

十二 115 会 てはかわいそうですからね。」と答え  
 十二 117 タロットという人でした。書物 リビ  
 十二 119 していたときの話です。ある日、リビン  
 十二 125 まったという事です。一 写生 (一  
 十二 179 会 、こおろぎさんですか。まだだめです  
 十二 179 会 すか。まだだめです。もともとと美  
 十二 1710 会 と思っているのですが——あなたの声  
 十二 181 会 におかしいようでしたけれど——「ハ  
 十二 188 会 しろくなったんです。おとなりの草む  
 十二 191 会 なっていくようです。」「略。」「略」  
 十二 197 会 があまりだったでしょうね。」「略」  
 十二 198 会 りよほどいいのです。わたしはなん年  
 十二 204 会 容易じゃないのですね。」「略。」「ハ  
 十二 205 会 色くぼけているでしょう。わたしはこ  
 十二 206 会 ようにしたいのです。けれども、思う  
 十二 210 会 「略。」「そうですか。わたしはまた  
 十二 212 会 しなくちゃだめでしょうね。」「略」  
 十二 213 会 「略。」「そうです。文雄さんがりっ  
 十二 216 会 になりました。」「略。」「略」  
 十二 234 会 の人たちは大喜びです。ひさしぶりで、  
 十二 236 の下でくらせるのですから、家内じゅう  
 十二 242 母にとつてのことですが、わたしには、  
 十二 244 男ちゃん、五つですから、もうひとり  
 十二 246 いて、かわいそうです。わたしは民ちゃ  
 十二 248 どうれしかったのです。民ちゃんをなん  
 十二 249 してやりたいものです。民ちゃんは、ま  
 十二 2411 してやりたいものです。民ちゃんは、ぼ  
 十二 2511 会 たいへんな進歩ですよ。いまにもう失  
 十二 273 会 いざつて歩くのです。たいへんおそい  
 十二 274 いへんおそいようですが、いざりだすと  
 十二 275 なかなか早いものです。いまそこにした  
 十二 299 会 ことを覚えたんでしょう。たいへんな

十二 302 「略。」というのでした。おとなりで、  
 十二 307 そのことをいうのでしょう。「略。」民  
 十二 323 こしも知りませんでした。私は、近づい  
 十二 342 に指を動かすだけでした。それからいく  
 十二 348 たつてからのことでした。ある日、私が  
 十二 352 へん苦しんだあとでした。サリバン先生  
 十二 354 めに苦しめたのですが、私は、いつま  
 十二 354 區別ができませんでした。先生は失望し  
 十二 3512 足を覚えたばかりでした。しばらくして  
 十二 3710 ることになったのです。こうして私は、  
 十二 3711 ことがわかったのです。私の手にふれる  
 十二 383 ようになったからです。へやに帰るとす  
 十二 386 としましたがだめでした。私の目にはな  
 十二 393 とは、むずかしいでしょう。私は、生ま  
 十二 398 語になおしたものです。よんでわかるよ  
 十二 3910 、そのうえつんぽでした。それなのに、  
 十二 413 勉強をはじめたのです。手のひらに文字  
 十二 4112 会 がすくわれるのです。どうぞ神さま、  
 十二 426 つになったおかげです。五 人形しは  
 十二 445 会 しばいをするんですか。」「略。」「ハ  
 十二 4410 会 うして動かすんですか。」「略。」「ハ  
 十二 457 会 。「おもしろいでしょうね。」「略」  
 十二 4510 会 かはまだあるんですか。」「略。」「ハ  
 十二 464 会 り人形のしはいですか。」「略。」「ハ  
 十二 471 会 なものがあるんですか。」「略。」「ハ  
 十二 478 会 し、それに便利でしょう。」「略。」「ハ  
 十二 485 会 「そりゃ、そうですね。」「略。」「ハ  
 十二 703 たいそうじょうずでしたが、芭蕉のこと  
 十二 714 い句の話をきくのでした。先生の近くに  
 十二 719 をみるのが楽しみでした。芭蕉は、くも  
 十二 7111 たちも、同じ気持ちでした。まだなにも降  
 十二 724 、子どもが大すきました。そのあたりに

十二 72 9 きれいではないのですが、芭蕉は、いつ  
 十二 75 2 まくらにひびくのでしたが、その夜は、  
 十二 75 3 たようなしずかさでした。そのしんと  
 十二 75 7 、もうおやすみですか。」その声は、  
 十二 75 8 れている曾良の声です。芭蕉はすぐ戸を  
 十二 75 12 はいられませんでした。「略。」や  
 十二 76 4 雪の句はいかがですか。「略。」芭  
 十二 76 7 こしらえたるさぎでした。なんてんの実  
 十二 77 4 合をする日のことでした。テニスコート  
 十二 77 6 たいへんな見物人でした。時間がせまっ  
 十二 78 8 ことはありませんでした。あまりかわい  
 十二 78 10 みたちは日本人ですか。」とたずねま  
 十二 78 12 らって、「そうです。」とほつきり答  
 十二 80 7 でもなく、日本ですよ。」と、ことに  
 十二 82 7 手はチルデン選手でした。チルデン選手  
 十二 82 8 リカきつての選手です。身長は一・八七  
 十二 84 9 がにチルデン選手です。このままおされ  
 十二 85 9 つこうのチャンスです。チルデン選手も  
 十二 85 11 きらめいているときでした。清水選手は、  
 十二 86 10 手をおしませんでした。十 ことば  
 十二 96 3 に、写真帳があるでしょう。それにはあ  
 十二 96 6 の写真などもあるでしょう。その写真帳  
 十二 96 8 まに思いだされるでしょう。なつかしい  
 十二 96 9 いことなどもあるでしょう。次の写真帳  
 十二 97 1 は、なんの写真帳でしょう。これをみ  
 十二 97 2 んなことを感じるでしょう。貝つか  
 十二 97 5 のかわりもない貝ですが、いまから三四  
 十二 97 6 四千年もまえの貝です。四年生のとき習  
 十二 98 3 んたべていたようです。このほか魚では  
 十二 99 10 いるるためのものですが、もちろん、水  
 十二 100 1 にもつかったことでしょう。土器には、  
 十二 101 6 ほりだされたものです。赤色のすやきの

十二 103 1 とばれている作品です。 はじめてのお  
 十二 103 4 られた日本のお金です。 いまつかつてい  
 十二 103 7 、おもしろいお金です。 お金がなかった  
 十二 104 4 名高いほうおう堂です。 ほうおう堂とい  
 十二 104 11 とに気がつくことでしょう。 大和絵  
 十二 106 7 たが、たおれそうです。 たまりかねた二  
 十二 107 3 ぐれたものの一つです。 さあ、うさが  
 十二 107 4 あ、うさが勝つでしょう。かえるが  
 十二 107 4 か、かえるが勝つでしょう。か。 仁王さ  
 十二 108 7 して代表的なものです。 能面 これは  
 十二 108 9 は能にかうお面です。 舞う人のあるき  
 十二 109 1 室町時代の藝術品です。 イソップ物語  
 十二 109 6 う人が書いたお話ですが、これをキリス  
 十二 109 7 年ほどまえのことです。 いんさつ機も外  
 十二 110 7 きたまき絵書だなんです。 まき絵というの  
 十二 110 9 をあらわしたものです。 また、なまりや  
 十二 111 1 もいえない美しさです。 まき絵は、日本  
 十二 111 6 じみの富士山の絵です。 この絵は北斎と  
 十二 112 1 との共同作品なんです。 三人がひとつに  
 十二 112 2 なって生まれたんです。 解体図 これ  
 十二 112 8 本で出版したものです。 表紙の文字は、  
 十二 112 11 れていなかったのですが、この本によっ  
 十二 115 4 たてていけばいいでしょう。それは、  
 十二 115 7 に行かうということです。 こうして、みん  
 十二 116 7 目についてきたんです。 熱心な学者が、  
 十二 116 11 ルニクスという人です。 しばらくして、  
 十二 117 4 た熱心な天文学者でした。 いっしんに観  
 十二 117 6 っかりわかったのです。 しかし、そのこ  
 十二 118 1 ことはありませんでした。「略。」と信  
 十二 118 7 理を求めていたのです。 三 みどりの  
 十二 118 11 せまい、小さな國ですのに、そのもつと  
 十二 118 13 真にすぐれた國民でしょう。 國のおこる

十三 18 12 ら帰ったダルガスです。 かれは、その胸  
 十三 19 2 そうと決心したのです。 ダルガスは、戦  
 十三 20 5 はててしまったのです。 これを生かすの  
 十三 20 8 に木を植えることです。 ダルガスは、こ  
 十三 21 3 のこしていまませんでした。 しかし、ダル  
 十三 22 11 植物の研究がすきでしたが、かれは、も  
 十三 23 2 らべておくからです。 もしある時期に  
 十三 24 4 ることがあったのです。 そのころ、ユー  
 十三 24 6 ものにすぎませんでした。 植林が成功  
 十三 25 11 全國民のたましいでした。 デンマルク人  
 十三 27 9 しもし……そうです。 あ、おぼさん。  
 十三 38 2 たんじやないでしょうか。 げんかん  
 十三 38 4 らないじやないですか。 え、え、はい  
 十三 38 5 、はい……そうです。 ほんとう……  
 十三 39 2 、帰って来たんですか……いつ……え  
 十三 39 3 、うちに来たんですか……へえ……は  
 十三 39 3 たいへんだったでしょうね……四十日  
 十三 39 6 今晩……そうですか。 あいたいな、  
 十三 39 8 れかと思っただけです。 だって、おぼ  
 十三 39 9 ……行ってもいいでしょう……はい、は  
 十三 40 4 ……五千二十五番ですか。 きよう、マン  
 十三 40 5 田さん、おいででしょう。 はい、真  
 十三 40 6 いたきたいのです……はい。(電話  
 十三 44 5 人が、ただひとりです。 それでは、これ  
 十三 44 7 目につかないだけです。 そうでしょう。  
 十三 44 7 いだけです。 そうでしょう。 電話のはじ  
 十三 44 11 話をしているわけです。 ところが、この  
 十三 45 4 かいつているわけです。 ですから、文字  
 十三 45 11 、たいせつなことです。 六 そよ風  
 十三 53 6 りかかっている絵です。 その下の白いと  
 十三 54 9 をまわって来た人です。 だから、この絵  
 十三 54 10 うと、思っただけです。 ちょうど、おじ

十三五六〇 んなにちがうのですか、おじさん。「  
十三五七九 らしいと思うのです。「略」。「略  
十三五八七 来なくちゃだめですね。「略」。「お  
十三五九五 ひれふしている絵でした。「略」。「略  
十三五九八 いるんじゃないでしょうか。「略」。  
十三六〇八 〇、西洋の名画でしょう。ぼくには、  
十四四五 たちの心をうつのです。なぜでしょう。  
十四四五 うつのです。なぜでしょう。それは、フ  
十四四七 とい光のためなのです。フィリップは、  
十四四九 とさをみつけたのです。そうして、心の  
十四五〇 ともに苦しんだのです。だから、フィリ  
十四五三 、こもっているのです。それというのも  
十四五七 ていたからのことでした。しかし、フィ  
十四五九 れたりはしませんでした。こうしたフィ  
十四六七 はいられませんでした。なつかしいお  
十四六八 やると思うことでした。子どもたちの  
十四七〇 うにすぎないのです。私たちは、おと  
十四七二 になつてくれるでしょう。おとうさん  
十四八三 いせつなことばです。が、おかあさん  
十四八五 ふかいものなんです。私には決心  
十四八八 やるということ。なにも、勇気を  
十四九一 りきっているのです。けれども、  
十四九二 お考えになるのです。おかあさんの生  
十四九三 のたりないことです。私は、おかあさ  
十四九四 と、思いたいのです。ランプとコーヒ  
十四九七 ついては、よく説明して  
十四一〇 〇を思っているのです。じきに九月にな  
十四一〇 〇たほうがいいのです。ランプはかべに  
十四一一 〇ちらにまわすのです。いっしょに小さ  
十四一二 〇ろうということでしたが、もしこれわ  
十四一二 〇見つけになれるでしょう。それに、ラ  
十四一二 〇くするためなのです。これは、私の友

十四一二 〇 くれたことなのです。その友だちの母  
十四一二 〇 きているそうです。小包二つは、お  
十四一三 〇 のせるためなのです。おかあさんのこ  
十四一三 〇 すごしておいででしょうか、お知らせ  
十四一四 〇 たときそのままです。そうして、おか  
十四一四 〇 思われてくるのです。おかあさんが、  
十四一五 〇 かあさんがご用でしたら、いつでもと  
十四一五 〇 うとい宝なのです。おとうさんのお  
十四一五 〇 時間が早くたつでしょうから。たとい  
十四一七 〇 私にはわかるのです。では、おかあさ  
十四一八 〇 といっているんですよ。」とたずね  
十四二〇 〇 □々に、「英語です。」と、そくさに  
十四二四 〇 本語になったのでしよう。」とおたず  
十四二五 〇 たいものがあるのです。見てもらいたい  
十四二五 〇 見られるものなのです。それは、空にか  
十四二六 〇 かがやいている星です。どうも日本人は  
十四二八 〇 ていなかったようです。ですから、星の  
十四三〇 〇 なってしまったのでしようか。むかしの  
十四三一 〇 は、よくないことでした。そういうちっ  
十四三一 〇 だじなことがたてです。あなたがたの考  
十四三一 〇 もわるくもなるのです。あなたがたのも  
十四三一 〇 國になつていくのです。さて、私は、あ  
十四三二 〇 っている人もあるでしょう。けれども、  
十四三二 〇 農業が進歩したのです。こよみが作られ  
十四三二 〇 よみが作られたのです。天文学が生まれ  
十四三二 〇 文学が生まれたのです。数学が発達した  
十四三二 〇 数学が発達したのです。航海術がさかん  
十四三二 〇 さかんになったのです。宗教も、科学も  
十四三二 〇 かまっていたのです。よそ目には、星  
十四三二 〇 て関係がなさそうですが、じつは、ふか  
十四三二 〇 つながりがあるのです。人間は、星によ  
十四三三 〇 にしかすぎないのです。このぎんが系と

十四三三 〇 んの星のむれなのです。それでは、この  
十四三四 〇 おいくつあるのです。こうなってくる  
十四三四 〇 億光年ということ。二十億光年  
十四三四 〇 るほどの廣さなのです。この廣大なうち  
十四三四 〇 もごく小さなものです。地球などになる  
十四三四 〇 くごく小さなものです。したがって、そ  
十四三五 〇 ほどの小さなものでしよう。しかし、そ  
十四三五 〇 いうことができるでしょう。みなさん、  
十四三五 〇 んというしげさでしょう。なんとい  
十四三五 〇 なんとという美しさでしょう。なんとい  
十四三五 〇 おおそかなすがたでしょう。じいっと大  
十四三六 〇 、声のないことばです。ことばのない詩  
十四三六 〇 。ことばのない詩です。教えを説かない  
十四三六 〇 えを説かない教えです。むかしからすぐ  
十四三六 〇 受けたということ。夫人は、星はつ  
十四三六 〇 つかまなかつたのですが、その感動から  
十四三七 〇 ウムを発見したのです。みなさん、あな  
十四三七 〇 わかつてくるはず。もし、くしゃく  
十四三七 〇 月のない夜のことで。乗っていた百四  
十四四五 〇 氣ではありませんでした。助けを求めて  
十四四五 〇 いような歌いかたです。マッケナは、  
十四四六 〇 ことはありませんでした。なんだか、す  
十四四六 〇 れてしまったほどでした。寒さ、つか  
十四四七 〇 なげだされたものでしょう。たいていの  
十四四八 〇 、その中のひとりでした。まだわかいお  
十四四八 〇 かいおじょうさんです。頭から大波をか  
十四四九 〇 氣をつけていたのです。「略」。「このお  
十四四九 〇 かった人は少ないでしょう。このおじょ  
十四四九 〇 った人というべきです。さて、おじょ  
十四五〇 〇 きらかになつたのですが、おしいこと  
十四五一 〇 まつりの晩のことでした。「略」。「こ  
十四五一 〇 たいへんゆかいです。それで、よきよ

十四 51 9 るしをつけた老人でした。「略」。「略」  
 十四 52 2 、美しいわかい女でした。「略」。「略」  
 十四 52 5 ちゃは私のものです。私の花がさかな  
 十四 52 9 ちゃの実がつくのです。こんな、十キロ  
 十四 52 12 元氣のいい青年でした。「略」。「略」  
 十四 53 3 、ぞんじないようですね。それは、私が  
 十四 53 7 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 53 10 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 54 3 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 54 9 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 54 11 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 55 3 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 56 7 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 56 8 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 57 1 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 57 9 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 57 11 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 58 1 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 58 3 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 58 7 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 58 9 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 58 10 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 58 11 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 58 12 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 59 4 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 59 6 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 59 7 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 59 8 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 59 12 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 60 3 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 61 5 ちゃをさかしたからですよ。だから、この  
 十四 61 6 ちゃをさかしたからですよ。だから、この

十四 61 9 います、どうでしょうか。「略」。  
 十四 62 5 ふしぎもないようですが、よく氣をつけ  
 十四 62 7 おこつてくるはずですよ。ただ一ぱいのこ  
 十四 62 9 おもしろい見ものです。第一に、湯の表  
 十四 63 3 、にたようなものです。この色について  
 十四 63 9 さんういているのです。空中にうかん  
 十四 64 7 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 64 10 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 65 1 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 65 4 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 65 5 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 65 10 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 67 9 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 67 12 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 68 9 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 68 10 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 69 3 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 69 6 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 70 3 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 70 10 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 71 7 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 71 8 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 72 10 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 73 4 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 73 11 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 73 12 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 75 3 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 75 4 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 75 6 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 76 2 さんういてるのです。空中にうかん  
 十四 76 10 さんういてるのです。空中にうかん

十四 77 8 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十四 77 10 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十四 79 6 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十四 80 1 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十四 85 4 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 19 6 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 20 4 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 20 7 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 21 1 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 21 6 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 22 9 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 23 10 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 23 11 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 24 1 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 24 2 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 24 9 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 24 10 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 25 4 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 26 3 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 27 2 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 29 10 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 30 8 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 31 6 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 32 4 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 32 6 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 33 10 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 44 4 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 44 9 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 44 11 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 46 6 さんがいいという教えました。私はすぐにこ  
 十五 46 8 さんがいいという教えました。私はすぐにこ

十五 46 11 会、もうこれだけです。「へ略」。「へ略」  
 十五 47 1 会。九州の有田です。ときどき焼いて  
 十五 50 1 会である。「そうですか。よくわかりま  
 十五 50 4 会れはおいしいことです。品物は私が買い  
 十五 51 8 会んのおまごさんでしたか。じつは、私  
 十五 51 9 会ごにあたるものです。」と、自分のこ  
 十五 54 8 会学徒、大島くんでしょう。まあ、かけ  
 十五 59 2 会わいがられたのですから。」と、あり  
 十五 62 12 会といっているのですよ。なんとかしな  
 十五 68 12 会じさんのおへやですよ。あれをごらん  
 十五 70 10 会キがおいてあるでしょう。おじさんは  
 十五 70 12 会なりになったのですよ。そのペンをに  
 十五 71 2 会かいなれたペンですよ。ああ、満ぼ  
 十五 72 3 会がら、「満ぼうですよ。」と、おばさ  
 十五 79 9 会たことがあるからです。私のつくえの上  
 十五 84 3 会きれいなおかしでしょう。」いぬ「それ  
 十五 87 2 会あなた、どなたです。」幸福「わたし  
 十五 87 4 会お金持の幸福」です。失礼ですが、こ  
 十五 87 4 会福」です。失礼ですが、この中のおも  
 十五 87 12 会、足はうどんこです。(ふたり、よろ  
 十五 88 5 会はもものジャムですよ。さて、いちば  
 十五 88 8 会うものはないのですよ。」「はちきれそ  
 十五 88 12 会ているのはだれです。」幸福「あの男  
 十五 89 4 会しをするところですよ。これでけさから  
 十五 89 5 会さから十二どめです。わたしたちは、  
 十五 89 6 会を待っていたのです。あのとおり、さ  
 十五 89 7 会呼びたてているでしょう。わたしは、  
 十五 89 9 会おびたらしい数ですからね。(ふたり  
 十五 90 2 会も行かれないのです。ぼくたちは、た  
 十五 90 2 会ん急いでいるのです。青い鳥をさがし  
 十五 90 3 会さがしているのです。たぶん、あなた  
 十五 90 4 会、「ごそんじないでしょうね。」ふとっ

十五 90 8 会だそうじゃないですか。とにかく、そ  
 十五 90 10 会ことはないうです。というのは、そ  
 十五 90 11 会は思わないからです。だが、まあいい  
 十五 90 11 会だが、まあいいでしょう。もつといい  
 十五 91 2 会な見るといいのですよ。」チルチル「な  
 十五 91 3 会「なにをするのです。」幸福「それは  
 十五 91 4 会とをしないことです。わたしたちは、  
 十五 91 8 会ないはずはないでしょう。それがこの  
 十五 91 9 会この世のすべてですもの。」光「あなた  
 十五 93 1 会もらいたいのですね。」チルチル「な  
 十五 94 12 会うのは目のせいです。私たちはやつと  
 十五 97 8 会らうことはどうです。なんてかわいら  
 十五 99 10 会なことあるのですか。」チルチル「す  
 十五 100 11 会、ぼくたちだけですよ。ぼくたちは、  
 十五 100 12 会まわりにいるのですよ。ぼくたちは、  
 十五 101 2 会くらしているのですもの。」チルチル「  
 十五 101 5 会にも知らないのですね。ぼくは、あな  
 十五 101 6 会の幸福のかしらですよ。それから、こ  
 十五 101 7 会いる幸福」どもですよ。」チルチル「ぼ  
 十五 102 2 会しらえているのですよ。でも、ぼくた  
 十五 102 6 会『健康の幸福』です。ぼくは、きれい  
 十五 102 7 会たいせつなものです。こんどあったら  
 十五 102 8 会ったら、わかるでしょう。これは、『  
 十五 102 11 会てくれないからです。これは、『青空  
 十五 103 7 会え、ええ、そうですよ。それから、  
 十五 104 4 会うかいしませんでした。まもなくやつ  
 十五 104 5 会んのようなものですかね。その名は  
 十五 104 6 会な考えの幸福」です。それは、ぼくた  
 十五 104 7 会つとう快活なのです。それから、これ  
 十五 105 5 会くなるゆかい」ですよ。」せの高い、  
 十五 105 8 会『大きな喜び』ですよ。」チルチル「き  
 十五 105 10 会つしよに遊ぶのですもの。まず第一に

十五 106 4 会ちばん幸福なのですが、いちばん悲し  
 十五 106 4 会ちばん悲しそうです。あれが『不幸』  
 十五 106 6 会かむずかしいのです。なにしろ、『不  
 十五 106 7 会ことがすきなのですから。そういうわ  
 十五 106 9 会なってしまうのです。右の方には、『  
 十五 107 1 会さがしているのです。』チルチル「だっ  
 十五 107 4 会そりゃあ、そうでしょう。あれはわる  
 十五 107 5 会ってしまったのです。わるいなかま  
 十五 107 6 会ってしまったのですね。でも、それ  
 十五 107 9 会つてしまわねえですかね。さてここ  
 十五 107 12 会を加えていくのです。」チルチル「それ  
 十五 108 4 会の大きな喜び」ですよ。まあ、どうあ  
 十五 108 9 会る『喜び』たちです。」チルチル「ほか  
 十五 108 12 会むかえているのですよ。その『喜び』  
 十五 109 1 会ばん純潔なものでしょう。幸福あな  
 十五 109 3 会人を知らないのですか。まあ、よくご  
 十五 109 7 会あさんの喜び」です。くらべるものも  
 十五 109 8 会母の愛の喜び」です。」方々から急い  
 十五 110 8 会幸福とがますのですよ。おまえがにっ  
 十五 110 9 会、わくなるのですよ——うちにいる  
 十五 110 10 会もかも見えるのですからね。」チルチ  
 十五 111 5 会ことで織ったのですよ。おまえたちが  
 十五 112 8 会にはお金持なのですよ。もう、びんぼ  
 十五 112 11 会美しい喜びなんですよ。それに、おか  
 十五 113 2 会なってしまうのですよ。」チルチル「あ  
 十五 113 11 会それは同じことですよ。まあ、おまえ  
 十五 114 11 会それは同じことですよ。私も下へ行く  
 十五 114 11 会私も下へ行くのですよ。小さな家に帰  
 十五 114 12 会さな家に帰るのですよ。おまえたちが  
 十五 115 6 会も天国にいますのですよ。おかあさんに  
 十五 115 7 会んはひとりぎりです。それは、いつだ  
 十五 116 12 会心配しているのですよ。」母の愛「あの



ます。

六325 てっぺんのぬけたかんかんぼうしがふきとばされる。

六1234 ④ このくるみを持っていって、山のてっぺんでたべよう。

六1323 ④ 決勝点は、あの山のてっぺんにしよう。

六1333 ④ あの山のてっぺんさ。

六1334 ④ あの山のてっぺんか。

六1369 ぶんぶんおこりながら、びっこをひきひき、てっぺんにたどりつきました。

てっぽう 「鉄砲」(名) 7 てっぽう 鉄砲

一461 かたなだの、てっぽうだの、あぶないものはみんなとりあげられてしまいました。

四496 下の方から、てっぽうの音がひびいてきました。

四4910 かっちゃん、いまのてっぽうでやられたということがわかりました。

四5010 二はつめの てっぽうの音が、ひびいてきました。

八761 たまの音はあしのあいだに鳴りひびき、てっぽうはひきつづいて火ぶたをきった。

十五328 ふいに「ドン」という鉄砲の音がしたかと思うと、

十五459 ブリンクリーが、日本政府から頼まれて、鉄砲のうちかたを教えるためにやって来たのも、そのころのことであった。

てっぽう 「鉄棒」(名) 3 鉄ぼう

七937 茶色のうさがはいっているへやに、えさがなかったのか、かこいの鉄ぼうを、かじっていました。

十三2811 かた手には、大きな毛ぬきのようなものを持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、

十三2812 ときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく。

てて 「手」はおてて

ででむし 「虫」(名) 1 ででむし

十一323 ④ しとしとと降る春雨に、やぶのたけのこすくすのびて、しずくすおうとででむしが、つのをふりあげのぼりだす。

てとあし 「課名」 2 手と足

一35 十三 手と足……二十九

一291 十三 手と足

てということば 「課名」 2 手ということば

七23 二 手ということば……十一

七111 二 手ということば

でないと 「接」 2 でない

十五863 ④ なにも受けてはいけないよ。でないとかんじんな用むきをわすれてしまうからね。

十五927 ④ 光呼び返しなさい。でない、いまに困ることになるから。」

でなおす 「出直」(五) 1 でなおす 《一シ》

十一453 弟は、さつさともとの自分の席にもどり、そこからでなおして進みました。

てならい 「手習」(名) 1 手ならい

七129 「手ならいをはじめましょう。」

てならし 「手慣」(名) 1 手ならし

十二778 すこしばかり手ならしをしてから、休けい場にもどつてくると、

テニス 「課名」 2 テニス

十二35 九 テニス……七十七

十二771 九 テニス

テニス (名) 2 テニス

十二791 ④ じゃあ、きょうのテニスの試合には、どちらをおうえんするの。

十四219 ボール、テニス、ピンポン、

テニスコート (名) 1 テニスコート

十二774 テニスコートには日本とメキシコの国旗が美しくひるがえって、

テニスせんしゅ (名) 2 テニス選手

十二773 メキシコのテニス選手キンゼーと私とがいよいよ試合をする日のことでした。

十二822 十一ヶ國のテニス選手をなぎたおした清水選手は、

てぬぐい 「手拭」(名) 3 手ぬぐい

一328 お日さま——おかあさん——かがみ——くし——手ぬぐい——ふきん——おへや

四174 わたしが 手ぬぐいを もって、おふろへいくのがみえるの。

十四142 ビエンヌという川の岸には、手ぬぐいのようなものをかぶった女の人たちが、ならんでせんたくをしていました。

てのひら 「手平」(名) 7 てのひら 手のひら

三1021 「略。」と、てのひらにのせて かえりました。

七119 このときの「手」は、てのひらをさしています。

八510 指さきへとまらせたり、かたへ乗せたり、てのひらで遊ばせたり、

十382 天然眞珠をてのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者があった。

十二413 手のひらに文字を書くことから、

十三311 「ジャン、ジャン、ジャン」と、はげしくたたいておいて、てのひらで、きゅうにどらをおさえるので、「ジャン、ジャン、ジャツ」というように聞える。

十四893 しゃがんで土のにおいをかいだり、ての



ひらでなでてみたり、

では(接)33 では

二74(会) よく おもいつきましたね。では、『あさ』という ことばの つくものを、あつめてみましょう。

二112(会) では、めいめいの かんがえどおりに、わけてごらんなさい。

二44(会) よろしい、では やりますよ。

二63(会) そろいました。『しや』では、しゅつぱつ。

三12(会) おしやかさまは、『では、わたしがはなしをしてみよう。』とおっしゃって、はんたかをおよびになりました。

三71(会) 『では、はいてごらん。』

三74(会) 『では、光の とおり道を さがしてみよう。』

三108(会) 『では、つれていくのは やめよう。』

四11(会) おとひめ『では、みんなに おもしろいおどりを おどってもらいましょう。』

四113(会) えび『では、にぎやかな おどりを して、ごらんにいれましょう。』

四116(会) おとひめ『では、おみやげに たまてばこをさしあげましょう。』

四132(会) はごろもを お返し いたしましょう。『天人』それは、ありがとうございます。では、こちらへ いただきます。』

五16(会) 『では、としおさん、さようなら。』

五36(会) 私たちは、石炭なしには、くらすことができません。では、石炭は、どうしてできたのでしょうか。

六87(会) では、私がいいことを教えてあげましょう。

六91(会) 海の神『では、そのかたをこちらへご案内いたしません。』

六93(会) それはお困りでしよう。では、さっそくさがさせてみましょう。

六109(会) おもしろいぞとぼくは思った。では、なんという音が、はなから声のでる音なのだろうか。

七45(会) 青年は、大きな声で、『では、ありがたくださいます。』といって、おじぎをした。

七83(会) 裁判官では、まえ歯のぬけているということは、なぜわかったのか。』

八32(会) 天帝は、このようすをごらんになって、『では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう。』とおっしゃいました。

八39(会) では、その願いどおりにしてあげましょう。

八43(会) では、庭のいけの水をすくって、こがねになったものにふりかけなさい。

十一10(会) では、実力があって、力いっぱいはたらくいい船員には、だれがなるのさ。

十三16(会) 自分の説はあやまりであったということにして、『略』では、ガリレオは、はく害のため、考えをかえてしまったのかというところ、

十四10(会) では、おかあさん、さようなら。

十四17(会) では、おかあさん、さようなら。

十四19(会) では、バケツやカーテンなどは、日本語で、なんといっていたんでしょう。

十四19(会) 「カーテンは、まどかけさ。』では、バケツは。」

十四52(会) では、花さんからおはじめなさい。

十四54(会) では、つるさん、どうぞ。

十四54(会) では、おさきに申します。

十五62(会) なに、そうじゃない。ではどうしたのだ。

デパート(名) 1 デパート

八53 ぎんざの大通りを歩いていましたら、あるデパートのまえのうすくらがりに、大ぜい人が立っているの、

ではじめる「出始」(下) 2 ではじめる「メ」

五39(会) 山の木のめがではじめました。

八102(会) 9月22日(木) 晴 28度 いねのほがではじめました。

ではず「手筈」(名) 2 ではず

十五52(会) いろいろではずをしておいたから、ぜひカーネギー博物館に館長ホランド博士をたずねるようにとおっしゃった。

十五55(会) 用事は、『略』カーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらおうことで、恩師ジョルダン博士は、そのためにはずを早くからすすめられていた。

ではなす「手放」(五) 1 手ばなす『一シ』

九138(会) くもは、ちようちよを手ばなしました。

てばやい「手早」(形) 2 手早い『一ク』

四54(会) ほうたいをもっていた がんが、手早くくるくるとまきつけました。

十五28(会) 手早く、自分のこしにさしていた短刀をぬいて、

デビスカップ(名) 1 デビスカップ

十二82(会) もし、この決勝戦に勝つことができたなら、世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらふことになりす。

デビッド(人名) 11 デビッド

三59(会) 「略。」と、デビッドがいいいます。

三59(会) 「略。」と、デビッドがいいいます。

三60 9 「略。」デビッドはこういいいます。  
 三62 5 ㊦ 「デビッドもそれでいいかい。」  
 三62 7 「略。」デビッドはいいました。  
 三71 2 「略。」デビッドがいました。  
 三71 5 そこで、デビッドはいすからおりて、つまんでみました。  
 三76 7 「略。」と、デビッドがたずねます。  
 三78 2 「略。」と、デビッドがききますと、「略。」と、ジュデーがいいいます。  
 三80 2 「略。」と、デビッドがいます。  
 三83 1 「略。」デビッドがいました。  
 デビッドスター・ジョルダンはいくしー (人名) 1 デビッド・スター・ジョルダン博士  
 十五52 7 眞心こめて教えてくださった世界的魚類学者デビッド・スター・ジョルダン博士は、  
 てぶくる 「手袋」(名) 1 手ぶくる  
 十五8 2 ㊦ みかんむこうと手ぶくるをぬぐ山ふかく  
 てぶり 「手振」(名) 1 手ぶり  
 十二108 10 舞う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶりによって、このお面は、生きもののように、いろいろな表情をあらわします。  
 てほん 「手本」(名) 1 手本  
 十四7 1 ㊦ おとうさんのご一生は、私たちにとっての手本になってくれるでしょう。  
 てま 「手間」(名) 1 てま  
 十五47 2 ㊦ とときどき焼いては、この店に持って来ますが、なにぶん作るのにてまのかかるもので。  
 てまね 「手真似」(名) 1 手まね  
 十五34 4 私たちは、自分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。  
 てまねき 「手招」(名) 3 手まねき

二48 4 うしろをふりかえって 手まねきをします。  
 二50 2 うしろをふりかえって、手まねきをします。  
 六54 7 「ここへきてごらん。」と、手まねきをしました。  
 てまねきする 「手招」(サ変) 3 手まねきする  
 《シ》  
 二54 1 「略。」こういって、さちこは、じろうを手まねきします。  
 七40 7 「ねえさん、こっち。」と、私を手まねきしています。  
 九53 2 いちろうは、すぐ手まねきして、それをよびとめて、「略。」とたずねました。  
 てまり 「手毬」(名) 1 手まり ㊦ てまり  
 四78 8 て——てんてん 手まりをつきましよう。  
 でむかえ 「出迎」(名) 1 でむかえ  
 五25 10 駅の出口までくると、でむかえにきていたおねえさんをみつめました。  
 ても (接助) 102 ても でも ㊦ どうしても  
 一62 3 ㊦ どなたが おもちになっても、たまはやつぱり たまですよ。  
 二19 4 ㊦ ねむっていても、みえるものはなかに。  
 二33 1 ㊦ いや、目でみなくても、手でさわったことがあるかい。  
 三40 8 くわのはが、やわらかで、光っていて、おかいこさんでなくても たべたいようです。  
 三51 7 ㊦ のみの 手もととはくらくても、かっちゃん かっちゃん 石を切る。  
 四26 5 ㊦ りんごさんは、どこへいってもきれいな。

四29 8 じぶんで じぶんに きてみて、なかなか はつきりした 返事をしてくれない。  
 四35 1 ここまで いわれても、まだ、なんのこと だかわかりません。  
 四35 10 ㊦ おとうさんが おいでにならなくても、かずこさんの 耳には、おとうさんの ことばが、ひびいてきたのです。  
 四36 2 ㊦ そこに いなくても、その 人の ことばが 生きて いる という ことが、わかりますか。  
 四42 4 どのように 列の かたちを かえても、ばらばらになつて しまう ことは ありません  
 四90 1 どんなに つもつて いても、おかつてからは きはじめて、かいどうへ ぬけて、おとなりまでは いて いく。  
 四103 1 うらしまさん。」かめが よびかけても、うらしまは、略、気が つきません。  
 四116 6 ㊦ この たまてばこは、どんな ことが あつても、おあけになつては いけませんよ。  
 五48 3 いつ 通つても、いつもの たいの しい、この 小道。  
 六6 8 ㊦ かたちも 大きさも それぞれが つかつては いるが、どれを みても 大きくて えらそうである。  
 六22 2 ありさん、ありさん。」よばれても、あり たちは 気が つきません。  
 六49 1 ㊦ 書いても 書いても 書き たり ぬ、わたしの 心の 小人たち、いつも でてくる 小人たち。  
 六49 1 ㊦ 書いても 書いても 書き たり ぬ、  
 六74 10 たとえ 動いても、それ だけでは 命があると はいえないと、ごろうは 思いつきました。  
 六77 10 風や、自動車や、水車は、動いて いても 息を しないから、命が ないんだと、  
 六107 11 なぜ はなが つまるとい えなくなる ことばと、 はなが つまつても いえる ことばとがある のだらう、

六108 6 そうして、はながつまっても発音できるよ  
うな音は、はなから声がでない音のはずである。  
六140 3 うさぎさんたちは、もうにげようと思つて  
もにげることはできません。

七47 6 どこまで書きたしても、それでいいという  
ところまでは、なかなか、いきつくものではあり  
ません。

七47 10 心がくもっていると、いくらなおしても、  
文章のくもりはとれません。

八9 2 ときたまそとのろじへだしてやっても、す  
ぐまいもどつてきます。

八9 3 ろじどころか、庭の木にとまらせても長く  
はいません。

八9 11 のらねこが通りかかって、にげるどころ  
か、向かっていこうとさえるのです。

八10 8 ピオのゆうかんさや、りこうさや、〈略〉  
は、まだいくら書いても書ききれません。

八14 8 春がきて、たまごはそのままでした。

八16 3 だから、虫たちが、いいかげんにすんで  
いっても、なにかの木の根にいきあたります。

八44 7 王さまは、ご病氣をなさって〈略〉、いく  
ら手をつくしても、よくおなりになりません。

八49 10 だれでも幸福のほしくない人はありません  
から、どこの家をたずねても、みんな喜んでむか  
えてくれるにちがいありません。

八50 6 そんなまずしいなりをしていても、それで  
も、自分をよくむかえてくれる人があったら、

八63 11 になしろ、水をこわがるのだから、どん  
なにしても思いきつてはいるようにしてやること  
ができなかった。

八82 2 わたしのことはいわないとしても、おま  
えさん、ねこやおばあさんよりかしこいと思つ

ていないだろうね。

八91 2 生まれがはくちようのたまごであつてみれ  
ば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。

九5 8 オルガンで一つの音だけひいてきいても、  
その音には、ある感じがこもっているものです。

九14 7 いい音楽をきいても、それがわからないの  
は、

九39 5 下からどんなに大きな声で話しかけられ  
ても、きこえないときがあります。

九77 3 むかしといつても大むかしのことだが、  
貝などをおもにたべていたときがあったらしい。

九122 5 岸では、その味がきえてしまうことがあつ  
ても、中ほどでは、いい味はたえなかった。

九144 6 ちょうちよにして、ばらの花にしても、  
なんとしずかなくらしをしているのだろう。

九144 6 ちょうちよにしても、ばらの花にしても、  
なんとしずかなくらしをしているのだろう。

十10 1 どこへいつても、遊びたわむれている子ど  
もにあいました。

十12 7 お友だちにさそわれても、どうしてもおと  
うさんのそばへこない女の子もありました。

十27 5 わざわざ遠くにでかけなくても、ふだん自  
分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる  
心がまえを、つくりたいと思います。

十29 1 私は、同じものをみるにしても、どうして  
そのものがこうなったかということを、考えてし  
らべたいと思っています。

十40 9 あざけられ、からかわれても、その助力者  
となつてくれたのは、つまのうめであつた。

十65 6 めうえのいばつたものに対してもおそれず、  
十65 6 なにをしてもにくまれぬ、おもしろい人  
物になつていきます。

十121 9 しかし、なんといつても子どもです。

十一25 1 1 どんなことがあつても、親子四人、わ  
かれないようにしましょうね。

十一51 2 ゆうべからの大あらしは、けさになつて  
もまだ続いていた。

十一78 6 たとえわからなかったとしても、病人が  
なんだかうれしうにその話す声に〈略〉耳をか  
たむけているようにみえたからです。

十二35 4 私は、いつまでたつても区別ができませ  
んでした。

十二47 3 だいたい人間には、顔の色やくらしか  
たがどんなにちがつていても、心にあることを、  
なにか美しいものであらわそうとする氣持がある。

十二62 4 そののちは、だれがなんと頼んでも、か  
してくれなくなつたという。

十二63 2 いくら飲んでものどのかわきがとまらな  
かつた。

十二69 5 どんなにはたらきがあつても、それにあ  
つみと廣さがなかつたら、

十二89 5 「ありがとう」というあいさつにしても、  
ほんとうに感謝の心持をこめていうときと、ただ  
とおりの一べんのあいさつとしていうときとは、

十二89 8 食事のたびごとにいう「いただきます」  
「ごちそうさま」にしても、そのときそのときの  
心持があらわれるはずである。

十二92 6 ほかの人がこれと同じ文を書いたとして  
も、そのなかみは、〈略〉同じではなからう。

十二92 9 みんなが「遠足」という同じ文題で書い  
ても、書かれたことがそれぞれちがつてくるのも、

十二92 11 なかみはそれぞれちがつても、「〈略〉」  
といい、「遠足」ということは、だれにでも同  
じようにわかり、

十二107 10 大きな目、のびた手さき、しつかりふま

五60 11 会  
五61 2 会

「でも——って、なにか、おかあさん。でもね、そのたねからめがでなかったら



十五114 3 声までそっくりだよ。でも、うちにいるときよりか、ずっとお話がうまいな。

十五114 11 母の愛「でも、それは同じことですよ。

十五115 11 おかあさんをよく覚えて、だいいじにすることをわすれてはなりませんよ。でも、おまえたちは、どうしてここまであがつて來られたの。

十五116 9 たいへんしんせつにしてくれるそうだね。でも、なんで、あんなに顔をかくしているの。

十五118 10 ときはまだ來ないのです。でも、いまにきつと來るでしょう。

十五119 10 哦や、みんないないのだな。でも、どうしてみんな、目にいっぱいみだをためているの。

でも (副助) 157 でも、それでも・なんでも・ひとつのものでも

一34 2 なににでも なる ことができるなら、ただおさんは、なにになつて みたいとおもいますか。

一34 7 かげになつて、どこでも どんどんふきまわつて みたいのです。

一62 7 でんとうでも ついたのかと おもつてみまわすと、山のうえから、おおきな お月さんが どころでした。

三96 8 大きな 字でも、小さな 字でも、かくことが できます。

三96 8 大きな 字でも、小さな 字でも、三99 1 どんな ところでも、紙は、字やえを はこんで くれます。

三99 4 みなさんの かいた えでも、字でも、だいいじに しまつて おきなさい。

三99 4 えでも、字でも、三103 2 おじいさんは、きもちの わるい ときでも、

はらの たつ ときでも、この かぐやひめのかおをみると、すぐ なおりました。

三103 3 はらの たつ ときでも、

三103 6 光る ように うつくしい かぐやひめに、ひと目でも あいたいものだ。

三104 2 一どでも かぐやひめをみた人たちは、四6 2 どんな ところへでも とどけて くれます。

四64 2 どうでも いいや。

四122 8 ただ 一本の マッチでも、これを 作りあげる までには、どれほど 手かずが かかつて いる ことでしょう。

五15 9 私は、三十銭でどこへでも 旅を することが できます。

五66 11 それが、海へ 帰してくれ、お礼はいくらでも あげると いったが、

五72 7 ねばあさん、氣でも ちがつたかね。

五86 8 おまつさんか、あなたが みえなかつたから、かげでも ひいたかと思つて。

五87 2 どの おにんぎょうでも、目は 二つです。五90 6 それでな、さどが 島を うたう ときには、いつでも おじぎをする のだよ。

五93 5 どれどれ、ゆうごはんでも たこうかな。

五100 6 小鳥でも 感心なものだ、新しい ことを どんどん おぼえていく。

六9 5 「それでは、自分の ようなものでも、役に たつ ことがあるのかしら。」と 喜んだが、

六16 9 小さな ありでも、力まかせに かんたので、かりうども びっくりして、

六58 1 どうぞ、みなさんの 氣づいたことは、なんでも、かかりのものにお知らせ ください。

六78 4 たとえ動かない木でも、草でも、命をもっているのだよ。

六78 4 たとえ動かない木でも、草でも、命をもっているのだよ。

六79 7 息と 同じように、あなたが ねむつて いる ときでも、きんきん やつて いますよ。

六82 1 いくら 一日でも、いやだ。

六85 9 どんな ことでも して、おわび いたします。

六103 4 なんでも いいから、きて ください。

六104 1 さかさまでも、よく みえる でしょう。

六107 7 しかし、どんな ことばでも 発音 できないわけ ではない。

六110 3 なんでも、「ナ」や「ノ」の つく ことばが あつたら、「ダ」や「ド」に いいかえ ればいいわけだ。

六110 10 新しい ことが あたまに うかんだので、もう そんな ことは どうでも よくなつて しまつた。

六113 5 カキケコでも、サシセソでも、六113 5 カキケコでも、サシセソでも、(略)、一ぎよう一ぎようは、なにか、ほかの ぎようとは ちがつた 性質を もつて いるに ちがいない。

七27 6 なんでも、自分で みつけて いきましょね。

七73 4 ぼたんでも さいているのかと思つたら、まあ、子どもが わらつて いたんだよ。

七89 7 うさぎでも、くもつた 日や 雨降りの 日は、きらいな でしょう。

八9 1 ピオの ほうでも、その 氣になつたらしく、八9 5 とつぜん、上へ 飛行機でも とんでくると、その あわてかた といつたら ありません。

八18 9 同じ 地中に 住むものでも、こがねむしや、かぶとむしの 子どもたちは、(略)、わずかに 二三ヶ月で 大きくなつて、

八49 9 だれでも 幸福の ほしくない 人は ありません

から、

八五二 iyaなものでも家のまえに立つたように顔をしかめて、

九〇六 これは色のばあいでも、音のばあいでも同じことです。

九〇六 音のばあいでも同じことです。

九一五 つばめが、ならんでいるのをみると、なにかしら相談でもしているようにみえます。

九一六 ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわすれたことはありません。

九三二 せめて、貝だけでもおみせしたいと思っています。

九四〇 ちよまはふるる力の強い草なので、どんな小さな根っこでも、すっかりとりのぞいておかないといけないといわれて、ほねをおりました。

九七二 なん十メートルもある高いすぎやまつのはえているところは、晝でもうすぐらく、

九八三 かれ枝ならば、だれの山の木の枝でも、おつてよいことになっています。

九八四 セドリックは、七つ八つのころでも、せんきよのことを話していますけれども、

九七二 いまでもこうやって、人は目をたべています。

九八五 これはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろっておきなさい。

九八二 くもの小さなときのこと、ゆめでもみるように思いだされてきました。

一四五 いまも、美しいものはどこにでもある。

一五七 美しいものは、いまも、どこにでもある。

一六二 しかし、われわれは、いつでも、どこにでも、その美しいものを、すなおに感じとる心を、もちつづけたいものである。

一六二 いつでも、どこにでも、

一六五 心がけひとつで、われわれは、どんなにでも毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができる。

一九四 知らない外国人どうしても、こんなに親しみをもちことができるものかと思いました。

一二一 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。

一六二 「子どもでも。」と、また太郎がたずねましたので、おとうさんは答えました。

一七二 太郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。

一七二 やお屋さんでも、みんなフランス語です。

一三〇 もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、

一三〇 このように、なんでも、そのものとのかをしらべていくような心がけを、

一三二 自分ひとりぐらいいいというようにな、無責任な、ひきような考えを

一四〇 はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もとのままになっていた。

一四八 道ばたにあるものを、なんでもみつめて、それに話しかけたり、

一六二 能を知らない人でも、〈略〉うたいを、きいたことがあるでしょう。

一六五 よわい人間のしそうなことを、なんでもやります。

一六八 いつでもにげだせるかっこうで、こしをうしろにひき、

一八八 きみはなんでもよくわかつている。

一一〇 船ばかりではなく、あの町でも、あの工場でも、また、日本の國全体だって、同じことだと思う。

一一一〇 あの町でも、あの工場でも、

一一二八 いままででも、なまけたことのない金次郎でしたが、

一一五八 電車は、歯ぎしりでもするように車の音をたてて、あらしの中をつき進んでいく。

一一六二 ひよっとすると命を失うようなあぶないときでも、いいだすことのできないほど、

一一六八 びっくりでもしたように、大きくみ開いた目をあけて、

一一七二 その日は、病人の目つきが、いくらかわかりかけでもしたようにみえました。

一一七五 そうして、なにかいおうとでもするうちに、すこしくちびるを動かしました。

一一八〇 ものをいおうとでもしているように、

一一八五 おじさんは、いつでもぼくをみています。

一二一四 もしけがでもしてはかわいそうですから。

一二二〇 あれがあれば、どんなかけのところで、美しい色にできますがねえ。

一二二七 たった九十センチぐらいのところでも、〈略〉、すぐに手をついて、いざり歩きになります。

一二四〇 両親は、なんとかして、すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

一二四八 ところで人形しばいが、これは人間にできないことでも平気でやれる。

一二八二 私はいまでも、あのときのことをわすれることができません。

一二八五 「〈略〉。」という簡単なことばでも、相手の人のいうことばのわけをよくききわけて、

一二九二 どんなたつことばでも、ただ口まねをして、おうむのようになえていたのでは、そ

のことばは、すこしの力も発きしないから

十二92 12 「遠足」ということばは、だれにでも同じようにわかり、

十二94 6 このようにままとすると、だれでも読んで、すぐにそのわけがわかる。

十二102 11 夢殿の観音といて、いまでも、多くの入々からたつとばれていく作品です。

十二113 3 新しい学問をきり開いていくときは、いつの時代でもなみなみのどりでなくでなしとげられるものではない。

十二113 10 汽車にかざらず、船でも、自動車でも、日に日に進歩しています。

十二113 10 船でも、自動車でも、

十三10 3 今日でも、まだ、そうした考えがのこっている。

十三30 4 同じ大きさのどらでも、そのうちかたによつて、調子がちがう。

十三41 3 なんでもあるよ。

十三44 6 これはしばいではないかというところ、そうではなく、これでも、しばいになっています。

十三55 1 絵はがきでも、たいへんいい絵だと思

十三55 12 絵はがきでも、たいへんいい絵だと思

十三56 4 絵はがきでも、たいへんいい絵だと思

十四11 6 絵はがきでも、たいへんいい絵だと思

十四11 6 絵はがきでも、たいへんいい絵だと思

十四14 11 絵はがきでも、たいへんいい絵だと思

十四29 5 だれでも、どこからでも、自由に見られるものなのです。

十四29 5 だれでも、どこからでも、

十四30 12 だれでも、どこからでも、

十四31 1 だれでも、どこからでも、

十四52 10 だれでも、どこからでも、

十四56 3 だれでも、どこからでも、

十四56 4 だれでも、どこからでも、

十四56 6 だれでも、どこからでも、

十四56 6 だれでも、どこからでも、

十四56 9 だれでも、どこからでも、

十四56 9 だれでも、どこからでも、

十四56 9 だれでも、どこからでも、

十四58 7 だれでも、どこからでも、

十四62 7 だれでも、どこからでも、

十四63 4 だれでも、どこからでも、

十四65 11 だれでも、どこからでも、

十四65 11 だれでも、どこからでも、

十四67 1 だれでも、どこからでも、

ころへ日光があたつて、

十四70 11 表面にちゃんとふたでもしておけば、

十四76 11 茶わんの湯のお話は、すればまだいくら

十四89 4 耳を地べたに近づけて、なにかもの音で

十四89 7 同じ題の作文でも、それをとりあつかう

十四89 9 どのような文章でも、読む人の心がひか

十四93 9 ただひと目でも、火の光とごちそうとを

十四93 10 火の光とごちそうとを見るだけでも、

十四100 11 まっ晝間でも、それ以上に明かるくはな

十五22 2 女の子は、《略》下の方にちらばって

十五26 3 とちゅうで、高い木の上へでもとまろう

十五26 6 わしが大きなくちばしで女の子の頭でも

十五26 8 そんなことのないうちに、どこでもいい

十五27 4 女の子は、あきらめたのか、おそろしい

十五31 9 羽風で空気がゆれ動き、ちよつとでもゆ

十五31 10 ちよつとでも気をゆるめると、鳥のくち

十五56 9 日本留学生第一号とでもいおうか、



十五70頁 手紙でもなんでも赤インキで書かなく

ては見えないようにおなりになったのですよ。

十五70頁 手紙でもなんでも

十五83頁 青い鳥だって、ことによるとちよいと

でも、この人たちのなかまにまよいこんでいない

ともかぎらない。

十五83頁 ほんの形だけでも、廣間の方をさがし

てみよう。

十五93頁 さあ、みんなで、力ずくで、いやでも

幸福にしてしまおうじゃないか。

十五102頁 いつでもすこし悲しそうにしているの

は、

十五103頁 外へ出ればいつでも、この『幸福』た

ちは見られます。

十五103頁 みんな、いつでもあんなにきれいな。

十五106頁 『もののわかる喜び』が立っています

が、あれは、いつでも、兄弟の『なにもものわ

からない幸福』をさがしているのです。

十五113頁 おかあさんたちが悲しそうな顔をして

いるときでも、ほおずりをしてもらえば、すぐそ

のなみだは、目の中の星になってしまおうのですよ。

十五115頁 おまえと私とが、かわいがりあうとき

は、いつでも天國にいるのですよ。

十五119頁 私は、愛しあう人たちには、いつでも

しんせつにいたします。

てもと 『手凸』(名) 2 手もと

三51頁 囀 のみの 手もととはくらくても、かっちゃん

かっちゃん石を切る。

九94頁 やまだ、はなれたまま、たかぎの手もとを

みている。

てら 『寺』(名) 2 寺 寺おてら

十二108頁 仁王さまは寺の門に立つて、ほとけさま

をおまもりします。

十五71頁 町の東にある寺の一角に、こけむす一つ

のおほか、

てらす 『照』(四五) 9 てらす 照らす 『サ・

ーシース』

四16頁 おかあさんが、月にてらされて、水をく

む。

八65頁 あくる日はいいお天気で、太陽は、ごぼう

の上をてらしていた。

八93頁 太陽はあたたかく、おだやかにてらした。

十四53頁 じりじりと暑い日に照らされながら、

十四72頁 その光が同じようにならず、むらになっ

て、茶わんのそこを照らします。

十四98頁 たくさんの小さなろうそくが、〈略〉、ち

かちか、ちかちかと女の子の上を照らし、

十五137頁 月照らす上野の森を見つつあれば家

ゆるがして汽車ゆきかえる

十五94頁 舞台は清らかな、こうごうしい、ばら色

の美しい光に照らされます。

十五107頁 それは、毎日ぼくたちを照らす光に、

二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。

てり じりてり

てりかえる 『照返』(四) 1 照りかえる 『ール』

十五15頁 囀 おどろきてわが身も光るばかりなり

大きなるばらの花照りかえる

てりそ・う 『照添』(四) 1 照りそう 『ウ』

十五14頁 囀 風くればばらはたちまち火となれり

ゆれにゆるるか照りそう風に

てりつ・ける 『照付』(下) 1 てりつける 『ケル』

七65頁 麦のとりのいれ、日がてりつける。

てりはじ・める 『照始』(下) 1 てりはじめる

『メ』

八88頁 太陽がてりはじめ、ひばりが歌いだしたと

き、

てる 『照』(四五) 7 てる 照る 『ーッ・ーリ・ー

ル』

三53頁 囀 おてんとうさまは空にてり、〈略〉。」

といました。

五82頁 ねるまえにたべないことや、日のかんかん

てるところで長くあそばさないことなどを、

七62頁 日がてっている。

九116頁 囀 屋根の雪かきおとしる少年の顔の明

かるさ日のでる中に

十一33頁 囀 げんげがさいて、なの花ちって、かき

のわか葉に日の照るころは、

十一36頁 囀 くわをかついで田をみまわれば、日は

また照って水たつぷりと、

十五135頁 囀 照る月の位置かわりけん鳥かこの屋

根にうつりし影なくなりぬ

てる (助動) 28 テル てる 『デ・テル・デル』

一17頁 まどのきのはがうこいてる。

一40頁 かっこうがないてる。

一40頁 つつじからにいてる。

三68頁 囀 「風はなんていつてのの。」

三68頁 囀 『もりの方。』っていつてます。

六48頁 囀 海 どこかでだれかがめくってる、大き

なきれいなページ、生きた絵本の一ページ。

七18頁 囀 ああ、とんでる、とんでる。

七18頁 囀 ああ、とんでる、とんでる。

七18頁 囀 きょうは、ずいぶんとんでるなあ。

七23頁 囀 なにしているの。

七32頁 囀 おや、ひげをはやしてる。

七66頁 ふうからみてる十三夜さん。

十491 ㊦ キタナイワンワンチャン——アンヨナ  
 メテルワ——  
 十492 ㊦ ワンワン——ミテルワウシロ——  
 十494 ㊦ アカチャンネテルワ——  
 十495 ㊦ ワンワンチャンネテルワ——  
 十498 ㊦ ハナガサイテル——  
 十499 ㊦ アッポタイテル  
 十507 ㊦ 「アンヨナメテルワ」といって、私に  
 知らせたのです。  
 十527 ㊦ 「アカチャンネテルワ」でした。  
 十532 ㊦ 「ワンワンチャンネテルワ」といって  
 いると、いぬがもつくりおきました。  
 十543 ㊦ 「ハナガサイテル」  
 十172 ㊦ あのざくろの色もかけてないや。  
 十208 ㊦ ほら、そこで絵をかいている文雄さん  
 がいましたよ。  
 十351 ㊦ 母うしのそばに立ってるんだが、  
 十352 ㊦ おとなになってる、いまもそうだ。  
 十592 ㊦ みんなは、テーブルにすわりこんでる  
 よ。  
 十五109 ㊦ きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。  
 出る「出」(下) 230 出る 《デ・デル・デレ》  
 ㊦ あふれでる・おでる・さしでがましい・すすみで  
 る・すべりでる・ながれでる・はしりでる・ふきで  
 る・ほとばしりでる・もうしでる・わきでる  
 一629 ㊦ 山のうえから、おおきな お月さんがで  
 るところでした。  
 二143 ㊦ あめがやんで、にじが できました。  
 二382 ㊦ てる人 たろう おとうさん 山びこ (声  
 ばかり)  
 二467 ㊦ いいえ、これは、お月さまが、くもから  
 でてくるところです。

二468 ㊦ てる人 いちろう じろう いもうとのさ  
 ちこ おかあさん  
 二476 ㊦ いちろうが できてます。  
 二486 ㊦ そこへ、じろうが できてます。  
 二504 ㊦ さちこが、走って できてます。  
 二542 ㊦ じろうが、走って できてます。  
 二546 ㊦ いちろうが、走って できてます。  
 二578 ㊦ そこへ、ひとりの おじいさんが でき  
 ました。  
 三23 ㊦ まいあさ 日が できると、この 木の 西がわ  
 の なん十 という 村々が、日かげになります。  
 三43 ㊦ ある 日、はまべに でて みると、わにざ  
 めが いましたので、  
 三586 ㊦ おりれば みずうみへ であれますし、  
 三587 ㊦ のぼれば 大きな 木の あるところへ であ  
 れます。  
 三634 ㊦ そうして、そこで おもしろく あそんでか  
 ら 丘を おりて みずうみへ でした。  
 三6310 ㊦ みずうみを 右へ いけば もりへ であす。  
 三6310 ㊦ 左へ いけば たきへ であす。  
 三657 ㊦ だって、もりへ であいたんだもの。  
 三659 ㊦ たきへ であいたんだもの。  
 三695 ㊦ はじめに もりへ いって、それから た  
 きへ であうね。  
 三746 ㊦ その 光の 中を あるいて いって、まっす  
 ぐに まどぎわへ でした。  
 三787 ㊦ 雲さえ でて いなかったら、まいあさ  
 あえますよ。  
 三833 ㊦ その とき、おかあさんが えんがわに だ  
 て いらっしやいました。  
 三1125 ㊦ お月さまが 一どに 十も だかと思われ  
 るほど、あたりが あかるくなりました。

三1135 ㊦ かぐやひめの からだは、すうっと そとへ  
 でて しまいました。  
 四163 ㊦ ゆうがた、水くみに だた。  
 四206 ㊦ ねずみが 三びき、わの 中にはいり、  
 ねこが 二ひき、わの そとに でした。  
 四549 ㊦ かっちゃん は ねつが でてきたので、  
 四878 ㊦ すみがまの 上に、雲が でています。  
 四963 ㊦ てる人 うらしまたろう 子ども 四人  
 四1023 ㊦ てる人 うらしまたろう かめ  
 四1026 ㊦ そこへ かめが でて できます。  
 四1082 ㊦ てる人 うらしまたろう  
 四1099 ㊦ いろいろ な 魚が できて ならぶと、そ  
 の うしろから、おとひめさまが あられます。  
 四1122 ㊦ 魚たちが、たくさん できて、にぎやか  
 な おんがくに あわせて おどりはじめます。  
 四1132 ㊦ てる人 もところも、三の ばめんと おな  
 じ。  
 四1184 ㊦ かめが、うらしまの 手をとって、でて  
 いきます。  
 四1219 ㊦ 光が てるのは なぜでしょう。  
 四1262 ㊦ てる人 りょうし 天人  
 四1271 ㊦ ひとりの りょうしが、みほの まつ原へ  
 でて できます。  
 四1293 ㊦ まつの 木の うしろから、ひとりの 女が  
 でて できます。  
 五54 ㊦ さあ、はいはいをして、たっちして、村に  
 であしょう、町に であしょう。  
 五54 ㊦ 村に であしょう、町に であしょう。  
 五217 ㊦ みんな、ぶつぶつと ことをいいながら、  
 出口の方へ であきました。  
 五228 ㊦ いちろうさんが 家に 帰ると、おかあさんが、  
 げんかんに むかえに でした。

- 五26 8 かるくあたたまをさげて、そこをでました。  
 五29 3 店をですすこしくと、  
 五35 5 まわりのかべに、石炭がでています。  
 五49 5 網のたりのたりとわたし船、なの花ざかりの岸をでる。  
 五49 6 網子うしが水のむ岸をでる。  
 五49 8 網のたりのたりとわたし船、かふんやそよ風のせてでる。  
 五50 1 網子どもや荷物のせてでる。  
 五50 3 網のたりのたりとわたし船、おもさにゆれゆれ岸をでる。  
 五50 4 網かげをちらして岸をでる。  
 五52 6 私は、まさこをうば車に乗せて、はるおと大通りにでました。  
 五55 1 食事をすませてから、またちょっと、家のまえにでてみました。  
 五55 3 もうすっかりくらくらなっていて、空いちめんに、星がでていました。  
 五57 5 網「あつ、でた、でた。」  
 五57 5 網「あつ、でた、でた。」  
 五61 2 網でもね、そのたねからめがでなかつたら  
 五61 4 網めがでないことはありません。  
 五65 10 ある日、おじいさんは、海にでてあみをなげました。  
 五67 10 おじいさんが金のさかなをよびますと、すぐでてきて、「へ略。」とききました。  
 五76 2 金のさかなは、でてきていいました。  
 五84 8 いのうえさんは、國語の本にでていることばを、五十音にわけてみるといいました。  
 五92 4 網みんな、もっとまえへでてごらん。  
 五95 6 ひなは、みちがえるように元氣がでて、だんだん大きくなりました。

- 六21 7 そのとき、しもてから、ありが三びき、ゆつくりでできます。  
 六26 5 網風がでてこなければいいね。  
 六34 11 口をもぐもぐさせている——声がでないのである。  
 六49 3 網書いても書いても書きたりぬ、わたしの心の小人たち、いつもでてくる小人たち。  
 六51 7 月は、雲にはいったかと思うとすぐで、でたかと思うとまたすぐはいります。  
 六51 7 でたかと思うとまたすぐはいります。  
 六52 2 月はいま雲からでて、大いそぎではなれていきます。  
 六63 4 弟がせきがでるので、おかあさんはゆたんぽをいれている。  
 六63 6 わたしもせきがでたらいいなあ。  
 六80 5 網にいさんは毎日海へでて、魚をとっていらつしやるが、  
 六86 9 そこへひとりの年よりがでてくる。  
 六89 5 そこへ女の人がでてきて、いどの水をくもうとする。  
 六90 9 そこへ、さつきの女の人がでてくる。  
 六91 8 まもなく、ほおりのみことをあんないしてでてくる。  
 六93 9 女の方は、魚たちをたくさんつれてでてくる。  
 六96 3 女の方は、たいをつれてでてくる。  
 六98 2 網だいいじなだいいじなつりばりが、でてきて神さまお喜び。  
 六99 5 古いめがねのたまと、おとうさんにかつていただいた小さな虫めがねがでてきた。  
 六108 5 発音がでなくなるような音は、もともとはなから声のするような音にちがいない。

- 六108 8 そうして、はながつまっても発音できるような音は、はなから声がない音のはずである。  
 六108 10 ぼくは、いままで、ものをいうときに、声のはなからでるかでないかということを、考えたことがなかった。  
 六108 10 声のはなからでるかでないかということを、  
 六109 2 では、なんという音が、はなから声のでる音なのだろうか。  
 六109 5 すると、これらははなからでる音なのだろう。  
 六109 6 「ム」と自分で声をだしていってみると、いかにもはなから声がでているような気がする。  
 六109 9 はなから声がでる音であることはたしかとなった。  
 六112 7 はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメモの二ぎようだけで、  
 六112 10 あとは、へ略、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。  
 六138 1 やがて、うさぎさんたちは、大きな岩のところにでました。  
 六142 8 谷川にそつて、山のふもとにできました。  
 六142 9 やつとしずかな廣い野原にでました。  
 七6 9 網手をつないで校門をでていく子ども、  
 七7 2 網かたを組んで話しながらでていく子ども、  
 七17 3 網風のない日は、ちようちよがよくでるのだったね。  
 七19 3 網このまえきたときは、風が強かったから、ちようちよがでなかつたんですね。  
 七31 11 網あの羽をしぼつたら、きれいなしるがでそうね。  
 七35 7 家をでるとき、おかあさんに、「へ略。」とうけあつて、さぶろうをつれてきたのでした。

七42 7 トンネルをでたとき、向こうの席で、「略。」と、大きな声をだした人があった。  
 七49 1 ぼくのほうは、セクターが外野へでてしまったので、  
 七50 6 ぼくたちは、コートへでていった。  
 七51 6 ぼくらのほうが、どんどんあてられて、セクターまで、外野にでてしまった。  
 七58 1 雨ははれて、にじが大きくでました。  
 七70 4 すぐうしろに、月は、音もなく、のっそりとでていた。  
 七92 3 小屋からだすとき、みんな喜んですぐでました、  
 七92 4 1 ぴきの白いうさぎと、茶色のうさぎは、おくへはいつてでてこないの、  
 七97 6 ねずみ色の子うさが、きょうは、巣からでて歩いていました。  
 七98 5 お晝ごろみたら、子うさは、7 ひきとも巣からでて歩いていました。  
 八13 7 いなかのしものふかい朝の野にでたとき、  
 八19 2 わずか二三ヶ月で大きくなって、皮をぬぎかえて地の上へでていきます。  
 八22 7 せなががです。  
 八22 8 頭がです。  
 八22 9 足もです。  
 八29 2 こうお考えになった天帝は、そのままそへでて、  
 八31 9 けんぎゅうも、はたけにではたらかなくなり、  
 八45 5 これという考えはでませんでした。  
 八45 6 そこへ、王さまの病氣をなおすというものができました。  
 八53 11 その家の人がでてみると、まずしいこじ

きのようなものが、おもてに立っていました。  
 八56 2 朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎり、美しい砂地がみわたされた。  
 八60 10 けれども、親あひるは、ひながでてくるまえに、もうつかれきっていた。  
 八61 5 どのたまごからも小さなひなの首がでた。  
 八65 1 ひなは鳴いて、はってでた。  
 八83 2 ⑤ 私は、廣い世界へでたいと思っているのです。  
 八94 10 こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるといふこと。  
 八95 7 もみのものさのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。  
 八96 7 いつ、めがでるでしょう。  
 八96 9 種もみから黄みどりのめがでました。  
 八96 10 ひたさないほうは、まだめがでません。  
 八97 4 ひたさない種もみからも、やっとめがでてきました。  
 八97 6 水にひたしたほうが、1週間早くでました。  
 八100 2 どのなえからも、すこしずつ新しいなえがでてきました。  
 八100 5 1本のなえのまん中からでた新しい葉が、5 cm ぐらいになりました。  
 八100 9 葉と葉のあいだから、新しい葉がたくさんでてきました。  
 八101 1 新しい葉は、まるまってでてきます。  
 八102 1 いねのほのさがふくらんで、いまにもほがでそうです。  
 八102 4 葉のついているものところから、黄みどりのほがでました。  
 八108 9 きれいなお米がでてきました。  
 八109 4 どんどんすっていたら、こんどはすぐには

げましたが、くだけた米もでてきました。  
 九32 1 ④ ぼくは、こちらへきてから、おとなといっしょに畑にでたり、  
 九32 7 ④ 家のまえをちよつとでると、はるか下の方に美しい湖がみえます。  
 九34 8 ④ ちよまの根は、〈略〉、たこの足のように一かぶから七本も八本もでていて、  
 九37 9 ④ 名も知らない雑草がいちめんにはえていて、なにかでてきそうです。  
 九43 5 ④ 朝早く庭にでて、  
 九45 2 ④ 「小公子」の話にでてくる、セドリック少年のように、  
 九49 1 おもてにでてみると、  
 九78 6 しばらくして、その主人といっしょにでておいでになりました。  
 九82 5 ④ 先生のところは、いろいろでるらしいぞ。  
 九82 6 ④ ここからも、でるかもしれないぞ。  
 九84 3 ④ これはじょうもん土器といって、貝づからでる物では、いちばん多い土器です。  
 九85 5 ④ ここからでるのは、このとおりうちだいて作った物で、  
 九93 2 しばらく、間——やまだ、さがし物のようすで地面をみながらでてくる。  
 九93 7 しばらくすると、たかきもさがし物のようすででてくる。  
 九105 8 だんだんのぼり坂になると、からだはほてってあせがでる。  
 十9 8 その少女のわけてくれたくりは、むじやきな心からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。  
 十21 10 ④ 「ごらん、にじがでているよ。」  
 十25 4 ひとりの工員がしごとをすませて、坑内から地上にでてくる。

- 十3411 小学校をでただけのかれには、手のとどき  
 そうもない空想になりがちであった。  
 十476 私は、きのう、〈略〉妹をつれて、さんば  
 にでました。  
 十501 家からでてしばらくいくと、  
 十5212 門からもどつてきて、道にでたとき、あと  
 をふり向きまして。  
 十601 月がでてきた。  
 十602 〔会〕 そとへでて、あかちゃんにも、みせてあ  
 げて。  
 十604 おかあさんが、あかちゃんをだっこして、  
 おもての通りへでていらつしやった。  
 十623 二階の窓からそとをみたら、大きな竹が  
 によつかりでいたので、びっくりしました。  
 十126 あげはのちようが、まつのかげから舞つ  
 てでる。  
 十157 オルガンのキイから、赤い、青い、金色  
 の、ちがった形の小鳥が、はばたいでて、  
 十211 さかわ川のといぼう工事があつて、どの  
 家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで  
 て働くことになりました。  
 十214 父親が病氣でねていましたので、金次郎  
 が、そのかわりにでることになりました。  
 十301 やがて、金次郎は、親類の家からでて、  
 もとの自分の家に帰り、  
 十355 〔会〕 あぶらぜみの声さわがしく、晝の休み  
 もあせがでる。  
 十426 〔会〕 ふきのとうでて、すいせんにおい、  
 十434 弟が卒業するので、私が、母にかわつて  
 でした。  
 十456 園長さんのまえにでて、だんをあがり、  
 十708 〔会〕 チチロがいなかからでてきたんですよ。

- 十757 〔会〕 たんどくが顔にでたのです。  
 十878 父親はそういつてでていきました。  
 十610 戸をたたきますと、おくからひとりの少  
 女がでてきましたので、  
 十211 〔会〕 でも、あなたの歌には、そのさびしい  
 氣持がでているので、人の心を動かすのだから、  
 あのピアノの先生がおつしやいましたよ。  
 十298 〔会〕 民ちゃんがひとりで〈略〉、正男のあ  
 とを追つかけて道まででていたよ。  
 十4611 〔会〕 これに光をあてて影絵にしてみせるの  
 だが、人間ばかりでなく、動物などもでてくる。  
 十581 もしそれができなかつたら、これからの  
 ちは、けつして村へでてきてはならない、  
 十619 ふとしたことから、この岩屋からぜんや  
 わんなどの家具のであることを知った。  
 十6210 水を飲もうと思つて小川の岸にでてみる  
 と、美しい小魚がおよいでいる。  
 十664 おおづなのようなたくましい根が、深く  
 のびてみきをささえ、〈略〉、それからでた細い根  
 が、つなのようにからみあつて、  
 十727 そのあたりにいるのは、〈略〉、のりをと  
 りにでるりょうしの子どもたちで、  
 十778 時間がせまつたので、私はユニホームを  
 つけて、練習のためにコートにでました。  
 十817 火のするようなはげしい試合が続きまし  
 た。  
 十965 それにはあなたがたのおとうさんや、お  
 じいさんや、ひいおじいさんの写真がでていたり、  
 十979 貝づかからでる貝は、三百種類にものぼ  
 りますが、  
 十992 貝づかからでたものをならべてみましょ  
 う。

- 十912 でんせん病がはやると、ほうき星が出た  
 からだといつたり、  
 十1312 つまり、天動説とは反対に、地動説が出  
 てきました。  
 十143 しばらくして、ドイツ人でケプラーとい  
 う人が出ました。  
 十339 月が出ていれば、出ていたで美しく、星  
 の夜であれば、またさらに美しい。  
 十339 月が出ていれば、出ていたで美しく、  
 十375 だれも出て来ない。  
 十431 手紙を読みながら、舞台のまん中に出て  
 来る。  
 十444 ところが、このしばいは、舞台に出て来  
 る人が、ただひとりです。  
 十4410 ですから、舞台に出てくる人は、四人の  
 人と話をしていくわけです。  
 十572 〔会〕 ミケランジェロとラファエルは、前後  
 して、そこからローマに出て、へき画をかわたり、  
 十5711 〔会〕 いかにも、おかあさんの喜びという心  
 持が、よく出ているね。  
 十598 〔会〕 キリストのおかあさんという感じが、  
 よく出ているんじゃないでしょうか。  
 十511 文学修業のためにパリに出て、市役所  
 のガス係という職についたとき、  
 十284 〔会〕 たくさん出てくるよ。  
 十506 このことは、あくる日の新聞に出たマッ  
 ケンナの話で、あきらかになったのですが、  
 十538 〔会〕 いつも日あたりのいいところに出て、  
 十6511 けむりの出るところからいくらかの高さ  
 までは、まっすぐにあがりますが、  
 十907 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出  
 たときは、上ぐつを足にひっかけていた。

十五64 文 家を出て手をひかれたるまつりかな  
十五102 月が出る山の家になつた木  
十五20 10 このふたりの子どもたちは、両親や家庭教師につれて、散歩に出て来るのです。  
十五217 ある朝、このアメリカ人の家族は、いつものように散歩に出ました。

十五29 11 昔の物語に出てくる英ゆうのように、このただけしい相手を待ちかまえていました。

十五412 ローマ字は、略、その大もとをたずねれば、エジプト文字から出たものである。  
十五463 ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵のはちを手にとって、かれは、びっくりした。

十五601 げんかんに出て、横づけにしてあったりっぱな自動車に、ためらう私をおしこみ、  
十五644 おじさんとおばさんはそのあとを追って出て来られたが、

十五645 門を出て十メートルとは行かないうちに、  
十五685 みんな早く出たおいで、満ぼうが来たよ。

十五727 「略」と呼びかけようとしたが、声が出なかった。  
十五971 1 どこから出て来たのだらう。

十五1032 外へ出ればいつでも、この「幸福」たちは見られます。  
十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。  
十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。  
十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。  
十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。  
十五1088 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

らべることにしました。

九355 5 手 そうして、近所からわけてもらったさつまいものなえを、手わけして植えていきました。

十二451 1 からだ全体と右手を受け持つ人、左手だけの人、足だけの人と、それぞれ手わけしているんだが、

てん 「天」(名) 13 天

三1159 そこで、よいいの車にのって、しずかに天へのぼっていきました。

三1165 5 天にいちばんちかい山はどこか。  
三1169 9 するがにある山がいちばんみやこにもちかく、天にもちかいそうでございます。

四1313 3 天がないうと、天へかえることができます。  
四1343 3 天人は、まいながら、だんだん天へのぼっていきます。

十一164 4 天と地にかがやくものの中で、いちばん清らかな、すみきったたま、  
十二247 わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にものぼるほどうれしかったのです。

十三132 2 天は動き、地はじっとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。  
十三1412 コペルニクスのいったとおり、天は動くものではない、地球が動くのだということを、

十三3510 早春になると、はとぶえが天から鳴ってきて、ホートンをにぎわわせる。  
十四425 5 天には雲、地にはあらそいがたえなからうが、心に太陽をもて。

十五812 2 天は、人のうえに人をつくらず、人のしたに人をつくらず。  
十五984 4 子どもの幸福というものは、地の上でも、天の上でも、いちばん美しいものに見えるも

のだからね。

てん 「点」(名) 4 点ひけつしようてん

六368 8 高くふきあげられて、空にきえていくかし——点になって、おしまいはみえなくなってしまう。

十二867 わずかな点のちがいで、清水選手の負けとなりました。

十三582 2 色のあるのは、その点はよいが、すりうまくいかないから、また困る。

十五2711 人々の目には、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなっていました。

でんえん 「課金」2 田園  
十一28 四 田園……三十  
十一305 四 田園

でんえん 「田園」(名) 1 田園  
十三2411 ユートランドのあれ地は、大もみの林がしげったために、こえた田園となりました。

てんか 「天下」(名) 1 天下  
十五6011 長男に生まれて父母の愛を一身に集めていた身にとっては、天下におおるべきなものもなく、わがままいっばいにふるまっていた。

てんき 「天気」(名) 7 てんき 天気ひおてんき  
一184 田 あした てんきになあれ。  
七665 よい天気。

七913 このころは天気がわるいので、うさぎは、元気がありません。  
八207 上からつたわってくるあたたかさと、かわきかたで、いまが夏だということや、よい天気がつづいていることなどを知ります。

八1086 天気のよい日に2日ほしたら、もみがよくかわきました。  
九467 7 天気の良い日は、あの廣い学校の運動場

で、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。

十二90<sup>11</sup> 天氣のよかったこと、山へいったこと、でんき「電気」(名) 1 でんき ↓ すいりよくでんき

四122<sup>1</sup> 園 わたくしはでんきです。

でんきゅう「電球」(名) 2 でんきゅう

四122<sup>5</sup> 園 けれども、ただ一つのこのでんきゅうがないと、光ることができません。

四122<sup>6</sup> 園 でんきゅうはわたくしのかおです。

でんぐ「天狗」(名) 1 てんぐ

十二45<sup>3</sup> 園 ときには、したをだしたり鼻がでんぐのようにとびだすこともある。

でんくう「天空」(名) 2 天空

十四85<sup>2</sup> その雪が、どこで、どのようにしてできたか、どんな天空を旅して降ってきたか、

十四85<sup>6</sup> 一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、たしかに空からの手紙にちがいない。

でんこう「電光」(名) 1 電光

十二84<sup>10</sup> もう然とたちなおって、電光のようなボールをうちだしました。

てんごく「天国」(名) 2 天国

十五115<sup>4</sup> 園 チルチルや、おまえは、いまだけ天国に來ていると思っているけれど、

十五115<sup>6</sup> 園 おまえと私とが、かわいがりあうときは、いつでも天国にいますのですよ。

てんさい「天才」(名) 1 天才

十三56<sup>11</sup> 園 レオナルド・ダ・ビンチだの、ミケランジェロだのという天才の集まっていた、美術の中心のフロレンスで、研究しているうちに、

てんし「天使」(名) 1 天使

十五106<sup>6</sup> せの高い、美しい、天使のようなすがたをした者が、

てんじ「点字」(名) 2 点字

十19<sup>8</sup> ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字を読んでいる。

十19<sup>9</sup> ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上をすべっていく。

でんしゃ「電車」(名) 16 でんしゃ 電車 ↓ とざんでんしゃ

三93<sup>5</sup> このでんしゃもみんなのもです。

五21<sup>3</sup> 一だいの長い電車が、おきやくをいっぱい乗せて、終点につきました。

五23<sup>3</sup> 園 あのね、帰りの電車はともこんでいたんです。

五25<sup>4</sup> 園 ええ、はじめは、電車の中は、まるでにらめっこをしているようだったのに、

五27<sup>1</sup> 園 だって、電車のおかげで、あんな遠いところまで、一日でいって帰ってきたのですもの。

五27<sup>9</sup> しんきちくんは、電車をおりてから、元氣にあるいて帰りました。

六37<sup>10</sup> ずっと下にみえる夕やけの大通りを、豆つぶほどの自動車や電車が、ひっきりなしにゆききしている。

十一51<sup>6</sup> 私は、かさをさして電車の停留所まででかけた。

十一51<sup>9</sup> 雨にうたれながら、電車のくるのを待っていた。

十一51<sup>9</sup> 電車は、くるにはくるが、みな満員の札をさげて、とまらずに走っていつてしまう。

十一52<sup>2</sup> やつと一台の電車がとまった。

十一52<sup>8</sup> 電車は、歯ぎしりでもするように車の音をたてて、あらしの中をつき進んでいく。

十一53<sup>1</sup> 園 「そんなにぶらさがっちゃ、電車は動かせんよ。」とさげんだ。

十一53<sup>6</sup> 園 電車もなみだをこぼしています。

十一54<sup>1</sup> このごろ、電車の中に、つぎのようなひょう語がかげられているのを見た。

十一54<sup>8</sup> 園 「電車もなみだをこぼしています。」といった、しゃしやうさんのことばを

てんじやう「天上」(名) 6 天上

十三36<sup>2</sup> ふえには大小があるから、はとがむれになつてとんで來ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、それこそ天上の音楽である。

十四29<sup>10</sup> 日本は景色のよい國で、花がたえずさいていたために、天上の花を見ようとはしなかったのだからという人もありますが、

十四32<sup>3</sup> 天上の星とあなたがたととは、あまりにかけはなれているために、

十四35<sup>9</sup> みなさん、ごらんさい、あの天上の星を。

十四37<sup>9</sup> もし、くしゃくしゃするようなことがあつたら、どうか天上の星を見あげてください。

十四84<sup>4</sup> その美しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ降ってくるなどを写している。

てんじやう「天井」(名) 1 てんじやう

五80<sup>8</sup> 竹のさきにはうきをむすびつけて、てんじやうのくものすをはいりました。

てんじやうが「天井画」(名) 1 てんじやう画

十三60<sup>11</sup> 園 あれは、ミケランジェロのかいた、てんじやう画の一部だ。

でんせつ「課名」2 傳説

十二32<sup>2</sup> 六 傳説……五十五

十二55<sup>1</sup> 六 傳説

でんせつ「伝説」(名) 4 傳説

十二476 命のない人形を思うままに動かして、喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。

十二555 子どものときからきかれた傳説が、そのあいだにおこまれているからである。

十二556 傳説には、正しい歴史にもとづいたものもあるが、昔からいい伝えられたというだけのもののほうが多い。

十二564 傳説を廣く全國で調べてみると、よく似たようなのが、あちらこちらで発見される。

てんせん 「点線」(名) 1 点線

十二5211 (2) 二まいあわせて、図の点線のところをぬう。

でんせん 「電線」(名) 4 でんせん 電線  
二247 先生、でんせんに、つばめがたくさんとまっています。

四1223 長い 長い でんせんをつたわって、ここまで たびをしてきたのです。

九123 町の通りを、電線を、はたを、せんたく物をふいている風である。

九152 つばめが電線や物ほしざおに五六ばぐらいならんでとまっているのを、よくみかけます。

でんせんびょう 「伝染病」(名) 1 でんせん病  
十三911 でんせん病がはやると、ほうき星が出たからだといったたり、

てんたい 「天体」(名) 1 天体

十三1410 自分で望遠鏡を組み立てて、それで天体を観察し、数学でこまかに計算した結果、

てんち 「天地」(名) 1 天地

十三2710 子どもたちにとっては、〈略〉、なつかしい思い出の天地である。

でんちゅう 「電柱」(名) 1 電柱

六1027 長い物がぼんやりみえる。〈略〉。電柱だ。

てんで (副) 1 てんで

九693 今の中で、いちばんばかで、めちゃくちゃで、てんでなくてなくて、頭のつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。

てんてい 「天帝」(名) 11 天帝

八265 中には天帝が乗っておいでです。

八274 天帝は、あたりをみまわして、なにかさがすようになさいました。

八277 それは、天帝のひとりむすめのはたおりひめのすがたを、もとめておいでになるのです。

八285 天帝は、そつとてんの中へおはいりになりました。

八288 そのおり物の美しい光に、天帝もすっかりおみとれになりました。

八292 こうお考えになった天帝は、そのままそとへでて、

八298 天帝は、その男にたずねました。

八301 天帝は、ひとつこの男のうでをためしてみようと考えて、黒うしのしっぽのあたりを一つきおつきになりました。

八312 天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにももらいました。

八321 それをみた天帝は、たいへんおおこりになって、はたおりひめを天の川の東の岸のごてんにもどしてしまい、

八325 天帝は、このようすをごらんになって、

「略」とおっしゃいました。

てんでに 「手手」(副) 1 てんでに

十七78 おとうさんの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけていって、てんでに、おとうさんの顔をのぞきこむようにしました。

てんでん (感) 1 てんでん

四788 て——てんでん手まりをつきましよう。でんでんだいこ 「太鼓」(名) 1 でんでんだいこ

十三294 でんでんだいこのような、ブリキのつづみを鳴らしてやって来る。

てんとう ↓おてんとうさま

でんとう 「電燈」(名) 8 でんとう 電燈  
一413 でんとうのしたを、くろくすうつととんだ。

一627 でんとうでも ついたのかと おもってみまわすと、山のうえから、おおきな お月さんがでるところでした。

四1202 でんとうが つきました。

四1207 たった一つの でんとうですが、この光をだすために、どれほどたくさんの方が、はたらいている ことでしょう。

四1215 でんとうの まるい ガラスは、どうしてこしらえたのでしょうか。

九294 電燈 かやごしの電燈のたまみておりぬ  
九1162 階上のわが電燈のきえにけりみわたす  
家々みなまくらなり

十四703 これは、夜、電燈の光をあてて見ると、もつとよく、あざやかに見えます。

てんどうせつ 「天動説」(名) 4 天動説  
十三133 天は動き、地はじっとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。

十三135 しかし、この天動説では、どうしてもかたづかないようなことが、目についてきたのです。

十三1311 つまり、天動説とは反対に、地動説が出てきました。

十三157 しかし、そのころの教会のぼうさんたちは、天動説を信じていましたので、



てんとうむし 「天道虫」(名) 1 てんとうむし

十一 554 ㊦ てんとうむしのよう、みずすましの  
ように、一つ一つはねる。

てんにん 「天人」(話手) 5 天人

四 131 ㊦ 天人「それがないと、天へかえることが  
できません。」

四 132 ㊦ お氣のどくですから、はごろもを お返し  
いたしましょう。」天人「それは、ありがとうご  
ざいます。」

四 132 ㊦ 天人の まいをまっ、みせて いただけ  
ませんか。」天人「それでは、お礼に まいましよ  
う。」

四 132 ㊦ 天人「天人は、うそと いう ことを 知りま  
せん。」

四 133 ㊦ 天人「月の 都の 天人たちは、みんな そ  
ろって まいじようず。」

てんにん 「天人」(名) 12 天人

三 114 ㊦ 天人が はごろもを きせようと すると、

かぐやひめは、「略。」と いうて、

三 115 ㊦ 天人は、いそいで かぐやひめにはごろも  
を きせました。

四 126 ㊦ てる人 りようし 天人

四 130 ㊦ それは、天人のはごろもと 申しまして、  
あなたがたには、ご用の ないもので ございま  
す。

四 131 ㊦ 天人のはごろもなら、なおさら お返し  
は できません。

四 131 ㊦ 天人は、かなし そうな かおをして、空を  
みあげます。

四 131 ㊦ 天人の しおれた、この ようすを みて、  
りようし「お氣のどくですから、はごろもを お返  
しいたしましょう。」

四 132 ㊦ 天人の まいをまっ、みせて いただ  
けませんか。

四 132 ㊦ 天人は、うそと いう ことを 知りませ  
ん。

四 133 ㊦ 天人は、それを きて、しずかに まいます。  
四 134 ㊦ 天人は、まいながら、だんだん 天への  
ぼって いきます。

四 135 ㊦ 一つの まにやら 天人は、春の かすみ  
につつまれて。

てんにんたち 「天人達」(名) 2 天人たち

三 113 ㊦ そのうちに、空から 大ぜいの 天人たちが、  
雲に のって おりて きました。

四 133 ㊦ 月の 都の 天人たちは、みんな そ  
ろって まいじようず。

てんねんしんじゅ 「天然眞珠」(名) 3 天然眞珠

十 38 ㊦ 一つぶの天然眞珠をてのひらにのせて、大  
きなゆめをえがいていた、ひとりのわかががあつ  
た。

十 38 ㊦ 貝の中に、砂のような小さなものがいりこ  
み、それに、貝のだす眞珠質がまきつき、(略)、

天然眞珠となることがわかったからである。  
十 45 ㊦ 世界の学者の研究によって、天然眞珠と  
まったく同じであることが、明らかにされた。

てんびんぼう 「天秤棒」(名) 1 てんびんぼう

十 38 ㊦ せんめん器や、道具を入れた赤いほこを、  
てんびんぼうでかついでやって来る。

てんぶら 「天麩羅」(名) 2 てんぶら

四 72 ㊦ こおりの てんぶら。

てんぼう 「電報」(名) 1 てんぼう

四 6 ㊦ いそぐ ときには、てんぼうを うって く  
れます。

てんまつ 「顛末」(名) 1 てんまつ

十五 75 ㊦ 日本へ帰ったら、新島夫人にきょうのゆ  
かいな会見のてんまつを伝えてくれといながら、

デンマルク 「地名」 7 デンマルク

十一 50 ㊦ デンマルクの農業のことを勉強して、ぼ  
くは、いい農夫になろう。

十三 17 ㊦ デンマルクは、みどりの牧場と、もみと、

《略》のほかに、鉱山があるのでもなく、  
十三 18 ㊦ いかにして、國運をもとどおりにするか、  
これが、デンマルクの愛國者たちの心をくだいた、  
もっとも大きな問題でありました。

十三 19 ㊦ ユーランドは、デンマルクの半分以上  
もあつて、その三分の一以上が、作物のできない  
土地であります。

十三 21 ㊦ ダルガスの希望であり、デンマルクの希  
望であるこの植林は、みごとに実現されました。

十三 22 ㊦ そこで、デンマルクの國運回復の意氣は、  
年々高まってきました。

十三 22 ㊦ デンマルクの農夫たちは、「略。」と  
いうて、かれにせまりました。

デンマルクじん (名) 1 デンマルク人

十三 25 ㊦ デンマルク人のたましいは、ダルガスの  
研究と実行の結果として、すっかり生まれかわり  
ました。

てんもんがく 「天文学」(名) 1 天文学

十四 32 ㊦ 天文学が生まれたのです。

てんもんがくしゃ 「天文学者」(名) 1 天文学者

十三 14 ㊦ この人は、すぐれた数学者で、また熱心  
な天文学者でした。

てんりゅうがわ 「天竜川」(地名) 3 てんりゅう川  
九 121 ㊦ ところが、てんりゅう川の中流の水をくん  
で、それで茶をたててみると、いまままで味わた

こともないような、ふしぎな味が感じられた。

九二〇 ころまでくると、てんりゅう川もよほど水かさが増していた。

九二四 まつ川がてんりゅう川に流れこんでいるところの近くまでくると、いい味の水は、左の岸のほとりを流れていた。

てんりゅうきょう 「天竜峡」〔地名〕1 てんりゅうきょう

九二八 てんりゅうきょうという景色で名高いところもすぎて、四十キロあまりもきてしまった。

でんわ〔課名〕2 電話

十三二八 五 電話……三十七

十三三七 五 電話

でんわ〔電話〕(名)9 でんわ 電話

四六四 もっといそぐときには、でんわをとりついでくれます。

九一九 ウィーンの動物ほご協会に、〈略〉、電話でこのことを知らせてきました。

九二〇 協会へは、電話が、ひっきりなしにかかって、つばめを集めていることを知らせてきました。

十三三七 ところ 三郎のうちの二室 右がわのかべに、電話がとりつけてある。

十三三七 電話のベルが鳴る。

十三四〇 読み終ると、また電話口に行き、電話をかける。

十三四〇 電話のかかるのを待っている。

十三四八 電話のはじめの人は、三郎くんのおばさん、それからおとうさん、

十三四六 「……」を時間的に短くしたり長くしたりして、電話の話らしくしなければなりません。

でんわぐち 「電話口」(名)2 電話口

十三三九 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つ

くえの方へ走りよって、ひきだしをあける。

十三四二 読み終ると、また電話口に行き、電話をかける。

でんわばんこう 「電話番号」(名)1 電話番号  
十三四一 電話番号が書いてあったものだから

## と

と「戸」(名)14 戸あまだ・ガラスど・せど

十三三三 すると、しめきっておいたくらの戸がひとりであきました。

六二八 このとき、戸のそとに、きりぎりすが二ひきたずねてきます。

六二八 きりぎりすが、戸をトントンとたたきます。

六二九 おや、だれかたずねてきたらしい。あり

一、二が戸の方をみています。

六二九 おはいり。戸をあけて、きりぎりす一、二がはいってきます。

七九二 寒くなったので、むしろで戸をこしらえてやりました。

八五七 「略」と、その家の人は、戸をピシャンとしましました。

八七五 あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあいてるのをみつけたので、

八八二 おりよく戸があいていたので、あひるの子は、雪の中の草むらへはいりこんだ。

十一二七 母親と相談して、戸をしめきって、息をころして、だれもないふうをしていました。

十二六九 戸をたたきますと、おくからひとりの少

女がでてきましたので、

十二七五 芭蕉はすぐ戸をあけました。

十四五七 戸の外で聞いていると、あなたたちは、ずいぶんかたくなことをしていましたね。

十五一〇 戸や窓のやぶれるほど、いっぱい「幸福」でつまっているじゃないの。

と(接)3 と

十四九八 女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。と、そのとき、マッチはもえつくしてしまった。

十五二三 「あれあれ。」とさけぶばかりです。と、そのとき、だれか、その大わしのせの上へ、がけ

十五四〇 と、見るまに、黒の肉じゅばんを着たわんぱくこぞうのようなのが、〈略〉、チルチルに近づいて来ます。

と(格助)207 トとムうんと・おとというものがちゃんと・がらんと・きちんと・きゅつと・ぎよつとする・きよんと・きらつと・ぐつと・くるつと・ぐるりと・こつんと・ころつと・ごろりと・ごろんと・ざあつと・さつと・さつと・さりと・さんさんと・じいつと・しいんと・しつかと・じつと・すいと・すうつと・すつと・すらりと・ずらりと・するりと・せつせと・そうつと・そつと・それとなく・だらりと・ちくつと・ちくりと・ちよいと・ちよんと・ちらと・ちらりと・つるつと・つるりと・つんと・てということば・どうと・どつと・どぶんと・とんと・なんと・なんと・か・なんとなく・にこつと・にやあと・にやつと・ばあと・ばさりと・ばたんと・ばちりと・はつと・ぱつと・ぴかりと・ぴしんと・ぴゅつと・ひよいと・びよいと・びよんと・ひらりと・ぴんと・ふつと・ぶらりと・ふわりと・ぶんと・べたんと・

ぼうっと・ぼちっと・ほっと・まんまと・わざと・わっと

- 196 聞いた。ひらいたとおもったら、みる  
204 なんだ。つぼんだとおもったら、みる  
226 ころで、おともだちとてをつなぎました  
245 んおもしろかったとおもいます。十一  
296 、ひだりみぎ。手となかのいいこと  
303 まだあります。足となかのいいこと  
318 とばかり お日さまというひとつのことばを、つぎつぎとかいてみました。  
321 ことばを、つぎつぎと  
343 になつてみたいとおもいますか。「へ  
345 かげになりたいたとおもいますか。「へ  
373 かげがそよそよと ふきます。あさか  
374 さかげが、そよそよとのはらを ふきます  
377 す。川が、さらさらとながれています。  
381 のまををさらさらとながれています。  
395 ゆうべ、おとうさんときしやにのつて、  
442 「略。」「略。」とききますと、どこ  
445 どかで、「略。」というこえがしま  
493 りました。ぴいっと、しゃしようさんが  
517 れあつて、ぐうぐうとねてしまいました  
524 た。「これはなんという川だろう。」  
534 「略。」「略。」と、わたくしがいつ  
559 「略。」「略。」と、ぼけつと  
588 きました。「略。」と、おれいを  
607 んも、おともだちとなかのいい、やさ  
609 (十)「略。」と、おじいさんはお  
618 りだして、「略。」と、いいました。「略  
624 「略。」「略。」と、わたくし  
628 うでもつたのかとおもつて、みまわす  
631 ろでした。「略。」と、いいました。「略  
636 いますと、「略。」と、おじいさんがい

- 659 「略。」と、いい、おかあさ  
610 さんが、「略。」と、いいました。する  
72 おさんが、「略。」と、いいました。「略  
74 。では、『あさ』ということばのつ  
83 さんが、「略。」と、へんなこえでい  
97 なつて、「略。」とおたずねになりま  
102 、わけたらいいとおもいます。「と  
103 おさんは、「略。」と、いいました。ほる  
106 、わけたらいいとおもいます。「と  
107 さんは、「略。」と、いいました。ただ  
110 、わけたらいいとおもいます。「と  
111 さんは、「略。」と、いいました。「略  
119 じめは、むずかしいとおもいましたが、  
214 までみていたとおもいましたが、  
232 たいへんあつたとおもいました。び  
266 ました。「略。」と、いいました。「へ  
276 ました。「略。」と、びきのやぎが  
2710 ました。「略。」と、べつのやぎが  
319 「略。」と、いって、大さわぎ  
325 『みんなは、ぞうというものをみた  
327 とりが、「略。」と、いいました。「略  
3210 ました。「略。」と、ほかのものがい  
333 ました。「略。」と、またたずねまし  
336 んなは、「略。」と、いいました。こん  
337 と、どしんどしんというおとがして  
341 ました。「略。」と、ぞうつかいがい  
342 よつとそのぞうというものに、さわ  
345 「略。」「略。」と、六人のめくらが、  
348 かいが、「略。」と、いって、ぞうをと  
353 あ、ぞうはかべとおなじだ。」「ぼん  
359 わつて、「略。」と、いいました。四人  
362 わつて、「略。」と、いいました。五人

- 364 うは、木のみきとおなじじゃないか  
365 なで、「略。」と、いいました。おし  
379 た。「略。」と、うたいながら、か  
402 っこうが、「略。」と、なきます。すると、  
403 ほうでも、「略。」と、なきます。たろう  
404 な声で、「略。」と、さげびます。する  
406 ほうで、「略。」と、さげびます。たろ  
483 りのへやへいこうとして、きゆうにた  
499 りんごをたべようとします。けれども、  
525 やいます。「略。」と、いって、さちこの声  
584 おもわず、「略。」と、いいますと、その  
586 かたは、「略。」と、いって、にこにこ  
678 ほうで、「略。」と、いって、声がする。  
697 「略。」「略。」と、なく。すずめ「まあ  
708 「略。」「略。」と、いって、声がする。  
713 。それがだんだんとおおくになるよう  
95 からひよこりと、おでになった  
112 かさまにはたかというでしがいま  
116 人にしてやりたいと、おおもいになり  
118 やつて、いろいろとものをおしえる  
126 かさまは、「略。」とおっしゃって、は  
128 ことをしっかりとおぼえなさい。」は  
132 「そのひとことというのは、きたな  
134 ばをつかわないということだよ。わ  
141 まれてくるものだといふことがわか  
145 れいな心になれといふことにちが  
146 りました。「略。」と、さとりました。あ  
156 をみて、「略。」と、いって、とおして  
161 た手が、するするとおしやかさまの目  
166 王さまは、「略。」とおっしゃいました。  
1610 しにとどけようとして、手をここま  
172 かさまは、「略。」とおっしゃいました。

三 20 8 んな虫がいい虫とおもいますか。』三  
 三 22 4 よるも、ぐんぐんとおびていきました  
 三 23 4 の西がわのなん十という村々が、日か  
 三 23 5 、東がわのなん十という村々が、日か  
 三 25 6 くりして、「略。」といますと、おじ  
 三 25 9 いさんは、「略。」といました。そこ  
 三 26 2 なん十人、なん百人というきこりが、切  
 三 26 5 木を、どうするかということになり  
 三 26 9 いさんが、「略。」といました。そこ  
 三 27 5 そうして、「略。」とこぎました。おど  
 三 27 10 せんか。「なんという早いふねだ  
 三 28 2 。「略。」「略。」と、せんだうたちも  
 三 28 7 会 だから、はやとりという名をつけよ  
 三 28 8 いさんが、「略。」といました。その  
 三 29 7 かなっていったという事です。  
 三 30 2 五 学校「学校」というので、作文  
 三 30 6 りました。「略。」と、先生がおっしゃ  
 三 32 7 会 ります。「略。」と、かいてあります。  
 三 34 8 会 な花をかきたいとおもいました。「へ  
 三 36 7 会 ゆげがもうもうとたっています。大  
 三 37 1 会 みんな大きいとおもいました。「へ  
 三 38 9 くぼんに、「略。」とおかきになりました  
 三 41 6 になって、麦のほとすれすれにあるき  
 三 43 3 くへいってみたいと思いました。ある  
 三 43 5 ので、これはいいと思って、「略。」  
 三 43 8 思って、「略。」といました。わに  
 三 44 1 にぎめは、「略。」と、いって、すぐにな  
 三 44 7 をみて、「略。」と、いきました。わに  
 三 44 9 うさぎは、「略。」とかぞえながら、わ  
 三 45 1 でりくへあがろうというとき、白うさ  
 三 45 7 うさぎは、「略。」と、いってわらいまし  
 三 46 7 なって、「略。」とおたずねになりま

三 46 10 たがたは、「略。」とおっしゃいました。  
 三 48 4 みことも、「略。」とおたずねになりま  
 三 52 3 ぼり、「略。」と、いきました。うぐ  
 三 52 5 まり、「略。」と、いきました。りす  
 三 52 7 ねて、「略。」と、いきました。いな  
 三 53 1 立ち、「略。」と、いきました。こど  
 三 53 3 ち、「略。」と、いきました。おて  
 三 53 5 たり、「略。」と、いきました。がん  
 三 59 3 けました。「略。」と、ジュデーがいい  
 三 59 6 いいます。「略。」と、デビッドがいい  
 三 59 8 いいます。「略。」と、ジュデーがいい  
 三 59 10 いいます。「略。」と、デビッドがいい  
 三 60 5 になって、「略。」とおきになりました  
 三 61 8 イクルが、「略。」と、いきました。「略  
 三 64 4 りました。「略。」と、女の子たちが  
 三 64 6 いました。「略。」と、女の子たちが  
 三 65 1 。「略。」と、女の子たちが  
 三 65 3 いうと、「略。」と、男の子たちが  
 三 66 6 ーターが、「略。」と、いきました。「略  
 三 66 8 いました。「略。」と、ジュデーがいい  
 三 67 9 いました。「略。」と、おとうさんが  
 三 67 10 みあげました。青々とした中に、ふんわ  
 三 73 1 いました。「略。」と、またおかあさん  
 三 74 4 ねますと、「略。」と、おかあさんが  
 三 76 7 いました。「略。」と、デビッドがたず  
 三 78 2 「略。」と、デビッドがきき  
 三 78 5 きますと、「略。」と、ジュデーがいい  
 三 79 6 ラ、ポトポトポトというおとがきこ  
 三 80 2 いました。「略。」と、デビッドがいい  
 三 80 6 いいます。「略。」と、マイクルがいい  
 三 83 6 いました。「略。」とおきになりました  
 三 83 9 。「略。」「略。」と、マイクルがきき

三 84 6 みつけて、「略。」と、いきました。みん  
 三 93 8 どり色につやつやと光ったしほふ。「へ  
 三 99 9 。先生が、「略。」とおっしゃいました。  
 三 100 2 「竹とりのおきな」というおじいさんが  
 三 100 9 いって、「略。」と、竹やぶをみまわ  
 三 102 1 るこんで、「略。」と、てのひらにのせ  
 三 102 2 いれて、おばあさんとふたりでだいに  
 三 102 4 てました。それからというものは、おじ  
 三 102 8 あいだに、すくすくとせいがのびて、ふ  
 三 103 1 で、「かぐやひめ」という名をつけま  
 三 103 8 人たちは、「略。」と、いって、まいにち  
 三 104 5 人たちは、「略。」と、思って、みんな  
 三 105 1 会 おそばにいたいと思います。」とい  
 三 105 2 やひめは、「略。」と、いって、どんな  
 三 105 8 たらおよめにいくと、いきました。けれ  
 三 106 4 なって、「略。」とお思になりました  
 三 106 7 いさんに、「略。」とおっしゃいました。  
 三 106 10 ましたが、「略。」と、いって、かぐやひ  
 三 107 1 かどは、おじいさんとごそだんになっ  
 三 107 8 います。「略。」とお思になりました。  
 三 107 9 につれて、かえろうとなさいました。す  
 三 108 3 なさって、「略。」とおっしゃいますと、  
 三 108 6 みかどは、「略。」とお思になりました。  
 三 110 1 会 なしみになるかと思つて、いままで  
 三 110 6 やひめは、「略。」と、こたえました。こ  
 三 111 1 しました。「略。」と、ふたりはいろいろ  
 三 112 2 の中で、しつかりとかぐやひめをだ  
 三 112 5 一どに十もでたかと思われるほど、あ  
 三 113 8 会 うこうをしたいと思ひましたのに、  
 三 114 2 あさんに、「略。」と、いって、きていた  
 三 114 7 ころもをきせようとすると、かぐやひ  
 三 115 3 やひめは、「略。」と、いって、みかどへ

三116 6 るとき、「略。」と、おつきのものに  
三117 1 ものは、「略。」ともしあげました。  
三117 5 みかどは、「略。」とおいいつけになり  
三117 9 名を、「ふじの山」というようになりま  
四6 5 くれます。「略。」と声をかけて、話が  
四9 6 カントッテンカンとはたらいいていま  
四12 2 です。となりの町と、いったりきたり  
四13 3 です。この町の手となり足となつて、  
四13 3 町の手となり足となつて、はたらい  
四18 1 は、ゴロンゴロンといった。おかあ  
四18 6 あさんに、「略。」ときいたら、「略。」  
四18 8 きいたら、「略。」とおっしゃった。そ  
四19 2 、「お話をするとおなじことです。  
四20 3 「さっき、みんなとねこねずみをして  
四20 10 先生が、『略。』とおっしゃいました。  
四21 2 んなは、『略。』とこたえました。ね  
四21 5 つかまえようかと考えました。ねず  
四21 9 へもぐりこもうとしました。みんな  
四21 10 みんなは、「略。」といてしやがみま  
四23 3 どころ、にいさんとよく星をみまし  
四23 10 たら、にいさんといっしょに、ふね  
四23 10 ではたらきたいと思ひます。」すみこ  
四24 8 のまさこちゃん、あのいけのそば  
四25 7 んでいるだろうと、ときどき思ひま  
四25 8 かで休んで いると思ひます。さよう  
四28 2 いかな。ふわふわとして、氣もちがい  
四28 7 わたくしがしたいと思ふことは、なん  
四30 3 きいてもらいたいといつて、文を書き  
四31 1 手を かいてもいいと思ひます。わたく  
四31 3 の花をあげようと思ひます。」かづこ  
四31 4 な」に知らせたいといつて、つぎのよ  
四33 1 くしは、「略。」といふおとうさんの

四33 7 くしに、『略。』といつて、わかれて  
四36 3 ぼが 生きて いるといふことが、わか  
四36 8 うさんが、『略。』といつて、つぎのよ  
四37 6 さんに、『略。』といおうとしました  
四37 6 略。』といおうとしました。そのと  
四37 10 でした。『略。』といふ声でした。わ  
四39 4 ありを ころそうとしたとき、にいさ  
四39 7 らの 枝を おろうとしたとき、おじさ  
四44 3 きようも、きのうと おなじじゅんばん  
四44 8 ところが、『略。』といつたのは、かっ  
四45 9 とりのこされるかと思つてさ。それに、  
四46 1 てきやしないかと思つてね。『略。』  
四46 2 こにならびたいといふの。『略。』  
四46 9 んにならびたいといふんだね。『略。』  
四48 8 ちゃんが、『略。』と、声をたてました。  
四48 10 くりさせるのだろうと思つて、べつに氣  
四49 2 らわきにそれたかと思つて、石ころか  
四49 10 っぽうで やられたといふことがわか  
四51 4 なつて、にげようとするものはあり  
四53 3 のところへいこうと話しあいました。  
四53 9 は、この風がなんともいえないいい  
四53 10 島には、こんもりとした林がありま  
四54 7 、手早くくるくるとまきつけました。  
四55 7 夜でした。かさかさといふ木の音  
四57 5 快いわいをしようといふことになり  
四58 1 六わ、二十七わ——と、だんだんそい  
四59 4 がんは、『略。』とさげました。山  
四59 7 むこうで、『略。』とこたえるだけ  
四61 8 ちゃんは、『略。』と、おいのりをしま  
四62 1 ませると、『略。』と、出発がかりの  
四62 5 びからぬけだそうとして、もがいてい  
四69 8 「なぞ」。「ゆうだちと かけて、なんと

四69 8 ちと かけて、なんと とく。ボンボン  
四70 1 く。ボンボンといふとく。こころは、  
四70 4 「略。」「ラジオと かけて なんとと  
四70 4 ジオと かけて なんととく。あきの 花ば  
四70 5 。あきの 花ばたけとく。こころは、  
四70 7 。（「略。」「すずと かけて、なんとと  
四70 7 ずと かけて、なんととく。かみなりと  
四70 8 ととく。かみなりとく。こころは、  
四70 10 ろはの『い』の字と かけて、なんとと  
四70 10 字と かけて、なんととく。つづびんと  
四71 2 ととく。つづびんととく。こころは、  
四71 4 ろはの『ろ』の字と かけて、なんとと  
四71 4 字と かけて、なんととく。あさつゆと  
四71 5 ととく。あさつゆととく。こころは、  
四72 1 。『にやあ・わん』といふわけです。』  
四72 1 。これは、『略。』といふわけです。』  
四72 5 『あげられません』といふわけです。』  
四72 8 あげます。『略。』といふわけです。』  
四73 1 はいつも はつきりと。と——とんぼ、と  
四74 8 たくしは、ねえさんとふたりで、クリス  
四82 3 た。弟が、『略。』といつて、一まいの  
四83 3 と、弟は、『略。』といつたので、ねえ  
四84 2 た。弟が、『略。』と、大きな声でいっ  
四85 9 ささいが、『略。』とないた。冬がきた  
四86 7 ちら ちらと 雪が 降る。すず  
四88 3 ろう。『略。』と 親すずめ。『略。』  
四89 3 め。『略。』と、子すずめが、「へ  
四89 4 さらさらと 雪の音。雪だ  
四89 7 と 雪の音。雪だといふと、あさ早く  
四89 8 る。もくもくもくと、えんとつからす  
四94 3 まつたり、ふわふわとながれたりして、  
四95 2 もたちは、『略。』といひながら、いっ  
四100 2

四一〇三 4 な声で、「略。」といいます。うらし  
 四一〇三 5 、「ま、おや、だれかと思つたら、かめさ  
 四一〇四 10 へおつれしようと思つて、ここまで  
 四一〇六 4 そこをぐるぐるとあるきまわります。  
 四一〇三 2 ろも、三のぼめんとおなじ。ある日の  
 四一〇四 10 、「おいとましようと思ひます。」おとひ  
 四一〇七 1 けてはいけないというのですか。「お  
 四一〇八 10 のをもつていこうとします。まつの木  
 四一〇九 2 たからにしようと思ひます。」女「そ  
 四一〇三 3 天人のはごろもと申しまして、あな  
 四一〇四 10 人「天人は、うそというのを知り  
 四一〇四 4 左にひらひらと、ゆれるたもとが  
 五五九 とびおりて、さかなとジャブジャブはしや  
 五六一 おりる。川は友だちとあくしゆして、川は  
 五七四 くなると、ゆつくりとながれていく。汽船  
 五一一三 5 こうからきた汽車とすれちがったのださ。  
 五一一五 5 しょうとつしたかと思つた。」「略。」「  
 五一一七 旅にきつぷがいののと、おなじことです。  
 五一一六 2 れられると、友だちといっしょになりまし  
 五一一五 5 人がきて、「略。」といつて、私たちをみ  
 五一一八 1 ころにやられるかと思つて、びくびくし  
 五一一八 9 たがい、であつたと思つたら、すぐおわ  
 五一一六 2 、みんな、ぶつぶつとごをいいながら  
 五一一三 10 るとき、「略。」といつて、かけさせて  
 五一一四 6 がつて、「略。」といつて、みんなを立  
 五一一四 10 ついて、「略。」といつて、せきをすこ  
 五一一五 2 れども、「略。」といつて、とうとうか  
 五一一六 7 とうございました。といつて、かるくあた  
 五一一七 2 こかでありがとうといつたと思つたけ  
 五一一七 3 がとうといつたと思つたけれど、いう  
 五一一九 2 ら、うれしかったというのとはどんなこと  
 五一一九 11 ぼくは、「略。」といひました。「略」

五三〇三 3 略。」「略。」といつて、小さいほう  
 五三〇九 5 の人は、「略。」ときいたので、ぼくは  
 五三〇九 10 からも、やりたいと思つていましたが、  
 五三一二 5 、「いつもやりたいと思ひます。」といひ  
 五三一二 3 ぼくは、「略。」といひました。すると  
 五三一九 5 だして、「略。」といつて、ぼくにくれ  
 五三二四 4 なけむりをもうもうとはいひて、どんどん走  
 五三三九 けむりが、むくむくとたちのぼつていま  
 五三三九 9 うすが、いろいろとわかるだらう。」「  
 五三三八 3 手んにおみせしたいと思ひます。」「略。  
 五三九四 4 手。白くてゆつたりとさく、ひんのいい花  
 五四〇六 3 手。く年は、ほう年だといひます。いま、た  
 五四二二 3 手。きれいなところだと思ひます。ほんとう  
 五四二二 5 手。いどいつてみたいと思ひます。」「略。  
 五四二二 1 手。なかよくきらきらと、しずかな空で光  
 五四二二 6 手。声がした。」「略。」というようにきこえた  
 五四二二 8 手。と、また、「略。」と鳴いた。春になつた  
 五四二二 4 手。船のたりのたりとわたした船、なの花  
 五四二二 7 手。のたりのたりとわたした船、かふん  
 五四二二 2 手。のたりのたりとわたした船、おもさ  
 五四二二 6 手。車に乗せて、はるおと大通りにでました。  
 五四二二 9 手。通ります。」「略。」と、あいさつをしてい  
 五四二二 1 手。まさか、「略。」というので、西の方を  
 五四二二 4 手。いきました。」「略。」といひて、手をたたい  
 五四二二 10 手。は、まだ、ほんのりと明かるくて、つぎの  
 五四二二 4 手。いきました。」「略。」といひて、西の空をみ  
 五四二二 9 手。になつて、「略。」と、さそつてください  
 五四二二 11 手。をさそつて、はるおといひしよに、学校へ  
 五四二二 6 手。ん星よ。あれ土星というのよ。」「じゅん  
 五四二二 1 手。うさんは、「略。」といひました。すると  
 五四二二 3 手。はるおも、「略。」といひました。私は、

五五九 5 ねいにかいておこうと思ひました。八  
 五五九 1 につけて、「略。」といひました。」「略」  
 五五九 4 、「あやこは、なんとこたえていいの、か、  
 五五九 9 だつて、あさがおとおなじですよ。たね  
 五五九 7 になつて、「略。」といひて、おわらいに  
 五五九 2 、「で、大きくなつたと思ひます。」「略」  
 五五九 5 さかなは、「略。」といひました。おじい  
 五五九 8 さんは、「略。」とやさしくいひて、は  
 五五九 11 いくらでもあけるといひたが、わしはお  
 五五九 7 さんは、「略。」といひました。あくる  
 五五九 1 できて、「略。」とききました。」「略」  
 五五九 3 しいおけがほしいといひています。」「へ  
 五五九 6 さんは、家がほしいといひます。」「略」  
 五五九 5 さんは、「略。」といひました。おじい  
 五五九 11 くんさんになりたいたいといひます。」「略」  
 五五九 11 さんが、「略。」といひますと、おばあ  
 五五九 11 さんは、とぼとぼと海へやつてきました  
 五五九 4 さかなは、「略。」とたずねました。」「略」  
 五五九 6 、「女王になりたいたいといひます。」「へ  
 五五九 9 さんは、「略。」といひました。おじい  
 五五九 6 さんは、「略。」といひました。おばあ  
 五五九 10 けらいに、「略。」といひつけました。そ  
 五五九 11 波が高く、ゴーゴーとうなつています。お  
 五五九 5 もう女王はいやだといひています。海の  
 五五九 7 けらいにしたいといひています。」「金  
 五五九 10 、「しつぽでビシヤリと音をさせて、海の中  
 五五九 2 いさんは、すごすごと、おばあさんのとこ  
 五五九 4 先生が、「略。」とおっしゃいました。  
 五五九 10 火きよう、先生といひしよに、学校の  
 五五九 6 、「ビシヤビシヤと、あがつたりさがつ  
 五五九 11 るように、らくらくと流れていきます。」「  
 五五九 1 くりして、「略。」といひてとびあがつた

五82 5 と、それから——と、先生がおっしゃい  
 五83 1 念に写真を書いたとおっしゃいました。  
 五83 6 友だちが、「略。」とおっしゃったとき、  
 五83 8 だれかが、「略。」とわらいだしたので、  
 五84 3 んは、え日記を書くといいました。たなか  
 五84 4 しばをたくさん作るといいました。ささき  
 五84 5 んは、星をしらべるといいました。いとう  
 五84 7 海の作文を書くんだといって、よろこんで  
 五84 9 五十音にわけるといいました。「略」  
 五84 11 いました。「略。」と、先生がおっしゃい  
 五85 7 「略。」「略。」とよびながら、走って  
 五86 5 の方から、「略。」と、うたのようにふし  
 五86 9 かせでもひいたかと思つて。「略。」  
 五87 4 つも四つもあるかと思つていたよ。あは  
 五90 1 ま、『さどが島』とおうたいになったと  
 五90 3 子どもが、「略。」とたずねました。「略」  
 五90 9 ギャア、オギャアとないたのだよ。それ  
 五90 10 ちをコップコップといただいて、こんな  
 五91 3 んさんは、「略。」と、おくざしきにつれ  
 五91 8 たので、『略。』とたずねると、『略』  
 五91 8 ねると、『略。』というのだよ。それで  
 五93 6 つかから、「略。」といつて、手おけをさ  
 五94 2 んちゃんが、友だちと、山へわらびをとり  
 五95 4 うさんが、「略。」とおっしゃって、たま  
 五96 3 んとうは、まひわというのですが、ふつ  
 五96 3 うは、ひわ、ひわといつています。いま  
 五96 5 りました。「略。」と、となりのおじさん  
 五98 1 のなかまの鳴き声だと思ひました。そうし  
 五98 9 いって、はなそうと思つていいますので、  
 五98 10 とでした。バタバタと音がしましたので、  
 五99 1 んで、ひわをとろうとしていました。「略」  
 五99 2 いました。「略。」というと、ねこは、お

五100 2 かかれた羽がぶらりとなつて、半分しかひ  
 五100 7 。ひわは、「略。」と、人なつっこい声で  
 五100 11 、ひわは、「略。」と、へんな声でさえず  
 五101 6 るこんで、「略。」と、早く、おそく、高  
 五102 4 ヤー、ジャージャーと、音をたてて流れて  
 五102 8 ねをして、「略。」と、すずしい声で鳴き  
 五102 11 しますと「略。」と、ひわもまねをし  
 五103 4 、ひわが、「略。」と鳴いてみせました。  
 五103 7 すずめは、「略。」と鳴きました。ひわが  
 五103 10 。ひわが、「略。」と、さわがしく鳴いて  
 五104 4 、ひわが、「略。」と鳴きました。すると  
 五104 6 ささいは、「略。」と鳴いて、木のかげに  
 五104 10 つかきて、「略。」と、いい声で鳴いて、  
 五105 1 しまいに、「略。」と、本をよむようなひ  
 五106 5 をみると、「略。」と、せきこむように、  
 五106 10 のひわが、「略。」といいました。「略」  
 五107 7 を、つぎからつぎへときかせました。そこ  
 五109 1 こまつた、こまつたといっていました。し  
 五109 5 、すぐに、「略。」と、まねをしました。  
 六4 5 うな物が、ごたごたと耳にはいり、目には  
 六5 9 んでいる。カチカチと氣ぜわしいのはおき  
 六5 11 、カッターカッターとおうようなのはし  
 六6 2 具や時計をあこれとみくらべて、あはは  
 六6 4 かれるのだらうなどと考へていうちに、  
 六6 6 およんだ。「なんという小さい、なさけ  
 六7 1 ない。ああ、なんというなさけない身の  
 六7 3 」。ふいにバタバタと足音がして、小さな  
 六7 9 上のものをあれこれといじりはじめた。女  
 六8 3 みつけて、「略。」というと、男の子はゆ  
 六8 3 きでそれをつまもうとしたが、あまり小さ  
 六8 4 た。やとつまんだと思うと、すぐにおと  
 六8 9 屋さんは、「略。」といいながら、しごと

六9 6 しかった。「略。」と喜んだが、「略。」  
 六9 7 喜んだが、「略。」と、それがまた心配に  
 六9 10 。ねじは、「略。」とさげびたくてたまら  
 六10 9 、思わず「略。」とさげんだ。時計屋さ  
 六11 5 じまわしでしかりととめた。りゅうずを  
 六11 7 かいそうにカチカチと音をたてはじめた。  
 六11 9 ることができたのだと思うと、うれしくて  
 六12 8 「略。」「略。」といつてわたした。ね  
 六12 11 。ねじは、「略。」と、心からまんぞくし  
 六13 6 つむいて水をのもうとしました。もうすこ  
 六13 8 すべつて、「略。」というまに、川の中に  
 六17 1 くりして、「略。」と、大きな声をたてま  
 六17 5 ませんか。「略。」といつて、大いそぎで  
 六18 10 「上でき。上でき。」と、さもまんぞくそ  
 六19 11 しいときは、二どとありませんね。」し  
 六22 5 り「あ、だれかと思つたら、きりぎり  
 六23 1 で、いつあそぼうというのさ。わるいこ  
 六23 9 たいをドンドンとたたいて、「略。」  
 六24 3 で、いつあそぼうというんだね。楽しむ  
 六24 7 からでかけよう。」といつて、あり、二  
 六24 8 な荷物を、「略。」と、かけ声をかけて持  
 六27 7 うぶたべられるというわけだ。」あり  
 六28 8 一が、戸をトントンとたたきます。あり三  
 六40 5 し。かし「帰るといつたつて、あんな  
 六41 1 のまどに、一つ二つと火がつく。34 ビル  
 六47 2 よんちよんすずめとどこへいく。か  
 六49 7 らさきにほのぼのと、明かるくそまる  
 六51 7 は、雲にはいったかと思うとすぐで、でた  
 六51 7 うとすぐで、でたかと思うとまたすぐはい  
 六52 1 いります。「略。」と、よしおがいいまし  
 六53 1 みえます。「略。」と、みちこがいいまし  
 六53 3 さまが走っているといつたね。みちこさ

六107 3 は、これで大わらいとなった。ほくのまね  
六107 8 いことばとがある、ということに気がつい  
六108 1 とがあるのだらう、と考えてみた。そのわ  
六108 11 からでるかでないかというのを、考えた  
六109 1 これはおもしろいぞとほくは思った。では  
六109 2 思った。では、なんとという音が、はなから  
六109 6 ニ、「ミ」、「ム」、と自分で声をだしてい  
六109 9 「ニ」、「ミ」、「ム」といつてみた。苦しい  
六109 10 であることはたしかとなった。自分ではな  
六109 10 全 つまんで、「ナ」といながら、耳でき  
六109 11 全 と、まるで「ダ」といつているようだ。  
六110 1 うにして、「はな」といつているんだなと  
六110 1 といっているんだなと思うと、きゆうにお  
六110 3 ななかわけはないぞと思った。なんでも  
六110 4 めしに、「なんだ」というかわりに、「ダ  
六110 5 全 りに、「ダンダ」といつてみると、いか  
六110 9 わらわせてみせるぞと思ったが、そのとき  
六111 1 オ、カキクケコ——という五十音の中で、  
六111 1 の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中に  
六111 3 か。ただ一つ「ヌ」という音がぬけている  
六111 6 て声をだして「ヌ」といつてみた。これも  
六111 9 をつまんで、「ヌ」といおうとしたら、じ  
六111 9 で、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦し  
六111 11 すると、ナニヌネノという一ぎょうは、ぜ  
六112 3 方とも、マミムメモという一ぎょうの中に  
六112 3 る。ここで、もしやと思つて、はなをつま  
六112 4 「マ」、「メ」といつてみたら、これ  
六112 11 た。ほくは、五十音というものは、一年生  
六113 6 にか、ほかのぎょうとはちがった性質をも  
六113 9 らわせてやろうなどという氣持は、どこか  
六113 11 つくりさせてやろうと考えたからである。  
六114 6 みんなが、「略。」といつてわらいました



六115 1 たものも、「略」といって感心しました  
 六115 4 そばから、「略」といいました。ただし  
 六115 7 ちゃんは、「略」といってにこにこしま  
 六115 11 ています。「略」と、ただしちゃんが  
 六116 3 りなので、「略」といいますと、た  
 六116 5 は喜んで、「略」と、元氣のいい声で  
 六116 8 わきから、「略」ときました。「略」  
 六116 10 きました。「略」と答えましたが、ほん  
 六117 1 いことはないだろうと思いました。うちへ  
 六117 11 きました。「略」と、いろいろ考えま  
 六118 5 んの顔が、生き生きとうきあがってまし  
 六119 6 に紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ  
 六120 1 でいって、「略」といっておみせしま  
 六120 3 あさんは、「略」と、ほめてくださいま  
 六122 3 まつかさをあげようと、話しあいました。  
 六122 5 一つ一つ、ぼんぼんとおさるさんにな  
 六122 10 みの実が、ころころと落ちていました。う  
 六123 6 ら、カチン、カチンとわっていると、そこ  
 六123 7 そこへちよろちよろと、りすさんがきま  
 六127 7 つぶって、「略」とさげました。四ひ  
 六127 8 とんとこ、とんとこトンネルの中を走  
 六128 2 とんとこ、とんとこさがしにでかけま  
 六128 8 しながら、「略」といって、うまくにげ  
 六128 10 べらせて、ころころと、下の方へころが  
 六129 2 て、またはじめようとしたとき、トンネル  
 六130 11 きさんは、「略」と、大声でわらいまし  
 六131 4 会、今夜、ゆっくりとねむりたかったのさ  
 六132 7 「略」「略」といおうとすると、う  
 六132 7 「略」といおうとすると、うさぎさん  
 六133 5 かさんは、のっそりと立って、山の方をみ  
 六134 2 んたちをつきあげるといいます。「略」  
 六134 9 、あの角をおるなどということはできませ

六134 11 もいいことではないと、うさぎさんたちは  
 六135 3 んたちは、しかさんとならびました。しか  
 六135 5 かさんは、「略」と、元氣のいい声をか  
 六135 11 んのもつともくいとするところです。し  
 六136 7 て、すってんころりところげました。「略」  
 六137 5 会「略」「なんだと、ひとをばかにして  
 六138 8 いきなり、「略」と、われがねのような  
 六140 3 ちは、もうにげようと思ってもにげること  
 六140 5 ん。助けてくださいと、お願いしたところ  
 六141 2 そのとき、「略」という、それこそかみ  
 六141 7 会が、いまたべようとしていたところだ。  
 六143 6 んできて、「略」と、うたいながらい  
 七5 10 た。つぎからつぎへと、子どもたちがやっ  
 七8 7 どき、チュンチュンと鳴く。その声が校庭  
 七9 2 子どものクレヨン画と同じだ。「略」お  
 七11 5 「略」同じ「手」ということばにも、い  
 七11 10 「の「手」も、これと同じつかいかたです  
 七12 1 とか、「なべの手」となると、人の手では  
 七12 2 これは、持つところということになりま  
 七12 3 す。また、「略」というときの「手」は  
 七13 1 、どうして、「手」ということばが、文字  
 七13 8 るのでしょう。それとよくにたつかいかた  
 七13 8 たで、「まいの手」といったり、「略」  
 七13 10 するように、「手」ということばも、さま  
 七15 3 へ。「これは、「腹」ということばを、いろ  
 七21 8 が、弟のはるおくと、ふたりで、本をよ  
 七25 9 会すよ。「母」はつぱと同じ色になったのね  
 七25 9 会どうして、はつぱと同じ色になるのか、  
 七26 3 会と。ねえ、はつぱと同じになるのは、鳥  
 七27 4 会でしらべるようにと、おっしやっただけ  
 七29 5 会だいいこんのはつぱと同じ色にかわって  
 七29 7 会べられないためだと、おかあさんが教え

七29 8 会いるようなものだと思った。ぼくは、学  
 七30 3 会ていたの。まだかと思つた。「母」いま、  
 七34 6 「むりにわりこもうとする男の人もあり、  
 七35 4 だになつてしまふかと、思われるほどで  
 七35 11 あさんに、「略」とうけあつて、さぶろ  
 七36 5 じにつきますようにと、心の中でのつて  
 七36 10 ばさんも、「略」と、心配そうにい  
 七37 4 をかけて、「略」ときいてみました。人  
 七37 8 だれかが、「略」といったので、みんな  
 七38 3 、思わず、「略」と、頭をさげました。  
 七38 6 をかきわけていこうとしました。しかし、  
 七39 1 男の人が、「略」といったかと思うと、  
 七39 1 「略」といったかと思うと、いきなりさ  
 七39 8 「略」「略」と、送ってくれました  
 七39 10 が、三人め、四人めと、高いところをメデ  
 七40 7 に立って、「略」と、私を手まねきして  
 七41 11 た私には、しみじみときかれた。汽車はト  
 七42 10 うの席で、「略」と、大きな声をだした  
 七43 9 会を、あらわしたいとぞんじます。みなさ  
 七44 1 ぼうしは、つぎつぎと人々の手を渡り、お  
 七44 7 。老人は、「略」といって、青年のまえ  
 七44 8 会「たいへん失礼だと思つていますが、これは  
 七45 2 会んなことになろうとは、思つていませ  
 七45 10 きな声で、「略」といって、おじぎをし  
 七46 3 でぐつとひろげたかと思うと、しずかにひ  
 七47 4 きり書きあらわそうとすると、文章が、だ  
 七47 6 しても、それでいいところまでは、  
 七47 8 です。心がはつきりとしていますと、文章  
 七48 1 ドッジボール大会」という文章が、二へん  
 七48 4 よむ人に、はつきりと、そのようすがわか  
 七48 10 に、ひがし村の学校とやった。ぼくのほう  
 七49 3 ンターが、「略」とさわいだ。それで、

七496 には、にし村の学校としあいをした。これ  
 七498 さいごに、町の学校とやることになった。  
 七5010 ま先生が、「略。」と、元気づけてくださ  
 七5011 ださった。「略。」と、用意のふえが鳴っ  
 七513 の先生が、「略。」といわれた。ぼくらの  
 七515 えがまた「略。」と鳴って、しあいがは  
 七5110 、喜んで、「略。」とさげんだ。ぼくは氣  
 七5111 んだんが、「略。」と、大声をたてる。の  
 七521 。やがて、「略。」と、ふえがひびいた。  
 七522 なく、ぼくたちの勝となった。「略。」し  
 七526 ていると、「略。」と鳴った。どちらが勝  
 七526 。どちらが勝ったかと思って、心配してい  
 七529 めは、にし村の学校とやることになった。  
 七535 ま先生が、「略。」と、はげましてくださ  
 七543 のたびに、「略。」という声がおこった。  
 七553 しだすことができるとはかぎりません。そ  
 七557 ます。心にはつきりとえがかれた一つの  
 七592 きあげられたことばということはできませ  
 七597 のところ。ボタンと音がして、まりが、  
 七608 またしても、ボタンと音がする。さきだけ  
 七612 とし竹が、ざわざわと、動いている。うす  
 七664 うかんでいる。青々とはれて、すすきすこ  
 七685 をきりつめていくのと同じです。やりかた  
 七687 たことを、はつきりと写しだすということ  
 七687 はつきりと写しだすということにほかなり  
 七692 月明かり たつぷりと、春は、小さな川に  
 七704 音もなく、のっそりとでている。もやが深  
 七712 か雨は、ぐつしよりとぬらした。うまもう  
 七734 でもさいているのかと思つたら、まあ、子  
 七773 —それから—といつてから、ちよつ  
 七811 うから、「略。」と、たずねるのでござ  
 七832 きたのではないかと、思つたのです。

七833 らくだがかた目だということは、どうし  
 七837 ど。して、びつこということは。旅人  
 七8310 え菌のぬけているということとは、なぜわ  
 七843 いるにちがいないと、考えました。裁  
 七847 です。それが麦だということが、なぜわ  
 七859 がいはれたことと思う。早くいつてら  
 七92 た。そうじをしように思つて、首のところ  
 七93 へいれたら、キューと、高く鳴きました。  
 七95 ると、毛がふわふわととびます。寒くなっ  
 七96 ようぶにそでたたいと思います。11月22  
 七97 ぎが、ちちをのうとして、親うさぎのち  
 八43 、私のうちに、ピオという、うちじゅうの  
 八44 の子どもだらうなどと、早がつてんしては  
 八48 ぼんたくさんいる鳥といわれるほおじろで  
 八49 れるようになったかといえは……。秋のは  
 八54 るので、なんだらうとのぞいてみると、ひ  
 八56 ていました。小鳥屋というより、ほおじろ  
 八56 うより、ほおじろ屋といったほうがいいか  
 八65 り、あくる日、ピオという名がつけられま  
 八610 とつたり、「略。」とよんでひざをたたく  
 八74 をすると、「略。」としかつたり、それで  
 八711 きだして、「略。」とほめたり、なでてや  
 八82 やつたり、「略。」と、きいてみたりする  
 八83 るのです。「略。」というのは、同じ日本  
 八84 の鳴きかたがちがうと、本でよんだため  
 八85 っぴつつけいじょう」と歌つたり、「ツンツ  
 八85 ツンつっころぼし」とさえずつたり。そ  
 八88 かたのちがいだらうと思う人もありましょ  
 八810 いのふかい鳥だらうと、それを知つてから  
 八94 安心なところはないというように。庭さ  
 八96 と、そのあわてかたといつたらありません  
 八99 っこんだりします。といえは、いかにもお

八101 か、向かつていこうとさえるのです。う  
 八115 たのです。「略。」と、女の子ばかりでな  
 八129 て、「ピオのはか」と書いた、小さなせき  
 八133 にあわれに死なせたというなさけなさ、  
 八138 だの、「略。」だのと鳴いているほおじろ  
 八139 のすがたがありありとうかんできて、思わ  
 八1310 一わの小鳥のことをと、わらわないくだ  
 八175 かつてちちをのむのと同じように、しぜん  
 八198 なることができないういいます。なんと  
 八199 いといいます。なんとという氣長なこと  
 八207 たとで、いまが夏だということや、よい天  
 八235 がておきなかつたかと思うと、からだはす  
 八242 みの羽は、ぶるぶるとふるえて、色も、も  
 八243 もようも、はつきりとしてきます。黒いと  
 八246 らぜみが「略。」と鳴きはじめてました。  
 八247 になつて、そろそろと歩きだしました。は  
 八248 すつとびたつたかと思うと、その鳴いて  
 八252 はみえずせみの声 と、むかしの人がうた  
 八254 、あたりもひっそりとしずかになります。  
 八295 ました。そのすがたといい、その目とい  
 八295 がたといい、その目といい、ふえの音とい  
 八296 目といい、ふえの音といい、申しぶんのな  
 八297 あなたの名はなんといひますか。天帝  
 八299 私は、けんぎゅうというものです。「へ  
 八2910 」。けんぎゅうというのですか。「へ  
 八302 でをためしてみようと考へて、黒うしのし  
 八308 天の川へ落ちこもうとしましたが、そのせ  
 八310 首をかるくポンポンとたたきました。うし  
 八326 だけ、けんぎゅうとあうことをゆるして  
 八328 になつて、「略。」とおつしやいました。  
 八332 川は、なんなん万という星がかさなりあ  
 八335 一つ一つがはつきりとみえないのですから



九一九 のランネルスドルフというところから、は  
九一九 事をしました。それと同時に、協会ではす  
九二〇 しました。「略。」という運動に全國民が  
九二一 られました。いく千というつばめたちは、  
九二三 した。また、飛行機という文明の利器が、  
九二三 しごとにつかわれたということを、たいへ  
九二三 んありがたいことだといわずにはいられま  
九二四 同じ家に帰ってくるといわれています。つ  
九二四 じ巢へもどってくるというのです。近年に  
九二四 ん。日本に春がくると思うと、もう矢もた  
九二五 、きっと、「略。」といって喜びます。わ  
九二五 自分の家へいそいそと帰ってきたつばめを  
九二九 文 道をきちきちととぶばったかな 下  
九三二 きてから、おとなといっしよに畑にでた  
九三四 先生やみなさんといっしよに、この湖  
九三四 へつりにいけたらと、いつも思っていま  
九三四 でもおみせしたいと思っています。せん  
九三四 かないといけないといわれて、ほねをお  
九三八 ろします。ポキンという音がして、ガサ  
九三八 がして、ガサガサと落ちてくると、うれ  
九四三 かきが、ころころと二つ三つ落ちている  
九四四 の葉を「略。」といつてひろい集めて  
九四四 ってお話したいと思いましたが、いそ  
九四五 意を向けるようにといわれました。ぼく  
九四五 しんけんにやろうと思っています。兄は  
九四六 遊んでいるだろうと思います。先生、み  
九四六 や、そのめんどうだという裁判のようすな  
九四八 くりの木はバラバラと実を落しました。い  
九四八 みあげて、「略。」とききました。くりの  
九四九 になって、「略。」と答えました。「略」  
九五〇 てまた実をバラバラと落しました。いちろ  
九五〇 になって、ゴウゴウと谷に落ちていました

九五九 「ドッテコドッテコと、へんな樂隊をやつ  
 九六〇 かがめて、「略。」とききました。すると  
 九六一 きのこは、「略。」と答えました。いちろ  
 九六二 、ドッテコドッテコと、へんな樂隊をつづ  
 九六三 すが、ぴょんぴょんととんでいました。い  
 九六四 びとめて、「略。」とたずねました。する  
 九六五 さがって、「略。」といいました。すると  
 九六六 「略。」と、男は、下を向いて  
 九六七 になって、「略。」といいました。男は、  
 九六八 れながら、「略。」とききました。いちろ  
 九六九 ました。「四年生というのは、小学校の  
 九七〇 こらえて、「略。」とたずねますと、男は  
 九七一 になって、「略。」といいました。そのと  
 九七二 ちろろは、おかしいと思つてふり返つてみ  
 九七三 てとがつているな、と思ひながらみている  
 九七四 えをうかがいたいと思ひましたのです。  
 九七五 どんぐりで、その数といつたら、三百でも  
 九七六 どでした。ワアワアとみんななにかいつて  
 九七七 して、ザックザックとやまねこのまえのと  
 九七八 ラン、ガランガランとふりました。すずの  
 九七九 ラン、ガランガランとひびき、こがね色の  
 九八〇 チツ、ヒュウパチツと鳴りました。「略」  
 九八一 、だめです。なんといつたつて、頭のと  
 九八二 しい、ここをなんと心える。しずまれ、  
 九八三 しい、ここをなんと心える。しずまれ、  
 九八四 むちをヒュウパチツと鳴らしましたので、  
 九八五 、だめです。なんといつたつて、頭のと  
 九八六 しい。ここをなんと心える。しずまれ、  
 九八七 むちをヒュウパチツと鳴らしました。やま  
 九八八 しい。ここをなんと心える。しずまれ、  
 九八九 むちをヒュウパチツと鳴らし、どんぐりは  
 九九〇 てないのがえらいとね。」やまねこは、  
 九九一 まねこは、なるほどというようにうなずい

九九二 チツ、ヒュウパチツと鳴りました。やま  
 九九三 まねこは、「略。」といいました。「略」  
 九九四 ねたいちろろどのと書いて、こちらを裁  
 九九五 、こちらを裁判所としますが、ようござ  
 九九六 「略。」と、いいますと、やまね  
 九九七 、明日出頭すべし、と書いていいし、しほら  
 九九八 いかにもさんねんだというふうには、しほら  
 九九九 なくてまあよかったというふうには、口早に  
 一〇〇〇 と、「やまねこ拜」というのがきは、もう  
 一〇〇一 やつぱり、「略。」と書いてもいいといえ  
 一〇〇二 、「と書いてもいいといえよかったですと、  
 一〇〇三 いといえよかったですと、いちろろはときど  
 一〇〇四 、待つていようにおつしやつたので、  
 一〇〇五 かみさんが、店の人とふたりで、せつせと  
 一〇〇六 ています。むかしといつても大むかしの  
 一〇〇七 白い物がちらちらとみえるでしょう。あ  
 一〇〇八 こして貝づかに着くというところで、先生  
 一〇〇九 くして、その主人といつしよにでておい  
 一〇一〇 わらかで、ずぶずぶと、ステッキのたけい  
 一〇一一 しの人は、貝がらといつしよに、いらな  
 一〇一二 らないと、だめだと思つてやめてしま  
 一〇一三 いていくのがいいと思ひます。「略」  
 一〇一四 のところにあるのと同じだね。「略」  
 一〇一五 しますと、「略。」と、しずかにおつし  
 一〇一六 はじょうもん土器といつて、貝づかから  
 一〇一七 ことを知つてくると思ひます。みなさん  
 一〇一八 はじょうもん土器という種類で、こんな  
 一〇一九 とものかげらがると思ふような物ですが  
 一〇二〇 してしらべ、へんだと思ふ物は、みなかご  
 一〇二一 ました。ピリピリツとふえが鳴りました。  
 一〇二二 やまだ「いやだ。」と、たかぎをにらみつ  
 一〇二三 くだつていやだ。」と、つかまれている手

一〇二四 る手をふりはなそうとする。二「まだやる  
 一〇二五 ね、やまだくん。」と、つれていこうとす  
 一〇二六 」と、つれていこうとする。やまだ「はな  
 一〇二七 の手からぬけだそうともがく。みんなでそ  
 一〇二八 がら、「もうきみとは遊ばないからな。  
 一〇二九 だれがきみなんかと遊ぶもんか——」五  
 一〇三〇 ういいつたら——と、やまだのせなかを  
 一〇三一 きな声で、「略。」と数えながら、大また  
 一〇三二 「一、二、三——」と数えながら舞台はし  
 一〇三三 ぎ「あつ、それだ。」と喜ぶが、やまだの顔  
 一〇三四 「やまだ「なんだ。」と立ちどまる。たかぎ  
 一〇三五 たんじやないか。」と、ボタンをとる。た  
 一〇三六 糸にむすびつけようとする。たかぎ、それ  
 一〇三七 。やまだ、みせまいとしてからだをねじつ  
 一〇三八 タンをみたまえ。」と胸をみせる。たかぎ  
 一〇三九 いたのはだれた。」と、首をさする。やま  
 一〇四〇 つなぐつてやる。」と、げんこをかためて  
 一〇四一 、ぼくも負けまいと思つたんだ。じまん  
 一〇四二 いちばんりつぱだと思ふんだね。なん  
 一〇四三 集まった。「略。」と、のだ先生が先頭に  
 一〇四四 だ先生が、「略。」と、大きな声をかけら  
 一〇四五 の方から、「略。」とさげられた。その声  
 一〇四六 だれかが、「略。」と、大声にさげんだ。  
 一〇四七 であつた。「略。」と、のだ先生がつえで  
 一〇四八 。「略。」と、みんながいうと、  
 一〇四九 がいうと、「略。」と、いしい先生がうし  
 一〇五〇 、ぼくが、「略。」といつた。すると、の  
 一〇五一 だ先生が、「略。」といわれた。ぼくたち  
 一〇五二 つになつて、ビュウとうなる。まるで、空  
 一〇五三 とも、まだ上へ上へと登つていかれたが、  
 一〇五四 をあげて、「略。」というあいずをされた  
 一〇五五 られると、もうもうと雪けむりが立つ。雪

九一四 している。「略。」と、だれかがさげんだ  
 九一五 れるすがたは、なんとという勇ましさであろ  
 九一六 んでいく。「略。」と、だれかがさげんだ  
 九一七 さげんだ。「略。」と、だれかがさげんだ  
 九一八 で、先生は地上の人となられた。お晝にな  
 九一九 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二一 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二二 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二三 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二四 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二五 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二六 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二七 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二八 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九二九 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三一 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三二 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三三 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三四 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三五 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三六 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三七 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三八 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九三九 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四一 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四二 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四三 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四四 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四五 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四六 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四七 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四八 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九四九 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五一 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五二 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五三 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五四 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五五 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五六 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五七 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五八 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九五九 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六一 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六二 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六三 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六四 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六五 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六六 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六七 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六八 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九六九 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七一 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七二 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七三 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七四 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七五 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七六 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七七 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七八 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九七九 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八一 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八二 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八三 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八四 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八五 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八六 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八七 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八八 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九八九 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九一 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九二 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九三 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九四 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九五 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九六 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九七 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九八 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 九九九 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊  
 一〇〇〇 文 中 ちろちろと岩つたう水にはい遊

九一四 口をあいてたべようとしたとき、ちようち  
 九一五 うちよは、「略。」と頼みました。こう頼  
 九一六 ろへいつてみたいと思いませんか。」「  
 九一七 ところへいきたいと思います。」「略。  
 九一八 は、このおかあさんというこばを、長い  
 九一九 うちに、「略。」といわれて、きゆうに  
 九二〇 しをたべてもいいと思っているんだけど  
 九二一 もう、命はほしいとは思いません。」「  
 九二二 白な羽をひろげたかと思うと、ひらりひら  
 九二三 うと、ひらりひらりと舞いあがりました。  
 九二四 りながら、「略。」と、ひとりごとをいい  
 九二五 た、あみをかけようと考えました。くもは  
 九二六 くもはのそのそと歩きました。けれど  
 九二七 もは、うつらうつらとねむくなつてしまし  
 九二八 しながら、しげしげとみつめました。「略  
 九二九 略。」「おかあさんときいて、くもは、手  
 九三〇 して、とりすがろうとしました。そのひょ  
 九三一 めました。「略。」と、くもは、いまみた  
 九三二 って、ポタリポタリと落ちてきました。く  
 九三三 ーくもは、なんといつて返事をしてい  
 九三四 の光にちりちりちりと光りながら落ちてく  
 九三五 ふいてきました。風と思つたのは、そうで  
 九三六 、べつににげだそうとはしませんでした。  
 九三七 東の空が、ほんのりとしらみかけてしまし  
 九三八 いままで、みにくいと思つていた自分のか  
 九三九 だも、もうみにくいとは思えなくなりました  
 九四〇 。どこからきこえるともないが、どこから  
 九四一 どうさんは、子どもと遊ぶことがすきです  
 九四二 びとめて、「略。」といいながら、おとう  
 九四三 ことができるものかと思いました。その少  
 九四四 ようど、プラタナスという木の葉が黄色く  
 九四五 の町には、ボンナフという石の橋があつて

一〇〇三 があつて、イエヌという川が、その下を  
 一〇〇四 は、センチエヌというお寺の高いとう  
 一〇〇五 りました。「略。」と、おとうさんが頼み  
 一〇〇六 りました。「略。」と、ひとりの少女が、  
 一〇〇七 「おいで、わたしといっしょにお話をし  
 一〇〇八 ようどあなたたちと同じ年ぐらいな子ど  
 一〇〇九 、歌を歌つてほしいと頼みました。方言で  
 一〇一〇 いなかはつまらないと、わるくいう旅人も  
 一〇一一 からです。ビエヌという川の岸には、手  
 一〇一二 してから、「略。」とたずねました。この  
 一〇一三 「略。」と、おとうさんが、力  
 一〇一四 たらしく、「略。」と、日本の海の美しさ  
 一〇一五 ことば「略。」と、太郎がそばへきて  
 一〇一六 んなことばを話すとたずねるものですか  
 一〇一七 ですから、「略。」と、おとうさんがいっ  
 一〇一八 せました。「略。」と、また太郎がたずね  
 一〇一九 てみて、つくづく、自分の國のことば  
 一〇二〇 9 暗室。「略。」という先生の声とも  
 一〇二一 子どもの、よちよちと歩いてくる。母親が  
 一〇二二 の友だちは、その兄といっしょに種まきを  
 一〇二三 女の子が、「略。」と、「くく」の文  
 一〇二四 とりの友だちは、母といっしょに汽車に乗  
 一〇二五 22 坂道を、ゆつくりとした足どりで、家に  
 一〇二六 呼吸。23 「略。」と呼ぶ声。その声をき  
 一〇二七 をきいて、にっこりとわらう顔。「略。」  
 一〇二八 へ。また、「略。」とさけぶ。「略。」工  
 一〇二九 に受けた、はればれとした父と子。 四  
 一〇三〇 とつづけていきたいと思います。わざわざ  
 一〇三一 まえを、つくりたいと思います。庭の木に  
 一〇三二 、たんねんにみようといます。また、く  
 一〇三三 、しらべておきたいと思います。こんな動

十286 、しらべていきたいと思ひます。観察すれ  
 十292 ものがこうなつたかというのを、考へて  
 十292 、考へてしらべたいと思ひます。たと  
 十295 、よく考へてみたいと思ひます。また、一  
 十301 れをさがしてみようと思ひます。もし、弟  
 十303 考へていつてみようと思ひます。このよう  
 十305 心がけを、もちたいと思ひます。(三)  
 十307 ) ぼくは、みんなといっしょにはたらし  
 十307 しょにはたらしきたいと思ひます。家では、  
 十308 り、兄や姉の手助けとなりたと思ひます  
 十309 の手助けとなりたと思ひます。父や母の  
 十311 けないうようにしたいと思ひます。ぼくがい  
 十311 校では、組の友だちとなかよくして、助け  
 十315 助けあつていきたいと思ひます。かげで人  
 十316 おに学んでいきたいと思ひます。自分をえ  
 十318 ぐらにどうでもいいというやうな、無責任  
 十324 分があつての全体、というつながりをわす  
 十326 の勇氣を、もちたいと思ひます。五 発  
 十336 て、父は、「略」とさとしたが、佐吉の  
 十331 ある。人間の衣食住というものは、みんな  
 十344 なければならぬ、というのである。佐吉  
 十347 から左、左から右へといききするのである  
 十354 するとともに、なんともいえないかた身の  
 十3512 考へぬき、これならという一台の機械を作  
 十3611 「略」。「略」といつてほめたたえた  
 十385 れる、ふしぎな宝石とされてきたが、しら  
 十388 珠寶がまきつき、年とともに大きくなつて  
 十389 くなつて、天然眞珠となることがわかつた  
 十399 とは、そうやすやすと、ひとつになるもの  
 十4010 れても、その助力者となつてくれたのは、  
 十418 り、かれを氣ちがいとよび、やましとさえ  
 十418 がいとよび、やましとさえのしるやうに

十419 もこのわる口のたてとなつて、幸吉をかば  
 十4411 ていた。第二、第三と母貝を開いていくと  
 十454 セイロン島をはじめとして、オーストラリ  
 十4510 、まがいものであるといつた。しかし、世  
 十4511 によつて、天然眞珠とまかつく同じである  
 十462 りかたを、こまごまと話した。エジソンは  
 十4610 なたが自然をあいてとして、眞珠を世界の  
 十4612 なたの光明を太陽とするならば、作製に  
 十478 そこへつれていこうと思つたのです。とこ  
 十481 かつたのではないかと思ひました。これは  
 十482 これは、足がおそいというためばかりでな  
 十505 ワンワンチャン」といつたのは、そのた  
 十506 、まえ足をあげたかと思ふと、その足をな  
 十507 ソノナメテルワ」といつて、私に知らせ  
 十5010 せなかに「略」といつたのです。そのと  
 十5011 とをして、「フツ」と息をはきました。妹  
 十512 ながら、「フツ」と、ひとりごとをいい  
 十514 ら、「ハイ」「ハイ」と、なんどもくり返し  
 十516 そのパンをたべようと思へん。「イラナ  
 十517 ん。「イラナイ」といつて、いぬにたず  
 十5110 「オハナシシテ」といつて、心らしいです  
 十522 「ワンワンチャン」と、こちらを向かせよ  
 十522 こちらを向かせようとしたり、「モツト」  
 十523 ここで遊んでいたいと、私にねだつたり、  
 十524 のくせ、でかけようといひだしたりしてい  
 十525 た。五六歩いったかと思ふと、よそのおば  
 十529 へ、はいつていこうと思ひます。そのとき、  
 十5210 ハイテクノヨ」と、おとなびたことを  
 十532 チャンネルワ」といつていけると、いぬ  
 十534 ヤンタツシタ」といつて喜びました。  
 十534 「オスワリシタ」と、いちいち、いぬの  
 十537 はずして、手に持つといひます。かたにか

十537 いから手に持つのだと、ませたことをいつ  
 十539 づつ、のそのそりと、どこかへいくとこ  
 十542 が一びき、すいすいといひてきたかと思ふ  
 十542 すいといひてきたかと思ふと、また、すぐ  
 十546 自分で、「イコウ」ときめてあるきかける  
 十5412 すがたが、ありありとうかんであります。七  
 十552 になるのではないかと、ふと、こんなこと  
 十555 は、作文がすらすらと書けなくなりました  
 十557 えたりしていることは、ちがつたものに  
 十559 思ふことがどんどんと書けていたまへのこ  
 十561 けもなく、すらすらと書いていることでし  
 十562 りもなく、ぐんぐんと書きつけているその  
 十565 にふみだしていいと思ひます。妹の作  
 十572 男の子は、「略」といつて喜びました。  
 十592 見 私に、「略」といつて、学校から帰  
 十595 あさんが、「略」とおつちやつた。ごは  
 十603 あさんに、「略」といつたら、おかあさ  
 十606 そうして、「略」とおつちやつた。私も  
 十608 た。私も、「略」といつて、月の方へ手  
 十6010 ちゃんは、「略」といつた。たけのこ  
 十622 たから、なんだろうと思つて、二階の窓か  
 十625 ました。もう、親竹と同じくらいに高くな  
 十628 て みなさんは、能というものをみたこと  
 十633 きや、ほかのしはいとも、いろいろちがう  
 十6310 ん、わかい女のめんと、それぞれの人物に  
 十6311 、能は、めんの藝術ともいわれ、ヨーロッパ  
 十6312 の、同じめんの藝術とくらべて、研究され  
 十642 や、建築にも、外國とはおもむきのちがつ  
 十644 たところのあるものとなつています。みな  
 十646 ことを、喜ぶだらうと思ひます。能といつ  
 十647 ろうと思ひます。能といっしょに、狂言と  
 十647 といっしょに、狂言といひものが演じられ

十 64 8 、美しさを現わそうとするのところが、  
 十 64 9 を現わそうとするのところが、狂言は、  
 十 64 10 など、できているといつてもよく、それ  
 十 65 6 もおそれず、そうかといつて、なにをして  
 十 66 4 かじや、次郎かじやというふたりの下男に  
 十 66 4 の下男に、「略。」といいつけ、それから  
 十 66 6 には、『ぶす』といつて、おそろしい  
 十 66 8 も、たちまち死ぬといわれるくらいだ。  
 十 67 5 そつといつてみようといふことになりまし  
 十 68 11 になると、「略。」と、ふるえ声でいいな  
 十 69 5 にかはいつていっているとみて、重たい。「  
 十 71 6 て、うまい、うまいとなめていようちに、  
 十 72 2 きはらい、「略。」といいながら立ちあが  
 十 72 8 かななく、ずつしりと重い、大きな湯飲み  
 十 73 6 が負けて、ドサリとこのまにたおれた  
 十 73 11 ておわびをしようと考え、それには、大  
 十 73 11 それに、大どくとうかがいました、お  
 十 73 12 が、いちばん早道と思ったのです。が、  
 十 74 1 いました。「略。」と、ここまで話したと  
 十 74 2 なって、次郎かじやといつしよに歌いだし  
 十 74 12 おこつて、「略。」と追いかけてました。  
 十 11 5 ールをぐいぐいとこいでみたいな。「  
 十 11 5 12 がぎゅうぎゅうとしなつて、船は、も  
 十 11 6 9 たりひき返そうとしたりするときには  
 十 11 8 4 りっぱなものだと思ふ。「略。」「へ  
 十 11 9 3 だじょうぶだと思ふんだ。「略。」  
 十 11 9 4 て、よしやろうといふことができた  
 十 11 9 5 なか、よしきたとはいえない。「略」  
 十 11 10 「略。」「さあというときに、ひとり  
 十 11 10 12 て、同じことだと思ふ。いいコックス  
 十 11 11 4 「略。」「略。」と、ふえが鳴つて、ふ  
 十 11 16 8 には、どんな困難とも戦う、そのうで。

十 11 19 1 奈川縣のかやま村といつて、さかわ川に  
 十 11 19 3 村に、ぎんえもんという人がいました。  
 十 11 19 5 どもに、りえもんという人がありました  
 十 11 20 1 うにしたいものだ、ほねをおつていま  
 十 11 21 9 た。しかし、なんといつても子どもです  
 十 11 21 10 人たちにすまないと思ひました。そこで  
 十 11 23 7 。母親は、金次郎と相談して、すえの子  
 十 11 24 1 日したらなとおもうけれど。「略」  
 十 11 24 10 次郎が、「略。」というのに、その晩の  
 十 11 25 3 うして、「略。」といひあいました。そ  
 十 11 25 12 。それは「大学」といって、かん文で書  
 十 11 26 7 なくてはならないと書いてありました。  
 十 11 27 7 。中には、正月だといふので、そのうえ  
 十 11 27 10 わずかな金がないといふことはいえませ  
 十 11 27 10 いえません。母親と相談して、戸をしめ  
 十 11 28 9 夜おそくこつそりと勉強を続けました。  
 十 11 28 10 を自分でとりたいたいと思ひ、となりのおば  
 十 11 32 1 ぶ。しとしとと降る春雨に、やぶ  
 十 11 32 3 しずくすおうとでむしが、つの  
 十 11 32 8 すうい、すういととびまわる。げん  
 十 11 34 6 のうの畑は水田となつて、晩にはか  
 十 11 35 8 いの音。たきと落ちくる大ゆうだち  
 十 11 36 2 水たつぷりと、いねのかぶばり  
 十 11 36 7 歌声あちこちと、こよい楽しいほ  
 十 11 37 9 く。あぜに火とさくまんじゅしゃげ  
 十 11 38 6 どりもいそいそと。かきねににおう  
 十 11 38 8 い、しとしとと降る秋雨に、ちれ  
 十 11 44 3 す。それをみよう、父兄の人たちは、  
 十 11 45 2 たとき、「略。」と、大声でいひました  
 十 11 45 11 らいのことだからといつて、ごまかさな  
 十 11 46 2 まえで、「略。」とさげんだ弟よ。まち  
 十 11 46 10 、いつもぼつかりといひていたえぞ富士

十 11 47 1 ことを、いろいろと思ひださせる。ぼく  
 十 11 47 5 んに、おかあさんとふたりで立つていた  
 十 11 48 10 また、おかあさんといつしよに北海道へ  
 十 11 49 3 くは、おとうさんと同じように、ちちう  
 十 11 49 11 ぐらは、北海道だといひます。さつぽろ  
 十 11 50 3 も北海道へいこうと思ふ。北海道へじや  
 十 11 52 6 つの上にぼたぼたと落ちてきたりした。  
 十 11 52 12 さんは、「略。」と、声をかけた。「略」  
 十 11 53 2 かけた。「略。」とさげんだ。大きな声  
 十 11 53 8 さんは、「略。」といひた。そのことば  
 十 11 54 9 、私は、「略。」といひた、しやしろう  
 十 11 58 8 太郎は、「略。」と、早口にすらすらと  
 十 11 58 8 、早口にすらすらといえるようになった  
 十 11 59 2 なつて、「略。」といひと、父はにこに  
 十 11 59 4 ながら、「略。」と答えた。「略。」「へ  
 十 11 59 5 答えた。「なんといひことばですか。  
 十 11 59 6 略。」「はい」といふことばと、「い  
 十 11 59 6 と、「いいえ」といふことばだ。「へ  
 十 11 59 9 だちの正男と一雄と三人づれで、学校か  
 十 11 59 12 あつた。「略。」と、正男がいうと、一  
 十 11 59 12 成した。その近道といひのは、田のあぜ  
 十 11 60 6 ら父に、「略。」とたたくとめられてい  
 十 11 61 5 えからあぶないといひておいた、あの  
 十 11 61 7 父は、「略。」とたずねた。しかし、  
 十 11 61 11 とき、「略。」と、きつぱりことわら  
 十 11 62 1 父は、「略。」とせめた。「略。」「へ  
 十 11 62 2 ると、よわ虫だといひてわらうのです  
 十 11 62 4 がこわいものかと、自分からさきにな  
 十 11 62 5 とに「いいえ」といひきるには、ほん  
 十 11 62 8 ど、「いいえ」といふことばはいいに  
 十 11 62 9 なおに「はい」といひなかつたのだね  
 十 11 63 5 みれにぐつしよとぬれて、わきの下に



十一 63 10 した。少年の父親というのは、去年、し  
 十一 65 2 つれていくようにしていました。「略」  
 十一 65 3 さんの名はなんというの。」と、看護  
 十一 65 4 ました。「略」と、看護人がききまし  
 十一 65 5 をきはしまいかと、おそろしさにふる  
 十一 65 9 帰ってきた——と、看護人がききまし  
 十一 65 11 ました。「略」と、少年は、ますます  
 十一 66 3 五日ほどまえたと思います。」看護人  
 十一 66 7 ように、「略」といいました。「略」  
 十一 66 9 ました。「略」と、少年は心配そうに  
 十一 66 12 、ただ、「略」といっただけでした。  
 十一 67 7 ました。「略」と、看護人は、くり返  
 十一 68 10 あけて、「略」といいました。(二)  
 十一 69 8 病人はしげしげと少年をみつめて、い  
 十一 69 12 れが父親であろうとは、とても思われま  
 十一 70 3 のほかには、どこいつて父親らしいと  
 十一 70 6 でした。「略」と、少年はいいました  
 十一 70 9 せんか。なんとかひとこといつてく  
 十一 71 8 ました。「略」と、少年は考えました  
 十一 71 11 のことをいろいろと思い返していました  
 十一 72 3 —それからそれへと、いろいろ考えまし  
 十一 72 7 でした。「略」と、少年は口早にきき  
 十一 72 9 ました。「略」と、看護婦はやさしく  
 十一 74 4 ました。「略」と、看護婦がいいまし  
 十一 74 12 ました。「略」と、看護婦は答えまし  
 十一 75 6 「略」と、「略」と、医者、もう一ど  
 十一 76 2 。が、ほかになにといつてすることもで  
 十一 77 5 て、なにかいおうとでもするうちに、す  
 十一 77 7 た。ちよいちよいとねむったあとでは、  
 十一 77 9 なったように思うといいました。夕がた  
 十一 78 1 かわかるであらうと思うと、いろいろの  
 十一 78 3 —それからそれへと長々と話しかけて、

十一 78 4 からそれへと長々と話しかけて、そうし  
 十一 78 5 っかりするようにと病人をはげまし  
 十一 78 6 えわからなかったとしても、病人がなん  
 十一 78 7 あった、しみじみとしたそのちようにし  
 十一 78 10 すこしよくなるかと思えば、思いがけな  
 十一 79 10 、まったくだめだといわんばかりに頭を  
 十一 79 11 、いすにぐったりと身を落して、すすり  
 十一 80 6 にかものをいおうとでもしているように  
 十一 80 7 ちびるを動かそうとしました。それが、  
 十一 80 8 いかにもはつきりとしたので、少年  
 十一 80 12 かねで、「略」といつて力づけました  
 十一 81 5 やがて、「略」という声はきこえまし  
 十一 83 1 でした。「略」と、父親は、じっと病  
 十一 84 3 のようすを話そうとしましたが、「略」  
 十一 84 5 したが、「略」とだけ、やつといいま  
 十一 84 10 ました。「略」と、父親はあきれてう  
 十一 86 3 ました。「略」と、父親はたずねまし  
 十一 86 4 した。「あなたと同じように、いなか  
 十一 86 5 ました。「略」と、看護人が答えまし  
 十一 86 7 なたが入院したと同じ日に、入院した  
 十一 86 10 なたのむすこさんと同じ年ぐらいのむす  
 十一 86 11 自分のむすこだと思ひこんでいるよう  
 十一 87 4 「略」と、「略」と、また、看護人が小  
 十一 88 1 う強さとは、まえとすこしもかわりませ  
 十一 88 4 っかりするようにとほげましたりまし  
 十一 88 9 医者は、「略」といいました。そこで  
 十一 88 11 病人はしげしげと少年をみつめながら  
 十一 89 7 ました。「略」と、医者はいいました  
 十一 90 1 ました。「略」と、少年はさげびまし  
 十一 90 6 ました。「略」と、少年はさげびまし  
 十一 90 8 ました。「略」と、医者はいいました  
 十一 91 9 「略」と、「略」と、少年はいつて、一

十一 92 10 向いて、「略」といつて、名をなんと  
 十一 92 10 いて、名をなんと呼ぼうかと思ってい  
 十一 92 10 をなんと呼ぼうかと思っているうち、五  
 十一 92 11 いた名が、しげんと口のにぼってきた  
 十一 94 10 大洋を西へ西へと航海して陸地にであ  
 十一 95 2 の男が、「略」といつてあざわらいま  
 十一 95 7 をとり、「略」といいました。人々は  
 十一 95 8 をいいたのかと思ひながらやつてみ  
 十一 97 2 たので、「略」とたのみました。少女  
 十一 97 12 になきぞ悲しき」という古歌に、少女の  
 十一 98 7 ました。「略」といつて、母のそばへ  
 十一 99 4 ろいて、「略」とたずねますと、母は  
 十一 99 8 とでたち切るのと同じことです。」と  
 十一 99 9 、母は、「略」といいました。ガラ  
 十一 10 1 、道路をうろろろとみまわしながら、な  
 十一 10 7 てきて、「略」とたずねました。する  
 十一 11 2 んさは、「略」とききました。すると  
 十一 11 6 さして、「略」と答えました。この老  
 十一 11 7 は、ペスタロッチという人でした。書  
 十一 11 11 のひとりが、書物というものはなにかす  
 十一 12 1 もっているものだと考えました。そこ  
 十一 12 4 、たべてしまったということ。一  
 十一 13 9 それが、めきめきと大きくなり、このご  
 十一 14 3 もいい。まだ青々とした木の葉の中から  
 十一 14 6 文雄は、あれこれと考えていたが、根も  
 十一 14 6 、根もとをかこうと決心した。そうして  
 十一 15 1 草をとりのけようとすると、大きなえん  
 十一 15 12 いの形をしつかりとつかんで、日のあた  
 十一 16 3 かまえないものだと思つて、しきりに木  
 十一 17 10 美しくなりたいたいと思つているのです  
 十一 18 1 かしてピッピッと鳴いていたときには  
 十一 18 5 たら、ピッピッという音がしました。

十二 18 7 ㊦ れが鳴るんだなと思ってやっているう  
 十二 18 10 ㊦ でも、ピッピッという音がする。みんな  
 十二 18 11 ㊦ ちのなかまだなと思ってよくきいてみ  
 十二 19 6 ㊦ ておいでだろうと思いましたが——あな  
 十二 19 9 ㊦ らね。一年一年とすんだことをかえり  
 十二 19 10 ㊦ っとよくしたいと考えることができま  
 十二 20 11 ㊦ があればいいなと思いましたよ。あれ  
 十二 23 3 ㊦ 、兄は氣のどくだといって、いつもえん  
 十二 23 5 ㊦ ふたりのまごたちといっしょに、同じ屋  
 十二 23 6 ㊦ 敷声をあげているといっても、いいすぎ  
 十二 24 2 ㊦ ん。ふたりのまごというのは、父母にと  
 十二 25 2 ㊦ くそれを覚えたいと思います。学校から  
 十二 26 8 ㊦ まわりをぐるぐると歩きます。ちゃぶ台  
 十二 27 2 ㊦ からあっちへいくとなると、すぐに手を  
 十二 27 5 ㊦ いまそこにいたかと思うと、もう次のへ  
 十二 27 6 ㊦ やにはいっているというように、すこし  
 十二 27 7 ㊦ 立つことができると、だれかがいったこ  
 十二 27 11 ㊦ らえて、「略」といって、民ちゃんに  
 十二 28 3 ㊦ げると、よちよちと立ちあがりました。  
 十二 29 4 ㊦ ちゃん三足四足と歩けるようになりま  
 十二 29 12 ㊦ んをだいてやろうとすると、かぶりをふ  
 十二 30 2 ㊦ ふって、「略」というのでした。おと  
 十二 32 6 ㊦ ので、それが母だとばかり思いこんで、  
 十二 33 3 ㊦ しばらくその人形と遊んでいますと、先  
 十二 33 5 ㊦ の手に、「人形」という文字をつづられ  
 十二 33 7 ㊦ 、それをまねようとした。とうとう  
 十二 33 11 ㊦ り、指さきで人形という字をつづつてみ  
 十二 34 3 ㊦ だに、なんのこともわからないままに  
 十二 34 10 ㊦ おいて、「人形」という字をつづりなが  
 十二 35 6 ㊦ 私にわからせようとなさいました。その  
 十二 35 12 ㊦ とをわからせようとなさいました。私は  
 十二 35 12 ㊦ がとりのぞかれたという満足を覚えたば

十二 36 2 ㊦ たにでかけるのだと知って、おどりがあ  
 十二 37 1 ㊦ じめのはゆつくりと、次には早く、「水」  
 十二 37 1 ㊦ には早く、「水」という字を書いてくだ  
 十二 37 5 ㊦ 、めばえてこようとする心のはたらきと  
 十二 37 5 ㊦ する心のはたらきといったようなあるふ  
 十二 38 6 ㊦ をつぎあわせようとしたがだめでし  
 十二 39 7 ㊦ 、ヘレン・ケラーというアメリカの女の  
 十二 39 10 ㊦ ばな文章が書けるということとは、なんと  
 十二 40 6 ㊦ に育ててやりたいと念じて、もうあ教育  
 十二 40 10 ㊦ ラーに「ことば」というものをわからせ  
 十二 42 2 ㊦ 先生も、「略」といひながら、一生  
 十二 44 6 ㊦ 日本には、文楽といつて、りっぱな人  
 十二 44 11 ㊦ 」。人形つかいといわれる人がいて、  
 十二 45 1 ㊦ 人、足だけのひと、それぞれ手わけし  
 十二 45 8 ㊦ 。人間のしほいとちがつて、みている  
 十二 47 3 ㊦ のであらわそうとする氣持がある。だ  
 十二 47 7 ㊦ 台にあらわそうとする望みもあるのだ  
 十二 48 11 ㊦ よう。お友だちとやってごらん。」  
 十二 55 3 ㊦ たところは、なんともいえない暖かい感  
 十二 55 7 ㊦ らしい伝えられたというだけのもののほ  
 十二 56 2 ㊦ 書きのこしておくといいことは、ただお  
 十二 56 8 ㊦ 、島原にみそ五郎という大きな男がいた  
 十二 57 2 ㊦ にある湯島であるという。九十九の石  
 十二 57 4 ㊦ 島に、神山、本山という二つの山がある  
 十二 58 2 ㊦ 間をくわせてやるというのであった。お  
 十二 58 10 ㊦ ころがいま一だんというところで、いち  
 十二 59 10 ㊦ 者の家の田植えだというので、里のおと  
 十二 60 2 ㊦ た。長者は、なんと思つたか、なん千ア  
 十二 60 3 ㊦ 日で植えてしまえといいつけた。里の人  
 十二 60 7 ㊦ 、もうあとわずかというところで、日は  
 十二 61 4 ㊦ ちよせる大きな池となっていた。家具  
 十二 61 7 ㊦ 山に、家具の岩屋というのがある。昔、

十二 61 9 ㊦ 知った。それからというものは、いり用  
 十二 62 4 ㊦ ちは、だれがなんと頼んでも、かしてく  
 十二 62 5 ㊦ てくれなくなつたという。十和田湖  
 十二 62 8 ㊦ がいた。名を八郎といつた。ある日のこ  
 十二 62 10 ㊦ きた。水を飲もうと思つて小川の岸にで  
 十二 63 11 ㊦ みるみるうちに湖となつた。それが十和  
 十二 63 11 ㊦ 和田湖のおこりだということである。  
 十二 70 2 ㊦ 家の近くに、曾良という人が住んでいま  
 十二 70 9 ㊦ ているのがすきだというし、家もせまい  
 十二 71 6 ㊦ なによりうれしいと、曾良は喜びました  
 十二 71 10 ㊦ 以降るといいなあと待ち遠しがつていま  
 十二 72 3 ㊦ に、「略」。などと、はやしたてていま  
 十二 73 4 ㊦ うちに、バラバラと音がして、白い小さ  
 十二 73 8 ㊦ にして、受けようと思いますが、あらは  
 十二 73 12 ㊦ よにかけだしたいと思ひました。いざ子  
 十二 75 2 ㊦ 音がバサリバサリと、まくらにひびくの  
 十二 75 6 ㊦ ントン、トントんと入口をたたく者があ  
 十二 75 11 ㊦ していられるかと思うと、どうしても  
 十二 76 3 ㊦ りには、パチパチとしほがもえあがりま  
 十二 78 6 ㊦ い語で、「略」といひました。私は、  
 十二 78 11 ㊦ るので、「略」とたずねました。ふた  
 十二 78 11 ㊦ 少年は、にっこりとわらつて、「略」。  
 十二 79 1 ㊦ らつて、「略」とはつきり答えました  
 十二 80 8 ㊦ 「略」。と、ことに「ジャパン  
 十二 80 8 ㊦ とに「ジャパン」ということばに力をい  
 十二 80 11 ㊦ 中には、「略」という色があらわれて  
 十二 81 1 ㊦ ていました。日本という國をみたことも  
 十二 81 6 ㊦ なければならぬと思ひました。火の  
 十二 82 10 ㊦ 試合を見物しようと、方々の國の人々が  
 十二 83 10 ㊦ トの上を右に左にと、ゆききました。  
 十二 84 4 ㊦ はり清水選手勝となりました。あの小  
 十二 84 10 ㊦ りません。もう然とちななおつて、電光

十二 84 12 チルデン選手の勝となりました。見物人  
十二 86 5 ました。つぎつぎと、両選手はしのぎを  
十二 86 7 、清水選手の負けとなりました。ネット  
十二 87 5 父が、「略」という。庭で植え木の  
十二 87 8 う。手紙を書こうとして、すずりばこを  
十二 88 4 かわる。「略」という簡単なことばで  
十二 88 11 ことばがわかったとはいえないことにな  
十二 89 5 な「ありがとう」というあいさつにして  
十二 90 5 れるその人の面影ということでもきよう  
十二 91 3 たこと、カサカサと落ち葉をふんでいっ  
十二 91 11 ように、「略」と書いた。太郎と同じ  
十二 91 11 」と書いた。太郎と同じ文であるが、そ  
十二 92 1 いることは、太郎とはちがっている。と  
十二 92 1 。ほかの人がこれと同じ文を書いたとし  
十二 92 6 と同じ文を書いたとしても、そのなかみ  
十二 92 7 らく、太郎や秋子と同じではなからう。  
十二 92 9 みんなが「遠足」という同じ文題で書い  
十二 92 12 つても、「略」といい、「遠足」とい  
十二 92 12 とい、「遠足」ということばは、だれ  
十二 93 3 ことは、話すこととちがって、その場の  
十二 94 2 る「赤とんぼ」という文字をおして  
十二 94 2 おして、すいすいとどびまわるかわい  
十二 94 2 いて遊んでみたいと思う。正男は、き  
十二 94 10 ので、しょんぼりと校庭に立っている  
十二 95 5 りわかるいとぐちとなつたのは、アメ  
十二 98 10 メリカのモールズという学者が、東京の  
十二 100 3 じょうもん式土器といひます。形も、か  
十二 100 9 に、やよい式土器といひのがあります。  
十二 101 1 で、やよい式土器という名まえがつけら  
十二 101 4 の人形は、はにわといひて古代人のはか  
十二 102 11 ます。夢殿の観音といひて、いまでも、  
十二 103 4 つかっているお金とずいぶんちがいます

十二 104 3 に作られた平等院という建物の中にある  
十二 104 5 です。ほうおう堂という名まえは、屋根  
十二 104 7 ついていてからだといひられています。  
十二 104 9 うにも、ほうおうといひ鳥の美しいすが  
十二 105 5 ども、いまのものといひぶちがついてい  
十二 107 1 これは、鳥羽僧正といひ人がかいた動物  
十二 108 5 ほつたのは運慶だといひられています。ふ  
十二 109 5 プ物語はイソップといひ人が書いたお話  
十二 110 8 だなです。まき絵といひのは、うるしを  
十二 110 11 ているのは、なんともいひえない美しさで  
十二 111 7 す。この絵は北斎といひ江戸時代の人の  
十二 111 8 たもので、浮世絵といひます。この浮世  
十二 112 2 おりりつぱなものとなつて生まれたので  
十二 112 5 ーヘルアナトミアといひ人体のことを絵  
十二 112 10 「かいたいず」と読みます。そのころ  
十二 113 1 しっかりしたものとなりました。この本  
十二 115 5 それは、民主主義といひことばをほんと  
十二 115 6 。ことばを生かすといひことは、身に行  
十二 115 7 ことは、身に行かうといひことです。こう  
十二 115 9 正しい、美しい國となることができます  
十二 116 6 も、はやふくらと、季節の命はわきあ  
十二 116 6 ようにもちちらちらとして、あさい水には  
十二 116 6 しのめがすすくと、するどい角をのぞ  
十二 117 2 どのかな午前。どこともしれぬ方角の、遠  
十二 117 4 んとうにのんびりとして、ゆめのように  
十二 118 8 ものを科学的知識といひ。深い、正しい  
十二 118 8 知つたことを材料として、考えをおし進  
十二 119 1 ととのつた知識とし、また、さらに進  
十二 119 4 世の中がみだれるといひたり、でんせん  
十二 119 11 き星が出たからだといひたり、あるいは  
十二 120 2 ら不幸があるなどといひた。今日でも、  
十二 130 7 る。しかし、よいといひた方角へ移つて

十三 10 7 もあれば、わるいといひた方角へこして  
十三 11 1 同じ運命をたどるとは、考えられない。  
十三 11 2 信ずるのを、迷信といひ。一つのこと  
十三 11 5 ことの原因であると、信ずるのである。  
十三 11 12 とは、知識をもととして考えなければな  
十三 13 3 していて動かないといひ、いわゆる天動  
十三 13 10 もので、火星などと同じように、太陽の  
十三 13 11 いる星の一つだ、ということもわかりま  
十三 13 12 。つまり、天動説とは反対に、地動説が  
十三 14 2 ドのコペルニクスといひ人です。しほら  
十三 14 3 イツ人でケプラーといひ人が出ました。  
十三 14 6 —これをわく星といひますが——の空  
十三 14 7 点に在るものだ、といひことを発見しま  
十三 14 8 た。そのケプラーと同じころ、イタリ  
十三 14 9 生まれたガリレオといひ学者がありまし  
十三 14 12 、地球が動くのだといひことを、明らか  
十三 15 1 しました。地は動くといひても、それは一  
十三 15 2 ありません。自轉といひて、一晝夜に一  
十三 15 3 ます。また、公轉といひて、自轉をしな  
十三 15 9 えてはならない、といひました。ガリ  
十三 16 1 説いてはならぬといひました。ガリ  
十三 16 3 あやまりであつたといひことにして、ゆ  
十三 16 6 えてしまつたのかといひと、そんなこと  
十三 16 7 でした。「略」と信じて、死ぬまで真  
十三 17 8 ます。世界の樂園といひられるこの國も、  
十三 17 9 オーストリア二國との戦いに敗れ、賠償  
十三 17 10 ヒとホルスタインといひ、作物のよくで  
十三 18 9 、國の建てなおしといひ大事業をなしと  
十三 19 2 すきでとり返そうと決心したのです。ダ  
十三 19 6 トランドのあれ地と戦ひ、これを豊かな  
十三 19 6 かな土地にしようとする大計画をたてま  
十三 19 11 これをこえた土地とするのが、ダルガス

十三<sup>20</sup><sub>12</sub> 地にも育つだろうと思って、実際に試験  
 十三<sup>21</sup><sub>6</sub> となく、「略」と、熱心に研究を続け  
 十三<sup>21</sup><sub>8</sub> てみたかどうか、ということでありまし  
 十三<sup>22</sup><sub>8</sub> おまえがくれるといった材木を、さあ  
 十三<sup>22</sup><sub>9</sub> たちは、「略」といって、かれにせま  
 十三<sup>23</sup><sub>5</sub> 、父に、「略」といいました。わかい  
 十三<sup>23</sup><sub>9</sub> てさまたげになるという、植物学上の事  
 十三<sup>24</sup><sub>11</sub> めに、こえた田園となりました。木材が  
 十三<sup>26</sup><sub>3</sub> れ地をみどりの野とし、祖國を生き返ら  
 十三<sup>26</sup><sub>7</sub> ている。ホートンというの、小路のこ  
 十三<sup>27</sup><sub>12</sub> は夏で、ひんやりとした土べいの日かけ  
 十三<sup>28</sup><sub>2</sub> 遊んでいる。遊ぶといつても、べつに、  
 十三<sup>29</sup><sub>1</sub> と、「ピューン」と、あとをひくような  
 十三<sup>29</sup><sub>6</sub> 、チャカチャン」と、かるやかな、はず  
 十三<sup>29</sup><sub>7</sub> たてる。どこからともなく、女の人たち  
 十三<sup>30</sup><sub>1</sub> たる。「ボーン」と、かわいらしい音を  
 十三<sup>30</sup><sub>5</sub> 「略」と、それぞれ子どもた  
 十三<sup>30</sup><sub>12</sub> ジャン、ジャン」と、はげしくたいて  
 十三<sup>31</sup><sub>2</sub> ジャン、ジャツ」というように聞える。  
 十三<sup>32</sup><sub>8</sub> て来る。「略」と歌う。秋には、なつ  
 十三<sup>32</sup><sub>12</sub> がひびくが、なんといつても、いちばん  
 十三<sup>33</sup><sub>4</sub> キリ、リリリ」とときしみながら、かん  
 十三<sup>33</sup><sub>7</sub> いかにもさむざむとした氣持をおこさせ  
 十三<sup>33</sup><sub>12</sub> く美しさは、なんといったらよからう。  
 十三<sup>34</sup><sub>3</sub> じまる。ほのぼのとゆれ動かけ絵は、  
 十三<sup>35</sup><sub>3</sub> まれる。文字の國といわれるのも、いわ  
 十三<sup>36</sup><sub>3</sub> トンへちらちらと降ってくるのも、こ  
 十三<sup>36</sup><sub>5</sub> わたが、どこからともなくたくさん舞つ  
 十三<sup>36</sup><sub>6</sub> たまる。ふわふわとまろくなつて、風が  
 十三<sup>36</sup><sub>7</sub> くと、ころころとこがりがります。子ど  
 十三<sup>36</sup><sub>8</sub> 、それをつかもうとして追いかける。大  
 十三<sup>36</sup><sub>9</sub> 、ぶたがぞろぞろと歩いて行く。あひる

十三<sup>36</sup><sub>10</sub> 、「ガア、ガア」とさわいで行く。花よ  
 十三<sup>37</sup><sub>9</sub> ばさん。だれかと思つた……え、いま  
 十三<sup>39</sup><sub>8</sub> らう。だれかと思つたんですよ。だ  
 十三<sup>41</sup><sub>7</sub> のは、ぜいたくというもんだ。それに  
 十三<sup>43</sup><sub>7</sub> あさんなの……(と、うら手に行く……  
 十三<sup>44</sup><sub>5</sub> しはいではないかという、そうではな  
 十三<sup>44</sup><sub>10</sub> る人は、四人のひと話をしているわけ  
 十三<sup>45</sup><sub>1</sub> 動きだけで、四人とそれぞれ話をしてい  
 十三<sup>47</sup><sub>4</sub> 風の中にひっそりと、客をむかえた赤い  
 十三<sup>49</sup><sub>9</sub> して、ハ・ハ・ヒとわらう。わたしたち  
 十三<sup>52</sup><sub>8</sub> う心で、一日一日と、むすばれていくよ  
 十三<sup>53</sup><sub>4</sub> さんが、まるまるとふとったかわいあ  
 十三<sup>53</sup><sub>10</sub> アのラファエルという画家のかいたも  
 十三<sup>54</sup><sub>1</sub> よるマドンナ」といわれています。こ  
 十三<sup>54</sup><sub>4</sub> あさんがマリアだということは、すぐに  
 十三<sup>54</sup><sub>10</sub> なっているだろうと、思つたからです。  
 十三<sup>55</sup><sub>6</sub> ますと、「略」といって、一まいの絵  
 十三<sup>55</sup><sub>10</sub> きをそのすりものとくらべてみると、ず  
 十三<sup>56</sup><sub>1</sub> いへんいい絵だなと思いましたが、おじ  
 十三<sup>56</sup><sub>2</sub> いっそう生き生きとして、その着物やは  
 十三<sup>56</sup><sub>5</sub> みたいにながうといつてもいいな。」「  
 十三<sup>56</sup><sub>7</sub> アのフロレンスという町の絵画館にか  
 十三<sup>56</sup><sub>8</sub> ルは、ウルピノというところで生まれ  
 十三<sup>56</sup><sub>11</sub> ランジェロだのという天才の集まつて  
 十三<sup>57</sup><sub>5</sub> のそこにかいたという小さな絵だが、  
 十三<sup>57</sup><sub>6</sub> くして、ありありとその絵を目の前に見  
 十三<sup>57</sup><sub>9</sub> かあさんらしいと思うのです。」「略  
 十三<sup>57</sup><sub>10</sub> かあさんの喜びという心持が、よく出  
 十三<sup>58</sup><sub>9</sub> ね。それはそうとして、ラファエルの  
 十三<sup>59</sup><sub>3</sub> トのマドンナ」といわれている。これ  
 十三<sup>59</sup><sub>8</sub> トのおかあさんという感じが、よく出  
 十三<sup>61</sup><sub>3</sub> だらうね。なんといつても、二十二か

十四<sup>5</sup><sub>5</sub> いるのです。それというのも、フィリッ  
 十四<sup>5</sup><sub>7</sub> 苦しみをいろいろとなめていたからのこ  
 十四<sup>5</sup><sub>12</sub> 、市役所のガス係という職についたとき  
 十四<sup>6</sup><sub>5</sub> 日 おかあさんとお話をする。私は短い  
 十四<sup>6</sup><sub>5</sub> とお話をしようと思つた。私は短い  
 十四<sup>6</sup><sub>9</sub> ていらつしやると思つた。子  
 十四<sup>7</sup><sub>4</sub> ちではないのだと、お考えになつてく  
 十四<sup>7</sup><sub>7</sub> とが、おこつたというにすぎないので  
 十四<sup>8</sup><sub>1</sub> の間、いくたびとなく、おとうさんの  
 十四<sup>8</sup><sub>7</sub> ないことがあるとしたら、それは、お  
 十四<sup>8</sup><sub>8</sub> ていらつしやるということです。なに  
 十四<sup>8</sup><sub>9</sub> すれてしまおうとお思ひになるにはお  
 十四<sup>9</sup><sub>2</sub> ている、なぜかといえ、妹にしても  
 十四<sup>9</sup><sub>4</sub> しているからだ、こうお考えになら  
 十四<sup>9</sup><sub>12</sub> てくださるのだと、思ひたいのです。  
 十四<sup>10</sup><sub>8</sub> いになるかと思ひます。ちつとも  
 十四<sup>11</sup><sub>11</sub> こわれるだろうといふことでしたが、  
 十四<sup>12</sup><sub>6</sub> をつかつていふというのが教えてくれ  
 十四<sup>14</sup><sub>12</sub> うとき、「略」と、こんなことが思わ  
 十四<sup>15</sup><sub>2</sub> は子どもがあるといふことをお考えに  
 十四<sup>15</sup><sub>3</sub> くださるようといふのつています。お  
 十四<sup>16</sup><sub>2</sub> ぐさめにしたと思つています。私が  
 十四<sup>16</sup><sub>7</sub> とを思つていふ。ランプがお氣にい  
 十四<sup>16</sup><sub>10</sub> いりすぎているとお考えではないかと  
 十四<sup>16</sup><sub>10</sub> 考えではないかと心配してました。  
 十四<sup>17</sup><sub>1</sub> でさびしすぎるとは、お思ひになりま  
 十四<sup>18</sup><sub>6</sub> ように、「略」といふ。すると、窓  
 十四<sup>18</sup><sub>9</sub> さんが、「略」といふ。これを聞いて  
 十四<sup>19</sup><sub>1</sub> 日本語で、なんといふていたんでしょ  
 十四<sup>19</sup><sub>3</sub> さんが、「略」とたずねた。「略」  
 十四<sup>20</sup><sub>2</sub> なつて、「略」とおっしゃつた。それ  
 十四<sup>20</sup><sub>7</sub> とばはその一例だとおっしゃつてくば

十四 21 1 「略。」「略。」といって、みんなが  
 十四 21 1 先生は、つぎつぎと書き続けられた。「へ  
 十四 22 4 さん、日本語だとばかり思っていました  
 十四 22 6 さんが、「略。」と、さもふしぎそうに  
 十四 22 9 日本語になったと考えていいだろう。  
 十四 22 10 先生は、「略。」とおっしゃった。それ  
 十四 22 11 、外国語であつたとお話しになったので  
 十四 23 4 先生が、「略。」とおっしゃったので、  
 十四 23 6 口々に、「略。」と、そくぎに答えた。  
 十四 24 1 カンボジア語だといわれている。その  
 十四 24 5 になったのだからと、ふしぎになってき  
 十四 24 9 、私は、「略。」とおたずねした。それ  
 十四 24 10 た。それは、外国と交通をして、日本に  
 十四 24 12 たとえば、ラジオといつしよに、「ラジ  
 十四 24 12 よに、「ラジオ」ということがはいり  
 十四 25 1 がいり、タバコとともに、「タバコ」  
 十四 25 1 もに、「タバコ」ということが、傳え  
 十四 25 2 ばが、傳えられたということがわかつた  
 十四 25 4 しよになつてゐるということは、あたり  
 十四 25 5 かなかおもしろいと思つた。だから、こ  
 十四 25 8 たんじよう」などというお話が、つくれ  
 十四 26 3 がおもに傳わつたとうかがつたが、この  
 十四 27 1 傳わつてきたのだということが想像され  
 十四 27 2 と、古くから日本といちばん関係のふか  
 十四 27 3 てきたのだからかと思つた。それで、先  
 十四 27 5 、『略。』などというときの漢語は、  
 十四 27 9 先生は、「略。」とおっしゃった。私は  
 十四 27 11 さん調べてみたいと思つた。そこで、「へ  
 十四 28 1 こそで、「略。」とおたずねした。「略  
 十四 28 4 からきたことばと思つていい。たくさ  
 十四 28 5 ら、外來語辞典というものもあるから  
 十四 29 3 てもらいたいなどという、どこかにし

十四 29 10 天上の花を見ようとはしなかったのだろ  
 十四 29 10 なかつたのだからという人もありますが  
 十四 30 1 すが、そればかりとも思われません。か  
 十四 30 3 ほんとうのことだとしても、自分の身近  
 十四 30 6 さんねんなことだと思ひます。小さな島  
 十四 30 12 んでも日本、日本と、日本だけが特別の  
 十四 32 2 中には、「略。」という人があるかもし  
 十四 32 4 ために、自分たちとはえんがなと思つ  
 十四 32 4 ちとはえんがなと思つてゐる人もある  
 十四 32 11 よつて生きてゐるといつてもいいすぎで  
 十四 32 12 星が、太陽を中心として回轉してゐるこ  
 十四 33 3 を、ふつう太陽系とよんでゐます。しか  
 十四 33 4 陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな  
 十四 33 7 す。このぎんが系というのは、地球をと  
 十四 33 11 星の世界の全部かといふと、なかなかそ  
 十四 34 3 くと、うちゅうといふものは、どこま  
 十四 34 7 およそ二十億光年といふことです。二十  
 十四 35 3 かし、それだからといつて、すこしもか  
 十四 35 7 思へば、人間の力といふものは、うちゅ  
 十四 35 8 すばらしいものだといふことができるで  
 十四 35 9 星を。まあ、なんといふしずさでしよ  
 十四 35 10 さでしよ。なんといふ美しさでしよ  
 十四 35 10 さでしよ。なんといふおごそかなすが  
 十四 36 10 から、星をつかめといわれ、そのことば  
 十四 36 11 かい感動を受けたといふことです。夫人  
 十四 37 7 は、なんであるかといふことも、しぜん  
 十四 39 7 持よく、のびのびと深呼吸をする。一の  
 十四 44 11 いで、ローマン号という小さな汽船が、  
 十四 46 4 間で歌つてゐると、ちつともちがわな  
 十四 46 9 ぐらい、しみじみと歌のありがたさを味  
 十四 47 4 おそらくは、自分と同じように、船から  
 十四 47 10 まつた中で、なんというおちつた、ま

十四 47 11 ついた、またなんというほらかな人だ  
 十四 48 2 声がだせるものだと思います。そうし  
 十四 48 4 でいきたいものだと思います。かれは  
 十四 49 11 この歌を歌つた人といふべきです。さて  
 十四 51 6 うに、「略。」という話しあいをやつ  
 十四 51 7 もしろいだらうと思ひます。」こうい  
 十四 53 1 たち花のものだといふことはうたがい  
 十四 53 7 な実になつたかといふことは、ごぞん  
 十四 53 9 出て、じりじりと暑い日に照らされな  
 十四 54 3 全部私のものだと思います。「略。  
 十四 55 5 は、私のものだと思います。「略。  
 十四 57 2 全部私のものだと思います。」つるが  
 十四 57 3 ながら、どやどやといつてきたものが  
 十四 57 5 、土、はちたちだといふことがわかりま  
 十四 57 10 たら、どうなると思ひます。いったい  
 十四 60 2 なほくのものだといつてもいいのです  
 十四 61 5 は、だれのものとも、簡單にはいえま  
 十四 61 9 さしつかえないと思ひますが、どうで  
 十四 61 11 「略。」「略。」と、日や、土や、水な  
 十四 63 2 ちようど雲やきりと同じようなものです  
 十四 63 5 いのが、ちらちらと目に見えます。ばあ  
 十四 63 8 たときに見えるのと、にたようなもので  
 十四 64 3 たやすくできないといふことが、学者の  
 十四 65 3 ために、どんどんとさかんにたちのぼり  
 十四 65 7 は、わかるだらうと思ひます。つぎに、  
 十四 66 10 ていきます。これとよくにたうず、も  
 十四 68 12 ほどよくにたものと思つてさしつかえあ  
 十四 69 5 くにしたものであるといふ一つの例に、ら  
 十四 70 10 熱がにげるためだと思つていいのです。  
 十四 71 6 たときの水の流れと、同じようなもの  
 十四 73 10 うがなんであるかといふことは、まだ、  
 十四 73 12 、前の温度のむらとにか関係があるこ

十四74 3 らが、どうなるかということは、ただ、  
 十四74 8 な流れがおこるかというようなことにも  
 十四74 10 ろの実用上の問題とえんががつながってき  
 十四75 3 ものです。とつ風というものがそれです  
 十四75 12 飛行機は、しぜんと下の方へおしおろさ  
 十四76 2 なるのです。これと同じような氣流のじ  
 十四76 3 。それは、海陸風とよばれているもので  
 十四76 5 反対に陸から海へとふきます。すこし高  
 十四76 6 いています。これと同じようなことが、  
 十四76 7 にあって、山谷風と名づけられています  
 十四77 4 にかこしらえようとしていると、祖父が  
 十四77 4 「木もと竹うら」ということを教え  
 十四77 7 うから割るがいいという教えでした。私  
 十四77 10 のほうから割ろうとすると、たとい、は  
 十四79 2 で、チョンチョンとたたいて、みごとに  
 十四79 3 木のほうは、これと反対に、もとのほう  
 十四79 9 話すと、「略」と教えてくれました。  
 十四79 10 「木もと竹うら」という簡単なことを、  
 十四79 11 ど、「二が四」という算数の九九と、  
 十四79 12 という算数の九九と、にたようなものだ  
 十四79 12 にたようなものだと思います。いった  
 十四80 2 よると、なん百年という前からつくられ  
 十四80 2 て、子に、まごにと傳えたことではない  
 十四80 3 たことではないかと思えます。または、  
 十四80 7 とう一つの眞理だと思われたので、その  
 十四80 9 ものになつたものとも考えられます。  
 十四82 2 ちりもつもれば山となる。燈台もと暗し  
 十四83 2 。一つは「雪國」というのであり、もう  
 十四83 3 もう一つは「雪」というのであった。「  
 十四83 4 北國の人たちが雪と戦っているようすを  
 十四83 10 のである。「雪」というのは、雪の景色  
 十四85 3 知ることができるというのである。「略

十四85 6 うすが、こまごまとわかるとすれば、た  
 十四85 7 こまごまとわかるとすれば、たしかに空  
 十四85 8 空からのお手紙」とは、うまくいったも  
 十四86 6 っしてわるいものとは思われないが、いま  
 十四87 2 、かなり生き生きと表現することができ  
 十四87 6 ても、おもしろいと思う。一面の銀世界  
 十四87 7 う。一面の銀世界となつた廣い野原を、  
 十四88 1 く。ぼつりぼつりとしるした足あとが、  
 十四88 1 横ぎる一すじの道となる。その一すじの  
 十四88 2 はなく、くねくねとゆがんでいる。歩く  
 十四88 3 まつすぐに歩こうと思つたのであろうが  
 十四88 10 しいものは、なんといつても、春さきの  
 十四89 2 て、足でトントンとふんでみたり、しゃ  
 十四89 4 もの音でも聞こえたりする。こんな  
 十四90 5 かつた。「略」と、小さなマッチ賣り  
 十四91 7 にはもつてこいだと思つたのであろう。  
 十四91 11 足のつめたいことといつたらなかつた。  
 十四92 3 おおみそかの晩だというのに、その子は  
 十四93 5 の前を、そろそろとかなしげに通つて行  
 十四93 7 おして、ちらちらとかがやくともしびの  
 十四94 9 て、あたためようとした。けれどもだめ  
 十四95 2 けた。まあ、なんといううれしいことだ  
 十四95 6 のマッチだらうかとさえ思つた。それは  
 十四96 3 の方へのぼした。と思うと、そのとき、  
 十四96 8 。それがゆらゆらともえあがると、まあ  
 十四96 8 ると、まあ、なんというふしぎなことだ  
 十四97 2 の鳥が、ほかほかとあたたかいきをた  
 十四98 4 かちか、ちかちかと女の子の上を照らし  
 十四98 4 ひいた。「略」と、女の子は思つた。  
 十四99 4 のぼつていくのだと、話してきかせたこ  
 十四99 7 ていた。「略」と、女の子は、声をあ  
 十四100 5 なくなくなつては困ると思つたので、急いで

十四100 10 つけた。「略」と、女の子はいっしょ  
 十四100 12 に明かるくはないと思われるくらいであ  
 十四101 12 い國へ、上の方へと、神さまのおそばへ  
 十四102 5 たとき、「略」といった。けれども、  
 十五6 2 時計はカチカチと 朝さくらみどり子  
 十五8 2 かんむりこうと手ぶくろをぬぐ山ふ  
 十五9 1 ずかに流るると見ればもの花 こど  
 十五9 3 たく書き月夜となり うまよ人間の  
 十五10 1 んげつみて子といる母の黒いこうも  
 十五14 6 はたちまち火となれりゆれにゆるる  
 十五19 3 に、ユングフラウという美しい山があり  
 十五19 5 その中で、一だんと高くそびえているの  
 十五21 9 けの上をそろそろと歩いていました。男  
 十五21 11 、それがコトコトと音をたてて下の方ま  
 十五23 1 まわしが、サアツという羽音をたてて、  
 十五23 2 來ます。「略」という声をたてて、み  
 十五23 10 はただ、「略」とさけぶばかりです。  
 十五25 1 、上体をびつたりと鳥のせにつけて、右  
 十五25 6 からぎゅうぎゅうとおしつけ、両足でい  
 十五26 9 なければならないと、少年は思いました  
 十五27 2 ために「略」といわずにはいられま  
 十五27 6 もなくなつたのかと、そのことがまた、  
 十五27 10 ように、下へ下へとおりて行きました。  
 十五27 11 の上で「略」といつている人々の目  
 十五28 1 とき、鳥はサアツという羽音をさせたか  
 十五28 1 う羽音をさせたかと思うと、もうたまた  
 十五28 1 いことが近づいたと感じたので、左手は  
 十五28 6 年の頭をくだこうと、向かつて來ました  
 十五30 2 年は、身をかわすと同時に、右手の短刀  
 十五30 3 こし舞いたつたかと思うと、こんどは両  
 十五30 5 、目に、ひしひしとあたります。そのた  
 十五31 7 どから、ガヤガヤという人声が聞えてき

15 32 8 ふいに「略」という鉄ぼうの音がし  
 15 32 8 ぼうの音がしたかと思うと、いままでむ  
 15 35 5 れらの表わしかたとともに、事物の形を  
 15 35 7 きたものが、文字というものの起りとな  
 15 35 8 というものの起りとなった。いまから五  
 15 35 10 、そうした絵文字とよばれるものがあつ  
 15 36 1 形のきまつたものとなり、今日のように  
 15 36 2 日のようになつたといわれている。漢  
 15 36 7 こでたとえ、数という形のないものを  
 15 36 8 「うえ」「した」という考えを表わすの  
 15 37 9 えだ・いた」などと、「木」に關係のあ  
 15 37 10 て、「シ・ハン」という音をしめしたり  
 15 37 12 「海」を「カイ」というようにもとの中  
 15 38 2 「を」「うみ」などをつかつて、その漢字  
 15 38 5 読みかたを「音」といい、日本のことば  
 15 38 6 よる読みかたを訓という。それで、たい  
 15 39 7 「から」「カ」などと書くようになった。  
 15 39 9 「に」「は」「仁」というように、漢字の  
 15 40 5 の書き表わしかたとなっている。ロー  
 15 41 3 てフェニキア文字となり、さらに、その  
 15 41 4 つてギリシア文字となり、それから、そ  
 15 41 6 なつた。ローマ字といわれるのもそのた  
 15 43 5 はちを、しげしげとのぞきこみながら、  
 15 43 9 ン博物館の——とつぶやいた。かれは  
 15 44 5 ながら、「略」と、じょうずな日本語  
 15 44 10 、あなたは——と、あいさつともつか  
 15 44 10 —と、あいさつともつかず、返事とも  
 15 44 10 ともつかず、返事ともつかない答えかた  
 15 44 11 〇。私はハギンスというのですが、じ  
 15 45 1 いさんがね——と、いって、すすめられ  
 15 45 6 学んで、つぎつぎと近代的工業の道をた  
 15 47 8 はん主は、お庭焼といって、自分の家で

15 47 10 「色なべしま」といわれる、色のはい  
 15 47 11 ばんすぐれていたという。このお庭焼の  
 15 48 8 うかして残したいと考え、自分でまず、  
 15 49 11 て買うことがあるというのを聞いて、  
 15 50 10 衛門は、「略」と決心し、いよいよこ  
 15 51 3 ジャパンタイムスという新聞も発行した  
 15 51 3 した。しかしなんといつても、日本の古  
 15 51 4 美術工藝史十二巻という大作を著わした  
 15 51 10 ながら、「略」と、自分のことをうち  
 15 52 11 をたずねるようにとおっしゃった。とち  
 15 53 3 ーク、ワシントンと無事に旅を進めて、  
 15 53 7 なドアをコツコツとノックした。「カム  
 15 53 9 た。「カム イン」と答える、ひくい、し  
 15 54 3 できた私は、なんというしあわせ者であ  
 15 54 9 そいで、「略」と、私が一言も発しな  
 15 55 8 〇が、それはそれとして、きょうはきみ  
 15 55 11 ときで、鹿鳴館というクラブがあり、  
 15 56 6 〇は、実測の結果とわずか十フィートし  
 15 56 9 〇本留学生第一号とでもいおうか、私が  
 15 57 4 〇てはくれまいかと、やぶからぼうの話  
 15 57 5 〇れはおもしろいと、教授の申し出で  
 15 57 9 〇ちらはアメリカといつて、たがいに向  
 15 57 12 〇ア語で読みたいといひだした。それは  
 15 58 1 〇語を教えてくれと、その申し出で承  
 15 58 3 〇の日本語の先生というわけだが、かれ  
 15 58 10 〇ぶには、「略」とある——新島襄とい  
 15 58 10 〇とある——新島襄という名を耳にした私  
 15 58 12 〇なお語り続けようとする博士をさえぎつ  
 15 59 3 〇ぎつて、「略」と、ありし昔を語ろう  
 15 59 3 〇ありし昔を語ろうとした。すると博士は  
 15 59 5 〇博士は、「略」と、一言のもとにしり  
 15 59 5 〇とにしりぞけようとした。が、ことばみ

15 59 12 がつて、「略」と、あつてにとられて  
 15 60 2 み、一路自たくへと車を走らせた。同志  
 15 60 7 どつていた私の父とは、心をゆるした間  
 15 61 2 さんは、「略」といって私をかわいが  
 15 61 4 れにも、「略」と、必ず書きそえてあ  
 15 62 1 のえて、「略」と、私をうながした。  
 15 62 1 〇がした。いそいそとげんかんへ出かけて  
 15 62 4 〇「おじさんたちと行くのがいやなのか  
 15 62 7 〇だした。「略」といって、おじさんは  
 15 62 12 〇行くのはいやだといっているのですよ  
 15 64 1 〇を見て、にこにこわらつた私は、それ  
 15 64 5 〇を出て十メートルとは行かないうちに、  
 15 64 10 〇ながら、「略」と、にこやかにわらい  
 15 65 2 〇ながら、「略」と命令した。暑さのき  
 15 65 8 〇小樽で目についたといつて、車のついた  
 15 65 10 〇らそれをガラガラとひきまわすので、家  
 15 65 12 〇送ってくださるなど、くじょうの手紙を  
 15 66 3 〇二まい、満ぼうへと名さして送ってくだ  
 15 67 7 〇婦人が、「略」とさけんで、しつかと  
 15 68 1 〇て、これでたけといふように、しゅも  
 15 68 3 〇あった。「略」とよんだつもりで、私  
 15 68 3 〇私はかねをカーンとたたいた。音もなく  
 15 68 6 〇婦人が、「略」と、家の人によびかけ  
 15 68 11 〇ぶだるうに——といひながら、主なき  
 15 69 1 〇びいた。「略」と指さされるままに、  
 15 69 4 〇やかに「略」とよびかけそつてであつ  
 15 69 7 〇をとつていられたという大きなつくえの  
 15 69 11 〇、どうしているかとたずねられたのもそ  
 15 70 8 〇さんが、「略」とおっしゃった。「そ  
 15 71 4 〇になつたら——」といつて、おばさんは  
 15 71 7 〇れから、「略」とおっしゃった。人力  
 15 71 12 〇さんは、「略」といって、私をひきよ

十五七二 一の「新島襄之墓」という五つの文字をき  
 十五七二 ながら、「略。」と、おぼさんはふたた  
 十五七二 七。私は、「略。」と呼びかけようとした  
 十五七二 七「と呼びかけようとしたが、声が出なか  
 十五七二 七おして、つかつかと中にすすんだホラン  
 十五七三 六博士は、「略。」といって、日記をくり  
 十五七三 十みちびかれ、博士とたったふたり、しず  
 十五七四 五能力のちがいは別として、一方が先に生  
 十五七四 六あとから生まれたというだけのことで、  
 十五七四 七られねばならないという理由はすこしも  
 十五七四 七界平和、人間平等という理念が、ここか  
 十五七五 一いてくるのだ——と、テーブルをたい  
 十五七五 四まわし、「略。」と、力をこめてさげび  
 十五七五 八まつを傳えてくれといながら、自動車  
 十五七五 八さらに、「略。」とささやかれた。博士  
 十五七五 一二こんどははっきりと、「略。」といった  
 十五七六 二きりと、「略。」といったされた。ああ  
 十五七六 九ながら、「略。」と、意外なあいさつを  
 十五七六 一〇た日本語の一つだといわれた。五 そ  
 十五七七 一たとい世間の考えとちがっていても、そ  
 十五七九 四特別の権利があると信じます。といいま  
 十五七九 五あると信じます。といいますのは、私は  
 十五七九 八自分の國を愛するということを学んでい  
 十五八二 六「キャッキヤツ」とさかいだり、歌を歌  
 十五八二 七、とてもほんとうと思えないほど、ふと  
 十五八三 七いこんでいないともかぎらない。だか  
 十五八五 七キャッキヤツ」といっている。わらい  
 十五八六 一ちそうによぼうというのだろう。それ  
 十五八六 七てしまふよ。人というものは、自分の  
 十五八六 九しかしきつぱりと、ことわりなさい。  
 十五八七 九の幸福「ゆつくりとうなずく。このな  
 十五八八 一にも知らないという幸福」で、みん

十五八八 二にもわからないという幸福」は、こう  
 十五八八 四なんにもしないという幸福」と、『必  
 十五八八 四要以上にねむるという幸福」でね、ふ  
 十五九〇 六た幸福「青い鳥とね。はてな。そうそ  
 十五九〇 六鳥をあまより上等とは思わないからです  
 十五九二 三、かれらはみんなとなかよくテーブルに  
 十五九二 九、チロ。来いというのに聞えないの  
 十五九二 一〇も、だれが行けといいた。そこでなに  
 十五九三 七、そうあたふたとおいとますることも  
 十五九四 一ひきずって行こうとする。その間に、「  
 十五九八 三。子どもの幸福というものは、地のう  
 十五九八 六く、あの子たちとおどりたいなあ。」  
 十五九九 四あげて、「略。」と歌い、子どもたちを  
 十五一〇 一たちを、あなたは、あなたといっしょに、たべた  
 十五一〇 七を着て、そろそろとやって来ます。幸福  
 十五一〇 七った幸福」たちといっしょに、不幸の  
 十五一〇 七。わるいなかまとつきあっていたもの  
 十五一〇 一〇はなにをしようとしているの。なぜ横  
 十五一〇 一〇横いま来ようとする新しい『喜び』  
 十五一〇 一〇れ。なにが幸福といつて、これほどの  
 十五一一 二そんなお金持だとは知らなかった。い  
 十五一一 二ないのさ。人間というものは、目を閉  
 十五一一 五れを、はっきりとささるためだからね  
 十五一一 五天國に來ていると思っているけれど、  
 十五一一 五おけばよかったなと思った。「略。」私  
 十五一二 六、これもいいなと思った。読んでい  
 十五一二 九きた。それはなんともいえない、せつな  
 十五一二 一。受持の佐藤先生と、教室でお別れをし  
 十五一二 三先生は、「略。」とおっしゃった。うれ  
 十五一二 一、もっと先生がたたくしきしなかった  
 十五一二 二なかったのだろうと、さんねんに思いま  
 十五一二 二と（接助）500 と見すると・でない・ひよとす

ると・まどをあげると・わたしのころはにじをみ  
 るとおどる  
 一四三 四なかに目をあげると、おとうさんがそ  
 一四四 二略。」とききますと、どこかで、「略」  
 一四六 五てなかをみせますと、「略。」おんなの  
 一四八 八けてまっていますと、おおきなむしめ  
 一四八 八きがついてみると、さっきの人たち  
 一五二 五ひとりごとをいうと、となりのおじさ  
 一五三 八いい人がひろうと、だいやもんどです  
 一五三 九きの人がひろうと、ただのいしころ  
 一五六 六つとうとうとすると、きしやはもうつ  
 一六四 一いさんがこういうと、しろちゃんはふ  
 一六六 一「よるになると、おどりがはじま  
 一六八 八おもってみまわすと、山のうえから、  
 一六九 一略。」といいますと、「略。」と、おじ  
 一七〇 七をきて、かわくとぬぐものはなあ  
 一七二 七なしをしていると、どしんどしんと  
 一七二 一またあかるくなると、おかあさんが、い  
 一七二 九てきました。みると、わたくしのおじ  
 一七五 四略。」といいますと、そのかたは、「へ  
 一七五 三いり口まできますと、門ばんがほんた  
 一七五 三まいあさ日がでると、この木の西がわ  
 一七五 三ます。ごごになると、東がわのなん十  
 一七五 六略。」といいますと、おじいさんは、「へ  
 一七五 七ひとかき水をかくと、ふねはななつの  
 一七五 九です。なぜがふくと、くわのはのにお  
 一七五 九はまべにでてみると、わにざめがいま  
 一七五 九ざめはそれをきくと、たいそうおこり  
 一七五 八ことをはなしますと、そのかたがたは、  
 一七五 九のとおりにしますと、からだはすぐも  
 一七五 九の心があわなないと、どこへもいけま  
 一七五 九の心があわなないと、どこへもいけな



三65 1 女の子たちがいうと、「略。」と、男の  
 三74 2 クルがたずねますと、「略。」と、おか  
 三78 2 ビッドがききますと、「略。」と、ジュ  
 三84 7 。みんながみますと、そのあまだれの  
 三100 9 みまわして、いますと、ねもとのぴかり  
 三101 2 竹を切つて、みまわす、小さな、きれいな  
 三103 3 ひめのかおをみると、すぐなおりまし  
 三107 4 って、ごらんになると、光の中に、きれい  
 三108 3 とおつしやいますと、かぐやひめは、ま  
 三109 2 れいなぼんになると、かぐやひめは、空  
 三109 4 がうつくしくなると、かぐやひめのよ  
 三115 1 をきせようとすると、かぐやひめは、「へ  
 四43 ちゃんが生まれると、ここに知らせま  
 四14 4 ている。風がふくと、にわとりがふわ  
 四18 4 いて、いっしょにひくと、かるくなるかし  
 四25 4 さん。お話をすると、みっちゃんこそ  
 四25 5 さん。お話をすると、そこにすわつて  
 四25 8 さん。でも、雨がふると、どこかで休んで  
 四31 7 さん。さをさしていくと、むこうで、ようち  
 四33 3 さん。おが、できあがると、男の子は、それを  
 四39 1 こまで、話がすすむと、みんなは、めいめ  
 四47 10 、のはらをすぎると、高い山のそばに  
 四49 3 に、それたかと思つと、石ころかなにか  
 四52 2 せん。どうかすると、するりとすべり  
 四54 4 きれいな水をくむと、これをうけとつ  
 四57 9 かり、用意ができると、みはりばんのが  
 四61 9 、食事をすませると、「略。」と、出発  
 四62 5 きこえます。みると、なかまの、がなが、  
 四70 2 ろは、ふりがやむと、なりもととる。」  
 四83 10 さきに、つりさげると、弟は、「略。」と  
 四86 6 こんをぬいて、いと、みそさざいが、「へ  
 四89 8 音。雪だというと、あさ早くはねお

四91 5 っておいでになると、ひたいからゆげ  
 四92 4 い。雪が降りだすと、ぼくはまどから  
 四95 4 雪を、上からみると、白くて、黒くは  
 四109 10 でてきて、ならぶと、そのうしろから、  
 四122 5 さん。きゆうがないと、光る、ことが、でき  
 四127 5 らある、いて、いますと、どこからか、よい  
 四127 7 してきます。みると、むこうの、まつの  
 四131 3 さん。天人「それが、ないと、天へ、かえる、こと  
 四132 6 さん。は、ごろもがないと、まう、ことが、でき  
 五73 3 さん。川は、大きくなると、ゆっくりとながれ  
 五16 2 さん。ポストに、いれられると、友だちといっしょ  
 五19 9 て、ほつとして、いますと、こんどは、また、  
 五22 7 ろうさんが、家に帰ると、おかあさんが、げ  
 五23 7 さん。たれか、かっている、こしを、かけて、いた  
 五25 10 さん。駅の、出口まで、くると、で、むかえに、きて、い  
 五29 3 さん。を、で、て、す、こし、くると、どこか、のおじさん  
 五30 5 さん。ました。駅につくと、その人は、「略。」  
 五40 2 さん。たりが、美しくなると、私は、なんだか、  
 五46 7 さん。こえた。たちどまると、鳴き声、が、やんだ。  
 五46 8 さん。んだ。しばらく、すると、また、「略。」と  
 五48 6 さん。と、まどを、あけると、いまの、ぼつた、ばか  
 五53 1 さん。ので、西の方を、みると、日、が、しずん、で、まも  
 五53 4 さん。を、た、た、いて、やり、ますと、まさ、こも、ま、る、く  
 五53 11 さん。ながら、西の方を、みると、小さな、星、が、ち、ら、ち  
 五67 9 さん。の、さ、かな、を、よ、び、ますと、すぐ、で、て、きて、「へ  
 五68 8 さん。い、さん、が、帰、つ、て、み、ると、お、ば、あ、さん、は、新  
 五69 2 さん。の、さ、かな、を、よ、び、ますと、お、よ、い、で、き、て、き、き  
 五69 10 さん。「お、じ、い、さん、が、帰、ると、り、つ、ば、な、家、が、た、つ  
 五70 8 さん。の、さ、かな、を、よ、び、ますと、金、の、さ、かな、が、お、よ  
 五71 2 さん。の、と、こ、ろ、へ、帰、り、ま、す、と、お、ば、あ、さん、は、け  
 五71 11 さん。「略。」とい、いますと、お、ば、あ、さん、は、お  
 五73 2 さん。の、さ、かな、を、よ、び、ますと、金、の、さ、かな、は、「へ

五73 10 さん。い、さん、が、帰、つ、て、み、ると、どう、で、し、よう、ち  
 五77 3 さん。へ、帰、り、ま、した。み、ると、ま、え、に、住、ん、で、いた  
 五88 2 さん。び、を、お、し、め、に、な、ると、へ、ん、で、し、よう。」  
 五91 5 さん。した。「略。」みると、ざ、し、き、の、ま、ん、中、の  
 五91 8 さん。略。」と、た、ず、ね、ると、「略。」とい、う、の  
 五91 9 さん。の水、を、か、け、て、や、ると、た、け、の、こ、が、よ、ろ、こ  
 五95 2 さん。や、ん、が、ひ、ろ、つ、て、帰、ると、お、と、う、さ、ん、が、「へ  
 五98 11 さん。な、が、と、び、お、き、て、み、ると、ど、こ、か、の、ね、こ、が、  
 五99 2 さん。た。「略。」とい、う、と、ね、こ、は、お、ど、ろ、い  
 五99 5 さん。け、て、や、つ、た、り、し、ま、す、と、や、つ、と、生、き、返、り、ま  
 五99 6 さん。ました。二、三、日、す、ると、ひ、わ、は、も、と、の、よ  
 五100 1 さん。い、わ、れ、て、よ、く、み、ると、ね、こ、に、ひ、つ、か、か、れ  
 五100 8 さん。ん、き、よ、う、を、は、じ、め、ると、ひ、わ、は、「略。」  
 五101 3 さん。二、力、を、ふ、き、は、じ、め、ると、ひ、わ、も、よ、ろ、こ、ん、で  
 五102 9 さん。、せ、ん、た、く、を、し、ま、す、と、「略。」と、ひ、わ  
 五103 1 さん。の、木、に、つ、る、し、て、お、く、と、い、ろ、い、ろ、な、鳥、が、や  
 五103 11 さん。しく、鳴、い、て、み、せ、ま、す、と、す、ず、め、は、お、ど、ろ  
 五105 11 さん。め、ま、した。秋、に、な、ると、ま、た、わ、た、り、鳥、が  
 五106 3 さん。ひ、わ、は、そ、れ、を、み、ると、「略。」と、せ、き  
 六47 さん。だ、ん、お、ち、つ、い、て、み、ると、こ、こ、は、時、計、屋、の、店  
 六83 さん。て、「略。」とい、う、と、男、の、子、は、ゆ、び、さ、き  
 六84 さん。つ、と、つ、ま、ん、だ、と、思、う、と、す、ぐ、に、お、と、し、て、し  
 六92 2 さん。の、だ。あ、れ、が、な、い、と、町、長、さ、ん、の、か、い、ち  
 六116 さん。り、ゆ、う、ず、を、ま、わ、す、と、い、ま、ま、で、死、ん、だ、よ  
 六119 さん。が、で、き、た、の、だ、と、思、う、と、う、れ、し、く、て、た、ま、ら  
 六134 さん。び、な、が、ら、歩、い、て、く、ると、の、ど、が、か、わ、き、ま、し  
 六172 さん。と、が、下、の、方、を、み、ま、す、と、か、り、う、ど、が、矢、を、つ  
 六178 さん。ば、め、ん、ま、く、が、あ、く、と、き、り、ぎ、り、す、が、大、ぜ  
 六193 さん。こ、ん、な、に、よ、く、あ、う、と、た、い、こ、の、う、ち、が、い  
 六517 さん。に、は、い、つ、た、か、と、思、う、と、す、ぐ、で、で、た、か、と、思  
 六517 さん。ぐ、で、で、た、か、と、思、う、と、ま、た、す、ぐ、は、い、り、ま、す  
 六527 さん。と、月、を、み、つ、め、て、い、ると、月、は、動、か、な、い、で、

六五三 月さまをみていると雲が動いていくし、  
 六五三 雲をみているとお月さまが動いてい  
 六五三 略。」「こうするとよくわかるのね。」  
 六五五 るまえにそとをみると、空はいつのまにか  
 六六四 うして、八時になると、ねむくなるのだろ  
 六七九 」「と、子ぐまがいうと、さるは子ぐまをみ  
 六七〇 六 」「ほんとうに歩くとおもしろいな。」「へ  
 六九三 しをかたづけていると、いつか、おじいさ  
 六〇二 略。」「こう思いつくと、ぼくは、もう、じ  
 六〇七 、なぜはながつまるといえなくなることは  
 六〇九 をだしていつてみると、いかにもはなから  
 六〇九 一 」「耳できいてみると、まるで「ダ」とい  
 六一一 ているんだなと思うと、きゆうにおかしく  
 六一一 五 「ンダ」といつてみると、いかにも弟のいい  
 六一〇 に苦しい。そうすると、ナニヌネノという  
 六一三 ぼくは、こう考えたと、弟のまねをしてみ  
 六一四 れども、あげてみると、なかなかよくあが  
 六一五 空で右や左にゆれると、自分もいつしよに  
 六一六 略。」「といいますと、ただしちゃんは喜  
 六一七 はんつぶをよくねると、いいのりができま  
 六二〇 六 ちにあまりいじると、すぐはがれますよ  
 六二〇 九 六 ち。」「早くかわくといいな。かわいたら  
 六二二 カチンとわっている、そこへよろちょ  
 六二四 にながらからくると、こちらへかくれ、  
 六二五 らからまわっていくと、みんなはあちらへ  
 六二八 七 」「といおうとすると、うさぎさんたちの  
 六三六 いません。そうすると、自分たちは、あ  
 六三六 さんがおこつて走ると、こんどはたおれた  
 六四一 八 だ。よこどりすると、ゆるさないぞ。」「  
 七〇二 船に子どもが乗ると、こっちの岸から向  
 七〇四 六 っていく。渡し終ると、またひき返して、  
 七一二 「なべの手」となると、人の手ではありま

七二九 九 六 は、学校から帰ると、だいこんのはっぱ  
 七二九 一〇 六 校から帰つてみると、あおむしは、もう  
 七三二 一〇 六 おかあさん、死ぬといけないから、ここ  
 七三七 とき、ふと上を向くと、私のよこのわかい  
 七三九 一 」「といったかと思うと、いきなりさぶらう  
 七四一 一 六 った。目をさますと、向こうの席にひと  
 七四二 一〇 六 た人があった。みると、しらがの老人であ  
 七四四 中をひとまわりすると、ぼうしは、ふたた  
 七四六 三 とひろげたとすると、しずかにひきはじ  
 七四七 四 きあらわそうとすると、文章が、だんだん  
 七四七 九 つきりとしていきますと、文章も、だんだん  
 七四七 一〇 六 。心がくもつていくと、いくらなおしても  
 七五二 六 ちゆうでやっていると、「略。」「と鳴った  
 七五二 七 六 って、心配していると、十一たい十で、ぼ  
 七五四 九 ませてもどつてくると、たかやま先生も組  
 七六一 六 ろで、からすが鳴くと、あつちでもこつち  
 七六〇 七 六 「目がさめてみると、らくだがいません  
 七六〇 八 六 くを旅していますと、砂の上にくだの  
 七六四 一 六 ったあとをみますと、かみきれないで、  
 七八八 しい草をいれてやると、そればかりたべて  
 七九一 一 六 かをさかさになでると、毛がふわふわと  
 七九五 六 いました。よくみると、おくの方に、わら  
 七九七 九 ちにながりますと、親うさぎは、足で  
 七九七 一〇 六 ぎは、人がみていると、ちちをのませたく  
 八〇四 四 ろうとのぞいてみると、ひとりの小鳥屋が  
 八〇六 一〇 六 よんでひざをたたくと、ひざの上にとび乗  
 八〇七 二 六 のわるいまねをすると、「略。」「としかつ  
 八〇九 六 行機でもとんでくると、そのあわてかた  
 八一〇 三 たりおこつたりすると、赤い口をあけて、  
 八一〇 五 六 。また、どうかすると、歩いているとき、  
 八一三 八 ほおじろの声をきくと、ピオのすがたがあ  
 八一四 九 六 暑い夏がやってくると、たまごは、はじめ

八一六 九 これは、木からいうとめいわくしごくな  
 八一九 七 、七年もかからないと、親になることがで  
 八二一 一〇 六 は、それにとりつくと、まえ足のつめでか  
 八二三 五 きなおつたかと思うと、からだはすっかり  
 八二四 二 六 っとさすころになると、せみの羽は、ぶる  
 八二四 五 ます。しばらくすると、れいのあおぎりの  
 八二八 八 とびたつたかと思うと、その鳴いているな  
 八二八 四 、やがて、秋になると、みんな死んでしま  
 八二八 四 六 て車を走らせていくと、林の中にごてんが  
 八三二 九 六 よいよその日になると、けんぎゅうは、黒  
 八三三 一〇 六 のきよになりますと、これでは、もうま  
 八三六 六 の早さで計算しますと、太陽から発した光  
 八三八 八 とどく時間ではかると、あの星と地球との  
 八三六 一 六 なって天の川をみると、なんともいえない  
 八三七 七 六 んぽぽをつんでくると、王さまは、「略」  
 八三八 二 六 ぞえておいでになると、み知らぬ人がはい  
 八四一 一 六 のみになろうとすると、コーヒーはこがね  
 八四一 二 六 しあがろうとなさると、これもこがねのさ  
 八四二 八 六 なっていらつしやると、きのうの、み知ら  
 八四六 七 六 せん。金持だと思ふとからだがよかった  
 八四六 八 六 からだがじょうぶだとちえがたりなかった  
 八四六 九 六 らしているかと思うと、友だちがいなかっ  
 八四七 四 六 どんどん歩いていくと、さびしい村にさし  
 八五〇 九 六 をたずねていきますと、いぬのかつてある  
 八五三 一〇 六 の家の人がでてみると、まづしいこじきの  
 八五六 二 六 早くはまにでてみると、目のとどくかぎり  
 八五六 五 六 からふり返つてみると、足あとが曲がつて  
 八五七 五 六 てきた足あとをみると、みちがえるように  
 八五八 三 六 方をふり返つてみると、足もとの森や林の  
 八五八 一〇 六 らし台に立つてみると、目のまえに高い山  
 八五八 一〇 六 いている。下をみると、大きな川が遠くへ  
 八六一 六 一 六 」「と親あひるがいうと、ひなたちはすぐと

八六五 だ。「略」というと、ひなたちも一わず  
 八六八 なたちが通っていくと、一わの鳥が、「略  
 八六八 が、「略」というと、もう一わの鳥がと  
 八八五 ぐってそこへいくと、それはさっぱりし  
 八八四 たちがみえなくなると、すぐ水のどんぞこ  
 八九二 は、「略」というと、年をとったはくち  
 八九六 手ですくってみますと、かるいもみともみ  
 八九九 えました。こうすると、なわしろにまいて  
 八九六 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎ  
 八〇二 いたので、水をやるとうれしそうです。  
 八〇二 ぶを虫めがねでみると、毛のようなものが  
 八〇四 あとをさわってみると、いままでべしゃん  
 八〇五 先生におきしますと、うんかのたまごだ  
 八〇五 の数を数えてみますと、大きなかぶは30本  
 九四三 に赤い色をぬりますと、明かるい感じにな  
 九四三 ばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは感  
 九四七 どり色をぬってみると、また、ちがった感  
 九五〇 っしょにひいてみると、ままとはちがった  
 九六二 と組みあわせてみると、さらにちがった氣  
 九六七 音をうまくあわせると、とけあつた美しい  
 九七四 字でよんだりますと、夜のしずかなけし  
 九八二 とばの組みあわせだと、すぐ心にものを思  
 九八三 まりたくさん重ねると、ごちゃごちゃにな  
 九八三 っさいにきいてみると、たしかに水の音で  
 九八三 い。よくきいてみると、たしかに風の音に  
 九八四 らんでいゝのを見ると、なにかしら相談で  
 九八六 月のなかばをすぎると、つばめは、そろそ  
 九八六 ました。それによると、さいたま縣のある  
 九八六 いてくる人があると、たちまち、そのか  
 九八六 ったつばめを加えると、十万ばあまりにな  
 九八六 とをしらべてみますと、やはりそうである  
 九八六 本に春がくると思うと、もう矢もたてもた

九二五 でしょう。春になると、だれもが、このめ  
 九二五 先生のことを思うと、みなさんがうらや  
 九二五 えをちよつとでると、はるか下の方に美  
 九三三 大きなのになると、三十センチあまり  
 九三三 びきもとつてくると、うちの家族七人が  
 九三三 が、深いものになると、一メートルあまり  
 九三三 のぞいておかないといけないといわれて  
 九三三 とつて口へいれると、つめたくてあまい  
 九三三 ガサと落ちてくると、うれしくなります  
 九三三 高い木をみつけると、兄かぼくのぼる  
 九三三 やつとおりでくると、からだじゅうがあ  
 九三三 りをみまわしますと、はるか向こうの山  
 九三三 っているのを見ると、いまにもものぼつて  
 九三三 。おもてにでてみると、まわりの山は、み  
 九三三 た風がザアツとふくと、くりの木はバラバ  
 九三三 は、すこしいきますと、そこはもう、「ふ  
 九三三 またすこしいきますと、一本のぶなの木の  
 九三三 が、またすこしいくと、一本のくるみの木  
 九三三 、その坂を登りますと、にわかにはつと明  
 九三三 略」とたずねますと、男は、きゆうにま  
 九三三 てふり返つてみますと、そこに、やまねこ  
 九三三 思いながらみていると、やまねこは、ひげ  
 九三三 してかがんでみますと、草の中にあつち  
 九三三 のでした。よくみると、これはみんな赤い  
 九三三 になりました。みると、やまねこは、もう  
 九三三 にいばつていいますと、どんぐりどもは、  
 九三三 「略」といいますと、やまねこは、まだ  
 九三三 ました。そこへ着くと、先生はステッキを  
 九三三 れで、ここをほると、そういうものがみ  
 九三三 にもみつからないと、だめだと思つてや  
 九三三 のぞきにいつてみると、先生のかごの中に  
 九三三 生におたずねしますと、「略」と、しず

九三三 さる。しばらくすると、たかきもさがし物  
 九三三 、やまだの顔をみると、きゆうにまたつん  
 九三三 まん話をはじめる、自分がいちばんり  
 九三三 だか、いま考えるとはずかしい氣持さ。  
 九三三 だんのぼり坂になると、からだかほつて  
 九三三 きゆうな坂にかかると、まえの方で、のだ  
 九三三 声にさげんだ。みると、大きなうさが、  
 九三三 でさされる方をみると、なるほどりっぱな  
 九三三 「と、みんながいうと、「略」と、いし  
 九三三 へきて、急停止すると、ぱつと雪けむりが  
 九三三 んなが急停止すると、雪けむりが一どに  
 九三三 ぶりにみとれていると、先生たちは、もう  
 九三三 い制動をかけられると、もうもうと雪けむ  
 九三三 。みんなそこへいくと、いま、いしい先生  
 九三三 して谷をおりてくると、そこに小石でかこ  
 九三三 れをすくおうとすると、おく山の雪がとけ  
 九三三 れで茶をたててみると、いままで味わつた  
 九三三 れこむところへくると、ときどきあまい水  
 九三三 った。ここまできると、てんりゅう川もよ  
 九三三 ころの近くまでくると、いい味の味は、左  
 九三三 水をにて飲んでみると、たいへんうまかつ  
 九三三 流の水を飲んでみると、もうそれはただの  
 九三三 って水を飲んでみると、いい味は、すこし  
 九三三 こで氣をつけてみると、右岸からさらさら  
 九三三 をくんで飲んでみると、それこそまぎれも  
 九三三 をさらにさかのぼると、岩まからよろち  
 九三三 りとびかかつていくと、あぶは、力いっぱ  
 九三三 うまくひっかかるというな。「くもが、  
 九三三 ころして待つてみると、みつばちは、くも  
 九三三 。ぐずぐずしてると、そのままたべられ  
 九三三 てしずかにしていると、また、パタパタと  
 九三三 思わすそちらをみると、こうもりは、ひょ

九三二 もが氣がついてみると、あたりにいいにお  
 九三三 においをかいでいると、いつのまにか、い  
 九三六 ぎに思つてよくみると、それは白いちよう  
 九三九 した。こう頼まれると、だまつてたべてし  
 九四〇 をひろげたかと思ふと、ひらりひらりと舞  
 九四一 ました。目をつむると、だれかが、くもの  
 九四二 ています。上をみると、わらつてゐるでは  
 九四三 かの虫がひつかかると、いきなりとびつい  
 九四四 る夜つゆをみていると、風がふいてきまし  
 九四五 へ。こう決心がつくと、くもは、すっかり  
 九四六 すぎる。耳をすますと、なにか、かすかな  
 九四七 遊んでいたりしますと、そのなかまいりを  
 九四八 してもらつていますと、きまつて、その少  
 九四九 十十七六 といふ遠い國へいくと、自分の國のことば  
 九五〇 すが、わけてみると、こんなにさまざま  
 九五一 った。ためしてみると、はたしてよく動い  
 九五二 たが、しらべてみると、けつして、ふしぎ  
 九五三 、あとで開いてみると、もとのまになつ  
 九五四 と母目を開いていくと、どれにも眞珠が、  
 九五五 なる——まんていうと二年三月月になる妹  
 九五六 らでてしばらくいくと、道のまん中に、黒  
 九五七 いぬに近よつてみると、ひふ病にかかつて  
 九五八 足をあげたかと思ふと、その足をなめたの  
 九五九 六歩いったかと思ふと、よそのおばさんが  
 九六〇 を通りました。みると、なるほど、「アカ  
 九六一 ルワ」といつてゐると、いぬがもつくりお  
 九六二 ます。かたにかけると重いから手に持つ  
 九六三 かるのか、ふり向くと、いぬは、立ちあが  
 九六四 きらめて歩きかけると、水おけがありまし  
 九六五 ういてきたかと思ふと、また、すぐ水そこ  
 九六六 きめてあるきかけると、道のわきで、たき  
 九六七 ました。むりに書く、自分がほんとうに

九五七 、おじいさんになるとかわいそうね。い  
 九五八 っ、学校から帰ると、おかあさんが、「へ  
 九五九 く、それをみてゐると、世の中のうらおも  
 九六〇 をあけるときになると、「略。」と、ふる  
 九六一 上のおきをながめると、大きな汽船がけむ  
 九六二 上の方をながめると、近くの町の工場の  
 九六三 が、それにあきると、そのボートをなが  
 九六四 う。それをおうと、ぼくは胸がわくわ  
 九六五 本バックをやると、ボートは向きをか  
 九六六 れずこいでいくと、乗り組んでゐる者  
 九六七 ンをおひきになると、オルガンのキカ  
 九六八 困つて頼みになると、氣持よく、物をわ  
 九六九 、家に帰つてくると、晝まの働きでつか  
 九七〇 てから、夜になると、ため息ばかりつ  
 九七一 郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうちから  
 九七二 でした。夜になると、また、なわをな  
 九七三 り返し読んでみると、りっぱな人になる  
 九七四 郎は、それを読むとうれしくなり、いっ  
 九七五 た。お正月がくると、例年のことで、だ  
 九七六 ます。百文はらうと、おもしろい藝をし  
 九七七 野山をかざると、おも赤く畑にさ  
 九七八 じゃがいもをみると、ぼくは、北海道の  
 九七九 「略。」という、父はにこにこわら  
 九八〇 」と、正男がいうと、一雄はすぐ賛成し  
 九八一 ぼくがことわると、よわ虫だといつて  
 九八二 その知らせをみるとがっかりしましたが  
 九八三 のまゝまできくと、その中にはベッド  
 九八四 やのはしまでいくと、看護人は、一つの  
 九八五 は包みを下におくと、頭を病人のかたの  
 九八六 半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がき  
 九八七 こえました。みると、医者、ひとりの  
 九八八 み物を持つてくると、コップなりさしな

九八九 ました。夜になると、少年は、へやのす  
 九九〇 うして、朝になると、また看病をはじめ  
 九九一 声のひびきをきくと、感謝するような色  
 九九二 るであらうと思ふと、いろいろのことを  
 九九三 さえながら。みると、一方の手にあつく  
 九九四 ひと目少年をみると、こんどはかれがさ  
 九九五 がそばにいないといけないのです。あ  
 九九六 もとの場所に帰ると、病人はほつとした  
 九九七 の成功を祝しますと、ひとりの男が、「へ  
 九九八 て戸をたたきますと、おくらひとりの  
 九九九 、孟子の顔をみると、つと立つて、そば  
 一〇〇〇 びっくりしてゐると、母は、いままでた  
 一〇〇一 へ。」とたずねますと、母は、「略。」と  
 一〇〇二 りのけようとすると、大きなえんまこお  
 一〇〇三 文雄が手をのぼすと、すばやくあなの中  
 一〇〇四 た。下がきがすむと、パレットの上にチ  
 一〇〇五 にぬりつけてみると、思いもよらない色  
 一〇〇六 よくきいてみると、じょうずなものあ  
 一〇〇七 へ。」「そこへいくと、こおろぎさんより  
 一〇〇八 しやったりすると、なんとなくさびし  
 一〇〇九 校から帰つてくると、わたしは民ちゃん  
 一〇一〇 たままほつておくと、民ちゃんは平氣で  
 一〇一一 とりつく物があるとすぐに立ちあがつて  
 一〇一二 意などをしていると、とりついてぐんぐ  
 一〇一三 ちへいくとなると、すぐに手をついて  
 一〇一四 すが、いざりだすとなかなか早いもので  
 一〇一五 こにいたかと思ふと、もう次のへやには  
 一〇一六 は、物を持たせると立つことができる  
 一〇一七 包みをとりあげると、よちよちと立ちあ  
 一〇一八 もとをひいてやると、民ちゃんは、ぼつ  
 一〇一九 略。」立ちあがると、民ちゃんは、はじ  
 一〇二〇 校から帰つてくると、姉が大さわざして

十二<sup>29</sup><sub>12</sub> いてやろうとすると、かぶりをふって、  
 十二<sup>33</sup><sub>4</sub> 形と遊んでいますと、先生は、私の手に  
 十二<sup>34</sup><sub>9</sub> つて遊んでいますと、サリバン先生が、  
 十二<sup>38</sup><sub>4</sub> です。へやに帰るとすぐ、私は、自分が  
 十二<sup>45</sup><sub>9</sub> いて、みていると別世界にいったよう  
 十二<sup>48</sup><sub>8</sub> づ、作ってみるといいよ。」〔略〕。」「  
 十二<sup>53</sup><sub>7</sub> けた着物を裏返すとできあがる。二一  
 十二<sup>56</sup><sub>4</sub> 全国で調べてみると、よくにたようなの  
 十二<sup>60</sup><sub>11</sub> た日をさしまねくと、さすがの太陽も、  
 十二<sup>61</sup><sub>2</sub> あくる朝ながめると、高どのは消えてし  
 十二<sup>61</sup><sub>11</sub> よく日いつてみると、頼んだ品物がちゃ  
 十二<sup>62</sup><sub>8</sub> しごとをしていると、のどがかわいてき  
 十二<sup>62</sup><sub>10</sub> 川の岸にでてみると、美しい小魚がおよ  
 十二<sup>63</sup><sub>10</sub> 水ぞこにとびこむと、小川がひろがって  
 十二<sup>67</sup><sub>10</sub> よじつておかないと、なんの役にもた  
 十二<sup>69</sup><sub>3</sub> きをかけていないと、じき、役にたたな  
 十二<sup>71</sup><sub>3</sub> た、まきが少ないと、近所へ木をひろい  
 十二<sup>71</sup><sub>10</sub> ら、雪が早く降るといふと待ち遠し  
 十二<sup>75</sup><sub>11</sub> られるかと思うと、どうしてもこず  
 十二<sup>77</sup><sub>9</sub> 場にもどつてくると、中国人らしい十一  
 十二<sup>78</sup><sub>9</sub> 、よくみえますと、どこかしら日本人  
 十二<sup>89</sup><sub>1</sub> ない。そうでないと、相手の人に満足  
 十二<sup>94</sup><sub>5</sub> のようにまると、だれでも読んで、  
 十二<sup>95</sup><sub>6</sub> 校庭に立っていると、赤とんぼが自分の  
 十二<sup>95</sup><sub>11</sub> ん読まれてしまうと、読み手の思いでや  
 十二<sup>96</sup><sub>7</sub> 帳をひろげてみると、あなたがたの家の  
 十二<sup>99</sup><sub>6</sub> 関係についていうと、おしべのかふんが  
 十二<sup>99</sup><sub>12</sub> んせん病がはやると、ほうき星が出たか  
 十二<sup>12</sup><sub>8</sub> リレオ 朝になると、日は東の空からの  
 十二<sup>12</sup><sub>8</sub> り、夕がたになると、西の空にしみま  
 十三<sup>16</sup><sub>6</sub> まったのかという、そんなことはあり  
 十三<sup>20</sup><sub>12</sub> 際に試験してみると、もみの木ははえる

十三<sup>21</sup><sub>9</sub> の間に植えてみると、両種のみは、た  
 十三<sup>22</sup><sub>5</sub> 大きなままでのびると、そこで生長をとめ  
 十三<sup>23</sup><sub>6</sub> 際にためしみると、そのとおりになり  
 十三<sup>23</sup><sub>8</sub> が、それをこえると、かえってさまたげ  
 十三<sup>29</sup><sub>2</sub> ユーン」がとまると、そこでは、どこか  
 十三<sup>29</sup><sub>12</sub> おく。歩いて行くと荷がゆれて、しぜん  
 十三<sup>32</sup><sub>10</sub> 鳴りものであると、呼び声であらうと  
 十三<sup>32</sup><sub>10</sub> 、呼び声であらうと、トンネルのような  
 十三<sup>35</sup><sub>2</sub> 味がわかつてくると、いつそその美し  
 十三<sup>35</sup><sub>10</sub> わう。早春になると、はとぶえが天から  
 十三<sup>35</sup><sub>12</sub> のであるが、とぶと、風を受けてそのふ  
 十三<sup>36</sup><sub>1</sub> なつてとんで来ると、ふえの音がおのず  
 十三<sup>36</sup><sub>7</sub> 、風がふいてくると、ころころと音が  
 十三<sup>40</sup><sub>2</sub> て読む。読み終ると、また電話口に行き  
 十三<sup>44</sup><sub>5</sub> ではないかという、そうではなく、こ  
 十三<sup>50</sup><sub>1</sub> ちそうをならべると、その木のかげで、  
 十三<sup>51</sup><sub>3</sub> しがしたでなめると、よろけるんだよ。  
 十三<sup>51</sup><sub>8</sub> 心は、にじを見たとおどる。おさないこ  
 十三<sup>54</sup><sub>3</sub> は、その絵を見ると、そのあかちゃんが  
 十三<sup>55</sup><sub>3</sub> をだして見せると、「略。」といつて  
 十三<sup>55</sup><sub>10</sub> のとくらべてみると、ずいぶんちがつて  
 十三<sup>56</sup><sub>1</sub> おじさんで見ると、いつそ生き生き  
 十三<sup>59</sup><sub>4</sub> だいて立っていると、老人のぼうさんら  
 十三<sup>60</sup><sub>12</sub> うまさからいうと、ラファエルのほう  
 十四<sup>10</sup><sub>8</sub> おもらいになるといいと思います。ち  
 十四<sup>19</sup><sub>5</sub> えられないでいると、高山くんが、「略  
 十四<sup>20</sup><sub>4</sub> みんなが席につくと、先生は、私たちの  
 十四<sup>22</sup><sub>6</sub> ふしぎそうにいうと、先生は、「略。」  
 十四<sup>25</sup><sub>7</sub> の中でできくると、ことばも、それに  
 十四<sup>25</sup><sub>12</sub> い。そうしてみると、このあいだ、先生  
 十四<sup>26</sup><sub>4</sub> 考えあわせてみると、コレラは、オラン  
 十四<sup>27</sup><sub>4</sub> とをおたずねすると、先生は、「略。」

十四<sup>28</sup><sub>2</sub> 典をひいてみると、だいたいわかる。  
 十四<sup>28</sup><sub>5</sub> 、それを調べると、なおいっそうよく  
 十四<sup>29</sup><sub>3</sub> いたいなどという、どこかにしまつて  
 十四<sup>33</sup><sub>11</sub> 界の全部かという、なかなかそうでは  
 十四<sup>34</sup><sub>3</sub> 。こうなつてくると、うちゅうというも  
 十四<sup>34</sup><sub>5</sub> ン博士の話によると、うちゅうは、けっ  
 十四<sup>34</sup><sub>11</sub> 。地球などになると、なおさら、ごくこ  
 十四<sup>35</sup><sub>12</sub> 星をながめてみると、はてしのない、遠  
 十四<sup>36</sup><sub>7</sub> 聞くところによると、キューリー夫人は  
 十四<sup>42</sup><sub>8</sub> 、なにがごとくと、平氣じゃないか。  
 十四<sup>43</sup><sub>7</sub> 、なにがごとくと、平氣じゃないか。  
 十四<sup>48</sup><sub>6</sub> た。近づいてみると、船がしずむひよう  
 十四<sup>57</sup><sub>6</sub> 外で聞いていると、あなたたちは、ず  
 十四<sup>62</sup><sub>5</sub> をつけて見ていると、だんだんに、いろ  
 十四<sup>63</sup><sub>5</sub> いてすかして見ると、しずくのつぶの大  
 十四<sup>63</sup><sub>7</sub> 光にすかして見ると、湯げの中に、にじ  
 十四<sup>64</sup><sub>9</sub> からすかして見ると、ちようど、けむり  
 十四<sup>64</sup><sub>11</sub> る湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるい  
 十四<sup>65</sup><sub>1</sub> まわらないときだと、ことによくわか  
 十四<sup>65</sup><sub>1</sub> ます。熱い湯ですと、湯げの温度が高く  
 十四<sup>65</sup><sub>3</sub> 対に、湯がぬるいと、いきおいがよわ  
 十四<sup>65</sup><sub>5</sub> 分でためしてみると、おもしろいでしょ  
 十四<sup>65</sup><sub>9</sub> た、よく見ていると、なかなかおもしろ  
 十四<sup>66</sup><sub>5</sub> げなどのばあいだと、もう、茶わんのす  
 十四<sup>68</sup><sub>1</sub> にあたためられると、そこだけは、地面  
 十四<sup>68</sup><sub>3</sub> われた地方があると、あたたかい空気が  
 十四<sup>68</sup><sub>7</sub> ばあいにくらべると、しくみがずっと大  
 十四<sup>70</sup><sub>4</sub> の光をあてて見ると、もつとよく、あざ  
 十四<sup>71</sup><sub>1</sub> ります。そうになると、茶わんに接したと  
 十四<sup>72</sup><sub>6</sub> れに日光をあてると、熱いところとつめ  
 十四<sup>72</sup><sub>11</sub> 根をすかして見ると、ちらちらしたもの  
 十四<sup>73</sup><sub>1</sub> 屋根が熱せられると、それに接した空気が

十四73 6 光にすかして見ると、湯のおもてに、に  
 十四74 9 きます。そうなると、いろいろの実用上  
 十四75 6 ようなところだと、畑のほうで、森よ  
 十四75 11 、森の上へかかると、飛行機は、しぜん  
 十四76 1 まりはげしくなると、きけんになるので  
 十四76 8 洋との間におこると、それがいわゆる季  
 十四77 4 えようとしていると、祖父が来て、「木  
 十四77 10 から割ろうとする」と、たとい、はじめに  
 十四78 4 ほう、いいかえると、竹の先のほうから  
 十四78 5 うから割ってみると、もとまで、きれい  
 十四78 11 いるところを見ると、はじめ、うらのほ  
 十四79 4 はものをうちこむと、まっすぐに割れて  
 十四79 7 とを友だちに話すと、「略。」と教えて  
 十四80 2 うか。ことによると、なん百年という前  
 十四84 2 あるが、よく見ると、まことにきれいな  
 十四85 1 しく観察してみると、その雪が、どこで  
 十四88 2 じの道をながめると、一直線ではなく、  
 十四96 3 のぼした。と思うと、そのとき、ほのお  
 十四96 8 ゆらともえあがると、まあ、なんという  
 十五19 4 の町からながめると、まっ白に雪をいた  
 十五22 11 へ顔を向けて見ると、三メートルもある  
 十五23 4 と気がついてみると、いままで先生のそ  
 十五23 6 かけまわる。見ると、そのがけの下の方  
 十五24 5 おりて来ていますと、急に目の前へ、大  
 十五24 7 ません。そう思うと、勇ましいひつじか  
 十五28 1 をさせたかと思うと、もうたまらなくな  
 十五30 5 いたったかと思うと、こんどは両羽をあ  
 十五31 10 でも気をゆるめると、鳥のくちばしでつ  
 十五32 8 音がしたかと思うと、いままでむちゅう  
 十五32 12 したが、気がつくとも、もう自分のまわり  
 十五41 11 ローマ字をつかうと、字数が少なくてす  
 十五42 7 かし、考えてみると、世界のどこに、こ

十五53 3 、用事をきりだすと、話に聞きいって  
 十五56 11 会、指おり数えると数十年の昔になるが  
 十五69 1 へき面を見あげると、おじさんの大きな  
 十五69 6 とばに目をうつすと、おじさんが日夜ふ  
 十五76 6 の手をさしのべると、博士は満面にこ  
 十五82 2 雲のまがががると、園の前の方に、高  
 十五83 6 会、ことによるとちよいとでも、この  
 十五91 1 会、を、みんな見るといいですよ。」チ  
 十五92 3 ルチルがふと見ると、かれらはみんなと  
 十五103 8 会、夕がたになると、これが『日ぐれの  
 十五103 11 会、お天気が変わると、これが、『雨の幸  
 十五106 8 会、うっちゃられると、ぼくたちは、『不  
 十五110 9 会、——うちにいると、それが見えないが  
 十五112 6 会、目を閉じていると、なんにも見えない  
 十五114 5 会、愛、うちにいるとね、あんまり用が多  
 十五116 11 会、きり顔を見せると、『幸福』たちがこ  
 十五119 7 会、れて顔をあげますと、ふたりの目にはな  
 十五120 2 会、お話を聞いていると、ずっとまえのこと  
 と（並助） 326 と、ひありときりぎりす・ありとは  
 と・ここところ・せつきとどき・せんせいとみ  
 なさんへ・ちしきとめいしん・つきとくも・てとあ  
 し・どんぐりとやまねこ・のうときようげんについ  
 て・やとうた・ゆめとつくえ  
 二87 会、うのつくことばと、『え』のつくこ  
 二101 会、さんは、『人のなと、そうでないもの  
 二101 会、そうでないものなと、わけたらいい  
 二105 会、んは、『くさのなと、とりのなと、そ  
 二105 会、など、とりのなと、そのほかのもの  
 二105 会、そのほかのものなと、わけたらいい  
 二109 会、目にみえるものと、みえないものと  
 二109 会、みえないものなと、わけたらいい  
 二25 3 会、うは、いちろうさんと、さだおさんと、す

二25 3 さんと、さだおさんと、すみこさんと、く  
 二25 4 さんと、すみこさんと、くにおさんと、た  
 二25 4 さんと、くにおさんと、たけこさんと、こ  
 二25 4 さんと、たけこさんと、この五人のぼん  
 二28 2 会、いいました。やぎとやぎと、せまいは  
 二28 2 会、た。やぎとやぎと、せまいはしの上  
 二39 1 会、山の中たろうとおとうさんが、山  
 三10 1 会、しゃかさま。上と下とをゆびさして  
 三10 1 会、さま。上と下とをゆびさして、  
 三21 2 会、に。『川にいてる魚と海にいてる魚とを  
 三21 2 会、魚と海にいてる魚とをわけなさい。』四  
 三43 6 会、とぼくのなかまど、どっちが多いか、  
 三43 6 会、いけなさい。右手と左手をはんたいに  
 三64 7 会、だれにもひるとよるがあるのです  
 三77 8 会、学校へいくときと、かえるときにこ  
 三91 2 会、でも、おじいさんとおばあさんのおそ  
 三104 10 会、ました。おじいさんとおばあさんはおど  
 三109 7 会、ひめは、おじいさんとおばあさんに、「へ  
 三113 7 会、へおわかれの手紙とふしのくすりを  
 三116 3 会、て、ふしのくすりと手紙は、かえって  
 三117 4 会、ふしのくすりと手紙をやきすてよ  
 四71 8 会、びき。『ようふくとげた。』これにあ  
 四71 9 会、おもちのねこと、いぬとをあげま  
 四72 1 会、やのねこと、いぬとをあげます。『にや  
 四76 10 会、うに。ね——ねずみとねこのかけっこ。  
 四77 1 会、かけっこ。な——なつと冬。ら——ラジオ  
 四79 2 会、ぼり。き——きしゃときせん。ゆ——ゆ  
 四79 6 会、いもの。み——右と左とちがえぬよう  
 四79 6 会、の。み——右と左とちがえぬように。  
 四102 4 会、めところ。うみべとうみの中うらし  
 五93 会、こかのおばあさんとぼっちゃん、乗っ

五11 10 ㊦、なにかしら。赤と青のしるしのついた  
 五18 3 北の方へいく友だちと、南の方へいく友だ  
 五18 4 南の方へいく友だちと、西の方へいく友だ  
 五18 4 西の方へいく友だちと、東の方へいく友だ  
 五65 2 海べに、おじいさんとおばあさんが、住ん  
 五80 2 略。」「川の中の石と石とが、おどつてい  
 五80 2 。「川の中の石と石とが、おどつていま  
 六7 6 だしてきた。男の子と女の子である。ふた  
 六41 6 くる。35 親つばめと子つばめが、かかし  
 六51 3 ていました。ふみおと、よしおと、みちこ  
 六51 3 。ふみおと、よしおと、みちこの三人が、  
 六54 2 あげました。よしおとみちこが「略。」「  
 六59 2 もとさんです。七と五と 私は、きのう  
 六59 2 さんです。七と五と 私は、きのう、お  
 六79 10 た。そうして、自分とあさがおの花とが、  
 六79 11 自分とあさがおの花とが、たいへん近いも  
 六82 9 ㊦ にいさんはこの弓と矢を持っていらっし  
 六99 4 た古いめがねのたまと、おとうさんにかっ  
 六104 4 略。」「略。」「ぼくとおかあさんは、かわ  
 六107 8 。発音できることばと、できないことばと  
 六107 8 と、できないことばとがある、ということ  
 六107 11 いえなくなることばと、はながつまつても  
 六108 1 つてもいえることばとがあるのだらう、と  
 六109 3 「あのね」の「ノ」と「ネ」、「にいさん」  
 六117 4 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹  
 六117 4 にするほそい竹二本と、それに、たこ糸や  
 六118 9 です。骨は、たて骨とよこ骨の二本です。  
 六119 2 切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつ  
 六119 2 、小さな紙で上と下とまん中をはりつけま  
 六126 7 ㊦。「そっちのあなと、こっちのあなとつ  
 六126 7 ㊦と、こっちのあなとつづけようか。」「へ  
 六135 6 五ひきのうさぎさんと、しかさんとは、風

六135 7 ぎさんと、しかさんとは、風のように走り  
 七14 11 腹に思っていることと、いうことが、ち  
 七14 11 ることと、いうことが、ちがう人がある  
 七34 8 人もありました。私と弟のさぶろうは、乗  
 七35 3 、おしまいは、私とさぶろうとは、まる  
 七35 3 には、私とさぶろうとは、まるで、一つか  
 七38 5 したので、私は、人と人のあいだをかきわ  
 七46 7 、たがやしている父と子、きりの花——曲  
 七48 2 。はじめに書いたのと、二回めに書いたの  
 七48 2 、二回めに書いたのとを、くらべてごらん  
 七50 5 じめに、ぼくの学校とひがし村の学校とが  
 七50 5 校とひがし村の学校とが、しあいをするこ  
 七56 5 。海がみえます。家と家とのあいだに、ほ  
 七56 5 がみえます。家と家とのあいだに、ほそ長  
 七66 1 りの麦のほ、子どもと子どもとかけていく  
 七66 1 ほ、子どもと子どもとかけていく。もみじ  
 七74 7 一の場面 人 甲と乙、ほかに、ひとり  
 七80 1 ところ 法廷。旅人と甲乙が、ならんでい  
 七86 4 先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶  
 七86 4 さぎと、白いうさぎと、茶色のうさぎを、  
 七87 2 ようは、れんげそうとなたねの葉をやりま  
 七88 2 雨 15度 にんじんとじゃがいもをやった  
 七88 2 いもをやったら、黒と白が、けんかをして  
 七88 5 ち晴 15度 はこべとおおぼこをやったら  
 七89 4 。白うさぎが9ひきと、黒うさぎを1ひき  
 七92 3 1ひきの白いうさぎと、茶色のうさぎは、  
 七98 8 日めです。子うさぎと母うさぎのめかたを  
 七99 3 た。耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色  
 七99 5 さみたら、母うさぎと7ひきの子うさぎは  
 八20 6 ってくるあたかさと、かわきかたとい  
 八20 6 かさと、かわきかたとい、いまが夏だとい  
 八34 8 ではかると、あの星と地球とのきよりは、

八34 8 ると、あの星と地球とのきよりは、二十分  
 八43 1 ㊦ あなたは、こがねと一ぱいの水と、どち  
 八43 1 ㊦ がねと一ぱいの水と、どちらをえらびま  
 八43 3 ㊦ 「略。」「こがねと一ぱいのパンとでは  
 八43 3 ㊦ ねと一ぱいのパンとでは。」「略。」「へ  
 八43 5 ㊦ 「略。」「こがねと王女は。」「略。」「  
 八77 9 おばあさんが、ねことにわとりといっしょ  
 八80 7 へ、さわやかな空気と日の光が流れてきた  
 八91 3 受けてきたまじしさとふしあわせとをかせ  
 八91 3 ずしさとふしあわせとをかせつて喜んだ。  
 八94 6 ますと、かるいもみともみがらばかりでし  
 八99 4 に3本ずつ植えたのと、1本ずつ植えたの  
 八99 4 、1本ずつ植えたのと二とおりにして、く  
 八100 9 ㊦ 晴 29度 葉と葉のあいだから、新  
 八108 2 た。こんどは、もみとごみをわけました。  
 八108 8 ふうしました。いたといたのあいだにもみ  
 九5 10 るものです。この音と、ほかの音とをいっ  
 九5 10 この音と、ほかの音とをいっしょにひいて  
 九34 5 ㊦ のところ。母と、おぼと、兄と、妹  
 九34 6 ㊦ です。母と、おぼと、兄と、妹と、ぼく  
 九34 6 ㊦ 母と、おぼと、兄と、妹と、ぼくの五人  
 九34 6 ㊦ おぼと、兄と、妹と、ぼくの五人で、三  
 九36 3 ㊦ なかこうがんの岩と岩とのあいだを流れ  
 九36 3 ㊦ こうがんの岩と岩とのあいだを流れ落ち  
 九41 5 ㊦ 木とりになれたのと、山へいくたびに、  
 九46 8 ㊦ の運動場で、先生とみなさんが、ゆかい  
 九72 3 ㊦ んぐり二リットルと、しおさけの頭と、  
 九72 3 ㊦ と、しおさけの頭と、どちらがおすきで  
 九88 4 ㊦ まくがあく。たかぎとやまだが左右にひき  
 九104 3 ㊦ 四十人は、のだ先生といし先生につれら  
 九127 2 ㊦ もがいました。黄色と黒のしままようのつ  
 九127 6 ㊦ た、このくもは、木と木のあいだに、巢を

15 12 日の生活のらんざつとあわただしさの中に  
 14 10 ⑤ してから、「日本とフランスとは、どち  
 14 10 ⑤ 「日本とフランスとは、どちらがきれい  
 26 7 、はればれとした父と子。四 あなたの  
 39 9 けであったが、理論と実際とは、そうやす  
 39 9 ったが、理論と実際とは、そうやすやすと  
 42 4 った。「略」幸吉とうめは、たがいに  
 57 6 いにさきました。白と、もも色と、こいも  
 57 6 した。白と、もも色と、こいも色のがさ  
 58 10 なのよし子ちゃんと、なお子ちゃんに、  
 65 2 、よく、太郎かじやと次郎かじやが、現わ  
 66 11 ⑤ 「略」太郎かじやと次郎かじやは、声  
 67 1 ⑤ いかから、太郎かじやと次郎かじやは、は  
 74 9 ⑤ 「略」太郎かじやと次郎かじやは、こ  
 9 9 ⑤ 大きな船の船長と、コックスと、ど  
 9 9 ⑤ 長と、コックスと、どっちがむずかし  
 16 4 ばん美しい花、天と地にかがやくものの  
 17 4 っているいいことと、正しいことは、お  
 44 4 あります。子どもと父兄と、いっしょに  
 44 4 ⑤ す。子どもと父兄と、いっしょに呼ばれ  
 52 9 ごとに、おりる人と乗る人ともみくち  
 52 9 ⑤ おりる人と乗る人ともみくちやにな  
 59 6 ⑤ 『ということばと、「いいえ」という  
 59 9 ⑤ は、友だちの正男と一雄と三人づれで、  
 64 6 いて、帰ったことと、病院にはいったこ  
 70 2 ⑤ た。ただ、ひたいと弓形をしたまゆとの  
 70 2 ⑤ と弓形をしたまゆとのほかに、どこと  
 73 5 ⑤ 。さっきの看護婦と、もうひとりの看護  
 73 5 ⑤ うひとりの看護婦とがついていました。  
 78 7 ⑤ 話す声に——愛情とかなしみとのまじり  
 78 7 ⑤ —愛情とかなしみとのまじりあった、し  
 78 12 ⑤ こしばかりのパンとチーズも、ほとんど

79 5 休めるような希望と、胸をこおらせるよ  
 79 6 ⑤ らせるような失望とのあいだで、たえず  
 88 1 ⑤ ました。その熱心とそのしんぼう強さと  
 88 1 ⑤ そのしんぼう強さと、まえとすこしも  
 89 5 ⑤ 、医者が、看護婦と看護人をつれてはい  
 76 ⑤ 女とやまぶきの花とをみくらべるばかり  
 76 ⑤ は、かわいいいめいとおいにあたります。  
 24 3 ⑤ のようなおどろきとふしぎが私を待って  
 32 2 ⑤ 子どもらしい喜びと得意さに大はしゃぎ  
 33 9 ⑤ 私は、「ゆのみ」と「水」とでたいへん  
 35 1 ⑤ ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しんだ  
 35 1 ⑤ を目ざめさせ、光と希望と喜びとを興え  
 37 9 ⑤ めさせ、光と希望と喜びとを興えること  
 37 10 ⑤ 、光と希望と喜びとを興えることにな  
 37 10 ⑤ じめて、くやむ心と悲しみに胸をささ  
 38 8 ⑤ くやむ心と悲しみに胸をさされました  
 41 5 ⑤ から、進んで、手と手をにぎりあい、そ  
 42 5 ⑤ 先生に対する信頼と、サリバン先生のケ  
 42 5 ⑤ ケラーを思う愛情とが、一つになったお  
 44 12 ⑤ だ。からだ全体と右手を受け持つ人、  
 52 7 ⑤ 着物の作りかたと手のつけかた。(1)  
 53 6 ⑤ いつける。(5) 顔と手をつけた着物を裏  
 53 9 ⑤ 中にいれ、おや指となか指を、そでの中  
 67 5 ⑤ て、一つおきに右と左にすこしよじれて  
 67 10 ⑤ やすりをかけて右と左によじっておかな  
 69 6 ⑤ も、それにあつみと廣さがなかったら、  
 77 3 ⑤ ニス選手キンゼーと私とが、いよいよ試  
 77 3 ⑤ 選手キンゼーと私とが、いよいよ試合を  
 77 4 ⑤ スコートには日本とメキシコの国旗が美  
 89 6 ⑤ をこめていうときと、ただとおりの一ぺん  
 89 7 ⑤ つとしていうときとは、いいかたもか

111 10 画で、絵をかく人と、それを木にほりつ  
 111 11 ⑤ 木にほりつける人と、紙にすりあげる人  
 111 11 ⑤ 紙にすりあげる人との共同作品なのです  
 87 ⑤ 識には、浅いものと深いものがあるが、  
 87 ⑤ ものごとの原因と結果との関係や、そ  
 93 ⑤ ごとの原因と結果との関係や、その間に  
 93 ⑤ えば、花のおしべとめしべとの関係につ  
 95 ⑤ のおしべとめしべとの関係についてい  
 96 ⑤ ないようなくふうと、いま一つ、よくつ  
 97 ⑤ いう。一つのことと他のこととの間に、  
 11 3 ⑤ のことと他のこととの間に、すこしのつ  
 11 3 ⑤ がりもなく、原因と結果との関係もない  
 11 4 ⑤ なく、原因と結果との関係もないのに、  
 11 4 ⑤ ろに考えて、原因と結果との関係を調べ  
 11 10 ⑤ えて、原因と結果との関係を調べきわめ  
 11 10 ⑤ ます。これで、夜と晝とがあるわけも、  
 15 5 ⑤ 。これで、夜と晝とがあるわけも、春・  
 15 5 ⑤ は、みどりの牧場と、もみと、しらかば  
 17 2 ⑤ りの牧場と、もみと、しらかばの森林と  
 17 2 ⑤ 、しらかばの森林と、近海の漁場のほか  
 17 3 ⑤ が九州ほどの本國と、三つの島からな  
 17 5 ⑤ 、シユレスウイヒとホルスタインとい  
 17 10 ⑤ ルガス親子の発見と努力によつてもたら  
 23 12 ⑤ たシユレスウイヒとホルスタインとは、  
 25 8 ⑤ ヒとホルスタインとは、すでにつぐなわ  
 25 8 ⑤ 、ダルガスの研究と実行の結果として、  
 25 12 ⑤ 返し、誠実な研究と、がまん強い実行と  
 26 2 ⑤ 、がまん強い実行と、熱誠な共力によつ  
 26 2 ⑤ で、三郎くんの声と動きだけで、四人と  
 45 1 ⑤ でわらう。メアリとスーザンとエミリと  
 48 ⑤ メアリとスーザンとエミリとが、かわい  
 48 ⑤ スーザンとエミリとが、かわい口をま



十三 50 1 ちが、さくらんぼと、くるみのごちそう  
 十三 56 4 ㊦、やっぱり、月と太陽みたいにちがう  
 十三 57 1 ㊦ ミケランジェロとラファエルは、前後  
 十四 10 1 ㊦ のです。ランプとコーヒール入れとは、  
 十四 10 1 ㊦ とコーヒール入れとは、あす、送らせま  
 十四 11 4 ㊦、いま、ランプとコーヒール入れを送  
 十四 11 5 ㊦ とコーヒール入れを送らせました。こ  
 十四 14 8 ㊦ ㊦ 「おかあさんと私とは、おたがい  
 十四 14 8 ㊦ ㊦ かあさんと私とは、おたがいに、そ  
 十四 24 1 ㊦ ㊦ ガル語、キセルとカボチャはカンボジ  
 十四 25 4 ㊦ ㊦ かんできた。ものとことばが、いっしょ  
 十四 32 3 ㊦ ㊦ ません。天上の星とあなたがたとは、あ  
 十四 32 3 ㊦ ㊦ の星とあなたがたとは、あまりにかけは  
 十四 32 9 ㊦ ㊦ 。よそ目には、星と人間とは、たいして  
 十四 32 9 ㊦ ㊦ 目には、星と人間とは、たいして関係が  
 十四 40 11 ㊦ ㊦ ㊦ 五の人「平和と自由の光がさして  
 十四 41 1 ㊦ ㊦ ㊦ る。」みんな「平和と自由。」一の人「友よ  
 十四 55 1 ㊦ ㊦ ㊦ をのぼして、水と養分とを吸いとって  
 十四 55 1 ㊦ ㊦ ㊦ して、水と養分とを吸いとって、夜も  
 十四 57 12 ㊦ ㊦ ㊦ めには、私が熱と光とをゆたかに送っ  
 十四 57 12 ㊦ ㊦ ㊦ は、私が熱と光とをゆたかに送ってや  
 十四 68 11 ㊦ ㊦ ㊦ ては、茶わんの湯と、こうしたら雨の  
 十四 68 12 ㊦ ㊦ ㊦ たら雨のぼあいとは、よほどよくにた  
 十四 72 3 ㊦ ㊦ ㊦ おりてるところと、のぼっているところ  
 十四 72 4 ㊦ ㊦ ㊦ ぼっているところとがほうぼうにできま  
 十四 72 5 ㊦ ㊦ ㊦ までも熱いところと、わりあいぬるい  
 十四 72 5 ㊦ ㊦ ㊦ いにぬるいところとが、いろいろに入り  
 十四 72 7 ㊦ ㊦ ㊦ ると、熱いところとつめたところとの  
 十四 72 7 ㊦ ㊦ ㊦ とつめたところとのさかいで、光が曲  
 十四 74 2 ㊦ ㊦ ㊦ きにできる、熱さとつめたさとのむら  
 十四 74 2 ㊦ ㊦ ㊦ 、熱さとつめたさとのむらが、どうなる  
 十四 75 5 ㊦ ㊦ ㊦ す。たとえば、森と畑とのさかいのよう

十四 75 5 ㊦ ㊦ ㊦ たとえば、森と畑とのさかいのようなど  
 十四 76 3 ㊦ ㊦ ㊦ 大じかけに、陸地と海との間に行われて  
 十四 76 3 ㊦ ㊦ ㊦ かけに、陸地と海との間に行われており  
 十四 76 6 ㊦ ㊦ ㊦ うなことが、山腹と谷との間にあって、  
 十四 76 6 ㊦ ㊦ ㊦ ことが、山腹と谷との間にあって、山谷  
 十四 76 8 ㊦ ㊦ ㊦ えば、アジア大陸と太平洋との間に  
 十四 76 8 ㊦ ㊦ ㊦ ジア大陸と太平洋との間におけると、そ  
 十四 76 10 ㊦ ㊦ ㊦ に受ける北西の風と、夏季の南がかった  
 十四 79 10 ㊦ ㊦ ㊦ を、知っているのといないのでは、たい  
 十四 86 12 ㊦ ㊦ ㊦ 場面の組みあわせと説明のことばなどに  
 十四 93 10 ㊦ ㊦ ㊦ と目でも、火の光とごちそうとを見るだ  
 十四 93 10 ㊦ ㊦ ㊦ 火の光とごちそうとを見るだけでも、満  
 十四 97 5 ㊦ ㊦ ㊦ 、肉を切るナイフとホークとをせなかに  
 十四 97 5 ㊦ ㊦ ㊦ るナイフとホークとをせなかに立てたま  
 十五 9 6 ㊦ ㊦ ㊦ つ来る子どもと子ども 日の第一線  
 十五 20 6 ㊦ ㊦ ㊦ ていました。両親と子どもふたり、ひと  
 十五 20 9 ㊦ ㊦ ㊦ ました。朝の十時と午後の三時ごろと、  
 十五 20 9 ㊦ ㊦ ㊦ と午後の三時ごろと、日に二どずつ、こ  
 十五 24 10 ㊦ ㊦ ㊦ ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさか  
 十五 31 5 ㊦ ㊦ ㊦ とびかかる大わしと、この勇ましい少年  
 十五 31 6 ㊦ ㊦ ㊦ この勇ましい少年との戦いです。少年の  
 十五 32 5 ㊦ ㊦ ㊦ 見つけて、この鳥と少年との戦っている  
 十五 32 5 ㊦ ㊦ ㊦ て、この鳥と少年との戦っている岩角近  
 十五 32 6 ㊦ ㊦ ㊦ も、戦っている人と鳥とはむちゅうです  
 十五 32 6 ㊦ ㊦ ㊦ 戦っている人と鳥とはむちゅうです。血  
 十五 37 6 ㊦ ㊦ ㊦ たとえば、「日」と「月」をあわせて「  
 十五 38 7 ㊦ ㊦ ㊦ 漢字」には、この音と訓のふたとおりの性  
 十五 42 4 ㊦ ㊦ ㊦ ま日本では、漢字と、かたかなと、ひら  
 十五 42 4 ㊦ ㊦ ㊦ 漢字と、かたかなと、ひらがなの三種  
 十五 42 5 ㊦ ㊦ ㊦ かなと、ひらがなの三種の文字をつ  
 十五 48 6 ㊦ ㊦ ㊦ いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてし  
 十五 56 7 ㊦ ㊦ ㊦ んなわけで、私と日本とはふかい関係

十五 56 8 ㊦ ㊦ ㊦ けで、私と日本とはふかい関係がある  
 十五 61 2 ㊦ ㊦ ㊦ 。新島のおじさんとおばさんは、「略」  
 十五 61 9 ㊦ ㊦ ㊦ のこと、おじさんとおばさんが外出の用  
 十五 64 4 ㊦ ㊦ ㊦ 略。おじさんとおばさんはそのあと  
 十五 65 4 ㊦ ㊦ ㊦ た新島のおじさんと、日がさをさしかけ  
 十五 65 5 ㊦ ㊦ ㊦ た新島のおばさんとの思い出は、いまも  
 十五 65 7 ㊦ ㊦ ㊦ るころ、おじさんとおばさんは京都へひ  
 十五 74 4 ㊦ ㊦ ㊦ けじめもない。兄と弟とのちがいは、い  
 十五 74 4 ㊦ ㊦ ㊦ めもない。兄と弟とのちがいは、い  
 十五 82 10 ㊦ ㊦ ㊦ います。チルチルとミチルと、いぬと、  
 十五 82 10 ㊦ ㊦ ㊦ チルチルとミチルと、いぬと、パンと、  
 十五 82 10 ㊦ ㊦ ㊦ とミチルと、いぬと、パンと、さとうと  
 十五 82 10 ㊦ ㊦ ㊦ と、いぬと、パンと、さとうとは、はじ  
 十五 82 10 ㊦ ㊦ ㊦ 、パンと、さとうとは、はじめはいつて  
 十五 87 10 ㊦ ㊦ ㊦ 物を飲む幸福」と、『腹のへらないと  
 十五 88 4 ㊦ ㊦ ㊦ いという幸福』と、『必要以上になむ  
 十五 92 1 ㊦ ㊦ ㊦ 、せっせと、いぬと、さとうと、パンを  
 十五 92 1 ㊦ ㊦ ㊦ 、いぬと、さとうと、パンをときつけて  
 十五 110 7 ㊦ ㊦ ㊦ 毎日、新しい力と、わかさと幸福とが  
 十五 110 7 ㊦ ㊦ ㊦ い力と、わかさと幸福とがますますです  
 十五 110 8 ㊦ ㊦ ㊦ 、わかさと幸福とがますますです。お  
 十五 111 3 ㊦ ㊦ ㊦ たちのほおずりと、おめめと、だっ  
 十五 111 4 ㊦ ㊦ ㊦ ずりと、おめめと、だっことで織った  
 十五 111 4 ㊦ ㊦ ㊦ めめと、だっことで織ったのですよ。  
 十五 111 9 ㊦ ㊦ ㊦ 私の着物に、月と日の光がさしてきて  
 十五 115 5 ㊦ ㊦ ㊦ けれど、おまえと私とが、かわいがり  
 十五 115 5 ㊦ ㊦ ㊦ ど、おまえと私とが、かわいがりあう  
 十五 122 10 ㊦ ㊦ ㊦ 手品や、森田先生と西野先生のバイオリ  
 十五 122 10 ㊦ ㊦ ㊦ 先生のバイオリンとピアノ合奏など、  
 と 1 と  
 四 74 9 ㊦ ㊦ ㊦ と——とんぼ、とんぼ、かきねにとまれ。  
 ど 「土」(名) 11 (出) 土

|   |    |        |                |
|---|----|--------|----------------|
| 五84   | 1  | 七月十六日  | 土              |
| 七86   | 2  | 4月28日  | (出) 晴 19度      |
| 七88   | 1  | 5月5日   | (出) 雨 15度      |
| 七93   | 5  | 8月4日   | (出) くもり 25度    |
| 七98   | 6  | 12月1日  | (出) 晴 13度      |
| 八95   | 5  | 5月5日   | (出) 雨 15度      |
| 八101  | 10 | 8月18日  | (出) くもりのち雨 25度 |
| 八102  | 6  | 9月1日   | (出) くもり 25度    |
| 八105  | 3  | 9月29日  | (出) くもりのち雨 23度 |
| 八105  | 7  | 10月20日 | (出) 晴 22度      |
| 八107  | 3  | 11月10日 | (出) 晴 19度      |
| ど   |    |        |                |
| 「度」   |    |        |                |
| ひいくど・いちど・いちどに・ごど・さんどさんど・さんどめ・じゅうくど・じゅうごど・じゅうさんど・じゅうしちど・じゅうしど・じゅうにど・じゅうにどめ・じゅうはちど・じゅうろくど・なんど・にさんど・にじゅうくど・にじゅうごど・にじゅうさんど・にじゅうしちど・にじゅうしど・にじゅうろくど・にじゅうにど・にじゅうはちど・にじゅうろくど・にど |    |        |                |
| ど (接助) 1 ど  |    |        |                |
| 十五126 ㊦ ㊦ ガラス戸の外のつくよをながむれど  |    |        |                |
| ランプの影のうつりて見えず   |    |        |                |
| ど 1 ど   |    |        |                |
| 六110 4 「ナ」や「ノ」のつくことばがあったら、  |    |        |                |
| 「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。  |    |        |                |
| ドア (名) 8 ドア   |    |        |                |
| 八111 学校から帰ってきたすえの女の子が、茶の  |    |        |                |
| まのドアをあけて、ひよいとふみこんだたん、   |    |        |                |
| 十一673 そうして、大きなへやの、開いたドアの  |    |        |                |
| まえまできますと、   |    |        |                |
| 十一814 ドアのそとに足音がきこえて、やがて、  |    |        |                |
| 「略」という声がきこえました。   |    |        |                |

|                               |    |  |
|-------------------------------|----|--|
| 十五43                          | 10 | かれは、かるくドアをおしあけながら、   |
| 「略」と、じょうずな日本語で話しかけた。          |    |  |
| 十五53                          | 7  | 私は、しばしためらったのち、意を決して大きなドアをコツコツとノックした。                       |
| 十五68                          | 3  | 音もなくドアがあいて、  |
| 十五72                          | 10 | ドアをおして、つかつかと中にすすんだ   |
| ホランド博士は、客間に私をみちびき、            |    |  |
| 十五75                          | 8  | 自動車のドアに手をかけた老博士が、さらに、「略」とささやかれた。                           |
| とい 問 (名) 1 問                  |    |  |
| 十五1                           | 1  | この少年の間には、ちよつとおとうさんも困りました。                                  |
| とい 桶 (名) 1 とい                 |    |  |
| 十二36                          | 11 | だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をといの口の下へやりました。                     |
| というのは (接) 1 というのは             |    |  |
| 十五90                          | 10 | そいつは、一どもわたしたちのテーブルにのぼったことはないようです。というの、その鳥をあまり上等とは思わないからです。 |
| ドイツいがく (名) 2 ドイツ医学            |    |  |
| 十四26                          | 2  | 日本にはいつてきた西洋医学は、はじめオランダからはいり、そののちはドイツ医学がおもに傳わったどうかがつたが、     |
| 十四26                          | 5  | チフスやトラホームは、ドイツ医学がはいってきたときに「略」傳わったことばであろう                   |
| ドイツオーストリアにく (名) 1 ドイツオーストリア二國 |    |  |
| 十三17                          | 8  | 樂園といわれるこの國も、千八百六十四年に、ドイツオーストリア二國との戦いに敗れ、                   |
| ドイツご (名) 1 ドイツ語               |    |  |
| 十四23                          | 12 | チフス、トラホーム、ガーゼ、スキーはドイツ語。                                    |

|                         |    |  |
|-------------------------|----|--|
| ドイツじん (名) 1 ドイツ人        |    |  |
| 十三14                    | 3  | しばらくして、ドイツ人でケブラーという人が出ました。   |
| とい 接 (接) 1 とい           |    |  |
| 四132                    | 7  | そのはごろもないと、まうことができません。」りようし」といって、はごろもをお返ししたら、あなたは、まわずにかえっておしまいになるでしょう。」 |
| とい 助 (助動) 1 とい 助 《トイデ》  |    |  |
| 一12                     | 3  | かくれんぼするもの、よつといで。   |
| 十四81                    | 11 | 十色   |
| とう 島 (名) 1 とう           |    |  |
| とう 塔 (名) 1 とう           |    |  |
| 十10                     | 4  | 岸にある丘の上には、センチチェンヌとい  |
| う お寺の高いともみえました。         |    |  |
| とう 頭 (名) 1 とう           |    |  |
| う さんとう                  |    |  |
| とう 臺 (名) 1 とう           |    |  |
| とう 等 (副助) 1 等           |    |  |
| 十五58                    | 10 | ㊦ ㊦ 室友ホランド先生、「略」、化学、生理、植物、動物、地質等をこのんで勉学す。                              |
| どう 洞 (名) 1 どう           |    |  |
| 十四11                    | 10 | ㊦ ㊦ 調子をとのえるには、どうをあらわ   |
| こちらにまわすのです。             |    |  |
| どう 堂 (名) 1 どう           |    |  |
| どう 道 (名) 1 どう           |    |  |
| どう 如何 (副) 118 どう        |    |  |
| 一54                     | 7  | ㊦ ㊦ たまがひろえなかったら、どうなりま  |
| すか。                     |    |  |
| 一58                     | 4  | ㊦ ㊦ あのとき、たろうさんがくろいぬを   |
| おって くださらなかったら、どう なって いた |    |  |

かわかりません。

一65 1 ㊦ どうかしたの。

二15 3 あんな大きな、あかるい お月さまは、どうしたらえにかくことができるでしょう。

二30 7 ㊦ みんなわたったはずなのに、どうしたのだろう。

三26 5 こんどは、切りたおした木を、どうするかというになりました。

三60 1 ほかの 子どもたちは、 どう きまるかまっています。

三61 3 おとうさんは えんがわに こしを おろして、どう きまるか おまに になりました。

三75 3 ㊦ ほら、 どう なるか、 きをつけて みて いなさい。

三89 5 かいがんでは どうでしょう。

三89 6 こうばでは どうでしょう。

三89 7 みなとでは どうでしょう。

三91 4 この はしが なかったら どう しましょう。

三113 6 もう、 ひきとめる ことも どう すること も できません。

四52 2 どうか すると、 すると すべりおちそう になり、

四58 10 ㊦ 「どう したんだろう。」

四63 8 ㊦ きょうは、 どう ならぼうか、 かっちゃん。

四64 1 ㊦ どうだい、 かっちゃん。  
四64 2 ㊦ どうでもいいや。  
四97 5 ㊦ これこれ、 どう したのだ。  
四98 7 ㊦ どう しよう。  
四114 8 ㊦ どうか なさいましたか。  
四121 5 ㊦ どんとうの まるい ガラスは、 どうして こしらえたのでしょうか。

四129 7 ㊦ どう なさるので ございますか。

五26 11 ㊦ はるこさん、 いま改札口の人に ありがと うっていったのは、 どういうわけ。

五28 6 ㊦ どうしたのだね。

五36 7 ㊦ では、 石炭は、 どうして できたのでしょうか。  
五73 10 おじいさんが 帰ってみると、 どうでしょう、 ちゃんとごてんが できていて、 おばあさんは 女王 になって いる ではありませんか。

五85 9 ㊦ どうしたのかい。

六15 10 ㊦ もし、 あの木の葉の 船が 流れて こなかったら、 どうなっていた かしれない。

六23 5 ㊦ どうだい。

六30 1 ㊦ どう しよう。

六38 11 ㊦ どうしたの、 いったい。

六72 1 ㊦ 雪だるまは お話を し ないけれども、 はる えさんが、 なにか お話を して あげたら どう。

六75 2 ㊦ どうだ、 ゆうべの 命のこと、 わかったかい。

六80 8 ㊦ それが どうした。

六81 2 ㊦ どういう ことだ。

六84 3 ㊦ どう しよう。

六85 2 ㊦ どうしたのだ。

六110 10 新しい ことが あたまに うかんだので、 もう そんな ことは どうでも よくな ってしまった。

六129 7 ㊦ どうしたの、 たぬきさん。  
六133 10 ㊦ どうだ、 こうしては。  
七9 3 ㊦ わたしを うえて くれた 卒業生 たちは、 ど こに どうして いる だろう。  
七22 10 ㊦ あおむしをとって、 どう する の。  
七26 9 ㊦ どうしたのさ。  
七27 4 ㊦ いいえ、 どうなるか、 みんな 自分で しら べる ようにと、 おっしゃ っただけです。

七27 9 ㊦ これから、 どうかわる でしょうね。

七30 11 ㊦ どうしたんです。

七59 2 つぎのは どうでしょう。

七80 2 ㊦ いったい、 どういう ことなのか、 くわしく 話 しないさい。

七80 6 ㊦ それで、 どうした。

八10 5 また、 どうか すると、 歩 いている とき、 追 いかけてきて、

八12 3 すえの 女の子などは、 目を なきはらし ましたが、 もう どうすることも できませんから、

八36 5 この きそく 正しい ちつじよは、 いったい どうして たもたれている のでしょうか。

八39 2 ㊦ どうすれば 満足 なさる のですか。

八45 4 どうしたら 王さまの ご病氣を なおす ことができるかと、

八62 8 ㊦ 「どうだね、 どんなふうだね。」と、 た ずねて きた 年よりの あひるが いった。

八73 6 ㊦ どうだ、 われわれと いっしょに にかけて、 渡り鳥 になる 考えはないかね。

八81 7 ㊦ 水の上を およい だり、 もぐ ったり する の がいい 氣持 かどうか。

八93 1 ㊦ どうして いいのかわからないので、 つばさ の中に 頭を かく した。

九4 9 みどり 色のかわりに、 むらさきを ぬ ったら、 どうなる でしょう。

九5 2 むらさきのかわりに、 茶色を ぬ ったら、 どうなる でしょう。

九6 6 ほかの 樂器を、 いっしょに あわせて ひいて みたら どう でしょう。  
九7 6 「水」という ことばを そえたら、 どういう けしきを 思い だしますか。  
九8 1 「虫の 声」という ことばを 加えたら どう する

しょう。

九六三(会) いいかげんになかなかおりをしたらどうだ。

九六三(会) いいかげんになかなかおりをしたらどうだ。

九六五(会) いいかげんになかなかおりをしたらどうだ。

九六七(会) どうしたらいいでしょう。

九八四(会) どうしたんだい。

九八七(会) どうだ。

九八七(会) にげていくみつばちのうしろすがたをみて

九八七(会) いましたが、くもはどうすることもできません。

九八七(会) 苦しくてどうにもなりません。

九八七(会) お月さんのところへとんでいったあの白

いちょうちよは、どうしたろう。

九八七(会) お友だち、どうしているかな。

九八七(会) 自分ひとりぐらいどうでもいいというよう

な、無責任な、ひきような考えを

九八七(会) 「略」とさとしたが、佐吉のもえるよ

うな研究熱は、どうすることもできなかった。

九八七(会) 日本のゆくすえをどうするのか。

九八七(会) いったい、ふたりともどうしたのだ。

九八七(会) いまはどうにもなりません。

九八七(会) どうしたのです。

九八七(会) あの子は、どうかしているのではない

だらうか。

九八七(会) おまえはどうしたのだ。

九八七(会) どうなんでしょう。

九八七(会) いったい、どうしたんですか。

九八七(会) ぼくの父はどうしたんでしょう。

九八七(会) ぼくの父はどうしたんでしょう。

九八七(会) チチロ、これはいったいどうしたのだ。

九八七(会) それで、おかあさんはどうしているの。

九八七(会) それから、コンセテラは、それから、

あかんぼうは——みんなどうしている。

十二九二(会) おかあさん、どうなさったのですか。

十二九二(会) こんなものをひろって、どうするの

すか。

十二九二(会) へえ、そんな大きなものを、どうして

動かすんでしょう。

十二九二(会) おひとりですらどうしていられるかと思

と、どうしてもこずにはいられません。

十二九二(会) どうしたはずみか、チルデン選手はか

た足をふみすべらせてしまいました。

十二九二(会) そのころまで、人間のからだはどうな

っているか、ほとんど知られていなかったのですが、

十二九二(会) このような歩みをたどってきた日本を、

これからどうもたてていけばいいでしょうか。

十二九二(会) そうして、かれがふと思いうかべたのは、

アルプス産の小もみを移植してみたかどうか、と

いうことでありました。

十二九二(会) これを見て、どう思いますか。

十二九二(会) これはどう思うかね。

十二九二(会) くらべてみて、うまさからいうと、ラ

ファエルのほうがうまいかもしれないが、深みや

しんけんさは、どうだろう。

十二九二(会) おからだをおいためになるなんて、ど

うあつても考えのたりないことです。

十二九二(会) 夜をどうしてすごしておいでし

か、お知らせください。

十二九二(会) おとうさんのおはかについては、どう

したものか、ちょっと私にはわかりかねます。

十二九二(会) 「どうすれば、外国からきたことばが

調べられますか。」とおたずねした。

十二九二(会) 歌っている人は、どういう人かわかりま

せんが、

十二九二(会) このおじょうさんは、この歌を知ってい

たかどうか知りません。

十四五七(会) もし、私、つまり太陽がなかったら、

どうなると思います。

十四五七(会) このかぼちゃは、お礼に、すっかり人

間にあげてしまっても、さしつかえないと思いま

すが、どうでしょうか。

十四五七(会) 湯がひえるときにできる、熱さとつめた

さとのむら、どうなるかということは、

十四五七(会) そのとき、まあ、どうだろう。そのやい

た鳥は、〈略〉、その女の子の方へずつとよつてく

るではないか。

十五二三(会) どうしたらいいか。

十五二三(会) ではどうしたのだ。

十五二三(会) 満ぼう、これでどうだ。

十五二三(会) 手紙のたびごとに、どうしているかとた

ずねられたのもそのはずだ。

十五二三(会) まあ、あのふとった子のわらうことは

どうです。

十五二三(会) まあ、どうあなたがやってみたって、

あれをすっかり見るには、まだ小さすぎますよ。

十五二三(会) これから下へ帰ってから、どうい

うに私を見なければならぬか、

どういたしまして (感) 1 ドウイタシマシテ

十五二三(会) 「ドウイタシマシテ」と、意外なあ

いさつをされた。

どうか (副) 17 どうか

一五二三(会) みなさん、どうかゆっくり おやすみく

ださい。

三一一(会) おしゃかさまは、どうかしてはんたかを

りっぱな人にしてやりたいと、おおもいにな

りました。

三一一(会) どうかして、あんなにきれいな人

およめにもらいたいのものだ。

三110 9 ㊦ どうかして、かぐやひめを月の世界の  
人にわたさないくふうはあるまいか。

六29 11 ㊦ どうかたのみます。

七36 9 ㊦ 「どうかして、中へいれてやれませんか  
しら。」と、心配そうにいました。

九70 1 ㊦ どうかこれから、わたしの裁判所のめい  
よ判事になってください。

九70 3 ㊦ これからも、はがきがいったら、どうか  
きてくださいませんか。

九70 7 ㊦ いいえ、お礼はどうかと思ってください。  
十一22 9 ㊦ どうかそのかわりにはいてください。

十一75 11 ㊦ どうかよくしたいものだ。

十一85 11 ㊦ どうか、ここにいさせてください。  
十四37 9 ㊦ もし、くしゃくしゃするようないことが  
あったら、どうか天上の星を見あげてください。

十四54 6 ㊦ いや、どうか根さんから。

十四94 8 ㊦ 両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で  
重ねて、どうかして、あたためようとした。

十五48 8 ㊦ 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどう  
かして残したいと考え、

十五50 5 ㊦ どうか、私のことばを今右衛門さんに  
傳えてください。

どうかん ㊦ 道灌 ㊦ 人名 2 道灌 ㊦ おおたどうか  
ん

十二7 5 ㊦ 道灌は、その花の枝を手にはしましたが、  
なんのことだかその意味がわかりません。

十二7 8 ㊦ それからのちになって、道灌は少女の心  
がわかりました。

どうかん ㊦ 同感 ㊦ 名 2 同感  
十四61 10 ㊦ 同感。同感。 ㊦

十四61 10 ㊦ 同感。同感。 ㊦ と、日や、土や、水

などがいいました。

とうき ㊦ 冬期 ㊦ 名 1 冬期  
十四76 9 ㊦ それがいわゆる季節風(モンスーン)で、  
われわれが冬期に受ける北西の風と、夏季の南が  
かった風になるのです。

とうきび ㊦ 唐黍 ㊦ 名 1 とうきび  
十一37 3 ㊦ さやまめ・とうきびよくみのり いも  
もふとつてくるようす。

どうきゅうせい ㊦ 同級生 ㊦ 名 1 同級生  
十五123 9 ㊦ ほんとうにみんないい同級生であった。  
とうきよう ㊦ 東京 ㊦ 地名 6 とうきよう 東京

七37 7 ㊦ 「頭はとうきよう、足はおおさか。」  
九17 2 ㊦ とうきようから四千キロもあるフィリピン  
で、

十35 1 ㊦ そのころ、東京にはくらん会が開かれた。  
十二98 11 ㊦ アメリカのモールズという学者が、東  
京の大森の貝づかを発見してからのことであり  
ます。

十二100 12 ㊦ この式の土器は、はじめ、東京のやよい  
町から発見されたので、

十五49 11 ㊦ ただわずかに外國人がこれに目をとめて  
買うことがあるというのを聞いて、作品を東  
京や箱根へ賣りだすことにしたのである。

とうきようよこはまかん ㊦ 東京横浜間 ㊦ 名 1 東  
京横浜間  
十二113 8 ㊦ これは、汽車第一号で、明治五年九月十  
二日、はじめて日本で東京横浜間を走ったもので  
あります。

どうぐ ㊦ 道具 ㊦ 名 10 道具 ㊦ がっこうどうぐ・  
とびどうぐ  
六5 4 ㊦ きりや、ねじまわしや、(略)、さまざまの

道具も、おなじ台の上によこたわっている。

六6 2 ㊦ ねじは、これらの道具や時計をあれこれと  
みくらべて、

六6 7 ㊦ あのような道具、たくさん時計、  
九79 8 ㊦ むかしの人は、貝がらといっしょに、い  
らなくなったりこわれたりした道具や、たべたけ  
ものの骨や、角などを、こへすてました。

九85 1 ㊦ いのししやしかの角などに手を加えて、  
なにかの道具につかった物があつたでしょう。

九86 6 ㊦ それから、道具を集めて、めいめい持っ  
てきた物があるか、おしらべなさい。

十二35 2 ㊦ 「ゆのみ」が道具で、「水」がその中に  
はいっているものであることを、はつきり教える  
ために苦しめたのですが、

十三28 9 ㊦ せんめん器や、道具を入れた赤いほこを、  
てんびんぼうでかついでやって来る。

十三29 10 ㊦ これも、いろいろな道具を入れた荷をか  
ついでいる。

十五48 12 ㊦ 職人のちんぎんや材料のお金をはらうた  
めに、家の道具を賣らなければならなかった。

とうげみち ㊦ 峠道 ㊦ 名 1 とうげ道  
九12 1 ㊦ とうげ道にさしかかったとき、さつとふい  
てくる風であり、竹やぶを流れてくる風であり、

どうさ ㊦ 動作 ㊦ 名 1 動作  
十53 4 ㊦ 「オスワリシタ」と、いちいち、いぬの動  
作をことばにして喜びました。

とうさい ㊦ 東西 ㊦ 名 1 東西  
九81 4 ㊦ まず、一メートルぐらいのはばで、東西  
に四五十メートルほってみることにしよう。

とうさま ㊦ おとうさま  
とうさん ㊦ おとうさん  
とうじ ㊦ 当時 ㊦ 名 2 当時

十五59 9 ㊦ 裏の写真やら、当時の日記やら、きみに見せなければならぬものがたくさんある。

十五60 5 ㊦ 当時、母校札幌農学校の教師をしながら、  
〔略〕 札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、

とうじ 〔答辞〕(名) 1 答辞

十五121 2 ㊦ 私が答辞を読んだ。

どうし ㄱ おとなりどうし・がいこくじんどうし

どうし 〔動詞〕(名) 1 動詞

十二34 6 ㊦ 「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。

とうじ 〔同時〕(名) 2 同時

九19 9 ㊦ それと同時に、協会ではすぐに、〔略〕つばめのせわをすることを、新聞に廣告しました。

十五30 3 ㊦ 少年は、身をおかずと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。

どうししゃ 〔同志社〕(名) 2 同志社 同志社

十五60 3 ㊦ 同志社をわが子のように、だいに胸に

だいてはぐくみ育てていた新島のおじさんが、

十五66 8 ㊦ 私の父は、同志社を守り育てるために、  
〔略〕、京都にすまいを移すことになった。

どうして 〔如何〕(副) 49 どうして

一35 8 ㊦ 「うみになります。」「どうして。」

一62 1 ㊦ どうして、たろうさん。

二22 8 ㊦ どうしてですか。

四44 9 ㊦ 「どうしていけないの。」

五13 2 ㊦ どうして、きつぷをみるの。

五67 4 ㊦ どうしてお礼をもらわなかったの。

五82 1 ㊦ どうして、きょうはこんなに休んだのしょう。

五90 2 ㊦ あれはどうしてですか。

五107 1 ㊦ ぼくはおとまがでないのさ。」「どうして。」

て。」

六59 5 ㊦ どうして、ふだんの話がうたえないのかと  
考えました。

六64 2 ㊦ どうして、八時になると、ねむくなるのだろうか。

六64 6 ㊦ どうしてだろう。

六83 2 ㊦ どうしてつれないのだろう。

六87 1 ㊦ もしもし、あなたは、どうしてないていらっしやるのですか。

七12 11 ㊦ どうして、「手」ということばが、文字を書くことになってきたのでしょうか。

七24 4 ㊦ はい、だいこんの葉——どうして、葉を

砂の中に立てるの。」「兄、かれないようにさ。」

七25 9 ㊦ どうして、はっぱと同じ色になるのか、

わかりますか。」「兄、どうしてかしら。」

七25 11 ㊦ どうしてかしら。

七28 8 ㊦ 先生にほめられたの。」「母、どうして。」

七83 4 ㊦ それから、そのらくだがかた目だという

ことは、どうしてわかったのかね。

七84 5 ㊦ もしもし、それなら、荷物をつけている

ことが、どうしてわかったのでしょうか。

八4 9 ㊦ どうして、ピオが私のうちにかわれるようになったかといえ……。

八9 10 ㊦ といえば、いかにもおくびょうもののように

にも思えましようが、どうして、一方で、とても

むてつぼうなきかんぼうでした。

八17 1 ㊦ 虫たちは、どうしてこんなことができるのでしょうか。

八85 4 ㊦ どうして、あの鳥のもっているような美し

さをもったらなど望むことができよう。

八88 5 ㊦ どうしてこんなになったのかわからないうちに、大きな庭の中にきていた。

九57 1 ㊦ けれども、どうしてそれを知っていますか。

九91 5 ㊦ どうしてけんかなんかしたのさ。

九137 5 ㊦ 「どうして。」

九143 5 ㊦ どうしてねむらないの。

十29 1 ㊦ 私は、同じものをみるにしても、どうしてそのものがこうなったかということを、考えてし

らべたいと思っています。

十30 2 ㊦ 弟や妹がけんかでもはじめたら、どうして

そんなことになったか、そのわけをよく考えて

十55 8 ㊦ どうして、こんなふうにゆきづまってきた

のでしょうか。

十62 1 ㊦ たけのこは、どうして、あんなに早くのび

るのでしょうか。

十一83 7 ㊦ どうしてこんなまちがいがおこったの

だろう。

十二20 8 ㊦ どうしてこのざくろはこんなに美しい

んだらうって。

十二79 9 ㊦ 「どうして。」

十四24 3 ㊦ どうしてこんなにたくさんのおじさんが、

いろいろな國からはいってきて、日本語になった

のだらうかと、

十四24 7 ㊦ 先生、どうして、そんなにたくさん

外國のことばが、日本語になったのでしょうか。

十四53 5 ㊦ どうしてそのめしべの根もとがふくれ

て、そんな大きな実になったかということば、

十四60 6 ㊦ あなたがたは、どうして地面にはえた

のか、考えたことがありますか。

十四84 6 ㊦ どうして雪のけっしょうができるか、ど

んなばあいに、どのようなけっしょうになるか、

十四88 4 ㊦ どうしてこんなに曲がるのか。

十五66 6 ㊦ 満ぼうの心から、どうして新島のおじさ

んのすがたが消えうせよう。

十五865 ㊦ どうして。

十五115 ㊦ でも、おまえたちは、どうしてここま  
であがって来られたの。

十五116 ㊦ 人間が地上に住みついてからこのかた、  
いつもたずねあぐんでいた道が、どうしてわかっ  
たの。

十五119 ㊦ どうしてないているの。

十五119 ㊦ でも、どうしてみんな、目にいっぱい  
なみだをためているの。

どうしても 「如何」(副) 13 どうしても

三105 ㊦ さいごまで どうしても あきらめない人  
が、なんんかのこりました。

四92 ㊦ まっ黒くはないかもしれないが、どうし  
ても、白いものではない。

九126 ㊦ それで、茶人は、泉はどうしても支流のほ  
うにはなくて、遠い上流にあるのだとさった。

九132 ㊦ みつばちは、そのつなをさけてにげようと  
しましたが、どうしても手足がうまく動きません。

十二7 ㊦ お友だちにさそわれても、どうしてもおと  
うさんのそばへこない女の子もありました。

十四45 ㊦ わたしが、研究所でどうしてもできな  
かったことが、二つあります。

十一50 ㊦ ぼくは、大きくなったら、どうしても北  
海道へいこうと思う。

十二75 ㊦ おひとりりでどうしていられるかと思  
うと、どうしてもこずにはいられませんでした。

十二81 ㊦ 私もどうしても勝たなければならな  
いと思ひました。

十三13 ㊦ しかし、この天動説では、どうしてもか  
たづかないようなことが、目についてきたのです。

十四75 ㊦ どうしても一どはおこらなければなら

ないことが、おこったというにすぎないのです。

十四87 ㊦ どうしてもなれることのできないこと  
があるとしたら、それは、おかあさんがかなし  
がっていらつしやるということです。

十五98 ㊦ それは、どうしてもいけませんよ。  
どうしよくぶつ 「動植物」(名) 1 動植物

十二8 ㊦ こんな動植物だけではなく、雪のようすや、  
星の世界なども、しらべていきたいと思ひます。

どうせ (副) 3 どうせ  
六134 ㊦ どうせ、足の早いことにかけては、しかさ  
んにかないません。

十四48 ㊦ 自分もどうせ助からないものなら、こう  
いう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだ

十五96 ㊦ 私たちに用のあるものは、どうせこっ  
ちを通るのだから。

どうぞ 「何卒」(副) 16 どうぞ  
一61 ㊦ どうぞ おかあさんのおみやげにして  
ください。

三93 ㊦ どうぞ おらないでください。  
四61 ㊦ 「かみさま、どうぞ なかまを たすけて  
ください。」と、おいのりをしました。

四108 ㊦ さあ、どうぞ こちらへ。  
四108 ㊦ さあ、どうぞ その こしかけに おかけ  
ください。

四111 ㊦ どうぞ ゆっくり あそんで いってくだ  
さいませ。

四130 ㊦ どうぞ お返しくださいませ。  
四131 ㊦ どうぞ、お返しくださいませ。

六57 ㊦ どうぞ、みなさんの氣づいたことは、なん  
でも、かかりのものにお知らせください。

六91 ㊦ さあ、どうぞこちらへ。

七36 ㊦ 私はそういつて、どうぞおぶじにつきますよ

うにと、心の中でいのつていました。

七82 ㊦ どうぞ、おさばきをお願いします。

八83 ㊦ どうぞ、かってにおいでよ。

十二42 ㊦ どうぞ神さま、おまもりください。  
十四54 ㊦ では、つるさん、どうぞ。

十五89 ㊦ (ふたりの子どもに手をだしながら)  
さあ、どうぞ。

とうだい 「灯台」(名) 2 燈台  
十四82 ㊦ 燈台もと暗し。

十五97 ㊦ 日の第一線が燈台の高きに  
どうと (副) 1 どうと

九59 ㊦ そのとき、風がどうとふいてきて、草はい  
ちめんに波だち、  
とうとい 「尊」(形) 4 とうとい 《—イ》

十二56 ㊦ おばあさんから聞いた話を思いだして、  
書きのこしておくことは、ただおもしろみ  
があるばかりでなく、とうといことである。

十三25 ㊦ ところが、ここに、木材よりも、農作物  
よりも、とうといものが生き返りました。

十四47 ㊦ それは、フィリップの作品の中にみな  
ぎっている大きな愛の氣持、そこからさしてくる  
とうとい光のためなのです。

十四15 ㊦ おかあさんのおやさしさこそ、私に  
とっては、いちばんとうとい宝なのです。

とうとう 「到頭」(副) 22 とうとう  
二53 ㊦ とうとう、おかあさんは、さちこからり  
んごをもらいます。

三22 ㊦ とうとう、そのてっぺんは、空のくもに  
とどくようになりました。

三27 ㊦ なん年か かって、とうとう 一そのの  
ふねが できあがりました。

三80 ㊦ みんなは とうとう えんがわまで にげて

いきました。

三〇九 十五夜が ちかくなったある夜、かぐやひめは、とうとう 声をたててなきだしました。五二五 〇 『ぼくは、もう大きいんですから。』といつて、とうとう かけなかったの。

五九二 〇 のびて、のびて、とうとう えんの下のいたで、あたまをコツンとうったのだよ。

七三九 〇 高いところをメデシンボールのように送られていくうちに、にこにこ顔になり、とうとう、うれしそうに、声をたててわらいました。

八六四 〇 とうとう、一つ一つ たまごがわれた。

八六四 〇 それから二三日して、とうとう その大きなたまごがわれた。

八八五 〇 とうとう つかれはてて、こおりの中にとじこめられたまま、身動きもせずたおれてしまった。

九七二 〇 やまねこは、まだなにかいいたそうに、〈略〉、目をぱちぱちさせていましたが、とうとう決心したらしく、いいだしました。

一〇五 〇 とうとう、くるつと、うしろを向いてしまったわけです。

一二三 〇 とうとう じょうずにつづれましたとき、私は子どもらしい喜びと得意さに大はしゃぎで、二二五 〇 私は、とうとう かんしゃくをおこして、新しい人形を〈略〉ゆかにたたきつけました。

二二四 〇 芭蕉の待ちに待った雪が、とうとう くれがたから降ってきました。

二二八 〇 私はスタンドから一心におうえんしている二少年のことを思つては、ふるいたって戦い、とうとう 五セットで勝つことができました。

二二五 〇 とうとう、ユートランドは生まれかわりました。

二二二 〇 とうとう、こくばんがいっぱいになって

しまった。

二四八 〇 なん代もなん代もやってみた結果、とうとう 一つの眞理だと思われたので、二五五 〇 とうとう 「いちばんふとった幸福」が、テーブルをはなれて、

二五五 〇 『光』がとうとう 来てくれました。

とうとさ 〔尊〕(名) 1 とうとさ

二四四 〇 フィリップは、まずしいものの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

どうにかこうにか 〔如何〕(副) 1 どうにかこうにか

二二二 〇 父親の生きているあいだは、〈略〉、どうにかこうにか切りぬけてきましたが、

とうのいけ 〔唐池〕(地名) 1 唐の池

二二五 〇 雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をうったときのくわのあとで、

とうばん 〔当番〕(名) 1 とうばん 〆にっきとうばん

二四四 〇 とうばんの がんは、大きな声で さけびました。

とうぶしよしゅう 〔東部諸州〕(名) 1 東部諸州

二五五 〇 書きあげた論文を持って、その出版の用事かたがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった。

どうぶつ 〔動物〕(名) 2 動物

二二五 〇 みなれない木や、草や、動物がみえますね。

二二四 〇 これに光をあてて影絵にしてみせるのだが、人間ばかりでなく、動物などもでくる。

どうぶつえまき 〔動物絵巻〕(名) 1 動物絵巻

二二〇 〇 これは、鳥羽僧正という人がかいた動物絵巻の一場面であります。

どうぶつえん 〆オーストリア どうぶつえん

どうぶつたち 〔動物達〕(名) 1 動物たち

二八三 〇 けれども、すがたがみつともないので、いろいろな動物たちからのけものあつかいにされた。どうぶつほごきょうかい 〔動物保護協会〕(名) 1

動物ほご協会

二二六 〇 ウィーンの動物ほご協会に、〈略〉、はじめて、電話でこのことを知らせてきました。

とうほくほんせん 〔東北本線〕(名) 1 東北本線

二四四 〇 駅は、東北本線の「はなびざみ」であった。

とうめい 〔透明〕(形状) 2 とうめい

二四四 〇 すべて、まったくとうめいなガス体の蒸気が、しずくなる時には、

二四四 〇 きりのようなものがひと皮かぶさっており、それが、ちょうどさけめのようにたて横にやぶれて、そこだけがとうめいに見えます。

どうも 〔副〕 15 どうも

二二六 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。

二二四 〇 どうも ありがとう。



十四297 どうも日本人は、むかしから、あまり星に親しみをもっていなかったようです。

十五835 ともあんまりあてにはならないけれど、

十五8912 いいえ、どうもありがとう、『ふとつた幸福』さん。

とうもろこし 「玉蜀黍」(名) 2 とうもろこし 242 大きな あおがえるが、とうもろこしのはっぱに、じっとぶらさがっていました。

三351 中にわに、とうもろこしがたくさんはえています。

どうやら (副) 4 どうやら

四5210 きけんなところは、どうやらとおりすぎましたが、

十一523 あふれそうな乗客にまじって、どうやら乗車口へもぐりこむことができた。

十一8610 どうやら、あなたのむすこさんと同じ年ぐらいのむすこがいるらしく、

十五4511 ある日、プリンクラーは、どうやら覚えてた日本語で、町をひとりで散歩していた。

とうよう 「東洋」(名) 2 東洋

十三132 東洋でも西洋でも、天は動き、地はじつとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。

十五576 教授の申し出でをさっそく承知して、はじめて見る東洋の青年をひきとったが、

とうようびじゅつ 「東洋美術」(名) 1 東洋美術 十五515 大英百科辞典の東洋美術についての説明は、プリンクラーのふでになったものである。

どうり 「道理」(名) 3 道理

十三112 このように、道理にあわないことを信ずるのを、迷信という。

十三1112 そうして、人は、道理によって動かなければならない。

十三121 知識によらず道理によらず、いたずらに理由のないことを信ずる迷信は、

どうりよくきかい 「動力機械」(名) 1 動力機械 3373 豊田式人力織機は、国内につかわれるようになったが、かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械を作ることにとりかかった。

どうろ 「道路」(名) 4 どうろ 道路 四51 こうえんのせわや、どうろの そうじなどもしてくれま。

十二101 老人が、道路をうろろとみまわしながら、なにかさがしては、それをひろって

十三193 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたり、道路をつくったり、みぞをほったりするときに、

よく、国土の地質や地味を研究しましたが、

十三256 道路・鉄道は、いたるところにしかれました。

どうわ 「童話」(名) 1 童話 十二438 おじさんからいただいた童話の本に、人形が夜中に集まっておどります話がありました

とお 「十」(名) 7 とお 十 10

一113 ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いっつ、むっつ、ななつ、やっつ、ここのつ、とお、

一117 ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いっつ、むっつ、ななつ、やっつ、ここのつ、とお、

三1125 お月さまが一どに十もでたかと思われ

るほど、あたりがあかるくなりました。

八1062 一本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいついでいました。

九1192 十のころであった。

十588 たばが十あって、五まいありました。

十五669 十の春をむかえた私は、〈略〉、ひとり父につれられて、景色の美しい京都に移った。

とおい 「遠」(形) 50 とおい 遠い 《ーイーク》 5 まちどおしがる・まどお

三962 にわの花も、空の雲も、とおい山も、ちかい家も、かくことが出来ます。

三991 どんなとおい ところでも、紙は、字やえをはこんでくれます。

四124 ここから、とおいとおい町へいくことが出来ます。

四124 とおいとおい町へ

四127 とおいとおい町から だいじなものここに とどきます。

四127 とおいとおい町から

四1065 りゅうぐうは、まだとおいの。

四121 とおいとおい川の 水で 生まれたものです。

四121 とおいとおい川の 水で

五172 ぼくは遠いところへいくんだけど、あて名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。

五271 電車のおかげで、あんな遠いところまで、一日でいって帰ってきたのですもの。

五9610 自分でえさをとったり、遠いところまでとんでいくことはできません。

六394 ああ山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。

六405 帰るといったって、あんな遠いところでも、もう一どあの村に帰りたいなあ。

六9910 左の手に、めがねのたまを持って、目から遠くはなした。

七706 もやが深いから、遠いような、近いような、月明かりだ。

八三六 この星は、一つ一つがはつきりとみえないのですから、ずいぶん、遠いことがそうぞうされます。

八三七 私たちの、ただ「遠い」という考えだけでは、この遠いきよりは、おしはかることはできません。

八三七 この遠いきよりは、おしはかることはできません。

八三九 「光年」を単位として計算しなければならぬほど、遠いきよりであります。

八四六 遠いところにくれてくれさえすればいい。

九一六 これからいこうとする遠い國のことを、話しあっているのかもしれない。

九一七 つばめのゆくさは、遠い南の海のかたです。

九一七 南洋の島々から、さらに海をこえて、遠いオーストラリアまでいくのがあるということです。

九一八 ヨーロッパの北の方ではんしくしたものが、秋には「略」遠くアフリカまでいって、

九二四 すると、いい味は、もつと遠いところで感じられる。

九二七 それで、茶人は、泉はどうしても支流のほうにはなくて、遠い上流にあるのだとさとした。

九三〇 プンブン、プンブンと、遠いところで羽音がしました。

九三六 そういう遠い國へいくと、自分の國のこ

とばがこいしくなります。

九四二 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえざくらの花。

九四四 たんぼのわた毛が遠くとんでいく日だ。

九四七 ああ、われわれみんな、遠い國から旅してきた旅人のような氣持のする日だ。

一〇一四 たんぼのわた毛も遠くとんでいく。

一〇一五 窓ガラスが、一まいこわれていて、やがて、小鳥たちは、そこから遠い空へにげていった。

一〇二五 まだ暗いうちからおきて、遠い山へいって、しばをかったり木を切ったりして、

一〇二九 本道は遠いから、近道をしよう。

一〇三六 たぶん、遠いところに家族があるのでしよう。

一〇四二 だけど、ぼく、遠い道を歩いていくんですから、しぼんでしまいます。

一〇四二 この二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをいのつてくれていることを知って、

一〇四三 そうして、遠いところも近くなり、世界はだんだん小さくなるような氣がします。

一〇四六 ひばりやつばめも、やがて、遠い國からここに帰って来て、

一〇四七 どのもしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、

一〇四八 目がさめたころ、遠いところを通るその声を聞くのは、ゆめの中の声のように思われる。

一〇五二 母を思ふ子の眞情は、遠く海をこえて、私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。

一〇五四 身近なものしか見ないで、遠いもの、大きなものに心をくばることがたりなかったのは、

一〇五五 大空の星をながめていると、はてしのない、遠い世界にひきこまれるような氣がします。

一〇五八 ああ、いい音がする。」みんな「一人の人の見ている方を遠く見つめる。

一〇五九 自分から話したホランド博士は、遠い昔を思い出して、

一〇六〇 それから、あちらの遠い遠い金色の雲の中に、つま先で立って、やっと見えるくらい

ところにいる人、だれなの。

一〇六〇 あちらの遠い遠い金色の雲の中に、とおいちかい「遠近」(名) 1 遠い、近い

一〇六二 汽車のきつぷは、遠い、近いによって、ねだんがちがいますが、

とおか「十日」(名) 1 十日 ↓じゅういちがつとおか・せんきゅうひやくしちねんしがつとおか

七二七 それから十日すぎて、からだが黒つぶかったのが、青くかわってきたんですよ。

とおか「十日」(名) 1 十日め

八六二 種もみひたしをしてから、ちょうど十日めでした。

とおく「遠」(名) 17 とおく 遠く

二四三 すると、とおくのほうでも、「略。」となきます。

二四八 かつこうが、とおくでしずかになきます。

二五三 それがだんだんととおくになるように、小さくする。

二五八 下水の水やうんがの水、きたないどぶ水

ながして、海のおくにすてにいく。

六六二 この学校の子どものかずや、一ばん遠くから通っている子どもの名や家の場所も書きました。

七五四 さて、どこへいったものかしら。」ふたりそろって、遠くをみまわす。

七五九 あまり遠くへいかないうちに。

八五八 下をみると、大きな川が遠くへ流れている。

九四六 もう、遠くの山々のいただきに、白い雪のぼうしがみえます。

九七三 いちろうは、こがねのどんぐりをみ、やまねこは、とぼけた顔つきで遠くをみていました。

一〇七五 わざわざ遠くにでかけなくても、

一〇七八 長いいかだを組んで、材木を遠くの山か

ら運んでくるのもみえる。

十一 98 会 きつと遠くへいくんだらう。

十二 189 会 おとなりの草むらでも、遠くの草むらでも、ピッピツという音がする。

十三 285 遠くの方からひびいてくる、いろいろな

もの音に、耳をかたむけたりしているのである。

十四 399 是るか遠くの方を指さして、「略。」

十五 345 けれども、それをその場にいない人や、

遠くにいる人に知らせるためには、

とおし ↓ぶつとおし・よどおし

とおし [遠] (形) 1 遠し 《一く》

十五 54 文 遠くそののち かしの木に、矢はま

だおれでとどまりぬ。

とおし [通] (五) 6 とおす 通す 《一しーす》

↓かんがえとおす・つきとおす・みとおす

三 154 会 おまえさんのような おろかものは、こ

こをとおすことはできない。

三 156 「略。」といって、とおしてはくれま

せん。

九 43 手 ほしがきにするために、母がかわをむい

て竹ぐしにとおし、のき下につるしてくれま

十二 535 (4) 手は、手さきのほうをいれて、穴に

糸を通してぬいつける。

十二 942 「赤とんぼ」という文字をとおして、す

いすいとびまわるかわいい赤とんぼを、心の中

にえがきだす。

十四 937 女の子は、窓々をとおして、ちらちらと

かがやくともしびの光を見た。

とおし [通] (名) 37 とおり 通り ↓いままでど

おり・おおどおり・おもいどおり・かんがえど

り・ぎんざどおり・ごうれいどおり・ねがいど

おり・ひととおし・ふたとおし・もどおり

二 435 会 おとうさんのおっしゃるとおりですね。

三 448 わにぎめは、白うさぎのいう とおりに

ならびました。

三 489 白うさぎが そのとおりにしますと、か

らだはすぐもとのようになりしました。

三 1176 おつきのものはそのとおりにしました。

四 571 会 「このとおりで。」かつちゃん、立ち

あがってはばたきをしたので、

四 908 学校へかよう子どもたちのことを思っ

て、おもてのとおりをさつさとなく。

四 103 会 おかげさまで、このとおりでじょうぶに

なりました。

五 922 会 たたみのまん中にあなをあけてやったら

それ、このとおりで、いせよくのびるわ、

六 203 会 そのとおりで、そのとおりで。

六 203 会 そのとおりで、そのとおりで。

六 297 会 お元氣どころか、このとおりですっかりよ

わって。

六 54 10 ふたりはそのとおりにしてみました。

六 71 10 会 はるえさんのいうとおりでね。

七 76 10 会 まったくそのとおりで。

七 816 会 そのとおりで、私どものらくだは、かた目

でございます。

八 252 やがて死ぬけしきはみえずせみの声 と、

むかしの人がうたっています、そのとおりで、死

ぬことなど考えられないほどにぎやかに鳴きたて

たせみも、

八 378 会 「この花が、みたとおりのこがねならば、

わしもつむのだが。」とおっしゃいました。

八 391 会 「そのとおりで。」

八 579 会 勉強もそのとおりで。

九 123 町の通りを、電線を、はたを、せんたく物

をふいている風である。

九 226 汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつ

ぎのとおりです。

九 67 11 会 このとおりで。

九 72 1 会 それでは、もんくはいままでのおとりに

しましう。

九 855 会 ここからでるのは、このとおりでうちく

いて作った物で、

十 154 フランスだって、きれいなところもあり、

きたないところもあり、日本も、やはりそのとお

りです。

十 604 おかあさんが、あかちゃんをだっこして、

おもての通りへでていらつしやう。

十 737 会 たおれたはずみに、あのだいせつなかけ

ものを、あのとおりひきさいてしましました。

十一 88 会 ほんとうにきみのいうとおりで。

十一 838 会 わたしは、これこのとおりで、すっかり

じょうぶになったよ。

十二 112 1 三人がひとつに心をあわせた美しさは、

このとおりでつばなもとなつて生まれたのです。

十三 14 11 コペルニクスのいったとおりで、天は動く

ものではない、地球が動くのだということ、

十三 236 わかいダルガスの意見を、実際にためし

てみると、そのとおりでなりました。

十四 779 私はすぐにこれをためしてみましたが、

ほんとうにそのとおりでした。

十五 735 会 「それ、このとおりで。」といって、

日記をくりひろげ、

十五 851 会 あのとおりでテーブルの光栄になつてい

るさとうがしを。

十五 877 会 これが『みたされたきよえいの幸福』

で、このとおりで、りつばな、ふくれあがった顔を

しています。

十五896 ㊦ あのとおり、さわぎやどもが、おまえさんがたを呼びたてているでしょう。

とおりにいっぺん 〔通一遍〕(名) 2 とおりにいっぺん

とおりにいっぺん

十二896 感謝の心持をこめていうときと、ただとおりにいっぺんのあいさつとしていうときとは、十三197 ダルガスは、とおりにいっぺんの空想家ではありません。

とおりにいっぺん 〔通掛〕(五) 7 とおりにいっぺん 通りかかる 《一ッーリ》

四974 そこへうらしまたろうがとおりにいっぺん

四1012 ㊦ ちょうど ここを とおりにいっぺん 通ったね。

四1108 ㊦ いや、ちょうどとおりにいっぺん 通ったので。

六588 そこを通りかかった人が、おんぶして学校までつれてきました。

八911 のらねが通りかかって、にげるどころか、向かっていこうとさえするのです。

八478 その小屋のそばを通りかかったときでした。

八862 あくる朝早く、ひとりの農夫が通りかかった。

とおりにいっぺん 〔通過〕(上) 2 とおりにいっぺん

通りすぎる 《ギーギル》

四5210 きげんなところは、どうやらとおりにいっぺん 通ったが、

九921 学校帰りの女の子ふたり、通りすぎる。

とおりにいっぺん 〔通抜〕(下) 1 通りぬける 《一ッーリ》

六388 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、ま

た、もどつてきてかかしの近くにとまる。

とおりにいっぺん 〔通場〕(名) 1 通り場

十三281 夏は夏で、ひんやりとした土べいの日かげを選び、風の通り場で遊んでいる。

とおりにいっぺん 〔通道〕(名) 1 とおりにいっぺん

三743 ㊦ では、光のとおり道をさがしてみましよう。

とおりにいっぺん 〔通〕(五) 45 とおる 通る 《一ッーラ》

二3310 ㊦ どうがとおりますから。

三906 ばしやもとおります。

三907 じどうしやもとおります。

三913 わたくしは、学校へいくときと かわる ときに ここをとおります。

四3610 ㊦ そのとき、ぶどうだなの下をとおりました。

五75 汽船や荷船がとおる。

五121 ㊦ あれをみて、汽車が、とまったりとおったりするのだ。

五203 しげた竹やぶの小道をとおりたり、すずしい川のきしを走ったりしました。

五465 おつかいにいくとき、うらの竹やぶのそばを通ったら、おくの方でうぐいすの音がした。

五4610 帰りに、また通ったら、もう鳴いてはいなかった。

五472 いつも通るこの小道、たのしい小道だ。

五474 ひとりで通るときも、みんなで通るときも。

五475 ひとりで通るときも、みんなで通るときも。

五483 いつ通っても、いつもたのしい、この小道。

五527 いそがしそうに人々が通ります。

六163 そのとき、ありのまをひとりのかりうどが弓矢を持って通りました。

七79 ㊦ ろうかをすうつと通ってみたり、かいだんをトントンあがってみたり、

七83 渡りろうかをとおる足音がきこえる。

七714 ぬまの上を、にわか雨が通る。

七803 ㊦ 私どもは、麦をつけたらくだをつれて、さばくを通っていましたが、

八293 天帝は、《略》、また馬車を走らせて、天の川の西の岸を通っていらつしやいました。

八678 そうして、親あひるにつれられたひなたちが通っていくと、

九182 秋には、南ヨーロッパを通過して、遠くアフリカまでもいって、冬ごしをします。

九365 ㊦ たきになり流れになって、村の中を通り、田んぼに落ち、湖にまでつづいています。

九497 ㊦ やまねがここを通らなかつたかい。」とききました。

九512 ㊦ やまねがここを通らなかつたかい。」たきがピーピー答えました。

九521 ㊦ やまねがここを通らなかつたかい。」とききました。

九533 ㊦ やまねがここを通らなかつたかい。」とたずねました。

九1068 まつ林の中を通過していくとき、だれかが、《略》と、大声にさげんだ。

十76 日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。

十711 こんなにうるさくついてこられたときには、《略》子どもをさけて通ったこともありましたが、

十212 その下を、あひるがならんで通っていく。

十526 五六歩いったかと思うと、よそのおばさんが、あかちゃんをおんぶして、そばを通りました。

十145 大きな汽船がけむりをはいて、長いかけ

をひいて通っていくのがみえるし、

十一 97 窓 おきを大きな船が通っていくよ。

十三 28 9 床屋が通る。

十三 32 1 目がさめたころ、遠いところを通るその

声を聞くのは、ゆめの中の声のように思われる。

十三 32 6 「略。」こんなことをいつて通る。

十四 87 10 やがて第三の人も通り、第四、第五の人

も、同じ足あとをたよりに通って行く。

十四 87 12 やがて第三の人も通り、第四、第五の人

も、同じ足あとをたよりに通って行く。

十四 93 5 美しく火のともった家々の前を、そろそ

ろとかなしげに通って行きながら、

十五 92 罫 こどもら手をつないだ中を日ぐれのう

まが通る

十五 60 9 ふつう「満ぼう」でとおっていた私は、

そのときちょうど四つのいたずらざかりであった。

十五 67 1 学校のいきかえりにその門前を通っても

新島家の窓は、かたとざされてあった。

十五 96 9 窓 私たちに用のあるものは、どうせこっ

ちを通るのだから。

とか (並助) 48 とか

六 45 1 窓 あのかかしったら、『さようなら。』とか、

『ありがとう。』とか、

六 45 1 窓 『ありがとう。』とか、なんべんもなん

べんもさげんでいたよ。

七 12 1 「かごの手」とか、「なべの手」となると、

人の手ではありません。

七 13 9 「略。」とかいったりします。

九 6 4 オルガンのほかに、バイオリンとか、フ

ルートとか、ほかの楽器を、いっしょにあわせて

ひいてみたらどうでしょう。

九 6 5 バイオリンとか、フルートとか、

九 11 9 風といえば、「そよそよ」とか、「ザワザ

ワ」とか、「ビュビュウ」とかいうことばであ

らわしているが、

九 11 10 「ザワザワ」とか、「ビュビュウ」とか

いうことばであらわしているが、

九 11 10 「ビュビュウ」とかいうことばで

九 40 2 罫 「略。」とか、「略。」などいわれた

が、ぼくはがんばっておりませんでした。

九 44 3 罫 かきの葉を—まい—まいならべて、この

色がよいとか、こちらの色がよいとかいって

九 44 4 罫 こちらの色がよいとかいってながめてい

ます。

十二 21 7 罫 さくろさんが、來年とか、さ來年とか、

それからもつとさきのことをおしやったりする

と、なんとなくさびしくなります。

十二 21 7 罫 來年とか、さ來年とか、

十二 26 4 民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、

なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、

そのまわりをぐるぐる歩きまわす。

十二 26 4 つくえとか、テーブルとか、

十二 47 10 罫 便利とか不便だけで物事を考えないと

ころに、人間の美しさやおもしろさが生まれてく

るのだ。

十三 10 1 むかしは、略、きつねがつくとか、か

らすの鳴き声がわるいから不幸があるなどといっ

た。

十三 10 4 たとえば、移轉するのに、方角がよい

とかわるいとかいい、

十三 10 4 方角がよいとかわるいとかいい、

十三 10 5 名まえの字画を数えて、運がよいとかわ

るいとかきめたり、

十三 10 5 運がよいとかわるいとかきめたり、

十三 31 4 三國志とか、西遊記とかいった、中國

のむかしものがたりをやるつもりなのだが、

十三 31 5 三國志とか、西遊記とかいった、

十四 10 3 罫 くぎへかけるようにしたほうがいいと

か、調節ができるとか、

十四 10 4 罫 調節ができるとか、ほのおがゆれたり

しないとか、

十四 10 4 罫 ほのおがゆれたりしないとか、略

小さなかさがあるとか——

十四 10 6 罫 かさがあるとか——それには、つかい

かたを書いた小さな書きつけがついているはずで

す。

十四 21 5 「略。」とか、「略。」とかいいなが

ら、先生のお書きになる文字に目をそそいだ。

十四 21 5 「略。」とかいいながら、

十四 26 8 また、音楽の時間によくつかう、リズム

とか、ハーモニイとか、そのほか、コーラスとか、

ソナタとかいうことばは、

十四 26 8 リズムとか、ハーモニイとか、

十四 26 9 コーラスとか、ソナタとかいうことばは、

西洋音楽がはいってきたとくに、いっしょに傳

わってきたことばであらう。

十四 26 9 コーラスとか、ソナタとかいうことばは、

十四 26 11 また、図画工作の時間によくいう、デッ

サンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、

十四 26 12 デッサンとか、モデルとか、

十四 26 12 モデルとか、バックとかいうことばも、

十四 68 8 これは、茶わんのばあいにくらべると、

しくみがずっと大きくて、うずの高さも、四キロ

とか八キロとかいうのですから、

十四 68 9 四キロとか八キロとかいうのですから、

十五 36 10 「上」「下」とかいう字の起りである。

十五373 「もと」とか、「すえ」とかいう考えを表わすことにした。

十五373 「もと」とか「すえ」とかいう考えを

十五374 いまの「本」「末」とかいう字はそれである。

十五478 佐賀はん主は、お庭焼といって、自分の家であつたか、おくりものにする焼物とかを作らせていたが、

十五479 おくりものにする焼物とかを

十五953 「ばらの目ざめ」とか、「水のほおえみ」とか、「あけぼののむらさき」とか、「こはくのつゆ」などがあらわれます。

十五954 「水のほおえみ」とか、

十五955 「あけぼののむらさき」とか、「こはくのつゆ」などがあらわれます。

とかい ↓だいたいかい

とかく「兎角」(副) 1 とかく

十五223 女の子は、あぶない足どりで、《略》、とかく家庭教師の手からはなれて行きそうにしてい

ました。

とかげ「蜥蜴」(名) 1 とかげ

十三67 わらびや、ふきや、たけのこや、ちょうや、はち、へびや、とかげや、青がえる。

とかす「溶」(五) 2 とかす《サ・シ》

七319 白いえのぐにみどりをとかしたような、美しい羽です。

十二9511 いったん読まれてしまうと、読み手の思いでや心持とかかれて、その人その人の生活や経験によつて生かされてくる。

とが・る「尖」(五) 12 とがる《ツ》

二356 二つ二つして、とがったものじゃないか。

六372 23 そのビルディングの一つ——とがった屋根にひっかかっているのかし。

八145 親ぜみが、あのほそくとがった口のさきで、かたい皮にあなをあけて、ていねいに生みつけておいてくれましたので、

八166 虫は、小さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいとがった口をもっています。

九602 やっぱりやまねこの耳は立ってとがっているな、と思ひながらみていると、

九645 なんとといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。

九647 九 そうして、わたくしがいちばんとがっているな。

九665 九 なんとといったって、頭のとがったものが、いちばんえらいんです。

九676 九 頭のとがったのが——

九1453 ふしくれた手、とがった足、

十二674 のこぎりののは、いぬの歯のようにとがって、一つおきに右と左にすこしよじれて、

十五3010 ちょうどそこに、手ごろなとがった岩のかけらが目にはいりました。

とき「時」(名) 315 とき ↓おひろるとき・かたとき

一152 みかき、じをよむときには、くちをつ

一161 いま。じをかくときには、てをつか

一534 わたくしがいったとき、しゃしようさん

一549 ました。「そんなときには、はなればし

一582 さいます。あのとき、たろうさんが

二68 —「こまできたとき、とみこさんが、

二192 二 「《略》。」「いるときにいらなくて、

二192 二 くて、いらないうちに、いるものは

二375 二 学校からかえるとき、くにざかいの

二601 おはなしをきいたとき、わたくしは、ふ

二675 春をさがす。そのとき、かげのほうで、

二694 きこえる。そのとき、かげのほうで、

三1510 らびました。そのときです。ふしぎな

三451 あがろうというとき、白うさぎは、「へ

三464 ていました。そのとき、みなのりつ

三615 ていました。そのとき、マイクルが、「へ

三664 さいました。そのとき、ピーターが、「へ

三701 ていました。そのとき、ピーターはふ

三833 た。《略》。」「そのとき、おかあさんが

三912 しは、学校へいくとき、かえるときに

三912 くととき、かえるときに、ここをとり

三1032 、きもちのわるいときでも、はらのた

三1033 でも、はらのたつときでも、このかぐ

三1164 でしたので、あるとき、「略》。」と、お

四54 、人がなくなつたときには、やはりこ

四61 くれます。いそぐときには、でんぼうを

四63 す。もつといそぐときには、でんぼうを

四224 四 りそうになつたとき、またわの中に

四236 四 りですか。そのときは、山へくりひ

四316 四 学校からかえるとき、雨がふつてい

四3210 四 げました。そのとき、わたくしは、「へ

四357 四 「《略》。」「そのとき、ふと思ひだし

四366 四 ていました。そのとき、たろうさんが、

四3610 四 きました。そのとき、ぶどうだなの

四377 四 しました。そのとき、わたくしの口

四395 四 ころそうとしたとき、にいさんのこ

四398 四 おろうとしたとき、おじさんのこ

四486 四 にさしかかつたとき、かつちゃんが、

四511 四 ねらわれているときには、ばらばらに

四774 四 う——うれしいときは、どんなとき。

四774 いときは、どんなとき。あ——「あ」の

四853 をしました。そのとき、おかあさんが、

五二三(会) じさんが、おりるとき、『略。』といっ  
 五二四(会) らせました。そのとき、どこかの女の人  
 五三二(手) いちばんのしいときです。冬がすぎて  
 五四四 すす おつかいにいくとき、うらの竹やぶの  
 五四四 道だ。ひとりで通るときも、みんなで通る  
 五四五 きも、みんなで通るときも。たんぼぼがさ  
 五二六 した。あさはんのとき、はたけではじめ  
 五三六(会) した。「生まれたときは、ねてばかりい  
 五三六(会) 略。」「生まれたときからせわはしてき  
 五三二 ことで、おひる休みのとき、私たちは、運動  
 五三六(会) へ。」「とおっしゃったとき、だれかが、「略  
 五三六(会) 略。」「略。」「そのとき、下の方から、「  
 五九〇(一) 会 おうたいになったとき、おじぎをなさい  
 五九〇(六) 会 さどが島をうたうときには、いつでもお  
 五九〇(八) 会 このわしも小さいときは、オギヤア、オ  
 五九二(二) ます。すずめがきたとき、ひわが、「略」  
 六八七 がっていった。このとき、父の時計屋さん  
 六八七 がっかりした。そのとき、いまだ雲にか  
 六三七 とどきそうになったとき、足がつるりとす  
 六三六 をいきました。そのとき、ありのまえをひ  
 六三六(一) 会 ね。こんな楽しいときは、二どとありま  
 六二六 きいています。そのとき、しもてから、あ  
 六二四(三) 会 いや、こんないいときにあそばないで、  
 六二四(五) 会 ちは、はたらけるとときにはたらくのです  
 六二八(一) 会 かにそうだ。」「このとき、戸のそとに、き  
 六四四(七) 会 くが目をさましたときには、おびみたい  
 六四四(七) 会 た。これがわかったとき、私はおもしろく  
 六四六 あに。三はたらくときはよこになり、休  
 六五六 はよこになり、休むときは立つものはない  
 六五七(一〇) 会 略。」「学校へいくとき、雪だるまのかた  
 六九七(七) 会 たがねむっているときでも、どきんどき  
 六九七(七) 会 きちんとはまったとき、まいた紙を糸で

六九八(九) まで、ものをいうときに、声がはなから  
 六九八(九) ぞと思ったが、そのとき、新しいことがあ  
 六九八(九) うものは、一年生のときにならったからよ  
 六九八(九) じめてあげにいったときに、みんなが、「へ  
 六九八(九) に、ま四角に切ったときにつけたすじがた  
 六九八(九) たはじめようとしたとき、トンネルの入口  
 六九八(九) りをしました。そのとき、「略。」「という  
 六九八(九) 六四四(四) 会 。あの谷をわたるときに、ちゃんとみつ  
 六九八(九) ずなできばえをみたとき、感心して、思わ  
 六九八(九) をたたきます。このときの「手」は、ての  
 六九八(九) た、「略。」「というときの「手」は、また  
 六九八(九) 略。」「略。」「このときの「手」は、文字  
 六九八(九) 略。」「このようなときの「手」は、どん  
 六九八(九) 七二二(二) 会 三「このまえきたときは、風が強かった  
 六九八(九) 七二三(三) 会 「だいきさき。」「そのとき、おかあさんがお  
 六九八(九) 七三三(七) 会 りました。家をでるとき、おかあさんに、  
 六九八(九) 七三七(九) 会 わらいました。そのとき、ふと上を向くと  
 六九八(九) 七三八(一〇) 会 はありません。そのとき、そのわかい男の  
 六九八(九) 七四二(七) 会 た。トンネルをでたとき、向こうの席で、  
 六九八(九) 七五二(九) 会 ことになった。このときは、ぼくらのほう  
 六九八(九) 七五九(九) 会 たりません。そのとき、この人に出てあ  
 六九八(九) 七五九(九) 会 、にんじんをやったときのように、喜んで  
 六九八(九) 七五九(九) 会 した。小屋からだすとき、みんな喜んです  
 六九八(九) 七五九(九) 会 へだしました。だすときに、わらを足でけ  
 六九八(九) 七五九(九) 会 ました。うまれるときはまるくなって  
 六九八(九) 七五九(九) 会 した。客がきているときなど、あまりテー  
 六九八(九) 七五九(九) 会 に――庭さきにいるとき、とつぜん、上へ  
 六九八(九) 七五九(九) 会 すると、歩いていくとき、追いかけてきて  
 六九八(九) 七五九(九) 会 ふかい朝の野にでたとき、「略。」「だの、  
 六九八(九) 七五九(九) 会 になりました。そのとき、王女がはいって  
 六九八(九) 七五九(九) 会 そばを通りかかったときでした。中から人  
 六九八(九) 七五九(九) 会 った。「略。」「このときである。「略。」「

八七四(九) ろが、ちょうどそのとき、おそろしい大き  
 八八〇(四) 会 ものをいっているときに、自分の考えな  
 八八二(五) 会 せつにしてあげるときは、喜ぶものです  
 八八三(一〇) 会 太陽が美しくずむときであった。草むら  
 八八八(一) 会 ひばりが歌いだしたとき、あひるの子は、  
 八八八(一) 会 あざけられたりしたときのことを考えた。  
 八八八(一) 会 八九三(一〇) 会 ひるの子であったとき、こんな幸福があ  
 八八八(一) 会 八九五(二) 度 水をとりかえるときにみたらみものも  
 八八八(一) 会 八九八(六) しました。種まきのときとちがって、こん  
 八八八(一) 会 九五(四) せにしたら、二色のときよりも、もっとち  
 八八八(一) 会 九一五(五) ドブンとびこんだときの音もあらわした  
 八八八(一) 会 九一二(二) げ道にさしかかったとき、さつとふいてく  
 八八八(一) 会 九一四(二) ことがあふ。こんなときにも、たいこをつ  
 八八八(一) 会 九一四(三) う。ゆめからさめるときには、音などはけ  
 八八八(一) 会 九二〇(八) わいなことに、そのとき、あいていた家が  
 八八八(一) 会 九三三(三) す。こちらへきたときは夏の暑さかり  
 八八八(一) 会 九三六(七) 手 った山からおけるととき、この谷まの流れ  
 八八八(一) 会 九三九(五) 手 ても、きこえないときがあります。上の  
 八八八(一) 会 九四二(九) 手 るのをほりおこすとき、胸がどきどきし  
 八八八(一) 会 九四三(七) 手 ちているのをみたときは、思わず手にと  
 八八八(一) 会 九四四(八) 手 そちらにでかけるとき、ぼくもついでい  
 八八八(一) 会 九四八(一〇) ろうが目をさましたときは、もうすっかり  
 八八八(一) 会 九五八(八) といいました。そのとき、風がどうとふい  
 八八八(一) 会 九六三(三) した。「略。」「そのとき、いちろうは、足  
 八八八(一) 会 九七四(七) なく馬車がとまったときは、茶色のどんぐ  
 八八八(一) 会 九七四(四) 会 おもにたてていたときがあったらしい。  
 八八八(一) 会 九八二(二) 。八 なかよし とき ある晴れた日の  
 八八八(一) 会 九八六(九) 林の中を歩いていくとき、だれかが、「略  
 八八八(一) 会 九八八(四) メートルほど登ったとき、ぼくが、「略」  
 八八八(一) 会 九八八(四) げていました。そのとき、あみがにわかに  
 八八八(一) 会 九八八(四) いてたべようとしたとき、ちようちよは、  
 八八八(一) 会 九八八(四) した。くもの小さなとき、ちようちよは、

十 7 3 スのいなかへいったときは、子どもが大ぜ  
 十 7 10 さくついてこられたときには、おとうさん  
 十 16 2 國のことをきかれたときは、おとうさん  
 十 29 7 つの和音を耳にしたときは、組みあわせれ  
 十 29 10 ます。もようをみたときには、そのもよう  
 十 34 2 では、やがて、困るときがくるにちがいな  
 十 34 5 たのは、ぬのを織るとき、たて糸のあいだ  
 十 37 1 、佐吉が二十四才のときのことである。あ  
 十 41 10 かをすごした。あるとき、うめが、母貝の  
 十 44 5 いに核をさしいれるときに、ほかの母貝の  
 十 49 11 いでしようが、そのときのいきさつを知っ  
 十 50 2 ワンワン」は、そのときさげんだことばで  
 十 50 10 というのです。そのとき、いぬは、くしゃ  
 十 52 9 こうとします。そのとき、私をふり向いて  
 十 52 12 つてきて、道にでたとき、あとをふり向  
 十 53 6 て喜びました。そのとき、いままでかたに  
 十 55 11 えなりました。あるとき、なにげなく妹の  
 十 63 6 い男になつたりするときには、おしろいや  
 十 66 2 していました。あるとき、このだんなは、  
 十 66 3 んでした。でかけるとき、太郎かじや、次  
 十 68 9 、おしれをあげるときになると、「略」  
 十 74 1 と、そこまで話したとき、いままでおい  
 十 76 9 うとしたりするときには、きつとコッ  
 十 81 10 はりきつてるとき、ぼくらのつかれ  
 十 81 10 のつかれてるとき、ぼくらのしたい  
 十 107 7 会。「さあというときに、ひとりで責任  
 十 120 3 ました。そういうときに、金次郎が生ま  
 十 120 4 次郎は、子どものときから、家の手つだ  
 十 121 3 なりました。そのとき、父親が病気でね  
 十 123 2 。金次郎が十四のとき、父親がなくなり  
 十 123 3 ばんだのは、そのとき二つでした。どん  
 十 128 3 まいました。このとき、金次郎はたった

十 44 11 んのまえに向いたとき、「略」と、大  
 十 46 3 弟よ。まちがったとき、思いきつてやり  
 十 47 3 、ぼくの二年生のときだった。津軽海峡  
 十 53 5 てしまった。そのとき、しゃしようさん  
 十 54 7 画。「ゆづられたときの氣持でゆづりま  
 十 59 10 で、学校から帰るときのことであつた。  
 十 61 11 会。「なぜ、そのとき、『略』と、き  
 十 62 7 会 ようなあぶないときでも、いいだすこ  
 十 62 9 会 ことをたずねたとき、なぜすなおに『  
 十 72 2 や、手紙の着いたときに、母親がどんな  
 十 72 3 考えました。そのとき、少年は、かるい  
 十 75 3 た。「略」。そのとき、少年は、勇氣を  
 十 76 8 を目にあててるときには、じつとみつ  
 十 77 7 では、目を開いたときに、その小さな看  
 十 77 10 の口もとにつけたときに、少年はそのふ  
 十 81 3 んに看護していたときでした。そのへや  
 十 84 11 た。病人は、そのとき、目を開いて、じ  
 十 86 7 会 こへつれてきたときには、もうすつか  
 十 88 8 夕がたの回しんのときに、医者は、「略  
 十 89 4 くさしこんできたとき、医者が、看護婦  
 十 89 10 閉じました。そのとき、少年は、病人が  
 十 94 4 を発見して帰ったとき、イスパニア人は  
 十 95 10 ありません。このときコンプスは、コ  
 十 98 7 よりました。そのとき、母ははたを織つ  
 十 101 9 を探けんしていたときの話です。ある日  
 十 106 9 レットの上でみたときは、ずいぶん美し  
 十 108 1 会 ッと嗚いていたときには、ほんとうに  
 十 123 8 まえからそういうときのことを考えて、  
 十 124 7 やんをひと目みたとき、天にものぼるほ  
 十 133 8 ずにつづれましたとき、私は子どもらし  
 十 133 12 みせました。そのとき、私は、もちろん  
 十 137 6 感じました。このときはじめて、「水」

十 39 2 を思い返していたときの私ほど幸福な子  
 十 40 1 一年半ほどたったとき、大病にかかって  
 十 54 2 ないように、話すときは人形の顔を前後  
 十 55 5 はない。子どものときからききなれた傳  
 十 56 11 五郎が畑をうつたときのくわのあとで、  
 十 57 1 わのあとで、そのとき落ちた土くれが、  
 十 60 9 なつてきた。このとき、高どのに立つて  
 十 61 10 ものは、いり用のときはいつもこへき  
 十 80 4 るようにたずねたとき、少年たちは、「  
 十 81 11 はいまでも、あのときのことをわすれる  
 十 85 11 うあきらめてるときでした。清水選手  
 十 88 2 。ことばは、そのときのまわりのようす  
 十 88 12 になる。話をきくときには、相手の人の  
 十 89 3 。自分が話をするときには、その場のよ  
 十 89 6 心持をこめていうときと、ただとおり一  
 十 89 7 いさつとしていうときとは、いいかた  
 十 89 9 「にしても、そのときそのときの心持が  
 十 89 9 も、そのときそのときの心持があらわれ  
 十 93 8 である。文を書くときには、よく手をい  
 十 95 4 校にうつてきたときのことを思いだす  
 十 96 5 なたがたの小さいときの写真などもある  
 十 97 7 貝です。四年生のとき習った貝づかのこ  
 十 100 1 だり連んだりするときにもつかったこと  
 十 103 7 。お金がなかったときにくらべて、お金  
 十 109 3 プ物語 三年生のときに習ったイソップ  
 十 113 3 をきり開いていくときは、いつの時代で  
 十 115 8 の歩調がそろつたときに、はじめて、日  
 十 135 10 希望の帰つてくるとき。新しい勇氣や空  
 十 137 6 こういうのどかなとき、こういふしずか  
 十 139 8 んがめしべにつくときはよくみのるが、  
 十 139 9 のるが、つかないときはみのらないこと  
 十 138 8 ろびるかは、このときにさだまり、この



十三18 8 まり、この苦しいときにうちかつことの  
 十三18 11 であります。このとき、希望をいだいて  
 十三19 4 ゴをほったりするときに、よく、國土の  
 十三38 7 ㊦、一ど、三年のときだったか、遠足で  
 十三59 11 ㊦ わたしが行ったとき、この絵の前には  
 十三59 12 ㊦ て、あいているときがなかったよ。」  
 十四5 12 という職についたとき、ふるさとにのこ  
 十四13 4 ㊦ ーこしをとったとき、それをのせるた  
 十四14 5 ㊦ おいでになったときそのままです。そ  
 十四14 7 ㊦ たのことを思うとき、「略」と、こ  
 十四15 1 ㊦ 氣持になられたときには、自分には子  
 十四16 6 ㊦ 思ってくださいるとき、私もおかあさん  
 十四16 12 ㊦ ものがご入用のときは、ごえんりよな  
 十四18 2 そうじをしているとき、高山くんが、思  
 十四24 11 國から傳えられたときに、そのことばも  
 十四25 11 ㊦ どが傳わってきたときに、そのことばも  
 十四26 4 ㊦ 学がはいってきたときに、また、チフス  
 十四26 6 ㊦ 学がはいってきたときにそれぞれ傳わつ  
 十四26 10 ㊦ 樂がはいってきたときに、いっしょに傳  
 十四27 1 ㊦ 絵がはいってきたときに傳わってきたの  
 十四27 5 ㊦ ㊦。』などというときの漢語は、たいて  
 十四36 8 しい学生であったとき、物理の時間に、  
 十四46 8 れませんが、このときぐらい、しみじみ  
 十四47 6 は、しょうとつのときにあわてふためい  
 十四57 3 つるがこういったとき、高い声でわらい  
 十四63 6 ㊦ あまり大きくないときには、日光にすか  
 十四63 8 雲が月にかかったときに見えるのと、に  
 十四63 10 た、いつかべつのときにしまししょう。す  
 十四63 12 が、しづくになるときには、かならず、  
 十四65 1 の動きまわらないときだと、ことによく  
 十四65 8 に、湯げがのぼるときには、いろいろの  
 十四67 3 ります。そういうときに、よく氣をつけ

十四67 11 十四67 11 それは、らい雨のときに、空中におこつ  
 十四71 6 ㊦ ルランプで熱したときの水の流れと、同  
 十四73 3 ㊦ れてのぼる、そのときできる氣流のむら  
 十四74 1 ㊦ よう。湯がひえるときにできる、熱さと  
 十四74 4 ㊦ 、ただ、茶わんのときだけの問題ではな  
 十四74 6 ㊦ 面からひえていくときには、どんな流れ  
 十四75 1 ㊦ ためられてできるときは、飛行家  
 十四77 6 ㊦ わざは、木を割るときには、もとのほう  
 十四77 7 ㊦ がい、竹を割るときには、うらのほう  
 十四77 10 ㊦ でした。竹を割るとき、もとのほうから  
 十四89 1 ㊦ 土が見えはじめたときの喜びは、たとえ  
 十四90 7 ㊦ うらのへやを出たときは、上ぐつを足に  
 十四90 10 ㊦ いで道を横ぎったときに、その上ぐつは  
 十四96 3 ㊦ 。と思うと、そのとき、ほのおは消えて  
 十四97 4 ㊦ れてあった。そのとき、まあ、どうだろ  
 十四97 7 ㊦ いか。ああ、そのときもとき、ちょうど  
 十四97 7 ㊦ ああ、そのときもとき、ちょうどマツチ  
 十四98 8 ㊦ のべた。と、そのとき、マツチはもうつ  
 十四99 3 ㊦ 。その星が落ちるとき、空を横ぎって長  
 十四99 6 ㊦ なが、星の落ちるときは、なにかのたま  
 十四102 3 ㊦ きがらを見つけたとき、「略」といっ  
 十五22 5 ㊦ ていました。そのとき、ふいに、みんな  
 十五23 10 ㊦ りです。と、そのとき、だれか、その大  
 十五28 1 ㊦ まいました。そのとき、鳥はサアツとい  
 十五30 10 ㊦ へ身をよせかけたとき、ちょうどそこに  
 十五32 2 ㊦ ていました。そのとき、がけの中ほどか  
 十五33 5 ㊦ ていました。そのときの少年の喜び、そ  
 十五33 5 ㊦ 少年の喜び、そのときの女の子の両親の  
 十五50 11 ㊦ 情をこめた。そのときから、プリンクリ  
 十五55 11 ㊦ ことがさかんときで、鹿鳴館という  
 十五56 2 ㊦ てだろう。そのときは、まだ三角測量  
 十五58 6 ㊦ して、ひとりそのときの思い出にふけっ

十五59 1 ㊦ す。私は小さいとき、その新島襄にた  
 十五60 9 ㊦ ていた私は、そのときちょうど四つとい  
 十五80 11 ㊦ がたの時代がきたときには、私たちの時  
 十五82 10 ㊦ じめはいつて来たとき、すこしはにかん  
 十五87 9 ㊦ かわいていないときに物を飲む幸福  
 十五87 10 ㊦ 『腹のへらないときに物をたべる幸福  
 十五93 4 ㊦ 物をたべているときは、だれにもかま  
 十五105 12 ㊦ しかえしされたときに、いつもにつこ  
 十五112 7 ㊦ もをかわいがるときにはお金持なので  
 十五112 12 ㊦ な顔をしているときでも、ほおずりを  
 十五113 7 ㊦ ランプをつけるときやけどをしたあと  
 十五113 9 ㊦ は、うちにいるときのように、しごと  
 十五114 1 ㊦ せわをしているときは、いつだつてこ  
 十五114 4 ㊦ も、うちにいるときよりか、ずっとお  
 十五115 5 ㊦ かわいがりあうときは、いつでも天國  
 十五118 9 ㊦ ているのです。ときはまだ来ないので  
 十五120 4 ㊦ 校の門をくぐったときのこと、はつき  
 とき「土器」(名) 6 土器 じようもんしきど  
 き・じようもんしき・せつきとどき・やよいしきど  
 き  
 九82 3 ㊦ かごの中には、いつのまにか、せきふらし  
 九84 4 ㊦ い物、土器らしい物、略がたまっています。  
 九84 4 ㊦ これはじようもん土器といつて、貝づか  
 からでる物では、いちばん多い土器です。  
 九85 8 ㊦ それから土器。  
 十二99 9 ㊦ また、土器もあります。  
 十二100 2 ㊦ 土器には、なわ目のようがあるので、  
 じようもん式土器といえます。  
 十二100 11 ㊦ この式の土器は、はじめ、東京のやよい  
 町から発見されたので、やよい式土器という名ま  
 えがつけられています。  
 ときかねる「解兼」(下) 1 ときかねる「

ネ

十五75 博士は、そのことばの意味をときかねて

いた私のようすを見て、大きな声でわらわれ、

ときとさん (人名) 1 とときとさん

四387 ときとさん。」

ときたま [時偶] (副) 1 ときたま

八91 ときたまそのろじへだしてやっても、すぐまいもどってきます。

ときつ・ける [説付] (下二) 1 ときたつ・ける『ケ』

十五922 「ふとった幸福」どもは、せつせと、いぬと、さとうと、パンをときたつて、えん会の中にひきずりこんでしまいました。

ときどき [時時] (副) 17 とときどき

三379 ときどき 目をひらいて わたくしをみます。

四257 我々 わたくしは、みっちゃんを空をとんでいるだろうと、ときどき 思います。

五308 ときどき きみは、ときどき、こういうことをやるのかね。

五102 人がときどききて、水道をつかいます。

七87 すずめが、ときどき、チュンチュンと鳴く。

八94 水をいっぱいいれ、ふたをして日かげにおき、ときどき水をとりかえました。

九75 「略」と書いてもいいといえよよかったと、いちろうはときどき思うのです。

九822 ぼくらは、ときどき手をとめて、そこをのぞきにいてみると、

九1232 大きな支流が流れこむところへくると、ときどきあまい水の味がわからなくなってしまう。

九1252 岸にそって上流に向かって歩きながら、ときどき水をふくんで泉をさがしていった。

十一763 病人のふとんをなおしたり、ときどきその手にさわってみたり、

十一767 病人は、ときどき少年の方をみましたが、わかったようすはしませんでした。

十一8811 病人は「略」、ときどきむりにくちびるを動かして、なにかものをいいたげにしました。

十二259 民ちゃんも「略」、ときどき、わからないことばで、わたしに知らせようになりました。

十三2812 とときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく。

十五2611 少年は、ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、

十五471 ときどき焼いては、この店に持って来ますが、なにぶん作るのにてまのかかるもので。

ときどき・する (サ変) 2 どきどきする『シ』

七548 ぼくは、うれしくて、胸がどきどきしていた。

九4210 大きなうねのはだが地われしているのをほりおこすとき、胸がどきどきしました。

ときに [時] (副) 1 ときに

十三244 植林以前は、ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はときに、しもさえ見ることがあったのです。

ときには [時] (副) 8 とときには

四417 とときには、かきなりになって、空をひっかけるようになりました。

六503 ずんだ青さをもちながら、ときにはくもる晝の空。

九153 とときには、十ばも二十ばも、ずらりとならんでいることがあります。

九188 とときには、あらしや、そのほかの思いがけないさいなんに、あわないともかぎりません。

十一808 それが、ときにはいかにもはつきりとし

ましたので、

十二452 まゆ毛も、目も、口も動くし、ときには、したをだしたり

十二969 なつかしいことや、楽しいことや、ときには悲しいことなどもあるでしょう。

十三341 とときには、ホートンの廣場などに、かげ絵の舞台をこしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。

とき・れる [跡切] (下二) 1 とぎれる『レ』

十三375 一どとぎれて、また鳴りはじめる。

ときどき (名) 2 どきんどきん

六793 息と同じように、あなたがねむっているときでも、どきんどきんやっていますよ。

とく [得] (名) 1 とく

五6810 こんなおけなんて、とくにもならない。

とく [解] (五) 10 とく『ク』

四698 ゆうだちと かけて、なんととく。

四701 ボンボンどけいととく。

四704 ラジオと かけてなんととく。

四705 あきの花ばたけととく。

四707 すずと かけて、なんととく。

四708 かみなりととく。

四711 「い」の字と かけて、なんととく。

四712 てつびんととく。

四714 「ろ」の字と かけてなんととく。

四715 あさつゆととく。

とく [説] (五) 2 説く『イ・カ』

十三161 そのため、ガリレオは、ローマに呼びだされて、自分でも信じてはならぬ、人にも説いてはならぬといわれました。

十四363 教えを説かない教えます。

どく「毒」(名) 5 どく ↓おおどく・おきのどく・きのどく

十666 会 おくのへやのおいしいれには、『ぶす』といつて、おそろしいどくがはいっている。

十6612 そんなおそろしいどくで、死ぬようなことになってはつまらないから、

十696 会 それこそ、どくの『ぶす』だよ。

十705 会 こんなどくってありはしない。

十707 会 なみたいでいいのどくではないから、かえって、うまそうにみえるのだよ。

どく「退」(五) 3 どく『ーイ』

二274 会 きみ、どいてくれたまえ。

二279 会 きみこそどいてくれたまえ。

二339 会 ちょっとそこをどいてください。

とくい「得意」(形状) 7 とくい 得意 ↓おとく

六135 11 のぼりざかを走るの、うさぎさんのもつともとくいとするとこです。

七45 11 会 それでは、お礼にわたしのいちばんとくいな曲を、一曲ひきましよう。

十一589 太郎は得意になって、「略」というと、

十二606 長者は、高どのの上からこのありさまをながめて、得意になっていた。

十二1065 かえるは、うさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。

十三574 会 中でも、ラファエルは、マドンナの像をかくことが得意だった。

十五674 教会の日曜学校の生徒であった私は、そのクリスマスに得意の銀てきをふいたが、

とくいさ「得意」(名) 1 得意さ

十二339 とうとうじょうずにつづれましたとき、

私は子どもらしい喜びと得意さに大はしやぎで、

とくがわじだい「徳川時代」(名) 1 徳川時代

十五453 徳川時代の長いときたりが、明治になってすっかりようすを変えてしまったので、

とくしまけん「徳島県」(地名) 1 徳島県

十二617 徳島県の津峯山に、家具の岩屋というのがある。

どくとく ↓えいがどくとく・にっぽんどくとくとくに「特」(副) 4 とくに

十二468 会 ジャワのものはとくに有名だね。

十二1073 平安時代の終りから鎌倉時代にかけての藝術の中で、とくにすぐれたものの一つです。

十四682 そこだけは、地面から蒸発する水蒸気が、とくに多くなります。

十五2612 ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、とくに下の方にいる女の子を元気づけるために「略」といわずにはいられませんでした。

とくべつ「特別」(形状) 9 とくべつ 特別

八58 それがまたとくべつで、略かごの中から、一わずつつかみだしては指さきへとまらせた

り、

九224 ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたにかくした貨車一つつけて送ったほどでした。

十四444 けれども、フランスのルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもって、私たちの心をうつのです。

十四3012 日本、日本と、日本だけが特別の國でもあるかのように考えて、世界全体を見わたすことをわすれていたのは、よくないことでした。

十四561 会 私は、こんなに長いばかりで、花さんや、葉さんや、根さんのような、特別なはたらきは、なに一つございません。

十四681 陸地の上のどこかの一地方が、日光のために、特別にあたためられると、

十四711 そのひえかたがどこも同じではないので、ところどころ特別につめたいむらができます。

十五346 それをその場にはない人や、遠くにいる人に知らせるためには、文字に書くか、またほかに特別の表わしかたをしなければならぬ。

十五794 私には、略みなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。

とくゆう ↓ほっかいがんとくゆう

どくりつ ↓さっぽろどくりつきようかい

とけあう「溶合」(五) 2 とけあう『ーッ』

九67 音をうまくあわせると、とけあった美しいひびきとなつてきこえるにちがいありません。

九83 音の組みあわせも、おたがいにとけあつて、一つの感じをつくりあげると同じように、

とけい「時計」(名) 6 時計 ↓おきどけい・かいちゅうどけい・ちくたくどけい・はしらどけい・ぼんぼんどけい

六58 まわりのかべやガラス戸だには、いろいろな時計がたくさんならんでいる。

六62 ねじは、これらの道具や時計をあこれとみくらべて、

六67 会 あのような道具、たくさん時計、略、どれをみても大きくてえらそうである。

六1110 時計屋さんは、しあげた時計をちよつと耳にあててから、ガラス戸だなの中につりさげた。

六122 会 時計はなりましたか。

十五62 会 だいいいは実をたれ時計はカチカチと

とけいぜんたい「時計全体」(名) 1 時計ぜんたい

六118 ねじは、自分がここにはいったために、この時計ぜんたいが、ふたたび活動することができ

たのだと思うと、うれしくてたまらなかった。

とけいや 「時計屋」(名) 1 時計屋

六四七 しかし、だんだんおちついてみると、ここは時計屋の店であることがわかった。

とけいやさん 「時計屋」(名) 5 時計屋さん

六八七 このとき、父の時計屋さんがはいってきた。

六八七 時計屋さんは、〈略〉、しごと台の上をみて、

だしておいたねじのないのに気がついた。

六八七 時計屋さんも喜んだ。

六八七 時計屋さんは、〈略〉ねじをはさみあげて、

だいいじにもとのふたガラスの中へ入れた。

六八七 時計屋さんは、しあげた時計をちよっと耳

にあててから、ガラス戸だなの中につりさげた。

とけこむ 「溶込」(五) 1 とけこむ 《一ン》

一四九 わかめをだしかけたこずえのさが、かす

んだ空の中にとけこんでいる。

とげとげする 「刺刺」(サ変) 2 とげとげする

《一シ》

一四九 あのとげとげしたいがわれて、じゅくし

たくりの実の落ちるころでしたから。

一五三 ひとくとげとげした心でおしあっていた

人たちも、きゆうになごやかな氣持になった。

とける 「溶」(下二) 2 とける 《一ケ》↓ゆきど

けごろ・ゆきどけみず

九二四 おく山の雪がとけてそのままみてきたか

と思われようにつめたかった。

一四八 いまのお話の養分だって、水にとけて

いるから、根から実まで運んでいけるのですよ。

とける 「解」(下二) 1 とける 《一ケ》

五八九 むすびめがとけて、ほうきがおちました。

とげる 「遂」(下二) 1 とげる 《一ゲ》↓なしと

一六六一 それで、のこりの田植えも無事にすんで、

長者の望みはとげられた。

とこ 「床」(名) 1 とこ ↓ねどこ

一五三 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸

の外明らかに月ふけわたる

とこ 「所」(名) 2 とこ

三六六 この丘の上の大きな木のどこ。

九二四 きょうは、そこが日あたりがいいようだ

から、そこんとこの草をかれ。

どこ 「何処」(代名) 一八二 どこ

一七九 せみがどこかでなきだした。

一三三 この足で、どこへいったでしょう。

一三五 この足で、どこへいくでしょう。

一四七 かぜになって、どこでもどんだんふ

きまわってみたいのです。

一四二 「略」と ききますと、どこかで、

「略」というこえがしました。

一四二 どこかで、かつこうが、「略」となき

ます。

一五二 「おかあさん、どこ。」

一六六 どこかで、春の音がするよ。

一六八 どこも さくら。

一七三 大きなえだは四方にひろがって、どこ

からどこまで つづいて いるのか、わからない

ほどになりました。

一七三 どこからどこまで つづいて いるのか、

一八二 みんなの心があわないと、どこへもい

けません。

一八四 どこへいこうかね。

一八六 みんなの心があわないと、どこへも

いけないじゃないか。

一八六 もうみんなはどこへも いけません。

一七四 これ、どこからやってきたの。

一七五 おや、さっきのお日さまの光、どこへ

いったの。

一七六 お日さまってどこへいくのかなあ。

一七八 いまの紙にかいたえを、どこにかざ

りましょう。

一八七 紙にかいた字を、どこへおくってあげ

ましょう。

一八八 どこへいくのもいやでございます。

一八九 天にいちばんちかい山はどこか。

一九〇 どこも、この町の目です。

一九一 でも、雨がふると、どこかで 休んで

いると思います。

一九二 りんごさんは、どこへいってもきれい

ね。

一九三 どこかの 中学校の女の生徒さんがき

て、なっているわけをききました。

一九四 じゃあ、かつちゃん、きょうは どこに

ならびたいというの。

一九五 右にも左にも、むこうにも こっちにも、

どこにも 降る。

一九六 けしきに みとれながら あるいは います

と、どこからか、よいにおいが します。

一九七 どこかのおばあさんと ぼっちゃん、

乗ってきたよ。

一九八 どこで走らせているの。

一九九 私は、三十銭でどこへでも 旅をすることが

できます。

二〇〇 きみは、どこへいくの。

二〇一 あなたは、どこまでいくの。

二〇二 それで、どこかのおばあさんのよこのと

ころに、もたれかかっていると、

五24(会) そのとき、どこかの女の人が、ぼくに氣がついて、

五27(会) どこかでありがとうといたいと思ったけれど、いうところがなかったものだから、

五29(会) どこかのおじさんが、荷物を二つ持って、

あせをふきふきあるいていました。

五98(1) とびおきてみると、どこかのねこが、しのびこんで、ひわをとろうとしていました。

五104(7) どこからか、しじゅうからがやってきて、「略。」と、いい声で鳴いて、

五105(6) いつのまにか、しじゅうからは、どこかへ

いってしまいました。

六22(7(会) きみたち、どこへいくの。

六33(11(会) 雲のおじさん、わたしのたんぼはどこでしょう。

六39(3(会) きみ、どこにいたの。

六46(7(会) からから、かけかけ、どこへいく。

六47(3(会) おちぼの、おちぼの子どもたち、ちゃん

ちゃんすずめと どこへいく。

六48(4(会) 海 どこかでだれかがめくつて、大きなきれいなページ、生きた絵本のページ。

六66(6) そのようにして、どこまでもお話をつづけてみましょう。

六100(5) どこかの屋根が、めがねのたまいっぱいに

ひろがって、ついそこにあるようにみえる

六113(9) 弟のまねをしてみんなをわらわせてやろう

などという氣持は、どこかへふっとんでしまった。

六130(1(会) きみたちが、ここでわいわいやつていて

は、すぐぼくが、きつねにみつかつてしまうから、

どこかへいってくれたまえ。

六133(2(会) 「決勝点は、どこ。」

七4(4) どこかで小鳥が鳴いた。

七8(6) 教室のまどは、どこもまぶたをとじる。

七9(3(会) わたしをうえてくれた卒業生たちは、どこに

どうしているだろう。

七19(5(会) 先生、風の日は、ちょうちょは、どこにか

かくれているんですか。

七43(5(会) このどなたかはぞんじませんが、

七47(6) どこまで書きたしても、それでいいという

ところまでは、なかなか、いきつくものではありません。

七61(3) うす黒い雲は、どこかへいってしまったのに。

七75(1(会) どこへいったのだろうね。

七75(2(会) さて、どこへいったものかしら。

七77(10(会) どこでみましたか。

七78(5(会) どこにいるか、早く教えてください。

七78(11(会) あなたは、そのらくだを、どこかへつれて

いったのにそういない。

七83(2(会) それで、このらくだはどこからにげて

きたのではないかと、思ったのです。

七87(6) いつも、どこかを動かしています。

八8(1(会) この生まれだ。

八8(3) 「どこ。」というのは、同じ日本の中でも、

土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと、本で

よんだためです。

八15(7) 地の中はどこもまっくらです。

八39(9) み知らぬ人は、そのままだどこかへいってしま

いました。

八49(9) この家をたずねても、みんな喜んでむか

えてくれるにちがいありません。

八64(9) 年よりのあひるは、そういつて、どこかへ

いってしまつた。

八75(3) それからピシャ、ピシャと、どこかへい

てしまつた。

八85(1) あひるの子は、あの鳥の名も、どこへとんで

いったのかということも知らなかった。

八98(1) この田も、たんざくがたにでそろつてに

ぎやかです。

九41(11(手) いつのまにどこへ渡つていったのか、いま

はもういなくなりました。

九43(1(手) こちらはかきの木の多いところで、どこ

の家にも、二本や三本はあります。

九81(1(会) ぼくは、どこか一つのところをきめて、

廣く深くほつていくのがいいと思います。

九129(1) どこかであかちゃんのなき声がしています。

十4(5) いまも、美しいものはどこにでもあります。

十5(5) どこからきえるともないが、どこからかきこえてくる。

十5(5) どこからかきこえてくる。

十5(7) 美しいものは、いまも、どこにでもある。

十6(2) しかし、われわれは、いつでも、どこにでも、

その美しいものを、すなおに感じとる心を、

もちつづけたものである。

十9(12) どこへいっても、遊びたわむれている子ども

にあいました。

十49(8(会) キントットガ——アドコヘイッタノ

十53(10) ふり向くと、いぬは、立ちあがって、のそ

りのそりと、どこかへいくところでした。

十54(4(会) 「キントットガ」「アドコヘイッタノ」

は、そのことをいいあらわしています。

十19(7(会) あれはどこへいく船だろう。

十135(9(会) たきと落ちくる大ゆうだちに、いまの

暑さはどこへやら。

十170(3) ひたいと弓形をしたまゆとのほかに、

どことって父親らしいところはありません  
 十一 72 10 ㊦ それでばくがきたのですが、どこがわるいのでしょうか。  
 十二 48 7 ㊦ こうえんでも教室でも、どこでもやるからね。  
 十二 79 5 ㊦ 「どこで生まれたの。」  
 十二 107 9 大きな目、のびた手さき、しっかりふまえた両足、どこをみても、力があふれています。  
 十三 7 2 どこともしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、  
 十三 26 8 どの家も、高い土べいを立てめぐらしているの、  
 十三 27 5 ホートンは一本のトンネルのようになつて、どこまでもつながっている感じがする。  
 十三 29 2 その「ビューン」がとまると、そこではどこかの子どもが、もう、頭をつるつるにそられている。  
 十三 29 7 どこからともなく、女の人たちが集まって来て、糸屋さんを取りまく。  
 十三 36 5 やなぎのわたが、どこからともなくたくさん舞ってくる。  
 十三 36 11 花よめ行列のラッパの音が、どこかでひびく。  
 十三 41 4 ㊦ いまだこの家でも二けんぶんも、三けんぶんもの人が、寝とまりしているんだよ。  
 十四 13 1 ㊦ どこまでコーヒーを入れていいの、  
 十四 23 2 ㊦ それでは、これらのことばは、もとはどこの國のことばだったのだろう。  
 十四 29 3 どこかにしまつてあるもののように聞えるかもしれないが、  
 十四 29 5 だれでも、どこからでも、自由に見られるものなのです。

十四 34 3 こうなつてくると、うちゅうというものは、どこまで廣いか、想像がつきません。  
 十四 46 12 寒さも、つかれも、どこかへけしとんでしまつて、  
 十四 67 12 陸地の上のどこかの一地方が、日光のために、特別にあたためられると、  
 十四 71 10 そのひえかたがどこも同じではないので、  
 十四 85 1 その雪が、どこで、どのようにしてできたか、  
 十四 91 1 かたほうはどこへいったか、つい見いだせなかった。  
 十四 91 3 もう一つのほうは、どこかの男の子がひろつて行つてしまつた。  
 十五 24 7 いまそれをとめなければ、もうその女の子は、どこへ持つて行かれるかわかりません。  
 十五 26 8 どこでもいから、安全な場所へおりなければならぬと、少年は思いました。  
 十五 42 7 世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかつている國があらうか。  
 十五 46 12 ㊦ どこで作りますか。  
 十五 73 9 博士の家族たちは暑さをどこかにさせて、家の中はがらんとした。  
 十五 85 4 ㊦ いや、どこのなにものおさえている。  
 十五 90 4 ㊦ たぶん、あなたがたも、あの鳥、どこにかくれているか、ごぞんじないでしょうね。  
 十五 94 7 ㊦ みんなどこへ行くの。  
 十五 94 10 ㊦ どこへ来たのかしら。  
 十五 97 1 ㊦ どこから出て来たのだろう。  
 十五 97 12 ㊦ ここだつて、どこだつて、やはり、お金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。  
 十五 98 2 ㊦ どこにびんぼう人がいるの。

十五 99 6 ㊦ (光に) ぼくは、どこへ行つても、だんだんに知られてくるね。  
 十五 112 1 ㊦ いつもそれをどこにしまつてあるの。  
 どこかしら 「何処」(副) 1 どこかしら  
 十二 78 9 よくみていますと、どこかしら日本人らしいところもあるの、  
 とことこ (副) 1 とことこ  
 五 41 5 ㊦ 子うしは、小川の岸をとことこ走りました。  
 とこのま 「床間」(名) 3 とこのま  
 十 72 2 いきなり、とこのまのりっぱなかけものをひきさきました。  
 十 73 6 ㊦ 私が負けて、ドサリとこのまにたおれたはずみに、あたいせつなかけものを、あのおりひきさいてしまいました。  
 十二 43 5 ㊦ とこのまの人形が、動きだしそうな気がするんだけど――  
 とこや 「床屋」(名) 1 床屋  
 十三 28 9 床屋が通る。  
 とこ 「所」(名) 23 トコロ ところ ぐいたるところ・それどころか・だいどころ・ねらいどころ・ひとところ  
 一 22 5 ててつないで」のところ、おともだち  
 一 22 7 みちをいけば」のところは、げんきよ  
 一 23 2 とりになつて」のところは、こまりまし  
 一 24 3 ねておどれば」のところは、びよんぴ  
 一 39 6 って、お月さんのところへいったゆめ  
 一 56 8 いました。まどのところに、みおぼえの  
 一 62 9 お月さんがでるところでした。「略」  
 二 26 1 ㊦ おはなし。「あるところに、川があり  
 二 28 9 ㊦ ました。あさいところをわたりまし  
 二 32 3 ㊦ おはなし。「あるところに、六人のめ

二38 6 びこ(声ばかり)ところ 山の中たる  
二46 7 会 からでてくるところですよ。」(二)  
二47 4 さちこ おかあさんところへやの中  
三11 8 ずつ、はんたかのところへやって、い  
三22 2 り むかし、あるところに、一本のく  
三30 4 会 ぶんの かきたいところへいって、そ  
三32 4 会 ます。あがったところの かべには、  
三35 4 会 います。やねのところ、すずめが  
三37 4 会 をかっているところにきました。  
三49 4 会 した、あんなところにさきました。  
三58 6 大きな木のあるところへでられます。  
三59 1 会 え、大きな木のところまでのぼって  
三61 6 会 ねえ、丘の木のところまでのぼって  
三63 2 丘の大きな木のところまでのぼりま  
三74 10 の かげへしずむところでした。「略」  
三77 7 会 があなたたちのところへかえってく  
三83 8 会 「略」。「あんなところにだれがかけ  
三99 1 う。どんなところでも、紙は、字  
三100 2 ひめ むかしあるところに、「竹とりの  
三104 9 会 たくしはだれのところにも およめに  
四6 2 くれます。どんなところへでもとどけ  
四6 9 まいにちあつかうところですよ。ここは  
四14 7 もさもさしているところから、小鳥が  
四29 2 えんのおじさんのところへいって、あ  
四43 10 きれいにしげったところで、ねむったの  
四49 9 てて かつちゃんのところへ あつまりま  
四52 5 会 ます。「きけんなところを早くはなれ  
四52 10 ました。きけんなところは、どうやら  
四53 3 ある みずうみのところへいこうと 話  
四62 4 。 しずかなやぶのところ、はばたきの  
四66 6 て、もがいているところですよ。かつちゃ  
四96 4 ろう 子ども 四人ところ うみのそば

四102 4 らしまたろうかめところ うみべとう  
四105 7 会 とうにきれいなところですよ。こ  
四108 4 いろいろな魚ところ りゆうぐう  
四110 8 会 とおりかかったところでしたのよ。」  
四111 9 会 しま「すばらしいところだな。」おとひ  
四113 2 ばめん てる人もところも、三の ばめ  
四126 3 人 りようし 天人ところ みほのまつ  
五4 8 つべんのすぐちかいところ、小さいにま  
五15 4 ゆくさきはむねのところを書いてありま  
五17 2 会 きみ。ぼくは遠いところへいくんだけど  
五17 11 会 ら、とんでもないところにやられるかと  
五18 1 会 びくびくしているところだよ。」そのう  
五23 6 会 ばあさんのよこのところに、もたれか  
五27 1 会 げで、あんな遠いところまで、一日でい  
五27 3 会 ったけれど、いうところがなかったもの  
五35 3 う。なにをしているところでしょう。これ  
五35 4 、石炭をほっているところですよ。まわりの  
五41 11 会 して、くぼんのところにならべてあり  
五42 3 手 とした、きれいなところだと思ひます。  
五54 4 会 もつともつと高いところに、四ばん星  
五54 7 会 五ばん星、あんなところ。「空のまん中  
五68 11 会 一ど金のさかなのところへいって、家を  
五70 2 会 「金のさかなのところへいって、たの  
五71 2 さんがおばあさんのところへ帰りますと、  
五77 2 ごと、おばあさんのところへ帰りました。  
五79 1 を流れている小川のところにいきました。  
五79 5 。「略」。「おなじところ、いつまでも  
五82 7 、日のかんかんとるところで長くあそばな  
五93 7 な月がのぼってくるところでした。「略」  
五96 10 会 をとったり、遠いところまでとんでいく  
五99 3 が、ひわは、かたのところにかがをして、  
五101 9 あるいどぼたの高いところにかがますが、

五108 9 しまいました。近いところに製材所ができ  
六4 3 さまれて、明かるいところへだされた。ね  
六6 3 ろう、これはどんなところにおかれるのだ  
六9 6 会 んだが、「こんなところにくらげおちて  
六17 4 会 んか。「あぶないところだった。」とい  
六22 9 会 り三「うちへ帰るところなんです。」パ  
六40 5 会 っ、あんな遠いところ——でも、もう  
六60 11 会 タ——五 アンナトコロニ——七 サキ  
六67 2 (第一かい) あるところに、一ぴきの子  
六71 3 会 っ、いつていたところよ。」これをき  
六71 8 会 った「よみかき」のところを、ふと思いだ  
六75 10 、雪だるまのかたのところに、まつ枝を  
六79 2 会 ほら、左のむねのところに手をあててご  
六89 2 会 四「おや、あんなところにいどがある。  
六93 3 会 ここへやってきたところですよ。」海の神  
六96 7 会 へん苦しんでいるところでございます。  
六102 10 いで、おかあさんのところへいった。「略  
六119 10 しやるおかあさんのところへとんでいって  
六120 10 会 、ただしちゃんのところへ持つていつて  
六129 3 、トンネルの入口のところ、だれかの声  
六136 1 つともとくいとるところですよ。しかさん  
六138 1 たちは、大きな岩のところにでました。「へ  
六139 11 会 いました。「いいところへきてくれた。  
六139 11 会 なががべこべこなところだ。おいしい肉  
六141 7 会 べようとしていたところだ。よこどりす  
六143 4 会 こは、しずかなところですよ。安心し  
七12 2 せん。これは、持つところというこにな  
七28 9 会 がさなぎになったところを書いたのが、  
七30 4 会 んでもらったところよ。きょう、先  
七32 1 会 あさんも、こんなところをみるのは、は  
七39 10 め、四人めと、高いところをメデシンボー  
七40 2 した。乗客は、高いところを渡っていくさ

744 5 び、しらがの老人のところにどった。老  
 747 7 、それでいいところまでは、かな  
 754 4 、ボールが、ぼくのと看にとんできた。  
 759 6 上、一センチほどのところで。ボタンと音  
 763 1 がたまって、顔のところでとんでいく  
 771 5 る。そのずっと高いところでは、ひばりが  
 774 8 に、ひとりの旅人。ところ さばくの中。  
 779 10 人。甲乙。裁判官。ところ 法廷。旅人と  
 792 10 ようと思つて、首のところを持つて、かご  
 794 5 お晝に、うさぎのところへいつてみたら  
 89 4 ど、すきな、安心なところははないというよ  
 815 5 い思いにやわらかいところをさがして、地  
 819 11 、はじめにはあさいところをいいて、ほそい  
 821 8 ートルほどのぼったところに、小枝がわか  
 824 3 としてきます。黒いところは黒く、茶色の  
 824 3 ところは黒く、茶色のところは茶色になつて  
 835 8 のほか、五十光年のところに光っている星  
 837 3 こがねひめ あるところに、金持の王さ  
 844 3 まいのシャツ あるところに、ひとりの王  
 849 1 になろうとしているところでした。王子は  
 850 7 あつたら、その人のところへ幸福をわけて  
 859 10 、「そうだ。高いところのぼるほど、  
 860 8 ごぼうのはえているところに、一わのあひ  
 865 9 みんなつれて、水のところへおりていつた  
 871 6 、「遠いところにいなくてくれさえ  
 872 3 、大きなぬまのあるところへやつてきた。  
 889 3 、「あのかだかい鳥のところへとんでいつこ  
 892 4 った。おかあさんのところへ走つていつて  
 896 6 ない種もみをまいたところには、べつにし  
 897 7 横へはるの、廣いところのほうで育ちが  
 898 3 のついているものとところから、黄みどり  
 898 3 、目の高さぐらいのところからごみをふき

911 4 ワザワとたちさわぐところである。つぎに  
 911 4 つぎには、雨の降るところであつた。それ  
 911 6 海岸で波のくだけるところをきかせてくれ  
 912 6 は、雪の降つてくるところをあらわしたひ  
 917 5 、さいたま縣のあるところ、こころみに  
 919 7 ネルスドルフというところから、はじめて  
 921 1 つばめたちのとまるところがつくられまし  
 921 10 早く南のあたにかいところへ運ぶために、  
 934 5 一アールあまりのところ。母と、お  
 937 11 まつのはえているところは、晝でもうす  
 940 3 、「そんな高いところ、あぶないから  
 940 11 えます。道もないところから、木こりの  
 941 11 われます。思わぬところに炭やき小屋が  
 943 11 はかきの木の多いところ、どここの家に  
 962 10 とやまねこのまえのところの草をかりまし  
 976 5 て、角のむきみ屋のところに集まつていま  
 977 5 の貝がらをすてたところが、きようこれ  
 977 9 、一だん高くなつたところがみえます。「へ  
 978 11 の向こうの小高いところに、白い物がち  
 978 4 貝づかに着くというところ、先生は一け  
 980 5 、「ありそうなところをほつてみます  
 980 6 、「ありそうなところ、どんなと  
 980 6 ころつて、どんなところでしょう。」「一  
 981 11 は、どこか一つのところをきめて、廣く  
 982 5 います。「先生のところは、いろいろで  
 982 10 にそうだ。先生のところにあるのと同じ  
 987 4 る晴れた日の午後とところ 学校の帰り道  
 988 4 右にひきわけられたところである。たかき  
 997 1 つの中へとびこんだところであつた。「略  
 997 1 十メートルも登つたところで、つえをあげ  
 997 6 い先生がすべられるところである。たちま  
 997 11 して、一方のかけたところから、さらさら

992 4 い味は、もつと遠いところで感じられる。  
 992 2 きな支流が流れこむところへくると、とき  
 993 4 めしてみたり、深いところの水をとつて飲  
 993 8 という景色で名高いところもすきて、四十  
 994 4 川に流れこんでいるところの近くまでくる  
 999 6 プンブンいつていところ。くもが、  
 999 11 、くもは、やぶれたところをつくらうかけ  
 999 10 プンブンと、遠いところまで羽音がしまし  
 999 11 、「あのお月さんのところへいつてみたい  
 999 11 から、お月さんのところへいつてみたい  
 999 11 もりのために、高いところからたたき落さ  
 999 11 た。「お月さんのところへとんでいつた  
 999 11 にそつた景色のよいところですから、橋の  
 999 11 のたもとの石がきのところへきては、遊ん  
 999 11 スだつて、きれいなところもあり、きたな  
 999 11 ろもあり、きたないところもあり、日本も  
 999 11 分のもっているいいところを、えんりよし  
 999 11 わし、友だちのいいところを、すなおに学  
 999 11 三分ばかり歩いたところに、廣い草原が  
 999 11 の足では十二三分のところですが、妹には  
 999 11 りと、どこかへいくところでした。あきら  
 999 11 べをしたら、はなのところまでありました  
 999 11 も、いろいろちがうところがあります。い  
 999 11 す。いちばんちがうところは、ふつうのし  
 999 11 本らしい、すぐれたところのあるものとな  
 999 11 たち 川口はいいところだ。近くには小  
 999 11 えて、あぶないところからぬけだして  
 999 11 める。教室の高いところの窓ガラスが、  
 999 11 金次郎の生まれたところは、神奈川縣の  
 999 11 になつてたおれるところを、金次郎は、  
 999 11 のまんべえさんのところに、あずけられ  
 999 11 やつたり、植えるところをふやしていっ



十二 65 2 少年をその父親のところへつれていくよ  
 十一 69 1 頭を病人のかたのところへさげて、一方  
 十一 70 3 いって父親らしいところはありませんで  
 十一 83 4 会 えはべつの人のところへつれていかれ  
 十一 83 11 会 、いま退院するところだ。さあ、いこ  
 十一 86 9 会 。たぶん、遠いところに家族があるの  
 十二 14 3 きたかった。高いところからたれさがつ  
 十二 14 4 。だが、根もとのところに三つ四つかた  
 十二 14 5 っただけだ。高いところもいい。文雄は  
 十二 16 1 んで、日のあたるところ、かげになつた  
 十二 16 1 ろ、かげになつたところ、力のこもつた  
 十二 16 3 た軽い葉、そんなところをはつきりつか  
 十二 16 12 てすこしはなれたところからじつとみつ  
 十二 20 6 会 わたしはこんなところがすこしもない  
 十二 20 11 会 、どんなかげのところでも、美しい色  
 十二 27 1 十センチぐらいのところでも、こつちか  
 十二 33 10 で、二階から母のところへかけおり、指  
 十二 47 4 会 ら、人間がいるところには、かならず  
 十二 47 10 会 物事を考えないと、人間の美し  
 十二 48 1 会 絵には絵のいいところがあるからね。  
 十二 50 3 ぶせる。(4)首のところだけのこして、  
 十二 52 11 せて、図の点線のところをぬう。(3)顔  
 十二 54 8 かう人のかくれるところを作り、まくで  
 十二 55 3 、自分の生まれたところは、なんともい  
 十二 58 10 いま一だんというところで、いちばんど  
 十二 59 3 の西方約四キロのところに、まわり十二  
 十二 60 7 あとわずかというところで、日ははや西  
 十二 78 9 しら日本人らしいところもあるの、  
 十二 82 9 清水選手のおよぶところではありませ  
 十二 86 1 しかも受けやすいところに、送ってやっ  
 十二 94 10 き、自分もそんなところについて遊んで  
 十二 97 4 があります。みたところ、なんのかわり

十二 113 11 。そうして、遠いところも近くなり、世  
 十三 9 10 、科学の進まないところには、迷信が行  
 十三 25 5 があがつて、あるところでは、百五十ば  
 十三 27 7 、なんのかわつたところもないような  
 十三 32 1 されたところ、遠いところを通るその声  
 十三 37 3 電話 人 三郎<sup>さん</sup>と三郎<sup>さん</sup>のうちの  
 十三 53 7 す。その下の白いところに、先生の手で  
 十三 54 7 なりのおじさんのところへ行きました。  
 十三 56 8 会 ウルビノというところで生まれ、早く  
 十三 57 12 会 からない。赤いところが黒くなつたり  
 十四 36 7 させました。聞くところによると、キ  
 十四 53 8 会 日あたりのいいところに出て、じりじ  
 十四 54 11 会 。そこは、暗いところで、土もかたい  
 十四 56 6 会 も、日のあたるところや、高いところ  
 十四 56 6 会 ところや、高いところがおすきなよう  
 十四 65 11 も、けむりの出るところからいくらかの  
 十四 67 2 土のしめつてるところへ日光があつた  
 十四 71 1 、茶わんに接したところでは、湯は、ひ  
 十四 72 3 、水のおりてるところと、のぼつてい  
 十四 72 4 と、のぼつてるところとがほうぼうに  
 十四 72 5 の、中までも熱いところと、わりあいに  
 十四 72 5 わりあいにぬるいところとが、いろいろ  
 十四 72 7 をあてると、熱いところとつめたいとこ  
 十四 72 7 ところとつめたいところとのさかいで、  
 十四 75 5 のさかいのようなところだと、畑のほ  
 十四 76 5 ます。すこし高いところでは、反対の風  
 十四 78 10 などのやつているところを見ると、はじ  
 十四 83 7 だけ水が流れだすところ、それをうれし  
 十四 96 9 その火の光のさすところは、かべがきぬ  
 十四 99 4 会 かが、神さまのところへ行くのだ。」  
 十四 99 6 ましいが神さまのところへのぼつていく  
 十五 28 3 こしあき地のあるところを目がけており

十五 41 12 、発音のこまかなところまで書き表わす  
 十五 61 11 会 「満ぼう、いいところへつれて行って  
 十五 89 4 会 りなおしをするところです。これでけ  
 十五 94 8 会 「みんな不幸のところへにげこんでし  
 十五 94 9 会 なんてきれいなところだろう。どこへ  
 十五 94 11 会 略。」光<sup>さん</sup>同じところにいるのだよ。  
 十五 108 2 会 見えるくらいのところにいる人、だれ  
 どころ (副助) 2 どころ  
 四 52 6 二十九わの はんは、列をきれいに つく  
 るどころではありません。  
 八 9 2 ろじどころか、庭の木にとまらせても長く  
 はいません。  
 ところが (接) 29 ところが  
 三 112 8 けらいたちは、弓に矢をつがえました。  
 ところが、ふしぎな ことに、手足の力がなく  
 なつて、  
 四 44 6 みんなは、それに さんせいしました。と  
 ころが、「略。」といったのは、かっちゃん  
 でした。  
 五 24 1 会 かけさせてくれたんです。ところが、ぼ  
 くのまえに、まつぼづえをついた、わかい人がい  
 るんです。  
 五 68 9 おじいさんが帰つてみると、おばあさんは、  
 新しいおけを持っていました。ところが、おばあ  
 さんは、「こんなおけなんて、とくにもならない。  
 六 128 9 うまくにげました。ところが、一びきのう  
 さぎさんが、あわててにげたので、トンネルのさ  
 か道に足をすべらせて、  
 六 136 3 角をふりたてふりたて走りしました。ところ  
 が、ぶどうのつるに、角がひっかかりました。  
 六 138 6 五ひきのうさぎさんたちは、ここでゆつ々  
 り休むことにしました。ところが、この大きな岩

のかげに、とらさんがねむっていたのです。

七121 「手をあわせる」の「手」も、これと同じ

つかいかたです。ところが、「かごの手」とか、「なべの手」となると、人の手ではありません。

八1011 毎日なにかかわったことをしてかしては、みんなをおどろかせたり感心させたりします。ところが、ある土曜の午後、〈略〉女の子が、〈略〉ピオを、かた足でふんでしまったのです。

八315 天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにももらいました。ところが、はたおりひめは、あまりうれしいので、はたをおることをわすれてしまいました。

八348 太陽から発した光が、地球にとどくまでには、やく八分二十秒ばかりかかることになりました。ところが、〈略〉、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。

八477 日がくれましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。ところが、そまつな一けんの小屋がありました。

八749 頭をねじ曲げてつばさの中にいれた。ところが、ちょうどそのとき、おそろしい大きなぬがそのすぐそばに立っていた。

八889 こは、ほんとうにきれいで、春の喜びがみちあふれていた。ところが、木のしげみから、二三ぼの美しいはくちようがあらわれてきた。

九1210 うまそうな水や名高いいど水をためてみたけれども、どうも氣にいらなかった。ところが、てんりゅう川の中流の水をくんで、それで茶をたててみると、〈略〉ふしぎな味が感じられた。

十479 そこへつれていこうと思ったのです。ところが、私たちの足では十二三分のところですが、妹にはそうはいきませんでした。

十一642 数日まえ、イタリアへ帰ってきて、ナポリに上陸しました。ところが、にわかにな病氣にかかって入院したので、

十一798 たえずはらはらしていました。ところが、五日めに、病人はにわかにな病氣になりました。

十二374 私は、〈略〉、全身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。ところがとつぜん、私は、なにかしらわすれていたものを思い出すような、〈略〉ふしぎなものを感じました。

十二589 みるみるうちに工事がはかどって、九十九の石だんができた。ところがいま一だんというところで、いちばんどりが鳴いて、

十二612 のこりの田植えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。ところが、そのあくる朝ながめると、高どのは消えてしまつてあとかたもなく、

十二852 見物人は、いよいよ手にあせをにぎりました。ところが、〈略〉どうしたはずみか、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。

十二947 それは文字のおかけである。ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいちがったもの

十三2510 戦いによって失われたシュレスウィヒとホルスタインとは、すでにつぐなわれて、〈略〉。

ところが、ここに、木材よりも、農作物よりも、とうといものが生き返りました。

十三444 しばいは、かならず、ふたり以上の会話から組みたてられています。ところが、このしばいは、舞台に出て来る人が、ただひとりです。

十三4412 ですから、舞台に出ている人は、四人の人と話をしているわけです。ところが、この四人の声は、見ている人には聞えません。

十五273 女の子を元氣づけるために「〈略〉。」と

いわずにはいられません。ところが、下につかまれている女の子は、〈略〉すこしもさわがず、

十五484 この赤絵製作の方法が他にみれないように、保護されていた。ところが明治になって、はん主の保護がなくなったうえに、

十五571 〇 アマスト大学の助手をつとめていたころ、寄宿舎で二間統きの室をつかっていた。ところがある日のこと、せんばいの教授がやって来て、

ところが（接助）1 ところが

六1127 アイウエオ、カキクケコから、じゅんじゅんにいつてみたところが、〈略〉はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメモの二ぎょうだけで、

どころか（接助）3 どころか  
六297 〇 お元氣どころか、このとおりすっかりよわつて。

六849 〇 つれないどころか、申しわけのないことをしてしまいました。

八101 のらねが通りかかっても、にげるところか、向かつていこうとさえるのです。

ところが（副）3 ところが

十一281 ところが、そのつぎの年、母親が、四五日の病氣で死んでしまいました。

十二482 〇 ところで人形しばいが、これは人間にできないことでも平氣でやれる。

十二607 ところが、もうあとわずかというところ

で、日は〈略〉、くれそうになってきた。

ところで（接助）4 ところで

六1349 しかさんに勝ったところで、あの角をおるなどということはできません。

六13410 角をとったところで、なんになりましょう。

六1405 助けてくださいと、お願いしたところで、

ゆるしてくれるみこみありません。

十403 同じことをなんどもくり返してみたところ  
で、かわりのあるはずはない。

ところどころ 「所所」(名) 3 ところどころ

一526 図 そら、ところどころに、おおきなほし  
がひかっているでしょう。

九122 舟をやとってこぎのぼりながら、ところど  
ころでその水でお茶をたてる。

十四71 図 そのひえかたがどこも同じではないので、  
ところどころ特別につめたいむらができます。

とさす 「閉」(五) 2 とさす 《一サ》

十四88 図 半年も雪にとざされていた地上に、ぼ  
ちと黒い土が見えはじめたときの喜びは、

十五67 図 学校のいきかえりにその門前を通っても、  
新島家の窓は、かたくとざされてあった。

どさり (副) 1 ドサリ

十736 図 私が負けて、ドサリとこのまにたおれ  
たはずみに、

とさんでんしゃ 「登山電車」(名) 2 登山電車

十五199 深い深い谷の上を、登山電車がわれわれ  
を運んでいってくれます。

十五201 図 その登山電車のとちゅうにはいくつかの  
停車場があって、

とし 「年」(名) 24 とし 年 ↓はんとし

一551 図 そうして、つぎのとしのたまひろいで、  
きれいなたまがひろえたら、

三109 図 ある年の春のころから、  
五405 図 この花がよくさく年は、ほう年だとい  
います。

六931 図 そこへ年をとったかたがあらわれて、  
八929 年をとったはくちようが、新しいはくちよ  
うのまえにきて頭をさげた。

九172 フィリピンで、ある年の十月のすえ、子ど

もがつぼめをつかまえました。

九192 その年は氣候がわるくて、九月のまじろ、  
きゆうに十二月の氣候と同じ寒さになり、

十1212 図 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、  
わたしは、自分の國にのこしておいてきました。

十372 あくる年から、豊田式人力織機は、國內に  
つかわれるようになったが、

十388 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものが  
いりこみ、それに、貝のだす眞珠質がまきつき、

年とともに大きくなって、

十405 それが、くる年もくる年も、うまくいかな  
かった。

十405 くる年もくる年も、うまくいかなかった。  
十412 ある年のこと、赤しおが、おびたたく発  
生した。

十1214 金次郎は、年のわりにからだが大きかつ  
たし、働きつけているので、

十1281 図 ところで、そのつぎの年、母親が、四五  
日の病氣で死んでしまいました。

十12812 あくる年の春、黄色い花がさいて、たく  
さんの実がつかしました。

十18610 図 どうやら、あなたのむすこさんと同じ  
年ぐらいのむすこがいるらし、

十1599 ある年の夏、  
十13105 生まれた年によって、その人の性質や運  
命をきめたりしている。

十13162 ガリレオは、年をとってもいたし、  
十13204 しかし、切りとるばかりで手入れをおこ  
たつたために、土地は、年を追ってやせおとろえ、  
ついに、あはれてしまったのです。

十13210 両種のみは、たがいにならんで生長し、

年がたつてもかれないで、よくしげりました。

十五1106 図 私は、もう年をとることはないのだか  
らね。

十五1129 図 きりようのわるいおかあさんもないし、  
年をとったおかあさんもないのさ。

とし 「都市」(名) 1 都市

十三254 すたれた都市はふたたびおこり、新しい  
町村が、いたるところに生まれました。

とし 「疾」(形) 1 とし 《一キ》  
十五45 図 ときいきおいに まなこすら、その  
行く末を見ざりけり。

としおくん 「人名」 1 としおくん

五208 図 としおくんから手紙がきたよ。  
としおさん 「人名」 4 としおさん

四278 としおさんは、「雲」に話をするつもり  
で書きました。

五152 私は、としおさんが、みつおさんにあてて  
書いた手紙です。

五161 図 では、としおさん、さようなら。  
五2010 私は、ぶじに、としおさんの心を、そのま  
まみつおさんにおつたえすることができました。

としごと 「年毎」(名) 1 年ごと

十三2111 ユートランドのあれ野には、年ごとに、  
みどりの野が広がりました。

としこめる 「閉込」(下二) 1 としこめる 《一  
メ》

八8511 とうとうつかはれて、こおりの中にとじ  
こめられたまま、身動きもせずたおれてしまった。  
としこもる 「閉籠」(五) 1 閉じこもる 《一ッ》

十3511 佐吉は、一けんの小屋に閉じこもって、  
いっしんに考えぬき、

として (格助) 20 として

九108 その例として、まず、水の首をとりあつかった。

十二11 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。

十三11 ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、

十三5 機械は、どれひとつとして、日本製のもの、なかったからである。

十三9 このわか者こそ、のちに眞珠王として世界に知られた御木本幸吉であつた。

十四29 半円眞珠が思いどおりに取れるようになったので、ひとまずこれを加工して、かざり物として、ともかく、世にだすようになった。

十二89 感謝の心持をこめていうときと、ただとおりのあいさつとしていうときとは、

十二89 ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。

十二93 そこにことばとしての性質があり、おもしろさがある。

十二108 ふたつとも鎌倉時代の作で、ほりものとして代表的なものです。

十三85 一人まえの人として、自分のつとめをはたしていくために、

十三17 戦いに敗れ、賠償として、《略》作物のよくできる二州をとられました。

十三25 デンマルク人のたましいは、ダルガスの研究と実行の結果として、すっかり生まれかわりました。

十四49 フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

十四14 自分としては、力のかぎりおかあさ

んを幸福にしてあげよう。

十五52 そのころ留学生としてアメリカのスタンフォード大学に学んでいた私は、

十五54 用事は、《略》カーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらうことで、

十五73 平和主義の旗がしらとしてその名を知られていた老博士は、

十五74 親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に

果だたせたいのが念願である。

十五80 友だちとして心のかよったおつきあいができるようにしたのは、

としとる 「年取」(五) 1 年とる 《一ラ》

十五70 おじさんは、年とられてから目がわるくなつてね、

としなみ 「年波」(名) 1 年なみ

十四4 よる年なみにも負けず、研究を重ねたすえ、としよかん 「図書館」(名) 1 としよかん

四103 ここはとしよかんです。

としより 「年寄」(話手) 4 年より

六71 年より「もしもし、あなたは、どうしてないていらつしやるのですか。」

六75 年より「では、私がいいことを教えてあげましよう。

六79 なんのごてんですか。」年より「海の神のごてんです。

六83 木のぼるのですか。」年より「そうです。としより 「年寄」(名) 8 年より

六86 そこへひとりの年よりがでてくる。

八62 「《略》。」と、たずねてきた年よりのあひるがいった。

八64 年よりのあひるは、そういつて、どこかへいつてしまった。

八68 年よりのあひるは、「《略》。」といった。

十一65 「年よりのでかせぎ人ですか、外國から帰ってきた——」と、看護人がききました。

十一65 そんなに年よりではないのですが、外國から帰ってきたのです。

十五80 そう思いながら、年よりの私は、日本の小学校のみなさんに、はるかなあいさつを送り、

としとる 「閉」(上) 6 とじる 閉じる 《一ジ—ジル》

七86 教室のまどは、どこもまぶたをとじる。

八117 くちばしから血をだして、目さえあけたりとじたりして、《略》もう虫の息です。

八103 3時間めの終りに開きはじめましたがお晝の時間には、もう閉じてしまっていました。

十一70 けれども、病人は、いっしんに少年をみつめたあとで、目を閉じました。

十一89 病人は、目を開いて少年をじつとみて、そうして、また目を閉じました。

十五112 人間というものは、目を閉じていると、なんにも見えないのだからね。

どじん 「土人」(名) 1 土人

十二11 それをみた土人のひとりが、書物というものはなにかすばらしい力をもっているものだと考えました。

どしんどしん (副) 1 どしんどしん

二337 こんなはなしをしていると、どしんどしんというおとがしてきました。

どせい 「土星」(名) 3 土星

五56 今夜みるのは土星です。

五56 あれ土星というのよ。

五594 私は、いまみてきた土星を、紙にいていねいにかいておこうと思いました。

どだい 「土台」(名) 1 土台

十三95 原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのつた知識とし、また、さらに進んだ研究をする土台にするのである。

とだな 「戸棚」(名) 1 戸だな ↓ ガラスとだな

十五112 図 それは、おとうさんがかぎをかけたあの戸だなの中にはいつているの。

とたん 「途端」(名) 3 とたん

八112 茶のまのドアをあけて、ひよいとふみこんだとたん、うちがわでむじやきに遊んでいたピオを、かた足でふんでしまったのです。

八906 そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのを見た。

九139 あみにつきあたってはいへんと、くもが思ったとたんに、ばさりとこうもりの羽にたたかれました。

とち 「土地」(名) 15 土地

八83 同じ日本の中でも、土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。

八83 土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと、八810 なんとりこうな、土地にかんけいのふかい鳥だらうと、

八1096 やく12平方mの土地で、41のげん米がとれました。

九1475 つばめは、麦畑らしい土地の上をとびました。

十二552 先祖代々住みなれた土地はもとよりのこと、自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。

十三181 もともととせまい、小さな國ですのに、そ

のもっともよい土地を失いました。

十三195 こんどは、のこった土地の大部分をしめるユートランドのあれ地と戦い、これを豊かな土地にしようとする大計画をたてました。

十三196 これを豊かな土地にしようとする

十三1910 ユートランドは、略、その三分の一以上が、作物のできない土地であります。

十三1911 これをこえた土地とするのが、ダルガスのゆめであります。

十三204 しかし、切りとるばかりで手入れをおこたつたために、土地は、年を追ってやせおとろえ、

十三234 図 もしある時期になつて、小もみを切りはらってしまったら、大もみは土地をひとりじめして、生長するにちがいありません。

十三242 しげた木のない土地は、熱しやすくさめやすいから、

十三255 土地のねだんがあがつて、あるところでは、百五十ばいになりました。

とちゅう 「途中」(名) 13 とちゅう

五2811 図 品物をとどけて、受けとりをもらつて帰つてくるとちゅう、よその人からもらったんです。

七804 図 らくだをつれて、さばくを通つていました、とちゅうでひと休みしているうちに、

九1097 とちゅうでころんで、雪だるまになつておきあがるものもある。

十一601 近道というのは、田のあぜ道で、とちゅうに、かなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。

十三316 中国のむかしものがたりをやるつもりなのだが、さるは、とちゅうできよんととしてやめてしまつたり、

十四1111 図 たぶん、とちゅうでこわれるだらうと

いうことでしたが、

十四5311 図 花が開いても、とちゅうから、黄色くなつて落ちてしまつたたくさんのかぼちゃの花を十四568 図 もし、つるの私がとちゅうで切れたりしたら、

十四781 はじめにまん中になたをいれても、きつと、とちゅうから横の方へそれてしまつて、

十五201 その登山電車のとちゅうにはいくつかの停車場があつて、

十五262 もしこのわしが、その舞いおるとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、

十五266 もしまたとちゅうで、このわしが大きなくちばしで女の子の頭でもつつけば、

十五531 とちゅう、あるいはミシガン湖のほとりにたたずみ、あるいはナイアガラの水をながめ、

どちら 「何方」(代名) 13 どちら

一119 図 おや、どちらもおなじでしたね。

三641 図 「どちらへいこうか。」

三649 図 はじめに右か左かどちらかへやらなければ、

三677 図 そうして、風がどちらへふいてるか、みてごらん。

七526 どちらが勝つたかと思つて、心配していると、十一たい十で、ぼくらのほうが勝つた。

八431 図 あなたは、こがねと一ぱいの水と、どちらをえらびますか。

八732 どちらまたまごからはいだしてまもないものであつた。

九723 図 あなたは、こがねのどんぐり二リットルと、しおぎの頭と、どちらがおすきですか。

十1410 図 日本とフランスとは、どちらがきれいですか。

十二574 どちらもけっしてたやすくは登れないが、  
十二7912 じゃあ、きょうのテニスの試合には、  
どちらもおうえんするの。

十四116 どのランプは、石油でもきはつ油でも、  
どちらをおつかいになってもかまいません。

十四859 このように、二つの映画は、どちらも雪  
にえんのあるものであるが、

どっき [毒気] (名) 4 どっき

十676 風がどっきを運んできてはたいへ  
んだから、次郎かじゃ、おまえは、せんすであお  
いで、風を向こうへやってくれ。

十697 風を向こうへやってくれ。  
それなら、もう、ふたりとも、どっきに  
あたって死んでいるはずじゃないか。

十6911 ぐずぐずしているうちに、どっきにあた  
るにちがいない。

十702 べつにどっきもたたず、かえて、うまそ  
うなあまいにおいがして、

とっくに [疾] (副) 1 とっくに

十四9912 そのマッチの火の中で、もうとっくにわ  
かれて神さまのおそばへ行ったおばあさんを見た。  
とっけん [特権] (名) 1 特権

十五746 それによって兄が特権を與えられねばな  
らないという理由はすこしもない。

どっさり (副) 1 どっさり

十四639 この色については、お話することがどっ  
さりありますが、

ドッジボールたいかい [題名] 3 ドッジボール大  
会

七481 「ドッジボール大会」という文章が、二へ  
んあります。

七485 ドッジボール大会

七501 ドッジボール大会

ドッジボールたいかい (名) 2 ドッジボール大会  
七486 六日の日、郡ぜんたいのドッジボール大会  
があった。

七502 いよいよ、ドッジボール大会がはじまった。  
とっぜん [突然] (副) 5 とっぜん

三1072 みかどは、〈略〉、ある日、かりのおかえ  
りに、とっぜん おたちよりになりました。

八95 庭さきにいるとき、とっぜん、上へ飛行機  
でもとんでくると、

八883 すると、とっぜん、あひるの子は、つばさ  
をばたつかせることができた。

十二374 ところがとっぜん、私は、〈略〉、めばえ  
てこようとする心のはたらきといったようなある  
ふしぎなものを感じました。

十四4511 しずけさの中から、とっぜん、まったく  
思いがけなく、きれいな歌が流れてきました。

どっち [何方] (代名) 8 どっち

三436 きみの なかまと ぼくの なかまと、  
どっちが多いか、くらべてみようではないか。

三665 「どっちへいったらいいか、風にき  
いてみようよ。」と、いいました。

六5311 いったいどっちなんだろう。  
六739 「さ、どっちな。」

六7310 ぼく、どっちだかわからなくなっちゃっ  
た。

八769 小屋はひどくあれていて、どっちにたおれ  
るかわからなかった。

十一99 あんな大きな船の船長と、コックスと、  
どっちがむずかしいだろうね。

十四795 ただ、困るのは、木のぼあいには、どっ  
ちがうらかもとか、わからないことでした。

どっちみち [何方道] (副) 1 どっちみち

十四999 どっちみちさけることのできなかつた  
ことに對して、しつかりしたかくこをおきめにな  
り、

どってこってこ (感) 2 ドッテコドッテコ  
九519 たくさんの白いきのこが、ドッテコドッテ  
コと、へんな樂隊をやっていました。

九529 きのはみんないそがしそうちに、ドッテコ  
ドッテコと、へんな樂隊をつづけていました。

とってんかんとってんかん (感) 1 トッテンカン  
トッテンカン

四95 あさからばんまで、トッテンカン トッテ  
ンカンとはたらいしています。

とつと ぐきんとつと  
どつと (副) 3 どつと

十一851 すると、少年のたましいのそこから、  
どつとことばがほとばしりました。

十五1009 ほかの「幸福」ども、どつとわらいくず  
れる。

十五1019 「幸福」たちは、みなどつとわらいます。

とつとり [鳥取] (地名) 1 鳥取  
十二593 鳥取の西方約四キロのところに、まわり  
十二キロの湖がある。

トッパ (名) 5 トッパ

十一655 ぼくはトッパがこぎたいな。

十一612 トッパ、バック一本。

十一73 トッパ、バック一本。

十一107 さあというときに、ひとりて責任を  
しよって立つ、トッパをこぐ人もいるだろう。

十一11 1 トッパ 3 5 7 コックス 2  
4 6 8 整調  
とっふう [突風] (名) 1 とつ風  
十四753 とつ風というものがそれです。

とて (係助) 1 とて

十五五二(文) いかにも目ざるとき 人とても、声の行くえの 見えんやは。

とて (接助) 1 とて

十五六八 私父とは、心をゆるした間がらのこととて、両者のつきあいはかなりひんぱんであった。とて「王手」(名) 1 とて

九二七 茶人は、そこをほりくぼめ、小石でどてをつくり、泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、とても「逆」(副) 19 とて

三四七 するといたみがいつそうひどくなって、とてもたまらなくなりました。

三〇六 それで、かぐやひめは、その人たちにとてもむずかしいことをいって、それができたからおよめにいくといいました。

五二二(金) きょう、ぼく、とてもうれしかった。

五二三(金) あのね、帰りの電車はとてもこんでいたんです。

五二五(金) ぼく、きょう、とてもうれいんです。五二九(金) 一つは大きくて、ぼくなんか、とても持てそうもない物、

五三一(金) ぼくにはすこしおもかったです、とてもうれいんです。

七三六(金) とてもはいれないね。

七三七 うさぎは、にんじんを、とても喜んでたべました。

七八九 よく晴れた日には、とても元氣があります。八九一〇 一方で、とてもむてっぽうなきかんぼうでした。

十一六九 ころもかわればかわるものか——これが父親であろうとは、とても思われませんでした。

十一八五(金) ぼく、とても思いきれないんです。

十二五七 すばらしい大きな石だんで、とても人間

わざではない。十四八(五) とてもおすれることのできないのは、

わかりきっているのですから。

十四三九 そういうちっぽけな考えでは、とても世界のの中にはたっていないけません。

十五八二 とてもほんとうと思えないほど、ふとっ

ていて、十五八九(金) わたしは、とてもいちいちしょうかいしてはいられない。

十五一〇五(金) 『とてもたまらなくなるゆかい』です。とどく「屈」(五) 11 とどく「カーキーク」

三二二 とうとう、そのてっぺんは、空のくもとに

とどくようになりました。四二九 とおい、とおい、町からだいじなもの

ここに とどきます。六三九 もうすこしで口が水にとどきそうになった

とき、足がつるりとすべって、八四四 一光年は、光が出発してから、一年か

つてとどききよさをさしています。八四六 太陽から発した光が、地球にとどくまでに

は、やく八分二十秒ばかりかかることになりました。八四八 光のとどく時間ではかると、あの星と地球

とのきよりは、二十分や三十分ではありません。八五二 朝早くはまにでてみると、目のとどくか

ぎり、美しい砂地がみわたされた。九三八(五) 高くて手のとどかないかれ枝は、

十三四 小学校をでただけのかれには、手のとどき

そうもない空想になりがちであった。十四三四 光が一方のはしから、向こうのはしまで

です。

十四七二 それが、おりた水のとどくじぶんにはひえて、そこからあります。

とどける「屈」(下) 4 とどける「ケ」↓おくりとどける

三六〇(金) あれは門のそとにいますので、この

はちをわたくしにとどけようとして、手をこ

こまでのばしたのです。四五五 もし、人がなくなったときには、やはり

ここに とどけます。四六二 どんなところへでも とどけてくれます。

五二九(金) むこうの店に品物をとどけて、受けとり

をもらって帰ってくるとちゅう、ととのう「整」(五) 1 ととのう「ツ」

十三九四 ものごとの原因と結果との関係や、その

間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、

ととのえる「整」(下) 3 ととのえる「エ・

エル」九四一 ちょうちよは、うれしそうに羽をととのえ

ました。十四一(五) 調子をととのえるには、どうをあら

こちらにまわすのです。十五六一 おじさんとおばさんが外出の用意をと

とのえて、「略」と、私をうながした。とどまる「止」(四五) 2 とどまる「リ」↓ふ

みとどまる 十三二四 よい結果は、木材だけにとどまりません。

十五五(文) 遠くそののちかしの木に、矢はま

だおれで とどまりぬ。

とともに (接助) 3 とともに 十三二 あいての人をうやまうとともに、自分のつ

とめをはたすだけの勇氣を、もちたいと考えます。

十35 4 かれは、そのりっぱな機械をみて、感心するとともに、〈略〉かた身のせまい思いがした。  
十五29 2 鳥は、不意のしゅうげきにおどろいて、思わず羽ばたきするとともに、つかんでいた女の子をはなして、あおむけにたおれかかりました。

どんどんどん (感) 1 ドドンドンドン

九11 7 ドドンドンドンとなる大だいこの音は、〈略〉うちよせる波の音をきいているようであった。

となう [唱] (下二) 1 となう 《—エ》

十五4 7 [文] 空にとなえし わが歌は、あわれいずに 落ちにけん。

となえる [唱] (下二) 2 となえる 《—エ》

十二90 3 どなたたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのようにとなえていたのでは、

十三15 11 ガリレオも、〈略〉、だまっていられず、本を書いて、地動説を強くとなえました。

どなた [何方] (代名) 4 どなた

一62 2 [会] どなたが おもちになつても、たまはやつぱりたまですよ。

六91 11 [会] あなたは、どなたでいらっしゃいますか。七43 6 [会] どこのどなたかはぞんじませんが、

十五87 2 [会] あなた、どなたです。となり [隣] (名) 19 となり 1 おとなり・おとなり どうし

一52 5 ひとりごとをいうと、となりの おじさんが、〈略〉。

二48 2 それから、となりの へやへ いこうとして、きゆうにたちどまります。

二49 2 いちろうは、となりの へやへ いきます。二50 9 じろうも、となりの へやへ いってしまいます。

四12 2 となりの 町と、いったりきたりします。

四29 5 となりの うちから、うさぎを もらってくる ことかな。

四36 9 [会] わたくしが、きのう、となりの うちにおつかいにいきました。

四37 4 [会] 思いきって、 となりの おばさんに、

『略』』といおうとしました。

四84 7 二ばんめに、となりの うちの ひでおさんが、おもしろい 紙しばいをしました。

五54 6 そこへ、となりの ごろうさんが、かけよってきて、〈略〉。

五96 5 「略」。」と、となりの おじさんがおしえてくれました。

七39 2 いきなりさぶろうをだきあげ、となりの おじさんの目のまえへ、つきだしました。

九53 11 ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちよと光つただけでした。

十一28 11 となりの おばさんから一にぎりのあぶらの種をかりて、

十一73 11 医者が、まだとなりの ベッドをはなれないうちに、少年は立ちあがりました。

十二92 1 となりの 友だちにさそわれていったこと、くりはあんがい少なかったこと、

十五11 4 [文] わか草のはつかにもゆる庭に来てすずめあざりてとなりへとびぬ

十五67 3 新島家のとなりにあった教会の日曜学校の生徒であった私は、

十五106 10 [考] 考えることの喜び』のとなりにいます。

となりむら [隣村] (名) 1 となり村

十66 2 あるとき、このだんなは、用事で、となり村までいかなければなりませんでした。

となりや [隣家] (名) 1 となり家

十五10 6 [文] いけがきのすぎの木ひくみとなり家の庭の植え木の青めふく見ゆ

どなる [怒鳴] (五) 1 どなる 《—ル》

十一7 2 [会] それでもきこえなければ、また、どなる。

とにかく [兎角] (副) 4 とにかく

六78 4 [会] とにかく、命のことはむずかしい大きな問題だね。

九50 1 [会] とにかく、もつといってみよう。

十五27 8 とにかく、朝の冷たい空の中を、アルプスの深い谷の中を、大わしは、少年をせにのせ、少女を下にさげて、〈略〉おりて行きました。

十五90 8 [会] とにかく、そいつは、一どもわたしたちのテーブルにのぼったことはないようです。

との 1 いたかどの・ゆめどののかんのん

どの 1 かねたいちろうどの・さいばんかんのどの [何] (連体) 22 どの

四21 3 [会] ねこの わたくしは、どの ねずみをつかまえようかと 考えました。

四42 4 どのように 列の かたちを かえても、ばらばらになつてしまう ことは ありません

四46 9 [会] さあ、きょうは、どの へんにならびたいというんだね。

四60 10 どの がんも どの がんも、夜つゆで からだがびっしりぬれていました。

四60 10 どの がんも どの がんも、

五33 8 どの えんとつからも、けむりが、むくむくと たちのぼっています。

五58 10 [会] ぼく、大きくなるまでに、どの 星もみなみてしまいたいな。

五87 2 [会] どの おにんぎょうでも、目は二つですよ。七50 3 どの 学校のせんしゅも、みんな、運動場に



整列して、式をあげた。

七624 どの花も、みんな空を向いている。

八351 さて、空の星は、地球からどのくらいの高きよにあるのでしょうか。

八615 「略。」と、どのたまごからも小さなひなの首がでた。

八1002 どのなえからも、すこしずつ新しいなえがでてきました。

八1006 どのなえも生き生きとしています。

八1058 どのいねのほも、すっかり黄色になつておじぎをしています。

十一211 さかわ川のていぼう工事があつて、どの家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで働くことになりました。

十二322 私は、どのようなおどろきとふしぎが私を待っているのか、すこしも知りませんでした。

十四175 どの時間になにをしていらつしやるか、この私にはわかるのです。

十四847 どうして雪のけつしようができるか、どんなばあいに、どのようなけつしようになるか、

十四851 その雪が、どこで、どのようにしてできたか、

十四898 同じ題の作文でも、〈略〉人によつて、文章は、どのように書きあらわされる。

十四899 どのような文章でも、読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたかくながめた人によつて書かれた文である。

とのも 〔外面〕(名) 1 とのも

十五121 〔文〕 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸のとのもを見ればよきつくよなり

とばす 〔飛〕(五) 1 とばす 《一ス》 しゃくとなす・しゃかりとばす・はねとばす・ふきとばす

十三3511 はとにふえをむすびつけてとばすのであるが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。

とばそうじょう 〔鳥羽僧正〕(人名) 1 鳥羽僧正とばそうじょう

十二1071 これは、鳥羽僧正という人がかいた動物絵巻の一場面でありました。

とばり 〔帳〕(名) 1 とばり

十四391 暗いとばりが、たち切られる。

とび 〔跳〕 しゃなわとび

とび 〔驚〕(名) 1 とび

二452 〔窓〕 これは、とび。

とびあがる 〔飛上〕(五) 8 とびあがる 《一ツ、ラー・リール》

五811 「略。」といつてとびあがつたので、みんなわらいました。

六94 ねじはこれをきいて、とびあがるほどうれしかった。

六381 26 立ちならぶビルディングのあいだからとびあがつてくる親子のつばめ。

八69 自分から指さきやくちびるへとびあがり、とびついて、じょうずにえさをとったり、

十436 すると、かれはきゆうにとびあがつた。

十一724 そのとき、少年は、かるい手がふとかたにさわたつたので、びつくりしてとびあがりしました。

十一816 少年は、思わずはつととびあがりしました。

十五5811 新島襄という名を耳にした私は、とびあがらんばかりにおどろいた。

とびお・きる 〔飛起〕(上二) 4 とびおきる とび起きる 《一キ》

五9811 バタバタと音がしましたので、みんながとびおきてみると、

八3910 王さまは、大喜びでねどこからとびおきて、まず、いすにおさわりになりました。

八726 朝がた、かもとびおきた。

十五298 大わしはすぐにとび起きて、〈略〉、おそろしいいきおいで少年にとびかかって來ました。

とびお・りる 〔飛下〕(上二) 4 とびおりる 《一リ》

五58 小石をころころ、ころがして、いわの上からとびおりて、川は山からかけおりる。

八869 そこで、あひるの子は、バターのいれてあるたの中へとびおり、

十四975 そのやいた鳥は、〈略〉、テーブルからとびおりて、ゆかの上をよたよた歩いて、

十五291 鳥を後へひっくり返すようにするいきおいで、ぱつと、地面へすばやくとびおりました。

とびかう 〔飛交〕(五) 2 とびかう 《一イ・ウ》

十257 道ばたにさくたんぽぽ、とびかうちょうちよ。

十三64 ひばりやつばめも、〈略〉ここに帰つて來て、私たちの頭上にとびかい、歌うだろう。

とびか・る 〔飛掛〕(五) 8 とびかかる 《一ツ、リール》

六325 かかしの顔に葉がとびかかる。

六1421 一びきのとらさんが、いきなり、もう一びきのとらさんにとびかかりました。

九1297 くもが、いきなりとびかかっていくと、あぶは、力いっぱい羽ばたきをして、すいとにげていきました。

九1319 くもはみつばちにとびかかりました。

十五299 大わしはすぐにとび起きて、〈略〉、おそろしいいきおいで少年にとびかかって來ました。

十五315 それからは、必死にとびかかる大わしと、この勇ましい少年との戦いです。

十五318 鳥はさけび声をたてて、苦しきまぎれに、

いっそうするどくとびかかります。  
十五329 いままでむちゅうになつて少年目がけて

とびかかつていた大わしは、

とびこえる「飛越」(下一) 2 とびこえる「一

エ」

四485 山の上を高くとびこえて、たににさし

かかったとき、

八719 そこで、みにくいあひるの子は、かきねを

とびこえてにげだした。

とびこむ「飛込」(五) 11 とびこむ「一ミーム・

ーン」

七598 ボタンと音がして、まりが、そとからとび

こんできた。

八6510 さつと水の中へとびこんだ。

八6511 「略」というと、ひなたちも一わずつ

とびこんだ。

八866 あひるの子はまたいじめられるかと思つて、

おそろしさのあまり、牛乳なべの中へとびこんだ。

八899 そういつて、水の中にとびこみ、はくちよ

うのほうへおよいでいった。

九115 それから、水の中にドブンととびこんだ

きの音もあらわした。

九1071 みると、大きなうさが、ちょうど小まつ

の中へとびこんだところであつた。

十二639 八郎は思い切つて、水ぞこにとびこむと、

小川がひろがつて、みるみるうちに湖となつた。

十二7310 あられはその手にはのらないで、顔にあ

たつたりふところにとびこんだりします。

十三377 三郎が、ぼうしをかぶつたままとびこん

で来て、受話器をとる。

十五686 「略」と、家の人によびかけながら、

おもわずとびこんだ私をだきしめた。

とびだす「飛出」(五) 8 とびだす「一シース」

四898 雪だという、あさ早くはねおきて、

そとにとびだして、雪かきをなさる おじいさ

ん。

六3210 からすの子が、びっくりしてすからと

びだし、空をみあげる。

七334 空きつと、とびだすよ。

八616 「略」と親あひるがいうと、ひなたち

はすぐとびだしてきた。

九5010 がけの中ほどに、小さなあながあいていて、

そこから水がふえのように鳴つてとびだし、

九631 そこへ四方の草の中から、どんぐりどもが

ぎらぎら光つてとびだして、

十二453 目も、口も動かし、ときには、したを

だしたり鼻がてんぐのようにとびだすこともある。

十五642 だされたくつを見て、にこにこわらつ

た私は、それを足先につつかけるなり、すぐ、小

鳥のようにとびだした。

とびたつ「飛立」(五) 6 とびたつ「一チーッ」

四151 むこうぎしの、すすきのもさもさしてい

るところから、小鳥がとびたつた。

四654 三十ぼのがんは、みずうみの 島を とび

たちました。

六175 「略」といつて、大いそぎで木からと

びたつていきました。

八248 すつととびたつたかと思うと、その鳴いて

いるなかまのそばへ、とんでいつてとまりました。

八7110 草むらにいた小鳥がおそれとびたつた。

八741 がんのむれが、そろつてあしのあいだから

とびたつた。

とびちる「飛散」(五) 1 とびちる「一リ」

十五3111 まわりには、鳥の白い羽が雪のようにと

びちりました。

とびつく「飛付」(五) 6 とびつく「一イキ」

八69 自分から指さやくちびるへとびあがり、

とびついて、じょうずにえさをとったり、

九1411 あみをはり、かくれていて、ほかの虫が

ひつかかると、いきなりとびついてかみころすな

んて、なんとひどいことをしてきたものだろう。

十五2311 そのとき、だれか、その大わしのせの上

へ、がけの中ほどからとびついたものがあります。

十五249 ひつじかいは、身のあぶないこともわす

れて、思わず鳥のせにとびついたのでした。

十五2411 さいわいにその勇ましい少年は、大わし

のせにとびつき、その上へ乗りうつつて、

十五6411 見るなり私は、おじさんの廣いせなかに

とびついた。

とびつづける「飛続」(下一) 1 とびつづける

「一ケ」

四491 ほかの がんは、「略」、べつに 氣にもか

けないで とびつづけました。

とびどうぐ「飛道具」(名) 1 とび道具

九476 とび道具を持たないでください。

とびのる「飛乗」(五) 1 とび乗る「一ッ」

八610 「ピオ」とよんでひさをたたくと、ひさ

の上にとび乗つたり、

とびまわる「飛回」(五) 7 とびまわる「一ッ・

一リール」

二495 じろうは、よろこんで、りんごをもつて

とびまわります。

四558 かさかさという 木の 音がしまし

たが、それは、小鳥たちが、ねぼけて とびまわ

る音でした。

五966 夏休みがすむころには、ひなはもう、かご

の中をとびまわっていました。

五99 8 二三日すると、ひわは、もとのように元氣になつて、かごの中をとびまわっていました。

十一32 8 鵜 麦のはしりほかがよく上を、海こえてきたつばくろが、すうい、すういととびまわる。

十二94 2 すいすいととびまわるかわいい赤とんぼを、心の中にえがきだす。

十四59 11 鵜 あなたが、どんなに美しくさいたつて、ぼくがとびまわつて、かふんをなかだちしてあげなかつたら、実は一つもつかかなかつたのですよ。

どひょう [土儀] (名) 1 土ひょう

十二106 11 土ひょうは、はぎやすきがさきみだれた秋の野原。

とびら [扉] (名) 1 とびら

十三35 5 正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。

とびわかる [飛分] (下二) 1 とびわかる 《レ》

九30 5 文 鵜 歩みくる胸のへにちようとびわかれとぶ [飛] (四五) 113 とぶ 《パ・ピー・ピー・

ペーン》はけしとぶ・はねとぶ・ふつとぶ

一33 6 お日さま はな——ことり——とぶ——なく——とまる——かくれる——

一41 4 でんとうのしたを、くろくすうつととんだ。

二37 8 鵜 山から小ぞうがとんできた。

二57 2 ちょうちよも とんでいました。

三27 8 ふねは かなつの 大なみを のりきつて、鳥の とぶように 走るではありませんか。

三41 7 たんぼの みが、小人になつて とんでいました。

三68 1 青々とした中に、ふんわりした、小さな、

白い雲がとんでいました。

三68 3 雲は、もりの方へしずかにしずかにとんでいます。

四25 7 鵜 わたくしは、みつちゃんを空をとんでいるだろうと、ときどき思います。

四41 6 ものさしで きちんと そろえたようになつて とんだら、まがつて つりばりのようになつたりしました。

四43 1 鵜 きみ、きみ、じぶんかつてに早くとんでいっちゃあこまるよ。

四43 5 がんは、おたがい いましめあつて、きょうきよく空をとびました。

四44 4 鵜 きょうも、きのうとおなじじゅんぼんにならんで とぶ ことにしよう。

四47 4 鵜 かっちゃんが そういうなら、十五ぼんめにして、とぶ ことにしようじゃないか。

四47 8 三十ぼの がんは、一列になつて とんでいきましたが、やがて、まつばのようなかたちになりました。

四48 3 その 山の ふもとには、大きな 木がしげつて いるので、そこをよけて とびました。

四51 2 下からねらわれて いる ときには、ぼらばらになつて、はなれて とべば 安全なのです

が、

四51 10 かっちゃんは、とぶ 力が なくなつてしまいました。

四52 1 おもい かっちゃんを かつぎながら 空をとぶのは、よい ことでは ありません。

四52 9 もうふのようになつて、かっちゃんを ささえながら、できるだけ 早く とびました。

四63 2 かっちゃんは、なかまの 手をとつて、いそいで とんで かえりました。

四94 3 もくもくもくと、えんとつから すがとぶように、黒い、こまかいものが とんで いる。

四94 4 黒い、こまかいものが とんで いる。

四95 6 風になつて とんで いるうちに、いっしょになつたり わかれたり、

四126 6 鵜 かもめ すいすいとんで いく。

四135 3 鵜 かもめ すいすいとんで いく、空にほんのり ふじの 山。

五43 3 手 そちらでも、ほたるは とびますか。

五44 6 鵜 世界の友よ、手をつなぎ、なかよく とんであそぼうよ。

五44 7 鵜 明かるい世界の空とんで、平和のうたをうたおうよ。

五96 11 鵜 自分でえさをとつたり、遠いところまで とんで いくことは できないよ。

五97 4 まいにち、わたり鳥のむれが とんで きます。

五103 11 さわがしく 鳴いて みせますと、すずめは、おどろいて とんで いって しまいました。

五106 8 鵜 きみも、いっしょにむこうへとんで いくよ。

五108 7 けれども、旅のひわは、そのままとんで いって しまいました。

六31 10 雲がちぎれて とぶ。

六32 1 木の葉が とぶ。

六32 6 顔のうしろを雲が とぶ。

六41 5 つむじ風のように、列をつくつたつばめのむれが、かかしの方へとんでくる。

六43 2 しずんでいくお日さまをおつて、町の上を列車のように とぶつばめのむれ。

六43 4 山や、みずうみや、はたけの上をひとかたまりになつて とぶつばめのむれ。

六44 9 ㊦ ぼくが目をさましたときには、おびみ  
いなものが向こうの山の方へとんでいったんだよ。  
六52 8 じつと月をみつめていると、月は動かない  
で、雲が大いそぎでとんでいくようにもみえます。  
六53 6 ㊦ 雲が大いそぎでとんでいくでしょう。  
六119 10 おかあさんのところへとんでいって、「略」  
といておみせしました。  
六143 2 みつばちさんがとんできて、「略」と、  
うたいながらいいました。  
七5 6 白いちやうが、〈略〉、思いきり高くとんで、  
屋根をこえて、うすべに色の空にきた。  
七17 1 ㊦ 先生、きようは風がありませんから、  
ちやうちやが、たくさんとんでいよう。  
七18 9 ㊦ ああ、とんで、とんで。  
七18 9 ㊦ ああ、とんで、とんで。  
七18 11 ㊦ きようは、ずいぶんとんでるなあ。  
七20 10 ㊦ あつ、白いちやうちやがとんできた。  
七22 6 すずめが、ぱつと、とんでにげる。  
七54 1 ㊦ ボールがピュッととんできた。  
七54 3 ㊦ ボールは、すばやくあちこちにとんだ。  
七54 4 ふいに、ボールが、ぼくのところにとん  
きた。  
七57 2 紙が、くるくるまいをしてとんでいる。  
七63 1 小さな虫がかたまつて、顔のところとん  
でいるくれた。  
七95 1 うさぎのせなかをさかさになると、毛が  
ふわふわとびます。  
八9 6 庭さきにいるとき、とつぜん、上へ飛行機  
でもとんでくると、  
八24 9 その鳴いているなかまのそばへ、とんで  
いってとまりました。  
八68 1 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくい

あひるの子の首すじにかみついた。  
八72 2 「略」と、あひるの子は思った。そうし  
て、目をふさいだが、またさきへとんでいった。  
八84 4 はくちやうはみごとな羽を廣げ、〈略〉あ  
たたい國、廣いみずうみへと、とんでいった。  
八85 1 あひるの子は、あの鳥の名も、どこへと  
でいったのかということも知らなかった。  
八88 4 まえより強く空気をうち、とぶことができ  
た。  
八89 3 ㊦ 私は、あのけだかい鳥のところへとんで  
いこう。  
九17 8 しかし、つばめは、もつともつと南へと  
でいくのです。  
九18 4 つばめは、鳥の中でも、たいへん早くとぶ  
鳥です。  
九18 6 なん百キロの海をひといきにとぶのも、  
けつしてふしぎではありません。  
九22 3 つばめをのせた飛行機は、それから毎日の  
ように、〈略〉ヴェニスへとんでいきました。  
九28 4 ㊦ ほし草にかけおとしとぶとんぼかな  
九49 9 ㊦ やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方  
へとんでいきましたよ。  
九51 4 ㊦ やまねこなら、さつき馬車で、西の方へ  
とんでいきましたよ。  
九52 4 ㊦ やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方  
へとんでいきました。  
九53 7 ㊦ やまねこなら、けさまだくらしいうちに、  
馬車で、南の方へとんでいきましたよ。  
九119 ㊦ 両手をひろげて高くとばれるすがたは、な  
んという勇ましさであらう。  
九112 2 こんどは、のだ先生がとばれるばんである。  
九112 5 先生のからは、美しくちゅうをとんでい

く。  
九112 10 四十メートルも空中をとんで、先生は地上  
の人となられた。  
九131 6 みつばちは、くものあみを知らないで、  
まっすぐにとんできました。  
九132 11 ゆうゆうととんで、にげていくみつばちの  
うしろすがたをみていましたが、  
九133 8 こうもりは、ひょうきんなかつこうをして、  
こちらにとんできます。  
九139 11 ㊦ さあ、早くとんでいくがいい。」ちやう  
ちよは、うれしそうに羽をととのえました。  
九140 4 ちやうど白ばらの花がとんでいくように。  
九140 5 くもは、とんでいくちやうちよを送りな  
がら、「略」と、ひとりごとをいいました。  
九145 10 風と思ったのは、そうではなくて、つばめ  
がすいととんできたのでした。  
九147 1 くもは、つばめの口ばしにはさまれたまま、  
空をとんでいきました。  
九147 5 つばめは、麦畑らしい土地の上をとびまし  
た。  
九147 5 湖の岸べをとびました。  
九147 6 深い森のそばをとびました。  
九148 2 ㊦ お月さんのところへとんでいったあの白  
いちやうちよは、どうしたろう。  
十12 4 「略」と、おとうさんが頼みしたら、  
少女たちは、手をとりあつてとんでいって、  
十112 4 たんぼぼのわた毛が遠くとんでいく日だ。  
十114 10 たんぼぼのわた毛も遠くとんでいく。  
十113 10 ㊦ えんどう・そらまめみな花つけて、羽  
音高くみつばちがとぶ。  
十113 25 ㊦ 岸のやなぎのほわたがとんで、  
十1182 4 「チチロ。」男はそういって、少年の方

へとんできました。

十二483 空をとんだり、すがたを消したり。

十二841 一つのボールを中心にして、両選手はとぶ鳥のようにかけまわりました。

十二941 「赤とんぼがとんでいる」

十二943 「とんでいる。」で動いているようすがすぐわかる。

十二945 「赤とんぼ」が「とんでいる。」

十二949 太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむれてとんでいる景色を思い、

十二957 しょんぼりと校庭に立っていると、赤とんぼが自分のまわりをとんでいた。

十二958 「赤とんぼがとんでいる。」

十三3512 はとにふえをむすびつけてとぼすのであるが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。

十三361 はとがむれになってとんで来ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、

十三479 あぶが一ぴきとんで来る。

十四154 おかあさんがご用でしたら、いつでもとんで行きます。

十四7510 それで、畑の上からとんできて、森の上へかかると、飛行機は、

十五108 ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でとぶ見ゆ

十五115 わか草のはつかにもゆる庭に来てすずめあさりとなりへとびぬ

十五237 見ると、そのがけの下の方へゆったりとんで行く大きなやまわしのつめにつかまれて、

とぶ「跳」(五)8 とぶ《ピープーン》

一244 二ばんの「はねておどれば」のところは、

ぴよんぴよんとびました。

三445 ぼくが、きみたちのせなかの上を、か

ぞえながらとんでいくから、むこうのりくまでならんでみたまえ。

五803 水が光って、とんでねています。

六1359 ささの中、やぶの中をとんでいきます。

七222 すずめは、ぴよんぴよんとんで、庭のはたけの中を歩く。

九291 かい道をきちきちとぶぼったかな

九482 はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゆうを、とんだりはねたりしました。

九531 またすこしいくと、一本のくるみの木のこずえを、りすが、ぴよんぴよんととんでいました。

どぶみず「溝水」(名)1 どぶ水

五77 下水の水やうんがの水、きたないどぶ水をながして、海のとおくにすてにいく。

どぶんと(副)3 ドブんと どぶんと

二284 そのうちに、二ひきとも、どぶんとおちてしまいました。

九115 それから、水の中にドブんとどびこんだとき、音もあらわした。

十一611 すると、橋はまん中からおれて、三人は、川の中へドブんと落ちこんだ。

どべい「土塀」(名)4 土べい

十三268 この家も、高い土べいを立てめぐらしているの、

十三271 土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、ねむのきの枝などが、ずつとのびだしている。

十三272 夏は夏で、ひんやりとした土べいの日かげを選び、風の通り場で遊んでいる。

十三366 小さな光ったわたが、土べいのかたすみ

にたまる。

どべいつづき「土塀続」(名)1 土べい続き

十三269 この家も、高い土べいを立てめぐらし

ているので、小路は、おのずから高い土べい続きになっている。

と・べる「飛」(下)3 とべる《ピーペル》

五958 おとうさん、ひとりでとべるようになるまで、かってやりましょうね。

五968 おとうさん、ひわは自由にとべるようになりましたね。

五9910 いいや、この鳥はとべなくなったらしい。

とほう「途方」(名)1 とほう

四1192 とほうにくれたうらしまは、あけてみました、たまでばこ。

とぼ・ける「惚」(下)1 とぼける《一ケ》

九743 いちろうは、こがねのどんぐりをみ、やまねこは、とぼけた顔つきで遠くをみていました。

とぼとぼ(副)1 とぼとぼ

五721 おじいさんは、とぼとぼと海へやってきました。

トマト(名)3 トマト とまと

二166 はととまととんぼぼうししかからすすずめだかかめめじろ

十279 トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、《略》を、たんねんにみようと思います。

十四213 ミルク、コーヒー、ジャム、トマト、キャベツ、バス、トラック、オートバイ、リヤカー、

とまり ↓ねとまりする

とまりかた「止方」(名)1 とまりかた

十277 庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や、とまりかたや、《略》を、こまかにしらべたいのです。

とまりぎ「止木」(名)1 とまり木

十5610 ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり

木の下におりていつてしまいました。

とまる「止」(五) 39 とまる 《ツ・ラー・リ

ル・レ・ロ》ひたちどまる

一 33 7 お日さま はな ことり とぶ  
なく とまる かくれる

一 36 6 たかい 木に とまって、うたをうたいたいからです。

二 24 7 先生、でんせんに、つばめがたくさんとまっています。

三 52 4 うぐいすはうめの木にとまり、「高い、高い。」といいました。

四 70 3 こころは、ふりがやむと、なりもとまる。

四 74 9 と とんぼ、とんぼ、かきねにとまれ。

五 12 1 あれをみて、汽車が、とまったりとおったりするのだ。

五 14 1 「とまってから、おりるんだよ。」シュ、シュ、シュ。

五 97 7 さんちゃんのおうちのまつの木にとまったり、かえでの枝で休んだりしていききました。

六 16 6 木の上には、一わのはとがとまっています。

六 36 1 大すぎの上にとまるとまったかし。

六 38 5 あの家根にとまっているのは。

六 38 10 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどってきてかしの近くにとまる。

六 41 7 親つばめと子つばめが、かしのそばにとまる。

六 44 1 木の枝にとまっている二わの子がらす。

七 16 3 ちょうちょ、ちょうちょ、なの葉にとまれ。

七 17 4 ちょうちょ、ちょうちょ、なの葉にとまれ。

七 20 11 白いちょうちょが、白い花にとまった。

七 21 3 とまっているちょうちょが、どんなかっこうをして、みつをすうか、よくごらん。

七 46 8 ちょうど、汽車もとまった。

七 58 5 おかあさん、いま、柱時計がとまりました。

七 58 6 黄色いやまぶきの花に、黄色いちょうとまっています。

八 5 9 かごの中から、一わずつつかみだしては指さきへとまらせたり、かたへ乗せたり、

八 6 6 だんだんなれて、指さきへもかたへもとまるようになったばかりか、頭の上にも乗り、

八 9 3 庭の木にとまらせても長くはいません。

八 24 9 とびたつたかと思うと、その鳴いているなかまのそばへ、とんでいつてとまりました。

九 15 3 つばめが電線や物ほしざおに五六ばぐらいならんととまっているのを、よくみかけます。

九 21 1 たくさんのはりがねがはりまわされて、つばめたちのとまるところがつくられました。

九 21 3 つばめたちは、人をおそれず、へやにはいつてくる人があると、たちまち、そのかたや、頭や、手にとまりました。

九 74 7 まもなく馬車がとまったときは、

九 92 4 「十」ととまる。

九 92 10 「一、二、三」と数えながら舞台はしまできてとまる。

十一 52 1 電車は、くるにはくるが、みな満員の札をさげて、とまらずに走っていつてしまふ。

十一 52 2 やつと一台の電車がとまった。

十二 63 2 いくら飲んでものどのかわきがとまらなかつた。

十二 83 9 目にもとまらぬボールが、ネットの上を右に左にと、ゆききました。

十三 4 9 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木のめのむれは、

十三 29 2 その「ビューン」がとまると、

十五 26 3 もしこのわしが、その舞いおりとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、

とまる「泊」(五) 3 とまる 《ツ・ラー・ル》

十三 42 9 きょうはとまるだろう……うん、楽しみにしているよ

十五 20 5 ユングフラウの山中のホテルに、アメリカ人の一家族が来て、しばらくとまっていた。

十五 57 3 きみは室を二つももっているようだが、その一つに日本の青年をとまらせて、

とみこさん「人名」1 とみこさん

二 6 8 ここまで きた とき、 とみこさんが、「略」といいました。

とみちゃん「人名」1 とみちゃん

十一 24 2 おかあさん、とみちゃんを返してもらいましよう。

とめる「止」(下) 18 とめる 《ト・メ・メル》

ひうけとめる・おしとめる・かきとめる・くいとめる・ひきとめる・よびとめる

二 34 8 ぞうつかいは、『じゃあ、さわってごらん。』といって、ぞうをとめました。

三 92 3 くさを ちぎって いれたり、かみきれを いれたり する 小さな子が いたら、とめて やりましよう。

四 38 8 おかあさんのことばがとめたからです。

五 86 7 りようかんさんは、ほうきの手をとめて、

六 11 5 ねじをはさんで、きかいのあなにさしこみ

小さなねじまわしでしっかりとめた。

九 82 2 ぼくらは、ときどき手をとめて、そこをのぞきにいつてみると、

九八八 みんなはほる手をとめました。

九八三 けんかをとめる声がつづく。

九五三 そうしてさっさといきかけが、舞台はしで足をとめる。

十一六〇六 「略。」とかたくとめられていたのがある。

十一六一七 ぼくは、とめられているから渡らない。

十二四九 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。

十二五〇 首のほうからもかぶせてまわくしてから、細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。

十二五一 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作って、のりでとめる。

十三二二五 もみは、ある大きさまでのびると、そこで生長をとめました。

十五二四六 いまそれをとめなければ、もうその女の子は、どこへ持って行かれるかわかりません。

十五四九〇 ただわずかに外国人がこれに目をとめて買うことがあるというのを聞いて、

十五一〇六 「不幸」に行くのをとめることは、なかなかむずかしいのです。

とも「友」(名) 4 友

五四五 世界の友よ、手をつなぎ、なかよくとんであそぼうよ。

十四四二 友よ、友よ。

十四四二 友よ、友よ。

十五五七 歌のもと末 ふたたびも、友の心にあられぬ。

とも「其」(名) 4 とも じさんびきとも・しちひきとも・それとも・とともに・にひきとも・にまいとも・ふたつとも・ふたりとも・りようほうとも

十二〇七 「略。」という先生の声とともに、七色

の光が写しだされる。

十三八 それに、目のだす眞珠質がまきつき、年とともに大きくなって、天然眞珠となる

十四二五 タバコとともに、「タバコ」ということばが、伝えられたということがわかった。

十五三五 これらの表わしかたとともに、事物の形を絵にうつすことも行われた。

とも「供」 じおとも

とも(接助) 4 とも じすくなくとも

十四四三 日々の苦勞に、よし心配がたえなくとも、くちびるに歌をもて。

十五一六 少年たちよ、野にはたらきて、土ほこり顔よごすとも、わするるな、明かるくすめるながえ顔。

十五一七 少女たちよ、花そだてつつあきないで、つづれ着るとも、失うな、やさしく清きな心。

十五七四 自分の子女は、その性質がどんなにちがっていようと、かわいいことはみな同じで

とも(終助) 11 とも

二四二 ほんとうだとも。

六四六 動きますとも。

六四六 いいとも。

九八三 やるとも。

九一〇 いいとも、だれがきみなんかと遊ぶもんか――

九一〇 ああ、いいとも。

十二四五 あるとも。

十二四八 できるとも。

十五八三 いいとも。

十五一〇三 ええ、ええ、そうですとも。

十五一〇六 そりゃあそうともさ。

とも「其」 じあひるども・うおども・うさぎども・おうちにいるこうふくども・こうふくども・さわぎやども・どんぐりども・にわとりども・ふとったこうふくども・わたくしども

とも(接助) 4 とも じけれども

七四四 ひとくちくえども死にもせず、ふたくちくえども死にもせず、みくち、よくち、ぶすはくえども、死なれもせず。

七四五 ふたくちくえども死にもせず、七四七 みくち、よくち、ぶすはくえども、死なれもせず。

七四七 「七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、

七五〇 ともお「ひろいはたけの 中で。」

七五九 ともお「ああ、お日さま。」

七六〇 ともかく「兎角」(副) 2 ともかく

七六一 ともかく「食事」をすませて。

七二九 半円眞珠が思いどおりに取れるようになったので、(略)、ともかく、世にだすようになった。

七三〇 ともしび「灯火」(名) 1 ともしび

七三三 女の子は、窓々をとおして、ちらちらとかがやくともしびの光を見た。

七三四 ともす「点」(五) 2 ともす 《シー・ス》

七四四 女の子は、どんなにか、それで火をともしてみたかったことだろう。

七四九 その両手をあたためるために、(略)一本のマッチで、火をともしることができたならば、

ともだち「友達」(名) 42 友だち じあそびともだち・おともだち

三八七 東の 友だち。

三八八 西の 友だち。

- 三 8 9 南の友だち。  
 三 8 10 北の友だち。  
 四 11 町じゅうの友だちがみんなあつまつてきます。  
 五 6 川は友だちとあくしゅして、川はだんだん大きくなる。  
 五 16 2 ポストにいられると、友だちといっしょになりました。  
 五 18 3 そのうちに、きよくの人が、私たちをかたはしからしらべていって、北の方へいく友だちと、南の方へいく友だちと、西の方へいく友だちと、東の方へいく友だちを、それぞれひとかたまりにわけてくれました。  
 五 18 3 南の方へいく友だちと、  
 五 18 4 西の方へいく友だちと、  
 五 18 4 東の方へいく友だちを、  
 五 25 6 電車の中は、〈略〉、みんなにこにこして友だちのようになかよくなってきました。  
 五 94 2 さんちゃんが、友だちと、山へわらびをとりにいきました。  
 五 108 1 ぼくの友だちのさんちゃんだよ。  
 七 54 9 式をすましてもどつてくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、にこにこしていた。  
 八 46 9 なんの不自由もなくくらししているかと思うと、友だちがいなかったりしました。  
 八 82 10 いやなことをいうようだが、それは、いい友だちはみんなそうしたものだよ。  
 九 8 11 「絵はがき」「港」「友だち」など、いろいろなことを組みあわせてみましょう。  
 九 87 6 人 たかぎ・やまだ そのほか友だち大ぜい  
 九 88 5 たかぎには友だちの一、二、三、やまだに

- は四、五、六、そのほか数人が、それぞれにわかれてふたりをひきとめている。  
 九 89 10 さあこい。」ふたりともむきになって、友だちの手からぬけだそうともかく。  
 九 90 4 たかぎくん、帰ろうよ。」やまだをかこんでいる友だちに、「略」。  
 九 91 2 そのほかの友だちが、落ちているやまだのかばんやぼうしをひろってあとにつづく。  
 九 91 11 友だち、たかぎをかこみながらさる。  
 九 102 2 友だちにまで心配させて——  
 十 19 4 友だちの顔、顔、顔。  
 十 22 3 ひとりの友だちは、水えのぐで写生をしている。  
 十 22 7 ひとりの友だちは、その兄といっしょに種まきをしている。  
 十 22 11 ひとりの友だちは、妹をつれて、つつみの上でつみ草をしている。  
 十 23 7 ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に乗っている。  
 十 31 5 学校では、組の友だちとなかよくして、助けあつていきたいと思ひます。  
 十 31 7 友だちのいいところを、すなおに学んできたと思います。  
 十 59 9 太郎は、友だちの正男と一雄と三人づれで、学校から帰るときのことであつた。  
 十 60 7 が、いま、友だちからすすめられて、こわりかねてしまった。  
 十 22 3 先生もあるし、友だちもある。  
 十 27 6 友だちがほしくなるのはやはりこんな晩だ。  
 十 27 10 友だちがないから。  
 十 29 2 となりの友だちにさそわれていったこと、

- 十四 12 5 私の友だちで、母親が十年このかた、この式のランプをつかつているというのが  
 十四 12 8 その友だちの母親は、このランプに満足しきっているそうです。  
 十四 79 7 そのことを友だちに話すと、「略」と教えてくれました。  
 十五 80 1 友だちとして心のかよつたおつきあいでできるようにしたのは、  
 とともに「共」(副) 1 とともに  
 十四 4 10 そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。  
 とともに「点」(五) 3 とともに「一ツ」  
 七 8 10 しゅくちよく室にひがとまった。  
 八 48 10 中には、うすぐらいひが一つとまっているだけでした。  
 十四 93 4 美しく火のともった家々の前を、そろそろとかなしげに通つて行きながら、  
 とや「鳥屋」(名) 1 とや  
 十三 48 7 とやへ追われて行く、白いレグホンたち。  
 どやどや(副) 1 どやどや  
 十四 57 3 高い声でわらいながら、どやどやとはいつてきたものがあります。  
 どや「土曜」(名) 1 土曜  
 八 10 11 ところが、ある土曜の午後、おなかをすかして学校から帰ってきたすえの女の子が、  
 どやうび「土曜日」(名) 1 土曜日  
 九 47 2 おかしながきが、ある土曜日の夕がた、いちろうのうちにきました。  
 とよださきち「豊田佐吉」(人名) 1 豊田佐吉  
 十 32 10 「略」豊田佐吉は、村の人々から、こういつてあざけられた。  
 とよだしきじんりきしょっき「豊田式人力織機」



(名) 1 豊田式人力織機

十三七二 あくる年から、豊田式人力織機は、國內に  
つかわれるようになったが、

どら 「銅鑼」(名) 5 どら

十三二九 前の荷の上に、小さなどらをぶらさげ、

その両がわに、ふんどうをつるしておく。

十三三〇 歩いて行くと荷がゆれて、しぜんにふん

どうがどらにあたる。

十三三〇 どちらにも、大小さまざまあつて、音色も

ちがうし、

十三三〇 同じ大きさのどらでも、そのうちかたに

よつて、調子がちがう。

十三三一 「ジャン、ジャン、ジャン」と、はげし

くたたいておいて、てのひらで、きゆうにどらをおさえるので、「ジャン、ジャン、ジャツ」とい

うように聞える。

とら える 「捕」(下) 4 とらえる 「一エ」

九一四 くもは、長い手をのぼして、わけなく白い

ちようちよをとらえました。

十二三二 だれかがそれをとらえました。

十四八四 「雪」というのは、〈略〉、雪の一ひらを

とらえて映画にしたものである。

十四八五 一ひらの雪をとらえて、それをいろいろ

な角度からながめてみることは、

とらさん 「虎」(名) 9 とらさん

六三六 ところが、この大きな岩のかげに、とらさ

んがねむっていたのです。

六三九 とらさんは、晝ねをしていたのですが、

六四〇 とらさんは、そつと首をのぼして、うさぎ

さんたちの方をのぞきました。

六四六 とらさんは、いきなり、「〈略〉。」と、われ

がねのような声をたてました。

六四七 とらさんが手をのぼして、一ぴきのうさぎ

さんのせなかをおさえました。

六四八 それは、もう一ぴきのとらさんでした。

六四九 一ぴきのとらさんが、いきなり、もう一ぴ

きのとらさんにとびかかりました。

六五〇 もう一ぴきのとらさんにとびかかりました。

六五一 二ぴきのとらさんが、つかみあいをはじめ

ました。

トラック (名) 1 トラック

十四二一 ミルク、コーヒ、ジャム、トマト、

キャベツ、バス、トラック、オートバイ、リヤ

カー、

トラホーム (名) 3 トラホーム

十四二二 コレラ、マラリア、トラホーム、アル

コール、ガーゼ。

十四二三 チフス、トラホーム、ガーゼ、スキー

はドイツ語。

十四二四 チフスやトラホームは、ドイツ医学がは

いつてきたときに〈略〉傳つたことばであらう。

トランク (名) 1 トランク

五三六 すると、その人は、トランクからこの本

をだして、〈略〉、ぼくにくれました。

トランプあそび (名) 1 トランプあそび

四八二 おしまいに、みんな トランプあそびを

しました。

とり 「取」 しゃしどり・うけとり・くさとり・しり

とり・たきとり・むしとり・よこどりする

とり 「鳥」(名) 63 とり 鳥 しゃおいとり・いち

ばんどり・ことり・ことりさん・ことりたち・こ

りや・はやとり・やきとり・わたりどり

二一〇 くのさの など、とりの など、そのほか

のものに、わけたらいとおもいます。

三二五 四くみは鳥の名をあつめました。

三二六 鳥の名は十四あつりました。

三二七 えをかいいていくうちに、花の名も、鳥

の名も、だんだんふえてきました。

三二八 ひとかき水をかくと、ふねは〈略〉、鳥

のとぶように 走るではありませんか。

三二九 鳥のように 早いふねだから、はやとり

という名をつけよう。

三三〇 あたまからせなかにかけて、き色がかった

美しい鳥になりました。

三三一 いいや、この鳥はとべなくなつたらしい。

三三二 かえでの木につるしておく、いろいろな

鳥がやってきました。

三三三 まあま、この鳥は、いくつもげいがで

きるのね。

三三四 私は毎日山へいって、鳥やけものをとつ

ていますね。

三七五 ねえ、はつぱと同じになるのは、鳥など

に、すぐみつからないためですよ。

三七六 鳥——それも、日本どくとくの、〈略〉ほ

おじろです。

三七七 いたるところの山野に、いちばんたくさん

いる鳥といわれるはおじろです。

三八八 なんというかな、土地にかんけいのふかい

鳥だらうと、

三八九 そこには、二つの鳥の家族が、一つのうな

ぎの頭のことであらそつていた。

三九〇 親あひるにつれられたひなたちが通つてい

くと、一わの鳥が、「〈略〉。」という、

三九一 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくい

あひるの子の首すじにかみついた。

三九二 草むらから、大きなりっぱな鳥の一むれが

やってきた。

八84 2 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっていた。

八85 1 あひるの子は、あの鳥の名も、どこへんていったのかということも知らなかった。

八85 3 しかし、いままでにだれをなつかしく思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。

八85 4 どうして、あの鳥のもっているような美しさをもつたらなどと思ふことができた。

八89 1 あひるの子は、そのみごとに鳥を知っていた。

八89 3 図 私は、あのけだかい鳥のところへとんでいこう。

八89 8 図 冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがまだ。

八93 4 いまでは、すべての鳥の中で、いちばん美しいといわれる身のうえになったのである。

九18 4 つばめは、鳥の中でも、たいへん早くとぶ鳥です。

九18 4 つばめは、鳥の中でも、たいへん早くとぶ鳥です。

九115 1 図 いまの鳥はこの木にいるにちがいないしひそかに枝葉の中をみあぐる

九118 4 図 金色の小さき鳥のかたちしていちようあるなり丘の夕日に

十一25 4 とりが鳴くと、まだ暗いうちからおきて、

十二84 1 一つのボールを中心にして、両選手はとぶ鳥のようにかけまわりました。

十二102 3 はにわには、このほか、うまや、いぬや、鳥などをこしらえたものがあります。

十二104 9 屋根の形や左右にのびたるうかのかっこうにも、ほうおうという鳥の美しいすがたがあら

われていることに気がつくことでしよう。  
十三50 2 その木のかげで、きれいな鳥がわらっている。

十四97 1 やいた鳥が——それこそほんとうのまるやきの鳥が、ほかほかとあたたいいきをたてて、

テーパーの一方におかれてあった。

十四97 2 ほんとうのまるやきの鳥が、

十四97 4 そのやいた鳥は、〈略〉、テーパーからとびおりて、ゆかの上をよたよた歩いて

十五116 図 ガラス戸の外にいかく鳥の影のガラス戸すきてたみにうつりぬ

十五24 1 その人は、〈略〉わしのせにしがみついて、両足で鳥の腹をしめつけるようにしています。

十五24 8 ひつじかいは、身あぶないこともわすれて、思わず鳥のせにとびついたのでした。

十五24 12 少年は、大わしのせにとびつき、その上へ乗りうつて、両足で鳥の腹をしめつけ、

十五25 1 上体をびったりと鳥のせにつけて、

十五25 1 右手で鳥のつばさのつけねをつかみ、

十五25 2 鳥が大づめでつかんでいる女の子のからだから下へ落ちないように、

十五25 7 両足でいっそうはげしく鳥の腹をしめつけました。

十五26 4 少年はいっつ鳥のせからふり落されないものでもない。

十五28 1 鳥は〈略〉、その重荷をふり落すように、ある岩角のすこしあき地のあるところを目がけておりて行きました。

十五28 10 短刀をぬいて、鳥がそのあき地へ身をおろすかおろさないうちに、鳥のせ骨をさけて一つきつき通し、

十五28 11 鳥のせ骨をさけて一つきつき通し、

十五28 12 鳥を後へひっくり返すようにするいきおいで、ぱっと、地面へすばやくとびおりました。

十五29 1 すると、鳥は、〈略〉、つかんでいた女の子をはなして、おおむけにたおれかかりました。

十五30 3 少年は、身をかわすと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。

十五31 6 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしとあたります。

十五31 7 鳥はさげび声をたてて、苦しきまじれに、いっそうするどくとびかかります。

十五31 10 ちよつとでも気をゆるめると、鳥のくちばしでつき殺されます。

十五31 11 まわりには、鳥の白い羽が雪のようにとびちりました。

十五32 5 ようやく道を見つけて、この鳥と少年との戦っている岩角近くまで来ました。

十五32 6 けれども、戦っている人と鳥とはむちゅうです。

十五90 4 図 たぶん、あなたがたも、あの鳥、どこにかくれているか、ごぞんじないでしょうね。

十五90 8 図 なんでも、たべてはうまくない鳥だそうじゃないですか。

十五90 10 図 というのは、その鳥をあまり上等とは思わないからです。

とりあう 「取合」(五) 2 とりあう 《イー・ツツ》

一57 4 きしゃからかけおりて、手をとりたいました。

十12 3 少女たちは、手をとってとんでいて、小さなのをえらんで、ひろってきてくれました。

とりあげる 「取上」(下二) 6 とりあげる 《ゲ・ゲル》

一46 2 かたなだの、てっぽうだの、あぶないも

のはみんなとりあげられてしまいました。  
 五二〇 みつおさんがよろこんで、私を手にとりあげました。

九四八 大きなかきが、ころころと二つ三つ落ちて  
 いるのをみたときは、思わず手にとりあげます。  
 九五二 やがて思いきって、たかぎのそばにより、  
 だまつたままそれをとる。

一二八 母は「略」、孟子の顔を見ると、つと  
 立って、そばにあった小がたなをとるあげました。  
 一二八 民ちゃんはうれしそうにいて、その包  
 みをとりあげると、よちよちと立ちあがりました。  
 とりあつかう 「取扱」(五) 3 とりあつかう 《一  
 ウーッ》

九一〇 その例として、まず、水の音をとりあつ  
 かった。

一四八 雪だけ水が流れたところ、それをうれ  
 しそうに見ている雪國の子どもなど、時間的に、  
 じゅんじょをおって、とりあつかったものである。  
 一四八 同主題の作文でも、それをとりあつかう  
 人によって、文章は、どのように書きあらわさ  
 れる。

とりいそぐ 「取扱」(五) 1 とりいそぐ 《一グ》  
 一三九 葉は、赤く黄色く色づいて、冬  
 のしたくをとりいそぐ 村人の目をなぐさめる。

とりいれ 「取入」(名) 2 とりいれ  
 七六五 麦のとりいれ、日がてりつける。  
 一三九 追う夜も重なって、麦のとりい  
 れことなくすめば、

とりいれまつり 「取入祭」(名) 1 とりいれまつり  
 一四五一 ある家の、かぼちゃのとりいれまつりの  
 晩のことでした。

とりいれまつりのよる 「課名」 2 とりいれまつり

の夜

一四三 六 とりいれまつりの夜……五十一  
 一四五一 六 とりいれまつりの夜

とりいれる 「取入」(下) 3 とりいれる とり  
 入れる 《一レーレル》

一三八 続くひよりに勇みたち、いねもことな  
 くとりいれた。

一二二 外国から書物が新しくはいつてくること  
 は、外国人の心が傳わることで、日本はこのよう  
 な心をとりにいて、どんどん育ってきました。  
 一五五 私が日本をおとすところは、西洋の  
 文化をとりに入れることがさかんときで、

とりうち 「鳥打」(名) 1 鳥うち  
 八七二 ものすごい鳥うちがはじまったのである。

とりかえす 「取扱」(五) 2 とり返す 《一シー  
 ソ》

一三九 つるぎで失ったものを、すきでとり返そ  
 うと決心したのです。

一三六 敗戦のために意氣のおとろえた國民は、  
 希望をとり返し、

とりかえる 「取扱」(下) 5 とりかえる 《一  
 エーエル》

一四二 小さなねじが一本いたんでいましたから、  
 とりかえておきました。

七二八 あなたは、きょう、しくびんのなっぱ  
 を、とりかえましたか。

七二九 ぼくは、学校から帰ると、だいこんの  
 はっぱを、とりかえてやるのが楽しみだ。

八四九 水をいっぱい、ふたをして日かげにお  
 き、ときどき水をとりかえました。

八五二 水をとりかえるときにみたらもみのものと  
 ほうがすこしふくらんでいました。

とりかかる 「取掛」(五) 1 とりかかる 《一ツ》

一三七 かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械  
 を作ることにとりかかった。

とりかこ 「鳥籠」(名) 3 鳥かこ  
 五〇八 鳥かこは、おひるまは、水道のあるいど  
 ばたの高いところにかけますが、

一五二 ガラス戸の外にすえたる鳥かこのブ  
 リキの屋根に月うつる見ゆ

一五三 照る月の位置かわりけん鳥かこの屋  
 根にうつりし影なくなりぬ

とりかこむ 「取囲」(五) 1 とりかこむ 《一マ》  
 三二〇 おじいさんの 家の まわりは、弓矢を  
 もった人たちで、いくえにもとりかこまれ、

とりかたづける 「取片付」(下) 1 とりかたづ  
 ける 《一ケ》

一四四 「これをとりかたづけてやろうか。」  
 《略》文雄が、そのくち草をとりのけようとす  
 ると、

とりかわす 「取交」(五) 2 とりかわす 《一サ  
 ース》

七四五 それから、二三どのおし問答が、ふたりの  
 あいだにとりかわされた。

一四七 手と手をにぎりあい、そのにぎりかたに  
 よって「ことば」をとりかわすようになりました。

とりこや 「鳥小屋」(名) 3 鳥こや 鳥小屋  
 一四五 みんな、鳥こやにかくれていた。

一四六 わたしについておいで、大きな世界の鳥  
 小屋へつれていってあげるからね。

八六六 そこで、みんなは鳥小屋にでかけた。

とりさる 「取去」(五) 1 とりさる 《一ツ》

一三二 知識を廣め、学問を研究して、迷信を  
 まったくとり去ってしまうようになれば、

とりすがる 「取籠」(五) 1 とりすがる 《一ロ》

九四六 おかあさんときいて、くもは、手をうんと  
のぼして、とりすがろうとしました。

とりだす 「取出」(五) 10 とりだす 《一シ・ス》

一五六 ぽけつとからうずらの たまごほど ある  
だいやもんどをひとつとりだして、わたくしに  
みせました。

一六一 しろちゃん は ふくろから だいやもんどを  
とりだして、「略」といいました。

六四四 ぼくは画用紙をとりだした。

七三六 兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちょ  
うちよを、しくびんからとりだす。

九六九 ギョーしゃもたいへんあわてて、こしから大  
きなかまをとりだして、「略」草をかりました。

九四七 くもは、ふといつなをとりだして、みつば  
ちのからだをしぼりつけようとした。

一五二 母がこしらえてくださったパンを、ふくろ  
からとりだして、いぬにやりながら、

一二一〇 すると、老人は、ほおえみながらポケッ  
トに手をいれましたが、とりだしてみせたものは、  
ガラスのかけらばかりでした。

一三二四 眞ちゃんが書きのこしていった手紙を、  
とりだして読む。

一四九五 女の子は一本のマッチをとりだした。

とりつく 「取付」(五) 4 とりつく 《一イ・ク》

八一六 木からいうとめいわくしこくなことです、  
せみの子からいえば、母親のちぶさにすがったよ  
うなもので、とりついたがさいご、ようににそれ  
からはなれません。

八二一〇 虫は、それにとりつく、《略》それにし  
がみついて、動かなくなっていました。

一二二五 民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、

なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、

一二二六 ちゃぶ台をだして、食事の用意などをし  
ていると、とりついてぐんぐんおしについて、

とりつく 「取次」(五) 1 とりつく 《一イ》

四六四 もっといそぐときには、でんわをとり  
ついでくれます。

とりつけ 「取付」(名) 1 とりつけ

六四七 つぎに骨のとりつけです。

とりつける 「取付」(下二) 2 とりつける 《一  
ケ》

六四七 さっきのつの中へ、ちょうど、するする  
とはいるくらい大きさに作って、そのほしに、  
虫めがねをとりつけた。

一三三七 ところ 三郎のうちの二室 右がわのか  
べに、電話がとりつけてある。

とりなおす 「取直」(五) 1 とりなおす 《一シ》

一四一五 自分には子どもがあるということをお  
考えになって、力をとりなおしてくださいように

とりのける 「取除」(下二) 2 とりのける 《一  
ケ・ケル》

一二一四 そのくち草をとりのけようとすると、  
一二一五 文雄は、それをとりのけるのをやめて、  
また下がきにかかった。

とりのこす 「取残」(五) 1 とりのこす 《一サ》

一四四九 とりのこされるかと思つてさ。

とりのぞく 「取除」(五) 3 とりのぞく 《一イ・  
一カ》

九四四 どんな小さな根つこでも、すっかりとり  
のぞいておかまいといけないうわて、

一三六 いまままでの失敗のもとをとりのぞいて、新  
しい設計図をこしらえあげた。

一二三五 ただ、腹だちの原因がとりのぞかれたと

いう満足を覚えたばかりでした。

とりまく 「取巻」(五) 8 とりまく 《一イ・キ・  
一ク》

一三〇九 まいにちまいばん あつまってきた、お  
じいさんの家のまわりをとりまきました。

四九六 四人の子どもが、一びきのかめをとり  
まいて、あそんでいます

五五三 島をとりまく 青い海、青い海。

八四四 いまは、その身をとりまくりつぽなもの  
の中に、しみじみと幸福をさとしたのである。

一三二八 どこからともなく、女の人たちが集まっ  
て来て、糸屋さんを取りまく。

一四三三 このぎんが系というのは、地球をとりま  
いている天の川の内がわにあるたくさんの星のむ  
れなのです。

一五八二 みんな右手の前の方に、光をとりまいて  
かたまっています。

一五九四 「略」と歌い、子どもたちをとりま  
いて、陽気なおどりをします。

とりみだす 「取乱」(五) 1 とりみだす 《一シ》

一二八六 チルデン選手は、とりみだしたしせい  
ではありましたが《略》無事に受け返すことができ、  
とりよく「努力」(名) 4 とりよく 努力

一二四九 クレーをしつけていくのには、なみなみ  
ならぬどりよくがいました。

一二一四 新しい学問をきり開いていくときは、い  
つの時代でもなみなみのどりよくでなしとげられ  
るものではありません。

一三二二 ダルガス親子の発見と努力によってもた  
らされた、よい結果は、

一五二五 私は、一年半の努力の結果、しゅびよく  
書きあげた論文を持って、

どりよくする 「努力」(サ変) 1 努力する 《↑シ》

十五426 日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種の文字をつかっており、そのうえ、ローマ字の教育にも努力している。

とりわけ 「取分」(副) 1 とりわけ

十四528 花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。

とる 「取」(四五) 120 とる 取る 《↑ッ・ラ・リ・ル・ロ》 ↓うけとりにくい・うけとる・おうけとりくださる・おとりくださる・おとりなさる・かきとる・かりとる・かんじとる・きどる・きりとる・くいとる・くまどる・すいとる・としとる・ぬきとる・はぎとる・ひきとる・みてとる・むしりとる・よみとる

— 254 さかなをとる人、

— 489 わたくしは、おばあさんの 手をとってあげました。

— 639 おんがくにつれて、みんなが 手をとっておどりました。

— 783 会 よその 子どもたちが わたしのお日さまをとってしまふのはいや。

— 787 会 だれにも お日さまは とられません。

— 1004 おじいさんは まいにち、のや山へ 竹をとりに いきました。

— 1024 おじいさんの とる 竹の中には、たびたび こがねがはいっていました。

— 249 手 おみやげに うめどきをとって きました。

— 615 みんなは はしをとりました。

— 632 かっちゃん、なかまの 手をとって、いそいでとんで かえりました。

— 1063 かめは、うらしまの 手をとって、そこら をぐるぐると あるきまわります。

— 1184 お氣をつけて。」かめが、うらしまの 手をとって、でていきます。

— 357 さかんに、きかいで 石炭をくずしてとっています。

— 657 おじいさんは、あみでさかなをとり、おばあさんは、糸をつむいでくらしていました。

— 6610 会 わしは、きょう、金のさかなをとったよ。

— 942 さんちゃんが、友だちと、山へわらびをとりにいきました。

— 9610 会 自分でえさをとったり、遠いところまでとんでいくことはできないよ。

— 991 どこかのねこが、しのびこんで、ひわをとろうとしていました。

— 149 はとは、いそいで木の葉をとって、ありのそばにおとしてやりました。

— 239 会 ぼくがひょうしをとってあげる。

— 398 会 わたしたちのなかまがわるい虫をとってそだてたいねを、

— 805 会 にいさんは毎日海へで、魚をとっていらっしゃるが、

— 806 会 私は毎日山へいって、鳥やけものをとっていますね。

— 843 会 あ、つりばりをとられた。

— 853 会 つりばりを魚にとられてしまいました。

— 855 会 とられたって。

— 873 会 つりばりは魚にとられてしまふし、にいさんにはしかられるし、困っていないたのです。

— 927 会 じつは、海でつりをしていたら、つりばりをとられてしまったのです。

— 931 会 そこへ年をとったかたがあらわれて、

— 948 会 みんなのものにたずねるが、だれか、このかたのつりばりをとっていったものはないか。

— 9411 会 とりません。

— 9610 会 たいののだから、つりばりをとっておやり。

— 971 つりばりをとる。

— 10410 角をとったところで、なんになりましょう。

— 146 「手にとるようによくわかる。」

— 183 会 そんなに実をとっちゃいけない。

— 185 会 よくみのつてから、油をとるんだからね。

— 206 会 そのうち、たねをとるために、一本だけのこしておきましたら、

— 2210 会 あおむしをとって、どうするの。

— 2311 会 はるお、だいこんの葉を—まいとってき

てね。

— 242 はるおは、だいこんの葉をとってくる。

— 252 会 たまごをとってしらべてから、なん日ほどたっているかしら。

— 5310 センターが、外野のセンターにれんらくをとって、どんどん、あてにあてた。

— 797 ふたりは、旅人の両手をとる。

— 8511 口さきにふくんだえさをとらせたり——

— 869 とびついで、じょうずにえさをとったり、

— 8424 王女は、王さまにあっては、世界じゅうのこがねよりもたいせつであつたからです。

— 8569 波うちぎわのかめが目について、それに氣をとられて、わきみをしたあたりが

— 8929 年をとったはくちようが、新しいはくちようのまえにきて頭をさげた。

— 8992 なわしろからとったなえをみんなでわけました。

— 9211 航空会社では、お金をとらずにつばめを運

ぶことを申しでました。

九三二(手) おとなといっしょに畑にでたり、山へたきぎをとりにいったりするので、

九三三(手) 黒くてひらたい貝がとれますので、なんども湖に近い川しもの方へとりにいきました。

九三三(手) 村の子どもがきょうそうでとりにいくので、たいそうにぎやかです。

九三三(手) 三びきもとつてくると、うちの家族七人が、じゅうぶんだべることができます。

九三六(手) たきぎをとりに行く山は、ぼくの家からは十五分ほど登るのですが、

九三六(手) 手にとつて口へいれると、つめたくてあまり味がしました。

九三七(手) ぼくははじめ、山へたきぎをとりに行くのが、すきではありませんでした。

九四四(手) じゅくした実がすずなりになっているのをみると、いまにものぼつてとりたくなります。

九六八(手) やまねこは、〈略〉、ひたいのあせをぬぐいながら、いちろうの手をとりました。

九七〇(手) いいえ、お礼はどうかとつてください。

九八三(手) あとでよくみてあげるから、かごにいれてとつておきなさい。

九八四(手) これはじょうもん土器といって、〈略〉。とつておきなさい。

九九六(手) だまつてそれととり、かばんにいれる。

九九六(手) きみがむしりとつたんじゃないか。」と、ボタンをとる。

九一三(手) ずっと上流へいってためしてみたり、深いところの水をとつて飲んでみたり

九一三(手) 木の葉が黄色くなるころで、いなかの子どもにとつては、もっとも楽しい季節でした。

一〇五九(手) ごはんをたべてから、すすきを取つてお

いで。

一〇五九(手) ごはんをたべてから、山の方へいって、たくさん取つてきた。

一〇六九(手) ふたを取つてみようか。

一〇七三(手) だんなは、あつけにとられてたずねました。

一〇七三(手) じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうをとつて遊んでいました。

一一五二(手) 川口の子どもたちは、いつも砂原で、すもうをとつたり、おにごっこをしたりして

一一二六(手) まきをとり山へいく、そのいき帰りに、いつもその本を手からはなさず、

一一二八(手) その油を自分でとりたいと思い、

一一二九(手) 三年めには、二十びょうの米をとることができました。

一一七六(手) 看護婦がなにか飲み物を持ってくると、コップなりさじなりをその手から取つて、

一一九二(手) 看護婦が、小さなすみれの花たばを、ベッドの上のコップの中から取つてきました。

一一九二(手) 一方の手で花たばを取りながら、

一二五四(手) これをきいたコロンブスは、つと立って、テーブルの上のゆでたまごをとり、

一二五三(手) リビングストーンがちよつとそとにでかけたるすにやつてきて、その書物を手にとりました。

一二七四(手) 文雄は、三きやくにこしかけて、またふでをとつてかきはじめた。

一二二四(手) ふたりのまごというのは、父母にとつてのことですが、わたしには、かわいいいいとおいにあたります。

一二三三(手) 私は、〈略〉、新しい人形を手にとつて、ゆかにたたきつけました。

一二六二(手) 八郎はその魚をとつてやいてたべた。

一二七二(手) そのあたりにいるのは、〈略〉や、のり

をとりにでるりょうしの子どもたちで、

一二七四(手) 曾良が水をたくさんくんでおいてくれたし、まきもたくさんとつてきてくれてあるし、

一二九二(手) もみじの枝をとつてきたこと——

一二九四(手) 弟にせがまれて、赤とんぼをとりにでかけたが、

一二九五(手) 赤とんぼはとらずに、花を手にいっぱいつんで帰つたことを思う。

一三二六(手) ガリレオは、年をとつてもいたし、

一三二七(手) 戦いに敗れ、賠償として、〈略〉、作物のよくできる二州をとられました。

一三二九(手) このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかありません。

一三二九(手) ここに住んでいる子どもたちにとっては、かけがえのない、楽しい遊び場所であり、

一三三七(手) 三郎が、ぼうしをかぶつたままとびこんで来て、受話器をとる。

一三三八(手) おかあさん、配給物を取りに行ったんじゃないでしょうか。

一三九四(手) せつかくの記念品だから、とつておいたほうがいいよ……

一四一七(手) おとうさんのご一生は、私たちにとつての手本になってくれるでしょう。

一四一八(手) それは私にとつて、このうえもないいせつなことばです。

一四一三(手) それは、コップの上からコーヒーこしをとつたとき、それをのせるためなのです。

一四一五(手) おかあさんのおやさしさこそ、私にとつては、いちばんとうとい宝なのです。

一四三六(手) あなたがたは、これからの日本にとつてだいじなかがたです。

一四七五(手) 地面の空気が、日光のためにあたためら

れてできるときはむらは、飛行家にとって、たいへんあぶないものです。

十四 80 ㊦ あぶはちとらず。

十四 90 9 その上ぐつは、母親のものだったので、この子にとっては大きすぎた。

十四 96 6 女の子は、〈略〉、もう一本のマッチをとってかべでこすった。

十四 99 5 この子にとって、ただひとりのしんせつな人であつたおばあさんが、

十五 30 12 その石を取るが早いか、

十五 39 6 かたかなは漢字の一部分をとって作ったもので、

十五 39 8 ひらがなはかたかなのように漢字の一部分をとったのではなく、

十五 39 11 かなは、日本の文化にとって、ほんとうに大きな発明で、

十五 46 4 ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵のはちを手にとって、かれは、びっくりした。

十五 59 12 あっけにとられているタイピストをしり目に、げんかんに出て、

十五 60 11 長男に生まれて父母の愛を一身に集めていた身にとっては、天下におそるべきなものもなく、

十五 69 6 おじさんが日夜ふでをとっていられたという大きなつくえの上に、

十五 78 7 ひとりの人間にとって眞実であるものは、他人にとっても眞実だからである。

十五 78 8 他人にとっても眞実だからである。

十五 89 11 ㊦ おふたりのために、ちゃんと席がとってありますよ。

十五 110 6 ㊦ 私は、もう年をとることはないのだからね。

十五 112 10 ㊦ きりょうのわるいおかあさんもないし、年をとったおかあさんもないのさ。

トルコ (地名) 1 トルコ

十五 40 9 ローマ字は、アメリカ・イギリス・フランス・イタリア・トルコ・〈略〉など、世界の大半につかわれている文字である。

どれ [何] (代名) 20 どれ

四 121 1 この光をだすために、どれほどたくさんの人が、はたらいしていることでしょう。

四 121 3 これができあがるまでには、どれほど苦心をしたことでしょう。

四 122 9 ただ一本のマッチでも、これを作りあげるまでには、どれほど手かずがかかっていることでしょう。

五 55 4 ㊦ さつきみつけた星は、どれだったかしら。

五 59 8 ㊦ どれも空色です。

六 6 8 ㊦ あのような道具、たくさんの時計、〈略〉、どれをみても大きくてえらそうである。

六 6 10 ㊦ ひとかどの役目をつとめて、世の中の役にたつのに、どれもこれも不足はなさそうである。

八 63 2 ㊦ 「われないというたまごはどれかね。」と、年よりのお客さんがいった。

九 81 5 ㊦ 貝や石ころは、どれか一つのかごにいれておこう。

十 35 5 機械は、どれひとつとして、日本製のもの、は、なかったからである。

十 37 7 日本の新しい出発にあつても、この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであらう。

十 44 12 第二、第三と母貝を開いていくと、どれにも眞珠が、きよらかにかがやいていてではないか。

十一 54 8 どれもみなうまいことばだ。

十二 72 8 のりをとりにでるりょうしの子どもたちで、どれも身なりはきれいではないのですが、

十二 103 8 お金がなかったときにくらべて、お金ができてからはどれほど便利になったか、

十二 113 2 この本を日本語になおすのには、どれほど苦心したかわかりません。

十三 12 2 理由のないことを信ずる迷信は、今日、世の中にどれほど害をなしているかしかない。

十四 46 8 かれは、いままでにどれだけ歌を聞いたかしれませんが、

十四 69 2 だから、どれもこれもみんな、茶わんの湯にくらべるのはむりですが、

十五 61 3 父に送った手紙のどれにも、「〈略〉。」と、必ず書きそえてあつたのを見ても、

どれ (感) 4 どれ

三 100 8 ㊦ どれ、ひとしごとしよう。

六 140 1 ㊦ どれ、ごちそうになろうかな。

八 64 3 ㊦ どれ、たまごをみせてごらん。

十一 42 9 ㊦ どれ植えつけの用意をしよう。

ドレスデン (地名) 1 ドレスデン

十三 59 2 ㊦ これは、ドレスデンの美術館にある絵で、『シストのマドンナ』といわれている。

どれどれ (感) 1 どれどれ

五 93 5 ㊦ どれどれ、ゆうごはんでもたこうかな。

とれる [取] (下) 15 とれる 取れる 《レ・レー》ひきとれる

五 35 8 とれた石炭は、トロッコにつんで、そとへはこびだします。

五 36 3 ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろいろのくすりも石炭からとれます。

五 36 5 いろいろのくすりも石炭からとれます。

五 62 6 あさごはんのとき、はたけではじめてとれ

たきゅうりをたべました。

六八五(四) 小鳥一わとれやしな。

六二四(二) たくさんとれたね。

七四七(一) 心がくもっていると、いくらなおしても、

文章のくもりはとれません。

八九六(四) 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎ

て、あとでなえがよくとれないそうです。

八〇八(二) ぼうのあいだにいねをはさんでこいたらよ

くとれました。

八〇九(六) やく12平方mの土地で、4-1のげん米がと

れました。

八〇九(七) 平年作は、1平方mに3・5dlのげん米が

とれるのですから、

九三三(三) このほかに、大きな、黒くてひらたい貝

がとれますので、

九三六(三) ここからは美しいかこうがんがとれます。

十42(八) 半円真珠が思いどおりに取れるようになっ

たので、ひとまずこれを加工して、

十43(一) 八十五万から五つぶの真珠が取れたわけ

ある。

トロッコ (名) 5 トロッコ

五35(八) とれた石炭は、トロッコにつんで、そとへ

はこびだします。

十24(三) トロッコをおして、炭坑にはいつていく工

員。

十24(一) みるまに、トロッコにつまれる石炭の山。

十25(一) おしだされてくるトロッコ。

十25(二) ごうごうたるトロッコのひびき。

どろまみれ (泥塗) (名) 1 どろまみれ

十一63(四) いなかの人らしいひとりの少年が、どろ

まみれにぐつしよりとぬれて、

とわだこ (十和田湖) (地名) 2 十和田湖

十二62(七) 十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木

こりがいた。

十二63(一) それが十和田湖のおこりだということ

ある。

とわだこ (題名) 1 十和田湖

十二62(六) 十和田湖

とん (感) 1 トン

三85(七) ガラガラガラ、ガラ、トン。

どん (感) 3 ドン どん

六三二(七) 「どん」といおうとすると、うさぎさ

んたちのまえに、大きなかさんがあらわれまし

た。

六三三(四) 「よいい、どん」と、元氣のいい声を

かけました。

十五32(八) ふいに「ドン」という鉄ぼうの音がし

たかと思うと、

どんぐり (団栗) (名) 13 どんぐり

九六九(九) よくみると、これはみんな赤いズボンをは

いたどんぐりで、

九七二(九) ぎよしやがむちをヒュウパチツと鳴らし、

どんぐりはみんなしずまりました。

九七二(二) そこできょうのお礼ですが、あなたは、

こがねのどんぐりニリットルと、しおさけの頭と、

どちらがおすきですか。

九七二(四) こがねのどんぐりがすきです。

九七二(七) どんぐりをニリットル早く持つてこい。

九七二(八) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

どんぐりもまぜてこい、早く。

九七二(九) ぎよしやは、さっきのどんぐりをますにい

れて、はかつてさげました。

九七三(一) ふたりは馬車に乗り、ぎよしやはどんぐり

のますを馬車の中にいれました。

九七四(二) いちろうは、こがねのどんぐりをみ、やま

ねこは、とぼけた顔つきで遠くをみていました。

九七四(五) 馬車がすすむにしたがつて、どんぐりはだ

んだん光がうすくなって、

九七四(八) まもなく馬車がとまったときは、茶色のど

んぐりにかわっていました。

九七五(一) いちろうは、自分のうちのまえに、どんぐ

りをいれたますを持つて立っていました。

十四82(四) どんぐりのせいぐらべ。

どんぐりども (団栗共) (名) 9 どんぐりども

九六一(一) じき、どんぐりどもがまいるでしょう。

九六二(一) そこへ四方の草の中から、どんぐりどもが

ぎらぎら光つてとびだして、

九六三(五) すずの音は、かやの森にガラランガラ、ガ

ランガラんとひびき、こがね色のどんぐりどもは、

すこしずつしずかになりました。

九六三(七) やまねこは、(略) しずすの服を着て、ど

んぐりどものまえにすわっていました。

九六四(二) やまねこが(略) むりにいばっていました

と、どんぐりどもは、口々にさげました。

九六五(一〇) ぎよしやがむちをヒュウパチツと鳴らし

したので、どんぐりどもはやっとしずまりました。

九六六(四) また、どんぐりどもが口々にいいました。

九六九(一) えりを開いて、黄色のじんばおりをちよっ

とだして、どんぐりどもに申しわたしました。

九六九(五) どんぐりどもは、しいんとしてしまいま

した。

どんぐりとやまねこ (課名) 2 どんぐりとやまね

こ

九三二(六) どんぐりとやまねこ……四十七

九四七(一) 六 どんぐりとやまねこ

どんぞこ (底) (名) 2 どんぞこ どん底



八八10 そうして、はくちようたちがみえなくなる  
と、すぐ水のどんぞこまでもぐっていった。  
一五104 4 なたの二つの目をたましいのどん底  
におちつけて、よくごらんさい。  
とんちゃん (名) 1 とんちゃん  
二30 10 なたが かぞえて みました。  
とんでもない (形) 5 とんでもない 《一イ》  
五17 10 ゆくさきは知っているが、うそ字だから  
とんでもないところにやられるかと思つて、  
六73 3 「略」と、とんでもない話もちだし  
たので、みんながわいました。  
十65 4 とんでもないへまをやったり、  
十69 10 「ふたを取ってみようか。」とんでもな  
い。  
十三31 6 むかしものがたりをやるつもりなのだが、  
さるは、とちゅうできよんととしてやめてしまつ  
たり、とんでもないべつのことを演じたりする。  
とんと (副) 1 トント  
六136 7 しかさんがおこつて走ると、こんどはたお  
れた木のみきにトントとけつまずいて、  
とんとことんと (副) 2 とんとこ、とんとこ  
六127 7 四ひきのうさぎさんたちは、とんとこ、と  
んとことトントネルの中を走つていきました。  
六128 2 おにも、とんとこ、とんとことさがしにで  
かけました。  
とんとん (副) 3 トントン  
六28 8 きりぎりす一が、戸をトントンとたたきま  
す。  
七7 10 とうかをすうつと通つてみたり、かいだ  
んをトントンあがつてみたり、  
十四89 2 子どもたちは、この黒い土の上に集まつ  
て、足でトントンとふんでみたり、

どんどん (副) 25 ドンドン どんどん  
一34 7 かげになつて、どこでも どんどん ふ  
きまわつてみたいのです。  
三42 7 ぼくは、学校どうぐをわきにかかえて、  
どんどん 走つて かえりました。  
三80 8 雨は、みんなのいうことには おかまい  
なしに、どんどん ふりつづけます。  
四59 9 かっちゃん、どんどん かけました。  
四93 6 風にかかれて、うずをまいて、どんどん  
降ってくる。  
五19 3 私たちは、汽車につまれて、どんどん、南  
へはこぼれました。  
五32 4 まっ黒なけむりをもうもうとはいいて、どん  
どん 走っています。  
五109 6 小鳥でも感心なもののだ、新しいことをど  
んどん おぼえていく。  
六23 9 たいこをドンドンとたたいて、  
六52 5 そうして、つぎの雲の方へどんどん 走つて  
いきます。  
六137 7 しかさんは、うさぎさんたちのあとを、ど  
んどん 追いかけてました。  
六142 6 どんどん、どんどんにげました。  
六142 6 どんどん、どんどんにげました。  
七51 6 ぼくらのほうが、どんどん あてられて、セ  
ンターまで、外野にでてしまつた。  
七53 10 センターが、外野のセンターにれんらくを  
とつて、どんどん、あてにあてた。  
七65 5 どんどん、どんどん、うえていく。  
七65 5 どんどん、どんどん、うえていく。  
八47 4 どんどん 歩いていくと、さびしい村にさし  
かかりました。  
八76 5 田や野原をこえて、どんどん 走つていった。

八109 3 どんどん すつていたら、こんどはすぐには  
げましたが、くだけた米もでてきました。  
十43 9 幸吉は、それこそ氣ちがいのようになって、  
死貝をどんどん みていった。  
十55 9 思うことがどんどん と書いていたまえのこ  
ろが、うらやましくさえなりました。  
十二110 2 日本はこのような心をとりにいれて、どん  
どん 育つてきました。  
十四21 7 先生は、そんなことにはおかまいなしに、  
どんどん お続けになった。  
十四65 2 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、ま  
わりの空氣にくらべてずっとかるいために、どん  
どんとさかんにたちのほります。  
とんとんとん (感) 1 トン、トン、トン  
三36 2 ガタガタ、トン、トン、トン、ゴシゴシ  
ゴシ、スススス、たいへんにぎやかで  
とんとんとんとん (感) 1 トントン、トントン  
十二75 6 トントン、トントンと入口をたたく者が  
あります。  
どんな (形状) 77 どんな  
一17 5 きょうは、どんな えがかれるでしょう。  
一17 6 どんな じがかれるでしょう。  
二56 1 それは、どんな かただったでしょう。  
三20 6 どんな 花が すきですか。  
三20 8 どんな 虫が いい 虫と おもいますか。  
三89 3 ていしやばでは、どんな ひびきがきこえ  
るでしょう。  
三89 4 学校では、どんな 音がするでしょう。  
三90 1 風の日にはどんな 音。  
三90 2 雨の日にはどんな 音。  
三99 1 どんな ところでも、紙は、字や  
えをはこんでくれます。

- 三105 2 どんなりっぱな人のねがいを、みんなこわってしまいました。
- 三110 1 会 おふたりがどんなにおかしみになるかと思つて、いままでだまつていましたが、
- 四62 2 どんなところへでもどけてくれます。
- 四77 4 う——うれしいときは、どんなとき。
- 四90 1 どんなにつもつていても、おかつてからはきはじめて、かいどうへぬけて、
- 四116 6 会 この たまてばこは、どんな ことがあつても、おあけになつてはいけませんよ。
- 五23 2 会 どんなこと。
- 五29 2 会 うれしかったというのとはどんなことかね。
- 六63 3 これはどんなところにおかれるのだろうか、と考へているうちに、
- 六56 7 私たち一組のものは、みんな集まつて、どんなものになしようかといろいろ相談しました。
- 六66 6 どんなふうにお話ですすんでいくか、楽しみではありませんか。
- 六69 8 第二号がどんなふうになるか、楽しみです。
- 六70 8 会 雪だるま、どんなお話をするだろう。
- 六85 9 会 どんなことでもして、おわびいたします。
- 六107 7 しかし、どんなことばでも発音できないわけではない。
- 七13 6 このようなときの「手」は、どんないみにつかわれているのでしょうか。
- 七14 1 つぎの「手」は、どんなつかいかたでしょうか。
- 七21 3 会 とまつているちようちよが、どんなかっこうをして、みつをすうか、よくごらん。
- 七29 1 会 どんなふうに書いたの。
- 七81 4 会 どんなことを、知っているのかね。
- 七87 1 うさぎはどんな草を、いちばん喜んでたべ

- るか、しらべてみることにしました。
- 八62 8 会 「どうだね、どんなふうだね。」と、たずねてきた年よりのあひるがいった。
- 八63 11 会 なにしろ、水をこわがるのだから、どんなにしても思ひきつてはいるようにしてやることできなかった。
- 八87 9 あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どんなに苦しんだか、
- 九23 7 この國の人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた
- 九25 9 いそいそと帰つてきたつばめをむかえる人の心は、どんなにうれしいことでしょう。
- 九34 10 手 どんな小さな根っこでも、すっかりとりのぞいておかないといけないといわれて、
- 九39 4 手 下からどんなに大きな声で話しかけられても、きこえないときがあります。
- 九80 4 会 まずどんなふうになりますか。
- 九80 6 会 ありそうところつて、どんなところでしょう。
- 九85 10 会 これはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろつておきなさい。
- 十65 5 心がけひとつで、われわれは、どんなにでも毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができ
- 十15 7 会 日本の海はどんな色ですか。
- 十16 7 太郎がそばへきて、外國ではどんなことばを話すかとたずねるものだから、
- 十17 11 会 ことばを愛することを知つて、勉強したら、どんなにしあわせでしょう。
- 十29 3 そのあみかたはどんなあみかたか、
- 十29 11 そのもようが、どんな單位からなりたつて

- 十40 9 まわりの者から、どんなにあざけられ、からかわれても、
- 十71 8 会 だんなが帰つたら、どんな目にあわされるかわからない。
- 十一16 8 わたしをまもるためには、どんな困難とも戦う、そのうで。
- 十一23 4 どんなに病氣がちでも、父親の生きているあいだは、みんなはげましあつて、どうにかこうにか切りぬけてきました。
- 十一25 1 会 どんなことがあつても、親子四人、わかれないうちにしましようね。
- 十一72 2 手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど——
- 十一83 6 会 手紙がきたきり、おまえがこないから、どんなにがつかりしていたかわからないよ。
- 十二20 11 会 あれがあれば、どんなかげのところでも、美しい色にできますがねえ。
- 十二22 3 会 どんな絵の大家だつて、一心にけいこをして、じょうずになつたのだろう。
- 十二47 2 会 顔の色やくらしかたがどんなにちがつていても、
- 十二69 5 どんなにはたらきがあつても、
- 十二90 2 どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのようになえていたのでは、
- 十二97 2 これをみて、どんなことを感じるでしょう。
- 十四17 3 手 どんなにしていらつしやいますか、お知らせください。
- 十四27 3 大陸からは、どんなことばがはいつてきたのだらうかと思つた。
- 十四42 10 画 どんな暗い日だつて、それが明かるくしてくる。

十四439 園 どんなさびしい日だって、それが元氣にしてくれる。

十四5910 園 花さん、あなたが、どんなに美しくさいたって、

十四747 湖や海の水が、冬になって、表面からひえていくときには、どんな流れがおこるか

十四847 どうして雪のけっしょうができるか、どんなばあいに、どのようなけっしょうになるか、

十四852 その雪が、どこで、どのようにしてできたか、どんな天空を旅して降ってきたか、

十四941 女の子は、どんなにか、それで火をともしてみたかったことだろう。

十四9412 一本のマッチで、火をともしることができたならば、どんなによからうか。

十四1027 その子がどんなに幸福に、神さまの樂園の中で、元日をむかえているか知らないのだ。

十五508 園 よし、どんなにお金に困っても、どんなに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。

十五508 園 どんなに苦しんでも、

十五616 そのころ、新島のおじさんがどんなにえらいかたであるかを知らなかった私は、

十五6810 園 おじさんが生きていたら、どんなにか喜ぶだろうに――

十五742 自分の子女は、その性質がどんなにちがっていても、

十五1157 園 どんな子だって、おかさんはひとりぎりです。

トンネル (名) 20 トンネル とんねる  
一512 園 きしやは、まもなくくもの とんねるにはいります。

三792 すなで、トンネルや、いどや、家や、道をこしらえています。

五103 園 まっくらになった。「トンネルですよ。五104 園 ここは、みなさんと、苦勞をしてほってくださったトンネルですよ。

六1261 園 あなをほって、トンネルをこしらえて遊ぶうよ。

六1262 園 トンネルか。

六1269 トンネルはだんだん深くなり、廣くなりました。

六1278 四ひきのうさぎさんたちは、とんとこ、とんとことトンネルの中を走っていました。

六12810 一ひきのうさぎさんが、あわててにげたので、トンネルのさか道に足をすべらせて、

六1292 またはじめようとしたとき、トンネルの入口のところで、だれかの声がします。

六1313 園 このトンネルがほしかったのさ。

六1314 園 このあたたいトンネルで、今夜、ゆっくりとねむりたかったのさ。

七422 汽車はトンネルにはいった。

七427 トンネルをでたとき、向こうの席で、「略」と、大きな声をだした人があった。

八159 せみの子どもたちは、〈略〉トンネルをほりながら、さぐりさぐりもぐっていきます。

八181 まえ足は、いつもトンネルをほるのにつかいますから、

八184 土の中は、たとえ一二センチ歩くにも、トンネルをほっていかなくてはなりません。

十2310 トンネル。

十三274 ホー-ton は一本のトンネルのようになつて、どこまでもつながっている感じがする。  
十三3210 たとえ、鳴りものであるうと、呼び声であらうと、トンネルのようなホー-ton には、それが、ふしぎなほどよくひびきたる。

とんぼ 「蜻蛉」(名) 5 とんぼ ひあかとんぼ

二166 はととまと とんぼ ぼうししかからす  
すずめだかかめめじろ

四749 と——とんぼ、とんぼ、かきねにとまれ。

四749 と——とんぼ、とんぼ、かきねにとまれ。

九284 文 園 ほし草にかけおとしとぶとんぼかな  
十一566 園 花火やほたる、とんぼの目だま、一つ  
一つ光る。

どんより (副) 1 どんより  
十一701 顔ははれあがつてどんより赤く、ひふは  
はち切れそうになっていました。

## な

な [名] (名) 41 な 名ひあてな

二58 園 お友だちのなを かんがえて、ごらん  
さい。

二101 園 人の なと、そうでないものにと、わ  
けたら いいと おもいます。

二105 園 くさの なと、とりの なと、そのほか  
のものにと、わけたら いいと おもいます。

二105 園 くさの なと、とりの なと、そのほか  
のものにと、わけたら いいと おもいます。

三182 一くみは 花の名を あつめました。

三183 二くみは 虫の名を あつめました。

三184 三くみは 魚の名を あつめました。

三185 四くみは 鳥の名を あつめました。

三191 花の名は 十二 あつまりました。

三192 虫の名は 十五 あつまりました。

三193 魚の名は 十三 あつまりました。

- 三194 鳥の名は十四あつまりました。  
 三201 えを かいていくうちに、花の名も、鳥の名も、だんだんふえてきました。  
 三202 花の名も、鳥の名も、  
 三287 鳥のように早いふねだから、はやとりという名をつけよう。  
 三1031 「かぐやひめ」という名をつけました。  
 三1179 それで、この山の名を、「ふじの山」というようになりました。  
 六693 この学校の子どものかずや、一ばん遠くから通っている子どもの名や家の場所も書きました。  
 七4610 駅の名も美しくよまれた。  
 八65 その晩から家族のひとりになり、あくる日、ピオという名がつけられました。  
 八297 あなたの名はなんといひますか。  
 八851 あひるの子は、あの鳥の名も、どこへとんでいったのかということも知らなかった。  
 九378 くらさざやいろいろな名も知らない雑草がいちめんにはえていて、  
 九423 そのほか、名のわからない美しい小鳥がたくさんいます。  
 十一4310 女の先生が、卒業する子どもの名をお読みあげになりました。  
 十一447 総代の名が、ひととき高く呼ばれました。  
 十一448 弟の名でした。  
 十一653 おとうさんの名はなんといひの。  
 十一656 少年は、もしやわるい知らせをききはしまいかと、おそろしさにふるえながら、その名をいいました。  
 十一657 しかし看護人は、そういう名を思いだせませんでした。  
 十一9210 名をなんと呼ぼうかと思っているうち、

- 十一9211 五日のあいだ呼びなれていた名が、しぜんと口へのぼってききました。  
 十二3411 「人形」という字をつづりながら、二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。  
 十二377 「水」はいま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいものの名であることを知りました。  
 十二627 名を八郎はちろうといった。  
 十四42 名高い文学者で、その名が國に知られている人は、けつして少なくはありません。  
 十四444 けれども、フランスのルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもつて、  
 十五584 かれこそ、のちに名をなした新島襄にいしまやうだよ。  
 十五5811 新島襄という名を耳にした私は、とびあがらんばかりにおどろいた。  
 十五7311 平和主義の旗がしらとしてその名を知られていた老博士は、  
 十五1045 その名はすなわち、「むじや氣な考えの幸福」です。  
 な「菜」(名) 1 なしあふらな  
 九264 子もりするしずかなる月なの上に  
 な「汝」(代名) 2 な  
 十五168 少年たちよ、野にはたらきて、土ほこり顔よごすとも、わするな、明かるくするながえ顔。  
 十五176 少女たちよ、花そだてつつあきないて、つづれ着るとも、失うな、やさしく清きながら。  
 な「命令」(終助) 2 な  
 五249 ぼちゃん、あなたもおかけなさいな。

- 九1437 おやすみなさいな。  
 な「禁止」(終助) 14 な  
 二416 うそつくな。  
 二417 うそつくな。  
 四767 そ——そまつにするな 学用品。  
 七144 そんなに、手をやかせるな。  
 七1410 腹をたてるな。  
 七156 「口をだすな。」  
 七262 なまいきいうな、はるお。  
 十四446 くちびるに歌をもて、勇氣を失うな。  
 十五166 土ほこり顔よごすとも、わするな、明かるくするながえ顔。  
 十五174 つづれ着るとも、失うな、やさしく清きなが心。  
 十五6512 これから車のついたものは送ってくださいなと、くじょうの手紙を京都へ送ったりした。  
 十五772 たべるために生きるな。  
 十五774 きょうのできごとを、あすまでのばすな。  
 十五932 なまいきなことをいうな。  
 な「詠嘆」(終助) 96 な  
 一172 あさのこくぼんきれいだな。  
 一426 せんせいの目のなか、ひろいな。  
 一533 ひとつひろって いて、おかあさんのおみやげにしたいな。  
 一576 みんなげんきでうれしいな。  
 二307 おかしいな。  
 二458 ほう、なにをやるかな。  
 二463 ふうせんかな。  
 三371 こづかいさんのおへやのものは、みんな大きいなおもいました。  
 三443 きみのなかまはずいぶん多いな。  
 三454 きみたちはうまくだまされたな。

三107 6 ㊦ あれがかぐやひめだな。  
 四28 1 ㊦ 白い雲さん、光ってきれいだな。  
 四28 2 ㊦ ぼくをのせてくれないかな。  
 四28 3 ㊦ ふわふわとして、氣もちがいいだろうな。  
 四29 1 ㊦ 山に いて、くりひろいをする ことかな。  
 四29 3 ㊦ ぶどうえんのおじさんのところへ いて、あそんでくる ことかな。  
 四29 5 ㊦ おばさんのうちへ いて、いもほりのつくだいをする ことかな。  
 四29 7 ㊦ となののうちら、うさぎをもらって くる ことかな。  
 四46 4 ㊦ そうだな。  
 四47 1 ㊦ まん中がいいな。  
 四99 1 ㊦ でもかわいそうだな。  
 四106 1 ㊦ つれて いてもらおうかな。  
 四106 7 ㊦ いいお天気で氣もちがいいな。  
 四111 9 ㊦ すばらしいところだな。  
 四128 3 ㊦ きものだな。  
 五57 10 ㊦ へんなもんだな。  
 五58 5 ㊦ ほんとうにきれいだな。  
 五58 11 ㊦ ぼく、大きくなるまでに、どの星もみんなみてしまいたいな。  
 五85 8 ㊦ おお、みんなそろってきたな。  
 五87 11 ㊦ わしもほしいな。  
 五90 7 ㊦ おぼうさんにおかあさんがあるって、おかしいな。  
 五93 1 ㊦ わからない子どもたちじゃな。  
 五93 5 ㊦ どれどれ、ゆうごはんでもたこうかな。  
 六21 11 ㊦ 大きな荷物だな。  
 六24 9 ㊦ 苦労しようのありさんたちだな。

六35 3 ㊦ おじさん、大風ってこわいな。  
 六44 10 ㊦ なんだろうな、それ。  
 六70 6 ㊦ ほんとに歩くとおもしろいな。  
 六73 9 ㊦ さ、どっちな。  
 六75 9 ㊦ だいいち、おまえが生きているんだから、わかりそうなものだから。  
 六76 7 ㊦ この手が動かないから、やはり雪だるまは命がないのかなと思いました。  
 六84 3 ㊦ 困ったな。  
 六88 9 ㊦ はあ、この木だな。  
 六89 4 ㊦ きれいな水だな。  
 六95 8 ㊦ おかしいな。  
 六106 11 ㊦ いてから、すこしふしぜんだなと思った。  
 六110 1 ㊦ 「はな」と いてるんだなと思うときゅうにおかしくなった。  
 六114 5 ㊦ へんなたこだな。  
 六115 6 ㊦ よくひつばるな。  
 六120 9 ㊦ 早くかわくといいな。  
 六140 1 ㊦ どれ、ごちそうになろうかな。  
 七4 9 ㊦ さあ、きょう、いちばんはじめにくるのは、だれかな。  
 七5 1 ㊦ あの白いブラウスの女の子かな。  
 七5 2 ㊦ かばんをカチャカチャ鳴らして、走ってくる男の子かな。  
 七5 8 ㊦ きょうは、ぼうしをかぶっているな。  
 七14 5 ㊦ ちよつと、手にあまるしごとだな。  
 七15 2 ㊦ 腹のすわった人だな。  
 七30 6 ㊦ いいな、にちゃん。  
 七32 10 ㊦ ふしぎだな。  
 九50 1 ㊦ おかしいな。  
 九51 5 ㊦ おかしいな。  
 九52 7 ㊦ おかしいな。

九56 10 ㊦ きみは、いちろうさんだな。  
 九60 2 ㊦ やっぱりやまねこの耳は立ってとがっているな、と思いがらみていると、  
 九62 1 ㊦ あ、きたな。  
 九81 9 ㊦ だめだな、こは。  
 九100 10 ㊦ でも、いやだな、けんかしたあとの氣持って。  
 九127 7 ㊦ 今晩はうまいえさがかかるかな。  
 九131 4 ㊦ あれが、うまくひつかかるといいな。  
 九133 6 ㊦ 「あ、こうもりだな。」  
 九134 6 ㊦ おかしいなと、ふしぎに思っよくみると、それは白いうちよでした。  
 九140 7 ㊦ ちようちよさんは、羽があるからいいな。  
 九141 6 ㊦ 今夜は、ばらのかげでねむることにしようかな。  
 十21 12 ㊦ 早く、あの野原で、遊びたいな。  
 十22 2 ㊦ お友だち、どうしているかな。  
 十15 9 ㊦ 力まかせに、長いオールをぐいぐいとこいでみたいな。  
 十16 5 ㊦ ぼくはトップがこぎたいな。  
 十17 12 ㊦ みんながさせてくれたら、コックスのまえにすわって、整調をやってみたいな。  
 十18 4 ㊦ おまえはべつの人のところへつれていかれたのだな。  
 十15 7 ㊦ これは、こおろぎの果なんだな。  
 十18 7 ㊦ はあ、これが鳴るんだなと思っやっているうちに、  
 十18 11 ㊦ みんな自分たちのなかまだなと思っよくきいてみると、  
 十20 11 ㊦ わたしはまた、あのような絵のぐがあらばいいなと思っましたよ。  
 十25 10 ㊦ こんなに降るのによくきたな。

十三396 会 あいたいな、早く……はい、四時ね。

十三561 会 絵はがきでも、たいへんいい絵だなと思  
いました。

十三565 会 これでも、本物にくらべたら、やっぱ  
り、月と太陽みたいにながうといつてもいいな。

十五437 会 美しい赤色だな。

十五643 会 かわいいぼうやだな。

十五851 会 だが、おまえさんたちは、あのさとう  
がしをわすれたのじゃないかな。

十五933 会 なにかおまえについているな。

十五1138 会 でも、ずっと色が白いな。

十五1143 会 ふしぎだな、おかあさん。

十五1144 会 でも、うちにいるときよりか、ずっと  
お話がうまいな。

十五1199 会 おや、みんなないているのだな。

十五1207 会 その歌を耳にしなげら、もつと下級生を  
かわいがってあげばよかったなと思った。

な (間助) 7 な

四603 会 はてな。

五8811 会 こうして右の手でだいてな、左の手でか  
かえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

五904 会 わしのおかあさんはな、ずっとまえに、  
さどが島においでなされたことがあった。

五905 会 それでな、さどが島をうたうときには、  
いつでもおしぎをするのだよ。

五909 会 それからな、おかあさんのおちちをコッ  
プコップといただいて、

九909 会 もうきみとは遊ばないからな。

十五906 会 はてな。

な 7 ナ な

四771 会 な——なつと冬。

六1093 会 「はな」の「ナ」

六1095 会 「ナ」、「ノ」、「ネ」、「ニ」、「ミ」、「ム」、  
と自分で声をだしていつてみると、

六1098 会 「ナ」、「ノ」、「ネ」、「ニ」、「ミ」、「ム」  
といつてみた。

六10910 会 「ナ」といいながら、耳できいてみると、  
まるで「ダ」といつているようだ。

六1103 会 「ナ」や「ノ」のつくことばがあったら、  
「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。

六11011 会 「ナ」、「ノ」、「ネ」、「ニ」は、みんな  
《略》五十音の中で、ナニヌネノという一ぎょう  
の中にはいつている音ばかりではないか。

なあ (終助) 28 なあ

三239 会 なんとかならないものかなあ。

三766 会 お日さまってどこへいくのかなあ。

三803 会 つまらないなあ。

五588 会 あれが、ぼくのみつけた二ばん星かなあ。

六406 会 帰るといつたって、あんな遠いところ  
——でも、もう一どあの村に帰りたいなあ。

六539 会 へんだなあ。

六636 会 わたしもせきがでたらいいなあ。

六1149 会 ふしぎだなあ。

六11510 会 こんなたこ、ほしいなあ。

七1811 会 きょうは、ずいぶんとんでるなあ。

八710 会 ビオ、いい声だなあ、おまえは。

八6110 会 世界は廣いものだなあ。

九538 会 南へいつたなんておかしいなあ。

十二433 会 ふしぎだなあ。

十二7110 会 芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪  
が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。

十三409 会 ぼく、三郎……うん……よかったなあ。

十三439 会 よかったなあ……

十四2012 会 ずいぶんあるなあ。

十五625 会 なにが氣にさわったのかなあ。

十五626 会 やえ子、満ぼうがまた、おくの手をだ  
したよ、よかったなあ。

十五647 会 よわったなあ。

十五848 会 いかにもうまそうだなあ。

十五849 会 うまそうだなあ。

十五857 会 あの人たち、ずいぶんうれしそうな、  
幸福そうな顔をしているなあ。

十五986 会 ぼく、あの子たちとおどりたいなあ。

十五1024 会 でも、ぼくたちがなにをいつても、  
あなたには、なんにも見えないし、なんにも聞え  
ないんだなあ。

十五1112 会 おもしろいなあ。

十五1135 会 でも、ずっときれいなあ。

ない (無) (形) 407 ナイ ない 《イー・カツー・  
カロー・ク・クレ・サ》ししかたない・でない  
と・とんでもない・なさけない・なさけなさ・なに  
げない・もうしわけなさ

一504 会 うさぎさんじゃないか。「《略》。」お

二101 会 のなど、そうでないものにと、わけ

二191 会 んに「ぺんしかなないものはなあに。

二225 会 ろはにほ」しかないのに、わたくしの

二232 会 。びょうきではないでしようか。「へ

二335 会 てみたこともない。」といいました

二356 会 がったものじゃないか。」三人めのめ

二364 会 きとおなじじゃないか。」といいまし

二421 会 つかうものではないよ。」たろう「だっ

二669 会 はやさにかわりはない。」とこかで

二708 会 声はひとりではなく、大ぜいの声。

三145 会 うことにちがいない。」とさとりまし

三226 会 もきいたこともないほど、大きな木

三253 会 した。「しかたがない。この木を切る

三二七三 もきいたこともない、大きなふねで  
 三二八四 ぎでもなんでも。あのいきおい  
 三三〇八 、おかいこさんでなくてもたべたいよ  
 三三三七 べてみようではないか。」といいまし  
 三六一一 もいけないじゃないか。」そこで おと  
 三七三三 さまは一つしか ないから、みんなで  
 三二九二 色でもいいじゃないか。」デビッドが  
 三九一四 ます。このはしが なかったらどうしま  
 三三〇一〇 った子にちがいない。」と、てのひら  
 三三〇二〇 さはたとえようもなく、家のすみずみ  
 四四二八 れちゃ だめじゃないか。」「略。」「へ  
 四四三三 そうしたんじゃないか。」「略。」「へ  
 四四五五 略。」「でもじゃ ないよ。おしまい  
 四四五六 て、いったじゃ ないか。」「略。」「へ  
 四四七四 とにしようじゃ ないか。」みんなはそ  
 四六〇八 ました。しかたがないので、二十九わの  
 四六五一 じゅうぶんではないから、あとのも  
 四九二二 黒だ。まっ黒くはないかもしれなが、  
 四九二二 も、白いものではない。雪が降りだす  
 四九五五 、白くて、黒くはない。大きな雪、小  
 四四一六 さあ、ごえんりよくめしあがつてく  
 四四一六 しあげたことのない、おいしいごち  
 四四二五 のでんきゅうがないと、光ることが  
 四四二五 は、みたことが ない。もってかえつ  
 四四三三 たには、ご用の ないものでございま  
 四四三三 。「天人」それが ないと、天へ かえる  
 四四三三 そのほろもが ないと、まうことが  
 五三九六 た。わすれものはないか、じろう。」「へ  
 五二七三 ど、いうところがなかったものだから、  
 五二六六 とても持てそうもない物、一つは小さく  
 五五三、 日がしずんでまもない空に、大きな星が  
 五五三、 えひとりの力でもなければ、おとうさん

五五三七 かあさんの力でもない。」——「略」  
 五五五八 たえもできず、力のない足どりで、海へや  
 五五八四 「なに、へんじやない。黒いころもに赤  
 五九四 う小さくて、元気がなく、死んだようにな  
 五九四 とも動かないじゃないか。」「略。」「さ  
 五九四 いるよりしかたがないのさ。」「略。」「  
 五九四 ともこわいことはないから、いっしょに  
 六四五 な音や、みたこともないような物が、ごた  
 六六〇 れもこれも不足はなさそうである。ただ  
 六六〇 役にもたちそうにない。ああ、なんとい  
 六八九 だしておいたねじのないうに気がついた。  
 六八一一 ついた。「ねじがない。だれだ、しごと  
 六九一 て、あれ一つしかないのだ。あれがない  
 六九二 ないのだ。あれがないと、町長さんのか  
 六二〇二 日を楽しもうではないか。」うたをうた  
 六二二〇 樂会をやるうじやないか。」あり一、二、  
 六二三六 うだい。いいじやないか。」バイオリン  
 六二四四 生きているんじゃないか。」あり三「でも  
 六二九四 りぎりすさんじやないか。」「きりぎりす」  
 六三三 や、かかしくんじやないか。」かかし「助け  
 六五二〇 。「お月さまじやないわ。雲が走ってい  
 六五五 つのまにか、雲一つなく、きれいにはれわ  
 六五五 きの枝のあいだにはなくて、木をずっとは  
 六五九 、きれいに、むだのないようにへんしゅう  
 六六六 はり雪だるまは命がないのかと思いまし  
 六六六 まは生きものではないからね。」「略」。  
 六六六 をしないから、命がないんだと、ごろうは  
 六六六 ことも自分の力ではないことをきいて、な  
 六八二五 くつれるものではないよ。でも、つて  
 六八四五 こと「おもしろくなかった。小鳥一わと  
 六八四七 やつぱりえものがなかったんですか。」  
 六八五 ろか、申しわけのないことをしてしま

六九四九 っていったものはないか。」魚「ぞんじ  
 六九五六 知っているものはないか。」魚たち「ほん  
 六九六八 あ、それにちがいない。」女の人に向か  
 六九六八 るようにみえるではないか。それは、ここ  
 六九六八 も、さかさまじやないの。」「略」。「へ  
 六九六八 る。しかし、ねつはないので、ねているわ  
 六九六八 、ねているわけではない。ただ、はながつ  
 六九六八 たことがあるのではない。しかし、「略」  
 六九六八 。なにかよいおりはないかと思っていたら  
 六九六八 音できないわけではない。発音できること  
 六九六八 るような音にちがいない。そうして、はな  
 六九六八 とを、考えたことがなかった。これはおも  
 六九六八 のまねなんかわけはないぞと思った。なん  
 六九六八 ている音ばかりではないか。ただ一つ「ヌ  
 六九六八 から声の音ではないことがわかった。  
 六九六八 く考えてみたことはなかった。それがいま  
 六九六八 もっているにちがいない。ぼくは、こう考  
 六九六八 ら、できないことはないだろうと思いまし  
 六九六八 こ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりにま  
 六九六八 にかかけようじやないか。」「略」。「へ  
 六九六八 じゃ、おもしろくない。なにかかけよう  
 六九六八 ったものになにもないなんて話はない。  
 六九六八 もないなんて話はない。どうだ、こうし  
 六九六八 っともいいことではないと、うさぎさんた  
 六九六八 んどうの花が、風もないのにゆれている。  
 六九六八 えていたね。風のない日は、ちょうち  
 六九六八 れに、乗りがえもないし、二時間ほどで  
 六九六八 、ひく手にくるいはなかった。かるやかな  
 六九六八 。ぼくは気がついてはない。みかたのおうえ  
 六九六八 たちは、まじりけのない宝石のようなもの  
 六九六八 実。いまに、一つもなくなくなるだろう。また  
 六九六八 しろに、月は、音もなく、のっそりとて

七79 1 ㊦ いったのにそういない。」旅人はおどろ  
 七80 1 ㊦ をにがしたのではないか。」と、たずね  
 七83 2 ㊦ にげてきたのではないかと、思ったので  
 七84 3 ㊦ けているにちがいないと、考えました。  
 七85 3 ㊦ がぬすんだのではない。もう帰つてもよ  
 七85 7 ㊦ ったのも、むりはない。けれども、いま  
 七93 6 ㊦ いるへやに、えさがなかったのか、かこい  
 七98 1 ㊦ 、ちちをのませたくないのでしょうか。  
 八8 7 ㊦ きかたのちがいではなく、きかたのちが  
 八8 8 ㊦ うが、そればかりでなく、ほおじろ自身、  
 八9 4 ㊦ な、安心なところはないうように——  
 八11 5 ㊦ と、女の子ばかりでなく、茶のまにいたう  
 八12 1 ㊦ をなくしたばかりでなく、私は、ピオの信  
 八13 4 ㊦ なさは、いいようのないものでした。それ  
 八16 1 ㊦ ぎりの根ばかりではなく、あたりの木の根  
 八18 6 ㊦ がおれて、このうえなくふべんですが、そ  
 八26 8 ㊦ 大きなそり橋を音もなく渡つて、草花のさ  
 八29 6 ㊦ といい、申しぶんのないけださがこもつ  
 八38 8 ㊦ だじゅうぶんではない。」と、お答えに  
 八38 10 ㊦ 、「まだ満足ではないというのですか。  
 八46 9 ㊦ で、なんの不自由もなくくらしているかと  
 八49 9 ㊦ れでも幸福のほしくない人はありませんか  
 八62 4 ㊦ いや、みんなではない。いちばん大きな  
 八66 7 ㊦ ちめんちようではない。」と、親あひる  
 八70 3 ㊦ をいわれるばかりでなく、にわとりからも  
 八72 1 ㊦ りしてもらえそうもなかった。それから二  
 八73 3 ㊦ からはい出してまもないものであった。「へ  
 八73 7 ㊦ り鳥になる考えはないかね。きみはみつ  
 八79 1 ㊦ べられる。おすでなければいいが、まあ  
 八79 4 ㊦ った。そればかりでなく、ねこやにわとり  
 八81 1 ㊦ んは、することがないから、そんなこと  
 八85 4 ㊦ ましく思つたのではない。どうして、あの

八89 4 ㊦ のが、おくめんもなく近づいていくのだ  
 八90 10 ㊦ ないあひるの子ではなかった。はくちよう  
 八91 2 ㊦ れてもさしつかえはない。はくちようは、  
 八96 5 ㊦ のをまつて、むらのないようになまきました  
 八99 1 ㊦ よいお天気で、風もなくあついでした。  
 八102 9 ㊦ は、白くておいもなくな目だちません。  
 八108 7 ㊦ しました。きかいがないのでくふうしまし  
 八109 5 ㊦ すりをするものではないと思ひました。や  
 九14 3 ㊦ っしてするものではないが、やはりたいこ  
 九14 5 ㊦ をあらわすばかりでなく、心持まであらわ  
 九21 7 ㊦ から晩まで、こやみなく雨が降つていまし  
 九40 11 ㊦ がみえます。道もないところから、木こ  
 九58 8 ㊦ 声が、あんまり力がなく、あわれにきこえ  
 九65 2 ㊦ おつしやつたじやないか。」「略。」「へ  
 九72 5 ㊦ ねこは、さけの頭でなくてまあよかつたと  
 九81 8 ㊦ した。「なんにもないぞ。」「略。」「へ  
 九84 1 ㊦ なものがあるじやないか。」「先生がまわ  
 九90 3 ㊦ 。学校の帰りじやないか。」「二「たか  
 九91 9 ㊦ 、「もういいじやないか、そんな話——  
 九93 4 ㊦ かし、自分の物ではないので、それを舞台  
 九93 9 ㊦ るが、自分の物ではないので、なおあたり  
 九95 9 ㊦ んだつていいじやないか。よけいなおせ  
 九96 10 ㊦ だ「落したんじやない。きみがむしりと  
 九96 10 ㊦ しりかつたんじやないか。」「と、ボタン  
 九98 2 ㊦ ぼうに、「いたかない。」「ふたりだまる。  
 九98 9 ㊦ ろつてやつたじやないか。」「やまだ「ぼく  
 九98 10 ㊦ つけてやつたじやないか。」「たかぎ「だか  
 九121 1 ㊦ まで味わつたこともないような、ふしぎな  
 九122 2 ㊦ いい泉があるのではないかと気がついた。  
 九122 6 ㊦ ても支流のほうにはなくて、遠い上流にあ  
 九122 9 ㊦ のぼるのもたやすくなかった。つれの人は  
 九122 10 ㊦ の茶人ほど熱心ではないから、やめて帰る

九123 11 ㊦ したには、まぎれもないいい味がはつきり  
 九125 10 ㊦ 林におおれた道もない谷まになつた。そ  
 九126 1 ㊦ いい味は、すこしもなかった。そこで氣を  
 九126 4 ㊦ 、それこそまぎれもないうまい水であつた  
 九134 10 ㊦ 手をのばして、わけなく白いちようちよを  
 九142 5 ㊦ のおかあさんじやないかね。」「おかあさ  
 九145 10 ㊦ ったのは、そうではなくて、つばめがすい  
 十5 5 ㊦ こからきこえるものがないが、どこからかき  
 十7 6 ㊦ 日本人をみたことがない子どもたちは、お  
 十28 3 ㊦ んな動植物だけではなく、雪のようすや、  
 十32 2 ㊦ 校では、かけがえのないひとりでること  
 十34 2 ㊦ ときがくるにちがいない。そのために、い  
 十34 12 ㊦ 、手のとききそうもない空想になりがちで  
 十35 6 ㊦ 、日本製のものは、なかったからである。  
 十36 3 ㊦ おこして、夜も書もなく考えとおし、いま  
 十38 6 ㊦ ふしぎでもなんでもないのであつた。眞  
 十39 4 ㊦ 発生するにちがいない。」「幸吉は、あわ  
 十39 10 ㊦ とつになるものではない。だいいち、  
 十40 4 ㊦ かわりのあるはずはない。しかも、核をさ  
 十43 8 ㊦ が、光っているではないか。幸吉は、それ  
 十44 10 ㊦ 大きなかわりかたもなく、四年めになつた  
 十45 1 ㊦ かがやいているではないか。大きなゆめは  
 十48 1 ㊦ 分もかかつたのではないかと思ひました。  
 十48 2 ㊦ というためばかりでなく、道ばたにあるも  
 十55 2 ㊦ の写真になるのではないかと、ふと、こん  
 十56 1 ㊦ た。なんと、わけもなく、すらすらと書い  
 十56 2 ㊦ すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書き  
 十68 10 ㊦ かい、あぶなくはないかい。」「と、ふる  
 十69 8 ㊦ んでいるはずじやないか。それが、死な  
 十69 8 ㊦ ら、「ぶす」ではない。」「略。」「略  
 十69 11 ㊦ にあたるにちがいない。」「略。」「略  
 十70 5 ㊦ たべてみようじやないか。」「略。」「へ



十 70 7 ㊦ いていのどくではないから、かえって、  
 十 70 10 ㊦ ひきとめるひまもなく、太郎かじやは、  
 十 71 11 ㊦ 氣が強いばかりでなく、わるぢえがあつ  
 十 72 5 ㊦ うしかられるじやないか。」「略。」「こ  
 十 1 6 7 ㊦ で、べつに用もないようだが、ボート  
 十 1 10 11 ㊦ 「船ばかりではなく、あの町でも、あ  
 十 1 11 3 ㊦ くれるにちがいないよ。」「略。」「と、  
 十 1 13 1 ㊦ っている。休みもなく、はてしもなく、  
 十 1 13 1 ㊦ もなく、はてしもなく、ゆるやかにうつ  
 十 1 17 11 ㊦ もいたみも、あとなくぬぐわれます。朝  
 十 1 25 10 ㊦ つかれたようすもなく、かえって、その  
 十 1 27 2 ㊦ しているのではないだろうか。」「村の  
 十 1 27 10 ㊦ んなわずかな金がないということはいえ  
 十 1 28 7 ㊦ 、なまけたことのない金次郎でしたが、  
 十 1 34 1 ㊦ のとりいれことなくすめば、はい色  
 十 1 36 3 ㊦ ばりこのうえもなく、秋のみのりも  
 十 1 38 2 ㊦ 、いねもことなくとりいれた。き  
 十 1 53 4 ㊦ 耳にきこえそうもない。乗客はおたがい  
 十 1 59 1 ㊦ とばは、ほかにないでしょう。」「とい  
 十 1 61 6 ㊦ を渡ったのではないかね。」「とたずね  
 十 1 62 12 ㊦ くいことばではないか。」「九 父の看  
 十 1 65 12 ㊦ なに年よりではないのですが、外國か  
 十 1 80 5 ㊦ 、少年の手からでなければ飲まないよう  
 十 1 5 11 ㊦ けて、なんの苦もなく立てていました  
 十 1 5 12 ㊦ なんのぞうさもないことでございまし  
 十 1 14 10 ㊦ になつてしかたがなかった。」「略。」「ひ  
 十 1 17 2 ㊦ こしも立体感がない。あのざくろの色  
 十 1 20 4 ㊦ っぱり容易じやないのですね。」「略  
 十 1 20 6 ㊦ ころがすこしもないようにしたいので  
 十 1 25 6 ㊦ は、そとさえ寒くなければ、ものかげへ  
 十 1 29 10 ㊦ へんな進歩じやないの。」「わたしはそ  
 十 1 30 10 ㊦ ンワン、ゲタナイ、アンヨ、イタイ

十 1 46 5 ㊦ あまりさかんでなかったが、アジアで  
 十 1 46 11 ㊦ 、人間ばかりでなく、動物などもで  
 十 1 47 5 ㊦ 樂もある。命のない人形を思うままに  
 十 1 55 4 ㊦ るためばかりではない。子どものときか  
 十 1 56 3 ㊦ みがあるばかりでなく、とうといことで  
 十 1 57 7 ㊦ ても人間わざではない。昔、神山のおく  
 十 1 61 3 ㊦ まつてあとかたもなく、きのう植えたな  
 十 1 61 4 ㊦ あ美しい田さへなく、みわたすかぎり  
 十 1 65 6 ㊦ ぎるものはなにもない。おおづなよう  
 十 1 69 7 ㊦ にあつみと廣さがなかったら、正しくり  
 十 1 72 9 ㊦ なりはきれいではないのですが、芭蕉は  
 十 1 79 7 ㊦ 日本へいきたくない。」「略。」「略  
 十 1 79 10 ㊦ 」。」「友だちがないから。」「略。」「  
 十 1 80 7 ㊦ 」。」「いうまでもなく、日本ですよ。」「  
 十 1 81 1 ㊦ う國をみたこともなく、また日本語をす  
 十 1 86 9 ㊦ しました。心おきなく戦いぬいた西選手  
 十 1 88 10 ㊦ になるばかりでなく、そのことばがわ  
 十 1 89 1 ㊦ ならない。そうでないと、相手の人に満  
 十 1 89 9 ㊦ ずである。そうでなかったら、ただ口さ  
 十 1 90 11 ㊦ めているにちがいない。天氣のよかつた  
 十 1 91 9 ㊦ れているにちがいない。秋子も同じよう  
 十 1 92 7 ㊦ や秋子と同じではなからう。それは、め  
 十 1 92 8 ㊦ 活や経験が同じではないためである。みん  
 十 1 93 6 ㊦ ひとりがつてんでなく、読み手によくわ  
 十 1 95 5 ㊦ だれも話し相手がないので、しょんぼり  
 十 1 97 5 ㊦ 、なんのかわりもない貝ですが、いまか  
 十 1 103 7 ㊦ お金です。お金がなかったときにくらべ  
 十 1 13 5 3 ㊦ あつて、ことばのないかれらのことばで  
 十 1 13 10 11 ㊦ とは、いうまでもない。日本には、毎年  
 十 1 13 11 3 ㊦ こしのつながりもなく、原因と結果との  
 十 1 13 11 4 ㊦ と結果との関係もないのに、一つのこと  
 十 1 13 12 2 ㊦ いたずらに理由のないことを信ずる迷信

十 1 14 12 ㊦ 天は動くものではない、地球が動くのだ  
 十 1 17 4 ㊦ 鉾山があるのでもなく、いい港があるの  
 十 1 17 4 ㊦ い港があるのでもなく、わが九州ほどの  
 十 1 20 9 ㊦ に育つ木があるかないか、まず、このこ  
 十 1 21 4 ㊦ にくじかれることなく、」「略。」「と、熱  
 十 1 21 6 ㊦ くれるにちがいない。」「と、熱心に研  
 十 1 24 2 ㊦ た。しげつた木のない土地は、熱しやす  
 十 1 24 9 ㊦ 、できないものはないまでになりました  
 十 1 24 12 ㊦ た。そればかりでなく、しげつた林は、  
 十 1 26 9 ㊦ る。あまり廣くもない道の両がわの土べ  
 十 1 27 8 ㊦ かわつたところもないような、このホー  
 十 1 27 9 ㊦ ては、かけがえのない、楽しい遊び場所  
 十 1 28 3 ㊦ って遊ぶわけではない。そのへんを走っ  
 十 1 29 7 ㊦ る。どこからともなく、女の人たちが集  
 十 1 33 5 ㊦ ている間、たえまなく、「キリキリ、リ  
 十 1 35 4 ㊦ るのも、いわれないことではない。正  
 十 1 35 4 ㊦ れのないことではない。正月には、門の  
 十 1 36 5 ㊦ が、どこからともなくたくさん舞つてく  
 十 1 38 2 ㊦ に行つたんじゃないでしょうか。げん  
 十 1 38 4 ㊦ ださらないじゃないですか。え、え、  
 十 1 41 11 ㊦ て。」「いいじゃないか。帰つたばかり  
 十 1 44 5 ㊦ これはしばいではないかという、そう  
 十 1 44 6 ㊦ いうと、そうではなく、これでも、しば  
 十 1 52 3 ㊦ のように。そうでなければ、死んでいた  
 十 1 54 11 ㊦ じさんは、用事がなく、しよさいで、本  
 十 1 58 1 ㊦ で、どうもよくない。色のあるのは、  
 十 1 59 7 ㊦ おかあさんではなくて、キリストのお  
 十 1 59 8 ㊦ 出ているんじゃないでしょうか。」「へ  
 十 1 60 1 ㊦ いているときがなかったよ。」「ぼくは、  
 十 1 74 4 ㊦ とりぼっちではないのだと、お考えに  
 十 1 81 ㊦ 間、いくたびとなく、おとうさんのお  
 十 1 83 ㊦ て、このうえもないたいせつなことば

- 十四 12 1 手、そちらでわけなくかわりをお見つけ  
十四 14 1 手では、このうえなくまめやかな、この  
十四 14 2 手な、このうえもなく純真な思い出がの  
十四 16 10 手るとお考えではないかと心配していま  
十四 16 12 手は、ごえんりよくおっしゃってくだ  
十四 18 8 会テンも英語じゃないかしら。」といっ  
十四 22 7 会日本語にちがいないが、もとは、外国  
十四 23 7 会、英語だけではなく、ほかの國からも  
十四 24 10 通をして、日本になかった品物が、外国  
十四 25 11 品物からだけではなく、外國の学問など  
十四 25 12 てきたのにちがいない。そうしてみると  
十四 30 11 がまえは、大きくなくてはいいません。  
十四 31 3 ていたのは、よくないことでした。そう  
十四 32 4 分たちとはえんがなと思っっている人も  
十四 32 9、たいして關係がなさそうですが、じつ  
十四 34 5 けっしてはてしのないものではありませ  
十四 35 12 りると、はてしのない、遠い世界にひき  
十四 36 1、星の光は、声のないことばです。こと  
十四 36 2 ばです。ことばのない詩です。教えを説  
十四 40 2 会きれいな雲ではないか。――二人の「大空  
十四 42 9 会うと、平氣じゃないか。どんな暗い日  
十四 43 8 会うと、平氣じゃないか。どんなさびし  
十四 45 2 十月の、ある月のない夜のことです。乗  
十四 52 6 会、つるや、葉のないかばちやはあるま  
十四 53 7 会とは、ごぞんじないようですね。それ  
十四 57 9 会、つまり太陽がなかったら、どうなる  
十四 58 3 会は、葉さんではなくて、私ですよ。そ  
十四 58 7 会ち水です。水がなかったら、なんでも  
十四 59 5 会んで見たことがない。さつきから問題  
十四 61 9 会も、さしつかえないと思いますが、ど  
十四 62 4 会んのおもしろみもなく、ふしぎもないよ  
十四 62 4 もなく、ふしぎもないようですが、よく  
十四 63 1 会は、いうまでもなく、熱い水蒸氣がひ  
十四 63 6 ぶがあまり大きくないときには、日光に  
十四 64 3、そういうしんがなかったら、きりは、  
十四 69 2、なばあいばかりでなく、だいぶようすの  
十四 69 4、まったく關係のないようなことがらが  
十四 71 11 がどこも同じではないので、ところどこ  
十四 74 4 きだけの問題ではなく、たとえば、湖や  
十四 80 3 と傳えたことではないかと思えます。ま  
十四 80 4 が発見したのではなく、よその民族から  
十四 82 5 りのせいくらべ。なくて七くせ。二階か  
十四 83 10 を写したのではなく、雪の一ひらをと  
十四 84 4 しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ  
十四 85 7 らの手紙にちがいない。「空からのお手  
十四 86 2 はできるものではない。野原の中で、一  
十四 88 2 ると、一直線ではなく、くねくねとゆが  
十四 89 1 は、たとえようがない。子どもたちは、  
十四 91 11 いことといったらなかった。自分の足だ  
十四 95 8。そればかりではない。それがもえ続け  
十四 97 7 とよつてくるではないか。ああ、そのと  
十四 100 12 以上に明かるくはないと思われるくらい  
十四 101 4 ことは、いままでなかったことであつた  
十四 101 12 じさも、なみだもない國へ、上の方へと  
十四 102 5 れども、そうではなかった。人々は、女  
十五 26 4 されなないものでもない。一こくも早く谷  
十五 26 8 る。そんなことのないうちに、どこでも  
十五 36 6 のであるが、形のないものは、この方法  
十五 36 7 ば、数という形ののないものを表わすのに  
十五 39 8 分をとったのではなく、たとえば、「い」  
十五 41 11 くてすむばかりでなく、発音のこまかな  
十五 42 9 書き表わす方法がないものであろうか。  
十五 46 5 ままで見たこともないみごとな焼物であ  
十五 48 10 きあがるものではなく、白く焼けるはず  
十五 57 7 会くえは一つしかなかった。そこで、大  
十五 59 4 会っているはずがない。」と、一言のも  
十五 60 11 るべきなものもなく、わがままいっぱ  
十五 62 4 会なに、そうじゃない。ではどうしたの  
十五 65 11 またげてしかたがない。そこで、たまり  
十五 68 3 とたいた。音もなくドアがあいて、半  
十五 69 8 ざられてあるではないか。ああ、新島の  
十五 74 4 になんのけじめもない。兄と弟とのちが  
十五 74 7 う理由はすこしもない。親としてみれば  
十五 74 11、あるべきはずはない。四海の民すべて  
十五 80 5 してきたばかりでなく、實際は、たがい  
十五 83 12 会ど、人はわるくないんだよ。」ミチル  
十五 85 1 会わすれたのじゃないかな。あのとおり  
十五 85 5 会わすれたのじゃないかね。」チルチル  
十五 85 12 会「こわいことではないよ。あいそのいい  
十五 86 8 会せいにする心がなければならぬものの  
十五 88 8 会ち向かうものはないですよ。」「はち  
十五 90 4 会るか、ごぞんじないでしょうね。」ふ  
十五 90 8 会たべてはうまくない鳥だそうじゃない  
十五 90 8 会い鳥だそうじゃないですか。とにかく  
十五 90 10 会のぼつたことではないようです。という  
十五 91 5 会すこしの休みもなく、飲む、たべる、  
十五 91 8 会福「おもしろくないはずはないでしょ  
十五 91 8 会ろくないはずはないでしょう。それが  
十五 93 11 会てしまおうじゃないか。」ふとった幸  
十五 96 10 会っているひまはないよ。」小さな「幸  
十五 98 8 会よ。もう時間がないのだからね。あの  
十五 99 12 会会ったおぼえがないもの。」幸福「おい  
十五 100 7 会に会ったことがないんだってさ。(ほ  
十五 101 12 会まっているじゃないの。ぼくたちは、  
十五 102 7 会は、きれいではないが、いちばんたい  
十五 109 8 会くらべるものもない「母の愛の喜び」

十五110 6 会 年をとることはないのだからね。その  
十五112 9 会 なおかあさんもなければ、きりようの  
十五112 9 会 いおかあさんもないし、年をとったお  
十五112 10 会 たおかあさんもないのさ。おかあさん  
十五113 12 会 え、見たことがなかったかい。この手  
十五114 5 会 すぎて、ひまがないのだよ。さあ、こ  
十五114 9 会 うちへ帰りたいくないや。おかあさん、  
十五116 7 会 人を見たことがなかったよ。あの人は  
十五116 10 会 を見せることはないの。「チルチル」い  
ない (助動) 隔 ナイ ない 《ナイ・ナカツ・ナカ  
ロ・ナク・ナクレ》↓おもしろくない・しのびない・  
たまらない・つまらない・なっていない・みえない  
から  
一54 7 会 「「たまたがひろえなかったら、どうな  
一57 8 会 りおみなおらないのね。」わたくし  
一58 4 会 おつてくださらなかったら、どうな  
一61 10 会 になってしまわないかしら。」「《略》。  
二10 9 会 るものと、みえないものとに、わけ  
二19 2 会 いるときにいらなくて、いらないと  
二19 2 会 いらなくて、いらないとときにいるも  
二29 10 会 十一ぴきしかない。一ぴきたりな  
二30 1 会 い。一ぴきたりない。『ぶうちゃんは  
二31 7 会 た。』『一ぴきたりない。』『《略》。』とい  
二31 8 会 ぬ。』『一ぴきたりない。』といて、大  
二32 9 会 ことなんかできないよ。』と、ほかの  
二33 1 会 。『いや、目でみなくても、手でさわ  
二12 7 会 のことをおぼえなくてもよろしい。  
二13 4 会 ことばをつかわないということだよ  
二15 5 会 おすことはできない。』といて、と  
二23 1 会 いるのか、わからないほどになりまし  
二23 7 会 す。『日があたらないで、こまったも  
二23 8 会 はんぶんもできない。』『《略》。』あち

三23 9 会 「「なんとかならないものかなあ。」あ  
三44 4 会 まけるかもしれない。ぼくが、きみた  
三60 2 会 みんなの心があわないと、どこへもい  
三60 10 会 んなの心があわないと、どこへもい  
三60 10 会 、どこへもいけないじゃないか。』そ  
三64 7 会 っぺんにはいけないよ。右手と左手  
三64 9 会 どちらかへやらないければ。」「《略》。  
三65 4 会 。また、心があわなくなりました。そ  
三66 1 会 した。『心があわなくてはだめ、だめ。  
三78 7 会 雲さえでていなかったら、まいあさ  
三82 6 会 のもも色、みえないわ。』バーバラが  
三92 6 会 れます。『花をおらないでください。み  
三93 2 会 よう。どうぞおらないでください。』こ  
三105 5 会 うしてもあきらめない人が、なんんか  
三107 10 会 たがきゅうにみえなくなりました。み  
三110 4 会 がきて、かえらなければなりません。  
三110 10 会 界の人にわたさないくふうはあるま  
三112 10 会 することでもできなくなってしまう  
四7 6 会 す。火事がおこらないように、また、わ  
四7 8 会 びようきがはやらないように、氣をつ  
四15 3 会 いたけれども、なかなかった。かくれんぼ  
四19 4 会 てなしにはできないように、文もあ  
四24 4 会 みっちゃんがいなくなっているから、も  
四25 3 手 んなでお話ししない日はありません  
四28 2 手 くをのせてくれないかな。ふわふわと  
四29 9 会 返事をしてくれない。』せつこさんは、  
四32 3 手 が切れてあるけなかったのです。その  
四35 10 会 がおいでにならなくても、かずこさん  
四36 2 会 すか。そこにいなくても、その人の  
四38 4 会 ぶどうをもらわないで、かえれたので  
四44 7 会 が、「それはいけないよ。」といったの  
四44 9 会 。『どうしていけないの。』『《略》。』『へ

四45 10 会 っかけてきやしないかと思つてね。』  
四48 10 会 べつに氣にもかけないでとびつづけま  
四51 3 会 っちゃんをたすけなければなりません。  
四53 9 会 風がなんともいえないいい氣もちでし  
四55 5 会 ならず、風もふかない、しずかな、星の  
四59 1 会 みはりばんがいけない。』二十九わのが  
四59 10 会 なかまをみかけなかったかい。』『《略  
四60 2 会 んのなかまをみかけなかったかい。』『《略  
四61 10 会 あ、ひとねいりしなければ。』と、出発  
四65 7 会 な雲の中に、みえなくなっていくまし  
四66 4 会 、それをまちがえないで、早くいって  
四75 10 会 つく。わ——わからないことはしらべよ  
四78 1 会 け——けつせきしないで学校へ。ふー  
四78 6 会 —えんぴつをなめないように。て——て  
四79 5 会 みえるもの、みえないもの。み——右  
四87 4 会 って、まだかえらない。さむい。雪が  
四92 2 会 くはないかもしれないが、どうしても  
四95 6 会 たちはきまつていない。風にふかれて  
四97 8 会 とをしないといけない。かわいそうだか  
四98 6 会 めをうてくれないか。』子ども四「ど  
四104 6 会 「お礼にはおぼえないよ。元氣になっ  
四117 1 会 をあけてはいけないというのですか。  
四119 1 会 、だれも知らない人ばかり。とほ  
五11 6 会 そんな心配はいらない。駅の人たちは、  
五13 3 会 乗っている人がいないか、しらべるのさ  
五13 4 会 ち、まちがつていないの。』『《略》。』『へ  
五23 8 会 をかけていた知らないおじさんが、おり  
五25 2 会 て、とうとうかけなかったの。』『《略》。  
五27 6 会 しいから、わからなかったかもしれない  
五30 7 会 。ほんとうにすまなかったね。きみは、  
五30 11 会 が、なかなかできなかったのです。ぼく  
五36 9 会 のでしょう。みなれない木や、草や、動物

五46 9 だから、うまく鳴けないのだろう。帰りに  
五46 10 ら、もう鳴いてはいなかった。 たのしい  
五47 8 たり、名まえは知らないが、きれいな花が  
五55 2 ぐらいいかたつていなかったのに、もうす  
五57 2 が、かげんがわからないようです。「略」  
五57 3 うです。「あわてないで、しずかにごら  
五58 1 んまり長くみていないで、さあ、おかわ  
五61 3 のたねからめがでなかったら——」「略  
五61 4 ら——」「めがでないことはありません  
五62 4 ていいのか、わからなくなつてしまいまし  
五67 1 はお札などもらわなかった。そうして、  
五67 4 してお札をもらわなかったの。せめて、  
五68 5 じいさん、心配しないでお帰りなさい。  
五68 10 て、とくにもならない。もう一ど金のさ  
五69 7 じいさん、心配しないでお帰りなさい。  
五71 1 じいさん、心配しないでお帰りなさい。  
五72 8 のききかたも知らないで——國じゅうの  
五73 7 じいさん、心配しないでお帰りなさい。  
五74 8 いさんには目もくれないで、けらいに、「へ  
五76 9 かなは、なにもいわないで、しっぽでピシ  
五82 2 ださい。じゅくさないものをたべないよ  
五82 3 さないものをたべないようにすること、  
五82 5 なは、なま水をのまないことや、ねるまえ  
五82 6 や、ねるまえにたべないことや、日のかん  
五82 7 ところで長くあそばないことなどを、話し  
五85 8 、おまつさんがいない。どうしたのかい  
五86 8 か、あなたがみえなかったから、かぜで  
五93 1 「略」。「わからない子どもたちじゃな  
五93 2 「略」。「わからないおぼろさん——」  
五94 8 「ひばりかもしれないよ。」「略」。「へ  
五94 9 「ちっとも動かないじゃないか。」「へ  
五99 10 や、この鳥はとべなくなつたらしい。に

五99 11 い。にがしてやれなくなつたよ。」「おと  
五106 11 くはおともができるのさ。」「略」。「  
五108 1 きみ。おりてこないかい。ぼくの友だ  
六4 6 ら、さっぱりわからなかった。しかし、だ  
六8 4 り小さいのでつまめなかった。やつとつま  
六8 8 であそんではいけない。」「いいながら、  
六9 2 ゆう時計がなおせない。さがせ、さがせ  
六9 7 、もし、みつからなかったら。」「と、そ  
六9 11 わつたが、みつからないのでがつかりした  
六15 10 葉の船が流れてこなかったら、どうなっ  
六15 11 なつていたかしかない。」「ありは、心か  
六23 1 ろう。いまあそばないで、いつあそぼう  
六23 2 わるいことはいわない。さあ、はいりた  
六24 3 いいときにあそばないで、いつあそぼう  
六24 10 んな楽しさも知らないで、気のどくなあ  
六25 4 ありはなんにもいわないで、おもい足どり  
六26 4 はつもあるかもしれない。」「あり三風がで  
六26 5 り三風がでてこなければいいね。ふぶ  
六27 8 あり三はたらかないものには、この樂  
六27 10 の喜びはあじわえないだろう。」「あり二  
六34 2 、ここからはみえないよ。」「14 風がふく  
六34 11 せている——声がでないのである。雪」だ  
六36 9 、おしまいはみえなくなつてしまふ。21  
六39 5 、ぼく、もう帰れないんだ。」「なみだを  
六39 7 「でも、村に帰らなくちゃ。あなたのし  
六40 1 えがある。心配しないでまっていられし  
六42 3 から、えんりよしなくていいのよ。さ  
六42 6 ん、日がくれきらないうちにおねがいし  
六44 6 あさんにもわからないんだって——ぼく  
六51 6 なつて、かげがみえなくなりました。三人  
六52 7 ていると、月は動かないで、雲が大いそぎ  
六55 9 ってみました。動かないと思つてみた月は

六58 7 足をいためて、歩けなくなりました。そこ  
六59 5 ふだんの話がうたえないのかと考えました  
六71 11 だるまはお話はいらないけれども、はるえ  
六72 7 生きているとは思われないが、死んでいると  
六72 8 死んでいるとも思えない。死んでいたら、  
六72 10 いい顔つきもしていないはずだ——「略  
六73 10 どっちだかわからなくなつちやつた。」「  
六74 11 は命があるとはいえないと、ごろうは思い  
六76 6 がら、この手が動かないから、やはり雪だ  
六77 6 だるまは動きもしないし、息もしていま  
六77 10 動いていても息をしないから、命がないん  
六78 4 いく。たとえ動かない木でも、草でも、  
六78 7 てしまつたら動かなくなるでしょう。け  
六83 2 と「どうしてつれないのだろう。朝から  
六83 4 から一びきもつれないなんて——おや、  
六84 5 小鳥一わとれやしない。さ、弓矢を返す  
六84 9 せんでした。つれないどころか、申しわ  
六86 5 ゆるすことはできない。」「四のぼめん  
六96 1 へよんできてくれないか。」「女はいい。」「  
六96 5 のつりばりを知らないか。」「たい「このあ  
六101 1 、できるかもしれない。」「こう思いつく  
六101 2 、じつとしていられなくなつた。ぼくは画  
六101 8 きりとまいて、動かないようにした。これ  
六106 4 その、弟がまだいわないことを、さきに  
六107 1 あまりわらつてくれない。弟が、「略」。  
六107 6 が、うまく発音できないわけではない。しか  
六107 7 ことばでも発音できないわけではない。発  
六107 8 きることばと、できないことばとがある。  
六107 11 はながつまるといえなくなることばと、は  
六108 3 たために発音がでなくなるような音は、  
六108 8 は、はなから声でない音のほずである。  
六108 10 がはなからでるかでないかということ、

六109 8 のあなから息がもれないようにして、「ナ」  
 六110 11 しまった。弟がいえない音の中で、「ナ」  
 六112 2 「ミ」「ム」がいえなかった。この二つは  
 六113 5 かんたんにはわからないが、一ぎょう一ぎ  
 六114 3 が二本しかついでいないたです。はじめ  
 六116 11 いに作ったら、できないことはないだろう  
 六120 5 も、のりがかわかないうちにあまりいい  
 六122 1 会のまつかさをくれないか。「うさぎさん  
 六123 11 くて、うまくわれないだろう。」「略」  
 六131 3 れてなんかいやしないんだ。このトンネ  
 六133 9 会。」「なんにもいらないや。」「略」し  
 六134 8 きあげられてしまわなければなりません。  
 六137 5 会。ようしやはならない。角でついてやる  
 六141 8 会。りすると、ゆるさないぞ。」「略」。「へ  
 七8 5 さつと、学校からいなくなつてしまった。  
 七11 4 「略」。「手がたりない。同じ「手」と  
 七15 7 「略」。「はがたたいない。」「私たちのから  
 七18 4 会。実をとっちゃいけない。よくみのつてか  
 七19 1 会。ないよ。川に落ちないように。」「男の子  
 七19 3 会。、ちようちよがでなかったんですね。」「  
 七24 6 会。てるの。」「兄」かれないうにさ。」「はる  
 七26 1 会。いちゃん、わからないのかい。」「兄」なま  
 七26 4 会。に、すぐみつからないためです。」「兄」  
 七27 3 会。、教えてくださらなかったの。」「兄」いい  
 七29 6 会。めたちにたべられないためだと、おかあ  
 七32 11 会。さん、死ぬといけなから、ここからだ  
 七36 2 会。よ。とてもはいれないね。」「私は、ほん  
 七42 5 年は、ひく手をやめないで、いっしんにひ  
 七52 8 れしいような、すまないような氣持がした  
 七72 6 たるだ。だあれもない。うまが、水のに  
 七75 2 会。よつとのまに、いなくなつてしまった。  
 七75 5 会。かに、なんにもみえない。」「乙」木一本もみ

七75 6 会。乙「木一本もみえない。」「そこへ、ひと  
 七77 11 人は、それには答えないで、また思いだし  
 七84 1 会。ますと、かみきれないで、のこっている  
 七85 10 会。あまり遠くへいかないうちに。」「甲」ふ  
 七91 5 て、ぬれた草はやらないように注意してい  
 七92 4 くへはいつてでてこないの、小屋へ頭を  
 七94 3 です。しばらく動かないで、いたそうにし  
 八5 7 るだけしか賣つていなかったのですから：  
 八7 4 たり、それでもきかなければ、指で追つた  
 八10 2 で、なにか氣にいらなかったりおこつたり  
 八13 10 のことをと、わらわないでください。この  
 八13 11 そらく一生なくならないでしょう。――  
 八18 4 ネルをほつていかななくてはなりません。  
 八18 8 めもねこもやつてこないから、安全です。  
 八19 7 では、七年もかからないと、親になること  
 八19 8 親になることができないといひます。なん  
 八21 4 し、目もよくはみえないらしいので、ねこ  
 八22 1 しがついて、動かなくなつてしまいまし  
 八25 3 んなことなど考えられないほどにぎやかに鳴  
 八31 9 たけにでてはたらかなくなりました。ふた  
 八33 5 つがはつきりとみえないのですから、ずい  
 八34 11 を単位として計算しなければならぬほど  
 八34 11 計算しなければならぬほど、遠いきより  
 八36 1 ると、なんともいえない大きなふかい感じ  
 八39 5 会。以上の幸福は願わない。」「略」。「略  
 八42 7 会。こがねなどはいらない。」「そうおっしや  
 八46 8 うぶだどちえがたりなかったり、金もあり  
 八46 9 思うと、友だちがいなかったりしました。  
 八52 1 福」がきたとは知らなかったとみえて、い  
 八53 2 をぬすんでいきはしないかと思つたのでし  
 八54 3 福」がきたとは知らないようでしたが、な  
 八62 10 会。よ。なかなかわれないのですね。」「略」。

八63 1 会。。「略」。「われないというたまごはど  
 八64 1 会。てやるのでできなかった。わたしは、  
 八65 5 会。なすがたをしていない。ほんとうにしち  
 八65 6 会。、水にいてやらなければならぬまい。」「  
 八67 4 会。てね。人にふまれないように、それから  
 八68 3 会。もわるいことをしないのですから。」「と、  
 八70 8 いかさへも、わからなかった。すがたがみ  
 八73 8 会。せにあうかもしれないよ。」「このときで  
 八75 8 会。もかみつこうとしない。」「しばらく、じ  
 八76 3 きあがる氣にもならなかった。なん時間も  
 八76 10 にたおれるかわからなかった。風がひどい  
 八77 2 すわりこんでしまわなければならなかった  
 八77 2 しまわなければならなかった。あらしはま  
 八79 4 かし、たまごは生まなかつた。そればかり  
 八79 10 会。いだから口をださないでほしいね。」「す  
 八80 5 会。の考えなどはいえないのだよ。」「それで、  
 八81 3 会。そんなことは考えなくなつてしまふよ。  
 八81 9 会。うな人はありはしないから。」「略」。「  
 八81 10 会。がおわかりにならないのです。」「略」。  
 八82 1 会。いうことがわからない。」「じゃあ、だ  
 八82 2 会。たしのことはいわれないとしても、おまえ  
 八82 3 会。こいとは思っていないだろうね。うぬぼ  
 八82 4 会。うぬぼれてはいけないよ。人がしんせつ  
 八84 9 わすれることはできなかった。そうして、  
 八84 10 くちようたちがみえなくなると、すぐ水の  
 八85 2 かというとも知らなかった。しかし、い  
 八85 7 かりこおつてしまわれないように、水の中を  
 八85 7 の中をおよぎまわらなければならなかった  
 八85 8 まわらなければならなかった。しかし、一  
 八85 10 ながこおつてしまわれないように、いつも足  
 八85 10 つも足をつかっているなければならなかった  
 八85 11 っていないなければならなかった。とうとうつ

九一二三 まい水の味がわからなくなつてしまふ。あ  
九一二五 ちつとみづかくなつてはならなかつた。茶人はすこ  
九一二七 ちつともかからなかつたから、おなか  
九一二九 どのそは、にがさないぞ。」と、くもは、  
九一三〇 くものおみを知らないで、まっすぐにと  
九一三二 いお月さん、みえないの。」「なんだつて  
九一三三 日、なんにもたべないことをちゃんと知  
九一三五 えさんをたべやしないよ。」「へ略。」「  
九一三七 どうしてねむらないの。」こう話しか  
九一三九 をしていいかわからないので、そのままだ  
九一四一 花は、もう話しかけなくなりました。ぐっ  
九一四三 うみにくいととは思えなくなりました。「へ略  
九一四五 つたに日本人もいらないのです。日本人を  
九一四七 おとうさんは、知らない外国人どうしでも  
九一四九 とうさんのそばへこない女の子もありまし  
九一五一 ざわざ遠くにでかなくても、ふだん自分  
九一五三 ようなあみかたをしなければならなかつた  
九一五五 たをしなければならなかつたのか、よく考  
九一五七 に、めいわくをかけないようにしたいと考  
九一五九 くなるように、できないものでしょうか。  
九一六一 持になるようにできないものでしょうか。  
九一六三 人のわる口をいわないようにしたいし、  
九一六五 ころを、えんりよししないであらわし、友だ  
九一六七 、人をだましたりしないで、ありのままの  
九一六九 うつながりをわすれないで、あいての人を  
九一七一 ほかのことを考えないで、みつちりしご  
九一七三 どうすることもできなかった。それで、父  
九一七五 がせにしてはおかれない。いまのようなぬ  
九一七七 機を進歩させておかなければならぬ、と  
九一七九 ておかなければならぬ、というのである  
九一八一 もに、なんともいえないかた身のせまい思

十358、じつとしていられなくなり、設計図をひ  
 十3510は、なかなか生まれなかった。佐吉は、一  
 十362りあいてにしてくれなくなり、まずしさは  
 十381会りだすことはできないものだろうか。」  
 十3810会ゆめも、実現できないことはあるまい。  
 十3911きだして、受けつけなかった。また、核を  
 十401しもせず、死にもしないものでも、あとで  
 十406る年も、うまくいかなかった。村や町の者  
 十415まったく考えてもみなかったことである。  
 十434幸吉は、くじけはしなかった。研究のため  
 十438ゆめにもわすれられない眞田眞珠が、光っ  
 十447会。「これで成功しなければ。」幸吉は、  
 十449、赤しおもよせてこなかった。海水の温度  
 十466会どうしてもできなかったことが、二つ  
 十471会は、星にもあたらないでしよう。」六  
 十492会——ハイ——イラナイノ——オハナシシ  
 十4910か、おそらくわからないでしようが、その  
 十517会しません。「イラナイノ」といって、い  
 十519、いぬは、ふり向かないので、たべるよう  
 十555文がすらすらと書けなくなりました。むり  
 十629りますか。能を知らない人でも、おじいさ  
 十657にをしてもにくまれぬ、おもしろい人物  
 十6511づかいをやったりしなければならぬので  
 十6511たりしなければならぬので、ずっと、ひ  
 十662、となり村までいかなければなりません  
 十672の方へは、顔も向けないようにしていまし  
 十674からだにさわりもしないのだから、自分た  
 十698会か。それが、死なないのだから、『ぶす  
 十705会どくってありはしない。ひとつ、たべて  
 十709会「略。」「かまわぬ、おれはたべてや  
 十719会わされるかわからない。」おくびよう者  
 十717会それでもきこえなければ、また、どな

十96会しきたとはいえない。」「略。」「略  
 十1171きも、ききもらさない、その耳。わたし  
 十1215るの、役にたたないことはあります  
 十12110がじゅうぶんできないの、金次郎は、  
 十12110かの人たちにすまないと思ひました。そ  
 十1228会んのお役にたたいで、すみません。  
 十1251会子四人、わかれないうにしましう  
 十1267めには、学問をしなくてはならないと書  
 十1267をしなくてはならないと書いてありまし  
 十1271ろして、だれもないふうをしていまし  
 十124511いて、ごまかさなかつた弟よ。大ぜい  
 十12499とうさんに、負けないように働きます。  
 十12524たりおされたりしなければならなかつた  
 十12525りしなければならなかつた。だれかの  
 十12527動かすことはできなかった。電車は、齒  
 十125211会「あんまり乗らないでください、満員  
 十12536会。そんなにやさしいでください。」と  
 十125410するの、七、一つ一つ  
 十12606会て渡ってはいけません。七、一つ一つ  
 十12611会ているから渡らない。」と、きつぱり  
 十12612会つぱりことわらなかつたのか。」とせ  
 十12628会だすことのできないほど、『いいえ』  
 十126210会『はい』といわなかつたのだね。」「へ  
 十126211会くて、そういえなかつたのです。」「へ  
 十126411あけることができないので、長男にい  
 十126610て、それには答えないで、ただ、「略」  
 十12714人は、身動きもしないで、苦しうに息  
 十12715親の顔からはなさないで、こしをおろし  
 十12712会略。」「心配しないでいらつしやい。  
 十127311のベッドをはなれないうちに、少年は立  
 十12755会略。」「心配しないでおいで。」と、  
 十127510会てことがわからないです。」「略」。

十1785た。たとえわからなかつたとしても、病  
 十1805らでなければ飲まないようになりました  
 十1836会り、おまえがこないから、どんなにが  
 十1836会ていたかわからないよ。これ、チチロ  
 十1849会いくのか、いかなのかね。」と、父  
 十1853会い。ぼく、いけないんです。ここにあ  
 十1857会ぼくがそばにいないといけませんの、す  
 十1857会にいないといけませんの、す。あの人、  
 十1858会とても思ひきれないんです。ぼく、あ  
 十1868会りわけがわからなくなつていて、口も  
 十1868会いて、口もきけなかつたのですよ。た  
 十1873会もういくらもいなくなつていいでしう  
 十1888会うだめかもしれない。」といひました。  
 十1810と、思ひもよらない色になつてしま  
 十18172会ろの色もかけてないや。」文雄は、三  
 十18201会、ついたりつかなくなつたりだつたのに  
 十18212会めいにけいこしなくちゃだめでしょう  
 十18258会んも、よごれていないほうが気がいい  
 十18259ときどき、わからないことばで、わたし  
 十18261会いしつけがでなくなつて。」民ちゃん、  
 十18296会「ゆだんがでえないわ。いま、民ちゃ  
 十18313会するの、できないいちはばん大きな日  
 十18343のことともわからないままに、私は、「  
 十18403、話すこともできないので、気があら  
 十18408しいわけのわからないケラーをしつて  
 十18441会いるのかもしれないよ。」「略。」「へ  
 十18454会形はものをいひないが、そのかわり説  
 十184710会けで物事を考えないところに、人間の  
 十18482会れは人間にできないことでも平気でや  
 十18484会わがままをいひないからね。」「略。」「  
 十18505だ紙にのりをつけないで、上から上から  
 十185311人の顔や頭がみえないようにする。3

十二542 人形がかたむかないように、話すときは、なんともいえない暖かい感じのする  
 十二553 てたやすくは登れないが、ふしぎなこと  
 十二575 、もしそれができなかったら、これから  
 十二5711 へでてきてはならない、もしそれができ  
 十二581 ことはあとへひかないので、おとめの数  
 十二604 ばなしにして返さなかった。そののちは  
 十二623 でも、かしてくれなくなったという。  
 十二624 のかわきがとまらなかった。そのうちに  
 十二633 根はちつともみえない。花は美しく、実  
 十二646 根はちつともみえない。根のさきは毛よ  
 十二649 かせる。根はみえない。みえないが深く  
 十二667 はみえない。みえないが深く長い。深  
 十二668 左によじっておかないと、なんの役にも  
 十二6710 なんの役にもたない。のこぎりは、あ  
 十二681 みぎをかけていないと、じぎ、役にた  
 十二693 、じぎ、役にたたなくなる。どんなには  
 十二694 わたることができる。八 雪まろげ  
 十二698 ては、芭蕉のおきないうちに、いどから  
 十二711 にも降ってきもしないのに、「略。」な  
 十二7112 はその手にはのらないで、顔にあたった  
 十二739 句か、まだできない。だが、みせるも  
 十二765 語をすこしも話せないこの二少年が、遠  
 十二812 もどうしても勝たなければならぬと思  
 十二815 勝たなければならぬと思いました。火  
 十二815 かなうようにしなくてはならない。も  
 十二888 にしなくてはならない。もし、そのわけ  
 十二888 そのわけにかなわないことをすれば、た  
 十二889 わかったとはいえないことになる。話を  
 十二891 きわけ、のみこまなければならぬ。そ  
 十二891 こまなければならぬ。そうでないと、  
 十二892 興えることができないし、また自分の誠

十二892 自分の誠意も通じない。自分が話をする  
 十二894 、氣をつけて話さなければならぬ。こ  
 十二894 話さなければならぬ。ごく簡単な「あ  
 十二904 こしの力も発きしないからねんぶつであ  
 十二934 うすが相手にみえないから、ことばづか  
 十二935 いっそう氣をつけなくてはならない。前  
 十二935 つけなくてはならない。前後の続きがあ  
 十二110 は、なんともいえない美しさです。まき  
 十二112 とんど知られていなかったのですが、こ  
 十二97 んがめしべにつかないようなくふうと、  
 十二97 くみのるが、つかないときはみのらない  
 十二99 ないときはみのらないことを、知るよう  
 十二99 けず、科学の進まないところには、迷信  
 十三910 るとは、考えられない。このように、道  
 十三111 うに、道理にあわないことを信ずるのを  
 十三112 、まだ知られていないことはたくさんあ  
 十三118 をもととして考えなければならぬ。そ  
 十三1112 考えなければならぬ。そうして、人は  
 十三121 道理によつて動かなければならぬ。知  
 十三121 動かなければならぬ。知識によらず道  
 十三123 なしているかしかない。知識を廣め、学  
 十三133 つとしていて動かないという、いわゆる  
 十三136 うしてもかたづかないようなことが、目  
 十三159 人に教えてはならない、といいました。  
 十三186 も、精神的に敗れない國民こそ、眞にす  
 十三1910 上が、作物のできない土地であります。  
 十三2110 年がたつてもかれないで、よくしげりま  
 十三227 によつてはたされなかったのであります  
 十三231 以上で生長しないのは、きつと、小  
 十三249 の農作物で、できないものはないまでに  
 十三319 やしをいれたらしなければならぬので  
 十三319 りしなければならぬので、なかなか

十三311 鳴りものをつかわないで、呼び声でやっ  
 十三332 、水を運んで行かなければならぬ。大  
 十三333 行かなければならぬ。大きな水おけを  
 十三338 ままれてもわからないほどである。それ  
 十三345 をひきつけてやまない。夜のふけるのも  
 十三346 のふけるのも知らないで、見とれてしま  
 十三3412 、絵も字もわからないころから、ただ美  
 十三375 る。だれも出て来ない。一どとぎれて、  
 十三384 も来てくだらないじゃないですか。  
 十三386 らって、) いらぬ。ごちそうなんて  
 十三389 しら……じらさないでいつて……え、  
 十三412 こと……かまわないよ。ぼくがある  
 十三417 に、うちはやけなかったから、本だつ  
 十三424 ぼくに……いらぬ。せつかくの記  
 十三447 見物人の目につかないだけです。そうで  
 十三452 るようすを、見せなくてはなりません。  
 十三454 字にあらわれていないあいてのことばを  
 十三456 電話の話らしくしなければなりません。  
 十三4510 人にせなかを向けられないように、顔の表情  
 十三508 見ているかもしれない。すぐ帰って来る  
 十三572 が、色がわからない。赤いところが黒  
 十三583 りがうまくいかないから、また困る。  
 十三586 に、旅行して来なくちゃだめです。ね。  
 十三6010 さがよくわからないけれど。」「略。  
 十三611 うまいかもしれないが、深みやしんけ  
 十四53 思わずふり返らせないではない強い眞  
 十四53 返らせないではない強い眞実の力が、  
 十四67 んのことを考えないではいられません  
 十四67 も一どはおこらなければならぬこと  
 十四76 らなければならぬことが、おこった  
 十四78 たというにすぎないのです。私たちは  
 十四84 命にはしたがわなければなりません。



十四 84 ㊦ みようにも負けなければなりません。  
 十四 87 ㊦ れることのできないことがあるとした  
 十四 81 ㊦ れることのできないのは、わかりきつ  
 十四 94 ㊦ うお考えにならなければいけません。  
 十四 96 ㊦ なしい思いをしなければなりません。  
 十四 98 ㊦ ても考えのたりないことです。私は、  
 十四 910 ㊦ けることのできなかったことに對して  
 十四 104 ㊦ おがゆれたりしないとか、光をずっと  
 十四 149 ㊦ はなれてはいないのだ、もうすこし  
 十四 163 ㊦ 。私がそばにいないことなど、すつか  
 十四 195 ㊦ 中さんが答えられないでいると、高山く  
 十四 298 ㊦ 親しみをもっていなかったようです。で  
 十四 2910 ㊦ 花を見ようとはしなかったのだらうとい  
 十四 304 ㊦ 身近なものしか見ないで、遠いもの、大  
 十四 305 ㊦ くぼることがたりなかったのは、ざんね  
 十四 336 ㊦ 一部分にしかすぎないのです。このぎん  
 十四 341 ㊦ のぎんが系に負けないほど大きな星の世  
 十四 357 ㊦ うちゅうにも負けないくらい廣大で、す  
 十四 363 ㊦ です。教えを説かない教えです。むかし  
 十四 3612 ㊦ 人は、星はつかまなかったのですが、そ  
 十四 376 ㊦ 間がだいいちにしなければならぬこと  
 十四 377 ㊦ にしなければならぬことは、なんであ  
 十四 426 ㊦ あらそいがたえなからうが、心に太陽  
 十四 435 ㊦ よし心配がたえなくとも、くちびるに  
 十四 453 ㊦ のゆくえがわからなくなりました。アイ  
 十四 458 ㊦ 声も、いつか聞えなくなりました。すべ  
 十四 461 ㊦ 調子もみだれていなければ、ふるえても  
 十四 464 ㊦ 、ちっともちがわらないような歌いかたで  
 十四 483 ㊦ 分もどうせ助からないものなら、こうい  
 十四 4812 ㊦ たちが力をおとさないように、寒さに氣  
 十四 491 ㊦ たから手をはなさないように、こうして  
 十四 509 ㊦ 、名まえはわからなくても、あの美しい

十四 525 ㊦ 。私の花がさかなかったら、実はつき  
 十四 5411 ㊦ のことはわからないでしょう。そこは  
 十四 565 ㊦ 私が運んであげなかったら、りっぱな  
 十四 571 ㊦ なたがたがかけないようにしてあげた  
 十四 578 ㊦ のことしか考えないようですが、もし  
 十四 594 ㊦ 、土にはえていないかぼちゃなんて見  
 十四 598 ㊦ おわすれにないでしよう。」する  
 十四 5912 ㊦ かだちしてあげなかったら、実は一つ  
 十四 5912 ㊦ 実は一つもつかかなかったのですよ。だ  
 十四 5912 ㊦ 、あの人間がいなかったら、また、そ  
 十四 611 ㊦ せわをしてくれなかったら、私たちは  
 十四 612 ㊦ ちは、はえもしなければ、大きくもな  
 十四 613 ㊦ 、大きくもならなかったかもしれない  
 十四 613 ㊦ かったかもしれない。」つるも、うな  
 十四 643 ㊦ は、たやすくできないということが、学  
 十四 645 ㊦ けんび鏡でも見えないほどの、たいへん  
 十四 6412 ㊦ 、人の動きまわらないときだと、ことに  
 十四 664 ㊦ て、しまいに見えなくなってしまう  
 十四 719 ㊦ の湯を、ふたをしないでおいたばあいに  
 十四 7311 ㊦ りよくわかっていないようです。しかし  
 十四 783 ㊦ に割ることができなかったのに、うらの  
 十四 796 ㊦ かもとか、わからないことでした。その  
 十四 7910 ㊦ 知っているのといないのでは、たいへん  
 十四 866 ㊦ るいものとは思われないが、いますこしふ  
 十四 896 ㊦ もしろく編集できないだらうか。同じ題  
 十四 912 ㊦ か、つい見いだせなかった。もう一つの  
 十四 9112 ㊦ の足だか、わからないくらいだった。寒  
 十四 924 ㊦ こしも賣ってはいなかった。一はこも賣  
 十四 925 ㊦ はこも賣ってはいなかった。思いきつて  
 十四 927 ㊦ へ帰ることもできなかった。まだ一銭も  
 十四 928 ㊦ 銭ももうけてはいないので、父親が、き  
 十四 934 ㊦ 、雪のことも考えなかった。美しく火の

十四 966 ㊦ 子は、またそうしないではいられなくな  
 十四 966 ㊦ しないではいられなくなつて、もう一本  
 十四 979 ㊦ べしかのこつていなかった。女の子は、  
 十四 1005 ㊦ おばあさんが見えなくなつては困ると思  
 十四 1026 ㊦ なまぼろしを知らないのだ。人々は、そ  
 十四 1028 ㊦ えているかを知らないのだ。もうろく  
 十五 246 ㊦ 。いまそれをとめなければ、もうその女  
 十五 253 ㊦ からだが下へ落ちないように、その上帯  
 十五 2511 ㊦ の重さにたえられなくなつて、羽ばたき  
 十五 264 ㊦ せからふり落されぬものでもない。一  
 十五 265 ㊦ 面へおりてしまわなければならぬ。そ  
 十五 265 ㊦ まわなければならぬ。それに、もしま  
 十五 268 ㊦ 安全な場所へおりなければならぬと、  
 十五 269 ㊦ おりなければならぬと、少年は思いま  
 十五 2712 ㊦ のようにしか見えなくなつてしまいまし  
 十五 2811 ㊦ をおろすかおろさないうちに、鳥のせ骨  
 十五 314 ㊦ したが、まだこりないでやって來ました  
 十五 345 ㊦ それをその場にいない人や、遠くにいる  
 十五 346 ㊦ の表わしかたをしなければならぬ。こ  
 十五 347 ㊦ をしなければならぬ。これは、記おく  
 十五 366 ㊦ 表わすことができない。そこでたとえ  
 十五 4410 ㊦ ず、返事ともつかない答えかたをした。  
 十五 484 ㊦ の方法が他にもれないように、保護され  
 十五 491 ㊦ 、家の道具を賣らなければならなかった  
 十五 491 ㊦ 賣らなければならなかった。それでも、  
 十五 492 ㊦ このしごとはやめなかった。やがて、思  
 十五 498 ㊦ のは、ほとんどいなくなった。ただわずか  
 十五 549 ㊦ 、私が一言も発しないうちに先手をうつ  
 十五 554 ㊦ 思うようにつかえないことについてくわ  
 十五 559 ㊦ みがまだ生まれないころの日本の話を  
 十五 563 ㊦ 量が行われていなかったの、富士山  
 十五 567 ㊦ ートしかちがわなかった。そんなわけ

十五112 6 ㊦、なんにも見えないのだからね。母親  
十五113 10 ㊦に、しごとをしないの。』母の愛「いい  
十五115 2 ㊦うように私を見なければならぬか、  
十五115 2 ㊦見なければならぬか、それを、はっ  
十五117 3 ㊦ることを、知らないのだろう。(ほか  
十五117 9 ㊦のものは、見えないのです。』正義で  
十五118 1 ㊦上のもは見えないのです。』美しい  
十五118 5 ㊦ものは、見られないのです。』物のわ  
十五118 9 ㊦。ときはまだ来ないのです。でも、い  
十五121 4 ㊦すこしも書けていないことに気がついた  
十五121 9 ㊦れはなんともいえない、せつない気持ちで  
十五123 1 ㊦がたとしたしくしなかったのだろうと、  
ないち「内地」(名) 1 内地  
十一47 2 ㊦ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたの  
は、ぼくの二年生のときだった。  
ナイト ⇩アラビアンナイト  
ナイフ (名) 2 ナイフ ⇩フィッシュナイフ  
十四20 9 ㊦クレヨン、ペン、ナイフ、ゴム、ランド  
セル、ピアノ、オルガン、バイオリン、  
十四97 4 ㊦そのやいた鳥は、肉を切るナイフとホー  
クとをせなかに立てたまま、  
ないや「内野」(名) 1 内野  
七49 4 ㊦それで、内野の人はいつしんになったので、  
かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。  
ナイヤガラ(taki) (名) 1 ナイヤガラ(taki) のたき  
十五53 2 ㊦とちゅう、あるいはミシガン湖のほとり  
にたらずみ、あるいはナイヤガラ(taki) のたきをながめ  
なう「綯」(五) 1 なう 《一ツ》  
十一25 8 ㊦夜になると、また、なわをなったりわら  
じを作ったりしました。  
なえ「苗」(名) 13 なえ ⇩いもなえ  
八96 4 ㊦土をあまり深くほると、根が下へのびすぎ

て、あとでなえがよくとれないそうです。

八972 もう、なえが、2 cmから3 cmにのびました。

八978 なえが朝風にゆられるようになりました。

八979 黄みどりの新しいなえが、だんだん育って  
いきます。

八992 なわしろからとったなえをみんなでわけま  
した。

八1002 どのなえからも、すこしずつ新しいなえが  
できました。

八1002 どのなえからも、すこしずつ新しいなえが  
できました。

八1005 1本のなえのまん中からでた新しい葉が、  
5 cmぐらいになりました。

八1006 どのなえも生き生きとしています。

八1014 みんなで植えたなえが、いきおいよく育っ  
ていきます。

八1016 3本ずつ植えたなえが、だいたい7本ぐら  
いにふえました。

九355 5 手 そうして、近所からわけてもらったさつ  
まいものなえを、手わけして植えていきました。

十一293 金次郎は、〈略〉いねのなえをひろって、  
大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。

なえうり 〔苗売〕(名) 1 なえ賣り  
十三323 春は、なえ賣りがやって来る。

なえはこび 〔苗運〕(名) 1 なえはこび  
五427 手 私は、なえはこびをしています。

なお 〔猶〕(副) 10 なお  
五177 猶 わたしのはこんな小さな字だから、なお  
心配ですよ。

六707 猶 お話もしたら、なおおもしろいわねえ。

七769 ふたりは、なおびっくりして、甲「まったく  
くそのとおりです。」

九935 それを舞台のおくになげすて、なお、あ  
ちこちさがしつづけるがさる。

九939 新しいすみをひろいあげるが、自分の物で  
はないので、なおあたりをさがしている。

十三259 戦いによって失われたシュレスウィヒと  
ホルスタインとは、すでにつぐなわれて、なおあ  
まりあることになりました。

十四285 外來語辞典というものもあるから、そ  
れを調べると、なおいつそうよくわかるだろう。

十四341 あのぎんが系に負けないほど大きな星の  
世界が、なおいくつあるのです。

十五5812 こうしてなお語り続けようとする博士を  
さえぎって、

十五763 ああ、新島のおじさんが、いまなお満ぼ  
うを守っていてくださったのだ。

なおおちゃん 〔人名〕 1 なおおちゃん

十5810 おとなりのよし子ちゃんと、なおおちゃん  
に、三たばすつあげました。

なおさら 〔尚更〕(副) 2 なおさら  
四131 猶 天人のはごろもなら、なおさら お返し  
はできません。

十四341 地球などになると、なおさら、ごくごく  
小さなものです。

なおし 1 したてなおし・やりなおし  
なおす 〔直〕(五) 12 なおす 《―シ―ス》 1 2  
もいなおす・かきなおす・つくりなおす・でなお  
す・とりなおす・ぬりなおす・やりなおす・よみな  
おす

七4710 心がくもっていると、いくらなおしても、  
文章のくもりはとれません。

八4410 わたしの病氣をなおしてくれたものには、  
國の半分をわけてやる。

八454 より集まって、どうしたら王さまの病氣  
をなおすことができるかと、相談をはじめました。

八456 そこへ、王さまの病氣をなおすというもの  
がでてきました。

八472 王子も、なんとかして父の病氣をなおした  
いと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

十一763 病人のふとんをなおしたり、

十一883 チチロはまた、病人に飲み物を飲ませた  
り、ふとんをなおしたり、手をさすったり、

十二398 これは、ヘレン・ケラーというアメリカ  
の女の人を書いた「わが生がい」の一せつを、日  
本語になおしたものです。

十二939 文をなおすことはつまり心を練ることに  
なる。

十二10910 日本のことばになおしてローマ字で書い  
てあります。

十二1132 この本を日本語になおすのには、どれほ  
ど苦心したかわかりません。

十四5612 こんなに大きな字ができていますが、  
私は、いっしょうけんめいそれをなおして、

なおせる 〔直〕(下) 1 なおせる 《―セ》  
六92 猶 あれがないと、町長さんのかいちょう時  
計がなおせない。

なおも 〔猶〕(副) 1 なおも  
十734 太郎かじやは、なおも、おいおいなきなが  
らいました。

なおり 1 なくななおり・なくななおりする  
なおる 〔直〕(五) 6 なおる 《―ツ―ラーリ・

―ル》 1 おきななおる・おななおる・たちななおる  
一578 猶 やっぱり おみななおらないのね。

三1034 きもちのわるいときでも、はらの たつ  
ときでも、この かぐやひめのかおをみると、

すぐなおりました。

六122(会) 時計はなおりましたか。

六123(会) なおりました。

九235 オーストリアは第一次世界大戦のあとで、

まだそのいたでがなおりていないころでした。

十一241(会) 二三日したらなおると思うけれど。

なか「中」(名) 277 なか 中(あ)めのなか・おなか・きしやのなか・せなか・ひなか・まんなか・よなか・よのなか

— 331 — おへや — なか — そと — ま

— 412 — ほたる。うちのなかではなした。で

— 421 — せんせいの目のなかに、わたしが

— 425 — せんせいの目のなか、ひろいな。十

— 458 — きました。へやのなかでは、しろいき

— 465 — かばんをあけて なかを みせますと、「

— 595 — るおはなばたけの なかに ありました。

— 641 — わたくしも、わの なかに はいって、お

— 657(会) 、あなたの 目の なかに ふたつ ひかつ

— 264(会) うりが、くつの 中 には いました。『

— 387 — り)ところ 山の中 たろうとおとうさ

— 474 — んところ へやの中 一のぼめん い

— 556(会) ひろいはたけの 中で。『さぶろう「たね

— 95(会) 。あまちやの 中から ひよこりと、

— 137 — ひとことを 心の中 に しまいました。

— 152 — をもって、でしの 中 になじって いまし

— 375(会) さきが、はこの 中 で ねそべって いまし

— 6710 — した。青々と した 中 に、ふんわりした、

— 745 — おりて、その 光の中 をあるいて いって

— 847 — 、そのあまだれの 中 に、小さなにじが

— 1022 — そうして、かごの 中 に いて、おぼあ

— 1025 — さんのとる 竹の 中 には、たびたびこ

— 1046 — のみました。その 中 には、みやさまがた

三1074 んになると、光の 中 に きれいな おひめ

三1122 しめきったくらの 中 で、しっかりとか

四171 そうだ。バケツの 中 に 月がうつって

四205(手) が三びき、わの 中 には いて、ねこが

四216(手) みたちは、わの 中 で きよろきよろし

四219(手) ねらって、わの 中 へ もぐりこもうと

四221(手) ちに、ぴよいと 中 には いました。

四225(手) とき、またわの 中 に につこみました。

四541 かまは、この 林の 中 におりました。一

四657 のきれいな雲の 中 に、みえなくなっ

四1024 うみべとうみの 中 うらしまが、海べ

五1010(会) さきのきかん車の中です。『ビュツ、

五1610 んな話で、かばんの 中 には ぎやかです。ま

五171 よくの大きなは 中 には いました。そ

五198 きました。ふくろの 中 から だされて、ほっ

五1910 は、また、かばんの 中 に入れられました。

五218 した。しかし、その 中 に 三人だけ、たいへ

五254(会) はじめは、電車の中は、まるでにらめっ

五334 います。この荷物の 中 に、おり物や、お茶

五376 たちをかえ、石炭の 中 に たくわえられてい

五385 るのです。手紙の 中 に、こんなことが書

五409(手) のちうしです。なかに、子うしが三と

五585(会) 、青い、青い水の 中 に いうているようだ

五7611 と音をさせて、海の中へおよいでいてし

五798 へ。『略。』「川の 中 の石が、のびたりち

五802 へ。『略。』「川の 中 の石と石とが、おど

五927(会) ますよ。ごはんの 中 に だけこのはいっ

五966 ひなはもう、かごの 中 をとびまわっていま

五975 とんできます。その 中 には、ひわのむれも

五997 気になって、かごの 中 をとびまわっていま

五1041 さいが、くらい木の 中 から きたので、ひわ

五1084 た。『略。』かごの 中 のひわは、なかまを

六42 ねじ くらいはこの 中 に しまいこまれてい

六49 小さなふたガラスの 中 で、そばには小さな

六112 もとのふたガラスの 中 へ 入れた。そうして

六1111 ら、ガラス戸だの 中 に つけさせた。一日

六138 「というまに、川の 中 におちてしまいまし

六261 半分はありのいえの 中 、しもて半分はそと

六346 った、また、ひげの 中 におちる。15 かか

六612 がるたやことわざの 中 にも、このことのあ

六625 。きゅうりがくつの 中 には いました。『へ

六1010 て、さっきのつつの 中 へ、ちょうど、する

六11011 。弟がいえない音の 中 で、「ナ」、「ノ」、「

六1111 — という五十音の 中 で、ナニヌネノとい

六1112 ノという一ぎょうの 中 には いてる音ば

六1123 モという一ぎょうの 中 には いてる。こ

六1215 ぎさんは、まつ林の 中 で、まつかさで、ま

六1278 んとことトンネルの 中 を 走って きました

六1358 だしました。ささの 中 、やぶの 中 をとんで

六1358 。ささの 中 、やぶの 中 をとんでいきます。

七55 だりしながら、光の 中 をおよいでいたが、

七78(会) なったら、学校の 中 を、ちよつとひとま

七197(会) しげった草むらの 中 に、かくれているの

七222 んで、庭のはたけの 中 を 歩く。兄「すずめ

七2311(会) 。ぼくは、びんの 中 を そうじて、砂に

七243 兄は、しいくびんの 中 の砂に水をやする。は

七244(会) うして、葉を砂の 中 に 立てるの。』兄「か

七343 中 (一) 汽車の 中 は、人ではないで

七344(会) 中 (一) 汽車の 中 は、人ではないで

七361(会) 中 (一) 汽車の 中 は、人ではないで

七365 ますようにと、心の 中 でのいていました

七369(会) 、「どうかして、中へ いてやれません

七374 人ごみのうすぐらい 中 で、さぶろうは、元

七409 中の人たちに、心の中でお礼をいいました

七44 2 を渡り、お金がその中にたまった。私のま  
 七74 8 。ところ さばくの中。甲乙ふたりが、あ  
 七90 10 さぎのふんを、水の中へいれてみたろうき  
 七93 1 ろを持って、かごの中へいれたら、キュー  
 七95 8 くらんでいて、その中に、わたのようなふ  
 七96 2 子うさぎは、わらの中の毛の中で、元氣に  
 七96 2 は、わらの中の毛の中で、元氣に動いてい  
 七98 3 ら、子うさぎは巢の中でねていて、親うさ  
 八59 すえた小さなかごの中から、一わずつつか  
 八83 うのは、同じ日本の中でも、土地土地でほ  
 八94 私たちの家のうち、中でも茶のまほど、す  
 八10 2 するのです。うちの中にいるかぎり、こわ  
 八15 6 ろをさがして、地の中にかくれてしまいま  
 八15 7 しましました。地の中はどこもまっくらで  
 八16 7 その口のさきを根の中につきさして、木の  
 八18 3 ぶになります。土の中は、たとえ一二セン  
 八18 11 つみごえやこえ土の中に生みつけられて、  
 八22 4 きました。すると、中から、みずみずしい  
 八26 5 車が走ってきます。中には天帝が乗ってお  
 八28 4 らせていくと、林の中にごてんがあつて、  
 八28 4 にごてんがあつて、中から、はたをおる音  
 八28 5 は、そとごてんの中へおはいりになりま  
 八38 1 王さまは、宝ぐらの中で、宝物をかぞえて  
 八47 8 かったときでした。中から人の声がきこえ  
 八48 7 、つかつかと小屋の中へはいっていきまし  
 八48 9 いていきました。中には、うすぐらいひ  
 八58 4 、足もとの森や林の中に、みえがくれにお  
 八60 6 きな森があり、森の中には深いみずうみが  
 八65 10 いった。さつと水の中へとびこんだ。「略  
 八69 9 しょう。たまごの中にあんまり長くいた  
 八72 9 の子は、このあしの中で、横になって休み  
 八73 11 わのがんは、ぬまの中に死んで落ちた。「へ

八74 9 ねじ曲げてつばさの中にいれた。ところが  
 八77 7 けたので、そこから中へはいっていった。  
 八77 8 へはいっていった。中には、おばあさんが  
 八81 5 ね。それに、水の中へもぐってそこへい  
 八85 7 わないように、水の中をおよぎまわらなけ  
 八85 11 れはてて、こおりの中にとじこめられたま  
 八86 6 あまり、牛乳なべの中へとびこんだ。たち  
 八86 7 まち、牛乳がへやの中に流れたので、おか  
 八86 9 のいれてあるたるの中へとびおり、こんど  
 八87 4 あひるの子は、雪の中の草むらへはいりこ  
 八88 2 は、ぬまの草むらの中で横になっていた。  
 八88 6 うちに、大きな庭の中にきていた。そこに  
 八89 9 「そういつて、水の中にとびこみ、はくち  
 八91 4 まくりつばなもののの中に、しみじみと幸福  
 八93 1 ないで、つばさの中に頭をかくした。ほ  
 八93 5 では、すべての鳥の中で、いちばん美しい  
 八94 5 6dlのみを、水の中にひたしました。う  
 八104 3 つにわってみたら、中に、青いものがまる  
 九10 3 話」をきいた。その中で、たいこのたたき  
 九11 5 た。それから、水の中にドブンとどびこん  
 九15 5 とがあります。この中には、親つばめもい  
 九18 4 す。つばめは、鳥の中でも、たいへん早く  
 九18 7 せん。しかし、その中には、ことし生まれ  
 九26 2 やりみえるかやの中 上ばきを自分でつ  
 九28 2 ゆく 朝つゆの中に自轉車のりいれぬ  
 九32 6 ふもとにある森の中の小さな農家ですが  
 九32 11 、さかさまに湖の中にうつて、がくに  
 九36 5 れになって、村の中を通り、田んぼに落  
 九36 10 れたように雑草の中にありました。手に  
 九52 7 ら、あつちの山の中だ。おかしいな。ま  
 九61 6 んでみますと、草の中にあつちにもこっち  
 九62 11 。そこへ四方の草の中から、どんぐりども

九68 3 いでしょう。この中で、いちばんばかで  
 九69 2 しわたしだ。この中で、いちばんばかで  
 九73 10 ぐりのますを馬車の中にいれました。ヒュ  
 九78 11 ステッキを深く土の中へお立てになりまし  
 九79 5 のは、むかし海の中にいろいろな貝  
 九82 3 ると、先生のかごの中には、いつのまにか  
 九84 11 んのひろった物のの中に、いのししやしか  
 九86 2 う物は、みなかごの中にいれておきました  
 九106 8 ていった。まつ林の中を通っていくとき、  
 九107 1 、ちょうど小まつの中へとびこんだところ  
 九115 2 ひそかに枝葉の中をみあぐる 着ぶく  
 九116 5 かるさ日のでる中に ちろちろと岩つ  
 十4 9 きが、かすんだ空の中にとけこんでいる。  
 十6 1 つとあわただしさの中に、それを失つてい  
 十8 8 。そういう子どもの中には、道でおとうさ  
 十31 2 いるために、うちの中が明かるくなるよう  
 十32 4 す。いつも、全体の中の部分、部分があつ  
 十38 7 あった。眞珠母貝の中に、砂のような小さ  
 十39 3 。もし、母貝の中に、核をさしいれる  
 十39 7 てみた。うまく貝の中に核がのこり、眞珠  
 十41 11 き、うめが、母貝の中をしらべているうち  
 十52 9 が、よその家の門の中へ、はいっていきこ  
 十54 1 につかまって、水の中のをのぞきました。き  
 十54 11 ことばですが、この中には、妹のすがたが  
 十64 3 ますが、能は、その中でも、もつとも日本  
 十65 1 「ぶす」は、狂言の中の有名なものです。  
 十16 4 にかがやくものの中で、いちばん清らか  
 十22 2 。たくさんの人の中には、わらじの切れ  
 十27 7 みせてくれます。中には、正月だとい  
 十52 9 たてて、あらしの中をつき進んでいく。  
 十54 1 このごろ、電車の中に、つぎのようなひ  
 十54 3 さがず乗ったら中へ。「へ略」。「へ略

十二 60 12 て、三人は、川の中へドブんと落ちこん  
 十二 67 4 できますと、その中にはベッドが二列に  
 十二 67 8 くり返しながら、中へはいりました。少  
 十二 68 1 みまわしました。中には、死人のように  
 十二 82 5 は、父親のうでの中にたおれましたが、  
 十二 91 2 ドの上のコップの中から取ってきました  
 十二 14 4 ととした木の葉の中から大きくのぞいて  
 十二 15 4 、すばやくあなの中へかくれてしまつた  
 十二 33 1 のかたの両うでの中に強くきざげられ  
 十二 35 2 で、「水」がその中にはいつているもの  
 十二 38 11 いませんが、その中には、「父」「母」「  
 十二 53 9 ひとさし指を首の中にいれ、おや指とな  
 十二 53 10 なか指を、そでの中、いたのうしろがわ  
 十二 56 5 発見される。その中には、世界に共通な  
 十二 57 1 くれが、有明海の中にある湯島である  
 十二 62 2 うになった。その中にわるい人がいて、  
 十二 75 4 としたしずかさの中に、芭蕉は心をすま  
 十二 80 10 た。そのひとみの中には、「略。」とい  
 十二 87 10 だらう。ふろ場の中で湯をかきまわして  
 十二 90 10 「くりひろい」の中に、さまざまな氣持  
 十二 91 8 まかに、この文の中にたたみこまれてい  
 十二 91 12 文であるが、その中にたたみこまれてい  
 十二 94 3 赤とんぼを、心の中にえがきます。「略」  
 十二 95 10 がったことを心の中に思いうかべる。い  
 十二 104 3 等院という建物の中にある名高いほうお  
 十二 107 3 にかけての藝術の中で、とくにすぐれた  
 十二 110 11 ます。黒うるしの中に、銀や貝が光をは  
 十三 30 7 すぐわかる。その中で、いちばんさわが  
 十三 31 4 く輪になったその中で、さるがさまざま  
 十三 32 2 聞くのは、ゆめのの中の声のように思われ  
 十三 47 4 消える。そよ風の中にひっそりと、客を  
 十三 49 7 が、楽しい景色の中でわらう。メアリと

十三 57 3 さんかいた。中でも、ラファエルは  
 十四 4 6 イリッパの作品の中にみなぎっている大  
 十四 4 8 しあわせなものの中に、かえって、人間  
 十四 5 1 イリッパの作品の中には、たしかに、私  
 十四 6 1 つたつぎの手紙の中にもよくうかがわれ  
 十四 13 1 ーヒー入れは、中に小さなめもりのよ  
 十四 20 5 っていることばの中で、外国からはいつ  
 十四 23 9 あげたことばの中でも、クレヨン、ズ  
 十四 27 10 からきたことばの中で、西洋からきたこ  
 十四 28 2 いわかる。その中で、かたかなで書い  
 十四 31 5 は、とても世界の中にはたつていけませ  
 十四 32 2 すすめました、中には、「略。」とい  
 十四 36 4 たちは、星の光の中からふかい思想を読  
 十四 45 11 わるいしずけさの中から、とつぜん、ま  
 十四 46 10 った、自分が水の中にひたっていること  
 十四 47 10 きけんのせまつた中で、なんというおち  
 十四 48 8 ているのは、その中のひとりでした。ま  
 十四 54 8 根の私が、土の中から吸いとりて、送  
 十四 54 10 なたには、土の中のこととはわからない  
 十四 56 2 くださった地の中の水や養分でも、葉  
 十四 62 2 が一つあります。中には、熱い湯がいっ  
 十四 63 7 て見ると、湯げの中に、にじのような、  
 十四 71 7 す。これは、湯の中にうかんでいる小さ  
 十四 72 5 たがって、湯の、中までも熱いところと  
 十四 81 9 落ちる。親しきなかにも礼儀あり。し  
 十四 83 6 ようす、深い雪の中で生活している人々  
 十四 85 11 に降ってくる雪の中から、一ひらの雪を  
 十四 86 2 ではない。野原の中で、一本の草花を見  
 十四 88 6 。それとも、心の中で考えごとをしてい  
 十四 93 12 ろぼろの前だれの中には、もつとたくさ  
 十四 95 10 ていた。そのろの中には、美しい火がも  
 十四 96 10 、その女の子は、中のへやをすっかり見

十四 99 10 を、そばのたばの中からひきだした。そ  
 十四 99 11 そのマッチの火の中で、もうとつとくにわ  
 十四 100 6 、急いで、たばの中にあつたマッチをみ  
 十四 102 7 、神さまの樂園の中で、元日をむかえて  
 十五 7 3 みんなてききりの中鉄のひびきのかじ屋  
 十五 9 2 ら手をつないだ中を日ぐれのうまが通  
 十五 19 5 っています。その中で、一だんと高くそ  
 十五 20 12 ロッパの高い山の中の生活は、見るもの  
 十五 21 2 でした。朝ぎりの中から、白い雲のわき  
 十五 21 10 つけては深い谷の中へなげこんで、それ  
 十五 24 10 谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに  
 十五 27 8 朝の冷たい空氣の中を、アルプスの深い  
 十五 27 8 ルプスの深い谷の中を、大わしは、少年  
 十五 31 12 ちりました。その中で、女の子を後にか  
 十五 32 10 、下の方へ、谷の中へ落ちて行きました  
 十五 33 9 山までも、朝日の中のこの勇ましい少年  
 十五 47 9 が、そのお庭焼の中でも、「色なべしま」  
 十五 55 12 たずねた外人の中で、富士山や磐梯山  
 十五 72 11 して、つかつかと中にすすんだホランド  
 十五 73 9 かにさけて、家の中はがらんとしていた  
 十五 87 4 礼ですが、この中のおもなものをこし  
 十五 92 2 つけて、えん会の中にひきずりこんでし  
 十五 99 2 高いのが、廣間の中につけてこんで来て、  
 十五 107 10 大きな喜び」の中に、「美しいものを  
 十五 108 1 遠い金色の雲の中に、つま先で立つて  
 十五 112 3 たあの戸だなの中にはいつているの。  
 十五 112 11 の愛は、喜びの中でも、いちばん美し  
 十五 112 11 なみだは、目の中の星になつてしまふ  
 十五 113 3 かあさんの目の中には、星がいつぱい  
 十五 113 8 が白いな。その中から光が流れだすよ  
 なか 「仲」(名) 14 なか  
 一 29 6 手となかのいいことば。

- 一 30 3 足となかのいいことば。  
 一 48 10 よにんが むきあって、なかよく こしをかきました。  
 一 60 7 ㊦ まきげちゃんも、おともだちと なかのいい、やさしいこになりました。  
 四 81 5 ㊦ 星のきれいなこのよるを、みんなでなかよくあそびましょう。  
 五 25 6 ㊦ それからは、みんなにこにこして、友だちのようになかよくなってきました。  
 五 44 6 ㊦ 世界の友よ、手をつなぎ、なかよくとんであそぼうよ。  
 五 45 5 ㊦ みんななかよくさきそろうい 世界の花ぞのかざろうよ。  
 五 46 1 ㊦ みんななかよくきらきらと、しずかな空で光ろうよ。  
 七 99 6 母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭をそろえて、なかよくにんじんをたべていました。  
 九 89 4 ㊦ あんなになかのいいふたりが。  
 九 103 3 ふたり、なかよくかたを組みながらさる。  
 十 31 5 学校では、組の友だちとなかよくして、助けあっていたいと思います。  
 十五 92 3 かれらはみんなとなかよくテーブルについて、
- ながい「長」(形) 65 ながい 長い 《イー・カッ・ク》 ♪おもなが・きなが・ほそながい
- 一 45 9 おんなの人たちが、ながいみみをふりふり、もちものをしらべています。  
 一 46 10 おじいさんが、やっぱりながいみみをふりふり、わたくしたちをよびました。  
 一 50 1 みんなながいみみのある、あかい目のうさぎさんでした。  
 二 45 4 ㊦ 長い竹のさおで、ふねをこぎます。

- 二 59 1 ㊦ つくえも、こしかけも、長いあいだはたらいてきました。  
 三 26 3 長いあいだかかって、やっと切りたおすことができました。  
 三 31 1 ㊦ 長くまっすぐになっていきます。  
 三 70 7 ゆかの上に、なにか、長い、光った、ぴかぴかしたものがあります。  
 四 114 6 ㊦ 長いあいだ、ほんとうにお世話になりました。  
 四 114 9 ㊦ あまり長くなりますので、もう、おいとましようと思います。  
 四 122 3 ㊦ それから、みんなの手で、そだてられ、長い長いでんせんをつたわって、ここまでたびをしてきたのです。  
 四 122 3 ㊦ 長い長いでんせんをつたわって、五 21 3 一だいの長い電車が、おきやくをいっぱい乗せて、終点につきました。  
 五 32 6 おや、むこうからも長い、長い貨物列車がやってきます。  
 五 32 6 おや、むこうからも長い、長い貨物列車がやってきます。  
 五 37 3 このような木が、たおれて土にうずまり、長いあいだかかって石炭になったのです。  
 五 58 1 ㊦ あんまり長くみていないで、さあ、おかわり。  
 五 82 7 日のかんかんてるところで長くあそばないことなどを、話しあいました。  
 六 34 4 雲のひげがおおられて長くのびる。  
 六 102 1 二本のつつは、うまくはまりあって、長くのぼしたりちぢめたりすることができ。  
 六 102 5 長い物がぼんやりみえる。  
 六 126 6 あなはずんずん長くなっていきました。

- 六 137 10 長い森をくぐりました。  
 七 94 6 あと足を長くのぼして、まえ足を胸の下にいれていました。  
 八 9 3 庭の木にとまらせても長くはいません。  
 八 44 6 王さまは、ご病気をなさって長いことお苦しみになりましたが、  
 八 60 5 野原にはかれ草がつみあげられ、こうのとりは、長い赤い足をして歩きまわっていた。  
 八 62 10 ㊦ 一つのたまごに長くかかるのですよ。  
 八 69 9 ㊦ たまごの中にあんまり長くないので、あんなふうになっただけですよ。  
 八 84 2 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっている。  
 八 88 7 たくさん木のかんばしきにおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上にのびていた。  
 九 38 5 ㊦ 長い竹ざおのさきにかまをくくりつけて、  
 九 63 7 みると、やまねこは、もう、いつか黒い、長いしゅすの服を着て、  
 九 105 7 はじめは二列ですすんだが、谷あいでは一列になったので、ずいぶん列が長かった。  
 九 107 8 いかにもすべりよさそうないしゃが、長くつづいている。  
 九 113 10 林をぬって長いきよりをすべるのは、ほんとうにゆかいであつた。  
 九 124 10 茶人は、長い探求の旅が終りに近づいたことを知って喜んだ。  
 九 134 10 くもは、長い手をのぼして、わけなく白いちようちよをとらえました。  
 九 137 8 くもは、このおかあさんということばを、長いこと耳にしたことはありませんでした。  
 十 23 11 長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船、島。

- 十一44 大きな汽船がけむりをはいて、長いかけをひいて通っていくのがみえるし、
- 十一48 長いかだを組んで、材木を遠くの山から運んでくるのもみえる。
- 十一59 力まかせに、長いオールをぐいぐいとこいでみたい。
- 十一51 体格で、思うぞんぶん、長いオールをこいだら、
- 十一135 ふえの音は、長くおをひいて消えていく。
- 十一67 ふたりは、はしごだんをのぼって、長いろうかのはずれまで歩いていきました。
- 十一73 待っているそのあいが、少年にはたいへん長く思われました。
- 十二23 長いこと外地にいた姉たちがひきあげてきました。
- 十二63 そのうちからだがだんだん長くのびて、おしまいにへびになってしまった。
- 十二64 葉は青く、くきは長く、みきは高くそびえているが、根はちつともみえない。
- 十二66 みえないが深くて長い。
- 十二66 深くて長い根の上に、みごとに草や木がしげっていく。
- 十二68 まっすぐに長く切るのこぎりは、廣いはばをもっている。
- 十三59 長くかなしみにしずんだものにも、春は、希望の帰ってくるとき。
- 十三78 人生よ、長くそこにあれ。
- 十三45 「……」を時間的に短くしたり長くしたりして、電話の話らしくしなければなりません。
- 十四22 8 それが長い間つかっているうちに、すっかりなれてしまっ、
- 十四27 7 長いあいだつかっているうちに、もと

- もとのからの日本語のように思われてきたのだ。
- 十四39 2 長いゆめがさめた。
- 十四55 1 私、こんなに長いばかりで、花さんや、葉さんや、根さんのような、特別なはたらきは、なに一つございません。
- 十四99 その星が落ちるとき、空を横ぎって長い光のおをひいた。
- 十五25 左手を長くのばして、
- 十五45 徳川時代の長いしきたりが、明治になつてすっかりようすを変えてしまったので、
- 十五110 私、それは長いこと、あなたを求めている『正義であることの喜び』でございます。
- 十五116 「光」の方へ行き、ふたりは長いあいだきあいます。
- ながいす「長椅子」(名) 1 長いす
- 十三59 1 わたしが行ったとき、この絵の前には、一台の長いすがおいてあったが、
- なかごろ「中頃」(名) 2 中ごろ
- 九19 その年は氣候がわるくて、九月の中ごろ、きゆうに十二月の氣候と同じ寒さになり、
- 十三14 十六世紀の中ごろに死んだ、ポーランドのコペルニクスという人です。
- ながさ「長」(名) 8 長さ
- 六119 ちょうどいい長さにひごを切りました。
- 七92 うさぎの毛の長さを計ってみたら、白は2cm、黒も2cm、茶は1・5cmでした。
- 七99 子うさぎの毛の長さを計りました。
- 七99 耳の長さも計りました。
- 七99 耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6cmでした。
- 十二44 7 その人形などは、長さにすれば一メートル以上のものもあるが、

- 十二52 いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切って、まん中にあなをあける。
- 十二52 古ぎれを、はば二センチ、長さ三十センチくらいにつきあわせて、図の形に切る。
- ながし「流」(名) 1 ながし
- 三36 大きなながしもあります。
- ながし「長」(形) 2 長し《ク・ーシ》
- 十四81 5 おびに短し、たすきに長し。
- 十五12 5 ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ
- ながしかく「長四角」(名) 1 なが四角
- 六117 なが四角から、ま四角に切る切りかたは、いつかおかあさんに教えていただきましたから、
- ながす「流」(五) 7 ながす 流す《サ・ーシ》
- 三50 9 目もとをすえて石を切る、あせをながして石を切る。
- 五77 下水の水やうんがの水、きたないどぶ水をながして、海のとおくにすていく。
- 六15 木の葉の船は波に流されて、川の岸につきましたので、
- 六33 白いひげの雲が風に流されている。
- 九84 だれもかれも、あせを流し、顔をまっかにしてほっています。
- 十一19 そのうえ、さかわ川の大水で、田や畑をみんな流されたりしましたので、
- 十一28 さかわ川がまたあふれて、のこっていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。
- ながす・きる「長過」(上二) 1 長すぎる《ーギ》
- 十四17 1 夜が長すぎはしませんか。
- なかだち・する「仲立」(サ変) 1 なかだちする《ーシ》
- 十四59 11 ぼくがとびまわって、かふんをなかだ



ちしてあげなかったら、

ながたまご 1 ナガタマゴ

十一58 ㊦ ナマムギナガゴメ ナガタマゴ

なかなかおり [仲直] (名) 3 なかなかおり

九63 ㊦ いいかげんになかなかおりをしたらどうだ。

九66 ㊦ いいかげんになかなかおりをしたらどうだ。

九67 ㊦ いいかげんになかなかおりをしたらどうだ。

なかなかおりする [仲直] (サ変) 1 なかなかおりする  
『シ』

九102 ㊦ なかなかおりしたら、よくなった。

なかなか [中] (副) 23 なかなか

四29 ㊦ じぶんで じぶんに きてみて、なか

なかはつきりした 返事をしてくれない。

五30 ㊦ その荷物は小さいわりに、なかなかおも

かったのですが、

五30 ㊦ まえからも、やりたいと思っていました

が、なかなかできなかったのです。

六19 ㊦ なかなかよくあったね。』 チェロの「ほん

とうにいい氣持だ。』

六114 ㊦ あげてみると、なかなかよくあがりました。

七47 ㊦ それでいいところまでは、なかなか、

いきつくものではありません。

八62 ㊦ なかなかわれないのでね。

九40 ㊦ 木が動くので、かれ枝はなかなかたたき

落せませんでした。

九57 ㊦ 文章はなかなかうまいようでしたよ。

九58 ㊦ あの名もなかなかうまいか。

九93 ㊦ なかなかみつからない。

九143 ㊦ くもは、目がさえてなかなかねむれせん。

十35 ㊦ だが、思うように動くものは、なかなか生

まれなかった。

十一95 ㊦ けれども、ぼくにはなかなか、よしき

たとはいえない。

十一59 ㊦ やさしいようだが、なかなかいいに

いことばだよ。

十二27 ㊦ たいへんおそいようですが、いざりだす

となかなか早いものです。

十三31 ㊦ さるまわしは、さるをつかったり、せり

ふをいったり、(略)、なかなかいそがしい。

十四25 ㊦ あたりまえのことだが、なかなかおもし

ろいと思った。

十四33 ㊦ このぎんが系全体が、星の世界の全部か

という、なかなかそうではありません。

十四62 ㊦ ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現象を

観察し、研究することのすきな人には、なかなか

おもしろい見ものです。

十四65 ㊦ これがまた、よく見ていると、なかなか

おもしろいものです。

十五57 ㊦ その日本の青年はなかなかの人物だっ

たよ。

十五106 ㊦ 『不幸』に行くのをとめることは、な

かなかむずかしいのです。

ながなが [長長] (副) 1 長々

十一78 ㊦ それからそれへと長々と話しかけて、

なかにわ [中庭] (名) 3 中にわ 中庭

三35 ㊦ 中にわに、とうもろこしがたくさんは

えています。

七42 ㊦ 中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、

ぼうつとあらわれる。

十三36 ㊦ 中庭のあんずがさいて、花びらがホー

ンへちらちらと降ってくるのも、このころである。

ながねん [長年] (名) 1 ながねん

十四86 ㊦ 一ぴきのこん虫をながねんかかって調べ

ながのけん [長野県] (地名) 1 ながの縣

九123 ㊦ 求め求めて、いつか、いまのしずおか縣の

さかいもすぎ、ながの縣にはいった。

なかば [半] (名) 1 なかば

九16 ㊦ やがて、九月のなかばをすぎると、つばめ

は、そろそろ日本をさつていき、

なかほど [中程] (名) 12 なかほど 中ほど

三58 ㊦ 丘のちょうどなかほどにあるのです。

五39 ㊦ 中ほどから下は、雪がありません。

九50 ㊦ がけの中ほどに、小さなあながあいていて、

そこから水がふえのように鳴つてとびだし、

九87 ㊦ 舞台の中ほどに大きな木が一本立っている。

九122 ㊦ 岸では、その味がきえてしまうことがあつ

ても、中ほどでは、いい味はたえなかった。

十一54 ㊦ 「つり皮あけずに中ほどへ。」

十二56 ㊦ 雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五

郎が畑をうったときのくわのあとで、

十二60 ㊦ さすがの太陽も、まねかれるままに空の

中ほどまでもどってきた。

十二105 ㊦ 絵の中ほどをごらん下さい。

十五23 ㊦ そのとき、だれか、その大わしのせの上

へ、がけの中ほどからとびついたものがあります。

十五24 ㊦ このひつじかいは、がけの中ほどのあき

地に、草のしげっている場所を見つけて、

十五32 ㊦ そのとき、がけの中ほどから、ガヤガヤ

という人声が聞えてきました。

なかま [仲間] (名) 35 なかま ㊦ がんのなかま・

こうふくなかま

一54 ㊦ そうして、たまがひろえたら、お月さ

んのくにのなかまにいられてもらえます。

一61 ㊦ ここに いる ものは、みんな、たまを

ひろったなかまです。

三436 金 きみの なかまと ぼくの なかまと、  
 どちらが多いか、くらべて みようではないか。  
 三436 金 きみの なかまと ぼくの なかまと、  
 どちらが多いか、  
 三441 金 わにざめは、「略。」といって、すぐに  
 なかまを大ぜい つれてきました。  
 三443 金 きみの なかまはずいぶん多いな。  
 四532 金 がんの なかまは、〈略〉みずうみの ところへいこうと 話しあいました。  
 四541 金 がんの なかまは、この 林の中におりました。  
 四5910 金 りすさん、がんの なかまを みかけなかったかい。  
 四602 金 ふくろうさん、がんの なかまを みなかったかい。  
 四617 金 かみさま、どうぞ なかまを たすけてください。  
 四625 金 みると、なかまの がんが、へびからぬけだそうとして、もがいているところです。  
 四629 金 その ひまに なかまの がんは、するりとぬけだしました。  
 四632 金 かっちゃん、なかまの 手をとって、いそいでとんで かえりました。  
 五201 金 私のなかまは、一けん一けんにくばられはじめました。  
 五981 金 ひわの子は、それが自分のなかまの鳴き声だと思いました。  
 五1084 金 かごの中のひわは、なかまをよびました。  
 六398 金 わたしたちのなかまがわるい虫をとってそだてたいねを、こんどは、あなたがたがまもるんですもの。  
 六13210 金 ぼくも、かけっこのなかまにいられてくれ

たまえ。  
 八249 金 その鳴いているなかまのそばへ、とんでいってとまりました。  
 八2410 金 そこへなかまが集まってきて、にぎやかな音楽会のようにになりました。  
 八702 金 みにくいあひるの子は、あひるのなかまからわる口をいわれるばかりでなく、  
 八726 金 そうして、新しいなかまをみた。  
 八895 金 なかまに追いかけられたり、にわとりにぶたれたり、女の子につきのけられたり、  
 九777 金 先生について、五十人のなかまが、おくれなくいように歩いていきました。  
 十二1811 金 みんな自分たちのなかまだと思っていた  
 十五837 金 青い鳥だつて、〈略〉、この人たちのなかまにまよいこんでいないともかぎらない。  
 十五879 金 このなかまは、『のどのかわいていないときに物を飲む幸福』と、『腹のへらないときに物をたべる幸福』で、  
 十五8811 金 それから、あの、なかまにはいらなくて、せなかをむけているのはだれです。  
 十五9012 金 わたしたちの生活のなかまにはいってわたしたちのすること、みんな見るといい  
 十五1043 金 それから、ぼくは、まだなかまのうちでいっといいのをしようかいしませんでした。  
 十五1046 金 それは、ぼくたちのなかまです。快活なのです。  
 十五1073 金 『ふとった幸福』たちといっしょに、不幸のなかまにはいってしまった。  
 十五1075 金 わるいなかまとつきあったものだから、すっかりくさってしまったのですね。  
 十五1078 金 ぼくたちのなかまから、いちばん美しいものがいなくなってしまうわけですからね。

なかまいり 「仲間人」(名) 2 なかまいり  
 八826 金 ものごとを教えてもらえる人たちのなかまいりをしたんだもの。  
 十83 金 道で子どもたちが、なわとびをして遊んでいたりますと、そのなかまいりをして、  
 なかみ 「中身」(名) 2 なかみ  
 十二926 金 ほかの人がこれと同じ文を書いたとしても、そのなかみは、おそらく、太郎や秋子と同じではなからう。  
 十二9211 金 しかし、たたみこまれているなかみはそれぞれがって  
 ながむ 「眺」(下二) 1 ながむ 《一ムレ》  
 十五126 文 蘭 ガラス戸の外のつくよをながむれどランプの影のうつりて見えず  
 ながめる 「眺」(下二) 27 ながめる 《一メーメル》  
 二401 金 たろうは、あせを ふきながら、あたりのけしきをながめます。  
 三797 金 みんなは空をながめました。  
 三1092 金 月のきれいなぼんになると、かぐやひめは、空をながめてはためいきをつき、じつとかんがえこむようになりました。  
 四931 金 まどから かおをだして 空の ほうをみあげて、降ってくる 雪を ながめる。  
 七89 金 やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をながめている。  
 七337 金 母は、ふたりの兄弟をながめている。  
 七465 金 私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそとをながめた。  
 八653 金 親あひるは、じつとその子をながめた。  
 九444 金 母やおばまで子どものように、かきの葉をまいまい一まいならべて、この色がよいとか、こ

ちらの色がよいとかいってながめています。

十5410 そのけむりやほのおがおもしろらしく、妹は「略」いろいろなものをながめるのです。

十一43 近くには小高い丘があつて、そこからおきをながめると、大きな汽船がけむりをはいて、長いかけをひいて通っていくのがみえるし、

十一46 川上の方をながめると、近くの町の工場のおえんとつが、なん本も立っているのがみえる。

十一54 それにあきると、そのボートをながめては、いろいろな話をしあつて楽しむ。

十一6610 看護人は、少年をながめて、「略」、ただ、「略。」といっただけでした。

十一8411 少年は、また、病人の方をながめました。十二606 長者は、高どのの上からこのありさまをながめて、得意になっていた。

十二612 ところが、そのあくる朝ながめると、高どののは消えてしまつてあとかたもなく、

十三351 小さな子どもは、「略」、ただ美しいかざりのような氣持で、れんをながめている。

十四3511 じいっと大空の星をながめていると、十四861 一ひらの雪をとらえて、それをいろいろ

な角度からながめてみることは、十四882 その一すじの道をながめると、一直線ではなく、くねくねとゆがんでいる。

十四8910 読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたくながめた人によつて書かれた文である。

十五194 ベルンの町からながめると、まっ白に雪をいただく山々がならび立っています。

十五473 プリンクリーは、まんぞくそうに赤絵のはちをながめながら、その話のさをうながした。

十五532 とちゅう、あるいはミシガン湖のほとり、にたらずみ、あるいはナイアガラのをながめ、

十五565 山のいただきに立つた私は、小手をか

ざして足の下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ、十五797 あなたがたのお國を親しくおたずねして、

町や、家や森や、山をながめたり、ながめわたす「眺渡」(五) 1 ながめわたす「眺渡」(五) 1 ながめわたす「眺渡」(五) 1 ながめわたす「眺渡」(五) 1

十四375 人類全体を、そうして、うちゅう全体をながめわたす大きな目をもってください。

なかゆび「中指」(名) 1 なか指

十二539 ひとさし指を首の中にいれ、おや指となか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。

なかよし「課名」2 なかよし

九34 八 なかよし……八十七

九871 八 なかよし

なかよし「仲好」(名) 1 なかよし

十141 そういふかわいらしい子どもがいて、なかよしになつてくれたからです。

なかよしこよし「仲好好」(名) 1 なかよしこよし

一53 鯛 なかよしこよし、みんないいこ。

ながら「乍」(接助) 12 ながらじぶんながら

一474 おじいさんは、わたくしを むしめがねでのぞいてみながらいいました。

二371 ぬくらが、ひとりびとり かつてなことをいうので、ぞうつかいは、わらいながらいつてしまいました。

二379 〔略〕』とうたいながら、かえっていきました。

二401 たろうは、あせを ふきながら、あたりのけしきをながめます。

二575 「みんな いいこ」をうたいながら、あ

るいて いきました。

二673 「しゅしゅしゅしゅ」をつづけながら、

春をさがす。

三405 きょう ならったばかりのしょうかを、大声でうたいながらあるきました。

三445 ぼくが、きみたちのせなかの上を、かぞえながらとんで いくから、むこうの りくまでならんで みたまえ。

三4410 「略。」とかぞえながら、わたつていきました。

三749 お日さまが光りながら、いま、丘のかけへしずむところでした。

四521 おもいかつちゃんを かつぎながら 空をとぶのは、よいいな ことでは ありません。

四528 もうふのようになつて、かつちゃんをささえながら、できるだけ 早く とびました。

四972 よいしょ、よいしょ。」かけ声を かけながら、みんなで かめをころがします。

四1002 「略。」といいながら、いつて しまいます。

四1008 かめは、手で なみだを ふきながら、なん

ども おじぎを します。

四1275 けしきに みとれながら あるいて いますと、どこからか、よいにおいが して きます。

四1342 天人は、まいながら、だんだん 天へ のぼつて いきます。

五202 私もその人の手ににぎられながら、あちらこちらへまわりました。

五216 みんな、ぶつぶつとこことをいいながら、出口の方へでいきました。

五265 はるこさんは、きつぷを改札の女の人にわたしながら、「ありがとうございました。

五537 はるおが、東の空をみながらいいました。

- 五53 11 そういいながら西の方をみると、小さな星がちらちら光っていました。
- 五85 4 りょうかんさんはこういいながら、ほうきを持って、木の葉をはきよせました。
- 五85 7 「略。」とよびながら、走ってきました。
- 五86 5 「略。」と、うたのようにふしをつけてよびながら、ひとりの子どもがきます。
- 六8 9 「略。」といいながら、しごと台の上をみて、
- 六13 4 あつい日中の道を、ものを運びながら歩いてくると、のどがかわきました。
- 六29 5 「きりぎりす」ていねいにおじぎをしながら、「略。」
- 六34 9 かかしの目だま、ぐるぐるまわりながら、大きくふたり、小さくふたりする。
- 六35 10 くるくるまいながらおちていくかし。
- 六50 2 鯛 すんだ青さを持ちながら、ときにはくもる晝の空。
- 六54 3 よしおとみちこが「略。」「略。」といふあつてのをききながら、ふみおはふしぎでたまりませんでした。
- 六68 5 それは、むしめがねでよくみながら書いたのです。
- 六72 4 その日、晩ごはんをたべながら、ごろろはこんなことを考えました。
- 六76 6 「手だよ。」といいながら、この手が動かないから、やはり雪だるまは命がないのかなと思ひました。
- 六89 11 女の人は木をみあげながら、おじぎをする。
- 六97 5 ほおりのみことのまえにさしだしながら、海の神「このつりばりではございませんか。」
- 六99 6 「略。」と思ひながら、ぼくは、この二

- つをかさねたりべつべつにしたりして、
- 六102 4 ぼくはこうひとりごとをいいながら、そとをのぞいてみた。
- 六109 10 「ナ」といいながら、耳できいてみると、まるで「ダ」といつているようだ。
- 六115 8 たかが青空で右や左にゆれると、自分もいっしょに首をふりながら、しつかり糸にぎっています。
- 六122 7 おさるさんは、きよろきよろしながら、まつかさを受けとりました。
- 六123 5 そういいながら、カチン、カチンとわっている、
- 六128 7 かくれているうさぎさんたちは、おかしいのをがまんしながら、「略」うまくにげました。
- 六136 9 ぶんぶんおこりながら、びっこをひきひき、てっぺんにとどりつきました。
- 六143 6 「略。」と、うたいながらいいました。
- 七5 5 白いちようが、ういたりしずんだりしながら、光の中をおよいでいたが、
- 七7 2 窓 かたを組んで話しながらでていく子ども、
- 七7 6 窓 なんども手をふりながら、先生にさようならをして走って帰る子ども。
- 七25 5 日記帳をみながら、兄「たまごから小さい虫になるのに、七日かかっています。」
- 七27 8 はるお さなぎをふしぎそうにみながら、「これ、死んでいるの。」
- 七30 8 さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。」立ちあがりながら、なにげなく、ししくびんをみる。
- 七39 4 おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人に渡しました。
- 七40 8 私は、さぶろうの方に近よりながら、車中の人たちに、心の中でお礼をいいました。

- 七74 9 甲乙ふたりが、あちこちをみまわしながら、なにか、ものをさがして歩いてくる。
- 七77 11 また思ひだしながら、旅人「それから、つけた荷がありましたね。」
- 八10 9 小さな家で、小さなかつこうをしていながら、毎日なにかかわったことをしてかしては、みんなをおどろかせたり感心させたりします。
- 八15 9 せみの子どもたちは、「略」トンネルをほりながら、さぐりさぐりもぐっていきます。
- 八32 4 はたおりひめは、毎日をはたをおりながらなきました。
- 八62 3 「略。」といいながら、親あひるは立ちあがった。
- 八90 5 かわいそうにあひるの子は、ころされるものと思ひながら、水の上に頭をたれた。
- 九53 5 すると、りすは、木の上からひたいに手をかざして、いちろうをみながら答えました。
- 九54 9 いちろうは、顔をまっかにして、あせをほとほと落しながら、その坂を登りますと、
- 九58 1 着物のえりを廣げて、からだに風をいれながら、「略。」とききました。
- 九58 3 いちろうは、思わずわらいだしながら返事をしました。
- 九60 2 やっぱりやまねこの耳は立ってとがっているな、と思ひながらみていると、
- 九69 8 やまねこは、「略」、ひたいのあせをぬぐいながら、いちろうの手をとりました。
- 九73 3 やまねこは、大きくのびあがって、目をつぶって、半分あくびをしながらいいました。
- 九90 9 やまだ ひっぱられながら、「略。」
- 九90 11 やまだのせなかをおしながらさる。
- 九91 5 たかぎの服のほこりをはらいながら、

「略。」

九11 友だち、たかぎをかこみながらさる。

九23 「略。」と数えながら、大またでびよん  
びよんかけてきて、「十」でとまる。

九29 「一、二、三——」と数えながら舞台はし  
まできてとまる。

九32 しばらく、間——やまだ、さがし物のよう  
すで地面をみながらでてくる。

九35 それを舞台のおくになげすて、なお、あ  
ちこちさがしつづけながらさる。

九77 たかぎ、首をさすりながら、その場にぼん  
やり立っている。

九102 やまだ たかぎの首をのぞきながら、「でも、  
みてあげよう。」

九103 ふたり、なかよくかたを組みながらさる。

九105 リックサックをせおって、スキーをつけ、  
二本のつえをつきながら、そこへ集まった。

九108 みんなだまって、あえぎながら登ってい  
た。

九109 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえが  
きながら、小鳥のようにおりてくる。

九109 にこにこわらいながらおりてくるもの、ま  
じめな顔でやってくるものなどさまざまである。

九122 舟をやってこぎのぼりながら、ところど  
ころでその水でお茶をたてる。

九125 岸にそって上流に向かって歩きながら、と  
きどき水をふくんでは泉をさがしていった。

九129 くもは、その子もり歌を耳にしながら、光  
る星をみあげていました。

九129 ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもは、  
やぶれたところをつくろいかけました。

九145 くもは、とんでいくちようちよをみ送りな

がら、「略。」と、ひとりごとをいいました。

九1410 くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげ  
とみつめました。

九1458 くもが、月の光にちりちりりと光りなが  
ら落ちてくる夜つゆをみていると、

十811 「略。」といいながら、おとうさんにわ  
けてくれる少女もありました。

十219 窓に花のはちをおきながら、「略。」

十368 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、  
ふしぎな機械に目をみはりながら、「よくやつ  
た。「えらいものだ。」といってほめたたえた。

十5011 妹は、わらいながら、「フツテ」と、ひと  
りごとをいいました。

十513 パンを、略、いぬにやりながら、「ハイ」  
「ハイ」と、なんどもくり返しました。

十6811 ふるえ声でいいながら、いつでもにげだせ  
るかっこうで、こしをうしろにひき、

十722 「略。」といいながら立ちあがり、

十734 太郎かじやは、なおも、おいおいなきなが  
らいいました。

十749 太郎かじやと次郎かじやは、こんな歌を歌  
いながらにげだしました。

十1212 毎晩、家に帰ってくると、晝まの働きで  
つかれきつていながら、わらをたたいてわらじを  
作ることにしました。

十1271 そのいき帰りに、いつもその本を手から  
はなさず、略、大声で読みながら歩きました。

十1458 おめんじょうをいただいて、ささげ持つ  
ようにしながら、席に着きました。

十1518 雨にうたれながら、電車のくるのを待つ  
ていた。

十1592 「略。」という、父はにこにこわら

いながら、「略。」と答えた。

十1635 わきの下に着物の包みをかえながら、  
ナボリの大きな病院の門ばんのまえへいつて、

十1656 少年は、もしやわるい知らせをききはし  
まいかと、おそろしさにふるえながら、その名を  
いいました。

十16511 「略。」と、少年は、ますます不安を  
おぼえながら答えました。

十1677 「略。」と、看護人は、くり返しなが  
ら、中へはいりました。

十16710 勇気をふるいおこして、その後からつい  
ていきながら、略、病人たちをみまわしました。

十17110 少年は、かなしい思いにしみながら、  
やさしい父親のことを略、思い返していました。

十1756 「略。」と、医者、もう一ど少年の  
かたに手をかけながら答えました。

十1793 父親のちよとしたため息にも、ちよっ  
とした目つきにも、ふるえながら氣をもんで、

十1804 病人は、略、うれしそうな顔を顔にう  
かべながら、飲み物やくすりを、少年の手からで  
なければ飲まないようになりました。

十1809 少年は希望に力づけられながら、いきな  
り病人のうでをつかんで、

十1817 少年は、略、とびあがりました。のだ  
まででかけたさげを、じっとおさえながら。

十1819 ほしいをしたひとりの男が、看護婦に  
送られながら、そのへやにはいつてきました。

十18811 病人はしげしげと少年をみつめながら、  
ときどきむりにくちびるを動かして、

十1914 それを少年に渡しながらいいました。

十19110 一方の手で花たばを取りながら、一方の  
手で目をふきました。

十一 92 3 すみれをベッドの上にちらしながら、「略。」

十二 5 8 人々は、なんのためにこんなことをい

出したのかと思いがちだったが、  
十二 10 1 みずばらしい身なりをした老人が、道路をうろうろとみまわしながら、なにかさがしては、それをひろってポケットにいれていました。

十二 10 8 すると、老人は、ほおえみながらポケットに手をいれましたが、

十二 14 12 ひとりごとをいながら文雄が、そのくちた草をとりのけようとすると、

十二 29 11 わたしはそういいながら、「略」民ちゃんをだいてやろうとすると、

十二 34 11 「人形」という字をつづりながら、二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。

十二 35 9 そうして私は、くだけた人形のかげらを足さきを感じながら、ゆかいに思いました。

十二 39 2 ベッドに横たわりながら、この日が自分にもたらした喜びを思い返していたとき

十二 42 2 先生も、「略。」といのりながら、一生をケラーのためにささげました。

十二 56 9 みそ五郎は、雲仙岳にこしかけて、ひなたぼっこをしながら、まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。

十二 71 4 このようにして芭蕉につかえながら、はい句の話をきくのです。

十二 71 10 芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。

十三 15 3 また、公轉<sup>こうてん</sup>といって、自轉<sup>じてん</sup>をしながら、「略」、一年に一回、太陽のまわりをまわります。

十三 29 4 荷車をひきながら、ゆっくり歩いて来る。

十三 31 12 朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ歩いて来る。

十三 33 4 「キリキリ、リリリリ」ときしみながら、かん高いひびきをたてる。

十三 38 12 その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるくるまわしながら、楽しそうなようす。

十三 43 1 また、手紙を読みながら、舞台のまん中に出て来る。

十三 43 2 三郎手紙を読みながら、「生きて帰って来ました——」か。

十三 49 3 みどりの森が、喜びの声でわらい、波だつ小川が、わらいながら走っていく。

十三 57 6 小さな絵だが、じつによくかけている。」おじさんは、そういいながら、目を細くして、

十三 60 3 ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、かべにかかっている一まいの絵を見ました。

十四 21 5 「略。」とかいいながら、先生のお書きになる文字に目をそそいだ。

十四 53 9 暑い日に照らされながら、せつせと養分をこしらえて、送ってあげたからですよ。

十四 57 3 つるがこういったとき、高い声でわらいながら、どやどやとはいって来たものがあります。

十四 66 8 大きなうずができて、それが、かなり早くまわりながら、のぼっています。

十四 90 5 「略。」と、小さなマッチ賣りの女の子は、町をあちらこちら歩きながら思った。

十四 93 5 美しく火のともった家々の前を、そろそろとかなしげに通って行きながら、その小さなマッチ賣りのむすめの考えたことはそれであった。

十五 13 3 文鑑 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸の外明らかに月ふけわたる

十五 21 9 めずらしい草花をつみながら、がけの上

をそろそろと歩いていました。

十五 31 12 その中で、女の子の後にかいばいながら、少年は苦しい戦いを続けていました。

十五 43 3 まぶしい日の光をさけながら、銀座通りをアメリカの一しようこうが歩いていたが、

十五 43 5 ウィンドにかざられてあるさらやはちをしげしげとのぞきこみながら、「美しい赤色だな。

十五 43 10 かれは、かるくドアをおしあけながら、「略。」と、じょうずな日本語で話しかけた。

十五 47 3 ブリンクリーは、まんぞくそうに赤絵のはちをながめながら、その話のさきをうながした。

十五 51 7 主人は、新しい茶をハギンスにすすめながら、「略。」と、自分のことをうちあけた。

十五 53 11 そばにいるタイプストになにごとかをいながらうたせているしらがの老しん士の

十五 60 6 母校札幌農学校の教師をしながら、「略」札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、

十五 64 8 おじさんは道ばたにしゃがんで、自分のせをたたきながら、「略。」と、にこやかにわらいながら私によびかけた。

十五 64 10 にこやかにわらいながら私によびかけた。

十五 64 12 そうして、足をばたばたさせながら、「略。」と命令した。

十五 65 3 夏の日に、私をせにおいながら、あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、

十五 65 4 日がさをさしかけながらついでいらっしやった新島のお婆さんとの思い出は、

十五 67 11 おどる胸をおさえながらたどりついたげんかんには、

十五 68 6 「略。」と、家の人によびかけながら、おもわずとびこんだ私をだきしめた。

十五 68 8 お婆さんは目になみだをためながら、

しゃにむに私をおく深くひき入れた。

15 68 11 「おじさんが生きていたら、〈略〉——」

15 70 1 じつとおじさんの写真に見入りながら、

私は無言で頭をびよこんとさげた。

15 72 2 はか石に水をそそぎながら、「〈略〉。」と、

おばさんはふたたび呼びかけた。

15 75 4 「〈略〉。」と、力をこめてさげびながら、

そのにぎりこぶしを私の鼻先につきだされた。

15 75 8 日本へ帰ったら、新島夫人にきょうのゆ

かいな会見のてんまつを傳えてくれといひながら、

自動車のドアに手をかけた老博士が、

15 76 7 博士は満面ににこやかなわらいをたたえ

ながら、「〈略〉。」と、意外なあいさつをされた。

15 80 10 そう思ひながら、年よりの私は、日本の

小学校のみなさんに、はるかなあいつを送り、

15 86 11 チルチルの方へ手をさしだしながら、

幸福<sup>ふとつた</sup>「チルチルさん、ごきげんよう。」

15 87 12 ふたり、よろよろしながらおじぎをする。

15 88 9 「はちきれそうなわらい」が、腹をかか

えながらおじぎをする。

15 89 3 (チルチルの手をにぎりながら) まあ、

おいでなさい。

15 89 10 (ふたりの子どもに手をだしながら) さ

あ、どうぞ。

15 91 11 ふとつた幸福「光」を指さしながら、チ

ルチルに向かって、「〈略〉。」

15 92 12 パン口にいっぱい物を入れながら、

「〈略〉。」

15 93 4 いぬぶつぶついながら、テーブルの

すみで、「〈略〉。」

15 93 7 ㊦ おまねきをいただきながら、そうあた

ふたとおいとますることもできませんからね。

15 93 12 ふとつた幸福どもは、喜びの声をあげな

がら、いやがる子どもたちをひきずって「行こうと

する。」

15 94 6 チルチル「ふとつた幸福」どもがにげて

行くのを見ながら、「〈略〉。」

15 96 11 小さな「幸福」のむれ、ふざけたり、わ

らいこけたりしながら、「〈略〉」かきだして来て、

15 97 7 チルチルはねまわりながら、「〈略〉。」

15 104 11 わんぱくこぞうのようなのが「〈略〉」な

かにぶつかりながら、チルチルに近づいて来ます。

15 116 3 チルチル つつましくすこしさがっている

「光」を指さしながら、「〈略〉。」

15 119 1 ㊦ お別れしましょう。ほどなくあらわれ

るあすの日を待ちながら。

15 119 2 母の愛光をだきながら、「〈略〉。」

15 119 8 (ほかの「喜び」たちを見ながら) おや、

みんなないているのだな。

15 120 6 その歌を耳にしながらか、もっと下級生を

かわいがってあげようかと思った。

ながらく「長」(副) 1 長らく

9 31 2 ㊦ 先生とみなさんへ 長らくごぶさたして

います。

ながる「流」(下二) 1 流る 《一ルル》

15 9 1 ㊦ 水はしずかに流ると見ればもの花

ながれ「流」(名) 12 ながれ 流れしこながれ

三 7 4 ㊦ 小川のながれ。

三 7 5 ㊦ 白いくものながれ。

五 4 10 小さいにまに、小さいながれ 山から川

のあかんぼが生まれる。

九 36 4 ㊦ 岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみずが、

せかれて、たきになり流れになって、

九 36 8 ㊦ 夏のあいだ、たきぎをせおって山からお

りるとき、この谷まの流れにはいつて、頭から水

をあげるのが楽しみでした。

九 122 8 けれども、流れは急流だし、雨の日も風の

日もある。

十 24 5 地下水の流れ。

十 24 5 その流れのかすかな音。

十 42 6 しおの流れの早さや、

十四 71 6 ビーカーのそこをアルコールランプで熱

したときの水の流れと、同じようなものになる

十四 74 7 湖や海の水が、冬になって、表面からひ

えていくときには、どんな流れがおこるか

十五 19 9 氷河が無言の流れをきざんでいる深い深

い谷の上を、

ながれおちる「流落」(上二) 2 流れ落ちる 《一

チル》

九 36 4 ㊦ 岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみずが、

せかれて、たきになり流れになって、

九 126 2 そこで氣をつけてみると、右岸からさらさ

らと流れ落ちる小さな谷川がある。

ながれこむ「流込」(五) 4 ながれこむ 流れこ

む 《ム・ーン》

五 48 8 まどをあけると、いまのぼったばかりの日

の光が、さつといっぱいながれこんで来た。

九 121 2 あふれでた水は、さらさらと走って、やが

て、すぐ下のすこし大きな川に流れこんでいた。

九 123 2 大きな支流が流れこむところへくると、と

きどきあまい水の味がわからなくなってしまう。

九 124 3 まつ川がてんりゅう川に流れこんでいると

ころの近くまでくると、

ながれだす「流出」(五) 3 流れだす 《一・シ・

ス》

九二〇<sup>2</sup> ブツブツと音をたててわきだして、一方の  
 かけたところから、さらさらと流れだしていた。  
 一四八<sup>3</sup> 雪どけ水が流れだすところ、  
 一五三<sup>8</sup> 雪の中から光が流れだすようだよ。  
 ながれ・でる 「流出」(下二) 2 流れ出る 《一デ》  
 一四八<sup>6</sup> 船がしずむむいように流れ出たものらし  
 い一本の大きななるたに、  
 一五七<sup>9</sup> そのなつかしい顔をあおいだ私の目から  
 は、たまのようなみだが流れ出た。  
 ながれや・む 「流止」(五) 1 流れやむ 《一マ》  
 一八<sup>1</sup> 朝も、晝も、夜も、流れやまぬ愛のしみ  
 ずに、うるおされ、やしなわれて、  
 なが・れる 「流」(下二) 38 ながれる 流れる 《一  
 レーレル》  
 一三七<sup>6</sup> 川がながれています。  
 一三七<sup>7</sup> 川が、さらさらとながれています。  
 一三八<sup>1</sup> ちいさな川が、うちのまえをさらさら  
 とながれています。  
 一五二<sup>3</sup> おおきな川がながれていました。  
 二二六<sup>2</sup> くつがながれてきました。  
 二二六<sup>3</sup> きゅうりがながれてきました。  
 三三二<sup>2</sup> すべる、すべる、ながれる。  
 四九五<sup>2</sup> ひろがったり、あつまったり、ふわふわと  
 ながれたりして、だんだん下におちてくる。  
 五七<sup>4</sup> 川は大きくなると、ゆっくりとながれてい  
 く。  
 五七<sup>10</sup> 先生といっしょに、学校のはたけのむこう  
 を流れている小川のところにいきました。  
 五七<sup>6</sup> ピシャピシャと、あがつたりさがったりし  
 て、流れていきます。  
 五七<sup>11</sup> 波が、すべりだいをすべるように、らくら  
 くと流れていきます。

五二〇<sup>4</sup> 水が、ジャー、ジャー、ジャージャーと、  
 音をたてて流れているのをきいて、  
 六三<sup>5</sup> ちょうど、そばに小川が流れていました。  
 六五<sup>1</sup> 木の葉は船のようになって、ありのそばを  
 流れました。  
 六五<sup>10</sup> もし、あの木の葉の船が流れてこなかっ  
 たら、どうなっていたかしれない。  
 六六<sup>3</sup> 川が流れていました。  
 六六<sup>4</sup> くつが流れてきました。  
 六六<sup>4</sup> そこへきゅうりが流れてきました。  
 七四<sup>2</sup> 夜明けの風が流れてくる。  
 七四<sup>9</sup> かるやかなしらべは、朝の光のように氣持  
 よく、車中のすみからすみまで流れた。  
 八五<sup>11</sup> 下を見ると、大きな川が遠くへ流れている。  
 八六<sup>1</sup> 水はひなたの頭の上を流れたが、すぐに  
 うかびあがつてきて、うまくよいだ。  
 八八<sup>7</sup> そこへ、さわやかな空と日の光が流れて  
 きた。  
 八八<sup>7</sup> たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、  
 おかみさんは手をたいておこった。  
 八八<sup>7</sup> たくさんの木がかんばしくにおい、その長  
 いみどりの枝は、流れる水の上にのびていた。  
 九七<sup>9</sup> この「水」は、さらさらと流れる小川とも  
 なり、ちらちらと光るいけともなり、  
 九二<sup>2</sup> 竹やぶを流れてくる風であり、  
 九二<sup>10</sup> そこに流れているのがまつ川だ。  
 九二<sup>5</sup> いい味の水は、左の岸のほとりを流れてい  
 た。  
 一〇<sup>3</sup> 町には、ポンナフという石の橋があつて、  
 イエンヌという川が、その下を流れていました。  
 一八<sup>2</sup> 黒い雲が流れてくる。  
 一二<sup>36</sup> 冷たい水がいきおいよく流れているあい

だに、  
 一二<sup>37</sup> 「水」はいま自分のかた手の上を流れて  
 いる《略》ものの名であることを知りました。  
 一四<sup>45</sup> そのきみのわるいしずけさの中から、と  
 つぜん、《略》、きれいな歌が流れてきました。  
 一四<sup>71</sup> そうなると、茶わんに接したところでは、  
 湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、  
 一四<sup>71</sup> まん中の方では、ぎやくに上の方への  
 ぼって、表面から外がわに向かって流れます。  
 一四<sup>72</sup> わりあいに熱い表面の水が、そのあとへ  
 向かって流れ、  
 なき ↓すすりなきする  
 なきかた 「鳴方」(名) 2 鳴きかた  
 八八<sup>4</sup> 同じ日本の中でも、土地土地でほおじろの  
 鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。  
 八八<sup>7</sup> それは、鳴きかたのちがいでなく、きき  
 かたのちがいだらうと思う人もありましようが、  
 なきがら 「亡骸」(名) 1 なきがら  
 一四<sup>102</sup> 元日の朝、人々が、マツチ賣りのむすめ  
 の、ひえきった小さななきがらを見つけたとき、  
 なきこえ 「泣声」(名) 2 なきこえ  
 九二<sup>1</sup> どこかであかちゃんのなき声がしています。  
 九三<sup>4</sup> あかちゃんのなき声も、子もり歌もきこえ  
 ませんでした。  
 なきこえ 「鳴声」(名) 6 なきこえ 鳴き声  
 三二<sup>4</sup> なき声の わかる ものは、その なき声を  
 かきなさい。  
 三二<sup>4</sup> なき声の わかる ものは、その なき声を  
 かきなさい。  
 五七<sup>7</sup> たちどまると、鳴き声がやんだ。  
 五九<sup>1</sup> ひわの子は、それが自分のなかまの鳴き声  
 だと思いました。



十277 庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や、  
《略》を、こまかにしらべたいのです。

十三101 からの鳴き声がわるいから不幸がある  
などといった。

なきさけぶ「泣叫」(五) 1 なきさけぶ 《一ブ》

十四458 助けを求めてなきさけぶ声も、いつか聞  
えなくなりました。

なきたおす「難倒」(五) 1 なきたおす 《一シ》

十二823 十一ヶ國のテニス選手をなきたおした清  
水選手は、

なきだす「泣出」(五) 4 なきだす 《一シ》

三1097 十五夜がちかくなつたある夜、かぐや  
ひめは、とうとう声をたてて なきだしました。

十7212 太郎かじやは、きゆうに両手で顔をおおい、  
おいおい大声をあげてなきだしました。

十731 次郎かじやも、そのまねをして、おいおい  
なきだしました。

十一697 すると、かなしくなつてなきだしました。  
なきだす「鳴出」(五) 1 なきだす 《一シ》

一179 せみがどこかで なきだした。

なきたてる「鳴立」(下二) 1 鳴きたてる 《一  
テ》

八253 死ぬことなど考えられないほどにぎやかに  
鳴きたてたせみも、

なきはじめ「鳴始」(下二) 2 鳴きはじめる  
《一メ》

八246 れいのあおぎりの木でも、ほかのあぶらぜ  
みが《略》と鳴きはじめました。

十一127 まつの木では、きょうからせみが鳴きは  
じめた。

なきはらす「泣腫」(五) 1 なきはらす 《一シ》

八122 すえの女の子などは、目をなきはらしまし

たが、もうどうすることもできませんから、  
なく《無》 それとなく・なんとなく・ほどなく・  
まもなく

なく「泣」(四五) 18 なく 《一イ・キ・ク》

一283 ひとつのかおが、わらったり、ないたり、  
おこったり、よろこんだり、かんがえたり、

三464 はまべでしくしくなっていました。

三466 おまえはなぜなっていないのか。

三483 なぜなっていないのか。

四318 かさをさしていくと、むこうでよう  
ちえんの男の子がなっていました。

四319 どのかの 中学校の 女の生徒さんがき  
て、なっているわけをききました。

五909 このわしも小さいときは、オギヤア、オ  
ギヤアとないたのだよ。

六867 ほおりのみことは、海べでなっている。  
六871 もしも、あなたは、どうしてなってい  
らっしゃるのですか。

六874 つりばりは魚にとられてしまふし、にい  
さんにはしかられるし、困ってないいたのです。  
六983 いたい、いたいとなっていた、たいも  
喜び、おめでたい。

八122 みんなないて——ことに、すえの女の子な  
どは、目をなきはらしましたが、

八324 はたおりひめは、毎日したをおりながらな  
きました。

九115 着ぶくれて歩かさいし女の子ばたん  
とたおれそのまもなく

十734 太郎かじやは、なおも、おいおいなきなが  
らいました。

十741 いままでおいおいなっていたくせに、きゅ  
うに、にっこりわらい顔になつて、

十五1198 どうしてなっているの。  
十五1199 《ほかの「喜び」たちを見ながら》お  
や、みんななっているのだな。

なく「鳴」(四五) 52 なく 鳴く 《一イ・カ・  
キ・ク・ケ》

一337 お日さま——はな——ことり——とぶ——  
なく——とまる——かくれる——

一404 かつこうがなっている。

一407 つじからなっている。

二402 「かつこう、かつこう。」となきます。

二403 「かつこう。」となきます。

二439 かつこうが、とおくでしずかになきます。

二697 「ほうほけきよ。」となく。

三354 かすみになくひばり。

三392 やねのところで、すずめがなってい  
ます。

三392 海のような空で、ひばりがなってい  
ました。

四152 みんな、しずかに——よしきりがなく  
から。

四153 みんなじつとしていたけれども、なか  
なかつた。

四269 きみはよくなくね。

四272 もうしばらくなくてくれたら、かご  
からはなしてあげるよ。

四867 みそさざいが、「チャツ、チャツ。」とな  
いた。

四872 冬がきたので、よろこんでないた。

五468 「ホーケ。」と鳴いた。

五4610 帰りに、また通つたら、もう鳴いてはいな  
かつた。

五1007 《略》と、人なつこい声で鳴きまし

た。  
 五102 8 「略。」と、すずしい声で鳴きます。  
 五103 4 「略。」と鳴いてみせました。  
 五103 7 「略。」と鳴きました。  
 五103 10 「略。」と、さわがしく鳴いてみせますと、  
 五104 4 「略。」と鳴きました。  
 五104 6 「略。」と鳴いて、木のかげにかくれました。  
 五104 10 「略。」と、いい声で鳴いて、  
 五106 5 「略。」と、せきこむように、さかんに鳴きました。  
 七4 4 どこかで小鳥が鳴いた。  
 七8 7 すずめが、ときどき、チュンチュンと鳴く。  
 七56 7 そとで、虫が鳴いています。  
 七61 6 ひとところで、からすが鳴くと、あつちでもこつちでも鳴く。  
 七61 7 あつちでもこつちでも鳴く。  
 七93 1 首のところを持って、かごの中へいれたら、キューと、高く鳴きました。  
 八13 8 「チロリン。」だの、「チイチイチン。」だのと鳴いているほおじろの声をきくと、  
 八24 9 その鳴いているなまのそばへ、とんでいってとまりました。  
 八51 9 おまけに、その家にかつてあるいぬが、おそろしい声で追いたるように鳴きました。  
 八53 4 「略。」と、その家のにわとりは、用心ぶかい声をだして鳴きました。  
 八64 2 会 『クワッ、クワッ。』とないたり、  
 八65 1 「ピヨ。ピヨ。」と、ひなは鳴いて、はってでた。  
 九118 6 文 ぽおずきを口にふくみて鳴らすごとか

わずは鳴くも夏のあさ夜を  
 十5 1 小鳥が鳴いている。  
 十13 10 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよう。  
 十14 8 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちょうも舞い、まっさおな海もわらい、  
 十25 4 そのあくる日から、金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうちからおきて、遠い山へいって、  
 十28 1 会 はじめ短い羽を動かしてピッピッと鳴いていたときには、  
 十28 12 会 毎晩鳴いているうちに、すこしずつじょうずになっていくようです。  
 十29 3 会 ビアノの先生が、散歩にいらして、あなたの鳴く声に耳をかたむけて、  
 十28 10 ところがいま一だんというところで、いちばんどりが鳴いて、東の空が明るくなった。  
 十29 1 4 カサカサと落ち葉をふんでいったこと、小鳥が鳴いていたこと、  
 十三7 2 遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、ほんとうにのんびりとして、  
 十五11 2 文 人の家にさえずるすずめガラス戸の外にきて鳴け病む人のために  
 十五12 1 文 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸のともを見ればよきつくよなり  
 なぐ 〔五〕 1 なぐ 《ーイ》  
 六35 4 会 ないだりあれたり、海みたいなのさ。  
 なぐさめ 〔慰〕 (名) 1 なぐさめ じおなぐさめ  
 十一17 9 おかあさまの胸に、わきあふれるなぐさめの泉に、  
 なぐさめる 〔慰〕 (下二) 5 なぐさめる 《ーメーメル》 じおなぐさめいたす  
 十33 9 このあいだに立って、佐吉をはげましたり、

なぐさめたりしたのは、母であった。  
 十一39 4 会 はじの葉も、赤く黄色く色づいて、冬のしたくをとりそぐ 村人の目をなぐさめる。  
 十一77 12 そこで、少年は、自分をなぐさめて望みをかけはじめました。  
 十一79 12 が、ただ一つ、少年をなぐさめることがありません。  
 十五106 6 会 『不幸』をなぐさめてやるのがすきなのですから。  
 なぐす 〔無〕 (五) 3 なぐす 《ーシ》  
 六85 11 会 だいじなつりばりをなくしてしまうなんて。  
 八12 11 かわいいものをなくしたばかりでなく、私は、ピアノの信頼をうらぎったのが、かなしくて  
 九95 5 会 きみはなにをなくしたんだ。  
 なくなる 〔無〕 (四五) 18 なくなる 《ーッーラーリール》  
 三92 9 みにきた人が一本ずつおってしまえばいまいにみんななくなってしまうでしょう。  
 三98 2 口ではなしたことは、そのままきえてなくなりませんが、  
 三112 9 手足の力がなくなって、なにをすることもできなくなりました。  
 四5 3 もし、人がなくなったときには、やはりここに とどけます。  
 四51 10 かつちゃんとは、とぶ力がなくなりました。  
 六9 1 会 ああいうねじはもうなくなって、あれ一つしかないのだ。  
 七63 4 豆のつるがまきついて、まきつくものがないくなった豆のつる。  
 八13 11 この思いでは、おそらく一生なくならない

でしょう。

九二五 7 はじめの八キロほどは、村ざとがあつて川べりに道もあつたが、いまはそれもなくなつて、十一二三 2 金次郎が十四のとき、父親がなくなりました。

十二二五 一〇 いまにもう失敗もなくなるようにしてみせます。

十二五五 一〇 ただ人々のあいだで語り伝えられているだけで、そういう人たちのなくなるにつれて、順々に消えていってしまうものもある。

十二五九 一 おには約そくをまもつて、そののちはもう田畑を荒らすようなことはなくなつた。

十四九六 三 と思うと、そのとき、ほのおは消えてしまい、ろはなくなつてしまつた。

十五一三 五 文 照る月の位置かわりけん鳥かこの屋根にうつりし影なくなりぬ

十五二七 六 もう呼吸もなくなつたのかと、そのことがまた、少年の氣にかかつてきました。

十五四八 五 ところが明治になつて、はん主の保護がなくなつたうえに、

十五六六 七 なくなつた新島のおじさんがいい残された願ひによつて、

なぐる 「腰」(五) 3 なぐる 《一ツ—ラ》

九一九 七 〇 でも、ぼくは二つなぐられて、三つきみをなぐつた。

九二八 八 〇 でも、ぼくは二つなぐられて、三つきみをなぐつた。

九三九 一〇 〇 よし、じゃあ、あいこになるように、もう一つなぐつてやる。

なげ じまりなげ

なげいれ じゆうびんなげいれぐち

なげこむ 「投込」(五) 2 なげこむ 《一—ン》

十四七九 八 〇 水になげこんでごらん。

十五二一 一〇 男の子は、小石を見つけては深い谷の中へなげこんで、

なげすてる 「投捨」(下二) 1 なげすてる 《一—テ》

九三九 五 〇 しかし、自分の物ではないので、それを舞台のおくになげすてて、

なげだす 「投出」(五) 2 なげだす 《一—サー—シ》

十二二七 三 〇 かた足をなげだして、おしりでいざつて歩くのです。

十四四七 四 〇 歌っている人は、《略》、自分と同じように、船からなげだされたものでしょう。

なげつ—ける 「投付」(下二) 2 投げつける 《一—ケ—ケル》

十五三一 二 〇 その石を取るが早いのか、《略》あくまの胸をめがけて、全身の力をこめて投げつけました。

十五三一 六 〇 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしとあたります。

な—ける 「鳴」(下二) 1 鳴ける 《一—ケ》

五四六 九 〇 春になつたばかりだから、うまく鳴けないのだらう。

な—げる 「投」(下二) 7 なげる 《一—ゲ—ゲル》

一三〇 一 〇 もつ、にぎる、なげる。

二四九 七 〇 上になげてはうけ、うけては上になげて、よろこびます。

二四九 八 〇 うけては上になげて、よろこびます。

五六五 一〇 〇 ある日、おじいさんは、海にでてあみをなげました。

六二二 六 〇 うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、

八二八 八 〇 小な子どもがきて、水にパンや麦をなげ

八二五 五 〇 おかあさんのところへ走つていって、も

らつてきたパンやおかしをなげてよこした。

なごやか 「和」(形状) 2 なごやか

七三二 五 〇 なごやかな音楽がつづく。

十一五三 一〇 〇 ひどくとげとげた心でおしあつていた人たちも、きゆうになごやかな氣持になつた。

なごり 「名残」(名) 1 なごり

九一六 六 〇 まもなくさつていかなければならない日本に、なごりをおしんでいるのかもしれない。

なごり おしい じおなごりおしい

なさけ 「情」(名) 1 なさけ

八五四 四 〇 なさけのある人とみえて、台所の方からおむすびを一つにぎつてきて、

なさけな—い 「情無」(形) 3 なさけない 《一—イ—ク》

六六六 〇 〇 なんと—い小さい、なさけない自分であらう。

六七七 〇 〇 ああ、なんと—いなさけない身のうえであらう。

八七〇 一〇 〇 すがたがみつともないばかりに、みんなからしかりとばされるので、しみじみとなさけなく思つた。

なさけな—さ 「情無」(名) 1 なさけなさ

八一三 三 〇 信用してくれていたものを、あやまちのためにあわれに死なせたというなさけなさ、

なさけふかい 「情深」(形) 1 情ふかい 《一—イ》

十一一九 六 〇 その子どもに、りえもんという人があり

ましたが、たいへん情ふかい人でした。

なごし 「名指」(名) 1 なごし

十五六六 三 〇 むしや人形にそえて、《略》写真を二まい、満ほうへと名さして送つてくださった。

なさる 「為」(五) 20 なさる 《一—イ—ツ—ル》

↓いなさる・うみなさる・おあがりなさる・おあげなさる・おあそびなさる・おいでなさる・おうれなさる・おおきなさる・おかいなさる・おかえりなさる・おかけなさる・おきなさる・おしらべなさる・おとりなさる・おのりなさる・おはじめなさる・おぼえなさる・おみせなさる・おやすみなさる・かきなさる・ごあんないしなさる・ことわりなさる・ごめんなさい・ごらんなさる・さがしなさる・しつかりしなさる・しなさる・しゅちようなさる・つかいなさる・つづけなさる・つみなさる・にこにこなさる・はなしなさる・びっくりなさる・ふりかけなさる・まわしなさる・まんぞくなさる・よびかえしなさる・わけなさる

二五八 先生が、こんなおはなしを なさいました。  
三六三 おとうさんは そう いって、また ぐるぐるまわりを なさいました。

三〇七 九 「へ略。」とお思いに なって、すぐごしょにつれて かえろうと なさいました。  
四八九 雪だというと、あさ 早く はねおきて、そとに とびだして、雪かきを なさる おじいさん。

四一四 八 どうか なさいましたか。  
四二四 八 どうか なさるので ございますか。

五九〇 二 会 『さどが島』とおうたいになったとき、おじぎを なさいましたね。

八二七 六 天帝は、あたりをみまわして、なにかがさすようになさいました。

八四〇 三 着物を着ようとなさいました。

八四〇 一 王さまは、朝ごはんをめしあがろうとなさいました。

八四一 二 さかなをめしあがろうとなさると、これもこがねのさかなになりました。

八四四 五 王さまは、ご病氣をなさって長いことお苦しみに なりましたが、

九一三 三 先生がジャンプをなさるそうだ。

一二九 二 会 おかあさん、どうなさったのですか。

一二九 七 会 あなただつてその実をそんなに美しくなさるには、ご苦心が おありだつたでしやうね。

一二三 四 二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。

一二三 五 六 こんどは、二つの人形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。

一三三 七 七 目を細くして、ありありとその絵を目の前に見るようなようすを なさいました。

一四四 一 九 会 きはつ油のさしかたは、ご自分でなさつてごらんない。

一四四 五 八 会 が、おかあさんのおすきなようになさつてください。

なし 〔做〕 ↓おもしろいなし

なし 〔梨〕 (名) 三 なし

五二〇 五 なしの花のきれいにさいている家に、はいりました。

五三九 九 会 こちらでは、さくらの花も、なしの花も、

一五八 七 六 会 『地所持の幸福』で、なしのようなおなかをしています。

なし 〔無〕 (名) 四 なし ↓おかまいなし・かさなし・サリバンせんせいなし・せきたんなし・ひつきりなし

四一九 四 会 お話が あいて なしには できないように、

四一九 四 会 文も あいて なしには 書ける ものでは ありません。

一四一 九 一 会 ただ、わかつて いる だけでは なしに、

いつもそのうえを 考えていて、

一四八 六 一 一 ひらの雪をとらえて、それをいろいろな角度からながめてみることは、つつましい心なしには できるものではない。

なし 〔無〕 (形) 七 なし 《キーシ》

九二九 五 文 会 さるすべりラジオのほかに声もなし

九一五 一 文 会 いまの鳥はこの木にいるにちがいないし

ひそかに枝葉の中をみあぐる

一四四 一 一 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめの

れいにささげて、その成功をしらせた。

一二七 一〇 文 会 「七重八重花はさけどもやまぶきの

みのひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、

一四八 二 一 文 会 たまみがかざれば光なし。

一五五 一 七 文 会 大きななにごともなきばらの花ふ

とのはずみにくずれたりけり

一五五 六 一 一 「おじさんが生きていたら、〈略〉——」

といいながら、主なき書さへ私をみちびいた。

なしと・げる 〔成遂〕 (下二) 2 なしとげる 《ゲ》

一二一 三 四 新しい学問をきり開いていくときは、い

つの時代でもなみなみのどりでよくでなしとげられるものでは ありません。

一三三 八 九 この苦しいときにうちかつことのできる

國民だけが、國の建てなおしという大事業をなし

とげて、さかえるのであります。

なじみ ↓おなじみ

ナショナル ↓アイリッシュナショナルほけんがい

しゃ

なす 〔為〕 (四五) 3 なす 《シー・ス》

一三三 一 三 迷信は、今日、世の中にどれほど害をな

しているかしのれない。

一五五 一 三 文 会 あさき夜の月影清み森をなすすぎの

こぬれの高きひくき見ゆ  
十五584 かねこそ、のちに名をなした新島襄（にいじま じやう）だよ。

なすび「茄子」(名) 1 なすび

五893 高い山からたにそこみれば、うりやなすびの花ざかり。

なぜ「何故」(副) 21 なぜ

一345 なぜ、かぜになりたいとおもいますか。  
一365 それはなぜですか。

三466 おまえはなぜないているのか。

三483 なぜないているのか。

三772 「なぜ。」

四384 たろうさんは、なぜぶどうをもらわな  
いで、かえたのでしょうか。

四121 光がでるのはなぜでしょう。

六594 うたうたは、なぜうたいやすいかと考え  
ました。

六107 なぜはながつまるといえなくなることばと、  
はながつまってもいえることばとがあるのだろう、

七179 なぜかしら。

七831 では、まえ歯のぬけているということは、  
なぜわかったのか。

七847 それが麦だということが、なぜわかった  
のでしょうか。

八57 なぜなら、ほおじろだけしか賣っていな  
かったのですから……。

十294 どんなあみかたか、なぜ、このようなあみ  
かたをしなげばならなかったのか、

十一611 なぜ、そのとき、『略』と、きつぱ  
りことわらなかったのか。

十一629 また、このことをたずねたとき、なぜ  
すなおに『はい』といわなかったのだね。

十二80 「なぜ、そんなことをきくのか。」とい  
う色があらわれていました。

十四45 なぜでしょう。

十四92 この世の中には、まだ幸福のこつて  
いる、なぜかといえ、妹にしても、私にしても、

心からおかあさんを愛しているからだ、

十五108 なぜ横つちよを向いたままでいるの。

十五121 なぜいままで、もっと先生がたとしたし  
くしなかったのだろうと、さんねんに思いました。

なぜ「謎」(名) 3 なぜ

四697 三組の「なぜ。」

六651 なぜ 一世界じゅうで、いちばん力のつ  
よいものはなあに。

六658 このなぜの答がわかった人は、紙に書いて  
かへ新聞がかりのものにだしてください。

なぜあそび「謎遊」(名) 1 なぜあそび  
四672 「なぜあそび」「ふくびきあそび」お正月  
までに、ことばあそびのたねをたくさんこし  
らえて おきましょう。

なぜ「鉈」(名) 3 なぜ

九393 八九メートルもある木の上で、なぜ枝  
をおろすのは気がつかれます。

九405 なたをふりおろすたびに、すぎの木は大  
きくゆれました。

十四781 はじめにまん中になたをいれても、きつ  
と、とちゅうから横の方へそれてしまつて、

なだかい「名高」(形) 9 名高い『イー・イク』  
七464 名高いオペラの序曲である。

九1197 これは、名高い泉なんだよ。

九1218 茶人は、日本じゅうを歩きまわつて、うま  
そうな水や名高いど水をためしてみただけでも、  
九1238 てんりゅうきょうという景色で名高いとこ

ろもすぎて、四十キロあまりもきてしまった。  
十456 眞珠の産地は、〈略〉、日本産のものは、こ  
とに名高い。

十457 名高くなったかげには、幸吉一生の苦心が  
ひそんでいる。

十二1044 これは、九百年ほどまえに作られた平  
等院という建物の中にある名高いほうおう堂です。

十四42 世界の名高い文学者で、その名のわが國  
に知られている人は〈略〉少なくありません。

十五515 また、名高い大英百科辞典の

なたね「菜種」(名) 2 なたね

七43 中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、  
ぼうつとあらわれる。

七872 きょうは、れんげそうとなたねの葉をやり  
ました。

なつ「夏」(名) 29 なつ 夏 ↓ なつ  
四771 な——なつと冬。

四1246 夏 六月はつゆ。

六201 おおいにうたい、おおいにひいて、この  
夏の日を楽しもうではないか。

六2610 夏のあいだに、こんなにたきぎをあつめ  
ておいて、よかったね。

六271 でも、夏のころはあつくてたいへんだつ  
た。

七641 夏の風がふきこんで、新聞など動かして、  
ふきぬける。

八143 夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に生  
みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。

八148 暑い夏がやってくると、たまごは、はじめ  
てかえりました。

八207 あたたかさと、かわきかたとで、いまが夏  
だということや、〈略〉を知ります。

九152 夏の終りごろ、つばめが電線や物ほしざおに五六ばぐらいならんでとまっているのを、よくみかけます。

九313 国 こちらへきたときは夏の暑いさかりでしたが、

九367 国 夏のあいだ、〈略〉、この谷まの流れにはいつて、頭から水をあびるのが楽しみでした。

九448 国 この夏、一ど、用事でおばがそちらにでかけるとき、ぼくもついていったのです。

九1187 文 国 ほおずきを口にふくみて鳴らすごとかわずは鳴くも夏のあさ夜を

十一123 春がさって夏がくる。

十一338 夏 ほたる追う夜も重なって、麦のとりいれことなくすめば、はい色雲が空うちおおい、

十二148 地面には、夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいたかれ草が、すっかりくちていた。

十二599 ある年の夏、きょうは長者の家の田植えだというので、

十三155 これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。

十三244 以前は、ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はときに、しもさえ見ることがあったのです。

十三247 夏、しもがおりののはまったくやみ、

十三2712 夏は夏で、ひんやりとした土べいの日かげを選び、風の通り場で遊んでいる。

十三2712 夏は夏で、

十三324 夏は、きんぎょ賣りがやって来る。

十三335 夏の日には、この音がすずしい氣持をおこさせ、

十四5812 国 あのかわききつた夏のさいちゅうに、

十五204 ある夏のことでした。

十五605 新島のおじさんが、やまいを札幌のこう外に養っていたのは、明治二十年の夏であった。

十五653 暑さのきびしい夏の日に、〈略〉、あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、

なつかしい「懐」(形) 16 なつかしい「イーク」

八852 しかし、いまままでにだれをなつかしく思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。

八853 あの鳥をなつかしく思った。

九251 あの家のかき下につくった古巣がなつかしいのでしよう。

九467 国 なつかしいそちらの山々の景色を思い出します。

九1381 「おかあさん。」といわれて、きゅうになつかしくなりました。

十二84 家はなれて勉強にでかけていましたが、ある日のこと、母親がなつかしくなり、

十二3110 もう、めばえそめたそのなつかしい葉や、花の上を、

十二553 なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。

十二968 なつかしいことや、楽しいことや、ときには悲しいことなどもあるでしょう。

十三2710 ここに住んでいる子どもたちにとっては、〈略〉、なつかしい思い出の天地である。

十四688 国 なつかしいおかあさん、

十五677 ああ、なつかしい新島のおばさんだった。

十五678 そのなつかしい顔をあおいだ私の目からは、たまのようなみだが流れ出た。

十五688 なつかしい新島のおばさん、

十五733 博士の手には、〈略〉、なつかしい数々の写真があった。

十五1238 なつかしい一年生。

なづける「名付」(下二) 1 名づける「イーク」

十四767 これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。

なつじゅう「夏中」(名) 1 夏じゅう

十二136 そこには一本のざくろの木があつて、夏じゅう美しい花をつけていたが、

なつこい ↓ひとなつこい

なつてない「形」 2 なつてない「イーク」

九685 国 この中で、いちばんばかで、めちやくちゃで、まるでなつてないのがえらいとね。

九693 国 この中で、いちばんばかで、めちやくちゃで、てんでなつてなくて、頭のつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。

なつてみたいもの「課名」 2 なつてみたいもの

一37 十五 なつてみたいもの……二十四

一341 十五 なつてみたいもの

なっぱ「菜葉」(名) 1 なっぱ

七238 国 あなたは、きょう、しくびんのなっぱを、とりかえましたか。

なつめうり「蜜売」(名) 1 なつめ賣り

十三329 秋には、なつめ賣りがやって来る。

なつやすみ「夏休」(名) 2 夏休み

五842 夏休みになにをするか、みんなで話しあいました。

五966 夏休みがすむころには、ひなはもう、かごの中をとびまわっていました。

なでる「撫」(下二) 10 なでる「デーデル」

二351 国 はじめのめくらは、ぞうのおなかをなでて、こいいました。

二363 国 五人めのめくらは、足をなでて、

「〈略〉。」といいました。

二548 おかあさんは、三人の あたまを、しずかに  
なでて やります。

七903 よくみていたら、ねこが顔をあらうように、  
うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました。

七951 うさぎのせなかをさかさになると、毛が  
ふわふわとびます。

八711 「略。」とほめたり、なでてやったり、

八917 大きなはくちようたちは、そばへおよいで  
きて、くちばしでかるくなでてくれた。

九149 目をつむると、だれかが、くもの頭をなで  
ています。

十二321 そのなつかしい葉や、花の上を、私の指  
はまったくわれをわすれてなでていました。

十四893 しやがんで土のおいをかいだり、ての  
ひらでなでてみたり、

など (副助) 124 など

三952 きつねや、だましぶねや、紙ふうせんなど  
もおろすことができます。

四52 こうえんのせわや、どうろの そうじなど  
もしてくれます。

四58 手紙や 小づつみなどをおくって くれま  
す。

四117 さんすう、りか、おんがく、ずがこうさく、  
たいいくなどの べんきょうをします。

五224 おじいさんにおあいして、おもちゃ、まっ  
白にこなふいたほしがきなどをいただいで、

五335 この荷物の中に、おり物や、お茶や、しん  
じゆなどがはいっています。

五342 ここで、きかいや、ひりようなど、たいせ  
つな品物を作っています。

五671 海へ帰してくれ、お礼はいくらでもあげ  
るといったが、わしはお礼などもらわなかった。

五827 日のかんかんてるところで長くあそばない  
ことなどを、話しあいました。

五1077 ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよ  
むまねなどを、つきからつぎへときかせました。

六52 そばには小さなしんぼうや、は車や、ぜん  
まいなどがならんでいる。

六64 あれはなんの役にたつのだろう、これはど  
んなところにおかれるのだらうなどと考えている  
うちに、ふと、自分のことに考えおよんだ。

六408 村の子どもや、森や、小川や、いな田など  
の、きれいな、楽しかった思い出が、

六1139 みんなをわらわせてやらうなどという氣持  
は、どこかへふっとんでしまった。

六1175 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹  
二本と、それに、たこ糸やのりなどです。

六1349 しかさんに勝ったところで、あの角をおろ  
などということはできません。

七128 「きゅうりの手」や「豆の手」なども、同  
じです。

七264 ねえ、はっぱと同じになるのは、鳥など  
に、すぐみつからないためですよ。

七641 夏の風がふきこんで、新聞など動かして、  
ふきぬける。

八44 西洋の子どもだらうなどと、早がってんし  
てはいけませんよ。

八71 客がきているときなど、あまりテーブルの  
上できょうぎのわるいまねをすると、

八108 ピオのゆうかんさや、《略》、おかしさなど  
は、まだいくら書いても書ききれません。

八122 みんなないて——ことに、すえの女の子な  
どは、目をなきはらしましたが、

八207 いまが夏だということや、よい天氣がつづ

いていることなどを知ります。

八253 死ぬことなど考えられないほどにぎやかに  
鳴きたてたせみも、

八427 もし、ひめが生き返るなら、わしはもう  
こがねなどはいらない。

八805 かしいものたちがものをいっていると  
きに、自分の考えなどはいえないのだよ。

八855 どうして、あの鳥のもっているような美し  
さをもつたらなど望むことができよう。

八9311 こんな幸福があらうなどは、ゆめにも  
思わなかった。

九811 「絵はがき」「港」「友だち」など、いろい  
ろなことばを組みあわせてみましょう。

九109 水の音をたいこであらわすことなどは、  
ちょっと考えられないが、

九143 ゆめからさめるときには、音などはけっし  
てするものではないが、やはりたいこをたたく。

九404 「《略》。」とか、「《略》。」などいわれた  
が、ぼくはがんばっておりませんでした。

九487 やまねこのにやあとした顔や、そのめんど  
うだという裁判のようすなどを考えて、

九764 めいめい、シャベルや移植ごてなどを持っ  
て、角のむきみ屋のところに集まっていた。

九768 先生が、リヤカーに、はこやかごなどをの  
せておいでになりました。

九774 むかしといっても大むかしのことだが、  
貝などをおもにたべていたときがあったらしい。

九789 主人も、くわや、ふごや、かごなどを持っ  
てきて、かしてくれました。

九799 貝がらといっしょに、《略》や、たべた  
けもの骨や、角などを、ここへすてました。  
九824 かごの中には、いつのまにか、せきふらし

い物、土器らしい物、ただのわり石のような物などがたまっています。

九八五 一のししやしかの角などに手を加えて、なにかの道具につかった物があつたでしょう。

九八五 二 中には、こんな針や、もりなどがあります。

九八五 四 石で作ったもの、それには石の矢じり、おもりなどいろいろあります。

九八五 九 にここわらいながらおりてくるもの、まじめな顔でやってくるものなどさまざまである。

二一 一 まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。

二二 八 庭の木に小鳥がくれば、《略》や、羽の色や、形などを、こまかにしらべたいのです。

二二 一〇 トマトが畑に植えてあれば、《略》や、実のなりかたなどを、たんねんにみようと思います。

二二 八 一 くもがのきに巣をかけることがあれば、果のはりかたなどを、しらべておきたいと思います。

二二 八 五 こんな動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思っています。

二二 八 七 しおの流れの早さや、えさのよいわるいなども、はっきりしてきました。

二二 八 一〇 狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきや、ひやかしなどで、できている

二二 八 一四 いたずらをしたり、また、とんでもないへまをやったり、だまされたりなど、よいい人間のしそうなことを、なんでもやります。

二二 八 一八 ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやなことなど、きみはなんでもよくわかつている。

二二 八 二二 《略》や、手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど――

二二 八 二七 母親のことや、妹たちのことや、父親の

帰りを待ちこがれていたことなどを――

二二 八 二八 ちゃぶ台をだして、食事の用意などをしている、

二二 八 三二 「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさんのことばをつづることを覚え、

二二 八 三六 「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。

二二 八 四〇 「父」「母」「妹」「先生」などのことばがあつたことを思い出します。

二二 八 四四 文樂は手づかうのだが、そのほか、指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろ種類がある。

二二 八 四八 これに光をあてて影絵にしてみせるのだが、人間ばかりでなく、動物などもでてる。

二二 八 五二 なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。

二二 八 五六 昔、あるまじい人が、《略》、この岩屋からぜんやわんなどの家具のであることを知った。

二二 八 六〇 「雪やこんこん、あられやこんこん」などと、はやしてていました。

二二 八 六四 あなたがたの小さいときの写真などもあるでしょう。

二二 八 六八 なつかしいことや、楽しいことや、ときには悲しいことなどもあるでしょう。

二二 八 七二 古代の人は、はいが、はまぐり、かき、《略》などをたくさんたべていたようです。

二二 八 七六 このほか魚では、たい、さば、まぐろ、かつおなどをたべました。

二二 八 八〇 しかの角などで作ったつり針もあります。

二二 八 八四 手首やむねなどには、まがたま、まるた

まなどがかざってあります。

二二 八 八八 手首やむねなどには、まがたま、まるたまなどがかざってあります。

二二 八 九二 はにわには、このほか、うまや、いぬや、鳥などをこしらえたものがあります。

二二 八 九六 この人たちの着物やかぶりものなども、いまのものと同じぶんちがついています。

二二 八 一〇〇 また、なまりや貝などはめこんだものもあります。

二二 八 一〇四 あるいは、きつねがつくとか、からすの鳴き声がわるいから不幸があるなどといった。

二二 八 一〇八 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、この考えのまつたてはまらぬことは、

二二 八 一一二 火星や金星・木星などのような星は、

二二 八 一二六 地球も《略》、火星などと同じように、太陽のまわりをまわっている星の一つだ、

二二 八 一三〇 こむぎ・さとうだいこんなど、北ヨーロッパ産の農作物で、

二二 八 一三四 土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、ねむのきの枝などが、ずつとのびだしている。

二二 八 一三八 遊ぶといつても、べつに、おもちゃや絵本などを持って遊ぶわけではない。

二二 八 一四二 ホーントンの廣場などに、かけ絵の舞台をこしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。

二二 八 一四六 そこからローマに出て、へき画をかい

二二 八 一五〇 美しいしょう像などを、たくさんかいた。私がそばにいないことなど、すっかりおわすれ願ひしよう。

二二 八 一五四 では、バケツやカーテンなどは、日本語で、なんといっていたんでしょう。

二二 八 一五八 「ことばのおたんじょう」などというお話が、つくれそうな気がしてきた。



十四2511 外國の学問などが傳わつてきたときに、そのことばもいっしょに傳わつてきたのにちがいない。

十四275 〔漢語をつかう。〕などというときの漢語は、たいてい大陸からきたことばだ。

十四293 見てももらいたいなどというとき、どこかにしまつてあるもののように聞えるかもしれない

十四3212 地球や金星などのわく星が、

十四3411 地球などになると、なおさら、ごくごく小さなものです。

十四3412 したがって、その地球の上に住んでいる人間などは、バクテリアよりも、もつともつと小さなものを感じられるかもしれません。

十四5412 〔そこは、暗いところで、土もかたいし、石ころなども、ごろごろしています。〕

十四6111 〔同感。同感。〕と、日や、土や、水などがいいました。

十四649 飛行機などで、横からすかして見ると、ちょうど、けむりが廣がつているように見える

十四665 茶わんの湯げなどのばあいだと、もう、茶わんのすぐ上から大きなうずができて

十四6611 これとよくにたうずで、もつと大きなのが、庭の上などにできることがあります。

十四6612 春さきなどの、ぼかぼかあたたいかに日は、

十四715 よく理科の本などにある、ビーカーのそこをアルコールランプで熱したときの水の流れと、

十四718 湯の中にうかんでいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずで

十四7810 そののち、氣をつけて、おけ屋さんなどのやっているところを見ると、

十四838 雪だけ水が流れたところ、それをうれ

しそうに見ている雪國の子どもなど、時間的に、じゅんじよをおつて、とりあつたものである。

十四845 それぞれちがつたけつしょうをしていること、その美しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ降ってくることを写している。

十四849 空中の温度の變化、風の關係、水蒸氣の量、高度など、さまざまな條件によつて、

十四868 たとえば、ふぶきなどもその一つである。

十四871 ばんそうの音楽や、場面の組みあわせと説明のことばなどによつて、かなり生き生きと表現することができそうである。

十五344 私たちは、自分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。

十五349 それで大昔には、なわを結んで、その結びかたや、なわの色や、なわの太さなどによつて、いろいろな考えを表わした。

十五351 あさなわなどであんだひもつかい、

十五353 ぼうきや、石や、貝がらなどに、はものなどであるしを付けてしめすことも行われた。

十五353 はものなどであるしを付けて

十五378 〔枝・板〕など、その文字の左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に關係のあることを表わし、

十五378 「えだ・いた」などと、「木」に關係のあることを表わし、

十五382 「海」を「うみ」などにつかつて、その漢字の意味にあつた日本語をあてて読むことも

十五3810 「上・下・生」などの読みかたをちよつと考へてみただけでも、

十五397 「江」から「エ」、「加」から「カ」などと書くようになった。

十五403 あの有名な源氏物語や枕草子などは、

すべてこのかなによつて書かれた作品である。

十五4010 ローマ字は、アメリカ・イギリス・〈略〉など、世界の大半につかわれている文字である。

十五481 このお庭焼のために、細工人、画工、ちようこく師、下ばたらきの者などが、三十数人かえられていた。

十五7410 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別など、あるべきはずはない。

十五825 「幸福」(ぜいたく) たちが、けだもの

の肉や、〈略〉を、水がめや、ひっくりかえつたかなえなどの間で、たべたり、飲んだり、

十五956 「ばらのめざめ」とか、〈略〉、「こはくのつゆ」などがあらわれます。

十五1210 石井先生の手品や、森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合奏など、はじめてのことなので、

なないろ 「七色」(名) 2 七色

八267 馬車は、七色の大きなそり橋を音もなく渡つて、

十207 「略」。という先生の声とともに、七色の光が写しだされる。

ななえやえ 「七重八重」(名) 1 七重八重

十二710 〔圖〕「七重八重花はさけどもやまぶきのみひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、

ななくせ 「七癖」(名) 1 七くせ

十四825 なくて七くせ。

ななつ 「七」(名) 3 ななつ  
一112 〔圖〕ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、い一つ、むつつ、ななつ、やつつ、ここのつ、とお、一116 〔圖〕ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、い

つ、むっつ、ななつ、やっつ、このつ、とお、  
 三二七 ふねは ななつの 大なみを のりきって、  
 鳥のとぶように 走るではありませんか。  
 ななつやっつ 「七八」(名) 1 七つ八つ  
 九四六(手) セドリツクは、七つ八つのころでも、せ  
 んきよのことを話していますけれども、  
 ななまわりはん・する 「七回半」(サ変) 1 七まわ  
 り半する 《―シ》  
 八三四 光の速度は、一秒間に地球を七まわり半し  
 ます。  
 ななめ 「斜」(名) 1 ななめ  
 七五三 朝日の光がななめにさしてきた。  
 なに 「何」(代名) 140 ななに なに  
 一八六(鯛) うさぎ、うさぎ、なにみてはねる。  
 一八八(金) けさ、あなたは、その 目で なにを み  
 ましたか。  
 一八九(金) きう、その みみで なにを ききまし  
 たか。  
 一三〇 7 この 手で、なにをもったでしょう。  
 一三一 1 この 手で、なにをもつでしょう。  
 一三四(金) なににでもなる ことが できるなら、  
 ただおさんは、なにになって みたいとおもい  
 ますか。  
 一三四(金) なにに なって みたいとおもいますか。  
 一三五(金) みちこさんは なにになりますか。  
 一七六(金) 口から たべて、おなかから だす もの  
 は ななに。  
 一七七(金) ぬれた きものを きて、かわくと ぬぐ  
 ものは ななに。  
 一七八(金) 上は大みず、下は大かじ、ななに。  
 一八五(金) 一しゅうかんに 一ど、赤い きものを  
 きるものは ななに。

二一九(金) いちにちに二へんあるのに、いちねん  
 に一べんしかないものは ななに。  
 二一九(金) いるときにいらなくて、いらないと  
 きに いるものは ななに。  
 二一九(金) ねむって いても、みえるものは なあ  
 に。  
 二四五(金) ほう、なにをやるかな。  
 二四七(金) にいさん、ななに。  
 二五〇(金) にいさん、ななに。  
 二七〇 2 そのとき、ピーターはふと、ゆかの 上  
 なにか あるのを みつけました。  
 二七〇 7 ゆかの 上、なにか、長い、光った、び  
 かびかした があります。  
 二七二(金) 「あれ ななに。」マイクルが たずねま  
 した。  
 二七六(金) じゃあ、お日さまはよその 國で なに  
 をするの。  
 三二九 9 手足の 力がなくなって、なにをするこ  
 とも できなくなりました。  
 四三〇(手) それで、みんなで なにか おみまいを  
 しようではありませんか。  
 四三二(金) かずこさんの 書いた 文で、なにか 氣  
 のついたことは ありませんか。  
 四四五(金) なにが つかいの。  
 四四五(金) あとから なにか おっかけて きやしな  
 いかと思つてね。  
 四四九 3 かっちゃんは、十五ばんめから わきにそ  
 れたかと思うと、石ころか なにかのように お  
 ちて きました。  
 四七九 や——山より 高いものは なに。  
 四八三 5 ねえさんが、赤い きれで なにか こしら  
 えはじめました。

四四四(金) それでは、なにか かわった ことをし  
 て、おなぐさめ いたしましょう。  
 四四四(金) いや、おとひめさま、なにかも じゅ  
 うぶんで ございます。  
 五一一(金) あれ、なにかしら。  
 五三二 9 この 汽車は、なにをたいて 走っているの  
 でしょう。  
 五三二 2 あのガスは、なにかから 作るのでしょうか。  
 五三三 3 なにをしているところでしょう。  
 五三六(金) でも——つて、なにか、おかあさん。  
 五八二 2 夏休みになにをするか、みんなで 話しあい  
 しました。  
 五九〇(金) なにか おかしいものか、  
 五九四(金) ここにいて、なにか、おもしろいことが  
 あるのかい。  
 六四六 6 いろいろな音や、みたこともないような物  
 が、ごたごたと 耳にはいり、目にはいるばかりで、  
 なにがなにやら、さっぱりわからなかった。  
 六四六 6 なにかがなにやら、さっぱりわからなかった。  
 六四八(金) なにかめぐんでください。  
 六五三 3 世界じゅうで、いちばん力のつよいものは  
 ななに。  
 六五四 4 上にすれば下になり、下にすれば上になる  
 ものは ななに。  
 六五五 6 はたらくときはよこになり、休むときは立  
 つものは ななに。  
 六七一(金) 雪だるまはお話はないけれども、はる  
 えさんが、なにかお話を してあげたらどう。  
 六七二(金) ごろう、なにを 考えこんでいるんだね。  
 六七三(金) にいさん、これ ななに。  
 六八四(金) おまえは、なにか つたか。  
 六九二(金) なにか ご用で ございますようか。

六九六 会 なにかご用でございましょうか。

六〇六 会 なにかよいおりはないかと思っていたら、  
六二六 一ぎよう一ぎようは、なにか、ほかのぎよ  
うとはちがった性質をもっているにちがいない。

六三九 会 うさぎさん、なにしているの。  
六四九 会 こんどは、なにをしようか。

六二九 会 たぬきさんは毛をぬらしてなにかあわてて  
います。

六三六 会 こんどはなにをして遊ぼう。

六三六 会 なにかかけようじゃないか。

六三六 会 なにかかけよう。

六四九 会 よこどりすると、ゆるさないぞ。」「なに  
を。」

七二八 会 先生、この実はなににするんですか。

七二八 会 にいちゃん、すずめはなににくるの。

七二八 会 なにしにくるの。

七二八 会 なにしてるの。

七三九 会 にいちゃん、なあに。

七五九 会 なにかの花びらが、くもの巣にかかってゆ  
れている。

七四九 会 甲乙ふたりが、あちこちをまわしながら、  
なにか、ものをさがして歩いてくる。

七五九 会 あなたがたは、なにかさがしておいでの  
ようだが——「甲」そうです。」

七七四 会 このようすを、甲乙ふたりがみてとって、  
なにか、こそこそささやきあう。

七八八 会 なにか、そちらにも、いいぶんがあるか  
ね。

七八八 会 それについて、なにか。

八〇二 会 なにか氣にいらなかったりおこったりする  
と、

八〇九 会 毎日なにかかわったことをしでかしては、

みんなをおどろかせたり感心させたりします。

八六三 会 だから、虫たちが、いいかげんにすずんで  
いても、なにかの木の根にいきあたります。

八二五 会 天帝は、あたりをみまわして、なにかさが  
すようになさいました。

八三九 会 かわいひひとりの王女もあって、なにひと  
つ不足なことはありませんでしたが、

八四〇 会 おまえさん、なにを考えているの。

八四八 会 葉のうらに、青黒いなにかのたまごが生み  
つけられていました。

九三九 会 名も知らない雑草がいちめんにはえてい  
て、なにかでてきそうです。

九六一 会 ワアワアとみんななにかいっているのです。  
九六六 会 ガヤガヤ、ガヤガヤいって、なにがなんだ  
か、〈略〉、わけがわからなくなりました。

九六九 会 ガヤガヤ、ガヤガヤ、また、なにがなんだ  
かわからなくなりました。

九七一 会 やまねこは、まだなにかいいたそうに、  
九八〇 会 もし、手あたりしだいにやって、ぐあい  
よくなにかをほりあてたらいいが、

九八五 会 いのししやしかの角などに手を加えて、  
なにかの道具につかった物があつたでしよう。

九八五 会 きみはなにをなくしたんだ。

九八八 会 なにかいいこだ。

一〇五三 会 耳をすますと、なにか、かすかな音楽がき  
こえてくるようだ。

一〇六六 会 なにをしてもにくまれぬ、おもしろい人  
物になっています。

一〇六九 会 なにかはいっているときみえて、重たい。  
一一四一〇 会 なによりおもしろいのは、大学のポート  
がいつもここで練習していることだ。

一一七五 会 少年は、もっとなにかききたかったが、

いえませんでした。

一一七六 会 が、ほかになにといつてすることもでき  
ませんでしたから、病人のふとんをなおしたり、

一一七六 会 看護婦がなにか飲み物を持ってくると、  
一一七五 会 そうして、なにかいおうとでもするよう  
に、すこしくちびるを動かしました。

一一八〇 会 なにかものをいおうとでもしているよう  
に、

一一八八 会 病人はしげしげと少年をみつめながら、  
〈略〉、なにかものをいいたげにしました。

一二七二 会 少女はなにを思ったのか、ふと庭さきに  
さいていた黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、

一二一〇 会 老人が、道路をうろうろとみまわしながら、  
なにかさがしては、それをひろって

一二一〇 会 なにをひろっているのですか。

一二一一 会 土人のひとりが、書物というものはなに  
かすばらしい力をもっているものだと考えました。

一二二五 会 民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、  
なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、

一二三二 会 先生——私の心の目をあらゆるものに向  
けて開いてくださるため、いいえ、それよりもな  
によりも、私を愛するためにきてくださった

一二四三 会 「ふしぎだなあ。」「なにが。」

一二四七 会 人間には、〈略〉、心にあることを、な  
にか美しいものであらわそうとする氣持がある。

一二七一 会 これがなによりうれいとい、曾良は喜び  
ました。

一二七二 会 雪が降ったら、なにをして遊ぶの。

一二七六 会 芭蕉は、えんがわにいつてなにか持ちだ  
してきました。

一二八〇 会 皮ざいくの店らしく、なにかの毛皮がひ  
ろげてあります。

十三422 見せたいものだって……なにを……それきみにくれたの……マンシェウの子どもが。  
 十三453 三郎くんのことばの間に、あいてがなにかいつているわけです。  
 十三551 なにかおもしろいこともあるのか。  
 十四1611 なにかそういったものがご入用のときは、ごえんりよくおっしゃってください。  
 十四175 どの時間になにをしていらっしゃるか、この私にはわかるのです。  
 十四287 私は、なにか大きな楽しみをもったような氣持になって、家に帰ってきた。  
 十四322 「星を見たってなにになる。」という人があるかもしれません。  
 十四428 そうですね、なにかこようと、平氣じゃないか。  
 十四437 そうですね、なにかこようと、平氣じゃないか。  
 十四456 助け船は、いったい、なにをしているのだろう。  
 十四561 特別なはたらきは、なに一つございせん。  
 十四641 ガス体の蒸氣が、しずくになるときは、かならず、なにか、そのしずくのしんになるものがあるって、  
 十四7312 しかし、それも、前の温度のむらとにか関係があることだけはたしかでしょう。  
 十四773 私が、木を割ったり、竹を割ったりして、なにかこしらえようとしていると、  
 十四894 耳を地べたに近づけて、なにかものの音でも聞こうとしたりする。  
 十四994 「なにかが、神さまのところへ行くのだ。」と、女の子は思った。

十四996 星の落ちるときは、なにかのたましいが神さまのところへのぼっていくのだと、  
 十五2712 人々の目には、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなってしまうました。  
 十五625 ながに氣にさわったのかなあ。  
 十五628 満ほう、ながに氣にさわったの、おぼさんについてごらん。  
 十五913 なにをするのです。  
 十五9217 そこでなにをしているんだ。  
 十五932 ながにおまえについているな。  
 十五1022 でも、ぼくたちがなにをしていても、あなたには、なんにも見えないし、  
 十五1048 ながによりも、まず『大きな喜び』を呼びにやりましょう。  
 十五10411 わんぱくこぞうのようなのが、〈略〉、なにかにぶつかりながら、  
 十五1054 ながにさ、あれは、〈略〉『とてもたまらなくなるゆかい』ですよ。  
 十五10810 ほかの人たちはなにをしようとしているの。  
 十五1102 ながに幸福といって、これほどの幸福は、世の中にありませんよ。  
 十五11010 うちにいると、それが見えないが、ここでは、なにかも見えるのですからね。  
 なに〔何〕(感) 4 なに  
 四1053 ながに、りゅうぐうだって。  
 五884 ながに、へんじやない。  
 十一623 ぼくはくやしくなったので、なに、このくらいのことがこわいものかと、  
 十五624 ながに、そうじやない。  
 なにか〔何彼〕(代名) 1 なにか  
 十二706 芭蕉はたったひとりで住んでいて、なに

かにつけて不自由であらうから、  
 なにかしら〔何〕(副) 3 なにかしら  
 九165 つばめが、ならんでいるのを見ると、なにかしら相談でもしているようにみえます。  
 十二374 なにかしらわすれていたものを思いだすような、  
 十五868 つとめのためには、なにかしらぎせいにする心がなければならぬものだ。  
 なにげない〔何氣無〕(形) 2 なにげない《一ク》  
 七308 立ちあがりながら、なにげなく、しくびんをみる。  
 十五511 あるとき、なにげなく妹の作文をみました。  
 なにごと〔何事〕(名) 3 なにごと  
 十三53 小さな木のめのむれは、〈略〉、ことばのないこれらのことばで、なにごとか、ささやきかわしているけはい。  
 十五157 大きななにごともなきばらの花ふとのはずみにくずれたりけり  
 十五5311 そばにいるタイプストになにごとかをいいながらうたせているしらがの老しん士のなにしろ〔何〕(副) 8 なにしろ  
 八639 ながにしろ、水をこわがるのだから、  
 八656 ながにしろ、水にいてやらなければならまい。  
 十二586 ながにしろ、いっしょうけんめいであるから、みるみるうちに工事がはかどって、  
 十四85 ながにしろ、私たちよりふかいものなんですから。  
 十四810 ながにしろ、おかあさんにしても、私にしても、とてもわすれることのできないのは、わかりきっているのですから。

十五899 なにしろ、おびたらしい数ですからね。  
十五9812 なにしろ、子どもの時代は、ごく短い  
のだからね。

十五1066 なにしろ、『不幸』をなぐさめてやる  
ことがすきなのですから。  
なにぬねの 3 ナニヌネノ

六111 アイウエオ、カキクケコ——という五十音  
の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中に  
六1111 そうすると、ナニヌネノという一ぎょうは、  
ぜんぶはなの音でできていることがわかった。  
六1128 はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメ  
モの二ぎょうだけで、

なにぶん 「何分」(副) 1 なにぶん

十五472 ときどき焼いては、この店に持って来  
ますが、なにぶん作るのにてまのかかるもので。

なにも 「何」(副) 17 なにも

三121 けれども、なにも おぼえません。

三122 まだ なにも おぼえません。

四727 これを ひいた 人には、なにも あげませ  
ん。

五769 金のさかなは、なにもいわないで、〈略〉、  
海の中へおよいでいってしまいました。

六1339 なにもいらないや。

六13310 勝ったものになにもないなんて話はない。

七755 砂のほかに、なにもみえない。

八288 ひめは、なにも知らずにおりつづけました。

十一915 ほかになにもあげるものがありません。

十二656 のびていく根のさきをさえるものはな  
にもない。

十二712 まだなにも降ってきもしないのに、

十四89 にも、勇気をだしてわすれてしまお  
うと思いいなるにはおよびません。

十四6910 日かげで見えては、べつにかわったようす  
はなにもありませんが、

十五862 にも受けてはいけないよ。

十五935 にも聞えませんが。

十五10612 『なにもものわからない幸福』をさ  
がしているのです。

十五11812 そうしたら、私は、もうなにもおそれ  
ず帰って来ます。

なにも 「何物」(名) 3 なにも

十五6011 父母の愛を一身に集めていた身にとって

は、天下におそるべきなものもなく、

十五853 いてみれば、すばらしく美しくて、  
この廣間のなにもをもおさえている。

十五854 いや、どこのなにもをもおさえてい  
る。

なにか 「七日」(名) 1 七日 ↓くがつなのか・ご

がつなのか・しちがつなのか・はちがつなのか

七256 たまごから小さい虫になるのに、七日か  
かっています。

なのは 「菜葉」(名) 2 なのは

七163 「ちようちよ、ちようちよ、なのはにと  
まれ。」の音楽が、ひびいてくる。

七174 「ちようちよ、ちようちよ、なのはに  
とまれ。」の唱歌が、きこえてくる。

なのは 「課名」 2 なのは

一23 二 なのはな……六

一61 二 なのはな

なのはな 「菜花」(名) 16 なのはな なの花

一62 なのはな、なのはな、まつき。

一63 なのはな、なのはな、まつき。

一65 なのはな、なのはな、しろいくも。

一66 なのはな、なのはな、しろいくも。

一71 なのはな、「おはよう。」「おはよう。」

一74 なのはな、なのはな、なのはな。

一75 なのはな、なのはな、なのはな。

一76 なのはな、なのはな、なのはな。

二5610 なの花が、いちめんにさいっていました。

三366 なの花の 大きなもけいがありました。

七177 このまえより、なの花がへっているわ。

七625 なの花ちらほらさきはじめ、うすぐもり。

十233 15 いちめんのなの花。

十234 「なのはな、なのはな、まつき。」

と、「こくこ」の文を大きな声で歌う。

十234 「なのはな、なのはな、まつき。」

十一329 げんげがさいて、なの花ちって、かき

のわか葉に日の照るころは、

なのはなざかり 「菜花盛」(名) 1 なの花ざかり

五495 のたりのたりとわたし船、なの花ざかり

の岸をでる。

なのはなばたけ 「菜花畑」(名) 1 なの花畑

十236 自轉車に乗った中学生が、ふたりづれでな

の花畑を横ぎる。

なびく 「靡」(五) 1 なびく 《一い》

十四675 湯げは、〈略〉、つめたい風がふきこむた

びに、横になびいては、また、たちのぼります。

ナフタリン (名) 1 ナフタリン

三342 ナフタリンのにおいがしてきます。

なべ 「鍋」(名) 2 なべ ↓ぎゅうにゅうなべ

五3410 ガスこんろにかけたかまやなべから、ゆげ

がふきでています。

七121 「なべの手」となると、人の手ではありま

せん。

なべしま ↓いろなべしま

ナポリ (地名) 4 ナポリ

十一635 ひとりの少年が、〈略〉、ナボリの大きな病院の門ばんのまえへいつて、

十一639 少年は、ナボリの近くにある村からきたのでした。

十一641 少年の父親というのは、〈略〉、数日まえ、イタリアへ帰ってきて、ナボリに上陸しました。

十一6412 母親は、〈略〉、長男にいくらかのお金を持たせ、父親の看病のために、ナボリへよこしたのでした。

なまいき〔生意気〕(形状) 2 なまいき

七262 名まいきいうな、はるお。

十五932 名まいきなことをいうな。

なまえ〔名前〕(名) 15 名まえ

五478 すみれがさいいていたり、名まえは知らないが、きれいな花がさいいていたり。

七158 私たちのからだの名まえに、このような、いろいろなつかいかたがあるのは、おもしろい

九961 名「きみの名まえが書いてある。」

十二346 物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、

十二356 こんどは、二つの人形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。

十二3711 こうして私は、物にはみな名まえのあることがわかったのです。

十二1012 この式の土器は、はじめ、東京のやよい町から発見されたので、やよい式土器という名まえがつけられています。

十二1045 ほうおう堂という名まえは、屋根のかざりにほうおうがついているからだ

十三104 名まえの字画を数えて、運がよいとかわるいとかきめたり、

十三108 同じ名まえの人も世の中には多いが、

十三1010 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、この考えのまつたくあてはまらぬことは、いうまでもない。

十四508 おしいことに、歌を歌ったおじょうさんの名まえがわかりません。

十四508 たとい、名まえはわからなくても、十五1014 でも、きみたちの名まえを聞かせてくれたまえ。

十五1059 名きみ、あの人たちの名まえを知ってるの。なまえいり〔名前入〕(名) 1 名まえ入り

十五662 ご両人の名まえ入りの大きな写真を二まい、満ぼうへと名ざして送ってください。

なま・ける〔怠〕(下) 1 なまける 《一ケ》

十一287 いままででも、なまけたことのない金次郎でしたが、

なまごめ〔生米〕(名) 1 なまごめ

十一587 名「なまむぎ、なまごめ、なまたまご。」と、早口にすらすらといえるようになった。

なまたまご〔生卵〕(名) 1 なまたまご

十一587 名「なまむぎ、なまごめ、なまたまご。」なまみず〔生水〕(名) 1 なまみず

五825 みんなは、なま水をのまないことや、〈略〉などを、話しあいました。

なまむぎ〔生麦〕(名) 1 なまむぎ

十一587 名「なまむぎ、なまごめ、なまたまご。」と、早口にすらすらといえるようになった。

なまむぎながごめ 1 ナナムギナガゴメ

十一58 名 ナナムギナガゴメ

なまむぎながごめながたまご 1 ナナムギ、ナガゴメ、ナガタマゴ

十一584 名「ナナムギ、ナガゴメ、ナガタマゴ。」なまむぎなまもめ 1 ナナムギナマモメ

十一58 名 ナナムギナマモメ

なまむぎなまもめなまたまご 1 ナナムギ、ナマモメ、ナマタマゴ

十一585 名「ナナムギ、ナマモメ、ナマタマゴ。」なまむみなまもめ 1 ナナムミナマモメ

十一58 名 ナナムミナマモメ

なまり〔訛〕(名) 1 なまり

八89 ほおろろ自身、國々のなまりのようなことばをもっているのだそうです。

なまり〔鉛〕(名) 1 なまり

十二110 まき絵というのは、〈略〉。また、なまりや貝などをはめこんだものもあります。

なみ〔波〕(名) 21 なみ 波 波はおおなみ・かわなみ・さざなみ・としなみ

二208 はなほしよる ゆめ 山川さかなふね なみ

四1067 波もしずかだ。

四1265 白い はまべの まつ原に、波がよったりかえったり。

四1347 白い はまべの まつ原に、波がよったり、かえったり。

五7510 海はまつ黒になって、波が高く、ゴーゴーとうなっています。

五7911 波が、すべりだいをすべるように、らくらくと流れていきます。

五897 名 うらの山から海べをみれば、波にうかんださが島。

六156 木の葉の船は波に流されて、川の岸につきましたので、

六314 いねが波のようにゆれる。

六495 名 ふと、そんなこと思わせる、あのまっ白な波の音。

七 64 2 しずかに波がよせている。

七 65 2 波の音がきこえている。

九 11 6 おしまいに、海岸で波のくだけるところをきかせてくれた。

九 11 8 ドンドンドンとなる大だいこの音は、〈略〉

うちよせる波の音をきいているようであった。

九 77 11 囿 むかし、このへんは、波のおだやかな海のいりえだったのです。

十 23 11 長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船、島。

十一 13 2 はてしもなく、ゆるやかにうつ波の声は、われわれの心をあらうようにきこえる。

十二 75 2 大川の波の音がバサリバサリと、まくらにひびくのですが、

十四 45 5 マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、黒い波の間をおよいでいました。

十四 45 9 すべてのものが、ことごとく波にのまれてしまったように、

十四 47 8 たいていの人は〈略〉あわてふためいて、そのためにかえって波にのまれてしまったのに、

なみ 〔並〕 ↓ あしなみ

なみうちぎわ 〔波打際〕 (名) 1 波うちぎわ

八 56 8 波うちぎわのことも目が目について、なみうちぎわ 〔波打〕 (五) 1 波うちぎわ

六 32 7 8 いねが大きく波うつ。

なみき 〔並木〕 (名) 1 なみ木 ↓ まつなみき

十 10 8 プラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。

なみだ 〔涙〕 (名) 13 なみだ

四 100 8 かめは、手で なみだをふきながら、なんども おじぎをします。

六 37 6 「の」の字のはねたさきから、雨だれのよ

うななみだがこぼれおちる。

六 39 5 ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。」 なみだをぼろぼろこぼす。

十一 53 6 電車もなみだをこぼしています。

十一 54 8 電車もなみだをこぼしています。」

といつた、しゃしやうさんのことばを

十二 38 7 私の目にはなみだがいっぱいたまりました。

十四 101 11 寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、

十五 67 9 そのなつかしい顔をあおいた私の目からは、たまのようななみだの流れ出た。

十五 68 8 おばさんは目になみだをためながら、

十五 70 4 せきあえぬなみだに目をくもらせたおばさんが、「〈略〉。」とおっしゃった。

十五 113 1 囿 ほおずりをしてもらえば、すぐそのなみだは、目の中の星になってしまふのですよ。

十五 119 7 やがてはなれて顔をあげますと、ふたりの目にはなみだが光っていました。

十五 119 10 囿 でも、どうしてみんな、目にいっぱい

なみだをためているの。

なみたいてい 〔並大抵〕 (形状) 1 なみたいてい

十 70 7 囿 なみたいていのどくではないから、かえって、うまそうにみえるのだよ。

なみだぐむ 〔涙〕 (五) 1 なみだぐむ 《—ミ》

八 13 9 ほおじろの声をきくと、ピオのすがたがありありとうかんできて、思わずなみだぐみます。

なみだつ 〔波立〕 (五) 2 波だつ 《—チーツ》

九 59 8 そのとき、風がどうとふいてきて、草はいちめんに波だち、

十三 49 3 みどりの森が、喜びの声でわらい、波だつ小川が、わらいながら走っていく。

なみなみ 〔並並〕 (名) 2 なみなみ

十二 40 9 ケラーをしつけていくのには、なみなみ

ならぬどりがよくいりました。

十二 113 3 新しい学問をきり開いていくときは、いつの時代でもなみなみのどりがよくでなしとげられるものではありません。

なめる 〔嘗〕 (下) 7 ナメル なめる 《—メル》

四 78 6 え——えんぴつをなめないように。

十 49 1 囿 キタナイワンワンチャン——アノヨナメテルワ——

十 50 6 黒いいぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、

十 50 7 囿 「アノヨ ナメテルワ」といって、私に知らせたのです。

十 71 6 そうして、うまい、うまいとなめているうちに、つぼが、からつぽになつてしまいました。

十三 51 3 まだあかんぼうで、母うしがしたでなめると、よろけるんだよ。

十四 57 7 おさないころから、人の世の苦しみをいろいろとなめていたからのことでした。

なやむ 〔悩〕 (五) 1 なやむ 《—ミ》

十四 44 2 囿 他人のためにもことばをもて、なやみ、苦しんでいる他人のためにも。

なら ↓ それなら・そんなら

ならい ↓ てならい・みならい

ならう 〔習〕 (五) 9 ならう 習う 《—ツ》

三 40 4 きょう ならつたばかりのしょうかを、大声でうたいながらあるきました。

六 60 8 それから、まえになつたのを思いだして書いてみました。

六 71 8 はるえは、まえに「こくこ」でならつた「よみかき」のところを、ふと思ひだしました。

六79 9 ごろうは、いつか「こくご」でならった  
「あさがおの花」を思いだしました。  
六112 11 ぼくは、五十音というものは、一年生のと  
きにならったからよく知っているが、  
七73 3 ならったばかりの唱歌を、大きな声で  
歌っていく子ども、  
十二97 7 四年生るとき習った貝づかのことを思い  
だしてください。  
十二109 3 三年生るときに習ったイソップ物語。  
十五76 9 そうして、これが新島からならった日本  
語の一つだといわれた。  
ならし ↓てならし  
ならす 「鳴」(四五) 20 ならす 鳴らす 《一サ・  
一シ・ス・セ》 ↓うちならす  
五51 6 6 きてきも鳴らさず 船がいく 船がいく。  
七51 1 1 かばんをカチャカチャ鳴らして、走って  
くる男の子かな。  
七59 9 かばんをカチャカチャ鳴らして、げたばこ  
のかげにかくれた。  
七15 5 「はなをならす。」  
八77 10 ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴  
らしたり、火花をだすことさえできた。  
八78 7 ねこはのどを鳴らし、にわとりは「略。」  
とさわいだ。  
八80 1 1 せなかをまるくしたり、のどを鳴らした  
り、火花をだしたりすることができかい。  
八81 2 2 のどを鳴らすか、たまごを生みなさい。  
八82 11 11 たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火  
花をだすことを、せいだして勉強するのだね。  
八88 10 10 はくちょうは、つばさをサラサラと鳴らし、  
かるく水の上をおよいでいた。  
九62 2 2 おい、さあ早くベルを鳴らせ。

九63 9 9 ぎよしやが、こんどは、草むらをむちで二  
三べん、ヒユウパチッ、ヒユウパチッと鳴らしま  
した。  
九65 10 10 ぎよしやがむちをヒユウパチッと鳴らしま  
したので、どんぐりどもはやつとしまりました。  
九67 2 2 ぎよしやが、むちをヒユウパチッと鳴らし  
ました。  
九67 9 9 ぎよしやがむちをヒユウパチッと鳴らし、  
どんぐりはみんなしまりました。  
九69 10 10 ぎよしやも、大喜びで、五六べん、むちを  
ヒユウパチッ、ヒユウパチッと鳴らしました。  
九118 6 6 6 ほおずきを口にくくみて鳴らすことか  
わすは鳴くも夏のあさ夜を  
十一40 4 4 夕ぐれ寒くふくこがらしは、黄色くか  
れたくぬぎ葉鳴らす。  
十三28 7 7 まず、もの賣りが鳴らして来る鳴りもの  
の音がおもしろい。  
十三29 5 5 でんでんだいこのような、ブリキのつづ  
みを鳴らしてやって来る。  
ならす 「均」(五) 1 ならす 《一シ》  
十22 10 10 田をならしている農夫。  
ならびたつ 「並立」(五) 1 ならび立つ 《一ツ》  
十五19 4 4 ベルンの町からながめると、まっ白に雪  
をいたたく山々がならび立っています。  
ならぶ 「並」(四五) 32 ならぶ 《一ビ・一ブ・一  
ボ・一ン》 ↓おならびくださる・たちならぶ  
一56 10 10 まどのところに、みおぼえのある かお  
が、たくさんならんでいます。  
三15 9 9 でしたちはそのわきにならびました。  
三31 2 2 2 右がわはきょうしつで、左がわにはま  
どがならんでいます。  
三31 4 4 4 ぼうしかけがならんでいます。

三33 7 7 青色や ちゃ色の くすりびんが、たくさ  
んならんでいます。  
三44 6 6 6 ぼくが、きみたちのせなかの上を、か  
ぞえながらとんでいくから、むこうのりくま  
でならんでみたまえ。  
三44 8 8 わにざめは、白うさぎの いう とおりに  
ならびました。  
三54 5 5 5 たすきにならんで、がんがかえる。  
四44 3 3 3 きょうも、きのうと おなじじゅんぼん  
にならんで とぶ ことにしよう。  
四46 2 2 2 じゃあ、かつちゃん、きょうは どこに  
ならびたいというの。  
四46 9 9 9 さあ、きょうは、どのへんにならびた  
いというんだね。  
四63 8 8 8 きょうは、どう ならぼうか、かつちゃ  
ん。  
四109 10 10 いろいろな魚がでてきてならぶと、そ  
のうしろから、おとひめさまがあらわれます。  
四111 4 4 4 かめはそのそばにならびます。  
五83 3 3 3 おひる休みのとき、私たちは、運動場にあ  
つまって、先生をまん中にしてならびました。  
六52 2 2 2 そばには小さなしんぼうや、は車や、ぜん  
まいなどがならんでいる。  
六58 8 8 8 まわりのかべやガラス戸だには、いろい  
ろな時計がたくさんならんでいる。  
六18 5 5 5 オルガンをひいているもの、たいこをたた  
いているもの、(略)、そのうしろに合唱隊がなら  
んで、うたをうたっています。  
六131 6 6 6 うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、  
まるくならんで、話をしました。  
六135 3 3 3 うさぎさんたちは、しかさんとならびまし  
た。



七80 旅人と甲乙が、ならんでいる。  
 九15 3 つばめが電線や物ほしざおに五六ばぐらい  
 ならんでとまっているのを、よくみかけます。  
 九15 4 ときには、十ばも二十ばも、ずらりとなら  
 んでいることがあります。  
 九16 4 こうして、大ぜいのつばめが、ならんでい  
 るのを見ると、  
 九49 3 まわりの山は、〈略〉、きれいにありあがつ  
 て、まっさおな空の下にならんでいました。  
 十14 3 ビエンヌという川の岸には、〈略〉女の人  
 たちが、ならんでせんたくをしていました。  
 十21 2 その下を、あひるがならんで通っていく。  
 十一67 5 開いたドアのまえまできますと、その中  
 にはベッドが二列にならんでいました。  
 十二61 11 そうしてよく日いつてみると、頼んだ品  
 物がちゃんとそろってならんでいた。  
 十二103 6 クロスワーズパズルのようにならんだ文  
 字があつたりして、おもしろいお金です。  
 十三21 9 両種のもみは、たがいにならんで生長し、  
 十五10 4 〇〇 荒れ庭にきたる板のかたわらにふ  
 るばちならび赤き花さく  
 ならべる「並」(下二) 14 ならべる「一べーべ  
 ル」  
 二12 2 木のはをならべてみました。  
 二12 4 かたちのにたものをならべてみました。  
 二12 6 ちがったのをならべてみました。  
 二12 7 いろいろかえてならべました。  
 五42 1 〇〇 みんなだいじにして、くくばんのところ  
 にならべてあります。  
 六113 1 五十音というものは、〈略〉、「ちがったか  
 なをならべたもの」ぐらいに思つて、  
 九44 3 〇〇 かきの葉を一まい一まいならべて、この

色がよいとか、こちらの色がよいとかいって  
 十一76 11 夜になると、少年は、へやのすみにいす  
 を二つならべて、その上でねむりました。  
 十二99 2 貝づかからでたものをならべてみましょ  
 う。  
 十二105 9 くだものをならべたやお屋らしいのもあ  
 ります。  
 十三23 2 〇〇 大もみがある大きさに生長しない  
 のは、きつと、小もみをいつまでも、大もみのそ  
 ばにならべておくからです。  
 十三50 1 わたしたちが、さくらんぼと、くるみの  
 ごちそうをならべると、  
 十四96 12 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴ  
 か光るさらをならべたテーブルが見えた。  
 十五37 7 「木」を二つならべて「林」、三つ重ね  
 て「森」が作られた。  
 なり「生」↓すずなり  
 なり「形」(名) 3 なり ↓かきなり・みなり・ゆ  
 みなり  
 七72 2 うまよ、そんな大きななりをして、子ども  
 のように、からだまであらつてもらっているのか。  
 八50 3 「幸福」は、まずしいこじきのようななり  
 をしました。  
 八50 6 そんなまずしいなりをしていても、それで  
 も、自分をよくむかえてくれる人があつたら、  
 なり「鳴」(名) 1 なり  
 四70 2 こころは、ふりがやむと、なりもとまる。  
 なり ↓それなり  
 なり (接助) 2 なり  
 十五64 2 だされたくつを見て、にこにこわらつ  
 た私は、それを足先につつかけるなり、すぐ、小  
 鳥のようにとびだした。

十五64 10 見るなり私は、おじさんの廣いせなかに  
 とびついた。  
 なり (並助) 2 なり  
 十一76 5 看護婦がなにか飲み物を持ってくると、  
 コップなりさじなりをその手から取つて、  
 十一76 5 コップなりさじなりをその手から取つて、  
 看護婦にかわつてそれを飲ませたりしました。  
 なり (助動) 22 なり 《ナラ・ナリ・ナル・ナレ・ニ》  
 九26 4 〇〇 子もりするしずかなる月の上に  
 九115 1 〇〇 いまの鳥はこの木ににいるにちがいないし  
 ひそかに枝葉の中をみあぐる  
 九116 3 〇〇 階上のわが電燈のきえにけりみわたす  
 家々みなまくらなり  
 九118 4 〇〇 金色の小さき鳥のかたちしていちよう  
 ちるなり丘の夕日に  
 十二40 9 クラををしつけていくのには、なみなみ  
 ならぬどりよくがいました。  
 十三21 1 実際に試験してみると、もみの木はえ  
 るが、数年ならずしてかれてしまいました。  
 十四81 12 〇〇 すきこそものじようずなれ。  
 十五11 4 〇〇 わか草のはつつかにもゆる庭に来てす  
 ずめあさりとなりへとびぬ  
 十五12 2 〇〇 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の  
 とのを見ればよきつくよなり  
 十五13 3 〇〇 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸  
 の外明らかに月ふけわたる  
 十五14 2 〇〇 大きなるべにばらのひと花思わぬを  
 ゆららにあかく開き満ちたる  
 十五14 4 〇〇 目をあけてつくづく見ればばらの木  
 にばらがまつかにさいてけるかも  
 十五15 1 〇〇 おどろきてわが身も光るばかりなり  
 大きなるばらの花照りかえる

十五151〔文〕 おどろきてわが身も光るばかりなり  
大きなばらの花照りかえる

十五157〔文〕 大きななにごともなきばらの花ふ  
とのはずみにくずれたりけり

十五170〔文〕 きみたちのそのまともなるひとみも  
て。

十五791 すなおなれ。

十五814 いだいなれよ。

十五815 平ぼんなれよ。

十五816 平ぼんにしていだいなれよ。

十五816 平ぼんにしていだいなれよ。

十五818 空氣または日光のごとく平ぼんなれよ。

なりかける「生掛」(下一) 1 なりかける「  
ケ」

十四569〔文〕 つるの私がとちゅうで切れたりしたら、  
それについている葉でも、花でも、なりかけてい  
る実でも、みんなかれて、くさってしまします。

なりかける「成掛」(下一) 2 なりかける「  
ケ」

八209 あたりのくらくなりかけた夕ぐれをみはか  
らって、

十三162 ガリレオは、年をとつてもいたし、めく  
らにもなりかけていたので、

なりかた「生方」(名) 1 なりかた

十2710 トマトが畑に植えてあれば、〈略〉や、実  
のなりかたなどを、たんねんにみようとします。

なりがち「成勝」(名) 1 なりがち

十3412 小学校をでただけのかれには、手のとどき  
そうもない空想になりがちであった。

なりきる「成切」(五) 1 なりきる「  
ツ」

八204 七年の月日がたったころ、せみの子たちは、  
〈略〉、もう大きくなりきつたことを知ります。

なりたつ「成立」(五) 1 なりたつ「  
ツ」

十2912 そのもようが、どんな單位からなりたつて  
いるか、

なりはじめる「鳴始」(下一) 1 鳴りはじめる  
「  
メル」

十三376 一どとぎれて、また鳴りはじめる。

なりひびく「鳴響」(五) 1 鳴りひびく「  
キ」

八761 たまの音はあしのあいだに鳴りひびき、  
てつぼうはひきつづいて火ぶたをきつた。

なりもの「鳴物」(名) 3 鳴りもの

十三288 まず、もの賣りが鳴らして来る鳴りもの  
の音がおもしろい。

十三311 鳴りものををつかわないで、呼び声でやっ  
て来る者もある。

十三3210 たとえ、鳴りものであらうと、呼び声で  
あらうと、トンネルのようなホートンには、それ  
が、ふしぎなほどよくひびきわたる。

なる「成」(四五) 1000 なる「  
ツ・ラ・

ー・ル・レ・ロ」 おおなる・かわはおおきく  
なる・だんだんくわしくなる・なくなる

一184〔文〕 した てんきになあれ。うさぎ、う

一215〔文〕 いい ことりになって、うたをうた

一232〔文〕 わいい ことりになって」のところは

一342〔文〕 「なににでもなることができるな

一343〔文〕 さんは、なにになってみたいとおも

一344〔文〕 〈略〉。「かぜに なります。」〈略〉。「

一345〔文〕 「なぜ、かぜに なりたいとおもいま

一347〔文〕 〈略〉。「かぜに なって、どこでもど

一351〔文〕 こさんは なにに なりますか。」〈略〉。

一352〔文〕 たくしは はなに なります。」〈略〉。「

一354〔文〕 きれいな はなに なって、おへやをか

一357〔文〕 〈略〉。「うみに なります。」〈略〉。「

一361〔文〕 〈略〉。「うみに なって、せかいじゅう

一364〔文〕 略〉。「ことりに なります。」〈略〉。「

一5310〔文〕 だの いしころに なって しまします。」

一547〔文〕 かったら、どう なりますか。」おと

一584〔文〕 かったら、どう なって いたかわかり

一604〔文〕 、げんきな こに なりました。ぴんち

一605〔文〕 きない いこに なりました。はねちや

一606〔文〕 いう いこに なりました。まきげち

一608〔文〕 、やさしい こに なりました。おかげさ

一619〔文〕 だの いしころに なって しまわないか

一623〔文〕 なたが おもちに なっても、たまは や

一626 (十一) よるに なると、おどりが は

一627 あたりが あかるく なりました。でんとう

一93 、それを ごらんに なって、「略。」と

一94〔文〕 ごちゃごちゃに なって います。なん

一97 べ。」とおたずねに なりました。みんなは

一1110 だん おもしろく なりました。一一え

一217〔文〕 こんなに 大きく なりました。」〈略〉。

一515 やめて、しずかに なります。そうして、

一521 めん 一どくらくなり、また あかるく

一521 り、また あかるく なると、おかあさんが

一557 さんは、おいでに なりません。いまは

一557 。いまは おいでに なりませんが、まえに

一558 まえには おいでに なったに ちがひ あり

一604〔文〕 さんが 二年生に なったら、あたらしい

一641 だんだん はやく なる。りょううでを

一645〔文〕 だんだん はやく なる。」みんな はやく

一646〔文〕 「みんな はやく なる。」すずめ「もう、

一657〔文〕 「空が あかるく なって きた。」みんな

一659〔文〕 みんな あかるく なって きた。」みけ「

一714 だん だんと おおくなるように、小さく

一84〔文〕 だん だんと おおくなるように、みんな わに

三85(会)。「みんな」わになろう。大きな大き  
三86(会) な大きなわになれ。」さき「東の  
三96(会) りと、おでになつたか、おしやかさ  
三102(会) て、お立ちになつていらつしやる。  
三116 いと、おおもいになりました。そこで、  
三123 えません。三年になりました。やはり  
三123 。やはりかしこくありません。おしやか  
三126 んたかをおよびになりました。「略」。  
三145(会) 、きれいな心になれということに  
三158 せきにおつきになりました。でしたち  
三173 んたかをおよびになりました。はんたか  
三204 ことをおかきになりました。「くみ  
三227 ほど、大きな木になりました。とうとう  
三229 もにとどくようになりました。大きな  
三232 わからないほどになりました。まいあさ  
三234 村々が、日かげになりました。ごにな  
三234 なります。ごになると、東がわのな  
三235 村々が、日かげになります。「略」。「へ  
三239(会) 略」。「なんとかならないものかなあ。  
三2510 こで、切ることにしました。こんな  
三266 かという ことになりました。すると、  
三271 をつくる ことになりました。なん年か  
三294 かげで、日かげになつてこまつていた  
三297 だんだんゆたかになつていったという  
三302 文をすることにしました。「略」。  
三311(会) 長くまつすぐになつています。右が  
三317(会) んあがるようになつています。きれ  
三347(会) も、早く大きくなつて、あんなきれ  
三389 略」。」とおかきになりました。六か  
三415 ぼくらはふたりになつて、麦のほとす  
三417 ぼのみが、小人になつてとんでいまし  
三426 」。ひとりぼっちになつてしまいました。

三465 大ぜいおとおりになつて、「略」。」と  
三467 」。とおたずねになりました。白うさぎ  
三473 いつそうひどくなつて、とてもたま  
三474 ともたまらなくなりました。そこへ、  
三478 きほどおとおりになつたかたがたのお  
三481 、おそくおなりのなつたのです。おおく  
三484 」。とおたずねになりました。白うさぎ  
三4810 すぐもとのようになりました。八高  
三553(会) れた。おびになつて、ひもになつ  
三554(会) っ、ひもになつて、がんがかえ  
三564(会) えいえ、それはなりません。うたを  
三567(会) えいえ、それもなりません。うたを  
三573(会) えいえ、それもなりません。うたを  
三603 うさんがおいでになつて、「略」。」と  
三605 略」。」とおきになりました。「略」。  
三613 きまるかおまちなりました。ほかの  
三621 ユデーにおきになりました。「略」。  
三631 から、いっしょになつて、丘の大きな  
三639 ポートをおきになりました。みずうみ  
三642 うさんはおきになりました。「略」。  
三654 た、心があわなくなりました。そこで、  
三656 るぐるおまわりになりました。もうみ  
三6610 子たちにおきになりました。「略」。  
三674 子たちにおきになりました。「略」。  
三687 うさんが おきになりました。「略」。  
三727 はおきかえしになりました。「略」。  
三731 あさんが おきになりました。「略」。  
三753(会) 」。「ほら、どうなるか、きをつけて  
三777(会) れから、あさになつて、お日さまが  
三836 略」。」とおきになりました。「略」。  
三955 いろいろなかたちになつたり、ふくれたり  
三996(会) なさんが大きくなつてから、それを

三1026 んだんかねもちになりました。また、小  
三1029 の人の大きさにになりました。そのう  
三1047 まがたもおいでになりました。けれども  
三1061 が、だんだん高くなつたのを、みかどが  
三1062 みかどがおきになつて、「略」。」と  
三1064 略」。」とお思ひになりました。それで、  
三1071 んとごそうだんになつて、ある日、か  
三1072 ぜんおたちよりにになりました。家には  
三1074 はいってごらんになると、光の中にき  
三1078 略」。」とお思ひになつて、すぐごしよ  
三10710 きゆうにみえなくなりました。みかどは  
三1086 略」。」とお思ひになつて、そのままお  
三1086 のままおかえりになりました。そのの  
三1092 きれいなばんになると、かぐやひめは  
三1093 んがえこむようになつた。あきが  
三1094 月がうつくしくなると、かぐやひめの  
三1096 。十五夜がちかくなつたある夜、かぐ  
三1101(会) におかしみになるかと思つて、い  
三1105(会) かえらなければなりません。」とこた  
三1112 かみのけが白くなり、こしもまがつ  
三1114 ことを おきになつて、たいへんか  
三1115 いそうに お思ひになりました。それで、  
三1117 くださる ことになりました。いよいよ  
三1118 いよいよ十五夜になりました。おじいさ  
三1121 、人दै いっぱいになりました。おばあさ  
三1125 いました。夜中になつて、お月さまが  
三1126 あたりがあかるくなりました。「略」。  
三11210 こともできなくなつてしまいました。  
三1162 ひめをおわすれになることができませ  
三1164 ゐをますたねになるばかりでしたので  
三1166 ものにおたずねになりました。おつきの  
三1175 」。とおいつけになりました。おつきの

三117 山」というようになりまして。干 郵  
 四133 。この町の手となり足となつて、は  
 四134 の手となり足となつて、はたらいで  
 四136 たいが、ひとつになつて生きています  
 四154 、わたしがおにになつた。みんな、鳥ご  
 四185 ひくと、かるくなるかしら。」ときい  
 四224 つかまりそうになつたとき、またわ  
 四239 ぼくは、大きく なつたら、にいさんと  
 四244 ちゃんがいなく なつてから、もう半  
 四3510 さんがおいでにならなくても、かづこ  
 四401 しい お友だちになつたり、先生にな  
 四401 たり、先生になつたりしてくれま  
 四416 とそろえたように なつてとんだら、ま  
 四417 つりばりのように なつたりしました。  
 四418 には、かぎなりに なつて、空をひっか  
 四421 ひっかけるように なりました。ゴムのよ  
 四425 ても、ばらばらになつてしまうことは  
 四478 のがんは、一列になつてとんで いきま  
 四479 のようなかたちになりました。はたけを  
 四507 のものは、あとになつて、さきになりし  
 四507 とになり、さきになりして、はげまし  
 四511 には、ばらばらになつて、はなれてと  
 四513 をたすけなければなりません。だれも、  
 四514 れも、ばらばらになつて、にげようと  
 四523 すべりおちそうになつて、おんぶしてい  
 四524 がんも おちそうになります。「略。」二  
 四528 のもうふのようになつて、かっちゃんを  
 四564 口も だんだんよくなり、みんながはこ  
 四565 しくたべるようになりました。「略。」  
 四576 うという ことになりました。かっちゃん  
 四606 そのうちに、夜になつてしまいました。  
 四628 、いきがくるしく なつたので、力をゆ

四658 の中に、みえなくなつていきました。  
 四668 んでも、おなじじになることばを考えだ  
 四915 あがつておいでになると、ひたいから  
 四957 ちに、いっしょになつたりわかれたり、  
 四957 、また いっしょになつたりはなれたり  
 四1039 すっかり元氣になつたの。」かめ「おか  
 四10310 おりじようぶになつたの。」あなたの  
 四1047 ないよ。元氣になつてよかったね。」  
 四1134 家へかえりたく なりました。たい「こ  
 四1147 とうにおせわになりました。」おとひ  
 四1149 ま「あまり長くなりすので、もう、  
 四1167 ても、おあけになつてはいけません  
 四1176 ひめ「おかえりになりますか。おなごり  
 四1203 へやが、あかるくなりしました。みんなの  
 四1328 へやが、あかるくなりしました。みんなの  
 五62 川はだんだん大きくなる。ダムにせかれて  
 五63 ムにせかれていけになり、水力電氣をおこ  
 五65 こし、水道の水にもなり、川はだんだん大  
 五66 川はだんだん大きくなる。川は野原におり  
 五73 たらく 川は大きくなると、ゆっくりとな  
 五102 やん、まっくらになつた。「略。」「へ  
 五105 」。もう明かるくなつた。あ、あそこに  
 五162 友だちといっしょになりました。そこへ、  
 五256 のようになくなくなつてきました。ほん  
 五298 ん、駅へおいでになるのしょう。つい  
 五374 いだかつて石炭になつたのです。大むか  
 五395 ました。ふもとになるにしたがつて、木  
 五396 木のみどりがこくなつてみえます。茶色  
 五402 にあたりが美しくなると、私は、なんだ  
 五432 、あたりはくらくらつています。きのう  
 五469 」。と鳴いた。春になつたばかりだから、  
 五491 持がして、たのしくなつた。あさの光に、

五521 い雲。 ひつじになつて わいてくる、  
 五553 もうすっかりくらくらつていて、空いちめ  
 五556 もと先生がおいでになつて、「略。」と、  
 五5810 「、ぼく、大きくなるまでに、どの星も  
 五624 のか、わからなくなつてしまいました。  
 五635 話をそばでおきになつて、「略。」とい  
 五637 いて、おわらいになりました。「略。」  
 五638 のが、はうようになり、立つようになり  
 五639 なり、立つようになり、あるくようにな  
 五639 り、あるくようになつて、いまは、もう  
 五6310 うこんなに大きくなつた。「略。」「へ  
 五6311 ひとり、大きくなつたのでしようが、  
 五642 んの力で、大きくなつたと思います。」  
 五644 、日に日に大きくなつたのは、おまえひ  
 五6810 なんて、とくにもならない。もう一ど金  
 五703 なんか、もういやになつたから、お金持の  
 五704 金持のおくさんになつたから、お金持の  
 五7010 くしょうはいやになつたから、お金持の  
 五7011 金持のおくさんになつたから、お金持の  
 五724 おくさんはいやになつた、女王になりた  
 五725 になつた、女王になりたつたのたので  
 五729 うのものわらいになるよ。「略。」お  
 五731 した。海はまっ黒になつてあれていま  
 五736 はいやだ、女王になりたいといつていま  
 五738 ばあさんは女王になりますよ。」とい  
 五7311 おばあさんは女王になつてゐるではありません  
 五752 しは女王もいやになつた。こんどは、海  
 五754 どは、海のぬしになりたい。あのひろい  
 五7510 した。海はまっ黒になつて、波が高く、ゴ  
 五766 ます。海のぬしになりたい、ひろい海で  
 五788 れで教室が明かるくなりました。七月十  
 五804 ら、せながあつくなつてきました。」

五81 2。ガラスもきれいになって、そのけしき  
 五82 10の教室にもおいでになりました。そのお友  
 五88 2会いおびをおしめになると、へんでしやう  
 五90 1会島」とおうたいになったとき、おじぎを  
 五90 11会いいおほうさんになったのだよ。」こう  
 五94 4なく、死んだようになっておちていたので  
 五95 7て、だんだん大きくなりました。「略略。」  
 五95 8会りでとべるようになるまで、かつてやり  
 五96 1がかった美しい鳥になりました。「略略。」  
 五96 8会由にとべるようになりましたね。かごか  
 五97 3ているうちに、秋になりました。まいにち  
 五99 7もとのように元氣になって、かごの中をと  
 五99 9会。「もう、元氣になったようですね。」「  
 五99 10会この鳥はとべなくなったらしい。にがし  
 五99 11会にがしてやれなくなったよ。」おとうさ  
 五100 2かれた羽がぶらりとなって、半分しかひろ  
 五105 5まねができるようになりました。いつのま  
 五105 11をほめました。秋になると、また、わたり  
 五109 9ますひわがかわいくまりました。干も  
 六9 7、それがまた心配になってきた。親子はそ  
 六11 6ままで死んだようになっていたかいちゅう  
 六13 7が水にとどきそうになったとき、足がつる  
 六14 11木の葉は船のようになって、ありのそばを  
 六15 10会なかつたら、どうなっていたかしれない  
 六20 10あつまって、まるくなります。テーブルに  
 六24 6会よ。さあ、おそくなるからでかけよう。  
 六26 1しもて半分はそとになっています。雪がち  
 六28 7会のめば、なんとかなるだろう。」きりぎ  
 六34 9わりながら、大きくなったり、小さくなっ  
 六34 10くなったり、小さくなったりする。口をも  
 六36 8いっかかし——点になって、おしまいは  
 六36 9しまいにはみえなくなってしまう。21風

六三六 21風の音がよくなる。それにつれて、空がうす赤くなってくる。夕やけ雲  
六三六 10 やけがばら色にくくなる。かかしの顔まで  
六四〇 10 かかしの顔まで赤くなる。33 ビルディン  
六四〇 11 上にひとかたまりになる。それがほぐれて  
六四二 9 上をひとかたまりになってとぶつばめのむ  
六四三 4 りがきゆうにくらくなつて、かげがみえな  
六五一 5 て、かげがみえなくなりました。三人は遊  
六五一 6 一組でつくることになりました。それから  
六五六 4 間を發行することになりました。これには  
六五七 4 いたためて、歩けなくなりました。そこを通  
六五八 7 のかすが、五か七になつてゐるのです。「  
六五九 7 、私はおもしろくてなりませんでした。ま  
六六一 4 た。また、ふしぎでなりませんでした。み  
六六一 5 六六二 1 川が、こたつでまろくなる。」一口話  
六六三 3 。どうして、八時になると、ねむくなるの  
六六四 3 時になると、ねむくなるのだらう。どうし  
六六四 4 二上にすれば下になり、下にすれば上に  
六六五 4 り、下にすれば上になるものはないに。三  
六六五 6 たらくときはよになり、休むときは立つ  
六六六 8 二号がどんなふうになるか、楽しみです。  
六六七 2 はるえといつしよになつて、大きな雪だる  
六六八 7 と、はるえは本氣になつていました。は  
六六九 11 ちだかわからなくなつちやつた。」おか  
六七〇 3 だんだん大きくなるから、生きてゐる  
六七〇 4 、動いたり大きくなつたりしてゐるもの  
六七一 4 まつたら動かなくなるでしょう。けれど  
六七二 5 は、ぐつとおのみになつて、ほおりの「ああ  
みこと」  
六七三 10 、しばらくお考えになつて、女の人に、「へ  
六七四 2 ですつかりくになつちやつた。」女の人  
六七五 2 つとしていらなくなつた。ぼくは画用紙  
六七六 3 、これで大わらいとなつた。ぼくのまねは

六107 6 うまく発音できなくなっている。しかし、  
六107 11 がつまるといえなくなることばと、はなが  
六108 3 めに発音ができなくなるような音は、もと  
六109 10 あることはたしかとなった。自分ではなを  
六110 2 、きゅうにおかしくなった。これなら、弟  
六110 6 いいかたそっくりになった。それでぼくは  
六110 10 ことはどうでもよくなってしまう。弟が  
六126 6 あなはずんずん長くなっていきました。「へ  
六126 9 ネルはだんだん深くなり、廣くなりました  
六126 9 だん深くなり、廣くなりました。「略」  
六130 4 めきさんが、ま顔になつていうので、うさ  
六130 6 さんがかわいそうになりました。うさぎさ  
六134 8 れてしまわなければなりません。しかさん  
六134 10 たところで、なんになりましょう。ちつと  
六137 5 いる。ようしゃはならない。角でついて  
六140 1 どれ、ごちそうになるうかな。」のそり、  
六140 9 たちは、いっしんになって、神さまにおい  
六142 2 はじめました。上になったり、下になった  
六142 3 上になったり、下になったりしました。そ  
七7 8 会 でいいから、風になりたい。風になった  
七7 8 会 になんたい。風になったら、学校の中を  
七8 6 と、学校からいなくなってしまう。教室  
七9 4 会 う、四十五年にもなる。あの日からきょ  
七10 8 つして、しめっぽくなつた葉をふるわせ、  
七12 1 か、「なべの手」となると、人の手ではあ  
七12 2 ところということになります。また、「略  
七13 1 、文字を書くことになってきたのでし  
七23 3 かあさんがおいでになる。母」なに  
七24 9 センチほどに大きくなつたあおむしを、新  
七25 2 会 あおむし、大きくなりましたね。たまご  
七25 6 会 ごから小さい虫になるのに、七日かか  
七25 9 会 っぽと同じ色になったのね。どうして

七25 10 会 はっぱと同じ色になるのか、わかります  
七26 3 会 、はっぱと同じになるのは、鳥などに、  
七27 1 会 かあさん。黄色になっちゃった。」母「さ  
七27 2 会 た。」母「さなぎになったのですよ。先生  
七27 3 会 おむしがさなぎになるって、教えてくだ  
七27 4 会 兄「いいえ、どうなるか、みんな自分で  
七28 9 会 おむしがさなぎになったところを書いた  
七31 3 会 に。」兄「ちよになつた、ちよになつ  
七31 4 会 なつた、ちよになつた。」はるお「ほん  
七35 4 会 るで、一つからだになつてしまふかと、思  
七36 11 会 がすこしゆるやかになり、からだがらくに  
七37 1 会 り、からだがらくになつたような気がしま  
七39 11 会 ちに、にこに顔になり、とうとう、うれ  
七41 3 会 たみつばちのようになつて、汽車でねむっ  
七45 2 会 は、こんなことになるうとは、思つてい  
七47 4 会 ぼくも、だんだんくわしくなつていきます。ど  
七48 8 会 ぼくも、せんしゅになつて、いっしょうけ  
七49 4 会 野の人はいっしんになつたので、かえつて  
七49 8 会 の学校とやることになつた。あぶなかつた  
七49 10 会 れしさでいっばいになつた。ドッジボー  
七50 6 会 しあいをする事になつた。ぼくたちは、  
七51 4 会 ールをつかう事になつた。ふえがまた「  
七52 2 会 く、ぼくたちの勝となつた。『略』」しん  
七52 9 会 の学校とやる事になつた。このときは、  
七54 5 会 ぶなくころびそうになつた。『略』」はく  
七55 5 会 て、文章がみじかくなつていくことがあり  
七55 9 会 ちりほどもあつてはなりません。五年生が  
七58 4 会 が、ますますほそくなる。おかあさん、い  
七59 1 会 んなのは、みじかくなつた文ですが、まだ  
七60 7 会 いまに、一つもなくなるだらう。またして  
七63 3 会 ンパン、もうくらくらなつてゐる。豆のつる  
七65 1 会 葉ばかりのさくらになつて、毎日ほれ。波

七67 2 鳥の声も、夕がたになつてゐる。(三)  
七74 4 会 いま、まづたつになるすいかだ。七  
七75 2 会 とのまに、いなくなつてしまつた。さて  
七78 8 会 だれかにおききになつたのですか。旅  
七83 8 会 一つおきにあさくなつてゐましたので。  
七86 3 会 うさぎをかう事になりました。先生が、  
七89 3 会 みんなで、13びきになりました。白うさぎ  
七95 2 会 わととびます。寒くなつたので、むしろで  
七95 2 会 まれるときはまるくなつてゐました。  
七95 2 会 ちにかわれる事になつたかとい黒山の人  
八4 9 会 から家族のひとりになり、あくる日、ピオ  
八6 4 会 たへもとまる事になつたばかりか、頭の  
八6 6 会 ぶもつつくようになつてゐました。それど  
八6 8 会 けいにピオがすきになりました。ピオのほ  
八8 11 会 ほうでも、その氣になつたらしく、ときた  
八9 1 会 せんから、つめたくなつたからだをわたに  
八12 4 会 たのが、かなしくてなりませんでした。こ  
八13 1 会 てゐますが、大きくなるにつれて、六本の  
八17 10 会 の足がだんだん強くなり、ことにまえ足は  
八17 11 会 かく、じょうぶになります。土の中は、  
八18 2 会 ほつていかなくはなりません。それでた  
八18 4 会 か二三ヶ月で大きくなつて、皮をぬぎかえ  
八19 1 会 て、よいに大きくなります。あぶらぜ  
八19 6 会 かからないと、親になることができな  
八19 8 会 てゐますが、大きくなるにつれて、だんだ  
八20 1 会 みついて、動かなくなつてしまひました。  
八22 1 会 もうすっかりくらくらしました。あめ色の  
八22 2 会 、からだの色もこくなくなつていきます。虫は  
八23 9 会 がさつとさすころになると、せみの羽は、  
八24 2 会 色のところは茶色になつて、いかにあぶ  
八24 4 会 もあぶらぜみらしくなります。しばらくす  
八24 4 会 は、きゆうに元氣になつて、そろそろと歩  
八24 7 会

八24 11 かな音楽会のようになりました。やがて  
八25 4 会 みも、やがて、秋になると、みんな死んで  
八25 5 会 ひつそりとしずかになります。せみの死が  
八27 9 会 、もとめておいでになるのです。けれど  
八28 6 会 んの中へおはいりになりました。すると、  
八28 8 会 すっかりおみとれになりました。ひめは、  
八29 2 会 略。』こうお考えになつた天帝は、そのま  
八30 4 会 りを一つおつきになりました。黒うしは  
八31 9 会 にではたらかなくなりました。ふたりは  
八32 1 会 たいへんおこりになつて、はたおりひめ  
八32 3 会 に帰しておしまひになりました。はたおり  
八32 5 会 のようすをごらんになつて、『略。』とお  
八32 9 会 、いよいよその日になると、けんぎゅうは  
八33 10 会 すが、星のきよりになりますと、これでは  
八34 7 会 ばかりかかゝることになります。ところが、  
八34 11 会 して計算しなければならぬほど、遠いき  
八35 7 会 た光だというわけになります。このほか、  
八36 1 会 ばつてゐます。夜になつて天の川をみると  
八37 6 会 うと願つておいでになりました。王女がこ  
八38 2 会 をかぞえておいでになると、み知らぬ人が  
八38 9 会 略。』と、お答えになりました。『略。』  
八39 3 会 、みんなこがねになつた。『略。』  
八39 8 会 しかにそのようになるでしよう。『略。』  
八39 10 会 ました。あくる朝になりました。王さまは  
八39 11 会 、いすにおさわりになりました。いすはた  
八40 2 会 ねどこにおさわりになりました。それもこ  
八40 3 会 た。それもこがねになりました。着物を着  
八40 4 会 た。着物もこがねになりました。王さまは  
八40 5 会 さまは、庭へおでになりました。『略。』  
八40 9 会 みんな手をおふれになりました。庭の草木  
八40 10 会 かと光つたこがねになつてゐました。王  
八41 1 会 コーヒーをおのみになるとすると、コー

八四三 もこがねのさかなになりました。たまごを  
 八四四 たまごをおとりになりました。これもこ  
 八四五 もこがねのたまごになりました。そのとき  
 八四六 は、かたいこがねになっていたのです。王  
 八四七 まは、おかなしみにまりました。王女は、  
 八四八 「困ったことになってしまった。もし  
 八四九 やって、おくやみになっていらつしやると  
 八五〇 ぐって、こがねになったものにふりかけ  
 八五一 つともどおりになるでしょう。」王さ  
 八五二 らだにおふりかけになりました。「略略。」  
 八五三 長いことお苦しみになりましたが、いくら  
 八五四 ても、よくおなりになりました。王さまは  
 八五五 おふれを、おだしになりました。これをき  
 八五六 ばすぐおなおりになります。「これをき  
 八五七 はたいへんお喜びになりました。さっそく  
 八五八 」と、おいしいつけになりました。けらいた  
 八五九 まにもごろりと横になるうとしていたとこ  
 八六〇 きに立ってお歩きになった。みはらし台に  
 八六一 れてやらなければならぬまい。」あくる日  
 八六二 の子も、いっしょになっておよいだ。「略  
 八六三 ら、かみつきたくなるんだよ。」年より  
 八六四 てもいい。大きくなれば美しくもなるで  
 八六五 くなれば美しくもなるでしょう。たまご  
 八六六 で、あんなふうになっただけですよ。」  
 八六七 からのちは、わるくなるばかりであった。  
 八六八 は、ここで一晩横になった。つかれて、氣  
 八六九 のあしの中で、横になって休みたいと思っ  
 八七〇 かけて、渡り鳥になる考えはないかね。  
 八七一 (二) くれがたになって、あひるの子は  
 八七二 んでしまわなければならなかった。あらし  
 八七三 はますますはげしくなってきた。あひるの  
 八七四 かわいがった。朝になって、よそからきた

八八〇 きゆうにおよぎたくなったので、にわとり  
 八八一 なことは考えなくなってしまうよ。「へ  
 八八二 ことがおわかりにならないのです。」  
 八八三 がこがね色や茶色になった。雲は、あられ  
 八八四 、あられや雪で重くなってひくくたれてい  
 八八五 て、ふしぎな氣持になった。あひるの子は  
 八八六 ようたちがみえなくなると、すぐ水のどん  
 八八七 なぎまわらなければならなかった。しかし  
 八八八 ながだんだん小さくなっていった。あひる  
 八八九 つかつていなければならなかった。とうと  
 八九〇 、つかれきつて横になっていた。あひるの  
 八九一 の草むらの中で横になっていた。美しい春  
 八九二 。どうしてこんなになったのかわからない  
 八九三 いわれる身のうえになったのである。にわ  
 八九四 が、ほんとうにめになるのでしょうか。  
 八九五 風にゆられるようになりました。黄みどり  
 八九六 度 田植えのころになったので、しろかき  
 八九七 葉が、5cmぐらゐになりました。どのなえ  
 八九八 て、ほとんど85cmになりました。1本ずつ  
 八九九 ばん多いので15本になりました。8月18  
 九〇〇 が、ふくれてかたくなっていました。二つ  
 九〇一 このが、きつと実になるのでしょう。9  
 九〇二 は、だんだん黄色くなっています。9  
 九〇三 も、すっかり黄色になっておじぎをしてい  
 九〇四 平年作ということになります。  
 九〇五 と、明かるい感じになります。この赤い色  
 九〇六 きをぬつたら、どうなるでしょう。むらさ  
 九〇七 色をぬつたら、どうなるでしょう。これは  
 九〇八 の感じはまたふかくなるでしょう。(二)  
 九〇九 った美しいひびきとなってきこえるにちが  
 九一〇 らと流れる小川ともなり、ちらちらと光る  
 九一一 ちらと光るいけともなり、また廣い海とも

九二〇 り、また廣い海ともなります。さらに、「  
 九二一 と、ごちゃごちゃになって、まとまりがつ  
 九二二 、たしかに風の音になる。とうげ道にさし  
 九二三 よって、水の音にもなり、風の音にもなり  
 九二四 もなり、風の音にもなり、雪の降るようす  
 九二五 雪の降るようすにもなるのは、ふしぎであ  
 九二六 が生きてくることになるう。三 つばめ  
 九二七 さつていかなければならない日本に、なご  
 九二八 、十一月のはじめになれば、もうほとんど  
 九二九 どすがたをみせなくなってしまう。つ  
 九三〇 の氣候と同じ寒さになり、雨が降りつづき  
 九三一 たい雨にずぶぬれになって、身動きもでき  
 九三二 、身動きもできなくなってしまうのです  
 九三三 と、十万ばあまりになります。そのころ、  
 九三四 いうのです。近年になって、いろいろな方  
 九三五 いのでしょう。春になると、だれもが、こ  
 九三六 ら、もう四ヶ月になります。こちらへき  
 九三七 て、秋も終り近くなりました。ぼくは、  
 九三八 んがうらやましくなります。先生、おか  
 九三九 よは、大きなのになると、三十センチあ  
 九四〇 せが、深い谷になると、一メートルあ  
 九四一 そこは、深い谷になっていきます。ここか  
 九四二 せかれて、たきになり流れになって、村  
 九四三 たきになり流れになって、村の中を通り  
 九四四 おつてよいことになっていきます。高く  
 九四五 くと、うれしくなります。母たちもぼ  
 九四六 みえました。秋になって、ぼくは山へい  
 九四七 いくのが楽しみにしました。だんだん  
 九四八 いまはもういなくなりしました。そのかわ  
 九四九 ばん小さな三つになる妹もつれて、うち  
 九五〇 たちはむちゅうになつていもをひろいま  
 九五一 つくしてはだかになった木の上に、まっ

九四七 〇のぼつてとりたくなりす。この夏、一  
 九四九 〇す。兄は、大きくなって農業をするため  
 九四八 〇うすっかり明かなくなっていました。おも  
 九四八 〇、ちょっとしづかになって、「略。」と答  
 九五〇 〇びだし、すぐたきになって、ゴウゴウと谷  
 九五二 〇た道は、もうほそくなってきてしまいま  
 九五八 〇いへんきゆうな坂になりました。いちろう  
 九五四 〇かにぼつと明かなくなつて、目がちくつと  
 九五六 〇もどつておいでになるよ。きみは、いち  
 九五七 〇ちろうは氣のどくになって、「略。」とい  
 九五七 〇あたりまでまっかになり、着物のえりを廣  
 九五九 〇、きゆうにまじめになって、「略。」とい  
 九六三 〇すこしずつしづかになりました。みると、  
 九六五 〇、わけがわからなくなりました。そこで、  
 九六六 〇なんだかわからなくなりました。やまねこ  
 九七〇 〇所のめいよ判事になってください。これ  
 九七四 〇だんだん光がうすくなって、まもなく馬車  
 九七四 〇も、一どにみえなくなつて、いちろうは、  
 九七六 〇どをのせておいでになりました。「略。」  
 九七七 〇こうに、一だん高くなつたところがみえま  
 九七八 〇しよにでておいでになりました。「略。」  
 九七八 〇く土の中へお立てになりました。土はやわ  
 九七八 〇しよに、いらなくなつたりこわれたりし  
 九八二 〇は、耳にもおいれにならないで、ひとりで  
 九八二 〇んにほつておいでになります。ぼくらは、  
 九八二 〇だんだんしんけんになってほりました。「へ  
 九八四 〇がまわつておいでになりました。「略。」  
 九八八 〇「ふたりともむきになって、友だちの手か  
 九八八 〇きゆうにまたつんとなつて、だまつてそれ  
 九八八 〇じゃあ、あいこになるように、もう一つ  
 九八八 〇おりしたら、よくなつた。」やまだ たか  
 九八八 〇、谷あいでは一列になつたので、ずいぶん

九八八 〇だんだんのぼり坂になると、からだかほて  
 九八八 〇だもスキーも一つになって、ビュウとうな  
 九八八 〇ろんで、雪だるまになっておきあがるもの  
 九八八 〇、先生は地上の人となられた。お書になつ  
 九八八 〇となられた。お書になつたので、雪の上で  
 九八八 〇水の味がわからなくなつてしまふ。あとも  
 九八八 〇でみたりしなくてはならなかつた。茶人は  
 九八八 〇と感ぜられるようになった。「略。」茶人  
 九八八 〇れた道もない谷まになつた。そこからさら  
 九八八 〇た。くもは、きつとなつてその方を見つめ  
 九八八 〇つなになつた。きつとなつた。ぐずぐず  
 九八八 〇、苦しうどうにもなりませんでした。し  
 九八八 〇きゆうになつた。きつとなつた。くもの小  
 九八八 〇かあさんを見つた。「略。」  
 九八八 〇つらうつらとねむくなつてきました。「略  
 九八八 〇めて、ころつと横になりました。目をつむ  
 九八八 〇たつゆが、しづかになつて、ポタリポタリ  
 九八八 〇、もう話しかけなくなりました。ぐつすり  
 九八八 〇っかりくなく持になりました。いまのい  
 九八八 〇にくいとは思えなくなりました。「略。」  
 九八八 〇いう木の葉が黄色くなるころで、いなかの  
 九八八 〇のそばへくるようになりました。ひろい集  
 九八八 〇さんにくれるようになりました。プラタナ  
 九八八 〇のいなか町がすきになつたのも、一つは、  
 九八八 〇がいて、なかよしになつてくれたからです  
 九八八 〇ことばがこいしくなります。こうしてお  
 九八八 〇んつかつてみたくなります。わたしは、  
 九八八 〇だんだんまどおになる。「ことばの愛」  
 九八八 〇にさまざまな色になります。「10 せんた  
 九八八 〇。あせまみれになつた工員の顔、胸、  
 九八八 〇の子が、むちゆうになつてかけてくる。工  
 九八八 〇してそのものがこうなつたかということ

九八八 〇みかたをしなければならなかつたのか、よ  
 九八八 〇うしてそんなことになつたか、そのわけを  
 九八八 〇、兄や姉の手助けとなりたいたいと思ひます。  
 九八八 〇もすなおな子どもになりたいたいです。そう  
 九八八 〇うちの中が明かくなるように、できない  
 九八八 〇みんな楽しい氣持になるようにできないも  
 九八八 〇とを、ほころぶようにしたいのです。い  
 九八八 〇させておかなければならない、というので  
 九八八 〇つとしていられなくなり、設計図をひいて  
 九八八 〇いてにしてくれなくなり、まずしさはいよ  
 九八八 〇につかわれるようになったが、かれは、こ  
 九八八 〇、年とともに大きくなって、天然眞珠とな  
 九八八 〇なつて、天然眞珠となることがわかつたか  
 九八八 〇すやすと、ひとつになるものではなかつた  
 九八八 〇と、もとのままになつていた。同じこと  
 九八八 〇いれてから、眞珠になるまでには、少く  
 九八八 〇ても、その助力者となつてくれたのは、つ  
 九八八 〇茶色にかわるほどになるのである。この赤  
 九八八 〇、いっそうはげしくなり、かれを氣ちがい  
 九八八 〇さえのしるようになった。うめは、いつ  
 九八八 〇このわる口のためとなつて、幸吉をかば  
 九八八 〇。「半円が眞円になれば成功するのだ。  
 九八八 〇おりに取れるようになったので、ひとまず  
 九八八 〇く、世にだすようになった。この光明を喜  
 九八八 〇そ氣ちがいのようになつて、死員をどんど  
 九八八 〇でにしがの老人になつていた。よる年な  
 九八八 〇たもなく、四年めになつた。幸吉は、望み  
 九八八 〇とに名高い。名高くなつたかげには、幸吉  
 九八八 〇たちが、幸吉の手になる養殖眞珠は、まが  
 九八八 〇は、きのう、三つになる——まんていうと  
 九八八 〇いうと二年三ヶ月になる妹をつれて、さん  
 九八八 〇んと、地べたに横になつてねそべっていま



十551 写真も、思いではなるでしょうが、こと  
 十552 は、妹の心の写真になるのではないかと、  
 十555 すらすらと書けなくなりました。むりに書  
 十557 は、ちがったものになります。どうして、  
 十5510 うらやましくさえないりました。あるとき  
 十579 スは、おじいさんになるとかわいそうね。  
 十618 さんのせいより高くなりました。もう、先  
 十6110 生のせいより高くなりました。たけのこ  
 十6111 ぐんぐん早く大きくなります。たけのこは  
 十625 と同じくらいに高くなって、風にゆれてい  
 十629 うさんがおうたいになるうたいを、きいた  
 十635 役者がおじいさんになったり、むすめにな  
 十635 ったり、むすめになったり、わかい男に  
 十636 ったり、わかい男になったりするときには  
 十644 ところのあるものとなっています。みなさ  
 十645 みなさんも、大きくなったら、自分たちの  
 十657 、おもしろい人物になっています。狂言  
 十6511 やったりしなければならぬので、ずっと  
 十663 村までいかなければなりません。で  
 十6612 、死ぬようなことになってはつまらないか  
 十673 のはかえってみたくありません。それに、だ  
 十675 みようということになりました。「略」。  
 十689 いれをあげるようになります。「略」。  
 十716 つぼが、からつぽになってしまいました。  
 十7110 郎かじゃは、心配になりました。太郎かじ  
 十742 につこりわらい顔になって、次郎かじゃと  
 十156 、まだむちゅうになつているのである。  
 十158 ぼくは、大きくなったら、三ばんか四  
 十1511 ぼくは、大きくなったら、三ばんか四  
 十1710 たがじょうろになつて、みんながさせ  
 十1912 りっぱな船長になるだろうよ。「略」  
 十1101 運轉をする人になるだろうね。「略」

十1104 員には、だれがなるのさ。「略」。  
 十1109 男には、ぼくがなることにきめている  
 十1151 ルガンをおひきになると、オルガンのキ  
 十11911 まにかびんぼうになつて、その日のくら  
 十11912 しにも困るようになりまして。しかし、  
 十1212 つで働くことになりました。そのとき  
 十1214 わりにでることになりました。金次郎は、  
 十1236 いまはどうにもなりません。母親は、  
 十12310 やつてから、夜になると、ため息ばかり  
 十1258 ぶんでした。夜になると、また、なわを  
 十1259 たら、くたくたになつてたおれるところ  
 十12511 の体格もりっぱになつていきました。金  
 十1267 と、りっぱな人になるためには、学問を  
 十1267 学問をしなくてはならないと書いてあり  
 十1269 を読むとうれしくなり、いっしんに勉強  
 十12610 んに勉強がしたくなりました。まきをと  
 十1286 ずけられることになりました。いままで  
 十1304 やまわれるようになりました。四田  
 十1346 うの畑は水田となつて、晩にはかえ  
 十1349 に日ざしが強くなり、いねはそだつ  
 十1372 音さえずりしくなつてきた。さやま  
 十1375 ・しぶがき赤くなり、くりもぼらば  
 十1439 んの上にお立ちになりました。女の先生  
 十14310 名をお読みあげになりました。「略」。  
 十1446 をいただくことになりました。総代の名  
 十1489 、ぼくは、大きくなったら、また、おか  
 十1503 「ぼくは、大きくなったら、どうしても  
 十1507 くは、いい農夫になろう。六雨の中  
 十1512 あらしは、けさになつてもまだ続いてい  
 十1515 、みんな下向きになつてしまった。私は  
 十1525 れたりしなければならなかった。だれか  
 十15210 とがもみくちやになつた。しゃしようさ

十1535 台までいっぱいになつてしまった。その  
 十15311 なごやかな氣持になつた。このごろ、電  
 十1588 らといえるようになった。太郎は得意に  
 十1589 た。太郎は得意になつて、「略」とい  
 十1612 れねずみのようになつて家に帰った。父  
 十1623 ぼくはくやしくなつたので、なに、こ  
 十1624 自分からさきになつて渡つてしまつた  
 十1697 すると、かなしくなつてなきました  
 十16912 。かみの毛は白くなり、ひげはのび、顔  
 十1702 ははち切れそうになつていました。ただ  
 十17212 じきにおいでになりますからね。「看  
 十1759 ぼ、きつとよくなるから。」「略」。  
 十17611 すぎました。夜になると、少年は、へや  
 十1771 。そうして、朝になると、また看病をは  
 十1779 て、いくらかよくなつたように思うとい  
 十17810 した。すこしよくなるかと思えば、思い  
 十17810 けなくまたわるくなつたりで、少年は看  
 十17811 しょうけんめいになつていました。一日  
 十1799 はにわかにはわるくなりました。医者、  
 十1801 ようだいがわるくなつたにもかかわらず  
 十1805 ば飲まないようになつた。また、な  
 十1839 かりじょうぶになつたよ。それで、お  
 十1868 けがわからなくなつていて、口もきけ  
 十1886 はますますわるくなるばかりでした。顔  
 十1887 顔はむらさき色になり、呼吸はいよいよ  
 十1887 はいよいよ困難になりました。夕がたの  
 十1892 く、しだいに暗くなつていきました。そ  
 十1892 。それからちになつて、道灌は少女の  
 十1884 母親がなつかしくなり、会いたくなつた  
 十1884 くなり、会いたくなつたので、学校から  
 十1884 めきめきと大きくなり、このごろは、き  
 十1810 文雄はそれが氣になつてしかたがなかつ

十二 16 1 ところ、かげになったところ、力のこ  
 十二 16 10 いもよらない色になってしまふ。かきな  
 十二 17 7 といへんいい色になりましたね。」「ああ  
 十二 17 10 ともっと美しくなりたいたいと思つてい  
 十二 18 8 だんおもしろくなったのです。おとな  
 十二 19 1 ずつじょうずになっていくようです。  
 十二 19 2 へんじょうずになりました。このあい  
 十二 20 2 ができるようになりました。」「略」。  
 十二 21 4 っぱな絵かきになるころは、わたしも  
 十二 21 5 っと大きな木になって、美しいりつぱ  
 十二 21 6 ぶんつけるようになりたいものです。」「  
 十二 21 9 となくさびしくなります。」「略」。  
 十二 22 4 て、じょうずになったのだらう。そう  
 十二 25 10 に知らせるようになりました。」「略」。  
 十二 27 2 らあつちへいくとなると、すぐに手をつ  
 十二 27 2 て、いざり歩きになります。かた足をな  
 十二 29 4 足と歩けるようになりました。ある日、  
 十二 29 11 ってきて愛らしくなった民ちゃんをだ  
 十二 30 5 いぬをかうようになりましたが、民ちゃ  
 十二 31 5 、私が満七さいになる三ヶ月まえのこと  
 十二 33 2 先生は、お着きになったあくる朝、私を  
 十二 33 7 遊びがおもしろくなって、それをまねよ  
 十二 34 7 、先生がおいでになってからいく週間も  
 十二 35 11 きよせておいでになっているようすを感  
 十二 37 10 とを興えることになったのです。こうし  
 十二 38 3 べてをみるようになったからです。へや  
 十二 40 4 持があらあらしくなり、かんしゃくもち  
 十二 40 4 かんしゃくもちになったのもむりはあり  
 十二 40 12 学校にいくようになりました。もちろん  
 十二 41 2 がひとりのようになつて、勉強をはじめ  
 十二 41 8 とりかわすようになりました。ケラーは  
 十二 42 4 し、はかせにまでなりました。これは、

十二 42 5 愛情とが、一つになったおかげです。  
 十二 55 8 つづられて有名になったものもあるが、  
 十二 58 1 て村へでてきてはならない、もしそれが  
 十二 58 11 東の空が明かるくなつた。おにはおどろ  
 十二 60 6 ながめて、得意になつていた。ところで  
 十二 60 8 いて、くれそうになつてきた。このとき  
 十二 61 4 よせる大きな池となつていた。家具の  
 十二 62 1 そのことが評判になつて、だれもかれも  
 十二 62 1 かりにいくようになった。その中にある  
 十二 62 4 、かしくてくねくねつたという。十和  
 十二 63 5 おしまいにへびになつてしまつた。家に  
 十二 63 11 るみるうちに湖となつた。それが十和田  
 十二 69 4 き、役にたたなくなる。どんなにはたら  
 十二 70 4 から、その弟子になりました。そうして  
 十二 76 1 友だちがほしくなるのはやはりこんな  
 十二 76 9 すっかりうれしくなりました、ふたりは  
 十二 81 3 、胸がいっぱいになりました。それから  
 十二 81 5 ても勝たなければならぬと思ひました  
 十二 82 4 戦いのぞむことになりました。もし、こ  
 十二 82 6 めてもらふことになりました。清水選手の  
 十二 83 12 生きもののようになつて、はねとびまし  
 十二 84 4 り清水選手の勝となりました。あの小さ  
 十二 84 6 うつかいのようになつて、大きなチルデ  
 十二 84 12 ルデン選手の勝となりました。見物人は  
 十二 85 7 にもころびそうになりました。相手を一  
 十二 86 4 びはげしいものになつていきました。つ  
 十二 86 7 清水選手の負けとなりました。ネットを  
 十二 88 8 ようにしなくてはならない。もし、その  
 十二 88 10 んおかしなことになるばかりでなく、そ  
 十二 88 11 はいえないことになる。話をきくときに  
 十二 89 1 のみこまなければならぬ。そうでない  
 十二 89 4 けて話さなければならぬ。ごく簡単な

十二 89 10 いうだけのことになる。ただ習慣として  
 十二 89 12 やしめることにもなるからである。どん  
 十二 93 5 氣をつけなくてはならない。前後の続き  
 十二 93 10 り心を練ることになる。心を練るほど、  
 十二 98 10 わかるいとぐちとなつたのは、アメリカ  
 十二 103 8 はどれほど便利になつたか、考えること  
 十二 112 2 りりっぱなものとなつて生まれたのです  
 十二 112 10 間のからだがどうなつてゐるか、ほとん  
 十二 113 1 っかりしたものとなりました。この本を  
 十二 114 1 遠いところも近くなり、世界はだんだん  
 十二 114 2 はだんだん小さくなるような氣がします  
 十二 115 9 しい、美しい國となることができました  
 十二 110 8 て、つごうのよくなつた人もある。同じ  
 十二 110 10 、たいへん不幸になつてゐる。漢字で名  
 十二 111 12 して考えなければならぬ。そうして、  
 十二 112 1 づつ動かなければならぬ。知識によら  
 十二 112 5 づつしまふようになれば、日本の國は、  
 十二 112 8 ガリレオ 朝になると、日は東の空か  
 十二 112 8 のぼり、夕がたになると、西の空にしづ  
 十二 113 1 考えかたがもとになつて、東洋でも西洋  
 十二 115 8 説を人に教へてはならない、といひまし  
 十二 116 1 自分でも信じてはならぬ、人にも説いて  
 十二 116 1 、人にも説いてはならぬといわれまし  
 十二 117 5 と、三つの島からなつてゐる、小さな、  
 十二 23 3 といふある時期になつて、小もみを切り  
 十二 23 7 と、そのとおりになりました。小もみは  
 十二 23 9 えつてさまたげになつた。植物学上  
 十二 23 11 が見られるようになつた。ダルガス  
 十二 24 9 ものはないまでになりました。ユートラ  
 十二 24 11 に、こえた田園となりました。木材があ  
 十二 25 6 は、百五十ばいになりました。道路・鉄  
 十二 25 9 あまりあることになりました。ところが

十三 26 9 高い土べい続きになっている。あまり廣  
 十三 27 5 トンネルのようになって、どこまでもつ  
 十三 31 3 まる。まるく輪になったその中で、さる  
 十三 31 9 れたりしなければならぬので、なかな  
 十三 33 3 んで行かなければならない。大きな水お  
 十三 35 1 、だんだん大きくなって、文字であるこ  
 十三 35 10 を味わう。早春になると、はとぶえが天  
 十三 36 1 ら、はとがむれになってとんで来ると、  
 十三 36 7 ふわふわとまるくなって、風がふいてく  
 十三 42 7 国 がだせるようになったら、いっしょに  
 十三 44 6 れでも、しばいになっています。ただ、  
 十三 44 7 。ただ、あいてになる人が、見物人の目  
 十三 45 2 を、見せなくてはなりません。そこに、  
 十三 45 6 らしくしなければなりません。あいての  
 十三 48 4 が、きゆうに暗くなりました。短日  
 十三 52 1 だった。おとなになつて、いまもそう  
 十三 54 5 の絵がだいすきになりました。その氣持  
 十三 54 6 たくてたまらなくなりました。それで、  
 十三 54 10 、本物をごらんになっているだろうと、  
 十三 57 12 国 いとこが黒くなったりするので、ど  
 十三 61 4 国 しのいで大家になり、自由にふでをふ  
 十四 7 1 国 ことをお考えになってください。そう  
 十四 7 4 国 だと、お考えになってください。どう  
 十四 7 6 国 おこらなければならぬことが、おこ  
 十四 7 11 国 とつての手法になつてくれるでしょう  
 十四 8 4 国 たがわなければなりません。じゅみよ  
 十四 8 5 国 も負けなければなりません。なにしろ  
 十四 8 9 国 おうとお思ひになるにはおよびません  
 十四 8 12 国 ことをお考えになるのです。おかあさ  
 十四 9 1 国 ことをお考えになって、この世の中に  
 十四 9 4 国 光がお考えにならなければいけません  
 十四 9 5 国 しておしまいになつたら、あなたのル

十四 9 6 国 いをしなければなりません。かなしみ  
 十四 9 7 国 だをおいためになるなんて、どうあつ  
 十四 9 11 国 くごをおきめになり、自分を愛してく  
 十四 10 8 国 しておもらいになるといふと思います  
 十四 10 12 国 。じきに九月になります。そうしたら  
 十四 11 7 国 らをおつかいになつてもかまいません  
 十四 11 7 国 油をおつかいになつたほうがいいので  
 十四 13 2 国 か、おわかりになります。それに、小  
 十四 14 5 国 生きておいでになつたときそのまま  
 十四 15 1 国 なしいお氣持になられたときには、自  
 十四 15 2 国 ことをお考えになって、力をとりな  
 十四 17 2 国 とは、お思ひになりますか。どんな  
 十四 19 12 国 なの話をお聞きになって、「略。」とお  
 十四 20 8 国 くばんにお書きになつた。「略。」とお  
 十四 21 6 国 、先生のお書きになる文字に目をそそい  
 十四 21 8 国 だんどんお続けになつた。「略。」とい  
 十四 21 12 国 ばんがいっぱいになつてしまつた。「略  
 十四 22 9 国 国 って、日本語になつたと考えていいだ  
 十四 22 11 国 あつたとお話しになつたので、私たちは  
 十四 24 5 国 てきて、日本語になつたのだからかと、  
 十四 24 6 国 うかと、ふしぎになつてきた。それで、  
 十四 24 8 国 国 ばが、日本語になつたのでしよう。」  
 十四 25 4 国 ばが、いっしょになつていふこと  
 十四 28 7 国 ったような氣持になつて、家に帰つてき  
 十四 30 8 国 ちっぽけなものになつてしまつたのでし  
 十四 31 9 国 はよくもわるくもなるのです。あなたが  
 十四 31 11 国 考える力が大きくなつていけば、日本は  
 十四 31 12 国 ほどりっぱな國になつていくのです。さ  
 十四 32 2 国 見たつてなにになる。」という人があ  
 十四 32 7 国 航海術がさかになつたのです。宗教も  
 十四 34 3 国 あるのです。こうなつてくると、うちゅ  
 十四 34 11 国 です。地球などになると、なおさら、こ

十四 37 4 ません。ひくつになつてはいけません。  
 十四 37 7 国 いちにしなければならぬことは、なん  
 十四 38 8 国 の空が明るくなつてくる。「三の」  
 十四 45 3 国 くえがわからなくなりました。アイリッ  
 十四 45 8 国 、いつか聞えなくなりました。すべての  
 十四 46 10 国 うつといい氣持になつて、自分が水の中  
 十四 47 1 国 ったような氣持になりました。歌つてい  
 十四 50 7 国 話で、あきらかになつたのですが、おし  
 十四 53 6 国 んな大きな実になつたかといふことは  
 十四 53 12 国 うから、黄色くなつて落ちてしまつた  
 十四 56 4 国 空氣をお吸いになつて、養分におこし  
 十四 56 4 国 におこしらえになつたものでも、私が  
 十四 56 5 国 ぼちゃの実にはなりません。また、花  
 十四 57 10 国 かつたら、どうなると思ひます。いっ  
 十四 59 5 国 つきから問題になつていふ養分だつて  
 十四 61 3 国 れば、大きくもならなかつたかもしれ  
 十四 63 1 国 、小さなしずくになつたのが、無数にむ  
 十四 63 12 国 蒸氣が、しずくになるときは、かなら  
 十四 64 1 国 のしずくのしんになるものがあつて、そ  
 十四 64 4 国 した。そのしんになるものは、ふつうけ  
 十四 66 2 国 いくつものうずになり、それがだんだん  
 十四 66 4 国 しまいに見えなくなつてしまひます。茶  
 十四 67 7 国 きのようなものになつて、地面からなん  
 十四 67 8 国 る、高い柱の形になり、たいへん早さ  
 十四 68 2 国 氣が、とくに多くなります。そういう地  
 十四 70 1 国 なもようのようになつて、ゆるやかに動  
 十四 70 12 国 ふれた部分だけになります。そうなると  
 十四 70 12 国 になります。そうなると、茶わんに接し  
 十四 71 1 国 湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れ  
 十四 71 7 国 同じようなものになるわけです。これは  
 十四 72 8 国 の光が同じようにならず、むらになつて  
 十四 72 8 国 にならず、むらになつて、茶わんのそこ

十四 74 3 とのむらだが、どうなるかということは、  
 十四 74 6 や海の水が、冬になって、表面からひえ  
 十四 74 9 してきます。そうすると、いろいろの実  
 十四 76 1 があまりはげしくなると、きけんになる  
 十四 76 1 となると、きけんになるのです。これと同  
 十四 76 8 まわり大じかけになって、たとえば、ア  
 十四 76 10 の南がかつた風になるのです。茶わんの  
 十四 78 2 太く、一方は細くなって、まっすぐに割  
 十四 80 9 氣のきいたものになったものとも考えら  
 十四 81 10 にまじわれば赤くなる。十人十色。すき  
 十四 82 2 りもつもれば山となる。燈台もと暗し。  
 十四 84 7 うなけつしようになるか、空中の温度の  
 十四 87 7 。一面の銀世界となった廣い野原を、第  
 十四 88 1 ぎる一すじの道となる。その一すじの道  
 十四 88 5 か。足がつめたくなくて、立ちどまった  
 十四 91 9 まったくはだしになってしまった。だか  
 十四 92 1 、足は赤く、青くなっていった。おおみそ  
 十四 94 7 さな、赤く、青くなった両足をそろえて  
 十四 96 6 いではいられなくなって、もう一本のマ  
 十四 96 10 ぬのようにうすくなって、その女の子は  
 十四 100 6 あさんが見えなくなつては困ると思つた  
 十五 9 3 青き月夜となり。うまよ人間のか  
 十五 14 6 たちまち火となれりゆれにゆるるか  
 十五 20 7 は女の子で四つになるかわいい子どもた  
 十五 22 6 な頭の上が暗くなって、なんだか大き  
 十五 24 2 それは、十五六になるひつじかいの少年  
 十五 25 11 さにたえられなくなって、羽ばたきも苦  
 十五 26 5 てしまわなければならぬ。それに、も  
 十五 26 8 所へおりなければならぬと、少年は思  
 十五 27 12 うにしか見えなくなつてしまいました。  
 十五 28 2 、もうたまらなくなつたのか、その重荷  
 十五 32 6 です。血まなこになって目の前のできを

十五 32 9 ままでむちゅうになって少年目がけてと  
 十五 34 7 かたをしなければならぬ。これは、記  
 十五 35 8 いうものの起りとなった。いまから五六  
 十五 36 1 のきまつたものとなり、今日のようにな  
 十五 36 2 り、今日のようになつたといわれている  
 十五 39 5 を作りだすようになった。かたかなは漢  
 十五 39 7 などと書くようになった。ひらがなはか  
 十五 40 2 とができるようになった。あの有名な源  
 十五 40 5 書き表わしかたとなっている。ローマ  
 十五 41 3 フェニキア文字となり、さらに、そのフ  
 十五 41 4 てギリシア文字となり、それから、その  
 十五 41 5 現在のようになつた。ローマ字とい  
 十五 42 2 親しまれるようになるであらう。日本  
 十五 45 3 きたりが、明治になってすっかりようす  
 十五 45 5 活さえずしくなつてきた。そこで、  
 十五 45 7 どつていくようになった。ハギンスの祖  
 十五 48 5 。ところが明治になって、はん主の保護  
 十五 48 11 はずのものが黒くなつたり、黄色くなつ  
 十五 48 11 なつたり、黄色くなつたりして、失敗に  
 十五 49 1 具を賣らなければならなかつた。それで  
 十五 50 3 てしまうことになりました。それはおし  
 十五 51 6 ンクリーのふでになつたものである。主  
 十五 52 1 び結ばれることになった。熱情のこと  
 十五 55 8 たずねもむだになるようなわけだが、  
 十五 56 11 と数十年の昔になるが、私がまだわか  
 十五 57 11 クリスチャンになつていたが、ある日  
 十五 59 10 に見せなければならぬものがたくさ  
 十五 63 11 ようにきれいになつたらう。さあ、行  
 十五 64 6 ったまま動かなくなった。「略。」おじ  
 十五 66 9 まいを移すことになった。十の春をむか  
 十五 70 1 いのだ。暗い心になって、じつとおじさ  
 十五 70 11 から目がわるくなつてね、手紙でもな

十五 70 12 ようにおなりになつたのですよ。その  
 十五 71 3 さんがごらんになつたら——「とい  
 十五 72 1 た。勝海舟の筆になる「新島襄の墓」と  
 十五 72 10 んかに横づけになつた。ドアをおして  
 十五 73 10 やがてお晝どきになつたので、廣い食堂  
 十五 74 7 権を與えられねばならないという理由は  
 十五 78 2 表をためらつてはならない。はじめ、き  
 十五 78 11 な身ぶりをしてはならない。すなおなれ  
 十五 80 2 いができるようになったのは、われわれ  
 十五 80 12 く思われるようになることをいひります  
 十五 83 5 んまりあてにはならないけれど、青い  
 十五 85 2 ーブルの光栄になつていさうがし  
 十五 86 7 分のしなげばならないつとめのため  
 十五 86 9 る心がなければならぬものだ。て  
 十五 92 7 まに困ることになるから。「チルチル」  
 十五 96 12 のまわりで、わになつておどります。チ  
 十五 98 6 がまんがでなくなつて、「略。」光  
 十五 103 7 から、夕がたになると、これが「日ぐ  
 十五 105 5 てもたまらなくなるゆかい」ですよ。  
 十五 105 11 にいわなければならぬのは、『正義  
 十五 106 9 みじめなものになつてしまうのです。  
 十五 107 4 あればわるくなつてしまつたのです  
 十五 107 9 いものがいなくなつてしまつたのです  
 十五 110 9 たびに、わくなるのですよ——うち  
 十五 113 2 、目の中の星になつてしまふのですよ  
 十五 114 1 てこんなに白くなって、光がさすのに  
 十五 115 2 私を見なければならぬか、それを、  
 十五 115 11 とをわすれてはなりませんよ。でも、  
 なる「生」(五) 4 なる「ツ—ラ」  
 五 63 4 花がついたり、みがなつたりしたのは、  
 九 44 6 おかあさんのせいではありませんよ。  
 まつかにじゅくした実がすずなりになつ

ているのをみると、

十二138 こには一本のぎくろの木があつて、夏じゅう美しい花をつけていたが、あらかたちつてあとにいくつかの実がなっていた。

十二202 ところでは、いつも美しい実をならせることができるようになりました。

なる「鳴」(五) 29 なる 鳴る 《ーッ・ーリ・ール》

一217 園 うたをうたえば、くつがなる。

一237 園 「くつがなる」では、あしぶみをしました。

一2310 園 「はれたおそらくくつがなる」では、てをうえにさしあげました。

二215 園 しまいまでみていたいとおもいましたが、かねがなつたので、やめてきました。

四709 こころは、ふればなる。

四777 お——おにさんこちら、手のなる方へ。

五794 チョロチョロ、ひくく鳴ったり高く鳴ったりしています。

五794 ひくく鳴ったり高く鳴ったりしています。

五795 おなじところで、いつまでも高く鳴っています。

七5011 「ピー」と、用意のふえが鳴った。

七515 ふえがまた「ピー」と鳴って、しあいのはじまった。

七526 「ピー」と鳴った。

八7310 「ポン、ポン」と、空で鳴った。

八741 「ポン、ポン」と、また鳴った。

九117 ドンドンドンとなる大だいこの音は、

九5010 がけの中ほどに、小さなあながあいていて、

そこから水がふえのように鳴ってとびだし、

九551 草は風にザワザワ鳴り、

九731 やまねこのじんばおりが、風にバタバタ鳴りました。

九848 先生のふえが鳴りました。

九864 ピリピリッとふえが鳴りました。

十一114 「ピリピリ」と、ふえが鳴って、ふいに一そのボートが近づいてきた。

十一134 おりから、港の方でふえが鳴る。

十一366 園 ひと日のあせもおさまって、夕風ふけばたいこ鳴り、

十一733 半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。

十二186 園 ははあ、これが鳴るんだなと思ってやっているうちに、

十三3510 早春になると、はとぶえが天から鳴ってきて、ホートンをにぎわわせる。

十三3512 はとにふえをむすびつけてとばすのであるが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。

十三375 電話のベルが鳴る。

十四686 そうして、ひょうが降ったり、かみなりが鳴ったりします。

なるべく (副) 4 なるべく

七914 なるべく、こくるいをやるようにして、ぬれた草はやらないように注意しています。

九2110 なるべく早く南のあたたいところへ運ぶために、飛行機をつかうことにしました。

九564 いちろうは、きみがわるかったのですが、なるべくおちついてたずねました。

十122 園 なるべく、小さな葉をくれませんか。

なるほど [成程] (副) 7 なるほど

六791 ごろうは、息をすることも自分の力ではないことをきいて、なるほどと思いました。

七833 園 それで、このらくだはどこからにげて

きたのではないかと、思ったのです。」裁判官「なるほど。」

七837 園 道のかたがわの草ばかりたべてあつたからです。」裁判官「なるほど。」

九687 やまねこは、なるほどというようにうなずいて、

九1074 のだ先生がつえでさされる方を見ると、なるほどりっぱなスキー場で、

十526 よそのおばさんが、あかちゃんをおんぶして、そばを通りました。みると、なるほど、「アカチャン ネテルワ」でした。

十一625 園 なるほど、よわ虫だ。

なれる [可能] (下) 3 なれる 《ーレ・ーレル》

八763 しかし、かわいそうにあひるの子は、おきあがる氣にもなれなかった。

十四122 園 もしこわれたら、そちらでわけなくかわりをお見つけになれるでしょう。

十四598 園 ほかのことはわすれても、この土のこととは、かたときもおわすれにれないでしょう。

なれる [慣] (下) 5 なれる 《ーレ・ーレル》

↓ききなれる・すみなれる・つかいなれる・みなれる・よびなれる

八66 だんだんなれて、指さきへもかたへもとまるようになったばかりか、頭の上にも乗り、

九415 園 だんだんたき木とりになれたのと、

十一477 みんなちちうしで、ぼくによくなれていった。

十四87 園 どうしてもなれることのできないことがあるとしたら、それは、おかあさんがかなしがっていらつしゃるということです。

十四228 園 それが長い間つかっているうちに、

すっかりなれてしまつて、日本語になつた

なわ 〔繩〕(名) 6 なわ 〆あさなわ・しめなわ

二369 〔會〕 そうは、なわそっくりだ。

一183 道で子どもたちが、なわとびをして遊んでいたりしますと、そのなかまいりをして、なわをまわしてやったこともありました。

一1258 夜になると、また、なわをなったりわらじを作ったりしました。

一15348 それで大昔には、なわを結んで、その結びかたや、なわの色や、なわの太さなどによって、いろいろな考えを表わした。

一15348 その結びかたや、なわの色や、

一15349 なわの太さなどによって、

なわしろ 〔苗代〕(名) 3 なわしろ

一8949 こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるといふことです。

一8962 はんごになわしろをきめ、そのさかいにしるしをつけました。

一8991 なわしろからとつたなえをみんなでわけました。

なわとび 〔繩跳〕(名) 1 なわとび

一182 道で子どもたちが、なわとびをして遊んでいたりしますと、そのなかまいりをして、

なわめ 〔縄目〕(名) 1 なわ目

一121002 土器には、なわ目のようがあるので、じょうもん式土器といふ。

なん 〔何〕(代名) 135 なん

一166 なんでしょう。

一194 〔鯛〕 なんのはなひらいた。

一202 〔鯛〕 なんのはなつぽんだ。

一524 〔會〕 これはなんという川だろう。

二459 〔會〕 これはなんですか。

二4510 〔會〕 さあ、なんだろう。

三2710 〔會〕 なんという早いふねだろう。

三284 〔會〕 いや、ふしぎでもなんでもない。

三685 〔會〕 風はなんていつてるの。

三7010 〔會〕 なんだかつまんでみよう。

四228 〔手〕 なんのえか、あててごらんさい。

四288 いま、わたくしがしたいと思うことは、なんだろう。

四351 〔略〕「こまでいわれても、まだ、なんのことだかわかりません。

四539 がんたちには、この風がなんともいえないいい氣もちでした。

四698 ゆうだちと かけて、なんととく。

四704 ラジオと かけて、なんととく。

四707 すずと かけて、なんととく。

四710 『い』の字と かけて、なんととく。

四714 『ろ』の字と かけて、なんととく。

四1158 〔會〕 なんのおかまいもできませんでした。

四1217 光っている、ほそい糸のようなものはなんでしょう。

四1279 〔會〕 あれはなんだろう。

五336 船は、なんの力で走るのでしょう。

五345 この工場のきかいを動かしている力は、なんでしょう。

五624 あやこは、なんとこたえていいのか、わからなくなつてしまいました。

五6711 〔會〕 なんの用ですか、おじいさん。

五694 〔會〕 なんの用ですか、おじいさん。

五733 〔會〕 なんの用ですか、おじいさん。

五763 〔會〕 なんの用ですか、おじいさん。

五946 〔會〕 これ、なんのひなだろう。

六63 あれはなんの役にたつのだろう、

六66 〔會〕 なんという小さい、なさけない自分であらう。

六611 〔會〕 ただ自分だけがこのように小さくて、なんの役にもたそうにない。

六711 〔會〕 なんというなさけない身のうえであらう。

六384 〔會〕 おかあさん、なんでしょう。

六4410 〔會〕 なんだろうな、それ。

六5710 どうぞ、みなさんの氣づいたことは、なんでも、かかりのものにお知らせください。

六7611 〔會〕 なんだい、ごろくんは。

六804 〔會〕 なんだ。

六878 〔會〕 なんのごてんですか。

六912 〔會〕 なんだね。

六1032 〔會〕 なんです、まさおさん。

六1034 〔會〕 なんでもいいから、きてください。

六1092 では、なんという音が、はなから声の音なのだろうか。

六1103 なんでも、「ナ」や「ノ」のつくことばがあつたら、「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。

六11711 〔會〕 なんの絵をかこうか。

六13410 角をとつたところで、なんになりましょう。

六1365 なんだ、このぶどうのつるめ。

六1375 〔會〕 なんだと、ひとをばかにしている。

七199 〔會〕 先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。

七276 〔會〕 なんでも、自分でみつけていきましょうね。

七709 なんの木の花だろう。

七7510 〔會〕 なんですか。

八54 大ぜい人が立っているのです、なんだろうと、のぞいてみると、

八164 おいで知るか、なんで知るか、  
 八198 なんという氣長なことでしょう。  
 八297 ④ あなたの名はなんといひますか。  
 八361 夜になって天の川をみると、なんともいえない大きなふかい感じにうたれます。  
 八422 「略。」とおっしゃいましたが、王女はなんの返事もしません。  
 八469 金もあり、からだもりっぱで、なんの不自由もなくくらししているかと思うと、  
 八6710 ④ なんというかつこうだろう。  
 九644 ④ なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。  
 九656 なにがなんだか、まるではちの巣をついたように、わけがわからなくなりました。  
 九659 ④ やかましい、ここをなんと心える。  
 九665 ④ なんといったって、頭のとがったものが、いちばんえらいんです。  
 九669 ガヤガヤ、ガヤガヤ、また、なにがなんだかわからなくなりました。  
 九6611 ④ ここをなんと心える。  
 九678 ④ ここをなんと心える。  
 九831 ④ おや、これはなんだろう。  
 九959 ④ なんだっというじゃないか。  
 九967 ④ なんだ。」と立ちどまる。  
 九9711 ④ 「おい。」たかぎ「なんだ。」  
 九1110 ④ 両手をひろげて高くとばれるすがたは、なんという勇ましさであろう。  
 九1366 ④ なんだ、なんの用かね。  
 九1368 ④ なんだ、なんの用かね。  
 九1368 ④ なんだ、なんの用かね。  
 九1439 ④ くもは、なんといひ返事をしていたからないので、そのままだまっていた。

十304 なんでも、そのもとのことをしらべていくような心がけを、もちたいと思います。  
 十354 ④ かれは、そのりっぱな機械をみて、感心するとともに、なんともいえないかた身のせまい思いがした。  
 十385 しらべてみると、けっして、ふしぎでもなんでもないものであった。  
 十483 道ばたにあるものを、なんでもみつけて、  
 十4910 よその人には、なんのことか、おそろくわからないでしようが、  
 十622 風がふいて、ガサガサ音がしたから、なんだろうと思って、二階の窓からそとをみたら、  
 十655 よわい人間のしそうなことを、なんでもやります。  
 十一811 ④ きみはなんでもよくわかつている。  
 十一219 しかし、なんといひても子どもです。  
 十一595 ④ なんといひことばですか。  
 十一653 ④ おとうさんの名はなんといひの。  
 十一709 ④ なんとかひとこといつてください。  
 十一9210 名をなんと呼ぼうかと思っているうち、  
 十二58 人々は、なんのためにこんなことをいひだしたのかと思ひながらやってみましたが、  
 十二511 このときコロンブスは、コッソリとたまごのはしをテーブルにうちつけて、なんの苦もなく立てていました。  
 十二512 ④ みなさん、これも人のしたあとでは、なんのどうさもないこととごさいましよう。  
 十二75 道灌は、その花の枝を手にはしましたが、なんのことだかその意味がわかりません。  
 十二343 ④ なんのことともわからないままに、私は、「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさんのごとばをつづることを覚え、

十二553 ④ 自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。  
 十二602 ④ 長者は、なんと思つたか、なん千アールの田をきよう一日で植えてしまえといひつけた。  
 十二624 ④ そののちは、だれがなんとも頼んでも、かしてくれなくなつたという。  
 十二681 のこぎりののはは、いつも「略」右と左によじつておかなく、なんの役にもたない。  
 十二971 次の写真帳は、なんの写真帳でしょうか。  
 十二975 みたところ、なんのかわりもない貝ですが、いまから三千年もまえの貝です。  
 十二11011 黒うるしの中に、銀や貝が光をはなっているのは、なんともいえない美しさです。  
 十三277 ④ 一見、なんのかわつたところもないような、このホートンではあるが、  
 十三3212 なんといひても、いちばん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であらう。  
 十三3312 青みがかった明かるい夜空に、なんきんだまのような星がばらまかれて、一つ一つがかがやく美しさは、なんといひたらよからう。  
 十三413 ④ なんでもあるよ。  
 十三596 ④ なんといひるか、ただのおかあさんではなくて、キリストのおかあさんという感じが、  
 十三613 ④ なんといひても、「略」、りっぱな作品をたくさんのかしたのはいえらう。  
 十四191 ④ では、バケツやカーテンなどは、日本語で、なんといひていたんでしよう。  
 十四1910 ④ それではなんだろう。  
 十四3011 ④ なんでも日本、日本と、日本だけが特別の國でもあるかのように考へて、  
 十四359 ④ まあ、なんといひしげさでしよう。  
 十四3510 ④ なんといひ美しさでしよう。

- 十四3510 なんというおごそかなすがたでしょう。  
 十四377 人間がだいいちにしなければならぬことは、なんであるかということも、  
 十四448 心太陽をもて、そうすりや、なんだつてふつとんでしまふ。  
 十四4710 こんなきけんのせまつた中で、なんというおちついた、またなんというほがらかな人だろう。  
 十四4711 またなんというほがらかな人だろう。  
 十四587 水がなかったら、なんでもすぐ、かれたり死んだりしてしまいます。  
 十四624 ただそれだけでは、なんのおもしろみもなく、ふしぎもないようですが、  
 十四6511 せんこうのけむりでもなんでも、《略》いくらかの高さまでは、まっすぐにありますが、  
 十四7310 このふしぎなものがなんであるかということは、《略》よくわかっていないようです。  
 十四8810 雪國でいちばん楽しいものは、なんといつても、春さきの雪どけごろである。  
 十四952 まあ、なんといううれいことだろう。  
 十四968 それがゆらゆらともえあがると、まあ、なんというふしぎなことだろう。  
 十四9812 かがやく小さな星よ、おまえはいったいなんだろうか。  
 十五229 なんでしょう。  
 十五513 しかしなんといつても、日本の古い美術に対する愛着がふかく、  
 十五543 いまその大先生にお会いすることができた私は、なんというしあわせ者であらう。  
 十五7011 手紙でもなんでも赤インキで書かなくては見えないようにおなりになったのですよ。  
 十五744 自分の子女は、《略》、かわいいことはみ

- なじりであつて、そこになんのけじめもない。  
 十五932 なんだつて。  
 十五1053 このらんぼうなやつ、いったいなんだい。  
 十五11011 それに、このきれいな着物は、まあ、なんでこしらえたの。  
 十五1218 それはなんともいえない、せつない気持ちであつた。  
 なんか「何」(副助)12 なんか  
 二328 わたしたちはめくらだもの、みることも  
 なんかできないよ。  
 五295 一つは大きくて、ぼくなんか、とても  
 持てそうもない物、  
 五703 わたしは、ひやくしようなんか、もういやになったから、  
 六747 風なんかも。「あれはちがいますよ。  
 六1102 弟のまねなんかわけはないぞと思った。  
 六1313 ぼくはきつねに追われてなんかいやしな  
 いんだ。  
 七328 あかんぼのくせに、ひげなんか。  
 八714 おまえなんかは、ねこにくわれてしまえばいい。  
 九706 お礼なんかいりませんよ。  
 九9010 だれがきみなんかと遊ぶもんか——  
 九916 どうしてけんかなんかしたのさ。  
 十四4712 自分なんか、およいでいるだけがせいぜいなのにな、  
 なんかい「何回」(名)2 なん回  
 十四806 それは、なん回もなん回も、あるいは、  
 なん代もなん代もやってみた結果、とうとう一つの眞理だと思われたので、  
 十四806 それは、なん回もなん回も、

- なんきんだま「南京玉」(名)1 なんきんだま  
 十三3311 青みがかった明かるい夜空に、なんきんだまのような星がばらまかれて、  
 なんじかん「何時間」(名)1 なん時間  
 八763 なん時間もたつてから、ようやくあたりをみまわし、  
 なんじゅう「何十」(名)2 なん十  
 三233 まいあさ日がでると、この木の西がわのなん十という村々が、日かげになります。  
 三235 ごこになると、東がわのなん十という村々が、日かげになります。  
 なんじゅうにん「何十人」(名)1 なん十人  
 三262 なん十人、なん百人というきこりが、切りはじめました。  
 なんじゅうねん「何十年」(名)1 なん十年  
 十五511 祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年の月日をへだてて、いま、まごたちによつてふたび結ばれることになった。  
 なんじゅうメートル(名)1 なん十メートル  
 九3710 なん十メートルもある高いすぎやまつのはえているところは、晝でもうすぐらく、  
 なんぜんアール(名)2 なん千アール  
 十二602 長者は、なんと思つたか、なん千アールの田をきょう一日で植えてしまえといつた。  
 十二613 なん千アールのあの美しい田さえなく、  
 なんぜんなんまん「何千何万」(名)1 なん千なん万  
 八332 天の川は、なん千なん万という星がかざなりあつて、  
 なんぜんにん「何千人」(名)1 なん千人  
 七98 なん百人の子どもの顔、なん千人の子どもの心。



なんぜんねん 「何千年」(名) 1 なん千年

四〇三 〇 〇 〇 わたくしがこの世に生まれてくるま

では、なん百年も、なん千年も、人々は不自由な思いをしました。

なんだ 「何」(感) 5 なあんだ なんだ

一五三 〇 〇 〇 なんだ、みんなうさぎさんじゃないか。

五五三 〇 〇 〇 なんだ。あんな小さいの。

六〇四 〇 〇 〇 「なんだ」というかわりに、「ダンダ」といってみると、

九三八 〇 〇 〇 なんだ。ちょうちよか。

一七〇 〇 〇 〇 「なあんだ、さとうだ。」

なんだい 「何代」(名) 2 なん代

一四八〇 〇 〇 〇 それは、なん回もなん回も、あるいは、なん代もなん代もやってみた結果、とうとう一つの真理だと思われたので、

一四八〇 〇 〇 〇 なん代もなん代もやってみた結果、

なんだい 「難題」(名) 1 難題

一二五七 〇 〇 〇 村の人たちは困りはて、おにに向かって、一つの難題をもちだした。

なんだか 「何」(副) 15 なんだか

五〇二 〇 〇 〇 きゆうにあたりが美しくなると、私は、

なんだか、ぼんやりするほどたのしい氣がします。

五五五 〇 〇 〇 なんだか、青い、青い水の中にういているようだ。

七三六 〇 〇 〇 なんだか、まわりがすこしゆるやかになり、からだがらくになったような氣がしました。

七五三 〇 〇 〇 なんだか、向こうのせんしゅは、大きくて強そうだ。

八八九 〇 〇 〇 なんだかかないしい思いがこみあげてきた。

九一七 〇 〇 〇 さあ、なんだかへんですね。

九七三 〇 〇 〇 そうして、なんだかねずみ色のおかしな私たちのうまがついています。

九〇一 〇 〇 〇 なんだか、いま考えるとほずかしい氣持さ。

九三七 〇 〇 〇 なんだか、わたしも、おかあさんをみたくなったよ。

九四〇 〇 〇 〇 けれども、なんだか氣がすすみません。

一一六二 〇 〇 〇 なんだか氣まりがわるくて、そういえなかったのです。

一一七六 〇 〇 〇 病人がなんだかうれしそうに

一四四六 〇 〇 〇 なんだか、すうつといひ氣持になつて、

一五二二 〇 〇 〇 みんなの頭の上が暗くなつて、なんだか大きなあらしがふき起つたような音がしました。

一五八五 〇 〇 〇 なんだか、あの人たち、こつちを見ただよう。

なんて 「何」(副) 9 なんて

六三二 〇 〇 〇 なんてらんぼうな風なんだろう。

六三二 〇 〇 〇 うさぎたちは、なんてひとがいいんだろう。

一五八四 〇 〇 〇 なんてきれいなおかしでしょう。

一五九四 〇 〇 〇 おやおや、なんてみつともないざまだろう。

一五九四 〇 〇 〇 やあ、なんてきれいなところだろう。

一五九五 〇 〇 〇 なんてたくさいるのだろう。

一五九七 〇 〇 〇 まあ、なんてかわいらしいのだ。

一五九七 〇 〇 〇 なんてかわいらしいほつべたをしているのだろう。

一五九七 〇 〇 〇 なんてかわいらしい服を着ているのだろう。

なんて (格助) 3 なんて

六三三 〇 〇 〇 勝つたものになにもないなんて話はない。

一七四 〇 〇 〇 『こんにちば。』なんていったって、だれもわかるものがありません。

一三三九 〇 〇 〇 だって、おばさんたら、お客さんなん

ておっしゃるんだもの……

なんて (保助) 9 なんて

五八〇 〇 〇 〇 こんなおけなんて、とくにもならない。

六八四 〇 〇 〇 朝から一びきもつれないなんて——おや、ひく、ひく。

六八五 〇 〇 〇 だいいじなつりばりをなくしてしまふなんて。

九三三 〇 〇 〇 南へいったなんておかしいなあ。

一四四 〇 〇 〇 あみをほり、かくれていて、ほかの虫がひつかかると、いきなりとびついてかみころすなんて、なんとひどいことをしてきたものだろう。

一三三八 〇 〇 〇 ごちそうなんてたくさん。

一四九七 〇 〇 〇 かなしみのために、おからだをおいためになるなんて、どうあつても考えのたりないことです。

一四五九 〇 〇 〇 しかし、土にはえていないかぼちゃんて見たことがない。

一五九九 〇 〇 〇 ここにいる子をだれも知らないなんて、そんなことあるのですか。

なんで 「何」(副) 3 なんで

九〇一 〇 〇 〇 いったい、なんでけんかをはじめたんだろう。

一四四四 〇 〇 〇 そうして、なんでこんなにほがらかで

いられるのか、それを、こう話してやるのだ。

一五一一 〇 〇 〇 でも、なんで、あんなに顔をかくしているの。

なんでも 「何」(副) 1 なんでも

一五九〇 〇 〇 〇 なんでも、たべてはうまくない鳥だそうじゃないですか。

なんてん 「南天」(名) 1 なんてん

一二七六 〇 〇 〇 なんてんの実が、赤く、うさぎの目らしくいれてありました。

なんと「何」(副) 13 なんと

四1273(会) なんとまあ、いいけしきだろう。

八810 なんととりこうな、土地にかんけいのふかい鳥だろうと、

九1429(会) なんとみじかいゆめだろう。

九1446 ちょうちよにしても、ばらの花にしても、

なんとしずかなくらしをしているのだろう。

九1447 なんとおだやかなくらしをしているのだろう。

九1448 それにくらべて、自分は、なんとあらったば

いくらしをしていることだろう。

九14411 なんとひどいことをしてきたものだろう。

十1310 なんとかわいらしい子どもたちではありま

せんか。

十5511 なんと、わけもなく、すらすらと書いてい

ることでしよう。

十二3911 こんなりっぱな文章が書けるということ

は、なんとすばらしいことではありませんか。

十二1136 なんとかわいい汽車ではありませんか。

十四398(会) なんとさわやかな夜明けだろう。

十四904(会) なんと暗い、寒い夜だろう。

なんと「何度」(名) 11 なんと

四1008 かめは、手で なみだを ふきながら、なん

ども おじぎを します。

六307 なんどもお礼をいってたちさります。

七75(会) なんども手をふりながら、先生にさよう

ならをして走って帰る子ども。

九337(手) 黒くてひらいたい貝がとれますので、なん

ども湖に近い川しもの方へとりいきました。

九14210 くもは、いまみたばかりのゆめを、なんと

もなんども思い返しました。

十403 同じことをなんどもくり返してみたところ

で、かわりのあるはずはない。

十411 「略」。こういって、失望にせずむ幸吉

を、なんどもはげました。

十514 「ハイ」「ハイ」と、なんどもくり返しま

した。

十二818 なんどもコートでたおれました。

十二938 文を書くときには、よく手をいれること

もできるし、なんども書きなおすことができる。

なんと「南東」(名) 1 南東

五539 それは、南東の空で光っていました。

なんと「何」(副) 10 なんと

二95(会) なんとかして、そろえる ことはでき

ません。

三239(会) なんとかならないものかなあ。

六286(会) ふたりでたのめば、なんとかなるだろう。

八472 王子も、なんとかして父の病氣をおした

いと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

九1216 なんとかしてうまい水のわきでる泉をさが

しだしたのと思った。

十一1912 なんとかして、からだをじょうぶにして、

身代をもとのようにしたいものだ、

十一719(会) そうすれば、おとうさんのようすもな

んとかわかるだろう。

十二249 民ちゃんをなんとかして早く歩くように

してやりたいのです。

十二405 両親は、なんとかして、すこしでももの

のわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

十五6212(会) なんとかしなければ、おみこしはあが

りませんよ。

なんとなく「何無」(副) 2 なんとなく

十二219(会) さくろさんが、來年とか、さ來年とか、

それからもつとさきのことをおっしやったりする

と、なんとなくさびしくなります。

十二317 この日の午後、私はなんとなくものを待

つ氣持で、じつとげんかんにたたずんでいました。

なんにち「何日」(名) 1 なん日

七253(会) たまごをとってしらべてから、なん日ほ

どたっているかしら。

なんにも「何」(副) 14 なんにも

六254 ありはなんにもいわないで、おもい足どり

でかみてにさつていきます。

九8010(会) あっちこっちほつてみて、なんにもみつ

からないと、だめだと思つてやめてしまふ。

九818(会) 「なんにもないぞ。」

九849(会) わたしは、なんにも説明しなかったが、

九1392(会) あなたが、この四五日、なんにもたべな

いことをちゃんと知っています。

十一732 看護婦は、ほかにはなんにもいわずに

いつてしまいました。

十五327 血まなこになって目の前のてきを相手に

しているものには、なんにも耳にはいりません。

十五8712(会) 『なんにも知らないという幸福』で、

十五882(会) 『なんにもわからないという幸福』は、

こうもりのように目が見えない。

十五883(会) 『なんにもしないという幸福』と、

『必要以上になむるという幸福』でね、

十五1015(会) あなたは、やっぱり、なんにも知らな

いのですね。

十五1023(会) でも、ぼくたちがなにをしていても、

あなたには、なんにも見えないし、なんにも聞え

ないんだなあ。

十五1023(会) なんにも聞えないんだなあ。

十五1126(会) 人間というものは、目を閉じていると、

なんにも見えないのだからね。

なんにん「何人」(名) 2 なんん

三105 さいごまで どうしても あきらめない人が、なんんかのこりました。

十四48 一本の大きなまるとに、なんんかの婦人がつかまって、立ちおよぎをしていました。

なんねん「何年」(名) 5 なんん

三22 5 なんんか たつうちに、

三27 1 なんんか かかって、とうとう 一そうのふねができました。

十四10 うめは、いつも「略」幸吉をかばい、苦しみにたえて、なんんかをすこした。

十二19 9 なたしはなんん年もなんん年も生きていますからね。

十二19 9 なたしはなんん年もなんん年も生きていますからね。

なんの「何」(感) 1 なんの

十五97 12 なんの、ここだって、どこだって、やはり、お金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

なんびやくにん「何百人」(名) 2 なん百人

三26 2 なん百人、なん百人というきこりが、切りはじめました。

七97 9 なん百人の子どもの顔、なん千人の子どもの心。

なんびやくねん「何百年」(名) 2 なん百年

四102 2 わたくしがこの世に生まれてくるまでは、なん百年も、なん千年も、人々は不自由な思いをしました。

十四80 2 なん百年という前からつくられて、子にまごにと傳えたことではないかと思ひます。

なんびやくキロ (名) 1 なん百キロ

九18 5 なん百キロの海をひといきにとぶのも、

けつしてふしぎではありません。

なんべん「何遍」(名) 3 なんべん

六45 2 2 『さようなら。』とか、『ありがとう。』とか、なんべんもなんべんもさげんでいたよ。

六45 2 2 なんべんもなんべんもさげんでいたよ。

十三40 12 なんべんもくり返して読んだよ。

なんぼん「何本」(名) 1 なん本

十一4 7 川上の方をながめると、近くの町の工場

のえんとつが、なん本も立っているのがみえる。

なんメートル (名) 1 なんメートル

十四67 7 たつまきのようなものになって、地面からなんメートルもある、高い柱の形になり、

なんよう「南洋」(名) 2 南洋

九17 9 南洋の島々から、さらに海をこえて、遠いオーストラリアまでいくのがあるということです。

十四5 5 今日、眞珠の産地は、「略」、オーストラリアや南洋の島々であるが、

## に

に (課名) 30 二

一2 3 二 なのはな……………六

一6 1 二 なのはな

二2 3 二 えにっき……………十二

二12 1 二 えにっき

三2 3 二 花まつり……………九

三9 1 二 花まつり

四2 3 二 にわとり……………十四

四13 6 二 にわとり

五2 3 二 私の旅……………八

五8 1 二 私の旅

六2 3 二 イソップものがたり……………十三

六13 1 二 イソップものがたり

七2 3 二 手ということば……………十一

七11 1 二 手ということば

八2 3 二 あぶらぎ……………十四

八14 1 二 あぶらぎ

九2 6 二 音というもの……………十

九10 1 二 音というもの

十2 3 二 ことばの愛……………七

十7 1 二 ことばの愛

十一2 3 二 めいめいの歌……………十二

十一12 1 二 めいめいの歌

十二2 3 二 写生……………十三

十二13 1 二 写生

十三2 3 二 眞理……………八

十三8 1 二 眞理

十四2 3 二 外國からきたことば……………十八

十四18 1 二 外國からきたことば

十五2 10 二 大わしに乗った話……………十九

十五19 1 二 大わしに乗った話

に (二) (話手) 3 二

九89 2 二「まだやるのか。」たかぎ「やるとも。」三「よせよ。」

九90 4 二「たかぎくん、帰ろうよ。」

九91 9 二「もういいじゃないか、そんな話——たかぎくん、いこうよ。」

に (題名) 35 (二)

一44 6 (二)

二8 4 (二)

二17 4 (二)

二26 7 (二)

七七八 3 金 その荷は麦でしよう。  
十三二九 10 これも、いろいろな道具を入れた荷をか  
ついでいる。  
十三二九 11 前の荷の上に、小さなどらをぶらさげ、  
その両がわに、ふんどうをつるしておく。  
十三二九 12 歩いて行くと荷がゆれて、しぜんにふん  
どうがあたつた。  
に (格助) 474 ニ に 下に かに・いちじに・いちど  
に・いっきよに・いっさんに・いっしんに・いっぺ  
んに・いまに・いまにも・おうちにいるこうふくど  
も・おおいに・おおわしにのったはなし・おまけ  
に・おもに・かりに・くちびるにうたをもて・ここ  
ろにいきていることば・ここにたいようをもて・こ  
ころみに・ごじゅんに・ことに・さらに・じか  
に・しきりに・しだいしだいに・しだいに・じつ  
に・じやがいもをつくりに・じゅんじゅんに・しん  
に・すでに・そくざに・それだけに・それに・ため  
しに・ついに・てんでに・どうにかこうにか・とき  
に・ときには・とくに・とつくに・とともに・とも  
に・はるをわかえに・ひとりでに・ひにひに・べつ  
に・ほんとうに・ほんとに・ほんに・まことに・ま  
さに・まさにたつべし・まにあう・みるみるうち  
に・めつたに・ゆめにも  
一八八 8 金 そのてをうえに。 四 たまいれし  
一四六 6 金 いたま。「かごにはいったたまを  
一四八 8 金 えましよう。さきに、しろいたまをか  
一五二 2 金 き じをよむときには、くちをつかい  
一五六 1 金 す。 じをかくときには、てをつかいま  
一五八 4 金 あした てんきになあれ。 うさぎ、  
一五九 7 金 たら、みるまにつぼんだ。 つぼ  
一六〇 5 金 たら、みるまにひらいた。 十ゆ  
一六二 5 金 かわいい ことりになつて、 うたを

23 2 ㊦ かわいいことりになって」のところ  
 23 5 ㊦ たえば」では、くちにてをあてて、らっ  
 23 9 ㊦ 「はれたおそらにくつがなる」では  
 23 10 ㊦ 「では、てをうえにさしあげました。  
 30 6 ㊦ るく、はしる。ほかにありませんか。こ  
 34 2 ㊦ いもの「なになにでもなることが  
 34 3 ㊦ だおさんは、なにになってみたいと  
 34 4 ㊦ 「略」。「かぜになります。」「略」  
 34 5 ㊦ へ。「なぜ、かぜになりたいとおも  
 34 7 ㊦ へ。「略」。「かぜになって、どこでも  
 35 1 ㊦ ちこさんはなにになりますか。」「略  
 35 2 ㊦ わたくしははなにになります。」「略」  
 35 4 ㊦ 「きれいなはなにになって、おへやを  
 35 7 ㊦ 「略」。「うみになります。」「略」  
 36 1 ㊦ 「略」。「うみになって、せかいじ  
 36 4 ㊦ 「略」。「ことりになります。」「略」  
 36 6 ㊦ 略」。「たかい木にとまって、うたを  
 39 2 ㊦ が、いつつかきねにさきました。ゆめ  
 39 5 ㊦ とうさんときしゃにのって、お月さん  
 42 1 ㊦ んせいの目のなかに、わたしがいます  
 43 4 ㊦ に (一) よなかに目をあけると、お  
 43 5 ㊦ おとうさんがそばにたっていました。  
 44 7 ㊦ りはいそいでえきにきました。」「略  
 47 10 ㊦ いた四かくなかみに、まるいおおきな  
 49 1 ㊦ かけました。へやには、きれいなほな  
 51 2 ㊦ くものとんねるにはいます。みな  
 52 6 ㊦ ら、ところどころに、おおきなほしが  
 53 2 ㊦ さんのおみやげにしたいな。」と、わ  
 53 10 ㊦ ただのいしころになってしまします  
 54 3 ㊦ くにでは、一ねんに一どたまひろい  
 54 3 ㊦ 一どたまひろいにこのかわらにき  
 54 4 ㊦ いにこのかわらにきます。そうして、

54 5 ㊦ のくにのなかにいれてもらえます  
 54 9 ㊦ た。「そんなときには、はなれぼしに  
 54 9 ㊦ には、はなれぼしにあるがっこうに  
 54 9 ㊦ にあるがっこうにはいって、べんき  
 55 8 ㊦ へ。」「略」。「ここにもっています。」「  
 56 2 ㊦ りだして、わたくしにみせました。(八  
 56 8 ㊦ た。まどのところに、みおぼえのある  
 57 3 ㊦ なわたくしのうちにいたきようだいで  
 59 5 ㊦ はなばたけのなかにありました。おじ  
 60 3 ㊦ あなたのおうちにおいでいただいた  
 60 4 ㊦ は、げんきなこになりました。びよ  
 60 5 ㊦ いずきないこになりました。はね  
 60 6 ㊦ りいういいこになりました。まき  
 60 8 ㊦ い、やさしいこになりました。おか  
 61 2 ㊦ んじです。ここにいますのは、みん  
 61 6 ㊦ れをたろうさんにさしあげます。ど  
 61 7 ㊦ さんのおみやげにしてください。」「  
 61 9 ㊦ ただのいしころになってしまわない  
 62 3 ㊦ どなたがおもちになっても、たまは  
 62 4 ㊦ て、わたくしの手にたまをおしつけま  
 62 6 ㊦ へ。(十一) よるになると、おどりが  
 63 8 ㊦ いました。おんがくにつれて、みんなが  
 64 1 ㊦ くしも、わのなかにはいって、おほな  
 64 5 ㊦ 「わたくしは、そこにあったこしかけに  
 64 5 ㊦ にあったこしかけにもたれて、うとう  
 65 4 ㊦ さんのおみやげにいただいたの。」「へ  
 65 7 ㊦ なたの目のなかにふたつひかて  
 65 9 ㊦ くしをひざのうえにだきあげてくれま  
 8 5 ㊦ (二) つぎの日に、「い」のつくこ  
 8 9 ㊦ めました。おしまいに、「お」のつくこ  
 9 3 ㊦ が、それをごらんになって、「略」。  
 9 7 ㊦ 略」。」とおたずねになりました。みん

10 1 ㊦ うでないものにと、わけたらいいと  
 10 5 ㊦ のほかのものにと、わけたらいいと  
 10 9 ㊦ だしさんは、「目」にみえるものと、み  
 10 9 ㊦ みえないものにと、わけたらいいと  
 11 2 ㊦ かんがえどおりに、わけてごらん  
 11 4 ㊦ なは、小さなかみに、ひとつひとつ  
 11 6 ㊦ のかんがえどおりにわけてみました。  
 11 7 ㊦ わけているうちに、そのわけかたが、  
 13 6 ㊦ いました。おさらにのせてかざりまし  
 14 1 ㊦ ふりました。にわに川ができました。  
 15 4 ㊦ は、どうしたらえにかくことができ  
 16 4 ㊦ しました。はじめにしりとりをしまし  
 18 4 ㊦ へ。」「しゅうかんに一ど、赤いきもの  
 18 7 ㊦ 略」。「いちにちに二へんあるのに、  
 19 1 ㊦ るのに、いちねんに一ぺんしかない  
 19 2 ㊦ 略」。「いるときにいらなくて、いら  
 19 2 ㊦ へ、いらないうきにいらるものはな  
 19 6 ㊦ 「(二) おわりに、ひとりがあった  
 23 4 ㊦ さも、ゆりの花にきていましたよ。  
 24 3 ㊦ ろこしのはつばに、じつとぶらさが  
 24 7 ㊦ 「先生、でんせんに、つばめがたくさ  
 25 2 ㊦ はなし じゅんばんに、おはなしをして  
 26 1 ㊦ し。」「あるところに、川がありました。  
 26 4 ㊦ りが、くつの中にはいました。『へ  
 28 4 ㊦ ました。そのうちに、二ひきとも、どぶ  
 29 2 ㊦ なむこうのきしにきました。きし  
 29 3 ㊦ つきました。きしにあらがってから、か  
 29 5 ㊦ し。一ばんはじめに、ぶうちやんがか  
 32 3 ㊦ し。」「あるところに、六人のめくらが  
 34 2 ㊦ ぞうというものに、さわらせてくれ  
 34 5 ㊦ らが、ぞうつかいにたのみました。ぞ  
 34 9 ㊦ そるぞうのそばによってきました。

二35 4 会 は、ぞうのきばにさわって、こうい  
 二35 7 会 は、ぞうのはなにさわって、『略』  
 二35 10 会 のめくらは、耳にさわって、『略』  
 二36 1 会 、大きなうちわににているよ。』と  
 二37 5 会 くにごかいの山に、ゆきがふつてい  
 二42 2 会 、だれかがばかにするんだもの。』お  
 二45 10 会 だろう。手の上にごむまりをのせて  
 二47 8 会 きます。『略』。』手に大きなりんごを  
 二48 8 会 して、じろうの手にわたします。『略』  
 二49 7 会 とびまわります。上にながてはうけ、う  
 二49 8 会 うけ、うけては上にながて、よろこび  
 二50 6 会 なりんごをさちこにわたします。『略』  
 二51 3 会 をだいたり、ほおにつけたり、おどつ  
 二52 2 会 おかあさんが、いすにこしかけて、本を  
 二52 7 会 おかあさんのそばにかけよります。太  
 二52 8 会 んごを、おかあさんにあげます。おかあ  
 二52 9 会 いて、りんごを手にうけとりまします。け  
 二53 2 会 ども、またさちこに、りんごをかえし  
 二53 4 会 、またおかあさんにあげます。とうと  
 二53 9 会 、じろうにいさんにいただいたの。』こ  
 二54 7 会 おかあさんのよこに、三人が立ちまします。  
 二55 3 会 ー ゆうべ、ねどこにはいつてから、こ  
 二55 5 会 えましました。わたくしには、おとうさんも  
 二55 7 会 とうさんは、おいでになりまません。いま  
 二55 7 会 ん。いまはおいでになりまませんが、ま  
 二55 8 会 なりまませんが、まえにはおいでになった  
 二55 8 会 、まえにはおいでになったにちがい  
 二55 8 会 はおいでになったにちがいありません  
 二56 5 会 んがえて いるうちに、いつのまにか、  
 二56 5 会 うちに、いつのまにか、ねむってしま  
 二56 8 会 しましました。ゆめに、ひろいのはらを  
 二57 1 会 なの花が、いちめんにさいて いました。

二57 10 会 くしのおじいさんによくにたかたで  
 二60 4 会 なさんが二年生になったら、あたら  
 二61 5 会 あ、春をむかえにでかけましよう。』  
 二66 8 会 、うごかすはやさにかわりはない。し  
 二71 4 会 だんだんととおくになるように、小さ  
 二71 4 会 ー。みんな「かすみになくひばり。」す  
 二84 4 会 ー。みんな「たつお」わになろう。みんな  
 二85 4 会 ー。みんな「わになろう。大きな大  
 二86 4 会 大きな大きなわになれ。」さきこ「東  
 二96 4 会 っこりと、おでになったか、おしや  
 二102 4 会 ー。さして、お立ちになつていらつしや  
 二112 4 会 たか おしやかさまにはんたかという  
 二116 4 会 たかをりつばな人にしてやりたいと、  
 二116 4 会 りたいと、おおもいになりました。そこ  
 二119 4 会 のをおしえることにしました。一年た  
 二123 4 会 おぼえません。三年になりました。やは  
 二126 4 会 はんたかをおよびになりました。『略』  
 二137 4 会 ひとことを心の中にしましました。そ  
 二139 4 会 いました。そのうちに、きたないことば  
 二145 4 会 は、きれいな心になれという こと  
 二145 4 会 ー なれという ことになれという こと  
 二147 4 会 王さまのおまねきにあずかりました。  
 二147 4 会 ー、王さまのごてんにまいりました。は  
 二152 4 会 もって、でしの中にまじつて いました  
 二157 4 会 なたかは門のそとにのこりました。ご  
 二158 4 会 しゃかさまがせきにおつきになりまし  
 二158 4 会 まがせきにおつきになりました。でし  
 二159 4 会 したちはそのわきにならびました。そ  
 二159 4 会 す。ふしぎなことに、はちをもった手  
 二161 4 会 かさまの目のまえにのびて きました。  
 二169 4 会 あれは門のそとにいますので、この  
 二169 4 会 はちをわたくしにとどけようとして

二17 3 会 はんたかをおよびになりました。はん  
 二17 4 会 、しずかにごてんにあがって きました  
 二19 5 会 。あつめたことばにえをかきそえまし  
 二19 7 会 よくしらべることにしました。えをか  
 二20 1 会 かいいていくうちに、花の名も、鳥の  
 二20 3 会 。先生が、こくぼんにつぎのようなこと  
 二20 3 会 うなことを おかきになりました。『一く  
 二20 5 会 。』二くみの人たちに。『略』。』二くみの  
 二20 7 会 。』二くみの人たちに。『略』。』三くみの  
 二21 1 会 。』三くみの人たちに。『略』。』四くみの  
 二21 2 会 みの人たちに。『川に いる 魚と海に いる  
 二21 2 会 川に いる 魚と海に いる 魚とを わけ  
 二21 3 会 。』四くみの人たちに。『略』。』できあ  
 二21 6 会 のをうしろのかべにはりました。みん  
 二22 2 会 かし、あるところに、一本のくすのき  
 二22 5 会 なん年かたつうちに、このくすのきは、  
 二22 6 会 いほど、大きな木になりました。とう  
 二22 8 会 べんは、空のくもとどくようになり  
 二22 9 会 大きなえだは 四方にひろがつて、どこ  
 二23 2 会 か、わからないほどになりました。まい  
 二23 4 会 う村々が、日かげになります。ごごに  
 二23 4 会 になります。ごごになると、東がわの  
 二23 5 会 う村々が、日かげになります。『略』。  
 二25 3 会 木を切る ことに しよう。』みんなは  
 二25 7 会 たるように するに は 切るより ほかに  
 二25 7 会 は 切るより ほかに しかたがあるまい  
 二25 10 会 そこで、切る ことになりました。こん  
 二26 1 会 とですから、切るのにも 大さわざでした。  
 二26 6 会 するかと いう ことになりました。する  
 二27 1 会 ふねをつくる ことになりました。なん年  
 二27 4 会 なふねでした。海にうかべて、大ぜい  
 二29 4 会 おかげで、日かげになつてこまつて

三三〇二、作文をすることになりました。「略  
 三三〇七、なほあちらこちらにわかれてました。あ  
 三三一二、うしつで、左がわにはまどがならんで  
 三三一六、いだんははじめに十五だんあがつて  
 三三二八、だんあがるごとに、あたりのようす  
 三三二九、たところのかべには、えがはつてあ  
 三三三〇、略。」「でいり口には、げたばこがた  
 三三三二、ほそ長いびんに、さかながはいつ  
 三三三三、た。へやのすみに、かれ木が立つて  
 三三三九、いました。そこに、はくせいりのりす  
 三三四一、まっ白なかびんに、赤い花がさして  
 三三四六、ながそのまわりにあつまつて、しゃ  
 三三四七、略。」「中にわに、とうもろこしが  
 三三四八、ています。いけには、きんぎょが三  
 三三四九、。白いくもが水にうつっています。  
 三五〇三、ます。大きなろに、大きなやかんが  
 三五〇四、つてあるところにきました。白いう  
 三五〇五、います。かなあみにからだをつけるよ  
 三五〇六、声が、オルガンにまじつてきこえて  
 三五〇七、先生が、くぼんに、「略。」「とおか  
 三五〇八、つ。たのしい学校にしましょう。きれ  
 三五〇九、れいなきょうしつにしましょう。」と  
 三五一〇、「略。」「とおかきになりました。六  
 三五一一、ん中で、右のかたにはいちろうくん、  
 三五一二、うくん、左のかたにはみよこさん。ぼ  
 三五一三、うくんが、右の方にまがつていって  
 三五一四、。ぼくらはふたりになって、麦のほと  
 三五一五、ぼぼのみが、小人になってとんでい  
 三五一六、略。」「ひとりぼっちになってしまいまし  
 三五一七、学校どうぐをわきにかかえて、どんど  
 三五一八、ある日、はまべにでてみると、わに  
 三五一九、。」「といつて、すぐになかまを大せい

三三六八、さぎのいうとおりにならびました。白  
 三三六九、。いばんしまいにいたわにぎめが、  
 三三七〇、が大ぜいとおりになつて、「略。」「  
 三三七一、略。」「とおたずねになりました。白う  
 三三七二、さきほどおとおりになつたかたがたの  
 三三七三、で、おそくおなりのなつたのです。お  
 三三七四、略。」「とおたずねになりました。白う  
 三三七五、。しいて、その上にねるがよい。」「白  
 三三七六、さぎがそのとおりにしますと、からだ  
 三三七七、。あんなところにさきました。よあ  
 三三七八、ました。よあけにばあさまつき色、  
 三三七九、ました。はかげにふたつさきました  
 三三八〇、さめて、かぜにゆれゆれさきました  
 三三八一、りはすみの花にのぼり、「略。」「  
 三三八二、いすはうめの木にとまり、「略。」「  
 三三八三、はしらかばの木にはねて、「略。」「  
 三三八四、こどもは石の上に立ち、「略。」「と  
 三三八五、んとうさまは空にたり、「略。」「と  
 三三八六、かえる。たすきにならんで、がんが  
 三三八七、あれた。おびになつて、ひもに  
 三三八八、なつて、ひもになつて、がんが  
 三三八九、。うしろの山にすてましょか。  
 三三九〇、せどのこやぶにいけましょか。  
 三三九一、ぞうげのふねにぎんのかい、月  
 三三九二、い、月夜の海にうかべれば、わす  
 三三九三、。おうち、丘の上にあるのでも、ふも  
 三三九四、あるのでも、ふもとにあるのでもありま  
 三三九五、ちやうどなかほどにあるのです。それ  
 三三九六、。みんなであそびにでかけました。「へ  
 三三九七、とうさんがおいでになつて、「略。」「  
 三三九八、「略。」「とおきになりました。「略  
 三三九九、うさんはえんがわにこしをおろして、

三三六三、うきまるかおまちになりました。ほか  
 三三六四、。しやつて、ジュデーにおきになりました  
 三三六五、ジュデーにおきになりました。「略  
 三三六六、したから、いっしょになつて、丘の大き  
 三三六七、でました。みずうみにはボートがうかん  
 三三六八、。みんなはボートにのりこみました。  
 三三六九、男の子は、うしろにこしかけました。  
 三三七〇、の女の子は、まえにこしかけました。  
 三三七一、かけました。まん中には、おとうさんが  
 三三七二、。ボートを、おきになりました。みず  
 三三七三、とうさんはおきになりました。「略  
 三三七四、。左手をはんたいにこいだら、ぐるぐ  
 三三七五、。ばかりだ。はじめに右か左かどちら  
 三三七六、ぐるぐる。おまわりになりました。もう  
 三三七七、。たらいいか、風にきいてみようよ。  
 三三七八、。さんは女の子たちにおきになりました  
 三三七九、。の子どもたちにおきになりました。「略  
 三三八〇、。さんは男の子たちにおきになりました  
 三三八一、。の子たちにおきになりました。「略  
 三三八二、。青々とした中に、ふんわりした、小  
 三三八三、。とうさんがおきになりました。「略  
 三三八四、。ました。「はじめにもりへいって、そ  
 三三八五、。はふと、ゆかのうしろに、なにかあるのを  
 三三八六、。ました。ゆかのうしろに、長い、光  
 三三八七、。せん。やはりゆかにのこっています。  
 三三八八、。んはおきかえしになりました。「略  
 三三八九、。かあさんがおきになりました。「略  
 三三九〇、。略。」「そのうちに、赤いお日さまは  
 三三九一、。したが、ゆかのうしろにはもうみえませ  
 三三九二、。國の子どもたちに光をあけるのです  
 三三九三、。でかわりばんこにお目にかかるので  
 三三九四、。りばんこにお目にかかるのです。あ

三776 ㊦ うに、光をあげにいくのです。それ  
 三777 ㊦ 。それから、あさになつて、お日さま  
 三778 ㊦ す。だから、だれにもひるとよるが  
 三786 ㊦ きますよ。だれにもお日さまはとら  
 三7910 ㊦ 。「だめだよ。雨にぼくのいどをい  
 三804 ㊦ ぼくの道は、雨にめちやめちやにさ  
 三808 ㊦ みんなのいうことにはおかまいなしに、  
 三808 ㊦ にはおかまいなしに、どんどんふりつ  
 三812 ㊦ きました。そのうちに、雲は雨をつれて  
 三814 ㊦ のようなにじが空にかかりました。「へ  
 三832 ㊦ くは、だいたい色にするからね。」その  
 三833 ㊦ あさんがえんがわにでていらっしやい  
 三836 ㊦ 「略。」とおききになりました。「略  
 三838 ㊦ 」「あんなところにだれがかけたの。  
 三843 ㊦ ターは、はのさきにあまだれがあるの  
 三847 ㊦ そのあまだれの中に、小さなにじがみ  
 三901 ㊦ でしょう。風の日にはどんな音。雨の  
 三902 ㊦ どんな音。雨の日にはどんな音。十  
 三912 ㊦ とときとかわるときにここをとおります  
 三918 ㊦ やはがきを、ここにいれます。きんじ  
 三921 ㊦ たちもこのポストにいれます。くさを  
 三924 ㊦ ましょう。こうえんにさいたきれいな  
 三927 ㊦ いでください。みにきた人が一本ず  
 三938 ㊦ しばふ、みどり色につやつやと光った  
 三939 ㊦ しばふ。「よござすにかわいがつてくだ  
 三955 ㊦ いろいろなかたちになつたり、ふくれ  
 三957 ㊦ 。この一まいの紙に、えをかくことが  
 三966 ㊦ 、この一まいの紙に、字をかくことが  
 三978 ㊦ ともできます。心に思ったことは、い  
 三979 ㊦ ことは、いつのまにかきてしまいま  
 三9710 ㊦ しまいますが、紙にかいたものは、い  
 三983 ㊦ なくなりますが、紙にかいたおはなしは

三985 ㊦ ます。一まいの紙にかいたえを、どこ  
 三985 ㊦ かいたえを、どこにかざりましょう。  
 三987 ㊦ かざりましょう。紙にかいた字を、どこ  
 三1002 ㊦ むかしあるところに、「竹とりのおきな」  
 三1004 ㊦ や山へ竹をとりにいきました。ある  
 三1007 ㊦ れよりもはやく山にいつて、「略。」  
 三1018 ㊦ 「これはわたしにさずかった子に  
 三1019 ㊦ にさずかった子にちがいない。」と、  
 三1021 ㊦ 略。」と、てのひらにのせてかえりまし  
 三1022 ㊦ うして、かごの中にいれて、おばあさ  
 三1025 ㊦ んのとする竹の中には、たびたびこが  
 三1026 ㊦ だんだんかねもちになりました。また、  
 三1028 ㊦ 三月ほどのあいだに、すくすくとせい  
 三1029 ㊦ つうの人の大きさになりました。その  
 三1036 ㊦ しいかぐやひめに、ひと目でもあい  
 三1043 ㊦ いな人がおよめにもらいたいものだ  
 三1046 ㊦ めいにおじいさんにたのみました。そ  
 三1046 ㊦ みました。その中には、みやさまがたも  
 三1047 ㊦ さまがたもおいでになりました。けれ  
 三1049 ㊦ はだれのところにもおよめにいきま  
 三1049 ㊦ ころにもおよめにいきません。いつ  
 三1051 ㊦ あさんのおそばにいたいと思います  
 三1056 ㊦ めは、その人たちにとてもむずかしい  
 三1058 ㊦ ができたらおよめにいくといいました  
 三1062 ㊦ 、みかどがおききになつて、「略。」  
 三1063 ㊦ なのなら、ごてんによびたい。」とお  
 三1064 ㊦ 「略。」とお思いになりました。それ  
 三1064 ㊦ それで、おじいさんに、「略。」とおつ  
 三1065 ㊦ やひめをごてんにつれてきたら、お  
 三1066 ㊦ きたら、おまえにくらいをさずけて  
 三1067 ㊦ さんは、かぐやひめにこのことをつた  
 三1071 ㊦ さんとごそうだんになつて、ある日、

三1072 ㊦ 、かりのおかえりに、とつぜんおたち  
 三1072 ㊦ つぜんおたちよりになりました。家に  
 三1074 ㊦ になりました。家にはいつてごらん  
 三1074 ㊦ にはいつてごらんになると、光の中に  
 三1074 ㊦ になると、光の中にきれいなおひめさ  
 三1078 ㊦ 「略。」とお思いになつて、すぐごし  
 三1078 ㊦ して、すぐごしょにつれてかえろうと  
 三1086 ㊦ 「略。」とお思いになつて、そのまま  
 三1086 ㊦ そのままおかえりになりました。その  
 三1089 ㊦ ひめも、そのたびにごへんじをさしあ  
 三1091 ㊦ 月のきれいなばんになると、かぐやひ  
 三1101 ㊦ なにおかなしみになると、思つて、  
 三1104 ㊦ す。この十五夜には、月の國からむ  
 三1109 ㊦ 月の世界のの人にわたさないくふう  
 三1114 ㊦ このことをおききになつて、たいへん  
 三1115 ㊦ わいそうにお思いになりました。そ  
 三1116 ㊦ たくさんのけらいにいつけて、まも  
 三1116 ㊦ つてくださることになりました。いよ  
 三1118 ㊦ 。いよいよ十五夜になりました。おじ  
 三11110 ㊦ 人たちで、いくえにもとりかこまれ、  
 三1125 ㊦ ていました。夜中になつて、お月さま  
 三1128 ㊦ 「けらいたちは、弓に矢をつがえました  
 三1129 ㊦ が、ふしぎなことに、手足の力がなく  
 三1131 ㊦ いました。そのうちに、空から大ぜいの  
 三1131 ㊦ の天人たちが、雲にのつておりてき  
 三1137 ㊦ さんとおばあさんに、「略。」といつ  
 三1138 ㊦ つまでもおそばにいて、こうこうを  
 三11310 ㊦ す。せめて月夜には月をみて、わた  
 三1145 ㊦ んいで、おばあさんにわたしました。天  
 三1155 ㊦ そいで、かぐやひめにはごろもをきせま  
 三1158 ㊦ こで、よいの車にのつて、しずかに  
 三1162 ㊦ やひめをおわすれになることができ



三116 4 なしみをますたねになるばかりでした  
 三116 5 会、あるとき、「天にいちばんちかい  
 三116 6 と、おつきのものにおたずねになりま  
 三116 6 のものにおたずねになりました。おつ  
 三116 8 会 ものは、「するがにある山がいちば  
 三116 8 会 いちばんみやこにもちかく、天にも  
 三116 9 会 にもちかく、天にもちかいそうでこ  
 三117 5 へ」とおいつけになりました。おつ  
 三117 6 ものはそのとおりにしました。すると、  
 四4 4 生まれると、ここに知らせます。うえ  
 四4 7 からきます。学校にはいる子どもも、  
 四5 4 がなくなったときには、やはりここに  
 四5 4 には、やはりここにとどけます。ここ  
 四6 1 ます。いそぐときには、でんぼうをう  
 四6 3 もつといそぐときには、でんぼうをとり  
 四8 7 いけです。まわりには、さくらの木が  
 四9 1 かがみを、この町にはめこんだよう  
 四12 8 いじなものがここにどきます。どこ  
 四13 5 ぜんたいが、ひとつになつて生きてい  
 四15 4 ら、わたしがおになつた。みんな、  
 四15 5 た。みんな、鳥ごやにかくれていた。た  
 四15 8 。わたしのせなにかおをつけてね  
 四16 1 かしをしつかり手にもつてねんねした  
 四16 3 。ゆうがた、水くみにでた。おかあさん  
 四16 4 。おかあさんが、月にてらされて、水  
 四17 1 うだ。バケツの中に月がうつつてい  
 四18 1 かあさんの手の上につかまつてひいた  
 四18 3 いった。おかあさんに、「略。」ときい  
 四18 4 会 ばくがいつしよにひくと、かるくな  
 四19 4 会 話がいてなしにはできないように、  
 四19 5 会 文もあいてなしには書けるものでは  
 四20 1 を「おかあさん」にきめて、つぎのよ

四20 5 手 三びき、わの中にはいり、ねこが二  
 四20 6 手 ひき、わのそとにでました。ねこの  
 四22 1 手 わつていゝうちに、びよと中には  
 四22 1 手 に、びよと中にはいりました。ね  
 四22 3 手 た。すると、そとにいたねこがおい  
 四22 5 手 き、またわの中ににげこみました。  
 四22 7 手 ねは、「にいさん」にあてて文を書き  
 四23 7 手 山へくりひろいにいきましようね。  
 四23 10 手 さんといつしよに、ふねではたらき  
 四24 2 手 ねは、「いもうと」にあてて書きました  
 四24 9 手 ました。おみやげにうめもどきをとつ  
 四25 1 手 しやしんのまゑにかざりました。み  
 四25 4 手 っちゃんがそばにくるような気が  
 四25 5 手 かざると、そこにすわつていゝよう  
 四26 1 手 さんは、「りんご」にお話をするつも  
 四26 7 手 ぎりす」をあいてに書きました。「略  
 四27 4 手 ねは、「ボチ」あてに書きました。「略  
 四27 8 手 しおさんは、「雲」に話をするつもり  
 四28 5 手 、じぶんをあいてに書くことに、気が  
 四28 5 手 あいてに書くことに、気がつきました。  
 四28 8 手 は、なんだろう。山にいつて、くりひろ  
 四29 8 手 。じぶんでじぶんにきいてみても、な  
 四30 2 手 くみの人みんな」にきいてもらいたい  
 四31 2 手 は、うちのわにさいていゝコス  
 四31 4 手 やはり、「みんな」に知らせたいといっ  
 四33 5 手 さんはわたくしに、「略。」といっ  
 四34 4 手 ば「略。」先生にこうたずねられて  
 四34 7 手 うさんのことばに、気がつきました。  
 四35 9 手 。「先生は、そこに気がついたのです  
 四35 10 手 うさんがおいでにならなくても、か  
 四36 1 会 かずこさんの耳には、おとうさんの  
 四36 2 会 かりますか。そこにいなくても、その

四36 9 会 、となりのうちにおつかいにいきま  
 四36 9 会 うちに おつかいにいきました。その  
 四37 1 会 おりました。そこには、ぶどうが、たく  
 四37 5 会 なるのおばさんに、「略。」といお  
 四39 9 会 じさんのことばに気がついてやめ  
 四40 1 会 のいいお友だちになつたり、先生に  
 四40 1 会 なつたり、先生になつたりしてく  
 四40 3 会 りっぱなことばにいろいろであうで  
 四41 8 会 ときには、かぎなりになつて、空をひっ  
 四43 3 会 「がねは、おたがいにいましめあつて、  
 四44 3 会 なじじゅんばんにならんでとぶこ  
 四44 4 会 らんでとぶことにしよう。」みんなは  
 四44 5 会 へ。」みんなは、それにさんせいしました。  
 四45 2 会 やんが おしまいにしてくれつてい  
 四46 2 会 、きょうはどこにならびたいとい  
 四46 6 会 一ばんせんとうにしてくれつてい  
 四46 9 会 うは、どのへんにならびたいとい  
 四47 3 会 なら、十五ばんめにして、とぶこと  
 四47 4 会 して、とぶことにしようじゃないか  
 四47 6 会 く、がねのむなげにあたりました。三  
 四47 8 会 ばのがねは、一列になつてとんでい  
 四47 9 会 ばのようなかたちになりました。はた  
 四48 1 会 と、高い山のそばにきました。その山  
 四48 2 会 。その山のふもとには、大きな木がし  
 四48 5 会 とびこえて、たににさしかつたとき  
 四48 10 会 思つて、べつに氣にもかけないでとび  
 四49 2 会 五ばんめからわきにそれたかと思うと  
 四50 7 会 かのものは、あとになり、さきにな  
 四50 7 会 あとになり、さきになりして、はげま  
 四51 1 会 らわれていゝときには、ばらばらにな  
 四53 1 会 したが、目のまゑに、高い、高い山が  
 四53 2 会 、この山のむこうにあるみずうみの

四53 8 いているがんたちには、この風がなん  
四53 10 た。みずうみの島には、こんもりとし  
四54 1 まは、この林の中におりました。一わ  
四55 2 てやりました。島にはかりうどはきま  
四57 6 しょうということになりました。かつ  
四58 5 会。ねて いるうちに、いいこと考えた  
四60 6 「略」。そのうちに、夜になってしま  
四60 6 」。そのうちに、夜になってしまいまし  
四60 9 テーブルのまわりにあつまりました。  
四62 2 のねて いるひまに、かつちゃんも、も  
四62 3 林のおくをさがしにいきました。しず  
四62 7 きなりへびのくびにかみつきました。  
四62 9 ました。そのひまになかまのがんは、  
四64 9 会。やんは、三ばんめにしよう。まだ、か  
四65 7 きれいな雲の中に、みえなくなつて  
四67 4 そび」お正月までに、ことばあそびの  
四68 5 らの小山の小さいけに子もが二百は、  
四71 3 ころは、「ろ」の上にある。「略」。四  
四71 6 ころは、「は」の上にある。「四組の「  
四71 9 き」。略」。これにあたつた人には、  
四71 9 これにあたつた人には、おもちゃのね  
四72 4 」。略」。これにあたつた人には、  
四72 4 これにあたつた人には、ハンケチをあ  
四72 7 『これをひいた人には、なんもあげま  
四72 10 くれがあつた人には、につきちょうを  
四73 1 をあげます。『ひびにつける。』とい  
四73 4 た。これをあつ紙に書いて、えもつけ  
四73 5 にこしらえることにしました。七い  
四74 9 ぽ、とんぽ、かきねにとまれ。ち——小  
四75 9 は、ことばのあとにつく。わ——わか  
四77 6 かう。の——のきばにすくうつばめさん  
四77 10 なに。ま——まつに月。け——けつせ

四79 4 たゆめ。め——目——みえるもの、みえ  
四81 7 世界の子どもにうたわれて、きよ  
四83 9 まつの枝のさきにつりさげると、弟  
四84 5 ました。一ばんさきに、ねえさんが、エス  
四84 7 しました。二ばんめに、となりのうちの  
四84 9 しました。三ばんめに、すじむかいのみ  
四85 1 たつこさんが、それにあわせておどりま  
四85 2 りました。おしまいに、みんなでトラン  
四85 3 おかあさんが、かごにみかんをいれて、  
四86 3 は、まがるほど雪につもられて、だま  
四87 7 た。すみがまの上に、雲がでて います  
四88 1 ます。あの白い雲に、だれかが、ちぢま  
四89 8 はねおきて、そとにとびだして、雪か  
四91 4 はきはいて、うちにあがつておいでに  
四91 5 にあがつておいでになると、ひたいか  
四91 7 ゆげがたつ。ほおにはあせがつたわっ  
四93 4 さかに降る。右にも左にも、むこう  
四93 4 に降る。右にも左にも、むこうにもこ  
四93 4 も左にも、むこうにも こつちにも、ど  
四93 4 むこうにも こつちにも、どこにも降る。  
四93 4 こつちにも、どこにも降る。風にか  
四93 6 どもにも降る。風にかかれて、うずを  
四94 1 な黒い。雪がかおにかかるのも わすれ  
四95 2 して、だんだん下におちてくる。よく  
四95 6 まつて いない。風にふかれてとんで  
四95 6 てとんで いるうちに、いっしょになつ  
四95 7 るうちに、いっしょになつたり わかれた  
四95 7 り、また いっしょになつたり はなれた  
四98 4 会。「そうだ、わたしにこのかめをうつ  
四99 2 会。子ども「この人にうってあげようか  
四99 7 を子どもたちの手に、それぞれ わたし  
四104 4 会。きょうは、お礼にあがりました。」う

四104 6 会。「うらしま」お礼にはおよばないよ。  
四104 9 会。たね。」かめ「お礼にりゅうぐうへおつ  
四106 9 会。しまさん。むこうに光つたやねがみ  
四108 5 りゅうぐうまん中にきれいなこしかけ  
四109 2 たりゅうぐうくしきにおどろいて います  
四109 5 会。ぞそのこしかけにおかけください。」  
四109 8 は、右のこしかけにこしかけます。い  
四111 3 さまは、左のいすにこしかけます。か  
四111 4 。かめはそのそばにならびます。魚た  
四111 10 会。め「では、みんなにおもしろいおど  
四112 4 りめ」ぎやかなおんがくにあわせておど  
四113 9 会。をして、ごらんにいれましょう。」う  
四114 7 会。んとうにおせわになりました。」おと  
四115 4 会。うちのことも氣にかかりますので、  
四116 3 会。「では、おみやげにたまてばこをさし  
四116 7 会。あつても、おあけになつてはいけませ  
四116 10 会。たまてばこを手にもつて、うらしま」  
四117 2 会。までもそのまゝにしておいでいた  
四117 6 会。とひめ「おかえりになりますか。おな  
四118 8 会。ん 生まれた村にかえつたら、だれ  
四119 2 会。ばかり。とほうにくれたうらしまは  
四121 1 の光をだすために、どれほどたくさ  
四121 3 ができあがるまでには、どれほど 苦心  
四122 8 を作りあげるまでには、どれほど 手か  
四123 1 会。たくしがこの世に生まれてくるまで  
四123 7 会。であるくかわりに、わたくしをもつ  
四126 4 会。はまべのまつ原に、波がよつたり  
四126 7 会。んでいく。空にかすんだふじの  
四127 5 きだろ。」けしきにみとれながらある  
四127 7 会。むこうのまつの枝に、きれいなものが、  
四128 7 会。、うちのたからにしよう。」りようし  
四130 2 会。、うちのたからにしようと思ひます

四一四 四 合 して、あなたがたには、ご用のないも  
四一三 二 合 ン。國のたからにいたします。」天人  
四一三 五 合 「それでは、お札にまいましよう。で  
四一三 八 合 あなたは、まわすにかえておしまい  
四一三 八 合 えって、おしまになるでしよう。」天  
四一四 四 合 いきます。右に左にひらひらと、  
四一四 六 合 ます。右に左にひらひらと、ゆれ  
四一五 一 合 はまへのまつ原に、波がよったり、  
四一五 二 合 り。いつのまにやら天人は、春の  
四一五 四 合 、春のかすみにつつまれて。かも  
四一五 四 合 んでいく、空にほんのりふじの  
五四三 川のかかんぼ 山に雨が降る、きりがお  
五四四 ころ、小さいにまに、小さいみ、小  
五四五 ずみ、小さいにまに、小さいながれ山か  
五四六 て、たつちして、村にでましよう、町にで  
五四七 村にでましよう、町にでましよう。川は  
五四八 ん大きくなる。ダムにせかれていけになり  
五四九 ダムにせかれていけになり、水力電氣をお  
五五〇 をおこし、水道の水にもなり、川はだんだ  
五五一 きくなる。川は野原におりてくる。野原を  
五五二 くるまわし、たんぼに水をいれ、はたけに  
五五三 水をいれ、はたけにも水をまいていく。  
五五四 がして、海のおくにすていく。川はだ  
五五五 海のおくにすていく。川はだま  
五五六 った。あ、あそこきれいなさくら。」  
五五七 さんが、みつおさんにあてて書いた手紙で  
五五八 。私も、いまから旅にでかけます。ゆくさ  
五五九 さきはむねのところに書いてありますから  
五六〇 。これは、汽車の旅にきつぷがいのと、  
五六一 つぶは、遠い、近いによって、ねだんがち  
五六二 す。「略」。「ポストにいれられると、友だ  
、友だちといっしょになりました。そこへ

五六一 四 合 さあ、このかばんにはいるんだよ。」と  
五六一 五 たちをみんなかばんにいれました。「略」  
五六一 六 くの大きなはこの中にはいりました。そこ  
五六一 七 合 んでもないところにやられるかと思つて  
五六一 八 合 「「略」。」そのうちに、きよくの人が、私  
五六一 九 合 れぞれひとかたまりにわけてくれました。  
五二〇 〇 合 「「略」。」おたがいに、であつたと思つた  
五二〇 一 合 、じょうぶなふくろにいれられて、かぎを  
五二〇 二 合 ん。私たちは、自動車につまされて、どんだ  
五二〇 三 合 らおろされ、自動車につまこまれて、ある  
五二〇 四 合 町のゆうびんきよくにつきました。ふくろ  
五二〇 五 合 、また、かばんの中にいれられました。配  
五二〇 六 する人は、自てん車に乗って走りました。  
五二〇 七 合 まは、一けん一けんにくばられはじめまし  
五二〇 八 合 た。私もその人の手にぎられながら、あ  
五二〇 九 合 れいにさいている家に、はいりました。「へ  
五二一 〇 合 、その家のげんかんにおかれました。「略  
五二一 一 合 よろこんで、私を手にとりあげました。私  
五二一 二 合 そのままみつおさんにおつたえすることが  
五二一 三 合 っぱい乗せて、終点につきました。あまり  
五二一 四 合 た。しかし、その中に三人だけ、たいへん  
五二一 五 合 んのさとの、いなかにいきました。ひさし  
五二一 六 合 ました。ひさしふりにおいさんにおあい  
五二一 七 合 しふりにおいさんにおあいして、おもち  
五二一 八 合 。いちろうさんが家に帰ると、おかあさん  
五二一 九 合 あさんが、げんかんにむかえにでました。  
五二二 〇 合 、げんかんにむかえにでました。「略」。  
五二二 一 合 略」。「まだほかにあるの。どんなこと  
五二二 二 合 んのよこのところに、もたれかかつてい  
五二二 三 合 るが、ぼくのまえに、まつばづえをつい  
五二二 四 合 の女の人が、ぼくに気がついて、「略」  
五二二 五 合 できると、でむかえにきていたおねえさん

五二六 四 合 つぶを改札の女の人にわたしながら、「あ  
五二六 五 合 、いま改札口の人にありがとうってい  
五二六 六 合 ら、それであの人がいったのよ。」「略  
五二六 七 合 いえ、むこうの店に品物をとどけて、受  
五二六 八 合 けて、ぼくなんかに、とても持てそうも  
五二六 九 合 さん、駅へおいでになるのでしょうか。つ  
五二七 〇 合 ようぶです。ぼくにも持てそうですから  
五二七 一 合 荷物は小さいわりに、なかなかおもかつ  
五二七 二 合 ていきました。駅につくと、その人は、  
五二七 三 合 ったのです。ぼくにはすこしおもかつた  
五二七 四 合 をだして、「これには、きみのようない  
五二七 五 合 』といつて、ぼくにくれました。それで  
五二七 六 合 ます。この荷物の中に、おり物や、お茶や  
五二七 七 合 います。ガスこんろにかけたかまやなべか  
五二七 八 合 です。まわりのかべに、石炭がでています  
五二七 九 合 た石炭は、トロツコにつんで、そとへはこ  
五二八 〇 合 私たちは、石炭なしには、くらすことがで  
五二八 一 合 な木が、たおれて土にうずまり、長いあい  
五二八 二 合 あいだかかつて石炭になったのです。大む  
五二八 三 合 ちをかえ、石炭の中にくわえられていて  
五二八 四 合 れが、私たちのために、生き返ってはた  
五二八 五 合 ら（一）けさ、先生に、先生のお友だちか  
五二八 六 合 るのです。手紙の中に、こんなことが書い  
五二八 七 合 受持の子どもたちに、手紙を書いてもら  
五二八 八 合 受持の子どもたちに、それを送ってあげ  
五二八 九 合 す。山のとつべんには、まだ雪がのこつ  
五二九 〇 合 めました。ふもとになるにしたがつて、  
五二九 一 合 た。ふもとになるにしたがつて、木のみ  
五二九 二 合 しきを、みなさんにおみせしたいと思  
五二九 三 合 。

五二九 四 合 「ぼくのうちには、うしが十三とう  
五二九 五 合 ちうしです。なかに、子うしが三とうい  
五二九 六 合 。けさも、まきばにだしてやりました。

五42(手) こくばんのところにならべてあります。  
 五43(手) だいをして、うちに帰るころは、もう、  
 五43(手) さびがわへおよめにいつています。ぼく  
 五43(手) で、よくいつしよにうたいました。ぼく  
 五45(手) だ。世界のそのにさきにおう、きれ  
 五46(手) うぐいす おつかいにいくとき、うらの竹  
 五46(手) 略。」と鳴いた。春になったばかりだから  
 五46(手) ないのだろう。帰りに、また通つたら、も  
 五49(手) くなった。あさの光に、身をきよめるのは  
 五50(手) たし船、おもさにゆれゆれ岸をでる。  
 五50(手) 海べ がけの下には 白いはま、白  
 五52(手) 白い雲。 ひつじになつて わいてくる  
 五52(手) は、まさこをうば車に乗せて、はるおと大  
 五52(手) て、はるおと大通りにでました。いそがし  
 五53(手) しずんでももない空に、大きな星が光つて  
 五54(手) もっと高いところに、四ばん星 赤い  
 五54(手) 略。」空のまん中に、大きな星が光つて  
 五54(手) まさこをおかあさんにわたして、食事をす  
 五55(手) ちよつと、家のまえにでてみました。三十  
 五55(手) ていて、空いちめんに、星がでていました  
 五55(手) まもと先生がおいでになつて、「略。」と  
 五55(手) 。私は、おかあさんにこのことをいって、  
 五55(手) はるおといつしよに、学校へいきました  
 五56(手) 土星です。あそこに大きく光っている星  
 五56(手) 、みえる。まん中にまいるいきれいなたま  
 五56(手) える。そのまわりに、うすい、大きな、  
 五57(手) 略。」はるおにさいそくされて、ば  
 五58(手) わり。ごろうさんにおみせなさい。」は  
 五58(手) 、ばんをごろうさんにゆずりました。「略  
 五58(手) 青い、青い水の中にういているようだ。  
 五58(手) 、大きくなるまでに、どの星もみんなみ  
 五59(手) みてきた土星を、紙にいていねいにかいてお

五59(手) さがおの花 かきねにあさがおの花が、三  
 五62(手) 「花の色を空色にそめてくれたのは、  
 五63(手) の話をそばでおききになつて、「略。」と  
 五63(手) といつて、おわらいになりました。「略」  
 五65(手) 金のさかな 海べに、おじいさんとおば  
 五65(手) は、ふるい小さな家に住んでいました。お  
 五65(手) 、おじいさんは、海にでてあみをなげまし  
 五66(手) 帰つて、おばあさんに、このふしぎな話を  
 五68(手) なさい。帰るまでには、新しいおけがで  
 五68(手) おけなつて、とくにもならない。もう一  
 五70(手) お金持のおくさんになつたといつて。」と  
 五70(手) お金持のおくさんになつたといつて。そ  
 五72(手) をうま小屋のしごとにおいやりました。そ  
 五72(手) あさんはおじいさんにいりました。「略」  
 五72(手) た。「金のさかなに、わたしは金持のお  
 五72(手) やになつた、女王になつたといつたのん  
 五72(手) ゆうのものわらいになるよ。「略」  
 五72(手) 、ぐずぐずいわずに海へいつておいで。  
 五73(手) んはいやだ、女王になつたといつてい  
 五73(手) おばあさんは女王になりますよ。」とい  
 五73(手) 、おばあさんは女王になつてゐるではあり  
 五74(手) ありませんか。そばには、りっぱなけらい  
 五74(手) さんは、おじいさんには目もくれないで、  
 五74(手) くれなひで、けらいに、「略。」といいつ  
 五75(手) た。「金のさかなにたのんでおいで。わ  
 五75(手) んどは、海のぬしになりたい。あのひろ  
 五75(手) のさかなをけらいにしてやりたい。」お  
 五76(手) います。海のぬしになりたい、ひろい海  
 五76(手) 、あなたをけらいにしたいといつていま  
 五77(手) した。みると、まえに住んでいた、ふるい  
 五77(手) っていました。入口におばあさんがすわつ  
 五78(手) 生のつくえのかびんに、大きなひまわりの

五78(手) のすが工作の時間に、写生しましょう。  
 五78(手) う、先生といつしよに、学校のはたけのむ  
 五79(手) ている小川のところにいきました。そうし  
 五80(手) きました。竹のさきにほうきをむすびつけ  
 五80(手) しもりさんのせなかにあたりました。にし  
 五82(手) 。みんな、からだに氣をつけてください  
 五82(手) いことや、ねるまえにたべないことや、日  
 五82(手) 友だちが、学校をみにいらつしやいました  
 五82(手) して、私たちの教室にもおいでになりました  
 五82(手) ちの教室にもおいでになりました。そのお  
 五83(手) のお友だちが、記念に写真を写したいとお  
 五83(手) 、私たちは、運動場にあつまつて、先生を  
 五83(手) へ、先生をまん中にしてならびました。  
 五84(手) 十六日 土 夏休みになにをするか、みん  
 五84(手) えさんは、國語の本にでていることばを、  
 五84(手) ることばを、五十音にわけてみるといいま  
 五85(手) もたちがくるまでに、そこらをきれいに  
 五88(手) 赤いおびをおしめになると、へんでしよ  
 五88(手) ない。黒いころもに赤いおび——かわい  
 五88(手) うかんさんのまわりにあつまりました。「へ  
 五89(手) をみれば、波にうかんださどが島。  
 五90(手) が島」とおうたいになつたとき、おじぎ  
 五90(手) はな、ずつとまえに、さどが島においで  
 五90(手) まえに、さどが島においでなかつたこと  
 五90(手) が島をうたうときには、いつでもおじぎ  
 五90(手) へ。「おぼろさんにおかあさんがあるっ  
 五90(手) にいいおぼろさんになつたのだよ。」こ  
 五91(手) と、おくざしきにつれていきました。  
 五91(手) のこが、えんの下にあたまをだしたので  
 五92(手) 、たたみのまん中にあなをあけてやつた  
 五92(手) 。それ、たけのこにごはんつぶがついて  
 五92(手) れそれ、たけのこにごはんのつぶが――

五九二 七 〇 すよ。ごはんの中にたけのこのはいって  
 五九二 九 〇 「いや、たけのこにごはんつぶがついて  
 五九三 六 〇 て、うらのいどばたに立ちました。むこう  
 五九三 九 〇 んは、いつまでも月にみとれていました。  
 五九四 二 〇 、山へわらびをとりにいきました。その帰  
 五九四 三 〇 ました。その帰り道に、一わの小鳥のひな  
 五九六 一 〇 。あたまからせなかにかけて、き色がかっ  
 五九六 一 〇 色がかった美しい鳥になりました。〔略〕  
 五九六 六 〇 。夏休みがすむころには、ひなはもう、か  
 五九七 二 〇 そういつているうちに、秋になりました。  
 五九七 二 〇 っているうちに、秋になりました。まいに  
 五九七 五 〇 んできます。その中には、ひわのむれもあ  
 五九七 七 〇 のうちのまつの木にとまったり、かえで  
 五九八 四 〇 〔略〕。こんなふうに、自分でもさえずり  
 五九八 五 〇 た。いちばんはじめに、それをおかあさん  
 五九九 三 〇 わは、かたのところにけがをして、ころが  
 五九九 一 〇 〔略〕。おとうさんにいわれて、よくみる  
 五九九 一 〇 、よくみると、ねこにひっつかれた羽がぶ  
 五九九 五 〇 さんちゃん、ひわによくいつてきかせま  
 五九九 九 〇 どばたの高いところにかけますが、おひる  
 五九九 一〇 ますが、おひるすぎには、かえでの木につ  
 五九九 一〇 ぎには、かえでの木につるしておきます。  
 五九九 一〇 します。かえでの木につるしておくと、い  
 五九九 六 〇 と鳴いて、木のかげにかくれました。どこ  
 五九九 一〇 で鳴いて、おしまいに、〔略〕。と、本を  
 五九九 一〇 りました。いつのまにか、しじゅうからは  
 五九九 一〇 わをほめました。秋になると、また、わた  
 五九九 一〇 んのうちのまつの木におりてきました。ひ  
 五九九 八 〇 きみも、いっしょにむこうへとんでいこ  
 五九九 二 〇 いつまでも、ここにいるよりしかたがな  
 五九九 四 〇 〔略〕。ここにいる、なにか、おも  
 五九九 九 〇 、おどろいて、すぐにまつの上へにげ

五九九 二 〇 いから、いっしょにあそぼうよ。」かご  
 五九九 九 〇 ました。近いうちに製材所ができて、の  
 五九九 二 〇 かし、ひわは、すぐに、〔略〕。と、まね  
 五九九 二 〇 じくらしいはの中にしまいこまれていた  
 五九九 三 〇 な鉄のねじが、ふいにピンセットにはさま  
 五九九 四 〇 、ふいにピンセットにはさまれて、明かる  
 五九九 五 〇 物が、ごたごたと耳にはいり、目にはいる  
 五九九 六 〇 たと耳にはいり、目にはいるばかりで、な  
 五九九 七 〇 のは、しごと台の上ののっている小さなふ  
 五九九 八 〇 ガラスの中で、そばには小さなしんぼうや  
 五九九 九 〇 具も、おなじ台の上によこたわっている。  
 五九九 一〇 かべやガラス戸だには、いろいろな時計  
 五九九 一〇 て、あれはなんの役にたつのだろう、これ  
 五九九 一〇 これはなんの役にたつのだろうか、これ  
 五九九 一〇 どと考えているうちに、ふと、自分のこと  
 五九九 一〇 、ふと、自分のことに考えおよんだ。〔略〕  
 五九九 一〇 めて、世の中の役にたつのに、どれもこ  
 五九九 一〇 の中の役にたつのに、どれもこれも不足  
 五九九 一〇 さくて、なんの役にもたちそうにない。  
 五九九 一〇 んだ。〔略〕。ふいにバタバタと足音がし  
 五九九 一〇 んだと思つと、すぐにおとしてしまった。  
 五九九 一〇 ごと台のあしのかげにころがっていった。  
 五九九 一〇 おいたねじのないのに気がついた。〔略〕  
 五九九 一〇 うなものでも、役にたつことがあるのか  
 五九九 一〇 、「こんなところにもころがおちてしまつ  
 五九九 一〇 。ねじは、「ここにいます。」とさげび  
 五九九 一〇 のとき、いままでも雲にかくれていたとい  
 五九九 一〇 、日光が店いっばいにさしこんできた。す  
 五九九 一〇 んで、きかいのあなにさしこみ、小さなね  
 五九九 一〇 ねじは、自分がここにはいったために、こ  
 五九九 一〇 ここにはいったために、この時計ぜんたい  
 五九九 一〇 た時計をちよつと耳にあててから、ガラス

五九九 一〇 、ガラス戸だの中にすりさげた。一日お  
 五九九 一〇 分もほんとうに役にたっているのだ。」  
 五九九 一〇 た。ちやうど、そばに小川が流れていまし  
 五九九 一〇 もうすこしで口が水にとどきそうになつた  
 五九九 一〇 、「〔略〕。」というまに、川の中におちてし  
 五九九 一〇 というまに、川の中におちてしまひました  
 五九九 一〇 とつて、ありのそばにおちてやりました  
 五九九 一〇 て、すぐ木の葉の船につかりました。そ  
 五九九 一〇 た。そうしてその上に乗りました。木の葉  
 五九九 一〇 た。木の葉の船は波に流されて、川の岸に  
 五九九 一〇 に流されて、川の岸につきましたので、あ  
 五九九 一〇 、ありは、ぶじに岸にあがることができま  
 五九九 一〇 りは、心から木の葉におれいをいしました  
 五九九 一〇 歩くのをやめて、弓に矢をつがえて、木の  
 五九九 一〇 らいました。木の上には、一わのはとがと  
 五九九 一〇 ていることを知らずにいました。ありは、  
 五九九 一〇 いでかりうどのすねにはいのぼりました。  
 五九九 一〇 ありでも、力まかせにかんだので、かりう  
 五九九 一〇 るもの、そのうしろに合唱隊がならんで、  
 五九九 一〇 っています。まん中に、しきしきがタクト  
 五九九 一〇 りの木の葉は喜びにみち、きよらかな風  
 五九九 一〇 六二〇 九 一 テーブルのまわりにあつまって、まるく  
 五九九 一〇 なります。テーブルには、お茶が用意して  
 五九九 一〇 が、たくさんおさらにもつてあります。み  
 五九九 一〇 六二二 一〇 、「ここにいっしょに音楽会をやろうじゃ  
 五九九 一〇 六二四 三 〇 、こないだのときにあそばないで、いつ  
 五九九 一〇 六二四 四 〇 だね。楽しむために生きているんじやな  
 五九九 一〇 六二五 一 〇 、はたらけるときにははたらくのですよ。  
 五九九 一〇 六二五 二 〇 す。小さなからだに大きな荷物。荷物が  
 五九九 一〇 六二五 四 〇 もい足どりでかみてにさつていきます。し  
 五九九 一〇 六二六 一 〇 、しもて半分はそとになつていきます。雪が  
 五九九 一〇 六二六 二 〇 降っていて、夕ぐれに近いころ。あり一

六26 6 〇そろそろ夕ごはんにしようか。」あり二、  
六26 10 〇「夏をあいだに、こんなにたぎぎを  
六27 8 〇はたらかないものには、この楽しさ、こ  
六28 1 〇このとき、戸のそとに、きりぎりすが二ひ  
六30 4 〇の方からみつをびんにいれてもってきます  
六30 5 〇。それをきりぎりすにわたします。きりぎ  
六31 7 〇のもへ」の顔で、風に向かって立っている  
六31 9 〇。きものすそが風にあおられる。3 雲  
六32 1 〇4 木が大ゆれにゆれる。木の葉がと  
六32 4 〇「これぐらいの風にまけるものか。」7  
六32 5 〇。7 かかしの顔に葉がとびかかる。て  
六32 8 〇音。9 かかしが風にまきあげられる。糸  
六32 9 〇。たたこのように、空にすいこまれていくか  
六33 1 〇。て、子 がらすをすにひきもどす。12 白  
六33 3 〇12 白いひげの雲が風に流されている。13  
六33 5 〇13 風を受けるたびに雲のからだのかっこ  
六34 1 〇う。」雲、山のかげにかくれて、ここから  
六34 7 〇。て、また、ひげの中におちる。15 かかし  
六36 1 〇し。18 大すぎの上にやっととまったかか  
六36 6 〇るようにあたまを地につけるすぎの木。は  
六36 8 〇ふきあげられて、空にきえていくかかし—  
六36 8 〇ていくかかし—点になって、おしまいに  
六36 9 〇になって、おしまいはみえなくなつてし  
六36 10 〇がよくなる。それにつれて、空がうす赤  
六37 3 〇つ——とがった屋根にひっかかっているか  
六37 9 〇動く。25 ずっと下にみえる夕やけの大通  
六37 11 〇車が、ひっきりなしにゆききしている。26  
六38 5 〇しょう。あの屋根にとまっているのは。  
六38 10 〇てきてかかしの近くにとまる。親つばめ「  
六39 2 〇す。きょうの大風に。」子つばめへえ。  
六39 3 〇へえ。きみ、どこにいたの。」かかし「あ  
六39 7 〇つばめ」でも、村に帰らなくちゃ。あな

六40 6 〇、もう一どあの村に帰りたいなあ。」31  
六40 7 〇31 かかしのまわりに、村の子どもや、森  
六40 10 〇る。夕やけがばら色にこくなる。かかしの  
六41 1 〇ビルディングのまどに、一つ二つと火がつ  
六41 7 〇めが、かかしのそばにとまる。親つばめ「  
六42 6 〇くれきらないうちにおねがいします。」  
六42 8 〇めのむれ、屋根の上にひとかたまりになる  
六42 9 〇の上にひとかたまりになる。それがほぐれ  
六42 10 〇れがほぐれて、一列にビルディングをはな  
六42 11 〇かかしが列のまん中にはいつている。37  
六43 4 〇の上をひとかたまりになってとぶつばめの  
六43 6 〇れ。39 その列が空にすいこまれていく。  
六43 9 〇色。40 青黒い夜空に大きな三日月さま。  
六44 1 〇白い雲。42 木の枝にとまっている二わの  
六44 6 〇さんやおかさんにもわからないんだっ  
六44 7 〇目を見ましたときには、おびみたいなも  
六45 7 〇。かかしの目のまえに、風にそよぐ金色の  
六45 7 〇しの目のまえに、風にそよぐ金色のいねが  
六45 9 〇のいねが、いちめんにつづいている。四  
六47 8 〇びだす子うまの顔に、 かきはすずなり  
六49 7 〇うすむらさきにほのぼのと、明か  
六51 5 〇いました。そのうちに、あたりがぎゅうに  
六51 7 〇げました。月は、雲にはいつたかと思うと  
六54 4 〇がついて、まえの方にある木の下へいきま  
六54 5 〇て、しばらく枝ごしに月をみていました  
六54 9 〇ききました。「ここに立って、お月さまを  
六54 10 〇ふたりはそのとおりにしてみました。する  
六54 11 〇と、月は枝のあいだにじつとしていますが  
六55 6 〇。ふみおがねるまえにそとをみると、空は  
六55 6 〇と、空はいつのまにか、雲一つなく、き  
六55 9 〇さっきの枝のあいだにはなくて、木をずっ  
六56 3 〇新聞を発行することになりました。かべ新聞

六56 4 〇、一組でつくることになりました。それか  
六56 6 〇んしゅうをすることにきめました。私たち  
六56 7 〇まって、どんなものにしようかといろいろ  
六57 4 〇新聞を発行することになりました。これに  
六57 5 〇になりました。これには、みんなにお知ら  
六57 5 〇。これには、みんなにお知らせしたいこと  
六58 1 〇でも、かかしのものにお知らせください。  
六58 5 〇一年生の子が、学校にくる道で、はき物に  
六58 5 〇にくる道で、はき物に雪がついてころびま  
六58 7 〇した。そのひょうしに足をいたためて、歩け  
六59 3 〇う、おもしろいことに気がつきました。そ  
六59 7 〇声のかずが、五か七になっているのです。  
六59 10 〇。ウスムラサキニ——七 ホノボノト  
六60 8 〇五 それから、まえにならったのを思いだ  
六60 11 〇五 アンナトコロニ——七 サキマシタ  
六61 2 〇るたやことわざの中にも、このことのアて  
六61 8 〇す。毎朝、このらん、その日の朝の温度  
六62 5 〇きゅうりがくつの中にはいりました。「略  
六63 9 〇。つかまえて、たなにあげたら、あぶくを  
六64 2 〇た。どうして、八時になると、ねむくなる  
六65 4 〇のはなにあに。二上にすれば下になり、下  
六65 4 〇。二上にすれば下になり、下にすれば上  
六65 4 〇すれば下になり、下にすれば上になるもの  
六65 4 〇なり、下にすれば上になるものはなにあに。  
六65 6 〇はたらくときはよこになり、休むときは立  
六65 8 〇がわかった人は、紙に書いてかべ新聞がか  
六65 9 〇べ新聞がかりのものにだしてください。  
六66 2 〇づき話 この第一号に、つづき話の第一か  
六66 7 〇しょう。どんなふうにお話がすすんでいく  
六67 2 〇かい） あるところに、一びきの子ぐまが  
六67 5 〇ると、一びきのさるにであいました。「略  
六68 1 〇」といって、木の上にするするとおぼって

六六八 4 　　れを切りとつて新聞にはりつけました。そ  
六六九 8 　　第二号がどんなふうになるか、楽しみです  
六七〇 2 　　のはるえといっしょになって、大きな雪だ  
六七〇 9 　　へ。」そこへ、中学校に通っているねえさん  
六七一 8 　　た。はるえは、まえに「こくご」でならつ  
六七三 一 　　《略》。」おとうさんにたずねられて、「《略  
六七四 2 会 　　。生きているものには、みんな命という  
六七五 10 　　るまのかたのところに、まつの枝をつけま  
六七八 一 　　ごろうはおとうさんに、この考えついたこ  
六七九 2 会 　　左のむねのところに手をあててごらん  
六八一 4 会 　　よう一日だけ、私につりをさせてくださ  
六八五 3 会 　　と」「つりばりを魚にとられてしまいまし  
六八七 3 会 　　と」「つりばりは魚にとられてしまうし、  
六八七 5 会 　　まうし、にいさんにはしかられるし、困  
六八七 6 会 　　げましょう。そこに船がある。あれにお  
六八七 7 会 　　に船がある。あれにお乗りなさい。まも  
六八七 9 会 　　、きれいなごてんにつくでしょう。」ほ  
六八七 10 会 　　ごてんの門のそばにいどがあつて、その  
六八七 11 会 　　あつて、そのそばには、大きな木が立  
六八八 2 会 　　は、その大きな木にのぼつて、まってい  
六八八 4 会 　　い。」ほおりの「木にのぼるのですか。」  
六八八 7 　　う。さあ、早く船にお乗りなさい。おし  
六八八 8 　　のごてんの門のまえに、大きな木が立  
六八八 9 　　ぼつてみよう。」木にのぼつて、下を  
六八九 3 会 　　や、あんなところにいどがある。きれ  
六八九 9 会 　　っぱなかが、水にうつっているわ。」  
六九〇 4 　　で、ほおりのみにこにさしあげる。ほ  
六九〇 5 　　とは、ぐつとおのみになつて、ほおりの「あ  
六九〇 8 　　六のぼめん 正面に、海の神がこしをか  
六九一 一 会 　　。女「海の神さまに、申しあげます。」  
六九一 3 会 　　。女「門の木の上に、りっぱなかがい  
六九一 4 会 　　。」海の神の木の上に、りっぱなかが

六九三 一 海 あがられて、私に海のごてんへいくよ  
六九三 六 ましよう。」女の人に向かって、海の時  
六九四 六 海 うか。みなものになずねるが、だれか  
六九五 一〇 は、しばらくお考えになって、女の人に、  
六九五 一〇 えになって、女の人に、「略。」女「はい。  
六九六 六 海、つりばりをのどにかけまして、たいへ  
六九六 八 海の時」あ、それにちがいない。」女の  
六九六 九 がいない。」女の人に向かって、海の時  
六九七 三 であらって、海の時になしあがる。海の時  
六九七 五 おりのみことのまにさしだしながら、海  
六九七 一〇 る。みことは、それにあわせておどりをお  
六九八 四 つか、おじいさんにいただいた古いめが  
六九八 四 たまと、おとうさんにかつていただいた小  
六九九 九 していた。そのうちに、ふと、おもしろい  
六九九 一〇 を発見した。左の手に、めがねのたまを持  
七〇〇 四 うと思つて、右の手に虫めがねを持つて、  
七〇〇 七 るがつて、ついそこにあるようにみえるで  
七〇〇 一〇 一 おとうさんのお話にきいた望遠鏡が、で  
七〇一 六 まるくらしいの大きさにまいて、その一方  
七〇一 六 て、その一方のはしに、めがねのたまをは  
七〇一 九 できあがつた。つぎに、もう一まいの画用  
七〇一 一〇 いるくらしいの大きさに作つて、そのはしに  
七〇一 一〇 一 に作つて、そのはしに、虫めがねをとりつ  
七〇二 六 かげんしているうちに、はつきりした。電  
七〇四 九 だけだが、そのために発音がすこしおかし  
七〇六 一 んのまねのうまいのに感心した。弟は、ま  
七〇六 一 心した。弟は、まに、「略。」というこ  
七〇六 四 ないことを、さきにいったから感心した  
七〇七 五 で、おもしろいことに気がついた。弟はは  
七〇七 六 がつまつているために、あることが、う  
七〇七 八 がある、ということに気がついたのである  
七〇八 三 はながつまつたために発音がでなくなる

六108 5 ら声のするような音にちがいない。そうし  
六108 10 で、ものをいうときに、声はなからでる  
六110 1 。弟は、こんなふうにして、「はな」とい  
六110 4 ら、「ダ」や「ド」にいいかえればいいわ  
六110 5 いいわけだ。ためしに、「なんだ」という  
六110 9 んだ」というかわりに、「ダンダ」といっ  
六111 2 新しいことがあたまたにうかんだので、もう  
六111 2 という一ぎょうの中にはいつている音ばか  
六111 8 ようだ。ねんのために、はなをつまんで、  
六112 2 わかった。このほかに、弟は「ミ」、「ム」  
六112 3 という一ぎょうの中にはいつている。こここ  
六112 9 ブベボ、パビブベボにいたるまで、みんな  
六112 11 のは、一年生のときにならったからよく知  
六113 2 らべたもの」ぐらいに思つて、それ以上ふ  
六113 7 た性質をもっているにちがいない。ぼくは  
六113 11 ついたことをみんなに話して、びっくりさ  
六114 4 です。はじめてあげにいったときに、みん  
六114 4 てあげにいったときに、みんなが、「略」  
六115 7 たこが青空で右や左にゆれると、自分もい  
六115 8 と、自分もいっしょに首をふりながら、し  
六117 4 、ま四角な紙と、骨にするほそい竹二本と  
六117 8 できました。はじめに半紙をま四角に切り  
六117 9 、いつかおかあさんに教えていただきまし  
六118 1 わらい顔をかくことにしました。クレヨン  
六118 2 バックをむらさき色にぬりつぶしたら、た  
六118 7 ってきました。つぎに骨のとりつけです。  
六118 11 めました。紙のうらには、まん中に、ま四  
六118 11 のうらには、まん中に、ま四角に切ったと  
六119 1 ま四角に切ったときにつけたすじがたてに  
六119 1 につけたすじがたてについています。その  
六119 2 ています。そのすじにあわせてひごを切り  
六119 5 はなく、上へ弓なりにまげるのですから、

六119 5 うでした。じつさいに紙の上でいろいろと  
六119 6 、ちょうどいい長さにひごを切りました。  
六119 9 きたので、おかつてにいらつしやるおかあ  
六120 4 会 ね、ただしちゃんにあげるの。」「略」。  
六120 6 会 がかわかないうちにあまりいじると、す  
六120 8 だいに本ばこの上にのせておきました。  
六122 2 たちは、おさるさんにみんなまつかさをあ  
六122 6 んぽんとおさるさんにながてやりました。  
六122 9 で遊びました。そこには、くるみの実が、  
六123 2 でわってたべることにしました。「略」。  
六124 2 会 んとれたね。ぼくにもちょうだい。ぼく  
六124 7 「りすさんは、両手に、くるみをにぎって  
六126 3 んたちは、めいめいにあなをほりはじめま  
六128 2 、とんとことさがしにでかけました。おに  
六128 10 、トンネルのさか道に足をすべらせて、こ  
六129 8 会 「いま、きつねに追いかけてられている  
六130 1 会 ぐぼくが、きつねにみつかったしてしまうか  
六130 4 たぬきさんが、ま顔になつていうので、う  
六131 3 会 う。ぼくはきつねに追われてなんかいや  
六132 4 会 あの山のてっぺんにしよう。いいかい。  
六132 8 さきさんたちのまえに、大きなしかがさんが  
六132 10 会 かけっこのなかまにいられてくれたまえ。  
六133 10 会 」。」「勝ったものになにもないなんて話  
六134 6 うせ、足の早いことにかけては、しかがさん  
六134 6 かけては、しかがさんにかないません。そう  
六134 9 りません。しかがさんに勝ったところで、あ  
六134 10 ったところで、なんになりましよう。ちっ  
六136 3 ろが、ぶどうのつるに、角がひっかかりま  
六136 6 はたおれた木のみきにトンとけつまずいて  
六136 9 ひきひき、てっぺんにたどりつきました。  
六136 11 りつきました。そこには、もううさぎさん  
六137 1 して、木の切りかぶに、つぎのようなこと

六137 5 会 だと、ひとをばかにしている。ようしや  
六137 10 りました。そのうちに、しかがさんは、いつ  
六137 11 かさんは、いつのまにかはぐれてしまいま  
六138 1 、大きな岩のところにでました。「略」。  
六138 5 でゆつくり休むことにしました。ところが  
六138 6 この大きな岩のかげに、とらさんがねむっ  
六139 9 うてん、みんな地面にべたんとうつぶして  
六140 1 会 。どれ、ごちそうになろうかな。」「のそ  
六140 2 そり、のそり、そばに歩いてきました。う  
六140 9 んになって、神さまにおいのりをしました  
六141 4 会 た。「おれがさきにうさぎをみつけたの  
六141 5 会 の谷をわたるときに、ちゃんとみつけた  
六141 11 う一びきのとらさんにとびかかりました。  
六142 2 をはじめました。上になつたり、下になつ  
六142 3 。上になつたり、下になつたりしました。  
六142 4 ました。そのあいだに、うさぎさんたちは  
六142 8 もこえました。谷川にそって、山のふもと  
六142 8 会 そって、山のふもとにでてきました。やっ  
六142 9 としずかな廣い野原にでました。野原には  
六142 9 会 原にでました。野原には、日の光がいっぱ  
七4 9 会 、いちばんはじめにくるのは、だれかな  
七5 3 「朝日の光がななめにさしてきた。校舎の  
七5 6 て、うすべに色の空にきえた。「略」。「か  
七5 9 て、げたばこのかげにかくれた。つぎから  
七7 6 会 ふりながら、先生にさようならをして走  
七7 8 会 どでいいから、風になりたい。風になつ  
七7 8 会 風になりたい。風になつたら、学校の中  
七7 11 会 なが勉強する教室にはいつて、こしかけ  
七8 7 鳴く。その声が校庭にひびきわたる。やぎ  
七8 10 る。しゅくちよく室にひがともった。白い  
七9 3 会 業生たちは、どこにどうしているだろう  
七9 4 会 。もう、四十五年にもなる。あの日から

七9 7 会 ろな話がある。春には春の話、秋には秋  
七9 7 会 春には春の話、秋には秋のものがたり。  
七9 11 略」。おぼろ月が空にかかっている。さく  
七10 2 会 しもりは、渡し船に子どもが乗ると、こ  
七10 9 、それから、ねむりにおちていった。二一  
七11 5 「手」ということばにも、いろいろなつか  
七12 2 つところということばになります。また、「へ  
七12 3 。また、「あさがおに手をやりましよう。  
七13 1 が、文字を書くことになつてきたのでしよ  
七13 6 手」は、どんないみにつかわれているので  
七14 2 しょうか。「ゆく手に、まつの木が立つて  
七14 3 すばらしいものを手にいれたね。」「略」。  
七14 5 」。」「ちよっと、手にあまるしことだな。  
七14 6 略」。」「略」。」「手にとるようによくわか  
七14 11 略」。」「略」。」「腹に思っていることと、  
七15 8 ちのからだの名まえに、このような、いろ  
七16 3 会 ようちよ、なの葉にとまれ。」「音楽が、  
七16 5 くる。学校の運動場に、子どもたちが集ま  
七17 4 会 うちよ、なの葉にとまれ。」「唱歌が、  
七18 1 会 生、この実はなににするんですか。」「先  
七19 1 会 「あぶないよ。川に落ちないようにな。」  
七19 5 会 ようちよは、どこにかくれているんです  
七19 7 会 げた草むらの中に、かくれているのさ  
七20 5 会 、だいこんを、庭に二十本うえたんです  
七20 6 会 、たねをとるために、一本だけのこして  
七20 11 会 うちよが、白い花にとまった。」「男の子  
七21 1 会 四「あつ、こつちにも。」「女の子四「あつ  
七21 2 会 女の子四「あつちにも。」「先生」とまつて  
七22 5 会 、すずめはなににくるの。」「すずめが、  
七22 8 会 いちゃん。なににくるの。」「兄「あおむ  
七22 9 会 あおむしをさがしにくるのさ。」「はるお  
七22 11 会 の。」「兄「すずめにやるのさ。」「はるお」



七二三 おかあさんがおいでになる。母「なに  
七二四 七二四 をそうじして、砂に水をやるから。」は  
七二四 七二四 しいくびんの中の砂に水をやる。はるお  
七二四 七二四 して、葉を砂の中に立てるの。」兄「かれ  
七二四 七二四 兄は、二センチほどに大きくなったあおむ  
七二四 七二四 おむしを、新しい葉にうつす。兄「ねえ、  
七二五 七二五 まごから小さい虫になるのに、七日かか  
七二五 七二五 小さい虫になるのに、七日かかっていま  
七二五 七二五 「はっぱと同じ色になったのね。どうし  
七二五 七二五 、はっぱと同じ色になるのか、わかりま  
七二六 七二六 なるのは、鳥などに、すぐみつからない  
七二六 七二六 むしが、へんな色にかわっている。」兄  
七二七 七二七 おかあさん。黄色になっちゃった。」母  
七二七 七二七 った。」母「さなぎになったのですよ。先  
七二七 七二七 ちあおむしがさなぎになるって、教えてく  
七二七 七二七 ね。」兄「観察日記に、さっそく、これを  
七二八 七二八 うね、國語の時間に、先生にほめられた  
七二八 七二八 語の時間に、先生にほめられたの。」母  
七二八 七二八 あおむしがさなぎになったところを書い  
七二九 七二九 たね。どんなふうにかわったの。」兄「よん  
七二九 七二九 のはっぱと同じ色にかわっていた。それ  
七二九 七二九 れは、すずめたちになべられないためだ  
七二九 七二九 もう黄色なさなぎにかわっていた。弟が  
七三〇 七三〇 が、ぼくよりさきに、それをみつけた。  
七三〇 七三〇 「いま、にいさんに日記をよんでもらっ  
七三〇 七三〇 よ。きょう、先生にほめられたんです  
七三〇 七三〇 はるお、いっしょに遊ぼう。」立ちあが  
七三一 七三一 前に。」兄「ちようになつた、ちようにな  
七三一 七三一 になった、ちようになつた。」はるお「ほ  
七三一 七三一 。母「白いえのぐにみどりをとこしたよ  
七三二 七三二 っている。」母「空気にふれて、すこしずつ  
七三二 七三二 「あかんぼのくせに、ひげなんか。」兄「

七三三 庭のだいこんの葉に、うつしてやりまし  
七三三 七三三 んからとりだす。庭には、日光が降りそそ  
七三四 七三四 のさぶろうは、乗るには乗ったものの、動  
七三五 七三五 ろうは、私のからだにすがりついていまし  
七三五 七三五 、汽車がゆれるたびに、前後からおされて  
七三五 七三五 は、だんだん頭を私によせ、おしまいは  
七三五 七三五 私によせ、おしまいは、私とさぶろうと  
七三五 七三五 まるで、一つからだになつてしまふかと、  
七三五 七三五 るとき、おかあさんに、「略。」とうけあ  
七三六 七三六 いました。「ここに子どもがいる。かわ  
七三七 七三七 は、さぶろうのかたに手をかけて、「略」  
七三七 七三七 とり、わらいもせずに、両方の手でまどわ  
七三七八 七三七八 ます。私たちのために、せいっぱいの力  
七三八 七三八 さあ、いまのうちに、さきの方へいらっ  
七三八 七三八 で、ひとあしすむにも、よいいではあり  
七三八 七三八 「さあ、リレーにしよう。」といった  
七三九 七三九 けとつて、つぎの人に渡しました。それか  
七三九 七三九 に送られていくうちに、にこにこ顔になり  
七三九 七三九 うちに、にこにこ顔になり、とうとう、う  
七四〇 七四〇 た。三郎は、だれかにゆずってもらった座  
七四〇 七四〇 てもらった座席の上に立つて、「略。」と  
七四〇 七四〇 私は、さぶろうの方に近よりながら、車中  
七四〇 七四〇 がら、車中の人たちに、心の中でお礼をい  
七四一 七四一 、ちようど、かふんにまみれたみづぼの  
七四一 七四一 ねむっていた。ふいに、はくしゅがおこっ  
七四一 七四一 ますと、向こうの席にひとりの青年が立つ  
七四一 七四一 いた。かれは、むねに、大きなびかびかし  
七四一 七四一 れていたが、ひく手にくるいはなかった。  
七四二 七四二 が、旅をしてきた私には、しみじみときか  
七四二 七四二 た。汽車はトンネルにはいった。しかし、  
七四三 七四三 とですが、わたしにちよつと話をさせて  
七四四 七四四 しを、そばの人の手に渡した。ぼうしは、

七四四 渡り、お金がその中にたまつた。私のまえ  
七四四 七四四 たまつた。私のまえにもぼうしがきた。私  
七四四 七四四 くらかのお金をそれにくわえた。車中をひ  
七四四 七四四 らがの老人のところにどつた。老人は、  
七四四 七四四 いって、青年のまえにすすみだた。「略」  
七四五 七四五 しは、こんなことになろうとは、思つて  
七四五 七四五 、たいくつまぎれにひいたのです。せつ  
七四五 七四五 ういつてから、老人にぼうしを返した。そ  
七四五 七四五 が、ふたりのあいだにとりかわされた。お  
七四五 七四五 わされた。おしまいに、青年は、大きな声  
七四五 七四五 「それでは、お礼にわたしのいちばんと  
七四五 七四五 のまどから、夕ぐれに近いそとをながめた  
七四五 七四五 い道、そこを自轉車に乗って走る中学生、  
七四五 七四五 ンを黒ぬりのケースにおさめた。駅は、東  
七四五 七四五 はとれません。つぎに、「ドッジボール大  
七四五 七四五 んあります。はじめに書いたのと、二回め  
七四五 七四五 書いたのと、二回めに書いたのとを、くら  
七四五 七四五 てあるだけ、よむ人に、はつきりと、その  
七四五 七四五 ぼくも、せんしゅになつて、いっしょう  
七四五 七四五 いにやつた。はじめに、ひがし村の学校と  
七四五 七四五 しました。第二回めには、にし村の学校と  
七四五 七四五 れも勝つた。さいごに、町の学校とやるこ  
七四五 七四五 町の学校とやることになった。あぶなか  
七四五 七四五 も、みんな、運動場に整列して、式をあげ  
七四五 七四五 式をあげた。はじめに、ぼくの学校とひが  
七四五 七四五 、しあいをする事になった。ぼくたちは  
七四五 七四五 ボールをつかうことになった。ふえがまた  
七四五 七四五 センターまで、外野にでてしまった。ぼく  
七四五 七四五 村の学校とやることになった。このときは  
七四五 七四五 ールが、よくあいてにあたつて、ちよつと  
七四五 七四五 、ちよつとのあいだに、勝つことができた  
七四五 七四五 「おうえんの声が耳にひびいてくる。セン

753 10 が、外野のセクターにれんらくをとって、  
 754 2 めて、すぐセクターに渡した。ボールは、  
 754 3 、すばやくあちこちにとんだ。そのたびに  
 754 3 にとんだ。そのたびに、「略。」という声  
 754 4 声がおこった。ふいに、ボールが、ぼくの  
 754 4 ルが、ぼくのところにとんできた。ぼくは  
 754 5 た。ぼくはよこだきに受けとめた。あぶな  
 754 7 みんな、また運動場に集まって、終りの式  
 755 4 せん。そのはんにたいに、ふでをいれるほ  
 755 7 ことがあります。心にはつきりとえがかれ  
 756 3 いています。根もとに、ぼたぼた落ちてい  
 756 5 。家と家とのあいだに、ほそ長く光ってい  
 758 6 黄色いやまぶきの花に、黄色いちようがと  
 759 5 花びらが、くもの巣にかかってゆれている  
 761 4 たせみが、かきの木につきあたって、パタ  
 765 1 けさ書く。いつのまにか、葉ばかりのさく  
 765 1 、葉ばかりのさくらになって、毎日のはれ  
 766 5 ゆれている。うら山に、みかんを持って遊  
 766 5 みかんを持って遊びにきている。よい天気  
 767 2 小鳥の声も、夕がたになつてくる。(三)  
 767 4 をちようこくするの、二つのやりかたが  
 767 7 らえておいて、それにねんどでだんだん肉  
 767 9 だいに、その人の顔にせていくやりかた  
 768 2 んだん、その人の顔にせていくやりかた  
 768 4 くわしく書きたすのにています。あとの  
 768 7 ころは一つです。心に思ったことを、はっ  
 768 7 写しだすということにほかなりません。  
 769 4 と、春は、小さな川にまで、あふれている  
 770 3 たのか、すぐうしろに、月は、音もなく、  
 774 4 。いま、まっぶたつになるすいかだ。七  
 774 7 人 甲と乙、ほかに、ひとりの旅人。と  
 775 2 乙「ちよつとのまに、いなくなつてしま

775 5 す。甲「砂のほかに、なにもみえない。  
 775 9 甲乙が、いっしょにふり返って、甲乙「  
 777 9 りして、乙「それにちがひありません。  
 777 11 か。」旅人は、それには答えないで、また  
 778 5 うです。」乙「どこにいるか、早く教えて  
 778 8 それとも、だれかにおききになったので  
 778 8 、だれかにおききになったのですか。」  
 779 1 へつれていったのにさういらない。」旅人  
 779 3 しよへ、いっしょにいってもらおう。」  
 780 4 休みしているうちに、つい、ねむつてし  
 780 9 そのとき、この人になつたのです。」  
 781 10 す。」裁判官「ほかにまだ、知っていたか  
 782 4 んだのは、この男にちがひありません。  
 782 8 「なにか、そちらにも、いいぶんがある  
 782 11 いますと、砂の上にならぬ足あとが  
 783 8 あとが、一つおきにあさくなつていまし  
 784 3 二三本ぬけているにちがひないと、考え  
 784 11 もありません。道に、麦がこぼれていた  
 785 5 官は、ふたりのものに向かつて、裁判官「  
 785 10 くへいかないうちに。」甲乙ふたり、い  
 786 3 、うさぎをかうことになりました。先生が  
 786 4 色のうさぎを、かごにいれて持つていらつ  
 787 2 、しらべてみることにしました。きようは  
 788 9 ばかりたべて、まえにたべのこした古い草  
 789 3 、みんで、13びきになりました。白うさ  
 789 7 23度 よく晴れた日には、とても元氣があ  
 791 8 か、黒いうさぎの上に乗って、たべました  
 792 5 しました。だすときに、わらを足でつけた  
 793 3 から四ばんめのへやに、子うさぎが4ひき  
 793 6 がはいっているへやに、えさがなかつたの  
 793 8 から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、  
 794 2 けさ、白うさぎは耳にけがをしました。ほ

794 5 のち晴 29度 お晝に、うさぎのところへ  
 794 7 て、まえ足を胸の下にいれていました。  
 795 5 たら、左がわのへやに、毛がたくさんぬけ  
 795 6 くみると、おくの方に、わらが果のように  
 795 8 らんでいて、その中に、わたのようなふわ  
 795 9 ていました。その毛にくるまって、うさぎ  
 796 8 、目があき、からだには、すっかり毛がは  
 797 2 白の子うさぎは、親について、はじめて、  
 797 3 きました。草のそばにきて、口をくつつけ  
 797 9 て、親うさぎのうちにすがりつきますと、  
 799 7 ました。よいぐあいに、みんな元氣よくそ  
 84 2 ほどもえ、私のうちに、ピオという、うち  
 84 7 いたるところの山野に、いちばんたくさん  
 84 9 て、ピオが私のうちにかわれるようになって  
 85 3 まえのうすくらがり、大ぜい人が立つて  
 85 8 たとくべつで、そばにすえた小さなかごの  
 85 10 遊ばせたり、口さきにくんだえさをとら  
 85 11 らしさ、おもしろさに、黒山の人だかりだ  
 86 3 、小さなボールばこにいれてもらつて、だ  
 86 4 晩から家族のひとりになり、あくる日、ピ  
 86 7 たばかりか、頭の上にも乗り、口さきのめ  
 86 10 たたくと、ひざの上にとび乗つたり、三ど  
 86 11 り、三ど三どの食事に、テーブルの上でお  
 87 5 ずさりして、うしろに氣づかず、テーブル  
 88 10 んとりこうな、土地にかんけいのふかい鳥  
 89 1 のほうでも、その氣になつたらしく、とき  
 89 3 じどころか、庭の木にとまらせても長くは  
 89 5 うように――庭さきにいるとき、とつぜん  
 89 7 まへにげこみ、そこにすわっている私のひ  
 89 8 る私のひざのあいだにもぐつたり頭をつつ  
 810 2 るのです。うちの中にいるかぎり、こわい  
 810 2 知らずで、なにか氣にいらなかつたりおこ

八二五 かりでなく、茶のまにいたうちじゅうのも  
 八二四 んなあわてて、口々によんで、元氣づける  
 八二三 なたからだをわたにつつんで、小ばこに  
 八二二 につつんで、小ばこにいられて、庭さきの、  
 八二一 つばきの木の根もとにうめてやりました。  
 八二〇 を、あやまちのためにあわれに死なせたと  
 八一九 しものふかい朝の野にでたとき、「略。」  
 八一八 (一) 夏の終りに、せどのおおぎりの  
 八一七 のおおぎりの木の皮に生みつけられた、あ  
 八一六 のさきで、かたい皮にあなをあけて、てい  
 八一五 きをつたつて、地面に向かつて、すべつた  
 八一四 ていきました。地面におりた虫たちは、や  
 八一三 、やがて、思い思いにやわらかいところを  
 八一二 をさがして、地の中にかくれてしまいまし  
 八一〇 も、なにかの木の根にいきあたります。し  
 八〇九 さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいと  
 八〇八 の口のさきを根の中につきさして、木のし  
 八〇七 えば、母親のちぶさにすがったようなもの  
 八〇六 同じように、しぜんになつたかきさ  
 八〇五 ますが、大きくなるにつれて、六本の足が  
 八〇四 もトンネルをはるのにつかいますから、た  
 八〇三 とえ一二センチ歩くにも、トンネルをほつ  
 八〇二 安全です。同じ地中に住むものでも、こが  
 八〇一 みごえやこえ土の中に生みつけられて、わ  
 八〇〇 もかからないと、親になることができない  
 七九九 の子たちは、はじめにはあさいところにい  
 七九八 めにはあさいところについて、ほそい木の根  
 七九七 ますが、大きくなるにつれて、だんだん地  
 七九六 ります。そこで地表に近づいてきて、皮を  
 七九五 つすぐなあなを地表に向けてほつていき、  
 七九四 土をかきわけて地上にはいできます。(二)  
 七九三 で、ねこや、すずめにみつけれられたらたい

八二六 たいへんです。地上には、一本のさきだけ  
 八二五 つこうをして、それにはいあがつていきま  
 八二四 ほどのぼったところに、小枝がわかれてい  
 八二三 ました。虫は、それにとりつくど、まえ足  
 八二二 のつめでかたくそれにしがみついて、動か  
 八二一 た。あめ色のせなかに、たてのすじがはい  
 八二〇 の下のほうだけが皮にかくれています。虫  
 八一九 にして、頭をうしろにさげました。しばらく  
 八一八 ていました。みるまに、羽はすりりとび  
 八一七 虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれし  
 八一六 です。朝日が山の上ののぼつて、明かるい  
 八一五 光がさつとさすところになると、せみの羽は  
 八一四 茶色のところは茶色になって、いかにもあ  
 八一三 せみも、やがて、秋になると、みんな死ん  
 八一二 いてつまでもさきだけにかたくすがりついて  
 八一〇 が走つてきます。中には天帝が乗つておい  
 八〇九 りてきました。そこには、星のかんむりを  
 八〇八 を、もとめておいでになるのです。けれ  
 八〇七 がて、大きな天の川にさしかかりました。  
 八〇六 した。川の水は銀色に光り、はくちようが  
 八〇五 いていました。川岸にそつて車を走らせて  
 八〇四 せていくと、林の中にごてんがあつて、中  
 八〇三 てんの中へおはいりになりました。すると  
 八〇二 のおり物の美しい光に、天帝もすつかりお  
 八〇一 もすつかりおみとれになりました。ひめは  
 八〇〇 めは、なにも知らずにおりつづけました。  
 七九九 だ。むすめのために、りっぱなむこをさ  
 七九八 「略。」こうお考えになった天帝は、その  
 七九七 た。すると、黒うしにまたがり、ふえをふ  
 七九六 いてくる、わかい男にであいました。その  
 七九五 「天帝は、その男にたずねました。「略  
 七九四 たりを一つきおつきになりました。黒うし

八三〇 どれいて、大あばれにあられました。  
 八二九 ゆうは、やはりふえに心をうばわれていま  
 八二八 、男らしいうでまえにうたれて、むすめの  
 八二七 れて、むすめのむこにもあいました。そこ  
 八二六 んぎゅうも、はたけにでてはたかなくな  
 八二五 、たいへんおこりになって、はたおりひ  
 八二四 川の東の岸のごてんにもどしてしまい、け  
 八二三 けんぎゅうを西の岸に帰しておしまいにな  
 八二二 岸に帰しておしまいになりました。はたお  
 八二一 このようすをごらんになって、「略。」と  
 八二〇 て、いよいよその日になると、けんぎゅう  
 八一九 んぎゅうは、黒うしに乗つて、ふえをふい  
 八一八 ますが、星のきよりになりますと、これで  
 八一七 と大きな単位をもとにして計ります。それ  
 八一六 光の速度は、一秒間に地球を七まわり半し  
 八一五 ら発した光が、地球にとどくまでには、や  
 八一四 、地球にとどくまでには、やく八分二十秒  
 八一三 秒ばかりかかることになりました。ところが  
 八一二 どのくらいのきよりにあるのでしょうか。二  
 八一〇 やく三十年ほどまえに発した光だというわ  
 八〇九 した光だというわけになります。このほか  
 八〇八 、五十光年のところに光っている星があり  
 八〇七 らばつています。夜になって天の川をみる  
 八〇六 い大きなふかい感じにうたれます。しかも  
 八〇五 ねひめ あるところに、金持の王さまがい  
 八〇四 ようと願つておいでになりました。王女が  
 八〇三 物をかぞえておいでになると、み知らぬ人  
 八〇二 「略。」と、お答えになりました。「略」  
 八〇一 「わたしの手になつたものが、み  
 八〇〇 が、みんなこがねになつたら。」「略。」  
 七九九 、その願いどおりにしてあげましょう。  
 七九八 いました。あくる朝になりました。王さま

八三九 におきて、まず、いすにおさわりになりました。  
 八三九 ず、いすにおさわりになりました。いすは  
 八四〇 ずはたちまちこがねにかかりました。王さ  
 八四〇 王さまは、ねどこにおさわりになりました。  
 八四〇 ねどこにおさわりになりました。それも  
 八四〇 した。それもこがねになりました。着物を  
 八四〇 した。着物もこがねになりました。王さま  
 八四〇 王さまは、庭へおでになりました。「略」  
 八四〇 そこらの木の葉や花にみんな手をおふれに  
 八四〇 にみんな手をおふれになりました。庭の草  
 八四〇 木は、みているうちに、ぴかぴかと光った  
 八四〇 ぴかと光ったこがねになっていきました。  
 八四〇 ずこヒーをおのみになろうとすると、こ  
 八四一 、こヒーはこがねにかかりました。さか  
 八四一 れもこがねのさかなになりました。たまご  
 八四一 た。たまごをおとりになりました。それと  
 八四一 れもこがねのたまごになりました。それと  
 八四一 こういって、王さまにだきつきました。「へ  
 八四二 女は、かたいこがねになっていたのです。  
 八四二 さまは、おかなしみになりました。王女は  
 八四二 た。王女は、王さまにとっては、世界じゅ  
 八四二 す。「困ったことになってしまった。も  
 八四二 しゃって、おくやみになっていらっしやる  
 八四三 すくって、こがねになったものになりか  
 八四三 がねになったものになりかけなさい。き  
 八四三 きつともどおりになるでしょう。」王  
 八四三 王女は、王女は、王女は、王女は、王女は、  
 八四三 からだにおふりかけになりました。「略」  
 八四四 こういって、王さまにすがりつきました。  
 八四四 シャツ あるところに、ひとりの王さまが  
 八四四 長いことお苦しみにりましたが、いく  
 八四四 しても、よくおなりになりません。王さま

八四五 なおしてくれたものには、國の半分をわけ  
 八四五 うおふれを、おだしになりました。これを  
 八四五 るシャツを王さまにお着せするのです。  
 八四五 ればすぐおなおりになります。「これを  
 八四五 まはたいへんお喜びになりました。さっそ  
 八四五 へ」と、おいつけになりました。けらい  
 八四六 いたちは、足をぼうにしてさがしまわりま  
 八四六 、幸福な人をさがしにでかけました。どん  
 八四六 いくと、さびしい村にさしかかりました。  
 八四七 ちどまて、その声に耳をかたむけました  
 八四七 りがたい。世の中におしより幸福なもの  
 八四八 っていました。中には、うすぐらいひが  
 八四八 いまにもごろりと横になろうとしていると  
 八四八 までのわけをこの男に話しました。すると  
 八四八 の男は、「王さまに、さしあげたいこと  
 八四八 ありますが、わたしには、あいにく、一ま  
 八四八 んでむかえてくれるにちがいありません。  
 八四八 「幸福」だといわずに、「びんぼう」だと  
 八四八 した。その家のまえにいて、「幸福」が  
 八四八 うなもの家のまえにいて、「幸福」が  
 八四八 おまけに、その家にかつてあるいぬが、  
 八四八 なのでも家のまえに立つたように顔をし  
 八四八 かってあるにわとりを氣をつけました。ま  
 八四八 うなもの、おもてに立っていました。そ  
 八四八 ま、そのおむすびにそえてくれました。  
 八四八 いました。「幸福」には、その家の人の  
 八四八 つ、たくあん一きれにも、人の心のおくは  
 八四八 らし台 朝早くはまにでみると、目のと  
 八四八 。ぼくは、砂地の上にまっすぐな足あとを  
 八四八 る。そこで、向こうにみえるまつの木を目  
 八四八 るまつの木を目あてにして歩きだした。ま  
 八四八 ちぎわのかもめが目について、それに氣を

八五六 が目について、それに氣をとられて、わき  
 八五六 みをしたあたりが横にそれている。こんど  
 八五六 百メートルほどさきに、ひきあげである小  
 八五六 し、あれを目じるしにしてやってみよう。  
 八五六 やつてみよう。小船にいきついて、それに  
 八五六 にいきついて、それにもたれて、いま歩い  
 八五六 帰って、おじいさんにその話をしたら、お  
 八五六 のおねを曲がるたびに、美しい大きなけし  
 八五六 なけしきが目のまえにひらけてくる。いま  
 八五六 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺  
 八五六 の中に、みえがくれにお寺の屋根や停車場  
 八五六 の屋根や停車場が目についていた。すると、お  
 八五六 「略」と、汽車によびかけた。先生は  
 八五六 おっしゃって、さきに立ってお歩きになつ  
 八五六 さきに立ってお歩きになった。みはらし台  
 八五六 になった。みはらし台に立つてみると、目の  
 八五六 てみると、目のまえに高い山々がそびえて  
 八五六 ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠  
 八五六 、向こうの山の谷まにのこっている雪が目  
 八五六 のこっている雪が目についていた。あの山にの  
 八五六 目についていた。あの山にのぼったら、もつと  
 八五六 えるだろう。山の上には、青い空がすきと  
 八五六 た。そのことを先生に話してみたら、先生  
 八五六 うだ。高いところのぼるほど、大きな  
 八五六 どりであった。野原にはかれ草がつみあげ  
 八五六 。田や野原のまわりには、大きな森があり  
 八五六 な森があり、森の中には深いみずうみがあ  
 八五六 のはえていて、一わのあひるがす  
 八五六 ひながでてくるまに、もうつかれきつて  
 八五六 。みどりは目のためにいいから、親あひる  
 八五六 一つのためには長いかかるのですよ  
 八五六 ね、そのひなには苦労したよ。なに

八六五(会) て、ほかの子どもに、およくことを教え  
 八六六(会) ら。なにしろ、水にいられてやらなければ  
 八六六(上) 上を流れたが、すぐにうかびあがってきて  
 八六五(子) るの子ども、いっしょになっておいだ。「へ  
 八六二(会) 、『略。』わたしについておいで、大き  
 八六三(会) が、わたしのそばにくっついてね。人に  
 八六四(会) くっついてね。人にふまれないように、  
 八六四(会) に、それからねここに氣をつけてね。」そ  
 八六七(会) で、みんなは鳥小屋にでかけた。そこには  
 八六七(会) 屋にでかけた。そこには、二つの鳥の家族  
 八六七(会) そうして、親あひるにつれられたひなたち  
 八六八(会) るがいい。あそこにいるあひるの子をさ  
 八六八(会) あひるの子の首すじにかみついた。「略」  
 八六九(会) てください。だれにもわるいことをしな  
 八六九(会) よう。たまごの中にあんまり長くいたの  
 八六九(会) ので、あんなふうになっただけですよ。  
 八七〇(会) みつともないばかりに、みんなからしかり  
 八七一(会) であった。おしまいは、自分の兄や姉か  
 八七二(会) えなんかは、ねこにくわれてしまえば  
 八七三(会) ら、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八七四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八七五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八七六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八七七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八七八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八七九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八八九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 八九九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九〇九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九一九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九二九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九三九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九四九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九五九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九六九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九七九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九八九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九一(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九二(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九三(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九四(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九五(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九六(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九七(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九八(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 九九九(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば  
 一〇〇〇(会) 、「遠いところにいるくわえさすれば

八七三(会) ら、いいしあわせにあうかもしれないよ  
 八七四(会) のがんは、ぬまの中に死んで落ちた。「略  
 八七五(会) どは、ぬまのまわりにまぢぶせをしていた  
 八七六(会) していた。あしの上に廣がついている木の枝  
 八七七(会) 廣がついている木の枝にものぼっていた。青  
 八七八(会) じ曲げてつばさの中にいた。ところが、  
 八七九(会) いぬがそのすぐそばに立っていた。したは  
 八八〇(会) をあひるの子のそばにつきつけて歯をむい  
 八八一(会) の音はあしのあいだに鳴りひびき、つば  
 八八二(会) 子は、おきあがる氣にもなれなかった。な  
 八八三(会) (二) くれがたになつて、あひるの子  
 八八四(会) あれていて、どっちにたおれるかわからな  
 八八五(会) はいっていった。中には、おばあさんが、  
 八八六(会) にわとりといっしょに住んでいた。ねこは  
 八八七(会) にかわいがつた。朝になつて、よそからき  
 八八八(会) あひるの子は、すぐにつけられた。ねこ  
 八八九(会) 三週間ばかりためしにしておらつた。し  
 八九〇(会) 、「と、あひるの子にたずねる。「略」」  
 八九一(会) をいっているときに、自分の考えなどは  
 八九二(会) るの子は、すみっこにすわってばかりいた  
 八九三(会) ったので、にわとりに思わずその話をした  
 八九四(会) ったのだよ。ねこにきいてごらん。水の  
 八九五(会) うちのおばあさんにきいてごらん。世界  
 八九六(会) ることがおわかりにならないのです。「  
 八九七(会) て。じゃあ、だれにわかるのかね。わた  
 八九八(会) 。あたかなへやにはいつてさ、ものご  
 八九九(会) らのけものあつかいにされた。(四) 秋  
 九〇〇(会) 葉がこがね色や茶色になった。雲は、あら  
 九〇一(会) みて、ふしぎな氣持になった。あひるの子  
 九〇二(会) 。しかし、いままでにだれをなつかしく思  
 九〇三(会) できよう。そのうちに寒い冬がきた。あひ  
 九〇四(会) 。しかし、一晩ごとに、そのおよぎまわる

八八五(会) はてて、こおりの中にとじこめられたまま  
 八八六(会) どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、あ  
 八八七(会) ち、牛乳がへやの中に流れたので、おかみ  
 八八八(会) んどはまたこなおけにはいつてしまった。  
 八八九(会) で、つかれきつて横になつていた。あひる  
 九〇〇(会) んだか、ここで話すにはあまりにもかわい  
 九〇一(会) まの草むらの中で横になつていた。美しい  
 九〇二(会) のかわからないうちに、大きな庭の中にき  
 九〇三(会) ちに、大きな庭の中にきいていた。そこは  
 九〇四(会) 中にきいてた。そこには、たくさんのお木が  
 九〇五(会) 枝は、流れる水の上にのびていた。ここは  
 九〇六(会) まわらない。なかまに追いかけられたり、  
 九〇七(会) れたり、にわとりにぶたれたり、女の子  
 九〇八(会) たれたり、女の子につきのけられたり、  
 九〇九(会) るよりは、あひるの鳥にころされたほうがま  
 九一〇(会) そういつて、水の中にとびこみ、はくちよ  
 九一一(会) 思いながら、水の上に頭をたれた。そのと  
 九一二(会) 、すみきつた水の上に自分のすがたのうっ  
 九一三(会) れば、あひるの小屋に生まれてもさしつか  
 九一四(会) くりつばなものの中に、しみじみと幸福を  
 九一五(会) な子どもがきて、水にパンや麦をなげてく  
 九一六(会) どもが、「あすこに新しいのがいるよ。  
 九一七(会) いはくちよのまえにきて頭をさげた。新  
 九一八(会) いので、つばさの中に頭をかくした。ほん  
 九一九(会) といわれる身のうえになつたのである。に  
 九二〇(会) いはくちよのまえに枝をたれた。太陽は  
 九二一(会) うなどとは、ゆめにも思わなかつた。  
 九二二(会) dlのものを、水の中にひたしました。うい  
 九二三(会) 、ふたをして日かげにおき、ときどき水を  
 九二四(会) うすると、なわしろにまいてから、早くめ  
 九二五(会) 水をとにかえるときにみたらもみのもとの  
 九二六(会) れが、ほんとうにめになるのでしょうか。

八九六 二 めでした。はんごとになわしろをきめ、そ  
 八九六 三 をきめ、そのさかいにしろしをつけました  
 八九六 六 もみをまいたところには、べつにしろしを  
 八九七 三 えが、2 cm から3 cm にのびました。ひたさ  
 八九七 五 がでてきました。水にひたしたほうが、1  
 八九七 八 27度 なえが朝風にゆられるようになり  
 八九八 一 田も、たんざくがたにでそろってにぎやか  
 八九八 四 24度 田植えのころになったので、しろか  
 八九九 三 植えました。1 かぶに3本ずつ植えたのと  
 八九九 四 植えたのと二とおりにして、くきの数のふ  
 八九九 五 るようすをみることにしました。やく12平  
 八九九 五 した。やく12平方mに150 かぶばかり植  
 八九九 五 い葉が、5 cm ぐらいになりました。どのな  
 八九九 五 して、ほとんど85 cm になりました。1本ず  
 八九九 五 だいたい7本ぐらいにふえました。3本ず  
 八九九 五 たのは、9本ぐらいにふえました。いち  
 八九九 五 ちばん多いので15本になりました。8月  
 八九九 五 朝、花のようすをみにいきましたら、まだ  
 八九九 五 た。3時間めの終りに開きはじめてしま  
 八九九 五 したが、お晝の時間には、もう閉じてしま  
 八九九 五 花のさくのは、1日にすこしのあいだけ  
 八九九 五 っていました。二つにわってみたら、中に  
 八九九 五 にわってみたら、中に、青いものがまるく  
 八九九 五 。これが、きつと実になるのでしょうか。  
 八九九 五 いました。葉のうらに、青黒いなかのた  
 八九九 五 れていました。先生におききしますと、う  
 八九九 五 ぶありました。先生におききしたら、この  
 八九九 五 いもち病という病氣にかかったのだとお  
 八九九 五 ぼも、すっかり黄色になっておじぎをして  
 八九九 五 1本ずつ植えたかぶには、ほか10ぐらい  
 八九九 五 3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いの  
 八九九 五 みました。1本のほに、多いのは180ぐ

八九七 一 ぶに作つたいねかけに、目がよくあたるよ  
 八九七 四 ききかいたかわずに、手でいねこきをし  
 八九七 一 した。ぼうのあいだにいねをはさんでこい  
 八九七 四 。もみをむしろの上にひろげてほしました  
 八九七 六 17度 天氣のよい日に2日ほしたら、もみ  
 八九七 八 いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴ  
 八九七 二 もみを、1日、日光にかんかんほして、す  
 八九七 三 かんかんほして、すぐにもみすりをしてみ  
 八九七 四 たら、こんどはすぐにはげましたが、くだ  
 八九七 七 平年作は、1平方mに3・5 dlのげん米が  
 八九七 八 は平年作ということになります。  
 八九七 八 せ (一) 白い紙に赤い色をぬりますと  
 八九七 八 すと、明かるい感じになります。この赤い  
 八九七 八 。この赤い色のそばに黄色をぬりますと、  
 八九七 八 ます。黄色のかわりに、みどり色をぬって  
 八九七 八 。みどり色のかわりに、むらさき色をぬつた  
 八九七 八 。むらさきのかわりに、茶色をぬつたら、  
 八九七 八 、三色の組みあわせにしたら、二色のとき  
 八九七 八 ちがつた感じがするにちがいありません。  
 八九七 八 てきいても、その音には、ある感じがこも  
 八九七 八 かの音とをいっしょにひいてみると、ま  
 八九七 八 す。オルガンのほかに、パイオリンとか、  
 八九七 八 の樂器を、いっしょにあわせてひいてみた  
 八九七 八 きとなつてきこえるにちがいありません。  
 八九七 八 す。 (二) ここに、「月」という一つ  
 八九七 八 す。このことばを耳にしたり、文字でよん  
 八九七 八 「月」ということばに、「水」ということ  
 八九七 八 あわせも、おたがいにとけあって、一つの  
 八九七 八 「風」ということばに、ほかのことばをつ  
 八九七 八 朝風」として、これにいろいろなことばを  
 八九七 八 ましょう。おしまいに、「山」「けむり」「  
 八九七 八 あわせだと、すぐ心にものを思いうかべる

八九七 三 たいこのたたきかたによって、いろいろな  
 八九七 一 れないが、じつさいにきいてみると、たし  
 八九七 三 の音である。はじめに、川の水の音をた  
 八九七 四 ところである。つぎには、雨の降るところ  
 八九七 五 。それから、水の中にドブンとどきこんだ  
 八九七 六 らわした。おしまいに、海岸で波のくだけ  
 八九七 九 ようであった。つぎに、風の音をたいた  
 八九七 一 と、たしかに風の音になる。とうげ道にさ  
 八九七 一 音になる。とうげ道にさしかかったとき、  
 八九七 九 こが、そのうちかたによって、水の音にも  
 八九七 九 たによって、水の音にもなり、風の音にも  
 八九七 九 音にもなり、風の音にもなり、雪の降るよ  
 八九七 九 り、雪の降るようすにもなるのは、ふしぎ  
 八九七 九 がある。こんなときにも、たいこをつかう  
 八九七 九 ゆめからさめるときには、音などはけつし  
 八九七 九 ちが生きてくることになる。三 つば  
 八九七 九 が電線や物ほしざおに五六ばぐらいならん  
 八九七 九 があります。この中には、親つばめもいま  
 八九七 九 わきがいくぶん黄色にみえるのさえありま  
 八九七 九 ければならない日本に、なごりをおしん  
 八九七 九 き、十一月のはじめになれば、もうほとん  
 八九七 九 すると、その右の足に、日本の文字をし  
 八九七 九 いていました。それによると、さいたま縣  
 八九七 九 ばめは、こんなふうに渡つていきますが、  
 八九七 九 よくしたものが、秋には、南ヨーロッパを  
 八九七 九 キロの海をひといきにとぶのも、けつして  
 八九七 九 ん。しかし、その中には、ことし生まれた  
 八九七 九 いがけないさいなんに、あわなれともかき  
 八九七 九 月の氣候と同じ寒さになり、雨が降りつづ  
 八九七 九 だったつばめは、食にうえ、つめたい雨に  
 八九七 九 にうえ、つめたい雨にうえ、つめたい雨に  
 八九七 九 めたい雨にうえ、つめたい雨にうえ、つめたい雨に

九二六 一の動物は協会に、近くのランネルス  
 九一九 ました。それと同時に、協会ではすぐに、  
 九一九 時に、協会ではすぐに、寒氣のために苦し  
 九一九 すぐに、寒氣のために苦しんでいるつぼめ  
 九一〇 することを、新聞に廣告しました。その  
 九二〇 「略。」という運動に全國民が、加わった  
 九二〇 話が、ひっきりなしにかかって、つぼめを  
 九二〇 そのつぼめを運ぶのに六台の自動車ではま  
 九二〇 夜なかの二時、三時にも、よわきつてい  
 九二〇 た。さいわいなことに、そのとき、あいて  
 九二〇 をつぼめたのためにぐあいよくつくりな  
 九二一 人をおそれず、へやにはいつてくる人があ  
 九二一 のかたや、頭や、手にとまりました。たく  
 九二一 いました。晩の十時に、二千ばのつぼめが  
 九二一 きました。その夜半には、また一台の貨物  
 九二一 いところへ運ぶために、飛行機をつかうこ  
 九二一 飛行機をつかうことにしました。航空会社  
 九二一 では、お金をとらずにつぼめを運ぶことを  
 九二二 て、九月十九日の晩には、ヴェニスいきの  
 九二二 ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたた  
 九二二 千ばです。このほかに、オーストリア動物  
 九二三 ると、十万ばあまりになります。そのころ  
 九二三 われなこの小鳥たちにしめしたもつとも人  
 九二三 いるかを世界じゅうに知らせた大きなでき  
 九二三 利器が、このしごとにつかわれたというこ  
 九二三 たいことだといわずにはいられません。む  
 九二四 、つぼめは、同じ家に帰ってくるというわ  
 九二四 というのです。近年になって、いろいろな  
 九二四 わすれません。日本に春がくると思うと、  
 九二四 です。その小さな胸には、わか葉のもえる  
 九二四 う。あの家ののき下につくった古巣がなつ  
 九二五 しいのでしょうか。春になると、だれもが、

九二六 かなる月なの上に 麦ふむやみだれし  
 九二七 音や秋の風 秋風にプールの水がゆれて  
 九二七 れている 草原に一本あかしはじもみ  
 九二八 重にじ青田の上にうすれゆく 朝つゆ  
 九二八 朝つゆの中に自轉車のりいれぬ  
 九二八 草の花 ほし草にかげおとしとぶとん  
 九二八 れている 大空にのびかたむける冬木  
 九二九 さる うらがれにおろされ立てる子ど  
 九二九 りラジオのほかに声もなし ぐれてい  
 九三〇 るくものあお向きに まえ向けるすずめ  
 九三〇 ひたいそぐいぬにあいけり木のめ道  
 九三〇 歩みくる胸のへにちようとびわかれ  
 九三〇 から、もう四ヶ月になります。こちらへ  
 九三一 おとなといっしょに畑にでたり、山へた  
 九三二 などいっしょに畑にでたり、山へたきぎ  
 九三二 山へたきぎをとりにいったりするので、  
 九三二 家は、山のふもとにある森の中の小さな  
 九三二 と、はるか下の方に美しい湖がみえます  
 九三二 すみきった空の下に、山のすがたが、さ  
 九三二 さかさまに湖の中にうつって、がくに  
 九三二 にうつって、がくにいた油絵のように  
 九三二 す。この湖へつりにいくのが、いちばん  
 九三二 うです。このほかに、大きな、黒くてひ  
 九三二 ので、なんども湖に近い川しもの方へと  
 九三二 川しもの方へとりいききました。村の子  
 九三二 きょうそうでとりいくので、たいそう  
 九三二 ぎよは、大きなになると、三十センチ  
 九三二 なさんといっしょに、この湖へつりにい  
 九三二 に、この湖へつりにいけたらと、いつも  
 九三二 、それが、深いになると、一メートル  
 九三二 んされて、三日めにやつと、うねを十三  
 九三二 た。たきぎをとりにいく山は、ぼくの家

九三六 、そこは、深い谷になっています。ここ  
 九三六 、せかれて、たきになり流れになって、  
 九三六 、たきになり流れになって、村の中を通  
 九三六 中を通り、田んぼに落ち、湖にまでつづ  
 九三六 田んぼに落ち、湖にまでつづいていま  
 九三六 、この谷まの流れにはいつて、頭から水  
 九三六 るほそ道の両がわに、まっかな、かわい  
 九三六 たように雑草の中にありました。手にと  
 九三六 になりました。手にとって口へいれると  
 九三六 。小さい妹のために、くわの葉につつん  
 九三六 ために、くわの葉につつんで持つて帰っ  
 九三六 山へたきぎをとりにいくのが、すきでは  
 九三六 い雑草がいちめんにはえていて、なにか  
 九三六 、おつてよいことになっています。高く  
 九三六 長い竹ざおのさきにかまをくくりつけて  
 九三六 じめ、その竹ざおにかまをつけてやる方  
 九三六 高さ十五メートルに近い木にのぼったこ  
 九三六 メートルに近い木にのぼったことがあり  
 九三六 した。のぼるたびにぐらぐら動くので、  
 九三六 くので、思わず木にしがみついたりしま  
 九三六 をふりおろすたびに、すぎの木は大きく  
 九三六 す。思わぬところに炭やき小屋があつて  
 九三六 がみえました。秋になって、ぼくは山へ  
 九三六 へいくのが楽しみにしました。だんだ  
 九三六 んだんだん木とりになれたのと、山へい  
 九三六 と、山へいくたびに、めずらしい小鳥が  
 九三六 へきたころは、湖には美しい白さがた  
 九三六 したが、いつのまにどこへ渡つていった  
 九三六 りました、いつのまにかがが渡つてきま  
 九三六 ももきました。山には、つぐみや、ひわ  
 九三六 では、五日めごとにひとうねずつほりお  
 九三六 つほりおことにしました。苦勞して

九四二(七) ちばん小さな三つになる妹もつれて、う  
 九四三(一) ころで、どここの家にも、二本や三本はあ  
 九四三(三) るやしきのまわりにも、大きなかきの木  
 九四三(五) ります。朝早く庭にでて、つやつやした  
 九四三(八) ときは、思わず手にとりあげます。うち  
 九四三(一〇) すから、ほしがきにするために、母がか  
 九四三(一二) しがきにするために、母がかわをむいて  
 九四三(一四) わをむいて竹ぐしにとおし、のき下につ  
 九四三(一六) にとおし、のき下につるしてくれま  
 九四四(一) います。いつのまにか葉がすっかり落ち  
 九四四(三) ちつくしてはだかになった木の上に、ま  
 九四四(五) かになった木の上に、まっかにじゅくし  
 九四四(七) した実がすずなりになっているのを見る  
 九四四(九) 事でおぼがそちらにでかけるとき、ぼく  
 九四四(一一) 。ぼくはみなさんにあつてお話がしたい  
 九四四(一三) だったので、先生にだけお目にかかつて  
 九四四(一五) 、先生にだけお目にかかつてすぐ帰りま  
 九四五(一) 帰りました。おぼに、「小公子」をよん  
 九四五(三) 「小公子」の話にでてる、セドリッ  
 九四五(五) ら、世の中のことに注意を向けるよう  
 九四五(七) て農業をするために、いま知りあいの家  
 九四六(一) すけれども、ぼくにはまだ、セドリッ  
 九四六(三) 公子」をみなさんにお話してあげてくだ  
 九四六(五) の山々のいただきに、白い雪のぼうし  
 九四七(一) た、いちろうのうちにきました。「かねた  
 九四七(三) みもがさがさして指につくくらいでした。  
 九四八(一) そとと学校のかばんにしまつて、うちじゅ  
 九四八(三) りしました。ねどこにもぐつてからも、や  
 九四八(五) ていました。おもてにでてみると、まわり  
 九四九(一) 、まっさおな空の下にならんでいました。  
 九四九(三) はんをたべて、谷川にそった小道を、上の  
 九五〇(一) な岩のがけの中ほどに、小さなあながい

九五〇(一) とびだし、すぐたきになって、ゴウゴウと  
 九五〇(三) 一つ、ゴウゴウと谷に落ちていました。「へ  
 九五〇(五) 一本のぶなの木の下に、たくさんの白いき  
 九五〇(七) 、木の上からひたいに手をかざして、いち  
 九五〇(九) さまだくらしいうちに、馬車で、南の方へ  
 九五〇(一一) いきましたら、谷川にそった道は、もうほ  
 九五〇(一三) たいへんきゆうな坂になりました。いろろ  
 九五〇(一五) 色の草地で、草は風にザワザワ鳴り、まわ  
 九五〇(一七) 。その草地のまん中に、せいのひくい、お  
 九五〇(一九) 、ひざをまげて、手に皮のむちを持つて、  
 九五〇(二一) さまは、いますぐにここへもどつておい  
 九五〇(二三) へもどつておいでになるよ。きみは、い  
 九五〇(二五) して、ひと足うしろにさがつて、「略」  
 九五〇(二七) りを廣げて、からだに風をいれながら、「へ  
 九五〇(二九) きて、草はいちめんに波だち、ぎよしゃは  
 九五〇(三一) ってみますと、そこに、やまねこが、黄色  
 九五〇(三三) て、ちよつと裁判に困りましたので、あ  
 九五〇(三五) でみますと、草の中にあつちにもこつち  
 九五〇(三七) と、草の中にあつちにもこつちにも、こが  
 九五〇(三九) にあつちにもこつちにも、こがね色のまる  
 九五〇(四一) だいそぎでぎよしゃにいつけました。ぎ  
 九五〇(四三) ずの音は、かやの森にガランガラン、ガラ  
 九五〇(四五) どんぐりどものまえにすわっていました。  
 九五〇(四七) んぐりどもは、□々にさげました。「略」  
 九五〇(四九) どんぐりどもが□々にいきました。「略」  
 九五〇(五一) やまねこがいちろうにそつと申しました。  
 九五〇(五三) して、どんぐりどもに申しわたしました。  
 九五〇(五五) 判所のめいよ判事になってください。こ  
 九五〇(五七) せんか。そのたびにお札はいたします。  
 九五〇(五九) い。わたしの人格にかかりますから。  
 九五〇(六一) れからは、はがきに、かねたいちろうど  
 九五〇(六三) んねんだというふうに、しばらくひげをひ

九七二(一) いままでのとおりにしましょう。そこで  
 九七二(三) よかったというふうに、口早にぎよしゃに  
 九七二(五) に、口早にぎよしゃにいいました。「略」  
 九七二(七) こい。二リットルにたりなかつたら、め  
 九七二(九) きのどんぐりをますにいれて、はかつてさ  
 九七二(一一) のじんばおりが、風にバタバタ鳴りました  
 九七二(一三) した。ふたりは馬車に乗り、ぎよしゃはど  
 九七二(一五) りのますを馬車の中にいれました。ヒュウ  
 九七二(一七) した。馬車がすむにしがたつて、どんぐ  
 九七二(一九) は、茶色のどんぐりにかわっていました。  
 九七二(二一) 、自分のうちのまえに、どんぐりをいれた  
 九七二(二三) のむきみ屋のところに集まっていました。  
 九七二(二五) ていました。みるまに、貝がらの山が家の  
 九七二(二七) がらの山が家のまえにできます。先生が、  
 九七二(二九) 。先生が、リヤカーに、はこやかごなどを  
 九七二(三一) などをのせておいでになりました。「略」  
 九七二(三三) した。「略」先生について、五十人のな  
 九七二(三五) 畑やたんぼの向こうに、一だん高くなった  
 九七二(三七) うの小高いところに、白い物がちらちら  
 九七二(三九) もうすこしで貝づかに着くというところで  
 九七二(四一) 先生は一けん農家にたちよられました。  
 九七二(四三) この主人といつしよにでておいでになりま  
 九七二(四五) つしよにでておいでになりました。「略」  
 九七二(四七) らせてもらうことにします。」主人も、  
 九七二(四九) 深く土の中へお立てになりました。土はや  
 九七二(五一) です。この土の上に白くみえてるのは  
 九七二(五三) は、むかし海の中にいたいろいろな貝の  
 九七二(五五) 貝がらといつしよに、いらなくなつたり  
 九七二(五七) らほつてみることにしましょう。」私た  
 九七二(五九) 、ゆつくりしごとにかかります。ま  
 九七二(六一) 。まずどんなふうになりますか。「略」  
 九七二(六三) 、手あたりしだいにやつて、ぐあいよく



九八四(会) いのはばで、東西に四十メートルほつ  
九八一(会) ルほつてみることにしよう。貝や石ころ  
九八六(会) どれか一つのかごにいられておこう。」そ  
九八一(略)「(略)。」口々にこんなことをいうの  
九八一(11) うのを、先生は、耳にもおきれにならない  
九八一(11) 生は、耳にもおきれにならないで、ひとり  
九八二(1) ねんにほつておいでになります。ぼくらは  
九八二(2) めて、そこをのぞきにいつてみると、先生  
九八二(3) と、先生のかごの中には、いつのまにか、  
九八二(3) の中には、いつのまにか、せきふらしい物  
九八二(10(会) だ。先生のところにあるのと同じだね。  
九八三(4(会) いよ。ぼく、先生におたずねしてみよう  
九八三(6) かけていって、先生におたずねしますと、  
九八三(9(会) あげるから、かごにいられてとっておきな  
九八四(2) 生がまわつておいでになりました。「(略)」  
九八四(11(会) のひろつた物の中に、いのししやしかの  
九八五(1(会) しやしかの角などに手を加えて、なにか  
九八五(1(会) て、なにかの道具につかつた物があつた  
九八五(2(会) たでしよう。それには、こんな針や、も  
九八五(4(会) 作つたもの、それには石の矢じり、おも  
九八六(2) 物は、みなかごの中にいられておきました。  
九八六(6(会) ごをこのリヤカーにつみなさい。それか  
九八七(8) ぜい、舞台の中ほどに大きな木が一本立つ  
九八八(4) かぎとやまだが左右にひきわけられたとこ  
九八八(5) ころである。たかぎには友だちの一、二、  
九八八(5) 一、二、三、やまだには四、五、六、その  
九八八(6) か数人が、それぞれにわかれてふたりをひ  
九八九(10) 「ふたりともむきになって、友だちの手  
九九〇(5) かこんでいる友だちに、「(略)。」六「うん。  
九九一(3) うしをひろつてあとにつづく。一、二も、  
九九一(7(会) したよ。いっしょに歩いてるうちに、  
九九一(7(会) に歩いてるうちに、きゆうにつかみあ

九三三 からない。そのうちに、セルロイドの三角  
九三五 、それを舞台のおくにあげずて、なお、  
九三八 つている。そのうちに新しいすみをひろい  
九三二 する。両方ともあいてに気がつくが、わざと  
九四四 して持つているすみに気がつき、ちよつと  
九五二 つて、たかぎのそばにより、だまつたまま  
九六二 まだ たかぎのまえにじょうぎをつきだし  
九六四 それをとり、かばんにいれる。そのあいだ  
九六五 いれる。そのあいだに、やまだがいきかけ  
九七三 ンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする  
九七九 すりながら、その場にぼんやり立っている  
九八四 して、そつとやまだに近づく。たかぎ「お  
九九一 、じゃあ、あいこになるように、もう一  
九一〇二 二 会」。「やまだ」友だちにまで心配させて――  
九一〇三 三 会 たかぎ「いっしょにあやまろう、あした  
九一〇四 四 会 ねえ、きみ、うちによつて、ねえさんに  
九一〇五 五 会 よつて、ねえさんにそのボタンをつけて  
九一〇六 六 会 だ先生といい先生につれられて、山のス  
九一〇七 七 会 へいった。まえの日に、こな雪がたくさん  
九一〇八 八 会 ので、スキーをするには、ちようどよかつ  
九一〇九 九 会 と、のだ先生が先頭に立たれ、いしい先生  
九一一〇 十 会 が、谷あいでは一列になったので、ずいぶ  
九一一一 十一 会 。だんだんのぼり坂になると、からだがあ  
九一一二 十二 会 こえる。きゆうな坂にかかると、まえの方  
九一一三 十三 会 さげられた。その声にはげまされて、ぼく  
九一一四 十四 会 、「略」と、大声にさけんだ。みると、  
九一一五 十五 会 いやいよ、スキー場に着いた。いかにもす  
九一一六 十六 会 はなれて、ま一文字にすべりおりた。すば  
九一一七 十七 会 だ。すばらしい早さに、からだもスキーも  
九一一八 十八 会 らだもスキーも一つになつて、ビュウとう  
九一九九 十九 会 立ち、あせばんだ顔に、雪のこなが降りか  
九二〇〇 二十 会 、二十人、つきつぎにすべりはじめた。思

九〇九 6 はじめた。思い思いに、スキーのあとを雪  
九〇九 6 キーのあとを雪の上にながきながら、小鳥  
九〇九 7 ころんで、雪だるまになっておきあがるも  
九一〇 3 つえをふって、それに答えた。のだ先生が  
九一〇 4 た。のだ先生がさきに、すぐつづいていし  
九一一 5 みごとなすべりぶりにみとれていると、先  
九一一 6 ちは、もう目のまえにこられた。はげしい  
九一一 8 のからだは、ちゅうにうかんだ。両手をひ  
九一二 11 人となられた。お書になったので、雪の上  
九一三 2 べた。午後は、先生について、ひとりひと  
九一四 2 文韻 せてちよ紙かいにゆく月夜かな 水ぐ  
九一四 4 文韻 るま近きひびきにすこしゆれすこしゆ  
九一五 1 文韻 まの鳥はこの木にいるにちがいないし  
九一五 1 文韻 はこの木にいるにちがいないしひそかに  
九一六 5 文韻 るさ日のでる中に ちろちろと岩つた  
九一六 6 文韻 ると岩つたう水にはい遊ぶ赤きかにい  
九一七 2 文韻 や青き葉のかげにきておる たべのこ  
九一七 7 文韻 やえんがわの上にくる日を追いて  
九一八 3 文韻 夜はいろりの火にあてており 金色の  
九一八 5 文韻 るなり丘の夕日に ほおずきを口にふ  
九一八 6 文韻 ほおずきを口にふくみて鳴らすごと  
九一九 2 ろであつた。私は父につれられて、近くの  
九一九 2 れて、近くの高い山に登つた。その帰りに  
九一九 3 に登つた。その帰りに、近道をして谷をお  
九一九 3 おりてくると、そこに小石でかこまれた美  
九一九 6 うに飲んでから、私にいった。「略。」水  
九二〇 7 かつた。ちよつと齒にしみたが、うまかつ  
九二〇 10 文韻 味だった。「そこに流れているのがまつ  
九二一 2 下のすこし大きな川に流れこんでいた。帰  
九二一 5 茶そのもののうまさにもよるが、たてる湯  
九二一 9 けれども、どうも氣にいらなかつた。とここ  
九二二 1 茶人は、この上流にいい泉があるのでは

九一二六 うしても支流のほうにはなくて、遠い上流  
 九一二七 はなくて、遠い上流にあるのだとさった  
 九一二八 いもすぎ、ながの縣にはいった。そうして  
 九一二九 。ここで茶人のしたには、まぎれもない  
 九一三〇 と、泉はこの近くにある。」茶人はつれ  
 九一三一 へ。「茶人はつれの人はいった。まつ川がて  
 九一三二 つ川がてんりゅう川に流れこんでいるとこ  
 九一三三 流れていた。ためしにまつ川の水をにて飲  
 九一三四 泉はまつ川の上流にある。」茶人は、長  
 九一三五 長い探求の旅が終りに近づいたことを知っ  
 九一三六 こで船をすて、岸にそって上流に向かって、  
 九一三七 岸にそって上流に向かって歩きながら  
 九一三八 ざとがあつて川べりに道もあつたが、いま  
 九一三九 てをふさぎ、まつ林におおわれた道もない  
 九一四〇 われた道もない谷まになった。そこからさ  
 九一四一 は、木と木のあいだに、果をかけました。  
 九一四二 、その子もり歌を耳にしながら、光る星を  
 九一四三 た。おまけに、あみに大きなあなをあけて  
 九一四四 れ、くももいっしょにゆれました。ブンブ  
 九一四五 であることが、くもにはすぐわかりました  
 九一四六 へ。」くもはみつばちにとびかかりました。  
 九一四七 。みつばちも、くもに向かいました。くも  
 九一四八 きません。そのうちにみつばちのからだも  
 九一四九 ちのからだも、つなにかれそうになりま  
 九一五〇 きさしました。それにはさすがの大きなく  
 九一五一 さすっているあいだに、みつばちは、つな  
 九一五二 いし、苦しうどうにもなりません。あみ  
 九一五三 こうをして、こちらにとんできます。あみ  
 九一五四 とんできます。あみにつきたつてはたい  
 九一五五 くもが思ったとたんに、ばさりとくもり  
 九一五六 さりとくもりの羽にたたかれました。あ  
 九一五七 くもはそのまま地面に落ちました。「略」。

九一四二 いてみると、あたりにいいにおいがします  
 九一四三 っていると、いつのまにか、いままで苦し  
 九一四四 てたべてしまふわけにもいきません。「略  
 九一四五 とばを、長いこと耳にしたことはありま  
 九一四六 せんでした。また、口にすることもありま  
 九一四七 せ。いま、ちょうちよに、「略」。」といわれ  
 九一四八 かあさんをさがしにいきたいのか、ちょ  
 九一四九 しがつた、みつばちにさされて、苦しんだ  
 九一五〇 たし、おかあさんにひと目あつたら、も  
 九一五一 なががすいているのに気がつき、また、あ  
 九一五二 ていました。あたりに、やはりばらの花  
 九一五三 かげでねむることにしようかな。」くも  
 九一五四 るめて、ころつと横になりました。目をつ  
 九一五五 した。そのひょうしに、くもは、目がさめ  
 九一五六 した。つゆが木の葉にたまりました。たま  
 九一五七 ったつゆが、しずくになって、ポタリポタ  
 九一五八 は、くもりのために、高いところからた  
 九一五九 あの白いちょうちよにあうことができた。  
 九一六〇 九一六一 思いだしているうちに、心持が、しだいに  
 九一六二 九一六三 ました。ちょうちよにしても、ばらの花に  
 九一六四 九一六五 にしても、ばらの花にしても、なんとしず  
 九一六六 九一六七 いるのだらう。それにくらべて、自分は、  
 九一六八 九一六九 いかたち、いままでにこの手で、この足で  
 九一七〇 九一七一 う。くもが、月の光にちりちりりと光り  
 九一七二 九一七三 くもは、このつばめにひろわれました。く  
 九一七四 九一七五 は、つばめの口ばしにはさまれたまま、空  
 九一七六 九一七七 命は、つばめさんにあげよう。」こう決  
 九一七八 九一七九 すっかりくもは氣持になりました。いまの  
 九一八〇 九一八一 うまくおかあさんにあえたかしら。」そ  
 九一八二 九一八三 、美しいものはどこにもある。高い木が  
 九一八四 九一八五 が、かすんだ空の中にとけこんでいる。じ  
 九一八六 九一八七 のは、いまも、どこにでもある。ただ、そ

十 6 1 とあわださしの中に、それを失っている  
 十 6 2 は、いつでも、どこにでも、その美しいも  
 十 7 6 どうさんが通るたびに、目をまるくしまし  
 十 7 10 ついてこられたときには、おとうさんも困  
 十 8 6 いなかでくらすうちに、おとうさんには、  
 十 8 6 うちに、おとうさんには、子どものお友だ  
 十 8 8 そういう子どもの中には、道でおとうさん  
 十 8 11 ながら、おとうさんにわけてくれる少女も  
 十 9 12 で、いなかの子どもにとつては、もっとも  
 十 10 1 わむれている子どもにあいました。そのい  
 十 10 2 た。そのいなかの町には、ポンナフという  
 十 10 4 流れていました。岸にある丘の上には、セ  
 十 10 4 た。岸にある丘の上には、センチエンヌ  
 十 10 6 は、フランスの國道にそつた景色のよいと  
 十 10 8 た。その橋のたもとにあるプラタナスのな  
 十 10 9 のかわいらしい少女にもあいました。みあ  
 十 11 1 が、休み茶屋のまえにこしかけて、コーヒ  
 十 11 4 その少女たちも遊びにきています。いずれ  
 十 11 11 てきて、おとうさんにくれるようになります  
 十 12 7 けれど、お友だちにさそわれても、どう  
 十 12 11 わたしといっしょにお話をしておくれ。  
 十 12 12 たしは、自分の國にのこしておいてきま  
 十 13 4 れから、三人の少女に、歌を歌ってほしい  
 十 14 1 もがいて、なかよしになつてくれたからで  
 十 14 2 エンヌという川の岸には、手ぬぐいのよう  
 十 14 4 。フランスのいなかによくみかける、赤い  
 十 14 4 屋根の家が、川の水にうつっていました。  
 十 14 6 んは、ひとりの少年にもあいました。たぶ  
 十 14 8 たは、そのいなか町にある商業学校の下の  
 十 15 1 した。この少年の間には、ちよつとおとう  
 十 15 11 えました。この返事に、少年も満足したら  
 十 17 3 えんぴつ一本買いにいづくにも、日本のこ

十 17 3 ㊦ つ一本買いにいくにも、日本のことばで  
 十 17 7 ㊦ うしておまえたちに話すようなことばが  
 十 17 10 ㊦ たちは、おさな心にも、ことばを愛する  
 十 18 4 ㊦ 。2 いけのおもてにはじける雨あし。竹  
 十 19 8 ㊦ ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字  
 十 20 1 ㊦ 。8 村の林の上に、大きな半円形の  
 十 20 5 ㊦ ㊦ あ、その白いかべに、プリズムでわけた  
 十 20 7 ㊦ いう先生の声とともに、七色の光が写した  
 十 20 10 ㊦ ㊦ なにさまざまな色になります。」10 せん  
 十 21 1 ㊦ ハンケチなどが、風にゆれている。その下  
 十 21 7 ㊦ ㊦ 男の子がベッドにすわっている。「へ略  
 十 21 9 ㊦ ㊦ ている。「略。」窓に花のはちをおきなが  
 十 22 8 ㊦ ㊦ 、その兄といっしょに種まきをしている。  
 十 23 6 ㊦ ㊦ な声で歌う。自轉車に乗った中学生が、ふ  
 十 23 7 ㊦ ㊦ ちは、母といっしょに汽車に乗っている。  
 十 23 7 ㊦ ㊦ 母といっしょに汽車に乗っている。窓から  
 十 24 3 ㊦ ㊦ ツコをおして、炭坑にはいっていく工員。  
 十 24 4 ㊦ ㊦ 工員。ヘッドライトにたよって現場に近づ  
 十 24 4 ㊦ ㊦ イトにたよって現場に近づく。地下水の流  
 十 24 8 ㊦ ㊦ る。19 あせまみれになった工員の顔、胸  
 十 24 12 ㊦ ㊦ う石炭。20 みるまに、トロロッコにつま  
 十 24 12 ㊦ ㊦ みるまに、トロロッコにつまめる石炭の山。  
 十 25 4 ㊦ ㊦ せて、坑内から地上にでてくる。まぶしい  
 十 25 6 ㊦ ㊦ とした足どりで、家に帰ってくる。道ばた  
 十 25 7 ㊦ ㊦ 帰ってくる。道ばたにさくたんぽぽ、とび  
 十 27 3 ㊦ ㊦ ぽくは、いままでに学んだ「自然の観察  
 十 27 5 ㊦ ㊦ ます。わざわざ遠くにでかけなくても、ふ  
 十 27 5 ㊦ ㊦ ん自分の身のまわりにあるものを、よくし  
 十 27 7 ㊦ ㊦ と思います。庭の木に小鳥がくれば、その  
 十 27 9 ㊦ ㊦ のです。トマトが畑に植えてあれば、その  
 十 27 11 ㊦ ㊦ 。また、くもがのきに巣をかけることがあ  
 十 28 9 ㊦ ㊦ 、そのふしぎなことにうたれ、美しさにお

十 28 10 ㊦ とにうたれ、美しさにおどろくにちがいがあ  
 十 28 10 ㊦ ㊦ 、美しさにおどろくにちががありません。  
 十 29 1 ㊦ ㊦ は、同じものをみるにしても、どうしてそ  
 十 29 6 ㊦ ㊦ た、一つの和音を耳にしたときは、組みあ  
 十 29 8 ㊦ ㊦ 音一音のことも、心にうかべてみたいので  
 十 29 10 ㊦ ㊦ 。もようをみたときには、そのもようが、  
 十 30 3 ㊦ ㊦ どうしてそんなことになったか、そのわけ  
 十 30 7 ㊦ ㊦ 、みんなといっしょにはたきたいと思  
 十 30 9 ㊦ ㊦ ます。父や母のために、いつもすなおな子  
 十 30 9 ㊦ ㊦ つもすなおな子どもになりたいのです。そ  
 十 30 11 ㊦ ㊦ うちじゅうの人たちに、めいわくをかけな  
 十 31 2 ㊦ ㊦ す。ぽくがいるために、うちの中が明かる  
 十 31 3 ㊦ ㊦ 、みんな楽しい氣持になるようにできない  
 十 32 9 ㊦ ㊦ やつだ。男のくせに。」豊田佐吉は、村  
 十 33 3 ㊦ ㊦ ら氣ちがいあつかいにされるのをみて、父  
 十 33 8 ㊦ ㊦ いれかえさせるために、佐吉をよその大工  
 十 33 8 ㊦ ㊦ 吉をよその大工の家にあずけてしまった。  
 十 33 9 ㊦ ㊦ まった。このあいだに立つて、佐吉をはげ  
 十 34 1 ㊦ ㊦ 、けつしてゆるがせにしてはおかれない。  
 十 34 2 ㊦ ㊦ て、困るときがくるにちがいない。そのた  
 十 34 3 ㊦ ㊦ がいない。そのために、いまのうちに、早  
 十 34 3 ㊦ ㊦ ために、いまのうちに、早く機械を進歩さ  
 十 34 5 ㊦ ㊦ る。佐吉が、はじめに目をつけたのは、ぬ  
 十 34 6 ㊦ ㊦ あった。横糸はおさによつて、右から左、  
 十 34 7 ㊦ ㊦ るが、これを人の手によらず、機械の力で  
 十 34 12 ㊦ ㊦ 校をでただけのかれには、手のとどきそう  
 十 34 12 ㊦ ㊦ どきそうもない空想になりがちであった。  
 十 35 1 ㊦ ㊦ ま、そのころ、東京にはくらん会が開かれ  
 十 35 2 ㊦ ㊦ 毎日かよった。銀色に光った、たくさんの  
 十 35 11 ㊦ ㊦ 吉は、一けんの小屋に閉じこもつて、いっ  
 十 36 2 ㊦ ㊦ 、だれひとりあいてにしてくれなくなり、  
 十 36 7 ㊦ ㊦ いく、ふしぎな機械に目をみはりながら、

十 37 2 ㊦ 式人力織機は、國內につかわれるようにな  
 十 37 3 ㊦ ㊦ たが、かれは、これに満足せず、すぐ、動  
 十 37 4 ㊦ ㊦ 動力機械を作ることにとりかかった。そこ  
 十 37 7 ㊦ ㊦ 。日本の新しい出発にあたって、この自  
 十 38 2 ㊦ ㊦ 天然眞珠をてのひらにのせて、大きなゆめ  
 十 38 7 ㊦ ㊦ った。眞珠母貝の中に、砂のような小さな  
 十 38 7 ㊦ ㊦ のがிரりこみ、それに、貝のだす眞珠質が  
 十 38 8 ㊦ ㊦ まきつき、年とともに大きくなって、天然  
 十 38 12 ㊦ ㊦ 者は、眞珠貝の研究に全力をつくした。こ  
 十 39 1 ㊦ ㊦ のわか者こそ、のちに眞珠王として世界に  
 十 39 1 ㊦ ㊦ に眞珠王として世界に知られた御木本幸吉  
 十 39 3 ㊦ ㊦ 十 39 3 ㊦ ㊦ 「もし、母貝の中に、核をさしいれるこ  
 十 39 4 ㊦ ㊦ 十 39 4 ㊦ ㊦ 、眞珠が発生するにちがいない。」幸吉  
 十 39 6 ㊦ ㊦ それを、母貝の体内にさしいれてみた。う  
 十 39 7 ㊦ ㊦ みた。うまく貝の中に核がのこり、眞珠質  
 十 39 9 ㊦ ㊦ やすやすと、ひとつになるものではなかつ  
 十 39 11 ㊦ ㊦ 貝は、その核をそとにはきだして、受けつ  
 十 39 12 ㊦ ㊦ 核をさしいれたために死ぬものもあつた。  
 十 40 2 ㊦ ㊦ みると、もとのままになっていた。同じこ  
 十 40 4 ㊦ ㊦ しいれてから、眞珠になるまでには、少く  
 十 40 4 ㊦ ㊦ ら、眞珠になるまでには、少くとも四年は  
 十 40 11 ㊦ ㊦ ます。世界のために、きつと、あなたの  
 十 41 1 ㊦ ㊦ 十 41 1 ㊦ ㊦ 「こういつて、失望にせずむ幸吉を、なん  
 十 41 3 ㊦ ㊦ 物が、海水いちめんふえて、海水が茶色  
 十 41 3 ㊦ ㊦ ふえて、海水が茶色にかわるほどになるの  
 十 41 4 ㊦ ㊦ が茶色にかわるほどになるのである。この  
 十 41 4 ㊦ ㊦ 。この赤しおのために、母貝はみな死んで  
 十 41 6 ㊦ ㊦ てきて、やりなおしにかかった。町の人の  
 十 41 10 ㊦ ㊦ 吉をかばい、苦しみにあたえて、なん年かを  
 十 41 11 ㊦ ㊦ をしらべているうちに、一つの半円形の眞  
 十 41 12 ㊦ ㊦ した。これは、まえにさしいれておいた核  
 十 41 12 ㊦ ㊦ さしいれておいた核によって発生した半円

十42 2 ㊦ た。「半円が眞円になれば成功するのだ  
 十42 4 吉とうめは、たがいにはげましあつた。そ  
 十42 5 づけられた。眞珠貝にちようどよい海水の  
 十42 8 円眞珠が思いどおりに取れるようになった  
 十42 9 して、ともかく、世にだすようになった。  
 十43 2 は、じつに八十五万にもおよんだ。しかし  
 十44 1 まはなきうめのれいにささげて、その成功  
 十44 3 すでにしらがの老人になっていた。よる年  
 十44 4 ていた。よる年なみにも負けず、研究を重  
 十44 5 核をさしいれるときに、ほかの母貝のがい  
 十44 8 をもって母貝を海中にはなつた。さいわい  
 十44 9 かつた。海水の温度に大きなかわりかたも  
 十44 10 かつた。四年めになった。幸吉は、望  
 十44 12 開いていくと、どれにも眞珠が、きよらか  
 十45 7 。名高くなつたかげには、幸吉一生の苦心  
 十45 9 商たちが、幸吉の手になる養殖眞珠は、ま  
 十45 11 、世界の学者の研究によつて、天然眞珠と  
 十46 10 ㊦ 眞珠を世界の人々にあたえたことに、心  
 十46 11 ㊦ 々にあたえたことに、心から敬意をささ  
 十47 1 ㊦ するならば、作製に失敗したわたしは、  
 十47 1 ㊦ したわたしは、星にもあたらないでしよ  
 十47 5 私は、きのう、三つになる——まんていう  
 十47 5 でいうと二年三ヶ月になる妹をつれて、さ  
 十47 6 妹をつれて、さんぽにでました。家から十  
 十47 7 ばかり歩いたところに、廣い草原があるの  
 十47 9 のところですが、妹にはそうはいきません  
 十48 3 かりでなく、道ばたにあるものを、なんで  
 十48 3 でもみつめて、それに話しかけたり、そこ  
 十48 8 いきました。ために、私は、妹のいつて  
 十48 9 ることばを、紙きれに書きとめてみたので  
 十49 10 タイデルよその人には、なんのことか、  
 十49 11 さつを知っている私には、このことばの意

十50 1 いくと、道のまん中に、黒いいぬが一びき  
 十50 3 です。その黒いいぬに近よってみると、ひ  
 十50 3 つてみると、ひふ病にかかつていて、顔の  
 十50 7 ルワ」といつて、私に知らせたのです。い  
 十50 9 ヨ」は、足をせなかに「略。」というの  
 十51 3 らとりだして、いぬにやりながら、「ハイ」  
 十51 7 ノ」といつて、いぬにたずねているのです  
 十52 3 遊んでいたいと、私にねだったり、そのく  
 十52 12 らもどつてきて、道にでたとき、あとをふ  
 十53 1 、ごろんと、地べたに横になつてねそべつ  
 十53 1 ろんと、地べたに横になつてねそべつてい  
 十53 1 いぬの動作をことばにして喜びました。そ  
 十53 5 とき、いままでかたにかけていたすいとう  
 十53 6 とうをはずして、手に持つといひます。か  
 十53 7 つといひます。かたにかけると重いから手  
 十53 7 かけると重いから手に持つのだと、ませた  
 十53 8 た。まだ、いぬが氣にかかるのか、ふり向  
 十53 11 がありました。そこに、すいれんの花が三  
 十54 1 つて、水おけのふちにつかまつて、水の中  
 十54 11 とぼですが、この中には、妹のすがたが、  
 十55 1 記念写真も、思いではななるでしようが、  
 十55 2 くは、妹の心の写真になるのではないかと  
 十55 2 とは、ちがつたものになります。どうして  
 十55 7 うして、こんなふうにゆきづまつてきたの  
 十55 8 きつていてその力に、おどろきました。  
 十56 2 さつて、新しい世界にふみだしていこうと  
 十56 4 う 私は、遊び時間にくろろをみにいき  
 十56 8 時間にくろろをみにきました。そうし  
 十56 10 せて、とまり木の下におりていつてしま  
 十57 9 モスは、おじいさんになるとかわいそうね  
 十58 2 うの葉 算数の時間に、先生が、はしごで  
 十58 3 しごでいちょうの木にのぼつて、いちょう

十58 5 した。みんな負けずにひろいました。うち  
 十58 6 ひろいました。うちに帰つて、十まいずつ  
 十58 6 て、十まいずつたばにして、赤いひもでい  
 十58 11 んと、なお子ちゃんに、三たばずつあげま  
 十58 12 のこつたのをおし葉にしました。 お月見  
 十59 9 ってきた。えんがわにつくえをだして、そ  
 十59 10 えをだして、その上にすきをかざつた。  
 十60 1 れいだ。おかあさんに、「略。」といつた  
 十60 2 ㊦ で、あかちゃんにも、みせてあげて。  
 十61 1 けのこ うちの家庭に、たけのこが一本は  
 十61 2 は、たけのこのそばにいつて、せいくらべ  
 十62 5 、親竹と同じくらいに高くなつて、風にゆ  
 十62 5 いに高くなつて、風にゆれていました。  
 十62 9 とうさんがおうたいになるうたいを、きい  
 十63 1 。能は、そのうたいにつれて、役者が美し  
 十63 5 、役者がおじいさんになつたり、むすめに  
 十63 5 になつたり、むすめになつたり、わかい男  
 十63 5 になつたり、わかい男になつたりするときに  
 十63 6 になつたりするときは、おしろいやべに  
 十63 10 と、それぞれの人物によつて、それぞれの  
 十63 11 あります。そのために、能は、めんの藝術  
 十63 12 ーロッパの大むかしにさかえた、ギリシア  
 十64 2 画や、庭園や、建築にも、外國とはおもむ  
 十64 7 ます。能といつしよに、狂言というものが  
 十65 2 名なものです。狂言には、よく、太郎かじ  
 十65 6 うえのいばつたものに対してもおそれず、  
 十65 7 い、おもしろい人物になつています。狂  
 十65 9 言「ぶす」 ある村に、けちんぼのだんな  
 十65 10 をもらえば、くらしにもお金がかかり、着  
 十66 4 というふたりの下男に、「略。」といひつ  
 十66 6 ㊦ のへやのおしれには、『ぶす』といひつ  
 十66 7 ㊦ からふいてくる風にあたつても、たちま

十66 12 で、死ぬようなことになってはつまらない  
 十67 4 よいよいあのへやにはいるが、べつに、  
 十67 4 が、べつに、からだにさわりもしないのだ  
 十67 5 てみようということになりました。「略」  
 十68 2 、そつとおくのへやに近づき、さきに立っ  
 十68 2 へやに近づき、さきに立った太郎かじゃが  
 十68 9 しれをあげるときになると、「略」と  
 十68 12 うで、こしをうしろにひき、せんすの手だ  
 十68 12 んすの手だけをまえにつきだして、あおぎ  
 十69 2 いました。そのうちに、太郎かじゃは、お  
 十69 2 しいれのたなのすみに、だいいそにししま  
 十69 4 つけ、へやのまん中にかかえてきました。  
 十69 7 たりとも、どつきにあたって死んでい  
 十69 10 さあ、もとの場所において、あつちへい  
 十69 11 ぐずしているうちに、どつきにあたるに  
 十69 11 るうちに、どつきにあたるにちがいない  
 十69 11 、どつきにあたるにちがいない。「略  
 十70 11 く、すぐそれを、口に持っていきました。  
 十71 5 りは、かわりばんこに指をつっこみました  
 十71 6 いとなめているうちに、つぼが、からつぼ  
 十71 8 ったら、どんな目にあわされるかわから  
 十72 1 きはらい、「おれに、うまいくふうがあ  
 十72 7 み茶わんを、庭石にたたきつけろ。」こ  
 十73 3 「だんなは、あつけにとられてたずねまし  
 十73 6 ドサリとこのまにたおれたはずみに、  
 十73 7 にたおれたはずみに、あのだいせつなか  
 十73 9 して、こなみじんにいたしました。あま  
 十73 10 りの申しわけなさに、ふたりとも、命を  
 十73 11 ようと考え、それには、大どくとうかが  
 十74 1 おいなくていたくせに、きゆうに、につこ  
 十74 2 、につこりわらい顔になって、次郎かじゃ  
 十74 3 郎かじゃといっしょに歌いだしました。「へ

十14 2 いところだ。近くには小高い丘があつて  
 十15 3 んでいるが、それにあきると、そのボー  
 十15 5 うも、みんな話に花をさかせている。  
 十15 5 んだつて、大学生に頼んで乗せてもらっ  
 十15 9 んだ。力まかせに、長いオールをぐい  
 十15 10 だ。「ぼくもきみに賛成だ。ぼくは、父  
 十15 10 だ。ぼくは、父にいたら、せいの高い  
 十15 11 りっぱなからだになるだろう。その体  
 十16 6 、いちばんびりにいるばかりで、べつ  
 十16 9 したりするときには、きつとコックス  
 十17 7 て、新しい方向に進んでいく。ぼく、  
 十17 11 コックスのまえにすわつて、整調をや  
 十18 1 スの号令どおりに、一糸みだれずこい  
 十18 7 きみをコックスにすいせんする。「へ  
 十19 1 るだけではなしに、いつもそのうえを  
 十19 2 ぼくらは、きみについていきさすれ  
 十19 5 けれども、ぼくにはなかなかな、よしき  
 十19 12 かりつばな船長になるだろうよ。「へ  
 十10 1 な運轉をする人になるだろうね。「へ  
 十10 3 たらくい船員には、だれがなるのさ  
 十10 7 さあというときに、ひとりで責任をし  
 十10 9 さ。そういう男には、ぼくがなること  
 十10 9 ぼくがなることにきめているのさ。「  
 十11 3 そろえてくれるにちがいないよ。「へ  
 十11 4 えが鳴つて、ふいに一そうのボートが近  
 十11 13 日だ。丘の上の草にすわつて、いつまで  
 十11 15 オルガンをおひきになると、オルガンの  
 十11 16 さま 人の心の畑にさいた、いちばん美  
 十11 16 美しい花、天と地にかがやくものの中で  
 十11 16 たしをまもるためには、どんな困難とも  
 十11 17 耳。わたしのためには、いばらの道をも  
 十11 17 おかあさまの胸に、わきあふれるなく

十11 17 れるなぐさめの泉に、かなしみもいたみ  
 十11 18 やまぬ愛のしみに、うるおされ、やし  
 十11 19 いって、さかわ川にそつた村です。この  
 十11 19 た村です。この村に、ぎんえもんという  
 十11 19 した。その子どもに、りえもんという人  
 十11 19 たちが困つて頼みになると、氣持よく、  
 十11 19 たので、いつのまにかびんぼうになつて  
 十11 19 、その日のくらしにも困るようになりま  
 十12 0 た。そういうときに、金次郎が生まれて  
 十12 0 なものを買うために、自分でわらじを作  
 十12 2 ずつで働くことになりました。そのと  
 十12 4 郎が、そのかわりにでることになりました  
 十12 4 かわりにでることになりました。金次郎  
 十12 4 次郎は、年のわりにからだが大きかつた  
 十12 5 けているので、役にたたないことはあり  
 十12 10 は、ほかの人たちにすまないと思いまし  
 十12 12 ました。毎晩、家に帰つてくると、晝ま  
 十12 21 わらじを作ることにしました。これを持  
 十12 22 たくさんの人の中には、わらじの切れて  
 十12 28 みなさんのお役にたたないで、すみま  
 十12 28 うかそのかわりにはいてください。」  
 十12 22 おどろいて、すぐには受けてくれません  
 十12 21 したが、おしまいは、喜んではいてく  
 十12 23 した。金次郎の下にふたりの弟がありま  
 十12 23 たが、いまはどうにもなりません。母親  
 十12 23 えの子どもを親類にもらつてもらいまし  
 十12 23 へやつてから、夜になると、ため息はか  
 十12 23 返し話して、母親にすめました。「略  
 十12 24 に、その晩のうちにいて、子どもをつ  
 十12 24 たりして、村の人に買つてもらいました  
 十12 25 四人が生きていくにはじゅうぶんでした  
 十12 25 うぶんでした。夜になると、また、なわ

十一 26 7 すると、りっぱな人になるためには、学園  
 十一 26 7 ばな人になるためには、学園をしなくて  
 十一 26 10 した。まきをとりに山へいく、そのいき  
 十一 26 10 く、そのいき帰りに、いつもその本を手  
 十一 27 3 たが、金次郎は耳にもいれず、それを続  
 十一 27 7 せてくれます。中には、正月だというの  
 十一 27 8 うので、そのうえに十二文はずむ者もあ  
 十一 28 5 の弟は母親のさとに、金次郎は親類のま  
 十一 28 6 べえさんのところに、あずけられること  
 十一 28 6 あずけられることになりました。いまま  
 十一 28 10 ました。夜の勉強には油がいります。そ  
 十一 28 12 へいって、あき地にまいておきました。  
 十一 29 1 ました。これを油にかえて、本を読み続  
 十一 29 4 んだ田の水たまりに植えてみました。す  
 十一 29 5 すると、秋の終りには、一ぴょうあまり  
 十一 29 6 の米を自分のものにするのができまし  
 十一 29 7 の一ぴょうをもとにして、困っている人  
 十一 29 8 て、困っている人にかしてやったり、植  
 十一 29 10 いたりするうちに、三年めには、二十  
 十一 29 10 るうちに、三年めには、二十ぴょうの米  
 十一 30 1 、もとの自分の家に帰り、一家をふた  
 十一 30 2 ろいろのことを身につけて、やがて、村  
 十一 31 2 のめも、日々に色づきふとりだす。  
 十一 31 3 。続くひよりにさくらがさいて、  
 十一 31 5 、もも赤く 畑にさいて、れんぎよう  
 十一 31 6 かきねを黄色にそめていく。青い  
 十一 31 7 いく。青い空にはかすみがかめて、  
 十一 32 1 しとと降る春雨に、やぶのたけのこ  
 十一 33 1 かきのわか葉に日の照るころは、  
 十一 33 3 村のわら屋の庭に立つ。短か夜しら  
 十一 33 5 だいこんの花にあかつきの 色ただ  
 十一 33 7 ・くわ持つて野にいそぐ。夏 ほか

十一 34 3 青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。さ  
 十一 34 7 となって、晩にはかえるが歌いだす  
 十一 34 8 晴れ空はみどりにすんで、日ましに  
 十一 34 9 んで、日ましに日ざしが強くなり、  
 十一 35 1 、ふくすず風に夕はん樂し。空に  
 十一 35 2 はん樂し。空にくずれる雲のみね、  
 十一 35 3 雲のみね、庭にかがやくひまわりの  
 十一 35 6 く光るいなすまに、続いてひびくら  
 十一 35 8 くる大ゆうだちに、いまの暑さはど  
 十一 35 8 も、すむ秋空によくひびく。あぜ  
 十一 37 8 ひびく。あぜに火とさくまんじゆし  
 十一 37 9 じゆしゃげ 庭にもえたつはげいとう  
 十一 37 10 。続くひよりに勇みたち、いねも  
 十一 38 1 まつり。村道に立つ大のぼり、ゆ  
 十一 38 4 そと。かきねににおうきんもくせい  
 十一 38 7 しとと降る秋雨に、ちれば山にはま  
 十一 38 8 に、ちれば山にはまつたけが、か  
 十一 38 9 葉鳴らす。南にかたむく日につれて  
 十一 40 5 南にかたむく日につれて、光はま  
 十一 40 5 はまともいんにさす。ほしたかぼ  
 十一 40 6 て、うらの山には白雪つもる。も  
 十一 41 3 はつ日。廣場につどうたおとなりど  
 十一 41 6 どうし、え顔にほころびあいさつを  
 十一 41 7 つをする。池にむすぶほうすごおり  
 十一 41 8 すごおり、庭に立つたはしも柱。  
 十一 41 9 そうちくも重荷にたえず、つばきの  
 十一 42 3 、つばきの上にばたばた落す。こ  
 十一 42 4 、春も目さきに近づいた。どれ植  
 十一 42 8 るので、私が、母にかわってました。  
 十一 43 4 。正面のテーブルには、赤いうめの花を  
 十一 43 5 たちは、そのまえにおとなしくこしかけ  
 十一 43 7 さんが、だんの上にお立ちになりました

十一 43 9 だんの上にお立ちになりました。女の先  
 十一 43 10 の名をお読みあげになりました。「略」  
 十一 44 4 父兄と、いっしょに呼ばれているよう  
 十一 44 5 うをいただくことになりました。総代の  
 十一 44 10 たで四歩ほどまえに進みました。そうし  
 十一 44 11 、園長さんのまえに向いたとき、「略」  
 十一 45 3 ともとの自分の席にもどり、そこからで  
 十一 45 6 。園長さんのまえにでて、だんをさがり  
 十一 45 8 うにしながら、席に着きました。私はほ  
 十一 46 9 畑のうねの向こうに、いつもぼっかりと  
 十一 47 2 海峡をこえて内地にきたのは、ぼくの二  
 十一 47 4 が、こいみどり色にゆれて、ぼくは、船  
 十一 47 5 は、船のかんぽんに、おかあさんとふた  
 十一 47 6 いた。北海道の家には、うしが四頭いた  
 十一 47 7 ちちうしで、ぼくによくなれていた。う  
 十一 48 3 りいすで、その下に、いつもかいねこの  
 十一 48 5 アカシヤの花が風にゆれ、畑では、い  
 十一 48 10 あさんといっしょに北海道へいきます。  
 十一 49 6 やぎ小屋のまわりには、おかあさんのお  
 十一 49 9 よう。おとうさんに、負けないように働  
 十一 50 1 います。さつばろに農学校をつくられた  
 十一 50 4 やがいもをつくりにいこう。おかあさん  
 十一 50 7 ぼくは、いい農夫になろう。六 雨の  
 十一 51 2 大あらしは、けさになってもまだ続いて  
 十一 51 5 は、みんな下向きになってしまった。私  
 十一 51 8 めてしまった。雨にうたれながら、電車  
 十一 51 10 た。電車は、くるにはくるが、みな満員  
 十一 52 1 さげて、とまらずに走っていつてしま  
 十一 52 2 あふれそうな乗客にまじって、どうやら  
 十一 52 4 内はむし暑いうえに、おたがいがぬれた  
 十一 52 6 が、私のくつの上にばたばたと落ちてき  
 十一 52 9 く。一停留所ごとに、おりる人と乗る人

- 十一 53 3 雨や風の音のために、乗客の耳にきこえ  
 十一 53 3 ために、乗客の耳にきこえそうもない。  
 十一 53 4 乗客はおたがいにおしあつて、しゃし  
 十一 53 11 になごやかな氣持になった。このごろ、  
 十一 54 1 のごろ、電車の中に、つぎのようなひょ  
 十一 54 5 韻 「つり皮あけずに中ほどへ。」「略。」「  
 十一 54 6 韻 。」「おたがいにつめて、座席にもう  
 十一 54 6 韻 につめて、座席にもうひとり。」「略  
 十一 58 6 り返しているうちに、太郎は、「略。」「  
 十一 58 8 略。」「と、早口にすらすらといえるよ  
 十一 59 1 ことばは、ほかにないでしょう。」「と  
 十一 60 1 ぜ道で、とちゅうに、かなり深い小川に  
 十一 60 2 、かなり深い小川にかけ渡した一本橋が  
 十一 60 4 郎は、まえから父に、「略。」「とかたく  
 十一 60 10 うして、いっしょにその一本橋を渡りだ  
 十一 61 2 ていた村の人たちに助けられて、みんな  
 十一 61 2 のようになって家に帰った。父は、「略  
 十一 61 8 。その夜、また父にきびしくただされて  
 十一 61 9 とを、ありのままにうちあげた。父は、  
 十一 62 4 会 、自分からさきになって渡ってしまった  
 十一 62 5 会 。人のいうことに『いいえ』といいき  
 十一 62 5 会 え』といいきるには、ほんとうの勇氣  
 十一 62 6 会 のようなよわ虫には、ひよっとすると  
 十一 63 4 年が、ごろまみれにぐっしりとぬれて  
 十一 63 5 ぬれて、わきの下に着物の包みをかかえ  
 十一 63 9 は、ナボリの近くにある村からきたので  
 十一 63 10 、しごとをさがしにフランスへいったの  
 十一 64 1 つてきて、ナボリに上陸しました。そこ  
 十一 64 2 が、にわかに病氣にかかって入院したの  
 十一 64 3 たので、家族の者にかんたんな手紙を書  
 十一 64 6 ったことと、病院にはいったことを知ら  
 十一 64 11 きないので、長男にいくらのお金を持  
 十一 64 12 父親の看病のために、ナボリへよこした  
 十一 65 6 かと、おそろしさにふるえながら、その  
 十一 66 10 をながめて、それには答えなくて、ただ  
 十一 66 11 会 ただ、「わたしについておいで。」「と  
 十一 67 4 きますと、その中にはベッドが二列にな  
 十一 67 5 にはベッドが二列にならんでいました。  
 十一 67 11 どおどした目を右に左に向けて、青ざめ  
 十一 67 11 どした目を右に左に向けて、青ざめた、  
 十一 68 1 まわしました。中には、死人のようにみ  
 十一 68 4 うす暗く、あたりにははげしくすりの  
 十一 68 5 護婦がふたり、手にくすりびんを持って  
 十一 68 8 のベッドの頭の方に立ちどまって、カー  
 十一 69 1 少年は包みを下におくと、頭を病人の  
 十一 69 2 手で、ふとんの上におかれたまま動かず  
 十一 69 2 かれたまま動かずにいる、うでをつかみ  
 十一 70 3 したまゆとのほかに、どこかといって父  
 十一 71 7 会 お医者さんがみにきてくださるだろう  
 十一 71 10 は、かなしい思いにしずみながら、やさ  
 十一 71 12 っていって、最後に船の上でわかれを告  
 十一 72 1 族の者が、その旅に楽しい希望をかけて  
 十一 72 2 手紙の着いたときに、母親がどんなにか  
 十一 72 4 るい手がふとまたにさわったので、びっ  
 十一 72 12 会 生が、いまじきにおいでになりますか  
 十一 72 12 会 まじきにおいでになりますからね。」「  
 十一 73 2 「看護婦は、ほかになんにもいわずに  
 十一 73 2 はなんにもいわずにいってしまいました  
 十一 73 4 やの向こうのはしにはいってききました。  
 十一 73 8 つのベッドのそばに立ちどまりました。  
 十一 73 8 のあいだが、少年にはたいへん長く思わ  
 十一 73 11 をはなれないうちに、少年は立ちあがり  
 十一 74 5 、手を少年のかたにかけました。それか  
 十一 74 7 れから、病人の上にかがんで、みやくを  
 十一 74 8 をみたり、ひたいにさわってみたりして  
 十一 74 10 こと三こと看護婦にたずねました。「略  
 十一 75 6 う一ど少年のかたに手をかけながら答え  
 十一 75 7 会 「たんどくが顔にでたのです。だいふ  
 十一 75 11 会 。力をおとさずにいるがいいよ。」「少  
 十一 76 1 こで、少年は看病にかかりました。が、  
 十一 76 2 ました。が、ほかになにといってするこ  
 十一 76 3 、ときどきその手にさわってみたり、は  
 十一 76 4 、うなるたびごとにかがんでみたり、そ  
 十一 76 6 ら取って、看護婦にかわってそれを飲ま  
 十一 76 8 も、ハンカチを目にあてているときには  
 十一 76 9 にあてているときには、じっとみつめて  
 十一 76 11 はすぎました。夜になると、少年は、へ  
 十一 76 11 年は、へやのすみにいすを二つならべて  
 十一 77 1 た。そうして、朝になると、また看病を  
 十一 77 4 色が、そのひとみに、ちよっとのあいだ  
 十一 77 7 、目を開いたときに、その小さな看護人  
 十一 77 10 ブを病人の口もとにつけたときに、少年  
 十一 77 10 もとにつけたときに、少年はそのふくれ  
 十一 77 11 れあがつた顔の上に、きわめてかすかな  
 十一 78 6 そうにその話す声に――愛情とかなしみ  
 十一 78 8 したそのちやうしに、じっと耳をかたむ  
 十一 78 11 りで、少年は看病にいっしょうけんめい  
 十一 78 11 ていました。一日に二ど、看護婦が持っ  
 十一 79 2 よつとしたため息にも、ちよつとした目  
 十一 79 3 よつとした目つきにも、ふるえながら氣  
 十一 79 8 ところが、五日めに、病人はにわかにお  
 十一 79 11 だといわんばかりに頭をふりました。少  
 十一 79 11 た。少年は、いすにぐったりと身を落し  
 十一 80 4 した目を少年の上にすえて、うれしそう  
 十一 80 4 れしそうな顔をうかべながら、飲み  
 十一 80 8 ので、少年は希望に力づけられながら、

十一 81 4 ばの、ドアのそとに足音がきこえて、や  
 十一 81 8 ゐると、一方の手にあつくほうたいをし  
 十一 81 9 りの男が、看護婦に送られながら、その  
 十一 81 9 ながら、そのへやにはいつてきました。  
 十一 81 10 をあげて、その場に立ちすくみました。  
 十一 82 5 、父親のうでの中にたおれましたが、胸  
 十一 83 2 で、いくども少年にほおずりしてからい  
 十一 83 7 日おまえはここにいたのだね。どうし  
 十一 84 6 あ、いこう。晩には家に着けるから。  
 十一 84 6 こう。晩には家に着けるから。父親  
 十一 85 4 いんです。ここにあのおじさんがいま  
 十一 85 4 す。ぼく、ここに五日のあいだいまし  
 十一 85 6 ぼく、あの人におくすりを飲ませて  
 十一 85 7 も、ぼくがそばにいないといけないの  
 十一 85 10 もうすこしここにいさせてください。  
 十一 85 11 どうか、ここにいさせてください。  
 十一 86 7 院したと同じ日に、入院したんです。  
 十一 86 7 つれてきたときには、もうすっかりわ  
 十一 86 9 ん、遠いところに家族があるのでしょ  
 十一 87 1 た。父親はチチロにいました。「略」。  
 十一 87 2 「じゃあ、ここにおいで。」「略」。  
 十一 87 5 「これからすぐにうちへ帰って、おか  
 十一 87 6 じゃあ、ここに二円だけおいていく  
 十一 87 7 から、こづかいにしないさい。さような  
 十一 87 10 そばのものと場所に帰ると、病人はほっ  
 十一 88 2 チロはまた、病人に飲み物を飲ませたり  
 十一 88 6 、一日ずっとそばにいました。しかし、  
 十一 88 7 。顔はむらさき色になり、呼吸はいよい  
 十一 88 8 たの回しんのときに、医者は、「略」。  
 十一 89 1 さしい色がその目にうかぶこともありま  
 十一 89 3 年は夜どおしそばについて、病人をみま  
 十一 90 2 医者は、病人の上にしばらくのあいだう

十一 90 12 「略」。「そのうちに、ちょっとわきのほ  
 十一 90 12 よつとわきのほうにいつていた看護婦が  
 十一 91 4 して、それを少年に渡しながらいまし  
 十一 91 5 ました。「ほかににもあげるものが  
 十一 91 7 れを病院の記念に持つていらつしやい  
 十一 92 3 みれをベッドの上にちらしながら、「略  
 十一 92 4 」、「ぼく、記念に、この死んだ人に  
 十一 92 5 、「この死んだ人にのこしていきます。  
 十一 92 11 名が、しぜんと口にはのぼつてきました。  
 十一 93 1 物の包みを小わきにかかえました。夜は  
 十一 95 1 と航海して陸地にであつたのが、それ  
 十一 95 5 をテーブルの上に立ててごらんさい  
 十一 95 8 々は、なんのためにこんなことをいいだ  
 十一 95 10 のはしをテーブルにうちつけて、なんの  
 十一 96 4 道灌は、たかりにでかけました。する  
 十一 96 7 雨具をかりることにしました。「略」。  
 十一 97 2 のか、ふと庭さきにさいていた黄色なや  
 十一 97 5 、その花の枝を手にはしましたが、なん  
 十一 97 8 た。それからのにちになって、道灌は少女  
 十一 97 12 しき」という古歌に、少女の思いをたく  
 十一 98 3 家をはなれて勉強にでかけていました  
 十一 98 8 つと立つて、そばにあった小がたなをと  
 十一 99 6 のちゅうとで家に帰つてくるのは、ち  
 十一 10 3 ひろつてポケットにいれていました。そ  
 十一 10 5 さが、老人のそばによつてきて、「略」。  
 十一 10 9 みなからポケットに手をいれましたが、  
 十一 12 2 ンがちよつとそとにでかけたるすにやっ  
 十一 12 2 とにでかけたるすにやつてきて、その書  
 十一 12 3 て、その書物を手にとりました。そうし  
 十一 12 3 は、庭のかたすみにも三きやくをすえ、が  
 十一 12 5 をはじめた。そこには一本のざくろの木  
 十一 12 8 かたちって、あとにいくつかの実がなつ

十二 14 5 、根もとのところに三つ四つかたまって  
 十二 14 8 その根もとの地面には、夏のころ、草と  
 十二 14 9 。文雄はそれが氣になつてしかたがなか  
 十二 15 7 だな。そのままにしておいてやろう。  
 十二 15 10 めて、また下がきにかかった。だいたい  
 十二 16 1 たるところ、かげになったところ、力の  
 十二 16 5 と、パレットの上にチューブから絵のぐ  
 十二 16 7 たもので、子どもにはりつぱすぎるほど  
 十二 16 9 が、カンパスの上にぬりつけてみると、  
 十二 16 10 思いもよらない色になつてしまふ。かき  
 十二 16 11 、かいていくうちに、ひととおりできあ  
 十二 17 4 文雄は、三きやくにこしかけて、またふ  
 十二 17 7 たいへんいい色になりましたね。」「あ  
 十二 18 1 鳴いていたときには、ほんとうにおか  
 十二 18 3 ど——」「ぼくにはだれも教えてくれ  
 十二 18 7 やつていけるうちに、だんだんおもしろ  
 十二 18 12 鳴いているうちに、すこしずつじよう  
 十二 19 3 の先生が、散歩にいらつして、あなた  
 十二 19 3 あなたの鳴く声に耳をかたむけて、た  
 十二 19 7 に美しくなさるには、ご苦心がおあり  
 十二 20 12 でも、美しい色にできますがねえ。」「  
 十二 21 3 りっぱな絵かきになるころは、わたし  
 十二 21 5 ずつと大きな木になつて、美しいりつ  
 十二 21 10 も、あなたの歌には、そのさびしい氣  
 十二 22 2 (三)「自分には父もある。母もあ  
 十二 23 2 ん 長いこと外地にいた姉たちがひきあ  
 十二 23 5 ごたちといつしよに、同じ屋根の下でく  
 十二 24 2 というのは、父母にとつてのことですが  
 十二 24 3 とですが、わたしには、かわいめいと  
 十二 24 3 わいめいとおいにあたります。おいの  
 十二 24 7 と目みたとき、天にものぼるほどうれし  
 十二 25 1 りません。姉だけにわかるへんなことば



十二 25 9 ことばで、わたしに知らせるようになり  
 十二 26 6 く物があるとすぐに立ちあがって、その  
 十二 26 11 いって、かべぎわにおしつけてしまった  
 十二 27 2 くとすると、すぐに手について、いざり  
 十二 27 2 いて、いざり歩きになります。かた足を  
 十二 27 5 のです。いまそこにはいたかと思うと、も  
 十二 27 5 と、もう次のへやにはいっているという  
 十二 27 7 せん。立ちはじめには、物を持たせると  
 十二 27 11 いって、民ちゃんに持たせてみました。  
 十二 28 6 ㊦ さあ、いっちょにいきましょね。」  
 十二 29 3 した。こんなふうにして、毎朝おべんと  
 十二 29 4 持たせているうちに、民ちゃんは三足四  
 十二 29 7 ㊦ って口から地面におりて、わたしのげ  
 十二 30 11 とば数のふえるのには、おどろいてしま  
 十二 31 5 日、私が満七さいになる三ヶ月まえのこ  
 十二 31 8 、じっとげんかんになたずんでいました  
 十二 31 9 、みあげる私の顔に降りそそいでいまし  
 十二 32 9 て、次のしゅん間には、私は、先生――  
 十二 32 11 目をあらゆるものに向けて開いてくださ  
 十二 32 12 、私を愛するためにきてくださった――  
 十二 33 1 かたの両うでの中に強くだきあげられま  
 十二 33 2 ン先生は、お着きになったあくる朝、私  
 十二 33 2 る朝、私をおへやに呼んで、一つの人形  
 十二 33 4 、先生は、私の手に、「人形」という文  
 十二 33 9 しい喜びと得意さに大はしゃぎで、二階  
 十二 34 1 んなものがこの世にあることさえ知らず  
 十二 34 3 いく日かのあいだに、なんのことともわ  
 十二 34 4 もわからないままに、私は、「ピン」「コ  
 十二 34 6 た。けれども、物にはそれぞれ名まえの  
 十二 34 7 は、先生がおいでになってからいく週間  
 十二 34 10 形を私のひざの上において、「人形」と  
 十二 34 11 名であることを私にわからせようとなさ

十二 35 2 、「水」がその中にはいっているもので  
 十二 35 3 っきり教えるために苦しめたのですが  
 十二 35 8 、新しい人形を手にとって、ゆかにたた  
 十二 35 8 手にとつて、ゆかにたたきつけました。  
 十二 35 9 のかけらを足さきを感じながら、ゆかい  
 十二 35 10 いろりのかたすみにはきよせておいでに  
 十二 35 11 はきよせておいでになっているようすを  
 十二 36 2 私は暖かい日なたにでかけるのだと知っ  
 十二 36 7 らのあまいにおいにひかれて、庭の小道  
 十二 36 12 流れているあいだに、別の手に、はじめ  
 十二 37 1 あいだに、別の手に、はじめのはゆつく  
 十二 37 1 はゆつくりと、次には早く、「水」とい  
 十二 37 3 を先生の指の動きにそそいでいました。  
 十二 37 10 びとを興えることになったのです。こう  
 十二 37 11 こうして私は、物にはみな名まえのある  
 十二 37 12 たのです。私の手にふれるあらゆるもの  
 十二 38 4 たからです。へやに帰るとすぐ、私は、  
 十二 38 5 いろりのかたすみに走りよってかけらを  
 十二 38 7 めでした。私の目にはなみだがいっぱい  
 十二 38 8 やむ心と悲しみに胸をさされました。  
 十二 38 11 ませんが、その中には、「父」「母」「妹」  
 十二 39 1 て、小さなベッドに横たわりながら、こ  
 十二 39 2 ら、この日が自分にもたらした喜びを思  
 十二 39 8 一せつを、日本語になおしたものです。  
 十二 40 1 たったとき、大病にかかって、みるはた  
 十二 40 4 、かんしゃくもちになったのもむりはあ  
 十二 40 6 ののわかる子どもに育ててやりたいと念  
 十二 40 6 じて、もうあ教育に経験のあるサリバン  
 十二 40 7 あるサリバン先生にきていただくことに  
 十二 40 7 きていただくことにしました。サリバン  
 十二 40 9 をしつけていくのには、なみなみならぬ  
 十二 40 10 。しかし、ケラーに「ことば」というも

十二 40 10 をわからせることによって、そのまっ暗  
 十二 40 11 明かるくすることに成功しました。だん  
 十二 40 12 心がついて、学校にいくようになりまし  
 十二 41 1 ん、サリバン先生に手をひかれ、ふたり  
 十二 41 4 のです。手のひらに文字を書くことから  
 十二 41 6 、そのにぎりかたによって「ことば」を  
 十二 41 10 サリバン先生なしには、生きていけませ  
 十二 42 2 生をケラーのためにささげました。その  
 十二 42 4 で卒業し、はかせにまでなりました。こ  
 十二 42 4 ーのサリバン先生に対する信頼と、サリ  
 十二 42 5 う愛情とが、一つになったおかげです。  
 十二 43 8 ㊦ だいた童話の本に、人形が夜中に集ま  
 十二 43 8 ㊦ に、人形が夜中に集まっておどろだす  
 十二 44 3 ㊦ 。「さあ、人形にきてごらん。はは  
 十二 44 6 ㊦ んだがね。日本には、文楽といって、  
 十二 44 7 ㊦ 形などは、長さにすればメートル以  
 十二 44 11 ㊦ 人がいて、ものによっては、三人がか  
 十二 45 5 ㊦ うるりさ。あれにあわせてしばいをす  
 十二 45 9 ㊦ ていると別世界にいったような楽しい  
 十二 45 10 ㊦ 。「文楽のほかにまだあるんですか。  
 十二 46 9 ㊦ けてある。これに光をあてて影絵にし  
 十二 46 10 ㊦ 光をあてて影絵にしてみせるのだが、  
 十二 46 11 ㊦ それが音楽や歌にあわせてしばいをす  
 十二 47 1 ㊦ て、いろんな國にいろんなものがある  
 十二 47 2 ㊦ 「だいたい人間には、顔の色やくらし  
 十二 47 3 ㊦ っていて、心にあることを、なにか  
 十二 47 4 ㊦ 間がいてるところには、かならず詩もあ  
 十二 47 6 ㊦ 人形を思うままに動かして、喜びや、  
 十二 47 7 ㊦ やを美しく舞台にあらわそうとする望  
 十二 47 10 ㊦ 考えないところに、人間の美しさやお  
 十二 48 1 ㊦ けだけれど、絵には絵のいいところが  
 十二 48 2 ㊦ が、これは人間にできないことでも平

十二 49 7 (1) 古はがきを横にまいて、ひとさし指  
 十二 49 9 を二まいとも八つに切つて、そのうち一  
 十二 49 10 まいだけを正方形にする。ほかのはよく  
 十二 50 1 (3) 正方形の一まいにのりをつけてつづに  
 十二 50 2 のりをつけてつづにかぶせる。(4) 首の  
 十二 50 4 こして、もんだ紙にのりをつけなくて、  
 十二 50 9 長く切つた古新聞にのりをつけてとめる  
 十二 51 2 て、一まい一まいによくのりをつけては  
 十二 52 2 さ九センチくらいに切つて、まん中にあ  
 十二 52 3 に切つて、まん中にあなをあける。(2)  
 十二 52 10 三十センチぐらいにつきあわせて、図の  
 十二 52 10 あわせて、図の形に切る。これを二まい  
 十二 53 2 いて、首を着物にぬいつける。(4) 手  
 十二 53 5 ほうをいれて、穴に糸を通してぬいつけ  
 十二 53 9 とさし指を首の中にいれ、おや指となか  
 十二 53 10 いたのうしろがわにいれる。2 人形  
 十二 54 3 は人形の顔を前後に動かす。3 舞台  
 十二 54 10 。2 舞台の上には、紙やいたぎれで  
 十二 55 5 説が、そのあいだにおこまれているか  
 十二 55 6 からである。傳説には、正しい歴史にも  
 十二 55 6 には、正しい歴史にもとづいたものもあ  
 十二 55 8 多い。また、文章に書きつづられて有名  
 十二 55 10 人たちのなくなるにつれて、順々に消え  
 十二 56 5 見される。その中には、世界に共通なも  
 十二 56 5 の中には、世界に共通なものもある  
 十二 56 6 ものさもある。次にいくつかの例をあげ  
 十二 56 8 そ五郎、昔、島原にみそ五郎という大  
 十二 56 9 そ五郎は、雲仙岳にこしかけて、ひなた  
 十二 56 10 あらうのを楽しみにしていた。雲仙岳の  
 十二 56 11 。雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ  
 十二 57 1 れが、有明海の中にある湯島であるとい  
 十二 57 4 秋田縣の男鹿半島に、神山、本山といふ

十二 57 5 が、ふしぎなことに、神山のほうには、  
 十二 57 6 とに、神山のほうには、昔から九十九だ  
 十二 57 8 。昔、神山のおくにおにが住んでいて、  
 十二 57 8 んでいて、毎年村にあらわれては、田や  
 十二 57 9 は困りはて、おにに向かつて、一つの難  
 十二 57 10 おにが一夜のうちに百だんの石だんをき  
 十二 58 2 ひとりずつ、おにに人間をくわせてやる  
 十二 59 3 約四キロのところに、まわり十二キロの  
 十二 59 5 ある。昔、この里に長者がいた。一代二  
 十二 59 7 、先祖のことを鼻にかけて、わがままを  
 十二 60 8 、日はや西の山に傾いて、くれそうに  
 十二 60 9 このとき、高どのに立っていた長者は、  
 十二 61 11 、まねかれるままに空の中ほどまでもど  
 十二 61 7 徳島縣の津峯山に、家具の岩屋といふ  
 十二 62 1 。そのことが評判になって、だれもかれ  
 十二 62 1 だれもかれもかりにくうようになった。  
 十二 62 2 になった。その中にわるい人がいて、か  
 十二 62 2 具をかりつばなしにして返さなかった。  
 十二 62 7 湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木こりが  
 十二 62 10 と思つて小川の岸にでみると、美しい  
 十二 63 4 かった。そのうちからだんだん長  
 十二 63 5 のびて、おしまいにへびになってしまつ  
 十二 63 5 、おしまいにへびになってしまった。家  
 十二 63 6 へびになってしまった。家にはひとりの母がある  
 十二 63 6 りの母がある。母にそのからだをみせる  
 十二 63 6 のからだをみせるにはしのびない。また  
 十二 63 7 のびない。また人にみられるのもこまる  
 十二 63 7 い切つて、水ぞこにとびこむと、小川が  
 十二 63 9 深くて長い根の上に、みごとな草や木が  
 十二 66 9 こぎりのこぎりに、はがある。のこ  
 十二 67 2 がつて、一つおきに右と左にすこしよじ  
 十二 67 5 一つおきに右と左にすこしよじれて、二

十二 67 10 りをかけて右と左によじつておかないと  
 十二 68 1 ないと、なんの役にたたない。のこぎ  
 十二 69 2 をもつたのこぎりににている。しかし、  
 十二 69 4 ないと、じき、役にたたなくなる。どん  
 十二 69 6 があつても、それにあつみと廣さがなか  
 十二 70 2 の芭蕉の家の近くに、曾良という人が住  
 十二 70 4 てから、その弟子になりました。そうし  
 十二 70 5 句を勉強することに心をきめました。曾  
 十二 70 7 んでいて、なにかにつけて不自由であろ  
 十二 70 10 自分は、その近所に別に家をかりて住む  
 十二 70 10 をかりて住むことにしました。そうして  
 十二 71 1 蕉のおきないうちに、いどから水をくみ  
 十二 71 3 近所へ木をひろいにいったりしました。  
 十二 71 4 のようにして芭蕉につかえながら、はい  
 十二 71 5 した。先生の近くにいればこそ、毎日教  
 十二 71 7 ました。そのうちに、冬がきて、くもつ  
 十二 71 8 いので、寒さは身にこたえました。雪  
 十二 71 11 した。そのあたりに遊んでいる子どもた  
 十二 72 5 した。そのあたりにいるのは、川べりに  
 十二 72 6 いるのは、川べりにある船大工の子ども  
 十二 72 7 もや、のりをとりでるりようしの子ど  
 十二 72 10 いつも遊び友だちにいました。「略  
 十二 73 4 話をしていううちに、バラバラと音がし  
 十二 73 5 や、芭蕉の足もとに落ちて、はね返つた  
 十二 73 8 さな手をしゃくしにして、受けようとし  
 十二 73 9 、あらはれその手にはのらないで、顔に  
 十二 73 9 はのらないで、顔にあたつたりふところ  
 十二 73 10 たつたりふところにとびこんだりします  
 十二 73 11 ちのかけていく方に、自分もいっしょに  
 十二 73 11 、自分もいっしょにかけだしたいと思ひ  
 十二 75 2 バサリと、まくらにひびくのでしたが、  
 十二 75 3 、すべての音も雪にうずめられたような

十二75 4 したしずかさの中に、芭蕉は心をすませ  
 十二75 12 ㊦ どうしてもこずにはいられませんでし  
 十二76 3 〽」やがていろいろには、パチパチとしば  
 十二76 6 芭蕉は、えんがわにいつてなにか持ちだ  
 十二76 7 、赤いおぼんの上に、雪をまるめてこし  
 十二77 4 た。テニスコートには日本とメキシコの  
 十二77 6 います。スタンドには、はじまるまえか  
 十二77 7 けて、練習のためにコートにでました。  
 十二77 7 習のためにコートにでました。すこしば  
 十二77 8 づから、休けい場にもどつてくると、中  
 十二77 9 しい十一二の兄弟にサインを頼まれまし  
 十二78 7 ままで試合のまえにこんなふうにはげま  
 十二78 7 まえにこんなふうにはげまされたことは  
 十二79 12 ㊦ のテニスの試合には、どちらをおうえ  
 十二80 9 ン」ということばに力をいれて答えまし  
 十二80 10 。そのひとみの中には、「略」という  
 十二81 2 母國の選手のために、勝つことをいのつ  
 十二81 8 時間もぶつとおしに戦いました。なんど  
 十二82 2 月、八月の四ヶ月にわたつて、十一ヶ國  
 十二82 3 は、最後の決勝戦にのぞむことになりま  
 十二82 4 決勝戦にのぞむことになりました。もし、  
 十二82 4 もし、この決勝戦に勝つことができた  
 十二82 6 じめてもらふことになります。清水選手  
 十二82 9 ートル、みるからにりっぱな体格は、小  
 十二83 2 のひかれたコートには、日ざしがさんさ  
 十二83 6 なはく手をふたりに送りました。「略」  
 十二83 8 じまりました。目にもとまらぬボールが  
 十二83 10 、ネットの上を右に左にと、ゆききしま  
 十二83 10 ットの上を右に左にと、ゆききしまし  
 十二84 1 つのボールを中心にして、両選手はとど  
 十二84 3 合をみているうちに、早くも、第一回は  
 十二84 9 。しかし、さすがにチルデン選手です。

十二85 1 人は、いよいよ手にあせをにぎりまし  
 十二86 1 受けやすいところに、送つてやったので  
 十二86 4 たびはげしいものになっていききました。  
 十二86 9 いた両選手のために、見物人たちは、し  
 十二87 6 入れをしている父にこういわれたら、バ  
 十二87 7 ケツか、じょうろに水をいっぱいいれて  
 十二87 8 りばこをあけた父にこういわれたら、水  
 十二87 9 われたら、水さしに水をいれて持つてい  
 十二87 10 きまわしている父にこういわれたら、手  
 十二88 1 われたら、手おけに水をいっぱいくんで  
 十二88 3 や、音声や身ぶりによつて、いろいろに  
 十二88 7 ききわけて、それによくかなうようにし  
 十二88 9 。もし、そのわけにかなわないことをす  
 十二88 10 へんおかしなことになるばかりでなく、  
 十二88 11 とはいえないことになる。話をきくとき  
 十二88 12 。話をきくときには、相手の人のいっ  
 十二89 1 ないと、相手の人に満足を与えることが  
 十二89 3 分が話をするときには、その場のようす  
 十二89 3 、その場のようすによくあうように、氣  
 十二89 5 〽」というあいさつにしても、ほんとうに  
 十二89 8 。食事のたびごとにいう「いただきます  
 十二89 8 「ごちそうさま」にしても、そのときそ  
 十二89 10 でいうだけのことになる。ただ習慣とし  
 十二89 12 をいやしめることにもなるからである。  
 十二90 5 は、その場その場にあらわれるその人の  
 十二90 8 〽」「くりひろいにいった。」太郎が、  
 十二90 10 くりひろい」の中に、さまざまな氣持を  
 十二90 11 氣持をこめているにちがいない。天氣の  
 十二91 5 帰つておかあさんにゆでていだいたこ  
 十二91 8 かに、この文の中にたたみこまれてい  
 十二91 9 ためこまれてにちがいない。秋子も  
 十二91 11 に、「くりひろいにいった。」と書いた。

十二91 12 であるが、その中にたたみこまれてい  
 十二92 2 。となりの友だちにさそわれていったこ  
 十二92 12 も、「くりひろいにいった。」といい、「  
 十二92 12 うことばは、だれにでも同じようにわか  
 十二93 2 もっている。そこにことばとしての性質  
 十二93 3 場のようすが相手にみえないから、こと  
 十二93 4 いいあらわしかたには、いつそう氣をつ  
 十二93 6 んでなく、読み手によくわかるようにく  
 十二93 8 る。文を書くときには、よく手をいれる  
 十二93 10 まり心を練ることになる。心を練るほど  
 十二94 3 とんぼを、心の中にえがきます。「略」  
 十二94 6 でも読んで、すぐにそのわけがわかる。  
 十二94 7 を読んで人々の心には、めいめいちがっ  
 十二94 9 すすきの野原を心にえがき、自分もそん  
 十二94 10 分もそんなところについて遊んでみたい  
 十二94 11 ふと思いだす。弟にせがまれて、赤とん  
 十二94 12 、赤とんぼをとりにでかけたが、道ばた  
 十二94 12 かけたが、道ばたに野はぎがさいていた  
 十二95 1 赤とんぼはとらずに、花を手にいっぱい  
 十二95 1 とらずに、花を手にいっぱいつんで帰っ  
 十二95 3 おと年、この学校にうつってきたときの  
 十二95 6 しょうぼりと校庭に立っていると、赤と  
 十二95 9 であるが、読み手によつて、三人三よう  
 十二95 10 ったことを心の中に思いうかべる。いっ  
 十二95 11 手の思いでや心持にかかれて、その人  
 十二95 12 の人の生活や経験によつて生かされてく  
 十二96 3 あなたがたの家に、写真帳があるでし  
 十二96 4 るでしょう。それにはあなたがたのおと  
 十二97 4 。貝つか ここに貝ががあります。  
 十二97 9 る貝は、三百種類にものぼりますが、古  
 十二100 1 運んだりするときにもつかったことでし  
 十二100 2 とでしょう。土器には、なわ目のよう

- 十二100 8 もん式土器のほかに、やよい式土器とい  
十二101 10 。手首やむねなどには、まがたま、まる  
十二102 3 ませんか。はにわには、このほか、うま  
十二102 9 三百年ばかりまえに作られたものであり  
十二103 3 千二百年ほどまえに、はじめて作られた  
十二103 7 金がなかったときにくらべて、お金で  
十二104 2 、九百年ほどまえに作られた平等院とい  
十二104 3 院という建物の中にある名高いほうおう  
十二104 6 は、屋根のかざりにほうおうがついてい  
十二104 8 、屋根の形や左右にのびたろうかのかっ  
十二104 9 ろうかのかっこうにも、ほうおうとい  
十二104 11 らわれていることに気がつくことでし  
十二105 7 ます。向こうがわに店がみえます。皮ざ  
十二106 3 。絵巻物 四つに組んだ大ずもう。か  
十二107 2 終りから鎌倉時代にかけての藝術の中  
十二108 2 仁王さまは寺の門に立って、ほとけさま  
十二108 9 能面 これは能につかうお面です。舞  
十二108 10 身ぶりや、手ぶりによって、このお面は  
十二109 3 語 三年生のときに習ったイソップ物語  
十二109 6 教の宣教師が日本に傳えたのは、三百五  
十二109 10 た。日本のことばになおしてローマ字で  
十二110 5 これは、茶だんすににっていますが、そ  
十二110 6 ません。江戸時代にできたまき絵書だ  
十二110 9 るしをぬったうえに、金や銀のこなをま  
十二110 11 す。黒うるしの中に、銀や貝が光をはな  
十二111 3 、古くから外國人にもはやされてきま  
十二111 10 く人と、それを木にほりつける人と、紙  
十二111 11 りつける人と、紙にすりあげる人との共  
十二112 1 す。三人がひとつに心をあわせた美しさ  
十二112 7 から百八十年まえに、日本で出版したも  
十二112 11 のですが、この本によって、日本の医学  
十二113 2 。この本を日本語になおすのには、どれ  
十二113 2 日本語になおすのには、どれほど苦心し  
十二113 9 であります。汽車にかぎらず、船でも、  
十二114 5 が、全國からここに集まって、いろいろ  
十二114 7 國日本を作るために、また、文化國家を  
十二114 8 國家をきずくために。こんどの新しい憲  
十二115 6 していくよりほかに道はありません。こ  
十二115 6 ということは、身に行うということです  
十二115 8 調がそろったときに、はじめて、日本が  
十二115 8 小枝のあみ目の先にも、はやふくらと  
十二115 8 に。その、まだ目にもとまらぬ、小さな  
十二115 8 むれは、おたがいひじをつつきあって  
十二115 8 は、はや、しばふに落ちかかる木もれ日  
十二115 8 日のしま目もようにもちらちらとして、  
十二115 8 として、あさい水には、あしのめがすく  
十二115 8 た。長くかなしみにしずんだものにも、  
十二115 8 みにしずんだものにも、春は、希望の帰  
十二115 8 、遠い國からここに帰って来て、私たち  
十二115 8 て、私たちの頭上にとびかい、歌うだろ  
十二115 8 のきざしは、よにもあらわれて、目に見  
十二115 8 にあらわれて、目に見えぬかすみのよう  
十二115 8 うに、白雲をかたにまどった小山をめぐ  
十二115 8 いうしずかな午前にあつて考える、「略  
十二115 8 人生よ、長くそこにあれ。」二 眞理  
十二115 8 はたしていくために、知識をますことは  
十二115 8 がらである。知識には、浅いものと深い  
十二115 8 正しい知識を得るには、考えたり、調べ  
十二115 8 の関係や、その間に行われる法則を知っ  
十二115 8 だ研究をする土台にするのである。たと  
十二115 8 のかふんがめしべにつかないようなくふ  
十二115 8 、かふんがめしべにつくときはよくみの  
十二115 8 の進まないところには、迷信が行われる  
十二115 8 ば、移轉をするのに、方角がよいとかわ  
十二115 8 たり、生まれた年によって、その人の性  
十二115 8 まえの人も世の中には多いが、ある人は  
十二115 8 かぬ國の人々などには、この考えのまっ  
十二115 8 までもない。日本には、毎年、約二百万  
十二115 8 このように、道理にあわないことを信ず  
十二115 8 と他のこととの間に、すこしのつながり  
十二115 8 のは、普通の知識によって知られ、むず  
十二115 8 のは、科学的研究によって調べられる。  
十二115 8 もとより世の中には、科学的研究によ  
十二115 8 には、科学的研究によっても、まだ知ら  
十二115 8 して、人は、道理によって動かなければ  
十二115 8 ばならない。知識によらず道理によらず  
十二115 8 知識によらず道理によらず、いたずらに  
十二115 8 は、今日、世の中にどれほど害をなして  
十二115 8 。ガリレオ 朝になると、日は東の空  
十二115 8 らのぼり、夕がたになると、西の空にし  
十二115 8 になると、西の空にしずみます。月も、  
十二115 8 東の空から西の空に向かって動きます。  
十二115 8 な考えかたがもとになって、東洋でも西  
十二115 8 ようなことが、目についてきたのです。  
十二115 8 、天動説とは反対に、地動説が出てきま  
十二115 8 した。これを最初にい出したのは、十  
十二115 8 十六世紀の中ごろに死んだ、ポーランド  
十二115 8 います。——の空にえがく道は、だえん  
十二115 8 はいつもその焦点にいるものだ、とい  
十二115 8 、イタリアのピサに生まれたガリレオと  
十二115 8 といつて、一晝夜に一寸ずつ、自分で西  
十二115 8 をえがいて、一年に一回、太陽のまわり  
十二115 8 だし、その説を人に教えてはならない、  
十二115 8 リレオは、ローマに呼びだされて、自分  
十二115 8 じてはならぬ、人にも説いてはならぬ  
十二115 8 もいたし、めくらにもなりかけていたの

- 十三163 あつたということにして、ゆるしてもら  
 十三173 近海の漁場のほかには、鉾山があるので  
 十三176 世界の子どもたちにおくった、アンデル  
 十三178 、千八百六十四年に、ドイツオーストリ  
 十三179 リア二國との戦いに敗れ、賠償として、  
 十三182 國運をもとどりにするか、これが、デ  
 十三186 した。たとえ戦いに敗れても、精神的に  
 十三188 るかは、このときにさだまり、この苦し  
 十三188 、この苦しいときにうちかつこのでき  
 十三1812 。かれは、その胸に國運回復の計画をた  
 十三191 画をたて、その顔にほほえみをたたえて  
 十三194 ほったりするときに、よく、國土の地質  
 十三196 これを豊かな土地にしようとする大計画  
 十三198 想を実現する誠意にみちていました。ユ  
 十三1912 めを実現するために、ダルガスをとるべ  
 十三202 ートランドの平野には、八百年あまり前  
 十三202 、八百年あまり前には、よくしげった森  
 十三204 をおこたつたために、土地は、年を追っ  
 十三207 牧草を植えることにありますが、もつと  
 十三208 しいのは、あれ地に木を植えることです  
 十三209 スは、このあれ地に育つ木があるかない  
 十三2012 トランドのあれ地にも育つだろうと思っ  
 十三2012 うと思って、実際に試験してみると、も  
 十三212 強い木をやしなうにたる地力さえ、のこ  
 十三214 実、これがためにくじかれることなく  
 十三216 解決してくれるにちがいない。」と、  
 十三219 エー産のもみの間に植えてみると、兩種  
 十三219 のみは、たがいにならんで生長し、年  
 十三211 トランドのあれ野には、年ごとに、みど  
 十三211 れ野には、年ごとに、みどりの野が廣が  
 十三227 その生長は、これによつてはたされなか  
 十三229 」といつて、かれにせまりました。ダル
- 十三2212 いダルガスは、父に、「略。」といいま  
 十三231 がある大きさ以上に生長しないのは、き  
 十三232 大もみのそばにならべておくからで  
 十三233 もある時期になつて、小もみを切  
 十三234 して、生長するにちがいありません。  
 十三236 スの意見を、実際にためしてみると、そ  
 十三237 ると、そのとおりになりました。小もみ  
 十三239 かえつてさまたげになるという、植物学  
 十三239 が、ダルガス親子によつて、発見された  
 十三2311 トランドのあれ地には、おいしげったも  
 十三2312 親子の発見と努力によつてもたらされた  
 十三241 結果は、木材だけにどまりません。第  
 十三246 ほかわずかのものにすぎませんでした  
 十三249 いものはないまにになりました。ユート  
 十三2410 林がしげつたために、こえた田園となり  
 十三2411 あたえられたうえに、いい氣候があたえ  
 十三255 が、いたるところに生まれました。土地  
 十三256 では、百五十ばいになりました。道路・  
 十三256 は、いたるところにしかれました。とう  
 十三258 わりました。戦いによつて失われたシュ  
 十三259 おあまりあることになりました。ところ  
 十三2510 。ところが、ここに、木材よりも、農作  
 十三261 した。敗戦のために意氣のおとろえた國  
 十三263 行と、熱誠な共力によつて、あれ地をみ  
 十三266 風景 ペキンの町には、ホートンが、あ  
 十三269 ら高い土べい続きになつてゐる。あまり  
 十三279 ではあるが、ここに住んでゐる子どもた  
 十三279 である子どもたちにとっては、かけがえ  
 十三2711 いホートンの廣場に、子どもたちがたむ  
 十三283 を走ったり、地面にこしをおろして、あ  
 十三285 いろいろなもの音に、耳をかたむけたり  
 十三287 のである。もの音には、いろいろなもの
- 十三2811 つて来る。かた手には、大きな毛ぬきの  
 十三2811 のを持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎつ  
 十三293 う、頭をつるつるにそられてゐる。糸屋  
 十三2911 いる。前の荷の上に、小さなだらをぶら  
 十三2912 さげ、その両がわに、ふんどうをつるし  
 十三301 がゆれて、しげんにふんどうがだらにあ  
 十三301 にふんどうがだらにあたる。「ポーン」  
 十三303 音をたてる。どらにも、小ささまさまあ  
 十三304 も、そのうちかたによつて、調子がちが  
 十三306 れぞれ子どもたちにはすぐわかる。その  
 十三313 集まる。まるく輪になつたその中で、さ  
 十三317 れが、見ている人には、かえつておもし  
 十三329 略。」と歌う。秋には、なつめ賣りがや  
 十三3211 のようなホートンには、それが、ふしぎ  
 十三331 ても、いちばん耳に親しいものは、水を  
 十三332 の音であらう。水に不便なペキンでは、  
 十三336 がひびく。夏の日には、この音がすずし  
 十三336 おこさせ、冬の日には、いかにもさむざ  
 十三3311 つた明かるい夜空に、なんきんだまのよ  
 十三341 ートンの廣場などに、かげ絵の舞台をこ  
 十三347 ちは、あわてて家にもどつて行つたりす  
 十三349 りする。ホートンに面した家々の門には  
 十三349 に面した家々の門には、「れん」が書か  
 十三353 うその美しさが胸にきざまれる。文字の  
 十三355 とではない。正月には、門のとびらに、  
 十三356 には、門のとびらに、まっかな紙の春れ  
 十三359 あざやかな色どりに、正月氣分を味わう  
 十三3510 分を味わう。早春になると、はとぶえが  
 十三3511 る。これは、はとにふえをむすびつけて  
 十三3512 ふえが鳴る。ふえには大小があるから、  
 十三361 から、はとがむれになつてとんで来ると  
 十三366 土べいのかたすみにたまる。ふわふわと

十三三七 室 右がわのかべに、電話がとりつけて  
十三三七 つけてある。左手につくえ。電話のベル  
十三三八 配給物を取りに行ったんじゃないで  
十三三八 っている。その間に、ぼうしをぬぎ、指  
十三三九 っ……え、うちに来たんですか……へ  
十三三九 ね。おかあさんに……はい。早く帰っ  
十三四〇 ると、また電話口に行き、電話をかける  
十三四〇 。（その間、かた手に持ったさっきの手紙  
十三四〇 ）。きょう、うちに来たんだって……う  
十三四〇 んだ。いまここに持っている。なんべ  
十三四一 るよ。いっしょにつかえいいよ……  
十三四一 ある。いっしょに読もう。ああ、リッ  
十三四一 きみをお客さんにして、ハイキングに  
十三四一 て、ハイキングにつれて行くって……  
十三四二 を……それきみにくれたの……マンシ  
十三四二 ね……え、ぼくに……いらないよ。せ  
十三四二 たら、いっしょに、そのマンシウの  
十三四二 シュウの子どもに、お札の手紙を書こ  
十三四二 ……うん、楽しみにしているよ……おじ  
十三四二 さんやおばさんによろしく。さような  
十三四三 ら、舞台のまん中に出て来る。三郎 手  
十三四三 する。三郎、それに気がついて、三郎  
十三四三 ……（と、うら手に行く……声だけ続く  
十三四四 のしばいは、舞台に出て来る人が、ただ  
十三四四 これでも、しばいになっています。ただ  
十三四四 す。ただ、あいてになる人が、見物人の  
十三四四 人が、見物人の目につかないだけです。  
十三四四 二くん、おしまいにおかあさん。です  
十三四四 。ですから、舞台に出ている人は、四人  
十三四四 声は、見ている人には聞えませんが、そこ  
十三四四 なりません。そこに、このしばいのむず  
十三四五 くんのことばの間に、あいてがなにかい

十三四五 。ですから、文字にあらわれていないあ  
十三四五 ばを考えて、それによって、「……」を  
十三四五 うします。見物人にせなかを向けないよ  
十三四五 チューリップの花に消える。そよ風の中  
十三四七 える。そよ風の中にひっそりと、客をむ  
十三四七 しか 午前の森に、しかがすわってい  
十三四七 いる。そのせなかにその角のかげ。あぶ  
十三四七 ているその耳もとに。きり 山の湖水  
十三四七 場の泉を、そうじに行つて来るよ。ちょ  
十三五〇 子うしをつかまえに行つて来るよ。母う  
十三五一 よ。母うしのそばに立つて来るんだが、ま  
十三五一 る。おさないころにそうだった。おとな  
十三五一 うだった。おとなになつて、いまもそ  
十三五二 、はがきの上の方に、まるく原色ですっ  
十三五三 いて、その右の方に、もうひとりの子ど  
十三五三 の下の白いところに、先生の手で、こう  
十三五三 ら五百年ほど前に、イタリアのラファ  
十三五三 もので、『いすによるマドンナ』とい  
十三五四 うことは、すぐにわかりました。そう  
十三五四 の氣持を、だれかに話してみたくてたま  
十三五四 た。それで、すぐに、おとなりのおじさ  
十三五四 も、本物をごらんになつてみるだろうと  
十三五四 んちがっているのにおどろきました。絵  
十三五五 だの色の美しいのにおどろかされました  
十三五五 これでも、本物にくらべたら、やっぱり  
十三五六 という町の絵画館にかざつてあるよ。ラ  
十三五六 究しているうちに、たいそう上達した  
十三五六 そこからローマに出て、へき画をかい  
十三五七 た。その『いすによるマドンナ』は、  
十三五七 は、おけのそこにかいたという小さな  
十三五七 とその絵を目の前に見るようなうすを  
十三五八 ました。「ぼくには、よくわかりませ

十三五九 スデンの美術館にある絵で、『シスト  
十三五九 しい人が、その前にひれふしている絵で  
十三五九 き、この絵の前には、一台の長いすが  
十三五九 、かわりばんこにやつて来て、あいて  
十三六〇 目をあげて、かべにかかつている一まい  
十三六〇 でしょう。ぼくには、そのうまさによ  
十三六〇 さは、普通の人もわかるだろうね。  
十三六〇 をしので大家になり、自由にふでを  
十三六四 、その名のわが國に知られている人は、  
十三六四 リップの作品の中にみながっている大き  
十三六四 あわせなものの中に、かえって、人間と  
十三六四 リップの作品の中には、たしかに、私た  
十三六四 しい木ぐつしの子に生まれ、おさないこ  
十三六四 、まずしさのために、すこしもゆがめら  
十三六四 、文学修業のためにパリに出て、市役  
十三六四 業のためにパリに出て、市役所のガス  
十三六四 のガス係という職についたとき、ふるさ  
十三六四 たとき、ふるさとにのこした母へ送った  
十三六四 たつぎの手紙の中にもよくうかがわれま  
十三六四 えて、私たちの胸にまでせまってくるで  
十三六六 たあとで、七時にパリに着きました  
十三六六 、七時にパリに着きました。たつて  
十三六六 のことをお考えになつてください。そ  
十三六六 うして、ご自分にはまだ子どもたちが  
十三六六 のだと、お考えになつてください。ど  
十三六六 おこつたというにすぎないのです。私  
十三六六 とうさんのために、心からの思い出を  
十三六六 出をまもることにはましよう。おとう  
十三六七 一生は、私たちにのつての手本になつ  
十三六七 にとつての手本になつてくれるでしょ  
十三六七 ばのつくえの上におきます。一生の間  
十三六八 を思いだすことにします。それは私に

十四 8 2 手  
 十四 8 4 手  
 十四 8 4 手  
 十四 8 6 手  
 十四 8 9 手  
 十四 8 9 手  
 十四 8 10 手  
 十四 8 10 手  
 十四 8 12 手  
 十四 9 1 手  
 十四 9 2 手  
 十四 9 3 手  
 十四 9 3 手  
 十四 9 4 手  
 十四 9 5 手  
 十四 9 7 手  
 十四 9 7 手  
 十四 9 10 手  
 十四 9 10 手  
 十四 9 11 手  
 十四 10 5 手  
 十四 10 6 手  
 十四 10 8 手  
 十四 10 10 手  
 十四 10 12 手  
 十四 10 12 手  
 十四 11 1 手  
 十四 11 6 手  
 十四 11 7 手  
 十四 11 8 手  
 十四 11 9 手  
 十四 11 10 手  
 十四 11 10 手  
 ます。それは私にとって、このうえも  
 かあさん、運命にはしたがわなければ  
 ん。じゅみょうにも負けなければなり  
 んですから。私には決心がつきました  
 まおうとお思ひになるにはおよびませ  
 とお思ひになるにはおよびません。な  
 ろ、おかあさんにしても、私にしても  
 んにしても、私にしても、とてもわす  
 のことをお考えになるのです。おかあ  
 のことをお考えになって、この世の中  
 て、この世の中には、まだ幸福がのこ  
 かといえ、妹にしても、私にしても  
 妹にしても、私にしても、心からおか  
 と、こうお考えにならなければいけま  
 としておしまひになったら、あなたの  
 かなしみのために、おからだをおいた  
 らだをおいたことになるなんて、どうあ  
 きなかつたことに對して、しっかりと  
 かくごをおきめになり、自分を愛して  
 らかくするために小さなかさがあると  
 るとか——それには、つかいかたを書  
 明しておもらいになるといふと思いま  
 も、一週間ごとにお手紙をさしあげま  
 るのです。じきに九月になります。そ  
 す。じきに九月になります。そうした  
 したら、おそばに行きます。さような  
 ちらをおつかひになつてもかまひませ  
 つ油をおつかひになつたほうがいいの  
 。ランプはかべにおかけなさい。きは  
 子をととのえるには、どうをあらこ  
 をあらここちらにまわすのです。いっ  
 です。いっしょに小さなかさを送りま

十四 12 2 手  
 十四 12 3 手  
 十四 12 9 手  
 十四 12 12 手  
 十四 13 1 手  
 十四 13 2 手  
 十四 13 6 手  
 十四 13 11 手  
 十四 14 1 手  
 十四 14 5 手  
 十四 14 9 手  
 十四 14 10 手  
 十四 15 1 手  
 十四 15 1 手  
 十四 15 2 手  
 十四 15 2 手  
 十四 15 5 手  
 十四 15 8 手  
 十四 15 10 手  
 十四 15 11 手  
 十四 15 12 手  
 十四 16 2 手  
 十四 16 3 手  
 十四 16 8 手  
 十四 16 11 手  
 十四 17 2 手  
 十四 17 3 手  
 十四 17 4 手  
 十四 17 5 手  
 十四 17 5 手  
 十四 17 8 手  
 十四 18 4 手  
 わりをお見つけになれるでしょう。そ  
 でもりつぱに役にたちます。かさは、  
 は、このランプに満足しきつてゐるそ  
 そらくいっしょには着きますまい。コ  
 ヒー入れば、中に小さなめもりのよう  
 のか、おわかりになります。それに、  
 。もうじきお目にかかれます。あなた  
 えの上、私の前においてあります。お  
 す。おとうさんに對しては、このうえ  
 、生きておいでになつたときそのま  
 十四 14 9 手  
 十四 14 10 手  
 十四 15 1 手  
 十四 15 1 手  
 十四 15 2 手  
 十四 15 2 手  
 十四 15 5 手  
 十四 15 8 手  
 十四 15 10 手  
 十四 15 11 手  
 十四 15 12 手  
 十四 16 2 手  
 十四 16 3 手  
 十四 16 8 手  
 十四 16 11 手  
 十四 17 2 手  
 十四 17 3 手  
 十四 17 4 手  
 十四 17 5 手  
 十四 17 5 手  
 十四 17 8 手  
 十四 18 4 手  
 は、おたがい、それほどはなれて  
 、ごいっしょに一月をくらせるのだ  
 かなしいお氣持になられたときには、  
 になられたときには、自分には子ども  
 ときには、自分には子どもがあるとい  
 うことをお考えになつて、力をとりな  
 さしさこそ、私にとつては、いちばん  
 か、ちよつと私にはわかりかねます。  
 紙をあげることにしましょう。そうす  
 れば、おあいしに行く日のくるまで、  
 からだはこちらにいても、このまごこ  
 ものおなぐさめにしたと思つていま  
 ます。私がそばにいないことなど、す  
 。ランプがお氣にいつて、うれしく思  
 ました。パリーにある、なにかさうい  
 るとは、お思ひになりますか。どん  
 せくください。私には、おかあさんのお  
 おすがたが、目に見えるような氣がし  
 ます。どの時間になをしていらつし  
 やるか、この私にはわかるのです。で  
 。が、近いうちにまたははじめしょう  
 うべ、にいさんに聞いたよ。」といっ

十四 19 12 手  
 十四 20 4 手  
 十四 20 8 手  
 十四 20 8 手  
 十四 21 6 手  
 十四 21 6 手  
 十四 21 7 手  
 十四 21 7 手  
 十四 21 7 手  
 十四 22 2 手  
 十四 22 2 手  
 十四 22 7 手  
 十四 22 8 手  
 十四 22 9 手  
 十四 23 4 手  
 十四 23 6 手  
 十四 23 9 手  
 十四 24 3 手  
 十四 24 5 手  
 十四 24 8 手  
 十四 24 10 手  
 十四 24 11 手  
 十四 24 11 手  
 十四 24 12 手  
 十四 25 1 手  
 十四 25 3 手  
 十四 25 4 手  
 十四 25 6 手  
 十四 25 7 手  
 十四 25 11 手  
 十四 25 12 手  
 十四 25 12 手  
 んなの話をお聞きになって、「略。」と  
 せた。みんなが席につくと、先生は、私  
 しゃつてくくばんにお書きになった。「く  
 くん、先生のお書きになる文字に目をそ  
 お書きになる文字に目をそそいだ。先生  
 生は、そんなことにはおかまいなしに、  
 にはおかまいなしに、どんどんお続けに  
 、どんどんお続けになった。「略。」と  
 は、あまり多いのおどろいた。佐藤さ  
 十四 22 7 手  
 十四 22 8 手  
 十四 22 9 手  
 十四 23 4 手  
 十四 23 6 手  
 十四 23 9 手  
 十四 24 3 手  
 十四 24 5 手  
 十四 24 8 手  
 十四 24 10 手  
 十四 24 11 手  
 十四 24 11 手  
 十四 24 12 手  
 十四 25 1 手  
 十四 25 3 手  
 十四 25 4 手  
 十四 25 6 手  
 十四 25 7 手  
 十四 25 11 手  
 十四 25 12 手  
 十四 25 12 手  
 かつて、日本語になつたと思つてい  
 まつて、日本語になつたと思つてい  
 であつたとお話になつたので、私たち  
 で、みんなは口々に、「略。」と、そく  
 略。」と、そくぎに答えた。すると先生  
 たとえば、ここにあげたことばの中で  
 を聞いているうちに、私は、どうしてこ  
 つてきて、日本語になつたのだろうか  
 十四 24 8 手  
 十四 24 10 手  
 十四 24 11 手  
 十四 24 11 手  
 十四 24 12 手  
 十四 25 1 手  
 十四 25 3 手  
 十四 25 4 手  
 十四 25 6 手  
 十四 25 7 手  
 十四 25 11 手  
 十四 25 12 手  
 十四 25 12 手  
 とばが、日本語になつたのでしよう。  
 交通をして、日本になつた品物が、外  
 ら傳えられたときに、そのことばもいっ  
 ことばもいっしょにはいつてきたので、  
 ラジオといっしょに、「ラジオ」という  
 り、タバコとともに、「タバコ」という  
 まざまなことが心にうかんできた。もの  
 とばが、いっしょになつてゐるといふこ  
 しいものが世の中にできてくると、こと  
 、ことばも、それにつれて、新しく生ま  
 傳わつてきたときに、そのことばもいっ  
 ことばもいっしょに傳わつてきたのにち  
 に傳わつてきたのにちがいない。そうし

十四 26 1 、先生から、日本にはいつてきた西洋医  
 十四 26 5 はいって来たときに、また、チフスやト  
 十四 26 6 はいって来たときにそれぞれ傳わったこ  
 十四 26 8 また、音楽の時間によくつかう、リズム  
 十四 26 10 はいって来たときに、いっしょに傳わつ  
 十四 26 10 ときに、いっしょに傳わってきたことば  
 十四 26 11 、図画工作の時間によくいう、デッサン  
 十四 27 1 はいって来たときに傳わってきたのだと  
 十四 27 4 た。それで、先生にそのことをおたずね  
 十四 27 6 会 あまり古い時代にはいつてきて、長い  
 十四 27 7 会 かつているうちに、もともとからの日  
 十四 28 7 もったような氣持になって、家に帰って  
 十四 28 8 氣持になって、家に帰ってきた。三  
 十四 29 2 の光 あなたがたに見てもらいたいもの  
 十四 29 3 という、どこかにしまつてあるもの  
 十四 29 6 です。それは、空にかがやいている星で  
 十四 29 7 してから、あまり星に親しみをもっていな  
 十四 29 8 おとぎ話は、日本にはあまりありません  
 十四 29 10 ずさいいたために、天上の花を見よう  
 十四 30 5 もの、大きなものに心をくぼることがた  
 十四 30 7 ます。小さな島國に住んでいたために、  
 十四 30 7 に住んでいたために、氣持までちっぽけ  
 十四 30 8 でちっぽけなものになってしまったので  
 十四 31 5 、とても世界の中にはたつていきません  
 十四 31 6 、これからの日本にたつていじなかつ  
 十四 31 12 るほどりつぱな國になっていくのです。  
 十四 32 1 私は、あなたがたに星を見るようにす  
 十四 32 2 すめましたが、中には、「略。」という  
 十四 32 2 会 を見たってなになる。」という人が  
 十四 32 4 はなれているために、自分たちとはえん  
 十四 32 8 たのです。よそ目には、星と人間とは、  
 十四 32 10 十四 32 10 人間は、星によってみちびかれ、

十四 32 10 てみちびかれ、星によって生きていると  
 十四 33 6 な集まりの一部分にしかすぎないのです  
 十四 33 8 る天の川の内がわにあるたぐさんの星の  
 十四 34 1 ん。あのぎんが系に負けないほど大きな  
 十四 34 4 ユタイン博士の話によると、うちゅうは  
 十四 34 8 はしまでどくのに、二十億年も、かか  
 十四 34 10 の廣大なうちゅうにくらべては、太陽も  
 十四 34 11 のです。地球などになると、なおさら、  
 十四 34 12 て、その地球の上に住んでいる人間など  
 十四 35 1 もっと小さなものに感じられるかもしれ  
 十四 35 2 間、バクテリアにもおとるほどの小さ  
 十四 35 4 。そのバクテリアにもおとる小さな人間  
 十四 35 7 ものは、うちゅうにも負けないくらい廣  
 十四 35 12 のない、遠い世界にひきこまれるような  
 十四 36 7 した。聞くところによると、キューリー  
 十四 36 9 とき、物理の時間に、先生から、星をつ  
 十四 36 10 われ、そのことばにふかい感動を受けた  
 十四 37 2 いま、日々の生活にもつらい思いをして  
 十四 37 3 すが、そんなことにへこたれてはいけま  
 十四 37 6 、人間がだいいちにしなければならな  
 十四 37 7 うことも、しぜんにわかってくるはずで  
 十四 37 10 った、あなたがたに力をあたえてくれる  
 十四 37 10 をあたえてくれるにちがいありません。  
 十四 38 5 聞える、わたしにも聞える。」三の人  
 十四 40 3 会 「この光を全身にあびよう。」三の人  
 十四 41 3 会 「三の人」喜びにみちてかがやく光。  
 十四 41 4 会 わたしたちの前に、朝がきた。」一の  
 十四 42 3 会 太陽をもて 心に太陽をもて、あらし  
 十四 42 5 会 がふろうが。天には雲、地にはあらし  
 十四 42 6 会 。天には雲、地にはあらしがたえな  
 十四 42 7 会 なかるうが、心に太陽をもて。そうす

十四 43 2 会 れる。くちびるに歌をもて、ほがらか  
 十四 43 4 会 で。日々の苦勞に、よし心配がたえな  
 十四 43 6 会 とも、くちびるに歌をもて。そうすり  
 十四 44 1 会 る。他人のためにもことばをもて、な  
 十四 44 2 会 いる他人のためにも。そうして、なん  
 十四 44 5 会 のだ。くちびるに歌をもて、勇氣を失  
 十四 44 7 会 氣を失うな。心に太陽をもて、そうす  
 十四 44 11 ばいもある定期船につきあたって、ちん  
 十四 45 9 が、ことごとく波にのまれてしまったよ  
 十四 45 10 しずけさがあたりに廣がりました。する  
 十四 46 3 大ぜいの來客を前にして、客間で歌つて  
 十四 46 7 た氣持で、この歌に聞きほれていました  
 十四 46 8 かれば、いままでにどれだけ歌を聞いた  
 十四 46 10 すうつといい氣持になって、自分が水の  
 十四 46 10 て、自分が水の中にひたっていることも  
 十四 47 1 えったような氣持になりました。歌つて  
 十四 47 6 しようとするときにあわてふためい、  
 十四 47 7 めいて、そのためにかえて波にのまれ  
 十四 47 8 ためにかえて波にのまれてしまったの  
 十四 48 3 こういう美しい歌に送られて、死んでい  
 十四 48 5 、歌の声をたよりに、その方におよいで  
 十四 48 5 たよりに、その方におよいで行きました  
 十四 48 6 がしずむひょうしに流れ出たものらしい  
 十四 48 7 本の大きなまるとに、なんんかの婦人が  
 十四 48 12 ないように、寒さに氣を失って、また  
 十四 49 3 会 たのです。「心に太陽をもて、くちび  
 十四 49 4 会 もて、くちびるに歌をもて。」このお  
 十四 50 1 さんの歌をたよりに、マッケンナがおよ  
 十四 50 2 やみをぬって助けにきてくれました。や  
 十四 50 3 しい声を手がかりにして。そうして、マ  
 十四 50 6 、あくる日の新聞に出たマッケンナの話  
 十四 50 7 すが、おいしいことに、歌を歌ったおじよ



十四 50 9 も、われわれの耳にひびいてくるように  
 十四 51 4 会。「ひさしぶりにごちそうをたべて、  
 十四 51 5 会。れで、よきように、『略』という話  
 十四 53 6 会。そんな大きな実になったかというこ  
 十四 53 8 会。りのいいところに出て、じりじりと暑  
 十四 53 9 会。りじりと暑い日に照らされながら、せ  
 十四 54 2 会。る力をかまわずに、あなたがたが、か  
 十四 54 7 会。「では、おさきに申します。さつき、  
 十四 54 10 会。らしているかたには、土の中のことは  
 十四 55 7 会。「略。」「ほかに、だれもいせんか  
 十四 56 3 会。、それを日の光にあてたり、空気を  
 十四 56 3 会。、空気を吸いになって、養分におこ  
 十四 56 4 会。になって、養分におこしらえになった  
 十四 56 4 会。分におこしらえになったものでも、私  
 十四 56 5 会。なかぼちゃの実にはなりません。また  
 十四 56 9 会。りしたら、それについている葉でも、  
 十四 57 12 会。本でできるためには、私が熱と光を  
 十四 58 2 会。が、それを養分につくるのは、葉さん  
 十四 58 6 会。た。「生きものに、いちばんたいせつ  
 十四 58 10 会。養分だつて、水にとけているから、根  
 十四 59 1 会。夏のさいちゅうに、あの雨のおかげで  
 十四 59 4 会。す。しかし、土にはえていないかぼち  
 十四 59 5 会。さつきから問題になっている養分だつ  
 十四 59 8 会。ときもおわすれにされないでしょう。  
 十四 60 7 会。、どうして地面にはえたのか、考えた  
 十四 61 7 会。来年もわすれずにまいてもらうことが  
 十四 61 8 会。ぼちゃは、お礼に、すっかり人間にあ  
 十四 61 8 会。、すっかり人間にあげてしまつても、  
 十四 62 2 会。茶わんの湯 ここに、茶わんが一つあり  
 十四 62 2 会。一つあります。中には、熱い湯がいっぱ  
 十四 62 6 会。いと、だんだんに、いろいろのこまか  
 十四 62 6 会。こまかいことが目につき、さまざまのう

十四 62 8 ることのすきな人には、なかなかおもし  
 十四 62 10 見ものです。第一に、湯の表面からは、  
 十四 63 1 会。て、小さなしずくになったのが、無数に  
 十四 63 2 会。なったのが、無数にむらがつているので  
 十四 63 4 会。して、日光を湯げにあて、向こうがわに  
 十四 63 4 会。あて、向こうがわに黒いぬのでもおいて  
 十四 63 5 会。が、ちらちらと目に見えます。ばあい  
 十四 63 6 会。見えます。ばあいにより、つぶがあまり  
 十四 63 6 会。り大きくないときには、日光にすかして  
 十四 63 6 会。いときには、日光にすかして見ると、湯  
 十四 63 7 会。見ると、湯げの中に、にじのような、赤  
 十四 63 8 会。、白いうす雲が月にかかったときに見え  
 十四 63 10 会。月にかかったときに見えるのと、にたよ  
 十四 63 12 会。いつかべつるときにしましよう。すべて  
 十四 64 1 会。の蒸気が、しずくになるときは、かな  
 十四 64 1 会。しずくになるときは、かならず、なに  
 十四 64 1 会。そのしずくのしんになるものがあるて、  
 十四 64 2 会。って、そのまわりに、蒸気がこつてくつ  
 十四 64 4 会。ました。そのしんになるものは、ふつう  
 十四 64 6 会。ものです。空気中には、それが、しぜん  
 十四 64 6 会。、それが、しぜんにくさんういている  
 十四 64 7 会。いるのです。空中にうかんでいた雲が消  
 十四 64 7 会。えてしまったあとには、いまいった、ち  
 十四 65 2 会。て、まわりの空気にくらべてずつとかる  
 十四 65 2 会。ずつとかるいために、どんどんとさかん  
 十四 65 3 会。のぼります。反対に、湯がぬるいと、い  
 十四 65 6 会。わりの空気の温度によつてもちがいます  
 十四 65 8 会。と思います。つぎに、湯げがのぼるとき  
 十四 65 8 会。湯げがのぼるときには、いろいろのうず  
 十四 66 2 会。、いくつものうずになり、それがだんだ  
 十四 66 3 会。、それがだんだんに廣がり、入りみだれ  
 十四 66 4 会。みだれて、しまいに見えなくなつてしま

十四 66 11 のが、庭の上などにできることがあります  
 十四 67 1 会。ぽかあたたい日には、前日雨でも降つ  
 十四 67 3 会。す。そういうときには、よく氣をつけて見  
 十四 67 5 会。風がふきこむたびに、横になびいては、  
 十四 67 5 会。きこむたびに、横になびいては、また、  
 十四 67 7 会。まきのようなものになって、地面からな  
 十四 67 8 会。ある、高い柱の形になり、たいへんな早  
 十四 67 11 会。は、らい雨のときに、空中におこつてい  
 十四 67 11 会。雨のときに、空中におこつてい大きな  
 十四 68 1 会。方が、日光のために、特別にあたためら  
 十四 68 3 会。いう地方のまわりに、わりあいにつめた  
 十四 68 3 会。わりに、わりあいにつめた空気におお  
 十四 68 3 会。いにつめた空気におおわれた地方があ  
 十四 68 4 会。とへ、入れかわりに、そのつめた空気  
 十四 68 7 会。、茶わんのばあいにくらべると、しくみ  
 十四 68 11 会。かしました。見かたによつては、茶わんの  
 十四 69 3 会。んな、茶わんの湯にくらべるのはむりで  
 十四 69 5 会。からは、おたがいによくにたものである  
 十四 69 6 会。という一つの例に、らい雨をあげてみ  
 十四 69 7 会。お話はこのくらいにして、こんどは、湯  
 十四 69 8 会。のほうを見ることにしましよう。白い茶  
 十四 69 9 会。よう。白い茶わんにはいつている湯は、  
 十四 69 12 会。らんないさい。そこには、みようなゆらゆ  
 十四 70 2 会。かに動いているのに氣がつくでしょう。  
 十四 70 2 会。きります。つぎに、茶わんのお湯がだ  
 十四 70 9 会。のお湯がだんだんにひえるのは、湯の表  
 十四 70 9 会。です。もし、表面にちゃんとふたでもし  
 十四 70 11 会。、まわりの茶わんにふれた部分だけに  
 十四 70 12 会。にふれた部分だけになります。そうなる  
 十四 71 1 会。うなると、茶わんに接したところでは、  
 十四 71 2 会。きます。その反対に、茶わんのまん中  
 十四 71 3 会。の方では、ぎやくに上の方へはのぼつて、

十四 84 7  
 ようなけつしようになるか、空中の温度  
 、さまざまな条件によって、雪のけつし  
 十四 84 9  
 けを、映画的手法によって、よくわかる  
 十四 84 10  
 べ。」こんなことばによって、映画は私た  
 十四 85 5  
 て、映画は私たちに説明してくれた。一  
 十四 85 5  
 れた。一ひらの雪によって、はるかに高  
 十四 85 6  
 かに空からの手紙にちがいない。「空か  
 十四 85 7  
 画は、どちらも雪にえんのあるものであ  
 十四 85 9  
 る。あとのほうの映画に心をひかれた。ふん  
 十四 86 1  
 つつましい心なしにはできるものではな  
 十四 86 8  
 の一つである。風にあおられた雪のむれ  
 十四 87 1  
 の説明のことばなどによって、かなり生き  
 十四 87 9  
 の足あとをしるべに、第二の人が歩いて  
 十四 87 12  
 じ足あとをたよりに通って行く。ぼつり  
 十四 88 4  
 ろうが、いつのまにか曲がってしまふ。  
 十四 88 5  
 に曲がるのか。風にふかれたからであろ  
 十四 88 11  
 である。半年も雪にとざされていた地上  
 十四 88 12  
 がざされていた地上に、ぼちっと黒い土が  
 十四 89 2  
 、この黒い土の上に集まって、足でトン  
 十四 89 4  
 たり、耳を地べたに近づけて、なにかも  
 十四 89 5  
 、映画独特の手法によって、おもしろく  
 十四 89 7  
 をとりあつかう人によって、文章は、ど  
 十四 89 10  
 たかくながめた人によって書かれた文で  
 十四 90 2  
 雪はひっきりなしに降ってくる。寒いこ  
 十四 90 8  
 きは、上ぐつを足にひっかけていた。そ  
 十四 90 9  
 ったので、この子にとっては大きすぎた  
 十四 90 10  
 それをさけるために、急いで道を横ぎつ  
 十四 91 6  
 道を横ぎったときに、その上ぐつはぬげ  
 十四 91 9  
 は人形のゆりかごにもってこいだと思  
 十四 92 9  
 、まったくだしになつてしまつた。だ  
 十四 93 1  
 っとひどくしかるにきまつていた。かわ  
 みの毛は、両かたにまつわりつき、雪は

十四 93 11 う。女の子は、手にマッチの小さなたば  
 十四 93 12 ぼろの前だれの中には、もっとたくさん  
 十四 94 3 は、二つの家の間に、ちよつとした、身  
 十四 94 5 。そうして、そこにすわりこんだ。女の  
 十四 94 11 をあたためるために、一本のマッチで―  
 十四 95 1 とりだした。かべにこすりつけて、火を  
 十四 95 5 ほのおが、その子には、もえさかる大き  
 十四 95 10 間、大きなろの前にすわっていた。その  
 十四 95 11 いた。そのろの中には、美しい火がもえ  
 十四 96 4 た。女の子は、手にもえつくしたマッチ  
 十四 97 3 、テーブルの一方におかれてあった。そ  
 十四 97 5 ホークとをせなかに立てたまま、テーブ  
 十四 97 8 て、女の子のそばには、あつい、かたい  
 十四 97 12 リスマスの木の下にすわっていた。いか  
 十四 99 2 見つめているうちに、一つの明かるい星  
 十四 99 5 は思った。この子にとって、ただひとり  
 十四 100 6 急いで、たばの中にあつたマッチをみん  
 十四 100 8 た。「いっしょにつれて行つてくださ  
 十四 100 8 ねえ、いっしょにつれて行つてくださ  
 十四 100 12 間でも、それ以上に明かるくはないと思  
 十四 101 7 は、女の子をうでにかかえて、ふたりは  
 十四 101 8 たりは、いっしょにふわりとまいあがつ  
 十四 102 6 がおみそかの晩に見たふしぎなまぼろ  
 十五 4 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 4 4 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 4 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 4 7 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 5 1 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 5 4 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 5 7 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 6 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 9 6 矢と歌 空にはなちし わがそ矢

十五 9 7 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 10 2 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 10 4 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 10 10 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 10 8 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 11 2 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 11 2 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 11 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 11 4 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 11 6 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 12 1 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 12 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 12 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 12 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 13 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 13 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 14 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 14 4 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 14 7 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 15 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 15 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 15 7 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 16 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 19 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 20 1 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 20 2 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 20 2 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 20 4 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 20 7 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 20 9 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 20 10 矢と歌 空にはなちし わがそ矢

十五 20 10 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 20 11 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 21 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 21 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 21 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 21 4 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 21 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 21 7 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 21 8 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 21 12 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 22 1 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 22 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 23 1 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 23 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 23 5 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 23 7 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 23 12 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 24 2 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 24 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 24 9 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 24 11 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 25 1 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 25 10 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 25 11 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 26 8 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 26 10 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 26 12 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 27 1 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 27 2 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 27 3 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 27 6 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 27 9 矢と歌 空にはなちし わがそ矢  
 十五 27 9 矢と歌 空にはなちし わがそ矢

十五 27 11 っている人々の目には、小さな小さな黒  
十五 28 7 手は女の子の上帯にかけたままで、右手  
十五 28 9 早く、自分のこしにさしていた短刀をぬ  
十五 28 11 かおろさないうちに、鳥のせ骨をさけて  
十五 29 2 不意のしゅうげきにおどろいて、思わず  
十五 29 3 なして、おおむけにたおれかかりました  
十五 29 4 いま、少年の左手には女の子が、右手に  
十五 29 4 は女の子が、右手には血にそまつた短刀  
十五 29 4 子が、右手には血にそまつた短刀があり  
十五 29 6 子を自分のせなかにかくしました。大わ  
十五 29 8 た。大わしはすぐにとび起きて、きずの  
十五 29 9 いいきおいで少年にとびかかって来まし  
十五 29 10 す。少年は、右手に短刀をふりかざし、  
十五 29 11 かばい、昔の物語に出てくる英ゆうのよ  
十五 30 3 身をかわずと同時に、右手の短刀で鳥の  
十五 30 3 短刀で鳥のつばさに一たちあびせました  
十五 30 4 、綿のように一面にちりました。わしは  
十五 30 9 少年が女の子を後にかばうようにして、  
十五 30 10 き、ちょうどそこに、手ごろなとがった  
十五 30 11 た岩のかげらが目にはいりました。少年  
十五 31 3 この思わぬいたでにおどろいて、ぱっと  
十五 31 6 石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひし  
十五 31 6 鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしと  
十五 31 7 ばさに、胸に、目に、ひしひしとあたり  
十五 31 7 す。そのたびごとに、鳥はさけび声をた  
十五 31 8 てて、苦しまぎれに、いつそうするどく  
十五 31 9 んをすれば、それにふきとばされ、ちょ  
十五 31 11 されます。まわりには、鳥の白い羽が雪  
十五 31 12 中で、女の子を後にかばいながら、少年  
十五 32 3 たちが、そのへんにいたひつじかいたち  
十五 32 6 うです。血まなこになって目の前のてき  
十五 32 7 の前のてきを相手にしているものには、

十五 32 7 手にしているものには、なんにも耳には  
十五 32 7 には、なんにも耳にはいりません。ふい  
十五 32 8 いりません。ふいに「へ略。」という鉄  
十五 32 12 もう自分のまわりには、おおぜいのひつ  
十五 33 2 おり、父親のうでにだかれた女の子は、  
十五 34 3 の考えを表わすのに、ことばや、身ぶり  
十五 34 5 も、それをその場にいらない人や、遠く  
十五 34 5 いない人や、遠くにいる人に知らせるた  
十五 34 5 や、遠くにいる人に知らせるためには、  
十五 34 6 人に知らせるためには、文字に書くか、  
十五 34 6 するために、文字に書くか、またほかに  
十五 34 6 書くか、またほかに特別の表わしかたを  
十五 34 7 は、記おくのためにも必要な方法である  
十五 34 8 ある。それで大昔には、なわを結んで、  
十五 34 9 、なわの太さなどによって、いろいろな  
十五 35 3 石や、貝がらなどに、はものなどでは  
十五 35 3 表わしかたとともに、事物の形を絵にう  
十五 35 5 に、事物の形を絵にうつすことも行われ  
十五 35 5 六千年ぐらいまえに、アフリカのエジ  
十五 35 9 フリカのエジプトには、そうした絵文字  
十五 35 9 部アラビアあたりにも、これに似た文字  
十五 35 11 あたりにも、これに似た文字があった。  
十五 36 7 いものを表わすのに、線を横に一本引い  
十五 36 7 わすのに、線を横に一本引いたり、二本  
十五 36 8 う考えを表わすのに、線を横に引いて  
十五 36 9 すのには、線を横に引いて、「・」をそ  
十五 36 9 「」をその線のうえにおいたり、したにお  
十五 36 10 においたり、したにおいたりして表わし  
十五 37 2 のであるが、それに線を加えて、「もと」  
十五 37 3 考えを表わすことにした。いまの「本」  
十五 37 5 だ。また、それまでに作られた文字を組み  
十五 37 8 、その文字の左側に「木」を書いて、「

十五 37 9 「」などと、「木」に関係のあることを表  
十五 37 9 表わし、字の右側に、「支・反」をおい  
十五 37 11 字が中国から日本に伝えられたのは、千  
十五 38 1 もとの中国の発音にしたがつた読みかた  
十五 38 2 、その漢字の意味にあった日本語をあて  
十五 38 4 漢字をふたとおりに読んできたが、中国  
十五 38 5 たが、中国の発音にもとづいた漢字の読  
十五 38 6 い、日本のことばによる読みかたを訓と  
十五 38 7 、たいていの漢字には、この音と訓のふ  
十五 38 8 ある。しかも、字によっては、いくつか  
十五 39 3 つかっているうちに、その漢字から、日  
十五 39 4 日本語を表わすのに便利なかたかなや、  
十五 39 11 なは、日本の文化にとって、ほんとうに  
十五 40 3 、すべてこのかなによって書かれた作品  
十五 40 4 をいかして、かなに漢字をてきとうにま  
十五 40 10 など、世界の大半につかわれている文字  
十五 41 1 ローマ字は、まえにいったように、その  
十五 41 3 文字がフェニキアに移ってフェニキア文  
十五 41 4 ア文字がギリシアに移ってギリシア文  
十五 41 5 シア文字がローマに移って、現在のよう  
十五 41 5 、現在のようになつた。ローマ字と  
十五 42 1 て、標準語の教育に役だつた。また、ロー  
十五 42 2 本語が世界の人々に親しまれるようにな  
十五 42 6 、ローマ字の教育にも努力している。し  
十五 42 7 ると、世界のどこに、こんなに三種類も  
十五 43 5 まった。ウインドにかざられてあるさら  
十五 45 1 すすめられたいすにかけて、楽しそうに  
十五 45 2 は明治初年のころにさかのぼる。徳川時  
十五 45 3 しきたりが、明治になってすっかりよう  
十五 45 8 。ハギンスの祖父にあたるプリンクリ  
十五 45 9 かたを教えるためにやって来たのも、そ  
十五 46 2 した店も、のき先にかかっているおもし

十五462 かんばんも、かれには、みなめずらしい  
 十五463 。ある小さな店先に出ていた一まいの赤  
 十五464 の赤絵のはちを手にとつて、かれは、び  
 十五469 〇 あまりに安いのおどろいた。「略」。  
 十五4610 〇 のが、まだほかにもありますか。」「へ  
 十五471 〇 いては、この店に持つて来ますが、な  
 十五472 〇 なにぶん作るのにてまのかかるもので  
 十五474 は、きかれるままに語りだした。有田に  
 十五476 語りだした。有田に焼物がはじめられた  
 十五479 とか、おくりものにする焼物とかを作ら  
 十五4711 〇 このお庭焼のために、細工人、画工、ち  
 十五482 〇 ていた。そのほかに、色絵をつける赤絵  
 十五483 〇 六人だけが、有田に赤絵町を作つて住み  
 十五484 〇 絵製作の方法が他にもれないように、保  
 十五485 〇 た。ところが明治になつて、はん主の保  
 十五485 〇 がなくなつたうえに、いままで、焼く人  
 十五4811 〇 たりして、失敗に失敗を重ねていつた  
 十五4812 〇 お金をはらうために、家の道具を賣らな  
 十五4910 〇 かに外國人がこれに目をとめて買うこと  
 十五4912 〇 根へ賣りだすことにしたのである。「略」  
 十五503 〇 えてしまうことになりました。それはお  
 十五505 〇 。ほかの外國人にも話してあげましょ  
 十五506 〇 を今右衛門さんへ傳えてください。」  
 十五507 〇 「略」これを耳にした今右衛門は、「へ  
 十五508 〇 略」、どんなにお金に困つても、どんなに  
 十五5010 〇 よいよこのしごとに熱情をこめた。その  
 十五5011 〇 日本の美しい焼物にひきつけられていろ  
 十五514 〇 、日本の古い美術に対する愛着がふかく  
 十五516 〇 リンクリーのふでになつたものである。  
 十五517 〇 しい茶をハギンスにすすめながら、「略」  
 十五519 〇 今右衛門のまごにあたるものです。」  
 十五5110 〇 た。祖父たちの間に結ばれた心が、なん

十五5111 〇 、いま、まごたちによつてふたたび結ば  
 十五521 〇 たび結ばれることになつた。熱情のこ  
 十五524 〇 タンフォード大学に学んでいた私は、一  
 十五526 〇 部諸州へ見学の旅にのぼつた。眞心こめ  
 十五528 〇 ダン博士は、別れに際して、各地の大学  
 十五5210 〇 カーネギー博物館に館長ホランド博士を  
 十五531 〇 シガン湖のほとりにたたずみ、あるいは  
 十五534 〇 あるピッツバーグに着いたのは、暑い眞  
 十五535 〇 すりつばな博物館に自動車を取りつけ、  
 十五535 〇 を乗りつけ、守衛にみちびかれておくま  
 十五536 〇 まつた館長室の前に立つた私は、しばし  
 十五539 〇 、しかも力強い声に、しずかに室内には  
 十五539 〇 に、しずかに室内にはいつた私の目に映  
 十五5310 〇 にはいつた私の目に映じたのは、廣いへ  
 十五5310 〇 廣いへやの窓ぎわに大きなデスクをすえ  
 十五5311 〇 スクをすえ、そばにいたタイプストにな  
 十五5311 〇 いるタイプストになにごとかをいいな  
 十五542 〇 、いまその大先生にお会いすることがで  
 十五544 〇 に歩みよる私が手にしているしうかい  
 十五544 〇 いるしうかい目に目をそそいで、「略」  
 十五546 〇 いろのふうとうには見おぼえがある。  
 十五549 〇 言も発しないうちに先手をうつて、かた  
 十五549 〇 うつて、かたわらにあつたいすをすすめ  
 十五553 〇 をきりだすと、話に聞きいつていたホラ  
 十五564 〇 を、山のいただきに立つた私は、小手を  
 十五564 〇 かざして足の下にひろがる駿河湾の海  
 十五569 〇 たへのごちそうに、日本留学生第一号  
 十五5611 〇 ると数十年前の昔になるが、私がまだわ  
 十五573 〇 だが、その一つに日本の青年をとまら  
 十五578 〇 つくえのまん中にチョークで線をひき  
 十五579 〇 いて、たがいに向かいあい、勉強に  
 十五579 〇 かいあい、勉強にいそしむことにした

十五579 〇 にいそしむことにしたが、その日本の  
 十五5711 〇 なクリスチャンになつていたが、ある  
 十五582 〇 して、私はすぐに授業にかかった。つ  
 十五582 〇 私はすぐに授業にかかった。つまり、  
 十五584 〇 かれこそ、のちに名をなした新島襄だ  
 十五586 〇 そのときの思い出にふけていられるよ  
 十五587 〇 新島先生年ぶには、「略」。」とある  
 十五588 〇 州アマスト大学に入学、北側の第八号  
 十五588 〇 北側の第八号室に入る。室友ホランド  
 十五589 〇 先生、自然科学にもっともきょうみを  
 十五5811 〇 島襄という名を耳にした私は、とびあが  
 十五5911 〇 びあがらんばかりにおどろいた。こうし  
 十五592 〇 き、その新島襄にたいそうかわいがら  
 十五595 〇 一と、一言のもとにしりぞけようとした  
 十五5910 〇 日記やら、きみに見せなければならな  
 十五5912 〇 略」。」と、あつてにとられていたタイプ  
 十五5912 〇 イピストをしり目に、げんかんに出て、  
 十五5912 〇 り目に、げんかんに出て、横づけにし  
 十五601 〇 んに出て、横づけにしてあつたりつばな  
 十五601 〇 たりつばな自動車に、ためらう私をおし  
 十五603 〇 うに、だいに胸にだいてはぐくみ育て  
 十五604 〇 いを札幌のこう外に養つていたのは、明  
 十五6010 〇 た。ことに、長男に生まれて父母の愛を  
 十五6010 〇 て父母の愛を一身に集めていた身にとつ  
 十五6011 〇 身に集めていた身にとつては、天下にお  
 十五6011 〇 にとつては、天下におおるべきなもの  
 十五613 〇 わいがつた。京都に帰つてから父に送  
 十五613 〇 都に帰つてから父に送つた手紙のどれに  
 十五613 〇 送つた手紙のどれにも、「略」。」と、必  
 十五617 〇 札幌の創成川の岸にあつた家につれられ  
 十五617 〇 川の岸にあつた家につれられて行つても  
 十五618 〇 も、思うぞんぶんにふるまつた。ある日

十五622 けて、ふみ石の上にそろえてある大小二  
十五625 なのだ。なにが氣にさわったのかなあ。  
十五627 じさんはおぼさんに助け船を求められた  
十五628 ぼう、なにが氣にさわったの、おぼさ  
十五628 だの、おぼさんにいつてごらん。」小  
十五629 私にくりごとを耳にしたおぼさんは、腹  
十五636 りすてて、かた手に小さなくつを持ち、  
十五638 つを持ち、かた手に大きなブラシをつか  
十五642 私は、それを足先につっかけるなり、す  
十五645 とは行かないうちに、私は、道のまん中  
十五648 おじさんは道ばたにしゃがんで、自分の  
十五6410 にわらいながら私によびかけた。見るな  
十五6411 さんの廣いせなかにとびついた。そうし  
十五653 のきびしい夏の日に、私をせにおいな  
十五653 夏の日、私をせにおいながら、あせを  
十五656 は、いまでも私の胸にやきついている。秋  
十五658 すがら、小樽で目についたといつて、車  
十五659 となおもちゃを私に送ってくださった。  
十五661 たりした。その次には、りっぱなむしや  
十五662 っぱなむしや人形にそえて、ご兩人の名  
十五664 せつがくるごとにその人形をかざって  
十五667 いい残された願いによって、私の父は、  
十五668 を守り育てるために、北海の地をすてて  
十五669 地をすてて、京都にすまいを移すことに  
十五669 すまいを移すことになった。十の春をむ  
十五6610 の弟妹たちをあとに残し、ひとり父につ  
十五6610 に残し、ひとり父につれられて、景色の  
十五6611 景色の美しい京都に移った。そのころは  
十五6611 のおぼさんは廣島におられて、学校のい  
十五671 学校のいきかえりにその門前を通つても  
十五672 あった。そのうちにクリスマスの日がめ  
十五673 新島家のとなりにあった教会の日曜学

十五674 、そのクリスマスに得意の銀てきをふい  
十五6712 りついたげんかんには、おもむきのある  
十五686 略。」と、家の人によびかけながら、お  
十五688 ん、おぼさんは目になみだをためながら  
十五691 と指さされるままに、顔をあげてへき面  
十五692 のあるみけんの下にかがやく目は、思い  
十五696 おぼさんのことばに目をうつすと、おじ  
十五697 大きなつくえの上に、くつをみがかせた  
十五6910 手紙のたびごとに、どうしているかと  
十五701 ないのだ。暗い心になって、じっとおじ  
十五701 とおじさんの写真に見入りながら、私は  
十五704 せきあえぬなみだに目をくもらせたおぼ  
十五706 が、「そのいすにこしにかけてごらん。  
十五709 やった。」そこに赤インキがおいてあ  
十五712 いうようにおなりになったのですよ。そ  
十五712 満ぼうがいますにこしをかけて、ペン  
十五713 じさんがごらんになったら——」とい  
十五715 ら、「いっしょにお寺へ行って来まし  
十五718 しゃった。人力車に乗ったおぼさんは、  
十五718 のように私をひざにのせた。町の東にあ  
十五719 にのせた。町の東にある寺の一角に、こ  
十五719 東にある寺の一角に、こけむす一つのお  
十五719 のおはか、その前に立つたおぼさんは、  
十五721 せた。勝海舟の筆になる「新島襄之墓」  
十五721 おくつき。はか石に水をそそぎながら、  
十五722 しい家のげんかんに横づけになった。ド  
十五7210 げんかんに横づけになった。ドアをおし  
十五7210 て、つかつかと中にすすんだホランド博  
十五7211 ンド博士は、客間に私をみちびき、自分  
十五731 き、自分は書さいにはいつて、しきりに  
十五732 らわした博士の手には、古ぼけたアマス  
十五734 た。ふかい思い出にうたれている私の目

十五736 りひろげ、つくえに白線をひいて「國境  
十五739 ちは暑さをどこかにさけて、家の中はが  
十五7310 。やがてお晝どきになったので、廣い食  
十五7310 たので、廣い食堂にみちびかれ、博士と  
十五7312 老博士は、きょうに乗じて、アメリカの  
十五744 じであつて、そこになんのけじめもない  
十五745 として、一方が先に生まれ、他方があと  
十五746 けのことで、それによって兄が特権を與  
十五748 れば、自分の子女にはすべて同じ教育を  
十五749 会を與えて、社会に巣だたせたいのが念  
十五754 こぶしを私の鼻先につきだされた。  
十五757 たら、新島夫人にきょうのゆかいな会  
十五758 ら、自動車のドアに手をかけた老博士が  
十五766 ると、博士は満面にこやかなわらいを  
十五772 とば 生きるためにたべよ。たべるため  
十五772 べよ。たべるために生きるな。きょうの  
十五784 たちは、世間の人にかつてもえないう。  
十五787 う。ひとりの人間にとつて眞実であるも  
十五788 あるものは、他人にとつても眞実だから  
十五7810 人の心をひくために、しかめつつらをし  
十五793 —ロダン— 私には、あなたがた日本  
十五793 小学校のみなさんに、このあいさつを送  
十五799 の子どもさんたちにも、お目にかかった  
十五799 んたちにも、お目にかかったことがある  
十五7910 私をつくえの上には、日本のみなさん  
十五801 ろな國の人々の間に、友だちとして心の  
十五804 以前は、おたがい他國のことはわ  
十五806 。實際は、たがいにくみあつたり、お  
十五8010 小学校のみなさんに、はるかなあいつ  
十五8011 の時代がきたときには、私たちの時代が  
十五812 天は、人のうえに人をつくらず、人の  
十五812 くらず、人のしたに人をつくらず。 —

十五 82 2 すると、園の前の方に、高い大理石のまる  
 十五 82 3 テーブルのまわりには、この地球の上で  
 十五 82 8 ろうどや、にしきにくるまり、金だの、  
 十五 82 8 、宝石だのを、頭にいっぱいつけていま  
 十五 82 11 んな右手の前の方に、光をとりまいてか  
 十五 83 4 会 とつただれの目にも見える『幸福』ど  
 十五 83 5 会 もあんまりあてにはならないけれど、  
 十五 83 6 会 鳥だって、ことによるとちよいとでも  
 十五 83 7 会 人たちのなかまにまよいこんでいない  
 十五 85 2 会 テーブルの光采になっているさとうが  
 十五 85 11 きなおなかを両手にかかえて、たいぎそ  
 十五 86 1 会 ちを、ごちそうによぼうというのだろ  
 十五 86 8 会 いつとめのためには、なにかしらぎせ  
 十五 86 8 会 にかしらぎせいにする心がなければな  
 十五 87 10 会 いていないときに物を飲む幸福』と、  
 十五 87 10 会 のへらないときに物をたべる幸福』で  
 十五 88 4 会 と、『必要以上にねむるといふ幸福』  
 十五 88 6 会 ちばんおしまいに、ここにいるのは、  
 十五 88 6 会 しまいに、ここにいるのは、『はちき  
 十五 88 8 会 し、だれもそれに立ち向かうもののはな  
 十五 88 10 ル、すこし横の方に立っているひとりの  
 十五 88 11 会 、あの、なかまにはいないで、せな  
 十五 89 2 会 子どもさんたちにしようかいするのは  
 十五 89 10 (ふたりの子どもに手をだしながら)さ  
 十五 89 11 会 おふたりのために、ちゃんと席がとつ  
 十五 90 4 会 、あの鳥、どこにかくれているか、ご  
 十五 90 9 会 たちのテーブルにのぼったことはない  
 十五 91 1 会 の生活のなかまにはいって、わたした  
 十五 91 11 会 ながら、チルチルに向かって、「(略)」。  
 十五 92 1 会 な話をしているまに、「ふとつた幸福」  
 十五 92 2 会 けて、えん会の中にひきずりこんでしま  
 十五 92 3 会 なかよくテーブルについて、飲んだり、

十五 92 5 会 なは、テーブルにすわりこんでるよ。  
 十五 92 7 会 いまに困ることになるから。」チルチ  
 十五 92 12 るんだ。」バン口にいっぱい物を入れな  
 十五 93 3 会 。なにかおまえについているな。それ  
 十五 93 5 会 るときは、だれにもかまっていられま  
 十五 94 1 会 うとする。その間に、「はちきれそうな  
 十五 94 2 会 たりを、力まかせにおさえました。光」  
 十五 94 5 会 ばら色の美しい光に照らされます。チル  
 十五 94 11 会 光「同じところにいるのだよ。ちがつ  
 十五 95 1 会 イヤモンドの光にたえられる幸福の精  
 十五 95 9 会 たちをあんないに來た。」チルチル「あ  
 十五 96 2 会 もが、ひどい目にあわせたのだよ。」  
 十五 96 4 会 光「この世の中には、人が思うよりも  
 十五 96 5 会 、ふつうの人間には、それが見つけれ  
 十五 96 8 会 とだよ。私たちに用のあるものは、ど  
 十五 96 9 会 から。ほかの者にまで会っているひま  
 十五 96 12 会 ちのまわりで、わになつておどります。  
 十五 98 2 会 チルチル「どこにびんぼう人がいるの  
 十五 98 5 会 ばん美しいものに見えるものだからね  
 十五 98 11 会 たちは、大急ぎに急いでいる。ごらん  
 十五 99 2 会 いのが、廣間の中にかげこんで來て、あ  
 十五 99 6 会 る子がいる。(光に)ぼくは、どこへ行  
 十五 99 7 会 も、だんだんに知られてくるね。(へ  
 十五 99 7 会 てくるね。(幸福に向かい)きみはだれ  
 十五 99 9 会 らないの。ここにいる子をだれも知ら  
 十五 100 5 会 、まだぼくたちに会ったことがないん  
 十五 100 12 会 あなたのまわりにいるのですよ。ぼく  
 十五 101 1 会 なたといっしょに、たべたり、飲んだ  
 十五 101 8 会 ル「ぼくのうちに『幸福』がいるの  
 十五 101 10 会 。この人のうちに『幸福』がいるかっ  
 十五 102 3 会 いても、あなたには、なんにも見えな  
 十五 102 5 会 なあ。まず第一に、ぼく自身をしょう

十五 102 6 会 ぼくは、あなたにつかえる『健康の幸  
 十五 103 7 会 れから、夕がたになると、これが『日  
 十五 103 9 会 っぱで、おともに『星の出を見ること  
 十五 104 1 会 ごえた手のために、きれいなむらさき  
 十五 104 9 会 な喜び』を呼びにやりましよう。」と、  
 十五 104 10 会 う。」と、見るまに、黒の肉じゅばんを  
 十五 104 11 会 をたてて、なにかにぶつかりながら、チ  
 十五 104 11 会 ながら、チルチルに近づいて來ます。鼻  
 十五 105 10 会 、よくいっしょに遊ぶのですもの。ま  
 十五 105 11 会 もの。まず第一にいわなければならな  
 十五 105 12 会 えしされたときに、いつもにつこりし  
 十五 106 3 会 ません。その後にいるのは、『善人で  
 十五 106 5 会 あれが『不幸』に行くのをとめること  
 十五 106 7 会 うわけで、あれにうつちやられると、  
 十五 106 9 会 、みじめなものになつてしまふのです  
 十五 106 9 会 のです。右の方には、『しごとをしあ  
 十五 106 10 会 喜び』のとなりになります。その後に、  
 十五 106 11 会 います。その後に、『ものわかる喜  
 十五 107 2 会 ぼく、その兄弟にあつたよ。『ふとつ  
 十五 107 3 会 たちといっしょに、不幸のなかまには  
 十五 107 3 会 、不幸のなかまにはいってしまつた。  
 十五 107 7 会 でも、それを妹にいつてはいけません  
 十五 107 7 会 あの女はさがしに行きたがつて、つま  
 十五 107 10 会 らね。さてここに、『いちばん大きな  
 十五 107 10 会 きな喜び』の中に、『美しいものを見  
 十五 107 12 会 たちを照らす光に、二つ三つずつ新し  
 十五 108 1 会 い金色の雲の中に、つま先で立つて、  
 十五 108 2 会 くらいのところにいる人、だれなの。  
 十五 108 5 会 をすっかり見るには、まだ小さすぎま  
 十五 108 7 会 れから、あすここに、ずっと後の方に、  
 十五 108 7 会 、ずっと後の方に、べールをかぶった  
 十五 108 9 会 人がまだ知らずにいる『喜び』たちで

十五109 5 ㊦ ましいのどん底におちつけて、よくご  
 十五109 12 ㊦ まえたち、ここにいたの。思いもかけ  
 十五110 1 ㊦ きょう、ここにいて、それはさびし  
 十五110 2 ㊦ も、おかあさんにだかれておくれ。な  
 十五110 3 ㊦ 幸福は、世の中にありませんよ。」チ  
 十五110 4 ㊦ ちのおかあさんににているけれども、  
 十五110 8 ㊦ つこりするたびに、わくなるのです  
 十五110 9 ㊦ です。——うちにいると、それが見え  
 十五111 8 ㊦ ずりをするたびに、私の着物に、月と  
 十五111 9 ㊦ びに、私の着物に、月と日の光がさし  
 十五112 1 ㊦ つもそれをどこにしまっているの。そ  
 十五112 3 ㊦ あのだなの中にはいつているの。」  
 十五112 5 ㊦ けれど、人間には見えないのさ。人  
 十五112 7 ㊦ かわいがるときにはお金持なのです  
 十五113 2 ㊦ は、目の中の星になってしまふのだ  
 十五113 3 ㊦ 皆さんの目の中には、星がいつぱいあ  
 十五113 9 ㊦ こでは、うちにいるときのように、  
 十五114 4 ㊦ よ。でも、うちにいるときよりか、ず  
 十五114 5 ㊦ 』母の愛「うちにいるとね、あんまり  
 十五114 6 ㊦ おまえたち、私に会ったのだから、あ  
 十五114 7 ㊦ 、あの小さな家に帰って、私がぼろぼ  
 十五114 9 ㊦ かあさん、ここにいないなら、ぼくもこ  
 十五114 10 ㊦ ら、ぼくもここにいたいや。」母の愛「  
 十五114 12 ㊦ すよ。小さな家に帰るのですよ。おま  
 十五115 4 ㊦ 、いまだけ天國に來ていると思ってい  
 十五115 6 ㊦ 、いつでも天國にいますのすよ。おか  
 十五115 6 ㊦ よ。おかあさんに、ふたりはありませ  
 十五115 12 ㊦ の。人間が地上に住みついてからこの  
 十五119 2 ㊦ 私の子どもたちには、それはごしんせつ  
 十五119 4 ㊦ 愛しあう人たちには、いつでもしんせ  
 十五119 7 ㊦ すと、ふたりの目にはなみだが光ってい  
 十五119 10 ㊦ してみんな、目にいつぱいなみだをた

十五120 5 ㊦ で、私たちのために送別の歌を歌って  
 十五120 6 ㊦ れた。その歌を耳にしながら、もっと下  
 十五121 4 ㊦ 書いていないことに気がついた。あれも  
 十五121 7 ㊦ 。読んでいるうちに先生がたに対する感  
 十五121 7 ㊦ るうちに先生がたに対する感謝の念があ  
 十五122 1 ㊦ は、「おたがいに、信じあえ。愛しあ  
 十五122 7 ㊦ 記当番ですが、私にも書かせてください  
 十五123 10 ㊦ 生であった。「心に花をかざれ。」——  
 に (接助) 1 に  
 十一41 1 ㊦ さとはしぐれがしと降るに、ふも  
 との小屋はみぞれして、うらの山には白雪つもる。  
 に (並助) 8 に  
 四77 3 ㊦ む——麦の花に、ばらの花。  
 六21 2 ㊦ 美しいぶどうに、かがやくりんご、楽し  
 いわれらきりぎりすの生活——  
 七53 11 ㊦ センターが、外野のセンターにれんらくを  
 とって、どんどん、あてにあてた。  
 十一39 1 ㊦ かんえでにうるし、はじの葉も、赤く黄  
 色く色づいて、  
 十二74 3 ㊦ 芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれ  
 がたから降ってきました。  
 十三32 5 ㊦ 大きなきんぎょに小さなきんぎょ。」  
 こんなことをいつて通る。  
 十五14 6 ㊦ 風くればばらはたちまち火となれり  
 ゆれにゆるるか照りそう風に  
 十五84 6 ㊦ 小ひつじの足に、小うしのかんぞうも  
 ある。  
 に (終助) 1 に  
 十五68 10 ㊦ おじさんが生きていたら、どんなにか  
 喜ぶだろうに——  
 に 6 に  
 四74 6 ㊦ に——日本一のふじの山。

六109 3 ㊦ 「にいさん」の「二」、「紙」の「ミ」、「か  
 む」の「ム」がいいにくいらしい。  
 六109 5 ㊦ 「二」、「ミ」、「ム」、と自分で声をだし  
 ていってみると、  
 六109 8 ㊦ 「二」、「ミ」、「ム」といつてみた。  
 六110 11 ㊦ 「二」は、〈略〉五十音の中で、ナニヌネ  
 ノという一ぎょうの中にはいつている。  
 十五39 9 ㊦ 「に」は「仁」というように、漢字の全  
 体をくずしたもので作りだしたものである。  
 にいさまがた「兄様方」(名) 1 にいさまがた  
 三47 9 ㊦ にいさまがたのおもいふくろをせおつ  
 ていらつしやったので、おそくおなりになつ  
 たのです。  
 にいさん「兄」(名) 31 にいさん「いちろううにい  
 さん・おにいさん・じろうにいさん  
 二20 6 ㊦ おかあさん おとうさん にいさん ねえさ  
 んはなほしよるゆめ山川  
 二48 7 ㊦ 「にいさん、なあに。」いちろうは、り  
 んごをだして、じろうの手にわたします。  
 二49 1 ㊦ 「にいさん、ありがとう。」  
 二50 5 ㊦ 「にいさん、なあに。」じろうは、大き  
 なりんごをさちこにわたします。  
 四22 7 ㊦ 「にいさん」にあてて文を書きました。  
 四23 2 ㊦ あ、まどから、にいさんとよく星を  
 みましたね。  
 四23 4 ㊦ にいさんは、こんど、いつ おふねから  
 おかえりですか。  
 四23 10 ㊦ ぼくは、大きくになったら、にいさんと  
 いっしょに、ふねではたらきたいと思ひます。  
 四39 5 ㊦ ありをころそうとしたとき、にいさ  
 んのことばを思いだして、  
 五8 3 ㊦ にいさん、汽車のきつぷかったの。



五八六(会) にいさん、汽車がはいってきたよ。  
 五八六(会) ずいぶん早いね、にいさん。  
 五八六(会) にいさん、あの人だあれ。  
 五八六(会) にいさん、もうおりていいの。  
 五八六(会) にいさん、この雪だるま、歩きだしそう  
 ね。  
 五八六(会) にいさん、これなあに。  
 五八六(会) にいさん、お願いがあります。  
 五八六(会) にいさんは毎日海へでて、魚をとって  
 らっしゃるが、私は毎日山へいって、鳥やけもの  
 をとっていますね。  
 五八六(会) そのかわり、にいさんは山へいらっ  
 しゃって。  
 五八六(会) ほんとう、にいさん。  
 五八六(会) ありがとう、にいさん。  
 五八六(会) にいさんはこの弓と矢を持ってい  
 しゃい。  
 五八六(会) にいさんもやっぱりえものがなかつた  
 ですか。  
 五八六(会) にいさん、ゆるしてください。  
 五八六(会) つりばりは魚にとられてしまし  
 うし、にい  
 さんにはしかられるし、困っていない  
 いたのです。  
 五八六(会) 「にいさん」というのは、「リイ  
 サン」  
 のようだ。  
 五八六(会) にいさんが、「略」といって、  
 みんなで  
 大わらいをした。  
 五八六(会) にいさんのまねのうまいの  
 に感心した。  
 五八六(会) 「にいさん」の「ニ」、「紙」  
 の「ミ」、「か  
 む」の「ム」がいいにくいらしい。  
 五八六(会) いま、にいさんに日記をよ  
 んでもらっ  
 いたところよ。  
 五八六(会) ゆうべ、にいさんに聞いた  
 よ。

にいじま 「新島」(人名) 15 新島  
 五八六(会) 新島のおじさんなら、私は  
 よく知って  
 います。  
 五八六(会) 同志社をわが子のように、  
 だいいに胸に  
 だいてはぐくみ育てていた新島のお  
 じさんが、  
 五八六(会) 新島のおじさんとおば  
 さんは、「略」  
 といつて私をかわいがった。  
 五八六(会) そのころ、新島のお  
 じさんがど  
 んなにえ  
 らいかたで  
 あるかを  
 知らなかつた  
 私には、  
 五八六(会) 夏の日、私をせ  
 においなが  
 ら、あせを  
 ふきふき  
 歩かれた  
 新島のお  
 じさんと、  
 五八六(会) 日がさ  
 をさしか  
 けなが  
 らつて  
 いらつ  
 しゃつた  
 新島のお  
 じさんと  
 の思い  
 出は、  
 五八六(会) 満ぼ  
 うの心  
 から、ど  
 うして  
 新島のお  
 じさん  
 のすがた  
 が消え  
 うせ  
 よう。  
 五八六(会) 新島のお  
 じさんが  
 いい残  
 された  
 願ひに  
 よつて、  
 私のお  
 父は、  
 同志社  
 を守り  
 育てる  
 ため  
 に、  
 「略」、  
 京都に  
 すまい  
 を移す  
 こと  
 にな  
 った。  
 五八六(会) その  
 ころは、  
 新島  
 のお  
 じさん  
 は廣島  
 にお  
 られて、  
 五八六(会) ああ、  
 なつか  
 しい新  
 島のお  
 じさん  
 だつた。  
 五八六(会) 「新  
 島のお  
 じさん」  
 とよん  
 だつも  
 りで、  
 私は  
 かねを  
 カー  
 ンとた  
 たい  
 した。  
 五八六(会) な  
 つか  
 しい新  
 島のお  
 じさん  
 は、お  
 ばさん  
 は「略」、  
 しゃに  
 むに私  
 をお  
 く深  
 くひ  
 き入  
 れた。  
 五八六(会) ああ、  
 新島  
 のお  
 じさん  
 は、私  
 を京都  
 まで  
 もつ  
 れて  
 来て、  
 朝夕  
 か  
 わい  
 が  
 つて  
 くだ  
 した  
 だ。  
 五八六(会) ああ、  
 新島  
 のお  
 じさん  
 が、  
 いま  
 なお  
 満ぼ  
 うを  
 守つ  
 てい  
 くだ  
 した  
 だ。  
 五八六(会) そ  
 うして、  
 これ  
 が新  
 島か  
 らな  
 らつた  
 日本  
 語の  
 一つ  
 だとい  
 われた。  
 にいじま 「新島家」(人名) 3 新島家

五八六(会) 学校の  
 いきか  
 えりに  
 その門  
 前を通  
 っても、  
 新島家  
 の窓は、  
 かたく  
 とざさ  
 れてあ  
 った。  
 五八六(会) 新島  
 家のな  
 りにあ  
 った  
 教会  
 の日曜  
 学校の  
 生徒で  
 あつた  
 私には、  
 五八六(会) その  
 こと  
 のあ  
 った  
 あくる  
 日、私  
 は、ひ  
 さ  
 しぶ  
 りで窓  
 のあけ  
 はな  
 たれた  
 新島家  
 をおと  
 ずれた。  
 にいじま  
 せんせい  
 ねんぶ  
 「新島  
 先生年  
 譜」(名) 1  
 新島  
 先生年  
 ぶ  
 五八六(会) 新島  
 先生年  
 ぶには、  
 「略」と  
 ある  
 五八六(会) にい  
 じまふ  
 じん「新  
 島夫人」  
 (人名) 1  
 新島  
 夫人  
 五八六(会) 日本  
 へ帰つ  
 たら、  
 新島  
 夫人に  
 きよう  
 のゆ  
 かいな  
 会  
 見の  
 てん  
 まつ  
 を傳  
 えて  
 くれ  
 といい  
 なが  
 ら、  
 にいじ  
 まゆ  
 ずる「  
 新島  
 裏」(人  
 名) 3  
 新島  
 裏 新  
 島  
 五八六(会) 新島  
 裏とい  
 う名を  
 耳にし  
 た私は、  
 とびあ  
 がらん  
 ばかり  
 におど  
 ろいた。  
 五八六(会) 私  
 は小  
 さいと  
 き、そ  
 の新島  
 裏に  
 たい  
 そ  
 うか  
 わい  
 が  
 られた  
 のです  
 から。  
 にいじ  
 まゆ  
 ずる  
 のは  
 か「新  
 島裏」  
 (名) 1  
 新島  
 裏之墓  
 五八六(会) 勝  
 海舟の  
 筆にな  
 る「新  
 島裏之  
 墓」と  
 い  
 う五  
 つの  
 文字  
 をき  
 さん  
 だそ  
 のお  
 くつ  
 き。  
 にい  
 ちゃん  
 「兄」  
 (名) 11  
 にい  
 ちゃん  
 おお  
 にい  
 ちゃん  
 七二一(会) にい  
 ちゃん。  
 七二二(会) にい  
 ちゃん、  
 すずめ  
 はなに  
 しにく  
 るの。  
 七二三(会) ねえ、  
 にい  
 ちゃん。  
 七二四(会) にい  
 ちゃん、  
 わか  
 らない  
 のかい。  
 七二五(会) にい  
 ちゃん、  
 にい  
 ちゃん。

- 七268 ㊦ にいちゃん、にいちゃん。  
 七303 ㊦ にいちゃん、帰っていたの。  
 七306 ㊦ いいな、にいちゃん。  
 七311 ㊦ にいちゃん、なあに。  
 七316 ㊦ ほんとうだね、にいちゃん。  
 七333 ㊦ にいちゃん、早くいこう。  
 にえん 二四 (名) 1 二円  
 十一876 ㊦ じゃあ、ここに二円だけおいていくから、こづかいにしないさい。  
 におい ㊦ (名) 17 におい  
 二481 ㊦ うれしそうに、そのりんごを、高くさしあげたりにおいをかいだりします。  
 三342 ㊦ ナフタリンのにおいがします。  
 三411 ㊦ かぜがふくと、くわのはのにおいがぶんとします。  
 四1276 ㊦ けしきにみとれながらあるいていますと、どこからか、よいにおいがしてきます。  
 七84 ㊦ 学校のおいがしてくる。  
 七731 ㊦ うまが、水のおいをかいでいる。  
 八164 ㊦ しかし、虫たちは、においで知るか、なんで知るか、手ごろな、皮のうすい、しるの多い木の根をさがしてあるきます。  
 八1029 ㊦ やくは、白くてにおいもなく目だちません。  
 九1342 ㊦ くもが氣がついてみると、あたりにいいにおいがします。  
 九1344 ㊦ いいにおいをかいでいると、〈略〉苦しかったからだのいたみもきえていきました。  
 九1412 ㊦ あたりには、やはりばらの花のにおいがしていました。  
 十703 ㊦ べつにどつきもたたず、かえって、うまそうなあまいにおいがして、  
 十一685 ㊦ 大きなへやはうす暗く、あたりにはげ

- しくすりのにおいがただよっていました。  
 十二367 ㊦ ふたりは、〈略〉すいかずらのあまいにおいにひかれて、庭の小道をおりていきました。  
 十三328 ㊦ においもさとうも大まけだ。  
 十四893 ㊦ しゃがんで土のにおいをかいだり、  
 十四938 ㊦ おいしそうなにおいをかいだ。  
 におう ㊦ (五) 3 におう 《イ・ウ》 ↓ さきにおう  
 八886 ㊦ たくさんの木がかんばしくにおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上のびていた。  
 十一387 ㊦ かきねににおうきんもくせい、  
 十一426 ㊦ ふきのとうでて、すいせんにおい、  
 におうさま ㊦ (題名) 1 仁王さま  
 十二1075 ㊦ 仁王さま  
 におうさま ㊦ (仁王) (名) 3 仁王さま  
 十二1076 ㊦ こんどは仁王さま。  
 十二1081 ㊦ 仁王さまは寺の門に立って、ほとけさまをおまもりします。  
 十二1084 ㊦ 右の仁王さまをほったのは運慶だといわれています。  
 における ㊦ (於) (格助) 1 における  
 十375 ㊦ これが、日本における自動織機のはじめである。  
 におわ・せる ㊦ (与) (下) 1 におわせる 《一セ》  
 十五555 ㊦ ホランド博士は、戦争中で費用が思うようにつかえないことについてくわしく話し、それとなく論文刊行のむずかしいことをにおわせた。  
 にかい ㊦ 二階 (名) 3 二階  
 十623 ㊦ 二階の窓からそとをみたら、  
 十二3310 ㊦ 私は子どもらしい喜びと得意さに大はしゃぎで、二階から母のところへかけおり、  
 十四826 ㊦ 二階から目ぐすり。

- にが・い ㊦ (形) 2 にがい 《一イ》  
 十一576 ㊦ はちみつやいちご、青うめ・わさび、にがい、にがいくすり、一つ一つしみる。  
 十一576 ㊦ にがい、にがいくすり、  
 にかいめ ㊦ 二回目 (名) 2 二回目  
 七482 ㊦ はじめに書いたのと、二回めに書いたのとを、くらべてごらんないさい。  
 七483 ㊦ 二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人、はつきりと、そのようすがわかります。  
 にが・す ㊦ (逃) (五) 8 にがす 《サ・シ・ス》  
 五969 ㊦ かごからだして、にがしてやりましょうか。  
 五991 ㊦ にがしてやれなくなったよ。  
 六842 ㊦ 大きいのをにがした。  
 七763 ㊦ あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていらっしゃるのではありませんか。  
 七801 ㊦ らくだをにがしたのではないぞ。  
 九1301 ㊦ こんどこそは、にがさないぞ。  
 十741 ㊦ 「にがすものか、にがすものか。」と追いかけてました。  
 十741 ㊦ 「にがすものか、にがすものか。」  
 にかつ ㊦ 二月 (名) 1 二月  
 四1259 ㊦ 二月はうめの花。  
 にぎやか ㊦ (賑) (形状) 10 にぎやか  
 三363 ㊦ トン、トン、ゴシゴシゴシ、スススス、たいへん にぎやかでいそがしそうです。  
 四1123 ㊦ 魚たちが、たくさんでてきて、にぎやかなおんがくにあわせておどりはじめます。  
 四1139 ㊦ では、にぎやかなおどりをして、ごらんにいれましょう。  
 五1610 ㊦ こんな話で、かばんの中はにぎやかです。  
 六259 ㊦ みんなにぎやかに音楽をはじめます。

八2410 そこへなかまが集まってきて、にぎやかな

音楽会のようになりました。

八253 にぎやかに鳴きたてたせみも、やがて、秋  
になると、みんな死んでしまつて、

八982 この田も、たんざくがたにでそろつてに  
ぎやかです。

九339 村の子どもがきょうそうでとりにいくの  
で、たいそうにぎやかです。

十三299 黄色や、赤や、白の糸たばくりひろげ  
られ、にぎやかな話が続く。

にぎょう 「三行」(名) 1 二ぎょう

六1128 はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメ  
モノの二ぎょうだけで、

にぎり ひとにぎり

にぎりあう 「握合」(五) 1 にぎりあう 《一イ》

十二415 手と手をにぎりあい、そのにぎりかたに  
よつて「ことば」をと리카わすようになりました。

にぎりかた 「握方」(名) 1 にぎりかた

十二416 手と手をにぎりあい、そのにぎりかたに  
よつて「ことば」をと리카わすようになりました。

にぎりこぶし 「握拳」(名) 1 にぎりこぶし

十五754 「略」と、力をこめてさげびながら、  
そのにぎりこぶしを私の鼻先につきだされた。

にぎりしめる 「握締」(下一) 1 にぎりしめる

《一メ》

十一8910 そのとき、少年は、病人が自分の手をに  
ぎりしめたような気がしました。

にぎる 「握」(五) 15 にぎる 《一ツ・一ラ・一リ・  
一ル》

一301 もつ、にぎる、なげる。

五202 私もその手ににぎられながら、あちら  
こちらへまわりました。

六1158 たこが青空で右や左にゆれると、自分も  
いっしょに首をふりながら、しつかり糸をにぎっ  
ています。

六1247 りすさんは、両手に、くるみをにぎって、  
おいしそうにたべました。

七3410 私は、さぶろうの手をしつかりにぎり、さ  
ぶろうは、私のからだにすがりついていました。

八545 なさけのある人とみえて、台所の方からお  
むすびを一つにぎってきて、

十一898 少年は病人の手をにぎりました。

十一8912 「ぼくの手をにぎった。」と、少年は  
さげびました。

十二852 見物人は、いよいよ手にあせをにぎりま  
した。

十三2812 かた手には、大きな毛ぬきのようなもの  
を持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、

十五254 女の子のからだ下がへ落ちないように、  
その上帯をかたくにぎったのでした。

十五711 彼のペンをにぎってごらん。

十五712 ああ、満ぼうがすすにこしをかけて、  
ペンをにぎっている。

十五752 老博士は、フィッシュナイフをにぎった  
右手を大きくふりまわし、

十五893 (チルチルの手をにぎりながら) まあ、  
おいでなさい。

にぎわう 「賑」(五) 1 にぎわう 《一ワ》

十三3510 早春になると、はとぶえが天から鳴つて  
きて、ホートンをにぎわわせる。

にく 「肉」(名) 4 肉

六1401 おいしい肉がたべられる。

十四974 そのやいた鳥は、肉を切るナイフとホー  
クとをせなかに立てたまま、

十五824 「幸福」(ぜいたく) たちが、けだもの  
の肉や、ふしぎなものを、《略》、たべたり、  
飲んだり、

十五844 それに、あんなに肉がある。

にくい しいにくい・いいにくいことば・うけとり  
にくい・ひきぬきにくい・みにくい・わかりにくい

にくしみ 「憎」(名) 1 にくしみ

十五753 「愛はにくしみよりも強い。」

にくじゅばん 「肉襦袢」(名) 1 肉じゅばん

十五10410 黒の肉じゅばんを着たわんぱくこぞうの  
ようなのが、

にくづけ 「肉付」(名) 1 肉づけ

七678 一つは、はじめ骨組みをこしらえておいて、  
それにねんどでだんだん肉づけをし、しだいに、  
その人の顔にせていくやりかたです。

にくみ 「二組」(名) 4 二くみ 二組

三183 二くみは 虫の名をあつめました。

三207 二くみの人たちに。

四691 二組のあつめた「かいぶん」。

六565 それから、二組、三組と、じゅんじゅんに  
へんしゅうをすることにきめました。

にくみあう 「憎合」(五) 1 にくみあう 《一ツ》

十五806 おたがい他國々のことはわからず、  
世をすごしてきたばかりでなく、実際は、たがい  
にくみあつたり、おそれあつたりしてきました。

にくむ 「憎」(五) 1 にくむ 《一マ》

十657 なにをしてもにくまれない、おもしろい人  
物になっています。

にぐるま 「荷車」(名) 1 荷車

十三294 荷車をひきながら、ゆっくり歩いて来る。

にげこむ 「逃込」(五) 3 にげこむ 《一ミーン》  
四225 もう すこしで、つかまりそうになつた

とき、またわの中ににげこみました。

八97 びっくりして茶のまへにげこみ、そこにす

わっている私のひざのあいだにもぐったり

十五948 ④ みんな不幸のところへにげこんでしま

うのさ。

にげだす「逃出」(五) 4 にげだす『シー・ソ』

六1425 そのあいだに、うさぎさんたちは、手をつ

ないで、そこをにげだしました。

八719 そこで、みにくいあひるの子は、かきねを

とびこえてにげだした。

九1474 けれども、べつににげだそうとはしません

でした。

十749 太郎かじやと次郎かじやは、こんな歌を歌

いながらにげだしました。

にげだせる「逃出」(下一) 1 にげだせる『セ

ル』

十6811 いつでもにげだせるかっこうで、こしをう

しろにひき、

にげたらくだ「課名」2 にげたらくだ

七387 にげたらくだ……七十四

七745 七 にげたらくだ

にげる「逃」(下一) 28 にげる『ゲ・ゲル』

三811 みんなはとうとう えんがわまで にげて

いきました。

四222 ④ ねずみたちは、あわてて わの そとへ

にげました。

四514 だれも、ばらばらになつて、にげようと

するものはありません。

五992 「シッ。」というと、ねこは、おどろいて

にげていつてしまいました。

五1079 旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木

の上へにげていきました。

六841 糸がぶつと切れて、魚はにげる。

六1284 おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさん

たちは、うまくににげました。

六1288 「略。」というて、うまくににげました。

六1289 一ひきのうさぎさんが、あわててにげたの

で、トンネルのさか道に足をすべらせて、

六1403 うさぎさんたちは、もうにげようと思つて

もにげることはできません。

六1403 うさぎさんたちは、もうにげようと思つて

もにげることはできません。

六1426 どんどん、どんどんににげました。

七226 すずめが、ぱつと、とんでにげる。

七227 ④ はるお、あまり大きな声をだすから、に

げちゃったよ。

七615 まよったせみが、かきの木につきあたって、

七832 ④ それで、このらくだはどこからにげて

きたのではないかと、思つたのです。

八101 のらねこが通りかかっても、にげるどころ

か、向かつていこうとさえるのです。

八765 できるだけ早くぬま地をにげていった。

九1005 たかぎ、頭をかかえてにげるまねをする。

九1298 くもが、いきなりとびかかっていると、あ

ぶは、略、すいとにげていきました。

九1321 みつばちは、そのつなをさけてにげようと

しましたが、どうしても手足がうまく動きません。

九13210 みつばちは、つなをほどこいて、あみをく

切つて、にげていつてしまいました。

九13211 にげていくみつばちのうしろすがたをみて

いましたが、くもはどうすることもできません。

十一1512 窓ガラスが、一まいこわれていて、やが

て、小鳥たちは、そこから遠い空へにげていった。

十一553 ④ ことばははねる、つまめばにげる。

十四7010 お湯がだんだんにひえるのは、湯の表面

の茶わんのまわりから、熱がにげるためだ

十五946 チルチル「ふとった幸福」どもがにげて

行くのを見ながら、「略。」

十五1054 ④ あれは、不幸のほらあなからにげて來

た『とてもたまらなくなるゆかい』ですよ。

にけんぶん「軒分」(名) 1 二けんぶん

十三415 ④ いまだこの家でも二けんぶんも、三げ

んぶんもの人が、寝とまりしているんだよ。

にこく ④ ドイツオーストリアにこく

にこつと「副」 1 にこつと

七375 人ごみのうすぐらい中で、さぶろうは、元

氣よくにこつと、私をみあげました。

にこにこ「副」 5 にこにこ

四639 こういわれて、かっちゃんは、きまりわ

るそうににこにこわりました。

九1098 にこにこわらいながらおりてくるもの、ま

じめな顔でやってくるものなどさまざまである。

十一592 「略。」というて、父はにこにこわら

いながら、「略。」と答えた。

十五332 女の子は、にこにこわらつて、この自分

のすくい主へ手をさしだしていました。

十五641 だされたくつを見て、にこにこわらつ

た私は、

にこにこがお「顔」(名) 1 にこにこ顔

七3911 高いところをメデシンボールのように送ら

れていくうちに、にこにこ顔になり、

にこにこする「サ変」 5 にこにこする『シ』

四583 かっちゃんは、みんなのかおをみて、に

こにこしました。

五255 ④ それからは、みんなにこにこして、友だ

ちのようになかよくなってきました。  
五259 はるこさんも、にこにこして帰ってきました。  
た。

六115 「略。」といつてにこにこしました。

七549 式をすませてもどつてくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、にこにこしていた。

にこにこなさる (五) 1 にこにこなさる 《ーイ》  
二586 そのかたは、「略。」といつて、にこにこなさいました。

にこやか (形状) 2 にこやか

十五6410 「略。」と、にこやかにわらいながら私によびかけた。

十五766 博士は満面ににこやかなわらいをたたえながら、「略。」と、意外なあいさつをされた。

にこる (濁) (五) 1 にこる 《ーッ》

五691 海はにこっていました。

にさつ (三冊) (名) 1 二さつ

一144 ほん一さつ、ちようめん二さつ、いろがみ五まい、くれよんひとほこ、

にさんかげつ (三箇月) (名) 1 二三ヶ月

八191 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、  
《略》、わずか二三ヶ月で大きくなって、

にさんど (三度) (名) 1 二三ど

七456 それから、二三どのおし問答が、ふたりのあいだにとりかわされた。

にさんち (三旦) (名) 5 二三旦

五996 二三日すると、ひわは、もとのように元氣になつて、かごの中をとびまわっていました。

八6410 それから二三日して、とうとうその大きなたまごがわれた。

九1278 この二三日というものは、ちつともかからなかったから、おなががすいてしまった。

十一241 二三日したらなおると思うけれど。

十二7411 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重いのので、二三日は困ることもあります。

にさんにちまえ (三日前) (名) 1 二三日まえ

六1047 弟は、二三日まえから、かぜがみである。

にさんちん (三人) (名) 1 二三人

七662 もみじがまつかで、山のいもをほっている人が二三人。

にさんねん (三年) (名) 1 二三年

十二1912 はじめて実をつけた二三年は、青い小さな実が、ほんの二つ三つ、

にさんば (三羽) (名) 2 二二ば

五1061 ある日、二二ばのひわが、さんちゃんのうちまつの木におりてきました。

八889 ところが、木のしげみから、二二ばの美しいはくちようがあらわれた。

にさんべん (三遍) (名) 1 二二べん

九638 ぎよしやは、《略》草むらをむちで二二べん、ヒュウパチツ、ヒュウパチツと鳴りました。

にさんほん (三本) (名) 3 二二本

七776 そうそう、そのらくだは、まえ歯が二三本ぬけてはいませんか。

七8111 らくだのまえ歯が、二三本ぬけていることまで。

七842 それで、歯が二三本ぬけているにちがいないと、考えました。

にし (西) (名) 17 にし 西

一325 くも かぜ あめ ゆき きた  
——みなみ——にし——ひがし——

三88 西の方たち。

五184 北の方へいく友だちと、南の方へいく友だちと、西の方へいく友だちと、東の方へいく友だちと、

ちを、それぞれひとかたまりにわけてくれました。

五531 西の方を見ると、日がしずんでまもない空に、大きな星が光っていました。

五5311 そういいながら西の方を見ると、小さな星がちらちら光っていました。

五554 《略。》と思つて、西の空をみましたが、わかりませんでした。

八293 天帝は、《略》馬車を走らせて、天の川の西の岸を通つていらつしやいました。

八323 天帝は、たいへんおこりになつて、はたおりひめを《略》、けんぎゅうを西の岸に帰しておしまになりました。

九514 やまねこなら、さつき馬車で、西の方へとんでいきましたよ。

九515 西なら、ぼくのうちの方だ。

十二410 大洋を西へ西へと航海して陸地にであつたのが、それほどの手がらだらうか。

十二410 大洋を西へ西へと航海して

十二608 もうあとわずかというところで、日ははや西の山に傾いて、くれそうになつてきた。

十三128 朝になると、日は東の空からのぼり、夕

がたになると、西の空にしづみます。

十三129 月も、東の空から西の空に向かって動き

ます。

十三1210 地面は平らなもので、日や月が、東から西へまわっているように思われます。

十三152 自轉といつて、一晝夜に一どずつ、自分で西から東へ一回轉します。

にじ (題名) 1 にじ

三789 にじ

にじ (虹) (名) 14 にじ じふたえにじ・わたしの

ところはにじをみるとおどる

一 333 お日さま——にじ——あか——あお——き  
 いろ——まる——四かく——三かく——  
 二 142 あめがやんで、にじがでました。  
 二 144 大きなにじでした。  
 三 814 すると、色リボンのようなにじが空に  
 かかりました。  
 三 835 全 あなたたち、にじがみえて。  
 三 842 だんだんにじもきえていきます。  
 三 848 みんながみえすと、そのあまだれの中  
 に、小さなにじがみえました。  
 七 581 雨がはれて、にじが大きくなりました。  
 十 1912 全 あ、きれいなにじ。  
 十 201 村の林の上に、大きな半円形のにじがか  
 かってる。  
 十 2110 全 ごらん、にじがでているよ。  
 十三 518 わたしの心は、にじを見るとおどる。  
 十四 637 日光にすかして見ると、湯げの中に、に  
 じのような、赤や青の色がついています。  
 十四 737 湯のおもてに、にじの色のついた、きり  
 のようなものがひと皮かぶさっており、  
 にじ「二時」(名) 1 二時  
 九 206 自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわ  
 りきっているつばめたちを運んできました。  
 にしがわ「西側」(名) 1 西がわ  
 三 233 まいあさ日がでると、この木の西がわ  
 のなん十という村々が、日かげになります。  
 にじかん「二時間」(名) 1 二時間  
 七 359 全 それに、乗りがえもないし、二時間ほど  
 でつくのですから。  
 にしき「錦」(名) 2 にしき  
 十四 828 ぼろを着ても心はにしき。  
 十五 828 とてもほんとうと思えないほど、ふとっ

ていて、びろうどや、にしきにくるまり、  
 にしださん「人名」1 にしださん  
 四 305 全 にしださんは、きょうもびようきで休  
 んでいます。  
 にじっこうねん「二十光年」(名) 1 二十光年  
 八 353 二十光年の星もあり、三十光年の星もあり  
 ます。  
 にじっぱ「二十羽」(名) 1 二十ぱ  
 九 154 ときには、十ぱも二十ぱも、ずらりとなら  
 んでいることがあります。  
 にじっぴょう「二十俵」(名) 1 二十びょう  
 十一 2910 三年めには、二十びょうの米をとること  
 ができました。  
 にじっぶん「二十分」(名) 1 二十分  
 八 349 光のとどく時間ではかると、あの星と地球  
 とのきよりは、二十分や三十分ではありません。  
 にじっぼん「二十本」(名) 1 二十本  
 七 205 全 私のうちでは、だいこんを、庭に二十本  
 うえたんです。  
 にじのうた「題名」1 にじの歌  
 十 203 「にじの歌」を歌う子どもの声。  
 にしのせんせい「西野先生」(人名) 1 西野先生  
 十五 1210 石井先生の手品や、森田先生と西野先生  
 のパイオリンとピアノ合奏など、  
 にしむら「名」2 にし村  
 七 496 第二回めには、にし村の学校としあいをし  
 た。  
 七 529 第二回めは、にし村の学校とやることに  
 なった。  
 にしもりさん「人名」2 にしもりさん  
 五 809 それが、にしもりさんのせなかにあたりま  
 した。

五 8010 にしもりさんはびっくりして、「キヤア。」  
 といつてとびあがったので、  
 にしゅう「二州」(名) 1 二州  
 十三 1710 戦いに敗れ、賠償として、〈略〉、作物の  
 よくできる二州をとられました。  
 にじゅう「二十」(名) 3 二十 20  
 六 368 20  
 十 2412 20  
 十二 676 のこぎりののはは、〈略〉、一つおきに右と  
 左にすこしよじれて、二十も三十も続いている。  
 にじゅういち「課名」3 二十一  
 一 32 十 ゆうぎ……二十一  
 二 25 四 先生……二十一  
 五 24 三 ありがとう……二十一  
 にじゅういち「二十」(名) 2 21  
 六 3610 21  
 十 253 21  
 にじゅうおくこうねん「二十億光年」(名) 2 二十  
 億光年  
 十四 346 博士の計算では、うちゅうのさしわたし  
 は、およそ二十億光年ということ。  
 十四 347 二十億光年——わかりますか。  
 にじゅうおくねん「二十億年」(名) 1 二十億年  
 十四 348 光が一方のはしから、向こうのはしまで  
 とどくの、二十億年も、かかるほどの廣さなの  
 です。  
 にじゅうきゅうてんこうねん「二十九・五光年」  
 (名) 1 一九・五光年  
 八 355 あなたなばたものがたりのはたおり星は、  
 二九・五光年ですから、  
 にじゅうく「課名」2 二十九  
 一 35 十三 手と足……二十九

十四24 三星の光……二十九  
 にじゅうく 「二十九」(名) 1 29  
 六403 29  
 にじゅうくど 「二十九度」(名) 4 29度  
 七932 8月2日 (休) くもりのち晴 29度  
 七944 9月6日 (休) くもりのち晴 29度  
 八1008 7月18日 (休) 晴 29度  
 八1031 9月4日 (休) 晴 29度  
 にじゅうくにち 「二十九日」(名) 1 二十九日  
 九2210 二十九日 飛行機で一万は  
 にじゅうくわ 「二十九羽」(名) 6 二十九わ  
 四498 二十九わの がんは、あわててかっちゃん  
 のところへあつまりました。  
 四526 二十九わの がんは、列をきれいにつく  
 るどころではありません。  
 四588 二十九わの かおがそろいました。  
 四592 二十九わの がんは、「略」とさげびま  
 した。  
 四608 しかたがないので、二十九わの がんは、  
 テーブルのまわりにあつまりました。  
 四619 二十九わの がんが、食事をすませると、  
 にじゅうこ (課名) 1 二十五  
 二31 五 おはなし……二十五  
 にじゅうこ 「二十五」(名) 1 25  
 六379 25  
 にじゅうこど 「二十五度」(名) 5 25度  
 七935 8月4日 (出) くもり 25度  
 七941 9月3日 (月) くもり 25度  
 八1013 8月7日 (休) くもり 25度  
 八10110 8月18日 (出) くもりのち雨 25度  
 八1026 9月1日 (出) くもり 25度  
 にじゅうくにち 「二十五日」(名) 1 二十五日

九228 九月二十四日 飛行機で二千は 二十五日  
 同じく一万五千は  
 にじゅうくわ 「二十五羽」(名) 1 二十五わ  
 四581 二十五わ、二十六わ、二十七わ——と、だ  
 んだん そろいました。  
 にじゅうさん (課名) 1 二十三  
 十二24 三 わたしの民ちゃん……二十三  
 にじゅうさん 「二十三」(名) 2 23  
 六372 23  
 十2510 23  
 にじゅうさんセンチ (名) 1 23センチ  
 十二53 23センチ  
 にじゅうさんど 「二十三度」(名) 3 23度  
 七896 5月28日 (月) 晴 23度  
 八1053 9月29日 (出) くもりのち雨 23度  
 八1069 10月25日 (休) 晴 23度  
 にじゅうし (課名) 1 二十四  
 一33 十一 あいさつ……二十四  
 にじゅうし 「二十四」(名) 2 24  
 六375 24  
 十264 24  
 にじゅうしさい 「二十四歳」(名) 1 二十四才  
 十371 それは、明治二十三年、佐吉が二十四才の  
 ときのことである。  
 にじゅうしち (課名) 2 二十七  
 一34 十二 人のかお……二十七  
 十27 四 あなたの思っていることは……二十  
 七  
 にじゅうしち 「二十七」(名) 1 27  
 六383 27  
 にじゅうしちど 「二十七度」(名) 3 27度  
 七909 6月25日 (月) 晴 27度

八977 6月13日 (休) 晴 27度  
 八1045 9月21日 (休) 晴 27度  
 にじゅうしちわ 「二十七羽」(名) 1 二十七わ  
 四581 二十五わ、二十六わ、二十七わ——と、だ  
 んだん そろいました。  
 にじゅうしど 「二十四度」(名) 2 24度  
 七901 5月29日 (休) くもり 24度  
 八983 6月15日 (休) くもり 24度  
 にじゅうど 「二十四」(名) 4 20度  
 七867 4月29日 (日) 晴 20度  
 七949 10月23日 (休) 雨 20度  
 八951 5月2日 (休) 晴 20度  
 八968 5月15日 (休) 晴 20度  
 にじゅうに (課名) 1 二十二  
 三25 四 はやとり……二十二  
 にじゅうに 「二十二」(名) 3 二十二 22  
 六371 22  
 十256 22  
 十三613 なんといいても、二十二か三のわかさ  
 で、せんぱいをしので大家になり、  
 にじゅうにセンチ (名) 1 二十二センチ  
 十二529 古きれを、はば二十二センチ、長さ三十  
 センチぐらいつぎあわせて、図の形に切る。  
 にじゅうにど 「二十二度」(名) 2 22度  
 七921 7月20日 (休) 雨のちくもり 22度  
 八1057 10月20日 (出) 晴 22度  
 にじゅうにん 「二十人」(名) 1 二十人  
 九1095 やがて、十人、二十人、つぎつぎにすべり  
 はじめた。  
 にじゅうはち 「二十八」(名) 1 28  
 六388 28  
 にじゅうはちど 「二十八度」(名) 6 28度





じゅうごにち・ろくがつじゅうさんにち・ろくがつ  
にじゅうごにち・ろくがつにじゅうしちにち・ろく  
がつにじゅうはちにち・ろくじゅうにちめ

七八六 4月29日 (日) 晴 20度

七八七 5月6日 (日) 雨のち晴 15度

七八八 5月20日 (日) くもり 18度

七九三 11月11日 (日) 晴 19度

七九七 11月25日 (日) 晴のちくもり 17度

七九九 12月2日 (日) 晴 15度

にちや「日夜」(名) 1 日夜

十五六九 おじさんが日夜ふでをとっていられたと  
いう大きなつくえの上に、

にちよう「日曜」(名) 2 日曜

十三三八 ほんとう……こんどの日曜ね。

十三四九 おぼさんがね、こんどの日曜、きみを  
お客さんにして、ハイキングにつれて行くって、

にちようがっこう「日曜学校」(名) 1 日曜学校

十五六七 教会の日曜学校の生徒であった私は、そ  
のクリスマスに得意の銀てきをふいたが、

にちようび「日曜日」(名) 1 日曜日

七二九 日曜日のはれた朝。

について(格助) 15 について 1のうときようげん  
について

六三九 それよりも、五十音について、新しく思い  
ついたことをみんなに話して、

七八三 人の人は、私どものらくだのことについ  
て、それはよく知っております。

七八四 それに、なにか。

七九六 たとえば、花のおしべとめしべとの関係  
についていうと、

十三二〇 このあれ地に育つ木があるかないか、ま  
ず、このことについて研究を重ねました。

十三二二 かれは、もみの生長について、大きな発  
見をしました。

十四一〇 ランプについては、いろいろいいこと  
を教えてくださいました。

十四一五 おとうさんのおはかについては、どう  
したものか、ちょっと私にはわかりかねます。

十四二〇 そうじがすんだら、そのことについて  
話をしよう。

十四三九 この色については、お話することがどっ  
さりあります。

十五五二 また、日本についていろいろの研究を進  
め、日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、

十五五五 大英百科辞典の東洋美術についての説明  
は、プリンクラーのふでになったものである。

十五五八 ホランド博士は、戦争中で費用が思うよ  
うにつかえないことについてくわしく話し、

十五六〇 日本留学生第一号とでもいおうか、私  
はじめて会った日本人について話をしあげよ  
う。

十五七四 老博士は、きょうに乗じて、アメリカの  
考えかたについて熱意をこめて語られた。

につき「日記」(名) 4 日記 1あさがおにつき  
うさぎにつき・えにつき・がつきゅうにつきから・

かんさつにつき・さいごのがつきゅうにつき

七三〇 いま、にいさんに日記をよんでもらって  
いたところ。

十五五九 裏の写真やら、当時の日記やら、きみ  
に見せなければならぬものがたくさんある。

十五七六 「略」といって、日記をくりひろげ、  
つくえに白線をひいて「國境」をつくったあたり  
を、声高らかに読みあげられた。

十五八二 うれしいような、楽しいような、悲しい

ような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。  
につき(接助) 1 につき

九一五 文手 1 これからは、用事これあるにつき、  
明日出頭すべし、と書いていいでしょう。

につきちよう「日記帳」(名) 3 につきちよう 日  
記帳

四七二 これがあたった人には、につきちようを  
あげます。

七二四 まってください。日記帳をみますから。

七二五 日記帳をみながら、兄「たまごから小さい  
虫になるのに、七日かかっています。

につきちようばん「日記当番」(名) 1 日記当番

十五八七 高橋さんが、きょうの日記当番ですが、  
私にも書かせてください。

にっこう「日光」(名) 16 日光

六三三 雲にかくれていたたいようがおおだした  
ので、日光が店いっぱいにさしこんできた。

七三六 庭には、日光が降りそそいでいる。

八〇二 のこっていたもみを、1日、日光にかんか  
んほして、すぐにもみすりをしてみました。

十二五 まぶしい日光。

十二三二 午後の日光は、略、みあげる私の顔に  
降りそそいでいました。

十四六三 この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだ  
して、日光を湯げにあて、

十四六六 日光にすかして見ると、湯げの中に、に  
じのような、赤や青の色がついています。

十四六七 土のしめついているところへ日光があたっ  
て、そこから白い湯げがたつことがよくあります。

十四六八 陸地の上のどこかの一地方が、日光のた  
めに、特別にあたためられると、

十四六九 それを日なたへ持ちだして、じかに日光

- をあて、茶わんのそこをよく見てごらんさい。
- 十四72 6 これに日光をあてると、熱いところとつめたいところとのさかいで、光が曲がるために、
- 十四73 6 熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかしで見ると、
- 十四74 12 地面の空気が、日光のためにあたためられてできるときは、飛行家にとって、たいへんあぶないものです。
- 十四75 7 畑のほうが、森よりも、日光のためによけいあたためられるので、
- 十五21 3 日光にかがやく高山植物のかおり、
- 十五81 7 空気がまたは日光のごとく平ぽんなれよ。
- にっこり (副) 5 にっこり
- 七44 10 青年はにっこりわらった。
- 十25 11 その声をきいて、にっこりとわらう顔。
- 十74 2 いままでおいおいいたくせに、きゅうに、にっこりわらい顔になって、
- 十二73 10 芭蕉は、にっこりわらって立っていました、
- 十二78 11 ふたりの少年は、にっこりとわらって、「略。」とはっきり答えました。
- にっこりする (サ変) 2 にっこりする 《—シール》
- 十五100 1 会 『正義であることの大きな喜び』で、不正がしかえしされたときに、いつもにっこりしています。
- 十五110 8 会 おまえがにっこりするたびに、わかなるのですよ——
- にっぽん 「日本」[地名] 88 日本
- 五44 3 画 ぼくら、日本の子どもらは、はとだ。
- 五45 1 画 ぼくら、日本の子どもらは、つぼみだ。
- 五45 7 画 ぼくら、日本の子どもらは、星だ。

- 七41 10 青年は、つづいて日本の子もりうたをひきはじめた。
- 八8 3 同じ日本の中でも、土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。
- 九16 6 まもなくさつていかなければならない日本に、なごりをおしんでいるのかもしれない。
- 九16 9 やがて、九月のなかばをすぎると、つぼめは、そろそろ日本をさつていき、
- 九17 4 すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。
- 九17 11 日本のつぼめは、こんなふうに渡つていきます、
- 九24 6 日本からオーストラリアまでは、一万キロあまりもありますが、
- 九24 7 日本に春がくると思うと、もう矢もたてもたまず、北をさしてすすむのです。
- 九24 9 その小さな胸には、わか葉のもえる日本の春の美しさを感じうかべているのでしょうか。
- 十14 10 会 「日本とフランスとは、どちらがきれいですか。」とたずねました。
- 十15 3 フランスだって、きれいなところもあり、きたないところもあり、日本も、やはりそのとおりですから。
- 十15 7 会 日本の海はどんな色ですか。
- 十16 1 「へ略。」と、日本の海の美しさを、思うかべるようにいいました。
- 十17 3 会 えんぴつ一本買いにいくにも、日本のことばでは通じません。
- 十35 7 会 日本のゆくすえをどうするのか。」佐吉は、もう、じっとしていられなくなり、
- 十37 5 これが、日本における自動織機のはじめである。

- 十37 7 日本の新しい出発にあたって、この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであらう。
- 十64 2 日本の絵画や、庭園や、建築にも、外国とはおもむきのちがったおもしろいものが、たくさんありますが、
- 十一10 11 会 あの町でも、あの工場でも、また、日本の国全体だって、同じことだと思ふ。
- 十一10 12 会 いいコックスが日本を正しい方へつれていくのさ。
- 十一49 11 日本のこくぐらは、北海道だといいます。
- 十二44 6 会 日本には、文楽といって、りっぱな人形しほいがある。
- 十二46 5 会 日本ではあまりさかんなかったが、アジアでもヨーロッパでも、りっぱな影絵しほいができている。
- 十二77 4 テニスコートには日本とメキシコの国旗が美しくひるがえって、
- 十二79 7 会 日本へいきたくない。
- 十二80 7 会 「いうまでもなく、日本ですよ。」
- 十二81 1 日本という國をみたこともなく、また日本語をすこしも話せないこの二少年が、
- 十二82 5 もし、この決勝戦に勝つことができれば、世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらうことになります。
- 十二103 3 これは、千二百年ほどまえに、はじめて作られた日本のお金です。
- 十二109 6 イソップ物語はイソップという人が書いたお話ですが、これをキリスト教の宣教師が日本に傳えたのは、三百五十年ほどまえのことです。
- 十二109 10 日本のことばになおしてローマ字で書いてあります。

- 十二110 2 外國から書物が新しくはいってくることは、外國人の心が傳わることで、日本はこのような心を取り入れて、どんどん育ってきました。
- 十二111 2 まき絵は、日本のすぐれた工藝品の一つで、古くから外國人にもはやされてきました。
- 十二112 7 これは、オランダのターヘルアナムという人体のことを絵いりで説明した本を、いまから百八十年まえに、日本で出版したものです。
- 十二112 11 この本によって、日本の医学は、はじめてしっかりしたものとなりました。
- 十二113 8 これは、汽車第一号で、明治五年九月十二日、はじめて日本で東京横浜間を走ったものがあります。
- 十二114 7 平和な國日本を作るために、また、文化國家をきずくために。
- 十二115 2 これで、日本の面影を写した写真帳が終りました。
- 十二115 3 このような歩みをたどってきた日本を、これからどうもりたてていけばいいでしょうか。
- 十二115 8 歩調がそろったときに、はじめて、日本が正しい、美しい國となることができましょう。
- 十三10 12 日本には、毎年、約二百万人の人が生まれるが、
- 十三12 5 知識を廣め、學問を研究して、迷信をまったく去ってしまうようになれば、日本の國は、今日よりまだまだ進むことであろう。
- 十四24 10 日本になかった品物が、外國から傳えられたときに、
- 十四26 1 日本にはいつてきた西洋医学は、はじめオランダからはいり、
- 十四27 2 古くから日本といちばん關係のふかかった大陸からは、

- 十四29 8 ですから、星のおとき話は、日本にはあまりありません。
- 十四29 9 日本は景色のよい國で、花がたえずさいていたために、
- 十四30 12 なんでも日本、日本と、日本だけが特別の國でもあるかのように考えて、
- 十四30 12 なんでも日本、日本と、
- 十四30 12 日本だけが特別の國でもあるかのように考えて、
- 十四31 6 あなたがたは、これからの日本にとってだいいなかがたです。
- 十四31 8 あなたがたの考えひとつで、日本はよくもわるくなるのです。
- 十四31 11 あなたがたのものをみる目、ものを考える力が大きくなっていけば、日本は、見ちがえるほどりっぱな國になっていくのです。
- 十四40 7 日本は、
- 十四57 11 日本は、それがこの日本のできるためには、私が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。
- 十五18 1 文藝 ああ、日本、まさに立つべし。
- 十五37 11 漢字が中國から日本に傳えられたのは、千七百年ほどまえであるが、
- 十五37 12 日本では、「山」を「サン」、「海」を「カイ」というようにもとの中國の発音にしたがつた読みかたをしたが、
- 十五38 4 このように、日本では一つの漢字をふたとおりに読んできたが、
- 十五38 5 中國の発音にもとづいた漢字の読みかたを「音」といい、日本のことばによる読みかたを訓という。
- 十五39 2 日本では、《略》漢字から、日本語を表わすのに便利なかたかなや、ひらがなを作りだす

- ようになった。
- 十五39 11 かなは、日本の文化にとって、ほんとうに大きな發明で、
- 十五40 1 かなのおかげで、日本のことばを、たやすくしかも自由にうつすことができるようになった。
- 十五41 10 日本のことばも、ローマ字で書くことができる。
- 十五42 4 いま日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種の文字をつかっており、
- 十五42 8 日本のことばをもっとも正しく、もっとも簡単に書き表わす方法がないものであろうか。
- 十五45 5 日本の手工業も、《略》、つぎつぎと近代工業の道をたどっていくようになった。
- 十五50 2 日本は、この焼物をやめれば、日本から美しいものが一つ消えてしまうことになります。
- 十五50 11 プリンクリーは、日本の美しい焼物にひきつけられていろいろな焼物を集めた。
- 十五50 12 また、日本についていろいろの研究を進め、日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、
- 十五51 1 日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、
- 十五51 3 日本の古い美術に対する愛着がふかく、日本美術工藝史十二巻という大作を著わした。
- 十五54 7 きみは、かねがねジョルダン博士からいつてきている日本の学徒、大島くんでしょう。
- 十五55 9 それはそれとして、きょうはきみがまだ生まれないころの日本の話をさせてもらおう。
- 十五55 9 私が日本をおとずれたころは、西洋の文化をとり入れることがさかんなときで、
- 十五55 12 そのころ日本をたずねた外人の中で、富士山や磐梯山のいただきをきわめたのは、《略》私のはじめてだろう。

十五567㊦ 私と日本とはふかい関係があるのだが、  
十五573㊦ きみは室を二つももっているようだが、  
その一つに日本の青年をとまらせて、

十五578㊦ つくえのまん中にチョークで線をひき、  
向こうは日本、こちらはアメリカといって、  
十五5710㊦ その日本の青年はなかなかの人物だったよ。

十五757 日本へ帰ったら、新島夫人にきょうのゆかいな会見のてんまつを伝えてくれといながら、  
十五793 私には、あなたがた日本の小学校のみなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。

十五798 日本の子どもさんたちにも、お目にかったことがあるからです。

十五7910 私のつくえの上には、日本のみなさんが書いたあつい絵の本が、いつもおかれてあります。  
十五8010 そう思いながら、年よりの私は、日本の小学校のみなさんに、はるかなあいさつを送り、  
にっぽんいち 「日本」(名) 1 日本  
四746 に——日本一のふじの山。

にっぽんご 「日本語」(名) 19 日本語

十二398 これは、ヘレン・ケラーというアメリカの女の人が書いた「わが生がい」の一せつを、日本語になおしたものです。

十二793㊦ きみたちは、日本語を知っているの。

十二811 日本という國をみたこともなく、また日本語をすこしも話せないこの二少年が、

十二1132 この本を日本語になおすのには、どれほど苦心したかわかりません。

十四191㊦ では、バケツやカーテンなどは、日本語で、なんといっていたんでしょう。

十四224㊦ 先生、私は、これはみんな、日本語だ

とばかり思っていました。

十四227㊦ いや、いまは日本語にちがいないが、もとは、外國のことばさ。

十四229㊦ 長い間つかっているうちに、すっかりなれてしまつて、日本語になったと考えていい

十四245 私、どうしてこんなにたくさんのことばが、いろいろな國からはいってきて、日本語になったのだらうかと、ふしぎになってきた。

十四247㊦ 先生、どうして、そんなにたくさん外國のことばが、日本語になったのでしょうか。

十四277㊦ 長いあいだつかっているうちに、もともとの日本語のように思われてきたのだ。

十五382 一方、「山」を「やま」、「海」を「うみ」などとかつて、その漢字の意味にあつた日本語をあてて読むこともした。

十五393 日本では、〈略〉漢字から、日本語を表わすのに便利なかたかなや、ひらがなを作りだすようになった。

十五421 また、ローマ字は世界的の文字であるから、日本語が世界の人々に親しまれるようになるであらう。

十五445 「略」と、じょうずな日本語で話しかけた。

十五4511 ある日、ブリンクリーは、どうやら覚えた日本語で、町をひとり散歩していた。

十五581㊦ そのかわり日本語を教えてください、その申し出でを承知して、

十五583㊦ つまり、私はいかのギリシア語の先生で、かれは私の日本語の先生というわけだが、

十五7610 そうして、これが新島からならつた日本語の一つだといわれた。

にっぽんごのかきあらわしかた 「題名」 2 日本語

の書き表わしかた

十五35 日本語の書き表わしかた  
十五423 日本語の書き表わしかた

にっぽんさん 「日本産」(名) 1 日本産  
十四56 今日、眞珠の産地は、〈略〉であるが、日本産のものは、ことに名高い。

にっぽんじゅう 「日本中」(名) 2 日本じゅう  
九1218 茶人は、日本じゅうを歩きまわつて、うま

そうな水や名高いいど水をためてみたけれども、どうも氣にいらなかった。

十一112㊦ いい整調が、りっぱに日本じゅうの足なみをそろえてくれるにちがいないよ。

にっぽんじん 「日本人」(名) 9 日本人  
十75 そういういなかへは、めつたに日本人もい

かないのです。

十75 日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。

十810㊦ 日本人、くりをおさがり。

十二789 よくみていますと、どこかしら日本人らしいところがあるので、

十二7810㊦ きみたちは日本人ですか。

十四297 どうも日本人は、むかしから、あまり星に親しみをもっていなかったようです。

十五511 日本人のための英語教科書の編さんまでしたりした。

十五5610㊦ 日本留学生第一号とでもいおうか、私

がはじめて会つた日本人について話をしてあげよう。

十五598㊦ じつにめずらしい日本人が舞いこんで

來たものだ。

にっぽんせい 「日本製」(名) 1 日本製  
十355 機械は、どれひとつとして、日本製のもの

は、なかったからである。

にっぽんせいふ「日本政府」(名) 1 日本政府

十五458 ハギンスの祖父にあたるプリンクラーが、日本政府から頼まれて、鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって来たのも、そのころのことです。

にっぽんどくとく「日本独特」(名) 1 日本どくとく

八45 鳥——それも、日本どくとくの、〈略〉はおじろです。

にっぽんのこども「題名」1 日本の子ども

五442 日本の子ども

にっぽんびじゅつこうげいし「日本美術工芸史」(名) 1 日本美術工芸史

十五514 日本の古い美術に対する愛着がふかく、日本美術工芸史十二巻という大作を著わした。

にっぽんらしい「日本」(形) 1 日本らしい「イ」

十644 能は、その中でも、もっとも日本らしい、すぐれたところのあるものとなっています。

にっぽんりゅうがくせいだいいちこう「日本留学生第一号」(名) 1 日本留学生第一号

十五569 日本留学生第一号とでもいおうか、私

がはじめて会った日本人について話をしあげよう。

にど「二度」(名) 5 二ど

六1911 こんな楽しいときは、二どとありませんね。

七358 おばさんのうちへは、もう二どもいった

ことがあるのですもの。

十一778 医者は一どきてみて、いくらかよくなったように思うといいました。

十一7811 一日に二ど、看護婦が持ってきてくれる、

すこしばかりのパンとチーズも、

十五209 朝の十時と午後の三時ごろと、日に二ど

ずつ、〈略〉、散歩に出て来るのでした。

に「二」(名) 1 二

十四7911 「二」が四」という算数の九九と、にた

ようなものだと思います。

にねん「二年」(名) 1 二年

三122 二年すぎました。

にねんさんかげつ「二年三箇月」(名) 1 二年三ヶ月

十475 三つになる——まるでいうと二年三ヶ月に

なる妹をつれて、さんぽにでました。

にねんせい「二年生」(名) 4 二年生

二593 二年生も、これで ぺんきようをししました。

二604 こんど、みなさんが二年生になったら、

あたらしい一年生がはいってきます。

十569 そうしたら、二年生の男の子が、ふくろう

のからだを手でいじりました。

十一473 ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたの

は、ぼくの二年生のときだった。

にのばめん「題名」6 二のばめん 二の場面

二485 二のばめん

四102 二のばめん

六2510 二のばめん

六831 二のばめん

七310 二の場面

七798 二の場面

にのひと「二人」(話手) 7 二人の人

十四385 二人のそのまのまのかっこうで、「略」。

十四388 二人の東の空が明るくなってくる。

十四399 二人の人はるか遠くの方を指さして、

「略」。

十四403 二人の「大空がほおえんでいる。

十四408 二人の「わたしたちの朝だ。」

十四413 二人の「この光を全身にあびよう。」

十四416 二人の「朝風がふいてきた。」

にのみやきんじろう「課名」2 二宮金次郎 二宮

金次郎

十一27 三 二宮金次郎……十八

十一186 三 二宮金次郎

にのみやきんじろう「二宮金次郎」(人名) 2 二宮

金次郎

十一187 これから、私の調べた二宮金次郎のこと

をお話します。

十一191 二宮金次郎の生まれたところは、神奈川

縣のかやま村といって、さかわ川にそった村です。

にばし「荷馬車」(名) 1 荷馬車

十四909 二台の荷馬車が来たので、それをさける

ために、急いで道を横ぎったときに、

にはつめ「二発目」(名) 1 二はつめ

四5010 二はつめの てつぼうの音が、ひびいて

きました。

にばん「二番」(名) 1 二ばん

一242 二ばんの「はねておどれば」のところは、

びよん びよんとびました。

にばんぼし「二番星」(名) 4 二ばんぼし 二ばん

星

一261 二ばんぼし みつけた。

五536 二ばん星 みつけた。

五565 はるおさん、ほら、あなたのみつけた二

ばん星よ。

五588 あれが、ぼくのみつけた二ばん星かなあ。

にばんめ「二番目」(名) 3 二ばんめ 二番め

二354 二ばんめのめくらは、ぞうのきばに  
さわって、こういいました。

四847 二ばんめに、となりのうちのひでおさん  
が、おもしろい紙しばいをしました。

十三394 手紙が、はい……二番めのひきだしの  
……上……はい。

にひき 二匹(名) 9 2ひき 二ひき

二271 二ひきのやぎが、そのはしのまん中  
であいました。

二297 一ひき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひ  
き、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、十ひき、  
十一ひき——おや、十一ひきしかない。

二304 一ひき、二ひき、三ひき、

二341 そこに、はくせいのがりすが、二ひき  
のつていました。

四205 ねずみが三ひき、わの中にはいり、  
ねこが二ひき、わのそとにでました。

六282 このとき、戸のそとに、きりぎりすが二ひ  
きたずねてきます。

六142 二ひきのとらさんが、つかみあいをはじめ  
ました。

七89 黒うさぎ 2ひき

十二106 たまりかねた二ひきのうさぎが、〈略〉  
手をふり足をふって、おうえんをはじめました。

にひきとも 二匹共(名) 1 二ひきとも

二284 そのうちに、二ひきとも、どぶんとお  
ちてしまいました。

にひやくろくじゅうグラム(名) 1 260g

七98 母うさぎは4kg 子うさぎは、おもいので  
320g、かるいので260gでした。

にひやっぱ 二羽羽(名) 1 二ひや

四68 うらの小山の小さいけに子かすが二ひや、

こ米が一ぴょう、

にぶね 荷船(名) 1 荷船

五75 汽船や荷船がとおる。

にへん 二遍(名) 1 二へん

二187 いちにちに二へんあるのに、いちねん  
に「へん」しかないものはなかに。

にへん 二編(名) 1 二へん

七48 「ドッジボール大会」という文章が、二へ  
んあります。

にほん 二本(名) 9 二ほん 二本

一292 手は二ほん、みぎひだり。

一294 足も二ほん、ひだりみぎ。

六102 こうしてできた二本のつつは、うまくはま  
りあって、

六114 ま四角で、骨が二本しかついていないこ  
です。

六117 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹  
二本と、それに、たこ糸やのりなどです。

六118 骨は、たて骨とよこ骨の二本です。

九43 どちらかはかきの木の多いところで、どこ  
の家にも、二本や三本はあります。

九105 スキーをつけ、二本のつえをつきながら、  
十五368 数という形のないものを表すのに、線  
を横に一本引いたり、二本引いたりした。

にほんし 日本紙(名) 2 日本紙

十二49 日本紙。

十二512 日本紙を細長く切って、一まい一まいに  
よくのりをつけてはりかためる。

にまい 二枚(名) 4 二まい

十二49 古新聞二まい。

十二52 これを二まい作る。

十二52 二まいあわせて、図の点線のところをぬ

う。

十五662 ご両人の名まえ入りの大きな写真を二ま  
い、満ぼうへと名さして送ってください。

にまいとも 二枚共(名) 1 二まいとも

十二49 古新聞を二まいとも八つに切って、その  
うち一まいだけを正方形にする。

にまんごせんば 二万五千羽(名) 1 二万五千ば  
九228 九月二十四日 飛行機で二千ば 二十五日  
同じく二万五千ば

にミリ(名) 1 二ミリ

八149 二ミリほどある、白いうじのようなよう  
ちゆうが、はいだして、

にメートル(名) 1 二メートル

十五30 石を取るが早いのか、目の前二メートルほ  
どまでせまって来たこのあくまの胸をめがけて、

にもかかわらず 拘(援助) 1 にもかかわらず  
十一801 それは、ようだいがわるくなったにもか  
かわらず、病人が、しだいに、すこしずつものが  
わかりかけるようにみえたことです。

にもつ 荷物(名) 15 にもつ 荷物

一487 おとうさんは、うしろのおきやくさんの  
にもつをもつてあげました。

五294 どこかのおじさんが、荷物を二つ持って、  
あせをふきふきあるいていました。

五303 小さいほうの荷物を、わたしてもらいま  
した。

五304 その荷物は小さいわりに、なかなかおも  
かったのですが、

五333 かんぱんのクレーンが、あがつたりさがつ  
たりして、荷物をつみこんでいます。

五334 この荷物の中に、おり物や、お茶や、しん  
じゅなどはいっています。

五50 子どもや荷物のせてでる。

六21 大きな荷物を、力をあわせて運んできます。

六21 大きな荷物だ。

六24 大きな荷物を、「一、二の三。」と、かけ声をかけて持ちあげます。

六25 小さなからだに大きな荷物。

六25 荷物があか、あかが荷物か。

六25 荷物があか、あかが荷物か。

七82 そのうえ、つけていた荷物の品まで、知っているじゃありませんか。

七84 もしも、それなら、荷物をつけていることが、どうしてわかったのでしょうか。

にゃあと (副) 1 にゃあと

九48 やまねこのにゃあとした顔や、そのめんどうだという裁判のようすなどを考えて、

にゃあわん (感) 1 にゃあ・わん

四72 『にゃあ・わん』というわけです。

にゃおにゃおにゃお (感) 2 にゃお、にゃお、にゃお

二62 みけちゃんは。」みけ」にゃお、にゃお、にゃお。

三86 にゃお、にゃお、にゃお。

にゃと (副) 1 にゃと

九58 その男は、横目でいろいろの顔をみて、口を曲げて、にゃとわらっていました。

にゅういんする 「入院」(サ変) 4 入院する「し」

十一64 にわかに病氣にかかって入院したので、

家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。

十一66 いっ入院したのですか。

十一86 外国から帰ったばかりで、ちょうどあ

なたが入院したと同じ日に、入院したんです。

十一86 同じ日に、入院したんです。

にゅうがく 「入学」(名) 1 入学

十五58 慶應三年九月二十一日、マサチュセツ

ツ州アマスト大学に入学、北側の第八号室に入る。

にゅうがくする 「入学」(サ変) 1 入学する「し」

七98 毎年、新しく入学した子どもたちが、わたしのそばへやってきた。

ニユス (名) 1 ニユス

十四21 ボール、テニス、ピンポン、ラケット、スキー、ラジオ、ニユス、レコード、チフス、にゅうよう

にゅうよう じごにゅうよう

ニユヨーク (地名) 3 ニユヨーク

十五20 ニユヨークの大都会で育てられた子どもたちには、

十五43 あの、ニユヨークのメトロポリタン博物館の——とつぶやいた。

十五53 ポストン、ニユヨーク、ワシントンと無事に旅を進めて、

によつきり (副) 1 によつきり

十62 二階の窓からそとをみたら、大きな竹がによつきりでいたので、びっくりしました。

にらみつける 「睨付」(下二) 1 にらみつける

「ケル」

九88 いやだ。」と、たかぎをにらみつける。

にらめつこ 「睨」(名) 1 にらめつこ

五25 はじめは、電車の中は、まるでにらめつこをしているようだったのに、

にリットル (名) 4 二リットル

九72 あなたは、こがねのどんぐり二リットルと、しおぎの頭と、どちらがおすきですか。

九72 どんぐりを二リットル早く持つてこい。

九72 ニリットルにたりなかつたら、めっきのどんぐりもまけてこい、早く。

九72 ちょうど二リットルあります。

にる 「似」(上二) 18 にる「二」

二12 私たちのにたものをならべてみました。

二24 あんまりいろがにっているの、ぼくははじめはきがつきませんでした。

二36 ぞうは、大きなうわににっているよ。

二58 みると、わたくしのおじいさんによくにたかたでした。

七13 それとよくにたつかいかたで、「まいの手」といったり、「略」とかいったります。

七68 まえのやりかたは、ちょうど、文章をくわしく書きたすのににっています。

八16 虫は、小さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいとがった口をもっています。

十一50 ぼくは、父ににたら、せいの高いりっぱなからだになるだろう。

十二56 傳説を聞く全国で調べてみると、よくにたようなのが、あちらこちらで発見される。

十二69 はたらきのある人は、はをもったのこぎりににっている。

十二110 まき絵書だ これは、茶だんすににいます、そうではありません。

十四63 これは、白いうす雲が月にかかったときに見えるのと、にたようなものです。

十四66 これとよくにたうずで、もつと大きなのが、庭の上などにできることがあります。

十四68 しかしまた、見かたによつては、茶わんの湯と、こうしたら雨のばあいとは、よほどよくにたものと思つてさしつかえありません。

十四695 関係のないようなことがらが、原理のう

えからは、おたがいによくにたものであるという

十四7912 「二が四」という算数の九九と、にた

ようなものだと思います。

十五3511 中部アラビアあたりにも、これにた文

字があった。

十五1104 庭でも、あなたは、うちのおかあさんに

にているけれども、ずっときれいだもの。

に「煮」(上) 1 にる 《二》

九1245 ためにまつ川の水をにて飲んでみると、

たいへんうまかった。

にれつ 「二列」(名) 2 二列

九1056 はじめは二列ですんだが、谷あいでは一

列になったので、ずいぶん列が長かった。

十一674 開いたドアのまえまできますと、その中

にはベッドが二列にならんでいました。

にわ 「庭」(名) 32 にわ 庭 ↓あれにわ・おに

わ・おにわやき・なかにわ

二141 にわに川ができました。

三962 にわの花も、空の雲も、とおい 山も、

ちかい 家も、かくことができます。

四312 庭 わたくしは、うちの にわに さいてい

る コスモスの 花を あげようと思います。

五557 庭 今夜、学校の にわで、ぼうえんきょうで

星をみせますよ。

五786 ひまわりの花は、いけださんが自分のうち

の にわから、持ってきてくれたのです。

六558 ふみおはさっきのことを思い出して、また、

にわの木の下へいってみました。

七205 庭 私のうちでは、だいこんを、庭に二十本

うえたんです。

七222 すずめは、びよんびよんとんで、庭のはた

けの中を歩く。

七331 庭 ここからだして、庭のだいこんの葉に、

うつしてやりましょうね。

七336 庭には、日光が降りそそいでいる。

七576 おかあさんの鏡、庭のはっぱがうつつてい

る。

八93 庭の木にとまらせても長くはいません。

八405 王さまは、庭へおでになりました。

八406 庭 さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん

美しい庭をもつことができます。

八409 庭の草木は、みているうちに、ぴかぴかと

光ったのがねになっていきました。

八437 庭 では、庭のいけの水をすくって、こがね

になったものにふりかけなさい。

八439 王さまは、いそいで庭のいけの水をすくつ

て、王女のからだにおふりかけになりました。

八621 庭 世界は庭の向こうがわまで広がっている

のだよ。

八885 どうしてこんなになったのかわからないう

ちに、大きな庭の中にきていた。

九435 庭 朝早く庭にでて、つやつやした大きなか

きが、(略)落ちていたのをみたときは、

十277 庭の木に小鳥がくれば、

十一333 庭 かきのわか葉に日の照るころは、矢車

からからこいのぼり、村のわら屋の庭に立つ。

十一353 庭 空にくずれる雲のみね、庭にかがやく

ひまわりの花、あぶらぎの声さがしく、

十一3710 庭 あぜに火とさくまんじゅしゃげ 庭に

もえたつはげいとう。

十一419 庭 池にむすぶはうすごおり、庭に立った

はしも柱。

十一513 庭のあさがおの花は、みんなふきちぎら

れ、

十二133 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、

がかを立てて写生をはじめた。

十二368 ふたりは、(略)すいかずらのあまいに

おいにひかれて、庭の小道をおりていきました。

十二876 庭で植え木の手入れをしている父にこう

いわれたら、

十四6611 これとよくにたうずで、もっと大きなの

が、庭の上などにできることがあります。

十五106 庭 いけがきのすぎの木ひくみとなり家

の庭の植え木の青めふく見ゆ

十五114 庭 わか草のはつかにもゆる庭に来てす

ずめあさりとなりへとびぬ

にわ 「二羽」(名) 3 二わ

六441 木の枝にとまっている二わの子がらす。

八732 そこへ二わのがらがやってきた。

八7311 そうして二わのがらは、ぬまの中に死んで

落ちた。

にわいし 「庭石」(名) 1 庭石

十727 庭 おまえは、だんながだいじにしているあ

の湯飲み茶碗を、庭石にたたきつける。

にわか 「俄」(形状) 7 にわか

三795 にわか パラ パラ パラ、ポト ポト ポ

トという おとがきこえました。

八308 黒うしは、にわかにかげだし、天の川へ落

ちこもうとしましたが、

九141 しほいで、ゆめをみていた人が、にわか

目をさます場面を演ずることがある。

九5410 その坂を登りますと、にわかにはっきりと明

るくなって、目がちくちくしました。

九1244 そのとき、あみがにわかにはなれました。

十一642 にわかには病氣にかかって入院したので、



十一799 ところが、五日めに、病人はにわかにな  
るくなりました。

にわかあめ 「俄雨」(名) 4 にわか雨

七七一 にわか雨は、ぐつしよりとぬらした。

七七一 ぬまの上を、にわか雨が通る。

十七2 はげしいにわか雨。

十二64 すると、にわか雨が降りだしたので、近

くの家をたずねて雨具をかりことにしました。

にわさき 「庭先」(名) 5 庭さき

八九五 庭さきにいるとき、とつぜん、上へ飛行機

でもとんでくると、そのあわてかたといったらあ

りません。

八二六 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つば

きの木の根もとにうめてやりました。

十二五 病院の庭さき。

十二72 少女はなにを思ったのか、ふと庭さきに

さいていた黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、

十四六七 茶わんの上や、庭さきでおこるうずのよ

うなもので、もっと大じかけなものがあります。

にわそうじ 「庭掃除」(名) 1 庭そうじ

七七〇 くれがたの庭そうじ、それがすむのをまっ

ていたのか、すぐうしろに、月は、音もなく、

のっそりとでていた。

にわとこ 「庭常」(名) 1 にわとこ

八九六 にわとこの木でさえ、新しいはくちょうの

まえに枝をたれた。

にわとり 「課名」2 にわとり

四二三 二 にわとり……十四

四四 二 にわとり

にわとり 「鶏」(名) 18 にわとり

四四二 にわとりが、かぶのはっぱを たべてい  
る。

四四四 風が ふくと、にわとりが ふわふわ ふく  
れる。

六四三 二 にわとりの声。

八五一 こんどは、にわとりのいる家のまえへいつ

て立ちました。

八五二 それから、かつてあるにわとりに氣をつけ

ました。

八五三 こじきのようなものがきて、にわとりをぬ

すんでいきはしないかと思ったのでしょうか。

八五四 「略」と、その家のにわとりは、用

心ぶかい声をだして鳴きました。

八七〇 みにくいあひるの子は、「略」、にわとりか

らもぶたれたり、つつかれたりした。

八七一 あひるにはかみつかれ、にわとりにはこず

きまわされ、

八七九 中には、おばあさんが、ねことにわとりと

いっしょに住んでいた。

八七二 にわとりは、足はみじかいが、いいたまご

を生んだ。

八七三 ねこはのどを鳴らし、にわとりは「略」。

とさわいだ。

八七五 そればかりでなく、ねこやにわとりとは

まったくちがった考えをもっていた。

八七六 にわとりは、「略」と、あひるの子にた

ずねる。

八八〇 あひるの子は、きゅうにおよぎたくなった

ので、にわとりに思わずその話をした。

八八二 「略」と、にわとりがさげんだ。

八八六 二 なかまに追いかけられたり、にわとりに

ぶたれたり、女の子につきのけられたり、

一九一 その下で、雨やどりをしてにわとりの  
むれ。

にわとりども 「鶏共」(名) 1 にわとりども

十一四〇 二 ほしたかばちや赤や黄や、にわ

とりどもはひなたぼこ。

にん 「人」 〇 いちにんまえ・かんにん・けんぶつ

にん・けんぶつにんたち・ごじゅうにん・ごにん・

ごにんのこども・ごにんめ・さいくにん・さんじゅ

うすうにん・さんにん・さんにながかり・さんにな

づれ・さんになめ・さんよにん・しじゅうにん・し

ちにん・じゅういちにん・じゅうにん・じゅうよに

ん・じゅうろくにん・すうにん・でかせぎにん・な

んじゅうにん・なんぜんにん・なんにん・なんびや

くにん・にさんにん・にじゅうにん・ひやくよに

ん・びんぼうにん・やくにひやくまんにん・よに

ん・よにんめ・ろくにん

にんきもの 「人氣者」(名) 1 人氣者

八四三 ちょうど十年ほどまえ、私のうちに、ピオ

という、うちじゅうの人氣者がいました。

にんぎょう 「人形」(名) 33 にんぎょう 人形 〇

おにんぎょう・つちにんぎょう・むしやにんぎょ

う・ゆびにんぎょう

五八二 二 これはかわいいにんぎょうだ。

十二三三 サリバン先生は、「略」あくる朝、私を

おへやに呼んで、一つの人形をくださいました。

十二三三 私がいばらくその人形と遊んでいますと、

先生は、私の手に、「人形」という文字をつづら

れました。

十二三三 「人形」という文字をつづられました。

十二三三 私はい「略」二階から母のところへかけお

り、指さきで人形という字をつづってみせました。

十二三三 ある日、私が新しい人形を持って遊んで

いますと、

十二三四 サリバン先生が、ほかの大きな人形を私

のひざの上において、

十二34 10 「人形」という字をつづりながら、

十二35 6 こんどは、二つの人形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。

十二35 7 私は〈略〉かんしゃくをおこして、新しい人形を手にとって、ゆかにたたきつけました。

十二35 9 そうして私は、くだけた人形のかけらを足さきを感じながら、ゆかいに思いました。

十二38 4 へやに帰るとすぐ、私は、自分がこわした人形のことを思いだして、

十二43 5 こんどこのまの人形が、動きだしそんな気がするんだけど——

十二43 8 図 おじさんからいただいた童話の本に、人形が夜中に集まっておどろだす話がありましたよ。

十二43 10 図 この人形だって、みんながねはずまつたあとで、動いているのかもしれないよ。

十二44 3 図 さあ、人形にきいてごらん。

十二44 3 図 はははは——でも、動く人形だってあるよ。

十二44 5 図 人形しばいって、人形がしばいをするんですか。

十二44 7 図 その人形などは、〈略〉、まるでたましいがはいっているように動くよ。

十二44 12 図 人形つかいといわれる人がいて、〈略〉、三人がかりで一つの人形を動かすんだ。

十二45 3 図 人形はものをいわないが、そのかわり説明がついている。

十二46 4 図 影絵ってやっぱり人形のしばいですか。

十二47 5 図 命のない人形を思うままに動かして、喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。

十二48 10 図 簡単な人形の作りかたを教えてあげよう。

十二53 8 二 人形のつかいかた

十二53 11 2 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔や頭がみえないようにする。

十二54 2 3 人形がかたむかないように、話すときは人形の顔を前後に動かす。

十二54 2 話すときは人形の顔を前後に動かす。

十二101 4 この人形は、はにわといって古代人のはからほりだされたものです。

十四91 6 その男の子は、これは人形のゆりかごにはもってこいだと思っただけであらう。

十四98 6 いく百もの小さな人形が見おろして、マツチ賣りのむすめを見てわらいかけた。

十四98 7 女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。

十五66 4 せつくがくるごとにその人形をかざってにんぎょうあやつり「人形操」(名) 1 人形あやつり

十三34 3 ホーソンの廣場などに、かげ絵の舞台をこしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。

にんぎょうしばい (課名) 2 人形しばい

十二31 1 五 人形しばい……四十三

十二43 1 五 人形しばい

にんぎょうしばい「人形芝居」(名) 5 人形しばい

十二44 4 図 一雄くんは、人形しばいをみたことがあるかね。

十二44 5 図 人形しばいって、人形がしばいをするんですか。

十二44 7 図 日本には、文楽といって、りっぱな人形しばいがある。

十二47 1 図 人形しばいって、いろんな國にいろんなものがあるんですね。

十二48 2 図 ところで人形しばいが、これは人間にできないことでも平気でやれる。

にんぎょうつかい「人形遣」(名) 1 人形つかい

十二44 11 図 人形つかいといわれる人がいて、〈略〉、三人がかりで一つの人形を動かすんだ。

にんげん「人間」(名) 33 にんげん 人間

三108 5 図 これはただの にんげんではあるまい。

八17 3 人間のあかんぼが、したのさをじようずにつかつてちちをのむのと同じように、

十33 11 人間の衣食住というのは、みんなたいせつなものであるから、

十61 11 たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きくなります。

十65 5 いたずらをしたり、また、とんでもないへまをやったり、だまされたりなど、よいい人間のしそうなことを、なんでもやります。

十二45 8 図 人間のしばいとちがつて、みていると別世界にいったような楽しい気がするよ。

十二46 10 図 これに光をあてて影絵にしてみせるのだが、人間ばかりでなく、動物などもでくる。

十二47 2 図 だいたい人間には、〈略〉、心にあることを、なにか美しいものであらわそうとする気持ちがある。

十二47 4 図 だから、人間がいるところには、かならず詩もあれば、絵もある。

十二47 8 図 でも、生きた人間のほうがうまくやれるし、それに便利でしょう。

十二47 10 図 便利とか不便だけで物事を考えないところに、人間の美しさやおもしろさが生まれてくるのだ。

十二48 2 図 ところで人形しばいだが、これは人間にできないことでも平気でやれる。

十二483 図 それに、人間みたいに不平やわがままをいわないからね。

十二582 もしそれができたら、毎年ひとりずつ、おにに人間をくわせてやるというのであった。

十二11210 そのころまで、人間のからだはどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、

十四49 フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

十四329 星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、じつは、ふかいつながりがあるのです。

十四3210 人間は、星によってみちびかれ、星によって生きている

十四3412 人間などは、バクテリアよりも、もっともっと小さなものに感じられるかもしれません。

十四352 大うちゅうから見たら、〈略〉人間は、バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。

十四355 そのバクテリアにもおとる小さな人間が、引力の法則を発見したり、うちゅうの大きさを計算したりするではありませんか。

十四356 これを思えば、人間の力というものは、うちゅうにも負けないくらい廣大で、

十四376 人間がだいいちにしなければならぬことは、なんであるかということも、

十四6012 人間が来て、まいてくれたのだった。

十四611 図 人間がいなかったら、また、その人間がせわをしてくれなかったら、私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。

十四612 図 その人間がせわをしてくれなかったら、

十四618 図 このかばちは、お札に、すっかり人間にあげてしまっても、さしつかえないと思いが、

十五94 図 うまよ人間のかさから耳をだして

十五787 ひとりの人間にとって真実であるものは、他人にとっても真実だからである。

十五965 図 けれども、ふつうの人間には、それが見つけられないのだよ。

十五1125 図 けれど、人間には見えないのさ。

十五1125 図 人間というものは、目を閉じていると、なんにも見えないのだからね。

十五11512 図 人間が地上に住みついてからこのかた、いつもたずねあぐんでいた道が、どうしてわかつたの。

にんげんびょうどう 「人間平等」(名) 1 人間平等

十五7412 それで、世界平和、人間平等という理念が、ここからわいてくるのだ――

にんげんらし「人間」(形) 1 人間らしい 《一イ》

九236 この國の人々が、あわれなこの小鳥たちにしめしたもつとも人間らしいあたたかい気持は、

にんげんわざ 「人間業」(名) 1 人間わざ

十二577 すばらしい大きな石だんで、とても人間わざではない。

にんじん 「人參」(名) 5 にんじん

七878 うさぎは、にんじんを、とても喜んでたべました。

七882 にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白が、けんかをしてたべました。

七885 はこべとおおばこをやったら、にんじんをやったときのように、喜んでたべました。

七977 そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。

にんず 「人数」(名) 1 にんず

七167 図 はん長は、めいめいのはんのにんずをかぞえたかね。

ぬ

ぬ 「完了」(助動) 11 ぬ 《ニヌ》

九282 文 図 朝つゆの中に自轉車のりいれぬ

九294 文 図 かやごしの電燈のたまみておりぬ

九1162 文 図 階上のわが電燈のきえにけりみわたす家々みなまくらなり

十五44 文 図 空にはなちし わがそ矢は、あわれいずこに 落ちにけん。

十五51 文 図 空にとなえし わが歌は、あわれいずこに 落ちにけん。

十五55 文 図 遠くそののち かの木に、矢はまだおれで とどまりぬ。

十五57 文 図 歌のもと末 ふたたびも、友の心にあらわれぬ。

十五72 文 図 うしはずかにのおのの大きな耳をむけぬ

十五115 文 図 わか草のはつかにもゆる庭に来てすずめあさりととなりへとびぬ

十五117 文 図 ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガラス戸すきてたためにうつりぬ

十五136 文 図 照る月の位置かわりけん鳥かこの屋根にうつりし影なかりぬ

ぬ 「打消」(助動) 98 ぬ 《ヌヌ》 1 おもわぬ

三939 よごさずにかわいがってください。

四555 その夜は、さいわい、雨もふらず、風も



十二75 ㊦ おひとりですらしていられるかと思う

と、どうしてもこずにはいられませんでした。

十二83 9 目にもとまらぬボールが、ネットの上を

右に左にと、ゆききました。

十二95 1 赤とんぼはとらずに、花を手にいっぱい

つんで帰ったことを思う。

十二113 10 汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、

日に日に進歩しています。

十三4 9 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木の

めのむれは、

十三7 1 さかんな春のきざしは、よにもあらわれ

て、目に見えぬかすみのようにたなびいている、

十三7 2 どこともしれぬ方角の、遠い、はるか

空のおくで、鳴いているからすの声も、

十三9 10 知識が開けず、科学の進まないところに

は、迷信が行われる。

十三10 10 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、

十三10 11 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、

この考えのまったくあてはまらぬことは、

十三12 1 知識によらず道理によらず、いたずらに

理由のないことを信ずる迷信は、

十三12 1 知識によらず道理によらず、

十三15 10 ガリレオも、〈略〉、だまっていられず、

本を書いて、地動説を強くとなえました。

十三16 1 そのため、ガリレオは、ローマに呼びだ

されて、自分でも信じてはならぬ、人にも説いて

はならぬといわれました。

十三16 1 人にも説いてはならぬ

十三16 3 やむを得ず自分の説はあやまりであった

ということにして、ゆるしてもらいました。

十三21 1 実際に試験してみると、もみの木ははえ

るが、数年ならずしてかれてしまいました。

十四54 2 ㊦ 養分をこしらえる力をかまわずに、あ

なたがたが、かつてに花をさかせたからです。

十四61 7 ㊦ しかし、いちばんいい種を、來年もわ

すれずにまいでもらうことができさえすれば、

十四72 8 その光が同じようにならず、むらになっ

て、茶わんのそこを照らします。

十四80 11 ㊦ あぶはちとらず。

十四81 7 ㊦ ころばぬさきのつえ。

十四82 9 まかぬ種ははえぬ。

十四82 9 まかぬ種ははえぬ。

十四82 9 ㊦ 世の中は、三日見ぬまのさくらかな。

十五14 2 ㊦ 大きなるべにばらのひと花思わぬを

ゆららにあかく開き満ちたる

十五27 2 女の子を元氣づけるために「〈略〉。」と

いわずにはいられませんでした。

十五27 5 女の子は、〈略〉おどろいて氣でも失っ

たのか、すこしもさががず、あばれもせず、じっ

としています。

十五27 5 あばれもせず、じっとしています。

十五29 8 大わしは〈略〉、きずのいたみもかまわ

ず、〈略〉少年にとびかかって來ました。

十五31 3 大わしは、この思わぬいたでにおどろい

て、ぱつと一まず舞いたちました。

十五44 10 「たいへん焼物がおすきのようですが、

あなたは——」と、あいさつともつかず、返事と

もつかない答えかたをした。

十五70 4 せきあえぬなみに目をくもらせたおば

さんが、「〈略〉。」とおっしゃった。

十五74 7 それによって兄が特権を與えられねばな

らないという理由はすこしもない。

十五80 4 それ以前は、おたがいに他の國々のこと

はわからず、世をすごしてきたばかりでなく、

十五81 2 天は、人のうえに人をつくらず、人のし

たに人をつくらず。

十五81 2 人のしたに人をつくらず。

十五82 12 ねこは、ひとことも口をきかず、〈略〉

黒いまくをあけて、すがたをかくしてしまいます。

十五108 9 ㊦ あれは、人がまだ知らずにいる『喜

び』たちです。

十五118 11 ㊦ 私は、もうなにもおそれず帰って來ま

す。

ぬ 4 ヌ ぬ

四75 5 ぬ——ぬれたものはほせ。

六11 3 ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだけ

である。

六11 6 ㊦ そこで、あらためて声をだして「ヌ」と

いつてみた。

六11 9 ㊦ 「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。

ぬいつける「縫付」(下二) 2 ぬいつける《—ケ

ル》

十二53 2 (3) 顔は、着物のすそからさかさにいれ

て、首を着物にぬいつける。

十二53 5 (4) 手は、手さきのほうをいれて、穴に

糸を通してぬいつける。

ぬう「縫」(五) 4 ぬう《—ウィツ》

九113 10 林をぬって長いきよりをすべるのは、ほん

とうにゆかいであった。

十34 6 はじめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、

たて糸のあいだをぬっていく横糸であった。

十二52 11 (2) 二まいあわせて、㊦の点線のところ

をぬう。

十四50 2 やがて、一そののボートが、やみをぬっ

て助けにきてくれました。

ぬか「糠」(名) 1 ぬか

十四827 ぬかにくぎ。

ぬき ぬけぬき・すっぱぬき

ぬきあししあし 「抜足差足」(名) 1 ぬき足さし足

十681 ふたりは、それをあいずのようにして、ぬき足さし足で、そつとおくのへやに近づき、

ぬぎかえる 「脱代」(下二) 1 ぬぎかえる 《一エ》

八192 かぶとむしの子どもたちは、《略》、わずかに二三ヶ月で大きくなって、皮をぬぎかえて地の上へでていきます。

ぬぎさる 「脱去」(五) 1 ぬぎさる 《一ツ》

十564 いままでの作文のからをぬぎさつて、新しい世界にふみだしていこうと思います。

ぬきとる 「抜取」(五) 1 ぬきとる 《一ツ》

十679 次郎かじやは、こしからぬきとつたせんすを、さらりと開きました。

ぬく 「抜」(五) 3 ぬく 《一イ》 ↓ かんがえぬく・きりぬく・くりぬく・たたかいぬく・ひきぬきにくい

四865 だいこんをぬいていると、みそさざいが、《略》。とないた。

十一62 ぬき みるみるうちにぬいてをぬいてしまふ十五289 こしにさしていた短刀をぬいて、

ぬく 「脱」(五) 7 ぬく 《一イーギング》

二177 ぬれたきものをきて、かわくとぬくものはなかに。

三114 かぐやひめは、《略》、きていたうわぎをぬいで、おばあさんにわたしました。

八205 そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日まつのです。

九697 やまねこは、黒いしゅすの服をぬいで、

十563 かいこが、皮をぬいで新しく成長していくように、

十三3811 その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるくるまわしながら、楽しそうにやうす。

十五82 ぬき みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山ふかく

ぬぐい ぬてぬぐい

ぬぐう 「拭」(五) 2 ぬぐう 《一イーワ》

九698 やまねこは、《略》、ひたいのあせをぬぐいながら、いちろうの手をとりました。

十一1711 かなしみもいたみも、あとなくぬぐわれ

ぬけがら 「抜殻」(名) 1 ぬけがら

八257 あぬけがらだけは、いつまでもささだけにかたくすがりついています。

ぬけだす 「拔出」(五) 4 ぬけだす 《一シーソ》

四625 みると、なかまのがんが、へびからぬけだそうとして、もがいているところ

四6210 そのひまになかまのがんは、するりとぬけだしました。

九8910 ふたりともむきになって、友だちの手からぬけだそうともがく。

十一76 ぬき 一本バックをやると、ボートは向きをかえて、あぶないところからぬけだして、

ぬける 「抜」(下二) 10 ぬける 《一ケ》 ↓ かけぬける・きりぬける・とりぬける・ふきぬける

四903 おかっから はきはじめて、かいどうへぬけて、おとなりまではいていく。

六325 てっぺんのぬけたかんかんぼうしがふきとばされる。

六114 ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだけである。

六1117 これもはなから声がぬけているようだ。

七776 ぬき そうそう、そのらくだは、まえ菌が二三本ぬけてはいませんか。

七8111 ぬき らくだのまえ菌が、二三本ぬけていることまで。

七8310 ぬき では、まえ菌のぬけているということは、なぜわかったのか。

七842 ぬき それで、菌が二三本ぬけているにちがいないと、考えました。

七955 けさ、いつてみたら、左がわのへやに、毛がたくさんぬけていました。

十504 黒いぬに近づいてみると、ひふ病にかかっていて、顔のあたりの毛が、ぬけていました。

ぬける 「脱」(下二) 1 ぬける 《一ゲ》

十四9010 それをさけるために、急いで道を横ぎったときに、その上ぐつはぬけてしまった。

ぬし 「主」(名) 4 ぬし 主 ↓ すくいぬし

五753 ぬき こんどは、海のぬしになりたい。

五766 ぬき 海のぬしになりたい、ひろい海で、あなたをけらいにしたいといっています。

十五6811 「おじさんが生きていたら、《略》——」

十五6911 その写真の主が、こうしておじさんを見てあげているのに、おじさんの声は聞えないのだ。

ぬすむ 「盗」(五) 3 ぬすむ 《一ン》

七824 ぬき らくだをぬすんだのは、この男にちがいない。

七852 ぬき らくだは、あなたがぬすんだのではない。

八532 こじきのようなものがきて、にわとりをぬすんでいきはしないかと思ったのでしよう。

ぬの 「布」(名) 9 ぬの ↓ ほぬの

十3312 ぬのを織るしごと、けつしてゆるがせに

してはおかれない。

十341 いまのようなぬの織りかたをしていたのでは、やがて、困るときがくるにちがいない。

十345 はじめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、たて糸のあいだをぬっていく横糸であった。

十349 機械で動かせば、〈略〉、ひとりでに、ぬのがずんずん織られていくからである。

十367 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎな機械に目をみはりながら、

十3612 試運轉の日、その織機をあやつって、りっぱにぬのを織ってみせたのは、佐吉の母であった。

十二811 母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切つてしまいました。

十四634 日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬのでもおいてすかして見ると、

十四9612 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴか光るさらをならべたテールブルが見えた。

ぬま 〔沼〕(名) 7 ぬま

四438 ゆうべは、ぬまのきしの、よしのきれいにしげったところで、ねむつたのでした。

七714 ぬまの上を、にわか雨が通る。

八723 大きなぬまのあるところへやつてきた。

八7210 ぬまの水をのませてもらいたいとも思ったが、それもゆるしてもらえそうもなかった。

八7311 二わのがんは、ぬまの中に死んで落ちた。

八744 かいうどは、ぬまのまわりにまちぶせをしていた。

八882 ひばりが歌いだしたとき、あひるの子は、ぬまの草むらの中で横になっていた。  
ぬまち 〔沼地〕(名) 2 ぬま地  
八747 かいいぬが、ピシヤ、ピシヤとぬま地へはいつてきた。

八765 できるだけ早くぬま地をにげていった。

ぬらす 〔濡〕(五) 2 ぬらす 《ーシ》  
六124 たぬきさんは毛をぬらしてなにかあわています。

七712 にわか雨は、ぐっしよりとぬらした。

ぬり じくろぬり  
ぬりつける 〔塗付〕(下二) 1 ぬりつける 《ーケ》

十二169 カンパスの上にぬりつけてみると、思いもよらない色になってしまう。

ぬりつぶす 〔塗潰〕(五) 1 ぬりつぶす 《ーシ》  
六1182 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、

ぬりなおす 〔塗直〕(五) 1 ぬりなおす 《ーシ》  
十二1611 かきなおし、ぬりなおして、かいていくうちに、ひととおりできあがった。

ぬりはじめる 〔塗始〕(下二) 1 ぬりはじめる 《ーメ》

十二166 下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。

ぬる 〔塗〕(五) 7 ぬる 《ーッ・ーリール》  
九43 白い紙に赤い色をぬりますと、明かるい感じになります。

九44 この赤い色のそばに黄色をぬりますと、

九47 黄色のかわりに、みどり色をぬってみると、また、ちがった感じがします。

九49 みどり色のかわりに、むらさきをぬったら、どうなるでしょう。

九52 むらさきのかわりに、茶色をぬったら、どうなるでしょう。

十二515 絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬる。

十二1108 まき絵というのは、うるしをぬったうえに、金や銀のこなをまいて、

ぬるい 〔濡〕(形) 3 ぬるい 《ーイ》

十四6411 茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。

十四653 反対に、湯がぬるいと、いきおいがよいわけです。

十四725 熱いところと、わりあいぬるいところとが、いろいろに入りみだれてできてきます。

ぬれ 〔末〕 ↓こぬれ  
ぬれ 〔濡〕 ↓ずぶぬれ

ぬれぬずみ 〔濡鼠〕(名) 1 ぬれぬずみ  
十一612 村の人たちに助けられて、みんな、ぬれぬずみのようになつて家に帰った。

ぬれる 〔濡〕(下二) 8 ぬれる 《ーレ》  
二177ぬ ぬれた きものをきて、かわくとぬぐものはなかに。

四611 どのがなんもどのがなんも、夜つゆでからだがびっしりぬれていました。

四755 ぬ——ぬれたものはほせ。

七622 さくらの木が、ぬれてゆれている。

七914 なるべく、こくるいをするようにして、ぬれた草はやらないように注意しています。

九381〔註〕 高いすぎやまつのはえているところは、〈略〉、雨の降ったあとのようにぬれています。

十一524 車内はむし暑いうえに、おたがいがぬれたからだ、おしたりおされたり

十一635 ひとりの少年が、どろまみれにぐっしりとぬれて、

## ね

ね〔題名〕1 根

十二642 根

ね〔音〕7 音

七644 ふえの音、虫の声、三日月さん。

八295 そのすがたといひ、〈略〉、ふえの音といひ、申しぶんのないけだかさがこもっています。

九634 すずの音は、かやの森にガランガラン、ガラランガランとひびき、

十一135 ふえの音は、長くおをひいて消えていく。

十一377 罫 こずえをかけるもすの音も、すむ秋空によくひびく。

十三361 はとがむれになってとんで来ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、

十五213 朝風にひびくすずの音、

ね〔根〕(名)29 根 ↓つけね・やのね

六363 根の方へおりていらつしやい——ああ、またふいてくるよ。

八1511 そこは木の下ですから、大小の木の根が、からみあい、かさなりあつてはえています。

八161 あおぎりの根ばかりではなく、あたりの木の根ものびています。

八162 あたりの木の根ものびています。

八163 だから、虫たちが、いいかげんにすすんでいっても、なにかの木の根にいきあたります。

八165 虫たちは、〈略〉、手ごろな、皮のうすい、しるの多い木の根をさがしてあるきます。

八167 その口のさを根の中につきさして、木の

しるをすいはじめます。

八194 ほそいくだのさきから、木の根のしるをわずかずつすっているせみの子たちは、

八1911 せみの子たちは、はじめにはあさいところにおいて、ほそい木の根のしるをすっています、

八964 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。

八985 いねがよく根をはって育つように、

八1006 根が横へはるので、廣いところのほうが育ちがよいと思いました。

九347 ちよまの根は、ふといごぼうのようで、

九349 それが、深いになると、一メートルあまりも根をはっていました。

十二646 葉は青く、くきは長く、みきは高くそびえているが、根はちつともみえない。

十二649 しかし根はちつともみえない。

十二651 根のさきは毛より細い。

十二656 のびていく根のさきをささざるものはない。

十二661 おおづなのようなたくましい根が、深くのびてみきをささえ、廣くのびて枝をやしない、

十二664 それからでた細い根が、つなのようにからみあつて、葉を育て花をさかせる。

十二667 根はみえない。

十二669 深くて長い根の上に、みことな草や木がしげっていく。

十四518 こういいたしたのは、根のしるしをつけた老人でした。

十四526 根や、つるや、葉のないかぼちゃはありませんが、それだけでは実はずきません。

十四548 それは、大部分、根の私が、土の中か

ら吸いとって、送ってあげたものです。

十四5412 そこへ細い根をのぼして、水と養分とを吸いとって、夜も晝も送ってあげるのは、

十四5811 いまのお話の養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。

十四6011 しばらくして、根がいました。

十四6111 花も、葉も、根も、みんな賛成しました。

ね〔寝〕↓ひるね

ね〔感〕2 ね

六736 ね、おとうさん。

九897 ね、やまだくん。

ね〔終助〕28 ね

一119 も おなじでしたね。もう 一ど やりま

一451 が あるようですね。〔「略」〕「こんな

一5210 ほしみたいですね。〔「略」〕「略」。

一578 みなおらないのね。〔「略」〕「わたくしは、か

一611 ってきたですね。〔「略」〕「おじい

一612 くごぞんじですね。ここに いるもの

二73 おもいつきましたね。では、『あさ』と

二248 いをするのですね。〔「略」〕「五 おはなし

二394 、ずいぶん 高いね。〔「略」〕「よくここ

二4210 」。たろう「ごめんね。山びこ「ごめんね

二431 「山びこ「ごめんね。たろう「ぼくが

二435 やるとおりですね。〔「略」〕「さあ、も

二461 りをのせて いるね。〔「略」〕「略」。

二607 て やりましょうね。〔「略」〕「九 春をむか

二632 な、そろいましたね。みんな「そろいま

二604 どこへいこうかね。とおききにな

二628 んなそれで いいね。〔「略」〕「みんな

二667 まい かんがえだね。と、ジュデーが

三696 らたきへ でしょうね。それから みんな

三752 ら やって きたのね。〔「略」〕「そのう



三832会 い色にするからね。」そのとき、おか  
 四173 星さん、よく光るね。わたしが手ぬぐ  
 四234手 く星をみましたね。にいはんは、こん  
 四238手 にいきましようね。ぼくは、大きく  
 四246手 半年もたちますね。きのうのゆうが  
 四265手 いってもきれいな。まっ白な おさら  
 四266手 めさまのようですね。」たみおさんは、「  
 四269手 きみはよくなくね。きみのだいすき  
 四276手 けっこをしようね。林のむこうの一  
 四277手 けっこをしようね。」としおさんは、「  
 四355会 てあげたのですね。」「略。」「略。」  
 四357会 とぼが ありますね。」「略。」「略。」  
 四3810会 略。」「そうですね。」ここまで 話が  
 四461会 ないかと思っただね。」「略。」「略。」  
 四4610会 たいというんだね。」「略。」「略。」  
 四567会 んとによかったね、かつちゃん。」「  
 四643会 わがまま、ごめんね。」かつちゃんが、  
 四996会 「うって くれるかね。それは ありがた  
 四1013会 かって よかったね。さあ、元氣をだ  
 四1048会 なって よかったね。」かめ「お礼に  
 四1077会 き色で きれいだね。ああ、だんだん  
 五1011会 、お船もみえますね。」「略。」「略。」  
 五1066会 「ずいぶん早いね、にいはん。」「略  
 五137会 このつぎの駅ですね。」「略。」「略。」  
 五244会 、それはよかったですね。それでうれしかっ  
 五253会 でうれしかったのね。」「略。」「はる  
 五282会 きちか、早かったね。」しんきちくんの  
 五286会 「どうしたのだね。」「略。」「略。」  
 五292会 のほんなことかね。」「それはこうなん  
 五307会 うにすまなかつたね。きみは、ときどき  
 五308会 うことをやるのかね。」ときいたので、  
 五3610 や、動物がみえますね。これは大むかしの

五533会 ばん星みつけたのね。えらいわね。」と  
 五533会 たのね。えらいわね。」といっ、手を  
 五538会 た。「ああ、あれね。だいたい色の大き  
 五545会 さんは目が早いね。」そこへ、となり  
 五587会 ってきたいなものね。」「略。」「私たち  
 五602会 れいにさきましたね。いい色ですこと。  
 五604会 るようにみえますね。」「略。」「略。」  
 五606会 をまいたのですね。」「略。」「略。」  
 五609会 なにさいたのですね。」「略。」「略。」  
 五628会 きれいなきゅうりね。おかあさん。」「へ  
 五727会 氣でもちがつたかね。女王さまのような  
 五781会 やあ、きれいでですね。だれがいてくれ  
 五8410会 字びきができますね。」と、先生がおっ  
 五902会 ぎをなさいましたね。あれはどうしてで  
 五947会 すずめの子らしいね。」「略。」「略。」  
 五959会 ってやりましようね。」さんちゃんは大  
 五968会 ようになりましたね。かごから出して、  
 五971会 やあ、もうすこしね。」そういつている  
 五999会 になったようですね。」「略。」「おとう  
 五1059会 もげいができるのね。」さんちゃんのお  
 六1911会 かながよくあつたね。」「チェロの「ほん  
 六1910会 んくをいきましたね。こんな楽しいとき  
 六1911会 二どとありませんね。」しきしや「おい  
 六243会 そぼうというんだね。楽しむために生き  
 六265会 てこなければいいね。ふぶきはいやだか  
 六2611会 おいて、よかったね。」あり「「ほんと  
 六273会 日あせだくだったね。」あり「「そのお  
 六295会 「しばらくでしたね。」あり「「お元氣で  
 六302会 「「かわいそうだね。」あり「「三花のみつ  
 六363会 子どものかわいさだね。かわいそうに。根  
 六3811会 、かわいさんですね。どうしたの、いつ  
 六445会 て帰ったんだろうね。」子がらす「「おと

六519会 が早く走っているね。」と、よしおがい  
 六533会 っているといつたね。みちこさんは雲が  
 六552会 が走っているんだね。」「略。」「と、み  
 六553会 るとよくわかるのね。」と、みちこも感  
 六705会 ま、歩きだしそうね。」「略。」「略。」  
 六711会 あ、よくできたのね。」「略。」「これを  
 六7110会 しました。」そうね。はるえさんのいう  
 六7110会 さんのいうとおりね。雪だるまはお話は  
 六7211会 えこんでいるんだね。」おとうさんにた  
 六775会 みんな生きものだね。」「略。」「略。」  
 六776会 息もしていませんね。」「略。」「略。」  
 六777会 ものではないからね。」「略。」「いぬは  
 六785会 しい大きな問題だね。」とおっしゃいま  
 六807会 のをとっていますね。」「ほでりの「そう  
 六912会 」。海の神「なんだね。」女「門の木の上  
 六10310会 まあ、よくみえるね。でも、さかさまじ  
 六1202会 、よくできましたね。」と、ほめてくだ  
 六1242会 「たくさんとれたね。ぼくにもちようだ  
 六1383会 たら、もう安心だね。」「略。」「五ひき  
 七143 143 いものを手にいれたね。」「略。」「略。」  
 七168会 んずをかぞえたかね。」「はん長「はい。」  
 七172会 よくおぼえていたね。風の日は、ち  
 七173会 よくでるのだったね。さあ、出発しよう  
 七178会 」。女の子「「そうね。」女の子「「なぜか  
 七186会 油をとるんだからね。てんぷらは、これ  
 七193会 でなかつたんですね。」女の子「「それに  
 七204会 。よく知っているね。」きしもと「私のう  
 七209会 で知っているんだね。」女の子「「あつ、  
 七215会 わかれて、そつとね。」「子ども「はい。」  
 七237会 それもお勉強ですね。あなたは、きょう  
 七2311会 一まいとつてきてね。ぼくは、びんの中  
 七252会 大きくならしましたね。たまごをとつてし

七259 同色になったのね。どうして、はっぱ  
 七276 おっしゃいましたね。なんでも、自分で  
 七277 けていきましようね。」はおさなぎを  
 七2710 うかわるでしようね。」兄「観察日記に、  
 七291 「それはよかったね。どんなふうに書い  
 七315 るお」ほんとうだね、にいちちゃん。」母  
 七311 いなしるがでそうね。」母「おあさんも  
 七322 うのおたんじょうね。」兄「羽をふるわせ  
 七324 こしずつのびるのね。」なごやかな音楽  
 七327 んとう——ひげだね。」はお「あかんぼ  
 七329 ほんとうにきれいなね。おあさん、花よ  
 七329 ん、花よりきれいなね。」はお「ふしぎだ  
 七331 してやりましようね。」母「それがいいわ  
 七362 ともはいれないね。」私は、ほんとう  
 七751 へいったのさうね。」乙「ちよつとのま  
 七781 た荷がありましたね。」甲「ありました  
 七814 、知っているのかね。」乙「はい、知って  
 七810 だ、知っていたかね。」乙「はい、知って  
 七828 いいぶんがあるかね。もしあるなら、こ  
 七834 してわかったのかね。」旅人「それは、こ  
 八384 なたはお金持ですな。」と、そのみ知ら  
 八622 んなそろつたろうね。」といながら、  
 八628 ろした。「どうだね、どんなふうだね。  
 八628 ね、どんなふうだね。」と、たずねてき  
 八6211 なかわれないのね。」「略。」と、年  
 八632 うたまごはどれかね。」と、年よりのお  
 八673 いってあげるからね。だが、わたしのそ  
 八674 そばにくつてね。人にふまれないよ  
 八675 ねこに氣をつけてね。」そこで、みんな  
 八6810 だけはしくじったね。」といった。する  
 八727 ずいぶんみにくいね。」と、かみがいつ  
 八737 なる考えはないかね。きみはみつともな

八7910 ださないでほしいね。」すると、ねこが  
 八814 いい氣持ですからね。それに、水の中へ  
 八822 だれにわかるのかね。わたしのことは  
 八824 っていないだろうね。うぬぼれてはいけ  
 八831 して勉強するのだね。」「略。」「略。」  
 九401 て、氣をつけてね。氣をつけてね。」  
 九401 ね。氣をつけてね。」とか、「略。」  
 九585 た。「うまいですね。四年生だってあん  
 九686 ないのがえらいとね。」やまねこは、な  
 九717 なんだかへんですな。それは、やめたほ  
 九808 っとわかりませんね。もし、手あたりし  
 九813 それがよくさうだね。それではまず、一  
 九821 にあるのと同じだね。」「略。」「略。」  
 九832 ろう。針みたいだね。」「略。」私はか  
 九838 、よくみつけたね。あとでよくみてあ  
 九843 ました。「これかね。これはじょうもん  
 九1011 ばだと思ふもんだね。なんだか、いま考  
 九1027 そう、してもいいね。」たかぎ「じゃあ、  
 九1053 「みんなそろつたね。さあ、でかけよう  
 九1366 だい、なんの用かね。」「略。」「なんだ  
 九1425 あさんじゃないかね。」おあさんとき  
 十218 雨がはれてきれいなね。」窓に花のはちを  
 十5710 になるとかわいそうね。いちようの葉  
 十一98 「大きな船だね。きつと遠くへいく  
 十一910 ずかしいだろうね。」「略。」「略。」  
 十一102 人になるだろうね。」「略。」「略。」  
 十一252 うにしましようね。」といあいまし  
 十一616 たのではないかね。」とたずねた。し  
 十一6210 わなかったのだね。」「略。」「略。」  
 十一731 になりますからね。」看護婦は、ほか  
 十一837 ここにいたのだね。どうしてこんなま  
 十一849 、いかないかね。」と、父親はあき

十一864 かのかたですがね。」と、看護人が答  
 十一877 じきまたあえるね。」父親はそういつ  
 十二115 いそうですからね。」と答えました。  
 十二178 色になりましたね。」「ああ、こおろぎ  
 十二197 だったでしようね。」「略。」「略。」  
 十二199 きていますからね。一年一年とすんだ  
 十二204 じゃないですね。」「略。」「略。」  
 十二212 やだめでしょうね。」「略。」「略。」  
 十二2710 へいきましようね。」といつて、民ち  
 十二287 にいきましようね。」たもとをひいて  
 十二437 「——「さうだね。おどろかしそうに  
 十二437 しそうにみえるね。」「略。」「略。」  
 十二444 たことがあるかね。」「略。」「略。」  
 十二446 が動かすんだがね。日本には、文樂と  
 十二457 しろいでしようね。」「略。」「略。」  
 十二468 はとくに有名だね。牛皮を切りぬいて  
 十二471 のがあるんですな。」「略。」「略。」  
 十二481 ころがあるからね。ところで人形しば  
 十二484 をいわないからね。」「略。」「略。」  
 十二485 りや、さうですね。」「略。」「略。」  
 十二488 でもやれるからね。きみもひとつ、作  
 十三385 ……こんどの日曜ね。(わらつて) いら  
 十三394 だったでしようね。……四十日も……手  
 十三396 ……はい、四時ね。おあさんに……  
 十三397 帰ってくださいね。……(わらう。) だ  
 十三401 ……さうだつてね。四十日の旅じやつ  
 十三423 が。しんせつだね。……え、ぼくに……  
 十三428 の手紙を書こうね。……うん、おみやげ  
 十三438 て来たんだつてね。よかったね。よか  
 十三439 てね。よかったね。よかったなあ……  
 十三551 ああ、よく来たね。なにかおもしろい  
 十三5710 「さう思ふかね。いかにも、おあ

十三5711会 よく出ているね。絵は、写真で見た  
 十三587会 くちやだめですね。「略」。おじさ  
 十三588会 「まあ、そうだね。それはそうとして  
 十三593会 れはどう思うかね。」それは、せい  
 十三596会 じがちがいますね、おじさん。なんて  
 十三5910会 かな感じがするね。この絵は、たいへ  
 十三613会 もわかるだろうね。なんといつても、  
 十三617会 強を続けるんだね。きつと先生も、そ  
 十四184会 とは英語だってね。ゆうべ、にいさん  
 十四199会 っとおかしいわね。「略」。「略」。  
 十四535会 張なさいましたね。しかし、どうして  
 十四537会 じないようですね。それは、私が、い  
 十四578会 いていましたね。あなたがたは、自  
 十四616会 にはいえませんね。公平にいつて、み  
 十五444会 物そっくりですね。」と、じょうずな  
 十五716会 喜ばせましたね。」とおっしゃった。  
 十五855会 たのじゃないかね。」チルチル「あの人  
 十五8512会 い人たちだからね。きつと、おまえさ  
 十五864会 れてしまふからね。」チルチル「どうし  
 十五899会 しい数ですからね。(ふたりの子ども  
 十五905会 じないでしょうね。幸福「青い鳥と  
 十五906会 幸福「青い鳥とね。はてな。そうそ  
 十五9112会 かい女はだれだね。」こんな話をして  
 十五931会 いたいのですね。」チルチル「なんだ  
 十五938会 できませんからね。」幸福「ほら見た  
 十五985会 えるものだからね。」チルチル「まん  
 十五989会 がないのだからね。あの子たちが青い  
 十五991会 く短いのだからね。」また、もう一つ  
 十五997会 に知られてくるね。(幸福に向かい)  
 十五1015会 知らないのですね。ぼくは、あなたの  
 十五1045会 名ものですからね。その名はすなわち  
 十五1048会 おぜいすぎますね。もうよしましよ

十五1076会 しまったのですね。でも、それを妹に  
 十五1079会 うわけですからね。さてここに、『い  
 十五1107会 はないのだからね。そのうえ、毎日、  
 十五11010会 えるのですからね。」チルチル「それに  
 十五11111会 光がさしてきてね。」チルチル「おもし  
 十五1127会 えなないのだからね。母親はだれだつて  
 十五1142会 、光がさすのね。」チルチル「ふしぎ  
 十五1148会 、わかるだろうね。」チルチル「ぼく、  
 十五1153会 とるためだからね。わかったかね。チ  
 十五1153会 ね。わかったかね。チルチルや、おま  
 十五1159会 さんなのだからね。おまえたちは、お  
 十五1169会 てくれるそうだね。でも、なんで、あ  
 十五1176会 『光』なんですね。私たちは、ちつと  
 十五1193会 しんせつでしたね。」光「私は、愛しあ  
 ね(間助) 17 ね  
 二71会 「あのね。」といました。  
 三768会 丘をこえてね、よその 國へ いくんで  
 すよ。  
 四457会 でもね、つらいんだよ。  
 五233会 あのね、帰りの電車はともこんでいた  
 んです。  
 五612会 でもね、そのたねからめがでなかったら  
 六537会 でもね、雲をじつとみていてごらん。  
 六1093 会 「あのね」の「ノ」と「ネ」、  
 七287会 きょうね、國語の時間に、先生にほめら  
 れたの。  
 八638会 わたしも、一どそれでだまされたことが  
 あつてね、そのひなには苦労したよ。  
 十一855会 だがね、やつぱり、いちばんだいじで、  
 むずかしいのは、コックスだろう。  
 十三419会 おばさんがね、こんどの日曜、きみを

お客さんにして、ハイキングにつれて行くって…  
 十三567会 本物はね、いま、イタリアのプロレン  
 スという町の絵画館にかざつてあるよ。  
 十四198会 バケツはね、手おけさ。  
 十五4412会 私はハギンスというものですが、じつ  
 は、私のプリンクリーじいさんがね——  
 十五7011会 おじさんは、年とられてから目がわる  
 くなつてね、  
 十五884会 『必要以上にねむるという幸福』でね、  
 十五1145会 うちにいるとね、あんまり用が多すぎ  
 て、ひまがないのだよ。  
 ね 5 ね  
 四7610 ね——ねずみとねこのかけっこ。  
 六1093 会 「あのね」の「ノ」と「ネ」、  
 六1095会 「ノ」、「ネ」、「ニ」、「ミ」、「ム」、と目  
 分で声をだしていつてみると、  
 六1098会 「ノ」、「ネ」、「ニ」、「ミ」、「ム」といっ  
 てみた。  
 六11011 会 「ノ」、「ネ」、「ニ」は、みんな〈略〉五十  
 音の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中には  
 いてる音ばかりではないか。  
 ねいり じひとねいりする  
 ねいろ 「音色」(名) 1 音色  
 十三303 どちらにも、小さきさまあつて、音色も  
 ちがうし、  
 ねうち 「値打」(名) 1 ねうち  
 九149 もし、きく人の心が高ければ、それだけ音  
 樂のねうちが生きてくることになるう。  
 ねえ (感) 12 ねえ  
 三591会 ねえ、大きな木のところまでのぼつ  
 てみよう。  
 五172会 ねえ、きみ。



八911 たとえば、近所のねこやのらねこが通りか  
かっても、にげるどころか、

八187 そのかわり、親たちの大てきのすずめもね  
こもやってこないから、安全です。

八215 目もよくはみえないらしいので、ねこや、  
すずめにみつけれたいへんです。

八674 人にふまれないように、それからねこに  
氣をつけてね。

八714 「おまえなんかは、ねこにくわれてしま  
えばいい。」といわれた。

八778 中には、おばあさんが、ねこにわとりと  
いっしょに住んでいた。

八7710 ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴  
らしたり、火花をだすことさえできた。

八786 ねこはのどを鳴らし、にわとりは「コッ、  
コッ。」とさわいだ。

八794 そればかりでなく、ねこやにわとりとは  
まったくちがった考えをもっていた。

八7911 すると、ねこがいう。

八816 ねこにきいてごらん。

八823 おまえさん、ねこやおばあさんよりかし  
こいとは思っていないだろうね。

十五8212 ねこは、ひとことも口をきかず、〈略〉、  
黒いまくをあげて、すがたをかくしてしまいます。

ねこかぶり 「猫被」(名) 1 ねこかぶり

十六653 かれらは、だんなのねこかぶりをあばいた  
り、いたずらをしたり、

ねこねずみ 「猫鼠」(名) 1 ねこねずみ  
四203 みんなとねこねずみをして あそびま  
した。

ねころぶ 「寝転」(五) 1 ねころぶ 《一》  
六1395 五ひきのうさぎさんたちは、あせをふいた

り、ねころんだり、足をもんだりしていました。

ねさん 「根」(名) 5 根さん  
十四523 それでは、座長の根さんのご指名で、  
私から申します。

十四546 「いや、どうか根さんから。」  
十四5512 私は、こんなに長いばかりで、花さん  
や、葉さんや、根さんのような、特別なはたらき  
は、なに一つございません。

十四562 しかし、根さんが、せっかく吸ってく  
ださった地の中の水や養分でも、

十四581 さっき、葉さんや根さんは、養分のこ  
とをいっていらつしやいましたが、

ねじ 「螺旋」(名) 19 ねじ ぐちいさなねじ

六42 小さな鉄のねじが、ふいにピンセットには  
さまれて、明かるいところへだされた。

六44 ねじは、おどろいてあたりをみまわしたが、  
六62 ねじは、これらの道具や時計をあこれと  
みくらべて、

六81 女の子はただじつとみつめていたが、やが  
てこの小さなねじをみつめて、

六82 「まあ、かわいいねじ。」という、男  
の子はゆびさきでそれをつまもうとしたが、

六86 ねじは、しごと台のあしのかげにころがっ  
ていった。

六89 「〈略〉。」といいながら、しごと台の上を  
みて、だしておいたねじのないうちに氣がついた。

六811 ねじがない。

六91 ああいうねじはもうなくなって、あれ一  
つしかないのだ。

六94 ねじはこれをきいて、とびあがるほどうれ  
しかった。

六98 ねじは、「ここにいます。」とさげびたくて

たまらない。

六911 ねじもがっかりした。

六105 ねじがその光を受けて、ピカリと光った。

六1011 しかし、いちばん喜んだのはねじであった。

六111 時計屋さんは、さっそくピンセットでねじ  
をはさみあげて、〈略〉ふたガラスの中へ入れた。

六114 ピンセットでねじをはさんで、きかいのあ  
なにさしこみ、

六118 ねじは、自分がここにはいったために、こ  
の時計ぜんたいが、ふたたび活動することができ  
たのだと思うと、うれしくてたまらなかった。

六123 小さなねじが一本いたんでいましたから、  
とりかえておきました。

六128 ねじは、「〈略〉。」と、心からまんぞくした。

ねしずまる 「寝静」(五) 1 ねしずまる 《一ツ》  
十二4310 この人形だつて、みんながねしずまっ  
たあとで、動いているのかもしれないよ。

ねじまげる 「振曲」(下二) 1 ねじ曲げる 《一  
ゲ》

八748 頭をねじ曲げてつばさの中にいれた。

ねじまわし 「螺旋回」(名) 2 ねじまわし

六53 きりや、ねじまわしや、〈略〉、さまざまの  
道具も、おなじ台の上によこたわっている。

六115 ねじをはさんで、きかいのあなにさしこみ、  
小さなねじまわしでしっかりとめた。

ねじる 「振」(五) 2 ねじる 《一ツ》  
九976 やまだ、みせまいとしてからだをねじって  
かくす。

九1369 「なんだって、お月さん——」くもは、首  
をねじって上の方をみあげました。

ねずみ 「鼠」(名) 3 ねずみ ぐねねずみ・ねこ  
ねずみ

四二〇四(手) ねずみが三びき、わの中にはいり、

ねこが二ひき、わのそとにでました。

四二四(手) ねこのわたくしは、どのねずみをつ

かまえようかと考えました。

四七六(手) ね——ねずみとねこのかけっこ。

ねずみいろ 「鼠色」(名) 6 ねずみ色

七九六 7 ひきの子うさぎのうち、5 ひきはねずみ

色、1 ひきは白、もう1 ひきは黒でした。

七九七 ねずみ色の4 ひきは、生まれてから12 日め

のきょう、みんな、目があき、

七九七 ねずみ色の子うさぎが、きょうは、巣から

でて歩いていました。

七九九 耳の長さは、白と黒は5 cm、ねずみ色は6

cm でした。

九三六 そうして、なんだかねずみ色のおかしな

たちのうまがついています。

一五〇二(手) これは、『両親を愛する幸福』で、ね

ずみ色の着物を着て、いつでもすこし悲しそうに

しているのは、だれもふり向いてくれないからで

す。

ねずみたち 「鼠達」(名) 2 ねずみたち

四二五(手) ねずみたちは、わの中できよろきよろ

しています。

四二二(手) ねずみたちは、あわてて わの そとへ

にげました。

ねそべる 「寝」(五) 2 ねそべる 《一ツ》

三三七(手) 白いうさぎが、はこの 中で ねそべっ

ています。

一五三 すると、さっきの黒いいぬが、ごろんと、

地べたに横になってねそべっていました。

ねだる (五) 1 ねだる 《一ツ》

一五二 「モット」ここで遊んでいたいと、私にね

だったり、

ねだん 「値段」(名) 3 ねだん

一五八 汽車のきつぷは、遠い、近いによって、ね

だんがちがいますが、

一三二五 土地のねだんがあがって、あるところ

は、百五十ばいになりました。

一五四六(手) そのねだんのあまりに安いのおどろ

いた。

ねつ 「熱」(名) 6 ねつ 熱いけんきゅうねつ

一四四九 かっちゃんねつがでてきたので、みん

なが かわるがわる、つめたい 水で、あたまを

ひやしてやりました。

一五五九 つぎの日のあさ、かっちゃんは、ねつが

ずつとさがって、まぶたをすこしひらきまし

た。

一五三七 大むかしのたいようのねつが、かたちをか

え、石炭の中にたくわえられていて、

一四〇七 ねつはないので、ねているわけではない。

一四五七(手) それがこの日本でできるためには、私

が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。

一四七〇 つぎに、茶わんのお湯がだんだんにひえ

るのは、湯の表面の茶わんのまわりから、熱がに

げるためだと思っています。

ねつい 「熱意」(名) 1 熱意

一五七四 老博士は、きょうに乗じて、アメリカの

考えかたについて熱意をこめて語られた。

ねっこ 「根」(名) 1 根っこ

一四三〇 小さな小さな根っこでも、すっかりとり

のぞいておかないといけなといわれて、

ねっしやす い 「熱易」(形) 1 熱しやす い 《一

ク》

一三二四 しげた木のない土地は、熱しやすくさ

めやすいから、

ねつじょう 「熱情」(名) 2 熱情

一五五〇 「略」と決心し、いよいよこのしこ

とに熱情をこめた。

一五七六 ああ、忘れもしない、満面べにをさして

語られたホランド博士のあの熱情のことば。

ねつじょうのことば 「題名」 2 熱情のことば

一五三八 熱情のことば

一五五二 熱情のことば

ねっしん 「熱心」(名) 1 熱心

一八八 一 その熱心とそのしんぼう強さとは、ま

とすこしもかわりませんでした。

ねっしん 「熱心」(形状) 5 熱心

一九二九 つれの人は、この茶人ほど熱心ではないか

ら、やめて帰ろうといった。

一三三六 熱心な学者が、だんだんそれを発見しま

した。

一三三六 この人は、すぐれた数学者で、また熱心

な天文学者でした。

一三二六 「略」と、熱心に研究を続けました。

一五五七(手) そのころ、もう熱心なクリスチャンに

なっていたが、

ねっする 「熱」(サ変) 2 熱する 《一シーセ》

一四七六 ビーカーのそこをアルコールランプで熱

したときの水の流れと、同じようなものになる

一四七三 かべや屋根が熱せられると、

ねっせい 「熱誠」(形状) 1 熱誠

一三二六 誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠

な共力によって、あれ地をみどりの野とし、

ねったいちほう 「熱帯地方」(名) 1 熱帯地方

一四五七(手) かぼちゃは熱帯地方のものです。

ネット (名) 2 ネット

十二839 目にもとまらぬボールが、ネットの上を右に左にと、ゆききました。

十二868 ネットをはさんで、両選手はかたいあく手をかわしました。

ねつぼう「熱望」(名) 1 熱望

十三224 みどりの野はできたが、ユートランドのあれ地から建築用材を求めるダルガスの熱望は、実現されません。

ねどこ「寝床」(名) 4 ねどこ

二553 ゆうべ、ねどこにはいつてから、こんなことをかかんがえました。

八3910 王さまは、大喜びでねどこからとびおきて、まず、いすにおさわりになりました。

八402 王さまは、ねどこにおさわりになりました。九484 ねどこにもぐってからも、やまねこのにやあとした顔や、〈略〉裁判のようすなどを考えて、

ねとまりする「寝泊」(サ変) 1 寝とまりする

《—シ》

十三415 家でも二けんぶんも、三けんぶんも、寝とまりしているんだよ。

ねびえ「寝冷え」(名) 1 ねびえ

五824 夜は、はらまきをきちんとして、ねびえをふせぐこと、

ねぼう ↓あさねぼう

ねぼける「寝惚」(下—) 1 ねぼける 《—ケ》

四558 かさかさという木の音の音がしました、それは、小鳥たちが、ねぼけてとびまわる音でした。

ねむい「眠」(形) 4 ねむい 《—ク》

六644 どうして、八時になると、ねむくなるのだろうか。

六647 だれがねむくするのだろうか。

九1413 くもは、うつらうつらとねむくなってきました。

十四991 女の子はねむそうにつぶやいた。

ねむのき「合歡木」(名) 1 ねむのき

十三272 土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、ねむのきの枝などが、ずっとのびだしている。

ねむり「眠」(名) 4 ねむり

六507 くらければこそ光る星、ねむりをふらす夜の空。

七46 教室のまどは、まだねむりがふかい。

七109 かしの木は、あくびを一つして、〈略〉葉をふるわせ、それから、ねむりにおちていった。

十五6511 朝早くからそれをガラガラとひきまわすので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。

ねむりこける「眠」(下—) 1 ねむりこける 《—ケ》

十五826 歌を歌ったり、ぶつかったり、よろけたり、ねむりこけたりしています。

ねむる「眠」(五) 20 ねむる 《—ツ—ラー—ル》

一265 ことりもねむりました。

一266 らじおもねむりました。

一267 くさもきもねむりました。

二194 ねむっていても、みえるものはなかに。

二566 こんなことをかかんがえているうちに、いつのまにか、ねむってしまいました。

四4310 ゆうべは、ぬまのきしの、よしのきれいにしげったところで、ねむったのです。

六787 ごろうさん、あなたは、ねむってしまったら動かなくなるでしょう。

六797 息と同じように、あなたがねむっている

ときでも、どきんどきんやっていますよ。

六1314 このあたたかいトンネルで、今夜、ゆっくりとねむりたかったのさ。

六1386 ところが、この大きな岩のかげに、とらさんがねむっていたのです。

七413 ちやうど、かふんにまみれたみつばちのようになつて、汽車でねむっていた。

七805 とちゅうでひと休みしているうちに、つい、ねむってしまいました。

七946 お晝に、うさぎのところへいつてみたら、暑いのでねむっていました。

九1415 今夜は、ばらのかげでねむることにしようかな。

九1435 どうしてねむらないの。」こう話しかけたのは、ばらの花でした。

九1456 ぐつすりねむってしまったのでしよう。

十一7612 夜になると、少年は、へやのすみにいすを二つならべて、その上でねむりました。

十一777 ちよいちよいとねむったあとでは、〈略〉小さな看護人をさがすようにみえました。

十五884 『必要以上にねむるという幸福』でね、十五915 わたしたちは、すこしの休みもなく、飲む、たべる、ねむる、

ねむれる「眠」(下—) 3 ねむれる 《—レ》

九488 やまねこのにやあとした顔や、〈略〉などを考えて、おそくまでねむれませんでした。

九1434 くもは、目がさえてなかなかねむれませんでした。

ねもと「根元」(名) 10 ねもと 根もと

三1009 竹やぶをみまわしていますと、ねもとのぴかりと光る竹が一本ありました。

七五三 根もとに、ぼたぼた落ちています。

八二七 つめたくなつたからだをわたにつつんで、

《略》 つばきの木の根もとにうめてやりました。

八〇六 ねを根もとからかりとりました。

九三九 根もとからかかれてゐる高さ十五メートル

に近い木にのぼつたことがあります。

一二四 だが、根もととところに三つ四つかた

まっしてだれてゐるところもい。

一二四 文雄は、あれこれと考えていたが、根も

とをかこうと決心した。

一二四 しかし、その根もととの地面には、《略》

つみ重ねておいたかれ草が、すっかりくちていた。

一四二 こんな、十キロもあるような大きなか

ぼちゃでも、それは、花の一部であるめしべの根

もとが、大きくふくれただけのものです。

一四三 どうしてそのめしべの根もとがふくれ

て、そんな大きな実になつたかといふことは、

ねらい 〔狙〕(名) 1 ねらい

一五三 ねらいのはずれようはずはありません。

ねらいうち 〔狙撃〕(名) 1 ねらいうち

一四四 よく木の かげから ねらいうちを される

からです。

ねらいどころ 〔狙所〕(名) 1 ねらいどころ

一六六 やりかたはいろいろですが、ねらいどころ

は一つです。

ねらう 〔狙〕(五) 6 ねらう 《イー・ツ・ワ》

一四九 わたくしは、ただしさんを ねらつて、

わの中へもぐりこもうとしました。

一五一 下から ねらわれて いる ときには、ばら

ばらになつて、はなれてとべば 安全なのです

が、

一六五 そのかりうどは、きゆうに歩くのをやめて、

弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

一六六 はとは、ねらわれていることを知らずにい

ました。

一五三 あいてのセンターは、ぼくをねらつた。

一四二 みつばはだいいな針をだして、くもをね

らつて、ちくりとつきさしました。

ねる 〔練〕(五) 3 ねる 練る 《ル》

一四七 のりは、ごはんつぶをよくねると、いいの

りができました。

一二九 文をなおすことはつまり心を練ることに

なる。

一二九 心を練るほど、ことばがみがかてくる。

ねる 〔寝〕(下) 23 ネル ねる 《ネ・ネル》

一五五 さあねましよう。

一五七 よにんはもたれあつて、ぐうぐうとねて

しまいました。

一四八 まあ、たろうさんのよくねて いるこ

と。

一三七 かなあみに からだを つけるようにし

て、ねています。

一四九 それなら、海の水を あびて、ねてい

るがよい。

一四七 早く川の水で からだを あらつて、が

まのほをしいて、その上に ねるがよい。

一七四 あなたたちが ねて いる あいだ、お日

さまは、よその 國の子どもが あそべるように、

光を あげに いくのです。

一五五 ねて いる うちに、いい こと 考えたん

だ。

一四二 みんなの ねて いる ひまに、かっちゃん

は、もう 一ど 林のおくを さがしに いきまし

た。

一八九 すぐめ親子の ねた あとは、さらさら

さらと 雪の 音。

一五八 生まれたときは、ねてばかりいたのが、

はうようになり、立つようになり、

五二六 なま水をのまないことや、ねるまえにたべ

ないことや、《略》を、話しあいました。

一五五 ふみおがねるまえにそとをみると、

一四二 ただけは、病気でねておりますので、

ここへはまいっておりません。

一四八 ねつはないので、ねてゐるわけではない。

一四八 朝早くいってみたら、子うさぎは巣の中で

ねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。

一四八 あとはぐつすりねるばかりだ。

一四四 アカチャン ネテルワ——

一四五 ワンワンチャン ネテルワ——

一五二 「アカチャン ネテルワ」でした。

一五三 「ワンワンチャン ネテルワ」といって

いると、いぬがもつくりおきました。

一四二 父親が病気でねていたので、金次郎

が、そのかわりにでることになりました。

一五三 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸

の外明らかに月ふけたる

ねん 〔年〕 ①いくねん・いちにねん・いちねん・い

ちねん・いちねん・いちねん・い・いちねん・い・

い・いちねん・い・い・い・い・い・い・い・い・

い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・

い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・

い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・

い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・

い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・

い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・

い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・い・



ひやくしちねんしがつじゅういちにち・せんきゅうひやくしちねんしがつじゅうろくにち・せんきゅうひやくしちねんしがつとおか・せんきゅうひやくしちねんじゅうがつ・せんさんびやくねん・せんなんひやくねん・せんにひやくねん・せんはつびやくはちじゅうしちねん・せんはつびやくろくじゅうよねん・なんじゅうねん・なんぜんねん・なんねん・なんびやくねん・にさんねん・にじゅうおくねん・にねん・にねんさんかげつ・にねんせい・はつびやくねんあまり・ひやくはちじゅうねんまえ・めいじごねんくがつじゅうにち・めいじにじゅうさんねん・めいじにじゅうねん・やくさんじゅうねん・よねん・よねんせい・よねんめ・ろくねん・ろくねんせい・ろっかねん

ねん〔念〕(名) 3 ねん 念

六四八 ねんのために、はなをつまんで、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。

九四六 念のため、もっと上流の本流の水を飲んでみると、もうそれはただの水であった。

一五二八 読んでいるうちに先生がたに対する感謝の念があふれてきた。

ねんが〔念願〕(名) 1 念願

一五七四 親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に巣だたせたいのが念願である。

ねんする〔念〕(サ変) 1 念する 《一じ》

一二四六 両親は、なんとかして、すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

ねんど〔粘土〕(名) 1 ねんど

七六七 一つは、はじめ骨組みをこしらえておいて、それにねんどでだんだん肉づけをし、しだいに、その人の顔にせていくやりかたです。

ねんねする (サ変) 3 ねんねする 《一じ》

四一五 七 えつ子がわたしのせなかでねんねした。

四一五 八 わたしのせなかにかおをつけてねんねした。

四一六 一 おかしをしっかり手にもってねんねした。

ねんねん〔年〕(副) 1 年々

一三二二 二 そこで、デンマルクの國運回復の意氣は、年々高まってきました。

ねんぶ〔念仏〕(名) 1 ねんぶつ

一二九四 ただ口まねをして、おうむのようになえていたのでは、そのことばは、すこしの力も発きしないからねんぶつである。

## の

の〔野〕(名) 7 の 野 野あれの・ひろの・みどりの

一三〇四 おじいさんはまいにち、のや山へ竹をとりにいきました。

八一三 七 しものふかい朝の野にでたとき、

一三三 七 圓 だいこんの花にあかつきの 色ただよえば勇ましく、すき・くわ持つて野にいそぐ。

一三二一 一 ユートランドのあれ野には、年ごとに、みどりの野が廣がりました。

一三二二 三 みどりの野はできたが、

一三二六 三 誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、

こり顔よごすとも、  
(格助) 6170 の ん ンあかえのはち・あさが  
おのはな・あさのこくぼん・あなたのおもっていることは・あのつくことば・あまのがわ・あみのめ・あめのなか・ありのまま・いちにのさん・いちのばめん・いちのひと・いちまいのかみ・いちまいのシャツ・いっぴきのくも・いのしし・いもうとのことば・いもうとのさくぶん・うえののもり・うごきのせかい・うちのおおじろ・うみのかみ・えんのした・おおくにぬしのみこと・おかのうえ・おきのどく・おくて・おしまいのことば・おつきさんのくし・おとこのこいち・おとこのごさん・おとこのこし・おとこのこたち・おとこのこに・オルガンのきりぎりす・おんなのこいち・おんなのごさん・おんなのこし・おんなのこたち・おんなのこに・おんなのひとたち・かきのあき・かぐのいわや・かすおのてちようから・かぼちゃのはな・かみのけ・ガラスのかけら・かわぐちのこどもたち・かわのあかんぼ・かわのうた・がんのなかも・きしゃのなか・きのこ・きのどく・きのめみち・きんのさかな・きんのさかなさん・くじゅうくのいしだん・くすのき・くものす・こうふくのその・こうもののかしのき・ことばのあい・ことばのはたらき・ごにんのこども・ごのばめん・ごのひと・こやまのいけ・コロンブスのたまご・さいごのがつきゅうにつき・さんのばめん・さんのひと・さんぶんのいちいじよう・しきしゃのきりぎりす・しのばめん・しのひと・じぶんのくにのことば・シロフオンのきりぎりす・せいぎであることよろこび・せみのこたち・そのひとのことば・そのうた・たいこのきりぎりす・たけとりのおきな・たけのこ・たけのこはん・だれのちから・チェロのきりぎりす・ちちのかんびよう・

ちゃのま・ちゃわんのゆ・つかのま・つりばりのゆ  
 くえ・てのひら・とうのいけ・とこのま・とのも・  
 とりいれまつりのよる・ナイヤガラたたき・なの  
 は・なののはな・なののはなざかり・なののはなばたけ・  
 にいじまゆずるのはか・にじのうた・にっぼんごの  
 かきあらわしかた・にっぼんのこども・にのぼめ  
 ん・にのひと・ねつじょうのことば・ねむのき・  
 ハーモニカのきりぎりす・バイオリンのきりぎり  
 す・はじめてのおかね・はじめのことば・ははのあ  
 い・ばらののはな・はるのおがわ・はるのくに・はる  
 のくにさん・はるのこえ・ひとつのことばから・ひ  
 とつのもので・ひとのかお・ひのこ・ひのひか  
 り・ひわのこ・ふえのきりぎりす・ふきのとう・ふ  
 じのやま・ふゆのくに・ほおりのみこと・ぼくの  
 はっけん・ほしのひかり・ほでりのみこと・ほん  
 の・まぐらのそうし・まちのおと・マツチウりのむ  
 すめ・みどりのの・みにくいあひるのこ・みのう  
 え・みほのまつばら・みんなのもの・むしのいき・  
 めいめいのうた・もじのはじめ・もじのはなし・も  
 のの・もののわかるよろこび・やのね・やまのい  
 も・やまのスキーじょう・やまのつつじ・やまぶき  
 のひとえだ・ゆきのえいが・ゆめどののかんのん・  
 よのなか・ろくのぼめん・わきのした・わたくしの  
 いもうと・わたくしのたび・わたしのころはにじ  
 をみるとおどる・わたしのたまちゃん・わらいのう  
 た

19 5 韻 らいた。れんげのはなひらいた。  
 20 2 韻 つぼんだ。なんのはなつぼんだ。  
 20 3 韻 ぼんだ。れんげのはなつぼんだ。  
 22 1 おててつないで」のうたをうたいまし  
 22 2 れから、このうたのゆうぎを、みんな  
 22 5 おててつないで」のところは、おとも  
 22 7 のみちをいけば」のところは、げんき  
 23 2 ことりになって」のところは、こまりま  
 23 3 り、うててをはねのようにうごかしま  
 23 6 をあてて、らっぼのようにしました。「  
 24 2 あげました。二ばんの「はねて おどれば  
 24 3 はねて おどれば」のところは、ぴよん  
 28 1 ったかお。ひとつのかおが、わらった  
 29 6 りみぎ。手となかのいいことば。もつ  
 30 3 ります。足となかのいいことば。たつ  
 31 8 さまというひとつのことばから、おも  
 32 2 ました。ただおさんのかいたことば。お  
 32 6 し——みちこさんのかいたことば。お  
 33 2 と——まことさんのかいたことば。お  
 33 5 く——よしこさんのかいたことば。お  
 36 1 会 て、せかいじゅうのおふねをうかべた  
 37 8 いさな川が、うちのまえをさらさらと  
 38 7 きます。あさがおのはながさきました  
 38 8 きました。あさがおのはながいつつさ  
 39 1 した。うすもいろいろのあさがおのはなが  
 39 1 もいろいろのあさがおのはなが、いつつか  
 39 5 のって、お月さんのところへいった  
 40 2 山のつつじ 山のつつじがさいた。  
 41 2 略」はたる。うちのなかではなした。  
 41 3 はなした。でんとうのしたを、くろくす  
 41 5 ととんだ。はしらのかげで、びかり、  
 42 1 ひかった。せんせいの目のなかに、わた

42 1 た。せんせいの目のなかに、わたしが  
 42 5 いますよ。せんせいの目のなか、ひろい  
 42 5 よ。せんせいの目のなか、ひろいな。  
 43 7 会 「さあ、お月さんのくにへいくんだよ  
 44 8 会 した。「お月さんのくにへ、おいでの  
 44 8 会 のくにへ、おいでのかたは、こちらへ  
 45 6 だんわたくしたちのばんが、ちかづきま  
 45 8 かづきました。へやのなかでは、しろい  
 45 9 ものをきた おんなんの人たちが、ながい  
 46 4 三 わたくしたちのばんがきました。  
 46 6 会 よ。さあ、あちらのへやへいらっしや  
 46 7 と、「略」おんなんの人がやさしくい  
 46 8 いいました。つぎのへやで、こしをか  
 47 9 いて、おとうさんのもつていた四か  
 48 4 ました。かくせいきのこえが、またひび  
 48 7 とうさんは、うしろのおきやくさんのに  
 48 7 ろのおきやくさんのにもつをもつて  
 48 8 くしは、おばあさんの手をとってあげ  
 49 9 てみると、さっきの人たちも、しやし  
 50 1 みんなながいみみのある、あかい目の  
 50 1 のある、あかい目のうさぎさんでした。  
 50 6 会 いたの。お月さんのくにのきしやだも  
 50 6 会 お月さんのくにのきしやだもの。」お  
 51 2 会 、まもなくくものとんねるにはいり  
 52 5 をいうと、となりのおじさんが、「略  
 52 9 会 ました。「かわらのすなは、みんなち  
 53 2 会 っておかあさんのおみやげにしたい  
 53 8 会 んどですが、いじのわるいけんかずき  
 53 9 会 るいけんかずきの人ひろうと、た  
 53 9 会 ひろうと、ただのいしころになって  
 54 2 会 。このお月さんのくにでは、一ねん  
 54 5 会 えたら、お月さんのくにのなかに

54 5 会 お月さんのくのに なかまに いれて  
 55 1 会 。そうして、つぎの としの たまひろい  
 55 1 会 て、つぎの としの たまひろい で、き  
 55 4 会 、また お月さんの くのに いれても  
 55 10 会 けつと から うずらの たまご ほど ある  
 56 8 会 ていました。まどの ところに、みおぼ  
 56 9 会 ところに、みおぼえの ある かおが、たく  
 57 3 会 、みんな わたくしの うちに いたきょ  
 57 10 会 がった しろちゃん の みみを みて きき  
 58 6 会 あなたは いのちの おんじん です。」と  
 59 1 会 ろって しろちゃん の うちへ いきました  
 59 3 会 ました。しろちゃん の うちへ、つきみそ  
 59 4 会 うちへ、つきみそうの さいてい いる おは  
 59 5 会 いる おはなばたけの なかに ありました  
 59 9 会 ろこんで、めいぶつ の おだんごや、おも  
 60 3 会 (十)「あなたの おうちに おいて  
 60 7 会 ともだちと なかの いい、やさしい こ  
 61 7 会 うぞ おかあさんの おみやげに して  
 61 9 会 もつたら、ただの いし ころに なって  
 62 4 会 いって、わたくしの 手に たまを おし  
 62 8 会 て みまわすと、山の うえから、おおき  
 63 3 会 たろうさんたちの おくに ですよ。そ  
 64 1 会 も、わたくしも、わの なかに はいって、  
 64 8 会 まあ、たろうさんの よく ねて いるこ  
 64 9 会 略。」「おかあさんの こえて 目が さめ  
 65 3 会 略。」「あまの川の だいやもんど、お  
 65 4 会 んど、おかあさんのおみやげに いただ  
 65 7 会 それなら、あなたの 目の なかに ふた  
 65 7 会 ら、あなたの 目の なかに ふたつ ひ  
 65 9 会 、わたくしを ひさの うえに だきあげて  
 二 4 3 会 (一)「『あ』の つくことばを、み  
 二 5 8 会 」「お友だちの なを かんがえて、

二 7 5 会 』という ことばの つくものを、あつ  
 二 8 5 会 た。(二) つぎの 日に、「い」の つ  
 二 8 5 会 つぎの 日に、「い」の つくことばを あ  
 二 8 7 会 。それから、「う」の つくことばと、「  
 二 8 7 会 くことばと、「え」の つくことばを あ  
 二 8 9 会 おしまいに、「お」の つくことばを あ  
 二 10 1 会 みおさんは、「人」の など、そうで ない  
 二 10 5 会 こさんは、「く」の など、とりの など  
 二 10 5 会 さの など、とりの など、その ほかの  
 二 10 5 会 など、その ほかの もの とに、わけた  
 二 11 2 会 「では、めいめいの かんがえどおりに、  
 二 11 5 会 して、ひとりびとりの かんがえどおりに  
 二 12 2 会 二 えにつき 木のはを ならべて み  
 二 12 4 会 みました。かたちの いたもの を なら  
 二 13 1 会 べました。おぼさんの うちから、大きな  
 二 14 7 会 赤や 青や むらさきの たまが できました  
 二 22 2 会 たしたち、もみじの はっぱで、いろは  
 二 22 9 会 略。」「先生、すの おそうじを するの  
 二 23 3 会 」。先生、はねの いたんだ 大きな  
 二 23 4 会 が、けさも、ゆりの 花に きて しまし  
 二 23 6 会 へんです。だりやの 花が、さきか けて  
 二 24 1 会 」。先生、いもの はの つゆは、あれ  
 二 24 1 会 先生、いもの はの つゆは、あれ、た  
 二 24 1 会 ゆは、あれ、ただの 水で しょうか。」「へ  
 二 24 3 会 が、とうもろこしの はっぱに、じつと  
 二 25 4 会 さんと、この 五人の ぼんです。(二)  
 二 25 7 会 (一) いろいろさんの した おはなし。」「へ  
 二 26 4 会 きゅうりが、くつの中 には いました  
 二 26 8 会 (二) さだおさんの した おはなし。」「へ  
 二 27 1 会 りました。二ひきの やぎが、その はし  
 二 27 2 会 ぎが、その はしの まん 中で あいま  
 二 27 6 会 略。』と、一びきの やぎが いい ました

二 27 10 会 略。』と、べつの やぎが いい ました  
 二 28 2 会 と、せまい はしの 上で、つのおし  
 二 28 7 会 (三) すみこさんの した おはなし。」「  
 二 28 8 会 なし。」「十二ひきの ぶたが、そろって  
 二 29 1 会 、みんな むこうの きしに つきま した  
 二 31 5 会 ません。十二ひきの ぶたは、ぶうぶう  
 二 32 2 会 (四) くにおさんの した おはなし。」「  
 二 32 3 会 ところに、六人の めくらが ありま した  
 二 32 4 会 ました。そのうちの ひとり が、『略』。  
 二 32 10 会 略。』と、ほかの ものが いい ました  
 二 34 5 会 略。』と、六人の めくらが、ぞうつ  
 二 34 9 会 とめました。六人の めくらたちは、お  
 二 34 9 会 そるおそる ぞうの そばに よって き  
 二 35 1 会 きました。はじめの めくら は、ぞうの  
 二 35 1 会 めくらは、ぞうの おなかを なで て、  
 二 35 4 会 略。』二ばんめの めくらは、ぞうの  
 二 35 4 会 めくらは、ぞうの きばに さわ って、  
 二 35 7 会 略。』三人めの めくらは、ぞうの  
 二 35 7 会 めくらは、ぞうの はな に さわ って、  
 二 35 10 会 いました。四人めの めくらは、耳に さ  
 二 36 3 会 いました。五人めの めくらは、足を な  
 二 36 4 会 て、『ぞうは、木のみきと おなじじや  
 二 36 6 会 ました。おしまいの めくらは、しっぱ  
 二 37 4 会 (五) たけこさんの した おはなし。」「へ  
 二 37 5 会 とき、くに ざかいの 山に、ゆきが ふ  
 二 38 7 会 かり) ところ 山の中 たろうと おと  
 二 40 1 会 ふきながら、あたりの けしきを ながめ ま  
 二 40 3 会 す。すると、とおくの ほうでも、『略』。  
 二 40 5 会 す。すると、むこうの ほうで、『略』。  
 二 43 5 会 ろう「おとうさんの おつしやと おり  
 二 45 4 会 うさん。長い 竹の さおで、ふねを こ  
 二 45 10 会 、なんだろ。手の上 に こむまりを

二47 2 うじろういもうとのさちこ おかあさん  
 二47 4 さんところへやの中一のぼめん  
 二48 2 。それから、となりのへやへいこうと  
 二48 8 をだして、じろうの手にわたします。  
 二49 2 いちろうは、となりのへやへいきます。  
 二50 9 「じろうも、となりのへやへいってし  
 二52 5 」。という、さちこの声がします。「略  
 二52 7 ちこが、おかあさんのそばにかけよりま  
 二54 7 きます。おかあさんのよこに、三人が立  
 二54 8 おかあさんは、三人のあたまを、しずか  
 二55 6 れども、おじいさんのおとうさんは、お  
 二56 5 いるうちに、いつのまにか、ねむって  
 二57 7 た。そこへ、ひとりのおじいさんがでて  
 二57 10 。みると、わたくしのおじいさんによく  
 二58 5 わたしは、おまえのおじいさんのおと  
 二58 5 えのおじいさんのおとうさんだよ。」  
 二58 9 した。「みなさんのつかっているつ  
 二59 7 うしました。四年の人たちも、五年の  
 二59 7 人たちも、五年の人たちも、六年の  
 二59 8 人たちも、六年の人たちも、そのま  
 二59 9 ちも、そのまえの人たちも、これを  
 二60 2 しは、ふと、ゆうべのゆめをおもいだし  
 二64 2 りよううでを車のようにうごかす。  
 二66 10 う「どこかで、春の声がするよ。」み  
 二67 5 。そのとき、かげのほうで、「略略。」  
 二69 2 う「たしかに春の声がきこえる。」  
 二69 4 。そのとき、かげのほうで、「略略。」  
 二70 5 こしたって、かげのほうで、「略略。」  
 二70 9 ではなく、大ぜいの声。しや「さあ、  
 二49 9 える。」ただし「山の山びこ。」みんな「  
 二53 3 山。」みんな「山のあの色。」さぶろ  
 二55 5 ぜ。」みんな「かぜの手ざわり。」ともお

三56 6 お「ひろいはたけの中で。」さぶろう「  
 三510 6 みんな「お日さまの光、光。」(二)  
 三74 4 ら。」のぶこ「小川のながれ。」すみこ「  
 三75 5 すみこ「白いくものながれ。」みんな「  
 三87 7 なれ。」さきこ「東の友だち。」みんな「  
 三88 8 だち。」みんな「西の友だち。」たけひこ  
 三89 9 ち。」たけひこ「南の友だち。」みんな「  
 三810 6 だち。」みんな「北の友だち。」一一花  
 三94 4 れんげそう、花のおやねがうつくし  
 三95 5 しい。あまちゃの中からひよっこり  
 三108 8 きようはあなたの花まつり。はんた  
 三118 8 とりずつ、はんたかのところへやって、  
 三127 7 まえはたくさんのおかおをみつめな  
 三1210 7 せて、おしやかさまのおかおをみつめな  
 三137 7 このひとことを心の中にしましました  
 三144 4 。（「おしやかさまのおしえてくださっ  
 三147 7 やかさまは、王さまのおまねきにあずか  
 三149 7 かさまはたくさんのでしをつれて、王  
 三1410 をつれて、王さまのごてんにまいりま  
 三151 7 かもおしやかさまのはちをもつて、で  
 三151 7 ちをもつて、でしの中にまじって  
 三152 7 いました。ごてんのいり口まできま  
 三154 4 て、「おまえさんのようなおろかも  
 三157 7 ら、はんたか門のそとにのこりまし  
 三161 7 るとおしやかさまの目のまえにのび  
 三161 7 おしやかさまの目のまえにのびてき  
 三162 7 それをみたごてんの人々は、びっくり  
 三165 5 ふしぎだ。だれの手だろう。」とお  
 三168 8 これははんたかの手でございませ  
 三169 9 ます。あれは門のそとにいますので  
 三175 5 きました。はんたかのからだから、きれ  
 三182 2 つめ 一くみは花の名をあつめました

三183 3 した。二くみは虫の名をあつめました  
 三184 3 した。三くみは魚の名をあつめました  
 三185 3 した。四くみは鳥の名をあつめました  
 三191 3 あつめました。花の名は十二あつま  
 三192 3 あつまりました。虫の名は十五あつま  
 三193 3 あつまりました。魚の名は十三あつま  
 三194 3 あつまりました。鳥の名は十四あつま  
 三201 3 ていくうちに、花の名も、鳥の名も、  
 三202 3 に、花の名も、鳥の名も、だんだんふ  
 三203 3 、こくばんにつぎのようなことをお  
 三205 3 りました。「一くみの人たちに。『略略  
 三207 3 に。』略略。』二くみの人たちに。『略略  
 三211 3 に。』略略。』三くみの人たちに。『略略  
 三213 3 に。』略略。』四くみの人たちに。『略略  
 三214 3 人たちに。』なき声のわかるものは、そ  
 三216 3 ったものをうしろのかべにはりました  
 三222 3 るところに、一本のくすのきのはえま  
 三228 3 のてっぺんは、空のくもとどくよう  
 三233 3 がでると、この木の西がわのなん十と  
 三233 3 、この木の西がわのなん十という村  
 三235 3 になると、東がわのなん十という村  
 三2310 3 。（「略略。』あちらの村でもこちらの  
 三2310 3 らの村でもこちらの村でも、こうい  
 三252 3 ました。あるちえのあるおじいさんが  
 三257 6 じいさんは、「日のあたるようにする  
 三261 3 。こんな大きな木のことですから、切  
 三266 3 すると、あのちえのあるおじいさんが  
 三2610 3 た。そこで、大ぜいのだいくをあつめ  
 三272 3 、とうとう一そうのふねがでかあがり  
 三274 3 うかべて、大ぜいのせんだうがのりこ  
 三276 3 たのは、そのふねの早いことです。か  
 三277 3 と、ふねはななつの大なみをのりきつ

三27 8 をのりきって、鳥のとぶように 走るで  
 三28 3 すると、あの ちえの ある おじいさんが  
 三28 4 会 。あの いきおいの いい くすのきで  
 三28 5 会 だもの、いきおいの いいのが あたりま  
 三28 6 会 あたりまえさ。鳥のように 早い ふねだ  
 三28 10 会 やとりは、たくさんの 米や、麦や、豆を  
 三29 5 会 っていた たくさんの 村々は、だんだん  
 三30 4 会 ました。「じぶんの かきたいところへ  
 三31 8 会 ごとに、あたりの ようすが かわりま  
 三32 4 会 あがったところの かべには、えがは  
 三33 3 会 て、わたくしたちの かえるのを まって  
 三33 4 会 「ひょうほんしつ の まえです。ほそ長  
 三33 6 会 いました。なの花の 大きな もけいが  
 三33 7 会 。青色や ちゃ色の くすりびんが、た  
 三33 8 会 いた、みほんの まるい びんも あ  
 三33 9 会 ありました。へやの すみに、かれ木が  
 三34 1 会 そこに、はくせい の りすが、二ひきの  
 三34 2 会 した。ナフタリンの においが してき  
 三34 3 会 「へ略」。「五年生の きょうしつでは、  
 三34 3 会 ようしつでは、花の しゃせいを して  
 三34 4 会 ています。やねの ところで、すずめ  
 三35 4 会 、六年生が、はこの ようなものを こし  
 三35 6 会 。」「こづかいさんのおへやは あたか  
 三36 4 会 す。こづかいさんのおへやのものは、  
 三37 1 会 いさんのおへやのものは、みんな大  
 三37 1 会 うさが、はこの 中で ねそべって  
 三37 5 会 みます。うさぎの 目は もも色の か  
 三38 1 会 ぎの 目は もも色の かわいらしい 目で  
 三38 5 会 くぼんに、「みんなの 学校。みんなの き  
 三38 6 会 なの 学校。みんなの きょうしつ。たの  
 三39 2 会 六 かえり道 海のような 空で、ひば  
 三39 6 会 ぐが まん中で、右の かたには いろいろ

三39 8 いちろうくん、左の かたには みよこさ  
 三40 4 う ならったばかりの しょうかを、大声  
 三40 6 会 ました。くわばたけの くわのはが、やわ  
 三40 6 会 くわばたけの くわのはが、やわらかで、  
 三41 1 会 ぜが ふくと、くわのはの においが ぶ  
 三41 1 会 ふくと、くわのはの においが ぶんと  
 三41 3 会 いちろうくんが、右の 方に まがつてい  
 三41 6 会 たりになって、麦の ほと すれすれに  
 三41 7 会 きました。たんぼぼの みが、小人になっ  
 三42 2 会 「みよこさんが、左の かたからはなれて  
 三42 2 会 はなれて、麦ばたけの よこ道を かえりま  
 三43 2 会 が、島から むこうの りくへ いてみ  
 三43 6 会 と思つて、「きみの なかまと ぼくの  
 三43 6 会 の なかまと ぼくの なかまと、どっち  
 三44 3 会 れをみて、「きみの なかまはずいぶん  
 三44 3 会 多いな。ぼくらの ほうが まけるかも  
 三44 4 会 ぼくが、きみたちの せなかの上を、か  
 三44 5 会 みたちの せなかの上を、かぞえなが  
 三44 6 会 いくから、むこうの りくまで ならんで  
 三44 8 会 にさめは、白うさぎの いうと おりに な  
 三46 1 会 つかまえて、からだの けを みんなむし  
 三46 4 会 そのとき、みんりの りつばな かがた  
 三46 7 会 うさが いままでの ことを はなします  
 三46 9 会 「それなら、海の水を あびて、ねて  
 三47 1 会 白うさぎは、すぐ 海の水を あびました。  
 三47 8 会 になった かたがたのおとうさんです。  
 三47 9 会 です。にいさまがたのおもい ふくろを  
 三48 4 会 うさぎは いままでの ことを はなしまし  
 三48 6 会 そうだ。早く 川の水で からだをあ  
 三48 7 会 あらって、がまの ほを して、その  
 三48 10 会 からだは、すぐもとの ように なりました。  
 三49 3 会 やの花 かぼちゃの花が さきました、

三50 1 会 した。かぼちゃの花が さきました、  
 三51 2 会 より かわいいのみの さき、のみの より  
 三51 6 会 花が みえるのみの さき。のみの 手  
 三51 7 会 の さき。のみの 手もと はくらくて  
 三52 2 会 ありは すみれの 花にの ぼり、「へ  
 三52 4 会 うぐいすは うめの 木にとまり、「へ  
 三52 6 会 りすは しらかばの 木にはねて、「へ  
 三52 8 会 ました。いなかの やねの ぺんぺんぐ  
 三53 2 会 いなかの やねの ぺんぺんぐさは、  
 三53 2 会 。こどもは 石の上に 立ち、「へ略  
 三56 3 会 リヤは、うしろの 山に すてましょか  
 三56 3 会 ナリヤは、せどの こやぶに いけまし  
 三56 6 会 リヤは、やなぎの むちで ぶちまし  
 三57 2 会 リヤは、ぞうげの ふねに ぎんのか  
 三57 5 会 げの ふねに ぎんのかい、月夜の 海  
 三57 6 会 の かい、月夜の 海に うかべれば、  
 三58 3 会 も みずうみ 五人の 子どもの おうち  
 三58 3 会 み 五人の 子どもの おうちは、丘の上  
 三58 3 会 ものおうちは、丘の上にあるのでも、  
 三58 4 会 もありません。丘の ちようど なかほど  
 三58 6 会 の ぼれば 大きな 木のあるところへ  
 三59 1 会 ねえ、大きな 木のあるところまで のぼ  
 三60 1 会 が います。ほかの 子どもたちは、ど  
 三60 2 会 ています。みんなの 心が あわないと、  
 三60 6 会 ました。「この 丘の上の 大きな 木の  
 三60 6 会 。「この 丘の上の 大きな 木の ところ。  
 三60 8 会 上の 大きな 木の ところ。」ジュデーは  
 三60 8 会 ずうみ、この 丘の 下の。」デビッドは  
 三60 10 会 み、この 丘の 下の。」デビッドは こう  
 三61 3 会 います。「みんなの 心が あわないと、こ  
 三61 6 会 になりました。ほかの 子どもたちも、こ  
 三61 6 会 「あのねえ、丘の 木の ところまで

三61 6 ねえ、丘の木の ところまでのぼっ  
 三63 1 しました。みんなの 心が あいましたか  
 三63 2 しよになつて、丘の 大きな 木の とこ  
 三63 2 て、丘の 大きな 木の ところまで のぼり  
 三63 6 りこみました。三人の 男の子は、うしろ  
 三63 6 ました。三人の 男の子は、うしろにこ  
 三63 7 かけました。ふたりの 女の子は、まえにこ  
 三63 7 した。ふたりの 女の子は、まえにこし  
 三64 3 なりました。「右の方。」と、女の子た  
 三64 5 いいました。「左の方。」と、男の子た  
 三68 2 ました。雲は、もりの 方へしずかにし  
 三68 8 りました。「もりの 方。」っていつて  
 三69 1 いました。「もりの 方。」みんなの 心  
 三69 2 た。「略。」みんなの 心が あいました。  
 三69 9 。お日さま 五人の 子どもは ゆうごは  
 三70 2 ターは ふと、ゆかの 上になにかある  
 三70 7 いいました。ゆかの 上に、なにか、長  
 三72 10 いました。「ぎんの リボンかしら。」と  
 三73 6 略。「びかびかの かみかしら。」「略  
 三73 8 略。」「お日さまの 光かしら。」「略  
 三74 3 すと、「では、光の とおり道をさがし  
 三74 5 をおいて、その 光の 中をあるいてい  
 三74 7 ごらん。あの 丘の上を。」おかあさん  
 三74 9 りながら、いま、丘の かげへしずむと  
 三75 1 した。「お日さまの 光は お日さまから  
 三75 6 赤い お日さまは 丘の かげへしずんで  
 三75 8 。「おや、さっきの お日さまの 光、ど  
 三75 9 っきの お日さまの 光、どこへ いった  
 三76 2 わりましたが、ゆかの 上には もう みえ  
 三76 8 こえてね、よその 國へ いくんですよ  
 三76 9 お日さまは よその 國で なにをする  
 三77 1 ねました。「よその 國の 子どもたち

三77 1 した。「よその 國の 子どもたちに 光を  
 三77 5 お日さまは、よその 國の 子どもがあ  
 三77 5 まは、よその 國の 子どもがあそべる  
 三77 7 まが あなたたちの ところへ かえつて  
 三77 10 「略。」「あしたの あさも、お日さま  
 三78 3 きますと、「よその 子どもたちが わた  
 三78 3 もたちが わたしの お日さまをとつて  
 三79 1 略。」にじ 五人の 子どもが、もみじ  
 三79 1 子どもが、もみじの こかげの すなばで  
 三79 1 、もみじの こかげの すなばで あそんで  
 三79 1 だよ。雨に ぼくの いどを いっぱいに  
 三79 10 らないなあ。ぼくの 道は、雨に めちゃ  
 三80 3 ます。雨は、みんなの いうことには お  
 三80 7 ます。雨は、みんなの いうことには お  
 三81 3 。そこへ お日さまの 光が さしはじめま  
 三81 4 すると、色リボン の ような にじが 空に  
 三82 6 でした。「わたしの もも色、みえない  
 三83 10 「お日さまが、雨の つぶつぶを しゃぼ  
 三84 3 す。ピーターは、はの さきに あまだれが  
 三84 7 と、その あまだれの中に、小さな にじ  
 三88 8 ソフ。キーン。こまの ように まわる。ま  
 三89 1 てうなる。じぶんの 耳で きいた ひび  
 三90 1 どうでしょう。風の 日には どんな 音。  
 三90 2 には どんな 音。雨の 日には どんな 音。  
 三90 2 この はしは みんなの ものです。ばしや  
 三90 4 の ポストも みんなの ものです。うちの  
 三91 6 の ものです。うちの 人の かいたてが  
 三91 7 のです。うちの 人の かいたてが みや  
 三91 7 いれます。きんじよの 人たちが この ポ  
 三91 9 いな花は、みんなの 心を たのしませて  
 三92 4 いしゃばも みんなの ものです。この で  
 三93 4 どんしゃも みんなの ものです。この の  
 三93 5 の ものです。この しばふも みんなの  
 三93 6

三93 6 の しばふも みんなの ものです。やわら  
 三94 1 お月さまも みんなの もの。あの まっ白  
 三94 2 つ 白な 雲も みんなの もの。よるの ほし  
 三94 3 んなの もの。よるの ほしも、あさの 風  
 三94 3 るの ほしも、あさの 風も、みんなの も  
 三94 3 さの 風も、みんなの ものです。十一  
 三94 5 まいの 紙 一まいの 紙で、いろいろな  
 三95 4 ます。この 一まいの 紙が、いろいろな  
 三95 7 ます。この 一まいの 紙に、えを かく  
 三95 9 きます。おとうさんの かおも、先生の つ  
 三95 9 んの かおも、先生の つくえも かくこ  
 三96 2 が できます。にわの 花も、空の 雲も、  
 三96 2 。にわの 花も、空の 雲も、とおい 山も  
 三96 6 また、この 一まいの 紙に、字を かく  
 三97 8 ったことは、いつの まにか きえてし  
 三98 5 の こります。一まいの 紙にかいた えを、  
 三99 4 生が、「みなさんの かいた えでも、字  
 三100 6 きました。ある 日の ことです。おじい  
 三100 9 いますと、ねもとの ぴかりと 光る 竹  
 三102 2 た。そうして、かこの 中に いれて、おば  
 三102 4 ものは、おじいさんの とる 竹の 中には、  
 三102 4 じいさんの とる 竹の 中には、たびたび  
 三102 6 ました。おじいさんの うちには だんだん  
 三102 7 ました。また、小人の ようだった おひめ  
 三102 7 めさまは、三月ほどの あいだに、すくす  
 三102 8 が のびて、ふつうの 人の 大きさに な  
 三102 8 びて、ふつうの 人の 大きさに なりまし  
 三102 10 えようもなく、家の すみずみまで 光り  
 三103 2 じいさんは、きもちの わるい ときでも、  
 三103 2 いときでも、はらの たつ ときでも、こ  
 三103 3 、この かぐやひめのかおをみると、す  
 三103 5 おりました。世の中の 人たちは、「略」。

三103 9 きて、おじいさんの家のまわりをと  
 三103 9 、おじいさんの家のまわりをとりまき  
 三103 10 。そうして、かきねの上からのびあがつ  
 三103 10 ってみたり、へいのすきまからのぞき  
 三104 9 三104 9 わたくしはだれのところにも およめ  
 三104 10 三104 10 んとおばあさんのおそばにいたい  
 三105 2 三105 2 どんなりっぱな人のねがいを、みん  
 三105 4 三105 4 いました。たいていの人は、あきらめて  
 三105 9 三105 9 れども、かぐやひめのいうようには、だ  
 三106 1 三106 1 でした。かぐやひめのひょうばんが、だ  
 三107 2 三107 2 て、ある日、かりのおかえりに、とつ  
 三107 4 三107 4 らんになると、光の中にきれいな  
 三107 9 三107 9 すると、かぐやひめのすがたがきゆうに  
 三108 5 三108 5 は、「これはただの にんげんではある  
 三109 1 三109 1 りました。ある年の春のころから、月  
 三109 1 三109 1 した。ある年の春のころから、月のき  
 三109 1 三109 1 春のころから、月のきれいなばんに  
 三109 5 三109 5 になると、かぐやひめのようすはいっそう  
 三110 3 三110 3 、わたくしは月の世界のものです  
 三110 3 三110 3 くしは月の世界のものです  
 三110 4 三110 4 十五夜には、月の國からむかえが  
 三110 9 三110 9 かぐやひめを月の世界の 人にわた  
 三110 9 三110 9 ひめを月の世界の 人にわたさない  
 三111 6 三111 6 。それで、たくさんのけらにいいつけ  
 三111 9 三111 9 ました。おじいさんの家のまわりは、弓  
 三111 9 三111 9 。おじいさんの家のまわりは、弓矢を  
 三111 10 三111 10 とりかこまれ、やねの上まで、人といっ  
 三112 2 三112 2 、しめきつたくらの中で、しつかりと  
 三112 9 三112 9 ぎなことに、手足の力がなくなつて、  
 三113 1 三113 1 に、空から大ぜいの天人たちが、雲に  
 三113 3 三113 3 きつておいたくらの戸がひとりでに  
 三113 4 三113 4 ていたかぐやひめのはらは、すうっ

三113 10 三113 10 みて、わたくしのことを思いだして  
 三115 3 三115 3 みかどへ おわかれの手紙とふしのく  
 三115 4 三115 4 かれの手紙とふしのくすりをのこしま  
 三115 6 三115 6 ました。かぐやひめのすがたは、それは  
 三115 8 三115 8 た。そこで、よいの車にのつて、しず  
 三116 3 三116 3 た。そうして、ふしのくすり手紙は、  
 三116 6 三116 6 「略」と、おつきのものにおたずねに  
 三116 7 三116 7 なりました。おつきのは、「略」。  
 三117 3 三117 3 かどは、「その山の上で、ふしのくす  
 三117 3 三117 3 山の上で、ふしのくすり手紙を  
 三117 6 三117 6 なりました。おつきのはそのとお  
 三117 7 三117 7 した。すると、ふしのくすりをやいた  
 三117 7 三117 7 いたけむりが、山の上からいつまでも  
 三117 9 三117 9 。それで、この山の名を、「ふじの山」  
 三117 9 三117 9 ます。うえぼうそうの知らせは、ここか  
 三117 9 三117 9 くれます。こうえんのせわや、どうろの  
 三117 9 三117 9 のせわや、どうろのそうじなどもして  
 三117 9 三117 9 きます。世界じゅうの人の心をつなぐ  
 三117 9 三117 9 。世界じゅうの人の心をつなぐ糸を、  
 三117 9 三117 9 さつしよです。人々のたいせつなもちも  
 三117 9 三117 9 れます。こは、水のきれいないけです  
 三117 9 三117 9 まわりには、さくらの木がたくさん  
 三117 9 三117 9 町でもひょうばんのかじやさんです。  
 三117 9 三117 9 こはわたくしたちの学校です。町じゅ  
 三117 9 三117 9 学校です。町じゅうの友だちがみんな  
 三117 9 三117 9 さく、たいいくなどのべんきょうをし  
 三117 9 三117 9 えきです。となりの町と、いったりき  
 三117 9 三117 9 。どこも、この町の目です。この町の  
 三117 9 三117 9 の目です。この町の目です。この町の  
 三117 9 三117 9 の耳です。この町の手となり足とな  
 三117 9 三117 9 にわとりが、かぶのはっぱをたべて  
 三117 9 三117 9 くれる。むこうぎしの、すすきのもさも

四14 6 四14 6 こうぎしの、すすきのもさもさしている  
 四15 7 四15 7 。えつ子がわたしのせなかでねんねし  
 四15 8 四15 8 ねんねした。わたしのせなかにかおを  
 四16 8 四16 8 いる。おかあさんのバケツがおもそう  
 四17 1 四17 1 おもそうだ。バケツの中に月がうつつ  
 四17 9 四17 9 だった。おかあさんの手の上につかま  
 四17 9 四17 9 。おかあさんの手の上につかま  
 四18 9 四18 9 ところで、おかあさんの手の上で、力いっ  
 四18 9 四18 9 、おかあさんの手の上で、力いっ  
 四19 7 四19 7 はそれぞれあいての人をきめてから、  
 四20 1 四20 1 さおさんは、あいての人を「おかあさん  
 四20 2 四20 2 」にきめて、つぎのような文を書きま  
 四20 5 四20 5 みが三びき、わの中にはいり、ねこ  
 四20 6 四20 6 こが二ひき、わのそとにでました。  
 四20 6 四20 6 でした。ねこの一びきは、わたく  
 四21 3 四21 3 たえました。ねこのわたくしは、どの  
 四21 6 四21 6 ねずみたちは、わの中できよろきよ  
 四21 9 四21 9 をねらって、わの中へもぐりこもう  
 四22 2 四22 2 は、あわててわのそとへにげました  
 四22 5 四22 5 たとき、またわの中ににげこみまし  
 四22 8 四22 8 かきました。なんのえか、あててごら  
 四22 9 四22 9 らんなさい。ぼくのうちをかいので  
 四24 6 四24 6 ちますね。きのうのゆうがた、おとな  
 四24 7 四24 7 うがた、おとなりのまさこちゃん、  
 四24 8 四24 8 んと、あのいけのそばまでさんぼし  
 四25 1 四25 1 して、みっちゃんのしゃしんのまえに  
 四25 1 四25 1 やんのしゃしんのまえにかざりまし  
 四25 3 四25 3 した。みっちゃんのことを、みんな  
 四26 3 四26 3 た。「りんごさんのほったの赤いこ  
 四26 3 四26 3 さんのほったの赤いこと。りんご  
 四26 4 四26 4 こと。りんごさんのかおのまるいこ  
 四26 4 四26 4 んごさんのかおのまるいこと。りん

四二六六 手 まっ白なおさらの上では、おひめさ  
 四二六六 手 では、おひめさまのようですね。」たみ  
 四二六九 手 くなくね。きみのだいすきなきゅう  
 四二七五 手 ました。「あしたのあさも、またかけ  
 四二七六 手 をしようね。林のむこうの一本道ま  
 四二七六 手 ね。林のむこうの一本道まで、かけ  
 四二九一 手 とかな。ぶどうえんのおじさんのところ  
 四二九二 手 うえんのおじさんのところへいって、い  
 四二九三 手 ことかな。おぼさんのうちへいって、い  
 四二九四 手 いて、いもほりのてつだいをする  
 四二九六 手 ことかな。となりのうちから、うさぎ  
 四三〇一 手 つこさんは、「くみの人みんな」にき  
 四三一二 手 わたくしは、うちの花をあげようと  
 四三一二 手 ているコスモスの花をあげようと  
 四三一二 手 いて、つぎのような文を書きま  
 四三二五 手 うでようちえんの男の子がなくて  
 四三二八 手 ようちえんの男の子がなくていまし  
 四三二八 手 いました。どこかの中学校の女の生  
 四三二九 手 どかの中学校の女の生徒さんがきて、  
 四三二九 手 かの中学校の女の生徒さんがきて、  
 四三二九 手 ききました。男の子は、げたのはな  
 四三二九 手 。男の子は、げたのはななが切れて  
 四三二九 手 すぐひもでげたのはなをすけて  
 四三二九 手 いう。おとうさんのことを思い出し  
 四三二九 手 できあがると、男の子は、それをはい  
 四三二九 手 しまいました。女の生徒さんはわたく  
 四三二九 手 ば「かずこさんの書いた文で、なに  
 四三二九 手 文で、なにか気のついたことはあ  
 四三二九 手 一ど、かずこさんの文をよみなおしま  
 四三二九 手 生は、かずこさんのおとうさんのこと  
 四三二九 手 んのおとうさんのことばに、気がつ  
 四三二九 手 ても、まだ、なんのことかわかりま

四三三三 手 こさんは、中学校の女の生徒さんが  
 四三三三 手 は、中学校の女の生徒さんが子ども  
 四三三三 手 徒さんが子どものげたのはなを  
 四三三三 手 が子どものげたのはなをすける  
 四三三三 手 へ。「おとうさんのことばです。」「略  
 四三三三 手 ても、かずこさんの耳には、おとうさ  
 四三三三 手 には、おとうさんのことばが、ひびい  
 四三三三 手 くて、その人のことばが生きて  
 四三三三 手 いて、つぎのような話をしまし  
 四三三三 手 、きのう、となりのうちにおつかい  
 四三三三 手 とき、ぶどうだなの下をとおりました  
 四三三三 手 いきって、となりのおぼさんに、「略  
 四三三三 手 とき、わたくしの口をおさえたも  
 四三三三 手 れは、おかあさんのことばでした。『へ  
 四三三三 手 へ。』「おかあさんのことばがとめたか  
 四三三三 手 、めいめいじぶんのことが思い出され  
 四三三三 手 とき、にいさんのことばを思い出し  
 四三三三 手 先生、さくらの枝をおうとし  
 四三三三 手 とき、おじさんのことばに気がつ  
 四三三三 手 つも、あなたがたのいいお友だちに  
 四三三三 手 のなにか 三十ぼのがんは、まいにち  
 四三三三 手 まがつてつりぼりのようになつたりし  
 四三三三 手 なりました。ゴムのようになつたりし  
 四三三三 手 た。どのように列のかたちをかえても  
 四三三三 手 早くから、三十ぼのがんは目をさま  
 四三三三 手 た。ゆうべは、ぬまのきしの、よしのき  
 四三三三 手 べは、ぬまのきしの、よしのきれいに  
 四三三三 手 まのきしの、よしのきれいにしげつた  
 四三三三 手 。「略。」「とうばんのがんは、大きな声  
 四三三三 手 きめました。あさの風は、氣もちよく、  
 四三三三 手 、氣もちよく、がんのむなげにあたりま  
 四三三三 手 たりました。三十ぼのがんは、一列にな

四三七九 手 が、やがて、まっぼのようなかたちにな  
 四三七九 手 すぎると、高い山のそばにきました。  
 四三七九 手 きました。その山のふもとには、大き  
 四三七九 手 びました。よく木のかげからねらいう  
 四三七九 手 されるからです。山の上を高くとびこ  
 四三七九 手 たてました。ほかのがんは、また、み  
 四三七九 手 、石ころかなにかのようにおちていき  
 四三七九 手 ました。「略。」「下の方から、てつぼう  
 四三七九 手 方から、てつぼうの音がひびいてき  
 四三七九 手 きました。二十九わのがんは、あわてて  
 四三七九 手 わててかっちゃんのところへあつまり  
 四三七九 手 かっちゃんが、いまのてつぼうでやられ  
 四三七九 手 わかりました。力のつよいがんが、三  
 四三七九 手 三ばで、かっちゃんのおちていくのを、  
 四三七九 手 けとめました。ほかのがんは、右や左か  
 四三七九 手 略。」「略。」「ほかのものは、あとにな  
 四三七九 手 。「略。」「二はつめのてつぼうの音が、  
 四三七九 手 はつめのてつぼうの音が、ひびいてき  
 四三七九 手 。「略。」「二十九わのがんは、列をき  
 四三七九 手 。ちようど、一まいのもうふのようにな  
 四三七九 手 、一まいのもうふのようになつて、か  
 四三七九 手 りすぎましたが、目のまえに、高い、高  
 四三七九 手 ていました。がんのなかまは、この山  
 四三七九 手 なかまは、この山のむこうにあるみ  
 四三七九 手 うにあるみずうみのところへいこうと  
 四三七九 手 た。やと高い山のみねをこえました  
 四三七九 手 」「略。」「みずうみのほうから、風がふ  
 四三七九 手 ちでした。みずうみの島には、こんもり  
 四三七九 手 ありました。がんのなかまは、この林  
 四三七九 手 なかまは、この林の中におりました。  
 四三七九 手 おりました。一わのがんが、みずうみ  
 四三七九 手 がんが、みずうみのきれいな水をく



四548 かつちゃんは、はねのつけねをうたれて  
 四556 ない、しずかな、星の光る夜でした。か  
 四557 かさかさという木の音の音がしまし  
 四557 さという木の音の音がしまし  
 四559 る音でした。つぎの日のあさ、かつち  
 四559 でした。つぎの日のあさ、かつちゃん  
 四568 略。「あしたのあさ、出発しても  
 四568 いいよ。ぼくたちのたびが、あんまり  
 四574 。そこで、その日のばんは、かつち  
 四575 ばんは、かつちゃんの全快いおいをしよ  
 四577 ました。かつちゃんのすきなおだんごを  
 四579 きると、みはりばんのがんだちもあつめ  
 四583 かつちゃんは、みんなのおおをみて、にこ  
 四588 いました。二十九わのかおがそろいまし  
 四592 略。「二十九わのばんは、略。」  
 四5910 略。「りすさん、がんなかまをみかけな  
 四602 くらうさん、がんなかまをみなかっ  
 四609 ないので、二十九わのばんは、テーブル  
 四609 ばんは、テーブルのまわりにあつまり  
 四612 た。いんそつがかりのばんが、口をひら  
 四613 会 ひらいて、「あすのあさ、出発しよう。  
 四619 しました。二十九わのばんが、食事をす  
 四621 べ。」と、出発がかりのばんが、みんなを  
 四622 づけました。みんなのねているひまに、  
 四623 ばんは、もう一ど林のおくをさがしに  
 四624 た。しずかなやぶのところで、はばた  
 四624 ところで、はばたきの音がきえます。  
 四625 す。みると、なかまのばんが、へびから  
 四627 は、いきなりへびのくびにかみつしま  
 四628 つきました。さすがのへびも、いきがく  
 四629 そのひまになかまのばんは、するりと  
 四632 かつちゃんは、なかまの手をとって、いそ

四643 会 いいや。いままでのわがまま、ごめん  
 四651 会 ないから、あとのものがじゅんじゅ  
 四653 た。「略。」三十ぼのばんは、みずうみ  
 四653 ばんは、みずうみの島をとびたちまし  
 四655 した。うすむらさきの雲が、おだやかに  
 四656 ていました。ばんの列は、そのきれい  
 四657 、そのきれいな雲の中に、みえなくな  
 四675 でに、ことばあそびのたねをたくさん  
 四684 略。「略。」うらの小山の小さいけに  
 四684 略。「うらの小山の小さいけに子もが  
 四689 略。「このえんの下のくぎ、ひきぬきに  
 四691 略。「略。」二組のあつめた「かいぶ  
 四697 略。「略。」三組の「なぞ」。「略。」  
 四705 なんととく。あきの花はたけととく。  
 四7010 略。「略。」いろはの「い」の字とかけ  
 四7010 略。「いろはの「い」の字とかけて、なん  
 四713 略。「いろはの「ろ」の字とかけ、なん  
 四714 略。「略。」いろはの「ろ」の字とかけ  
 四714 略。「いろはの「ろ」の字とかけ、なん  
 四716 略。「いろはの「ろ」の字とかけ、なん  
 四717 略。「略。」四組の「ふくびき」。「略  
 四719 人には、おもちゃのねこと、いぬとを  
 四726 略。「略。」「こおりのてんぶら」これを  
 四729 略。「略。」「ひびのくすり」これが  
 四742 はがるたい——いの一ばん。ろ——ろ  
 四745 どうさん。は——花のようにきれいな心  
 四746 心。に——日本一のふじの山。ほ——  
 四747 じの山。ほ——星のきれいな夜空。へ  
 四753 がれ。り——りんごのような赤いほお。  
 四758 けて。を——「を」の字は、ことばのあ  
 四759 「の字は、ことばのあとにつく。わー  
 四765 たにれ——れんげの花がひらいた。そ

四7610 —ねずみとねこのかけっこ。な——  
 四772 冬。ら——ラジオのお話きましよう  
 四773 ましよう。む——麦の花に、ばらの花。  
 四773 —麦の花に、ばらの花。う——うれし  
 四775 とき。あ——「あ」の字はこれから「  
 四777 にさんこちら、手のなる方へ。く——  
 四778 へ。く——くじやくのまねをするから  
 四785 あがれ。こ——こいのたきのぼり。え——  
 四791 あられ。さ——さるの木のぼり。き——  
 四798 ように。し——しものあさ、白いき。  
 四799 いき。あ——「あ」の字もこれから「  
 四7910 つかう。ひ——火の用心。も——もも  
 四801 用心。も——ももの花のさくころ。せ——  
 四801 も——ももの花のさくころ。せ——  
 四802 ころ。せ——世界の子ども。す——す  
 四814 会 クリスマス。星のきれいなこのよ  
 四817 会 リスマス。世界の子どもにうたわれ  
 四826 つくりました。まつの木をを立てて、  
 四826 ました。まつの木をを立てて、色紙  
 四833 といつて、一まいのえをだしました。  
 四834 た。それはふじ山のえでした。ねえさ  
 四838 たサンタクロースのおじさんができ  
 四839 した。それをまつ枝のさきにつり  
 四839 。それをまつ枝のさきにつりさげる  
 四843 ました。そのつぎの日の夜、お友だち  
 四843 た。そのつぎの日の夜、お友だちがあ  
 四844 。クリスマスツリーのそばで、みんな  
 四845 えさんが、エスさまのおたんじょうのお  
 四846 まのおたんじょうのお話をしました。  
 四847 二ばんめに、となりのうちのひでおさん  
 四847 に、となりのうちのひでおさんが、お  
 四849 んめに、すじむかいのみきこさんが、し

四八四 すると、みきこさんのいもうとの たつこ  
 四八四 皆さんのいもうとの たつこさんが、そ  
 四八五 さんが、「おかあさんの サンタクローズさ  
 四八六 雪 ゆうがた、まつ の 枝は、まがる  
 四八七 うがた、まつ の 枝は、まがるほど  
 四八八 てきた。すみがまの 上に、雲がでて  
 四八八 くる。すずめ親子の ものがたり。山は  
 四八九 つたよ。からすの かんたは さむかろ  
 四八九 へ。」すずめ親子の ねたあとは、さ  
 四八九 さらさら雪の 音。雪だ という  
 四九〇 かよう 子どもたちの ことを思つて、お  
 四九〇 を思つて、おもての とおりを さつさと  
 四九一 んはいたつ する人 の ことを思つて、ゆ  
 四九二 ゆうびんなげいれ口の まわりを さつさと  
 四九三 かおを だして 空の ほうを みあげて、  
 四九四 れて、高い 高い 空の まん中を みあげる  
 四九五 よくも あんなに 雪の たねが あるもの  
 四九五 雪、小さな 雪、雪の かたちは きまつて  
 四九六 四人と ところ うみの そば 四人の 子ど  
 四九六 うみの そば 四人の 子どもが、一びき  
 四九六 子どもが、一びきのかめを とりまいて  
 四九九 かねを 子どもたちの 手に、それぞれわ  
 四一〇 おじぎをして、海の方へ いってしま  
 四一〇 うらしまは、かめの うしろすがたを み  
 四一〇 ろ うみべとうみの 中うらしまが、海  
 四一〇 りました。あなたのお力で、いのちび  
 四一〇 「かめは、うらしまの手をとつて、そこ  
 四一〇 れがりゆうぐうのご門で ございます  
 四一〇 うらしまは、あたりの うつくしさに おど  
 四一〇 「うらしまは、右の こしかけに こしか  
 四一〇 のあいだは、うちのかめをおたすけ  
 四一〇 「ほんとうに お礼の 申しようも ござい

四一一 おとひめさまは、左の いすに こしかけま  
 四一一 ま。まるで ゆめの ようだ。」かめ「りゅ  
 四一一 とおなじ。ある 日の こと、うらしまは、  
 四一一 らしまは、父や 母の ことを 思いだして  
 四一一 さしあげた ことの ない、おいしいご  
 四一一 しま「でも、うちの ことも 氣にかか  
 四一一 ざいますか。なんの おかまいも できま  
 四一一 「かめが、うらしまの手をとつて、でて  
 四一一 みるみる しらがのおじいさん。むか  
 四一一 むかしむかしの 話です。十一  
 四一一 なりました。みんなの おかみえです。  
 四一一 ます。たつた一つの でんとうですが、  
 四一一 どれほど たくさんの人 が、はたらいて  
 四一一 でしょう。でんとうの まるい ガラスは、  
 四一一 ている、ほそい 糸の ようなものは なん  
 四一一 とおいと おい 川の水で 生まれたも  
 四一一 それから、みんなの手で そだてられ、  
 四一一 ども、ただ一つの この でんきゅうが  
 四一一 ゆうは わたくしのかおです。」ただ  
 四一一 「へ略」。ただ 一本の マッチでも、これ  
 四一一 い。十一月は きのうの花。冬 十二月  
 四一一 正月。二月は うめの花。十三 はごろ  
 四一一 原 白いはまべの まつ原に、波が  
 四一一 じの山。ひとりの りょうしが、みほ  
 四一一 す。みると、むこうの まつの 枝に、きれ  
 四一一 と、むこうの まつの 枝に、きれいな も  
 四一一 かえつて、うちの たからに しよう。  
 四一一 うと します。まつ の 木の うしろから、  
 四一一 します。まつ の 木の うしろから、ひと  
 四一一 うしろから、ひとりの 女が でて きます。  
 四一一 それは、わたくしの きもので ございま  
 四一一 かえつて、うちの たからに しようと

四一三 女「それは、天人のはごろもと 申しま  
 四一三 たがたには、ご用の ないもので ござ  
 四一三 「りょうし」天人のはごろもなら、な  
 四一三 できません。國の たからに いたしま  
 四一三 みあげます。天人の しおれた、この よ  
 四一三 ちください。天人の まいを まつて、み  
 四一三 ます。天人の 月の 都の 天人たちは、  
 四一三 天人の 月の 都の 天人たちは、みん  
 四一三 黒い ころもの そろい で まえば、  
 四一三 まっ黒、やみの 夜。白い ころも  
 四一三 白い ころもの そろい で まえば、  
 四一三 白い はまべの まつ原に、波が  
 四一三 えつたり。いつの まにやら 天人は、  
 四一三 ら 天人は、春の かすみにつつまれ  
 四一三 る。水を ふくんだ草のうた、こけのうた、  
 四一三 んだ草のうた、こけのうた、土のうた、い  
 四一三 た、こけのうた、土のうた、いわのうた。  
 四一三 た、土のうた、いわのうた。山から 川のあ  
 四一三 わのうた。山から 川のあかんぼが 生まれる  
 四一三 んぼが 生まれる。山の てつぺんの すぐか  
 四一三 れる。山の てつぺんの すぐちかいところ、  
 四一三 さいながれ山から 川のあかんぼが 生まれる  
 四一三 んぼが 生まれる。川のはかんぼ、チョチ、  
 四一三 、ころがして、いわの上からとびおりて、  
 四一三 電氣をおこし、水道の水にもなり、川はだ  
 四一三 荷船がおとる。下水の水やうんがの水、き  
 四一三 下水の水やうんがの水、きたないどぶ水  
 四一三 ぶ水をながして、海のとおくにすてにい  
 四一三 「にいさん、汽車のきつぷかったの。」  
 四一三 、シユ。「どこかのおばあさんと ぽつち  
 四一三 略。」「きかんしの人が、いっしょうけ  
 四一三 「いちばんさきのきかん車の中です。



五407手 「へ略。」「ぼくのうちは、うしが十  
五409手 います。白黒ぶちのちうしです。なか  
五413手 のびはじめた草の上を、うれしそうに  
五415手 。子うしは、小川の岸をとことこ走りま  
五4110手 「ほっかいどうのみなさん。このあい  
五4111手 にして、こくぼんのところにならべてあ  
五429手 す。つばめが、私のすぐ目のまえを、い  
五429手 めが、私のすぐ目のまえを、いつたりき  
五434手 「へ略。」「ぼくのねえさんは、あさひ  
五436手 い声でした。ぼくのうちは花屋です。で  
五438手 たいました。ぼくのすきな花は、あさが  
五439手 さがおです。空色のあさがおです。それ  
五443手 も ぼくら、日本の子どもらは、はと  
五444手 、はとだ。平和のはとだ。世界の友  
五445手 のはとだ。世界の友よ、手をつなぎ、  
五447手 。明かるい世界の空とんで、平和の  
五448手 空とんで、平和のうたをうたおうよ。  
五451手 。 ぼくら、日本の子どもらは、つば  
五453手 いな花だ。世界のそのにさきにおう、  
五454手 う、きれいな花のその一つ。みんな  
五456手 さきそらい。世界の花ぞのかざろうよ。  
五457手 。 ぼくら、日本の子どもらは、星だ  
五459手 った星だ。世界の空のかず多い、か  
五4510手 星だ。世界の空のかず多い、かがや  
五464手 い、かがやく星のその一つ。みんな  
五464手 いにくとき、うらの竹やぶのそばを通  
五464手 とき、うらの竹やぶのそばを通たら、お  
五465手 ばを通たら、おくの方でうぐいすの音が  
五465手 おくの方でうぐいすの音がした。「略。」  
五487手 いまのぼったばかりの日の光が、さつとい  
五487手 のぼったばかりの日の光が、さつといば  
五492手 のしくなった。あさの光に、身をきよめる

五495手 、なの花ざかりの岸をでる。子うし  
五506手 る。海べ がけの下には 白いはま、  
五509手 ま。あみひく人の 黒いかげ 黒いか  
五519手 船がいく。海のはてから 白い雲、  
五531手 べ。」というので、西の方をみると、日がし  
五537手 声で、はるおが、東の空をみながらいいま  
五538手 れね。だいたい色の大きな星だこと。」  
五539手 略。」それは、南東の空で光っていました  
五5311手 「そっくりながら西の方をみると、小さな  
五546手 べ。」そこへ、となりのごろうさんが、かけ  
五548手 てきて、「略。」空のまん中に、大きな星  
五5410手 と明かるくて、つぎの星をみつけることは  
五551手 、またちよつと、家のまえにでてみました  
五555手 略。」と思って、西の空をみましたが、わ  
五556手 した。そこへ、受持のやまと先生がおい  
五557手 て、「今夜、学校のにわで、ぼうえんき  
五561手 くさん、子どもや町の人々が、あつまつて  
五565手 ん、ほら、あなたのみつけた二ばん星よ  
五569手 な、表わらぼうしのつばみtainなものも  
五574手 こういつて、はるおのかたをそつとおさえ  
五576手 だしたので、あたりの人がわらいました。  
五585手 か、青い、青い水の中にういているよう  
五587手 「ほんとうに、夜の星つてきれいなもの  
五588手 」。あれが、ぼくのみつけた二ばん星か  
五597手 かきねにあさがおの花が、三つはじめて  
五603手 略。」「あの三つの花が、そろってしん  
五623手 略。」「花の色を空色にそめてく  
五626手 ました。あさごはんのとき、はたけではじ  
五6211手 のは、おかあさんの力ではありませんよ  
五634手 のは、おかあさんのせいではありません  
五636手 うりも、あさがおの花もおなじだよ。」  
五641手 さんやおかあさんの力で、大きくなった

五645手 は、おまえひとりの力でもなければ、お  
五647手 さんやおかあさんの力でもない。」――  
五6410手 いけるのは、だれのおかげだろう。さあ  
五661手 ました。すると、金のさかながかかってき  
五662手 かってきました。金のさかなは、「へ略。」  
五6610手 しは、きよう、金のさかなをとったよ。  
五674手 の。せめて、おけの一つも、もらつてく  
五675手 かったのに。うちのおけは、もう、すつ  
五679手 た。おじいさんが金のさかなをよびますと  
五6711手 でてきて、「なんの用ですか、おじいさ  
五6810手 ない。もう一ど金のさかなのところへい  
五6811手 う一ど金のさかなのところへいつて、家  
五692手 た。おじいさんが金のさかなをよびますと  
五694手 きました。「なんの用ですか、おじいさ  
五695手 」。へ略。」「うちのおばあさんは、家が  
五702手 ばあさんは、「金のさかなのところへい  
五702手 は、「金のさかなのところへいつて、た  
五704手 ったから、お金持のおくさんになりたい  
五708手 た。おじいさんが金のさかなをよびますと  
五708手 なをよびますと、金のさかながおよいでき  
五7011手 ったから、お金持のおくさんになりたい  
五712手 いさんがおばあさんのところへ帰りますと  
五713手 ばあさんは、けがわのふくをきて、ぴかぴ  
五714手 ずきんをかぶり、金のうでわをはめ、赤い  
五719手 さんが、「お金持のおくさん、これであ  
五7111 じいさんをうま小屋のしごとにおいやりま  
五724手 いいました。「金のさかなに、わたしは  
五724手 に、わたしは金持のおくさんいやにな  
五727手 たかね。女王さまのようなあるきかたも  
五728手 あるきかたも、口のききかたも知らない  
五728手 いで――國じゅうのものわらいになるよ  
五731手 た。おじいさんが金のさかなをよびますと

五七二 なをよびますと、金のさかなは、「略」。  
五七三 さかなは、「なんの用ですか、おじいさ  
五七四 さんは、もう金持のおくさんはいやだ、  
五七五 いいました。「金のさかなにたのんでお  
五七六 た。こんどは、海のぬしになりたい。あ  
五七七 のひろい海で、金のさかなをけらいにし  
五七八 ぐたえもできず、力のない足どりで、海へ  
五七九 す。おじいさんは金のさかなをよびましたた  
五八〇 なをよびました。金のさかなは、できて  
五八一 いました。「なんの用ですか、おじいさ  
五八二 」。略。「うちのおばあさんは、もう  
五八三 いています。海のぬしになりたい、ひ  
五八四 いています。海の中へおよいでいて  
五八五 すごと、おばあさんのところへ帰りました  
五八六 月十一日 月 先生のつくえのかびんに、  
五八七 月 先生のつくえのかびんに、大きなひ  
五八八 に、大きなひまわりの花が、三本かざって  
五八九 たのですか。ごこのずが工作の時間に、  
五九〇 ました。ごこのずが工作の時間に、写  
五九一 しました。ひまわりの花は、いけださんが  
五九二 、いけださんが自分のうちのにわから、持  
五九三 ださんが自分のうちのにわから、持てき  
五九四 といっしょに、学校のはたけのむこうを流  
五九五 よに、学校のはたけのむこうを流れている  
五九六 うを流れている小川のところにいきまし  
五九七 うして、川をみて氣のついたことを書  
五九八 を書きました。つぎのような文が、はり  
五九九 略。「略」。「川の中の石が、のびたり  
六〇〇 略」。「略」。「葉のかげぼうしが、魚の  
六〇一 のかげぼうしが、魚のようによい

五80 2 略。」「略。」「川の中の石と石とが、お  
五80 2 略。」「略。」「川の中の石と石とが、おどつ  
五80 4 略。」「略。」「水の音をきいていたら、  
五80 7 たふきました。竹のさきにほうきをむす  
五80 8 つけて、てんじょうのくものすをはらいまし  
五80 9 れが、にしもりさんのせなかにあたりまし  
五81 2 れいになって、そのけしきがよくみえま  
五82 6 たべないことや、日のかんかんでるところ  
五82 9 月十五日 金 先生のお友だちが、学校を  
五82 10 。そうして、私たちの教室にもおいでにな  
五83 2 そこで、おひる休みるとき、私たちは、運  
五83 4 ならびました。先生のお友だちが、「略」  
五84 6 いたうくんは、海岸のおじさんの家で、海  
五84 6 は、海岸のおじさんの家で、海の作文を書  
五84 6 おじさんの家で、海の作文を書くんだとい  
五84 8 のうえさんは、國語の本にでていることば  
五84 10 い。いのうえさんの字びきができますね  
五85 5 ほうきを持って、木の葉をはきよせまし  
五85 5 ました。そこへ、村の子どもたちが、「略  
五86 2 略。」「そのとき、下の方から、「略。」「と  
五86 3 ん、おじょうさんのりょうかんさん。」「  
五86 5 、「略。」「と、うたのようにふしにつけて  
五86 5 よびながら、ひとりの子どもがきます。り  
五86 7 かんさんは、ほうきの手をとめて、「略」  
五87 7 は、おにんぎょうのおもりのしかたをし  
五87 7 んぎょうのおもりのしかたをしてみせて  
五88 9 な、りょうかんさんのまわりにあつまり  
五88 11 た。「こうして右の手でだいてな、左の  
五88 11 手でだいてな、左の手でかかえてさ、そ  
五89 3 うりやなすびの花ざかり。 あれは  
五89 6 いよい。 うらの山から海をみれば  
五89 10 、「略。」「ひとりの子どもが、「略。」「と

五90 4 ねました。「わしのおかあさんはな、ず  
五90 10 らな、おかあさんのおちちをコップコッ  
五91 5 」。みると、ざしきのまん中のたたみをや  
五91 5 と、ざしきのまん中のたたみをやぶって、  
五91 9 。

それで、手おけの水をかけてやると、  
五91 11 とうとうえんの下のいたで、あたまをコ  
五92 1 合 はがして、たたみのまん中にあなをあげ  
五92 6 合 たけのこにごはんのつぶが——こりやあ  
五92 7 合 いますよ。ごはんの中にたけのこのはい  
五92 8 合 んの中にたけのこのはいっているのが、  
五93 6 おけをさげて、うらのいどばたに立ちまし  
五93 7 立ちました。むこうの山から、大きな月が  
五94 3 その帰り道に、一わの小鳥のひなをひろい  
五94 3 り道に、一わの小鳥のひなをひろいました  
五94 6 合 す。「これ、なんのひなだろう。」「略  
五94 7 合 「略」。」「すずめの子らしいね。」「略  
五95 4 つしやって、たまごのきみですりえをこし  
五96 2 合 めずらしい。ひわの子ですよ。ほんとう  
五96 5 「略。」と、となりのおじさんがおしえて  
五96 6 、ひなはもう、かごの中をとびまわってい  
五97 4 まいにち、わたり鳥のむれがとんできます  
五97 5 。その中には、ひわのむれもありました。  
五97 6 ました。さんちゃんのおうちのまつの木に  
五97 7 さんちゃんのおうちのまつの木にとまった  
五97 7 やんのおうちのまつの木にとまった、か  
五97 8 とまったり、かえでの枝で休んだりしてい  
五98 1 した。「略。」ひわの子は、それが自分の  
五98 1 の子は、それが自分のなかまの鳴き声だと  
五98 1 それが自分のなかまの鳴き声だと思いまし  
五98 10 「略。」そのぼんのことでした。パタパ  
五98 11 きてみると、どこかのねこが、しのびこん  
五99 3 たが、ひわは、かたのところにはがをして

六95(金)「それでは、自分のようなものでも、役  
六106と光った。しごと台のそばで、ふさぎこん  
六108下をみつめていた女の子が、思わず「へ略  
六112げて、だいじにもとのふたガラスの中へい  
六112にもとのふたガラスの中へ入れた。そうし  
六112た。そうして、一つのかいちゅう時計をだ  
六114をはさんで、きかいのあなにさしこみ、小  
六111から、ガラス戸だなの中につりさげた。一  
六126(金)きました。ぐあいのわるかったのは、そ  
六133ありとはと一ぴきのありがいました。あ  
六133ました。あつい日中の道を、ものを運びな  
六136ました。ありは、川の岸で、うつむいて水  
六138。」というまに、川の中におちてしまいま  
六147ました。それを一わのはとがみつきました  
六149とはと、いそいで木の葉をとって、ありの  
六149の葉をとって、ありのそばにおとしてやり  
六149してやりました。木の葉は船のようになっ  
六1411ました。木の葉は船のようになって、あり  
六151ようになって、ありのそばを流れました。  
六153そういって、すぐ木の葉の船につかまりま  
六153いって、すぐ木の葉の船につかまりました  
六153上に乗りました。木の葉の船は波に流され  
六156乗りました。木の葉の船は波に流されて、  
六156は波に流されて、川の岸につきましたので  
六159(金)た。もし、あの木の葉の船が流れてこな  
六1510(金)もし、あの木の葉の船が流れてこなかつ  
六161「ありは、心から木の葉のおれいをいま  
六162た。そのとき、ありのまえをひとりのかり  
六162ありのまえをひとりのかりうどが弓矢を持  
六165に矢をつがえて、木の上をねらいました。  
六166をねらいました。木の上には、一わのはと  
六166。木の上には、一わのはとがとまっています

六16 8、いそいでかりうどのすねにはいのぼりま  
六17 2をきいて、はとが下の方をみますと、かり  
六19 4くあうと、たいこのうちがいもあるよ。  
六19 6「りぎりす」みどりの木の葉は喜びにみち  
六19 6「りす」みどりの木の葉は喜びにみち、き  
六19 8な風は、われわれの音楽をほめてくれる  
六20 1にひいて、この夏の日を楽しもうではな  
六20 9しよう。」テーブルのまわりにあつまつて  
六21 3「われらきりぎりすの生活——」こんなこ  
六24 9「りす」苦勞しようのありさんたちだな。  
六26 1かみて半分はありのいえの中、しもて半  
六26 1て半分はありのいえの中、しもて半分はそ  
六26 8う。」あり一は、ろの火を赤くもえたたせ  
六26 10「かい。」あり一「夏のあいだに、こんな  
六27 1とうだ。でも、夏のころはあつてたい  
六28 1だ。」このとき、戸のそとに、きりぎりす  
六29 1「あり一、二が戸の方をみています。あ  
六30 3「だね。」あり三「花のみつをわけてあげよ  
六30 4。」あり一が、おくの方からみつをびんに  
六31 2し「これは、まんがのシナリオです。1  
六31 4げしい風。いねが波のようにゆれる。2  
六31 7、「へへのへのもへ」の顔で、風に向かって  
六31 8立っている。きものすがすがしく風にあおられ  
六32 1大ゆれにゆれる。木の葉がとぶ。5 か  
六32 2がとぶ。5 かかしのまゆがまつすぐにの  
六32 2ぐにのびる。目だまの「の」の字がくるく  
六32 2る。目だまの「の」の字がくるくるまわる  
六32 3くるくるまわる。口の「へ」の字がのびた  
六32 3まわる。口の「へ」の字がのびたりちぢん  
六32 4「6 「これぐらいの風にまけるものか。  
六32 5「略。」7 かかしの顔に葉がとびかかる  
六32 5びかかる。てっぺんのぬけたかんかんぼう

六32 6ふきとばされる。顔のうしろを雲がとぶ。  
六32 7波うつ。はげしい風の音。9 かかしが風  
六32 8まきあげられる。糸の切れたたこのように  
六32 8る。糸の切れたたこのように、空にすいこ  
六32 10かし。10 からすの子が、びっくりして  
六33 3どす。12 白いひげの雲が風に流されてい  
六33 5風を受けるたびに雲のからだのかっこうが  
六33 5るたびに雲のからだのかっこうがかわる。  
六33 9「し」助けて——雲のおじさん。」かし  
六33 10「生まれてはじめての大風だ。雲のおじさ  
六33 11めての大風だ。雲のおじさん、わたしの  
六33 11おじさん、わたしのたんぽぽはどこでしよ  
六34 1でしよう。」雲、山のかげにかくれて、こ  
六34 3「14 風がふく。雲のひげがあられて長  
六34 6うって、また、ひげの中におちる。15 か  
六34 8おちる。15 かかしの目だま、ぐるぐるま  
六35 716 また、風。かかしのつかまつたひげ、の  
六36 1かし。18 大すぎの木にやまとまつた  
六36 2し。かし「すぎの木のお婆さん、助け  
六36 2かし「すぎの木のお婆さん、助けて。  
六36 3「ぎ」あら、子どものかかしだね。かわい  
六36 3かわいそうに。根の方へおりていらっし  
六36 6まを地につけるすぎの木。はげしい風の音  
六36 7ぎの木。はげしい風の音。20 高くふきあ  
六36 10ってしまふ。21 風の音がよくなる。そ  
六37 1んでいる町。ラジオの音楽。23 そのビル  
六37 223 そのビルディングの一つ——とがった屋  
六37 5いるかし。24 顔の大写真し。「の」の字  
六37 5顔の大写真し。「の」の字のはねたさきから  
六37 5大写真し。「の」の字のはねたさきから、雨  
六37 6たさきから、雨だれのようなみだがこぼ  
六37 9と下にみえる夕やけの大通りを、豆つぶほ

六37 10通りを、豆つぶほどの自動車や電車が、ひ  
六38 1ならぶビルディングのあいだから、とびあ  
六38 2びあがってくる親子のつばめ。27 子つば  
六38 8「さあ——」28 親子のつばめ、屋根のそば  
六38 8親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、ま  
六38 10もどってきてかかしの近くにとまる。親つ  
六39 2「たんです。きょうの大風に。」子つばめ  
六39 4「かし」あのかげの、ずっと遠い  
六39 4「し」あのかげの、ずっと遠い  
六39 7「なくちゃ。あなたのしごとはこれからよ  
六39 8らよ。わたしたちのなかまがわるい虫を  
六40 430 のこされたかかしの大写真し。かし「帰  
六40 7いなあ。」31 かかしのまわりに、村の子ど  
六40 7かしのまわりに、村の子どもや、森や、小  
六40 8小川や、いな田などの、きれいな、楽しか  
六40 10にくくなる。かかしの顔まで赤くなる。33  
六41 1「33 ビルディングのまどに、一つ二つと  
六41 2「34 ビルディングのあいだから、つむじ  
六41 3いだから、つむじ風のようにな、列をつくつ  
六41 4列をつくつたつばめのむれが、かかしの方  
六41 4めむれが、かかしの方へとんでくる。35  
六41 7子つばめが、かかしのそばにとまる。親つ  
六42 8します。」36 つばめのむれ、屋根の上にひ  
六42 8つばめのむれ、屋根の上にひとまたまりに  
六42 11なれる。かかしが列のまん中にはいつてい  
六43 1日さまをおって、町の上を列車のようにと  
六43 1って、町の上を列車のようにとぶつばめの  
六43 2のようにとぶつばめのむれ。38 山や、み  
六43 3みずうみや、はたけの上をひとまたまりに  
六43 5になつてとぶつばめのむれ。39 その列が  
六43 8がくれる。美しい空の色。40 青黒い夜空  
六43 10さま。41 にわたりの声。さわやかな朝の

六43<sup>10</sup> の声。さわやかな朝の空。白い雲。42 木  
六44<sup>1</sup> 空。白い雲。42 木の枝にとまっている二  
六44<sup>1</sup> にとまっている二わの子がらす。子がらす  
六44<sup>8</sup> いなものが向こうの山の方へとんでいっ  
六44<sup>8</sup> ものが向こうの山の方へとんでいったん  
六45<sup>4</sup> 43「へのへのもへ」のかかしが、むねをは  
六45<sup>7</sup> たしている。かかしの目のまえに、風にそ  
六45<sup>7</sup> ている。かかしの目のまえに、風にそよ  
六45<sup>8</sup> に、風にそよぐ金色のいねが、いちめん  
六46<sup>4</sup> いのに、おちばの、おちばの子どもた  
六46<sup>4</sup> おちばの、おちばの子どもたち、じゃ  
六47<sup>1</sup> へいく。おちばの、おちばの子どもた  
六47<sup>1</sup> おちばの、おちばの子どもたち、ちょ  
六47<sup>5</sup> 秋やまが、草屋ののきまでたれて、  
六47<sup>8</sup> たくびだす子うまの顔に、かきはすず  
六48<sup>6</sup> ジ、生きた絵本のページ。ふと、  
六48<sup>8</sup> あのまっさおな海の色。書いても書い  
六49<sup>2</sup> たりぬ、わたしの心の小人たち、い  
六49<sup>2</sup> ぬ、わたしの心の小人たち、いつも  
六49<sup>5</sup> あのまっ白な波の音。空のうた う  
六49<sup>8</sup> 明かるくそまる朝の空。楽しいことが  
六50<sup>1</sup> あ、さわやかな朝の空。すんだ青さを  
六50<sup>3</sup> ときにはくもる晝の空。考えごとでも  
六50<sup>5</sup> あ、おほらかな晝の空。くらければこ  
六50<sup>7</sup> ねむりをふらす夜の空。きたないこと  
六50<sup>9</sup> あ、おごそかな夜の空。五 月と雲  
六51<sup>2</sup> 。五 月と雲 月の明かるい晩でした。  
六51<sup>2</sup> でした。屋根も、木の葉も、石ころも、み  
六51<sup>4</sup> 、よしおと、みちこの三人が、かげふみを  
六52<sup>4</sup> す。そうして、つぎの雲の方へどんどん走  
六52<sup>4</sup> そうして、つぎの雲の方へどんどん走っ  
六53<sup>2</sup> た。ふみおは、両方のいうことをきいてい

六54<sup>4</sup> と気がついて、まえの方にある木の下へい  
六54<sup>4</sup> 、まえの方にある木の下へいきました。そ  
六54<sup>8</sup> ました。ふたりは木のそばへ走っていきま  
六54<sup>9</sup> て、お月さまを枝のあいだからみてこら  
六54<sup>10</sup> た。すると、月は枝のあいだにじつとして  
六55<sup>6</sup> をみると、空はいつのまにか、雲一つなく  
六55<sup>8</sup> た。ふみおはさっきのことを思いだして、  
六55<sup>8</sup> だして、また、にわの木の下へいってみま  
六55<sup>8</sup> て、また、にわの木の下へいってみま  
六55<sup>9</sup> た月は、もうさっきの枝のあいだにはなく  
六55<sup>9</sup> は、もうさっきの枝のあいだにはなくて、  
六56<sup>2</sup> 六 かべ新聞 私の学級では、来週から  
六56<sup>7</sup> ました。私たち一組のものは、みんな集ま  
六56<sup>8</sup> をして、やつとつぎのようなものができあ  
六57<sup>2</sup> 聞 第一号 はじめのことば こんど私た  
六57<sup>3</sup> とば こんど私たちの学級で、かべ新聞を  
六57<sup>8</sup> を書きます。みんなのしらべたことをはっ  
六57<sup>10</sup> 。どうぞ、みなさんの氣づいたことは、な  
六58<sup>1</sup> 、なんでも、かかしのものにお知らせくだ  
六58<sup>3</sup> さい。「略」。雪の朝 このあいだ雪の  
六58<sup>4</sup> の朝 このあいだ雪の降った朝、一年生の  
六58<sup>5</sup> の降った朝、一年生の子が、学校にくる道  
六58<sup>10</sup> 。この人は、私たちの組のまつもとさんで  
六58<sup>10</sup> の人は、私たちの組のまつもとさんです。  
六59<sup>4</sup> した。それはことばの声のかずのことです  
六59<sup>4</sup> 。それはことばの声のかずのことです。う  
六59<sup>4</sup> はことばの声のかずのことです。うたう  
六59<sup>5</sup> 。どうして、ふだんの話がうたえないのか  
六59<sup>7</sup> うたは、そのことばの声のかずが、五か七  
六59<sup>7</sup> は、そのことばの声のかずが、五か七にな  
六60<sup>3</sup> マル——七 アサノソラ——五 タノシ  
六60<sup>7</sup> カナ——七 アサノソラ——五 それか

六60<sup>9</sup> した。カボチャノハナガ——七 サキ  
六61<sup>2</sup> はがたやことわざの中にも、このことの  
六61<sup>2</sup> の中にも、このことのあてはまるものがみ  
六61<sup>8</sup> だ。寒暖計 けさの温度は五度です。毎  
六61<sup>9</sup> このらん、その日の朝の温度を書きつけ  
六61<sup>9</sup> らんに、その日の朝の温度を書きつけま  
六61<sup>10</sup> う。「子どもは風の子。」「略」。一口  
六62<sup>5</sup> た。きゅうりがくつの中にはいりました。  
六62<sup>9</sup> みじかい文 朝日の光で、アルコールの  
六63<sup>1</sup> の光で、アルコールのびんがきらりと光っ  
六63<sup>3</sup> た。アルコールは銀の水。弟がせきがでる  
六63<sup>7</sup> っ、しゃぼんを水の上へおいたら、つる  
六65<sup>2</sup> ゆうで、いちばん力のつよいものはな  
六65<sup>8</sup> はな。このなぞの答がわかった人は、  
六65<sup>9</sup> いてかべ新聞がかりのものにだしてくだ  
六66<sup>2</sup> 第一号に、つぎ話の第一かいめを書きま  
六66<sup>3</sup> 人たちは、このお話のつづきを書いてくだ  
六66<sup>8</sup> ありませんか。お話の題はべつにきめませ  
六67<sup>2</sup> るところに、一びきの子ぐまが住んでいま  
六67<sup>4</sup> 遊ぼうと思って、山の谷を歩いていきまし  
六67<sup>5</sup> た。すると、一びきのさるにであいました  
六68<sup>1</sup> 略。」「といて、木の上にするするとのぼ  
六68<sup>3</sup> 。このほか、「雪のかたち」を五つばか  
六68<sup>7</sup> もいれました。一組の人がみんな考えて  
六69<sup>2</sup> きました。この学校の子どものかずや、一  
六69<sup>2</sup> 。この学校の子どものかずや、一ばん遠く  
六69<sup>3</sup> ら通っている子どもの名や家の場所も書き  
六69<sup>3</sup> いる子どもの名や家の場所も書きました。  
六69<sup>4</sup> きました。かべ新聞の大きさは、わら半紙  
六69<sup>6</sup> て、きれいに、むだのないようにへんしゅ  
六70<sup>2</sup> の力 ごろうは、妹のはるえといっしょに  
六71<sup>8</sup> らった「よみかき」のところを、ふと思



六710 ㊦ うね。はるえさんのいうとおりね。雪だ  
六72 ㊦ ヶ。「だるまさんのうたをつくって、う  
六72 9 うし、あんなに元氣のいい顔つきもしてい  
六73 2 ㊦ れて、「雪だるまのことです。」と、と  
六75 2 ㊦ 「どうだ、ゆうべの命のこと、わかった  
六75 2 ㊦ うだ、ゆうべの命のこと、わかったかい  
六75 10 いくとき、雪だるまのかたのところに、ま  
六75 10 き、雪だるまのかたのところに、まつ枝  
六75 10 たのところに、まつ枝をつけました。は  
六78 3 ㊦ 「よく考えた。命のあるものは、日に日  
六78 5 ㊦ よ。とにかく、命のことはむずかしい大  
六78 11 息をすることも自分の力ではないことをき  
六79 2 ㊦ せんよ。ほら、左のむねのところに手を  
六79 2 ㊦ 。ほら、左のむねのところに手をあてて  
六79 4 ㊦ しょう。しんそうのごとうですよ。あな  
六79 10 ならった「あさがおの花」を思いだしまし  
六79 11 て、自分とあさがおの花とが、たいへん近  
六79 11 、たいへん近いもののように思われました  
六85 1 ㊦ ころか、申しわけのないことをしてしま  
六86 8 いる。そこへひとりの年よりがでてる。  
六87 8 ㊦ 」。ほこりの「なんのごてんですか。」年  
六87 9 ㊦ すか。」年より「海の神のごてんです。そ  
六87 9 ㊦ 。六87 9 ㊦ です。そのごてんの門のそばにいどがあ  
六87 9 ㊦ 。そのごてんの門のそばにいどがあつて  
六88 3 ㊦ です。すると、海の神は、きつといいこ  
六88 7 「五のぼめん 海のごてんの門のまえに  
六88 7 ばめん 海のごてんの門のまえに、大きな  
六88 7 ん 海のごてんの門のまえに、大きな木が  
六89 5 水だな。」そこへ女の人がでてきて、いど  
六89 6 人がでてきて、いどの水をくもうとする。  
六89 7 くもうとする。いどの水をみて、女「まあ、

六八九 11 つっているわ。」女の人は木をみあげなが  
六九〇 2 せんが、そのいどの水を一ぱいください  
六九〇 4 い。」女「はい。」女の人は、水をくんで、  
六九〇 8 ばめん 正面に、海の神がこしをかけてい  
六九〇 9 る。そこへ、さっきの女の人がでてくる。  
六九〇 9 そこへ、さっきの女の人がでてくる。女「  
六九一 1 でてくる。女「海の神さまに、申しあげ  
六九一 3 なんだね。」女「門の木の上に、りっぱな  
六九一 3 だね。」女「門の木の上に、りっぱな  
六九一 4 ます。」海の神「木の上に、りっぱな  
六九一 7 ないしなさい。」女の人は、いったんさが  
六九二 1 、ほでりのみことの弟、ほおりのみこと  
六九二 10 と「そうです。兄のだいじなつりばりな  
六九三 1 らわれて、私に海のごてんへいくように  
六九三 6 てみましょう。」女の人は向かつて、海の  
六九三 9 に。」女「はい。」女の人は、魚たちをたく  
六九四 5 神「そうか。みんなのものにたずねるが、  
六九四 7 だれか、このかたのつりばりをとって  
六九五 9 神「おかしいな。」海の神は、しばらくお考  
六九五 10 お考えになって、女の人に、「略。」女「  
六九六 3 略。」女「はい。」女の人は、たいをつれて  
六九六 5 まえは、このかたのつりばりを知らない  
六九六 9 にちがいない。」女の人は向かつて、海の  
六九六 10 て、海の神「たいのどから、つりばり  
六九七 3 になりました。」女の人はつりばりを水で  
六九七 3 を水であらって、海の神にさしあげる。海  
六九七 5 につりばりだ。」海の神は、ほおりのみこ  
六九七 5 は、ほおりのみことのまえにさしだしなが  
六九八 3 見（一）つくえのひきだしをかたづけ  
六九八 4 ただいた古いめがねのたまと、おとうさん  
六九八 7 したりして、つくえの上をみたりそとのけ  
六九八 8 えの上をみたりそとのけしきをのぞいたり

六九<sup>10</sup> ことを発見した。左の手に、めがねのたま  
六九<sup>10</sup> 。左の手に、めがねのたまを持つて、目か  
六<sup>100</sup> 1 た。すると、向こうのけしきが、小さく、  
六<sup>100</sup> 4 みようと思つて、右の手に虫めがねを持つ  
六<sup>100</sup> 5 ぞいてみた。どこかの屋根が、めがねのた  
六<sup>100</sup> 6 かの屋根が、めがねのたまいっぱいにひろ  
六<sup>100</sup> 10 なれている、向こうの家の屋根であつた。  
六<sup>100</sup> 10 ている、向こうの家の屋根であつた。「略  
六<sup>100</sup> 11 会 つか、おとうさんのお話にきいた望遠鏡  
六<sup>101</sup> 5 。ちょうど、めがねのたまがはまるくらい  
六<sup>101</sup> 5 たまがはまるくらい大きさにまいて、そ  
六<sup>101</sup> 6 にまいて、その一方のはしに、めがねのた  
六<sup>101</sup> 6 方のはしに、めがねのたまをはめた。きち  
六<sup>101</sup> 8 した。これで、一本のつづができた。きち  
六<sup>101</sup> 9 つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐる  
六<sup>101</sup> 10 。そうして、さっきのつづの中へ、ちようど  
六<sup>101</sup> 10 して、さっきのつづの中へ、ちようど、す  
六<sup>101</sup> 11 するとはいはるくらい大きさに作つて、そ  
六<sup>102</sup> 1 こうしてできた二本のつづは、うまくはま  
六<sup>102</sup> 5 んやりみえる。二つのつづをのぼしたりち  
六<sup>102</sup> 9 だれかが、しょうじのあいだから顔をだし  
六<sup>102</sup> 10 そいで、おかあさんのところへいった。「へ  
六<sup>103</sup> 8 た。そうして、ぼくの望遠鏡をのぞいても  
六<sup>104</sup> 2 会 「略。」「向こうの家のせんたく物もみ  
六<sup>104</sup> 2 会 へ。」「向こうの家のせんたく物もみえま  
六<sup>104</sup> 3 会 ちをみている。森の木のきれいなこと。  
六<sup>104</sup> 3 会 みている。森の木のきれいなこと。」ぼ  
六<sup>105</sup> 1 のは、「リイサン」のようだ。さっきも、  
六<sup>105</sup> 7 大わらいをした。弟のことばをまねて、「へ  
六<sup>105</sup> 11 そうして、にいさんのまねのうまいのに感  
六<sup>105</sup> 11 て、にいさんのまねのうまいのに感心した  
六<sup>106</sup> 3 うのが、いかにも弟のいいそんなことばつ

六106 8 がきこえてきた。弟のだいすきな飛行機で  
六107 4 らいとなった。ぼくのまねはしくじった。  
六108 5 もともとはなから声のするような音にちが  
六108 8 なから声がでない音のはずである。ぼくは  
六109 2 う音が、はなから声の音なのだろうか  
六109 3 か。弟は、「はな」の「ナ」、「あのね」の  
六109 3 の「ナ」、「あのね」の「ノ」と「ネ」、「に  
六109 3 「ネ」、「にいさん」の「ニ」、「紙」の「ミ  
六109 3 ん」の「ニ」、「紙」の「ミ」、「かむ」の「  
六109 4 」の「ミ」、「かむ」の「ム」がいいにくい  
六109 8 なをつまんで、はなのあなから息がもれな  
六110 2 った。これなら、弟のまねなんかわけはな  
六110 3 も、「ナ」や「ノ」のつくことばがあった  
六110 5 みると、いかにも弟のいいかたそっくりに  
六110 11 た。弟がいえない音の中で、「ナ」、「ノ」、  
六111 1 コーという五十音の中で、ナニヌネノと  
六111 2 ネノという一ぎようの中にはいっている音  
六111 8 ているようだ。ねんのために、はなをつま  
六111 11 ようは、ぜんぶはなの音でできていること  
六112 3 メモという一ぎようの中にはいっている。  
六112 5 たら、これらはなの音であることがわか  
六112 8 ヌネノ、マミムメモの二ぎようだけで、あ  
六112 9 、あとは、おしまいのパビブベボ、パビブ  
六112 10 、みんなはなから声の音ではないこと  
六112 11 いうものは、一年生のときにならったから  
六113 3 れがいま、一つ一つの音の性質を考えたう  
六113 3 いま、一つ一つの音の性質を考えたう  
六113 6 うは、なにか、ほかのぎようとはちがった  
六113 8 、こう考えると、弟のまねをしてみんなを  
六114 7 あがりました。だれのたこよりもよくあが  
六116 5 、「略」と、元氣のいい声でいいました  
六117 6 でいいし、骨は工作のあまりのひごでま

六117 6 、骨は工作のあまりのひごでまにあわせま  
六117 11 きました。「なんの絵をかこうか。」と、  
六118 1 たが、ただしちゃんのわらい顔をかくこと  
六118 4 たら、ただしちゃんの顔が、生き生きとう  
六118 7 きました。つぎに骨のとりつけです。骨は  
六118 10 は、たて骨とよこ骨の二本です。まず、た  
六118 11 らははじめました。紙のうらには、まん中に  
六119 5 した。じっさいに紙の上でいろいろとまげ  
六119 9 っしゃるおかあさんのところへとんでいっ  
六120 8 は、だいに本ばこの上に乗せておきまし  
六120 10 て、ただしちゃんのところへ持っていっ  
六121 2 うさぎさん。五ひきのうさぎさんがいまし  
六121 4 がいました。ある日のこと、五ひきのうさ  
六121 4 る日のこと、五ひきのうさぎさんは、まつ  
六121 5 さぎさんは、まつ林の中で、まつかさで、  
六122 9 さんたちは、くるみの木の下で遊びまし  
六122 9 たちは、くるみの木の下で遊びました。そ  
六122 10 。そこには、くるみの実が、ころころと落  
六123 4 持っていつて、山のてっぺんでたべよう  
六126 3 、「略」。五ひきのうさぎさんたちは、  
六126 7 ました。「そっちのあなと、こっちのあ  
六126 7 なたと、こっちのあなとつづけようか  
六127 3 、「略」。五ひきのうさぎさんたちは、  
六127 7 けびました。四ひきのうさぎさんたちは、  
六127 8 とんとことトンネルの中を走っていきまし  
六128 3 でかけました。おにの足音をきいて、四ひ  
六128 3 音をきいて、四ひきのうさぎさんたちは、  
六128 9 。ところが、一ぴきのうさぎさんが、あわ  
六128 10 げたので、トンネルのさか道に足をすべら  
六128 10 て、ころころと、下の方へころがりこんで  
六129 3 したとき、トンネルの入口のところで、だ  
六129 3 き、トンネルの入口のところで、だれかの

六129 3 のところで、だれかの声がします。それは  
六130 9 は、そのまま向こうのやぶの方へいってし  
六130 9 のまま向こうのやぶの方へいってしまいま  
六131 6 ちは、大きなけやきの下で、まるくならん  
六132 2 は、うさぎさんたちのおとくいです。「略  
六132 3 決勝点は、あの山のてっぺんにしよう。  
六132 8 と、うさぎさんたちのまに、大きなしか  
六132 10 ぼくも、かけっこをなかにいれてくれ  
六133 3 「略」。あの山のてっぺんさ。」「略  
六133 4 「略」。あの山のてっぺんか。わかっ  
六133 5 つそりと立って、山の方をみあげました。  
六134 1 勝ったら、このしかの角で、うさぎさんた  
六134 5 ました。どうせ、足の早いことにかけては  
六135 5 「略」と、元氣のいい声をかけました  
六135 6 かけました。五ひきのうさぎさんと、しか  
六135 7 、しかさんとは、風のように走りだしまし  
六135 8 りだしました。ささの中、やぶの中をとん  
六135 8 た。ささの中、やぶの中をとんでいきます  
六135 11 るのは、うさぎさんのもっともどくとす  
六136 3 。ところが、ぶどうのつるに、角がひっか  
六136 5 なんだ、このぶどうのつるめ。」しかさん  
六136 6 こんどはたおれた木のみきにトンとけつま  
六137 1 した。そして、木の切りかぶに、つぎの  
六137 1 の切りかぶに、つぎのようだが、赤い  
六137 3 けれども、あなたの角はおりません。う  
六137 7 は、うさぎさんたちのあとを、どんどん追  
六137 10 、しかさんは、いつのまにかはぐれてしま  
六138 1 なたちは、大きな岩のところにでました。  
六138 5 、「略」。五ひきのうさぎさんたちは、  
六138 6 るが、この大きな岩のかげに、とらさんが  
六139 3 て、うさぎさんたちの方をのぞきました。  
六139 4 ぞきました。五ひきのうさぎさんたちは、

六三九 略。」と、われがねのような声をたてまし  
六四〇 をのぼして、一びきのうさぎさんのせなか  
六四一 一びきのうさぎさんのせなかをおさえまし  
六四二 、それこそかみなりのような声がひびきま  
六四三 せは、もう一びきのとらさんでした。「へ  
六四四 へ。」「略。」一びきのとらさんが、いきな  
六四五 きなり、もう一びきのとらさんにとびかか  
六四六 かりました。二ひきのとらさんが、つかみ  
六四七 。谷川にそつて、山のふもとにでてしまし  
六四八 した。野原には、日の光がいっぱいさして  
六四九 います。クロバーの花が、まっ白にさい  
六五〇 ていました。おなかのすいた五ひきのうさ  
六五一 ぎさんは、だいいました。五ひきのうさぎさんたちは、  
六五二 ちは、みつばちさんのことばを、たいへん  
六五三 のかしの木 夜明けの風が流れてくる。中  
六五四 が流れてくる。中庭のキャベツが、なたね  
六五五 、チチ、チチ。教室のまどは、まだねむり  
六五六 むりがふかい。校門のかしの木は、目をさ  
六五七 ました。「略。」かしの木は、子どもたちの  
六五八 の木は、子どもたちのことを、まず思いう  
六五九 あの白いブラウスの女の子かな。かばん  
七〇〇 白いブラウスの女の子かな。かばんをカ  
七〇一 て、走ってくる男の子かな。「朝日の光  
七〇二 べる。」「略。」朝日の光がななめにさして  
七〇三 にさしてきた。校舎の半分が光った。校庭  
七〇四 半分が光った。校庭のつゆもいっぺんに光  
七〇五 んだりしながら、光の中をおよいでいたが  
七〇六 こえて、うすべに色の空にきえた。「略」  
七〇七 七五九 鳴らして、げたばこのかげにかくれた。つ

七六<sup>一</sup> たようだ。あちこちのまどがあいて、教室  
 七六<sup>六</sup> 「「略」。」えんどうの花が、風もないのに  
 七七<sup>三</sup> 会、ならったばかりの唱歌を、大きな声で  
 七七<sup>八</sup> 会 になつたら、学校の中を、ちよつとひと  
 七八<sup>二</sup> てみたり——」かしの木は、きょうもそん  
 七八<sup>四</sup> がきこえる。バケツの音もする。水の音も  
 七八<sup>四</sup> ケツの音もする。水の音もする。学校の  
 七八<sup>四</sup> 水の音もする。学校のおいがしてくる。  
 七八<sup>六</sup> ってしまった。教室のまどは、どこもまぶ  
 七八<sup>九</sup> らなそうに、夕やけの空をながめている。  
 七九<sup>二</sup> がきこえてくる。星のちらばった青い夜空  
 七九<sup>二</sup> 青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ  
 七九<sup>五</sup> 会 ようまで、わたしのみたこと、きいたこ  
 七九<sup>六</sup> 会 アラビアンナイトのように、いろいろな  
 七九<sup>七</sup> 会 がある。春には春の話、秋には秋のものな  
 七九<sup>七</sup> 会 春の話、秋には秋のものがたり。なん百  
 七九<sup>七</sup> 会 がたり。なん百人の子どもの顔、なん千  
 七九<sup>八</sup> 会 なん百人の子どもの顔、なん千人の子ど  
 七九<sup>八</sup> 会 もの顔、なん千人の子どもの心。毎年、  
 七九<sup>八</sup> 会 なん千人の子どもの心。毎年、新しく入  
 七九<sup>九</sup> 会 もたちが、わたしのそばへやってきた。  
 七九<sup>九</sup> 会 生たちが、わたしのそばからさつていつ  
 七九<sup>一〇</sup> 会 かつている。さくらの花が、白くうかんで  
 七九<sup>一〇</sup> 会 が乗ると、こちの岸から向こうの岸へ  
 七九<sup>一〇</sup> 会 ちの岸から向こうの岸へ、船をこいでい  
 七九<sup>一〇</sup> 会 う岸へ運ぶ。先生のおしごとは、渡しも  
 七九<sup>一〇</sup> 会 ことは、渡しもりのようなものだ。「し  
 七九<sup>一〇</sup> 会 七<sup>一〇</sup>」しゆくちよく室のひがきえた。夜つゆ  
 七九<sup>一〇</sup> 会 がおりてきた。かしの木は、あくびを一つ  
 七九<sup>一〇</sup> 会 たきます。このときの「手」は、てのひら  
 七九<sup>一〇</sup> 会 ます。「手をうつ」の「手」も、「手をあ  
 七九<sup>一〇</sup> 会 「手をあわせる」の「手」も、これと同

七二一。ところが、「かごの手」とか、「なべの  
七二〇。手」とか、「なべの手」となると、人の  
七一九。の手」となると、人の手ではありません。  
七一八。「略。」というときの「手」は、またすこ  
七一七。ゝ。これは、あさがおのだしている手のこと  
七一二。がおのだしている手のことではありません  
七一六。りません。あさがおのつるがまきつくよう  
七一一。立てである、竹や木のことをいうのです。  
七一〇。のです。「きゅうりの手」や「豆の手」な  
七〇九。ゆうりの手」や「豆の手」なども、同じで  
七〇八。「略。」このときの「手」は、文字を書  
七〇七。く。「このようなときの「手」は、どんな  
七〇六。かいかなで、「まいの手」といったり、「へ  
七〇五。たりします。私どもの手が、さまざまなのは  
七〇四。してくれれます。つぎの「手」は、どんな  
七〇三。う。ゆくと手に、まつの木が立っています。  
七〇二。略。」「略。」腹のすわった人だな。」  
七〇一。く。「略。」私たちのからだの名まえに、  
七〇〇。く。「私たちのからだの名まえに、このよう  
九九九。ひびいてくる。(一)「略。」の音楽が、ひびいてく  
九九八。ん長は、めいめいはのはんにんずをかぞ  
九九七。、めいめいはのはんにんずをかぞえたか  
九九六。ぼえていたね。風のない日は、ちょうち  
九九五。しょう。「略。」の唱歌が、きこえてく  
九九四。の子「先生、風の日は、ちょうちよは  
九九三。「しげった草むらの中に、かくれている  
九九二。四「先生、こっちの白い花のはたけは、  
九九一。、こっちの白い花のはたけは、なんのは  
九九〇。のはたけは、なんのはただですか。」先  
九八九。ね。」きしもと「私のうちでは、だいこん  
九八八。三) きしもとくんの家。きしもとくんが

七二八 きしもとくんが、弟のはるおくと、ふた  
 七二九 よんでいる。日曜日はれた朝。はるお「  
 七二二 んびよんとんで、庭のはたけの中を歩く。  
 七二二 とんで、庭のはたけの中を歩く。兄「すず  
 七二三 ずめが、だいこんの葉をみているよ。」  
 七二六 あさん、あおむしのことを、話していた  
 七二八 よう、しいくびんのなつぽを、とりかえ  
 七三〇 だから、あおむしのせわをしよう。はる  
 七三〇 はるお、だいこんの葉をまいとってき  
 七三二 ね。ぼくは、びんの中をそうじして、砂  
 七三二 はるおは、だいこんの葉をとってくる。兄  
 七三三 。兄は、しいくびんの中の砂に水をやる。  
 七三三 は、しいくびんの中の砂に水をやる。はる  
 七四四 「はい、だいこんの葉——どうして、葉  
 七四四 どうして、葉を砂の中に立てるの。」兄  
 七四七 く日かたつたある日の午後。はるお「にい  
 七四七 「きょうね、國語の時間に、先生にほめ  
 七四八 だい。」兄「自轉車のチューブのようにふ  
 七四八 自轉車のチューブのようにふわふわした  
 七四五 むしは、だいこんのはつぽと同じ色にか  
 七四九 帰ると、だいこんのはつぽを、とりかえ  
 七五二 。もんしろちようのおたんじようね。」  
 七五二 はるお「あかんぼのくせに、ひげなんか  
 七五二 こからだして、庭のだいこんの葉に、う  
 七五三 て、庭のだいこんの葉に、うつしてやり  
 七五五 いま生まれたばかりのちようちよを、しい  
 七五七 いる。母は、ふたりの兄弟をながめている  
 七五八 の中（二）汽車の中は、人でいっぱい  
 七六〇 わりこもうとする男の人もあり、足をふま  
 七六〇 て、おこっている女の人もありました。私  
 七六八 ありました。私と弟のさぶろうは、乗るに  
 七六八 ン。私は、さぶろうの手をしつかりにぎり

七六四 り、さぶろうは、私のからだにすがりつい  
 七六五 。私は、ありつたけの力をだして、さぶろ  
 七六五 ぶです。おぼさんのうちへは、もう二ど  
 七六五 きますようにと、心の中でいのつていまし  
 七六八 ました。「略。」頭の上で声がしました。  
 七六八 ました。すぐしろのおぼさんも、「略」  
 七七一 た。私は、さぶろうのかたに手をかけて、  
 七七一 てみました。人ごみのうすぐらい中で、さ  
 七七一 ふと上を向くと、私のよこのわかい男の人  
 七七一 を向くと、私のよこのわかい男の人が、た  
 七七一 私のよこのわかい男の人が、ただひとり、  
 七七一 らいもせずに、両方の手でまどわくをおし  
 七七一 しています。私たちのために、せいっぱ  
 七七一 めに、せいっぱいの力で、すきまをこし  
 七七一 た。「さあ、いまのうちに、さきの方へ  
 七七一 まのうちに、さきの方へいらっしゃい。  
 七七一 た。「略。」しろのおぼさんがいつてく  
 七七一 ので、私は、人と人のあいだをかきわけ  
 七七一 ました。しかし、弟の手をひいているので  
 七七一 とき、そのわかい男の人が、「略。」とい  
 七七一 をだきあげ、となりのおじさんの目のまえ  
 七七一 、となりのおじさんの目のまえへ、つきだ  
 七七一 なりのおじさんの目のまえへ、つきだしま  
 七七一 を受けとって、つぎの人に渡しました。そ  
 七七一 めて、心配そうに私の方をみていましたが  
 七七一 ろをメデシンボールのように送られていく  
 七七一 いそいで、さぶろうのあとを追いかけまし  
 七七一 ずつてもらった座席の上に立って、「略」。  
 七七一 す。私は、さぶろうの方に近よりながら、  
 七七一 近よりながら、車中の人たちに、心の中で  
 七七一 車中の人たちに、心の中でお礼をいまし  
 七七一 にまみれたみつばちのようになって、汽車

七四四 をさますと、向こうの席にひとりの青年が  
 七四五 向こうの席にひとりの青年が立っていた。  
 七四六 ンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。  
 七四七 っているので、青年のからだはゆれていた  
 七四九 やかなしらは、朝の光のように氣持よく  
 七四九 なしらは、朝の光のように氣持よく、車  
 七四九 うに氣持よく、車中のすみからすみまで流  
 七四九 年は、つづいて日本の子もりうたをひきは  
 七四九 をでたとき、向こうの席で、「略。」と、  
 七四九 た。みると、しらがの老人である。「略」。  
 七四九 ある。「略。」車中の人たちは、みんなこ  
 七四九 ております。どこのどなたかはぞんじま  
 七四九 が、このかんしゃの氣持を、あらわした  
 七四九 こで、老人は、自分のかぶっていたぼうし  
 七四九 いたぼうしを、そばの人の手に渡した。ぼ  
 七四九 ぼうしを、そばの人の手に渡した。ぼうし  
 七四九 は、つぎつぎと人々の手を渡り、お金がそ  
 七四九 の中にたまつた。私のまえにもぼうしがき  
 七四九 も喜んで、いくらかのお金をそれにくわえ  
 七四九 、ふたたび、しらがの老人のところにもど  
 七四九 たび、しらがの老人のところにもどつた。  
 七四九 、「といて、青年のまえにすみました。  
 七四九 が、これは、車中の人たちのころざし  
 七四九 は、車中の人たちのころざしでありま  
 七四九 のです。せつかくのおこころざしですが  
 七四九 。それから、二三どのおし問答が、ふたり  
 七四九 おし問答が、ふたりのあいだにとりかわさ  
 七四九 は、お礼にわたしのいちばんとくいな曲  
 七四九 めた。名高いオペラの序曲である。私は、  
 七四九 である。私は、汽車のまどから、夕ぐれに  
 七四九 ている父と子、きりの花——曲は終つた。  
 七四九 コーデオンを黒ぬりのケースにおさめた。

七四六 十 た。駅は、東北本線の「はないずみ」であ  
七四六 十 ずみ」であつた。駅の名も美しくよまれた  
七四八 八 ません。文章は、心の鏡のようなものです  
七四八 八 ん。文章は、心の鏡のようなものです。心  
七四七 十 らなおしても、文章のくもりはとれませ  
七四八 六 ジボール大会 六日の日、郡ぜんたいのド  
七四八 六 日の日、郡ぜんたいのドッジボール大会が  
七四八 十 はじめに、ひがし村の学校とやつた。ぼく  
七四八 十 学校とやつた。ぼくのほうは、センターが  
七四九 一 まつたので、あいてのセンターが、「略」  
七四九 一 いだ。それで、内野の人はいっしんになつ  
七四九 五 かえつて、ぼくたちのほうが勝つてしまつ  
七四九 六 二回めには、にし村の学校としあいをし  
七四九 八 つた。さいごに、町の学校とやることにな  
七四九 八 かつたが、わずかのちがいで勝つた。ぼ  
七五〇 三 じまつた。どの学校のせんしゅも、みんな  
七五〇 五 た。はじめに、ぼくの学校とひがし村の学  
七五〇 五 くの学校とひがし村の学校とが、しあいを  
七五〇 一 一。「略」と、用意のふえが鳴つた。しん  
七五〇 一 が鳴つた。しんぼんの先生が、「略」と  
七五〇 二 をして、いいほうのボールをつかいなさ  
七五〇 四 といわれた。ぼくらのほうのボールをつか  
七五〇 四 れた。ぼくらのほうのボールをつかうこと  
七五〇 五 はじまつた。ぼくらのほうが、どんどんあ  
七五〇 八 てられた。ひがし村の学校のセンターが、  
七五〇 八 た。ひがし村の学校のセンターが、喜んで  
七五〇 八 氣ではない。みかたのおうえんだんが、「へ  
七五〇 八 がけなく、ぼくたちの勝となつた。「略」  
七五〇 八 一。「略」しんぼんの先生のあいずで、ぼ  
七五〇 八 一「しんぼんの先生のあいずで、ぼくらは  
七五〇 八 一たい十で、ぼくらのほうが勝つた。うれ  
七五〇 八 二第二回めは、にし村の学校とやることにな

七五二 十 このときは、ぼくらのほうのボールが、よ  
七五二 十 きは、ぼくらのほうのボールが、よくあい  
七五二 十 あたつて、ちよつとのあいだに、勝つこと  
七五三 一 一。こんどは、さいごの決勝戦だ。あいては  
七五三 一 戦だ。あいては、町の、いちばん強い学校  
七五三 一 なんだか、向こうのせんしゅは、大きく  
七五三 一 一。「略」おうえんの声が耳にひびいてく  
七五三 一 一。センターが、外野のセンターにれんらく  
七五三 一 一てにあてた。あいてのセンターは、ぼくを  
七五三 一 一に、ボールが、ぼくのところにとんできた  
七五三 一 一おこつた。ぼくたちの勝である。みんな、  
七五三 一 一場に集まつて、終りの式をした。ぼくは、  
七五三 一 一、たかやま先生も組の友だちも、みんな、  
七五三 一 一りとながれた一つのかたちは、まじりけ  
七五三 一 一かたちは、まじりけのない宝石のようなも  
七五三 一 一まじりけのない宝石のようなものでありま  
七五三 一 一しています。一年生の唱歌がきこえてきま  
七五三 一 一えてきます。つばきの花がまつかにさいて  
七五三 一 一みえます。家と家とのあいだに、ほそ長く  
七五三 一 一つむじ風が、わたしのまを走つていく。  
七五三 一 一てきた。おかあさんの鏡、庭のはつばがう  
七五三 一 一おかあさんの鏡、庭のはつばがうつつてい  
七五三 一 一くでました。たんぼの上で、つばめがちゅ  
七五三 一 一りをした。あさがおの花が、ラジオの音楽  
七五三 一 一がおの花が、ラジオの音楽をきいています  
七五三 一 一た。黄色いやまぶきの花に、黄色いちよう  
七五三 一 一うでしよう。なにかの花びらが、くもの果  
七五三 一 一つてゆれていく。土の上、一センチほどの  
七五三 一 一の上、一センチほどのところで。ボタンと  
七五三 一 一た。よつちやんたちの話し声がする。考え  
七五三 一 一きなあり。スリッパのへりをひとまわりし  
七五三 一 一た。よく落ちるかきの実。いまに、一つも

七六二 一 よつたせみが、かきの木につきあつて、  
七六二 一 すつている。めじろの音がきこえている。  
七六二 一 一。風がふく。さくらの木が、ぬれてゆれて  
七六二 一 一ゆれている。四年生の樂しさよ。さくらの  
七六二 一 一の樂しさよ。さくらの花をしらべてみたり  
七六二 一 一虫がかたまつて、顔のところでとんでいる  
七六二 一 一らくなつていく。豆のつるがまきついて、  
七六二 一 一ものがなくなつた豆のつる。夏の風がふき  
七六二 一 一なつた豆のつる。夏の風がふきこんで、新  
七六二 一 一をたべている。ふえの音、虫の音、三日月  
七六二 一 一いる。ふえの音、虫の音、三日月さん。毎  
七六二 一 一さがお日記。はつ花のさいたこと、けさ書  
七六二 一 一と、けさ書く。いつのまにか、葉ばかりの  
七六二 一 一のまにか、葉ばかりのさくらになつて、毎  
七六二 一 一つて、毎日ほれ。波の音がきこえている。  
七六二 一 一こえている。子どもの声がきこえている。  
七六二 一 一も、だつこく機。麦のとりのいれ、日がてり  
七六二 一 一、うえていく。もやのかかつたおきの島、  
七六二 一 一もやのかかつたおきの島、ポンポン船がで  
七六二 一 一けていく。雨あがりの麦のほ、子どもと子  
七六二 一 一いく。雨あがりの麦のほ、子どもと子ども  
七六二 一 一うめがさく。方々のうちで、ふとんほし  
七六二 一 一。炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになつ  
七六二 一 一いる。(三) 人の顔をちようこくする  
七六二 一 一こくするの、二つのやりかたがあります  
七六二 一 一、しだいに、その人の顔ににせていくやり  
七六二 一 一、だんだん、その人の顔ににせていくやり  
七六二 一 一たであります。まえのやりかたは、ちよう  
七六二 一 一ににています。あとのやりかたは、文章を  
七六二 一 一ににています。くれがたの庭そうじ、それがす  
七六二 一 一、月明かりだ。なんの木の花だらう。にわ  
七六二 一 一明かりだ。なんの木の花だらう。にわか雨

7714、同じように。ぬまの上を、にわか雨が通  
 7723なりをして、子どものように、からだまで  
 7731いない。うまが、水のおいをかいてい  
 7733いでいる。ぼさぼさのいけがきの上である  
 7733ぼさぼさのいけがきの上である。ぼたん  
 7747乙、ほかに、ひとりの旅人。ところ。さば  
 7748人。ところ。さばくの中。甲乙ふたりが、  
 7752ね。乙「ちよっとのまに、いなくなつて  
 7755みまわす。甲「砂のほかに、なにもみえ  
 7757。そこへ、ひとりの旅人がやつてくる。  
 7757かさがしておいでのようにだが——」甲「  
 7772人」そうして、左の足が一本短くて——  
 7797。ふたりは、旅人の両手をとる。むりに  
 7812この人は、私どものらくだのことについ  
 7813、私どものらくだのことについて、それ  
 7816のとおり、私どものらくだは、かた目  
 7819した。しかも、左の足の短いことを、ち  
 7819。しかも、左の足の短いことを、ちゃん  
 7819いました。らくだのまえ歯が、二三本ぬ  
 7822、つけていた荷物の品まで、知っている  
 7826。「裁判官」ふたりのいうことは、よくわ  
 7827していますと、砂の上にくだの足あと  
 7827、砂の上にくだの足あとがつづいてい  
 7831た。それなのに人の足あとがみえませ  
 7835は、こうです。道のかたがわの草ばかり  
 7835す。道のかたがわの草ばかりたべてあつ  
 7838「それは、かた方の足あとが、一つおき  
 7838官」では、まえ歯のぬけているというこ  
 7854。裁判官は、ふたりのものに向かつて、裁  
 7857。けれども、いまの答で、知っていたわ  
 7864白いうさぎと、茶色のうさぎを、かごにい  
 7872れんげそうとなたねの葉をやりました。

7885 んじんをやったときのように、喜んでたべ  
 7898くもった日や雨降りの日は、きらいなので  
 7901晴 27度 うさぎのふんを、水の中へい  
 7901うさぎのふんを、水の中へ入れてみたらう  
 7911うさぎのふんはまんまるです  
 7911のか、黒いうさぎの上に乗って、たべま  
 79222度 うさぎ小屋のそうじをしました。  
 7923でましたが、1ぴきの白いうさぎと、茶色  
 7923白いうさぎと、茶色のうさぎは、おくへは  
 792819度 うさぎの毛の長さを計ってみ  
 7928しように思って、首のところを持って、か  
 7931ころを持って、かごの中へ入れたら、キ  
 7933ら、右から四ばんめのへやに、うさぎが  
 7936くもり 25度 茶色のうさぎはいって  
 7937かったたので、かごの鉄ぼうを、かじつて  
 7938いました。うさぎの生まれた、右から四  
 7938た、右から四ばんめのへやに、黒い小さな  
 7942がをしました。ほかのうさぎがかんだので  
 7945度 お晝に、うさぎのところへいってみた  
 7947ばして、まえ足を胸の下にのけていました  
 7951雨 20度 うさぎのせなかをさかさにな  
 7954つてみたら、左がわのへやに、毛がたくさ  
 7954。よくみると、おくの方に、わらが果のよ  
 7956くの方に、わらが果のようにふくらんでい  
 7957て、その中に、わたのようなふわふわした  
 7958くるまって、うさぎの子が7ひきいました  
 7959晴 12度 7ひきの生まれたばかりの子  
 7962きの生まれたばかりの子うさぎは、わらの  
 7962の子うさぎは、わらの毛の中で、元氣  
 7962うさぎは、わらの毛の中で、元氣に動  
 7962ぎは、わらの毛の中で、元氣に動いて

7966 もり 17度 7ひきのうさぎのうち、5  
 79667ひきのうさぎのうち、5ひきはねず  
 7967黒でした。ねずみ色の4ひきは、生まれて  
 7968生まれから12日めのきょう、みんな、目  
 7972ちくもり 17度 白のうさぎは、親につ  
 7973だしてきました。草のそばにきて、口をく  
 7976晴 19度 ねずみ色のうさぎが、きょう  
 7977そうして、にんじんのやわらかそうな葉を  
 7978たべていました。黒のうさぎが、ちちを  
 7978うとして、親うさぎのちちにすがりつきま  
 7983たら、うさぎは果の中でねていて、親う  
 7988子うさぎと母うさぎのめかたを計ってみ  
 7992晴 15度 子うさぎの毛の長さを計りまし  
 799215度 子うさぎの毛の長さを計りました。  
 7992さを計りました。耳の長さも計りました。  
 7993さも計りました。耳の長さは、白と黒は5  
 7995、母うさぎと7ひきのうさぎは、頭をそ  
 7995ど十年ほどまえ、私のうちに、ピオとい  
 7995という、うちじゅうの人気者がいました。  
 7995者がいました。西洋の子どもだらうなど  
 7995れも、日本どくとくの、北はほっかいどう  
 7995うしゅうやそのさきの島々まで、いたると  
 7995まで、いたるところの山野に、いちばんた  
 7995どうして、ピオが私のうちにかわれるよう  
 7995かといえ……。秋のはじめのある晩、一  
 7995ば……。秋のはじめのある晩、一家そろつ  
 7995家そろって、ぎんざの大通りを歩いていま  
 7995たら、あるデパートのまえのうすくらがり  
 7995あるデパートのまえのうすくらがり、大  
 7995いてみると、ひとりの小鳥屋が、夜店をひ  
 7995にすえた小さなかごの中から、一わずつつ  
 7995になったかとい黒山の人だかりだったのだ

八六四 た。その晩から家族のひとりになり、あく  
 八六七 なったばかりか、頭の上にも乗り、口さき  
 八六七 上にも乗り、口さきのめしつづもつつく  
 八六〇 ざをたたくと、ひざの上にとび乗ったり、  
 八六一 乗ったり、三ど三どの食事に、テーブルの  
 八六一 の食事に、テーブルの上でおしよばんし  
 八七一 ど、あまりテーブルの上でぎょうぎのわる  
 八七一 ブルの上でぎょうぎのわるいまねをする  
 八七六 氣づかず、テーブルのはしからころげ落ち  
 八七七 ちたりしました。朝の早いうちの小鳥の声  
 八七七 した。朝の早いうちの小鳥の声は、ことに  
 八七七 朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しい  
 八七八 です。まるで、一日の幸福を予言してくれ  
 八八一 図 やったり、「どこの生まれだ。」と、  
 八八三 いうのは、同じ日本の中でも、土地土地で  
 八八四 土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと  
 八八七 —それは、鳴きかたのちがいではなく、き  
 八八七 ではなく、ききかたのちがいだろうと思う  
 八八八 はおじろ自身、國々のなまりのようなこと  
 八八九 自身、國々のなまりのようなことばをもつ  
 八八〇 な、土地にかんけいのふかい鳥だろうと、  
 八八一 になりました。ピオのほうでも、その氣に  
 八九一 しく、ときたまそのろじへだしてやって  
 八九三 。ろじどころか、庭の木にとまらせても長  
 八九三 はいません。私たちの家のうち、中でも茶  
 八九三 ません。私たちの家のうち、中でも茶のま  
 八九七 こにすわっている私のひざのあいだにもぐ  
 八九七 わっている私のひざのあいだにもぐったり  
 八九九 にもおくびょうもののようにも思えましょ  
 八九一 一 た。たとえば、近所のねこやのらねこが通  
 八一〇 えてくるのです。うちの中にいるかぎり、こ  
 八一〇 てきて、かかとや足の指をつつついたりす

八一〇 七 りするのです。ピオのゆうかんさや、りこ  
 八一〇 一 ところが、ある土曜の午後、おなかをすか  
 八一一 から帰ってきたすえの女の子が、茶のまの  
 八一一 帰ってきたすえの女の子が、茶のまのドア  
 八一一 の女の子が、茶のまのドアをあけて、ひょ  
 八一一 一 す。「略。」と、女の子ばかりでなく、茶  
 八一一 五 まにいたうちじゅうのものがびっくりして  
 八一二 て——ことに、すえの女の子などは、目を  
 八一二 —ことに、すえの女の子などは、目をな  
 八一二 二 こにいて、庭さきの、いちばん美しい花  
 八一二 六 、いちばん美しい花のさく、つばきの木の  
 八一二 七 い花のさく、つばきの木の根もとにうめて  
 八一二 七 のさく、つばきの木の根もとにうめてやり  
 八一二 九 。そうして、「ピオのはか」と書いた、小  
 八一二 一 ではなく、私は、ピオの信頼をうらぎったの  
 八一二 三 たものを、あやまちのためにあわれに死な  
 八一二 四 けなさは、いいようのないものでした。そ  
 八一二 五 、いまも、私はピオのことがわすれられま  
 八一二 六 ことに、町はずれの野原を歩いたりいな  
 八一二 六 原を歩いたりいなかのしものふかい朝の野  
 八一二 六 いたたりいなかのしものふかい朝の野にでた  
 八一二 七 かのしものふかい朝の野にでたとき、「略  
 八一二 八 鳴いているはおじろの声をきくと、ピオの  
 八一二 八 の声をきくと、ピオのすがたがありありと  
 八一二 一〇 みます。たかが一わの小鳥のことをと、わ  
 八一二 一〇 一 たかが一わの小鳥のことをと、わらわな  
 八一二 一〇 三 らぜみ (一) 夏の終りに、せどのあお  
 八一二 一〇 三 夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に  
 八一二 一〇 三 に、せどのあおぎりの木の皮に生みつけら  
 八一二 一〇 三 せどのあおぎりの木の皮に生みつけられた  
 八一二 一〇 四 られた、あぶらぜみのたまごがありました  
 八一二 一〇 五 のほそくとがった口のさきで、かたい皮に

八一四 一〇 ほどある、白いうじのようなうちゅうが  
 八一四 一〇 一 いだして、あおぎりのふといみきをつたっ  
 八一五 六 ころをさがして、地の中にかくれてしま  
 八一五 七 てしましました。地の中はどこもまっくら  
 八一五 八 まっくらです。せみの子どもたちは、自分  
 八一五 八 子どもたちは、自分の小さなまき足でトン  
 八一五 一〇 いきます。そこは木の下ですから、大小の  
 八一五 一〇 一 の下ですから、大小の木の根が、からみあ  
 八一五 一〇 二 ですから、大小の木の根が、からみあ  
 八一五 一〇 三 ています。あおぎりの根ばかりではなく、  
 八一六 二 りではなく、あたりの木の根ものびていま  
 八一六 二 はなく、あたりの木の根ものびています。  
 八一六 三 といっても、なにかの木の根にいきあたり  
 八一六 三 っても、なにかの木の根にいきあたりま  
 八一六 五 のか、手ごろな、皮のうすい、しるの多い  
 八一六 五 、皮のうすい、しるの多い木の根をさがし  
 八一六 五 すい、しるの多い木の根をさがしてあるき  
 八一六 七 っています。その口のさきを根の中につ  
 八一六 七 。その口のさきを根の中につきさして、木  
 八一六 八 中につきさして、木のしるをすいはいじめ  
 八一六 八 なことですが、せみの子からいえば、母親  
 八一六 一〇 子からいえば、母親のちぶさにすがったよ  
 八一六 一〇 はありません。人間のあかんぼが、したの  
 八一七 三 のあかんぼが、したのさきをじょうずにつ  
 八一七 四 、よわよわしいうじのようなかたちをして  
 八一七 九 なるにつれて、六本の足がだんだん強くな  
 八一七 一〇 うぶになります。土の中は、たとえ一二セ  
 八一八 三 そのかわり、親たちの大てきのすずめもね  
 八一八 七 り、親たちの大てきのすずめもねこもやっ  
 八一八 一〇 むしや、かぶとむしの子どもたちは、つみ  
 八一八 一〇 一 、つみごえやこえ土の中に生みつけられて  
 八一九 二 、皮をぬぎかえて地の上へでていきます。

八三〇　りを計りますが、星のきよりになりますと  
 八三四　さしていいいます。光の速度は、一秒間に地  
 八三八　ます。ところが、光のとどく時間ではかる  
 八四八　と、あの星と地球とのきよりは、二十分や  
 八五一　あります。さて、空の星は、地球からの  
 八五二　地球からどのくらいいきよりにあるのでし  
 八五三　でしょう。二十光年の星もあり、三十光年  
 八五四　星もあり、三十光年の星もあります。あの  
 八五五　たなばたものがたりのはたおり星は、二九  
 八五六　光年ですから、今夜のはたおり星の光は、  
 八五七　今夜のはたおり星の光は、やく三十年ほ  
 八五八　このほか、五十光年のところに光っている  
 八五九　があります。百光年の星もあり、一千光年  
 八六〇　星もあり、一千光年の星のむれもあり、一  
 八六一　あり、一千光年の星のむれもあり、一万光  
 八六二　年もあり、一万光年の星もあります。それ  
 八六三　どころか、十万光年の星もちらばっていま  
 八六四　あるところに、金持の王さまがいらっしゃ  
 八六五　た。かわいひひとりの王女もあって、なに  
 八六六　た。王女がこがね色のたんぽぽをつんでく  
 八六七　花が、みたとおりのこがねならば、わし  
 八六八　、王さまは、宝くらの中で、宝物をかぞえ  
 八六九　「略」。「わたしの手にさわたものが  
 八七〇　自分は、それ以上の幸福は願わない。」  
 八七一　「略」。あすの朝から、たしかにそ  
 八七二　つしゃって、これらの木の葉や花にみんな  
 八七三　やつて、これらの木の葉や花にみんな手  
 八七四　れになりました。庭の草木は、みているう  
 八七五　ると、これもこがねのさかなになりました  
 八七六　した。これもこがねのたまごになりました  
 八七七　したが、王女はなんの返事もしません。王  
 八七八　っては、世界じゅうのこがねよりもたいせ



八四二 九 つしやると、きのうの、み知らぬ人があら  
 八四三 一 金 、こがねと一ぱいの水と、どちらをえら  
 八四三 二 金 「略略。」「一ぱいの水です。」「略略。」「  
 八四三 三 金 「こがねと一きれのパンとでは。」「略略  
 八四三 四 金 「略略。」「一きれのパンです。」「略略」  
 八四三 七 金 略。」「では、庭のいけの水をすくつて  
 八四三 九 さまは、いそいで庭のいけの水をすくつて  
 八四三 九 いそいで庭のいけの水をすくつて、王女  
 八四三 九 水をすくつて、王女のからだにおふりかけ  
 八四四 三 るところに、ひとりの王さまがいらつしや  
 八四四 一〇 王さまは、「わたしの病氣をなおしてくれ  
 八四五 一 くれたものには、國の半分をわけてやる。  
 八四五 三 これをきいて、ちえのある人たちは、みん  
 八四五 四 、どうしたら王さまのご病氣をなおすこと  
 八四五 六 た。そこへ、王さまの病氣をなおすという  
 八四五 八 金 みつけて、その人の着ているシャツを王  
 八四六 九 だもりつばで、なんの不自由もなくくらし  
 八四七 二 も、なんとかして父の病氣をなおしたいと  
 八四七 七 が、そまつな一けんの小屋がありました。  
 八四七 八 りました。その小屋のそばを通りかかった  
 八四七 八 きでした。中から人の声がきこえてきます  
 八四八 七 で、つかつかと小屋の中へはいっていきま  
 八四八 一 一 だけでした。ひとりの男が、いまにもござろ  
 八四九 二 。王子は、いままでのわけをこの男に話し  
 八四九 五 金 あいにく、一まいのシャツの持ちあわせ  
 八四九 五 金 、一まいのシャツの持ちあわせもござい  
 八四九 九 した。だれでも幸福のほしくない人はあり  
 八四九 九 りませんから、どこの家をたずねても、み  
 八五〇 二 れども、それでは人の心がよくわかりませ  
 八五〇 三 は、まづしいこじきのようななりをしまし  
 八五〇 七 があつたら、その人のところへ幸福をわけ

ハ50 9 ていきますと、いぬのかつてある家があり  
ハ50 10 ありました。その家のまえにいつて、「幸  
ハ51 1 が立ちました。その家の人は、「幸福」  
ハ51 1 ちました。その家の人は、「幸福」がき  
ハ51 2 ら、まづしいこじきのようなのが家のま  
ハ51 2 きのようなものが家のまえにいるのをみて  
ハ51 7 「へ略。」と、その家の人は、戸をピシ  
ハ51 7 略。」と、その家の人は、戸をピシャン  
ハ51 8 た。おまけに、その家にかつてあるいぬ  
ハ51 11 こんどは、にわとりがいる家のまえへいつ  
ハ51 11 、にわとりがいる家のまえへいつて立ちま  
ハ52 1 て立ちました。その家の人も、「幸福」  
ハ52 1 ちました。その家の人も、「幸福」がき  
ハ52 2 、いやなものでも家のまえに立つたように  
ハ52 9 「へ略。」と、その家の人はふかいたため  
ハ52 9 略。」と、その家の人はふかいため息を  
ハ53 1 た。まづしいこじきのようのがきて、  
ハ53 4 「へ略。」と、その家のにわとりは、用  
ハ53 4 略。」と、その家のにわとりは、用心ぶ  
ハ53 6 「幸福」はまた、その家でもごめんをこう  
ハ53 7 。こんどは、うさぎのかつてある家のまえ  
ハ53 7 さぎのかつてある家のまえへいつて立ちま  
ハ53 11 いいましたが、その家の人がでみると  
ハ53 11 ましたが、その家の人がでてみると、ま  
ハ54 1 と、まづしいこじきのようなのが、おも  
ハ54 2 つていました。その家の人も「幸福」が  
ハ54 2 きました。その家の人も「幸福」がきた  
ハ54 4 うでしたが、なさけのある人とみえて、台  
ハ54 5 る人とみえて、台所の方からおむすびを一  
ハ55 3 「幸福」には、その家の人の心がよくわ  
ハ55 3 かり福」には、その家の人の心がよくわか  
ハ55 3 には、その家の人の心がよくわかりまし

八五五 あん一きれにも、人の心のおくは知れるも  
 八五四 一きれにも、人の心のおくは知れるもので  
 八五二 まにでてみると、目のとどくかぎり、美し  
 八五四 れた。ぽくは、砂地の上にまっすぐ足あ  
 八五七 向こうにみえるまつの木を求めてにして歩  
 八五八 ぐだが、波うちぎわのかもめが目について  
 八五一 らし台へいった。山のおねを曲がるたびに  
 八五二 い大きなけしきが目のまえにひらけてくる  
 八五三 つてみると、足もとの森や林の中に、みえ  
 八五四 と、足もとの森や林の中に、みえがぐれに  
 八五四 、みえがぐれにお寺の屋根や停車場が目  
 八五五 。すると、おもちゃのように小さな汽車が  
 八五八 に立ってみると、目のまえに高い山々がそ  
 八五三 た。すると、向こうの山の谷まにのこつて  
 八五三 すると、向こうの山の谷まにのこっている  
 八五三 がみえるだらう。山の上には、青い空がす  
 八五七 すんでいる。飛行機の上からは、もつとも  
 八六六 っていた。田や野原のまわりには、大きな  
 八六六 大きな森があり、森の中には深いみずうみ  
 八六八 があった。みずうみの岸の、ごぼうのはえ  
 八六八 った。みずうみの岸の、ごぼうのはえてい  
 八六八 うみの岸の、ごぼうのはえているところに  
 八六八 いるところに、一わのあひるがすわつてい  
 八六二 のも少ないし、ほかのあひるどもは、みず  
 八六五 ごからも小さなひなの首がでた。「略。」  
 八六七 。そうして、みどりの葉の下で、あたりを  
 八六七 うして、みどりの葉の下で、あたりをみま  
 八六八 わした。みどりは目のためにいいから、親  
 八六二 のかい。世界は庭の向こうがわまで廣が  
 八六二 たずねてきた年よりのあひるがいった。「へ  
 八六三 ぐい。」「一つのためごに長くかかる  
 八六三 略。」と、年よりのお客さんがいった。

八63 5 ㊦ としちめんちようのたまごだよ。わたし  
 八64 5 ㊦ っておいて、ほかの子どもに、おようこ  
 八64 9 ㊦。」「略。」「年よりのあひるは、そういつ  
 八65 4 ㊦ きなひなだ。ほかのものは、一わだつて  
 八65 6 ㊦ にしちめんちようのひなかしら。なにし  
 八65 8 ㊦ で、太陽は、ごぼうの上をてらしていた。  
 八65 9 ㊦ をみんなつれて、水のところへおりていっ  
 八65 10 ㊦ ていった。さつと水の中へとびこんだ。」「  
 八66 1 ㊦ んだ。水はひなたの頭の上を流れたが、  
 八66 1 ㊦ 水はひなたの頭の上を流れたが、すぐ  
 八66 4 ㊦ だ。みにくいあひるの子も、いっしょにな  
 八66 10 ㊦ すや、あのしせいの子のいいのをみてわか  
 八67 1 ㊦ る。これはわたしの子だ。よくみればき  
 八67 2 ㊦ いで、大きな世界の鳥小屋へつれていっ  
 八67 3 ㊦ ね。だが、わたしのそばにくっついてね  
 八67 6 ㊦ た。そこには、二つの鳥の家族が、一つの  
 八67 7 ㊦ そこには、二つの鳥の家族が、一つのうな  
 八67 7 ㊦ の鳥の家族が、一つのうなぎの頭のこと  
 八67 7 ㊦ 族が、一つのうなぎの頭のことであらそつ  
 八67 7 ㊦ 、一つのうなぎの頭のことであらそつてい  
 八67 9 ㊦ 通つていくと、一わの鳥が、「略。」「とい  
 八67 10 ㊦ そこにいるあひるの子をさ。なんという  
 八68 1 ㊦ という、もう一わの鳥がとんできて、そ  
 八68 2 ㊦ そのみにくいあひるの子の首すじにかみつ  
 八68 2 ㊦ みにくいあひるの子の首すじにかみついた  
 八68 8 ㊦ た。」「略。」「年よりのあひるは、「略。」「  
 八69 4 ㊦ す。それに、ほかのものと同じようにお  
 八69 5 ㊦ ぐし、いや、ほかのものよりうまくおよ  
 八69 9 ㊦ でしょう。たまごの中にあんまり長  
 八70 2 ㊦ た。みにくいあひるの子は、あひるのな  
 八70 2 ㊦ ひるの子は、あひるのなまからわる口を  
 八70 4 ㊦ うは、風を受けた船のほのようからだを

八70 4 ㊦ 、風を受けた船のほのようからだをふく  
 八70 7 ㊦ た。あわれなあひるの子は、立っていたほ  
 八71 3 ㊦ おしまいは、自分の兄や姉からまで、「へ  
 八71 9 ㊦ で、みにくいあひるの子は、かきねをとび  
 八72 1 ㊦ に——」と、あひるの子は思った。そうし  
 八72 3 ㊦ うして、大きなぬまのあるところへやつて  
 八72 4 ㊦ 住んでいた。あひるの子は、ここで一晩横  
 八72 9 ㊦ もがいった。あひるの子は、このあしの中  
 八72 9 ㊦ るの子は、このあしの中で、横になって休  
 八72 10 ㊦ 思った。また、ぬまの水をのませてもらい  
 八73 2 ㊦ すると、そこへ二わのさんがやつてきた。  
 八73 2 ㊦ った。そうして二わのさんが、ぬまの中に  
 八73 11 ㊦ 二わのさんが、ぬまの中に死んで落ちた。  
 八73 11 ㊦ 、また鳴った。がんのむれが、そろつてあ  
 八74 1 ㊦ れが、そろつてあしのあいだからとびたつ  
 八74 1 ㊦ 。かりうどは、ぬまのまわりにまちぶせを  
 八74 4 ㊦ せをしていた。あしの上に横がつている木  
 八74 4 ㊦ 上に横がつている木の枝にものぼつていた  
 八74 5 ㊦ けむりが、くらしい木のあいだから雲のよう  
 八74 6 ㊦ い木のあいだから雲のようにたちのぼつた  
 八74 6 ㊦ た。あわれなあひるの子はきもをつぶした  
 八74 8 ㊦ をねじ曲げてつばさの中にいれた。ところ  
 八74 9 ㊦ いた。はなをあひるの子のそばにつきつけ  
 八74 11 ㊦ 。はなをあひるの子のそばにつきつけて歯  
 八74 11 ㊦ た。」「略。」「あひるの子は、ため息をつい  
 八75 5 ㊦ そのあいだも、たまの音はあしのあいだに  
 八75 11 ㊦ も、たまの音はあしのあいだに鳴りひびき  
 八76 3 ㊦ かわいそうにあひるの子は、おきあがる氣  
 八76 8 ㊦ たになつて、あひるの子は、ある小さなひ  
 八76 9 ㊦ 小さなひやくしよの小屋へやつてきた。  
 八76 10 ㊦ ひどいので、あひるの子は立つこともでき  
 八77 4 ㊦ なつてきた。あひるの子は、小屋の入口の

八77 5 ㊦ あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあ  
 八77 5 ㊦ の子は、小屋の入口の戸がすこしあいてい  
 八78 3 ㊦ さんは、それを自分の子のようにかわいが  
 八78 3 ㊦ は、それを自分の子のようにかわいがつた  
 八78 5 ㊦ よそからきたあひるの子は、すぐみつ  
 八78 11 ㊦ 々々からあひるのたまごもたべられる  
 八79 3 ㊦ た。そこで、あひるの子は、三週間ばかり  
 八79 8 ㊦ 「略。」「と、あひるの子にたずねる。」「略  
 八80 5 ㊦ いるときに、自分の考えなどはいえない  
 八80 6 ㊦ 」。それで、あひるの子は、すみつこにす  
 八80 7 ㊦ さわやかな空と日の光が流れてきた。あ  
 八80 7 ㊦ 流れてきた。あひるの子は、きゆうにおよ  
 八81 4 ㊦ 略。」「でも、水の上をおよぐのは、い  
 八81 5 ㊦ らね。それに、水の中へもぐつてそこへ  
 八81 7 ㊦ きいてごらん。水の上をおよいだり、も  
 八81 8 ㊦ 。それから、うちのおばあさんにきいて  
 八81 10 ㊦ 」。「あなたは、私のいつていることがお  
 八82 1 ㊦ 」。「おまえさんのいうことがわからな  
 八82 2 ㊦ るのかね。わたしのことはいわないとし  
 八82 6 ㊦ てもらえる人たちのなにかまいりをしたん  
 八82 9 ㊦ すよ。おまえさんのためを思っているの  
 八83 4 ㊦ 」。そこで、あひるの子はかけていった  
 八83 8 ㊦ 四。秋がきた。森の木の葉がこがね色や  
 八83 8 ㊦ 秋がきた。森の木の葉がこがね色や茶色  
 八84 1 ㊦ 、大きなりっぱな鳥の一われがやつてきた  
 八84 5 ㊦ った。そこで、あひるの子は、それを見て、  
 八84 6 ㊦ 持になつた。あひるの子は、水の上を車の  
 八84 6 ㊦ 。あひるの子は、水の上を車のようになる  
 八84 6 ㊦ の子は、水の上を車のようになるくるまわ  
 八84 7 ㊦ その首をはくちようの方へさしるべ、自分  
 八84 8 ㊦ 声をだした。あひるの子は、あの美しい、  
 八84 10 ㊦ なくなると、すぐ水のどんぞこまでもぐつ



八103 2 晴 29度 朝、花のようすをみにいきま  
八103 3 んでした。3時間めの終りに開きはじめま  
八103 3 じめましたが、お晝の時間には、もう閉じ  
八103 4 まっていました。花のさくのは、1日にす  
八103 5 のは、1日にすこしのあいだだけだと思  
八104 1 くもり 26度 いねの花のすんだあとをさ  
八104 1 り 26度 いねの花のすんだあとをさわ  
八104 6 (金) 晴 27度 いねの害虫——いなごが6  
八104 7 きほっていました。葉のうらに、青黒いな  
八104 8 らに、青黒いなにかのたまごが生みつけ  
八105 1 きしますと、うんかのたまごだということ  
八105 4 23度 病氣でせいのびないいねが、5  
八105 8 晴 22度 どのいねのほも、すっかり黄色  
八105 9 しています。1かぶのくきの数を数えてみ  
八105 9 ます。1かぶのくきの数を数えてみますと  
八106 1 た。こんどは1かぶのほの数をみんなどし  
八106 1 こんどは1かぶのほの数をみんなどし  
八106 6 わかりました。もみの数をしらべてみま  
八106 6 べてみました。1本のほに、多いのは18  
八106 7 。ですから、1つぶの種もみから、やく1  
八108 1 人もいました。ぼうのあいだにいねをはさ  
八108 3 みをわけました。風のくる場所で、目の高  
八108 3 風のくる場所で、目の高さぐらいのところ  
八108 3 で、目の高さぐらいのところからごみをふ  
八108 4 ます。もみをむしろの上にひろげてほしま  
八108 6 (木) 晴 17度 天氣のよい日に2日ほした  
八108 8 ました。いたといたのあいだにもみをいれ  
八109 6 した。やく12平方mの土地で、41のげん  
八109 6 方mの土地で、41のげん米がとれました  
八109 7 1平方mに3・5dlのげん米がとれるので  
九4 4 ります。この赤い色のそばに黄色をぬりま  
九4 7 あられます。黄色のかわりに、みどり色

九4 9 がします。みどり色のかわりに、むらさき  
九5 2 でしょう。むらさきのかわりに、茶色をぬ  
九5 3 しょう。これは二つの色の組みあわせです  
九5 3 う。これは二つの色の組みあわせですが、  
九5 3 あわせですが、三色の組みあわせにしたら  
九5 4 わせにしたら、二色のときよりも、もっと  
九5 8 ーオルガンで一つの音だけひいてきて  
九5 10 す。この音と、ほかの音とをいっしょにひ  
九6 4 がします。オルガンのほかに、パイオリン  
九6 5 フルートとか、ほかの楽器を、いっしょに  
九6 9 がいありません。色の組みあわせが、さま  
九6 9 あわせが、さまざまの感じをあらわすの  
九6 10 のと同じように、音の組みあわせも、いろ  
九7 2 、「月」という一つのことがあります。  
九7 4 んだりしますと、夜のしずかなけしきを思  
九7 7 だけで思い出した心の絵とは、いくらかち  
九8 1 ます。さらに、「虫の声」ということがばを  
九8 2 らどうでしょう。色の組みあわせも、音の  
九8 2 の組みあわせも、音の組みあわせも、おた  
九8 3 にとけあって、一つの感じをつくりあげる  
九8 5 同じように、ことばの組みあわせも、それ  
九8 7 いうことばに、ほかのことばをつけてみま  
九9 2 よう。二つか、三つのことばの組みあわせ  
九9 2 つか、三つのことばの組みあわせだと、す  
九9 4 とまりがつかず、心の絵がみだれてしま  
九9 4 まいます。これは色のばあいでも、音のば  
九9 6 色のばあいでも、音のばあいでも同じこと  
九9 6 ジオで、「劇場音楽の話」をきいた。その  
九10 2 。その中で、たいこのたたきかたによつて  
九10 3 例として、まず、水の音をとりあつた  
九10 8 とりあつた。水の音をたいこであらわ  
九10 9 むると、たしかに水の音である。はじめに  
九11 1

九11 3 ある。はじめに、川の水の音をたたいてき  
九11 3 。はじめに、川の水の音をたたいてきか  
九11 4 ある。つぎには、雨の降るところであつた  
九11 5 った。それから、水の中にドブンとどび  
九11 6 ンとどびこんだときの音もあらわした。お  
九11 6 しまいに、海岸で波のくだけるところをき  
九11 7 ドンとなる大だいこの音は、ほんとうにう  
九11 8 とうにうちよせる波の音をきいているよう  
九11 9 あつた。つぎに、風の音をたたいた。風と  
九12 1 いると、たしかに風の音になる。とうげ道  
九12 3 てくる風であり、町の通りを、電線を、は  
九12 5 ている風である。風の音よりも、もっとお  
九12 5 ーおと思つたのは、雪の降ってくるところを  
九12 9 氣がした。ただ一つのたいこが、そのうち  
九12 9 ちかたによつて、水の音にもなり、風の音  
九12 9 水の音にもなり、風の音にもなり、雪の降  
九12 10 風の音にもなり、雪の降るようすにもなる  
九12 10 さを受けいれるだけの心持をもっていない  
九14 8 ろう。もし、きく人の心が高ければ、それ  
九14 9 れば、それだけ音楽のねうちが生きてくる  
九14 9 。三 つばめ 夏の終りごろ、つばめが  
九15 2 すが、まだ、口ばしの下の赤色が、親つば  
九16 1 、まだ、口ばしの下の赤色が、親つばめ  
九16 1 あります。口ばしの両わきがいくぶん黄  
九16 2 。こうして、大ぜいのつばめが、ならん  
九16 4 いうこうとする遠い國のことを、話しあつて  
九16 7 せん。やがて、九月のなかばをすぎると、  
九16 9 さつていき、十一月のはじめになれば、も  
九16 10 しまいます。つばめのゆくさは、遠い南  
九17 1 ゆくさは、遠い南の海のかなたです。と  
九17 1 さきは、遠い南の海のかなたです。とうき  
九17 2 イリピンで、ある年の十月のすえ、子ども

九一七三 ンで、ある年の十月のすえ、子どもがつば  
九一七四 た。すると、その右の足に、日本の文字を  
九一七四 その右の足に、日本の文字をしるした小  
九一七四 るした小さな金ぞくのいたがついていまし  
九一七五 よると、さいたま縣のあるところで、こ  
九一七九 でいくのです。南洋の島々から、さらに海  
九一七九 いうことです。日本のつばめは、こんなふ  
九一八一 ますが、ヨーロッパのつばめも同じように  
九一八一 ように、ヨーロッパの北の方ではんしょく  
九一八一 に、ヨーロッパの北の方ではんしょくし  
九一八四 ます。つばめは、鳥の中でも、たいへん早  
九一八五 もかなわないくらいの早さですから、なん  
九一八五 すから、なん百キロの海をひといきにとぶ  
九一八八 あらしや、そのほかの思いがけないさいな  
九一八八 せん。しょうわ六年の秋、オーストリアの  
九一八八 の秋、オーストリアの都ウィーンのでき  
九一八八 リアの都ウィーンのできごとです。約十  
九一八八 ごとです。約十万ばのつばめが、きゆうに  
九一八八 候がわるくて、九月の中ごろ、きゆうに十  
九一八八 ろ、きゆうに十二月の氣候と同じ寒さにな  
九一八八 たのです。ウィーンの動物はご協会に、近  
九一八八 物ほご協会に、近くのランネルスドルフと  
九一八八 では、喜んでつばめのせわをする返事をし  
九一八八 会ではすぐに、寒氣のために苦しんでいる  
九一八八 苦しんでいるつばめのせわをすることを、  
九一八八 ばめを運ぶのに六台の自動車ではまにあわ  
九一八八 あわず、さらに二台の自動車を加えました  
九一八八 て自動車は、夜なかの二時、三時にも、よ  
九一八八 その家をつばめたちのためにぐあいよくつ  
九一八八 ためられ、たくさんのはりかねがはりまわ  
九一八八 されて、つばめたちのとまるところがつく  
九一八八 りました。たくさんのつばめがはじめて運

九二一六 たいへん寒いあらしの日で、朝から晩まで  
九二一七 降っていました。晩の十時に、二千ばのつ  
九二一七 晩の十時に、二千ばのつばめが着きました  
九二一八 夜半には、また一台の貨物自動車が、五千  
九二一九 物自動車、五千ばのつばめをつんできま  
九二一〇 で、なるべく早く南のあたにかいところへ  
九二二二 機は、それから毎日のように、アルプス  
九二二二 なく、九月十九日の晩には、ヴェニス  
九二二四 には、ヴェニスいきの汽車に、とくべつに  
九二二六 数は、だいたいつぎのとおりです。九月二  
九二二六 五日 同じく のこりの三十九わ この合計  
九二二六 オーストリア動物園の人たちがひき受けて  
九二二六 アは第一次世界大戦のあとで、まだそのい  
九二二六 た。しかし、この國の人々が、あわれなこ  
九二二六 かい氣持は、この國の人々が、どんなに高  
九二二六 、飛行機という文明の利器が、このしごと  
九二二六 まり、ことしある家ののき下で巣をつくつ  
九二二六 めは、けつて自分の國をわすれません。  
九二二六 さな胸には、わか葉のもえる日本の春の美  
九二二六 わか葉のもえる日本の春の美しさという  
九二二六 葉のもえる日本の春の美しさというかべ  
九二二六 のでしよう。あの家ののき下につくった古  
九二二六 このめづらしいお客の帰ってくるのをまち  
九二二六 す。ちらりとつばめのすがたをみた人は、  
九二二六 す。わけても、自分の家へいそいそと帰つ  
九二二六 つばめをむかえる人の心は、どんなにうれ  
九二二六 んやりみえるかやの中 上ばきを自分で  
九二二六 しずかなる月なの上に 妻ふむやみだ  
九二二六 むやみだれし麦の夕日かけ こがらし  
九二二六 がらしや子ぶたのはなもかわきけり  
九二二六 かわきけり 月の夜をわが家のありし  
九二二六 月の夜をわが家のありしあたりまで

九二七三 すみきったボールの音や秋の風 秋風に  
九二七三 たボールの音や秋の風 秋風にボールの  
九二七四 風 秋風にボールの水がゆれている 草  
九二八一 二重にじ青田の上にうすれゆく 朝  
九二八二 れゆく 朝つゆの中に自轉車のりいれ  
九二八三 のりいれぬ 親のまたくぐる子うしや  
九二八三 ぐる子うしや草の花 ほし草にかげお  
九二八五 しせんこう火花のゆれている 大空に  
九二八五 かな かやごしの電燈のたまみており  
九二八五 かやごしの電燈のたまみておりぬ さ  
九二八五 るすべりラジオのほかに声もなし く  
九三〇一 いく果をはるくものあお向きに まえ向  
九三〇五 道 歩みくる胸のへにちようとびわか  
九三〇五 らへきたときは夏の暑いさかりでしたが  
九三〇五 、いまはもうかきの葉もすっかり落ちつ  
九三〇五 、先生やみなさんのことを、一日もわす  
九三〇五 ありません。先生のことを思うと、みな  
九三〇五 いまいる家は、山のふもとにある森の中  
九三〇五 のふもとにある森の中の小さな農家です  
九三〇五 もとにある森の中の小さな農家です  
九三〇五 な農家ですが、家のまえをちよつとでる  
九三〇五 だと、はるか下の方に美しい湖がみえ  
九三〇五 みえます。秋晴れのすみきった空の下に  
九三〇五 れのすみきった空の下に、山のすがたが  
九三〇五 った空の下に、山のすがたが、さかさま  
九三〇五 が、さかさまに湖の中にうつって、がく  
九三〇五 がくにいた油絵のように美しくかがや  
九三〇五 くのが、いちばんの楽しみです。ふなが  
九三〇五 えてからは、ほかの魚がだんだんへって  
九三〇五 も湖に近い川しもの方へとりいきまし  
九三〇五 にいきました。村の子どもがきょうそう  
九三〇五 ってくる、うちの家族七人が、じゅう

九四四(四) よいとが、こちらの色がよいとかいって  
九四四(四) めています。いつのまにか葉がすっかり  
九四四(五) はだかになった木の上に、まっかにじゅ  
九四五(一) ぽは、「小公子」の話にでてる、セド  
九四五(三) 、セドリック少年のように、子どものこ  
九四五(三) のように、子どもの中から、世の中の  
九四五(四) ころから、世の中のことに注意を向ける  
九四五(六) くは、おとうさんのやっていたパン屋の  
九四五(七) やっていたパン屋のしごとを、しんけん  
九四五(一〇) に、いま知りあいの家でみならいをして  
九四六(一) ます。「小公子」のセドリックは、七つ  
九四六(一) ックは、七つ八つのころでも、せんきよ  
九四六(一) ろでも、せんきよのことを話しています  
九四六(六) した。もう、遠くの山々のいただきに、  
九四六(六) もう、遠くの山々のいただきに、白い雪  
九四六(六) ただきに、白い雪のぼうしが見えます。  
九四六(七) なつかしいそちらの山々の景色を思いだ  
九四六(七) しいそちらの山々の景色を思い出します  
九四六(八) いだします。天気の良い日は、あの廣い  
九四六(八) は、あの廣い学校の運動場で、先生とみ  
九四七(二) がきが、ある土曜日の夕がた、いちろうの  
九四七(二) の夕がた、いちろうのうちにきました。  
九四八(一) はがきをそと学校のかばんにしまつて、  
九四八(一) てからも、やまねこのにやあとした顔や、  
九四八(五) んどうだという裁判のようなどを考えて  
九四八(六) でてみると、まわりの山は、みんな、たつ  
九四九(一) たいまできたばかりのように、きれいにも  
九四九(二) った、まっさおな空の下にならんでいまし  
九四九(三) にそった小道を、上の方へ登っていきまし  
九四九(四) アツとふくと、くりの木はバラバラと実を  
九四九(五) た。いちろうはくりの木をみあげて、「略  
九四九(六) みあげて、「くりの木、くりの木。やま  
九四九(七) 九四九(七)

九497 ㊦ 「くりの木、くりの木。やまねこがここ  
九498 とききました。くりの木は、ちよつとしず  
九499 ㊦ さ早く馬車で、東の方へとんでいきまし  
九501 ㊦ 。「東なら、ぼくのいく方だねえ。おか  
九502 ㊦ ってみよう。くりの木、ありがとう。」  
九504 した。「略」。くりの木は、だまってまた  
九507 はもう、「ふえふきのたき」でした。「ふ  
九508 でした。「ふえふきのたき」は、まっ白な  
九508 き」は、まっ白な岩のかけの中ほどに、小  
九508 、まっ白な岩のかけの中ほどに、小さなあ  
九510 、そこから水がふえのように鳴ってとびだ  
九514 ㊦ さつき馬車で、西の方へとんでいきまし  
九515 ㊦ な。西なら、ぼくのうちの方だ。けれど  
九515 ㊦ なら、ぼくのうちの方だ。けれども、ま  
九517 「たきは、またもどのようにふえをふきつ  
九518 しいきますと、一本のぶなの木の下に、た  
九518 ますと、一本のぶなの木の下に、たくさん  
九518 と、一本のぶなの木の下に、たくさんの白  
九519 木の下に、たくさんの白いきのこが、ドッ  
九523 ㊦ さ早く馬車で、南の方へとんでいきまし  
九527 ㊦ 「南なら、あっちの山の中だ。おかしい  
九527 ㊦ なら、あっちの山の中だ。おかしいな。  
九5211 すこしいくと、一本のくるみの木のこずえ  
九5211 くと、一本のくるみの木のこずえを、りす  
九5211 、一本のくるみの木のこずえを、りすが、  
九534 すると、りすは、木の上からひたいに手を  
九536 ㊦ ちに、馬車で、南の方へとんでいきまし  
九5310 した。ただ、くるみのいちばん上の枝がゆ  
九5310 くるみのいちばん上の枝がゆれ、となりの  
九5311 の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちよつと  
九5311 ゆれ、となりのぶなの葉がちよつと光った  
九542 た。そうして、谷川の南の、まっ黒なかや

九542 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木  
九543 南の、まっ黒なかやの木の森の方へ、新し  
九543 、まっ黒なかやの木の森の方へ、新しい小  
九543 つ黒なかやの木の森の方へ、新しい小  
九546 ていききました。かやの枝は、まっ黒にかさ  
九5411 こは美しいがね色の草地で、草は風にザ  
九552 りっぱなオリブ色のかやの木の森でかこ  
九552 なオリブ色のかやの木の森でかこまれて  
九552 リーブ色のかやの木の森でかこまれていま  
九554 いました。その草地のまん中に、せいひ  
九554 地のまん中に、せいひのひくい、おかしな  
九555 、おかしなかつこうの男が、ひざをまげて  
九556 ざをまげて、手に皮のむちを持って、だま  
九561 うして、みえない方の目は、白くびくびく  
九562 ひどく曲がってやぎのようですし、ことに  
九563 足さは、しゃもじのようなかたちだった  
九567 は、横目でいちろうの顔をみて、口を曲げ  
九5710 ハアハアさせて、耳のあたりまでまっかに  
九5711 まっかになり、着物のえりを廣げて、から  
九587 ㊦ いうのは、小学校の四年生だらう。」そ  
九5810 ㊦ 。「いいえ、大学の四年生ですよ。」す  
九5811 喜んで、顔じゅう口のようにして、にたに  
九596 ㊦ しはやまねこさまのぎよしやだよ。」と  
九5911 、黄色なじんぼおりのような物を着て、み  
九601 物を着て、みどり色の目をまんまるにして  
九602 。やっぱりやまねこの耳は立ってとがって  
九6011 したので、あなたのお考えをうかがいた  
九614 もとでパチパチしおのはねるような音をき  
九616 がんでみますと、草の中にあっちにもこっ  
九618 ちにも、こがね色のまるいものが、ぴか  
九621 ㊦ あ、きたな。ありのようにやってくる。  
九624 ㊦ ようだから、そこんこの草をかれ。」

九624 ㊦ から、そこんこの草をかれ。」やまね  
九6210 クザツクとやまねこのまへのところの草を  
九6210 クとやまねこのまへのところの草をかりま  
九6210 ねこのまへのところの草をかりました。そ  
九6211 ました。そこへ四方の草の中から、どんぐ  
九6211 た。そこへ四方の草の中から、どんぐりど  
九634 とふりました。すずの音は、かやの森にガ  
九634 。すずの音は、かやの森にガランガラン、  
九635 とびびき、こがね色のどんぐりどもは、す  
九637 か黒い、長いしゅすの服を着て、どんぐり  
九637 着て、どんぐりどものまへのすわっている  
九645 ㊦ といったって、頭のとがっているのがい  
九651 ㊦ ちがうよ。わたしのほうがよっぽど大き  
九653 ㊦ そんなこと。せいの高いのだよ。せいの  
九653 ㊦ 高いのだよ。せいの高いことなんだよ。  
九655 ㊦ 略。」「おしいの強いものだよ。おし  
九657 んだか、まるではちの巣をついたようで  
九665 ㊦ といったって、頭のとがったものが、い  
九676 ㊦ え、だめです。頭のとがったのが――」  
九6810 たようすで、しゅすの着物のえりを開いて  
九6810 すで、しゅすの着物のえりを開いて、黄色  
九6811 えりを開いて、黄色のじんぼおりをちよつ  
九693 ㊦ なってなくて、頭のつぶれたようなやつ  
九697 ねこは、黒いしゅすの服をぬいで、ひたい  
九697 服をぬいで、ひたいのあせをぬぐいながら  
九698 いながら、いちろうの手をとりました。ぎ  
九6911 ました。これほどのひどい裁判を、まる  
九702 ㊦ これから、わたしの裁判所のめいよ判事  
九702 ㊦ 、わたしの裁判所のめいよ判事になつて  
九707 ㊦ ください。わたしの人格にかかります  
九714 ㊦ それから、はがきのもんでありますが、これ  
九721 ㊦ もんくはいままでのとおりにしませう

九七二(会) う。そこできょうのお礼ですが、あなた  
 九七二(会) あなたは、こがねのどんぐり二リツトル  
 九七三(会) トルと、しおぎの頭と、どちらがおす  
 九七四(会) 「略。」「こがねのどんぐりがすきです  
 九七五(会) 」やまねこは、さけの頭でなくてまあよか  
 九七六(会) かったら、めっきのどんぐりもまぜてこ  
 九七七(会) ぎよしやは、さっきのどんぐりをますにい  
 九七八(会) 。「略。」やまねこのじんばおりが、風に  
 九七九(会) 「よし、早く馬車のしたくをしる。」白  
 九八〇(会) 、なんだかねずみ色のおかしなたちのう  
 九八一(会) 色のおかしなたちのうまがついています  
 九八二(会) ぎよしやはどんぐりのますを馬車の中にい  
 九八三(会) んぐりのますを馬車の中にいれました。ヒ  
 九八四(会) 木ややぶが、けむりのようにぐらぐらゆれ  
 九八五(会) いちろうは、こがねのどんぐりをみ、やま  
 九八六(会) まったときは、茶色のどんぐりにかわって  
 九八七(会) そうして、やまねこの黄色のじんばおりも  
 九八八(会) て、やまねこの黄色のじんばおりも、ぎよ  
 九八九(会) ぎよしやも、きのこの馬車も、一どにみえ  
 九九〇(会) 、いちろうは、自分のうちのまゑに、どん  
 九九一(会) ろうは、自分のうちのまゑに、どんぐりを  
 九九二(会) てなどを持って、角のむきみ屋のところに  
 九九三(会) っ、角のむきみ屋のところに集まってい  
 九九四(会) 。おかみさんが、店の人とふたりで、せつ  
 九九五(会) 。みるまに、目がらの山が家のまゑにでき  
 九九六(会) に、目がらの山が家のまゑにできます。先  
 九九七(会) 九七三(会) いっても大むかしのことだが、目などを  
 九九八(会) 生について、五十人のなかまが、おくれな  
 九九九(会) 九七九(会) 。平らな畑やたんぼの向こうに、一だん高  
 一〇〇〇(会) 九七二(会) 、このへんは、波のおだやかな海のいり  
 一〇〇一(会) 九七八(会) 波のおだやかな海のいりえだったのです  
 一〇〇二(会) 九七九(会) そう、あの向こうの小高いところに、白

九七八(会) ろで、先生は一けんの農家にたちよられま  
 九七九(会) 九七八(会) しばらくして、その主人といっしょにで  
 九八〇(会) 九七八(会) ようは、このかたの畑をすこしほらせて  
 九八一(会) 九七八(会) はステッキを深く土の中へお立てになりま  
 九八二(会) 九七九(会) ぶずぶと、ステッキのたけいっばいにはい  
 九八三(会) 九七九(会) づかです。この土の上に白くみえてはい  
 九八四(会) 九七九(会) るのは、むかし海の中にいたいろいろな  
 九八五(会) 九七九(会) いたいろいろな貝のからです。むかしの  
 九八六(会) 九七九(会) からです。むかしの人は、目がらといっ  
 九八七(会) 九七九(会) や、たべたけもの骨や、角などを、こ  
 九八八(会) 九七九(会) くは、どこか一つのところをきめて、廣  
 九八九(会) 九八一(会) 一メートルぐらいのはばで、東西に四五  
 九九〇(会) 九八一(会) ろは、どれか一つのかごにいれておこう  
 九九一(会) 九八二(会) いってみると、先生のかごの中には、いつ  
 九九二(会) 九八二(会) みると、先生のかごの中には、いつのまに  
 九九三(会) 九八二(会) かごの中には、いつのまにか、せきふらし  
 九九四(会) 九八二(会) 土器らしい物、ただのわり石のような物な  
 九九五(会) 九八二(会) い物、ただのわり石のような物などがたま  
 九九六(会) 九八二(会) ています。「先生のところは、いろいろ  
 九九七(会) 九八二(会) かにそうだ。先生のところにあるのと同  
 九九八(会) 九八二(会) した。「せともののかげらみみたいなもの  
 九九九(会) 九八四(会) ほっています。先生のふえが鳴りました。  
 一〇〇〇(会) 九八四(会) います。みなさんのひろった物の中に、  
 一〇〇一(会) 九八四(会) さんのひろった物の中に、いのししやし  
 一〇〇二(会) 九八四(会) 、いのししやしかの角などに手を加えて  
 一〇〇三(会) 九八五(会) を加えて、なにかの道具につかった物が  
 一〇〇四(会) 九八五(会) もの、それには石の矢じり、おもりなど  
 一〇〇五(会) 九八五(会) いないから、ただのわり石のようにみえ  
 一〇〇六(会) 九八五(会) ら、ただのわり石のようにみえる物もあ  
 一〇〇七(会) 九八五(会) 類で、こんなただのせともののかげらが  
 一〇〇八(会) 九八五(会) なただのせともののかげらがと思うよう  
 一〇〇九(会) 九八六(会) 思う物は、みなかごの中にいれておきまし

九八六(会) 九八六(会) が鳴りました。あとの三十分は、ひじょう  
 九八七(会) 九八七(会) とき ある晴れた日の午後、ところ 学校  
 九八八(会) 九八七(会) 午後、ところ 学校の帰り道人 たかぎ  
 九八九(会) 九八八(会) 友だち大ぜい 舞台の中ほどに大きな木が  
 九九〇(会) 九八八(会) 。たかぎには友だちの「一、二、三、やまだ  
 九九一(会) 九八九(会) い。あんなになかのいいふたりが。」五  
 九九二(会) 九八九(会) きになって、友だちの手からぬげだそうと  
 九九三(会) 九九〇(会) ともないよ。学校の帰りじゃないか――  
 九九四(会) 九九〇(会) 「六うん。」やまだの手をひっぱって、「へ  
 九九五(会) 九九〇(会) ら――」と、やまだのせなかをおしながら  
 九九六(会) 九九〇(会) がらさる。そのほかの友だちが、落ちてい  
 九九七(会) 九九〇(会) 、落ちていゝやまだのかばんやぼうしをひ  
 九九八(会) 九九〇(会) 。一、二も、たかぎの落した物を集める。  
 九九九(会) 九九〇(会) 集める。三たかぎの服のほこりをはらい  
 一〇〇〇(会) 九九〇(会) る。三たかぎの服のほこりをはらいなが  
 一〇〇一(会) 九九一(会) そのあと、学校帰りの女の子ふたり、通り  
 一〇〇二(会) 九九一(会) あと、学校帰りの女の子ふたり、通りす  
 一〇〇三(会) 九九一(会) く、一、二年ぐらいの男の子、大きな声で  
 一〇〇四(会) 九九二(会) 一、二年ぐらいの男の子、大きな声で、  
 一〇〇五(会) 九九二(会) 「やまだ、さがし物のようすで地面をみな  
 一〇〇六(会) 九九三(会) うちに、セルロイドの三角じょうぎをひろ  
 一〇〇七(会) 九九三(会) げる。しかし、自分の物ではないので、そ  
 一〇〇八(会) 九九三(会) いので、それを舞台のおくにあげて、  
 一〇〇九(会) 九九三(会) 、たかぎもさがし物のようすですてくる。  
 一〇一〇(会) 九九三(会) ろいあげるが、自分の物ではないので、な  
 一〇一一(会) 九九四(会) なれたまま、たかぎの手もとをみている。  
 一〇一二(会) 九九四(会) 思いきって、たかぎのそばにより、だま  
 一〇一三(会) 九九五(会) まだわざとたかぎの顔をみないようにし  
 一〇一四(会) 九九五(会) ぎ、ちよっとやまだの方をみるが、返事を  
 一〇一五(会) 九九五(会) する。やまだ たかぎのまゑにじょうぎをつ  
 一〇一六(会) 九九六(会) きだして、「きみの名まえが書いてある  
 一〇一七(会) 九九六(会) 」と喜ぶが、やまだの顔をみると、きゅう



九六八 まる。たかぎ 舞台のすみからボタンをひ  
九七三 ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけよう  
九八三 る。たかぎ、うしろの木をひとまわりして  
九九三 合 る。たかぎ「ぼくの首をひっかいたのは  
九一〇〇 合 「けんかしたあとの氣持つて。」やまだ  
九一二 合 」。やまだ「けんかの話をするのかい。」  
九一〇二 合 」。やまだ「けんかの話をのぞきな  
九一〇四 生 につれられて、山のスキー場へいった。  
九一〇五 ー 場へいった。まえの日に、こな雪がた  
九一〇八 集合地は、村はずれの一本すぎのそばであ  
九一〇九 村はずれの一本すぎのそばであつた。ぼく  
九一〇五 一 スキーをつけ、二本のつえをつきなが  
九一〇五 四 しい先生は、みんなのあとからこられた  
九一〇五 九 つていった。スキーの雪をすべる音だけ  
九一〇五 一〇 坂にかかる、まゑの方で、のだ先生が、  
九一〇六 一 生も、ずつとうしろの方から、「略。」と  
九一〇六 八 つていった。まつ林の中を通つていくとき  
九一〇七 一 が、ちょうど小まつの中へとびこんだとき  
九一〇八 二 いい先生がうしろの方から追いたてるよ  
九一〇九 四 あせばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。  
九一〇九 六 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえが  
九一〇九 六 、スキーのあとを雪の上にえがきなが  
九一〇九 六 えがきながら、小鳥のようにおりてくる。  
九一一〇 先生たちは、もう目のまえにこられた。は  
九一一〇 六 ゐりがきえて、先生のお顔がうかぶ。それ  
九一一〇 七 ある。たちまち先生のからだは、ちゅうに  
九一一〇 七 さだ。「略。」先生のからだは、美しくち  
九一一〇 五 とんで、先生は地上の人となられた。お晝  
九一一〇 一〇 晝になつたので、雪の上で楽しくおべんと  
九一一〇 一〇 りは、村までくだりの坂道だ。林をぬつて  
九一一〇 一四 文 紙 いもうとの小さき歩みいそがせ  
九一一〇 一四 文 韻 れいるこでまりの花 いまの鳥はこの

九一五 一 文韻 まりの花 いまの鳥はこの木にいるに  
九一五 二 文韻 しひそかに枝葉の中をみあぐる 着ぶ  
九一五 三 文韻 歩かされいし女の子ばたとたおれそ  
九一五 五 文韻 なくも 赤いぬの一びきゆけばこの町  
九一五 五 文韻 きゆけばこの町のそここよりぞいぬ  
九一六 一 文韻 ここよりぞいぬのあらわる 階上のわ  
九一六 二 文韻 あらわる 階上のわが電燈のきえにけ  
九一六 四 文韻 階上のわが電燈のきえにけりみわたす  
九一六 四 文韻 くらなり 屋根の雪かきおとしいる少  
九一六 四 文韻 おとしいる少年の顔の明かるさ日にて  
九一六 四 文韻 している少年の顔の明かるさ日にてる中  
九一六 四 文韻 顔の明かるさ日にてる中に ちろちろ  
九一七 一 文韻 きかにいてすぎの山しずか 青さを  
九一七 一 文韻 やりたればいけのふなはや青き葉のか  
九一七 三 文韻 ふなはや青き葉のかげにきておる た  
九一七 五 文韻 る たべのこしのめしつぶまげばうち  
九一七 六 文韻 ちつどうすずめの子らと日なたぼこす  
九一七 七 文韻 ふくじゆそうのちはをおきかうるお  
九一七 七 文韻 な子やえんがわの上うつる日を追ひ  
九一八 一 文韻 ふくじゆそうのつぼみとおしむお  
九一八 三 文韻 子や夜はいろりの火にあてており 金  
九一八 四 文韻 てており 金色の小さき鳥のかたちし  
九一八 四 文韻 金色の小さき鳥のかたちしていちょう  
九一八 五 文韻 ようちるなり丘の夕日に ほおずきを  
九一八 七 文韻 わずは鳴くも夏のあさ夜を 十一 泉  
九一九 二 一 泉を求めて 十のころであつた。私は  
九一九 二 につれられて、近くの高い山に登つた。そ  
九一九 五 った。父は、その泉の水を手ですくつて、  
九一九 九 ごろごろした石ころのあいだから、プツプ  
九二〇 一 てわきだして、一方のかけたところから、  
九二〇 四 うとすると、おく山の雪がとけてそのまま  
九二〇 八 すずしいような、氣の晴れ晴れするような

九二〇 川だ。私たちの村の用水も、このまつ川  
九二一 だ。帰り道で、父は次のような話をしてくれ  
九二二 た。むかし、ひとりの茶人があった。茶の  
九二三 の茶人があった。茶のうまさには、お茶その  
九二四 もよるが、たてる湯のうまさがいちいちで  
九二五 るが、てんりゅう川の中流の水をくんで、そ  
九二六 るが、てんりゅう川の中流の水をくんで、そ  
九二七 泉はどうしても支流のほうにはなくて、遠  
九二八 流は急流だし、雨の日も風の日もある。  
九二九 流だし、雨の日も風の日もある。さかのぼ  
九三〇 すくなかった。つれの人は、この茶人ほど  
九三一 、ときどきあまい水の味がわからなくなっ  
九三二 たり、深いところの水をとって飲んでみ  
九三三 めて、いつか、いまのしずおか縣のさかい  
九三四 、いまのしずおか縣のさかいもすぎ、なが  
九三五 ていた。ここで茶人のしたには、まぎれも  
九三六 「略。」茶人はつれの人に行った。まつ川  
九三七 れこんでいるところの近くまでくると、い  
九三八 までくると、いい味の味の水は、左の岸のほ  
九三九 、いい味の味の水は、左の岸のほりを流れて  
九四〇 い味の水は、左の岸のほりを流れていた  
九四一 た。ためしにまつ川の水をに飲んでみる  
九四二 へんうまかった。念のため、もっと上流の  
九四三 のため、もっと上流の本流の水を飲んでみ  
九四四 、もっと上流の本流の水を飲んでみると、  
九四五 と、もうそれはただの水であった。「略」  
九四六 た。「泉はまつ川の上流にある。」茶人  
九四七 「茶人は、長い探求の旅が終りに近づいた

九125 4 していった。はじめの八キロほどは、村ざり、泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、  
九126 7 びきのくも 一びきのくもがいました。黄  
九127 2 いました。黄色と黒のしまもようのついた  
九127 3 色と黒のしまもようのついた大きなくもで  
九127 5 くもでした。ある日の夕がた、このくもは  
九127 6 このくもは、木と木のあいだに、巣をかけ  
九129 1 どこかであかちゃんのみき声かしています  
九130 4 ました。あかちゃんのみき声も、子もり歌  
九131 6 、みつばちは、くものあみを知らないで、  
九131 11 りだして、みつばちのからだをしばりつけ  
九132 3 そのうちにみつばちのからだも、つなにな  
九132 6 た。それにはさすがの大きなくもも、びつ  
九132 11 にげていくみつばちのうしろすがたをみて  
九133 2 ん。それより、自分のからだははれてくる  
九133 9 、ばさりとこうもりの羽にたたかれました  
九134 4 かいていると、いつのまにか、いままで苦  
九134 5 で苦しかったからだのいたみもきえていき  
九134 6 えていきました。目のまえのばらの花が動  
九134 6 きました。目のまえのばらの花が動いてい  
九134 6 た。目のまえのばらの花が動いています。  
九136 6 「なんだい、なんの用かね。」「略。」「  
九136 9 は、首をねじって上の方をみあげました。  
九136 10 のぼりかけたばかりの月が、しずかに光つ  
九136 11 ん、あのお月さんのところへいつてみた  
九137 3 いから、お月さんのところへいきたいと  
九138 1 くなりました。くもの小さなときのこと  
九138 2 。くもの小さなときのこと、ゆめでもみ  
九140 4 た。ちようど白ばらの花がとんでいくよう  
九141 2 りには、やはりばらの花のおいしがしてい  
九141 2 は、やはりばらの花のおいしがしていまし  
九141 5 今夜は、ばらのかげでねむることに

九141 9 と、だれかが、くもの頭をなでています。  
九142 1 ました。「わたしの顔ばかりみて、おか  
九142 5 わたしは、おまえのおかあさんじゃない  
九142 10 は、いまみたばかりのゆめを、なんでもな  
九143 1 ました。月ほもう頭の上までできていました  
九143 1 いました。つゆが木の葉にたまりました。  
九143 6 しかけたのは、ばらの花でした。」「略。」「  
九143 11 。自分は、こうもりのために、高いところ  
九144 2 た。いままた、ばらの花のやさしいことば  
九144 3 いまた、ばらの花のやさしいことばをき  
九144 4 た。くもは、これらのことを一つ一つ思い  
九144 6 ちよにしても、ばらの花にしても、なんと  
九144 10 かかれていて、ほかの虫がひつかかると、  
九145 2 くもは、そつと自分の手をのびし足をのび  
九145 3 がった足、うすきみのわるいかたち、いま  
九145 4 は、自分ながら自分のからだ、それおそ  
九145 6 てきました。白ばらの花は、もう話しかけ  
九145 8 しょう。くもは、月の光にちりちりりと  
九145 11 た。くもは、つばめの口ばしにはさまれた  
九147 2 、あるいは、つばめのくちばしからころげ  
九147 5 は、麦畑らしい土地の上をとびました。湖  
九147 5 上をとびました。湖の岸べをとびました。  
九147 6 とびました。深い森のそばをとびました。  
九147 7 明けが近づいて、東の空が、ほんのりとし  
九147 9 きました。「自分の命は、つばめさんに  
九147 11 になりました。いまのいままでも、みなく  
九147 11 いと思つていた自分のからだも、もうみに  
九148 2 した。「お月さんのところへとんでいっ  
九148 2 美しいもの 青空の美しさ、朝明けの空  
九14 3 空の美しさ、朝明けの空、夕やけの空の美  
九14 3 朝明けの空、夕やけの空の美しさ、月の夜  
九14 3 けの空、夕やけの空の美しさ、月の夜、星

十4 4 けの空の美しさ、月の夜、星の夜の美しさ  
十4 4 美しさ、月の夜、星の夜の美しさ。いまも  
十4 4 さ、月の夜、星の夜の美しさ。いまも、美  
十4 8 をだしかけたこずえのさが、かすんだ空  
十4 9 ささが、かすんだ空の中にとけこんでいる  
十5 12 は失っている。毎日の生活のらんざつとあ  
十5 12 っている。毎日の生活のらんざつとあ  
十6 1 ざつとあわただしさの中に、それを失つて  
十6 5 、どんなにでも毎日の生活を、ゆたかに、  
十7 3 うさんが、フランスのいなかへいったとき  
十7 7 ました。おとうさんの歩いていくそばを、  
十7 7 んで、おとうさんの顔をのぞきこむよう  
十8 7 うさんには、子どものお友だちがでまし  
十8 8 た。そういう子どもの中には、道でおとう  
十9 1 て、じゅくしたくりの実の落ちるころでし  
十9 1 じゅくしたくりの実の落ちるころでしたか  
十9 7 いました。その少女のわけてくれたくりは  
十9 9 、子どもらしい愛情のしるしでした。ちよ  
十9 11 プラタナスという木の葉が黄色くなるころ  
十9 12 なるころで、いなかの子どもにとっては、  
十10 2 ました。そのいなかの町には、ボンナフと  
十10 2 、ボンナフという石の橋があつて、イエン  
十10 4 ました。岸にある丘の上には、センチチュ  
十10 4 チェンヌというお寺の高いとうもみえまし  
十10 6 あたりは、フランスの國道にそつた景色の  
十10 6 の國道にそつた景色のよいところですから  
十10 7 ところですから、橋のたもと休み茶屋へ  
十10 7 すから、橋のたもと休み茶屋へは、おと  
十10 8 かけました。その橋のたもとにあるプラタ  
十10 8 とにあるプラタナスのなみ木の下で、おと  
十10 8 プラタナスのなみ木の下で、おとうさんは  
十10 9 おとうさんは、三人のかわいらしい少女に



十 23 5 「と、「こくご」の文を大きな声で歌う  
 十 23 7 横きる。16 ひとりの友だちは、母といっ  
 十 23 8 る。窓からみえる村の家、まつなみ木、竹  
 十 23 9 、竹やぶ。新しい家のたつた町、ふみきり  
 十 23 9 た町、ふみきりばんのおじいさん。トンネ  
 十 23 11 うちよせる波、おきの漁船、島。18 炭坑  
 十 24 1 漁船、島。18 炭坑の風景。エレベーター  
 十 24 5 場に近づく。地下水の流れ。その流れのか  
 十 24 5 水の流れ。その流れのかすかな音。石炭の  
 十 24 6 のかすかな音。石炭の坑道。工員たちは、  
 十 24 8 まみれになった工員の顔、胸、うで。たく  
 十 24 12 ツコにつまれる石炭の山。おしだされてく  
 十 25 2 うごうたるトロツコのひびき。21 ひとり  
 十 25 3 ひびき。21 ひとりの工員がしごとをすま  
 十 26 4 も走りだす。24 男の子が、むちゅうにな  
 十 26 5 けてくる。工員は男の子をだきあげる。ふ  
 十 26 6 だきあげる。ふたりのうれしそうな顔。日  
 十 26 7 うれしそうな顔。日の光をいっぱい受け  
 十 27 3 までに学んだ「自然の観察」を、ずつとつ  
 十 27 5 けても、ふだん自分の身のまわりにあるも  
 十 27 5 も、ふだん自分の身のまわりにあるもの  
 十 27 7 たいと思います。庭の木に小鳥がくれば、  
 十 27 8 や、動きかたや、羽の色や、形などを、こ  
 十 27 9 そののびかたや、花のさきかたや、実のな  
 十 27 10 花のさきかたや、実のなりかたなどを、た  
 十 27 11 ることがあれば、果のほりかたなどを、し  
 十 28 4 物だけではなく、雪のようすや、星の世界  
 十 28 4 、雪のようすや、星の世界なども、しらべ  
 十 28 8 ればするほど、自然のおもしろさもわか  
 十 29 3 す。たとえば、毛糸のあみ物があれば、そ  
 十 29 6 います。また、一つの和音を耳にしたとき  
 十 29 8 あわされた一音一音のことも、心にうかべ

十 30 4 なんでも、そのものとことをしらべていく  
 十 30 8 す。家では、弟たちのめんどろをみてやり  
 十 30 8 をみてやり、兄や姉の手助けになりたいと  
 十 30 9 と思っています。父や母のために、いつもすな  
 十 30 11 うして、うちじゅうの人たちに、めいわく  
 十 31 2 があるために、うちの中が明かるくなるよ  
 十 31 5 うか。学校では、組の友だちとなかよくし  
 十 31 6 思います。かげで人のわる口をいわないよ  
 十 31 7 うにしたいし、自分のもっているいいとこ  
 十 31 8 であらわし、友だちのいいところを、すな  
 十 31 10 ないで、ありのままのすがたで、つきあっ  
 十 31 11 ます。ぼくは、学校の生徒のひとりとして  
 十 31 11 ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっ  
 十 32 2 学校では、かげがえのないひとりであるこ  
 十 32 4 です。いつも、全体の中の部分、部分があ  
 十 32 4 いて、いつも、全体の中の部分、部分があ  
 十 32 4 部分、部分があつての全体、というつな  
 十 32 4 ずれないで、あいての人をうやまうとも  
 十 32 5 まうとともに、自分のつとめをはたすだけ  
 十 32 5 つとめをはたすだけの勇気を、もちたいと  
 十 32 6 かしなやつだ。男のくせに。」豊田佐吉  
 十 32 9 〇「豊田佐吉は、村の人々から、こうい  
 十 32 10 った。佐吉は、父の木工のしごとを助け  
 十 33 1 られた。佐吉は、父の木工のしごとを助け  
 十 33 1 。佐吉は、父の木工のしごとを助けてはた  
 十 33 2 まさえあれば、織機のことをしらべつづけ  
 十 33 2 のである。村じゅうの者から気持ちがいつ  
 十 33 3 、「おまえは木工のせがれだ。ほかのこ  
 十 33 4 〇のせがれだ。ほかのことを考えないで、  
 十 33 4 〇とさとしたが、佐吉のもえるような研究熱  
 十 33 6 それで、父は、佐吉の心をいれかえさせる  
 十 33 7 ために、佐吉をよその木工の家にあずけて  
 十 33 8 、佐吉をよその木工の家にあずけてしまつ

十 33 11 、母であつた。佐吉の考えはこうである。  
 十 33 11 はこうである。人間の衣食住というものは  
 十 34 1 はおかれない。いまのようなぬのの織りか  
 十 34 1 。いまのようなぬのの織りかたをしていた  
 十 34 3 。そのために、いまのうちに、早く織機を  
 十 34 6 を織るとき、たて糸のあいだをぬっていく  
 十 34 7 であるが、これを人の手によらず、機械の  
 十 34 8 の手によらず、機械の力で動かすようにし  
 十 34 11 くらである。佐吉の考えは、しだいに高  
 十 34 12 、小学校をでただけのかれには、手のとど  
 十 34 12 だけのかれには、手のとどきそうもない空  
 十 35 2 に光った、たくさん機械は、生きものの  
 十 35 3 の機械は、生きもののよう動いていた。  
 十 35 4 ともいえないかた身のせまい思いがした。  
 十 35 4 とつとして、日本製のものは、なかったか  
 十 35 5 〇でいいの。日本のゆくすえをどうする  
 十 35 7 〇た。佐吉は、一けん小屋に閉じこもつて  
 十 35 11 これならという一台の機械を作りあげた。  
 十 35 12 えとおし、いままでの失敗のもとをとりの  
 十 36 4 し、いままでの失敗のもとをとりのぞいて  
 十 36 4 やつと、思いどおりの機械ができあがつた  
 十 36 5 してよく動いた。村の人たちは、ぬのをみ  
 十 36 7 めたためた。試運転の日、その織機をあや  
 十 36 11 てみせたのは、佐吉の母であつた。それは  
 十 36 12 年、佐吉が二十四才のときのことである。  
 十 37 1 吉が二十四才のときのことである。あくる  
 十 37 1 こでさらに、七年間のくふうがつづけられ  
 十 37 4 本における自動織機のはじめである。日本  
 十 37 6 はじめである。日本の新しい出発にあたつ  
 十 37 7 〇眞珠、世界じゅうの人から愛される眞珠  
 十 37 10 〇「略」。一つぶの天然眞珠をてのひら  
 十 38 2 がいていた、ひとりのわか者があつた。眞  
 十 38 3

十 38 4 あった。眞珠は、海のそこからまれにひろ  
十 38 7 であった。眞珠母貝の中に、砂のような小  
十 38 7 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものが  
十 38 8 りこみ、それに、貝のだす眞珠質がまきつ  
十 38 10 〇 てはめれば、自分のゆめも、実現できな  
十 38 12 、わか者は、眞珠貝の研究に全力をつくし  
十 39 3 〇 た。「もし、母貝の中に、核をさしいれ  
十 39 5 吉は、あわつぶほどの核をこしらえて、そ  
十 39 6 えて、それを、母貝の体内にさしいれてみ  
十 39 7 れてみた。うまく貝の中に核がのこり、眞  
十 40 2 開いてみると、もとのままになっていた。  
十 40 3 たところで、かわりのあるはずはない。し  
十 40 7 かなかった。村や町の者は、幸吉のむだぼ  
十 40 7 村や町の者は、幸吉のむだぼねをあざけり  
十 40 7 あざけり、そのゆめのような考えをわらっ  
十 40 9 をわらった。まわりの者から、どんなにあ  
十 40 10 てくれたのは、つまのゆめであった。うめ  
十 40 11 〇 成功します。世界のために、きつと、あ  
十 40 11 〇 、きつと、あなたの願いがかないます。  
十 41 2 はげました。ある年のこと、赤しおが、お  
十 41 4 である。この赤しおのために、母貝はみな  
十 41 7 おしにかかった。町の人のかげ口は、いっ  
十 41 7 にかかった。町の人のかげ口は、いっそう  
十 41 9 、いつもこのわる口のためとなつて、幸吉  
十 41 11 とき、うめが、母貝の中をしらべているう  
十 41 11 ているうちに、一つの半円形の眞珠を発見  
十 41 11 ちに、一つの半円形の眞珠を発見した。こ  
十 42 5 れから、眞珠貝養殖の科学的研究がつづけ  
十 42 6 にちようどよい海水の温度や、海の深さの  
十 42 6 い海水の温度や、海の深さのこともわかり  
十 42 6 の温度や、海の深さのこともわかり、しお  
十 42 6 こともわかり、しおの流れの早さや、えさ

十 42 6 わかり、しおの流れの早さや、えさのよい  
十 42 7 流れの早さや、えさのよいわるいなども、  
十 42 11 のもつかのま、幸吉の心からの助力者であ  
十 42 11 のま、幸吉の心からの助力者であつたうめ  
十 43 4 はしなかつた。研究のため、死貝を一つ一  
十 43 9 、それこそ氣ちがいのようになって、死貝  
十 43 10 た。すると、五つぶの眞円眞珠が現われた  
十 43 11 八十五万から五つぶの眞珠が取れたわけで  
十 44 1 〇 、「かれは、五つぶの眞珠をいまはなきう  
十 44 1 珠をいまはなきうめのれいにささげて、そ  
十 44 3 吉は、すでにしらがの老人になっていた。  
十 44 5 いれるときに、ほかの母貝のがいとうまく  
十 44 5 ときに、ほかの母貝のがいとうまくを切り  
十 44 6 り取つてきて、一種の手術をほどこすこと  
十 44 9 てこなかつた。海水の温度に大きなわり  
十 44 10 、望みをかけた第一の母貝を開いてみた。  
十 45 2 された。今日、眞珠の産地は、ペルシア湾  
十 45 5 ーストラリアや南洋の島々であるが、日本  
十 45 6 々であるが、日本産のものは、ことに名高  
十 45 8 かげには、幸吉一生の苦心がひそんでいる  
十 45 9 る。かつて、パリーの眞珠商たちが、幸吉  
十 45 9 眞珠商たちが、幸吉の手になる養殖眞珠は  
十 45 10 った。しかし、世界の学者の研究によつて  
十 45 10 しかし、世界の学者の研究によつて、天然  
十 46 1 いしていたエジソンのもとをたずねて、養  
十 46 2 たずねて、養殖眞珠のつくりかたを、こま  
十 46 10 〇 して、眞珠を世界の人々にあたえたこと  
十 46 12 〇 す。養殖眞珠発明の、かがやかしい、あ  
十 46 12 〇 やかしい、あなたの光明を太陽とするな  
十 47 9 。ところが、私たちの足では十二三分のと  
十 47 9 ちの足では十二三分のところですが、妹に  
十 48 5 せんでしたので、妹の氣のすむようにして

十 48 5 でしたので、妹の氣のすむようにして、つ  
十 48 8 ために、私は、妹のいつていることばを  
十 49 10 ッポタイテルよその人には、なんのこと  
十 49 10 よその人には、なんのことか、おそらくわ  
十 49 11 しょうが、そのときのいきさつを知ってい  
十 49 11 私には、このことばの意味がよくわかりま  
十 50 1 しばらくいくと、道のまん中に、黒いぬ  
十 50 4 にかかつていて、顔のあたりの毛が、ぬけ  
十 50 4 ていて、顔のあたりの毛が、ぬけていまし  
十 50 10 、いぬは、くしゃみのようなことをして、  
十 52 5 たかと思うと、よそのおばさんが、あかち  
十 52 8 だしましたが、よその家の門の中へ、はい  
十 52 8 ましたが、よその家の門の中へ、はい  
十 52 9 たが、よその家の門の中へ、はいってこ  
十 53 1 た。すると、さつきの黒いぬが、ごろん  
十 53 4 と、いちいち、いぬの動作をことばにして  
十 53 12 。そこに、すいれんの花が三つほど、きれ  
十 54 1 こへいつて、水おけのふちにつかまって、  
十 54 1 ちにつかまって、水の中をのぞきました。  
十 54 7 あるきかけると、道のわきで、たき火をし  
十 54 11 めるのです。わずかのことばですが、この  
十 54 12 が、この中には、妹のすがたが、ありあり  
十 55 1 んでいます。七五三の記念写真も、思いで  
十 55 2 でしょうが、ことばの記ろくは、妹の心の  
十 55 2 とばの記ろくは、妹の心の写真になるので  
十 55 2 の記ろくは、妹の心の写真になるのではな  
十 55 2 んと書いていたまえのころが、うらやまし  
十 55 9 とき、なにげなく妹の作文をみました。な  
十 55 11 とでしよう。すこしのこだわりもなく、ぐ  
十 56 4 で、いままでの作文のからをぬぎさつて、  
十 56 4 そうしたら、二年生の男の子が、ふくろう

十 56 9 したら、二年生の男の子が、ふくろうのか  
 十 56 9 男の子が、ふくろうのからだを手でいじり  
 十 56 10 りさせて、とまり木の下におりていつてし  
 十 57 2 てしまいました。男の子は、「略。」とい  
 十 57 3 ました。コスモスの花 コスモスがさき  
 十 58 1 そうね。いちようの葉 算数の時間に、  
 十 58 2 いちようの葉 算数の時間に、先生が、は  
 十 58 3 、はしごでいちようの木にのぼって、いち  
 十 58 3 のぼって、いちようの葉をたくさん落して  
 十 58 10 りました。おとなりのよし子ちゃんと、な  
 十 59 6 んをたべてから、山の方へいつて、たくさ  
 十 60 4 だつこして、おもての通りへでていらつし  
 十 60 8 略。」といつて、月の方へ手をやつたら、  
 十 61 1 たけのこ うちのお庭に、たけのこが  
 十 61 2 た。私は、たけのこのそばにいつて、せい  
 十 61 3 らべをしたら、はなのところまでありまし  
 十 61 6 う、たけのこは、私のせいをすぎて、おに  
 十 61 7 すぎで、おにいさんのせいより高くなりま  
 十 61 9 しました。もう、先生のせいくらい高くなり  
 十 62 3 ろうと思つて、二階の窓からそとをみたら  
 十 63 3 が、かぶきや、ほかのしばいとも、いろい  
 十 63 4 うところは、ふつうのしばいでは、役者が  
 十 63 7 あげるのですが、能のほうでは、めんをつ  
 十 63 9 けます。おにいさんのめん、おばあさんの  
 十 63 9 のめん、おばあさんのめん、わかい男のめ  
 十 63 9 のめん、わかい男のめん、わかい女のめ  
 十 63 10 のめん、わかい女のめんと、それぞれの  
 十 63 10 のめんと、それぞれの人物によつて、それ  
 十 63 10 によつて、それぞれのめんがあります。そ  
 十 63 11 ために、能は、めんの藝術ともいわれ、ヨ  
 十 63 12 いわれ、ヨーロッパの大むかしにさかえた  
 十 63 12 さかえた、ギリシアの、同じめんの藝術と

十 63 12 リシアの、同じめんの藝術とくらべて、研  
 十 64 2 されていきます。日本の絵画や、庭園や、建  
 十 64 2 、外國とはおもむきのちがつたおもしろい  
 十 64 4 い、すぐれたところのあるものとなつてい  
 十 64 5 なつたら、自分たちの國が持つてゐるこの  
 十 64 11 みてゐると、世の中のうらおもてが、よく  
 十 65 1 はありません。つぎの「ぶす」は、狂言の  
 十 65 1 の「ぶす」は、狂言の中の有名なものです  
 十 65 1 「ぶす」は、狂言の中の有名なものです。狂  
 十 65 3 かれらは、だんなのねこかぶりをあばい  
 十 65 3 りなど、よわい人間のしそうなことを、な  
 十 65 5 もやります。めうえのいばつたものに対し  
 十 65 5 ある村に、けちんぼのだんながありました  
 十 65 9 かじやというふたりの下男に、「略。」と  
 十 66 4 いました。「おくのへやのおしにいれには  
 十 66 6 た。「おくのへやのおしにいれには、『ぶ  
 十 66 6 はじめは、そのへやの方へは、顔も向けな  
 十 67 1 りは、それをあいつのようにして、ぬき足  
 十 68 1 し足で、そつとおくのへやに近づき、さき  
 十 68 2 へ「略。」次郎かじやのほうに、太郎かじや  
 十 68 8 しろにひき、せんすの手だけをまえにつき  
 十 68 12 かじやは、おしにいれのたなのすみに、だい  
 十 69 2 は、おしにいれのたなのすみに、だいいじそ  
 十 69 2 まつてあつた、一つのまるいつぽをみつ  
 十 69 3 つぽをみつ、へやのまん中にかかえてき  
 十 69 3 「それこそ、どくの『ぶす』だよ。」「へ  
 十 69 6 ない。さあ、もとの場所において、あつ  
 十 69 10 れ。なみたいていのどくではないから、  
 十 70 7 んに、これは上等の黒ざとうだ。」ふた  
 十 71 4 略。」「おくびよう者の次郎かじやは、心配  
 十 71 10 しました。太郎かじやのほうは、氣が強いば  
 十 71 11 いきなり、とこのまのりつぽなかけものを  
 十 72 2

十 72 9 み茶わんを、ふみ石の上で、ガチャンとく  
 十 73 5 つは、だんなさまのおるすのあいだ、私  
 十 73 5 んなさまのおるすのあいだ、私どもは、  
 十 73 8 があまり、茶だなの湯飲みをはねとばし  
 十 73 10 しました。あまりの申しわけなさに、ふ  
 十 74 6 がみえるし、川上の方をながめると、近  
 十 74 6 ながめると、近くの町の工場のえんとつ  
 十 74 6 めると、近くの町の工場のえんとつが、  
 十 74 6 、近くの町の工場のえんとつが、なん本  
 十 74 8 んで、材木を遠くの山から運んでくるの  
 十 74 10 しろいのは、大学のボートがいつもここ  
 十 75 2 いることだ。川口の子どもたちは、いつ  
 十 75 10 ににたら、せいの高いりつぽなからだ  
 十 76 8 うだが、ボートの向きをかえたりひき  
 十 77 11 たら、コックスのまえにすわつて、整  
 十 78 1 づく。コックスの号令どおりに、一糸  
 十 78 3 そろつて、一つの生きものみたいに進  
 十 78 8 ほんとうにきみのいうとおりだ。ぽく  
 十 78 9 きみは、ぽくらの心持をよく知つてい  
 十 78 9 ている。ぽくらのはりきつてるとき  
 十 78 9 るとき、ぽくらのつかれてるとき、  
 十 78 10 るとき、ぽくらのしたいこと、ぽくら  
 十 78 11 いこと、ぽくらのいやなことなど、き  
 十 79 9 あんな大きな船の船長と、コックスと  
 十 79 11 そりやあ、船長のほうがむずかしいだ  
 十 79 11 ぼくたち強い男の子だ。」「略。」「へ  
 十 79 12 も、また、日本の國全体だつて、同じ  
 十 79 12 ばに日本じゅうの足なみをそろえてく  
 十 79 14 て、ふいに一そのボートが近づいてき  
 十 79 16 た。「あ、大学のボートだ。このあい  
 十 79 16 だ。このあいだのレースで勝つたボー  
 十 79 18 いっさんにボートの方へかけていつた。

十一 12 4 くる。たんぽぽのわた毛が遠くとんで  
 十一 12 5 いく日だ。あげはのちようが、まつのか  
 十一 12 5 のちようが、まつのかげから舞ってでる  
 十一 12 7 舞ってでる。まつの木では、きょうから  
 十一 12 9 さおな海は、太陽の下でわらっている。  
 十一 13 2 ゆるやかにうつ波の声は、われわれの心  
 十一 13 3 の声は、われわれの心をあらうようにき  
 十一 13 4 る。おりから、港の方でふえが鳴る。ふ  
 十一 13 5 ふえが鳴る。ふえの音は、長くおをひい  
 十一 13 7 ら旅してきた旅人のような氣持のする日  
 十一 13 8 旅人のような氣持のする日だ。丘の上の  
 十一 13 9 持のする日だ。丘の上の草にすわって、  
 十一 13 9 する日だ。丘の上の草にすわって、いつ  
 十一 13 10 、いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよ  
 十一 13 12 れは、あわてもののほおじろだ。あれは  
 十一 14 1 あれは、元氣もののこがらだ。あれは、  
 十一 14 2 。あれは、この村のさみしがりの小す  
 十一 14 2 村のさみしがりの小すすめだ。小鳥た  
 十一 14 4 はみんなめいめいの歌を歌う。一つの太  
 十一 14 5 の歌を歌う。一つの太陽の下で、みんな  
 十一 14 5 歌う。一つの太陽の下で、みんながめい  
 十一 14 6 みんながめいめいの歌を歌っている。一  
 十一 14 7 歌っている。一つの太陽の下で、せみも  
 十一 14 7 いる。一つの太陽の下で、せみも鳴き、  
 十一 14 10 わらい、たんぽぽのわた毛も遠くとんで  
 十一 15 2 になると、オルガンのキイから、赤い、青  
 十一 15 5 赤い、青い、金色の、ちがった形の小鳥  
 十一 15 6 色の、ちがった形の小鳥が、はばたいて  
 十一 15 9 るくる、ぼくたちの頭の上を、まわりは  
 十一 15 9 る、ぼくたちの頭の上を、まわりはじめ  
 十一 15 10 りはじめる。教室の高いところの窓ガラ  
 十一 15 10 教室の高いところの窓ガラスが、一まい

十一 16 2 おかあさま 人の心の畑にさいた、い  
 十一 16 2 かあさま 人の心の畑にさいた、いちば  
 十一 16 4 地にかがやくものの中で、いちばん清ら  
 十一 16 6 それはおかあさまの愛です。わたしをま  
 十一 16 9 ぼそい、おさな子のささやきも、ききも  
 十一 17 2 、その耳。わたしのためには、いばらの  
 十一 17 3 ためには、いばらの道をもふみわけたそ  
 十一 17 7 かあさま、あなたの目から教えられまし  
 十一 17 8 した。おかあさまの胸に、わきあふれる  
 十一 17 9 あふれるなぐさめ泉に、かなしみもい  
 十一 18 1 も、流れやまぬ愛のしみずに、うるおさ  
 十一 18 3 て、のびていく命のわか葉。わたしの幸  
 十一 18 4 のわか葉。わたしの幸福は、おかあさま  
 十一 18 5 福は、おかあさまの笑顔から生まれます  
 十一 18 7 郎。これから、私の調べた二宮金次郎の  
 十一 18 7 調べた二宮金次郎のことをお話します。  
 十一 19 1 ます。二宮金次郎の生まれたところは、  
 十一 19 1 ころは、神奈川縣のかやま村といつて、  
 十一 19 1 かい人でした。村の人たちが困って頼み  
 十一 19 6 。この人が金次郎の父親でした。りえも  
 十一 19 8 のうえ、さかわ川の大水で、田や畑をみ  
 十一 19 10 ましたので、いつのまにかびんぼうにな  
 十一 19 11 になって、その日のくらしにも困るよう  
 十一 20 1 して、身代をもとのようにしたいものだ  
 十一 20 4 金次郎は、子どものときから、家の手つ  
 十一 20 5 ものときから、家の手つたいをしてよく  
 十一 20 7 した。また、父親のすきなものを買った  
 十一 20 12 た。金次郎が十二のころです。さかわ川  
 十一 21 1 ろです。さかわ川のていぼう工事があつ  
 十一 21 1 家からも、おとなの男の人が、毎日ひと  
 十一 21 1 人も、おとなの男の人が、毎日ひとりず  
 十一 21 4 た。金次郎は、年のわりにからだが大き

十一 21 6 れどころか、ほかの人たちは休んだりむ  
 十一 21 10 、金次郎は、ほかの人たちにすまないとい  
 十一 21 12 ってくる、晝まの働きでつかれきって  
 十一 22 2 ました。たくさんの人の中には、わらじ  
 十一 22 2 た。たくさんの人の中には、わらじの切  
 十一 22 3 の中には、わらじの切れている人もあり  
 十一 22 8 なたしがみなさんのお役にたたないで、  
 十一 22 11 。「略。」おとなの人たちはおどろいて  
 十一 23 2 た。金次郎が十四のとき、父親がなくな  
 十一 23 2 りました。金次郎の下にふたりの弟があ  
 十一 23 3 次郎の下にふたりの弟がありました。い  
 十一 23 4 氣がちでも、父親の生きているあいだは  
 十一 23 7 と相談して、すえの子どもを親類にもら  
 十一 24 5 「金次郎は、自分の考えをくり返し話し  
 十一 24 10 いうのに、その晩のうちにいつて、子ど  
 十一 25 6 切ったりして、村の人に買ってもらいま  
 十一 25 9 しました。ふつうの子どもだったら、く  
 十一 25 12 金次郎は、一さつの本をみつめました。  
 十一 27 3 した。「略。」村の人たちは、こう、う  
 十一 27 5 月がくると、例年のことで、だいかぐら  
 十一 27 9 ましたが、金次郎のうちでは、その十二  
 十一 27 12 いました。金次郎のうちは、こんなにも  
 十一 28 1 ころで、そのつぎの年、母親が、四五日  
 十一 28 1 、母親が、四五日の病氣で死んでしま  
 十一 28 3 こつていたわずかの田や畑も、流されて  
 十一 28 5 。そこで、ふたりの弟は母親のさにと、  
 十一 28 5 ふたりの弟は母親のさにと、金次郎は親  
 十一 28 5 に、金次郎は親類のまんべえさんのとこ  
 十一 28 6 類のまんべえさんのところに、あずけら  
 十一 28 7 も、なまけたことのない金次郎でしたが  
 十一 28 10 を続けました。夜の勉強には油がいりま  
 十一 28 11 いと思ひ、となりのおばさんから一にぎ





十一 51 4 ちぎられ、へちまの葉は、みんな下向き  
十一 51 6 かさをさして電車の停留所まででかけた  
十一 51 9 たれながら、電車のくるのを待っていた  
十一 51 10 くるが、みな満員の札をさげて、とまら  
十一 52 2 まう。やっと一台の電車がとまった。あ  
十一 52 6 なかった。だれかのかさのしずくが、私  
十一 52 6 た。だれかのかさのしずくが、私のくつ  
十一 52 6 さのしずくが、私のくつの上にばたばた  
十一 52 6 ずくが、私のくつの上にばたばたと落ち  
十一 52 8 でもするように車の音をたてて、あらし  
十一 52 8 をたてて、あらしの中をつき進んでいく  
十一 53 3 な声だが、雨や風の音のために、乗客の  
十一 53 3 だが、雨や風の音のために、乗客の耳に  
十一 53 3 音のために、乗客の耳にきこえそうもな  
十一 53 9 をきいて、そこらの乗客は思わずほおえ  
十一 54 1 。このごろ、電車の中に、つぎのような  
十一 54 1 電車の中に、つぎのようなひょう語がか  
十一 54 4 「略。」「え顔の入口、感謝の出口。  
十一 54 4 顔の入口、感謝の出口。」「略。」「へ  
十一 54 7 顔の入口、感謝の出口。感謝の出口。  
十一 54 9 、しゃしやうさんのことばをわすれるこ  
十一 55 4 てんとうむしのように、みずすま  
十一 55 5 、みずすましのよう、一つ一つ  
十一 55 8 ひびく、あしの葉のふえよ。すず  
十一 55 8 く、あしの葉のふえよ。すずむし  
十一 56 4 る、プリズムのかげよ。火花やほ  
十一 56 6 たる、とんぼの目だま、一つ一つ  
十一 56 10 ら、さんしよの木め、めやぎの  
十一 56 10 さんしよの木め、めやぎのおち  
十一 57 1 のめ、めやぎのおち、一つ一つ  
十一 58 1 ばき、げんげの花わ、一つ一つ  
十一 59 9 、太郎は、友だちの正男と一雄と三人づ

十一 59 10 学校から帰るときのことであつた。「略  
十一 60 1 道というのは、田のあぜ道で、とちゅう  
十一 60 12 れて、三人は、川の中へドブンと落ちこ  
十一 61 1 だ。さいわい近くの田で働いていた村の  
十一 61 1 田で働いていた村の人たちに助けられて  
十一 61 2 んな、ぬれねずみのように家になつて  
十一 61 9 は、やるときやうのことを、ありのまま  
十一 62 3 に、このくらゐのことがこわいものか  
十一 62 5 には、よわ虫だ。人のいうことに『いいえ  
十一 62 6 には、ほんとうの勇氣がある。おまえ  
十一 62 6 がある。おまえのようになよわ虫には、  
十一 62 7 、「いいだすことのできないほど、『い  
十一 63 3 看病（一）雨の降っている三月のあ  
十一 63 3 の降っている三月のある朝、いなかの人  
十一 63 3 のある朝、いなかの人らしいひとりの少  
十一 63 4 の人らしいひとりの少年が、どろまみれ  
十一 63 5 、わきの下に着物の包みをかかえながら  
十一 63 5 えながら、ナボリの大きな病院の門ばん  
十一 63 6 ポリの大きな病院の門ばんのまえへいつ  
十一 63 6 きな病院の門ばんのまえへいつて、一通  
十一 63 6 えへいつて、一通の手紙をみせ、父親を  
十一 63 7 した。少年は、色のあさ黒い、おも長な  
十一 63 9 少年は、ナボリの近くにある村からき  
十一 63 9 たのでした。少年の父親というの、去  
十一 64 2 院したので、家族の者にかんたんな手紙  
十一 64 11 、長男にいづらかのお金を持たせ、父親  
十一 64 12 金を持たせ、父親の看病のために、ナボ  
十一 64 12 たせ、父親の看病のために、ナボリへよ  
十一 65 2 、少年をその父親のところへつれていく  
十一 65 3 、「おとうさんの名はなんというの。  
十一 65 8 した。「年よりのでかせぎ人ですか、  
十一 66 6 やあ、第四号室のいちばん向こうのベ

十一 66 6 、「いちばん向こうのベッドだ。」といい  
十一 67 1 、「って、長いろうかのはずれまで歩いてい  
十一 67 3 して、大きなへやの、開いたドアのまえ  
十一 67 3 やの、開いたドアのまえまできますと、  
十一 68 1 た。中には、死人のようにみえる者もあ  
十一 68 3 た。また、子どものようにうなっている  
十一 68 5 ははげしくすりのにおいがただよって  
十一 68 7 。その大きなへやのはしまでいくと、看  
十一 68 7 、看護人は、一つのベッドの頭の方に立  
十一 68 8 は、一つのベッドの頭の方に立ちどまっ  
十一 68 8 一つのベッドの頭の方に立ちどまっ  
十一 68 9 、「これが、きみのおとうさんですよ。  
十一 69 1 おくと、頭を病人のかたのところへさげ  
十一 69 1 、頭を病人のかたのところへさげて、一  
十一 69 2 ろへさげて、一方の手で、ふとんの上に  
十一 69 2 方の手で、ふとんの上におかれたまま動  
十一 69 6 身をおこして父親の方をみました。する  
十一 70 2 弓形をしたまゆとのほかに、どことい  
十一 70 4 をつくのもやつのようでした。「略」  
十一 71 2 は、おとうさんの子どもですよ。おと  
十一 71 2 よ。おとうさんの子どもはチチロです  
十一 71 2 うさんの子どもはチチロですよ。」病  
十一 71 5 よせて、目を父親の顔からはなさないで  
十一 71 9 ば、おとうさんのようすもなんとかわ  
十一 71 10 ら、やさしい父親のことをいろいろと思  
十一 71 12 いて、最後に船の上でわかれを告げた  
十一 72 1 げたことや、家族の者が、その旅に楽し  
十一 72 2 いたことや、手紙の着いたときに、母親  
十一 72 6 でした。「ぼくの父はどうしたんでし  
十一 72 8 のかた、あなたのおとうさんですか。  
十一 73 3 かりたつと、ベルの鳴る音がきこえまし  
十一 73 4 、医者か、ひとりの助手をつれて、へや

十一 73 4 手をつれて、へやの向こうのはしにはい  
 十一 73 4 て、へやの向こうのはしにはいつてきま  
 十一 73 5 きました。さっきの看護婦と、もうひと  
 十一 73 5 婦と、もうひとりの看護婦とがついてい  
 十一 73 7 じめて、一つ一つのベッドのそばに立ち  
 十一 73 7 一つ一つのベッドのそばに立ちどまりま  
 十一 73 9 。医者がすぐそばのベッドまできました  
 十一 73 10 た。医者は、せいの高い、すこしががん  
 十一 73 11 者が、まだとなりのベッドをはなれない  
 十一 74 2 ⑤ たは、この病人のむすこさんです。き  
 十一 74 5 医者は、手を少年のかたにかけました。  
 十一 74 6 。それから、病人の上にかがんで、み  
 十一 75 2 ⑤ いままでどおりのであてを続けなさい  
 十一 75 4 ⑤ ました。「ぼくの父はどうしたのでし  
 十一 75 6 は、もう一ど少年のかたに手をかけなが  
 十一 76 3 でしたから、病人のふとんをなおしたり  
 十一 76 7 は、ときどき少年の方をみましたが、わ  
 十一 76 11 と、少年は、へやのすみにいすを二つな  
 十一 77 2 。その日は、病人の目つきが、いくらか  
 十一 77 3 みえました。少年のいたわるような声の  
 十一 77 3 いたわるような声のひびきをきくと、感  
 十一 77 4 とみに、ちよつとのあいだうかぶように  
 十一 77 10 た、コップを病人の口もとにつけたとき  
 十一 77 11 ふくれあがつた顔の上に、きわめてかす  
 十一 78 2 ② 思うと、いろいろのことを――母親のこ  
 十一 78 2 のことを――母親のこや、妹たちのこ  
 十一 78 2 のこや、妹たちのこや、父親の帰り  
 十一 78 2 ちのこや、父親の帰りを待ちこがれて  
 十一 78 4 、あたたかい愛情のこもったことばで、  
 十一 78 7 愛情とかなしみとのまじりあった、しみ  
 十一 78 12 る、すこしばかりのパンとチーズも、ほ  
 十一 79 2 た。少年は、父親のちよつとしたため息

十一 79 6 せるような失望とのあいだで、たえずは  
 十一 80 4 かりした目を少年の上にすえて、うれし  
 十一 80 5 やくすりを、少年の手からでなければ飲  
 十一 80 9 ら、いきなり病人のうでをつかんで、「へ  
 十一 80 11 ⑤ よ。もうすこしのあいだですから。」  
 十一 81 2 (二) その日の午後四時ごろでした  
 十一 81 4 でした。そのへやのすぐそばの、ドアの  
 十一 81 4 のへやのすぐそばの、ドアのそとに足音  
 十一 81 4 すぐそばの、ドアのそとに足音がきこえ  
 十一 81 8 ら。みると、一方の手にあつくほうたい  
 十一 81 8 たいをしたひとりの男が、看護婦に送ら  
 十一 82 3 そういつて、少年の方へとんできました  
 十一 82 5 た。少年は、父親のうでの中にたおれま  
 十一 82 5 年は、父親のうでの中にたおれましたが  
 十一 83 1 親は、じつと病人の方をみつめたあとで  
 十一 83 3 ③ おまえはべつの人のところへつれて  
 十一 83 3 ③ まえはべつの人のところへつれていか  
 十一 84 2 をはさんで、家族のようすを話そうとし  
 十一 84 7 親は、少年を自分の方へひっぱりまし  
 十一 84 8 ぶり返つて、病人の方をみました。「へ略  
 十一 84 11 年は、また、病人の方をながめました。  
 十一 85 1 た。すると、少年のたましいのそこら  
 十一 85 1 、少年のたましいのそこら、どつとこ  
 十一 85 4 ④ く、ここに五日のあいだいました。お  
 十一 86 1 やがてまた、病人の方をみました。「へ略  
 十一 86 4 ④ ように、いなかのかたですがね。」と、  
 十一 86 10 ④ うやら、あなたのみすこさんと同じ年  
 十一 86 10 ④ と同じ年ぐらいのみすこさんと思ひこ  
 十一 86 11 ④ るらしく、自分のむすこだと思ひこ  
 十一 86 12 ④ やはりじつと少年の方をみていました。  
 十一 87 10 ④ 少年がベッドのそばのものと場所に  
 十一 87 10 ④ 少年がベッドのそばのものと場所に帰ると

十一 87 10 ッドのそばのものと場所に帰ると、病人  
 十一 88 5 ⑤ ました。そのつぎの日も、一日ずつとそ  
 十一 88 8 りました。夕がたの回しんのときに、医  
 十一 88 8 夕がたの回しんのときに、医者は、「へ  
 十一 88 10 ⑤ をして、ちよつとのまも、目を病人から  
 十一 89 4 ⑤ しました。あかつきの光が窓から白くさし  
 十一 89 8 ⑤ した。少年は病人の手をにぎりしました。  
 十一 89 10 ⑤ 年は、病人が自分の手をにぎりしめたよ  
 十一 89 12 ⑤ ました。「ぼくの手をにぎった。」と、  
 十一 90 2 ⑤ た。医者は、病人の上にはばらくのあい  
 十一 90 2 ⑤ 人の上にはばらくのあいだうつむいてい  
 十一 90 9 ⑤ ました。「きみの看病はすんだ。帰っ  
 十一 90 12 ⑤ に、ちよつとわきのほうにいつていた看  
 十一 91 1 ⑤ が、小さなすみれの花たばを、ベッドの  
 十一 91 2 ⑤ 花たばを、ベッドの上のコップの中から  
 十一 91 2 ⑤ ばを、ベッドの上のコップの中から取っ  
 十一 91 2 ⑤ ッドの上のコップの中から取つてきまし  
 十一 91 6 ⑥ ん。これを病院の記念に持つていらつ  
 十一 91 9 ⑥ 年はいつて、一方の手で花たばを取りな  
 十一 91 10 ⑥ 取りながら、一方の手で目をふきました  
 十一 92 3 ⑥ 、すみれをベッドの上にならしながら、  
 十一 92 8 ⑥ 略。」そこで死人の方へ向いて、「へ略  
 十一 92 10 ⑥ ているうち、五日のあいだ呼びなれてい  
 十一 93 1 ⑥ 、その小さな着物の包みを小わきにかか  
 十一 94 6 ⑥ 。ある日、祝賀会の席で、人々がかわる  
 十一 94 8 ⑥ 立つてコロンブスの成功を祝しますと、  
 十一 94 9 ⑥ しますと、ひとりの男が、「へ略。」とい  
 十一 95 1 ⑥ のが、それほどの手がらだらうか。」  
 十一 95 3 ⑥ 立つて、テーブルの上のゆでたまごをと  
 十一 95 3 ⑥ て、テーブルの上のゆでたまごをとり、  
 十一 95 5 ⑥ まごをテーブルの上に立ててごらん  
 十一 95 8 ⑥ た。人々は、なんのためにこんなことを

十二510、コッソとたまごのはしをテーブルにう  
十二511うちつけて、なんの苦もなく立てていい  
十二512さん、これも人のしたあとでは、なん  
十二612あとでは、なんのぞうさもないことで  
十二616だしたので、近くの家をたずねて雨具を  
十二610、おくからひとりの少女がでてきました  
十二73た黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、  
十二75道灌は、その花の枝を手にはしました  
十二75しました、なんのことだかその意味が  
十二76少女とやまぶきの花とをみくらべるば  
十二78つて、道灌は少女の心がわかりました。  
十二710文圃 どもやまぶきのみのひとつだになき  
十二710文圃 やまぶきのみのひとつだになきぞ悲  
十二712いう古歌に、少女の思いをたくしたもの  
十二82孟子がまだ子どものころでした。家をは  
十二83ましたが、ある日のこと、母親がなつか  
十二87ゝ」といって、母のそばへかけよりまし  
十二88いでしたが、孟子の顔をみると、つと立  
十二95文圃 「おまえが学問のちゅうとで家に帰っ  
十二911かけら ある町角の廣場で、ひとりのみ  
十二911の廣場で、ひとりのみすばらしい身なり  
十二105じゅんさが、老人のそばによつてきて、  
十二1010たものは、ガラスのかげらばかりでした  
十二112ると、老人は廣場の方を指さして、「略  
十二119けんしていたときの話です。ある日、リ  
十二111それをみた土人のひとりが、書物とい  
十二133(一) 文雄は、庭のかたすみに三きやく  
十二135た。そこには一本のざくろの木があつて  
十二135には一本のざくろの木があつて、夏じゅ  
十二138、あとにいくつかの実がなつていた。そ  
十二141つやつとしたしゅの色がさしてきた。文  
十二143まだ青々とした木の葉の中から大きくの

十二144青々とした木の葉の中から大きくのぞい  
十二144い。だが、根もとのところに三つ四つか  
十二148かし、その根もとの地面には、夏のころ  
十二148との地面には、夏のころ、草とりをして  
十二154と、すばやくあなの中へかくれてしまつ  
十二156文圃 れは、こおろぎの巢なんだな。そのま  
十二1511かった。だいたい形の形をすっかりとつか  
十二1512りとつかんで、日のあたるところ、かけ  
十二161なつたところ、力のこもつた角、まるみ  
十二161もつた角、まるみのある面、重みのかか  
十二162みのある面、重みのかかつた枝のつけね  
十二162重みのかかつた枝のつけね、ふわふわし  
十二165すむと、パレットの上にチューブから絵  
十二166めた。これは、絵のすきだつたおじさん  
十二168どだった。いい色の絵のぐがたぐさんあ  
十二168しかし、パレットの上でみたときは、ず  
十二169えるが、カンパスの上にぬりつけてみる  
十二172文圃 い。あのざくろの色もかけてないや。  
十二1710文圃 すが——あなたの声もたいそうよくお  
十二189文圃 です。おとなりの草むらでも、遠くの  
十二189文圃 むらでも、遠くの草むらでも、ピッピ  
十二1811文圃 みんな自分たちのなかまだなと思つて  
十二192文圃 た。このあいだの晩も、ピアノの先生  
十二193文圃 の晩も、ピアノの先生が、散歩にいら  
十二193文圃 つして、あなたの鳴く声に耳をかたむ  
十二205文圃 略。」「この実のかげは黄色くぼけて  
十二2011文圃 ば、どんなかげのところで、美しい  
十二218文圃 からもつとさきのことをおつしやつた  
十二2110文圃 。でも、あなたの歌には、そのさびし  
十二2111文圃 ているので、人の心を動かすのだから  
十二2112文圃 て、あのピアノの先生がおつしやいま  
十二223文圃 ある。どんな絵の大家だつて、一心に

十二234母をはじめ、うちの人たちは大喜びです  
十二235りで、姉やふたりのまごたちといっしょ  
十二235しよに、同じ屋根の下でくらせるのです  
十二238からそういうときのことを考えて、近所  
十二239とを考へて、近所の荒れ地を三十アル  
十二242りません。ふたりのまごというのは、父  
十二242は、父母にとつてのことですが、わたし  
十二244あたりです。おいの正男ちゃん、五つ  
十二245できますが、めいの民ちゃん、二つ、  
十二253わたしは民ちゃんの子もりをひき受けま  
十二269台をだして、食事の用意などをしてい  
十二2612れども、かんじんの歩くことはまだで  
十二271九十センチぐらいのところでも、こつち  
十二275と思うと、もう次のへやにはいつてい  
十二279わたしはおべんとうの包みをこしらえて、  
十二297文圃 おりて、わたしのげたをひっかけ、  
十二297文圃 っかけて、正男のあとを追つかけて道  
十二3011文圃 《略》。「民ちゃんのことば数のふえるの  
十二3011文圃 ちゃんのことば数のふえるのには、おど  
十二313めて (一) 私の一生を通じて、わす  
十二313て、わすれることのできないちばん大  
十二315それは一八八七年の三月三日、私が満七  
十二315になる三ヶ月まえのことでありました。  
十二317りました。この日の午後、私はなんと  
十二317でいました。午後の日光は、げんかんを  
十二318おつたすいかずらのしげみをもれて、み  
十二319れて、みあげる私の顔に降りそそいでい  
十二319つかしい葉や、花の上を、私の指はまっ  
十二3110や、花の上を、私の指はまっ  
十二321た。そうして、次のしゅん間には、私は  
十二329私は、先生——私の心の目をあらゆるも  
十二3210私は、先生——私の心の目をあらゆるも  
十二3211、先生——私の心の目をあらゆるものに

十二 37 1 つた——そのかたの両うでの中に強くだ  
 十二 33 1 そのかたの両うでの中に強くだきあげら  
 十二 33 3 やに呼んで、一つの人形をくださいまし  
 十二 33 4 すと、先生は、私の手に、「人形」とい  
 十二 33 6 私は、すぐこの指の遊びがおもしろくな  
 十二 33 10 ぎで、二階から母のところへかけおり、  
 十二 34 1 らず、ただ、さるの人まねのように指を  
 十二 34 2 だ、さるの人まねのように指を動かすだ  
 十二 34 3 それからいく日かのあいだに、なんのこ  
 十二 34 3 のあいだに、なんのこともわからない  
 十二 34 4 「など、たくさんのことばをつづること  
 十二 34 5 ど、すこしばかりの動詞も知りました。  
 十二 34 6 はそれぞれ名まえのあることを知ったの  
 十二 34 8 週間もたつてからのことでした。ある日  
 十二 34 10 パン先生が、ほかの大きな人形を私のひ  
 十二 34 10 の大きな人形を私のひざの上において、  
 十二 34 10 な人形を私のひざの上において、「人形」  
 十二 35 6 、こんどは、二つの人形が同じ名まえで  
 十二 35 9 は、くだけた人形のかげらを足さきに感  
 十二 35 10 がかけらをいろいろのかたすみにはきよせ  
 十二 35 11 が、ただ、腹だちの原因がとりのぞかれ  
 十二 36 4 。ふたりは、いどの小屋をおおっている  
 十二 36 6 ているすいかずらのあまいにおいにひか  
 十二 36 8 いにひかれて、庭の小道をおりていきま  
 十二 36 11 たので、先生は私の手をといて口の下へ  
 十二 36 11 生は私の手をといて口の下へやりました  
 十二 36 11 私の手をといて口の下へやりました。冷  
 十二 36 12 いるあいだに、別の手に、はじめのはゆ  
 十二 37 3 つたままで、全身の注意を先生の指の動  
 十二 37 3 全身の注意を先生の指の動きにそいでま  
 十二 37 3 の注意を先生の指の動きにそいでいま  
 十二 37 5 てこようとする心のはたらきといったよ

十二 37 7 「水」はいま自分のかた手の上を流れて  
 十二 37 7 いま自分のかた手の上を流れているふし  
 十二 37 7 しぎな冷たいものの名であることを知り  
 十二 37 9 きた一ことが、私のたましいを目ざめさ  
 十二 37 11 物にはみな名まえのあることがわかった  
 十二 37 12 かったのです。私の手にふれるあらゆる  
 十二 38 4 分がこわした人形のことを思いだして、  
 十二 38 5 いだして、いろいろのかたすみに走りよっ  
 十二 38 7 がだめでした。私の目にはなみだがいっ  
 十二 38 7 まりました。自分のしたことがわかった  
 十二 38 10 その日、たくさんのことばを覚えまして  
 十二 38 11 妹「先生」などのことばがあったこと  
 十二 39 1 します。できごとの多かったこの日もく  
 十二 39 3 い返していたときの私ほど幸福な子ども  
 十二 39 7 というアメリカの女の人が書いた「わ  
 十二 39 7 いうアメリカの女の人が書いた「わが生  
 十二 39 8 た「わが生がい」の一せつを、日本語に  
 十二 40 5 りません。ケラーの両親は、なんとかし  
 十二 40 5 、すこしでもものわかる子どもに育て  
 十二 40 6 もうあ教育に経験のあるサリバン先生に  
 十二 40 8 あらあらしいわけのわからないケラーを  
 十二 41 2 、ふたりがひとりのようになって、勉強  
 十二 42 2 ら、一生をケラーのためにささげました  
 十二 42 4 。これは、ケラーのサリバン先生に対す  
 十二 42 5 と、サリバン先生のケラーを思う愛情と  
 十二 43 5 さん。とこのまの人形が、動きだしそ  
 十二 43 8 いただいた童話の本に、人形が夜中に  
 十二 44 8 一メートル以上のものもあるが、まる  
 十二 44 12 人がかりで一つの人形を動かすんだ。  
 十二 45 1 人、左手だけの人、足だけの人と、  
 十二 45 1 けの人、足だけの人と、それぞれ手わ  
 十二 45 3 たり鼻がてんぐのようにとびだすこと

十二 45 4 する。ほら、分家のおじいさんの大すき  
 十二 45 5 家のおじいさんの大すきなじょうり  
 十二 45 8 しろいさ。人間のしばいもちがって、  
 十二 45 10 「略」。「文楽のほかにまだあるんで  
 十二 46 2 たし、おじいさんの子どもころ、よく  
 十二 46 2 じいさんの子どもころ、よくみたもの  
 十二 46 4 てやっぱり人形のしばいですか。」「へ  
 十二 46 7 ている。ジャワのものはとくに有名だ  
 十二 47 2 い人間には、顔の色やくらしがたがど  
 十二 47 5 音楽もある。命のない人形を思うまま  
 十二 47 8 も、生きた人間のほうがうまくやれる  
 十二 47 10 ところに、人間の美しさやおもしろさ  
 十二 47 12 かくより、写真のほうがずっと便利な  
 十二 48 1 れど、絵には絵のいいところがあるか  
 十二 48 10 も。簡単な人形の作りかたを覚えてあ  
 十二 49 2 から 一指人形の作りかた 1 材料  
 十二 49 6 古きれ。2 顔の作りかた。(1) 古は  
 十二 49 7 いて、ひとさし指のふとさのつつを作り  
 十二 49 7 とさし指のふとさのつつを作り、のりで  
 十二 50 1 おく。(3) 正方形の一まいのりをつけ  
 十二 50 3 かぶせる。(4) 首のところだけのこして  
 十二 50 7 かぶせる。(5) 首のほうからもかぶせて  
 十二 50 12 耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作っ  
 十二 51 4 、顔をかいいたり頭の毛をぬる。3 手  
 十二 52 1 をぬる。3 手の作りかた。(1) いた  
 十二 52 4 あける。(2) あなの両わきを切りこんで  
 十二 52 6 さきまをぬる。指の線をほる。4 着  
 十二 52 7 ぼる。4 着物の作りかたと手のつけ  
 十二 52 7 物の作りかたと手のつけかた。(1) 古き  
 十二 52 10 つぎあわせて、図の形に切る。これを二  
 十二 52 11 まいあわせて、図の点線のところをぬう  
 十二 52 11 わせて、図の点線のところをぬう。(3)

十二 53 1 。(3) 顔は、着物のすそからさかさにい  
十二 53 4 (4) 手は、手さきのほうをいれて、穴に  
十二 53 8 がる。二 人形のつかいかた 1 ひ  
十二 53 9 ひとさし指を首の中にいれ、おや指と  
十二 53 9 となか指を、そでの中、いたのうしろが  
十二 53 10 、そでの中、いたのうしろがわにいれる  
十二 53 11 だして、つかう人の顔や頭がみえないよ  
十二 54 2 、話すときは人形の顔を前後に動かす。  
十二 54 4 かす。三 舞台の作りかた 1 つく  
十二 54 7 重ねて、つかう人のかくれるところを作  
十二 54 10 くす。2 舞台の上には、紙やいたぎ  
十二 55 2 た土地はもとよりのこと、自分の生まれ  
十二 55 2 よりのこと、自分の生まれたところは、  
十二 55 3 えな暖かい感じのするものである。な  
十二 55 4 い山や、おもむきのある川などがあるた  
十二 55 5 ではない。子どものときからきなれた  
十二 55 7 られたというだけのもののほうが多い。  
十二 55 7 というだけのもののほうが多い。また、  
十二 55 9 あるが、ただ人々のあいだで語り傳えら  
十二 55 10 る、そういう人たちのなくなるにつれて、  
十二 56 6 る。次にいくつかの例をあげてみよう。  
十二 56 9 をしながら、まえの海で顔をあらうのを  
十二 56 11 していた。雲仙岳の中ほどにある唐の池  
十二 57 1 が畑をうったときのくわのあとで、その  
十二 57 1 うったときのくわのあとで、そのとき落  
十二 57 1 土くれが、有明海の中にある湯島である  
十二 57 1 の石だん 秋田縣の男鹿半島に、神山、  
十二 57 4 、本山という二つの山がある。どちらも  
十二 57 4 ぎなことに、神山のほうには、昔から九  
十二 57 6 昔から九十九だんの石だんができてい  
十二 57 8 はない。昔、神山のおくにおにが住んで  
十二 57 9 を荒らすので、村の人たちは困りはて、

十二 57 10 に向かつて、一つの難題をもちだした。  
十二 57 10 れは、おにが一夜のうちに百だんの石だ  
十二 57 11 夜のうちに百だんの石だんをきずきあげ  
十二 58 8 かどつて、九十九の石だんができあがっ  
十二 58 10 どりか鳴いて、東の空が明かるくなった  
十二 59 3 湖山の池 鳥取の西方約四キロのこ  
十二 59 3 取の西方約四キロのところに、まわり十  
十二 59 3 、まわり十二キロの湖がある。これが湖  
十二 59 6 かえたが、三代めの長者は、先祖のこと  
十二 59 7 めの長者は、先祖のことを鼻にかけて、  
十二 59 9 はじめた。ある年の夏、きようは長者の  
十二 59 9 夏、きようは長者の家の田植えだとい  
十二 59 9 きようは長者の家の田植えだとい  
十二 59 10 だといふので、里のおとめたちは、赤い  
十二 60 2 か、なん千アールの田をきよう一日で植  
十二 60 3 といいつけた。里の人たちはおどろいた  
十二 60 4 ないので、おとめの数をまして、田植え  
十二 60 5 。長者は、高どのの上からこのありさま  
十二 60 8 ろで、日ははや西の山に傾いて、くれそ  
十二 60 10 長者は、日のまるのおおきをあげて、し  
十二 60 11 まねくと、さすがの太陽も、まねかれる  
十二 60 11 ねかれるままに空の中ほどもどつて  
十二 60 11 。それで、のこりの田植えも無事にすん  
十二 60 12 事にすんで、長者の望みはとげられた。  
十二 61 3 えたなん千アールのあめ美しい田さな  
十二 61 3 具の岩屋 徳島縣の津峯山に、家具の岩  
十二 61 7 らぜんやわんなどの家具のすることを知  
十二 61 9 やわんなどの家具のであることを知  
十二 61 9 うものは、いり用のときはいつもここへ  
十二 61 10 ここへきて、岩屋の入口で頼んだ。そう  
十二 62 7 和田湖 十和田湖の近くの奥瀬村に、ひ  
十二 62 7 十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの

十二 62 7 奥瀬村に、ひとりの木こりがいた。名を  
十二 62 8 といった。ある日のこと、八郎が山でし  
十二 62 10 もうと思つて小川の岸にでてみると、美  
十二 63 2 い。そこでまた川の水を飲んだ。いくら  
十二 63 2 くら飲んでもどのかわきがとまらな  
十二 63 6 た。家にはひとりの母がある。母にその  
十二 63 11 。それが十和田湖のおこりだといふこと  
十二 65 1 ともみえない。根のさきは毛より細い。  
十二 65 6 く。のびていく根のさきをさえぎるもの  
十二 66 1 もない。おおづなのようなたくましい根  
十二 66 5 た細い根が、つなのようにからみあつて  
十二 66 9 い。深くて長い根の上に、みごとな草や  
十二 67 3 がある。のこぎりののはは、いぬの歯のよ  
十二 67 4 ぎりののはは、いぬの歯のようにとが  
十二 67 4 ののはは、いぬの歯のようにとが  
十二 67 8 ている。のこぎりののはは、いつもやす  
十二 68 1 おかないと、なんの役にもたない。の  
十二 68 4 物を切るのこぎりののはは、大きくてあ  
十二 68 5 物を切るのこぎりののはは、小さくてう  
十二 68 6 すい。糸のこは糸のようになく、ひきま  
十二 68 9 っている。こびきの大のこははばが廣  
十二 68 10 が廣いし、製材所のまいるのこぎりも、  
十二 69 1 ている。はたらきのある人は、はをも  
十二 70 2 雪まろげ 深川の芭蕉の家近くに、  
十二 70 2 ろげ 深川の芭蕉の家近くに、曾良と  
十二 70 2 深川の芭蕉の家近くに、曾良とい  
十二 70 3 た。曾良は、信州の人で、歌がたいそ  
十二 70 4 ずでしたが、芭蕉のことをきいてから、  
十二 70 8 てあげたい。下男のように住みこんであ  
十二 71 1 早くきては、芭蕉のおきないうちに、い  
十二 71 4 えながら、はい句の話をきくのでした。  
十二 71 5 くのでした。先生の近くにいればこそ、

十二72 6 べりにある船大工の子どもや、のりをと  
十二72 7 りにでるりようしの子どもたちで、どれ  
十二73 5 い小さなつづぶのものが落ちてきて、  
十二73 5 どもたちや、芭蕉の足もとに落ちて、は  
十二73 11 たが、子どもたちのかけていく方に、自  
十二74 3 たまあられ芭蕉の待ちに待った雪が、  
十二74 10 、そのうえ、台所の米入れの大きな入れ  
十二74 10 え、台所の米入れの大きな入れ物もかな  
十二75 2 さぶつたり、大川の波の音がバサリバサ  
十二75 2 ったり、大川の波の音がバサリバサリと  
十二75 3 その夜は、すべての音も雪にうずめられ  
十二75 4 んとしたしずかさの中に、芭蕉は心をす  
十二75 4 は心をすませ、雪の句を考えました。ト  
十二75 8 きなれている曾良の声です。芭蕉はすぐ  
十二76 4 会 。「先生、今夜の雪の句はいかがです  
十二76 4 会 先生、今夜の雪の句はいかがですか。  
十二76 7 れは、赤いおぼんの上に、雪をまるめて  
十二76 8 でした。なんてんの実が、赤く、うさぎ  
十二76 8 が、赤く、うさぎの目らしくいれてあり  
十二76 9 た。曾良は、芭蕉の子どものらしい手すさ  
十二76 10 、ふたりは子どものようにわらいました  
十二77 3 少年 メキシコのテニス選手キンゼー  
十二77 4 いよ試合をする日のことでした。テニス  
十二77 4 は日本とメキシコの国旗が美しくひるが  
十二77 5 がえつて、きょうの戦いを物語っていま  
十二77 7 ムをつけて、練習のためにコートにでま  
十二77 9 國人らしい十一二の兄弟にサインを頼ま  
十二78 2 。私は、その少年の持っていたペンをか  
十二78 7 は、いままで試合のまえにこんなふう  
十二78 11 ねました。ふたりの少年は、につこりと  
十二79 11 会 じゃあ、きょうのテニスの試合には、  
十二79 11 会 きょうのテニスの試合には、どちらを

十二80 10 した。そのひとみの中には、「略。」と  
十二81 2 少年が、遠い母國の選手のために、勝つ  
十二81 2 、遠い母國の選手のために、勝つこと  
十二81 7 と思ひました。火のでるようなほげしい  
十二81 10 んしている二少年のことを思つては、ふ  
十二81 12 までも、あのときのことをわすれること  
十二82 2 六月、七月、八月の四ヶ月にわたつて、  
十二82 2 たつて、十一ヶ國のテニス選手をなぎた  
十二82 3 清水選手は、最後の決勝戦にのぞむこと  
十二82 5 ができたら、世界のほまれ、デビスカッ  
十二82 7 ります。清水選手の相手はチルデン選  
十二82 8 、アメリカきつての名手です。身長は一  
十二82 9 、小さな清水選手のおよぶところではあ  
十二82 10 も、この清水選手の試合を見物しようと  
十二82 10 物しようと、方々の國の人々が、そのコ  
十二82 11 ようと、方々の國の人々が、そのコート  
十二83 1 した。まっ白い線のひかれたコートには  
十二83 1 ました。スタンドの人たちは、われるよ  
十二83 5 ボールが、ネットの上を右に左にと、ゆ  
十二83 9 ボールはたましいのこもった生きものの  
十二83 11 こもった生きもののようになつて、はね  
十二83 12 とびました。一つのボールを中心にして  
十二84 1 、両選手はとぶ鳥のようになつてまわりま  
十二84 1 もやはり清水選手の勝となりました。あ  
十二84 4 が、まほうつかいのようになつて、大き  
十二84 6 ちなおつて、電光のようなボールをうち  
十二84 10 めはチルデン選手の勝、続いて第四回め  
十二84 11 めもチルデン選手の勝となりました。見  
十二84 12 。ところが、試合のまっさいちゅう、ど  
十二85 3 ちのめすぜつこうのチャンスです。チル  
十二85 9 した。わずかな点のちがいで、清水選手  
十二86 7 がいで、清水選手の負けとなりました。

十二86 9 戦いぬいた両選手のために、見物人たち  
十二86 10 しばらく、あらしのようなはく手をおし  
十二87 6 いう。庭で植え木の手入れをしている父  
十二87 10 くだらう。ふる場の中で湯をかきまわし  
十二88 2 とぼは、そのときのまわりのようすや、  
十二88 2 そのときのまわりのようすや、ゆきが  
十二88 5 ことばでも、相手の人のいうことばのわ  
十二88 6 ばでも、相手の人のいうことばのわけを  
十二88 6 の人のいうことばのわけをよくききわけ  
十二88 12 ときには、相手の人のいっていること  
十二88 12 きには、相手の人のいっていることばを  
十二89 1 うでない、相手の人に満足を與えるこ  
十二89 2 ないし、また自分の誠意も通じない。自  
十二89 3 ときには、その場のようすによくあうよ  
十二89 6 、ほんとうに感謝の心持をこめていうと  
十二89 6 ただとおりのあいつとしていう  
十二89 8 るであらう。食事のたびごとにいう「い  
十二89 9 そのときそのときの心持があらわれるは  
十二89 10 口さきでいうだけのことになる。ただ習  
十二89 11 つかえば、ことばの力がうしなわれてい  
十二89 12 いく。それは自分の生活を軽はくにし、  
十二89 12 軽はくにし、相手の人をいやしめること  
十二90 2 ねをして、おうむのようになえていた  
十二90 2 ことばは、すこしの力も発きしないから  
十二90 3 あらわれるその人の面影というこも  
十二90 5 の「くりひろい」の中に、さまざまな氣  
十二90 10 ちがない。天氣のよかつたこと、山へ  
十二90 11 こまかに、この文の中にたたみこまれて  
十二91 8 っている。となりの友だちにさそわれて  
十二92 1 けたこと、もみじの枝をとってきたこと  
十二92 4 まれている。ほかの人がこれと同じ文を  
十二92 6 それは、めいめいの生活や経験が同じで

十二 93 2 ことにことばとしての性質があり、おもしろ  
十二 93 3 ちがつて、その場のようすが相手にみえ  
十二 93 5 はならない。前後の続きぐあいをよく考  
十二 94 3 い赤とんぼを、心の中にえがきだす。「  
十二 94 6 かる。それは文字のおかげである。とこ  
十二 94 7 これを読んだ人々の心には、めいめいち  
十二 94 8 くる。太郎は、秋の青い空を赤とんぼが  
十二 94 9 色を思い、すすきの野原を心にえがき、  
十二 94 11 。正男は、きよ年のいまごろのことをふ  
十二 94 11 きよ年のいまごろのことをふと思いだす  
十二 95 4 うつつてきたときのことを思いだす。だ  
十二 95 6 、赤とんぼが自分のまわりをとんでいた  
十二 95 10 ちがつたことを心の中に思いうかべる。  
十二 95 11 しまうと、読み手の思いでや心持にとか  
十二 95 12 て、その人その人の生活や経験によつて  
十二 96 3 とば あなたがたの家に、写真帳がある  
十二 96 4 れにはあなたがたのおとうさんや、おじ  
十二 96 5 、ひいおじさんの写真がでていたり、  
十二 96 5 たり、あなたがたの小さいときの写真な  
十二 96 5 がたの小さいときの写真などもあるでし  
十二 96 7 ると、あなたがたの家の昔からいまま  
十二 96 7 、あなたがたの家の昔からいままでのこ  
十二 96 8 の昔からいままでのことがさまざまに思  
十二 97 1 あるでしょう。次の写真帳は、なんの写  
十二 97 1 の写真帳は、なんの写真帳でしょうか。  
十二 97 5 みたところ、なんのかわりもない目です  
十二 97 6 ら三四千年もまえの目です。四年生のと  
十二 97 7 の目です。四年生のとき習った貝づかの  
十二 97 7 ととき習った貝づかのことを思いだして  
十二 97 10 ぼりますが、古代の人は、はいが、は  
十二 98 9 ように、古い時代のことがはつきりわか  
十二 98 10 たのは、アメリカのモールズという学者

十二 98 11 という学者が、東京の大森の貝づかを発見  
十二 98 11 者が、東京の大森の貝づかを発見してか  
十二 98 11 かを発見してからのこととあります。  
十二 99 3 てみましよう。石の矢の根があります。  
十二 99 3 根があります。石のおのがあります。し  
十二 99 4 もあります。しかの角などで作ったつり  
十二 99 7 食物をいれるためのものですが、もちろ  
十二 99 10 土器には、なわ目のものがありますので、  
十二 100 2 はちや、いろいろのものがあつた。じ  
十二 100 4 じょうもん式土器のほかに、やよい式土  
十二 100 7 ています。この式の土器は、はじめ、東  
十二 100 11 は、はじめ、東京のやよい町から発見さ  
十二 101 5 わといつて古代人のはからほりだされ  
十二 101 6 たものです。赤色のすやきの土人形で、  
十二 101 6 す。赤色のすやきの土人形で、高さは一  
十二 101 6 ほどあり、男や女のいろいろなすがたを  
十二 101 8 平和を愛した古代の人たちの氣持がよく  
十二 102 2 した古代の人たちの氣持がよくわかるで  
十二 102 2 、いまでも、多くの人々からたつとばれ  
十二 102 11 めて作られた日本のお金です。いまつか  
十二 103 3 ロスワーズパズルのようにならんだ文字  
十二 103 6 平等院という建物の中にある名高いほう  
十二 104 3 う名まえは、屋根のかざりにほうおうが  
十二 104 6 ています。右のびたろうのかつこうにも、ほう  
十二 104 8 右のびたろうのかつこうにも、ほう  
十二 104 8 ほうおうという鳥の美しいすがたがあら  
十二 104 9 う。大和絵 絵の中ほどをこらんなさ  
十二 105 2 なげたをはいた女の人、おともをふた  
十二 105 3 ます。この人たちの着物やかぶりのな  
十二 105 4 ものなども、いまのものといふぶんが  
十二 105 5 えます。皮さいくの店らしく、なにかの  
十二 105 8 店らしく、なにかの毛皮がひろげてあり

十二 105 11 これは、平安時代の町の風景で、大和絵  
十二 105 11 は、平安時代の町の風景で、大和絵でや  
十二 106 4 かるは、うさぎの耳をくわえて、得意  
十二 106 4 をくわえて、得意の足かけをしました。  
十二 106 5 まりかねた二ひきのうさぎが、うしろか  
十二 107 1 がさきみだれた秋の野原。これは、鳥羽  
十二 107 2 がいた動物絵巻の一場面です。  
十二 107 2 ります。平安時代の終りから鎌倉時代に  
十二 107 3 鎌倉時代にかけての藝術の中で、とくに  
十二 107 3 代にかけての藝術の中で、とくにすぐれ  
十二 108 1 くにすぐれたもの一つです。さあ、う  
十二 108 1 す。仁王さまは寺の門に立つて、ほとけ  
十二 108 4 まもりします。右の仁王さまをほつたの  
十二 108 7 たつとも鎌倉時代で作で、ほりものとし  
十二 108 10 お面です。舞う人のあるきかたや、身ぶ  
十二 108 11 お面は、生きもののように、いろいろな  
十二 109 1 します。室町時代の藝術品です。イソ  
十二 109 3 ツプ物語 三年生のときに習ったイソツ  
十二 109 6 これをキリスト教の宣教師が日本に傳え  
十二 109 7 百五十年ほどまえのことです。いんさつ  
十二 109 10 できました。日本のことばになおしてロ  
十二 110 1 ることは、外國人の心が傳わることで、  
十二 110 1 たうえに、金や銀のこなをまいて、もよ  
十二 110 9 ります。黒うるしの中に、銀や貝が光を  
十二 110 11 。まき絵は、日本のすぐれた工藝品の一  
十二 111 2 のすぐれた工藝品の一つで、古くから外  
十二 111 3 浮世絵 おなじみの富士山の絵です。こ  
十二 111 6 おなじみの富士山の絵です。この絵は北  
十二 111 7 斎という江戸時代の人のかいたもので、  
十二 111 7 という江戸時代の人のかいたもので、浮世  
十二 111 11 にすりあげる人と共同作品なのです。  
十二 112 4 これは、オランダのターヘルアナム

十二112 5 トミアという人体のことを絵いりで説明  
 十二112 9 たものです。表紙の文字は、「かいた  
 十二112 10 のころまで、人間のからだがどうなっ  
 十二113 1 本によって、日本の医学は、はじめてし  
 十二113 3 いくときは、いつの時代でもみなみの  
 十二113 3 時代でもみなみのどりでよくでなしとげ  
 十二114 4 堂 みなさんがたの代表が、全国からこ  
 十二114 9 ために。こんどの新しい憲法は、この  
 十二115 2 ば これで、日本の面影を写した写真帳  
 十二115 8 こうして、みんなの歩調がそろったとき  
 十三4 2 、まだこのかれ木のままの、高いけやき  
 十三4 2 このかれ木のままの、高いけやきのこず  
 十三4 2 まの、高いけやきのこずえの方を。そ  
 十三4 3 いけやきのこずえの方を。そのこずえ  
 十三4 3 方を。そのこずえの、細い、細い小枝の  
 十三4 4 、細い、細い小枝のあみ目の先にも、は  
 十三4 4 細い小枝のあみ目の先にも、はやふつく  
 十三4 5 ふつくらと、季節の命はわきあがって、  
 十三4 6 いる、子どもたちのむれのように。その  
 十三4 8 子どもたちのむれのように。その、まだ  
 十三4 8 まらぬ、小さな木のめのむれは、おたが  
 十三5 1 ぬ、小さな木のめのむれは、おたがい  
 十三5 3 きあって、ことばのないかれらのことば  
 十三5 3 とばのないかれらのことばで、なにごと  
 十三5 3 ちかか木もれ日のしま目もようにもち  
 十三5 6 さい水には、あしのめがすすくと、す  
 十三5 7 にも、春は、希望の帰ってくるとき。新  
 十三5 10 また、楽しい船出のほぬのを、高くか  
 十三5 12 かって来て、私たちの頭上にとびかい、歌  
 十三6 4 いして、かげろうのたいまつをたいて、  
 十三6 10 、そのさかな春のきざしは、よもにあ  
 十三6 11 目に見えぬかすみのようにたなびいてい

十三7 2 こともしれぬ方角の、遠い、はるかな空  
 十三7 2 遠い、はるかな空のおくで、鳴いている  
 十三7 3 鳴いているからすの声も、ほんとうにの  
 十三7 4 びりとして、ゆめのように、真理のよう  
 十三7 4 めのように、真理のように、白雲をかた  
 十三7 6 くる。ああ、季節のこういうのどかなと  
 十三8 5 ていく。一人まえの人として、自分のつ  
 十三8 5 の人として、自分のつとめをはたしてい  
 十三8 9 たり、また、種々の器械をつかつて観察  
 十三9 1 をおし進め、種々のことがらの関係を明  
 十三9 2 、種々のことがらの関係を明らかにして  
 十三9 3 えば、ものごとの原因と結果との関係  
 十三9 3 との原因と結果との関係や、その間に行  
 十三9 5 る。たとえば、花のおしべとめしべとの  
 十三9 6 おしべとめしべとの関係についていうと  
 十三9 6 ていうと、おしべのかふんがめしべにつ  
 十三9 10 識が開けず、科学の進まないところには  
 十三10 1 つくとか、からすの鳴き声がわるいから  
 十三10 4 とかい、名まえの字画を数えて、運が  
 十三10 6 によって、その人の性質や運命をきめた  
 十三10 8 へこして、つごうのよくなった人もある  
 十三10 8 ある。同じ名まえの人も世の中には多い  
 十三10 10 名まえを書かぬ國の人々などには、この  
 十三10 10 どには、この考えのまったくあてはまら  
 十三10 11 毎年、約二百万人の人が生まれるが、こ  
 十三10 12 まれるが、これらの人がみな同じ性質を  
 十三11 2 迷信という。一つのことと他のこととの  
 十三11 3 。一つのことと他のこととの間に、すこ  
 十三11 3 ことと他のこととの間に、すこしのつな  
 十三11 3 との間に、すこしのつながりもなく、原  
 十三11 4 因と結果との関係もないのに、一  
 十三11 4 もないのに、一つのこととは他のことの原

十三11 4 、一つのこととは他のことの原因であると  
 十三11 4 のことは他のことの原因であると、信ず  
 十三11 6 ある。原因・結果の関係の簡単なものは  
 十三11 6 原因・結果の関係の簡単なものは、普通  
 十三11 6 単なもの、普通の知識によって知られ  
 十三11 10 て、原因と結果との関係を調べきわめて  
 十三12 2 、いたずらに理由のないことを信ずる迷  
 十三12 5 うになれば、日本の國は、今日よりまだ  
 十三12 8 になると、日は東の空からのぼり、夕が  
 十三12 8 がたになると、西の空にしずみます。月  
 十三12 9 みます。月も、東の空から西の空に向か  
 十三12 9 も、東の空から西の空に向かって動きま  
 十三13 8 や金星・木星などのような星は、太陽の  
 十三13 8 ような星は、太陽のまわりを、大きく輪  
 十三13 10 同じように、太陽のまわりをまわってい  
 十三13 11 をまわっている星の一つだ、ということ  
 十三14 1 たのは、十六世紀の中ごろに死んだ、ポ  
 十三14 1 ーランドのコペルニクスという  
 十三14 1 といいますが――の空にえがく道は、だ  
 十三14 6 じころ、イタリヤのピサに生まれたガリ  
 十三14 8 果、コペルニクスのいったとおり、天は  
 十三14 11 ながら、だえん形のきまった輪をえがい  
 十三15 4 一年に一回、太陽のまわりをまわります  
 十三15 4 、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっか  
 十三15 5 しかし、そのころの教会のほうさんたち  
 十三15 7 、そのころの教会のほうさんたちは、天  
 十三15 7 、やむを得ず自分の説はあやまりであつ  
 十三16 3 リレオは、はく害のため、考えをかえて  
 十三16 5 マルクは、みどりの牧場と、もみと、し  
 十三17 2 もみと、しらかばの森林と、近海の漁場  
 十三17 3 ばの森林と、近海の漁場のほかに、鉾  
 十三17 3 林と、近海の漁場のほかに、鉾山があ



十三174 く、わが九州<sup>きゅうしゅう</sup>ほどの本國と、三つの島か  
十三175 どの本國と、三つの島からなっている、  
十三176 ぎばなしを、世界の子どもたちにおくつ  
十三177 た、アンデルセンの生まれた國でありま  
十三178 であります。世界の樂園といわれるこの  
十三179 イストリア二國との戦いに敗れ、賠償と  
十三180 インという、作物のよくできる二州をと  
十三181 れが、デンマルクの愛國者たちの心をく  
十三182 ルクの愛國者たちの心をくだいた、もっ  
十三183 はけずられ、國民の意氣はしずみ、その  
十三184 國民でしよう。國のおこるかほろびるか  
十三185 きにうちかつことのできる國民だけが、  
十三186 る國民だけが、國の建てなおしという大  
十三187 ちあがつたひとりの軍人がありました。  
十三188 その胸に國運回復の計画をたて、その顔  
十三189 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたり、  
十三190 きに、よく、國土の地質や地味を研究し  
十三191 は、のこった土地の大部分をしめるユー  
十三192 めるユートランドのあれ地と戦い、これ  
十三193 、とおりにつべんの空想家ではありませ  
十三194 ドは、デンマルクの半分以上もあつて、  
十三195 の一以上が、作物のできない土地であり  
十三196 るのが、ダルガスのゆめであります。こ  
十三197 ために、ダルガスのとるべき手だては、  
十三198 た。ユートランドの平野には、八百年あ  
十三199 水をそそぎ、平野の雑草をかりとり、じ  
十三200 は、ノルウェー産のもみの木でありまし  
十三201 ルウェー産のもみの木でありました。こ  
十三202 ら、ユートランドのあれ地にも育つだろ  
十三203 してみると、もみの木ははえるが、数年  
十三204 た。ユートランドのあれ地は、もはや、  
十三205 しかし、ダルガスの誠実は、これがため

十三217 のは、アルプス産の小もみを移植してみ  
十三218 れをノルウェー産のもみの間に植えてみ  
十三219 ルウェー産のもみの間に植えてみると、  
十三220 えてみると、兩種のもみは、たがいにな  
十三221 た。ユートランドのあれ野には、年ごと  
十三222 年ごとに、みどりの野が廣がりました。  
十三223 ました。ダルガスの希望であり、デンマ  
十三224 あり、デンマルクの希望であるこの植林  
十三225 こで、デンマルクの國運回復の意氣は、  
十三226 マルクの國運回復の意氣は、年々高まっ  
十三227 ています。みどりの野はできたが、ユー  
十三228 が、ユートランドのあれ地から建築用材  
十三229 を求めるダルガスの熱望は、実現されま  
十三230 した。アルプス産の小もみを植えたので  
十三231 ます。デンマルクの農夫たちは、「略」  
十三232 ました。ダルガスの長男、フレデリック  
十三233 ・ダルガスは、父の質を受けて、植物の  
十三234 質を受けて、植物の研究がすきでしたが  
十三235 が、かれは、もみの生長について、大き  
十三236 までも、大もみのそばにならべておく  
十三237 。わかいダルガスの意見を、実際にため  
十三238 さまでは、大もみの生長をうながす力を  
十三239 という、植物学上の事実が、ダルガス親  
十三240 で、ユートランドのあれ地には、おいし  
十三241 おいしげったもみの林が見られるように  
十三242 た。ダルガス親子の発見と努力によつて  
十三243 一、ユートランドの氣候が、そのよい感  
十三244 した。しげった木のない土地は、熱しや  
十三245 いから、ダルガスの植林以前は、ユート  
十三246 は、ユートランドの夏は、晝は暑く、夜  
十三247 ろ、ユートランドの農夫のつくった農作  
十三248 ートランドの農夫のつくった農作物は、

十三246 、そのほかわずかのものにすぎませんで  
十三247 成功してから以後の農業は、すっかりか  
十三248 、北ヨーロッパ産の農作物で、できない  
十三249 た。ユートランドのあれ地は、大もみの  
十三250 あれ地は、大もみの林がしげったために  
十三251 らに、北海岸特有の砂丘を、海岸近くで  
十三252 、そのうえ、大水の害がのぞかれたので  
十三253 まれました。土地のねだんがあがつて、  
十三254 それは、全國民のたましいでした。デ  
十三255 た。デンマルク人のたましいは、ダルガ  
十三256 しいは、ダルガスの研究と実行の結果と  
十三257 ガスの研究と実行の結果として、すっか  
十三258 わりました。敗戦のために意氣のおとろ  
十三259 敗戦のために意氣のおとろえた國民は、  
十三260 、あれ地をみどりの野とし、祖國を生き  
十三261 せ、ついに、今日のような平和國家をう  
十三262 トン風景 ベキンの町には、ホートンが  
十三263 トンが、あみの目のように通じている。  
十三264 というのは、小路のことである。どこの  
十三265 ことである。どこの家も、高い土べい  
十三266 まり廣くもない道の両がわの土べいの上  
十三267 もない道の両がわの土べいの上から、え  
十三268 の両がわの土べいの上から、えんじゅや  
十三269 なぎや、ねむのきの枝などが、ずつとの  
十三270 、ホートンは一本のトンネルのようにな  
十三271 は一本のトンネルのようになって、どこ  
十三272 する。一見、なんのかわつたところもな  
十三273 っては、かがえのない、楽しい遊び場  
十三274 なつかしい思い出の天地である。冬は冬  
十三275 は冬で、風あたりの少いホートンの廣場  
十三276 りの少いホートンの廣場に、子どもたち  
十三277 やりとした土べいの日かげを選び、風の

十三 28 1 日かげを選び、風の通り場で遊んでいる  
 十三 28 4 り、土でおだんごのようなものをこしら  
 十三 28 5 しらえたり、遠くの方からひびいてくる  
 十三 28 8 して来る鳴りものの音がおもしろい。床  
 十三 28 9 。床屋が通る。客のこしかける赤いす  
 十三 28 11 は、大きな毛ぬきのようなものを持ち、  
 十三 29 2 そこでは、どこかの子どもが、もう、頭  
 十三 29 5 。でんでんだいこのような、ブリキのつ  
 十三 29 5 のような、ブリキのつづみを鳴らしてや  
 十三 29 8 黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげ  
 十三 29 11 かついでいる。前の荷の上に、小さなど  
 十三 29 11 いでいる。前の荷の上に、小さなどら  
 十三 30 4 うし、同じ大きなどらでも、そのうち  
 十三 31 5 とかいった、中國のむかしものがたりを  
 十三 31 7 とんでもないべつのことを演じたりする  
 十三 32 2 を聞くのは、ゆめの中の声のように思わ  
 十三 32 2 くのは、ゆめの中の声のように思われる  
 十三 32 2 は、ゆめの中の声のように思われる。春  
 十三 32 10 ろうと、トンネルのようなホートンには  
 十三 33 1 、水を運ぶ一輪車の音であらう。水に不  
 十三 33 4 てる。だから、車の動いている間、たえ  
 十三 33 5 リ」がひびく。夏の日には、この音がす  
 十三 33 6 持をおこさせ、冬の日には、いかにもさ  
 十三 33 8 をおこさせる。夜のホートンはまっ暗な  
 十三 33 10 いたで美しく、星の夜であれば、またさ  
 十三 33 11 に、なんきんだまのような星がばらまか  
 十三 34 1 きには、ホートンの廣場などに、かげ絵  
 十三 34 2 場などに、かげ絵の舞台をこしらえて、  
 十三 34 4 かげ絵は、子どもの心をひきつけてやま  
 十三 34 5 けてやまない。夜のふけるのも知らない  
 十三 34 9 トンに面した家々の門には、「れん」が  
 十三 34 10 たい文句や、詩の一節であるが、みな

十三 34 12 ただ美しいかざりのような氣持で、れん  
 十三 35 2 わかり、その文字の意味がわかってくる  
 十三 35 3 きざまれる。文字の國といわれるのも、  
 十三 35 4 れるのも、いわれないことではない。  
 十三 35 5 い。正月には、門のとびらに、まっかな  
 十三 35 6 らに、まっかな紙の春れんがはりつけら  
 十三 36 1 んで来ると、ふえの音がおのずから和音  
 十三 36 2 み、それこそ天上の音楽である。中庭の  
 十三 36 3 音楽である。中庭のあんずがさいて、花  
 十三 36 5 ろである。やなぎのわたが、どこからと  
 十三 36 6 たわたが、土べいのかたすみにたまる。  
 十三 36 11 行く。花よめ行列のラッパの音が、どこ  
 十三 36 11 よめ行列のラッパの音が、どこかでひび  
 十三 36 12 ちは、またそちらの方へ走って行く。  
 十三 37 3 十三 37 3 郎と 十三 37 3 郎のうちの一室 右がわ  
 十三 37 3 ころ 十三 37 3 郎のうちの一室 右がわ  
 十三 37 4 ちの一室 右がわのかべに、電話がとり  
 十三 37 5 手につくえ。電話のベルが鳴る。だれも  
 十三 38 5 とう……こんどの日曜ね。(わらって  
 十三 38 7 え、一ど、三年のときだったか、遠足  
 十三 38 8 お客さん、ぼくの知っている人……だ  
 十三 39 1 ……マンシェウの真ちゃん、帰って  
 十三 39 4 はい……二番めのひきだし……上……  
 十三 39 5 番めのひきだし……上……はい。(…  
 十三 39 11 ……はい。(つくえの方をちらちら見る。  
 十三 40 6 ……はい。(電話のかかるのを待って  
 十三 40 7 手に持ったさっきの手紙をくり返して読  
 十三 40 11 ってね。四十日の旅じゃつかれただろ  
 十三 41 5 って、いまだこの家でも二けんぶんも  
 十三 41 5 、三けんぶんもの人が、寝とまりして  
 十三 41 6 るんだよ。ぼくの学用品を、ぼくひと

十三 41 9 んがね、こんどの日曜、きみをお客さ  
 十三 42 3 ……マンシェウの子どもが。しんせつ  
 十三 42 4 いよ。せっかくの記念品だから、とっ  
 十三 42 7 そのマンシェウの子どもに、お礼の手  
 十三 42 8 子どもに、お礼の手紙を書こうね……  
 十三 42 9 より、早くきみの顔が見たいよ。きよ  
 十三 43 1 読みながら、舞台のまん中に出て来る。  
 十三 43 5 ばらくして、うらの方で、もの音がする  
 十三 43 10 たなあ……」三郎の声が終るころ、しず  
 十三 44 2 ばい」をするための注意。しばいは、か  
 十三 44 3 らず、ふたり以上の会話から組みたてら  
 十三 44 7 なる人が、見物人の目につかないだけ  
 十三 44 8 うでしよう。電話のはじめの人は、三郎  
 十三 44 8 う。電話のはじめの人は、三郎くんのお  
 十三 44 8 の人は、三郎くんのおばさん、それから  
 十三 44 10 ている人は、四人の人と話をしているわ  
 十三 44 12 ころが、この四人の声は、見ている人に  
 十三 45 1 そこで、三郎くんの声と動きだけで、四  
 十三 45 2 こに、このしばいのむずかしさがありま  
 十三 45 3 ります。三郎くんのことばの間に、あい  
 十三 45 3 三郎くんのことばの間に、あいてがな  
 十三 45 5 れていないあいてのことばを考えて、そ  
 十三 45 6 したりして、電話の話らしくしなければ  
 十三 45 7 りません。あいてのいうことを聞いて、  
 十三 45 7 それから三郎くんのことばをいい、そう  
 十三 45 8 うして、三郎くんのことばだけで、すつ  
 十三 45 10 けないように、顔の表情がよく見えるよ  
 十三 46 4 ありが、ちようの羽をひいて行く。あ  
 十三 46 6 く。ああ、ヨットのようだ。チュール  
 十三 47 2 ユーリップ はちの羽音が、チュールリ  
 十三 47 3 が、チュールリップの花に消える。そよ風  
 十三 47 4 に消える。そよ風の中にひっそりと、客

十三 47 7 や。しか 午前の森に、しかがすわつ  
 十三 47 8 のせなかにその角のかげ。あぶが一びき  
 十三 48 2 とに。きり 山の湖水のほとり、「ま  
 十三 48 2 きり 山の湖水のほとり、「ます」小  
 十三 48 3 り、「ます」小屋のランプが、きゆうに  
 十三 49 2 らいの歌 みどりの森が、喜びの声でわ  
 十三 49 2 だりの森が、喜びの声でわらい、波だつ  
 十三 49 4 でが、わたしたちのゆかいなじょうだん  
 十三 49 5 でわらい、みどりの丘が、その声でわら  
 十三 49 7 すが、楽しい景色の中でわらう。メアリ  
 十三 50 1 らんほと、くるみのごちそうをならべる  
 十三 50 2 らべると、その木のかげで、きれいな鳥  
 十三 50 6 う。牧場 牧場の泉を、そうじに行つ  
 十三 51 2 て来るよ。母うしのそばに立つてゐた  
 十三 51 8 とおどる わたしの心は、にじを見ると  
 十三 52 4 おさな子はおとなの父だ。それで、わた  
 十三 52 6 望ましい、わたしの日々が、自然をした  
 十三 53 2 ある画像 もとの先生から、一まいの  
 十三 53 2 先生から、一まいの絵はがきをいただき  
 十三 53 3 た。絵は、はがきの上の方に、まるく原  
 十三 53 3 絵は、はがきの上の方に、まるく原色で  
 十三 53 5 いていて、その右の方に、もうひとりの  
 十三 53 5 方に、もうひとりの子どもがよりかっ  
 十三 53 7 る絵です。その下の白いところに、先生  
 十三 53 7 いたところに、先生の手で、こう書いてあ  
 十三 53 10 前に、イタリアのラファエルという画  
 十三 53 10 手 エルという画家のかいたもので、「い  
 十三 54 7 すぐに、おとなりのおじさんのところへ  
 十三 54 7 となりのおじさんのところへ行きました  
 十三 55 6 といつて、一まいの絵をひきだしからだ  
 十三 56 2 、その着物やはだの色の美しいのにおど  
 十三 56 2 の着物やはだの色の美しいのにおどろか

十三 56 7 包 いま、イタリアのプロレンスという町  
 十三 56 7 包 レンスという町の絵画館にかざつてあ  
 十三 56 9 包 れ、早くから絵のけいこをして、たい  
 十三 56 11 包 だのという天才の集まつていた、美術  
 十三 56 11 包 づいていた、美術の中心のプロレンスで  
 十三 56 11 包 た、美術の中心のプロレンスで、研究  
 十三 57 3 包 ルは、マドンナの像をかくことが得意  
 十三 57 4 包 シナ」は、おけのそこにかいたという  
 十三 57 7 包 ありとその絵を目の前に見るようなう  
 十三 57 10 包 も、おかあさんの喜びという心持が、  
 十三 58 1 包 もよくない。色のあるのは、その点は  
 十三 58 9 包 て、ラファエルのかいたマドンナのか  
 十三 58 10 包 いたマドンナのかわつたのを見せて  
 十三 59 2 包 は、ドレスデンの美術館にある絵で、  
 十三 59 2 包 絵で、『シストのマドンナ』といわれ  
 十三 59 4 包 〽それは、せいの高いマリアがキリス  
 十三 59 5 包 っている、老人のぼうさんらしい人が  
 十三 59 7 包 ていうか、ただのおかあさんではなく  
 十三 59 7 包 くて、キリストのおかあさんという感  
 十三 59 11 包 たとき、この絵の前には、一台の長い  
 十三 59 11 包 の前には、一台の長いすがおいてあつ  
 十三 59 12 包 あつたが、見物の人が、かわりばんこ  
 十三 60 6 包 かつている一まいの絵を見ました。「略  
 十三 60 7 包 「あれも、西洋の名画でしょう。ぼく  
 十三 60 11 包 ミケランジェロのかいた、てんじよう  
 十三 60 12 包 、てんじよう画の一部だ。くらべてみ  
 十三 61 1 包 と、ラファエルのほうがうまいかし  
 十三 61 2 包 も、ラファエルのうまさは、普通の人  
 十三 61 2 包 うまさは、普通の人にもわかるだろう  
 十三 61 3 包 も、二十二か三のかさで、せんばい  
 十四 4 2 おかあさん 世界の有名な文学者で、そ  
 十四 4 2 文学者で、その名のわが國に知られてい

十四 4 3 れども、フランスのルイ・フィリップの  
 十四 4 4 ルイ・フィリップの名は、すこしちがっ  
 十四 4 5 をもつて、私たちの心をうつのです。な  
 十四 4 6 れは、フィリップの作品の中にみなぎつ  
 十四 4 6 フィリップの作品の中にみなぎつて  
 十四 4 6 っている大きな愛の氣持、そこからさし  
 十四 4 7 てくるとうとい光のためなのです。フィ  
 十四 4 8 ふしあわせなものの中に、かえつて、人  
 十四 4 9 づつて、人間としての心のとうとさをみつ  
 十四 4 9 、人間としての心のとうとさをみつけた  
 十四 4 10 す。そうして、心の正しい人々の苦しみ  
 十四 4 10 、心の正しい人々の苦しみを、自分もと  
 十四 5 1 から、フィリップの作品の中には、たし  
 十四 5 1 フィリップの作品の中には、たしかに、  
 十四 5 2 かに、私たちを心のそこから動かし、私  
 十四 5 2 かし、私たち自身の生活を思わず返  
 十四 5 3 はいない強い眞実の力が、こもっている  
 十四 5 3 身、中部フランスの小さな町のまづしい  
 十四 5 6 ランスの小さな町のまづしい木ぐつしの  
 十四 5 6 まづしい木ぐつしの子に生まれ、おさな  
 十四 5 7 ないころから、人の世の苦しみをいろいろ  
 十四 5 7 ころから、人の世の苦しみをいろいろと  
 十四 5 7 となめていたからのことでした。しかし  
 十四 5 7 かし、フィリップのすなおな心は、まづ  
 十四 5 8 な心は、まづしさのために、すこしもゆ  
 十四 5 8 うしたフィリップの純眞さ、誠実さ、そ  
 十四 5 10 た直後、文学修業のためにパリに出て  
 十四 5 11 ーに出て、市役所のガス係という職につ  
 十四 6 1 た母へ送つたつぎの手紙の中にもよくう  
 十四 6 1 送つたつぎの手紙の中にもよくうかがわ  
 十四 6 2 老いた母を思う子の眞情は、遠く海をこ  
 十四 6 2 をこえて、私たちの胸にまでせまつてく

十四 6 7 ㊦ も、おかあさんのことを考えないでは  
 十四 7 1 ㊦ た。子どもたちのことをお考えになっ  
 十四 7 9 ㊦ は、おとうさんのために、心からの思  
 十四 7 9 ㊦ ために、心からの思い出をまもること  
 十四 7 11 ㊦ う。おとうさんのご一生は、私たちに  
 十四 7 11 ㊦ 私たちにとつての手本になってくれる  
 十四 7 12 ㊦ う。おとうさんのお写真を、私は、い  
 十四 7 12 ㊦ は、いつも自分のそばのつくえの上に  
 十四 8 1 ㊦ つも自分のそばのつくえの上におきま  
 十四 8 1 ㊦ のそばのつくえの上におきます。一生  
 十四 8 1 ㊦ おきます。一生の間、いくたびとなく  
 十四 8 2 ㊦ く、おとうさんのおこぼを思いだす  
 十四 8 7 ㊦ てもなれることのできないことがある  
 十四 8 11 ㊦ もわすれることのできないのは、わか  
 十四 8 12 ㊦ をだしてしごとのことをお考えになる  
 十四 9 1 ㊦ す。おかあさんの生活や、私たちの生  
 十四 9 1 ㊦ 生活や、私たちの生活のことをお考え  
 十四 9 1 ㊦ 、私たちの生活のことをお考えになっ  
 十四 9 6 ㊦ たら、あなたのルイは、たいへんか  
 十四 9 7 ㊦ せん。かなしみのために、おからだを  
 十四 9 8 ㊦ うあつても考えのたりないことです。  
 十四 9 10 ㊦ みちさけることのできなかったことに  
 十四 9 11 ㊦ れる子どもたちのことを思つて、安ら  
 十四 10 11 ㊦ えずおかあさんのことを思っているの  
 十四 11 2 ㊦ うなら。あなたのルイから パリー、  
 十四 11 8 ㊦ さい。きはつ油のさしかたは、ご自分  
 十四 12 5 ㊦ す。これは、私の友だちで、母親が十  
 十四 12 5 ㊦ のかた、この式のランプをつかつてい  
 十四 12 8 ㊦ す。その友だちの母親は、このランプ  
 十四 13 1 ㊦ に小さなめもりのようなものがついて  
 十四 13 3 ㊦ それは、コップの上からコーヒーこし  
 十四 13 5 ㊦ す。おかあさんのことを思つておりま

十四 13 7 ㊦ たを思うすべての心をかたむけて、さ  
 十四 13 10 ㊦ 日 おかあさんのことを思つています  
 十四 13 10 ㊦ たがたおふたりの写真は、いま、この  
 十四 13 11 ㊦ いているつくえの上、私の前において  
 十四 13 11 ㊦ つくえの上、私の前においてあります  
 十四 14 3 ㊦ す。おとうさんのお写真は、ほんとう  
 十四 14 7 ㊦ あさん、あなたのことを思うとき、「へ  
 十四 14 11 ㊦ ㊦ としては、力のかぎりおかあさんを  
 十四 15 5 ㊦ す。おかあさんのおやさしさこそ、私  
 十四 15 7 ㊦ す。おとうさんのおほかにについては、  
 十四 15 8 ㊦ が、おかあさんのおすきなようになさ  
 十四 15 11 ㊦ あいしに行く日のくるまで、いまま  
 十四 16 1 ㊦ して、せめてものおなぐさめにしたい  
 十四 16 6 ㊦ 私もおかあさんのことを思つてい  
 十四 16 12 ㊦ たものがご入用のときは、ごえんりょ  
 十四 17 4 ㊦ は、おかあさんのおすがたが、目に見  
 十四 17 9 ㊦ うなら。あなたのルイ 二 外国から  
 十四 19 12 ㊦ しゃつた。みんなの話をお聞きになつて  
 十四 20 4 ㊦ 、先生は、私たちのつかっていることば  
 十四 20 5 ㊦ かつていることばの中で、外国からは  
 十四 20 7 ㊦ そうして、つぎのようなことばはそ  
 十四 21 6 ㊦ いいながら、先生のお書きになる文字に  
 十四 22 7 ㊦ 、もとは、外国のことばさ。それが長  
 十四 23 2 ㊦ れでは、これらのことばは、もとはど  
 十四 23 2 ㊦ は、もとはどこの國のことばだったの  
 十四 23 2 ㊦ もとはどこの國のことばだったのだろ  
 十四 23 8 ㊦ ではなく、ほかの國からも、いろいろ  
 十四 23 9 ㊦ にあげたことばの中でも、クレヨン、  
 十四 24 2 ㊦ いる。そのほかのことばは、みんな英  
 十四 24 3 ㊦ は、「略」。先生のお話を聞いているう  
 十四 24 4 ㊦ こんなにたくさんのことばが、いろいろ  
 十四 24 7 ㊦ んなにたくさん外国のことばが、日

十四 24 7 ㊦ たくさん外国のことばが、日本語に  
 十四 25 5 ㊦ とは、あたりまえのことだが、なかなか  
 十四 25 8 ㊦ られる。「ことばのおたんじょう」など  
 十四 25 10 ㊦ 。それから、外国のことばがはいってき  
 十四 25 11 ㊦ けではなく、外国の学問などが傳わつて  
 十四 26 8 ㊦ ろう。また、音楽の時間によくつかう、  
 十四 26 11 ㊦ 。また、図画工作の時間によくいう、デ  
 十四 26 12 ㊦ うことばも、西洋の油絵がはいってきた  
 十四 27 2 ㊦ 本といはん関係のふかった大陸から  
 十四 27 5 ㊦ などというときの漢語は、たいいてい大  
 十四 27 7 ㊦ 、もともとからの日本語のように思わ  
 十四 27 8 ㊦ とからの日本語のように思われてきた  
 十四 27 10 ㊦ 國からきたことばの中で、西洋からきた  
 十四 29 3 ㊦ しまつてあるもののように聞えるかもし  
 十四 29 8 ㊦ す。ですから、星のおとき話は、日本に  
 十四 29 9 ㊦ せん。日本は景色のよい國で、花がたえ  
 十四 29 10 ㊦ いたために、天上の花を見ようとはしな  
 十四 30 2 ㊦ にそれがほんとうのことだとしても、自  
 十四 30 3 ㊦ だとしても、自分の身近なものしか見な  
 十四 30 9 ㊦ しょうか。むかしのことはしばらくおき  
 十四 30 10 ㊦ くおき、これからの人の心がまえは、大  
 十四 30 10 ㊦ き、これからの人の心がまえは、大きく  
 十四 31 1 ㊦ 、日本だけが特別の國でもあるかのよ  
 十四 31 1 ㊦ の國でもあるかのように考えて、世界  
 十四 31 5 ㊦ では、とても世界の中にはたつていけま  
 十四 31 6 ㊦ がたは、これからの日本にとつてだいじ  
 十四 31 8 ㊦ です。あなたがたの考えひとつで、日本  
 十四 31 9 ㊦ です。あなたがたのものをみる目、もの  
 十四 32 3 ㊦ しれません。天上の星とあなたがたとは  
 十四 32 12 ㊦ 、地球や金星などのわく星が、太陽を中  
 十四 33 2 ㊦ ます。この一むれの星を、ふつう太陽系  
 十四 33 5 ㊦ が系といわれる星の大きな集まりの一部

十四 33 5 星の大きな集まりの一部分にしかすぎな  
 十四 33 8 まいている天の川の内がわにあるたくさ  
 十四 33 9 わにあるたくさんの星のむれなのです。  
 十四 33 9 あるたくさんの星のむれなのです。それ  
 十四 33 11 々が系全体が、星の世界の全部かという  
 十四 33 11 全体が、星の世界の全部かという、な  
 十四 34 1 ないほど大きな星の世界が、なおいくつ  
 十四 34 4 シュタイン博士の話によると、うちゅ  
 十四 34 5 、けっしてはてしのないものではないま  
 十四 34 6 ありません。博士の計算では、うちゅ  
 十四 34 6 算では、うちゅのさしわたしは、およ  
 十四 34 8 ますか。光が一方のはしから、向こうの  
 十四 34 8 はしから、向こうのはしまでとどくの  
 十四 34 9 年も、かかるほどの廣さなのです。この  
 十四 34 12 がって、その地球の上に住んでいる人間  
 十四 35 3 アにもおとるほどの小さなものでしょう  
 十四 35 5 さな人間が、引力の法則を発見したり、  
 十四 35 5 したり、うちゅの大きさを計算したり  
 十四 35 7 れを思えば、人間の力というものは、う  
 十四 35 9 なさい、あの天上の星を。まあ、なんと  
 十四 35 11 う。じいっと大空の星をながめていると  
 十四 35 12 ていると、はてしのない、遠い世界にひ  
 十四 36 1 す。まことに、星の光は、声のないこと  
 十四 36 1 に、星の光は、声のないことです。こ  
 十四 36 2 とばです。ことばのない詩です。教えを  
 十四 36 4 れた人たちは、星の光の中からふかい思  
 十四 36 4 人たちは、星の光の中からふかい思想を  
 十四 36 9 あったとき、物理の時間に、先生から、  
 十四 37 2 たは、いま、日々の生活にもつらい思い  
 十四 37 9 たら、どうか天上の星を見あげてくださ  
 十四 38 3 みんな「一の人」の見ている方を遠く見  
 十四 38 4 会 聞える、夜明けの音楽が聞える。」二

十四 38 5 二の人そのまものかつこうで、「略」  
 十四 38 8 会 「二の人」東の空が明るくなつて  
 十四 38 10 会 みんな「夜明けの足音、しずかな夜明  
 十四 39 4 会 みんな「みんなの朝がくる。」一の人  
 十四 39 5 会 「わたしたちの、楽しい朝がくる。  
 十四 39 9 の人はるか遠くの方を指さして、「略」  
 十四 39 11 会 「三の人」希望の光。」五の人「喜びの  
 十四 40 1 会 「五の人」喜びの光。」四の人「きれ  
 十四 40 7 会 「一の人」日本の朝。」二の人「わたし  
 十四 40 8 会 「わたしたちの朝だ。」三の人「新し  
 十四 40 9 会 「新しい世界のおとずれ。」四の人「平  
 十四 40 10 会 人」平和と自由の光がさしてくる。」  
 十四 40 11 会 人「わたしたちの前に、朝がきた。」  
 十四 41 8 会 人「わたしたちのために、朝がきた。」  
 十四 43 4 会 な調子で。日々の苦勞に、よし心配が  
 十四 44 1 会 てくれる。他人のためにことばをも  
 十四 44 2 会 しんでいる他人のためにも。そうして  
 十四 44 10 スコットランドの西岸のおきあい、  
 十四 44 10 ットランドの西岸のおきあい、ローマ  
 十四 45 1 千九百二十年十月の、ある月のない夜の  
 十四 45 2 年十月の、ある月のない夜のことで  
 十四 45 2 、ある月のない夜のことで。乗ってい  
 十四 45 2 乗っていた百四十人のうち、乗組員十一人  
 十四 45 3 一人、船客十四人のゆくえがわからなく  
 十四 45 4 ショナル保険会社の社員、フランク・マ  
 十四 45 5 だされて、黒い波の間をおよいでいまし  
 十四 45 9 りました。すべてのものが、ことごとく  
 十四 45 10 まったように、死のしずけさがあたり  
 十四 45 10 すると、そのきみのわろいしずけさの中  
 十四 45 11 のわろいしずけさの中から、とつぜん、  
 十四 45 12 ました。それは女の声で、しかも、調子  
 十四 46 2 。まるで、大ぜいの來客を前にして、客

十四 46 9 い、しみじみと歌のありがたさを味わつ  
 十四 46 10 なって、自分が水の中にひたっているこ  
 十四 47 6 しょう。たいていの人は、しょうとつ  
 十四 47 6 の人は、しょうとつとつとつにあわてふため  
 十四 47 9 に、こんなきけんのせまつた中で、なん  
 十四 48 1 暗い夜、こんな海のまん中で、よくあん  
 十四 48 5 した。かれは、歌の声をたよりに、その  
 十四 48 7 たものらしい一本の大きなまるとに、な  
 十四 48 7 るたに、なんんかの婦人がつかまつて、  
 十四 48 8 いるのは、その中のひとりでした。まだ  
 十四 48 11 いました。助け船のくるのを待つ間、ほ  
 十四 48 11 のを待つ間、ほかの婦人たちが力をおと  
 十四 49 8 んくらい、この歌の心を生かした人は少  
 十四 49 12 て、おじょうさんの歌をたよりに、マッ  
 十四 50 2 、やがて、一そうのボートが、やみをぬ  
 十四 50 5 さんも、そのほかの婦人たちも、みんな  
 十四 50 6 ことは、あくる日の新聞に出たマッケン  
 十四 50 6 に出たマッケンナの話で、あきらかにな  
 十四 50 8 ったおじょうさんの名まえがわかりませ  
 十四 50 9 いまも、われわれの耳にひびいてくるよ  
 十四 51 2 つりの夜 ある家の、かぼちゃのとりの  
 十四 51 2 家の、かぼちゃのとりのいれまつりの晩  
 十四 51 2 のとりいれまつりの晩のことでした。「へ  
 十四 51 2 りいれまつりの晩のことでした。「略」  
 十四 51 2 かぼちゃはだれのものか。」という話  
 十四 51 8 いだしたのは、根のしるしをつけた老人  
 十四 52 3 会 それでは、座長の根さんのご指名で、  
 十四 52 3 会 、座長の根さんのご指名で、私から申  
 十四 52 4 会 のかぼちゃは私のものです。私の花が  
 十四 52 5 会 のものです。私の花がさかなかつたら  
 十四 52 6 会 や、つるや、葉のないかぼちゃはあり  
 十四 52 9 会 めて、かぼちゃの実がつくのです。こ

十四五二<sup>11</sup>会 も、それは、花の一部であるめしべの  
 十四五二<sup>11</sup>会 部であるめしべの根もとが、大きくふ  
 十四五二<sup>12</sup>会 くふくれただけのものです。だから、  
 十四五三<sup>1</sup>会 れは、私たち花のものだということは  
 十四五三<sup>3</sup> 略。」葉は、元氣のいい青年でした。「へ  
 十四五三<sup>4</sup> 会 じょうずに自分のことを主張なさいま  
 十四五三<sup>6</sup> 会 してそのめしべの根もとがふくれて、  
 十四五三<sup>8</sup> 会 いつも日あたりのいいところに出て、  
 十四五三<sup>12</sup>会 まったたくさんのかぼちゃの花を見て  
 十四五四<sup>1</sup>会 さんのかぼちゃの花を見えています。あ  
 十四五四<sup>1</sup>会 あれは、私たちの養分をこしらえる力  
 十四五四<sup>3</sup>会 ちゃは、全部私のものだと思ひます。  
 十四五四<sup>7</sup>会 葉さんは養分のことをおっしゃいま  
 十四五四<sup>8</sup>会 は、大部分、根の私が、土の中から吸  
 十四五四<sup>8</sup>会 、根の私が、土の中から吸いとして、  
 十四五四<sup>9</sup>会 です。みなさんのように、明かるい地  
 十四五四<sup>10</sup>会 に、明かるい地の上でくらししているか  
 十四五四<sup>10</sup>会 るかたには、土の中のこととはわからな  
 十四五四<sup>10</sup>会 たには、土の中のこととはわからないで  
 十四五五<sup>5</sup>会 かぼちゃは、私のものだと思ひます。  
 十四五五<sup>9</sup> 」「略。」「おとなのつるは、しずかにい  
 十四五六<sup>1</sup>会 さんや、根さんのような 特別なはた  
 十四五六<sup>2</sup>会 てくださった地の中の水や養分でも、  
 十四五六<sup>2</sup>会 ださった地の中の水や養分でも、葉さ  
 十四五六<sup>3</sup>会 さんが、それを日の光にあてたり、空気  
 十四五六<sup>5</sup>会 っぱなかぼちゃの実にはなりません。  
 十四五六<sup>6</sup>会 葉さんでも、日のあたるところや、高  
 十四五六<sup>8</sup>会 す。もし、つるの私がちゅうで切れ  
 十四五六<sup>11</sup>会 らんなさい、私のこの足を、手を。こ  
 十四五七<sup>2</sup>会 ちゃは、全部私のものだと思ひます。  
 十四五七<sup>4</sup> ます。それは、頭のぼうしで、日、水、  
 十四五七<sup>6</sup>会 はは、いま、戸の外で聞いていると、

十四五七<sup>8</sup>会 たがたは、自分のことしか考えないよ  
 十四五七<sup>11</sup>会 ちゃは熱帯地方のものです。それがこ  
 十四五八<sup>1</sup>会 根さんは、養分のことをいっていらっ  
 十四五八<sup>10</sup>会 は水です。いまのお話の養分だって、  
 十四五八<sup>10</sup>会 す。いまのお話の養分だって、水にと  
 十四五八<sup>12</sup>会 かわききった夏のさいちゅうに、あの  
 十四五九<sup>1</sup>会 ゆうに、あの雨のおかげで、かれるの  
 十四五九<sup>7</sup>会 たのです。ほかのことはわすれても、  
 十四五九<sup>8</sup>会 れても、この土のことは、かたときも  
 十四六〇<sup>2</sup>会 は、みんなぼくのものだといつてもい  
 十四六〇<sup>4</sup>会 は、そんなよくのふかい、身がつてな  
 十四六〇<sup>5</sup>会 ぼちゃは、だれのものとも、簡単に  
 十四六〇<sup>6</sup>会 いて、みんなのものです。しかし、  
 十四六二<sup>4</sup> だけで、なんのおもしろみもなく、  
 十四六二<sup>6</sup> だんに、いろいろのこまかいことが目に  
 十四六二<sup>6</sup> につき、さまざまのうたがいがおこつて  
 十四六二<sup>7</sup> ます。ただ一ぱいのこの湯でも、自然の  
 十四六二<sup>8</sup> この湯でも、自然の現象を観察し、研究  
 十四六二<sup>8</sup> し、研究することのすきな人には、なか  
 十四六二<sup>10</sup> ます。第一に、湯の表面からは、白い湯  
 十四六三<sup>3</sup> 茶わんをえんがわの日なたへ持ちだして  
 十四六三<sup>5</sup> て見ると、しずくのつぶの大きいのが、  
 十四六三<sup>5</sup> と、しずくのつぶの大きいのが、ちらち  
 十四六三<sup>7</sup> して見ると、湯げの中に、にじのような  
 十四六三<sup>7</sup> 湯げの中に、にじのような、赤や青の色  
 十四六三<sup>7</sup> のような、赤や青の色がついています。  
 十四六三<sup>7</sup> また、いつかべつとにしましよう。  
 十四六三<sup>10</sup> とう明なガス体の蒸気が、しずくにな  
 十四六四<sup>1</sup> にか、そのしずくのしんになるものがあ  
 十四六四<sup>4</sup> りうことが、学者の研究でわかってきま  
 十四六四<sup>5</sup> ても見えないほどの、たいへんこまかい  
 十四六四<sup>5</sup> へんこまかいちりのようなものです。空

十四六四<sup>8</sup> いまいった、ちりのようなものばかりが  
 十四六四<sup>12</sup> きたへやで、人の動きまわらないとき  
 十四六五<sup>1</sup> 湯ですと、湯げの温度が高くて、まわ  
 十四六五<sup>2</sup> が高くて、まわりの空気にくらべてずつ  
 十四六五<sup>4</sup> わいわけです。湯の温度を計る寒暖計が  
 十四六五<sup>6</sup> 、これは、まわりの空気の温度によつて  
 十四六五<sup>6</sup> は、まわりの空気の温度によつてもちが  
 十四六五<sup>7</sup> ますが、おおよそのけんとうは、わかる  
 十四六五<sup>8</sup> きには、いろいろのうすができます。こ  
 十四六五<sup>10</sup> のです。せんこうのけむりでもなんでも  
 十四六五<sup>11</sup> なんでも、けむりの出るところからいく  
 十四六五<sup>12</sup> ところからいくらかの高さまでは、まっす  
 十四六六<sup>2</sup> らして、いくつものうすになり、それが  
 十四六六<sup>5</sup> まいます。茶わんの湯げなどのばあいだ  
 十四六六<sup>5</sup> 茶わんの湯げなどのばあいだ、もう、  
 十四六六<sup>6</sup> と、もう、茶わんのすぐ上から大きなう  
 十四六六<sup>11</sup> と大きなのが、庭の上などにできること  
 十四六六<sup>11</sup> ます。春さきなどの、ぼかばかあたたか  
 十四六七<sup>1</sup> 雨でも降って、土のしめつてるところ  
 十四六七<sup>1</sup> えんの下やかきねのすきまから、つめた  
 十四六七<sup>4</sup> ちようどたつまきのようなものになつて  
 十四六七<sup>7</sup> ルもある、高い柱の形になり、たいへん  
 十四六七<sup>8</sup> でしょう。茶わんの上や、庭さきでおこ  
 十四六七<sup>10</sup> さきでおこるうすのようなもので、もつ  
 十四六七<sup>10</sup> 。それは、らい雨のときに、空中におこ  
 十四六七<sup>11</sup> なうずです。陸地の上のどこかの一地方  
 十四六七<sup>12</sup> ずです。陸地の上のどこかの一地方が、  
 十四六七<sup>12</sup> 陸地の上のどこかの一地方が、日光のた  
 十四六八<sup>1</sup> の一地方が、日光のために、特別にあた  
 十四六八<sup>2</sup> す。そういう地方のまわりに、わりあい  
 十四六八<sup>7</sup> 。これは、茶わんのばあいにくらべると  
 十四六八<sup>8</sup> と大きくて、うすの高さも、四キロとか

十四六八 十一 よつては、茶わんの湯と、こうしたら  
 十四六八 十二 、こうしたら雨のばあいとは、よほど  
 十四六九 一 もっとも、らい雨のできたは、いまい  
 十四六九 二 く、だいぶようすのちがつたのもありま  
 十四六九 三 もみんな、茶わんの湯にくらべるのはむ  
 十四六九 四 は、まったく関係のないようなことがら  
 十四六九 五 ことがらが、原理のうえからは、おたが  
 十四六九 六 であるという一つの例に、らい雨をあけ  
 十四六九 七 みたのです。湯げのお話は、このくらいに  
 十四六九 八 て、こんどは、湯のほうを見ることにし  
 十四六九 九 光をあて、茶わんのそこをよく見てごら  
 十四七〇 一 、不規則なようなようになって、ゆる  
 十四七〇 二 これは、夜、電燈の光をあてて見ると、  
 十四七〇 三 えます。夕ごはんのおぜんの上でもやれ  
 十四七〇 四 夕ごはんのおぜんの上でもやれますから  
 十四七〇 五 。つぎに、茶わんのお湯がだんだんにひ  
 十四七〇 六 にひえるのは、湯の表面の茶わんのまわ  
 十四七〇 七 るのは、湯の表面の茶わんのまわりから  
 十四七〇 八 湯の表面の茶わんのまわりから、熱がに  
 十四七〇 九 、おもに、まわりの茶わんにふれた部分  
 十四七〇 十 えて重くなり、下の方へ流れて、そのこ  
 十四七〇 十一 方へ流れて、その方へ向かって動きま  
 十四七〇 十二 の反対に、茶わんのまん中の方では、ぎ  
 十四七〇 十三 、茶わんのまん中の方では、ぎやくに上  
 十四七〇 十四 では、ぎやくに上の方へのぼって、表面  
 十四七〇 十五 ります。よく理科の本などにある、ビー  
 十四七〇 十六 がある、ビーカーのそこをアルコールラ  
 十四七〇 十七 ンプで熱したときの水の流れと、同じよ  
 十四七〇 十八 で熱したときの水の流れと、同じような  
 十四七〇 十九 です。これは、湯の中にうかんでいる小  
 十四七〇 二十 小さな糸くずなどの動くのを見ていても  
 十四七〇 二十一 。しかし、茶わんの湯を、ふたをしない

十四七二 一 おり、そのまわりの、わりあいに熱い表  
 十四七二 二 りあいに熱い表面の水が、そのあとへ向  
 十四七二 三 それが、おりた水のあとへどくじぶん  
 十四七二 四 なふうにして、湯の表面には、水のおり  
 十四七二 五 湯の表面には、水のおりているところと  
 十四七二 六 。したがって、湯の、中までも熱いとこ  
 十四七二 七 つめたいところとのさかいで、光が曲が  
 十四七二 八 になつて、茶わんのそこを照らします。  
 十四七二 九 見えるのです。日のあたっているかべや  
 十四七三 一 のときできる氣流のむら、光をおり曲  
 十四七三 二 には、熱い茶わんの湯の表面を、日光に  
 十四七三 三 、熱い茶わんの湯の表面を、日光にすか  
 十四七三 四 かけて見ると、湯のおもてに、にじの色  
 十四七三 五 のおもてに、にじの色のついた、きりの  
 十四七三 六 色のおもてに、にじの色のついた、きりの  
 十四七三 七 色のついた、きりのようなものがひと皮  
 十四七三 八 、ちょうどさけめのようにたて横にやぶ  
 十四七三 九 かし、それも、前の温度のむらとなにか  
 十四七三 十 それも、前の温度のむらとなにか関係が  
 十四七三 十一 熱さをつめたさとのむらが、どうなるか  
 十四七三 十二 は、ただ、茶わんのときだけの問題では  
 十四七三 十三 茶わんのときだけの問題ではなく、たと  
 十四七三 十四 たえば、湖や海の水が、冬になって、  
 十四七三 十五 となると、いろいろの実用上の問題とえん  
 十四七三 十六 いろいろの実用上の問題とえんがつなが  
 十四七三 十七 ってきます。地面の空氣が、日光のため  
 十四七三 十八 面の空氣が、日光のためにあたためられ  
 十四七三 十九 られてできるときは、飛行家にと  
 十四七三 二十 とえば、森と畑とのさかいのようなどこ  
 十四七三 二十一 森と畑とのさかいのようなどこですと  
 十四七三 二十二 ところですと、畑のほうが、森よりも、  
 十四七三 二十三 、森よりも、日光のためによけいあたた

十四七五 一 ます。それで、畑の上からとんできて、  
 十四七五 二 らとんできて、森の上へかかると、飛行  
 十四七五 三 機は、しぜんと下の方へおしおろされる  
 十四七五 四 と同じような氣流のじゅんかんが、もつ  
 十四七五 五 けに、陸地と海との間に行われておりま  
 十四七五 六 ところでは、反対の風がふいています。  
 十四七五 七 とが、山腹と谷との間にあつて、山谷風  
 十四七五 八 ア大陸と太平洋との間におこると、それ  
 十四七五 九 冬期に受ける北西の風と、夏季の南が北  
 十四七五 十 北西の風と、夏季の南が北西の風になる  
 十四七五 十一 のです。茶わんの湯のお話は、すれば  
 十四七五 十二 です。茶わんの湯のお話は、すればまだ  
 十四七五 十三 るときには、もとのほうから割るがよい  
 十四七五 十四 るときには、もとのほうから割るがよい  
 十四七五 十五 とを割るとき、もとのほうから割るがよい  
 十四七五 十六 、とちゅうから横の方へそれてしまつて  
 十四七五 十七 かつたのに、うらのほう、いいかえると  
 十四七五 十八 いいかえると、竹の先のほうから割つて  
 十四七五 十九 かえると、竹の先のほうから割つてみる  
 十四七五 二十 、おけ屋さんなどのやっているところを  
 十四七五 二十一 と、はじめ、うらのほうをかく四つに  
 十四七五 二十二 、あとは、十文字の小さな木ぎれをはさ  
 十四七五 二十三 っていました。木のほうは、これと反対  
 十四七五 二十四 れと反対に、もとのほうを上にして、上  
 十四七五 二十五 だ、困るのは、木のばあいには、どっち  
 十四七五 二十六 が四」という算数の九九と、にたような  
 十四七五 二十七 または、自分たちの祖先が発見したので  
 十四七五 二十八 のではなく、よその民族から教えられて  
 十四七五 二十九 果、とうとう一つの眞理だと思われたの  
 十四七五 三十 、そのことをほかの人々に伝えるうちに  
 十四七五 三十一 うな、短くて調子のいい、氣のきいたも  
 十四七五 三十二 て調子のいい、氣のきいたものになった

十四 81 1 ぶはちとらず。石の上にも三年。一事が  
 十四 81 7 文 ころばぬさきのつえ。さるも木から  
 十四 81 12 文 すきこそものじようずなれ。たま  
 十四 82 4 と暗し。どんぐりのせいくらべ。なくて  
 十四 82 10 はえぬ。三つ子のたましい百まで。世  
 十四 82 11 文 三、三日見ぬまのさくらかな。九  
 十四 83 2 九 雪の映画 雪の映画を二つ見た。一  
 十四 83 4 「雪國」は、北國の人たちが雪と戦って  
 十四 83 6 るようす、深い雪の中で生活している人  
 十四 83 7 している人々、春の光がさしそめて、雪  
 十四 83 8 うに見えている雪國の子どもなど、時間的  
 十四 83 10 「というの、雪の景色を写したもので  
 十四 83 10 ものではなく、雪の一ひらをとりえて映  
 十四 84 1 ある。ただ一ひらの雪ではあるが、よく  
 十四 84 3 も、一ひら一ひらの雪が、それぞれが  
 十四 84 6 また、どうして雪のけっしょうができる  
 十四 84 8 うになるか、空中の温度の変化、風の関  
 十四 84 8 るか、空中の温度の変化、風の関係、水  
 十四 84 8 の温度の変化、風の関係、水蒸気の量、  
 十四 84 8 風の関係、水蒸気の量、高度など、さま  
 十四 84 9 条件によって、雪のけっしょうがちがう  
 十四 84 12 から降ってきた雪の一ひらを受けとって  
 十四 85 4 文 「雪は、空からのお手紙です。」こん  
 十四 85 6 てくれた。一ひらの雪によって、はるか  
 十四 85 6 はるかに高い天空のようすが、こまごま  
 十四 85 7 、たしかに空からの手紙にちがいない。  
 十四 85 8 文 ない。「空からのお手紙」とは、うま  
 十四 85 9 このように、二つの映画は、どちらも雪  
 十四 85 9 どちらも雪にえんのあるものであるが、  
 十四 85 10 あるが、私はあとのほうの映画に心をひ  
 十四 85 10 、私はあとのほうの映画に心をひかれた  
 十四 85 11 んに降ってくる雪の中から、一ひらの雪

十四 85 11 の中から、一ひらの雪をとらえて、それ  
 十四 86 2 ではない。野原の中で、一本の草花を  
 十四 86 2 野原の中で、一本の草花を見いだして、  
 十四 86 3 するの、一びきのこん虫をながねんか  
 十四 86 4 ろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ  
 十四 86 5 よむのも、同じ心の現われであらう。「  
 十四 86 6 あらう。「雪國」の映画も、けっしてわ  
 十四 86 9 風にあおられた雪のむれが、道を消し、  
 十四 86 12 まいが、ばんそうの音楽や、場面の組み  
 十四 86 12 うの音楽や、場面の組みあわせと説明の  
 十四 86 12 組みあわせと説明のことばなどによって  
 十四 87 4 うである。ふぶきのやんだあとの、雪の  
 十四 87 4 ぶきのやんだあとの、雪の野原の表情を  
 十四 87 4 やんだあとの、雪の野原の表情をあつか  
 十四 87 5 あとの、雪の野原の表情をあつかって  
 十四 87 6 ろいと思う。一面の銀世界となった廣  
 十四 87 7 廣い野原を、第一の人が歩いて行く。そ  
 十四 87 8 いて行く。その人の足あとをしるべに、  
 十四 87 8 をしるべに、第二の人が歩いて行く。や  
 十四 87 9 行く。やがて第三の人も通り、第四、第  
 十四 87 10 通り、第四、第五の人も、同じ足あとを  
 十四 87 11 野を横ぎる一すじの道となる。その一す  
 十四 88 1 なる。その一すじの道をながめると、一  
 十四 88 2 であるが、いつのまにか曲がってしま  
 十四 88 4 か。それとも、心の中で考えごとをして  
 十四 88 6 いても、春さきの雪どけごろである。  
 十四 88 10 見えはじめたときの喜びは、たとえよう  
 十四 89 1 ちは、この黒い土の上に集まって、足で  
 十四 89 2 り、しゃがんで土のおいをかいたり、  
 十四 89 3 場面を、映画独特の手法によって、おも  
 十四 89 5 だろうか。同じ題の作文でも、それと  
 十四 89 7 文章でも、読む人の心がひかれるのは、  
 十四 89 9

十四 90 5 小さなマッチ賣りの女の子は、町をあら  
 十四 90 5 なマッチ賣りの女の子は、町をあらち  
 十四 90 7 ながら思った。女の子は、つめたい屋根  
 十四 90 7 つめたい屋根うらのへやを出たときは、  
 十四 90 7 の上ぐつは、母親のものだったので、こ  
 十四 90 8 大きすぎた。二台の荷馬車が来たので、  
 十四 90 9 かった。もう一つのほうは、どこかの男  
 十四 91 3 のほうは、どこかの男の子がひろって行  
 十四 91 4 うは、どこかの男の子がひろって行っ  
 十四 91 5 しまった。その男の子は、これは人形の  
 十四 91 6 子は、これは人形のゆりかごにはもって  
 十四 91 8 。そこで、その女の子は、まったくはだ  
 十四 91 10 。だから、その足のつめたいこととい  
 十四 91 11 らなかった。自分の足だか、ひとの足だ  
 十四 91 12 分の足だか、ひとの足だか、わからない  
 十四 92 3 いた。おおみそかの晩だというのに、そ  
 十四 92 6 て、その屋根うらの家へ帰ることもでき  
 十四 93 1 いていた。その子のきれいなかみの毛は  
 十四 93 2 しげな、小さな顔のまわりを、花かんむ  
 十四 93 2 りを、花かんむりのようにくまどった。  
 十四 93 3 小さなマッチ賣りのむすめは、自分のま  
 十四 93 4 のむすめは、自分のまき毛のことも、雪  
 十四 93 4 は、自分のまき毛のことも、雪のことも  
 十四 93 4 き毛のことも、雪のことも考えなかった  
 十四 93 4 かった。美しく火のともった家々の前を  
 十四 93 4 火のともった家々の前を、そろそろとか  
 十四 93 5 小さなマッチ賣りのむすめの考えたこと  
 十四 93 6 ツチ賣りのむすめの考えたことはそれで  
 十四 93 6 それであった。女の子は、窓々をおし  
 十四 93 7 がやくともしびの光を見た。おいしそ  
 十四 93 10 だひと目でも、火の光とごちそうを見  
 十四 93 11 したのであらう。女の子は、手にマッチの



十四 93 11 子は、手にマッチの小さなたばを一つ持  
十四 93 12 ていた。ぼろぼろの前だれの中には、も  
十四 93 12 ぼろぼろの前だれの中には、もつとたく  
十四 93 12 はいっていった。女の子は、どんなにか、  
十四 94 3 たことだろう。女の子は、二つの家の間  
十四 94 3 。女の子は、二つの家の間に、ちよつと  
十四 94 3 の子は、二つの家の間に、ちよつとした  
十四 94 3 すわりこんだ。女の子は、両足を――そ  
十四 94 6 ろえて、ぼろぼろの着物の下で重ねて、  
十四 94 8 、ぼろぼろの着物の下で重ねて、どうか  
十四 94 11 めるために、一本のマッチで――ほんの  
十四 94 11 ほんのたつた一本のマッチで、火をとも  
十四 95 1 によかうか。女の子は一本のマッチを  
十四 95 1 か。女の子は一本のマッチをとりだした  
十四 95 3 がやきだした。女の子は、その上へ、小  
十四 95 6 かる大きなほのおのように思われた。こ  
十四 95 6 た。これは、魔法のマッチだろうかとかさ  
十四 95 9 いる間、大きなほのおにすわっていた。  
十四 95 10 っていた。そのほのおの中には、美しい火が  
十四 96 1 小さなマッチ賣りのむすめを喜びむかえ  
十四 96 2 どりあがった。女の子は、小さな、つめ  
十四 96 2 、かがやくほのおの方へぼした。と思  
十四 96 4 ってしまった。女の子は、手にもえつく  
十四 96 5 すわっていた。女の子は、またそうしな  
十四 96 6 なって、もう一本のマッチをとってかべ  
十四 96 6 とだろう。その火の光のさすところは、  
十四 96 9 ろう。その火の光のさすところは、かべ  
十四 96 9 ろは、かべがきぬのうすくくなって  
十四 96 10 くなって、その女の子は、中のへやをす  
十四 96 10 その女の子は、中のへやをすっかり見と  
十四 96 12 ことができた。雪のようにまっ白なぬの  
十四 97 1 それこそほんとうのまるやきの鳥が、ほ

十四 97 2 んとうのまるやきの鳥が、ほかほかとあ  
十四 97 2 たてて、テーブルの一方におかれてあつ  
十四 97 6 とびおきて、ゆかの上をよたよた歩いて  
十四 97 6 た歩いて、その女の子の方へずつとよつ  
十四 97 6 いて、その女の子の方へずつとよつてく  
十四 97 8 してしまつて、女の子のそばには、あつ  
十四 97 8 しまつて、女の子のそばには、あつい、  
十四 97 8 ていなかった。女の子は、もう一本の、  
十四 97 10 の子は、もう一本の、第三番めのマッチ  
十四 97 10 一本の、第三番めのマッチをすった。ほ  
十四 97 10 て、こんどは、女の子は、一本のクリス  
十四 97 11 、女の子は、一本のクリスマスの木の下  
十四 97 12 一本のクリスマスの木の下にすわってい  
十四 97 12 のクリスマスの木の下にすわっていた。  
十四 98 2 ていた。たくさん小さなろうそくが、  
十四 98 2 うそくが、みどりの枝の間からかがやい  
十四 98 3 くが、みどりの枝の間からかがやいて、  
十四 98 3 か、ちかちかと女の子の上を照らし、い  
十四 98 4 ちかちかと女の子の上を照らし、いく百  
十四 98 4 照らし、いく百もの小さな人形が見おろ  
十四 98 5 して、マッチ賣りのむすめを見てわらい  
十四 98 7 わらいかけた。女の子は、人形の方へ両  
十四 98 7 。女の子は、人形の方へ両手をさしのべ  
十四 98 7 り、そのたくさんるろうそくはもえ続け  
十四 98 9 へのぼつて、大空の星のようにかがやく  
十四 98 10 ぼつて、大空の星のようにかがやくのを  
十四 98 10 った。「略。」女の子はねむそうにつぶ  
十四 99 1 いるうちに、一つの明かるい星が落ちる  
十四 99 2 を横ぎって長い光のおをひいた。「略」  
十四 99 3 にかが、神さまのところへ行くのだ。  
十四 99 4 。「略。」と、女の子は思った。この子  
十四 99 5 って、ただひとりとしんせつな人であつ

十四 99 6 おばあさんが、星の落ちるときは、なに  
十四 99 6 るときは、なにかのたましいが神さまの  
十四 99 6 たましいが神さまのところへのぼつてい  
十四 99 6 ことがあつた。女の子は、またもう一本  
十四 99 9 は、またもう一本のマッチを、そばのた  
十四 99 9 のマッチを、そばのたばの中からひきだ  
十四 99 10 ちを、そばのたばの中からひきだした。  
十四 99 10 した。そのマッチの火の中で、もうとつ  
十四 99 11 。そのマッチの火の中で、もうとつとく  
十四 99 11 にわかれて神さまのおそばへ行つたおば  
十四 99 12 あさんは、いつものように、やさしく、  
十四 100 1 ちゃん、わたしのおばあちゃん。もう  
十四 100 4 。「略。」と、女の子は、声をあげた。  
十四 100 5 で、急いで、たばの中にあつたマッチを  
十四 100 6 。「略。」と、女の子はいっしょうけん  
十四 101 6 おばあさんは、女の子をうでにかかえて  
十四 101 6 、楽しそうに、上の方へ、地面から高く  
十四 101 10 だもない國へ、上の方へ、神さまのお  
十四 101 12 の方へと、神さまのおそばへ行くかのよ  
十四 102 1 のおそばへ行くかのようにのぼつて行つ  
十四 102 2 行つた。小雪の降つた元日の朝、人  
十四 102 2 小雪の降つた元日の朝、人々が、マッチ  
十四 102 2 々が、マッチ賣りのむすめの、ひえきつ  
十四 102 2 ツツ賣りのむすめの、ひえきつた小さな  
十四 102 5 った。人々は、女の子がおおみそかの晩  
十四 102 5 の子がおおみそかの晩に見たふしぎなま  
十四 102 6 に幸福に、神さまの樂園の中で、元日を  
十四 102 7 に、神さまの樂園の中で、元日をむかえ  
十五 5 3 文 とも、声の行くえの見えんや  
十五 5 3 文 声の行くえの見えんやは。遠く  
十五 5 4 文 ののちかしの木に、矢はまだお  
十五 5 4 文 まりぬ。歌のもと末ふたたびも、

十五57文 たびも、友の心にあらわれぬ。  
 十五65文 六つほどの子がおよくゆえ水わ  
 十五71文 水わかな 冬の水一枝の影もあざむ  
 十五71文 冬の水一枝の影もあざむかず う  
 十五72文 かにのおのの大きな耳をむけぬ  
 十五73文 みてききりの中鉄のひびきのかじ  
 十五73文 てききりの中鉄のひびきのかじ屋の火  
 十五73文 の中鉄のひびきのかじ屋の火 息白し  
 十五73文 ひびきのかじ屋の火 息白しいつまで  
 十五75文 や火のご豊かの汽車けむり 影絵め  
 十五84文 ずだまりて人の足大きくする き  
 十五85文 れ口そそぐ朝のそここの小流れ  
 十五85文 朝のそここの小流れ 水はしずか  
 十五91文 ると見ればもの花 こどもら手をつ  
 十五92文 いだ中を日ぐれのうまが通る はまの  
 十五93文 が通る はまの子ら火をたく青き月  
 十五94文 り うまよ人間のかさから耳をだして  
 十五95文 りすてある道のまんじゆしやげさき  
 十五97文 と子ども 日の第一線が燈台の高き  
 十五97文 第一線が燈台の高きに れんげつみ  
 十五101文 て子といる母の黒いこうもり 月が  
 十五102文 り 月が出る山の家にうしをつないだ  
 十五104文 にしたる板のかたわらにふるばち  
 十五106文 く いけがきのすぎの木ひくみとな  
 十五106文 けがきのすぎの木ひくみとなり家の  
 十五106文 くみとなり家の庭の植え木の青めふ  
 十五106文 となり家の庭の植え木の青めふく見  
 十五106文 の庭の植え木の青めふく見ゆ ばら  
 十五108文 く見ゆ ばらの木の赤きめをふくか  
 十五108文 ゆ ばらの木の赤きめをふくかきの  
 十五108文 めをふくかきの上に小さき虫の出で  
 十五108文 上に小さき虫の出でとぶ見ゆ 人

十五112文 とぶ見ゆ 人の家にさえずるすずめ  
 十五112文 ずめガラス戸の外に來て鳴け病む人  
 十五112文 て鳴け病む人のために わか草のは  
 十五114文 めに わか草のはつかにもゆる庭に  
 十五116文 ぬ ガラス戸の外にかいおく鳥の影  
 十五116文 にかいおく鳥の影のガラス戸すきて  
 十五116文 いかいおく鳥の影のガラス戸すきた  
 十五121文 あげガラス戸のものをればよき  
 十五121文 り ガラス戸の外にすえたる鳥かご  
 十五123文 えたる鳥かごのブリキの屋根に月う  
 十五123文 かごのブリキの屋根に月うつる見ゆ  
 十五125文 ゆ ガラス戸の外は月あかし森の上  
 十五125文 は月あかし森の上に白雲長くたなび  
 十五126文 ゆ ガラス戸の外につくよをながむ  
 十五126文 ガラス戸の外につくよをながむれど  
 十五126文 むれどランプの影のうつりて見え  
 十五126文 どランプの影のうつりて見え 紙  
 十五126文 えばガラス戸の外につくよの明らけ  
 十五128文 ガラス戸の外につくよの明らけく見  
 十五128文 の外につくよの明らけく見ゆ あさ  
 十五131文 ゆ あさき夜の月影清み森をなす  
 十五131文 森をなすすぎのこぬれの高きひくき  
 十五131文 すぎのこぬれの高きひくき見ゆ 夜  
 十五133文 くき見ゆ 夜のどこにねながら見ゆ  
 十五133文 ゆるガラス戸の外明らかに月ふけわ  
 十五133文 たる 照る月の位置かわりけん鳥か  
 十五135文 りけん鳥かごの屋根にうつりし影な  
 十五135文 なるべにばらのひと花思わぬをゆら  
 十五142文 く見ればばらの木にばらがまっかに  
 十五144文 大きなばらの花照りかえる ただ  
 十五151文 これかりそめのばらの花おどろきて  
 十五153文 りそめのばらの花おどろきて見れば

十五155文 にあかきばらの花いよに重くかた  
 十五157文 ともなきばらの花ふとのはずみにく  
 十五157文 ばらの花ふとのはずみにくずれたり  
 十五179文 し。きみたちのそのまともなるひと  
 十五183文 し。きみたちのそのやわらかきたな  
 十五192文 た話 ヨーロッパのアルプスの山々のう  
 十五192文 ロッパのアルプスの山々のうち、もつと  
 十五192文 のアルプスの山々のうち、もつとも高い  
 十五192文 、もつとも高い山の一つに、ユングフラ  
 十五193文 あります。スイスの首府のベルンの町か  
 十五193文 す。スイスの首府のベルンの町からなが  
 十五194文 スの首府のベルンの町からながめると、  
 十五196文 このユングフラウの山です。これは、富  
 十五197文 十メートルばかりの高さがありますが、  
 十五198文 だきまで高山植物のさきみだれているけ  
 十五199文 いは、氷河が無言の流れをさきみだ  
 十五199文 ている深い深い谷の上を、登山電車がわ  
 十五201文 す。その登山電車のとちゅうにはいくつ  
 十五201文 ゆうにはいくつかの停車場があつて、そ  
 十五202文 、そこには、氣持のいい、小さなホテル  
 十五202文 ています。ある夏のことでした。このユ  
 十五204文 このユングフラウの山中のホテルに、ア  
 十五204文 ングフラウの山中のホテルに、アメリカ  
 十五205文 ルに、アメリカ人の一家族が來て、しば  
 十五206文 たり、ひとり男の子で八つ、ひとり女  
 十五206文 八つ、ひとり女の子で四つになるかわ  
 十五208文 せわする、ひとりの女が家庭教師がつい  
 十五208文 する、ひとりの女が家庭教師がついて  
 十五209文 いていました。朝の十時と午後の三時ご  
 十五209文 。朝の十時と午後の三時ごろと、日に二  
 十五209文 づつ、このふたりの子どもたちは、両親  
 十五211文 た。ニューヨークの大会で育てられた

十五 20 12 、このヨーロッパの高い山の中の生活は  
 十五 20 12 ーロッパの高い山の中の生活は、見るも  
 十五 20 12 ッパの高い山の中の生活は、見るもの聞  
 十五 21 2 のでした。朝ぎりの中から、白い雲のわ  
 十五 21 2 の中から、白い雲のわきたつように、す  
 十五 21 3 るまっ白なひつじのむれ、朝風にひびく  
 十五 21 3 朝風にひびくすずの音、日光にかがやく  
 十五 21 4 かがやく高山植物のかおり、その上に、  
 十五 21 4 な服をつけた少女の立っているようなけ  
 十五 21 5 さきがかつた大空の下に、わらうように  
 十五 21 7 、このアメリカ人の家族は、いつものよ  
 十五 21 7 の家族は、いつものように散歩に出まし  
 十五 21 8 出ました。ふたりの子どもは家庭教師に  
 十五 21 9 つみながら、がけの上をそろそろと歩い  
 十五 21 10 いていました。男の子は、小石を見つ  
 十五 21 10 見つけては深い谷の中へなげこんで、そ  
 十五 21 11 トと音をたてて下の方まで落ちていくの  
 十五 21 12 見ていました。女の子は、あぶない足ど  
 十五 21 12 ない足どりで、山の上の方に、また下の  
 十五 21 12 足どりで、山の上の方に、また下の方に  
 十五 22 1 上の方に、また下の方にちらばっている  
 十五 22 2 ばっているひつじのむれを追いかけても  
 十五 22 2 、とかく家庭教師の手からはなれて行き  
 十五 22 3 、ふいに、みんなの頭の上が暗くなって  
 十五 22 5 いに、みんなの頭の上が暗くなって、な  
 十五 22 6 おどろいてその音の方へ顔を向けて見る  
 十五 22 10 ろげた大きな一わのやまわしが、サアッ  
 十五 22 12 き起して、みんなの上へ舞いおりて來ま  
 十五 23 2 たてて、みんな草の上へひれふすように  
 十五 23 3 と、いままで先生のそばにいた女の子の  
 十五 23 4 生のそばにいた女の子のすがたが見えま  
 十五 23 5 そばにいた女の子のすがたが見えません

十五 23 6 見ると、そのがけの下の方へゆつたりと  
 十五 23 6 と、そのがけの下の方へゆつたりとんで  
 十五 23 7 く大きなやまわしのつめにつかまれて、  
 十五 23 8 につかまれて、女の子はばたばたしてい  
 十五 23 10 れか、その大わしのせの上へ、がけの中  
 十五 23 11 、その大わしのせの上へ、がけの中ほど  
 十五 23 11 のせの上へ、がけの中ほどからとびつい  
 十五 23 12 うけんめいにわしのせにしがみついて、  
 十五 24 1 ついて、両足で鳥の腹をしめつけるよう  
 十五 24 2 になるひつじかいの少年です。このひつ  
 十五 24 3 つじかいのは、がけの中ほどのあき地に、  
 十五 24 3 は、がけの中ほどのあき地に、草のしげ  
 十五 24 3 どのあき地に、草のしげっている場所を  
 十五 24 5 いますと、急に目の前へ、大きなわしが  
 十五 24 5 きなわしがひとりの女の子をつかんで舞  
 十五 24 5 わしがひとりの女の子をつかんで舞いお  
 十五 24 6 れば、もうその女の子は、どこへ持って  
 十五 24 8 ひつじかいのは、身のあぶないこともわす  
 十五 24 8 すれて、思わず鳥のせにとびついたので  
 十五 24 9 ちがえば、千ひろの谷間へ、氷と雪の中  
 十五 24 10 の谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさま  
 十五 24 11 の少年は、大わしのせにとびつき、その  
 十五 24 12 つつて、両足で鳥の腹をしめつけ、上体  
 十五 25 1 体をびったりと鳥のせにつけて、右手で  
 十五 25 1 つけて、右手で鳥のつばさのつけねをつ  
 十五 25 1 右手で鳥のつばさのつけねをつかみ、左  
 十五 25 2 でつかんでいる女の子のからだの下へ落  
 十五 25 2 かんんでいる女の子のからだの下へ落ちな  
 十五 25 5 そうして、からだの重さで上からぎゅう  
 十五 25 7 つそうはげしく鳥の腹をしめつけました  
 十五 25 9 すると、さすがの大わしも、十五六の  
 十五 25 9 大わしも、十五六の少年に上からおされ

十五 25 12 だいしだいに、下の方へ落ちるように舞  
 十五 26 3 ちゅうで、高い木の上へでもとまろうも  
 十五 26 3 す。少年はいつ鳥のせからふり落されな  
 十五 26 4 一こも早く谷底の地面へおりてしまわ  
 十五 26 5 きなくちばしで女の子の頭でもつづけば  
 十五 26 6 くちばしで女の子の頭でもつづけば、大  
 十五 26 6 ある。そんなことのないうちに、どこで  
 十五 26 7 発動機にこしようのできた飛行機乗りが  
 十五 26 10 んだり、とくに下の方にいる女の子を元  
 十五 26 12 に下の方にいる女の子を元気づけるため  
 十五 27 3 つかまれている女の子は、あきらめたの  
 十五 27 3 ことがまた、少年の氣にかかつてきまし  
 十五 27 8 た。とにかく、朝の冷たい空氣の中を、  
 十五 27 8 、朝の冷たい空氣の中を、アルプスの深  
 十五 27 8 の中を、アルプスの深い谷の中を、大わ  
 十五 27 8 アルプスの深い谷の中を、大わしは、少  
 十五 27 10 した。もう、がけの上で「へ略。」とい  
 十五 27 11 といっている人々の目には、小さな小さ  
 十五 27 12 な黒い点かなにかのようにしか見えなく  
 十五 28 3 ように、ある岩角のすこしあき地のある  
 十五 28 3 角のすこしあき地のあるところを目がけ  
 十五 28 7 たので、左手は女の子の上帯にかけたま  
 十五 28 7 で、左手は女の子の上帯にかけたまま  
 十五 28 8 て、手早く、自分のこしにさしていた短  
 十五 28 11 さないうちに、鳥のせ骨をさけて一つき  
 十五 29 2 ると、鳥は、不意のしゅうげきにおどろ  
 十五 29 3 、つかんでいた女の子をはなして、あお  
 十五 29 4 した。いま、少年の左手には女の子が、  
 十五 29 4 少年の左手には女の子が、右手には血に  
 十五 29 6 す。少年は、必死のかくごで、すばやく  
 十五 29 6 ごで、すばやく女の子を自分のせなかに  
 十五 29 6 やく女の子を自分のせなかにかくしまし

十五 29 8 とび起きて、きずのいたみもかまわず、  
 十五 29 10 た。両方とも必死の戦いです。少年は、  
 十五 29 10 かざし、左手で女の子をかばい、昔の物  
 十五 29 11 の子をかばい、昔の物語に出てくる英  
 十五 29 11 に出てくる英ゆうのように、このたけだ  
 十五 30 1 しは、太いけずめの最初の一げきで少年  
 十五 30 1 太いけずめの最初の一げきで少年の頭を  
 十五 30 1 初の一げきで少年の頭をくだこうと、向  
 十五 30 3 すと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに  
 十五 30 3 、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあび  
 十五 30 4 びせました。わしの白い下羽が、綿のよ  
 十五 30 4 の白い下羽が、綿のように一面にちりま  
 十五 30 6 ようにして、少年の周囲をおおい包むい  
 十五 30 9 まです。少年が女の子を後にかばうよう  
 十五 30 11 ごろなとがった岩のかげらが目にはいり  
 十五 30 12 取るが早いか、目の前二メートルほどま  
 十五 31 1 て来たこのあくまの胸をめがけて、全身  
 十五 31 1 をめがけて、全身の力をこめて投げつけ  
 十五 31 2 けました。ねらいのはずれようはずはあ  
 十五 31 6 の勇ましい少年との戦いです。少年の投  
 十五 31 6 の戦いです。少年の投げつける石は、鳥  
 十五 31 6 げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目  
 十五 31 10 をゆるめると、鳥のくちばしでつき殺さ  
 十五 31 11 。まわりには、鳥の白い羽が雪のように  
 十五 31 11 、鳥の白い羽が雪のようにとびちまし  
 十五 31 12 た。その中で、女の子を後にかばいなが  
 十五 32 2 。そのとき、がけの中ほどから、ガヤガ  
 十五 32 3 てきました。少女の両親たちが、そのへ  
 十五 32 5 、この鳥と少年との戦っている岩角近く  
 十五 32 6 まなこになって目の前のできを相手にし  
 十五 32 7 こになって目の前のできを相手にしてい  
 十五 32 8 へ。」という鉄ぼうの音がしたかと思うと

十五 32 10 る舞いをして、下の方へ、谷の中へ落ち  
 十五 32 10 て、下の方へ、谷の中へ落ちて行きました  
 十五 32 12 つくと、もう自分のまわりには、おおよ  
 十五 32 12 りには、おおよのひつじかいが集まっ  
 十五 33 1 て来ており、父親のうでにだかれた女の  
 十五 33 2 うでにだかれた女の子は、にこにこわら  
 十五 33 3 なくて、この自分のすくい主へ手をさし  
 十五 33 5 ました。そのときの少年の喜び、そのと  
 十五 33 5 。そのときの少年の喜び、そのときの女  
 十五 33 5 の喜び、そのときの女の子の両親の喜び  
 十五 33 5 び、そのときの女の子の両親の喜び、お  
 十五 33 5 そのときの女の子の両親の喜び、おおよ  
 十五 33 6 きの女の子の両親の喜び、おおよの女  
 十五 33 6 の喜び、おおよの女たちのほめことば  
 十五 33 6 おおよの女たちのほめことば、それは  
 十五 33 8 もありません。目の前の美しい、大きな  
 十五 33 8 りません。目の前の美しい、大きなエン  
 十五 33 8 きなエングフラウのまっ白な山までも、  
 十五 33 9 な山までも、朝日の中のこの勇ましい少  
 十五 33 9 までも、朝日の中のこの勇ましい少年を  
 十五 33 9 私たちは、自分の考えを表わすのに、  
 十五 34 3 、またほかに特別の表わしかたをしなけ  
 十五 34 6 。これは、記おくのためにも必要な方法  
 十五 34 7 結びかたや、なわの色や、なわの太さな  
 十五 34 8 なわの色や、なわの太さなどによって、  
 十五 34 9 わした。また、木の皮や、あさなわなど  
 十五 35 1 ひももつかい、色のちがった貝や、じゅ  
 十五 35 1 行われた。これらの表わしかたとともに  
 十五 35 5 たとともに、事物の形を絵にうつすこと  
 十五 35 5 行われた。この絵のだんだんやりくされ  
 十五 35 7 、文字というものの起りとなった。いま  
 十五 35 8 まえに、アフリカのエジプトには、そう  
 十五 35 9

十五 35 12 字も、もとは事物の形を表わした絵文字  
 十五 36 1 って、しだいに形のきまったものとなり  
 十五 36 1 ものとなり、今日のようになったといわ  
 十五 36 5 に、はじめ、事物の形をうつしたのか  
 十五 36 6 ものであるが、形のないものは、この方  
 十五 36 7 えば、数という形のないものを表わすの  
 十五 36 9 、「・」をその線のうえにおいたり、し  
 十五 36 10 「下」とかいう字の起りである。木は、  
 十五 37 4 ことにした。いまの「本」「末」とかい  
 十五 37 4 「など、その文字の左側に「木」を書い  
 十五 37 8 と、「木」に關係のあることを表わし、  
 十五 37 9 ことを表わし、字の右側に、「支・反」  
 十五 37 9 というようにもとの中國の発音にしたが  
 十五 38 1 ようにもとの中國の発音にしたがった読  
 十五 38 2 かって、その漢字の意味にあった日本語  
 十五 38 4 に、日本では一つの漢字をふたとおりに  
 十五 38 5 んできたが、中國の発音にもとづいた漢  
 十五 38 5 にもとづいた漢字の読みかたを「音」と  
 十五 38 6 音」といい、日本のことばによる読みか  
 十五 38 7 それで、たいていの漢字には、この音と  
 十五 38 7 には、この音と訓のふたとおりの性質の  
 十五 38 7 と訓のふたとおりの性質のちがった読み  
 十五 38 8 ふたとおりの性質のちがった読みかたが  
 十五 38 9 っては、いくつかの音のあるものがあり  
 十五 38 9 は、いくつかの音のあるものがあり、ま  
 十五 38 9 り、またいくつかの訓のあるものもある  
 十五 38 9 またいくつかの訓のあるものもある。た  
 十五 38 10 上・下・生」などの読みかたをちよつと  
 十五 39 6 。かたかなは漢字の一部分をとって作っ  
 十五 39 6 らがなはかたかなのように漢字の一部分  
 十五 39 8 かなのように漢字の一部分をとったので  
 十五 39 8 いうように、漢字の全体をくずしたのも

十五 39 11 かなは、日本の文化にとって、ほん  
 十五 40 1 発明で、このかなのおかげで、日本のこ  
 十五 40 1 のおかげで、日本のことばを、たやすく  
 十五 40 4 し、いまでは漢字の長所をいかして、か  
 十五 40 5 まぜるのが、文章のふつうの書き表わし  
 十五 40 5 が、文章のふつうの書き表わしかたとな  
 十五 40 10 リピンなど、世界の大半につかわれてい  
 十五 41 5 マに移って、現在のような形になった。  
 十五 41 8 る。この二十六字のローマ字を利用して  
 十五 41 8 を利用して、発音のちがっている多くの  
 十五 41 9 ちがっている多くの國々のことばが書き  
 十五 41 9 ている多くの國々のことばが書き表わさ  
 十五 41 10 されている。日本のことばも、ローマ字  
 十五 41 12 かりでなく、発音のこまかなところまで  
 十五 41 12 ができて、標準語の教育に役だつ。また  
 十五 42 1 ローマ字は世界的な文字であるから、日  
 十五 42 2 ら、日本語が世界の人人に親しまれるよ  
 十五 42 5 など、ひらがなの三種類の文字をつか  
 十五 42 5 らがなとの三種類の文字をつかっており  
 十五 42 6 のうえ、ローマ字の教育にも努力してい  
 十五 42 7 えてみると、世界のどこに、こんなに三  
 十五 42 8 三種類も四種類もの文字をつかっている  
 十五 42 8 があろうか。日本のことばをもっとも正  
 十五 43 3 はち まぶしい日の光をさけながら、銀  
 十五 43 3 座通りをアメリカの一しようにこうが歩い  
 十五 43 7 公園、ニューヨークのメトロポリタン博物  
 十五 43 8 公園「ポリタン博物館の——」とつぶやいた  
 十五 44 7 で話しかけた。店の主人はあわてて、「  
 十五 44 9 公園 焼物がおすきようですが、あなた  
 十五 44 12 公園 が、じつは、私のプリンクリーじいさ  
 十五 45 2 た。話は明治初年のころにさかのぼる。  
 十五 45 3 のぼる。徳川時代の長いしきたりが、明

十五 45 4 たので、それまでのものの考えかたや商  
 十五 45 4 、それまでのものの考えかたや商賣では  
 十五 45 5 商賣では、ふだんの生活さえむずかしく  
 十五 45 5 た。そこで、日本の手工業も、外國から  
 十五 45 6 つぎと近代的工業の道をたどっていくよ  
 十五 45 8 になった。ハギンスの祖父にあたるプリン  
 十五 45 9 頼まれて、鉄ぼうのうしかたを教えるた  
 十五 45 10 たのも、そのころのことであつた。ある  
 十五 46 4 に出でいた一まいの赤絵のはちを手にと  
 十五 46 4 いた一まいの赤絵のはちを手にとつて、  
 十五 46 9 公園 「。そのねだんのあまりに安いのにお  
 十五 47 1 公園 「略。」「九州の有田です。ときどき  
 十五 47 2 公園 ん作るのにてまのかかるもので。」ブ  
 十五 47 3 んぞくそうに赤絵のはちをながめながら  
 十五 47 4 めながら、その話のさきをうながした。  
 十五 47 4 をうながした。店の主人は、きかれるま  
 十五 47 7 三十年ばかりまえのことである。佐賀は  
 十五 47 8 焼といつて、自分の家であつたかう食器とか  
 十五 47 9 たが、そのお庭焼の中でも、「色なべし  
 十五 47 10 といわれる、色のはいたたものが、い  
 十五 47 11 いう。このお庭焼のために、細工人、画  
 十五 48 1 師、下ばたらきの者などが、三十数人  
 十五 48 4 み、この赤絵製作の方法が他にもれない  
 十五 48 5 になって、はん主の保護がなくなつたう  
 十五 48 8 は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残  
 十五 48 8 、白く焼けるはずのものが黒くなつたり  
 十五 48 10 ねていった。職人のちんぎんや材料のお  
 十五 48 12 のちんぎんや材料のお金をはらうために  
 十五 48 12 はらうために、家の道具を賣らなければ  
 十五 49 3 がて、思いどおりのものを作ることので  
 十五 49 4 のものを作ることのできる日がきた。し  
 十五 50 4 公園 ましょう。ほかの外國人にも話してあ

十五 50 5 公園 う。どうか、私のことばを今右衛門さ  
 十五 50 9 公園 ても、この赤絵の技術を続けよう。」  
 十五 50 11 ンクリーは、日本の美しい焼物にひきつ  
 十五 51 1 についていろいろの研究を進め、日本の  
 十五 51 1 研究を進め、日本の歴史を書いたり、辞  
 十五 51 2 作つたり、日本人のための英語教科書の  
 十五 51 2 り、日本人のための英語教科書の編さん  
 十五 51 2 ための英語教科書の編さんまでしたりし  
 十五 51 3 といつても、日本の古い美術に対する愛  
 十五 51 5 高い大英百科辞典の東洋美術についての  
 十五 51 6 東洋美術についての説明は、プリンクリ  
 十五 51 6 は、プリンクリーのふでになつたもので  
 十五 51 8 公園 リンクリーさんのおまごさんでしたか  
 十五 51 9 公園 、私は今右衛門のまごにあたるもので  
 十五 51 10 略。」「と、自分のことをうちあけた。  
 十五 51 10 あけた。祖父たちの間に結ばれた心が、  
 十五 51 11 た心が、なん十年の月日をへだてて、い  
 十五 52 3 なわであつたころのことである。そのこ  
 十五 52 3 生としてアメリカのスタンフォード大学  
 十五 52 4 いた私は、一年半の努力の結果、しゅび  
 十五 52 5 は、一年半の努力の結果、しゅびよく書  
 十五 52 6 持つて、その出版の用事かたがた、東部  
 十五 52 6 、東部諸州へ見学の旅にのぼつた。眞心  
 十五 52 8 れに際して、各地の大学者たちへのてい  
 十五 52 9 地の大学者たちへのていねいなしような  
 十五 53 1 るいはミシガン湖のほとりにたえずみ、  
 十五 53 3 カネギー博物館のあるピッツバーグに  
 十五 53 4 たのは、暑い眞夏の日の朝であつた。目  
 十五 53 4 は、暑い眞夏の日の朝であつた。目ざす  
 十五 53 6 おくまつた館長室の前に立つた私は、し  
 十五 53 10 室内にはいった私の目に映じたのは、廣  
 十五 53 10 たのは、廣いへやの窓ぎわに大きなデス

十五53 12 たせているしらがの老しん士のすがたで  
 十五53 12 しらがの老しん士のすがたであった。学  
 十五54 1 ちょうるいずふ」の著者ダブリュー・ジ  
 十五54 6 、「そのあい色のふうとうには見おぼ  
 十五54 8 きていている日本の学徒、大島くんでし  
 十五54 11 もな用事は、世界の学者がだれものぞん  
 十五54 12 カーネギー博物館の刊行物として自分の  
 十五54 12 刊行物として自分の論文を出版してもら  
 十五55 1 博士は、そのためのはずを早くからす  
 十五55 5 れとなく論文刊行のむずかしいことをに  
 十五55 5 た。そうしてつぎのように語った。「ま  
 十五55 7 まで、せっかくのおたずねもむだにな  
 十五55 9 生まれにくいころの日本の話をさせても  
 十五55 9 ないころの日本の話をさせてもらおう  
 十五55 10 たころは、西洋の文化をとり入れるこ  
 十五55 12 をたずねた外人の中で、富士山や磐梯  
 十五56 1 富士山や磐梯山のいたきをきわめた  
 十五56 3 たので、富士山の高さも不明であつた  
 十五56 4 た。そこで、山のいただきに立つた私  
 十五56 4 手をかざして足の下にひろがる駿河湾  
 十五56 5 ひろがる駿河湾の海岸線をながめ、そ  
 十五56 6 た高さは、実測の結果とわずかに十フイ  
 十五56 9 みえたあなたへのごちそうに、日本留  
 十五56 11 数えると数十年の昔になるが、私がま  
 十五56 12 てアマスト大学の助手をつとめていた  
 十五57 1 宿舎で二間続きの室をつかつていた。  
 十五57 1 ところがある日のこと、せんばいの教  
 十五57 2 こと、せんばいの教授がやって来て、  
 十五57 3 その一つに日本の青年をとまらせて、  
 十五57 4 、やぶからぼうの話をもちだした。も  
 十五57 5 しろいと、教授の申し出でをさっそく  
 十五57 6 じめて見る東洋の青年をひきとったが

十五57 7 、「大きなつくえのまん中にチョークで  
 十五57 10 たが、その日本の青年はなかなかの人  
 十五57 10 青年はなかなかの人物だったよ。その  
 十五57 11 いたが、ある日のこと、せい書をギリ  
 十五58 3 まり、私はかれのギリシア語の先生で  
 十五58 3 れのギリシア語の先生で、かれは私の  
 十五58 3 生で、かれは私の日本語の先生という  
 十五58 3 れは私の日本語の先生というわけだが  
 十五58 6 、ひとりそのときの思い出にふけてい  
 十五58 8 学に入學、北側の第八号室に入る。室  
 十五59 1 ぎって、「新島のおじさんなら、私は  
 十五59 5 略」と、一言のもとにしりぞけよう  
 十五59 6 の関係を物語る私の顔を、あなのあくほ  
 十五59 6 私顔を、あなのあくほど見つめてい  
 十五59 9 だ。それなら裏の写真やら、当時の日  
 十五59 9 写真やら、当時の日記やら、きみに見  
 十五59 9 同志社をわが子のように、だいに胸  
 十五60 3 みてていた新島のおじさんが、やまい  
 十五60 4 が、やまいを札幌のこう外に養っていた  
 十五60 4 のは、明治二十年の夏であつた。当時、  
 十五60 5 、母校札幌農学校の教師をしながら、恩  
 十五60 5 教師クランク博士の精神のやどっている  
 十五60 6 ラーク博士の精神のやどっている札幌独  
 十五60 6 かさどっていた私の父とは、心をゆるし  
 十五60 7 をゆるした間がらのこととて、両者のつ  
 十五60 7 のこととて、両者のつきあいはかなりひ  
 十五60 8 ときちようど四つのいたざかりであ  
 十五60 9 男に生まれて父母の愛を一身に集めてい  
 十五61 0 まっていた。新島のおじさんとおばさん  
 十五61 2 ら父に送った手紙のどれにも、「略」。  
 十五61 3 。そのころ、新島のおじさんがどんなに  
 十五61 6 かった私は、札幌の創成川の岸にあつた

十五61 7 は、札幌の創成川の岸にあつた家につれ  
 十五61 9 るまつた。ある日のこと、おじさんとお  
 十五61 9 とおばさんが外出の用意をととのえて、  
 十五62 2 出かけて、ふみ石の上にそろえてある大  
 十五62 2 えてある大小二つのくつをちらと見た私  
 十五62 9 声でうったえる私のくりごとを耳にした  
 十五62 11 た。「おじさんのくつは光っているの  
 十五62 11 るのに、ぼうやのくつはほこりだらけ  
 十五63 9 シをつかんで、力のかぎりみがきをかけ  
 十五63 11 うだ。おじさんのようにきれいになっ  
 十五64 2 なり、すぐ、小鳥のようにとびだした。  
 十五64 5 うちに、私は、道のまん中で、無言でつ  
 十五64 7 。やえ子、ぼくのステッキを持ってお  
 十五64 8 しゃがんで、自分のせをたたきながら、  
 十五64 11 り私は、おじさんの廣いせなかにとびつ  
 十五65 3 と命令した。暑さのきびしい夏の日、  
 十五65 3 暑さのきびしい夏の日、私をせにおい  
 十五65 3 ふき歩かれた新島のおじさんと、日がさ  
 十五65 4 らつしゃつた新島のおじさんとの思い出  
 十五65 5 新島のおじさんとの思い出は、いまでも私  
 十五65 5 い出は、いまでも私の胸にやきついている  
 十五65 5 。秋たけてりんごのみのころ、おじさ  
 十五65 7 いたといつて、車のついたみごとなおも  
 十五65 9 きまわすので、家の人のねむりをさまた  
 十五65 10 わすので、家の人のねむりをさまたげ  
 十五65 10 、たまりかねた家の書生が、これから車  
 十五65 11 生が、これから車のついたものは送って  
 十五65 12 るなど、くじょうの手紙を京都へ送った  
 十五66 1 にそえて、ご両人の名まえ入りの大きな  
 十五66 2 両人の名まえ入りの大きな写真を二まい  
 十五66 2 れなかった満ぼうの心から、どうして新  
 十五66 5 ら、どうして新島のおじさんのすがたが

十五666 て新島のおじさんのすがたが消えうせよ  
 十五667 。なくなった新島のおじさんがいい残さ  
 十五668 願いによって、私の父は、同志社を守り  
 十五668 てるために、北海の地をすて、京都に  
 十五669 ことになった。十の春をむかえた私は、  
 十五6610 私は、母や多くの弟妹たちをあとに残  
 十五6610 つれられて、景色の美しい京都に移った  
 十五6611 そのころは、新島のおじさんは廣島にお  
 十五671 におられて、学校のいきかえりにその門  
 十五671 通つても、新島家の窓は、かたくとざさ  
 十五672 うちにクリスマスの日がめぐつてきた。  
 十五673 ってきた。新島家となりになった教会  
 十五673 なりにあった教会の日曜学校の生徒であ  
 十五673 た教会の日曜学校の生徒であった私は、  
 十五674 クリスマスに得意の銀てきをふいたが、  
 十五678 、なつかしい新島のおばさんだった。そ  
 十五678 い顔をあおいだ私の目からは、たまのよ  
 十五679 の目からは、たまのようなみだが流れ  
 十五6710 れ出た。そのことのあるあつたあくる日、私  
 十五6710 、ひさしぶりで窓のあけはなれた新島  
 十五6712 人には、おもむきのあるかねがつるして  
 十五682 あった。「新島のおばさん。」とよん  
 十五686 、「略。」と、家の人によびかけながら  
 十五688 。なつかしい新島のおばさん、おばさん  
 十五6812 ここがおじさんのおへですよ。あれ  
 十五692 げると、おじさんの大きな写真があった  
 十五692 真があった。きずのあるみけんの下にか  
 十五692 きずのあるみけんの下にかがやく目は、  
 十五695 った。「つくえの上をごらん。」おば  
 十五696 〈略〉。おばさんのことばに目をうつす  
 十五697 いう大きなつくえの上に、くつをみがか  
 十五698 かせた満ぼう時代の私の写真がかざられ

十五698 た満ぼう時代の私の写真がかざられてあ  
 十五699 いか。ああ、新島のおじさんは、私を京  
 十五6910 さつたのだ。手紙のたびごとに、どうし  
 十五6911 だ。いまその写真の主が、こうしておじ  
 十五6912 のに、おじさんの声は聞えないのだ。  
 十五701 、じつとおじさんの写真に見入りながら  
 十五711 らん。おじさんのつかい入れたペンで  
 十五718 たおばさんは、昔のように私をひざにの  
 十五719 ひざにのせた。町の東にある寺の一角に  
 十五719 。町の東にある寺の一角に、こけむす一  
 十五719 に、こけむす一つのおはか、その前に立  
 十五721 きよせた。勝海舟の筆になる「新島襄之  
 十五721 之墓」という五つの文字をきざんだその  
 十五729 た。ピツツバグの町を走り出た自動車  
 十五729 は、やがてこう外のすばらしい家のげん  
 十五7210 外のすばらしい家のげんかんに横づけに  
 十五732 をあらわした博士の手には、古ぼけたア  
 十五733 けたアマスト時代のもの、京都時代のも  
 十五733 のもの、京都時代のもの、なつかしい数  
 十五733 、なつかしい数々の写真があった。ふか  
 十五734 にうたれている私の目の前で、博士は、  
 十五734 たれている私の目の前で、博士は、「略  
 十五738 あつたので、博士の家族たちは暑さをど  
 十五739 こかにさけて、家の中はがらんとしてい  
 十五7311 したが、平和主義の旗がしらとしてその  
 十五7312 乗じて、アメリカの考えかたについて熱  
 十五742 語られた。――親の目から見れば、自分  
 十五742 から見れば、自分の子女は、その性質が  
 十五744 って、そこになんのけじめもない。兄と  
 十五744 もない。兄と弟とのちがいは、いでん学  
 十五744 いは、いでん学上の能力のちがいは別と  
 十五745 いでん学上の能力のちがいは別として、

十五746 まれたというだけのこと、それによつ  
 十五748 してみれば、自分の子女にはすべて同じ  
 十五749 が念願である。神の目から見れば世界の  
 十五749 目から見れば世界の人類はすべてその愛  
 十五749 はずはない。四海の民すべて兄弟姉妹で  
 十五754 にぎりこぶしを私の鼻先につきだされた  
 十五754 れたホランド博士のあの熱情のことば。  
 十五756 ド博士のあの熱情のことば。日本へ帰っ  
 十五757 新島夫人にきょうのゆかいな会見のてん  
 十五757 うのゆかいな会見のてんまつを傳えてく  
 十五758 いながら、自動車のドアに手をかけた老  
 十五7510 人に、「先ほどの話は、ころよくひ  
 十五7511 士は、そのことばの意味をときかねてい  
 十五7512 とかねていた私のようすを見て、大き  
 十五761 きりと、「きみの論文を、カーネギー  
 十五763 した。ああ、新島のおじさんが、いまな  
 十五765 てくださった博士のこう意をふかく謝し  
 十五766 かく謝して、別れの手をさしのべると、  
 十五7610 らならつた日本語の一つだといわれた。  
 十五773 生きるな。きょうのできごとを、あすま  
 十五781 ン――きみたちの考えが、たとい世間  
 十五781 えが、たとい世間の考えとちがつていて  
 十五783 きみたちは、世間の人にわかつてもらえ  
 十五787 るだろう。ひとりの人間にとって真実で  
 十五7810 だからである。人の心をひくために、し  
 十五793 、あなたがた日本の小学校のみなさんに  
 十五793 がた日本の小学校のみなさんに、このあ  
 十五794 いさつを送るだけの特別の権利があると  
 十五794 を送るだけの特別の権利があると信じま  
 十五796 美しいあなたがたのお國を親しくおたず  
 十五798 た風景から、自分の國を愛するというこ  
 十五798 を学んでいる日本の子どもさんたちにも

十五 79 10 あるからです。私のつくえの上には、日  
 十五 79 10 です。私のつくえの上には、日本のみな  
 十五 79 10 えの上には、日本のみなさんが書いたあ  
 十五 79 10 が書いたあつい絵の本が、いつもおかれ  
 十五 80 1 があります。歴史の上で、いろいろな國  
 十五 80 1 で、いろいろな國の人々の間に、友だち  
 十五 80 1 ろいろな國の人々の間に、友だちとして  
 十五 80 1 、友だちとして心のかよったおつきあい  
 十五 80 4 は、おたがいに他の國々のことはわか  
 十五 80 4 たがいに他の國々のことはわからず、世  
 十五 80 8 てきました。友愛の精神が、もつともつ  
 十五 80 10 いながら、年よりの私は、日本の小学  
 十五 80 10 より私の私は、日本の小学校のみなさん  
 十五 80 10 は、日本の小学校のみなさんに、はるか  
 十五 80 11 送り、あなたがたの時代がきたときには  
 十五 80 12 ときには、私たちの時代がはずかしく思  
 十五 81 2 ン——天は、人のうえに人をつくらず  
 十五 81 2 人をつくらず、人のしたに人をつくらず  
 十五 81 7 。空氣または日光のごとく平ほんなれよ  
 十五 82 2 六 幸福の園 雲のまぐがあがると、園  
 十五 82 2 くがあがると、園の前の方に、高い大理  
 十五 82 2 かがあがると、園の前の方に、高い大理  
 十五 82 2 方があがると、園の前の方に、高い大理  
 十五 82 2 方に、高い大理石のまいる柱でできた大  
 十五 82 2 柱でできた大廣間のようなものがあらわ  
 十五 82 3 れます。テーブルのまわりには、この地  
 十五 82 3 りには、この地球の上でいちばんふとつ  
 十五 82 3 たちが、けだものの肉や、ふしぎなくだ  
 十五 82 4 えったかなえなどの間で、たべたり、飲  
 十五 82 5 んで、みんな右手の前の方に、光をとり  
 十五 82 11 、みんな右手の前の方に、光をとりま  
 十五 82 11 ず、これも、右手の方のおくへ向かつて  
 十五 82 12 これも、右手の方のおくへ向かつて歩い

十五 83 4 会  
 んふとっただれの目にも見える『幸福  
 十五 83 7 会  
 も、この人たちのなかにまよいこん  
 十五 83 9 会  
 だけでも、廣間の方をさがしてみよう  
 十五 83 12 会  
 いはまあ、育ちのわるいものばかりだ  
 十五 84 6 会  
 ある。小ひつじの足に、小うしのかん  
 十五 84 7 会  
 の足に、小うしのかんぞうもある。」  
 十五 85 1 会  
 とおりテーブルの光栄になっているさ  
 十五 85 3 会  
 くて、この廣間のなにものをもおさえ  
 十五 85 4 会  
 る。いや、どこのなにものをもおさえ  
 十五 85 11 会  
 うに、子どもたちの方へやって來ました  
 十五 85 12 会  
 ないよ。あいそがいい人たちだからね  
 十五 86 6 会  
 ないよ。おまえの氣持をくじけてしま  
 十五 86 7 会  
 うものは、自分のしなればならない  
 十五 86 8 会  
 ならないつとめのためには、なにかし  
 十五 86 11 会  
 た幸福」チルチルの方へ手をさしだしな  
 十五 87 3 会  
 とった『お金持の幸福』です。失礼で  
 十五 87 4 会  
 ですが、この中のおもなものをごしよ  
 十五 87 5 会  
 これが、わたしのむこの『地所持の幸  
 十五 87 5 会  
 、わたしのむこの『地所持の幸福』で  
 十五 87 6 会  
 むこの『地所持の幸福』で、なしのよ  
 十五 87 6 会  
 幸福』で、なしのようなおなかをして  
 十五 87 7 会  
 されたきよえいの幸福』で、このとお  
 十五 87 8 会  
 たされたきよえいの幸福』ゆっくりとう  
 十五 87 9 会  
 かまは、『のどのかわいていないとき  
 十五 87 10 会  
 幸福』と、『腹のへらないときに物を  
 十五 88 1 会  
 』で、みんな魚のようににつんぼだし、  
 十五 88 2 会  
 『は、こうもりのように目が見えない  
 十五 88 5 会  
 りとも手はパンのしんだし、目はもも  
 十五 88 5 会  
 だし、目はもものジャムですよ。さて  
 十五 88 10 会  
 ルチル、すこし横の方に立っているひと  
 十五 88 10 会  
 立っているひとりの『幸福』を指さして  
 十五 89 1 会  
 た幸福』あの男のことは、きかないほ

十五 89 3 し。 (チルチルの手をにぎりながら)  
 十五 89 4 会 。 みんなえん会のやりなおしをする  
 十五 89 10 からね。(ふたりの子どもに手をだしな  
 十五 89 10 会 うぞ。 おふたりのために、ちゃんと席  
 十五 90 1 会 さんが、ちよつとのまも行かないので  
 十五 90 9 会 どもわたしたちのテーブルにのぼった  
 十五 90 12 会 よ。 わたしたちの生活のなかまにはい  
 十五 90 12 会 たしたちの生活のなかまにはいって、  
 十五 91 1 会 て、わたしたちのすることを、みんな  
 十五 91 5 会 たちは、すこしの休みもなく、飲む、  
 十五 91 8 会 。 それがこの世のすべてですもの。」「  
 十五 91 11 会 、 「あの、育ちのわるいわかい女はだ  
 十五 92 2 きつけて、えん会の中にひきずりこんで  
 十五 92 12 会 ら、「ぎょうぎのいいことばをつかっ  
 十五 93 4 ながら、テーブルのすみで、「略。」さ  
 十五 93 12 幸福どもは、喜びの声をあげながら、い  
 十五 94 1 なわらい」は、光のこしのあたりを、力  
 十五 94 1 いは、光のこしのあたりを、力まかせ  
 十五 94 4 ルチルは、「光」のいうように、ダイヤ  
 十五 94 5 ぎょうしい、ばら色の美しい光に照らされ  
 十五 94 8 会 光「みんな不幸のところへにげこんで  
 十五 94 12 会 うに思うのは目のせいです。 私たちは  
 十五 94 12 会 ちはやつと、物の眞実を見ることがで  
 十五 95 1 会 。 ダイヤモンドの光にたえられる幸福  
 十五 95 1 会 たえられる幸福の精を見るのだよ。」「  
 十五 95 1 会 るのだよ。」「ばらの目ざめ」とか、「水  
 十五 95 3 ざめ」とか、「水のほおえみ」とか、「  
 十五 95 3 とか、「あけぼののむらさき」とか、「  
 十五 95 4 とか、「こはくのつゆ」などがあらわ  
 十五 96 5 会 れども、ふつうの人間には、それが見  
 十五 96 8 会 よ。 私たちに用のあるものは、どうせ  
 十五 96 9 会 のだから。ほかの者にまで会っている



十五 96 11 「小さな「幸福」のむれ、ふざけたり、  
十五 96 11 しながら、みどりの園のおくからかけだ  
十五 96 11 がら、みどりの園のおくからかけだして  
十五 96 12 来て、子どもたちのまわりで、わになっ  
十五 97 3 会 あれは『子どもの幸福』だよ。」チル  
十五 97 8 会 あのとった子のわらうことはどうで  
十五 98 1 会 よりびんぼう人のほうが、ずっと多い  
十五 98 3 会 ないよ。子どもの幸福というものは、  
十五 98 4 会 いうものは、地の上でも、天の上でも  
十五 98 4 会 地の上でも、天の上でも、いちばん美  
十五 98 12 会 にしろ、子どもの時代は、ごく短い  
十五 99 2 「また、もう一つの「幸福」のむれ、ま  
十五 99 2 う一つの「幸福」のむれ、まえよりはす  
十五 99 2 えよりはすこしせの高いのが、廣間の中  
十五 99 2 の高いのが、廣間の中へかけこんで来  
十五 99 3 来て、ありったけの声をはりあげて、「へ  
十五 100 8 だつてさ。（ほかの「略」）チルチル」  
十五 100 10 会 ルさん。あなたの知っているのは、ぼ  
十五 100 12 会 だつて、あなたのまわりにいるのです  
十五 101 4 会 でも、きみたちの名まえを聞かせてく  
十五 101 6 会 ぼくは、あなたのおうちの幸福のかし  
十五 101 6 会 あなたのうちのお幸福のかしらすよ  
十五 101 6 会 のうちの幸福のかしらすよ。それ  
十五 101 8 会 チルチル「ぼくのうちに『幸福』が  
十五 101 10 会 たかい。この人のうちに『幸福』がい  
十五 101 11 会 っつてさ。戸や窓のやぶれるほど、いつ  
十五 102 6 会 もちあげるほどの喜びをこしらえてい  
十五 102 8 会 つかえる『健康の幸福』です。ぼくは  
十五 102 10 会 は、『清い空気の幸福』で、ほとんど  
十五 102 12 会 『で、ねずみ色の着物を着て、いつで  
十五 102 12 会 これは、『青空の幸福』で、もちろん  
十五 102 12 会 もちろん青い色の着物を着ていますし

十五103 1会、これは『森の幸福』で、みどりの  
十五103 1会福』で、みどりの着物を着ています。  
十五103 3会れは、『ひなたの幸福』で、ダイヤモ  
十五103 4会ダイヤモンド色の着物を着ていますし  
十五103 4会、これは、『春の幸福』で、きらきら  
十五103 5会ら光る青いたまの色をしています。」  
十五103 8会これが『日ぐれの幸福』で、世界じゅ  
十五103 8会で、世界じゅうの王さまのすべてより  
十五103 8会じゅうの王さまのすべてよりもりっぱ  
十五103 9会、おともに『星の出を見ることの幸福  
十五103 9会の出を見ることの幸福』が、むかしの  
十五103 10会福』が、むかしの神さまのような、金  
十五103 10会むかしの神さまのような、金びかの着  
十五103 10会ような、金びかの着物を着てついでい  
十五103 12会、これが、『雨の幸福』で、眞珠をい  
十五104 1会それから、『冬の日幸福』は、ここ  
十五104 1会から、『冬の日幸福』は、ここえた  
十五104 1会は、ここえた手のために、きれいなむ  
十五104 1会いなむらさき色のマントを開きます。  
十五104 2会は、まだなかまのうちでいっとういい  
十五104 3会『大きな喜び』の兄弟ぶんのようなも  
十五104 4会びの兄弟ぶんのようなものですから  
十五104 5会むじゃ氣な考えの幸福』です。それは  
十五104 6会れは、ぼくたちのなかまでいっとう快  
十五104 6会と、見るまに、黒の肉じゅばんを着たわ  
十五104 10たわんぱくこぞうのようなのが、聞きと  
十五105 1たりして氣ちがいのようににはねまわりま  
十五105 4会、あれは、不幸のほらあなからにげて  
十五105 6い』ですよ。」「せの高い、美しい、天使  
十五105 6い、美しい、天使のようなすがたをした  
十五105 9会み、あの人たちの名まえ知ってるの。  
十五105 12会正義であることの大きな喜び』で、不

十五106 2会  
 善人であることの大きな喜び』で、い  
 不幸』そのもののように、みじめなま  
 まうのです。右の方には、『しごとを  
 、考えることの喜び』のとなりにい  
 ることの喜び』のとなりにあります。そ  
 の後に、『ものわかる喜び』が立つ  
 いつでも、兄弟の『なにものもののわか  
 の『なにものもののわからない幸福』を  
 つしよに、不幸のなまにはいってしま  
 まり、ぼくたちのなまから、いちば  
 ん大きな喜び』の中に、『美しいもの  
 れから、あちらの遠い遠い金色の雲の  
 の遠い遠い金色の雲の中に、つま先で  
 い遠い金色の雲の中に、つま先で立つ  
 と見えるくらしいところにいる人、だ  
 、『愛することの大きな喜び』ですよ  
 こに、ずっと後の方に、ペールをかぶ  
 チルチル』ほかの人たちはなにをしよ  
 あなた、あの女の人を知らないのです  
 なさい。あなたの二つの目をたましい  
 。あなたの二つの目をたましいのどん  
 の目をたましいのどん底におちつけて  
 あれが、あなたの『おかあさんの喜び  
 の『おかあさんの喜び』です。くらべ  
 ものものない『母の愛の喜び』です。』  
 もない『母の愛の喜び』です。』方々  
 び』たちは、『母の愛の喜び』を手をた  
 たちは、『母の愛の喜び』を手をた  
 いて、これほどの幸福は、世の中にあ  
 あなたは、うちのおかあさんにしてい  
 は、おまえたちのはおずりと、おめめ

十五111 8 会 するたびに、私の着物に、月と日の光  
 十五111 10 会 着物に、月と日の光がさしてきてね。  
 十五112 2 会 けたあの戸だなの中にはいつているの  
 十五112 9 会 れば、きりょうのわるいおかあさんも  
 十五112 10 会 おかあさんたちの愛は、喜びの中でも  
 十五112 11 会 ちの愛は、喜びの中でも、いちばん美  
 十五113 2 会 のなみだは、目の中の星になってしま  
 十五113 2 会 みだは、目の中の星になってしま  
 十五113 3 会 だ。おかあさんの目の中には、星がい  
 十五113 3 会 おかあさんの目の中には、星がい  
 十五113 4 会 うにおかあさんの目だ。でも、ずっと  
 十五113 6 会 れもおかあさんの手だ。小さな指を  
 十五113 9 会 うちにいるときのよう、しごとをし  
 十五113 12 会 この手でおまえのせわをしているとき  
 十五114 8 会 、私がぼろぼろの着物を着ているも  
 十五117 3 会 のだろう。(ほかの「大きな喜び」たち  
 十五117 8 会 すか。私は『物のわかる喜び』でござ  
 十五117 9 会 、自分たち以上のもは、見えないの  
 十五117 11 会 正義であることの喜び』でございま  
 十五118 1 会 やはり、私たちの影以上のものは見え  
 十五118 1 会 私たちの影以上のものは見えないので  
 十五118 4 会 けれど、私たちのゆめ以上のものは、  
 十五118 4 会 たちのゆめ以上のものは、見られない  
 十五118 8 会 ん、私は神さまのおいつけを守って  
 十五119 1 会 あられるあすの日を待ちながら。」  
 十五119 2 会 「あなたは、私の子どもたちに、それ  
 十五119 6 会 いたします。」「物のわかる喜び、」「光」  
 十五119 6 会 かる喜び、」「光」の方へ行き、ふたりは  
 十五119 7 会 げますと、ふたりの目にはなみだが光つ  
 十五119 8 会 ている。(ほかの「略」。)光「まあ、  
 十五120 2 会 あった。校長先生のお話を聞いていると  
 十五120 3 会 ると、ずっとまえのことが思い出されて

十五120 3 会 はじめてこの学校の門をくぐったときの  
 十五120 4 会 門をくぐったときのこと、はつきりう  
 十五120 5 会 みんなで、私たちのために送別の歌を歌  
 十五120 5 会 たちのために送別の歌を歌ってくれた。  
 十五121 7 会 がたに対する感謝の念があふれてきた。  
 十五121 11 会 持であつた。受持の佐藤先生と、教室で  
 十五122 2 会 。これがこの級の最後のことばだ。」  
 十五122 2 会 がこの級の最後のことばだ。」とおつ  
 十五122 5 会 だいて、この日記のふでをおこう。――  
 十五122 7 会 橋さんが、きょうの日記当番ですが、私  
 十五122 7 会 ください。きょうの感謝会はわすれるこ  
 十五122 10 会 校歌や、石井先生の手品や、森田先生と  
 十五122 10 会 田先生と西野先生のバイオリンとピアノ  
 十五122 11 会 うなど、はじめてのことなので、ほんと  
 十五123 2 会 ました。先生がたのご幸福をおいのりい  
 十五123 5 会 ー楽しい六か年の思い出を残してくれ  
 十五123 8 会 生。「くくく」の第一課「みんない  
 十五124 2 会 山――新しい旅の門出、希望をもって  
 十五124 4 会 望をもって。校門のかしの木よ、母校よ  
 十五124 4 会 っ。校門のかしの木よ、母校よ、ばん  
 の (準助) 986 ノのふというのは・はだをかぶの  
 かい  
 一34 9 会 まわってみたいのです。」「(略)。」「へ  
 一45 2 会 ものをしらべるのだよ。」「こんなこえ  
 一54 10 会 きょうしてくるのです。そうして、つ  
 一57 8 会 みみなおらないのね。」「わたくしは、  
 一61 1 会 をひろってきただけです。」「(略)。」「  
 一62 8 会 んとうでもつきたのかとおもってみま  
 一63 5 会 んなにおおきいのです。」「と、おじい  
 二12 6 会 みました。ちがったのをならべてみまし  
 二22 4 会 した。よしこさんのは、『いろはにほ』  
 二22 6 会 いのに、わたくしのは、『いろはにほへ

二24 8 会 どうかいをするんですね。」「五 おは  
 二30 8 会 のに、どうしたのだろう。」「(略)。」「  
 二37 6 会 きがふっているのをみつけました。  
 二54 4 会 んからもらったのです。」「こういって  
 三13 2 会 ひとことというのは、きたないこと  
 三17 1 会 こまでのぼしたのです。」「とおっしゃ  
 三23 1 会 まですついているのか、わからないほど  
 三26 1 会 ことです。切るのにも 大さわざでし  
 三27 6 会 ました。おどろいたのは、そのふねの早  
 三28 6 会 いきおいのいいのがあたりまえさ。  
 三33 3 会 したのかえるのをまっています。  
 三45 5 会 ってきたかったのだ。あははは。」「と  
 三46 6 会 なぜないているのか。」「とおたずねに  
 三48 1 会 くおなりになったのです。おおくにぬし  
 三48 3 会 なぜないているのか。」「とおたずねに  
 三58 3 会 は、丘の上にあるのでも、ふもとにあ  
 三58 4 会 も、ふもとにあるのでもありません。  
 三58 5 会 どなかほどにあるのです。それで、おり  
 三70 3 会 上になにかあるのをみつけました。」「  
 三75 2 会 からやってきたのね。」「(略)。」「その  
 三76 4 会 いってしまつたのよ。」「おかあさんが  
 三76 6 会 っでどこへいくのかなあ。」「と、デビ  
 三77 1 会 ちに光をあげるのですよ。」「(略)。」「  
 三77 4 会 にお目にかかるのです。あなたたちが  
 三77 6 会 光をあげにいくのです。それから、あ  
 三77 8 会 へかえってくるのです。だから、だれ  
 三77 9 会 るとよるがあるのです。」「(略)。」「と、  
 三78 4 会 をとつてしまふのはいや。」「と、ジュ  
 三84 1 会 たいに光らせるのよ。」「だんだんにじ  
 三84 3 会 にあまだれがあるのをみつめて、(略)  
 三99 7 会 ら、それを見るのは、ほんとにた  
 三106 2 会 んだん高くなったのを、みかどがおき

三〇六 三 会 それほどきれいなのなら、ごてんによ  
三〇六 九 会 が、「どこへいくのもいやでございま  
三〇八 二 会 は、つれていくのはやめよう。」と  
四一五 六 会 まごを生んでいるのをみていた。えつ  
四一七 五 会 て、おふろへいくのがみえるの。学校  
四一九 二 会 は、お話をするとおなじことです  
四二二 九 会 のうちを聞いたのです。やねも、かべ  
四三二 四 会 あるけなかったのです。その生徒さ  
四三五 五 会 をさしてあげたのですね。「略。」「  
四三五 九 会 こに氣がついたのです。おとうさんが  
四三六 一 会 、ひびいてきたのです。わかりますか  
四三八 五 会 ないで、かえれたのでしょうか。」「略。」「  
四四三 一〇 会 ところで、ねむったのです。「略。」「と  
四四四 八 会 「略。」「といったのは、かっちゃんとし  
四四八 一〇 会 てびっくりさせるのだらうと思って、  
四五〇 三 会 ちゃんのおちていくのを、下からうけと  
四五一 二 会 れてとべば安全なのですが、いまは、か  
四五二 一 会 ぎながら空をとぶのは、よいいなこと  
四五六 三 会 。「略。」「いいのかい。」「きず口もだ  
四六六 五 会 早くいってあそぶのです。「かいぶんあ  
四七三 三 会 くさん おもしろいのができました。こ  
四八七 五 会 さむい。雪が降るのだらうか。風がふ  
四九四 一 会 雪がにおにかかるのもわすれて、高い  
四九七 五 会 これ、どうしたのだ。」子ども三「おも  
四九七 六 会 ころがしているのです。」うらしま「そ  
四九七 一〇 会 ちがつかまえたのでもの。」「うらしま  
四九八 八 会 はいいつも こんなのですよ。」「うらしま  
四九八 一 会 いけないというのですか。」「おとひめ  
四九八 六 会 うしてこしらえたのでしょうか。光つて  
四九八 九 会 しょう。光がでるのはなぜでしょう。」「  
四九八 四 会 たびをしてきたのです。けれども、た  
四九八 八 会 す。どうなさるのでございますか。」「

四九八 一 会 たしがひろったのです。もって かせ  
五一一 四 会 車とすれちがったのだ。」「略。」「略  
五一二 二 会 りとおったりするのだ。」「略。」「略  
五一三 三 会 ないか、しらべるのだ。」「略。」「略  
五一五 六 会 切手をはってもらいます。これは、汽車  
五一五 七 会 の旅にきつぷがいのと、おなじことです  
五一七 六 会 「略。」「わたしはこんな小さな字だ  
五一七 九 会 いい。このわたしのをくらん。うそ字さ  
五二二 一〇 会 がつてくださったのでしょうか。」「略。  
五二五 三 会 れでうれしかったのね。」「略。」「は  
五二六 一 会 がとうっていったのは、どういうわけ。  
五二七 二 会 いって帰ってきたのですもの。どこかで  
五二七 四 会 であの人にいったのよ。」「略。」「略  
五二八 六 会 略。」「どうしたのだね。」「略。」「へ  
五二九 二 会 れしかったというのほどんなことかね。  
五二九 八 会 駅へおいでになるのでしょうか。ついでで  
五三〇 四 会 かなかおもったのですが、ぼくは、か  
五三〇 八 会 ういうことをやるのかね。」「ときいたの  
五三〇 一 一 会 なかできなかったのです。ぼくにはすこ  
五三二 一〇 会 をたいて走っているのでしょうか。これは貨  
五三三 六 会 は、なんの力で走るのでしょうか。えんとつ  
五三三 一 会 、ガスがもえているのです。あのガスは、  
五三五 二 会 スは、なにかから作るのでしょうか。なにをし  
五三六 二 会 場のきかいを動かすのです。ガスも石炭か  
五三六 八 会 は、どうしてできたのでしょうか。みなれな  
五三七 四 会 かって石炭になったのです。大むかしのだ  
五三七 九 会 ってはたらいっているのです。五 心と心  
五三八 五 会 をしていらいっしやるのです。手紙の中に、  
五三九 九 会 ら、うまく鳴けないのだらう。帰りに、ま  
五四二 二 会 光に、身をきよめるのはうれし。わた  
五四三 三 会 一ばん星みつけたのね。えらいわね。」「  
五四三 八 会 だ。あんな小さいの。それより、ほら、

五四五 五 会 おさんは目が早いね。」「そこへ、とな  
五四六 二 会 した。」「今夜みるのは土星です。あそこ  
五四六 六 会 。あれ土星というのよ。」「じゅんぽんが  
五四六 五 会 が、たねをまいたのでしたね。」「略。  
五四七 七 会 す。この春まいたのです。たねをまいた  
五四九 九 会 、こんなにさいたのですね。」「略。」「  
五五〇 九 会 のつるをのぼしたの、だれかしら。あ  
五六一 七 会 ぼみをこしらえたのは、だあれ。」「  
五六一 一〇 会 、三つもさかせたのは、だあれ。」「  
五六一 一 会 色にそめてくれたのは、だれでしょう。  
五六一 四 会 なんとこたえていいの、わからなくなっ  
五六一 一〇 会 かあさんがまいたのだけれど、こんなに  
五六一 一〇 会 んなによくできたのは、おかあさんの力  
五六一 一〇 会 みがなったりしたのは、おかあさんのせ  
五六一 一〇 会 、ねてばかりいたのが、はうようになり  
五六一 一〇 会 で、大きくなったのでしょうか、わたし  
五六一 一〇 会 日に大きくなったのは、おまえひとりの  
五六一 一〇 会 やで生きていけるのは、だれのおかげだ  
五六一 一〇 会 家がほしいというのです。」「略。」「お  
五六一 一〇 会 になりたいたいというのです。」「略。」「お  
五六一 一〇 会 れがいてくれたのですか。」「ごのすが  
五六一 一〇 会 、持ってきてくれたのです。これで教室  
五六一 一〇 会 はこんなに休んだのでしょうか。みんな、  
五六一 一〇 会 いない。どうしたのかい。」「略。」「へ  
五六一 一〇 会 ら、うたをうたうのだよ。高い山から  
五六一 一〇 会 でもおじぎをするのだよ。」「略。」「へ  
五六一 一〇 会 オギアアとないたのだよ。それからな、  
五六一 一〇 会 ぼうさんになったのだよ。」「こういって  
五六一 一〇 会 まえは水がほしいのか。」「とたずねると、  
五六一 一〇 会 、「略。」「というのだよ。それで、手お  
五六一 一〇 会 をコッソンとうったのだよ。そこで、ゆか  
五六一 一〇 会 このはいっているのが、たけのこはん

五九二(九) つぶがついているのが、たけのこごはん  
 五九四(五) になっておちていたのです。「略。」「略  
 五九六(三) は、まひわというのですが、ふつうは、  
 五九八(九) そうと思っているのです。「そのぼんは、  
 五九二(五) をたてて流れているのをきいて、ひわは、  
 五九五(九) つもげいができるのね。」「さんちゃんの  
 五九六(一) おともができるのさ。」「略。」「略  
 五九七(三) よりしかたがないのさ。」「略。」「略  
 五九七(四) しるいことがあるのかい。」「略。」「そ  
 五九八(八) おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃ  
 六〇四(八) 自分のおかれていのは、しごと台の上に  
 六〇五(九) チカチと氣ぜわしいのはおき時計で、カッ  
 六〇五(一) ッタリとおうようなのはしら時計である  
 六〇六(三) れはなんの役にたつのだろう、これはどん  
 六〇六(四) などところにおかれるのだらうなどと考えて  
 六〇九(九) 世の中の役にたつのに、どれもこれも不  
 六〇八(一) ておいたねじのないのに氣がついた。「略  
 六〇八(一) 上をかきまわしたのは。ああいうねじは  
 六〇九(一) あれ一つしかないのだ。あれがないと、  
 六〇九(五) にたつことがあるのかしら。」「喜んで  
 六一〇(一) し、いちばん喜んだのはねじであった。時  
 六一一(九) 動することができたのだと思うと、うれし  
 六一二(六) あいのわるかったのは、そのためでした  
 六一二(一〇) に役にたっているのだ。」「と、心からま  
 六一六(四) どは、きゆうに歩くのをやめて、弓に矢を  
 六一三(二) つあそぼうというのさ。わるいことはい  
 六一四(一) くそくをしているのです。」「チェロの「は  
 六一四(五) るときにはたらくのですよ。さあ、おそ  
 六一四(一〇) いる——声がでないのである。雪「だいい  
 六一五(六) う、また、すごいのがくるぞ。」「また  
 六一六(六) 根にとまっているのは。」「親つばめ「さあ  
 六一九(九) ん、いまから帰るのよ。」「子つばめ「みん

六四二(四) よしなくてもいいのよ。さあ、みなさん  
 六五一(六) ました。三人は遊ぶのをやめて、空をみあ  
 六五二(一〇) 。雲が走っているのよ。」「と、みちこが  
 六五三(八) んずん動いていくのがよくわかるよ。」「  
 六五四(三) 」「といいあっているのをききながら、ふみ  
 六五五(三) するとよくわかるのね。」「と、みちこも  
 六五九(六) んの話がうたえないのかと考えました。そ  
 六五九(八) 五か七になっているのです。「空のうた」  
 六六〇(八) ら、まえにならったのを思い出して書いて  
 六六四(四) になると、ねむくなるのだらう。どうしてだ  
 六六四(八) だれがねむくなるのだらう。(いしの)  
 六六五(五) またそのつぎを書くのです。そのようにし  
 六六八(六) よくみながら書いたのです。まんがもいれ  
 六六九(六) うにへんしゅうするのは、むずかしいこと  
 六七〇(一) まあ、よくできたのね。」「略。」「これ  
 六七二(六) るまは、死んでいるのか、生きているのか  
 六七二(七) るのか、生きているのか。もちろん生きて  
 六七三(七) るまは生きているのでしょうか、死んで  
 六七三(八) うか、死んでいるのでしょうか。」「略  
 六七六(七) 雪だるまは命がないのかと思いました。  
 六七八(四) 、命をもっているのだよ。とにかく、命  
 六七九(九) だれがそうさせるのかしら。」「といいま  
 六八〇(一) と「お願いがあるのです。」「ほでりの「どう  
 六八〇(一) た一日だけいいのです。」「ほでりの「いく  
 六八二(二) 一どつりがしたいのです。」「ほでりの「そん  
 六八二(三) なにつりがしたいのか。」「ほでりの「あの大  
 六八二(四) いをつつてみたいのです。」「みこ「そう  
 六八三(二) どうしてつれないのだらう。朝から一び  
 六八四(二) しまった。大きいのをにがした。あ、つ  
 六八五(二) みこと「どうしたのだ。」「ほおりの「つりば  
 六八七(二) いていらっしやるのですか。」「みこ「つ  
 六八七(四) 困ってないでいたのです。」「年より「では

六八八(二) こと「木にのぼるのですか。」「年より「そ  
 六九二(七) とられてしまったのです。」「海の神「つり  
 六九四(一〇) 「あのねえ」というのが、「アドデエ」と  
 六九四(一〇) 「にいさん」というのは、「リイサン」の  
 六九五(三) も、「略。」「というのが、「略。」「ときこ  
 六九五(八) て、「はなをかむのかい。」「といったの  
 六九五(八) 、「略。」「といったのである。ぼくも、も  
 六九六(一) さんのまねのうまいのに感心した。弟は、  
 六九六(二) にいったことがあるのではない。しかし、  
 六九六(三) し、「略。」「というのが、いかにも弟のい  
 六九六(五) いったから感心したのである。そこで、ぼ  
 六九七(九) うことに氣がついたのである。ぼくは、夜  
 六九八(一) えることばとがあるのだらう、と考えてみ  
 六九八(二) なから声のする音なのだらうか。弟は、「  
 六九八(五) ははなからする音なのだらう。そう思っ  
 六九八(一〇) とうは、たこを作るのはじめてです。け  
 六九九(五) 上へ弓なりにまげるのですから、めんどろ  
 六九九(七) ました。はりつけるのも、まがつているの  
 七〇〇(一) いて、わっているのさ。」「略。」「略  
 七〇二(七) んたちは、おかしいのをがまんしながら、  
 七〇三(四) ネルがほしかったのさ。このあたたかい  
 七〇三(五) とねむりたかったのさ。」「うさぎさんた  
 七〇四(二) をつきあげるといいます。「略。」「うさ  
 七〇五(一〇) 。のぼりさかを走るのさ、うさぎさんのも  
 七〇六(七) さんがねむっていたのです。うさぎさんた  
 七〇六(九) は、晝ねをしていたのですが、うさぎさん  
 七〇七(四) うさぎをみつけたのだ。あの谷をわたる  
 七〇八(五) ちゃんとみつけたのだ。そこから、あと  
 七〇九(六) あとをつけてきたのだ。」「略。」「略  
 七一〇(九) ぼんはじめるのは、だれかな。」「か  
 七一〇(九) とひとまわりするのだ。ろくかをすうつ  
 七一二(七) 竹や木のことをいいます。「きゆうりの

七131 くことになつてきたのでしよう。「略」。  
七136 みにつかわれているのでしよう。それとよ  
七147 たつかいかたがあるのは、「手」だけでは  
七159 なつかいかたがあるのは、おもしろいでは  
七173 うちよがよくでるのだたね。さあ、出  
七197 に、かくれているのさ。」子どもたちは、  
七229 しをさがしにくるのさ。」はお「あおむ  
七221 「子すずめにやるのさ。」はお「子すず  
七256 ら小さい虫になるのに、七日かかってい  
七257 だが黒っぽかったのが、青くかわってき  
七259 と同じ色になったのね。どうして、はっ  
七2510 ぽと同じ色になるのか、わかりますか。  
七261 やん、わからないのかい。」兄「なまいき  
七263 っぽと同じになるのは、鳥などに、すぐ  
七269 ん。」兄「どうしたのさ。」はお「あおむ  
七272 「さなぎになったのですよ。先生は、あ  
七289 たところを書いたのが、よくできたつて  
七2910 、とりかえてやるのが楽しみだ。きのう  
七321 んなところをみるのは、はじめてですよ  
七324 すこしずつのびるのね。」なごやかな音  
七359 いったことがあるのですもの。それに、  
七3510 二時間ほどでつくのですから。」とうけ  
七3511 ぶろうをつれてきたのです。「略」。「へ  
七381 しらえてくれたのです。私は、思わず  
七453 なつもりでひいたのでもありません。た  
七454 つまぎれにひいたのです。せつかくのお  
七482 す。はじめに書いたのと、二回めに書いた  
七482 と、二回めに書いたのとを、くらべてごら  
七483 らんなさい。二回めのは、書きたしてある  
七591 っています。こんなのは、みじかくなつた  
七592 はできません。つぎのはどうでしょう。な  
七618 なに、からすがいるのかしら。すみをすつ

七674 顔をちようこくするのに、二つのやりかた  
七683 をくわしく書きたすのにしています。あと  
七684 章をきりつめていくのと同じです。やりか  
七702 そうじ、それがすむのをまつていたのか、  
七702 すむのをまつていたのか、すぐうしろに、  
七724 らつてもらっているのか。あ、ほたるだ。  
七734 たんでもさいているのかと思つたら、まあ  
七751 甲「どこへいったのだらうね。」乙「ちょ  
七762 がしつづけているのですが。」旅人「もし  
七764 していらいしやるのではありませんか。  
七786 そのらくだをみたのではありませんか。」  
七788 におききになったのですか。」旅人「いい  
七789 人「いいえ、みたのでも、きいたのでも  
七789 たのでも、きいたのでもありません。」  
七791 かへつていったのにさういえない。」旅  
七802 、どういふことなのか、くわしく話した  
七809 この人にであつたのです。」裁判官「それ  
七811 らくだをにがしたのではないかと。」と、  
七811 〆と、たずねるのでございます。」乙「  
七814 とを、知っているのかね。」乙「だいいち  
七819 やんと知っているのです。」裁判官「ほか  
七824 らくだをぬすんだのは、この男にちがい  
七832 かからにげてきたのではないかと、思つ  
七832 ないかと、思つたのです。」裁判官「なる  
七834 どうしてわかつたのかね。」旅人「それは  
七8311 は、なぜわかつたのか。」旅人「草をくい  
七846 どうしてわかつたのでしよう。」乙「そう  
七847 が、なぜわかつたのでしよう。裁判官ど  
七853 あなたがぬすんだのではない。もう帰つ  
七856 旅人をうたがったのも、むりはない。け  
七898 りの日は、きらいなのではない。茶うさ  
七918 きは、早くたべたいのか、黒いうさぎの上

七943 かのうさがかんたのです。しばらく動か  
七9510 1ぴきは白で、あとは黒っぽい色をして  
七95 〇 おやうさがしたのです。  
七981 ちをのませたくないのでしょうか。11月  
七989 子うさは、おもいで320g、かるい  
七989 で320g、かるいので260gでした。  
八57 か賣つていなかったのですから……。それ  
八61 山の人だからだったのです。私も、すつか  
八82 、きいてみたりするのです。「略」とい  
八83 す。「略」といふのは、同じ日本の中で  
八89 ことばをもっているのだそうです。なんと  
八101 ていこうとさえるのです。うちの中にい  
八106 をつついたりするのです。ピオのゆうか  
八113 足でふんでしまったのです。「略」と、  
八131 の信頼をうらぎつたのが、かなしくてなり  
八132 んでした。ころしたのは、もちろんあやま  
八164 ちは、においで知るか、なんで知るか  
八164 のか、なんで知るか、手ごろな、皮の  
八172 こんなことができるのでしよう。それは、  
八175 つかつてちちをのむのと同じように、しぜ  
八177 ようずに生きていくのです。虫は、はじめ  
八181 つもトンネルをほるのにつかいますから、  
八205 、皮をぬぐ日をまつのです。上からつたわ  
八213 よつくり歩いていくのは、ほんとうにおか  
八2311 ずしい夜風にあたるのが、うれしそうです  
八279 とめておいでになるのです。けれど、  
八2811 らきつづけているのは感心なことだ。む  
八2910 けんぎゅうというのですか。「略」。  
八334 ているようにみえるのです。この星は、一  
八335 はつきりとみえないのですから、ずいぶん  
八351 らいのきよりにあるのでしよう。二十光年  
八366 してたもたれているのでしよう。四 幸





十58 12 た。私は、のこったのをおし葉にしました  
 十62 1 あんなに早くのびるのでしょう。きのう、  
 十63 7 顔をこしらえあげるのですが、能のほうで  
 十64 8 さを現わそうとするのところが、狂言は  
 十66 4 会 「よくるすをするのだぞ。」といいつけ、  
 十67 4 だにさわりもしないのだから、自分たちも  
 十69 8 会 それが、死なないのだから、『ぶす』で  
 十70 8 会 うまそうにみえるのだよ。」「略。」「ひ  
 十73 2 会 たりともどうしたのだ。」だんなは、あ  
 十73 12 会 す』をたべて死ぬのが、いちばん早道と  
 十73 12 会 ばん早道と思ったのです。が……。」「と  
 十1 4 5 ひいて通っていくのがみえるし、川上の  
 十1 4 7 ん本も立っているのがみえる。長いいか  
 十1 4 9 山から運んでくるのもみえる。なにより  
 十1 4 10 によりおもしろいのは、大学のボートが  
 十1 5 6 ゆうになつていのである。」「略。」「へ  
 十1 8 5 会 で、むずかしいのは、コックスだろう  
 十1 10 4 会 は、だれがなるのさ。」「略。」「略  
 十1 10 10 会 とにきめているのさ。」「略。」「略  
 十1 11 1 会 方へつれていくのさ。」「略。」「略  
 十1 20 3 郎が生まれてきたのです。だから、金次  
 十1 23 3 した。いちばん下のは、そのとき二つで  
 十1 23 12 会 ん。」「どうしたのです。おかあさん。  
 十1 27 2 会 どうかしているのではないだろうか。  
 十1 47 2 会 こえて内地にきたのは、ぼくの二年生の  
 十1 51 9 会 がら、電車のくるのを待っていた。電車  
 十1 54 2 会 かかげられているのを見た。」「略。」「へ  
 十1 59 12 会 。その近道というのは、田のあぜ道で、  
 十1 60 7 会 くとめられていたのである。が、いま、  
 十1 61 5 会 まえはどうしたのだ。まえからあぶな  
 十1 61 6 会 あ、の橋を渡ったのではないかね。」「と  
 十1 61 12 会 とわらなかつたのか。」「とせめた。」「へ

十1 62 2 会 十1 62 2 会 十1 62 2 会 十1 62 2 会 十1 62 2 会  
 十1 62 4 会 十1 62 4 会 十1 62 4 会 十1 62 4 会 十1 62 4 会  
 十1 62 8 会 十1 62 8 会 十1 62 8 会 十1 62 8 会 十1 62 8 会  
 十1 62 10 会 十1 62 10 会 十1 62 10 会 十1 62 10 会 十1 62 10 会  
 十1 62 11 会 十1 62 11 会 十1 62 11 会 十1 62 11 会 十1 62 11 会  
 十1 63 9 十1 63 9 十1 63 9 十1 63 9 十1 63 9  
 十1 63 10 十1 63 10 十1 63 10 十1 63 10 十1 63 10  
 十1 63 10 十1 63 10 十1 63 10 十1 63 10 十1 63 10  
 十1 64 12 十1 64 12 十1 64 12 十1 64 12 十1 64 12  
 十1 65 12 十1 65 12 十1 65 12 十1 65 12 十1 65 12  
 十1 65 12 十1 65 12 十1 65 12 十1 65 12 十1 65 12  
 十1 66 2 十1 66 2 十1 66 2 十1 66 2 十1 66 2  
 十1 66 8 十1 66 8 十1 66 8 十1 66 8 十1 66 8  
 十1 70 4 十1 70 4 十1 70 4 十1 70 4 十1 70 4  
 十1 72 10 十1 72 10 十1 72 10 十1 72 10 十1 72 10  
 十1 72 10 十1 72 10 十1 72 10 十1 72 10 十1 72 10  
 十1 74 3 十1 74 3 十1 74 3 十1 74 3 十1 74 3  
 十1 75 4 十1 75 4 十1 75 4 十1 75 4 十1 75 4  
 十1 75 7 十1 75 7 十1 75 7 十1 75 7 十1 75 7  
 十1 77 11 十1 77 11 十1 77 11 十1 77 11 十1 77 11  
 十1 83 3 十1 83 3 十1 83 3 十1 83 3 十1 83 3  
 十1 83 4 十1 83 4 十1 83 4 十1 83 4 十1 83 4  
 十1 83 7 十1 83 7 十1 83 7 十1 83 7 十1 83 7  
 十1 83 8 十1 83 8 十1 83 8 十1 83 8 十1 83 8  
 十1 84 9 十1 84 9 十1 84 9 十1 84 9 十1 84 9  
 十1 84 9 十1 84 9 十1 84 9 十1 84 9 十1 84 9  
 十1 85 6 十1 85 6 十1 85 6 十1 85 6 十1 85 6  
 十1 85 7 十1 85 7 十1 85 7 十1 85 7 十1 85 7  
 十1 86 9 十1 86 9 十1 86 9 十1 86 9 十1 86 9  
 十1 86 9 十1 86 9 十1 86 9 十1 86 9 十1 86 9  
 十1 5 1 十1 5 1 十1 5 1 十1 5 1 十1 5 1  
 十1 5 8 十1 5 8 十1 5 8 十1 5 8 十1 5 8  
 十1 5 8 十1 5 8 十1 5 8 十1 5 8 十1 5 8

十1 7 1 会 雨具をかりたいのですが。」「とたのみ  
 十1 7 2 会 女はなにを思ったのか、ふと庭さきにさ  
 十1 9 2 会 会、どうなさつたのですか。」「とたずね  
 十1 9 6 会 家に帰ってくるのは、ちょうど、織物  
 十1 9 7 会 うとでたち切るのと同じことです。」「  
 十1 10 6 会 をひろっているのですか。」「とたずね  
 十1 10 12 会 会、どうするのですか。」「とききま  
 十1 14 3 会 からたれさがつたのもいい。まだ青々と  
 十1 14 4 会 きくのぞいているのもいい。だが、根も  
 十1 15 10 会 それをとりのけるのをやめて、また下が  
 十1 17 10 会 いと思つていのですが――あなたの  
 十1 18 8 会 もしろくなつたのです。おとなりの草  
 十1 18 12 会 と、じょうずなのもあるし、へたなの  
 十1 18 12 会 あるし、へたなのもある。毎晩鳴いて  
 十1 19 8 会 よりよほどいいのです。わたしはなん  
 十1 20 4 会 り容易じやないのですね。」「略。」「  
 十1 20 6 会 いようにしたいのです。けれども、思  
 十1 21 11 会 人の心を動かすのだって、あのピアノ  
 十1 22 4 会 ようずになつたのだらう。そうだ、け  
 十1 23 6 会 根の下でくらせるのですから、家内じゅ  
 十1 24 2 会 たちのまごというのには、父母にとつての  
 十1 24 8 会 ほどうれしかったのです。民ちゃんをな  
 十1 27 3 会 りでいざつて歩くのです。たいへんおそ  
 十1 29 8 会 道まででていたのよ。」「略。」「わた  
 十1 30 2 会 、略。」「というのです。おとなりで  
 十1 30 7 会 、そのことをいうのです。」「略。」「  
 十1 30 11 会 ことば数のふえるのには、おどろいてし  
 十1 32 2 会 が私を待っているのか、すこしも知りま  
 十1 34 7 会 あることを知つたのは、先生がおいでに  
 十1 35 4 会 ために苦しめたのですが、私は、いつ  
 十1 36 2 会 日なたにでかけるのだと知つて、おどろ  
 十1 37 1 会 別の手に、はじめのはゆっくりと、次に



十二 37 10 えることになったのです。こうして私は  
 十二 37 11 ることがわかったのです。私の手にふれ  
 十二 40 4 やくもちになったのもむりはありません  
 十二 40 9 ーをしつけていくのには、なみなみなら  
 十二 41 3 、勉強をはじめたのです。手のひらに文  
 十二 41 12 さんがすぐわれるのです。どうぞ神さま  
 十二 44 1 会 で、動いているのかもしれないよ。」  
 十二 45 11 会 樂は手でつかうのだが、そのほか、指  
 十二 46 10 会 絵にしてみせるのだが、人間ばかりで  
 十二 47 7 会 する望みもあるのだ。」「略。」「略  
 十二 47 11 会 が生まれてくるのだ。たとえば、わざ  
 十二 48 7 会 て自分で動かすのは楽しいものだよ。  
 十二 49 10 方形にする。ほかのはよくもんでのぼし  
 十二 56 4 、よくにたようなのが、あちらこちらで  
 十二 56 10 会 の海で顔をあらうのを楽しみにしていた  
 十二 58 3 会 わせてやるというのであった。おには、  
 十二 61 7 会 家具の岩屋というのがある。昔、あるま  
 十二 63 8 会 また人にみられるのもこまる。八郎は思  
 十二 70 9 会 しずかにしているのがすきだというし、  
 十二 71 4 会 はい句の話をきくのです。先生の近く  
 十二 71 5 会 日教えてもらえるので、これがなにより  
 十二 71 9 会 したが、雪をみるのが楽しみでした。芭  
 十二 72 5 会 そのあたりにいるのは、川べりにある船  
 十二 72 9 会 はきれいではないのですが、芭蕉は、い  
 十二 75 2 会 、まぐらにひびくのですが、その夜は  
 十二 76 1 会 ちがほしくなるのはやはりこんな晩だ  
 十二 79 2 会 。「そうだったのかい。きみたちは、  
 十二 80 11 会 んなことをきくのか。」という色があ  
 十二 86 1 会 に、送ってやったのであります。チルデ  
 十二 90 3 会 うにとなえていたのでは、そのことばは  
 十二 92 10 会 ぞれちがつてくるのも、やはりこのため  
 十二 98 10 会 いとぐちとなったのは、アメリカのモー

十二 100 9 よい式土器というのがあります。それは  
 十二 105 10 べたやお屋らしいのもあります。これは  
 十二 108 5 会 仁王さまをほったのは運慶だといわれて  
 十二 109 6 会 師が日本に傳えたのは、三百五十年ほど  
 十二 110 8 会 す。まき絵というのは、うるしをぬった  
 十二 110 11 会 光をはなっているのは、なんともいえな  
 十二 112 1 会 人との共同作品なのです。三人がひとつ  
 十二 112 2 会 となつて生まれたのです。解体図 こ  
 十二 112 11 会 られていなかったのですが、この本によ  
 十二 113 2 会 を日本語になおすのには、どれほど苦心  
 十二 9 5 会 をする土台にするのである。たとえば、  
 十二 10 4 会 えば、移轉をするのに、方角がよいと  
 十二 11 2 会 ないことを信ずるのを、迷信という。一  
 十二 11 5 会 であると、信ずるのである。原因・結果  
 十二 13 6 会 、目についてきたのです。熱心な学者が  
 十二 14 1 会 最初にいいだしたのは、十六世紀の中ご  
 十二 14 12 会 ない、地球が動くのだということを、明  
 十二 15 6 会 すっかりわかったのです。しかし、その  
 十二 16 5 会 をかえてしまったのかという、そんな  
 十二 16 7 会 眞理を求めていたのです。三 みどり  
 十二 17 4 会 には、鉾山があるのでもなく、いい港が  
 十二 17 4 会 く、いい港があるのでもなく、わが九州  
 十二 18 10 会 とげて、さかえるのであります。このと  
 十二 19 2 会 返そうと決心したのです。ダルガスは、  
 十二 19 11 会 こえた土地とするのが、ダルガスのゆめ  
 十二 20 5 会 れはてしてしまったのです。これを生かす  
 十二 20 6 会 す。これを生かすのは、みぞをほって水  
 十二 20 8 会 ともむずかしいのは、あれ地に木を植  
 十二 20 10 会 そこで思いついたのは、ノルウェー産の  
 十二 21 7 会 ふと思いついたのは、アルプス産の小  
 十二 22 6 会 えたので、かれるのはふせがれましたが  
 十二 22 7 会 はたされなかったのであります。デンマ

十三 23 1 会 上に生長しないのは、きつと、小もみ  
 十三 23 10 会 っで、発見されたのであります。このお  
 十三 24 4 会 見ることがあったのです。そのころ、ユ  
 十三 24 8 会 夏、しもがおきるのはまったくやみ、こ  
 十三 26 7 会 。ホートンというのは、小路のことであ  
 十三 28 6 会 むけたりしているのです。もの音には  
 十三 30 5 会 「略。」「いまのは、あめ屋さんだ。  
 十三 30 9 会 たててやって来るのは、さるまわしであ  
 十三 31 5 会 りをやるつもりなのだが、さるは、とち  
 十三 32 2 会 通るその声を聞くのは、ゆめの中の声の  
 十三 34 5 会 ない。夜のふけるのも知らないで、見と  
 十三 35 3 会 字の國といわれるのも、いわれのないこ  
 十三 35 11 会 すびつけてとばすのであるが、とぶと、  
 十三 36 4 会 ちらと降ってくるのも、このころである  
 十三 40 6 会 でいたきたいのです……はい。(電  
 十三 40 6 会 )電話のかかるのを待っている。その  
 十三 41 3 会 わないよ。ぼくがある。なんでもあ  
 十三 41 6 会 ひとりでつかうのは、ぜいたくという  
 十三 42 5 会 そう、二つあるのならもうよ……う  
 十三 55 1 会 いことでもあるのか。」そういって、  
 十三 55 5 会 うすこし大きいのがあるよ。」といっ  
 十三 55 11 会 ぶんちがつているのにおどろきました。  
 十三 56 1 会 したが、おじさんで見ると、いっそう  
 十三 56 2 会 はだの色の美しいのにおどろかされまし  
 十三 56 6 会 そんなにちがうのですか、おじさん。  
 十三 56 12 会 いそう上達したのさ。ミケランジェロ  
 十三 57 9 会 んらしいと思うのです。」「略。」「へ  
 十三 58 2 会 ない。色のあるのは、その点はよいが  
 十三 58 10 会 ンナのかわたたを見させてあげよう。  
 十三 61 5 会 くさんのこしたのはいえらいよ。こんな  
 十四 4 5 会 私たちの心をうつのです。なぜでしょう  
 十四 4 7 会 うとい光のためなのです。フィリップは

十四49 うとさをつけたのです。そうして、心  
 十四51 もともに苦しんだのです。だから、フィ  
 十四53 が、こもっているのです。それというの  
 十四55 です。それというのも、フィリップ自身  
 十四74 ぼっちではないのだと、お考えになっ  
 十四78 いうにすぎないのです。私たちは、お  
 十四86 ました。つらいのをがまんして生きて  
 十四81 ことのできないのは、わかりきってい  
 十四81 かりきっているのですから。けれども  
 十四812 おお考えになるのです。おあさんの  
 十四912 ていいてくださるのだと、思いたいの  
 十四912 だと、思いたいのです。ランプとコー  
 十四1012 とを思っているのです。じきに九月に  
 十四118 つたほうがいいのです。ランプはか  
 十四1110 こちらにまわすのです。いっしょに小  
 十四124 かくするためなのです。これは、私の  
 十四126 っているというのが教えてくれたこと  
 十四127 てくれたことなのです。その友だちの  
 十四132 ーを入れていいのか、おわかりになり  
 十四134 をのせるためなのです。おあさんの  
 十四1410 れてはいないのだ、もうすこしすれ  
 十四1410 月をくらせるのだ、自分としては、  
 十四1412 が思われてくるのです。おあさんが  
 十四156 んとうとい宝なのです。おとうさんの  
 十四175 の私にはわかるのです。では、おあ  
 十四222 ちは、あまり多いのおどろいた。佐藤  
 十四233 のことばだったのだろう。」とおし  
 十四245 、日本語になったのだからと、ふし  
 十四248 日本語になったのでしよう。」とおた  
 十四2411 よにはいってきただけ、たとえば、ラジ  
 十四2510 ばがはいってきただけ、品物からだけで  
 十四2512 よに傳わってきたのにちがいない。そう

十四271 きに傳わってきたのだということが想像  
 十四273 ばがはいってきただけのだからと思った。  
 十四278 に思われてきたのだ。」とおしやっ  
 十四292 いたいのがあるのです。見てもらいた  
 十四295 に見られるものなのです。それは、空に  
 十四2910 うとはしなかったのだからという人もあ  
 十四305 とがたりなかったのは、ざんねなこと  
 十四309 になつてしまったのでしょうか。むかし  
 十四313 とをわすれていたのは、よくないことで  
 十四319 くもわるくもなるのです。あなたがたの  
 十四3112 な國になつていくのです。さて、私は、  
 十四326 、農業が進歩したのです。こよみが作ら  
 十四326 こよみが作られたのです。天文学が生ま  
 十四326 天文学が生まれたのです。数学が発達し  
 十四327 。数学が発達したのです。航海術がさか  
 十四327 がさかんになったのです。宗教も、科学  
 十四328 ふかまつていったのです。よそ目には、  
 十四328 いつながりがあるのです。人間は、星に  
 十四3210 分にしかすぎないのです。このぎんが系  
 十四336 のぎんが系というのは、地球をとりま  
 十四337 さんの星のむれなのです。それでは、こ  
 十四339 なおいくつかあるのです。こうなつてく  
 十四342 は、どこまで廣いか、想像がつきませ  
 十四343 のはしまでとどくのに、二十億年も、か  
 十四348 かるほどの廣さなのです。この廣大なう  
 十四349 はつかまなかつたのですが、その感動が  
 十四3612 ジウムを発見したのです。みなさん、あ  
 十四371 らかでいられるのか、それを、こう話  
 十四443 こう話してやるのだ。くちびるに歌を  
 十四444 へ、なをしてやるのだ。かれは、氣  
 十四456 客間で歌っているのと、ちっともちがわ  
 十四464 。歌を歌っているのは、その中のひとり  
 十四488

十四4811 た。助け船のくるのを待つ間、ほかの婦  
 十四492 元氣をつけていたのです。「略」。この  
 十四507 あきらかになったのですが、おいしいこと  
 十四518 「こういいだしたのは、根のしるしをつ  
 十四529 ちゃの実がつくのです。こんな、十キ  
 十四552 も送ってあげるの、たいへんなほね  
 十四567 て行つてあげるの、この私です。も  
 十四571 うにしてあげたのです。だから、私は  
 十四582 を養分につくるのは、葉さんではなく  
 十四5811 で運んでいけるのですよ。それから、  
 十四591 かげで、かれるのが助かったことを考  
 十四596 がわけてあげたのです。水だつて、た  
 十四597 ておいてあげたのです。ほかのことは  
 十四5912 もつかなかつたのですよ。だから、あ  
 十四603 といつてもいいのです。しかし、ぼく  
 十四607 て地面にはえたのか、考えたことがあ  
 十四611 、まいてくれたのだった。もし、あの  
 十四632 なしづくになつたのが、無数にむらがつ  
 十四632 にむらがつているので、ちょうど雲やき  
 十四635 くつぶの大きいのが、ちらちらと目に  
 十四638 ったときに見えるのと、にたようなもの  
 十四642 がこつてくつつかの、もし、そういう  
 十四647 くさんういているのです。空中にうかん  
 十四661 で、もっと大きなのが、庭の上などに  
 十四678 な早さで回轉するのを見ることがあるで  
 十四689 か八キロとかいうのですから、そういう  
 十四6810 ったことがおこるのです。しかしまた、  
 十四692 ようすのちがつたのもあります。だから  
 十四693 んの湯にくらべるのはわりですが、ただ  
 十四696 い雨をあけてみたのです。湯げのお話は  
 十四702 やかに動いているのに氣がつくでしょう  
 十四709 だんだんにひえるのは、湯の表面の茶わ

十四70 10 めだと思っていいます。もし、表面に  
十四70 11 けば、ひやされるのは、おもに、まわり  
十四71 8 糸くずなどの動くのを見ていても、いく  
十四72 9 なもようが見えるのです。日のあたって  
十四72 12 かげろう」がたつのは、かべや屋根が熱  
十四73 4 おり曲げるためなのです。つぎには、熱  
十四76 2 と、きけんになるのです。これと同じよ  
十四76 10 がかった風になるのです。茶わんの湯の  
十四79 5 せん。ただ、困るのは、木のばあいには  
十四79 10 とを、知っているのといいたいのでは、た  
十四79 10 ているのといいたいのでは、たいへんちが  
十四80 1 のことを発見したのでしょうか。ことに  
十四80 4 の祖先が発見したのではなく、よその民  
十四80 5 い傳えられているものもあるかもしれませ  
十四80 7 眞理だと思われたので、そのことをほか  
十四83 2 は「雪國」というのであり、もう一つは  
十四83 3 つは「雪」というのであった。「雪國」  
十四83 10 る。「雪」というのは、雪の景色を写し  
十四85 3 とができるというのである。「略」。こ  
十四86 3 んねんに写生するのも、一びきのこん虫  
十四86 4 んかかって調べるのも、ごくさいな感  
十四86 5 、一首の歌をよむのも、同じ心の現われ  
十四88 3 に歩こうと思つたのであろうが、いつの  
十四88 5 てこんなに曲がるのか。風にふかれたか  
十四89 9 人の心がひかれるのは、ものごとをあた  
十四91 7 てこいだと思つたのであろう。そこで、  
十四98 11 のようにかがやくのを見た。たしかにそ  
十四99 2 かるい星が落ちるのを見た。その星が落  
十四99 4 ところへ行くのだ。」と、女の子は  
十四99 7 ろへのぼっていくのだと、話してきかせ  
十四102 4 だでこえ死んだのだ。」といった。け  
十四102 6 ぼろしを知らないのだ。人々は、その子

十四102 8 いるかを知らないのだ。もくろく、一  
十五19 5 高くそびえているのが、このユングフラ  
十五20 11 、散歩に出て来るのです。ニューヨーク  
十五21 6 うにそびえているのです。ある朝、こ  
十五21 11 方まで落ちていくのを、おもしろそうに  
十五24 9 のせにとびついたのです。一つまちが  
十五24 10 かさまに落ちこむのです。さいわいに  
十五25 4 をかたくにぎったのです。そうして、  
十五27 3 子は、あきらめたのか、おそろしいのか  
十五27 4 のか、おそろしいのか、それともおどろ  
十五27 4 いて氣でも失ったのか、すこしもさわが  
十五27 6 呼吸もなくなったのか、そのことがま  
十五28 2 たまらなくなつたのか、その重荷をふり  
十五32 4 急ぎでおりて来たのです。ようやく道を  
十五34 3 分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶ  
十五36 7 ないものを表わすのに、線を横に一本引  
十五36 9 いう考えを表わすのに、線を横に引い  
十五37 11 日本に傳えられたのは、千七百年ほどま  
十五39 4 、日本語を表わすのに便利なかたかなや  
十五39 8 の一部分をとつたのではなく、たとえば  
十五40 5 てきとうにまぜるのが、文章のふつうの  
十五41 6 一文字といわれるのもそのためである。  
十五45 9 ためにやって来たのも、そのころのこと  
十五46 9 のあまりに安いのにおどろいた。「略  
十五47 2 、なにぶん作るのにてまのかかるもの  
十五47 6 物がはじめられたのは、いまから三百三  
十五49 12 りだすことにしたのである。「略」。こ  
十五53 4 ツパーグに着いたのは、暑い眞夏の日の  
十五53 10 た私の目に映じたのは、廣いへやの窓ぎ  
十五54 10 たいすをすすめるのであった。私がこの  
十五56 1 だきをきわめたのは、アメリカ山がく  
十五56 8 かい関係があるのだが、きょうは、は

十五59 2 かわいがられたのですから。」と、あ  
十五60 5 う外に養つていたのは、明治二十年の夏  
十五61 5 書きそえてあつたのを見ても、その愛さ  
十五62 4 さんたちと行くのがいやなのか。なに  
十五62 4 行くのがいやなのか。なに、そうじゃ  
十五62 5 。ではどうしたのだ。なにが氣にさわ  
十五62 5 が氣にさわつたのかなあ。やえ子、満  
十五62 12 けだから、行くのはいやだといってい  
十五62 12 だといっているのですよ。なんとかし  
十五67 5 私がだんをおりるのを待ちかまえていた  
十五69 10 がつてくたさつたのだ。手紙のたびごと  
十五69 11 かとたずねられたのもそのはずだ。いま  
十五70 1 の声は聞えないのだ。暗い心になつて  
十五70 12 おなりになつたのですよ。そのペンを  
十五74 9 会に果たしたたいのが念願である。神の  
十五74 10 の愛する子どもなのだから、人種的な区  
十五74 12 こからわいてくるのだ——と、テーブル  
十五76 4 ていてくたさつたのだ。私は、停車場ま  
十五79 5 ます。といひますのは、私は、あの美し  
十五80 2 きるようになったのは、われわれが最初  
十五85 1 がしをわすれたのじゃないかな。あの  
十五85 5 がしをわすれたのじゃないかな。「チ  
十五86 2 によぼうというのだらう。それを受け  
十五88 6 に、ここにいるのは、『はちきれそう  
十五88 8 かうものはないのですよ。』「はちきれ  
十五88 12 かをむけているのはだれです。」ふと  
十五89 3 しょうかいするのはむづかしい。(チ  
十五89 6 たを待つていたのです。あのとおろ、  
十五90 2 まも行かれないのです。ぼくたちは、  
十五90 2 へん急いでいるのです。青い鳥をさが  
十五90 3 をさがしているのです。たぶん、あな  
十五91 2 んな見るといいのですよ。」チルチル

十五913 ㊦ 「なにをするのです。」幸福<sup>ふとつた</sup>「それ  
うのに聞えないのかい。それからさ  
十五929 ㊦ みを待っているのだ。おことわりはで  
十五939 ㊦ 十五946 ㊦ どもがにげて行くのを見ながら、「略  
十五948 ㊦ げこんでしまふのさ。」チルチルそこ  
十五9410 ㊦ う。どこへ来たのかしら。」光同じと  
十五9411 ㊦ じとこにいるのだよ。ちがつたよう  
十五9411 ㊦ ったように思うのは目のせいです。私  
十五951 ㊦ ることができるのだよ。ダイヤモンド  
十五952 ㊦ 幸福の精を見るのだよ。」ばらの目さ  
十五9512 ㊦ てたくさんいるのだらう。」光「もつと  
十五962 ㊦ い目にあわせたのだよ。」チルチル「で  
十五965 ㊦ ん、幸福はあるのだから。けれども、  
十五966 ㊦ 見つけられないのだよ。」チルチル「小  
十五969 ㊦ せこっちを通るのだから。ほかの者に  
十五971 ㊦ てかわいらしいのだ。どこから出て来  
十五971 ㊦ こから出て来たのだらう。だれなの  
十五972 ㊦ だらう。だれなののだらう。」光「あれは  
十五976 ㊦ お話はできないのだよ。」チルチルは  
十五979 ㊦ べたをしているのだらう。なんてかわ  
十五9710 ㊦ い服を着ているのだらう。このへん  
十五981 ㊦ が、ずっと多いのだよ。」チルチル「ど  
十五988 ㊦ もう時間がないのだからね。あの子た  
十五9810 ㊦ 、わかつているのだからねえ。それに  
十五9812 ㊦ り時間がおしいのだよ。なにしろ、子  
十五991 ㊦ 代は、ごく短いのだからね。」また、  
十五992 ㊦ はすこしせの高いのが、廣間の中にか  
十五10011 ㊦ たの知っているのは、ぼくたちだけ  
十五10012 ㊦ のまわりにいるのですよ。ぼくたちは  
十五1012 ㊦ 、くらしているのですもの。」チルチ  
十五1015 ㊦ んにも知らないのですね。ぼくは、あ  
十五1022 ㊦ こしらえているのですよ。でも、ぼく

十五10211 ㊦ そうにしているのは、だれもふり向い  
十五1043 ㊦ ていつとう快活なのです。それから、こ  
十五1047 ㊦ 十五10410 ㊦ くこどうのようなのが、聞きとれないさ  
十五10510 ㊦ いっしょに遊ぶのですもの。まず第一  
十五10511 ㊦ ければならないのは、『正義であるこ  
十五1062 ㊦ あの人をわらうのを見たことがありま  
十五1063 ㊦ 。その後にいるのは、『善人であるこ  
十五1064 ㊦ いちばん幸福なのですが、いちばん悲  
十五1065 ㊦ 『不幸』に行くのをとめることは、な  
十五1066 ㊦ なかむずかしいのです。なにしろ、『  
十五1067 ㊦ ることがすきなのですから。そういう  
十五1069 ㊦ になつてしまふのです。右の方には、  
十五1071 ㊦ をさがしているのです。」チルチル「だ  
十五1075 ㊦ なつてしまったのです。わるいなかま  
十五1076 ㊦ さつてしまったのですね。でも、それ  
十五10712 ㊦ 線を加えていくのです。」チルチル「そ  
十五1088 ㊦ とも出て来ないのは。」幸福「あれは、  
十五10812 ㊦ をむかえているのですよ。その『喜び  
十五1093 ㊦ の人を知らないのですか。まあ、よく  
十五1107 ㊦ とることはないのだからね。そのうえ  
十五1108 ㊦ と幸福とがますのですよ。おまえがに  
十五1109 ㊦ に、わかつたのですよ——うちにい  
十五1110 ㊦ にもかも見えるのですからね。」チル  
十五1115 ㊦ つことで織つたのですよ。おまえたち  
十五1125 ㊦ 着物を着ているのよ。けれど、人間に  
十五1125 ㊦ 間には見えないのさ。人間というもの  
十五1126 ㊦ んにも見えないのだからね。母親はだ  
十五1128 ㊦ きにはお金持なのですよ。もう、びん  
十五11210 ㊦ かあさんもないのさ。おかあさんたち  
十五1132 ㊦ になつてしまふのですよ。」チルチル「  
十五1146 ㊦ て、ひまがないのだよ。さあ、これで

十五1146 ㊦ ち、私に会つたのだから、あしたまた  
十五11411 ㊦ 。私も下へ行くのですよ。小さな家に  
十五11412 ㊦ 小さな家に帰るのですよ。おまえたち  
十五1151 ㊦ であがつて来たのは、これから下へ帰  
十五1156 ㊦ でも天国にいるのですよ。おかあさん  
十五1159 ㊦ いおかあさんなのだからね。おまえた  
十五11612 ㊦ 、心配しているのですよ。」母の愛あ  
十五1173 ㊦ とを、知らないのだらう。(ほかの「  
十五1179 ㊦ のは、見えないのです。」<sup>正義である</sup>「私  
十五1181 ㊦ ものは見えないのです。」<sup>この喜び</sup>「あ  
十五1184 ㊦ たちは、幸福なのですけれど、私たち  
十五1185 ㊦ は、見られないのです。」<sup>物のわか</sup>「さあ  
十五1189 ㊦ けを守っているのです。ときはまだ来  
十五1189 ㊦ きはまだ来ないのです。でも、いまに  
十五1199 ㊦ んないでいるのだな。でも、どうし  
十五1231 ㊦ たしくしなかつたのだらうと、さんねん  
の(終助) 106 の  
一505 ㊦ やつときがついたの。  
一652 ㊦ どうかしたの。  
一655 ㊦ あまの川の だいやもんど、おかあさん  
のおみやげにいただいたの。  
二539 ㊦ このりんご、じろろにいさんにいた  
いたの。  
三685 ㊦ 風はなんていつてるの。  
三741 ㊦ これ、どこからやつてきたの。  
三759 ㊦ おや、さっきのお日さまの光、どこへ  
いったの。  
三769 ㊦ じゃあ、お日さまはよその國でなに  
をするの。  
三781 ㊦ あしたの あさも、お日さまはきつと  
かえつてきてくれるの。  
三838 ㊦ あんなところにだれがかけたの。

四一七 六 わたしが 手ぬぐいをもつて、おふろへ  
いくのがみえるの。

四四九 六 どうして いけないの。

四四八 六 なにが つらいの。

四四三 六 じゃあ、かっちゃん、きょうは どこに  
ならびたいというの。

四四三 九 もう すっかり 元氣になったの。

四四三 五 りゆうぐうは、まだとおいの。

五八三 六 いさん、汽車のきつぷかったの。

五二九 六 どこで走らせているの。

五二二 六 どうして、きつぷをみるの。

五二二 四 ぼくたち、まちがっていないの。

五二二 三 にいさん、もうおりていいの。

五二二 六 きみは、どこへいくの。

五二二 八 あなたは、どこまでいくの。

五二二 二 まだほかにあるの。

五二二 四 それでうれしかったの。

五二二 二 どうとうかけなかったの。

五二二 七 でもいいの。

五二二 八 ねえさん、あれが星なの。

五二二 八 あやこさんがひっぽったの。

五二二 四 どうしてお礼をもらわなかったの。

五二二 七 きみたち、どこへいくの。

五二二 八 どうしたの、いったい。

五二二 三 きみ、どこにいたの。

五二二 四 みちこさんは雲が走っているっていうの。

五二二 六 あなたが、それを動かそうと思って動か  
しているの。

五二二 八 でも、さかさまじゃないの。

五二二 四 これ、ただしちゃんにあげるの。

五二二 九 うさぎさん、なにしているの。

五二二 七 どうしたの、たぬきさん。

七二二 五 にいちゃん、すずめはなににくるの。

七二二 八 なにしにくるの。

七二二 一〇 あおむしをとって、どうするの。

七二二 一 子すずめ、あおむしをたべるの。

七二二 四 なにしているの。

七二二 五 はい、だいこんの葉——どうして、葉を  
砂の中に立てるの。

七二二 三 先生は、あおむしがさなぎになるって、  
教えてくださらなかったの。

七二二 八 これ、死んでいるの。

七二二 七 きょうね、國語の時間に、先生にほめら  
れたの。

七二二 一 どんなふうに書いたの。

七二二 三 にいちゃん、帰っていたの。

八二二 一〇 おまえさん、なにを考えているの。

八二二 七 くもさん、あんないいお月さん、みえな  
いの。

九二二 五 どうしてねむらないの。

九二二 二 ハイ——イライナイノ——

九二二 九 キントットガ——アドコヘイッタノ

——

一〇二二 七 「イライナイ」といって、いぬにたずね  
ているのです。

一〇二二 四 「キントットガ」「アドコヘイッタノ」  
は、そのことをいいあらわしています。

一〇二二 一 おちちがはって困るの。

一〇二二 三 おとうさんの名はなんというの。

一〇二二 一〇 それで、おかあさんはどうしているの。

一〇二二 九 たいへんな進歩じゃないの。

一〇二二 七 みんなは、雪が降ったら、なにをして  
遊ぶの。

一〇二二 二 雪だるまを作るの。

一二二二 三 きみたちは、日本語を知っているの。

一二二二 五 どこで生まれたの。

一二二二 一 じゃあ、きょうのテニスの試合には、  
どちらをおうえんするの。

一二二二 二 見せたいものだって……なにを……そ  
れきみにくれたの……マンシェウの子どもが。

一二二二 六 へえ……そんなにしんせつだったの。

一二二二 七 おかあさん、おかあさんなの……

一二二二 八 満ぼう、なにが氣にさわったの、おば  
さんについてごらん。

一二二二 一〇 私たち、あそこへ行ってもいいの。

一二二二 五 小さなおかしもいけないの。

一二二二 一 へえ、あなた、ぼくを知っているの。

一二二二 七 それがおもしろいの。

一二二二 一〇 あなたはそう思うの。

一二二二 五 みんなどこへ行くの。

一二二二 一〇 あの子たちを知っているの。

一二二二 五 話をしてもいいの。

一二二二 一 このへんでは、みんなお金持なの。

一二二二 五 どこにびんぼう人がいるの。

一二二二 八 (幸福に向かい) きみはだれなの。

一二二二 九 きみ、ぼくを知らないの。

一二二二 三 おや、そうなの。

一二二二 八 ぼくのうちにも『幸福』がいるの。

一二二二 一〇 『幸福』でつまっているじゃないの。

一二二二 五 みんな、いつでもあんなにきれいな。

一二二二 九 きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。

一二二二 三 金色の雲の中に、つま先で立って、  
やっと見えるくらいのところにいる人、だれなの。

一二二二 一〇 ほかの人たちはなにをしようとしてい  
るの。

一二二二 八 なぜ横っちゃを向いたままでいるの。

十五109 12 金 まあおまえたち、ここにいたの。

十五110 12 金 それに、このきれいな着物は、まあ、  
なんでこしらえたの。

十五110 12 金 きぬなの、銀なの、それとも真珠なの。

十五110 12 金 きぬなの、銀なの、それとも真珠なの。

十五110 12 金 きぬなの、銀なの、それとも真珠なの。

十五112 2 金 いつもそれをどこにしまっているの。

十五112 3 金 それは、おとうさんがかぎをかけたあ  
の戸だなの中にはいつているの。

十五113 10 金 ここでは、うちにいるときのように、  
しごとをしないの。

十五115 12 金 でも、おまえたちは、どうしてここま  
であがって来られたの。

十五116 2 金 道が、どうしてわかったの。

十五116 4 金 あの人がつれて来てくれたの。

十五116 5 金 あの人、だれなの。

十五116 10 金 なんて、あんなに顔をかくしているの。

十五116 10 金 あの人、顔を見せることはないの。

十五119 8 金 どうしてないているの。

十五119 11 金 でも、どうしてみんな、目にいっぱい  
なみだをためているの。

の 8 ノ の

四77 6 の——のきばにすくうつばめさん。

六32 2 目だまの「の」の字がくるくるまわる。

六37 5 「の」の字のはねたさきから、雨だれのよ  
うななみだがこぼれおちる。

六109 3 「あのね」の「ノ」と「ネ」、

六109 5 金 「ノ」、「ネ」、「ニ」、「ミ」、「ム」と、自  
分で声をだして試してみると、

六109 8 金 「ノ」、「ネ」、「ニ」、「ミ」、「ム」といっ  
てみた。

六110 3 「ナ」や「ノ」のつくことばがあったら、

「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。

六110 11 「ノ」、「ネ」、「ニ」は、みんな〈略〉五十  
音の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中には  
いつている音ばかりではないか。

のう「能」(名) 10 能

十62 8 みなさんは、能というものをみたことがあ  
りますか。

十62 8 能を知らない人でも、おじいさんやおとう  
さんがおうたいになるうたいを、きいたことがあ  
るでしょう。

十63 1 能は、そのうたいにつれて、役者が美しい  
舞を舞ったり、さまざまなしぐさをしたりするも  
のですが、

十63 7 ふつうのしぼいでは、〈略〉けしようにをし  
て、その役らしく顔をこしらえあげるのですが、  
能のほうでは、めんをつけます。

十63 11 そのために、能は、めんの藝術ともいわれ、  
十64 3 能は、その中でも、もっとも日本らしい、  
すぐれたところのあるものとなっています。

十64 7 能といっしょに、狂言というものが演じら  
れます。

十64 8 そうして、能が、美しさを現わそうとする  
のところが、

十64 11 ことばも、能は、ゆう美ですが、狂言はそ  
うではありません。

十二108 9 これは能につかうお面です。

のうえん「農園」(名) 1 農園

十五123 6 楽しい六か年の思い出を残してくれたこ  
の運動場、この校舎、あの農園、

のうか「農家」(名) 2 農家

九32 6 国 ぼくがいまいる家は、山のふもとにある  
森の中の小さな農家ですが、

九78 5 もうすこしで目づかに着くというところで、  
先生は一けんの農家にたよりられました。

のうがっこう「農学校」(名) 1 農学校 じさつば  
ろのうがっこう

十一50 1 さつばろに農学校をつくられたクラーク  
先生もおっしゃった。

のうぎょう「農業」(名) 4 農業

九45 9 国 兄は、大きくなって農業をするために、  
いま知りあいの家でみならいをしています。

十一50 6 デンマルクの農業のことを勉強して、ぼ  
くは、いい農夫になろう。

十三24 7 植林が成功してから以後の農業は、すつ  
かりかわりました。

十四32 5 けれども、星をこまかく観察したことか  
ら、農業が進歩したのです。

のうさくぶつ「農作物」(名) 3 農作物

十三24 5 そのころ、ユートランドの農夫のつくつ  
た農作物は、じゃがいも・くろむぎ、そのほかわ  
ずかのものにすぎませんでした。

十三24 9 夏、しもおおりののはまったくやみ、こ  
むぎ・さとうだいこんなど、北ヨーロッパ産の農  
作物で、できないものはないまでになりました。

十三25 10 ところが、ここに、木材よりも、農作物  
よりも、とうといものが生き返りました。

のうときょうげんについて「題名」 2 能と狂言に  
ついて

十三3 9 能と狂言について

十62 7 能と狂言について

のうふ「農夫」(名) 4 農夫

八86 2 あくる朝早く、ひとりの農夫が通りかかっ  
た。

十22 10 田をならしている農夫。

十一507 デンマルクの農業のことを勉強して、ぼくは、いい農夫になろう。

十三245 そのころ、ユートランドの農夫のつくった農作物は、じやがいも・くろむぎ、そのほかわずかのものにすぎませんでした。

のうふたち 「農夫達」(名) 1 農夫たち

十三227 デンマルクの農夫たちは、「略」といって、かれにせまりました。

のうめん (題名) 1 能面

のうりよく 「能力」(名) 1 能力

十五744 兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力のちがいは別として、

のうりんいちこう 「農林一号」(名) 1 農林1こう

八944 品種は、あじのよい「農林1こう」というのだそうです。

のき 「軒」(名) 3 のき

六475 園 やまが、草屋のきまでたれて、かきはすずなり、夕がらす。

十188 わら屋根のきから、たきのように落ちる雨水。

十2711 くもがのきに巣をかけることがあれば、果のほりかたなどを、しらべておきたいと思ひます。

のきさき 「軒先」(名) 1 のき先

十五461 ひくい屋根も、あけはなした店も、のき先にかかっているおもしろいかんばんも、かれには、みなめずらしいものばかりであった。

のきした 「軒下」(名) 3 のき下

九242 ある家ののき下で果をつくったつばめは、來年また、同じ果へもどってくるというのです。

九2410 あの家とのき下につくった古果がなつかしいのでしよう。

九4311 ほしいがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしにとおし、のき下につるしてくれます。

のきば 「軒端」(名) 1 のきば

四776 のきばにすくうつばめさん。

のけものあつかい 「除者扱」(名) 1 のけものあつかい

八836 すがたがみつともないので、いろいろな動物たちからのけものあつかいにされた。

のける 「除」(下) 1 のける 《一ケ》↓かきのける・つきける・とりのける

八689 園 あの一わをのけたほかは、みんないい子だ。

のこ ↓いとこのこ・おおのこのこ

のこぎり (題名) 1 のこぎり

十二671 のこぎり

のこぎり 「鋸」(名) 11 のこぎり

三359 園 のこぎりをひいている人もあります。

五10810 近いところに製材所ができて、のこぎりのやかましい音が、あさからばんまでびきました。

十二672 のこぎりには、はがある。

十二673 のこぎりは、いぬの歯のようにとがって、一つおきに右と左にすこしよじれて、二十も三十も続いている。

十二678 のこぎりは、いつもやすりをかけて右と左によじっておかないと、なんの役にもたない。

十二682 のこぎりは、あつみをもっている。

十二684 大きなたい物を切るのこぎりは、大きくてあつい。

十二685 小さなやわらかい物を切るのこぎりは、小さくてうすい。

十二688 まっすぐに長く切るのこぎりは、廣いは

ばをもっている。

十二6810 製材所のまいるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。

十二692 はたらきのある人は、はをもったのこぎりににている。

のこし ↓たべのこし

のこす 「残」(五) 13 のこす 残す 《一サ・一シ》 ↓いいのこす・かきのこす・たべのこす・とりのこす

三1154 かぐやひめは、《略》、みかどへおわかれの手紙とふしのくすりをのこしました。

六404 30 のこされたかしの大写真し。

七206 園 そのうち、たねをとるために、一本だけのこしておきました。

八1015 5 かぶをのこして、ほとんど85cmになりました。

十131 園 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國にのこしておいてきました。

十一925 園 ぼく、記念に、この死んだ人にのこしていきます。

十二503 首のところだけのこして、もんだ紙のりをつけないで、上から上からかぶせる。

十三213 ユートランドのあれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力さへ、のこしていませんでした。

十三615 園 自由にふでをふるって、りっぱな作品をたくさんのかしたのはいえらいよ。

十四512 かが、《略》、ふるさとにのこした母へ送ったつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。

十五488 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考え、自分でまず、焼くしごとからはじめた。

十五66 10 十の春をむかえた私は、母や多くの弟妹たちをあとに残し、〈略〉京都に移った。

十五123 5 楽しい六か年の思い出を残してくれたこの運動場、この校舎、あの農園、

のこり「残」(名) 2 のこり

九22 13 十月一日 飛行機で 一千六百ば 二日 同じく 九百九十ば 五日 同じく のこりの三十九わ

十二60 12 それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。

のこる「残」(四五) 25 のこる 残る 《ツツーラー・リール》

三15 7 しかたがありませんから、はんたかは門のそとにのこりました。

三72 3 やはりゆかにのこっています。

三98 1 紙にかいたものは、いつまでも のこります。

三98 3 紙にかいたおはなしは、いつまでも のこります。

三105 5 さいごまで どうしても あきらめない 人が、なんんかのこりました。

五39 4 山のとつべんには、まだ雪がのこっています。

七51 11 のこったものがふんとうした。

七84 1 草をくいとったあとをみますと、かみきれないで、のこっている葉がありました。

七96 3 1びきのこらず、じょうぶにそでてたいと思います。

八59 3 すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。

八62 4 いちばん大きなたまごがまだのこっている。

八109 2 のこっていたもみを、1日、日光にかんか

んほして、すぐにもみすりをしてみました。

十39 7 うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功するわけであったが、

十58 12 私は、のこったのをおし葉にしました。

十一28 2 さかわ川がまたあふれて、のこっていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。

十三10 3 今日でも、まだ、そうした考えがのこっている。

十三19 5 こんどは、のこった土地の大部分をしめるユートランドのあれ地と戦い、

十三22 2 しかし、問題はまだのこっています。

十四7 2 自分にはまだ子どもたちがのこっている、

十四9 2 この世の中には、まだ幸福がのこっている、なぜかといえ、妹にしても、私にしても、心からおかあさんを愛しているからだ、

十四14 2 おとうさんに対しては、〈略〉、このうゑもなく純眞な思い出がのこっています。

十四64 8 雲が消えてしまったあとには、いまいった、ちりのようなものばかりがのこっていて、

十四97 9 ああ、そのときもとき、ちょうどマッチはもえつくしてしまって、女の子のそばには、あ

つい、かたいかべしかのこっていません。

十五7 4 息白しいつまで残る明星ぞ

十五96 3 あれだけ残っていればいいや。

のせる「乗」(下) 21 のせる 乗せる 《一セル》

二13 6 おさらにのせてかざりました。

二45 10 手の上にごむまりをのせているね。

三102 1 「〈略〉。」と、てのひらにのせて かえりました。

四28 2 ぼくをのせてくれないかな。

五21 4 一だいの長い電車が、おきやくをいっぱい乗せて、終点につきました。

五30 5 その荷物は〈略〉おもかったのですが、ぼくは、かたへのせて持っていきました。

五49 8 のたりのたりとわたし船、かふんやそよ風のせてでる。

五50 1 子どもや荷物のせてでる。

五52 6 ゆうごはんをまつあいだ、私は、まさこをうば車に乗せて、はるおと大通りにでました。

六120 8 ぼくは、だいに本ばこの上にのせておきました。

七10 5 渡し終ると、またひき返して、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。

八5 10 一わずつつかみだしては指さきへとまらせたり、かたへ乗せたり、

九22 1 つばめをのせた飛行機は、〈略〉、アルプスをこえてヴェニスへとんでいきました。

九76 9 先生が、リヤカーに、はこやかごなどをのせておいでになりました。

十38 2 一つぶの天然眞珠をてのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者があった。

十一5 6 ついせんだって、大学生に頼んで乗せてもらったうれしさで、まだむちゅうになっている

十一11 7 頼んで乗せてもらおう。」子どもたちは、いっさんにボートの方へかけていった。

十三33 3 大きな水おけをのせた一輪車が、「キリ

キリ、リリリリ」ときしみながら、

十四13 4 それは、コップの上からコーヒーこしをとったとき、それをのせるためなのです。

十五27 9 大わしは、少年をせにのせ、少女を下にさげて、〈略〉、下へ下へとおりて行きました。



十五718 人力車に乗ったおばさんは、昔のように私をひざにのせた。

のぞきこむ 「覗込」(五) 4 のぞきこむ 《—ミ—ム—ン》

三1041 かきねの上からのびあがつてみたり、へいのすきまからのぞきこんだりしました。

九974 たかぎ、それをのぞきこむ。

十78 足ばやにかけぬけていつて、てんでに、おとうさんの顔をのぞきこむようにしました。

十五435 ウインドにかざられてあるさらやはちをしげしげとのぞきこみながら、

のぞく 「除」(五) 1 のぞく 《—カ》 ↓ とりのぞく

十三253 しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水の害がのぞかれたので、

のぞく 「覗」(五) 18 のぞく 《—イ—カ—キ—ク》

一473 おじいさんは、わたくしをむしめがねでのぞいてみながらいました。

三747 窓 まどからのぞいてごらん。

五572 はるおは、のぞいていましたが、かげんがわからないようです。

六998 ぼくは、この二つをかさねたりべつべつにしたりして、つくえの上をみたりそとのけしきをのぞいたりしていた。

六1004 けしきを、大きくしてみようと思って、右の手に虫めがねを持って、のぞいてみた。

六1024 ぼくはこうひとりごとをいいながら、そとをのぞいてみた。

六1038 そうして、ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。

六1044 ぼくとおかあさんは、かわるがわるこの望

遠鏡をのぞいて楽しんだ。

六1394 とらさんは、そつと首をのぼして、うさぎさんたちの方をのぞきました。

七711 かいだんをトントンあがつてみたり、ことうどうをのぞいてみたり、

八54 大ぜい人が立っているの、なんだろうとのぞいてみると、

八592 ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠鏡をのぞいてみた。

九822 ぼくらは、ときどき手をとめて、そこをのぞきにいつてみると、

九10211 やまだたかぎの首をのぞきながら、「でも、みてあげよう。」

十2111 窓をのぞく子どものはればれした顔。

十541 妹は、そこへいつて、水おけのふちにつかまって、水の中をのぞきました。

十二144 まだ青々とした木の葉の中から大きくのぞいているのいい。

十三58 あさい水には、あしのめがすくすくと、するどい角をのぞかせた。

のぞその (副) 1 のぞその

九14010 くもはのぞそのと歩きました。

のぞましい 「望」(形) 1 望ましい 《—イ》

十三525 それで、わたしは望ましい、わたしの日々が、自然をしたう心で、一日一日と、むすばれていくように。

のぞみ 「望」(名) 6 望み

十4410 幸吉は、望みをかけた第一の母貝を開いてみた。

十一502 窓 「青年よ、大きな望みをもて。」

十一757 窓 だいぶんわるいけれど、まだ望みがある。

十一7712 そこで、少年は、自分をなぐさめて望みをかけはじめました。

十二477 窓 命のない人形を思うままに動かして、喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。

十二6012 それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。

のぞむ 「望」(五) 2 のぞむ 望む 《—ム—ン—

八855 どうして、あの鳥のもっているような美しさをもつたらなど望むことができよう。

十五5412 博物館をたずねたおもな用事は、世界の学者がだれものぞんでいるカーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらうことで、

のぞむ 「臨」(五) 1 のぞむ 《—ム》

十二823 五月、六月、七月、八月の四ヶ月にわたって、十一ヶ國のテニス選手をなきたおした清水選手は、最後の決勝戦にのぞむことになりました。

のそりのそり (副) 2 のそりのそり

六1402 のそり、のそり、そばに歩いてきました。

十539 ふり向くと、いぬは、立ちあがつて、のそりのそりと、どこかへいくところでした。

のだせんせい 「先生」(人名) 8 のだ先生

九1042 ぼくたち四十人は、のだ先生といしい先生につれられて、山のスキー場へいった。

九1054 のだ先生が先頭に立たれ、いしい先生は、みんなのあとからこられた。

九10510 きゆうな坂にかかると、まえの方で、のだ先生が、「(略)。」と、大きな声をかけられる。

九1073 のだ先生がつえでさされる方をみると、なるほどりっぱなスキー場で、ジャンプ台もみえる。

九1087 のだ先生が、「(略)。」といわれた。

九一〇 だ先生がさきに、すぐつづいていい先生がすべられる。

九一二 こんどは、のだ先生がとばれるばんである。

九一八 〔副〕「のだ先生。」と、だれかがさげんだ。

五九四 〔副〕のたりのたりとわたし船、なの花ざかりの岸をでる。

五九七 〔副〕のたりのたりとわたし船、かふんやそよ風のせてでる。

五五二 〔副〕のたりのたりとわたし船、おもさにゆれゆれ岸をでる。

のち〔後〕(名) 27 のち

三二九 そののち、はやとりは、たくさん米や、麦や、豆をつんで、海をわたりました。

三〇八 そののち、みかどからたびたび お手紙をくださいましたので、

三二六 みかどは、そののち いつまでも、かぐやひめをおすれになることができませんでした。

七八四 五月六日 (日) 雨のち晴 15度

七九二 七月二十日 (金) 雨のちくもり 22度

七九三 八月二日 (木) くもりのち晴 29度

七九四 九月六日 (木) くもりのち晴 29度

七九七 十一月二日 (日) 晴のちくもり 17度

八六二 私、すっかりひきこまれて、しばらく見物したのち、その一わを買い、

八七二 それからのちは、わるくなるばかりであった。

八八〇 八月十八日 (出) くもりのち雨 25度

八八三 九月二十九日 (出) くもりのち雨 23度

八八六 十一月十九日 (日) 晴のちくもり 18度

九四六 たかぎ しばらくして持っているすみに氣

がつき、ちよつとためらったのち、「略」。

三九一 このわか者こそ、のちに眞珠王として世界に知られた御本幸吉であつた。

四六二 そののち、幸吉は、日ごろそんけいしていたエジソンのもとをたずねて、

二七八 それからのちになつて、道灌は少女の心がわりました。

二四二 そののち、ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。

二五八 もしそれができなかつたら、これからのちは、けつして村へでてきてはならない、

二五八 おには約そくをまもつて、そののちはもう田畑を荒らすようなことはなくなつた。

二六二 そののちは、だれがなんと頼んでも、かしてくれなくなつたという。

二五五 だから、これからのちも、新しいものが世の中にできてくると、ことばも、それにつれて、新しく生まれるものであることが、考えられる。

二六二 西洋医学は、はじめオランダからはいり、そののちはドイツ医学がおもに傳つたとうかがつたが、

二七八 そののち、氣をつけて、おけ屋さんなどのやつているところを見ると、

二五五 〔文〕遠くそののち かしの木に、矢はまだおれでとどまりぬ。

二五五 私、しばらくためらつたのち、意を決して大きなドアをコツコツとノックした。

二五八 〔文〕かれこそ、のちに名をなした新島襄だよ。

ノックする (サ変) 1 ノックする 《一シ》

二五五 私、しばらくためらつたのち、意を決して大きなドアをコツコツとノックした。

のっそり (副) 2 のっそり

六三三 しかさんは、のっそりと立つて、山の方をみあげました。

七〇四 くれがたの庭そうじ、それがすむのをまつていたのか、すぐうしろに、月は、音もなく、のっそりとでていた。

ので (接助) 196 ので

一五二 すずしい かげが ふきこんで きたので、目がさめました。

二八三 「略」と、へんな こえで いつたので、みんな わりました。

二二五 しまいまで みて いたいとおもいましたが、かねがなつたので、やめてきました。

二三三 すのおそうじをするので、はとをだいていたら、たいへんあついとおもいました。

二四五 あんまりいろいろにいてるので、ぼくははじめきが つきませんでした。

二三七 めくらが、ひとりびとり かつてなことをいうので、ぞうつかいは、わらいながらいつてしまいました。

二六九 あれは 門の そとに いますので、このはちを わたくしにとだけようとして、手をこまでのぼしたのです。

二四三 ある日、はまべに みてみると、わにざめが いましたので、これは いいと 思つて、「略」といいました。

二四八 にいさまがたの おもい ふくろを せおつて いらつしたので、おそく おなりになつたのです。

二六九 「略」と、おとうさんが おつしたので、みんなは 空を みあげました。

二七四 むちゅうで あそんで いましたので、だれ

ひとり、上をみたりまわりをみたりするひまありませんでした。

三102 10 そのうつくしさはたとえようもなく家のすみずみまで 光りかがやくほどなので、「かぐやひめ」という名をつけました。

三108 9 そののち、みかどからたびたび お手紙をくださいましたので、かぐやひめも、そのたびにごへんじをさしあげておりました。

三111 2 あまりしんばいしましたので、かみのけが白くなり、こしもまがつてしまいました。

三116 4 そうして、ふしのくすりと 手紙は、かえってかなしみをますたねになるばかりでしたので、あるとき、「へ略。」と、おつきのものにおたずねになりました。

四19 6 先生がこうおっしゃったので、みんなはそれぞれあいての人をきめてから、文を書きました。

四32 8 雨がびしゃびしゃふるので、わたくしは、かさをさしかけてあげました。

四48 3 その山のふもとには、大きな木がしげっているの、そこをよけてとびました。

四54 10 かっちゃんねつがでてきたので、みんながかわるがわる、つめたい 水で、あたまをひやしてやりました。

四57 2 かっちゃんが、立ちあがって はばたきをしたので、みんなは大よろこびでした。

四60 8 しかたがないので、二十九わの がんは、テーブルのまわりにあつまりました。

四62 8 さすがのへびも、いきがくるしくなったので、力をゆるめました。

四64 6 かっちゃんが、わびるように ちょこんとあたまをさげたので、みんなもわらいました。

四84 2 「へ略。」といったので、ねえさんがわらいました。

四85 9 「へ略。」と、大きな声でいったので、みんながわらいました。

四87 1 冬がきたので、よろこんで ないた。

四103 2 かめがよびかけても、うらしまは、いっしんにつりをしてるので、気がつきません。

四110 9 いや、ちょうどとおりがかったところでしたので。

四114 9 あまり長くなりますので、もう、おいとましようと思います。

四115 5 でも、うちのことも 氣にかかりますので、かえらせていただきます。

五17 4 ぼくは遠いところへいくんだけど、あて名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。

五21 5 あまりこんでいきましたので、みんな、ぶつぶつとこことをいながら、出口の方へでいきました。

五30 9 その人は、「へ略。」ときいたので、ぼくは、「へ略。」といいました。

五53 1 まさこが、「へ略。」というので、西の方をみると、

五56 7 じゅんばんがきたので、みせていただきます。

五57 6 あんまり大きな声をだしたので、あたりの人がわらいました。

五81 1 「へ略。」と、いってとびあがったので、みんなわらいました。

五83 8 「へ略。」とわらいだしたので、みんな、いっぺんにわらってしまいました。

五91 7 このたけのこが、えんの下にあたまをだしたので、「へ略。」とたずねると、

五98 10 バタバタと音がしましたので、みんながとびおきてみると、

五104 2 みそささいが、くらしい木の中からきたので、ひわが、「へ略。」と鳴きました。

六8 4 男の子はゆびさきでそれをつまもうとしたが、あまり小さいのでつまめなかった。

六9 11 三人はさんざんさがしまわったが、みつからないのがっかりした。

六10 3 そのとき、いままで雲にかくれていたたいようがおをだしたので、日光が店いっぱいにさしこんできた。

六15 7 木の葉の船は波に流されて、川の岸につきましたので、ありは、ぶじに岸にあがることができました。

六16 10 小さなありでも、力まかせにかんだので、かりうどもびっくりして、

六63 4 弟がせきがでるので、おかあさんはゆたんぽをいれている。

六73 4 「へ略。」と、とんでもない話もちだしたので、みんながわらいました。

六92 11 兄のだいじなつりばりなので、私も困ってしまいました。

六94 2 たいだけは、病氣でねておりますので、ここへはまいっておりません。

六104 8 ねつはないので、ねているわけではない。

六105 4 「へ略。」ときこえたので、にいさんが、「へ略。」と、いって、みんなで大わらいをした。

六107 3 「へ略。」と、いって、みんなは、これで大わらいとなった。

六110 9 新しいことがあたまにうかんだので、もうそんなことはどうでもよくなってしまった。

六116 1 ほんとうにほしそうな口ぶりなので、

「作ってあげようか。」といいますと、  
 六119 7 はりつけるのも、まがっているのめんど  
 うでしたが、  
 六119 9 やつとできたので、おかつてにいらっし  
 るおかあさんのところへとんでいって、「略。」  
 といっておみせしました。  
 六128 9 一ぴきのうさぎさんが、あわててにげたの  
 で、トンネルのさか道に足をすべらせて、  
 六130 5 たぬきさんが、ま顔になっていうので、う  
 さぎさんたちは、たぬきさんがかわいそうにな  
 りました。  
 六139 1 とらさんは、晝ねをしていたのですが、う  
 さぎさんたちがあまりガヤガヤ話をするので、目  
 をさましてしまいました。  
 七37 8 「略。」といったので、みんながわつと  
 わりました。  
 七38 5 うしろのおばさんがいってくれましたので、  
 私は、人と人のあいだをかきわけていこうとしま  
 した。  
 七38 8 しかし、弟の手をひいているので、ひとあ  
 しすすむにも、よいいではありません。  
 七41 7 汽車は、かなり早く走っているの、青年  
 のからだはゆれていたが、ひく手にくるいはな  
 かった。  
 七49 1 ぼくのほうは、センターが外野へでてし  
 まったので、あいてのセンターが、「勝つ、勝  
 つ。」とさわいだ。  
 七49 4 それで、内野の人はいっしんになったので、  
 かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。  
 七83 9 ㊦ それは、かた方の足あとが、一つおきに  
 あさくなっていました。  
 七91 3 このごろは天気がわるいので、うさぎは、

元氣がありません。  
 七92 4 茶色のうさぎは、おくへはいってでてこな  
 いので、「略」、だきあげて、そとへだしました。  
 七93 6 茶色のうさぎがはいっているへやに、えさ  
 がなかったの、かこいの鉄ぼうを、かじってい  
 ました。  
 七94 6 お晝に、うさぎのところへいってみたら、  
 暑いのでねむっていました。  
 七95 2 寒くなったので、むしろで戸をこしらえて  
 やりました。  
 七99 8 よいぐあいに、みんな元氣よくそだってい  
 るので、安心しました。  
 八54 大ぜい人が立っているの、なんだろうと  
 のぞいてみると、  
 八14 6 親ぜみが、「略」、かたい皮にあなをあけて、  
 ていねいに生みつけておいてくれましたので、寒  
 い冬もぶじにこすことができました。  
 八21 5 皮がこわばっていて不自由だし、目もよく  
 はみえないらしいので、ねこや、すずめにみつ  
 けられたらいへんです。  
 八31 6 ところが、はたおりひめは、あまりうれし  
 いので、はたをおることをわすれてしまいました。  
 八62 10 ㊦ なかなかわれないのね。  
 八69 10 ㊦ たまごの中にあんまり長くいたので、あ  
 んなふうになっただけですよ。  
 八70 9 すがたがみつともないばかりに、みんなか  
 らしかりとばされるので、しみじみとなさけなく  
 思った。  
 八75 7 ㊦ 自分がみにくいので、いぬもかみつこう  
 としない。  
 八76 10 風がひどいので、あひるの子は立つことも  
 できず、

八77 6 小屋の入口の戸がすこしあいているのをみ  
 つけたので、そこから中へはいっていった。  
 八80 8 あひるの子は、きゅうにおよぎたくなっ  
 たので、にわとりに思わずその話をした。  
 八83 5 すがたがみつともないので、いろいろな動  
 物たちからのけものあつかいにされた。  
 八86 7 たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、  
 おかみさんは手をたたいておこった。  
 八87 3 おりよく戸があいていたので、あひるの子  
 は、雪の中の草むらへはいりこんだ。  
 八93 1 どうしていいのかわからないので、つばさ  
 の中に頭をかくした。  
 八94 6 ういたもみがあったので、手ですくってみ  
 ますと、かるいもみともみがらばかりでした。  
 八96 1 きょうは、お天気がいいので、もみまきを  
 しました。  
 八98 4 田植えのころになったので、しろかきをし  
 ました。  
 八98 9 いよいよきょうは田植えでしたので、みん  
 なうれしそうでした。  
 八100 7 根が横へはるので、廣いところのほうが育  
 ちがよいと思いました。  
 八101 2 ずっと日やりがつづいたので、水をやると  
 うれしそうです。  
 八108 7 きかいがないのでくふうしました。  
 九20 9 そのとき、あいていた家がけんあつたの  
 で、協会では、おおいそぎで、その家をつぶめた  
 ちのためにぐあいよくつくりなおしました。  
 九32 3 ㊦ ぼくは、こちらへきてから、おとなと  
 いっしょに畑にでたり、山へたきぎをとりにいっ  
 たりするので、まえより元氣で、  
 九33 7 ㊦ 黒くてひらたい貝がとれますので、なん

ども湖に近い川しもの方へとりにいきました。  
九33 村の子どもがきょうそうでとりにいくので、たいそうにぎやかです。

九34 ちよまはふる力の強い草なので、どんな小さな根つこでも、すっかりとりのぞいておかないといけないといわれて、ほねをおりました。

九38 高いすぎやまつのはえているところは、晝でもうすぐらく、日があたらないので、雨の降ったあとのようにぬれています。

九39 はじめ、その竹ざおにかまをつけてやる方法を知らなかったので、〈略〉、兄かぼくがのぼる役をひきうけました。

九39 のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず木にしがみついたりしました。

九40 木が動くので、かれ枝はなかなかたたき落せませんでした。

九44 いそぐ用事だったので、先生にだけお目にかかってすぐ帰りました。

九58 その声が、あんまり力がなく、あわれにきこえたので、いちろうはあわてていました。

九60 おとといからめんどうなあらそいがおこって、ちよと裁判に困りましたので、あなたのお考えをうかがいたいと思いました。

九65 ぎよしゃがむちをヒュウパチッと鳴らしたので、どんぐりどもはやっとしずまりました。

九76 先生が、町角までいって、待っているようにとおっしゃったので、〈略〉、角のむきみ屋のところに集まっていました。

九93 しかし、自分の物ではないので、それを舞台のおくになげすて、

九93 新しいすみをひろいあげるが、自分の物ではないので、なおあたりをさがしている。

九104 まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、スキーをするには、ちようどよかった。

九105 はじめは二列ですすんだが、谷あいでは一列になったので、ずいぶん列が長かった。

九112 お晝になったので、雪の上で楽しくおべんとうをたべた。

九130 風が思いたしたようにふいてくるので、あみがゆれ、くももいっしょにゆれました。

九132 ぐずぐずしていると、そのまたべられるので、みつばちはだいじん針をだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。

九143 くもは、なんといって返事をしていたからないので、そのまままっています。

九171 こんなにうるさくついてこられたときには、おとうさんも困りましたので、子どもをさけて通ったこともありました。

九171 「〈略〉。」と、また太郎がたずねましたので、おとうさんは答えました。

九313 ぼくがいるので、みんな楽しい気持ちになるようにできないものでしょうか。

九428 半円眞珠が思いどおりに取れるようになったので、ひとまずこれを加工して、かざり物として、ともかく、世にだすようになった。

九477 家から十二三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるので、そこへつれていこうと思ったのです。

九485 べつにいそぐこともありませんでしたので、妹の気のすむようにして、つれていきました。

九506 黒いいぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、妹はびっくりして、

九519 いぬは、ふり向かないので、たべるように、「オハナシテ」という心らしいのです。

十62 二階の窓からそとをみたら、大きな竹がよつきりでいたので、びっくりしました。

十65 おかみさんをもらえば、〈略〉、着物をきせたり、おこづかいをやったりしなければならいので、ずっと、ひとりてくらしていました。

十19 さかわ川の大水で、田や畑をみんな流されたりしたので、いつのまにかびんぼうになって、その日のくらしにも困るようになりました。

十21 父親が病気でねていたので、金次郎が、そのかわりにでることになりました。

十215 金次郎は、年のわりにからだが大きかったし、働きつけているので、役にたたないことはありませんでした。

十217 すこしも休まず働くので、かえって、おとなよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十2110 しごとがじゅうぶんできないので、金次郎は、ほかの人たちにすまないと思いました。

十278 中には、正月だというので、そのうえに十二文はすむ者もありましたが、

十434 弟が卒業するので、私が、母にかわってました。

十517 しかし、風がはげしいので、すぐさをつぼめてしまった。

十623 ぼくはくやしくなったので、なに、このくらしいことがこわいものかと、自分からさきになって渡ってしまったのです。

十642 にわかに病氣にかかって入院したので、家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。

十6411 母親は、〈略〉、家をあげることができないので、長男にいくらかのお金を持たせ、父親の

看病のために、ナポリへよこしたのですした。

十一724 そのとき、少年は、かるい手がふとかたにさわったので、びっくりしてとびあがりました。

十一808 それが、ときにはいかにもはつきりとなりましたので、少年は希望に力づけられながら、

十二65 すると、にわか雨が降りだしたので、近くの家をたずねて雨具をかりることにしました。

十二611 おくからひとりの少女がでてきましたので、「略。」とたのみました。

十二84 家をはなれて勉強にでかけていましたが、ある日のこと、母親がなつかしくなり、会いたくなかったので、学校から家へもどってきました。

十二195 園 いや、わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがっておいでだろうと思いましたが

十二211 園 でも、あなたの歌には、そのさびしい氣持がでているので、人の心を動かすのだから、あのピアノの先生がおっしゃいましたよ。

十二233 せまい家なので、兄は氣のどくだといつて、いつもえんりよがちにしています。

十二2310 近所の荒れ地を三アールばかりかいこんで、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、さしあたり困ることはありません。

十二254 姉が、いそがしいので、おしめカバーをさせたままほっておくと、

十二259 はじめはいやがっていた民ちゃんも、よごれていないほうが氣持がいいので、ときどき、〈略〉、わたしに知らせるようになりました。

十二325 私は、近づいてくる足音を感じましたので、それが母だとばかり思いこんで、両手をさしだしました。

十二361 先生がぼうしを持ってきてくださったので、私は暖かい日なたにでかけるのだと知って、

十二3611 だれかが水をくみあげていたので、先生は私の手をといの口の下へやりました。

十二388 自分のしたことがわかったので、〈略〉、くやむ心と悲しみに胸をさされました。

十二403 みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、〈略〉、かんしゃくもちになったのもむりはありません。

十二579 昔、神山のおくにおが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、村の人たちは困りはて、

十二5910 ある年の夏、きょうは長者の家の田植えだといので、里のおとめたちは、赤いたすきもかいがいしく、朝から集まってきた。

十二604 里の人たちはおどろいたが、いいだしたことはあとへひかないので、おとめの数をまして、田植え歌勇ましく、一心にはたらいだ。

十二631 小魚はしおからかったので、のどがかわいてたまらない。

十二709 芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、家もせまいので、自分は、その近所に別に家をかりて住むことにしました。

十二718 芭蕉はからだがいよいので、寒さは身にこたえましたが、雪をみるのが楽しみでした。

十二7411 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重いのので、二三日は困ることもあります。

十二777 時間がせまったので、私はユニホームをつけて、練習のためにコートにでました。

十二788 あまりかわいい少年だったので、よくみていますと、

十二789 どこかしら日本人らしいところもあるので、〈略〉とたずねました。

十二863 チルデン選手は、〈略〉、やわらかなボー

ルだったので、無事に受け返すことができ、

十二951 弟にせがまれて、赤とんぼをとりにでかけたが、道ばたに野はぎがさいっていたので、赤とんぼはとらずに、花を手についたついで帰った

十二955 だれも話し相手がないので、しよんぼりと校庭に立っていると、

十二1002 土器には、なわ目のようがあるので、じょうもん式土器といっています。

十二1011 この式の土器は、はじめ、東京のやよい町から発見されたので、やよい式土器という名まえがつけられています。

十三158 そのころの教会のぼうさんたちは、天動説を信じていたので、ガリレオを呼びだし、その説を人に教えてはならない、といいました。

十三162 ガリレオは、年をとってもいたし、めくらにもなりかけていたので、やむを得ず自分の説はあやまりであったということにして、

十三226 アルプス産の小もみを植えたので、かれるのはふせがれましたが、

十三253 しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水の害がのぞかれたので、すたれた都市はふたたびおこり、新しい町村が〈略〉生まれました。

十三268 この家も、高い土べいを立てめぐらしているのので、小路は、おのずから高い土べい続きになっている。

十三311 「ジャン、ジャン、ジャン」と、はげしくたたいておいて、てのひらで、きゅうにどらをおさえるので、「ジャン、ジャン、ジャッ」というように聞える。

十三319 さるまわしは、さるをつかったり、せりふをいったり、はやしをいれたりしなければならぬので、なかなかいそがしい。

十三33 8 夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからないほどである。

十三55 2 喜んでむかえてくださったので、先生からいただいた絵はがきをだして見せますと、

十三58 1 赤いところが黒くなったりするので、どうもよくない。

十四22 11 それから、タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、外国語であったとお話になったので、私たちは、いよいよおどろいた。

十四23 4 「略。」とおっしゃったので、みんなは口々に、「略。」と、そくさに答えた。

十四71 11 そのひえかたがどこも同じではないので、ところどころ特別につめたいむらができます。

十四75 8 畑のほうに、森よりも、日光のためによいあたためられるので、畑では空気がのぼり、森ではくだっています。

十四90 8 その上ぐつは、母親のものでしたので、この子にとっては大きすぎた。

十四90 9 二台の荷馬車が来たので、それをさけるために、急いで道を横ぎったときに、

十四92 8 まだ一銭ももうけてはいないので、父親が、きつとひどくしかるにきまっていた。

十四93 9 ひもじいので、そんなことを思った。

十四100 6 そうして、おばあさんが見えなくなつては困ると思ったので、急いで、たばの中にあつたマッチをみんな一時につけた。

十五25 10 さすがの大わしも、十六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなつて、

十五28 6 少年は、あぶないことが近づいたと感じたので、「略」、右手をはなして、手早く、自分のこしにさしていた短刀をぬいて、

十五45 4 徳川時代の長いしきたりが、明治になつ

てすっかりようすを変えてしまったので、それまでのものの考えかたや商賣では、ふだんの生活さえむずかしくなってきた。

十五56 3 園 そのときは、まだ三角測量が行われていなかったもので、富士山の高さも不明であつた。

十五65 10 朝早くからそれをガラガラとひきまわすので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。

十五73 8 眞夏であつたので、博士の家族たちは暑さをどこかにさけて、家の中はがらんとしていた。

十五73 10 やがてお書どきになったので、廣い食堂にみちびかれ、

十五122 11 森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合奏など、はじめてのことなので、ほんとうにうれしく思いました。

のど「喉」(名) 13 のど

六13 4 あつい日中の道を、ものを選びながら歩いてくると、のどがかわきました。

六96 6 園 つりばりをのどにかけまして、たいへん苦しんでいるところでございます。

六96 10 園 たいののどから、つりばりをとつておやり。

八77 10 ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだすこととさえてきた。

八78 6 ねこはのどを鳴らし、にわとりは「へ略。」とさわいだ。

八80 1 園 おまえさん、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだしたりすることができ

るかい。

八81 2 園 のどを鳴らすか、たまごを生みなさい。

八82 11 園 たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火花をだすことを、せいでして勉強するのだね。

えながら。

十二62 9 ある日のこと、八郎が山でしごとをしていると、のどがかわいてきた。

十二63 1 小魚はしおからかったもので、のどがかわいてたまらない。

十二63 2 いくら飲んでものどのかわきがとまらなかつた。

十五87 9 園 このなかまは、『のどのかわいていないときに物を飲む幸福』と、『腹のへらないときに物をたべる幸福』で、ふたりはふたごで、

のどか「長閑」(形状) 2 のどか

十三7 1 ああ、そのさかな春のきざしは、よもにあらわれて、目に見えぬかすみのようにたなびいている、のどかな午前。

十三7 6 ああ、季節のこういうのどかなとき、こ

ういうしずかな午前にあつて考える、

のど(接助) 23 のどにそれなのに

二18 7 園 いちにちに二へんあるのに、いちねんに一ぺんしかないものはなあに。

二22 5 園 よしこさんのは、『いろはにほ』しかないのに、わたくしのは、『いろはにほへ』までもありました。

二30 7 園 みんな わたつたはずなのに、どうしたのだろう。

三113 9 園 いつまでもおそばにいて、こうこうをしたいと思ひましたのに、ほんとうにおなごりおしゅうございます。

五25 5 園 はじめは、電車の中は、まるでにらめっこをしているようだったのに、それから、みんなにこにこして、友だちのようになくなって、

五55 2 三十分ぐらいいしかなかったのに、もうすっかりくらくらなっていて、空いちめんに、

星がでていました。

六463 北風、からかぜ、寒いのに、おちばの、おちばの子どもたち、じゃんけんばらばら かけていく。

七67 えんどうの花が、風もないのにゆれている。  
八2810 ほかのむすめたちは、野原で遊んでいるのに、うちのむすめは、こうしてはたらきつづけているのは感心なことだ。

十一217 ほかの人たちは休んだりむだ話をしているのに、金次郎は、すこしも休まず働くので、  
十一2410 「もうおそいから。」というのに、その晩のうちに、子どもをつれてきました。

十二201 二三年は、青い小さな実が、ほんの二つ三つ、ついたりつかなくなったりだったのに、このごろでは、いつも美しい実をならせることができるようになりました。

十二7112 まだなにも降ってきもしないのに、「雪やこんこん、〈略〉。」などと、はやしたてていました。

十二7510 こんなに降るのによくきたな。

十三114 他のこととの間に、すこしのつながりもなく、原因と結果との関係もないのに、一つのことは他のことの原因であると、信ずるのである。

十三181 もともとせまい、小さな國ですのに、そのもともともよい土地を失いました。

十四479 たいていの人は、しょうとつのときにあわてふためいて、そのためにかえって波にのまれてしまったのに、こんなきけんのせまった中で、なんというおちついた〈略〉ほがらかな人だろう。  
十四481 自分なんか、およいでいるだけがせいぜいなのに、こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。

十四783 もとのほうから割ろうとすると、〈略〉、

まっすぐに割ることができなかったのに、〈略〉、竹の先のほうから割ってみると、もともとで、きれいにまっすぐに割ることができました。

十四923 おおみそかの晩だというのに、その子は、まだマツチをすこしも賣ってはいなかった。

十五6211 おじさんのくつは光っているのに、ぼうやのくつはほこりだらけだから、

十五6912 その写真の主が、こうしておじさんを見てあげているのに、おじさんの声は聞えないのだ。

十五929 来いというのに聞えないのかい。

のに(終助) 4 のに

四466 おとといは、一ばん せんとうに してくれていったのに。

五675 せめて、おけの一つも、もらってくればよかったのに。

七613 うす黒い雲は、どこかへいつてしまったのに。

十五1142 おまえのせわをしているときは、いつだってこんなに白くなって、光がさすのにね。

ののしる [罵] (五) 1 ののしる 《ール》

十四18 町の人のかげ口は、いっそうはげしくなり、かれを氣ちがいとよび、やましとさえののしるようになった。

のはぎ [野萩] (名) 1 野はぎ

十二9412 道ばたに野はぎがさいていたので、赤とんぼはとらずに、花を手にいっぱいつんで帰った

のぼす [伸] (五) 20 のぼす 《サー・シース・ーセ》

三1610 あれは 門の そとに いますので、このはちを わたくしにとどけようとして、手をこままでの ぼしたのです。

四769 つ——つめのはばさぬように。

五617 それでも、まいにちあのつるをのぼしたのは、だれかしら。

六1022 二本のつつは、うまくはまりあって、長くのぼしたりちぢめたりすることができると。

六1025 二つのつつをのぼしたりちぢめたり、かげんしているうちに、はつきりした。

六1393 とらさんは、そつと首をのぼして、うさぎさんたちの方をのぞきました。

六1407 とらさんが手をのぼして、一ぴきのうさぎさんのせなかをおさえました。

七947 あと足を長くのぼして、まえ足を胸の下に 入れていました。

九13410 くもは、長い手をのぼして、わけなく白いちようちよをとらえました。

九1426 おかあさんときいて、くもは、手をうんと のぼして、とりすがろうとしました。

九1452 くもは、そつと自分の手をのぼし足をのぼしてみました。

九1452 足をのぼしてみました。

十214 母親が、両手をのぼしてつてくる。

十二153 そうして、文雄が手をのぼすと、すばやくあなの中へかくれてしまった。

十二4910 古新聞を〈略〉。ほかのはよくもんでのぼしておく。

十四419 みんな、両手をのぼせ。

十四5412 そこへ細い根をのぼして、水と養分とを吸いとり、夜も晝も送ってあげるのは、たいへんなほねおります。

十四962 女の子は、小さな、つめたい足を、かかやくほのおの方へのぼした。

十五252 左手を長くのぼして、〈略〉女の子のか



らだが下へ落ちないように、その上帯をかたくにぎったのでした。

十五774 きょうのできごとを、あすまでのばすな

のはら「野原」(名) 20 のはら 野原

一374 あさかぜが、そよそよとのはらをふきま

す。

二568 ゆめに、ひろいのはらをみました。

四4710 はたけをこえ、のはらをすぎると、高い

山のそばにきました。

五67 川は野原におりてくる。

五68 野原をゆっくりあるいていく、水車をくる

くるまわし、たんぽに水をいれ、

六1429 やつとしずかな廣い野原にでました。

六1429 野原には、日の光がいつぱいさしています。

八136 町はずれの野原を歩いたり

八269 馬車は、《略》そり橋を音もなく渡って、

草花のさきみちている野原へおりてきました。

八2810 ほかのむすめたちは、野原で遊んでいる

のに、うちのむすめは、こうしてはたらきつづ

けているのは感心なことだ。

八3110 ふたりは、毎日野原で楽しく遊びつづけま

した。

八604 野原にはかれ草がつみあげられ、こうのと

りは、長い赤い足をして歩きまわっていた。

八606 田や野原のまわりには、大きな森があり、

森の中には深いみずうみがあった。

八765 田や野原をこえて、どんどん走っていった。

十2112 早く、あの野原で、遊びたいな。

十二949 すすきの野原を心にえがき、

十二1071 土ひょうは、はぎやすすぎがさきみだれ

た秋の野原。

十四862 野原の中で、一本の草花を見いだして、

それをたんねんに写生するのも、

十四875 ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情

をあつかっても、おもしろいと思う。

十四877 一面の銀世界となった廣い野原を、第一

の人が歩いて行く。

のばら「野薔薇」(名) 1 野ばら

十一569 べにばら野ばら、さんしよの木のため、

めやぎのおちち、一つ一つかおる。

のびあがる「伸上」(五) 2 のびあがる 《一ツ》

三10310 かきねの上からのびあがって、みたり、

へいのすきまからのぞきこんだりしました。

九732 やまねこは、大きくのびあがって、目をつ

ぶって、半分あくびをしながらいいました。

のびかた「伸方」(名) 1 のびかた

十279 トマトが畑に植えてあれば、そののびかた

や、《略》を、たんねんにみようと思います。

のびすぎる「伸過」(上二) 1 のびすぎる 《一

ギ》

八964 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎ

て、あとでなえがよくとれないそうです。

のびだす「伸出」(五) 1 のびだす 《一シ》

十三273 土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、

ねむのきの枝などが、ずつとのびだしている。

のびのび「伸伸」(副) 1 のびのび

十四397 みんな氣持よく、のびのびと深呼吸をす

る。

のびのびする「伸伸」(サ変) 1 のびのびする

《一シ》

十二1021 このやさしいのびのびした顔をごらん

さい。

のびはじめる「伸始」(下二) 1 のびはじめる

《一メ》

五412 国 のびはじめた草の上を、うれしそうにあ

るいていました。

のびる「伸」(上二) 37 のびる 《一ビール》

三161 はちをもった手が、するするとおし

かさまの目のまえにのびてきました。

三224 たいへんないきおいで、ひるもよるも、

ぐんぐんとのびていきました。

三352 庭 ひまわりものびています。

三1028 また、小人のようだったおひめさまは、

三月ほどのあいだに、すくすくとせいがのび

て、ふつうの人の大きさにになりました。

四421 ゴムのように のびる ことも あるし、

きゅつとちぢむ こともありました。

五798 川の中の石が、のびたりちぢんだりしてい

ます。

五915 みると、ざしきのまん中のたたみをやぶっ

て、のびているたけのこがありました。

五9110 手で、手おけの水をかけてやると、た

けのこがよろこんで、のびるわ、のびるわ。

五9110 のびるわ、のびるわ。

五9110 のびて、のびて、とうとうえんの下のい

たで、あたまとコッソンとうったのだよ。

五9110 のびて、のびて、

五923 庭 そこで、ゆかいたをはがして、たたみの

まん中にあなをあけてやったら、それ、このとお

り、いせいいくくのびるわ、のびるわ。

五923 庭 いせいいくくのびるわ、のびるわ。

六322 かかしのまゆがまっすぐにのびる。

六323 口の「へ」の字のびたりちぢんだりする。

六344 雲のひげがあおられて長くのびる。

六358 かかしのつかまったひげ、のびるだけのび

てちぎれてしまう。

- 六35 8 のびるだけのびてちぎれてしまう。  
 七32 4 羽をふるわせている。「母」空気にふれて、すこしずつのびるのね。」  
 八16 2 あおぎりの根ばかりではなく、あたりの木の根ものびています。  
 八23 8 みるまに、羽はすらりとのび、からだの色もこくなつていきます。  
 八88 7 たくさんの木がかんばしくにおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上ののびていた。  
 八97 3 もう、なえが、2cmから3cmにのびました。  
 八105 4 病気でせいのびないねが、5かぶありました。  
 十62 1 たけのこは、どうして、あんなに早くのびるのでしょうか。  
 十一18 3 流れやまぬ愛のしみずに、うるおされ、やしなわれて、のびていく命のわか葉。  
 十一32 2 しとしとと降る春雨に、やぶのたけのこすくすくのびて、しずくすおうとでむしが、つのをふりあげのぼりだす。  
 十一34 10 日ましに日ざしが強くなり、いねはそだつし、あぜまめのびて、ふくすず風に夕はん樂し。  
 十一70 1 かみの毛は白くなり、ひげはのび、  
 十二63 4 そのうちにからがだんだん長くのびて、おしまいへびになつてしまった。  
 十二65 5 その細いやわらかなものが、地をうがち岩をおしわけ、深く廣くのびていく。  
 十二65 6 のびていく根のさきをささえるものはない。  
 十二66 2 おおづなのようなたくましい根が、深くのびてみきをささえ、廣くのびて枝をやしない、  
 十二66 3 廣くのびて枝をやしない、

- 十二104 8 屋根の形や左右にのびたろうかのかつこうにも、ほうおうという鳥の美しいすがたが  
 十二107 7 大きな目、のびた手さき、しつかりふまたえた両足、どこをみても、力があふれています。  
 十三22 5 もみは、ある大きさまでのびると、そこで生長をとめました。  
 のぶ「伸」(上) 1 のぶ「ビ」  
 九28 6 大空にのびかたむける冬木かな  
 のぶ「話手」 1 のぶ「こ」  
 三74 のぶ「小川のながれ。」  
 のぶ「さん」(人名) 1 のぶ「さん」  
 四26 1 のぶ「さん」は、「りんご」に お話を するつもりで 書きました。  
 のぶ「伸」 ↓さしのべる  
 のぶ「登」 ↓さしのべる・たきのぼり  
 のぶ「織」 ↓おおのぼり・こいのぼり  
 のぶ「か・ける」(上) 1 のぶ「か・ける」(下) 1 のぶ「か・ける」  
 九136 9 いまのぼりかけたばかりの月が、しずかに 光っていました。  
 のぶ「さか」(上) 2 のぶ「さか」のぼり坂  
 六135 10 のぼりさかを走るの、うさぎさんのもつともくいとすところだ。  
 九105 7 だんだんのぼり坂になると、からだがかぼつてあせがでる。  
 のぶ「だ・す」(上) 1 のぼりだす  
 十一32 4 しずくすおうとでむしが、つのをふりあげのぼりだす。  
 のぶ「上」(五) 65 のぼる 登る 《上・上・上・上・上・上》  
 ル・レ・ロ ↓さきのぼる・さかのぼる・たちのぼる・はいのぼる・まいのぼる  
 二15 2 まんまるい お月さまがのぼりました。

- 二39 2 たろうと おとうさんが、山へ のぼって きます。  
 二39 5 よくこまでのぼった。  
 二43 6 さあ、もうすこしのぼろう。  
 二43 7 のぼろう。  
 三52 2 ありはすみれの花にのぼり、「高い、高い。」といました。  
 三58 6 おりればみずうみへでられますし、のぼれば大きな木のあるところへでられます。  
 三59 2 大きな木のところまでのぼってみよう。  
 三61 6 あのねえ、丘の木の ところまでのぼってさ、それから さっさと かけおけて みずうみへいこうよ。  
 三63 2 いっしょになって、丘の大きな木のところまでのぼりました。  
 三115 9 そこで、よいの車にのって、しずかに 天へのぼって きました。  
 四134 3 天人は、まいながら、だんだん 天へのぼって いきます。  
 五48 7 まどをあけると、いまのぼったばかりの日の光が、さつと いっぱいながれこんで来た。  
 五93 7 むこうの山から、大きな月がのぼってくる ところでした。  
 六68 1 「略。」といって、木の上にするすると のぼって しまいました。  
 六87 11 あなたは、その大きな木にのぼって、まっていらいしやい。  
 六88 2 木にのぼるのですか。  
 六88 9 のぼってみよう。  
 六89 1 木にのぼって、下をみる。  
 八21 8 地表からメートルほどのぼったところに、

小枝がわかれていました。

八24 朝日が山の上にのぼって、明かるい光がさつとさすところになると、

八58 3 いままででぼってきた方をふり返ってみると、足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺の屋根や停車場が目についた。

八58 8 みんなその元氣でのぼろう。

八59 5 あの山にのぼったら、もっと大きなけしきが見えるだろう。

八59 10 高いところのぼるほど、大きな世界がみえる。

八74 5 かりうどは、〈略〉。あしの上に廣がついて木の枝にものぼっていた。

八84 5 はくちようは〈略〉、とんでいった。高く、

九36 1 1 たきぎをとりにかく山は、ぼくの家からは十五六分ほど登るのですが、

九36 9 3 また山へ登るほそ道の両がわに、

九39 2 3 かれ枝のたくさんついている高い木をみつけると、兄かぼくがのぼる役をひきうけました。

九39 9 3 根もとからかかれての高さ十五メートルに近い木にのぼったことがありました。

九39 9 3 のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず木にしがみついたりしました。

九40 10 3 下の方の山道を、しよいこをつけたおとなの人が、〈略〉登ってくるのがみえます。

九44 7 3 じゆくした実がすずなりになつてのぼるのを見ると、いまにもものぼつてとりたくなります。

九49 4 1 ちろうは、いそいでごはんをたべて、谷川にそつた小道を、上の方へ登っていききました。

九54 5 1 ちろうは、その道を登っていききました。

九54 10 1 ちろうは、顔をまっかにして、あせをば

とぼと落しながら、その坂を登りますと、

九105 8 3 みんなだまって、あえぎながら登っていった。

九106 3 3 「しつかり登れ。」とさげられた。

九106 7 3 その声にはげまされて、ぼくたちは、いっしょうけんめいに登っていった。

九108 4 3 百五十メートルほど登ったとき、ぼくが、「〈略〉。」といった。

九109 11 3 先生は、ふたりとも、まだ上へ上へと登っていかれたが、

九110 1 3 三百五十メートルも登ったところで、つえをあけて、「〈略〉。」というあいずをされた。

九110 9 3 それから、ぼくたちは、登っていつてはすべり、おりてはまた登った。

九110 10 3 おりてはまた登った。

九119 3 3 私は父につれられて、近くの高い山に登った。

十58 3 3 算数の時間に、先生が、はしごでいちようの木にのぼって、いちようの葉をたくさん落してくださいました。

十一67 1 3 ふたりは、はしごだんをのぼって、長いらうかのはずれまで歩いていきました。

十一92 11 3 名をなんと呼ぼうかと思つていううち、五日のあいだ呼ばれていた名が、しぜんと口にのぼってきました。

十二24 7 3 わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にもものぼるほどうれしかったのです。

十二97 10 3 貝づかからでる貝は、三百種類にものぼります。

十三12 8 3 朝になると、日は東の空からのぼり、夕がたになると、西の空にしずみます。

十四41 5 3 朝日が、朝日がのぼる。

十四65 8 3 つぎに、湯げがのぼるときには、いろいろのうずができます。

十四66 8 3 大きなうずができて、それが、かなり早くまわりながら、のぼっていきます。

十四68 4 3 あたたかい空氣がのぼっていくあとへ、〈略〉つめたい空氣が下からふきこんできて、

十四71 3 3 その反対に、茶わんのまん中の方では、ぎやくに上の方へのぼって、

十四72 4 3 湯の表面には、水のおりているところとのぼっているところがほうぼうにできます。

十四73 2 3 かべや屋根が熱せられると、それに接した空氣がふくれてのぼる、

十四75 8 3 畑のほうが、森よりも、日光のためによいあたためられるので、畑では空氣がのぼり、森ではくだつていきます。

十四98 10 3 そのたぐさんのろうそくはもえ続けていて、それが、高く、高く、しだいにのぼって、

十四99 7 3 星の落ちるときは、なにかのたましいが神さまのところへのぼっていくのだと、

十四102 1 3 寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、上の方へと、神さまのおそばへ行くかのようにのぼって行った。

十五52 6 3 私は、〈略〉論文を持って、その出版の用事かたがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった。

十五90 9 3 3 とにかく、そいつは、一どもわたしたちのテーブルにのぼったことはいないようです。

のぼれる 「上」(下) 1 登れる 《レ》

十二57 5 3 どちらもけつしてたやすくは登れないが、ふしぎなことに、神山のほうには、昔から九十九

だんの石だんができています。

の み 1 ゆのみ・ゆのみちやわんの み 「整」(名) 4 の み

三512 罎 石より かしい のみの さき、 のみより つよい うでさきで、 かっちゃん かっちゃん 石を切る。

三513 罎 のみより つよい うでさきで、

三516 罎 かっちゃん かっちゃん 日がくれて、 火花がみえる のみの さき。

三517 罎 のみの 手もととはくらくても、 かっちゃん かっちゃん 石を切る。

のみこ・む 「飲込」(五) 1 のみこむ 《マ》

十二89 1 話をきくときには、相手の人のいつていることばをよくききわけ、 のみこまなければならぬ。

のみち 「野道」(名) 2 のみち

一213 罎 おてて つないで、 のみちを いけば、 みんな かわいい ことり になって、

一227 罎 「のみちを いけば」の ところは、 げんき よく ある きました。

のみもの 「飲物」(名) 3 飲み物

十一76 5 看護婦が なにか 飲み物 を持ってくる、

十一80 4 病人は、《略》、 飲み物 やくすりを、 少年の手から でなければ 飲まない よう になりました。

十一88 2 チチロはまた、 病人に 飲み物 を飲ませたり、 ふとんを おしたり、 手を さす ったり、

のみ 「飲」(五) 32 のむ 飲む 《マ・ム・モ・ン》 ↓ おのむ・ちのみご

五49 6 罎 子うしが 水の む 岸を 渡る。

五82 5 なま水を のまない ことや、

六13 6 ありは、 川の 岸で、 うつむいて 水を のもう しました。

七97 8 黒の子うさが、 ちちを のもう として、 親うさぎの ちちに すがり つきますと、

七97 9 親うさぎは、 足で けて、 のませ ませんで

した。

七97 10 うさぎは、 人が みて いると、 ちちを のませ たくない ので しょうか。

八11 11 くすりを のませる やら、 あたためる やら

—— あらゆる 手あて を つく しました が、

八17 5 人間の あか ンぼが、 したの さきを じょうず につか ちを のむ のと 同 じ よう に、

八72 10 ぬまの水を のませ てもら いたい とも 思 った が、 それも ゆる して も ら え ず も な かつ た。

九119 5 父は、 その 泉の水を 手 で すく けて、 いくど も う ま そ う に 飲 ん で か ら、 私 に い っ た。

九119 7 罎 この 水を 飲 ん で こ ら ん。

九123 3 あとも どり して 飲 ん で み た り、 ず っ と 上 流 へ い っ て た め し て み た り、

九123 5 上流 へ い っ て た め し て み た り、 深 い と こ ろ の 水 を と っ て 飲 ん で み た り し な くて は な ら な かつ た。

九124 5 ためしに まつ 川の水を に て 飲 ん で み る と、

たい へん う ま かつ た。

九124 7 念のため、 も っ と 上 流の本 流の水を 飲 ん で み る と、 も う そ れ は た だ の 水 で あ っ た。

九125 11 そ こ か ら さ ら に、 す こ し さ か の ぼ っ て 水 を 飲 ん で み る と、 い い 味 は、 す こ し も な かつ た。

九126 3 そ こ を く ん で 飲 ん で み る と、 そ れ こ そ ま ぎ れ も な い う ま い 水 で あ っ た。

十一76 6 なにか 飲み物 を持ってくる、 《略》、 看護婦に か っ て そ れ を 飲 ま せ たり し ま し た。

十一80 5 飲み物 やくすりを、 少年の 手から で なければ 飲 ま ない よう に な り ま し た。

十一85 6 罎 ぼく、 あ の 人 に お く す り を 飲 ま せ て あ げ る の で す。

十一88 2 チチロはまた、 病人に 飲み物 を飲ませた

り、 ふとんを お したり、

十二62 10 水を 飲もう と思 っ て 小 川の 岸に で て み る と、 美 しい 小 魚 が お よ い で い る。

十二63 2 そ こ で ま た 川の水を 飲 ん だ。

十二63 2 いくら 飲 ん で も の どの か わ き が と ま ら な かつ た。

十二84 3 かたずを の ん で 試 合を み て い る う ち に、

十四45 9 す べ て の も の が、 こ と こ と く 波に の ま れ て し ま っ た よう に、 死の し ず け さ が あ た り に 廣 が り ま し た。

十四47 8 た い て い の 人 は、 し ょ う と つ の と き に あ わ て ふ た め い て 《略》 波に の ま れ て し ま っ た の に、

十五82 5 けだもの の 肉や、 ふ し ぎ な く だ も の を、 《略》、 た べ たり、 飲 ん だ り、

十五87 10 罎 『の どの か わ い て い な い と き に 物 を 飲 む 幸 福』 と、

十五91 5 罎 わ た し た ち は、 す こ し の 休 み も な く、 飲 む、 た べ る、 ね む る、

十五92 3 か れ ら は み ん な と な か よ く テーブル に つ い て、 飲 ん だ り、 た べ たり、

十五101 1 罎 ぼく た ち は、 あ な た と い っ し ょ に、 た べ たり、 飲 ん だ り、 《略》、 く ら し て い る の で す も の。

のむらさん 「野村」(人名) 1 野村さん

十四18 10 これを 聞 い て い た 野村さん が、 「略。」 と た ず ね た。

のめす ↓ う ち の めす

のやま 「野山」(名) 1 野山

十一31 4 罎 続 く ひ ょ り に さ く ら が さ い て、 野山を か ざ る と、 も も 赤 く 畑に さ い て、

のらねこ 「野良猫」(名) 1 のらねこ

八9 11 のらねこ が 通 り か っ て も、 に げ る と こ ろ

か、向かっていこうとさえるのです。

のり〔乗〕↓ひこうきのり  
のり〔糊〕(名) 11 のり

六117 5 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹二本と、それに、たこ糸やのりなどです。

六117 6 のりは、ごはんつぶをよくねると、いいのりができました。

六117 7 ごはんつぶをよくねると、いいのりができました。

六120 5 〇でも、のりがかわかないうちにあまりいじると、すぐはがれますよ。

十二49 4 材料。〈略〉。日本紙。のり。

十二49 8 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。

十二50 1 正方形の一まいにのりをつけてつつにかぶせる。

十二50 4 首のところだけのこして、もんだ紙にのりをつけないで、上から上からかぶせる。

十二50 9 首のほうからもかぶせてまるくしてから細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。

十二51 1 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作って、のりでとめる。

十二51 2 日本紙を細長く切って、一まい一まいによくのりをつけてはりかためる。

のり〔海苔〕(名) 1 のり  
十二72 7 そのあたりにいるのは、〈略〉や、のりをとりにでるりょうしの子どもたちで、

のりいゝる〔乗入〕(下二) 1 のりいゝる《一レ》  
九28 2 〇朝つゆの中に自轉車のりいれぬ

のりうつゝる〔乗移〕(五) 1 乗りうつる《一ッ》  
十五24 12 さいわいにその勇ましい少年は、大わし

のせにとびつき、その上へ乗りうつって、

のりかえ〔乗換〕(名) 1 乗りかえ

七35 9 〇それに、乗りかえもないし、二時間ほどでつくのすから。

のりきる〔乗切〕(五) 1 のりきる《一ッ》  
三27 8 ふねは、ななつの大なみをのりきって、

鳥のとぶように走るではありませんか。

のりくみいん〔乗組員〕(名) 1 乗組員  
十四45 2 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、

船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

のりくむ〔乗組〕(五) 1 乗り組む《一ン》  
十一8 2 〇乗り組んでいる者が、みんなそろって、

一つの生きものみたいに進んでいく。

のりこむ〔乗込〕(五) 2 のりこむ《一ミ》  
三27 4 海にうかべて、大ぜいのせんどうがのりこみました。

三63 6 みんなはボートにのりこみました。  
のりつける〔乗付〕(下二) 1 乗りつける《一ケ》  
十五53 5 目ざすりっぱな博物館に自動車を乗りつ

け、守衛にみちびかれて

のる〔乗〕(五) 29 のる 乗る《一ッ・ラ・リール》↓おおわしにのつたはなし・おのりくだ

さる・おのりなさる・おのる・とびのる  
一39 5 ゆうべ、おとうさんときしやにのって、

お月さんのところへいったゆめをみました。

二61 8 〇みんなのりしましたか。  
二62 1 〇のりしました。

二62 2 〇ぼちさんはのりしましたか。  
三34 1 〇そこに、はくせいひのりすが、二ひきの

のっていました。  
三113 1 そのうちに、空から大ぜいの天人たちが、雲にのっておりました。

三115 9 そこで、よいの車にのって、しずかに

天へのぼっていききました。

五9 4 〇どこかのおばあさんとぼっちゃん、乗ってきたよ。

五13 3 〇まちがって乗っている人がいないか、しらべるのさ。

五19 11 配たつをする人は、自てん車に乗って走りました。

六4 9 自分のおかれていますのは、しごと台の上ののっている小さなふたガラスの中で、

六15 5 そうしてその上に乗りました。

七10 2 〇渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、こつちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。

七34 8 私と弟のさぶろうは、乗るには乗ったものの、動くことさえできません。

七34 8 乗るには乗ったものの、  
七46 7 黄みがかった麦ばたけ、縣道らしい白っぽい道、そこを自轉車に乗って走る中学生、

七91 8 麦をやったたら、白いうさぎは、早くたべたのか、黒いうさぎの上に乗って、たべました。

八6 7 だんだんなれて、指さきへもかたへもとまるようになったばかりか、頭の上にも乗り、

八26 5 中には天帝が乗っておいでです。  
八32 10 いよいよその日になると、けんぎゅうは、

黒うしに乗って、ふえをふいてきました。

九73 9 ふたりは馬車に乗り、ぎよしゃはどんぐりのますを馬車の中にいれました。

十23 6 自轉車に乗った中学生が、ふたりづれでな

の花畑を横ぎる。  
十23 7 ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に乗っている。  
十一52 9 一停留所ごとに、おりる人と乗る人が

もみくちやになった。

十一 52 11 会 「あんまり乗らないでください、満員ですから。」と、声をかけた。

十一 54 3 画 「入口ふさがず乗ったら中へ。」

十二 73 9 子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようとしては、あらはその手にはのらないで、顔にあたったり

十四 45 2 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

十五 71 8 人力車に乗ったおばさんは、昔のように私をひざにのせた。

ノルウェーさん (名) 2 ノルウェー産

十三 20 10 そこで思いついたのは、ノルウェー産のもみの木でありました。

十三 21 8 これをノルウェー産のもみの間に植えてみると、両種のもみは、たがいにならんで生長し、

のんのさん (名) 4 のんのさん

十 60 5 会 のんのさん、のんのさん。

十 60 5 会 のんのさん、のんのさん。

十 60 7 会 「ほら、のんのさん、のんのさん。」と

いって、月の方へ手をやったら、

十 60 7 会 ほら、のんのさん、のんのさん。

のんびり (副) 1 のんびり

十三 7 4 遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、ほんとうにのんびりとして、

## は

は 「刃」 (名) 6 は

十二 67 2 のこぎりには、はがある。

十二 67 3 のこぎりののは、いぬの歯のようにと

がって、一つおきに右と左にすこしよれて、十二 67 8 のこぎりののは、いつもやすりをかけて

右と左によじっておかないと、なんの役にたたない。

十二 68 4 大きなかたい物を切るのこぎりののは、大きくてあつい。

十二 68 5 小さなやわらかい物を切るのこぎりののは、小さくてうすい。

十二 69 2 はたらきのある人は、はをもったのこぎりににている。

は 「葉」 (名) 69 は 葉 1 あおば・えだは・おし

ば・おちば・くぬぎば・なのは・まつば・まつばづえ・もみじば・わかば

一 17 3 まどのきのはがうごいてる。

二 12 2 木のはをならべてみました。

二 24 1 会 先生、いものはのつゆは、あれ、ただの水でしょうか。

三 40 6 くわのはが、やわらかで、光っていて、

おかいこさんでなくてもたべたいようです。

三 41 1 かざがふくと、くわのはのにおいがぶんとします。

三 84 3 ビーターは、はのさきにあまだれがあるのをみつけて、「略。」といいました。

四 55 7 かさかさという木のはの音がしました、それは、小鳥たちが、ねぼけてとびまわる音でした。

五 79 9 葉のかげぼうしが、魚のようにおよいでいます。

五 85 5 りょうかんさんはこういいながら、ほうきを持って、木の葉をはきよせました。

六 14 9 はとは、いそいで木の葉をとって、ありの

そばにおとしてやりました。

六 14 11 木の葉は船のようになって、ありのそばを流れました。

六 15 3 ありはそういって、すぐ木の葉の船につかりました。

六 15 6 木の葉の船は波に流されて、川の岸につきましたので、

六 15 9 会 もし、あの木の葉の船が流れてこなかったら、どうなっていたかしのれない。

六 16 1 ありは、心から木の葉におれいをいいました。

六 19 6 会 みどりの木の葉は喜びにみち、きよらかな風は、われわれの音楽をはめてくれる。

六 32 1 木の葉がとぶ。

六 32 5 かかしの顔に葉がとびかかる。

六 51 2 屋根も、木の葉も、石ころも、みんなきれいに光っていました。

七 10 8 かしの木は、あくびを一つして、しめっぽくなった葉をふるわせ、

七 22 3 会 すずめが、だいこんの葉をみているよ。

七 23 10 会 はるお、だいこんの葉を一まいとってきてね。

七 24 2 はるおは、だいこんの葉をとってくる。

七 24 4 会 はい、だいこんの葉——どうして、葉を砂の中に立てるの。

七 24 4 会 どうして、葉を砂の中に立てるの。

七 24 9 兄は、二センチほどに大きくなったあおむしを、新しい葉にうつす。

七 33 1 会 ここからだして、庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょうね。

七 65 1 いつのまにか、葉ばかりのさくらになって、毎日ほれ。

七842 草をくいとったあとをみますと、かみきれないで、のこっている葉がありました。

七872 きょうは、れんげそうとなたねの葉をやりました。

七977 そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。

八408 こんなひとりごとをおっしゃって、そこらの木の葉や花にみんな手をおふれになりました。

八617 みどりの葉の下で、あたりをみまわした。

八838 森の木の葉がこがね色や茶色になった。

八1005 1本のなえのまん中からでた新しい葉が、5cmぐらいになりました。

八1009 葉と葉のあいだから、新しい葉がたくさんできました。

八1009 葉と葉のあいだから、

八1009 新しい葉がたくさんできました。

八1011 新しい葉は、まるまってできました。

八1023 葉のついているものとところから、黄みどりのほができました。

八1047 葉のうらに、青黒いなかのたまごが生みつけられていました。

九314 いまはもうかきの葉もすっかり落ちつくして、秋も終り近くなりました。

九371 小さい妹のために、くわの葉につつんで持つて帰ったこともありました。

九441 妹は、かきの葉を「へ略。」といってひろい集めては、ままごとをして遊びます。

九443 母やおばまで子どものように、かきの葉を一まい一まいならべて、この色がよいとか、こちらの色がよいとかいってながめています。

九445 一つのまにか葉がすっかり落ちつくしてはだかになった木の上に、

九5311 ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちよっと光っただけでした。

九1171 青さをいれやりたればいけのふなはや青き葉のかげにきておる

九1431 つゆが木の葉にたまりました。

十911 ちょうど、プラタナスという木の葉が黄色くなるころで、

十1010 みあげるように高いプラタナスの枝からは、黄色い葉が、毎日のように落ちました。

十1011 少女は、その葉をひろい集めて、橋のたもとに石がきのところへきては、遊んでいました。

十1112 プラタナスの葉の大きいのは、やつでほどもありました。

十122 なるべく、小さな葉をくれませんか。

十581 いちようの葉

十583 先生が、はしごでいちようの木にのぼって、いちようの葉をたくさん落してくださいました。

十1391 かえでにうるし、はじの葉も、赤く黄色く色づいて、

十1514 あさがおの花は、みんなふきちぎられ、へちまの葉は、みんな下向きになってしまった。

十1558 ことばはひびく、あしの葉のふえよ。

十1214 まだ青々とした木の葉の中から大きくのぞいているのもいい。

十12162 重みのかかった枝のつけね、ふわふわした軽い葉、

十123110 そのなつかしい葉や、花の上を、私の指はまったくわれをわすれてなでていました。

十12643 葉は青く、くきは長く、みきは高くそびえているが、根はちつともみえない。

十12666 それからでた細い根が、つなのようにかみあって、葉を育て花をさかせる。

十四526 根や、つるや、葉のなかぼちゃはありませんが、それだけでは実はつきません。

十四533 葉は、元氣のいい青年でした。

十四569 づるの私がとちゅうで切れたりしたら、それについている葉でも、花でも、なりかけている実でも、みんなかれて、くさってしまいます。

十四609 花も、葉も、つるも、首をひねって考えていました。

十四611 花も、葉も、根も、みんな賛成しました。

は「歯」(名) 5 は 歯はまえば

七842 それで、歯が二三本ぬけているにちがいないと、考えました。

八751 はなをあひるの子のそばにつきつけて歯をむいた。

九1206 ちよつと歯にしみたが、うまかった。

十二674 のこぎりののは、いぬの歯のようにとがって、

は「端」のきば

は(係助) 4416 ははあなたのおもっていることは・あるいは・かわはおおきくなる・かわははたらく・これはこれは・こんにちば・こんばんは・じつは・それでは・それは・それはそれは・では・というの・ときには・または・わたしのころはにじをみるとおどる

一115 「へ略。」「こんどは、あかいたまをか

一152 じをよむときには、くちをつかいます。

一161 じをかくときには、てをつかいます。

一174 うごいてる。きょうは、どんなえがかかりました。わたくしは、「おてて つないで

一228 いけば」のところは、げんきよくあるなって」のところはこまりました。そ

235 たをうたえば」では、くちにてをあて  
 237 「くつがなる」では、あしぶみをしま  
 2310 にくつがなる」では、てをうえにさし  
 243 どれば」のところは、ぴよんぴよんと  
 272 二人のかお目はふたつ、みみもふ  
 274 みみもふたつ。口はひとつ、はなもひ  
 288 「けさ、あなたは、その目で、なにを  
 292 十三 手と足 手は二ほん、みぎひだ  
 342 なら、ただおさんは、なにになつてみ  
 351 「みちこさんは、なにになつてみ  
 352 略。」「わたくしは、はなになつてみ  
 353 略。」「そのわけは。」「略。」「略。  
 356 略。」「まことさんは。」「略。」「略。  
 363 略。」「よしこさんは。」「略。」「略。  
 365 「略。」「それはなぜですか。」「略  
 441 略。」「おかあさんは。」「とききますと、  
 447 。（二）ふたりはいそいでえきに  
 448 へおいでのかたは、こちらへおなら  
 458 た。へやのなかでは、しろいきものを  
 461 の、あぶないものは、みんなとりあげら  
 472 ました。おじいさんは、わたくしをむし  
 475 いました。「これはいいおこさんだ。  
 485 ました。「きしやは、すいています。こ  
 487 略。」「おとうさんは、うしろのおきや  
 488 げました。わたくしは、おばあさんの手  
 491 かけました。へやには、きれいなはなが  
 495 ふきました。きしやは、すくはっしやしま  
 511 ました。「きしやは、まもなくくもの  
 516 。（「略。」「よにんはもたれあって、ぐ  
 524 いました。「これはなんという川だ  
 526 じさんが、「これはあまの川ですよ。  
 529 。（「かわらのすなは、みんなちいさな

531 。（「略。」「あれは、みんなだいやも  
 537 （七）「あれは、ふしぎなだいやも  
 541 「しやしょうさんは、ひろったことが  
 543 月さんのくには、一ねんに一どた  
 549 。（「そんなときには、はなればしにあ  
 556 「略。」「あなたは、そのたまをもつ  
 567 とすると、きしやはもうついでいま  
 579 「略。」「わたくしは、かたほうだらり  
 586 りません。あなたは、いのちのおんじん  
 593 しろちゃんのうちは、つきみそうのさ  
 604 げで、しろちゃん、げんきなこにな  
 609 。（「と、おじいさんは、おいをいまし  
 613 ここにいるものは、みんな、たまを  
 614 いうと、しろちゃんは、ふくろからだいや  
 623 なつても、たまは、やつぱり、たまです  
 626 。（「いいえ、あれは、たろうさんたちの  
 632 りました。わたくしは、「みんないいこ  
 642 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 645 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 659 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 695 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 698 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 699 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 704 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 708 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 714 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 719 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 723 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 724 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 726 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 729 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 732 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 734 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 736 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 738 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 740 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 742 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 744 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 746 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 748 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 750 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 752 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 754 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 756 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 758 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 760 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 762 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 764 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 766 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 768 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 770 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 772 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 774 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 776 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 778 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 780 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 782 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 784 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 786 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 788 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 790 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 792 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 794 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 796 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 798 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 800 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ

182 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 185 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 191 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 193 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 194 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 224 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 226 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 232 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 241 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 246 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 253 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 302 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 312 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 315 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 325 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 328 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 334 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 346 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 349 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 351 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 353 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 354 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 357 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 358 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 3510 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 361 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 363 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 364 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 366 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 369 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 371 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 3710 。（「略。」「わたくしは、そこにあったこ  
 上は大みず、下は大かじ、なにあに。」  
 ものをきるものはなにあに。」「略。」「  
 んしかないものはなにあに。」「略。」「  
 ときにいるものはなにあに。」「略。」「  
 も、みえるものはなにあに。」「（三）  
 た。よしこさんののは、『いろはにほ』し  
 のに、わたくしのは、『いろはにほ』と  
 した。びようきではないでしょうか。」「  
 いものは、つゆは、あれ、ただの水  
 で、ぼく、はじめは、きが、つきませんで  
 きました。きようは、いちろうさんと、  
 略。』『ぶろちゃん、しんばいして、も  
 ません。』『こんどは、ぼくがかぞえて  
 十一ひきのぶたは、ぶろぶろいって  
 とりが、『みんなは、どうというもの  
 た。』『わたしたちは、めくらだもの、み  
 。（するとみんなは、『略。』と、いい  
 した。『どうつかいは、『略。』とい  
 人のめくらたちは、おそろおそろぞ  
 はじめのめくらには、どうのおなかを  
 。（『はあ、どうは、かべとおなじだ。  
 ばんめのめくらには、どうのきばにさ  
 三人めのめくらには、どうのはなにさ  
 さわって、『どうは、大きなへびみた  
 四人めのめくらには、耳にさわって、『  
 さわって、『どうは、大きなうちわに  
 五人めのめくらには、足をなでて、『へ  
 をなでて、『どうは、木のみきとおな  
 しまいのめくらには、しっぽをもつて  
 大ちがいだ。『どうは、なわそっくりだ。  
 ので、どうつかいは、わらいながら、い  
 きました。空は、ほんとうに青い



二393 会 おとうさん、ここは、ずいぶん高いね。  
 二399 ましよう。「たろうは、あせを ふきな  
 二421 会 をつかうものではないよ。」たろう  
 二438 「のぼろう。」たろうは げんきよく あるき  
 二448 会 「略。」「こんどは きつね。こんこん  
 二452 会 こんこん。これは、とび。くちばしを  
 二454 会 へ。」はい、これは せんだうさん。長  
 二456 会 おじさん、こんどは、わたくしが やっ  
 二459 会 「略。」「これは なんですか。」「略  
 二466 会 。」「いいえ、これは、お月さまが、くも  
 二488 「略。」いちろうは、りんごを だして、  
 二492 「略。」いちろうは、となりの へやへ  
 二494 のぼめん じろうは、よろこんで、りん  
 二497 ます。上にながては うえ、うけては 上  
 二498 ては うえ、うけては 上にながて、よろ  
 二499 。それから、じろうは、りんごを たべよ  
 二506 会 「略。」じろうは、大きな りんごを  
 二512 のぼめん さちこは、りんごを だいた  
 二529 げます。おかあさんは、本を おいて、り  
 二533 かえします。さちこは、また おかあさん  
 二535 うとう、おかあさんは、さちこから りん  
 二5310 ういって、さちこは、じろうを 手まね  
 二548 ちます。おかあさんは、三人の あたまを、  
 二555 ました。わたくしには、おとうさんも あ  
 二556 さんの おとうさんは、おいでに なりま  
 二557 なりません。いまは おいでに なりませ  
 二558 りませんが、まえには おいでに なったに  
 二561 ありません。それは、どんな か ただつ  
 二574 いました。わたくしは、「みんな いい こ」  
 二582 たでした。わたくしは、おもわず、「略」  
 二584 ますと、その かたは、「略。」といっ  
 二585 会 かたは、「わたしは、おまえの おじい

二601 たとき、わたくしは、ふと、ゆうべの  
 二603 いだしました。先生は、つづけて おっし  
 二612 を つかえに。これは よびかけです。み  
 二622 会 しゃ「ぼちさんは のりましたか。」ぼ  
 二624 会 よう「みけちゃん。」みけ「にや、お、に  
 二626 会 よう「からすさんは。」からす「あかあ  
 二628 会 よう「すずめさんは。」すずめ「ちゅんち  
 二6210 会 からぶうちんは。」ぶた「ぶうぶう、  
 二666 しずかに。」みんなは、「しゅしゅしゅし  
 二669 すは やさにかわりは ない。しゃ」どこ  
 二672 がするよ。」みんなは、小さな 声で、「し  
 二688 しゅしゅしゅしゅ」は、ひくく つづいて  
 二708 声がする。この 声は ひとりではなく、  
 二708 この 声は ひとりではなく、大ぜいの 声  
 二108 会 しそう、きょうは あなたの 花まつり  
 二113 いました。はんたかは ものおぼえが わる  
 二115 した。おしゃかさまは、どうかして はん  
 二124 せん。おしゃかさまは、「略。」とおつ  
 二127 会 はんたか、おまえは たくさんの ことを  
 二1210 「略。」はんたかは 目を かがかせて  
 二133 会 とことというの、きかない ことば  
 二136 「略。」はんたかは、この ひとことを  
 二1310 、きかない ことばは、きかない 心から  
 二142 きれない ことばは、きれない 心から  
 二144 会 くださった ことばは、きれない 心にな  
 二147 日、おしゃかさまは、王さまの おまね  
 二149 した。おしゃかさまは たくさんの でのしを  
 二154 会 うな おろかものは、ここを とおすこ  
 二155 会 こを とおす ことは できない。」とい  
 二156 いって、とおしては くれません。しか  
 二157 せんから、はんたかは 門の そとに のこ  
 二158 りました。ごてんでは、おしゃかさまが

二159 りました。でしたちは その わきに なら  
 二162 みたごてんの 人々は、びつくりして し  
 二164 まいました。王さまは、「略。」とおつ  
 二165 会 王さまは、「これは ふしぎだ。だれの  
 二167 した。おしゃかさまは、「略。」とおつ  
 二168 会 かさまは、「これは はんたかの 手で  
 二169 会 ごさいます。あれは 門の そとに いま  
 二173 やいました。王さまは、すぐ はんたかを  
 二174 りました。はんたかは、しずかに ごてん  
 二182 ばあつめ 一くみは 花の名を あつめ  
 二183 つめました。二くみは 虫の名を あつめ  
 二184 つめました。三くみは 魚の名を あつめ  
 二185 つめました。四くみは 鳥の名を あつめ  
 二191 めました。花の名は 十二 あつまりまし  
 二192 りました。虫の名は 十五 あつまりまし  
 二193 りました。魚の名は 十三 あつまりまし  
 二194 りました。鳥の名は 十四 あつまりまし  
 二214 き声の わかるものは、その なき声をか  
 二225 に、この くすのきは、いままで みたこ  
 二228 う、その てっぺんは、空の くもとど  
 二229 した。大きな えだは 四方に ひろがって  
 二254 した。「略。」みんなは びつくりして、「へ  
 二256 ますと、おじいさんは、「略。」とい  
 二257 会 るように するには 切るより ほかに  
 二265 できました。こんどは、切りた おした 木  
 二276 した。おどろいたのは、その ふねの 早い  
 二277 水を かくと、ふねは ななつの 大なみを  
 二278 とぶように 走るでは ありませんか。「へ  
 二289 ののち、はやとりは、たくさんの 米や、  
 二296 たたくさんの 村々は、だんだん ゆたか  
 二307 やいました。みんなは あちらこちらに わ  
 二311 会 みました。「ここは ろうかです。長く

三三二 います。右がわはきょうしつで、左  
 三三一 しつで、左がわにはまどがならんで  
 三三〇 略。」「わたくしはかいだんをかきま  
 三二九 きます。かいだんははじめに十五だん  
 三二八 わります。てすりはつるつるしてい  
 三二七 ところのかべには、えがはつてあり  
 三二六 へ。」「でいり口には、げたばこがたく  
 三二五 のきょうしつでは、花のしゃせいを  
 三二四 います。いけには、きんぎよが三び  
 三二三 「こうさくしつでは、六年生が、はこの  
 三二二 いさんのおへやはあたたかです。大  
 三二一 のおへやのものは、みんな大きいな  
 三二〇 す。うさぎの目はもも色のかわいら  
 三一九 いました。ぼくらはくさはら道ある  
 三一八 中、右のかたにはいちろうくん、左  
 三一七 くん、左のかたにはみよこさん。ぼく  
 三一六 みよこさん。ぼくらはかたをくんで、く  
 三一五 まいました。ぼくらはふたりになつて、  
 三一四 しまいました。ぼくは、学校どうぐをわ  
 三一三 いましたので、これはいいと思つて、「へ  
 三一二 らべてみようではないか。」とい  
 三一一 いました。わにぎめは、「略。」とい  
 三〇九 にぎめは、「それはおもしろかう。」  
 三〇八 きました。白うさぎはそれをみて、「略  
 三〇七 、」きみのなかまはずいぶん多いな。  
 三〇六 いました。わにぎめは、白うさぎのう  
 三〇五 びました。白うさぎは、「略。」とかぞ  
 三〇四 うとき、白うさぎは、「略。」とい  
 三〇三 ぎは、「きみたちはうまくだまされた  
 三〇二 まされたな。ぼくは海をわたつてき  
 三〇一 ました。わにぎめはそれをきくと、た  
 三〇〇 いました。白うさぎはいたくてたまりま  
 二九九

三六六 なるて、「おまえはなぜないている  
 三六五 と、そのかたがたは、「略。」とお  
 三六四 いました。白うさぎはすぐ海の水をあ  
 三六三 りました。このかたは、さきほどとお  
 三六二 しました。白うさぎはいままでのことを  
 三六一 しました。「それはかわいそうだ。早  
 三六〇 しますと、からだはすぐもとのように  
 三五九 のみの手もとはくらくても、かっ  
 三五八 高い高い、ありはすみれの花にの  
 三五七 した。うぐいすはうめの木にとま  
 三五六 いました。りすはしらかばの木に  
 三五五 のぺんぺんぐさは、「略。」とい  
 三五四 ました。こどもは石の上に立ち、  
 三五三 おてんとうさまは空にてり、「略  
 三五二 したカナリヤは、うしろの山に  
 三五一 いえいえ、それはなりません。うた  
 三五〇 したカナリヤは、せどのこやぶに  
 三四九 したカナリヤは、やなぎのむちで  
 三四八 したカナリヤは、ぞうげのふねに  
 三四七 の子どものおうちは、丘の上にあるの  
 三四六 ほかの子どもたちは、どうきまるかま  
 三四五 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三四四 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三四三 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三四二 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三四一 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三四〇 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三九 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三八 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三七 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三六 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三五 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三四 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三三 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三二 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三一 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三三〇 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二九 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二八 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二七 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二六 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二五 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二四 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二三 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二二 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二一 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三二〇 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一九 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一八 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一七 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一六 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一五 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一四 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一三 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一二 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三一一 「略。」ジュデーはこういます。「へ  
 三〇〇

三六四 「略。」おとうさんはおききになりまし  
 三六三 う方いっぺんにはいけないう。右手  
 三六二 そこで、おとうさんは、ボートをこいで  
 三六一 した。もうみんなはどこへもいけませ  
 三六〇 心があわなくてだめ、だめ。」「おと  
 三五九 「略。」おとうさんはそういつて、また  
 三五八 「略。」おとうさんは女の子たちにおき  
 三五七 「略。」おとうさんは女の子たちにおき  
 三五六 「略。」おとうさんは男の子たちにおき  
 三五五 「略。」おとうさんは男の子たちにおき  
 三五四 やつたので、みんなは空をみあげました  
 三五三 んでいました。雲は、もりの方へし  
 三五二 んでいます。「風はなんていつてるの  
 三五一 「略。」おとうさんはおっしゃいました。  
 三五四 「それからみんなはおもしろくあそび  
 三五四 ま五人の子どもはゆうごはんをたべ  
 三五四 そのとき、ピーターはふと、ゆかの  
 三五四 「略。」ピーターは大声でいいました  
 三五四 。そこで、デビッドはいすからおりて、  
 三五四 ども、つまむことはできません。「略  
 三五四 。そこで、バーバラは、だいどころから  
 三五四 「略。」おかあさんはおききかえしにな  
 三五四 た。それで、みんなはいすをおりて、そ  
 三五四 さいました。みんなはそこをみました。  
 三五四 「お日さまの光はお日さまからやつ  
 三五四 に、赤いお日さまは丘のかけへし  
 三五四 たが、ゆかのの上にはもうみえません  
 三五四 じゃあ、お日さまはよその國でなに  
 三五四 「略。」「お日さまは一つしかないから  
 三五四 あいだ、お日さまは、よその國の子ど  
 三五四 あさも、お日さまはきつとかえつて  
 三五四 としてしまうのはいや。」と、ジュデ  
 三五四

三78 6 ⑤ ます。「お日さまはまいあさかえつて  
 三78 7 ⑤ れにも お日さまはとられませんか。雲  
 三79 7 ⑤ こえました。みんなは空をながめました  
 三80 4 ⑤ なあ。ぼくの道は、雨にめちやめち  
 三80 7 ⑤ ルがいいです。雨は、みんなのいうこ  
 三80 8 ⑤ んなのいうことにはおかまいなしに、  
 三80 10 ⑤ つづけます。みんなはとうとうえんがわ  
 三81 2 ⑤ た。そのうちに、雲は雨をつれて、空を  
 三81 7 ⑤ いました。ピーターは赤がすきでした。  
 三81 10 ⑤ いました。マイクルはみどりがすきでし  
 三82 4 ⑤ いました。ジュデルは青がすきでした。  
 三83 2 ⑤ いました。「ぼくはだいたい色にする  
 三84 3 ⑤ いきます。ピーターは、ほのさきにあま  
 三89 3 ⑤ よう。ていしゃばでは、どんなひびきが  
 三89 4 ⑤ るでしょう。学校では、どんな音がする  
 三89 5 ⑤ しょう。かいがんではどうでしょう。こ  
 三89 6 ⑤ でしょう。こうばではどうでしょう。み  
 三89 7 ⑤ でしょう。みなとはどうでしょう。風  
 三90 1 ⑤ しょう。風の日にはどんな音。雨の  
 三90 2 ⑤ んな音。雨の日にはどんな音。十一  
 三90 4 ⑤ のもの。このはしはみんなのものです  
 三91 2 ⑤ いきます。わたくしは、学校へいくとき  
 三92 4 ⑤ さいたきれいな花は、みんなの心をた  
 三97 8 ⑤ 。心に思ったことは、いつのまにかき  
 三97 10 ⑤ 、紙にかいたものは、いつまでものこ  
 三98 2 ⑤ 口ではなしたことは、そのままきえて  
 三98 3 ⑤ にかいたおはなしは、いつまでものこ  
 三99 1 ⑤ いところでも、紙は、字やえをはこん  
 三99 7 ⑤ 、それをみるのは、ほんとうにたの  
 三100 4 ⑤ ました。おじいさんはまいにち、のや山  
 三101 5 ⑤ ました。おじいさんはよろこんで、「へ略  
 三101 7 ⑤ ろこんで、「これはわたしにさずかっ

三102 4 ⑤ れからというものは、おじいさんのと  
 三102 5 ⑤ のとる竹の中には、たびたびこがね  
 三102 6 ⑤ おじいさんのうちは、だんだんかねもち  
 三102 7 ⑤ だったおひめさまは、三月ほどのあい  
 三102 9 ⑤ 。そのうつくしさはたとえようもなく  
 三103 2 ⑤ ました。おじいさんは、きもちのわるい  
 三103 5 ⑤ 。世の中の人たちは、「略。」といっ  
 三104 2 ⑤ ひめをみた人たちは、「略。」と思っ  
 三104 6 ⑤ ました。その中には、みやさまがたも  
 三104 8 ⑤ れども、かぐやひめは、「略。」といっ  
 三104 9 ⑤ めは、「わたくしはだれのところにも  
 三105 4 ⑤ た。たいていの人は、あきらめてしま  
 三105 6 ⑤ それで、かぐやひめは、その人たちに  
 三105 9 ⑤ ひめのいうようには、だれもすること  
 三106 7 ⑤ ました。おじいさんは、かぐやひめにこ  
 三106 10 ⑤ いて、かぐやひめはやつぱりきまぜ  
 三107 1 ⑤ せんでした。みかどは、おじいさんとご  
 三108 1 ⑤ なりました。みかどはびっくりなさつて  
 三108 2 ⑤ 、つれていくのはやめよう。」とお  
 三108 3 ⑤ ますと、かぐやひめは、またすがたをあ  
 三108 4 ⑤ わしました。みかどは、「略。」とお思  
 三108 5 ⑤ みかどは、「これはただのにんげんで  
 三108 5 ⑤ だのににんげんではあるまい。」とお  
 三109 2 ⑤ なるど、かぐやひめは、空をながめては  
 三109 2 ⑤ は、空をながめてはためいきをつき、  
 三109 5 ⑤ ぐやひめのようなすはいつそうかなしそ  
 三109 6 ⑤ る夜、かぐやひめは、とうとう声をた  
 三109 8 ⑤ さんとおぼあさんはおどろいて、その  
 三109 9 ⑤ ました。かぐやひめは、「略。」とこた  
 三110 2 ⑤ したが、ほんとうは、わたくしは月の  
 三110 3 ⑤ とうは、わたくしは月の世界のもの  
 三110 4 ⑤ 。この十五夜には、月の國からむか

三110 10 ⑤ たさないくふうはあるまいか。」と、  
 三111 1 ⑤ 「略。」と、ふたりはいろいろかんがえ  
 三111 9 ⑤ さんの家のまわりは、弓矢をもった人  
 三112 2 ⑤ ました。おぼあさんは、しめきつたくら  
 三112 3 ⑤ ました。おじいさんは、そのいり口でば  
 三112 8 ⑤ 「略。」けらいたちは、弓に矢をつがえ  
 三113 4 ⑤ ぐやひめのかからだは、すうつとそとへ  
 三113 7 ⑤ ません。かぐやひめは、おじいさんとお  
 三113 10 ⑤ 。せめて月夜には月をみて、わたく  
 三115 1 ⑤ すると、かぐやひめは、「略。」といっ  
 三115 5 ⑤ のこしました。天人は、いそいでかぐや  
 三115 6 ⑤ ぐやひめのすがたは、それはそれはう  
 三116 1 ⑤ いきました。みかどは、そののちいつま  
 三116 3 ⑤ しのくすりと手紙は、かえつてかなし  
 三116 5 ⑤ ちばんちかい山はどこか。」と、おつ  
 三116 7 ⑤ た。おつきのものは、「略。」ともう  
 三117 2 ⑤ あげました。みかどは、「略。」とおい  
 三117 6 ⑤ た。おつきのものはそのとおりにし  
 三117 6 ⑤ 一 この町 ここは、町やくばです。あ  
 三117 6 ⑤ ぼうそうの知らせは、ここからきます。  
 三117 6 ⑤ なくなつたときには、やはりここに  
 三117 6 ⑤ とどけます。ここはゆうびんきよくで  
 三117 6 ⑤ す。いそぐときには、でんぼうをうつ  
 三117 6 ⑤ つといそぐときには、でんわをとりつ  
 三117 6 ⑤ ところ。ここはけいさつしよです。  
 三117 6 ⑤ ざつする町かどでは、きちんとせいり  
 三117 6 ⑤ てくれます。ここは、水のきれいな  
 三117 6 ⑤ いけです。まわりには、さくらの木がた  
 三117 6 ⑤ んだよう。ここは、町でもひょうば  
 三117 6 ⑤ いています。ここは、びょういんです。  
 三117 6 ⑤ よういんです。ここは、しょうぼうしよ  
 三117 6 ⑤ ぼうしよです。ここは、えいがかんです。

四一〇三 いがかんです。ここはとしゃかんです。  
 四一一一 しゃかんです。ここはわたくしたちの学  
 四一二一 うをします。ここはえきです。となり  
 四一八一 てひいた。石うすは、ゴロンゴロンと  
 四一九二 「文を書くことは、お話をすると  
 四一九四 があいてなしにはできないように、  
 四一九五 もあいてなしには書けるものでは  
 四一九六 は書けるものではありません。」先生  
 四一九六 やったので、みんなはそれぞれあいての  
 四二〇一 ました。まさおさんは、あいての人を「  
 四二〇六 ねこの一ぴきは、わたくしです。先  
 四二〇九 、「さあ、用意はいいですか。」と  
 四二一〇 いました。みんなは、『略。』とこた  
 四二一三 ねこのわたくしは、どのねずみをつ  
 四二一六 した。ねずみたちは、わのなかできよ  
 四二一八 います。わたくしは、ただしさんをね  
 四二一〇 しました。みんなは、『略。』たつおさ  
 四二二二 した。ねずみたちは、あわててわのそ  
 四二二七 「略。』たつおさんは、『にいさん』にあ  
 四二三四 したね。にいさんは、こんど、いつお  
 四二三六 すか。そのときは、山へくりひろい  
 四二三九 ましょうね。ぼくは、大きくなったら、  
 四二四二 「略。』すみこさんは、『いもうと』にあ  
 四二五三 お話ししない日はありません。お話  
 四二五六 うです。わたくしは、みっちゃんがあ  
 四二六一 「略。』のぶこさんは、『りんご』にお話  
 四二六五 こと。りんごさんは、どこへいっても  
 四二六六 なおさらの上では、おひめさまのよう  
 四二六七 「略。』たみおさんは、『きりぎりす』を  
 四二六九 きました。「きみはよくなくね。きみ  
 四二七四 「略。』たろうさんは、『ボチ』あてに書  
 四二七八 「略。』としおさんは、『雲』に話をす

四二八四 「略。』きよしさんは、じぶんをあいて  
 四二八八 したいと思うことは、なんだろう。山に  
 四三〇一 「略。』せつこさんは、『くみの人みん  
 四三〇五 た。』にしださんは、きょうもびよう  
 四三〇九 まいをしようでは、ありませんか。お  
 四三一〇 います。わたくしは、うちのにわにさ  
 四三二二 きました。男の子は、げたのはなおが  
 四三二五 。その生徒さんは、すぐひもでげた  
 四三二八 ので、わたくしは、かさをさしかけ  
 四三三一 とき、わたくしは、『略。』四心  
 四三三三 あがると、男の子は、それをはいて、  
 四三三五 女の子は、わたくしに、『略  
 四三四三 気のついたことは、ありませんか。』先  
 四三四四 ずねられて、みんなは、もう一ど、かず  
 四三四七 きません。「先生は、かずこさんのお  
 四三五三 さん。」「かずこさんは、中学校の女の生  
 四三五九 」。『略。』先生は、そこに気がつい  
 四三六一 ずこさんの耳には、おとうさんのこ  
 四三六五 、「略。』みんなは、しばらく考えて  
 四三七一 りました。そこには、ぶどうが、たくさ  
 四三七三 ました。わたくしは、たべたくてしよ  
 四三七九 ありました。それは、おかあさんのこ  
 四三七八 しいまねをしてはいけませんよ。』と  
 四三八一 でした。わたくしは、だまってうちへ  
 四三八三 、「略。』それはえらかった。たろ  
 四三八四 った。たろうさんは、なぜぶどうをも  
 四三九一 すむと、みんなは、めいめいじぶん  
 四三九四 かわいいことばは、いつも、あなたが  
 四四〇三 ます。あなたがたは、これから、りつぱ  
 四四〇二 ま。三十ばのがんは、まいにちまいに  
 四四二六 なってしまふことは、ありませんでした。  
 四四三三 略。』「略。』がんは、おたがいにいま

四四三七 ら、三十ばのがんは、目をさしました  
 四四三八 ましました。ゆうべは、ぬまのきしの、  
 四四四二 とうばんのがんは、大きな声でさけ  
 四四四五 た。『略。』みんなは、それにさんせい  
 四四四七 ところが、『それはいけないよ。』と  
 四四四八 略。』といったのは、かっちゃんでした  
 四四四九 、「略。』「ぼくは、きのうは、一ばん  
 四四五〇 ぼくは、きのうは、一ばんおしまいだ  
 四四五一 たもの。おしまいはいつらいよ。」「略  
 四四五五 ないよ。おしまいには、気がらくでいい  
 四四五七 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四五九 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四六〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四六二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四六四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四六六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四六八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四七〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四七二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四七四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四七六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四七八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四八〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四八二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四八四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四八六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四八八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四九〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四九二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四九四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四九六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四四九八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五〇〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五〇二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五〇四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五〇六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五〇八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五一〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五一二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五一四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五一六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五一八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五二〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五二二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五二四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五二六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五二八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五三〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五三二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五三四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五三六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五三八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五四〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五四二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五四四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五四六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五四八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五五〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五五二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五五四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五五六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五五八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五六〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五六二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五六四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五六六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五六八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五七〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五七二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五七四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五七六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五七八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五八〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五八二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五八四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五八六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五八八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五九〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五九二 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五九四 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五九六 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 四五九八 、「さあ、きょうは、どのへんになら  
 五〇〇〇 、「さあ、きょうは、どのへんになら

四 52 2 、よいなことでありません。どう  
四 52 6 。二十九わの がんは、列をきれいに  
四 52 7 につくるところではありません。ちょ  
四 52 10 。きけんなところは、どうやらと  
四 53 2 た。 がんの なかまは、この 山の むこう  
四 53 8 ている がんたちには、この 風が なんと  
四 53 10 。みずうみの 島には、こんもりとし  
四 54 1 た。 がんの なかまは、この 林の中  
四 54 8 ました。 かつちゃん は、はねの つけねを  
四 54 9 ました。 かつちゃん は、ねつが でてきたの  
四 55 2 やりました。 島には かりうどは きませ  
四 55 2 。 島には かりうどは きませんが、大  
四 55 5 きました。その 夜は、さいわい、雨も  
四 55 8 しました。それは、小鳥たちが、ねぼ  
四 55 9 あさ、 かつちゃん は、ねつが ずっとさ  
四 57 3 したので、みんなは 大よろこびでし  
四 57 4 で、その 日の ばんは、 かつちゃん の 全  
四 58 3 ました。 かつちゃん は、みんなの か  
四 58 7 いって、 かつちゃん は たのしんで いま  
四 59 2 。二十九わの がんは、「略」とさ  
四 59 9 略。 かつちゃん は、 どんどん でか  
四 60 9 、二十九わの がんは、 テーブルの まわ  
四 61 5 て、「略。」みんなは はしを とりまし  
四 61 6 ました。 かつちゃん は、「略。」と、お  
四 62 2 ひまに、 かつちゃん は、もう 一ど 林の  
四 62 7 ろです。 かつちゃん は、いきなり へびの  
四 62 9 まに なかまの がんは、 するりと ぬけだ  
四 63 2 略。 かつちゃん は、 なかまの 手をと  
四 63 4 えりました。 みんなは、 それを みて、お  
四 63 8 略。 かつちゃん は、 どう なら ぼうか、  
四 63 9 われて、 かつちゃん は、 きまりわるそうに  
四 64 8 やあ、 かつちゃん は、 三ばんめに しよ

四 64 10 がじゅうぶんではないから、あとの  
四 65 3 。三十ばの がんは、 みずうみの 島を  
四 65 6 ました。 がんの 列は、その きれいな 雲  
四 66 2 早口あそび」これは、 いいにくいこと  
四 66 6 ぶんあそび」これは、 上から よんでも  
四 70 2 いととく。 ころは、 ぶりが やむと、  
四 70 6 けととく。 ころは、 きくばかり。 「へ  
四 70 9 りととく。 ころは、 ふれば なる。 「へ  
四 71 3 んととく。 ころは、 『ろ』の 上に あ  
四 71 6 ゆととく。 ころは、 『は』の 上に あ  
四 71 9 れに あたった 人には、 おもちゃの ねこ  
四 72 4 れに あたった 人には、 ハンケチを あげ  
四 72 5 を あげます。 これは、『略。』という  
四 72 7 これを ひいた 人には、 なにも あげませ  
四 72 10 れが あたった 人には、 につきちやうを  
四 74 8 夜空。へ——返事は いつも はつきりと  
四 75 5 ぬ——ぬれた ものは ほせ。る——るす  
四 75 6 ほせ。る——るす いは しっかり 氣をつ  
四 75 8 を——「を」の 字は、 ことばの あとに  
四 75 10 —わから ない こと は しらべよう。 か—  
四 76 2 よう。 か——からだは いつも きれいに  
四 76 9 学用品。つ——つめは のばさぬ ように。  
四 77 4 —うれし い ときは、 どん とき。 む  
四 77 5 る——「あ」の 字は これから 「い」を  
四 77 9 —山より 高い もの は なに。 ま——まつ  
四 81 3 (一) きようは たのしい クリスマ  
四 82 1 われて、 きようは、 エスさま およろ  
四 82 3 (二) わたくしは、 ねえさんと ふた  
四 83 3 だしました。それは ふじ山の えでし  
四 83 10 つりさげると、 弟は 「略。」とい  
四 85 6 た。「略。」みんなは よろこんでもらい  
四 86 3 た、まつ の 木の 枝は、 まがるほど 雪に

四 87 3 ないた。おとうさんは、町へいって、ま  
四 88 6 ものがたり。 山は 大雪、日は くれる  
四 88 6 山は 大雪、日は くれる。 からです  
四 88 9 からすの かんたは さむからう。 「略  
四 89 5 が、「こんやは だいぶつもるでし  
四 89 6 親子の ねたあとは、 さらさらさら  
四 91 7 げが たつ。 ほおには あせが つたわつて  
四 91 9 れども、 おじいさんは うれしそう。 降つ  
四 92 1 しそう。 降つた 雪は まっ白だ。 かし、  
四 92 1 し、 降つてくる 雪は、 まっ黒だ。 まっ黒  
四 92 2 まっ黒だ。 まっ黒くは ないかも しれない  
四 92 3 ても、 白い もの ではない。 雪が 降りだ  
四 92 4 降りだすと、 ぼくは まどから か  
四 93 8 る。 降つてくる 雪は みんな 黒い。 雪が  
四 94 4 ると、 白くて、 黒くは ない。 大きな 雪、  
四 95 4 な雪、 雪の かたちは きま っていない。  
四 95 5 んな こと を しは いけない。 か  
四 97 8 くれる かね。 それは ありがたい。 うら  
四 99 6 がたい。 うらしまは、 おかねを 子ども  
四 99 7 こう。 子どもたちは、 「略。」とい  
四 100 2 めさん。 うらしまは、 かめを だきおこ  
四 100 5 りしなさい。 かめは、 手で なみだを ふ  
四 100 8 て おかえり。 かめは、 ていねいにお  
四 101 6 まいます。 うらしまは、 かめの うしろ  
四 101 9 かけても、 うらしまは、 いっしんに つり  
四 103 1 つきません。 かめは、 すぐそばまで  
四 103 3 しました。 きようは、 お札に あがりま  
四 104 4 うらしま、 お札には およばないよ。 元  
四 105 6 ます。 りゅうぐうは、 ほんとうに きれ  
四 105 9 うらしま、 それは おもしろい。 つれ  
四 106 3 しましう。 かめは、 うらしまの 手  
四 106 5 しま「りゅうぐうは、 まだとおいの。」

四一〇九 ちらへ。」うらしまは、あたりのうつく  
 四一〇七 ださい。」うらしまは、右のこしかけに  
 四一一五 した。このあいだは、うちのかめをお  
 四一一三 せ。」おとひめさまは、左のいすにこし  
 四一一四 こしかけます。かめはそのそばになら  
 四一一五 ならびます。魚たちはごちそうをはこん  
 四一一八 かめ「りゅうぐうはいつもこうなので  
 四一三三 のこと、うらしまは、父や母のことを  
 四一三六 した。たい「これは、まださしあげた  
 四一五二 まあ、よろしいではございませんか。」  
 四一六六 「このたまてばこは、どんなことがあ  
 四一六七 おあけになつてはいけませんよ。」う  
 四一七〇 います。」うらしまは、たまてばこを手  
 四一七二 ま「これをあけてはいけないというの  
 四一八二 くれたうらしまは、あけてみました  
 四一九五 わかいうらしまは、みるみるしらが  
 四二〇三 できあがるまでには、どれほど苦心を  
 四二〇五 うのまるいガラスは、どうしてこしら  
 四二〇七 い糸のようなものはなんでしょう。光  
 四二〇九 よう。光がでるのはなぜでしょう。「へ  
 四二二一 よう。「わたくしはでんきです。とお  
 四二二六 せん。でんきゅうはわたくしのかおで  
 四二二九 作りあげるまでには、どれほど手かず  
 四二三一 よう。「わたくしはマツチです。わた  
 四二三二 まれてくるまでは、なん百年も、なん  
 四二三四 なん千年も、人々は不自由な思いを  
 四二三六 二 四季 春 三月はひなまつり。四月  
 四二三七 ひなまつり。四月はさくら。五月はこ  
 四二三八 月はさくら。五月はこいのぼり。夏  
 四二四〇 のぼり。夏 六月はつゆ。七月はたな  
 四二四二 六月はつゆ。七月はたなばた。八月は  
 四二四四 はたなばた。八月は水およぎ。秋九

四二五三 およぎ。秋 九月はお月。十月はう  
 四二五四 月はお月。十月はうんどうかい。十  
 四二五五 んどうかい。十一月はきくの花。冬  
 四二五七 花。冬 十二月はもちつき。一月は  
 四二五八 はもちつき。一月はお正月。二月はう  
 四二五九 月はお正月。二月はうめの花。十三  
 四二七三 りようし「きようはいいお天気だ。な  
 四二七四 りようし「あれはなんだろう。」りよ  
 四二七五 だろう。」りようしは、そばへよつて、  
 四二八〇 きれいなきものは、みたことがない  
 四二八二 しょう。」りようしは、そのきものをも  
 四二八四 。女「もし、それは、わたくしのきも  
 四二八六 うし「いや、これは、わたしがひろつ  
 四二八八 います。」女「それは、天人のはごろも  
 四二九〇 て、あなたがたには、ご用のないもの  
 四二九二 なおさらお返しはできません。國の  
 四二九四 返せません。」天人は、かなしそうなか  
 四二九六 よう。「天人「それは、ありがとうござ  
 四二九八 したら、あなたは、まわずにかえつ  
 四三〇〇 よう。」天人「天人は、うそということ  
 四三〇二 うし「ああ、これははずかしいことを  
 四三〇四 しました。」りようしは、はごろもを返し  
 四三〇六 を返します。天人は、それをきて、し  
 四三〇八 都の天人たちは、みんなそろつて  
 四三一〇 まえば、月はまっ黒、やみの夜  
 四三一二 まえば、月は十五夜、まんまる  
 四三二四 んまるい。」天人は、まいながら、だん  
 四三二六 のまにやら天人は、春のかすみ  
 四三二八 、きりがおりる、夜は夜つゆがおりる。水  
 四三三〇 川は大きくなる 川は山からかけおりる。  
 四三三二 ヤブはしやいで、川は山からかけおりる。  
 四三三四 からかけおりる。川は友だちとあくしゅし

五六二 とあくしゅして、川はだんだん大きくなる  
 五六六 道の水にもなり、川はだんだん大きくなる  
 五六七 だんだん大きくなる。川は野原におりてくる。  
 五七三 川ははたらく 川は大きくなると、ゆつ  
 五七九 くにすてにいく。川はだまってはたらく。  
 五八〇 ネルです。ここは、みなさんで、苦勞  
 五八二 ない。駅の人たちは、いつも氣をつけて  
 五八四 いた。わすれものはないか、じろう。」  
 五八六 略。」(二) 私は、としおさんが、み  
 五八八 かけます。ゆくさきはむねのところに書い  
 五九〇 ますから、まちがいありません。けれど  
 五九二 も、このままでは旅はできません。切手  
 五九四 もらうのです。これは、汽車の旅にきつ  
 五九六 ぶです。汽車のきつぷは、遠い、近いによつ  
 五九八 がちがいますが、私は、三十錢でどこへで  
 五九九 れました。「きみは、どこへいくの。」  
 六〇〇 略。」「ぼくは、さつぽろまで。」  
 六〇二 略。」「あなたは、どこまでいくの。」  
 六〇四 略。」「わたしは、かごしままで。」  
 六〇六 な話で、かばんの中にはぎやかです。まも  
 六〇八 。まもなく、私たちは、ゆうびんきよくの  
 六一〇 はいりました。そこは私たちの山です。「へ  
 六一二 ねえ、きみ。ぼくは遠いところへいくん  
 六一四 略。」「わたしのはこんな小さな字だか  
 六一六 へ。」「あなたたちはまだいい。このわた  
 六一八 うそ字さ。わたしは、ちゃんとゆくさき  
 六二〇 ちゃんとゆくさきは知ってるが、うそ  
 六二二 た。そこで、私たちは、じょうぶなふくろ  
 六二四 すから、おちる心配はありません。私たち  
 六二六 ありません。私たちは、汽車につまれて、

五19 9 している、こんどは、また、かぼんの中  
 五19 11 た。配たつをする人は、自てん車に乗って  
 五20 1 ました。私のなかまは、一けん一けんにく  
 五20 7 ました。「略」。私は、その家のげんかん  
 五20 10 とりあげました。私は、ぶじに、としおさ  
 五22 2 さん、いちろうさんは、おかあさんのさと  
 五22 5 、きょうのうれしさは、それだけではありません  
 五22 6 しさは、それだけではありません。いちろ  
 五23 3 のね、帰りの電車はともこんでいたん  
 五24 2 いるんです。ぼくは、はっと思つて、す  
 五24 4 へ。「そう、それはよかったね。それで  
 五24 6 がって、『男の人は立つてください。』  
 五25 1 けれども、『ぼくは、もう大きいんです  
 五25 4 』。「ええ、はじめは、電車の中は、まる  
 五25 4 じめは、電車の中は、まるでにらめっこ  
 五25 5 たのに、それから、みんなにこにこし  
 五25 6 ました。ほんとうは、それでうれしかっ  
 五26 3 れから、はるこさんは、きつぷを改札の女  
 五26 11 とうっていったのは、どういうわけ。」「  
 五27 9 くん しんきちくんは、電車をおりてから  
 五28 3 ちくんのおとうさんは、店でそろばんをは  
 五29 2 しかつたというのとはどんなことかね。」「  
 五29 3 略。」「それはこうなんです。店を  
 五29 5 ていました。一つは大きくて、ぼくなん  
 五29 6 うもない物、一つは小さくてかるそうな  
 五29 7 す。そこで、ぼくは、『略。』といいま  
 五30 1 う。しかし、きみは小さいから、まあい  
 五30 4 ました。その荷物は小さいわりに、なか  
 五30 5 たのですが、ぼくは、かたへのせて持つ  
 五30 6 につくと、その人は、『略。』ときいた  
 五30 8 なかったね。きみは、ときどき、こうい  
 五30 9 きいたので、ぼくは、『略。』といいま

五31 1 たのです。ぼくにはすこしおもかったん  
 五31 4 すると、その人は、トランクからこの  
 五31 6 だして、『これには、きみのようないい  
 五32 9 でいます。この汽車は、なにをたいて走っ  
 五33 1 るのでしょうか。これは貨物船です。かんば  
 五33 6 はいっています。船は、なんの力で走ると  
 五34 1 ぼっています。ここは工場町です。ここで  
 五34 5 いを動かしている力は、なんでしょう。お  
 五35 1 ガスこんろの青い火は、ガスがもえている  
 五35 2 るのです。あのガスは、なにかから作るの  
 五35 4 ころでしょう。これは、石炭をほっている  
 五35 8 います。とれた石炭は、トロッコにつんで  
 五36 5 らとれます。私たちは、石炭なしには、く  
 五36 6 たちは、石炭なしには、くらすことができ  
 五36 7 ません。では、石炭は、どうしてできたの  
 五37 1 がみえますか。これは大むかしのけしきで  
 五38 4 きました。そのかたは、ほっかいどうで、  
 五39 2 「ほっかいどうは、いまがいちばんた  
 五39 3 山のとつぺんには、まだ雪がのこつて  
 五39 4 も、中ほどから下は、雪がありません。  
 五39 9 略。」「こちらでは、さくらの花も、な  
 五40 2 美しくなると、私は、なんだか、ぼんや  
 五40 4 す。私のすきな花は、こぶしの花です。  
 五40 5 の花がよくさく年は、ほう年だといいま  
 五40 7 」。ぼくのうちには、うしが十三とうい  
 五41 5 いました。子うしは、小川の岸をとこと  
 五41 10 さん。このあいだは、お手紙ありがとう  
 五42 1 べてあります。私は、まだ、ほっかいど  
 五42 2 どうへいったことはありません。けれど  
 五42 6 略。」「こちらでは、田うえがはじまり  
 五42 7 じまりました。私は、なえはこびをして  
 五43 1 うち、うちに帰るころは、もう、あたりはく

五43 1 は、もう、あたりはくらくらしています  
 五43 3 ちらでも、ほたるはとびますか。」「略  
 五43 4 「ぼくのねえさんは、あさひがわへおよ  
 五43 5 っています。ぼくはねえさんから、よく  
 五43 6 ました。ねえさんはいいい声でした。ぼく  
 五43 8 した。ぼくのうちは花屋です。ですから  
 五44 3 ぼくのすきな花は、あさがおです。空  
 五44 3 日本の子どもらは、はとだ。平和の  
 五45 1 日本の子どもらは、つばみだ。きれ  
 五45 7 日本の子どもらは、星だ。光った星  
 五46 10 たら、もう鳴いてはいなかった。たの  
 五47 8 いていたり、名まえは知らないが、きれい  
 五49 2 に、身をきよめるのはうれしい。わたし  
 五50 6 海べ がけの下には 白いはま、 白い  
 五52 5 んをまつあいだ、私は、まさこをうば車に  
 五53 9 した。「略。」「それは、南東の空で光って  
 五53 10 した。「三ばん星は、ねえさんがみつ  
 五54 5 うに、はるおさんは目が早いね。」「そ  
 五54 9 まわしましたが、空は、まだ、ほんのりと  
 五54 10 の星をみつめることは、できませんでした  
 五55 4 さつきみつけた星は、どれだったかしら  
 五55 10 くださいました。私は、おかあさんにこの  
 五56 2 た。「今夜みるのは土星です。あそこに  
 五56 4 ました。「略。」「私は、『略。』じゅんば  
 五57 2 ずりました。はるおは、のぞいていました  
 五57 4 うです。「略。」「私は、こういつて、はる  
 五58 3 た。「略。」「はるおは、まだみていたいよ  
 五58 9 へ。「略。」「私たちは、まもなく帰ってき  
 五58 9 ました。ごろうさんは、『略。』といいま  
 五59 4 といいました。私は、いまみてきた土星  
 五59 9 も空色です。あやこは、それをみつめて、  
 五61 4 「めがでないことはありません。わたし

五617 ㊦ つるをのぼしたのは、だれかしら。あや  
五610 ㊦ みをこしらえたのは、だあれ。」「  
五621 ㊦ 三つもさかせたのは、だあれ。」「  
五623 ㊦ にそめてくれたのは、だれでしょう。」「  
五624 ㊦ 「略」。あやこは、なんとこたえてい  
五629 ㊦ なじですよ。たねはおかあさんがまいた  
五6211 ㊦ なによくできたのは、おかあさんの力で  
五6211 ㊦ おかあさんの力ではありませんよ。」「へ  
五633 ㊦ 「略」。せわはしてやりました。け  
五634 ㊦ がなったりしたのは、おかあさんのせい  
五634 ㊦ かあさんのせいではありませんよ。」「お  
五635 ㊦ 「略」。おとうさんは、この話をそばでお  
五638 ㊦ 「生まれたときは、ねてばかりいたの  
五639 ㊦ うになつて、いまは、もうこんなに大き  
五6311 ㊦ さがおやきゅうりは、自分ひとりで、大  
五641 ㊦ しょうが、わたしは、おとうさんやおか  
五643 ㊦ れたときからせわはしてきたが、日に日  
五645 ㊦ に大きくなったのは、おまえひとりの力  
五6410 ㊦ で生きていけるのは、だれのおかげだろ  
五654 ㊦ でした。ふたりは、ふるい小さな家に  
五656 ㊦ ました。おじいさんは、あみでさかなをと  
五657 ㊦ をとり、おばあさんは、糸をつむいでくら  
五659 ㊦ ある日、おじいさんは、海にでてあみをな  
五662 ㊦ ました。金のさかなは、「略」。といいま  
五663 ㊦ てください。お礼はたくさんさしあげま  
五666 ㊦ ました。おじいさんは、「略」。とやさし  
五668 ㊦ ました。おじいさんは、うちへ帰つて、お  
五6610 ㊦ しました。「わしは、きょう、金のさか  
五6611 ㊦ 帰してくれ、お礼はいくらでもあげると  
五671 ㊦ といったが、わしはお礼などもらわなか  
五673 ㊦ 「略」。おばあさんは、「略」。といいま  
五675 ㊦ のに。うちのおけは、もう、すっかりこ

五678 ㊦ くる日、おじいさんは海へやってきました  
五678 ㊦ やってきました。海はすこしあれていまし  
五686 ㊦ さい。帰るまでには、新しいおけができ  
五688 ㊦ みると、おばあさんは、新しいおけを持っ  
五689 ㊦ ころが、おばあさんは、「略」。おじいさ  
五691 ㊦ 「略」。おじいさんは海へやってきました  
五691 ㊦ やってきました。海はにごっていました。  
五695 ㊦ うちのおばあさんは、家がほしいという  
五698 ㊦ お帰りなさい。家はちゃんとできていま  
五701 ㊦ ました。おばあさんは、「略」。といいま  
五703 ㊦ でおくれ。わたしは、ひやくしようなん  
五706 ㊦ ました。おじいさんは、また海へやってきました。  
五706 ㊦ やってきました。海はあれていました。お  
五7010 ㊦ た。「おばあさんは、もうひやくしよう  
五7010 ㊦ もうひやくしようはいやになつたから、  
五713 ㊦ ますと、おばあさんは、けがわのふくをき  
五711 ㊦ ますと、おばあさんは、おじいさんをうま  
五722 ㊦ たつて、おばあさんはおじいさんにいま  
五724 ㊦ さかなに、わたしは金持のおくさんとい  
五726 ㊦ 「略」。おじいさんはびっくりして、「略  
五7211 ㊦ 「略」。おじいさんは、とほとほと海へや  
五7211 ㊦ やってきました。海はまっ黒になつてあれ  
五732 ㊦ ますと、金のさかなは、「略」。とたずね  
五735 ㊦ さん、おばあさんは、もう金持のおくさ  
五735 ㊦ う金持のおくさんはいやだ、女王になり  
五737 ㊦ さい。おばあさんは女王になりますよ。  
五7311 ㊦ ていて、おばあさんは女王になつていま  
五7311 ㊦ 女王になつてゐるではありませんか。そ  
五741 ㊦ りませんか。そばには、りっぱなけらいも  
五743 ㊦ います。おじいさんは、「略」。といいま  
五747 ㊦ ました。おばあさんは、おじいさんには目  
五748 ㊦ んは、おじいさんには目もくれないで、け

五7411 ㊦ たころ、おばあさんは、おじいさんをよん  
五752 ㊦ でおいで。わたしは女王もいやになつた  
五753 ㊦ になつた。こんどは、海のぬしになりた  
五757 ㊦ 「略」。おじいさんは、口ごたえもできず  
五7510 ㊦ やってきました。海はまっ黒になつて、波  
五761 ㊦ います。おじいさんは金のさかなをよびま  
五762 ㊦ ました。金のさかなは、でてきていいいま  
五764 ㊦ うちのおばあさんは、もう女王はいやだ  
五765 ㊦ さんは、もう女王はいやだといつていま  
五769 ㊦ 「略」。金のさかなは、なにもいわないで  
五772 ㊦ ました。おじいさんは、すぐごと、おば  
五785 ㊦ した。ひまわりの花は、いけださんが自分  
五806 ㊦ 十三日 水 きょうは大そうじをしました  
五8010 ㊦ した。にしもりさんはびっくりして、「略  
五814 ㊦ 十四日 木 きょうは五人も休みました。  
五821 ㊦ どうして、きょうはこんなに休んだので  
五823 ㊦ うにすること、夜は、はらまきをきちん  
五825 ㊦ やいました。みんなは、なま水をのまない  
五832 ㊦ 休みのとき、私たちは、運動場にあつま  
五843 ㊦ ました。たかぎくんは、え日記を書くとい  
五844 ㊦ ました。たかぎくんは、おしほをたくさん  
五845 ㊦ ました。ささきくんは、星をしらべるとい  
五846 ㊦ ました。いとうくんは、海岸のおじさんの  
五848 ㊦ した。いのうえさんは、國語の本にでい  
五8410 ㊦ いました。「それはおもしろい。いのう  
五854 ㊦ 」。りようかんさんはこういいながら、ほ  
五8510 ㊦ 」。「おまつさんはあとからきますよ。  
五867 ㊦ す。りようかんさんは、ほうきの手をとめ  
五8611 ㊦ 「略」。」「これはかわいいにんぎよう  
五872 ㊦ んぎようでも、目は二つですよ。」「略  
五873 ㊦ 「略」。」「わしは、三つも四つもある  
五878 ㊦ このおにんぎようは、きれいな赤いおび



五87(会)「略。」「きょうは、おにんぎょうのお  
五89(4)(会)ざかり。あれは、よいよいよい。  
五89(5)(会)いよい。これは、よいよいよい。  
五89(8)(会)どが島。あれは、よいよいよい、  
五89(9)(会)いよい、これは、よいよいよい。」  
五90(2)(会)いましたね。あれはどうですか。」  
五90(4)(会)わしのおかあさんはな、ずっとまえに、  
五90(6)(会)島をうたうときには、いつでもおじぎを  
五90(8)(会)わしも小さいときは、オギャア、オギャ  
五91(1)(会)ら、りようかんさんは、「略。」と、おく  
五91(8)(会)たので、「おまえは水がほしいのか。」  
五93(3)(会)ん——子どもたちは、みんな帰っていき  
五93(4)(会)た。りようかんさんは、帰っていく子ども  
五93(9)(会)「りようかんさんは、いつまでも月にみ  
五94(4)(会)ひろいました。ひなはたいそう小さくて、  
五95(6)(会)てやりました。ひなは、みちがえるように  
五95(10)(会)「略。」「さんちゃんは大きくて。  
五95(10)(会)ろこびでした。ひなはすずめではありません  
五95(10)(会)た。ひなはすずめではありませんでした。  
五96(2)(会)りました。「これはめずらしい。ひわの  
五96(2)(会)ですよ。ほんとうは、まひわというので  
五96(3)(会)のですが、ふつうは、ひわ、ひわといっ  
五96(6)(会)夏休みがすむころには、ひなはもう、かご  
五96(6)(会)すむころには、ひなはもう、かごの中をと  
五96(8)(会)おとうさん、ひわは自由にとべるように  
五96(11)(会)でとんでいくことはできますよ。」「略」  
五97(5)(会)できます。その中には、ひわのむれもあり  
五98(1)(会)。「略。」ひわの子は、それが自分のなか  
五99(2)(会)「。」という、ねこは、おどろいてにげて  
五99(3)(会)まいましたが、ひわは、かたのところにけ  
五99(6)(会)二三日すると、ひわは、もとのように元氣  
五99(10)(会)「いいや、この鳥はとべなくなったらし

五100(5)(会)「略。」「さんちゃんは、ひわによくいつて  
五100(5)(会)きかせました。ひわは、「略。」と、人な  
五100(8)(会)をはじめると、ひわは、「略。」と、へん  
五101(8)(会)ねをします。鳥かごは、おひるまえは、水  
五101(8)(会)かごは、おひるまえは、水道のあるいどば  
五101(10)(会)すが、おひるすぎには、かえでの木につる  
五102(6)(会)るのをきいて、ひわは、そのまねをして、  
五103(5)(会)みせました。すずめは、「略。」と鳴きま  
五103(11)(会)みせますと、すずめは、おどろいてとんで  
五104(4)(会)すると、みそささいは、「略。」と鳴いて  
五105(1)(会)をいきました。ひわは、感心したように、  
五105(3)(会)した。しじゅうからは、あくる日もやって  
五105(4)(会)した。それで、ひわは、すっかりそのまね  
五105(6)(会)にか、しじゅうからは、どこかへいつてし  
五105(7)(会)まいましたが、ひわは、いつもそのまねを  
五105(7)(会)つもそのまねをしては、ひとりよろこんで  
五105(9)(会)まあま、この鳥は、いくつもげいがで  
五106(3)(会)りてきました。ひわは、それを見ると、「へ  
五106(8)(会)んでいこうよ。空はひろくておもしろい  
五106(11)(会)ありがとう。ぼくはおともができないの  
五107(9)(会)きました。旅のひわは、おどろいて、すぐ  
五107(10)(会)したが、かごのひわは、大よろこびで、「へ  
五108(2)(会)ともこわいことはないから、いっしょ  
五108(4)(会)。」かごの中のひわは、なかまをよびまし  
五108(7)(会)けれども、旅のひわは、そのままとんでい  
五108(11)(会)した。近所の人たちは、まいにち、こまっ  
五109(2)(会)した。しかし、ひわは、すぐに、「略。」  
五109(8)(会)きいて、さんちゃんは、ますますひわがか  
五109(8)(会)ろへだされた。ねじは、おどろいてあたり  
五109(8)(会)ついてみると、こは時計屋の店であるこ  
五109(8)(会)分のおかれているのは、しごと台の上のに  
五109(8)(会)ラスの中で、そばには小さなしんぼうや、

六57(会)べやガラス戸だなには、いろいろな時計が  
六510(会)カチと氣ぜわしいのはおき時計で、カッタ  
六511(会)リとおうようなのはしら時計である。  
六62(会)ら時計である。ねじは、これらの道具や時  
六63(会)とみくらべて、あれはなんの役にたつのだ  
六63(会)たつのだろう、これはどんなところにおか  
六63(会)んの時計、それらはかたちも大きさもそ  
六68(会)それぞれがってはいが、どれをみて  
六610(会)どれもこれも不足はなさそうである。た  
六77(会)の子である。ふたりはそこらを見まわして  
六78(会)していたが、男の子は、やがてしごと台の  
六710(会)りはじめた。女の子はただじつとみつめて  
六83(会)「という、男の子はゆびさきでそれをつ  
六85(会)まった。子どもたちは思わずかおをみあわ  
六86(会)をみあわせた。ねじは、しごと台のあしの  
六87(会)てきた。時計屋さんは、「略。」といいな  
六88(会)「ここであそんではいけない。」といい  
六811(会)をかきまわしたのは。ああいうねじはも  
六91(会)は。ああいうねじはもうなくなつて、あ  
六94(会)いた。「略。」ねじはこれをきいて、とび  
六98(会)になつてきた。親子はそうがかりでさがし  
六98(会)がしはじめた。ねじは、「略。」とさけび  
六910(会)てたまらない。三人はさんざんがしまわ  
六1011(会)、「いちばん喜んだのはねじであつた。時計  
六111(会)あつた。時計屋さんは、さっそくピンセツ  
六118(会)たてはじめた。ねじは、自分がここにはい  
六1110(会)かつた。時計屋さんは、しあげた時計をち  
六122(会)んがきた。「時計はなりましたか。」  
六126(会)いのわるかつたのは、そのためでした。  
六128(会)つてわたした。ねじは、「略。」と、心か  
六136(会)れていました。ありは、川の岸で、うつむ  
六141(会)した。「略。」ありは大きな声をだしてさ

六五四 としていますが、雲はさつさと走っていき  
六五五 た。それから、三人はわかれて、それぞれ  
六五六 にそとをみると、空はいつのまにか、雲一  
六五七 ていました。ふみおはさつきのことを思い  
六五九 ないと思つてみた月は、もうさつきの枝の  
六五九 つきの枝のあいだにはなくて、木をずつと  
六五六 べ新聞 私の学級では、來週から、かべ新  
六五六 た。かべ新聞第一号は、一組でつくること  
六五六 。私たち一組のものは、みんな集まつて、  
六五七 なりました。これには、みんなにお知らせ  
六五七 さんの氣づいたことは、なんでも、かかり  
六五八 さい。「楽しい学級は、かべ新聞から。」  
六五八 てきました。この人は、私たちの組のまつ  
六五八 す。七と五と 私は、きのう、おもしろ  
六五九 がつきました。それはことばの声のかずの  
六五九 とです。うたうたは、なげうたいやすい  
六五九 ました。うたうたは、そのことばの声の  
六六〇 がわかつたとき、私はおもしろくてなりま  
六六〇 寒暖計 けさの温度は五度です。毎朝、こ  
六六一 しょう。「子どもは風の子。」「略。」「  
六六一 」。《略》。」「ねこは、こたつでまろくな  
六六二 光つた。アルコールは銀の水。弟がせきが  
六六三 るので、おかあさんはゆたんぽをいれてい  
六六三 ばん力のつよいものはなかに。二上にす  
六六四 すれば上になるものはなかに。三はたら  
六六四 。三はたらくときはよこになり、休むと  
六六五 こになり、休むときは立つものはなかに。  
六六五 休むときは立つものはなかに。このなぞの  
六六六 ぞの答がわかつた人は、紙に書いてかべ新  
六六六 二号をつくる人たちは、このお話のつづき  
六六六 。第三号をつくる人は、またそのつきを書  
六六七 でいくか、楽しみではありませんか。お話

六八七〇金　つて、そのそばには、大きな木が立つて  
六八七一合　ています。あなたは、その大きな木の  
六八八三金　。すると、海の神は、きつといふことを  
六八八八　る。ほおりのみことは、木をみあげて、ほ  
六八九一　ているわ。」女の人は木をみあげながら、  
六九〇四　「女はいい。」女の人は、水をくんで、ほお  
六九〇五　る。ほおりのみことは、ぐっとおのみにな  
六九一七　しなさい。」女の人は、いったんさがる。  
六九二〇　。「ほおりのみことは、こしをかける。海  
六九二一合　。海の神「あなたは、どなたでいらっし  
六九二二金　か。」ほおりの  
六九三三金　うでしたか。それはお困りでしよう。で  
六九三八　「女はいい。」女の人は、魚たちをたくさん  
六九四一合　。「はい。ただだけは、病氣でねておりま  
六九四三金　ますので、ここへはまいっておりません  
六九四四合　とっていったものはないか。」魚「ぞん  
六九五三金　ん。」海の神「それはおかしい。いや、た  
六九五六金　か知っているものはないか。」魚たち「ほ  
六九五九　かしいな。」海の神は、しばらくお考えに  
六九六三　「女はいい。」女の人は、たいをつれてでて  
六九六五合　。「海の神」おまえは、このかたのつりば  
六九七三　りました。」女の人はつりばりを水であら  
六九七五　りばりだ。」海の神は、ほおりのみことの  
六九七六合　。「このつりばりではございませんか。」  
六九七九　合唱をする。みことは、それにあわせてお  
六九九六合　でできた。「これは、いいものがみつつか  
六九九六　と思ひながら、ぼくは、この二つをかさね  
六九九八　あるようにみえるではないか。それは、こ  
六九九八　るではないか。それは、これから百メート  
六九九八　う思ひつくと、ぼくは、もう、じつとして  
六九九八　れなくなつた。ぼくは画用紙をとりだした  
六九九八　てできた二本のつつは、うまくはまりあつ

六102 4 きる。「略」。「ぼくはこうひとりごとをい  
六103 1 略」。「おかあさんは、目をまるくして、  
六103 6 略」。「略」。「ぼくは、おかあさんをひっ  
六104 4 「ぼくとおかあさんは、かわるがわるこの  
六104 7 んだ。(二) 弟は、二三日まえから、  
六104 7 ある。しかし、ねつはないので、ねている  
六104 8 で、ねているわけではない。ただ、はなが  
六106 1 いのに感心した。弟は、まえに、「略」。  
六106 2 ったことがあるのではない。しかし、「略」  
六106 7 た。なにかよいおりはないかと思っていた  
六106 9 飛行機である。ぼくは、ここだと思って、  
六107 3 いったので、みんなは、これで大わらいと  
六107 4 なった。ぼくのまねはしくじった。しかし  
六107 4 った。しかし、ぼくは、このおかげで、お  
六107 5 とに気がついた。弟ははながつまっている  
六107 7 発音できないわけではない。発音できるこ  
六107 10 いたのである。ぼくは、夜、勉強をすまし  
六108 1 えてみた。そのわけは、すぐけんとうがつ  
六108 4 きなくなるような音は、もともとはなから  
六108 7 発音できるような音は、はなから声でな  
六108 9 のはずである。ぼくは、いままで、ものを  
六108 11 とがなかった。これはおもしろいぞとぼく  
六109 1 おもしろいぞとぼくは思った。では、なん  
六109 3 音なのだろうか。弟は、「はな」の「ナ」、  
六109 4 い。すると、これらははなからでる音なの  
六109 7 がする。そこでぼくは、自分ではなをつま  
六109 10 がでる音であることはたしかとなった。自  
六109 11 っているようだ。弟は、こんなふうにして  
六110 2 弟のまねなんかわけはないぞと思った。な  
六110 6 なった。それでぼくは、思わず声をたてて  
六110 8 った。よし、あしたはうまくやって、みん  
六110 10 で、もうそんなことはどうでもよくなって

六110 11 「ノ」、「ネ」、「ニ」は、みんなアイウエオ  
六111 3 っている音ばかりではないか。ただ一つ「  
六111 11 ネノという一ぎようは、ぜんぶはなの音で  
六112 2 た。このほかに、弟は「ミ」、「ム」がいえ  
六112 2 なかった。この二つは、両方とも、マミム  
六112 6 。そうして、こんどは、アイウエオ、カキ  
六112 7 ぎ、はなからでる音は、ナニヌネノ、マミ  
六112 8 ぎようだけで、あとは、おしまいのパビブ  
六112 10 なから声のでる音ではないことがわかった  
六112 11 とがわかった。ぼくは、五十音というもの  
六112 11 、五十音というものは、一年生のときにな  
六113 1 っているが、いままでは、「ちがったかなを  
六113 2 かく考えてみたことはなかった。それがい  
六113 5 ソでも、かんたんにはわからないが、一ぎ  
六113 6 、一ぎよう一ぎようは、なにか、ほかのぎ  
六113 6 か、ほかのぎようとはちがった性質をもつ  
六113 8 にちがいない。ぼくは、こう考えると、弟  
六113 9 ろうなどという気持は、どこかへふっとん  
六115 4 した。ただしちゃんは、海外からひきあげ  
六115 5 持ったただしちゃんは、「略」といって  
六116 3 すと、ただしちゃんは喜んで、「略」と  
六116 10 ましたが、ほんとうは、たこを作るのは  
六116 10 うは、たこを作るのははじめてです。けれ  
六116 11 たら、できないことはないだろうと思いま  
六117 3 えてみました。材料は、ま四角な紙と、骨  
六117 3 やのりなどです。紙は半紙でいいし、骨は  
六117 5 は半紙でいいし、骨は工作のあまりのひご  
六117 6 あわせました。のりは、ごはんつぶをよく  
六117 7 四角に切る切りかたは、いつかおかあさん  
六117 9 のとりつけです。骨は、たて骨とよこ骨の  
六118 9 ました。紙のうらには、まん中に、ま四角  
六118 11 ら、よこ骨。よこ骨はまっすぐではなく、  
六119 4

六119 4 よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりに  
六120 1 ました。おかあさんは、「略」と、ほめ  
六120 8 略」。「略」。「ぼくは、だいに本ほこの  
六120 11 した。「略」。「ぼくは、うれしくてたま  
六121 5 五ひきのうさぎさんは、まつ林の中で、ま  
六122 2 」。うさぎさんたちは、おさるさんにみん  
六122 5 」。うさぎさんたちは、まつかさを一つ一  
六122 7 ました。おさるさんは、きよろきよろしな  
六122 9 た。うさぎさんたちは、くるみの木の下で  
六122 10 遊びました。そこには、くるみの実が、こ  
六123 1 ました。うさぎさんは、くるみをひろって  
六124 4 略」。「りすさんは、くるみがだいすき  
六124 7 」。「略」。「りすさんは、両手に、くるみを  
六124 9 ました。「こんどは、なにをしようか。  
六126 2 」。トンネルか。それはおもしろい。」五ひ  
六126 3 きのうさぎさんたちは、めいめいにあなを  
六126 5 た。まえ足でほって、うしろ足で土をは  
六126 6 きだしました。あなはずんずん長くなって  
六126 9 」。トンネルはだんだん深くなり、  
六127 3 きのうさぎさんたちは、大きな声でじゃん  
六127 7 きのうさぎさんたちは、とんとこ、とんと  
六128 3 きのうさぎさんたちは、うまくにげました  
六128 5 っていくと、みんなはあちらへこっそりわ  
六128 7 いるうさぎさんたちは、おかしいのをがま  
六129 3 の声がします。それはたぬきさんでした。  
六129 4 でした。たぬきさんは毛をぬらしてなにか  
六129 11 いわいやっていては、すぐぼくが、きつ  
六130 5 で、うさぎさんたちは、たぬきさんがかわ  
六130 8 た。うさぎさんたちは、そのまま向こうの  
六130 11 をみて、たぬきさんは、「略」と、大声  
六131 2 」。うさぎさんたちは、なんてひどくない  
六131 2 。

六131 2 。

六131 6「うさぎさんたちは、大きなけやきの下  
六131 8 へ」ました。「こんどはなにをして遊ぼう。  
六132 2 「略」かけっこは、うさぎさんたちの  
六132 3 います。「決勝点は、あの山のとっぺん  
六133 2 「略」決勝点は、どこ。」「略」  
六133 5 「略」しかさんは、のっそりと立つて  
六133 10 にもないなんて話はない。どうだ、こう  
六133 11 どうだ、こうしては。」しかさんは、も  
六134 1 「略」しかさんは、もし自分が勝った  
六134 5 「うさぎさんたちは、困ってしまいまし  
六134 6 の早いことにかけては、しかさんにかない  
六134 7 うすると、自分たちは、あの大きなすど  
六134 10 おるなどということはできません。角をと  
六134 11 ちっともいいことではないと、うさぎさん  
六134 11 と、うさぎさんたちは話しあいました。「へ  
六135 3 「うさぎさんたちは、しかさんとならび  
六135 3 びました。しかさんは、「略」と、元氣  
六135 7 さんと、しかさんとは、風のように走りだ  
六135 10 のぼりざかを走るの、うさぎさんのもつ  
六136 2 。しかさんも負けてはいません。角をふり  
六136 6 って走ると、こんどはたおれた木のみきに  
六136 11 つきました。そこには、もううさぎさんた  
六136 11 もううさぎさんたちはいませんでした。そ  
六137 4 ども、あなたの角はおりません。うさぎ  
六137 5 ている。ようしやはない。角でつい  
六137 7 「略」しかさんは、うさぎさんたちの  
六137 9 た。うさぎさんたちは、谷をわたり、みね  
六137 10 のうちに、しかさんは、いつのまにかはぐ  
六138 1 て、うさぎさんたちは、大きな岩のところ  
六138 5 き。うさぎさんたちは、ここでゆっくり休  
六138 8 す。うさぎさんたちは、そのことをすこし  
六138 9 んでした。とらさんは、晝ねをしていたの

六139 3 「略」とらさんは、そつと首をのぼし  
六139 4 き。うさぎさんたちは、あせをふいたり、  
六139 6 いました。とらさんは、いきなり、「略」  
六139 9 ました。うさぎさんは、びっくりぎようと  
六140 3 た。うさぎさんたちは、もうにげようと思  
六140 3 思ってもにげることではできません。助けて  
六140 9 た。うさぎさんたちは、いっしんになって  
六141 3 ひびきました。それは、もう一びきのとら  
六142 4 に、うさぎさんたちは、手をつないで、そ  
六142 9 にでました。野原には、日の光がいつぱい  
六142 11 五ひきのうさぎさんは、だいすきなクロ  
六143 3 うさぎさん、ここは、しずかなところで  
六143 7 き。うさぎさんたちは、みつばちさんのこ  
六146 7 、チチ。教室のまどは、まだねむりがふか  
六147 7 い。校門のかしの木は、目をさまして、し  
六149 7 んははじめにくるのは、だれかな。」かし  
六150 10 「略」かしの木は、子どもたちのこと  
六155 5 いでいたが、こんどは、思いきり高くどん  
六157 7 子だった。きょうは、ぼうしをかぶって  
六157 11 てくる。学校じゅうは、いちどに花がさい  
六182 2 たり——」かしの木は、きょうもそんなこ  
六186 6 まった。教室のまどは、どこもまぶたをと  
六192 2 ちらばった青い夜空は、子どもたちのクレヨン  
六193 3 くれた卒業生たちは、どこにどうしてい  
六197 7 な話がある。春には春の話、秋には秋の  
六197 7 には春の話、秋には秋のものがたり。な  
六197 7 える。「渡しもりは、渡し船に子どもが  
六202 2 先生のおしごとは、渡しもりのような  
六206 6 りてきた。かしの木は、あくびを一つして  
六210 8 。このときの「手」は、てのひらをさして  
六212 1 となると、人の手ではありません。これは  
六212 2 はありません。これは、持つところという

七12 4 というときの「手」は、またすこしながい  
七12 5 しながい。これは、あさがおのだして  
七12 5 している手のことではありません。あさが  
七12 5 「このときの「手」は、文字を書くことを  
七13 6 ようなときの「手」は、どんないみにつか  
七14 1 ます。つぎの「手」は、どんなつかいかた  
七14 7 つかいかたがあるの、手」だけではあ  
七14 8 のは、「手」だけではありません。「略」  
七15 3 「略」これは、「腹」ということ  
七15 9 つかいかたがあるの、おもしろいではあ  
七15 9 のは、おもしろいではありませんか。三  
七16 7 かけよう。はん長は、めいめいのはんの  
七16 10 「先生、きょうは風がありませんから  
七17 2 たね。風のない日は、きょうちよがよく  
七18 1 四先生、この実はなににするんですか  
七18 6 からね。てんぶらは、これであげるんだ  
七18 10 とんでる。きょうは、ずいぶんとんでる  
七19 2 このまえたときは、風が強かったから  
七19 5 「先生、風の日は、きょうちよは、ど  
七19 5 日は、きょうちよは、どこにかくれてい  
七19 8 のさ。」子どもたちは、小さな橋を渡る。  
七19 9 の白い花のはたけは、なんのはたけです  
七20 5 もと「私のうちでは、だいこんを、庭に  
七22 2 てごらん。」すずめは、びんぴんよんと  
七22 5 いちゃん、すずめはなににするの。」  
七23 7 強です。あなた、きょう、しゅくじ  
七23 11 強です。あなた、きょう、しゅくじ  
七24 2 やるから。」はるおは、だいこんの葉をと  
七24 2 葉をとってくる。兄は、しゅくじの葉の中  
七24 9 いごちそうだ。」兄は、二センチほどに大  
七26 4 ばと同じになるのは、鳥などに、すぐみ  
七27 2 たのです。先生は、あおむしがさなぎ

七四六 五 ラの序曲である。私は、汽車のまどから  
 七四六 八 子、きりの花——曲は終った。ちやうど、  
 七四六 一〇 車もとまった。青年は、すわって、アコー  
 七四七 一 というところまでは、なかなか、いきつ  
 七四七 七 か、いきつくものではありません。文章は  
 七四七 八 はありません。文章は、心の鏡のようなも  
 七四七 一〇 ても、文章のくもりはとれません。つぎに  
 七四八 三 んなさい。二回めのは、書きたしてあるだ  
 七四八 一〇 やった。ぼくのほうは、セクターが外野へ  
 七四九 四 。それで、内野の人はいっしんになったの  
 七四九 六 まった。第二回めには、にし村の学校とし  
 七四九 一〇 がいで勝った。ぼくは、うれしさをいっ  
 七五〇 六 になった。ぼくたちは、コートへでていっ  
 七五一 一〇 「とさけんだ。ぼくは氣が氣ではない。み  
 七五一 一〇 だ。ぼくは氣が氣ではない。みかたのおう  
 七五二 四 のあいずで、ぼくらは場所をこうたいした  
 七五二 九 持がした。第二回めは、にし村の学校とや  
 七五二 一〇 になった。このときは、ぼくらのほうのボ  
 七五三 一 とができた。こんどは、さいごの決勝戦だ  
 七五三 一 といは、町の、いちばん強  
 七五三 六 、向こうのせんしゅは、大きくて強そうだ  
 七五三 一〇 。あいてのセクターは、ぼくをねらった。  
 七五四 一 とんできた。ぼくは、しっかり受けとめ  
 七五四 二 ーに渡した。ボールは、すばやくあちこち  
 七五四 四 にとんできた。ぼくはよこだきに受けとめ  
 七五四 八 りの式をした。ぼくは、うれしくて、胸が  
 七五五 二 一 二 一 しかし、文章は、くわしくしさえす  
 七五五 三 だすことができるとはかぎりません。その  
 七五五 七 かれた一つのかたちは、まじりけのない宝  
 七五五 八 ら、よけいなことばは、ちりほどもあつて  
 七五五 九 、ちりほどもあつてはなりません。五年生

七五九 います。こんなのは、みじかくなった文  
 七五九 ことばということはできません。つぎの  
 七五二 できません。つぎのはどうでしょう。なに  
 七六三 ている。うす黒い雲は、どこかへいつてし  
 七六六 たがあります。一つは、はじめ骨組みをこ  
 七六八 かったです。もう一つは、だいいせきや木材  
 七六八 す。まへのやりかたは、ちょうど、文章を  
 七六八 す。あとのやりかたは、文章をきりつめて  
 七六六 同じです。やりかたはいろいろですが、ね  
 七六六 すが、ねらいどころは一つです。心に思っ  
 七六九 り、たっふりと、春は、小さな川にまで、  
 七七〇 、すぐうしろに、月は、音もなく、のっそ  
 七七一 花だろう。にわか雨は、ぐっしりとぬら  
 七七一 ずっと高いところでは、ひばりが一つ、さ  
 七五九 旅人「あなたがたは、なにかさがしてお  
 七六三 しや、あなたがたは、らくだをにがして  
 七六四 いらっしゃるのではありませんか。」ふ  
 七六五 せんか。」ふたりは、びっくりした顔で  
 七六七 。そうです。」旅人は、おちついたことば  
 七六八 旅人「そのらくだは、かた目ではありま  
 七六八 くだは、かた目ではありませんか。」ふ  
 七六九 せんか。」ふたりは、なおびっくりして  
 七七一 なんですよ。」旅人は、思いだすようなふ  
 七七六 そう、そのらくだは、まえ歯が二三本  
 七七六 歯が二三本ぬけてはいませんか。」ふた  
 七七八 せんか。」ふたりは、いよいよびっくり  
 七七八 みましたか。」旅人は、それには答えな  
 七七八 。

七七八 旅人「その荷は麦でしょう。」甲「た  
 七七八 人「いや、わたしは、そのらくだをみた  
 七七八 らくだをみたではありません。」甲「え  
 七七八 わしくござんではありませんか。」乙「  
 七七八 りません。」ふたりは、また顔をみあわせ  
 七七八 おかしい。あなたは、そのらくだを、ど  
 七七八 そういいない。」旅人はおどろく。乙「あや  
 七七八 もらおう。」ふたりは、旅人の両手をとる  
 七八〇 さい。」甲「私どもは、麦をつけたらくだ  
 七八〇 だをにがしたのではないか。」と、たず  
 七八一 っとあやしいことは、この人は、私ども  
 七八一 いことは、この人は、私どものらくだの  
 七八一 、私どものらくだは、かた目でごさいま  
 七八一 くだをぬすんだのは、この男にちがいあ  
 七八一 なたりのいうことは、よくわかった。」  
 七八一 れで、このらくだはどこからにげてき  
 七八一 らににげてきたのではないかと、思ったの  
 七八一 た目だということは、どうしてわかった  
 七八一 かね。」旅人「それは、こうです。道の  
 七八一 びつこということは。」旅人「それは、か  
 七八一 とは。」旅人「それは、かた方の足あとが  
 七八一 ているということとは、なぜわかったのか  
 七八一 にか。」旅人「それはほかでもありません  
 七八一 わかった。らくだは、あなたがぬすんだ  
 七八一 たがぬすんだのではない。もう帰っても  
 七八一 もよろしい。」旅人は、うれしそうに立ち  
 七八一 立ちあがる。裁判官は、ふたりのものに向  
 七八一 がったのも、わりはない。けれども、い  
 七八一 。

七八一 もう、うたがいははれたことと思う。  
 七八一 晴 19度 私たちは、うさぎをかうこと  
 七八一 たべました。うさぎはどんな草を、いちば  
 七八一 にしました。きょうは、れんげそうとなた  
 七八一 晴 19度 うさぎは、すこしもじっとし  
 七八一 もり 19度 うさぎは、にんじんを、とて  
 七八一 もり 18度 うさぎは、新しい草をいれて  
 七八一 たべのこした古い草は、ふみつけるだけで  
 七八九 もり 16度 うさぎは、みんなで、13びき  
 七八九 度 よく晴れた日には、とても元気があり  
 七八九 った日や雨降りの日は、きらいなのでしょ  
 七八九 した。うさぎのふんはまんまるです。 6  
 七九一 雨 28度 このごろは天気がわるいので、  
 七九一 わるいので、うさぎは、元気がありません  
 七九一 うにして、ぬれた草はやらないように注意  
 七九一 したら、白いうさぎは、早くたべたいのか  
 七九四 ぎと、茶色のうさぎは、おくへはいってで  
 七九四 を計てみたら、白は2cm、黒も2cm、茶  
 七九四 2cm、黒も2cm、茶は1・5cmでした。そ  
 七九四 度 けさ、白うさぎは耳にけがをしました  
 七九四 きいました。1びきは白で、あとは黒  
 七九四 びきは白で、あとは黒っぽい色をしてい  
 七九四 た。 うまるときはまるくなって いま  
 七九四 たばかりの子うさぎは、わらの中の毛の中  
 七九四 さぎのうち、5ひきはねずみ色、1ひきは  
 七九四 はねずみ色、1ひきは白、もう1ひきは黒  
 七九四 きは白、もう1ひきは黒でした。ねずみ色  
 七九四 。ねずみ色の4ひきは、生まれてから12日  
 七九四 目があき、からだには、すっかり毛がはえ  
 七九四 17度 白の子うさぎは、親について、はじ  
 七九四 っつけましたが、草はたべませんでした。  
 七九四 子うさぎが、きょうは、巣からでて歩いて  
 七九四 きますと、親うさぎは、足でけて、のま  
 七九四 せんでした。うさぎは、人がみていると、  
 七九四 てみたら、子うさぎは果の中でねていて、  
 七九四 ろみたら、子うさぎは、7ひきとも、巣か  
 七九四 みました。母うさぎは4kg、子うさぎは、  
 七九四 ぎは4kg、子うさぎは、おもしろいので320  
 七九四 りました。耳の長さは、白と黒は5cm、ね  
 七九四 耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6





八三三 えるのです。この星は、一つ一つがはつき  
八三二 「という考えだけでは、この遠いきよりは  
八三一 は、この遠いきよりは、おしはかることは  
八三〇 は、おしはかることはできません。ふだん  
八二九 ん。ふだん、私たちは、メートルという單  
八二八 なりますと、これでは、もうまにあいませ  
八二七 して計ります。それは、「光年」という單  
八二六 う単位です。一光年は、光が発してから  
八二五 いいます。光の速度は、一秒間に地球を七  
八二四 地球にとどくまでには、やく八分二十秒ば  
八二三 星と地球とのきよりは、二十分や三十分で  
八二二 、二十分や三十分ではありません。五日や  
八二一 ます。さて、空の星は、地球からのくら  
八二〇 がたりのはたおり星は、二九・五光年です  
八一九 夜のはたおり星の光は、やく三十年ほどま  
八一八 この大きなうちゅうは、だいたいきそく正  
八一七 そく正しいちつじよは、いったいどうして  
八一六 にひとつ不足なことはありませんでしたが  
八一五 んでくると、王さまは、「略」とおとし  
八一四 た。ある日、王さまは、宝ぐらの中で、宝  
八一三 「王さま、あなたは金持ですね。」と、  
八一二 ました。「すしはあ。けれども、ま  
八一 一 まだじゅうぶんではない。」と、お答え  
八〇 八 た。「まだ満足ではないのですか  
七九 八 〇。」「略。」「自分は、それ以上の幸福は  
七八 八 〇、それ以上の幸福は願わない。」「略。」「  
七七 八 〇略。」「み知らぬ人は、そのままだこかへ  
七六 八 〇になりました。王さまは、大喜びでねどこか  
七五 八 〇になりました。いすはたちまちこがねにか  
七四 八 〇わりました。王さまは、ねどこにおさわり  
七三 八 〇なりました。王さまは、庭へおでになりま  
七二 八 〇。」「さあ、わたしは、世界じゅうでいち

八四〇 りました。庭の草木は、みているうちに、  
八三九 いきました。王さまは、朝ごはんをめしあ  
八三八 とすると、コーヒーはこがねにかわりました  
八三七 やいしましたが、王女はなんの返事もしませ  
八三六 事もしません。王女は、かたいこがねにな  
八三五 いたのです。王さまは、おかしみになり  
八三四 になりました。王女は、王さまにとっては  
八三三 は、王さまにとっては、世界じゅうのこが  
八三二 き返るなら、わしはもうこがねなどはい  
八三一 はもうこがねなどはいらない。」「そうお  
八三〇 や、いや、わたしは、こんなかなしいこ  
八二九 んなかなしいことはありません。」「略  
八二八 略。」「あなたは、こがねと一ぱいの  
八二七 一きれのパンとでは。」「略。」「略。  
八二六 略。」「こがねと王女は。」「略。」「略。  
八二五 略。」「略。」「王さまは、いそいで庭のいけ  
八二四 した。」「略。」「王女は、こういつて、王さ  
八二三 やいました。王さまは、ご病氣をなさつて  
八二二 なりません。王さまは、略」というお  
八二一 おしてくれたものには、國の半分をわけて  
八二〇 、ちえのある人たちは、みんなより集まっ  
八一九 も、これという考えはでませんでした。そ  
八一八 てきました。その人は、こういしました。  
八一七 れをきいて、王さまはたいへんお喜びにな  
八一六 りました。けらいたちは、あちこちとさがし  
八一五 ほんとうに幸福な人は、やすやすとみつか  
八一四 すとみつかるものではありません。金持だ  
八一三 ました。けらいたちは、足をぼううにしてさ  
八一二 くれましたが、王子は、もうしばらくさが  
八一 一 こえてきます。王子はふと立ちどまって、  
八〇 八 〇いただいた。あととがつつりねるばかり  
七九 八 〇しより幸福なものはあるまい。ほんとう

八四三 〇。ほんとうにわしは幸福ものだ。」「王子  
八四二 した。」「略。」「王子は手をうって、略  
八四一 ていきました。中には、うすぐらいひが一  
八四〇 ところでした。王子は、いままでのわけを  
八三九 た。すると、その男は、略」と答えま  
八三八 さしあげたいことはやまやまですが、わ  
八三七 ですが、わたしには、あいにく、一まい  
八三六 幸福のほしくない人はありませんから、ど  
八三五 けれども、それでは人の心がよくわかり  
八三四 。そこで、幸福は、まじしいこじきの  
八三三 かがきいたら、自分は「幸福」だといわず  
八三二 した。その家の人は、「幸福」がきたと  
八三一 、幸福」がきたとは知りませんから、ま  
八三〇 て、「おまえさんはだれですか。」とた  
八二九 ました。「わたしは、『びんぼう』でこ  
八二八 か、『びんぼう』はうちじゃおことわり  
八二七 した。」「と、その家の人は、戸をピシヤンとし  
八二六 きました。「幸福」は、さつそくごめんを  
八二五 りました。こんどは、にわたりのいる家  
八二四 、幸福」がきたとは知らなかったとみえ  
八二三 て、「おまえさんはだれですか。」とた  
八二二 ました。「わたしは、『びんぼう』でこ  
八二一 か、『びんぼう』はうちじゃよくさんだ  
八二〇 した。」「と、その家の人はふかいたため息をつき  
八一九 とりをぬすんでいきはしないかと思つたの  
八一八 その家のにわとりは、用心ぶかい声をだ  
八一七 きました。「幸福」はまた、その家でも  
八一六 りました。こんどは、うさぎのかつてあ  
八一五 た。「おまえさんはだれですか。」「略  
八一四 略。」「わたしは、『びんぼう』でこ  
八一三 も「幸福」がきたとは知らないようでした  
八一二 略。」「と、うさぎは、高いびきをかいて

八五三 ました。「幸福」には、その家の人の心  
 八五四 にも、人の心のおくは知れるものです。そ  
 八五六 みわたされた。ぼくは、砂地の上にまっす  
 八五七 だした。まえのよりはまっすぐだが、波う  
 八五八 それでいる。こんどは三どめだ。しっかり  
 八五九 がついている。ぼくはうちへ帰って、おじ  
 八六〇 したら、おじいさんは、「略。」とおっし  
 八六一 いさんは、「それはおもしろい。勉強も  
 八六二 った。ある日、ぼくは遠足でみはらし台へ  
 八六三 によびかけた。先生は、「略。」とおっし  
 八六四 へ流れている。ぼくは、みはらし台にすえ  
 八六五 るだろう。山の上には、青い空がすきとお  
 八六六 る。飛行機の上からは、もつともつと大き  
 八六七 話してみたら、先生は、「略。」とおっし  
 八六八 子（一）いなかは、いいお天気であつ  
 八六九 であつた。麦ばたけは黄色く、からすむぎ  
 八七〇 黄色く、からすむぎはみどりであつた。野  
 八七一 りであつた。野原にはかれ草がつみあげら  
 八七二 げられ、こうのとりは、長い赤い足をして  
 八七三 田や野原のまわりには、大きな森があり、  
 八七四 森があり、森の中には深いみずうみがあつ  
 八七五 すわっていた。それは、たまごをかえして  
 八七六 けれども、親あひるは、ひながでてくるま  
 八七七 、ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎ  
 八七八 がいうと、ひなたちはすぐとびだしてきた  
 八七九 みまわした。みどりは目のためにいいから  
 八八〇 いいから、親あひるはみただけみさせて  
 八八一 てやった。「世界は広いものだなあ。」  
 八八二 略。」と、ひなたちはいった。「略。」と  
 八八三 いるのかい。世界は庭の向こうがわまで  
 八八四 いながら、親あひるは立ちあがつた。「略  
 八八五 」「いや、みんなではない。いちばん大き

八八六 のだろう。わたしは、もうほんとうにく  
 八八七 ないというたまごはどれかね。」と、年  
 八八八 てね、そのひなには苦労したよ。なに  
 八八九 なかつた。わたしは、「略。」とないた  
 八九〇 うだ、そんなものはほっておいて、ほか  
 八九一 だし、あと四五日はするともできま  
 八九二 せ。」年よりのあひるは、そういつて、ど  
 八九三 、「略。」と、ひなは鳴いて、はつてでた  
 八九四 、はつてでた。それは、ひどく大きな  
 八九五 であつた。親あひるは、じつとその子をな  
 八九六 ながめた。「これはまた、ひどく大きな  
 八九七 だ。ほかのものは、一わだつてこんな  
 八九八 、「略。」あくる日はいいお天気で、太陽  
 八九九 いいお天気で、太陽は、ごぼうの上をてら  
 九〇〇 していた。親あひるは、そのひなをみんな  
 九〇一 ずつとびこんだ。水はひなたちの頭の上を  
 九〇二 しちめんちようではない。」と、親あひ  
 九〇三 略。」と、親あひるはいった。「略。」そ  
 九〇四 てもわかる。これはわたしの子だ。よく  
 九〇五 、「そこで、みんなは鳥小屋にでかけた。  
 九〇六 、「そこは、二つの鳥の家族が  
 九〇七 、「年よりのあひるは、「略。」といつた  
 九〇八 、「一わをのけたほかは、みんないい子だ。  
 九〇九 い子だ。あれだけはしくじつたね。」と  
 九一〇 した。すると親あひるは、「略。」といつて  
 九一一 あひるは、「あれは美しくありません  
 九一二 、「あれは美しくありませんが、たち  
 九一三 りませんが、たちはほんとうにいいんで  
 九一四 みにくいあひるの子は、あひるのなかまか  
 九一五 た。しちめんちようは、風を受けた船のほ  
 九一六 あわれなあひるの子は、立っていたほうが  
 九一七 、「それからのちは、わるくなるばかり

九一八 あつた。おしまいは、自分の兄や姉から  
 九一九 、「おまえなんかは、ねこにくわれてし  
 九二〇 といった。あひるにはかみつかれ、にわと  
 九二一 つかれ、にわとりにはこずきまわされ、え  
 九二二 さをくれるむすめには足でくたばされた。  
 九二三 みにくいあひるの子は、かきねをとびこえ  
 九二四 、「と、あひるの子は思った。そうして、  
 九二五 やつてきた。そこにはかみが住んでいた。  
 九二六 あひるの子は、ここで一晩横にな  
 九二七 さん、おまえさんはずいぶんみにくいね  
 九二八 いった。あひるの子は、このあしの中で、  
 九二九 がいった。「きみはじつにみにくいから  
 九三〇 渡り鳥になる考えはないかね。きみはみ  
 九三一 はないかね。きみはみつともないから、  
 九三二 そうして二わのがんは、ぬまの中に死んで  
 九三三 のである。かりうどは、ぬまのまわりにま  
 九三四 あわれなあひるの子はきもをつぶした。頭  
 九三五 に立っていた。したは口からたれて、目は  
 九三六 は口からたれて、目はみにくく光っていた  
 九三七 、「略。」あひるの子は、ため息をついた。  
 九三八 あいだも、たまの音はあしのあいだに鳴り  
 九三九 りひびき、てっぽうはひきつづいて火ぶた  
 九四〇 いそうにあひるの子は、おきあがる氣にも  
 九四一 なつて、あひるの子は、ある小さなひやく  
 九四二 へやつてきた。小屋はひどくあれていて、  
 九四三 いので、あひるの子は立つこともできず、  
 九四四 らなかつた。あらしはますますはげしくな  
 九四五 てきた。あひるの子は、小屋の入口の戸が  
 九四六 いていった。中には、おばあさんが、ね  
 九四七 に住んでいた。ねこは、せなかをまるくし  
 九四八 えできた。にわとりは、足はみじかいが、  
 九四九 た。にわとりは、足はみじかいが、いい

八七二 生んだ。おばあさんは、それを自分の子の  
 八七五 からきたあひるの子は、すぐにみつけれ  
 八七六 みつけられた。ねこはのどを鳴らし、にわ  
 八七七 を鳴らし、にわとりは「略」とさわい  
 八七八 さわいだ。「これは、たいしたもうちも  
 八七九 のだよ。これからはあひるのたまごもた  
 八八〇 そこで、あひるの子は、三週間ばかりため  
 八八四 た。しかし、たまごは生まなかつた。それ  
 八八五 、ねこやにわとりとはまったくちがつた考  
 八八六 えていた。にわとりは、「略」と、あひ  
 八八七 は、「おまえさんは、たまごを生むこと  
 八八八 、自分の考えなどはいえないのだよ。」  
 八八九 それで、あひるの子は、すみっこにすわっ  
 八九〇 てきた。あひるの子は、きゆうにおよぎた  
 八九一 だ。「おまえさんは、することがないか  
 八九二 れば、そんなことは考えなくなつてしま  
 八九三 水の上をおよぐのは、いい氣持ですから  
 八九四 人ほどりこうな人はありはしないから。」  
 八九五 「略」。「あなたは、私のいつているこ  
 八九六 ね。わたしのことはいわないとしても、  
 八九七 んよりかしこいとは思つていないだろう  
 八九八 うね。うぬぼれてはいけないよ。人がし  
 八九九 にしてあげるときは、喜ぶものですよ。  
 九〇〇 のに、おまえさんは口がずが多すぎる。  
 九〇一 れは、いい友だちはみんなそうしたもの  
 九〇二 するのだね。」私は、廣い世界へでたい  
 九〇三 そこで、あひるの子はでかけていった。そ  
 九〇四 や茶色になった。雲は、あられや雪で重く  
 九〇五 をもつていた。それははくちようであつた  
 九〇六 あつた。はくちようはみごとな羽を廣げ、  
 九〇七 いった。あひるの子は、それをみて、ふし

八八四 になった。あひるの子は、水の上を車のよう  
 八八五 だした。あひるの子は、あの美しい、しあ  
 八八六 ょうをわすれることはできなかった。そう  
 八八七 いった。あひるの子は、あの鳥の名も、ど  
 八八八 かしく思った。それは、うらやましく思っ  
 八八九 やましく思つたのではない。どうして、あ  
 九〇〇 がきた。あひるの子は、水のおもてがすつ  
 九〇一 いった。あひるの子は、あながこおつてし  
 九〇二 すると、あひるの子は生き返つた。子ども  
 九〇三 返つた。子どもたちはいっしょに遊ぼうと  
 九〇四 したが、あひるの子はまたいじめられるか  
 九〇五 たので、おかみさんは手をたいておこつ  
 九〇六 そこで、あひるの子は、バターのいれてあ  
 九〇七 へとびおり、こんどはまたこなおけにはい  
 九〇八 まつた。おかみさんは声をはりあげ、火ば  
 九〇九 うつた。子どもたちは、あひるの子をつか  
 九一〇 たので、あひるの子は、雪の中の草むらへ  
 九一一 だか、こで話すにはあまりにもかかわいそ  
 九一二 たとき、あひるの子は、ぬまの草むらの中  
 九一三 つぜん、あひるの子は、つばさをばたつか  
 九一四 きていた。そこには、たくさんの木がか  
 九一五 その長いみどりの枝は、流れる水の上のに  
 九一六 のびていた。こは、ほんとうにきれい  
 九一七 てきた。はくちようは、つばさをサラサラ  
 九一八 でいた。あひるの子は、そのみごとな鳥を  
 九一九 あげてきた。「私は、あのけだかい鳥の  
 九二〇 をしかりするよりは、あの鳥にころされ  
 九二一 いった。はくちようはあひるの子をみた。  
 九二二 いそうにあひるの子は、ころされるものと  
 九二三 いるのをみた。それは、ぶかっこうなみつ  
 九二四 もないあひるの子ではなかつた。はくちよ  
 九二五 まれてもさしつかえはない。はくちようは

八九二 はない。はくちようは、その受けてきたま  
 八九三 えって喜んだ。いまは、その身をとりまく  
 八九四 きなはくちようたちは、そばへおよいでき  
 八九五 喜んだ。子どもたちは、手をたいておど  
 八九六 てよこした。みんなは、「略」というと  
 八九七 。新しいはくちようは、すつかりはにかん  
 八九八 た。それが、いまでは、すべての鳥の中で  
 八九九 に枝をたれた。太陽はあたたかく、おだや  
 九〇〇 。わかいのはくちようは、そのほそ長い首を  
 九〇一 福があらうなどとは、ゆめにも思わなか  
 九〇二 晴 19度 きようは、種もみひたしをし  
 九〇三 しをしました。品種は、あじのよい「農林  
 九〇四 晴 18度 きようは、お天氣がいいので  
 九〇五 みをまいたところには、べつにしろしをつ  
 九〇六 た。ひたさないほうは、まだめがでません  
 九〇七 とちがつて、こんどは深くがやしました  
 九〇八 度 いよいよきようは田植えでしたので、  
 九〇九 きました。新しい葉は、まるまってでき  
 九一〇 。3本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえ  
 九一一 みつけました。やくは、白くてにおいもな  
 九一二 たが、お晝の時間には、もう閉じてしまっ  
 九一三 ました。花のさくのは、1日にすこしのあ  
 九一四 雨 26度 きようは雨降りでした。花は  
 九一五 は雨降りでした。花は、1日開きませんで  
 九一六 りをしました。いねは、だんだん黄色くな  
 九一七 きしたら、このいねは、いも病という病  
 九一八 ますと、大きなかぶは30本もありました。  
 九一九 ありました。こんどは1かぶのほの数を見  
 九二〇 本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいつい  
 九二一 本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので  
 九二二 多いので16、ほかのは、だいたい12ぐらい  
 九二三 1本のほに、多いのは180ぐらいずつ

九一〇二 とれました。こんどは、もみとごみをわけ  
 九一〇七 わきました。きょうはもみすりをしました  
 九一〇四 つていたら、こんどはすぐにはげましたが  
 九一〇五 みすりをするものではないと思いました。  
 九一〇七 とれました。平年作は、1平方mに3、5  
 九一〇八 るのですから、これは平年作ということに  
 九四五 すと、赤い色だけでは感じられなかった明  
 九五三 なるでしょう。これは二つの色の組みあわ  
 九五六 ていけば、その感じはまたふかくなるでし  
 九五八 きいても、その音には、ある感じがこもっ  
 九六一 てみると、まえとはちがった感じがしま  
 九七七 思いだした心の絵とは、いくらかちがった  
 九七九 しょう。この「水」は、さらさらと流れる  
 九九六 てしまします。これは色のぼあいでも、音  
 九一〇九 であらわすことなどは、ちよつと考えられ  
 九一一 ころである。つぎには、雨の降るところで  
 九一一 となる大だいこの音は、ほんとうにうちよ  
 九一二 もしろいと思ったのは、雪の降ってくる  
 九一二 ようすにもなるのは、ふしぎである。し  
 九一四 めからさめるときには、音などはけつして  
 九一四 るときには、音などはけつしてするもので  
 九一四 けつしてするものではないが、やはりたい  
 九一五 たく。音というものは、情景をあらわすば  
 九一四 それがわからないのは、その高さを受けい  
 九一五 あります。この中には、親つばめもいます  
 九一六 す。もう大ききだけは親つばめと同じです  
 九一六 をすぎると、つばめは、そろそろ日本をさ  
 九一七 。つばめのゆくさは、遠い南の海のかな  
 九一七 た。しかし、つばめは、もつともつと南へ  
 九一七 です。日本のつばめは、こんなふうに渡つ  
 九一八 くしたものが、秋には、南ヨーロッパを通  
 九一八 しをします。つばめは、鳥の中でも、たい

九一八 、けつしてふしぎではありません。しかし  
 九一八 。しかし、その中には、ことし生まれた子  
 九一八 があります。その年は氣候がわるくて、九  
 九一八 飛行中だったつばめは、食にうえ、つめた  
 九一八 てきました。協会では、喜んでつばめのせ  
 九一八 れと同時に、協会ではすぐに、寒氣のため  
 九一八 しました。その廣告は、たいへんはんき  
 九二〇 たほどです。協会へは、電話が、ひっきり  
 九二〇 のに六台の自動車ではまにあわず、さらに  
 九二〇 た。そうして自動車は、夜なかの二時、三  
 九二〇 あつたので、協会では、おおいそぎで、そ  
 九二〇 なおしました。へやはいそいであたためら  
 九二〇 千というつばめたちは、人をおそれず、へ  
 九二〇 めて運ばれてきたのは、九月十七日とし  
 九二〇 七日でした。その日はたいへん寒いらし  
 九二〇 ました。その夜半には、また一台の貨物自  
 九二〇 ました。航空会社では、お金をとらずにつ  
 九二〇 ばめをのせた飛行機は、それから毎日のよ  
 九二二 、九月十九日の晩には、ヴェニスいきの汽  
 九二二 飛行機で送られた数は、だいたいつぎのと  
 九二二 三十九わこの合計は、約八万九千ばです  
 九二二 ころ、オーストリアは第一次世界大戦のあ  
 九二二 しいあたにかい気持は、この國の人々が、  
 九二二 いことだといわずにはいられません。むか  
 九二二 むかしから、つばめは、同じ家に帰つてく  
 九二二 巣をつくつたつばめは、來年また、同じ巣  
 九二二 オーストラリアまでは、一万キロあまりも  
 九二二 ありますが、つばめは、けつして自分の國  
 九二二 す。その小さな胸には、わか葉のもえる日  
 九二二 めのすがたをみた人は、きつと、「略。」  
 九二二 めをむかえる人の心は、どんなにうれし  
 九二二 え向けるすずめは白し朝ぐもり ひた

九三三 こちらへきたときは夏の暑いさかりでし  
 九三三 りでしたが、いまはもうかきの葉もすつ  
 九三三 なりました。ぼくは、いまでも、先生や  
 九三三 日もわすれたことはありません。先生の  
 九三三 元氣ですか。ぼくは、こちらへきてから  
 九三三 ぼくが住んでいる家は、山のふもとにある  
 九三三 ぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだ  
 九三三 たそうです。まえば、もつともつといろ  
 九三三 かです。らいぎよは、大きなのになると  
 九三三 ができます。ぼくは、先生やみなさんと  
 九三三 した。ちよまの根は、ふといごぼうのよ  
 九三三 た。また、ちよまはふえる力の強い草な  
 九三三 ました。いもなえは、ぜんぶで三百五十  
 九三三 ありました。それは、七月の二十八日  
 九三三 ぎをとりにいく山は、ぼくの家からは十  
 九三三 は、ぼくの家からは十五六分ほど登るの  
 九三三 るのですが、そこは、深い谷になってい  
 九三三 います。ここからは美しいかこうがなが  
 九三三 ありました。ぼくははじめ、山へたきぎ  
 九三三 いくのが、すきではありませんでした。  
 九三三 はえているところは、晝でもうすぐらく  
 九三三 とどかないかれ枝は、長い竹ざおのさき  
 九三三 たで枝をおろすのは氣がつかれます。下  
 九三三 りしました。下では、兄や、母や、おば  
 九三三 いわれたが、ぼくはがんばつておりませ  
 九三三 動くので、かれ枝はなかなかたき落せ  
 九三三 たびに、すぎの木は大きくゆれました。  
 九三三 ついてから、ぼくはあたりをみまわしま  
 九三三 秋になって、ぼくは山へいくのが楽しみ  
 九三三 この村へきたころは、湖には美しい白さ  
 九三三 きたころは、湖には美しい白さがたく  
 九三三 いったのか、いまはもういなくなりまし

九四二(二) もきました。山には、つぐみや、ひわが  
九四二(五) た。ぼくのうちでは、五日めぐにひと  
九四二(六) もをほりおこすのは、楽しく、うれしい  
九四二(七) とから、ぼくたちはむちゅうになつてい  
九四三(一) いました。こちらはかきの木の多いところ  
九四三(二) にも、二本や三本はあります。ぼくたち  
九四三(八) いるのをみたときは、思わず手にとりあ  
九四三(九) ます。うちのかきはしづがきですから、  
九四四(一) してくれまます。妹は、かきの葉を「略  
九四四(二) してひろい集めては、ままごとをして遊  
九四四(九) たのでした。ぼくはみなさんであつてお  
九四五(一) らいました。おぼは、「小公子」の話に  
九四五(五) われました。ぼくは、おとうさんのやっ  
九四五(八) 思っています。兄は、大きくなって農業  
九四六(一) 子」のセドリックは、七つ八つのころで  
九四六(二) けれども、ぼくにはまだ、セドリックほ  
九四六(五) てください。ぼくは、この手紙を数日も  
九四六(八) す。天気のよい日は、あの廣い学校の運  
九四七(五) 十九日。あなたは、ごきげんよろしい  
九四七(八) やまねこ拜」字はへたで、すみもがさ  
九四七(九) けれども、いちろうはうれしくてたまりま  
九四八(一〇) が目をさましたときは、もうすっかり明か  
九四九(一) みると、まわりの山は、みんな、たつた  
九四九(三) いました。いちろうは、いそいでごはんを  
九四九(五) とふくと、くりの木はバラバラと実を落し  
九四九(六) しました。いちろうはくりの木をみあげて  
九四九(八) きました。くりの木は、ちよつとしづかに  
九五〇(四) 。「略」。くりの木は、だまつてまた実を  
九五〇(六) しました。いちろうは、すこしいきますと  
九五〇(七) しいきますと、そこはもう、「ふえふきの  
九五〇(八) 「ふえふきのたき」は、まっ白な岩のがけ  
九五〇(九) 略。」「略。」「たきは、またもとのように

九五二(一) いました。いちろうは、からだをかがめて  
九五二(二) た。すると、きのこは、「略。」と答えま  
九五二(六) えました。いちろうは、首をひねりました  
九五二(九) た。「略。」きのこはみんないそがしそ  
九五三(一) いました。いちろうは、すぐ手まねきして  
九五三(四) した。すると、りすは、木の上からひたい  
九五三(一〇) 略。」「略。」「りすはもういませんでした  
九五四(一) ら、谷川にそつた道は、もうほそくなつて  
九五四(五) いました。いちろうは、その道を登つてい  
九五四(六) きました。かやの枝は、まっ黒にかさなり  
九五四(七) さなりあつて、青空は一きれもみえず、道  
九五四(八) 一きれもみえず、道はたいへんきゆうな坂  
九五四(九) りました。いちろうは、顔をまっかにして  
九五五(一) つとしました。そこは美しいがね色の草  
九五五(二) がね色の草地で、草は風にザワザワ鳴り、  
九五五(三) ワザワ鳴り、まわりは、りっぱなオリーブ  
九五五(九) たのです。いちろうは、だんだんそばへい  
九五六(一) まいました。その男はかた目でした。そう  
九五六(二) て、みえない方の目は、白くびくびくうご  
九五六(三) ことに、その足さきは、しゃもじのような  
九五六(四) たのです。いちろうは、きみがわるかった  
九五六(六) ました。「あなたはやまねこを知りませ  
九五六(七) 」。すると、その男は、横目でいちろうの  
九五六(九) 。「やまねこさまは、いますぐにここへ  
九五七(一〇) でになるよ。きみは、いちろうさんだ  
九五七(一) 。「略。」「いちろうはぎよつとして、ひと  
九五七(三) と、そのきたいな男は、「略。」「略。」「  
九五七(六) 略。」「あの文章は、ずいぶんへただつ  
九五七(七) 」。すると、男は、下を向いて、かな  
九五七(八) いました。いちろうは氣のどくになつて、  
九五七(九) て、「さあ、文章はなかなかうまいよう  
九五八(一〇) 」。といいました。男は、喜んで、息をハア

九五八(三) きました。いちろうは、思わずわらいだし  
九五八(五) 生だつてあんなには書けないでしょう。  
九五八(六) 略。」「すると、男はまたいやな顔をしま  
九五八(七) 。「四年生というのは、小学校の四年生だ  
九五八(九) したので、いちろうはあわてていました  
九五九(一) 略。」「すると、男は、また喜んで、顔じ  
九五九(二) た。「あのはがきは、わしが書いたのだ  
九五九(三) 。「略。」「いちろうは、おかしいのをこら  
九五九(四) いったい、あなたはたれですか。」とた  
九五九(五) とたずねますと、男は、きゆうにまじめに  
九五九(六) になつて、「わしはやまねこさまのぎよ  
九五九(八) うとふいてきて、草はいちめんに波だち、  
九五九(九) に波だち、ぎよしやはきゆうにいていねいな  
六〇〇(一) しました。いちろうは、おかしいと思つて  
六〇〇(二) っぱりやまねこの耳は立つてとがっている  
六〇〇(三) ていると、やまねこは、ひげをぴんとひっ  
六〇〇(八) ました。「ぎようはよくきてくださいま  
六〇一(三) そのとき、いちろうは、足もとでパチパチ  
六〇一(九) 。よくみると、これはみんな赤いズボンを  
六〇二(三) を鳴らせ。きようは、そこが日あたりが  
六〇二(六) 。「略。」「やまねこは、大いそぎでぎよし  
六〇三(三) いました。ぎよしは、こんどは、すずを  
六〇三(四) ぎよしは、こんどは、すずをガランガラ  
六〇三(五) りました。すずの音は、かやの森にガラ  
六〇三(六) ね色のどんぐりどもは、すこしずつしか  
六〇三(八) 。みると、やまねこは、もう、いつか黒い  
六〇三(九) いました。ぎよしは、こんどは、草むら  
六〇四(八) ぎよしは、こんどは、草むらをむちで二  
六〇四(九) すと、どんぐりどもは、口々にさげまし  
六〇五(一) いちばんまるいのはわたしです。」「略  
六〇五(二) ので、どんぐりどもはやつとしづまりまし  
六〇五(三) りました。やまねこはぴんとひげをひねつ



九一〇 高くとばれるすがたは、なんという勇まし  
 九一一 さであらう。みんなは思わず手をたたいた  
 九一二 をたたいた。こんどは、のだ先生がとばれ  
 九一二 るばんである。先生は、はちまきをして、  
 九一五 略。先生のからだは、美しくちゆうをと  
 九一二 空中をとんで、先生は地上の人となられた  
 九一三 とうをたべた。午後は、先生について、ひ  
 九一三 ていた。帰りは、村までくだりの坂  
 九一三 いきよりをすべるのは、ほんとうにゆかい  
 九一五 の花 いまの鳥はこの木にいるにちが  
 九一六 むおさな子や夜はいろりの火にあてて  
 九一六 らすごとかわずは鳴くも夏のあさ夜を  
 九一五 のころであった。私は父につれられて、近  
 九一五 しい泉があった。父は、その泉の水を手で  
 九一七 んでごらん。これは、名高い泉なんだよ  
 九一七 いった。「略。」水は大きなごろごろした  
 九一七 流れだしていた。私は手をいれて、それを  
 九一七 「泉をあふれた水は、さらさらと走って  
 九一七 いた。帰り道で、父は次のような話をして  
 九一四 あった。茶のうまさ、お茶そのもののう  
 九一八 ものと思った。茶人は、日本じゅうを歩き  
 九一八 が感じられた。茶人は、この上流にいい泉  
 九一八 にいい泉があるのではないかと気がついた  
 九一八 る。すると、いい味は、もっと遠いところ  
 九一八 れる。右岸や左岸では、その味がきえてし  
 九一八 あっても、中ほどでは、いい味はたえな  
 九一八 中ほどでは、いい味はたえなかつた。それ  
 九一八 った。それで、茶人は、泉はどうしても支  
 九一八 それで、茶人は、泉はどうしても支流のほ  
 九一八 しても支流のほうにはなくて、遠い上流に  
 九一八 た。けれども、流れは急流だし、雨の日も  
 九一八 なかつた。つれの人は、この茶人ほど熱心

九一〇 この茶人ほど熱心ではないから、やめて帰  
 九一二 いった。しかし茶人は、いろいろな困難を  
 九一二 みんなをばげましては上流へたどっていっ  
 九一二 んでみたりしなくてはならなかつた。茶人  
 九一六 ならなかつた。茶人はすこしもくつせず、  
 九一六 ここで茶人のしたには、まぎれもないいい  
 九一六 た。「きっと、泉はこの近くにある。」  
 九一六 った。「略。」茶人はつれの人について  
 九一六 くと、いい味の水は、左の岸のほとりを  
 九一六 でみると、もうそれはただの水であつた。  
 九一六 水であつた。「泉はまつ川の上流にある  
 九一六 った。「略。」茶人は、長い探求の旅が終  
 九一六 て喜んだ。茶人たちは、ここで船をすて  
 九一六 きどき水をふくんで泉をさがしていった  
 九一六 はじめの八キロほどは、村ざとがあつて川  
 九一六 道もあつたが、いまはそれもなくつた  
 九一六 んでみると、いい味は、すこしもなかつた  
 九一六 終りであつた。茶人は、そこをほりくぼめ  
 九一六 の夕がた、このくもは、木と木のあいだに  
 九一六 けました。「今晚はうまいえさがかかる  
 九一六 二三日というものは、ちつともかからな  
 九一六 略。」ここの四日は大風がふくし、雨は  
 九一六 は大風がふくし、雨は降るしで、あみもは  
 九一六 で、あみもはすることはできませんでした。  
 九一六 こえてきます。くもは、その子もり歌を耳  
 九一六 にゆれました。くもは、きつとなつてその  
 九一六 かっていくと、あふは、力いっぱい羽ばた  
 九一六 をいいながら、くもは、やぶれたところを  
 九一六 た。「こんどこそは、にがさないぞ。」  
 九一六 略。」と、くもは、足をふんばつて身  
 九一六 まえをしました。星はだんだんきれいに光  
 九一六 音がしました。それは、みつばちであるこ

九一〇 あることが、くもにはすぐわかりました。  
 九一〇 いると、みつばちは、くものあみを知ら  
 九一〇 「略。」くもはみつばちにとびか  
 九一〇 向かいました。くもは、ふといつなをとり  
 九一〇 しました。みつばちは、そのつなをさけて  
 九一〇 れるので、みつばちはだいい針をだして  
 九一〇 さしました。それにはさすがの大きなくも  
 九一〇 あいだに、みつばちは、つなをほどいて、  
 九一〇 ていましたが、くもはどうすることもでき  
 九一〇 をみると、こうもりは、ひょうきんなか  
 九一〇 あみにつきあたつてはたいへんと、くもが  
 九一〇 たかれました。あみは、すっかりやぶれて  
 九一〇 かりやぶれて、くもはそのまま地面に落ち  
 九一〇 てよくみると、それは白いちようちよでし  
 九一〇 した。「略。」くもは、長い手をのばして  
 九一〇 たとき、ちようちよは、「略。」と頼みま  
 九一〇 お月さん——くもは、首をねじつて上の  
 九一〇 略。」くもは、このおかあさんと  
 九一〇 いこと耳にしたことはありませんでした。  
 九一〇 「くもさん、今夜は助けてください。」  
 九一〇 略。」くもは、ちようちよを手ば  
 九一〇 たら、もう、命はほしいとは思いません  
 九一〇 う、命はほしいとは思いません。」  
 九一〇 略。」ちようちよは、うれしそうに羽を  
 九一〇 でいくように。くもは、とんでいくちよう  
 九一〇 「ちようちよさんは、羽があるからいい  
 九一〇 をいきました。くもは、おなががすいてい  
 九一〇 と考えました。くもはのそのそ歩きまし  
 九一〇 いました。あたりに、やはりばらの花の  
 九一〇 していました。くもは、うつらうつらとね  
 九一〇 きました。「今夜は、ばらのかげでねむ  
 九一〇 した。「略。」くもはからだを小さくする

九一四 10 と、わらっているではありませんか。くも  
 九一四 10 ありませんか。くもは、ふしぎな顔をしな  
 九一四 3 会 「「まあ、おまえは、わたしをわすれた  
 九一四 5 会 「——」「わたしは、おまえのおかあさ  
 九一四 6 さんときて、くもは、手をうんとおぼし  
 九一四 7 のひょうしに、くもは、目がさめました。  
 九一四 10 「「略。」と、くもは、いまみたばかりの  
 九一四 1 思い返しました。月はもう頭の上まできて  
 九一四 4 ちてきました。くもは、目がさえてなかな  
 九一四 6 「こう話しかけたのは、ぼらの花でした。  
 九一四 9 略。」——「くもは、なんといつて返事  
 九一四 11 っていました。自分は、こうもりのために  
 九一四 4 こともできた。くもは、これらのことを一  
 九一四 8 れにくらべて、自分は、なんとあらっぽい  
 九一四 2 たものだろう。くもは、そつと自分の手を  
 九一四 4 、この足で——くもは、自分ながら自分の  
 九一四 6 ました。白ばらの花は、もう話しかけなく  
 九一四 9 した。風と思つたのは、そうではなくて、  
 九一四 10 思つたのは、そうではなくて、つばめがす  
 九一四 11 きたのでした。くもは、このつばめにひろ  
 九一四 11 ろわれました。くもは、つばめの口ばしに  
 九一四 2 でいきました。くもは、力いっぱいものがけ  
 九一四 4 べつににげだそうとはしませんでした。つ  
 九一四 5 せんでした。つばめは、麦畑らしい土地の  
 九一四 9 会 した。「自分の命は、つばめさんにあげ  
 九一四 10 決心がつくと、くもは、すっかりくもな  
 九一四 1 会 も、もうみにくいとは思えなくなりました  
 九一四 2 会 の白いちようちよは、どうしたろう。う  
 九一四 4 「そんなことをくもは思いました。もく  
 九一四 5 いまも、美しいものはどこにもある。高  
 九一四 7 てくる。美しいものは、いまも、どこに  
 九一四 10 とる心を、われわれは失っている。毎日の

十 6 2 。しかし、われわれは、いつでも、どこに  
 十 6 5 ひとつで、われわれは、どんなにでも毎日  
 十 7 3 いなかへいつたときは、子どもが大ぜい、  
 十 7 5 。そういういなかへは、めつたに日本人も  
 十 7 6 とがない子どもたちは、おとうさんが通る  
 十 7 10 いてこられたときには、おとうさんも困り  
 十 8 1 しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶこと  
 十 8 6 ちに、おとうさんには、子どものお友だち  
 十 8 8 ういう子どもの中には、道でおとうさんを  
 十 9 3 たから。おとうさんは、知らない外国人ど  
 十 9 8 のわけてくれたくりは、むじやきな心から  
 十 9 12 かの子どもにとつては、もつとも楽しい季  
 十 10 2 。そのいなかの町には、ポンナフという石  
 十 10 4 。岸にある丘の上には、センチチェンヌと  
 十 10 6 ました。そのあたりは、フランスの國道に  
 十 10 7 たもとの休み茶屋へは、おとうさんもよく  
 十 10 9 の下で、おとうさんは、三人のかわいらし  
 十 10 10 プラタナスの枝からは、黄色い葉が、毎日  
 十 10 11 ました。三人の少女は、その葉をひろい集  
 十 10 12 がきのところへきては、遊んでいました。  
 十 11 8 りで、その少女たちは、おとうさんのそば  
 十 11 12 ナスの葉の大きいのは、やつでほどもあり  
 十 12 3 ましたら、少女たちは、手をとりあつてと  
 十 12 12 会 子どもを、わたしは、自分の國にのこし  
 十 13 1 会 きました。わたしは、そんなにこわいも  
 十 13 2 会 なにこわいものではありませんよ。」お  
 十 13 5 ことを、おとうさんは、きいて知っていま  
 十 13 7 したから。少女たちは、おとうさんのこし  
 十 13 10 らしい子どもたちではありませんか。あんな  
 十 13 11 にか。あんないなかはつまらないと、わる  
 十 13 12 になったのも、一つは、そういうかわいら  
 十 14 2 ンヌという川の岸には、手ぬぐいのような

十 14 5 の岸で、おとうさんは、ひとりの少年にも  
 十 14 7 。たぶん、その少年は、小学校のいちばん  
 十 14 10 会 日本とフランスとは、どちらがきれい  
 十 15 1 た。この少年の間には、ちよつとおとうさ  
 十 15 6 をしましたら、少年は、さらにこんなこと  
 十 15 7 会 した。「日本の海はどんな色ですか。」「  
 十 15 8 会 」。『略。』「それはすきとおった青い色  
 十 16 3 ことをきかれたときは、おとうさんもうれ  
 十 16 7 そばへきて、外國ではどんなことばを話す  
 十 16 8 会 やあ、フランスではフランスのことば、  
 十 16 9 会 とば、イギリスではイギリスのことばを  
 十 17 1 たので、おとうさんは答えました。『略。』  
 十 17 2 会 郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも  
 十 17 4 会 、日本のことばでは通じません。『略。』  
 十 17 8 会 なります。わたしは、外國でくらししてみ  
 十 17 10 会 した。おまえたちは、おさな心にも、こ  
 十 22 3 12 ひとりの友だちは、水えのぐで写生を  
 十 22 7 13 ひとりの友だちは、その兄といつしよ  
 十 22 11 14 ひとりの友だちは、妹をつれて、つづ  
 十 23 7 16 ひとりの友だちは、母といつしよに汽  
 十 24 6 炭の坑道。工員たちは、さくがん機やつる  
 十 26 5 てかけてくる。工員は男の子をだきあげる  
 十 27 3 とは (一) ぼくは、いままでに学んだ  
 十 28 3 こんな動植物だけではなく、雪のようすや  
 十 29 1 会 せん。(二) 私は、同じものをみるに  
 十 29 3 れば、そのあみかたはどんなあみかたか、  
 十 29 7 和音を耳にしたときは、組みあわされた一  
 十 29 10 もようをみたときには、そのもようが、ど  
 十 30 7 す。(三) ぼくは、みんなといつしよ  
 十 30 8 いと思います。家では、弟たちのめんどう  
 十 31 5 でしょうか。学校では、組の友だちとなか  
 十 31 11 きたいのです。ぼくは、学校の生徒のひと



十 32 1 うな考えをもちたくはありません。ぼくは  
 十 32 2 はありません。ぼくは、この学校では、か  
 十 32 2 ぼくは、この学校では、かけがえのないひ  
 十 32 10 「略。」豊田佐吉は、村の人々から、こ  
 十 33 1 あざけられた。佐吉は、父の大作のしごと  
 十 33 3 されるのをみて、父は、「略。」とさとし  
 十 33 4 父は、「おまえは大作のせがれだ。ほ  
 十 33 6 もえるような研究熱は、どうすることもで  
 十 33 7 かった。それで、父は、佐吉の心をいれか  
 十 33 10 なぐさめたりしたのは、母であつた。佐吉  
 十 33 11 あつた。佐吉の考えはこうである。人間の  
 十 33 11 の衣食住というものは、みんなたいせつな  
 十 34 1 してゆるがせにしてはおれない。いまの  
 十 34 2 かたをしていたのでは、やがて、困るとき  
 十 34 5 じめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、  
 十 34 6 横糸であつた。横糸はおさによつて、右か  
 十 34 11 である。佐吉の考えは、しだいに高まつて  
 十 34 12 をでただけのかれには、手のとどきそうも  
 十 35 1 会が開かれた。佐吉は、上京して機械館へ  
 十 35 3 た、たくさんの機械は、生きもののように  
 十 35 3 に動いていた。かれは、そのりつばな機械  
 十 35 5 い思いがした。機械は、どれひとつとして  
 十 35 5 して、日本製のものは、なかったからであ  
 十 35 8 ある。「略。」佐吉は、もう、じつとして  
 十 35 9 り、設計図をひいては組みたて、組みたて  
 十 35 9 みたて、組みたてては動かしてみた。だが  
 十 35 10 思うように動くものは、なかなか生まれな  
 十 35 11 まれなかつた。佐吉は、一けんの小屋に閉  
 十 36 1 であつた。世間からはますますわられて  
 十 36 2 なくなり、まずしさはいよいよせまつてく  
 十 36 3 せまってくる。かれは、勇氣をふるいおこ  
 十 36 7 動いた。村の人たちは、ぬのをみごとに織

十 36 12 のを織つてみせたのは、佐吉の母であつた  
 十 36 12 の母であつた。それは、明治二十三年、佐  
 十 37 2 ら、豊田式人力織機は、國內につかわれる  
 十 37 3 うになつたが、かれは、これに満足せず、  
 十 38 1 工で作りだすことはできないものだらう  
 十 38 4 か者があつた。眞珠は、海のそこからまれ  
 十 38 11 実現できないことはあるまい。」それが  
 十 38 12 「それから、わかれは、眞珠貝の研究に全  
 十 39 5 った。「略。」幸吉は、あわつづほどの核  
 十 39 9 たが、理論と実際とは、そうやすやすと、  
 十 39 10 ひとつになるものではなかつた。だいいち  
 十 39 11 た。だいいち、母貝は、その核をそとには  
 十 40 4 、かわりのあるはずはない。しかも、核を  
 十 40 5 、眞珠になるまでには、少くとも四年はか  
 十 40 5 には、少くとも四年はかかる。それが、く  
 十 40 7 かつた。村や町の者は、幸吉のむだげねを  
 十 40 10 者となつてくれたのは、つまのうめであつ  
 十 40 10 うめであつた。うめは、「略。」こういっ  
 十 41 2 しく発生した。これは、ある小さな生物が  
 十 41 4 しおのために、母貝はみな死んでしまつた  
 十 41 5 んでしまつた。これは、まったく考えても  
 十 41 6 たことである。かれは、新しく母貝を求め  
 十 41 7 た。町の人のかけ口は、いっそうはげしく  
 十 41 9 ようになつた。うめは、いつもこのわる口  
 十 41 12 珠を発見した。これは、まえにさしいれて  
 十 42 4 「略。」幸吉とうめは、たがいにはげまし  
 十 43 2 た。そのため、母貝は、ほとんど死んでし  
 十 43 2 でしまつた。その数は、じつに八十五万に  
 十 43 4 んだ。しかし、幸吉は、くじけはしなかつ  
 十 43 4 し、幸吉は、くじけはしなかつた。研究の  
 十 43 5 った。すると、かれはきゆうにとびあがつ  
 十 43 8 珠が、光っているではないか。幸吉は、そ

十 43 9 るではないか。幸吉は、それこそ気がい  
 十 44 1 ある。「略。」かれは、五つぶの眞珠をい  
 十 44 1 五つぶの眞珠をいまはなきうめのれいにさ  
 十 44 3 た。そのころ、幸吉は、すでにしらがの老  
 十 44 8 した。「略。」幸吉は、自信をもつて母貝  
 十 44 10 年めになつた。幸吉は、望みをかけた第一  
 十 45 1 にかがやいていてではないか。大きなゆめ  
 十 45 1 ないか。大きなゆめは実現された。今日、  
 十 45 2 今日、眞珠の産地は、ペルシア湾、セイ  
 十 45 6 るが、日本産のものは、ことに名高い。名  
 十 45 8 名高くなつたかげには、幸吉一生の苦心が  
 十 45 10 の手になる養殖眞珠は、まがいものである  
 十 46 1 た。そのうち、幸吉は、日ごろそんけいし  
 十 46 3 と話した。エジソンはたいへん喜んで、こ  
 十 46 8 つあります。一つは、ダイヤモンドであ  
 十 46 9 であり、いま一つは、眞珠でした。あな  
 十 47 1 失敗したわたしは、星にもあたらな  
 十 47 5 妹、妹のことば 私、きのう、三つにな  
 十 47 9 ろが、私たちの足では十二三分のところ  
 十 47 9 ところが、妹にはそうはいきませんでした。  
 十 48 1 ですが、妹にはそうはいきませんでした。  
 十 48 1 十分もかかつたのではないかと思ひました  
 十 48 2 と思ひました。これは、足がおそいとい  
 十 48 5 したからでした。私は、べつにいそぐこと  
 十 48 8 した。ためしに、私は、妹のいっているこ  
 十 49 10 イテルよその人には、なんのことか、お  
 十 49 11 つを知っている私には、このことばの意味  
 十 50 2 クロイワンワン」は、そのときさげんだ  
 十 50 5 チャン」といったのは、そのためです。黒  
 十 50 6 ためです。黒いぬは、まえ足をあげたか  
 十 50 7 足をなめたので、妹はびっくりして、「ア  
 十 50 8 らせたのです。いぬは、うしろ足をもちあ

十70 10 もなく、太郎かじやは、すばやく指をつ  
 十71 4 会。「ほんに、これは上等の黒ざとうだ。  
 十71 5 た。「略。」ふたりは、かわりばんこに指  
 十71 8 会 いました。「これは困った。だんなが帰  
 十71 10 よう者の次郎かじやは、心配になりました  
 十71 11 太郎かじやのほうは、氣が強いばかりで  
 十72 4 会 ならんぼうをしては、いつそうしかられ  
 十72 6 会 それから、おまえは、だんながだいに  
 十72 11 すると、太郎かじやは、きゆうに両手で顔  
 十73 3 た。「略。」だんなは、あつけにとられて  
 十73 3 ました。太郎かじやは、なおも、おいおい  
 十73 5 会 のあいだ、私もは、すもうをとって遊  
 十73 8 会 した。次郎かじやは力があり、茶だな  
 十73 11 会 うと考え、それには、大どくとうかがい  
 十74 7 文 会 よくち、ぶすはくえども、死なれも  
 十74 9 かじやと次郎かじやは、こんな歌を歌いな  
 十74 10 だしました。だんなは、おこつて、「略」  
 十1 4 2 子どもたち 川口はいいところだ。近く  
 十1 4 2 とろろだ。近くには小高い丘があつて、  
 十1 4 10 よりおもしろいのは、大学のボートがい  
 十1 5 2 川口の子どもたちは、いつも砂原で、す  
 十1 5 4 ボートをながめては、いろいろな話をし  
 十1 5 5 きょうも、みんなは話に花をさかせてい  
 十1 5 8 会 である。「ぼくは、大きくなったら、  
 十1 5 10 会 に賛成だ。ぼくは、父にいたら、せい  
 十1 5 12 会 となつて、船は、ものすごいスピー  
 十1 6 4 会 を思うと、ぼくは胸がわくわくする。  
 十1 6 5 会 「略」。「ぼくはトップがこぎたいな  
 十1 6 6 会 たいな。いつもは、いちばんびりにい  
 十1 6 9 会 たりするときには、きつとコックスが  
 十1 7 5 会 やると、ボートは向きをかえて、あぶ  
 十1 7 9 会 「略」。「ぼくは、こぎかたがじょう

十一 7 12 会 みたいな。ぼくはからだもいいし、息  
 十一 8 5 会 、むずかしいのは、コックスだろう。  
 十一 8 6 会 つきから、きみはだまっているけれど  
 十一 8 7 会 るけれど、ぼくはきみをコックスにす  
 十一 8 9 会 しようよ。きみは、ぼくらの心持をよ  
 十一 8 11 会 ことなど、きみはなんでもよくわかっ  
 十一 9 1 会 っているだけではないに、いつもその  
 十一 9 2 会 きめる。ぼくらは、きみについていき  
 十一 9 5 会 れども、ぼくにはなかなか、よきした  
 十一 9 6 会 か、よきしたとはいえない。「略」。  
 十一 9 7 会 ていくよ。あれはどこへいく船だろう  
 十一 9 12 会 っぱなコックスは、いつかりっぱな船  
 十一 10 1 会 、りっぱな整調は、りっぱな運轉をす  
 十一 10 3 会 らくいい船員には、だれがなるのさ。  
 十一 10 5 会 「略」。「それはぼくたちだ。三ぼん  
 十一 10 9 会 。そういう男には、ぼくがなることに  
 十一 10 11 会 」。船ばかりではなく、あの町でも、  
 十一 11 8 略。子どもたちは、いっさんにボート  
 十一 12 7 会 である。まつの木では、きょうからせみが  
 十一 12 9 会 た。まっさおな海は、太陽の下でわらっ  
 十一 13 2 会 やかにうつ波の声は、われわれの心をあ  
 十一 13 5 会 が鳴る。ふえの音は、長くおをひいて消  
 十一 13 12 会 いていよう。あれは、あわてもののほお  
 十一 14 1 会 ほおじろだ。あれは、元氣もののこがら  
 十一 14 2 会 のこがらだ。あれは、この村のさみしが  
 十一 14 4 会 ずめだ。小鳥たちはみんなめいめいの歌  
 十一 15 11 会 やがて、小鳥たちは、そこから遠い空へ  
 十一 16 6 会 きったたま、それはおかあさまの愛です  
 十一 16 7 会 しをまもるためには、どんな困難とも戦  
 十一 17 2 会 。わたしのためには、いばらの道をもふ  
 十一 17 5 会 とと、正しいことは、おかあさま、あな  
 十一 18 4 会 葉。わたしの幸福は、おかあさまの笑顔

十一 19 1 会 の生まれたところは、神奈川縣のかやま  
 十一 19 9 会 でした。りえもんは、からだがよくて  
 十一 19 12 会 しかし、りえもんは、なんとかして、か  
 十一 20 4 会 。だから、金次郎は、子どものときから  
 十一 21 4 会 りました。金次郎は、年のわりからだ  
 十一 21 5 会 役にたないことはありませんでした。  
 十一 21 6 会 か、ほかの人たちは休んだりむだ話をし  
 十一 21 7 会 いるのに、金次郎は、すこしも休まず働  
 十一 21 10 会 ないので、金次郎は、ほかの人たちにす  
 十一 21 11 会 。そこで、金次郎はいいことを考えつき  
 十一 22 2 会 くさんの人の中には、わらじの切れてい  
 十一 22 4 会 あります。金次郎はわらじをさしだして  
 十一 22 11 会 「おとなの人たちはおどろいて、すぐに  
 十一 22 12 会 どりいて、すぐには受けてくれませんで  
 十一 23 1 会 たが、おしまいに、喜んではいってくれ  
 十一 23 3 会 た。いちばん下のは、そのとき二つでし  
 十一 23 4 会 生きているあいだは、みんなはげましあ  
 十一 23 6 会 きました。が、いまはどうにもなりません  
 十一 23 7 会 なりません。母親は、金次郎と相談して  
 十一 24 3 会 らい育てるお金は、わたしが山へいっ  
 十一 24 5 会 た。「略」。金次郎は、自分の考えをくり  
 十一 24 9 会 た。「略」。母親は、金次郎が、「略」  
 十一 25 4 会 る日から、金次郎は、とりが鳴くと、ま  
 十一 25 6 会 ました。そのお金は多くはありませんで  
 十一 25 6 会 。そのお金は多くはありませんで  
 十一 25 7 会 人が生きていくにはじゅうぶんでした。  
 十一 25 10 会 ところを、金次郎は、すこしもつかれた  
 十一 25 12 会 きました。金次郎は、一さつの本をみつ  
 十一 25 12 会 つけました。それは「大学」といって、  
 十一 26 7 会 な人になるためには、学問をしなくては  
 十一 26 7 会 、学問をしなくてはならないと書いてあ  
 十一 26 9 会 りました。金次郎は、それを読むとうれ

十一 27 2 会 した。「あの子は、どうかしているの  
 十一 27 2 会 かしているのではないだろうか。」村  
 十一 27 3 略。村の人たちは、こう、うわさをし  
 十一 27 3 会 ましたが、金次郎は耳にもいれず、それ  
 十一 27 7 会 てくれます。中には、正月だといので  
 十一 27 9 会 、金次郎のうちでは、その十二文さえも  
 十一 27 10 会 がないといふことはいえませんが。母親と  
 十一 27 12 会 た。金次郎のうちは、こんなにもびんぼ  
 十一 28 4 会 このとき、金次郎はたった十六でした。  
 十一 28 5 会 こで、ふたりの弟は母親のさにと、金次  
 十一 28 5 会 のさにと、金次郎は親類のまんべえさん  
 十一 28 8 会 そこへいってからは、いよいよいっしょ  
 十一 28 10 会 した。夜の勉強には油がいらす。その  
 十一 29 3 会 けました。金次郎は、また、人がすてて  
 十一 29 5 会 ると、秋の終りには、一びょうあまりの  
 十一 29 10 会 うちに、三年めには、二十びょうの米を  
 十一 29 12 会 やがて、金次郎は、親類の家からでて  
 十一 30 2 会 た。そればかりではありません。いろい  
 十一 31 5 会 て、れんぎょうは、かきねを黄色に  
 十一 31 7 会 く。青い空にはかすみがかめて、  
 十一 31 8 会 めて、ひばりは朝から大うかれ。  
 十一 33 1 会 に日の照るころは、矢車からからこ  
 十一 34 6 会 。きのうの畑は水田となって、晩  
 十一 34 7 会 なって、晩にはかえるが歌いだす。  
 十一 34 8 会 。つゆ晴れ空はみどりにすんで、  
 十一 34 10 会 くなり、いねはそだつし、あぜまめ  
 十一 35 9 会 、いまの暑さはどこへやら。くわ  
 十一 36 2 会 まわれば、日はまた照って水たつぷ  
 十一 38 3 会 れた。きょうはうれいしい豊年まつり  
 十一 38 9 会 、ちれば山にはまつたけが、かお  
 十一 39 9 会 に進み、あとはのみすりするばかり  
 十一 40 2 会 、青くしげるはまつ・すぎ・ひのき

十一 40 3 圓 くふくこがらしは、黄色くかれたく  
 十一 40 6 圓 につれて、光はまともにえんにさす  
 十一 40 7 圓 ほしたかぼちや赤やら黄やら、に  
 十一 40 8 圓 にわとりどもはひなたぼこ。はい  
 十一 41 1 圓 こめて、さとはしぐれがしとしと降  
 十一 41 2 圓 ふもとの小屋はみぞれして、うら  
 十一 41 3 圓 、うらの山には白雪つもる。もち  
 十一 41 8 圓 。池にむすぶはうすごおり、庭に  
 十一 41 9 圓 、庭に立つたはしも柱。学校へい  
 十一 42 1 圓 どもらの、息はま白に舞いのぼる。  
 十一 42 5 圓 。ことしも作はよいだろう。ふき  
 十一 43 5 正面のテーブルには、赤いうめの花をい  
 十一 43 7 ち園の子どもたちは、そのまえにおとな  
 十一 44 3 と、父兄の人たちは、自分の席で立ちあ  
 十一 44 9 弟の名でした。私は、自分が呼ばれたよ  
 十一 44 10 氣がしました。弟は、すこし大またで四  
 十一 45 3 でいきました。弟は、さつさとの自  
 十一 45 5 みました。こんどはまちがいせんでき  
 十一 45 9 に着きました。私はほっとしました。そ  
 十一 46 6 もをみると、ぼくは、北海道のいなかを  
 十一 47 2 えて内地にきたのは、ぼくの二年生のと  
 十一 47 5 色にゆれて、ぼくは、船のかんばんに、  
 十一 47 6 た。北海道の家には、うしが四頭いた。  
 十一 47 8 れていた。うちではバターもつくつたし  
 十一 47 11 やくそばで、ぼくは、いつも本を読んで  
 十一 48 1 いた。ぼくのいすは、小さなゆりいすで  
 十一 48 6 が風にゆれ、畑では、いちごがでさかり  
 十一 48 9 おとうさん、ぼくは、大きくなったら、  
 十一 49 3 つくります。ぼくは、おとうさんと同じ  
 十一 49 6 ぎ小屋のまわりには、おかあさんのおす  
 十一 49 11 。日本のこぐらは、北海道だといいま  
 十一 50 3 た。「略。」ぼくは、大きくなったら、

十一 50 7 を勉強して、ぼくは、いい農夫になろう  
 十一 51 2 べからの大あらしは、けさになっていま  
 十一 51 3 庭のあさがおの花は、みんなふきちぎら  
 十一 51 4 られ、へちまの葉は、みんな下向きにな  
 十一 51 6 ってしまった。私は、かさをさして電車  
 十一 51 9 待つていた。電車は、くるにはくるが、  
 十一 51 10 。電車は、くるにはくるが、みな満員の  
 十一 52 3 とができた。車内はむし暑いうえに、お  
 十一 52 7 の足も動かすことはできなかった。電車  
 十一 52 8 きなかつた。電車は、歯ぎしりでもする  
 十一 52 10 。しゃしょうさんは、「略。」と、声を  
 十一 53 1 圓 がつちや、電車は動かせんよ。」と  
 十一 53 4 そうもない。乗客はおたがいにおしあ  
 十一 53 5 、しゃしょうさんは、「略。」といった  
 十一 53 9 て、そこらの乗客は思わずはおえんだ。  
 十一 54 8 だ。けれども、私は、「略。」といった  
 十一 55 2 圓 つづろ ことばはねる、つまめば  
 十一 55 7 圓 ねる。 ことばはひびく、あしの葉  
 十一 56 3 圓 びく。 ことばは光る、プリズムの  
 十一 56 8 圓 光る。 ことばはかおる。 べにばら  
 十一 57 3 圓 おる。 ことばはしみる。 はちみつ  
 十一 58 6 いるうちに、太郎は、「略。」と、早口  
 十一 58 9 うになった。太郎は得意になって、「略  
 十一 58 10 圓 いにくいことばは、ほかにないでしよ  
 十一 59 2 圓 べ。」という、父はにこにこわらいなが  
 十一 59 3 圓 「おとうさんは、もっといいにくい  
 十一 59 7 圓 さしいことばではありませんか。」「へ  
 十一 59 9 圓 」あくる日、太郎は、友だちの正男と一  
 十一 59 11 圓 あった。「本道は遠いから、近道をし  
 十一 59 12 圓 男がいうと、一雄はすぐ賛成した。その  
 十一 59 12 圓 その近道というのは、田のあぜ道で、と  
 十一 60 3 本橋がある。太郎は、まえから父に、「へ

十一 60 4 圓 父に、「あの橋はあぶないから、けっ  
 十一 60 5 圓 けっして渡ってはいけない。」とかた  
 十一 60 11 した。すると、橋はまん中からおれて、  
 十一 60 12 からおれて、三人は、川の中へドブンと  
 十一 61 4 て家に帰った。父は、「略。」とたずね  
 十一 61 5 圓 父は、「おまえはどうしたのだ。まえ  
 十一 61 6 圓 橋を渡ったのではないかね。」とたず  
 十一 61 7 た。しかし、太郎はだまっていた。その  
 十一 61 8 ただされて、太郎は、やるときやうのこ  
 十一 61 10 にうちあけた。父は、「略。」とせめた  
 十一 61 11 圓 のとき、「ぼくは、とめられていたか  
 十一 62 3 圓 うのです。ぼくはくやしくなったので  
 十一 62 5 圓 』といいきるには、ほんとうの勇氣が  
 十一 62 6 圓 ようなよわ虫には、ひよつとすると命  
 十一 62 8 圓 』ということばはいいにくいのだ。そ  
 十一 62 12 圓 にくいことばではないか。」九 父の  
 十一 63 7 ずねました。少年は、色のあさ黒い、お  
 十一 63 9 ていました。少年は、ナポリの近くにあ  
 十一 63 10 年の父親というの、去年、しごとをさ  
 十一 64 9 らせました。母親は、その知らせをみる  
 十一 64 10 しました。自分ちのちのみ子もあつて、  
 十一 65 1 のでした。門はんは、その手紙をひと目  
 十一 65 3 圓 おとうさんの名はなんというの。」と、  
 十一 65 5 ききました。少年は、もしやわるい知ら  
 十一 65 5 圓 るい知らせをききはしまいかと、おそろ  
 十一 65 6 た。しかし看護人は、そういう名を思い  
 十一 65 11 「略。」と、少年は、ますます不安をお  
 十一 65 12 圓 んなに年よりではないのですが、外国  
 十一 66 4 「「略。」看護人は、しばらく考えてい  
 十一 66 9 「略。」と、少年は心配そうにききまし  
 十一 66 10 きました。看護人は、少年をながめて、  
 十一 66 10 ながめて、それには答えないで、ただ、

十一 67 1 けでした。ふたりは、はしごだんをのぼ  
 十一 67 4 ますと、その中にはベッドが二列になら  
 十一 67 7 略。」と、看護人は、くり返しなが  
 十一 67 9 いりました。少年は、勇氣をふるいおこ  
 十一 68 1 わしました。中には、死人のようにみえ  
 十一 68 4 した。大きなへやはうす暗く、あたりに  
 十一 68 4 す暗く、あたりににはげしくすりのに  
 十一 68 7 でいくと、看護人は、一つのベッドの頭  
 十一 69 1 。(二) 少年は包みを下におくと、  
 十一 69 3 かみしました。病人は動きませんでした。  
 十一 69 5 せんでした。少年は、身をおこして父親  
 十一 69 8 だしました。病人はしげしげと少年をみ  
 十一 69 10 したが、くちびるは動きませんでした。  
 十一 69 12 が父親であらうとは、とても思われませ  
 十一 69 12 でした。かみの毛は白くなり、ひげはの  
 十一 70 1 は白くなり、ひげはのび、顔ははれあが  
 十一 70 1 、ひげはのび、顔ははれあがつてどんよ  
 十一 70 1 んより赤く、ひふははち切れそうになっ  
 十一 70 3 たまゆとのほかに、どこといて父親  
 十一 70 3 父親らしいところはありませんでした。  
 十一 70 6 略。」と、少年はいいました。「略」  
 十一 70 11 「けれども、病人は、いっしんに少年を  
 十一 71 2 会 へんですか。ぼくは、おとうさんの子ど  
 十一 71 4 会 だ。「略。」病人は、身動きもしないで  
 十一 71 5 ていました。少年は、いすをひきよせて  
 十一 71 8 略。」と、少年は考えました。「略」  
 十一 71 10 た。「略。」少年は、かなしい思いにし  
 十一 72 4 。そのとき、少年は、かるい手がふとか  
 十一 72 5 がりました。それは看護婦でした。「略  
 十一 72 6 会 だ。「ぼくの父はどうしたんでしょう  
 十一 72 7 略。」と、少年は口早にききました。  
 十一 72 9 略。」と、看護婦はやさしくいいました

十一 73 2 「「略。」看護婦は、ほかにはなんにも  
 十一 73 2 看護婦は、ほかにはなんにもいわずにい  
 十一 73 7 した。その人たちは、しんさつをはじめ  
 十一 73 8 あいだが、少年にはたいへん長く思われ  
 十一 73 10 できました。医者は、せいの高い、すこ  
 十一 73 12 ないうちに、少年は立ちあがりました。  
 十一 74 1 がりました。医者は少年をみました。「へ  
 十一 74 2 会 だ。「このかたは、この病人のむすこ  
 十一 74 5 いいました。医者は、手を少年のかたに  
 十一 74 11 会 「べつにかわりはございません。」と、  
 十一 74 12 略。」と、看護婦は答えました。すると  
 十一 74 12 た。すると、医者はちよつと考えてから  
 十一 75 3 「そのとき、少年は、勇氣をふるいおこ  
 十一 75 4 会 た。「ぼくの父はどうしたのでしょう  
 十一 75 6 略。」と、医者は、もう一ど少年のか  
 十一 75 12 会 「「略。」少年は、もつとなにかきき  
 十一 76 1 せんでした。医者はいつてしまいました  
 十一 76 1 た。そこで、少年は看病にかかりました  
 十一 76 7 りしました。病人は、ときどき少年の方  
 十一 76 7 ったようなうすはしませんでした。で  
 十一 76 8 あてているときには、じつとみつめてい  
 十一 76 9 。こうして第一日はすぎました。夜にな  
 十一 76 11 夜になると、少年は、へやのすみにいす  
 十一 77 1 めました。その日は、病人の目つきが、  
 十一 77 1 とねむったあとでは、目を開いたときに  
 十一 77 7 みえました。医者は二どきてみて、いく  
 十一 77 10 けたときに、少年はそのふくれあがつた  
 十一 77 12 た。そこで、少年は、自分をなぐさめて  
 十一 78 11 なったりで、少年は看病にいっしょうけ  
 十一 79 2 せんでした。少年は、父親のちよつとし  
 十一 79 9 、五日めに、病人はにわかになるくなり  
 十一 79 10 なりました。医者は、まったくだめだと

十一 79 11 ふりました。少年は、いすにぐつたりと  
 十一 80 1 ありました。それは、ようだいがわるく  
 十一 80 3 たことです。病人は、だんだんしつかり  
 十一 80 8 ましたので、少年は希望に力づけられな  
 十一 81 5 こえました。少年は、思わずはつとび  
 十一 81 10 てきました。少年は、するどいさげびを  
 十一 81 11 すくみました。男はみまわして、ひと目  
 十一 81 11 をみると、こんどはかがさげびを發し  
 十一 82 3 した。「略。」男はそういつて、少年の  
 十一 82 5 てきました。少年は、父親のうでの中  
 十一 82 10 てきました。少年は、まだ声をだすこと  
 十一 83 1 略。」と、父親は、じつと病人の方を  
 十一 83 3 会 「チチロ、これはいったいどうしたの  
 十一 83 3 会 たのだ。おまえはべつの人のところへ  
 十一 83 4 会 のだ。わたしはまた、おかあさんか  
 十一 83 7 会 。いく日おまえはここにいたのだね。  
 十一 83 8 会 だろう。わたしは、これのことおり、  
 十一 83 9 会 で、おかあさんはどうしているの。そ  
 十一 83 10 会 ら、コンセテラは、それから、あかん  
 十一 83 11 会 ら、あかんぼうは——みんなどうして  
 十一 83 11 会 ている。わたしは、いま退院するとこ  
 十一 84 2 会 た。「略。」少年は二こと三ことば  
 十一 84 6 会 、いこう。晩には家に着けるから。」  
 十一 84 7 た。「略。」父親は、少年を自分の方へ  
 十一 84 8 ぱりました。少年はふり返って、病人の  
 十一 84 10 略。」と、父親はあきれてうながしま  
 十一 84 11 がしました。少年は、また、病人の方を  
 十一 84 11 がめました。病人は、そのとき、目を開  
 十一 85 5 会 した。おじさんは、いつでもぼくをみ  
 十一 85 12 た。「略。」父親は、じつと少年をみつ  
 十一 86 2 会 ですか、あの人は。」と、父親はたず  
 十一 86 3 略。」と、父親はたずねました。「略

十一 86 7 会 れてきたときには、もうすっかりわけ  
 十一 86 12 だ。「略。」病人は、やはりじつと少年  
 十一 87 1 ていました。父親はチチロにいました  
 十一 87 5 会 した。「わたしは、これからすぐにう  
 十一 87 8 だ。「略。」父親はそういつてでいき  
 十一 87 10 所に帰ると、病人はほつとしたようにみ  
 十一 87 11 した。で、チチロはまた看護をはじめま  
 十一 88 1 のしんぼう強さとは、まえとすこしもか  
 十一 88 2 んでした。チチロはまた、病人に飲み物  
 十一 88 6 た。しかし、病人はますますわるくなる  
 十一 88 7 ばかりでした。顔はむらさき色になり、  
 十一 88 7 き色になり、呼吸はいよいよ困難になり  
 十一 88 8 んのときに、医者は、「略。」といいま  
 十一 88 8 会 医者は、「今夜はもうだめかもしれな  
 十一 88 9 。そこで、チチロは、いよいよよくせわ  
 十一 88 10 せんでした。病人はしげしげと少年をみ  
 十一 89 3 た。その晩、少年は夜とおしそばについ  
 十一 89 7 会 「略。」と、医者はいました。少年は  
 十一 89 8 いいました。少年は病人の手をにぎりま  
 十一 89 8 ぎりました。病人は、目を開いて少年を  
 十一 89 10 。そのとき、少年は、病人が自分の手を  
 十一 90 1 会 「略。」と、少年はさげました。医者  
 十一 90 2 けびました。医者は、病人の上にしばら  
 十一 90 6 会 「略。」と、少年はさげました。「略  
 十一 90 8 会 「略。」と、医者はいました。「略」  
 十一 90 9 会 「きみの看病はすんだ。帰ってしあ  
 十一 91 9 会 「略。」と、少年はいつて、一方の手で  
 十一 93 1 そういつて、少年は、その小さな着物の  
 十一 93 3 かかえました。夜は明けかけていました  
 十一 24 5 き、イスパニア人はたいへん喜びました  
 十一 25 3 きいたコロンブスは、つと立って、デー  
 十一 25 8 いいました。人々は、なんのためにこん

十二 5 10 のときコロンブスは、コッソんとたまごの  
 十二 5 12 会 人のしたあとでは、なんのぞうさもな  
 十二 6 3 ある日、太田道灌は、たかがりにてかけ  
 十二 7 2 のみしました。少女はなにを思ったのか、  
 十二 7 5 だしました。道灌は、その花の枝を手に  
 十二 7 5 その花の枝を手にしましたが、なんの  
 十二 7 8 ちになつて、道灌は少女の心がわかりま  
 十二 7 9 かりました。それは、「七重八重花はさ  
 十二 7 10 文 会 「七重八重花はさけどもやまぶきの  
 十二 8 7 会 た。そのとき、母ははたを織っていました  
 十二 8 10 りしてしていると、母は、いままでたんねん  
 十二 9 1 まいました。孟子はおどろいて、「略」  
 十二 9 4 たずねますと、母は、「略。」といいま  
 十二 9 6 会 に帰ってくるのは、ちょうど、織物を  
 十二 10 2 、なにかさがしては、それをひろつてポ  
 十二 10 8 た。すると、老人は、ほおえみながらポ  
 十二 10 10 だしてみせたものは、ガラスのかげらば  
 十二 10 11 でした。じゅんさは、「略。」とききま  
 十二 11 2 た。すると、老人は廣場の方を指さして  
 十二 11 4 会 いている子どもはひとりもいません。  
 十二 11 4 会 しけがでもしてはかわいそうですから  
 十二 11 7 ました。この老人は、ペスタロッツとい  
 十二 11 11 、書物というものはなにかすばらしい力  
 十二 13 3 生 (一) 文雄は、庭のかたすみに三  
 十二 13 5 はじめた。そこには一本のざくろの木が  
 十二 13 10 くなり、このごろは、きわだつて美しい  
 十二 14 1 さしてきた。文雄は、それがかきたかつ  
 十二 14 6 ころもよい。文雄は、あれこれと考えて  
 十二 14 8 の根もとの地面には、夏のころ、草とり  
 十二 14 9 ちていた。文雄はそれが氣になつてし  
 十二 15 6 会 まった。「これは、こおろぎの巣なん  
 十二 15 9 た。「略。」文雄は、それをとりのける

十二 16 6 りはじめた。これは、絵のすきだったお  
 十二 16 7 もので、子どもにはりつぽすぎるほどだ  
 十二 16 9 トの上でみたときは、ずいぶん美しくみ  
 十二 16 12 きあがつた。文雄は立ちあがつてすこし  
 十二 17 4 会 「略。」文雄は、三きやくにこしか  
 十二 17 11 会 うよくおなりではありませんか。はじ  
 十二 18 1 会 いていたときには、ほんとうにおかし  
 十二 18 3 会 「——」「ぼくにはだれも教えてくれる  
 十二 19 2 会 略。」「近ごろはたいへんじょうずに  
 十二 19 5 会 「いや、わたしはあんまりへたなので  
 十二 19 7 会 美しくなるには、ご苦心があたりだ  
 十二 19 9 会 のです。わたしはなん年もなん年も生  
 十二 19 10 会 えりみて、來年はもっともつとよくし  
 十二 19 12 会 をつけた三年は、青い小さな実が、  
 十二 20 2 会 に、このごろでは、いつも美しい実を  
 十二 20 5 会 「この実のかげは黄色くぼけているで  
 十二 20 5 会 しょう。わたしはこんなところがすこ  
 十二 20 9 会 してこのざくろはこんなに美しいんだ  
 十二 20 10 会 ですか。わたしはまた、あのような絵  
 十二 21 4 会 かきになるころは、わたしも、ずっと  
 十二 21 10 会 、あなたの歌には、そのさびしい氣持  
 十二 22 2 会 三 「自分には父もある。母もある  
 十二 22 7 会 「略。」文雄はこう考えた。三  
 十二 23 3 まい家なので、兄は氣のどくだといつて  
 十二 23 4 め、うちの人たちは大喜びです。ひさし  
 十二 23 7 ても、いいすぎではありません。やしき  
 十二 23 10 しあたり困ることはありません。ふたり  
 十二 24 2 りのまごというの、父母にとつてのこ  
 十二 24 3 ですが、わたしには、かわいいめいとお  
 十二 24 4 おいの正男ちゃん、五つですから、も  
 十二 24 5 、めいの民ちゃん、二つ、満でいえば  
 十二 24 7 そうです。わたしは民ちゃんをひと目み

十二 24 10 のです。民ちゃんは、まだ、うんこもし  
十二 24 11 のです。民ちゃんは、ぼつぼつものをい  
十二 25 3 てくると、わたしは民ちゃんの子もりを  
十二 25 5 おくと、民ちゃんは平気でそこらをはい  
十二 25 6 ています。わたしは時間をはかつては、  
十二 25 6 は時間をはかつては、そとさえ寒くなけ  
十二 25 8 しました。はじめはいやがっていた民ち  
十二 26 3 「略」。民ちゃんは、つくえとか、テー  
十二 26 12 んじんの歩くことはまだできません。た  
十二 27 7 ん。立ちはじめには、物を持たせると立  
十二 27 8 。それで、わたしはおべんとうの包みを  
十二 28 1 「略」。民ちゃんはうれしそうにいつて  
十二 28 9 やると、民ちゃんは、ぼつたりそこへす  
十二 29 2 がる。民ちゃんは、はじめて二足ほど  
十二 29 4 うちに、民ちゃんは三足四足と歩けるよ  
十二 29 11 「略」。わたしはそういいながら、こ  
十二 30 6 したが、民ちゃんは、そのことをいうの  
十二 30 11 ば数のふえるのには、おどろいてしま  
十二 31 4 いちばん大きな日は、サリバン先生がき  
十二 31 4 であります。それは一八八七年の三月三  
十二 31 7 この日の午後、私はなんとなくものを待  
十二 31 8 した。午後の日光は、げんかんをおおっ  
十二 32 1 花の上を、私の指はまったくわれをわす  
十二 32 1 でていました。私は、どのようなおどろ  
十二 32 4 ませんでした。私は、近づいてくる足音  
十二 32 10 、次のしゅん間には、私は、先生——私  
十二 32 10 しゅん間には、私は、先生——私の心の  
十二 33 2 た。サリバン先生は、お着きになったあ  
十二 33 4 でいますと、先生は、私の手に、「人形」  
十二 33 6 づられました。私は、すぐこの指の遊び  
十二 33 9 れましたとき、私は子どもらしい喜びと  
十二 33 12 た。そのとき、私は、もちろん、ことば

十二 34 4 らないままに、私は、「ピン」「コップ」  
十二 34 6 。けれども、物にはそれぞれ名まえのあ  
十二 34 7 ることを知ったのは、先生がおいでにな  
十二 35 1 いました。その日はすでに、私は、「ゆ  
十二 35 1 の日はすでに、私は、「ゆのみ」と「水」  
十二 35 2 た。サリバン先生は、「ゆのみ」が道具  
十二 35 4 れたのですが、私は、いつまでたっても  
十二 35 4 せんでした。先生は失望して、一時やめ  
十二 35 5 ましたが、こんどは、二つの人形が同じ  
十二 35 6 なさいました。私は、とうとうかんしゃ  
十二 35 7 した。そうして私は、くだけた人形のか  
十二 35 8 に思いました。私は、先生がかけらをい  
十二 36 2 ださったので、私は暖かい日なたにでか  
十二 36 3 りました。ふたりは、いどの小屋をおお  
十二 36 11 ましたので、先生は私の手をといて口の  
十二 37 1 の手に、はじめはゆつくりと、次には  
十二 37 1 ゆつくりと、次には早く、「水」という  
十二 37 2 ださいました。私は、身動きもせず、立  
十二 37 4 ろがとつぜん、私は、なにかしらわすれ  
十二 37 6 はじめて、「水」はいま自分のかた手の  
十二 37 11 です。こうして私は、物にはみな名まえ  
十二 37 11 うして私は、物にはみな名まえのあるこ  
十二 38 2 じめました。それは、先生が與えてくだ  
十二 38 4 に帰るとすぐ、私は、自分がこわした人  
十二 38 7 でした。私の目にはなみだがいっぱい  
十二 38 10 さされました。私はその日、たくさん  
十二 38 10 した。全部覚えてはいませんが、その中  
十二 38 11 せんが、その中には、「父」「母」「妹」  
十二 39 3 もを発見することは、むずかしいでし  
十二 39 4 しいでしょう。私は、生まれてはじめて  
十二 39 7 。(二) これは、ヘレン・ケラーと  
十二 39 9 るように、ケラーは、めくらで、そのう

十二 39 11 書けるということは、なんとすばらしい  
十二 39 11 すばらしいことではありませんか。ケラ  
十二 40 1 ませんか。ケラーは、生まれて一年半ほ  
十二 40 4 になったのもむりはありません。ケラー  
十二 40 5 ん。ケラーの両親は、なんとかして、す  
十二 40 9 しつけていくのには、なみなならぬど  
十二 41 9 りました。ケラーは、もうサリバン先生  
十二 41 10 リバン先生なしには、生きていけません  
十二 42 3 、ヘレン・ケラーは、大学をりつばな成  
十二 42 4 なりました。これは、ケラーのサリバン  
十二 44 4 るよ。一雄くんは、人形しばいをみた  
十二 44 6 だがね。日本には、文楽といって、り  
十二 44 7 。その人形などは、長さにすれば一メ  
十二 44 11 、ものによつては、三人がかりで一つ  
十二 45 3 ともある。人形はものをいわないが、  
十二 45 11 いまいった文楽は手でつかうのだが、  
十二 46 1 ある。あやつりは文楽よりもっと古く  
十二 46 3 だよ。あのころは影絵もあったよ。」「  
十二 46 5 略。」「日本ではあまりさかんでなか  
十二 46 8 。ジャワのものはとくに有名だね。牛  
十二 47 2 だいたい人間には、顔の色やくらしか  
十二 47 4 があるところには、かならず詩もあれ  
十二 48 1 だけれど、絵には絵のいいところがあ  
十二 48 2 ばいだが、これは人間にできないこと  
十二 48 7 自分で動かすのは楽しいものだ。こ  
十二 49 10 形にする。ほかのはよくもんでのぼして  
十二 53 1 ろをぬう。(3) 顔は、着物のすそからさ  
十二 53 4 いつける。(4) 手は、手さきのほうをい  
十二 54 2 ように、話すときは人形の顔を前後に動  
十二 54 10 2 舞台の上には、紙やいたぎれで、  
十二 55 2 々住みなれた土地はもとよりのこと、自  
十二 55 3 の生まれたところは、なんともいえない

十二554 あるためばかりではない。子どものとき  
 十二556 らである。傳説には、正しい歴史にもと  
 十二562 ておくということは、ただおもしろみが  
 十二565 される。その中には、世界に共通なもの  
 十二568 がいた。みそ五郎は、雲仙岳にこしかけ  
 十二5611 ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をう  
 十二575 けつしてたやすくは登れないが、ふしぎ  
 十二576 に、神山のほうには、昔から九十九だん  
 十二577 とても人間わざではない。昔、神山のお  
 十二578 年村にあらわれては、田や畑を荒らすの  
 十二579 ので、村の人たちは困りはて、おにに向  
 十二5710 もちだした。それは、おにが一夜のうち  
 十二581 ら、これからのちは、けつして村へで  
 十二581 して村へでてきてはならない、もしそれ  
 十二584 のであつた。おにには、これを承知して、  
 十二5811 るくなつた。おにはおどろいてすがたを  
 十二5812 てしまった。おにには約そくをまもつて、  
 十二5812 もつて、そののちはもう田畑を荒らすよ  
 十二591 荒らすようなことはなくなった。湖山  
 十二591 がいた。一代二代はいい人で、よくさか  
 十二597 が、三代めの長者は、先祖のことを鼻に  
 十二599 る年の夏、きょうは長者の家の田植えだ  
 十二5910 、里のおとめたちは、赤いたすきもかい  
 十二602 まつてきた。長者は、なんと思つたか、  
 十二603 けた。里の人たちはおどろいたが、いい  
 十二604 、いいたしたことはあとへひかないので  
 十二605 はたらいた。長者は、高どの上からこ  
 十二608 いうところで、日はや西の山に傾いて  
 十二609 に立っていた長者は、日のまるのおおき  
 十二611 んで、長者の望みはとげられた。ところ  
 十二612 がめると、高どのは消えてしまつてあと  
 十二619 れからというものは、いり用のときはい

十二6110 は、いり用のときはいつもここへきて、  
 十二624 かつた。そののちは、だれがなんと頼ん  
 十二6211 よいでいる。八郎はその魚をとつてやい  
 十二631 いてたべた。小魚はしおからかつたので  
 十二636 てしまった。家にはひとりの母がある。  
 十二637 からだをみせるにはしのびない。また人  
 十二639 のもこまる。八郎は思い切つて、水ぞこ  
 十二643 えないう力 根 葉は青く、くきは長く、  
 十二644 葉は青く、くきは長く、みきは高くそ  
 十二645 くきは長く、みきは高くそびえているが  
 十二646 びえているが、根はちつともみえない。  
 十二647 ともみえない。花は美しく、実はうまい  
 十二648 。花は美しく、実はうまい。しかし根は  
 十二649 うまい。しかし根はちつともみえない。  
 十二651 えないう。根のさきは毛より細い。毛より  
 十二656 きをさえぎるものはなにもない。おおづ  
 十二667 花をさかせる。根はみえない。みえない  
 十二672 ぎり のこぎりには、はがある。のこぎ  
 十二673 る。のこぎりののは、いぬの歯のように  
 十二678 る。のこぎりののは、いつもやすりをか  
 十二682 たない。のこぎりは、あつみをもつてい  
 十二684 切るのこぎりののは、大きくてあつてい  
 十二685 切るのこぎりののは、小さくてうすい。  
 十二686 てうすい。糸のこは糸のように細く、ひ  
 十二687 細く、ひきまわしはひじょうにせまい。  
 十二688 長く切るのこぎりは、廣いはばをもつて  
 十二689 。こびきの大のこははばが廣いし、製材  
 十二691 はたらきのある人は、はをもつたのこぎ  
 十二703 でいました。曾良は、信州の人で、歌が  
 十二706 きめました。曾良は思いました。芭蕉は  
 十二706 思いました。芭蕉はたつたひとりで住ん  
 十二708 いけれども、芭蕉はひとりしずかにして

十二7010 せまいので、自分は、その近所に別に家  
 十二711 て、毎朝早くきては、芭蕉のおきないう  
 十二716 うれしいと、曾良は喜びました。そのう  
 十二718 続きました。芭蕉はからだがいよいよ  
 十二718 よわいので、寒さは身にこたえましたが  
 十二719 しみてした。芭蕉は、くもつた空をあお  
 十二724 ていました。芭蕉は、子どもが大すきで  
 十二725 のあたりにいるのは、川べりにある船大  
 十二728 で、どれも身なりはきれいではないので  
 十二729 身なりはきれいでないのですが、芭蕉  
 十二729 いのですが、芭蕉は、いつも遊び友だち  
 十二7212 した。「みんなは、雪が降つたら、な  
 十二738 略。」子どもたちは、小さな手をしゃく  
 十二739 しますが、あらははその手にはのらない  
 十二739 あられはその手にはのらないで、顔にあ  
 十二7310 だりします。芭蕉は、につこりわらつて  
 十二7411 重いので、二三日は困ることもありませ  
 十二751 りません。ふだんは筑波おろしがさわが  
 十二753 でしたが、その夜は、すべての音も雪に  
 十二754 かさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の句  
 十二758 。「略。」その声は、毎日ききなれてい  
 十二758 良の声です。芭蕉はすぐ戸をあけました  
 十二7511 「略。」「先生は、おひとりどうし  
 十二7512 うしてもこずにはいられませんでした  
 十二761 がおほくなるのはやはりこんな晩だ。  
 十二763 「やがていりろには、パチパチとしばが  
 十二764 今夜の雪の句はいかがですか。」「へ  
 十二766 」。芭蕉は、えんがわにいつて  
 十二767 てきました。それは、赤いおぼんの上に  
 十二769 ありました。曾良は、芭蕉の子どもらし  
 十二7610 りました。ふたりは子どものようにわら  
 十二774 。テニスコートには日本とメキシコの國



十二 77 6 ます。スタンドには、はじまるまえから  
十二 77 7 せまったので、私はユニホームをつけて  
十二 78 1 た。その少年たちは、じょうずにえい語  
十二 78 2 て頼みました。私は、その少年の持つて  
十二 78 4 ました。少年たちは、これをみて、うれ  
十二 78 5 語で、「きょうは、きつと勝つてくだ  
十二 78 7 といいました。私は、いままで試合のま  
十二 78 8 はげまされたことはありませんでした。  
十二 78 10 会 で、「きみたちは日本人ですか。」と  
十二 78 11 た。ふたりの少年は、にっこりとわらっ  
十二 79 3 会 かい。きみたちは、日本語を知ってい  
十二 79 12 会 テニスの試合には、どちらをおうえん  
十二 80 1 会 。キンゼー選手はセントルイス生まれ  
十二 80 4 たとき、少年たちは、「略」。「略」。  
十二 80 10 そのひとみの中には、「略」。「略」という色  
十二 81 4 た。キンゼー選手は世界的名手でありま  
十二 81 9 ました。たおれてはおき、おきては戦い  
十二 81 9 てはおき、おきては戦いました。私はス  
十二 81 9 は戦いました。私はスタンドから一心に  
十二 81 10 年のことを思つては、ふるいたつて戦い  
十二 81 11 ができました。私はいまでも、あのとき  
十二 82 3 たおした清水選手は、最後の決勝戦にの  
十二 82 5 カップを、日本では、はじめてもらうこ  
十二 82 7 。清水選手の相手はチルデン選手でした  
十二 82 7 た。チルデン選手は、アメリカきつての  
十二 82 8 の名手です。身長は一・八七メートル、  
十二 82 9 らにりっぱな体格は、小さな清水選手の  
十二 82 9 のおよぶところではありません。それで  
十二 83 2 ひかれたコートには、日ざしがさんさん  
十二 83 5 スタンドの人たちは、われるようなはく  
十二 83 11 しました。ボールはたましいのこもった  
十二 84 1 心にして、両選手はとぶ鳥のようにかけ

十二 84 3 、早くも、第一回は七―五で清水選手が  
十二 84 7 つめるものすごさは、ことばではあらわ  
十二 84 7 ごさは、ことばではあらわすことができ  
十二 84 10 まおされるものではありません。もう然  
十二 84 11 ました。第三回めはチルデン選手の勝、  
十二 85 1 りました。見物人は、いよいよ手にあせ  
十二 85 4 か、チルデン選手はかた足をふみすべら  
十二 85 12 でした。清水選手は、ボールをやわらか  
十二 86 2 す。チルデン選手は、とりみだしたし  
十二 86 2 みだしたしせいではありましたが、やわ  
十二 86 4 ことができ、試合はふたたびはげしいも  
十二 86 5 ぎつぎと、両選手はしのぎをけずつて戦  
十二 86 5 戦いました。夕日はすっかりおちてしま  
十二 86 8 はさんで、両選手はかたいあく手をかわ  
十二 86 9 めに、見物人たちは、しばらく、あらし  
十二 88 2 くだらう。ことばは、そのときのまわり  
十二 88 8 うようにしなくてはならない。もし、そ  
十二 88 11 とばがわかったとはいえないことになる  
十二 88 12 。話をきくときには、相手の人のいつて  
十二 89 3 が話をするときには、その場のようすに  
十二 89 7 していうときとは、いいかたもかわつ  
十二 89 11 われていく。それは自分の生活を軽はず  
十二 90 3 となえていたのでは、そのことばは、す  
十二 90 3 では、そのことばは、すこしの力も発  
十二 90 5 ある。話すことばは、その場その場にあ  
十二 90 10 文を書いた。太郎はこの「くりひろい」  
十二 92 1 こまれていることは、太郎とはちがつて  
十二 92 1 ることは、太郎とはちがつている。とな  
十二 92 2 いったこと、くりはあんがい少なかった  
十二 92 6 ても、そのなかみは、おそらく、太郎や  
十二 92 7 郎や秋子と同じではなからう。それは、  
十二 92 7 はなからう。それは、めいめいの生活や

十二 92 11 まれているなかみはそれぞれちがつても  
十二 92 12 足」ということばは、だれにでも同じよ  
十二 93 3 がある。書くことは、話すこととちがつ  
十二 93 4 いあらわしかたには、いつそう氣をつけ  
十二 93 5 う氣をつけなくてはならない。前後の続  
十二 93 8 。文を書くときには、よく手をいれるこ  
十二 93 9 。文をおすことはつまり心を練ること  
十二 94 6 けがわかる。それは文字のおかげである  
十二 94 7 読んだ人々の心には、めいめいちがつた  
十二 94 8 されてくる。太郎は、秋の青い空を赤と  
十二 94 11 たいと思う。正男は、きよ年のいまごろ  
十二 95 1 たので、赤とんぼはとらずに、花を手  
十二 95 3 ことを思う。秋子は、おと年、この学校  
十二 96 4 でしょう。それにはあなたがたのおとう  
十二 97 1 よう。次の写真帳は、なんの写真帳でし  
十二 97 9 貝づからでる貝は、三百種類にもものぼ  
十二 97 10 ますが、古代の人は、はいがい、はまぐ  
十二 98 4 す。このほか魚では、たい、さば、まぐ  
十二 98 10 とぐちとなつたのは、アメリカのモール  
十二 99 9 もあります。これは、食物をいれるため  
十二 100 2 でしょう。土器には、なわ目のようが  
十二 100 9 があります。それは、もようもごくかん  
十二 100 12 す。この式の土器は、はじめ、東京のや  
十二 101 4 はにわ この人形は、はにわといって古  
十二 101 7 の土人形で、高さは一メートルほどあり  
十二 101 10 手首やむねなどには、まがたま、まるた  
十二 102 2 持がよくわかるではありませんか。はに  
十二 102 3 せんか。はにわには、このほか、うまや  
十二 102 7 っぱなほとけさまは、いまから千三百年  
十二 103 3 めてのお金 これは、千二百年ほどまえ  
十二 103 8 お金ができてからはどれほど便利になっ  
十二 104 2 ほうおう堂 これは、九百年ほどまえに

- |          |                    |         |                     |          |                    |
|----------|--------------------|---------|---------------------|----------|--------------------|
| 十二104 5  | う堂という名まえは、屋根のかざりにほ | 十二114 9 | んどの新しい憲法は、この議事堂でたん  | 十三11 11  | とや曲がつたことは、知識をもととし  |
| 十二105 10 | もあります。これは、平安時代の町の風 | 十二115 5 | でしようか。それは、民主主義というこ  | 十三11 12  | い。そうして、人は、道理によって動か |
| 十二106 4  | 大ずもう。かえるは、うさぎの耳をくわ | 十二115 6 | いくよりほかに道はありません。ことば  | 十三12 2   | ことを信ずる迷信は、今日、世の中にど |
| 十二106 6  | しました。うさぎはけんめいにこらえま | 十二115 6 | 生かすということは、身に行うというこ  | 十三12 5   | なれば、日本の國は、今日よりまだまだ |
| 十二106 11 | ました。土ひょうは、はぎやすすきがさ | 十三4 6   | くらと、季節の命はわきあがって、まる  | 十三12 8   | 朝になると、日は東の空からのぼり、  |
| 十二107 1  | た秋の野原。これは、鳥羽僧正という人 | 十三5 1   | さな木のめのむれは、おたがいひじを   | 十三12 10  | て動きます。地面は平らなもので、日や |
| 十二107 6  | 仁王さま。こんどは仁王さま。大きな目 | 十三5 5   | ているけはい。春は、はや、しばふに落  | 十三13 2   | でも西洋でも、天は動き、地はじっとし |
| 十二108 1  | います。仁王さまは寺の門に立って、ほ | 十三5 7   | して、あさい水には、あしのめがすくす  | 十三13 2   | も、天は動き、地はじっとしていて動か |
| 十二108 5  | 王さまをほったのは運慶だといわれてい | 十三5 10  | んだものにも、春は、希望の帰ってくる  | 十三13 5   | し、この天動説では、どうしてもかたづ |
| 十二108 9  | す。能面。これは能につかうお面です  | 十三5 12  | 空想をもつて、春は、また、楽しい船出  | 十三13 8   | 星などのような星は、太陽のまわりを、 |
| 十二108 11 | よって、このお面は、生きもののように | 十三6 11  | かなな春のきざしは、よもにあらわれて  | 十三13 12  | つまり、天動説とは反対に、地動説が出 |
| 十二109 5  | 語。イソップ物語はイソップという人が | 十三8 3   | 知識と迷信。知識は、人から教えられた  | 十三14 1   | 初にいいだしたのは、十六世紀の中ごろ |
| 十二109 6  | が日本に傳えたのは、三百五十年ほどま | 十三8 6   | 知識をますことは、たいせつなことが   | 十三14 4   | 出ました。この人は、すぐれた数学者で |
| 十二110 1  | はいってくることは、外國人の心が傳わ | 十三8 7   | らである。知識には、浅いものと深いも  | 十三14 6   | の空にえがく道は、だえん形であって  |
| 十二110 2  | わることで、日本はこのような心をと  | 十三8 8   | しい知識を得るには、考えたり、調べた  | 十三14 7   | 形であって、太陽はいつもその焦点にい |
| 十二110 5  | き絵書だ。これは、茶だんすににてい  | 十三9 8   | めしべにつくときはよくみるが、つか   | 十三14 12  | いったとおり、天は動くものではない、 |
| 十二110 6  | いますが、そうではありません。江戸時 | 十三9 9   | が、つかないときはみられないことを、  | 十三14 12  | 、天は動くものではない、地球が動くの |
| 十二110 8  | まき絵というの、うるしをぬつたう   | 十三9 10  | 進まないところには、迷信が行われる。  | 十三15 1   | かにしました。地は動くといっても、そ |
| 十二110 11 | をはなつてゐるのは、なんともいえない | 十三9 11  | 行われる。むかしは、星を見て世の中が  | 十三15 1   | といっても、それは一種ではありませ  |
| 十二111 2  | しさです。まき絵は、日本のすぐれた工 | 十三10 9  | えの人も世の中には多いが、ある人は、  | 十三15 1   | も、それは一種ではありません。自轉と |
| 十二111 7  | の絵です。この絵は北斎という江戸時代 | 十三10 9  | は多いが、ある人は、幸福なぐらしをし  | 十三15 7   | 会のぼうさんたちは、天動説を信じてい |
| 十二111 9  | ます。この浮世絵は、版画で、絵をかく | 十三10 9  | らしをし、ある人は、たいへん不幸にな  | 十三15 8   | の説を人に教えてはならない、といいま |
| 十二112 1  | をあわせた美しさは、このとおりつば  | 十三10 11 | ぬ國の人々などには、この考えのまった  | 十三15 9   | も、十三年ばかりは、だまって研究を続 |
| 十二112 4  | 。解体図。これは、オランダのターヘ  | 十三10 11 | あてはまらぬことは、いうまでもない。  | 十三15 12  | のため、ガリレオは、ローマに呼びださ |
| 十二112 9  | です。表紙の文字は、「かいたいず」と | 十三10 12 | でもない。日本には、毎年、約二百万人  | 十三16 1   | 、自分でも信じてはならぬ、人にも説い |
| 十二113 1  | って、日本の医学は、はじめてすっかり | 十三11 1  | じ運命をたどるとは、考えられない。こ  | 十三16 1   | ぬ、人にも説いてはならぬといわれま  |
| 十二113 2  | 本語になおすのには、どれほど苦心した | 十三11 4  | のに、一つのこととは他のことの原因であ | 十三16 2   | ました。ガリレオは、年をとつてもいた |
| 十二113 3  | り開いていくときは、いつの時代でもな | 十三11 6  | 関係の簡單なものは、普通の知識によつ  | 十三16 3   | むを得ず自分の説はあやまりであつたと |
| 十二113 4  | とげられるものではありません。汽車  | 十三11 7  | 、むずかしいものは、科学的研究によつ  | 十三16 5   | では、ガリレオは、はく害のため、考  |
| 十二113 6  | とかわいい汽車ではありませんか。これ | 十三11 8  | もとより世の中には、科学的研究によつ  | 十三16 6   | うと、そんなことはありませんでした。 |
| 十二113 7  | りませんか。これは、汽車第一号で、明 | 十三11 9  | られていないことはたくさんあるが、そ  | 十三16 6 空 | 。「やはり地球はまわる。」と信じて、 |
| 十二114 1  | も近くなり、世界はだんだん小さくなる | 十三11 9  | さんあるが、それは、学者がいろいろに  | 十三17 2   | の野 デンマークは、みどりの牧場と、 |

十三173 海の漁場のほかには、鉱山があるのでも  
十三185 ありました。戦いは敗れ、國はけずられ  
十三185 戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意  
十三185 志は、國民の意氣はしずみ、その活動は  
十三186 しずみ、その活動はおとろえました。た  
十三188 ころかほろびるかは、このときにさだま  
十三1812 ルガスです。かれは、その胸に國運回復  
十三193 のです。ダルガスは、戦いの間、橋をか  
十三195 ましたが、こんどは、のこった土地の大  
十三197 ました。ダルガスは、とおりにつべんの  
十三197 つべんの空想家ではありません。かれは  
十三198 ありません。かれは、科学者であり、理  
十三199 た。ユートランドは、デンマルクの半分  
十三1912 のとるべき手だては、ただ二つしかあり  
十三201 ません。その第一は水で、その第二は木  
十三201 は水で、その第二は木でありました。ユ  
十三202 トランドの平野には、八百年あまり前に  
十三202 八百年あまり前には、よくしげった森林  
十三204 ったために、土地は、年を追ってやせお  
十三206 。

これを生かすのは、みぞをほって水を  
十三208 とむずかしいのは、あれ地に木を植え  
十三209 とです。ダルガスは、このあれ地に育つ  
十三2010 こで思いついたのは、ノルウェー産のも  
十三211 みると、もみの木ははえるが、数年なら  
十三212 トランドのあれ地は、もはや、この強い  
十三214 、ダルガスの誠実は、これがためにくじ  
十三215 図 となく、「自然は、このむずかしい問  
十三217 と思いかべたのは、アルプス産の小も  
十三219 くと、両種のもみは、たがいにならんで  
十三2111 ランドのあれ野には、年ごとに、みどり  
十三2112 望であるこの植林は、みごとに実現され  
十三221 の國運回復の意氣は、年々高まってきま

十三222 た。しかし、問題はまだのこっています  
十三223 ます。みどりの野はできたが、ユートラ  
十三224 ンダのあれ地は、実現されません。  
十三224 されません。もみは、ある大きさまでの  
十三226 たので、かれるのはふせがれましたが、  
十三226 したが、その生長は、これによつてはた  
十三228 マルクの農夫たちは、「略。」といつて  
十三2210 リック・ダルガスは、父の質を受けて、  
十三2211 きでしたが、かれは、もみの生長につい  
十三2212 。

わかいダルガスは、父に、「略。」と  
十三231 図 に生長しないのは、きつと、小もみを  
十三234 図 たら、大もみは土地をひとりじめし  
十三237 りました。小もみは、ある大きさまでは  
十三237 、ある大きさまでは、大もみの生長をう  
十三2311 ランドのあれ地には、おいしげったもみ  
十三241 された、よい結果は、木材だけにとどま  
十三242 った木のない土地は、熱しやすくさめや  
十三243 ルガスの植林以前は、ユートランドの夏  
十三244 ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はと  
十三244 ランドの夏は、晝は暑く、夜はときに、  
十三244 は、晝は暑く、夜はときに、しもさえ見  
十三245 のつくった農作物は、じゃがいも・くろ  
十三247 てから以後の農業は、すっかりかわりま  
十三248 、しもがおりののはまったくやみ、こむ  
十三249 で、できないものはないまでになりました  
十三2410 トランドのあれ地は、大もみの林がしげ  
十三2412 なく、しげった林は、海岸からふき送る  
十三253 とめました。しもは消え、砂は去り、そ  
十三253 。

しもは消え、砂は去り、そのうえ、大  
十三254 で、すたれた都市はふたたびおこり、新  
十三256 て、あるところでは、百五十ばいになり  
十三256 した。道路・鉄道は、いたるところにし

十三257 う、ユートランドは生まれかわりました  
十三258 とホルスタインとは、すでにつぐなわれ  
十三2511 返りました。それは、全國民のたましい  
十三2512 ルク人のたましいは、ダルガスの研究と  
十三262 のおとろえた國民は、希望をとり返し、  
十三266 景、ペキンというのは、ホルトンが、あみ  
十三267 ホートンというのは、小路のことである  
十三268 ているので、小路は、おのずから高い土  
十三274 それで、ホルトンは一本のトンネルのよ  
十三278 、このホルトンではあるが、ここに住ん  
十三279 どもたちにとつては、かけがえのない、  
十三2711 の天地である。冬は冬で、風あたりの少  
十三2712 まりを楽しみ、夏は夏で、ひんやりとし  
十三283 持つて遊ぶわけではない。そのへんを走  
十三287 である。もの音には、いろいろなものが  
十三287 て来る。かた手には、大きな毛ぬきのよ  
十三2811 を持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎって  
十三292 とまると、そこでは、どこかの子どもが  
十三305 図 がう。「あの音は、おもちゃ屋さんだ  
十三305 略。」「いまのは、あめ屋さんだ。」  
十三306 ぞれ子どもたちにはすぐわかる。その中  
十三309 ててやって来るのは、さるまわしである  
十三316 りなのだが、さるは、とちゆうできよと  
十三317 が、見ている人には、かえつておもしろ  
十三318 ろい。さるまわしは、さるをつかったり  
十三322 るその声を聞くのは、ゆめの中の声のよ  
十三323 うに思われる。春は、なえ賣りがやっ  
十三324 がやって来る。夏は、きんぎよ賣りがや  
十三329 。

と歌う。秋には、なつめ賣りがやっ  
十三3211 ようなホルトンには、それが、ふしぎな  
十三331 ん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪車  
十三332 に不便なペキンでは、一けん一けん、水

十三336 ひびく。夏の日には、この音がすずしい  
 十三336 こさせ、冬の日には、いかにもさむざむ  
 十三338 る。夜のホーントンはまっ暗なので、はな  
 十三3312 がかがやく美しさは、なんといったらよ  
 十三344 とゆれ動くかげ絵は、子どもの心をひき  
 十三347 いて、子どもたちは、あわてて家にもど  
 十三349 面した家々の門には、「れん」が書かれ  
 十三3410 かれてある。れんは、めでたい文句や、  
 十三3411 る。小さな子どもは、絵も字もわからな  
 十三354 われないことではない。正月には、門  
 十三355 ではない。正月には、門のとびらに、ま  
 十三358 れる。子どもたちは、そのあざやかな色  
 十三3511 ぎわわせる。これは、ほんとにふえをむす  
 十三3512 えが鳴る。ふえには大小があるから、は  
 十三368 だす。子どもたちは、それをつかもうと  
 十三3611 びく。子どもたちは、またそちらの方へ  
 十三3911 い、はい。」三郎は、受話器をかけ、電  
 十三416 とりでつかうのは、ぜいたくというも  
 十三417 会。それに、うちはやけなかったから、  
 十三429 会。たいよ。きょうはとまるだろう……う  
 十三443 めの注意。しばいは、かならず、ふたり  
 十三444 ろが、このしばいは、舞台に出て来る人  
 十三445 。それでは、これはしばいではないかと  
 十三445 、これはしばいではないかという、そ  
 十三446 という、そうではなく、これでも、し  
 十三448 電話のはじめの人は、三郎くんのおぼさ  
 十三449 うさん、そのあとはマンシェウから帰っ  
 十三4410 舞台に出ている人は、四人の人と話をし  
 十三4412 が、この四人の声は、見ている人には聞  
 十三4412 は、見ている人には聞えませんが、そこ  
 十三452 すを、見せなくてはなりません。そこに  
 十三518 づる わたしの心は、にじを見るとおど

十三524 いたい。おさな子はおとなの父だ。それ  
 十三525 。それで、わたしは望ましい、わたしの  
 十三532 ただきました。絵は、はがきの上の方に  
 十三539 手。ました。「これは、いまから五百年ほ  
 十三543 た。〔略〕。」「ぼくは、その絵を見ると、  
 十三544 リアだということは、すぐにわかりまし  
 十三548 ました。おじさんは、絵かきではありま  
 十三548 さんは、絵かきではありませんが、絵が  
 十三5411 ようど、おじさんは、用事がなく、しょ  
 十三559 さいました。ぼくは、絵はがきをそのす  
 十三567 会。〔略〕。」「本物はね、いま、イタリア  
 十三568 会。よ。ラファエルは、ウルビノというと  
 十三571 会。口とラファエルは、前後して、そこか  
 十三573 会。も、ラファエルは、マドンナの像をか  
 十三574 会。よるマドンナ」は、おけのそこにかい  
 十三576 会。〔略〕。」「おじさんは、そういうながら、  
 十三578 会。した。「ぼくには、よくわかりません  
 十三578 会。が、そのマリアは、たいへん美しくて  
 十三5711 会。出ているね。絵は、写真で見ただけで  
 十三5711 会。真で見ただけでは、明暗はかなりわか  
 十三5711 会。だけでは、明暗はかなりわかるが、色  
 十三582 会。い。色のあるのは、その点はよいが、  
 十三582 会。るのは、その点はよいが、すりがうま  
 十三588 会。そうだね。それはそうとして、ラファ  
 十三5812 会。〔略〕。」「おじさんはそういつて、同じひ  
 十三592 会。ました。「これは、ドレスデンの美術  
 十三593 会。れている。これはどう思うかね。」そ  
 十三594 会。た。〔略〕。」「それは、せいの高いマリア  
 十三596 会。した。「その絵は、たいへん感じがち  
 十三597 会。のおかあさんではなくて、キリストの  
 十三5910 会。するね。この絵は、たいへん大きなり  
 十三5911 会。、この絵の前には、一台の長いすがお

十三602 会。〔略〕。」「ぼくは、それを聞きながら  
 十三609 会。しょう。ぼくには、そのうまさがよく  
 十三611 会。あれか。あれは、ミケランジェロの  
 十三611 会。みやしんけんさは、どうだろう。でも  
 十三612 会。アエルのうまさは、普通の人にもわか  
 十三615 会。さんのこしたのはいえらいよ。こんなこ  
 十四43 に知られている人は、けっして少なくは  
 十四43 、けっして少なくはありません。けれど  
 十四44 ・フィリップの名は、すこしちがった特  
 十四45 ぜでしょう。それは、フィリップの作品  
 十四47 です。フィリップは、まづしいもの、苦  
 十四51 ップの作品の中には、たしかに、私たち  
 十四53 ふり返らせないではない強い眞実の力  
 十四58 ップのすなおな心は、まづしさのために  
 十四59 もゆがめられたりはしてませんでした。こ  
 十四510 さ、誠実さ、それは、かがが、父を失っ  
 十四62 母を思う子の眞情は、遠く海をこえて、  
 十四63 でせまってくるではありませんか。パ  
 十四65 会。と思います。私は短い旅をしたあとで  
 十四67 会。とを考えないではいられませんでした  
 十四69 会。つらかったことは、おかあさんがかな  
 十四72 会。して、ご自分にはまだ子どもたちがの  
 十四72 会。る、子どもたちはじゅうぶん愛してい  
 十四73 会。、だから、自分はたしかにひとりぼっ  
 十四74 会。ひとりぼっちではないのだと、お考え  
 十四76 会。どうしても一どはおこななければなら  
 十四78 会。のです。私たちは、おとうさんのため  
 十四711 会。うさんのご一生は、私たちにとっての  
 十四712 会。のお写真を、私は、いつも自分のそば  
 十四82 会。にします。それは私にとって、このう  
 十四84 会。あさん、運命にはしたがわなければな  
 十四86 会。ですから。私には決心ができました。

十四 8 8 手 したら、それは、おかあさんがかな  
十四 8 10 手 お思いになるにはおよびません。なに  
十四 8 11 手 とのできないのは、わかりきっている  
十四 9 2 手 、この世の中には、まだ幸福がこのこ  
十四 9 6 手 、あなたのルイは、たいへんかなしい  
十四 9 9 手 いことです。私は、おかあさんが、ち  
十四 10 1 手 コーヒー入れとは、あす、送らせませ  
十四 10 2 手 ランプについては、いろいろいいこと  
十四 10 6 手 とか——それには、つかいかたを書い  
十四 10 8 手 むずかしいことはありません。いたっ  
十四 11 6 手 た。このランプは、石油でもきはつ油  
十四 11 8 手 のです。ランプはかべにおかけなさい  
十四 11 9 手 つ油のさしかたは、ご自分でなさつて  
十四 11 10 手 をととのえるには、どうをあらちこち  
十四 12 2 手 それに、ランプは、かさなしでもりっ  
十四 12 3 手 ちます。かさは、光をへいきんさせ  
十四 12 5 手 なのです。これは、私の友だちで、母  
十四 12 8 手 の友だちの母親は、このランプに満足  
十四 12 11 手 です。小包二つは、おそろくいっしょ  
十四 12 12 手 らくいっしょには着きますまい。コー  
十四 13 1 手 。コーヒー入れは、中に小さなめもり  
十四 13 3 手 あります。それは、コップの上からコ  
十四 13 11 手 おふたりの写真は、いま、この手紙を  
十四 14 1 手 うさんに対しては、このうえなくまめ  
十四 14 3 手 うさんのお写真は、ほんとうに生き写  
十四 14 8 手 あさんと私とは、おたがい、それ  
十四 14 9 手 ほどはなれてはいないのだ、もうす  
十四 14 11 手 、自分としては、力のかぎりおあ  
十四 15 1 手 なられたときには、自分には子どもが  
十四 15 2 手 きには、自分には子どもがあるという  
十四 15 5 手 そ、私にとっては、いちばんとうとい  
十四 15 7 手 おはかについては、どうしたのか、

十四 15 8 手 、ちょっと私にはわかりかねます。が  
十四 15 12 手 たとい、からだはこちらにいても、こ  
十四 16 10 手 いるとお考えではないかと心配してい  
十四 16 12 手 がご入用のときは、ごえんりよくお  
十四 17 1 手 い。夜が長すぎはしませんか。おひと  
十四 17 1 手 さびしすぎるとは、お思ひになりませ  
十四 17 4 手 ください。私には、おかあさんのおす  
十四 17 5 手 るか、この私にはわかるのです。では  
十四 17 7 手 うなら。きょうはこれでお話をやめま  
十四 18 4 手 うに、「バケツは、もとは英語だつて  
十四 18 4 手 バケツは、もとは英語だつてね。ゆう  
十四 19 1 手 やカーテンなどは、日本語で、なんと  
十四 19 6 手 が、「カーテンは、まどかけさ。」「へ  
十四 19 7 手 「では、バケツは。」「へ略。」「へ略。  
十四 19 8 手 略。」「バケツはね、手おけさ。」「へ  
十四 19 9 手 手おけ、手おけはちよつとおかしいわ  
十四 20 3 手 。それで、みんなは急いでそうじをすま  
十四 20 4 手 席につくと、先生は、私たちのつかつて  
十四 20 7 手 ぎのようなことばはその一例だとおし  
十四 21 1 手 いていたが、先生は、つきつぎと書き続  
十四 21 5 手 。「略。」「みんなは、「略。」「とか、「へ  
十四 21 7 手 をそそいだ。先生は、そんなことにはお  
十四 21 7 手 は、そんなことにはおかまいなしに、ど  
十四 22 2 手 。「略。」「私たちは、あまり多いのにお  
十四 22 4 手 が、「先生、私は、これはみんな、日  
十四 22 4 手 生、私は、これはみんな、日本語だと  
十四 22 6 手 うにいうと、先生は、「略。」「とおし  
十四 22 7 手 、「いや、いまは日本語にちがいない  
十四 22 7 手 いないが、もとは、外國のことばさ。  
十四 22 11 手 ったので、私たちは、いよいよおどろい  
十四 23 2 手 これらのことばは、もとはどこの國の  
十四 23 2 手 ことばは、もとはどこの國のことばだ

十四 23 4 手 ったので、みんなは口々に、「略。」「と  
十四 23 6 手 えた。すると先生は、「略。」「先生のお  
十四 23 7 手 ってきたことばは、英語だけではなく  
十四 23 7 手 は、英語だけではなく、ほかの國から  
十四 23 10 手 レヨン、ズボンにはフランス語、ゴム、  
十四 23 11 手 ラ、アルコルはオランダ語、チフス  
十四 23 12 手 ガーゼ、スキーはドイツ語。それから  
十四 23 12 手 タバコ、カルタはポルトガル語、キセ  
十四 24 1 手 セルとカボチャはカンボジア語だとい  
十四 24 2 手 のほかのことばは、みんな英語だ。」「  
十四 24 3 手 ているうちに、私は、どうしてこんなに  
十四 24 6 手 きた。それで、私は、「略。」「とおたず  
十四 24 10 手 たずねした。それは、外國と交通をし  
十四 25 3 手 とがわかつた。私は、このお話から、さ  
十四 25 4 手 ているということばは、あたりまえのこと  
十四 25 10 手 がいってきただけは、品物からだけでは  
十四 25 11 手 、品物からだけでは、外國の学問な  
十四 26 1 手 ってきた西洋医学は、はじめオランダか  
十四 26 2 手 はいり、そののちはドイツ医学がおもに  
十四 26 4 手 てみると、コレラは、オランダ医学が  
十四 26 5 手 フスやトラホームは、ドイツ医学が  
十四 26 9 手 タとかいうことばは、西洋音楽がはい  
十四 27 3 手 かかった大陸からは、どんなことばが  
十四 27 4 手 ずねすると、先生は、「略。」「とおし  
十四 27 5 手 いうときの漢語は、たいいて大陸から  
十四 27 10 手 おつしやつた。私は、自由研究で、外國  
十四 28 2 手 ねした。「それは、國語辞典をひいて  
十四 28 3 手 いてあることばは、たいいて西洋から  
十四 28 7 手 した。「略。」「私は、なにか大きな樂し  
十四 29 4 手 れませんが、これはけつしてそういうも  
十四 29 4 手 てそういうものではありません。だれで  
十四 29 6 手 ののです。それは、空にかがやいてい

十四 29 7 す。どうも日本人は、むかしから、あま  
十四 29 8 ら、星のおとぎ話は、日本にはあまりあ  
十四 29 8 とぎ話は、日本にはあまりありません。  
十四 29 9 ありません。日本は景色のよい國で、花  
十四 29 10 上の花を見ようとはしなかったのだらう  
十四 30 6 がたりなかったのは、ざんねんなことだ  
十四 30 9 か。むかしのことはしばらくおき、これ  
十四 30 11 らの人の心がまえは、大きくなくてはい  
十四 30 11 は、大きくなくてはいいけません。なんで  
十四 31 3 をわすれていたのは、よくないことでし  
十四 31 4 ちっぽけな考えでは、とても世界の中に  
十四 31 5 とでも世界の中にはたつていけません。  
十四 31 6 せん。あなたがたは、これからの日本に  
十四 31 8 えひとつで、日本はよくもわるくもなる  
十四 31 11 つていけば、日本は、見ちがえるほどり  
十四 32 1 のです。さて、私は、あなたがたに星を  
十四 32 2 めましたが、中には、「略。」という人  
十四 32 3 星とあなたがたとは、あまりにかけはな  
十四 32 4 めに、自分たちとはえんがなと思つて  
十四 32 8 のです。よそ目には、星と人間とは、た  
十四 32 9 には、星と人間とは、たいして関係がな  
十四 32 10 あるのです。人間は、星によつてみちび  
十四 32 11 つてもいいすぎではありません。みなさ  
十四 32 12 ません。みなさんは、地球や金星などの  
十四 33 4 かし、この太陽系は、ぎんが系といわれ  
十四 33 7 ぎんが系というのは、地球をとりまいて  
十四 33 12 、なかなかそうではありません。あのぎ  
十四 34 3 ちゅうというものは、どこまで廣いのか  
十四 34 5 よると、うちゅうは、けつしてはてしの  
十四 34 5 てしのないものではありません。博士の  
十四 34 6 ん。博士の計算では、うちゅうのさしわ  
十四 34 6 ゆうのさしわたしは、およそ二十億光年

十四 34 10 ちゅうにくらべては、太陽もごく小さな  
十四 34 12 んでいる人間などは、バクテリアよりも  
十四 35 2 、たしかに、人間は、バクテリアにお  
十四 35 4 しもかなしむことはありません。そのバ  
十四 35 6 計算したりするではありませんか。これ  
十四 35 7 間の力というものは、うちゅうにも負け  
十四 36 1 まことに、星の光は、声のないことばで  
十四 36 4 らすぐれた人たちは、星の光の中からふ  
十四 36 8 、キューリー夫人は、まづしい学生であ  
十四 36 11 うことです。夫人は、星はつかまなかつ  
十四 36 12 です。夫人は、星はつかまなかつたので  
十四 37 2 さん、あなたがたは、いま、日々の生活  
十四 37 3 ことにへこたれてはいけません。ひくつ  
十四 37 4 。ひくつになつてはいけません。心を大  
十四 37 7 ればならないことは、なんであるかとい  
十四 37 9 げてください。星は、きつと、あなたが  
十四 40 2 会、きれいな雲ではないか。二の人「大  
十四 42 5 團 ふうろが。天には雲、地にはあらそい  
十四 42 6 團 天には雲、地にはあらそいがたえなか  
十四 45 6 いました。助け船は、いつたい、なにを  
十四 45 7 るのだらう。かれは、氣が氣ではありま  
十四 45 7 かれは、氣が氣ではありませんでした。  
十四 45 7 てきました。それは女の声で、しかも、  
十四 45 12 です。マッケンナは、しばらくしんみり  
十四 46 6 ていました。かれは、いままでにどれだ  
十四 46 7 さを味わつたことはありませんでした。  
十四 46 9 た。歌っている人は、どういふ人かわか  
十四 47 2 せんが、おそらくは、自分と同じように  
十四 47 3 う。たいていの人は、しようつとつとき  
十四 47 6 思いました。かれは、歌の声をたよりに  
十四 48 5 歌を歌っているのは、その中のひとり  
十四 48 8 このおじょうさんは、この歌を知ってい

十四 49 8 の心を生かした人は少ないでしょう。こ  
十四 50 6 ました。このことは、あくる日の新聞に  
十四 50 8 、たとい、名まえはわからなくても、あ  
十四 50 9 も、あの美しい歌は、いまも、われわれ  
十四 50 10 うに感じられるではありませんか。六  
十四 51 5 会 『このかぼちゃはだれのものか。』と  
十四 51 8 こういいだしたのは、根のしるしをつけ  
十四 52 2 略。』「略。』花は、美しいわかい女で  
十四 52 4 会 、このかぼちゃは私のものです。私の  
十四 52 5 会 なかつたら、実はつきません。根や、  
十四 52 6 会 のないかぼちゃはありませんが、それ  
十四 52 7 会 が、それだけでは実はつきません。花  
十四 52 7 会 それだけでは実はつきません。花、と  
十四 52 10 会 ちゃでも、それは、花の一部であるめ  
十四 52 12 会 。だから、それは、私たち花のものだ  
十四 53 1 会 のだということはどういたがいありません  
十四 53 2 会 略。』「こんどは、葉さん、いつてご  
十四 53 3 略。』「略。』葉は、元氣のいい青年で  
十四 53 4 会 した。「花さんは、たいへんじょうず  
十四 53 7 会 たかということ、ごぞんじないよう  
十四 53 8 会 うですね。それは、私が、いつも日あ  
十四 53 11 会 からですよ。私は、せっかく花が開い  
十四 54 1 会 ています。あれは、私たちの養分をこ  
十四 54 3 会 、このかぼちゃは、全部私のものだ  
十四 54 7 会 さつき、葉さんは養分のことをおっし  
十四 54 8 会 ましたが、それは、大部分、根の私が  
十四 54 10 会 しているかたには、土の中のことはわ  
十四 54 10 会 、土の中のことはわからないでしょう  
十四 54 11 会 でしょう。そこは、暗いところで、土  
十四 55 2 会 送ってあげるの、たいへんなほねお  
十四 55 4 会 す。だから、私は、やっぱりそのかぼ  
十四 55 5 会 りそのかぼちゃは、私のものだと思

十四559「。おとなのつるは、しずかにいいまし  
十四5511会 いました。「私は、こんなに長いばか  
十四561会 特別なはたらきは、なに一つございま  
十四565会 かぼちゃの実にはなりません。また、  
十四567会 行ってあげるのには、この私です。もし  
十四5612会 います、私は、いっしょうけんめ  
十四572会 す。だから、私は、そのかぼちゃは、  
十四572会 、そのかぼちゃは、全部私のものだ  
十四574 があります。それは、頭のぼうしで、日  
十四577会 と、あなたたちは、ずいぶんかつてな  
十四578会 ね。あなたがたは、自分のことしか考  
十四5711会 たい、かぼちゃは熱帯地方のものです  
十四5712会 であるためには、私が熱と光とをゆ  
十四581会 葉さんと根さんは、養分のことをいっ  
十四582会 養分につくるのは、葉さんではなくて  
十四583会 のは、葉さんではなくて、私ですよ。  
十四586会 たいせつなものは、私たち水です。水  
十四589会 大きなかぼちゃは、ずいぶんかたいよ  
十四5810会 り、この大部分は水です。いまのお話  
十四594会 しました。「ぼくは、いちばんじみなも  
十四597会 す。ほかのことはわすれても、この土  
十四598会 、この土のことは、かたときもおわす  
十四5912会 なかったら、実は一つもつかなかった  
十四601会 、あのかぼちゃは、みんなぼくのもの  
十四604会 。しかし、ぼくは、そんなよくのふか  
十四605会 身がってなことはいいませんよ。あな  
十四606会 よ。あなたがたは、どうして地面には  
十四613会 ったら、私たちは、はえもしなければ  
十四615会 。このかぼちゃは、だれのものとも、  
十四615会 のとも、簡単にはいえませんね。公平  
十四618会 、このかぼちゃは、お礼に、すっかり  
十四622 あります。中には、熱い湯がいっぱい

十四624 。ただそれだけでは、なんのおもしろみ  
十四628 ことのすきな人には、なかなかおもしろ  
十四6210 に、湯の表面からは、白い湯げがたつて  
十四6210 っています。これは、いうまでもなく、  
十四636 大きくないときには、日光にすかして見  
十四638 えています。これは、白いうす雲が月に  
十四639 。この色については、お話することがど  
十四6310 ありますが、それは、また、いつかべつ  
十四641 ずくなる時には、かならず、なにか  
十四643 なかったら、きりは、たやすくできない  
十四644 のしんになるものは、ふつうけんび鏡で  
十四646 のです。空気中には、それが、しぜんに  
十四647 てしまったあとには、いまいった、ちり  
十四656 。もちろん、これは、まわりの空気の温  
十四657 およそのけんとうは、わかるだろうと思  
十四658 げがのぼるときには、いろいろのうずが  
十四6512 ぐらかの高さまでは、まっすぐにあがり  
十四6512 ますが、それ以上は、けむりがゆらゆら  
十四671 かあたたかい日には、前日雨でも降って  
十四674 らんなさい。湯げは、えんの下やかきね  
十四675 に、横になびいては、また、たちのぼり  
十四6711 があります。それは、らい雨のときに、  
十四681 れると、そこだけは、地面から蒸発する  
十四687 たりします。これは、茶わんのぼあい  
十四687 、見かたによつては、茶わんの湯と、こ  
十四6811 らい雨のぼあいとは、よほどよくにたも  
十四6812 らい雨のできかたは、いまいったような  
十四691 の湯にくらべるのはむりですが、ただ、  
十四693 よつと見ただけでは、まったく関係のな  
十四694 、原理のうえからは、おたがいによくに  
十四697 です。湯げのお話は、このくらいにして、  
十四697 いにして、こんどは、湯のほうを見るこ

十四699 にはいつている湯は、日かげで見ても、  
十四699 は、日かげで見ても、べつにかわつたよ  
十四6910 にかわつたようすはなにもありませんが  
十四6912 んなさい。そこには、みようなゆらゆら  
十四703 くでしょう。これは、夜、電燈の光をあ  
十四709 んだんにひえるのは、湯の表面の茶わん  
十四7011 ば、ひやされるのは、おもに、まわりの  
十四711 に接したところでは、湯は、ひえて重く  
十四711 たところでは、湯は、ひえて重くなり、  
十四713 んのまん中の方では、ぎやくに上の方へ  
十四717 るわけです。これは、湯の中にうかんで  
十四719 おいたばあいには、湯は表面からもひ  
十四7110 たばあいには、湯は表面からもひえま  
十四7111 たがどこも同じではないので、ところど  
十四7112 そういう部分からは、ひえた水が下へお  
十四722 へとどくじぶんにはひえて、そこから  
十四723 して、湯の表面には、水のおりていと  
十四7212 げろう」がたつのは、かべや屋根が熱せ  
十四735 なのです。つきには、熱い茶わんの湯の  
十四7310 あるかということは、まだ、あまりよく  
十四7312 係があることだけはたしかでしょう。湯  
十四743 なるかということは、ただ、茶わんのと  
十四744 ときだけの問題ではなく、たとえ、湖  
十四747 ひえていくときには、どんな流れがおこ  
十四752 できるときには、飛行家にとって、  
十四758 られるので、畑では空気がのぼり、森で  
十四759 気がのぼり、森ではくだっています。そ  
十四7511 かかると、飛行機は、しぜんと下の方へ  
十四763 ております。それは、海陸風とよばれて  
十四764 いるもので、晝間は海から陸へ、夜は反  
十四764 は海から陸へ、夜は反対に陸から海へと  
十四765 こし高いところでは、反対の風がふいて

十四 76 11 茶わんの湯のお話は、すればまだいくら  
 十四 76 12 りますが、ここでは、これくらいにして  
 十四 77 6 の簡単なことわざは、木を割るときには  
 十四 77 6 、木を割るときには、もとのほうから割  
 十四 77 7 、竹を割るときには、うらのほうから割  
 十四 77 9 う教えた。私はすぐにこれをためし  
 十四 78 2 てしまつて、一方は太く、一方は細くな  
 十四 78 2 一方は太く、一方は細くなつて、まっす  
 十四 79 1 つに割つて、あとは、十文字の小さな木  
 十四 79 3 ました。木のほうは、これと反対に、も  
 十四 79 5 ん。ただ、困るのは、木のばあいには、  
 十四 79 5 は、木のばあいには、どっちがうらかも  
 十四 79 11 るのといないのでは、たいへんちがいま  
 十四 79 11 ちがいます。これは、ちょうど、「二一  
 十四 80 3 にと傳えたことではないかと思ひます。  
 十四 80 3 先が発見したのではなく、よその民族か  
 十四 80 4 しれません。それは、なん回もなん回も  
 十四 80 6 。ぼろを着ても心はにしき。まかぬ種は  
 十四 82 8 にしき。まかぬ種はえぬ。三つ子のた  
 十四 82 9 まで。世の中は、三日見ぬまのさく  
 十四 82 11 文 二つ見た。一つは「雪國」というので  
 十四 83 2 であり、もう一つは「雪」というのであ  
 十四 83 3 った。「雪國」は、北國の人たちが雪  
 十四 83 4 。「雪」というのは、雪の景色を写した  
 十四 83 10 色を写したのではなく、雪の一ひらを  
 十四 83 10 ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると  
 十四 84 1 のである。「雪は、空からのお手紙で  
 十四 85 4 ばによって、映画は私たちに説明してく  
 十四 85 5 からのお手紙」とは、うまくいったもの  
 十四 85 8 うに、二つの映画は、どちらも雪にえん  
 十四 85 10 ものであるが、私はあとのほうの映画に  
 十四 86 1 ながめてみることは、つつましい心なし

十四 86 1 つましい心なしにはできるものではない  
 十四 86 2 にはできるものではない。野原の中で、  
 十四 86 6 してわるいものとは思われないが、いま  
 十四 86 11 を映画化することは、たやすいことでは  
 十四 86 12 、たやすいことではあるまいが、ぼんそ  
 十四 88 2 めると、一直線ではなく、くねくねとゆ  
 十四 88 3 んでいる。歩く人は、おそらく、まっす  
 十四 88 9 ちばん楽しいものは、なんといつても、  
 十四 89 1 じめたときの喜びは、たとえようがない  
 十四 89 2 ない。子どもたちは、この黒い土の上に  
 十四 89 7 人によって、文章は、どのようにも書き  
 十四 89 9 の心がひかれるのは、ものごとをあた  
 十四 90 2 賣りのむすめ 雪はひっきりなしに降つ  
 十四 90 5 ツチ賣りの女の子は、町をあらこちら  
 十四 90 7 ら思つた。女の子は、つめたい屋根うら  
 十四 90 7 のへやを出たときは、上ぐつを足にひっ  
 十四 90 8 いた。その上ぐつは、母親のものでつた  
 十四 90 9 、この子にとっては大きすぎた。二台の  
 十四 90 10 きに、その上ぐつはぬけてしまつた。か  
 十四 91 1 まつた。かたほうはどこへいつたか、つ  
 十四 91 3 。もう一つのほうは、どこかの男の子が  
 十四 91 5 った。その男の子は、これは人形のゆり  
 十四 91 6 の男の子は、これは人形のゆりかごには  
 十四 91 6 人形のゆりかごにはもってこいだと思つ  
 十四 91 8 こで、その女の子は、まったくはだしに  
 十四 92 1 がしみこんで、足は赤く、青くなつてい  
 十四 92 3 いうのに、その子は、まだマツチをすこ  
 十四 92 4 をすこしも賣つてはいなかった。一はこ  
 十四 92 5 。一はこも賣つてはいなかった。思ひき  
 十四 92 8 だ一銭ももうけてはいないので、父親が  
 十四 92 11 いそうに、その子は、おなががすいて、  
 十四 93 1 きれいなかみの毛は、両かたにまつわり

十四 93 1 まつわりつき、雪は、そのかなしげな、  
 十四 93 3 ツチ賣りのむすめは、自分のまき毛のこ  
 十四 93 6 すめの考えたことはそれであつた。女の  
 十四 93 7 であつた。女の子は、窓々とおして、  
 十四 93 8 かいだ。「あれはやき鳥だらうか。」  
 十四 93 11 であらう。女の子は、手にマツチの小さ  
 十四 93 12 ろの前だれの中には、もつとたくさんは  
 十四 94 1 っていた。女の子は、どんなにか、それ  
 十四 94 3 とだらう。女の子は、二つの家の間に、  
 十四 94 6 りこんだ。女の子は、両足を――そのあ  
 十四 95 1 ころうか。女の子は、一本のマツチをとり  
 十四 95 3 きだした。女の子は、その上へ、小さな  
 十四 95 5 のおが、その子には、もえさかる大きな  
 十四 95 6 に思われた。これは、ま法のマツチだろ  
 十四 95 8 た。そればかりではない。それがもえ続  
 十四 95 11 た。そのろの中には、美しい火がもえあ  
 十四 95 12 えあがり、ほのおは、その小さなマツチ  
 十四 96 2 あがった。女の子は、小さな、つめたい  
 十四 96 3 そのとき、ほのおは消えてしまひ、ろは  
 十四 96 3 消えてしまひ、ろはなくなつてしまつた  
 十四 96 4 しまつた。女の子は、手にもえつくした  
 十四 96 5 っていた。女の子は、またそうしないで  
 十四 96 6 またそうしないではいられなくなつて、  
 十四 96 9 の光のさすところは、かべがきぬよう  
 十四 96 10 った、その女の子は、中のへやをすつか  
 十四 97 4 う。そのやいた鳥は、肉を切るナイフと  
 十四 97 7 つとよつてくるではないか。ああ、その  
 十四 97 7 、ちょうどマツチはもえつくしてしまつ  
 十四 97 8 、女の子のそばには、あつい、かたいか  
 十四 97 10 なかった。女の子は、もう一本の、第三  
 十四 97 11 そうして、こんどは、女の子は、一本の  
 十四 97 11 こんどは、女の子は、一本のクリスマス



十四 98 7 いかけた。女の子は、人形の方へ両手を  
 十四 98 8 そのとき、マッチはもえつくしてしまっ  
 十四 98 9 くさんのろうそくはもえ続けていて、そ  
 十四 98 11 た。たしかにそれは星であった。「略」  
 十四 98 12 星よ、おまえはいつたいなんだろう  
 十四 99 1 「略」。女の子はねむそうにつぶやい  
 十四 99 4 略」と、女の子は思った。この子にと  
 十四 99 6 、星の落ちるときは、なにかのたましい  
 十四 99 9 があった。女の子は、またもう一本のマ  
 十四 100 1 見た。おばあさんは、いつものように、  
 十四 100 3 けれども、前よりはもっと楽しそうなよ  
 十四 100 5 略」と、女の子は、声をあげた。そう  
 十四 100 6 が見えなくなつては困ると思つたので、  
 十四 100 10 略」と、女の子はいつしうけんめい  
 十四 100 11 たのんだ。マッチは、はなやかにえあ  
 十四 100 12 れ以上に明るくはないと思われるくら  
 十四 101 4 せつに見えたことは、いままでもなかつた  
 十四 101 6 った。おばあさんは、女の子をうでにか  
 十四 101 7 かかえて、ふたりは、いつしうにふわり  
 十四 102 4 な子だ。あの子は寒さでこえ死んだ  
 十四 102 5 けれども、そうではなかつた。人々は、  
 十四 102 5 はなかつた。人々は、女の子がおおみそ  
 十四 102 6 らないのだ。人々は、その子がどんなに  
 十五 4 3 しががそ矢は、あわれいずこに  
 十五 4 7 えしわが歌は、あわれいずこに  
 十五 5 5 の木に、矢はまだおれでとどま  
 十五 6 2 くら だいだいは実をたれ時計はカチ  
 十五 6 2 は実をたれ時計はカチカチと 朝さく  
 十五 7 2 むかず うしはしずかにのおおの  
 十五 9 1 の小流れ 水はしずかに森の上に見  
 十五 12 ガラス戸の外は月あかし森の上に白  
 十五 14 風くればばらはたちまち火となれり

十五 19 6 ウの山です。これは、富士山よりはすこ  
 十五 19 6 れは、富士山よりはすこし高く、四千百  
 十五 20 1 電車のとちゅうにはいくつかの停車場が  
 十五 20 2 があって、そこには、氣持のいい、小さ  
 十五 20 6 もふたり、ひとり男の子で八つ、ひと  
 十五 20 6 子で八つ、ひとりは女の子で四つになる  
 十五 20 10 たりの子どもたちは、両親や家庭教師に  
 十五 20 11 れた子どもたちには、このヨーロッパの  
 十五 20 12 高い山の中の生活は、見るもの聞くもの  
 十五 21 7 アメリカ人の家族は、いつものように散  
 十五 21 8 いました。男の子は、小石を見つけては  
 十五 21 10 小石を見つけては深い谷の中へなげこ  
 十五 21 12 いました。女の子は、あぶない足どりで  
 十五 23 8 かまれて、女の子はばたばたしているで  
 十五 23 8 たばたしているではありませんか。さあ  
 十五 23 9 たらいいか。人々はただ、「略」とさ  
 十五 23 12 しょうか。その人は、いつしうけんめ  
 十五 24 2 れでしよう。それは、十五六になるひつ  
 十五 24 3 このひつじかいは、がけの中ほどのあ  
 十五 24 7 、もうその女の子は、どこへ持つて行か  
 十五 24 8 ましいひつじかいは、身のあぶないこと  
 十五 24 11 その勇ましい少年は、大わしのせにとび  
 十五 26 4 いへんです。少年はいつ鳥のせからふり  
 十五 26 9 ならないと、少年は思いました。ちよう  
 十五 26 11 うな氣持で、少年は、ときどき大きな声  
 十五 27 2 略」といわずにはいられませんでした  
 十五 27 3 まれている女の子は、あきらめたのか、  
 十五 27 9 谷の中を、大わしは、少年をせにのせ、  
 十五 27 11 ている人々の目には、小さな小さな黒い  
 十五 28 1 た。そのとき、鳥はサアツという羽音を  
 十五 28 5 した。すると少年は、あぶないことが近

十五 28 6 感じたので、左手は女の子の上帯にかけ  
 十五 29 2 した。すると、鳥は、不意のしゅうげき  
 十五 29 4 ま、少年の左手には女の子が、右手には  
 十五 29 4 女の子が、右手には血にそまつた短刀が  
 十五 29 6 がありました。少年は、必死のかくごで、  
 十五 29 8 しました。大わしはすぐにとび起きて、  
 十五 29 10 の戦いです。少年は、右手に短刀をふり  
 十五 30 1 いました。大わしは、太いけずめの最初  
 十五 30 3 身をかわした少年は、身をかわすと同時  
 十五 30 5 ちりました。わしは、羽音はげしくすこ  
 十五 30 5 と思うと、こんどは両羽をあおりたて、  
 十五 30 11 いりました。少年は、すばやく短刀を持  
 十五 31 2 のはずれようはではありません。大わし  
 十五 31 3 りません。大わしは、この思わぬいたで  
 十五 31 5 ました。それから、必死にとびかかる  
 十五 31 6 年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸  
 十五 31 7 のたびごとに、鳥はさけび声をたてて、  
 十五 31 11 れます。まわりには、鳥の白い羽が雪の  
 十五 31 12 ばいながら、少年は苦しい戦いを続けて  
 十五 32 6 っている人と鳥とはむちゆうです。血ま  
 十五 32 7 にしているものには、なんにも耳にはい  
 十五 32 9 かつていた大わしは、空中をころぶよう  
 十五 32 11 行きました。少年はほっとして、思わず  
 十五 32 12 う自分のまわりには、おおぜいのひつじ  
 十五 33 2 にだかれた女の子は、にこにこわらつて  
 十五 33 7 ほめことば、それはいまこでいうまで  
 十五 34 3 のはじめ 私たちは、自分の考えを表わ  
 十五 34 6 に知らせるためには、文字に書くか、ま  
 十五 34 7 ばならない。これは、記おくのためにも  
 十五 34 8 る。それで大昔には、なわを結んで、そ  
 十五 35 9 リカのエジプトには、そうした絵文字と  
 十五 35 12 た。漢字も、もとは事物の形を表わした

十五 36 4 る。漢字 漢字は、いまいったように  
 十五 36 6 が、形のないものは、この方法では表わ  
 十五 36 6 のは、この方法では表わすことができな  
 十五 36 9 考えを表わすのには、線を横に引いて、  
 十五 37 2 の起りである。木は、もともと形をうつ  
 十五 37 4 「木」とかいう字はそれである。また、  
 十五 37 11 本に伝えられたのは、千七百年ほどまえ  
 十五 37 12 であるが、日本では、「山」を「サン」、  
 十五 38 4 のように、日本では一つの漢字をふたと  
 十五 38 7 たいていの漢字には、この音と訓のふた  
 十五 38 8 かも、字によつては、いくつかの音のあ  
 十五 39 2 。かな 日本では、中国から傳わつた  
 十五 39 6 なつた。かたかなは漢字の一部分をとつ  
 十五 39 7 なつた。ひらがなはかたかなのように漢  
 十五 39 8 部分をとつたのではなく、たとえば、「  
 十五 39 9 たとえば、「い」は「以」、「は」は「波  
 十五 39 9 「は」は「以」、「は」は「波」、「に」は「仁  
 十五 39 9 「は」は「波」、「に」は「仁」というように  
 十五 39 11 ものである。かなは、日本の文化にとつ  
 十五 40 3 物語や枕草子などは、すべてこのかなに  
 十五 40 4 。しかし、いまでは漢字の長所をいかし  
 十五 40 8 ーマ字 ローマ字は、アメリカ・イギリ  
 十五 41 1 である。ローマ字は、まえにいったよう  
 十五 41 7 である。ローマ字は、全部で二十六字で  
 十五 42 1 。また、ローマ字は世界的の文字である  
 十五 42 4 かた いま日本では、漢字と、かたかな  
 十五 42 10 であろうか。私たちは、この問題をもつと  
 十五 43 10 つぶやいた。かれは、かるくドアをおし  
 十五 44 1 ながら、「あれは今は右衛門焼じやあり  
 十五 44 7 かけた。店の主人はあわてて、「たいへ  
 十五 44 9 ですが、あなたは——」と、あいさつ  
 十五 44 11 会。「いや、これは失礼しました。私は

十五 44 11 会 礼しました。私はハギンスというもの  
 十五 45 2 に語りだした。話は明治初年のころにさ  
 十五 45 4 考えかたや商賣では、ふだんの生活さえ  
 十五 45 11 日、プリンクラーは、どうやら覚えたい日  
 十五 46 2 んばんも、かれには、みなめずらしいも  
 十五 46 4 手にとつて、かれは、びっくりした。い  
 十五 46 6 会 である。「これは賣りものですか。」「  
 十五 47 1 会 ときどき焼いては、この店に持つて來  
 十五 47 3 会 」。プリンクラーは、まんぞくそうに赤  
 十五 47 4 がした。店の主人は、きかれるままに語  
 十五 47 6 がはじめられたのは、いまから三百三十  
 十五 47 8 ある。佐賀はん主は、お庭焼といつて、  
 十五 48 2 もあつたが、これははん主からゆるされ  
 十五 48 7 の焼物を作ることは、むずかしいことで  
 十五 48 8 あつた。今右衛門は、すぐれた赤絵の技  
 十五 48 10 できあがるものではなく、白く焼けるは  
 十五 49 2 かけたこのしごととはやめなかつた。やが  
 十五 49 7 求めるようなものは、ほとんどいなか  
 十五 50 2 会 きたこのしごとは、ぜひ続けてくださ  
 十五 50 4 会 なります。それはおいしいことです。品  
 十五 50 4 会 ことです。品物は私が買うけましょ  
 十五 50 7 耳にした今右衛門は、「略。」と決心し  
 十五 50 11 ら、プリンクラーは、日本の美しい焼物  
 十五 51 6 術についての説明は、プリンクラーのふ  
 十五 51 7 ものである。主人は、新しい茶をハギン  
 十五 51 8 会 すると、あなたは、そのプリンクラー  
 十五 51 9 会 か。じつは、私は今右衛門のまごにあ  
 十五 52 3 熱情のことば 話は、第一次世界大戦が  
 十五 52 5 学に学んでいた私は、一年半の努力の結  
 十五 52 8 ・ジョルダン博士は、別れに際して、各  
 十五 53 4 バークに着いたのは、暑い真夏の日の朝  
 十五 53 6 室の前に立つた私は、しばしためらつた

十五 53 10 私の目に映じたのは、廣いへやの窓ぎわ  
 十五 54 3 ることができた私は、なんというしあわ  
 十五 54 4 者であらう。博士は、しずかに歩みよる  
 十五 54 6 色のふうとうには見おぼえがある。わ  
 十五 54 7 会 わかつた。きみは、かねがねジョルダ  
 十五 54 11 ずねたおもな用事は、世界の学者がだれ  
 十五 55 1 師ジョルダン博士は、そのためのてはず  
 十五 55 3 いたホランド博士は、戦争中で費用が思  
 十五 55 8 会 わけだが、それはそれとして、きよう  
 十五 55 8 会 として、きようはきみがまだ生まれな  
 十五 55 10 会 おとずれたころは、西洋の文化をとり  
 十五 56 1 会 きをきわめたのは、アメリカ山がく会  
 十五 56 2 会 ろう。そのときは、まだ三角測量が行  
 十五 56 4 会 だきに立つた私は、小手をかざして足  
 十五 56 6 会 際算出した高さは、実測の結果とわず  
 十五 56 8 会 で、私と日本とはふかい関係があるの  
 十五 56 8 会 のだが、きようは、はるばるたずねて  
 十五 57 2 会 して來て、きみは室を二つももつてい  
 十五 57 3 会 そのせわをしてはくれまいかと、やぶ  
 十五 57 5 会 。ものずきな私は、それはおもしろい  
 十五 57 5 会 きな私は、それはおもしろいと、教授  
 十五 57 6 会 きとつたが、室は二つあつても、つく  
 十五 57 7 会 つても、つくえは一つしかなかつた。  
 十五 57 8 会 をひき、向こうは日本、こちらはアメ  
 十五 57 8 会 は日本、こちらはアメリカといつて、  
 十五 57 10 会 その日本の青年はなかなかの人物だっ  
 十五 57 12 会 いだした。それはおやさいご用だ。そ  
 十五 58 2 会 を承知して、私はすぐに授業にかかっ  
 十五 58 2 会 た。つまり、私はかれのギリシア語の  
 十五 58 3 会 の先生で、かれは私の日本語の先生と  
 十五 58 5 したホランド博士は、遠い昔を思い出し  
 十五 58 7 新島先生年ぶには、「略。」とある—

十五5811 う名を耳にした私は、とびあがらんばか  
十五591会 じさんなら、私はよく知っています。  
十五591会 っています。私は小さいとき、その新  
十五593 した。すると博士は、「略」と、一言  
十五596 見つめていた博士は、つと立ちあがって  
十五598会 「おや、これはまた意外だ。じつに  
十五5910会 んある。きょうは、もうこれでしごと  
十五5911会 うこれでしごとはやめだ。さあ、うち  
十五605 外に養っていたのは、明治二十年の夏で  
十五607 っていた私の父とは、心をゆるした間が  
十五608 、両者のつきあいはかなりひんぱんであ  
十五609 だ。とおつていた私は、そのときちょうど  
十五6011 ていた身にとつては、天下におそるべき  
十五612 じさんとおばさんは、「略」といって  
十五614手 ろ、満ぼう先生はいかが、毎日お話し  
十五617 を知らなかった私は、札幌の創成川の岸  
十五622 つをちらと見た私は、たちまちふくれあ  
十五627 いて、おじさんはおばさんに助け船を  
十五629 耳にしたおばさんは、腹をかかえてわら  
十五6211会 おじさんのくつは光っているのに、ぼ  
十五6211会 、ぼうやのくつはほこりだらけだから  
十五6212会 だから、行くのはいやだといっている  
十五631会 れば、おみこしはあがりませんよ。」「  
十五634 「略」。」「おじさんは、きちんと着ていた  
十五641 にことわらった私は、それを足先につつ  
十五644 じさんとおばさんはそのあとを追って出  
十五645 出て十メートルとは行かないうちに、私  
十五645 かないうちに、私は、道のまん中で、無  
十五648 「略」。」「おじさんは道ばたにしゃがんで  
十五6410 けた。見るなり私は、おじさんの廣いせ  
十五655 ばさんとの思い出は、いま私の胸にや  
十五657 じさんとおばさんは京都へひきあげられ

十五6510 さった。喜んだ私は、朝早くからそれを  
十五6512 ら車のついたものは送ってくださるなと  
十五661 りした。その次には、りっぱなむしや人  
十五668 によって、私の父は、同志社を守り育て  
十五669 の春をむかえた私は、母や多くの弟妹た  
十五6611 移った。そのころは、新島のおばさんは  
十五6611 、新島のおばさんは廣島におられて、学  
十五671 ても、新島家の窓は、かたくとざされて  
十五674 の生徒であった私は、そのクリスマスに  
十五678 おいだ私の目からは、たまのようななみ  
十五6710 ったあくる日、私は、ひさしぶりで窓の  
十五6712 ついたげんかんには、おもむきのあるか  
十五683 んだつもりで、私はかねをカーンとたた  
十五688 ばさん、おばさんは目になみだをためな  
十五693 の下にかがやく目は、思いなしかやわら  
十五698 かざられてあるではないか。ああ、新島  
十五699 、新島のおじさんは、私を京都までもつ  
十五6912 に、おじさんの声は聞えないのだ。暗い  
十五702 見入りながら、私は無言で頭をびよこん  
十五7011会 よう。おじさんは、年とられてから目  
十五7012会 キで書かなくては見えないようにおな  
十五714 いて、おばさんは声をくもらせた。そ  
十五718 に乗ったおばさんは、昔のように私をひ  
十五7110 に立ったおばさんは、「略」。」「いって  
十五724 」。」「と、おばさんはふたたび呼びか  
十五725 び呼びかけた。私は、「略」。」「と呼びか  
十五729 を走り出した自動車は、やがてこう外のす  
十五7211 んだホランド博士は、客間に私をみちび  
十五731 をみちびき、自分は書さいにはいって、  
十五732 わした博士の手には、古ぼけたアマスト  
十五734 の目の前で、博士は、「略」。」「いって  
十五738 ちようどそのころは眞夏であつたので、

十五738 、博士の家族たちは暑さをどこかにさけ  
十五739 にさけて、家の中はがらんとしていた。  
十五7312 られていた老博士は、きょうに乗じて、  
十五742 れば、自分の子女は、その性質がどんな  
十五743 も、かわいことはみな同じであつて、  
十五744 兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力  
十五745 上の能力のちがいは別として、一方が先  
十五747 らないという理由はすこしもない。親と  
十五748 ば、自分の子女にはすべて同じ教育をほ  
十五7410 見れば世界の人類はすべてその愛する子  
十五7411 ど、あるべきはずはない。四海の民すべ  
十五751 ちあがつた老博士は、フィッシュナイフ  
十五753会 りまわし、「愛はにくしみよりも強い  
十五7510会 、「先ほどの話は、ころよくひきう  
十五7511 さやかれた。博士は、そのことばの意味  
十五7512 わられ、こんどははっきりと、「略」  
十五761会 で出版することは、ひきうけたよ。」「  
十五765 ださつたのだ。私は、停車場まで送つて  
十五766 しのべると、博士は満面ににこやかなわ  
十五775文 でのぼすな。神は、みずから助くる者  
十五782 発表をためらつてはならない。はじめ、  
十五783 はじめ、きみたちは、世間の人にわかっ  
十五785 れども、きみたちは、ほどなく、みかた  
十五788 で眞実であるものは、他人にとつても眞  
十五7811 うな身ぶりをしてはならない。すなおな  
十五793 ロダン——私には、あなたがた日本の  
十五795 す。といひますのは、私は、あの美しい  
十五795 いひますのは、私は、あの美しいあなた  
十五7910 私のつくえの上には、日本のみなさんが  
十五802 るようになったのは、われわれが最初で  
十五803 ります。それ以前は、おたがいに他の國  
十五804 に他の國々のことはわからず、世をすこ

十五 80 6 かりでなく、実際は、たがいにくみあ  
 十五 80 10 がら、年よりの私は、日本の小学校のみ  
 十五 80 11 時代がきたときには、私たちの時代がは  
 十五 81 2 ユタイン——天は、人のうえに人をつ  
 十五 82 3 ーブルのまわりには、この地球の上でい  
 十五 82 10 パンと、さとうとは、はじめはいって来  
 十五 82 12 しまいます。ねこは、ひとことも口をき  
 十五 83 3 ふとった人たちは、だれだろう。」光  
 十五 83 5 あんまりあてにはならないけれど、青  
 十五 83 8 ドを、まわしてはいけないよ。ほんの  
 十五 83 11 も。あの人たちは下等でもあり、たい  
 十五 83 11 あり、たいていはまあ、育ちのわるい  
 十五 83 12 りだけれど、人はわるくないんだよ。  
 十五 84 12 おまえさんたちは、あのさとうがしを  
 十五 85 12 光「こわいことはないよ。あいそがい  
 十五 86 2 。それを受けてはいけない。なにも受  
 十五 86 2 。なにも受けてはいけないよ。でない  
 十五 86 7 。人というものは、自分のしなれば  
 十五 86 8 つとめのためには、なにかしらぎせい  
 十五 87 3 た幸福「わたしは、幸福なままでい  
 十五 87 9 。」このなかまは、『のどのかわいて  
 十五 87 11 福』で、ふたりはふたごで、ふたりと  
 十五 87 11 ふたりとも、足はうどんこです。(ふ  
 十五 87 12 をする。)これは『なんにも知らない  
 十五 88 2 いという幸福』は、こうもりのように  
 十五 88 3 。このかたがたは、『なんにもしない  
 十五 88 5 、ふたりとも手はパンのしんだし、目  
 十五 88 5 のしんだし、目はもののジヤムですよ  
 十五 88 6 、ここにいるのは、『はちきれそうな  
 十五 88 7 わらい』で、口は耳までさけているし  
 十五 88 8 立ち向かうものはないですよ。」「は  
 十五 88 12 をむけているのはだれです。」ふとつ

十五 89 1 「あの男のことは、きかないほうがよ  
 十五 89 1 よろしい。あれはすこしひねくれ者で  
 十五 89 3 ようかいするのはむずかしい。(チル  
 十五 89 5 す。わたしたちは、ただもう、おまえ  
 十五 89 8 しょう。わたしは、とてもいちいちし  
 十五 89 8 しょうかいしてはいられない。なに  
 十五 90 1 福』さん。ぼくは、ほんとうにすみま  
 十五 90 2 ず。ぼくたちは、たいへん急いでい  
 十五 90 8 んでも、たべてはうまくない鳥だそう  
 十五 90 9 にかく、そいつは、一どもわたしたち  
 十五 90 10 へのぼったことはないようです。とい  
 十五 90 11 をあまり上等とは思わないからです。  
 十五 91 4 幸福「ふとつた」それは、いつもしごとをし  
 十五 91 5 す。わたしたちは、すこしの休みもな  
 十五 91 8 しろくないはずはないでしょう。それ  
 十五 91 10 の。」光「あなたはそう思うの。」ふと  
 十五 91 12 わるいわかい女はだれだね。」こん  
 十五 92 1 とつた幸福「どもは、せつせと、いぬと  
 十五 92 3 と見ると、かれらはみんなとなかくて  
 十五 92 5 らんよ。みんなは、テーブルにすわり  
 十五 93 4 たべているときは、だれにもかまっ  
 十五 93 10 だ。おことわりはできませんよ。さあ  
 十五 93 12 ふとつた幸福どもは、喜びの声をあげな  
 十五 94 1 れそうならい」は、光のこしのあたり  
 十五 94 4 だよ。」チルチルは、「光」のいうよう  
 十五 94 4 まわします。舞台は清らかな、こうごう  
 十五 94 11 たように思うのは目のせいです。私た  
 十五 94 12 いです。私たちちはやつと、物の真実を  
 十五 96 4 「この世の中には、人が思うよりも  
 十五 96 5 たくさん、幸福はあるのだから。けれ  
 十五 96 5 ふつうの人間には、それが見つけられ  
 十五 96 8 に用のあるものは、どうせこつちを通

十五 96 9 会っているひまはないよ。」小さな「  
 十五 97 3 ろう。」光「あれは『子どもの幸福』だ  
 十五 97 5 まだだよ。あれは、歌を歌ったり、お  
 十五 97 6 ど、まだ、お話はできないのだよ。」  
 十五 97 7 ら、「ごきげんはいかが、ごきげんは  
 十五 97 7 かが、ごきげんはいかが。まあ、あの  
 十五 97 8 子のわらうことはどうです。なんてか  
 十五 97 10 う。このへんでは、みんなお金持なの  
 十五 98 3 を見かけることはできないよ。子ども  
 十五 98 4 幸福というものは、地の上でも、天の  
 十五 98 8 略。」光「それは、どうしてもいけま  
 十五 98 9 っていないことは、わかっているのだ  
 十五 98 10 れにあの子たちは、大急ぎに急いでい  
 十五 98 12 、子どもの時代は、ごく短いのだから  
 十五 99 2 のむれ、まえよりはすこしせのhighのが  
 十五 99 6 。(光に)ぼくは、どこへ行っても、  
 十五 99 8 に向かい)きみはだれなの。」幸福き  
 十五 100 11 の知っているのは、ぼくたちだけです  
 十五 100 11 すよ。ぼくたちは、いつだって、あな  
 十五 100 12 すよ。ぼくたちは、あなたといっしょ  
 十五 101 5 。」幸福「あなたは、やっぱり、なんに  
 十五 101 6 のですね。ぼくは、あなたのおうちの  
 十五 101 7 それから、これはみんな、『おうち  
 十五 101 9 の。」「幸福」たちは、みなどつとわらい  
 十五 101 12 いの。ぼくたちは、わらったり、歌を  
 十五 102 3 ても、あなたには、なんにも見えない  
 十五 102 5 いします。ぼくは、あなたにつかえる  
 十五 102 6 福』です。ぼくは、きれいではないが  
 十五 102 7 くは、きれいではないが、いちばんた  
 十五 102 8 でしょう。これは、『清い空気の幸福  
 十五 102 9 ています。これは、『両親を愛する幸  
 十五 102 11 うにしているのは、だれもふり向いて

十五102 12 会 からです。これは、『青空の幸福』で、  
 十五103 1 会 いますし、これは、『森の幸福』で、  
 十五103 2 会 の『幸福』たちは見られます。また、  
 十五103 3 会 す。また、これは、『ひなたの幸福』  
 十五103 4 会 いますし、これは、『春の幸福』で、  
 十五104 1 会 冬の日の幸福』は、ここえた手のため  
 十五104 2 会 それから、ぼくは、まだなまのうち  
 十五104 5 会 からね。その名はすなわち、『むじゃ  
 十五104 6 会 福』です。それは、ぼくたちのなま  
 十五104 7 会 それから、これは、いや、まったくお  
 十五105 4 会 「なにさ、あれは、不幸のほらあなか  
 十五105 8 会 す。幸福』あれは、『大きな喜び』で  
 十五105 10 会 ろん。ぼくたちは、よくいつしよに遊  
 十五105 11 会 ればならないのは、『正義であること  
 十五106 1 会 ます。でもぼくは、まだわかいから、  
 十五106 3 会 その後にいるのは、『善人であること  
 十五106 5 会 のをとめることは、なかなかむずかし  
 十五106 8 会 ると、ぼくたちは、『不幸』そのもの  
 十五106 9 会 です。右の方には、『し』ことをしあげ  
 十五106 12 会 います。それは、いつでも、兄弟の  
 十五107 4 会 でしょう。あれはわるくなつてしまつ  
 十五107 7 会 れを妹にいつはいけません。すると  
 十五107 7 会 すると、あの女はさがしに行きたがっ  
 十五107 11 会 がいます。それは、毎日ぼくたちを照  
 十五108 4 会 の。』幸福』あれは、『愛することの大  
 十五108 5 会 すっかり見るには、まだ小さすぎます  
 十五108 8 会 も出て来ないのは。』幸福』あれは、人  
 十五108 9 会 は。』幸福』あれは、人がまだ知らずに  
 十五108 10 会 「ほかの人たちはなにをしようとして  
 十五109 1 会 。その『喜び』は、たぶんここでいち  
 十五109 9 会 来た『喜び』たちは、『母の愛の喜び』  
 十五110 3 会 これほどの幸福は、世の中にありませ

十五110 4 会 「でも、あなたは、うちのおかあさん  
 十五110 6 会 そうともさ。私は、もう年をとること  
 十五110 6 会 う年をとることはないのだからね。そ  
 十五110 10 会 ないが、ここでは、なにもかも見える  
 十五110 11 会 のきれいな着物、まあ、なんでこし  
 十五111 1 会 「いいえ、これは、おまえたちのほお  
 十五111 1 会 んなお金持だとは知らなかった。いつ  
 十五112 2 会 であるの。それは、おとうさんがかぎ  
 十五112 4 会 え、いいえ。私は、いつだってこの着  
 十五112 5 会 けれど、人間には見えないのさ。人間  
 十五112 6 会 人間というものは、目を閉じていると  
 十五112 7 会 だからね。母親はだれだって、子ども  
 十五112 8 会 わいがるときにはお金持なのですよ。  
 十五112 11 会 あさんたちの愛は、喜びの中でも、い  
 十五113 1 会 すぐそのなみだは、目の中の星になっ  
 十五113 3 会 さんの目の中には、星がいっぱいある  
 十五113 9 会 うだよ。ここでは、うちにいるときの  
 十五113 11 会 「いいえ、それは同じことです。ま  
 十五114 1 会 をしているときは、いつだってこんな  
 十五114 11 会 愛』でも、それは同じことです。私  
 十五115 1 会 あがつて来たのは、これから下へ帰っ  
 十五115 4 会 チルや、おまえは、いまだけ天國に來  
 十五115 5 会 いがりあうときは、いつでも天國にい  
 十五115 6 会 さんに、ふたりはありますよ。どん  
 十五115 7 会 っ、おかさんはひとりぎりです。そ  
 十五115 8 会 ぎりです。それは、いつだって、同じ  
 十五115 10 会 ね。おまえたちは、おかあさんをよく  
 十五115 11 会 ことをわすれてはなりませんよ。でも  
 十五115 11 会 も、おまえたちは、どうしてここまで  
 十五116 7 会 ったよ。あの人は、おまえたちふたり  
 十五116 10 会 顔を見せることはないの。』チルチル」  
 十五116 11 会 いいえ、あの人は、あんまりはつきり

十五117 6 会 る喜び』あなたは『光』なんですね。  
 十五117 6 会 ですね。私たちは、ちっとも知りませ  
 十五117 7 会 かりですか。私は『物のわかる喜び』  
 十五117 8 会 います。私たちは、それは幸福ですけ  
 十五117 9 会 たち以上のもは、見えないのです。  
 十五117 10 会 んじですか。私は、それは長いこと、  
 十五117 12 会 います。私たちは、それは幸福なん  
 十五118 1 会 の影以上のものは見えないのです。』  
 十五118 2 会 んじですか。私は、あなたをすいてい  
 十五118 3 会 います。私たちは、幸福なのですけれ  
 十五118 4 会 ゆめ以上のものは、見られないのです  
 十五118 6 会 ださい。私たちは、強くて、純潔です  
 十五118 8 会 「みなさん、私は神さまのおいつけ  
 十五118 9 会 るのです。ときはまだ来ないのです。  
 十五118 10 会 そうしたら、私は、もうなにもおそれ  
 十五119 2 会 がら、「あなたは、私の子どもたちに  
 十五119 4 会 「略」。光』私は、愛しあう人たちに  
 十五119 4 会 しあう人たちには、いつでもしんせつ  
 十五119 6 会 方へ行き、ふたりは長いあいだきあい  
 十五119 7 会 と、ふたりの目にはなみだが光っていま  
 十五120 2 会 学級日記 きようは修業式があつた。校  
 十五121 8 会 ふれてきた。それはなんともいえない、  
 十五121 12 会 別れをした。先生は、「略」。とおっし  
 十五122 8 会 きようの感謝会はわすれることはでき  
 十五122 8 会 会はわすれることはできません——先生  
 は 5 は  
 三 99 図 は  
 四 71 6 は『は』の上にある。  
 四 74 5 は——花のようにきれいな心。  
 十五 39 9 「は」は「波」、「に」は「仁」というよ  
 うに、漢字の全体をくずしたものから作りだした  
 ものである。

十五 39 9 「は」は「波」、「に」は「仁」というように、漢字の全体をくずしたもののから作りだしたものである。

ば [場] (名) 7 場 ひこうじば・すなば・ていしやば・とおりば・ひろば・ふろば・ほしば・まきば・まちやくば

九 97 7 たかぎ、首をさすりながら、その場にぼんやり立っている。

十一 81 10 少年は、するどいさげびをあげて、その場に立ちすくみました。

十二 89 3 話をするときには、その場のようすによくあうように、氣をつけて話さなければならぬ。

十二 90 5 話すことは、その場の場にあらわれるその人の面影ということもできよう。

十二 90 5 その場その場にあらわれる

十二 93 3 書くことは、話すこととちがって、その場のようすが相手にみえないから、

十五 34 5 けれども、それをその場にいない人や、遠くにいる人に知らせるためには、文字に書くか、

ば (接助) 184 ば ↓ とえは

一 21 3 齣 おてて つないで、のみちをいけば、みんなかわいい ことりになって、

一 21 6 齣 うたをうたえば、くつがなる。

一 22 7 齣 「のみちをいけば」のところは、げんきよくあるきました。

一 23 5 齣 「うたをうたえば」では、くちにてをあてて、らっぱのようにしました。

一 24 3 齣 二ばんの「はねておどれば」のところは、ぴよんぴよんとびました。

二 42 6 齣 おまえがきれいな ことばで いえば、あちらだつて、きれいにいうさ。

三 57 6 齣 うたをわすれたカナリやは、ぞうげの

ふねにぎんの かい、月夜の 海にうかべれば、わすれたうたを 思いだす。

三 58 5 おりれば みずうみへでられますし、のぼれば 大きな 木のあるところへでられます。

三 58 6 のぼれば 大きな 木のあるところへでられます。

三 63 10 みずうみを 右へいけば もりへです。

三 63 10 左へいけば たきへです。

三 64 9 齣 はじめに 右か 左か どちらかへやらなければ。

三 92 8 みにきた 人が 一本ずつ おつてしまえば いまに みんな なくなつてしまふでしょう。

三 110 5 齣 この 十五夜には、月の 國から むかえがきて、かえらなければ なりません。

四 51 2 下から ねらわれて いる ときには、ばらばらになつて、はなれて とべば 安全なのですが、

四 51 3 いまは、かっちゃんを たすけなければ なりません。

四 61 10 齣 さあ、ひとねいりしなければ。

四 70 9 ころは、ふれば なる。

四 133 6 齣 黒い ころもの そろいで まえば、月は まつ黒、やみの 夜。

四 133 8 齣 白い ころもの そろいで まえば、月は 十五夜、まんまるい。

五 38 8 手 そうすれば、こちらのようすが、いろいろとわかるだろう。

五 64 6 齣 日に日に 大きくなつたのは、おまえひとりの 力でもなければ、おとうさんやおかあさんの 力でもない。

五 67 5 齣 せめて、おけの一つも、もらつてくれれば よかつたのに。

五 89 2 齣 高い山からたにそこみれば、うりやなすびの花ざかり。

五 89 6 齣 うらの山から海べをみれば、波にうかんださが鳥。

六 26 5 齣 風がでてこなければいいね。

六 28 6 齣 ふたりでたのめば、なんとかなるだろう。

六 50 6 齣 くらければこそ光る星、ねむりをふらす夜の空。

六 65 4 上にすれば下になり、下にすれば上になるものはなかに。

六 65 4 下にすれば上になるものはなかに。

六 71 2 齣 いま、この雪だるまが、お話をすればいいつて、いつていたところよ。

六 110 4 「ナ」や「ノ」のつくことばがあったら、「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。

六 134 8 自分たちは、あの大きなするどい角で、つきあげられてしまわなければなりません。

七 55 2 文章は、くわしくしさえすれば、はつきり写しだすことができるとはかぎりません。

七 84 4 齣 きいてみれば、いちいち、もつともなことばかり。

八 51 1 どうして、ピオが私のうちにかわれるようになったかといえは……。

八 74 4 「略。」としかつたり、それでもきかなければ、指で追つたりしました。

八 99 9 といえは、いかにもおくびようもののようにも思えましようが、

八 16 10 これは、木からいうとめいわくしごくなことですが、せみの子からいえば、母親のちぶさにすがつたようなもので、

八 34 11 「光年」を単位として計算しなければならぬほど、遠いきよりであります。

八三〇 花が、みたとおりのこがねならば、わしもつむのだが。

八三二 どうかすれば満足なさるのですか。

八四九 そうですね、おなおりになります。

八五五 しろ、水にいられてやらなければならぬ。

八六九 遠いところにてくれさえすればいい。

八七四 大きくなれば美しくもなるでしょう。

八八〇 おまえなんかは、ねこにくわれてしまえばいい。

八八六 風がひどいので、あひるの子は「略」、すわりこんでしまわなければならなかった。

八九二 おすでなければいいが、まあ、かつておいてみよう。

八九八 そうすれば、そんなことは考えなくなくてしようよ。

九〇四 あひるの子は、水のおもてがすっかりこおってしまわないように、水の中をおよぎまわらなければならなかった。

九一〇 あなたがおってしまわないように、いつも足をつかっている必要はなかった。

九一六 生まれがくちようのたまごであってみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。

九二二 四色、五色と数をまわしていけば、その感じはまたふかくなるでしょう。

九三二 風といえば、「そよそよ」とか、「ザワザワ」とか、「ビュウビュウ」とかいふことばであらわしているが、

九三六 もし、きく人の心が高ければ、それだけ音楽のねうちが生きてくることになる。

九四二 まもなくさっていかねばならぬ日本

に、なごりをおしんでいるのかもしれない。

九四八 十一月のはじめになれば、もうほとんどすがたをみせなくなっています。

九五二 きれいな枝ならば、だれの山の木の枝でも、おつてよいことになっています。

九五八 「略」と書いてもいいといえればよかったと、いちろうはときどき思うのです。

九六四 赤いぬの一びきゆけばこの町のそここよりぞいぬのあらわる

九七〇 青ざさをいれやればいけのふなはや青き葉のかげにきておる

九七六 たべのこしのめしつづまけばうちつどうすめの子らと日なたぼこする

九八二 くもは、力いっぱいおがけば、あるいは、つばめのくちばしからころげ落ちることができたかもしれない。

九八八 庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や、「略」などを、こまかにしらべたいのです。

九九四 トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、「略」などを、たんねんにみようと思ひます。

一〇〇〇 くもがのきに巣をかけることがあれば、巢のはりかたなどを、しらべておきたいと思ひます。

一〇〇六 観察すればするほど、自然のおもしろさもわかり、そのふしぎなことにうたれ、

一〇一二 たとえば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあみかたか、

一〇一八 なぜ、このようなあみかたをしなければならなかったのか、よく考えてみたいと思ひます。

一〇二四 佐吉は、「略」、ひまさえあれば、織機のことをしらべつづけていたのである。

一〇三〇 そのために、いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければならぬ、というのである。

一〇三八 機械で動かせば、もっと早く織ることができし、

一〇四四 このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。

一〇五〇 うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功するわけであつたが、

一〇五六 半円が眞円になれば成功するのだ。

一〇六二 「これで成功しなければ」 幸吉は、自信をもつて母貝を海中にはなつた。

一〇六八 養殖眞珠発明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とするならば、作製に失敗したわたしは、星にもあたらぬでしょう。

一〇七四 おかみさんをもらえば、くらしにもお金がかかり、

一〇八〇 着物をきせたり、おこづかいをやったりしなければならぬので、

一〇八六 あるとき、このだんなは、用事で、となり村までいかなければならぬでした。

一〇九二 それでもきこえなければ、また、どなる。

一〇九八 ぼくらは、きみについていきさえすれば、だいじょうぶだと思ふんだ。

一一〇四 紅梅・白梅みなりはてて、ひがんすぎれば風あたたかく、

一一一〇 だいこんの花にあかつきの 色ただよえば勇ましく、すき・くわ持つて野にいそぐ。

一一一六 麦のとりのいれことなくすめば、はい色雲が空うちおおい、青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。

一二二二 くわをかついで田をみまわれば、日はまた照つて水たつぷりと、

一二二八 夕風ふけばたいこ鳴り、清い歌声あちこちと、こよい楽しいばんおどり。

十一 38 9 ㊦ かきねににおうきんもくせい、しとしとと降る秋雨に、ちれば山にはまつたけが、かおりも高くはえてくる。

十一 41 5 ㊦ もちつきすませて、しめなわをはり、一夜明ければうれしいはつ日。

十一 42 7 ㊦ うめもほころび、こちふけば、春も目さきに近づいた。

十一 52 5 ㊦ おたがいがぬれたからだで、おしたりおされたりしなければならなかった。

十一 55 3 ㊦ ことばはねる、つまめばにげる。

十一 68 1 ㊦ 死人のようにみえる者もあれば、〈略〉、じつと空間をみつめている者もありました。

十一 69 11 ㊦ こうもかわればかわるものか——これが父親であろうとは、とても思われませんでした。

十一 71 9 ㊦ そうすれば、おとうさんのようすもなんとかわかるだろう。

十一 75 8 ㊦ きみがいれば、きつとよくなるから。

十一 78 10 ㊦ すこしよくなるかと思えば、思いがけなくまたわるくなったりで、

十一 80 5 ㊦ 飲み物やくすりを、少年の手からでなければ飲まないようになりました。

十二 20 10 ㊦ わたしはまた、あのよう絵のぐがあればいいなと思いましたよ。

十二 20 11 ㊦ あれがあれば、どんなかげのところで、美しい色にできますがねえ。

十二 24 5 ㊦ めいの民ちゃん、二つ、満でいえば一年三ヶ月で、まだ歩けません。

十二 25 6 ㊦ そとさえ寒くなければ、ものかげへつれていって、用をたさせるようにしました。

十二 41 12 ㊦ 私が命がけでせわをすれば、ケラーさんがすぐわれるのです。

十二 44 8 ㊦ その人形などは、長さにすれば一メー

トル以上のものもあるが、

十二 47 5 ㊦ だから、人間がいるところには、かならず詩もあれば、絵もある。

十二 71 5 ㊦ 先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、

十二 81 5 ㊦ 私もどうしても勝たなければならないと思いました。

十二 88 10 ㊦ もし、そのわけにかなわないことをすれば、たいへんおかしいことになるばかりでなく、

十二 89 1 ㊦ 話をきくときには、〈略〉ことばをよくききわけ、のみこまなければならない。

十二 89 4 ㊦ 話をするときには、その場のようすによくあうように、氣をつけて話さなければならない。

十二 89 11 ㊦ ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。

十二 115 3 ㊦ このような歩みをたどってきた日本を、これからどうもりたてていけばいいでしょうか。

十三 9 3 ㊦ いいかえれば、ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、

十三 10 7 ㊦ しかし、よいといった方角へ移って困った人もあれば、わるいといった方角へこして、つごうのよくなった人もある。

十三 11 12 ㊦ よいことやわるいこと、〈略〉は、知識をもととして考えなければならない。

十三 12 1 ㊦ そうして、人は、道理によって動かなければならない。

十三 12 5 ㊦ 知識を廣め、学問を研究して、迷信をまったくとり去ってしまうようになれば、日本の

國は、今日よりまだまだ進むことであろう。

十三 31 9 ㊦ さるまわしは、さるをつかったり、せりふをいったり、はやしをいれたりしなければなら

ないので、なかなかいそがしい。

十三 33 2 ㊦ 水に不便なペキンでは、一けん一けん、水を運んで行かなければならない。

十三 33 9 ㊦ 月が出ていれば、出ていたで美しく、星の夜であれば、またさらに美しい。

十三 33 10 ㊦ 星の夜であれば、またさらに美しい。

十三 41 3 ㊦ いっしょにつかえばいいよ……

十三 45 6 ㊦ 「……」を時間的に短くしたり長くしたりして、電話の話しなくてはならない。

十三 52 3 ㊦ そうでなければ、死んでいたい。

十四 7 6 ㊦ どうしても一どはおこななければならないことが、おこったというにすぎないのです。

十四 8 4 ㊦ が、おかあさん、運命にはしたがわなければならない。

十四 8 5 ㊦ じゅみょうにも負けなければならない。

十四 9 3 ㊦ なぜかといえば、妹にしても、私にしても、心からおかあさんを愛しているからだ、

十四 9 4 ㊦ こうお考えにならなければいけません。

十四 9 6 ㊦ おかあさんが力をおとしておしまになったら、あなたのルイは、たいへんかなしい思いをしなればなりません。

十四 14 10 ㊦ もうすこしすれば、ごいっしょに一月をくらせるのだ、

十四 15 11 ㊦ そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早かつたでしょうから。

十四 27 12 ㊦ どうすれば、外國からきたことばが調べられますか。

十四 31 11 ㊦ あなたがたのものをみる目、ものを考える力が大きくなっていけば、日本は、見ちがえるほどりっぱな國になっていくのです。

十四 35 6 ㊦ これを思えば、人間の力というもののは、



うちゆうにも負けないくらい廣大で、すばらしいものだといふことができるでしょう。

十四37 6 そうすれば、人間がだいichiにしなければならぬことは、なんであるかということも、しぜんにわかってくるはずだ。

十四37 7 人間がだいichiにしなければならぬことは、なんであるかということも、調子もみだれていなければ、ふるえてもいません。

十四46 1 それは女の声で、しかも、調子もみだれていなければ、ふるえてもいません。

十四61 3 人間がせわをしてくれなかったら、私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。

十四61 8 いろいろな種を、来年もわずれずにまいてもらうことができさえすれば、このかぼちゃは、

《略》人間であつてしまつても、さしつかえない十四70 11 もし、表面にちゃんとふたでもしておけば、ひやされるのは、おもに、まわりの茶わんに

ふれた部分だけになります。

十四76 11 茶わんの湯のお話は、すればまだいくらかありますが、

十四81 10 しゆにまじわれば赤くなる。

十四82 1 文 たまみがかざれば光なる。

十四82 2 ちりもつれば山となる。

十四85 7 一ひらの雪によつて、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかとすれば、たしかに空からの手紙にちがいない。

十四86 7 いますこしふかく考えれば、さらにおもしろい場面が発見されるように思われる。

十四94 12 一本のマッチで、火をともしることができたらば、どんなによからうか。

十五9 1 文 水はしずかに流れると見ればもの花

十五12 1 文 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の

とのもを見ればよきつくよなり

十五12 8 文 紙をもてランプおおえガラス戸の外

十五13 7 文 月照らす上野の森を見つあれば家

十五14 4 文 目をあけてつくづく見ればばらの木

十五14 6 文 風くればばらはたちまち火となれり

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五15 3 文 ただみればこれかりそめのばらの花

十五50 2 文 この焼物をやめれば、日本から美しいものが一つ消えてしまうことになります。

十五59 10 文 裏の写真やら、当時の日記やら、きみに見せなければならぬものがたくさんある。

十五63 1 文 なんとかしなければ、おみこしはあがりませんよ。

十五74 2 文 親の目から見れば、自分の子女は、《略》、

十五74 7 文 それによつて兄が特権を與えられねばならぬという理由はすこしもない。

十五74 7 文 親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に

十五74 9 文 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、

十五85 2 文 いってみれば、すばらしく美しく、この廣間のなにもをとおさえている。

十五86 7 文 人というものは、自分のしなければならぬつとめのためには、なにかしらぎせいにする心がなければならぬものだ。

十五86 8 文 なにかしらぎせいにする心がなければならぬものだ。

十五96 3 文 あれだけ残っていればいいや。

十五103 2 文 外へ出ればいつでも、この『幸福』たちは見られます。

十五105 11 文 まず第一にいわなければならぬのは、『正義であることの大きな喜び』で、

十五112 9 文 もう、びんぼうなおかあさんもなければ、きりよのわいのおかあさんもないし、

十五113 1 文 ほおずりをしてもええ、すぐそのなみだは、目の中の星になつてしまうのですよ。

十五115 2 文 これから下へ帰つてから、どういふよ

ばあちゃん ↓おばあちゃん

の手にさわってみたり、はいを追ったり、

くる。



六21 11 おやおや、ありがとうございます。」 バイオリンのきりぎりす

「大きな荷物だな。」

六22 10 バイオリンの「ここであいっしょに音楽会をやろうじゃないか。」

六23 7 バイオリンの「バイオリンをちょっとひいて、」 きりぎりす

六24 10 バイオリンの「こんな楽しさも知らないで、氣のどくなありませんかだよ。」 きりぎりす

はいがい「道具」(名) 1 はいがい

十二97 10 古代の人は、はいがい、はまぐり、かき、《略》などをたくさんたべていたようです。

はいきゅうもの「配給物」(名) 1 配給物

十三38 1 におかあさん、配給物を取りに行つたんじゃないでしょうか。

ハイキング (名) 1 ハイキング

十三41 10 におぼさんがね、こんどの日曜、きみをお客さんにして、ハイキングにつれて行くって：

はいく「俳句」(名) 2 はい句

十二70 4 はい句を勉強することに心をきめました。

十二71 4 このようにして芭蕉につかえながら、はい句の話をきくのです。

はいけんさ・せる「拝見」(下) 1 はいけんさせる《一セ》

五12 8 5 きつぷをはいけんさせてもらいます。

ばいしゅう「賠償」(名) 1 賠償

十三17 9 ドイツオーストリア二國との戦いに敗れ、賠償として、シュレスウヒとホルスタインという、作物のよくできる二州をとられました。

はいせん「敗戦」(名) 1 敗戦

十三26 1 敗戦のために意氣のおとろえた國民は、希望をとり返し、

はいだす「這出」(五) 4 はいだす《一シ》

七97 2 白の子うさぎは、親について、はじめて、巣からはいだしてきました。

八14 10 ニミリほどある、白いうじのようなうちゅうが、はいだして、

八20 10 タぐれをみはからって、思いきって土をかきわけて地上にはいだします。

八73 2 どちらもたまごからはいだしてまもないものであった。

はいたつ「配達」(名) 2 配たつ 1 しんぶんはいたつする

五16 3 そこへ、配たつをする人がきて、《略》、私たちをみんなかばんにいれました。

五19 11 配たつをする人は、自てん車に乗って走りました。

はいのぼる「這上」(五) 1 はいのぼる《一リ》

六16 8 ありは、いそいでかりうどのすねにはいりましました。

はいはい「這這」(名) 1 はいはい

五5 3 さあ、はいはいをして、たっちして、村にでましよう、町にでましよう。

はいはい(感) 1 はいはい

七75 10 5 はいはい。なんですか。

はいまわる「這回」(五) 1 はいまわる《一ツ》

十二25 5 おしめカバーをさせたままほっておくと、民ちゃんは平氣でそこらをはいまわっています。

はいりこむ「入込」(五) 1 はいりこむ《一ン》

八87 4 おりよく戸があいていたので、あひるの子は、雪の中の草むらへはいりこんだ。

はいりたまう「入給」(五) 1 はいりたまう《一エ》

六23 2 5 さあ、はいりたまえ。

はいる「入」(五) 101 ハイル はいる《一ツ・一

ラ・リール》1 おはいる

— 9 8 融会 「はいった。」「はいった。」しろいたま。

— 10 1 融会 「はいった。」「はいった。」しろいたま。

— 10 3 融会 「はいった。」「はいった。」あかいたま。

— 10 4 融会 「はいった。」「はいった。」あかいたま。

— 10 6 融会 かごに はいった たまを かぞえましよう。

— 51 2 融会 きしやは、まもなくくもの とんねるに はいります。

— 54 10 融会 そんな ときには、 はなればしに ある がっこうに はいって、 べんきょうして くるの です。

— 64 1 融会 おとうさんも、 わたくしも、 わの なかに はいって、 おはなばたけを おどりまわりました。

— 26 4 融会 きゅうりが、くつの中にはいりました。

— 55 3 融会 ゆうべ、ねどこにはいってから、こんな ことを かんがえました。

— 60 5 融会 こんど、みなさんが二年生になったら、 あたらしい 一年生が はいってきます。

— 33 5 融会 ほそ長い びんに、 さかなが はいって いました。

— 102 5 融会 それから というものは、 おじいさんの とる 竹の中には、 たびたび こがねが はいって いました。

— 310 7 融会 家にはいって ぐらになつと、 光の 中に きれいな おひめさまが すわっています。

— 44 7 融会 学校にはいる 子ども、 いちいち 知ら せてくれます。

四205 ねずみが三びき、わの中にはいり、ねこが一ひき、わのそとにでました。  
 四221 うちこちまわっているうちに、ぴよいと中にはいりました。  
 四108 そこへ、かめがうらしまをあんないしてはいってきます。  
 五86 にいさん、汽車がはいってきたよ。  
 五164 さま、このかばんにはいるんだよ。  
 五171 まもなく、私たちは、ゆうびんきよくの大きなほこの中にはいりました。  
 五205 なしの花のきれいにさいている家に、はいりました。  
 五335 この荷物の中に、おり物や、お茶や、しんじゅなどがはいっています。  
 五928 ごはんの中にたけのこのはいっているのが、たけのこごはんですよ。  
 六45 いろいろな音や、みたこともないような物が、ごたごたと耳にはいり、目にはいるばかりで、なにがなにやら、さっぱりわからなかった。  
 六45 目にはいるばかりで、  
 六87 このとき、父の時計屋さんがはいってきた。  
 六118 ねじは、自分がここにはいなかったために、この時計ぜんたいが、ふたたび活動することができたのだと思うと、うれしくてたまらなかった。  
 六293 おはいり。」戸をあけて、きりぎりす一、二がはいってきます。  
 六421 かかしが列のまん中にはいっている。  
 六517 月は、雲にはいったかと思うとすぐで、でたかと思うとまたすぐはいります。  
 六518 でたかと思うとまたすぐはいります。  
 六625 きゅうりがくつつの中にはいりました。  
 六1010 そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、

するするとはいるくらい大きさに作って、  
 六1112 五十音の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中にはいっている音ばかりではないか。  
 六1123 この二つは、両方とも、マミムメモという一ぎょうの中にはいっている。  
 七711 みんなが勉強する教室にはいて、こしかけてみたり——  
 七423 汽車はトンネルにはいった。  
 七801 裁判官がはいってくる。  
 七924 1びきの白いうさぎと、茶色のうさぎは、おくへはいってでてこないで、  
 七936 茶色のうさぎがはいっているへやに、えさがなかったの、  
 七958 その中に、わたのようなふわふわした毛が、いっぱいはいっていました。  
 八223 あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、われめができました。  
 八382 宝くらの中で、宝物をかぞえておいでになると、み知らぬ人がはいってきました。  
 八416 そのとき、王女がはいってきました。  
 八488 「略。」と喜んで、つかつかと小屋の中へはいっていききました。  
 八641 なしろ、水をこわがるのだから、どんなにしても思いきってはいるようにしてやることのできなかつた。  
 八747 かりいぬが、ピシャ、ピシャとぬま地へはいってきた。  
 八777 小屋の入口の戸がすこしあいているのをみつけたので、そこから中へはいっていった。  
 八825 あたかなへやにはいてさ、  
 八869 そこで、あひるの子は、バッテリーのいれてあるたの中へとびおり、こんどはまたこなおけに

はいってしまった。  
 九212 へやにはいてくる人があると、  
 九368 山からおるとき、この谷まの流れにはいて、頭から水をあびるのが楽しみでした。  
 九792 土はやわらかで、ずぶずぶと、ステッキのたけいっばいにはいます。  
 九1237 求め求めて、いつか、いまのしずおか縣のさかいもすぎ、ながの縣にはいった。  
 十243 トロッコをおして、炭坑にはいていく工員。  
 十494 ゴメンクダサイッテ——ハイッテクノヨ  
 十529 妹は、(略)、よその家の門の中へ、はいっていこうとします。  
 十5210 「ゴメンクダサイッテハイッテクノヨ」と、おとなびたことをいいました。  
 十667 『ぶす』といって、おそろしいどくがはいっている。  
 十674 だんなは、ちよいちよいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、  
 十695 なにかはいっているとみえて、重たい。  
 十703 うまそうなあまいにおいがして、黒っぽいものがはいっていました。  
 十一647 家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。  
 十一678 「略。」と、看護人は、くり返しながら、中へはいりました。  
 十一734 みると、医者が、ひとりの助手をつれて、へやの向こうのしにはいてきました。  
 十一819 ひとりの男が、看護婦に送られながら、そのへやにはいてきました。

十一 89 5 医者が、看護婦と看護人をつれてはいってききました。

十二 27 5 いまそこにいたかと思うと、もう次のへやにはいっているというように、

十二 35 2 「水」がその中にはいっているものであることを、はっきり教えるために

十二 44 8 図 その人形などは、〈略〉、まるでたましいがはいっているように動くよ。

十二 110 1 外國から書物が新しくはいってくることは、外國人の心が傳わることで、

十四 20 5 外國からはいってきたことばが、いろいろまじっていることを

十四 23 7 図 外國からはいってきたことばは、英語だけではなく、ほかの國からも、いろいろはいってきている。

十四 23 8 図 ほかの國からも、いろいろはいっている。

十四 24 5 私は、どうしてこんなにたくさんのことばが、いろいろな國からはいってきて、日本語になったのだろうか、ふしぎになってきた。

十四 24 11 日本になかった品物が、外國から傳えられたときに、そのことばもいっしょにはいってきたので、

十四 24 12 ラジオといっしょに、「ラジオ」ということばがはいり、

十四 25 10 外國のことばがはいってきたのは、品物からだけでなく、

十四 26 1 日本にはいつてきた西洋医学は、はじめオランダからはいり、そののちはドイツ医学が

もに傳わったとうかがったが、

十四 26 2 西洋医学は、はじめオランダからはいり、

十四 26 4 コレラは、オランダ医学がはいってきた

ときに、〈略〉傳わったことばであろう。

十四 26 6 チフスやトラホームは、ドイツ医学がはいってきたときに〈略〉傳わったことばであろう。

十四 26 10 西洋音楽がはいってきたときに、

十四 26 12 西洋の油絵がはいってきたときに

十四 27 3 日本といちばん関係のふかった大陸からは、どんなことばがはいってきたのだろうか

十四 27 6 図 それが、あまり古い時代にはいつてきて、長いあいだつかっているうちに、

十四 57 4 つるがこういつたとき、高い声でわらいながら、どやどやといつてきたものがあります

十四 62 3 中には、熱い湯がいつぱいはいっております。

十四 69 9 白い茶わんにはいつている湯は、

十四 93 12 ぼろぼろの前だれの中には、もつとたくさんはいっていた。

十五 30 11 ちようどそこに、手ごろながつた岩のかげが目にはいりました。

十五 32 7 血まなこになって目の前のできを相手にしているものには、なんにも耳にはいりません。

十五 47 10 「色なべしま」といわれる、色のはいつたものが、いちばんすぐれていたという。

十五 53 9 しずかに室内にはいつた私の目に映じたのは、

十五 73 1 自分は書さいにはいつて、しきりにさがしものをしておられたが、

十五 82 10 チルチルとミチルと、〈略〉とは、はじめはいつて来たとき、すこしはにかなで、

十五 88 11 図 それから、あの、なかまにはいらなくて、せなかをむけているのはだれです。

十五 91 1 図 わたしたちの生活のなかまにはいつて、わたしたちのすること、みんな見るといい

十五 107 3 図 『ふとった幸福』たちといっしょに、不幸のなかまにはいつてしまった。

十五 112 3 図 それは、おとうさんがかぎをかけたあの戸だなの中にはいつているの。

はいれる 「入」(下二) 2 はいれる 《一レ》

七 34 4 図 もうすこし、中へはいれませんか。

七 36 2 図 とてもはいれないね。

はう 「這」(五) 2 はう 《一ウーツ》

五 63 8 図 生まれたときは、ねてばかりいたのが、はうようになり、立つようになり、

八 65 1 「ピヨ、ピヨ。」と、ひなは鳴いて、はってでた。

はえ じできばえ

はえる 「生」(下二) 17 はえる 《一エーエル》

じめばえる

一 42 4 木もはえていますよ。

三 22 2 図 わかし、あるところに、一本のくすのき

がはえました。

三 35 1 図 中にわに、とうもろこしがたくさんはえています。

七 96 9 12 日めのきよう、みんな、目があき、からだには、すっかり毛がはえました。

八 16 1 そこは木の下ですから、大小の木の根が、からみあい、かさなりあつてはえています。

八 21 6 地上には、一本のささだけがはえています。

八 60 8 みずうみの岸の、ごぼうのはえているところ、一わのあひるがすわっていた。

八 102 8 ほの1つぶを虫めがねでみると、毛のよう

なものがたくさんはえていました。

九 37 9 図 名も知らない雑草がいちめんにはえています、なにかでてきそうです。

九37(17) なん十メートルもある高いすぎやまつのはえているところは、書でもうすぐらく、

十61(1) うちのお庭に、たけのこが一本はえてきました。

十一38(10) 山にはまつたけが、かおりも高くはえてくる。

十三21(1) 実際に試験してみると、もみの木ははえるが、数年ならずしてかれてしまいました。

十四59(4) しかし、土にはえていないかぼちゃなんて見たことがない。

十四60(7) あなたがたは、どうして地面にはえたのか、考えたことがありますか。

十四61(3) 人間がせわをしてくれなかったら、私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。

十四82(9) まかぬ種ははえぬ。

はあと「羽音」(名) 8 羽音

九130(10) プンブンブン、ブンブンブーンと、遠いところで羽音がしました。

九131(3) プンブンブーン、羽音がだんだん近づいてきます。

九133(5) 目をつぶってしずかにしていると、また、パタパタという羽音がきこえてきました。

十三47(2) はちの羽音が、チューリップの花に消える。

十五23(1) 大きな一わのやまわしが、サアツという羽音をたてて、〈略〉舞いおりて来ます。

十五28(1) 鳥はサアツという羽音をさせたかと思うと、

十五30(5) わしは、羽音はげしくすこし舞いたったかと思うと、

十五30(8) その目、そのくちばし、その羽音、まっ

たく大きなあくまで。

はおり ↓じんばおり

はか「墓」(名) 2 はか ↓おはか・にいじまゆずるのはか

八12(9) 「ピオのはか」と書いた、小さなせきひを立ててやりました。

十二10(5) この人形は、はにわといって古代人のはからほりだされたものです。

ばか「馬鹿」(名) 2 ばか

二41(8) たろう「ばか。」

二41(9) 山びこ「ばか。」

ばか「馬鹿」(形状) 4 ばか

二42(2) だって、だれかがばかにするんだもの。

六13(5) なんだと、ひとをばかにしている。

九68(4) この中で、いちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなつてないのがえらいとね。

九69(3) この中で、いちばんばかで、〈略〉、頭のつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。

はかいし「墓石」(名) 1 はか石

十五72(2) はか石に水をそそぎながら、「〈略〉。」とおばさんはふたたび呼びかけた。

はがき「葉書」(名) 10 はがき ↓えはがき・ふるはがき

三91(8) うちの人の かいたてがみや はがきを、ここに いれます。

九47(2) おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、いちろうのうちにきました。

九47(9) はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうを、とんだりはねたりしました。

九57(4) それなら、はがきをみたらう。

九59(2) あのはがきは、わしが書いたのだよ。

九70(3) これからも、はがきがいったら、どうか

きてくだいせんか。

九70(8) そうして、これからは、はがきに、かねたいちろうのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。

九71(4) それから、はがきのもんくですが、

九75(3) 「やまねこ拜」というはがきは、もうきませんでした。

十三53(3) 絵は、はがきの上の方に、まるく原色ですってあります。

はかけ「葉陰」(名) 1 はかけ

三50(2) かぼちゃの花がさきました、はかけにふたつ さきました。

はがす「剃」(五) 1 はがす 《―シ》

五92(1) そこで、ゆかいたをはがして、たたみのまん中にあなをあけてやったら、それ、このとおり、いせいいくのびるわ、のびるわ。

はかせ「博士」(名) 1 はかせ

十二42(4) そののち、ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。

はかせ「羽風」(名) 1 羽風

十五31(9) 羽風で空気がゆれ動き、ちよつとでもゆだんをすれば、それにふきとばされ、

はかどる「抄」(五) 1 はかどる 《―ツ》

十二58(8) みるみるうちに工事ははかどつて、九十

九の石だんができた。

はかない「儂」(形) 1 はかない 《―イ》

十一81(2) ちょうど、少年がそういうはかない希望をもつて、いっしんに看護していたときでした。

はがゆい「齒痒」(形) 1 はがゆい 《―イ》

七15(7) 「はがゆい。」「〈略〉。」私たちのからだの名まえに、このような、いろいろなつかいかたがあるのは、おもしろいではありませんか。

はからう りみはからう

ばかり (副助) 91 ばかり

二385 てる人 たろう おとうさん 山びこ (声ばかり)

三404 きょうならったばかりのしょうかを、大声でうたいながらあるきました。

三648 右手と左手を ほんたいに こいだら、ぐるぐるまわりをするばかりだ。

三1164 ふしのくすりと手紙は、かえってかなしみをますたねになるばかりでしたので、

四706 こころは、きくばかり。

四1191 生まれた村に かつたら、だれも知らない 人ばかり。

五469 春になったばかりだから、うまく鳴けないのだろう。

五487 まどをあけると、いまのぼったばかりの日の光が、さつといっぱいながれこんできた。

五638 生まれたときは、ねてばかりいたのが、六46 いろいろな音や、みたこともないような物が、ごたごたと耳にはいり、目にはいるばかりで、

六683 「雪のかたち」を五つばかり、きれいに写真しました。

六792 息ばかりではありませんよ。

六1112 ナニヌネノという一きょうの中にはいつている音ばかりではないか。

七73 ならったばかりの唱歌を、大きな声で歌っていく子ども、

七335 兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちようちよを、しくびんからとりだす。

七651 いつのまにか、葉ばかりのさくらになって、毎日ほれ。

七835 道のかたがわの草ばかりたべてあったか

らです。

七844 きいてみれば、いちいち、もつともなこ

とばかり。

七888 うさは、新しい草をいれてやると、そればかりたべて、

七962 7ひきの生まれたばかりの子うさは、わらの中の毛の中で、元気に動いています。

八67 だんだん覚えて、指さきへもかたへもとまるようになったばかりか、頭の上にも乗り、

八88 ききかたのちがいだらうと思う人もありましようが、そればかりでなく、

八115 女の子ばかりでなく、茶のまにいたうちじゅうのものがびっくりして、

八1211 かわいものをなくしたばかりでなく、私は、ピアノの信頼をうらぎったのが、かなしくてなりませんでした。

八161 あおぎりの根ばかりではなく、あたりの木の根ものびています。

八347 太陽から発した光が、地球にとどくまでには、やく八分二十秒ばかりかかることになりました。

八481 あとはぐすりねるばかりだ。

八703 みにくいあひるの子は、あひるのなかまからわる口をいわれるばかりでなく、にわとりからもぶたれたり、つつかれたりした。

八709 すがたがみつともないばかりに、みんなからしかりとばされるので、

八712 それからのちは、わるくなるばかりであった。

八711 「これも自分がみにくいばかりに——」

と、あひるの子は思った。

八793 そこで、あひるの子は、三週間ばかりためしにおいてもらった。

八794 そればかりでなく、ねこやにわとりとは

まったくちがった考えをもっていた。

八806 それで、あひるの子は、すみっこにすわってばかりいた。

八947 ういたもみがあったので、手ですくってみ

ますと、かるいもみともみがあればかりでした。

八995 やく12平方mに150かぶばかり植えました。

九145 音というのは、情景をあらわすばかりでなく、心持まであらわすことができるものらしい。

九408 はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。

九492 まわりの山は、みんな、たつたいまできたばかりのように、きれいにありあがって、

九810 先生、こは貝ばかりですよ。

九136 いまのぼりかけたばかりの月が、しずかに光っていました。

九142 わたしの顔ばかりみて、おかしいこと。

九142 くもは、いままたばかりのゆめを、なんともなんとも思ひ返しました。

十85 二月半ばかり、いなかでくらすうちに、

十114 いずれも、八つばかりの子どもたちでした。

十329 はたばかりいじって、おかしなやつだ。

十477 家から十二三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるので、

十482 これは、足がおそいというためばかりでなく、

十711 太郎かじやのほうは、気が強いばかりでなく、わるちえがあったから、

十一66 いつもは、いちばんびりにいるばかりで、べつに用もないようだが、



十一1011 船ばかりではなく、あの町でも、あの工場でも、〈略〉、同じことだと思う。

十一2311 母親も、子どもをよそへやってから、夜になると、ため息ばかりついてねむれません。

十一302 そればかりではありません。

十一399 冬の用意もしだいに進み、あとはみすりするばかり。

十一733 半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。

十一7812 看護婦が持ってきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、ほとんどたべませんでした。

十一7911 医者ほ、まったくだめだといわんばかりに頭をふりました。

十一866 やはり外国から帰ったばかりで、ちょうど〈略〉同じ日に、入院したんです。

十一886 病人はますますわるくなるばかりでした。

十二76 その意味がわかりません。少女とやまぶきの花とをみくらべるばかりでした。

十二1010 ポケットに手をいれましたが、とりだしてみせたものは、ガラスのかげらばかりでした。

十二239 近所の荒れ地を三ノアールばかりかいこんして、

十二326 私は、近づいてくる足音を感じましたので、それが母だとばかり思いこんで、

十二345 「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。

十二3512 ただ、腹だちの原因がとりのぞかれたという満足を覚えたばかりでした。

十二4611 これに光をあてて影絵にしてみせるのだが、人間ばかりでなく、動物などもでくる。

十二554 なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。

十二562 おじいさんやおばあさんから聞いた話を〈略〉書きのこしておくことは、ただおもしろみがあるばかりでなく、とういことである。

十二778 すこしばかり手ならしをしてから、休けい場にもどつてくると、

十二8810 もし、そのわけにかなわないことをすれば、たいへんおかしいことになるばかりでなく、そのことがわかったとはいえないことになる。

十二102 夢殿の観音〈略〉、いまから千三百年ばかりまえに作られたものであります。

十三159 ガリレオも、十三年ばかりは、だまつて研究を続けていましたが、

十三203 しかし、切りとるばかりで手入れをおこたつたために、土地は、年を追ってやせおとろえ、

十三2412 そればかりでなく、しげった林は、海岸からふき送る砂ぼこりをふせぎ、

十三381 いま学校から帰ったばかり……

十三4111 帰ったばかりだから、お客さん……

十四224 先生、私は、これはみんな、日本語だとばかり思っていました。

十四301 そればかりとも思われません。

十四5511 私は、こんなに長いばかりで、〈略〉、特別なはたらきは、なに一つございせん。

十四648 雲が消えてしまったあとには、いまいった、ちりのようなもののばかりがのこつていて、

十四691 もっとも、らい雨のどきかたは、いまいったようなばあいばかりでなく、

十四958 そればかりではない。

十五151 ほどろきてわが身も光るばかりなり大きなぼらの花照りかえる

十五197 これは、富士山よりはすこし高く、四千七百七十メートルばかりの高さがありますが、

十五2310 人々はただ、「あれあれ。」とさげすばかりです。

十五4111 ローマ字をつかうと、字数が少なくてすむばかりでなく、発音のこまかなところまで書き表わすことができ、標準語の教育に役だつ。

十五463 かれには、みなめずらしいものばかりであつた。

十五476 有田に焼物がはじめられたのは、いまから三百三十年ばかりまえのことである。

十五5811 新島襄という名を耳にした私は、とびあがらんばかりにおどろいた。

十五805 それ以前は、おたがい他の國々のことはわからず、世をすごしてきたばかりでなく、

十五8312 あの人たちは下等でもあり、たいていはまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、

はかる「計」(五) 11 はかる 計る 《一ツ—リ—ル》 ↓おしはかる

七865 私たちで、めかたを計りました。

七928 うさぎの毛の長さを計てみたら、白は2cm、黒も2cm、茶は1・5cmでした。

七988 子うさぎと母うさぎのめかたを計てみました。

七992 子うさぎの毛の長さを計りました。

七992 耳の長さも計りました。

八3310 ふだん、私たちは、メートルという単位を用いてきよりを計りますが、

八341 そこで、もっと大きな単位をもとにして計ります。

八348 光のとどく時間ではかると、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。

九729 きよしやは、さっきのどんぐりをますすにいられて、はかつてさげびました。

十二256 わたしは時間をはかつては〈略〉ものか  
げへつれていって、用をたさせるようにしました。

十四654 湯の温度を計る寒暖計があるなら、  
はがれる [剃] (下) 1 はがれる 《一レ》

六1206 庭 でも、のりがかわかないうちにあまりい  
じると、すぐはがれますよ。

はき [掃] ひとはき

はき [履] ひうわばき

はぎ [秋] (名) 2 はぎ ひのはぎ

十一371 園 はぎの花ふく朝風も、音さえすずしく  
なってきた。

十二106 土ひょうは、はぎやすすぎがさきみだれ  
た秋の野原。

はぎしり [齒軋] (名) 1 齒ぎしり

十一528 電車は、齒ぎしりでもするように車の音  
をたてて、あらしの中をつき進んでいく。

はきだす [吐出] (五) 2 はきだす 《一シ》

十三911 だいいち、母貝は、その核をそとにはきだ  
して、受けつけなかった。

十四1 はきだしもせず、死にもしないものでも、  
あとで開いてみると、もとのままになっていた。

はきだす [掃出] (五) 2 はきだす 《一シ・ス》

三717 園 「わたしが はきだして あげよう。」  
バーバラがいいました。

三722 けれども、はきだすこともできません。

はぎとる [剝取] (五) 1 はぎとる 《一ツ》

十二124 そうして、ページをはぎとって、たべて  
しまったということです。

はきはじめる [掃始] (下) 1 はきはじめる

《一メ》

四902 おかたてから はきはじめて、 かいどうへ  
ぬけて、おとなりまではいっていく。

はきもの [履物] (名) 2 はきもの はき物

三332 園 はきものがきちんとそろって、わたく  
したちの かえるのをまっています。

六585 一年生の子が、学校にくる道で、はき物に  
雪がついてころびました。

はきよせる [掃寄] (下) 2 はきよせる 《一  
セ》

五855 りょうかんさんはこういいながら、ほうき  
を持って、木の葉をはきよせました。

十二3510 先生がかけらをいろいろのかたすみにはき  
よせておいでになっているようすを感じましたが、

ハギンス (人名) 3 ハギンス

十五441 園 私はハギンスというのですが、じつ  
は、私のプリンクリーじいさんがね――

十五458 ハギンスの祖父にあたるプリンクリーが、  
十五517 主人は、新しい茶をハギンスにすすめな  
がら、「略」と、自分のことをうちあげた。

はく [吐] (五) 4 はく 《一イ・キ》

五324 まっ黒なけむりをもうもうとはいって、どん  
どん走っています。

八585 すると、おもちゃのように小さな汽車が、  
けむりをはいて走ってくる。

十5011 「フツ」と息をはきました。

十一444 大きな汽船がけむりをはいて、長いかけ  
をひいて通っていくのがみえるし、

はく [掃] (五) 6 はく 《一イ・キーク》

三719 園 「では、はいてごらん。」おかあさんが  
おっしゃいました。

三722 そこで、バーバラは、だいどころからほ  
うきをもってきてはきました。

四904 どんなにつもっていても、おかたてから  
はきはじめて、かいどうへぬけて、おとなりま

ではっていく。

四909 学校へ かよう子どもたちの ことを思っ  
て、おもてのとおりをさっさと はく。

四913 しんぶんはいたつする人の ことを思っ  
て、ゆうびんなげいれ口の まわりを さっさと  
はく。

四914 ひとをはき はいて、うちに あがって おい  
でになると、ひたいからゆげが たつ。

はく [履] (五) 8 はく 《一イ》

四333 手 はなおが できあがると、男の子は、そ  
れをはいて、元氣よくかけていってしまいま  
した。

五715 おばあさんは、〈略〉、金のうでわをはめ、  
赤いくつをはいていました。

九619 よくみると、これはみんな赤いズボンをは  
いたどんぐりで、

十一226 園 おじさん、これをはいてください。

十一2210 園 どうかそのかわりにはいてください。

十一231 おとなの人たちはおどろいて、すぐには  
受けてくれませんでした、おしまいに、喜ん  
ではいてくれました。

十二113 園 くつをはいている子どもはひとりもい  
ません。

十二1053 大きなげたをはいた女の人が、おとをも  
ふたりつれています。

ばくおん [爆音] (名) 1 ばくおん

六1068 空からブルン、ブルンというばくおんがき  
こえてきた。

はくがい [迫害] (名) 1 はく害

十三165 では、ガリレオは、はく害のため、考え  
をかえてしまったのかという、

はぐくみそだてる [育苗] (下) 1 はぐくみ育

てる 《一テ》

十五603 同志社をわが子のように、だいに胸に

だいてはぐくみ育てていた新島のおじさんが、

はくし「博士」(名) 12 博士はアインシュタイン

はくし・クラークはくし・ジョルダンはくし・ダブ

リュージェーホランドはくし・デビッドスタージョ

ルダンはくし・ホランドはくし・ろうはくし

十四346 博士の計算では、うちゅうのさしわたし

は、およそ二十億光年ということです。

十五544 博士は、しずかに歩みよる私が手にして

いるしうかい状に目をそそいで、

十五5812 なお語り続けようとする博士をさえぎっ

て、「略」と、ありし昔を語ろうとした。

十五593 すると博士は、「略」と、一言のもと

にしりぞけようとした。

十五596 その関係を物語る私の顔を、あなのあく

ほど見つめていた博士は、つと立ちあがって、

十五732 やがてすがたをあらわした博士の手には、

《略》、なつかしい数々の写真があった。

十五734 思い出にうたれている私の目の前で、博

士は、「略」といって、日記をくりひろげ、

十五738 眞夏であったので、博士の家族たちは暑

さをどこかにさけて、家の中はがらんとしていた。

十五7310 廣い食堂にみちびかれ、博士とたったふ

たり、しずかに食事をしたが、

十五7511 博士は、そのことばの意味をときかねて

いた私のようなを見て、大きな声でわらわれ、

十五765 停車場まで送ってくださった博士のこう

意をふかく謝して、別れの手をさしのべると、

十五766 博士は満面にこやかなわらいをたたえ

ながら、「略」と、意外なあいさつをされた。

はくしゅ「拍手」(名) 6 はくしゅ はく手

七414 ふいに、はくしゅがおこった。

七4310 はくしゅが四方からおこった。

七462 これをきいて、みんなは、またはくしゅを

した。

七546 はくしゅがおこった。

十二835 スタンドの人たちは、われるようなはく

手をふたりに送りました。

十二8610 両選手のために、見物人たちは、しばら

く、あらしのようなはく手をおしきませんでした。

はくせい「剥製」(名) 1 はくせい

三341(画) そこに、はくせいの りすが、二ひき

のつていました。

はくせん「白線」(名) 1 白線

十五736 つくえに白線をひいて「國境」をつくつ

たあたりを、声高らかに読みあげられた。

ばくちくはなび「爆竹火花」(名) 1 ばくちく火花

七633 ばくちく火花が、パンパン、もうくらく

なっている。

はくちよう「白鳥」(名) 17 はくちよう

八283 川の水は銀色に光り、はくちようがしずか

にういていました。

八842 それははくちようであった。

八843 はくちようはみごとな羽を廣げ、この寒い

國からあたたかい國、廣いみずうみへと、とんで

いった。

八847 あひるの子は、水の上を車のようにくるく

るまわり、その首をはくちようの方へさしのべ、

八849 あひるの子は、あの美しい、しあわせなは

くちようをわすれることはできなかった。

八889 ところが、木のしげみから、二三ぼの美し

いはくちようがあらわれてきた。

八8810 はくちようは、つばさをサラサラと鳴らし、

かるく水の上をおよいでいた。

八899 「略」。そういって、水の中にとびこみ、

はくちようのほうへおよいでいった。

八8911 はくちようはあひるの子をみた。

八9011 みつともないあひるの子ではなかった。は

くちようであった。

八911 生まれがはくちようのたまごであってみれ

ば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。

八912 はくちようは、その受けてきたまずしさと

ふしあわせとをかえって喜んだ。

八929 年をとったはくちようが、新しいはくちよ

うのまえにきて頭をさげた。

八9210 年をとったはくちようが、新しいはくちよ

うのまえにきて頭をさげた。

八9211 新しいはくちようは、すっかりはにかんで

しまった。

八936 にわとこの木でさえ、新しいはくちようの

まえに枝をたれた。

八938 わかいはくちようは、そのほそ長い首をあ

げて、心のそこから喜ばしそうにさげんだ。

はくちようたち「白鳥達」(名) 2 はくちようたち

八8410 そうして、はくちようたちがみえなくなる

と、すぐ水のどんぞこまでもぐっていった。

八916 大きなはくちようたちは、そばへおよいで

きて、くちばしでかるくなでてくれた。

バクテリア (名) 3 バクテリア

十四3412 したがって、その地球の上に住んでいる

人間などは、バクテリアよりも、もっともっと小

さなものに感じられるかもしれません。

十四352 大うちゅうから見たら、《略》人間は、

バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。

十四354 そのバクテリアにもおとる小さな人間が、

引力の法則を発見したり、

はくばい「白梅」(名) 1 白梅

十一 307 紅梅・白梅みなりはてて、ひがんす  
ぎれば風あたたかく、

はくぶつかん「博物館」(名) 2 博物館 ↓カーネ  
ギーはくぶつかん・メトロポリタンはくぶつかん

十五 535 目ざすりっぱな博物館に自動車を取りつ  
け、《略》おくまった館長室の前に立った私は、  
十五 541 私がこの博物館をたずねたおもな用事は、  
《略》自分の論文を出版してもらうことで、

はくらんかい「博覧会」(名) 1 はくらん会  
十 351 たまたま、そのころ、東京にはくらん会  
が開かれた。

はぐるま「菌車」(名) 1 は車  
六 51 そばには小さなしんぼうや、は車や、ぜん  
まいなどがならんでいる。

はぐれる「逸」(下) 1 はぐれる 《一レ》  
六 171 そのうちに、しかさんは、いつのまにかは  
ぐれてしまいました。

はげいとう「葉鶏頭」(名) 1 はげいとう  
十一 3710 あぜに火とさくまんじゅしやげ 庭に  
もえたつはげいとう。

はげしい「激」(形) 16 はげしい 《一イーク》  
三 881 はげしく、まわる。

六 314 はげしい風。  
六 327 はげしい風の音。  
六 366 はげしい風の音。

八 773 あらしはますますはげしくなってきた。  
九 1106 はげしい制動をかけられると、もうもうと  
雪けむりが立つ。

十 182 はげしいにわか雨。  
十 417 町のかげ口は、いっそうはげしくなり、

かれを氣ちがいとよび、やましとさえののしるよ  
うになった。

十一 517 しかし、風がはげしいので、すぐかさを  
つぼめてしまった。

十一 684 大きなへやはうす暗く、あたりにははげ  
しいくすりのにおいがただよっていました。

十二 817 火のようなはげしい試合が続きまし  
た。

十二 864 試合はふたたびはげしいものになってい  
きました。  
十三 3012 「ジャン、ジャン、ジャン」と、はげし  
くたたいておいて、てのひらで、きゆうにどらを  
おさえるので、

十四 761 これがあまりはげしくなると、きけんに  
なるのです。

十五 257 上からぎゅうぎゅうとおしつけ、両足で  
いっそうはげしく鳥の腹をしめつけました。

十五 305 わしは、羽音はげしくすこし舞いたった  
かと思うと、  
バケツ (名) 8 バケツ

四 168 おかあさんのバケツがおもそうだ。  
四 171 バケツの中に月がうつっている。

七 84 バケツの音もする。  
十二 876 庭で植え木の手入れをしている父にこう  
いわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱい  
いれて持っていくだろう。

十四 184 バケツは、もとは英語だってね。  
十四 191 では、バケツやカーテンなどは、日本  
語で、なんといっていたんでしょ。

十四 197 では、バケツは。  
十四 198 バケツはね、手おけさ。  
はげましあ・う「励合」(五) 2 はげましあう

《一ツ》

十 424 幸吉とうめは、たがいにはげましあった。

十一 235 どんなに病氣がちでも、父親の生きている  
あいだは、みんなはげましあって、どうにかこ  
うにか切りぬけてきました。

はげます「励」(五) 10 はげます 《一サ・一シ》

四 508 ほかのものは、あとになり、さきにな  
りして、はげましはげまし、さげびました。

四 508 はげましはげまし、さげびました。  
七 535 みんな元氣でやるんだ。」と、はげまして  
くださった。

九 1065 その声にはげまされて、ぼくたちは、いっ  
しょうけんめいに登っていった。

九 122 しかし茶人は、いろいろな困難をしのいで、  
みんなをはげましては上流へたどっていった。

十 339 このあいだに立って、佐吉をはげましたり、  
なぐさめたりしたのは、母であった。

十 411 「《略》。」こういって、失望にせず幸吉  
を、なんどもはげました。

十一 785 あたたかい愛情のこもったことばで、  
しっかりするようにと病人をはげました。

十一 884 やさしく話しかけたり、しっかりするよ  
うにとはげましたりしました。  
十二 787 私は、いままで試合のまえにこんなふう  
にはげまされたことはありませんでした。

は・げる「割」(下) 1 はげる 《一ゲ》  
八 1094 どんどんすっていたら、こんどはすぐには  
げましたが、くだけた米もでてきました。  
はこ「箱」(名) 6 はこ ↓げたばこ・こぼこ・す  
ずりばこ・たまてばこ・ひとはこ・ボールばこ・ほ  
んばこ  
三 356 こうさくしつでは、六年生が、はこのよ

うなものをこしらえていました。

三三〇 白いうさが、はこの中でねそべっています。

五六一 まもなく、私たちは、ゆうびんきよくの大きなほの中にはいました。

六四二 くらいはこの中にしまいこまれていた、小さな鉄のねじが、

九七六 先生が、リヤカーに、はこやかごなどをのせておいでになりました。

十三二八 せんめん器や、道具を入れた赤いはこを、てんびんぼうでかついでやって来る。

はこね「箱根」(地名) 1 箱根

十五四九 外國人がこれに目をとめて買うことがあるというのを聞いて、作品を東京や箱根へ賣りだすことにしたのである。

はこび ↓なえはこび

はこびきれる「運切」(下一) 1 運びきれる「一レ」

九二二 それでも運びきれなくて、九月十九日の晩には、ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたたかくした貨車を一つつけて送ったほどでした。

はこびだす「運出」(五) 1 はこびだす「一シ」

五三九 とれた石炭は、トロツコにつんで、そとへはこびだします。

はこぶ「運」(五) 22 はこぶ 運ぶ「一バ・一ビ・一ブ・一ン」

三九九 どんなところでも、紙は、字やえをはこんでくれます。

四五六 みんながはこんでくるたべものも、おいしくたべようになりました。

四四一 魚たちはごちそうをはこんできます。

五一九 私たちは、汽車につまれて、どんどん、南

へはこばれました。

六三三 あつい日中の道を、ものを運びながら歩いてくると、のどがかわきました。

六二八 大きな荷物を、力をあわせて運んできます。七一〇 渡し終ると、またひき返して、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。

九二四 そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではまにあわず、さらに二台の自動車を加えました。

九二七 自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわりきっているつばめたちを運んできました。

九二五 たくさんのつばめがはじめて運ばれてきたのは、九月十七日でした。

九二六 なるべく早く南のあたいたいところへ運ぶために、飛行機をつかうことにしました。

九二七 航空会社では、お金をとらずにつばめを運ぶことを申しでました。

十〇六 風がどつきを運んできたいへんだから、

十一四九 長いいかだを組んで、材木を遠くの山から運んでくるのもみえる。

十一二八 すこしも休まず働くので、かえって、おとなよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十一三四 かなえ運ぶ子、うし追うおきな、家内そろって田植をする。

十二九九 もちろん、水をくんだり運んだりするときにもつかったことでしょう。

十三三三 なんといつても、いちばん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であらう。

十三三三 水に不便なベキンでは、一けん一けん、水を運んで行かなければならない。

十四五六 葉さんが、(略)、養分におこしらえになったものでも、私が運んであげなかったら、

十四五八 いまのお話の養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。

十五一九 深い深い谷の上を、登山電車がわれわれを運んでいってくれます。

はこべ「繁縷」(名) 1 はこべ

七八五 はこべとおおばこをやったら、にんじんをやったときのように、喜んでたべました。

はころも「課名」 2 はころも

四三七 十三 はころも……百二十六

四二六 十三 はころも

はころも「羽衣」(名) 8 はころも

三二六 天人がはころもをきせようとすると、かぐやひめは、「略」といって、

三二五 天人は、いそいでかぐやひめにはころもをきせました。

四三〇 それは、天人のはころもと申しまして、あなたがたには、ご用のないものでござい

四三二 天人のはころもなら、なおさらお返しはできません。

四三九 お氣のどくですから、はころもをお返ししたしましょう。

四四六 でも、そのはころもがないと、まうことができません。

四四七 はころもをお返ししたら、あなたは、まわずにかえっておしまになるでしょう。

四四八 ああ、これははずかしいことを申しました。りようしははころもを返します。

はさき「葉先」(名) 1 葉さき

十八五 竹の葉さきからしたるしずく。

はさみあげる「挟上」(下一) 1 はさみあげる「一ゲ」

六11 時計屋さんは、さっそくピンセットでねじをはさみあげて、〈略〉ふたガラスの中へ入れた。

はさ・む 〔挟〕(五) 8 はさむ 《マー・ン》  
六43 小さな鉄のねじが、ふいにピンセットにはさまれて、明かるいところへだされた。

六114 やがて、ピンセットでねじをはさんで、き

かいのあなにさしこみ、  
八108 ぼうのあいだにねをはさんでこいたらよくとれました。

九147 くもは、つばめの口ばしにはさまれたまま、空をとんでいきました。

十12 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。

十一84 少年は二こと三ことばをはさんで、家族のようすを話そうとしましたが、

十二86 ネットをはさんで、両選手はかたいあく手をかわしました。

十四79 うらのほうをかるく四つに割って、あとは、十文字の小さな木ぎれをはさんで、チョン

チョンとたたいて、みごとに割っていました。

ばざりと 〔副〕 1 ばざりと  
九139 あみにつきあたってはいへんと、くもが思ったとたんに、ばざりところもりの羽にたたかれました。

ばざりばざり 〔副〕 1 バサリバサリ  
十二75 ふだんは〈略〉、大川の波の音がバサリ

バサリと、まぐらにひびくのでしたが、

はさん 〔葉〕(名) 7 葉さん  
十四53 こんどは、葉さん、いってごらんない。

十四54 さつき、葉さんは養分のことをおっしゃいましたが、

十四55 私は、こんなに長いばかりで、花さんや、葉さんや、根さんのような、特別なはたらきは、なに一つございません。

十四56 葉さんが、それを日の光にあてたり、空気を吸いになって、養分におこしらえになったものでも、

十四57 花さんでも、葉さんでも、日のあたる

ところや、高いところがおすきなようですが、

十四58 さつき、葉さんや根さんは、養分のことをいっていらっしやいましたが、

十四59 それを養分につくるのは、葉さんではなくて、私ですよ。

はし 〔端〕(名) 9 はし じかたはし・くちばし・ぶたいはし  
六106 その一方のはしに、めがねのたまをはめた。

六107 そうして、さっきのつつの中へ、ちょうどするするといくらの大きさに作って、その

はしに、虫めがねをとりつけた。

八76 あとずさりして、うしろに氣づかず、テブルのはしからころげ落ちたりしました。

九40 はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。

十一68 その大きなへやのはしまでいくと、看護人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまって、

十一73 みると、医者が、ひとりの助手をつれて、へやの向こうのはしにいました。

十二50 このときコロンブスは、コッソリとたまごのはしをテーブルにうちつけて、

十四34 光が一方のはしから、向こうのはしまでとどくの、二十億年も、かかるほどの廣さなのです。

十四38 向こうのはしまでとどくの、

はし 〔箸〕(名) 1 はし じひばし  
四61 みんなは はしをとりました。

はし 〔橋〕(名) 14 はし 橋 じいばんばし・そりばし  
二269 せまい はしがありました。

二272 二ひきの やぎが、その はしの まん中であいました。

二282 やぎと やぎと、せまい はしの 上で、つのを おしあっていました。

三90 この はしは みんなの ものです。

三91 この はしが なかったら どう しましょう。

七19 子どもたちは、小さな橋を渡る。

十10 ポンナフという石の橋があつて、イエヌという川が、その下を流れていました。

十107 橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんもよくいってこしかけました。

十108 その橋のたもにあるプラタナスのなみ木の下で、

十102 三人の少女は、〈略〉、橋のたもとの石がきのところへきては、遊んでいました。

十一60 あの橋はあぶないから、けっして渡ってはいけません。

十一61 すると、橋はまん中からおれて、三人は、川の中へドボンと落ちこんだ。

十一62 まえからあぶないといっておいた、あの橋を渡ったのではないかね。

十三19 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたたり、道路をつくったり、みぞをほったりするときに、よく、國土の地質や地味を研究しましたが、

はし 〔槓〕(名) 1 はし  
十一39 かえでにうるし、はしの葉も、赤く黄色く色づいて、

はじきだす「弾出」(五) 1 はじきだす《ーシ》

六二六 5 まえ足でほつては、うしろ足で土をはじきだしました。

はじく「弾」(五) 3 はじく《ーイーキ》

五二八 4 しんきちくんのおとうさんは、店でそろばんをはじいていました。

八〇八 9 いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこすつてもみがらをはじきました。

一五〇四 二 鼻を指ではじいたり、ひら手でたたいたり、《略》氣ちがいのようにはねまわります。

はじける「弾」(下) 2 はじける《ーケル》

七六二 わらい声をはじける。

一八四 いけのおもてにはじける雨あし。

はしこ「梯子」(名) 1 はしこ

一五八 二 算数の時間に、先生が、はしこでいちようの木にのぼつて、

はしごだん「梯子段」(名) 1 はしごだん

一一六 一 ふたりは、はしごだんをのぼつて、長いろうかのはずれまで歩いていきました。

はじまり「始」(名) 1 はじまり

一一八 子どものすきそうなおかしを、一ふくろやったのはじまりで、その少女たちは、おとうさんのそばへくるようになりました。

はじまる「始」(五) 14 はじまる《ーッーリーー》

一六二 六 よるになると、おどりがはじまりました。

五四二 六 こちらでは、田うえがはじまりました。

七六三 おけいこがはじまった。

七八三 そうじがはじまった。

七三八 しずかな音楽がはじまる。

七五〇 二 いよいよ、ドッジボール大会がはじまった。

七五一 五 ふえがまた「ピー」と鳴つて、しあいが

はじまった。

七五二 五 すぐまた、しあいがはじまった。

七五三 七 「ピー。」はじまった。

八七二 二 ものすごい鳥うちがはじまったのである。

一二七 六 スタンドには、はじまるまえからたいへんな見物人でした。

一二八 四 それからまもなく試合がはじまりました。

一二八 八 「プレー。」試合がはじまりました。

一三三 四 ホートンの廣場などに、かげ絵の舞台をこしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。

はじめ「初」(名) 43 はじめ じたちはじめ・もじ

のはじめ

一一九 はじめはむずかしいとおもいましたが、だんだんおもしろくなりました。

一六四 はじめにしりとりをしました。

二四 五 あんまりいろがにているので、ぼく、はじめはきがつきませんでした。

二九 五 一ばんはじめに、ぶうちゃんがかぞえました。

二三五 はじめのめくらは、ぞうのおなかをなでて、こういきました。

三三 五 かいだんははじめに十五だんあがつて、それからまた十五だんあがるようになっていきます。

三六 九 はじめに右か左かどちらかへやらなければ。

三六 九 はじめにもしもいって、それからたきへでようね。

五二 四 はじめは、電車の中は、まるでにらめっこをしているようだったのに、それからは、みんなにここして、

五八 五 いちばんはじめに、それをおかあさんがき

きつけました。

六五 二 かべ新聞 第一号 はじめのことば

六二 八 はじめに半紙をま四角に切りました。

七四 九 さあ、きょう、いちばんはじめにくるのは、だれかな。

七三 九 はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配そうに私の方をみていましたが、

七四 二 はじめに書いたのと、二回めに書いたのとを、くらべてごらんさい。

七四 八 はじめに、ひがし村の学校とやった。

七五 五 はじめに、ぼくの学校とひがし村の学校とが、しあいをすることになった。

七六 六 はじめ骨組みをこしらえておいて、それにねんどでだんだん肉づけをし、

八五 二 秋のはじめのある晩、

八七 八 虫は、はじめは、白い、よわよわいうじのようなかたちをしています。

八九 一〇 せみの子たちは、はじめにはあさいところ

にいて、ほそい木の根のしるをすつていますが、

九一 三 はじめに、川の水の音をたいてきかせてくれた。

九六 一〇 十一月のはじめになれば、もうほとんどすがたをみせなくなつてしまします。

九七 三 ぼくははじめ、山へたきぎをとりにいくのが、すきではありませんでした。

九八 八 母たちもぼくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけてやる方法を知らなかったの

で、

九一 〇 はじめは二列ですんだが、谷あいでは一列になったので、ずいぶん列が長かった。

九二 四 はじめのハキロほどは、村ざとがあつて川

べりに道もあつたが、いまはそれもなくつて、

一〇 四 佐吉が、はじめに目をつけたのは、《略》、

たて糸のあいだをぬっていく横糸であった。  
 十376 これが、日本における自動織機のはじめである。

十453 今日、眞珠の産地は、ペルシア湾、セイロン島をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、日本産のものは、ことに名高い。  
 十671 次郎かじやは、はじめは、そのへやの方へは、顔も向けないようにしていました。

十一622 始め、ぼくがことわると、よわ虫だといってわらうのです。

十二171 始め短い羽を動かしてピッピッと鳴いていたときには、ほんとうにおかしいようでしたけれど——

十二258 はじめはいやがっていた民ちゃんも、

十二371 別の手に、はじめのはゆつくりと、次には早く、「水」という字を書いてくださいました。

十二100 12 この式の土器は、はじめ、東京のやよい町から発見されたので、やよい式土器という名まえがつけられています。

十三448 電話のはじめの人は、三郎くんのおぼさん、それからおとうさん、

十四261 日本にはいつてきた西洋医学は、はじめオランダからはいり、

十四781 はじめにまん中になたをいれても、きつと、とちゅうから横の方へそれてしまつて、

十四7811 はじめ、うらのほうをかるく四つに割つて、あとは、十文字の小さな木ぎれをはさんで、

十五364 漢字は、いまいったように、はじめ、事物の形をうつしたのから発達したものであるが、  
 十五783 はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。

十五8210 チルチルとミチルと、《略》とは、はじめ

めはいつて来たとき、すこしはに cand、  
 はじめて「初」(副) 32 はじめて

三7310 「あ、そうだ、光だ。」はじめてみんながこうさげびました。

五3010 10 いえ、はじめてです。

五432 21 きのう、はじめてほたるをみかけました。

五597 かきねにあさがおの花が、三つはじめてさきました。

五626 あさごはんのとき、はたけではじめてとれたきゅうりをたべました。

六224 はじめて気がついて、あり「あ、だれかと思つたら、きりぎりすさんでしたか。」

六3310 生まれてはじめての大風だ。

六1144 はじめてあげにいったときに、みんなが、「《略》。」といつてわらいました。

六11610 「作れるさ。」と答えましたが、ほんとうは、たこを作るのははじめてです。

七321 10 おかあさんも、こんなところをみるのは、はじめてですよ。

七972 白の子うさぎは、親について、はじめて、巣からはいだしてきました。

八149 暑い夏がやってくると、たまごは、はじめてかえりました。

九197 ウィーン動物協会の、近くのランネルスドルフというところから、はじめて、電話でこのことを知らせてきました。

九215 たくさんのつばめがはじめて運ばれてきたのは、九月十七日でした。

九256 6 10 きょう、はじめてつばめをみたよ。

九344 4 10 せんだつて、はじめて畑のかいこんのおつたいをしました。

十二1912 12 はじめて実をつけた三年は、

十二292 立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二足ほど歩きました。

十二376 このときははじめて、「水」はいま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいものの名であることを知りました。

十二388 生まれてはじめて、くやむ心と悲しみとに胸をさされました。

十二394 私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日を待つことを知りました。

十二825 もし、この決勝戦に勝つことができれば、世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらうことになりました。

十二1033 これは、千二百年ほどまえに、はじめて作られた日本のお金です。

十二1131 この本によつて、日本の医学は、はじめてしっかりしたものとなりました。

十二1138 これは、汽車第一号で、明治五年九月十二日、はじめて日本で東京横濱間を走つたものがあります。

十二1158 こうして、みんなの歩調がそろつたときに、はじめて、日本が正しい、美しい國となることができました。

十四528 8 10 花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。

十五562 2 10 外人の中で、富士山や磐梯山のいただきをきわめたのは、《略》私のはじめてだらう。

十五5610 10 日本留学生第一号とでもいおうか、私のはじめて会つた日本人について話をしてあげよう。

十五576 6 10 教授の申し出でをさっそく承知して、

はじめて見る東洋の青年をひきとつたが、

十五1203 はじめてこの学校の門をくぐつたときの



ことが、はつきりうかんできた。

十五 122 石井先生の手品や、森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合奏など、はじめてのことなので、ほんとうにうれしく思いました。

はじめてのおかね〔題名〕1 はじめてのお金

十二 103 はじめてのお金

はじめのことは〔題名〕1 はじめのことは

十二 96 はじめのことは

はじめの〔始〕(下) 23 はじめる 《—メ—メル》あるきはじめる・いじりはじめる・おどりはじめる・おはじめる・かきはじめる・かけはじめる・かんじはじめる・きりはじめる・こしらえはじめる・さえずりはじめる・さがしはじめる・さきはじめる・さしはじめる・しはじめる・すいはじめる・すべりはじめる・たてはじめる・たべはじめる・つきはじめる・ではじめる・てりはじめる・なきはじめる・なりはじめる・ぬりはじめる・のびはじめる・はきはじめる・ひきはじめる・ひらきはじめる・ふきはじめる・ほりはじめる・まわりはじめる・みえはじめる・れはじめる

五 100 さんちゃんがべんきょうをはじめると、ひわは、《略》さんちゃんの本をよむ声をまねます。

五 107 かこのひわは、大よろこびで、「チェイン、チェイン。」をはじめました。

六 25 みんなにぎやかに音楽をはじめます。

六 118 まず、たて骨からはじめました。

六 129 新しいおにがきまって、またはじめようとしたとき、

六 135 さ、はじめよう。

六 142 二ひきのとらさんが、つかみあいをはじめました。

七 129 手ならいをはじめましょう。

八 45 より集まって、どうしたら王さまのご病氣をなおすことができるかと、相談をはじめました。

九 91 8 いっしょに歩いているうちに、きゆうにつかみあいをはじめたもの。

九 101 6 いったい、なんでけんかをはじめたんだろう。

九 101 10 じまん話をはじめると、自分がいちばんりっぱだと思ふんだね。

十 30 2 もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、

十一 73 7 その人たちは、しんさつをはじめて、一つ一つのベッドのそばに立ちどまりました。

十一 77 1 朝になると、また看病をはじめました。

十一 87 11 で、チチロはまた看護をはじめました。

十二 13 4 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、

十二 23 4 母をはじめ、うちの人は大喜びです。

十二 41 3 サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひとりのようになって、勉強をはじめたのです。

十二 106 10 たまりかねた二ひきのうさが、《略》手をふり足をふって、おうえんをはじめました。

十四 17 8 が、近いうちにまたはじめましょう。

十五 47 6 有田に焼物がはじめられたのは、いまから三百三十年ばかりまえのことである。

十五 48 9 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考え、自分でまず、焼くしごとからはじめた。

はじめもじじ「植紅葉」(名) 1 はじめもじじ

九 27 5 草原に一本あかしはじめもじじ

ばしや「馬車」(名) 17 ばしや 馬車 にばしや

三 90 6 ばしやもとります。

八 26 4 たまでかざった、きれいな四頭びきの馬車が走ってきます。

八 26 7 馬車は、《略》そり橋を音もなく渡って、

草花のさきみちている野原へおりてきました。

八 27 11 馬車はふたたび走りだして、草原をよこぎっていつてしまいました。

八 29 2 天帝は、《略》また馬車を走らせて、天の川の西の岸を通っていらつしやいました。

九 49 9 やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方へとんでいきましたよ。

九 51 4 やまねこなら、さつき馬車で、西の方へとんでいきましたよ。

九 52 3 やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方へとんでいきました。

九 53 6 やまねこなら、けさまだくらくらうちに、馬車で、南の方へとんでいきましたよ。

九 73 4 よし、早く馬車のしたくをしろ。

九 73 5 白い、大きなきこでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。

九 73 9 ふたりは馬車に乗り、

九 73 10 ふたりは馬車に乗り、ぎよしゃはどんぐりのますを馬車の中にいれました。

九 73 11 馬車は草地をはなれました。

九 74 5 馬車がすすむにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなって、

九 74 7 まもなく馬車がとまったときは、茶色のどんぐりにかわっていました。

九 74 10 やまねこの黄色のじんばおりも、ぎよしゃも、きのこの馬車も、一どにみえなくなつて、

はしやぎ おおはしやぎ

はしやぐ「燥」(五) 1 はしやぐ 《—イ》

五 59 いわの上からとびおりて、さかなとジャブジャブはしやいで、川は山からかけおる。

ばしよ「場所」(名) 9 場所 あそびばしよ

六693 この学校の子どものかずや、一ばん遠くから通っている子どもの名や家の場所も書きました。  
 七523 〔場所〕「場所こうたい。」しんぼんの先生のあいで、ぼくらは場所をこうたいした。  
 七524 ぼくらは場所をこうたいした。  
 八108 風のくる場所で、目の高さぐらゐのところからごみをふきとばさせます。  
 十6910 〔さあ、もとの場所において、あっちへいこう。〕  
 十一8710 少年がベッドのそばのもとの場所に帰ると、病人はほつとしたようにみえました。  
 十四944 女の子は、二つの家の間に、ちよつとした、身をかくす場所を見つけた。  
 十五244 このひつじかいは、がけの中ほどのあき地に、草のしげっている場所を見つけて、  
 十五268 どこでもいいから、安全な場所へおりなければならぬと、少年は思いました。  
 ばしょう 〔芭蕉〕〔人名〕17 芭蕉 芭蕉  
 十二702 深川の芭蕉の家の近くに、曾良という人が住んでいました。  
 十二703 曾良は、信州の人で、〔略〕、芭蕉のことをきいてから、その弟子になりました。  
 十二706 芭蕉はたったひとりで住んでいて、なにかにつけて不自由であろうから、  
 十二708 住みこんであげてもいいけれども、芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、  
 十二711 芭蕉のおきないうちに、いどから水をくみあげたり、ごはんをたいたりしました。  
 十二714 このようにして芭蕉につかえながら、はい句の話をきくのです。  
 十二718 芭蕉はからだがよわいので、寒さは身こたえましたが、雪をみるのが楽しみでした。

十二719 芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。  
 十二724 芭蕉は、子どもが大すきでした。  
 十二729 どうも身なりはきれいではないのですが、芭蕉は、いつも遊び友だちにしています。  
 十二735 白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、子どもたちや、芭蕉の足もとに落ちて、  
 十二7310 芭蕉は、〔略〕、子どもたちのかけていく方に、自分もいっしょにかけだしたいと思いました。  
 十二743 芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれがたから降ってきました。  
 十二754 そのしんとしたしずかさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の句を考えました。  
 十二758 芭蕉はすぐ戸をあけました。  
 十二766 芭蕉は、えんがわにいつてなにか持ちだしてきました。  
 十二769 曾良は、芭蕉の子どもらしい手さびがすっかりうれしくなりました、  
 はしら 〔柱〕〔名〕4 はしら 柱 ↓しもばしらはしら  
 一415 はしらの かげで、ぴかり、ぴかり、ひかった。  
 四231 〔やねも、かべも、はしらも かきました。〕  
 十四678 たつまきのようなものになって、地面からなんメートルもある、高い柱の形になり、  
 十五822 園の前の方に、高い大理石のまゐり柱でできた大廣間のようなものがあらわれます。  
 はしらどけい 〔柱時計〕〔名〕2 はしら時計 柱時計  
 六511 カッターカッターとおうようなのははしら時計である。  
 七585 おかあさん、いま、柱時計がとまりました。

はしりあるく 〔走歩〕〔四〕1 走りあるく 〔一カ〕  
 十二741 〔いざ子ども走りあるかたまあらはしりだす 〔走出〕〔五〕3 走りだす 〔一シース〕  
 六1357 五ひきのうさぎさんと、しかさんとは、風のように走りだしました。  
 八2711 馬車はふたたび走りだして、草原をよこぎっていつてしまいました。  
 十263 工員も走りだす。  
 はしり・でる 〔走出〕〔下二〕1 走り出る 〔一デ〕  
 十五729 ピッツバーグの町を走り出た自動車は、はしりほ 〔走穂〕〔名〕1 はしりほ  
 十一326 麦のはしりほかがやく上を、海こえてきたつばくろが、すうい、すういとびまわる。  
 はしりよる 〔走寄〕〔五〕2 走りよる 〔一ツ〕  
 十二385 こわした人形のことを思いだして、いろりのかたすみに走りよってかけらをひろいあげ、  
 十三3911 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよって、ひきだしをあげる。  
 はしる 〔走〕〔五〕57 はしる 走る 〔一ツーラ・リール〕  
 一255 たねまきする人、いえをたてる人、さかなをとる人、きしやはしらせる人。  
 一305 たつ、あるく、はしる。  
 一382 いぬがはしってきます。  
 一383 しらい いぬがはしってきます。  
 一386 しらい いぬが、むこうからころげるようにはしってきます。  
 二504 さちこが、走ってでてきます。  
 二516 きゆうに、走ってたちさります。  
 二542 じろうが、走ってでてきます。

二54 6 いちろうが、走ってでてきます。

二71 3 いきおいよく走るきもち。

三27 8 ふねは、ななつの大なみをのりきって、

鳥のとぶように走るではありませんか。

三42 8 ぼくは、学校どうぐをわきにかかえて、

どんどん走ってかえりました。

三91 1 いぬも走っていきます。

五10 7 ㊦ きかんしの人が、いっしょうけんめいに

走らせているからさ。

五10 9 ㊦ どこで走らせているの。

五19 11 配たつをする人は、自てん車に乗って走り

ました。

五20 4 しげった竹やぶの小道をとおったり、すず

しい川のきしを走ったりしました。

五32 3 汽車が走っています。

五32 5 まっ黒なけむりをもうもうとはいって、どん

どん走っています。

五32 9 この汽車は、なにをたいて走っているの

でしょう。

五33 6 船は、なんの力で走るのでしょうか。

五36 2 この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場の

きかいを動かすのです。

五41 6 ㊦ 子うしは、小川の岸をとことこ走りまし

た。

五85 7 「略」とよびながら、走ってきました。

六51 9 ㊦ お月さまが早く走っているね。

六52 5 そうして、つぎの雲の方へどんどん走って

いきます。

六52 11 ㊦ 雲が走っているのよ。

六53 3 ㊦ よしおくんはお月さまが走っていると

いったね。

六53 4 ㊦ みちこさんは雲が走っているっていうの。

六54 2 ㊦ よしおとみちこが「月が走る」「雲が走

る」といいあっているのをききながら、

六54 2 ㊦ 「月が走る。」「雲が走る。」

六54 8 ふたりは木のそばへ走っていきました。

六54 11 すると、月は枝のあいだにじつとしていま

すが、雲はさっさと走っていきます。

六55 2 ㊦ やっぱり雲が走っているんだね。

六127 8 四ひきのうさぎさんたちは、とんとこ、と

んとことトンネルの中を走っていきました。

六135 10 のぼりざかを走るのは、うさぎさんのもつ

ともとくいとするところです。

六136 2 角をふりたてふりたて走りました。

六136 6 しかさんがおこって走ると、こんどはたお

れた木のみきにトンとけつまずいて、

七5 2 ㊦ かばんをカチャカチャ鳴らして、走って

くる男の子かな。

七7 7 ㊦ なんでも手をふりながら、先生にさよう

ならをして走って帰る子ども。

七41 7 汽車は、かなり早く走っているの、

七46 7 そこを自轉車に乗って走る中学生、

七57 1 つむじ風が、わたしのまえを走っていく。

八26 4 たまでかざった、きれいな四頭びきの馬車

が走ってきます。

八28 4 川岸にそって車を走らせていくと、

八29 3 天帝は、〈略〉、また馬車を走らせて、

八58 5 すると、おもちゃのように小さな汽車が、

けむりをはいて走ってくる。

八76 6 田や野原をこえて、どんどん走っていった。

八92 4 おかあさんのところへ走っていった、も

らってきたパンやおかしをなげてよこした。

九121 1 泉をあふれた水は、さらさらと走って、

〈略〉すこし大きな川に流れこんでいた。

十一6 1 ㊦ その体格で、思うぞんぶん、長いオー

ルをこいだら、オールがぎゅうぎゅうとしなつて、

船は、ものすごいスピードで走るだろう。

十一52 1 電車は、くるにはくるが、みな満員の札

をさげて、とまらずに走っていったらいい。

十二113 9 汽車第一号で、明治五年九月十二日、は

じめて日本で東京横濱間を走ったものであります。

十三28 3 そのへんを走ったり、地面にこしをおろ

して、あなをほったり、

十三36 12 子どもたちは、またそちらの方へ走って

行く。

十三49 3 みどりの森が、喜びの声でわらい、波だ

つ小川が、わらいながら走っていく。

十五60 2 りっぱな自動車に、ためらう私をおしこ

み、一路自たくへと車を走らせた。

はず「害」(名) 18 はず

二30 7 ㊦ みんなわたったはずなのに、どうし

たのだろう。

六72 10 死んでいたら、〈略〉、あんなに元氣のいい

顔つきもしていないはずだ――

六95 4 ㊦ いや、たしかにあるはずだ。

六108 8 そうして、はながつまっても発音できるよ

うな音は、はなから声がでない音のはずである。

十40 4 同じことをなんどもくり返してみたところ

で、かわりのあるはずはない。

十69 8 ㊦ それなら、もう、ふたりとも、どつきに

あたって死んでいるはずじゃないか。

十二5 9 人々は、〈略〉と思ひながらやってみま

したが、もとより立とうはずがありません。

十二89 9 食事のたびごとにいう「いただきます」

「ごちそうさま」にしても、そのときそのときの

心持があらわれるはずである。

十四107 罫 それには、つかいかたを書いた小さな書きつけがついているはずです。

十四378 そうすれば、〈略〉ということも、しぜんにわかってくるはずです。

十四627 氣をつけて見ていると、〈略〉、さまざまのうたがいがおこってくるはずです。

十四718 湯の中にかんではいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずです。

十五312 ねらいのはずれようはずはありません。

十五4810 白く焼けるはずのものが黒くなったり、黄色くなったりして、失敗に失敗を重ねていった。

十五594 罫 きみたちが知っているはずがない。

十五6911 手紙のたびごとに、どうしているかとたずねられたのもそのはずだ。

十五7411 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別など、あるべきはずはない。

十五918 罫 おもしろくないはずはないでしょう。

バス (名) 1 バス  
十四213 ミルク、コーヒー、ジャム、トマト、キャベツ、バス、トラック、オートバイ、

はずかしい 〔恥〕 (形) 3 はずかしい 《―イーク》

四1331 罫 ああ、これははずかしいことを申しました。

九1011 罫 なんだから、いま考えるとはずかしい気持ちさ。

十五8012 あなたがたの時代がきたときには、私たちの時代がはずかしく思われるようになることをいのります。

はずす 〔外〕 (五) 2 はずす 《―シ》

十五36 そのとき、いままでかたにかけていたすい

とうをはずして、手に持つといいます。

十一904 看護婦が十字かぞうをかべからはずしました。

はずみ 〔弾〕 (名) 3 はずみ  
十737 罫 私が負けて、ドサリとこのまにたおれたはずみに、あのたいせつなかけものを、あのとおりひきさいしてしまいました。

十二854 どうしたはずみか、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。

十五157 罫 大きななにごともなきばらの花ふとのはずみにくずれたりけり

はずむ 〔弾〕 (五) 2 はずむ 《―ム》

十一278 中には、正月だというので、そのうえに十二文はずむ者もありましたが、

十三296 「チャカチャン、チャカチャン」と、かるやかな、はずむような音をたてる。

パズル 〔クロスワーズパズル〕

はずれ 〔外〕 (名) 1 はずれ はずれはずれ・むらはずれ

十一671 ふたりは、はしごだんをのぼって、長いらうかのはずれまで歩いていきました。

はずれる 〔外〕 (下) 2 はずれる 《―レ》

六5510 月は、もうさっきの枝のあいだにはなくて、木をずつとはずれてしまっていました。

十五312 ねらいのはずれようはずはありません。

はた 〔煙〕 したはた  
はた 〔旗〕 (名) 1 はた  
九123 町の通りを、電線を、はたを、せんたく物をふいている風である。

はた 〔端〕 しいどばた・みちばた・ろばた  
はた 〔機〕 (名) 6 はた  
八285 林の中にごてんがあつて、中から、はたを

おる音がひびいてきます。

八287 すると、さがしていたはたおりひめが、いっしんにはたをおっていました。

八316 はたおりひめは、あまりうれいので、はたをおることをわすれてしまいました。

八324 はたおりひめは、毎日をはたをおりながらなきました。

十329 罫 はたばかりいじっていて、おかしなやつだ。

十二87 そのとき、母ははたを織っていました。

はた 〔肌〕 (名) 2 はた  
九429 罫 大きなうねのはたが地われしているのをほりおこすとき、胸がどきどきしました。

十三562 その着物やはたの色の美しいのにおどろかされました。

バター (名) 3 バター  
八868 そこで、あひるの子は、バターのいれてあるたるの中へとびおり、

十一478 うちではバターもつくったし、こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。

十一494 ぼくは、おとうさんと同じように、ちちうしをかって、自分でバターをつくります。

はたおり 〔題名〕 1 はた織り  
十二81 はた織り

はたおりひめ 〔機織姫〕 (人名) 5 はたおりひめ  
八278 それは、天帝のひとりむすめのはたおりひめのすがたを、もとめておいでになるのです。

八286 すると、さがしていたはたおりひめが、いっしんにはたをおっていました。

八315 とこが、はたおりひめは、あまりうれいので、はたをおることをわすれてしまいました。

八321 それをみた天帝は、たいへんおこりに

なつて、はたおりひめを天の川の東の岸のごてんにもどしてしまい、

八324 はたおりひめは、毎日したをおりながらなきました。

はたおりぼし 「機織星」(名) 2 はたおり星

八354 あの花なばたものがたりのはたおり星は、

二九・五光年ですから、

八355 今夜のはたおり星の光は、やく三十年ほどまえに発した光だというわけになります。

はだか 「裸」(名) 1 はだか

九445 「いつのまにか葉がすっかり落ちつくしてはだかになった木の上に、

はたがしら 「旗頭」(名) 1 旗がしら

十五73 「平和主義の旗がしらとしてその名を知られていた老博士は、

はたけ 「畑」(名) 31 はたけ畑 ↓おはなばたけ・くわばたけ・じゃがいもばたけ・だいこんばたけ・なのはなばたけ・はなばたけ・むぎばたけ

三56 「ひろいはたけの中で。  
四47 「はたけをこえ、のほらをすぎると、高い山のそばにきました。

五71 野原をゆっくりあるいていく、水車をくるくるまわし、《略》、はたけにも水をまいていく。

五62 「あさごはんのとき、はたけではじめてとれたきゅうりをたべました。

五78 「先生といっしょに、学校のはたけのむこうを流れている小川のところにきました。

六43 「山や、みずうみや、はたけの上をひとかたまりになつてとぶつばめのむれ。

七19 「先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。

七19 「白い花のはたけは、なんのはたけですか。

七22 「すずめは、びよんぴよんとんで、庭のはたけの中を歩く。

八318 けんぎゅうも、はたけにではたらかなくなりしました。

九32 「ぼくは、こちらへきてから、おとなといっしょに畑にでたり、

九34 「せんだつて、はじめて畑のかいこんのおてつだいをしました。

九35 「ぼくたちの畑がようやくかいこんされて、三日めにやつと、うねを十三本つくりました。

九42 「かきの色づくころ、畑のいもをほりおこしました。

九42 「苦労してかいこんした畑のいもをほりおこすのは、楽しく、うれしいことでした。

九77 「平らな畑やたんぼの向こうに、一だん高くなつたところがみえます。

九78 「きょうは、このかたの畑をすこしほらせてもらうことにします。

十22 「きれいにたがやされた畑。  
十27 「トマトが畑に植えてあれば、

十一16 「人の心の畑にさいた、いちばん美しい花、《略》、それはおあさまの愛です。

十一19 「そのうえ、さかわ川の大水で、田や畑をみんな流されたりしましたので、

十一28 「さかわ川がまたあふれて、のこっていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。

十一31 「もも赤く、畑にさいて、れんぎょうは、かきねを黄色にそめていく。

十一34 「きのうの畑は水田となつて、晩にはかえるが歌いだす。

十一48 「アカシヤの花が風にゆれ、畑では、いちごがでさかりだつた。

十二56 「雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をうったときのくわのあとで、

十二57 「昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、

十四75 「たとえば、森と畑とのさかいのようなところだと、

十四76 「畑のほうで、森よりも、日光のためによいあたためられるので、

十四78 「畑では空気がのぼり、森ではくだつています。

十四79 「それで、畑の上からとんできて、森の上へかかると、飛行機は、しげんと下の方へおしおろされるかたむきがあります。

はだし 「跣」(名) 1 はだし

十四91 「そこで、その女の子は、まったくはだしになつてしまった。

はたして 「果」(副) 2 はたして

十36 「ためしてみると、はたしてよく動いた。  
十44 「はたして、眞円眞珠がやどつていた。

はたす 「果」(五) 5 はたす 《サ・シ・ス》

十31 「ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、

十32 「自分のつとめをはたすだけの勇気を、もちたいと考えます。

十37 「日本の新しい出発にあつても、この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであらう。

十38 「自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことからである。

十32 「アルプス産の小もみを植えたので、かれのはふせがれましたが、その生長は、これによつてはたされなかつたのであります。

ばたつく (五) 1 ばたつく 《一カ》  
 八83 すると、とつぜん、あひるの子は、つばさをばたつかせることができた。

ばたばた (副) 4 バタバタ

五98 10 バタバタと音がしましたので、みんながとびおきてみると、

六73 ふいにバタバタと足音がして、小さな子どもがふたり、おくからかけだしてきた。

七61 5 まよったせみが、かきの木につきあたって、バタバタやって、にげていった。

九73 1 やまねこのじんばおりが、風にバタバタ鳴りました。

ばたばた (副) 1 バタバタ

九133 4 目をつぶってしずかにしていると、また、バタバタという羽音がきこえてきました。

ばたばたさ・せる (下二) 1 ばたばたさせる 《一セ》

十五64 11 そうして、足をばたばたさせながら、《略》と命令した。

ばたばたする (サ変) 1 ばたばたする 《一シ》  
 十五23 8 大きなやまわしのつめにつかまれて、女の子はばたばたしているではありませんか。

はたらき (名) 9 はたらき 働き じこばのはたらき・したはたらき

七13 10 私どもの手が、さまざまなのはたらきをするように、「手」ということばも、さまざまなのはたらきをしてくれます。

七13 11 「手」ということばも、さまざまなのはたらきをしてくれます。

十一21 12 書まの働きでつかれきつていながら、

十二37 5 めばえてこようとする心のはたらきと

いったようなあるふしぎなものを感じました。

十二40 2 ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、みるはたらき、きくはたらきを失いました。

十二40 2 きくはたらきを失いました。

十二69 1 はたらきのある人は、はをもったのこぎりにてゐる。

十二69 5 どんなにはたらきがあつても、

十四56 1 私、こんなに長いばかりで、花さんや、葉さんや、根さんのような、特別なはたらきは、なに一つございせん。

はたらきつ・ける (働付) (下二) 1 働きつける 《一ケ》

十一21 5 金次郎は、年のわりにからだが大きかつたし、働きつけているので、役にたたないことはありませんでした。

はたらきつづ・ける (働続) (下二) 1 はたらきつづける 《一ケ》

八28 11 うちのむすめは、こうしてはたらきつづけているのは感心なことだ。

はたら・く (働) (四五) 26 はたらく 働く 《一イ・カ・キ・ク》 ↓かわははたらく

二59 1 みなさんのつかっている つくえも、こしかけも、長いあいだはたらいてきました。

四97 あさからばんまで、トッテンカン トッテンカンとはたらいています。

四13 4 この町の 手となり 足となつて、はたらいています。

四23 10 大きく なつたら、にいさんと いっしょに、ふねで はたらきたい 思います。

四12 1 この 光を だす ために、どれほど たくさん の 人が、はたらいて いる こと でしょう。

五79 川はだまつてはたらく。

五37 9 たいようのねつが、かたちをかえ、石炭の中にたくわえられていて、いまそれが、私たちのために、生き返つてはたらいているのです。

六23 11 せつかくですが、わたしたちはみんな、はたらくやくそくをしているのです。

六24 2 はたらくやくそくだつて。

六24 5 でも、わたしたちは、はたらけるときに はたらくのですよ。

六27 8 はたらかないものには、この楽しさ、この喜びはあじわえないだろう。

六65 6 はたらくときはよになり、休むときは立つものはな。

八31 9 けんぎゅうも、はたけにではたらかなくなりまし。

八47 11 ああ、せいっぱいはたらいて、晩ごはんもいただいた。

十30 7 ぼくは、みんなといっしょにはたらくたい と思います。

十33 1 佐吉は、父の 大工のしごとを助けてはたら いていたが、

十一10 3 では、実力があつて、力いっぱいはたら にくい船員には、だれがなるのさ。

十一19 3 働くことがすきで、一代でりつぱな身代をこしらえました。

十一20 6 だから、金次郎は、子どものときから、家の手つだいをしてよく働きました。

十一21 1 さかわ川のていぼう工事があつて、どの家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで働くことになりました。

十一21 7 金次郎は、すこしも休まず働くので、

十一28 8 そこへいってからは、いよいよいっしょうけんめいに働きました。

十一 49 10 おとうさんに、負けないように働きます。  
 十一 61 1 さいわい近くの田で働いていた村の人たち  
 ちに助けられて、  
 十二 60 5 田植え歌勇ましく、一心にはたらいた。  
 十五 16 3 少年たちよ、野にはたらきて、土ぼ  
 こり顔よごすとも、  
 はたらける「働」(下二) 3 はたらける 働ける  
 《ケ―ケル》  
 六 24 5 でも、わたしたちは、はたらけるときに  
 はたらくのですよ。  
 十一 19 9 りえもんは、からだがよくて、よく働  
 けませんでした。  
 十一 23 9 ねえ、金次郎、これでわたしも、じゅ  
 うぶん働けますよ。  
 はだをかぶ 1 ハダヲカブ  
 六 106 3 「ハダヲカブ」というのが、いかにも  
 弟のいいそうなことばつきである。  
 はだをかぶのかい 1 ハダヲカブノカイ  
 六 105 5 「ハダヲカブノカイ」といって、みん  
 なで大わらいをした。  
 ばたと(副) 1 ばたと  
 九 115 3 着ぶくれて歩かされいし女の子ばたん  
 とたおれそのままなくも  
 はち(課名) 25 八  
 一 24 3 むすんでひらいて……八  
 一 29 八 あさのこくぼん……十七  
 一 17 1 八 あさのこくぼん  
 二 34 八 ゆめとつくえ……五十五  
 二 55 1 八 ゆめとつくえ  
 三 32 八 高い高い……四十九  
 三 49 1 八 高い高い  
 四 32 八 クリスマス……八十一

四 81 1 八 クリスマス  
 五 23 二 私の旅……八  
 五 33 八 あさがおの花……五十九  
 五 59 6 八 あさがおの花  
 六 33 八 つりばりのゆくえ……八十  
 六 80 1 八 つりばりのゆくえ  
 七 3 11 八 うさぎ日記……八十六  
 七 86 1 八 うさぎ日記  
 九 34 八 なかよし……八十七  
 九 87 1 八 なかよし  
 十一 36 八 いいにくいことば……五十八  
 十一 58 3 八 いいにくいことば  
 十二 34 八 雪まろげ……七十  
 十二 70 1 八 雪まろげ  
 十三 23 二 眞理……八  
 十四 34 八 木もと竹うら……七十七  
 十四 77 1 八 木もと竹うら  
 はち(題名) 1 八  
 一 56 4 (八)  
 はち「八」(名) 9 八 8 (8)  
 四 70 図 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10  
 六 32 7 8 12  
 六 64 図 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10  
 八 19 図 1 2 3 4 5 6 7 8  
 九 92 2 図 「七、八、九、十」と数えながら、大  
 またでびよんびよんかけてきて、「十」ととまる。  
 十 20 1 八 村の林の上に、大きな半円形のじが  
 かかっている。  
 十一 11 図 1 トップ 3 5 7 コックス 2  
 4 6 8 整調

十一 56 図 1 2 3 4 5 6 7 8 9  
 十 10 11 12  
 十二 51 4 (8)  
 はち「蜂」(名) 5 はち じひみずつちはちたち・  
 みつばち・みつばちさん  
 九 65 7 ガヤガヤ、ガヤガヤいつて、なにがなんだ  
 か、まるでちの巣をつついたようで、  
 十三 67 すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、  
 たけのこや、ちようや、はち、へびや、とかげや、  
 十三 47 2 はちの羽音が、チューリップの花に消え  
 る。  
 十四 59 9 すると、いたずらなはちがいました。  
 十四 80 11 図 あぶはちとらず。  
 はち「鉢」(名) 9 はち ↓あかえのはち・ふるば  
 ち  
 三 15 1 はんたかも おしやかさまのはちをもつ  
 て、でしの中にまじっていました。  
 三 15 10 はちをもった手が、するすると おしや  
 かさまの目のまえにのびてきました。  
 三 16 9 図 あれは門のそとにいますので、この  
 はちをわたくしにとけようとして、手をこ  
 こまで のぼしたのです。  
 九 117 6 図 ふくじゅそうのはちをおきかうるおさ  
 な子やえんがわの上にうつる目を追いて  
 十二 21 9 窓に花のはちをおきながら、「略」  
 十二 100 4 形も、かめや、はちや、いろいろのもの  
 があります。  
 十五 43 5 ウインドにかざられてあるさらやはちを、  
 《略》のぞきこみながら、「美しい赤色だな」  
 十五 46 4 ある小さな店先に出た一まいの赤絵  
 のはちを手にとって、かれは、びっくりした。  
 十五 47 3 プリンクリーは、まんぞくそうに赤絵の

はちをながめながら、その話のさきをうながした。  
はちかげつ 「八箇月」(名) 1 八ヶ月

八34 五ヶ月や八ヶ月でもありません。

はちがつ 「八月」(名) 2 八月

四125 八月は水およぎ。

十二82 五月、六月、七月、八月の四ヶ月にわたって、十一ヶ國のテニス選手をなぎたおした清水選手は、最後の決勝戦にのぞむことになりました。

はちがつじゅうはちにち 「八月十八日」(名) 1 8月18日

八101 8月18日 (出) くもりのち雨 25度

はちがつなのか 「八月七日」(名) 1 8月7日

八103 8月7日 (欠) くもり 25度

はちがつにじゅうにち 「八月二十二日」(名) 1 8月22日

八102 8月22日 (欠) 晴 28度

はちがつつつか 「八月二日」(名) 1 8月2日

七93 8月2日 (欠) くもりのち晴 29度

はちがつつつか 「八月四日」(名) 1 8月4日

七95 8月4日 (出) くもり 25度

はちきれる 「切」(下) 4 はちきれる はち切れる 《一レ》

十一70 顔ははれあがってどんより赤く、ひふは

はち切れそうになっていました。

十五88 『はちきれそうなわらい』で、口は耳

までさけているし、

十五88 「はちきれそうなわらい」が、腹をかか

えながらおじぎをする。

十五94 「はちきれそうなわらい」は、光のこし

のあたりを、力まかせにおさえました。

はちキロ (名) 2 八キロ

九125 4 はじめの八キロほどは、村ざとがあつて川

べりに道もあったが、

十四68 9 うずの高さも、四キロとか八キロとかい

うのですから、

はちくメートル (名) 1 八九メートル

九39 8 八九メートルもある木の上で、なで枝

をおろすのは氣がつかれます。

はちじ 「八時」(名) 1 八時

六64 2 どうして、八時になると、ねむくなるのだ

ろう。

はちじゅう (課名) 1 八十

六33 八 つりばりのゆくえ……………八十

はちじゅういち (課名) 1 八十一

四32 八 クリスマス……………八十一

はちじゅうご (課名) 2 八十五

三34 十 ひびき……………八十五

五36 十一 りょうかんさん……………八十五

はちじゅうごセンチメートル (名) 1 85cm

八106 5 かぶをのこして、ほとんど85cmになりま

した。

はちじゅうごまん 「八十五万」(名) 2 八十五万

十43 2 その数は、じつに八十五万にもおよんだ。

十43 8 八十五万から五つぶの眞珠が取れたわけで

ある。

はちじゅうさん (課名) 1 八十三

十四37 九 雪の映画……………八十三

はちじゅうしち (課名) 2 八十七

九34 八 なかよし……………八十七

十二36 十 ことばのはたらき……………八十七

はちじゅうに (課名) 1 八十一

十五310 六 幸福の園……………八十二

はちじゅうろく (課名) 2 八十六

四33 九 雪……………八十六

七311 八 うさぎ日記……………八十六

ぱちっ ひひゅうぱちっ

ぱちぱち (副) 2 パチパチ

九61 4 そのとき、いちろうは、足もとでパチパチ

しおのはねるような音をききました。

十二76 3 やがていりには、パチパチとしばがも

えあがります。

ぱちぱちさ・せる (下) 1 ぱちぱちさせる 《一

セ》

九71 2 やまねこは、まだなにかいたそうに、し

ばらく《略》目をぱちぱちさせていましたが、

はちひき 「八匹」(名) 2 八ひき

二29 9 一ひき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひ

き、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、十ひき、

二30 5 一ひき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひ

き、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、十ひき、

はちまき 「鉢巻」(名) 1 はちまき

九112 2 先生は、はちまきをして、すべりだされた。

はちみつ 「蜂蜜」(名) 1 はちみつ

十一57 4 八 はちみつやいちご、青うめ・わさび、

にがい、にがいくすり、一つ一つしみる。

ぱちりと (副) 1 パチリと

五83 10 そこをパチリと写されました。

はちろう 「八郎」(人名) 4 八郎 八郎

十二62 7 名を八郎(はちろう)といった。

十二62 8 ある日のこと、八郎が山でしごとをして

いると、のどがかわいてきた。

十二62 11 八郎はその魚をとってやいてたべた。

十二63 9 八郎は思い切つて、水ぞこにとびこむと、

小川がひろがって、みるみるうちに湖となった。

ぱちんぱちん (感) 1 パチン、パチン



五85 改札口へいこう。」パチン、パチン。

はつ ↓にはつめ

はついく「発音」(名) 1 発音

十二246 発音がたいへんおくられていて、かわいそうです。

はつおん「発音」(名) 6 発音

六1049 ただ、はながつまっているだけだが、そのために発音がすこしおかしい。

六1083 はながつまったために発音ができなくなるような音は、もともとはなから声のでるような音にちがいない。

十五381 「海」を「カイ」というようにもとの中国の発音にしたがった読みかたをしたが、

十五385 中国の発音にもとづいた漢字の読みかたを「音」といい、

十五418 ローマ字を利用して、発音のちがつている多くの國々のことばが書き表わされている。

十五4111 ローマ字をつかうと、〈略〉、発音のこまかなところまで書き表わすことができ、

はつおんで・きる「発音出来」(上二) 4 発音できる「キー・キル」

六1076 弟ははながつまっているために、あることばが、うまく発音できなくなっている。

六1077 しかし、どんなことばでも発音できないわけではない。

六1077 発音できることばと、できないことばとがある、

六1086 はながつまっても発音できような音は、はなから声がでない音のはずである。

はつか「二十日」(名) 1 二十日 ↓こがつはつか・しちがつはつか・じゅうがつはつか

八349 五日や二十日でもありません。

はつか「僅」(形状) 1 はつか

十五114(図) わか草のはつかにもゆる庭に来てすずめあさりととなりへとびぬ

はつかめ「二十日」(名) 1 20日め

七987 子うさが生まれてから、きょうで20日めです。

はつきする「発揮」(サ変) 1 発きする「ーシ」

十二903 どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのようにとなえていたのでは、そのことばは、すこしの力も発きしないから

はつきり(副) 23 はつきり

一606(図) はねちゃんも、ものを はつきり いいこになりました。

四748 へー返事はいつもはつきりと。

七473 思っていることを、はつきり書きあらわそうとすると、

七478 心がはつきりとしていますと、文章も、だんだんはつきりします。

七483 二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人

七553 しかし、文章は、くわしくしさえすれば、はつきり写しだすことができるとはかぎりません。

七557 心にはつきりとえがかれた一つのかたちは、

七687 心に思ったことを、はつきりと写しだすということにほかなりません。

七829(図) もしあるなら、ここで、はつきりいうがいい。

八243 せみの羽は、ぶるぶるとふるえて、色も、

八335 この星は、一つ一つがはつきりとみえないのですから、

九1211 ここで茶人のしたには、まぎれもないいい

味がはつきりと感じられるようになった。

十一92(図) いつもそのうえを考えていて、いいことをはつきりきめる。

十一808 それが、ときにはいかにもはつきりしましたので、少年は希望に力づけられながら、

十二163 そんなところをはつきりつかまえないものだと思つて、しきりに木炭を動かしていた。

十二353 「ゆのみ」が道具で、「水」がその中

にはいつているものであることを、はつきり教えるために苦しめたのですが、

十二791「略。」とはつきり答えました。

十二989 このように、古い時代のことがはつきりわかるいとぐちとなつたのは、

十四417(図) 山もはつきり見えてきた。

十五7512 博士は、〈略〉、こんどははつきりと、

「略。」といったされた。

十五1152(図) どういうように私を見なければなら

いか、それを、はつきりとさとするためだからね。

十五11611(図) あんまりはつきり顔を見せると、『幸

福』たちがこわがるだらうって、

十五1204 はじめてこの学校の門をくぐったときの

ことが、はつきりうかんできた。

はつきりする(サ変) 6 はつきりする「ーシ」

四299 じぶんで じぶんに きてみて、みても、な

なか はつきりした返事をしてくれな

六1026 二つのつづをのぼしたりちぢめたり、か

んしているうちに、はつきりした。

七479 心がはつきりとしていますと、文章も、だ

んだんはつきりします。

七858(図) けれども、いまの答で、知っていたわけ

がはつきりしたでしょう。

十427 しおの流れの早さや、えさのよいわるいな

ども、はつきりしてきた。  
 十四708 それも、お湯が熱いほど、もようがはつきりします。

バック(名)5 バック

六1182 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、

十一612 ④ トップ、バック一本。

十一73 ④ トップ、バック一本。

十一74 ④ ぼくが力をいれて、一本バックをやる  
 と、ポートは向きをかえて、

十四2612 また、図画工作の時間によくいう、デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも

はっけん「発見」(名)3 発見↓ぼくのはっけん

十三149 わかいころからいろいろな発見や発明をしました。

十三2212 かれは、もみの生長について、大きな発見をしました。

十三2312 ダルガス親子の発見と努力によってもたらされた、よい結果は、

はっけん・する「発見」(サ変) 16 発見する《サ・シースル》

六999 ふと、おもしろいことを発見した。

十4111 あるとき、うめが、母貝の中をしらべているうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。

十446 ほかの母貝のがいとまを切り取ってき  
 て、一種の手術をほどこすことを発見した。

十二43 コロンブスがアメリカを発見して帰ったとき、イスパニア人はたいへん喜びました。

十二393 この日が自分にもたらした喜びを思い返していたときの私はど幸福な子どもを発見することとは、むずかしいでしょう。

十二565 傳説を廣く全國で調べてみると、よくに

たようなのが、あちらこちらで発見される。  
 十二9811 モールズという学者が、東京の大森の貝づかを発見してからのことでもあります。

十二10012 この式の土器は、はじめ、東京のやよい町から発見されたので、

十三137 熱心な学者が、だんだんそれを見つけた。

十三147 これをわく星といいますが——の空にえがく道は、だえん形であって、太陽はいつもその焦点にいますもの、ということを見つけた。

十三2310 植物学上の事実が、ダルガス親子によって、発見されたのであります。

十四355 そのバクテリアにもおとる小さな人間が、引力の法則を発見したり、

十四371 夫人は、〈略〉、その感動から研究を進めて、ついにラジウムを発見したのです。

十四801 いったい、だれが、そのことを発見したのでしょうか。

十四804 自分たちの祖先が発見したのではなく、十四867 いますこしふかく考えれば、さらにおもしろい場面が発見されるように思われる。

はっこう・する「発行」(サ変) 3 発行する《サ・シースル》

六562 私の学級では、來週から、かべ新聞を発行することにしました。

六574 こんど私たちの学級で、かべ新聞を発行することにしました。

十五513 ジャパンタイムスという新聞も発行した。ぱっしっせ(感)3 パッシッセ

三877 パッシッセ、パッシッセ、パッシッセ。

三877 パッシッセ、パッシッセ、パッシッセ。

三877 パッシッセ、パッシッセ、パッシッセ。

はっしや・する「発車」(サ変) 1 はっしやする  
 《一シ》  
 一495 きしやはすぐはっしやしました。

はっしする「発」(サ変) 4 発する《一シ》  
 八346 太陽から発した光が、地球にとどくまでに、やく八分二十秒ばかりかかることになります。

八356 今夜のはたおり星の光は、やく三十年ほどまえに発した光だというわけになります。

十一821 男はみまわして、ひと目少年をみると、こんどはかれがさけびを発しました。

十五549 私が一言も発しないうちに先手をうって、はっせい・する「発生」(サ変) 3 発生する《一シ・スル》

十394 ④ もし、母貝の中に、核をさしいれることができたなら、眞珠が発生するにちがいない。

十412 ある年のこと、赤しおが、おびただしく発生した。

十4112 これは、まえにさしいれておいた核によって発生した半円眞珠であることが、わかった。

はった「飛蝗」(名) 1 ばった  
 九291 ④ かい道をきちきちとどぶばったかな

はったつさ・せる「発達」(下一) 1 発達させる《一セ》

十四366 さまざまな術を発達させました。

はったつ・する「発達」(サ変) 2 発達する《一シ》

十四327 数学が発達したのです。

十五365 漢字は、いまいったように、はじめ、事物の形をうつしたのから発達したものであるが、

ぱったり(副) 1 ぱったり

十二289 たもとをひいてやると、民ちゃんは、ぱったりそこへすわりこんでしまいました。

はっと (副) 2 はっと

五二四 (副) ぼくは、はっと思っ、すぐ立って、その人をすわらせてあげました。

一八八六 少年は、思わずはっととびあがりました。

はっと (副) 5 はっと

七二六 すぐめが、はっと、とんでにげる。

九五四 坂を登りますと、にわかにはっと明か  
るくなって、目がちくちくしました。

九四九 ふもとへきて、急停止すると、はっと雪け  
むりが立ち、

一五二九 鳥を後へひっくり返すようにするいきお  
いで、はっと、地面へすばやくとびおりました。

一五三三 大わしは、この思わぬいたでにおどろい  
て、はっと一まず舞いたちましたが、

はつどうき 「発動機」 (名) 1 発動機

一五二六 発動機にこしようにできた飛行機乗りが、

はつば 「葉」 (名) 9 はつば

二二二 先生、わたしち、もみじのはつばで、  
いろはそびをしました。

二二四 大きなあおがえるが、とうもろこし  
のはつばに、じつとぶらさがっていました。

一四四 二にわとりが、かぶのはつばをたべてい  
る。

七二五 九 はつばと同じ色になったのね。

七二五 九 どうして、はつばと同じ色になるのか、  
わかりますか。

七二六 三 ねえ、はつばと同じになるのは、鳥など  
に、すぐみつからないためですよ。

七二九 五 黒っぽい、かわいいあおむしは、だいい  
んのはつばと同じ色に変わっていた。

七二九 九 ぼくは、学校から帰ると、だいいんの  
はつばを、とりかえてやるのが楽しみだ。

七五七 六 おかさんの鏡、庭のはつばがうつてい  
る。

はつはな 「初花」 (名) 1 はつはな

七六五 はつはなのさいたこと、けさ書く。

はつひ 「初日」 (名) 1 はつひ

一四一 五 五 もちつきすませて、しめなわをはり、  
一夜明ければうれしいはつひ。

はつびやくねんあまり 「八百年余」 (名) 1 八百年  
あまり

一三二〇 ユートランドの平野には、八百年あまり  
前には、よくしげった森林がありました。

はつびよう 「発表」 (名) 1 発表

一五七八 きみたちの考えが、たとい世間の考えと  
ちがっていても、その発表をためらってはならな  
い。

はつびようする 「発表」 (サ変) 1 はつびようす  
る 《一シ》

六五八 みんなのしらべたことをはつびようします。

はつぽん 「八本」 (名) 1 八本

九四八 ちよまの根は、略、たこの足のよう  
に、一かぶから七本も八本もでていて、

はつめい 「発明」 (名) 2 発明 じようしよくしん  
じゅはつめい

一三二四 わかいころからいろいろな発見や発明を  
しました。

一五三九 かなは、日本の文化にとって、ほんとう  
に大きな発明で、

はつめいふたつ 「課名」 2 発明二つ

一三二 五 発明二つ……三十二

はて 「果」 (名) 1 はて  
五五九 海のはてから 白い雲、白い雲。

はて (感) 2 はて

四六〇 三 がんのなかまをみなかったかい。」「は  
てな。」

一五九〇 六 青い鳥とね。はてな。

はてし 「果」 (名) 3 はてし

一四一 三 休みもなく、はてしもなく、ゆるやかに  
うつ波の声は、

一四三 五 五 しかし、アインシュタイン博士の話によ  
ると、うちゅうは、けつしてはてしのないもので  
はありません。

一四三 五 五 大空の星をながめてみると、はてしのな  
い、遠い世界にひきこまれるような気がします。

はてる じあはてはてる・こまりはてる・ちりはてる・  
つかはてる

はと 「鳩」 (名) 11 はと じありとはと

一六六 ただおさん みちこさん まことさん よし  
こさん はととまととんぼ ぼうし

二二二 三 すのおそうじをするので、はとをだ  
いていたら、たいへんあついとおもいました。

五四四 六 ぼくら、日本の子どもらは、はとだ。

五四四 六 平和のはとだ。

一四七 それを一わのはとがみつきました。

一四八 はとは、いそいで木の葉をとって、ありの  
そばにおとしてやりました。

一六六 木の上には、一わのはとがとまっています  
た。

一六六 はとは、ねらわれていることを知らずにい  
ました。

一六二 その声をきいて、はとが下の方をみますと、  
かりうどが矢をつがえているではありませんか。

一三三 五 はとにふえをむすびつけてとばすのであ  
るが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。

- 十三 36 1 はとがむれになってとんで来ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、はとぶえ「鳩笛」(名) 1 はとぶえ
- 十三 35 10 早春になると、はとぶえが天から鳴ってきて、ホートンをにぎわわせる。
- はな「花」(名) 148 ハナ はな 花 ↓あさがおのはな・おはな・おはなばたけ・かぼちゃのはな・くさばな・なのはな・なのはなざかり・なのはなばたけ・はつはな・ばらのはな・ひとはな・ひばな・めばな
- 19 4 罇 なんのはな ひらいた。
- 19 5 罇 れんげのはな ひらいた。
- 20 2 罇 なんのはな つぼんだ。
- 20 3 罇 れんげのはな つぼんだ。
- 33 6 お日さま はな — ことり — とぶ — なく — とまる — かくれる —
- 35 2 罇 わたくしは はなになります。
- 35 4 罇 きれいな はな になって、おへやをかざりたいからです。
- 38 7 あさがおのはながさきました。
- 38 8 あさがおのはながいつつさきました。
- 39 1 うすもいろいろのあさがおのはなが、いつつかきねにさきました。
- 49 1 へやには、きれいな はなが かざってありました。
- 20 6 ねえさん はな ほし よる ゆめ 山川 さかな ふね なみ
- 23 4 罇 はねの いたんだ 大きな ちようちよが、けさも、ゆりの花にきていましたよ。
- 23 6 罇 だりやの花が、さきかけてしほみしました。
- 39 4 罇 すみれ、たんぽぽ、れんげそう、花の

- おやねが うつくしい。
- 18 2 一くみは花の名をあつめました。
- 19 1 花の名は 十二 あつまりました。
- 20 1 えを かい ていくうちに、花の名も、鳥の名も、だんだん ふえてきました。
- 20 6 どんな 花が すきですか。
- 34 3 罇 五年生の きようしつでは、花の しゃせいを していました。
- 34 5 罇 まっ白な かびんに、赤い 花が さしてありました。
- 34 8 罇 わたくしも、早く 大きくなって、あんなきれいな 花を かきたいとおもいました。
- 49 3 罇 かぼちゃの 花が さきました、あんなところに さきました。
- 50 1 罇 かぼちゃの 花が さきました、はかげに ふたつ さきました。
- 52 2 罇 ありは すみれの 花に のぼり、「高い、高い。」といいました。
- 92 4 こうえんに さいた きれいな 花は、みんなの 心を たのしませてくれます。
- 92 6 花を おらないでください。
- 96 2 にわの 花も、空の 雲も、とおい 山も、ちかい 家も、かくことが できます。
- 43 1 罇 わたくしは、うちの にわに さいている コスモスの 花を あげようと思ひます。
- 45 8 くだものを あつめたり、花を かざったりしました。
- 47 4 罇 は 花のように きれいな 心。
- 47 5 罇 れんげの花が ひらいた。
- 47 7 罇 む 麦の花に、ばらの 花。
- 47 7 罇 む 麦の花に、ばらの 花。
- 48 1 も ももの 花の さく ころ。

- 412 5 十一月は きくの 花。
- 412 9 二月は うめの 花。
- 520 5 なしの花のきれいにさいている家に、はいりました。
- 539 9 罇 こちらでは、さくらの花も、なしの花も、すももの花も、うめの花も、りんごの花も、いっぺんにさきます。
- 539 9 罇 なしの花も、
- 539 10 罇 すももの花も、
- 539 10 罇 うめの花も、
- 540 1 罇 りんごの花も、いっぺんにさきます。
- 540 4 罇 私の すきな花は、こぶしの花です。
- 540 4 罇 私の すきな花は、こぶしの花です。
- 540 5 罇 白くて ゆつたりと さく、ひんの いい 花です。
- 540 5 罇 この花がよくさく年は、ほう年だといひます。
- 543 8 罇 ぼくの すきな花は、あさが おです。
- 545 2 罇 きれいな 花だ。
- 545 4 罇 世界の そのに さきにおう、きれいな 花の 一つ。
- 547 9 すみれが さい ていたり、名まえは 知らないが、きれいな 花が さい ていたり。
- 548 1 おや、こんな 花が — また みつけた、きれいな 花を。
- 548 2 また みつけた、きれいな 花を。
- 559 7 かきねに あさが おの 花が、三つ はじめてさきました。
- 560 3 罇 あれ 三つの 花が、そろって しんこきゅう している ように みえますね。
- 562 1 罇 けさ、こんなに 大きな 花を、三つ も さかせたのは、だあれ。

五62 ㊦ 花の色を空色にそめてくれたのは、だれでしょう。

五63 ㊦ けれども、花がついたり、みがなったりしたのは、おかあさんのせいではありませんよ。

五66 ㊦ あやこも、このきゅうりも、あさがおの花もおなじだよ。

五77 ㊦ 先生のつくえのかびんに、大きなひまわりの花が、三本かざってありました。

五79 ㊦ かおよりも大きな花です。

五78 ㊦ ひまわりの花は、いけださんが自分のうちのわから、持ってきてくれたのでした。

六30 ㊦ 花のみつをわけてあげよう。

六60 ㊦ カボチャノハナガ——七 サキマシタ——五 アンナトコロニ——七 サキマシタ——

六79 ㊦ ごろうは、いつか「こくご」でならった

「あさがおの花」を思い出しました。

六79 ㊦ そうして、自分とあさがおの花とが、たいへん近いものように思われました。

六142 ㊦ クローバーの花が、まっ白にさいっていました。

七5 ㊦ 学校じゅうは、いちどに花がさいたようだ。

七6 ㊦ えんどうの花が、風もないのにゆれている。

七9 ㊦ さくらの花が、白くうかんでみえる。

七17 ㊦ 花がちって、実がつきはじめたからでしょう。

七19 ㊦ 先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。

七20 ㊦ それが、いまちようど、こんな白い花をつけています。

七20 ㊦ 白いちようちょが、白い花にとまった。

七32 ㊦ おかあさん、花よりきれいな。

七46 ㊦ たがやしている父と子、きりの花——

七56 ㊦ つばきの花がまっかにさいています。

七58 ㊦ あさがおの花が、ラジオの音楽をきいています。

七58 ㊦ 黄色いやまぶきの花に、黄色いちようがとまっています。

七62 ㊦ さくらの花をしらべてみたり——どの花もみんな空を向いている。

七62 ㊦ どの花も、みんな空を向いている。

七70 ㊦ なんの木の花だろう。

八12 ㊦ 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばきの木の根もとにうめてやりました。

八37 ㊦ この花が、みたとおりのこがねならば、わしもつむのだが。

八40 ㊦ こんなひとりごとをおっしゃって、そこらの木の葉や花にみんな手をおふれになりました。

八102 ㊦ 花のさいているほもみつめました。

八103 ㊦ 朝、花のようすをみにいきましたら、まださいていませんでした。

八103 ㊦ 花のさくのは、一日にすこしのあいだけだと思いました。

八103 ㊦ 花は、一日開きませんでした。

八104 ㊦ いねの花のすんだあとをさわってみると、〈略〉さが、ふくれてかたくなっていました。

九28 ㊦ 親のまたたくる子うしや草の花

九114 ㊦ 水ぐるま近きひびきにすこしゆれすこしゆれいるこでまりの花

九134 ㊦ 目のまえのばらの花が動いています。

九140 ㊦ ちようど白ばらの花がとんでいくように。

九141 ㊦ あたりには、やはりばらの花のにおいがしていました。

九143 ㊦ こう話しかけたのは、ばらの花でした。

九144 ㊦ いままた、ばらの花のやさしいことばをきくこともできた。

九144 ㊦ ちようちょにしても、ばらの花にしても、なんとしずかなくらしをしているのだろう。

九145 ㊦ 白ばらの花は、もう話しかけなくなりました。

十21 ㊦ 窓に花のはちをおきながら、〈略〉。

十22 ㊦ 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえさくらの花。

十27 ㊦ トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たねんにみようと思います。

十49 ㊦ ワンワン タッタ——ハナガ サイテル——

十53 ㊦ そこに、すいれんの花が三つほど、きれいにさいていました。

十54 ㊦ 「ハナガ サイテル」「キンストットガ」〈略〉は、そのことをいいあらわしています。

十57 ㊦ コスモスの花

十一5 ㊦ きょうも、みんな話に花をさかせている。

十一16 ㊦ 人の心の畑にさいた、いちばん美しい花、〈略〉、それはおかあさまの愛です。

十一29 ㊦ あくる年の春、黄色い花がさいて、たくさんの実がつかえました。

十一31 ㊦ えんどう・そらめみな花つけて、羽音高くみつばちがとぶ。

十一33 ㊦ だいこんの花にあかつきの 色ただよえば勇ましく、すき・くわ持って野にいそぐ。

十一35 ㊦ 空にくずれる雲のめね、庭にかがやく ひまわりの花、あぶらぜみの声さわがしく、

十一37 ㊦ はぎの花ふく朝風も、音さえずしく

なってきた。

十一435 正面のテーブルには、赤いうめの花をいけた、大きなかびんがかざってありました。

十一485 アカシヤの花が風にゆれ、畑では、いちごがさかりだった。

十一513 庭のあさがおの花は、みんなふきちぎられ、

十二75 道灌は、その花の枝を手にはしましたが、なんのことだかその意味がわかりません。

十二76 少女とやまぶきの花とをみくらべるばかりでした。

十二710 七重八重花はさけどもやまぶきのみひとつだになきぞ悲しき

十二136 そこには一本のさくろの木があつて、夏じゅう美しい花をつけていたが、

十二3110 そのなつかしい葉や、花の上を、私の指はまったくわれをわすれてなでていました。

十二647 花は美しく、実ほうまい。

十二666 それからでた細い根が、つなのようにからみあつて、葉を育て花をさかせる。

十二951 道はたに野ほぎがさいていたので、赤とんぼはとらずに、花を手にいっぱいつんで帰った

十三95 たとえば、花のおしべとめしべとの関係についていうと、

十三473 はちの羽音が、チューリップの花に消える。

十四299 日本は景色のよい國で、花がたえずさいていたために、天上の花を見ようとはしなかったのだらうという人もありますが、

十四2910 天上の花を見ようとはしなかったのだらうという人もありますが、

十四522 花は、美しいわかい女でした。

十四525 私の花がさかなかったら、実はつきません。

十四528 花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。

十四5210 それは、花の一部であるめしべの根もとが、大きくふくれただけのものです。

十四531 だから、それは、私たち花のものだということはうたがいありません。

十四5311 せっかく花が開いても、

十四541 とちゅうから、黄色くなつて落ちてしまったたぐさんのかぼちゃの花を見えています。

十四542 養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがたが、かつてに花をさかせたからです。

十四569 つるの私がとちゅうで切れたりしたら、それについている葉でも、花でも、なりかけている実でも、みんなかれて、くさつてしまいます。

十四609 花も、葉も、つるも、首をひねつて考えていました。

十四611 花も、葉も、根も、みんな賛成しました。

十五91 水はしずかに流れると見ればもの花

十五104 荒れ庭にしきたる板のかたわらにふるばちならび赤き花さく

十五151 おどろきてわが身も光るばかりなり

十五153 おどろきて見ればその花動く

十五154 ただみればこれかりそめのぼらの花

十五155 おどろきて見ればその花動く

十五157 ひるすぎていよよにあかきぼらの花

十五157 大きななにごともなきぼらの花ふとのはずみにくづれたけり

十五171 少女たちよ、花そだてつつあきないで、つづれ着るとも、

十五123 「心に花をかざれ。」

はな「鼻」(名) 42 はな 鼻

一275 口はひとつ、はなもひとつ。

二357 三人めのめくらは、ぞうのはなにさわつて、『略』といいました。

四725 『はなをふく。』というわけです。

六377 はなが動く。

六703 目もはなも口もつけました。

六1048 ただ、はながつまっているだけだが、そのために発音がすこしおかしい。

六1057 「はなをかむのかい。」といったのである。

六1061 「はなをかむ。」ということばを、そのようにいつたことがあるのではない。

六1075 弟ははながつまっているために、あることばが、うまく発音できなくなっている。

六10710 なぜはながつまることばとがあるのだらう、はながつまっていてもいえることばと

六10711 はながつまっていてもいえることばと

六1082 はながつまったために発音がでなくなるような音は、もともととはなから声のするような音にちがいない。

六1084 はなから声のするような音にちがいない。

六1086 そうして、はながつまって発音できるような音は、はなから声でない音のほうである。

六1087 はなから声でない音のほうである。

六10810 ものをいうときに、声ははなからでるかでないかということを、考えたことがなかった。

六1092 では、なんという音が、はなから声の音なのだらうか。

- 六〇九 三 「はな」の「ナ」、「あのね」の「ノ」と「ネ」、「にいさん」の「ニ」、「紙」の「ミ」、
- 六〇九 四 これらははなからでる音なのだろう。
- 六〇九 六 自分で声をだしていつてみると、いかにもはなから声がでているような気がする。
- 六〇九 七 そこでぼくは、自分ではなをつまんで、はなのあなから息がもれないようにして、
- 六〇九 八 はなのあなから息がもれないようにして、「ナ」、「ノ」、「ネ」、「ニ」、「ミ」、「ム」といつてみた。
- 六〇九 九 はなから声がでる音であることはたしかとなった。
- 六〇九 一〇 自分ではなをつまんで、「ナ」といいながら、耳できいてみると、まるで「ダ」といつているようだ。
- 六〇九 一〇 一 「はな」といつてゐるんだなと思うと、きゆうにおかしくなった。
- 六〇九 一七 これもはなから声がぬけてゐるようだ。
- 六〇九 一八 ねんのために、はなをつまんで、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。
- 六〇九 一八 一 そうすると、ナニヌネノという一ぎょうは、ぜんぶはなの音でできていることがわかった。
- 六〇九 二四 ここで、もしやと思つて、はなをつまんで「マ」、「メ」、「モ」といつてみたら、これらもはなの音であることがわかった。
- 六〇九 二五 これらもはなの音であることがわかった。
- 六〇九 二七 はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムモの二ぎょうだけで、
- 六〇九 二九 パピブペボにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。
- 七五五 「はなが高い。」
- 七五五 「はなをならす。」

- 八七四 一 はなをあひるの子のそばにつきつけて歯をむいた。
- 九二七 一 文 ころらしや子ぶたのはなもかわきけり
- 一〇六一 二 私は、たけのこのそばにいつて、せいくらべをしたたら、はなのところまでありました。
- 一二四五 三 ときには、したをだしたり鼻がてんぐのようにとびだすこともある。
- 一二五〇 一 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作つて、のりとめる。
- 一二五九 七 三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけて、わがままをしはじめた。
- 一三三三 八 夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからないほどである。
- 一五〇四 一 鼻を指ではじいたり、ひら手でたたいたり、いそがしく足でけつたりして
- はないずみ 「花泉」(地名) 一 はないずみ
- 七四六 一〇 駅は、東北本線の「はないずみ」であつた。
- はなは 「鼻緒」(名) 四 はなは
- 四三二 二 男の子は、げたのはなはが切れてあるけなかつたのです。
- 四三二 六 三 その生徒さんは、すぐひもでげたのはなはを上げてやりました。
- 四三三 三 一 はなはが、できあがると、男の子は、それをはいて、元氣よくかけていつてしまひました。
- 四三五 四 一 中学校の女の生徒さんが子どものげたのはなはをあげるあいだ、
- はなはなむり 「花冠」(名) 一 花かんむり
- 一四九三 二 雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわりを、花かんむりのようにくまどつた。
- はなざかり 「花盛」(名) 一 花ざかり
- 五八三 三 高い山からたにそこみれば、うりやな

- すびの花ざかり。
- はなさき 「鼻先」(名) 一 鼻先
- 一五七五 四 「略」と、力をこめてさげびながら、そのにぎりこぶしを私の鼻先につきだされた。
- はなさん 「花」(名) 五 花さん
- 一四五二 一 一 では、花さんからおはじめなさい。
- 一四五三 四 一 花さんは、たいへんじょうずに自分のことを主張なさいましたね。
- 一四五五 一 二 私、こんなに長いばかりで、花さんや、葉さんや、根さんのような、特別なはたらきは、なに一つございせん。
- 一四五六 六 一 花さんでも、葉さんでも、日のあたるところや、高いところがおすきなようですが、
- 一四五九 一〇 一 花さん、あなたが、どんなに美しくさいたつて、
- はなし 「放」↓かりつばなし
- はなし 「話」(名) 五五 はなし 話 ↓おおわしにのつたはなし・おとぎばなし・おはなし・じまんばなし・つづきばなし・ひとくちばなし・むだばなし・もじのはなし
- 二三三 七 一 一 こんなはなしをしてゐると、どしんどしんというおとがしてきました。
- 三二五 五 一 一 では、わたしがはなしをしてみよう。
- 四六六 一 「もしもし」と声をかけて、話ができません。
- 四二七 八 一 「雲」に話をするつもりで書きました。
- 四三六 八 一 つぎのような話をしました。
- 四三九 一 一 ここまで話がすすむと、みんなは、めいめいじぶんのことが思ひだされてきました。
- 四四八 八 一 一 むかしむかしの話です。
- 五一六 一〇 一 一 こんな話で、かばんの中はにぎやかです。
- 五六三 五 一 一 おとうさんは、この話をそばでおききに

なって、

五66 9 おじいさんは、うちへ帰って、おばあさん

に、このふしぎな話をしました。

六59 5 どうして、ふだんの話がうたえないのかと  
考えました。

六73 3 「略」と、とんでもない話を持ちだし  
たので、みんながわらいました。

六131 7 うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、  
まるくならんで、話をしました。

六133 10 勝ったものになにもないなんて話はない。  
六139 1 うさぎさんたちがあまりガヤガヤ話をする  
ので、目をさましてしまいました。

七96 6 アラビアンナイトのように、いろいろな  
話がある。

七97 7 春には春の話、秋には秋のものがたり。  
七43 2 たいへんさしでがましいことですが、わ  
たしにちょっと話をさせてください。

八57 7 ぼくはうちへ帰って、おじいさんにその話  
をしたら、

八80 9 あひるの子は、きゆうにおよぎなくなった  
ので、にわとりに思わずその話をした。

九10 2 「劇場音楽の話」をきいた。  
九10 6 その中で、「略」という話がおもしろかつ  
た。

九45 2 三 「小公子」の話にでてる、セドリック  
少年のように、

九91 9 三 もういいじゃないか、そんな話――  
九102 5 三 けんかの話をするのかい。

九121 3 帰り道で、父は次のような話をしてくれた。  
十一54 それにあきると、そのボートをながめて  
は、いろいろな話をしあって楽しむ。

十一55 きょうも、みんなは話に花をさかせてい  
る。

十二11 9 リビングストーンが南アフリカを探けんし  
ていたときの話です。

十二43 9 三 おじいさんからいただいた童話の本に、  
人形が夜中に集まっておどります話がありました  
よ。

十二56 1 おじいさんやおばあさんから聞いた話を  
思いだして、書きのこしておくといいことは、  
十二71 4 このようにして芭蕉につかえながら、は  
い句の話をきくのでした。

十二73 4 話をしているうちに、パラパラと音がし  
て、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、  
十二88 12 話をきくときには、相手の人のいつてい  
ることばをよくききわけ、

る。

十二89 3 自分が話をするときには、

十三29 9 黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげ  
られ、にぎやかな話が続く。

十三42 1 話がうんとある。  
十三44 10 ですから、舞台に出ている人は、四人の  
人と話をしているわけです。

十三45 1 そこで、三郎くんの声と動きだけで、四  
人とそれぞれ話をしているようすを、見せなくて  
はなりません。

十三45 6 「……」を時間的に短くしたり長くした  
りして、電話の話らしくしなければなりません。  
十四19 12 みんなの話を聞きになって、「略」  
とおっしゃった。

十四20 1 三 そうじがすんだら、そのことについて  
話をしよう。

十四34 4 しかし、アインシュタイン博士の話によ  
ると、うちゅうは、けっしてはてしのないもので  
はありません。

十四50 6 このことは、あくる日の新聞に出たマッ  
ケンナの話で、あきらかになったのですが、

十五45 2 話は明治初年のころにさかのぼる。

十五47 4 ブリンクリーは、まんぞくそうに赤絵の  
はちをながめながら、その話のさきをうながした。

十五52 3 話は、第一次世界大戦がたけなわであつ  
たところのことである。

十五55 3 話に聞きいつていたホランド博士は、

十五55 9 三 きょうはきみがまだ生まれないうころの  
日本の話をさせてもらおう。

十五56 10 三 日本留学生第一号とでもいおうか、私  
がはじめて会った日本人について話をしなう。

十五57 4 三 せんばいの教授がやって来て、「略」  
と、やぶからぼうの話をもちだした。

十五75 10 三 「先ほどの話は、ころよくひきうけ  
たよ。」とささやかれた。

十五90 7 三 だれだか、いつかそんな話をしてい  
たっけ。

十五92 1 こんな話をしているまに、  
十五97 4 三 話をしてもいいの。

はなしあい 「話合」(名) 1 話しあい  
はなしあい 「話合」(名) 1 話しあい

はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手  
はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手

はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手  
はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手

はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手  
はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手

はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手  
はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手

はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手  
はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手

はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手  
はなしあい 「話相手」(名) 1 話し相手



五八二 7 なま水をのまないことや、ねるまえにたべないことや、〈略〉などを、話しあいました。

五八四 2 夏休みになにをするか、みんなで話しあいました。

六二二 3 うさぎさんたちは、おさるさんにみんなまつかさをあげようと、話しあいました。

六三九 11 ちっともいいことではないと、うさぎさんたちは話しあいました。

九一六 7 これからいこうとする遠い國のことを、話しあっているのかもしれない。

九八六 2 四人が話しあってしらべ、へんだと思う物は、みなかごの中にいれておきました。

はなしかける 「話掛」(下) 8 話しかける 《一ケ》

九三九 4 下からどんなに大きな声で話しかけられても、きこえないときがあります。

九四三 6 こう話しかけたのは、ばらの花でした。

九四六 6 白ばらの花は、もう話しかけなくなりました。

一〇二六 6 ずんずんおとうさんのそばへきて、さまざまのことを話しかけたり、わらったりしました。

一〇四八 3 道ばたにあるものを、なんでもみつつけて、それに話しかけたり、

一一一七 4 それからそれへと長々と話しかけて、〈略〉しつかりするようにと病人をばげました。

一一一八 3 やさしく話しかけたり、

一五四四 6 ドアをおしあけながら、「〈略〉。」と、じょうずな日本語で話しかけた。

はなしごえ 「話声」(名) 1 話し声

七六〇 1 よつちゃんたちの話し声がする。

はなしだす 「話出」(五) 1 話しだす 《一シ》

一五五八 5 自分から話しだしたホランド博士は、はなしなざる 「話」(五) 1 話しなざる 《一イ》

七八〇 2 いったい、どういうことなのか、くわしく話しなさい。

はなす 「放」(五) 18 はなす 《一サ・一シ・一ソ》

↓あけはなす・てばなす・ふりはなす

一四二 2 うちのなかではなした。

四二七 2 もうしばらくなくてくれたら、かごからはなしてあげるよ。

四九七 9 かわいそうだから、はなしておやり。

五五八 3 はるおは、まだみていたいようでしたが、やっと目をはなして、

五六三 3 おじいさん、わたしを海へはなしてください。

五六八 8 「〈略〉。」とやさしくいって、はなしてやりました。

五七二 1 そうして、青い海へはなしてやったよ。

五九八 8 あした山へつれていって、はなそうと思っているのです。

五九九 4 山へはなしてやりたかったんだけど。

六九九 10 左の手に、めがねのたまを持つて、目から遠くはなした。

九一七 6 それによると、さいたま縣のあるところで、ころみに、しるしをつけてはなしたものだということがわかりました。

九八八 8 はなしてくれったら、ぼくはやるよ。

一一二六 11 いつもその本を手からはなさず、

一一七一 5 目を父親の顔からはなさないで、こしをおろして待っていました。

一一八八 10 チチロは、いよいよよくせわをして、ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでした。

一四四九 1 寒さに氣を失って、またから手をはなさないように、

一五二八 8 右手をはなして、手早く、自分のこしにさしていた短刀をぬいて、

一五二九 3 鳥は、〈略〉、つかんでいた女の子をはなして、あおむけにたおれかかりました。

はなす 「話」(五) 33 はなす 話す 《一サ・一シ・一ス・一ソ》

↓おはなした・おはなした・おはなした・おはなした

三六八 8 白うさぎが いままでのことを はなしますと、そのかたがたは、「〈略〉。」とおっしゃいました。

三八五 5 白うさぎは いままでのことを はなししました。

三九八 2 口ではなしたことは、そのままきえてなくなりませんが、

六七八 1 その夜、ごろろはおとうさんに、この考えついたことを話しました。

六九三 11 新しく思いついたことをみんなに話して、びっくりさせてやろうと考えたからである。

七二七 2 かたを組んで話しながらでいく子ども、

七九五 5 あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。

七三六 6 おかあさん、あおむしのことを、話していたんですよ。

八四九 2 王子は、いままでのわけをこの男に話しました。

八五九 9 そのことを先生に話してみたら、先生は、「〈略〉。」とおっしゃった。

八八七 10 あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どんなに苦しんだか、ここで話すにはあまりにもかわいそうである。

九46 2 ㊦ セドリックは、七つ八つのころでも、せんきよのことを話していますけれども、  
 十16 7 太郎がそばへきて、外国ではどんなことばを話しかたずねるものですか、  
 十16 9 ㊦ そりゃあ、フランスではフランスのことば、イギリスではイギリスのことばを話すよ。  
 十17 7 ㊦ こうしておまえたちに話すようなことばが、思うぞんぶんつかってみたいくなります。  
 十46 2 幸吉は、〈略〉エジソンのもとをたずねて、養殖真珠のつくりかたを、こまごまと話した。  
 十74 1 「略。」と、こまごまと話したとき、  
 十124 6 金次郎は、自分の考えをくり返し話して、母親にすすめました。  
 十178 6 病人がなんだかうれしそうにその話す声に〈略〉耳をかたむけているようにみえたから  
 十184 2 少年は二こと三ことと話をはさんで、家族のようすを話そうとしましたが、  
 十240 3 みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、  
 十254 2 人形がかたむかないように、話すときは人形の顔を前後に動かす。  
 十289 4 話をするときには、その場のようすによくあうように、氣をつけて話さなければならぬ。  
 十290 5 話すことばは、その場その場にあらわれるその人の面影ということもできよう。  
 十293 3 書くことは、話すこととちがって、その場のようすが相手にみえないから、  
 十354 6 その氣持を、だれかに話してみたくてたまらなくなりました。  
 十420 6 外国からはいってきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してください。  
 十444 4 ㊦ そうして、なんでこんなにほがらかで

いられるのか、それを、こう話してやるのだ。  
 十479 7 そのことを友だちに話すと、「〈略〉。」と教えてくれました。  
 十499 7 おばあさんが、〈略〉と、話してきかせたことがあった。  
 十五9 6 ㊦ 子どもみんな早口に話しつつ来る子どもと子ども  
 十五50 5 ㊦ ほかの外国人にも話してあげましょう。  
 十五55 4 ホランド博士は、戦争中で費用が思うようにつかえないことについてくわしく話し、  
 はなせる 「話」(下) 1 話せる 《一セ》  
 十281 1 日本という國をみたこともなく、また日本語をすこしも話せないこの二少年が、  
 はなその 「花園」(名) 1 花その  
 五45 6 ㊦ みんななかよくさきそい 世界の花ぞのかざろうよ。  
 はなたば 「花束」(名) 2 花たば  
 十191 1 看護婦が、小さなすみれの花たばを、ベッドの上のコップの中から取ってきました。  
 十191 10 一方の手で花たばを取りながら、一方の手で目をふきました。  
 はなつ 「放」(四五) 4 はなつ 《一チーッ》 ↓ あけはなつ  
 八33 4 天の川は、なん千なん万という星がかさなりあって、あのようになつとった銀の川のような光をはなつていようにみえるのです。  
 十44 8 幸吉は、自信をもって母を海中にはなつた。  
 十210 11 黒うるしの中に、銀や貝が光をはなつているのは、なんともいえない美しさです。  
 十五4 3 ㊦ 空にはなちしわがそ矢は、あわれいずこに落ちにけん。

はなつみ 「花摘」(名) 1 花つみ  
 八27 3 むすめたちが、樂しげに歌ったり、花つみをしたりして遊んでいました。  
 はなはだ 「甚」(副) 1 はなはだ  
 七43 7 ㊦ はなはだすぎたことかもしれませんが、  
 はなばたけ 「花畑」(名) 2 花ばたけ  
 四70 5 あきの花ばたけとく。  
 五43 7 ㊦ ですから、花ばたけで、よくいっしょにうたいました。  
 はなび 「花火」(名) 1 花火 ↓ せんこうはなび・ばくちくはなび  
 十156 5 ㊦ 花火やほたる、とんぼの目だま、一つ一つ光る。  
 はなびら 「花弁」(名) 2 花びら  
 七59 4 なにかの花びらが、くもの巣にかかってゆれている。  
 十336 3 中庭のあんずがさいて、花びらがホートンへちらちらと降ってくるのも、このころである。  
 はなまつり 「課名」 2 花まつり  
 三2 3 二 花まつり……九  
 三9 1 二 花まつり  
 はなまつり 「花祭」(名) 2 花まつり  
 三9 2 花まつり すみれ、たんぽぽ、れんげそう、花のおやねがうつくしい。  
 三10 8 ㊦ ちょうも 小鳥も たのしそう、きょうはあなたの花まつり。  
 はなや 「花屋」(名) 1 花屋  
 五43 6 ㊦ ぼくのうちは花屋です。  
 はなやか 「華」(形状) 1 はなやか  
 十400 11 マッチは、はなやかにもえあがった。  
 はなよめぎょうれつ 「花嫁行列」(名) 1 花よめ行列

十三36 花よめ行列のラッパの音が、どこかでひびく。

はなれぼし 「離星」(名) 1 はなれぼし

一549 そんなときには、はなれぼしにあるがっこうにはいつて、べんきょうしてくるのです。

はなれる 「離」(下二) 21 はなれる 《レ・レ・ル》↓かけはなれる

三422 みよこさんが、左のかたからはなれて、

表ばたけのよこ道をかえりました。

四427 しみ、列をはなれちゃだめじゃないか。

四512 下からねらわれているときには、ばらばらになって、はなれてとべば安全なのです、

四525 きけんなところを早くはなれよう。

四958 風にふかれてとんでいるうちに、いっしょになったりわかれたり、またいっしょになったりはなれたりする。

六4210 それがほぐれて、一列にビルディングをはなれる。

六523 月はいま雲からでて、大いそぎではなれていきます。

六1009 それは、ここから百メートルもはなれている、向こうの家の屋根であった。

八1611 せみの子からいえば、母親のちぶさにすがったようなもので、とりついたがさいご、ようにそれからはなれません。

八236 やがておきなおったかと思うと、からだはすっかり皮からはなれていました。

九7311 馬車は草地をはなれました。

九948 やまだ、はなれたまま、たかぎの手もとを

みている。

九10811 ぼくたち三四人は、列をはなれて、ま一文子にすべりおりた。

十一7311 医者が、まだとなりのベッドをはなれないうちに、少年は立ちあがりました。

十二83 家をはなれて勉強にでかけていましたが、

十二1612 文雄は立ちあがつてすこしはなれたところからじっとみつめた。

十四149 おかあさんと私とは、おたがいに、それほどはなれてはいないのだ、

十四10110 うれしそうに、楽しそうに、上の方へ、地面から高くはなれて、

十五223 女の子は、《略》、とかく家庭教師の手からはなれて行きそうにしていました。

十五8510 「いちばんふとった幸福」が、テーブルをはなれて、

十五1196 やがてはなれて顔をあげますと、ふたりの目にはなみだが光っていました。

はなわ 「花輪」(名) 1 花わ

十一581 じゅずだま・むくろんじ、赤い、赤いつばき、げんげの花わ、一つ一つつづろ。

はにかむ (五) 2 はにかむ 《一》

八9211 新しいはくちょうは、すっかりはにかんでしました。

十五8211 チルチルとミチルと、《略》とは、はじめはいつて来たとき、すこしはにかんで、

はにわ 「壇輪」(名) 3 はにわ

十二1013 はにわ この人形は、はにわといって古代人のはからほりだされたものです。

十二1014 この人形は、はにわといって古代人のはからほりだされたものです。

十二1023 はにわには、このほか、うまや、いぬや、

鳥などをこしらえたものがあります。

はね 「羽」(名) 24 はね 羽 ↓したばね・りようばね

一233 そこで、りようてをはねのようにうごかしました。

二233 はねのいたんだ大きなちようちよが、けさも、ゆりの花にきていましたよ。

四548 かっちゃんば、はねのつけねをうたれていました。

五1002 よくみると、ねこにひつかかれた羽がぶらりとなって、半分しかひろげられません。

五1072 ほら、羽がだめだから。

六331 おかあさんがすがすが、羽をさか立てて、子がらすをすにひきもどす。

七319 白いえのぐにみどりをとかしたような、美しい羽です。

七311 あ羽をしばつたら、きれいなしるがでそうね。

七323 羽をふるわせている。

八228 羽がぶらりとさがりました。

八238 みるまに、羽はすらりとのび、からだの色もこくなっています。

八242 明かるい光がさつとさすところになると、せみの羽は、ぶるぶるとふるえて、色も、もようも、はつきりとしてきます。

八843 はくちょうはみごとな羽を廣げ、《略》あたたかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。

八8911 そうして、羽をひろげてゆつたりと近づいてきた。

九139 たいへんと、くもが思ったとたんに、ぼさりとこもりの羽にたたかれました。

九1401 ちようちよは、うれしそうに羽をととのえ

ました。

九四二 それから、まっ白な羽をひろげたかと思うと、ひらりひらりと舞いあがりました。

九四七 ちようちよさんは、羽があるからいいな。

一七二 庭の木に小鳥がくれば、その《略》や、羽の色や、形などを、こまかにしらべたいのです。

一七三 はじめ短い羽を動かしてピッピッと鳴いていたときには、

一八四 せんだって、ふと羽を動かしてみたら、ピッピッという音がしました。

一八六 ありが、ちようの羽をひいて行く。

一九二 三メートルもあるような羽をひろげた大きな一わのやまわしが、

一九三 まわりには、鳥の白い羽が雪のようにとびちりました。

はねあ・げる 「撥上」(下一) 1 はねあげる 《一グ》

六三 かし、一どははねあげられるが、もんどりうって、また、ひげの中におちる。

はねお・きる 「跳起」(上一) 1 はねおきる 《一キ》

四八 雪だという、あさ早くはねおきて、《略》、雪かきをなさる おじいさん。

はねおと 「羽音」(名) 1 羽音

一三 一三 一三 えんどう・そらまめみな花つけて、羽音高くみつばちがとぶ。

はねかえる 「跳返」(五) 3 はねかえる はね返る 《一ツ・ール》

三 四 七 まさお「はねかえる。」みんな「はねかえる。」ただし「山の山びこ。」

三 四 八 みんな「はねかえる。」ただし「山の山びこ。」

一七三 パラパラと音がして、白い小さなつづつ

ぶのものが落ちてきて、子どもたちや、芭蕉の足もとに落ちて、はね返ったりころがったりします。

はねちゃん (名) 2 はねちゃん

一五二 しろちゃん、はねちゃん、《略》、みんなわたくしのうちにいたきょうだいです。

一六五 はねちゃんも、ものを はっきり いいこになりました。

はねとばす 「撥飛」(五) 1 はねとばす 《一シ》

一七九 次郎かじやは力があり、茶だなの湯飲みをはねとばして、こなみじんにいたしました。

はねとぶ 「撥飛」(五) 1 はねとぶ 《一ビ》

一八三 ボールはたましいのこもった生きもののようになつて、はねとびました。

はねまわる 「跳回」(五) 3 はねまわる 《一ツ・リ》

一五九 なかよくテーブルについて、飲んだり、たべたり、はねまわったりしていました。

一六〇 チルチル はねまわりながら、《略》。

一六一 ひら手でたいたたり、いそがしく足でけつたりして氣ちがいのようにはねまわります。

はねる 「跳」(下一) 10 はねる 《一ネ・ネル》

一八六 うさぎ、うさぎ、なにみてはねる。

一九二 十五やおつきさまみてはねる。

二四 二ばんの「はねておどれば」のところは、ぴよんぴよんとびました。

三二 五 りすはしらかばの木にはねて、「高い、高い。」といいました。

うちじゅうを、とんだりはねたりしました。

九六 四 そのとき、いちろうは、足もとでパチパチしおのはねるような音をききました。

一五五 ことばははねる、つまめばにげる。

一五六 てんとうむしのように、みずすましのよう、一つ一つはねる。

はは 「母」(話手) 20 母

七三 四 母「なにしてるの。」

七三 七 おかあさん、あおむしのことを、話していったんですよ。」母「そう、それもお勉強ですね。」

七二 五 先生も、あおむしをかっていらっしゃるって。」母「あおむし、大きくなりましたね。」

七二 九 母「はっぱと同じ色になったのね。」

七二 六 黄緑色になっちゃった。」母「さなぎになったんですよ。」

七二 七 母「先生は、いいことをおっしゃいましたね。」

七二 八 はるおは。」母「はるおは、さつきから、おもてで遊んでいますよ。」

七二 八 兄「おかあさん。」母「――」

七二 八 きょうね、國語の時間に、先生にほめられたの。」母「どうして。」

七二 九 あおむしがさなぎになったところを書いたのが、よくできたって。」母「それはよかったね。」

七二 九 よんでみましょうか。」母「よんでちょうだい。」

七三 四 母「いま、にいさんに日記をよんでもらっていたところよ。」

七三 一 母「どうしたんです。」

七三九 母「まあ、まあ。」

七三九 母「白いえのぐにみどりをとかしたような、美しい羽ですこと。」

七三二 母「おかあさんも、こんなところをみるのは、はじめてですよ。」

七三二 羽をふるわせている。「母」空気にふれて、すこしずつのびるのね。」

七三二 ここからだして、庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょうね。」母「それがいいわ。」

はは「母」(名) 30 母

四一三 うらしまは、父や母のことを思いだして、きゆうに家へかえりたくなりました。

七三二 母は、ふたりの兄弟をながめている。

九三二 母と、おぼと、兄と、妹と、ぼくの五人で、三日間かかりました。

九三二 下では、兄や、母や、おぼが、「略。」とか、「略。」などいわれたが、

九四二 母やおぼがくわをいれるあとから、ぼくたちはむちゅうになつていもをひろいました。

九四二 ぼしがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしとおし、のき下につるしてくれまう。

九四二 母やおぼまで子どものように、かきの葉を—まい—まいならべて、

二二七 ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に乗っている。

二二九 父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。

二二九 このあいだに立つて、佐吉をはげましたり、なぐさめたりしたのは、母であつた。

二二九 試運轉の日、その織機をあやつて、りっぱにぬのを織つてみせたのは、佐吉の母であつた。

二二九 母がこしらえてくださったパンを、

二二九 弟が卒業するので、私が、母にかわつてました。

二二九 「おかあさん。」といつて、母のそばへかけよりました。

二二九 母ははたを織つていましたが、孟子の顔を見ると、「略」小がたなをとりあげました。

二二九 孟子がびっくりしていると、母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切つてしまいました。

二二九 母は、「略。」といいました。

二二九 自分には父もある。母もある。

二二九 母をはじめ、うちの人たちは大喜びです。

二二九 私は、近づいてくる足音を感じましたので、それが母だとばかり思いこんで、

二二九 私は子どもらしい喜びと得意さに大はしやぎで、二階から母のところへかけおり、

二二九 「父」「母」「妹」「先生」などのことばがあつたことを思いだします。

二二九 家にはひとりの母がある。

二二九 母にそのからだをみせるにはしのびない。

二二九 ふるさとにのこした母へ送つたつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。

二二九 老いた母を思う子の真情は、「略」、私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。

二二九 ぶんげつみて子といふ母の黒いこうもり

二二九 十の春をむかえた私は、母や多くの弟妹たちをあとに残し、「略」京都に移つた。

二二九 『母の愛の喜び』です。

二二九 「喜び」たちは、「母の愛の喜び」を手をたいてむかえます。

はは「幅」(名) 5 はは

九八四 ます、一メートルぐらいのはばで、東西に四五十メートルほつてみることにしよう。

二二九 いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切つて、まん中にあなをあける。

二二九 古ぎれを、はば二センチ、長さ三十センチぐらいにつきあわせて、図の形に切る。

二二九 まつすぐに長く切るのこぎりは、廣いはばをもっている。

二二九 こびきの大のこははばが廣いし、

ははあ(感) 4 ははあ

二二九 ははあ、ぞうはかべとおなじだ。

六八四 ははあ、この木だ。

八八四 ははあ、そうだ、

二二九 ははあ、これが鳴るんだなと思つてやつているうちに、

ははうさぎ「母兔」(名) 3 母うさぎ

七九八 子うさぎと母うさぎのめかたを計つてみました。

七九八 母うさぎは4kg、子うさぎは、おもいので320g、かるいので260gでした。

七九八 母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭をそろえて、なかよくにんじんをたべていました。

ははうし「母牛」(名) 2 母うし

二二九 母うしのそばに立つてゐるんだが、まだあかんぼうで、

二二九 まだあかんぼうで、母うしがしたでなめると、よろけるんだ。

ははおや「母親」(名) 17 母親

八八四 これは、木からいうとめいわくしごくなことですが、せみの子からいえば、母親のちぶさにすがつたようなもので、

二二九 母親が、両手をのばしてついでくる。

十一 23 7 母親は、金次郎と相談して、すえの子どもを親類にもらってもらいました。  
 十一 23 10 母親も、子どもをよそへやってから、夜になると、ため息ばかりついてねむれません。  
 十一 24 6 金次郎は、自分の考えをくり返し話して、母親にすすめました。  
 十一 24 9 母親は、〈略〉、その晩のうちにいつて、子どもをつれてきました。  
 十一 27 10 母親と相談して、戸をしめきって、息をこらして、だれもいないふうをしていました。  
 十一 28 1 とこで、そのつぎの年、母親が、四五日の病気で死んでしまいました。  
 十一 28 5 そこで、ふたりの弟は母親のさとに、金次郎は親類のまんべえさんのところに、あずけられることになりました。  
 十一 64 9 母親は、その知らせをみるとがっかりしましたが、  
 十一 72 2 手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど――  
 十一 78 2 いろいろのことを――母親のことや、妹たちのことや、〈略〉などを――  
 十二 8 3 家をはなれて勉強にでかけていましたが、ある日のこと、母親がなつかしくなり、  
 十四 12 5 母の友だちで、母親が十年このかた、この式のランプをつかっているというのが  
 十四 12 8 母の友だちの母親は、このランプに満足しているそうです。  
 十四 90 8 その上ぐつは、母親のものだったので、この子にとっては大きすぎた。  
 十五 112 7 母親はだれだって、子どもをかわいがるときにはお金持なのですよ。  
 はばたき 「羽撃」(名) 5 はばたき 羽ばたき

四 57 2 かっちゃん、立ちあがって はばたきをしたので、みんなは 大よろこびでした。  
 四 62 4 しずかな やぶの ところで、 はばたきの音がきこえます。  
 八 24 8 はばたきをして、すつとびたったかと思うと、  
 九 128 8 あぶは、力いっぱい羽ばたきをして、すいとにげていきました。  
 十五 25 11 さすがの大わしも〈略〉重さにたえられなくなつて、羽ばたきも苦しげに、しだいしだいに、下の方へ落ちるように舞いおりて行きました。  
 はばたき・する 「羽撃」(サ変) 1 羽ばたきする  
 《―スル》  
 十五 29 2 すると、鳥は、不意のしゅうげきにおどろいて、思わず羽ばたきするとともに、  
 はばた・く 「羽撃」(五) 1 はばたく 《―イ》  
 十一 15 7 オルガンのキイから、赤い、青い、金色の、ちがった形の小鳥が、はばたいてでて、  
 ははたち 「母達」(名) 1 母たち  
 九 38 11 母たちもほくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけてやる方法を知らなかったで、  
 ははのあい 「母愛」(話手) 11 母の愛  
 十五 109 11 母の愛「チルチルや、それから、ミチルや。  
 十五 110 6 でも、あなたは、うちのおかあさんににているけれども、ずつときれいだもの。」母の愛  
 「そりやあそうともさ。  
 十五 111 1 きめなの、銀なの、それとも眞珠なの。」母の愛「いいえ、これは、おまえたちのほおずりと、おめめと、だつとで織ったのですよ。  
 十五 112 4 あの戸だなの中にはいつているの。」母の愛「いいえ、いいえ。

十五 113 11 ここでは、うちにいるときのよう、しごとをしないの。」母の愛「いいえ、それは同じことですよ。  
 十五 114 5 でも、うちにいるときよりか、ずつとお話ぐうまいな。」母の愛「うちにいるとね、あんまり用が多すぎて、ひまがないのだよ。  
 十五 114 11 おかあさん、ここにいないなら、ぼくもここにいたいや。」母の愛「でも、それは同じことですよ。  
 十五 116 5 母の愛「あの人、だれなの。」チルチル「光さ。」  
 十五 116 7 光さ。」母の愛「私、あの人を見たことがなかったよ。  
 十五 117 2 母の愛「あの人、私たちが、あの人をずいぶん待ちわびてゐることを、知らないのだろう。  
 十五 119 2 母の愛「光をだきながら、〈略〉。」  
 はははは (感) 1 はははは  
 十二 44 3 母の愛「はははは――でも、動く人形だつてあるよ。  
 はははは (感) 1 ははははあ  
 六 25 3 荷物がありか、ありが荷物か。」みんな「ははははあ。」  
 ははひ (感) 2 ハ・ハ・ヒ  
 十三 49 9 メアリとスーザンとエミリとが、かわい口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわらう。  
 十三 50 4 うれしいハ・ハ・ヒを、合唱しましょう。  
 ぱびゅべ 1 ぱびゅべ  
 六 112 9 おしまいのぱびゅべ、ぱびゅべにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではない  
 六 112 9 おしまいのぱびゅべ、ぱびゅべにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではない

はま〔浜〕(名) 4 はま

五507 〔圖〕 かげの下には 白いはま、白いはま。

五508 〔圖〕 かげの下には 白いはま、白いはま。

八562 朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎり、美しい砂地がみわたされた。

十五93 〔文〕 はまの子ら火をたく青き月夜となり

はまぐり〔蛤〕(名) 1 はまぐり

十二97 〔古〕 古代の人は、はいがい、はまぐり、〔略〕などをたくさんたべていたようです。

はまべ〔浜辺〕(名) 4 はまべ

三434 ある日、はまべにでてみると、わにざめがいましたので、

三463 はまべでしくしくなっていました。

四126 〔圖〕 白いはまべのまつ原に、波がよつたりかえつたり。

四134 〔圖〕 白いはまべのまつ原に、波がよつたり、かえつたり。

はまりあう〔嵌合〕(五) 1 はまりあう 《ーッ》

六102 二本のつつは、うまくはまりあつて、長くのぼしたりちぢめたりすることができ。

はまる〔嵌〕(五) 2 はまる 《ーッ・ール》 ↓ あてはまる

六101 ちょうど、めがねのたまがはまるくらいの大きさにまいて、

六107 きちんとはまったとき、また紙を糸できりきりまいて、動かないようにした。

はみだす〔食出〕(五) 1 はみだす 《ーシ》

八226 すると、中から、みずみずしい、やわらかい、せみのからだのはみだしてきました。

はむ ↓ あせばむ

はめこむ〔嵌込〕(五) 2 はめこむ 《ーン》

四92 よくみがいたまるいかがみを、この町

に はめこんだようです。

十二110 また、なまりや貝などをはめこんだものもあります。

はめる〔嵌〕(下) 3 はめる 《ーメ》 ↓ あてはめる

五715 おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴかぴか光るすきんをかぶり、金のうでわをはめ、

六101 6 めがねのたまがはまるくらいの大きさにまいて、その一方のはしに、めがねのたまをはめた。

十五113 〔圖〕 小さな指をはめている。

ばめん〔場面〕(名) 4 場面 ↓ いちのばめん・いちのばめん・このばめん・さんのばめん・しのばめん・のばめん・ろくのばめん

九141 しばいで、ゆめをみていた人が、にわかに目をさます場面を演ずることがある。

十四867 いますこしふかく考えれば、さらにももしろい場面が発見されるように思われる。

十四86 〔圖〕 ばんそうの音楽や、場面の組みあわせと説明のことばなどによって、

十四89 5 こんな場面を、映画独特の手法によって、おもしろく編集できないだろうか。

はもの〔刃物〕(名) 2 はもの

十四79 4 木のほうは〔略〕もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、

十五353 ぼうきや、石や、貝がらなどに、はものなどでするしをつけてしめすことも行われた。

はや〔早〕(副) 4 はや

九117 〔圖〕 青さをいれやうたればいけのふなはや青き葉のかげにきておる

十二608 もうあとわずかというところで、日ははや西の山に傾いて、くれそうになってきた。

十三46 こずえの、細い、細い小枝のあみ目の先

にも、はやふつくと、季節の命はわきあがって、

十三55 春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ日のしま目ようにもちらちらとして、

はやい〔早〕(形) 89 はやい 早い 《ーイ・ーイ・ーイ》 ↓ あしはや・くちばや・すばやい・てばやい

二453 〔圖〕 はやく、せんどろさんをみせてください。

二641 だんだんはやくなる。

二645 〔圖〕 だんだんはやくなる。

二646 〔圖〕 はやくなる。

二681 〔圖〕 はやくいこう。

二682 〔圖〕 はやく、はやく。

二682 〔圖〕 はやく、はやく。

二707 〔圖〕 はやくいらっしゃあ。

二276 おどろいたのは、そのふねの 早い ことです。

二2710 〔圖〕 なんと 早い ふねだろう。

二286 〔圖〕 鳥のように 早い ふねだから、はやとり という 名をつけよう。

二347 〔圖〕 わたくしも、早く 大きくなって、あんなきれいな花をかきたいとおもいました。

二486 〔圖〕 早く 川の水でからだをあらって、がまのほをして、その上にねるがよい。

二971 はやく かくことも、ゆつくり かくことも できます。

二1006 だれよりも はやく 山に いった、〔略〕。と、竹やぶを みまわして いますと、

四4210 〔圖〕 きみ、きみ、じぶん かってに 早く とんで いったあこまるよ。

四525 〔圖〕 きけん ところを 早く はなれよう。

四528 もうふのように なって、 かつちゃんを さ

さえながら、できるだけ早くとびました。

四63 1 会 「さあ、早く、早く。」

四63 1 会 「さあ、早く、早く。」

四66 4 「早口あそび」これは、いいにくいことばを みつけて、それを まちがえないで、早くいって あそぶのです。

四89 8 雪だという、あさ 早く はねおきて、

四100 10 会 早くうちへ おかえり。

五106 6 会 ずいぶん早いね、にいさん。

五28 2 会 しんきちか、早かったね。

五54 5 会 はるおさんは目が早いね。

五56 11 会 ねえさん、早くみせて。

五66 7 会 金のさかなさん、早くお帰り。

五96 10 会 まだすこし早いようだ。

五101 6 「略」と、早く、おそく、高く、ひくく、いっしょうけんめいにまねをします。

六36 5 会 早く、早く、あつ。

六36 5 会 早く、早く、あつ。

六51 9 会 お月さまが早く走っているね。

六88 4 会 さあ、早く船にお乗りなさい。

六102 11 会 早く、早く。

六102 11 会 早く、早く。

六120 9 会 早くかわくといいな。

六134 5 どうせ、足の早いことにかけては、しかさんにかないません。

七16 6 会 先生、早くでかけましょう。

七23 4 会 おさらいを早くすませてから、お遊びなさい。

七33 3 会 にいちゃん、早くいこう。

七41 7 汽車は、かなり早く走っているので、青年のからだはゆれていたが、

七78 5 会 どこにいるか、早く教えてください。

七85 9 会 早くいってらくだをさがしなさい。

七91 7 麦をやったら、白いうさぎは、早くたべたのか、黒いうさぎの上に乗って、たべました。

七98 3 朝早くいってみたら、子うさぎは巣の中でねていて、

八77 朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しいものです。

八56 2 朝早くはまにでみると、目のとどくかぎり、美しい砂地がみわたされた。

八76 5 できるだけ早くぬま地をにげていった。

八86 2 あくる朝早く、ひとりの農夫が通りかかった。

八94 9 こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるといふことです。

八97 5 水にひたしたほうが、1週間早くできました。

九18 4 つばめは、鳥の中でも、たいへん早くとぶ鳥です。

九21 10 なるべく早く南のあたかところへ運ぶために、飛行機をつかうことにしました。

九40 3 手 会 あぶないから、早くおいておいで。

九43 5 手 朝早く庭にでて、

九49 9 会 やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方へとんでいきましたよ。

九52 3 会 やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方へとんでいきました。

九62 2 会 おい、さあ早くベルを鳴らせ。

九72 7 会 どんぐりを二リットル早く持つてこい。

九72 8 会 二リットルにたりなかつたら、めつきのどんぐりもませてこい、早く。

九73 4 会 よし、早く馬車のしたくをしろ。

九139 11 会 さあ、早くとんでいけがいい。

十21 12 会 早く、あの野原で、遊びたいな。

十34 3 そのために、いまのうちに、早く織機を進歩させておかねばならない、というのである。

十34 9 機械で動かせば、もっと早く織ることができし、

十61 11 たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きくなります。

十62 1 たけのこは、どうして、あんなに早くのびるのでしよう。

十一22 2 これを持って、朝早く工事場へいきました。

十二24 9 民ちゃんをなんとかして早く歩くようにしてやりたいものです。

十二24 10 早く、いえるようにしてやりたいものです。

十二25 1 わたしも早くそれを覚えたいと思います。

十二27 4 たいへんおそいようですが、いざりだすとなかなか早いものです。

十二37 1 別の手に、はじめのはゆっくりと、次には早く、「水」という字を書いてくださいました。

十二71 1 毎朝早くきては、芭蕉のおきないうちに、いどから水をくみあげたり、

十二71 10 芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。

十三22 8 会 ダルガス、おまえがくれるといった材木を、さあ早くもらいたい。

十三31 12 朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ歩いて来る。

十三39 6 会 あいたいな、早く……はい、四時ね。

十三39 7 会 早く帰ってくださいね……

十三42 1 会 六時ごろ……もっと早くおいでよ。

十三42 9 会 おみやげより、早くきみの顔が見たいよ。



十四1512 早 そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早くたつでしょうから。

十四668 すぐ上から大きなうずができて、それが、かなり早くまわりながら、のぼっていきます。

十五264 一こくも早く谷底の地面へおりてしまわなければならぬ。

十五3012 その石を取るが早い、〈略〉あくまの胸をめがけて、全身の力をこめて投げつけました。

十五651 〇 おじさん、早く歩いてよ。

十五685 〇 みんな早く出でおいで、満ぼうが来たよ。

十五1174 〇 みんな早くいらっしゃいよ。

はやがってんする「早合点」(サ変) 1 早がつてんする《一シ》

八44 西洋の子どもだろろうなどと、早がつてんしてはいけませんよ。

はやく「早」(名) 4 早く

四436 けさも早くから、三十ばの がんは 目をさました。

十三569 〇 ラファエルは、ウルピノというところ

十五552 〇 恩師ジョルダン博士は、そのためには

十五6510 〇 朝早くからそれをガラガラとひきまわす

ので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。

はやくち「早口」(名) 2 早口

十一588 〇 〈略〉と、早口にすらすらいえるように

十五96 〇 〇 子どもみんな早口に話しつつ来る子

どもと子ども

はやくちあそび「早口遊」(名) 2 早口あそび

四662 〇 「早口あそび」これは、いいにくいこと

ばを みつけて、それを まちがえないで、早く

いつて あそぶのです。

四677 〇 一組であつめた「早口あそび」。

はやくち「早」(副) 1 早くも

十二843 〇 かつたをのんで試合をみているうちに、

早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、

はやさ「速」(名) 7 はやさ 早さ

二668 〇 うごかす はやさにかわりはない。

八345 〇 この早さで計算しますと、太陽から発した

光が、地球にとどくまでには、

九185 〇 汽車や自動車もかなわないくらい早さで

すから、

九1091 〇 すばらしい早さに、からだもスキーも一つ

になつて、ビュウとうなる。

九1123 〇 すばらしい早さだ。

十四678 〇 高い柱の形になり、たいへんな早さで回

轉するのを見ることがあるでしょう。

はやし「林」(名) 12 林 ↓ まつばやし

四276 〇 〇 林のむこうの一本道まで、かけっこを

しようね。

四5310 〇 みずうみの 島には、こんもりとした 林

がありました。

四541 〇 〇 がんの なかまは、この 林の 中におりま

した。

四623 〇 〇 かつちゃん、もう 一ど 林の おくをさ

がしにいきました。

八284 〇 〇 林の中にごてんがあつて、中から、はたを

おる音がひびいてきます。

八584 〇 〇 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺

の屋根や停車場が目についた。

九11310 〇 〇 林をぬつて長いきよをすべるのは、ほん

とうにゆかいであつた。

十201 〇 〇 村の林の上に、大きな半円形のにじがか

かつている。

十三2311 〇 〇 ユートランドのあれ地には、おいしげつ

たみみの林が見られるようになりました。

十三2410 〇 〇 ユートランドのあれ地は、大みみの林が

しげつたために、こえた田園となりました。

十三2412 〇 〇 そればかりでなく、しげつた林は、海岸

からふき送る砂ぼこりをふせき、

十五377 〇 〇 「木」を二つならべて「林」、三つ重ね

て「森」が作られた。

はやし「離子」(名) 1 はやし

十三319 〇 〇 さるまわしは、さるをつかったり、〈略〉

はやしをいれたりしなければならぬので、

はやしたてる「離立」(下一) 1 はやししたてる

《一テ》

十二723 〇 〇 「雪やこんこん、あられやこんこん。」

などと、はやしたてていました。

はやす「生」(五) 1 はやす 《一シ》

七326 〇 〇 おや、ひげをはやしてゐる。

はやす「離」(五) 2 はやす

はやとり「課名」 2 はやとり

三25 〇 〇 はやとり……二二二

三221 〇 〇 はやとり

はやとり「早鳥」(名) 2 はやとり

三287 〇 〇 鳥のように早いふねだから、はやとり

という名をつけよう。

三289 〇 〇 そののち、はやとりは、たくさんの米や、

麦や、豆をつんで、海をわたりました。

はやみち「早道」(名) 1 早道

十7312 〇 〇 「ぶす」をたべて死ぬのが、いちばん早

道と思つたのです。

はやる「流行」(五) 2 はやる《ーラール》

四78 わるいびようきはやるらないように、

十三912 でんせん病がはやると、ほうき星が出たからだといたり、

はら「原」 ↓くさはら・くさはらみち・すなはら・のほら・まつばら・みほのまつばら

はら「腹」(名) 16 はら 腹

三103 おじいさんは、きもちのわるいときでも、はらの たつときでも、この かぐやめのかおをみると、すぐなおりました。

七149 「腹がいたみでした。」

七1410 「腹をたてるな。」

七1411 「腹に思っていることと、いうことが、ちがう人がある。」

七151 「腹をかかえてわらった。」

七152 「腹のすわった人だな。」

七153 「腹」ということばを、いろいろにつかつたばあいを、しめたものです。

七411 私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、せなかから、腹までふりまかれて、

八2210 腹の下の方だけが皮にかくれています。

九605 やまねこは、ひげをぴんとひっぱって、腹をつきだしていました。

十五241 その人は、《略》わしのせにしがみついて、両足で鳥の腹をしめつけるようにしています。

十五2412 両足で鳥の腹をしめつけ、

十五257 両足でいっそうはげしく鳥の腹をしめつけました。

十五6210 小さな声でうったえる私のくりごを耳にしたお婆さんは、腹をかかえてわらいだした。

十五8710 腹のへらないときに物をたべる幸福で、

十五889 「はちきれそうなわらい」が、腹をかかえながらおじぎをする。

ばら「薔薇」(名) 17 ばら ↓しろばら・のばら・べにばら

四773 む——麦の花に、ばらの花。

九1343 まっ白なばらが、たくさんさいていたのです。

九1346 目のまえのばらの花が動いています。

九1411 あたりには、やはりばらの花のにおいがしていました。

九1415 今夜は、ばらのかけでねむることにしようかな。

九1436 こう話しかけたのは、ばらの花でした。

九1442 いままた、ばらの花のやさしいことばをきくこともできた。

九1446 ちょうちよにしても、ばらの花にしても、なんとしずかなくらしをしているのだろう。

十五108 ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でてとぶ見ゆ

十五144 目をあけてつくづく見ればばらの木にばらがまっかにさいてけるかも

十五144 ばらがまっかにさいてけるかも

十五146 風くればばらはたちまち火となれりゆれにゆるるか照りそう風に

十五151 おどろきてわが身も光るばかりなり大きなばらの花照りかえる

十五153 ただみればこれかきそめのばらの花

おどろきて見ればその花動く

十五155 ひるすぎていよよにあかきばらの花いよよに重くかたむきふかむ

十五157 大きななにごともなきばらの花ふとのはずみにくずれたりけり

十五953 「ばらの目ざめ」とか、「水のはおえみ」とか、《略》などがあらわれます。

ばらいろ「薔薇色」(名) 3 ばら色

六4010 タやけがばら色にこくなる。

十四403 ばら色にわらっている。

十五945 舞台は清らかな、こうごうしい、ばら色の美しい光に照らされます。

はらう「払」(五) 4 はらう 《ーイーウ》 ↓おちつきはらう・きりはらう

五808 竹のさきにほうきをむすびつけて、てんじょうのくものすをはらいしました。

九915 たかぎの服のほこりをはらいながら、十一276 百文はらうと、おもしろい藝をしてみせられます。

十五4812 職人のちんぎんや材料のお金をはらうために、家の道具を賣らなければならなかった。

はらす ↓なきはらす

はらだ「人名」 1 はらだ

六616 (はらだ)

はらだち「腹立」(名) 1 腹だち

十二3511 ただ、腹だちの原因がとりのぞかれたという満足を覚えたばかりでした。

ばらのはな「題名」 2 ばらの花

十五28 ばらの花

十五141 ばらの花

ばらばら(形状) 4 ばらばら

四425 列の かたちを かえても、ばらばらになつてしまう ことはありませんでした。

四511 下からねらわれている ときには、ばらばらになつて、はなれて とべば 安全なのです

四514 だれも、ばらばらになつて、にげようと

するものはありません。

七二四 ひとりびとり、ばらばらにわかれて、  
そつとね。

ばらばら (副) 2 バラバラ ばらばら

九四九 すきとおった風がザアツとふくと、くりの木はバラバラと実を落しました。

十一三七六 あまがき・しぶがき赤くなり、くりもばらばら落ちだした。

ばらばら (副) 2 バラバラ

九五四 くりの木は、だまってまた実をバラバラと落しました。

一二七三 話をしているうちに、バラバラと音がして、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、

はらはらする (サ変) 1 はらはらする 《ーシ》

十一七九六 希望と、《略》失望とのあいだで、たえずはらはらしていました。

ばらばら (感) 1 バラバラ

三九五 にわかにバラバラバラ、ポトポトポトというおとがきこえました。

はらまき (腹巻) (名) 1 はらまき

五八二 夜は、はらまきをきちんとして、ねびえをふせぐこと、

ばらまき (蒔) (五) 1 ばらまき 《ーカ》

十三三三 青みがかった明かるい夜空に、なんきんだまのような星がばらまかれて、

はり (針) (名) 4 はり 針 ひとりばり・つりばりのゆくえ

八五六 もみのものさのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。

九八二 針みただね。

九八五 それには、こんな針や、もりなどがあります。

九三二 みつばちはだいじな針をだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。

はり (張) しかぶ張り・みはりばん  
はりあげる (張上) (下二) 2 はりあげる 《ーゲ》

八八六 おかみさんは声をはりあげ、火ばしであるひるの子をうった。

一五九九 もう一つの「幸福」のむれ、《略》、ありったけの声をはりあげて、「《略》」と歌い、

はりあわ・せる (張合) (下二) 1 はりあわせる 《ーセ》

六六四 かべ新聞の大きさは、わら半紙を四まいはりあわせたものです。

パリ (地名) 7 パリー

一四五九 かつて、パリーの眞珠商たちが、幸吉の手になる養殖眞珠は、まがいものであるといった。

一四五五 文学修業のためにパリに出て、市役所のガス係という職についたとき、

一四六四 パリー、千九百七年四月十日 おかあさんとちよつとお話をしようと思います。

一四六六 私は短い旅をしたあとで、七時にパリに着きました。

一四一三 パリー、千九百七年四月十一日

一四一三 パリー、千九百七年四月十六日 おかあさんのことを思っています。

一四一六 パリーにある、なにかさういったものがご入用のときは、

はりかた (張方) (名) 1 はりかた

一四一七 くもがのきに果をかけることがあれば、果のはりかたなどを、しらべておきたいと思います。

はりかた・める (張固) (下二) 1 はりかためる 《ーメル》

一二五三 日本紙を細長く切つて、一まい一まいによくのりをつけてはりかためる。

はりがね (針金) (名) 2 はりがね

一四二七 はりがねが六本あることまでわかる。

九二〇 たくさんのはりがねがはりまわされて、つばめたちのとまるところがつくられました。

はりきる (張切) (五) 1 はりきる 《ーツ》

一八八九 ぼくらのはりきっているとき、ぼくらのつかれているとき、

はりだす (張出) (五) 1 はりだす 《ーサ》

五七三 つぎのような文が、はりだされました。

はりつ・ける (張付) (下二) 5 はりつける 《ーケ・ケル》

六八四 それを切りとつて新聞にはりつけました。

六八三 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。

六八七 はりつけるのも、まがっているのでもんだうでしたが、

六八八 いろいろにくふうして、うまくはりつけました。

一三三五 正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。

はりまわ・す (張回) (五) 1 はりまわす 《ーサ》

九二〇 たくさんのはりがねがはりまわされて、つばめたちのとまるところがつくられました。

はる (題名) 1 春  
十一三〇 春  
はる (春) (名) 34 春  
二六五 さあ、春をむかえにでかけましょう。  
二六六 どこかで、春の音がするよ。  
二六七 「しゅしゅしゅしゅ」をつづけながら、春をさがす。

- 二 69 2 ㊦ たしかに春の声がきこえる。  
 三 6 4 ㊦ 春。  
 三 6 5 ㊦ 春、春。  
 三 6 5 ㊦ 春、春。  
 三 109 1 ある年の春のころから、月のきれいなばんになると、かぐやひめは、空をながめてはためいきをつき、  
 四 124 2 春 三月は ひなまつり。  
 四 135 2 ㊦ 一つの まにやら 天人は、春のかすみにつつまれて。  
 五 39 3 ㊦ 冬がすぎて、春がきたからです。  
 五 46 9 春になったばかりだから、うまく鳴けないのだろう。  
 五 60 7 ㊦ この春まいたのです。  
 七 9 7 ㊦ 春には春の話、秋には秋のものがたり。  
 七 9 7 ㊦ 春には春の話、秋には秋のものがたり。  
 七 69 3 たつぷりと、春は、小さな川にまで、あふれている、あふれている。  
 八 14 8 春がきてても、たまごはそのままでした。  
 八 88 2 美しい春であった。  
 八 88 8 ここは、ほんとうにきれいで、春の喜びがみちあふれていた。  
 九 24 8 日本に春がくると思うと、もう矢もたてもたまらず、北をさしてすすむのです。  
 九 24 9 その小さな胸には、わか葉のもえる日本の春の美しさを感じていっているのでしょう。  
 九 25 2 春になると、だれもが、このめずらしいお客の帰ってくるのをまちがれています。  
 十一 12 3 春がさって夏がくる。  
 十一 28 12 あくる年の春、黄色い花がさいて、たくさんの実がつけました。  
 十一 42 8 ㊦ うめもほころび、こちふけば、春も目

- さきに近づいた。  
 十三 5 5 春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ日のしま目もようにもちらちらとして、  
 十三 5 10 長くかなしみにしずんだものにも、春は、希望の帰ってくるとき。  
 十三 5 12 新しい勇氣や空想をもって、春は、また、楽しい船出のほめのを、高くかかげる季節。  
 十三 6 11 ああ、そのさかな春のきざしは、よもにあらわれて、  
 十三 15 5 これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。  
 十三 32 3 春は、なえ賣りがやって来る。  
 十四 83 7 春の光がさしそめて、雪どけ水が流れだすところ、  
 十五 66 9 十の春をむかえた私は、〈略〉、ひとり父につれられて、景色の美しい京都に移った。  
 十五 103 4 ㊦ これは、『春の幸福』で、きらきら光る青いたまの色をしています。  
 はる「張」(五) 14 はる《ツ・リー・ル・レ》  
 ♪がなんぼる・こわばる・つつばる・ひつぱりだす・ひつばる・ふんばる・みはる  
 三 21 6 できあがったものをうしろのかべにはりました。  
 三 32 5 ㊦ あがったところのかべには、えがはってあります。  
 五 15 6 切手をはってもらうのです。  
 六 45 5 「へのへのもへ」のかかしが、むねをはって、目をむいて、たんぽをみわたしている。  
 八 98 5 いねがよく根をはって育つように、小石をひろい、土のかたまりをくぐらいて  
 八 100 6 根が横へはるので、廣いところのほうが育

- ちがよいと思いました。  
 九 30 1 ㊦ くれていく巣をはるくものあお向きに  
 九 34 9 ㊦ それが、深いになると、一メートルあまりも根をはっていました。  
 九 128 2 ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、あみもはることはできませんでした。  
 九 144 10 あみをはり、かくれていて、  
 十 4 7 高い木が大きく枝をはって、〈略〉こずえのさがが、かすんだ空の中にとけこんでいる。  
 十一 24 1 ㊦ おちちがはって困るの。  
 十一 41 4 ㊦ もちつきすませて、しめなわをはり、一夜明ければうれしいはつ日。  
 十四 41 10 ㊦ 胸をはれ。  
 はるえ「人名」 4 はるえ  
 六 70 2 ごろうは、妹のはるえといっしょになって、大きな雪だるまを作りました。  
 六 71 7 「〈略〉。」と、はるえは本氣になっていた。  
 六 71 8 はるえは、まえに「こくご」でならった「よみかき」のところを、ふと思いました。  
 六 76 2 はるえはそれを見て、「〈略〉。」とききました。  
 はるえさん「人名」 2 はるえさん  
 六 71 10 ㊦ はるえさんのいうとおりね。  
 六 71 11 ㊦ 雪だるまはお話はしないけれども、はるえさんが、なにかお話をしあげたらどう。  
 はるお「話手」 17 はるお  
 七 21 10 はるお「にちゃん。  
 七 22 5 ささやくように、はるお「にちゃん、すずめはなにしくくのの。」  
 七 22 8 はるお、あまり大きな声をだすから、にげちゃったよ。」はるお「ねえ、にちゃん。」

七22 10 あおむしをさがしにくるのさ。」はるお「あ  
おむしをとって、どうするの。」  
七23 1 子すずめにやるのさ。」はるお「子すずめ、  
あおむしをたべるの。」  
七24 4 はるお「はい、だいこんの葉——どうして、  
葉を砂の中に立てるの。」  
七26 1 はるお「にいちちゃん、わからないのかい。」  
七26 8 はるお「にいちちゃん、にいちちゃん。」  
七26 10 どうしたのさ。」はるお「あおむしが、へん  
な色にかわっている。」  
七30 3 はるお「にいちちゃん、帰っていたの。」  
七30 6 きょう、先生にほめられたんですって。」  
はるお「いいな、にいちちゃん。」  
七31 1 はるお「にいちちゃん、なあに。」  
七31 5 ちょうになつた、ちょうになつた。」はる  
お「ほんとうだね、にいちちゃん。」  
七32 6 はるお「おや、ひげをはやしてる。」  
七32 8 ほんとう——ひげだね。」はるお「あかんぼ  
のくせに、ひげなんか。」  
七32 10 おかあさん、花よりきれいな。」はるお「ふ  
しぎだな。あんなあおむしが。」  
七33 3 はるお「にいちちゃん、早くいこう。」  
はるお「(人名) 20 はるお  
七52 6 ゆうごはんをまつあいだ、私は、まさこを  
うば車に乗せて、はるおと大通りにでました。  
七53 7 大きな声で、はるおが、東の空をみながら  
いいました。  
七55 11 ごろうさんをさそって、はるおといっしょ  
に、学校へいきました。  
七57 1 はるおにさいそくされて、ばんをゆずりま  
した。  
七57 1 はるおは、のぞいていましたが、かげんが

わからないようです。  
七57 4 私は、こういって、はるおのかたをそつと  
おさえました。  
七58 3 はるおは、まだみていたいようでしたが、  
〈略〉、ばんをごろうさんにゆずりました。  
七59 1 するとおはるおも、〈略〉。といいました。  
七22 7 10 はるお、あまり大きな声をだすから、に  
げちゃったよ。  
七23 10 10 はるお、だいこんの葉を——まいとつてき  
てね。  
七24 2 はるおは、だいこんの葉をとつてくる。  
七24 7 はるお 感心したように、〈略〉。  
七26 2 10 なまいきいうな、はるお。  
七27 8 はるお さなぎをふしぎそうにみながら、  
〈略〉。  
七28 3 10 はるおは。  
七28 4 10 母「はるおは、さつきから、おもてで遊  
んでいますよ。」  
七30 2 そこへ、はるおが帰ってくる。  
七30 7 10 さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。  
七32 5 はるお、おかしな声で、はるお「おや、ひ  
げをはやしてる。」  
七33 4 10 さあ、はるお、おいで。  
はるおくん「(人名) 1 はるおくん  
七21 8 きしもとくんが、弟のはるおくと、ふた  
りで、本をよんでいる。  
はるおさん「(人名) 2 はるおさん  
七54 5 10 ほんとうに、はるおさんは目が早いね。  
七56 5 10 はるおさん、ほら、あなたのみつけた二  
ばん星よ。  
はるか「(形状) 7 はるか  
九32 8 10 家のまえをちよつとでると、はるか下の

方に美しい湖がみえます。  
九40 8 10 はるか向こうの山のはしから、美しい湖  
が半分ばかり顔をみせていました。  
十三7 2 遠い、はるかな空のおくで、鳴いている  
からすの声も、ほんとうにのんびりとして、  
十三47 10 はるかな谷川を聞いているその耳もとに。  
十四39 9 二人はるか遠くの方を指さして、  
〈略〉。  
十四85 6 一ひらの雪によって、はるかに高い天空  
のようすが、こまごまとわかるとすれば、  
十五80 10 そう思いながら、年よりの私は、日本の  
小学校のみなさんに、はるかなあいさつを送り、  
はるかぜ「春風」(名) 1 春風  
四72 3 「春風。」  
はるこさん「(人名) 4 はるこさん  
二10 4 はるこさんは、〈略〉。といいました。  
五25 9 はるこさんも、にこにこして帰ってきました。  
五26 3 はるこさんは、きつぷを改札の女の人にわ  
たしながら、「ありがとうございました。  
五26 9 10 はるこさん、いま改札口の人にありがと  
うっていったのは、どういうわけ。  
はるこさん「(題名) 1 はるこさん  
五25 8 はるこさん  
はるさき「(春先) (名) 2 春さき  
十四66 12 春さきなどの、ぽかぽかあたたかい日に  
は、  
十四88 10 雪國でいちばん楽しいものは、なんと  
いっても、春さきの雪どけごろである。  
はるさめ「(春雨) (名) 1 春雨  
十一32 1 10 しとしとと降る春雨に、やぶのたけの  
こすくすくのびて、

797  
1  
11月25日  
(日)  
晴のちくもり  
17度

た父と子。

はん  
〔飯〕 ↓あさごはん・ごはん・たけのこごはん

ん・ばんごはん・ゆうごはん・ゆうはん  
はん 3 ハン 反 板

十五 37 8 「枝・板」など、その文字の左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に関係のあることを表わし、

十五 37 9 字の右側に、「支・反」をおいて、「シ・ハン」という音をしめしたりした。

十五 37 10 「シ・ハン」という音をしめしたりした。ばん「晩」(名) 21 ばん 晩 ↓あさばん・ひとばん・ひとばんごと・まいばん

三 109 1 月のきれいなばんになると、

四 9 5 あさからばんまで、トッテンカン トッテンカンとはたらいしています。

四 57 4 その日のばんは、かっちゃん的全快いわいをしようという ことになりました。

五 98 10 そのばんのことでした。

五 108 11 近いところに製材所ができて、のこぎりのやかましい音が、あさからばんまでひびきました。

六 51 2 月の明かるい晩でした。

八 5 2 秋のはじめのある晩、一家そろって、ぎんざの大通りを歩いていましたら、

八 6 4 その晩から家族のひとりになり、あくる日、ピオという名がつけられました。

九 21 6 その日はたいへん寒いらしの日で、朝から晩まで、こやみなく雨が降っていました。

九 21 7 晩の十時に、二千ばのつばめが着きました。九 22 4 それでも運びきれなくて、九月十九日の晩には、ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたたかくした貨車を一つつけて送ったほどでした。

十一 24 10 その晩のうちにいて、

十一 34 7 圃 きのうの畑は水田となって、晩にはかえるが歌いだす。

十一 84 6 晩には家に着けるから。  
十一 88 4 その日も、その晩も、ずっとつきそっていました。

十一 89 3 その晩、少年は夜どおしそばについて、病人をみまもっていました。

十二 19 2 園 このあいだの晩も、ピアノの先生が、散歩にいらつして、

十二 76 1 園 友だちがほしくなるのはやはりこんな晩だ。

十四 51 2 ある家の、かぼちゃのとりいれまつりの晩のことでした。

十四 92 3 おおみそかの晩だというのに、その子は、まだマツチをすこしも賣ってはいなかった。

十四 102 6 人々は、女の子がおおみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。

ばん「番」(名) 7 ばん ↓いちばん・いちばんどろし・いちばんぼし・ごせんにじゅうごばん・ごばんぼし・さんばん・さんばんぼし・さんばんめ・じゅうごばんめ・だいさんばんめ・にばん・にばんぼし・にばんめ・ふみきりばん・みはりばん・よばん・よばんぼし・よばんめ

一 45 7 だんだん わたくしたちのばんが ちかづきました。

一 46 4 わたくしたちのばんが きました。

二 25 4 きょうは、いちろうさんと、さだおさんと、  
《略》、この五人の ばんです。

三 112 4 おじいさんは、その いり口で ばんを していました。

五 57 1 はるおにさいそくされて、ばんをゆずりました。

五 58 4 はるおは、《略》、やっと目をはなして、ばんを ころうさんにゆずりました。

九 112 2 こんどは、のだ先生がとばれるばんである。  
パン「話手」2 パン

十五 84 8 パン「いかにもうまそうだなあ。」  
十五 92 12 そこでなにをしているんだ。」パン 口に いっぱい物を入れながら、「略。」

パン(名) 13 パン  
八 43 3 園 こがねと一きれのパンとは。

八 43 4 園 一きれのパンです。

八 91 8 小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげてくれた。

八 92 5 おかあさんのところへ走っていった、もらってきたパンやおかしをなげてよこした。

十 51 1 母がこしらえてくださったパンを、ふくろからとりだして、いぬにやりながら、

十 51 6 いぬは、まばたきをしたきりで、そのパンをたべようとしません。

十一 47 9 うちではバターもつくったし、こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。

十一 47 10 おかあさんがパンをやくそばで、ぼくは、いつも本を読んでいた。

十一 78 12 看護婦が持ってきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、ほとんどたべませんでした。

十五 82 10 チルチルとミチルと、いぬと、パンと、さとうとは、はじめ《略》すこしはに かんて、

十五 88 5 園 ふたりとも手はパンのしんだし、目は もものジャムです。

十五 92 2 「ふとった幸福」どもは、せつせと、いぬと、さとうと、パンをときつけて、えん会の中にひきずりこんでしまいました。

十五 92 10 園 それからさとうも、パンも、だれが行けといった。

はんえん「半円」(名) 1 半円

十422 〔名〕 半円が眞円になれば成功するのだ。

はんえんけい 〔半円形〕(名) 2 半円形

十201 村の林の上に、大きな半円形のにじがかかっている。

十411 あるとき、うめが、母貝の中をしらべているうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。

はんえんしんじゅ 〔半円眞珠〕(名) 2 半円眞珠

十412 これは、まえにさしいれておいた核によって発生した半円眞珠であることが、わかった。

十428 半円眞珠が思いどおりに取れるようになったので、ひとまずこれを加工して、

はんが 〔版画〕(名) 1 版画

十二1119 この浮世絵は、版画で、絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人と、共同作品なのです。

ハンカチ (名) 1 ハンカチ

十一768 でも、ハンカチを目にあてているときには、じっとみつめていました。

はんきょう 〔反響〕(名) 1 はんきょう

九1911 その廣告は、たいへんなはんきょうをまきおこしました。

ハンケチ (名) 2 ハンケチ

四724 これにあたった人には、ハンケチをあげます。

十211 まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。

ばんごう 〔でんわばんごう〕

はんごと 〔班毎〕(名) 1 はんごと

八962 はんごとになわしろをきめ、そのさかいにしろしをつけます。

ばんごはん 〔晩御飯〕(名) 2 晩ごはん

六724 その日、晩ごはんをたべながら、ごろうは

こんなことを考えました。

八4711 〔名〕 ああ、せいといっぱいはたいて、晩ごはんもいいたいだいた。

ばんざい 〔万歳〕(感) 4 ばんざい

九1126 〔名〕 「ばんざい。」と、だれかがさげんだ。

十二285 〔名〕 ばんざい、ばんざい。

十二285 〔名〕 ばんざい、ばんざい。

十五1245 校門のかしの木よ、母校よ、ばんざい。

はんし 〔半紙〕(名) 2 半紙 〔わらばんし〕

六1175 紙は半紙でいいし、骨は工作のあまりのひごでまにあわせました。

六1178 はじめに半紙をま四角に切りました。

はんじ 〔めいよはんじ〕

ばんじ 〔万事〕(名) 1 万事

十四812 一事が万事。

はんじかん 〔半時間〕(名) 1 半時間

十一733 半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。

はんじさん 〔判事〕(名) 1 判事さん

九652 〔名〕 わたしのほうがよっぽど大きいって、きのう判事さんがおっしゃったじゃないか。

はんしゅ 〔藩主〕(名) 2 はん主 〔さきがはんしゅ〕

十五482 赤絵屋もあったが、これははん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、

十五485 ところが明治になって、はん主の保護がなくなつたうえに、

はんしよくする 〔繁殖〕(サ変) 1 はんしよくする 〔シ〕

九181 ヨーロッパのつばめも同じように、ヨーロッパの北の方ではんしよくしたものが、(略) アフリカまでもいつて、冬ごしをします。

はんしん 〔半身〕(名) 1 半身

十五684 音もなくドアがあいて、半身をだした老婦人が、

ばんそう 〔伴奏〕(名) 1 ばんそう

十四8612 ばんそうの音楽や、場面の組みあわせと説明のことばなどによって、

はんたい 〔反対〕(名) 8 はんたい 反対

三648 右手と左手を はんたいに こいだら、ぐるぐるまわりをするばかりだ。

七554 そのはんたいに、ふでをいれるほど、かえて、文章がみじかくなつていくことがあります。

十三1312 つまり、天動説とは反対に、地動説が出てきました。

十四653 反対に、湯がぬるいと、いきおいがよいわけです。

十四712 その反対に、茶わんのまん中の方では、ぎやくに上の方へのぼって、

十四764 海陸風とよばれているもので、晝間は海から陸へ、夜は反対に陸から海へとふきます。

十四765 すこし高いところでは、反対の風がふいています。

十四793 木のほうは、これと反対に、もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、けつしてそれることはありません。

ばんだいさん 〔磐梯山〕(地名) 1 磐梯山

十五561 〔名〕 外人の中で、富士山や磐梯山のいただきをきわめたのは、(略)私をはじめでたらう。

はんたか 〔人名〕 15 はんたか

三112 おしやかさまに はんたかという でした。

三113 はんたかはものおぼえがわるく、そのう



え、ものがよくいえませんでした。

三115 おしやかさまは、どうかして はんたかを  
りっぱな人にしてやりたいと、おおもいにな  
りました。

三117 そこで、まいにちかしこいでしをひと  
りずつ、はんたかのところへやって、

三126 「略」とおっしゃって、はんたかを  
およびになりました。

三127 はんたか、おまえはたくさんのかを  
おぼえなくてもよろしい。

三128 はんたかは目をかがやかせて、おしやか  
さまのおかをおみつめました。

三136 はんたかは、このひとことを心の中に  
しまいました。

三151 はんたかもおしやかさまのはちをもつ  
て、でしの中にまじっていました。

三153 門ぼんがはんたかをみて、「略」と  
いって、とおしてはくれません。

三157 しかたがありませんから、はんたかは門  
のそとにのこりました。

三168 これははんたかの手でございます。  
三173 王さまは、すぐはんたかを およびにな  
りました。

三174 はんたかは、しずかにごてんにあがって  
きました。

三175 はんたかの からだから、きれいな 光が  
さしていました。

はんたか〔題名〕1 はんたか

三111 はんたか

はんちよう 〔班長〕(名) 1 はん長

七167 はん長は、めいめいのはんのにんずをか  
ぞえたかね。

はんちよういち 〔班長二〕(話手) 1 はん長一

七1610 はん長一「先生、きょうは風がありません  
から、ちようちよが、たくさんとんでいるでし  
う。」

はんちようたち 〔班長達〕(話手) 1 はん長  
たち

七169 はん長は、めいめいのはんのにんずをかぞ  
えたかね。〔はん長〕はい。

はんとう 〔おがはんとう〕

はんとし 〔半年〕(名) 2 半年

四245 〔み〕 みっちゃんがいなくなつてから、もう  
半年もたちますね。

十四88 〔半〕 半年も雪にとざされていた地上に、  
ハンドル (名) 1 ハンドル

十四214 オートバイ、リヤカー、ハンドル。  
ばんばん (副) 1 パンパン

七633 ばくちく火花が、パンパン、もうくらく  
なっている。

はんぶん 〔半分〕(名) 9 はんぶん 半分 〔かみ  
てはんぶん・しもてはんぶん〕

二134 ひとつは、まっかでした、ひとつは、は  
んぶんだけみどりいろをしていました。

三238 〔お〕 お米がはんぶんもできない。  
五1002 よくみると、ねこにひつかれた羽がぶら  
りとなつて、半分しかひろげられません。

七53 校舎の半分が光つた。  
八451 わたしの病氣をなおしてくれたものには、  
國の半分をわけてやる。

九408 〔手〕 はるか向こうの山のはしから、美しい湖  
が半分ばかり顔をみせていました。

九732 やまねこは、大きくのびあがつて、目をつ  
ぶつて、半分あくびをしながらいいました。

十422 〔分〕 半分までこぎつけた。

十423 〔分〕 あと半分だ。」幸吉とうめは、たがい  
にげましあった。

はんぶんいじよう 〔半分以上〕(名) 1 半分以上  
十三199 ユートランドは、デンマルクの半分以上  
もあつて、

パンや (名) 1 パン屋

九456 〔手〕 ぼくは、おとうさんのやつていたパン屋  
のしごとを、しんけんにやろうと思っています。

## ひ

ひ 〔日〕(名) 15 日 〔あさひ・おひさま・こもれ  
び・つきひ・どうようび・にちようび・はつひ・ゆう  
ひ・ゆうひかげ〕

二85 つぎの日に、「い」のつくことばをあ  
つめました。

三147 ある日、おしやかさまは、王さまのおま  
ねきにあずかりました。

三233 日がでると、この木の西がわのなん十  
という村々が、日かげになります。

三237 〔日〕 日があたらないうで、こまつたものだ。  
三257 〔日〕 日のあたるようにするには 切るより  
ほかにしかたがあるまい。

三434 ある日、はまべにでてみると、  
三515 〔日〕 かつちん かつちん 日がくれて、火花  
がみえるののみさき。

三588 ある日、みんなであそびにでかけまし  
た。

三901 風の日にはどんな音。

三902 雨の日にはどんな音。

- 三 100 6 ある日のことです。
- 三 107 1 みかどは、〈略〉、ある日かりのおかえりに、とつぜんおたちよになりました。
- 四 25 3 ㊦ みっちゃんのことを、みんなで話さない日はありません。
- 四 55 9 つぎの日のあさ、かっちゃん、ねつがずっとさがって、
- 四 57 4 その日のばんは、かっちゃんの全快いわいをしようということになりました。
- 四 84 3 そのつぎの日の夜、お友だちがあつまりました。
- 四 88 6 山は大雪、日はくれる。
- 四 113 3 ある日のこと、うらしまは、父や母のことを思いだして、
- 五 21 2 ある日のゆうがたでした。
- 五 48 7 まどをあけると、いまのぼったばかりの日の光が、さといっぱいながれこんできた。
- 五 53 1 西の方を見ると、日がしずんでまもない空に、大きな星が光っていました。
- 五 65 9 ある日、おじいさんは、海にでてあみをなげました。
- 五 67 8 あくる日、おじいさんは海へやってきました。
- 五 82 6 日のかんかんとてるところで長くあそばないことなどを、話しあいました。
- 五 105 3 しじゅうからは、あくる日もやってきました。
- 五 105 3 そのつぎの日もやってきました。
- 五 105 11 ある日、二三ぼのひわが、さんちゃんのうちまつの木におりてきました。
- 六 20 1 ㊦ おおいにうたい、おおいにひいて、この夏の日を楽しいではないか。

- 六 40 10 日がくれかかる。
- 六 42 5 ㊦ さあ、みなさん、日がくれきらないうちにおねがいします。
- 六 43 7 それをつつむようにして日がくれる。
- 六 61 9 毎朝、このらんに、その日の朝の温度を書きつけましょう。
- 六 72 4 その日、晩ごはんをたべながら、ごろうはこんなことを考えました。
- 六 121 4 ある日のこと、五ひきのうさぎさんは、まつ林の中で、まつかさで、まりなげをしたり、
- 六 142 9 野原には、日の光がいっぱいさしています。
- 七 9 4 ㊦ あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。
- 七 17 2 ㊦ 風のない日は、ちょうちよがよくでるのだったね。
- 七 19 5 ㊦ 先生、風の日は、ちょうちよは、どこにかくれているんですか。
- 七 26 7 それから、いく日かたったある日の午後。
- 七 48 6 六日の日、郡ゼンたいのドッジボール大会があった。
- 七 62 4 日がてっている。
- 七 65 3 麦のとりのいれ、日がてりつける。
- 七 89 7 よく晴れた日には、とても元氣があります。
- 七 89 8 うさぎでも、くもった日や雨降りの日は、きらいなのでしょう。
- 七 89 8 雨降りの日は、きらいなのでしょう。
- 八 6 5 あくる日、ピオという名がつけられました。
- 八 20 5 そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をまつのです。
- 八 32 9 一年の月日がたって、いよいよその日になると、けんぎゅうは、黒うしに乗って、
- 八 38 1 ある日、〈略〉、宝物をかぞえておいでにな

- ると、み知らぬ人はいってきました。
- 八 47 5 日がくれましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。
- 八 58 1 ある日、ぼくは遠足でみはらし台へいった。
- 八 65 8 あくる日はいいお天気で、
- 八 80 7 そこへ、さわやかな空気と日の光が流れてきた。
- 八 99 1 よいお天気で、風もなくあつい日でした。
- 八 102 4 田植をした日から、ちょうど60日めです。
- 八 107 1 じょうぶに作りたいねかけに、日がよくあたるようにきちんとかけました。
- 八 108 6 天気のよい日に2日ほしたら、もみがよくかわきました。
- 九 21 6 その日はたいへん寒いあらしの日で、
- 九 21 6 その日はたいへん寒いあらしの日で、
- 九 38 1 ㊦ 高いすぎやまつのほえているところは、晝でもうすぐらく、日があたらないので、
- 九 46 8 ㊦ 天気のよい日は、〈略〉、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。
- 九 87 2 とき ある晴れた日の午後
- 九 104 5 まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、スキーをするには、ちょうどよかった。
- 九 116 4 ㊦ 屋根の雪かきおとしする少年の顔の明かるさ日のでる中に
- 九 117 7 ㊦ ふくじゅそうのはちをおきかうるおさな子やえんがわの上に向つる日を追いて
- 九 122 8 けれども、流れは急流だし、雨の日も風の日もある。
- 九 122 8 雨の日も風の日もある。
- 九 127 5 ある日の夕がた、このくもは、木と木のあいだに、果をかけました。
- 十 11 6 ある日のこと、おとうさんが、〈略〉お

しを、一ふくろやつたのははじまりで、

十267 日の光をいっぱい受けた、はればれとした父と子。

十3611 試運転の日、その織機をあやつって、りっぱにぬのを織ってみせたのは、佐吉の母であった。

十124 たんぼのわた毛が遠くとんでいく日だ。

十138 ああ、われわれみんな、遠い國から旅してきた旅人のような氣持のする日だ。

十1911 いつのまにかびんぼうになって、その日のくらしにも困るようになりました。

十254 そのあくる日から、金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうちからおきて、遠い山へいって、

十331 圃 かきのわか葉に日の照るころは、矢車からからこいのぼり、村のわら屋の庭に立つ。

十362 圃 くわをかついで田をみまわれば、日はまた照って水たっぷりと、

十405 圃 南にかたむく日につれて、光はまともにえんにさす。

十599 あくる日、太郎は、友だちの正男と一雄と三人づれで、学校から帰るときのことであった。

十771 その日は、病人の目つきが、いくらかわかりかけでもしたようにみえました。

十812 その日の午後四時ごろでした。

十867 圃 ちょうどあなたが入院したと同じ日に、入院したんです。

十884 その日も、その晩も、ずっとつきそっていました。

十885 そのつぎの日も、一日ずっとそばにいました。

十246 ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立つてコロンブスの成功を祝しますと、

十263 ある日、太田道灌は、たかがりにてかけ

ました。

十283 ある日のこと、母親がなつかしくなり、

十2110 ある日、リビングストーンが木かげで書物を読んでいました。

十21512 日のあたるところ、かげになったところ、

十295 ある日、学校から帰ってくると、姉が大さわぎしていました。

十314 私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな日は、サリバン先生がきてくださった日であります。

十314 サリバン先生がきてくださった日であります。

十317 この日の午後、私はなんとなくものを待つ氣持で、じつとげんかんにたたずんでいました。

十349 ある日、私が新しい人形を持って遊んでいますと、

十351 その日はすでに、私は、「ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しんだあとでした。

十3810 私はその日、たくさんのことばを覚えませんでした。

十391 できごとの多かったこの日もくれて、

十392 この日が自分にもたらした喜びを

十394 私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日を待つことを知りました。

十607 ところで、もうあとわずかというところ、日ははや西の山に傾いて、

十6010 長者は、日のまるのおおぎをあげて、しずみかけた日をさしまねくと、

十628 ある日のこと、八郎が山でしごとをして

十二717 そのうちに、冬がきて、くもった空がひくくたれる日が続ききました。

十2774 メキシコのテニス選手キンゼーと私とが、

いよいよ試合をする日のことでした。

十3128 朝になると、日は東の空からのぼり、夕

十三1210 地面は平らなもので、日や月が、東から西へまわっているように思われます。

十三336 夏の日には、この音がすずしい氣持をおこさせ、

十三336 夏の日には、この音が「略」、冬の日には、いかにもさむざむとした氣持をおこさせる。

十四1511 手 そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早くたつでしょうから。

十四4210 圃 どんな暗い日だって、それが明かるくしてくれる。

十四439 圃 どんなさびしい日だって、それが元氣にしてくれる。

十四506 このことは、あくる日の新聞に出たマツケンナの話で、あきらかになったのですが、

十四539 圃 じりじりと暑い日に照らされながら、

十四563 圃 葉さんが、それを日の光にあてたり、

十四566 圃 花さんでも、葉さんでも、日のあたる

十四6111 「略」「略」と、日や、土や、水

十四671 春さきなどの、ぼかぼかあたたかい日には、

十四7211 日のあたっているかべや屋根をすかして

十五97 圃 日の第一線が燈台の高きに

十五209 朝の十時と午後の三時ごろと、日に二ど

十五376 「日」と「月」をあわせて「明」が作ら

れ、

十五433

まぶしい日の光をさけながら、

十五4511

ある日、ブリンクリーは、どうやら覚え  
た日本語で、町をひとりで散歩していた。十五494 やがて、思いどおりのものを作るこ  
とのできる日がきた。

十五534

ピッツバーグに着いたのは、暑い真夏の  
日の朝であった。

十五571

ところがある日のこと、せんばいの教  
授がやって来て、

十五5711

ある日のこと、せい書をギリシア語で  
読みたいといひだした。

十五619

ある日のこと、おじさんとおばさんが外  
出の用意をととのえて、〈略〉私をうながした。

十五653

きびしい夏の日に、私をせにおいながら、  
あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、

十五665

せつくがくるごとにその人形をかざって、  
ありし日をしのぶことをわすれなかつた

十五672

そのうちにクリスマスの日がめぐってき  
た。

十五6710

そのことのあったあくる日、私は、ひさ  
しぶりで窓のあけはなれた新島家をおとずれた。

十五1041

『冬の日の幸福』は、こごえた手のた  
めに、きれいなむらさき色のマントを開きます。

十五1119

おまえたちがほおずりをするたびに、  
私の着物に、月と日の光がさしてきてね。

十五1191

ほどなくあらわれるあすの日を待ちな  
がら。

ひ

「火」(名) 26 ひ 火 しゃんこうはなび・たき  
び・ともしび・ばくちくはなび・はなび

三365

火がもえています。

四7910

ひ——火の用心。

四1236

もえている 火をもつて あるく かわ  
りに、わたくしをもつて あるきます。

五351

ガスこんろの青い火は、ガスがもえている  
のです。

六268

あり一は、ろの火を赤くもえたせです。

六411

ビルディングのまどに、一つ二つと火がつ  
く。

六749

「雪は。」「火は。」こんなことをつぎか  
らつぎへと考えました。

七810

しゆくちよく室にひがともった。

七107

しゆくちよく室のひがきえた。

八489

中には、うすぐらいひが一つともっている  
だけでした。

九1183

ふくじゆそうのつぼみいとおしむおさ  
な子や夜はいろいろの火にあてており

十一379

あぜに火とさくまんじゆしゃげ 庭に  
もえたつはげいとう。

十二761

まあ、火をたきつけておくれ。

十二7611

きみ火をたけよきものみせん雪まろ  
げ

十二817

火のでるようなはげしい試合が続きまし  
た。

十四934

美しく火のともった家々の前を、そろそ  
ろとかなしげに通って行きながら、

十四939

ただひと目でも、火の光とごちそうとを  
見るだけでも、満足したのであろう。

十四941

女の子は、どんなにか、それで火をとも  
してみたかったことだろう。

十四9412

その両手をあたためるために、〈略〉一  
本のマッチで、火をともすことができたならば、

十四952

かべにこすりつけて、火をつけた。

十四9511

そのろの中には、美しい火がもえあがり、

十四969

その火の光のさすところは、かべがきぬ  
のようにうすくなって、

十四9911

そのマッチの火の中で、もうとつくにわ  
かれて神さまのおそばへ行つたおばあさんを見た。

十五73

みんなききりの中鉄のひびきのかじ屋  
の火

十五93

はまの子ら火をたく青き月夜となり

十五146

風くればばらはたちまち火となれり  
ゆれにゆるるか照りそう風に

ひ

「碑」↓せきひ

ひ

四7910 ひ——火の用心。

ひあたり

「日当」(名) 2 日あたり  
九623 きょうは、そこが日あたりがいいようだ  
から、そこにとこの草をかれ。

十四538

私が、いつも日あたりのいいところに  
出て、じりじりと暑い日に照らされながら、

ピアノ

(名) 5 ピアノ

三947

ピアノやふくすけをおることもできま  
す。

十二193

ピアノの先生が〈略〉あなたの鳴く声  
に耳をかたむけて、たいへん感心していましたよ。

十二212

でも、あなたの歌には、そのさびしい  
氣持がでているので、人の心を動かすのだから、  
あのピアノの先生がおっしゃいましたよ。

十四209

クレヨン、ペン、ナイフ、ゴム、ランド  
セル、ピアノ、オルガン、バイオリン、

十五122

森田先生と西野先生のバイオリンとピア  
ノ台そうなど、はじめてのことなので、

ひー

(感) 6 ピー

七5011

「ピー」と、用意のふえが鳴った。

七515

ふえがまた「ピー」と鳴って、しあいが

はじまった。

七五二「ビ」と、ふえがびびいた。

七五三「ビ」と鳴った。

七五四「ビ」はじまった。

七五五「ビ」はくしゅがおこった。

びいっ (感) 1 びいっ

一四三 びいっ、しゃしゅさんがふえをふ

きました。

ひいおじさん「曾祖父」(名) 1 ひいおじさん

十二九六 それにはあなたがたのおとうさんや、お

じいさんや、ひいおじさんの写真がでいたり

ピーカー (名) 1 ピーカー

十四七五 よく理科の本などにある、ピーカーのそ

こをアルコールドランプで熱したときの水の流れと

同じようなものになるわけです。

びーくびーく (感) 1 ビークイ、ピークイ

七四五 チチ、チチ、ピークイ、ピークイ、チチ、

チチ。

ピーター (人名) 7 ピーター

三六四 そのとき、ピーターが、「略」と、い

いました。

三七一 そのとき、ピーターはふと、ゆかの上に

なにかあるのをみつけました。

三七五 ピーターは大声でいいました。

三七六 ピーターが大声をあげました。

三八七 「略」ピーターがいいました。

三八七 ピーターは赤がすきでした。

三八三 ピーターは、はのさきにあまだれがあ

るのをみつけて、「略」といいました。

びいっくびいっく (感) 1 びいっく、びいっく

二六六「びいっく、びいっく、びいっく、びいっく

い」という声をする。

びーびー (副) 1 ビービー

九五三「略」たきがビービー答えました。

びいびいびい (感) 1 びいびいびい

二六六「びいっく、びいっく、びいびいびい

い」という声をする。

びいよびいよ (感) 2 ビイヨ、ビイヨ ビイヨ。

ビイヨ

八六四「ビイヨ、ビイヨ」と、どのたまごか

らも小さな首がでた。

八六四「ビイヨ、ビイヨ」と、ひなは鳴いて、

はってでた。

ひえ びねびえ

ひえかた「冷方」(名) 1 ひえかた

十四七五 そのひえかたがどこも同じではないので、

ところどころ特別につめたいむらができます。

ひえきる「冷切」(五) 1 ひえきる《一ツ》

十四七二 元日の朝、人々が、マッチ賣りのむすめ

の、ひえきった小さなきがらを見つけたとき、

ひえる「冷」(下) 8 ひえる《一エール》

十四七三 熱い水蒸気がひえて、小さなしずくに

なったのが、無数にむらがついているので、

十四七九 お湯がだんだんにひえるのは、湯の表面

の茶わんのまわりから、熱がにげるためだ

十四七一 そうなると、茶わんに接したところでは、

湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、

十四七二 しかし、茶わんの湯を、ふたをしないで

おいたばあいには、湯は表面からもひえます。

十四七三 そういう部分からは、ひえた水が下へお

り、

十四七二 それが、おりた水のととどくじぶん

にはひえて、そこからおります。

十四七四 湯がひえるときにできる、熱さとつめた

さとのむらが、どうなるかということとは、

十四七六 湖や海の水が、冬になって、表面からひ

えていくときには、どんな流れがおこるか

ビエンヌ (地名) 1 ビエンヌ

十四七二 ビエンヌという川の岸には、(略) 女の人

たちが、ならんでせんたくをしていました。

ピオ (名) 15 ピオ

八四二 ちょうど十年ほどまえ、私のうちに、ピオ

という、うちじゅうの人氣者がいました。

八四九 どうして、ピオが私のうちにかわれるよう

になったかといえは、……。

八六五 その晩から家族のひとりになり、あくる日、

ピオという名がつけられました。

八六九「ピオ」とよんでひざをたたくと、ひ

ざの上にとび乗ったり、

八七〇 ピオ、いい声だなあ、おまえは。

八八二 それを知ってから、よけいにピオがすきに

なりました。

八九一 ピオのほうでも、その氣になったらしく、

八九七 ピオのゆうかんさや、りこうさや、ちゃめ

ぶりや、おかしさなどは、まだいくら書いても書

ききれません。

八一二 女の子が、茶のまのドアをあけて、ひよい

とふみこんだたん、うちがわでむじやきに遊ん

でいたピオを、かた足でふんでしまったのです。

八一六 茶のまにいたうちじゅうのものがびつくり

して、いそいでピオをひろいあげました。

八一九「ピオや、ピオちゃん。」

八二〇「ピオのはか」と書いた、小さなせきひを

立ててやりました。

八二二 私は、ピオの信頼をうらぎったのが、かな

しくてなりません。

八13 5 それから十年、いまでも、私はピオのことがわすれられませんが。

八13 8 ほおじろの声をきくと、ピオのすがたがありありとうかんできて、思わずなみだぐみします。

ピオちゃん (名) 1 ピオちゃん

八11 9 窓 「ピオや、ピオちゃん。」みんなあわてて、口々によんで、元氣づけるやら、くすりをのませるやら、あたためるやら――

ひか ↓きんぴか

ひかげ 「日陰」(名) 6 日かげ

三23 4 まいあさ 日がでると、この木の西がわのなん十という村々が、日かげになります。

三23 5 ごごになると、東がわのなん十という村々が、日かげになります。

三29 3 日かげになってこまっていたたくさん

の村々は、

八94 8 水をいっぱいいいれ、ふたをして日かげにお

き、ときどき水をとりかえました。

十三28 1 夏は夏で、ひんやりとした土べいの日か

げを選び、風の通り場で遊んでいる。

十四69 9 白い茶わんにはいつている湯は、日かげ

で見えては、べつにかわつたようすはなにもありま

せんが、

ひがさ 「日傘」(名) 1 日がさ

十五65 4 あせをふきふき歩かれた新島のおじさん

と、日がさをさしかけながらついでいらつしやっ

た新島のお婆さんとの思い出は、

ひがし 「東」(名) 15 ひがし 東

一32 5 くも かぜ あめ ゆき きた

みなみ にし ひがし

三87 窓 東の友だち。

五18 4 北の方へいく友だちと、南の方へいく友だ

ちと、西の方へいく友だちと、東の方へいく友だちを、それぞれひとかたまりにわけてくれました。

五53 7 大きな声で、はるおが、東の空をみながらいいました。

八32 2 それをみた天帝は、たいへんおこりに

なつて、はたおりひめを天の川の東の岸のごてんにもどしてしまい、

九49 9 窓 やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方

へとんでいきましたよ。

九50 1 窓 東なら、ぼくのいく方だねえ。

九147 7 夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりと

しらみかけてきました。

十二58 10 ところがいま一だんというところで、い

ちばんどりが鳴いて、東の空が明るくなった。

十三12 8 朝になると、日は東の空からのぼり、夕

がたになると、西の空にしずみます。

十三12 9 月も、東の空から西の空に向かって動き

ます。

十三12 10 地面は平らなもので、日や月が、東から

西へまわっているように思われます。

十三15 2 自轉といつて、一晝夜に一どずつ、自分

で西から東へ一回轉します。

十四38 8 窓 東の空が明るくなってくる。

十五71 9 町の東にある寺の一角に、こけむす一つ

のおほか、

ひがしがわ 「東側」(名) 1 東がわ

三23 5 「ごご」になると、東がわのなん十という

村々が、日かげになります。

ひがしむら 「東村」(名) 3 ひがし村

七48 10 はじめに、ひがし村の学校とやつた。

七50 5 はじめに、ぼくの学校とひがし村の学校と

が、しあいをする事になった。

七51 8 ひがし村の学校のセンターが、喜んで、「勝つ、勝つ。」とさげんだ。

ひかぴか (副) 5 ひかぴか

三73 6 窓 ひかぴかのかみかしら。

五71 3 お婆あさんは、けがわのふくをきて、ひか

ひか光るずきんをかぶり、金のうでわをはめ、

八40 10 庭の草木は、みているうちに、ひかぴかと

光ったこがねになっていきました。

九61 8 草の中にあつちにもこつちにも、こがね色

のまるいものが、ひかぴか光っているのでした。

十四96 12 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ひか

か光るさらをならべたテーブルが見えた。

ひかぴかする (サ変) 2 ひかぴかする 《―シ》

三70 8 ゆかの上に、なにか、長い、光った、ひ

かぴかしたものが、あります。

七41 5 かれは、むねに、大きなひかぴかしたア

コーデオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。

ひかり 「光」(話手) 22 光

十五83 4 光「あれがこの世の中でいちばんふとっ

ただれの目にも見える『幸福』どもだよ。

十五83 11 私たち、あそこへ行つてもいいの。」光

「いいとも。」

十五85 12 光「こわいことはないよ。」

十五86 6 小さなおかしもいけないの。」光「みんな、

あぶないよ。」

十五91 10 それがこの世のすべてですもの。」光「あ

なたはそう思うの。」

十五92 7 光さん、ごらんよ。みんなは、テーブル

にすわりこんでるよ。」光「呼び返しなさい。」

十五94 3 光「ダイヤモンドをまわしなさい。」

十五94 8 光「みんな不幸のところへにげこんでし

まうのさ。」

十五94 光 同じところにいるのだよ。

十五95 光 「かわいらしい幸福たちがやって来た。

十五95 光 あの子たちを知っているの。」光「みんな知っているよ」

十五96 なんてたくさんいるのだらう。」光「もっともっと、たくさんいたものだよ。

十五96 光「この世の中には、人が思うよりもっとたくさん、幸福はあるのだから。

十五96 かけて行つて会おうよ。」光「むだなことだよ。

十五97 光「あれは『子どもの幸福』だよ。」

十五97 話をしてもいいの。」光「まだだよ。

十五97 光「なんの、ここだって、どこだって、

やはり、お金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

十五98 どこにびんぼう人がいるの。」光「それを見わかることはできないよ。

十五98 光「それは、どうしてもいけませんよ。

十五98 光「いよいよペールをかぶつて、『略』。」

十五99 光「私は、愛しあう人たちには、いつでもしんせつにいたします。」

十五99 光「まあ、だまつておいでよ、いい子だから。」

ひかり 光 (名) 88 光 ひのひかり・ほしのひかり

三5 10 光 お日さまの光、光。

三5 10 光 お日さまの光、光。

三17 光 はんたかの からだから、きれいな 光がさして いました。

三31 3 光 まどから 光が さしこんで きます。

三73 8 光 お日さまの 光が しら。

三73 9 光 あ、そうだ、光だ。

三74 3 光 では、光のとおり道を さがして みましよう。

三74 5 光 それで、みんなは いすを おりて、その光の中を あるいて いて、

三75 1 光 お日さまの 光は お日さまから やつてきたのね。

三75 9 光 おや、さっきの お日さまの 光、どこへいったの。

三77 1 光 よその 國の 子どもたちに 光を あげるのですよ。

三77 6 光 あなたたちが ねて いる あいだ、お日さまは、よその 國の 子どもが あそべるように、

光を あげに いくのです。

三81 3 光 そこへ お日さまの 光が さしはじめました。

三107 4 光 家には いて ぐらんになると、光の中に きれいな おひめさまが すわつて います。

四120 8 光 たった 一つの でんとうですが、この 光を だす ために、どれほど たくさん の 人が、はたらいて いる ことでしょう。

四121 9 光 が できる のは なぜ でしょう。

五48 7 光 まどを あけると、いまの ぼつたばかりの 日の 光が、さつと ぱいながれ こんで きた。

五49 2 光 あさの 光に、身を きよめる のは うれしい。

六10 5 光 ねじが その 光を 受けて、ピカリと 光つた。

六62 9 光 朝日の 光で、アルコールの びんが ぎらつと 光つた。

六142 9 光 野原には、日の 光が いっぱい さいして います。

七5 3 光 朝日の 光が ななめに さいして きた。

七5 5 光 白い ちやうが、ういたり しずんだり しながら、光の中を およいで いたが、

七41 9 光 かる やかな ならべは、朝の 光の ように 氣持

よく、車中の すみから すみまで 流れた。

八24 1 光 朝日が 山の上に のぼつて、明かるい 光が さつと すすころ になると、

八28 8 光 その おり物の 美しい 光に、天帝も すっかり おみとれ になりました。

八33 4 光 天の 川は、なん 千なん 万という 星が かななり あつて、あのように、ぼうつとした 銀の 川の ような 光を はなつて いる ように みえる のです。

八34 3 光 一光年は、光が 出発して から、一年 かかつて どれくらい さいして います。

八34 4 光 の 速度は、一秒間に 地球を 七まわり 半し ます。

八34 6 光 太陽から 発した 光が、地球に とどく までに は、やく 八分二十秒 ばかり かかる こと になります。

八34 8 光 の とどく 時間では かと、あの 星と 地球 との きよりは、二十分 や 十分 では ありません。

八35 5 光 今夜のは たおり 星の 光は、やく 三十年ほど まえに 発した 光だ という わけ になります。

八35 6 光 やく 三十年ほど まえに 発した 光だ という わけ になります。

八80 7 光 そこへ、さわやかな 空氣と 日の 光が 流れて きた。

九74 6 光 馬車が すすむに したがつて、どんぐり は だんだん 光が うすく なつて、

九145 8 光 くもが、月の 光に ちらり ちらりと 光り ながら 落ちて くる 夜つゆを みていると、

十20 6 光 さあ、その 白い かべに、プリズムで わけた 光を 写して みますよ。

十20 7 光 「略」といふ 先生の 声とともに、七色 の 光が 写し だされる。

十26 7 光 日の 光を いっぱい に 受けた、はればれと した 父と子。

- 十一 40 6 罫 南にかたむく日につれて、光はまとも  
にえんにさす。
- 十一 89 4 あかつきの光が窓から白くさしこんで  
き  
たとき、
- 十二 37 9 この生きた一ことが、〈略〉、光と希望と  
喜びとを興えることになったのです。
- 十二 46 9 罫 これに光をあてて影絵にしてみせるの  
だが、人間ばかりでなく、動物などもでてくる。
- 十二 110 11 黒うるしの中に、銀や貝が光をはなっ  
ているのは、なんともいえない美しさです。
- 十四 4 7 それは、フィリップの作品の中にみな  
ぎっている大きな愛の氣持、そこからさしてくる  
とうとい光のためなのです。
- 十四 10 4 罫 ほのおがゆれたりしないとか、光を  
ずっとやわらかくするために小さなかさがあると  
か――
- 十四 12 3 罫 かさは、光をへいきんさせ、もっとや  
わらかくするためなのです。
- 十四 34 7 光が一方のはしから、向こうのはしまで  
とどくの、二十億年も、かかるほどの廣さなの  
です。
- 十四 36 1 まことに、星の光は、声のないことばで  
す。
- 十四 36 4 むかしからすぐれた人たちは、星の光の  
中からふかい思想を読みとりました。
- 十四 39 9 罫 「光、光だ。」
- 十四 39 9 罫 「光、光だ。」
- 十四 39 10 罫 光だ。
- 十四 39 11 罫 希望の光。
- 十四 40 1 罫 喜びの光。
- 十四 40 11 罫 平和と自由の光がさしてくる。
- 十四 41 3 罫 この光を全身にあびよう。

- 十四 41 4 罫 喜びにみちてかがやく光。
- 十四 56 3 罫 葉さんが、それを日の光にあてたり、
- 十四 57 12 罫 それがこの日本でできるためには、私  
が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。
- 十四 70 4 これは、夜、電燈の光をあてて見ると、  
もっとよく、あざやかに見えます。
- 十四 72 7 これに日光をあてると、熱いところとつ  
めたいところとのさかいで、光が曲がるために、
- 十四 72 8 その光が同じようにならず、むらになっ  
て、茶わんのそこを照らします。
- 十四 73 4 そのときできる氣流のむらに、光をおり  
曲げるためなのです。
- 十四 82 1 罫 たまみがかざれば光なし。
- 十四 83 7 春の光がさしそめて、雪どけ水が流れだ  
すところ、
- 十四 93 8 女の子は、窓々とおして、ちらちらと  
かがやくともしびの光を見た。
- 十四 93 10 ただひと目でも、火の光とごちそうとを  
見るだけでも、満足したであらう。
- 十四 96 9 その火の光のさすところは、かべがきぬ  
のようにうすくなって、その女の子は、中のへや  
をすっかり見とおすことができた。
- 十四 99 3 その星が落ちるとき、空を横ぎって長い  
光のおをひいた。
- 十五 43 3 まぶしい日の光をさけながら、銀座通り  
をアメリカの一しようこうが歩いていたが、
- 十五 82 11 チルチルと、いぬと、パンと、さとうと  
は、〈略〉、光をとりまいてかたまってしまします
- 十五 91 11 ふとった幸福「光」を指さしながら、チ  
ルチルに向かって、「略。」
- 十五 94 1 「はちきれそうなわらい」は、光のこし  
のあたりを、力まかせにおさえました。

- 十五 94 4 「光」のいうように、ダイヤモンドをま  
わします。
- 十五 94 5 舞台は清らかな、こうごうしい、ばら色  
の美しい光に照らされます。
- 十五 95 1 罫 ダイヤモンドの光にたえられる幸福の  
精を見るのだよ。
- 十五 99 6 (光に) ぼくは、どこへ行っても、だん  
だんに知られてくるね。
- 十五 107 12 罫 それは、毎日ぼくたちを照らす光に、  
二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。
- 十五 111 10 罫 おまえたちがほおずりをするたびに、  
私の着物に、月と日の光がさしてきてね。
- 十五 113 8 罫 その中から光が流れだすようだよ。
- 十五 114 1 罫 おまえのせわをしているときは、いつ  
だってこんなに白くなって、光がさすのにね。
- 十五 116 3 チルチル つつましくすこしさがつてい  
る「光」を指さしながら、「〈略〉。」
- 十五 116 6 罫 あの人、だれなの。」チルチル「光さ。」
- 十五 117 5 罫 『光』がとうとう来てくれました。
- 十五 117 6 罫 あなたは『光』なんですね。
- 十五 119 2 母の愛光をだきながら、「〈略〉。」
- 十五 119 6 「物のわかる喜び」、「光」の方へ行き、  
ふたりは長いあいだきあいます。
- びかり (副) 2 びかり
- 一 41 6 はしらの かげで、 びかり、 びかり、 ひ  
かった。
- 一 41 7 はしらの かげで、 びかり、 びかり、 ひ  
かった。
- ひかりかがやく 「光輝」 (五) 1 光りかがやく  
《一く》
- 三 102 10 その うつくしさは たとえようもなく、  
家の すみずみまで 光りかがやくほどなので、



「かぐやひめ」という名をつけました。

ひかりさん 「光」(名) 1 光さん

十五925 園 おや、光さん、ごらんよ。

ひかりだす 「光出」(五) 1 光りだす 《一シ》

九129 1 星が光りだしました。

ぴかりと (副) 2 ピカリと ぴかりと

三100 9 竹やぶをみまわしていますと、ねもとの

ぴかりと 光る 竹が一本ありました。

六105 ねじがその光を受けて、ピカリと光った。

ひかりをもとめて 「課名」 2 光を求めて

十二25 四 光を求めて……三十一

十二31 1 四 光を求めて

ひかる 「光」(四五) 59 ひかる 光る 《一ツ・

ラー・リール・ロー》

一41 8 はしらの かげで、ぴかり、ぴかり、ひ

かった。

一52 7 園 そら、ところどころに、おおきなほし

がひかっているでしょう。

一65 8 園 それなら、あなたの 目の なかに ふた

つ ひかっていますよ。

三40 7 くわのはが、やわらかで、光っていて、

おかいこさんでなくてもたべたいようです。

三70 8 ゆかの 上に、なにか、長い、光った、ぴ

かぴかしたものがああります。

三74 9 お日さまが 光りながら、いま、丘の かげ

へしずむ ところでした。

三84 1 園 「お日さまが、雨の つぶつぶを しやば

んだまみたいに 光らせるのよ。」だんだんにじ

もきえていきます。

三93 8 やわらかな もうせんを しいたようなし

ばふ、みどり色に つやつやと 光ったしばふ。

三101 1 竹やぶを みまわしていますと、ねもとの

ぴかりと 光る 竹が一本ありました。

三103 6 園 光るように うつくしい かぐやひめに、

ひと目でも あいたいものだ。

四17 3 お星さん、よく 光るね。

四28 1 手 白い 雲さん、光って きれいだな。

四55 6 その 夜は、さいわい、雨も ふらず、風も

ふかない、しずかな、星の 光る 夜でした。

四106 9 園 むこうに 光った やねが みえるでし

う。

四121 7 光っている、ほそい 糸のようなものは

なんでしょう。

四122 6 園 けれども、ただ 一つの この でんきゅ

うがないと、光る ことができません。

五45 8 園 光った星だ。

五46 2 園 みんななかよく くらきらと、しずかな空

で 光ろうよ。

五53 2 西の方をみると、日がしずんでまもない空

に、大きな星が光っていました。

五53 9 それは、南東の空で光っていました。

五53 11 そういいながら 西の方をみると、小さな星

がちらちら光っていました。

五54 8 空のまん中に、大きな星が光っていました。

五56 2 園 あそこ に大きく 光っている星ですよ。

五71 4 おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴか

ぴか 光る ずきんをかぶり、

五80 3 水が光って、とんではねています。

六10 6 ねじがその光を受けて、ピカリと光った。

六50 6 園 くらければこそ 光る 星、ねむりをふらす

夜の空。

六51 3 屋根も、木の葉も、石ころも、みんなきれ

いに光っていました。

六63 2 朝日の光で、アルコールのびんがきらっと

光った。

七53 校舎の半分が光った。

七54 校庭のつゆもいっぺんに光った。

七56 5 家と家とのあいだに、ほそ長く光っていま

す。

八28 3 川の水は銀色に 光り、はくちようがしずか

にういていました。

八35 8 このほか、五十光年のところに光っている

星があります。

八40 10 庭の草木は、みているうちに、ぴかぴかと

光ったこがねになっていきました。

八74 11 したは口からたれて、目はみにくく光って

いた。

九79 この「水」は、さらさらと流れる小川とも

なり、ちらちらと 光る いけともなり、

九53 11 ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、と

なりのぶなの葉がちよっと 光っただけでした。

九61 8 草の中にあつちにもこつちにも、こがね色

のまるいものが、ぴかぴか光っているのです。

九63 1 草の中から、どんぐりどもがきらきら光っ

てとびだして、もうワアワアいっていました。

九129 3 くもは、その子もり歌を耳にしながら、光

る星をみあげていました。

九130 3 星はだんだんきれいに光ってきました。

九136 10 いまのぼりかけたばかりの月が、しずかに

光っていました。

九145 8 くもが、月の光にちらりちらりと 光りなが

ら落ちてくる夜つゆをみていると、

十22 5 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえ

ざくらの花。

十23 2 小川の水、きらきら 光る。

十35 2 銀色に光った、たくさんの機械は、生きも

ののように動いていた。  
 十438 ゆめにもわすれられない眞田眞珠が、光っているではないか。

十一356 罫 まばゆく光るいらずまに、続いてひびくらしい音。

十一563 罫 ことは光る、プリズムのかげよ。

十一567 罫 花火やほたる、とんぼの目だま、一つ一つ光る。

十三366 小さな光ったわたが、土べいのかたすみにたまる。

十四6912 みょうなゆらゆらした光った線や、うす暗い線が、不規則なまのようなになって、

十四9612 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴか光るさらななべたテーブルが見えた。

十五151 罫 おどろきてわが身も光るばかりなり大きなばらの花照りかえる

十五6211 罫 おじさんのくつは光っているのに、ぼうやのくつはほこりだから、

十五1035 罫 これは、『春の幸福』で、きらきら光る青いたまの色をしています。

十五1056 天使のようなすがたをした者が、きらきら光る着物を着て、そろそろとやって來ます。

十五1197 やがてはなれて顔をあげますと、ふたりの目にはなみだが光っていました。

ひがん〔彼岸〕(名) 1 ひがん

十一308 罫 紅梅・白梅みなちりはてて、ひがんとすれば風あたたかく、

ひき〔匹〕 ↓いっぴき・いっぴきのくも・くひき・ごひき・さんびき・さんびきとも・しちひき・しちひきとも・じっぴき・しひき・じゅういっぴき・じゅうさんびき・じゅうにひき・にひき・にひきとも・はちひき・ろっぴき

ひき〔引〕 ↓しとうびき・じびき・ふくびき  
 ひき〔挽〕 ↓こびき  
 ひきあ・ける〔引開〕 (下二) 1 ひきあける《ケ》

十683 さきに立った太郎かじゃが、思いきって、からかみをひきあげました。

ひきあ・げる〔引上〕 (下二) 7 ひきあげる《ゲ・ゲル》

六422 罫 南へひきあげるついでだから、えんりよしなくてもいいのよ。

六837 罫 ひきあげてみよう。

六839 ほおりのみことはつりざおをひきあげる。  
 六1154 ただしちゃん、海外からひきあげてきた子で、來年小学校へあがります。

八573 五百メートルほどさきに、ひきあげてある小船がある。

十二232 長いこと外地にいた姉たちがひきあげてきました。

十五658 秋たけてりんごのみのころ、おじさんとお婆さんは京都へひきあげられたが、

ひきい・れる〔引入〕 (下二) 1 ひき入れる《レ》

十五689 お婆さんは目になみだをためながら、しやにむに私をおく深くひき入れた。

ひきう・ける〔引受〕 (下二) 5 ひきうける ひき受ける《ケ》

九232 このほかに、オーストリア動物園の人たちがひき受けて送ったつばめを加えると、十万ばかりになります。

九392 罫 かれ枝のたくさんついている高い木をみつけると、兄かばくがのぼる役をひきうけました。

十二253 学校から帰ってくると、わたしは民ちゃんの子もりをひき受けます。

十五7510 罫 先ほどの話は、ころよくひきうけたよ。

十五761 罫 きみの論文を、カーネギーで出版することは、ひきうけたよ。

ひきおろす〔引下〕 (五) 1 ひきおろす《シ》

九388 罫 手のとどかないかれ枝は、長い竹ざおのさきにかまをくりつけて、ひっかけるようにして、下から力をいれてひきおろします。

ひきかえす〔引返〕 (五) 2 ひき返す《シ・ソ》

七104 罫 渡し終ると、またひき返して、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。

十一68 罫 ボートの向きをかえたりひき返そうとしたりするときには、きつとコックスが大声でいうだろう。

ひきこむ〔引込〕 (五) 2 ひきこむ《マ》

八62 私、すっかりひきこまれて、しばらく見物したのち、その一わを買い、

十四3512 大空の星をながめてみると、はてしのない、遠い世界にひきこまれるような気がします。

ひきさ・く〔引裂〕 (五) 2 ひきさく《イ・キ》

十723 いきなり、とこのまのりっぱなかけものをひきさきました。

十737 罫 たおれたはずみに、あのたいせつなかけものを、あのとおひきさいてしまいました。

ひきずりこむ〔引摺込〕 (五) 1 ひきずりこむ《ン》

十五922 「ふとった幸福」どもは、せつせと、いぬと、さとうと、パンをときつけて、えん会の中にひきずりこんでしまいました。

ひきずる〔引摺〕 (五) 2 ひきずる《ツ》

十四92 12 かわいそうに、その子は、おなががすいて、こごえて、身をひきずって歩いてた。  
 十五93 12 ふとった幸福どもは、〈略〉、いやがる子どもたちをひきずって行こうとする。  
 ひきだし「引出」(名) 5 ひきだし  
 六99 3 つくえのひきだしをかたづけていると、  
 十三39 4 手紙が、はい……二番めのひきだしの……上……はい。  
 十三40 1 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよって、ひきだしをあげる。  
 十三55 7 「〈略〉。」といって、一まいの絵をひきだしから出して、見せてくださいました。  
 十三59 1 おじさんはそういつて、同じひきだしから、一まいえらび出して、見せてくださいました。  
 ひきだす「引出」(五) 1 ひきだす《ーシ》  
 十四99 10 女の子は、またもう一本のマッチを、そばのたばの中からひきだした。  
 ひきつ・ける「引付」(下二) 2 ひきつける《ーケ》  
 十三34 4 ほのぼのとゆれ動くかげ絵は、子どもの心をひきつけてやまない。  
 十五50 11 プリンクリーは、日本の美しい焼物にひきつけられていろいろな焼物を集めた。  
 ひきつづく「引続」(五) 1 ひきつづく《ーイ》  
 八76 1 たまの首はあしのあいだに鳴りひびき、てっぽうはひきつづいて火ぶたをきった。  
 ひきつづける「弾続」(下二) 1 ひきつづける《ーケ》  
 七42 6 しかし、青年は、ひく手をやめないで、いっしんにひきつづけていた。  
 ひきとめる「引留」(下二) 3 ひきとめる《ーメーメル》

三113 5 もう、ひきとめることもどうすることもできません。  
 九88 6 たかぎには友だちの一、二、三、やまだには四、五、六、〈略〉ふたりをひきとめている。  
 十70 10 ひきとめるひまもなく、太郎かじやは、すばやく指をつこんで、すぐそれを、口に持っていきました。  
 ひきとる「引取」(五) 2 ひきとる《ーッーリ》  
 八12 1 あらゆる手あてをつくしましたが、それなり、まもなく息をひきとりました。  
 十五57 6 教授の申し出をさっそく承知して、はじめて見る東洋の青年をひきとったが、  
 ひきぬきにくい「引拔悪」(形) 1 ひきぬきにくい《ーイ》  
 四68 10 このえんの下のくぎ、ひきぬきにくい。  
 ひきはじめる「弾始」(下二) 3 ひきはじめる《ーメ》  
 七41 6 かれは、むねに、大きなびかびかしたアコードオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。  
 七41 10 青年は、つづいて日本の子もりうたをひきはじめた。  
 七46 4 青年は、アコードオンを、両手でぐっとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。  
 ひきまわし「引回」(名) 1 ひきまわし  
 十二68 7 糸のこは糸のように細く、ひきまわしはひじょうにせまい。  
 ひきまわす「引回」(五) 1 ひきまわす《ース》  
 十五65 10 朝早くからそれをガラガラとひきまわすので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。  
 ひきもどす「引戻」(五) 1 ひきもどす《ース》  
 六33 2 おかあさんがすがすが、羽をさか立てて、子からすをすにひきもどす。

ひきよう「單怯」(形状) 1 ひきよう  
 十32 1 自分ひとりぐらいいいというような、無責任な、ひきような考えをもちたくはありません。  
 ひきよ・せる「引寄」(下二) 2 ひきよせる《ーセ》  
 十一71 5 少年は、いすをひきよせて、〈略〉、こしをおろして待っていました。  
 十五71 12 「〈略〉。」といって、私をひきよせた。  
 ひきわけ「引分」(名) 1 ひきわけ  
 九88 8 さあ、やまだくん、これでひきわけだ。  
 ひきわける「引分」(下二) 1 ひきわける《ーケ》  
 九88 4 たかぎとやまだが左右にひきわけられたところである。  
 ひく「引」(四五) 35 ひく 引く《ーイーカーキーク》ひふくびきあそび  
 四72 7 これをひいた人には、なにもあげません。  
 五50 9 黒いひく人の 黒いかげ 黒いかげ。  
 五86 8 おまつさんか、あなたがみえなかったから、かぜでもひいたかと思って。  
 六83 5 朝から一ひきもつれないなんて——おや、ひく、ひく。  
 六83 5 おや、ひく、ひく。  
 六83 6 ぐいぐいひくぞ。  
 六136 9 ぶんぶんおこりながら、びっこをひきひき、てっぺんにたどりつきました。  
 六136 9 びっこをひきひき、  
 七85 1 おがひくように、子どもたちが、さっと、学校からいなくなりました。  
 七38 7 しかし、弟の手をひいているので、ひとあ

しすすむにも、よういではありません。

八256 せみの死がいは、ありたちがよってたかってひいていきますが、

九120 11 図 私たちの村の用水も、このまつ川からひいてあるのだ。

十358 佐吉は、もう、じっとしていられなくなり、設計図をひいては組み立て、

十68 12 いつでもにげだせるかっこうで、こしをうしろにひき、

十一45 大きな汽船がけむりをはいて、長いかけをひいて通っていくのがみえるし、

十一135 ふえの音は、長くおをひいて消えていく。十二288 たもとをひいてやると、民ちゃんは、

ばったりそこへすわりこんでしまいました。十二367 ふたりは、〈略〉すいかずらのあまに

おいにひかれて、庭の小道をおりていきました。十二411 サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひ

とりのようになって、勉強をはじめたのです。十二604 いいだしたことはあとへひかないので、

十二831 まっ白い線のひかれたコートには、日ざしがさんさんと降りそいでいました。

十三291 「ビューン」と、あとをひくようなひびきがする。

十三294 荷車をひきながら、ゆっくり歩いて来る。十三464 ありが、ちょうの羽をひいて行く。

十四282 図 それは、國語辞典をひいてみると、だいたいわかる。

十四85 10 どちらも雪にえんのあるものであるが、私はあとのほうの映画に心をひかれた。

十四899 読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたくながめた人によって書かれた文である。

十四993 その星が落ちるとき、空を横ぎって長い

光のおをひいた。

十五64 文 図 家を出て手をひかれたるまつりかな十五368 数という形のないものを表わすのに、線

を横に一本引いたり、二本引いたりした。十五368 線を横に一本引いたり、二本引いたりした。

十五369 「うえ」「した」という考えを表わすのには、線を横に引いて、「・」をその線のうえに

おいたり、したにおいたりして表わした。十五578 図 つくえのまん中にチョークで線をひき、

向こうは日本、こちらはアメリカといって、たがいに向かいあい、勉強にいそむことにしたが、

十五736 つくえに白線をひいて「國境」をつくったあたりを、声高らかに読みあげられた。

十五78 10 人の心をひくために、しかめつづらをしたり、みょうな身ぶりをしてはならない。

ひく〔挽〕(五) 1 ひく《ーイ》三59 図 のこぎりをはいている人もあります。

ひく〔弾〕(五) 13 ひく《ーイ・キーク》↓おひく

六181 あるきりぎりすはバイオリンをひいています。六182 あるきりぎりすはチェロをひいています。

六184 そのほか、ハーモニカをふいているもの、オルガンをひいているもの、

六201 図 おおいにうたい、おおいにひいて、この夏の日を楽しくうたではないか。

六237 バイオリンをちよつとひいて、七418 かなり早く走っているの、青年のからだ

はゆれていたが、ひく手にくるいはなかった。七424 しかし、青年は、ひく手をやめないで、

いっしんにひきつづけていた。

七453 図 また、こんなつもりでひいたのでもありません。

七454 図 ただ、たいくつまぎれにひいたのです。七45 11 図 それでは、お札にわたしのいちばんとく

いな曲を、一曲ひきましょう。九58 オルガンで一つの音だけひいてきいても、

その音には、ある感じがこもっているものです。九5 10 この音と、ほかの音とをいっしょにひいて

みると、まえとはちがった感じがします。九66 オルガンのほかに、〈略〉ほかの楽器を、

いっしょにあわせてひいてみたらどうでしょう。ひく〔碾〕(五) 4 ひく《ーイ・キーク》

四178 学校からかえったら、おかあさんが、石うすをひいていらつしゃった。

四181 おかあさんの手の上につかまってひいた。四184 図 ぼくがいっしょにひくと、かるくな

るかしら。四18 10 そこで、おかあさんの手の上で、力いっ

ぱいひいた。ひくい〔低〕(形) 11 ひくい《ーイ・キーク》

二688 「しゅしゅしゅしゅ」は、ひくくつづいて

いる。四764 た——高い山、ひくいたに

五794 チョロチョロ、ひくく鳴ったり高く鳴ったりしています。

五106 「〈略〉。」と、早く、おそく、高く、ひくく、いっしょけんめいにまねをします。

八839 雲は、あられや雪で重くなってひくくたれて

いた。九126 たいこを、ひくく、こまかくつづけてうち

鳴らすのであるが、

九55 せいのひくい、おかしなかつこうの男が、  
 十一169 ひくく、かぼそい、おさな子のささやきも、ききもらさない、その耳。  
 十二717 そのうちに、冬がきて、くもった空がひくくたれる日が続きました。  
 十五461 ひくい屋根も、あけはなした店も、〈略〉、かれには、みなめずらしいものばかりであった。  
 十五539 「カムイン」と答える、ひくい、しかも力強い声に、  
 ひくし〔低〕〔形〕1 ひくし 《ーミ》 ↓たかきひくき  
 十五106〔文〕 いけがきのすぎの木ひくみとなり家の庭の植え木の青めふく見ゆ  
 ひくつ〔卑屈〕〔形状〕1 ひくつ  
 十四373 ひくつになってはいけません。  
 びくびく〔副〕1 びくびく  
 九561 みえない方の目は、白くびくびくうごき、びくびくする (サ変) 1 びくびくする 《ーシ》  
 五181〔会〕 うそ字だから、とんでもないところにやられるかと思つて、びくびくしているところだよ。  
 ひぐれ〔日暮〕〔名〕2 日ぐれ  
 十五92〔圖〕 こどもら手をつないだ中を日ぐれのうまが通る  
 十五103〔会〕 これが『日ぐれの幸福』で、世界じゅうの王さまのすべてよりもりっぱで、  
 ひげ〔髭〕〔名〕13 ひげ ↓あごひげ  
 六333 白いひげの雲が風に流されている。  
 六343 雲のひげがおおられて長くのびる。  
 六346 かかし、一どははねあげられるが、もんどりうって、また、ひげの中におちる。  
 六358 かかしのつかまつたひげ、のびるだけのびてちぎれてしまう。

七326〔会〕 おや、ひげをはやしてる。  
 七327〔会〕 ほんとう——ひげだね。  
 七328〔会〕 あかんぼのくせに、ひげなんか。  
 九603 やまねこは、ひげをぴんとひっぱって、腹をつきだしていいました。  
 九6511 やまねこはぴんとひげをひねっていいました。  
 九673 やまねこが、ひげをひねっていいました。  
 九712 やまねこは、まだなにかいいたそうに、しばらくひげをひねって、目をぼちぼちさせていまして、  
 九7110 やまねこは、〈略〉、しばらくひげをひねったまま下を向いていましたが、  
 十一701 かみの毛は白くなり、ひげはのび、  
 ひご〔籤〕〔名〕3 ひご  
 六1176 紙は半紙でいいし、骨は工作のあまりのひごでまにあわせました。  
 六1192 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。  
 六1196 じっさいに紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ、ちょうどいい長さにひごを切りました。  
 ひこうか〔飛行家〕〔名〕1 飛行家  
 十四752 地面の空気が、日光のためにあたためられてできるときむらは、飛行家にとって、たいへんあぶないものです。  
 ひこうき〔飛行機〕〔名〕14 飛行機  
 六1068 弟のだいすきな飛行機である。  
 六1072〔会〕 「飛行機なら、ちゃんと、ヒコーキといえるよ。」といったので、  
 六1072〔会〕 飛行機なら、ちゃんと、ヒコーキといえるよ。  
 八95 庭さきにいるとき、とつぜん、上へ飛行機

でもとんでくると、そのあわてかたといったら  
 八597 飛行機の上からは、もつともつと大きなけしきがみえるだろうと思つた。  
 九2111 なるべく早く南のあたたいところへ運ぶために、飛行機をつかうことにしました。  
 九221 つばめをのせた飛行機は、それから毎日のように、〈略〉ヴェニスへとんでいきました。  
 九226 汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつぎのとおりです。  
 九227 九月二十四日 飛行機で 二千ば 二十五日 同じく 二万五千ば  
 九2210 二十九日 飛行機で 一万ば  
 九2211 十月一日 飛行機で 一千六百ば  
 九239 また、飛行機という文明の利器が、このしごとにつかわれたということ、  
 十四648 飛行機などで、横からすかして見ると、十四7511 それで、畑の上からとんできて、森の上へかかると、飛行機は、しげんと下の方へおしおろされるかたむきがあります。  
 びこうきだ 1 ビゴウキダ  
 六10610〔会〕 「あつ、ビゴウキダ。」といった。  
 ひこうきのり〔飛行機乗〕〔名〕1 飛行機乗り  
 十五2610 ちょうど、発動機にこしようにできた飛行機乗りが、安全な着陸地を上からさがしているような氣持で、  
 ひこうちゅう〔飛行中〕〔名〕1 飛行中  
 九194 おりから南へ飛行中だったつばめは、食にうえ、つめたい雨にずぶぬれになって、  
 ひころ〔日頃〕〔名〕1 日ころ  
 十461 そのち、幸吉は、日ころそんけいしていたエジソンのもとをたずねて、  
 ひざ〔膝〕〔名〕7 ひざ

一659 おかあさんは、わたくしを ひざの うえに  
だきあげてくれました。

八610 「ピオ。」とよんでひざをたたくと、ひざ  
の上にとび乗ったり、

八610 ひざの上にとび乗ったり、

八97 びっくりして茶のまへにげこみ、そこにす  
わっている私のひざのあいだにもぐったり

九556 せいのひくい、おかしなかつこうの男が、  
ひざをまげて、

十二3410 サリバン先生が、ほかの大きな人形を私  
のひざの上において、

十五718 人力車に乗ったおばさんは、昔のように  
私をひざにのせた。

ピサ 〔地名〕 1 ピサ

十三148 そのケブラーと同じころ、イタリアのピ  
サに生まれたガリレオという学者がありました。

ひざし 〔日差〕 2 日ざし

十一349 罫 つゆ晴れ空はみどりにすんで、日まし  
に日ざしが強くなり、

十二832 まっ白い線のひかれたコートには、日ざ  
しがさんさんと降りそそいでいました。

ひさしぶり 〔久振〕 4 ひさしぶり

五223 ひさしぶりにおじいさんにおあいして、お  
もちや、〈略〉ほしがきなどをいただいたて、

十二234 ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちと  
いっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、

十四514 罫 ひさしぶりにごちそうをたべて、たい  
へんゆかいです。

十五6710 そのことのあったあくる日、私は、ひさ  
しぶりで窓のあけはなれた新島家をおとずれた。

ひじ 〔肘〕 1 ひじ

十三52 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木の

めのむれは、おたがいひじをつつきあって、

ひしひし 〔霹靂〕 1 ひしひし

十五317 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、  
胸に、目に、ひしひしとあたります。

ひしゃく 〔柄杓〕 1 ひしゃく

三103 罫 小さなひしゃくでおちゃくんで、か  
けてあげましょ、おしゃかさま。

ひしゃびしや 〔副〕 1 ひしゃびしや

四327 罫 雨がひしゃびしやふるので、わたくし  
は、かさをさしかけてあげました。

ひしゃびしや 〔副〕 3 ピシヤ、ピシヤ ピシヤピ  
シヤ

五796 ピシヤピシヤと、あがったりさがったりし  
て、流れていきます。

八747 かりいぬが、ピシヤ、ピシヤとぬま地へは  
いつてきた。

八752 それからピシヤ、ピシヤと、どこかへいつ  
てしまった。

ひしゃり 〔感〕 1 ピシヤリ

五7610 金のさかなは、なにもいわないで、しっぱ  
でピシヤリと音をさせて、

ひしゃんと 〔副〕 1 ピシヤんと

八517 「略。」と、その家の人は、戸をピ  
シヤンとしてしまいました。

ひじゅつ 〔美術〕 2 美術 ↓とうようびじゅ  
つ・にっぽんびじゅつこうげいし

十三5611 罫 天才の集まっていた、美術の中心のフ  
ロレンスで、研究しているうちに、

十五514 日本の古い美術に対する愛着がふかく、  
日本美術工芸史十二巻という大作を著わした。

ひじゅつかん 〔美術館〕 1 美術館

十三592 罫 これは、ドレスデンの美術館にある絵

で、『シストのマドンナ』といわれている。

ひじゅつひん 〔美術品〕 1 美術品

十五496 しかし、このような美術品を買い求める  
ようなものは、ほとんどいなかった。

ひじょう 〔非常〕 2 ひじょう

九864 あとの三十分は、ひじょうにみじかく思わ  
れました。

十二687 糸のこは糸のように細く、ひきまわしは  
ひじょうにせまい。

ひそか 〔密〕 1 ひそか

九115 罫 いまの鳥はこの木にいるにちがいないし  
ひそかに枝葉の中をみあぐる

ひそむ 〔潜〕 1 ひそむ 《一》

十458 名高くなつたかげには、幸吉一生の苦心が  
ひそんでいる。

ひたい 〔額〕 6 ひたい

四916 ひとときはいて、うちにあがっておい  
でになると、ひたいからゆげが たつ。

九534 すると、りすは、木の上からひたいに手を  
かざして、いちろうをみながら答えました。

九697 そこで、やまねこは、〈略〉、ひたいのあせ  
をぬぐいながら、いちろうの手をとりました。

十一702 ひたいと弓形をしたまゆとのほかには、  
〈略〉父親らしいところはありませんでした。

十一748 それから、病人の上にかがんで、みやく  
をみたり、ひたいにさわってみたりして、

十二5011 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で  
作って、のりでとめる。

ひたいそぐ 〔直急〕 1 ひたいそぐ 《一》グ  
九303 罫 ひたいそぐいぬにあいけり木のめ道

ひたし ↓たねもみひたし

ひたす 〔浸〕 5 ひたす 《一》サーシ

八94 5 やく3・6dlのみを、水の中にひたしました。

八96 6 ひたさない種もみをまいたところには、べつにしるしをつけておきました。

八96 9 ひたさないほうは、まだめがでません。

八97 3 ひたさない種もみからも、やっとめがでてきました。

八97 5 水にひたしたほうが、1週間早くできました。

ひだまり 「日溜」(名) 1 日だまり  
十三27 12 冬は冬で、〈略〉ホートンの廣場に、子どもたちがたむろして、日だまりを楽しみ、

ひだり 「左」(名) 26 ひだり 左

— 29 3 手は二ほん、みぎ ひだり。

— 29 5 足も二ほん、ひだり みぎ。

三39 8 ぼくがまん中で、右のかたにはいちろうくん、左のかたにはみよこさん。

三42 2 みよこさんが、左のかたからはなれて、麦ばたけのよこ道をかえりました。

三63 10 左へ いけばたきへ できます。

三64 5 左の方。」と、男の子たちがいいました。

三64 9 始めに右か左かどちらかへやらなければ。

三65 2 左。」と、男の子たちがいいました。

四50 4 ほかのがんは、右や左からかっちゃんをだきかえました。

四79 6 み——右と左とちがえぬように。

四93 4 右にも左にもむこうにもこっちにも、どこにも降る。

四111 3 おとひめさまは、左のいすにこしかけます。

四134 4 右に 左に ひらひらと、ゆれる たもと

がうつくしい。

五88 11 こうして右の手でだいてな、左の手でかかえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

六79 2 左のむねのところに手をあててごらんさい。

六99 10 左の手に、めがねのたまを持って、目から遠くはなした。

六115 7 たこが青空で右や左にゆれると、

七77 2 左の足が一本短くて——それから——

七81 9 しかも、左の足の短いことを、ちゃんと知っているのです。

九124 4 まつ川がてんりゅう川に流れこんでいるところの近くまでくると、いい味の水は、左の岸のほとりを流れていた。

十34 7 横糸はおさによって、右から左、左から右へといききするのであるが、

十34 7 横糸はおさによって、右から左、左から右へといききするのであるが、

十一67 11 少年は、〈略〉、その後からついていきながら、おどおどした目を右に左に向けて、

十二67 5 のこぎりののはは、いぬの歯のようにとがって、一つおきに右と左にすこしよじれて、

十二67 10 いつもやすりをかけて右と左によじっておかないと、なんの役にもたない。

十二83 10 目にもとまらぬボールが、ネットの上を右に左にと、ゆききました。

ひだりがわ 「左側」(名) 3 左がわ 左側

三31 2 右がわはきょうしつで、左がわにはまどがならんでいます。

七95 4 けさ、いってみたら、左がわのへやに、毛がたくさんぬけていました。

十五37 8 「枝・板」など、その文字の左側に

「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に

関係のあることを表わし、  
ひだりて 「左手」(名) 7 左手

三64 7 右手と 左手を はんたいに こいだら、ぐるぐるまわりをするばかりだ。

十二45 1 からだ全体と右手を受け持つ人、左手だけの人、足だけの人と、それぞれ手わけしているんだが、まゆ毛も、目も、口も動かし、

十三37 4 三郎のうちの二室〈略〉。左手につくえ。

十五25 1 右手で鳥のつばさのつけねをつかみ、左手を長くのばして、

十五28 6 左手は女の子の上帯にかけたままで、右手をはなして、〈略〉短刀をぬいて、

十五29 4 いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつた短刀があります。

十五29 10 少年は、右手に短刀をふりかざし、左手で女の子をかばい、

ひたる 「浸」(五) 1 ひたる 《一ツ》

十四46 10 いい氣持になって、自分が水の中にひたっていることも、わすれてしまったほどでした。

ひっかかる 「引掛」(五) 5 ひっかかる 《一ツ・リール》

六37 3 そのビルディングの一つ——とがった屋根にひっかかっているのかし。

六136 3 ぶどうのつるに、角がひっかかりました。

九131 4 「あれが、うまくひっかかる」といふ。くもが、じいっと息をこらして待っていると、

九131 8 プブプブ——「そら、ひっかった。」くもはみつばちにとびかかりました。

九144 10 あみをはり、〈略〉、ほかの虫がひっかかる、いきなりとびついてかみころすなんて、

ひっかく 「引掻」(五) 3 ひっかく 《一・イ・カ》

五100 1 よくみると、ねこにひっかかれた羽がぶらりとなって、半分しかひろげられません。

九97 1 首をひっかいたからさ。

九99 3 首をひっかいたのはだれた。

ひっかける「引掛」(下) 5 ひっかける「ケケル」

四41 8 ときには、かきなりになって、空をひっかけるようになりまし。

九38 6 高くて手のとどかないかれ枝は、長い竹ざおのさきにかまをくくりつけて、ひっかけるようにして、下から力をいれてひきおろします。

九124 5 あぶが、足をひっかけて、ブンブンいっているところ。

十二29 7 いま、民ちゃんが「略」、わたしのげたをひっかけて、「略」道まででいたのよ。

十四90 8 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。

ひっきりなし「引切無」(副) 3 ひっきりなし

六37 11 夕やけの大通りを、豆つぶほどの自動車や電車が、ひっきりなしにゆききしている。

九20 3 協会へは、電話が、ひっきりなしにかかって、つばめを集めていることを知らせてきました。

十四90 2 雪はひっきりなしに降ってくる。

びっくり「吃驚」(副) 1 ひっくり

十一68 1 ひっくりでもしたように、大きくみ開いた目をあけて、

ひっくりかえす「引繰返」(五) 1 ひっくり返す

《一ス》

十五28 12 鳥を後へひっくり返すようにするいきおいで、ぱっと、地面へすばやくとびおりました。

ひっくりかえる「引繰返」(五) 1 ひっくりかえる《一ッ》

十五82 5 水がめや、ひっくりかえったかなえなどの間で、たべたり、飲んだり、

びっくりぎょうてん「吃驚仰天」(名) 1 ひっくりぎょうてん

六139 9 うさぎさんは、びっくりぎょうてん、みんな地面にべたんとうつぶしてしまいました。

びっくりさせる「吃驚」(下) 2 ひっくりさせる《一セーセル》

四48 9 また、みんなをだましてびっくりさせる

のだろうと思つて、べつに氣にもかけないで六113 11 新しく思いついたことをみんなに話して、

びっくりさせてやろうと考えたからである。びっくりする「吃驚」(サ変) 28 ひっくりする

《一シースル》三16 2 それをみたごてんの人々は、びっくりしてしまいました。

三25 4 みんなはびっくりして、「略」といいますと、

三110 8 この思いがけないことをきいて、おじいさんもおばあさんもびっくりしました。

五112 2 「あつ、びっくりした。」

五72 6 おじいさんはびっくりして、「略。」

五80 10 にしもりさんはびっくりして、「キャア。」といつてとびあがったので、みんなわらいました。

六16 10 小さなありでも、力まかせにかんだので、かりうどもびっくりして、「あいたた。」と、大きな声をたてました。

六32 10 からすの子が、びっくりしてすからとびだし、空をみあげる。

六113 4 それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作つたものであることがわかつて、びっくりしてしまつた。

七76 5 あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていらつしやるのではありませんか。」ふたりは、びっくりした顔で、甲乙「そうです。」

七76 9 そのらくだは、かた目ではありませんか。」ふたりは、なおびっくりして、甲「まったくそのとおりです。」

七77 8 そのらくだは、まえ歯が二三本ぬけてはいませんか。」ふたりは、いよいよびっくりして、乙「それにちがいありません。」

八9 6 ひっくりして茶のまへにげこみ、そこにすわっている私のひざのあいだにもぐつたり

八11 6 茶のまにいたうちじゅうのものがびっくりして、いそいでピオをひろいあげました。

九55 10 いろいろは、だんだんそばへいきましたが、びっくりしてたちどまつてしまいました。

九61 5 ひっくりしてかがんでみますと、

九91 7 ひっくりしたよ。

九132 6 それにはさすがの大きくも、びっくりしました。

九134 1 「あ、びっくりした。」

十50 7 黒いぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、妹はびっくりして、

十62 4 二階の窓からそとをみたら、大きな竹が

によつていたので、びっくりしました。

十一72 4 そのとき、少年は、かるい手がふとかたにさわつたので、びっくりしてとびあがりました。

十二8 10 孟子がびっくりしていると、母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切つてしまいました。

十五46 4 ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵のはちを手にとつて、かれは、びっくりした。

十五82 7 みんなびっくりするほど、とてもほんと



うと思えないほど、ふとついで、

十五 87 1 チルチルさん、ごきげんよう。」チルチルびっくりして、「え、あなた、ぼくを知っているの。」

十五 105 2 チルチルびっくりしてひどくおこって、「このらんぼうなやつ、いったいなんだい。」

十五 119 8 チルチルびっくりして、「どうしてないているの。」

びっくりなさる「吃驚」(五) 1 びっくりなさる《一ツ》

三 108 1 みかどはびっくりなさって、「略。」とおっしゃいますと、かぐやひめは、またすがたをあらわしました。

びっこ「跛」(名) 3 びっこ

六 136 9 おんぶおこりながら、びっこをひきひき、てっぺんにたどりつきました。

七 81 8 園 らくだがびっこであることも知っていました。

七 83 7 園 して、びっこということは。「旅人」それは、かた方の足あとが、一つおきにあさくなっていましたので。

ひっし「必死」(形状) 3 必死

十五 29 6 少年は、必死のかくごで、すばやく女の子を自分のせなにかくしました。

十五 29 9 両方とも必死の戦いです。

十五 31 5 それからは、必死にとびかかる大わしと、この勇ましい少年との戦いです。

ひつじ「羊」(名) 4 ひつじひつじひつじ五 52 1 園 ひつじになって わいてくる、わいてくる。

十五 21 3 朝ぎりの中から、白い雲のわきたつように、すべり出るまっ白なひつじのむれ、

十五 22 1 女の子は、《略》下の方にちらばっているひつじのむれを追いかけてもするように、

十五 24 4 草のしげっている場所を見つけて、そこへひつじをつれておりて来ますと、

ひつじかい「羊飼」(名) 4 ひつじかい十五 24 2 それは、十五六になるひつじかいの少年です。

十五 24 3 このひつじかいは、がけの中ほどのあき地に、草のしげっている場所を見つけて、そこへひつじをつれておりて来ますと、

十五 24 8 そう思うと、勇ましいひつじかいは、身のおぶないこともわすれて、思わず鳥のせにとびついたのでした。

十五 32 12 気がつく、もう自分のまわりには、おおぜいのひつじかいが集まって来ており、

ひつじかいたち「羊飼達」(名) 1 ひつじかいたち十五 32 3 少女の両親たちが、そのへんにいたひつじかいたちを頼んで、大急ぎでおりて来たのです。

ひつじより「副」1 ひつじより四 60 10 どのがなんもどのがなんも、夜つゆでからだがひつじよりぬれていました。

ひっそり「副」2 ひっそり八 25 4 にぎやかに鳴きだしたせみも、やがて、秋になると、みんな死んでしまつて、あたりもひっそりとしずかになります。

十三 47 4 そよ風の中にひっそりと、客をむかえた赤いへや。

ひっそりする「サ変」1 ひっそりする《一シ》八 76 2 しばらくして、やっとひっそりした。

びったり「副」1 びったり十五 24 12 両足で鳥の腹をしめつけ、上体をびたりと鳥のせにつけて、

ピツツバーク「地名」2 ピツツバーク

十五 53 3 カーネギー博物館のあるピツツバークに着いたのは、暑い真夏の日の朝であった。

十五 72 9 ピツツバークの町を走り出た自動車は、ひっぱりだす「引張出」(五) 1 ひっぱりだす《一サ》

九 73 5 白い、大きなきこでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。

ひっぱり「引張」(五) 7 ひっぱり《一ツ一ラ一リール》

五 61 8 園 あつるをのぼしたのは、だれかしら。あやこさんがひっぱりだしたの。

六 103 6 ぼくは、おかあさんをひっぱりようにして、つれてきた。

六 115 6 園 糸を持ったただしちゃんは、「よくひっぱりな。」といてにこにこしました。

九 60 4 やまねこは、ひげをぴんとひっぱり、腹をつきだしていました。

九 90 7 やまだの手をひっぱり、《略》。九 90 9 やまだひっぱりながら、「略》。」

十一 84 7 父親は、少年を自分の方へひっぱりました。

びびっ「感」3 ビビビ十二 17 11 園 はじめ短い羽を動かしてビビビと鳴いていたときには、

十二 18 5 園 せんだつて、ふと羽を動かしてみたら、ビビビという音がしました。

十二 18 10 園 おとなりの草むらでも、遠くの草むらでも、ビビビという音がする。

ひつよう「必要」(形状) 1 必要十五 34 7 これは、記おくのためにも必要な方法である。

なりました。」女の人はずりばりを水であ

六104 2 ㊦ みえますよ。あ、人がこっちをみている  
 六131 2 ㊦ きたちは、なんてひとがいんだらう。  
 六137 5 ㊦ へ。「なんだと、ひとをばかにしている  
 七12 1 ㊦ べの手」となると、人の手ではありません  
 七14 11 ㊦ うことが、ちがう人がある。「略」。「  
 七15 2 ㊦ へ。「腹のすわった人だな」これは、「腹  
 七19 11 ㊦ 先生、知っている人——」子ども「はい。  
 七34 3 ㊦ 一 汽車の中は、人でいっぱいでした。  
 七34 6 ㊦ りこもうとする男の人もあり、足をふまれ  
 七34 7 ㊦ 、おこっている女の人もありました。私と  
 七37 9 ㊦ のよこのわかい男の人が、ただひとり、わ  
 七38 5 ㊦ ましたので、私は、人と人のあいだをかき  
 七38 5 ㊦ たので、私は、人と人のあいだをかきわ  
 七38 10 ㊦ き、そのわかい男の人が、「略」といっ  
 七39 5 ㊦ 受けとって、つぎの人に渡しました。それ  
 七42 10 ㊦ 、大きな声をだした人があった。みると、  
 七43 11 ㊦ たぼうしを、そばの人の手に渡した。ぼう  
 七48 3 ㊦ してあるだけ、よむ人に、はっきりと、そ  
 七49 4 ㊦ だ。それで、内野の人はいっしんになった  
 七66 2 ㊦ のいもをほっている人が二三人。ふろから  
 七67 4 ㊦ ている。(三) 人の顔をちようくす  
 七67 9 ㊦ し、しだいに、その人の顔にせていくや  
 七68 2 ㊦ て、だんだん、その人の顔にせていくや  
 七74 7 ㊦ らくだ 一の場面 人 甲と乙、ほかに、  
 七79 9 ㊦ いく。二の場面 人 旅人。甲乙。裁判  
 七80 9 ㊦ 。そのとき、この人にであつたのです。  
 七81 2 ㊦ しいことは、この人は、私どものらくだ  
 七83 1 ㊦ した。それなのに人の足あとがみえませ  
 七97 10 ㊦ でした。うさは、人がみていると、ちち  
 八5 4 ㊦ くらがりに、大ぜい人が立っているので、  
 八8 8 ㊦ ちがいだらうと思う人もありますうが、  
 八25 2 ㊦ の声と、むかしの人がうたっていますが

八38 2 ㊦ になると、み知らぬ人がはいってきました  
 八38 5 ㊦ 一と、そのみ知らぬ人がいました。「略  
 八39 9 ㊦ 「略」。「み知らぬ人は、そのままだこ  
 八42 9 ㊦ きのうの、み知らぬ人があらわれました。  
 八45 7 ㊦ できました。その人は、こういました  
 八45 8 ㊦ ほんとうに幸福な人をみつくて、その人  
 八45 8 ㊦ をみつくて、その人の着ているシャツを  
 八46 6 ㊦ 、ほんとうに幸福な人は、やすやすとみつ  
 八47 3 ㊦ いと考えて、幸福な人をさがしにでかけま  
 八47 8 ㊦ ときでした。中から人の声がきこえてきま  
 八48 5 ㊦ をうって、「この人こそ、さがしとめ  
 八48 6 ㊦ がしもとめていた人だ。」と喜んで、つ  
 八49 9 ㊦ も幸福のほしくない人はありませんから、  
 八50 2 ㊦ けれども、それでは人の心がよくわかりま  
 八50 7 ㊦ よくむかえてくれる人があったら、その人  
 八50 7 ㊦ 人があったら、その人のところへ幸福をわ  
 八51 1 ㊦ ました。その家の人は、「幸福」がきた  
 八51 7 ㊦ へ。」と、その家の人は、戸をピシャンと  
 八52 1 ㊦ ました。その家の人も、「幸福」がきた  
 八52 9 ㊦ へ。」と、その家の人はふかいため息をつ  
 八53 11 ㊦ したが、その家の人がでみると、まず  
 八54 2 ㊦ ました。その家の人も「幸福」がきたと  
 八54 4 ㊦ たが、なさけのある人とみえて、台所の方  
 八55 3 ㊦ へには、その家の人の心がよくわかりま  
 八55 4 ㊦ くあん一きれにも、人の心のおくは知れる  
 八67 4 ㊦ にくつついてね。人にふまれないように  
 八81 9 ㊦ 界じゅうで、あの人はどおりこうな人はあ  
 八81 9 ㊦ 人ほどりこうな人はありはしないから  
 八82 4 ㊦ てはいけないよ。人がしんせつにしてあ  
 八108 1 ㊦ 手でいねこきをした人もいました。ぼうの  
 九14 1 ㊦ で、ゆめをみていた人が、にわかに目をさ  
 九14 9 ㊦ あらう。もし、きく人の心が高ければ、そ

九21 2 ㊦ いうつばめたちは、人をおそれず、へやに  
 九21 3 ㊦ へやにはいつてくる人があると、たちまち  
 九25 5 ㊦ ばめのすがたをみた人は、きつと、「略」  
 九25 9 ㊦ たつばめをむかえる人の心は、どんなにう  
 九40 10 ㊦ をつけたおとなの人が、男か女かわから  
 九76 6 ㊦ おかみさんが、店の人とふたりで、せつせ  
 九77 1 ㊦ でもこうやって、人は目をたべています  
 九79 7 ㊦ らです。むかしの人は、目がらといっし  
 九86 1 ㊦ もう、むだ口をきく人は、ひとりもありま  
 九87 5 ㊦ ろ 学校の帰り道人 たかぎ・やまだ  
 九112 10 ㊦ んで、先生は地上の人となられた。お晝に  
 九122 9 ㊦ くなかった。つれの人は、この茶人ほど熱  
 九124 3 ㊦ 略」。「茶人はつれの人になった。まつ川が  
 十31 6 ㊦ と思います。かげで人のわる口をいわない  
 十31 9 ㊦ うにみせかけたり、人をだましたりしない  
 十32 5 ㊦ れないで、あいての人をうやまうとともに  
 十34 7 ㊦ のであるが、これを人の手によらず、機械  
 十37 10 ㊦ 珠、世界じゅうの人から愛される眞珠、  
 十41 7 ㊦ しにかかった。町の人のかげ口は、いっそ  
 十49 10 ㊦ ボタイテルよその人には、なんのことか  
 十62 9 ㊦ すか。能を知らない人でも、おじいさんや  
 十110 1 ㊦ ばな運轉をする人になるだらうね。」「  
 十110 8 ㊦ 、トップをこぐ人もいるだらう。」「へ  
 十116 2 ㊦ 。おかあさま 人の心の畑にさいた、  
 十119 3 ㊦ ぎんえもんという人がいました。働くこ  
 十119 5 ㊦ 、りえもんという人がありました。た  
 十119 6 ㊦ たいへん情ふかい人でした。村の人たち  
 十119 8 ㊦ りしました。この人が金次郎の父親でし  
 十121 1 ㊦ も、おとなの男の人が、毎日ひとりずつ  
 十122 2 ㊦ した。たくさんの中には、わらじの  
 十122 3 ㊦ らじの切れている人もあります。金次郎  
 十125 6 ㊦ ったりして、村の人に買ってもらいまし

十二 26 7 みると、りっぱな人になるためには、学  
 十一 29 3 金次郎は、また、人がすてておいたいね  
 十一 29 8 して、困っている人にかしてやったり、  
 十一 30 3 をすくい、多くの人からうやまわれるよ  
 十一 38 5 顧り、ゆききの人もえ顔して、その  
 十一 52 9 所ごとに、おりる人と乗る人ともみく  
 十一 52 9 、おりる人と乗る人ともみくちやにな  
 十一 62 5 だ、よわ虫だ。人のいうことに『いい  
 十一 63 3 ある朝、いなかの人らしいひとりの少年  
 十一 83 3 会 おまえはべつの人のところへつれてい  
 十一 85 6 会 す。ぼく、あの人におくすりを飲ませ  
 十一 85 7 会 いのです。あの人、いま、ひどくわる  
 十一 86 2 会 れですか、あの方は。』と、父親はた  
 十一 92 4 会 に、この死んだ人へのこしていきま  
 十二 5 12 会 なさん、これも人のしたあとでは、な  
 十二 11 7 スタロッチという人でした。書物 リ  
 十二 21 11 会 でのいて、人の心を動かすのだった  
 十二 39 7 うアメリカの女の人を書いた「わが生が  
 十二 44 6 会 うだ。もちろん人が動かすんだがね。  
 十二 44 11 会 かいといわれる人がいて、ものによつ  
 十二 45 1 会 右手を受け持つ人、左手だけの人、足  
 十二 45 1 会 人、左手だけの人、足だけの人と、そ  
 十二 45 1 会 の人、足だけの人と、それぞれ手わけ  
 十二 53 11 へだして、つかう人の顔や頭がみえない  
 十二 54 7 を重ねて、つかう人のかくるところを  
 十二 59 6 。一代二代はいい人で、よくさかえたが  
 十二 61 8 昔、あるまじい人が、ふとしたことか  
 十二 62 2 。その中にわるい人がいて、かりた家具  
 十二 63 7 しのびない。また人にみられるのもこま  
 十二 69 1 。はたらきのある人は、はをもったのこ  
 十二 70 2 くに、曾良という人が住んでいました。  
 十二 70 3 。曾良は、信州の人で、歌がたいそうじ

十二 88 5 とばでも、相手の人のいうことばのわけ  
 十二 88 12 ときには、相手の人のいつていることば  
 十二 89 1 でないと、相手の人に満足を与えること  
 十二 89 12 はくにし、相手の人をいやしめることに  
 十二 90 5 にあらわれるその人の面影ということも  
 十二 92 6 れている。ほかの人がこれと同じ文を書  
 十二 95 12 とかされて、その人その人の生活や経験  
 十二 95 12 れて、その人その人の生活や経験によっ  
 十二 97 10 りますが、古代の人は、はいが、いま  
 十二 105 3 げたをはいた女の人が、おともをふたり  
 十二 107 1 、鳥羽僧正という人がかいた動物絵巻の  
 十二 108 10 うお面です。舞う人のあるきかたや、身  
 十二 109 5 はイソップという人が書いたお話ですが  
 十二 111 7 という江戸時代の人のかいたもので、浮  
 十二 111 10 版画で、絵をかく人と、それを木にほり  
 十二 111 10 を木にほりつける人と、紙にすりあげる  
 十二 111 11 、紙にすりあげる人との共同作品なので  
 十二 8 3 と迷信 知識は、人から教えられたり、  
 十二 8 3 いく。一人まえの人として、自分のつと  
 十二 10 6 年によつて、その人の性質や運命をきめ  
 十二 10 7 角へ移つて困つた人もあれば、わるいと  
 十二 10 8 ごうのよくなつた人もある。同じ名まえ  
 十二 10 8 る。同じ名まえの人も世の中には多いが  
 十二 10 8 には多いが、ある人は、幸福なくらしを  
 十二 10 9 くらしをし、ある人は、たいへん不幸に  
 十二 10 9 年、約二百万人の人が生まれるが、これ  
 十二 10 12 れるが、これらの人がみな同じ性質をも  
 十二 11 12 ない。そうして、人は、道理によつて動  
 十二 14 2 ペルニクスという人です。しばらくして  
 十二 14 3 でケプラーという人が出ました。この人  
 十二 14 4 が出ました。この人は、すぐれた数学者  
 十二 15 8 びだし、その説を人に教えてはならない

十三 16 1 信じてはならぬ、人にも説いてはならぬ  
 十三 31 7 それが、見ている人には、かえつておも  
 十三 37 2 く。五 電話 人 三郎とくろ 三  
 十三 38 8 会 くの知っている人……だれかしら……  
 十三 41 5 会 三げんぶんものが、寝とまりしてい  
 十三 44 4 、舞台に出て来る人が、ただひとりです  
 十三 44 7 だ、あいてになる人が、見物人の目につ  
 十三 44 8 。電話のはじめの人は、三郎くんのおば  
 十三 44 10 、舞台に出てくる人は、四人のひとと話を  
 十三 44 10 いる人は、四人のひとと話をしているわけ  
 十三 44 12 の声は、見ている人には聞えませんが、そ  
 十三 54 9 界をまわつて来た人です。だから、この  
 十三 59 5 のほうさんらしい人が、その前にひれふ  
 十三 59 12 会 ったが、見物人が、かわりばんこに  
 十三 61 2 会 まさは、普通の人にもわかるだろうね  
 十四 4 2 國に知られている人は、けつして少なく  
 十四 5 6 さないところから、人の世の苦しみをいろ  
 十四 29 10 たのだらうという人もありますが、それ  
 十四 30 10 おき、これからの人の心がまえは、大き  
 十四 32 2 、「略」という人があるかもしれませ  
 十四 32 4 ないと思つている人もあるでしょう。け  
 十四 47 2 した。歌っている人は、どういふ人かわ  
 十四 47 2 る人は、どういふ人かわかりませんが、  
 十四 47 6 よう。たいていの人は、しょうとつのと  
 十四 47 6 というほかは、自分なにか  
 十四 47 11 歌の心を生かした人は少ないでしょう。  
 十四 49 8 にこの歌を歌つた人というべきです。さ  
 十四 49 11 するこのすきな人には、なかなかおも  
 十四 62 8 めきつたへやで、人の動きまわらないと  
 十四 64 12 おうじようさせ、人をたおし、こごえ死  
 十四 86 10 い野原を、第一の人が歩いて行く。その  
 十四 87 7 歩いて行く。その人の足あとをしるべに  
 十四 87 8

十四 87 9 しるべに、第二の人が歩いて行く。やが  
十四 87 10 く。やがて第三の人も通り、第四、第五  
十四 87 11 り、第四、第五の人も、同じ足あとをた  
十四 88 3 ぐんでいる。歩く人は、おそらく、まっ  
十四 89 7 れをとりあつかう人によって、文章は、  
十四 89 9 な文章でも、読む人の心がひかれるのは  
十四 89 10 たたかくながめた人によって書かれた文  
十四 91 12 。自分の足だか、ひとの足だか、わから  
十四 99 5 とりのしんせつな人であつたおばあさん  
十五 5 2 文 目にとき人とても、声の行く  
十五 8 3 文 さくらさくら人が人が子を歩かせて  
十五 8 3 文 くらさくら人が人が子を歩かせて か  
十五 8 4 文 わずだまりて人の足大きくする  
十五 11 2 文 てとぶ見ゆ 人の家にさえずるすず  
十五 11 2 文 来て鳴け病む人のために わか草の  
十五 23 12 でしょうか。その人は、いっしょうけん  
十五 32 6 ども、戦っている人と鳥とはむちゅうで  
十五 34 5 をその場にいない人や、遠くにいる人に  
十五 34 5 人や、遠くにいる人に知らせるためには  
十五 48 6 、いままで、焼く人と赤絵屋がわかれて  
十五 65 10 まわすので、家の人のねむりをさまたげ  
十五 68 6 「略」と、家の人によびかけながら、  
十五 78 3 みたちは、世間の人にわかつてもらえな  
十五 78 10 実だからである。人の心をひくために、  
十五 81 2 イン—— 天は、人のうえに人をつくら  
十五 81 2 天は、人のうえに人をつくらず、人のし  
十五 81 2 人をつくらず、人のしたに人をつくら  
十五 81 2 らず、人のしたに人をつくらず。—— 福  
十五 83 12 かりだけれど、人はわるくないんだよ  
十五 86 7 いてしまうよ。人というものは、自分  
十五 96 4 世の中には、人が思うよりもっとた  
十五 99 7 ても、だんだんに知られてくるね。

十五 100 4 いたろう。この人、まだぼくたちに会  
十五 101 10 いたかい。この人のうちに『幸福』が  
十五 106 2 かいから、あの人のわらうのを見たこ  
十五 108 2 のところにいる人、だれなの。『幸福』  
十五 108 9 幸福「あれは、人がまだ知らずにいる  
十五 109 3 なた、あの女の人を知らないのですか  
十五 109 5 んなさい。あの人、あなたを見ていま  
十五 116 3 ながら、「あの人がつれて来てくれた  
十五 116 5 母の愛」あの人、だれなの。『チル  
十五 116 7 母の愛』私、あの人を見たことがなかつ  
十五 116 7 かったよ。あの方は、おまえたちふた  
十五 116 10 ているの。あの人、顔を見せることは  
十五 116 11 「いいえ、あの方は、あんまりはつき  
十五 117 2 母の愛」あの人、私たちが、あの人  
十五 117 2 私たちが、あの人をずいぶん待ちわび  
ひとあし 二足 名 3 ひとあし ひと足  
三 44 10 もう ひと足で りくへ あがろうと いう  
とき、白うさぎは、「略」といって  
七 38 8 しかし、弟の手をひいているので、ひとあ  
しすむにも、よいいではありません。  
九 56 11 いちろうはぎよつとして、ひと足うしろに  
さがって、「略」といいました。  
ひとい 醜 形 14 ひとい 《イー・ク》  
三 47 2 するといたみがいっそう ひとく なくて、  
とても たまらなくなりました。  
八 65 1 それは、ひとく大きなからだで、たいへん  
みにくいものであった。  
八 65 4 これはまた、ひとく大きなひなだ。  
八 76 9 小屋はひとくあれでいて、どっちにたおれ  
るかわからなかった。  
八 76 10 風がひといので、あひるの子は立つことも  
できず、

九 56 2 足もひとく曲がってやぎのようですし、  
九 69 11 これほどのひとい裁判を、まるで一分半  
でかたづけてくださいました。  
九 99 1 でも、きみはひといよ。  
九 144 11 あみをはり、かくれていて、ほかの虫が  
ひつかかると、いきなりとびついてかみころすな  
んで、なんとひといことをしてきたものだろう。  
十一 53 10 いままで、ひとくとげとげした心でおし  
あっていた人たちも、きゆうになごやかな氣持に  
なった。  
十一 85 7 あの人、いま、ひとくわるいんですか  
ら、ゆるしてください。  
十四 92 9 まだ一銭ももうけてはいないので、父親  
が、きつとひとくしかるにきまつていた。  
十五 96 2 『ふとった幸福』どもが、ひとい目に  
あわせたのだよ。  
十五 105 2 チルチル びっくりしてひとくおこって、  
ひといき 二息 名 2 ひといき ひと息  
九 18 6 なん百キロの海をひといきにとぶのも、  
けつしてふしぎではありません。  
九 107 2 もうひと息」と、のだ先生がつえでさ  
される方を見ると、なるほどりっぱなスキー場で、  
ひとうね 二敵 名 1 ひとうね  
九 42 5 ぼくのうちでは、五日めごとにひとうね  
ずつほりおこすことにしました。  
ひとえだ 二枝 名 1 一枝 ひやまぶきのひと  
えだ  
十二 7 3 少女はなにを思ったのか、ふと庭さきに  
さいていた黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、  
ひとかき 二掻 名 1 ひとかき  
三 27 7 かいをそろえて ひとかき 水をかくと、  
ひとかたまり 二塊 名 3 ひとかたまり

ひとくち 二口 (名) 1 ひとくち

十四  
88  
1  
ほつりほつりとしるした足あとが、廣野

三 10 2 一 ともかくやてめをみた人たちは

三  
10 6 それで かくやひめは その人たちに







は、眞珠でした。

十469(金) いま一つは、眞珠でした。

十693 一つのまるいつばをみつけ、

十183(金) 乗り組んでいる者が、みんなそろって、

一つの生きものみたいに進んでいく。

十145 一つの太陽の下で、みんながめいめいの

歌を歌っている。

十147 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちょう

も舞い、まさおな海もわらい、

十1687 その大きなへやはしまでいくと、看護

人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまつて、

十17912 が、ただ一つ、少年をなぐさめることが

ありました。

十2710(文) 「七重八重花はさけどもやまぶきの

みのひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、

十2333 サリバン先生は、〈略〉あくる朝、私を

おへやに呼んで、一つの人形をくださいました。

十2425 これは、ケラーのサリバン先生に対する

信頼と、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、

一つになったおかげです。

十24412(金) 人形つかいといわれる人がいて、もの

によつては、三人がかりで一つの人形を動かすん

だ。

十25710 村の人たちは困りはて、おにに向かって、

一つの難題をもちだした。

十2841 一つのボールを中心にして、両選手はと

ぶ鳥のようにかけまわりました。

十21073 平安時代の終りから鎌倉時代にかけての

藝術の中で、とくにすぐれたものの一つです。

十21113 まき絵は、日本のすぐれた工芸品の一つ

で、古くから外國人にもはやされてきました。

十21121 三人がひとつに心をあわせた美しさは、

このとおりりつばなものとなって生まれたのです。

十397 かふんがめしべにつかないようなくふう

と、いま一つ、よくつくようなくふうをして、

十3113 一つのことと他のこととの間に、すこし

のつながりもなく、

十3114 原因と結果との関係もないのに、一つの

ことは他のことの原因であると、信ずるのである。

十31311 地球も〈略〉、火星などと同じように、

太陽のまわりをまわっている星の一つだ、

十4318 あなたがたの考えひとつで、日本はよく

もわるくなるのです。

十4561(金) 私は、こんなに長いばかりで、〈略〉

特別なはたらきは、なに一つございせん。

十45912(金) ぼくが〈略〉かふんをなからだちしてあ

げなかったら、実は一つもつかなかったのですよ。

十4622 ここに、茶わんが一つあります。

十4696 まったく関係のないようなことがらが、

原理のうえからは、おたがいによくにたものであ

るという一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

十4807 なん代もなん代もやってみた結果、どう

とう一つの眞理だと思われたので、

十4832 一つは「雪國」というのであり、もう一

つは「雪」というのであった。

十4833 もう一つは「雪」というのであった。

十4868 たとえば、ふぶきなどもその一つである。

十4913 もう一つのほうは、どこかの男の子がひ

ろって行ってしまった。

十49311 女の子は、手にマッチの小さなたばを一

つ持っていた。

十4992 じつと見つめているうちに、一つの明か

る星が落ちるのを見た。

十五192 アルプスの山々のうち、もっとも高い山

の一つに、ユングフラウという美しい山がありま

す。

十五384 このように、日本では一つの漢字をふた

とおりに読んできたが、

十五503(金) この焼物をやめれば、日本から美しい

ものが一つ消えてしまうことになります。

十五573(金) きみは室を二つももっているようだが、

その一つに日本の青年をとまらせて、

十五577(金) 室は二つあっても、つくえは一つしか

なかった。

十五719 町の東にある寺の一角に、こけむす一つ

のおほか、

十五7610 そうして、これが新島からならった日本

語の一つだといわれた。

十五992 もう一つの「幸福」のむれ、まえよりは

すこしせの高いのが、廣間の中につけこんで来て、

ひとつ「二」(副) 6 ひとつ 一つ

六106 ぼくもひとつまねをしてやろうと思った。

八301 天帝は、ひとつこの男のうでをためしてみ

ようと考えて、

九801(金) ひとつこれからほつてみることにしま

しょう。

十705(金) ひとつ、たべてみようじゃないか。

十248(金) きみもひとつ、作ってみるといいよ。

十五249 一つまちがえば、千ひろの谷間へ、氷と

雪の中へ、まさかさまに落ちこむのです。

ひとつおき 「二置」(名) 2 一つおき

七83(金) それは、かた方の足あとが、一つおきに

あさくなっていました。

十二675 のごぎりののはは、いぬの歯のようにと

がって、一つおきに右と左にすこしよじれて、

ひとつからだ 「二体」(名) 1 一つからだ

七353 私とさぶろうとは、まるで、一つからだになつてしまふかと、思われるほどでした。

ひとつき 「二月」(名) 1 一月

十四1410(国) もうすこしすれば、ごいっしょに一月をくらせるのだ、

ひとつき 「二突」(名) 2 一つき

八303 天帝は、(略)、黒うしのしっぽのあたりを一つきおつきになりました。

十五2812 短刀をぬいて、(略)、鳥のせ骨をさけて一つきつき通し、

ひとつのこばから 「課名」 2 ひとつのこばから

一36 十四 ひとつのこばから……三十一

一317 十四 ひとつのこばから

ひとつのものでも 「課名」 2 ひとつのものでも

四35 十一 ひとつのものでも……百二十

四1201 十一 ひとつのものでも

ひとつひとつ 「二」(名) 15 ひとつひとつ 一つ

二114 そこで、みんなは、小さなかみに、ひとつひとつこばをかきつけました。

六1133 それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作ったものであることがわかって、

六1225 うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、

ぼんぼんとおさるさんにながてやりました。

八335 この星は、一つ一つがはっきりとみえないのですから、

八614 とうとう、一つ一つたまごがわかれた。

九1444 くもは、これらのことを一つ一つ思いだしているうちに、

十435 研究のため、死員を一つ一つ、ていねいにしらべていった。

十一556(国) てんとうむしのように、みずすましのようになつて、一つ一つはねる。

十一562(国) すずむし、小むし、チックタック時計、一つ一つひびく。

十一567(国) 花火やほたる、とんぼの目だま、一つ一つ光る。

十一572(国) べにばら野ばら、さんしょの木め、めやぎのおちち、一つ一つかおる。

十一577(国) はちみつやいちご、青うめ・わさび、にがい、にがいくすり、一つ一つしみる。

十一582(国) じゅずだま・むくろんじ、赤い、赤い

つばき、げんげの花わ、一つ一つつづる。

十一737 その人たちは、しんさつをはじめ、一つ一つのベッドのそばに立ちどまりました。

十三3312 明かるい夜空に、なんきんだまのような星がばらまかれて、一つ一つががやく美しさは、

ひとつひとつつづる 「課名」 2 一つ一つつづる

十一35 七 一つ一つつづる……五十五

十一551 七 一つ一つつづる

ひとつぶ 「一粒」(名) 3 一つぶ 一つぶ

八1027 ほの1つぶを虫めがねでみると、毛のよう

なものがたくさんはえていました。

八1067 ですから、1つぶの種もみから、やく15

00つぶもみができたわけです。

十382 一つぶの天然真珠をてのひらにのせて、

ひとつとおり 「一通」(名) 1 ひとつとおり

十二1611 かきなおし、ぬりなおして、かいてい

くうちに、ひとつとおりできあがった。

ひとつとこ 「二所」(名) 1 ひとつとこ

七616 ひとつとこで、からすが鳴くと、あつちで

もこつちでも鳴く。

ひとつとつこい 「人懐」(形) 1 人なつこい

《一イ》

五1007 ひわは、「(略)。」と、人なつこい声で鳴

きました。

ひとにぎり 「一握」(名) 1 ひとにぎり

十一2811 とりのおぼさんからひとにぎりのあぶら

な種をかりて、

ひとねいりする 「一寝入」(サ変) 1 ひとねいり

する 《一シ》

四6110(国) 「さあ、ひとねいりしなければ。」と、

出発がかりのがらが、みんなを元気づけました。

ひとのかお 「課名」 2 ひとのかお

一34 十二 ひとのかお……二十七

一271 十二 ひとのかお

ひととき 「一掃」(名) 1 ひととき

四914 ひとときはいて、うちにあがっておい

でになると、ひたいからゆげがたつ。

ひととはこ 「二箱」(名) 2 ひととはこ 一とはこ

一146 ほん一さつ、ちようめん二さつ、いろが

み五まい、くれよんひととはこ、

十四924 まだマッチをすこしも賣ってはいなかつ

た。一はこも賣ってはいなかつた。

ひととはな 「二花」(名) 1 ひととは

十五142(文) 大きなべにばらのひと花思わぬを

ゆららにあかく開き満ちたる

ひとばん 「二晩」(名) 1 一晩

八724 あひるの子は、ここで一晩横になった。

ひとばんごと 「二晩毎」(名) 1 一晩ごと

八858 しかし、一晩ごとに、そのおよぎまわるあ

ながだんだん小さくなつていった。

ひとひ 「二日」(名) 1 ひとひ

十一365(国) ひとひのあせもおさまって、夕風ふけ

ばたいこ鳴り、

ひとびと 「人人」(名) 29 人々

三162 それをみたごてんの 人々は、びっくりしてしまいました。

三282 「略」。」と、せんだうたちも、みている人々もいました。

四72 人々のたいせつなものをももってくれます。

四1233 なん百年も、なん千年も、人々は 不由な思いをしました。

五527 いそがしそうに人々を通ります。

五561 もう、たくさん、子どもや町の人々が、あつまっていました。

七441 ぼうしは、つぎつぎと人々の手を渡り、お金がその中にたまった。

九236 この國の人々が、あわれなこの小島たちにしめしたもとも人間らしいあたたかい氣持は、

九237 この國の人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた

十3210 豊田佐吉は、村の人々から、こういつてあざけられた。

十4610 あなたが自然をあいてとして、眞珠を世界の人々にあたえたことに、

十二46 ある日、祝賀会の席で、人々がかかるがわる立つてコロンブスの成功を祝しますと、

十二58 人々は、なんのためにこんなことをいいだしたのかと思いがちで、みましたが、

十二559 ただ人々のあいだで語り伝えられているだけで、

十二8211 試合を見物しようと、方々の國の人々が、そのコートを目がけて集まりました。  
十二947 ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいがったものと思いだされてくる。

十二10211 夢殿の観音といって、いまでも、多くの

人々からたつとばれている作品です。

十三1010 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、この考えのまったくあてはまらぬことは、

十四410 そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。

十四808 そのことをほかの人々に伝えるうちに、

十四836 深い雪の中で生活している人々、

十四1022 元日の朝、人々が、マッチ賣りのむすめの、ひえきつた小さなきこをみつけたとき、

十四1025 人々は、女の子がおおみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。

十四1026 人々は、その子がどんなに幸福に、《略》、元日をむかえているかを知らないのだ。

十五239 人々はただ、「あれあれ。」とさけぶばかりです。

十五2612 少年は、ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、

十五2711 もう、がけの上で「あれあれ。」といっている人々の目には、

十五422 日本語が世界の人々に親しまれるようになるであろう。

十五801 いろいろな國の人々の間に、《略》心のかよったおつきあいができるようになったのは、

ひとひよこ (名) 1 ひとひよこ  
四679 「かえるが ひとひよこ、ふたひよこ みひよこ、あわせて ひよこひよこ むひよこひよこ。」

ひとひら 「二片」(名) 5 一ひら  
十四8310 「雪」というのは、《略》、雪の一ひらをとらえて映画にしたものである。  
十四841 ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、

まことにきれいな形をしていること、

十四8412 空から降ってきた雪の一ひらを受けとって、それをくわしく観察してみると、

十四855 一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、

十四8511 一ひらの雪をとらえて、それをいろいろな角度からながめてみることは、

ひとひらひとひら 「二片二片」(名) 1 一ひら一ひら  
十四842 しかも、一ひら一ひらの雪が、それぞれちがつたけつしようをしていること、

ひとふくろ 「二袋」(名) 1 一ふくろ  
十一7 おとうさんが、子どものすきそうなおかしを、一ふくろやったのがはじまりで、

ひとまがり 「二曲」(名) 1 一曲がり  
八588 さら、もう一曲がりだ。

ひとまず 「二先」(副) 2 ひとまず 一まず  
十428 半円眞珠が思いどおりに取れるようになったので、ひとまずこれを加工して、かざり物として、ともかく、世にだすようになった。

十五313 大わしは、この思わぬいたてにおどろいて、ぱつと一まず舞いたちましたが、まだこりないでやって來ました。

ひとまね 「人真似」(名) 1 人まね  
十二341 もちろん、ことばをつかっていることや、

そんなものがこの世にあることさえ知らず、ただ、さるの人まねのように指を動かすだけでした。

ひとまわり 「一回」(名) 1 ひとまわり  
十四767 これが、もうひとまわり大じかけになって、たとえば、アジア大陸と太平洋との間におけると、それがいわゆる季節風(モンスーン)で、

ひとまわりする 「一回」(サ変) 4 ひとまわりす

る『シ・スル』

七79 風になつたら、学校の中を、ちょっとひとまわりするのだ。

七44 車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふたたび、しらがの老人のところにどつた。

七60 スリッパのへりをひとまわりして、帰っていった。

九98 たかぎ、うしろの木をひとまわりして、そつとやまだに近づく。

ひとみ 瞳 (名) 3 ひとみ

十一77 感謝するような色が、そのひとみに、ちよつとのあいだうかぶようにみえた。

十二80 そのひとみの中には、『略』という色があらわれていました。

十五17 わが祖國、やがて立つべし。きみたちのそのまともなるひとみもて。

ひとむれ 二群 (名) 2 ひとむれ

八81 草むらから、大きな鳥の一むれがやってきた。

十四32 この一むれの星を、ふつう太陽系とよんでいます。

ひとめ 二目 (名) 6 ひと目

三103 光るようにうつくしい かぐやひめに、ひと目でもあいたいものだ。

九139 わたし、おかあさんにひと目あったら、もう、命はほしいとは思いません。

十一65 門ばんは、その手紙をひと目みてから、看護人と呼んで、

十一81 男はみまわして、ひと目少年をみると、こんどはかれがさげびをえました。

十二24 わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にものぼるほどうれしかったのです。

十四93 ただひと目でも、火の光とごちそうとを見るだけでも、満足したのであらう。

ひともと 二本 (名) 1 一本

九27 草原に一本あかしはじもみじひとやすみ 二休 (名) 1 ひとやすみ

一64 ひとやすみ。『わたくしは、略』こしけにもたれて、うとうとしました。

ひとやすみする 二休 (サ変) 2 ひと休みする

『シ』

六20 さあ、ひと休みしようではありませんか。七80 らくだをつれて、さばくを通っていましたが、とちゅうでひと休みしているうちに、

ひとり 一人 (名) 85 ひとり ひとり おひとり・おまえひとり・じぶんひとり

二19 ひとりがいったことばから、おもいついたことばをじゅんじゅんにつづけて、

二32 そのうちのひとりが、『略』といいました。

二57 そこへ、ひとりの おじいさんが できました。

二70 この声はひとりではなく、大ぜいの声。三117 そこで、まいにちかしこいでしをひとりずつ、はんだかのところへやって、

三79 だれひとり、上をみたりまわりをみたりするひまもありませんでした。

四121 ひとりの りようしが、みほの まつ原へ できました。

四123 まつの 木の うしろから、ひとりの 女が できました。

五24 そうしたら、ひとりの人が立ちあがって、『略』といいて、

五47 ひとりで通るときも、みんなで通るときも。

五64 日に日に大きくなったのは、おまえひとりの力でもなければ、

五86 『略』と、うたのようにふしをつけてよびながら、ひとりの子どもがきます。

五89 ひとりの子どもが、『略』とたずねました。

五98 おとうさん、ひとりでとべるようになるまで、かってやりましょうね。

五105 ひわは、いつもそのまねをしては、ひとりよろこんでいました。

六16 そのとき、ありのまねをひとりのかりうどが弓矢を持って通りました。

六86 そこへひとりの年よりがでてくる。六107 ぼくは、夜、勉強をすましてから、ひとりで、『略』と考えてみた。

六130 ぼくひとり、じつとじつかにしていたんだよ。

七37 わかい男の人が、ただひとり、わらいもせず、両方の手でまどわくをおしています。

七41 目をさますと、向こうの席にひとりの青年が立っていた。

七74 人 甲と乙、ほかに、ひとりの旅人。七75 そこへ、ひとりの旅人がやってくる。

八54 なんだろうとのぞいてみると、ひとりの小鳥屋が、夜店をひろげていました。

八64 その晩から家族のひとりになり、あくる日、ピオという名がつけられました。

八37 かわいいひとりの王女もあって、なにひとつ不足なことはありませんでしたが、

八44 あるところに、ひとりの王さまがいらっしやいました。

八48 ひとりの男が、いまにもごろりと横になろ

うとしているところでした。

八八六 2 あくる朝早く、ひとりの農夫が通りかかった。

九八二 1 先生は、耳にもおいれにならないで、ひとりでたんねんにほっておいになりまます。

九八六 1 もう、むだ口をきく人は、ひとりもありませんでした。

九八四 4 むかし、ひとりの茶人があった。

一〇二一〇 「略」と、ひとりの少女が、おとうさんをみてそういいました。

一〇二一五 その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少年にもあいました。

一〇二一四 ひとりの子どもが、立つて本を読んでいる。

一〇二一八 ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字を読んでいる。

一〇二二三 ひとりの友だちは、水えのぐで写生をしている。

一〇二二七 ひとりの友だちは、その兄といっしょに種まきをしている。

一〇二三二 ひとりの友だちは、妹をつれて、つつみの上でつみ草をしている。

一〇二三四 ひとりの女の子が、「略」と、「こくご」の文を大きな声で歌う。

一〇二三七 ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に乗っている。

一〇二五三 ひとりの工具がしごとをすませて、坑内から地上にでてる。

一〇三一一 ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、

一〇三一二 自分ひとりぐらいどうでもいいというような、

一〇三二二 この学校では、かけがえのないひとりであることを、ほころぶようになりたいものです。

一〇三六 1 世間からはますますわられて、だれひとりあいてにしてくれなくなり、

一〇三八 3 天然眞珠をてのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者があった。

一〇六五 11 ずっと、ひとりであらうしていました。

一〇一〇七 四 さあというときに、ひとりで責任をしょって立つ、トップをこぐ人もいるだろう。

一〇二二一 1 さかわ川のていぼう工事があって、どの家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで働くことになりました。

一〇二四二 四 ひとりぐらい育てるお金は、わたしが山へいって木を切ってきてあげますよ。

一〇二五四 六 なたがいにつめて、座席にもうひとり。

一〇二六三 4 いなかの人らしいひとりの少年が、

一〇二七三 4 みると、医者が、ひとりの助手をつれて、へやの向こうのはしにはいつてきました。

一〇二七五 5 さっきの看護婦と、もうひとりの看護婦とがついていました。

一〇二八八 1 ひとりの男が、看護婦に送られながら、そのへやにはいつてきました。

一〇二九四 8 ひとりの男が、「略」といってあざわらいしました。

一〇三〇六 一〇 おくからひとりの少女がでてきましたので、「略」とたのみました。

一〇三二九 11 ひとりのみずばらしい身なりをした老人が、道路をうろうろとみまわしながら、

一〇三三二 四 ぐつをはいている子どもはひとりいません。

一〇三三二 11 それをみた土人のひとりが、書物というものはなにかすばらしい力をもっているものだと言いました。

一〇三二九 六 いま、民ちゃんがひとりでおかって口から地面におりて、

一〇三四一 1 サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひとりのようになって、勉強をはじめたのです。

一〇三五二 2 もしそれができたら、毎年ひとりずつ、おに人間をくわせてやるというのであった。

一〇三六二 7 十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木こりがいた。

一〇三六三 六 家にはひとりの母がある。

一〇三七〇 六 芭蕉はたったひとりで住んでいて、なにかにつけて不自由であろうから、

一〇三七九 住みこんであげてもいいけれども、芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、

一〇三八二 11 このとき、希望をいだいてたちあがったひとりの軍人がありました。

一〇三九一 六 ぼくの学用品を、ぼくひとりであつのは、ぜいたくというもんだ。

一〇三九四 5 ところが、このしばいは、舞台に出て来る人が、ただひとりです。

一〇三九五 5 おかあさんが、「略」あかちゃんをだいていて、その右の方に、もうひとりの子どもがよりかかっている絵です。

一〇三九八 八 歌を歌っているのは、その中のひとりでした。

一〇四〇九 五 この子にとって、ただひとりのしんせつな人であつたおばあさんが、

一〇四二〇 六 両親と子どもふたり、ひとり男の子で八つ、ひとり女の子で四つになるかわいい子どもたちでした。

一〇四二六 六 ひとり女の子で四つになる

一〇四二八 八 それに、この子どもたちをせわする、ひとりの女の子の家庭教師がついていました。

十五245 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて来ました。

十五4511 ある日、プリンクリーは、どうやら覚えた日本語で、町をひとりで散歩していた。

十五486 いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、ひとりでこの焼物を作ることは、むずかしいことであった。

十五586 博士は、遠い昔を思い出して、ひとりそのときの思い出にふけていられるようすだった。

十五6610 私は、母や多くの弟妹たちをあとに残し、ひとり父につられて、《略》京都に移った。

十五786 ひとりの人間にとって真実であるものは、他人にとっても真実だからである。

十五8810 チルチル、すこし横の方に立っているひとりの「幸福」を指さして、

十五1157 どの子だって、おかさんはひとりぎりです。

ひとりあそび 「独遊」(名) 1 ひとり遊び

十二244 おいの正男ちゃん、五つですから、もうひとり遊びができますが、

ひとりがつてん 「都合点」(名) 1 ひとりがつてん  
十二936 ひとりがつてんでなく、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。

ひとりごと 「独言」(名) 9 ひとりごと

一525 ひとりごとをいうと、となりのおじさんが、「略。」

五1051 「《略》。」と、本をよむようなひとりごとをいいました。

六1024 ぼくはこうひとりごとをいいながら、そとをのぞいてみた。

八408 こんなひとりごとをおっしゃって、そこらの木の葉や花にみんな手をおふれになりました。

八627 「《略》。」と、ひとりごとをいって、こしをおろした。

九12910 ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもはやぶれたところをつくろいかけた。

九1408 「《略》。」と、ひとりごとをいいました。

十5012 「フツテ」と、ひとりごとをいいました。

十二1412 ひとりごとをいいながら文雄が、そのくちた草をとりのけようとすると、

ひとりじめする 「一人占」(サ変) 1 ひとりじめする 《一シ》

十三2344 もしある時期になって、小もみを切りはらってしまったら、大もみは土地をひとりじめして、生長するにちがいありません。

ひとりでに 「独」(副) 2 ひとりでに  
三1133 すると、しめきっておいたくらの戸がひとりでにあきました。

十349 機械で動かせば、《略》、ひとりでに、ぬのがずんずん織られていくからである。

ひとりひとり 「二人一人」(名) 1 ひとりひとり  
九1133 午後は、先生について、ひとりひとり、正しいすべりかたを教えていただいた。

ひとりひとり 「二人一人」(名) 4 ひとりひとり  
二115 そうして、ひとりひとりの かんがえどおりにわけてみました。

二3610 めくらが、ひとりひとりかってなこと

をいうので、

三308 あとで、できた作文を、ひとりひとりよみました。

七2144 ひとりひとり、ばらばらにわかれて、そつとね。

ひとりぼっち 「一人」(名) 2 ひとりぼっち  
三426 ひとりぼっちになってしまいました。

十四73 子どもたちはじゅうぶん愛していく

れる、だから、自分たしかにひとりぼっちではないのだと、お考えになってください。

ひとりむすめ 「二人娘」(名) 1 ひとりむすめ  
八277 それは、天帝のひとりむすめのはたおりひめのすがたを、もとめておいでになるのですた。

ひな 「雛」(名) 13 ひな  
五943 その帰り道に、一わの小鳥のひなをひろいました。

五943 ひなはたいそう小さくて、元気がなく、死んだようになっておちていたのです。

五946 これ、なんのひなだろう。

五956 ひなは、みちがえるように元気がでて、だんだん大きくなりました。

五9510 ひなはずめではありませんでした。

五966 夏休みがすむころには、ひなはもう、かごの中をとびまわっていました。

八6010 けれども、親あひるは、ひながでくるまえに、もうつかれきっていた。

八615 「ピイヨ、ピイヨ。」と、どのたまごからも小さなひなの首がでた。

八638 わたしも、一どそれだまされたことがあってね、そのひなには苦労したよ。

八651 「ピイヨ、ピイヨ。」と、ひなは鳴いて、はってでた。

八654 これはまた、ひどく大きなひなだ。

八656 ほんとうにしちめんちょうのひなかしら。

八659 親あひるは、そのひなをみんなつれて、水のところへおりていった。

ひなか 「日中」(名) 1 日中

六133 あつい日中の道を、ものを運びながら歩いてくると、のどがかわきました。

ひなた 「日向」(名) 4 ひなた 日なた

十二362 先生がぼうしを持ってきてくださったので、私は暖かい日なたにでかけるのだと知って、

十四633 この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだして、日光を湯げにあて、

十四6910 それを日なたへ持ちだして、じかに日光をあて、茶わんのそこをよく見てごらんさい。

十五1033 金は、『ひなたの幸福』で、ダイヤモンド色の着物を着ていますし、

ひなたち 「難達」(名) 5 ひなたち

八616 「ガア、ガア。」と親あひるがいうと、ひなたちはすぐとびだしてきた。

八6111 「略。」と、ひなたちはいった。

八6511 「クワツ、クワツ。」という、ひなたちも一わずつとびこんだ。

八661 水はひなたちの頭の上を流れたが、すぐにうかびあがってきて、うまくおよいだ。

八678 そうして、親あひるにつれられたひなたちが通っていくと、

ひなたぼこ 「日向」(名) 2 ひなたぼこ 日なたぼこ

九1175 文 文 たべのこしのめしつぶまげぼうちつどうすずめの子らと日なたぼこする

十一408 文 文 ほしたかぼちや赤やら黄やら、にわとりどもはひなたぼこ。

ひなたぼこ 「日向」(名) 1 ひなたぼこ

十二569 みそ五郎は、雲仙岳にこしかけて、ひなたぼこをしながら、まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。

ひなまつり 「雛祭」(名) 1 ひなまつり

四1243 三月はひなまつり。

ひにく 「皮肉」(名) 1 ひにく

十649 狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきや、略で、できているといつてもよく、

ひにひに 「日旦」(副) 3 日に日に

五644 日に日に大きくなったのは、おまえひとりの力でもなければ、おとうさんやおかあさんの力でもない。

六783 命のあるものは、日に日にそだっていく。十二11310 汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、日に日に進歩しています。

ひねくれもの 「捻者」(名) 1 ひねくれ者

十五892 あれはすこしひねくれ者で、子どもさんたちにしようかいするのはむずかしい。

ひねる 「捻」(五) 6 ひねる 《一ツ・リ》

九526 いちろうは、首をひねりました。

九661 やまねこはぴんとひげをひねっていいました。

九673 やまねこが、ひげをひねっていました。

九712 まだなにかいいたように、しばらくひげをひねって、目をばちばちさせていましたが、

九7110 いかにもさんねんだというふうには、しばらくひげをひねったまま下を向いていましたが、

十四609 花も、葉も、つるも、首をひねって考えていました。

ひのき 「檜」(名) 1 ひのき

十一402 山のもみじ葉みなちりはてて、青くしげるはまつ・すぎ・ひのき。

ひのこ 「火粉」(名) 1 火のこ

十五75 文 文 さい晩や火のこ豊かの汽車けむりのひかり 課名 2 日の光

十二6 三 日の光……十八

十181 三 日の光

ひのまる 「日丸」(名) 1 日のまる

十二609 高どのに立っていた長者は、日のまるのおおきをあけて、しずみかけた日をさしまねくと、

ひばし 「火箸」(名) 1 火ばし

八8610 おかみさんは声をはりあげ、火ばしであるの子をうった。

ひばな 「火花」(名) 4 火花

三516 かつちん かつちん 日がくれて、火花がみえるのみのさき。

八7711 ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだすことさえてきた。

八802 せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだしたりすることができた。

八831 たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火花をだすことを、せいでして勉強するのだね。

ひばり 「雲雀」(名) 9 ひばり

三71 かつみになくひばり。

三392 海のような空で、ひばりがいないいました。

四803 す——すだちする ひばり。

五948 ひばりかもしれないよ。

五9511 ひばりでもありませんでした。

七716 そのずつと高いところでは、ひばりが一つ、さえずっている。

八881 太陽がてりはじめ、ひばりが歌いだしたとき、

十一318 青い空にはかすみこめて、ひばりは朝から大うかれ。

十三62 ひばりやつばめも、やがて、遠い國からここに帰って来て、略、歌うだろう。

ひばりさん 「雲雀」(名) 2 ひばりさん

二679 おや、ひばりさんだ。

二6710 ひばりさんだ。

ひび 〔輝〕(名) 1 ひび  
 四七二 9 ひびのくすり。  
 ひび 〔目〕(名) 5 ひび 日々  
 四七三 1 ひびにつける。  
 十一三二 2 〔目〕 ひがんすぎれば風あたたかく、木々の  
 つぼみも草のめも、日々に色づきふとりだす。  
 十三五二 6 わたしの日々が、自然をしたう心で、一  
 日一日と、むすばれていくように。  
 十四三七 2 みなさん、あなたがたは、いま、日々の  
 生活にもつらい思いをしていますか、  
 十四四三 4 〔目〕 日々の苦勞に、よし心配がたえなくと  
 も、くちびるに歌をもて。  
 ひびき 〔課名〕 2 ひびき  
 三三三 4 十 ひびき……八十五  
 三三五 1 十 ひびき  
 ひびき 〔響〕(名) 13 ひびき  
 三八九 1 じぶんの 耳で きいた ひびきを、かき  
 とって みましよう。  
 三八九 3 ていしゃばでは、どんな ひびきが きこえ  
 るでしょう。  
 九六七 音をうまくあわせると、とけあった美しい  
 ひびきとなつてきこえるにちがいありません。  
 九一二 6 もっとおもしろいと思つたのは、雪の降つ  
 てくるところをあらわしたひびきである。  
 九一四 4 〔文〕 水ぐるま近きひびきにすこしゆれすこ  
 しゆれいるこでまりの花  
 一五二五 2 ごうごうたるトロッコのひびき。  
 一五七三 少年のいたわるような声のひびきをきく  
 と、感謝するような色が、そのひとみに、ちよつ  
 とのあいだうかぶようにみえました。  
 一五二九 1 「ビューン」と、あとをひくようなひび  
 きがする。

十三三三 4 「キリキリ、リリリリ」ときしみながら、  
 かん高いひびきをたてる。  
 一四四四 4 けれども、フランスのルイ・フィリップ  
 の名は、すこしちがった特別なひびきをもって、  
 私たちの心をうつのです。  
 一四三八 6 〔目〕 明かいひびき。  
 一四四〇 一〇 〔目〕 わかかわかしい世紀のひびき。  
 一五七三 三 〔目〕 みんなききりの中鉄のひびきのかじ屋  
 の火  
 ひびきわたる 〔響渡〕(五) 2 ひびきわたる 《一  
 ル》  
 七七八 8 その声が校庭にひびきわたる。  
 一三三二 一七 たとえ、鳴りものであるうと、呼び声で  
 あろうと、トンネルのようなホートンには、それ  
 が、ふしぎなほどよくひびきわたる。  
 ひびく 〔響〕(五) 28 ひびく 《一イーキーク》  
 ↓なりひびく  
 一四八 4 かくせいきの こえが、また ひびきました。  
 一三三五 五 〔目〕 その声がよく ひびきます。  
 一四三六 一 〔目〕 かずこさんの 耳には、おとうさんの こ  
 とばが、ひびいて きたのです。  
 一四四九 7 下の方から、てっぽうの 音が ひびいて  
 きました。  
 一四五〇 一〇 二はつめの てっぽうの 音が、 ひびいて  
 きました。  
 一五〇八 一七 近いところに製材所ができて、のこぎりの  
 やかましい音が、あさからばんまでひびきました。  
 一六四二 二 「こら、まて。」という、それこそかみな  
 りのような声がひびきました。  
 一七六二 二 オルガンがひびく。  
 一七六三 三 「略略」の音楽が、ひびいてくる。  
 一七五二 一 「ピー」と、ふえがひびいた。

七五三 9 おうえんの声が耳にひびいてくる。  
 八二八 五 林の中にごてんがあつて、中から、はたを  
 おる音がひびいてきます。  
 八七四 二 また音がひびいた。  
 九六三 五 すずの音は、かやの森にガランガラン、ガ  
 ランガランとひびき、  
 一四九〇 一〇 オルガンがひびいてくる。  
 一五二三 一 「春の小川」の歌がひびいてくる。  
 一五三三 七 〔目〕 まばゆく光るいなすまに、続いてひび  
 くらしいの音。  
 一五三七 八 〔目〕 こずえをかけるもすの音も、すむ秋空  
 によくひびく。  
 一五五七 七 〔目〕 ことばはひびく、あしの葉のふえよ。  
 一五五八 二 〔目〕 すずむし、小むし、チックタック時計、  
 一つ一つひびく。  
 一五七二 二 ふだんは「略略」、大川の波の音がバサリ  
 バサリと、まくらにひびくのでしたが、  
 一五七五 五 遠くの方からひびいてくる、いろいろな  
 もの音に、耳をかたむけたりしているのである。  
 一五八二 一〇 いろいろなもの音がひびくが、  
 一五八三 五 「キリキリ、リリリリ」がひびく。  
 一五八六 一 花よめ行列のラッパの音が、どこかでひ  
 びく。  
 一五九四 一 美しい音楽がひびく。  
 一六〇五 九 ああ美しい歌は、いまも、われわれの耳  
 にひびいてくるように感じられる  
 一六二一 三 朝風にひびくすずの音、  
 ひふ 〔皮膚〕(名) 1 ひふ  
 一六七〇 一 顔ははれあがつてどんより赤く、ひふは  
 はち切れそうになっていました。  
 一六八六 一 「火蓋」(名) 1 火ふた  
 一六八七 一 てっぽうはひきつづいて火ふたをきった。



ひふびょう 「皮膚病」(名) 1 ひふ病

1503 黒いいぬに近よってみると、ひふ病にかかっていて、顔のあたりの毛が、ぬけていました。

ひま 「暇」(名) 7 ひま

3795 だれひとり、上をみたりまわりをみたりするひまもありませんでした。

4622 みんなのねているひまに、かっちゃん、もう一ど林のおくをさがしにいきました。

4629 そのひまになかまのがんは、するりとぬけました。

1331 佐吉は、〈略〉、ひまさえあれば、織機のことをしらべつづけていたのである。

17010 ひきとめるひまもなく、太郎かじやは、すばやく指をつつこんで、

15969 ほかの者にまで会っているひまはないよ。

151145 うちにいるとね、あんまり用が多すぎて、ひまがないのだよ。

ひまし 「日増」(名) 1 ひまし

11349 晴れ空はみどりにすんで、日ましに日ざしが強くなり、

ひまわり 「向日葵」(名) 4 ひまわり

3352 ひまわりものびています。

5778 先生をつくえのかびんに、大きなひまわりの花が、三本かざってありました。

5785 ひまわりの花は、いけださんが自分のうちのわから、持ってきてくれたのでした。

11353 空にくずれる雲のみね、庭にかがやくひまわりの花、あぶらぎみの声さわがしく、

ひみずつちはちち 「日水土蜂達」(名) 1 日、水、土、はちち

14574 それは、頭のぼうしで、日、水、土、はちちだということがわかりました。

ひめ 「姫」(名) 4 ひめ・おとひめ・おとひめさま・おひめさま・かぐやひめ・こがねひめ・はたおりひめ

8288 ひめは、なにも知らずにおりつづけた。

8421 「おお、かわいいひめや。」とおっしゃいましたが、王女はなんの返事もしません。

8426 もし、ひめが生き返るなら、わしはもうこがねなどはいらない。

8436 ああ、かわいいひめです。

ひも 「紐」(名) 5 ひも

3554 おびになって、ひもになって、がんがかえる。

3726 「白いひもかしら。」

4325 その生徒さんは、すぐひもでげたのはなおをすけてやりました。

15877 うちに帰って、十まいずつたばにして、赤いひもでいわれて数えました。

15351 また、木の皮や、あさなわなどであんだひももつかい、色のちがつた貝や、じゅうだまを結びつけることも行われた。

ひもじい (形) 2 ひもじい 《一い》

8897 冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがましだ。

14939 「あれはやき鳥だろうか。」ひもじいで、そんなことを思った。

ひもじさ (名) 1 ひもじさ

141011 寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、ひやかし 「冷」(名) 1 ひやかし

16410 狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきや、ひやかしなどで、できている

ひやく (課名) 1 百

337 十三 かぐやひめ……百

ひやく 「百」(名) 1 百

148210 三つ子のたましい百まで。

ひやくこうねん 「百光年」(名) 1 百光年

8359 百光年の星もあり、一千光年の星のむれもあり、一万光年の星もあります。

ひやくこじつかぶ 「百五十株」(名) 1 150かぶ

8995 やく12平方mに150かぶばかり植えました。

ひやくこじゅうばい 「百五十倍」(名) 1 百五十ばい

13256 土地のねだんがあがって、あるところでは、百五十ばいになりました。

ひやくこじゅうメートル (名) 1 百五十メートル

91084 百五十メートルほど登ったとき、ぼくが、〈略〉。といった。

ひやくし (課名) 1 百四

935 九 山のスキー場……百四

ひやくじゅうく (課名) 1 百十九

937 十一 泉を求めて……百十九

ひやくじゅうし (課名) 2 百十四

637 たこ……百十四

936 十 ちよ紙……百十四

ひやくしょう 「百姓」(名) 3 ひやくしょう

5703 ひやくしょうなんか、もういやになったから、お金持のおくさんになりたいって。

57010 おばあさんは、もうひやくしょうはいやになったから、

8768 くれがたになって、あひるの子は、ある小さなひやくしょうの小屋へやってきた。

ひゃくだん 「百段」(名) 1 百だん

十二5710 それは、おにが一夜のうちに百だんの石  
だんをきずきあげること、

ひゃくにじゅう (課名) 2 百二十

四35 十一 一つのもので……百二十

十五311 七 最後の学級日記……百二十

ひゃくにじゅういち (課名) 1 百二十一

六38 十一 うさぎさん……百二十一

ひゃくにじゅうし (課名) 1 百二十四

四36 十二 四季……百二十四

ひゃくにじゅうしち (課名) 1 百二十七

九38 十二 一ぴきのくも……百二十七

ひゃくにじゅうろく (課名) 1 百二十六

四37 十三 はごろも……百二十六

ひゃくはちじゅう (課名) 1 180

八106 1本のほに、多いのは180ぐらいずつ  
いていました。

ひゃくはちじゅうねんまえ (課名) 1

百八十年まえ

十二1127 人体のことを絵いりで説明した本を、い  
まから百八十年まえに、日本で出版したものです。

ひゃくメートル (名) 1 百メートル

六1009 それは、ここから百メートルもはなれてい  
る、向こうの家の屋根であった。

ひゃくもん (名) 1 百文

十一276 百文はらうと、おもしろい藝をしてみせ  
てくれます。

ひゃくよにん (名) 1 百四人

十四452 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、  
船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

ひゃす (冷) (五) 2 ひやす 《—サーシ》

四551 かっちゃんねつがでできたので、みん  
ながかわるがわる、つめたい水で、あたまを

ひやしてやりました。

十四7011 ふたでもしておけば、ひやされるのは、  
《略》茶わんにふれた部分だけになります。

ひゃつかじてん ↓だいたいひゃつかじてん

びゅう (感) 1 ビュウ

九1091 すばらしい早さに、からだもスキーも一つ  
になって、ビュウとうなる。

びゅうっびゅう (感) 1 ビューツ、ビュウ

五111 ビューツ、ビュウ。

ひゅうばちっ (感) 8 ヒュウパチッ

九639 ギョシヤは、こんどは、草むらをむちで二  
三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴らしま  
した。

九639 ヒュウパチッ、ヒュウパチッと

九6510 ギョシヤがむちをヒュウパチッと鳴らしま  
したので、どんぐりどもはやっとしずまりました。

九672 ギョシヤが、むちをヒュウパチッと鳴らしま  
しました。

九679 ギョシヤがむちをヒュウパチッと鳴らし、  
どんぐりはみんなしずまりました。

九699 ギョシヤも、大喜びで、五六べん、むちを  
ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴らしました。

九699 ヒュウパチッ、ヒュウパチッと

九7311 ヒュウパチッ。

びゅうびゅう (感) 1 ビュウビュウ

九1110 風といえば、《略》、「ビュウビュウ」とか  
いうことばであらわしているが、

びゅうん (感) 2 ビューン

十三291 「ビューン」と、あとをひくようなびび  
きがする。

十三292 その「ビューン」がとまると、《略》子  
どもが、もう、頭をつるつるにそられている。

びゅっと (副) 1 ビュッと

七541 ボールがビュッととんできた。

ひょいと (副) 1 ひょいと

八111 学校から帰ってきたすえの女の子が、茶の  
まのドアをあけて、ひょいとふみこんだたん、

びょいと (副) 1 びょいと

四221(註) あちこちまわっているうちに、びょ  
いと中にはいりました。

ひょう (傍) ↓いっぴょう・いっぴょうあまり・に  
じっぴょう

ひょう (雹) (名) 1 ひょう

十四686 そうして、ひょうが降ったり、かみなり  
が鳴ったりします。

ひょう (費用) (名) 1 費用

十五553 ホランド博士は、戦争中で費用が思うよ  
うにつかえないことについてくわしく話し、

びょう (秒) ↓いちびょうかん・やくはちふんに  
じゅうびょう

びょう (病) ↓いもちびょう・でんせんびょう・ひ  
ふびょう

びょういん (病院) (名) 5 びょういん 病院

四988 ここはびょういんです。

十一215 病院の庭さき。

十一636 ひとりの少年が、《略》、ナポリの大きな  
病院の門ばんのまえへいて、一通の手紙をみせ、

十一646 家族の者にかんたんな手紙を書いて、  
帰ったことと、病院にはいったことを知らせまし  
た。

十一916(註) これを病院の記念に持っていらっしや  
い。

ひょうが (氷河) (名) 1 氷河

十五199 氷河が無言の流れをきざんでいる深い深

い谷の上を、

びょうき「病氣」(名) 12 びょうき 病氣 ↓こ

びょうき

二32 ㊦ びょうきではないでしょうか。

四77 わるいびょうきはやらないように、氣

をつけてくれます。

四30 ㊦ にしださんは、きょうもびょうきで休

んでいます。

六94 ㊦ たいだけは、病氣でねておりますので、

ここへはまいっております。

八44 ㊦ わたしの病氣をなおしてくれたものには、

國の半分をわけてやる。

八45 ㊦ そこへ、王さまの病氣をなおすというものが

でてきました。

八47 ㊦ 王子も、なんとかして父の病氣をなおした

いと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

八105 ㊦ 病氣でせいなのびないねが、5かぶあり

ました。

八105 ㊦ 先生におきしたら、このいねは、いもち

病という病氣にかかったのだとおっしゃいました。

十一21 ㊦ 父親が病氣でねていましたので、金次郎

が、そのかわりにでることになりました。

十一28 ㊦ ところで、そのつぎの年、母親が、四五

日の病氣で死んでしまいました。

十一64 ㊦ にわかに病氣にかかって入院したので、

びょうきがち「病氣勝」(形状) 1 病氣がち

十一23 ㊦ どんなに病氣がちでも、父親の生きてい

るあいだは、〈略〉切りぬけてきましたが、

ひょうきん「剽輕」(形状) 1 ひょうきん

九137 ㊦ こうもりは、ひょうきんなかつこうをして、

こちらにとんできます。

ひょうげん・する「表現」(サ変) 1 表現する ㊦

スル

十四87 ㊦ ばんそうの音楽や、〈略〉によって、か

なり生き生きと表現することができそうである。

ひょうご「標語」(名) 1 ひょうご

十一54 ㊦ このごろ、電車の中に、つぎのような

ひょう語がかかげられているのをみた。

ひょうし「拍子」(名) 4 ひょうし

六23 ㊦ ㊦ ぼくがひょうしをとってあげる。

六58 ㊦ そのひょうしに足をいためて、歩けなくな

りました。

九142 ㊦ そのひょうしに、くもは、目がさめました。

十四48 ㊦ 近づいてみると、船がしずむひょうしに

流れ出たものらしい一本の大きなまるとに、

ひょうし「表紙」(名) 1 表紙

十二112 ㊦ 表紙の文字は、「かいたいず」と読みま

す。

ひょうじゅんご「標準語」(名) 1 標準語

十五41 ㊦ ローマ字をつかうと、字数が少なくてす

むばかりでなく、発音のこまかなところまで書き

表わすことができて、標準語の教育に役だつ。

ひょうじょう「表情」(名) 3 表情

十二108 ㊦ 舞う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶ

りによって、このお面は、生きもののように、い

ろいろな表情をあらわします。

十三45 ㊦ 見物人に〈略〉、顔の表情がよく見える

ようにすることも、たいせつなことです。

十四87 ㊦ ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情

をあつかっても、おもしろいと思う。

ひょうどう ㊦ にんげんびょうどう

ひょうどういん「平等院」(名) 1 平等院

十二104 ㊦ これは、九百年ほどまえに作られた平

等院という建物の中にある名高いほうおう堂です。

びょうにん「病人」(名) 33 病人

十一69 ㊦ 少年は包みを下におくと、頭を病人のか

たのところへさげて、

十一69 ㊦ 病人は動きませんでした。

十一69 ㊦ 病人はしげしげと少年をみつめて、いく

らかわかったようでしたが、

十一70 ㊦ けれども、病人は、いっしんに少年をみ

つめたあとで、目を閉じました。

十一71 ㊦ 病人は、身動きもしないで、苦しそうに

息を続けていました。

十一74 ㊦ このかたは、この病人のむすこさんで

す。

十一74 ㊦ それから、病人の上にかがんで、みやく

をみたり、ひたいにさわってみたりして、

十一76 ㊦ 病人のふとんをなおしたり、

十一76 ㊦ 病人は、ときどき少年の方をみましたが、

わかったようなうすはしませんでした。

十一77 ㊦ その日は、病人の目つきが、いくらかわ

かりかけでもしたようにみえました。

十一77 ㊦ コップを病人の口もとにつけたときに、

十一78 ㊦ あたたかい愛情のこもったことばで、

しつかりするようにと病人をはげましました。

十一78 ㊦ 病人がなんだかうれしそうにその話す声

に〈略〉耳をかたむけているようにみえたから

十一79 ㊦ ところが、五日めに、病人はにわかにな

るくなりました。

十一80 ㊦ それは、ようだいがわるくなったにもか

かわらず、病人が、しだいに、すこしずつものが

十一80 ㊦ 病人は、だんだんしっかりした目を少年

の上にすえて、

十一80 ㊦ 少年は〈略〉、いきなり病人のうでをつ

かんで、「略」といって力づけました。

十一 83 1 「略」と、父親は、じっと病人の方をみつめたあとで、略いいました。

十一 84 8 少年はふり返って、病人の方をみました。

十一 84 11 少年は、また、病人の方をなめました。

十一 84 11 病人は、そのとき、目を開いて、じっと少年をみつめました。

十一 85 12 父親は、じっと少年をみつめていましたが、やがてまた、病人の方をみました。

十一 86 12 病人は、やはりじっと少年の方をみていました。

十一 87 10 少年がベッドのそばのものと場所に帰ると、病人はほっとしたようにみえました。

十一 88 2 チチロはまた、病人に飲み物を飲ませたり、ふとんをなおしたり、手をさすったり、

十一 88 6 しかし、病人はますますわるくなるばかりでした。

十一 88 10 チチロは、いよいよよくせわをして、ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでした。

十一 88 10 病人はしげしげと少年をみつめながら、略、なにかものをいいたげにしました。

十一 89 3 その晩、少年は夜どおしそばについて、病人をみまもっていました。

十一 89 8 少年は病人の手をにぎりました。

十一 89 8 病人は、目を開いて少年をじっとみて、そうして、また目を閉じました。

十一 89 10 そのとき、少年は、病人が自分の手をにぎりしめたような気がしました。

十一 90 2 医者は、病人の上にしばらくのあいだうつむいていましたが、

びょうにんたち 「病人達」(名) 1 病人たち

十一 67 12 目を右に左に向けて、青ざめた、やせこけた顔をしている病人たちをみまわしました。

ひょうばん 「評判」(名) 4 ひょうばん 評判

三 106 1 かぐやひめのひょうばんが、だんだん高くなったのを、みかどがおききになって、

三 107 6 ひょうばんよりもずっとうつくしい。

四 9 3 こは、町でもひょうばんのかじやさんです。

十二 62 1 そのことが評判になって、だれもかれもかりにいくようになった。

ひょうほんしつ 「標本室」(名) 1 ひょうほんしつ 三 33 4 ひょうほんしつのまえです。

ひょうめん 「表面」(名) 9 表面

十四 62 10 第一に、湯の表面からは、白い湯げがたっています。

十四 70 9 つぎに、茶わんのお湯がだんだんにひえるのは、湯の表面の茶わんのまわりから、熱がに

げるためだと思っていのです。

十四 70 11 表面にちゃんとふたでもしておけば、

十四 71 3 まん中の方では、ぎやくに上の方へのぼって、表面から外がわに向かって流れます。

十四 71 10 しかし、茶わんの湯を、ふたをしないで

おいたばあには、湯は表面からもひえます。

十四 72 1 わりあい熱い表面の水が、そのあとへ向かって流れ、

十四 72 3 湯の表面には、水のおりているところとのぼっているところがほうぼうにできます。

十四 73 6 つぎには、熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかして見ると、

十四 74 6 湖や海の水が、冬になって、表面からひえていくときには、

ひよこ (副) 1 ひよこ ひよこひよこ・ふたひよこ

こ・みひよこ・むひよこ

四 68 3 かえるがひよこひよこ、ふたひよこみひよこ、あわせてひよこひよこむひよこひよこ。

ひよこひよこ (副) 1 ひよこひよこ

四 68 2 かえるがひよこひよこ、ふたひよこみひよこ、あわせてひよこひよこむひよこひよこ。

ひよこんと (副) 1 ひよこんと

十五 70 2 じつとおじさんの写真に見入りながら、私は無言で頭をひよこんとさげた。

ひよっくり (副) 2 ひよっくり

八 21 2 あめ色をした六本足の虫が、こしを高くして、ひよっくりひよっくり歩いていくのは、

八 21 3 ひよっくりひよっくり歩いていくのは、ひよっくり (副) 1 ひよっくり

三 9 5 あまちゃの中からひよっくりと、おでになったか、おしやかさま。

ひよっとすると (副) 1 ひよっとすると

十一 62 6 ひよっとすると命を失うようなあぶないときでも、

ひより 「日和」(名) 2 ひより

十一 31 3 続くひよりにさくらがさいて、野山をかざると、もも赤く 畑にさいて、

十一 38 1 続くひよりに勇みたち、いねもことなくとりいれた。

ひよんちゃん (名) 2 ひよんちゃん

一 57 2 ひよんちゃん、まきげちゃん、みんなわたくしのうちにいたきょうだいです。

一 60 4 ひよんちゃんも、きれいずきないこになりました。

ひよんびよん (副) 4 ひよんびよん

一 24 3 二ばんの「はねておどれば」のところは、ひよんびよんとびました。

七22<sup>2</sup> すずめは、びよんびよんとんで、庭のはたけの中を歩く。

九53<sup>1</sup> 一本のくるみの木のこずえを、りすが、びよんびよんとんでいました。

九92<sup>3</sup> 「七、八、九、十。」と数えながら、大またでびよんびよんかけてきて、「十」でとまる。

ひら びのひら

ひらがな 〔平仮名〕(名) 4 ひらがな

三97<sup>3</sup> ひらがなを かく ことも、かたかなを かく ことも できます。

十五39<sup>4</sup> その漢字から、日本語を表わすのに便利なかたかなや、ひらがなを作りだすようになった。

十五39<sup>7</sup> ひらがなはかたかなのように漢字の一部分をとったのではなく、

十五42<sup>4</sup> いま日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種の文字をつかっており、

ひらきはじめる 〔開始〕(下二) 1 開きはじめる  
《一メ》

八103<sup>3</sup> 3時間めの終りに開きはじめましたがお晝の時間には、もう閉じてしまっていました。

ひらきみ・つ 〔開満〕(上二) 1 開き満つ 《一チ》  
十五14<sup>3</sup> 〔開〕 大きなべにばらのひと花思わぬをゆららにあかく開き満ちたる

ひらく 〔開〕(五) 26 ひらく 開く 《一イ・一カ・一キ》  
ひきりひらく・みひらく・むすんでひらいて

一83<sup>3</sup> 〔開〕 むすんで、ひらいて、てをうって、むすんで、またひらいて、てをうって、

一86<sup>3</sup> 〔開〕 またひらいて、てをうって、そのてをうえに。

一193<sup>3</sup> 〔開〕 ひらいた、ひらいた。

一193<sup>3</sup> 〔開〕 ひらいた、ひらいた。

一194<sup>3</sup> 〔開〕 なんのはなひらいた。

一195<sup>3</sup> 〔開〕 れんげのはなひらいた。

一196<sup>3</sup> 〔開〕 ひらいたとおもったら、みるまにつぼんだ。

一205<sup>3</sup> 〔開〕 つぼんだとおもったら、みるまにひらいた。

三379<sup>3</sup> 〔開〕 ときどき目をひらいてわたくしをみます。

四55<sup>10</sup> 〔開〕 かっちゃん、ねつがずっとさがって、まぶたをすこしひらきました。

四61<sup>2</sup> 〔開〕 いんそつがかりのがらが、口をひらいて、「略」。

四76<sup>5</sup> 〔開〕 れんげの花がひらいた。

八103<sup>7</sup> 〔開〕 花は、1日開きませんでした。

九68<sup>10</sup> 〔開〕 いかにも氣どったようすで、しゅすの着物のえりを開いて、

十35<sup>1</sup> 〔開〕 たまたま、そのころ、東京にはくらん会が開かれた。

十40<sup>1</sup> 〔開〕 はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もとのままになっていた。

十44<sup>10</sup> 〔開〕 幸吉は、望みをかけた第一の母目を開いてみた。

十44<sup>12</sup> 〔開〕 第二、第三と母目を開いていくと、どれにも眞珠が、きよらかにかがやいているではないか。

十67<sup>9</sup> 〔開〕 次郎かじやは、こしからぬきとったせんすを、さらりと開きました。

十一67<sup>3</sup> 〔開〕 そうして、大きなへやの、開いたドアのまえまできますと、

十一77<sup>7</sup> 〔開〕 ねむったあとでは、目を開いたときに、その小さな看護人をさがすようにみえました。

十一84<sup>12</sup> 〔開〕 病人は、そのとき、目を開いて、じっと少年をみつめました。

十一89<sup>8</sup> 〔開〕 病人は、目を開いて少年をじっとみて、

そうして、また目を閉じました。

十二32<sup>11</sup> 〔開〕 私の心の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、

十四53<sup>11</sup> 〔開〕 せつかく花が開いても、

十五104<sup>2</sup> 〔開〕 『冬の日の幸福』は、こえた手のために、きれいなむらさき色のマントを開きます。

ひら・ける 〔開〕(下二) 3 ひらける 開ける 《一ケ》

八58<sup>2</sup> 〔開〕 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけしが目のまえにひらけてくる。

十23<sup>11</sup> 〔開〕 ひらけて、海。

十三9<sup>10</sup> 〔開〕 知識が開けず、科学の進まないところに、迷信が行われる。

ひらたい 〔平〕(形) 1 ひらたい 《一イ》  
九33<sup>7</sup> 〔開〕 このほかに、大きな、黒くてひらたい貝がとれますので、

ひらて 〔平手〕(名) 1 ひら手  
十五104<sup>12</sup> 〔開〕 鼻を指ではじいたり、ひら手でたたいたり、いそがしく足でけったりして

ひらひら 〔副〕 1 ひらひら  
四134<sup>4</sup> 〔開〕 右に 左に ひらひらと、ゆれる たもとがうつくしい。

ひらりと 〔副〕 1 ひらりと  
十五30<sup>2</sup> 〔開〕 けれども、ひらりと身をかわした少年は、

ひらりひらり 〔副〕 1 ひらりひらり  
九140<sup>3</sup> 〔開〕 それから、まっ白な羽をひろげたかと思うと、ひらりひらりと舞いあがりました。

ひり(名) 1 ひり  
十一66<sup>6</sup> 〔開〕 いつもは、いちばんひりにいるばかりで、べつに用もないようだが、

ひりびり(感) 1 ひりびり  
十一11<sup>4</sup> 〔開〕 「ひりびり。」と、ふえが鳴って、ふい

に一そののボートが近づいてきた。

びりびりっ (感) 1 ビリビリッ

九八四 ビリビリッとふえが鳴りました。

ひりょう [肥料] (名) 1 ひりょう

五三二 ここで、きかいや、ひりょうなど、たいせつな品物を作っています。

ひる [昼] (名) 12 ひる 晝 おひる・おひるごろ・おひるすぎ・おひるどき・おひるまえ・おひるやすみ

三二二 たいへんいきおいで、ひるもよるも、ぐんぐんとのびていきました。

三七八 だから、だれにも ひると よるがあるのです。

六五三 圃 すんだ青さをもちながら、ときにはくもる晝の空。

六五五 圃 考えこともできそうな、ああ、おおらかな晝の空。

九三二 圃 なん十メートルもある高いすぎやまつのはえているところは、晝でもうすぐらく、

一三六 圃 かれは、勇氣をふるいおこして、夜も晝もなく考えとおし、

一一一七 朝も、晝も、夜も、流れやまぬ愛のしみに、うるおされ、やしなわれて、

一一三五 圃 庭にかがやくひまわりの花、あぶらぜみの声さわがしく、晝の休みもあせがでる。

一三二五 これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。

一三二四 ダルガスの植林以前は、ユートランドの夏は、晝は暑く、

一四五二 圃 水と養分とを吸いにとって、夜も晝も送ってあげるの、たいへんなねおりです。

一五五五 圃 ひるすぎていよよにあかきばらの花

いよよに重くかたむきふかむ

ひる ↓おとなびる

ひるがえる [翻] (五) 1 ひるがえる 《一ツ》

一二七五 テニスコートには日本とメキシコの國旗が美しくひるがえて、

ビルディング (名) 6 ビルディング

六三七 一 ビルディングが立ちならんでいる町。

六三七 二 そのビルディングの一つ——とがった屋根にひっかかっているかし。

六三八 一 立ちならぶビルディングのあいだから、とびあがってくる親子のつばめ。

六四一 一 ビルディングのまどに、一つ二つと火がつく。

六四二 一 ビルディングのあいだから、《略》つばめのむれが、かかしの方へとんでくる。

六四二 二 それがほぐれて、一列にビルディングをはなれる。

ひるね [昼寝] (名) 2 晝ね

六四九 一 とらさんは、晝ねをしていたのですが、うさぎさんたちがあまりガヤガヤ話をするので、目をさましてしまいました。

八五五 一 うさぎは、高いびきをかいて、さも楽しそうに晝ねをしていました。

ひるま [昼間] (名) 2 晝ま 晝間 ↓まっぴるま

一一二二 毎晩、家に帰ってくると、晝まの働きでつかれきつていながら、わらをたたいて

一四七六 海陸風とよばれているもので、晝間は海から陸へ、夜は反対に陸から海へとふきます。

ひれふす [平伏] (五) 2 ひれふす 《一・二・三》

一三九五 それは、せいの高いマリアがキリストをだいて立っていると、老人のぼうさんらしい人が、

その前にひれふしている絵でした。

一五二三 声をたてて、みんな草の上へひれふすように、思わずたおれてしまいました。

ひろ [尋] ↓ちひろ

ひろい [拾] ↓いのちひろい・くりひろい・たまひろい

ひろい [広] (形) 28 ひろい 廣い 《一・二・三》

一四二 せんせいの目のなか、ひろいな。

二五八 ゆめに、ひろいのほらをみました。

三五六 ひろい はたけの中。

五七四 金のひろい海で、金のさかなをけらいにしてやりたい。

五七六 海のぬしになりたい、ひろい海で、あなたをけらいにしたいといっています。

五八八 空はひろくてもおもしろいよ。

六二六 トネルはだんだん深くなり、廣くなりました。

六四九 やつとじずかな廣い野原にできました。

八六一 世界は廣いものだなあ。」と、ひなたちはいった。

八八三 私、廣い世界へでたいと思っているのです。

八八四 はくちようは《略》、この寒い國からあた

たかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。

八八七 根が横へはるので、廣いところのほうが育ちがよいと思いました。

九一〇 この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、《略》、また廣い海ともなります。

九四八 廣い学校の運動場で、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。

九八一 ぼくは、どこか一つのところをきめて、廣く深くはつていくのがいいと思います。

十477 家から十二三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるので、

十二238 やしきがすこし廣いし、

十二564 傳説を廣く全國で調べてみると、よくにたようなのが、あちらこちらで発見される。

十二655 その細いやわらかなものが、地をうがち岩をおしわけ、深く廣くのびていく。

十二663 おおづなのようなたくましい根が、深くのびてみきをささえ、廣くのびて枝をやしない、

十二688 まっすぐに長く切るのこぎりは、廣いはばをもっている。

十二689 こびきの大のこははばが廣いし、

十三269 あまり廣くもない道の

十四343 こうなつてくると、うちゅうというものは、どこまで廣いのか、想像がつきません。

十四877 一面の銀世界となった廣い野原を、第一の人が歩いて行く。

十五5310 廣いへやの窓ぎわに大きなデスクをすえ、

十五6411 見るなり私は、おじさんの廣いせなかにとびついた。

十五7310 やがてお書どきになったので、廣い食堂にみちびかれ、

ひろいあげる「拾上」(下一) 6 ひろいあげる

《ゲ・ゲル》

八116 茶のまにいたうちじゅうのものがびっくりして、いそいでピオをひろいあげました。

九934 セルロイドの三角じょうぎをひろいあげる。

九939 そのうちに新しいすみをひろいあげるが、

十384 眞珠は、海の中からまれにひろいあげられる、ふしぎな宝石とされてきたが、

十二385 こわした人形のことを思いだして、いろりのかたすみに走りよってかけらをひろいあげ、

十四864 ごくささいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

ひろいあつめる「拾集」(下一) 3 ひろい集める

《メ》

九441 妹は、かきの葉を「略」といってひろい集めては、ままごとをして遊びます。

十1011 三人の少女は、その葉をひろい集めて、

《略》、遊んでいました。

十1110 ひろい集めた落ち葉を持ってきて、おとうさんにくれるようになりました。

ひろう「拾」(五) 29 ひろう 《イ・ウ・ツ・一》

一532 ひとつ ひろって いって おかあさんのおみやげにしたいな。

一538 さんせつないいい人がひろうと、だいやもんどですが、

一539 いじのわるいけんかずきの人がひろうと、ただのいしころになつてしまします。

一541 しゃしょうさんは、ひろったことがありますか。

一542 ええ、いくどもひろいました。

一6010 それでは、みんな、あまの川で дайやもんどをひろつてきたのですね。

一613 ここにいるものは、みんな、たまをひろったなかまですよ。

四1301 いや、これは、わたしがひろったのです。

五943 その帰り道に、一わの小鳥のひなをひろいました。

五9410 かわいそうだもの、ひろっていつて、

五952 さんちゃんひろって帰ると、おとうさん

が《略》たまごのきみですりえをこしらえて、六1231 うさぎさんは、くるみをひろって、石でわってたべることにしました。

八985 いねがよく根をはって育つように、小石をひろい、土のかたまりをくぐらいて

九4211 母やおばがくわをいれるあとから、ぼくたちはむちゅうになつていもをひろいました。

九8411 みなさんのひろった物の中に、いのししやしかの角などに手を加えて、なにかの道具につかつた物があつたでしょう。

九8510 これはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろっておきなさい。

九913 そのほかの友だちが、落ちていいるやまだのかばんやぼうしをひろつてあとにつづく。

九9511 やまだ、おこつていきかけるが、思いなおして、さつきすてたじょうぎをひろってくる。

九968 たかき 舞台のすみからボタンをひろってくる。

九989 じょうぎひろつてやつたじゃないか。

九14511 くもは、このつばめにひろわれました。

十124 少女たちは、手とりあつてとんでいつて、小さなのをえらんで、ひろつてくれました。

十585 みんな負けずにひろいました。

十一293 金次郎は、《略》いねのなえをひろつて、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。

十二102 老人が、《略》、なにかさがしては、それをひろつてポケットにいれていました。

十二106 なにをひろっているのですか。

十二112 こんなものをひろつて、どうするのですか。

十二713 また、まきが少ないと、近所へ木をひろいにいったりしました。

十四914 もう一つのほうは、どこかの男の子がひ  
ろって行ってしまった。

ヒロウド (名) 1 ひろうど

十五828 ひろうどや、にしきにくるまり、  
ひろえる [拾] (下) 3 ひろえる 《一エ》

一544 圈 そうして、たまが ひろえたら、お月さ  
んのくにのなかにいれてもらえます。

一547 圈 たまが ひろえなかつたら、どうなりま  
すか。

一552 圈 そうして、つぎのとしのたまひろいで、  
きれいなたまが ひろえたら、また お月さんの  
くにへいれてもらえます。

ひろがる [広] (五) 12 ひろがる 廣がる

《一ツーリール》

三229 大きなえだは 四方に ひろがって、

四951 ひろがったり、あつまったり、ふわふわと

ながれたりして、だんだん 下におちてくる。

六1006 どこかの屋根が、めがねのたまいっぱいに

ひろがって、ついそこにあるようにみえる

八622 圈 世界は庭の向こうがわまで廣がっている

のだよ。

八745 あしの上に廣がっている木の枝にものぼっ

ていた。

十二6310 八郎は思い切って、水ぞこにとびこむと、

小川がひろがって、みるみるうちに湖となった。

十三2111 ユートランドのあれ野には、年ごとに、

みどりの野が廣がりました。

十四4510 ことごとく波にのまれてしまったように、

死のしずけさがあたりに廣がりました。

十四649 横からすかして見ると、ちやうど、けむ

りが廣がっているように見えるそうです。

十四663 けむりがゆらゆらして、いくつものうず

になり、それがだんだんに廣がり、入りみだれて、  
十五565 圈 私は、小手をかざして足の下にひろが  
る駿河湾の海岸線をながめ、

十五808 友愛の精神が、もっともっとひろがって  
いきますように。

ひろげる [広] (下) 14 ひろげる 廣げる 《一  
ゲ》ひくりひろげる

五1002 よくみると、ねこにひっかかれた羽がぶら  
りとなって、半分しかひろげられませんか。

七463 青年は、アコーデオンを、両手でぐっとひ  
ろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。

八55 のぞいてみると、ひとりの小鳥屋が、夜店  
をひろげていました。

八843 はくちようはみごとな羽を廣げ、《略》あ  
たたかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。

八8911 羽をひろげてゆったりと近づいてきた。

八1084 もみをむしろの上にひろげてほしました。

九5711 着物のえりを廣げて、からだに風をいれな  
がら、

九1119 両手をひろげて高くとばれるすがたは、な  
んという勇ましさであらう。

九1402 それから、まっ白な羽をひろげたかと思  
うと、ひらりひらりと舞いあがりました。

十259 立ちどまって、両手をひろげて深呼吸。

十二967 その写真帳をひろげてみると、

十二1058 皮ざいの店らしく、なにかの毛皮がひ  
ろげてあります。

十五2212 三メートルもあるような羽をひろげた大  
きな一わのやまわしが、

十五1096 圈 そら、手をひろげてこちらへかけてく  
る。

ひろさ [広] (名) 2 廣さ

十二697 どんなにはたらきがあっても、それにあ  
つみと廣さがなかったら、

十四349 光が一方のはしから、向こうのはしまで

とどくの、二十億年も、かかるほどの廣さなの  
です。

ひろしま [広島] (地名) 1 廣島 ひろしま

十五6611 そのころは、新島のおばさんは廣島にお  
られて、

ひろの [広野] (名) 1 廣野

十四881 ぼつりぼつりとしるした足あとが、廣野  
を横ぎる一すじの道となる。

ひろば [広場] (名) 6 廣場

十一416 圈 廣場にどうたおとなりどうし、え顔  
にほころびあいさつをする。

十二911 ある町角の廣場で、《略》老人が、道路  
をうろうろとみまわしながら、なにかさがしては、

それをひろってポケットにいれていました。

十二112 すると、老人は廣場の方を指さして、

「《略》。」と答えました。

十二113 圈 あの廣場で遊んでいる子どもたちをこ  
んなさい。

十三2711 風あたりの少いホートンの廣場に、子ど  
もたちがたむろして、日だまりを楽しみ、

十三341 ホートンの廣場などに、かげ絵の舞台を  
こしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。

ひろびろ [広] (副) 1 ひろびろ

五423 圈 ひろびろとした、きれいなところだと思  
います。

ひろま [広間] (名) 3 廣間 ひろおひろま

十五839 圈 ほんの形だけでも、廣間の方をさがし  
てみよう。

十五853 圈 いってみれば、すばらしく美しくて、



この廣間のなにものをもおさえている。

十五99 2 もう一つの「幸福」のむれ、まえよりはすこしせの高いのが、廣間の中へかけこんで来て、ひろ・める「広」(下) 1 廣める《一》

十三12 4 知識を廣め、学問を研究して、迷信をまったく取り去ってしまふようになれば、

ひわ「鷄」(名) 34 ひわひまひわ

五96 2 五 ひわの子ですよ。

五96 3 五 ひんとうは、まひわというのですが、ふつうは、ひわ、ひわといっています。

五96 3 五 ふつうは、ひわ、ひわといっています。

五96 8 五 おとうさん、ひわは自由にとべるようになりましたね。

五97 5 その中には、ひわのむれもありました。

五98 1 ひわの子は、それが自分のなかまの鳴き声だと思いました。

五98 6 五 ひわが、いい声でさえずりはじめましたよ。

五99 1 とびおきてみると、どこかのねこが、しのびこんで、ひわをとろうとしていました。

五99 3 ひわは、かたのところへけがをして、ころがっていました。

五99 6 二三日すると、ひわは、もとのように元氣になって、かごの中をとびまわっていました。

五100 5 さんちゃんは、ひわによくいつてきかせました。

五100 5 ひわは、「略。」と、人なつっこい声で鳴きました。

五100 8 さんちゃんがばんきようをはじめると、ひわは、「略。」と、へんな声でさえずって、さんちゃんの本をよむ声をまねます。

五101 3 さんちゃんが、ハーモニカをふきはじめる

と、ひわもよろこんで、《略》まねをします。

五102 5 水が、《略》、音をたてて流れているのをきいて、ひわは、そのまねをして、

五102 11 さんちゃんのおかあさんが、せんたくをしますと「略。」と、ひわもまねをします。

五103 2 すずめがきたとき、ひわが、「略。」と鳴いてみせました。

五103 7 ひわが、《略》鳴いてみせすと、すずめは、おどろいてとんでいつてしまいました。

五104 2 みそざいが、くらい木の中からきたので、ひわが、「略。」と鳴きました。

五105 1 ひわは、感心したように、いつまでもその声をきいていました。

五105 4 それで、ひわは、すっかりそのまねができるようになりました。

五105 7 しじゅうからは、どこかへいつてしまいましたしたが、ひわは、いつもそのまねをしては、

五105 10 さんちゃんのおかあさんも、ひわをほめました。

五106 1 ある日、二三ばのひわが、さんちゃんのうちまつの木におりてきました。

五106 3 ひわは、それを見ると、「略。」と、せきこむように、さかんに鳴きました。

五106 5 旅のひわも、大よろこびで、声をあわせてうたいました。

五106 7 旅のひわが、「略。」といいました。

五107 8 旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の上へにげていきましたが、

五107 10 かごのひわは、大よろこびで、「チュイン、チュイン。」をはじめました。

五108 4 かごの中のひわは、なかまをよびました。

五108 6 けれども、旅のひわは、そのままとんで

いつてしまいました。

五109 2 しかし、ひわは、すぐに、「略。」と、まねをしました。

五109 9 おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃんも、ますますひわがかわいくなりました。

九42 2 山には、つぐみや、ひわがきました。

ひわさん「鷄」(名) 1 ひわさん

五100 3 五 ひわさん、これからぼくの子だよ。

ひわのこ「課名」 2 ひわの子

五3 7 十二 ひわの子……九十四

五94 1 十二 ひわの子

ひん「豆」(名) 1 ひん ひんがくようひん・きねん

ひん・げいじゅつひん・こうげいひん・びじゅつひん

五40 5 白くてゆったりとさく、ひんのいい花です。

びん「瓶」(名) 5 びん ひんすりびん・しいくびん・てつびん

三33 5 五 ほそ長い びんに、さかなが はいって

三33 8 五 お米や 豆を 入れた、みほんの まるい

びんも ありました。

六30 4 あり一が、おくの方からみつをびんにいれてもってきます。

六63 1 朝日の光で、アルコールのびんがきらっと

光った。

七23 11 五 ぼくは、びんの中をそうじして、砂に水をやるから。

ピン(名) 1 ピン

十二34 4 「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさん

さんのことばをつづることを覚え、

ひんしゅ「品種」(名) 1 品種

八943 品種は、あじのよい「農林1こう」というのだそうです。

ピンセット (名) 4 ピンセット

六43 小さな鉄のねじが、ふいにピンセットにはさまれて、明かるいところへだされた。

六53 ピンセットや、小さなつちや、さまざまの道具も、おなじ台の上によこたわっている。

六117 時計屋さんは、さっそくピンセットでねじをはさみあげて、

六113 やがて、ピンセットでねじはさんで、きかいのあなにさしこみ、

びんと (副) 2 ぴんと

九604 やまねこは、ひげをぴんとひっぱって、

九6511 やまねこはぴんとひげをひねっていいました。

ひんばん (形状) 1 ひんばん

十五608 私の父とは、心をゆるした間がらのこと

とて、両者のつきあいはかなりひんばんであった。

びんぼう (名) 9 びんぼう

八504 自分は「幸福」といわずに、「びんぼう」というつもりでした。

八515 金 『びんぼう』でございます。

八516 金 『びんぼう』か、『びんぼう』はうちじゃおことわりだ。

八516 金 『びんぼう』はうちじゃおことわりだ。

八525 金 『びんぼう』でございます。

八527 金 『びんぼう』か、『びんぼう』はうちじゃなくさんだ。

八527 金 『びんぼう』はうちじゃなくさんだ。

八539 金 『びんぼう』でございます。

八5310 金 『びんぼう』か。

びんぼう (形状) 3 びんぼう

十一1911 大水で、田や畑をみんな流されたりしましたので、いつのまにかびんぼうになって、

十一2712 金次郎のうちは、こんなにもびんぼうでした。

十五1128 金 もう、びんぼうなおかあさんもなければ、きりょうのわるいおかあさんもないし、

びんぼうにん (名) 2 びんぼう人

十五981 金 ここだって、どこだって、やはり、お

金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

十五982 金 どこにびんぼう人がいるの。

ピンポン (名) 1 ピンポン

十四219 ボール、テニス、ピンポン、ラケット、

スキー、ラジオ、ニュース、レコード、チフス、

ひんやり (副) 1 ひんやり

十三2712 夏は夏で、ひんやりとした土べいの日か

## ふ

ふ (婦) 1 かんごふ・かんごふさん

ふ 1 ふ

四783 ふ——ふけ ふけ 風よ、たこあがれ。

ふ 1 ちふ

ふあん (不安) (名) 1 不安

十一6511 「略。」と、少年は、ますます不安をおぼえながら答えました。

ふい (不意) (名) 8 ふい 不意

六43 小さな鉄のねじが、ふいにピンセットにはさまれて、明かるいところへだされた。

六73 ふいにバタバタと足音がして、小さな子ども

もがふたり、おくからかへだしてきた。

七414 ふいに、はくしゅがおこった。

七544 ふいに、ボールが、ぼくのところにとんできた。

十一114 「ビリビリ。」と、ふえが鳴って、ふいに一そうのボートが近づいてきた。

十五225 そのとき、ふいに、みんなの頭の上が暗くなって、

十五292 鳥は、不意のしゅうげきにおどろいて、

十五328 ふいに「ドン。」という鉄ぼうの音がしたかと思うと、

フィート 1 じつフィート

フィッシュナイフ (名) 1 フィッシュナイフ

十五751 立ちあがった老博士は、フィッシュナイフをにぎった右手を大きくふりまわし、

フィリップ (人名) 5 フィリップ ルイフィリップ

十四45 それは、フィリップの作品の中にみ

ぎっている大きな愛の氣持、《略》のためなのです。

十四47 フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、

人間としての心のとうとさをみつけたのです。

十四51 だから、フィリップの作品の中には、《略》強い眞実の力が、こもっているのです。

十四58 しかし、フィリップのすなおな心は、ま

ずしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

十四510 こうしたフィリップの純眞さ、誠実さ、

フィリップじしん (名) 1 フィリップ自身

十四55 それというのも、フィリップ自身、《略》

まずしい木ぐつしの子に生まれ、

## フィリピン (地名) 2 フィリピン

九172 フィリピンで、ある年の十月のすえ、子どもがつぼめをつかまえました。

十五409 ローマ字は、アメリカ・イギリス・フランス・イタリア・トルコ・《略》フィリピンなど、世界の大半につかわれている文字である。

ふう (風) (名) 18 ふう ↓ かいりくふう・きせつふう・さんこくふう

五984 こんなふうに、自分でもさえずりはじめました。

六667 どんなふうにお話がすすんでいくか、楽しみではありませんか。

六698 第二号がどんなふうになるか、楽しみですよ。六1101 弟は、こんなふうにして、「はな」といつているんだなと思うと、きゅうにおかしくなった。

七291 (会) どんなふうに書いたの。

七771 旅人は、思いだすようなふうをして、八628 (会) どうだね、どんなふうだね。

八6910 (会) たまごの中にあんまり長くいたので、あんなふうになっただけです。

九1711 日本のつばめは、こんなふうに渡っているが、

九1110 いかにもさんねんだというふうに、しばらくひげをひねったまま下を向いていましたが、

九725 やまねこは、さけの頭でなくてまあよかったというふうに、口早にぎょしゃにいました。

九804 (会) まずどんなふうになりますか。

十558 どうして、こんなふうにゆきづまってきたのでしょうか。

十一2711 母親と相談して、戸をしめきって、息をこらして、だれもないふうをしていました。

十二293 こんなふうにして、毎朝おべんとうをこ

しらえて持たせているうちに、

十二787 私は、いままで試合のまえにこんなふうにはげまされたことはありませんでした。

十四714 そういうふうなじゅんかんがおこります。十四723 こんなふうにして、湯の表面には、水のおりているところと、のぼっているところとがほらぼうにできます。

ふうけい (風景) (名) 3 風景 ↓ ホートンふうけい

い

十241 炭坑の風景。

十二10511 これは、平安時代の町の風景で、大和絵でやわらかにかきあらわされています。

十五797 そうした風景から、自分の國を愛するということを学んでいる日本の子どもさんたちにも、

ふうせん (風船) (名) 2 ふうせん ↓ かみふうせん

二463 (会) 「ふうせんかな。」

四828 まつの木の枝を立てて、色紙でおったつるや、ふうせんをさげました。

ふうちゃん (名) 3 ふうちゃん

二295 (会) 一ばんはじめに、ふうちゃんが かぞえました。

二302 (会) ふうちゃんはしんぱいして、もう一どかぞえて みました。

二6210 (会) それから ふうちゃんは、「ぶた」ふうぶう、ふうぶう。」

ふうとう (封筒) (名) 1 ふうとう

十五546 (会) そのあい色のふうとうには見おぼえがある。

ふうぶう (副) 1 ふうぶう

二315 (会) 十二ひきのぶたは、ふうぶう いったさわぎたてました。

ふうぶうふうぶう (感) 1 ふうぶう、ふうぶう

二631 (会) ぶた「ふうぶう、ふうぶう。」

プール (名) 1 プール

九274 (会) 秋風にプールの水がゆれているふうん (感) 2 ふうん

一546 (会) たまがひろえたら、お月さんのくになかまにいれてもらえます。「ふうん。」

七247 (会) はるお感心したように、「ふうん。」

ふえ (笛) (名) 23 ふえ ↓ はとふえ

一494 びいっと、しゃしょうさんが ふえをふきました。

六182 あるきりぎりすはふえをふいています。

七5011 「ピー」と、用意のふえが鳴った。

七514 ふえがまた「ピー」と鳴って、しあいがはじまった。

七521 「ピー」と、ふえがひびいた。

七644 ふえの音、虫の声、三日月さん。

八294 すると、黒うしにまたがり、ふえをふいてくる、わかい男にであいました。

八295 すがたといい、その目といい、ふえの音と、いい、申しふんのないけだかさがこもっています。

八307 けれども、けんぎゅうはおちついて、ふえをふきつけていました。

八3011 けんぎゅうは、やはりふえに心をうばわれていました。

八3210 いよいよその日になると、けんぎゅうは、黒うしに乗って、ふえをふいてきました。

九5010 がけの中ほどに、小さなあながあいていて、そこから水がふえのように鳴ってとびだし、

九517 たきは、またもとのようにふえをふきつけました。

九848 先生のふえが鳴りました。

- 九八六 ビリビリッとふえが鳴りました。  
 一一一四 「ビリビリ。」と、ふえが鳴って、ふいにそのボートが近づいてきた。  
 一一一四 おりから、港の方でふえが鳴る。  
 一一一五 ふえの音は、長くおをひいて消えていく。  
 一一五八 ことばはひびく、あしの葉のふえよ。  
 一三三 ほとにふえをむすびつけてとばすのであるが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。  
 一三五二 とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。  
 一三五二 ふえには大小があるから、  
 一三六 ほとがむれになってとんで来ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、  
 フェニキア (地名) 1 フェニキア  
 一五四二 このエジプト文字がフェニキアに移ってフェニキア文字となり、  
 フェニキアもじ (名) 2 フェニキア文字  
 一五四三 このエジプト文字がフェニキアに移ってフェニキア文字となり、  
 一五四三 さらに、そのフェニキア文字がギリシアに傳わってギリシア文字となり、  
 ふえのきりぎりす (名) 1 ふえのきりぎりす  
 一六九 たいへんきれいなもんとくをいいましたね。  
 ふえふき (名) 4 ふえふき  
 九五七 「ふえふきのたき」でした。  
 九五七 「ふえふきのたき」は、まっ白な岩のげの中ほどに、小さなあながあいていて、そこから水がふえのように鳴ってとびだし、  
 九五一 おいおい、ふえふき。  
 九五一 ありがとう。  
 ふえる (下) 8 ふえる 《エーエル》  
 三二〇 えてをかいいていくうちに、花の名も、鳥

- の名も、だんだんふえてきました。  
 八九四 二とおりにして、くきの数のふえるようすをみることにしました。  
 八〇七 一本ずつ植えたなえが、だいたい七本ぐらいにふえました。  
 八〇八 三本ずつ植えたのは、九本ぐらいにふえましたが、いちばん多いので五本になりました。  
 九三三 らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだんへつてきたそうです。  
 九三九 また、ちよまはふえる力の強い草なので、  
 一四三 ある小さな生物が、海水いちめんふえて、海水が茶色にかわるほどになるのである。  
 一二三 民ちゃんのことば数のふえるのには、おどろいてしまいました。  
 フォア ムオフコースフォアジャパン  
 ふかい (形) 45 ふかい 深い 《イー・イ・カッ・ク》 ムカがえぶかい・なさけぶかい・ようじんぶかい  
 一六三 五十音というものは、へ略、「ちがったかなをならべたもの」ぐらいに思っ、それ以上ふかく考えてみたことはなかった。  
 一六九 トンネルはだんだん深くなり、廣くなりました。  
 七四六 教室のまどは、まだねむりがふかい。  
 七五五 もやが深いから、遠いような、近いような、月明かりだ。  
 八八〇 なんとりこうな、土地にかんけいのふかい鳥だらうと、  
 八三六 しまのふかい朝の野にでたとき、  
 八二〇 大きくなるにつれて、だんだん地のそこふかくもぐりこんでいきます。  
 八三六 夜になって天の川をみると、なんともい

- ない大きなふかい感じにうたれます。  
 八五二 その家の人はふかいため息をつきました。  
 八六六 森の中には深いみずうみがあった。  
 八六六 土をあまり深くすると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。  
 八八七 種まきのときとちがつて、こんどは深くたがやしました。  
 九五六 四色、五色と数をましていけば、その感じはまたふかくなるでしょう。  
 九三八 ちよまの根は、へ略、深いになると、一メートルあまり根をはっていました。  
 九三六 そこは、深い谷になっていました。  
 九七八 そこへ着くと、先生はステッキを深く土の中へお立てになりました。  
 九八二 ぼくは、どこか一つのところをきめて、廣く深くほつていくのがよいと思います。  
 九八四 ずっと上流へいつてためしてみたり、深いところの水をとって飲んでみたり  
 九八六 深い森のそばをとびました。  
 一一六〇 とちゆうに、かなり深い小川にかけ渡し一本橋がある。  
 一二六五 その細いやわらかなものが、地をうがち岩をおしわけ、深く廣くのびていく。  
 一二六六 おおづなのようなたくましい根が、深くのびてみきをささえ、  
 一二六六 みえないが深くて長い。  
 一二六九 深くて長い根の上に、みごとに草や木がしげっていく。  
 一三三七 知識には、浅いものと深いものがあるが、その深く進んだものを科学的知識という。  
 一三八七 その深く進んだものを科学的知識という。  
 一三八八 深い、正しい知識を得るには、

十四85 団 なにしろ、私たちよりふかいものなんですから。

十四272 日本といちばん関係のふかった大陸からは、どんなことばがはいってきたのだらうか

十四329 星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、じつは、ふかいつながりがあるのです。

十四365 むかしからすぐれた人たちは、星の光の中からふかい思想を読みとりました。

十四3610 キュリー夫人は、〈略〉、物理の時間に、先生から、星をつかめといわれ、そのことばにふかい感動を受けたということです。

十四604 団 しかし、ぼくは、そんなよくのふかい、身がってなことはいけませんよ。

十四836 深い雪の中で生活している人々、

十四867 いますこしふかく考えれば、さらにおもしろい場面が発見されるように思われる。

十五82 団 みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山ふかく

十五199 氷河が無言の流れをきざんでいる深い深い谷の上を、

十五199 深い深い谷の上を、

十五210 男の子は、小石を見つけては深い谷の中へなげこんで、

十五278 アルプスの深い谷の中を、大わしは、少年をせにのせ、少女を下にさげて、

十五514 日本の古い美術に対する愛着がふかく、日本美術工芸史十二巻という大作を著わした。

十五568 団 そんなわけで、私と日本とはふかい関係があるのだが、

十五689 おばさんは目になみだをためながら、しやにむに私をおく深くひき入れた。

十五734 ふかい思い出にうたれている私の目の前

で、

十五765 私は、停車場まで送ってくださった博士のこう意をふかく謝して、

ふかがわ 「深川」(地名) 1 深川

十二702 深川の芭蕉の家近くに、曾良という人が住んでいました。

ふかさ 「深」(名) 1 深さ

十四26 眞珠貝にちようどよい海水の温度や、海の深さのこともわかり、

ぶかつこう 「不格好」(形状) 1 ぶかつこう

八909 それは、ぶかつこうなみつもいないあひるの子ではなかった。

ふかまる 「深」(五) 1 ふかまる 《一ツ》

十四328 宗教も、科学も、哲学も、ふかまっていたのです。

ふかみ 「深」(名) 1 深み

十三611 団 くらべてみて、うまさからいうと、ラファエルのほうがうまいかもしれないが、深みやしんけんさは、どうだろう。

ふかむ 「深」(下) 1 1 ふかむ 《一ム》

十五156 団 ひるすぎていよよにあかきばらの花いよよに重くかたむきふかむ

ふき 「吹」 1 ふき

ふき 「路」(名) 1 1 ふき

十三65 すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、たけのこや、ちようや、はち、

ふきあがる 「吹上」(五) 1 1 ふきあがる 《一ル》

三879 ジュッ。ふきあがる。はげしくまわる。ふきあ・ける 「吹上」(下) 1 1 ふきあがる 《一ゲ》

六368 高くふきあげられて、空にきえていくかし——

ふきおくる 「吹送」(五) 1 1 ふき送る 《一ル》

十三251 そればかりでなく、しげった林は、海岸からふき送る砂ぼこりをふせぎ、

ふきおこる 「吹起」(五) 1 1 ふき起る 《一ツ》

十五227 みんなの頭の上が暗くなって、なんだか大きなあらしがふき起ったような音がしました。

ふきか・ける 「吹掛」(下) 1 1 ふきかける 《一ケ》

五994 さんちゃんたちが水をふきかけたり、くすりをつけてやったりしますと、やっと生き返りました。

ふきこ・む 「吹込」(五) 4 1 ふきこむ 《一ム・一ン》

一510 すずしい かげが ふきこんで きたので、目がさめました。

七641 夏の風がふきこんで、新聞など動かして、ふきぬける。

十四675 湯げは、えんの下やかきねのすきまから、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、

十四685 空気がぼつていくあとへ、入れかわりに、そのつめたい空気が下からふきこんできて、

ふきそく 「不規則」(形状) 1 1 不規則

十四701 みょうなゆらゆらした光った線や、うす暗い線が、不規則なまようのようになつて、

ふきちぎる 「吹千切」(五) 1 1 ふきちぎる 《一ラ》

十一514 庭のあさがおの花は、みんなふきちぎられ、

ふきつづ・ける 「吹続」(下) 2 2 ふきつづける 《一ケ》

八307 けれども、けんぎゅうはおちついて、ふえをふきつづけていました。

九517 たきは、またもとのようにふえをふきつづ

けました。

ふき・でる 「吹出」(下二) 1 ふきでる 《一デ》

五3410 ガスこんろにかけたかまやなべから、ゆげがふきでています。

ふきとばす 「吹飛」(五) 4 ふきとばす 《一サ》

六326 てっぺんのぬけたかんかんぼうしがふきとばされる。

六392 何かし「ふきとばされたんです。

八1084 風のくる場所、目の高さぐらいのところからごみをふきとばさせます。

十五3110 羽風で空気がゆれ動き、ちよつとでもゆだんをすれば、それにふきとばされ、

ふきぬける 「吹抜」(下二) 1 ふきぬける 《一ケル》

七641 夏の風がふきこんで、新聞など動かして、ふきぬける。

ふきのとう 「落葉」(名) 1 ふきのとう

十一426 風きとうで、すいせんにおい、ふきはじめる 「吹始」(下二) 1 ふきはじめる

《一メル》

五102 さんちゃんが、ハーモニカをふきはじめる

と、ふきまわる 「吹回」(五) 1 ふきまわる 《一ッ》

一348 かげになって、どこでも どんどんふきまわってみたいです。

ふきん 「布巾」(名) 1 ふきん

一328 お日さま おかあさん かがみ し 手ぬぐい ふきん おへや

ふく 「服」(名) 8 ふく 服

四837 赤いふくをきて、三かくぼうしをかぶり、《略》サンタクロースのおじいさんが五713 おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴか

ぴか光るずきんをかぶり、金のうでわをはめ、

九637 長いしゅすの服を着て、

九697 やまねこは、黒いしゅすの服をぬいで、

九915 たかぎの服のほこりをはらいながら、

九972 やまだ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする。

十五214 まっ白な服をつけた少女の立っているようなけわしい山が、

十五9710 なんてかわいらしい服を着ているのだから。

ふく 「吹」(四五) 49 ふく 《一イ・カ・キ・ク・ケ・コ》

一372 かげが ふきます。

一373 かげが そよそよと ふきます。

一374 あさかげが、そよそよとのはらを ふきま

す。一494 ぴいitto、しゃしようさんがふえをふきました。

二145 しゃぼんだまをふいてあそびました。

二651 あたたかい かげがふいてくる。

二653 ふいてくる、あたたかい かげ。

三409 かげがふくと、くわのはのにおいがぶんとします。

三678 そうして、風がどちらへ ふいているか、みてごらん。

四144 風がふくと、にわとりがふわふわふくれる。

四537 みずうみのほうから、風がふいてきました。

四555 その夜は、さいわい、雨もふらず、風もふかない、しずかな、星の光る夜でした。

四783 ふ——ふけ ふけ 風よ、たこあがれ。

四783 ふ——ふけ ふけ 風よ、たこあがれ。

四876 風がふいてきた。

四936 風にふかれて、うずをまいて、どんどん降ってくる。

四956 風にふかれて とんで いるうちに、いっしょになつたり わかれたり、

五224 まっ白にこなふいたほしがきなどをいただいて、

六183 あるきりぎりすはふえをふいています。

六183 ハーモニカをふいているもの、オルガンをひいているもの、たいこをたたいているもの、

六343 風がふく。

六364 ああ、またふいてくるよ。

七574 ろうかを曲がったら、ふつと、風がふいてきた。

七622 風がふく。

八294 すると、黒うしにまたがり、ふえをふいてくる、わかい男にであいました。

八3210 いよいよその日になると、けんぎゅうは、黒うしに乗って、ふえをふいてきました。

九122 とうげ道にさしかかったとき、さつとふいてくる風であり、

九124 町の通りを、電線を、はたを、せんたく物をふいている風である。

九495 すきとおった風がザアツとふくと、くりの木はバラバラと実を落しました。

九598 そのとき、風がどうとふいてきて、草はいちめんに波だち、

九1282 ここ四五日は大風がふくし、雨は降るして、あみもはることはできませんでした。

九1306 風が思いだしたようにふいてくるので、あみがゆれ、くももいっしょにゆれました。

九145 9 夜つゆをみていると、風がふいてきました。  
 十62 2 風がふいて、ガサガサ音がしたから、  
 十66 7 会 そちらからふいてくる風にあたっても、  
 たちまち死ぬといわれるくらいだ。  
 十一35 1 会 ふくすず風に夕はん樂し。  
 十一36 6 会 ひと日のあせもおさまって、夕風ふけばたいこ鳴り、  
 十一37 1 会 はぎの花ふく朝風も、音さえすしくなってきた。  
 十一40 3 会 夕ぐれ寒くふくこがらしは、黄色くかれたくぬぎ葉鳴らす。  
 十一42 7 会 うめもほころび、こちふけば、春も目さきに近づいた。  
 十三36 7 ふわふわとまるくなつて、風がふいてくると、ころころとこがりがだす。  
 十四41 6 会 朝風がふいてきた。  
 十四42 4 会 心に太陽をもて、あらしがふこうが、雪がふろうが。  
 十四76 5 海陸風とよばれているもので、晝間は海から陸へ、夜は反対に陸から海へとふきます。  
 十四76 5 すこし高いところでは、反対の風がふいています。  
 十四88 5 風にふかれたからであらうか。  
 十五10 6 会 いけがきのすぎの木ひくみとなり家の庭の植え木の青めふく見ゆ  
 十五10 8 会 ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でとぶ見ゆ  
 十五67 4 日曜学校の生徒であつた私は、そのクリスマスに得意の銀てきをふいたが、  
 ふく「拭」(五) 13 ふく「イー・キーク」  
 二39 9 たろうは、あせを ふきながら、あたりのけしきをながめます。

四72 5 はなを ふく。  
 四100 8 かめは、手で なみだを ふきながら、なんども おじぎを します。  
 五29 4 会 どこかのおじさんが、荷物を二つ持つて、あせをふきふきあるいていました。  
 五29 4 会 あせをふきふきあるいていました。  
 五80 6 ゆかをきれいにふきました。  
 五80 7 かべいたもふきました。  
 六18 10 上でき。」と、さもまんぞくそうにしき台をおりてきて、あせをふきます。  
 六139 4 五ひきのうさぎさんたちは、あせをふいたり、ねころんだり、足をもんだりしていました。  
 十一91 11 一方の手で花たばを取りながら、一方の手で目をふきました。  
 十四18 7 すると、窓ガラスをふいていた田中さんが、「略。」といった。  
 十五65 3 私をせにおいながら、あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、  
 十五65 4 あせをふきふき歩かれた  
 ふくざわゆきち 「福沢諭吉」(人名) 1 福沢諭吉  
 十五81 3 天は、人のうえに人をつくらず、人のしたに人をつくらず。——福沢諭吉——  
 ふくじゅそう 「福寿草」(名) 2 ふくじゅそう  
 九117 6 会 ふくじゅそうのはちをおきかうのおさな子やえんがわの上につる日を追いて  
 九118 1 会 ふくじゅそうのつぼみとおしむおさな子や夜はいろいろの火にあてており  
 ふくすけ 「福助」(名) 1 ふくすけ  
 三94 7 ピアノや ふくすけをおることも できます。  
 ふくびき 「福引」(名) 1 ふくびき  
 四71 7 四組の「ふくびき」。

ふくびきあそび 「福引遊」(名) 1 ふくびきあそび  
 四67 3 「なぞあそび」「ふくびきあそび」お正月までに、ことばあそびの たねを たくさん こしらえて おきましょう。  
 ふくむ 「含」(四五) 7 ふくむ「イー・ミーン」  
 三49 6 会 よあけにばあと まつき色、つゆをふくんで さきました。  
 五4 5 水をふくんだ草のうた、こけのうた、土のうた、いわのうた。  
 八5 10 てのひらで遊ばせたり、口さきにふくんだえさをとらせたり——  
 九118 6 会 ほおずきを口にふくみて鳴らすごとかわずは鳴くも夏のあさ夜を  
 九125 2 上流に向かって歩きながら、ときどき水をふくんでは泉をさがしていった。  
 十二92 4 きのがたくさんあつたこと、りすをみつめて追いかけたこと、もみじの枝をとつてきたこと——そんなことがふくまれている。  
 十三36 2 ふえには大小があるから、はとがむれになつてとんで来ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、それこそ天上の音楽である。  
 ふくらむ 「膨」(五) 5 ふくらむ「イー・マーン」  
 七95 7 よくみると、おくの方に、わらが果のようにふくらんでいて、  
 八70 5 しちめんちようは、風を受けた船のほのうにからだをふくらませて向かってきた。  
 八95 3 水をとりかえるときにみたらもみのものとのほうがすこしふくらんでいました。  
 八102 1 いねのほのさがふくらんで、いまにもほがでそうです。  
 八104 3 二つにわつてみたら、中に、青いものがま

るくふくらんでいました。

ふくる (下二) ↓きぶくる

ふくれあが・る 「膨上」(五) 3 ふくれあがる

《↑ッ》

十一7710 夕がた、コップを病人の口もとにつけた

ときに、少年はそのふくれあがった顔の上に、

十五623 大小二つのくつをちらと見た私は、たち

まちふくれあがってだだをこねだした。

十五878 〔圖〕『みたされたきよえいの幸福』で、

《略》、りっぱな、ふくれあがった顔をしています。

ふく・れる 「膨」(下二) 6 ふくれる 《ーレ・ーレ

ル》

三955 この 一まいの紙が、いろいろなかたち

になったり、ふくれたり、立ったりします。

四145 風がふくと、にわとりがふわふわ ふく

れる。

八1042 いねの花のすんだあとをさわってみると、

いままでべしやんこだったさがが、ふくれてかた

くなっていました。

十四5211 〔圖〕こんな、十キロもあるような大きな

ぼちゃでも、それは、花の一部であるめしべの根

もだが、大きくふくれただけのものです。

十四536 〔圖〕 どうしてそのめしべの根もとがふくれ

て、そんな大きな実になったかということは、

十四732 かべや屋根が熱せられると、それに接し

た空気がふくれてのぼる、

ふくる 「袋」(名) 5 ふくろ ↓てぶくろ・ひとふ

くろ

一614 しろちゃんは ふくろから だいやもんどを

とりだして、「略。」といいました。

三4710 にいさまがたのおもい ふくろを せおっ

ていらっしやったので、

五1810 そこで、私たちは、じょうぶなふくろにい

れられて、かぎをかけられました。

五198 ふくろの中からだされて、ほっとしている

と、《略》また、かばんの中にいれられました。

十512 母がこしらえてくださったパンを、ふくろ

からとりだして、いぬにやりながら、

ふくろう 「梟」(名) 4 ふくろう

十567 妹の作文 ふくろう

十568 私は、遊び時間にふくろうをみにいきまし

た。

十569 そうしたら、二年生の男の子が、ふくろう

のからだを手でいじりました。

十569 ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり

木の下におりていつてしまいました。

ふくろうさん 「梟」(名) 1 ふくろうさん

四602 〔圖〕 ふくろうさん、がんの なかまを みな

かったかい。

ふけ ↓よふけ

ふけい 「父兄」(名) 2 父兄

十一443 それをみよう、父兄の人たちは、自分

の席で立ちあがります。

十一444 子どもと父兄と、いっしょに呼ばれてい

るようです。

ふける 「耽」(五) 1 ふける 《↑ッ》

十五586 博士は、遠い昔を思い出して、ひとりそ

のときの思い出にふけていられるようすだった。

ふ・ける 「更」(下二) 1 ふける 《ーケル》

十三345 夜のふけるのも知らないで、見とれてし

まう。

ふけわたる 「更渡」(四) 1 ふけわたる 《ール》

十五133 〔圖〕 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸

の外明らかに月ふけわたる

ふこ 「畜」(名) 1 ふこ

九789 主人も、くわや、ふこや、かごなどを持つ

てきて、かしてくれました。

ふこう 「不幸」(名) 6 不幸

十三101 からすの鳴き声がわるいから不幸がある

などといった。

十五948 〔圖〕 みんな不幸のところへにげこんでしま

うのさ。

十五1054 〔圖〕 あれは、不幸のほらあなからにげて来

た『とてもたまらなくなるゆかい』です。

十五1065 〔圖〕 「不幸」に行くのをとめることは、な

かなかむずかしいのです。

十五1066 〔圖〕 「不幸」をなくさめてやるのがすき

なのですから。

十五1073 〔圖〕 『ふとった幸福』たちといっしょに、

不幸のなかまにはいつてしまった。

ふこう 「不幸」(形状) 1 不幸

十三1010 同じ名まえの人も世の中には多いが、あ

る人は、幸福な暮らしをし、ある人は、たいへん

不幸になっている。

ふこうそのもの 「不幸其物」(名) 1 『不幸』その

もの

十五1068 〔圖〕 そういうわけで、あれにうつちやられ

ると、ぼくたちは、『不幸』そのもののように、

みじめなものになってしまうのです。

ふさ ↓ちぶさ

ぶさいく 「不細工」(形状) 1 ぶさいく

八217 せみは、さつそく、ぶさいくなかつこうを

して、それにはいあがっていききました。

ふさぎこむ 「塞込」(五) 1 ふさぎこむ 《ーン》

六107 ふさぎこんで下をみつめていた女の子が、

思わず「あっ。」とさげんだ。



ふさぐー〔塞〕(五) 3 ふさぐー《イー・ガー・ギ》

八七二 「〔略〕」と、あひるの子は思った。そうして、目をふさいだが、またさきへとんでいった。

九二五 大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、まつ林におおわれた道もない谷まになった。

十一五三 〔入口〕ふさがず乗った中へ。

ふさ・ける (下) 1 ふさける 《ケ》

十五九六 小さな「幸福」のむれ、ふさけたり、わらいこけたりしながら、〔略〕かけたして来て、ふさた じふさたする

ふさふさする 〔総説〕(サ変) 1 ふさふさする 《シ》

五八六 黒いかみのけがふさふさして、まるい目が二つあつて。

ふし 〔節〕(名) 1 ふし

五八五 「〔略〕」と、うたのようにふしをつけてよびながら、ひとりの子どもがきます。

ふし 〔不死〕(名) 4 ふし

三二四 「〔略〕」と、いって、みかどへ おわかれの手紙とふしのくすりをのこしました。

三二六 ふしのくすりと手紙は、かえってかなしみをますたねになるばかりでしたので、

三二七 〔山〕その山の上で、ふしのくすりと手紙をやきすてよ。

三二八 すると、ふしのくすりをやいたけむりが、山の上からいつまでもいつまでもたちのぼっていました。

ふじ じえぞふじ

ふじ 〔無事〕(形状) 7 ぶじ 無事

五二〇 私は、ぶじに、としおさんの心を、そのま

まみつおさんにおつたえすることができました。

六二七 木の葉の船は〔略〕川の岸につきましたの

で、ありは、ぶじに岸にあがることができました。

七三六 私はそういって、どうぞぶじにつきますようにと、心の中でのびのびしていました。

八四七 寒い冬もぶじにこすことができました。

十二六〇 それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。

十二八六 やわらかなボールだったので、無事に受け返すことができ、

十五五三 ポストン、ニューヨーク、ワシントンと無事に旅を進めて、

ふしあわせ 〔不幸〕(名) 1 ふしあわせ

八九三 はくちようは、その受けてきたまじさとふしあわせとを覚えて喜んで。

ふしあわせ 〔不幸〕(形状) 1 ふしあわせ

十四四八 フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって人間としての心のとうとさをみつけたのです。

ふしぎ 〔不思議〕(名) 2 ふしぎ

十二三二 私は、どのようなおどろきとふしぎが私を待っているのか、すこしも知りませんでした。

十四六二 ただそれだけでは、なんのおもしろみもなく、ふしぎもないようですが、

ふしぎ 〔不思議〕(形状) 37 ふしぎ

一五七 あれはふしぎなだいやもんどですよ。

三二五 ふしぎなことに、はちをもった手が、するするとおしやかさまの目のまえにのびてきました。

三二六 これはふしぎだ。

三二七 「ふしぎだ、ふしぎだ。」と、せんだう

たちも、みている人々もいいました。

三二八 ふしぎだ、ふしぎだ。

三二九 いや、ふしぎでもなんでもない。

三〇一 ふしぎに思って、その竹を切ってみ

すと、小さな、きれいなおひめさまがすわっていました。

三二九 ところが、ふしぎなことに、手足の力がなくなつて、なにをすることもできなくなつてしまいました。

五六九 おじいさんは、うちへ帰つて、おばさん

に、このふしぎな話をしました。

六五四 よしおとみちこが「月が走る。」雲が走る。」といひあつてゐるのをききながら、ふみおはふしぎでたまりました。

六六五 また、ふしぎでなりませんでした。

六八四 「やあ、よくあがる。ふしぎだなあ。」といひて感心しました。

七二七 はるお さなぎをふしぎそうにみながら、「これ、死んでいるの。」

七三二 ふしぎだな。あんなあおむしが。

八二〇 七年の月日がたつたころ、せみの子たちは、れいのふしぎなかしこさで、もう大きくなりきつたことを知ります。

八四五 あひるの子は、それをみて、ふしぎな氣持

になった。

九二〇 一つのたいこが、そのうちかたによつて、水の音にもなり、風の音にもなり、雪の降るようすにもなるのは、ふしぎである。

九二六 汽車や自動車もかなわないうらいの早さですから、なん百キロの海をひといきにとぶのも、けつしてふしぎではありません。

九二七 それで茶をたててみると、いままで味わ

たこともないような、ふしぎな味が感じられた。

九三六 おかしいなと、ふしぎに思つてよくみると、それは白いちようちよでした。

九四10 くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげとみつめました。

十289 観察すればするほど、自然のおもしろさもわかり、そのふしぎなことにうたれ、

十367 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎな機械に目をみはりながら、

十384 眞珠は、海のそこからまれにひろいあげられる、ふしぎな宝石とされてきたが、

十385 しらべてみると、けっして、ふしぎでもなんでもないものであった。

十二376 めばえてこようとする心のはたらきといったようなあるふしぎなものを感しました。

十二377 「水」はいま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいものの名であることを知りました。

十二433 図 「ふしぎだなあ。」

十二575 ふしぎなことに、神山のほうには、昔から九十九だんの石だんができています。

十三3211 たとえ、鳴りものであろうと、呼び声であらうと、トンネルのようなホートンには、それが、ふしぎなほどよくひびきわたる。

十四226 「略」と、さもふしぎそうにいうと、十四246 私は、どうしてこんなにたくさんのごと

ばが、いろいろな國からはいってきて、日本語になったのだからと、ふしぎになってきた。

十四7310 このふしぎなもうがなんであるかということは、「略」よくわかっていないようです。

十四968 それがゆらゆらともえあがると、まあ、なんというふしぎなことだろう。

十四1026 人々は、女の子がおおみその晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。

十五824 「幸福」(ぜいたく) たちが、けだもの

の肉や、ふしぎなくだものを、〈略〉、たべたり、飲んだり、

十五1143 図 ふしぎだな、おかあさん。ふしぎふしぎ 「不思議不思議」(形状) 1 ふしぎふしぎ

六1127 アイウエオ、カキクケコから、じゅんじゅんにいってみたところが、ふしぎふしぎ、はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメモの二ぎょう

だけで、ふしくれる 「節博」(下二) 1 ふしくれる 《レ》

九1453 ふしくれた手、とがった足、うすきみのわ

るいかたち、〈略〉——くもは、自分ながらふじさん 「富士山」(地名) 5 ふじ山 富士山 富士山

四833 それはふじ山のえでした。

十二1116 おなじみの富士山の絵です。

十五1916 これは、富士山よりはすこし高く、四千七百メートルばかりの高さがありますが、

十五5512 図 そのころ日本をたずねた外人の中で、富士山や磐梯山のいただきをきわめたのは、〈略〉私のはじめてだろう。

十五563 図 そのときは、まだ三角測量が行われていなかったもので、富士山の高さも不明であった。

ふしぜん 「不自然」(形状) 1 ふしぜん

六10611 いってから、すこしふしぜんだなと思った。ふじのやま 「富士山」(地名) 4 ふじの山

三1179 それで、この山の名を、「ふじの山」というようになりました。

四746 に——日本一のふじの山。

四1267 図 空にかすんだふじの山。

四1354 図 かめめすいすいとんでいく、空にほ

んのりふじの山。

ふじゆう 「不自由」(名) 1 不自由

八469 なんの不自由もなくくらしているかと思うと、友だちがいなかったりしました。

ふじゆう 「不自由」(形状) 4 不自由

四1234 図 わたくしがこの世に生まれてくるまでは、なん百年も、なん千年も、人々は不自由な思いをしました。

五247 図 みんなを立たせ、不自由な人や、女や、子どもたちをすわらせました。

八214 皮がこわばっていて不自由だし、目もよくはみえないらしいので、ねこや、すずめにみつけられたらたいへんです。

十二707 芭蕉はたったひとりで住んでいて、なにかにつけて不自由であらうから、

ふじん 「夫人」(名) 1 夫人 じゅきゅりーふじん・にいしまふじん

十四3611 夫人は、〈略〉、その感動から研究を進めて、ついにラジオウムを発見したのです。

ふじん 「婦人」(名) 1 婦人 じゅろうふじん

十四487 一本の大きなまるとに、なんんかの婦人がつかまって、立ちおよぎをしていました。

ふじんたち 「婦人達」(名) 2 婦人たち

十四4811 助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人たちが力をおとさないように、

十四505 歌を歌っていたおじょうさんも、そのほかの婦人たちも、みんなすくいあげられました。

ふす じうつふす・ひれふす

ふす 「課名」 2 ぶす

十38 七 ぶす……六十二

十626 七 ぶす

ぶす (題名) 1 ぶす じきようげんぶす

十65 1 つぎの「ぶす」は、狂言の中の有名なものです。

ぶす 「付子」(名) 5 ぶす

十66 6 図 『ぶす』といって、おそろしいどくがはいつている。

十69 6 図 『ぶす』だよ。

十69 8 図 『ぶす』ではない。

十73 11 図 『ぶす』をたべて死ぬのが、いちばん早道と思ったのです。

十74 7 文 図 ひとくちくえども死にもせず、ふた  
くちくえども死にもせず、みくち、よくち、ぶす  
はくえども、死なれもせず。

ふせ ↓まちぶせ

ふせい 「不正」(名) 1 不正

十五105 12 図 第一にいわなければならぬのは、『正義であることの大きな喜び』で、不正がしかえしされたときに、いつもにっこりしています。

ふせぐ 「防」(五) 3 ふせぐ 《「ガ・ギ・グ」

五82 4 図 夜は、はらまきをきちんとして、ねびえをふせぐこと、

十三22 6 アルプス産の小もみを植えたので、かれ  
るのはふせがれましたが、

十三25 1 そればかりでなく、しげった林は、海岸  
からふき送る砂ぼこりをふせぎ、

ふそく 「不足」(名) 1 不足

六6 10 図 ひとかどの役目をつとめて、世の中の役  
にたつのに、どれもこれも不足はなさそうである。

ふそく 「不足」(形状) 1 不足

八37 4 かわいいひとりの王女もあって、なにひと  
つ不足なことはありませんでしたが、

ふた 「蓋」(名) 5 ふた ↓ひふた・まふた

八94 8 水をいっぱいいれ、ふたをして日かげにお

き、ときどき水をとるかえました。

十69 9 図 ふたを取ってみようか。

十70 2 思いきって、ふたをあけてみました。

十四70 11 ふたでもしておけば、ひやされるのは、

〈略〉茶わんにふれた部分だけになります。

十四71 9 しかし、茶わんの湯を、ふたをしないで  
おいたばあいには、湯は表面からもひえます。

ふた 「札」(名) 1 札

十一51 10 電車は、くるにはくるが、みな満員の札  
をさげて、とまらずに走っていつてしまふ。

ふた 「豚」(話手) 3 ぶた

二63 1 ぶた「ぶうぶう、ぶうぶう。」

二64 5 ぶた「だんだんはやくなる。」

二67 9 ぶた「おや、ひばりさんだ。」

ぶた 「豚」(名) 3 ぶた ↓こぶた

二28 8 図 十二ひきのぶたが、そろって川をわ  
たりました。

二31 5 図 十二ひきのぶたは、ぶうぶう いて  
さわぎたてました。

十三36 9 大通りを、ぶたがぞろぞろと歩いて行く。

ふたあし 「二足」(名) 1 二足

十二29 2 立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二  
足ほど歩きました。

ふたい 「舞台」(名) 14 舞台

九87 8 舞台の中ほどに大きな木が一本立っている。

九93 1 こうして、ふたり、じゅんじゅんに舞台を  
さる。

九93 4 しかし、自分の物ではないので、それを舞  
台のおくになげすてて、

九96 8 たかき 舞台のすみからボタンをひろって  
くる。

十二47 7 図 命のない人形を思うままに動かして、

喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台  
にあらわそうとする望みもあるのだ。

十二53 11 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔  
や頭がみえないようにする。

十二54 4 舞台の作りかた

十二54 10 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家  
を作っておく。

十二54 図 舞台

十三34 2 ときには、ホートンの廣場などに、かけ  
絵の舞台をこしらえて、そこで、人形あやつりが  
はじまる。

十三43 1 手紙を読みながら、舞台のまん中に出て  
来る。

十三44 4 ところが、このしばいは、舞台に出て来  
る人が、ただひとりです。

十三44 10 ですから、舞台に出ている人は、四人の  
人と話をしているわけです。

十五94 4 舞台は清らかな、こうごうしい、ばら色  
の美しい光に照らされます。

ふたいはし 「舞台端」(名) 2 舞台はし

九92 9 「一、二、三——」と数えながら舞台はし  
まできてとまる。

九95 2 そうしてさっさといきかけるが、舞台はし  
で足をとめる。

ふたえにじ 「二重虹」(名) 1 二重にじ

九28 1 文 二重にじ青田の上にうすれゆく

ふたガラス (名) 2 ふたガラス

六4 9 自分のおかれているのは、しごと台の上に  
のっている小さなふたガラスの中で、

六11 2 時計屋さんには、〈略〉ねじをはさみあげて、  
だいじにもとのふたガラスの中へ入れた。

ふたくち 「一口」(名) 1 ふたくち

十745 文圃 ひとくちくえども死にもせず、ふた  
くちくえども死にもせず、

ふたご 「三子」(名) 2 ふたご

二151 ふたごもできました。

十五871 文圃 『のどかわいていないときに物を飲  
む幸福』と、『腹のへらないときに物をたべる幸  
福』で、ふたりはふたごで、

ふたごことみこと 「三言三言」(名) 2 二こと三こと

十一749 病人の上にかがんで、みやくをみたり、  
《略》、二こと三こと看護婦にたずねました。

十一842 少年は二こと三こととばをはさんで、  
家族のようすを話そうとしましたが、

ふたたび 「再」(副) 10 ふたたび

六119 自分がここにはいったために、この時計ゼ  
んたいが、ふたたび活動することができたのだ  
七444 車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふた  
たび、しらがの老人のところにもどった。

八271 馬車はふたたび走りだして、

十431 そのうえ、ふたたび、赤しおがよせてきた。

十一301 やがて、金次郎は、親類の家からでて、

《略》、一家をふたたびおこすことができました。

十二864 試合はふたたびはげしいものになってい  
きました。

十三254 すたれた都市はふたたびおこり、新しい  
町村が、いたるところに生まれました。

十五56 文圃 歌のもと末 ふたたびも、友の心に  
あらわれぬ。

十五511 祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年  
の月日をへだてて、いま、まごたちによってふた  
たび結ばれることになった。

十五724 「《略》。」と、おばさんはふたたび呼び  
かけた。

ふたつ 「二」(名) 41 ふたつ 二つ ↓はつめいふ  
たつ・まっぶたつ

一112 文圃 ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いつ  
つ、むつつ、ななつ、やつつ、このつ、とお、

一116 文圃 ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いつ  
つ、むつつ、ななつ、やつつ、このつ、とお、

一272 目はふたつ、みみもふたつ。

一273 目はふたつ、みみもふたつ。

一657 文圃 それなら、あなたの目のなかにふた  
つひかつていますよ。

三365 文圃 大きなかまどがふたつもあります。

三449 文圃 「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ。」と  
かぞえながら、わたっていききました。

三502 文圃 かぼちゃの花がさきました、はかげに  
ふたつさきました。

四1085 こしかけが二つおいてあります。

五294 文圃 どこかのおじさんが、荷物を二つ持って、  
あせをふきふきあるいていました。

五871 文圃 黒いかみのけがふさふさして、まるい目  
が二つあつて。

五872 文圃 どのおにんぎょうでも、目は二つですよ。

六411 ビルディングのまどに、一つ二つと火がつ  
く。

六997 ぼくは、この二つをかさねたりべつべつに  
したりして、つくえの上をみたり

六1025 二つのつつをのぼしたりちぢめたり、かげ  
んしているうちに、はつきりした。

六1122 この二つは、両方とも、マミムメモという  
一ぎょうの中にはいつている。

七675 人の顔をちようくくするのに、二つのやり  
かたがあります。

八676 そこには、二つの鳥の家族が、一つのうな

ぎの頭のことであらそつていた。  
八1042 二つにわつてみたら、中に、青いものがま  
るくふくらんでいました。

九53 これは二つの色の組みあわせですが、

九92 二つか、三つのことばの組みあわせだと、  
すぐ心にもを思いうかべることができませんが、

九997 文圃 でも、ぼくは二つなぐられて、三つきみ  
をなぐった。

十467 文圃 わたしが、研究所でどうしてもできな  
かったことが、二つあります。

十一233 いちばん下のは、そのとき二つでした。

十一7611 夜になると、少年は、へやのすみにいす  
を二つならべて、その上でねむりました。

十二245 めいの民ちゃんは、二つ、満でいえば一  
年三ヶ月で、まだ歩けません。

十二356 先生は《略》、二つの人形が同じ名まえ  
であることをわからせようとなさいました。

十二574 秋田縣の男鹿半島に、神山、本山という  
二つの山がある。

十三1912 このゆめを実現するために、ダルガスの  
とるべき手だては、ただ二つしかありません。

十三419 文圃 ああ、リックサックも二つある。

十三425 文圃 とつておいたほうがいいよ……うん、  
うん……そう、二つあるのならもううよ……

十四1211 手 小包二つは、おそらくいっしょには着  
きますまい。

十四814 うり二つ。

十四832 雪の映画を二つ見た。

十四859 このように、二つの映画は、どちらも雪  
にえんのあるものであるが、

十四943 女の子は、二つの家の間に、ちよつとし  
た、身をかくす場所を見つけた。

さる。

十二 1053 大きなげたをはいた女の人、おとをも

九八  
一〇 さあこい。」ふたりともむきになって、友

（感） 3

十49 1 画 アンヨ ナメテルワ——クツチケルヨ

——フッテ——ハイ——イライナイノ——

十50 11 「フツ」と息をはきました。

十50 12 画 「フッテ」と、ひとりごとをいいました。

ぶつ 「物」 ↓かんこうぶつ・のうさくぶつ

ぶつ 「打」(五) 3 ぶつ 《ターチ》

三57 2 画 うたをわすれたカナリヤは、やなぎのむちでぶちましょか。

八70 3 みにくいあひるの子は、《略》、にわとりからもぶたれたり、つつかれたりした。

八89 6 画 なかまに追いかけられたり、にわとりにぶたれたり、女の子のきけられたり、

ぶつ 「普通」(名) 12 ぶつ 普通

三102 8 また、小人のようだった おひめさまは、

三月ほどの あいだに、すすくと せいがのび

て、ぶつうの人の大きさに なりました。

五96 3 画 ほんとうは、まひわというのですが、ふ

つうは、ひわ、ひわといっています。

九80 11 画 これがぶつうです。

十63 4 ぶつうのしほいでは、《略》けししょうをし

て、その役らしく顔をこしらえあげるのですが、

十一25 9 ぶつうの子ともだったら、くたくたにな

ってたおれるところを、

十三11 6 原因・結果の關係の簡單なものは、普通

の知識によつて知られ、

十三61 2 画 でも、ラファエルのうまさは、普通の

人にもわかるだろうね。

十四33 2 この一むれの星を、ぶつう太陽系とよん

でいます。

十四64 4 そのしんになるものは、ぶつうけんび鏡

でも見えないほどの、たいへんこまかいちりのよ

十五40 5 かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文

章のぶつうの書き表わしかたとなっている。

十五60 8 ぶつう「満ぼう」でとおっていた私は、

十五96 5 画 けれども、ぶつうの人間には、それが

見つけられないのだよ。

ぶつか 「二目」(名) 2 2日 二日 ↓ごがつぶつ

か・じゅうにがつぶつか・はちがつぶつか

八108 6 天氣のよい日に2日ほしたら、もみがよく

かわきました。

九22 12 十月一日 飛行機で一千六百ば二日同じ

く九百九十ば

ぶつかかん 「二日間」(名) 1 二日間

八73 1 それから二日間、ここにそとかくれてい

た。

ぶつかめ 「二目」(名) 2 二日目

五19 4 二日めのあさ、やっと汽車からおろされ、

十一78 9 そうして、二日目も、三日目も、四日目

もすぎました。

ぶつかる (五) 2 ぶつかる 《ツツ—リ》

十五82 6 歌を歌ったり、ぶつかったり、よろけた

り、ねむりこけたりしています。

十五104 11 わんぱくこぞうのようなのが《略》なに

かにぶつかりながら、チルチルに近づいて來ます。

ぶつきらぼう 「棒」(形状) 1 ぶつきらぼう

九98 2 「首、いたいのか。」たかぎぶつきらぼう

に、「いたかない。」ふたりだまる。

ぶつくら (副) 1 ぶつくら

十三4 6 こずえの、細い、細い小枝のあみ目の先

にも、はやぶつくらと、季節の命はわきあがって、

ぶつとり (副) 1 ぶつとり

六83 10 糸がぶつとりと切れて、魚はにげる。

ふつと (副) 1 ぶつと

七57 4 ろうかを曲がったら、ぶつと、風がふいて

きた。

ぶつとおし 「打通」(名) 1 ぶつとおし

十二81 7 三時間もぶつとおしに戦いました。

ぶつとぶ 「吹飛」(五) 2 ぶつとぶ 《—ン》

六113 9 弟のまねをしてみんなをわらわせてやろう

などという氣持は、どこかへぶつとんでしまった。

十四44 8 画 心に太陽をもて、そうすりや、なん

だつてぶつとんでしまふ。

フットボール (名) 1 フットボール

六121 6 まつ林の中で、まつかさで、まりなげをし

たり、フットボールをしたりして遊びました。

ぶつぶつ (副) 4 ブツブツ ぶつぶつ

五21 6 あまりこんでいましたので、みんな、ぶつ

ぶつとこごとをいいながら、

九119 9 水は大きなごろごろした石ころのあいだか

ら、ブツブツと音をたててわきだして、

九129 10 ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもは、

やぶれたところをつくろいかけました。

十五93 4 いぬ ぶつぶついいながら、テーブルの

すみで、「《略》」

ぶつり 「物理」(名) 1 物理

十四36 9 キュリー夫人は、《略》、物理の時間に、

先生から、星をつかめといわれ、

ふで 「筆」(名) 8 ぶで 筆

三96 5 えんぴつでかくことも、ぶででかくこ

とも できます。

七55 4 そのほんたいに、ぶでをいれるほど、か

えて、文章がみじかくなっていくことがあります。

十二17 4 文雄は、三きやくにこしかけて、またふ

でをとつてかきはじめた。

十三614 自由にふでをふるって、りっぱな作品をたくさんのはえらいよ。  
 十五516 大英百科辞典の東洋美術についての説明は、ブリンクリーのふでになったものである。  
 十五696 おじさんが日夜ふでをとっていられたという大きなつくえの上に、  
 十五721 勝海舟の筆になる「新島襄之墓」という五つの文字をきざんだそのおくつき。  
 十五1225 うれしいような、楽しいような、悲しいような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。  
 ふでいれ「筆入」(名) 1 ふでいれ  
 一147 ちょうめん二さつ、いろがみ五まい、くれよんひとつはこ、ふでいれひとつ、  
 ふと (副) 25 ふと  
 二601 おはなしをきいたとき、わたくしは、ふと、ゆうべのゆめをおもいだしました。  
 三701 そのとき、ピーターはふと、ゆかのうになにかあるのをみつけました。  
 四357 窓 そのとき、ふと思いだしたことがありませんね。  
 六64 「略」などと考えているうちに、ふと、自分のことに考えおよんだ。  
 六487 窓 ふと、そんなこと思わせる、あのまっさおな海の色。  
 六494 窓 ふと、そんなこと思わせる、あのまっ白な波の音。  
 六544 ふみおはふと氣がついて、まえの方にある木の下へいきましました。  
 六719 はるえは、まえに「こくご」でならった「よみかき」のころを、ふと思いだしました。  
 六999 そのうちに、ふと、おもしろいことを発見した。

七379 ふと上を向くと、私のよこのわかい男の人が、《略》両方の手でまどわくをおしています。  
 八4710 王子はふと立ちどまって、その声に耳をかつまけました。  
 十552 ことばの記ろくは、妹の心の写真になるのではないかと、ふと、こんなことを考えました。  
 十一664 看護人は、しばらく考えていましたが、ふと思いだしたように、「《略》。」といいました。  
 十一724 かるい手がふとかたにさわったので、  
 十二722 少女はなにを思ったのか、ふと庭さきにさいていた黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、  
 十二184 窓 せんだって、ふと羽を動かしてみたら、ピッピッという音がしました。  
 十二618 昔、あるまじい人が、ふとしたことから、この岩屋からぜんやわんなどの家具のであることを知った。  
 十二9411 正男は、きよ年のいまごろのことをふと思いだす。  
 十三217 そうして、かれがふと思いうかべたのは、アルプス産の小もみを移植してみたらどうか、ということでありました。  
 十三346 ふと氣がついて、子どもたちは、あわてて家にもどって行ったりする。  
 十四272 それから、ふと、《略》大陸からは、どんなことばがはいつてきたのだろうかと思った。  
 十五157 文 大きななにもなまなばらの花ふとはずみにくずれたりけり  
 十五234 ふと氣がついてみると、いままで先生のそばにいた女の子のすがたが見えません。  
 十五434 銀座通りをアメリカの一しようこうが歩いていて、ふと、ある店先で立ちどまった。  
 十五922 チルチルがふと見ると、かれらはみんな

となかよくテーブルについて、  
 ふと「太」(形) 5 ふとい 太い 《イー・イク》  
 八1410 あおぎりのふといみきをつたって、  
 九347 厩 ちよまの根は、ふといごぼうのようで、  
 九1311 くもは、ふといつなをとりだして、みつばちのからだをしばりつけようとしました。  
 十四782 はじめにまん中になたをいれても、きつと、とちゅうから横の方へそれてしまつて、一方は太く、一方は細くなつて、  
 十五301 大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かつて來ました。  
 ぶどう「葡萄」(名) 6 ぶどう  
 四371 窓 そこには、ぶどうが、たくさんおいしそうにじゅくしていました。  
 四375 窓 ぶどうをください。  
 四384 窓 たろうさんは、なぜぶどうをもらわないで、かえたのでしょうか。  
 六212 窓 美しいぶどうに、かがやくりんご、楽しいわれらきりぎりすの生活——  
 六1363 ところが、ぶどうのつるに、角がひっかかりました。  
 ぶどう「葡萄」(名) 1 ぶどう賣り  
 十三329 ぶどう賣りもやって来る。  
 ぶどう「葡萄園」(名) 1 ぶどうえん  
 四291 ぶどうえんのおじさんのところへいつて、あそんでくることかな。  
 ぶどう「葡萄棚」(名) 1 ぶどうだな  
 四3610 窓 そのとき、ぶどうだなの下をとおりました。  
 ふところ「懷」(名) 1 ふところ  
 十二739 あられはその手にはのらないで、顔にあたりふところにとびこんだります。





二454 長い竹のさおで、ふねをこぎます。  
 二68 くりぬいて、ふねをつくるがよい。  
 二610 そこで、大ぜいのだいくをあつめて、ふねをつくることになりました。  
 二72 なん年かかかって、とうとう一そうのふねができました。  
 二73 いままでみたこともきいたこともない、大きなふねでした。  
 二76 おどろいたのは、そのふねの早いことです。  
 二77 かいをそろえてひとかき水をかくと、ふねはななつの大なみをのりきって、鳥のつぶように走るではありませんか。  
 二710 なんと早いふねだろう。  
 二85 ああ、いきおいのいいくすのきでつくったふねだもの、  
 二86 鳥のように早いふねだから、はやとりという名をつけよう。  
 二575 うたをわすれたカナリヤは、ぞうげのふねにぎんのかい、月夜の海にうかべれば、わすれたうたを思いだす。  
 二947 一まいの紙で、〈略〉。ふねをおることできます。  
 二4310 ぼくは、大きくなったら、にいさんといっしょに、ふねではたらかたいと思います。  
 二336 船は、なんの力で走るのでしょ。  
 二517 きてきも鳴らさず 船がいく 船がいく。  
 二518 きてきも鳴らさず 船がいく 船がいく。  
 二614 木の葉は船のようになって、ありのそばを流れました。  
 二6153 「ありがたい。」ありはそういつて、すぐ木の葉の船につかまりました。

二6156 木の葉の船は波に流されて、川の岸につきましたので、  
 二61510 もし、あの木の葉の船が流れてこなかったら、どうなっていたかしれない。  
 二6876 そこに船がある。  
 二6884 さあ、早く船にお乗りなさい。  
 二7103 渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、こっちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。  
 二7404 しちめんちようは、風を受けた船のほのようからだをふくらませて向かってきた。  
 二9122 舟をやとてこぎのぼりながら、ところどころでその水でお茶をたてる。  
 二9125 茶人たちは、ここで船をすてて、  
 二11512 思うぞんぶん、長いオールをこいだら、  
 二1197 船は、ものすごいスピードで走るだろう。  
 二1197 おきを大きな船が通っていくよ。  
 二1197 あれはどこへいく船だろう。  
 二1198 大きな船だね。  
 二1199 あんな大きな船の船長と、コックスと、どっちがむずかしいだろうね。  
 二11101 船ばかりではなく、〈略〉、日本の國全体だって、同じことだと思ふ。  
 二11475 ぼくは、船のかんばんに、おかあさんとふたりで立っていた。  
 二11712 去年、みおくっていつて、最後に船の上でわかれを告げたことや、  
 二12113 汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、日に日に進歩しています。  
 二14455 マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、黒い波の間をおよいでいました。  
 二14474 おそろくは、自分と同じように、船からなげだされたものでしょう。

二14486 船がしずむひょうしに流れ出たものらしい一本の大きなまるとに、  
 ぶふうぶふう (感) 1 ププウ、ププウ  
 三863 ププウ、ププウ。  
 ふぶき (吹雪) (名) 3 ふぶき  
 二6265 ふぶきはいやだから。  
 二14868 たとえば、ふぶきなどもその一つである。  
 二14874 ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情をあつかっても、おもしろいと思う。  
 ぶぶぶ (感) 1 プププ  
 二91317 プププ——「そら、ひっかった。」くもはみつばちにとびかかりました。  
 ふふん (感) 1 ふふん  
 二13599 ふふん、そう思うかい。  
 ぶぶん (部分) (名) 4 部分 1 いちぶぶん・だいぶぶん  
 二324 いつも、全体の中の部分、部分があつての全体、というつながりをわすれないで、  
 二324 部分があつての全体、  
 二147012 ふたでもしておけば、ひやされるのは、  
 二14712 茶わんにふれた部分だけになります。  
 二4712 そういう部分からは、ひえた水が下へおり、  
 ふへい 「不平」(名) 1 不平  
 二12484 それに、人間みたいに不平やわがままをいわないからね。  
 ふべん 「不便」(形状) 3 ふべん 不便  
 二8186 土の中は、〈略〉。それでたいそうほねがおりて、このうえなくふべんですが、  
 二124710 便利とか不便だけで物事を考えないところに、人間の美しさやおもしろさが生まれてくるのだ。

十三332 水に不便なベキンでは、一けん一けん、水を運んで行かなければならない。

ふぼ 「父母」(名) 2 父母

十二242 ふたりのまごというのは、父母にとってのことですが、

十五6010 ことに、長男に生まれて父母の愛を一身に集めていた身にとっては、

ふま・える 「踏」(下) 1 ふまえる 《一エ》

十二1078 大きな目、のびた手さき、しつかりふまえた両足、どこをみても、力があふれています。

ふみ 1 あしふみ・かげふみ

ふみいし 「踏石」(名) 2 ふみ石

十729 重い、大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

十五621 げんかんへ出かけて、ふみ石の上にそろえてある大小二つのくつをちらと見た私は、

ふみお 「文雄」(人名) 17 ふみお 文雄 文雄

六513 ふみおと、よしおと、みちこの三人が、かげふみをして遊んでいました。

六532 ふみおは、両方のいうことをきいていました。

六541 ふみおは、こういって、空をみあげました。

六543 ふみおはふしぎでたまりませんでした。

六544 ふみおはふと氣がついて、まえの方にある木の下へいきました。

六556 ふみおがねるまえにそとをみると、

六557 ふみおはさっきのことを思いだして、また、にわの木の下へいってみました。

十二133 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、がかを立てて写生をはじめた。

十二141 文雄は、それがかきかかった。

十二146 文雄は、あれこれと考えていたが、根も

とをかこうと決心した。

十二149 文雄はそれが氣になってしかたがなかった。

十二1412 文雄が、そのくちた草をとりのけようとすると、

十二153 そうして、文雄が手をのぼすと、すばやくあなの中へかくれてしまった。

十二159 文雄は、それをとりのけるのをやめて、また下がきにかかった。

十二1612 文雄は立ちあがってすこしはなれたところからじっとみつめた。

十二174 文雄は、三きやくにこしかけて、またふでをとってかきはじめた。

十二227 文雄はこう考えた。

ふみおさん 「文雄」(人名) 3 ふみおさん 文雄さん

二99 ふみおさんは、「略」といいました。

十二208 ほう、そこで絵をかくている文雄さんがいつてましたよ。

十二213 文雄さんがりっぱな絵かきになるころは、わたしも、ずっと大きな木になって、

ふみきりばん 「踏切番」(名) 1 ふみきりばん

十239 新しい家のたった町、ふみきりばんのおじいさん。

ふみこ・む 「踏込」(五) 1 ふみこむ 《一ン》

八111 学校から帰ってきたすえの女の子が、茶のまのドアをあけて、ひよいとふみこんだとたん、

ふみすべらせる 「踏滑」(下) 1 ふみすべらせる 《一セ》

十二855 試合のまっさいちゅう、《略》、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。

ふみだす 「踏出」(五) 1 ふみだす 《一シ》

十564 ここで、いままでの作文のからをぬぎさつて、新しい世界にふみだしていこうと思います。

ふみつ・ける 「踏付」(下) 1 ふみつける 《一ケル》

七889 まえにたべのこした古い草は、ふみつけるだけで、ちっともたべません。

ふみとどまる 「踏止」(五) 1 ふみとどまる 《一ツ》

八3010 うしは、うまくふみとどまって、おとなしく草をたべはじめました。

ふみわ・ける 「踏分」(下) 1 ふみわける 《一ケ》

十一173 わたしのためには、いばらの道をもふみわけたその足。

ふむ 「踏」(四五) 6 ふむ 《一マ・ム・一ン》

七346 足をふまれて、おこっている女の人もありました。

八113 うちがわでむじやきに遊んでいたピオを、かた足でふんでしまったのです。

八674 人にふまれないように、それからねこに氣をつけてね。

九265 麦ふむやみだれし麦の夕日かげ

十二913 カサカサと落ち葉をふんでいったこと、

十四892 子どもたちは、この黒い土の上に集まって、足でトントンとふんでみたり、

ふめい 「不明」(形状) 1 不明

十五563 そのときは、まだ三角測量が行われていなかったたので、富士山の高さも不明であった。

ふもと 「麓」(名) 7 ふもと

三584 五人の子どものおうちは、丘の上にあるのでも、ふもとにあるのでもありません。

四482 その山のふもとには、大きな木がし

げっているの、そこをよけてとびました。  
五395 五 ふもとになるにしたがつて、木のみどりがこくなってみえます。

六142 八 谷川にそって、山のふもとにでてきました。  
九325 五 ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、

九109 2 ふもとへきて、急停止すると、ぱつと雪けむりが立ち、

十一412 四 さとはしづれがしとしと降るに、ふもと  
との小屋はみぞれして、うらの山には白雪つもる。

ふやす 「増」(五) 1 ふやす 《ーシ》

十一29 9 植えるところをふやしていったりするうちに、

ふゆ 〔題名〕 2 冬

四125 6 冬

十一39 5 冬

ふゆ 〔冬〕(名) 16 冬

四77 1 な——なつと冬。

四87 1 冬がきたので、よろこんでないた。

五39 2 五 冬がすぎて、春がきたからです。

八14 7 ていねいに生みつけておいてくれましたので、寒い冬もぶじにこすことができました。

八85 6 そのうちに寒い冬がきた。

八87 9 あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どんなに苦しんだか、

十一39 3 四 はじの葉も、赤く黄色く色づいて、冬のしたくをとりいそぐ 村人の目をなぐさめる。

十一39 8 四 冬の用意もしだいに進み、あとはのみすりするばかり。

十二71 7 そのうちに、冬がきて、くもった空がひくくたれる日が続きました。

十三15 5 これで、夜と晝とがあるわけ、春・

夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。

十三27 11 冬は冬で、風あたりの少いホートンの廣場に、子どもたちがたむろして、

十三27 11 冬は冬で、

十三33 6 この首が〈略〉、冬の日には、いかにもさむざむとした氣持をおこさせる。

十四74 5 湖や海の水が、冬になって、表面からひえていくときには、

十五7 1 四 四 冬の水一枝の影もあざむかず  
十五104 1 四 《冬の日》の幸福は、こえた手のために、きれいなむらさき色のマントを開きます。

ふゆき 〔冬木〕(名) 1 冬木

九28 6 四 四 大空にのびかたむける冬木かな

ふゆこし 〔冬越〕(名) 1 冬こし

九18 3 ヨーロッパの北の方ではんしょくしたもの  
が、秋には、南ヨーロッパを通過して、遠くアフリカまでもいつて、冬こしをします。

ふゆじゅう 〔冬中〕(名) 1 冬じゅう

八89 7 四 冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがましだ。

ふゆのくに 〔冬国〕(名) 1 冬の國

二64 7 四 《冬の國》もすぎていく。

ブラウス (名) 1 ブラウス

七5 1 四 ああ白いブラウスの女の子かな。

ぶらさがる 〔下〕(五) 2 ぶらさがる 《ーッ》

二24 3 四 大きなあおがえるが、とうもろこしのはっぱに、じつとぶらさがっていました。

十一53 1 四 「そんなにぶらさがっちゃ、電車は動かせんよ。」とさげんだ。

ぶらさげる 〔下〕(下) 1 ぶらさげる 《ーゲ》

十三29 11 前の荷の上に、小さなどらをぶらさげ、

その両がわに、ふんどうをつるしておく。

ブラシ (名) 1 ブラシ

十五63 8 おじさんは、〈略〉、かた手に小さくつを持ち、かた手に大きなブラシをつかんで、

ふらす 〔降〕(五) 1 ふらす 《ース》

六50 7 四 くらければこそ光る星、ねむりをふらす夜の空。

ブラタナス (名) 4 ブラタナス

十9 11 ちやうど、ブラタナスという木の葉が黄色くなるころで、

十10 8 ブラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。

十10 10 みあげるように高いブラタナスの枝からは、黄色い葉が、毎日のように落ちました。

十11 12 ブラタナスの葉の大きいのは、やつでほどもありました。

ぶらり (副) 2 ぶらり

五100 2 よくみると、ねこにひっかかれた羽がぶらりとなつて、半分しかひろげられません。

八22 8 羽がぶらりとさがりました。

フランクマッケンナ (人名) 1 フランク・マッケンナ

十四45 4 フランク・マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、

フランクリン (人名) 1 フランクリン

十五77 6 神は、みずから助くる者を助く。——フランクリン

ぶらんこする 〔鞦韆〕(サ変) 1 ぶらんこする 《ーシ》

四84 1 四 サンタクローズさんがぶらんこしているよ。

フランス (地名) 12 フランス ouchou フランス

十73 おとうさんが、フランスのいなかへいったときは、子どもが大ぜい、めずらしそうについてきて困りました。

十106 そのあたりは、フランスの國道にそった景色のよいところですから、

十143 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。

十1410 日本とフランスとは、どちらがきれいですか。

十151 フランスだって、きれいなところもあり、きたないところもあり、

十161 フランスのいなかの子どもから、自分の國のことをきかれたときは、

十168 〔会〕 そりゃあ、フランスではフランスのことば、イギリスではイギリスのことばを話すよ。

十168 〔会〕 フランスではフランスのことば、

十172 〔会〕 太郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。

十16310 少年の父親というのは、去年、しごとをさがしてフランスへいったのですが、

十443 けれども、フランスのルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもって、私たちの心をうつのです。

十5408 ローマ字は、アメリカ・イギリス・フランス・〔略〕など、世界の大半につかわれている文字である。

フランスご (名) 2 フランス語

十173 〔会〕 太郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。

十42310 〔会〕 クレヨン、ズボンにフランス語、

ふり 〔振〕 (名) 2 ふり

四702 こころは、ふりがやむと、なりもとまる。

九941 両方ともあいてに氣がつくが、わざと知らないふりをしている。

ふり 〔降〕 ↓あめふり

ふり ↓えだふり・くちふり・すべりふり・ちゃめふり・てふり・ひさしふり・みふり

ふりあ・げる 〔振上〕 (下) 2 ふりあげる 《ゲ・ゲル》

九1003 あいこになるように、もう一つなぐってやる。』と、げんこをかためて右手をふりあげる。

十1324 〔会〕 しとしとと降る春雨に、やぶのたけのこすくすのびて、しすくすおうとでむしが、つのをふりあげのぼりだす。

ふりおと・す 〔振落〕 (五) 2 ふり落す 《サ・サ》

十5264 少年はいつ鳥のせからふり落されないうのでもない。

十5282 鳥は〔略〕、その重荷をふり落すように、

〔略〕 おりて行きました。

ふりおろ・す 〔振下〕 (五) 1 ふりおろす 《サ・サ》

九406 〔会〕 なたをふりおろすたびに、すぎの木は大きくゆれました。

ふりかえ・る 〔振返〕 (五) 8 ふりかえる ふり返る 《ツ・ラ》

二484 うしろを ふりかえって 手まねきをします。

二502 うしろを ふりかえって、手まねきをします。

七759 「もし、もし。」甲乙が、いっしょにふり返って、甲乙「はいはい。」

八565 すこし歩いてからふり返ってみると、足あとが曲がっている。

八583 いままでのぼってきた方をふり返ってみると、〔略〕お寺の屋根や停車場が目についた。

九5910 おかしいと思ってふり返ってみますと、そこに、やまねこが、〔略〕立っていました。

十1848 少年はふり返って、病人の方をみました。

十452 私たち自身の生活を思わずふり返らせないではない強い眞実の力が、

ふりかか・る 〔降掛〕 (五) 1 降りかかる 《ル》

九1004 急停止すると、ぱっと雪けむりが立ち、あせばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。

ふりかけなさ・る 〔振掛〕 (五) 1 ふりかけなさる 《イ》

八437 〔会〕 では、庭のいけの水をすくって、こがねになったものにふりかけなさい。

ふりかける ↓おふりかける

ふりかざす 〔振翳〕 (五) 1 ふりかざす 《シ》

十52910 少年は、右手に短刀をふりかざし、〔略〕このただけだけしい相手を待ちかまえていました。

ブリキ (名) 2 ブリキ

十3295 でんでんだいこのような、ブリキのつづみを鳴らしてやって来る。

十5123 〔会〕 ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブリキの屋根に月うつる見ゆ

ふりしき・る 〔降頻〕 (五) 1 降りしきる 《ツ》

九128 たいこを、ひくく、こまかくつづけてうち鳴らすのであるが、いかにも雪がしんしんと降りしきっているような氣がした。

ブリズム (名) 2 ブリズム

十205 〔会〕 さあ、その白いかべに、ブリズムでわた光を写してみますよ。

十一564 〔会〕 ことばは光る、ブリズムのかげよ。

ふりそそ・ぐ 〔降注〕 (五) 4 ふりそそぐ 降りそそぐ 《イ・グ》

七33 庭には、日光が降りそそいでいる。  
 十一34 麦のとりのいれことなくすめば、はい色  
 雲が空うちおおい、青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。  
 十二31 午後の日光は、《略》、みあげる私の顔に  
 降りそそいでいました。  
 十二83 まっ白い線のひかれたコートには、日ざ  
 しがさんさんと降りそそいでいました。  
 ふりだす 「降」(五) 3 降りだす 《—シ—ス》  
 四92 雪が降りだすと、ぼくはまどからかお  
 をだして《略》降ってくる雪をながめる。  
 十二65 すると、にわか雨が降りだしたので、近  
 くの家をたずねて雨具をかりることにしました。  
 十四83 雪が降りだしてから、だんだんつもるよ  
 うす、  
 ふりたてる 「振立」(下) 2 ふりたてる 《—  
 テ》  
 六136 角をふりたてふりたて走りしました。  
 六136 角をふりたてふりたて走りしました。  
 ふりつつ 《降続》(五) 1 降りつつ 《—キ》  
 九193 九月の中ごろ、きゆうに十二月の氣候と同  
 じ寒さになり、雨が降りつつきました。  
 ふりつつける 「降続」(下) 1 ふりつつける  
 《—ケ》  
 三809 雨は、みんなのいうことには おかまい  
 なしに、どんどんふりつつけます。  
 ふりはなす 「振放」(五) 1 ふりはなす 《—ソ》  
 九88 つかまれている手をふりはなそうとする。  
 ふりまく 「振撒」(五) 1 ふりまく 《—カ》  
 七412 私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、  
 せなかから、腹までふりまかれて、  
 ふりまわす 「振回」(五) 1 ふりまわす 《—シ》  
 十五752 老博士は、フィッシュナイフをにぎった

右手を大きくふりまわし、  
 ふりむく 「振回」(五) 5 ふり向く 《—イ—カ—  
 キ—ク》  
 十519 やはり、いぬは、ふり向かないので、  
 十529 そのとき、私をふり向いて、「ゴメンクダ  
 サイッテ ハイッテクノヨ」と、おとなびたこと  
 をいいました。  
 十5212 門からもどってきて、道にでたとき、あと  
 をふり向きしました。  
 十539 まだ、いぬが氣にかかるのか、ふり向くと、  
 十五102 いつでもすこし悲しそうにしているの  
 は、だれもふり向いてくれないからです。  
 ふりやむ 「降止」(五) 1 降りやむ 《—マ》  
 十一422 よべの大雪まだ降りやまぬ。  
 プリンクリー 「人名」 5 プリンクリー  
 十五458 プリンクリーが、日本政府から頼まれて、  
 鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって来たのも、  
 そのころのことであった。  
 十五451 ある日、プリンクリーは、どうやら覚え  
 た日本語で、町をひとり散歩していた。  
 十五473 プリンクリーは、まんぞくそうに赤絵の  
 はちをながめながら、その話のさきをうながした。  
 十五5011 プリンクリーは、日本の美しい焼物にひ  
 きつけられていろいろな焼物を集めた。  
 十五516 大英百科辞典の東洋美術についての説明  
 は、プリンクリーのふでになったものである。  
 プリンクリーさん 「人名」 1 プリンクリーさん  
 十五518 すると、あなたは、そのプリンクリー  
 さんのおまごさんでしたか。  
 プリンクリーじいさん 「人名」 1 プリンクリーじ  
 いさん  
 十五4412 私はハギンスというのですが、じつ

は、私のプリンクリーじいさんがね——  
 ふる 「降」(四五) 53 ふる 降る 《—ッ—ラ—  
 リ—ル—レ—ロ》  
 二52 ふる あめですか。たべる あめですか。  
 二137 大あめがふりました。  
 二376 学校からかえるとき、くにざかいの  
 山に、ゆきがふっているのをみつけました。  
 四258 でも、雨がふると、どこかで 休んで  
 いると思います。  
 四316 きう、学校からかえるとき、雨が  
 ふっていました。  
 四328 雨がびしゃびしゃふるので、わたくし  
 は、かさをさしかけてあげました。  
 四555 その夜は、さいわい、雨もふらず、風も  
 ふかない、しずかな、星の光る夜でした。  
 四709 こころは、ふればなる。  
 四875 雪が降るのだらうか。  
 四884 ちらちらと雪が降る。  
 四921 降った雪はまっ白だ。  
 四921 しかし、降ってくる雪は、まっ黒だ。  
 四931 雪が降りだすと、ぼくはまどからかお  
 をだして《略》降ってくる雪をながめる。  
 四933 降る、降る。  
 四933 降る、降る。  
 四933 さかに降る。  
 四935 右にも左にも、むこうにもこっちにも、  
 どこにも 降る。  
 四936 風にふかれて、うずをまいて、どんどん  
 降ってくる。  
 四938 降ってくる雪はみんな黒い。  
 四954 降っている雪を上からみると、白くて、  
 黒くはない。

五43 山に雨が降る、きりがおきる、夜は夜つゆ  
 がおきる。  
 六26 雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近いこ  
 ろ。  
 六26 雪が降ってきた。  
 六30 雪がたくさん降ってきました。  
 六58 雪の降った朝、一年生の子が、学校にくる  
 道で、はき物に雪がついてころびました。  
 七62 雨が降る。  
 九11 ときには、雨の降るところであった。  
 九12 もっとおもしろいと思ったのは、雪の降っ  
 てくるところをあらわしたひびきである。  
 九12 ただ一つのたいこが、そのうちかたによっ  
 て、水の音にもなり、風の音にもなり、雪の降る  
 ようすにもなるのは、ふしぎである。  
 九21 その日はたいへん寒いらしい日、朝か  
 ら晩まで、こやみなく雨が降っていました。  
 九38 晝でもうすぐらく、日があたらないので、  
 雨の降ったあとのようにぬれていきます。  
 九104 まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、  
 スキーをするには、ちょうどよかった。  
 九128 ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、  
 あみもはることはできませんでした。  
 十一32 しとしとと降る春雨に、やぶのたけの  
 こすくすくのびて、  
 十一38 かきねににおうきんもくせい、しとし  
 とと降る秋雨に、ちれば山にはまつたけが、  
 十一41 はい色雲がたちこめて、さとはしぐれ  
 がしとしと降るに、  
 十一63 雨の降っている三月のある朝、  
 十二71 芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪  
 が早く降るといいなと待ち遠しがっていました。

十二71 まだなにも降ってきもしないのに、  
 「略。」などと、はやしたてていました。  
 十二72 みんなは、雪が降ったら、なにをして  
 遊ぶの。  
 十二74 芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれ  
 がたから降ってきました。  
 十二75 こんなに降るのによくきたな。  
 十三36 中庭のあんずがさいて、花びらがホート  
 ンへちらちらと降ってくるのも、このころである。  
 十四42 心に太陽をもて、あらしがふこうが、  
 雪がふろうが。  
 十四58 空から降る雨、あれだつて水ですよ。  
 十四67 前日雨でも降って、土のしめつていろと  
 ころへ日光があつて、ひょうが降ったり、かみなり  
 が鳴ったりします。  
 十四84 その美しい雪が数かぎりなく、天上から  
 地上へ降ってくることを写している。  
 十四84 空から降ってきた雪の一ひらを受けとつ  
 て、それをくわしく観察してみると、  
 十四85 その雪が、どこで、どのようにしてでき  
 たか、どんな天空を旅して降ってきたか、  
 十四85 ふんだんに降ってくる雪の中から、一ひ  
 らの雪をとらえて、  
 十四90 雪はひっきりなしに降ってくる。  
 十四102 小雪の降った元日の朝、  
 ふる「振」(五)14 ふる「ツーリ」  
 一45 へやのなかでは、しろい きものをきた  
 おんなの人たちが、ながい みみを ふりふり、  
 もちものをしらべています。  
 一45 ながい みみを ふりふり、  
 一46 おおきな むしめがねをもった おじいさ

んが、やつぱり、ながい みみを ふりふり、わた  
 くしたちをよびました。  
 一46 やつぱり、ながい みみを ふりふり、  
 四18 みんな、手をふつて みおくります。  
 六18 まん中に、しきしきがタクトをいっしんに  
 ふつています。  
 六115 たこが青空で右や左にゆれると、自分も  
 いっしよに首をふりながら、  
 七75 なんども手をふりながら、先生にさよう  
 ならをして走って帰る子ども。  
 九63 きよしやは、こんどは、すずをガランガラ  
 ン、ガランガランとふりました。  
 九110 ぼくたちも、みんなつえをふつて、それに  
 答えた。  
 十一79 医者は、まったくだめだといわんばかり  
 に頭をふりました。  
 十二29 民ちゃんをだいてやろうとすると、かぶ  
 りをふつて、「略。」というのでした。  
 十二106 たまりかねた二ひきのうさぎが、うしろ  
 から手をふり足をふつて、おうえんをはじめまし  
 た。  
 十二106 うしろから手をふり足をふつて、  
 ふる「五」(形)8 ふるい 古い「一イ」  
 五65 ふたりは、ふるい小さな家に住んでいまし  
 た。  
 五77 みると、まえに住んでいた、ふるい小さな  
 家がたっていました。  
 六99 いつか、おじいさんにいただいた古いめが  
 ねのたまと、  
 七88 まえにたべのこした古い草は、ふみつける  
 だけで、ちつともたべません。  
 十二98 このように、古い時代のがはつきり

わかるいとぐちとなったのは、

十四276 図 それが、あまり古い時代にはいつてきて、長いあいだつかっているうちに、もともとからの日本語のように思われてきたのだ。

十五443 図 古い焼物そっくりですね。

十五514 日本の古い美術に対する愛着がふかく、日本美術工芸史十二巻という大作を著わした。

ふるいおこす「奮起」(五) 3 ふるいおこす「シ」

十六363 かれは、勇氣をふるいおこして、夜も晝もなく考えとおし、

十一679 少年は、勇氣をふるいおこして、その後からついていきながら、

十一753 少年は、勇氣をふるいおこしてたずねました。「ぼくの父はどうしたのでしょう。」

ふるいたつ「奮立」(五) 1 ふるいたつ「一ツ」

十二8110 私はスタンドから一心におうえんしている少年のことを思つては、ふるいたつて戦い、

ふるう「振」(五) 1 ふるう「一ツ」

十三614 自由にあでをふるって、りっぱな作品をたくさんのはえらいよ。

フルート (名) 1 フルート

九64 オルガンのほかに、パイオリンとか、フルートとか、ほかの楽器を、いっしょにあわせてひいてみたらどうでしょう。

ふるえこえ「震声」(名) 1 ふるえ声

十6811 「略。」と、ふるえ声でいいながら、いつでもにげだせるかつこうで、

ふるえこえ「震」(下) 4 ふるえこえ「一エ」

八242 明かるい光がさつとさすところになると、せみの羽は、ふるぶるとふるえて、色も、もようも、はつきりしてきます。

十一656 わるい知らせをききはしまいかと、おそろしさにふるえながら、その名をいいました。

十一793 父親のちよつとしたため息にも、ちよつとした目つきにも、ふるえながら氣をもんで、

十四461 それは女の声で、しかも、調子もみだれていなければ、ふるえてもいません。

ふるぎれ「古切」(名) 2 古ぎれ

十二495 古ぎれ。

十二529 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十センチぐらいにつきあわせて、図の形に切る。

ふるく「古」(名) 3 古く

十二461 図 あやつりは文樂よりもっと古くからあったし、

十二1113 まき絵は、日本のすぐれた工芸品の一つで、古くから外國人にもはやされてきました。

十四272 古くから日本といちばん関係のふかつた大陸からは、

ふるさと「古里」(名) 1 ふるさと

十四512 パリーに出て、市役所のガス係という職についたとき、ふるさとにのこした母へ送ったつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。

ふるしんぶん「古新聞」(名) 4 古新聞

十二494 古新聞二まい。

十二499 古新聞を二まいとも八つに切つて、そのうち一まいだけを正方形にする。

十二509 首のほうからもかぶせてまるくしてから細長く切つた古新聞にのりをつけてとめる。

十二512 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作つて、のりでとめる。

ふるす「古巢」(名) 1 古巢

九251 あの家のかき下につくつた古巢がなつかしいのでしょう。

ふるはがき「古葉書」(名) 2 古はがき

十二494 古はがき一まい。

十二497 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。

ふるばち「古鉢」(名) 1 ふるばち

十五104 図 荒れ庭にしきたる板のかたわらにふるばちならび赤き花さく

ふるぶる (副) 1 ふるぶる

八242 せみの羽は、ふるぶるとふるえて、色も、もようも、はつきりしてきます。

ふるぼける「古惚」(下) 1 古ぼける「一ケ」

十五732 手には、古ぼけたアマスト時代のもの、京都時代のもの、なつかしい数々の写真があった。

ふるまう「振舞」(五) 2 ふるまう「一ツ」

十五611 天下におそるべきなものもなく、わがままいっぱいにふるまっていた。

十五618 私は、札幌の創成川の岸にあった家につれられて行つても、思うぞんぶんふるまうた。

ふるわせる「震」(下) 3 ふるわせる「一セ」

七108 かしの木は、あくびを一つして、しめつぱくなつた葉をふるわせ、

七323 図 羽をふるわせている。「母」空氣にふれて、すこしずつのびるのね。」

八118 くちばしから血をだして、〈略〉、からだをふるわせてもう虫の息です。

ふるんふるん (感) 1 ブルン、ブルン

六1067 ちようど、空からブルン、ブルンというばくおんがきこえてきた。

ふれ ↓おふれ

ふれあるく「触歩」(五) 1 ふれあるく「一イ」

十三3112 朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ歩いて来る。



ブレー (感) 1 プレー

十二837 ㊦ 「プレー」試合がはじまりました。

ふれーふれー (感) 1 プレー、プレー

七517 「プレー、プレー。」と、大声をたてる。

フレデリックダルガス (人名) 1 フレデリック・

ダルガス

十三2210 長男、フレデリック・ダルガスは、父の

質を受けて、植物の研究がすきでしたが、

ふれる [触] (下二) 3 ふれる 《レー・レル》

ひおふれる

七324 ㊦ 空気にふれて、すこしずつのびるのね。

十二3712 私の手にふれるあらゆるものが、生命を

もって動いているように感じはじめました。

十四7012 ふたでもしておけば、ひやされるのは、

《略》 茶わんにふれた部分だけになります。

ふろ [風呂] (名) 1 ふろ ひおふろ

七663 ふろからみてる十三夜さん。

ふろば [風呂場] (名) 1 ふろ場

十二8710 ふろ場の中で湯をかきまわしている父に

こういわれたら、

フロレンス (地名) 2 フロレンス

十三567 ㊦ 本物はね、いま、イタリアのフロレン

スという町の絵画館にかざってあるよ。

十三5611 ㊦ レオナルド・ダ・ビンチだの、ミケラ

ンジェロだのという天才の集まっていた、美術の

中心のフロレンスで、研究しているうちに、

ふわふわ (副) 5 ふわふわ

四145 風が ふくと、にわとりが ふわふわ ふく

れる。

四282 ㊦ ふわふわとして、氣もちがいいだろう

な。

四951 ひろがったり、あつまったり、ふわふわと

ながれたりして、だんだん下におちてくる。

七951 うさぎのせなかをさかさになると、毛が

ふわふわとびます。

十三366 わたが、《略》。ふわふわとまるくなって、

風がふいてくると、ころころとこがりだす。

ふわふわ・する (サ変) 3 ふわふわする 《ーシ》

七294 ㊦ 自轉車のチューブのようにふわふわした、

黒っぽい、かわいいあおむしは、

七958 その中に、わたのようなふわふわした毛が、

いっぱいはいっていました。

十二162 重みのかかった枝のつけね、ふわふわし

た軽い葉、

ふわりと (副) 1 ふわりと

十四1018 おばあさんは、女の子をうでにかかえて、

ふたりは、いっしょにふわりとまいあがった。

ふん [分] ひいっぶんかん・いっぶんはん・さん

じっぶん・しじっぶん・じゅうごろうぶん・じゅう

にさんぶん・にじっぶん・やくはちふんにじゅう

びよう

ふん [糞] (名) 2 ふん

七9010 うさぎのふんを、水の中へいれてみたらう

きました。

七911 うさぎのふんはまんまるです。

ぶん [分] ひいぶん・いくぶん・きようだいぶ

ん・さんげんぶん・なにぶん・にけんぶん・もうし

ぶん

ぶん [文] (名) 21 文

四192 ㊦ 文を書くことは、お話を するのと お

なじことです。

四194 ㊦ お話が あいて なしには できないよう

に、文も あいて なしには 書ける ものでは あ

四197 みんなはそれぞれあいての人をきめて

から、文を書きました。

四202 まさおさんは、あいての人を「おかあさ

ん」にきめて、つぎのような文を書きました。

四227 「にきさん」にあてて文を書きました。

四303 「くみの人みんな」にきいてもらいた

いといって、文を書きました。

四315 「みんな」に知らせたいといって、つぎ

のような文を書きました。

四342 ㊦ かずこさんの書いた文で、なにか氣

のついたことはありませんか。

四345 みんなは、もう一ど、かずこさんの文を

よみなおしました。

五793 つぎのような文が、はりだされました。

六628 みじかい文

七591 こんなのは、みじかくなった文ですが、

十235 「ごくこ」の文を大きな声で歌う。

十二909 太郎が、こういう短い文を書いた。

十二918 楽しかったさままなことが、こまかに、

この文の中にたたみこまれているにちがいない。

十二912 太郎と同じ文であるが、その中にたたみ

こまれていることは、太郎とはちがっている。

十二926 ほかの人がこれと同じ文を書いたとして

も、

十二938 文を書くときには、よく手をいれること

もできるし、なんども書きなおすことができる。

十二939 文をなおすことはつまり心を練ることに

なる。

十二959 こんな短い文であるが、読み手によって、

《略》ちがったことを心の中に思いうかべる。

十四8910 読む人の心がひかれるのは、ものごとを

あたたかくながめた人によって書かれた文である。

ぶんか「文化」(名) 2 文化

十五39 かなは、日本の文化にとって、ほんとうに大きな発明で、

十五55 〇 私がお日本をおとすれたころは、西洋の文化をとり入れることがさかんなときで、

ぶんがくしや「文学者」(名) 1 文学者

十四42 世界の名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、けつして少なくはありません。

ぶんがくしゅぎょう「文学修業」(名) 1 文学修業

十四51 文学修業のためにバリーに出て、市役所のガス係という職についたとき、

ぶんかこっか「文化国家」(名) 1 文化国家

十二114 平和な國日本を作るために、また、文化國家をきずくために。

ぶんけ「分家」(名) 1 分家

十二45 〇 ほら、分家のおじいさんの大すきなじょうるりさ。

ぶんしょう「文章」(名) 16 文章

七47 〇 思っていることを、はっきり書きあらわそうとすると、文章が、だんだんくわしくなつていきます。

七47 〇 文章は、心の鏡のようなものです。

七47 〇 心がはっきりとしていますと、文章も、だんだんはつきります。

七47 〇 心がくもつていると、いくらなおしても、文章のくもりはとれません。

七48 〇 「ドッジボール大会」という文章が、二へんあります。

七55 〇 文章は、くわしくしえすれば、はっきり写しだすことができますとはかぎりません。

七55 〇 そのほんたいに、ふでをいれるほど、か

えて、文章がみじかくなつていくことがあります。

七68 〇 まえのやりかたは、ちようど、文章をくわしく書きたすのににています。

七68 〇 あとのやりかたは、文章をきりつめていくのと同じです。

九57 〇 〇 あの記事は、ずいぶんへただったろう。

九57 〇 〇 文章はなかなかうまいようでしたよ。

十二39 〇 それなのに、こんなりっぱな文章が書けるといふことは、なんとすばらしいことではありませんか。

十二55 〇 また、文章に書きつづられて有名になつたものもあるが、

十四89 〇 〇 同じ題の作文でも、〈略〉人によつて、文章は、どのように書きあらわされる。

十四89 〇 〇 どのような文章でも、読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたくながめた人によつて書かれた文である。

十五40 〇 かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文章のふつうの書き表わしかたとなつていふ。

ぶんだい「文題」(名) 1 文題

十二92 〇 〇 みんなが「遠足」という同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれがてくるものも

ぶんだん (形状) 1 ぶんだん

十四85 〇 〇 ぶんだんに降ってくる雪の中から、一ひらの雪をとらえて、

ぶんと (副) 1 ぶんと

三41 〇 〇 かぜがふくと、くわのはのにおいがふんとします。

ふんどう「分銅」(名) 2 ふんどう

十三29 〇 〇 前の荷の上に、小さなどらをぶらさげ、その両がわに、ふんどうをつるしておく。

十三30 〇 〇 歩いて行くと荷がゆれて、しぜんにふんどうがどらにあたる。

ふんとう・する「奮闘」(サ変) 1 ふんとうする

《一シ》

七52 〇 〇 のこつたものがふんとうした。

ふんばる「踏張」(五) 1 ふんばる《一ツ》

九130 〇 〇 「略」と、くもは、足をふんばつて身がまえをしました。

ぶんぶん (副) 1 ブンブン

九129 〇 〇 あぶが、足をひっかけて、ブンブンいつていふところす。

ぶんぶん (副) 1 ぶんぶん

六136 〇 〇 ぶんぶんおこりながら、びっこをひきひき、てっぺんにたどりつきました。

ぶんぶんぶーん (感) 2 ブンブンブン

九130 〇 〇 ブンブンブン、ブンブンブンと、遠いところまで羽音がしました。

九131 〇 〇 ブンブンブン、羽音がだんだん近づいてきます。

ぶんぶんぶん (感) 1 ブンブンブン

九130 〇 〇 ブンブンブン、ブンブンブンと、遠いところまで羽音がしました。

ぶんめい「文明」(名) 1 文明

九23 〇 〇 また、飛行機という文明の利器が、このしごとにつかわれたといふことを、

ぶんらく「文楽」(名) 4 文楽

十二44 〇 〇 日本には、文楽といつて、りっぱな人形しばいがある。

十二45 〇 〇 文楽のほかにまだあるんですか。

十二45 〇 〇 いまいった文楽は手づかうのだが、そのほか、指でつかうもの、ほうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろな種類がある。

十二 46 1 会 あやつりは文樂よりもっと古くから

あったし、

ふんわりする (サ変) 1 ふんわりする 《―シ》

三 67 10 青々とした中に、ふんわりした、小さな、

白い雲がとんでいました。

へ

へ「辺」(名) 1 へうみべ・きしべ・はまべ

九 30 5 文 歩みくる胸のへにちようとびわかれ

へ(格助) 5 へへせんせいとみなさんへ

三 31 3 。この足で、どこへいったでしょう。

三 31 5 。この足で、どこへいくでしょう。

三 39 6 お月さんのところへいったゆめをみ

三 43 7 会 お月さんのくへいくんだよ。いそ

三 44 8 会 お月さんのくへおいでのかたは、

三 44 8 会 かたは、こちらへおならびください。

三 46 6 会 、あちらのへやへいらつしやい。」お

三 55 4 会 お月さんのくへいられてもらえます

三 59 1 しろちゃんのうちへいきました。しろ

三 39 2 おとうさんが、山へのぼってきます。

三 48 2 ら、となりのへやへいこうとして、き

三 48 6 二のぼめんそこへ、じろうがでてき

三 49 2 は、となりのへやへいきます。三の

三 50 9 も、となりのへやへいってしまいます

三 57 7 いきました。そこへ、ひとりのおい

三 11 8 はんたかのところへやって、いろいろ

三 30 4 会 かきたいところへいって、そこでか

三 43 2 からむこうのりくへいってみたいと

三 45 1 もうひと足でりくへあがろうという

三 47 5 なりました。そこへ、おおくにぬしのみ

三 58 5 おりればみずうみへでられますし、の

三 58 6 木のあるところへでられます。ある

三 59 4 会 「いや、みずうみへおよろうよ。」と、

三 60 2 あわないと、どこへもいけません。そ

三 60 3 いけません。そこへちようどおとうさ

三 60 4 会 になつて、「どこへいこうかね。」と

三 60 10 会 あわないと、どこへもいけないじゃな

三 61 7 会 おりてみずうみへいこうよ。」とい

三 63 4 をおりてみずうみへでました。みずう

三 63 9 た。みずうみを右へいけばもりへで

三 63 10 右へいけばもりへでます。左へいけ

三 63 10 もりへでます。左へいけばたきへで

三 63 10 左へいけばたきへでます。「へ略」。

三 64 1 会 ですよ。「どちらへいこうか。」おとう

三 64 9 会 か左かどちらかへやらなければ。」へ

三 65 6 会 もうみんなはどこへもいけません。「へ

三 65 7 会 。」だって、もりへでたいんだもの。」

三 65 9 会 いました。「たきへでたいんだもの。」

三 66 5 会 ターが、「どっちへいったらいいか、

三 67 8 会 て、風がどちらへふいているか、み

三 68 2 雲は、もりの方へしずかにしずかに

三 69 5 会 。「はじめにもりへいって、それから

三 69 5 会 、それからたきへでようね。」それか

三 74 6 つすぐにまどぎわへでました。「略」。

三 74 10 、いま、丘のかげへしずむところまし

三 75 6 日さまは丘のかげへしずんでいきまし

三 75 9 会 さまの光、どこへいったの。」ピータ

三 76 6 会 日さまってどこへいくのかなあ。」と

三 76 8 会 てね、よその國へいくんですよ。」「へ

三 77 7 会 たたちのところへかえってくるので

三 79 8 会 こら、雨、あっちへいけ。」バーバラが

三 81 3 いきました。そこへお日さまの光が

三 91 2 。わたくしは、学校へいくときとかえ

三 98 7 かいた字を、どこへおくつてあげまし

三 100 4 まいにち、のや山へ竹をとりにいき

三 106 9 会 ましたが、「どこへいくのもいやで

三 113 5 は、すうっとそとへでてしまいました

三 115 3 といつて、みかどへおわかれの手紙と

三 115 9 つて、しずかに天へのぼっていきまし

四 6 2 す。どんなところへでもとどけてくれ

四 12 5 、とおいとおい町へいくことができ

四 17 5 をもつて、おふろへいくのがみえるの

四 21 9 手 らつて、わの中へもぐりこもうとし

四 22 2 手 わててわのそとへにげました。する

四 23 6 手 そのときは、山へくりひろいにいき

四 26 5 手 んごさんは、どこへいってもきれいな

四 29 2 おじさんのところへいって、あそんで

四 29 4 。おぼさんのうちへいって、いもほり

四 38 1 会 、だまってうちへかえってきました

四 41 3 にちまいにち、北へむかつてたびを

四 49 9 つちゃんのところへあつまりました。

四 53 3 みずうみのところへいこうと話しい

四 77 7 ちら、手のなる方へ。くくくじやくの

四 78 2 せきしないで学校へ。ふふふけふけ

四 87 3 。おとうさんは、町へいって、まだかえ

四 90 3 はじめて、かいどうへぬけて、おとなり

四 90 6 はいていく。学校へかよう子どもたち

四 97 4 ころがします。そこへうらしまたろうが

四 99 10 会 「さあ、あっちへいってあそぼう。

四 100 10 会 うぶ。早くうちへおかえり。ちよう

四 101 8 ぎをして、海の方へいってしまいます

四 102 5 してきます。そこへかめがでてきま

四 104 10 会 礼にりゅうぐうへおつれしようと思

四〇八 六 いてあります。そこへ、かめがうらしま  
四〇八 九 会 、どうぞこちらへ。」うらしまは、あ  
四一三 四 して、きゆうに家へかえりたくなりま  
四一七 一 会 が、みほのまつ原へでてきます。りよ  
四二八 一 会 「りようしは、そばへよって、よくみま  
四三三 三 会 れがないと、天へかえることがで  
四三二 二 会 す。では、こちらへいただきましょう。  
四三三 三 会 がら、だんだん天へのぼっていきます  
五八四 四 会 よ。さあ、改札口へいこう。」パチン、  
五五八 八 会 私は、三十銭でどこへでも旅をすることが  
五五八 三 会 になりました。そこへ、配たつをする人が  
五五八 六 会 。「きみは、どこへいくの。」「略。」「  
五五八 三 会 ぼくは遠いところへいくんだけど、あて  
五五八 三 会 べていって、北の方へいく友だちと、南の  
五五八 三 会 く友だちと、南の方へいく友だちと、西の  
五五八 四 会 く友だちと、西の方へいく友だちと、東の  
五五八 四 会 く友だちと、東の方へいく友だちと、それ  
五五八 三 会 れて、どんどん、南へはこぼれました。二  
五五八 二 会 がら、あちらこちらへまわりました。しげ  
五五八 一 会 いながら、出口の方へでていきました。し  
五五八 八 会 、『おじさん、駅へおいでになるのし  
五五八 五 会 が、ぼくは、かたへおのせて持っていくま  
五五八 九 会 ツコにつんで、そこへはこびだします。ほ  
五五八 一 会 だ、ほっかいどうへいったことはありま  
五五八 四 会 んは、あさひがわへおよめにいっていま  
五五八 六 会 略。」「略。」「そこへ、となりのごろうさ  
五五八 六 会 ませんでした。そこへ、受持のやまもと先  
五五八 一 会 といっしょに、学校へいきました。もう、  
五五八 三 会 さん、わたしを海へはなしてください。  
五五八 九 会 おじいさんは、うちへ帰って、おばあさん  
五五八 一〇 会 たよ。それが、海へ帰してくれ、お礼は  
五五八 一 会 そうして、青い海へはなしてやったよ。

五五八 八 日、おじいさんは海へやってきました。海  
五五八 一〇 会 のさかなのところへいって、家をもらっ  
五五八 一 会 〇。おじいさんは海へやってきました。海  
五五八 二 会 のさかなのところへいって、たのんでお  
五五八 六 会 じいさんは、また海へやってきました。海  
五五八 二 会 おばあさんのところへ帰りますと、おばあ  
五五八 一〇 会 づぐいわずに海へいっておいで。」「お  
五五八 一 会 んは、とぼとぼと海へやってきました。海  
五五八 九 会 らいに、「あちらへつれていけ。」とい  
五五八 八 会 のない足どりで、海へやってきました。海  
五五八 一 会 音をさせて、海の中へおよいでいってしま  
五五八 二 会 おばあさんのところへ帰りました。みると  
五五八 五 会 きよせました。そこへ、村の子どもたちが  
五五八 八 会 よう。さあ、ここへおいで。」「子どもた  
五五八 二 会 あ、みんなこちらへおいで。」「と、おく  
五五八 四 会 んな、もつとまえへでござらん。それ、  
五五八 二 会 んが、友だちと、山へわらびをとりにいき  
五五八 八 会 あさん。あした山へつれていって、はな  
五五八 四 会 がつてやるよ。山へはなしてやりたかつ  
五五八 六 会 ゆうからは、どこかへいってしまいました  
五五八 八 会 いっしょにむこうへとんでいこうよ。空  
五五八 七 会 どを、つぎからつぎへときかせました。そ  
五五八 八 会 きかせました。そこへ、さんちゃんが学校  
五五八 九 会 すぐにまつの木の上へにげていきましたが  
五五八 三 会 て、明かるいところへだされた。ねじは、  
五五八 二 会 とのふたガラスの中へ入れた。そうして、  
五五八 七 会 。きみたち、どこへいくの。」「ハーモニ  
五五八 九 会 さ。」「あり三うちへ帰るところなんです  
五五八 四 会 いそうに。根の方へおりていらっしやい  
五五八 四 会 むれが、かかしの方へとんでくる。35 親  
五五八 二 会 で。」「親つばめ「南へひきあげるついでだ  
五五八 九 会 が向こうの山の方へとんでいったんだよ

六四六 七 会 、かけかけ、どこへいく。おちばの、  
六四六 三 会 んすずめとどこへいく。かきの秋  
六四六 四 会 して、つぎの雲の方へどんどん走ってい  
六四六 四 会 えの方にある木の下へいきました。そうし  
六四六 六 会 ましたが、「ここへきてござらん。ほら、  
六四六 八 会 。ふたりは木のそばへ走っていきました。  
六四六 五 会 かれて、それぞれ家へ帰りました。ふみお  
六四六 八 会 また、にわの木の下へいってみました。動  
六四六 四 会 れてきました。そこへきゆうりが流れてき  
六四六 七 会 、しゃぼんを水の上へおいたら、つるつと  
六四六 九 会 略。」「略。」「そこへ、中学校に通つてい  
六四六 一〇 会 ことをつぎからつぎへと考えました。たと  
六四六 一〇 会 した。」「略。」「学校へいくとき、雪だるま  
六四六 五 会 にいさんは毎日海へでて、魚をとつてい  
六四六 六 会 るが、私は毎日山へいって、鳥やけもの  
六四六 七 会 り、にいさんは山へいらっしやつて。」「  
六四六 八 会 いさ。わたしは山へいこう。」「ほおりの「ほ  
六四六 八 会 でないている。そこへひとりの年よりがで  
六四六 五 会 いな水だな。」「そこへ女の人が出てきて、  
六四六 九 会 いらっしやる。そこへ、さっきの女の人が  
六四六 六 会 そのかたをこちらへごあんないしなさい  
六四六 九 会 あ、どうぞこちらへ。」「ほおりのみこと  
六四六 一 会 まいました。そこへ年をとったかたがあ  
六四六 一 会 、私に海のごんへいくようにと教えて  
六四六 三 会 それで、いまここへやってきました。そこ  
六四六 七 会 もを、みんなここへよび集めるように。  
六四六 三 会 りますので、ここへはまいておりませ  
六四六 一 会 いをちよつとここへよんできてくれな  
六四六 一〇 会 、さっきのつの中へ、ちようど、するす  
六四六 一〇 会 おかあさんのところへいった。」「略。」「お  
六四六 九 会 いう氣持は、どこかへふつとんでしまった  
六四六 五 会 た子で、來年小学校へあがります。糸を持

六117 2 と思いました。うちへ帰って、そのたこを  
六119 4 つすぐではなく、上へ弓なりにまげるので  
六119 10 おかあさんのところへとんでいって、「略  
六120 10 舎」しちゃんのところへ持って行ってあげる  
六121 9 て遊びました。そこへ、おさるさんがやっ  
六123 6 わっている、そこへよろよろと、り  
六128 4 からくると、こちらへかくれ、こちらから  
六128 5 と、みんなはあちらへこっそりわたりまし  
六128 10 ころと、下の方へころがりこんでいき  
六130 1 舎 まうから、どこかへいってくれたまえ。  
六130 9 ま向こうのやぶの方へいってしまいましたが  
六139 11 舎 た。「いいところへきてくれた。おなか  
七5 10 れた。つきからつきへと、子どもたちがや  
七9 9 舎 が、わたしのそばへやってきた。毎年、  
七10 3 舎 岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。  
七10 5 舎 を乗せ、向こう岸へ運ぶ。先生のおしご  
七30 2 をみつけた。」そこへ、はるおが帰ってく  
七34 4 舎 「もうすこし、中へはいれませんか。」「  
七35 8 舎 。おばさんのうちへは、もう二どもいっ  
七36 1 舎 「もうすこし、中へいれてくださいませ  
七36 9 舎 「どうかして、中へいれてやれませんか  
七38 4 舎 うちに、さきの方へいらっしゃい。」う  
七39 3 おじさんの目のまえへ、つきだしました。  
七39 7 から、つきからつきへ、「略」。「略」。  
七49 1 は、セクターが外野へでてしまったので、  
七50 6 ぼくたちは、コートへでていった。たかや  
七61 3 す黒い雲は、どこかへいってしまつたのに  
七75 1 舎 てくる。甲「どこへいったのだらうね。  
七75 3 舎 った。さて、どこへいったものかしら。  
七75 7 もみえない。」そこへ、ひとりの旅人がや  
七78 11 舎 らくたを、どこかへつれていったのにそ  
七79 3 舎 あ、けいさつしょへ、いっしょにいって

七85 10 舎 さい。あまり遠くへいかないうちに。」  
七90 10 ぎのふんを、水の中へいれてみたうきま  
七92 4 色のうきまは、おくへはいつてでてこない  
七92 4 てこないの、小屋へ頭をいれて、だきあ  
七92 5 、だきあげて、そとへだしました。だすと  
七93 1 を持つて、かごの中へいたら、キューと  
七94 5 に、うさぎのところへいつてみたら、暑い  
八5 9 かみだしては指さきへととらせたり、暑  
八5 10 とまらせたり、かたへ乗せたり、のひら  
八6 6 だんなれて、指さきへもかたへもとまるよ  
八6 6 て、指さきへもかたへもとまるようになつ  
八6 9 ら指さきやくちびるへとびあがり、とびつ  
八9 2 ときたまそとのろじへだしてやつても、す  
八9 5 ととき、とつぜん、上へ飛行機でもとんでく  
八9 7 びっくりして茶のまへにげこみ、そこにす  
八19 2 をぬぎかえて地の上へでいきます。しか  
八24 9 ているなかまのそばへ、とんでいつてとま  
八24 10 とまりました。そこへなかまが集まつてき  
八26 9 さきまちている野原へおりてきました。そ  
八28 6 、そつとごてんの中へおはいりになりました  
八29 2 帝は、そのままとへで、また馬車を走  
八30 8 にかけたし、天の川へ落ちこもうとしまし  
八39 9 は、そのままとどこかへいつてしましました  
八40 5 した。王さまは、庭へおでになりました。  
八45 6 ませんでした。そこへ、王さまの病氣をな  
八48 8 つかつかと小屋の中へはいっていきました  
八49 8 「が、いろいろな家へたずねてきました  
八50 7 ら、その人のところへ幸福をわけておいて  
八51 11 とりのいる家のまえへいつて立ちました。  
八53 7 かつてある家のまえへいつて立ちました。  
八55 6 しく思つて、その家へ、幸福をわけておい  
八57 7 ている。ぼくはうちへ帰つて、おじいさん

八58 1 は遠足でみはらし台へいった。山のおねを  
八58 11 と、大きな川が遠くへ流れている。ぼくは  
八64 9 そういつて、どこかへいつてしまつた。そ  
八65 9 つれて、水のところへおりていつた。さつ  
八65 10 った。さつと水の中へとびこんだ。「略」  
八67 2 舎 きな世界の鳥小屋へつれていつてあげる  
八72 2 さいだが、またさきへとんでいつた。こう  
八72 3 なぬまのあるところへやつてきた。そこ  
八73 2 いた。すると、そこへ二わのがながやつて  
八74 7 ヤ、ピシャとぬま地へはいつてきた。あわ  
八75 3 、ピシャと、どこかへいつてしまつた。「  
八76 9 ひやくしょうの小屋へやつてきた。小屋は  
八77 7 たので、そこから中へはいつていつた。中  
八80 7 てばかりいた。そこへ、さわやかな空氣と  
八81 5 舎 。それに、水の中へもぐつてそこへいく  
八81 5 舎 中へもぐつてそこへいくと、それはさつ  
八83 2 舎 「私は、廣い世界へでたいと思つてい  
八84 4 舎 國、廣いみずうみへと、とんでいつた。  
八84 7 首をはくちようの方へさしのべ、自分でも  
八85 1 ああ鳥の名も、どこへとんでいつたのかと  
八86 3 おりをくだき、うちへつれて帰つた。する  
八86 6 まり、牛乳なべの中へとびこんだ。たちま  
八86 9 いてあるたの中へとびおり、こんどは  
八87 4 は、雪の中の草むらへはいりこんだ。そこ  
八89 3 舎 だかい鳥のところへとんでいこう。私の  
八89 9 、はくちようのほうへおよいでいつた。は  
八91 6 ちようたちは、そばへおよいできて、くち  
八92 4 おかあさんのところへ走つていつて、もら  
八96 4 深くほると、根が下へのびすぎて、あとで  
八100 6 しています。根が横へはるので、廣いとこ  
九17 8 は、もつともつと南へとんでいくのです。  
九19 4 ました。おりから南へ飛行中だつたつばめ

十35 2 は、上京して機械館へ毎日かよつた。銀色  
 十47 8 原があるので、そこへつれていこうと思つ  
 十49 8 会 トガ——アドコヘイタノ——イコウ  
 十52 9 、よその家の門の中へ、はいつていこうと  
 十53 10 りのそりと、どこかへいくところでした。  
 十54 1 ました。妹は、そこへいつて、水おけのふ  
 十54 3 、また、すぐ水そこへもぐりました。「ハ  
 十54 4 会 ットガ」「アドコヘイタノ」は、そ  
 十59 7 たべてから、山の方へいつて、たくさん取  
 十60 2 会 あさんに、「そとへで、あかちゃんに  
 十60 4 して、おもての通りへでいらつしやつた  
 十60 8 」といつて、月の方へ手をやつたら、あか  
 十66 9 会 も用心して、そばへもよらぬことだ。わ  
 十67 2 めは、そのへやの方へは、顔も向けないよ  
 十67 7 会 いで、風を向こうへやつてくれ。」「へ略  
 十69 10 会 において、あつちへいこう。ぐずぐずし  
 十72 11 しまいました。そこへ、だんなが帰つてき  
 十 9 7 会 よ。あれはどこへいく船だろう。」「へ  
 十 9 8 会 ね。きつと遠くへいくんだろう。」「へ  
 十 9 11 会 日本を正しい方へつれていくのさ。」「  
 十 9 11 8 さん、ここにボートの方へかけていった。二  
 十 9 15 12 、そこから遠い空へにげていった。お  
 十 9 22 2 て、朝早く工事場へきました。たくさ  
 十 9 23 10 も、子どもをよそへやつてから、夜にな  
 十 9 24 3 会 は、わたしが山へいつて木を切つてき  
 十 9 25 5 らおきて、遠い山へいつて、しばをかつ  
 十 9 26 10 。まきをとり山へいく、そのいき帰  
 十 9 27 6 たいで、家から家へつてきます。百文  
 十 9 28 7 郎でしたが、そこへいつてからは、いよ  
 十 9 28 12 をかりて、かわらへいつて、あき地にま  
 十 9 35 9 会 まの暑さはどこへやら。くわをかつ  
 十 9 41 10 会 しも柱。学校へいそぐ子どもらの、

十一 48 11 いっしょに北海道へいきます。北海道へ  
 十一 49 1 いきます。北海道へいって、じやがいも  
 十一 50 3 どうしても北海道へいこうと思う。北海  
 十一 50 4 うと思う。北海道へじゃがいもをつくり  
 十一 52 3 、どうやら乗車口へもぐりこむことがで  
 十一 54 3 づ乗ったら中へ。」「略。」「略。  
 十一 54 5 づあけずに中ほへ。」「略。」「略。  
 十一 61 1 、三人は、川の中へドボンと落ちこんだ  
 十一 63 6 院の門ばんのまえへいって、一通の手紙  
 十一 63 10 さがしにフランスへいったのですが、数  
 十一 64 1 日まえ、イタリヤへ帰ってきて、ナポリ  
 十一 64 12 のために、ナポリへよこしたのです。  
 十一 65 2 その父親のところへつれていくようにと  
 十一 67 8 り返しながらか、中へはいりました。少年  
 十一 69 1 人のかたのところへさげて、一方の手で  
 十一 72 3 ーそれからそれへと、いろいろ考えま  
 十一 78 3 ーそれからそれへと長々と話しかけて  
 十一 82 4 いって、少年の方へとんできました。少  
 十一 83 4 つの人のところへつれていかれたのだ  
 十一 84 7 、少年を自分の方へひっぱりました。少  
 十一 85 9 く、あしたうちへ帰りますから、もう  
 十一 86 7 たんです。ここへつれてきたときには  
 十一 87 5 からすぐにうちへ帰って、おかあさん  
 十一 92 8 ーそこで死人の方へ向いて、「略。」と  
 十二 4 10 が、「大洋を西へ西へと航海して陸地  
 十二 4 10 ー大洋を西へ西へと航海して陸地に  
 十二 8 4 ので、学校から家へもどってきました。  
 十二 8 7 いって、母のそばへかけよりました。そ  
 十二 15 4 すばやくあなの中へかくれました。  
 十二 19 8 ー略。」「そこへいくと、こおろぎさ  
 十二 25 6 ければ、ものかげへつれていって、用を  
 十二 27 2 こっちからあっちへいくとなると、すぐ

十二 27 10 これ持って学校へいきましようね。」  
 十二 28 10 は、ぱったりそこへすわりこんでしま  
 十二 33 10 階から母のところへかけおり、指さきで  
 十二 36 11 手をこの口の下へやりました。冷たい  
 十二 53 11 人形だけを舞台へだして、つかう人の  
 十二 58 1 ちは、けつして村へでてきてはならない  
 十二 60 4 だしたことはあとへひかないので、おと  
 十二 61 10 ときはいつもここへきて、岩屋の入口で  
 十二 71 3 が少ないと、近所へ木をひろいにつた  
 十二 79 7 ー略。」「日本へいきたくない。」「へ  
 十二 83 3 でいました。そこへ両選手があらわれま  
 十二 90 11 よかったこと、山へいったこと、弟やい  
 十二 10 7 よいといった方角へ移って困った人もあ  
 十二 10 8 るいといった方角へこして、つごうのよ  
 十二 12 10 や月が、東から西へまわっているように  
 十二 15 2 、自分で西から東へ一回轉します。また  
 十二 36 3 花びらがホートンへちらちらと降って  
 十二 36 12 、またそちらの方へ走って行く。五  
 十二 39 11 から、つくえの方へ走りよって、ひきだ  
 十二 48 7 たいている。とやへ追われて行く、白い  
 十二 54 7 おじさんのところへ行きました。おじさ  
 十二 55 12 さとにこのした母へ送ったつぎの手紙の  
 十二 10 2 手 れました。くぎへかけるようにしたほ  
 十二 19 12 ー略。」「そこへ先生がいらつしやっ  
 十二 46 12 つかれも、どこかへけしとんでしまつて  
 十二 54 12 ています。そこへ細い根をのぼして、  
 十二 56 7 うですが、そこへつれて行ってあげる  
 十四 63 3 えんがわの日なたへ持ちだして、日光を  
 十四 67 2 めっているところへ日光があたつて、そ  
 十四 68 4 のぼつていくあとへ、入れかわりに、そ  
 十四 69 10 が、それを日なたへ持ちだして、じかに  
 十四 71 2 重くなり、下の方へ流れて、その方へ

十四 71 2 流れて、その方へ向かつて動きます。  
 十四 71 3 、ぎやくに上の方へのぼつて、表面から  
 十四 71 12 は、ひえた水が下へおり、そのまわりの  
 十四 72 1 の水が、そのあとへ向かつて流れ、それ  
 十四 72 2 、おりた水のもとへとどくじぶんにはひ  
 十四 75 11 んできて、森の上へかかると、飛行機は  
 十四 75 12 、しぜんと下の方へおしおろされるかた  
 十四 76 4 、晝間は海から陸へ、夜は反対に陸から  
 十四 76 4 は反対に陸から海へとふきます。すこし  
 十四 78 2 ちゅうから横の方へそれしてしまつて、一  
 十四 84 4 く、天上から地上へ降つてくることなど  
 十四 91 2 。かたほうはどこへいったか、つい見  
 十四 92 6 その屋根うらの家へ帰ることもできな  
 十四 95 3 女の子は、その上へ、小さなつめたい両  
 十四 96 2 がやくほのおの方へのぼした。と思うと  
 十四 97 6 、その女の子の方へずつとよつてくるで  
 十四 98 7 の子は、人形の方へ両手をさしのべた。  
 十四 99 4 ー神さまのところへ行くのだ。」と、女  
 十四 99 7 が神さまのところへのぼつていくのだと  
 十四 100 1 て神さまのおそばへ行つたおばあさんを  
 十四 101 10 しそくに、上の方へ、地面から高くはな  
 十四 101 12 、なみだもない國へ、上の方へと、神さ  
 十四 101 12 ない國へ、上の方へと、神さまのおそば  
 十四 102 1 、神さまのおそばへ行くかのようにのぼ  
 十五 11 4 ーさりととなりへとびぬ ガラス戸の  
 十五 21 10 けては深い谷の中へなげこんで、それが  
 十五 22 10 ろいてその音の方へ顔を向けて見ると、  
 十五 23 2 して、みんなの上へ舞いおりて來ます。  
 十五 23 3 て、みんな草の上へひれふすように、思  
 十五 23 7 そのがけの下の方へゆつたりとんで行く  
 十五 23 11 の大わしのせの上へ、がけの中ほどから  
 十五 24 4 を見つけて、そこへひつじをつれており

15 24 5 すと、急に目の前へ、大きなわしがひと  
 15 24 7 の女の子は、どこへ持って行かれるかわ  
 15 24 9 ば、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、ま  
 15 24 10 間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落  
 15 24 12 とびつき、その上へ乗りうつって、両足  
 15 25 3 の子の中から下へ落ちないように、そ  
 15 25 12 しだいに、下の方へ落ちるように舞いお  
 15 26 3 うで、高い木の上へでもとまろうものな  
 15 26 5 も早く谷底の地面へおりてしまわなけれ  
 15 26 8 から、安全な場所へおりなければならな  
 15 27 10 落ちるように、下へ下へとおりて行きま  
 15 27 10 るように、下へ下へとおりて行きまし  
 15 28 10 た、鳥がそのあき地へ身をおろすかおろさ  
 15 28 12 つき通し、鳥を後へひっくり返すように  
 15 29 1 で、ぱっと、地面へすばやくとびおりま  
 15 30 10 とずさつて、岩角へ身をよせかけたとき  
 15 32 10 いをして、下の方へ、谷の中へ落ちて行  
 15 32 10 下の方へ、谷の中へ落ちて行きました。  
 15 32 11 として、思わず後へたおれかかりました  
 15 33 3 の自分のすくい主へ手をさしだしていま  
 15 49 11 作品を東京や箱根へ賣りだすことにした  
 15 52 6 たがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった  
 15 52 8 各地の大学者たちへのていねいなし  
 15 56 9 三 てみえたあなたへのごちそうに、日本  
 15 59 11 三 だ。さあ、うちへ行こう。」と、あつ  
 15 60 2 こみ、一路自たくへと車を走らせた。同  
 15 61 11 三 う、いいところへつれて行ってあげる  
 15 62 1 そいそとげんかんへ出かけて、ふみ石の  
 15 65 7 とおぼさんは京都へひきあげられたが、  
 15 66 1 ようの手紙を京都へ送ったりした。その  
 15 66 3 を「まい、満ほうへと名ざしで送ってく  
 15 68 11 ら、主なき書さいへ私をみちびいた。」へ

15 71 5 三 いっしょにお寺へ行つて来ましよう。  
 15 75 7 情のことば。日本へ帰つたら、新島夫人  
 15 82 12 、右手の方のおくへ向かつて歩いて行っ  
 15 83 10 三 私たち、あそこへ行つてもいいの。」  
 15 85 11 、子どもたちの方へやつて来ました。光  
 15 86 11 三 「チルチルの方へ手をさしだしながら  
 15 94 7 三 う。みんなどこへ行くの。」光「みんな  
 15 94 8 三 な不幸のところへにげこんでしまうの  
 15 94 10 三 ろだろう。どこへ来たのかしら。」光  
 15 99 7 三 「ぼくは、どこへ行つても、だんだん  
 15 103 2 三 着ています。外へ出ればいつでも、こ  
 15 109 6 三 ひろげてこちらへかけてくる。あれが  
 15 114 9 三 ル「ぼく、うちへ帰りたくないや。お  
 15 114 11 三 ですよ。私も下へ行くのですよ。小さ  
 15 115 1 三 は、これから下へ帰つてから、どうい  
 15 119 6 三 喜び、「光」の方へ行き、ふたりは長い  
 へ 2 へ  
 15 74 8 へ——返事はいつもはつきりと。  
 15 32 3 六 口の「へ」の字がのびたりちぢんだりする。  
 へい「堀」(名) 1 へい  
 15 103 10 三 かきねの上からのびあがつてみたり、  
 へいのすきまからのぞきこんだりしました。  
 へいあんじだい「平安時代」(名) 2 平安時代 平  
 安時代  
 15 105 10 十二 これは、平安時代の町の風景で、大和絵  
 でやわらかにかきあらわされています。  
 15 107 2 十二 平安時代の終りから鎌倉時代にかけての  
 藝術の中で、とくにすぐれたものの一つです。  
 へいき「平氣」(形状) 5 平氣  
 15 125 5 十二 おしめカバーをさせたままほつておくと、  
 民ちゃんは平氣でそこらをはいまわっています。  
 15 128 2 十二 ところで人形しばいだが、これは人間

にできないことでも平氣でやれる。  
 15 142 8 三 そうすりや、なにがこようと、平氣  
 じゃないか。  
 15 143 7 三 そうすりや、なにがこようと、平氣  
 じゃないか。  
 15 148 10 十四 頭から大波をかぶつても、平氣で歌を続  
 けていました。  
 へいきんさ・せる「平均」(下) 1 へいきんさ  
 せる「一せ」  
 15 142 13 十四 かさは、光をへいきんさせ、もつとや  
 わらかくするためなのです。  
 へいねんさく「平年作」(名) 2 平年作  
 15 109 6 八 平年作は、1平方mに3・5dlのげん米が  
 とれるのですから、これは平年作ということにな  
 ります。  
 15 109 8 八 これは平年作ということになります。  
 へいほうメートル へいちへいほうメートル・やく  
 じゅうにへいほうメートル  
 へいぼん「平凡」(形状) 3 平ぼん  
 15 81 5 十五 平ぼんなれよ。  
 15 81 6 十五 平ぼんにしていだいなれよ。  
 15 81 8 十五 空氣または日光のごとく平ぼんなれよ。  
 へいや「平野」(名) 2 平野  
 15 120 2 十三 ユートランドの平野には、八百年あまり  
 前には、よくしげった森林がありました。  
 15 120 6 十三 これを生かすのは、みぞをほつて水をそ  
 そぎ、平野の雑草をかりとり、  
 へいわ「平和」(名) 5 平和 へいせかいへいわ  
 15 44 4 五 平和のはとだ。  
 15 44 8 五 明かるい世界の空とんで、平和のうたを  
 うたおうよ。  
 15 102 1 十二 これをみても、平和を愛した古代の人た



ちの氣持がよくわかるではありませんか。

十四40頁 平和と自由の光がさしてくる。

十四41頁 平和と自由。

へいわ 〔平和〕(形状) 1 平和

十二114頁 平和な國日本を作るために、また、文化國家をきずくために。

へいわこっか 〔平和國家〕(名) 1 平和國家

十三26頁 がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、祖國を生き返らせ、ついに、今日のような平和國家をうち建てました。

へいわしゅぎ 〔平和主義〕(名) 1 平和主義

十五73頁 平和主義の旗がしらとしてその名を知られていた老博士は、

へえ (感) 6 へえ

六39頁 ふきとばされたんです。きょうの大風に。「子つばめへえ。」

十七1頁 「なあんだ。さとうだ。」「へえ。」

十二44頁 へえ、そんな大きなものを、どうして動かすんでしょう。

十三39頁 眞ちゃんが、帰って来たんですか……いつ……え、うちに来たんですか……へえ

十三42頁 そう、二つあるのならもうよ……うん……へえ……そんなにしんせつだったの。

十四22頁 「へえ。」私たちは、あまり多いのにおどろいた。

ページ (名) 1 ページ じいちページ

十二12頁 そうして、ページをはぎとって、たべてしまったということです。

ベール (名) 3 ベール

十五108頁 あすこに、ずっと後の方に、ベールをかぶったままで、ちつとも出て来ないのは。

十五118頁 さあ、そのベールをおとりください。

十五118頁 光いよいよベールをかぶって、「略。」

へきが 〔壁画〕(名) 1 へき画

十三57頁 ミケランジェロとラファエルは、前後して、そこからローマに出て、へき画をかいいたり、美しい肖像などを、たくさんかいた。

へきめん 〔壁画〕(名) 1 へき面

十五69頁 と指さされるままに、顔をあげてへき面を見あげると、おじさんの大きな写真があった。

ベキン 〔地名〕2 ベキン

十三26頁 ベキンの町には、ホートンが、あみの目のように通じている。

十三33頁 水に不便なベキンでは、一けん一けん、水を運んで行かなければならない。

へこたれる (下) 1 へこたれる 《一レ》

十四37頁 みなさん、あなたがたは、いま、日々の生活にもつらい思いをしています、そんなことにへこたれてはいけません。

ベこべこ (形状) 1 ベこべこ

六139頁 おなががベこべこなところだ。

べし (助動) 9 べし 《ベキ・ベシ》 ひまさにたつべし

九71頁 〔文〕手 これから、用事これあるにつき、明日出頭すべし、と書いていいでしょうか。

九75頁 〔文〕手 「出頭すべし。」と書いてもいいといえ、よかつた、いちろうはときどき思うのです。

十二39頁 私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日待つことを知りました。

十三19頁 このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかありません。

十四49頁 このおじょうさんこそ、ほんとうにこの歌を歌った人というべきです。

十五17頁 〔文〕 わが祖國、やがて立つべし。

十五18頁 〔文〕 ああ、日本、まさに立つべし。

十五60頁 父母の愛を一身に集めていた身にとつては、天下におそるべきなものもなく、

十五74頁 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別など、あるべきはずはない。

べしやんこ (形状) 1 べしやんこ

八104頁 いねの花のすんだあとをさわってみると、いままでべしやんこだったさが、ふくれてかたくなっていました。

ベスタロッツ 〔人名〕1 ベスタロッツ

十二117頁 この老人は、ベスタロッツという人でした。

へた 〔下手〕(形状) 4 へた

九47頁 字はへたで、すみもがさがさして指につくくらいでした。

九57頁 あの記事は、ずいぶんへただったろう。

十二18頁 よくきいてみると、じょうずなのもあるし、へたなのもある。

十二19頁 いや、わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがっておいでだろうと思いました

へだてる 〔隔〕(下) 1 へだてる 《一テ》

十五51頁 祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年の月日をへだてて、いま、まごたちによってふたたび結ばれることになった。

べたんと (副) 1 べたんと

六139頁 うさぎさんは、びっくりぎょうてん、みんな地面にべたんとうつぶしてしまいました。

へちま 〔糸瓜〕(名) 1 へちま

十一51頁 あさがおの花は、みんなふきちぎられ、へちまの葉は、みんな下向きになってしまった。

べつ 〔別〕(名) 2 別

十二3612 別の手に、はじめのはゆっくりと、次には早く、「水」という字を書いてくださいました。

十五745 いでん学上の能力のちがいは別として、べつ〔別〕(形状) 6 ベつ 別

二2710 〔略〕と、べつのやぎが いいました。

八966 ひたさない種もみをまいたところには、べつにしるしをつけておきました。

十一833 〔略〕 おまえはべつの人のところへつれていかれたのだな。

十二7010 自分は、その近所に別に家をかき住むことにしました。

十三317 むかしものがたりをやるつもりなのだが、さるは、とちゅうできよんとしてやめてしまったり、とんでもないべつのことを演じたりする。

十四6310 お話することがどつさりありますが、それは、また、いつかべつのときにしましょう。

べつせかい 〔別世界〕(名) 1 別世界

十二459 人間のしほいとちがつて、みていると別世界にいったような楽しい気がするよ。

ベツド (名) 11 ベツド

十一217 男の子がベツドにすわっている。

十一666 じゃあ、第四号室のいちばん向こうのベツドだ。

十一674 開いたドアのまえまできますと、その中にはベツドが二列にならんでいました。

十一687 看護人は、一つのベツドの頭の方に立ちどまつて、カーテンをあけて、

十一737 その人たちは、しんさつをはじめて、一つ一つのベツドのそばに立ちどまりました。

十一739 医者がつぐそばのベツドまできました。

十一7311 医者が、まだとなりのベツドをはなれないうちに、少年は立ちあがりました。

十一8710 少年がベツドのそばのものと場所に帰ると、病人はほつとしたようにみえました。

十一911 看護婦が、小さなすみれの花たばをベツドの上のコップの中から取ってきました。

十一922 すみれをベツドの上にちらしながら、

十二391 小さなベツドに横たわりながら、

ヘツドライト (名) 1 ヘツドライト

十244 ヘツドライトにたよつて現場に近づく。

べつに 〔別〕(副) 11 ベつに

四345 けれども、べつに気がつきません。

四4810 ほかのがんは、また、みんなをだましてびつくりさせるのだらうと思つて、べつに氣に

もかけないでとびつづけました。

六668 お話の題はべつにきませんから、かつてに

つぎを考へてください。

九1474 けれども、べつににげだそうとはしません

でした。

十485 私は、べつにいそぐこともありませんでしたので、

十674 だんなは、ちよいちよいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、

十702 ベつにどつきもたず、

十一674 べつに用もないようだが、

十一7411 〔べつにかわりはございません。〕と、看護婦は答えました。

十三282 遊ぶといつても、べつに、おもちゃや絵本などを持って遊ぶわけではない。

十四699 白い茶わんにはいつている湯は、日かげで見えては、べつにかわつたようすはなにもありませんが、

べつべつ 〔別別〕(形状) 1 ベつべつ

六997 ほくは、この二つをかさねたりべつべつにしたりして、

べに 〔紅〕(名) 2 ベに じうすべにいろ

十636 ふつうのしほいでは、〔略〕、おしろいやベにでけしようをして、その役らしく顔をこしらえ

あげるのですが、

十五755 ああ、忘れもしない、満面べにをさして語られたホランド博士のあの熱情のことば。

べにばら 〔紅薔薇〕(名) 2 ベにばら

十一569 べにばら野ばら、さんしよの木のため、めやぎのおちち、一つ一つかおる。

十五142 大きなべにばらのひと花思わぬをゆららにあかく開き満ちたる

へのへの 1 へのへの

六42 へのへの

へのへの 3 へのへのへの

六34 へのへのへの

六35 へのへのへの

六37 へのへのへの

へのへのへの 5 へのへのへの

六316 〔へのへのへの〕の顔で、風に向かって立っている。

六31 へのへのへの

六38 へのへのへの

六45 へのへのへの

六45 へのへのへの

へび 〔蛇〕(名) 7 へび

二358 ぞうは、大きなへびみたいなものさ。

四552 島にはかりうどはきませんが、大きなへびがやってくるがあります。

四625 みると、なかまのがんが、へびからぬけだそうとして、もがいているところす。

四627 かっちゃん、いきなりへびのくびにかみつきました。

四628 さすがのへびも、いきがくるしくなったので、力をゆるめました。

十二635 そのうちからだだんだん長くのびて、おしまいにへびになってしまった。

十三67 すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、たけのこや、ちようや、はち、へびや、とかげや、

へま (名) 1 へま

十654 いたずらをしたり、また、とんでもないへまをやったり、だまされたりなど、よわい人間のしそうなことを、なんでもやります。

へや「部屋」(名) 38 へや ↓ おへや

一458 へやのなかでは、しろいきものをきたおんなの人たちが、〈略〉、もちものをしらべています。

一466 窓 さあ、あちらのへやへいらっしゃい。

一468 つぎのへやで、こしをかけてまっていますと、

一491 へやには、きれいなはながかざってありました。

二474 ところ へやの中

二482 それから、となりのへやへいこうとして、きゆうにたちどまります。

二492 いちろうは、となりのへやへいきます。

二509 じろうも、となりのへやへいってしまします。

三339 窓 へやのすみに、かれ木が立っています。

四1203 いままで くらかったへやが、あかるくなりしました。

なりしました。

七933 朝、いってみたら、右から四ばんめのへやに、子うさぎが4ひき生まれていました。

七936 茶色のうさぎは、いっているへやに、えさがなかったの、

七938 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

七955 けさ、いってみたら、左がわのへやに、毛が、たくさんぬけていました。

八825 窓 あたかなへやには、いってき、

八867 たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、

九2010 へやは、いそいであたためられ、〈略〉、つばめたちのとまる場所が、つくられました。

九212 へやには、いってくる人があると、たちまち、そのかたや、頭や、手にとまりました。

十666 窓 おくのへやのおいしいには、『ぶす』といいて、おそろしいどくが、はいつている。

十671 はじめは、そのへやの方へは、顔も向けないようにしていました。

十674 だんなは、ちよいちよいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、

十682 ふたりは、それをあいつのようにして、ぬき足さし足で、そつとおくのへやに近づき、

十693 一つのまるいつばをみつ、へやのまん中にかかえてきました。

十一673 そうして、大きなへやの、開いたドアのまえまできると、

十一684 大きなへやは、うす暗く、あたりには、けしきよくのにおいがたよっていました。

十一686 看護婦がふたり、手にくすりびんを持って、へやを歩きまわっていました。

十一687 その大きなへやのはしまでいくと、

十一734 みると、医者が、ひとりの助手をつれて、へやの向こうのはしには、いってきました。

十一7611 夜になると、少年は、へやのすみにいすを二つならべて、その上でねむりました。

十一814 そのへやのすぐそばの、ドアのそとに足音がきこえて、

十一819 ひとりの男が、看護婦に送られながら、そのへやには、いってきました。

十二275 いまそこには、いたかと思うと、もう次のへやには、いっているというように、

十二384 へやに帰ると、すぐ、私は、自分がこわした人形のことを思い出して、

十三475 そよ風の中にひっそりと、客をむかえた赤いへや。

十四6412 しめきつたへやで、人の動きまわらないときだと、ことによくわかります。

十四907 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。

十四9610 その女の子は、中のへやをすっかり見とおすことができました。

十五5310 広いへやの窓ぎわに大きなデスクをすえ、

へり「縁」(名) 1 へり ↓ かわへり

七604 スリッパのへりをひとまわりして、帰っていった。

へる「減」(五) 4 へる 《ーッーラ》

七177 窓 このまえより、なの花がへっているわ。

九335 手 らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだんへってきたそうです。

九1210 こまでくると、てんりゅう川もよほど水かさが増していた。

十五8710 窓 『腹のへらないときに物をたべる幸

福』で、

ベル (名) 3 ベル

九六二(画) おい、さあ早くベルを鳴らせ。

十一七三 半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。

十三三七 電話のベルが鳴る。

ペルシア湾 (地名) 1 ペルシア湾

十四五 今日、真珠の産地は、ペルシア湾、セイロン島をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、日本産のものは、ことに名高い。

ベルン (地名) 1 ベルン

十五九四 スイスの首府のベルンの町からながめると、

ヘレンケラー (人名) 2 ヘレン・ケラー

十二三九 これは、ヘレン・ケラーというアメリカの女の人が書いた「わが生がい」の一せつを、日本語になおしたものです。

十二四二 そののち、ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。

へん (名) 5 へん

四四六(画) さあ、きょうは、どのへんにならびたというんだね。

九七二(画) むかし、このへんは、波のおだやかな海のいりえだったのです。

十三二八 そのへんを走ったり、地面にこしをおろして、あなをほったり、

十五三二 少女の両親たちが、そのへんにいたひつじかいたちを頼んで、大急ぎでおりに来たのです。

十五九七(画) このへんでは、みんなお金持なの。

へん (画) 〇いっぺん・ごろっぺん・とおいいっぺん・なんべん・にさんべん・にへん

へん (変) (形状) 15 へん

二八三 「略」と、へんなこえでいったので、

みんなわらいました。

五七二(画) へんなもんだな。

五八二(画) でも、おぼうさんが赤いおびをおしめになると、へんでしょう。

五八四(画) なに、へんじゃない。

五九二 「略」と、へんな声でさえずって、さんちゃんの本をよむ声をまねます。

六五九(画) へんだなあ。

六八五(画) へんなたこだな。

七二六(画) あおむしが、へんな色にかわっている。

八四八 あひるの子は、水の上を車のようにくるまわり、その首をはくちょうの方へさしのべ、自分でもおどろくほどへんな大きな声をだした。

九一五 たくさんの白いきのこが、ドッテコドッテコと、へんな樂隊をやっていました。

九二九 きのはみんないそがしそうに、ドッテコドッテコと、へんな樂隊をつづけていました。

九七二(画) さあ、なんだかへんですね。

九八二 四人が話しあってしらすべ、へんだと思う物は、みなかごの中にいれておきました。

九八六(画) へんだよ。

一二二五 姉だけにわかるへんなことばをいっています。

ペン (名) 5 ペン

一二二八 私、その少年の持っていたペンをかりて、サインをしてやりました。

十四二〇 クレヨン、ペン、ナイフ、ゴム、ランドセル、ピアノ、オルガン、バイオリン、

十五七一(画) そのペンをにぎってごらん。

十五七二(画) おじさんのつかいなれたペンですよ。

十五七二(画) ああ、満ぼうがいすにこしをかけて、

ペンをにぎっている。

へんか (変) (名) 1 変化

十四八四 空中の温度の変化、(略)、さまざまな條件によって、雪のけつしようがちがうわけを、

べんがく (勉学) (名) 1 勉学

十五五九(画) つくえのまん中にチョークで線をひき、向こうは日本、こちらはアメリカと違って、たがいに向かいあい、勉学にいそしむことにしたが、

べんがくす (勉学) (サ変) 1 勉学す 《一ス》

十五五八(画) 室友ホランド先生、(略)、化学、生理、植物、動物、地質等をこのんで勉学す。

べんきょう (勉強) (名) 11 べんきょう 勉強 ↓ おべんきょう

二五九(画) 二年生も、これでべんきょうをしました。

四二七 こくご、しゃかい、さんすう、りか、おんがく、(略)などのべんきょうをします。

五二〇 さんちゃんがべんきょうをはじめると、ひわは、(略)と、へんな声でさえずって、

六二〇(画) ぼくは、夜、勉強をすましてから、

八五九(画) 勉強もそのとおりだ。

一一二六 金次郎は、それを読むとうれしくなり、いっしんに勉強がしたくなりました。

一一二八 そのうえ、夜おそくこつそりと勉強を続けました。

一二二八 夜の勉強には油がいらいます。

一二八三 家をはなれて勉強にでかけていましたが、十二四二 サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひとりのようになると、勉強をはじめたのです。

十三六一(画) こんなことを考えて、きみも勉強を続けるんだね。

べんきょうする (勉強) (サ変) 9 べんきょうす

る 勉強する 《―シ―スル》

一5410 図 そんな ときには、はなればしに あるがっこうにはいって、べんきょうして くるのです。

二595 図 三年生も、これで べんきょうしました。

七711 図 みんなが勉強する教室にはいって、こし かけてみたり――

八831 図 たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火 花をだすことを、せいでして勉強するのだね。

九4610 図 楽しく元気で勉強してください。

十1711 図 ことばを愛することを 知って、勉強した ら、どんなにしあわせでしょう。

十一506 図 デンマルクの農業のことを勉強して、ぼ くは、いい農夫になろう。

十二693 図 しかし、いつも勉強してみがきを かけて いないと、じき、役にたたなくなる。

十二705 図 はい句を勉強することに心をきめました。

へんさん 〔編纂〕(名) 1 編さん

十五512 図 日本人のための英語教科書の編さんま で したりした。

へんじ 〔返事〕(名) 12 へんじ 返事 ↓ごへんじ

三6210 図 みんなも声をそろえて へんじをしまし た。

四299 図 じぶんで じぶんに きていて みても、なか は かつきりした 返事をして くれな

四748 図 へ――返事は いつも はつきりと。

八422 図 「略。」とおっしゃいましたが、王女は なんの返事も しません。

九198 図 協会では、喜んでつばめのせわをする返事 をしました。

九583 図 いちろうは、思わずわらいだしながら返事 をしました。

九956 図 たかぎ、ちよつとやまだの方をみるが、返 事をしてないでさがし物をつづける。

九1439 図 くもは、なんといつて返事をしていいかわ からないので、そのままだまっています。

十1511 図 この返事に、少年も満足したらしく、

十6611 図 太郎かじやと次郎かじやは、声をそろえて 返事をしました。

十一442 図 みんな元気のいい返事をして立ちます。

十五4410 図 「たいへん焼物がおすきのようですが、 あなたは――」と、あいさつともつかず、返事と もつかない答えかたをした。

へんしゅう 〔編集〕(名) 1 へんしゅう

六566 図 それから、二組、三組と、じゅんじゅんに へんしゅうをすることにきめました。

へんしゅうする 〔編集〕(サ変) 1 へんしゅうす る 《―スル》

六696 図 そんなに大きくはありませんが、これを じょうずにくぎって、きれいに、むだのないよう に へんしゅうするのは、むずかしいことでした。

へんしゅうできる 〔編集出来〕(上二) 1 編集で きる 《―キ》

十四896 図 こんな場面を、映画独特の手法によつて、 おもしろく編集できないだろうか。

べんとう ↓おべんとう

べんべんぐさ 〔草〕(名) 1 べんべんぐさ

三528 図 いなかの やねの べんべんぐさは、「高 い、高い。」と いいました。

べんり 〔便利〕(形状) 6 べんり 便利

十二478 図 でも、生きた人間のほうがうまくやれ るし、それに便利でしょう。

十二4710 図 便利とか不便だけで物事を考えないと ころに、人間の美しさやおもしろさが生まれてく

るのだ。

十二481 図 絵のぐをつかって時間をかけて絵をか くより、写真のほうがずっと便利なわけけれど、

十二1038 図 お金がなかったときにくらべて、お金が できてからはどれほど便利になったか、

十四109 図 いたってべんりにできています。

十五394 図 その漢字から、日本語を表わすのに便利 なかたかなや、ひらがなを作りだすようになった。

## ほ

ほ 〔帆〕(名) 1 ほ

八704 図 しちめんちようは、風を受けた船のほのよ うにからだをふくらませて向かってきた。

ほ 〔歩〕 ↓ころっぽ・よんぽ

ほ 〔穂〕(名) 14 ほ ↓はしりほ

三416 図 ぼくらはふたりになって、麦の ほとす れすれにあるきました。

三487 図 早く川の水で からだを あらって、が まの ほをして、その 上に ねるがよい。

七661 図 雨あがりの麦のほ、子どもと子どもとかけ ていく。

八1021 図 いねのほのさがふくらんで、いまにもほ がでそうです。

八1021 図 いまにもほがでそうです。

八1023 図 いねのほがではじめました。

八1024 図 葉のついていゝるところから、黄みど りのほができました。

八1027 図 ほがでそりました。

八1027 図 ほの1つぶを虫めがねでみると、毛のよう

なものがたくさんはえていました。

八〇二 花のさいているほもみつめました。

八〇五 どのいねのほも、すっかり黄色になつておじぎをしています。

八〇六 こんどは1かぶのほの数をみんなでしらべてみました。

八〇七 1本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいついています。

八〇八 1本のほに、多いのは180ぐらいずつついています。

ほ 1 ほ

四七四 ほ——星のきれいな夜空。

ほう 「方」(名) 181 ほう 方

二四〇 すると、とおくのほうでも、「略」となきます。

二四〇 すると、むこうのほうで、「略」とさげびます。

二六五 そのとき、かげのほうで、「略」という声がする。

二六九 そのとき、かげのほうで、「略」と「略」となく。

二七〇 すこしたつて、かげのほうで、「略」。「略」という声がする。

三四一 いちろうくんが、右の方にまがつていてしまいました。

三四三 ぼくらのほうがまけるかもしれない。

三六三 右の方。と、女の子たちがいいました。

三六五 左の方。と、男の子たちがいいました。

三八二 雲は、もりの方へしずかにしずかにとんでいます。

三八八 もりの方。

三九一 「もりの方。」みんなの心があいました。

四〇六 下の方から、てつぼうの音がひびいてきました。

四一七 みずうみのほうから、風がふいてきました。

四二七 お——おにさんこちら、手のなる方へ。

四三九 雪が降りだすと、ぼくはまどからかおをだして空のほうをみあげて、降ってくる雪をながめる。

四四七 かめは、ていねいにおじぎをして、海の方へいってしまいます。

四八三 そのうちに、きよくの人が、私たちをかたはしからしらべていって、北の方へいく友だちと、南の方へいく友だちと、西の方へいく友だちと、東の方へいく友だちを、それぞれひとかたまりにわけてくれました。

五〇三 南の方へいく友だちと、

五〇四 西の方へいく友だちと、

五〇五 東の方へいく友だちを、

五二七 あまりこんでいましたので、みんな、ぶつぶつとこごとをいいながら、出口の方へでいきました。

五三三 小さいほうの荷物を、わたししてもらいました。

五四〇 おつかいにくとき、うらの竹やぶのそばを通つたら、おくの方でうぐいすの声でした。

五五二 西の方をみると、日がしずんでももない空に、大きな星が光っていました。

五五九 そういいながら西の方をみると、小さな星がちらちら光っていました。

五八二 下の方から、「略」と、うたのようにふしをつけてよびながら、ひとりの子どもがきます。

六〇二 その声をきいて、はとが下の方をみますと、かりうどが矢をつがえているではありませんか。

六二九 おや、だれかたずねてきたらしい。」あり一、二が戸の方をみています。

六三六 花のみつをわけてあげよう。」あり一が、おくの方からみつをびんにいれてもってきます。

六四三 根の方へおりていらつしやい——ああ、またふいてくるよ。

六四九 つむじ風のように、列をつくつたつばめのむれが、かかしの方へとんでくる。

六五八 ぼくが目をさましたときには、おびみtainなものが向こうの山の方へとんでいったんだよ。

六六四 そうして、つぎの雲の方へどんどん走っていきます。

六八四 ふみおはふと気がついて、まえの方にある木の下へいきました。

六八八 トンネルのさか道に足をすべらせて、ころころと、下の方へころがりこんでいきました。

六九四 うさぎさんたちは、そのまま向こうのやぶの方へいってしまいました。

七〇五 しかさんは、のっそりと立って、山の方をみあげました。

七二四 とらさんは、そつと首をのぼして、うさぎさんたちの方をのぞきました。

七三六 さあ、いまのうちに、さきの方へいらつしやい。

七四四 はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配そうに私の方をみていましたが、

七五八 私は、さぶろうの方に近よりながら、車中の人たちに、心の中でお礼をいいました。

七48 10 ぼくのほうは、センターが外野へでてしまったので、

七49 5 それで、内野の人はいっしんになったので、かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。

七51 2 ㊦ じゃんけんをして、いいほうのボールをつかいなさい。

七51 4 ぼくらのほうのボールをつかうことになった。

七51 5 ぼくらのほうが、どんどんあてられて、センターまで、外野にでてしまった。

七52 7 どちらが勝ったかと思って、心配している

と、十一たい十で、ぼくらのほうが勝った。

七52 10 このときは、ぼくらのほうのボールが、よくあいてにあたって、

七95 6 よくみると、おくの方に、わらが巢のようにふくらんでいて、

八5 6 小鳥屋というより、ほおじろ屋といったほうがいいかもしれません。

八9 1 ビオのほうでも、その氣になったらしく、

八22 10 ただ、腹の下のほうだけが皮にかくれています。

八54 5 なさけのある人とみえて、台所の方からおむすびを一つにぎってきて、

八58 3 いままででのもぼってきた方をふり返ってみると、

八61 2 ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎまわるほうがすきであつたからである。

八70 7 あわれなあひるの子は、立っていたほうがいいか、歩いていったほうがいいかさえも、わからなかった。

八70 8 歩いていたほうがいいかさえも、わからなかった。

八84 7 あひるの子は、水の上を車のようにくるくるまわり、その首をはくちょうの方へさしのべ、

八89 8 ㊦ 冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがましだ。

八89 9 そういつて、水の中にとびこみ、はくちょうのほうへおよいでいった。

八95 3 水をとりかえるときにみたらもみのもとのほうがすこしふくらんでいました。

八95 6 もみのもとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。

八96 9 ひたさないほうは、まだめがでません。

八97 5 水にひたしたほうが、1週間早くでました。

八100 7 根が横へはるので、廣いところのほうに育ちがよいと思ひました。

九18 1 ヨーロッパの北の方ではんしくしたものが、

九32 8 ㊦ はるか下の方に美しい湖がみえます。

九33 8 ㊦ 黒くてひらいた貝がとれますので、なん

ども湖に近い川しもの方へとりいききました。

九39 5 ㊦ 上の方のかれ枝をじゅんじゅんにたたき落し、

九40 9 ㊦ また、下の方の山道を、しよいこをつけたおとなの人が、〈略〉登ってくるのがみえます。

九49 4 いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷川にそつた小道を、上の方へ登っていききました。

九49 9 ㊦ やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方へとんでいききましたよ。

九50 1 ㊦ 東なら、ぼくのいく方だねえ。

九51 4 ㊦ やまねこなら、さつき馬車で、西の方へとんでいききましたよ。

九51 5 ㊦ 西なら、ぼくのうちの方だ。

九52 3 ㊦ やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方

へとんでいききました。

九53 6 ㊦ やまねこなら、けさまだくらいうちに、馬車で、南の方へとんでいききましたよ。

九54 3 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木

の森の方へ、新しい小さな道がついていました。

九56 1 みえない方の目は、白くびくびくうごき、

九65 1 ㊦ わたしのほうがよっぽど大きいって、きのう判事さんがおつじやつたじゃないか。

九71 7 ㊦ それは、やめたほうがいいでしょう。

九95 6 たかぎ、ちよつとやまだの方をみるが、

九105 10 きゆうな坂にかかると、まえの方で、のだ

先生が、〈略〉と、大きな声をかけられる。

九106 2 いい先生も、ずつとろろの方から、

「略。」とさげられた。

九107 3 「略。」と、のだ先生がつえでさされる

方を見ると、

九108 2 「略。」と、いしい先生がうしろの方から追いたてるようにいわれた。

九122 6 泉はどうしても支流のほうにはなくて、

九129 5 くもは、きつとなつてその方をみつめました。

九136 9 くもは、首をねじつて上の方をみあげました。

十59 7 ごはんをたべてから、山の方へいつて、た

くさん取つてきた。

十60 8 「略。」といつて、月の方へ手をやった

ら、あかちゃんは、「略。」といった。

十63 7 ふつうのしばいでは、〈略〉、能のほうでは、めんをつけます。

十67 2 はじめは、そのへやの方へは、顔も向けな

いようにしていました。

十68 8 次郎かじやのほうは、太郎かじやよりも、

ずっとおくびよう者でした。

十一 71 太郎かじやのほうは、氣が強いばかりでなく、わるぢえがあつたから、

十一 46 川上の方をながめると、

十一 9 11 園 そりゃあ、船長のほうがむずかしいだろう。

十一 11 1 園 いいコックスが日本を正しい方へつれていくのさ。

十一 11 8 子どもたちは、いっさんにボートの方へかけていった。

十一 13 4 おりから、港の方でふえが鳴る。

十一 68 8 看護人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまつて、

十一 69 6 少年は、身をおこして父親の方をみました。

十一 76 7 病人は、ときどき少年の方をみましたが、

十一 82 3 「チチロ。」男はそういつて、少年の方へとんできました。

十一 83 1 父親は、じつと病人の方をみつめたあとで、

十一 84 7 父親は、少年を自分の方へひっぱりました。

十一 84 8 少年はふり返つて、病人の方をみました。

十一 84 11 少年は、また、病人の方をながめました。

十一 86 1 父親は、じつと少年をみつめていました

が、やがてまた、病人の方をみました。

十一 86 12 病人は、やはりじつと少年の方をみていました。

十一 90 12 そのうちに、ちよつとわきのほうにいつていた看護婦が、

十一 92 8 そこで死人の方へ向いて、

十二 11 2 老人は廣場の方を指さして、

十二 25 8 はじめはいやがつていた民ちゃんも、よ

ごれていないほうが氣持がいいので、

十二 47 8 園 生きた人間のほうがうまくやれるし、

十二 47 12 園 時間をかけて絵をかくより、写真のほう

がずっと便利なわけだけれど、

十二 50 7 首のほうからもかふせてまわすから、細長く切つた古新聞にのりをつけてとめる。

十二 53 4 手は、手さきのほうをいれて、穴に糸を通してぬいつける。

十二 55 7 昔からいい傳えられたというだけのもののほうが多い。

十二 57 6 ふしぎなことに、神山のほうには、昔から九十九だんの石だんができています。

十二 73 11 子どもたちのかけていく方に、自分もいっしょにかけだしたいと思いました。

十三 4 3 ごらん、まだこのかれ木のままでの、高いけやきのこずえの方を。

十三 28 5 遠くの方からひびいてくる、いろいろなもの音に、耳をかたむけたりしているのである。

十三 36 12 子どもたちは、またそちらの方へ走つて行く。

十三 39 5 つくえの方をちらちら見る。

十三 39 11 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよつて、ひきだしをあける。

十三 42 4 園 せっかくの記念品だから、とつておいたほうがいいよ……

十三 43 5 しばらくして、うらの方で、もの音がする。

十三 53 3 絵は、はがきの上の方に、まるく原色ですつてあります。

十三 53 5 その右の方に、もうひとり子どもがやりかかっている絵です。

十三 61 1 園 くらべてみて、うまさからいうと、ラ

ファエルのほうがうまいかもしれないが、

十四 10 3 園 くぎへかけるようにしたほうがいいとか、

十四 11 7 園 が、きはつ油をおつかいになったほうがいいのです。

十四 38 3 みんな「一人の人」の見ている方を遠く見つめる。

十四 39 9 一人の人はるか遠くの方を指さして、「略。」

十四 48 5 かれは、歌の声をたよりに、その方において行きました。

十四 69 7 湯げのお話はこのくらいにして、こんどは、湯のほうを見ることにしましょう。

十四 71 2 湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、

十四 71 2 その方へ向かつて動きます。

十四 71 3 その反対に、茶わんのまん中の方では、ぎやくに上の方へほつて、

十四 71 3 ぎやくに上の方へほつて、

十四 75 6 畑のほうで、森よりも、日光のためによけいあたためられるので、

十四 75 12 飛行機は、しぜんと下の方へおしおろされるかたむきがあります。

十四 77 6 木を割るときには、もとのほうから割るがいい、

十四 77 7 竹を割るときには、うらのほうから割るがいいという教えでした。

十四 77 10 竹を割るとき、もとのほうから割ろうとすると、

十四 78 2 はじめにまん中になたをいれても、きつと、とちゅうから横の方へそれてしまつて、

十四 78 3 うらのほう、いいかえると、竹の先のほ



うから割ってみると、

十四78 竹の先のほうから割ってみると、

十四78 12 はじめ、うらのほうをかるく四つに割って、

十四79 3 木のほうは、これと反対に、もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、

十四79 3 これと反対に、もとのほうを上にして、

十四79 8 12 しずむほうがもとだよ。

十四85 10 どちらも雪にえんのあるものであるが、

私はあとのほうの映画に心をひかれた。

十四91 3 もう一つのほうは、どこかの男の子がひろって行ってしまった。

十四96 2 女の子は、小さな、つめたい足を、かがやくほのおの方へのぼした。

十四97 6 ゆかの上をよたよた歩いて、その女の子の方へずっとよってくるではないか。

十四98 7 女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。

十四101 10 うれしそうに、楽しそうに、上の方へ、

十四101 12 上の方へと、神さまのおそばへ行くかのようにのぼって行つた。

十五21 11 それがコトコトと音をたてて下の方まで落ちていくのを、おもしろそうに見ていました。

十五21 12 女の子は、あぶない足どりで、山の上の方に、

十五22 1 また下の方にちらばっているひつじのむれを追いかけるように、

十五22 10 みんなが、おどろいてその音の方へ顔を向けて見ると、

十五23 7 見ると、そのがけの下の方へゆったりと

十五25 12 しだいしだいに、下の方へ落ちるように

舞いおりて行きました。

十五26 12 下の方にいる女の子を元気づけるために

十五32 10 くるくる舞いをして、下の方へ、谷の中へ落ちて行きました。

十五82 2 園の前方に、高い大理石のまいる柱でできた大廣間のようなものがあらわれます。

十五82 11 みんな右手の前方に、光をとりまいてかたまっています。

十五82 12 右手の方のおくへ向かって歩いて行って、

十五83 9 12 廣間の方をさがしてみよう。

十五85 11 「いちばんふとった幸福」が、テーブルをはなれて、〈略〉、子どもたちの方へやって來ました。

十五86 11 チルチルの方へ手をさしだしながら、

十五88 10 チルチル、すこし横の方に立っているひとりの「幸福」を指さして、

十五89 1 12 あの男のことは、きかないほうがよろしい。

十五98 1 12 お金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

十五106 9 12 右の方には、『しごとをしあげる喜び』が、『考えることの喜び』のとなりになっています。

十五108 7 12 ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て來ないのは。

十五119 6 「光」の方へ行き、ふたりは長いあいだだきあいます。

ほう (感) 3 ほう

二45 8 ほう、なにをやるかな。

六35 5 ほう、また、すごいのがくるぞ。

十四21 5 ほう、「ほう」とか、「あれもそうか。」とかいいたが、

ほう 「坊」あかんぼう・きかんぼう

ほう 「帽」ぼうんどうぼう

ほう 「棒」(名) 3 ほう ぼてんびんぼう・ぶつきらぼう・やぶからぼう

八46 11 けらいたちは、足をぼうにしてさがしまわりました。

八108 1 ほうのあいだにいねをはさんでこいたらよくとれました。

十二45 12 12 いまいった文樂は手でつかうのだが、

そのほか、指でつかうもの、ほうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろ種類がある。

ほうえんきょう 「望遠鏡」(名) 6 ほうえんきょう望遠鏡

五55 7 12 今夜、学校のいわで、ほうえんきょうで星をみせますよ。

六100 11 12 これです、いつか、おとうさんのお話にきいた望遠鏡が、できるかもしれない。

六103 8 12 ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。

六104 4 12 ぼくとおかあさんは、かわるがわるこの望遠鏡をのぞいて楽しんだ。

八59 2 12 ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠鏡をのぞいてみた。

十三14 10 12 自分で望遠鏡を組み立てて、それで天体を観察し、数学でこまかに計算した結果、

ほうおう 「鳳凰」(名) 2 ほうおう

十二104 6 ほうおう堂という名まえは、屋根のかざりにほうおうがついているからだといわれ

十二104 9 12 屋根の形や左右のびたろうかのかっこうにも、ほうおうという鳥の美しいすがたがあらわれていることに気がつくことでしょう。

ほうおうどう 「鳳凰堂」(名) 3 ほうおう堂

十二104 1 ほうおう堂

十二104 4 12 これは、九百年ほどまえに作られた平

等院どういんという建物の中にある名高いほうおう堂です。  
十二104 5 ほうおう堂という名まえば、屋根のかざりにほうおうがついているからだといわれ

ほうがく 「方角」(名) 4 方角

十三72 2 どこもしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、

十三104 たとえば、移轉をするのに、方角がよいとかわるいとかいい、

十三107 しかし、よいといった方角へ移って困った人もあれば、

十三107 わるいといった方角へこして、つごうのよくなった人もある。

ほうき 「箒」(名) 5 ほうき

七21 1 そこで、バーバラは、だいどころからほうきをもってきてはきました。

五80 7 竹のさきにほうきをむすびつけて、てんじょうのくものすをはらいしました。

五80 9 むすびめがとけて、ほうきがおちました。

五85 4 りょうかんさんはこういいながら、ほうきを持って、木の葉をはきよせました。

五86 7 りょうかんさんは、ほうきの手をとめて、ほうきほし 「箒星」(名) 1 ほうき星

十三9 12 でんせん病がはやると、ほうき星が出たからだといったり、

ほうきれ 「棒切」(名) 1 ほうきれ  
十五35 3 ほうきれや、石や、貝がらなどに、はものなどでするしをつけてしめすことも行われた。

ほうけい 「方形」(名) 1 ほうけい  
ほうげん 「方言」(名) 1 方言

十13 5 方言でできた小歌のあることを、おとうさんは、きいて知っていましたから。

ほうこう 「方向」(名) 2 方向

十一77 1 一本バックをやると、ボートは向きをかえて、「略」、新しい方向に進んでいく。

十四88 7 それとも、心の中で考えごとをしていて、思わず方向がちがったものであろうか。

ほうさん 「坊」(名) 1 ほうさん 1 おおほうさん  
十三59 5 それは、せいの高いマリアがキリストをだいて立っていると、老人のほうさんらしい人が、その前にひれふしている絵でした。

ほうさんたち 「坊連」(名) 1 ほうさんたち  
十三15 7 そのころの教会のほうさんたちは、天動説を信じていましたので、ガリレオを呼びだし、その説を人に教えてはならない、といいました。

ほうし 1 1 かけほうし  
ほうし 「帽子」(名) 15 ほうし 1 かんかんぼうし・さんかくぼうし・むぎわらぼうし

二16 6 はととまと とんぼ ほうし しかからすすずめ だか だめめし

六28 2 ほうしもかぶらず、がいとうもきています

七5 7 1 きょうは、ほうしをかぶっているな。

七43 11 そこで、老人は、自分のかぶっていたほうしを、そばの人の手に渡した。

七44 1 ほうしは、つぎつぎと人々の手を渡し、お金がその中にたまった。

七44 2 私のまえにもほうしがきた。

七44 4 車中をひとまわりすると、ほうしは、ふたたび、しらがの老人のところにもどった。

七45 6 そういつてから、老人にほうしを返した。

九46 6 1 もう、遠くの山々のいただきに、白い雪のほうしがみえます。

九91 2 そのほかの友だちが、落ちているやまだのかばんやほうしをひろってあとにつづく。

十二34 4 「ピン」「コップ」「ほうし」など、たくさんのことばをつづることを覚え、

十二36 1 先生がほうしを持ってきてくださったので、私は暖かい日なたにでかけるのだと知って、

十三37 7 三郎が、ほうしをかぶったままとびこんで来て、受話器をとる。

十三38 11 その間に、ほうしをぬぎ、指先でくるくるまわしながら、楽しそうにやうす。

十四57 4 それは、頭のほうしで、目、水、土、はちたちだということがわかりました。

ほうしかけ 「帽子掛」(名) 1 ほうしかけ  
三31 4 1 ほうしかけがならんでいます。

ほうせき 「寶石」(名) 3 宝石

七55 8 心にはつきりとえがかれた一つのかたちは、まじりけのない宝石のようなものでありますから、

十38 4 眞珠は、海のそこからまれにひろいあげられる、ふしぎな宝石とされてきたが、

十五82 8 にしきにくるまり、金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭にいっぱいつけています。

ほうそう 1 1 えほうそう  
ほうそく 「法則」(名) 3 法則

十三9 2 種々のことからの関係を明らかにして、きまった法則を知る。

十三9 4 ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、

十四35 5 そのバクテリアにもおとる小さな人間が、引力の法則を発見したり、うちゅうの大きさを計算したりするではありませんか。

ほうたい 「包帯」(名) 2 ほうたい

四54 6 ほうたいをもっていた がんが、手早くくるくるとまきつけました。

十一81 8 みると、一方の手にあつくほうたいをし

たひとりの男が、看護婦に送られながら、

ほうっと (副) 2 ほうっと

七43 中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、ほうっとあらわれる。

八333 天の川は、なん千なん万という星がかさなりあって、あのように、ほうっとした銀の川のような光をはなっているようにみえるのです。

ほうてい 「法廷」 (名) 1 法廷

七7910 ところ 法廷。

ほうねん 「豊年」 (名) 1 ほう年

五405 「この花がよくさく年は、ほう年だといひます。

ほうねんまつり 「豊年祭」 (名) 1 豊年まつり

十一383 ほうねんまつり きょうはうれしい豊年まつり。

ほうほう 「方法」 (名) 7 方法

九244 近年になって、いろいろな方法でこのことをしらべてみますと、やはりそうであることがわかりました。

九3811 母たちもぼくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけてやる方法を知らなかったので、

十五347 これは、記おくのためにも必要な方法である。

十五366 形のないものは、この方法では表わすことができない。

十五429 日本のことばをもっとも正しく、もっとも簡単に書き表わす方法がないものであろうか。

十五456 そこで、日本の手工業も、外国から新しい方法を学んで、

十五484 はん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、この赤絵製作の方法が他にもれないように、保護されていた。

ほうほう 「方方」 (名) 5 ほうほう 方々

七671 方々のうちで、ふとんほしてある。

七808 おどろいて、方々をさがして歩きました

が、みあたりません。

十二8210 清水選手の試合を見物しようと、方々の

國の人々が、そのコートを目がけて集まりました。十四724 湯の表面には、水のおりているところとのぼっているところがほうほうにできます。

十五1099 方々から急いでかけよって来た「喜び」たちは、

ほうほけきよ (感) 2 ほう、ほけきよ

二695 「ほう、ほけきよ。」「ほう、ほけきよ。」

となく。

二696 「ほう、ほけきよ。」「ほう、ほけきよ。」

となく。

ほうぼほう (感) 1 ほう、ぼほう

二655 「ほう、ぼほう。」みんな「しゅしゅしゅしゅしゅしゅ……」

しゅしゅしゅしゅ……」

ほうや 「坊」 (名) 3 ほうや

五123 ほうや、こです。

十五6211 おじさんのくつは光っているのに、ほうやのくつはほこりだから、行くのはいや

だといっているのですよ。

十五643 かわいいうやだな。

ほうりだす 「放出」 (五) 2 ほうりだす 《サ・

シ》

十七12 おくびよう者が、きゅうにいきおいづき、

せんすをほうりだして、自分も指をつっこみまし

た。

十四455 マッケンナも、しずんでいく船からほう

りだされて、黒い波の間をおよいでいました。

ほお 「頬」 (名) 3 ほお

二512 さちこは、りんごをだいたり、ほおにつ

けたり、おどったりします。

四754 りーりんごのような 赤い ほお。

四917 ほおにはあせがつたわっている。

ボーイさんたち (名) 1 ボーイさんたち

一4910 しゃしようさんたちも、ボーいさんたちも、

みんな《略》うさぎさんでした。

ほおえみ 「頬笑」 (名) 2 ほおえみ

十一7711 少年はそのふくれあがった顔の上に、き

わめてかすかなほおえみがうかんだのをみた

十五953 「水のほおえみ」とか、「あけぼののむ

らさき」とか、《略》などがあらわれます。

ほおえむ 「頬笑」 (五) 3 ほおえむ 《ミーン》

十一539 そのことばをきいて、そこらの乗客は思

わずほおえんだ。

十二108 すると、老人は、ほおえみながらポケッ

トに手をいれましたが、とりだしてみせたものは、

ガラスのかけらばかりでした。

十四403 大空がほおえんでいる。

ホーク (名) 1 ホーク

十四975 やいた鳥は、肉を切るナイフとホークと

をせなかに立てたまま、テーパーからとびおりて、

ほーけ (感) 1 ホーク

五468 また、「ホーク。」と鳴いた。

ほーけほーけ (感) 1 ホーク、ホーク

五466 うぐいすの声がした。「ホーク、ホーク。」

というようにきこえた。

ほおじろ 「頬白」 (名) 5 ほおじろ ほうちのほお

じろ

八48 いたるところの山野に、いちばんたくさん

いる鳥といわれるほおじろです。

八57 なぜなら、ほおじろだけしか賣っていな

八八三 同じ日本の中でも、土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。

八八八 ほおじろの声をきくと、ピアノのすがたがありあろうかんできて、思わずなみだぐみまします。

一一一三 あれは、あわてもののほおじろだ。

ほおじろじしん「頬白自身」(名) 1 ほおじろ自身

八八八 それは、鳴きかたのちがいでではなく、ききかたのちがいでだろうと思う人もありましようが、そればかりでなく、ほおじろ自身、國々のなまりのようなことばをもっているのだそうです。

ほおじろや「頬白屋」(名) 1 ほおじろ屋

八五六 小鳥屋というより、ほおじろ屋といったほうがいいかもしれません。

ほおずき「酸漿」(名) 1 ほおずき

九八六「文」 ほおずきを口にくみて鳴らすごとかわずは鳴くも夏のあさ夜を

ほおずり「頬擦」(名) 3 ほおずり

一五三二 いいえ、これは、おまえたちのほおずりと、おめめと、だつこと織ったのですよ。

一五三三 おまえたちがほおずりをするたびに、私の着物に、月と日の光がさしてきてね。

一五三三 おかあさんたちが悲しそうな顔をしているときでも、ほおずりをしてもらえば、すぐそのなみだは、目の中の屋になつてしまうのですよ。

ほおずりする「頬擦」(サ変) 1 ほおずりする

《一シ》

一一八二 父親は、じつと病人の方をみつめたあとで、いくども少年にほおずりしてからいました。

ボート(名) 13 ボート

三六五 みずうみには ボートが うかんで いました。

三六六 みんなは ボートに のりこみました。

三六九 まん中には、おとうさんが こしかけて、ボートをおこぎになりました。

三六五 そこで、おとうさんは、ボートを こいでぐるぐる おまわりになりました。

一一四一 なによりおもしろいのは、大学のボートがいつもここで練習していることだ。

一一五三 こどもたちは、〈略〉、そのボートをながめては、いろいろな話をしあって楽しむ。

一一六八 ボートの向きをかえたりひき返そうとしたりするときには、

一一七五 一本バックをやると、ボートは向きをかえて、あふないところからぬけだして、

一一八四 「ビリビリ。」と、ふえが鳴って、ふいに一そのボートが近づいてきた。

一一八六 あ、大学のボートだ。

一一八六 このあいだのレースで勝ったボートだよ。

一一八八 子どもたちは、いっさんにボートの方へかけていった。

一四五二 おじょうさんの歌をたよりに、マッケンナがおよいで行ったように、やがて、一そのボートが、やみをぬって助けにきてくれました。

ホートン(名) 11 ホートン

一三二六 ベキンの町には、ホートンが、あみの目のように通じている。

一三二七 ホートンというのは、小路のことである。

一三二八 ホートンは一本のトンネルのようになつて、どこまでもつながっている感じがする。

一三二九 一見、なんのかわつたところもないような、このホートンではあるが、

一三三〇 冬は冬で、風あたりの少いホートンの廣場に、子どもたちがたむろして、

一三三二 たとえ、鳴りものであると、呼び声であらうと、トンネルのようなホートンには、それが、ふしぎなほどよくひびきわたる。

一三三三 夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてわからないほどである。

一三三四 ホートンの廣場などに、かけ絵の舞台をこしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。

一三三五 ホートンに面した家々の門には、「れん」が書かれてある。

一三三六 早春になると、はとぶえが天から鳴ってきて、ホートンをにぎわわせる。

一三三七 中庭のあんずがさいて、花びらがホートンへちらちらと降ってくるのも、このころである。

ホートンふうけい「課名」2 ホートン風景

一三二七 四 ホートン風景……二十六

一三二八 四 ホートン風景

ポーランド「地名」1 ポーランド

一三二九 これを最初にいいだしたのは、十六世紀のころに死んだ、ポーランドのコペルニクスという人です。

ほおりのみこと「火遠理命」(話手) 29 ほおりのみこと

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

六八〇 「にいさん、お願いがあります。」

りがしたいのです。」

六八二 四 そんなにつりがしたいのか。」ほおりの「あ

大きなたいをつつてみたいのです。」

六八二 七 わたしは山へいこう。」ほおりの「ほんとう、

にいいさん。」

六八二 九 このつりざおを持っていくがいい。」

ほおりの「ありがとう、にいいさん。」

六八三 二 ほおりの「どうしてつれないのだろう。」

六八四 二 ほおりの「しまった。略。あ、つりばりを

とられた。

六八四 七 さ、弓矢を返すよ。」ほおりの「にいいさんも

やっぱりえものがなかったんですか。」

六八四 九 おまえは、なにかつったか。」ほおりの「いい

え、つれませんでした。」

六八五 三 どうしたのだ。」ほおりの「つりばりを魚にと

られてしまいました。」

六八五 六 とられたって。」ほおりの「はい。」

六八五 八 ほおりの「申しわけがありません。」

六八六 二 おまえからいいだしておいて。」ほおりの「に

いさん、ゆるしてください。」

六八七 三 ほおりの「つりばりは魚にとられてしまうし、

にいいさんにはしかられるし、困ってないでいたの

です。

六八七 八 ほおりの「なんのごてんですか。」年より「海

の神のごてんです。」

六八八 二 ほおりの「木にのぼるのですか。」年より「そ

うです。」

六八八 九 木をみあげて、ほおりの「はあ、この木だ

な。」

六八九 二 ほおりの「おや、あんなところにいどがある。

六九〇 二 ほおりの「すみませんが、そのいどの水を一

ばいください。」

六九〇 六 ほおりのみことは、ぐっとおのみにあって、

ほおりの「ああ、おいしい水。」

六九二 一 ほおりの「私は、ほでりのみことの弟、ほお

りのみことです。」

六九二 五 ほおりの「じつは、海でつりをしていたら、

つりばりをとられてしまったのです。」

六九二 一〇 つりばりを。」ほおりの「そうです。」

六九七 七 このつりばりではございませんか。」

ほおりの「あ、これだ。」

六九七 九 みつかって、ほんとうによろしゅうござい

ました。」ほおりの「ありがとう。」

ほおりのみこと「火遠理命」(人名) 9 ほおりのみ

こと

六八三 九 ほおりのみことはつりざおをひきあげる。

六八六 七 ほおりのみことは、海べでなっている。

六八八 八 ほおりのみことは、木をみあげて、ほおりの

「はあ、この木だな。」

六九〇 四 女の人、水をくんで、ほおりのみことに

さしあげる。

六九〇 五 ほおりのみことは、ぐっとおのみにあって、

ほおりの「ああ、おいしい水。」

六九一 七 ほおりのみことをあんないしてでてる。

六九一 一〇 ほおりのみことは、こしをかける。

六九二 一〇 私、ほでりのみことの弟、ほおりのみ

ことです。

六九七 五 ほおりのみことのまゑにさしだしながら、

海の神「このつりばりではございませんか。」

ボール(名) 15 ボールはフットボール・メデシン

ボール

七五一 二 じゃんけんをして、いいほうのボールを

つかいなさい。

七五一 四 ぼくらのほうのボールをつかうことになっ

た。

七五二 一〇 このときは、ぼくらのほうのボールが、よ

くあいてにあたって、ちよつとのあいだに、勝つ

ことができた。

七五四 一 ボールがビュッととんできた。

七五四 二 ボールは、すばやくあちこちにとんだ。

七五四 四 ふいに、ボールが、ぼくのところにとんで

きた。

九二七 三 すすみきったボールの音や秋の風

十二八二 一 やわらかなボール

十二八三 九 目にもとまらぬボールが、ネットの上を

右に左にと、ゆききました。

十二八三 一 一 ボールはたましいのこもった生きものの

ようになつて、はねとびました。

十二八四 一 一つのボールを中心にして、両選手はと

ぶ鳥のようにかけまわりました。

十二八四 一〇 もう然とたちなおつて、電光のような

ボールをうちだしました。

十二八五 一 清水選手は、ボールをやわらかくして、

しかも受けやすいところに、送つてやったのであ

ります。

十二八六 三 チルデン選手は、とりみだしたしせいで

はありましたが、やわらかなボールだったので、

無事に受け返すことができました。

十四二九 一 ボール、テニス、ピンポン、ラケット、

スキー、ラジオ、ニュース、レコード、

ボールばこ(名) 1 ボールばこ

八六三 一 その一わを買い、小さなボールばこにいれ

てもらつて、だいいに持つて帰りました。

ぼーん(感) 1 ボーん

十三三〇 一 しぜんにふんどうがどらにあたる。

「ボーん」と、かわいらしい音をたてる。

ほか「外」(名) 85 ほか  
 一306 ほかにありませんか。  
 二105 ぐさの など、とりの など、そのほかのものに、わけたらしいとおもいます。  
 二3210 〔略。〕と、ほかのものがいいました。  
 二257 日の あたるようにするには 切るよりほかにしかたがあるまい。  
 三601 ほかの 子どもたちは、どう きまるかまっています。  
 三613 ほかの 子どもたちも、こしをおろして、まっています。  
 四489 ほかの がんは、また、みんなをだましてびつくりさせるのだらうと思つて、  
 四503 ほかの がんは、右や左から かつちゃんをだきかかえました。  
 四507 ほかの ものは、あとになり、さきになりして、はげましはげまし、さげびました。  
 四1083 である人 うらしまたろうたいえび そのほかいろいろな魚  
 五232 ほかまだほかにあるの。  
 五364 ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろいろのくすりも石炭からとれます。  
 六183 そのほか、ハーモニカをふいているもの、オルガンをひいているもの、  
 六683 このほか、「雪のかたち」を五つばかり、きれいに写生しました。  
 六1122 このほかに、弟は「ミ」、「ム」がいえなかった。  
 六1136 一ぎよう一ぎようは、なにか、ほかのぎようとはちがった性質をもっているにちがいない。  
 七747 人 甲と乙、ほかに、ひとりの旅人。

七755 砂のほかに、なにもみえない。  
 七8110 ほかにまだ、知っていたかね。  
 七8411 それはほかでもありません。  
 七942 ほかのうさがかんだのです。  
 八245 あおぎりの木でも、ほかのあぶらぜみが「ジージー、ジージー。」と鳴きはじめました。  
 八2810 ほかのむすめたちは、野原で遊んでいるのに、うちのむすめは、こうしてはたらきつづけているのは感心なことだ。  
 八358 このほか、五十光年のところに光っている星があります。  
 八612 ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎまわるほうがすきであつたからである。  
 八644 そんなものはほつておいて、ほかの子どもに、およぐことを教えてやるがいいよ。  
 八654 ほかのものは、一わだつてこんなすがたをしていない。  
 八689 あの一わをのけたほかは、みんないい子だ。  
 八693 ほかのものと同じようによよくし、いや、ほかのものよりよよくおよぐといつてもいい。  
 八695 ほかのものよりよよくおよぐといつてもいい。  
 八9111 すると、ほかの子どもたちも、「略。」と喜んだ。  
 八1063 3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので16、ほかのは、だいたい12ぐらいでした。  
 九510 この音と、ほかの音とをいっしょにひいてみると、まえとはちがった感じがします。  
 九64 オルガンのほかに、バイオリンとか、フルートとか、ほかの楽器を、いっしょにあわせてひいてみたらどうでしょう。

九65 ほかの楽器を、いっしょにあわせて  
 九87 「風」ということばに、ほかのことばをつけてみましょう。  
 九188 ときには、あらしや、そのほかの思いがけないさいなんに、あわなひともかぎりません。  
 九231 このほかに、オーストリア動物園の人たちがひき受けて送つたつばめを加えると、  
 九295 さるすべりラジオのほかに声もなし  
 九335 らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだんへつてきたそうです。  
 九336 このほかに、大きな、黒くてひらいた貝がとれますので、  
 九422 そのほか、名のわからない美しい小鳥がたくさんいます。  
 九876 人 たかぎ・やまだ そのほか友だち大ぜい  
 九885 たかぎには友だちの一、二、三、やまだには四、五、六、そのほか数人が、それぞれにわかれてふたりをひきとめている。  
 九912 そのほかの友だちが、落ちてくるやまだのかばんやぼうしをひろつてあとにつづく。  
 九1410 あみをはり、かくれていて、ほかの虫がひつかかると、〔略〕かみころすなんて、  
 十199 ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上をすべっていく。  
 十334 ほかのことを考えないで、みっちりしごとをやってくれ。  
 十445 研究を重ねたすえ、ついに核をさしいれるときに、ほかの母貝のいがいとうまくを切り取つてきて、一種の手術をほどこすことを発見した。  
 十633 かぶきや、ほかのしはいとも、いろいろちがうところがあります。

十一216 ほかの人たちは休んだりむだ話をして  
 いるのに、金次郎は、すこしも休まず働くので、  
 十一2110 しごとがじゅうぶんできないので、金次  
 郎は、ほかの人たちにすまないと思いました。  
 十一591 園 おとうさん、こんないいにくいことば  
 は、ほかにないでしょう。  
 十一702 ひたいと弓形をしたまゆとのほかには、  
 〈略〉父親らしいところはありませんでした。  
 十一732 看護婦は、ほかにはなんにもいわずに  
 いってしまいました。  
 十一762 が、ほかにないといつてすることもでき  
 ませんでしたから、病人のふとんをなおしたり、  
 十一915 園 ほかにないものがあるものがある  
 十二3410 ある日、私が新しい人形を持って遊んで  
 いますと、サリバン先生が、ほかの大きな人形を  
 私のひざの上において、  
 十二4510 園 文樂のほかにまだあるんですか。  
 十二4511 園 文樂は手でつかうのだが、そのほか、  
 指でつかうもの、〈略〉、いろいろ種類がある。  
 十二4910 ほかのほくもんでのぼしておく。  
 十二926 ほかの人がこれと同じ文を書いたとして  
 も、  
 十二983 このほか魚では、たい、さば、まぐろ、  
 かつおなどをたべました。  
 十二1007 じょうもん式土器のほかに、やよい式土  
 器というのがあります。  
 十二1023 はにわには、このほか、うまや、いぬや、  
 鳥などをこしらえたものがあります。  
 十二1156 それは、民主主義ということばをほん  
 とうに生かしていくよりほかに道はありません。  
 十三173 牧場と、もみと、しらかばの森林と、近  
 海の漁場のほかには、鉱山があるのでなく、

十三246 農作物は、じゃがいも・くろむぎ、その  
 ほかわずかのものにすぎませんでした。  
 十四238 園 英語だけではなく、ほかの國からも、  
 いろいろはいってきている。  
 十四242 園 そのほかのことばは、みんな英語だ。  
 十四269 リズムとか、ハーモニとか、そのほか、  
 コーラスとか、ソナタとかいうことばは、  
 十四4811 助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人た  
 ちが力をおとさないように、  
 十四505 歌を歌っていたおじょうさんも、そのほ  
 かの婦人たちも、みんなすくいあげられました。  
 十四557 園 ほかに、だれもいせんから、私が申  
 します。  
 十四597 園 ほかのことはわすれても、この土のこ  
 とは、かたときもおわすれにないでしよう。  
 十四808 とうとう一つの眞理だと思われたので、  
 そのことをほかの人々に伝えるうちに、  
 十五346 それをその場にいない人や、遠くにいる  
 人に知らせるためには、文字に書くか、またほか  
 に特別の表わしかたをしなければならぬ。  
 十五4610 園 こんなものが、まだほかにもあります  
 か。  
 十五482 そのほかに、色絵をつける赤絵屋もあつ  
 たが、  
 十五504 園 ほかの外國人にも話してあげましよう。  
 十五969 園 ほかの者にまで会っているひまはない  
 よ。  
 十五1008 ほかの「幸福」ども、どつとわらいくず  
 れる。  
 十五10810 園 ほかの人たちはなにをしようとしてい  
 るの。  
 十五1173 ほかの「大きな喜び」たちを呼ぶ。

十五1198 ほかの「喜び」たちを見ながら  
 ぼがい「母貝」(名) 11 母貝↓しんじゅぼがい  
 十393 園 もし、母貝の中に、核をさしいれること  
 ができたら、眞珠が発生するにちがいない。  
 十396 幸吉は、あわつぷほどの核をこしらえて、  
 それを、母貝の体内にさしいれてみた。  
 十3911 だいいち、母貝は、その核をそとにはきだ  
 して、受けつけなかった。  
 十414 この赤しおのために、母貝はみな死んでし  
 まった。  
 十416 かれは、新しく母貝を求めてきて、やりな  
 おしにかかった。  
 十4110 あるとき、うめが、母貝の中をしらべてい  
 るうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。  
 十431 母貝は、ほとんど死んでしまった。  
 十445 研究を重ねたすえ、ついに核をさしいれる  
 ときに、ほかの母貝のがいうまくを切り取つて  
 きて、一種の手術をほどこすことを発見した。  
 十448 幸吉は、自信をもって母貝を海中にはなつ  
 た。  
 十4410 幸吉は、望みをかけた第一の母貝を開いて  
 みた。  
 十4412 第二、第三と母貝を開いていくと、どれに  
 も眞珠が、きよらかにかがやいているではないか。  
 ほかなる「他」(五) 1 ほかなる《ーリ》  
 七687 心に思つたことを、はつきりと写しだすと  
 いうことにほかなりません。  
 ほかほか (副) 2 ほかほか  
 四162 せながほかほか あたたかい。  
 十四972 やいた鳥が——それこそほんとうのまる  
 やきの鳥が、ほかほかとあたたかいきをたてて、  
 ぼかぼか (副) 1 ぼかぼか

十四67 春さきなどの、ぼかぼかあたたかい日に  
は、

ほがらか [朗] (形状) 3 ほがらか

十四43 韻 くちびるに歌をもて、ほがらかな調子  
で。

十四44 韻 そうして、なんでこんなにほがらかで  
いられるのか、それを、こう話してやるのだ。

十四47 韻 こんなきけんのせまった中で、なんとい  
うおちついた、またなんというほがらかな人だろ  
う。

ぼきん (感) 1 ポキン

九38 手 ポキンという音がして、ガサガサと落ち  
てくると、うれしくなります。

ぼく [僕] (代名) 224 ぼく

二24 5 会 あんまりいろがにているので、ぼく、  
はじめはきがつきませんでした。

二31 2 会 こんどは、ぼくがかぞえてみよう。

二41 2 会 ぼく、たろうだよ。

二41 4 会 ぼくがたろうだよ。

二43 2 会 ぼくがわるかったよう。

三39 5 会 ぼくがまん中で、右のかたにはいちろ  
うくん、左のかたにはみよこさん。

三42 7 会 ぼくは、学校どうぐをわきにかかえて、  
どんだん走ってかえりました。

三43 6 会 きみの なかまと ぼくの なかまと、  
どっちが多いか、くらべてみようではないか。

三44 4 会 ぼくが、きみたちのせなかの上を、か  
ぞえながらとんでいくから、むこうのりくま  
でならんでみたまえ。

三45 4 会 ぼくは海をわたってきたかったのだ。

三79 10 会 雨に ぼくの いどを いっぱいにして  
もらうんだから。

三80 3 会 ぼくの道は、雨にめちゃめちゃにさ  
れちゃった。

三83 2 会 ぼくはだいたい色にするからね。

四18 4 会 ぼくが いっしょにひくと、かるくな  
るかしら。

四22 9 手 ぼくのうちをかいただす。

四23 9 手 ぼくは、大きくなったら、にいさんと  
いっしょに、ふねではたらかたいと思います。

四28 1 手 ぼくをのせてくれないかな。

四44 10 会 ぼくは、きのうは一ばんおしまいだっ  
たもの。

四51 6 会 こんどは、ぼくがかわって、かついで  
いこう。

四58 5 会 ぼく、よきようをするよ。

四59 8 会 よし、ぼくがさがしてくる。

四92 4 会 雪が降りだすと、ぼくはまどからかお  
をだして空のほうをみあげて、降ってくる  
雪をながめる。

五16 7 会 ぼくは、さつぽろまで。

五17 2 会 ぼくは遠いところへいくんだけど、あて  
名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。

五22 9 会 きよう、ぼく、とてもうれしかった。

五24 1 会 ところが、ぼくのまえに、まっぼづえを  
ついた、わかい人がいるんです。

五24 2 会 ぼくは、はつと思つて、すぐ立つて、そ  
の人をすわらせてあげました。

五24 8 会 そのとき、どこかの女の人が、ぼくに氣  
がついて、『略。』といつて、

五25 1 会 ぼくは、もう大きいんですから。

五28 5 会 ぼく、きよう、とてもうれしんです。

五28 7 会 ぼく、こんな本をもらいました。

五29 5 会 一つは大きくて、ぼくなんか、とても

持てそうもない物、

五29 7 会 そこで、ぼくは、『略。』といいました。

五30 2 会 ぼくにも持てそうですから。

五30 5 会 その荷物は小さいわりに、なかなかおも  
かったのですが、ぼくは、かたへのせて持つてい  
きました。

五30 9 会 その人は、『略。』ときいたので、ぼく  
は、『略。』といいました。

五30 11 会 ぼくにはすこしおもかったです、と  
てもうれしんです。

五31 9 会 その人は、トランクからこの本をだして、  
〈略〉、ぼくにくれました。

五38 6 手 ぼくも、三年生を受け持っている。

五38 6 手 こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手  
紙を書いてもらって、きみの受持の子どもたちに、  
それを送ってあげよう。

五40 7 手 ぼくのうちには、うしが十三とういます。

五43 4 手 ぼくのねえさんは、あさひがわへおよめ  
にいつています。

五43 5 手 ぼくはねえさんから、よくうたをおしえ  
てもらいました。

五43 6 手 ぼくのうちは花屋です。

五43 8 手 ぼくのすきな花は、あさがおです。

五58 8 会 あれが、ぼくのみつけた二ばん星かなあ。

五58 10 会 ぼく、大きくなるまでに、どの星もみん  
なみてしまいたいな。

五59 2 会 「ぼくも。」といいました。

五100 3 会 ひわさん、これからぼくの子だよ。

五106 11 会 ぼくはおとまがでできないのさ。

五108 1 会 ぼくの友だちのさんちゃんだよ。

六23 9 会 ぼくがひょうしをとってあげる。

六39 4 会 あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけ



ど、ぼく、もう帰れないんだ。

六四七 ぼくが目をさましたときには、おびたいなものが向こうの山の方へとんでいったんだよ。  
六七三 ぼく、どっちだかわからなくなっちゃった。

六九六 ぼくは、この二つをかさねたりべつべつにしたりして、つくえの上をみたり  
六一二 こう思いつくと、ぼくは、もう、じっとしていられなくなった。

六一四 ぼくは画用紙をとりだした。  
六二四 ぼくはこうひとりごとをいいながら、そとをのぞいてみた。

六三六 ぼくは、おかあさんをひっぱるようにつれてきた。  
六三八 そうして、ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。

六四四 ぼくとおかあさんは、かわるがわるこの望遠鏡をのぞいて楽しんだ。

六五〇 ぼくも、もちろんわらった。  
六五六 そこで、ぼくもひとつまねをしてやろうと思つた。

六六九 ぼくは、ここだと思つて、「略。」といつた。

六七四 ぼくのまねはしくじった。  
六八四 しかし、ぼくは、このおかげで、おもしろいことに気がついた。

六九〇 ぼくは、夜、勉強をすましてから、ひとりで、「略」と考えてみた。

七〇八 ぼくは、いままで、ものをいうときに、声

がはなからでるかでないかということを、考えたことがなかった。

七〇九 これはおもしろいぞとぼくは思つた。

六〇七 そこでぼくは、自分ではなをつまんで、は

なのあなから息がもれないようにして、「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」「ミ」「ム」といつてみた。

六二六 それでぼくは、思はず声をたててわらってしまった。

六二七 ぼくは、五十音というものは、一年生のときにならったからよく知っているが、

六三三 ぼくは、「略」みんなをわらわせてやろうなどという気持は、どこかへふっとんでしまった。

六四八 ぼくは、だいいに本ばこの上にのせておきました。

六五九 ぼくは、うれしくてたまりませんでした。  
六六二 ぼくにもちょうだい。

六六八 ぼく、くるみだいすきなんだ。  
六七四 きみたちが、こでわいわいやっていて

は、すぐぼくが、きつねにみつかつてしまうから、  
六八二 ぼくひとり、じつとじつかにしていたんだよ。

六八八 ぼくはきつねに追われてなんかいやしいんだ。  
六九四 ぼくも、かけっこななかにいれてくれたまえ。

七〇〇 そのかわり、ぼくが負けたら、この角を、  
七〇六 おつてしまつてもいい。

七一二 ぼくは、びんの中をそうじして、砂に水をやるから。

七二七 ぼくは、あおむしは、かくれみのをきているようなものだと思つた。

七三九 ぼくは、学校から帰ると、だいこんのはっぱを、とりかえてやるのが楽しみだ。

七四〇 弟が、ぼくよりさきに、それをみつけた。

七四八 ぼくも、せんしゅになつて、いっしょうけん

んめいにやつた。

七四八 ぼくのほうは、センターが外野へでてしまったので、

七四九 ぼくは、うれしさでいっぱいになった。  
七五〇 はじめに、ぼくの学校とひがし村の学校と

が、しあいをするようになった。  
七五七 ぼくもあてられた。

七五八 ぼくは気が氣ではない。  
七五九 あいてのセンターは、ぼくをねらつた。

七六〇 ぼくは、しっかり受けとめて、すぐセンターに渡した。

七六四 ふいに、ボールが、ぼくのところにとんできた。

七六五 ぼくはよこだきに受けとめた。  
七六六 ぼくは、うれしくて、胸がどきどきして

いた。  
七六七 ぼくは、砂地の上にまっすぐな足あとをつ

けてみようと思つて歩きだした。  
七六八 ぼくはうちへ帰つて、おじいさんにその話をしたら、

七六九 ある日、ぼくは遠足でみはらし台へいった。  
七七〇 ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠

鏡をのぞいてみた。  
七七一 ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわすれたことはありません。

七七二 ぼくは、こちらへきてから、おとなといっしょに畑にでたり、

七七八 ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、

七九四 ぼくは、先生やみなさんといっしょに、この湖へつりにいけたらと、いつも思っています。

七九六 母と、おばと、兄と、妹と、ぼくの五人

で、三日間かかりました。

九三六(一) ときぎをとりにかく山は、ぼくの家からは十五分ほど登るのですが、

九三七(三) ぼくははじめ、山へときぎをとりにかくのが、すきではありませんでした。

九三八(一) 母たちもぼくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけてやる方法を知らなかったで、

九三九(二) かれ枝のたくさんついている高い木をみつけると、兄かぼくがのぼる役をひきうけました。

九四〇(四) 「略。」などいわれたが、ぼくはがんばっておりませんでした。

九四七(三) すこし氣がおちついてから、ぼくはあたりをみまわしますと、

九四三(三) 秋になって、ぼくは山へいくのが楽しみになりました。

九四四(四) ぼくのうちでは、五日めごとにひとつねずつほりおこすことにしました。

九四八(三) この夏、一ど、用事でおばがそちらにでかけるとき、ぼくもついていったのでした。

九四九(三) ぼくはみなさんにあつてお話がしたいと思いましたが、

九四五(三) ぼくは、おとうさんのやっていたパン屋のしごとを、しんけんにやろうと思っています。

九四六(二) 「小公子」のセドリックは、〈略〉、ぼくにはまだ、セドリックほどわかりません。

九四六(五) ぼくは、この手紙を数日もまえから、喜んで書きだしました。

九五〇(一) 東なら、ぼくのいく方だねえ。

九五一(五) 西なら、ぼくのうちの方だねえ。

九五七(一) ええ、ぼく、いちろうです。

九八一(一) ぼくは、どこか一つのところをきめて、廣く深くほつていくのがいいと思います。

九八三(四) ぼく、先生におたずねしてみよう。

九八八(一〇) ぼくだっていやだ。

九八九(八) はなしてくれつたら、ぼくはやるよ。

九八九(九) ぼくだってやるよ。

九九八(一〇) ぼくだって、すみをみつけてやったじゃないか。

九九九(三) ぼくの首をひっかいたのはだれだ。

九九七(七) でも、ぼくは二つながられて、三つきみをなぐった。

九一〇(一) ぼくもそうさ。

九一〇(四) いや、ぼくがいけなかったのさ。

九一〇(五) ぼくもわるかったよ。

九一〇(七) ぼくがあんまりじまん話をするもんだから――

九一〇(九) それで、ぼくも負けまいと思つたんだ。

九一〇(五) 百五十メートルほど登ったとき、ぼくが、「略。」といった。

九二七(三) ぼくは、いままでに学んだ「自然の觀察」を、ずつとつづけていきたいと思ひます。

九三〇(七) ぼくは、みんなといっしょにはたきたいと思ひます。

九三二(二) ぼくがいるために、うちの中が明るくなるように、できないものでしょうか。

九三三(三) ぼくが、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、

九三二(二) ぼくは、この学校では、かけがえのないひとりであることを、ほこるようになってほしいものです。

九五八(一〇) ぼくは、大きくなったら、三ばんか四ばんをこぐんだ。

十一五(一〇) ぼくもきみに賛成だ。

十一五(一〇) ぼくは、父ににたら、せいの高いりっぱなからだになるだろう。

十一六(三) それを思うと、ぼくは胸がわくわくする。

十一六(五) ぼくはトップがこぎたいな。

十一七(四) ぼくが力をいれて、一本バックをやると、ボートは向きをかえて、

十一七(八) ぼく、これがうれいんだよ。

十一七(九) ぼくは、〈略〉、コックスのまえにすわって、整調をやってみたな。

十一七(一〇) ぼくはからだもいいし、息もつづく。

十一八(六) さつきから、きみはだまっているけれど、ぼくはきみをコックスにすいせんする。

十一九(五) けれども、ぼくにはなかなか、よききたとはいえない。

十一一〇(九) そういう男には、ぼくがなることにきめているのさ。

十一一六(六) じゃがいもをみると、ぼくは、北海道のいなかを思ひだす。

十一一七(二) ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたのは、ぼくの二年生のときだった。

十一一七(三) ぼくは、船のかんばんに、おかあさんとふたりで立っていた。

十一一七(七) みんなちちうしで、ぼくによく慣れていた。

十一一七(一〇) おかあさんがパンをやくそばで、ぼくはいつも本を読んでいた。

十一一八(一) ぼくのいすは、小さなゆりいすで、その下に、いつもかいねこのメリーがいた。

十一一八(九) おとうさん、ぼくは、大きくなったら、

また、おかあさんといっしょに北海道へいきます。  
十一 49 3 ほくは、おとうさんと同じように、ちちうしをかって、自分でバターをつくりまします。

十一 50 3 ほくは、大きくなったら、どうしても北海道へいこうと思う。

十一 50 7 デンマルクの農業のことを勉強して、ぼくは、いい農夫になろう。

十一 61 11 ほくは、とめられているから渡らない。  
十一 62 2 はじめ、ぼくがことわると、よわ虫だといってわらうのです。

十一 62 3 ほくはくやしくなったので、〈略〉、自分からさきになって渡ってしまったのです。

十一 70 7 ほくです。

十一 70 9 ほくがわかりません。

十一 71 1 ほくは、おとうさんの子どもですよ。

十一 72 6 ほくは、おとうさんとうしてんでしよう。

と、少年は口早にきました。

十一 72 10 それでぼくがきたのですが、どこがわるいのでしょうか。

十一 75 4 ほくの父はどうしたのでしょうか。

十一 75 10 「けれど、ぼくってことがわからないんです。」

十一 84 4 「ほんとに、ぼく、うれしい。」

十一 85 3 ほく、いけないんです。

十一 85 4 ほく、ここに五日のあいだいました。

十一 85 5 おじさんは、いつでもぼくをみています。

十一 85 5 ほく、あの人におくすりを飲ませてあげるのです。

十一 85 6 いつも、ぼくがそばにいないといけません。

十一 85 8 ほく、とても思いきれないんです。

十一 85 9 ほく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにさせてください。

十一 85 10 ほら、あんなにぼくをみています。

十一 89 12 「ぼくの手をにぎった。」

十一 91 12 「だけど、ぼく、遠い道を歩いていくんですから、しぼんでしまいます。」

十一 92 4 ほく、記念に、この死んだ人にのこしていきます。

十二 18 3 ほくにはだれも教えてくれるものがあります。

りません。

十三 38 8 お客さん、ぼくの知っている人……

十三 38 12 ほく、三郎……

十三 40 8 ほく、三郎……

十三 41 3 ほくがある。

十三 41 6 ほくの学用品を、ぼくひとりであうのは、ぜいたくというもんだ。

十三 41 6 ほくひとりであうのは、

十三 42 3 え、ぼくに……いらないよ。

十三 54 3 ほくは、その絵を見ると、

十三 55 9 ほくは、〈略〉くらべてみると、ずいぶんちがっているのにおどろきました。

十三 57 8 ほくには、よくわかりませんが、

十三 60 2 ほくは、それを聞きながら、目をあげて、かべにかかっている一まいの絵を見ました。

十三 60 9 ほくには、そのうまさがよくわからな

いけれど。

十四 59 4 ほくは、いちばんじみなものです。

十四 59 11 ほくがとびまわって、かふんをなかだちしてあげなかったら、

十四 60 2 だから、あのかぼちゃは、みんなぼく

のものだといつもいいのです。

十四 60 3 しかし、ぼくは、そんなよくのふかい、

身がってなことはないよ。  
十五 64 7 やえ子、ぼくのステッキを持っておくれ。

十五 87 1 え、あなた、ぼくを知っているの。

十五 89 12 ほくは、ほんとうにすみませんが、ちよつとのまも行かれないのです。

十五 98 6 「ぼく、あの子たちとおどりたいなあ。」

十五 99 6 また、ぼくを知っている子がいる。

十五 99 6 (光に) ほくは、どこへ行っても、だんだんに知られてくるね。

十五 99 9 きみ、ぼくを知らないの。

十五 99 11 だって、ほんとうに、ぼく知らない。

十五 101 3 ほく、わかった。

十五 101 5 ほくは、あなたのおうちの幸福のかしらですよ。

十五 101 8 ほくのうちにも『幸福』がいるの。

十五 102 5 ほくは、あなたにつかえる『健康の幸福』です。

十五 102 6 ほくは、きれいではないが、いちばんたいせつなものです。

十五 104 2 それから、ぼくは、まだなかまのうちでいっとういいのをしようかしませんでした。

十五 106 1 でもぼくは、まだわかいから、あの人

のわらうのを見たことがあります。

十五 107 2 だって、ぼく、その兄弟にあつたよ。

十五 111 12 ほく、おかあさんがそんなお金持たとは知らなかった。

十五 114 9 ほく、うちへ帰りたくないや。

十五 114 10 おかあさん、ここにいないなら、ぼくもここにいたいや。

ほくさい「北斎」(人名) 1 北斎

十二 111 7 この絵は北斎という江戸時代の人のかい

たもので、浮世絵といいます。

ぼくじしん「僕自身」(代名) 1 ぼく自身

十五102 5 園 まず第一に、ぼく自身をしようかいします。

ぼくじょう「牧場」(名) 1 牧場

十三17 2 園 デンマルクは、みどりの牧場と、もみと、

しらかばの森林と、

ぼくせい「北西」(名) 1 北西

十四76 9 園 われわれが冬期に受ける北西の風と、夏季の南がかった風になるのです。

ぼくそう「牧草」(名) 1 牧草

十三20 7 園 これを生かすのは、(略)、じゃがいもか牧草を植えることにありますが、

ぼくたち「僕達」(代名) 34 ぼくたち

四56 8 園 ぼくたちのたびが、あんまりおくれるから。

四97 10 園 だって、ぼくたちがつかまえたのだもの。

五13 4 園 「ぼくたち、まちがっていないの。」

六76 9 園 「先生、ぼくたちは動いたり息をしたりするから、生きているんですよ。」

六77 2 園 ぼくたちは、だんだん大きくなるから、生きているんですよ。

七49 5 園 それで、内野の人はいっしんになったので、かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。

七50 6 園 ぼくたちは、コートへでていった。

七52 2 園 思いがけなく、ぼくたちの勝となった。

七54 6 園 ぼくたちの勝である。

九35 1 園 小さなぼくたちの畑がようやくよくかいこなされて、

九41 7 園 ぼくたちがこの村へきたころは、

九42 11 園 母やおばがくわをいれるあとから、ぼく

たちはむちゅうになっていもをひろいました。

九43 2 園 ぼくたちのかりているやしきのまわりにも、大きなかきの木が三本あります。

九104 2 園 ぼくたち四十人は、のだ先生といしい先生につれられて、山のスキー場へいった。

九104 9 園 ぼくたちは、リックサックをせおって、

九106 5 園 その声にはげまされて、ぼくたちは、いっしょうけんめいに登っていった。

九108 11 園 ぼくたち三四人は、列をはなれて、ま一文子にすべりおりた。

九110 2 園 ぼくたちも、みんなつえをふって、それに答えた。

九110 9 園 それから、ぼくたちは、登っていったすべり、おりてはまた登った。

十一10 5 園 それはぼくたちだ。

十一10 5 園 三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくたち強い男の子だ。

十一15 9 園 小鳥が、はばたいてでて、くるくる、くるくる、ぼくたちの頭の上を、まわりはじめる。

十五90 2 園 ぼくたちは、たいへん急いでいるのです。

十五100 4 園 この人、まだぼくたちに会ったことがないんだってさ。

十五100 11 園 あなたの知っているのは、ぼくたちだけですよ。

十五100 11 園 ぼくたちは、いつだって、あなたのまわりにいるのですよ。

十五100 12 園 ぼくたちは、あなたといっしょに、たべたり、飲んだり、目をさましたり、

十五101 12 園 ぼくたちは、わらったり、歌を歌ったり、

十五102 2 園 でも、ぼくたちがなにをしていても、

あなたには、なんにも見えないし、

十五104 6 園 それは、ぼくたちのなかまでいっとう快活なのです。

十五105 10 園 ぼくたちは、よくいっしょに遊ぶのですもの。

十五106 8 園 ぼくたちは、『不幸』そのもののように、はじめなものになってしまふのです。

十五107 8 園 ぼくたちのなかまから、いちばん美しいものがいなくなってしまうわけですからね。

十五107 11 園 それは、毎日ぼくたちを照らす光に、二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。

ぼくのはっけん「課名」2 ぼくの見

六3 4 九 ぼくの見……九十九

六99 1 九 ぼくの見

ぼくら「僕等」(代名) 20 ぼくら

三39 3 園 ぼくらはくさはら道をおいてかえりました。

三40 2 園 ぼくらはかたをくんで、くさはら道をおいてかえりました。

三41 5 園 ぼくらはふたりになって、麦のほとすれすれにあるきました。

三44 3 園 ぼくらのほうがまけるかもしれない。

五44 3 園 ぼくら、日本の子どもは、はとだ。

五45 1 園 ぼくら、日本の子どもは、つぼみだ。

五45 7 園 ぼくら、日本の子どもは、星だ。

七51 4 園 ぼくらのほうのボールをつかうことになった。

七51 5 園 ぼくらのほうが、どんどんあてられて、センターまで、外野にでてしまった。

七52 4 園 しんばんの先生のあいずで、ぼくらは場所をこうたいした。

七52 7 園 どちらが勝ったかと思って、心配している

と、十一たい十で、ぼくらのほうが勝った。  
 七52 10 このときは、ぼくらのほうのボールが、よくあいてあたって、  
 九82 1 ぼくらは、ときどき手をとめて、そこをのぞきにいてみると、  
 十一88 8 ぼくらですいせんしようよ。  
 十一89 9 6 きみは、ぼくらの心持をよく知っている。  
 十一89 9 6 ぼくらのほりきつているとき、  
 十一810 10 6 ぼくらのつかれているとき、  
 十一810 10 6 ぼくらのしたいこと、  
 十一811 11 6 ぼくらのいやなことなど、きみはなんでもよくわかつている。  
 十一92 2 6 ぼくらは、きみについていきさえすれば、だいじょうぶだと思うんだ。  
 ほぐれる「解」(下) 1 ほぐれる《一レ》  
 六42 9 それがほぐれて、一列にビルディングをはなれる。  
 ポケット (名) 5 ポケット ぽけっと  
 一55 9 ぽけっとからうずらのたまごほどある  
 だいやもんどをひとつとりだして、  
 一64 10 おもわず ぽけっとをさぐりました。  
 十二10 2 なにかさがしては、それをひろってポケットにいられていました。  
 十二10 8 すると、老人は、ほおえみながらポケットに手をいれましたが、  
 十四20 11 シャツ、ボタン、ポケット、ズボン、  
 ほける「惚」(下) 1 ほける《一ケ》ひねほける・ふるほける  
 十二20 5 6 この実のかげは黄色くぼけているでしょう。  
 ほけん ↓アイリッシュユナシヨナルほけんがいしや

ほご「保護」(名) 1 保護 ↓どうぶつほごきょうかい  
 十五48 5 ところが明治になって、はん主の保護がなくなつたうえに、  
 ほご ひなたほご  
 ほごう「母校」(名) 2 母校  
 十五60 5 当時、母校札幌農学校の教師をしながら、  
 十五124 5 校門のかしの木よ、母校よ、ばんざい。  
 ほごく「母国」(名) 1 母国  
 十二81 2 この二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをいつてくれていることを知って、  
 ほごする「保護」(サ変) 1 保護する《一サ》  
 十五48 4 この赤絵製作の方法が他にもれないように、保護されていた。  
 ほこり「埃」(名) 1 ほこり ひすなほこり・つちほこり  
 九91 5 たかぎの服のほこりをはらいながら、  
 ほこりだらけ「埃」(名) 1 ほこりだらけ  
 十五62 11 6 おじさんのくつは光っているのに、ぼうやのくつはほこりだらけだから、  
 ほこる「誇」(五) 1 ほこる《一ル》  
 十32 3 学校では、かけがえのないひとりであることを、ほこるようになりたいものです。  
 ほころぶ「綻」(五) 3 ほころぶ《一ピーン》  
 十一41 7 6 廣場にどううたおとなりどうし、え顔にほころびあいさつをする。  
 十一42 7 6 ふきのとうで、すいせんにおい、うめもほころび、こちふけば、  
 十五69 3 その口もとがほころんで声さわやかに「略。」とよびかけそうであった。  
 ほさばさ (形状) 1 ほさばさ  
 七73 3 ほさばさのいけがきの上である。

ほし「課名」2 星  
 五32 七 星……五十二  
 五52 4 七 星  
 ほし「干」ひものほしざお  
 ほし「星」(名) 85 ほし 星 ↓いちばんほし・おほしさま・おほしさん・ごばんほし・さんばんほし・にばんほし・はたおりほし・はなればし・ほうきぼし・よばんほし  
 一52 7 6 そら、ところどころに、おおきなほしがひかっているでしょう。  
 一52 9 6 「かわらのすなは、みんなちいさなほしみたいです。」  
 二20 7 ねえさんはなほしよるゆめ山川  
 三94 3 よるのほしも、あさの風も、みんなのもです。  
 四23 3 6 あのだから、にいさんとよく星をみましたね。  
 四55 6 さいわい、雨もふらず、風もふかない、しずかな、星の光る夜でした。  
 四74 7 ほ——星のきれいな夜空。  
 四81 4 6 星のきれいなこのよるを、みんなでなかよくあそびましょう。  
 五45 8 6 ぼくら、日本の子どもらは、星だ。  
 五45 8 6 光った星だ。  
 五45 10 6 世界の空のかず多い、かがやく星のその一つ。  
 五53 2 西の方を見ると、日がしずんでまもない空に、大きな星が光っていました。  
 五53 8 6 だいたい色の大きな星だこと。  
 五53 11 6 そういいながら西の方を見ると、小さな星がちらちら光っていました。  
 五54 4 6 それより、ほら、もっともっと高いとこ

ろに、四ばん星——赤い星。

五54 8 空のまん中に、大きな星が光っていました。

五54 10 空は、まだ、ほんのりと明かるくて、つぎの星をみつけることは、できませんでした。

五55 3 もうすっかりくらくなっている、空いちめんに、星がでていました。

五55 4 、「さっきみつけた星は、どれだったかしら。」

五55 7 、「今夜、学校のいわで、ぼうえんきょうで星をみせますよ。」

五56 2 、「あそこに大きく光っている星ですよ。」

五57 8 、「ねえさん、あれが星なの。」

五57 9 、「星ですよ。」

五58 7 、「ほんとうに、夜の星ってきれいなものね。」

五58 10 、「ぼく、大きくなるまでに、どの星もみんなみてしまいたいな。」

五84 5 ささきくんは、星をしらべるといいました。六50 6 くらければこそ光る星、ねむりをふらす夜の空。

七9 2 星のちらばった青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ。

八27 1 そこには、星のかんむりをつけたむすめたちが、〈略〉をしたりして遊んでいました。

八33 2 天の川は、なん千なん万という星がかさなりあって、

八33 5 この星は、一つ一つがはっきりとみえないのですから、

八33 10 星のきよになりますと、これでは、もうまにあいません。

八34 8 光のとどく時間ではかると、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。

八35 1 さて、空の星は、地球からどのくらい

きよにあるのでしょうか。

八35 3 二十光年の星もあり、三十光年の星もあります。

八35 3 三十光年の星もあります。

八35 8 このほか、五十光年のところに光っている星があります。

八35 9 百光年の星もあり、一千光年の星のむれもあり、

八35 9 あり、一万光年の星もありま。

八35 10 一万光年の星のむれもあり、

八35 10 十光年の星もちらばっています。

九129 1 星が光りだしました。

九129 3 くもは、その子もり歌を耳にしながら、光る星をみあげていました。

九130 3 星はだんだんきれいに光ってきました。

十4 4 青空の美しさ、朝明けの空、夕やけの空の美しさ、月の夜、星の夜の美しさ。

十28 4 動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思ひます。

十47 1 作製に失敗したわたしは、星にもあたらないでしよう。

十三9 11 むかしは、星を見て世の中がみだれると

いたり、

十三13 8 火星や金星・木星などのような星は、太陽のまわりを、〈略〉まわっていることがわかり、

十三13 11 太陽のまわりをまわっている星の一つだ、

ということもわかりました。

十三14 5 そういふ星——これをわく星といひます

が——の空にえがく道は、だえん形であつて、

十三33 10 月が出ていれば、出ていたで美しく、星

の夜であれば、またさらに美しい。

十三33 11 青みがかった明かるい夜空に、なんきん

だまのような星がばらまかれて、

十四29 6 それは、空にかがやいている星です。

十四29 7 どうも日本人は、むかしから、あまり星に親しみをもちていなかったようです。

十四29 8 ですから、星のおとぎ話は、日本にはあまりありません。

十四32 1 私は、あなたがたに星を見るようにすめましたが、

十四32 2 、「星を見たってなにになる。」

十四32 3 天上の星とあなたがたとは、あまりにかけはなれているために、

十四32 5 けれども、星をこまかく観察したことから、農業が進歩したのです。

十四32 8 星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、じつは、ふかいつながりがあるのです。

十四32 10 星によってみちびかれ、星によって生きているといつてもいいすぎではありません。

十四32 10 星によって生きているといっても

十四33 2 この一むれの星を、ふつう太陽系とよんでいます。

十四33 5 この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。

十四33 9 地球をとりまいていて天の川の内がわにあるたくさん星のむれなのです。

十四33 11 このぎんが系全体が、星の世界の全部か

という、なかなかそうではありません。

十四34 1 あのぎんが系に負けないほど大きな星の世界が、なおいくつあるのです。

十四35 9 みなさん、ごらんさない、あの天上の星を。

十四35 11 大空の星をながめっていると、はてしのな

い、遠い世界にひきこまれるような気がします。  
 十四361 まことに、星の光は、声のないことばです。

十四364 むかしからすぐれた人たちは、星の光の中からふかい思想を読みとりました。

十四369 物理の時間に、先生から、星をつかめといわれ、

十四3612 夫人は、星はつかまなかったのですが、

十四379 もし、くしゃくしゃするようなことがあったら、どうか天上の星を見あげてください。

十四379 星は、きつと、あなたがたに力をあたえてくれるにちがいありません。

十四9810 それが、高く、高く、しだいにのぼって、大空の星のようにかがやくのを見た。

十四9811 たしかにそれは星であった。

十四9812 「かがやく小さな星よ、おまえはいったいなんだろうか。」

十四992 じつと見つめているうちに、一つの明かり星が落ちるのを見た。

十四993 その星が落ちるとき、空を横ぎって長い光のおをひいた。

十四996 星の落ちるときは、なにかのたましいが神さまのところへのぼっていくのだと、

十五1039 「星の出を見ることの幸福」が、むかしの神さまのような、金ぴかの着物を着て

十五1132 「ほおずりをしてもらえば、すぐそのなみだは、目の中の星になってしまうのですよ。」

十五1134 「おかあさんの目の中には、星がいつぱいある。」

ほしいー「欲」(形) 13 ほしい 《ーイー・カツ・ーク》

五683 「金のさかなさん、おばあさんが、新し

いおけがほしいといっています。」  
 五695 「うちのおばあさんは、家がほしいというのです。」

五871 「わしもほしいな。」

五918 「おまえは水がほしいのか。」

六11510 「こんなたこ、ほしいなあ。」

六11511 ほんとうにほしそうな口ぶりなので、

六1313 「このトンネルがほしかったのさ。」

八462 「そのほんとうに幸福なものをさがしてきてほしい。」

八499 だれでも幸福のほしくない人はありませんから、

八7910 「じゃあ、お願いだから口をださないでほしいね。」

九1397 「わたし、おかあさんにひと目あったら、もう、命はほしいとは思いません。」

十134 それから、三人の少女に、歌を歌ってほしいと頼みました。

十二761 「友だちがほしくなるのはやはりこんな晩だ。」

ほしがき 「干柿」(名) 2 ほしがき

五224 おじいさんにおあいして、おもちゃ、まっ白にこなふいたほしがきなどをいただいて、

九4310 「ほしがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしにとおし、のき下につるしてくれま

ほしくさ 「干草」(名) 1 ほし草

九284 「文」 ほし草にかけおとしとぶとんぼかな

ほしのひかり 「課名」 2 星の光

十四24 三 星の光……二十九

十四29 三 星の光

ほしは 「干場」(名) 1 ほし場

十2012 せんたく物のほし場。

ほす 「干」(五) 8 ほす 《ーシー・セ》

四755 め——ぬれたものはほせ。

七671 方々のうちで、ふとんほしてある。

八1084 もみをむしろの上にひろげてほしました。

八1086 天気のよい日に2日ほしたら、もみがよくかわきました。

八1092 のこっていたもみを、1日、日光にかんかんほして、すぐにもみすりをしてみました。

八1094 ほしてすぐ、もみすりをするものではないと思いました。

十216 看護婦がもうふをほしている。

十一407 「ほしたかばちは赤やら黄やら、にわとりどもはひなたぼこ。」

ポスト(名) 3 ポスト

三916 このポストも みんなのもんです。

三919 きんじよの人たちも このポストにいられます。

五162 ポストにいられると、友だちといっしょになりました。

ポストン 「地名」 1 ポストン

十五532 ナイヤガラのをきながめ、ポストン、

ニューヨーク、ワシントンと無事に旅を進めて、

ほそい「細」(形) 20 ほそい 細い 《ーイー・ク》

ひかほそい

四8210 ほそい ろうそくも 立てました。

四1217 光っている、ほそい 糸のようなものは

なんでしょう。

六1174 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹

二本と、それに、たこ糸やのりなどです。

七584 ほそい雲が、ますますほそくなる。

七584 ほそい雲が、ますますほそくなる。

八145 親せみが、あのほそくがった口のさきで、

かたい皮にあなをあけて、

八166 虫は、小さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいとがった口をもっています。

八193 ほそいくだのさきから、木の根のしるをわずかずつすっているせみの子たちは、

八1911 せみの子たちは、はじめにはあさいところにて、ほそい木の根のしるをすっています。

八957 もみのものとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。

九542 すこしいきましたら、谷川にそった道は、もうほそくなつてきてしましました。

十二651 根のさきは毛より細い。

十二653 その細いやわらかなものが、地をうがち岩をおしわけ、深く廣くのびていく。

十二664 それからでた細い根が、つなのようにからみあつて、葉を育て花をさかせる。

十二686 糸のこは糸のように細く、ひきまわしはひじょうにせまい。

十三44 細い、細い小枝のあみ目の先にも、はやふつくと、季節の命はわきあがつて、

十三44 細い、細い小枝のあみ目の先にも、十三576 おじさんは、そいいいながら、目を細くして、《略》ようなうすをなさいました。

十四5412 そこへ細い根をのびして、《略》のは、たいへんなほねおりです。

十四782 一方は太く、一方は細くなつて、まつすぐに割ることができなかったのに、

ほそながい「細長」(形) 5 ほそ長い 細長い 《イ・ーク》

三335 ぼそ長い びんに、さかながはいっていました。

七565 家と家とのあいだに、ほそ長く光っています

す。

八938 わかいはくちようは、そのほそ長い首をあけて、心のそこから喜ばしようにさげんだ。

十二508 首のほうからもかぶせてまるくしてから細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。

十二512 日本紙を細長く切つて、一まい一まいによくのりをつけてはりかためる。

ほそみち「細道」(名) 1 ほそ道

九369 また山へ登るほそ道の両がわに、

七563 根もとに、ぼたぼた落ちていきます。

十一424 もうそうちくも重荷にたえず、つばきの上にぼたぼた落す。

十一526 だれかのかさのしずくが、私のくつの上にぼたぼたと落ちてきたりした。

ぼたりぼたり(副) 1 ポタリポタリ

九1432 たまったつゆが、しずくになつて、ポタリポタリと落ちてきました。

ぼたる「蛋」(名) 7 ほたる

一411 ほたる。

五432 きのお、はじめてぼたるをみかけました。

五433 そちらでも、ぼたるはとびますか。

七577 ほたるを三びき、つかまえました。

七725 あ、ぼたるだ。

十一339 ほたるの追う夜も重なつて、麦のとりいれことなくすめば、はい色雲が空うちおおい、

十一565 花火やぼたる、とんぼの目だま、一つ一つ光る。

ぼたん「鉤」(名) 8 ボタン

九968 たかき 舞台のすみからボタンをひろつてくる。

九969 「これきみが落したボタンだろう。」

九9611 《略》と、ボタンをとる。

九972 やまだ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする。

九985 おい、ボタンついたか。

九991 このボタンをみたまえ。

九1024 ねえ、きみ、うちによつて、ねえさんにそのボタンをつけてもらわない。

十四2011 シャツ、ボタン、ポケット、ズボン、

ぼたん「牡丹」(名) 1 ぼたん

七734 ぼたんでもさいているのかと思つたら、まあ、子どもがわらつていたんだよ。

ぼたん(感) 1 ボタン

七597 ボタンと音がして、まりが、そこからとびこんできた。

ぼち「話手」 2 ぼち

二623 ぼち「わんわん、わんわん。」

二657 ぼち「空があかるくなつてきた。」

ぼちあて「宛」(名) 1 「ボチ」あてに書きました。

四274 たろうさんは、「ボチ」あてに書きました。

ぼちさん(名) 1 ぼちさん

二622 ぼちさんはのりましたか。

ぼちと(副) 1 ぼちと

十四8812 半年も雪にとざされていた地上に、ぼちと黒い土が見えはじめたときの喜びは、

ぼちよう「歩調」(名) 1 歩調

十二1158 こうして、みんなの歩調がそろつたときに、

ほっかい「北海」(名) 1 北海

十五668 私の父は、同志社を守り育てるために、北海の地をすてて、

ほっかいがんとくゆう「北海岸特有」(名) 1 北海岸特有



十三251 しげった林は、〈略〉、さらに、北海道特有の砂丘を、海岸近くでくいとめました。

ほっかいどう 「北海道」〔地名〕12 ほっかいどう北海道

五384 そのかたは、ほっかいどうで、やはり先生をしていらつしやるのです。

五392 〔副〕 ほっかいどうは、いまがいちばんたのしいときです。

五4110 〔副〕 ほっかいどうのみなさん。

五421 〔副〕 私は、まだ、ほっかいどうへいったことはありません。

八46 北はほっかいどうから、南はきゅうしゅうやそのさきの島々まで、

十一466 じゃがいもをみると、ぼくは、北海道のいなかを思いだす。

十一476 北海道の家には、うしが四頭いた。

十一4810 おとうさん、ぼくは、大きくなったら、

また、おかあさんといっしょに北海道へいきます。

十一491 北海道へいって、じゃがいもをつくります。

十一4911 日本のこぐらは、北海道だといいます。

十一503 ぼくは、大きくなったら、どうしても北海道へいこうと思う。

十一504 北海道へじゃがいもをつくりにいこう。ぼっかり (副) 1 ぼっかり

十一4610 じゃがいも畑のうねの向こうに、いつもぼっかりとういていたえぞ富士。

ぼっこ ぐひなたぼっこ

ぼっち ぐひとりぼっち

ぼっちゃん 「坊」(名) 5 ぼっちゃん

五93 〔副〕 どこかのおおあさんとぼっちゃんが、乗ってきたよ。

五96 〔副〕 じろう、せきをあけて、あのぼっちゃんをかけさせておあげ。

五126 〔副〕 「ぼっちゃん、さようなら。」

五239 〔副〕 ぼっちゃん、おかけなさい。

五249 〔副〕 ぼっちゃん、あなたもおかけなさいな。

ほっと (副) 4 ほっと

五199 ふくろの中からだされて、ほっとしている

と、

十一459 私はほっとしました。

十一8710 少年がベッドのそばのものと場所に帰ると、病人はほっとしたようにみえました。

十五3211 少年はほっとして、思わず後へたおれかかりましたが、

ほった (副) 2 ほった

四263 〔副〕 りんごさんのほったの赤いこと。

十五979 〔副〕 なんてかわいらしいほったをしていのだろう。

ぼつぼつ (副) 1 ぼつぼつ

十二2411 民ちゃんは、ぼつぼつものをいいかけています、ちよときいてもわかりません。

ぼつりぼつり (副) 1 ぼつりぼつり

十四8712 ぼつりぼつりとした足あとが、廣野を横切る一すじの道となる。

ほでりのみこと 「火照命」〔話手〕 15 ほでりのみこと

六804 ほでりの「なんだ。」

六808 ほでりの「そうだ。」

六812 ほでりの「どういふことだ。」

六818 ほでりの「そんなこと、いやだよ。」

六821 ほでりの「いくら一日でも、いやだ。」

六823 ほでりの「そんなにうがしたいのか。」

六825 ほでりの「そううまくつれるものではないよ。

六828 ほでりの「このつりざおを持っていきたい。」

六845 ほでりの「おもしろくなかった。

六848 ほでりの「おまえは、なにかつったか。」

六852 ほでりの「どうしたのだ。」

六855 ほでりの「どられたって。」

六857 ほでりの「——」

六8511 ほでりの「だいたいなつりばりをなくしてしま

うなんて。

六864 にいさん、ゆるしてください。」ほでりの「いや、ゆるすことはできない。」

ほでりのみこと 「火照命」〔人名〕 1 ほでりのみこと

六921 〔副〕 私は、ほでりのみことの弟、ほおりのみことです。

ホテル (名) 2 ホテル

十五202 そこには、氣持のいい、小さなホテルがここかしこに立っています。

十五204 このユングフラウの山中のホテルに、アメリカ人の一家族が来て、

ほてる 「火照」(五) 1 ほてる 《——》

九1058 だんだんのぼり坂になると、からだがほ

ててあせがでる。

ほど 「程」(副助) 92 ほど ぐさきほど・なかほど・なるほど

一5510 ぼけつとからうずらのたまごほどある

だいやもんどをひとつとりだして、

三226 くすのきは、いままでみたこともき

たこともないほど、大きな木になりました。

三231 どこからどこまで つづいて いるのか、

わからないほどになりました。

三1027 小人のようだった おひめさまは、三月ほ

どのあいだに、すくすくとせいがのびて、

三10210 そのうつくしさはたとえようもなく、

家のすみずみまで 光りかがやくほどなので、  
 三〇六 三〇「それほど きれいなのなら、ごてんに  
 よびたい。」  
 三二六 〇月さまが一どに十もでたかと思われ  
 るほど、あたりがあかるくなりました。  
 四八六 〇 ゆうがた、まつの木の枝は、まがるほど  
 雪に つもられて、だまつている。  
 四二一 〇 この光をだすために、どれほどたくさ  
 んの人が、はたらいっている ことでしょう。  
 四二一 〇 これが できあがるまでには、どれほど 苦  
 心をした ことでしょう。  
 四二九 〇 これを作りあげるまでには、どれほど 手  
 かずが かかっている ことでしょう。  
 五四〇 〇 あたりが美しくなると、私は、なんだか  
 ぼんやりするほどたのしい氣がします。  
 五七二 〇 それから三日ほどたつて、おばあさんはお  
 じいさんにいました。  
 六九四 〇 ねじはこれをきいて、とびあがるほどうれ  
 しかった。  
 六三七 〇 夕やけの大通りを、豆つぶほどの自動車や  
 電車が、ひっきりなしにゆききしている。  
 七二四 〇 兄は、二センチほどに大きくなったあおむ  
 しを、新しい葉にうつす。  
 七二五 〇 たまごをとってしらべてから、なん日ほ  
 どたっているかしら。  
 七三五 〇 私とさぶろうとは、まるで、一つからだに  
 なってしまふかと、思われるほどでした。  
 七三五 〇 それに、乗りがえもないし、二時間ほど  
 でつくのですから。  
 七五五 〇 はんたいに、ふでをいれるほど、かえって、  
 文章がみじかくなつていくことがあります。  
 七五九 〇 よけいなことばは、ちりほどもあつてはな

りません。  
 七五九 〇 土の上、一センチほどのところで。  
 八四二 〇 ちょうど十年ほどまえ、私のうちに、ピオ  
 という、うちじゅうの人氣者がいました。  
 八九四 〇 私たちの家のうち、中でも茶のまほど、す  
 きな、安心なところはないうように――  
 八四九 〇 ニミリほどある、白いうじのようなよう  
 ちゅうが、はいだして、  
 八二一 〇 地表から一メートルほどのぼったところに、  
 小枝がわかれていました。  
 八二五 〇 死ぬことなど考えられないほどにぎやかに  
 鳴きたてたせみも、  
 八三四 〇 「光年」を單位として計算しなければなら  
 ないほど、遠いきよりであります。  
 八三六 〇 今夜のはたおり星の光は、やく三十年ほど  
 まえに発した光だというわけになります。  
 八五七 〇 五百メートルほどさきに、ひきあげてある  
 小船がある。  
 八五九 〇 高いところのぼるほど、大きな世界が  
 みえる。  
 八八九 〇 世界じゅうで、あの人ほどりこうな人は  
 ありはしないから。  
 八八四 〇 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる  
 首をもつていた。  
 八八八 〇 その首をはくちようの方へさしのべ、自分  
 でもおどろくほどへんな大きな声をだした。  
 八四七 〇 いねの害虫――いなごが6ぴきほどいまし  
 ました。  
 九一六 〇 まだ、口ばしの下の赤色が、親つばめほど  
 こくありません。  
 九二〇 〇 「略。」という運動に全國民が、加わつ  
 たほです。

九二五 〇 ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたた  
 かくした貨車をつつて送つたほどでした。  
 九三六 〇 たぎをとりにいく山は、ぼくの家から  
 は十五分ほど登るのですが、  
 九四六 〇 ぼくにはまだ、セドリックほどわかりま  
 せん。  
 九六一 〇 みんな赤いズボンをはいたどんぐりで、そ  
 の数といつたら、三百でもきかないほどでした。  
 九六九 〇 これほどのひどい裁判を、まるで一分半  
 でかたづけてくださいました。  
 九七六 〇 みんなで、学校から四キロほどある貝づか  
 へいきました。  
 九八四 〇 百五十メートルほど登ったとき、ぼくが、  
 「略。」といつた。  
 九八九 〇 つれの人は、この茶人ほど熱心ではないか  
 ら、やめて帰ろうといつた。  
 九八四 〇 はじめの八キロほどは、村ざとがあつて川  
 べりに道もあつたが、  
 一〇一 〇 プラタナスの葉の大きいのは、やつでほど  
 もありました。  
 一〇七 〇 観察すればするほど、自然のおもしろさも  
 わかり、そのふしぎなことにうたれ、  
 一〇七 〇 この自動織機が、どれほど大きな役わりを  
 はたすことであらう。  
 一〇九 〇 幸吉は、あわつぷほどの核をこしらえて、  
 それを、母貝の体内にさし入れてみた。  
 一四四 〇 ある小さな生物が、海水いちめんふえて、  
 海水が茶色にかわるほどになるのである。  
 一五三 〇 そこに、すいれんの花が三つほど、きれい  
 にさいっていました。  
 一一一 〇 すこしも休まず働くので、かえって、お  
 となよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十一 44 10 弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進みました。

十一 62 8 命を失うようなあぶないときでも、いいたすことのできないほど、『いいえ』ということばはいくにくいのだ。

十一 66 3 五日ほどまえだと思ひます。」

十一 5 1 窓 「大洋を西へ西へと航海して陸地にであつたのが、それほどの手がらだらうか。」

十二 16 7 おじさんからゆづってもらつたもので、子どもにはりっぱすぎるほどだった。

十二 24 7 わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にものぼるほどうれしかったのです。

十二 29 2 立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二足ほど歩きました。

十二 39 3 この日が自分にもたらした喜びを思い返していたときの私ほど幸福な子どもを発見することとは、むずかしいでしょう。

十二 40 1 ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかつて、

十二 93 10 心を練るほど、ことばがみがかれてくる。

十二 101 7 赤色のすやきの土人形で、高さは一メートルほどあり、

十二 103 3 これは、千二百年ほどまえに、はじめて作られた日本のお金です。

十二 103 8 お金がなかったときにくらべて、お金ができてからはどれほど便利になったか、

十二 104 2 これは、九百年ほどまえに作られた平等院という建物の

十二 109 7 これをキリスト教の宣教師が日本に傳えたのは、三百五十年ほどまえのことです。

十二 113 2 この本を日本語になおすには、どれほど苦心したかわかりません。

十三 12 3 理由のないことを信ずる迷信は、今日、

世の中にどれほど害をなしているかしかない。

十三 17 4 九州ほどの本國と、三つの島からなっている（略）國であります。

十三 32 11 トネルのようなホートンには、それが、ふしぎなほどよくひびきたる。

十三 33 9 夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからないほどである。

十三 53 9 国 これは、いまから五百年ほど前に、イタリヤのラファエルという画家のかいたもので、

十四 10 11 国 それほど、たえずおかあさんのことを思っているのです。

十四 14 9 国 おかあさんと私とは、おたがい、それほどはなれてはいないのだ、

十四 31 12 日本は、見ちがえるほどりっぱな國になつていくのです。

十四 34 1 ああ、のぎんが系に負けないほど大きな星の世界が、なおいくつあるのです。

十四 34 9 一方のはしから、向こうのはしまでどくのくに、二十億年も、かかるほどの廣さなのです。

十四 35 3 たしかに、人間は、バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。

十四 46 11 いい氣持になつて、自分が水の中にひたっていることも、わすれてしまったほどでした。

十四 64 5 ふつうけんび鏡でも見えないほどの、たいへんこまかいちりのようなものです。

十四 70 7 それも、お湯が熱いほど、もようがはっきりします。

十五 6 5 窓 六つほどの子がおよぐゆえ水わかな

十五 30 12 石を取るが早い、目の前二メートルほどまでせまって来たこのあくまの胸をめがけて、

十五 37 11 漢字が中國から日本に傳えられたのは、

千七百年ほどまえであるが、

十五 59 6 ことばみじかにその關係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、

十五 82 7 みんなびつくりするほど、とてもほんとうと思えないほど、ふとつていて、

十五 82 7 とてもほんとうと思えないほど、ふとつていて、

十五 101 11 戸や窓のやぶれるほど、いっぱい『幸福』でつまっているじゃないの。

十五 102 1 窓 かべをたたき落し、屋根をもちあげるほどの喜びをこしらえているのですよ。

十五 110 3 窓 なにが幸福といつて、これほどの幸福は、世の中にありませんよ。

ほどく「解」(五) 1 ほどく「一い」

九 132 10 みつばちは、つなをほどいて、あみをくい切つて、にげていつてしまひました。

ほどとけさま「仏様」(名) 2 ほどとけさま

十二 102 7 この美しい、りっぱなほどとけさまは、いまから千三百年ばかりまえに作られたもので

十二 108 2 仁王さまは寺の門に立つて、ほどとけさまをおまもりします。

ほどとけさま「施」(五) 2 ほどとけさま「一しーす」

十四 46 6 ほかの母貝のがいうまくを切り取つてきて、一種の手術をほどとけさまを発見した。

十五 74 8 親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどとけさま、同じ機會を與えて、

ほどとけさま「時鳥」(名) 1 ほどとけさま

十五 12 1 窓 ほどとけさま鳴くに首あげガラス戸の

ほどとけさま「程無」(副) 2 ほどとけさま

十五 78 5 けれども、きみたちは、ほどとけなく、みか

たができるだろう。

三 802 ホウウ シニシニシニシニ  
ば ぽう ぽう (感) 1 ぽう、 ぽう

二六三 6 会 ぽほう、ぽほう。

ほへえみ 〔微笑〕(名) 1 ほへえみ

一三九 1 かれは、その胸に國運回復の計画をたて、その顔にほへえみをたたえて、

ぽぽー (感) 1 ポ、ポ

五九 1 ポ、ポ、シュー、シュー、シュ、シュ。

ほまれ 〔誉〕(名) 1 ほまれ

一八二 5 世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらうことになります。

ほめことば 〔褒言葉〕(名) 1 ほめことば

一五三 6 両親の喜び、おおぜいの人たちのほめことば、それはいまここでいうまでもありません。

ほめたたえる 〔褒称〕(下) 2 ほめたたえる

《一エ》

一三六 11 「略。」といってほめたたえた。

一五三 10 まっ白な山までも、朝日の中のこの勇ましい少年をほめたたえているようでした。

ほめる 〔褒〕(下) 7 ほめる 《一メーメル》

一五〇 10 さんちゃんのおかあさんも、ひわをほめました。

一四八 8 おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃん、ますますひわがかわいくなりました。

一六九 8 みのりの木の葉は喜びにみち、きよらかな風は、われわれの音楽をほめてくれる。

一六二 3 「略。」と、ほめてくださいました。

一七八 7 会 きょうね、國語の時間に、先生にほめられたの。

一七三 5 会 きょう、先生にほめられたんですって。

一八七 11 「略。」とほめたり、なでてやったり、

「略。」と、きいてみたりするのです。

ほら (感) 14 ほら

二四三 4 会 ほら、ちゃんとあやまるだろう。

一七五 3 会 「ほら、どうなるか、きをつけてみていなさい。」

一五八 8 会 ほら、あそこをごろん。

一五四 3 会 それより、ほら、もっともっと高いところに、四ばん星——赤い星。

一五五 5 会 はるおさん、ほら、あなたのみつけた二ばん星よ。

一五〇 2 会 ほら、羽がだめだから。

一四四 2 会 ほら、みてごろんよ。

一五四 6 会 ほら、よくわかるよ。

一七九 2 会 ほら、左のむねのところに手をあててごろんなさい。

一六〇 7 会 「ほら、のんのさん、のんのさん。」

一八五 10 会 ほら、あんなにほくをみています。

一二〇 8 会 ほら、そこで絵をかくている文雄さんがいつてましたよ。

一二四 4 会 ほら、分家のおじいさんの大すなじようるりさ。

一五九 3 会 ほら見たまえ。

ほらあな 〔洞へ〕(名) 1 ほらあな

一五〇 4 会 あれは、不幸のほらあなからにげて来た『とてもたまらなくなるゆかい』ですよ。

ホランド 〔ダブリュージェー〕ホランドはくし

ホランドせんせい (人名) 1 ホランド先生

一五五 8 会 室友ホランド先生、自然科学にもっともきょうみを有し、

ホランドはくし (人名) 5 ホランド博士

一五二 10 ぜひカーネギー博物館に館長ホランド博士をたずねるようにおっしゃった。

一五五 3 話に聞きいつていたホランド博士は、

《略》についてくわしく話し、

一五五 5 ホランド博士は、《略》、ひとりそのとき

の思い出にふけていられるようすだった。

一五七 11 ドアをおして、つかつかと中にすすんだ

ホランド博士は、客間に私をみちびき、

一五七 6 — ああ、忘れもしない、満面べにをさして語られたホランド博士のあの熱情のことば。

ほり 〔掘〕↓いもほり

ほりあ・てる 〔掘当〕(下) 1 ほりあてる 《一テ》

一八〇 9 会 手あたりしだいにやって、ぐあいよくなにかをほりあてたらいいが、

ほりおこす 〔掘起〕(五) 4 ほりおこす 《一シ・一ス》

一四二 4 会 かきの色つくころ、畑のいもをほりおこしました。

一四二 5 会 ぼくのうちでは、五日めごとにひとうねずつほりおこすことにしました。

一四二 6 会 苦労してかいこんした畑のいもをほりおこすのは、楽しく、うれしいことでした。

一四二 9 会 大きなうねのはだが地われしているのをほりおこすとき、胸がどきどきしました。

ほりくぼ・める 〔掘窪〕(下) 1 ほりくぼめる 《一メ》

一四二 7 会 茶人は、そこをほりくぼめ、小石でどてをつくり、泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、

ほりだす 〔掘出〕(五) 3 ほりだす 《一サ・一シ》

一五三 1 ほりだされた石炭が、山のようにつまれて

います。

一八七 7 そこでみんなは、ほりだしました。

一二〇 5 この人形は、はにわといって古代人のは

からほりだされたものです。

ほりつ・ける 〔彫付〕(下) 1 ほりつける 《一ケル》

十二1110 絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人との共同作品なのです。

ほりはじめる「掘始」(下一) 1 ほりはじめる「一メ」

六1263 五ひきのうさぎさんたちは、めいめいになをほりはじめました。

ほりもの「彫物」(名) 1 ほりもの

十二1087 ふたつとも鎌倉時代の作で、ほりものとして代表的なものです。

ほる「放」(五) 3 ほる「一ッ」

八644 図 そんなものはほっておいて、ほかの子どもに、およくことを教えてやるがいいよ。

八683 図 ほっておいてください。

十二254 おしめカバーをさせたままほっておくと、民ちゃんは平気でそこらをはいまわっています。

ほる「彫」(五) 2 ほる「一ッ・一ル」

十二526 あなの両わきを切りこんで、手さきをまめるめ、指の線をほる。

十二1084 右の仁王さまをほったのは運慶だといわれています。

ほる「掘」(五) 29 ほる「一ッ・一ラ・一リール」五103 図 こは、みなさんで、苦勞をしてほってくださいったトンネルですよ。

五354 これは、石炭をほっているところです。

六1261 図 「あなをほって、トンネルをこしらえて遊ぼうよ。」

六1265 まえ足でほっては、うしろ足で土をはじきだしました。

七662 もみじがまっかで、山のいもをほっている人が三人。

八159 せみの子どもたちは、自分の小さなまえ足でトンネルをほりながら、

八181 ことにまえ足は、いつもトンネルをほるのにつかいますから、

八184 土の中は、たとえ一二センチ歩くにも、トンネルをほっていかなくてはなりません。

八209 せみの子は、だいたんに、まっすぐなあなを地表に向けてほっていき、

八964 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。

九787 図 「きょうは、このかたの畑をすこしほらせてもらうことにします。」

九7910 図 それで、ここをほると、そういうものがみつかることがあるのです。

九801 図 ひとつこれからほってみることにしましょう。

九802 私たちは、もう、ほってみたくてうずうずしていました。

九804 図 まずどんなふうにほりますか。

九805 図 「ありそうなところをほってみます。」

九8010 図 あっちこっちほってみて、なんにもみつからないと、だめだと思ってやめてしまう。

九812 図 「ぼくは、どこか一つのところをきめて、廣く深くほっていくのがいいと思います。」

九815 図 まず、一メートルぐらいのほばで、東西に四五十メートルほってみることにしよう。

九821 先生は、〈略〉、ひとりでたんねんにほっておいになります。

九828 私たちは、だんだんしんけんになってほりました。

九847 だれもかれも、あせを流し、顔をまっかにしてほっています。

九848 みんなはほる手をとめました。  
九849 図 これで三十分ほりました。

九8511 図 さあ、あと三十分ほってみましょう。

十247 工員たちは、さくがん機やつるはしを持って、石炭をほっている。

十三194 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたり、道路をつくったり、みぞをほったりするときに、

十三206 みぞをほって水をそそぎ、平野の雑草をかりとり、

十三284 地面にこしをおろして、あなをほったり、土でおだんごのようなものをこしらえたり、

ホルスタイン「地名」2 ホルスタイン  
十三1710 賠償として、シュレスウィヒとホルスタインという、作物のよくできる二州をとられました。

十三258 戦いによって失われたシュレスウィヒとホルスタインとは、すでにつぐなわれて、

ポルトガル「名」1 ポルトガル語  
十四241 図 タバコ、カルタはポルトガル語、キセルとカボチャはカンボジア語だといわれている。

ほれる 1 うぬぼれる・ききほれる  
ほる「檻樓」(名) 1 ぼろ

十四828 ぼろを着ても心はにしき。

ほる・びる「滅」(上一) 1 ほろびる「一ビル」  
十三187 國のおこるかほろびるかは、このときに

さだまり、  
ぼろぼろ (形状) 3 ぼろぼろ

十四9311 ぼろぼろの前だれの中には、もつとたくさんはいつていた。

十四948 女の子は、〈略〉両足をそろえて、ぼろ

ぼろの着物の下で重ねて、  
十五1147 図 あの小さな家に帰って、私がぼろぼろ

の着物を着ていても、わかるだらうね。

ぼろぼろ (副) 1 ぼろぼろ

六395 ぼく、もう帰れないんだ。」なみだをぼろぼろこぼす。

ほわた「穂綿」(名) 1 ほわた

十一325 岸のやなぎのほわたがとんで、ほん「本」(名) 30 ほん 本 ↓ いっぱん・いっばんすぎ・いっばんぼし・いっばんみち・くほん・さんじっぱん・さんびやくじっぱん・さんぼん・しちほん・じゅうごほん・じゅうさんぼん・なんぼん・さんぼん・にじっぱん・にほん・はっぱん・ろっぱん・ろっぱんあし

一143 ほん一さつ、ちようめん二さつ、いろがみ五まい、くれよんひとほこ、

二522 おかあさんが、いすにこしかけて、本をよんでいらっしやいます。

二529 おかあさんは、本をおいて、りんごを手にとります。

四1205 本もよめます。

五287 ぼく、こんな本をもらいました。」

五314 すると、その人は、トランクからこの本をだして、

五848 いのうえさんは、國語の本にでていることばを、五十音にわけてみるといいました。

五1001 「略」と、へんな声でさえずって、さんちゃんの本をよむ声をまねます。

五1051 「略」と、本をよむようなひとりごとをいいました。

五1076 ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つぎからつぎへときかせました。

七219 きしもとくんが、弟のはるおくと、ふたりで、本をよんでいる。

八84 同じ日本の中でも、土地土地でほおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。

十二1 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。

十194 ひとりの子どもが、立って本を読んでいる。

十一2512 金次郎は、一さつの本をみつめました。

十一264 それは「大学」といって、かん文で書いたむずかしい本でした。

十一2611 いつもその本を手からはなさず、くり返しくり返し、大声で読みながら歩きました。

十一292 これを油にかえて、本を読み続けました。

十一4711 おかあさんがパンをやくそばで、ぼくはいつも本を読んでいた。

十二438 いただいた童話の本に、人形が夜中に集まっておどります話がありましたよ。

十二1099 いんさつ機も外國から渡ってきていましたから、こんなりっぱな本ができました。

十二1126 人体のことを絵いりで説明した本を、いまから百八十年まえに、日本で出版したものです。

十二11211 この本によって、日本の医学は、はじめてしっかりしたものとなりました。

十二1131 この本を日本語になおすのには、どれほど苦心したかわかりません。

十三83 知識は、略、自分で本を読んだり、考えたり、調べたりして、しだいにまじていく。

十三1510 だまっていられず、本を書いて、地動説を強くとなえました。

十三418 それに、うちはやけなかったから、本だってたくさんある。

十三5411 ちょうど、おじさんは、用事がなく、しよさいで、本を読んでいらっしやいました。

十四715 よく理科の本などにある、略の水の流れと、同じようなものになるわけです。

十五7910 私のつくえの上には、日本のみなさんが書いたあつい絵の本が、いつもおかれてあります。

ほん ↓ おほん

ほんおどり「盆踊」(名) 1 ほんおどり

十一368 夕風ふけばたいこ鳴り、清い歌声あちこちと、こよい楽しいほんおどり。

ほんき「本気」(形状) 1 本気

六717 はるえは本気になっていました。

ほんこく「本国」(名) 1 本國

十三174 九州ほどの本國と、三つの島からなっている略國であります。

ほんせん ↓ とうほくほんせん

ほんとう「本立」(名) 21 ほんとう

二428 ほんとう、おとうさん。

二429 ほんとうだとも。

三1102 ほんとうは、わたくしは 月の 世界の ものでございます。

五256 ほんとうは、それでうれしかったんです。

五962 ほんとうは、まひわというのですが、ふつうは、ひわ、ひわといっています。

六271 ほんとうだ。

六827 ほんとう、にいさん。

六957 ほんとうです。

六11610 「略」と答えましたが、ほんとうは、たこを作るのははじめてです。

七271 ほんとうだ。

七315 ほんとうだね、にいちゃん。

七327 ほんとう——ひげだね。

八397 ほんとうか。」

八828 ほんとうですよ。

十一626 『いいえ』といいきるには、ほんとうの勇氣がいる。

十二442 「ほんとう、おじさん。」

十三385(会) ほんとう……こんどの日曜ね。  
 十四302 かりにそれがほんとうのことだとしても、  
 十四971 やいた鳥が——それこそほんとうのまる  
 やきの鳥が、ほかほかとあたたかいきをたてて、  
 十五827 みんなびっくりするほど、とてもほん  
 うと思えないほど、ふとっいて、  
 十五1133(会) ほんとうだ。  
 ほんどう 「本道」(名) 1 本道  
 十一5911(会) 「本道は遠いから、近道をしよう。」  
 ほんとうに 「本道」(副) 53 ほんとうに  
 二3710(会) 空は、ほんとうに 青い 色でした。  
 三997(会) みなさんが大きくなってから、それ  
 みるのは、ほんとうに たのしい ものですよ。  
 三1139(会) ほんとうに おなごりおしゅう ございま  
 す。  
 四1056(会) りゅうぐうは、ほんとうに きれいな  
 ところでございます。  
 四11010(会) ほんとうに お礼の 申しようも ござい  
 ません。  
 四1146(会) 長い あいだ、ほんとうに おせわにな  
 りました。  
 五307(会) ほんとうに すまなかつたね。  
 五3110(会) それで、ほんとうに うれしいんです。  
 五424(手) ほんとうに、一どいってみたいと思いま  
 す。  
 五545(会) 「ほんとうに、はるおさんは目が早いの  
 ね。」  
 五585(会) ほんとうに きれいだな。  
 五587(会) 「ほんとうに、夜の星ってきれいなもの  
 ね。」  
 五602(会) ほんとうに、きれいにさきましたね。  
 六129(会) 自分もほんとうに役にたっているのだ。

六192(会) ほんとうに いい 氣持だ。  
 六442(会) ほんとうに あのかかしが帰っているだろ  
 う。  
 六978(会) みつかって、ほんとうに よろしゅう ござ  
 いました。  
 六11511 ほんとうに ほし そうな 口ぶりなので、  
 「略。」といいますと、  
 七329(会) ほんとうに きれいね。  
 七363(会) 私は、ほんとうに 困ってしまいました。  
 七437(会) 楽しい 音楽を させてくださる 心持を、  
 ほんとうに ありがたく 思います。  
 八213(会) こしを 高くして、ひょっくり ひょっくり 歩  
 いていくのは、ほんとうに おかしな ものです。  
 八458(会) ほんとうに 幸福な 人を見つけて、その 人  
 の 着ている シャツを 王さまに お着せ するのです。  
 八462(会) その ほんとうに 幸福な ものを さがして きて  
 ほしい。  
 八465(会) ほんとうに 幸福な 人は、やすやすと みつか  
 る ものでは ありません。  
 八482(会) ほんとうに わしは 幸福な ものだ。  
 八625(会) わたしは、もう ほんとうに にくたび れた。  
 八655(会) ほんとうに しちめん ちょうの ひなかしら。  
 八692(会) あれは 美しく はありますが、たちは ほん  
 とうに いい んです。  
 八888(会) こは、ほんとうに きれいで、春の 喜びが  
 みちあふ れていた。  
 八932(会) ほんとうに 幸福 であつたが、すこしも いば  
 らなかつた。  
 八958(会) これが、ほんとうに めになる ので しょうか。  
 九117(会) ドドン となる 大だい この 音は、ほんとうに  
 うちよ せる 波の 音を きいて いる よう であつた。  
 九11310 林を ぬって 長い きより を すべる のは、ほん

とうに ゆかい であつた。  
 十556(会) むりに 書くと、自分が ほんとうに 思つたり、  
 感じたり、考へたり している ことは、ちがつた  
 もの になります。  
 十一88(会) ほんとうに きみの いうと おりだ。  
 十一8312(会) まあ、ほんとうに 思いが けない ことも  
 ある ものだ。  
 十一844(会) 「ほんとうに、ぼく、うれしい。」  
 十一909(会) ほんとうに 感心 な子だ。  
 十二181(会) ピピッと 鳴いて いた ときには、ほん  
 とうに おかしい よう でした けれど——  
 十二895(会) あいさつ にしても、ほんとうに 感謝の 心  
 持を こめて いう とくと、  
 十二1155(会) 民主主義 という ことばを ほんとうに 生か  
 して いく より ほか に 道は ありません。  
 十三774(会) 遠い、はるかな 空のおくで、鳴いて いる  
 からすの 声も、ほんとうに のんびり として、  
 十三386(会) だから、ほんとうに つれて 行つて くだ  
 さいよ……  
 十四143(手) おとうさんのお写真は、ほんとうに 生  
 き写しで、  
 十四4910(会) この おじょうさんこそ、ほんとうに この  
 歌を 歌つた 人という べきです。  
 十四779(会) 私は すぐに これを ため して みました が、  
 ほんとうに そのと おり でした。  
 十五3911(会) かなは、日本の 文化 にとって、ほんとう  
 に 大きな 発明で、  
 十五901(会) ぼくは、ほんとうに すみ ませんが、  
 ちよつと の まも 行かれない のです。  
 十五9911(会) だって、ほんとうに、ぼく 知らない。  
 十五1134(会) ほんとうに おかあさん の 目だ。  
 十五12211(会) パイオリン と ピアノ 合そう など、はじめ



てのことなので、ほんとうにうれしく思いました。

十五123 9 ほんとうにみんないい同級生であった。

ほんとに「本」(副) 2 ほんとに

四56 7 ほんとによかったね、かつちゃん。

六70 6 ほんとに歩くとおもしろいな。

ボンナフ (名) 1 ボンナフ

十10 2 そのいなかの町には、ボンナフという石の橋があつて、

ほんに「本」(副) 1 ほんに

十71 4 ほんに、これは上等の黒さとうだ。」

ふたりは、かわりばんこに指をつっこみました。

ほんの「本」(連体) 3 ほんの

十二20 1 青い小さな実が、ほんの二つ三つ、つ

いたりつかなかったりだったのに、

十四94 1 一本のマッチで——ほんのたった一本の

マッチで、火をとすことができたならば、

十五83 9 ほんの形だけでも、廣間の方をさがし

てみよう。

ほんのり (副) 3 ほんのり

四135 4 かもめすいすいとんでいく、空にほ

んのりふじの山。

五54 9 空は、まだ、ほんのりと明かるくて、つぎ

の星をみつけることは、できませんでした。

九147 7 夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりと

しらみかけてきました。

ほんばこ「本箱」(名) 1 本ばこ

六120 8 ぼくは、だいに本ばこの上にのせておき

ました。

ほんぼん (副) 2 ポンボン ほんぼん

六122 5 うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、

ほんぼんとおさるさんにながてやりました。

八30 9 そのせつな、けんぎゅうは、うしの首をか

るくボンボンとたたきました。

ぼんぼん (感) 2 ポン、ボン

八73 10 「ボン、ボン」と、空で鳴った。

八73 11 「ボン、ボン」と、また鳴った。

ぼんぼんどけい「時計」(名) 1 ボンボンどけい

四70 1 ゆうだちと かけて、なんととく。ボンボ

ンどけいととく。

ぼんぼんぶね「船」(名) 1 ポンボン船

七65 7 もやのかかったおきの島、ボンボン船がで

かけていく。

ぼんぼんぼんぼん (感) 1 ポン、ボン、ボン、ボ

ン 三85 6 ポン、ボン、ボン、ボン。

ほんもの「本物」(名) 3 本物

十三54 10 だから、この絵も、本物をごらんになっ

ているだろうと、思ったからです。

十三56 4 これでも、本物にくらべたら、やつぱ

り、月と太陽みたいにながうといつてもいいな。

十三56 7 本物はね、いま、イタリアのフロレン

スという町の絵画館にかざつてあるよ。

ぼんやり (副) 3 ぼんやり

六102 5 長い物がぼんやりみえる。

九26 2 かんあさんがぼんやりみえるかやの中

九97 8 たかぎ、首をさすりながら、その場にぼん

やり立っている。

ぼんやりする (サ変) 1 ぼんやりする 《—スル》

五40 2 あたりが美しくなると、私は、なんだか、

ぼんやりするほどのいい感じがします。

ほんりゅう「本流」(名) 1 本流

九124 7 念のため、もっと上流の本流の水を飲んで

みると、もうそれはただの水であった。

## ま

ま「間」(名) 29 ま 間 いわま・おひろま・

きやくま・すきま・たえま・たにま・ちゃのま・つ

かのま・とこのま・ひるま・ひろま・ふたまつづ

き・まつびるま

一19 7 ひらいたと おもつたら、みる まに つ

ぼんだ。

一20 5 つぼんだと おもつたら、みる まに ひ

らいた。

二56 5 こんなことをかんがえているうちに、

いつのまにか、ねむってしまった。

三97 9 心に思ったことは、いつのまにかきえ

てしまいましたが、

四135 1 一つの まにやら 天人は、春のかすみ

につつまれて。

五53 1 西の方を見ると、日がしずんでももない空

に、大きな星が光っていました。

五105 6 一つのまにか、しじゅうからは、どこかへ

いつてしまいました。

六13 8 「あつ。」というまに、川の中におちてし

まいました。

六55 6 そとをみると、空は一つのまにか、雲一つ

なく、きれいにはれわたっていました。

六137 10 そのうちに、しかさんは、一つのまにかは

ぐれてしまいました。

七65 1 一つのまにか、葉ばかりのさくらになって、

毎日ほれ。

七75 2 ちよつとのまに、いなくなりました。

八238 みるまに、羽はすらりと のび、からだの色もこくなつていきます。

八733 どちらもたまごからはいだしてまもないものであった。

九4110 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

九421 手 そのかわりまた、いつのまにかがなが渡つてきました。

九444 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

九767 みるまに、貝がらの山が家のまえにできま

す。

九823 ぼくらは、ときどき手をとめて、そこをのぞきにいつてみると、先生のかごの中には、いつのまにか、《略》などがたまつています。

九931 しばらく、間——やまだ、さがし物のようすで地面をみながらでてくる。

九1344 いいにおいをかいでいると、いつのまにか、《略》からだのいたみもきえていきました。

十2412 みるまに、トロツコにつまれる石炭の山。

十1911 大水で、田や畑をみんな流されたりしましたので、いつのまにかびんぼうになつて、

十18810 チチロは、いよいよよくせわをして、ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでした。

十48211 文 世の中は、三日見ぬまのさくらかな。

十4884 おそらく、まっすぐに歩こうと思つたのであろうが、いつのまにか曲がつてしまう。

十5901 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十5921 こんな話をしてるまに、《略》、えん会の中にひきずりこんでしまいました。

十五10410 見るまに、《略》、なにかにぶつかりながら、チルチルに近づいて来ます。

ま2 マ ま

四7710 ま——まつに月。

六1124 もしやと思つて、はなをつまんで「マ」「メ」「モ」といつてみたら、

まあ(副) 24 まあ

四1151 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

五291 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

五301 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

六242 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

六285 まあ、おねがいしてみよう。

八791 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

八8211 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

九515 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

九528 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

九538 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

九6011 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

九725 やまねこは、さけの頭でなくてまあよかったというふうに、口早にぎよしゃにいました。

九803 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十726 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十761 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

な晩だ。まあ、火をたきつけておくれ。」

十三588 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十五548 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十五557 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十五8311 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十五893 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十五9011 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十五1084 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十五1093 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

十五11912 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

まあ(感) 25 まあ

一648 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

一651 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

二507 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

二698 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

四1273 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

六82 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

六711 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

六898 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

六10310 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

六1202 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

七317 どのまにどこへ渡つていったのか、いまはもういなくなりました。

七三七 ㊦ まあ、まあ。

七三五 ぼたんでもさいているのかと思つたら、まあ、子どもがわらつていたんだよ。

九四三 ㊦ 「まあ、おまえは、わたしをわすれたのかい。」

一一八三 ㊦ まあ、ほんとうに思いがけないこともあるものだ。

一二二九 ㊦ まあ、そう。

一四三三 ㊦ まあ、なんというしげさでしょう。

一四九二 ㊦ まあ、なんといううれしいことだろう。

一四九六 ㊦ それがゆらゆらともえあがると、まあ、なんというふしぎなことだろう。

一四九七 ㊦ そのとき、まあ、どうだろう。

一五九七 ㊦ まあ、なんてかわいらしいのだ。

一五九八 ㊦ まあ、あのふとつた子のわらうことはどうです。

一五九九 ㊦ まあおまえたち、ここにいたの。

一五一一 ㊦ それに、このきれいな着物は、まあ、なんでこしらえたの。

一五一一 ㊦ まあ、おまえ、見たことがなかったかい。

まあまあ (感) 2 まあまあ

五〇九 ㊦ 「まあまあ、この鳥は、いくつもげいができるのね。」

六三 ㊦ まあまあ、かかしさんですね。

いったりします。

十63 ㊦ 能は、そのうたいにつれて、役者が美しい舞を舞つたり、

まい (助動) 13 まい 《マイ》

三二五 ㊦ 「日のあたるようにするには 切るよりほかにしかたがあるまい。」

三二八 ㊦ これはただのにんげんではあるまい。

三三〇 ㊦ 「どうかして、かぐやめを月の世界のの人にわたさないくふうはあるまいか。」

五九六 ㊦ 自分でえさをとつたり、遠いところまでとんでいくことはできないよ。

八四二 ㊦ 世の中にわしより幸福なものはあるまい。

八六六 ㊦ なにしろ、水にいられてやらなければならぬまい。

九七五 ㊦ やまだ、みせまいとしてからだをねじつてかくす。

九八〇 ㊦ それで、ぼくも負けまいと思つたんだ。

一〇三三 ㊦ 「このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。」

一一六五 ㊦ 少年は、もしやわるい知らせをききはしまいかと、おそろしさにふるえながら、

一四二二 ㊦ 小包二つは、おそろしくいっしょには着きますまい。

一四八六 ㊦ このものすごいありさまを映画化することは、たやすいことではあるまいが、

一五五七 ㊦ その一つに日本の青年をとまらせて、そのせわをしてはくれまいかと、

まいあがる ㊦ 「舞上」(五) 2 まいあがる 舞いあがる 《一ツ・ーリ》

ふたりは、いっしょにふわりとまいあがった。

まいあさ ㊦ 「毎朝」(名) 6 まいあさ 毎朝

三二三 ㊦ まいあさ 日がでると、この木の西がわのなん十という村々が、日かげになります。

三七八 ㊦ お日さまは まいあさ かえって きますよ。

三七八 ㊦ 雲さえ でて いなかったら、まいあさ あえますよ。

六六八 ㊦ 毎朝、このらんに、その日の朝の温度を書きつけましょう。

一二二九 ㊦ こんなふうにして、毎朝おべんとうをしらえて持たせているうちに、

一二七二 ㊦ そうして、毎朝早くきては、芭蕉のおきないうちに、いどから水をくみあげたり、

まいお・りる ㊦ 「舞降」(上) 5 まいおりる 舞いおる 《一リ・ーリル》

九四九 ㊦ ぼくたちがこの村へきたころは、湖には美しい白さがたくさんまいおりていましたが、

一五二三 ㊦ サアツという羽音をたてて、空中に風をまき起して、みんなの上へ舞いおりて來ます。

一五二四 ㊦ 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて來ました。

一五二五 ㊦ 羽ばたきも苦しげに、しだいしだいに、下の方へ落ちるように舞いおりて行きました。

一五二六 ㊦ もしこのわしが、その舞いおりるとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、

マイクル (人名) 9 マイクル

三六一 ㊦ そのとき、マイクルが、「略。」といいました。

三六五 ㊦ マイクルが いいました。

三七二 ㊦ マイクルが たずねました。

三七四 ㊦ マイクルが たずねますと、「略。」と、

おかあさんがおっしゃいました。

三76 10 こんどはマイクルがたずねました。

三80 6 「『略』。」と、マイクルがいいいます。

三81 10 マイクルがいいいました。

三81 10 マイクルはみどりがすきでした。

三83 9 「『略』。」と、マイクルがききました。

まいご 「迷子」(名) 1 まい子

四83 まい子をうちまでおくりとどけてくれます。

まいこむ 「舞込」(五) 1 舞いこむ 《ーン》

十五59 8 会 じつにめずらしい日本人が舞いこんで来たものだ。

まいじょうず 「舞上手」(形状) 1 まいじょうず  
四133 5 会 月の都の天人たちは、みんなそろってまいじょうず。

まいいたつ 「舞立」(五) 2 舞いたつ 《ーチーツ》  
十五30 5 わしは、羽音はげしくすこし舞いたった

かと思うと、こんどは両羽をあおりたて、  
十五31 3 大わしは、この思わぬいたでにおどろいて、ぱつと一まず舞いたちましたが、

まいちもんじ 「真一文字」(名) 1 ま一文字  
九108 11 ぼくたち三四人は、列をはなれて、ま一文

字にすべりおりました。

まいにち 「毎日」(名) 30 まいにち 毎日  
三117 7 そこで、まいにちかしこいでしをひとりずつ、はんだかのところへやって、

三100 4 おじいさんはまいにち、のや山へ竹を  
とりにいきました。

三103 8 まいにちまいばんあつまってきて、お  
じいさんの家のまわりをとりまきました。

四68 8 世界じゅうの人の心をつなぐ糸を、ま  
いにちあつかうところです。

四41 2 三十ばのがんばは、まいにちまいにち、北  
へむかつてたびをつづけていました。

四41 2 三十ばのがんばは、まいにちまいにち、  
五41 6 手 まいにち、たくさんちをしばります。

五41 6 手 まいにち、たくさんちをしばります。

五61 7 会 それでも、まいにちあつのるをのぼした  
のは、だれかしら。

五64 9 会 こうして、まいにち、たっしやで生きて  
いけるのは、だれのおかげだろう。

五97 3 まいにち、わたり鳥のむれがとんできます。  
五109 1 近所の人たちは、まいにち、こまった、こ  
まったといっていました。

六27 3 会 毎日あせだくだったね。  
六80 5 会 にいさんは毎日海へでて、魚をとって  
らっしゃるが、

六80 6 会 私は毎日山へいって、鳥やけものをとっ  
ていますね。

七64 5 毎日書いてきたあさがお日記。  
七65 1 一つのまにか、葉ばりのさくらになって、  
毎日はれ。

八10 9 毎日なにかかわったことをしてかしては、  
みんなをおどろかせたり感心させたりします。

八31 10 ふたりは、毎日野原で楽しく遊びつづけま  
した。

八32 4 はたおりひめは、毎日はたをおりながらな  
きました。

九22 2 飛行機は、それから毎日のように、アルプ  
スをこえてヴェニスへとんでいきました。

十5 12 毎日の生活のらんざつとあわただしさの中  
に、それを失っている。

十6 5 われわれは、どんなにでも毎日の生活を、  
ゆたかに、楽しくすることができ。

十10 10 みあげるように高いプラタナスの枝からは、  
黄色い葉が、毎日のように落ちました。

十35 2 佐吉は、上京して機械館へ毎日かよった。  
十一21 1 どの家からも、おとなの男の人が、毎日  
ひとりずつで働くことになりました。

十二71 5 先生の近くにいればこそ、毎日教えても  
らえるので、  
十二75 8 その声は、毎日ききなれている曾良の声  
です。  
十五61 4 手 「ちかごろ、満ぼろ先生はいかが、毎  
日お話ししております。」  
十五107 11 会 それは、毎日ぼくたちを照らす光に、  
二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。  
十五110 7 会 そのうえ、毎日、新しい力と、わかさ  
と幸福とがますますですよ。  
まいねん 「毎年」(名) 6 毎年  
七9 8 会 毎年、新しく入学した子どもたちが、わ  
たしのそばへやってきた。  
七9 9 会 毎年、新しい卒業生たちが、わたしのそ  
ばからさつていった。  
九61 2 会 どうも、毎年この裁判で苦しみます。  
十二57 8 昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎  
年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、  
十二58 2 もしそれができたら、毎年ひとりずつ、  
おにに人間をくわせてやるというのであった。  
十三10 12 日本には、毎年、約二百万人の人が生ま  
れるが、  
まいのぼる 「舞上」(五) 1 舞いのぼる 《ール》  
十一42 1 会 学校へいそぐ子どもたちの、息はま白に  
舞いのぼる。  
まいばん 「毎晩」(名) 3 まいばん 毎晩  
三103 8 「『略』。」といつて、まいにちまいばん  
あつまってきて、

十一21<sup>12</sup> 毎晩、家に帰ってくる、  
十二18<sup>12</sup> 毎晩鳴いているうちに、すこしずつ  
じょうずになっていくようです。

まいもどる「舞戻」(五) 1 まいもどる《一ツ》  
八92 ときたまそとのろじへだしてやっても、す  
ぐまいもどってきます。

まいる「参」(五) 6 まいる《一ツ・一リ》

三14<sup>10</sup> おしゃかさまは たくさんのでしをつれ  
て、王さまのごてんにまいりました。

四105<sup>1</sup> にお礼に りゅうぐうへ おつれしようと  
思って、ここまで まいりました。

六93<sup>10</sup> 魚どもをよんでまいりました。

六94<sup>3</sup> たいだけは、病気でねておりますので、  
ここへはまいっておりません。

九61<sup>1</sup> じき、どんぐりどもがまいりましたよ。  
十五71<sup>11</sup> 「満ぼうがまいりましたよ。」

ま・う「舞」(五) 15 まう 舞う《一・イ・ウ・一  
エ・一ツ・一ワ》

四132<sup>3</sup> 天人の まいを まって、みせて いただ  
けませんか。

四132<sup>5</sup> それでは、お礼に まいましょう。  
四132<sup>6</sup> でも、その はごろもがないと、まう  
ことができません。

四132<sup>8</sup> はごろもを お返ししたら、あなたは、  
まわすにかえっておしまいになるでしょう。

四133<sup>3</sup> 天人は、それをきて、しずかに まいます。  
四133<sup>6</sup> 黒い ころもの そろいで まえば、月  
は まっ黒、やみの 夜。

四133<sup>8</sup> 白い ころもの そろいで まえば、月  
は 十五夜、まんまるい。

四134<sup>2</sup> 天人は、まいながら、だんだん 天への  
ぼって いきます。

六35<sup>10</sup> くるくるまいながらおちていくかし。

六98<sup>6</sup> 舞 めでた、めでたとさかなたち、みんな  
でまうやら、うたうやら。

十63<sup>2</sup> 能は、そのうたいにつれて、役者が美しい  
舞を舞ったり、

十一12<sup>5</sup> あげはのちようが、まつのかげから舞っ  
てでる。

十一14<sup>8</sup> せみも鳴き、ちようも舞い、まつさおな  
海もわらい、たんぼのわた毛も遠くとんでいく。

十二108<sup>10</sup> 舞う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶ  
りによって、

十三36<sup>5</sup> やなぎのわたが、どこからともなくたく  
さん舞ってくる。

まえ「前」(名) 118 まえ 前 しいちにんまえ・う  
でまえ・おひるまえ・さんかげつまえ・すうじつま  
え・にさんにちまえ・ひやくはちじゅうねんまえ

一37<sup>8</sup> ちいさな 川が、うちの まえを さらさら  
とながれて います。

二55<sup>7</sup> いまはおいでになりませんが、まえには  
おいでになったに ちがい ありません。

二59<sup>9</sup> 五年の人たちも、六年の人たちも、そ  
の まえの人たちも、これをつかいました。

三16<sup>1</sup> はちをもった 手が、するすると おしや  
かさまの 目の まえに のびて きました。

三33<sup>4</sup> ひようほんしつの まえです。

三63<sup>7</sup> ふたりの 女の子は、まえに こしかけまし  
た。

四25<sup>1</sup> 五 そうして、みっちゃんの しゃしんの ま  
えに かざりました。

四53<sup>1</sup> 目の まえに、高い、高い 山が そびえて  
いました。

五24<sup>1</sup> ところが、ぼくの まえに、まつぼづえを

ついた、わかい人がいるんです。

五30<sup>10</sup> まえからも、やりたいと思っていました  
が、なかなかできなかったのです。

五42<sup>9</sup> つばめが、私のすぐ目の まえを、いった  
りきたります。

五55<sup>1</sup> 食事をすませてから、またちよっと、家の  
まえにでてみました。

五77<sup>3</sup> みると、まえに住んでいた、ふるい小さな  
家が たつて いました。

五82<sup>6</sup> なま水をのまないことや、ねるまえにたべ  
ないことや、《略》などを、話しあいました。

五90<sup>4</sup> わしのおかあさんはな、ずっとまえに、  
さどが島においでなさったことがあった。

五92<sup>4</sup> みんな、もっとまえへでてごらん。

六16<sup>2</sup> そのとき、ありの まえをひとりのかりうど  
が 弓矢を持って 通りました。

六45<sup>7</sup> かしの目の まえに、風にそよぐ 金色のい  
ねが、いちめんにつづいて いる。

六54<sup>4</sup> ふみおはふと 氣がついて、 まえの方にある  
木の下へいきました。

六55<sup>6</sup> ふみおがねるまえにそとをみると、  
六60<sup>8</sup> それから、まえにならったのを思いだして  
書いてみました。

六71<sup>8</sup> はるえは、まえに「こくこ」でならった  
「よみかき」の ところを、ふと思いだしました。

六88<sup>7</sup> 海のごてんの 門の まえに、大きな木が立っ  
ている。

六97<sup>5</sup> 海の神は、ほおりの みことの まえにさした  
しながら、

六106<sup>1</sup> 弟は、まえに、「《略》。」ということばを、  
そのようにいったことがあるのではない。

六132<sup>8</sup> うさぎさんたちの まえに、大きなしあさん

があらわれました。

七17 ㊦ このまえより、なの花がへつっているわ。

七19 ㊦ このまえきたときは、風が強かったから、  
ちようちよがでなかったんですね。

七39 3 いきなりさぶろうをだきあげ、となりのお  
じさんの目のまえへ、つきだしました。

七44 2 私のまえにもぼうしがきた。

七44 7 「略。」といつて、青年のまえにすすみ  
でた。

七57 1 つむじ風が、わたしのまえを走っていく。

七68 3 まえのやりかたは、ちようど、文章をくわ  
しく書きたすのになっています。

七88 9 まえにたべのこした古い草は、ふみつける  
だけで、ちつともたべません。

八42 ちようど十年ほどまえ、私のうちに、ピオ  
という、うちじゅうの人氣者がいました。

八53 あるデパートのまえのうすくらがりに、大  
ぜい人が立っているの、

八35 6 今夜のはたおり星の光は、やく三十年ほど  
まえに発した光だというわけになります。

八50 10 その家のまえにいつて、「幸福」が立ちま  
した。

八51 2 まずしいこじきのようなものが家のまえに  
いるのを見て、「略。」とたずねました。

八51 11 こんどは、にわとりのいる家のまえへいつ  
て立ちました。

八52 2 いやなものでも家のまえに立つたように顔  
をしかめて、「略。」とたずねました。

八53 7 こんどは、うさぎのかつてある家のまえへ  
いつて立ちました。

八56 8 まえのよりはまっすぐだが、  
八58 2 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけ

しきが目のまえにひらけてくる。

八58 10 みはらし台に立つてみると、目のまえに高  
い山々がそびえて、ずつとつづいている。

八60 10 けれども、親あひるは、ひながでてくるま  
えに、もうつかれきつていた。

八88 4 まえより強く空気をうち、とぶことができ  
た。

八92 10 年をとったはくちようが、新しいはくちよ  
うのまえにきて頭をさげた。

八93 6 にわとこの木でさえ、新しいはくちようの  
まえに枝をたれた。

九5 10 この音と、ほかの音とをいっしょにひいて  
みると、まえとはちがった感じがします。

九30 2 ㊦ まえ向けるすずめは白し朝ぐもり  
九32 3 ㊦ まえより元氣で、からだもしつかりして  
きました。

九32 7 ㊦ 家のまえをちよつとでると、はるか下の  
方に美しい湖がみえます。

九33 5 ㊦ まえは、もつともつといろいろな魚がい  
たそうです。

九46 5 ㊦ ぼくは、この手紙を数日もまえから、喜  
んで書きだしました。

九62 10 こしから大きなかまとりだして、ザック  
ザックとやまねこのまえのところの草をかりまし  
た。

九63 7 黒い、長いしゅすの服を着て、どんぐりど  
ものまえにすわっていました。

九75 1 いちろうは、自分のうちのまえに、どんぐ  
りをいれたますを持って立っていました。

九76 8 みるまに、貝がらの山が家のまえにできま  
す。

九96 1 たかぎのまえにじようぎをつきだして、

「略。」

九104 5 まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、  
スキーをするには、ちようどよかった。

九105 10 きゆうな坂にかかると、まえの方で、のだ  
先生が、「略。」と、大きな声をかけられる。

九110 6 そのみごとなすべりぶりにみとれていると、  
先生たちは、もう目のまえにこられた。

九134 6 目のまえのばらの花が動いています。

十11 1 おとうさんが、休み茶屋のまえにこしかけ  
て、コーヒーをわかつてもらっていますと、

十41 12 これは、まえにさしおいておいた核によつ  
て発生した半円眞珠であることが、わかった。

十55 9 思うことがどんどんと書けていたまえのこ  
ろが、うらやましくさえなりました。

十68 12 こしをうしろにひき、せんすの手だけをま  
えにつきだして、あおぎつづけていました。

十一7 11 ㊦ みんながさせてくれたら、コックスの  
まえにすわつて、整調をやつてみたい。

十一43 7 ようち園の子どもたちは、そのまえにお  
となしくこしかけています。

十一44 10 弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進  
みました。

十一44 11 そうして、園長さんのまえに向いたとき、  
「略。」と、大声でいきました。

十一45 6 園長さんのまえにでて、だんをあがり、  
両手をずつとさしのべて、

十一45 12 大ぜいの目のまえで、「略。」とさけん  
だ弟よ。

十一60 3 太郎は、まえから父に、「略。」とかた  
くとめられていたのである。

十一61 5 ㊦ まえからあぶないといつておいた、あ  
の橋を渡ったのではないかね。

十一 63 6 ナボリの大きな病院の門ばんのまえへ  
 いて、一通の手紙をみせ、父親をたずねました。  
 十二 66 3 ㊦ 「五日ほどまえだと思ひます。」  
 十一 67 3 そうして、大きなへやの、開いたドアの  
 まえまできますと、  
 十一 88 1 その熱心とそのしんぼう強さとは、まえ  
 とすこしもかわりませんでした。  
 十二 23 8 父がまえからそういうときのことを考え  
 て、  
 十二 56 9 みそ五郎は、雲仙岳にこしかけて、〈略〉  
 まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。  
 十二 77 6 スタンドには、はじまるまえからたいへ  
 んな見物人でした。  
 十二 78 7 私は、いままで試合のまえにこんなふう  
 にはげまされたことはありませんでした。  
 十二 97 6 みたところ、なんのかわりもない貝です  
 が、いまから三四千年もまえの貝です。  
 十二 102 9 りっぱなほとけさまは、いまから千三百  
 年ばかりまえに作られたものであります。  
 十二 103 3 これは、千二百年ほどまえに、はじめて  
 作られた日本のお金です。  
 十二 104 2 九百年ほどまえに作られた平等院とい  
 う建物の中にある名高いほうおう堂です。  
 十二 109 7 これをキリスト教の宣教師が日本に伝え  
 たのは、三百五十年ほどまえのことです。  
 十三 20 2 ユートランドの平野には、八百年あまり  
 前には、よくしげった森林がありました。  
 十三 29 11 前の荷の上に、小さなどらまぶらさげ、  
 その両がわに、ふんどうをつるしておく。  
 十三 53 9 ㊦ これは、いまから五百年ほど前に、イ  
 タリアのラファエルという画家のかいたもので、  
 十三 57 7 目を細くして、ありありとその絵を目の

前に見るようなようすをなさいました。  
 十三 59 5 老人のぼうさんらしい人が、その前にひ  
 れふしている絵でした。  
 十三 59 11 ㊦ わたしが行ったとき、この絵の前には、  
 一台の長いすがおいてあったが、  
 十四 13 11 ㊦ おふたりの写真、いま、この手紙を  
 書いているつくえの上、私の前においてあります。  
 十四 41 8 ㊦ わたしたちの前に、朝がきた。  
 十四 46 3 来客を前にして、客間で歌っているのと、  
 ちっともちがわなような歌いかたです。  
 十四 73 11 しかし、それも、前の温度のむらとなに  
 か関係があることだけはたしかでしょう。  
 十四 80 2 なん百年という前からつくられて、子に、  
 まごにと傳えたことではないかと思ひます。  
 十四 93 5 美しく火のともった家々の前を、そろそ  
 ろとかなしげに通って行きながら、  
 十四 95 10 それがもえ続けている間、大きなろの前  
 にすわっていた。  
 十四 100 2 けれども、前よりはもっと楽しそうなよ  
 うすをしていた。  
 十五 24 5 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女  
 の子をつかんで舞いおりて來ました。  
 十五 30 12 石を取るが早い、目の前二メートルほ  
 どまでせまって來たこのあくまの胸をめがけて、  
 十五 32 6 血まなこになって目の前のてきを相手に  
 しているものには、なんにも耳にはいりません。  
 十五 33 8 目の前の美しい、大きなユングフラウの  
 まっ白な山までも、  
 十五 35 9 いまから五六千年ぐらいまえに、  
 十五 37 11 漢字が中國から日本に傳えられたのは、  
 千七百年ほどまえであるが、  
 十五 41 1 ローマ字は、まえにいったように、その

大もとをたずねれば、エジプト文字から出たもの  
 である。  
 十五 47 7 有田に焼物がはじめられたのは、いまか  
 ら三百三十年ばかりまえのことである。  
 十五 53 6 守衛にみちびかれておくまった館長室の  
 前に立った私は、  
 十五 71 9 町の東にある寺の一角に、こけむす一つ  
 のおほか、その前に立ったおばさんは、  
 十五 73 4 思ひ出にうたれている私の目の前で、博  
 士は、〈略〉。といって、日記をくりひろげ  
 十五 82 2 園の前の方に、高い大理石のまいる柱で  
 できた大廣間のようなものがあらわれます。  
 十五 82 11 みんな右手の前の方に、光をとりまいて  
 きたまっています。  
 十五 99 2 「幸福」のむれ、まえよりはすこしせの  
 高いのが、廣間の中にかげこんで來て、  
 十五 120 3 校長先生のお話を聞いていると、ずっと  
 まえのことが思ひ出されてきた。  
 まえあし〔前足〕(名) 8 まえ足  
 六 26 5 まえ足ではっては、うしろ足で土をはじき  
 だしました。  
 七 90 3 ねこが顔をあらうように、うさぎも、まえ  
 足で、耳や顔をなでていました。  
 七 90 7 が、すぐ、まえ足をおろしてしまいました。  
 七 94 7 あと足を長くのばして、まえ足を胸の下に  
 いれていました。  
 八 15 8 せみの子どもたちは、自分の小さなまえ足  
 でトンネルをほりながら、  
 八 17 11 ことにまえ足は、いつもトンネルをほるの  
 につかいますから、たいへんかたく、  
 八 21 10 虫は、それにとりつくくと、まえ足のつめで  
 かくそれにしがみついて、

十506 黒いいぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、

まえかけ「前掛」(名) 1 まえかけ

十211 まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。

まえだれ「前垂」(名) 1 前だれ

十四9312 ぼろぼろの前だれの中には、もつとたくさんはいつていた。

まえば「前歯」(名) 3 まえ歯

七776 歯 そうそう、そのらくだは、まえ歯が二三本ぬけてはいませんか。

七811 歯 らくだのまえ歯が、二三本ぬけていることまで。

七8310 歯 では、まえ歯のぬけているということは、なぜわかったのか。

まがいもの「粉物」(名) 1 まがいもの

十4510 かつて、パリーの眞珠商たちが、幸吉の手になる養殖眞珠は、まがいものであるといった。

まがお「眞顔」(名) 1 ま顔

六1304 たぬきさんが、ま顔になっているので、まかせ ↓ちからまかせ

まかせ 「任」(下二) 1 まかせる 《一せ》

十726 歯 まあ、まかせておけ。

まがたま「曲玉」(名) 1 まがたま

十二10110 手首やむねなどには、まがたま、まるたまなどがかざってあります。

まがり「曲」↓ひとまがり

まがる「曲」(五) 14 まがる 曲がる 《一ツ・一ル》

三413 いちろうくんが、右の 方に まがって

三1113 あまりしんぱいしましたので、かみのけ

が白くなり、こしもまがってしまいました。  
四416 きちんとそろえたようになつてとんだり、まがってつりばりのようになつたりしました。

四863 ゆうがた、まつの木、枝は、まがるほど

雪に つもられて、だまっている。

六1197 まがっているのでもんだうでしたが、いろに、くふうして、うまくはりつけました。

七573 ろうかを曲がったら、ふつと、風がふいてきた。

八566 すこし歩いてからふり返つてみると、足あとが曲がっている。

八581 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけ

しが目のまえにひらけてくる。

八842 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもつていた。

九562 みえない方の目は、白くびくびくうごき、

足もびくびく曲がってやぎのようですし、

十三1111 まつすぐなことや曲がったことは、知識をもととして考えなければならぬ。

十四727 熱いところとつめたところとのさかいで、光が曲がるために、

十四884 おそらく、まっすぐに歩こうと思ったのであろうが、いつのまにか曲がってしまった。

十四885 どうしてこんなに曲がるのか。

まき「巻」 ↓えまきもの・たつまき・どうぶつえまき・はちまき・はらまき

まき「時」 ↓たねまき・もみまき

まき「新」(名) 3 まき

十一2610 まきをとり山へいく、そのいき帰りに、

十二712 また、まきが少ないと、近所へ木をひろいにいったりしました。

十二748 曾良が水をたくさんくんでおいてくれたし、まきもたくさんとってきてくれてあるし、まきあ・げる「巻上」(下二) 1 まきあ・げる 《一ゲ》

六328 かかしが風にまきあげられる。

まきえ「時絵」(名) 2 まき絵

十二1108 まき絵というのは、うるしをぬったうえに、金や銀のこなをまいて、もようをあらわしたものです。

十二1112 まき絵は、日本のすぐれた工藝品の一つ

で、古くから外国人にもてはやされてきました。

まきえしよだな「時絵書棚」(名) 2 まき絵書だ

十二1104 まき絵書だ

十二1107 江戸時代にできたまき絵書だなんです。

まきおこす「巻起こす」(五) 3 まきおこす まき起す 《一・シース》

九1911 その廣告は、たいへんはんきょうをまき

おこしました。

十五231 サアツという羽音をたてて、空中に風を

まき起して、みんなの上へ舞いおりて来ます。

十五306 大きな風をまき起すようにして、少年の

周囲をおおい包むいきおいでせまって来ました。

まきげ「巻毛」(名) 1 まき毛

十四934 その小さなマツチ賣りのむすめは、自分のまき毛のことも、雪のことも考えなかった。

まきげちゃん「巻毛」(名) 2 まきげちゃん

一572 びんちゃん、まきげちゃん、みんなわたくしのうちにいたきょうだいです。

一607 歯 まきげちゃんも、おともだちとなかの

いい、やさしいこになりました。

まきつく「巻付」(五) 5 まきつく 《一・イ・キ・一ク・一ケ》



七126 あさがおのつるがまきつくように立ててある、竹や木のことをいうのです。  
 七634 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。  
 七634 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。  
 十388 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものがいりこみ、それに、貝のだす眞珠質がまきつき、  
 十398 うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功するわけであつたが、  
 まきつ・ける 「巻付」(下一) 1 まきつける「ケ」  
 四547 ほうたいをもつていたが、手早くくるくるとまきつけました。  
 まきば 「題名」2 牧場  
 十三38 牧場  
 十三505 牧場  
 まきば 「牧場」(名) 3 牧場  
 五411 けさも、まきばにだしてやりました。  
 十三496 牧場が、生き生きしたみどりであらう、きりぎりすが、楽しい景色の中でわらう。  
 十三506 牧場の泉を、そうじに行つて来るよ。  
 まぎれ 「紛」(名) 2 まぎれ くるくるとまぎれ・たいくつまぎれ  
 九123 ところで茶人のしたには、まぎれもないいい味がはつきりと感じられるようになった。  
 九1263 そこを飲んで飲んでみると、それこそまぎれもないうまい水であつた。  
 まく 「幕」(名) 8 まく  
 六178 まくがあくと、きりぎりすが大ぜいあつまつて、音楽会をしています。  
 六309 — まく —

九883 まくがあく。  
 九1034 — まく —  
 十二549 つくえやいすを重ねて、つかう人のかくるところを作り、まくでかくす。  
 十三4310 三郎の声が終るころ、しずかにまく。  
 十五822 雲のまくがあがると、  
 十五831 おくへ向かつて歩いて行つて、黒いまくをあけて、すがたをかくしてしまひます。  
 まく 「膜」 じがいうまく  
 まく 「蔀」(四五) 15 まく 《イ・カ・キ・ケ》 じばらまく・ふりまく  
 五71 水車をくるくるまわし、たんぽに水をいれ、はたけにも水をまいていく。  
 五605 おまえが、たねをまいたのでしたね。  
 五607 この春まいたのです。  
 五608 たねをまいたから、こんなさいたのですね。  
 五6210 たねはおかあさんがまいたのだけれど、  
 八949 こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるということ。  
 八965 水のすむのをまつて、むらのないようになしました。  
 八966 ひたさない種もみをまいたところには、べつにしろしをつけておきました。  
 九1174 たべのこしのめしつぶまげばうちつどうすずめの子らと日なたぼこする  
 十一2812 一にぎりのあふらの種をかりて、かわらへいって、あき地にまいておきました。  
 十一397 おおむぎ・こむぎの種まきすんで、そらまめ・えんどうみなまいた。  
 十二1109 まき絵というのは、うるしをぬつたうえに、金や銀のこなをまいて、もようをあらわした

ものです。  
 十四611 人間が来て、まいてくれたのだった。  
 十四617 いちばんいい種を、來年もわすれずにまいてもらうことができさえすれば、  
 十四829 まかぬ種はえぬ。  
 まく 「巻」(五) 8 まく 《イ・カ》 じとりまく  
 四936 風にふかれて、うずをまいて、どんどん降ってくる。  
 六1015 そうして、その一まいをぐるぐるとまいた。  
 六1016 ちょうど、めがねのたまがはまるくらいの大きさにまいて、  
 六1017 きちんとはまつたとき、まいた紙を糸できりきりとまいて、動かないようにした。  
 六1017 まいた紙を糸できりきりとまいて、  
 六1019 つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐるとまいた。  
 九1323 そのうちにみつばちのからだも、つなにかれそうになりました。  
 十二497 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。  
 まくら 「枕」(名) 1 まくら  
 十二752 ふだんは「略」、大川の波の音がバサリバサリと、まくらにひびくのですが、  
 まくら 「真暗」(形状) 1 まくら  
 九1162 階上のわが電燈のきえにけりみわたす家々みなまくらなり  
 まくら 「のうし」(題名) 1 まくら  
 十五402 あの有名な源氏物語や枕草子などは、すべてこのかなによつて書かれた作品である。  
 まぐろ 「鰯」(名) 1 まぐろ  
 十二985 このほか魚では、たい、さば、まぐろ、

かつおなどをたべました。

まけ「負」(名) 1 負け ↓ おおまけ

十二867 わずかな点のちがいで、清水選手の負けとなりましした。

まげぐあい「曲具色」(名) 1 まげぐあい

六1196 紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ、ちようどいい長さにひごを切りました。

まける「負」(下二) 13 まける 負ける 《一ケケル》

三444 ぼくらのほうがまけるかもしれない。

六324 、「これぐらいの風にまけるものか。」

六1343 、「そのかわり、ぼくが負けたら、この角を、おつてしまってもいい。」

六1362 しかさんも負けてはいません。

九926 こんどは負けたらしくたちどまつて待つている。

九1019 、「それで、ぼくも負けまいと思ったんだ。

十444 よる年なみにも負けず、研究を重ねたすえ、

十585 みんな負けずにひろいました。

十736 、「私が負けて、ドサリとこのまにたおれたはずみに、

十一499 おとうさんに、負けないように働きます。

十四84 、「じゅみょうにも負けなければなりません。」

十四341 あおぎんが系に負けないほど大きな星の

世界が、なおいくつかあるのです。

十四357 人間の力というものは、うちゅうにも負けないくらい廣大で、

まげる「曲」(下二) 3 まげる 曲げる 《一ゲ、

ーゲル》 ↓ おりまげる・ねじまげる

六1195 よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりにまげるのですから、めんどうでした。

九556 せいひのひくい、おかしなかつこうの男が、

ひざをまげて、手に皮のむちを持って、

九567 その男は、横目でいちろうの顔をみて、口を曲げて、にやつとわらつていました。

まご「孫」(名) 3 まご ↓ おまごさん

十二242 ふたりのまごというのは、父母にとつてのことですが、

十四802 なん百年という前からつくられて、子に、まごにと傳えたことではないかと思ひます。

十五519 、「じつは、私は今右衛門のまごにあたるものです。」

まごころ「真心」(名) 2 まごころ 真心

十四161 、「たとい、からだはこちらにいても、このまごころを書いてお送りして、

十五527 真心こめて教えてくださった世界的魚類

学者デビッド・スター・ジョルダン博士は、

まごたち「孫達」(名) 2 まごたち

十二235 ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、

十五511 なん十年の月日をへだてて、いま、まごたちによつてふたたび結ばれることになった。

まことさん「人名」 4 まことさん

一332 まことさんのかいたことば。

一356 、「まことさんは。」

二165 みちこさん まことさん よしこさん

二202 よしこさん まことさん みちこさん

まことに「誠」(副) 2 まことに

十四361 まことに、星の光は、声のないことばです。

十四842 ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、

まことにきれいな形をしていること、  
まさお「話手」 2 まさお

三43 まさお「やあ。」

三47 まさお「はねかえる。」

まさお「正男」(人名) 4 正男 正男

十一599 あくる日、太郎は、友だちの正男と一雄と三人づれで、

十一5912 「略。」と、正男がいうと、一雄はすぐ賛成した。

十二297 、「わたしのげたをひっかけて、正男のあとを追っかけて道まででていたのよ。」

十二941 正男は、きよ年のいまごろのことをふと思ひだす。

まさおさん「人名」 3 まさおさん

二611 すると、まさおさんが、「略。」といいました。

四201 まさおさんは、あいての人を「おかあさん」にきめて、

六1032 、「なんです、まさおさん。」

まさおちゃん「正男」(人名) 1 正男ちゃん

十二244 おいの正男ちゃんは、五つですから、もうひとり遊びができますが、

まさこ「人名」 4 まさこ

五525 ゆうごはんをまつあいだ、私は、まさこをうば車に乗せて、はるおと大通りにでました。

五529 まさこが、「略。」というので、

五534 手をたたいてやりますと、まさこも、まるくふとつた手をたたきました。

五5411 まさこをおかあさんにわたして、

まさこちゃん「人名」 2 まさこちゃん

四247 、「ゆうがた、おとなりのまさこちゃんと、あのにけのそばまでさんぽしてきましたね。」

五533 、「まさこちゃん、一ばん星みつけたのね。」

マサチュセッツしゅう「地名」 1 マサチュセッツ

州

十五587㊦ マサチューセッツ州アマスト大学に入学

北側の第八号室に入る。

まさに「正」(副) 1 まさに

十五182㊦ ああ、日本、まさに立つべし。

まさにたつべし「課名」2 まさに立つべし

十五22 一 まさに立つべし……四

十五41 一 まさに立つべし

まさにたつべし「題名」2 まさに立つべし

十五29 まさに立つべし

十五161 まさに立つべし

まし「増」ひひまし

まし「増」(形状) 1 まし

八898㊦ 冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがましだ。

ましかく「真四角」(形状) 5 ま四角

六1142 ま四角で、骨が二本しかついていないたこです。

六1173 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹二本と、それに、たこ糸やのりなどです。

六1178 はじめに半紙をま四角に切りました。

六1178 なが四角から、ま四角に切る切りかたは、

いつかおかあさんに教えていたいただきましたから、

六1191 紙のうらには、まん中に、ま四角に切った

ときにつけたすじがたてについています。

まじめ「真面目」(形状) 3 まじめ

九595 男は、きゅうにまじめになって、「略」。

といいました。

九1099 にこにこわらいながらおりてくるもの、ま

じめな顔でやってくるものなどさまざまである。

十一7310 医者は、せいの高い、すこしがんだ、

まじめな顔をした老人でした。

まじりあう「混合」(五) 1 まじりあう《一ツ》

十一787 愛情とかなしみとのまじりあった、

しみじみとしたそのように、

まじりけ「混気」(名) 1 まじりけ

七557 はっきりとえがかれた一つのかたちは、ま

じりけのない宝石のようなものでありますから、

まじる「混」(五) 5 まじる《一ツ》

三152 はんたかも おしやかさまのはちをもつ

て、でしの中にまじっていました。

三382㊦ しょうかをうたっている声が、オル

ガンにまじってきこえてきます。

九156 この中には、親つばめもいますが、ことし

生まれた子つばめが、たくさんまじっています。

十一522 あふれそうな乗客にまじって、どうやら

乗車口へもぐりこむことができた。

十四205 外国からはいつてきたことが、いろい

ろまじっていることをくわしく話してくださった。

ましろ「真白」(形状) 1 ま白

十一421㊦ 学校へいそぐ子どもらの、息はま白に

舞いのぼる。

まじわる「交」(五) 1 まじわる《一レ》

十四8110 しゅにまじわれば赤くなる。

ます「升」(名) 3 ます

九729 ぎよしやは、さっきのどんぐりをますにい

れて、はかつてさげびました。

九7310 ふたりは馬車に乗り、ぎよしはどんぐり

のますを馬車の中にいれました。

九751 いちろうは、自分のうちのまゑに、どんぐ

りをいれたますを持って立っていました。

ま・す「増」(五) 6 ます《一・シ・ス》

三1163 ふしのくすりと手紙は、かえて、かな

しみをますたねになるばかりでしたので、

九55 四色、五色と数をましていけば、その感じ

はまたふかくなるでしょう。

十二604 おとめの数をまして、田植え歌勇ましく、

一心にはたらいだ。

十三85 知識は、人から教えられたり、《略》、考

えたり、調べたりして、しだいにましていく。

十三86 自分のつとめをはたしていくために、知

識をますことは、たいせつなことがらである。

十五1108㊦ そのうえ、毎日、新しい力と、わかさ

と幸福とがますのですよ。

ます(助動) 3948 マス ます 《マシ・マシヨ・マス・

マセ・マチヨ》ひあがりとうございます・いただき

ます・おはようございます・どういたしまして

一107㊦ たたまをかぞえましよう。さきに、し

一111㊦ いたまをかぞえましよう。《略》。」

一115㊦ いたまをかぞえましよう。《略》。」

一1110㊦ 。もう一どやりましよう。五 か

一153 は、くちをつかいます。めもつかいま

一154 ます。めもつかいます。いきもつかい

一155 す。いきもつかいます。ころもつか

一156 。ころもつかいます。じをかくとき

一162 には、てをつかいます。えんぴつもつ

一163 えんぴつもつかいます。かみもつかい

一164 す。かみもつかいます。まだあります。

一165 います。まだあります。なんでしょう。

一221 「のうたをうたいました。それから、こ

一223 かんがえておどりました。わたくしは、

一226 だちとてをつなぎました。「のみちをい

一231 げんきよくあるきました。「みんなかわ

一233 のところはこまりました。そこで、りょ

一234 のようにうごかしました。「うたをうた

一236 らっぱのようにしました。」「くつがなる

23 8 は、あしぶみをしました。「はれたおそ  
 24 1 をうえにさしあげました。二ばんの「  
 24 4 びよんびよんとびました。ここが一ぱ  
 24 6 ろかったとおもいます。十一 あいさ  
 26 2 もりうたがきこえます。「略。」「略」  
 26 5 「ことりもねむりました。らじおもね  
 26 6 。らじおもねむりました。くさもきも  
 26 7 くさもきもねむりました。十一 人の  
 28 7 いろいろにかかります。「略。」「略」  
 28 8 目でなにをみましたか。「略。」「  
 28 9 目でなにをききましたか。十三 手  
 30 2 ながる。まだあります。足となかのい  
 30 6 する。ほかにありませんか。この手で、  
 32 1 ぎつぎとかいてみました。ただおさんの  
 34 3 みたいとおもいますか。「略。」「へ  
 34 4 へ。」「かぜになりますか。「略。」「略  
 34 6 りたいとおもいますか。「略。」「へ  
 35 1 んはなにになりますか。「略。」「へ  
 35 2 しははなにになりますか。「略。」「略  
 35 7 へ。」「うみになりますか。「略。」「略  
 36 4 「ことりになりますか。「略。」「略  
 37 2 なる かぜがふきます。かぜがそよそ  
 37 3 がそよそよとふきます。あさかぜが、そ  
 37 5 よとのほらをふきます。川がながれて  
 37 6 川がながれています。川が、さらさら  
 37 7 さらとながれています。ちいさな川が、  
 38 1 さらとながれています。いぬがはしっ  
 38 2 いぬがはしっくきます。しろい いぬが  
 38 4 いぬがはしっくきます。しろい こいぬ  
 38 6 ようにはしっくきます。あさがおのは  
 38 7 がおのはながさきました。あさがおの  
 38 8 はながいつつさきました。うすもいろ

39 2 つつ かきねにさきました。ゆめをみま  
 39 3 ました。ゆめをみました。ゆうべ、おも  
 39 4 もしろいゆめをみしました。ゆうべ、おと  
 39 6 いったゆめをみしました。十七 山の  
 42 2 かに、わたしがいますよ。みんなもう  
 42 3 んなもうごいていますよ。木もはえて  
 42 4 よ。木もはえていますよ。せんせいの  
 43 6 そばにたっています。「略。」「略  
 44 2 「略。」「とききますと、どこかで、「へ  
 44 5 というこえがしました。「略。」「ふた  
 44 7 そいでえきにきました。「略。」「かく  
 44 10 せいきがよんでいます。「略。」「略  
 45 4 んなこえがきこえます。だんだんわた  
 45 7 のばんがちかづきました。へやの なか  
 45 10 ものをしらべています。かたなの、て  
 46 2 あげられてしまいました。「略。」「わた  
 46 4 したちのばんがきました。かばんをあ  
 46 5 あけてなかをみせました。「略。」「おん  
 46 7 人がやさしくいきました。つぎのへや  
 46 8 かけてまっていますと、おおきなむ  
 46 10 たくしたちをよびました。おじいさんは  
 47 4 いてみながらいいました。「略。」「そう  
 48 1 はんをおしてくれました。「略。」「きし  
 48 3 四 きしやがきました。かくせいきの  
 48 4 えが、またひびきました。「略。」「おと  
 48 5 しゃはすいています。ごじゅんにゆ  
 48 8 もつをもってあげました。わたくしは、  
 48 9 手をとってあげました。よにんがむ  
 48 10 かよくこしをかけました。へやには、き  
 49 2 ながかざってありました。びいっと、  
 49 4 さんがふえをふきました。きしやはす  
 49 6 はすぐはっししました。「五」 きが

50 8 も、みんなわらいました。しゃしようさ  
 50 10 まわってきていいました。「略。」「略  
 51 2 んねるにはいります。みなさん、どう  
 51 5 「略。」「さあねましよう。よにんは  
 51 7 ぐうとねてしまいました。「略。」「すず  
 52 1 たので、目がさめました。もうあさで  
 52 3 川がながれていました。「略。」「ひと  
 52 8 うさんも目をあけました。「略。」「略  
 53 4 やしろうさんがきました。「略。」「略  
 53 10 になつてしまいました。「略。」「略  
 54 1 ったことがありますか。「略。」「へ  
 54 2 いくどもひろいました。この お月さ  
 54 4 このかわらにきます。そうして、たま  
 54 5 にいれてもらえます。「略。」「略  
 54 7 たら、どうなりますか。「略。」「おとうさん  
 54 8 おとうさんがきました。「略。」「略  
 55 5 へいれてもらえます。「略。」「略  
 55 7 たまをもっていますか。「略。」「と  
 55 8 ここにもっていますか。」「略。」「と  
 56 3 、わたくしにみせました。「略。」「おべ  
 56 8 はもうついています。まどのとこ  
 56 10 くさんならんでいます。しろちゃん、  
 57 4 て、手をとりました。「略。」「略  
 57 5 くいらっしやいました。「略。」「と  
 57 10 みをみてきました。「略。」「と  
 58 5 ていたかわかりません。あなたはい  
 58 9 て、おれいをいいました。それから、そ  
 59 1 やんのうちへいきました。しろちゃんの  
 59 6 たけのなかにありました。おじいさんも  
 60 1 ごちそうしてくれました。「略。」「略  
 60 4 んきなこになりました。ぴんちゃん  
 60 5 いいこになりました。はねちゃんも

607 会 いい になりました。まきげちゃん  
 608 会 さしい になりました。おかげさまで  
 609 会 さんはおれいをいいました。「略。」「略  
 616 会 さんにおれいをいいました。どうぞ おかあ  
 618 会 「略。」と いいました。「略。」「略  
 624 会 にたまをおしつけました。(十一) よ  
 626 会 おどりが はじまりました。きゆうにあ  
 627 会 りがあかるくなりました。でんとうでも  
 631 会 「略。」と いいますと、「略。」と  
 636 会 おじいさんが いいました。おんがくに  
 6310 会 手をとって おどりました。おとうさん  
 642 会 けをおどりまわりました。わたくしは、  
 643 会 きな こえで うたいました。「略。」わ  
 646 会 れて、うとうとしました。(十二)「  
 649 会 こえで 目が さめました。おもわず  
 6410 会 ぼけつとを さぐりました。「略。」「略  
 658 会 たつ ひかっていますよ。」と いって、  
 6510 会 にだきあげて くれました。あいうえお  
 644 会 なで あつめて みましよう。「あたま  
 655 会 さい。まだ ありますよ。」「あかい  
 610 会 「略。」と いいました。すると、まさ  
 672 会 「略。」と いいました。「略。」「あ  
 673 会 よく おもいつきましたね。では、『あ  
 676 会 を、あつめて みましよう。』「あさがお  
 683 会 で、みんな わらいました。(二) つぎ  
 686 会 くことばを あつめました。それから、「  
 688 会 くことばを あつめました。おしまいに、  
 689 会 くことばを あつめました。あつめたこ  
 691 会 なかきとめて おきました。(三) 先生  
 695 会 ちゃんになって います。なんとかして、  
 696 会 えることは できませんか。」と おたず  
 697 会 と おたずね になりました。みんなは、い

298 いろいろ かんがえました。ふみおさんは  
 2102 会 らいいと おもいます。」と いいました  
 2103 会 「略。」と いいました。はるこさんは  
 2106 会 らいいと おもいます。」と いいました  
 2107 会 「略。」と いいました。ただしさんは  
 2110 会 らいいと おもいます。」と いいました  
 2111 会 「略。」と いいました。「略。」そこ  
 2115 会 ことばを かきつけました。そうして、ひ  
 2116 会 どおりに わけて みました。わけて いる  
 2118 会 ろにかわって いきました。はじめはむ  
 2119 会 ずかしいと おもいましたが、だんだん  
 21110 会 ん おもしろく になりました。一一 えにっ  
 2112 会 はを ならべて みました。かたちのに  
 21125 会 ものを ならべて みました。ちがったのを  
 21126 会 たのを ならべて みました。いろいろ か  
 21127 会 いろ かえて ならべました。おぼさんの  
 21132 会 を みつ ついた いただきました。ひとつはま  
 21135 会 どりいろを して いました。おさらにの  
 21136 会 らにのせて かざりました。大あめがふ  
 21137 会 た。大あめが ふりました。にわに 川が  
 21141 会 。にわに 川が できました。あめが やん  
 21143 会 やんで、にじが できました。大きな にじ  
 21146 会 まを ふいて あそびました。赤や 青や む  
 21148 会 さきの たまが できました。ふたごも で  
 21151 会 た。ふたごも できました。まんまるい  
 21152 会 お月さまが のぼりました。あんな 大き  
 21163 会 ことばあそびを しました。はじめにし  
 21164 会 めにしりと りを しました。ただおさん  
 21175 会 ものを して あそびました。「略。」「略  
 21201 会 つづけて、あそびました。よしこさん  
 21213 会 すを かけて いました。しまいまで  
 21214 会 いたいと おもいましたが、かねがな

2155 会 ので、やめて きました。「略。」「へ  
 2177 会 なに 大きく になりました。「略。」「へ  
 2223 会 ろはあそびを しました。よしこさんの  
 2227 会 と」までも ありました。どうしてです  
 2232 会 あつと おもいました。びょうきでは  
 2235 会 の花に きて いましたよ。「略。」「  
 2237 会 きかけて しばみました。みてくたさ  
 2244 会 ぶらさがって いました。あんまり い  
 2246 会 じめは きがつきませんでした。「略  
 2248 会 さんと まって います。これから うん  
 2252 会 おはなしを して きました。きょうは、い  
 2261 会 ろに、川が ありました。くつが なが  
 2262 会 つが ながれて きました。きゆうりが  
 2263 会 りが ながれて きました。きゆうりが、  
 2264 会 つの中には いました。「略。」「と  
 2266 会 「略。」と いいました。(二) さだ  
 2269 会 まい はしが ありました。二ひきの や  
 2273 会 まん中で あいました。「略。」「と、  
 2277 会 きの やぎが いいました。「略。」「と、  
 2281 会 つの やぎが いいました。やぎと やぎ  
 2283 会 を おしあつて いました。そのうちに、  
 2284 会 と おちて しまいました。(三) すみ  
 2288 会 川を わたりました。あさいとこ  
 2289 会 ところを わたりました。きをつけて  
 2291 会 を つけて わたりましたから、みんな  
 2292 会 うの きしに つきました。きしに あが  
 2294 会 ずを かぞえて みました。一ばんは じ  
 2296 会 ちゃんがかぞえました。「略。」「ぶ  
 2303 会 一ど かぞえて みました。「略。」「や  
 2306 会 十一 びきしか いません。「略。」「略  
 2310 会 んがかぞえて みました。やっぱり 十  
 2311 会 十一 びきしか いません。「略。」「こ

二 31 3 ㊤ んがかぞえてみました。けれども、や  
 二 31 4 ㊤ ぱり一びきたりません。十二ひきの  
 二 31 5 ㊤ ってさわぎたてました。『略。』『略  
 二 31 9 ㊤ 、大さわぎをしました。』(四) くに  
 二 32 3 ㊤ のめくらがありました。そのうちの  
 二 32 7 ㊤ 『略。』といました。『略。』と、  
 二 32 10 ㊤ かのものがありました。『略。』と、  
 二 33 3 ㊤ と、またたずねました。するとみん  
 二 33 6 ㊤ 『略。』といました。こんなはな  
 二 33 8 ㊤ おとがしてきました。『略。』と、  
 二 33 10 ㊤ 。ぞうがとおりますから。』と、ぞう  
 二 34 1 ㊤ うつかいがいいました。『略。』『略  
 二 34 3 ㊤ さわらせてくれませんか。』『略。』  
 二 34 5 ㊤ つかいにたのみました。ぞうつかいは  
 二 34 8 ㊤ て、ぞうをとめました。六人のめく  
 二 34 10 ㊤ そばによつてきました。はじめのめ  
 二 35 2 ㊤ でて、こういいました。『略。』二ば  
 二 35 5 ㊤ って、こういいました。『略。』三人  
 二 35 9 ㊤ 『略。』といました。四人めのめ  
 二 36 2 ㊤ 『略。』といました。五人めのめ  
 二 36 5 ㊤ 『略。』といました。おしまい  
 二 36 7 ㊤ ぽをもつていいました。『略。』めく  
 二 37 2 ㊤ らいつてしまいました。』(五) たけ  
 二 37 6 ㊤ いるのをみつめました。『略。』  
 二 37 9 ㊤ 、かえつていきました。空は、ほんと  
 二 39 2 ㊤ 、山へのぼつてきます。たろう「おとう  
 二 39 8 ㊤ ろう「ええ、休みましよう。たろうは、  
 二 40 1 ㊤ のけしきをながめます。どこかで、かっ  
 二 40 2 ㊤ 、『略。』となきます。すると、とおく  
 二 40 3 ㊤ 、『略。』となきます。たろうが、大き  
 二 40 4 ㊤ 『略。』とさげびます。すると、むこう  
 二 40 6 ㊤ 『略。』とさげびます。たろう「おうい。

二 43 8 ㊤ きよくあるきだします。かつこうが、と  
 二 43 9 ㊤ くでしずかになきます。七 かげえ  
 二 44 5 ㊤ しい、ではやりますよ。さあ、いぬだ  
 二 45 5 ㊤ で、ふねをこぎます。『略。』『略  
 二 45 6 ㊤ くしがやつてみましょうか。』『略。』  
 二 46 4 ㊤ 『略。』『ちがいます。』『略。』『略  
 二 47 6 ㊤ いちろうがでてきます。『略。』手に  
 二 47 9 ㊤ りんごをもつています。うれしそうに、  
 二 48 2 ㊤ おいをかいだりします。それから、とな  
 二 48 3 ㊤ ゆうにたちどまります。うしろをふり  
 二 48 4 ㊤ って手まねきをします。二のぼめん  
 二 48 6 ㊤ 、じろうがでてきます。『略。』いちろ  
 二 48 9 ㊤ ろうの手にわたします。『略。』いちろ  
 二 49 2 ㊤ なるのへやへいきます。三のぼめん  
 二 49 6 ㊤ もつてとびまわります。上にながては  
 二 49 8 ㊤ なげて、よろこびます。それから、じろ  
 二 49 9 ㊤ ごをたべようとします。けれども、それ  
 二 50 1 ㊤ しばらくかんがえます。うしろをふり  
 二 50 2 ㊤ て、手まねきをします。四のぼめん  
 二 50 4 ㊤ が、走つてでてきます。『略。』じろう  
 二 50 6 ㊤ をさちこにわたします。『略。』『略  
 二 50 9 ㊤ やへいつてしまいます。五のぼめん  
 二 51 3 ㊤ り、おどつたりします。きゆうにおど  
 二 51 5 ㊤ て、しずかになります。そうして、きゅ  
 二 51 7 ㊤ に走つてたちざります。六のぼめん  
 二 52 3 ㊤ んでいらつしやいます。『略。』とい  
 二 52 5 ㊤ 、さちこの声がします。『略。』さちこ  
 二 52 7 ㊤ のそばにかけよります。大きなりんご  
 二 52 8 ㊤ おかあさんにあげます。おかあさんは、  
 二 52 10 ㊤ ごを手にうけとります。けれども、また  
 二 53 2 ㊤ 、りんごをかえします。さちこは、また  
 二 53 4 ㊤ おかあさんにあげます。とうとう、おか

二 53 7 ㊤ らりんごをもらいます。『略。』こう  
 二 54 1 ㊤ ろうを手まねきします。じろうが、走つ  
 二 54 2 ㊤ が、走つてでてきます。『略。』こう  
 二 54 5 ㊤ 、いちろうをよびます。いちろうが、走  
 二 54 6 ㊤ が、走つてでてきます。おかあさんの  
 二 54 7 ㊤ こに、三人が立ちます。おかあさんは、  
 二 54 8 ㊤ ずかになでてやります。八 ゆめと  
 二 55 4 ㊤ なことをかんがえました。わたくしには  
 二 55 5 ㊤ おとうさんもあります。おじいさんも  
 二 55 6 ㊤ おじいさんもあります。けれども、おじ  
 二 55 7 ㊤ は、おいでになります。いまはおい  
 二 55 7 ㊤ まはおいでになります。が、まえには  
 二 55 8 ㊤ ったにちがいません。それは、どん  
 二 56 7 ㊤ 、ねむつてしまいました。ゆめに、ひろ  
 二 56 9 ㊤ ひろいのはらをみました。なの花が、い  
 二 57 1 ㊤ ちめんにさいていました。ちようちよも  
 二 57 3 ㊤ うちよもとんでいました。わたくしは、  
 二 57 6 ㊤ ら、あるいていきました。そこへ、ひと  
 二 57 8 ㊤ じいさんがでてきました。みると、わた  
 二 58 4 ㊤ 、『略。』といますと、そのかたは、  
 二 58 6 ㊤ 、にこにこなさいました。(二) 先生  
 二 58 8 ㊤ おはなしをなさいました。『略。』ここ  
 二 59 2 ㊤ だはたらいてきました。二年生も、こ  
 二 59 4 ㊤ べんきょうをしました。三年生も、こ  
 二 59 5 ㊤ でべんきょうしました。四年の人た  
 二 59 10 ㊤ 、これをつかいました。ここまでお  
 二 60 2 ㊤ ゆめをおもいだしました。先生は、つづ  
 二 60 3 ㊤ づけておつしやいました。『略。』九  
 二 60 5 ㊤ 生がはいつてきます。そうして、これ  
 二 60 6 ㊤ 、これをつかいます。ですから、こ  
 二 60 7 ㊤ わいがつてやりましようね。』九 春  
 二 61 3 ㊤ かんがえて、やりましよう。(一) し

三166 合 むかえに かけましよう。みんな「で  
 三167 合 「みんな」でかけましよう。」「み  
 三168 合 よう」みんなのりましたか。」みんな「の  
 三162 合 か。」みんなのりました。」「しょう」ぼち  
 三162 合 「ぼちさんはのりましたか。」ぼち「わん  
 三162 合 「みんな、そろいましたね。」みんな「そ  
 三163 合 。」みんな「そろいました。」「しょう」では  
 三105 合 、かけてあげましょ、おしやかさま  
 三112 合 というでしがいました。はんたかは  
 三114 合 、ものがよくいえませんでした。おしや  
 三116 合 、おおもいになりました。そこで、まい  
 三119 合 おしえることにしました。一年たちま  
 三121 合 ました。一年たちました。けれども、な  
 三121 合 も、なにもおぼえませんでした。二年すぎま  
 三122 合 せせん。二年すぎました。まだなにも  
 三122 合 まだなにもおぼえませんでした。三年になり  
 三123 合 せん。三年になりました。やはり、かし  
 三123 合 はりかしこくなりませんでした。おしやかさま  
 三126 合 かをおよびになりました。「略。」はん  
 三131 合 のをおかおをみつめました。「略。」はん  
 三137 合 心の中にしまいました。そのうちに、  
 三141 合 いうことがわかりました。きれいなこ  
 三143 合 くることもわかりました。「略。」と  
 三146 合 「略。」とさとりました。ある日、お  
 三148 合 まねきに気づかりました。おしやかさま  
 三1410 合 のごてんにまいりました。はんたかも  
 三152 合 中にまじっていました。ごてんのい  
 三152 合 んのいり口まできますと、門ぼんがは  
 三156 合 、とおしてはくれませんでした。しかたがあ  
 三157 合 ん。しかたがありませんから、はんたか  
 三157 合 門のそとにのこりました。ごてんでは、  
 三159 合 きにおつきになりました。でしたちは

三159 合 そのわきにならびました。そのときで  
 三162 合 まえにのびてきました。それをみた  
 三163 合 つくりしてしまいました。王さまは、「へ  
 三166 合 へ」とおっしゃいました。おしやかさま  
 三168 合 かの手でございます。あれは門のそ  
 三169 合 門のそとにいますので、このはち  
 三172 合 へ」とおっしゃいました。王さまは、す  
 三173 合 かをおよびになりました。はんたかは、  
 三174 合 てんにあがつてきました。はんたかの  
 三178 合 な光がさしていました。三、ことば  
 三182 合 花の名をあつめました。二くみは虫  
 三183 合 虫の名をあつめました。三くみは魚  
 三184 合 魚の名をあつめました。四くみは鳥  
 三185 合 鳥の名をあつめました。花の名は十  
 三191 合 名は十二あつりました。虫の名は十  
 三192 合 名は十五あつりました。魚の名は十  
 三193 合 名は十三あつりました。鳥の名は十  
 三194 合 名は十四あつりました。あつめたこ  
 三195 合 ばにえをかきそえました。手わけして、  
 三197 合 しらべることにしました。えをかい  
 三202 合 だんだんふえてきました。先生が、こく  
 三204 合 とをおかきになりました。「くみの人  
 三208 合 いい虫とおもいますか。」三くみの人  
 三216 合 しろのかべにはりました。みんなおも  
 三217 合 おもしろがってみました。四、はやと  
 三222 合 のくすのきがはえました。たいへんな  
 三224 合 ぐんとおびていきました。なん年かた  
 三227 合 、大きな木になりました。とうとう、そ  
 三229 合 とどくようになりました。大きなえだ  
 三232 合 らないほどになりました。まいあさ日  
 三234 合 が、日かげになります。ごにならんと、  
 三236 合 が、日かげになります。「略。」「略」

三251 合 大きな木をみあげました。あるちえの  
 三252 合 おじいさんがいいました。「略。」みん  
 三256 合 「略。」といいますと、おじいさんは  
 三259 合 「略。」といいました。そこで、切る  
 三2510 合 、切ることにしました。こんな大き  
 三263 合 こりが、切りはじめました。長いあいだ  
 三264 合 たおすことができませんでした。こんどは、切  
 三266 合 いうことになりました。すると、あの  
 三269 合 「略。」といいました。そこで、大ぜ  
 三271 合 つくることになりました。なん年かか  
 三272 合 ふねが、できあがりしました。いままでみ  
 三274 合 んどうがのりこみました。そうして、「へ  
 三275 合 「略。」とこぎました。おどろいたの  
 三278 合 うに走るではありませんか。「略。」「へ  
 三282 合 いる人々もいいました。すると、あの  
 三288 合 「略。」といいました。そののち、  
 三292 合 んで、海をわたりました。そのおかげ  
 三302 合 することになりました。「略。」と、  
 三306 合 先生がおっしゃいました。みんなはあ  
 三307 合 らこちらにわかれしました。あとで、でき  
 三308 合 ひとりびとりよりました。「略。」「略  
 三311 合 すぐになつています。右がわはきよ  
 三313 合 どがならんでいます。まどから光が  
 三313 合 がさしこんできます。ぼうしかけが  
 三314 合 けがならんでいます。「略。」「略  
 三315 合 かいだんをかきまします。かいだんはは  
 三317 合 ようになつています。きれいにそう  
 三318 合 うじがしてあります。一だんあがる  
 三321 合 ようすがかわります。てすりはつる  
 三323 合 つるつるしています。あがつたとこ  
 三326 合 えがはつてあります。「略。」とか  
 三327 合 』とかいてあります。「略。」「略

三46 10 へ。」とおっしゃいました。白うさぎは  
 三47 1 ぐ海の水をあびました。するといた  
 三47 4 もたまらなくなりました。そこへ、おお  
 三47 6 とがいらっしやいました。このかたは、  
 三48 4 とおたずねになりました。白うさぎは  
 三48 5 でのことをはなしました。「略。」白う  
 三48 9 そのとおりにしますと、からだはす  
 三48 10 もとのようになりました。八 高い  
 三49 3 ちやの花がさきました。あんなとこ  
 三49 4 なところにさきました。よあけにば  
 三49 6 をふくんでさきました。かぼちやの  
 三50 1 ちやの花がさきました。はかげにふ  
 三50 2 げにふたつさきました。かなかなぜ  
 三50 4 にゆれゆれさきました。石やさん  
 三52 3 「略。」といいました。うぐいすは  
 三52 5 「略。」といいました。りすはしら  
 三52 7 「略。」といいました。いなかのや  
 三53 1 「略。」といいました。こどもは石  
 三53 3 「略。」といいました。おてんとう  
 三53 5 「略。」といいました。がん がん  
 三56 3 しろの山にすてましょか。いえいえ  
 三56 4 え、それはなりません。うたをわす  
 三56 6 のこやぶにいけましょか。いえいえ  
 三56 7 え、それはなりません。うたをわす  
 三57 2 ぎのむちでぶちましょか。いえいえ  
 三57 3 え、それなりません。うたをわす  
 三58 4 にあるのでもありません。丘のちよう  
 三58 6 みずうみへでられますし、のぼれば大  
 三58 7 るところへでられます。ある日、みん  
 三58 8 であそびにでかけました。「略。」と、  
 三59 3 、ジューデーがいます。「略。」と、デ  
 三59 6 、デビッドがいます。「略。」と、ジ



三59 8 、ジュデーがいます。「略。」と、デ  
三59 10 、デビッドがいます。ほかの子ども  
三60 1 きまるかまっています。みんなの心が  
三60 2 と、どこへもいけません。そこへちょ  
三60 5 」とおききになりました。「略。」ジュ  
三60 7 ユデーはこういいます。「略。」デビッ  
三60 9 ビッドはこういいます。「略。」そこで  
三61 3 るかおまちになりました。ほかの子ど  
三61 4 ろして、まっています。そのとき、  
三61 8 「略。」といいました。「略。」おと  
三62 1 ーにおききになりました。「略。」「略  
三62 4 」。ジュデーはいいました。「略。」「略  
三62 7 」。デビッドはいいました。「略。」「略  
三62 10 ろえてへんじをしました。みんなの心  
三63 1 みんなの心があいましたから、いっしょ  
三63 2 ところまでのぼりました。そうして、そ  
三63 4 りてみずうみへでました。みずうみには  
三63 5 ートがうかんでいました。みんなはポ  
三63 6 ートにのりこみました。三人の男の  
三63 7 うしろにこしかけました。ふたりの女  
三63 8 、まえにこしかけました。まん中には、  
三63 9 トをおこぎになりました。みずうみを  
三63 10 いけばもりへです。左へいけばた  
三63 10 いけばたきへです。「略。」おとう  
三64 2 んはおききになりました。「略。」と、  
三64 4 女の子たちがいいました。「略。」と、  
三64 6 男の子たちがいいました。「略。」「略  
三65 3 男の子たちがいいました。また、心が  
三65 4 心があわなくなりしました。そこで、おと  
三65 6 るおまわりになりました。もうみんな  
三65 6 なはどこへもいけません。「略。」パー  
三65 8 ー。パーバラがいました。「略。」マイ

三65 10 」。マイクルがいました。「略。」おと  
三66 3 るまわりをなさいました。そのとき、  
三66 6 「略。」と、いいました。「略。」と、  
三66 8 、ジュデーがいました。「略。」おと  
三66 10 ちにおききになりました。「略。」女の  
三67 2 女の子たちはいいました。「略。」おと  
三67 4 ちにおききになりました。「略。」男の  
三67 6 男の子たちもいいました。「略。」と、  
三67 10 んなは空をみあげました。青々とした  
三68 2 い雲がとんでいました。雲は、もりの  
三68 4 しずかにとんでいます。「略。」おとう  
三68 7 んがおききになりました。「略。」パー  
三68 8 ン。パーバラがいいました。「略。」「  
三68 10 」。パーバラがいいました。「略。」みん  
三69 2 みんなの心があいました。「略。」おと  
三69 4 さんはおっしゃいました。「略。」それ  
三69 7 おもしろくあそびました。お日さま  
三69 9 ごはんをたべていました。そのとき、ピ  
三70 3 かあるのをみつけました。「略。」ピー  
三70 6 ターは大声でいいました。ゆかの上に、  
三70 9 かしたものがあります。「略。」デビッ  
三71 2 」。デビッドがいました。「略。」おか  
三71 4 さんがおっしゃいました。そこで、デビ  
三71 6 ーで、つまんでみました。けれども、つ  
三71 6 つまむことはできません。「略。」パー  
三71 8 ー。パーバラがいいました。「略。」おか  
三71 10 さんがおっしゃいました。そこで、パー  
三72 2 もつてきてはきました。けれども、は  
三72 3 きだすこともできません。やはりゆか  
三72 3 ゆかにのこっています。「略。」マイク  
三72 5 マイクルがたずねました。「略。」おか  
三72 7 ききかえしになりました。「略。」みん

三72 9 ン。みんながいました。「略。」と、  
三73 1 んがおききになりました。「略。」みん  
三73 3 」。みんながこたえました。「略。」「略  
三73 10 んながこうさげました。「略。」マイ  
三74 2 マイクルがたずねますと、「略。」と、  
三74 3 道をさがしてみましよう。」と、おか  
三74 4 さんがおっしゃいました。それで、みん  
三74 6 ぐにまどぎわへでました。「略。」おか  
三74 8 おしえてくださいました。みんなはそ  
三74 9 みんなはそこをみました。お日さまが  
三75 7 げへしずんでいきました。「略。」ピー  
三76 1 ターが大声をあげました。みんなでさ  
三76 2 なでさがしまわりましたが、ゆかの上  
三76 3 上にはもうみえませんでした。「略」  
三76 5 さんがおっしゃいました。「略。」と、  
三76 7 デビッドがたずねます。「略。」「略」  
三76 10 マイクルがたずねました。「略。」「略  
三78 2 、デビッドがききますと、「略。」と、  
三78 5 、ジュデーがいます。「略。」にじ  
三78 6 あさかえつてきますよ。だれにもお  
三78 7 日さまはとられません。雲さえでて  
三78 8 、まいあさあえますよ。」にじ 五  
三79 2 なばであそんでいます。すなで、トンネ  
三79 3 道をこしらえています。むちゅうであ  
三79 3 ゆうであそんでいますので、だれひと  
三79 5 するひまもありませんでした。にわか  
三79 6 いうおとがきこえました。みんなは空  
三79 7 んなは空をながめました。雨でした。「  
三79 9 」。パーバラがいました。「略。」と、  
三80 2 、デビッドがいます。「略。」と、マ  
三80 6 、マイクルがいます。雨は、みんなの  
三80 9 んどんふりつづけます。みんなはどう

三811 わまで にげて いきました。そのうちに、  
 三813 空をすすんで いきました。そこへ お日  
 三813 の光がさしはじめました。すると、色リ  
 三814 にじが空にかかりました。「略」。ピー  
 三817 「ピーターがいました。ピーターは  
 三8110 「マイクルがいました。マイクルは  
 三823 「ジュデーがいました。ジュデーは  
 三828 「バーバラがいました。「略」。デビ  
 三831 「デビッドがいました。「略」。その  
 三834 でていらっしやいました。「略」。と  
 三836 「とおききになりました。「略」。「略  
 三839 、マイクルがきました。「略」。だん  
 三842 にじもきえて いきます。ピーターは、は  
 三846 「略」。と いいました。みんながみ  
 三847 した。みんながみますと、その あまだ  
 三848 小さなにじがみえました。十 ひびき  
 三891 を、かきとつて みましよう。ていしやば  
 三906 。ぼしやもと おります。じどうしやも  
 三907 どうしやもと おります。いぬも 走つて  
 三911 いぬも 走つて いきます。わたくしは、学  
 三913 きに こをと おります。この はしがな  
 三915 なかつたら どうしましよう。この ポス  
 三918 きを、ここに いれます。きんじよの人  
 三921 このポストに いれます。くさを ちぎつ  
 三923 たら、とめて やりましよう。こうえんに  
 三925 たのしませて くれます。「略」。この  
 三946 おる ことが できます。ふねを おるこ  
 三947 おる ことも できます。ピアノや ふく  
 三951 おる ことも できます。きつねや、だま  
 三953 おる ことが できます。この 一まいの  
 三956 たり、立つたり します。この 一まいの  
 三958 かく ことが できます。おとうさんの

三961 かく ことが できます。にわの花も、  
 三963 かく ことが できます。クレヨンで か  
 三964 かく ことも できます。えんぴつで か  
 三965 かく ことも できます。また、この 一  
 三967 かく ことが できます。大きな 字でも、  
 三969 かく ことが できます。はやく かくこ  
 三972 かく ことも できます。ひらがなを か  
 三974 かく ことも できます。かん字を かく  
 三975 かく ことも できます。ローマ字を か  
 三976 かく ことも できます。心に 思ったこ  
 三979 にかきえて しまいますが、紙に かい  
 三981 いたつまでも のこります。口で はなした  
 三983 まきえて なくなり ますが、紙に かい  
 三984 いたつまでも のこります。一まいの 紙に  
 三985 を、どこに かざりましよう。紙に かい  
 三987 こへ おくつて あげましよう。どんなと  
 三992 えを はこんで くれます。先生が、「略」  
 三999 へ。」とおししやいました。十三 かく  
 三1003 いさんが すんで いました。おじいさんは  
 三1005 竹を とり に いきました。ある 日のこ  
 三1009 ぶを みまわして いますと、ねもとのび  
 三1011 る竹が 一本 ありました。ふしぎに 思  
 三1012 の竹を 切つて みますと、小さな、きれ  
 三1013 さまが すわつて いました。おじいさんは  
 三1021 らにのせて かえり ました。そうして、か  
 三1023 でだいじに そだて ました。それからと  
 三1025 がねが はいつて いました。おじいさんの  
 三1026 んかねもちに なりました。また、小人の  
 三1029 人の 大きさに なりました。その うつく  
 三1031 という 名を つけました。おじいさんは  
 三1034 ると、すぐ なおりました。世の中の人  
 三1039 まわりを とりまきました。そうして、か

三1041 のぞきこんだり しました。一どでも か  
 三1046 じいさんに たのみ ました。その 中には、  
 三1047 たもおいでに なりました。けれども、か  
 三1049 も およめに いきません。いつまでも  
 三1051 会 にいたい と思います。」といつて、ど  
 三1053 ことわつて しまいました。たいていの  
 三1054 あきらめて しまいましたが、さいごまで  
 三1056 、なんんかの こり ました。それで、かく  
 三1058 よめに いくと いいました。けれども、か  
 三1060 することが できませんでした。かくや  
 三1064 「とお思いに なりました。それで、おじ  
 三1067 へ。」とおししやいました。おじいさんは  
 三1068 てたびたび すすめ ましたが、「略」。と  
 三1069 会 も いやで ございます。」といつて、か  
 三1070 めは やつぱり きき ませんでした。みかど  
 三1073 おたちより に なりました。家には いっ  
 三1075 さまが すわつて います。「略」。とお  
 三1079 かえろうと なさい ました。すると、かく  
 三10710 うに みえなく なりました。みかどは び  
 三1083 へ。」とおししやいますと、かくやひめは  
 三1084 すがたを あらわ しました。みかどは、「へ  
 三1086 まおかえり に なりました。その のち、  
 三1089 お手紙を ください したので、かくやひ  
 三10810 をさしあけて おりました。ある 年の 春  
 三1093 えこむよう に なりました。あきが きて  
 三1095 かなし そうに みえ ました。十五夜が ち  
 三1097 をたてて なきだ しました。おじいさんと  
 三1098 その わけを たずね ました。かくやひめは  
 三1102 会 まで だまつて いましたが、ほんとうは  
 三1103 会 のもので ございます。この 十五夜に  
 三1105 会 らなければ なりません。」とこたえま  
 三1106 「略」。とこたえ ました。この 思いが

三110 8 さんもびっくりしました。「略。」と、  
 三111 1 いろいろ かんがえました。あまり しん  
 三111 2 あまり しんばいしましたので、かみの  
 三111 3 もまがつてしまいました。みかどがこ  
 三111 5 うにお思いになりました。それで、たく  
 三111 7 ださることになりました。いよいよ十  
 三111 8 いよ十五夜になりました。おじいさんの  
 三112 1 でいっばいになりました。おばあさんは  
 三112 3 やひめをだいていました。おじいさんは  
 三112 4 でばんをしていました。夜中になっ  
 三112 6 りがあかるくなりました。「略。」けら  
 三112 8 、弓に矢をつがえました。ところが、ふ  
 三112 10 なくなつてしまいました。そのうちに、  
 三113 2 のつておりてきました。すると、しめ  
 三113 3 がひとりでにきました。そうして、お  
 三113 5 そとへでてしまいました。もう、ひきと  
 三113 6 することもできません。かぐやひめは  
 三113 9 園 をしたいと思いましたが、ほんとう  
 三113 10 園 おしゅう ございます。せめて 月夜に  
 三114 5 ばあさんにわたしました。天人がはこ  
 三115 4 のくすりをのこしました。天人は、いそ  
 三115 6 にはごろもをきせました。かぐやひめの  
 三115 8 つくしくかがやきました。そこで、よう  
 三115 10 天へのぼつていきました。みかどは、そ  
 三116 2 なることができませんでした。そうし  
 三116 6 におたずねになりました。おつきのも  
 三116 9 園 いそうで ございます。」ともうしあげ  
 三117 1 へ。」ともうしあげました。みかどは、「へ  
 三117 5 おいつけになりました。おつきのも  
 三117 6 そのとおりにしました。すると、ふし  
 三117 8 もたちのぼつていました。それで、この  
 三117 10 というようになりました。

四44 と、ここに知らせます。うえぼうそのの  
 四46 せは、ここからきます。学校にはいる  
 四48 いち知らせてくれます。こうえんのせ  
 四52 じなどもしてくれれます。もし、人がな  
 四55 はりここにどけます。ここはゆうび  
 四59 どをおくつてくれます。いそぐときに  
 四61 ぼうをうつてくれます。どんなところ  
 四62 でもどけてくれます。もつといそぐ  
 四65 をとりついでくれます。「略。」と声  
 四66 かけて、話が できます。世界じゅうの  
 四72 のをまもつてくれます。もつとたいせ  
 四74 だをまもつてくれます。火事がおこら  
 四79 、氣をつけてくれます。こんざつする  
 四82 とせりしてくれます。まい子をうち  
 四84 くりとどけてくれます。こは、水の  
 四89 くさんうえてあります。よくみがいた  
 四97 ンとはたらいしています。こはびよう  
 四114 んなあつまつてきます。こくご、しゃか  
 四118 のべんきょうをします。こはえきで  
 四123 いったりきたりします。こから、とお  
 四125 いくことが できます。とおいとおい  
 四129 のがここにどきます。どこも、この  
 四134 て、はたらいしています。町ぜんたいが、  
 四136 なつて生きています。一一 にわとり  
 四195 園 るものでは ありません。」先生がこう  
 四197 てから、文を書きました。まさおさんは  
 四202 のような文を書きました。「さつき、み  
 四203 手 みをしてあそびました。みんなで手  
 四204 手 で、わをつくりました。ねずみが三  
 四206 手 、わのそとにでました。ねこの一ぴ  
 四210 手 』とおっしゃいました。みんなは、「へ  
 四212 手 略。」とこたえました。ねこのわた

四215 手 えようかと考えました。ねずみたちは  
 四217 手 ろきよろしています。わたくしは、た  
 四219 手 ぐりこもうとしました。みんなは、「へ  
 四2110 手 いってしゃがみます。あちこちまわ  
 四221 手 いと中にはいりました。ねずみたちは  
 四222 手 わのそとへにげました。すると、そと  
 四223 手 ねこがおいかけてました。もうすこし  
 四225 手 の中ににげこみました。そこを、わた  
 四226 手 うまくつかまえました。」たつおさん  
 四227 あてて 文を書きました。「略。」すみ  
 四228 手 きのを えをかきました。なんの えか、  
 四231 手 、はしらも かきました。まども かき  
 四232 手 た。まども かきました。あのまどか  
 四233 手 とよく星をみましたね。にいさんは  
 四237 手 りひろいにいきましようね。ぼくは、  
 四241 手 らきたいと 思います。」すみこさんは、  
 四243 手 と」にあてて 書きました。「略。」のぶ  
 四246 手 もう 半年も たちますね。きのうのゆ  
 四248 手 でさんぼして きました。おみやげに  
 四249 手 どきをとつて きました。そうして、み  
 四252 手 のまえにかざりました。みつちゃん  
 四254 手 しない日はありません。お話を する  
 四255 手 るような 氣が します。お花を かざる  
 四257 手 、ときどき 思います。でも、雨がふ  
 四258 手 んでいると 思います。さようなら。」  
 四262 手 するつもりで 書きました。「略。」たみ  
 四268 手 「を あいてに 書きました。「略。」たろ  
 四274 手 ポチ」あてに 書きました。「略。」とし  
 四278 手 するつもりで 書きました。「略。」きよ  
 四285 手 ことに、氣が つきました。「略。」せつ  
 四303 手 いて、文を 書きました。「略。」かず  
 四306 手 うきで 休んでいます。それで、みんな

四309(手) しょうではありませんか。おてがみを  
 四311(手) でもいいと思います。わたくしは、う  
 四313(手) あげようと思います。」かづこさんも、  
 四315(手) のような文を書きました。「きのう、学  
 四316(手) 、雨がふっていました。わたくしが  
 四318(手) の子がないていました。どこかの中  
 四321(手) いるわけをききました。男の子は、げ  
 四326(手) おをすげてやりました。雨がびしゃ  
 四329(手) さしかけてあげました。そのとき、  
 四332(手) とばを思いだしました。はなおがで  
 四334(手) ていってしまいました。女の生徒さ  
 四337(手) 、わかれていきました。」四 心に  
 四343(手) いたことはありませんか。」先生にこ  
 四345(手) の文をよみなおしました。けれども、べ  
 四346(手) 、べつに気がつきません。「略。」ここ  
 四348(手) ばに、気がつきました。「ここまでき  
 四352(手) のことだからわかりません。「略。」「略  
 四357(手) たことばがありますね。「略。」「へ  
 四362(手) たのです。わかりますか。そこにいな  
 四363(手) ことが、わかりますか。」みんなは、  
 四365(手) しばらく考えていました。そのとき、  
 四367(手) んなことがありました。」といて、  
 四368(手) ぎのような話をしました。「略。」「略  
 四3610(手) おつかいにいきました。そのとき、  
 四371(手) なの下をとりました。そこには、ぶ  
 四372(手) にじゅくしていました。わたくしは、  
 四374(手) てしやうがありませんでした。思いき  
 四376(手) 』といおうとしました。そのとき、  
 四378(手) えたものがありました。それは、おか  
 四3710(手) ねをしてはいけませんよ。』という  
 四382(手) ちへかえってきました。「略。」「へ  
 四393(手) が思いだされてきました。「略。」「略

四396(手) いだして、ころしませんでした。「略  
 四399(手) 気がついてやめました。「略。」  
 四402(手) ったりしてくれまます。あなたがたは、  
 四413(手) たびをつづけていました。ものさしで  
 四417(手) ようになったりしました。ときには、か  
 四421(手) かけるようになりしました。ゴムのよう  
 四423(手) ちぢむこともありました。どのように  
 四426(手) しまうことはありませんでした。「略」  
 四435(手) うぎよく空をとびました。けさも早く  
 四437(手) がんは目をさしました。ゆうべは、ぬ  
 四442(手) 大きな声でさけびました。「略。」みん  
 四445(手) それにさんせいしました。ところが、「へ  
 四475(手) みんなはそうきめました。あさの風は、  
 四477(手) のむなげにあたりました。三十ばのが  
 四478(手) なってとんでいきましたが、やがて、ま  
 四479(手) うなかたちになりました。はたけをこ  
 四481(手) い山のそばにきました。その山のふ  
 四483(手) そこをよけてとびました。よく木のか  
 四488(手) へ。」と、声をたてました。ほかのが  
 四491(手) ないでとびつづけました。かっちゃん  
 四494(手) ようにおちていきました。「略。」下の  
 四497(手) 音が ひびいてきました。二十九わの  
 四499(手) ところへあつまりました。かっちゃん  
 四501(手) いうことがわかりました。力のつよい  
 四503(手) 、下からうけとめました。ほかのが  
 四504(手) んをだきかえしました。「略。」「略  
 四508(手) はけまし、さけびました。「略。」二は  
 四510(手) 音が、ひびいてきました。下からねら  
 四513(手) すけなければなりません。だれも、ばら  
 四515(手) するものはありません。「略。」「略  
 四517(手) たしがおんぶしましょう。「略。」「  
 四5110(手) なくなってしまうました。おもいかつ

四522(手) いなことではありません。どうかする  
 四524(手) もおちそうになります。「略。」二十九  
 四527(手) るところではありません。ちょうど、一  
 四529(手) きるだけ早くとびました。きけんなど  
 四531(手) うやらとおろすぎましたが、目のまえ  
 四533(手) 山がそびえていました。がんのなか  
 四534(手) いこうと話しあいました。やつと高い  
 四537(手) 山のみねをこえました。「略。」「略  
 四5310(手) ら、風がふいてきました。あせをいっ  
 四542(手) とした林がありました。がんのなか  
 四545(手) の林の中におりました。一わのがん  
 四547(手) いにあらってやりました。ほうたいを  
 四549(手) るくるとまきつけました。かっちゃん  
 四551(手) けねをうたれていました。かっちゃん  
 四552(手) まをひやしてやりました。島にはかり  
 四553(手) にはかりうどはきませんが、大きなへ  
 四554(手) くることがあります。そこで、目ざと  
 四557(手) でみはりばんをしました。その夜は、小  
 四5510(手) 木ののは音がしましたが、それは、小  
 四565(手) たをすこしひらきました。「略。」「略  
 四576(手) たべるようになりしました。「略。」「略  
 四578(手) いうことになりました。かっちゃん  
 四579(手) なおだんごを作りました。くだものを  
 四5710(手) 花をかざったりしました。すっかり用  
 四582(手) がんたちもあつめました。二十五わ、二  
 四583(手) 、だんだんそろいました。かっちゃん  
 四587(手) みて、にこにこしました。「略。」こ  
 四588(手) んはたのしんでいました。二十九わの  
 四589(手) わのかおがそろいました。けれども、も  
 四594(手) 、もう一わがみえません。「略。」「略  
 四599(手) 「略。」とさけびました。山びこがむ  
 四5910(手) 、どんでんをかけました。「略。」「略

四六〇一 会 「略」。「知りませんよ。」「略」。「  
四六〇四 会 「小鳥さん、知りませんか。」「略」。「  
四六〇五 会 「略」。「ぞんじません。」そのうちに、  
四六〇七 夜になってしまいました。しかたがな  
四六〇九 まわりにあつまりました。どのがんも  
四六一一 つしよりぬれていました。いんそつが  
四六一五 んなはしをとりました。かつちゃん  
四六一八 と、おいのりをしました。二十九わの  
四六二一 みんなを元気づけました。みんなのね  
四六二三 くをさがしにいきました。しずかなや  
四六二四 たきの音がきこえます。みると、なかま  
四六二七 のくびにかみつきました。さすがのへ  
四六二九 ので、力をゆるめました。そのひまに  
四六三〇 するりとぬけました。「略」。「かっ  
四六三三 いでとんでかえりました。みんなは、そ  
四六三六 あさごはんをたべました。「略」。「略  
四六三九 ににこにこわりました。「略」。「略  
四六四一 、みんなもわりました。「略」。「三十  
四六四四 みの島をとびたちました。うすむらさき  
四六四六 かにたなびいていました。がんの列は、  
四六四八 えなくなっていました。六 ことば  
四六五〇 んこしらえておきました。一組であ  
四六五二 と、いぬとをあげます。「にゃあ・わん  
四六五四 、ハンケチをあげます。これは、「略」  
四六五七 には、なにもあげません。「あげられま  
四六五九 せん。『あげられません』というわけ  
四七〇一 つきょうをあげます。『略』とい  
四七〇三 はがるた」を考えました。たくさんお  
四七〇五 もしろいのができました。これをあつ  
四七〇七 しらせることにしました。七 いろは  
四七〇九 ラジオのお話きましよう。む 麦の  
四七一 せん手まりをつきましよう。あ 雨、

四八一五 会 なかよくあそびましよう。あかるく  
四八二五 スツリーをつくりました。まつの木  
四八二八 、ふうせんをさげました。ぎん紙でこ  
四八三〇 や、十字かもさげました。ほそいろ  
四八三二 いろうそくも立てました。弟が、「略」  
四八三四 一まいのえをだしました。それはふじ  
四八三六 かこしらえはじめました。赤いふく  
四八三八 さんができあがりしました。それをまつ  
四八四〇 ねえさんがわりました。そのつぎの  
四八四二 友だちがあつまりました。クリスマスツ  
四八四四 、みんなであそびました。一ばんさきに  
四八四六 じょうのお話をしました。二ばんめに、  
四八四八 ろい紙しばいをしました。三ばんめに、  
四八五〇 しょうかをうたいました。すると、みき  
四八五二 にあわせておどりました。おしまいに、  
四八五四 ランプあそびをしました。そのとき、  
四八五六 っていらつしやいました。「略」。「みん  
四八五八 よろこんでもらいました。弟が、「略」  
四八六〇 、みんながわりました。九 雪 ゆ  
四八六二 上に、雲がでています。あの白い雲に  
四八六四 上、雲がでています。あの白い雲に  
四八六六 め。「やすみましよう。」と、子す  
四八六八 いて、あそんでいます。子ども「この  
四八七〇 でかめをころがします。そこへうらし  
四八七二 うがとおりがかります。うらしま「これ  
四八七四 四九四 会 このかめをうりましよう。」うらしま  
四八七六 ぞれわたしてやります。みんな「ありが  
四八七八 ら、いつてしまします。うらしま「かめ  
四八八〇 んどもおじぎをします。うらしま「もう、  
四八八二 方へいつてしまします。うらしまは、か  
四八八四 すがたをみおくりまします。一一のぼめん  
四八八六 でつりをしています。そこへかめが  
四八八八 へかめがでてきます。かめ「うらしま

四九〇二 るので、気がつきません。かめは、すぐ  
四九〇四 「略」といいまします。うらしま「おや、  
四九〇六 たかめでございませう。」うらしま「あ、  
四九〇八 じょうぶになりました。あなたのあ  
四九一〇 びろいをいたしました。きようは、お  
四九一二 、お札にあげました。」うらしま「お  
四九一四 ここまでまいりました。」うらしま「な  
四九一六 「さようでございませう。りゅうぐうは、  
四九一八 とこでございませう。」うらしま「それ  
四九二〇 あんないいたしまししょう。」かめは、  
四九二二 るとあるきまわります。うらしま「りゅう  
四九二四 うじきでございませう。」うらしま「いい  
四九二六 のご門でございませう。」うらしま「赤や  
四九二八 が二つおいであります。そこへ、かめが  
四九三〇 いしてはいってきます。かめ「ここがり  
四九三二 うぐうでございませう。さあ、どうぞ  
四九三四 さにおどろいています。かめ「さあ、ど  
四九三六 しかけにこしかけます。いろいろな魚  
四九三八 めさまがあらわれます。かめ「このかた  
四九四〇 まさんでございませう。」おとひめ「あな  
四九四二 でいらつしやいますか。」うらしま「は  
四九四四 おいでくださいました。このあいだは  
四九四六 たすけくださいまして、ありがとう  
四九四八 りがとうございませう。」うらしま「い  
四九五〇 しょうもございませう。どうぞゆつ  
四九五二 いてくださいませ。」おとひめさま  
四九五四 のいすにこしかけます。かめはそのそ  
四九五六 のそばにならびまします。魚たちはごち  
四九五八 そうをはこんできます。おとひめ「さあ、  
四九六〇 おどつてもらいまししょう。」魚たちが、  
四九六二 せておどりはじめまします。うらしま「おも  
四九六四 たたいでよろこびまします。四のぼめん

四一三 四 へ かえりたく になりました。たい「これは、  
 四一三 七 ちそうで ございます。」うらしま「いや  
 四一三 八 うぶん いただきました。」えび「では、  
 四一四 一 、ごらん に いれましよう。」うらしま「  
 四一四 四 なぐさめ いたしましよう。」うらしま「  
 四一四 六 うぶん で ございます。長い あいだ、  
 四一四 七 におせわ になりました。」おとひめ「ど  
 四一四 八 め「どうか なさいましたか。」うらしま「  
 四一四 九 あまり 長く ありませんので、もう、おい  
 四一四 一〇 ましよう と思います。」おとひめ「まあ  
 四一五 二 しいでは ございせんか。」うらしま「  
 四一五 四 とも 氣に かかりますので、かえらせて  
 四一五 六 らせて いただきます。」おとひめ「さよ  
 四一五 七 「さようで ございますか。なんの おか  
 四一五 九 おかまいも できませんでした。」うら  
 四一六 二 させて いただきました。」おとひめ「で  
 四一六 三 ばこそ さしあげましよう。」かめが た  
 四一六 五 てばこそ もって きます。おとひめ「この  
 四一六 七 になつて は いけませんよ。」うらしま「  
 四一六 八 げまで いただきまして、ありがとう  
 四一六 九 りがとう ございます。」うらしま「よく  
 四一七 三 だきとう ございます。」うらしま「よく  
 四一七 四 しま」よく わかりました。それでは、お  
 四一七 五 おいと まいたします。」おとひめ「おか  
 四一七 六 「おかえり になりますか。おなごり おし  
 四一七 七 おしゅう ございます。」うらしま「さよ  
 四一七 一〇 おともを いたしましよう。」おとひめ「  
 四一八 五 とつて、でて いきます。みんな、手を  
 四一八 六 をふつて みおくります。五の ぼめん  
 四一九 三 は、あけて みました、たまてばこ。  
 四二〇 二 でんとう が つきました。いままで く  
 四二〇 三 が、あかるく になりました。みんなの か

四二〇 五 んなの かおが みえます。本も よめます。  
 四二〇 五 えます。本も よめます。字も 書けます。  
 四二〇 六 めます。字も 書けます。たった 一つの  
 四二二 六 光る ことが できません。でんきゅうは  
 四二三 五 自由な 思いを しました。もえて いる  
 四二三 七 をもつて あるきます。」十二 四季  
 四二七 二 まつ原へ でて きます。りょうし「きょ  
 四二七 五 ながら あるいて いますと、どこからか、  
 四二七 六 においが して きます。みると、むこう  
 四二七 八 のが、かかつて います。りょうし「あれ  
 四二八 二 へよつて、よく みます。りょうし「きも  
 四二九 一 もつて いくと します。まつの 木の う  
 四二九 四 りの 女が でて きます。女「もし、それ  
 四二九 七 きもので ございます。どう なさるの  
 四二九 九 さるので ございますか。」りょうし「い  
 四三〇 二 にしよう と思います。」女「それは、天  
 四三〇 三 はごろもと 申しまして、あなたが たに  
 四三〇 四 いもので ございます。どうぞ お返し  
 四三〇 五 お返し くださいませ。」りょうし「天人  
 四三〇 八 らお返し は できません。國の たから  
 四三〇 九 たからに いたします。」天人「それが  
 四三〇 一〇 える ことが できません。どうぞ、お返  
 四三〇 一三 、お返し くださいませ。」りょうし「いや  
 四三〇 一四 うし「いや、返せません。」天人は、か  
 四三〇 一五 して、空を みあげます。天人の しおれ  
 四三〇 一六 をお返し いたしましよう。」天人「それ  
 四三〇 一七 りがとう ございます。では、こちらへ  
 四三〇 一八 ちらへ いただきましよう。」りょうし「  
 四三〇 一九 みせて いただけせんか。」天人「それ  
 四三〇 二〇 は、お礼に まいましよう。でも、その  
 四三〇 二一 まう ことが できません。」りょうし「と  
 四三〇 二二 いう ことを 知りません。」りょうし「あ

四三三 一 しい ことを 申しました。」りょうしは  
 四三三 二 ははごろもを 返します。天人は、それを  
 四三三 三 て、しずかに まいます。天人「月の 都の  
 四三三 四 天への ぼつて いきます。右に 左に ひ  
 四三三 五 たつちして、村に でましよう、町に でま  
 四三三 六 しましよう、町に でましよう。川は 大き  
 四三三 七 ありがとう ございます。」略「略」へ  
 四三三 八 こと、お船も みえますね。」略「へ  
 四三三 九 ここです。おやりましよう。どうも あり  
 四三三 一〇 ありがとう ございました。」略「へ  
 四三三 一〇 けんさせて もらいます。」略「へ  
 四三三 一〇 ありがとう ございます。この つぎの 駅で  
 四三三 一〇 略」略」略」略」略」略」略」略」略」略」  
 四三三 一〇 くださつて、すみません。」略「略」シ  
 四三三 一〇 いまから 旅に かけます。ゆくさきは むね  
 四三三 一〇 とろに 書いて ありますから、まちがいは  
 四三三 一〇 ら、まちがいは ありません。けれども、こ  
 四三三 一〇 の ままでは 旅は できません。切手をはつて  
 四三三 一〇 て、ねだんが ちがいますが、私は、三十 銭  
 四三三 一〇 旅を することが できます。」略「略」ポ  
 四三三 一〇 ちといつ しょに になりました。そこへ、配  
 四三三 一〇 みんな かばんに いました。略「略」略  
 四三三 一〇 なは この 中では いました。そこは 私たち  
 四三三 一〇 たまりに わけて くれました。略「略」略  
 四三三 一〇 て、かぎを かけられました。こんな に だ  
 四三三 一〇 に だいに してくれまうから、おちる 心配  
 四三三 一〇 、おちる 心配は ありません。私たちは、汽  
 四三三 一〇 どん、南へ は ばれました。二日 めの あさ  
 四三三 一〇 うびんき よく につきました。ふくろの 中か  
 四三三 一〇 ばんの 中に入れられました。配たつを する  
 四三三 一〇 てん車に 乗つて 走りました。私の なかまは  
 四三三 一〇 んにくばれ はじめました。私も その 人の

五二〇二 ちらこちらへまわりました。しげった竹や  
五二〇四 のきを走ったりしました。なしの花のき  
五二〇五 ている家に、はいりました。「略。」私は  
五二〇七 のげんかんにおかれしました。「略。」みつ  
五二〇九 、私を手にとりあげました。私は、ぶじに  
五二一〇 たえすることができました。三、ありが  
五二一四 乗せて、終点につきました。あまりこんで  
五二一五 た。あまりこんでいましたので、みんな、  
五二一七 出口の方へでていきました。しかし、その  
五二二〇 いった子どもがありました。いちろうさ  
五二二二 との、いなかにいきました。ひさしぶりに  
五二二五 いへんかわいがられました。しかし、きょ  
五二二六 、それだけではありません。いちろうさん  
五二二八 かんにむかえにできました。「略。」「略」  
五二四三 をすわらせてあげました。「略。」「そ  
五二四七 もたちをすわらせました。そのとき、ど  
五二四八 すこしあけてくれました。けれども、『  
五二五〇 なかよくなってきました。ほんとうは、  
五二五九 こにこして帰ってきました。駅の出口まで  
五二六〇 おねえさんをみつめました。』「略。」「略」  
五二六六 ありがとうございました。といって、か  
五二六八 をさげて、そこをでました。「略。」「略」  
五二七六 なかったかもしれせん。でもいいの。  
五二七九 元氣にあるいて帰りました。「略。」「略」  
五二八四 ろばんをはじいていました。「略。」「略」  
五二八七 こんな本をもらいました。「略。」「へ  
五二九五 きふきあるいていました。一つは大きく  
五二九〇 持っていったあげましょう。』といいま  
五二九二 『略。』といいました。「略。』「略」  
五三〇三 、わたしてもらいました。その荷物は小  
五三〇五 のせて持っていきました。駅につくと、  
五三〇七 りたいと思っていました。なかなかで

五三一二 もやりたいと思います。』といいました。  
五三一二 『略。』といいました。すると、その  
五三二四 ことが書いてありますよ。』といつて、  
五三二六 って、ぼくにくれました。それで、ほん  
五三二八 「汽車が走っています。まっ黒なけむり  
五三三〇 、どんどん走っています。おや、むこうか  
五三三二 貨物列車がやってきました。材木や、石炭や  
五三三四 、たくさんつんでいます。この汽車は、な  
五三三六 荷物をつみこんでいます。この荷物の中に  
五三三八 ゆなどがはいっています。船は、なんの力  
五三三九 がたくさん立っています。どのえんとつか  
五三四一 くとたちのぼっています。ここは工場町で  
五三四三 つな品物を作っています。この工場のきか  
五三四五 をしていらいっしやいます。ガスこんろにか  
五三四七 、ゆげがふきでています。ガスこんろの青  
五三四九 べに、石炭がでています。さかんに、きか  
五三五一 をくずしてとっています。とれた石炭は、  
五三五三 、そとへはこびだします。ほりだされた石  
五三五五 のようにつまれています。この石炭が、汽  
五三五七 すりも石炭からとれます。私たちは、石炭  
五三六〇 、くらすことができません。では、石炭は  
五三六二 、草や、動物がみえますね。これは大むか  
五三六四 友だちから手紙がきました。そのかたは、  
五三六六 なことが書いてありました。「略。」「略」  
五三六八 だ雪がのこっています。けれども、中は  
五三七〇 下は、雪がありません。山の木のめが  
五三七二 木のめがではじめました。ふもとなる  
五三七四 がこくなつてみえます。茶色の木のめも  
五三七六 色の木のめもみえます。このきれいなけ  
五三七八 みせたいと思います。「略。」「略」  
五三九〇 っぺんにさきます。きゅうにあたり  
五三九二 どののしい氣がします。私のすきな花は

五四〇六 、ほう年だといえます。いま、たくさん  
五四〇八 たくさんさいています。「略。」「三  
五四一〇 うしが十三とういます。白黒ぶちのちち  
五四一二 子うしが三とういます。けさも、まきば  
五四一四 きばにだしてやりました。のびはじめた  
五四一六 そうにあるいていました。子うしは、小  
五四一八 岸をとことこ走りました。まいにち、た  
五四二〇 さんちをしばります。」「三」「略」  
五四二二 ありがとうございました。みんなだいじ  
五四二四 ろにならべてあります。私は、まだ、ほ  
五四二六 いったことはありません。けれども、お  
五四二八 手紙でよくわかります。ひろびろとした  
五四三〇 などところだと思えます。ほんとうに、一  
五四三二 つてみたいと思えます。「略。」「略」  
五四三四 田うえがはじまりました。私は、なえは  
五四三六 えはこびをしていきます。つばめが、私の  
五四三八 いったりきたります。一日じゅうてつ  
五四四〇 はくらくなっています。きのう、はじめ  
五四四二 てはたるをみかけました。そちらでも、  
五四四四 も、はたるはとびますか。「略。」「六  
五四四六 およめにいっています。ぼくはねえさん  
五四四八 をおしえてもらいました。ねえさんはい  
五四五〇 いっしょにうたいました。ぼくのすきな  
五四五二 をこんどお送りします。六、まどをあ  
五四五四 はるおと大通りにでました。いそがしそ  
五四五六 うに人々が通ります。「略。」と、あ  
五四五八 をしていく人もあります。まさこが、「略  
五四六〇 大きな星が光っていました。「略。」とい  
五四六二 、手をたたいてやりますと、まさこも、ま  
五四六四 ふとった手をたたきました。「略。」「大  
五四六六 き  
五四六八 の空をみながらいいました。「略。」それ  
五四七〇 南東の空で光っていました。「略。」そう

554 1 がちらちら光っていました。「略。」「略  
 554 8 大きな星が光っていました。それから、あ  
 554 9 、あたりをみまわしましたが、空は、まだ  
 554 10 つけることは、できませんでした。まさこ  
 555 1 、家のまえにでてみました。三十分ぐらい  
 555 3 めんに、星がでていました。「略。」「と思  
 555 5 思って、西の空をみましたが、わかりませ  
 555 5 みました。が、わかりませんでした。そこへ  
 555 7 会 きょうで星をみせますよ。いつてみませ  
 555 8 会 ますよ。いつてみませんか。」と、さそ  
 555 9 、さそってくださいました。私は、おかあ  
 555 11 しよに、学校へいきました。もう、たくさ  
 556 1 々が、あつまっていました。「略。」「私は  
 556 7 で、みせていただきました。「略。」「略  
 557 1 れて、ばんをゆずりました。はるおは、の  
 557 2 るおは、のぞいていましたが、かげんがわ  
 557 4 かたをそとおさえました。「略。」「あ  
 557 6 あたりの人がわらいました。「略。」「略  
 557 11 た、みんながわらいました。「略。」「はる  
 558 4 ごろうさんにゆずりました。「略。」「略  
 558 9 、まもなく帰ってきました。ごろうさんは  
 559 1 は、「略。」「いいました。するとはお  
 559 3 も、「略。」「いいました。私は、いまみ  
 559 5 かいておこうと思いました。八 あさが  
 559 8 、三つはじめてさきました。どれも空色で  
 559 10 会 、あさがおがさきましたよ。」といいま  
 560 1 て、「略。」「いいました。「略。」「略  
 560 2 会 に、きれいにさきましたね。いい色です  
 560 4 会 ているようにみえますね。「略。」「へ  
 561 4 会 でないことはありません。わたしが水を  
 562 5 らなくなってしまう。あさがほんの  
 562 7 れたきゅうりをたべました。「略。」「略

562 11 会 さんの力ではありませんよ。「略。」「  
 563 2 会 たりしたじやありませんか。「略。」「  
 563 3 会 「せわはしてやりました。けれども、花  
 563 4 会 んのせいでありませんよ。」おとうさ  
 563 7 て、おわらいになりました。「略。」「略  
 564 2 会 きくなったと思います。「略。」「  
 565 3 あさんが、住んでいました。ふたりは、ふ  
 565 5 小さな家に住んでいました。おじいさんは  
 565 8 つむいでくらししていました。ある日、おじ  
 565 10 海にでてあみをなげました。すると、金の  
 566 1 さかながかかってきました。金のさかなは  
 566 4 会 たくさんさしあげます。」といいました。  
 566 5 は、「略。」「いいました。おじいさんは  
 566 8 って、はなしてやりました。おじいさんは  
 566 9 このふしぎな話をしました。「略。」「おば  
 567 7 は、「略。」「いいました。あくる日、お  
 567 8 さんは海へやってきました。海はすこしあ  
 567 9 海はすこしあれていました。おじいさんが  
 567 9 が金のさかなをよびますと、すぐできて  
 568 1 て、「略。」「とききました。「略。」「略  
 568 3 会 ほしいといっています。「略。」「おじ  
 568 7 会 いおけができていますよ。「おじいさん  
 568 9 しいおけを持っています。ところが、お  
 569 1 さんは海へやってきました。海はにごって  
 569 1 た。海はにごっていました。おじいさんが  
 569 2 が金のさかなをよびますと、およいできて  
 569 3 、およいできてきました。「略。」「略  
 569 8 会 ちゃんとできていますから。「おじいさ  
 569 11 会 っぱな家がたっていました。おばあさんは  
 570 5 は、「略。」「いいました。おじいさんは  
 570 6 、また海へやってきました。海はあれてい  
 570 7 した。海はあれていました。おじいさんが

570 8 が金のさかなをよびますと、金のさかなが  
 570 9 さかながおよいできました。「略。」「略  
 571 2 さんのところへ帰りますと、おばあさんは  
 571 6 赤いくつをはいていました。めしつかいた  
 571 6 めしつかいたちもいました。おじいさんが  
 571 11 が、「略。」「いいますと、おばあさんは  
 572 1 のしごとにおいやりしました。それから三日  
 572 3 はおじいさんにいいました。「略。」「おじ  
 572 11 とほと海へやってきました。海はまっ黒に  
 573 1 黒になってあれていました。おじいさんが  
 573 2 が金のさかなをよびますと、金のさかなは  
 573 4 「略。」「とたずねました。「略。」「略  
 573 6 会 りたいといっています。「略。」「とい  
 573 8 会 さんは女王になりますよ。「略。」「とい  
 573 9 会 」「略。」「いいました。おじいさんが  
 574 1 なっているではありませんか。そばには、  
 574 2 なければいけません。おじいさんは、  
 574 5 会 まんぞくでございましょう。」といいま  
 574 6 は、「略。」「いいました。おばあさんは  
 574 10 「略。」「といいつけました。それから一週  
 575 1 いさんをよんでいいました。「略。」「おじ  
 575 9 りで、海へやってきました。海はまっ黒に  
 575 11 ーゴーとうなっています。おじいさんは金  
 576 1 は金のさかなをよびました。金のさかなは  
 576 2 なは、でてきていいました。「略。」「略  
 576 5 会 いやだといっています。海のぬしになり  
 576 8 会 したいといっています。「金のさかなは、  
 577 1 よいでいってしまいました。おじいさんは  
 577 3 さんのところへ帰りました。みると、まえ  
 577 4 小さな家がたっていました。入口におばあ  
 577 4 さんがすわっていました。こわれたおけ  
 577 5 一つ、ころがっていました。十 学級日



五779、三本かざってありました。かおよりも大  
五783(会)の時間に、写生しましょう。」とおっし  
五784略。」とおっしゃいました。ひまわりの花  
五788教室が明かるくなりました。七月十二日  
五791小川のところにきました。そうして、川  
五792のついたことを書きました。つぎのような  
五793な文が、はりだされました。「略。」「略  
五794高く鳴ったりしています。」「略。」「略  
五795までも高く鳴っています。」「略。」「略  
五797りして、流れていきます。」「略。」「略  
五798りちんだりにしています。」「略。」「略  
五799のようにおよいでいます。」「略。」「略  
五801くらくと流れていきます。」「略。」「略  
五802石とが、おどっています。」「略。」「略  
五803て、とんではねています。」「略。」「七月  
五804かがあつくなってきました。」「七月十三  
五806ようは大そうじをしました。ゆかをきれい  
五806ゆかをきれいにふきました。かべいたもふ  
五807た。かべいたもふきました。竹のさきにほ  
五808のくものすをはらいました。むすびめがと  
五809けて、ほうきがおちました。それが、にし  
五810んのせなかにあたりました。にしもりさん  
五811ので、みんなわらいました。ガラスもきれ  
五812のけしきがよくみえました。七月十四日  
五814きょうは五人も休みました。」「どうして、  
五825、先生がおっしゃいました。みんなは、な  
五827などを、話しあいしました。七月十五日  
五829をみにいらっしゃいました。そうして、私  
五831室にもおいでになりました。そのお友だち  
五833したいとおっしゃいました。そこで、おひ  
五835まん中にしてならびました。先生のお友だ  
五835(会)いいですか、写しますよ。」とおっしゃ

五839んにわらってしまいました。そこをバチリ  
五8310こをバチリと写されました。七月十六日  
五842、みんなで話しあいしました。たかぎくんは  
五843え日記を書くといいました。たなかさんは  
五844たくさん作るといいました。ささきくんは  
五845星をしらべるといいました。いとうくんは  
五847つて、よろこんでいました。いのうえさん  
五849にわけてみるといいました。「略。」「と、  
五8410(会)んの字びきができますね。」と、先生が  
五8411、先生がおっしゃいました。十一 りよ  
五855、木の葉をはきよせました。そこへ、村の  
五857びながら、走ってきました。「略。」「略  
五8510(会)さんはあとからきますよ。」「略。」「そ  
五866ひとりの子どもがきます。りようかんさん  
五8810のまわりにあつまりました。「略。」「ひ  
五902(会)、おじぎをなさいましたね。あれはどう  
五903、「略。」「とたずねました。「略。」「略  
五913ざしきにつれていきました。「略。」「みる  
五916いるだけのことがあります。「略。」「略  
五927(会)かんさん、ちがいますよ。ごはんの中に  
五9211(会)「略。」「ちがいますよ。」「略。」「わ  
五933、みんな帰っていきました。りようかんさ  
五936らのいどばたに立ちました。むこうの山か  
五939でも月にみとれていました。十一 ひわ  
五942わらびをとりにいきました。その帰り道に  
五943小鳥のひなをひろいました。ひなはたいそ  
五945て、たべさせてやりました。ひなは、みち  
五957だんだん大きくなりました。「略。」「さん  
五959(会)まで、かってやりましょうね。」「さんち  
五9511なはずりめではありませんでした。ひばり  
五9511た。ひばりでもありませんでした。あたま  
五961った美しい鳥になりました。「略。」「と、

五963(会)、ひわといっています。いまにいい声で  
五964(会)いい声でさえずりますよ。」と、となり  
五965さんがおしえてくれました。夏休みがすむ  
五967中をとびまわっていました。「略。」「略  
五968(会)とべるようになりましたね。かごからだ  
五969(会)て、にがしてやりましょうか。」「略。」「  
五973るうちに、秋になりました。まいにち、わ  
五974鳥のむれがとんできます。その中には、ひ  
五976、ひわのむれもありました。さんちゃん  
五978で休んだりしていきました。「略。」「ひわ  
五981まの鳴き声だと思いました。そうして、へ  
五984でもさえずりはじめました。いちばんはじ  
五985かあさんがききました。「略。」「略  
五986(会)でさえずりはじめましたよ。このままか  
五9810。パタパタと音がしましたので、みんなが  
五991わをとうとうしてしまいました。「略。」「とい  
五993にげていつてしまいました。ひわは、か  
五994して、ころがっていました。さんちゃん  
五995をつけてやったりしますと、やとと生き返  
五996と、やとと生き返りました。二三日すると  
五998中をとびまわっていました。「略。」「略  
五1002半分しかひろげられせん。「略。」「さん  
五1005によくいつてきかせました。ひわは、「略  
五1007なつつこい声で鳴きました。さんちゃんが  
五1011の本をよむ声をまねます。さんちゃんが、  
五1017けんめいにまねをします。鳥かごは、おひ  
五1010の高いところにかけますが、おひるすぎに  
五1011の木につるしておきます。人がときどき  
五1022きて、水道をつかいます。水が、ジャー、  
五1028、すずしい声で鳴きます。さんちゃんのお  
五1029んが、せんたくをしますと「略。」「と、  
五10211と、ひわもまねをします。かえでの木につ

五103 2 いろな鳥がやってきました。すずめがきたと  
五103 4 略。』と鳴いてみせました。すずめは、『へ  
五103 7 は、『略。』と鳴きました。ひわが、『略  
五103 10 わがしく鳴いてみせました。すずめは、お  
五104 1 とんでいてしまいました。みそさざいが  
五104 4 が、『略。』と鳴きました。すると、みそ  
五104 6 、木のかげにかくれました。どこからか、  
五105 1 なひとりごとをいいました。ひわは、感心  
五105 2 もその声をきいていました。しじゅうから  
五105 3 あくる日もやってきました。そのつぎの日  
五105 4 つぎの日もやってきました。それで、ひわ  
五105 5 ができるようにしました。いつのまにか  
五105 7 こかへいつてしまいました。ひわは、い  
五105 8 ひとりよろこんでいました。『略。』さん  
五105 10 さんも、ひわをほめました。秋になると、  
五105 11 わたり鳥がやってきました。ある日、二三  
五106 2 まつの木におりてきました。ひわは、それ  
五106 5 うに、さかんに鳴きました。旅のひわも、  
五106 6 声をあわせてうたいました。旅のひわが、  
五106 10 が、『略。』といいました。『略。』『略  
五107 7 からつきへときかせました。そこへ、さん  
五107 8 が学校から帰ってきました。旅のひわは、  
五107 9 木の上へにげていきましたが、かごのひわ  
五107 11 、『略。』をはじめました。『略。』かご  
五108 5 わは、なかまをよびました。けれども、旅  
五108 8 とんでいつてしまいました。近いところに  
五108 11 からばんまでひびきました。近所の人たち  
五109 1 こまったといっていました。しかし、ひわ  
五109 5 略。』と、まねをしました。『略。』おと  
五109 9 ひわがかわいくなりました。  
六99 9 じは、『ここにいます。』ときげびたく  
六122 2 、『時計はなおりましたか。』『略。』

六123 3 、『略。』『なおりました。小さなねじが  
六124 4 が一本いたんでいましたから、とりかえ  
六125 5 、『とりかえておきました。ぐあいのわる  
六133 3 一びきのありがいました。あつい日中の  
六134 4 ると、のどがかわきました。ちようど、そ  
六135 5 ばに小川が流れていました。ありは、川の  
六136 6 いて水をもうとしました。もうすこしで  
六138 8 の中におちてしまいました。『略。』あり  
六142 2 な声をだしてさげびました。けれども、だ  
六143 3 、だれもきてはくれません。『略。』あり  
六144 3 めいにさげびつづけました。それを一わの  
六148 8 一わのはとがみつけました。とは、いそ  
六1410 10 そばにおとしてやりました。木の葉は船の  
六151 1 、ありのそばを流れました。『略。』あり  
六154 4 の葉の船につかまりました。そうしてその  
六155 5 うしてその上に乗りました。木の葉の船は  
六157 7 れて、川の岸につききましたので、ありは、  
六158 8 にあがることができました。『略。』あり  
六161 1 の葉におれいをいいました。そのとき、あ  
六163 3 が弓矢を持って通りました。そのかうど  
六165 5 て、木の上をねらいました。木の上には、  
六166 6 のはとがとまっていた。はとは、ねら  
六167 7 ることを知らずにいました。ありは、いそ  
六168 8 のすねにはいのぼりました。そうして、力  
六169 9 力いっぱいいききました。小さなありで  
六171 1 と、大きな声をたてました。その声をきい  
六172 2 、はとが下の方をみますと、かりうどが矢  
六173 3 がえているではありませんか。『略。』と  
六175 5 からとびたつていきました。ありときり  
六181 1 て、音楽会をしています。あるきりぎりす  
六181 1 イオリンをひいています。あるきりぎりす  
六182 2 はチェロをひいています。あるきりぎりす

六183 3 すはふえをふいています。そのほか、ハ  
六186 6 、うたをうたっています。まん中に、しき  
六187 7 いっしんにふっています。しばらく音楽が  
六188 8 がつづいてから終わります。しきしや『上  
六1810 10 てきて、あせをふきます。きりぎりすの『な  
六1910 10 いなもんくをいいましたね。こんな樂し  
六1911 11 きは、二どとありませんね。』しきしや『  
六206 6 』みしようではありませんか。』みんな『そ  
六2010 10 まって、まるくなりませう。テーブルには、  
六2011 11 おさらにもつてあります。みんな、樂しそ  
六211 11 しそうにそれをたべます。きりぎりすの『美  
六215 5 んな喜んでできています。そのとき、しも  
六217 7 き、ゆっくりできてきます。大きな荷物を、  
六219 9 をあわせて運んできます。きりぎりすの『お  
六222 2 ありたちは氣がつきません。きりぎりすの『  
六248 8 声をかけて持ちあげます。しきしやの『苦  
六255 5 かみてにさつていきます。しきしや『われ  
六259 9 やかに音楽をはじめます。二のぼめん  
六262 2 分はそとになつています。雪がちらちら降  
六268 8 火を赤くもえたせす。あり二、三『あ  
六282 2 が二ひきたずねてきます。ぼうしもかぶら  
六284 4 、がいつともきていません。きりぎりす一  
六289 9 をトントんとたたきます。あり三『おや、  
六291 1 二が戸の方をみえています。あり三『おはい  
六293 3 一、二がいつてきます。あり三『きりぎ  
六2911 11 一、二どうかたのみませう。』あり二『どうし  
六304 4 んにいてもつてきます。それをきりぎり  
六305 5 きりぎりすにわたします。きりぎりす『あり  
六307 7 札をいつてたちざります。雪がたくさん降  
六308 8 がたくさん降ってきます。——まく——  
六402 2 い。すぐ帰ってきますから。』29 親つば  
六427 7 うちにおねがいします。』36 つばめのむ

六五三 なきれいに光っていました。ふみおと、よ  
 六五四 ふみをして遊んでいました。そのうちに、  
 六五五 かげがみえなくなりました。三人は遊ぶの  
 六五六 やめて、空をみあげました。月は、雲には  
 六五七 うとまたすぐはいります。「略。」と、よ  
 六五八 「と、よしおがいました。月はいま雲か  
 六五九 そぎではなれていきます。そうして、つぎ  
 六六〇 どんどん走っていきます。けれど、じつ  
 六六一 でいくようにもみえます。「略。」と、み  
 六六二 「と、みちこがいました。ふみおは、両  
 六六三 うことをきいていました。「略。」「略」  
 六六四 いて、空をみあげました。よしおとみち  
 六六五 おはふしぎでたまりませんでした。ふみお  
 六六六 がある木の下へいきました。そうして、し  
 六六七 枝ごしに月をみていましたが、「略。」と  
 六六八 「と、手まねきをしました。ふたりは木の  
 六六九 のそばへ走っていきました。「略。」ふた  
 六七〇 那のとおりにしてみました。すると、月は  
 六七一 いだにじっとしていましたが、雲はさつさと  
 六七二 さつさと走っていきます。よしおが大きな  
 六七三 おが大きな声をだしました。「略。」「略」  
 六七四 と、みちこも感心しました。それから、三  
 六七五 、それぞれ家へ帰りました。ふみおがねる  
 六七六 いにはれわたっていました。ふみおはさつ  
 六七七 の木の下へいってみました。動かないと思  
 六七八 はずれてしまっていました。六 かね新  
 六五九 を発行することになりました。かね新聞第一  
 六六〇 でつくることになりました。それから、二  
 六六一 うをするのにきめました。私たち一組の  
 六六二 かといういろいろ相談しました。手わけをして  
 六六三 六五九 六六〇 六六一 六六二 六六三 六六四 六六五 六六六 六六七 六六八 六六九 六七〇 六七一 六七二 六七三 六七四 六七五 六七六 六七七 六七八 六七九 六八〇 六八一 六八二 六八三 六八四 六八五 六八六 六八七 六八八 六八九 六九〇 六九一 六九二 六九三 六九四 六九五 六九六 六九七 六九八 六九九 七〇〇 七〇一 七〇二 七〇三 七〇四 七〇五 七〇六 七〇七 七〇八 七〇九 七一〇 七一一 七一二 七一三 七一四 七一五 七一六 七一七 七一八 七一九 七二〇 七二一 七二二 七二三 七二四 七二五 七二六 七二七 七二八 七二九 七三〇 七三一 七三二 七三三 七三四 七三五 七三六 七三七 七三八 七三九 七四〇 七四一 七四二 七四三 七四四 七四五 七四六 七四七 七四八 七四九 七五〇 七五一 七五二 七五三 七五四 七五五 七五六 七五七 七五八 七五九 七六〇 七六一 七六二 七六三 七六四 七六五 七六六 七六七 七六八 七六九 七七〇 七七一 七七二 七七三 七七四 七七五 七七六 七七七 七七八 七七九 七八〇 七八一 七八二 七八三 七八四 七八五 七八六 七八七 七八八 七八九 七九〇 七九一 七九二 七九三 七九四 七九五 七九六 七九七 七九八 七九九 八〇〇 八〇一 八〇二 八〇三 八〇四 八〇五 八〇六 八〇七 八〇八 八〇九 八一〇 八一一 八一二 八一三 八一四 八一五 八一六 八一七 八一八 八一九 八二〇 八二一 八二二 八二三 八二四 八二五 八二六 八二七 八二八 八二九 八三〇 八三一 八三二 八三三 八三四 八三五 八三六 八三七 八三八 八三九 八四〇 八四一 八四二 八四三 八四四 八四五 八四六 八四七 八四八 八四九 八五〇 八五一 八五二 八五三 八五四 八五五 八五六 八五七 八五八 八五九 八六〇 八六一 八六二 八六三 八六四 八六五 八六六 八六七 八六八 八六九 八七〇 八七一 八七二 八七三 八七四 八七五 八七六 八七七 八七八 八七九 八八〇 八八一 八八二 八八三 八八四 八八五 八八六 八八七 八八八 八八九 八九〇 八九一 八九二 八九三 八九四 八九五 八九六 八九七 八九八 八九九 九〇〇 九〇一 九〇二 九〇三 九〇四 九〇五 九〇六 九〇七 九〇八 九〇九 九一〇 九一一 九一二 九一三 九一四 九一五 九一六 九一七 九一八 九一九 九二〇 九二一 九二二 九二三 九二四 九二五 九二六 九二七 九二八 九二九 九三〇 九三一 九三二 九三三 九三四 九三五 九三六 九三七 九三八 九三九 九四〇 九四一 九四二 九四三 九四四 九四五 九四六 九四七 九四八 九四九 九五〇 九五二 九五三 九五四 九五五 九五六 九五七 九五八 九五九 九六〇 九六一 九六二 九六三 九六四 九六五 九六六 九六七 九六八 九六九 九七〇 九七一 九七二 九七三 九七四 九七五 九七六 九七七 九七八 九七九 九八〇 九八一 九八二 九八三 九八四 九八五 九八六 九八七 九八八 九八九 九九〇 九九一 九九二 九九三 九九四 九九五 九九六 九九七 九九八 九九九 一〇〇〇

六五七 せしたいことを書きます。みんなが喜ぶよ  
 六五八 ぶようなことを書きます。みんなのしらべ  
 六五九 ことをはつてようします。おもしろいこと  
 六六〇 おかしいことも書きます。どうぞ、みなさ  
 六六一 に雪がついてころびました。そのひようし  
 六六二 めて、歩けなくなりました。そこを通りか  
 六六三 て学校までつれてきました。この人は、私  
 六六四 ろいことに気がつきました。それはことば  
 六六五 たいやうすいかと考えました。どうして、ふ  
 六六六 たえないのかと考えました。そのわけがわ  
 六六七 。そのわけがわかりました。うたうたは  
 六六八 うた」をしらべてみました。ウスムラサ  
 六六九 思いだして書いてみました。カボチャノ  
 六七〇 ナガ——七 サキマシタ——五 アンナ  
 六七一 ロニ——七 サキマシタ——五 いろは  
 六七二 まるものがみつかりました。これがわかっ  
 六七三 はおもしろくてなりませんでした。また、  
 六七四 また、ふしぎでなりませんでした。みなさ  
 六七五 朝の温度を書きつけましょう。「略。」「へ  
 六七六 口話 川が流れていました。くつが流れて  
 六七七 た。くつが流れてきました。そこへきゅう  
 六七八 きゅうりが流れてきました。きゅうりがく  
 六七九 がくつの中にはいりました。「略。」とい  
 六八〇 た。「略。」といいました。みじかい文  
 六八一 の第一かいめを書きます。第二号をつくる  
 六八二 もお話を一つつけてみましょう。どんなふう  
 六八三 か、楽しみではありませんか。お話の題は  
 六八四 話の題はべつにきめませんか。かってに  
 六八五 の子ぐまが住んでいました。お友だちと遊  
 六八六 山の谷を歩いていきました。すると、一ぴ  
 六八七 びきのさるにであいました。「略。」と、  
 六八八 、さるさん。遊びましょう。」と、子ぐ  
 六八九 ぼっていつてしまいました。子ぐまはまた  
 六九〇 まはまた歩いていきました。このほか、  
 六九一 り、きれいに写生しました。それを切りと  
 六九二 った新聞にはりつけました。それは、むし  
 六九三 です。まんがもいれました。一組の人がみ  
 六九四 ズバズルもしらえました。ことば遊びも  
 六九五 。ことば遊びも書きました。この学校の子  
 六九六 名や家の場所も書きました。かね新聞の大  
 六九七 んなに大きくはありませんが、これをじょ  
 六九八 きな雪だるまを作りました。目もはなも口  
 六九九 目もはなも口もつけました。「略。」「略」  
 七〇〇 えさんが、帰ってきました。「略。」「略」  
 七〇一 、ねえさんはわらいました。「略。」「略」  
 七〇二 話もするかもしれないよ。「略。」  
 七〇三 は本気になっていいました。はるえは、ま  
 七〇四 ろを、ふと思いだしました。「略。」「略」  
 七〇五 るま、きつと喜びますよ。」その日、晩  
 七〇六 はこんなことを考えました。いったい、あ  
 七〇七 で、みんながわらいました。「略。」「略」  
 七〇八 というものがありますよ。それを考えた  
 七〇九 らわかるじゃありませんか。」とおっし  
 七一〇 略。」とおっしやいました。「略。」「略」  
 七一一 。「略。」「動きましますよ。」「略。」  
 七一二 。「あれはちがいますよ。」「略。」「へ  
 七一三 ぎからつぎへと考えました。たとえ動いて  
 七一四 、ごろうは思いつきました。あくる朝、お  
 七一五 だけんとろがつきません。」と答えまし  
 七一六 は、「略。」と答えました。「略。」学校  
 七一七 に、まつの枝をつけました。はるえはそれ  
 七一八 て、「略。」とききました。ごろうは、「へ  
 七一九 がないのかなと思いました。ごろうが学校  
 七二〇 いし、息もしていませんね。」「略。」

六八二 ぼっていつてしまいました。子ぐまはまた  
 六八三 まはまた歩いていきました。このほか、  
 六八四 り、きれいに写生しました。それを切りと  
 六八五 った新聞にはりつけました。それは、むし  
 六八六 です。まんがもいれました。一組の人がみ  
 六八七 ズバズルもしらえました。ことば遊びも  
 六八八 。ことば遊びも書きました。この学校の子  
 六八九 名や家の場所も書きました。かね新聞の大  
 七〇〇 んなに大きくはありませんが、これをじょ  
 七〇一 きな雪だるまを作りました。目もはなも口  
 七〇二 目もはなも口もつけました。「略。」「略」  
 七〇三 えさんが、帰ってきました。「略。」「略」  
 七〇四 、ねえさんはわらいました。「略。」「略」  
 七〇五 話もするかもしれないよ。「略。」  
 七〇六 は本気になっていいました。はるえは、ま  
 七〇七 ろを、ふと思いだしました。「略。」「略」  
 七〇八 るま、きつと喜びますよ。」その日、晩  
 七〇九 はこんなことを考えました。いったい、あ  
 七一〇 で、みんながわらいました。「略。」「略」  
 七一〇 というものがありますよ。それを考えた  
 七一一 らわかるじゃありませんか。」とおっし  
 七一二 略。」とおっしやいました。「略。」「略」  
 七一三 。「略。」「動きましますよ。」「略。」  
 七一四 。「あれはちがいますよ。」「略。」「へ  
 七一五 ぎからつぎへと考えました。たとえ動いて  
 七一六 、ごろうは思いつきました。あくる朝、お  
 七一七 だけんとろがつきません。」と答えまし  
 七一八 は、「略。」と答えました。「略。」学校  
 七一九 に、まつの枝をつけました。はるえはそれ  
 七二〇 て、「略。」とききました。ごろうは、「へ  
 七二一 がないのかなと思いました。ごろうが学校  
 七二二 いし、息もしていませんね。」「略。」

六77 11、ごろろは考えつきました。その夜、ごろろ  
六78 2えついたことを話しました。すると、おと  
六78 6略。』とおっしゃいました。そばからねえ  
六78 10が、「略。』と仰いました。ごろろは、息  
六79 1て、なるほどと思いました。「略。』ごろ  
六79 2息ばかりではありますよ。ほら、左の  
六79 8おの花」を思い出しました。そうして、自  
六79 10もののように思われました。八 つりば  
六80 3ん、お願いがあります。』ほでりの「なんだ  
六80 6けものをとっていただけますね。』みこと「そう  
六81 5をさせてくださいませんか。そのかわり  
六84 9と、「いいえ、つれませんでした。つれな  
六85 1ことをしてしまいました。』ほでりの「どう  
六85 4にとられてしまいました。』みこと「とら  
六85 8「申しわけがありません。どんなことで  
六85 10て、おわびいたします。』ほでりの「だいじ  
六87 5ことを教えてあげましょう。そこに船が  
六87 10きな木が立っています。あなたは、その  
六88 5さい。おしてあげますから。』五のぼめ  
六90 2。ほおりの「すみませんが、そのいどの  
六91 1さまに、申しあげます。海の神「なんだ  
六91 3たがいらいしやいます。』海の神「木の上  
六91 5「さようございます。』海の神「では、  
六91 11たでいらつしやいますか。』ほおりの「私は  
六92 2、さようでございますか。なにかご用  
六92 4にかご用でございますか。』ほおりの「ほお  
六92 11私も困ってしまいました。そこへ年をと  
六93 2と教えてくださいました。それで、いま  
六93 5そくさがさせてみましょう。』女の人に  
六93 10もをよんでまいりました。』海の神「これ  
六94 2、病氣でねておりますので、ここへはま

六94 4へはまいっております。』海の神「そう  
六94 10か。』魚「「ぞんじません。』魚「「とりま  
六94 11せん。』魚「「とりません。』魚「「ちつと  
六95 1「ちつともぞんじません。』海の神「それ  
六96 4にかご用でございますか。』海の神「  
六96 6ばりをのどにかけまして、たいへん苦し  
六96 7るところでございます。』海の神「あ、そ  
六97 2っかりらくになりました。』女の人「はつ  
六97 6りばかりではございませんか。』ほおりの「あ  
六97 8よろしゅうございました。』みこと「あり  
六104 2せんたく物もみえますよ。あ、人がこつ  
六114 2からたこをいただきました。ま四角で、骨  
六114 6。』と仰てわらいました。けれども、あ  
六114 7なかなかよくあがりました。だれのたこよ  
六114 7こよりもよくあがりました。わる口をいっ  
六115 1。』と仰て感心しました。ただしちゃん  
六115 4ら、「略。』と仰いました。ただしちゃん  
六115 5来年少学校へあがります。糸を持ったた  
六115 7と仰てにこにこしました。たこが青空で  
六115 9かり糸をにぎっています。』略。』と、た  
六115 11ただしちゃんがいました。ほんとうにほ  
六116 3で、「略。』と仰いますと、ただしちゃん  
六116 5元氣のいい声で仰いました。たろうさんが  
六116 8ら、「略。』とききました。』略。』と答  
六116 10た。』略。』と答えましたが、ほんとうは  
六117 1はないだろうと思いましたが、うちへ帰って  
六117 3作りかたを考えてみました。材料は、ま四  
六117 6のひごでまにあわせました。のりは、ごは  
六117 7と、いいのりができました。はじめに半紙  
六117 8半紙をま四角に切りました。なが四角から  
六117 9んに教えていただきましたから、うまくで  
六117 10たから、うまくできました。』略。』と、

六117 11「と、いろいろ考えましたが、ただしちゃん  
六118 1顔をかくことにしました。クレヨンで色  
六118 6きとうきあがつてきました。つぎに骨のと  
六118 11、たて骨からはじめました。紙のうらには  
六119 1じがたてについています。そのすじにあわ  
六119 3とまん中をはりつけました。それから、よ  
六119 7い長さにひごを切りました。はりつけるの  
六119 8て、うまくはりつけました。やつとできた  
六119 11て、「やつとできましたよ。』と仰て  
六120 1「と仰ておみせしました。おかあさんは  
六120 2「まあ、よくできましたね。』と、ほめ  
六120 3と、ほめてくださいました。』略。』と、略  
六120 6と、すぐはがれますよ。そうとかわ  
六120 8この上にのせておきました。』略。』と、略  
六120 11、うれしくてたまりました。』略。』と、略  
六121 2きのうさぎさんがいました。ある日のこと  
六121 7ルをしたりして遊びました。そこへ、おさ  
六121 9さるさんがやってきました。』略。』と、略  
六122 3げようと、話しあいました。』略。』と、略  
六122 6るさんになつてやりました。おさるさんは  
六122 8まつかさを受けてやりました。うさぎさん  
六122 9るみの木の下で遊びました。そこには、く  
六122 10ころころと落ちていました。うさぎさんは  
六123 2つてたべることにしました。』略。』と、略  
六123 7ろと、りすさんがきました。』略。』と、略  
六124 8、おいしそうにたべました。』略。』と、略  
六126 4にあなをほりはじめました。まえ足でほつ  
六126 5足で土をはじきだしました。あなはずんず  
六126 6ずん長くなつていきました。』略。』と、略  
六126 9深くなり、廣くなりました。』略。』と、略  
六127 4をして、おにをききました。おにが、目を  
六127 7「略。』とさげました。四ひきのうさ

六127 8 ルの中を走っていききました。「略。」「  
六128 2 ことさがしにでかけました。おにの足音を  
六128 4 たちは、うまくにげました。おにがあら  
六128 6 らへこっそりわたりました。かくれている  
六128 8 いて、うまくにげました。ところが、一  
六128 11 ころがりこんでいききました。「略。」「新し  
六129 3 で、だれかの声がします。それはたぬきさ  
六129 4 てなにかあわてています。「略。」「略」  
六130 7 がかわいそうになりました。うさぎさんた  
六130 10 の方へいってしまいました。それをみて、  
六131 1 「と、大声でわらいました。「略。」「うさ  
六131 7 くらんで、話をしました。「略。」「略」  
六132 9 しかさんがあらわれました。「略。」「略」  
六133 5 て、山の方をみあげました。「略。」「略」  
六134 5 ちは、困ってしまいました。どうせ、足の  
六134 6 、しかさんにかいません。そうすると、  
六134 8 しまわなければなりません。しかさんに勝  
六134 10 どということはできません。角をとったと  
六134 11 ころで、なんになりましょう。ちっともい  
六135 3 さんたちは話しあいました。「略。」「うさ  
六135 5 、しかさんとならびました。しかさんは、  
六135 8 元氣のいい声をかけました。五ひきのうさ  
六135 9 風のように走りだしました。ささの中、や  
六136 2 ぶの中をとんでいきます。のぼりざかを走  
六136 3 かさんも負けてはいません。角をふりたて  
六136 3 りたてふりたて走りました。ところが、ぶ  
六136 3 に、角がひっかかりました。「略。」「しか  
六136 7 てんころりとこぼれました。「略。」「ぶん  
六136 10 っぺんにとどろつきました。そこには、も  
六136 11 うさぎさんたちはいませんでした。そうし  
六137 2 レヨンで書いてありました。「略。」「略」  
六137 3 手、私たちが勝ちましたよ。けれども、

六137 4 手 あなたの角はおりません。うさぎたち。  
六137 8 、どんどん追いかけてました。うさぎさんた  
六137 9 り、みねを一つこえました。長い森をくぐ  
六137 10 た。長い森をくぐりました。そのうちに、  
六137 11 にかはぐれてしまいました。やがて、うさ  
六138 1 きな岩のところにでました。「略。」「略」  
六138 6 っくり休むことにしました。ところが、こ  
六138 8 ことをすこしも知りませんでした。とらさ  
六139 1 目をさましてしまいました。「略。」「とらさ  
六139 4 んたちの方をのぞきました。五ひきのうさ  
六139 5 足をもんだりしていました。とらさんは、  
六139 8 ねのような声をたてました。うさぎさんは  
六139 10 とうつぶしてしまいました。「略。」「のそ  
六140 2 り、そばに歩いてきました。うさぎさんた  
六140 4 もにげることはできません。助けてくださ  
六140 6 くれるみこみありません。とらさんが手  
六140 8 んのせなかをおさえました。うさぎさんた  
六140 10 さまにおいのりをしました。そのとき、「へ  
六141 2 のような声がひびきました。それは、もう  
六142 1 らさんにとびかかりました。二ひきのとら  
六142 2 つかみあいをはじめました。上になったり  
六142 3 り、下になったりしました。そのあいだに  
六142 5 で、そこをにげだしました。どんどん、ど  
六142 6 どん、どんどんにげました。山を、いくつ  
六142 7 つも、いくつもこえました。谷川にそって  
六142 8 山のふもとにでてきました。やっとしずか  
六142 9 ずかな廣い野原にでました。野原には、日  
六142 10 がいっぱいさしています。クロバーの花  
六142 11 、まっ白にさいています。おなかのすい  
六143 1 なクロバーをたべました。みつばちさん  
六143 6 、うたいながらいいました。五ひきのうさ  
六143 9 へんありがたく思いました。へへのもの

七11 2 「手がよごれていますよ。」「略。」「へ  
七11 3 」。」「手がつけれません。」「略。」「同  
七11 6 なつかいかたがあります。じょうずなでき  
七11 8 、思わず手をたたきます。このときの「手  
七11 9 てのひらをさしています。」「手をうつ」の  
七12 2 と、人の手ではありません。これは、持つ  
七12 2 ろということになります。また、「略。」「  
七12 3 あさがおに手をやりましょう。」「という  
七12 4 、またすこしちがいます。これは、あさが  
七12 6 る手のことではありません。あさがおのつ  
七12 9 「手ならいをはじめましょう。」「略。」「  
七12 11 書くことをさしています。どうして、「  
七13 9 」。」「とかいたりします。私どもの手が、  
七13 11 はたらきをしてくれます。つぎの「手」は  
七14 2 まつの木が立っています。」「略。」「略」  
七14 8 「手」だけではありません。」「略。」「略」  
七15 9 おもしろいではありませんか。三 もん  
七16 6 先生、早くでかけましょう。」「先生「じゃ  
七16 9 」。」「はい、しらべました。」「はん長「先  
七16 10 きようは風がありませんから、ちようち  
七20 7 だけのこしておきました。それが、い  
七20 8 白い花をつけています。」「先生「それで知  
七23 8 つばを、とりかえましたか。」「兄「あ、わ  
七25 2 むし、大きくなりましたね。たまごをと  
七25 4 さい。日記帳をみますから。」「日記帳を  
七25 6 、七日かかっています。それから十日す  
七25 10 なるのか、わかりますか。」「兄「どうして  
七27 6 ことをおっしゃいましたね。なんでも、  
七27 7 分で見つけていきましようね。」「はお  
七27 9 いいえ、生きていますよ。これから、ど  
七28 4 おもてで遊んでいますよ。」「兄「おあさ  
七29 2 の。」「兄「よんでみましようか。」「母「よん

七三三(会) に、うつしてやりましょうね。」母「それ  
七三四(会) こし、中へはいれませんか。」「略。」  
七三四(会) ている女の人もありました。私と弟のさぶ  
七三九(会) 、動くことさえできません。私は、さぶろ  
七三五(会) だにすがりついていた。それでも、汽  
七三六(会) うに両手をつっぱりました。家をでるとき  
七三六(会) へいれてくださいませんか。」「略。」  
七三六(会) とうに困ってしまいました。」「略。」私は  
七三六(会) 、どうぞぶじにつきますようにと、心の中  
七三六(会) 心の中でいのっていました。」「略。」頭の  
七三六(会) 頭の上で声がしました。すぐうしろの  
七三六(会) 、中へいれてやれませんかしら。」と、  
七三六(会) と、心配そうにいました。すると、なん  
七三七(会) なったような気がしました。私は、さぶろ  
七三七(会) 略。」ときいてみました。人ごみのうす  
七三七(会) こつと、私をみあげました。だが、  
七三七(会) んながわつとわらいました。そのとき、ふ  
七三七(会) まどわくをおしています。私たちのために  
七三二(会) ありがとうございます。」と、頭をさげ  
七三三(会) 略。」と、頭をさげました。」「略。」うし  
七三五(会) ばさんがいつてくれましたので、私は、人  
七三七(会) きわけていこうとしました。しかし、弟の  
七三九(会) も、よいいではありません。そのとき、そ  
七三九(会) のまえへ、つきだしました。おじさんは、  
七三九(会) て、つぎの人に渡しました。それから、つ  
七三九(会) ぐ。」と、送ってくれました。はじめ、さぶ  
七三九(会) うに私の方をみていましたが、三人め、四  
七四〇(会) 、声をたててわらいました。乗客は、高い  
七四〇(会) うに、みおくっていました。私は、いそい  
七四〇(会) うのあとを追いかけてました。三郎は、だれ  
七四〇(会) 私を手まねきしています。私は、さぶろう  
七四〇(会) 心の中でお礼をいいました。(二) 私は

七四三(会) びしい旅をしていました。けれども、き  
七四三(会) 旅行をしております。どこのだなか  
七四三(会) どなたかはほんじませんが、楽しい音楽  
七四三(会) にありがたく思います。はなはだですぎ  
七四三(会) ざたこともありませんが、このかんし  
七四三(会) わしたいとぞんじます。みなさん、いか  
七四四(会) 「ごあいさつをします。」といって、青  
七四四(会) へん失礼だと思ひますが、これは、車中  
七四四(会) ころざしであります。お受けとりくだ  
七四四(会) うとは、思っています。また、  
七四五(会) ひいたのでもありません。ただ、たいく  
七四五(会) 金はいたadakねます。」そういつてか  
七四五(会) りがたくいただきます。」といって、お  
七四六(会) な曲を、一曲ひきましよう。」これをき  
七四六(会) くわしくなっています。どこまで書きた  
七四六(会) きつくものではありません。文章は、心の  
七四六(会) がはつきりとしています。文章も、だん  
七四六(会) だんだんはつきります。心がくもつてい  
七四六(会) 文章のくもりはとれません。つぎに、「下  
七四六(会) 文章が、二へんあります。はじめに書いた  
七四六(会) そのようすがわかります。ドッジボール  
七四六(会) ができるとはかぎりません。そのほんたい  
七四六(会) っていくことがあります。心にはつきりと  
七四六(会) のようなものでありますから、よけいなこ  
七四六(会) どももあつてはなりません。五年生が、運  
七四六(会) 、たいそうをしています。一年生の唱歌が  
七四六(会) の唱歌がきこえてきます。つばきの花がま  
七四六(会) がまつかにさいています。根もとに、ぼた  
七四六(会) 、ぼたぼた落ちています。海がみえます。  
七四六(会) ています。海がみえます。家と家とのあい  
七四六(会) 、ほそ長く光っています。明かるい月夜で  
七四六(会) らで、虫が鳴いています。つむじ風が、わ

七五七(会) を三びき、つかまえました。雨がはれて、  
七五八(会) て、にじが大きくでました。たんぼの上で  
七五八(会) オの音楽をきいています。ほそい雲が、ま  
七五八(会) ま、柱時計がとまりました。黄色いやまぶ  
七五八(会) ちようがとまっています。こんなのは、み  
七五八(会) ぼということはできません。つぎのはどう  
七五八(会) つのやりかたがあります。一つは、はじめ  
七五八(会) いくやりかたであります。まえのやりかた  
七五八(会) 書きたすのにしています。あとのやりかた  
七五八(会) いうことにほかありません。六 月明か  
七五八(会) しゃるのではありませんか。」ふたりは、  
七五八(会) 、かた目ではありませんか。」ふたりは、  
七五八(会) 二三本ぬけてはいませんか。」ふたりは、  
七五八(会) それにちがひありません。」甲「どこでみ  
七五八(会) ん。」甲「どこでみましたか。」旅人は、  
七五八(会) 、つけた荷がありましたね。」甲「あり  
七五八(会) たね。」甲「ありました。」旅人「その荷  
七五八(会) をみたのではありませんか。」甲「え、でも  
七五八(会) ごぞんじではありませんか。」乙「それと  
七五八(会) きいたのではありませんか。」ふたりは、  
七五八(会) さばくを通つていましたが、とちゅうで  
七五八(会) 、ねむってしまった。」裁判官「それ  
七五八(会) と、らくだがいまません。おどろいて、  
七五八(会) 々をさがして歩きましたが、みあたりま  
七五八(会) したが、みあたりません。そのとき、こ  
七五八(会) ずねるのでございます。」乙「それに、も  
七五八(会) はよく知つております。」裁判官「どんな  
七五八(会) ることを知つていました。そのとおり、  
七五八(会) 、かた目でございます。」甲「らくだがび  
七五八(会) ることも知つていました。しかも、左の  
七五八(会) 「はい、知つていました。らくだのまえ  
七五八(会) っているじゃありませんか。」甲「乙「らく

七824 会 の男にちがいありません。どうぞ、おさ  
七825 会 さばきをお願いします。」裁判官「ふたり  
七8210 会 「はい、申しあげます。私がさばくを旅  
七8210 会 さばくを旅してありますと、砂の上にく  
七8211 会 あとがつづいていました。それなのに人  
七831 会 人の足あとがみえませんが、それで、こ  
七839 会 にあさくなっていましたので。」裁判官「  
七841 会 いとったあとをみますと、かみきれない  
七842 会 つている葉がありました。それで、齒が  
七843 会 がいないと、考えました。」裁判官「きい  
七849 会 ただきとうございます。」裁判官「それ  
七8411 会 れはほかでもありません。道に、麦がこ  
七863 会 ぎをかうことになりました。先生が、黒い  
七865 会 持つていらつしやいました。私たちで、め  
七865 会 ちで、めかたを計りました。黒うさぎ3  
七868 会 とも、せつせとたべました。うさぎはどん  
七872 会 らべてみることにしました。きょうは、れ  
七873 会 となたねの葉をやりました。4月30日  
七875 会 こしもじつとしていません。いつも、どこ  
七876 会 どかを動かしています。5月1日 (火)  
七879 会 、とても喜んでたべました。5月5日  
七883 会 、けんかをしてたべました。5月6日  
七886 会 ように、喜んでたべました。5月20日  
七891 会 けで、ちつともたべません。5月22日  
七894 会 なで、13びきになりました。白うさぎが9  
七895 会 さぎを1びきもらいました。5月28日  
七897 会 、とても元氣があります。うさぎでも、く  
七904 会 、耳や顔をなでていました。5月31日  
七907 会 ぎがうしろ足で立ちました。が、すぐ、ま  
七908 会 足をおろしてしまいました。6月25日  
七911 会 へいれてみたらうきました。うさぎのふん  
七913 会 さぎは、元氣がありません。なるべく、こ

七915 会 いように注意しています。7月9日 (月)  
七919 会 の上に乗って、たべました。7月20日  
七922 会 ぎ小屋のそうじをしました。小屋からだす  
七923 会 みんな喜んですぐでました。1びきの白  
七925 会 あげて、そとへだしました。だすときに、  
七926 会 ったりして、あばれました。7月24日  
七931 会 キューと、高く鳴きました。8月2日  
七934 会 が4ひき生まれていました。8月4日  
七937 会 ぼうを、かじっていました。子うさぎの生  
七939 会 な虫が、たくさんいました。9月3日  
七942 会 さぎは耳にけがをしました。ほかのうさぎ  
七943 会 、いたそうにしています。9月6日  
七946 会 暑いのでねむっていました。あと足を長く  
七947 会 を胸の下にいれていました。10月23日  
七952 会 毛がふわふわとびます。寒くなったので  
七952 会 戸をこしらえてやりました。11月11日  
七955 会 がたくさんぬけていました。よくみると、  
七959 会 いっぱいはいつていました。その毛にくる  
七959 会 さぎの子が7ひきいました。1びきは白で  
七9510 会 黒っぽい色をしていました。11月13日  
七9510 会 はまるくなつて いました。おやうさぎ  
七963 会 で、元氣に動いています。1びきのこらず  
七964 会 にそでたいと思います。11月22日 (木)  
七969 会 、すっかり毛がはえました。11月25日  
七973 会 巣からはいだしてきました。草のそばにき  
七973 会 きて、口をくつつけましたが、草はたべま  
七974 会 ましたが、草はたべませんでした。11月  
七976 会 巣からでて歩いていました。そうして、に  
七978 会 うな葉を、たべていました。黒の子うさぎ  
七979 会 のちにすがりつきますと、親うさぎは、  
七9710 会 足でけつて、のませませんでした。うさぎ  
七984 会 けが、草をたべていました。お晝ごろみた

七985 会 巣からでて歩いていました。12月1日  
七988 会 のめかたを計ってみました。母うさぎは4  
七992 会 ぎの毛の長さを計りました。耳の長さも計  
七992 会 た。耳の長さも計りました。耳の長さは、  
七997 会 にんじんをたべていました。よいぐあいに  
七998 会 ているので、安心しました。うまれると  
八43 会 じゅうの人氣者がいました。西洋の子ども  
八44 会 がってんしてはいけませんよ。いぬでもね  
八45 会 ぬでもねこでもありません。鳥——それも  
八53 会 の大通りを歩いていましたら、あるデパー  
八55 会 、夜店をひろげていました。小鳥屋という  
八57 会 ほうがいいかもしれません。なぜなら、ほ  
八64 会 だいに持つて帰りました。その晩から家  
八65 会 という名がつけられました。だんだんなれ  
八68 会 つつくようになりました。それどころか  
八611 会 しょうばんしたりしました。客がきてい  
八74 会 ば、指で追ったりしました。すると、だん  
八76 会 らころげ落ちたりしました。朝の早いうち  
八88 会 ろうと思う人もありましようが、そればか  
八811 会 にピオがすきになりました。ピオのほうで  
八92 会 すぐまいもどつてきます。ろじどころか、  
八93 会 まらせても長くはいません。私たちの家の  
八96 会 かたといったらありません。びっくりして  
八98 会 頭をつつこんだりします。といえ、いか  
八99 会 ものようにも思えましようが、どうして  
八104 会 どしたにかんだりします。そのかつこうは  
八108 会 ら書いても書ききれません。小さな家で、  
八110 会 たり感心させたりします。ところが、ある  
八116 会 でピオをひろいあげました。すると、あわ  
八121 会 ゆる手あてをつくしましたが、それなり、  
八121 会 もなく息をひきとりました。みんなないて  
八123 会 は、目をなきはらしましたが、もうどうす

八二 三 どうすることもできませんから、つめたく  
 八二 八 根もとにうめてやりました。そうして、「  
 八二 一〇 せきひを立ててやりました。かわいいもの  
 八三 一 が、かなしくてなりませんでした。ころし  
 八三 五 のことがわすれられませんか。ことに、町は  
 八三 九 、思わずなみだぐみます。たかが一わの小  
 八四 四 ぜみのたまごがありました。親ぜみが、あ  
 八四 六 みつけておいてくれましたので、寒い冬も  
 八四 七 じにこすことができました。春がきても、  
 八四 九 は、はじめてかえりました。二ミリほどあ  
 八五 三 たりしておりていきました。地面におりた  
 八五 六 中にかくれてしまいました。地の中はどこ  
 八五 一〇 さぐりもぐつていきます。そこは木の下で  
 八六 一 なりあつてはえています。おおぎりの根ば  
 八六 二 の木の根ものびています。だから、虫たち  
 八六 三 木の根にいきあたります。しかし、虫たち  
 八六 六 根をさがしてあるきます。虫は、小さいけ  
 八六 七 がった口をもっています。その口のさを  
 八六 八 のしるをすいはじめます。これは、木から  
 八六 一〇 いにそれからはなれません。虫たちは、ど  
 八七 三 くれたことではありません。人間のあかん  
 八七 九 うなかたちをしています。大きくなるに  
 八八 一 ルをほろのにつかいますから、たいへんか  
 八八 二 く、じょうぶになります。土の中は、たと  
 八八 五 ていかなくはなりません。それでたいそ  
 八九 二 て地の上へでていきます。しかし、ほそい  
 八九 六 ように大きくなりません。あぶらぜみで  
 八九 八 とがでけないといえます。なんという氣長  
 八二〇 一 根のしるをすっています。大きくなるに  
 八二〇 二 くもぐりこんでいきます。七年の月日がた  
 八二〇 四 りきつたことを知ります。そこで地表に近  
 八二〇 八 いることなどを知ります。せみの子は、だ

八二〇 一〇 けて地上にはいだします。(二) あめ色  
 八二一 六 ささだけがはえていました。せみは、さつ  
 八二一 八 にはいあがつていきました。地表から一メ  
 八二一 九 、小枝がわかれていました。虫は、それに  
 八二二 一 かなくなつてしまいました。もうすっかり  
 八二二 二 すっかりくらくらしました。あめ色のせな  
 八二二 四 いり、われめができました。すると、中か  
 八二二 七 らだかはみだしてきました。せなかがでま  
 八二二 七 しました。せなかがでます。頭がでます。羽  
 八二二 八 かがでます。頭がでます。羽がぶらりとさ  
 八二二 九 羽がぶらりとさがりました。足もでました  
 八二二 九 がりました。足もでました。ただ、腹の下  
 八二二 一〇 けが皮にかくれていきます。虫はぐつとそり  
 八二三 二 、頭をうしろにさげました。しばらくその  
 八二三 四 ままのしせいで動きません。やがておきな  
 八二三 七 り皮からはなれていきました。みるまに、羽  
 八二三 一〇 色もこくなつていきます。虫は、すずしい  
 八二四 三 、はつきりとしてきます。黒いところは黒  
 八二四 四 ぶらぜみらしくなります。しばらくすると  
 八二四 六 略。と鳴きはじめました。このわかいあ  
 八二四 八 そろそろ歩きだしました。はばたきをし  
 八二四 九 とんでいってとまりました。そこへなかま  
 八二四 一〇 音楽会のようになりました。やがて死ぬ  
 八二五 二 しの人がうたつていますが、そのとおり、  
 八二五 五 そりとしずかになります。せみの死がいはい  
 八二五 六 たかつてひいていきますが、あのぬけがら  
 八二五 八 たくすがりついています。三 天の川  
 八二六 四 きの馬車が走ってきます。中には天帝が乗  
 八二六 一〇 いる野原へおりてきました。そこには、星  
 八二七 四 したりして遊んでいました。天帝は、あた  
 八二七 六 さがすようになさいました。それは、天帝  
 八二七 一〇 けれども、みあたりませんでした。馬車は

八二八 一 ぎつていつてしまいました。やがて、大き  
 八二八 二 天の川にさしかかりました。川の水は銀色  
 八二八 三 がしずかにういていました。川岸にそつて  
 八二八 五 おる音がひびいてきます。天帝は、そつと  
 八二八 六 中へおはいりになりました。すると、さが  
 八二八 七 んにはたをおつていました。そのおり物の  
 八二八 八 かりおみとれになりました。ひめは、なに  
 八二八 九 知らずにおりつづけました。「略。」こう  
 八二九 三 通つていらつしやいました。すると、黒う  
 八二九 五 、わかい男にであいました。そのすがたと  
 八二九 六 だかさがこもっています。「略。」天帝は  
 八二九 七 名はなんといひますか。天帝は、そ  
 八二九 八 は、その男にたずねました。「略。」「略  
 八三〇 四 一つきおつきになりました。黒うしは、お  
 八三〇 六 あばれにあばれだしました。けれども、け  
 八三〇 七 えをふきつづけていました。黒うしは、に  
 八三〇 九 川へ落ちこもうとしましたが、そのせつな  
 八三〇 一〇 くポンポンとたたきました。うしは、うま  
 八三〇 一〇 しく草をたべはじめました。けんぎゅうは  
 八三一 一 に心をうばわれていました。天帝は、男ら  
 八三一 四 すめのむこにもりました。ところが、は  
 八三一 七 とをわすれてしまいました。けんぎゅうも  
 八三一 九 てはたかなくなりました。ふたりは、毎  
 八三二 一 で楽しく遊びつづけました。それをみた天  
 八三二 三 しておしまいになりました。はたおりひめ  
 八三二 四 たをおりながらなきました。天帝は、この  
 八三二 八 略。」とおつしやいました。一年の月日が  
 八三二 一〇 て、ふえをふいてきました。ふたりは、天  
 八三二 一〇 しくあうことができました。(二) 天の  
 八三三 六 ことがそうぞうされます。私たちの、ただ  
 八三三 八 しはかることはできません。ふだん、私た  
 八三三 一〇 用いてきよりを計りますが、星のきよりに





八五二 10 ふかいため息をつきました。それから、か  
 八五三 1 にわとりに氣をつけました。まずしいこじ  
 八五三 4 かい声をだして鳴きました。「幸福」はま  
 八五三 6 もごめんをこうむりました。こんどは、う  
 八五三 7 のまえへいつて立ちました。「略」。「略  
 八五三 9 ぼう」でございませう。「略」。「とい  
 八五三 11 」。『「略」』といひましたが、その家の  
 八五四 2 、おもてに立っていました。その家の  
 八五四 8 略』。』といつてくれました。黄色ななくあ  
 八五四 10 むすびにそえてくれました。「略」。「と、  
 八五五 2 そうに晝ねをしていました。「幸福」には、  
 八五五 3 人の心がよくわかりました。おむすび一つ  
 八五五 7 をわけておいていきました。五、みはら  
 八六四 6 すすこしだいてみましよう。いままです  
 八六四 7 すすわることでもできますから。「略」。  
 八六九 1 1 是れは美しくありませんが、たちはほん  
 八八一 5 是れはさつぱりしますよ。「略」。「へ  
 八九四 3 、種もみひたしをしました。品種は、あじ  
 八九四 5 を、水の中にひたしました。ういたもみが  
 八九四 6 で、手ですくってみますと、かるいもみと  
 八九四 9 きどき水をとりました。こうすると、  
 八九五 4 すこしふくらんでいました。五月五日  
 八九五 7 めのようなものができました。これが、ほん  
 八九六 1 ので、もみまきをしました。種もみひたし  
 八九六 3 かいにしろしをつけた。土をあまり深  
 八九六 6 らのないようにまきました。ひたさない種  
 八九六 7 しろしをつけておきました。いつ、めがで  
 八九六 9 ら黄みどりのめができました。ひたさないほ  
 八九六 10 ほうは、まだめがでません。五月二十一日  
 八九七 3 2 cm から 3 cm にのびました。ひたさない種  
 八九七 4 、やつとめがでてきました。水にひたした  
 八九七 6 うが、1 週間早くできました。六月十三日

八九七 9 ゆられるようになりました。黄みどりの新  
 八九八 1 だんだん育っていきます。どこの田も、た  
 八九八 4 ので、しろかきをしました。いねがよく根  
 八九八 6 くだいてこまかくしました。種まきのとき  
 八九八 7 こんどは深くたがやしました。六月二十七日  
 八九八 9 なえをみんなでわけました。あいだを 30 cm  
 八九九 3 、きそく正しく植えました。1 かぶに 3 本  
 八九九 5 うすをみることにしました。やく 12 平方 m  
 八九九 6 50 かぶばかり植えました。これから、水  
 八九九 9 ないように氣をつけましよう。七月十二日  
 八九九 10 新しいいねがでてきました。これで、もう  
 八九九 12 、5 cm ぐらいいなりました。どのえも生  
 八九九 16 も生き生きとしています。根が横へはるの  
 八九九 17 が育ちがよいと思ひました。七月十八日  
 八九九 19 葉がたくさんでできました。新しい葉は、  
 八九九 1 1 、まるまてでてきます。ずっと日でりが  
 八九九 1 5 おいよく育っていきます。5 かぶをのこし  
 八九九 1 6 ほとんど 85 cm になりました。1 本ずつ植え  
 八九九 1 7 い 7 本ぐらいいなりました。3 本ずつ植え  
 八九九 1 8 、9 本ぐらいいなりましたが、いちばん多  
 八九九 1 8 多いので 15 本になりました。八月十八日  
 八九九 1 9 いねのほがではじめました。葉のついてい  
 八九九 1 10 、黄みどりのほができました。田植えをした  
 八九九 1 25 度、ほがでそろいました。ほの 1 つぶを  
 八九九 1 28 がたくさんはいえていました。花のさいてい  
 八九九 1 29 いているほもみつきました。やくは、白く  
 八九九 1 30 においもなく目だちません。九月四日  
 八九九 1 31 のようすをみにいきましたら、まださいて  
 八九九 1 32 たら、まださいていませんでした。3 時間  
 八九九 1 33 の終りに開きはじめましたが、お晝の時間  
 八九九 1 34 う閉じてしまっていました。花のさくのは  
 八九九 1 35 あいだだけだと思ひました。九月七日

八九九 1 37 た。花は、1 日開きませんでした。九月  
 八九九 1 38 来てかたくなっていました。二つにわつて  
 八九九 1 39 まるくふくらんでいました。これが、きつ  
 八九九 1 40 なごが 6 びきほいしました。葉のうらに、  
 八九九 1 41 が生みつけられていました。先生におきき  
 八九九 1 42 た。先生におききしますと、うんかのたま  
 八九九 1 43 びんなどで虫とりをしました。いねは、だん  
 八九九 1 44 ん黄色くなつていきます。九月二十九日 (出  
 八九九 1 45 いねが、5 かぶありました。先生におきき  
 八九九 1 46 たのだとおつしやいました。十月二十日  
 八九九 1 47 一つおじぎをしています。1 かぶのくきの  
 八九九 1 48 くの数を数えてみますと、大きなかぶは  
 八九九 1 49 なかぶは 30 本もありました。こんどは 1 か  
 八九九 1 50 びんなどでしらべてみました。1 本ずつ植え  
 八九九 1 51 が 10 ぐらいいなりました。3 本ずつ植え  
 八九九 1 52 わないことがわかりました。もみの数をし  
 八九九 1 53 みの数をしらべてみました。1 本のほに、  
 八九九 1 54 ぐらいつつついていました。ですから、1  
 八九九 1 55 23 度 いねかりをしました。いねを根もと  
 八九九 1 56 根もとからかりとりました。じょうぶに作  
 八九九 1 57 ようにきちんとかけました。十一月十日  
 八九九 1 58 19 度 いねこきをしました。いねこきか  
 八九九 1 59 ねこきをした人もいました。ぼうのあいだ  
 八九九 1 60 でこいたらよくとれました。こんどは、も  
 八九九 1 61 、もみとごみをわけました。風のくる場所  
 八九九 1 62 ごみをふきとばさせます。もみをむしろの  
 八九九 1 63 の上にひろげてほしました。十一月十五日  
 八九九 1 64 、もみがよくかわきました。きょうはもみ  
 八九九 1 65 ようはもみすりをしました。きかいがない  
 八九九 1 66 がないのでくふうしました。いたいたの  
 八九九 1 67 てもみがらははじきました。きれいなお米  
 八九九 1 68 八九九 1 69 れいなお米がでてきました。十一月十九日

八〇九 三にもみすりをしてみました。どんどんすつ  
八〇九 四こんどはすぐにはげましたが、くだけた米  
八〇九 四くだけた米もできました。ほしてすぐ、  
八〇九 五ものではないと思いました。やく12平方m  
八〇九 六41のげん米がとれました。平年作は、1  
八〇九 八作ということになります。  
九四 三紙に赤い色をぬりますと、明かるい感じ  
九四 四明かるい感じになります。この赤い色のそ  
九四 四のそばに黄色をぬりますと、赤い色だけで  
九四 六明かるさがあらわれます。黄色のかわりに  
九四 八、ちがった感じがします。みどり色のかわ  
九五 五がするにちがいます。四色、五色と  
九六 一はちがった感じがします。三音、四音と組  
九六 三にちがった気がします。オルガンのほか  
九六 八こえるにちがいます。色の組みあわ  
九六 一〇ろな気持をあらわします。(三)ここに  
九七 二一つのことばがあります。このことばを耳  
九七 四、文字でよんだりしますと、夜のしずかな  
九七 四なけしきを思いだします。この「月」とい  
九七 六うけしきを思いだしますか。「月」だけで  
九七 一〇また廣い海ともなります。さらに、「虫の  
九八 六しい思いをおこさせます。「風」というこ  
九八 八のことばをつけてみましょう。「風」を「  
九八 一〇なことばをつけてみましょう。おしまいに  
九九 一ばを組みあわせてみましょう。二つか、三  
九九 三うかべることができそうですが、あまりたくさ  
九九 五絵がみだれてしまいます。これは色のばあ  
九五 三るのを、よくみかけます。ときには、十ば  
九五 四んでいることがあります。この中には、親  
九五 五には、親つばめもいます。ことし生まれ  
九一五 六たくさんまじっています。もう大きだけ  
九一六 二つばめほどこくありません。口ばしの両わ

九一六 三にみえるのさえあります。こうして、大ぜ  
九一六 五しているようにみえます。まもなくさつて  
九一六 七んでいるのかもしれない。これからいこ  
九一六 八つていけるのかもしれない。やがて、九月  
九一六 八せなくなってしまう。つばめのゆくさ  
九一六 一〇がつばめをつかまえました。すると、その  
九一七 三くのいたがついていました。それによると  
九一七 五ということがわかりました。しかし、つば  
九一七 七なふうになつていきますが、ヨーロッパの  
九一七 九いつて、冬こしをします。つばめは、鳥の  
九一八 三してふしぎではありません。しかし、その  
九一八 五つばめがたくさんいます。また、ときには  
九一八 七あわなにとまかぎります。しょうわ六年  
九一八 九ちてきたことがあります。その年は氣候が  
九一九 一り、雨が降りつづきました。おりから南へ  
九一九 三のことを知らせてきました。協会では、喜  
九一九 五せわをする返事をしました。それと同時に  
九一九 七とを、新聞に廣告しました。その廣告は、  
九一九 九きょうをまきおこしました。「略」とい  
九二〇 一ることを知らせてきました。そのつばめを  
九二〇 三二台の自動車を加えました。そうして自動  
九二〇 五ばめたちを運んできました。さいわいなこ  
九二〇 七いよくつくりなりました。へやはいそい  
九二〇 九るところがつくられました。いく干という  
九二一 一、頭や、手にとまりました。たくさんのつ  
九二一 三みなく雨が降っていました。晩の十時に、  
九二一 五千ばのつばめが着きました。その夜半には  
九二一 七のつばめをつんできました。そこで、なる  
九二一 九機をつかうことにしました。航空会社では  
九二二 一を運ぶことを申しでました。つばめをのせ  
九二二 三エニスへとんでいきました。それでも運び  
九二二 五十万ばあまりになります。そのころ、オー

九二二 七といわずにはいられません。むかしから、  
九二二 九てくるといわれています。つまり、ことし  
九二四 一のことをしらべてみますと、やはりそうで  
九二四 三であることがわかりました。日本からオー  
九二四 五万キロあまりありますが、つばめは、け  
九二四 七て自分の國をわすれませんでした。日本に春がく  
九二五 一のをまちこがれています。ちらりとつばめ  
九二五 三「略」といって喜びます。わけても、自分  
九二五 五くごぶさたしています。こちらへきてか  
九二五 七もう四ヶ月になります。こちらへきたと  
九二五 九秋も終り近くなりました。ぼくは、いま  
九二六 一すれたことはありません。先生のことを  
九二六 三うらやましくなります。先生、おかわり  
九二六 五生、おかわりありませんか。みなさんも  
九二六 七もしつかりしてきました。ぼくがいまい  
九二六 九に美しい湖がみえます。秋晴れのすみき  
九二七 一くかがやいてみえます。この湖へつりに  
九二七 三ふながたくさんいます。四五十センチも  
九二七 五チもあるこいもいます。いなもいます。  
九二七 七います。いなもいます。それから、らい  
九二七 九ひらいた貝がとれますので、なんども湖  
九二八 一の方へとりにいきました。村の子どもが  
九二八 三ンチあまりもあります。三びきもとって  
九二八 五たべることが出来ます。ぼくは、先生や  
九二八 七、いつも思っています。せめて、貝だけ  
九二八 九したいと思っています。せんだって、は  
九二九 一のおてつだいをしました。ちよまを植え  
九二九 三で、三日間かかりました。ちよまの根は  
九二九 五りも根をはっていました。また、ちよま  
九二九 七れて、ほねをおりました。小さなぼくた  
九三〇 一ねを十三本つくりました。そうして、近

九三六(手) けして植えていきました。いもなえは、  
 九三八(手) で三百五十本ありました。それは、七月  
 九三六(二) 深い谷になっていきます。ここからは美し  
 九三六(三) かこうがながとれます。大きなこうが  
 九三六(六) にまでつづいていきます。夏のあいだ、た  
 九三六(一〇) に雑草の中にありました。手にとつて口  
 九三六(一七) くてあまい味がしました。小さい妹のた  
 九三七(二) 帰ったこともありました。ぼくははじめ  
 九三七(五) が、すきではありませんでした。だいい  
 九三八(一) のようにぬれていきます。かれ枝ならば、  
 九三八(四) いことになっていきます。高くて手のとど  
 九三八(八) いれてひきおろします。ポキンという音  
 九三八(一〇) と、うれしくなります。母たちもぼくも  
 九三九(三) ぼる役をひきうけました。八九メートル  
 九三九(四) すのは気がつかれます。下からどんなに  
 九三九(五) えないときがあります。上の方のかれ枝  
 九三九(九) ぼったことがあります。のぼるたびに  
 九三九(一〇) しがついたりしました。下では、兄や  
 九四〇(四) はがんぼっておりませんでした。木が動  
 九四〇(五) かなかたき落せませんでした。なたを  
 九四〇(六) の木は大きくゆれました。すこし気がお  
 九四〇(七) あたりをみまわしますと、はるか向こう  
 九四〇(九) かり顔をみせていました。また、下の方  
 九四〇(一〇) ってくるのがみえます。道もないところ  
 九四一(一) すがたがあらわれます。思わぬところに  
 九四一(二) のあがるのがみえました。秋になって、  
 九四一(四) のが楽しみにになりました。だんだんたき  
 九四一(一〇) さんまいおりていましたが、いつのまに  
 九四二(一) はもういなくなりました。そのかわりま  
 九四二(二) かがんが渡ってきました。かもきまし  
 九四二(三) ました。かもきました。山には、つぐ  
 九四二(四) ぐみや、ひわがきました。そのほか、名

九四二(三) 小鳥がたくさんいます。かきの色づくこ  
 九四二(四) いもをほりおこしました。ぼくのうちで  
 九四二(五) りおこすことにしました。苦労してかい  
 九四二(八) なでいもほりをしました。大きなうねの  
 九四二(一〇) 、胸がどきどきしました。母やおばがく  
 九四二(一七) っているをひろいました。こちらのかき  
 九四三(二) 二本や三本はあります。ぼくたちのかり  
 九四三(四) きの木が三本あります。朝早く庭にでて  
 九四三(八) わず手にとりあげます。うちのかきはし  
 九四三(一〇) 下につるしてくれまます。妹は、かきの葉  
 九四四(二) まごとをして遊びます。母やおばまで子  
 九四四(四) いてながめていきます。いつのまにか葉  
 九四四(七) 一つとりたくなります。この夏、一ど、  
 九四四(一〇) 話がしたいと思いましたが、いそぐ用事  
 九四四(一七) がかかってすぐ帰りました。おばに、「小  
 九四五(一) 」をよんでもらいました。おばは、「小  
 九四五(五) るようにといわれました。ぼくは、おと  
 九四五(八) やろうと思っています。兄は、大きな  
 九四五(一〇) みならいをしています。「小公子」のセ  
 九四六(二) のことを話していますけれども、ぼくに  
 九四六(三) リックほどわかりません。先生、「小公  
 九四六(五) 」、喜んで書きだしました。もう、遠くの  
 九四六(七) 雪のぼうしがみえます。なつかしいそち  
 九四六(九) の景色を思い出します。天気の良い日は  
 九四六(一〇) いるだろうと思います。先生、みなさん  
 九四七(三) いちろうのうちにきました。「かねたいち  
 九四七(六) んどうな裁判をしますから、おいでなさ  
 九四七(九) はうれしくてたまりませんでした。はがき  
 九四八(三) とんだりねたりしました。ねどこにもぐ  
 九四八(八) 、おそくまでねむれませんでした。けれど  
 九四八(一〇) り明かくなっていました。おもてにでて  
 九四九(三) 空の下にならんでいました。いちろうは、

九四九(四) 上の方へ登っていきました。すきとおった  
 九四九(六) パラパラと実を落しました。いちろうはく  
 九四九(八) て、「略。」とききました。くりの木は、  
 九四九(九) の方へとんでいきましたよ。」と答えま  
 九四九(一〇) て、「略。」と答えました。「略。」くり  
 九五〇(五) 実をパラパラと落しました。いちろうは、  
 九五〇(六) ろうは、すこしいきますと、そこはもう、  
 九五〇(一) ゴウと谷に落ちていました。「略。」たき  
 九五〇(三) たきがピーピー答えました。「略。」「略  
 九五〇(四) の方へとんでいきましたよ。」「略。」  
 九五〇(七) にふえをふきつけました。いちろうがま  
 九五〇(八) うがまたすこしいきますと、一本のぶなの  
 九五〇(一〇) んな樂隊をやっていました。いちろうは、  
 九五二(二) て、「略。」とききました。すると、きの  
 九五二(四) の方へとんでいきました。」と答えまし  
 九五二(五) は、「略。」と答えました。いちろうは、  
 九五二(六) ろうは、首をひねりました。「略。」きの  
 九五二(一〇) な樂隊をつづけていました。いちろうが、  
 九五三(一) んびょんととんでいました。いちろうは、  
 九五三(四) 「略。」とたずねました。すると、りす  
 九五三(五) ろうをみながら答えました。「略。」「略  
 九五三(七) の方へとんでいきましたよ。」「略。」  
 九五三(一〇) 略。」りすはもういませんでした。ただ、  
 九五四(一) ちろうがすこしいきましたら、谷川にそっ  
 九五四(二) なってきえてしまいました。そうして、谷  
 九五四(三) 小さな道がついていました。いちろうは、  
 九五四(五) その道を登っていきました。かやの枝は、  
 九五四(八) んきゅうな坂になりました。いちろうは、  
 九五四(一〇) がら、その坂を登りますと、にわかにはつ  
 九五五(一) て、目がちくちくしました。そこは美しい  
 九五五(三) の森でかこまれていました。その草地のま  
 九五五(一〇) だんだんそばへいきましたが、びっくりし

九五五 たちどまつてしまいました。その男はかた  
 九五六 くおちついてたずねました。「略。」する  
 九五六 はやまねこを知りませんか。」すると、  
 九五八 やつとわらっていいました。「略。」いち  
 九五二 てそれを知っていますか。」といいまし  
 九五三 て、「略。」といいました。すると、その  
 九五五 は、「略。」「みました。それでしたん  
 九五七 、かなしそうにいいました。いちろうは氣  
 九五七 て、「略。」といいました。男は、喜んで  
 九五八 ら、「略。」とききました。いちろうは、  
 九五八 だしながら返事をしました。「略。」する  
 九五八 はまたいやな顔をしました。「略。」その  
 九五八 く、あわれにきこえたので、いちろう  
 九五九 ろうはあわてていいました。「略。」する  
 九五九 たにたわらっていいました。「略。」いち  
 九五九 、「略。」とたずねますと、男は、きゆう  
 九五九 て、「略。」といいました。そのとき、風  
 九五九 いねいなおじぎをしました。いちろうは、  
 九五九 思つてふり返つてみますと、そこに、やま  
 九六〇 まるにして立っていいました。やつぱりやま  
 九六〇 腹をつきだしていいました。「略。」その  
 九六〇 よくきてくださいました。じつは、おと  
 九六〇 よつと裁判に困りましたので、あなたの  
 九六〇 かがいたいと思ひましたのです。まあ、  
 九六一 ぐりどもがまいりました。どうも、毎  
 九六一 この裁判で苦しみます。」そのとき、い  
 九六一 ねるような音をききました。びっくりして  
 九六一 くりしてかがんでみますと、草の中にあつ  
 九六二 ぎよしやにいつけました。ぎよしやもた  
 九六二 のところの草をかりました。そこへ四方の  
 九六二 うワアワアいつていました。ぎよしやは、  
 九六四 ガランガランとふりました。すずの音は、

九六三 しずつしづかになりました。みると、やま  
 九六三 のまえにすわっていいました。ぎよしやは、  
 九六三 ユウパチツと鳴らしました。「略。」やま  
 九六四 むりにいばつていいました。どんぐりども  
 九六四 もは、口々にさげびました。「略。」「略  
 九六四 ちぼんとなつています。」「略。」「略  
 九六四 「いいえ、ちがいます。まるいのがえら  
 九六五 けがわからなくなりました。そこで、やま  
 九六五 、やまねこがさげびました。「略。」ぎよ  
 九六五 ユウパチツと鳴らしましたので、どんぐり  
 九六五 もはやつとしづまりました。やまねこはび  
 九六五 ひげをひねつていいました。「略。」する  
 九六六 りどもが口々にいいました。「略。」「略  
 九六六 「いいえ、ちがいます。まるいのがえら  
 九六六 だかわからなくなりました。やまねこがさ  
 九六六 。やまねこがさげびました。「略。」ぎよ  
 九六六 ユウパチツと鳴らしました。やまねこが、  
 九六七 ひげをひねつていいました。「略。」「い  
 九六七 やまねこがさげびました。「略。」ぎよ  
 九六七 りはみんなしづまりました。やまねこがい  
 九六七 ちろうにそつと申しました。「略。」いち  
 九六七 ろうはわらつて答えました。「略。」やま  
 九六八 りどもに申しわたしました。「略。」どん  
 九六八 しいんとしてしまいました。それはそれは  
 九六八 て、だまつてしまいました。そこで、やま  
 九六八 いちろうの手をとりました。ぎよしやも、  
 九六八 ユウパチツと鳴らしました。やまねこは、  
 九六九 ありがとうございました。これほどのひ  
 九六九 たづけてくださいました。どうかこれか  
 九七〇 うかしてくださいませんか。そのたびに  
 九七〇 びにお礼はいします。」といいました。  
 九七〇 は、「略。」といいました。「略。」「略

九七〇 た。「しようちしました。お礼なんかい  
 九七〇 。お礼なんかいりませんよ。」「略。」「  
 九七〇 の人格にかかわりますから。そうして、  
 九七〇 ちらを裁判所としますが、ようございま  
 九七〇 すが、ようございいますか。」「略。」と  
 九七〇 「ええ、かまいません。」といひます  
 九七一 「略。」といひますと、やまねこは、  
 九七一 をばらばらちさせていいましたが、とうとう決  
 九七一 たらしく、いいだしました。「略。」いち  
 九七一 ろうはわらつていいました。「略。」やま  
 九七一 たまま下を向いていいましたが、やつとあき  
 九七一 つとあきらめていいました。「略。」「略  
 九七二 までのとおりにしましう。そこでぎよ  
 九七二 早にぎよしやにいいました。「略。」ぎよ  
 九七二 て、はかつてさげびました。「略。」やま  
 九七二 ど二リツトルあります。」やまねこのじ  
 九七三 、風にバタバタ鳴りました。そこで、やま  
 九七三 くびをしながらいいました。「略。」「白  
 九七三 が、ひっぱりだされました。そうして、な  
 九七三 ちのうまがついていきます。「略。」やまね  
 九七三 ちへお送りいたしますしう。」やまねこ  
 九七三 「やまねこがいいました。ふたりは馬車  
 九七三 すを馬車の中にいれました。ヒュウパチツ  
 九七三 馬車は草地をはなれました。木ややぶが、  
 九七四 ようにぐらぐらゆれました。いちろうは、  
 九七四 つきで遠くをみていいました。馬車がすすむ  
 九七四 んぐりにかわつていいました。そうして、や  
 九七五 すを持つて立っていいました。それからあと  
 九七五 うはがきは、もうきませんでした。やつぱ  
 九七五 どある貝づかへいききました。先生が、町角  
 九七五 ところ集まつていました。おかみさんが  
 九七六 むきみをつくつていいました。みるまに、貝

九七六 山が家のまえにできます。先生が、リヤカ  
 九七九 のせておいでになりました。「略。」先生  
 九七二 人は目をたべています。むかしといって  
 九七八 いように歩いていきました。平らな畑やた  
 九七〇 なったところがみえます。「略。」もうす  
 九七五 の農家にたちよられました。しばらくして  
 九七六 にでておいでになりました。「略。」主人  
 九七八 てもらうことにします。「主人も、くわ  
 九八〇 てきて、かしてくれました。そこへ着くと  
 九八二 の中へお立てになりました。土はやわらか  
 九八二 けいっばいにはいります。「略。」私たち  
 九八二 どもを、ここへすてました。それで、ここ  
 九八二 ってみることにしましょう。「私たちは、  
 九八二 くてうずうずしていました。「略。」「略」  
 九八二 りしごとにかかりましょう。まずどんな  
 九八四 どんなふうになりますか。「略。」「へ  
 九八五 ところをほつてみます。「略。」「  
 九八八 はちよつとわかりませんね。もし、手あ  
 九八二 くのがいいと思います。「略。」そこ  
 九八七 みんなは、ほりだしました。「略。」「略」  
 九八二 ほつておいでになります。ほくらは、とき  
 九八二 物などがたまっています。「略。」「略」  
 九八二 んけんになってほりました。「略。」「略」  
 九八七 、先生におたずねしますと、「略。」と、  
 九八三 しずかにおっしゃいました。「略。」先生  
 九八二 わつておいでになりました。「略。」だれ  
 九八七 つかにしてほっています。先生のふえが鳴  
 九八八 。先生のふえが鳴りました。みんなはほ  
 九八八 んなほる手をとめました。「略。」もう  
 九八四 これで三十分ほりました。わたしは、な  
 九八四 知ってくると思います。みなさんのひろ  
 九八三 、もりなどがあります。石で作ったもの

九八五 などいろいろあります。ここからでるの  
 九八五 にも見える物もあります。それから土器。  
 九八五 と三十分ほつてみましょう。「もう、む  
 九八六 人は、ひとりもありませんでした。四人が  
 九八六 ごの中にいれておきました。ピリピリッ  
 九八六 とピリッとふえが鳴りました。あとの三分  
 九八六 うにみじかく思われました。「略。」帰り  
 九八六 、もう一ど整理しましょう。「帰りは、  
 九八六 ヤカーをおして歩きました。八 なかよ  
 九八六 だすべつてはいけませんか。「略。」  
 九八六 一びきのくもがいました。黄色と黒のし  
 九八六 あいだに、巣をかけました。「略。」ここ  
 九八六 みもはることはできませんでした。星が光  
 九八六 した。星が光りだしました。どこかであか  
 九八六 んのなき声がしています。子もり歌もきこ  
 九八六 もり歌もきこえてきます。くもは、その子  
 九八六 光る星をみあげていました。そのとき、あ  
 九八六 みがにわかにゆれました。くもは、きつ  
 九八六 てるその方をみつめました。あぶが、足を  
 九八六 、すいとにげていきました。おまけに、あ  
 九八六 なたをあげてしまいました。「略。」ぶつ  
 九八六 ころをつくろいかけました。「略。」と、  
 九八六 ばつて身がまえをしました。星はだんだん  
 九八六 んきれいに光ってきました。あかちゃんの  
 九八六 、子もり歌もきこえませんでした。風が思  
 九八六 ももいっしょにゆれました。ブンブンブン  
 九八六 ところどころで羽音がしました。それは、みつ  
 九八六 くもにはすぐわかりました。ブンブンブー  
 九八六 だんだん近づいてきます。「略。」くもが  
 九八六 まつすぐにとんできました。ブブブブー  
 九八六 つばちにとびかかりました。みつばちも、  
 九八六 ちも、くもに向かいました。くもは、ふと

九八六 しばらくつけようと思いました。みつばちは、  
 九八六 さけてにげようとしたが、どうしても  
 九八六 も手足がうまく動きません。そのうちにみ  
 九八六 になまれそうになりました。ぐずぐずして  
 九八六 、ちくりとつきさしました。それにはさす  
 九八六 くもも、びっくりしました。「略。」くも  
 九八六 にげていってしまいました。ゆうゆうとと  
 九八六 しろすがたをみていましたが、くもはどう  
 九八六 どうすることもできません。それより、自  
 九八六 しくてどうにもなりませんでした。しばら  
 九八六 う羽音がきこえてきました。「略。」思わ  
 九八六 、こちらにとんできます。あみにつきあた  
 九八六 もりの羽にたたかれました。あみは、すつ  
 九八六 そのまま地面に落ちました。「略。」くも  
 九八六 りにいいにおいがします。まっ白なばらが  
 九八六 いたみもきえていきました。目のまえのば  
 九八六 ばらの花が動いています。おかしいなど、  
 九八六 ちようちよをとらえました。大きな口をあ  
 九八六 は、「略。」と頼みました。こう頼まれる  
 九八六 しまうわけにもいきません。「略。」「略」  
 九八六 上の方をみあげました。いまのほりか  
 九八六 、しずかに光っていました。「略。」「  
 九八六 ってみたいと思いますか。」「へ  
 九八六 へいきたいと思います。「略。」「略」  
 九八六 耳にしたことはありませんでした。また、  
 九八六 口にしたことはありませんでした。いま、  
 九八六 うになつかしくなりました。くもの小さな  
 九八六 うに思いだされてきました。「略。」「  
 九八六 ようちよを手ばなしました。「略。」「略」  
 九八六 ちゃんと知っています。いましがた、み  
 九八六 だことも知っています。だから、わたし  
 九八六 はほしいとは思いません。」「——「略

九四〇 二 そうに羽をととのえました。それから、ま  
 九四〇 三 ひらりと舞いあがりました。ちょうど白ば  
 九四〇 八 、ひとりごとをいいました。くもは、おな  
 九四〇 一〇 みをかけようと考えました。くもはのその  
 九四〇 一〇 もはのそのそと歩きました。けれども、な  
 九四〇 一〇 なんだか氣がすすみません。それで、その  
 九四一 一 、じつとすわっていました。あたりに、花  
 九四一 二 花のにおいがしていました。くもは、うつ  
 九四一 四 らとねむくなってきました。「略。」くも  
 九四一 八 、ころっと横になりました。目をつむると  
 九四一 九 くもの頭をなでています。上を見ると、わ  
 九四一 一〇 らっているではありませんか。くもは、ふ  
 九四一 一〇 、しげしげとみつめました。「略。」「  
 九四二 七 、とりすがろうとしました。そのひょうし  
 九四二 七 、くもは、目がさめました。「略。」と、  
 九四二 一〇 もなんとも思い返しました。月はもう頭の  
 九四三 一 う頭の上までできていました。つゆが木の葉  
 九四三 二 ゆが木の葉にたまりました。たまつたつゆ  
 九四三 三 リポタリと落ちてきました。くもは、目が  
 九四三 四 えてなかなかねむれませんでした。「略。」こ  
 九四三 一〇 そのままだまっています。自分は、こう  
 九四四 五 しだいにかわってきました。ちようちよに  
 九四四 二 ばし足をのばしてみました。ふしくれた手  
 九四四 五 そろそろ思われてきました。白ばらの花は  
 九四五 五 う話しかけなくなりました。ぐつすりねむ  
 九四五 六 ると、風がふいてきました。風と思つたの  
 九四五 九 のつばめにひろわれました。くもは、つば  
 九四七 一 ま、空をとんでいきました。くもは、力い  
 九四七 三 とができたかもしれせん。けれども、べ  
 九四七 四 ににげだそうとはしませんでした。つばめ  
 九四七 五 しい土地の上を飛びました。湖の岸べをと  
 九四七 五 た。湖の岸べをとびました。深い森のそば

九四七 六 深い森のそばをとびました。夜明けが近づ  
 九四七 八 りとしらみかけてきました。「略。」こ  
 九四七 一〇 りらくな氣持になりました。いまのいまま  
 九四八 一 いとは思えなくなりました。「略。」そん  
 九四八 四 なことをくもは思いました。  
 九四八 四 うについてきて困りました。そういういな  
 九四八 四 びに、目をまるくしました。おとうさんの  
 九四八 四 のぞきこむようにしました。こんなにいる  
 九四八 四 、おとうさんも困りましたので、子どもを  
 九四八 四 て通つたこともありました。しかし、おと  
 九四八 四 して遊んでいたりしますと、そのなかま  
 九四八 四 てやつたこともありました。二月半ばかり  
 九四八 四 ものお友だちができました。そういう子ど  
 九四八 四 てくれる少女もありました。あのとげとげ  
 九四八 四 できるものかと思ひました。その少女のわ  
 九四八 四 ている子どもにあひました。そのいなかの  
 九四八 四 、その下を流れていました。岸にある丘の  
 九四八 四 寺の高いともみえました。そのあたりは  
 九四八 四 よくいってこしかけました。その橋のたも  
 九四八 四 らしい少女にもあひました。みあげるよう  
 九四八 四 、毎日のように落ちました。三人の少女は  
 九四八 四 へきては、遊んでいました。おとうさんが  
 九四八 四 わかしてもらっていますと、きまつて、そ  
 九四八 四 たちも遊びにきています。いずれも、八つ  
 九四八 四 ばへくるようになりました。ひろい集めた  
 九四八 四 にくれるようになりました。プラタナスの  
 九四八 四 、やつてほどもありました。「略。」と、  
 九四八 四 、小さな葉をくれませんか。」と、おと  
 九四八 四 、おとうさんが頼みしたら、少女たちは  
 九四八 四 、ひろつてきてくれました。こうして、ず  
 九四八 四 たり、わらつたりしました。けれども、お  
 九四八 四 こない女の子もありました。「略。」と、

九四八 四 さんをみて素晴らしい。「略。」おと  
 九四八 四 のこしておいてきました。わたしは、そ  
 九四八 四 わいものではありませんよ。」おとうさ  
 九四八 四 「おとうさんがいいました。それから、三  
 九四八 四 歌ってほしいと頼みました。方言でできた  
 九四八 四 は、きいて知っていましたから。少女たち  
 九四八 四 歌ってきかせてくれました。なんとかわい  
 九四八 四 子どもたちではありませんか。あんないな  
 九四八 四 るくいう旅人もありますが、おとうさんが  
 九四八 四 でせたくをしていました。フランスのい  
 九四八 四 川の水にうつっていました。その川の岸で  
 九四八 四 とりの少年にもあひました。たぶん、その  
 九四八 四 「略。」とたずねました。この少年の間  
 九四八 四 とおとうさんも困りました。フランスだっ  
 九四八 四 うじきにその答をしましたら、少年は、さ  
 九四八 四 にこんなことをいひました。「略。」「略  
 九四八 四 が、力をいれて答えました。この返事に、  
 九四八 四 うかべるようにいひました。フランスのい  
 九四八 四 さんもうれしく思ひました。かしこそうな  
 九四八 四 さんがいつてきかせました。「略。」と、  
 九四八 四 、また太郎がたずねましたので、おとうさ  
 九四八 四 、おとうさんは答えました。「略。」三  
 九四八 四 のことは通じません。「略。」なん  
 九四八 四 わかるものがあります。そういう遠い  
 九四八 四 ばがこいしくなります。こうしておまえ  
 九四八 四 かってみたくなります。わたしは、外國  
 九四八 四 ありがたみを知りました。おまえたちは  
 九四八 四 けた光を写してみますよ。」という先生  
 九四八 四 まざまな色になります。」10 せんたく物  
 九四八 四 けていきたいと思ひます。わざわざ遠くに  
 九四八 四 、つくりたいと思ひます。庭の木に小鳥が  
 九四八 四 ねんにみようと思ひます。また、くもがの

十282 べておきたいと思います。こんな動植物だ  
 十286 べていきたいと思います。観察すればする  
 十2810 どろくにちがいありません。(二) 私は  
 十292 らべたいと思っています。たとえば、毛糸  
 十295 考えてみたいと思います。また、一つの和  
 十301 がしてみようと思います。もし、弟や妹が  
 十303 いってみたいと思います。このように、な  
 十305 を、もちたいと思います。(三) ぼくは  
 十307 はたらきたいと思います。家では、弟たち  
 十309 けとなりたいたいと思います。父や母のため  
 十311 ようにしたいと考えます。ぼくがいるため  
 十316 っていきたいと思います。かげで人のわる  
 十318 んでいきたいと思います。自分をえらそう  
 十321 えをもちたくはありません。ぼくは、この  
 十326 を、もちたいと考えます。五 発明一つ  
 十4011 、「きつと成功します。世界のために、  
 十4012 たの願いがかあります。」こういって、  
 十467 ことが、二つあります。一つは、ダイヤ  
 十4611 から敬意をささげます。養殖眞珠発明の  
 十476 つれて、さんぽにできました。家から十二三  
 十481 、妹にはそうはいきませんでした。四十  
 十482 のではないかと思いました。これは、足が  
 十485 にいそぐこともありませんでしたので、妹  
 十487 にして、つれていきました。ために、私  
 十4912 の意味がよくわかります。家からでれば  
 十502 が一びきすわっていました。「クロイワン  
 十504 りの毛が、ぬけていました。「キタナイワ  
 十509 ようなかつこうをしました。「クツケル  
 十5011 「フツ」と息をはきました。妹は、わらい  
 十5012 、ひとりごとをいきました。母がこしらえ  
 十514 、なんどもくり返しました。いぬは、まば  
 十516 パンをたべようとしません。「イライナイノ」

十524 いいだしたりしていましたが、やっと歩き  
 十524 、やっと歩きはじめました。五六歩いた  
 十526 ぶして、そばを通りました。みると、なる  
 十528 よこちよこ歩きだしましたが、よその家の  
 十529 はいっていきこうとします。そのとき、私を  
 十5211 となびたことをいきました。門からもどっ  
 十5212 き、あとをふり向きしました。すると、さっ  
 十532 なってねそべっていました。「ワンワンチ  
 十533 いぬがもつくりおきました。「ワンワンチ  
 十534 シタ」といって喜びました。「オスワリシ  
 十535 をことばにして喜びました。そのとき、い  
 十537 て、手に持つといひます。かたにかけると  
 十538 をいって、歩きだしました。まだ、いぬが  
 十5311 ると、水おけがありました。そこに、すい  
 十5312 、きれいにさいっていました。妹は、そこへ  
 十541 て、水の中をのぞきました。きんぎょが一  
 十543 すぐ水そこへもぐりました。「ハナガサイ  
 十545 をいいあらわしています。自分で、「イコ  
 十547 で、たき火をしていました。そのけむりや  
 十551 りありとうかんでいます。七五三の記念写  
 十553 、こんなことを考えました。新しい世界  
 十555 すらと書けなくなりました。むりに書くと  
 十557 ちがつたものになります。どうして、こん  
 十5510 らやましくさなりました。あるとき、な  
 十5511 げなく妹の作文をみました。なんと、わけ  
 十562 その力に、おどろきました。かいこが、皮  
 十565 だしていきこうと思います。妹の作文 ふ  
 十568 ふくろうをみにいきました。そうしたら、  
 十569 からだを手でいじりました。ふくろうは、  
 十571 おりていってしまいました。男の子は、「へ  
 十572 略。」といひて喜びました。コスモスの  
 十574 花 コスモスがさきました。きれいにさき

十575 した。きれいにさきました。白と、もも色  
 十577 こいもも色がさきました。いまはきれい  
 十584 さん落してくださいました。みんな負けず  
 十585 んな負けずにひろいました。うちに帰って  
 十587 ひもでいわえて数えました。そうしたら、  
 十589 った、五まいあまりました。おとなりのよ  
 十5811 に、三たばずつあげました。私は、のこっ  
 十5812 ったのをおし葉にしました。お月見 私  
 十611 のこが一本はえてきました。私は、たけの  
 十613 なのところまでありました。あしたもあさ  
 十614 も、せいくらべをしますよ。もう、たけの  
 十618 のせいより高くなりました。もう、先生の  
 十6110 せいくらい高くなりました。たけのこは、  
 十6111 ぐん早く大きくなります。たけのこは、ど  
 十624 たので、びっくりしました。もう、親竹と  
 十625 った、風にゆれていました。七 ぶす  
 十628 のをみたことがありますか。能を知らない  
 十634 ちがうところがあります。いちばんちがう  
 十638 うでは、めんをつけます。おじいさんのめ  
 十6311 れぞれのめんがあります。そのために、能  
 十641 べて、研究されています。日本の絵画や、  
 十643 のが、たくさんありますが、能は、その中  
 十644 あるものとなっています。みなさんも、大  
 十646 、喜ぶだろうと思います。能といっしょに  
 十647 いうものが演じられます。狂言はめんをつ  
 十648 。狂言はめんをつけません。そうして、能  
 十6411 もてが、よくわかります。ことばも、能は  
 十6412 狂言はそうではありません。つぎの「ぶす  
 十652 郎かじゃが、現われます。かれらは、だん  
 十655 とを、なんでもやります。めうえのいばっ  
 十657 ろい人物になっています。狂言「ぶす」  
 十659 んぼのだんがありました。おかみさんを



十66 1 ひとりですらしてました。あるとき、こ  
 十66 3 でいかなければなりません。でかけ  
 十66 5 、きびしい声でいきました。「略。」「略  
 十66 10 会 い、はい。わかりました。」太郎かじゃ  
 十66 11 をそろえて返事をしました。そんなおそろ  
 十67 2 けないようにしてました。でも、こわい  
 十67 3 かえってみたくありません。それに、だんな  
 十67 5 うということになりました。「略。」「略  
 十67 10 すを、さりと開きました。「略。」「略  
 十68 3 からかみをひきあげました。「略。」「略  
 十69 1 、あおぎつづけていました。そのうちに、  
 十69 4 まん中にかかえてきました。「略。」「略  
 十70 2 て、ふたをあけてみました。べつにどつき  
 十70 4 いものがはいってました。「略。」「略  
 十70 11 を、口に持っていきました。「略。」「略  
 十71 3 自分も指をつっこみました。「略。」「ふた  
 十71 5 んこに指をつっこみました。そうして、う  
 十71 7 っぽになつてしまいました。「略。」「おく  
 十71 10 じゃは、心配になりました。太郎かじゃの  
 十72 3 かけものをひきさきました。「略。」「略  
 十72 10 ンとくだいてしまいました。そこへ、だん  
 十72 11 、だんなが帰ってきました。すると、太郎  
 十72 12 声をあげてなきだしました。次郎かじゃも  
 十73 1 、おいおいなきだしました。「略。」「だん  
 十73 3 けにとられてたずねました。太郎かじゃは  
 十73 4 おいなきながらいきました。「略。」「と、  
 十73 6 会 をとって遊んでいました。私が負けて、  
 十73 8 会 ひきさいてしまいました。次郎かじゃは  
 十73 9 会 なみじんにいたしました。あまりの申し  
 十73 11 会 大どくとうかがいました。おそろしい「  
 十74 3 いっしょに歌いだしました。「略。」「太郎  
 十74 10 歌いながらにげだしました。だんなは、お

十74 12 「略。」と追いかけてました。  
 十17 7 の目から教えられました。おかあさまの  
 十17 11 あとなくぬぐわれます。朝も、晝も、夜  
 十18 5 のえ顔から生まれます。三 一宮金次  
 十18 7 郎のことをお話しします。二宮金次郎の生  
 十19 3 もんという人がいました。働くことがす  
 十19 4 な身代をこしらえました。その子どもに  
 十19 5 んという人がありましたが、たいへん情  
 十19 7 かけてやったりしました。この人が金次  
 十19 9 わくて、よく働けませんでした。そのう  
 十19 10 んな流されたりしましたので、いつのま  
 十19 12 も困るようになりました。しかし、りえ  
 十20 2 、ほねをおつていました。そういうとき  
 十20 6 いをしてよく働きました。また、父親の  
 十20 10 をもうけたりもしました。金次郎が十二  
 十21 2 て働くことになりました。そのとき、父  
 十21 3 親が病気でねてしまったので、金次郎が  
 十21 4 にでることになりました。金次郎は、年  
 十21 6 たないことはありませんでした。それど  
 十21 10 にすまないと思いました。そこで、金次  
 十21 11 いことを考えつきました。毎晩、家に帰  
 十22 1 じを作ることになりました。これを持って  
 十22 2 早く工事場へいきました。たくさんの人  
 十22 3 れている人もあります。金次郎はわらじ  
 十22 5 をさしだしていいました。「略。」「おと  
 十22 9 会 たないで、すみません。どうかそのか  
 十22 12 ぐには受けてくれませんでしたがおし  
 十23 1 喜んではいてくれました。金次郎が十四  
 十23 2 、父親がなくなりました。金次郎の下に  
 十23 3 ふたりの弟がいました。いちばん下の  
 十23 5 にか切りぬけてきましたが、いまはどう  
 十23 6 まはどうにもなりません。母親は、金次

十23 8 にもらつてもらいました。「略。」「元氣  
 十23 9 会 じゅうぶん働けますよ。」元氣よくい  
 十23 11 かりついてねむれませんか。「略。」「略  
 十24 2 会 を返してもらいましょう。ひとりぐら  
 十24 4 会 っけてもうけますよ。」金次郎は、  
 十24 6 て、母親にすすめました。「略。」「母親  
 十24 8 会 してもらつてきましょう。」母親は、  
 十24 12 子どもをつれてきました。そうして、「へ  
 十25 1 会 れないようにしましょうね。」とい  
 十25 3 略。」「いいあいしました。そのあくる日  
 十25 6 人に買ってもらいました。そのお金は多  
 十25 8 お金は多くはありませんでしたが、四人  
 十25 11 らじを作つたりしました。ふつうの子ど  
 十25 12 づばになつていきました。金次郎は、一  
 十26 8 さつの本をみつめました。それは「大学  
 十26 10 ない」と書いてありました。金次郎は、そ  
 十26 12 勉強がしたくなりました。まきをとり  
 十27 1 で読みながら歩きました。「略。」「村の  
 十27 3 こう、うわさをしましたが、金次郎は耳  
 十27 4 れず、それが続けました。お正月がくる  
 十27 5 ぐらがまわつてきました。たいこをたた  
 十27 6 から家へやつてきます。百文はらうと、  
 十27 7 をしてみせてくれます。中には、正月だ  
 十27 8 文はずむ者もありましたが、金次郎のう  
 十27 9 十二文さえありませんでした。そんな  
 十27 10 ということはいえませんが。母親と相談し  
 十27 11 ないふうをしていました。金次郎のうち  
 十28 2 氣で死んでしまいました。おまけに、さ  
 十28 3 、流されてしまいました。このとき、金  
 十28 6 られることになりました。いままでも  
 十28 8 うけんめいに働きました。そのうえ、夜  
 十28 9 そりと勉強を続けました。夜の勉強には

十一 28 10 勉強には油がいります。その油を自分で  
 十一 28 12 き地にまいておきました。あくる年の春  
 十一 29 1 くさんの実がつけました。これを油にか  
 十一 29 2 て、本を読み続けました。金次郎は、ま  
 十一 29 4 たまりに植えてみました。すると、秋の  
 十一 29 6 にすることができました。この一びよう  
 十一 29 11 をとることができました。やがて、金次  
 十一 30 2 おくすことができました。そればかりで  
 十一 30 2 ればかりではありません。いろいろのこ  
 十一 30 4 われるようになりました。 四 田園  
 十一 43 3 園の卒業式がありました。弟が卒業する  
 十一 43 4 、母にかわってでした。正面のテーブ  
 十一 43 6 んがかざってありました。ようち園の子  
 十一 43 8 しくこしかけています。園長さんが、だ  
 十一 43 9 上にお立ちになりました。女の先生が、  
 十一 43 10 お読みあげになりました。「略」。「略  
 十一 44 2 い返事をして立ちます。それをみよう  
 十一 44 3 の席で立ちあがります。子どもと父兄と  
 十一 44 6 いただくことになりました。総代の名が、  
 十一 44 7 とかわ高く呼ばれました。弟の名でし  
 十一 44 9 れたような気がしました。弟は、すこし  
 十一 44 10 歩ほどまえに進みました。そして、園  
 十一 45 2 「と、大声でいきました。弟は、さっさ  
 十一 45 4 らでなおして進みました。こんどはまち  
 十一 45 5 こんどはまちがいませんでした。園長さ  
 十一 45 8 ながら、席に着きました。私はほっとし  
 十一 45 9 た。私はほっとしました。そして、弟  
 十一 45 10 持を頼もしく思いました。すこしぐらい  
 十一 46 4 氣を頼もしく思いました。じゃがいも  
 十一 48 11 よに北海道へいきます。北海道へいつて  
 十一 49 1 やがいもをつくります。それから、えん  
 十一 49 2 えんばくもつくります。ぼくは、おとう

十一 49 4 でバターをつくります。やぎもかいます  
 十一 49 5 ます。やぎもかいます。やぎ小屋のまわ  
 十一 49 8 ライラックを植えましよう。おとうさん  
 十一 49 10 けないように働きます。日本のこくぐら  
 十一 49 11 、北海道だといえます。さつばろに農学  
 十一 53 1 園 や、電車は動かせませんよ。」とさけん  
 十一 53 6 だをこぼしてきます。そんなにおさな  
 十一 54 7 園 氣持でゆずりましよう。どれもみ  
 十一 54 9 だをこぼしてきます。」といった、し  
 十一 59 7 ことばではありませんか。「略」。  
 十一 63 7 せ、父親をたずねました。少年は、色の  
 十一 63 8 そうな目をしていました。少年は、ナポ  
 十一 64 1 、ナポリに上陸しました。ところが、に  
 十一 64 8 ったことを知らせました。母親は、その  
 十一 64 10 みるとがっかりしましたが、自分たちの  
 十一 65 2 いくようにといいました。「略」。「と、  
 十一 65 4 と、看護人がききました。少年は、もし  
 十一 65 6 ら、その名をいいました。しかし看護人  
 十一 65 7 という名を思いだせませんでした。「年よ  
 十一 65 9 と、看護人がききました。「略」。「と、  
 十一 65 11 おぼえながら答えました。「略」。「略  
 十一 66 3 園 どまえだと思ひます。看護人は、し  
 十一 66 4 しばらく考えていきましたが、ふと思ひだ  
 十一 66 7 「略」。「といいました。「略」。「と、  
 十一 66 9 は心配そうにききました。看護人は、少  
 十一 66 9 れまで歩いていきました。そして、大  
 十一 67 2 ドアのまえまできますと、その中にはベ  
 十一 67 4 二列にならんでいました。「略」。「と、  
 十一 67 5 がら、中へはいりました。少年は、勇氣  
 十一 67 8 人たちをみまわしました。中には、死人  
 十一 68 3 めている者もありました。また、子ども  
 十一 68 4 っている者もありました。大きなへやは

十一 68 5 いがただよっていました。看護婦がふた  
 十一 68 6 を歩きまわっていました。その大きなへ  
 十一 68 10 「略」。「といいました。(二) 少年  
 十一 69 3 る、うでをつかみました。病人は動きま  
 十一 69 3 した。病人は動きませんでした。少年は  
 十一 69 6 して父親の方をみまわした。すると、かな  
 十一 69 7 くなってなきだしました。病人はしげし  
 十一 69 10 、くちびるは動きませんでした。こうも  
 十一 69 12 は、とても思われませんでした。かみの  
 十一 70 2 れそうになっていました。ただ、ひたい  
 十一 70 3 しいところはありませんでした。息をつ  
 十一 70 6 「と、少年はいいました。「略」。「けれ  
 十一 70 7 園 ですよ。わかりませんか。チコロです  
 十一 70 9 園 。ぼくがわかりませんか。なんとかひ  
 十一 70 12 あとで、目を閉じました。「略」。「病人  
 十一 71 4 うに息を続けていました。少年は、いす  
 十一 71 6 おろして待っていました。「略」。「と、  
 十一 71 8 「と、少年は考えました。「略」。「少年  
 十一 71 11 ろと思ひ返してました。去年、みおく  
 十一 72 3 と、いろいろ考えました。そのとき、少  
 十一 72 5 りしてとびあがりました。それは看護婦  
 十一 72 7 少年は口早にききました。「略」。「と、  
 十一 72 9 婦はやさしくいきました。「略」。「略  
 十一 73 1 園 においでになりますからね。看護婦  
 十一 73 2 ずについてしまいました。半時間ばかり  
 十一 73 3 の鳴る音がきこえました。みると、医者  
 十一 73 5 はしにはいつてきました。さっきの看護  
 十一 73 6 護人とがついていました。その人たちは  
 十一 73 8 そばに立ちどまりました。待っているそ  
 十一 73 9 いへん長く思われました。医者がすぐそ  
 十一 73 9 ばのベッドまできました。医者は、せい  
 十一 73 12 少年は立ちあがりました。医者は少年を



十一 90 6 と、少年はさげびました。「略。」と、  
 十一 90 8 「と、医者はいいました。「略。」その  
 十一 91 3 の中から取ってきました。そうして、そ  
 十一 91 4 に渡しながらいいました。「略。」「略  
 十一 91 6 げるものがあります。これを病院の  
 十一 91 11 方の手で目をふきました。「略。」「そ  
 十一 92 1 へ」しぼんでしまします。「略。」「そ  
 十一 92 5 へ」のこしていきます。看護婦さんあり  
 十一 92 11 と口へのぼってきました。「略。」「そ  
 十一 93 2 を小わきにかかえました。夜は明けかけ  
 十一 93 3 夜は明けかけていました。1 トップ  
 十一 4 5 人はたいへん喜びました。ある日、祝賀  
 十一 4 8 ブスの成功を祝しますと、ひとりの男が  
 十一 5 2 いってあざわらいしました。これをきいた  
 十一 5 7 「略。」といいました。人々は、なん  
 十一 5 9 いながらやってみましたが、もとより立  
 十一 5 9 立とうはずがありません。このときコロ  
 十一 5 11 もなく立てていました。「略。」「や  
 十一 6 1 へ」いこととごいしました。「略。」「やまぶき  
 十一 6 4 たかがりにてかけました。すると、にわ  
 十一 6 7 をかりことにしました。「略。」「こ  
 十一 6 9 いって戸をたたきますと、おくからひと  
 十一 6 11 りの少女がでてきましたので、「略。」「  
 十一 7 1 へ」雨で困っております。雨具をかりたい  
 十一 7 2 「略。」「とたのみました。少女はなにを  
 十一 7 4 しずかにさしました。道灌は、その  
 十一 7 5 花の枝を手にはしましたが、なんのこと  
 十一 7 6 その意味がわかりません。少女とやまぶ  
 十一 7 8 少女の心がわかりました。それは、「七  
 十一 7 12 くしたものであります。はた織り  
 十一 8 3 勉強にをかけていましたが、ある日のこ  
 十一 8 5 ら家へもどってきました。「略。」「とい

十二 8 7 のそばへかけようしました。そのとき、母  
 十二 8 8 ははたを織っていました。孟子の顔を  
 十二 8 9 がたなをとりあげました。孟子がびつ  
 十二 8 11 たち切つてしましました。孟子はおどろ  
 十二 9 4 「略。」「とたずねますと、母は、「略  
 十二 9 9 「略。」「といいました。ガラスのか  
 十二 10 3 ケットにいれていました。そのようすを  
 十二 10 7 「略。」「とたずねました。すると、老人  
 十二 10 9 ケットに手をいれましたが、とりだして  
 十二 11 2 「略。」「とききました。すると、老人  
 十二 11 4 へ」もはひとりいません。もしけがでも  
 十二 11 6 「略。」「と答えました。この老人は、  
 十二 11 10 で書物を読んでいました。それをみた土  
 十二 12 1 いるものだと考えました。そこで、リビ  
 十二 12 3 の書物を手にとりました。そうして、ペ  
 十二 12 8 へ」いい色になりましたね。「ああ、こ  
 十二 12 11 おなりではありませんか。はじめ短い  
 十二 12 11 れるものがあります。せんだつて、  
 十二 12 18 へ」ツという音がしました。ははあ、これ  
 十二 12 18 へ」じょうずになりました。このあいだの  
 十二 12 19 へ」へん感心してましたよ。「略。」「  
 十二 12 19 へ」でだろうと思ひました。あなただっ  
 十二 12 19 へ」ん年も生きていますからね。一年一年  
 十二 12 19 へ」えることができます。ですから、はじ  
 十二 12 19 へ」きるようになりました。「略。」「へ  
 十二 12 20 へ」思うようにいきません。「略。」「へ  
 十二 12 20 へ」雄さんがいつてましたよ。どうしてこ  
 十二 12 20 へ」ばいいなと思ひましたよ。あれがあれ  
 十二 12 20 へ」美しい色にできますがねえ。「略。」「  
 十二 12 21 へ」くさびしくなります。「略。」「(三  
 十二 12 21 へ」生がおつしやいましたよ。「(二)」「  
 十二 12 23 へ」ちがひきあげてきました。せまい家なの

十二 23 4 りよがちにしていますが、母をはじめ、  
 十二 23 7 いいすぎではありません。やしきがすこ  
 十二 24 1 り困ることはありません。ふたりのまご  
 十二 24 3 いとおいにあたります。おいの正男ちゃ  
 十二 24 5 ひとり遊びができますが、めいの民ちゃ  
 十二 24 6 ヶ月で、まだ歩けません。発育がたいへ  
 十二 24 10 こもしつこいえませんが、早く、いえる  
 十二 24 12 のをいにかけていますが、ちよつときい  
 十二 24 12 ときいてもわかりません。姉だけにわか  
 十二 25 1 ことばをいっています。わたしも早くそ  
 十二 25 2 を覚えたいと思います。学校から帰つて  
 十二 25 4 子もりをひき受けます。姉が、いそがし  
 十二 25 5 をはいまわっています。わたしは時間を  
 十二 25 7 たさせるようにしました。はじめはいや  
 十二 25 10 らせるようになりました。「略。」「略  
 十二 25 12 へ」ようにしてみせます。「略。」「民ち  
 十二 26 8 をぐるぐると歩きます。ちやぶ台をだし  
 十二 26 12 けてしまつたりします。けれども、かん  
 十二 26 12 くことはまだできません。たつた九十セ  
 十二 27 2 いざり歩きになります。かた足をなげだ  
 十二 27 6 しもゆだんができます。立ちはじめに  
 十二 27 8 たことを思ひだしました。それで、わた  
 十二 27 10 へ」って学校へいきましようね。」とい  
 十二 27 11 へ」んに持たせてみました。「略。」「民ち  
 十二 27 11 へ」よちと立ちあがりました。「略。」「たも  
 十二 28 4 へ」いっちょにいきましようね。」たもと  
 十二 28 7 へ」わりこんでしましました。「略。」「立ち  
 十二 28 11 へ」めて二足ほど歩きました。こんなふう  
 十二 29 2 へ」歩けるようになりました。ある日、学校  
 十二 29 4 へ」が大さわぎしてました。「略。」「略  
 十二 29 5 へ」をかうようになりましたが、民ちゃんは  
 十二 30 5 へ」おどろいてしましました。四 光を求

十二 31 4 ださった日であります。それは一八八七  
 十二 31 6 まえのことでありました。この日の午後  
 十二 31 8 んにたすんでいました。午後の日光は  
 十二 31 10 に降りそそいでいました。もう、めばえ  
 十二 32 1 わすれてなでていました。私は、どのよ  
 十二 32 3 か、すこしも知りませんでした。私は、  
 十二 32 5 てくる足音を感じましたので、それが母  
 十二 32 7 、両手をさししました。だれかがそれ  
 十二 32 8 かがそれをとらえました。そうして、次  
 十二 33 1 強くだきあげられました。サリバン先生  
 十二 33 3 の人形をくださいました。私がしばらく  
 十二 33 4 の人形と遊んでいますと、先生は、私の  
 十二 33 5 う文字をつづられました。私は、すぐこ  
 十二 33 7 れをまねようとしました。とうとうじょ  
 十二 33 8 じょうずにつづれましたとき、私は子ど  
 十二 33 11 字をつづってみせました。そのとき、私  
 十二 34 6 かりの動詞も知りました。けれども、物  
 十二 34 9 を持つて遊んでいますと、サリバン先生  
 十二 34 12 らせようとなさいました。その日はすで  
 十二 35 4 っても区別ができませんでした。先生は  
 十二 35 5 めていらつしやいましたが、こんどは、  
 十二 35 7 らせようとなさいました。私は、とうと  
 十二 35 8 ゆかにたたきつけました。そうして私は  
 十二 35 9 ら、ゆかいに思いました。私は、先生が  
 十二 35 11 いるようすを感じましたが、ただ、腹だ  
 十二 36 2 て、おどりがありました。ふたりは、い  
 十二 36 9 小道をおりていきました。だれかが水を  
 十二 36 11 水をくみあげていましたので、先生は私  
 十二 36 12 いの口の下へやりました。冷たい水がい  
 十二 37 2 を書いてくださいました。私は、身動き  
 十二 37 3 動きにそそいでいました。ところがとつ  
 十二 37 6 しきなものを感じました。このときはじ

十二 37 8 であることを知りました。この生きた一  
 十二 38 1 ように感じはじめました。それは、先生  
 十二 38 6 ぎあわせようとしたがだめでした。  
 十二 38 7 がいつぱいになりました。自分のしたこ  
 十二 38 9 みとに胸をさされました。私はその日、  
 十二 38 10 んのこばを覚えしました。全部覚えては  
 十二 38 11 。全部覚えてはいませんが、その中には  
 十二 38 12 たことを思い出します。できごとの多か  
 十二 39 5 を待つことを知りました。(二) これ  
 十二 39 11 しいことではありませんか。ケラーは、  
 十二 40 2 くはたらきを失いました。みることもで  
 十二 40 4 たのもむりはありません。ケラーの両親  
 十二 40 7 いただくことにしました。サリバン先生  
 十二 40 9 ぬどりよくがいました。しかし、ケラ  
 十二 40 11 することに成功しました。だんだんちえ  
 十二 41 1 にくくようになりました。もちろん、サ  
 十二 41 8 かわすようになりました。ケラーは、も  
 十二 41 11 には、生きていけません。先生も、「略  
 十二 42 2 ーのためにささげました。そののち、ヘ  
 十二 42 4 はかせにまでなりました。これは、ケラ  
 十二 43 9 くだす話がありましたよ。」「略。」「  
 十二 70 2 いう人が住んでいました。曾良は、信州  
 十二 70 4 、その弟子になりました。そうして、は  
 十二 70 5 ることに心をきめました。曾良は思いま  
 十二 70 6 した。曾良は思いました。芭蕉はたつた  
 十二 70 10 りて住むことにしました。そうして、毎  
 十二 71 2 はんをたいたりしました。また、まきが  
 十二 71 3 ろいにいったりしました。このようにし  
 十二 71 6 いと、曾良は喜びました。そのうちに、  
 十二 71 8 くだれる日が続きしました。芭蕉はからだ  
 十二 71 8 寒さは身にこたえましたが、雪をみるの  
 十二 71 10 待ち遠しがっていました。そのあたりに

十二 72 3 、はやしたてていました。芭蕉は、子ど  
 十二 72 10 び友だちにしていました。「略。」「略  
 十二 73 6 りころがったりします。「略。」「子ども  
 十二 73 8 て、受けようとはしますが、あらはそ  
 十二 73 10 にとびこんだりします。芭蕉は、につこ  
 十二 73 11 わらって立っていました。子どもたち  
 十二 73 12 けだしたいと思いましたが、いざ子ども走  
 十二 74 5 がたから降ってきました。みるみるうち  
 十二 74 6 みるうちにつもりましたが、曾良が水を  
 十二 74 12 は困ることもありません。ふだんは筑波  
 十二 75 5 せ、雪の句を考えました。トントン、ト  
 十二 75 6 をたたく者があります。「略。」「その声  
 十二 75 9 蕉はすぐ戸をあけました。「略。」「略  
 十二 75 12 えずにはいられませんでした。「略  
 十二 76 3 しばがもえあがります。「略。」「略  
 十二 76 6 にか持ちだしてきました。それは、赤い  
 十二 76 8 らしくいれてありました。曾良は、芭蕉  
 十二 76 10 かりうれしくなりました。ふたりは子ど  
 十二 76 10 ものようにわらいました。きみ火をた  
 十二 77 5 戦いを物語っています。スタンドには、  
 十二 77 8 ためにコートにでました。すこしばかり  
 十二 77 9 にサインを頼まれました。その少年たち  
 十二 78 1 語をつかって頼みました。私は、その少  
 十二 78 3 サインをしてやりました。少年たちは、  
 十二 78 6 「略。」「いいました。私は、いまま  
 十二 78 8 されたことはありませんでした。あまり  
 十二 78 9 ので、よくみていますと、どこかしら日  
 十二 78 11 「略。」「とたずねました。ふたりの少年  
 十二 79 1 「とはつきり答えました。「略。」「略  
 十二 79 8 、「いきたくありません。」「略。」「へ  
 十二 80 9 に力を入れて答えました。そのひとみの  
 十二 80 12 色があらわれていました。日本という國

十二 81 3 がいっぱいになりました。それからま  
十二 81 4 く試合がはじまりました。キンゼー選手  
十二 81 5 世界的名手でありましたが、私もどうして  
十二 81 6 ばならないと思いました。火のてるよう  
十二 81 7 げしい試合が続きました。三時間もぶっ  
十二 81 8 ぶっとおしに戦いました。なんどもコー  
十二 81 8 もコートでおれしました。たおれてはお  
十二 81 9 き、おきては戦いました。私はスタンド  
十二 81 11 で勝つことができました。私はいまでも  
十二 81 12 することができません。やわらかな  
十二 82 4 のぞむことになりました。もし、この決  
十二 82 6 もらうことになりました。清水選手の相手  
十二 82 9 ぶところではありません。それでも、こ  
十二 82 11 を目がけて集まりました。まっ白い線  
十二 83 3 と降りそそいでいました。そこへ両選手  
十二 83 4 両選手があらわれました。スタンドの人  
十二 83 6 手をふたりに送りました。「略略」試合  
十二 83 8 「試合がはじまりました。目にもとまら  
十二 83 10 左にと、ゆききしました。ボールはたま  
十二 84 1 なって、はねとびました。一つのボール  
十二 84 2 ようにかけまわりました。かたずをのん  
十二 84 5 水選手の勝となりました。あの小さいか  
十二 84 8 らわすことができません。しかし、さす  
十二 84 10 れるものではありません。もう然とたち  
十二 84 11 ボールをうちだしました。第三回はチ  
十二 84 12 ン選手の勝となりました。見物人は、い  
十二 85 2 手にあせをにぎりました。ところが、試  
十二 85 5 すべらせてしまいました。そうして、い  
十二 85 7 ころびそうになりました。相手を一きよ  
十二 86 1 てやったのであります。チルデン選手は  
十二 86 2 たしせいではありましたが、やわらかな  
十二 86 4 ものになっていきました。つぎつぎと、

十二 86 5 ぎをけずって戦いました。夕日はすっか  
十二 86 6 かりおちてしまいました。わずかな点の  
十二 86 7 選手の負けとなりました。ネットをはさ  
十二 86 8 いあく手をかわしました。心おきなく戦  
十二 86 10 なはく手をおしませんでした。十  
十二 97 4 こに貝がらがあります。みたところ、な  
十二 97 10 百種類にものぼりますが、古代の人は、  
十二 98 6 かつおなどをたべました。このように、  
十二 98 11 からのことでもあります。石器と土器  
十二 99 3 ものをならべてみましょう。石の矢の根  
十二 99 3 石の矢の根があります。石のおのもあり  
十二 99 6 。石のおのがあります。しかの角など  
十二 99 8 ったつり針もあります。また、土器もあ  
十二 99 9 また、土器もあります。これは、食物を  
十二 100 3 もん式土器といえます。形も、かめや、  
十二 100 5 いろのものがあります。じょうもん式土  
十二 100 9 器というのがあります。それは、もよう  
十二 100 11 よくまとまっています。この式の土器は  
十二 101 2 えがつけられています。はにわ この  
十二 101 9 たをあらわしています。手首やむねなど  
十二 101 11 どがかざってあります。このやさしいの  
十二 102 2 くわかるではありませんか。はにわには  
十二 102 4 らえたものがあります。夢殿の観音  
十二 102 10 られたものであります。夢殿の観音とい  
十二 103 5 とずいぶんちがいます。四角なあながあ  
十二 103 9 考えることができますか。ほうおう堂  
十二 104 7 らだといわれていますが、屋根の形や左  
十二 105 4 をふたりつれています。この人たちの着  
十二 105 6 いぶんちがっています。向こうがわに店  
十二 105 7 うがわに店がみえます。皮ざいくの店ら  
十二 105 9 皮がひろげてあります。くだものをなら  
十二 105 10 屋らしいのもあります。これは、平安時

十二 106 1 きあらわされています。絵巻物 四つ  
十二 106 5 得意の足かけをしました。うさぎはけん  
十二 106 6 けんめいにこらえましたが、たおれそう  
十二 106 10 おうえんをはじめました。土ひょうは、  
十二 107 2 巻の一場面であります。平安時代の終り  
十二 107 11 、力があふれています。仁王さまは寺の  
十二 108 3 さまをおまもりします。右の仁王さまを  
十二 108 6 慶だといわれています。ふたつとも鎌倉  
十二 108 11 な表情をあらわします。室町時代の藝術  
十二 109 9 から渡ってきていましたから、こんな  
十二 109 10 りっぱな本ができました。日本のことば  
十二 109 11 マ字で書いてあります。外国から書物が  
十二 110 3 だんだん育ってきました。まき絵書た  
十二 110 5 茶だんすににっています。江戸時代  
十二 110 6 が、そうではありません。黒うるしの中  
十二 110 10 もてはやされてきました。浮世絵、お  
十二 111 4 で、浮世絵といえます。この浮世絵は、  
十二 111 8 いたいず」と読みます。そのころまで、  
十二 112 10 りしたものとなりました。この本を日本  
十二 113 1 苦心したかわかりません。新しい学問を  
十二 113 2 れるものではありません。汽車第一号  
十二 113 4 いい汽車ではありませんか。これは、汽  
十二 113 6 走ったものであります。汽車にかざらず  
十二 113 9 に日に進歩しています。そうして、遠い  
十二 113 11 なるような気がします。議事堂 みな  
十二 114 2 ろなことを相談します。平和な國日本を  
十二 114 6 堂でたんじょうしました。おしまいの  
十二 114 10 した写真帳が終りました。このような歩  
十二 115 2 りほかに道はありません。ことばを生か  
十二 115 6 となることができます。30センチ  
十二 115 9 、西の空にします。月も、東の空か

十三 12 9 空に向かつて動きます。地面は平らなも  
十三 12 11 いるように思われます。こういううぶな  
十三 13 4 動説が行われていました。しかし、この  
十三 13 7 だんそれを発見しました。火星や金星・  
十三 13 11 いうこともわかりました。つまり、天動  
十三 13 12 、地動説が出てきました。これを最初に  
十三 14 3 ラーという人が出ました。この人は、す  
十三 14 6 れをわく星といいますが——の空にえが  
十三 14 7 いうことを発見しました。そのクブラー  
十三 14 9 という学者がありました。わかいころか  
十三 14 10 な発見や発明をしました。自分で望遠鏡  
十三 15 1 とを、明らかにしました。地は動くとい  
十三 15 2 れは一種ではありません。自轉といつて  
十三 15 3 から東へ一回轉します。また、公轉とい  
十三 15 5 のまわりをまわります。これで、夜と晝  
十三 15 8 天動説を信じていましたので、ガリレオ  
十三 15 9 ならない、といいました。ガリレオも、  
十三 15 10 て研究を続けていましたが、だまってい  
十三 15 11 動説を強くとなえました。そのため、ガ  
十三 16 1 ならぬといわれました。ガリレオは、  
十三 16 4 、ゆるしてもらいました。では、ガリレ  
十三 16 6 そんなことはありませんでした。〔略〕  
十三 17 5 しずかな國であります。美しいおとぎば  
十三 17 7 生まれた國であります。世界の樂園とい  
十三 17 10 きる二州をとられました。もともとせま  
十三 18 2 もよい土地を失いました。ですから、い  
十三 18 4 大きな問題でありました。戦いは敗れ、  
十三 18 6 の活動はおとろえました。たとえ戦いに  
十三 18 10 さかえるのであります。このとき、希望  
十三 18 12 とりの軍人がありました。戦場から帰っ  
十三 19 5 質や地味を研究しましたが、こんどは、  
十三 19 7 する大計画をたてました。ダルガスは、

十三 19 7 の空想家ではありません。かれは、科学  
十三 19 9 の誠意にみちていました。ユートランド  
十三 19 10 きない土地であります。これをこえた土  
十三 19 11 ガスのゆめであります。このゆめを實現  
十三 20 1 ただ二つしかありません。その第一は水  
十三 20 1 の第二は木であります。ユートランド  
十三 20 3 げった森林がありました。しかし、切り  
十三 20 7 植えることにありますが、もつともむず  
十三 20 10 ついて研究を重ねました。そこで思いつ  
十三 20 11 のもみの木であります。これなら、ユ  
十三 21 1 してかれてしまいました。ユートランド  
十三 21 3 さえ、のこしていませんでした。しかし  
十三 21 6 熱心に研究を続けました。そうして、か  
十三 21 8 ということであります。これをノルウ  
十三 21 10 いで、よくしげりました。ユートランド  
十三 21 11 どのりの野が廣がりました。ダルガスの希  
十三 22 1 みごとに實現されました。そこで、デン  
十三 22 2 、年々高まってきました。しかし、問題  
十三 22 2 はまだのこっています。みどりの野はで  
十三 22 4 熱望は、實現されません。もみは、ある  
十三 22 5 そこで生長をとめました。アルプス産の  
十三 22 6 れるのはふせがれましたが、その生長は  
十三 22 7 なかったのであります。デンマルクの農  
十三 22 9 て、かれにせまりました。ダルガスの長  
十三 22 12 、大きな発見をしました。わかいダルガ  
十三 23 4 〔会〕るにちがひありません。〕といいまし  
十三 23 5 、〔略〕。〕といいました。わかいダルガ  
十三 23 7 そのとおりにになりました。小もみは、あ  
十三 23 10 見されたのであります。このおかげで、  
十三 23 11 られるようになりました。ダルガス親子  
十三 24 1 材だけにとどまりません。第一、ユート  
十三 24 2 のよい感化を受けました。しげった木の

十三 24 6 ずかのものにすぎませんでした。が、植林  
十三 24 7 、すっかりかわりました。夏、しもがお  
十三 24 9 はないまでになりました。ユートランド  
十三 24 11 こえた田園となりました。木材があたえ  
十三 24 12 氣候があたえられました。そればかりで  
十三 25 2 岸近くでくいとめました。しもは消え、  
十三 25 5 るところに生まれしました。土地のねだん  
十三 25 6 百五十ばいになりました。道路・鉄道は  
十三 25 7 るところにしかれました。とうとう、ユ  
十三 25 9 ドは生まれかわりました。戦いによつて  
十三 25 11 りあることになりました。ところが、こ  
十三 26 1 いものが生き返りました。それは、全國  
十三 26 1 かり生まれかわりました。敗戦のために  
十三 26 4 和國家をうち建てました。四 ホート  
十三 38 8 〔会〕か、遠足で行きました……お客さん、  
十三 43 2 〔会〕きて帰って來ました——か。〔顔を  
十三 43 3 〔会〕きて帰って來ました……〕しばらく  
十三 44 4 組みたてられてあります。ところが、この  
十三 44 6 しばいになつてあります。ただ、あいてに  
十三 44 12 ている人には聞えませんが。そこで、三郎  
十三 45 2 見せなくてはなりません。そこに、この  
十三 45 3 むずかしさがあります。三郎くんのこと  
十三 45 6 くしなればなりません。あいてのいう  
十三 45 9 ように、くふうします。見物人にせなか  
十三 48 4 きゅうに暗くなりました。短日 かれ  
十三 50 3 いに、手をつなぎましょう。うれしいハ  
十三 50 4 ハ・ヒを、合唱しましょう。牧場 牧  
十三 53 2 はがきをいただきました。絵は、はがき  
十三 53 3 原色ですってあります。まだわかい、美  
十三 53 8 、こう書いてあります。〔略〕。〕ばく  
十三 54 1 〔会〕』といわれています。これを見て、ど  
十三 54 2 〔会〕見て、どう思いますか。〕ばくは、そ

十三544 手 は、すぐにわかりました。そうして、そ  
 十三545 手 がだいすきになりました。その氣持を、  
 十三546 手 てたまらなくなりました。それで、すぐ  
 十三547 手 のところへ行きました。おじさんは、  
 十三548 手 、絵かきではありませんが、絵がすきで  
 十三5412 手 んでいらつしやいました。「略。」そ  
 十三553 手 がきをだして見せました。「略。」とい  
 十三558 手 、見せてくださいました。ぼくは、絵は  
 十三5512 手 いるのにおどろきました。絵はがきでも  
 十三561 手 いい絵だなと思いました。おじさんの  
 十三563 手 のにおどろかされました。「略。」「略  
 十三577 手 なようすをなさいました。「略。」「略  
 十三578 手 は、よくわかりませんが、そのマリア  
 十三591 手 、見せてくださいました。「略。」それ  
 十三596 手 ん感じがちがいますね、おじさん。な  
 十三606 手 る一まいの絵を見ました。「略。」「略  
 十四43 手 して少なくはありません。けれども、フ  
 十四59 手 がめられたりはしませんでした。こうし  
 十四61 手 もよくうかがわれます。老いた母を思う  
 十四63 手 ってくるではありませんか。パリ、  
 十四65 手 をしようと思います。私は短い旅をし  
 十四66 手 にパリに着きました。たつて以来、  
 十四67 手 ないではいられませんでした。なつか  
 十四710 手 まることにしましょう。おとうさん  
 十四81 手 くえの上におきます。一生の間、いく  
 十四82 手 いだすことにします。それは私にとつ  
 十四84 手 わなければなりません。じゅみように  
 十四85 手 けなければなりません。なにしろ、私  
 十四86 手 には決心がつきました。つらいのをが  
 十四87 手 して生きていきます。どうしてもなれ  
 十四810 手 なるにはおよびません。なにしろ、お  
 十四94 手 らなければいけません。おかあさん、

十四97 手 しなければなりません。かなしみのた  
 十四101 手 、あす、送らせました。ランプについて  
 十四102 手 とを教えてくださいました。くぎへかける  
 十四108 手 るといいと思います。ちつともむずか  
 十四108 手 しいことはありません。いたってべん  
 十四109 手 りりにできています。では、おかあさ  
 十四110 手 手紙をさしあげましょう。それほど、  
 十四112 手 きに九月になります。そうしたら、お  
 十四111 手 、おそばに行きます。さようなら。あ  
 十四115 手 入れとを送らせました。このランプは  
 十四117 手 なつてもかまいません。が、きはつ油  
 十四111 手 さなかを送りました。たぶん、とち  
 十四123 手 づばに役にたちます。かさは、光をへ  
 十四1212 手 つしよには着きますまい。コヒー入  
 十四132 手 おわかりになります。それに、小さな  
 十四133 手 さなさがあります。それは、コップ  
 十四135 手 とを思っております。夜をどうしてす  
 十四137 手 きお目にかかれます。あなたを思うす  
 十四1310 手 ことを思っています。あなたがたおふ  
 十四141 手 前においてあります。おとうさんに對  
 十四142 手 出がのこっています。おとうさんのお  
 十四153 手 にといのこっています。おかあさんがご  
 十四154 手 でもとんで行きます。おかあさんのお  
 十四158 手 にはわかりかねます。が、おかあさん  
 十四1510 手 あげることにはしましょう。そうすべ  
 十四162 手 たいと思っています。私がそばにいな  
 十四164 手 りおわすれ願ひましょう。いつもこう  
 十四169 手 、うれしく思いました。すこしこみい  
 十四1610 手 かと心配してました。パリにある  
 十四171 手 夜が長すぎはしませんか。おひとり  
 十四172 手 、お思ひになりますか。どんなにし  
 十四173 手 ていらつしやいますか、お知らせくだ

十四174 手 るような氣がします。どの時間になに  
 十四178 手 れでお話をやめます。が、近いうちに  
 十四178 手 ちにまたはじめましょう。さようなら  
 十四224 手 ばかり思っていました。」と、さもふ  
 十四2712 手 とばが調べられますか。」とおたずね  
 十四294 手 に聞えるかもしれませんが、これはけっ  
 十四294 手 いうものではありません。だけれども、ど  
 十四299 手 本にはあまりありません。日本は景色の  
 十四301 手 うという人もありますが、そればかりと  
 十四302 手 ばかりとも思われません。かりにそれが  
 十四306 手 んなことだと思ひます。小さな島國に住  
 十四3011 手 きくなくてはいいけません。なんでも日本  
 十四315 手 中にはたつていいけません。あなたがたは  
 十四321 手 見るようにすすめましたが、中には、「へ  
 十四322 手 人があるかもしれせん。天上の星とあ  
 十四3211 手 いいすぎではありません。みなさんは、  
 十四331 手 ることを知っています。この一むれの星  
 十四333 手 太陽系とよんでいます。しかし、この太  
 十四3312 手 なかそうではありません。あのぎんが系  
 十四344 手 のか、想像がつきません。しかし、アイ  
 十四345 手 ないものではありません。博士の計算で  
 十四347 手 億光年——わかりますか。光が一方のは  
 十四351 手 じられるかもしれせん。大うちゅうか  
 十四354 手 なしむことはありません。そのバクテリ  
 十四356 手 たりするではありませんか。これを思え  
 十四3512 手 れるような氣がします。まことに、星の  
 十四365 手 い思想を読みとりました。さまざまな術  
 十四366 手 まな術を發達させました。聞くところに  
 十四373 手 らい思ひをしていますが、そんなことに  
 十四373 手 へこたれてはいけません。ひくつになつ  
 十四374 手 つになつてはいけません。心を大きくも  
 十四3710 手 れるにちがひありません。四 夜明け



十四451 千九百二十年 んぼつしてしまいました。  
 十四453 アイリッシュ の間をおよいでいました。助け船は、い  
 十四456 、気が氣ではありませんでした。助けを  
 十四457 つか聞えなくなりました。すべてのもの  
 十四458 があたりに廣がりました。すると、その  
 十四4510 いな歌が流れてきました。それは女の声  
 十四462 ば、ふるえてもいません。まるで、大ぜ  
 十四467 歌に聞きほれていました。かれは、いま  
 十四468 歌を聞いたかしれませんが、このときぐ  
 十四469 わったことはありませんでした。なんだ  
 十四471 ような氣持になりました。歌っている人  
 十四473 ういう人かわかりませんが、おそらくは  
 十四482 せるものだと思います。そうして、自  
 十四484 たいものだと思います。かれは、歌の  
 十四485 方におよいで行きました。近づいてみる  
 十四488 ちおよぎをしていました。歌を歌ってい  
 十四4811 氣で歌を続けていました。助け船のくる  
 十四496 いたかどうか知りません。しかし、この  
 十四502 て助けにきてくれました。やはり、その  
 十四505 なすくいあげられました。このことは、  
 十四508 の名まえがわかりません。しかし、たと  
 十四510 じられるではありませんか。六 とり  
 十四517 いだろうと思います。「こういだし  
 十四524 で、私から申します。もちろん、この  
 十四526 たら、実はつきませんが、根や、つるや  
 十四527 かぼちゃはありますが、それだけで  
 十四527 けでは実はつきません。花、とりわけ  
 十四531 はうたがいありません。「略」葉  
 十四535 とを主張なさいましたね。しかし、ど  
 十四541 やの花を見えています。あれは、私たち  
 十四544 のものだと思います。「略」

十四547 、おさきに申します。さつき、葉さん  
 十四548 とをおっしゃいましたが、それは、大  
 十四5412 ごろごろしています。そこへ細い根を  
 十四555 のものだと思います。「略」おと  
 十四557 かに、だれもいませんから、私が申し  
 十四558 から、私が申します。「おとなのつる  
 十四5510 は、しずかにいました。「略」つる  
 十四561 なに一つございせん。しかし、根さ  
 十四565 やの実にはなりません。また、花さん  
 十四5610 くさってしまいます。ごらんさい、  
 十四5612 きずができていますが、私は、いっし  
 十四572 のものだと思います。「つるがこうい  
 十四574 てきたものがあります。それは、頭のぼ  
 十四575 うことがわかりました。「略」水が  
 十四577 ことをいっていましたが、あなたがた  
 十四5710 どうなると思います。いったい、かぼ  
 十四582 ていらっしやいましたが、それを養分  
 十四584 みたことがありますか。「水が続いて  
 十四585 」水が続いていました。「略」土が  
 十四588 だりしてしまいます。この大きなかぼ  
 十四593 「略」土が立ちました。「略」する  
 十四599 ずらなはちがいしました。「略」花も  
 十四605 てなことはないませんよ。あなたがた  
 十四608 えたことがありますか。「花も、葉も、  
 十四610 ひねって考えていました。しばらくして  
 十四611 くして、根がいました。「略」つる  
 十四616 、簡單にはいえませんね。公平にいっ  
 十四619 かえないと思いますが、どうでしょう  
 十四6111 や、水などがいきました。花も、葉も、  
 十四612 も、みんな賛成しました。七 茶わん  
 十四622 茶わんが一つあります。中には、熱い湯  
 十四623 ばいはいっております。ただそれだけで

十四6210 湯げがたっています。これは、いうま  
 十四635 らちらと目に見えます。ばあいにより、  
 十四638 青の色がついています。これは、白いう  
 十四6310 とがどっさりありますが、それは、また  
 十四6310 かべつのときにしましょう。すべて、ま  
 十四644 研究でわかってきました。そのしんにな  
 十四6412 、おおよそわかります。しめきったへや  
 十四651 ことによくわかります。熱い湯ですと、  
 十四653 かににたちのぼります。反対に、湯がぬ  
 十四656 によつてもちがいますが、おおよそのけ  
 十四657 かるだろうと思います。つぎに、湯げが  
 十四659 いろのうずができます。これがまた、よ  
 十四6612 まつすぐにあがりますが、それ以上は、  
 十四664 なくなつてしまいます。茶わんの湯げな  
 十四669 ら、のぼつていきます。これとよくにた  
 十四6612 できることがあります。春さきなどの、  
 十四673 つことがよくあります。そういうときに  
 十四676 また、たちのぼります。そうして、大き  
 十四6711 かけなものがあります。それは、らい雨  
 十四682 、とくに多くなります。そういう地方の  
 十四685 大きなうずができます。そうして、ひょ  
 十四686 なが鳴つたりします。これは、茶わん  
 十四6812 てさしつかえありません。もつとも、ら  
 十四692 ちがつたものもあります。だから、どれも  
 十四698 うを見ることにしましょう。白い茶わん  
 十四6910 うすはなにもありませんが、それを目な  
 十四705 、あざやかに見えます。夕ごはんのおぜ  
 十四706 ぜんの上でもやれますから、よく見てご  
 十四708 ようがはつきります。つぎに、茶わん  
 十四7012 た部分だけになります。そうすると、茶  
 十四712 方へ向かつて動きます。その反対に、茶  
 十四714 わに向かつて流れます。だいたい、そう

十四七五 ゆんかんがおこります。よく理科の本な  
 十四七六 は表面からもひえます。そうして、その  
 十四七七 めたいむらができます。そういう部分か  
 十四七八 て、そこからあります。こんなふうにし  
 十四七九 がほうぼうにできます。したがって、湯  
 十四八〇 みだれてできてきます。これに日光をあ  
 十四八一 んのそこを照らします。そのために、さ  
 十四八二 見えることがあります。あの「かげろう  
 十四八三 けがとう明に見えます。このふしぎなも  
 十四八四 とにも関係してきます。そうすると、い  
 十四八五 んがつながってきます。地面の空気が、  
 十四八六 森ではくだっています。それで、畑の上  
 十四八七 るかたむきがあります。これがあまりは  
 十四八八 間に行われております。それは、海陸風  
 十四八九 陸から海へとふきます。すこし高いとこ  
 十四九〇 対の風がふいています。これと同じよう  
 十四九一 と名づけられています。これが、もうひ  
 十四九二 だいくらでもありますが、ここでは、こ  
 十四九三 くらいにしておきましょう。八 木も  
 十四九四 わざを教えてくださいました。この簡単なこ  
 十四九五 これをためしてみましたが、ほんとうに  
 十四九六 に割ることができました。そのうち、氣  
 十四九七 みごとに割っていました。木のほうは、  
 十四九八 それることがありません。ただ、困るの  
 十四九九 べ。」と教えてくれました。「木もと竹う  
 十五〇〇 、たいへんちがいます。これは、ちょう  
 十五〇一 うなものだと思いました。いったい、だ  
 十五〇二 ではないかと思えます。または、自分た  
 十五〇三 のもあるかもしれせん。それは、なん  
 十五〇四 ものとも考えられます。(一) あぶは  
 十五〇五 う美しい山があります。スイスの首府の  
 十五〇六 がならび立っています。その中で、一だ

十五〇七 かりの高さがありますが、そのほとんど  
 十五〇八 運んでいってくれます。その登山電車の  
 十五〇九 かしこに立っています。ある夏のことで  
 十五一〇 ばらくとまっています。両親と子ども  
 十五一一 庭教師がついていました。朝の十時と午  
 十五一二 のように散歩に出ました。ふたりの子ど  
 十五一三 ろそろと歩いていました。男の子は、小  
 十五一四 しろそうに見ていました。女の子は、あ  
 十五一五 行きそうにしていきました。そのとき、ふ  
 十五一六 ったような音がしました。なんでしょう  
 十五一七 上へ舞いおりて来ます。「略。」という  
 十五一八 ずたおれてしまいました。しばらくして  
 十五一九 子のすがたが見えませんでした。先生が第一に  
 十五二〇 しているではありませんか。さあたいへ  
 十五二一 ついたものがあります。だれでしょうか  
 十五二二 けるようにしています。だれでしょう  
 十五二三 れておりて来ています。急に目の前へ  
 十五二四 んで舞いおりて来ました。いまそれをと  
 十五二五 行かれるかわかりません。そう思うと、  
 十五二六 鳥の腹をしめつけました。すると、さす  
 十五二七 に舞いおりて行きました。けれど、もし  
 十五二八 いと、少年は思いました。ちょうど、発  
 十五二九 いわずにはいられませんでした。ところ  
 十五三〇 ず、じつとしています。もう呼吸もなく  
 十五三一 の氣にかかってきました。とにかく、朝  
 十五三二 下へとおおりて行きました。もう、がけの  
 十五三三 なくなってしまうました。そのとき、鳥  
 十五三四 がけておりて行きました。すると少年は  
 十五三五 すばやくとびおりました。すると、鳥は  
 十五三六 けたおれかかりました。いま、少年の  
 十五三七 まった短刀があります。少年は、必死の  
 十五三八 のせなかにかくしました。大わしはすぐ

十五三九 にとびかかって来ました。両方とも必死  
 十五四〇 を待ちかまえていました。大わしは、太  
 十五四一 うと、向かって来ました。けれども、ひ  
 十五四二 さに一たちあびせました。わしの白い下  
 十五四三 ように一面にちりました。わしは、羽音  
 十五四四 おいでせまって来ました。その目、その  
 十五四五 けらが目にはいりました。少年は、すば  
 十五四六 をこめて投げつけました。ねらいのはず  
 十五四七 れようはずはありません。大わしは、こ  
 十五四八 と一まず舞いたちましたが、まだこりな  
 十五四九 りないでやって来ました。それから、  
 十五五〇 ひしひしとあたり来ます。そのたびごと  
 十五五一 るどくとびかかります。羽風で空気がゆ  
 十五五二 ばしでつき殺されます。まわりには、鳥  
 十五五三 のようにとびちりました。その中で、女  
 十五五四 い戦いを続けていました。そのとき、が  
 十五五五 う人声が聞えてきました。少女の両親た  
 十五五六 る岩角近くまで来ました。けれども、戦  
 十五五七 んにも耳にはいりません。ふいに「略  
 十五五八 の中へ落ちて行きました。少年はほとと  
 十五五九 後へたおれかかりましたが、氣がつくと  
 十五六〇 手をさしだしていました。そのときの少  
 十五六一 いうまでもありません。目の前の美し  
 十五六二 衛門(えもん)焼じやありませんか。古い焼物そ  
 十五六三 、これは失礼しました。私はハギンス  
 十五六四 さようでございます。「略。」その  
 十五六五 だほかにあります。「略。」「へ  
 十五六六 。」どこで作りますか。「略。」「ブ  
 十五六七 の店に持って来ますが、なにぶん作る  
 十五六八 か。よくわかりました。せつかくうけ  
 十五六九 まうことになります。それはおいしいこ  
 十五七〇 は私が買い上げましょう。ほかの外國

15505 にも話してあげましょう。どうか、私  
 15591 にはよく知っています。私は小さいとき  
 15614 手 お話いたしております。」と、必ず書き  
 15631 手 みこしはあがりませんよ。」「へ略。」  
 15715 手 お寺へ行って来ましょう。そうしてお  
 15716 手 じさんを喜ばせましょうね。」とおつ  
 15717 手 満ぼうがまいましたよ。」といつて、  
 15795 権利があると信じます。といひますのは  
 15795 信じます。といひますのは、私は、あの  
 15795 つもおかれてあります。歴史の上で、い  
 15803 われが最初であります。それ以前は、お  
 15807 れあつたりしてききました。友愛の精神が  
 15809 とひろがっていきまますように。そう思い  
 15812 なることをいひます。——アインシュ  
 15823 なものあらわれまます。テーブルのまわ  
 15827 りこけたりしてあります。みんなびつくり  
 15829 いっぱいつけてあります。チルチルとミチ  
 15821 かつまつてしまひます。ねこは、ひとこ  
 15831 をかくしてしまひます。チルチル「あん  
 15851 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15875 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15876 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15878 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15891 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15901 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15902 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15922 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15924 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15935 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15935 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15936 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ  
 15938 ちの方へやつて来ました。光「こわいこ

159310 ことわりはできませんよ。さあ、みん  
 15942 力まかせにおさえました。光「ダイヤモ  
 15944 ヤモンドをまわします。舞台は清らかな  
 15945 しい光に照らされます。チルチル「ふと  
 15956 「などがあらわれまます。光「かわいらし  
 15962 わになつておどります。チルチル「まあ、  
 15988 どうしてもいけませんよ。もう時間が  
 15994 陽気なおどりをします。幸福「こんにち  
 151019 みなどつとわらひます。幸福「みんな聞  
 151025 をしようかいします。ぼくは、あなた  
 151029 すきとおつてあります。これは、『両親  
 151031 の着物を着ていますし、これは、『森  
 151032 の着物を着ています。外へ出ればいつ  
 151033 『たちは見られます。また、これは、  
 151034 の着物を着ていますし、これは、『春  
 151035 まの色をしてあります。』チルチル「そ  
 151037 を着てついでにいます。それからお天気  
 151039 っぱいつけています。それから、『冬  
 151042 のマントを開きます。それから、ぼく  
 151043 をしようかいしませんでした。まもな  
 151048 くおおいすぎまますね。もうよしまし  
 151048 すね。もうよしまししょう。なによりも  
 151049 『を呼びにやりますししょう。』と、見る  
 151041 チルに近づいて来ます。鼻を指ではじい  
 151051 ようにはねまわります。チルチル「びつ  
 151057 ろそろとやつて来ます。幸福「あれは、『  
 151061 につこりしてあります。でもぼくは、ま  
 151062 見たことがあります。その後にいる  
 1510610 のとなりにいます。その後、『も  
 1510611 び』が立っています。あれは、いつ  
 151077 についてはいけません。すると、あの  
 1510711 見る喜び』がいます。それは、毎日ば

151086 、まだ小さすぎまますよ。チルチル「そ  
 151096 あなたを見えています。それ、手をひろ  
 1510910 をたいてむかえます。母の愛「チルチ  
 151103 、世の中にありませんよ。チルチル「  
 151157 、ふたりはありませんよ。どんな子だ  
 1511511 わすれてはなりませんよ。でも、おま  
 151175 うとう来てくれました。物のわ「あな  
 151176 、ちつとも知りませんでしたよ。あな  
 151178 喜び』でございします。私たちは、それ  
 1511711 喜び』でございします。私たちは、それ  
 151183 喜び』でございします。私たちは、幸福  
 1511811 それぞれ帰つて来ます。さようなら。み  
 1511812 がつてお別れしまししょう。ほどなくあ  
 151195 んせつにいたします。物のわ「喜  
 151196 いあいだきあひます。やがてはなれて  
 151197 はなれて顔をあげまます。ふたりの目に  
 151197 なみだが光つていました。チルチル「び  
 151197 するくことはできません。先生がたが  
 151197 うにうれしく思ひました。なぜいままで  
 151197 、さんねんに思ひました。先生がたのこ  
 151197 をおのりいたします。——園山——  
 151197 13 まず 11 ひとまず  
 151197 まず、たて骨からはじめました。  
 151197 七 40 かしの木は、子どもたちのことを、まず思  
 151197 うかべる。  
 151197 八 39 王さまは、大喜びでねどこからとびおきて、  
 151197 まず、いすにおさわりになりました。  
 151197 八 40 まずコーヒーをおのみにならうとすると、  
 151197 コーヒーはこがねにかかりました。  
 151197 九 108 その例として、まず、水の音をとりあつ  
 151197 かった。  
 151197 九 803 まずどんなふうになりますか。

九八三(会) まず、一メートルぐらいのはばで、東西に四五十メートルほってみることにしよう。

一三二〇 このあれ地に育つ木があるかないか、まず、このことについて研究を重ねました。

一三二八 まず、もの賣りが鳴らして来る鳴りものの音がおもしろい。

一五四九 赤絵の技術をどうかして残したいと考え、自分でまず、焼くしごからはじめた。

一五〇五(会) まず第一に、ぼく自身をしようかいします。

一五〇九(会) なによりも、まず『大きな喜び』を呼びにやりましょう。

一五〇五(会) まず第一にいわなければならないのは、『正義であることの大きな喜び』で、

まずい (形) 1 まづい『一カッ』

九七九 やまねこは、どうもいいようがまづかった、いかにもさんねんだというふうに、

まずこや「鱒小屋」(名) 1 「まず」小屋

一三四八 山の湖水のほとり、「まず」小屋のランブが、きゆうに暗くなりました。

まずしい「貧」(形) 9 まづしい『一イ』

八五〇「幸福」は、まずしいこじきのようななりをしました。

八五〇 そんなまずしいなりをしていても、それでも、自分をよくむかえてくれる人があったら、

八五一 まずしいこじきのようなものが家のまえにいるのをみて、「略」とたずねました。

八五二 まずしいこじきのようなものがきて、

八五三 その家の人がでてみると、まずしいこじきのようなものが、おもてに立っていました。

一三六一 あるまずしい人が、ふとしたことから、この岩屋から「略」家具のを知った。

一四四七 フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

一四五六 フィリップ自身、中部フランスの小さな町のまずしい木ぐつしの子に生まれ、

一四六八 キューリー夫人は、まずしい学生であつたとき、

まずしさ「貧」(名) 3 まづしさ

八九三 はくちようは、その受けてきたまずしさとふしあわせとをかえって喜んだ。

一三六二 だれひとりあいてにしてくれなくなり、まずしさはいよいよよせまってくる。

一四五八 すなおな心は、まずしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

まずまず「益益」(副) 6 まずまず

一五〇八 おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃん、まずまずひわがかわいくなりました。

七五八 ほそい雲が、まずまずほそくなる。

八七三 あらしはまずまずはげしくなってきた。

一三六一 世間からはまずまずわられて、だれひとりあいてにしてくれなくなり、

一六五「略」と、少年は、まずまず不安をおぼえながら答えました。

一八八 しかし、病人はまずまずわるくなるばかりでした。

まず、(下) 2 ませる『一セ』

六四八(会) ませたたびだす子うまの顔に、かきはすずなり、夕明かり。

一五三 かたにかけると重いから手に持つのだと、

ませたことをいって、歩きだしました。

また「混」(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ま、(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ま、(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ま、(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ま、(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ま、(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ま、(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ま、(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ま、(下) 2 まざる『一ゼーゼル』

九二八(会) ニリットルにたりなかつたら、めっきの

ようね。

四48 9 ほかのがんは、また、みんなをだまして  
びっくりさせるのだからと思って、

四95 7 いっしょに なったり わかれたり、また  
いっしょになったり はなれたりする。

四117 10 なたくしが また、おとを いたしま  
しょう。

五19 10 ほつとしていると、こんどは、また、かば  
んの中にいれられました。

五46 8 しばらくすると、また、「略。」と鳴いた。  
五46 10 帰りに、また通ったら、もう鳴いてはいな  
かった。

五48 2 おや、こんな花が——またみつけた、きれ  
いな花を。

五55 1 食事をすませてから、またちよつと、家の  
まえにでてみました。

五57 11 また、みんながわりました。

五70 6 おじいさんは、また海へやってきました。  
五105 11 秋になると、また、わたり鳥がやってきま  
した。

六9 7 「略。」と、それがまた心配になつてき  
た。

六34 6 かかし、一どはねあげられるが、もんど  
りうって、また、ひげの中におちる。

六35 5 ほう、また、すごいのがくるぞ。

六35 7 また、風。

六36 4 4 — ああ、またふいてくるよ。

六38 9 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、ま  
た、もどつてきてかかしの近くにとまる。

六51 7 月は、雲にはいったかと思うとすぐで、で  
たかと思うとまたすぐはいります。  
六55 8 ふみおはさつきのことを思いだして、また、

にわの木の下へいってみました。

六66 5 第三号をつくる人は、またそのつぎを書く  
のです。

六68 2 子ぐまはまた歩いていきました。

六129 2 新しいおにがきまつて、またはじめようと  
したとき、

七10 4 渡し終ると、またひき返して、新しい子  
どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。

七12 4 「略。」というときの「手」は、またす  
こしちがいます。

七21 10 4 また、すづめがおりてきたよ。  
七46 2 これをきいて、みんなは、またはくしゅを  
した。

七51 4 ふえがまた「略。」と鳴つて、しあい  
がはじまつた。

七52 5 すぐまた、しあいのはじまつた。

七54 7 みんな、また運動場に集まつて、終りの式  
をした。

七77 11 旅人は、それには答えないで、また思いだ  
しながら、

七78 10 ふたりは、また顔をみあわせていたが、  
八5 8 それがまたとくべつで、

八29 2 そのままそとへでて、また馬車を走らせて、  
天の川の西の岸を通つていらつしやいました。

八53 6 「幸福」はまた、その家でもごめんをこ  
うむりました。

八65 4 4 これはまた、ひどく大きなひなだ。

八72 1 そうして、目をふさいだが、またさきへと  
んでいった。

八74 1 「略。」と、また鳴つた。  
八74 2 また音がひびいた。  
八86 5 子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、

あひるの子はまたいじめられるかと思つて、

八86 9 バターのいれてあるたるの中へとびおり、  
こんどはまたこなおけにはいつてしまった。

九4 7 黄色のかわりに、みどり色をぬつてみると、  
また、ちがつた感じがします。

九5 6 四色、五色と数をましていけば、その感じ  
はまたふかくなるでしょう。

九21 8 その夜半には、また一台の貨物自動車、  
五千ばのつばめをつんできました。

九24 3 ある家ののき下で巣をつくつたつばめは、  
來年また、同じ巢へもどつてくるというのです。

九42 1 5 そのかわりまた、いつのまにかがが  
渡つてきました。

九50 4 くりの木は、だまつてまた実をバラバラと  
落しました。

九51 7 たきは、またもとのようにふえをふきつづ  
けました。

九51 8 いちろうがまたすこしいきますと、

九52 11 いちろうが、またすこしいくと、

九58 6 すると、男はまたいやな顔をしました。

九58 11 すると、男は、また喜んで、顔じゅう口の  
ようにして、にたにたわつていました。

九66 4 すると、また、どんぐりどもが口々にいい  
ました。

九66 9 ガヤガヤ、ガヤガヤ、また、なにがなんだ  
かわからなくなりました。

九92 11 またじゃんけんをする。

九96 4 やまだの顔をみると、きゆうにまたつんと  
なつて、だまつてそれを取り、かばんにいれる。  
九110 10 それから、ぼくたちは、登つていつてはす  
べり、おりてはまた登つた。  
九133 4 目をつぶつてしずかにしていると、また、

パタパタという羽音がきこえてきました。

1140 9 くもは、おなががすいているのに気がつき、

また、あみをかけようと考えました。

1144 2 いままた、ばらの花のやさしいことをきくこともできた。

1171 「略。」と、また太郎がたずねましたので、おとうさんは答えました。

1196 また、「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる声がきこえる。

1261 また、「略。」とさげふ。

1528 妹は、また、ちよこちよこ歩きだしました

1542 きんぎょが一びき、すいすいといういてきたかと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。

1549 けむりやほのおがおもしろいらしく、妹は、ここでもた、いろいろなものをなめるのです。

1171 11 それでもきこえなければ、また、どなる。

1125 8 夜になると、また、なわをなったりわらじを作ったりしました。

1128 2 さかわ川がまたあふれて、のこっていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。

1136 2 11 日はまた照って水たっぷりと、いねのかぶぼりこのうえもなく、秋のみのりも思われる。

1148 9 おとうさん、ぼくは、大きくなったら、また、おかあさんといっしょに北海道へいきます。

1161 8 その夜、また父にきびしくただされて、1171 11 そうして、朝になると、また看病をはじめました。

1178 10 すこしよくなるかと思えば、思いがけなくまたわるくなったりで、

1183 4 11 わたしはまた、「略」、おまえがこない

から、どんなにがつかりしていたかわからないよ。

1184 11 少年は、また、病人の方をながめました。

1185 12 父親は、じつと少年をみつめていました

1187 4 「略。」と、また、看護人が小声でい

いました。

1187 7 11 じきまたあえるね。

1187 11 で、チチロはまた看護をはじめました。

1188 2 チチロはまた、病人に飲み物を飲ませたり、ふとんをおしたり、手をさすったり、

1189 9 病人は、目を開いて少年をじつとみて、そうして、また目を閉じました。

1215 10 文雄は、それをとりのけるのをやめて、また下がきにかかった。

1217 4 文雄は、三きやくにこしかけて、またふでをとってかきはじめた。

1220 10 11 わたしはまた、あのような絵のぐがあればいいなと思いましたよ。

1263 2 そこでまた川の水を飲んだ。

1333 10 月が出ていれば、出ていたで美しく、星の夜であれば、またさらに美しい。

1336 12 子どもたちは、またそちらの方へ走って行く。

1337 5 一どとぎれて、また鳴りはじめる。

1340 2 読み終ると、また電話口に行き、電話をかける。

1343 11 また、手紙を読みながら、舞台のまん中に出て来る。

しょう。

1465 9 これがまた、よく見ていると、なかなかおもしろいものです。

1467 5 湯げは、「略」つめたい風がふきこむた

びに、横になびいては、また、たちのぼります。

1494 10 両手もまた、寒さでほとんどこごえていた。

1496 5 女の子は、またそうしないではいられない

1499 9 女の子は、またもう一本のマッチを、そ

1526 5 それに、もしまたとちゅうで、このわし

1527 6 もう呼吸もなくなったのかと、そのこと

1559 8 11 おや、これはまた意外だ。

1562 6 11 やえ子、満ぼうがまた、おくの手をだ

1599 6 11 また、ぼくを知っている子がいる。

15114 7 11 あしたまた、あの小さな家に帰って、

1396 6 11 ふででかくこともできます。また、こ

13102 7 11 また、小人のようだった おひめさまは、

1477 7 11 火事がおこらないように、また、わるい

1661 5 11 私はおもしろくてなりませんでした。また、

1712 3 11 これは、持つところということになります。また、「略。」というときの「手」は、またすこ

しちがいます。

七453 ㊦ わたしは、こんなことになるうとは、思っていないでせんでした。また、こんなつもりでひいたのでもありません。

八104 そのかつこうは、さるそっくりです。また、どうかすると、〈略〉、かかとや足の指をつついたりするのです。

八7210 横になって休みたいと思った。また、ぬまの水をのませてもらいたいとも思ったが、

九710 さらにさらりと流れる小川ともなり、ちらちらと光るいけともなり、また廣い海ともなります。

九105 たたきかたによつて、いろいろな心持をあらわすことができるし、また、さまざまな情景を写しだすこともできるといふ話がおもしろかった。

九188 その中には、ことし生まれた子つばめがたくさんいます。また、ときには、あらしや、〈略〉

さいなんに、あわないともかぎりません。

九239 また、飛行機という文明の利器が、このしごとにつかわれたということを、

九349 ㊦ 深いものになると、一メートルあまりも根をはっていました。また、ちよまはふるる力の強い草なので、

九369 ㊦ この谷まの流れにはいつて、頭から水をあびるのが楽しみでした。また山へ登るほそ道の両がわに、まっかな、かわいらしい山いちごの実が、こぼれたように雑草の中にありました。

九409 ㊦ はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。また、下の方の山道を、しよいこをつけたおとなの人が、〈略〉

登ってくるのがみえます。

九1379 長いこと耳にしたことはありませんでした。また、口にしたこともありませんでした。

十2711 また、くもがのきに巣をかけることがあれば、巣のはりかたなどを、しらべておきたいと思ひます。

十296 また、一つの和音を耳にしたときは、組みあわされた一音一音のことも、心にうかべてみたのです。

十3912 また、核をさしいれたために死ぬものもあった。

十654 いたずらをしたり、また、とんでもないへまをやったり、

十一1011 ㊦ あの町でも、あの工場でも、また、日本の國全体だって、同じことだと思ふ。

十一207 金次郎は、子どものときから、家の手つだいをよく勤めました。また、父親のすきなものをかうために、自分でわらじを作って、お金をもうけたりもしました。

十一293 金次郎は、また、人がすておいたいねのなえをひろつて、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。

十一629 ㊦ それから、また、このことをたずねたとき、なぜすなおに『はい』といわなかったのだね。

十一683 大きくみ開いた目をあけて、じつと空間をみつめている者もありました。また、子どものようにうなっている者もありました。

十一806 飲み物やくすりや、少年の手からでなければ飲まないようになりました。また、なにかものをいおうとでもしているように、

十一8812 ときどきむりにくちびるを動かして、なにかものをいいたげにしました。また、やさしい色その目にうかぶこともありましたが、

十二558 昔からいい傳えられたというだけのもの

のほうが多い。また、文章に書きつづられて有名なものもあるが、

十二637 母にそのからだをみせるにはしのびない。また人にみられるのもこまる。

十二712 いどから水をくみあげたり、ごはんをたいたりしました。また、まきが少ないと、近所へ木をひろいにいつたりしました。

十二811 日本という國をみたこともなく、また日本語をすこしも話せないこの二少年が、

十二892 そうでないと、相手の人に満足を与えることができないし、また自分の誠意も通じない。

十二999 しかの角などで作つたつり針もあります。また、土器もあります。

十二11010 まき絵というのは、うるしをぬつたうえに、金や銀のこなをまいて、もようをあらわしたものです。また、なまりや貝などをはめこんだものもあります。

十二1147 平和な國日本を作るために、また、文化國家をきずくために。

十三512 新しい勇氣や空想をもつて、春は、また、楽しい船出のほぬのを、高くかかげる季節。

十三89 正しい知識を得るには、考えたり、調べたり、また、種々の器械をつかつて観察したり、実験したりする。

十三94 法則を知つて、ととのつた知識とし、また、さらに進んだ研究をする土台にするのである。

十三139 また、地球もまるい形をしたもので、火星などと同じように、太陽のまわりをまわっている星の一つだ、ということもわかりました。

十三144 この人は、すぐれた数学者で、また熱心な天文学者でした。

十三153 自轉といつて、〈略〉一回轉します。ま

た、公轉といって、〈略〉まわりをまわります。

十四265 コレは、オランダ医学がはいってきたときに、また、チフスやトラホームは、ドイツ医学がはいってきたときにそれぞれ傳わったことばであらう。

十四268 また、音楽の時間によくつかう、〈略〉とかいうことばは、西洋音楽がはいってきたときに、いっしょに傳わってきたことばであらう。

十四2611 また、図画工作の時間によくいう、〈略〉ことばも、西洋の油絵がはいってきたときに

十四4711 きけんのせまった中で、なんというおちついた、またなんというほがらかな人だらう。

十四565 ㊦ また、花さんでも、葉さんでも、日のあたるところや、高いところがおすきなようですが、

十四612 ㊦ もし、あの人間がいなかったら、また、その人間がせわをしてくれなかったら、

十四6810 しかしまた、見かたによつては、茶わんの湯と、こうしたらい雨のぼあいとは、よほどよくにたものと思つてさしつかえありません。

十四846 また、どうして雪のけっしょうができるか、〈略〉わかるようにしくんだものであった。

十四902 寒いことも寒いが、また暗さも暗かった。十五221 山の上の方に、また下の方にちらばつて

いるひつじのむれを追いでもするように、

十五346 知らせるためには、文字に書くか、またほかに特別の表わしかたをしなければならぬ。

十五349 なわを結んで、〈略〉などによつて、いろいろな考えを表わした。また、木の皮や、あさ

なわなどであんだひももつかい、  
十五368 形のないものを表わすのに、〈略〉。また、「うえ」「した」という考えを表わすのには、

十五375 また、それまでに作られた文字を組みあ

わせて表わすこともくふうされた。

十五389 字によつては、いくつかの音のあるものがあり、またいくつかの訓のあるものもある。

十五421 標準語の教育に役だつ。また、ローマ字は世界的の文字であるから、日本語が世界の人々に親しまれるようになるであらう。

十五5012 プリンクリーは、日本の美しい焼物にひきつけられていろいろの焼物を集めた。また、日本についていろいろの研究を進め、

十五515 日本美術工藝史十二巻という大作を著わした。また、名高い大英百科辞典の東洋美術につ

いての説明は、プリンクリーのふでになったものである。

十五797 また、〈略〉日本の子どもさんたちにも、お目にかかったことがあるからです。

十五992 また、もう一つの「幸福」のむれ、〈略〉、廣間の中にかげこんで来て、

十五1033 ㊦ また、これは、『ひなたの幸福』で、ダイヤモンド色の着物を着ていますし、

まだ「木」(副) 87 まあだ まだ

—131 ㊦ まあだだよ。

—133 ㊦ まあだだよ。

—165 まあ あります。

—302 まあ あります。

—65 ㊦ まあ ありますよ。

—235 ㊦ いや、まだ、さわつてみたこともない。

—3122 まだ なにも おぼえません。

四351 ここまで いわれても、まだ、なんのこと

四649 ㊦ まだ、からだ

がじゅうぶんではないから、

ら、  
四874 おとうさんは、町へいって、まだ かえら

ない。

四1065 ㊦ りゅうぐうは、まだ とおいの。

四1136 ㊦ これは、まだ さしあげた ことの ない、

五178 ㊦ おいしい ごちそうで ございます。

五232 ㊦ あなたたちはまだいい。

五393 ㊦ まだ ほかにあるの。

五421 ㊦ 私 は、まだ、ほっかいどうへいったこと

五549 ㊦ 私 は、まだ、ほっかいどうへいったこと

五583 ㊦ は、まだ、ほんのりと 明かるくて、

五9610 ㊦ は、まだ、ほんのりと 明かるくて、

六754 ㊦ まだ すこし 早い ようだ。

六1064 ㊦ 「まだ けんとう が つきません。」

七46 ㊦ その、弟 が まだ いわ ない ことばを、さきに

七303 ㊦ いった から 感心 したのである。

七591 ㊦ 教室 の まど は、まだ ねむりが ふかい。

七8110 ㊦ まだ かと思つた。

八108 ㊦ 七591 ㊦ こんなのは、みじかくなつた文ですが、ま

八387 ㊦ だ、みがきあげられたことばということはできま

せん。

八387 ㊦ ほかにまだ、知っていたかね。

八387 ㊦ などは、まだいくら書いても書ききれません。

八3810 ㊦ けれども、まだじゅうぶんではない。

八624 ㊦ まだ満足ではないというのですか。

八9310 ㊦ いちばん大きなまごがまだのこつてい

る。



き、

八96 10 ひたさないほうは、まだめがでません。

八103 2 朝、花のようすをみにいきましたら、まだ  
さいていませんでした。九16 1 まだ、口ばしの下の赤色が、親つばめほど  
こくありません。九23 4 オーストリアは第一次世界大戦のあとで、  
まだそのいたでがなおっていないころでした。九46 2 ㊦ ぼくにはまだ、セドリックほどわかりま  
せん。九53 6 ㊦ 「やまねこなら、けさまだくらいうちに、  
馬車で、南の方へとんでいきましたよ。」九71 1 やまねこは、まだなにかいいたそうに、  
〈略〉、目をぼちぼちさせていましたが、

九89 2 ㊦ まだやるのか。

九107 9 ㊦ 「先生、まだすべってはいけませんか。

九109 11 先生は、ふたりとも、まだ上へ上へと登っ  
ていかれたが、

十53 8 まだ、いぬが氣にかかるのか、ふり向くと、

十15 6 まだむちゅうになっているのである。

十125 4 金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうち  
からおきて、

十142 2 ㊦ よべの大雪まだ降りやまぬ。

十151 3 ゆうべからの大あらしは、けさになって  
もまだ続いていた。十173 11 医者が、まだとなりのベッドをはなれな  
いうちに、少年は立ちあがりました。十175 7 ㊦ だいぶんわるいけれど、まだ望みがあ  
る。十182 10 少年は、まだ声をだすことができません  
でした。

十二8 2 孟子がまだ子どものころでした。

十二14 3 まだ青々とした木の葉の中から大きくの  
ぞいているのもいい。

十二17 9 ㊦ まだだめです。

十二22 2 ㊦ まだわかい。

十二24 6 めいの民ちゃんは、二つ、満でいえば一  
年三ヶ月で、まだ歩けません。十二24 10 民ちゃんは、まだ、うんこもしっこもい  
えません。十二26 12 けれども、かんじんの歩くことはまだで  
きません。十二45 10 ㊦ 「文樂のほかにまだあるんですか。」  
十二71 11 まだなにも降ってきもしないのに、「〈略〉」などと、はやしたてていました。  
十二76 5 ㊦ 句か、まだできない。十三4 2 ごらん、まだこのかれ木のままでの、高い  
けやきのこずえの方を。十三4 9 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木の  
めのむれは、おたがいひじをつつきあつて、十三10 3 今日でも、まだ、そうした考えのこっ  
ている。十三11 8 世の中には、科学的研究によつても、ま  
だ知られていないことはたくさんあるが、

十三22 2 しかし、問題はまだのこっています。

十三51 3 まだあかんぼうで、母うしがしたでなめ  
ると、よろけるんだよ。十三53 3 まだわかい、美しいおかあさんが、まる  
まるとふとったかわいあかちゃんをだいていて、十四7 2 ㊦ ご自分にはまだ子どもたちがのこつて  
いる、十四9 2 ㊦ この世の中には、まだ幸福がのこつて  
いる、  
十四48 10 まだわかいおじょうさんです。十四73 10 ふしぎなまようがなんであるかというこ  
とは、まだ、あまりよくわかっていないようです。十四76 11 茶わんの湯のお話は、すればまだいくら  
でもありますが、十四92 3 おおみそかの晩だというのに、その子は、  
まだマツチをすこしも賣ってはいなかった。十四92 7 まだ一銭ももうけてはいないので、父親  
が、きつとひどくしかるにきまっていた。十五5 5 ㊦ 遠くそののち かしの木に、矢はま  
だおれで とどまりぬ。十五31 4 大わしは、〈略〉、ぱつと一まず舞いた  
ちましたが、まだこりないでやつて來ました。十五46 10 ㊦ 「こんなものが、まだほかにもありま  
すか。」十五55 8 ㊦ それはそれとして、きようはきみがま  
だ生まれなところの日本の話をさせてもらおう。十五56 2 ㊦ そのときは、まだ三角測量が行われて  
いなかったので、富士山の高さも不明であった。十五56 11 ㊦ 私がまだわかくてアマスト大学の助手  
をつとめていたころ、十五83 8 ㊦ だからまだ、ダイヤモンドを、まわし  
てはいけないよ。

十五97 5 ㊦ まだだよ。

十五97 6 ㊦ おどりをおどったり、わらったりする  
けれど、まだ、お話はできないのだよ。十五100 4 ㊦ この人、まだぼくたちに会ったことが  
ないんだってさ。十五104 2 ㊦ それから、ぼくは、まだなかまのうち  
でいつとういいのをしようかしませんかでした。十五106 1 ㊦ でもぼくは、まだわかいから、あの人  
のわらうのを見たことはありません。  
十五108 6 ㊦ どうあなたがやってみたって、あれを

すっかり見るには、まだ小さすぎますよ。

十五108 9 ㊦ あれは、人がまだ知らずにいる『喜び』たちです。

十五118 9 ㊦ ときはまだ来ないのです。

またがる「跨」(五) 1 またがる『一リ』

八29 4 すると、黒うしにまたがり、ふえをふいてくる、わかい男にであいました。

またしても「又」(副) 1 またしても

七60 8 またしても、ポトンと音がする。

または「又」(接) 3 または

十四14 7 その少年は、小学校のいちばん上の学年か、または、そのいなか町にある商業学校の下の学年ぐらいでしたでしょう。

十四80 3 なん百年という前からつくられて、子にまごとに傳えたことではないかと思えます。または、(略)、よその民族から教えられて、それから

いい傳えられているものもあるかもしれません。

十五81 7 平ぼんにしていだいなれよ。空氣または日光のごとく平ぼんなれよ。

まだまだ「未」(副) 1 まだまだ

十三12 5 日本の國は、今日よりまだまだ進むことであろう。

まち「町」(名) 34 町 ↓あかえまち・いなかまち・こうばまち・このまち

四9 1 よくみがいたまいるかがみを、この町にはめこんだようです。

四9 3 ここは、町でもひょうぼんのかじやさんです。

四12 2 となりの町と、いったりきたりします。

四12 5 ここから、とおいとおい町へいくことができます。

四12 7 とおいとおい町からだいじなものが

ここにどきます。

四13 1 ども、この町の目です。

四13 2 この町の耳です。

四13 3 この町の手となり足となって、はたらいしています。

四87 3 おとうさんは、町へ行って、まだかえらない。

五5 4 さあ、はいはいをして、たちちして、村にでましよう、町にでましよう。

五19 6 自動車につみこまれて、ある町のゆうびんきよくにつきました。

五56 1 もう、たくさん、子どもや町の人々が、あつまっていました。

六37 1 ビルディングが立ちならんでいる町。

六43 1 しずんでいくお日さまをおって、町の上を列車のようにとぶつばめのむれ。

七49 8 さいごに、町の学校とやることになった。

七53 1 あいては、町の、いちばん強い学校だ。

九12 3 町の通りを、電線を、はたを、せんたく物をふいている風である。

九115 5 ㊦ 赤いぬの一びきゆけばこの町のそここよりぞいぬのあらわる

十10 2 そのいなかの町には、ボンナフという石の橋があつて、

十23 9 新しい家のたった町、ふみきりばんのおじいさん。

十40 7 村や町の者は、幸吉のむだぼねをあざけり、そのゆめのような考えをわらつた。

十41 7 町の人のかげ口は、いつそはげしくなり、

十一4 6 川上の方をながめると、近くの町の工場

のえんとつが、なん本も立っているのがみえる。

十一10 11 ㊦ あの町でも、あの工場でも、また、日

本の國全体だって、同じことだと思う。

十二105 11 これは、平安時代の町の風景で、大和絵でやわらかにかきあらわされています。

十三26 6 ペキンの町には、ホートンが、あみの目のように通じている。

十三56 7 ㊦ 本物はね、いま、イタリアのフロレンスという町の絵画館にかざつてあるよ。

十四5 6 フィリップ自身、中部フランスの小さな町のまづしい木ぐつしの子に生まれ、

十四90 5 小さなマツチ賣りの女の子は、町をあちらこちら歩きながら思った。

十五19 4 スイスの首府のベルンの町からながめると、

十五45 11 ある日、プリンクリーは、どうやら覚え

た日本語で、町をひとりて散歩していた。

十五71 9 町の東にある寺の一角に、

十五72 9 ビツツバークの町を走り出た自動車は、

十五79 6 ああ美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、町や、家や森や、山をながめたり、

まちがい「間違」(名) 2 まちがい

五15 4 ゆくさきはむねのところに書いてありますから、まちがいはありません。

十一83 8 ㊦ どうしてこんなまちがいがおこつたの

だろう。

まちがう「間違」(五) 7 まちがう『一イーエ・

一ツ』

五13 3 ㊦ まちがって乗っている人がいないか、し

らべるのさ。

五13 4 ㊦ 「ぼくたち、まちがっていないの。」

十一45 1 ㊦ 「あ、まちがった。」

十一45 5 こんどはまちがいませんでした。

十一46 1 ㊦ 「あ、まちがった。」

十一463 まちがったとき、思いきってやりなおした、その勇氣を頼もしく思いました。

十五249 一つまちがえば、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落ちこむのですた。まちがえる 「間違」 (下二) 1 まちがえる 《エ》

四664 いいにくい ことばを みつけて、それをまちがえないで、早くいってあそぶのです。まちかど 「町角」 (名) 3 町かど 町角

四710 こんざつする 町かどでは、きちんとせりしてくれます。

九763 先生が、町角までいって、待っているようにとおっしゃったので、

十二911 ある町角の廣場で、まちか・ねる 「待兼」 (下二) 1 待ちかねる 《ネ》

十一334 短か夜しらむを待ちかねて、まちかまえる 「待構」 (下二) 2 待ちかまえる 《エ》

十五2912 昔の物語に出てくる英ゆうのように、このただけらしい相手を待ちかまえていました。

十五675 私がだんをおりるのを待ちかまえていた 老婦人が、

まちこがれる 「待焦」 (下二) 2 まちこがれる 待ちこがれる 《レ》

九253 春になると、だれもが、このめずらしいお客の帰ってくるのをまちこがれています。

十一783 父親の帰りを待ちこがれていたことなどを — それからそれへと長々と話しかけて、

まちじゅう 「町中」 (名) 1 町じゅう 四113 町じゅうの 友だちが みんな あつまって きます。

まちぜんたい 「町全体」 (名) 1 町ぜんたい 四135 町ぜんたいが、ひとつになつて 生きて います。

まちどおしが・る 「待遠」 (五) 1 待ち遠しがる 《ツ》

十二7110 芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。まちのおと 「題名」 1 まちの音

三872 まちの音 まちはずれ 「町外」 (名) 1 町はずれ

八136 町はずれの野原を歩いたりいなかのしものふかい朝の野にでたとき、

まちぶせ 「待伏」 (名) 1 まちぶせ 八744 かいうどは、ぬまのまわりにまちぶせをして いた。

まちやくば 「町役場」 (名) 1 町やくば 四42 こは、町やくばです。

まちわ・びる 「待佐」 (上二) 1 待ちわびる 《ジ》

十五1172 人、私たちが、あの人をすいぶん 待ちわびていることを、知らないのだらう。

まつ 「人名」 ↓おまつさん まつ 「松」 (名) 19 まつ ↓こまつ・たいまつ

一64 なのはな、なのはな、まつのき。 二173 いなごまつ まつ つくえ

四7710 ま — まつに月。 四826 まつの 木の 枝を立てて、色紙で おった

つるや、ふうせんを 上げました。 四839 それを まつの 枝の さきに つりさげると、

四862 ゆうがた、まつの 木の 枝は、まがるほど 雪に つもられて、だまつている。

四1277 みると、むこうの まつの 枝に、きれいな

ものが、かかっています。 四1292 まつの 木の うしろから、ひとりの 女が できて きます。

五977 さんちゃんのおうちのまつの木にとまったり、かえでの枝で休んだりして きました。

五1061 ある日、二三ぼのひわが、さんちゃんのうちのまつの木におりて きました。

五1079 旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の上へにげて きました。

六7510 学校へいくとき、雪だるまのかたのところに、まつの枝をつきました。

七142 ゆく手に、まつの木が立っています。 八567 そこで、向こうにみえるまつの木を目あてにして 歩きました。

九3711 なん十メートルもある高いすぎやまつの はえて いるところは、晝でもうすぐらく、

十234 なのはな、なのはな、まつのき。 十一125 あげはのちやうが、まつの かげから 舞って でる。

十一127 まつの木では、きょうからせみが鳴きは じめた。

十一402 山のもみじ葉みなちりはてて、青くし げるはまつ・すぎ・ひのき。

まつ 「待」 (五) 34 まつ 待つ 《チ・ツ・ツ・テ》 ↓おまちくださる・おまつ

一468 つぎの へやで、こしを かけて まつて います。

三333 はきものが きちんと そろって、 わたくしたちの かえるのを まつて います。

三601 ほかの 子どもたちは、 どう きまるか まつて います。

三614 ほかの 子どもたちも、こしを おろして、

まっています。

五25 ゆうごはんをまつあいだ、私は、まさこをうば車に乗せて、はるおと大通りにでました。

六40 心配しないでまっています。

六87 あなたは、その大きな木のぼって、まっています。

六141 「こら、まで。」

七254 ちょっとまっています。

七702 くれがたの庭そうじ、それがすむのをまっていますのか、

八205 そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をまつのです。

八965 水のすむのをまっています、むらのないようにまきました。

九763 先生が、町角までいって、待っているようにとおっしゃったので、

九927 こんどは負けたりしたちどまつて待っている。

九966 「ちょっと待て。」

九1081 待て、待て、もうすこし上までいこう。

九1081 待て、待て、

九1315 くもが、じいっと息をこらして待っている、と、

九1362 ちょっと待ってください。」と頼みました。

十一519 雨にうたれながら、電車のくるのを待っていた。

十一716 いすをひきよせて、目を父親の顔からはなさないで、こしをおろして待っていました。

十一738 待っているそのあいだが、少年にはたいへん長く思われました。

十一853 待ってください。

十二317 この日の午後、私はなんとなくものを待つ

十二322 私は、どのようなおどろきとふしぎが私を待っているのか、すこしも知りませんでした。

十二394 私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日待つことを知りました。

十二743 芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれがたから降ってきました。

十二743 芭蕉の待ちに待った雪が、

十三381 受話器を持ったまま、待っている。

十三407 電話のかかるのを待っている。

十四481 助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人たちが力をおとさないように、

十五896 わたしたちは、ただもう、おまえさんがたを待っていたのです。

十五939 さあ、きみを待っているのだ。

十五1191 ほどなくあらわれるあすの日を待ちながら。

まっか 「真赤」(形状) 13 まっか

一403 まっかなつつじがいっぱい。

二133 ひとつはまっかでしたが、ひとつは、はんぶんだけみどりいろをしていました。

五439 それから、まっかなカーネーションです。

七562 つばきの花がまっかにさいています。

七662 もみじがまっかで、山のいもをほっている人が三人。

八706 「(略)」といって、顔をまっかにしてやってきました。

九369 まっかな、かわいらしい山いちごの実が、こぼれたように雑草の中にありました。

九445 はだかになった木の上に、まっかにじゅくした実がすずなりになっているのを見ると、

九548 いちろうは、顔をまっかにして、

九571 男は、喜んで、息をハアハアさせて、耳のあたりまでまっかになり、

九846 だれもかれも、あせを流し、顔をまっかにしてほっています。

十三356 正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。

十五144 目をあけてつくづく見ればばらの木にばらがまっかにさいてけるかも

まっかさ 「松毬」(名) 5 まっかさ

六1215 五ひきのうさぎさんは、まつ林の中で、ま

つかさで、まりなげをしたり、

六1221 「うさぎさん、そのまっかさをくれないか。」

六1222 うさぎさんたちは、おさるさんにみんなまつかさをあげようと、話しあいました。

六1225 うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、ぼんぼんとおさるさんにながてやりました。

六1227 おさるさんは、きよろきよろしながら、ま

つかさを受けとりました。

まっかわ 「松川」(地名) 5 まつ川

九12010 そこに流れているのがまつ川だ。

九12011 私たちの村の用水も、このまつ川からひいてあるのだ。

九1243 まつ川がてんりゅう川に流れこんでいるところの近くまでくると、

九1245 ためしにまつ川の水をにて飲んでみると、たいへんうまかった。

九1249 「泉はまつ川の上流にある。」

まっきいろ 「真黄色」(名) 1 まっき色

三495 よあけにばあと まっき色、つゆをふくんで さきました。

まっくら 「真暗」(形状) 4 まっくら まっ暗

五102 ㊦ おばあちゃん、まっくらになった。

八157 地の中はどこもまっくらです。

十二4011 そのまっ暗なさびしい心を明かるくすることになった。

十三338 夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからないほどである。

まっくら 「真黒」(形状) 7 まっ黒

四922 しかし、降ってくる雪は、まっ黒だ。

四1337 ㊦ 黒いころもの そろいで まえば、月はまっ黒、やみの夜。

五323 まっ黒なけむりをもうもうとはいって、どんな走っています。

五7211 海はまっ黒になってあれていました。

五7510 海はまっ黒になって、波が高く、ゴーゴーとうなっています。

九543 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木

の森の方へ、新しい小さな道がついていました。

九546 かやの枝は、まっ黒にかさなりあって、

まっくらい 「真黒」(形) 1 まっ黒い 《一ク》  
四922 まっ黒くはないかもしれないが、どうしても、白いものではない。

マッケンナ (人名) 4 マッケンナ ↓フランクマッケンナ

十四466 マッケンナは、しばらくしんみりした氣

持で、この歌に聞きほれていました。

十四501 さて、おじょうさんの歌をたよりに、マッケンナがおよいで行ったように、

十四504 マッケンナも、その歌を歌っていたおじょうさんも、《略》、みんなすくいあげられました。

十四506 このことは、あくる日の新聞に出たマッ

ケンナの話で、あきらかになったのですが、

まっさいちゅう 「真最中」(名) 1 まっさいちゅう

十二853 試合のまっさいちゅう、《略》、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。

まっさお 「真青」(形状) 4 まっさお

六488 ㊦ ふと、そんなこと思わせる、あのまっさおな海の色。

九492 まわりの山は、《略》、きれいにもりあがって、まっさおな空の下にならんでいました。

十一129 まっさおな海は、太陽の下でわらっている。

十一149 一つの太陽の下で、《略》まっさおな海もわらい、たんぼのわた毛も遠くとんでいく。

まっさかさま 「真逆様」(形状) 1 まっさかさま

十五2410 一つまちがえば、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落ちこむのでした。

まっしろ 「真白」(形状) 16 まっ白  
三344 ㊦ まっ白なかびんに、赤い花がさしてありました。

三942 あのまっ白な雲もみんなのもの。  
四265 ㊦ まっ白なおさらの上では、おひめさまのようですね。

四837 まっ白な あごひげをつけた サンタク

ローズのおじいさんができあがりました。  
四921 降った雪は まっ白だ。

五224 おじいさんにおあいして、おもちゃ、まっ白にこなふいたはしがきなどをいただいて、

六495 ㊦ ふと、そんなこと思わせる、あのまっ白な波の音。

六14210 クローバーの花が、まっ白にさいいました。

九508 まっ白な岩のがけの中ほどに、小さなあな

があいていて、

九1343 まっ白なばらが、たくさんさいっていたので

す。

九1402 それから、まっ白な羽をひろげたかと思うと、ひらりひらりと舞いあがりました。

十四9612 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴか光るさをならべたテーブルが見えた。

十五194 ベルンの町からながめると、まっ白に雪をいただく山々がならび立っています。

十五212 朝ぎりの中から、白い雲のわきたつように、すべり出るまっ白なひつじのむれ、

十五214 その上に、まっ白な服をつけた少女の立っているようなわしい山が、

十五339 美しい、大きなエングフラウのまっ白な山までも、《略》をほめたたえているようでした。

まっしろい 「真白」(形) 1 まっ白い 《一イ》  
十二831 まっ白い線のひかれたコートには、日ざしがさんさんと降りそそいでいました。

まっすぐ 「真直」(形状) 17 まっすぐ  
三311 ㊦ 長くまっすぐになっています。

三746 光の中をあるいて いって、まっすぐにまどぎわへでした。

六322 かかしのまゆがまっすぐにのびる。  
六1194 よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりにまげるのですから、めんどうでした。

八208 せみの子は、だいたんに、まっすぐなあなを地表に向けてほっていき、

八564 ぼくは、砂地の上にまっすぐな足あとをつけてみようと思って歩きました。

八568 まえのよりはまっすぐだが、《略》、わきみをしたあたりが横にそれている。

八576 みちがえるように、まっすぐな、しっかり

した足あとがついている。

九三六 みつばちは、くものあみを知らないで、まっすぐにとんできました。

一一九〇 しばらくのあいだうつむいていましたが、やがてからだをまっすぐに立てました。

一二六八 まっすぐに長く切るのこぎり、広いはばをもっている。

一三一一 まっすぐなことや曲がったことは、知識をもととして考えなければならぬ。

一四六五 けむりの出るところからいくらかの高さまでは、まっすぐにありますが、

一四七八 一方は太く、一方は細くなって、まっすぐに割ることができなかったのに、

一四七六 竹の先のほうから割ってみると、もとまで、きれいにまっすぐに割ることができました。

一四七九 上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、けっしてそれることがありません。

一四八三 歩く人は、おそらく、まっすぐに歩こうと思ったのであろうが、

まったく〔全〕一五 まったく  
七七六 まったくそのとおりです。

八七五 そればかりでなく、ねこやにわとりとはまったくちがった考えをもっていた。

一四一五 これは、まったく考えてもみなかったことである。

一四五一 世界の学者の研究によって、天然真珠とまったく同じであることが、明らかにされた。

一一七〇 医者は、まったくだめだといわんばかりに頭をふりました。

一二三二 そのなつかしい葉や、花の上を、私の指はまったくわれをわすれてなでていました。

一三〇一 この考えのまったくあてはまらぬことは、

いうまでもない。

一三二四 知識を廣め、学問を研究して、迷信をまったくとり去ってしまふようになれば、

一三二八 夏、しもがおりののはまったくやみ、一四四五 しずけさの中から、とつぜん、まったく思いがけなく、きれいな歌が流れてきました。

一四六三 まったくとう明なガス体の蒸気が、しずくになるときは、

一四六九 ただ、ちよつと見ただけでは、まったく関係のないようなことがらが、

一四九八 そこで、その女の子は、まったくはだしになつてしまった。

一五三〇 その目、そのくちばし、その羽音、まったく大きなあくまです。

一五〇八 それから、これは、いや、まったくおおぜいすぎますね。

まつたけ〔松茸〕(名) 1 まつたけ  
一三八九 しとしと降る秋雨に、ちれば山には

まつたけが、かおりも高くはえてくる。  
マッチ(名) 一七 マッチ

一四二八 ただ一本のマッチでも、  
一四二九 わたくしは マッチです。

一四九二 おおみそかの晩だというのに、その子は、まだマッチをすこしも賣つてはいなかった。

一四九三 女の子は、手にマッチの小さなたばを一つ持っていた。

一四九四 一本のマッチで——ほんのたった一本のマッチで、火をとすことができたならば、

一四九四 ほんのたった一本のマッチで、  
一四九五 女の子は一本のマッチをとりだした。

一四九六 これは、ま法のマッチだろうかとさえ思った。

一四九六 女の子は、手にもえつくしたマッチを

持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。  
一四九六 またそうしないではいられなくなつて、

もう一本のマッチをとつてかべでこすつた。  
一四九七 ちょうどマッチはもえつくしてしまつて、

一四九七 女の子は、もう一本の、第三番めのマッチをすつた。

一四九八 と、そのとき、マッチはもえつくしてしまつた。

一四九九 女の子は、またもう一本のマッチを、そばのたばの中からひきだした。

一四九九 そのマッチの火の中で、もうとつくにわかれて神さまのおそばへ行つたおばあさんを見た。

一四九九 急いで、たばの中にあつたマッチをみんな一時につけた。

一四九九 マッチは、はなやかにえあがつた。  
マッチうり(名) 6 マッチ賣り

一四九九 小さなマッチ賣りの女の子は、町をあちらこちら歩きながら思つた。

一四九九 その小さなマッチ賣りのむすめは、自分のまき毛のことも、雪のことも考えなかった。

一四九九 その小さなマッチ賣りのむすめの考えたことはそれであつた。

一四九九 ほのおは、その小さなマッチ賣りのむすめを喜びむかえるようにおどりあがつた。

一四九九 いく百もの小さな人形が見おろして、マッチ賣りのむすめを見てわらいかけた。

一四九九 人々が、マッチ賣りのむすめの、ひえきつた小さなきかを見つけたとき、

マッチうりのむすめ〔課名〕 2 マッチ賣りのむすめ  
一四九九 十 マッチ賣りのむすめ……九十

十四90 十 マッチ賣りのむすめ

まつなみき 「松並木」(名) 1 まつなみ木

十238 窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。

まつば 「松葉」(名) 1 まつば

四479 やがて、まつばのようなかたちになりま  
した。

まつばづえ 「松葉杖」(名) 1 まつばづえ

五241 ところが、ぼくのまえに、まつばづえを  
ついた、わかい人がいるんです。

まつばやし 「松林」(名) 3 まつ林

六1215 五ひきのうさぎさんは、まつ林の中で、ま  
つかさで、まりなげをしたり、

九1068 まつ林の中を歩いていくとき、だれかが、

「略。」と、大声にさげんだ。

九1259 大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、ま  
つ林におおわれた道もない谷まになった。

まつばら 「松原」(名) 2 まつ原 しみほのまつば  
ら

四1264 白い はまべの まつ原に、波が よった  
り かえったり。

四1346 白い はまべの まつ原に、

まっぴるま 「真昼間」(名) 1 まっ晝間

十四10011 まっ晝間でも、それ以上に明かるくはな  
いと思われくらいであった。

まっぶたつ 「真」(名) 1 まっぶたつ

七744 いま、まっぶたつになるすいかだ。

まつもとさん 「人名」 1 まつもとさん

六5810 この人は、私たちの組のまつもとさんです。

まつり 「祭」(名) 1 まつり ひとりいれまつり・

ひとりいれまつりのよる・はなまつり・ひなまつり・

ほうねんまつり

十五64 家を出て手をひかれたるまつりかな

まつわりつく 「纏付」(五) 1 まつわりつく 《一  
キ》

十四931 その子のきれいなかみの毛は、両かたに  
まつわりつき、

まで 「迄」(副助) 182 ままで じあさからよるまで・  
いつまでも・いままでどおり

二68 ここまで きた とき、 とみこさんが、

「略。」といいました。

二213 しまいまで みて いたいとおもいまし  
たが、

二227 『いろはにほへと』までもありました。

二395 よくここまでのぼった。

二601 ここまで おはなしをきいたとき、

三152 ごてんのいり口まで きますと、

三1610 この はちを わたくしにとどけようと  
して、手をここまでのぼしたのです。

三225 くすのきは、いままで みたこともきい  
たこともないほど、大きな木になりました。

三231 どこからどこまで つづいて いるのか、

わからぬほどになりました。

三272 いままで みたこともきいたこともな  
い、大きなふねでした。

三446 むこうのりくまで ならんで みたまえ。

三467 白うさが いままでのことを はなしま  
すと、

三484 白うさは いままでのことを はなしま  
した。

三592 「ねえ、大きな木の ところまで の  
ぼって みよう。」

三616 丘の木の ところまでのぼってさ、

三632 いっしょになって、丘の大きな木の と  
ころまでのぼりました。

三811 みんなは とうとう えんがわまで にげて  
いきました。

三102 その うつくしきは たとえようもなく、

家の すみずみまで 光りかがやくほどなので、

三105 さいごまで どうしても あきらめない人  
が、なんんかのこりました。

三110 おふたりが どんなんにおかなしみにな  
るかと思つて、いまままで だまつて いましたが、

三111 やねの上まで、人で いっぱいになりま  
した。

四83 まい子を うちまで おくりとどけてくれ  
ます。

四95 あさからばんまで、トッテンカン トッテ  
ンカンとはたらいています。

四248 おとなりの まさこちゃん、あの いけ  
のそばまでさんぽしてきました。

四276 林の むこうの 一本道まで、かけっこを  
しようね。

四351 ここまで いわれても、まだ、なんの こと  
だかわかりません。

四391 ここまで 話が すすむと、みんなは、めい  
めい じぶんの ことが 思いだされて きました。

四642 いままでの わがまま、ごめんね。

四674 お正月までに、ことばあそびの たねを た  
くさん こしらえて おきましょう。

四904 おかたから はきはじめて、 かいどうへ  
ぬけて、おとなりまで はいて いく。

四103 かめは、すぐ そばまで いって、 大きな  
声で、「略。」といいます。

四105 お礼に りゅうぐうへ おつれしようと  
思つて、ここまですまいました。

四116 これは これは、おみやげまで いただき

まして、ありがとうございます。  
 四二〇 三 いままで くらかった へやが、あかるくなりまして。  
 四二一 三 これが できあがるまでには、どれほど苦心をしたことでしょう。  
 四二二 三 長い 長い でんせんをつたわって、ここまで たびを してきたのです。  
 四二二 八 これを作りあげるまでには、どれほど手かずが かかっている ことでしょう。  
 四二三 二 わたくしが この 世に 生まれてくるまでは、  
 五一六 七 三 「ぼくは、さつぼろまで。」  
 五一六 八 三 「あなたは、どこまでいくの。」  
 五一六 九 三 「わたしは、かごしままで。」  
 五二五 九 三 駅の出口までくると、でむかえにきていたおねえさんをみつめました。  
 五二七 一 三 だって、電車のおかげで、あんな遠いところまで、一日でいって帰ってきたのですもの。  
 五五八 一〇 三 「ぼく、大きくなるまでに、どの星もみんなみてしまいたいな。」  
 五五八 六 三 帰るまでには、新しいおけができていますよ。  
 五八二 二 三 「子どもたちがくるまでに、そこをきれいにそうじしておこう。」  
 五九五 九 三 おとうさん、ひとりだとべるようになるまで、かってやりましょうね。  
 五九六 一〇 三 自分でえさをとったり、遠いところまでとんでいくことはできまいよ。  
 五九八 一〇 三 のこぎりのやかましい音が、あさからばんまでひびきました。  
 六一〇 一 三 そのとき、いままで雲にかくれていたたいようがおおだしたので、

六一一 六 いままで 死んだようになっていたかいちゃう時計が、  
 六四〇 一 三 かかしの顔まで赤くなる。  
 六四七 五 三 やまが、草屋のきまでたれて、かきはすずなり、夕がらす。  
 六五八 九 三 そこを通りかかった人が、おんぶして学校までつれてきました。  
 六六六 六 三 そのようにして、どこまでもお話をつづけてみましょう。  
 六八二 七 三 はりがねが六本あることまでわかる。  
 六八八 九 三 ぼくは、いままで、ものをいうときに、  
 六八八 九 三 「略」ということを、考えたことがなかった。  
 六八八 九 三 パビブベボ、パビブベボにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。  
 六八八 九 三 いままで、ちがったかなをならべたもの「ぐらに思つて、  
 六八八 九 三 「ここまでできた、もう安心だね。」  
 七九四 四 三 あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。  
 七四一 一 三 私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、せなかから、腹までふりまかれて、  
 七四九 九 三 かるやかなしらべは、朝の光のように氣持よく、車中のすみからすみまで流れた。  
 七四七 六 三 どこまで書きたしても、それでいいところまでは、なかなか、いきつくものではないありません。  
 七四七 七 三 それでいいところまでは、  
 七五五 六 三 ぼくらのほうが、どんどんあてられて、センターまで、外野にでてしまった。  
 七六九 四 三 たつぷりと、春は、小さな川にまで、あふれている、あふれている。  
 七七二 四 三 うまよ、そんな大きななりをして、子ども

のように、からだまであらってもらっているのか。  
 七八二 一 三 らくだのまえ歯が、二三本ぬけていることまで。  
 七八二 二 三 そのうえ、つけていた荷物の品まで、知っているじゃありませんか。  
 八四七 七 三 北はほっかいどうから、南はきゅうしゅうやそのさきの島々まで、いたるところの山野に、  
 八三六 六 三 太陽から発した光が、地球にとどくまでには、〈略〉かかることになります。  
 八四九 一 三 王子は、いままでのわけをこの男に話しました。  
 八五九 九 三 黄色なたくあんまで、そのおむすびにそえてくれました。  
 八五八 三 三 いままで のぼってきた方をふり返ってみると、  
 八六二 二 三 世界は庭の向こうがわまで廣がっているのだよ。  
 八六二 五 三 いつまでかかるのだろう。  
 八六四 六 三 いままででいたのだし、あと四五日はすわることもできますから。  
 八七一 三 三 おしまいは、自分の兄や姉からまで、  
 八七一 三 「略」といわれた。  
 八八四 一 三 そうして、はくちようたちがみえなくなると、すぐ水のどんぞこまでもぐっていった。  
 八八五 二 三 しかし、いままでにだれをなつかしく思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。  
 八八四 一 三 さわってみると、いままでべしゅんこだったさが、ふくれてかたくなっていました。  
 九一四 五 三 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、心持まであらわすことができるものらしい。  
 九一七 九 三 南洋の島々から、さらに海をこえて、遠いオーストラリアまでいくのがあるということです。



九一八 秋には、南ヨーロッパを通過して、遠くアフリカまでも行って、冬ごしをします。

九二一 六 その日はたいへん寒いあらしの日で、朝から晩まで、こやみなく雨が降っていました。

九二四 六 日本からオーストラリアまでは、一万キロあまりもありますが、

九二七 二 文 月の夜をわが家のありしあたりまで

九三六 五 田んぼに落ち、湖にまでつづいていきます。

九四四 二 母やおばまで子どものように、かきの葉を—まい—まいならべて、

九四八 八 おそくまでねむれませんでした。

九五七 一 男は、喜んで、息をハアハアさせて、耳のあたりまでまっかになり、

九七二 一 六 それでは、もんくはいままでのとおりにしましう。

九七六 三 先生が、町角までいって、待っているようにとおっしゃったので、

九八二 九 「一、二、三——」と数えながら舞台はしまできてとまる。

九八二 二 友だちにまで心配させて——

九八八 一 六 待て、待て、もうすこし上までいこう。

九八九 九 帰りは、村までくだりの坂道だ。

九八二 一 一 それで茶をたててみると、いままで味わったこともないような、ふしぎな味が感じられた。

九八三 一 〇 ここまでくると、てんりゅう川もよほど水かさが増えている。

九八四 四 まつ川がてんりゅう川に流れこんでいるところの近くまでくると、

九八四 四 いつのまにか、いままで苦しかったからだのいたみもきえていきました。

九八九 一 〇 九 それまで、命を助けておいてください。

九八四 一 月はまだ頭の上までできていました。

九八四 四 いままででこの手で、この足で——

九八七 一 一 いまのいままで、みにくく思っていた自分のからだも、

九八七 三 ぼくは、いままでに学んだ「自然の観察」を、ずっとつづけていきたいと思っています。

九八六 四 いままでの失敗のもとをとりぞいて、新しい設計図をこしらえあげた。

九八四 四 しかも、核をさしいれてから、真珠になるまでには、少くとも四年はかかる。

九八二 二 六 半分までこぎつけた。

九八三 六 そのとき、いままでかたにかけていたすいとうをはずして、手に持つといいます。

九八六 四 いままでの作文のからをぬぎさって、新しい世界にふみだしていこうと思います。

九八六 三 私、たけのこのそばにいて、せいくらべをしたら、はなのところまでありました。

九八六 二 あるとき、このだんなは、用事で、となり村までいかなければなりません。

九八四 一 「略」と、ここまで話したとき、

九八四 一 いままでおいおいいたくせに、

九八二 七 いままででも、なまけたことのない金次郎でしたが、

九八二 六 私、かさをさして電車の停留所まででかけた。

九八三 四 乗客はおたがいにおしあつて、しゃしゅう台までいっばいになってしまった。

九八三 一 〇 いままで、《略》おしあつていた人たちも、きゅうになごやかな気分になった。

九八二 一 六 ふたりは、はしごだんをのぼって、長いろうかのはずれまで歩いていきました。

九八二 六 大きなへやの、開いたドアのまえまでき

ますと、

九八二 七 その大きなへやはしまでいくと、看護人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまつて、

九八二 九 医者がすぐそばのベッドまできました。

九八二 一 六 のどまででかけたさげびを、じつとおさえながら。

九八二 一 〇 母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切っていました。

九八二 八 正男のあとを追っかけて道まででいたのよ。

九八二 四 私、いつまでたっても区別ができませんでした。

九八二 四 ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。

九八二 一 一 さすがの太陽も、まねかれるままに空の中ほどまでもどってきた。

九八二 七 私、いままで試合のまえにこんなふうにはげまされたことはありませんでした。

九八二 七 「いうまでもなく、日本ですよ。」

九八二 八 あなたがたの家の昔からいままでのことがさまざまに思いだされるでしょう。

九八二 一 〇 そのころまで、人間のからだがどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、

九八二 一 一 この考えのまったくあてはまらぬことは、いうまでもない。

九八二 一 六 死ぬまで眞理を求めていたのです。

九八二 二 五 もみは、ある大きさまでのびると、そこで生長をとめました。

九八二 三 七 小もみは、ある大きさまでは、大もみの生長をうながす力をもっているが、

九八二 四 九 北ヨーロッパ産の農作物で、できないものはないまでになりました。

十三275 ホートンは一本のトンネルのようになつて、どこまでもつながっている感じがする。  
 十三494 空気が、わたしたちのゆかいなじょうだんでわらい、  
 十三508 でも、水がすむまで見ているかもしれない。  
 十四62 母を思う子の真情は、遠く海をこえて、私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。  
 十四132(註) どこまでコーヒーを入れていいのかわかりになります。  
 十四151(註) そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早くたつでしょうから。  
 十四151(手) いままでより時間が早くたつでしょうから。  
 十四308 小さな島國に住んでいたために、氣持までちっぽけなものになってしまったのでしょうか。  
 十四343 こうなってくると、うちゅうというものは、どこまで廣いのか、想像が付きません。  
 十四348 一方のはしから、向こうのはしまでとどくの、二十億年も、かかるほどの廣さなのです。  
 十四468 かれは、いままでにどれだけ歌を聞いたかしれませんが、  
 十四581(窓) 養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。  
 十四631 これは、いまでもなく、  
 十四6512 けむりの出るところからいくらかの高さまでは、まっすぐにあがりますが、  
 十四725 したがって、湯の、中までも熱いところと、わりあいにぬるいところとが、いろいろに入りみだれてできてきます。  
 十四786 竹の先のほうから割ってみると、もとまで、きれいにまっすぐに割ることができました。

十四8210 三つ子のたましい百まで。  
 十四1014 いままでなかったことであつた。  
 十五74(窓) 息白しいつまで残る明星ぞ  
 十五198 そのほとんどいただきまで高山植物のさきみだれているけいしや面を、  
 十五2111 それがコトコトと音をたてて下の方まで落ちていくのを、おもしろそうに見ていました。  
 十五234 ふと氣がついてみると、いままで先生のそばにいた女の子のすがたが見えません。  
 十五311 目の前二メートルほどまでせまって來たこのあくまの胸をめがけて、  
 十五325 ようやく道を見つけて、この鳥と少年との戦っている岩角近くまで來ました。  
 十五328 いままでむちゅうになつて少年目がけてとびかかっていた大わしは、  
 十五337 おおぜいの人たちのほめことば、それはいまここのいうまでもありません。  
 十五339 大きなユングフラウのまっ白な山までも、  
 《略》少年をほめたたえているようでした。  
 十五375 また、それまでに作られた文字を組みあわせて表わすこともくふうされた。  
 十五4112 発音のこまかなところまで書き表わすことができて、標準語の教育に役だつ。  
 十五454 それまでのものの考えかたや商賣では、ふだんの生活さえむずかしくなってきた。  
 十五464 いままで見たこともないみごとな焼物であつたからである。  
 十五485 いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、  
 十五512 辞書を作ったり、日本人のための英語教科書の編さんまでしたりした。  
 十五699 ああ、新島のおじさんは、私を京都まで

もつれて來て、朝夕かわいがってくださったのだ。  
 十五765 私は、停車場まで送ってくださった博士のこう意をふかく謝して、  
 十五773 きょうのできごとを、あすまでのばすな  
 十五887(窓) 口は耳までさけているし、だれもそれに立ち向かうものはないのですよ。  
 十五969(窓) ほかの者にまで会っているひまはないよ。  
 十五1137(窓) おまけに、いつかランプをつけるときやけどをしたあとであるよ。  
 十五1143(窓) 声までそっくりだよ。  
 十五11412(窓) おまえたがこの上まであがつて來たのは、  
 十五11512(窓) でも、おまえたは、どうしてここまであがつて來られたの。  
 十五1231 なぜいままで、もっと先生がたとしたしくしなかったのだろうと、さんねんに思いました。  
 まど「窓」(名) 24 まど 窓  
 一173 まどのきのはがうごいてる。  
 一568 まどのところに、みおぼえのあるかが、たくさんならんでいました。  
 三312(窓) 右がわはきょうしつで、左がわにはまどがならんでいます。  
 三313(窓) まどから光がさしこんできます。  
 三747(窓) まどからのぞいてごらん。  
 四231(手) まどもかきました。  
 四232(手) あ、まどから、にいさんとよく星をみましたね。  
 四924 雪が降りだすと、ぼくはまどからかおをだして空のほうをみあげて、  
 五486 まどをあけると、いまのぼったばかりの日の光が、さつといっぱいながれこんできた。

六二六 3 まどからそとをみて、「(略)。」  
六四一 ビルディングのまどに、一つ二つと火がつく。

七四五 教室のまどは、まだねむりがふかい。

七六一 あちこちのまどがあいて、教室も目がさめた。

七八六 教室のまどは、どこもまぶたをとじる。

七四五 私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそとをながめた。

一九一 窓をあける女の先生。

二一 窓に花のはちをおきながら、

二二 窓をのぞく子どものはれはれた顔。

二三八 窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。

二六三 二階の窓からそとをみたら、大きな竹が

によっきりでいたので、びっくりしました。

二八四 あかつきの光が窓から白くさしこんできたとき、

二九一 学校のいきかえりにその門前を通つても、新島家の窓は、かたくとざされてあつた。

三〇七 十 そのことのあつたあくる日、私は、ひさ

しぶりで窓のあけはなれた新島家をおとずれた。

三二四 戸や窓のやぶれるほど、いつぱい「幸福」でつまっているじゃないの。

まとう (五) 1 まとう 《一ツ》

三三七 5 ゆめのように、真理のように、白雲をか

たにまとった小山をめぐる、聞えてくる。

まどお (間遠) (形状) 1 まどお

一九二 だんだんまどおになる。

まどかけ (窓掛) (名) 1 まどかけ

四一九六 窓 「カーテンは、まどかけさ。」

まどガラス (名) 2 窓ガラス

一五 教室の高いところの窓ガラスが、一まい

こわれていて、

四一八 すると、窓ガラスをふいていた田中さんが、「(略)。」といった。

まどぎわ (窓際) (名) 2 まどぎわ 窓ぎわ

三七六 その光の中をあるいていって、まっすぐにまどぎわへでした。

五五三 廣いへやの窓ぎわに大きなデスクをすえ、

まどまど (窓窓) (名) 1 窓々

四九三 女の子は、窓々とおして、ちらちらとかがやくともしびの光を見た。

まどまり (纏) (名) 1 まどまり

九四 あまりたくさん重ねると、ごちゃごちゃになつて、まどまりがつかず、

まどまる (纏) (五) 2 まどまる 《一ツール》

二九四 5 —このようにまどまると、だれでも読んで、すぐにそのわけがわかる。

二一〇 十 それは、もうもくごかんたんで、形も

たいへんよくまとまっています。

まとも (正面) (形状) 2 まとも

一四〇 南にかたむく日につれて、光はまとも

にえんにさす。

五五七 十 きみたちのそのまともなるひとみも

まどわく (窓枠) (名) 1 まどわく

三七七 十 わかい男の人が、ただひとり、わらいもせず、

両方の手でまどわくをおしています。

まどをあけると (課名) 2 まどをあけると

五三 六 まどをあけると……四十四

まどをあけると (題名) 1 まどをあけると

五八 五 まどをあけると

マドンナ (名) 5 マドンナ

一五五 十 『いすによるマドンナ』といわれています。

一五七 十 中でも、ラファエルは、マドンナの像

をかくことが得意だった。

一五七 十 『いすによるマドンナ』は、おけのそ

こにかいたという小さな絵だが、

一五八 十 それはそうとして、ラファエルのかい

たマドンナのかわつたのを見せてあげよう。

一五九 十 これは、(略)で、『シストのマドンナ』といわれている。

まなこ (眼) (名) 1 まなこ ちまなこ

一五四 十 ときいきおいに まなこすら、その

行く末を見ざりけり。

まなつ (真夏) (名) 2 真夏

一五五 十 カーネギー博物館のあるピッツバーグに

着いたのは、暑い真夏の日の朝であつた。

一五七 十 ちょうどそのころは真夏であつたので、

まなぶ (学) (五) 5 学ぶ 《一ン》

一七三 十 ぼくは、いままでに学んだ「自然の観察」

を、ずつとつづけていきたいと思ひます。

一八四 十 友だちのいいところを、すなおに学んでい

きたいと思ひます。

一八六 十 外国から新しい方法を学んで、つぎつぎ

と近代的工業の道をたどっていくようになった。

一八八 十 そのころ留学生としてアメリカのスタン

フォード大学に学んでいた私は、

一九〇 十 自分の國を愛するということを学んでい

る日本の子どもさんたちにも、

まにあう (間合) (五) 3 まにあう 《一イ・ワ》

一九一 十 紙は半紙でいいし、骨は工作のあまりのひ

ごでまにあわせました。

一九三 十 星のきよになりますと、これでは、もう

まにあいません。

九205 そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではまにあわず、さらに二台の自動車を加えました。

まね「真似」(名) 18 まね ひくちまね・てまね・ひとまね

四3710 図 いやしいまねをしてはいけませんよ。

四778 くくじやくのまねをするからす。

五1017 「略。」と、早く、おそく、高く、ひくく、いっしょうけんめいにまねをします。

五1026 ひわは、そのまねをして、「略。」と、すずしい声で鳴きます。

五10211 さんちゃんのおかあさんが、せんたくをしますと「略。」と、ひわもまねをします。

五1054 それで、ひわは、すっかりそのまねができるようになります。

五1057 ひわは、いつもそのまねをしては、ひとりよろこんでいました。

五1076 ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つぎからつぎへときかせました。

五1077 さんちゃんの本をよむまねなどを、

五1095 「略。」と、まねをしました。

六10511 そうして、にいさんのまねのうまいのに感心した。

六1066 そこで、ぼくもひとつまねをしてやろうと思った。

六1074 ぼくのまねはしくじった。

六1102 これなら、弟のまねなんかわけはないぞと思った。

六1138 弟のまねをしてみんなをわらわせてやろうなどという氣持は、どこかへふっとんでしまった。

八72 客がきているときなど、あまりテーブルの上でぎょうぎのわるいまねをすると、

九1006 たかぎ、頭をかかえてにげるまねをする。

十731 次郎かじやも、そのまねをして、おいおいなきだしました。

まねき「招」ひおまねき・てまねき・てまねきする

まねく「招」(五) 1 まねく 《一カ》ひさしまねく

十二6011 目をさしまねくと、さすがの太陽も、まねかれるまに空の中ほどまでもどつてきた。

まねる「真似」(下) 3 まねる 《一ネ》

五10011 へんな声でさえずつて、さんちゃんの本をよむ声をまねます。

六1057 弟のことばをまねて、「略。」といったのである。

十二337 私は、すぐこの指の遊びがおもしろくなつて、それをまねようと思いました。

まばたき「瞬」(名) 1 まばたき

十515 いぬは、まばたきをしたきりで、そのパンをたべようとしません。

まばゆい「目映」(形) 1 まばゆい 《一ク》

十一356 図 まばゆく光るいなずまに、続いてひびくらしいの音。

まひわ「真鶏」(名) 1 まひわ

五962 図 ほんとうは、まひわというのですが、ふつうは、ひわ、ひわといっています。

まぶしい「眩」(形) 3 まぶしい 《一イ》

八841 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっていた。

十255 まぶしい日光。

十五433 まぶしい日の光をさけながら、

まぶた「瞼」(名) 2 まぶた

四5510 かっちゃんは、ねつがずつとさがつて、まぶたをすこしひらきました。

七86 教室のまどは、どこもまぶたをとじる。

まほう「魔法」(名) 1 ま法

十四956 これは、魔法のマッチだろうかときえ思った。

まほうつかい「魔法使」(名) 1 まほうつかい

十二846 あの小さいからだが、まほうつかいのようになつて、

まぼろし「幻」(名) 1 まぼろし

十四1026 人々は、女の子がおおみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。

まま「儘」(名) 45 まま ひありのまま・わがまま

三982 口ではなしたことは、そのままきえてなくなりませんが、

三1086 「略。」とお思いになつて、そのままおかえりになりました。

四1172 図 いつまでもそのままにしておいていただきとうございます。

五155 けれども、このままでは旅はできません。

五2010 私は、ぶじに、としおさんの心を、そのままみつおさんにおつたえすることができました。

五986 図 このままかつておいだらいいでしょう。

五1087 けれども、旅のひわは、そのままとんでいってしまいました。

六1308 うさぎさんたちは、そのままとこのやぶの方へいってしまいました。

八148 春がきてても、たまごはそのままでした。

八233 しばらくそのままでのしせいで動きません。

八292 こうお考えになつた天帝は、そのままとへで、

八399 み知らぬ人は、そのままだこへいってしまいました。

八861 つかれはてて、こおりの中にとじこめられ

たまま、身動きもせずたおれてしまった。

九一〇 しばらくひげをひねったまま下を向いていましたが、やっとあきらめていいました。

九四八 やまだ、はなれたまま、たかぎの手もとをみている。

九五一 やがて思いきって、たかぎのそばにより、だまったままそれを取りあげる。

九一四 文 着ぶくれて歩かされいし女の子ばたとたおれそのまもなく

九二五 おく山の雪がとけてそのまましみてきたかと思われようにつめたかった。

九三二 ぐずぐずしていると、そのまたべられるので、みつばちはいじな針をだして、

九三三 あみは、すっかりやぶれて、くもはそのまま地面に落ちました。

九四二 それで、そのまま手足をちぢめて、じっとすわっていました。

九四三 くもは、なんといつて返事をしていかなかった。

九四四 くもは、つばめの口ばしにはさまれたまま、空をとんでいきました。

九四八 ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字を読んでいる。

九四二 あとで開いてみると、もとのままになっていた。

九四二 一方の手で、ふとんの上におかれたまま動かずにいる、うでをつかみました。

九四七 窓 そのままにしておいてやろう。

九四八 おしめカバーをさせたままほっておくと、十二三 なんのこともわからないままに、私は、

十二三 略 たくさんのことばをつづることを覚え、

十二三 私、身動きもせず、立ったままで、全

身の注意を先生の指の動きにそいでいました。

九四七 命のない人形を思うままに動かして、

九四八 舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。

九四九 さすがの太陽も、まねかれるままに空の中ほどまでもどってきた。

九五〇 このままおされるものではありません。

九五二 ごらん、まだこのかれ木のまの、高いけやきのこずえの方を。

九五七 三郎が、ぼうしをかぶったままとびこんで来て、受話器をとる。

九五八 受話器を持ったまま、待っている。

九五九 おとうさんのお写真は、

九六〇 生きておいでになったときそのままです。

九六二 そのまものかつこうで、

九六三 やいた鳥は、肉を切るナイフとホークとをせなかに立てたまま、テーブルからとびおりて、

九六四 左手は女の子の上帯にかけたままで、右手をはなして、

九六五 店の主人は、きかれるままに語りだした。

九六六 私は、道のまん中で、無言でつっ立ったまま動かなくなった。

九六七 指さされるままに、顔をあげてへき面を見あげると、おじさんの大きな写真があった。

九六八 あすこに、ずっと後の方に、ボールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

九六九 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七〇 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七一 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七二 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七三 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七四 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七五 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七六 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七七 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七八 十五 横つちよを向いたままにいます。

九七九 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八〇 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八一 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八二 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八三 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八四 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八五 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八六 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八七 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八八 十五 横つちよを向いたままにいます。

九八九 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九〇 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九一 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九二 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九三 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九四 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九五 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九六 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九七 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九八 十五 横つちよを向いたままにいます。

九九九 十五 横つちよを向いたままにいます。

一〇〇〇 十五 横つちよを向いたままにいます。

六二八 はなからでる音は、ナニヌネノ、マミム

モの二ぎようだけで、

まみれ じあせまみれ・どろまみれ

まみれる 塗 (下) 1 まみれる 《レ》

七四二 ちょうど、かふんにまみれたみつばちのようになつて、汽車でねむっていた。

まめ 豆 (名) 5 豆 じあせまめ・さやまめ・そらまめ

三二九 そののち、はやとりは、たくさんの米や、麦や、豆をつんで、海をわたりました。

三三三 お米や豆をいれた、みほんの まるい

七二八 「きゅうりの手」や「豆の手」なども、同じです。

七三二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七三六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七四〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七四四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七四八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七五二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七五六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七六〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七六四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七六八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七七二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七七六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七八〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七八四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七八八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七九二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

七九六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八〇〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八〇四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八〇八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八一二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八一六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八二〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八二四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八二八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八三二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八三六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八四〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八四四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八四八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八五二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八五六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八六〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八六四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八六八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八七二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八七六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八八〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八八四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八八八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八九二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

八九六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九〇〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九〇四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九〇八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九一二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九一六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九二〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九二四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九二八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九三二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九三六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九四〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九四四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九四八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九五二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九五六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九六〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九六四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九六八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九七二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九七六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九八〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九八四 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九八八 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九九二 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

九九六 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

一〇〇〇 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなつた豆のつる。

六九七 女の人は、いったんさがる。まもなく、ほ  
 おりのみことをあんないしてでてる。

八二一 あらゆる手あてをつくしましたが、それな  
 り、まもなく息をひきとりました。

九一五 まもなくさつていかなければならない日本  
 に、なごりをおしんでいるのかもしれない。

九七四 まもなく馬車とまったときは、茶色のど  
 んぐりにかわっていました。

九九二 まもなく、一、二年ぐらいの男の子、《略》  
 びょんびょんかけてきて、「+」でとまる。

一二八四 それからまもなく試合がはじまりました。  
 一五〇四 まもなくやって来る明かい『大きな  
 喜び』の兄弟ぶんのようなものですからね。

まもりそだてる『守育』(下二) 1 守り育てる

《一テル》

一五六八 私の父は、同志社を守り育てるために、  
 北海の地をすて、

まもる『守』(五) 10 まもる 守る 《一ツール》

↓おまもりくださる・おまもりする・みまもる  
 三二六 それで、たくさんのからいにいいつけて、  
 まもってくださることにしました。

四七二 人々のたいせつなものをも まもって  
 くれます。

四七四 もっとたいせつなからだを まもってく  
 れます。

六三九 丸 わるい虫をとってそだてたいねを、こん  
 どは、あなたがたがまもるんですもの。

一一一六 わたしをまもるためには、どんな困難と  
 も戦う、そのうで。

一一九〇 神さまがきみをまもってくださいさるだろ  
 う。

一二五八 おには約そくをまもって、そののちはも

う田畑を荒らすようなことはなくなった。

一四七〇 私たちは、おとうさんのために、心か  
 らの思い出をまもることにしましょう。

一五七三 ああ、新島のおじさんが、いまなお満ほ  
 うを守ってくださったのだ。

一五八九 みなさん、私は神さまのおいつけを  
 守っているのです。

まゆ『眉』(名) 2 まゆ

六三二 かかしのまゆがまつすぐにのびる。

一一七二 ただ、ひたいと弓形をしたまゆとのほか  
 には、どこといって父親らしいところはあまりま  
 せんでした。

まゆげ『眉毛』(名) 1 まゆ毛

一二四五 まゆ毛も、目も、口も動くし、

まよいこ・む『迷込』(五) 1 まよいこむ 《一ン》

一五八三 この人たちのなかにまよいこんでい  
 ないともかぎらない。

まよう『迷』(五) 1 まよう 《一ツ》

七六四 まよったせみが、かきの木につきあたって  
 バタバタやって、にげていった。

マラリア(名) 1 マラリア

一四二一 コレラ、マラリア、トラホーム、  
 まり『秘』(名) 2 まり ↓こでまり・ゴムまり・  
 てまり

二〇三 ただおさん まりりんご かき

七五八 ボタンと音がして、まりが、そこからとび  
 こんできた。

マリア(人名) 3 マリア

一三五四 あかちゃんがキリストで、そのおあさ  
 んがマリアだということは、すぐにわかりました。  
 一三七八 そのマリアは、たいへん美しくて、い  
 かにもおかあさんらしいと思うのです。

一三五四 せいの高いマリアがキリストをだいて  
 立っていると、

まりなげ『秘投』(名) 1 まりなげ

六二六 五ひきのうさぎさんは、まつ林の中で、ま  
 つかさで、まりなげをしたり、

まる『丸』(名) 1 まる ↓ひのまる

一三三 — あお — きいろ — まる — 四かく —  
 まるい『丸』(形) 30 まるい 《一イーク》 ↓ま  
 るまるい

一四七 もつていた四かくなかみに、まるいお  
 おきなはんをおしてくれました。

三三八 お米や豆をいれた、みほんの まるい  
 びんもありました。

四八九 よくみがいたまるいかがみを、この町  
 にはめこんだようです。

四二六 りんごさんのかおの まるいこと。

四二五 でんとうの まるい ガラスは、どうして  
 こしらえたのでしょうか。

五三三 手をたたいてやりますと、まさこも、まる  
 くふとった手をたたきました。

五五八 まん中にまるいきれいなたまがみえる。  
 五八七 黒いかみのけがふさふさして、まるい目  
 が二つあって。

六二〇 テーブルのまわりにあつまって、まるくな  
 ります。

六六二 「ねこは、こたつでまるくなる。」

六三六 おかあさんは、目をまるくして、

六三六 うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、  
 まるくならんで、話をしました。

七九五 うまれるときはまるくなっていました。  
 八七〇 ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴  
 らしたり、火花をだすことさえできた。

八〇一 せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだしたりすることができる。  
 八四三 二つにわってみたら、中に、青いものがまるくふくらんでいました。  
 九一八 あつちにもこつちにも、こがね色のまるいものが、ぴかぴか光っているのです。  
 九四八 まるいのがえらいのです。  
 九六九 ちばんまるいのはわたしです。  
 九六七 まるいのがえらいのです。  
 一七六 日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。  
 一六九 しまってあった、一つのまるいつばをみつ  
 け、へやのまん中にかかえてきました。  
 一二五八 首のほうからもかぶせてまるくしてから、細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。  
 一二六八 製材所のまるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。  
 一三三九 また、地球もまるい形をしたもので、  
 一三三三 まるく輪になったその中で、さるがさまざまな藝をする。  
 一三三六 ふわふわとまるくなって、風がふいてくると、ころころとがりだす。  
 一三三九 メアリとスーザンとエミリとが、かわい  
 い口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわらう。  
 一三三三 絵は、はがきの上の方に、まるく原色で  
 すってあります。  
 一五八二 園の前の方に、高い大理石のまるい柱で  
 できた大廣間のようなものがあらわれます。  
 まるた「丸太」(名) 2 まるた  
 一四四七 一本の大きなまるたに、なんんかの婦人  
 がつかまって、立ちおよぎをしていました。  
 一四四八 寒さに氣を失って、まるたから手をはな

さないように、こうして元氣をつけていたのです。  
 まるたま「丸玉」(名) 1 まるたま  
 一二一〇 手首やむねなどには、まがたま、まるた  
 まなどがかざってあります。  
 まるで「副」12 まるで  
 四四七 まるでゆめのようだ。  
 五二四 はじめは、電車の中は、まるでにらめっ  
 こをしているようだったのに、  
 六四九 「ナ」といいながら、耳できいてみると、  
 まるで「ダ」といつているようだ。  
 七三三 私とさぶろうとは、まるで、一つからだに  
 なってしまふかと、思われるほどでした。  
 八七七 まるで、一日の幸福を予言してくれるよう  
 です。  
 九六五 なにがなんだか、まるではちの巣をつい  
 たようで、わけがわからなくなりました。  
 九八五 この中で、いちばんばかで、めちゃく  
 ちゃで、まるでなつてないのがえらいとね。  
 九七〇 これほどのひどい裁判を、まるで一分半  
 でかたづけてくださいました。  
 九八二 まるで、空中かっそうをしているようだ。  
 一二四四 まるでたましいがはいっているように  
 動くよ。  
 一三四七 まるで、息をこらしてしずかにしている、  
 子どもたちのむねのように。  
 一四四二 まるで、〈略〉、客間で歌っているのと、  
 ちつともちがわないうような歌いかたです。  
 まるまる「丸丸」(副) 1 まるまる  
 一三三三 まだわかい、美しいおかあさんが、まる  
 まるとふとったかわいいうあちゃんをだいていて、  
 まるまる「丸」(五) 1 まるまる 《ーッ》  
 一四〇一 新しい葉は、まるまってでてきます。

まるみ「丸」(名) 1 まるみ  
 一二一六 力のこもった角、まるみのある面、重み  
 のかかった枝のつけね、ふわふわした軽い葉、  
 まるまる「丸」(下) 3 まるまる 《ーメ》  
 九四七 くもはからだを小さくまるめて、ころっと  
 横になりました。  
 一二五五 あなの面わきを切りこんで、手さきをま  
 るめ、指の線をほる。  
 一二七六 それは、赤いおぼんの上に、雪をまるめ  
 てこしらえたうさぎでした。  
 まるやき「丸焼」(名) 1 まるやき  
 一四九七 やいた鳥が——それこそほんとうのまる  
 やきの鳥が、ほかほかとあたたかいいきをたてて、  
 まるやま「丸山」(人名) 1 まるやま  
 一五二四 「心に花をかざれ。」——丸山——  
 まれ「稀」(形状) 1 まれ  
 一三八 眞珠は、海のそこからまれにひろいあけら  
 れる、ふしぎな宝石とされてきたが、  
 まるげ じゆきまろげ  
 まわし じさるまわし・ねじまわし・ひきまわし  
 まわしなさる「回」(五) 1 まわしなさる 《ー  
 イ》  
 一五九三 ダイヤモンドをまわしなさい。  
 まわす「回」(五) 7 まわす 《ーシース》 じか  
 きまわす・こづきまわす・はりまわす・ひきまわ  
 す・ふりまわす・みまわす  
 五六九 水車をくるくるまわし、たんぽに水をいれ、  
 はたけにも水をまいていく。  
 六二六 りゅうずをまわすと、〈略〉、たちまち、ゆ  
 かいそうにカチカチと音をたてはじめた。  
 一八三 そのなにかまわりをして、なわをまわして  
 やったこともありまし。

十三3812 その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるくるまわしながら、楽しそうなようす。

十四1110㊦ 調子をととのえるには、どうをあらわこちらにまわすのです。

十五838㊦ だからまだ、ダイヤモンドを、まわしてはいけないよ。

十五944 「光」のいうように、ダイヤモンドをまわします。

まわり ㊦ (名) 42 まわり ぐるぐるまわり・ななまわりはんする・ひとまわり・ひとまわりする・ひまわり

三346㊦ みんなが その まわりに あつまって、しゃせいをしていました。

三794 だれひとり、上をみたり まわりをみたりする ひまもありませんでした。

三1039 まいにち まいばん あつまって きて、おじいさんの家のまわりをとりまきました。

三1119 おじいさんの 家の まわりは、弓矢をもった人たちで、いくえにもとりかこまれ、

四87 まわりには、さくらの 木が たくさんうえてあります。

四609 しかたがないので、二十九わの がんは、テーブルのまわりにあつまりました。

四912 ゆうびんなげいれ口の まわりを さっさとはく。

五355 まわりのかべに、石炭がでています。

五569㊦ そのまわりに、うすい、大きな、麦わらぼうしのつばみたいなものもみえる。

五889 子どもたちが、みんな、りょうかんさんのまわりにあつまりました。

六56 まわりのかべやガラス戸だなには、いろいろな時計がたくさんならんでいる。

六209 テーブルのまわりにあつまって、まるくならします。

六407 かかしのまわりに、〈略〉、きれいな、楽しかった思い出が、うかんではいく。

七3611 なんだか、まわりがすこしゆるやかになり、からだがらくになったような気がしました。

八606 田や野原のまわりには、大きな森があり、森の中には深いみずうみがあった。

八744 かいうどは、ぬまのまわりにまちぶせをしていた。

九433㊦ ぼくたちのかりてゐるやしきのまわりにも、大きなかきの木が三本あります。

九491 まわりの山は、みんな、たったいまできたばかりのように、きれいにありあがつて、

九551 まわりは、りっぱなオリブ色のかやの木の森でかこまれていました。

十275 自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。

十409 まわりの者から、どんなにあざけられ、からかわれても、

十一496 やぎ小屋のまわりには、おかあさんのおすきなライラックを植えましよう。

十二267 なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがつて、そのまわりをぐるぐると歩きます。

十二593 鳥取の西方約四キロのところに、まわり十二キロの湖がある。

十二882 ことばは、そのときのまわりのようすや、〈略〉によって、いろいろにその意味がかわる。

十二957 赤とんぼが自分のまわりをとんでいた。

十三138 火星や金星・木星などのような星は、太陽のまわりを、大きく輪をえがいて、まわっていることがわかり、

十三1310 同じように、太陽のまわりをまわっている星の一つだ、ということもわかりました。

十三154 だえん形のきまった輪をえがいて、一年に一回、太陽のまわりをまわります。

十四642 そのしずくのしんになるものがあつて、そのまわりに、蒸気がこってくつづくので、

十四652 まわりの空気にくらべてずっとかるいために、どんどんとさかんにたちのぼります。

十四656 もちろん、これは、まわりの空気の温度によつてもちがいますが、

十四682 そういう地方のまわりに、わりあいにつめたい空気におおわれた地方があると、

十四7010 湯の表面の茶わんのまわりから、熱がにげるためだと思つていいのです。

十四7012 ひやされるのは、おもに、まわりの茶わんにふれた部分だけになります。

十四7112 そのまわりの、わりあいに熱い表面の水が、そのあとへ向かつて流れ、

十四932 雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわりを、花かんむりのようにくまどつた。

十五3111 まわりには、鳥の白い羽が雪のようにとびちりました。

十五3212 氣がつくと、もう自分のまわりには、おおぜいのひつじかが集まつて来ており、

十五823 テーブルのまわりには、

十五9612 みどりの園のおくからかへだして来て、子どもたちのまわりで、わになつておどります。

十五10012㊦ ぼくたちは、いつだって、あなたのまわりにいるのですよ。

まわりはじめる ㊦ (開始) (下) 1 まわりはじめる 《一メル》

十一159 小鳥が、はばたいででて、くるくる、く



るくる、ぼくたちの頭の上を、まわりはじめる。

まわる「回」(五) 21 まわる 《一ツ・一リール》

↓ あばれまわる・あるきまわる・うごきまわる・おどりまわる・おまわる・およぎまわる・かけまわる・ころげまわる・さがしまわる・とびまわる・はいまわる・はねまわる・ふきまわる・みまわる・

— 509 しゃしようさんがまわって きて いいま

した。

388 I はげしくまわる。

388 8 こまのようにまわる。

388 9 まわってうなる。

422 I 国 あちこちまわっているうちに、ぴよ

いと中にはいりました。

520 2 私もその人の手ににぎられながら、あちら

こちらへまわりました。

632 3 目だまの「の」の字がくるくるまわる。

634 8 かかしの目だま、ぐるぐるまわりながら、

大きくなったり、小さくなったりする。

628 5 こちらからまわっていくと、みんなはあち

らへこっそりわたりました。

846 あひるの子は、水の上を車のようにくるく

るまわり、その首をはくちようの方へさしのべ、

984 2 先生がまわっておいでになりました。

242 エレベーターをあやつる大きな車輪が、ま

わっている。

1127 5 お正月がくると、例年のことで、だいか

ぐらがまわってきました。

1312 10 地面は平らなもので、日や月が、東から

西へまわっているように思われます。

1313 9 《略》のような星は、太陽のまわりを、

大きく輪をえがいて、まわっていることがわかり、

1313 10 同じように、太陽のまわりをまわっている

る星の一つだ、ということもわかりました。

1315 4 だえん形のきまつた輪をえがいて、一年

に一回、太陽のまわりをまわります。

1316 6 国 「やはり地球はまわる。」

1354 9 おじさんは、《略》、絵がすきで、それに

わかいころ、世界をまわって来た人です。

1466 8 すぐ上から大きなうずができて、それが、

かなり早くまわりながら、のぼっていきます。

1591 6 国 すこしの休みもなく、飲む、たべる、

ねむる、いやはや目がまわるようだ。

まん「満」(名) 2 まん 満

147 5 きのお、三つになる——まんという二年

三ヶ月になる妹をつれて、さんぽにできました。

1224 5 めいの民ちゃんは、二つ、満でいえば一

年三ヶ月で、まだ歩けません。

まんいん「満員」(名) 2 満員

1151 10 電車は、くるにはくるが、みな満員の札

をさげて、とまらずに走っていつてしまふ。

1152 11 国 「あんまり乗らないでください、満員

ですから。」

まんが「漫画」(名) 3 まんが

631 2 これは、まんがのシナリオです。

668 7 まんがもいれました。

668 8 一組の人がみんなで考えてこしらえたまん

がです。

まんしちさい「満七歳」(名) 1 満七さい

1231 5 それは一八八七年の三月三日、私が満七

さいになる三ヶ月まえのことでありました。

まんしゅう「満州」(地名) 5 マンシウ

1339 1 国 マンシウの眞ちゃんが、帰って来た

んですか……

1340 4 国 きょう、マンシウから来た竹田さん、

おいででしょうか。

1342 2 国 それきみにくれたの……マンシウの

子どもが。

1342 7 国 いっしょに、そのマンシウの子ども

に、お礼の手紙を書こうね……

1344 9 そのあとはマンシウから帰って来た眞

二くん、おしまいにおかあさん。

まんじゅうや「饅頭屋」(名) 1 まんじゅう屋

1331 12 まんじゅう屋がそらだ。

まんじゅしゃげ「曼珠沙華」(名) 3 まんじゅしゃ

げ

1137 9 国 あげに火とさくまんじゅしゃげ

159 5 国 まんじゅしゃげおりすてである道のま

んじゅしゃげさき続く

159 5 国 まんじゅしゃげおりすてである道のま

んじゅしゃげさき続く

まんぞく「満足」(名) 2 満足

1235 12 ただ、腹だちの原因がとりのぞかれたと

いう満足を覚えたばかりでした。

1289 2 そうでないし、相手の人に満足を與える

ことができないし、また自分の誠意も通じない。

まんぞく「満足」(形状) 4 まんぞく 満足 じこ

まんぞく

571 10 国 「お金持のおくさん、これであなたもま

んぞくでしょう。」

618 10 さもまんぞくそうにしき台をおりてきて、

あせをふきます。

838 10 国 「まだ満足ではないのですか。」

1547 3 まんぞくそうに赤絵のはちをながめなが

ら、その話のさきをうながした。

まんぞくしきる「満足」(五) 1 満足しきる

《一ツ》

十四129㊦ その友だちの母親は、このランプに満足しきっているそうです。

まんぞくする 「満足」(サ変) 4 まんぞくする

満足する 《シー・セ》

六1211 「略。」と、心からまんぞくした。

十五11 この返事に、少年も満足したらしく、

十373 かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械を作ることにりかかった。

十四9310 ただひと目でも、火の光とごちそうとを見るだけでも、満足したであろう。

まんぞくなさる 「満足」(五) 2 満足なさる 《イー・ル》

八392㊦ 「どうすれば満足なさるのですか。」

八4210㊦ 「王さま、満足なさいましたか。」

マント(名) 2 マント まんと

二205 あめかさまんとごむづつくつした

十五1042㊦ 『冬の日の幸福』は、ここえた手のために、きれいなむらさき色のマントを開きます。

まんなか 「真中」(名) 27 まん

二272㊦ 二ひきのやぎが、そのはしのまん中であいました。

三395 ぼくがまん中で、右のかたにはいちろうくん、左のかたにはみよこさん。

三638 まん中には、おとうさんが こしかけて、

ボートをおこぎになりました。

四471㊦ まん中がいいな。

四942 雪がかおにかかるのも わすれて、高い高い空のまん中を みあげる。

四1085 まん中にきれいなこしかけが二つ おいてあります。

五548 空のまん中に、大きな星が光っていました。

五568㊦ まん中にまるいきれいなたまがみえる。

五833 おひる休みのとき、私たちは、運動場にあつまって、先生をまん中にしてなびました。

五915 みると、ざしきのまん中のたたみをやぶって、のびているたけのこがありました。

五921㊦ ゆかいたをはがして、たたみのまん中にあなをあけてやったら、それ、このとおり、

六186 まん中に、しきしきがタクトをいっしんにふっています。

六4211 かかしが列のまん中はいっている。

六11811 紙のうらには、まん中に、ま四角に切ったときにつけたすじがたてについています。

六1192 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。

八1005 1本のなえのまん中からでた新しい葉が、5cmぐらいになりました。

九554 その草地のまん中に、

十501 家からでてしばらくいくと、道のまん中に、黒いぬが一びきすわっていました。

十694 一つのまるいつぼをみつけ、へやのまん中にかかえてきました。

十一6011 すると、橋はまん中からおれて、三人は、川の中へドブンと落ちこんだ。

十二523 いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切って、まん中にあなをあける。

十三431 また、手紙を読みながら、舞台のまん中に出て来る。

十四481 こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。

十四713 茶わんのまん中の方では、ぎやくに上の方へのぼって、

十四781 はじめにまん中になたをいれても、きつと、とちゅうから横の方へそれてしまつて、

十五578㊦ そこで、大きなつくえのまん中に、チョークで線をひき、

十五645 私は、道のまん中で、無言でつつ立ったまま動かなくなつた。

まんべえさん 「人名」 1 まんべえさん

十一285 金次郎は親類のまんべえさんのところに、あずけられることになりました。

まんまと (副) 1 まんまと

十3512 これも、まんまと失敗であつた。

まんまる 「真丸」(形状) 2 まんまる

七911 うさぎのふんはまんまるです。

九601 黄色なじんばおりのような物を着て、みどり色の目をまんまるにして立っていました。

まんまるい 「真丸」(形) 3 まんまるい 《イー・ク》

二152 まんまるい お月さまがのぼりました。

四1341㊦ 白いころもの そろいで まえば、月は十五夜、まんまるい。

十601 まんまるくてきれいだ。

まんめん 「満面」(名) 2 満面

十五755 — ああ、忘れもしない、満面べにをさして語られたホランド博士のあの熱情のことば。

十五766 博士は満面ににこやかなわらいをたたえながら、

## み

み 1 あおみがかる・あつみ・ありがたみ・いたみ・

おもしろみ・おもみ・かなしみ・きみがかる・くる

しみ・しげみ・したしみ・たのしみ・にくしみ・ふ

かみ・まるみ

み〔御〕 ↓おみこし

み〔見〕 ↓おつきみ・わきみ

み〔身〕(名) 17 身 ↓かたみ・なかみ・むきみ・むきみや

五492 あさの光に、身をきよめるのはうれしい。

八914 いまは、その身をとりまくりつばなものの中に、しみじみと幸福をさとしたのである。

十275 自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。

十一302 いろいろのことを身につけて、やがて、村をすくい、

十一695 少年は、身をおこして父親の方をみました。

十一7911 少年は、いすにぐったりと身を落して、すすりなきしました。

十二718 芭蕉はからだがよくいので、寒さは身にこたえましたが、雪をみるのが楽しみでした。

十二1156 ことばを生かすということは、身に行うということですよ。

十四9211 かわいそうに、その子は、おながやすいて、こごえて、身をひきずって歩いてた。

十四944 女の子は、二つの家の間に、ちよつとした、身をかくす場所を見つけた。

十五151〔文〕 おどろきてわが身も光るばかりなり

大きなるばらの花照りかえる

十五248 ひつじかいは、身のあぶないこともわすれて、思わず鳥のせにとびついたのでした。

十五2810 鳥がそのあき地へ身をおろすかおろさないうちに、鳥のせ骨をさけて一つつきつき通し、

十五302 ひらりと身をかわした少年は、

十五303 身をかわすと同時に、右手の短刀で鳥の

つばさに一たちあびせました。

十五3010 少年が女の子の後にかばうようにして、すこしあらずさつて、岩角へ身をよせかけたとき、

十五6011 ことに、長男に生まれて父母の愛を一身に集めていた身にとっては、

み〔実〕(名) 34 み 実

三417 たんぽぽの みが、小人になつてとんでいました。

五633 けれども、花がついたり、みがなつたりしたの、おかあさんのせいではありませんよ。

六1210 そこには、くるみの実が、ころころと落ちていました。

七1710 花がちつて、実がつきはじめてからでしよう。

七181 先生、この実はなににするんですか。

七183 そんなに実をとっちゃいけない。

七606 よく落ちるかきの実。

八1044 これが、きつと実になるのでしょうか。

九3610 まっかな、かわいらしい山いちこの実が、こぼれたように雑草の中にありました。

九446 まっかにじゅくした実がすずなりになつているのを見ると、

九496 すきとおった風がザアツとふくと、くりの木はパラパラと実を落しました。

九504 くりの木は、だまってまた実をパラパラと落しました。

十91 あのとげとげしたいがわれて、じゅくしたくりの実の落ちるころでしたから。

十2710 そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たんねんにみようと思います。

十一291 あくる年の春、黄色い花がさいて、たくさんの実がつきました。

十二710〔文〕 「七重八重花はさけどもやまぶきの

みのひとつたになきぞ悲しき」

十二138 あとにいくつかの実がなつていた。

十二196 あなただつてその実をそんなに美しくなさるには、ご苦心がおりだつたでしようね。

十二1912 はじめて実をつけた二三年は、青い小さな実が、ほんの二つ三つ、

十二1912 青い小さな実が、ほんの二つ三つ、ついたりつかなくつたのだのに、

十二202 このごろでは、いつも美しい実をならせることができるようになりました。

十二205 この実のかげは黄色くほけていてるでしよう。

十二215 美しいりつばな実をたくさんつけるようになりたいたいものです。

十二648 花は美しく、実ほうまい。

十二768 なんてんの実が、赤く、うさぎの目らしくいれてありました。

十四525 私の花がさかなかつたら、実はずきません。

十四527 根や、つるや、葉のなかばちやはありませんが、それだけでは実はずきません。

十四529 花、とりわけ、め花がさいて、はじめで、かばちやの実がつくのです。

十四536 どうしてそのめしべの根もとがふくれて、そんな大きな実になつたかということは、

十四565 私が運んであげなかつたら、りつばなかばちやの実にはなりません。

十四569 葉でも、花でも、なりかけている実でも、みんなかれて、くさってしまします。

十四5811 いまのお話の養分だつて、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。

十四5912 函 かふんをなかだちしてあげなかったら、  
 実は一つもつかなかったのですよ。

十五62 函 だいたいは実をたれ時計はカチカチと

み 5 ミ み

四796 み——右と左とちがえぬように。

六1094 「紙」の「ミ」、「かむ」の「ム」がいいに  
 くらいしい。

六1095 函 「ミ」、「ム」と自分で声をだしていっ  
 てみると、

六1099 函 「ミ」、「ム」といってみた。

六1122 このほかに、弟は「ミ」、「ム」がいえな  
 かった。

みあ・ぐ 「見上」(下二) 1 みあぐ 《「ゲル」》

九1152 文 函 いまの鳥はこの木にいるにちがいなし  
 ひそかに枝葉の中をみあぐる

みあ・げる 「見上」(下二) 20 みあげる 見あげる

《「ゲル」》

三251 あちらの村でもこちらの村でも、こう  
 いて、この大きな木をみあげました。

三6710 「略」と、おとうさんがおっしゃった  
 ので、みんなは空をみあげました。

四931 ぼくはまどからかおをだして空のほ  
 うをみあげて、降ってくる雪をながめる。

四942 雪が かおにかかるのも わすれて、高い  
 高い空のまん中をみあげる。

四1316 天人は、かなしそうなかおをして、空を  
 みあげます。

六3210 からすの子が、びっくりしてすからとびだ  
 し、空をみあげる。

六516 三人は遊ぶのをやめて、空をみあげました。

六541 ふみおは、こういって、空をみあげました。

六888 ほおりのみことは、木をみあげて、

六8911 女の人は木をみあげながら、おじぎをする。

六1335 しかさんは、のっそりと立って、山の方を  
 みあげました。

七375 人ごみのうすぐらい中で、さぶろうは、元  
 氣よくにこつと、私をみあげました。

九496 いちろうはくりの木をみあげて、「略」  
 ときました。

九1293 くもは、その子もり歌を耳にしながら、光  
 る星をみあげていました。

九1369 「なんだって、お月さん——」くもは、首  
 をねじって上の方をみあげました。

十1010 みあげるように高いプラタナスの枝からは、  
 黄色い葉が、毎日のように落ちました。

十二319 午後の日光は、「略」のしげみをもれて、  
 みあげる私の顔に降りそいでいました。

十四379 もし、くしゃくしゃするようなことが  
 あつたら、どうか天上の星を見あげてください。

十五691 指さされるままに、顔をあげてへき面を  
 見あげると、おじさんの大きな写真があった。

十五6912 その写真の主が、こうしておじさんを見  
 あげているのに、おじさんの声は聞えないのだ。

みあしよあし 「三足四足」(名) 1 三足四足  
 十二294 民ちゃん三足四足と歩けるようになり  
 ました。

みあた・る 「見当」(五) 3 みあたる 《「リ」》

七808 函 おどろいて、方々をさがして歩きました  
 が、みあたりません。

八2710 けれども、みあたりませんでした。

八471 けらいたちは、足をぼうにしてさがしまわ  
 りましたが、やはりみあたりませんでした。

みあわ・せる 「見合」(下二) 2 みあわせる 《「  
 セ」》

六85 子どもたちは思わずかおをみあわせた。

七7810 ふたりは、また顔をみあわせていたが、

みいだ・す 「見出」(五) 1 見いだす 《「シ」》

十四862 野原の中で、一本の草花を見いだして、  
 それをたんねんに写生するのも、

みいだ・せる 「見出」(下二) 1 見いだせる 《「  
 セ」》

十四912 かたほうはどこへいったか、つい見いだ  
 せなかった。

みい・る 「見入」(五) 1 見入る 《「リ」》

十五701 じっとおじさんの写真に見入りながら、  
 私は無言で頭をびよこんとさげた。

みう・き 「身動」(名) 4 身動き

八861 つかれはてて、こおりの中にとじこめられ  
 たまま、身動きもせずたおれてしまった。

九195 食にうえ、つめたい雨にずぶぬれになって、  
 身動きもできなくなりましたのです。

十一714 病人は、身動きもしないで、苦しそうに  
 息を続けていました。

十二372 私は、身動きもせず、立ったままで、全  
 身の注意を先生の指の動きにそいでいました。

みえがくれ 「見隠」(名) 1 みえがくれ

八584 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺  
 の屋根や停車場が目についた。

みえないから 「課名」 2 みえない力

十二33 七 みえない力……六十四  
 十二641 七 みえない力

みえはじ・める 「見始」(下二) 1 見えはじめる

《「メ」》

十四891 地上に、ぼちっと黒い土が見えはじめた  
 ときの喜びは、たとえようがない。

み・える 「見」(下二) 139 みえる 見える 《「エ・

— エル —

二109 ㊦ 「目に みえる のものと、みえないもの

とに、わけたらしいとおもいます。」

二109 ㊦ みえないものにと、

二194 ㊦ 「ねむっていても、みえるものはな

あに。」

三516 ㊦ かつちん かつちん 日がくれて、火花

が みえる のみの さき。

三763 ㊦ みんなで さがしまわりましたが、ゆかの

上には もう みえませんでした。

三816 ㊦ 「赤い 色、みえた。」

三819 ㊦ 「みどり色、みえた。」

三822 ㊦ 「青い 色、みえた。」

三826 ㊦ 「わたしの もも色、みえないわ。」

三835 ㊦ 「あなたたち、にじが みえて。」

三837 ㊦ 「みえたよ。」

三848 ㊦ みんなが みますと、その あまだれの 中

に、小さな にじが みえました。

三10710 ㊦ すると、かぐやひめの すがたが きゆうに

みえなくなりました。

三1095 ㊦ かぐやひめの ようすは いっそう かなし

そうに みえました。

四175 ㊦ わたしが 手ぬぐいをもって、おふろへ

いくのが みえるの。

四535 ㊦ 「みずうみが みえた。」

四589 ㊦ けれども、もう 一わが みえません。

四657 ㊦ がんの 列は、その きれいな 雲の中に、

みえなくなっていました。

四794 ㊦ め——目に みえる もの、みえない もの。

四795 ㊦ 目に みえる もの、みえない もの。

四10610 ㊦ むこうに 光った やねが みえるでしよ

四1071 ㊦ ああ、みえる、みえる。

四1071 ㊦ ああ、みえる、みえる。

四1204 ㊦ みんなの かおが みえます。

五910 ㊦ 「おばあちゃん、海が みえるよ。」

五101 ㊦ きれいな海だこと、お船も みえますね。

五3610 ㊦ みなれない木や、草や、動物が みえますね。

五396 ㊦ ふもとになるにしたがって、木のみどり

がこくなって みえます。

五397 ㊦ 茶色の木のもみえます。

五568 ㊦ みえる、みえる。

五568 ㊦ みえる、みえる。

五568 ㊦ まん中にまるいきれいなたまが みえる。

五5610 ㊦ そのまわりに、うすい、大きな、麦わら

ぼうしのつばみいたいものもみえる。

五604 ㊦ 「あの三つの花が、そろってしんこきゅ

うしているようにみえますね。」

五812 ㊦ ガラスもきれいになって、そとのけしきが

よくみえました。

五868 ㊦ 「おまつさんか、あなたが みえなかった

から、なぜでもひいたかと思って。」

六342 ㊦ 山のかげにかくれて、ここからはみえな

いよ。

六369 ㊦ 点になって、おしまいはみえなく

なってしまう。

六379 ㊦ ずっと下にみえる夕やけの大通りを、

六515 ㊦ そのうちに、あたりがきゆうにくらくくなっ

て、かげがみえなくなりました。

六529 ㊦ 月をみつめていると、月は動かないで、雲

が大きいそぎでとんでいくようにもみえます。

六1001 ㊦ すると、向こうのけしきが、小さく、さか

さまにみえた。

六1002 ㊦ そのさかさまにみえるけしきを、大きくし

てみようと思つて、

六1007 ㊦ 屋根が、めがねのたまいつぱいにひろがつ

て、ついそこにあるようにみえるではないか。

六1023 ㊦ うまくみえるかしら。

六1025 ㊦ 長い物がぼんやりみえる。

六10310 ㊦ まあ、よくみえるね。

六1041 ㊦ さかさまでも、よくみえるでしょう。

六1042 ㊦ 向こうの家のせんたく物もみえますよ。

七810 ㊦ 白いカーテンが黄色くみえる。

七101 ㊦ さくらの花が、白くうかんでみえる。

七564 ㊦ 海がみえます。

七611 ㊦ さきだけみえることし竹が、ざわざわと、

動いている。

七755 ㊦ 砂のほかに、なにもみえない。

七756 ㊦ 木一本もみえない。

七831 ㊦ それなのに人の足あとがみえません。

八214 ㊦ 目もよくはみえないらしいので、ねこや、

すずめにみつけれたらたいへんです。

八334 ㊦ あのように、ぼうつとした銀の川のような

光をはなっているようにみえるのです。

八335 ㊦ この星は、一つ一つがはっきりとみえない

のですから、

八521 ㊦ 「幸福」がきたとは知らなかったとみえて、

八544 ㊦ なさけのある人とみえて、台所の方からお

むすびを一つにぎってきて、

八567 ㊦ そこで、向こうにみえるまつの木を目あて

にして歩きました。

八595 ㊦ あの山にのぼったら、もっと大きなけしき

がみえるだろう。

八597 ㊦ 飛行機の上からは、もっともっと大きなけ

しきがみえるだろうと思つた。

八5910 ㊦ 高いところのぼるほど、大きな世界が

みえる。

八410 そうして、はくちようたちがみえなくなる

と、すぐ水のどんぞこまでもぐっていった。

九162 口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえるの  
さえあります。

九165 大ぜいのつばめが、ならんでいるのをみる

と、なにかしら相談でもしているようにみえます。

九262 圃 かあさんがぼんやりみえるかやの中

九328 家のまえをちよつとでると、はるか下の  
方に美しい湖がみえます。

九331 さらさまに湖の中にうつて、がくにい  
れた油絵のように美しくかがやいてみえます。

九4011 男か女かわからないが、下を向いて登っ  
てくるのがみえます。

九412 思わぬところに炭やき小屋があつて、ゆ  
るいけむりのあがるのがみえました。

九466 もう、遠くの山々のいただきに、白い雪  
のぼうしがみえます。

九547 かやの枝は、まつ黒にかさなりあつて、青  
空は一きれもみえず、

九561 みえない方の目は、白くびくびくうごき、  
足もひどく曲がつてやぎのようですし、

九7411 やまねこの黄色のじんばおりも、ぎよしや  
も、きのこの馬車も、一どにみえなくなつて、

九7710 平らな畑やたんぼの向こうに、一だん高く  
なつたところがみえます。

九782 そう、あの向こうの小高いところに、白  
い物がちらちらとみえるでしょう。

九794 この土の上に白くみえているのは、むか  
し海の中にいたいろいろな貝のからです。

九857 つるつるみがかれていないから、ただの  
わり石のようにみえる物もあります。

九1075 なるほどりつばなスキー場で、ジャンプ台  
もみえる。

九1367 「くもさん、あんないいお月さん、みえ  
ないの。」

十105 岸にある丘の上には、センチエンヌとい  
うお寺の高いとうもみえました。

十209 白つぽくみえる太陽の光線ですが、わけ  
てみると、こんなにさまざまな色になります。

十238 窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。

十695 なにかはいっているのとみえて、重たい。

十708 なみたいていのどくではないから、か  
えて、うまそうにみえるのだよ。

十一45 大きな汽船がけむりをはいて、長いかけ  
をひいて通っていくのがみえるし、

十一47 川上の方をながめると、近くの町の工場  
のえんとつが、なん本も立っているのがみえる。

十一49 長いいかだを組んで、材木を遠くの山か  
ら運んでくるのもみえる。

十一681 中には、死人のようにみえる者もあれば、  
十一772 その日は、病人の目つきが、いくらかわ  
かりかけでもしたようにみえました。

十一774 感謝するような色が、そのひとみに、  
ちよつとのあいだうかぶようにみえました。

十一778 目を開いたときに、その小さな看護人を  
さがすようにみえました。

十一788 しみじみとしたそのちょうしに、じつと  
耳をかたむけているようにみえたからです。

十一803 病人が、しだいに、すこしずつものがわ  
かりかけるようにみえたことです。

十一8711 少年がベッドのそばのものと場所に帰る  
と、病人はほつとしたようにみえました。

十二169 パレットの上でみたときは、ずいぶん美  
しくみえるが、

十二437 おどりだしそうにみえるね。

十二5311 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔  
や頭がみえないようにする。

十二646 葉は青く、くきは長く、みきは高くそび  
えているが、根はちつともみえない。

十二649 しかし根はちつともみえない。

十二667 根はみえない。

十二668 みえないが深くて長い。

十二934 書くことは、話すこととちがつて、その  
場のようすが相手にみえないから、

十二1057 向こうがわに店がみえます。

十三71 春のきざしは、よもにあらわれて、目に  
見えぬかすみのようにたなびいている、

十三4510 顔の表情がよく見えるようにすることも、  
たいせつなことです。

十四174 私には、おかあさんのおすがたが、目  
に見えるような気がします。

十四417 山もはつきり見えてきた。

十四635 すかして見ると、しずくのつぶの大きい  
のが、ちらちらと目に見えます。

十四638 これは、白いうす雲が月にかかったとき  
に見えるのと、にたようなものです。

十四645 ふつうけんび鏡でも見えないほどの、た  
いへんこまかいちりのようなものです。

十四6410 横からすかして見ると、ちようど、けむ  
りが廣がつているように見えるそうです。

十四664 それがだんだんに廣がり、入りみだれて、  
しまいに見えなくなつてしまします。

十四705 これは、夜、電燈の光をあてて見ると、  
もつとよく、あざやかに見えます。

十四729 そのために、さきにいっただようなもよう

が見えるのです。

十四72 12 かべや屋根をすかして見ると、ちらちらしたものが見えることがあります。

十四73 9 それが、ちょうどさけめのようにたて横にやぶれて、そこだけがとう明に見えます。

十四97 1 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴか光るさらなべたテールブルが見えた。

十四100 5 おばあさんが見えなくなつては困ると思つたので、

十四101 3 おばあさんが、こんなに〈略〉で、美しく、そうして、しんせつに見えたことは、

十五23 5 ふと氣がついてみると、いままで先生のそばにいた女の子のすがたが見えません。

十五27 12 人々の目には、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなつてしまいました。

十五56 9 9 きょうは、はるばるたずねてみえたあなたへのごちそうに、

十五69 3 きずのあるみけんの下にかがやく目は、思いなしかやわらいで見え、

十五70 12 手紙でもなんでも赤インキで書かなくては見えないようにおなりになったのですよ。

十五83 4 あれがこの世の中でいちばんふとつただれの目にも見える『幸福』もだよ。

十五88 3 9 『なんにもわからないという幸福』は、こうもりのように目が見えない。

十五98 5 地の上でも、天の上でも、いちばん美しいものに見えるものだからね。

十五102 3 9 あなたには、なんにも見えないし、なんにも聞えないんだなあ。

十五108 2 9 つま先で立つて、やっと見えるくらいのところにいる人、だれなの。

十五110 9 9 うちにいと、それが見えないが、こ

こでは、なにもかも見えるのですからね。

十五110 10 9 なにもかも見えるのですからね。

十五112 5 9 けれど、人間には見えないのさ。

十五112 6 9 人間というものは、目を閉じていると、なんにも見えないのだからね。

十五117 9 9 私たちは、それは幸福ですけど、自分たち以上のものは、見えないのです。

十五118 1 9 それは幸福なんですけれど、やはり、私たちの影以上のものは見えないのです。

みおくる 『見送』 (五) 6 みおくる み送る 『ツ・リー』

四101 10 うらしまは、かめのうしろすがたをみおくりします。

四118 6 みんな、手をふつてみおくりします。

五93 4 りょうかんさんは、帰っていく子どもたちをみおくりしてから、

七40 3 乗客は、高いところを渡っていくさぶろうを、おもしろそうに、みおくりしていました。

九140 5 くもは、とんでいくちようちよをみ送りながら、『略』と、ひとりごとをいいました。

十一71 12 去年、みおくりについて、最後に船の上でわかれを告げたことや、

みおぼえ 『見覧』 (名) 2 みおぼえ 見おぼえ 一56 9 まどのところに、みおぼえのある かおが、たくさんならんでいました。

十五54 6 9 そのあい色のふうとうには見おぼえがある。

みおろす 『見下』 (五) 1 見おろす 『一シ』

十四98 6 いく百もの小さな人形が見おろして、マッチ賣りのむすめを見てわらいかけた。

みがき 『磨』 (名) 2 みがき

十二69 3 しかし、いつも勉強してみがきをかけて

いないと、じき、役にたたなくなる。

十五63 10 かた手に大きなブラシをつかんで、力のかぎりみがきをかけた。

みがきあげ 『磨上』 (下一) 1 みがきあげる 『一ゲ』

七59 1 まだ、みがきあげられたことばということではできません。

みがく 『磨』 (四五) 6 みがく 『一イ・カ』

四8 9 よくみがいたまいるいかがみを、この町にはめこんだようです。

四69 4 『みがかぬかがみ。』

九85 6 9 つるつるみがかれていないから、ただのわり石のようにみえる物もあります。

十二93 10 心を練るほど、ことばがみがかれてくる。

十四82 1 9 たまみがかざれば光なし。

十五69 7 つくえの上に、くつをみがかせた満ぼう時代の私の写真がかざられてあるではないか。

みかける 『見掛』 (下一) 4 みかける 『一ケ・ケル』

四59 10 9 「りすさん、がんのなかまを みかけなかつたかい。」

五43 2 9 きのう、はじめてはたるをみかけました。

九15 3 つばめが電線や物ほしざおに五六ばぐらいならんでとまっているのを、よくみかけます。

十14 4 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。

みかた 『見方』 (名) 1 見かた

十四68 11 しかしまた、見かたによつては、茶わんの湯と、こうしたら雨のぼあいとは、よほどよくにたものと思つてさしつかえありません。

みかた 『味方』 (名) 2 みかた

七51 10 みかたのおうえんだんが、『略』と、大

声をたてる。  
十五78 6 けれども、きみたちは、ほどなく、みか  
たができるだろう。

みかづきさま 「三日月様」(名) 1 三日月さま  
六43 9 40 青黒い夜空に大きな三日月さま。

みかづきさん 「三日月」(名) 1 三日月さん

七64 4 ふえの音、虫の声、三日月さん。

みがって 「身勝手」(形状) 1 身がって

十四60 4 しかし、ぼくは、そんなよくのふかい、  
身がってなことはいけませんよ。

みかど 「御門」(名) 9 みかど

三106 2 かぐやひめの ひょうばんが、だんだん高  
くなったのを、みかどがおききになって、

三107 1 みかどは、おじいさんと、ごそうだんに  
なって、

三108 1 みかどは、びっくりなさって、

三108 4 みかどは、「略」とお思いになって、

そのままおかえりになりました。

三108 8 そののち、みかどからたびたび お手紙  
をくださいましたので、

三111 4 みかどがこのことをおききになって、  
たいへんかわいそうにお思いになりました。

三115 3 みかどへ「おわかれの手紙とふしのくす  
りをのこしました。」

三116 1 みかどは、「略」、かぐやひめをおわすれ  
になることができませんでした。

三117 2 みかどは、「略」とおいつけになり  
ました。

みがまえ 「身構」(名) 1 身がまえ

九130 2 くもは、足をふんばって身がまえをしまし  
た。

みかん (題名) 2 みかん

十五2 5 みかん  
十五8 1 みかん

みかん 「蜜柑」(名) 3 みかん

四85 3 そのとき、おかあさんが、かごに みかん  
をいれて、もっていらつしやいました。

七66 5 うら山に、みかんを持って遊びにきている。

十五8 2 〇〇 みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山ふか  
く

みき 「幹」(名) 5 みき

二36 4 〇〇 ぞうは、木の みきと おなじじゃ ない  
か。

六136 6 しかさんがおこつて走ると、こんどはたお  
れた木のみにトンとけつまずいて、

八15 1 白いうじのようなうちゅうが、はいだし  
て、あおぎりのふといみきをつたって、

十二64 5 葉は青く、くきは長く、みきは高くそび  
えているが、根はちつともみえない。

十二66 2 おおづなのようなたくましい根が、深く  
のびてみきをささえ、廣くのびて枝をやしない、

みき 「右」(名) 28 みき 右

一29 3 手は二ほん、みきひだり。

一29 5 足も二ほん、ひだり みき。

三39 6 ぼくがまん中で、右のかたには いろろ  
うくん、左のかたには みよこさん。

三41 3 いちろうくんが、右の 方に まがつて  
いつてしまいました。

三63 9 みずうみを右へいけばもりへです。

三64 3 〇〇 「右の方。」と、女の子たちがいいま  
した。

三64 9 〇〇 はじめに 右か 左か どちらかへ やらな  
ければ。

三64 10 〇〇 「右。」

四50 3 ほかの がんは、右や 左から かつちゃん  
を、だきかかえました。

四79 6 み 〇〇 右と 左と ちがえぬように。

四93 4 右にも 左にも、むこうにも こっちにも、  
どこにも 降る。

四109 7 うらしまは、右の こしかけに こしかけま  
す。

四134 4 〇〇 右に 左に ひらひらと、ゆれる たもと  
が うつくしい。

五88 11 〇〇 こうして 右の手でだいてな、左の手でか  
かえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

六100 3 右の手に虫めがねを持って、のぞいてみた。  
六115 7 たこが青空で 右や 左に ゆれると、自分も  
いっしょに首をふりながら、

七93 3 朝、いつてみたら、右から四ばんめのへや  
に、子うさが4ひき生まれていました。

七93 8 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへ  
やに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

九17 4 すると、その右の足に、日本の文字をしる  
した小さな金ぞくのいたがついていました。

十34 6 横糸はおさによつて、右から左、左から右  
へといききするのであるが、

十34 7 左から右へといききするのであるが、

十一67 11 おどおどした目を右に左に向けて、

十二67 5 一つおきに 右と 左に すこしよじれて、二  
十も三十も続いている。

十二67 10 いつもやすりをかけて 右と 左によじつて  
おかなく、なんの役にもたない。

十二83 10 目にもとまらぬボールが、ネットの上を  
右に 左にと、ゆききました。

十二108 4 右の仁王さまをほったのは 運慶だといわ  
れています。



十三535 その右の方に、もうひとりの子どもがよりかかっている絵です。

十五1069 右の方には、『しごとをしあげる喜び』が、『考えることの喜び』のとなりになっています。

みぎがわ 「右側」(名) 3 右がわ 右側

三312 右がわは きょうしつで、左がわにはまどがならんで います。

十三374 右がわのかべに、電話がとりつけてある。十五379 字の右側に、「支・反」をおいて、「シ・ハン」という音をしめしたりした。

みきこさん 「人名」 2 みきこさん

四849 三ばんめに、すじむかいの みきこさんが、しょうかをうたいました。

四8410 すると、みきこさんの いもうとの たつこさんが、それに あわせて おどりました。

みぎて 「右手」(名) 12 右手

三647 右手と 左手を はんたいに こいだら、ぐるぐるまわりをするばかりだ。

九1002 げんこをかためて右手をふりあげる。十二4412 からだ全体と右手を受け持つ人、〈略〉と、それぞれ手わけしているんだが、

十五251 上体をびったりと鳥のせにつけて、右手で鳥のつばさのつけねをつかみ、

十五287 左手は女の子の上帯にかけたままで、右手をはなして、

十五294 いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつた短刀があります。

十五2910 少年は、右手に短刀をふりかざし、左手で女の子をかばい、

十五303 身をおかずと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。

十五3012 すばやく短刀を持ちかえた右手で、

十五752 立ちあがった老博士は、フィッシュナイフをにぎった右手を大きくふりまわし、

十五8211 すこしはにきんで、みんな右手の前の方に、光をとりまいてかたまってしまっています。

十五8212 右手の方のおくへ向かって歩いて行って、みきもとこうきち 「御木本幸吉」(人名) 1 御木本幸吉

十391 このわか者こそ、のちに眞珠王として世界に知られた御木本幸吉であった。

みくち 「三口」(名) 1 みくち

十746 文韻 ふたくちくえども死にもせず、みくち、よくち、ぶすはくえども、死なれもせず。

みくらべる 「見比」(下) 2 みくらべる 《「ペーベル」

六62 ねじは、これらの道具や時計をあこれとみくらべて、

十二76 少女とやまぶきの花とをみくらべるばかりでした。

みけ 「話手」 2 みけ

二625 みけ「にやあ、にやあ、にやあ。」二6510 みけ「やあ、かすみが たなびいてみけちゃん (名) 1 みけちゃん

二624 1 みけちゃん

ミケランジェロ 「人名」 3 ミケランジェロ

十三5610 レオナルド・ダ・ビンチだの、ミケランジェロだのという天才の集まっていた、

十三5710 ミケランジェロとラファエルは、前後して、そこからローマに出て、

十三6010 あれは、ミケランジェロのかいた、てんじょう画の一部だ。

みけん 「眉間」(名) 1 みけん

十五692 きずのあるみけんの下にかがやく目は、

思いなしかやわらいで見え、

みこと 「命」(名) 1 みこと ↓おおくにぬしのみこと・ほおりのみこと・ほでのみこと

六9710 みことは、それにあわせておどりをおどる。みこと 「三言」 ↓ふたことみこと

みこと 「見事」(形状) 10 みこと

八843 はくちようはみことな羽を廣げ、〈略〉、廣いみずうみへと、とんでいった。

八8811 あひるの子は、そのみことな鳥を知っていた。

九1105 そのみことなすべりぶりにみとれていると、先生たちは、もう目のまえにこられた。

十367 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎな機械に目をみはりながら、

十375 そこでさらに、七年間のくふうがつづけられ、みごとに、自動機械ができた。

十二6610 深く長い根の上に、みことな草や木がしげっていく。

十三2112 ダルガスの希望であり、デンマルクの希望であるこの植林は、みごとに実現されました。

十四792 十文字の小さな木ぎれをはさんで、チョンチョンとたたいて、みごとに割っていました。

十五465 いままで見たこともないみことな焼物であつたからである。

十五659 小樽で目についたといつて、車のついたみことなおもちゃを私に送ってくださった。

みこみ 「見込」(名) 1 みこみ

六1406 助けてくださいと、お願いしたところで、ゆるしてくれらるみこみありません。

みさだめる 「見定」(下) 1 みさだめる 《「メ」

八571 しっかり目あてをみさだめて歩いてみよう。

みじかい「短」(形) 15 みじかい 短い 《—イ、

—ク》とことばみじか

六六二 八 みじかい文

七五五 ふでをいれるほど、かえって、文章がみじかくなっていることがあります。

七五九 こんなのは、みじかくなった文ですが、

七七二 ⑤ そうして、左の足が一本短くて——それから——

七八九 ⑤ しかも、左の足の短いことを、ちゃんと知っているのです。

八七二 ① にわとりは、足はみじかいが、いいたまごを生んだ。

九八五 あとの三十分は、ひじょうにみじかく思われました。

九四九 ⑤ 「なんとみじかいゆめだろう。」

一二七 ① ② はじめ短い羽を動かしてビッピツと鳴いていたときには、

一二九 ② 太郎が、こういう短い文を書いた。

一二九 ③ こんな短い文であるが、

一三四五 「……」を時間的に短くしたり長くしたりして、電話の話らしくしなければなりません。

一四六 ⑤ ⑥ 私は短い旅をしたあとで、七時にパリに着きました。

一四八 ⑧ あのような、短くて調子のいい、気のきいたものになったものとも考えられます。

一五九 ① ② なにしろ、子どもの時代は、ごく短いものだからね。

みじかし「短」(形) 1 短し 《—シ》

一四八 ⑤ ⑥ おびに短し、たすきに長し。

みじかよ「短夜」(名) 1 短か夜

一三三 ④ ⑤ 短か夜しらむを待ちかねて、

ミシガンこ「地名」 1 ミシガン湖

一五五 ① とちゅう、あるいはミシガン湖のほとり

にたたずみ、あるいはナイアガラの水をながめ、

みじめ「惨」(形状) 1 みじめ

一五八 ⑧ ⑨ 『不幸』そのもののように、みじめなものになってしまふのです。

みしる「見知」(五) 4 み知る 《—ラ》

一三八 ② 宝づらの中で、宝物をかぞえておいでになると、み知らぬ人がはいつてきました。

一三八 ⑤ そのみ知らぬ人がいました。

一三九 ⑨ み知らぬ人は、そのままだこかへいつてしましました。

一四二 ⑨ おくやみになっていらつしやると、きのうの、み知らぬ人があらわれました。

みじん ① ② こなみじん

みす「見」(下二) 1 みす 《—セ》

一二七 ① ② きみ火をたけよきものみせん雪まろ

みず「水」(名) ① ② 水 ↓ あまみず・いどみず・お

おみず・しみず・どぶみず・なまみず・ひみずつちはちちち・ゆきどけみず

二二四 ① ② 「先生、いものはのつゆは、あれ、ただの水でしょうか。」

二二七 ⑦ かいをそろえてひとかき水をかくと、

二三三 ③ ④ 白いくもが水にうつっています。

二四六 ⑨ ⑩ 「それなら、海の水をあびて、ねているがよい。」

二四七 ① ② 白うさぎはすぐ海の水をあびました。

二四八 ⑥ ⑦ 早く川の水でからだをあわって、がまのほをして、その上にねるがよい。

二七三 ④ ⑤ 「きらきらした水かしら。」

二八五 ⑤ ⑥ こは、水のきれいなけです。

四一六 ⑤ おかあさんが、月にてらされて、水をく

む。

四五四 ① 一わの がんが、みずうみのきれいな水をくむと、

四五五 ① みんながかわるがわる、つめたい水で、

あたまをひやしてやりました。

四二二 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

四四四 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

五五五 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

音をたてて流れているのをきいて、

六13 6 ありは、川の岸で、うつむいて水をのもうとしました。

六13 7 もうすこしで口が水にとどきそうになったとき、足がつるとすべって、

六63 3 アルコールは銀の水。

六63 7 手をあらって、しゃぼんを水の上へおいたら、つるとすべった。

六89 4 きれいな水だな。

六89 6 そこへ女の人がでてきて、いどの水をくもうとする。

六89 7 いどの水をみて、女「まあ、りっぱなかが、水にうつっているわ。」

六89 9 りっぱなかが、水にうつっているわ。

六90 2 すみませんが、そのいどの水を一ぱいください。

六90 4 女の方は、水をくんで、ほおりのみにこにさしあげる。

六90 6 ああ、おいしい水。

六97 3 女の方はつりばりを水であらって、海の神にさしあげる。

七8 4 水の音もする。

七24 1 ぼくは、びんの中をそうじして、砂に水やるから。

七24 3 兄は、しくびんの中の砂に水やる。

七73 1 うまが、水のおいをかいでいる。

七90 10 うさぎのふんを、水の中へいれてみたらうきました。

八28 2 川の水は銀色に光り、はくちようがしずかにういていました。

八43 1 「あなたは、こがねと一ぱいの水と、どちらをえらびますか。」

八43 2 「一ぱいの水です。」

八43 7 では、庭のいけの水をすくって、こがねになったものにふりかけなさい。

八43 9 王さまは、いそいで庭のいけの水をすくって、王女のからだにおふりかけになりました。

八63 10 なしろ、水をこわがるのだから、

八65 6 なしろ、水にいてやらなければなるまい。

八65 9 親あひるは、そのひなをみんなつれて、水のところへおりていった。

八65 10 さつと水の中へとびこんだ。

八66 1 水はひなたの頭の上を流れたが、すぐにうかびあがってきて、うまくおよいだ。

八72 10 ぬまの水をのませてもらいたいとも思ったが、それもゆるしてもらえそうもなかった。

八81 4 でも、水の上をおよぐのは、いい氣持ですからね。

八81 5 それに、水の中へもぐってそこへいくと、それはさつぱりしますよ。

八81 7 水の上をおよいだり、もぐったりするのがいい氣持かどうか。

八84 6 あひるの子は、水の上を車のようにくるくるまわり、

八84 10 そうして、はくちようたちがみえなくなるまで、すぐ水のどんぞこまでもぐっていった。

八85 6 水のおもてがすっかりこおってしまったように、

八85 7 水の中をおよぎまわらなければならなかった。

八88 7 たくさん木がかんばしくおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上のびていた。

八88 11 はくちようは、つばさをサラサラと鳴らし、

かるく水の上をおよいでいた。

八89 9 そういつて、水の中にとびこみ、はくちようのほうへおよいでいった。

八90 5 かわいそうにあひるの子は、ころされるものと思いながら、水の上に頭をたれた。

八90 7 そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのをみた。

八91 8 小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげてくれた。

八94 5 やく3・6 dlののみを、水の中にひたしました。

八94 8 水をいっぱいいれ、ふたをして日かげにおき、ときどき水をとりかえました。

八94 8 ときどき水をとりかえました。

八95 2 水をとりかえるときにみたらもみのもとのほうがすこしくらんでいました。

八96 5 水のすむのをまって、むらのないようにまきました。

八97 5 水にひたしたほうが、1週間早くできました。

八99 6 これから、水がきれないように氣をつけましょう。

八101 2 ずっと日やりがつづいたので、水をやるとうれしそうです。

九7 5 「水」ということばをえたら、どううけしきを思い出しますか。

九7 9 この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、ちらちらと光るいけともなり、

九10 8 その例として、まず、水の音をとりあつかった。

九10 9 水の音をたいこであらわすことなどは、ちょっと考えられないが、

九11 1 じっさいにきいてみると、たしかに水の音

である。

九一三 はじめに、川の水の音をたたいてきかせてくれた。

九一五 それから、水の中にドブンととびこんだとき、音もあらわした。

九二九 ただ一つのたいこが、そのうちかたによつて、水の音にもなり、風の音にもなり、

九二七 秋風にプールの水がゆれていて、

九三六 山からおるとき、この谷まの流れにはいつて、頭から水をあびるのが楽しみでした。

九五〇 がけの中ほどに、小さなあながあいていて、そこから水がふえのように鳴つてとびだし、

九一六 ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤きかにいてすぎの山しずか

九一五 父は、その泉の水を手ですくって、いくともうまそうに飲んでから、私にいった。

九一七 この水を飲んでごらん。

九一八 水は大きなごろごろした石ころのあいだから、ブツブツと音をたててわきだして、

九二一 泉をあふれでた水は、さらさらと走って、

九二二 なんとかしてうまい水のわきでる泉をさがしだしたいものと思つた。

九二八 茶人は、日本じゅうを歩きまわって、うまそうな水や名高いいど水をためてみたけれども、

九三〇 てんりゅう川の中流の水をくんで、それで茶をたててみると、

九三二 舟をやとつてこぎのぼりながら、ところどころでその水でお茶をたてる。

九三三 大きな支流が流れこむところへくると、ときどきあまい水の味がわからなくなってしまう。

九三六 深いところの水をとって飲んでみたりしな

九四四 いい味の水は、左の岸のほとりを流れていった。

九四五 ためしにまつ川の水をにて飲んでみると、たいへんうまかつた。

九四七 念のため、もつと上流の本流の水を飲んでみると、もうそれはただの水であつた。

九四八 もうそれはただの水であつた。

九五二 岸にそつて上流に向かつて歩きながら、ときどき水をふくんで泉をさがしていった。

九五五 そこからさらに、すこしさかのぼつて水を飲んでみると、いい味は、すこしもなかつた。

九六四 そこをくんで飲んでみると、それこそまぎれもないうまい水であつた。

九六八 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつていました。

九七二 小川の水、きらきら光る。

九七四 妹は、そこへいつて、水おけのふちにつかまつて、水の中をのぞきました。

九七六 くわをかついで田をみまわれば、日はまた照つて水たつぷりと、

九八〇 津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆれて、

九八二 「ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しんだあとでした。

九八四 「水」がその中にはいつているものであることを、はつきり教えるために

九八六 だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をといての口の下へやりました。

九八八 冷たい水がいきおいよく流れているあいだに、

九九〇 「水」という字を書いてくださいました。

九九二 「水」はいま自分のかた手の上を流れて

いるふしぎな冷たいものの名であることを知りました。

一〇〇二 水を飲もうと思つて小川の岸にでてみると、美しい小魚がおよいでいる。

一〇〇四 そこでまた川の水を飲んだ。

一〇〇六 毎朝早くては、芭蕉のおきないうちに、いどから水をくみあげたり、

一〇〇八 曾良が水をたくさんくんでおいてくれたし、まきもたくさんとつてきてくれてあるし、

一〇一〇 「水を持っておいで。」

一〇一二 こういわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱいれて持つていくだろう。

一〇一四 すずりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持つていくだろう。

一〇一六 こういわれたら、手おけに水をいっぱい

くんで持つていくだろう。

一〇一八 「水を持つておいで。」

一〇二〇 もちろん、水をくんだり運んだりするときにもつかつたことでしょう。

一〇二二 あさい水には、あしのめがすくすくと、

一〇二四 するどい角をのぞかせた。

一〇二六 その第一は水で、その第二は木でありました。

一〇二八 みぞをほつて水をそそぎ、平野の雑草をかりとり、

一〇三〇 なんといつても、いちばん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であらう。

一〇三二 水に不便なペキンでは、一けん一けん、水を運んで行かなければならない。

一〇三四 水に不便なペキンでは、一けん一けん、水を運んで行かなければならない。

一〇三六 でも、水がすむまで見ているかもしれない

い。

- 十四4610 いい氣持になって、自分が水の中にひたっていることも、わすれてしまったほどでした。
- 十四551(国) そこへ細い根をのぼして、水と養分とを吸いとり、夜も晝も送ってあげるの、
- 十四562(国) 根さんが、せっかく吸ってくださった地の中の水や養分でも、
- 十四585 水が続いていました。
- 十四587(国) 生きものに、いちばんたいせつなものは、私たち水です。
- 十四587(国) 水がなかったら、なんでもすぐ、かれたり死んだりしてしまいます。
- 十四5810(国) この大きなかばちゃは、ずいぶんかたいうですが、やっぱり、この大部分は水です。
- 十四5810(国) いまのお話の養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。
- 十四5812(国) それから、空から降る雨、あれだって水ですよ。
- 十四596(国) 水だって、ためておいてあげたのです。
- 十四6111 日や、土や、水などがいいました。
- 十四716 アルコールランプで熱したときの水の流れて、同じようなものになるわけです。
- 十四7112 そういう部分からは、ひえた水が下へおり、
- 十四721 そのまわりの、わりあい熱い表面の水が、そのあとへ向かって流れ、
- 十四722 それが、おりた水のととどくじぶんにはひえて、そこからおります。
- 十四723 湯の表面には、水のおりているところとのぼっているところがほうほうにできます。
- 十四745 湖や海の水が、冬になって、表面からひえていくときには、

十四798(国) 水になげこんでごらん。

- 十五71(国) 冬の水一枝の影もあざむかず
- 十五91(国) 水はしずかに流れると見ればもの花
- 十五722 はか石に水をそそぎながら、「略。」とおばさんはふたたび呼びかけた。
- 十五953 「水のほおえみ」とか、「あけぼののむらさき」とか、(略)などがあらわれます。
- みずうみ (題名) 1 みずうみ
- 三582 みずうみ
- みずうみ (名) 31 みずうみ 湖
- 三585 おりれば みずうみへ べられますし、のぼれば 大きな 木のあるところへ べられます。
- 三594(国) 「いや、みずうみへ おりようよ。」
- 三608(国) みずうみ、みずうみ、この丘の下。
- 三608(国) みずうみ、みずうみ、
- 三617(国) さつさと かけおいて みずうみへ いこようよ。
- 三634 そうして、そこで おもしろく あそんでから 丘を おいて みずうみへ べました。
- 三635 みずうみには ボートが うかんで いました。
- 三639 みずうみを 右へ いけば もりへ べます。
- 四532 この 山の むこうにある みずうみのところへ いこうと 話しあいました。
- 四535(国) 「みずうみが みえた。」
- 四537 みずうみの ほうから、風が ふいて きました。
- 四5310 みずうみの 島には、こんもりとした 林がありました。
- 四543 一わの がんが、みずうみの きれいな 水をくむと、
- 四653 三十ばの がんは、みずうみの 島をとび

たちました。

- 六433 山や、みずうみや、はたけの上をひとかたまりになってとぶつばめのむれ。
- 八607 田や野原のまわりには、大きな森があり、森の中には深いみずうみがあつた。
- 八608 みずうみの岸の、ごぼうのはえているところに、一わのあひるがすわっていた。
- 八612 ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎまわるほうがすきであつたからである。
- 八844 みごとな羽を廣げ、この寒い國からあたかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。
- 九328(国) 家のまえをちよつとでると、はるか下の方に美しい湖がみえます。
- 九3211(国) 秋晴れのすみきつた空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中にうつて、
- 九332(国) この湖へつりにいくのが、いちばんの楽しみです。
- 九337(国) 黒くてひらたい貝がとれますので、なんども湖に近い川しもの方へとりにいきました。
- 九341(国) ぼくは、先生やみなさんといっしょに、この湖へつりにいけたらと、いつも思っています。
- 九365(国) たきになり流れになって、村の中を通り、田んぼに落ち、湖にまでつづいていきます。
- 九408(国) はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。
- 九418(国) ぼくたちがこの村へきたころは、湖には美しい白さがたくさんまいおっていました、
- 九1475 湖の岸べをとおりました。
- 十二593 鳥取の西方約四キロのところに、まわり十二キロの湖がある。
- 十二6311 八郎は思い切つて、水ぞこにとびこむと、小川がひろがつて、みるみるうちに湖となった。

十四745 湖や海の水が、冬になって、表面からひえていくときには、

みずえのぐ 「水絵具」(名) 1 水えのぐ

十二23 ひとりの友だちは、水えのぐで写生をしている。

みずおけ 「水桶」(名) 3 水おけ

十三333 大きな水おけをのせた一輪車が、「キリキリ、リリリ」ときしみなながら、

十541 妹は、そこへいって、水おけのふちにつかまって、水の中をのぞきました。

十三333 大きな水おけをのせた一輪車が、「キリキリ、リリリ」ときしみなながら、

みずおよぎ 「水泳」(名) 1 水およぎ

四1251 八月は 水およぎ。

みずかさ 「水嵩」(名) 1 水かさ

九12310 ここまでくると、てんりゅう川もよほど水かさが増えていた。

みずがめ 「水瓶」(名) 1 水がめ

十五824 ふしぎなくだものを、水がめや、ひっくりかえったかなえなどの間で、たべたり、

みずから 「目」(副) 1 みずから

十五775 神は、みずから助くる者を助く。

みずくみ 「水汲」(名) 1 水くみ

四163 ゆうがた、水くみにでた。

みずぐるま 「水車」(名) 1 水ぐるま

九1144 文 水ぐるま近きびきにすこしゆれすこしゆれいるこでまりの花

みずさし 「水差」(名) 1 水さし

十二879 すずりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持っていくだろう。

みずすまし 「水澄」(名) 1 みずすまし

十一555 園 てんとうむしのように、みずすましの

ように、一つ一つはねる。

みずた 「水田」(名) 1 水田

十一346 園 きのうの畑は水田となって、晩にはかえるが歌いだす。

みずたまり 「水溜」(名) 1 水たまり

十一294 いねのなえをひろって、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。

みすばらしい 「見窄」(形) 1 みすばらしい

十二911 ひとりのみすばらしい身なりをした老人が、道路をうろうろとみまわしながら、

みずみずしい 「瑞瑞」(形) 1 みずみずしい

八225 中から、みずみずしい、やわらかい、せみのからだはみだしてきました。

みずわ 「水輪」(名) 1 水わ

十五65 文 六つほどの子がおよぐゆえ水わかな

みせ 「店」(名) 11 店

五283 しんきちくんのおとうさんは、店でそろばんをはじいていました。

五289 園 むこうの店に品物をとどけて、受けとり

五293 園 店をですこしくると、

六47 だんだんおちついてみると、ここは時計屋

の店であることがわかった。

九766 おかみさんが、店の人とふたりで、せつせ

と貝をこじあけて、むきみをつくっていました。

十二1057 向こうがわに店がみえます。

十二1058 皮ざいの店のらしく、なにかの毛皮がひろげてあります。

十五447 店の主人はあわてて、

十五461 ひくい屋根も、あけはなした店も、のき

先にかかっているおもしろいかんばんも、

十五471 園 ときどき焼いては、この店に持って来

ますが、なにぶん作るのにてまのかかるもので。

十五474 店の主人は、きかれるままに語りだした。

みせいっぱい 「店一杯」(名) 1 店いっぱい

六103 雲にかくれていたたいようがおおをだしたので、日光が店いっぱいにさしこんできた。

みせか・ける 「見掛」(下二) 1 みせかける

十319 自分をえらそうにみせかけたり、人をだまし

したりしないで、

十五434 通りをアメリカの一しように歩いて

いたが、ふと、ある店先で立ちどまった。

十五463 ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵

のはちを手にとって、かれは、びっくりした。

み・せる 「見」(下二) 36 みせる 見せる

「セル」おみせする・おみせなさる・おみせる

一465 かばんをあけてなかをみせますと、

一562 うずらのたまごほどあるだいやもんど

をひとつとりだして、わたくしにみせました。

二444 園 「おじさん、こんやもまた、かげえを

して、みせてください。」

二453 園 「はやく、せんだうさんをみせてくだ

さい。」

四1323 園 天人のまいをまって、みせていた

けませんか。

五557 園 今夜、学校のわで、ぼうえんきようで

星をみせますよ。

五567 じゅんぱんがきたので、みせていただき

した。

五5611 園 「ねえさん、早くみせて。」



十三585 図 「じゃあ、やっぱり、おじさんみたい  
に、旅行して来なくちゃだめですね。」

みたす 「満」(五) 2 みたす 《一サ》

十五877 図 『みたされたきよえいの幸福』で、こ  
のとおり、りっぱな、ふくれあがった顔をして

十五878 「みたされたきよえいの幸福」ゆつくり  
とうなずく。

みだす ひとりのみだす

みたば 「三束」(名) 1 三たば

十5811 おとなりのよし子ちゃんと、なお子ちゃん  
に、三たばずつあげました。

みたまう 「見給」(五) 3 みたまう 見たまう

《一エ》

三446 図 むこうのりくまでならんでみたまえ。

九991 図 このボタンをみたまえ。

十五939 図 ほら見たまえ。

みだる 「乱」(下二) 1 みだる 《一レ》

九265 図 麦ふむやみだれし麦の夕日かけ

みだれる 「乱」(下二) 4 みだれる 《一レ一レ

ル》ひりみだれる・さきみだれる

九94 心の絵がみだれてしまします。

十一82 図 コックスの号令どおりに、一糸みだれ

ずこいでいくと、

十三911 星を見て世の中がみだれるといったり、

十四4512 それは女の声で、しかも、調子もみだれ

ていなければ、ふるえてもいません。

みち 「道」(名) 35 道 ①あぜみち・いっぽんみ

ち・かえりみち・きのめみち・くさはらみち・こみ

ち・さかみち・たのしいこみち・ちかみち・とうげ

みち・とおりみち・どっちみち・のみち・はやみ

ち・ほそみち・やまみち・よこみち

三792 すなで、トンネルや、いどや、家や、道を

こしらえています。

三804 図 ぼくの道は、雨にめっちゃめっちゃにさ  
れちゃった。

六133 あつい日中の道を、ものを運びながら歩い  
てくると、のどがかわきました。

六585 雪の降った朝、一年生の子が、学校にくる

道で、はき物に雪がついてころびました。

七466 黄みがかった麦ばたけ、縣道らしい白っぽ

い道、そこを自轉車に乗って走る中学生、

七835 図 道のかたがわの草ばかりたべてあったか

らです。

七8411 図 道に、麦がこぼれていたからです。

九4011 図 道もないところから、木こりのすがたが

あらわれます。

九541 いちろうがすこしいきましたら、谷川に

そった道は、もうほそくなってきてしまいまし

た。

九543 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木

の森の方へ、新しい小さな道がついていました。

九545 いちろうは、その道を登っていきました。

九547 青空は一きれもみえず、道はたいへんきゅ

うな坂になりました。

九1256 はじめの八キロほどは、村ざとがあつて川

べりに道もあったが、

九1259 大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、ま

つ林におおわれた道もない谷まになった。

十82 道で子どもたちが、なわとびをして遊んで

いたりしますと、そのなかまいりをして、

十88 道でとおうさんを呼びとめて、「へ略。」と

いいながら、

十225 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえ

ざくらの花。

十501 家からでてしばらくいくと、道のまん中に、  
黒いぬがぴきすわっていました。

十5212 門からもどつてきて、道にでたとき、あと

をふり向きました。

十546 「イコウ」ときめてあるきかけると、道の

わきで、たき火をしていました。

十一173 わたしのために、いばらの道をもふみ

わけたその足。

十一9112 図 「だけど、ぼく、遠い道を歩いていく

んですから、しぼんでしまいます。」

十二298 図 わたしのげたをひっかけて、正男のあ

とを追っかけて道まででいたのよ。

十二1156 それは、民主主義ということばをほん

うに生かしていくよりほかに道はありません。

十三146 そういう星——これをわく星といいま

す——の空にえがく道は、だえん形であつて、

十三269 あまり廣くもない道の両がわの土べいの

上から、

十四869 風にあおられた雪のむれが、道を消し、

木をおり、汽車を立ちおうじようさせ、

十四881 ぼつりぼつりとした足あとが、廣野

を横ぎる一すじの道となる。

十四882 その一すじの道をながめると、一直線

はなく、くねくねとゆがんでいる。

十四9010 それをさけるために、急いで道を横ぎ

たときに、その上ぐつはぬけてしまった。

十五995 図 まんじゅしやげおりすてである道のま

んじゅしやげさき続く

十五324 ようやく道を見つけて、この鳥と少年と

の戦っている岩角近くまで来ました。

十五457 外國から新しい方法を学んで、つぎつぎ

と近代的工業の道をたどっていくようになった。



十五645 私は、道のまん中で、無言でつつ立ったまま動かなくなった。  
 十五1161 会 いつもたずねあぐんでいた道が、どうしてわかったの。  
 みちあふれる「満溢」(下一) 1 みちあふれる  
 《一レ》  
 八888 ここは、ほんとうにきれいで、春の喜びがみちあふれていた。  
 みちか「身近」(形状) 1 身近  
 十四303 自分の身近なものしか見ないで、みちがえる「見違」(下一) 3 みちがえる 見ちがえる 《一エル》  
 五956 ひなは、みちがえるように元気がでて、だんだん大きくなりました。  
 八575 足あとを見ると、みちがえるように、まっすぐな、しっかりした足あとがついている。  
 十四311 日本は、見ちがえるほどりっぱな國になつていくのです。  
 みちこ「人名」4 みちこ  
 六513 ふみおと、よしおと、みちこの三人が、かげふみをして遊んでいました。  
 六531 「略。」と、みちこがいいました。  
 六542 よしおとみちこが「略。」「略。」といひあつてゐるのをききながら、  
 六554 「略。」と、みちこも感心しました。  
 みちこさん「人名」5 みちこさん  
 一326 みちこさんのかいたことば。  
 一351 会 「みちこさんはなにになりますか。」  
 二165 ただおさん みちこさん まことさん  
 二202 まことさん みちこさん ただおさん  
 六533 会 みちこさんは雲が走つてゐるというの。  
 みちすがら「道」(名) 1 道すがら

十五658 その道すがら、小樽で目についたといつて、車のついたみことなおもちゃを私に送つてくださった。  
 みちばた「道端」(名) 4 道ばた  
 十257 道ばたにさくたんぼぼ、とびかうちようちよ。  
 十482 道ばたにあるものを、なんでもみつけて、《略》たり、そこで遊んだりしたからでした。  
 十二9412 道ばたに野はぎがさいていたので、《略》花を手にいっぱいつんで帰つたことを思う。  
 十五648 おじさんは道ばたにしゃがんで、みちびく「導」(五) 5 みちびく 《一イカーキ》  
 十四3210 星によつてみちびかれ、星によつて生きているといつてもいいすぎではありません。  
 十五535 博物館に自動車を乗りつけ、守衛にみちびかれておくまつた館長室の前に立つた私は、十五6811 「略」といひながら、主なき書さいへ私をみちびいた。  
 十五7211 ドアをおして、つかつかと中にすすんだホランド博士は、客間に私をみちびき、  
 十五7310 廣い食堂にみちびかれ、博士とたつたふたり、しずかに食事をしたが、  
 ミチル「話手」1 ミチル  
 十五842 ミチル「なんてきれいなおかしでしょう。」  
 ミチル「人名」2 ミチル  
 十五8210 チルチルとミチルと、いぬと、パンと、さとうとは、《略》、すこしはにやんで、  
 十五10911 会 チルチルや、それから、ミチルや。みちる「満」(上一) 3 みちる 《一チ》↓さきみちる

六197 会 みどりの木の葉は喜びにみち、きよらかな風は、われわれの音楽をほめてくれる。  
 十三198 かれは、科学者であり、理想を実現する誠意にみちていました。  
 十四414 会 喜びにみちてかがやく光。  
 みつ「三」↓ふたつみつ  
 みつ「蜜」(名) 3 みつ ↓はちみつ  
 六303 会 花のみつをわけてあげよう。  
 六304 あり一が、おくの方からみつをびんにいれてもつてきます。  
 七214 会 とまつてゐるちようちよが、どんなかっこうをして、みつをすうか、よくごらん。  
 みつ(上二) ↓ひらきみつ  
 みつおさん「人名」3 みつおさん  
 五152 私は、としおさんが、みつおさんにあてて書いた手紙です。  
 五209 みつおさんがよろこんで、私を手にとりあげました。  
 五2010 私は、ぶじに、としおさんの心を、そのままみつおさんにおつたえすることができました。  
 みっか「三日」(名) 2 三日 ↓くがつみっか・さんがつみっか  
 五722 それから三日ほどたつて、おばあさんはいじいさんにいました。  
 十四8211 文 世の中は、三日見ぬまのさくらかな。  
 みっかかん「三日間」(名) 1 三日間  
 九346 母と、おぼと、兄と、妹と、ぼくの五人で、三日間かかりました。  
 みっかめ「三日目」(名) 5 三日め  
 九351 手 ぼくたちの畑がようやくいこんされて、三日めにやつと、うねを十三本つくりました。  
 九6310 会 裁判も、もうきょうで三日めだぞ。

九66㉔ 裁判も、もうきようで三日めだぞ。  
 九67㉔ 裁判も、もうきようで三日めだぞ。  
 十一789 そうして、二日めも、三日めも、四日めもすぎました。

みつかる「見付」(五) 12 みつかる 《一ツ・ラ・リール》

六97㉔ 「こんなところころげおちてしまつて、もし、みつからなかったら。」

六911 三人はさんざんさがしまわつたが、みつからないのでがっかりした。

六613 いろはがるたやことわざの中にも、このことのはまるものがみつかりました。

六978㉔ みつかつて、ほんとうによろしゅうございしました。

六996㉔ 「これは、いいものがみつかった。」

六1301㉔ ぼくが、きつねにみつかつてしまふから、どこかへいつてくれたまえ。

七264㉔ はつぱと同じになるのは、鳥などに、すぐみつからないためですよ。

八466 ほんとうに幸福な人は、やすやすとみつかるものではありません。

九417㉔ 山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつかるからです。

九791㉔ それで、ここをほると、そういうものがみつかることがあります。

九801㉔ あつちこちほつてみて、なんにもみつからないと、だめだと思つてやめてしまふ。

九933 なかなかみつからない。

みつき 三月(名) 1 三月

三1027 小人のようだった おひめさまは、三月ほどのあいだに、すくすくとせいがのびて、

みつ・ける「見付」(下一) 44 みつける 見つける

《一ケ・ケル》↓おみつける

一258 一ばんぼし みつけた。

一261 二ばんぼし みつけた。

二376㉔ 学校から かえる とき、くにざかいの山に、ゆきがふつてゐるのを みつけました。

三703 そのとき、ピーターはふと、ゆかの 上に なるか あるのを みつけました。

三843 ピーターは、はの さきに あまだれがあるのを みつけて、「略。」といひました。

四663 いいにくい ことばを みつけて、それを まちがえないで、早くいつて あそぶのです。

五2510 駅の出口までくると、でむかえにきていた おねえさんを みつけました。

五482 おや、こんな花が——また みつけた、きれいな花を。

五533㉔ まさこちゃん、一ばん星 みつけたのね。

五536㉔ 「二ばん星 みつけた。」

五5310㉔ 三ばん星は、ねえさんが みつけたいわ。

五5410 空は、まだ、ほんのりと 明かるくて、つぎの星を みつけることは、できませんでした。

五554㉔ 「さつき みつけた星は、どれだったかしら。」

五565㉔ はる おさん、ほら、あなたの みつけた二ばん星よ。

五588㉔ 「あれが、ぼくのみつけた二ばん星かなあ。」

五599 あやこは、それを みつけて、「略。」といひました。

六81 女の子はただじつと みつめていたが、やがてこの小さなねじを みつけて、

六147 それを一わのはとが みつけました。

六383 子つばめがかかしを みつける。

六1291㉔ 「みつけた。」

六1414㉔ おれが さきに うさを みつけたのだ。

六1415㉔ あの谷をわたるときに、ちゃんと みつけたのだ。

七277㉔ なんでも、自分で みつけて いきましようね。

七301㉔ 弟が、ぼくより さきに、それを みつけた。八215 ねこや、すずめに みつけられたらたいへんです。

八458㉔ ほんとうに 幸福な人を みつけて、その人の着ている シャツを 王さまにお着せするのです。

八776 小屋の入口の戸が すこしあいてゐるのを みつけたので、そこから 中へはいつていった。

八785 朝になつて、よそから きたあひるの子は、すぐに みつけられた。

八863 あひるの子を みつけて、木ぐつで こおりをくだき、うちへ つれて 帰つた。

八1029 花のさいてゐる ほも みつけました。

九392㉔ 枝ぶりのよい いかれ枝の たくさん ついてゐる 高い木を みつけると、

九838㉔ よく みつけたね。

九9810㉔ ぼくだつて、すみを みつけて やつたじゃないか。

十483 道ばたにあるものを、なんでも みつけて、《略》たり、そこで 遊んだり したからでした。

十693 しまつて あつた、一つの まるい つばを みつけ、へやの まん 中にか かけて きました。

十一2512 金次郎は、一さつの本を みつけました。

十二923 りすを みつけて 追いかけたこと、もみじの枝をとつてきたこと——

十四49 ふしあわせなものの中に、かえつて、人間としての 心のとうとさを みつけたのです。

十四945 女の子は、二つの家の間に、ちょっとした、身をかくす場所を見つけた。

十四1023 元日の朝、人々が、マッチ賣りのむすめの、ひえきった小さなきながらを見つけたとき、

十五2110 男の子は、小石を見つけては深い谷の中へなげこんで、

十五244 このひつじかいは、がけの中ほどのあき地に、草のしげっている場所を見つけて、

十五324 ようやく道を見つけて、この鳥と少年との戦っている岩角近くまで来ました。

十五966 けれども、ふつうの人間には、それが見つけられないのだよ。

みつこ「三子」(名) 1 三つ子  
十四8210 三つ子のたましい百まで。

みっちゃん「人名」5 みっちゃん  
十四244 みっちゃんがいなくなってから、もう半年もたちますね。

四251 三つ子として、みっちゃんのしゃしんのまえにかざりました。

四253 三つ子 みっちゃんのことを、みんなでお話しない日はありません。

四254 三つ子 お話をすると、みっちゃんがそばにくるような気がします。

四256 三つ子 わたくしは、みっちゃんが空をとんでいるだろうと、ときどき思います。

みっちゃん(副) 1 みっちゃん  
十334 三つ子 ほかのことを考えないで、みっちゃんしごとをやってくれ。

みつこ「三子」(名) 16 みつこ 三つ子  
一112 三つ子 ひとつ、ふたつ、みつこ、よつこ、

一116 三つ子 ひとつ、ふたつ、みつこ、よつこ、

二132 お婆さんのうちから、大きなりんごを

みつこ いただきました。

三449 三つ子 一つ、二つ、三つ、四つ、五つ。  
四855 三つ子 はい、三つずつおとりなさい。

五597 三つ子 かきねにあさがおの花が、三つはじめてさきました。

五603 三つ子 「あの三つの花が、そろってしんこきゅうしているようにみえますね。」

五621 三つ子 「けさ、こんなに大きな花を、三つもさかせたのは、だあれ。」

五873 三つ子 わしは、三つも四つもあるかと思っていますよ。

九92 三つ子 二つか、三つのことばの組みあわせだと、すぐ心にものを思いうかべることが出来ますが、

九427 三つ子 いちばん小さな三つになる妹もつれて、九998 三つ子 でも、ぼくは二つなぐられて、三つきみをなぐった。

十475 三つ子 きょう、三つになる——まんていうと二年三ヶ月になる妹をつれて、さんぽにできました。

十5312 三つ子 そこに、すいれんの花が三つほど、きれいにさいていました。

十三175 三つ子 本國と、三つの島からなっている、小さな、しずかな國であります。

十五377 三つ子 「木」を二つならべて「林」、三つ重ねて「森」が作られた。

みつこ 三つ子  
十二145 三つ子 だが、根もとどこに三つ四つかたまっていただれているところもい。

みつこ 三つ子  
八686 三つ子 「あんまり大きすぎてみつこでもないから、かみつきたくなるんだよ。」

八708 三つ子 すがたがみつこでもないばかりに、みんなからしかりとばされるので、

八738 三つ子 きみはみつこでもないから、いいしあわせにあらうかもしれないよ。

八835 三つ子 すがたがみつこでもないの、いろいろな動物たちからのけものあつかいにされた。

八894 三つ子 私のようなみつこでもないものが、おくめんもなく近づいていくのだから、

八909 三つ子 それは、ぶかっこうなみつこでもないあひるの子ではなかった。

九903 三つ子 みつこでもないよ。  
十五946 三つ子 なんてみつこでもないさだらう。

みつぱち「蜜蜂」(名) 13 みつぱち  
七412 三つ子 ちょうど、かふんにまみれたみつぱちのようになつて、汽車でねむっていた。

九131 三つ子 それは、みつぱちであることが、くもにはすぐわかりました。

九1315 三つ子 みつぱちは、くものあみを知らないで、まっすぐにとんできました。

九1319 三つ子 くもはみつぱちにとびかかりました。

九1319 三つ子 みつぱちも、くもに向かいました。

九1311 三つ子 くもは、ふといつなをとりにだして、みつぱちのからだをしばりつけようとした。

九1321 三つ子 みつぱちは、そのつなをさけてにげようとしたが、どうしても手足がうまく動きません。

九1323 三つ子 そのうちにみつぱちのからだも、つなにかれそうになりました。

九1324 三つ子 みつぱちはだいた針をだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。

九1329 三つ子 みつぱちは、つなをほどいて、あみをくい切って、にげていってしまいました。

九13211 三つ子 にげていくみつぱちのうしろすがたをみていましたが、くもはどうすることもできません。  
九1393 三つ子 いましがた、みつぱちにさされて、苦し

んだことも知っています。

十一 31 10 罇 えんどう・そらまめみな花つけて、羽音高くみつばちがとぶ。

みつばちさん「蜜蜂」(名) 2 みつばちさん

六 143 2 みつばちさんがとんできて、「略。」と、うたいながらいいました。

六 143 8 五ひきのうさぎさんたちは、みつばちさんのことばを、たいへんありがたく思いました。

みつぼう「満坊」(人名) 18 満ぼう 満ぼう

十五 60 9 ふつう「満ぼう」でとおっていた私は、そのときちょうど四つのいたずらざかりであった。

十五 61 2 満ぼう、満ぼう。」といって私をかわいがった。

十五 61 2 満ぼう、満ぼう。」

十五 61 11 満ぼう、いいところへつれて行ってあげるから、さあ、出かけよう。」

十五 62 6 満ぼうがまた、おくの手をだしたよ、よかったなあ。

十五 62 8 満ぼう、なにが気にさわったの、おぼさんにいってごらん。」

十五 63 11 満ぼう、これでどうだ。

十五 64 9 満ぼう、これか。」

十五 66 2 ご両人の名まえ入りの大きな写真を二まい、満ぼうへと名さして送ってくださった。

十五 66 5 ありし日をしのぶことをわすれなかった満ぼうの心から、

十五 67 6 「おお、満ぼう。」

十五 68 5 満ぼうが来た。

十五 68 5 みんな早く出ておいで、満ぼうが来たよ。

十五 69 4 その口もとがほころんで声さわやかに「満ぼう。」とよびかけそうであった。

十五 71 2 ああ、満ぼうがいすにこしをかけて、ペンをにぎっている。

十五 71 11 「満ぼうがまいりましたよ。」

十五 72 3 「満ぼうですよ。」

十五 76 3 ああ、新島のおじさんが、いまなお満ぼうを守っていてくださったのだ。

みつぼうじだい「満坊時代」(名) 1 満ぼう時代

十五 69 7 つくえの上に、くつをみがかせた満ぼう時代の私の写真がかざられてあるではないか。

みつぼうせんせい「満坊先生」(人名) 1 満ぼう先生

十五 61 4 「ちかごろ、満ぼう先生はいかが、毎日お話ししております。」

みつめる「見詰」(下) 18 みつめる 見つめる

《メーメル》

三 13 1 はんたかは目をかがやかせて、おしゃかさまのおかおをみつめました。

六 7 11 女の子はただじっとみつめていたが、

六 10 7 しごと台のそばで、ふさぎこんで下をみつめていた女の子が、

六 52 6 じつと月をみつめていると、月は動かないで、雲が大いそぎでとんでいくようにもみえます。

九 12 5 くもは、きつとなつてその方をみつめました。

九 14 11 くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげとみつめました。

十一 68 2 大きくみ開いた目をあけて、じつと空間をみつめている者もありました。

十一 69 8 病人はしげしげと少年をみつめて、いくらかわかったようでしたが、

十一 70 11 けれども、病人は、いっしんに少年をみつめたあとで、目を閉じました。

十一 76 9 でも、ハンカチを目にあてているときには、じつとみつめていました。

十一 83 1 父親は、じつと病人の方をみつめたあとで、いくども少年にほおずりしてからいきました。

十一 84 12 病人は、そのとき、目を開いて、じつと少年をみつめました。

十一 85 12 父親は、じつと少年をみつめていましたが、やがてまた、病人の方をみしました。

十一 88 11 病人はしげしげと少年をみつめながら、ときどきむりにくちびるを動かして、

十二 17 1 文雄は立ちあがってすこしはなれたところからじつとみつめた。

十四 38 3 みんな「一人の人」の見ている方を遠く見つめる。

十四 99 2 じつと見つめているうちに、一つの明るい星が落ちるのを見た。

十五 59 6 その関係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、つと立ちあがって、

みてとる「見取」(五) 1 みてとる 《一ツ》

七 77 4 このようすを、甲乙ふたりがみてとって、なにか、こそこそささやきあう。

みとおす「見通」(五) 1 見とおす 《一ス》

十四 96 10 その女の子は、中のへやをすっかり見とおすことができた。

みどり「緑」(名) 19 みどり じきみどり

三 81 10 マイクルはみどりがすきでした。

五 39 6 ふもとになるにしたがって、木のみどりがこくなってみえます。

六 19 6 みどりの木の葉は喜びにみち、きよらかな風は、われわれの音楽をほめてくれる。

七 31 9 白いえのぐにみどりをとくしたような、美しい羽ですこと。

八604 麦ばたけは黄色く、からすむぎはみどりであった。

八617 そうして、みどりの葉の下で、あたりをみまわした。

八618 みどりは目のためにいいから、親あひるはみただけみさせてやった。

八887 たくさんの木がかんばしくにおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上のびていた。

十一348 晴れ空はみどりにすんで、日ましに日ざしが強くなり、

十三172 みどりの牧場と、もみと、しらかばの森林と、

十三211 ユートランドのあれ野には、年ごとに、みどりの野が広がりました。

十三223 みどりの野はできたが、〈略〉建築用材を求めるダルガスの熱望は、実現されません。

十三263 誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、

十三492 みどりの森が、喜びの声でわらい、波だつ小川が、わらいながら走っていく。

十三495 みどりの丘が、その声でわらいだす。

十三496 牧場が、生き生きしたみどりでわらい、きりぎりすが、楽しい景色の中でわらう。

十四983 たくさんの小さな小さなうそくが、みどりの枝の間からかがやいて、

十五9611 小さな「幸福」のむれ、〈略〉しながら、みどりの園のおくからかけだして来て、

十五1031 森の幸福で、みどりの着物を着ています。

みどりいろ 「緑色」(名) 7 みどりいろ みどり色 二134 ひとつは まっかでした、ひとつは、はるばるだけ みどりいろをしていました。

三819 園 「みどり色、みえた。」

三937 やわらかな もうせんを しいたようなし ばふ、みどり色に つやつと 光ったし ばふ。

九47 黄色のかわりに、みどり色をぬつてみると、また、ちがった感じがします。

九49 みどり色のかわりに、むらさきをぬつたら、どうなるでしょう。

九5911 黄色なじんばおりのような物を着て、みどり色の目をまんまるにして立っていました。

十一474 津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆれて、

みどりこ 「嬰兒」(名) 1 みどり子 十五63 園 朝ざくらみどり子にいうさようなら

みどりのの (課名) 2 みどりの野 十三26 三 みどりの野……十七

十三171 三 みどりの野 ひとつとれる 「見蕩」(下) 4 みとれる 見とれる

《一》 おおみとれる 四1275 けしきに みとれながら あるいて います

と、どこからか、よいにおいがしてきます。 五939 りようかんさんは、いつまでも月にみとれて

いました。 九1105 そのみごとなすべりぶりにみとれていると、

先生たちは、もう目のまえにこられた。 十三346 夜のふけるのも知らないで、見とれてしまふ。

みな 「皆」(名) 16 みな 六945 園 民なものにたずねるが、だれか、この

かたのつりばりをとっていったものはないか。 九862 四人が話しあつてしらべ、へんだと思う物

は、みなかごの中にいれておきました。 九1162 文 園 階上のが電燈のきえにけりみわたす

家々みなまくらなり

十414 この赤しおのために、母貝はみな死んでしまった。

十一307 園 紅梅・白梅みなりはてて、ひがんす ぎれば風あたたく、

十一319 園 えんどう・そらまめみな花つけて、羽 音高くみつばちがとぶ。

十一397 園 おおむぎ・こむぎの種まきすんで、そ らまめ・えんどうみなまいた。

十一401 園 山のもみじ葉みなりはてて、青くし げるはまつ・すぎ・ひのき。

十一5110 電車は、くるにはくるが、みな満員の札 をさげて、とまらずに走っていつてしまふ。

十一548 どれもみなうまいことばだ。 十二3711 こうして私は、物にはみな名まえのある

ことがわかったのです。 十三111 これらの人がみな同じ性質をもち、同じ

運命をたどるとは、考えられない。 十三3411 れんは、めでたい文句や、詩の一節であ

るが、みな、りっぱな文字で書かれてある。 十五462 かれには、みなめずらしいものばかりで

あった。 十五743 親の目から見れば、自分の子女は、〈略〉

かわいことはみな同じであつて、 十五1019 「幸福」たちは、みなどつとわらいます。

みなぎる 「漲」(五) 1 みなぎる 《一ツ》 十四46 それは、フィリップの作品の中にみな

ぎっている大きな愛の氣持、 みなさん 「皆」(名) 40 みなさん じせんせいとみ

なさんへ 一513 園 みなさん、どうかゆっくりおやすみく ださい。

二五九 皆さんのつかっているつくえも、こしかけも、長いあいだはたらいできました。二六四 こんど、みなさんが二年生になったら、あたらしい一年生がはいってきます。三九四 皆さんのかいたえでも、字でも、だいにじにしまっておきなさい。三九六 皆さんの大きくなってから、それを見るのは、ほんとうにたのしいものですよ。五一〇 三 ころは、みなさんで、苦勞をしてほってください。トネルですよ。五三九 三 このきれいなけしきを、みなさんにおみせしたいと思います。五四〇 三 ほっかいどうのみなさん。五四二 三 かかし「みなさんで。」五四五 三 さあ、みなさん、日がくれきらないうちにおねがいします。五四七 三 どうぞ、皆さんの氣づいたことは、なんでも、かかりのものにお知らせください。六六一 三 みなさん、ためしてみてください。六九七 三 みなさん、ありがとうございます。七二九 三 「みなさん。」と、大きな声をだした人があった。七四一 三 みなさん、たいへんさしでがましいことですが、わたしにちよつと話をさせてください。七四九 三 みなさん、いかがでしょう。七四四 三 「みなさん、ありがとうございます。」九一六 三 ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわすれたことはありません。九一七 三 先生のことを思うと、みなさんがうらやましくなります。九三九 三 みなさんもお元氣ですか。九四一 三 先生やみなさんといっしょに、この湖へ

つりにいけたらと、いつも思っています。九四九 三 ぼくはみなさんにあつてお話がしたいと思いましたが、九四六 三 「小公子」をみなさんにお話してあげてください。九四八 三 あの廣い学校の運動場で、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。九四六 三 先生、みなさん。九四八 三 みなさんのひろった物の中に、九四八 三 みなさんは、能というものをみたことがありますか。六四 三 みなさんも、大きくなったら、〈略〉よい藝術を味わうことを、喜ぶだろうと思います。一一二 三 わたしがみなさんのお役にたたないですみません。一二五 三 「みなさん、ころろにこのたまごをテーブルの上に立ててごらんなさい。」一二五 三 「みなさん、これも人のしたあとでは、なんのぞうさもないこととごいましょう。」一四三 三 みなさんは、〈略〉わく星が、太陽を中心として回轉していることを知っています。一四三 三 みなさん、ごらんなさい、あの天上の星を。一四三 三 みなさん、あなたがたは、いま、日々の生活にもつらい思いをしていますか、一四四 三 みなさんのように、明かるい地の上でくらしているかたには、一五九 三 日本の小学校のみなさんに、このあいさつを送るだけの特別の權利があると信じます。一五九 三 私のつくえの上には、日本のみなさんが書いたあつい絵の本が、いつもおかれてあります。一五八 三 そう思いながら、年よりの私は、日本の

小学校のみなさんに、はるかなあいつを送り、一五八 三 みなさん、いらっしやいよ。一五八 三 みなさん、私は神さまのおいつけを守っているのです。みなさんがた「皆方」(名) 1 みなさんがた一二四 三 みなさんがたの代表が、全國からここに集まって、いろいろなことを相談します。みなさんじしん「皆自身」(名) 1 みなさん自身九四八 三 みなさん自身で、だんだんいろいろなことを知ってくると思っています。みなそこ「水底」(名) 1 水そこ一五三 三 きんぎょが「びき、すいすい」とういてきたかと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。みなそこ「水底」(名) 1 水そこ一二六 三 八郎は思い切つて、水そこにとびこむと、小川がひろがつて、みるみるうちに湖となった。みなと「港」(名) 4 みなと 港三八九 三 みなとではどうでしょう。九八 三 「絵はがき」「港」「友だち」など、いろいろなことばを組みあわせてみましょう。一一三 三 おりから、港の方でふえが鳴る。一三 三 森林と、近海の漁場のほかには、鉾山があるのでもなく、いい港があるのでもなく、みなみ「南」(名) 16 みなみ 南一三二 三 きた——みなみ——にし——ひがし——三八九 三 南の友だち。一五八 三 北の方へいく友だちと、南の方へいく友だちと、西の方へいく友だちと、一五九 三 私たちは、汽車につまれて、どんどん、南へはこばれました。六四二 三 南へひきあげるついでだから、えんりよしなくていいのよ。

八46 北はほつかいどうから、南はきゆうしゅうやそのさきの島々まで、いたるところの山野に、九17 1 つばめのゆくさは、遠い南の海のかたです。  
九178 しかし、つばめは、もともと南へとんでいくのです。  
九194 おりから南へ飛行中だったつばめは、食にうえ、つめたい雨にずぶぬれになって、九210 なるべく早く南のあたいたかところへ運ぶために、飛行機をつかうことにしました。  
九523 図 「やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方へとんでいきました。」  
九527 図 南なら、あっちの山の中だ。  
九536 図 「やまねこなら、けさまだくらいうちに、馬車で、南の方へとんでいきましたよ。」  
九538 図 南へいったなんておかしいなあ。  
九542 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木の森の方へ、新しい小さな道がついていました。  
十一405 図 南にかたむく日につれて、光はまともになんにさす。  
みなみアフリカ (地名) 1 南アフリカ  
十二119 リビングストーンが南アフリカを探けんしていたときの話です。  
みなみがかゝる 「南掛」(五) 1 南がかかる 《一ッ》  
十四76 10 われわれが冬期に受ける北西の風と、夏季の南がかつた風になるのです。  
みなみヨーロッパ (地名) 1 南ヨーロッパ  
九182 秋には、南ヨーロッパを通して、遠くアフリカまでもいって、冬ごしをします。  
みならい 「見習」(名) 1 みならい  
九45 10 図 兄は、大きくなって農業をするために、いま知りあいの家でみならいをしています。

みなり 「見形」(名) 3 みなり 身なり  
三464 そのとき、みなりのりっぱなかたがたが大ぜいおとりになって、  
十二9 11 ひとりのみすばらしい身なりをした老人が、道路をうろうろとみまわしながら、  
十二728 のりをとりにでるりょうしの子どもたちで、どれも身なりはきれいではないのですが、  
みなれる 「見慣」(下) 1 みなれる 《一レ》  
五369 みなれない木や、草や、動物がみえますね。  
みなくい 「醜」(形) 13 みなくい 《一イ・一ク》  
八652 それは、ひどく大きなからだで、たいへんみなくいものであった。  
八664 みなくいあひるの子も、いっしょになっておよいだ。  
八681 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくいあひるの子の首すじにかみついた。  
八702 みなくいあひるの子は、あひるのなかまからわる口をいわれるばかりでなく、  
八719 そこで、みなくいあひるの子は、かきねをとびこえてにげだした。  
八71 11 図 「これも自分がみにくいばかりに——」と、あひるの子は思った。  
八727 図 「おまえさん、おまえさんはずいぶんみにくいね。」と、かみがいった。  
八736 図 きみはじつにみにくいから、氣にいったよ。  
八74 11 したは口からたれて、目はみにくく光っていた。  
八757 図 「自分がみにくいので、いぬもかみつこうとしない。」  
八93 10 図 私がまだみにくいあひるの子であったとき、こんな幸福があるなどとは、

九147 11 みなくいと思っていた自分のからだも、うみにくいとは思えなくなりました。  
九148 11 もうみにくいとは思えなくなりました。  
みなくいあひるの子 (課名) 2 みなくいあひるの子  
八35 六 みなくいあひるの子……六十  
八60 1 六 みなくいあひるの子  
みね 「峰」(名) 4 みね  
四534 やっと高い山のみねをこえました。  
六1379 うさぎさんたちは、谷をわたり、みねをつこえました。  
十225 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえざくらの花。  
十一352 図 空にくずれる雲のみね、庭にかがやくひまわりの花、あぶらぜみの声さわがしく、  
みの 1 かくれみの  
みのうえ 「身上」(名) 2 身のうえ  
六71 1 図 ああ、なんというなげない身のうえであらう。  
八935 いまでは、すべての鳥の中で、いちばん美しいといわれる身のうえになったのである。  
みのり 「実」(名) 1 みのり  
十一364 図 日はまた照って水たっぷりと、いねのかぶぼりこのうえもなく、秋のみのりも思われる。  
みのる 「実」(五) 5 みのる 《一ッ・一ラ・一リ・一ル》  
七184 図 よくみのつてから、油をとるんだからね。  
十一373 図 さやまめ・とうきびよくみのりいももふとってくるようす。  
十三98 かふんがめしべにつくときはよくみのるが、つかないときはみのらないことを、  
十三99 つかないときはみのらないことを、知る

ようなものである。

十五657 秋たけてりんごのみのころ、

みはからう 「見計」(五) 1 みはからう 《ーッ》

八209 くらくなりかけた夕ぐれをみはからう、

思いきって土をかきわけて地上にはいだします。

みはらしだい 「課名」 2 みはらし台

八34 五 みはらし台……五十六

八561 五 みはらし台

みはらしだい 「見晴台」(名) 3 みはらし台

八581 ある日、ぼくは遠足でみはらし台へいった。

八5810 みはらし台に立ってみると、目のまえに高

い山々がそびえて、ずっとつづいている。

八592 ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠

鏡をのぞいてみた。

みはりばん 「見張番」(名) 3 みはりばん

四554 そこで、目ざといがが五六は、あちこ

ちで みはりばんをしました。

四579 すっかり用意ができると、みはりばんの

がんたちもあつめました。

四591 〇 「みはりばんがない。」

みはる 「見張」(五) 1 みはる 《ーリ》

十368 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、

ふしぎな機械に目をみはりながら、

みひよこ (名) 1 みひよこ

四681 かえるがひとひよこ、ふたひよこ みひよ

こ、

みひらく 「見開」(五) 1 み開く 《ーイ》

十一682 びっくりでもしたように、大きくみ開い

た目をあけて、

みぶり 「身振」(名) 4 身ぶり

十二883 ことばは、〈略〉、音声や身ぶりによって、

いろいろなその意味がわかる。

十二10810 舞う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶ

りによって、

十五344 私たちは、自分の考えを表わすのに、こ

とばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。

十五7810 人の心をひくために、しかめつらをし

たり、みょうな身ぶりをしてはならない。

みほのまつばら 「三保松原」(地名) 2 みほのまつ

原

四1263 ところ みほのまつ原

四1271 ひとりの りょうしが、みほのまつ原へ

でてきます。

みほん 「見本」(名) 1 みほん

三338 〇 お米や 豆を いった、みほんの まるい

びんも ありました。

みまい 〇 おみまい

みまもる 「見守」(五) 1 みまもる 《ーッ》

十一893 その晩、少年は夜どおしそばについて、

病人をみまもっていました。

みまわす 「見回」(五) 15 みまわす 見まわす

《ーシース》

一628 どんとうでも ついたのかと おもって み

まわすと、

三1009 竹やぶを みまわしていますと、ねもとの

びかりと 光る 竹が 一本 ありました。

五549 それから、あたりをみまわしましたが、空

は、まだ、ほんのりと明かるくて、

六444 ねじは、おどろいてあたりをみまわしたが、

六777 ふたりはそこらをみまわしていたが、

七749 甲乙ふたりが、あちこちをみまわしながら、

なにか、ものをさがして歩いてくる。

七754 ふたりそろって、遠くをみまわす。

八275 天帝は、あたりをみまわして、なにかさが

すようになさいました。

八617 そうして、みどりの葉の下で、あたりをみ

まわした。

八764 なん時間もたってから、ようやくあたりを

みまわし、

九407 〇 すこし気がおちついてから、ぼくはあた

りをみまわしますと、

十一6712 目を右に左に向けて、青ざめた、やせこ

けた顔をしている病人たちをみまわしました。

十一8111 男はみまわして、ひと目少年をみると、

こんどはかれがさげびを発しました。

十二1011 ひとりのみすばらしい身なりをした老人

が、道路をうろうろとみまわしながら、

十五949 チルチルそこらを見まわして、〈略〉。

みまわる 「見回」(五) 1 みまわる 《ーレ》

十一361 〇 くわをかついで田をみまわれば、日は

また照って水たっぷりと、

みみ 「耳」(名) 47 みみ 耳 〇 おみみ・ききみみ

一273 目はふたつ、みみもふたつ。

一289 〇 「きのう、その みみで なにを ききま

したか。」

一459 おんなの人たちが、ながい みみを ふり

ふり、もちものをしらべています。

一4610 おじいさんが、やつぱりながい みみを

ふりふり、わたくしたちをよびました。

一501 きがついてみると〈略〉みんなながい

みみのある、あかい 目のうさぎさんでした。

一5710 わたくしは、かたほうだらりとさがった

しろちゃんのみみをみてきました。

二3510 〇 四人めのめくらは、耳にさわって、

三891 じぶんの 耳で きいた ひびきを、 かき

とって みましよう。



四三二 この町の耳です。

四三六 図 かずこさんの 耳には、おとうさんのことばが、ひびいてきたのです。

六四五 いろいろな音や、みたこともないような物が、ごたごたと耳にはいり、目にはいるばかりで、

六二七 時計屋さんは、しあげた時計をちよつと耳にあててから、ガラス戸だなの中につりさげた。

六二九 「ナ」といながら、耳できいてみると、まるで「ダ」といっているようだ。

七五九 おうえんの声が耳にひびいてくる。

七九三 ねこが顔をあらうように、うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました。

七九四 けさ、白うさぎは耳にけがをしました。

七九二 耳の長さも計りました。

七九三 耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6cmでした。

八四七 王子はふと立ちどまって、その声に耳をかたむけました。

九七三 このことばを耳にしたり、文字でよんだりしますと、夜のしずかなけしきを思い出します。

九五七 男は、喜んで、息をハアハアさせて、耳のあたりまでまっかになり、

九六二 やつぱりやまねこの耳は立ってとがっているな、と思ひながらみていると、

九八二 口々にこんなことをいうのを、先生は、耳にもおれににならないで、

九二九 くもは、その子もり歌を耳にしながら、光る星をみあげていました。

九三八 くもは、このおかあさんということばを、長いこと耳にしたことはありませんでした。

一五三 耳をすますと、なにか、かすかな音楽がきこえてくるようだ。

二九六 一つの和音を耳にしたときは、〈略〉一音

一音のことも、心にうかべてみたいのです。

一一一 七 ひとくく、かぼそい、おさな子のささやきも、ききもらさない、その耳。

一一二 七 村の人たちは、こう、うわさをしました。が、金次郎は耳にもいれず、それを続けました。

一一三 七 大きな声だが、雨や風の音のために、乗客の耳にきこえそうもない。

一一四 八 しみじみとしたそのように、じつと耳をかたむけているようにみえたからです。

一二九 三 図 ピアノの先生が、散歩にいらつして、あなたの鳴く声に耳をかたむけて、

一二五 一〇 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作って、のりでとめる。

一二六 四 かえるは、うさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。

一三二 五 遠くの方からひびいてくる、いろいろなもの音に、耳をかたむけたりしているのである。

一三三 一 なんといいつても、いちばん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であらう。

一四〇 九 美しい歌は、いまも、われわれの耳にひびいてくるように感じられるではありませんか。

一四一 八 図 かべに耳あり。

一四二 四 耳を地べたに近づけて、なにかもの音でも聞こうとしたりする。

一五七 二 図 うしはしづかにのおのの大きな耳をむけぬ

一五九 四 図 うまよ人間のかさから耳をだして

一五三 七 血まなこになって目の前のてきを相手にしているものには、なんにも耳にはいりません。一五五 七 これを耳にした今右衛門は、「略。」と決心し、いよいよこのしごとに熱情をこめた。

一五八 一 新島襄という名を耳にした私は、とびあ

がらんばかりにおどろいた。

一五九 二 小さな声でうったえる私のくりごとを耳にしたおばさんは、腹をかかえてわらいだした。

一五八 七 図 口は耳までさけているし、だれもそれに立ち向かうものはないのですよ。

一五九 六 その歌を耳にしながら、もっと下級生をかわいがってあげばよかったなと思った。

みみざわり 「耳障」(形状) 1 耳ざわり

一二九 五 図 わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがっておいでだろうと思いました——

みみもと 「耳匹」(名) 2 耳もと

一五二 風が、かすかに耳もとをすぎます。

一三三 七 図 はるかな谷川を聞いているその耳もとに。

一四二 九 自然の現象を観察し、研究することのすきな人には、なかなかおもしろい見ものです。

みやく 「脈」(名) 1 みやく

一一四 七 病人の上にかがんで、みやくをみたり、ひたいにさわってみたりして、

みやげ じおみやげ

みやこ 「都」(名) 3 みやこ 都

一三六 八 図 するがにある山がいちばん みやこにもちかく、天にもちかいそうぞうでございます。

四三三 四 図 月の 都の 天人たちは、みんなそろってまいじようす。

九一八 一〇 しょうわ六年の秋、オーストリアの都ウィーンのできごとです。

みやさまがた 「宮様方」(名) 1 みやさまがた

一三六 六 その 中には、 みやさまがたも おいでになりました。

み・ゆ 「見」(下二) 一〇 みゆ 見ゆ 《エー・ユー

ユル》

八25 1〔文〕 やがて死ぬけしきはみえずせみの声

十五5 3〔文〕 いかに目ざとき 人とても、声の行

くえの 見えんやは。

十五10 7〔文〕 いけがきのすぎの木ひくみとなり家

の庭の植え木の青めふく見ゆ

十五11 1〔文〕 ばらの木の赤きめをふくかきの上に

小さき虫の出でてとぶ見ゆ

十五12 4〔文〕 ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブ

リキの屋根に月うつる見ゆ

十五12 5〔文〕 ガラス戸の外は月あかし森の上に白

雲長くたなびける見ゆ

十五12 7〔文〕 ガラス戸の外につくよをながむれど

ランプの影のうつりて見えず

十五12 9〔文〕 紙をもてランプおおえガラス戸の

外のつくよの明らけく見ゆ

十五13 1〔文〕 あさき夜の月影清み森をなすすぎの

こぬれの高きひくき見ゆ

十五13 3〔文〕 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸

の外明らかに月ふけわたる

みょう 〔妙〕 (形状) 2 みょう

十四69 12 みょうなゆらゆらした光った線や、うす

暗い線が、不規則なもようのようになって、

十五78 10 人の心をひくために、しかめつつらをし

たり、みょうな身ぶりをしてはならない。

みょうじょう 〔明星〕 (名) 1 明星

十五74 4〔文〕 息白しいつまで残る明星ぞ

みょうにち 〔明日〕 (名) 1 明日

九71 5〔文〕 用事これあるにつき、明日出頭すべ

し、と書いていいでしょうか。

みよこさん 〔人名〕 2 みよこさん

三39 8 ぼくがまん中で、右のかたにはいちろ

うくん、左のかたにはみよこさん。

三42 2 みよこさんが、左のかたからはなれて、

麦ばたけのよこ道を かえりました。

ミリ 凡にミリ

みる 〔見〕 (上二) 502 ミル みる 見る 《ミ・ミ

ル・ミレ》 凡うつくしいものをみるよろこび・かえ

りみる・なつてみたいもの・わたしのころほにじ

をみるとおどる

一18 6 〔文〕 うさぎ、なにみてはねる。十五

一19 2 〔文〕 やおつきさま みてはねる。ひらい

一19 7 〔文〕 おもったら、みるまに つぼんだ。

一20 5 〔文〕 おもったら、みるまに ひらいた。

一28 8 〔文〕 の 目で なにを みましたか。〔略〕。

一32 1 つぎつぎと かいて みました。ただおさん

一34 3 〔文〕 、なにになつて みたいとおもいます

一34 8 〔文〕 ん ふきまわつて みたいのです。〔略〕

一39 3 きました。ゆめを みました。ゆうべ、お

一39 4 おもしろいゆめを みました。ゆうべ、お

一39 6 へい ったゆめを みました。十七 山

一47 3 めがねで のぞいて みながら いいました。

一49 8 五 きがついて みると、さっきの人

一57 10 ろちゃんのみを みて ききました。〔へ

一4 4 〔文〕 んなで あつめて みましよう。〔あたま

一7 6 〔文〕 のを、あつめて みましよう。〔あさが

一11 6 えどおりに わけて みました。わけて い

一12 2 のはを ならべて みました。かたちの

一12 5 ものを ならべて みました。ちがつたの

一12 6 ったのを ならべて みました。いろいろ

一21 3 〔文〕 た。しまいまで みて いたいとおも

一23 7 〔文〕 しほみました。みて ください。〔略

一29 4 〔文〕 かずを かぞえて みしました。一ばんは

一30 3 〔文〕 一ど かぞえて みしました。〔略〕。や

二30 9 〔文〕 たしが かぞえて みよう。とんちゃん

二30 10 〔文〕 やんが かぞえて みしました。やつぱり

二31 2 〔文〕 ぼくが かぞえて みよう。ころちゃん

二31 3 〔文〕 やんが かぞえて みしました。けれども、

二32 5 〔文〕 というものを みたことがあるかい

二32 8 〔文〕 めくらだもの、みる ことなかで

二33 1 〔文〕 た。『いや、目で みなくとも、手でさ

二33 5 〔文〕 まだ、さわつて みたこともない。』

二45 6 〔文〕 たくしが やつて みましようか。〔略

二56 9 、ひろいのはらを みました。なの花が、

二57 9 がでて きました。みると、わたくしの

二70 3 〔文〕 「みんな「よんで みよう。』」

二12 5 〔文〕 はなしをして みよう。』とおし

二15 3 ぼんが はんたかを みて、〔略〕。とい

二16 2 きました。それを みたごてんの人々は

二21 7 なおもしろがつて みました。四 はや

二22 6 のきは、いままで みたことも きいた

二27 2 ました。いままで みたことも きいた

二28 2 、せんどうたちも、みて いる人々も

二37 9 〔文〕 いて わたくしを みます。うさぎの 目

二43 2 のりくへい いて みたいと思

二43 4 日、はまべに みて みると、わにぞめが

二43 7 〔文〕 いか、くらべて みようではないか。』

二44 2 白うさぎは それを みて、〔略〕。とい

二59 2 〔文〕 ろまでの ぼつて みよう。』と、ジュデ

二66 5 〔文〕 か、風に きて みようよ。』と、い

二67 7 〔文〕 「じゃあ、雲を みてごらん。そうし

二67 8 〔文〕 ふいて いるか、みてごらん。』と、お

二70 10 〔文〕 んだか つまんで みよう。』デビッドが

二71 5 おりて、つまんで みしました。けれども、

二74 3 〔文〕 り道を さがして みましよう。』と、お

二74 9 。みんなは そこを みました。お日さまが

三754 かいきをつけてみていなさい。」その  
三794 だれひとり、上をみたりまわりをみた  
三794 ました。みんながみますと、そのあま  
三847 きを、かきとってみましよう。ていしや  
三891 ないでください。みにきた人が一本  
三927 てから、それをみるのは、ほんとうに  
三997 その竹を切つてみますと、小さな、き  
三1013 ぐやひめのかおをみると、すぐなおり  
三1033 からのびあがつてみたり、へいのすき  
三1042 でもかぐやひめをみた人たちは、「略  
三11310 月夜には月をみて、わたくしのこ  
四156 生んでゐるのをみていた。えつ子が  
四233 んとよく星をみましたね。にいさん  
四298 じぶんにきいてみても、なかなかは  
四583 、みんなのかおをみて、にこにこしまし  
四602 がんのなかまをみなかったかい。」へ  
四624 音がきこえます。みると、なかまのが  
四634 みんなは、それをみて、およろこびで  
四793 ん。ゆーゆうべみたまゆめ。めー目  
四954 いる雪を上からみると、白くて、黒く  
四1193 まは、あけてみました、たまてぼこ  
四1277 いがしてきます。みると、むこうのま  
四1282 ばへよって、よくみまします。りようし「き  
四1285 いなきものは、みたことがない。も  
四1318 た、このようすをみて、りようし「お氣  
五121 ナルだよ。あれをみて、汽車が、とまっ  
五132 うして、きつぷをみるの。」「略。」「へ  
五424 うに、一どいてみたいと思います。」「  
五531 いうので、西の方をみると、日がしずんで  
五537 はるおが、東の空をみながらいました。  
五5311 いいながら西の方をみると、小さな星がち

五551 と、家のまえにでてみました。三十分ぐら  
五555 と思つて、西の空をみましたが、わかりま  
五558 せますよ。いつてみませんか。」と、さ  
五562 いました。「今夜みるのは土星です。あ  
五581 「あんまり長くみていないで、さあ  
五583 へ。」はるおは、まだみていたいようでした  
五5810 、「どの星もみんなみてしまいたいな。」  
五594 ました。私は、いまみてきた土星を、紙に  
五688 おじいさんが帰つてみると、おばあさんは  
五7310 おじいさんが帰つてみると、どうでしょう  
五773 ころへ帰りました。みると、まえに住んで  
五791 た。そうして、川をみて氣のついたことを  
五829 お友だちが、学校をみにいらつしやいまし  
五849 を、五十音にわけてみるといいました。「へ  
五892 山からたにそこみれば、うりやなす  
五896 山のから海べをみれば、波にうかん  
五915 きました。「略。」「みると、ざしきのまん  
五951 ていつて、かつてみよう。」「さんちゃん  
五953 えて、たべさせてみよう。」「とおつしや  
五981 みんながとびおきてみると、どこかのねこ  
五1001 んにいわれて、よくみると、ねこにひつか  
五1063 た。ひわは、それをみると、「略。」「と、  
六45 、いろいろな音や、みたこともないような  
六47 だんだんおちついてみると、こは時計屋  
六68 いるが、どれをみても大きくてえらそ  
六89 ら、しごと台の上をみて、だしておいたね  
六172 て、はとが下の方をみますと、かりうどが  
六263 一まどからそとをみて、「略。」「あり二  
六285 まあ、おねがいしてみよう。」「きりぎりす  
六291 り一、二が戸の方をみています。あり三  
六442 がらす一「ほら、みてごらんよ。ほんと  
六535 お月さまをじつとみていてごらんさい

六537 もね、雲をじつとみていてごらん。お月  
六539 なあ。お月さまをみてみると雲が動いて  
六5310 いていくし、雲をみていとお月さまが  
六545 ばらく枝ごしに月をみていましたが、「略  
六549 を枝のあいだからみてごらん。」「ふたり  
六5410 はそのとおりにしてみました。すると、月  
六556 がねるまえにそとをみると、空はいつのま  
六558 わの木の下へいつてみました。動かないと  
六559 。動かないと思つてみた月は、もうさつき  
六599 のうた」をしらべてみました。ウスムラ  
六608 を思いだして書いてみました。カボチャ  
六615 みなさん、ためしてみてください。(はら  
六666 でもお話をつづけてみましよう。どんなふ  
六679 と、さはるは子ぐまをみてこわがつて、「略  
六685 、むしめがねでよくみながら書いたのです  
六762 た。はるえはそれをみて、「略。」「ときき  
六824 きなたいをつつてみたいのです。」「ほど  
六825 よ。でも、つつてみるがいいさ。わたし  
六837 しい。ひきあげてみよう。よいしょ。」「  
六889 木だ。のぼつてみよう。」「木にのぼつ  
六891 木にのぼつて、下をみる。ほおりの「おや、  
六897 とする。いどの水をみて、女「まあ、りつ  
六935 つそくさがさせてみましよう。」「女の人  
六998 して、つくえの上をみたりそとのけしきを  
六1003 しきを、大きくしてみようと思つて、右の  
六1005 を持つて、のぞいてみた。どこかの屋根が  
六1024 ら、そとをのぞいてみた。長い物がぼんや  
六1028 わかる。もつと下をみる。屋根だ。しょう  
六1043 あ、人がこつちをみている。森の木のき  
六1081 のだろ、と考えてみた。そのわけは、す  
六1096 で声をだしていつてみると、いかにもはな  
六1099 ミ、「ム」といつてみた。苦しい。はな

六109 11 ながら、耳できいてみると、まるで「ダ」  
 六110 5 「ダンダ」といつてみると、いかにも弟の  
 六111 6 して「ヌ」といつてみた。これもはなから  
 六112 5 メ、「モ」といつてみたら、これらもはな  
 六112 7 ゆんじゆんにいつてみたところが、ふしぎ  
 六113 2 れ以上ふかく考えてみたことはなかった。  
 六114 6 。けれども、あげてみると、なかなかよく  
 六117 2 帰って、そのたこをみて、作りかたを考え  
 六117 3 、作りかたを考えてみました。材料は、ま  
 六130 11 まいました。それをみて、たぬきさんは、  
 七7 10 会 をすうつと通つてみたり、かいだんをト  
 七7 10 会 トントンあがつてみたり、こうどうをの  
 七7 11 会 うどうをのぞいてみたり、みんなが勉強  
 七8 1 会 っ、こしかけてみたり——」かしの木  
 七9 5 会 うまで、わたしのみたこと、きいたこと  
 七11 7 会 ようずなでばえをみたとき、感心して、  
 七13 4 会 すこし、手をいれてみよう。「略。」こ  
 七13 9 、「この手でやってみよう。」とかいった  
 七22 1 会 「しずかにして、みていてごらん。」す  
 七22 3 会 、だいこんの葉をみているよ。」ささや  
 七25 4 会 ださい。日記帳をみますから。」日記帳  
 七25 5 会 すから。」日記帳をみながら、兄「たまご  
 七27 8 会 なぎをふしぎそうにみながら、「略。」母  
 七29 2 会 たの。」兄「よんでみましょうか。」母「よ  
 七29 10 会 、学校から帰つてみると、あおむしは、  
 七30 8 会 なく、しくびんをみる。兄「おやつ、お  
 七32 1 会 、こんなところをみるのは、はじめてで  
 七37 4 、「略。」ときいてみました。人ごみのう  
 七39 10 心配そうに私の方をみていましたが、三人  
 七42 10 だした人があった。みると、しらがの老人  
 七43 3 、みんなこの老人をみた。「略。」はくし  
 七62 3 ぐらの花をしらべてみたり——どの花も、

七66 3 が三人。ふろからみてる十三夜さん。雲  
 七77 10 会 せん。」甲「どこでみましたか。」旅人は、  
 七78 6 会 は、そのらくだをみたものではありません  
 七78 9 会 。」旅人「いいえ、みたのでも、きいたの  
 七80 7 会 。」乙「目がさめてみると、らくだがいま  
 七82 7 会 わかった。」旅人をみて、裁判官「なにか、  
 七84 1 会 くいとしたあとをみますと、かみきれな  
 七84 4 会 。」裁判官「きいてみれば、いちいち、も  
 七87 2 会 たべるか、しらべてみることにしました。  
 七90 2 会 くもり 24度 よくみていたら、ねこが顔  
 七90 10 会 を、水の中へいれてみたらうきました。う  
 七92 8 会 の毛の長さを計つてみたら、白は2cm、黒  
 七93 3 会 29度 朝、いつてみたら、右から四ばん  
 七94 5 会 ぎのところへいつてみたら、暑いのでねむ  
 七95 4 会 19度 けさ、いつてみたら、左がわのへや  
 七95 6 会 けていました。よくみると、おくの方に、  
 七97 10 会 た。うさぎは、人がみていると、ちちをの  
 七98 3 会 13度 朝早くいつてみたら、子うさぎは巢  
 七98 4 会 いました。お書ごろみたら、子うさぎは、  
 七98 8 会 ぎのめかたを計つてみました。母うさぎは  
 七99 5 会 欠 晴 14度 けさみたら、母うさぎと7  
 八5 4 会 んだらうとのぞいてみると、ひとりの小鳥  
 八8 2 会 「略。」と、きいてみたりするのです。「へ  
 八23 8 会 はなれていました。みるまに、羽はすらり  
 八30 2 会 男のうでをためしてみようと考えて、黒う  
 八32 1 会 づけました。それをみた天帝は、たいへん  
 八36 1 会 夜になつて天の川をみると、なんともいえ  
 八37 8 会 は、「この花が、みたとおりのこがねな  
 八40 9 会 した。庭の草木は、みているうちに、ぴか  
 八51 2 会 家のまえにいるのをみて、「略。」とたず  
 八53 11 会 その家の人がでてみると、まづしいこじ  
 八56 2 会 朝早くはまにでてみると、目のとどくか

八56 4 ぐな足あとをつけてみようと思つて歩きだ  
 八56 5 会 いてからふり返つてみると、足あとが曲が  
 八57 1 会 をみさだめて歩いてみよう。五百メートル  
 八57 4 会 じるしにしてやつてみよう。小船にいきつ  
 八57 5 会 歩いてきた足あとをみると、みちがえるよ  
 八58 3 会 きた方をふり返つてみると、足もとの森や  
 八58 10 会 みはらし台に立つてみると、目のまえに高  
 八58 11 会 つづいている。下をみると、大きな川が遠  
 八59 2 会 る望遠鏡をのぞいてみた。すると、向こう  
 八59 9 会 ことを先生に話してみたら、先生は、「略  
 八61 8 会 いから、親あひるはみただけみさせてや  
 八61 8 会 あひるはみただけみさせてやった。「略  
 八64 6 会 もうすこしだいてみましょう。いままで  
 八66 11 会 しせいの子だ。よくみればきれいな子なの  
 八67 1 会 たしの子だ。よくみればきれいな子なの  
 八67 10 会 の鳥が、「あれをみるがいい。あそこに  
 八72 6 会 て、新しいなかまをみた。「略。」と、か  
 八79 1 会 あ、かつておいてみよう。」と、おぼあ  
 八84 5 会 ひるの子は、それをみて、ふしぎな氣持に  
 八89 11 会 ようはあひるの子をみた。そうして、羽を  
 八90 8 会 のうつつているのをみた。それは、ぶかつ  
 八91 1 会 うのたまごであつてみれば、あひるの小屋  
 八94 6 会 ので、手ですくつてみますと、かるいもみ  
 八95 2 会 をとりかえるときにみたらもみのもとのほ  
 八99 5 会 数のふえるようすをみることにしました。  
 八102 7 会 1つぶを虫めがねでみると、毛のようなも  
 八103 2 会 朝、花のようすをみにいきましたら、ま  
 八104 1 会 んだあとをさわつてみると、いまだでべし  
 八104 3 会 した。二つにわつてみたら、中に、青いも  
 八105 9 会 のくきの数を数えてみますと、大きなかぶ  
 八106 2 会 をみんなでしらべてみました。1本ずつ植  
 八106 4 会 た。両方をくらべてみて、あまりちがわな

八106 6 もみの数をしらべてみました。1本のほに  
八109 3 ぐにもみすりをしてみました。どんどんす  
九47 、みどり色をぬってみると、また、ちがっ  
九510 をいっしょにひいてみると、まえとはちが  
九62 四音と組みあわせてみると、さらにちがっ  
九66 よにあわせてひいてみたらどうでしょう。  
九88 かのことばをつけてみましょう。「風」を  
九810 ろなことばをつけてみましょう。おしまい  
九91 とばを組みあわせてみましょう。二つか、  
九111 、じっさいにきいてみると、たしかに水の  
九141 。しばいで、ゆめをみていた人が、にわか  
九164 、ならんでいるのをみると、なにかしら相  
九244 このことをしらべてみますと、やはりそう  
九255 とつばめのすがたをみた人は、きつと、「へ  
九256 文」 はじめてつばめをみたよ。」といって喜  
九294 文 しの電燈のたまみておりぬ さるすべ  
九401 手 「足もとをよくみて、氣をつけてね。  
九437 手 つ落ちてゐるのをみたときは、思わず手  
九446 手 になつてゐるのをみると、いまにものぼ  
九491 した。おもてにでてみると、まわりの山は  
九502 会 く、もつといつてみよう。くりの木、あ  
九516 会 もうすこしいつてみよう。ふえふき、あ  
九528 会 もうすこしいつてみよう。きのこ、あり  
九535 ざして、いちろうをみながら答えました。  
九539 会 もうすこしいつてみよう。りす、ありが  
九558 、だまつてこつちをみていたのです。いち  
九567 目でいちろうの顔をみて、口を曲げて、に  
九574 会 れなら、はがきをみたらう。」「略」。「  
九575 会 男は、「略」。「みました。それできた  
九5910 と思つてふり返つてみますと、そこに、や  
九602 るな、と思ひながらみていると、やまねこ  
九616 っくりしてかんでみますと、草の中にあ

九618 いるのでした。よくみると、これはみんな  
九636 ずかになりました。みると、やまねこは、  
九742 こがねのどんぐりをみ、やまねこは、とば  
九744 けた顔つきで遠くをみていました。馬車が  
九767 つくつていました。みるまに、貝がらの山  
九801 会 つこれからほつてみることにしましう  
九802 ちは、もう、ほつてみたてうううう  
九805 会 などころをほつてみます。「略」。「  
九810 会 つちこつちほつてみて、なんにもみつ  
九815 会 十メートルほつてみることにしよう。貝  
九822 こをのぞきにいつてみると、先生のかごの  
九827 会 うけんめいやつてみよう。」私たちは、  
九835 会 生におたずねしてみよう。」私はかけて  
九839 会 たね。あとでよくみてあげるから、かご  
九8511 会 あと三十分ほつてみましょう。」もう、  
九932 物のようすで地面をみながらでてくる。な  
九949 、たかぎの手もとをみている。さがしてい  
九954 わざとたかぎの顔をみないようにして、「へ  
九956 よつとやまだの方をみるが、返事をしない  
九963 ぶが、やまだの顔をみると、きゆうにまた  
九966 そのうしろすがたをみて、「略」。「やまだ  
九979 ちよつとたかぎをみて、「略」。「たかぎ  
九10211 会 ながら、「でも、みてあげよう。」たか  
九10611 、大声にさげんだ。みると、大きなうさぎ  
九1074 つえでさされる方をみると、なるほどりっ  
九1219 いいど水をためてみたけれども、どうも  
九1211 、それで茶をたててみると、いままで味わ  
九1233 とんどりして飲んでみたり、ずつと上流へ  
九1234 流へいつてためてみたり、深いところの  
九1235 の水をとつて飲んでみたりしなくてはなら  
九1245 川の水をにて飲んでみると、たいへんうま  
九1247 の本流の水を飲んでみると、もうそれはた

九12511 のぼつて水を飲んでみると、いい味は、す  
九1262 。そこで氣をつけてみると、右岸からさら  
九1263 そこをくんで飲んでみると、それこそまぎ  
九1331 ちのうしろすがたをみていましたが、くも  
九1337 へ。」思わずそちらをみると、こうもりは、  
九1342 「くもが氣がついてみると、あたりにいい  
九1347 ふしぎに思つてよくみると、それは白いち  
九13611 会 のところへいつてみたいと思ひませんか  
九1382 のことが、ゆめでもみるように思ひだされ  
九1387 会 も、おかあさんをみたくなつたよ。」「へ  
九1419 なでています。上をみると、わらつてゐる  
九1421 会 わたしの顔ばかりみて、おかしいこと。  
九14210 「と、くもは、いまみたばかりのゆめを、  
九1442 れから、いいゆめをみることもできた。い  
九1452 のぼし足をのぼしてみました。ふしくれた  
九1459 落ちてくる夜つゆをみてゐると、風がふい  
九175 いのです。日本人をみたことがない子ども  
九1210 女が、おとうさんをみてそっくりしました。  
九178 会 ぞんぶんつかつてみたくなります。わた  
九178 会 、外國でくらしてみて、つくづく、自  
九206 会 わけた光を写してみますよ。」という先  
九2010 会 線ですが、わけてみると、こんなにさま  
九2412 ですくう石炭。20 みるまに、トロッコに  
九276 のを、よくしらべてみる心がまえを、つく  
九2710 などを、たんねんにみようと思ひます。ま  
九291 私、同じものをみるにしても、どうし  
九295 たのか、よく考えてみたいと思ひます。ま  
九299 と、心にうかべてみたいのです。もよう  
九2910 いのです。もようをみたときには、そのも  
九301 か、それをさがしてみようと思ひます。も  
九303 をよく考えていつてみようと思ひます。こ  
九308 弟たちのめんどろをみてやり、兄や姉の手

十 33 3 つかにされるのをみて、父は、「略。」  
 十 35 4 そのりっぱな機械をみて、感心するとともに  
 十 35 9 みたては動かしてみた。だが、思うよう  
 十 36 6 あがった。ためしてみると、はたしてよく  
 十 38 5 てきたが、しらべてみると、けつして、ふ  
 十 39 6 の体内にさしいれてみた。うまく目の中に  
 十 40 1 でも、あとで開いてみると、もとのままに  
 十 40 3 なんどもくり返してみたところで、かわり  
 十 41 5 、まったく考えてもみなかったことである  
 十 43 9 て、死貝をどんどんみていった。すると、  
 十 44 11 第一の母貝を開いてみた。はたして、眞円  
 十 48 10 紙きれに書きとめてみたのです。クロイ  
 十 49 2 ㊦ — ワンワン — ミテルワウシロ —  
 十 50 3 黒いぬに近よってみると、ひふ病にかか  
 十 52 6 そばを通りました。みると、なるほど、「  
 十 55 11 にげなく妹の作文をみました。なんと、わ  
 十 56 8 び時間にふくろうをみにいきました。そう  
 十 62 3 二階の窓からそとをみたら、大きな竹がに  
 十 62 8 は、能というものをみたことがありますか  
 十 64 10 ってもよく、それをみてみると、世の中の  
 十 67 3 わいものはかえってみたくありません。それ  
 十 67 5 ちも、そつといつてみようということにな  
 十 69 9 ㊦。「ふたを取つてみようか。」「略。」  
 十 70 2 っ、ふたをあけてみました。べつにどつ  
 十 70 5 ㊦。ひとつ、たべてみようじゃないか。」  
 十 71 5 ㊦。いぐいといぐいでみたいな。」「略。」  
 十 71 12 ㊦。整調をやつてみたい。ぼくはから  
 十 26 6 しくり返し読んでみると、りっぱな人に  
 十 29 4 水たまりに植えてみました。すると、秋  
 十 44 3 立ちます。それをみよう、父兄の人た  
 十 46 6 に、じゃがいもをみると、ぼくは、北海  
 十 54 2 げられているのをみた。「略。」「略」

十 64 10 は、その知らせをみるとがっかりしまし  
 十 65 1 その手紙をひと目みたら、看護人を呼  
 十 69 6 こして父親の方をみました。すると、か  
 十 70 9 ㊦。たんず。よくみてください。ぼくが  
 十 71 7 ㊦。お医者さんがみにきてくださるだろ  
 十 73 3 がきこえました。みると、医者が、ひと  
 十 74 1 た。医者は少年をみました。「略。」と  
 十 74 7 がんで、みやくをみたり、ひたいにさわ  
 十 74 8 ひたいにさわつてみたりして、そうして  
 十 76 3 その手にさわつてみたり、はいを追つた  
 十 76 4 びごとにかがんでみたり、そうして、看  
 十 76 7 きどき少年の方をみましたが、わかつた  
 十 77 8 。医者は二どきてみて、いくらかよくな  
 十 77 11 みがかんだのをみたような気がしまし  
 十 81 8 とおさえながら。みると、一方の手にあ  
 十 81 11 て、ひと目少年をみると、こんどはかれ  
 十 84 8 っ、病人の方をみました。「略。」と  
 十 85 5 ㊦。いつでもぼくをみています。ぼく、あ  
 十 85 10 ㊦。あんなにぼくをみています。どうか、  
 十 86 1 また、病人の方をみました。「略。」と  
 十 86 12 じつと少年の方をみていました。父親は  
 十 89 9 いて少年をじつとみて、そうして、また  
 十 89 9 思いながらやつてみましたが、もとより  
 十 88 8 たが、孟子の顔を見ると、つと立って、  
 十 10 4 た。そのようすをみていたじゅんさが、  
 十 11 11 いました。それをみた土人のひとりが、  
 十 16 9 、パレットの上でみたときは、ずいぶん  
 十 16 10 の上にぬりつけてみると、思いもよらな  
 十 18 5 ㊦。と羽を動かしてみたら、ピッピッとい  
 十 18 11 ㊦。つてよくきいてみると、じょうずなの  
 十 24 7 民ちゃんをひと目みたとき、天にものぼ  
 十 27 11 ちゃんに持たせてみました。「略。」民

十 38 2 目で、すべてをみるようになったから  
 十 40 2 大病にかかって、みるはたらしき、きくは  
 十 40 2 きを失いました。みることもできず、き  
 十 44 4 ㊦。人形しばいをみたことがあるかね。  
 十 45 8 ㊦。いとちがつて、みていると別世界にい  
 十 46 2 ㊦。ものころ、よくみたものだ。あのこ  
 十 48 8 ㊦。ひとつ、作つてみるといいよ。」「略  
 十 56 4 廣く全国で調べてみると、よくにたよう  
 十 56 6 つかの例をあげてみよう。みそ五郎  
 十 61 11 してよく目いってみると、頼んだ品物が  
 十 62 10 て小川の岸にでてみると、美しい小魚が  
 十 63 7 びない。また人にみられるのもこまる。  
 十 71 9 えましたが、雪をみるのが楽しみでした  
 十 78 4 年たちは、これを見て、うれしそうに、  
 十 78 8 だったので、よくみていますと、どこか  
 十 81 1 。日本という國をみたこともなく、また  
 十 84 3 ずをのんで試合をみているうちに、早く  
 十 94 10 ろにいつて遊んでみたいと思う。正男は  
 十 96 7 写真帳をひろげてみると、あなたがたの  
 十 97 2 しょうか。これを見て、どんなことを感  
 十 97 4 がらがあります。みたところ、なんのか  
 十 99 2 たものをならべてみましょう。石の矢の  
 十 102 1 んなさい。これを見て、平和を愛した  
 十 107 9 えた両足、どこをみて、力があふれて  
 十 9 11 。むかしは、星を見て世の中がみだれる  
 十 20 12 、実際に試験してみると、もみの木は  
 十 21 7 小もみを移植してみたらどうか、という  
 十 21 9 もみの間に植えてみると、両種のもみは  
 十 23 6 、実際にためしてみると、そのとおりに  
 十 23 11 げったもみの林が見られるようになりま  
 十 24 4 ときに、しもさえ見ることがあったので  
 十 31 7 りする。それが、見ている人には、かえ

十三 39 5 えの方をちらちら見る。今晩……そう  
十三 42 9 早くきみの顔が見たいよ。きょうはと  
十三 44 12 この四人の声は、見ている人には聞えま  
十三 50 8 も、水がすむまで見ているかもしれない  
十三 51 8 し心は、にじを見るとおどる。おさな  
十三 54 2 います。これを見て、どう思いますか  
十三 54 3 ぼくは、その絵を見ると、そのあかち  
十三 54 6 、だれかに話してみたくてたまらなくな  
十三 55 10 りものとくらべてみると、ずいぶんちが  
十三 56 1 が、おじさんで見ると、いっそう生き  
十三 57 7 その絵を目の前に見るようなうすをな  
十三 57 11 絵は、写真で見ただけでは、明暗は  
十三 60 6 いる一まいの絵を見ました。「略」。「  
十三 60 12 部だ。くらべてみて、うまさからいう  
十四 25 12 いない。そうしてみると、このあいだ、  
十四 26 3 から考えあわせてみると、コレは、オ  
十四 27 11 けたくさん調べてみたいと思った。そこ  
十四 28 2 語辞典をひいてみると、だいたいわか  
十四 29 2 光 あなたがたに見てもらいたいものが  
十四 29 2 のがあるのです。見てもらいたいなどと  
十四 29 5 からでも、自由に見られるものなのです  
十四 29 10 めに、天上の花を見ようとはしなかった  
十四 30 4 の身近なものしか見ないで、遠いもの、  
十四 31 10 あなたがたのものをみる目、ものを考える  
十四 32 1 あなたがたに星を見るようにすめまし  
十四 32 2 中には、「星を見たってなにになる。  
十四 35 2 。大うちゅうから見たら、たしかに、人  
十四 38 3 んな「一の人」の見ている方を遠く見つ  
十四 48 6 ました。近づいてみると、船がしずむひ  
十四 51 6 しあいをやってみたら、おもしろいだ  
十四 54 1 かぼちやの花を見えています。あれは、  
十四 58 3 うことを考えてみたことがありますか

十四 59 5 かぼちやなんて見たことがない。さっ  
十四 62 5 、よく氣をつけて見ていると、だんだん  
十四 63 5 もおいてすかして見ると、しずくのつぶ  
十四 63 7 、日光にすかして見ると、湯げの中に、  
十四 64 9 、横からすかして見ると、ちょうど、け  
十四 64 11 あがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬ  
十四 65 5 る自分でためしてみると、おもしろい  
十四 65 9 これがまた、よく見ていると、なかなか  
十四 67 3 、よく氣をつけて見ていると、なかなか  
十四 67 8 さで回転するのを見ることがあるでしょ  
十四 69 4 、ただ、ちよっと見ただけでは、まった  
十四 69 6 、らい雨をあげてみたのです。湯げのお  
十四 69 7 どは、湯のほうを見ることがにしましよ  
十四 69 9 る湯は、日かげで見ると、べつにかわっ  
十四 69 11 わんのそこをよく見てごらんさい。そ  
十四 70 4 電燈の光をあてて見ると、もつとよく、  
十四 70 7 れますから、よく見てごらんさい。そ  
十四 71 8 ずなどの動くのを見ていても、いくらか  
十四 72 11 や屋根をすかして見ると、ちらちらした  
十四 73 6 、日光にすかして見ると、湯のおもてに  
十四 77 9 にこれをためしてみましたが、ほんとう  
十四 78 5 のほうから割ってみると、もとまで、き  
十四 78 11 っているところを見ると、はじめ、うら  
十四 80 7 もなん代もやってみた結果、とうとう一  
十四 82 11 雪の映画を二つ見た。一つは「雪國」  
十四 83 2 れをうれしそうに見ている雪國の子ども  
十四 83 8 ではあるが、よく見ると、まことにきれ  
十四 84 2 くわしく観察してみると、その雪が、ど  
十四 85 1 角度からながめてみることは、つまし  
十四 86 1 トントンとふんでみたり、しゃがんで土  
十四 89 2 てのひらでなでてみたり、耳を地べたに  
十四 89 3

十四 93 8 くともしびの光を見た。おいしそうなに  
十四 93 10 光とごちそうとを見るだけでも、満足し  
十四 94 2 れで火をともしてみたかったことだろ  
十四 98 7 ち賣りのむすめを見てわらいかけた。女  
十四 98 11 うにかがやくのを見た。たしかにそれは  
十四 99 3 い星が落ちるのを見た。その星が落ちる  
十四 100 1 ったおばあさんを見た。おばあさんは、  
十四 102 6 おおみその晩に見たふしぎなまぼろし  
十五 4 6 の行く末を見ざりけり。空にと  
十五 9 1 かに流れると見ればよきつくよなり  
十五 12 1 戸のともを見ればよきつくよなり  
十五 13 7 す上野の森を見つければ家は家ゆるが  
十五 14 4 けてつくづく見ればばらの木にばら  
十五 15 3 かえる。ただみればこればかりそめの  
十五 15 3 花おどろきて見ればその花動く。ひ  
十五 20 12 山の中の生活は、見るもの聞くものがこ  
十五 21 12 、おもしろそうに見ていました。女の子  
十五 22 11 の方へ顔を向けて見ると、三メートルも  
十五 23 4 、ふと氣がついてみると、いままで先生  
十五 23 6 りをかけまわる。見ると、そのがけの下  
十五 38 10 をちよっと考えてみただけでも、このこ  
十五 42 7 。しかし、考えてみると、世界のどこに  
十五 42 10 もつとよく考えてみよう。四 めぐり  
十五 46 5 りした。いままで見えたこともないものと  
十五 56 6 て紙上計算してみたが、その際算出し  
十五 57 6 して、はじめて見る東洋の青年をひき  
十五 61 5 そえてあったのを見て、その愛されか  
十五 62 2 つのくつをちらと見た私は、たちまちふ  
十五 64 1 「だされたくつを見て、にこにこわら  
十五 64 10 私によびかけた。見るなり私は、おじさ  
十五 74 2 。——親の目から見れば、自分の子女は  
十五 74 7 もない。親としてみれば、自分の子女に

十五749 ある。神の目から見れば世界の人類はす  
 十五7512 いた私のようなを見て、大きな声でわら  
 十五839 会の方をさがしてみよう。」チルチル「私  
 十五852 会がしを。いつてみれば、すばらしく美  
 十五859 会たち、こつちを見たようだ。」とうと  
 十五911 会ことを、みんな見るといいのですよ。  
 十五923 。チルチルがふと見ると、かれらはみん  
 十五946 がにげて行くのを見ながら、「略。」光  
 十五9412 会と、物の真実を見ることができるとだ  
 十五952 会れる幸福の精を見るのだよ。」「ばらの  
 十五993 会いる、こつち見た。こつち見た。」  
 十五994 会見た。こつち見た。」と歌い、子ど  
 十五1032 会『幸福』たちは見られます。また、こ  
 十五1039 会もに『星の出を見ることの幸福』が、  
 十五10410 ましよう。」と、見るまに、黒の肉じゅ  
 十五1062 会人のわらうのを見たことがあります  
 十五10711 会『美しいものを見る喜び』があります。  
 十五1085 会あなたがやってみたって、あれをすつ  
 十五1085 会あれをすつかり見るには、まだ小さす  
 十五1096 会の人、あなたを見ています。そら、手  
 十五11311 会まあ、おまえ、見たことがなかったか  
 十五1152 会いうように私を見なければならぬか  
 十五1167 会「私、あの人を見たことがなかったよ  
 十五1183 会『美しいものを見る喜び』でございま  
 十五1184 会以上のものは、見られないのです。」  
 十五1198 の「喜び」たちを見ながら おや、みん  
 みるから「見」(副) 1 みるから  
 十二828 みるからにりつばな体格は、小さな清水  
 選手のおよぶところではありません。  
 ミルク(名) 1 ミルク  
 十四213 ミルク、コーヒー、ジャム、トマト、  
 みるみる「見見」(副) 1 みるみる

四1196 元気で わかい うらしまは、みるみる  
 しらがのおじいさん。  
 みるみるうちに「見見」(副) 4 みるみるうちに  
 十一62 会みるみるうちにあいてをぬいてしま  
 十二587 みるみるうちに工事がはかどって、九十  
 九の石だんができた。  
 十二6310 八郎は思い切って、水ぞこにとびこむと  
 小川がひろがって、みるみるうちに湖となつた。  
 十二745 みるみるうちにつもりましたが、  
 みわける「見分」(下) 1 見わける『ケル』  
 十五983 会それを見わけることはできないよ。  
 みわたす「見渡」(四五) 6 みわたす 見わたす  
 『サ・シ・ス』  
 六456 「へのへのもへ」のかかしが、むねをはっ  
 て、目をむいて、たんぽをみわたしている。  
 八563 朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎ  
 り、美しい砂地がみわたされた。  
 九1162 会階上のわが電燈のきえにけりみわたす  
 家々みなまくらなり  
 十一468 みわたすかぎりのじゃがいも畑のうねの  
 向こうに、  
 十二614 ああ美しい田さえなく、みわたすかぎり  
 さざなみがうちよせる大きな池となつていた。  
 十四312 世界全体を見わたすことをわすれていた  
 のは、よくないことでした。  
 みんしゅしゅぎ「民主主義」(名) 1 民主主義  
 十二1155 それは、民主主義ということばをほんと  
 うに生かしていくよりほかに道はありません。  
 みんぞく「民族」(名) 1 民族  
 十四804 よその民族から教えられて、それからい  
 い伝えられているものもあるかもしれません。  
 みんてき「明笛」(名) 1 みんてき

十五773 会みんなてききりの中鉄のひびきのかじ屋  
 の火  
 みんな「皆」(話し) 49 みんな  
 二617 みんな「でかけましょう。」  
 二621 みんな「のりしました。」  
 二633 みんな「そろいました。」  
 二635 みんな「しゅつぽつ。」  
 二637 みんな「しゅう、しゅう、しゅう、しゅう、  
 二646 みんな「はやくなる。」  
 二649 みんな「すぎていく。」  
 二653 みんな「ふいてくる、  
 二656 みんな「しゅしゅしゅしゅしゅしゅ……」  
 二659 みんな「あかるくなってきた。」  
 二662 みんな「たなびいている、  
 二6710 みんな「ひばりさんだ。」  
 二682 みんな「はやく、はやく。」  
 二699 みんな「うぐいすさん、  
 二703 みんな「よんでみよう。」  
 二711 みんな「ぜんそくりよく。」  
 三44 みんな「やあ。」  
 三46 みんな「山、山。」  
 三48 みんな「はねかえる。」  
 三51 みんな「山びこ。  
 三53 みんな「山のあの色。」  
 三55 みんな「かぜの手ざわり。」  
 三58 みんな「たのしいたねまき。」  
 三510 みんな「お日さまの光、光。」  
 三63 みんな「はあ。」  
 三65 みんな「春、春。」  
 三67 みんな「おきあがる。」  
 三69 みんな「さくら、さくら。」  
 三71 みんな「かすみになくひばり。」



三73 みんな「さらさら、さらさらさら。」  
 三76 みんな「さらさら、さらさらさら。」  
 三79 みんな「おうい、おうい。」  
 三81 みんな「あつまれ。」  
 三83 みんな「手をつなごう。」  
 三85 みんな「わになろう。」  
 三88 みんな「西の友だち。」  
 三810 みんな「北の友だち。」  
 四971 みんな「よいしょ、よいしょ。」  
 四983 みんな「——」  
 四993 みんな「うん、そうしよう。」  
 四999 みんな「ありがとう、おじさん。」  
 四1179 みんな「さようなら。」  
 六207 みんな「そうしよう、そうしよう。」  
 六253 みんな「はははあ。」  
 十四3810 みんな「夜明けの足音、」  
 十四394 みんな「みんなの朝がくる。」  
 十四406 みんな「おごそかな朝。」  
 十四411 みんな「平和と自由。」  
 十四4110 みんな「胸をはれ。」  
 みんな「皆」(名) 317 みんな  
 一43 誰 なをかざる、みんないいこ。き  
 一52 誰 いなことば、みんないいこ。な  
 一54 誰 よしこよし、みんないいこ。二  
 二14 誰 ちをいけば、みんなかわいいこ  
 二22 誰 うたのゆうぎを、みんながかってにか  
 一232 誰 あるきました。「みんなかわいいこと  
 一423 たしがいますよ。みんなもうごいてい  
 一461 、あぶないものは みんなとりあげられ  
 一501 ばーいさんたちも、みんなながいみみの  
 一503 誰 した。「なんだ、みんな うさぎさんじ  
 一508 おきやくさんも、みんなわらいました。

一529 誰 わらのすなは、みんなちいさなほし  
 一531 誰 略。」「あれは、みんなだいやもんど  
 一573 ん、まきげちゃん、みんなわたくしのう  
 一576 誰 した。「略。」「みんなげんきでうれ  
 一598 も、きょうだいも、みんなよろこんで、  
 一6010 誰 た。「それでは、みんな、あまの川で  
 一613 誰 にいるものは、みんな、たまをひろ  
 一622 誰 、おかあさんも、みんないい人ですも  
 一638 んがくに つれて、みんなが手をとって  
 二43 誰 つくことばを、みんなであつめてみ  
 二83 えでいったので、みんなわらいました。  
 二91 つめたことばを、みんなかきとめてお  
 二98 ねになりました。みんなは、いろいろ  
 二114 。「略。」そこで、みんなは、小さなか  
 二291 誰 たりましたから、みんなむこうのきし  
 二307 誰 。『おかしいな。みんなわたったはず  
 二325 誰 ちのひとりが、みんなは、ぞうとい  
 二334 誰 ました。すると みんなは、『略。』と  
 二368 誰 ていいました。『みんな大がいがいた。  
 二612 はよびかけです。みんなでかんがえて、  
 二618 誰 しょう。」「しょう」「みんなのりましたか。  
 二632 誰 うぶう。」「しょう」「みんな、そろいました  
 二666 誰 っ、しずかに。」みんなは、「しゅしゅ  
 二672 の声でするよ。」みんなは、小さな声  
 二687 もっとしずかに。」みんな、きき耳をた  
 三710 誰 おうい。」たつお「みんなあつまれ。」み  
 三217 べにはりました。みんなおもしろがつ  
 三254 いました。「略。」「みんなはびっくりし  
 三307 おっしやいました。みんなはあちらこち  
 三345 誰 てありました。みんながそのまわり  
 三371 誰 へやのものは、みんな大きいなどお  
 三385 生がくぼんに、「みんなの学校。みんな

三386 、「みんなの学校。みんなのきょうしつ。  
 三462 て、からだのけを みんなむしりとして  
 三588 れます。ある日、みんなであそびにで  
 三602 かまっています。みんなの心があわな  
 三6010 誰 こういいいます。「みんなの心があわな  
 三628 誰 はいいました。「みんなそれでいいね  
 三6210 。「略。」「略。」「みんなも声をそろえ  
 三631 んじをしました。みんなの心があいま  
 三635 かんではいました。みんなはボートにの  
 三656 なりました。もう みんなはどこへもい  
 三679 おっしやったので、みんなは空をみあげ  
 三692 いました。「略。」「みんなの心があいま  
 三697 「略。」「それから みんなはおもしろく  
 三729 りました。「略。」「みんながいました。  
 三733 「略。」「はじめて みんながこうさげび  
 三7310 いました。それで、みんなはいすをおり  
 三745 くださいました。みんなはそこをみま  
 三748 声をあげました。みんなでさがしまわ  
 三773 誰 しかないから、みんなは空をながめ  
 三797 がきこえました。みんなは空をながめ  
 三807 いいです。雨は、みんなのいうことに  
 三810 ふりつづけます。みんなはどうとうえ  
 三847 。」「いいました。みんながみますと、  
 三904 もの このはしは みんなのものです。  
 三916 う。このポストも みんなのものです。  
 三924 たきれいな花は、みんなの心をたのし  
 三929 しまえばいままに みんななくなつてし  
 三933 このていしやばも みんなのものです。  
 三935 。このでんしやも みんなのものです。  
 三936 。このしほふも みんなのものです。  
 三941 略。」「お月さまも みんなのもの。あの

三94 2 のまっ白な雲も みんなのもの。よる  
三94 3 も、あさの風も みんなのものです。  
三104 5 略。』と思つて、みんないっしょうけ  
三105 2 人のねがいをも、みんなことわつてし  
四11 3 じゅうの友だちが みんなあつまつてき  
四15 2 会 がとびたつた。『みんな、しずかに——  
四15 3 びたつた。』みんなじつとして  
四15 5 がおになつた。みんな、鳥ごやにか  
四19 6 おつしやつたので、みんなはそれぞれあ  
四20 3 手 した。『さつき、みんなとねこねずみ  
四20 4 手 あそびました。みんな手をつない  
四20 10 手 つしやいました。みんなは、『略。』と  
四21 9 手 うとしました。みんなは、『略。』た  
四25 3 手 ゃんのことを、みんなでお話ししな  
四30 2 んは、『くみの人 みんな』にきいても  
四30 7 手 います。それで、みんなでなにかおみ  
四31 4 さんも、やはり、『みんな』に知らせた  
四34 4 うたずねられて、みんなは、もう一ど、  
四36 5 『略。』みんなは、しばらく  
四39 1 で話がすすむと、みんなは、めいめい  
四39 10 会 略。』みんなは、よかった。た  
四44 5 びました。『略。』みんなは、それにさ  
四47 5 『略。』みんなは、そうきめま  
四48 9 のがんは、また、みんなをだましてび  
四54 10 がでてきたので、みんながかわるがわ  
四56 4 んだんよくなり、みんながはこんでく  
四57 3 たきをしたので、みんなは、大よろこび  
四58 3 た。かっちゃん、みんなのかおをみて  
四61 5 ひらいて、『略。』みんなは、はしをとり  
四62 1 がかりのがんが、みんなを元気づけま  
四62 2 元気づけました。みんなのねている  
四63 4 でかえりました。みんなは、それをみ

四64 6 まをさげたので、みんなもわらいまし  
四73 2 『略。』みんな、いろいろな  
四81 5 会 このよるを、みんなであそびまし  
四84 4 ツリーのそばで、みんなであそびまし  
四85 2 した。おしまいに、みんながトランプあ  
四85 6 いました。『略。』みんなは、よろこんで  
四85 9 声でいったので、みんながわらいまし  
四93 8 降ってくる雪は、みんな黒い。雪がか  
四96 8 会 ぼう。『子ども』みんなでころがそう  
四97 2 声をかけながら、みんながかめをころ  
四111 10 会 おとひめでは、みんなにおもしろい  
四118 5 、でていきます。みんな、手をふつて  
四120 4 るくなりました。みんなの、手がみえ  
四122 2 会 です。それから、みんなの手で、そだて  
四133 5 会 天人たちは、みんなそろってまい  
五16 5 といつて、私たちをみんながばんにいれま  
五21 5 んでいましたので、みんな、ぶつぶつとこ  
五24 6 会 略。』といつて、みんなを立たせ、不目  
五25 5 会 に、それから、みんなにこにこして、  
五41 11 手 うございました。みんなだいじにして、  
五45 5 会 花のその一つ。みんななかよくさきそ  
五46 1 会 星のその一つ。みんななかよくきらき  
五47 5 とりで通るときも、みんなが通るときも。  
五57 11 会 『略。』また、みんながわらいました  
五58 10 会 までに、どの星もみんなみてしまいた  
五81 1 とびあがつたので、みんなわらいました。  
五82 1 会 んだのでしよう。みんな、からだに氣を  
五82 5 おつしやいました。みんなは、なま水をの  
五83 8 わらいだしたので、みんな、いっぺんにわ  
五84 2 みなになにするか、みんなが話しいまし  
五85 8 会 ました。『おお、みんなそろつてきたな  
五88 9 』。』子どもたちが、みんな、りょうかんさ

五91 2 会 さんは、『さあ、みんなこちらへおいで  
五92 4 会 るわ、のびるわ。みんな、もつとまえへ  
五93 3 』子どもたちは、みんな帰っていきまし  
五98 11 音がしましたので、みんながとびおきてみ  
六20 11 にもつてあります。みんな、楽しそうにそ  
六21 4 ー「こんなことをみんな喜んできいてい  
六23 11 会 が、わたしたちはみんな、はたらくやく  
六25 9 さらにたかまる。』みんなにぎやかに音楽  
六41 10 会 のよ。』子つばめ「みんなできみをおんぶ  
六51 2 の葉も、石ころも、みんなきれいに光つて  
六56 7 たち一組のものは、みんな集まつて、どん  
六57 5 ました。これには、みんなにお知らせした  
六57 7 いことを書きます。みんなが喜ぶようなこ  
六57 8 なことを書きます。みんなのしらべたこと  
六68 7 ました。一組の人がみんなであつてこしら  
六73 4 をもちだしたので、みんながわらいました  
六74 2 会 ているものには、みんな命というものが  
六77 4 会 しているものは、みんな生きものだね。  
六93 7 会 の神「魚どもを、みんなここへよび集め  
六93 11 会 」。海神「これでみんなか。女はいい。  
六98 6 会 さかなたち、みんなであうやら、う  
六105 6 略。』といつて、みんなで大わらいをし  
六106 11 ぜんだなと思つた。みんなもあまりわら  
六107 3 会 』といつたので、みんなは、これで大わ  
六110 8 たはうまくやつて、みんなをわらわせてみ  
六110 11 会 「ネ、ニ」は、みんなアイウエオ、カ  
六112 9 ペポにいたるまで、みんなはなから声ので  
六113 8 と、弟のまねをしてみんなをわらわせてや  
六113 10 く思いついたことをみんなに話して、びっ  
六114 4 げにいったときに、みんなが、『略。』と  
六122 2 ちは、おさるさんにみんなまつかさをあげ  
六128 5 らまわつていくと、みんなはあちらへこつ



十四234 つしやったので、みんなは口々に、「へ略  
 十四242 かのことは、みんな英語だ。」先生  
 十四383 いい音がする。」みんな「一人の」見  
 十四394 ける。」みんな「みんなの朝がくる。」  
 十四397 呼吸をしよう。」みんな氣持よく、のび  
 十四415 てかがやく光。」みんな、かたまつて、  
 十四419 きた。」一人の「みんな、両手をのぼせ  
 十四411 んな「胸をはれ。」みんな空をあおぐ。美  
 十四505 かの婦人たちも、みんなすくいあげられ  
 十四5610 ている実でも、みんなかれて、くさつ  
 十四596 養分だつて、みんな私がわけてあげ  
 十四602 のかぼちゃは、みんなぼくのものだと  
 十四616 公平にいつて、みんなのもです。し  
 十四611 も、葉も、根も、みんな賛成しました。  
 十四693 ら、どれもこれもみんな、茶わんの湯に  
 十四1007 にあつたマッチをみんな一時につけた。  
 十五96 続く、子どもみんな早口に話しつづ  
 十五225 のとき、ふいに、みんなの頭の上が暗く  
 十五229 。なんでしよう。みんなが、おどろいて  
 十五232 風をまき起して、みんなの上へ舞いおり  
 十五233 という声をたてて、みんな草の上へひれふ  
 十五685 満ぼろが来た。みんな早く出しておい  
 十五827 たりしています。みんなびっくりするほ  
 十五8211 こしはに自分で、みんな右手の前の方に  
 十五866 けないの。」光「みんな、あぶないよ。  
 十五881 いう幸福」で、みんな魚のようにつん  
 十五894 おいでなさい。みんなえん会のやりな  
 十五911 のすることを、みんな見るといいので  
 十五923 見ると、かれらはみんなとなくよくテ  
 十五925 ん、ごらんよ。みんなは、テールに  
 十五9310 せんよ。さあ、みんなで、力ずくで、  
 十五947 いざまだらう。みんなどこへ行くの。

十五948 「へ略」光「みんな不幸のところへ  
 十五9511 ているの。」光「みんな知っているよ」  
 十五9711 このへんでは、みんなお金持なの。」  
 十五993 をはりあげて、「みんないる、みんな  
 十五993 みんないる、みんないる、こつち見  
 十五1001 幸福「おい、みんな、聞いたらう。  
 十五1017 幸福「みんな、『おうちにい  
 十五10110 います。幸福「みんな聞いたかい。こ  
 十五1036 ル「そうして、みんな、いつでもあん  
 十五1174 らつしやいよ。みんな早くいらつしや  
 十五11811 。さようなら。みんな起きあがつてお  
 十五1199 ながら」おや、みんなないているのだ  
 十五11910 でも、どうしてみんな、目にいつぱい  
 十五1205 た。在校生たちがみんな、私たちのた  
 十五1208 よ、妹たちよ。みんな元氣で、この学  
 十五1229 ん——先生がたがみんな、合唱してく  
 十五1236 校舎、あの農園、みんなありがとう。――  
 十五1239 こ。ほんとうにみんないい同級生であ  
 みんないいこ「課名」3 みんないいこ  
 22 1 みんないいこ……四  
 41 1 みんないいこ  
 十五1238 「こくこ」の第一課「みんないい  
 こ」。  
 みんないいこ「題名」2 みんないいこ  
 642 「みんないいこ」を、おおきなこえで  
 うたいました。  
 2574 「みんないいこ」をうたいながら、あ  
 るいていきました。  
 みんなのもの「課名」2 みんなのもの  
 335 11 みんなのもの……九十  
 3903 11 みんなのもの

## む

む 5 ム む  
 四773 む——麦の花に、ばらの花。  
 六1094 「かむ」の「ム」がいいにくらいしい。  
 六1095 「ム」と自分で声をだしていつてみる  
 と、  
 六1099 「ム」といつてみた。  
 六1122 「ム」がいえなかった。  
 むいか「六日」(名) 1 六日  
 七486 六日の日、郡ゼンたいのドッジボール大会  
 があつた。  
 むかい じすじむかい  
 むかいあう「向合」(五) 2 むかいあう 向かい  
 あう「イーッ」  
 三331 ぎょうぎよくむかいあつています。  
 十五579 向こうは日本、こちらはアメリカと  
 いて、たがいに向かいあい、  
 むかう「向」(五) 19 むかう 向かう「イ  
 ーッ」じちむかう  
 四413 三十ばの がんは、まいにちまいにち、北  
 へむかつてたびをつづけていました。  
 六317 「へのへのめへ」の顔で、風に向かって  
 立っている。  
 六936 女の人に向かって、海の神「魚どもを、み  
 んなこへよび集めるように。」  
 六969 女の人に向かって、海の神「たいののどか  
 ら、つりばりをとつておやり。」  
 七855 裁判官は、ふたりのものに向かって、

八101 のらねこが通りかかって、にげるどころか、向かっていこうとさえるのです。

八151 ふといみきをつたって、地面に向かつて、すべったりころがつたりしておりていきました。

八705 しちめんちようは、風を受けた船のほうにからだをふくらませて向かつてきた。

九1251 岸にそって上流に向かつて歩きながら、ときどき水をふくんで泉をさがしていった。

九13110 みつばちも、くもに向かいました。

十二579 村の人たちは困りはて、おにに向かつて、一つの難題をもちだした。

十三129 月も、東の空から西の空に向かつて動きまします。

十四712 湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、その方へ向かつて動きます。

十四714 まん中の方では、ぎやくに上の方へのぼって、表面から外がわに向かつて流れます。

十四721 そのまわりの、わりあい熱い表面の水が、そのあとへ向かつて流れ、

十五302 大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かつて来ました。

十五8212 ねこは、ひとことも口をきかず、これも、右手の方のおくへ向かつて歩いて行って、

十五9111 ふとった幸福「光」を指さしながら、チルチルに向かつて、「略」。

十五997 (幸福に向かい) きみはだれなの。

むかえ「迎」(名) 1 むかえでむかえ  
三1104 國から むかえ

がきて、かえらなければなりません。  
むかえる「迎」(下) 12 むかえる「エーエーエ

ル」はるをむかえに・よろこびむかえる  
二615 春をむかえにでかけましょう。

五228 いちろうさんが家に帰ると、おかあさんが、げんかんにむかえにでました。

八4910 この家をたずねても、みんな喜んでむかえてくれるにちがいありません。

八507 そんなまずいなりをしていても、それでも、自分をよくむかえてくれる人があったら、

九258 いそいそと帰ってきたつばめをむかえる人の心は、どんなにうれいことでしょう。

十三475 そよ風の中にひっそりと、客をむかえた赤いへや。

十三552 そういつて、喜んでむかえてくださったので、

十四412 朝をむかえよう。  
十四1027 その子がどんなに幸福に、神さまの樂園

の中で、元日をむかえているかを知らないのだ。  
十五669 十の春をむかえた私は、「略」、ひとり父

につれられて、景色の美しい京都に移った。  
十五10812 「喜び」をむかえているのですよ。

十五1099 「母の愛の喜び」を手をたたいてむかえます。

むかし「昔」(名) 29 むかし 昔 ↓ おおむかし  
三222 むかし、あるところに、一本のくすのき

がはえました。  
三1002 むかし あるところに、「竹とりのおきな」

というおじいさんがすんでいました。  
四1198 話です。  
四1198 話です。

八252 やがて死ぬけしきはみえずせみの声 と、  
むかしの人がうたっています。

八933 そのむかし、いじめられたり、あざけられたりしたときのことを考えた。

九241 むかしから、つばめは、同じ家に帰ってくるといわれています。

九773 むかしといっても大むかしのことだが、貝などをおもにたべていたときがあったらしい。

九7711 むかし、このへんは、波のおだやかな海のいりえだったのです。

九795 この土の上に白くみえてるのは、むかし海の中にいたいろいろな貝のからだです。

九797 むかしの人は、貝がらといっしょに、「略」や、角などを、ここへすてました。

九1214 むかし、ひとりの茶人があった。  
十二557 傳説には、「略」、昔からいい傳えられた

というだけのもののほうが多い。  
十二568 昔、島原にみそ五郎という大きな男がいた。

十二576 ふしぎなことに、神山のほうには、昔から九十九だんの石だんができていた。

十二578 昔、神山のおくにおにが住んでいて、  
十二595 昔、この里に長者がいた。

十二617 昔、あるまじい人が、「略」この岩屋からぜんやわんなどの家具ののこりを知った。

十二967 あなたがたの家の昔からいままでのことがさまたちに思いだされるでしょう。

十三911 むかしは、星を見て世の中がみだれるといたり、

十四297 どうも日本人は、むかしから、あまり星に親しみをもていなかったようです。

十四309 むかしのことはしばらくおき、これから人の心がまえば、大きくなくてはいいけません。

十四363 むかしからすぐれた人たちは、星の光の中からふかい思想を読みとりました。

十五2911 昔の物語に出てくる英ゆうのように、このただけしい相手を待ちかまえていました。

十五56 11 指おり数えると数十年の昔になるが、  
十五58 5 遠い昔を思い出して、ひとりそのときの  
思い出にふけっていられるようすだった。

十五59 3 「略」と、ありし昔を語ろうとした。

十五71 8 人力車に乗ったおばさんは、昔のように  
私をひざにのせた。

十五103 10 『星の出を見ることの幸福』が、むか  
しの神さまのような、金ぴかの着物を着てついで  
います。

むかしものがたり 〔昔物語〕(名) 1 むかしものが  
たり

十三31 5 中国のむかしものがたりをやるつもり  
なのだが、

むき 〔向〕(名) 3 むき 向き むあおむき・した  
むき・ようむき

九89 10 ふたりともむきになって、友だちの手から  
ぬけだそうともがく。

十一68 8 ポートの向きをかえたりひき返そうと  
したりするときには、

十一75 5 ポートは向きをかえて、あぶないところ  
からぬけだして、新しい方向に進んでいく。

むき 〔麦〕(名) 15 麦 むあおむき・からすむき・  
くろむき・こむぎ・こむぎこ・なまむぎ

三28 10 そののち、はやとりは、たくさん米や、  
麦や、豆をつんで、海をわたりました。

三41 6 ぼくらはふたりになって、麦のほとす  
れすれにあるきました。

四77 3 む——麦の花に、ばらの花。

七65 3 麦のとりのいれ、日がてりつける。

七66 1 雨あがりの麦のほ、子どもと子どもとかけ  
ていく。

七78 3 6 その荷は麦でしょう。

七80 3 私どもは、麦をつけたらくだをつれて、  
さばくを通っていましたが、

七84 7 麦が麦だということが、なぜわかった  
のでしょうか。

七84 11 道に、麦がこぼれていたからです。

七91 7 私が麦をやったら、白いうさは、〈略〉、  
黒いうさぎの上に乗って、たべました。

八91 8 小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげ  
てくれた。

九26 5 麦ふむやみだれし麦の夕日かげ

九26 5 麦ふむやみだれし麦の夕日かげ

十一32 6 麦のはしりほかがよく上を、海こえて  
きたつばくろが、すうい、すういとびまわる。

十一34 1 麦のとりのいれことなくすめば、はい色  
雲が空うちおおい、青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。

むきあう 〔向合〕(五) 1 むきあう 《一ツ》

一48 10 よにんが むきあうて、なかよく こしを  
かけました。

むきばたけ 〔麦畑〕(名) 4 麦ばたけ 麦畑

三42 2 みよこさんが、左のかたからはなれて、  
麦ばたけのよこ道をかえりました。

七46 6 黄みがかった麦ばたけ、縣道らしい白つぽ  
い道、そこを自轉車に乗って走る中学生、

八60 3 麦ばたけは黄色く、からすむきはみどり  
であった。

九17 5 つばめは、麦畑らしい土地の上をとびまし  
た。

むきみ 〔剃身〕(名) 1 むきみ

九76 7 おかみさんが、店の人とふたりで、せつせ  
と目をこじあけて、むきみをつくっていました。

むきみ 〔剃身屋〕(名) 1 むきみ屋

九76 4 シヤベルや移植こてなどを持って、角のむ

きみ屋のところに集まっていました。

むきわらぼうし 〔麦藁帽子〕(名) 1 麦わらぼうし  
五56 9 そのまわりに、うすい、大きな、麦わら  
ぼうしのつばみたいなものもみえる。

むく 〔向〕(四五) 12 向く 《イ・カー・ク・  
ク》 むふりむく

七37 9 ふと上を向くと、私のよこのわかい男の人  
が、〈略〉両方の手でまどわくをおしています。

七62 4 どの花も、みんな空を向いている。

九30 2 まえ向けるすずめは白し朝ぐもり

九40 10 しょうこをつけたおとなの人が、〈略〉、  
下を向いて登ってくるのがみえます。

九57 7 「略」と、男は、下を向いて、かなし  
そうにいました。

九71 10 しばらくひげをひねったまま下を向いてい  
ましたが、やっとあきらめていました。

九92 5 うしろを向いてじゃんけんをする。

十51 12 とうとう、くるっと、うしろを向いてし  
まったわけです。

十52 2 「ワンワンチャン」と、こちらを向かせよ  
うとしたり、

十一44 11 そうして、園長さんのまえに向いたとき、  
「略」と、大声でいました。

十一92 8 そこで死人の方へ向いて、「略」とと  
いて、名をなんと呼ぼうかと思っているうち、

十五108 11 なぜ横つちよを向いたままではいるの。  
むく 〔剃〕(五) 4 むく 《イ・イ・コ》

六45 5 「へのへのもへ」のかかしが、むねをはっ  
て、目をむいて、たんぽをみわたしている。

八75 1 はなをあひるの子のそばにつきつけて歯を  
むいた。

九43 11 ほしがきにするために、母がかわをむい

て竹ぐしとおし、のき下につるしてくれませう。  
十五82 罫 みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山ふか

むく「向」(下二) 1 むく《一ケ》

十五72 文 罫 うしはしずかにおのおの大きな耳をむけぬ

むくむく「副」 1 むくむく

五338 どのえんとつからも、けむりが、むくむくとたちのぼっています。

むくろんじ「無患子」(名) 1 むくろんじ

十一579 罫 じゅずだま・むくろんじ、赤い、赤いつばき、げんげの花わ、一つ一つつづろ。

むけ「向」 1 あおむけ

むける「向」(下二) 8 むける 向ける 《一ケ・ケル》

八209 せみの子は、だいたんに、まっすぐなあなを地表に向けてほっていき、

九454 罫 子どものころから、世の中のことに注意を向けるようにといわれました。

十672 はじめは、そのへやの方へは、顔も向けないようにしていました。

十一6711 その後からついていきながら、おどおどした目を右に左に向けて、

十二3211 私の心の目をあらゆるものに向けて開いてくさるため、

十三4510 見物人にせなかを向けないように、

十五2210 みんなが、おどろいてその音の方へ顔を向けて見ると、

十五8811 罫 それから、あの、なかまにはいらないうで、せなかをむけているのはだれです。

むこ「婿」(名) 3 むこ  
八291 罫 むすめのために、りっぱなむこをさがし

てやろう。

八313 天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにもうりました。

十五875 罫 これが、わたしのむこの『地所持の幸福』で、なしのようなおなかをしています。

むこう「向」(名) 39 むこう 向こう

一385 しらい、こいぬが、むこうからころげるようにはしつてきます。

二291 罫 きをつけてわたりましたから、みんなむこうのきしにつきました。

二405 すると、むこうのほうで、「略。」とさけびます。

三432 白うさが、島から むこうの りくへいつて、みたいと思いました。

三445 罫 かぞえながらとんでいくから、むこうのりくまでならんでみたまえ。

四276 罫 林の むこうの 一本道まで、かけっこをしようね。

四317 罫 かさをさしていくと、むこうで ようちえんの男の子がなっていました。

四532 この山の むこうにある みずうみのところへ、いこうと話しあいました。

四595 山びこが むこうで、「略。」とこたえるだけでした。

四934 右にも 左にも、むこうにも こっちにも、どこにも 降る。

四1069 罫 むこうに 光ったやねが みえるでしょう。

四1277 みると、むこうのまつの枝に、きれいなものが、かかっています。

五113 罫 「むこうからきた汽車とすれちがったのさ。」

五289 罫 むこうの店に品物をとどけて、《略》

帰つてくるとちゅう、よその人からもらったんです。

五325 おや、むこうからも長い、長い貨物列車がやってきます。

五7810 先生といっしょに、学校のはたけのむこうを流れている小川のところにいきました。

五937 むこうの山から、大きな月がのぼってくるころでした。

五1068 罫 きみも、いっしょにむこうへとんでいこうよ。

六448 罫 ぼくが目をさましたときには、おびみないなものが向こうの山の方へとんでいったんだよ。

六1001 すると、向こうのけしきが、小さく、さかさまにみえた。

六10010 それは、ここから百メートルもはなれている、向こうの家の屋根であった。

六1042 罫 向こうの家のせんとく物もみえますよ。

六1309 うさぎさんたちは、そのまま向こうのやぶの方へいつてしまいました。

七103 罫 渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、こちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。

七414 目をさますと、向こうの席にひとりの青年が立っていた。

七428 トンネルをでたとき、向こうの席で、「略。」と、大きな声をだした人があった。

七536 なんだか、向こうのせんしゅは、大きくて強そうだ。

七8011 罫 すると、向こうから、「略。」と、たずねるのでございます。

八567 そこで、向こうにみえるまつの木を目あてにして歩きだした。

八五三 すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。

九四八 是るか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。

九七九 平らな畑やたんぼの向こうに、一だん高くなつたところがみえます。

九七八 図 そう、あの向こうの小高いところに、白い物がちらちらとみえるでしょう。

十六七 次郎かじゃ、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやってくれ。

十一四六 じゃがいも畑のうねの向こうに、いつもぼつかりとういていたえぞ富士。

十一六六 図 「じゃあ、第四号室のいちばん向こうのベッドだ。」

十一七三 みると、医者が、ひとりの助手をつれて、へやの向こうのはしにはいつてきました。

十四三三 光が一方のはしから、向こうのはしまでとどくの、

十五五八 図 つくえのまん中にチョークで線をひき、向こうは日本、こちらはアメリカといつて、

むこうがわ 「向側」(名) 3 向こうがわ  
八六二 図 世界は庭の向こうがわまで廣がっているのだよ。

十二〇五 向こうがわに店がみえます。

十四六三 日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬのでもおいてすかして見ると、

むこうぎし 「向岸」(名) 2 むこうぎし 向こう岸四一四 むこうぎしの、すすきのもさもさしているところから、小鳥がとびたつた。

七一〇五 渡し終ると、またひき返して、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。

むごん 「無言」(名) 3 無言

十五一九 氷河が無言の流れをきざんでいる深い深い谷の上を、

十五六六 私、道のまん中で、無言でつつ立ったまま動かなくなつた。

十五七〇 じつとおじさんの写真に見入りながら、私は無言で頭をびよこんとさげた。

むし 「虫」(名) 一九 虫 見あおむし・あおむしくん・かぶとむし・こがねむし・こむし・すずむし・ででむし・てんとうむし・よわむし

三三八 二くみは虫の名をあつめました。

三九二 虫の名は十五あつまりました。

三二〇 虫の名は十五あつまりました。

三二〇 虫の名は十五あつまりました。

三二〇 虫の名は十五あつまりました。

三二〇 虫の名は十五あつまりました。

七六四 ふえの音、虫の声、三日月さん。

七九三 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

八一六 虫は、小さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいとがった口をもっています。

八一七 虫は、はじめは、白い、よわよわしいうじのようなかたちをしています。

八二二 あめ色をした六本足の虫が、こしを高くして、ひょっくりひょっくり歩いていくのは、

八二一〇 虫は、それにとりつくと、(略)、動かなくなつてしまいました。

八二三 虫はぐつとそり返るようにして、頭をうし

ろにさげました。

八二三 虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれしそうです。

九八一 「虫の声」ということばを加えたらどうでしょう。

九四四 かくれていて、ほかの虫がひつかかると、いきなりとびついてかみころすなんて、

十五一〇 図 ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でてとぶ見ゆ

むしあつゝい 「蒸暑」(形) 1 むし暑い 《一い》

十一五二 車内はむし暑いうえに、おたがいがぬれたからだ、おしたりおされたりしなければならなかった。

むしたち 「虫達」(名) 4 虫たち

八五四 地面におりた虫たちは、やがて、思い思いにやわらかいところをさがして、

八六二 だから、虫たちが、いいかげんにすすんでいても、なにかの木の根にいきあたります。

八六四 虫たちは、(略)、手ごろな、皮のうすい、しるの多い木の根をさがしてあるきます。

八七一 虫たちは、どうしてこんなことができるのでしょう。

むしとり 「虫取」(名) 1 虫とり

八〇五 みんなで虫とりをしました。

むしのいき 「虫息」(名) 1 虫の息

八一八 目さえあけたりとじたりして、からだをふるわせてもう虫の息です。

むしめがね 「虫眼鏡」(名) 7 むしめがね 虫めがね

一四六 おおきな むしめがねをもった おじいさんが、やっぱりながい みをふりふり、

一四七 おじいさんは、わたくしを むしめがねで



のぞいてみながらいいました。  
六六五 それは、むしめがねでよくみながら書いたのです。

六九五 古いめがねのたまと、おとうさんにかつていただいた小さな虫めがねがでてきた。

六〇四 けしきを、大きくしてみようと思って、右の手に虫めがねを持って、のぞいてみた。

六〇一 なのはしに、虫めがねをとりつけた。

八〇二 ほんのつづを虫めがねでみると、毛のようなものがたくさんはえていました。

むじゃき 「無邪氣」(形状) 3 むじゃき むじゃ氣 八一二 うちがわでむじゃきに遊んでいたピオを、かた足でふんでしまったのです。

一九八 少女のわけてくれたくりは、むじゃきな心からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。

一五〇四 六 「むじゃ氣な考えの幸福」です。

むしやにんぎょう 「武者人形」(名) 1 むしや人形 一五六六 一 りっぱなむしや人形にそえて、〈略〉大きな写真を二まい、〈略〉送ってくださいました。

むしりとる 「筆取」(五) 2 むしりとる 《一ツ》 三六二 わにざめが、白うさぎをつかまえて、からだのけをみんなむしりとしてしまいました。

九六〇 六 きみがむしりとったんじゃないか。」と、ボタンをとる。

むしろ 「筵」(名) 2 むしろ

七九五 寒くなったので、むしりで戸をこしらえてやりました。

八〇八 四 もみをむしろの上にひろげてほしました。

むす 「生」(五) 1 むす 《一ス》

一五七九 町の東にある寺の一角に、こけむす一つのおほか、  
むすう 「無数」(名) 1 無数

一四六三 二 熱い水蒸氣がひえて、小さなしずくになったのが、無数にむらがっているの、  
むずかしい 「難」(形) 18 むずかしい 《一イーク》

二一九 はじめはむずかしいとおもいましたが、だんだんおもしろくなりました。

三〇五 七 それで、かぐやひめは、その人たちにとってもむずかしいことをいって、

六六九 七 きれいに、むだのないようにへんしゅうするのは、むずかしいことでした。

六七八 五 とにかく、命のことはむずかしい大きな問題だね。

一一八五 五 やっぱり、いちばんだいじで、むずかしいのは、コックスだろう。

一一九九 五 「あんな大きな船の船長と、コックスと、どっちがむずかしいだろうね。」

一一九二 五 そりゃあ、船長のほうがむずかしいだろう。

一一二六 三 それは「大学」といって、かん文で書いたむずかしい本でした。

一二三九 三 この日が自分にもたらした喜びを思い返していたときの私はど幸福な子どもを発見することとは、むずかしいでしょう。

一三二七 七 むずかしいものは、科学的研究によって調べられる。

一三二〇 八 もっともむずかしいのは、あれ地に木を植えることです。

一三二五 五 「自然は、このむずかしい問題を、かならず解決してくれるにちがいない。」

一四一〇 八 ちっともむずかしいことはありません。

一五四五 五 それまでのものの考えかたや商賈では、ふだんの生活さえむずかしくなってきた。

一五八七 七 ひとりでのこの焼物を作ることは、むずかしいことであつた。

一五五五 五 それとなく論文刊行のむずかしいことをにおわせた。

一五八九 三 あれはすこしひねくれ者で、子どもさんたちにしようかいするのはむずかしい。

一五〇五 五 『不幸』に行くのをとめることは、なかなかむずかしいのです。

むずかしさ 「難」(名) 1 むずかしさ

一三二五 二 そこに、このしほいのむずかしさがあります。

むすこ 「息子」(名) 2 むすこ

一一八六 一〇 どうやら、あなたのむすこさんと同じ年ぐらいのむすこがいるらしく、

一一八六 一〇 同じ年ぐらいのむすこがいるらしく、自分のむすこだと思ひこんでいるようすです。

むすこさん 「息子」(名) 2 むすこさん

一一七四 二 このかたは、この病人のむすこさんです。

一一八六 一〇 どうやら、あなたのむすこさんと同じ年ぐらいのむすこがいるらしく、

むすび むおむすび

むすびかた 「結方」(名) 1 結びかた

一五三六 八 なわを結んで、その結びかたや、なわの色や、なわの太さなどによって、いろいろな考えを表わした。

むすびつける 「結付」(下二) 4 むすびつける

結びつける 《一ケ・ケル》

五八七 竹のさきにはうきをむすびつけて、てんじょうのくものすをはらいました。

九七三 やまだ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする。

十三35 11 はとにふえをむすびつけてとばすのであるが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。  
十五35 2 色のちがった貝や、じゅうだまを結びつけることも行われた。

むすびめ 〔結目〕(名) 1 むすびめ

五80 8 むすびめがとけて、ほうきがおちました。  
むすぶ 〔結〕(五) 7 むすぶ 結ぶ 《パープーン》

—82 〔圖〕

むすんで、ひらいて、てをうって、むすんで、またひらいて、てをうって、

—85 〔圖〕

てをうって、むすんで、  
十一41 8 〔圖〕 池にむすぶはうすごおり、庭に立ったはしも柱。

十三52 8 わたしの日々が、自然をしたう心で、一日一日と、むすばれていくように。

十五34 8 それで大昔には、なわを結んで、《略》などによって、いろいろな考えを表わした。

十五51 10 祖父たちの間に結ばれた心が、《略》、まごたちによってふたたび結ばれることになった。

十五52 1 ふたたび結ばれることになった。

むすめ 〔娘〕(名) 10 むすめ ひひとりむすめ・マツチうりのむすめ

八28 10 〔圖〕 うちのむすめは、こうしてはたらきつけているのは感心なことだ。

八29 1 〔圖〕 むすめのために、りっぱなむこをさがしてやろう。

八31 3 天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにもりました。

八71 8 にわとりにはこずきまわされ、えさをくれるむすめには足でけとばされた。

十63 5 役者がおじいさんになったり、むすめになったり、わかい男になったりするときには、

十四93 3 その小さなマツチ賣りのむすめは、自分のまき毛のことも、雪のことも考えなかった。  
十四93 6 その小さなマツチ賣りのむすめの考えたことはそれであった。

十四96 1 ほのおは、その小さなマツチ賣りのむすめを喜びむかえるようにおどりあがった。

十四98 7 いく百もの小さな人形が見おろして、マツチ賣りのむすめを見てわらいかけた。

十四102 2 元日の朝、人々が、マツチ賣りのむすめの、ひえきった小さなきがらを見つけたとき、

むすめたち 〔娘達〕(名) 2 むすめたち

八27 2 星のかんむりをつけたむすめたちが、楽しみに歌ったり、

八28 10 〔圖〕 ほかのむすめたちは、野原で遊んでいるのに、

むすんでひらいて 〔課色〕 2 むすんでひらいて

—24 三 むすんでひらいて……八

—8 1 三 むすんでひらいて

むせきにん 〔無責任〕(形状) 1 無責任

十31 12 どうでもいというような、無責任な、ひきょうな考えをもちたくはありません。

むだ 〔無駄〕(名) 1 むだ

六69 6 きれいに、むだのないようにへんしゅうするのには、むずかしいことでした。

むだ 〔無駄〕(形状) 2 むだ

十五55 7 〔圖〕 まあ、そのようなありさまで、せっかくのおたずねもむだになるようなわけだが、

十五96 8 〔圖〕 むだなことだよ。

むだぐち 〔無駄口〕(名) 1 むだ口

九86 1 もう、むだ口をきく人は、ひとりもありませんでした。

むだばなし 〔無駄話〕(名) 1 むだ話

十一21 6 ほかの人たちは休んだりむだ話をしているのに、金次郎は、すこしも休まず働くので、

むだばね 〔無駄骨〕(名) 1 むだばね

十40 7 村や町の者は、幸吉のむだばねをあざけり、そのゆめのような考えをわらった。

むち 〔鞭〕(名) 7 むち

三57 2 〔圖〕 うたをわすれたカナリヤは、やなぎのむちでぶちましょか。

九55 6 男が、ひざをまげて、手に皮のむちを持って、だまってこちちをみていたのです。

九63 8 こんどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九65 10 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九67 2 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九67 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

九69 9 んどは、草むらをむちで二三べん、ヒュウパチッ、ヒュウパチッと鳴りました。

とびかかっていた大わしは、

むつ 〔六〕(名) 1 六つ

十五65〔文〕 六つほどの子がおよぐゆえ水わかな  
むつ 〔六〕(名) 2 むつつ

一112〔名〕 いつつ、むつつ、ななつ、やつつ、

一116〔名〕 いつつ、むつつ、ななつ、やつつ、

むてっぽう 〔無鉄砲〕(形状) 1 むてっぽう

八910 一方では、とてもむてっぽうなきかんぼう  
でした。

むなげ 〔胸毛〕(名) 1 むなげ

四476 あさの風は、氣もちよく、がんの むなげ  
にあたりました。

むね 〔胸〕(名) 27 むね 胸

五154 ゆくさはむねのところに書いてあります  
から、まちがいはありません。

六454 「へのへのもへ」のかかしが、むねをはつ  
て、目をむいて、たんぽをみわたしている。

六792〔名〕 ほら、左のむねのところに手をあててご  
らんさい。

七415 かれは、むねに、大きなびかびかしたア  
コーデオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。

七548 ぼくは、うれしくて、胸がどきどきしてい  
た。

七947 あと足を長くのぼして、まえ足を胸の下に  
いれていました。

九249 その小さな胸には、わか葉のもえる日本の  
春の美しさを思いうかべているのでしょうか。

九305〔文〕 歩みくる胸のへにちようとびわかれ  
九4210〔名〕 大きなうねのはだが地わねしているのを  
ほりおこすとき、胸がどきどきしました。

九992 このボタンをみたまえ。」と胸をみせる。

十248 あせまみれになった工員の顔、胸、うで。

十一64〔名〕 それを思うと、ぼくは胸がわくわくす  
る。

十一178 おかあさまの胸に、わきあふれるなくさ  
めの泉に、

十一795 心を休めるような希望と、胸をこおらせ  
るような失望とのあいだで、

十一826 少年は、父親のうでの中にたおれました  
が、胸がせまって息もつけませんでした。

十二388 生まれてはじめて、くやむ心と悲しみに  
胸をさされました。

十二813 勝つことをいにつてくれていることを  
知って、胸がいっぱいになりました。

十二1019 手首やむねなどには、まがたま、まるた  
まなどがかざってあります。

十三1812 かれは、その胸に國運回復の計画をたて、  
その顔にほほえみをたたえて、

十三353 その文字の意味がわかってくると、いつ  
そうその美しさが胸にきざまれる。

十四662 母を思う子の真情は、遠く海をこえて、  
私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。

十四4110〔名〕 胸をはれ。

十五311 せまって来たこのあくまの胸をめがけて、  
全身の力をこめて投げつけました。

十五316 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、  
胸に、目に、ひしひしとあたります。

十五603 同志社をわが子のように、だいに胸に  
だいてはぐくみ育てていた新島のおじさんが、

十五655 新島のおばさんとの思い出は、いまでも私  
の胸にやきついていてる。

十五6711 おどる胸をおさえながらたどりついたげ  
んかんには、

むひよこ (名) 1 むひよこ

四683 かえるがひとひよこ、ふたひよこ みひよ  
こ、あわせて ひよこ ひよこ むひよこ ひよこ。

むら 〔村〕(名) 35 村 〇おいらせむら・かやまむ  
ら・となりむら・にしむら・ひがしむら

三2310 あちらの村でも こちらの村でも、こう  
いって、この大きな木を みあげました。

三2310 あちらの村でも こちらの村でも、  
四118〔名〕 生まれた村に かつたら、だれも知  
らない 人ばかり。

五54 さあ、はいはいをして、たちちして、村に  
でましよう、町にでましよう。

五855 そこへ、村の子どもたちが、「略。」  
〔略。〕とよびながら、走ってきました。

六397〔名〕 でも、村に帰らなくちゃ。

六406〔名〕 もう一どあの村に帰りたいなあ。

六407 村の子どもや、〔略〕などの、きれいな、  
楽しかった思い出が、うかんではいきていく。

八474 どんどん歩いていくと、さびしい村にさし  
かかりました。

九338〔名〕 村の子どもがきょうそうでとりにいくの  
で、たいそうにぎやかです。

九359〔名〕 それは、七月の二十八日でしたが、村で  
いちばんおおい植えつけでした。

九365〔名〕 たきになり流れになって、村の中を通り、  
田んぼに落ち、湖にまでつづいています。

九418〔名〕 ぼくたちがこの村へきたころは、湖には  
美しい白さがたくさんまいおっていました。

九1139 帰りは、村までくだりの坂道だ。

九12010〔名〕 私たちの村の用水も、このまつ川からひ  
いてあるのだ。

十201 村の林の上に、大きな半円形のにじがか  
かっている。

十225 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえざくらの花。  
 十238 窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。  
 十3210 「略」豊田佐吉は、村の人々から、こういつてあざけられた。  
 十367 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎな機械に目をみはりながら、  
 十407 村や町の者は、幸吉のむだばねをあざけり、そのゆめのような考えをわらった。  
 十659 ある村に、けちんぼの旦那がいました。  
 十1142 あれは、この村のさみしがりの小すずめだ。  
 十1192 二宮金次郎の生まれたところは、神奈川縣のかやま村といって、さかわ川にそった村です。  
 十1193 この村に、ぎんえもんという人がいました。  
 十1196 村の人たちが困って頼みになると、  
 十1256 遠い山へいって、しばをかつたり木を切ったりして、村の人に買ってもらいました。  
 十1273 村の人たちは、こう、うわさをしました。が、金次郎は耳にもいれず、それを続けました。  
 十1303 やがて、村をすくい、多くの人からうやまわれるようになりました。  
 十1333 鯛 かきのわか葉に日の照るころは、矢車からからこいのぼり、村のわら屋の庭に立つ。  
 十1611 さいわい近くの田で働いていた村の人たちに助けられて、  
 十1639 少年は、ナボリの近くにある村からきたのでした。  
 十2578 昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、  
 十2579 村の人たちは困りはて、おにに向かって、

一つの難題をもちだした。  
 十二581 もしそれができなかつたら、これからのちは、けつして村へでてきてはならない、  
 むら「斑」(名)7 むら  
 八965 水のすむのをまて、むらのないようにまきました。  
 十四7111 そのひえかたがどこも同じではないので、ところどころ特別につめたいむらができます。  
 十四728 その光が同じようにならず、むらになって、茶わんのそこを照らします。  
 十四733 そのときできる氣流のむらが、光をおり曲げるためなのです。  
 十四7312 しかし、それも、前の温度のむらとにか関係があることだけはたしかでしょう。  
 十四742 湯がひえるときにできる、熱さをつめたさとのむらが、どうなるかということ、  
 十四751 地面の空氣が、日光のためにあたためられてできるときのむらは、飛行家にとって、たいへんあぶないものです。  
 むら「群」↓くさむら  
 むらが「群」(五)1 むらが「↑ッ」  
 十四632 熱い水蒸氣がひえて、小さなすくになつたのが、無数にむらがっている、  
 むらさき「紫」(名)4 むらさき↓うすむらさき  
 二147 赤や青やむらさきのたまができました。  
 九49 みどり色のかわりに、むらさきをぬつたら、どうなるでしょう。  
 九52 むらさきのかわりに、茶色をぬつたら、どうなるでしょう。  
 十五954 「あけぼののむらさき」とか、「こはくのつゆ」などがあらわれます。  
 むらさき「紫」(名)3 むらさき色

六1182 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、  
 十一887 顔はむらさき色になり、呼吸はいよいよ困難になりました。  
 十五1041 冬の日「幸福」は、こえた手のために、きれいなむらさき色のマントを開きます。  
 むらさき「紫掛」(五)1 むらさき「紫掛」  
 十五215 けわしい山が、むらさきがかつた大空の下に、わらうようにそびえているのでした。  
 むらさき「村里」(名)1 村ざと  
 九1255 はじめの八キロほどは、村ざとがあつて川べりに道もあつたが、いまはそれもなく、  
 むらじゅう「村中」(名)1 村じゅう  
 十333 村じゅうの者から氣ちがいあつかいにされるのを見て、父は、「略」とさとしたが、  
 むらはずれ「村外」(名)1 村はずれ  
 九1048 集合地は、村はずれの一本すぎのそばであつた。  
 むらびと「村人」(名)1 村人  
 十一394 冬のしたくをとりいそぐ 村人の目をなぐさめる。  
 むらむら「村村」(名)3 村々  
 三234 まいあさ日がでると、この木の西がわのなん十という村々が、日かげになります。  
 三235 ごごになると、東がわのなん十という村々が、日かげになります。  
 三295 こまつていたたくさん村々は、だんだんゆたかになっていったということです。  
 むり「無理」(名)2 むり  
 七856 あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、むりはない。

十二404 氣持があらあしくなり、かんしゃくも  
ちになったのもむりはありません。

むり [無理] (形状) 7 むり

七346 むりにわりこもうとする男の人もあり、足  
をふまれて、おこっている女の人もありました。

七797 むりにつれていく。

九641 やまねこがすこし心配そうに、それでもむ  
りにいぼつていきますと、

十556 むりに書くと、自分が〈略〉たり、考えた  
りしていることは、ちがったものになります。

十一807 いくどもいくども、むりにくちびるを動  
かそうとしました。

十一8811 病人は〈略〉、ときどきむりにくちびる  
を動かして、なにかものをいたげにしました。

十四693 どれもこれもみんな、茶わんの湯にくら  
べるのはむりですが、

むれ [群] (名) 18 むれ 1 むれ

五974 まいにち、わたり鳥のむれがとんできます。

五975 その中には、ひわのむれもありました。

六414 つむじ風のように、列をつくったつばめの  
むれが、かかしの方へとんでくる。

六428 つばめのむれ、屋根の上にひとかたまりに  
なる。

六432 しずんでいくお日さまをおって、町の上を  
列車のようにとぶつばめのむれ。

六435 山や、みずうみや、はたけの上をひとかた  
まりになってとぶつばめのむれ。

八359 百光年の星もあり、一千光年の星のむれも  
あり、一万光年の星もあります。

八741 がんのむれが、そろってあしのあいだから  
とびたつた。

十191 その下で、雨やどりをしているにわたりの

むれ。

十三48 まるで、息をこらしてしずかにしている、  
子どもたちのむれのように。

十三51 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木の  
めのむれは、おたがいひじをつつきあって、

十三361 はとがむれになってとんで来ると、ふえ  
の音がおのずから和音をふくみ、

十四339 地球をとりまいていて天の川の内がわに  
あるたぐさんの星のむれなのです。

十四869 風にあおられた雪のむれが、道を消し、  
木をおり、汽車を立ちおうじようさせ、

十五213 朝ぎりの中から、白い雲のわきたつよう  
に、すべり出るまっ白なひつじのむれ、

十五222 山の上の方に、また下の方にちらばって  
いるひつじのむれを追いでもするように、

十五9611 小さな「幸福」のむれ、ふざけたり、わ  
らいこけたりしながら、

十五992 もう一つの「幸福」のむれ、まえよりは  
すこしせの高いのが、廣間の中へかけこんで来て、

むれる [群] (下) 1 むれる 《一レ》

十二948 太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむれて  
とんでいる景色を思い、

むろまちじだい [室町時代] (名) 1 室町時代  
十二10811 室町時代の藝術品です。

## め

め [奴] ひくされぎめ・つるめ

め [目] (名) 12 め 目 1 め 目のめ・あみめ・い

ちまいめ・いつかめ・いつかめごと・いとめ・お

め・おめめ・かため・ごにんめ・さけめ・さんじか  
んめ・さんだめ・さんどめ・さんにんめ・さんね  
んめ・さんばんめ・しまめもよう・じゅうごばん

め・じゅうにどめ・じゅうににちめ・しりめ・だい  
いっかいめ・だいさんかいめ・だいさんばんめ・だい

いにかいめ・だいよんかいめ・とおかめ・なわめ・  
にかいめ・にはつめ・にばんめ・はつかめ・ひと

め・ふつかめ・みつかめ・むすびめ・やくめ・よこ  
め・よそめ・よつかめ・よにんめ・よねんめ・よば

んめ・ろくじゅうにちめ・われめ

一154 めも つかいます。

一272 目は ふたつ、みみも ふたつ。

一288 目 「けさ、あなたは、その 目で なにを  
みましたか。」

一421 せんせいの 目の なかに、わたしがいま  
すよ。

一425 せんせいの 目の なか、ひろいな。

一434 よなかに 目を あけると、おとうさんが  
そばに たっていました。

一501 みんなながい 目の ある、あかい 目の  
うさぎさんでした。

一521 すずしい かぜが ふきこんで きたので、  
目が さめました。

一528 おとうさんも 目を あけました。

一649 おかあさんの こえで 目が さめました。

一657 目 それなら、あなたの 目の なかに ふた  
つ ひかっていますよ。

二109 目 「目に みえる ものと、みえない もの  
とに、わけたら いいと おもいます。」

二331 目 いや、目で みなくても、手で さわった  
ことが あるかい。

三1210 はんたかは 目を かがやかせて、おしやか

さまのおかおをみつめました。

三六〇 たちをもった手が、するするとおしやかさまの目のまえにのびてきました。

三七九 ときどき目をひらいてわたくしをみます。

三八一 うさぎの目はもも色のかわいらしい目です。

三八二 うさぎの目はもも色のかわいらしい目です。

三九〇 かなかなぜみも目がさめて、かぜにゆれゆれさきました。

四一三 ども、この町の目です。

四三九 けさも早くから、三十ばのがんは目をさしました。

四五一 目のまえに、高い、高い山がそびえていました。

四七九 目にみえるもの、みえないもの。

五二九 づばめが、私のすぐ目のまえを、いったりきたります。

五五五 「ほんとに、はるおさんは目が早いからね。」

五八三 やっと目をはなして、ばんをころうさんにゆずりました。

五九八 おばあさんは、おじいさんには目もくれな

いで、けらいに、「略」といいつけました。

五八七 黒いかみのけがふさふさして、まるい目

が二つあって。

五八二 どのおにんぎょうでも、目は二つですよ。

五八六 おかしいわ。目が四つもあったわ。

いなのが向こうの山の方へとんでいったんだよ。

六四五 「へのへのもへ」のかかしが、むねをはって、目をむいて、たんぽをみわたしている。

六四七 かかしの目のまえに、風にそよぐ金色のい

ねが、いちめんにつづいている。

六七〇 目もはなも口もつけました。

六七八 死んでいたら、ころがってたおれるわけだ

し、目だつてつぶつてしまおうし、

六九〇 左の手に、めがねのたまを持つて、目から

遠くはなした。

六〇三 おかあさんは、目をまるくして、

六二五 おにが、目をつぶつて、「略」とさげ

ました。

六三九 うさぎさんたちがあまりガヤガヤ話をする

ので、目をさましてしまいました。

七四七 校門のかしの木は、目をさまして、しずか

にしんこきゅうをした。

七六一 あちこちのまどがあいて、教室も目がさめ

た。

七三九 いきなりさぶろうをだきあげ、となりのお

八二五 その目といい、ふえの音といい、申しぶん

のないけだかさがこもっています。

八五二 朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎ

り、美しい砂地がみわたされた。

八五八 波うちぎわのかもめが目について、

八八二 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけ

しきが目のまえにひらけてくる。

八八四 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺

の屋根や停車場が目についた。

八八〇 みはらし台に立つてみると、目のまえに高

い山々がそびえて、ずっとつづいている。

八九三 向こうの山の谷まにのこっている雪が目

ついた。

八六一 みどりは目のためにいいから、親あひるは

みただけみさせてやった。

八七二 そうして、目をふさいだが、またさきへと

んでいった。

八七四 したは口からたれて、目はみにくく光つて

いた。

八〇八 風のくる場所で、目の高さぐらゐのところ

からごみをふきとばさせます。

九一四 しばいで、ゆめをみていた人が、にわか

に目をさます場面を演ずることがある。

九四九 けれども、いちろうが目をさましたときは、

もうすっかり明るくなっています。

九五五 にわかにはと明かるくなつて、目がち

くつとしました。

九五六 みえない方の目は、白くびくびくうごき、

足もひどく曲がつてやぎのようですし、

九六〇 黄色なじんばおりのような物を着て、みど

り色の目をまんなるにして立っていました。

九七二 まだなにかいいたそうに、しばらくひげを

ひねって、目をぼちぼちさせていましたが、

九七二 やまねこは、大きくのびあがって、目をつ

ぶって、半分あくびをしながらいいました。

九一〇六 そのみごとなすべりぶりにみとれていると、

先生たちは、もう目のまえにこられた。

九一三六 目をつぶってしずかにしていると、また、

パタパタという羽音がきこえてきました。

九一四六 目のまえのばらの花が動いています。

九一四八 目をつむると、だれかが、くもの頭をなで

ています。

九一四七 そのひょうしに、くもは、目がさめました。

九一四四 くもは、目がさえてなかなかねむれません。

九一七六 日本人をみたことがない子どもたちは、お

とうさんが通るたびに、目をまるくしました。

九一三四 はじめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、

たて糸のあいだをぬっていく横糸であった。

九一三六 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、

ふしぎな機械に目をみはりながら、

九一五〇 ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり

木の下におりていってしまいました。

九一七八 だんなが帰ったら、どんな目にあわされ

るかかわらない。

九一七七 いいことと、正しいことは、おかあさま、

あなたの目から教えられました。

九一三九 丸 はじの葉も、赤く黄色く色づいて、冬

のしたくをとりいそぐ、村人の目をなぐさめる。

九一四五 大ぜいの目のまえで、「略」とさけん

だ弟よ。

九一六三 少年は、色のあさ黒い、おも長な顔で、

考えぶかそうな目をしていました。

九一六七 その後からついていきながら、おどおど

した目を右に左に向けて、

九一六八 びっくりでもしたように、大きくみ開い

た目をあけて、

九一七〇 病人は、いっしんに少年をみつめたあと

で、目を閉じました。

九一七五 いすをひきよせて、目を父親の顔からは

なさないで、こしをおろして待っていました。

九一七六 でも、ハンカチを目にあてているときに

は、じっとみつめていました。

九一七七 ねむったあとでは、目を開いたときに、

その小さな看護人をさがすようにみえました。

九一八〇 病人は、だんだんしつかりした目を少年

の上にすえて、

九一八四 病人は、そのとき、目を開いて、じっと

少年をみつめました。

九一八八 チチロは、いよいよよくせわをして、

ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでし

た。

九一八九 また、やさしい色がその目にうかぶこと

もありましたが、

九一八九 病人は、目を開いて少年をじっとみて、

そうして、また目を閉じました。

九一九九 そうして、また目を閉じました。

九二〇一 一方の手で花たばを取りながら、一方の

手で目をふきました。

九二〇二 私の心の目をあらゆるものに向けて開い

てくださるため、

九二〇三 それは、先生が與えてくださった新しい

目で、すべてをみるようになったからです。

九二〇四 私の目にはなみだがいったばかりまし

た。

九二〇五 まゆ毛も、目も、口も動かし、

九二〇六 なんてんの実が、赤く、うさぎの目らし

くいれてありました。

九二〇八 目にもとまらぬボールが、ネットの上を

右に左にと、ゆききました。

九二〇九 大きな目、のびた手さき、しつかりふま

えた両足、どこをみても、力があふれています。

九二一〇 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木の

めのむれは、おたがいひじをつつきあつて、

九二一一 さかんな春のきざしは、よもにあらわれ

て、目に見えぬかすみのようにたなびいている、

九二一二 この天動説では、どうしてもかたづかな

いようなことが、目についてきたのです。

九二一三 目がさめたころ、遠いところを通るその

声を聞くのは、ゆめの中の声のように思われる。

九二一四 ただ、あいてになる人が、見物人の目に

つかないだけです。

九二一五 目を細くして、ありありとその絵を目の

前に見るようなうすをなさいました。

九二一六 その絵を目の前に見るようなうすを

九二一七 ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、

かべにかかっている一まいの絵を見ました。

九二一八 私には、おかあさんのおすがたが、目

に見えるような気がします。

九二一九 「略」とかいいいながら、先生のお書

きになる文字に目をそそいだ。

九二二〇 あなたがたのものをみる目、ものを考え

る力が大きくなっていけば、

九二二一 人類全体を、そうして、うちゅう全体を

ながめわたす大きな目をもってください。

九二二二 いろいろのこまかいことが目につき、さ

まさまのうたがいがおこってくるはずです。

九二二三 すかして見ると、しずくのつぶの大きい

のが、ちらちらと目に見えます。

十五144〔文〕 目をあけてつくづく見ればばらの木にばらがまっかにさいてけるかも

十五245 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて来ました。

十五2711 人々の目には、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなっていました。

十五307 その目、そのくちばし、その羽音、まったく大きなあくまでです。

十五3011 ちょうどそこに、手ごろなことがった岩のかげらが目にはいりました。

十五3012 石を取るが早い、目の前二メートルほどまでせまって来たこのあくまの胸をめぐって、

十五317 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしとあたります。

十五326 血まなこになって目の前のてきを相手にしているものには、なんにも耳にはいりません。

十五338 目の前の美しい、大きなユングフラウのまっ白な山までも、

十五4910 ただわずかに外国人がこれに目をとめて買うことがあるというのを聞いて、

十五5310 しずかに室内にはいった私の目に映じたのは、

十五545 博士は、しずかに歩みよる私が手にしているようなかいた目をそそいで、

十五658 小樽で目についたといつて、

十五678 そのなつかしい顔をあおいだ私の目からは、たまのようなみだが流れ出た。

十五688 おばさんは目になみだをためながら、しゃにむに私をおく深くひき入れた。

十五692 きずのあるみけんの下にかがやく目は、思いなしかわわらいで見え、

十五696 おばさんのことばに目をうつすと、

十五704 せきあえぬなみだに目をくもらせたおばさんが、「略」とおっしゃった。

十五7011 おじさんは、年とられてから目がわるくなつてね、

十五734 ふかい思い出にうたれている私の目の前で、博士は、「略」といって、

十五742 親の目から見れば、自分の子女は、「略」、かわいことはみな同じであつて、

十五749 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、

十五834 あれがこの世の中でいちばんふとつただれの目にも見える『幸福』どもだよ。

十五883 『なんにもわからないという幸福』は、こうもりのように目が見えない。

十五885 ふたりとも手はパンのしんだし、目はもののジャムですよ。

十五916 すこしの休みもなく、飲む、たべる、ねむる、いやはや目がまわるようだ。

十五9411 ちがつたように思うのは目のせいです。

十五962 『ふとつた幸福』どもが、ひどい目にあわせたのだよ。

十五1011 たべたり、飲んだり、目をさましたり、息をしたりして、くらしているのですもの。

十五1044 あなたの二つの目をたましいのどん底におちつけて、よくごらんさない。

十五1126 人間というものは、目を閉じていると、なんにも見えないのだからね。

十五1132 ほおずりをしてもらえば、すぐそのなみだは、目の中の星になつてしまうのですよ。

十五1133 おかあさんの目の中には、星がいっぱいある。

十五1134 ほんとうにおかあさんの目だ。

十五1197 やがてはなれて顔をあげますと、ふたりの目にはなみだが光っていました。

十五11910 でも、どうしてみんな、目にいっぱいなみだをためているの。

め 「芽」(名) 16 め じあおめ・きのめみち・わかめ

五395 山の木のめがではじめました。

五397 茶色の木のめもええです。

五612 「でもね、そのたねからめがでなかつたら――」

五614 めがでないことはありません。

八410 こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでることです。

八57 もみのもとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。

八58 これが、ほんとうにめになるのでしょうか。

八67 いつ、めがでるでしょう。

八69 種もみから黄みどりのめがでました。

八9610 ひたさないほうは、まだめがでません。

八974 ひたさない種もみからも、やとめがでてきました。

十一311 ひがんすぎれば風あたたく、木々のつぼみも草のめも、日々に色づきふとりだす。

十一5610 ベにばら野ばら、さんしよの木のめ、めやぎのおちち、一つ一つかおる。

十三51 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木のめのむれは、おたがいひじをつつきあって、

十三57 あさい水には、あしのめがすくすくと、するどい角をのぞかせた。

十五108 ばらの木の赤きめをふくかきの上に小き虫の出でとぶ見ゆ

め 2 メ め



四七九 4 め——目にみえるもの、みえないもの。

六二四 4 図 「メ」「モ」といつてみたら、これらもはなの音であることがわかった。

めあて 「目当」(名) 2 目あて

八五六 7 そこで、向こうにみえるまつの木を目あてにして歩きだした。

八五七 1 しつかり目あてをみさだめて歩いてみよう。  
メアリ (人名) 1 メアリ

十三四九 8 メアリとスーザンとエミリとが、かわい  
い口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわらう。

めい 「婬」(名) 2 めい

十二二四 3 わたしには、かわいいめいとおいにあた  
ります。

十二二四 5 めいの民ちゃんは、二つ、満でいえ一  
年三ヶ月で、まだ歩けません。

めい 1 明

十五三七 6 「日」と「月」をあわせて「明」が作ら  
れ、

めいあん 「明暗」(名) 1 明暗

十三五七 二 図 絵は、写真で見ただけでは、明暗はか  
なりわかるが、色がわからない。

めいが 「名画」(名) 1 名画

十三六〇 8 図 あれも、西洋の名画でしょう。

めいじ 「明治」(名) 2 明治

十五四五 3 徳川時代の長いしきたりが、明治になっ  
てすっかりようすを変えてしまったので、

十五四八 5 明治になって、はん主の保護がなくなっ  
たうえに、

めいじごねんくがつじゅうにち 「明治五年九月十  
二日」(名) 1 明治五年九月十二日

十二二一三 7 これは、汽車第一号で、明治五年九月十  
二日、はじめて日本で東京横浜間を走ったもので

あります。

めいじしよねん 「明治初年」(名) 1 明治初年  
十五四五 2 話は明治初年のころにさかのぼる。

めいじじゅうさんねん 「明治二十三年」(名) 1  
明治二十三年

十三七 1 それは、明治二十三年、佐吉が二十四才の  
ときのことである。

めいじじゅううねん 「明治二十年」(名) 1 明治二  
十年

十五六〇 5 新島のおじさんが、やまいを札幌のこう  
外に養っていたのは、明治二十年の夏であった。

めいしゅ 「名手」(名) 1 名手 じせかいてきめい  
しゅ

十二八二 8 チルデン選手は、アメリカきつての名手  
です。

めいしん 「迷信」(名) 4 迷信 じちしきとめいし  
ん

十三九一〇 知識が開けず、科学の進まないところに  
は、迷信が行われる。

十三一一 2 このように、道理にあわないことを信ず  
るのを、迷信という。

十三一二 2 知識によらず道理によらず、いたずらに  
理由のないことを信ずる迷信は、

十三一二 4 知識を廣め、学問を研究して、迷信を  
まったくとり去ってしまうようになれば、

めいぶつ 「名物」(名) 1 めいぶつ  
一五九 9 みんなよろこんで、めいぶつのおだんご  
や、おもちゃを、ごちそうしてくれました。

めいめい 「銘銘」(名) 10 めいめい  
二二二 二 図 「では、めいめいのかんがえどおりに、  
わけてごらんさい。」

四三九 一 ここまで話がすすむと、みんなは、めい

めいじぶんのことが思ひだされてきました。

六二六 3 五ひきのうさぎさんたちは、めいめいにあ  
なをほりはじめました。

七二六 7 図 はん長は、めいめいのはんのにんずをか  
ぞえたかね。

九七六 4 めいめい、シャベルや移植こてなどを持っ  
て、角のむきみ屋のところに集まっていた。

九八六 7 図 それから、道具を集めて、めいめい持っ  
てきた物があるか、おしらべなさい。

十一一四 4 小鳥たちはみんなめいめいの歌を歌う。  
十一一四 6 一つの太陽の下で、みんながめいめいの  
歌を歌っている。

十二九二 7 それは、めいめいの生活や経験が同じで  
ないためである。

十二九四 7 ところがこれを読んだ人々の心には、め  
いめいになったものが思ひだされてくる。

めいめいのうた 「課名」 2 めいめいの歌  
十一二二 3 二 めいめいの歌……十二

十一一二 1 二 めいめいの歌  
めいよはんじ 「名誉判事」(名) 1 めいよ判事

九七〇 二 図 どうかこれから、わたしの裁判所のめい  
よ判事になってください。

めいれいする 「命令」(サ変) 1 命令する 《一  
シ》

十五六五 2 「略。」と命令した。  
めいわく 「迷惑」(名) 1 めいわく

十三〇 二 図 うちじゅうの人たちに、めいわくをかけな  
いようにしたいと考えます。

めいわくしごく 「迷惑至極」(形状) 1 めいわくし  
ごく

八一六 9 これは、木からいうとめいわくしごくなこ  
とですが、せみの子からいえば、母親のちぶさに

すがったようなもので、

めうえ 「目上」(名) 1 めうえ

十65 めうえのいばったものに対してもおおそれず、  
メートル(名) 1 メートル ⑤いちてんごセンチ

メートル・いちてんはちななメートル・いちへいほ  
うメートル・いちメートル・いちメートルあまり・

いちメートルいじよう・ごセンチメートル・ごひゃ  
くメートル・さんじつセンチメートル・さんセンチ

メートル・さんびやくごじゅうメートル・さんメー  
トル・しごじゅうメートル・しじゅうメートル・し

せんひやくしちじゅうメートル・じゅうごメート  
ル・じゅうメートル・なんじゅうメートル・なん

メートル・にセンチメートル・にメートル・はちく  
メートル・はちじゅうごセンチメートル・ひやくご

じゅうメートル・ひやくメートル・やくじゅうにへ  
いほうメートル・ろくセンチメートル

八33 ふだん、私たちは、メートルという単位を  
用いてきよりを計りますが、

めがける 「目掛」(下) 4 めがける 目がける

《一ケ》  
十二82 試合を見物しようと、方々の國の人々が、  
そのコートを目がけて集まりました。

十五28 ある岩角のすこしあき地のあるところを  
目がけておりて行きました。

十五31 このあくまの胸をめがけて、全身の力を  
こめて投げつけました。

十五32 いままでむちゅうになって少年目がけて  
とびかかっていた大わしは、

めかた 「目方」(名) 2 めかた

七86 私たちで、めかたを計りました。  
七98 子うさぎと母うさぎのめかたを計ってみま  
した。

めがね 「眼鏡」(名) 6 めがね ⑤むしめがね

三50 めがねをかけて石を切る、

六99 おじいさんにいただいた古いめがねのたま  
と、《略》小さな虫めがねがでてきた。

六99 左の手に、めがねのたまを持って、目から  
遠くはなした。

六100 どこかの屋根が、めがねのたまいっぱいに  
ひろがって、

六101 ちょうど、めがねのたまがはまるくらいの  
大きさにまいて、

六106 その一方のはしに、めがねのたまをはめた。  
メキシコ 「地名」 2 メキシコ

十二77 メキシコのテニス選手キンゼーと私とが、  
いよいよ試合をする日のことでした。

十二77 テニスコートには日本とメキシコの國旗  
が美しくひるがえって、

めきめき (副) 1 めきめき  
十二139 それが、めきめきと大きくなり、《略》  
美しいつやつやとしたしゅの色がさしてきた。

めく ⑤かけえめく

めぐすり 「目薬」(名) 1 目ぐすり  
十四82 二階から目ぐすり。

めぐむ 「恵」(五) 1 めぐむ 《一ッ》  
六29 なにかめぐんでください。

めくら 「盲」(名) 12 めくら  
二32 あるところに、六人のめくらがあり  
ました。

二32 わたしたちはめくらだもの、みるこ  
と  
二34 なんかできないよ。

二34 六人のめくらが、ぞうつかいにたのみ  
ました。

二35 はじめのめくらは、ぞうのおなかを

なでて、こういいました。

二35 二ばんめのめくらは、ぞうのきばに  
さわって、こういいました。

二35 三人めのめくらは、ぞうのはなにさ  
わって、

二35 四人めのめくらは、耳にさわって、  
二36 五人めのめくらは、足をなでて、

二36 おしまいのめくらは、しっぽをもって  
いいました。

二36 めくらが、ひとりびとりかってなこと  
をいうので、

十二39 よんでわかるように、ケラーは、めくら  
で、そのうえつんぽでした。

十三16 ガリレオは、年をとってもいたし、めく  
らにもなりかけていたので、

めくらさん 「盲」(名) 2 めくらさん  
二33 めくらさん、めくらさん。

二33 めくらさん、めくらさん。  
めぐらす ⑤たてめぐらす

めくらたち 「盲達」(名) 1 めくらたち  
二34 六人のめくらたちは、おそろおそろぞ  
うのそばによってきました。

めぐりあい 「課名」 2 めぐりあい  
十五36 めぐりあい……四十三

十五43 めぐりあい  
めくる 「捲」(五) 2 めくる 《一ッ》

六48 どこかでだれかがめくってる、大きなき  
れいなページ、生きた絵本のページ。

十一26 そのまいめめくって、くり返しくり  
返し読んでみると、

めぐる 「巡」(五) 2 めぐる 《一ッ》  
十三7 ゆめのように、眞理のように、白雲をか

たにまとった小山をめぐって、聞えてくる。  
十五672 そのうちにクリスマスの日がめぐってき  
た。

めさき 「目先」(名) 1 目さき

十一428 ume もほころび、こちふけば、春も目  
さきに近づいた。

めさす 「目指」(五) 2 めさす 目さす 《—シ  
—ス》

十二225 高い理想をめざして、いっしょうけん  
めいけいこをすることだ。

十五535 目さすりっぱな博物館に自動車を乗りつ  
け、

めざとい 「目敏」(形) 1 目ざとい 《—イ》

四553 そこで、目ざとい がんが五六は、あちこ  
ちでみはりばんをしました。

めざとし 「目敏」(形) 1 目ざとし 《—キ》

十五522 いかにも目ざとき 人ととも、声の行  
くえの 見えんやは。

めざめ 「目寛」(名) 1 目ざめ

十五953 「ばらの目ざめ」とか、《略》とか、「こ  
はくのつゆ」などがあらわれます。

めざめる 「目寛」(下二) 1 目ざめる 《—メ》

十二379 この生きた一ことが、私のたましいを目  
ざめさせ、

めしあがる 「召上」(五) 3 めしあがる 《—ツ  
—ロ》

四116 さあ、ごえんりよなく めしあがって く  
ださい。

八4011 王さまは、朝ごはんをめしあがろうとなさ  
いました。

八412 さかなをめしあがろうとなさんと、これも  
こがねのさかなになりました。

めしつかいたち 「召使達」(名) 1 めしつかいたち

五716 めしつかいたちもいました。  
めしつぶ 「飯粒」(名) 2 めしつぶ

八67 頭の上にも乗り、口さきのめしつぶもつ  
つのようになりました。

九1174 たべのこしのめしつぶまげばうちつど  
うずめの子らと日なたぼこする

めしべ 「雌蕊」(名) 5 めしべ

十三96 花のおしべとめしべとの関係についてい  
うと、

十三96 おしべのかふんがめしべにつかないよう  
なくふうと、いま一つ、よくつくようなくふうを

十三98 かふんがめしべにつくときはよくみのる  
が、つかないときはみのらないことを、

十四521 それは、花の一部であるめしべの根も  
とが、大きくふくれただけのものです。

十四535 どうしてそのめしべの根もとがふくれ  
て、そんな大きな実になったかということは、

めじるし 「目印」(名) 1 目じるし

八574 あれを目じるしにしてやってみよう。

めじる 「目目」(名) 2 めじる

二168 めだかかめめじる——ろばたたい  
七621 めじろの声がきこえている。

めずらしい 「珍」(形) 8 めずらしい 《—イ  
—ク》

五962 これはめずらしい。

九252 春になると、だれもが、このめずらしいお  
客の帰ってくるのをまちがれています。

九416 山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつ  
かるからです。

十74 子どもが大ぜい、めずらしそうについてき  
て困りました。

十五211 見るもの聞くものがごとくめずらし  
く、ゆかいな楽しいものでした。

十五218 ふたりの子どもは家庭教師につれられて、  
めずらしい草花をつみながら、

十五462 かかっているおもしろいかんばんも、か  
れには、みなめずらしいものばかりであった。

十五598 じつにめずらしい日本人が舞いこんで  
来たものだ。

めずらしさ 「珍」(名) 1 めずらしさ

八511 そのめずらしさ、おもしろさに、黒山の人  
だかりだったのです。

めだか 「目高」(名) 1 めだか

二167 からすすめめだかかめめじる  
めだつ 「目立」(五) 1 目だつ 《—チ》

八1029 やくは、白くてにおいもなく目だちません。  
めだま 「目玉」(名) 3 目だま

六322 目だまの「の」の字がくるくるまわる。  
六348 かかしの目だま、ぐるぐるまわりながら、

大きくなったり、小さくなったりする。

十一566 花火やほたる、とんぼの目だま、一つ  
一つ光る。

めちやくちゃ 「目茶苦茶」(形状) 2 めちやくちゃ

九684 この中で、いちばんばかで、めちやく  
ちゃで、まるでなっていないのがえらいとね。

九693 この中で、いちばんばかで、めちやく  
ちゃで、《略》やつが、いちばんえらいのだ。

めちやくちゃ 「目茶目茶」(形状) 1 めちやくちゃ

三804 ぼくの道は、雨に めちやくちゃに さ  
れちゃった。

めっき 「鍍金」(名) 1 めっき

九728 ニリットルにたりなかつたら、めっきの  
どんぐりもまげてこい、早く。

めつき 「目付」(名) 3 目つき

十163 かしこそうな目つきの少年でした。

十一772 その日は、病人の目つきが、いくらかわかりかけでもしたようにみえました。

十一792 父親のちよつとしたため息にも、ちよつとした目つきにも、ふるえながら氣をもんで、めったに「滅多」(副) 1 めったに

十七5 そいういなかへは、めったに日本人もいかないのです。

メデシンボール(名) 1 メデシンボール

七3910 高いところをメデシンボールのように送られていくうちに、にこにこ顔になり、めでたい(形) 3 めでたい 《—イ》おめでたい

六985 齣会 めでた、めでたとさかなたち、みんなでまうやら、うたうやら。

六985 齣会 めでた、めでたとさかなたち、六985 齣会 めでた、めでたとさかなたち、十三3410 れんは、めでたい文句や、詩の一節であるが、みな、りっぱな文字で書かれてある。

メトロポリタンはくぶつかん(名) 1 メトロポリタン博物館

十五437 齣 あ、ニューヨークのメトロポリタン博物館の——とつぶやいた。

めばえそめる 「芽生初」(下二) 1 めばえそめる 《—メ》

十二3110 もう、めばえそめたそのなつかしい葉や、花の上を、私の指は《略》なでていました。

めばえる 「芽生」(下二) 1 めばえる 《—エ》

十二375 私は、なにかしらわすれていたものを感じたような、めばえてこようとする心のはたきといったようなあるふしぎなものを感ぜました。

めばな 「雌花」(名) 1 め花

十四528 齣 花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。

めもと 「目元」(名) 1 目もと

三508 齣 目もとをすえて石を切る、めもり 「目盛」(名) 1 めもり

十四131 齣 コーヒー入れは、中に小さなめもりのようなものがついていて、めやぎ 「雌山羊」(名) 1 めやぎ

十一571 齣 べにばら野ばら、さんしよの木のため、めやぎのおちち、一つ一つかおる。

メリー(人名) 1 メリー

十一483 ぼくのいすは、小さなゆりいすで、その下に、いつもかいねこのメリーがいた。

めん 「面」(名) 10 めん 面 おめん・けいしやめん・のうめん

十637 能のほうでは、めんをつけます。

十639 おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わかい女のめんと、

十639 おばあさんのめん、わかい男のめん、わかい女のめんと、それぞれ的人物によつて、それぞれのめんがあります。

十6310 それぞれのめんがあります。

十6311 そのために、能は、めんの藝術ともいわれ、大むかしにさかえた、ギリシアの、同じめんの藝術とくらべて、研究されています。

十6312 んの藝術とくらべて、研究されています。

十647 狂言はめんをつけません。

十二162 力のこもった角、まるみのある面、めんじよう おめんじよう

めんする 「面」(サ変) 1 面する 《—シ》

十三349 ホートンに面した家々の門には、「れん」が書かれてある。

めんどう 「面倒」(名) 1 めんどう

十308 家では、弟たちのめんどうをみてやり、兄や姉の手助けになりたいと思います。

めんどう 「面倒」(形状) 5 めんどう

六1195 よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりにまげるのですから、めんどうでした。

六1197 まがっているのめんどうでしたが、いろいろにくふうして、うまくはりました。

九476 齣 あした、めんどうな裁判をしますから、おいでなさい。

九486 そのめんどうだという裁判のようすなどを考えて、おそくまでねむれませんでした。

九609 齣 じつは、おとといからめんどうなあらそいがおこって、ちよつと裁判に困りましたので、

## も

も 「面」おとのも

も 「藻」(名) 1 も

十五91 齣 水はしずかに流ると見ればもの花(係助) 1347 も おいかにも・いつまでも・いつも・いまにも・すこしも・ちつとも・なおも・なにも・なんにも・にもかかわらず・はやくも・またしても・まもなく・ゆめにも・よくも・わけても

一119 齣 「おや、どちらもおなじでしたね。

一154 をつかいます。めもつかいます。いき

一155 つかいます。いきもつかいます。ここ

一156 つかいます。ここもつかいます。じを

一163 かいます。えんぴつもつかいます。かみ

一164 つかいます。かみもつかいます。まだ

26 5 へ。「略」。ことりもねわりました。ら  
26 6 わりました。らじおもねわりました。く  
26 7 ねわりました。くさもきもねわりました  
26 7 ました。くさもきもねわりました  
27 3 目はふたつ、みみもふたつ。口はひと  
27 5 口はひとつ、はなもひとつ。だれもだ  
27 6 なもひとつ。だれもだれもおなじか  
27 6 とつ。だれもだれもおなじか。だれ  
27 8 おなじか。だれもだれもちがつた  
27 8 か。だれもだれもちがつたか。お。ひ  
29 4 、みぎひだり。足も二ほん、ひだり  
42 3 いますよ。みんなもうごいていますよ  
42 4 いていますよ。木もはえていますよ。  
49 9 、さっきの人たちも、しゃしうさんた  
49 10 しゃしうさんたちも、ぼーいさんたち  
50 1 も、ぼーいさんたちも、みんなながい  
50 7 「略」。おとうさんも、おきやくさん  
50 7 人も、おきやくさん、みんなわらいま  
52 8 「略」。おとうさんも、目をあけました。  
54 2 会。「ええ、いくどもひろいました。こ  
59 7 ました。おじいさんも、おばあさんも、き  
59 8 さんも、おばあさんも、きようだいも、き  
59 8 さんも、きようだいも、みんなよろこ  
60 5 会。た。ぴょんちゃんも、きれいずきない  
60 6 会。した。はねちゃんも、ものをはつきり  
60 7 会。た。まきげちゃんも、おともだちとな  
62 1 会。ろうさん。あなたも、おとうさん、お  
62 1 会。たも、おとうさん、おかあさんも、み  
62 2 会。んも、おかあさんも、みんないい人  
63 10 ました。おとうさんも、わたくしも、わの  
64 1 うさんも、わたくしも、わのなかにはい  
15 1 できました。ふたごもできました。まん

22 7 会 はにほへと」までもありました。どう  
23 4 会 ようちよが、けさも、ゆりの花にきて  
33 5 会 わつてみたこともない。」といいま  
40 3 会 、とおくのほうでも、「略」となき  
44 3 会 おじさん、こんやもまた、かげえをし  
50 9 へ。「略」。じろうも、となりのへやへ  
55 5 しには、おとうさんもあります。おじい  
55 5 ります。おじいさんもあります。けれど  
57 2 ました。ちようちよもとんでいました。  
58 9 会 っているつくえも、こしかけも、長い  
58 9 会 くえも、こしかけも、長いあいだはた  
59 3 会 きました。二年生も、これで、べんきょ  
59 4 会 しました。三年生も、これで、べんきょ  
59 7 会 。四年の人たちも、五年の人たちも  
59 8 会 、五年の人たちも、六年の人たちも  
59 9 会 、六年の人たちも、そのまえの人た  
59 10 会 のまえの人たちも、これをつかいま  
64 7 会 もう、「冬の國」もすきていく。「み  
66 8 会 る。」ゆりこ、どこもさくら。「みんな  
10 7 会 かさま。ちようちよも小鳥もたのしそ  
10 7 会 ちようちよも小鳥もたのしそ  
12 8 会 をおぼえなくてもよろしい。ただひ  
14 3 会 うまれてくることもわかりました。「へ  
15 1 会 りました。はんたかもおしやかさまのは  
20 1 会 くうちに、花の名も、鳥の名も、だん  
20 2 会 花の名も、鳥の名も、だんだんふえて  
22 3 会 いきおいで、ひるもよるも、ぐんぐん  
22 3 会 いで、ひるもよるも、ぐんぐんとのび  
22 6 会 いままでみたこともきいたこともな  
22 6 会 こともきいたこともないほど、大きな  
23 8 会 お米がはんぶんもできない。「略」  
23 10 へ。「あちらの村でもこちらの村でも、

23 10 会 でもこちらの村でも、こういって、こ  
26 1 会 ですから、切るのにも大きわざでした。  
27 3 会 いままでみたこともきいたこともな  
27 3 会 こともきいたこともない、大きなふね  
28 2 会 「と、せんだうたちも、みている人々も  
28 2 会 も、みている人々もいきました。する  
28 4 会 「いや、ふしぎでもなんでもない。あ  
28 4 会 しぎでもなんでもない。あのいきお  
33 8 会 んのまるいびんもありました。へや  
34 7 会 ました。わたくしも、早く大きくなっ  
35 2 会 います。ひまわりものびています。い  
35 8 会 つかっている人もあります。のこぎ  
35 9 会 ひいている人もあります。かなづ  
36 1 会 うっている人もあります。ガタガ  
36 5 会 かまどがふたつもあります。火がも  
36 9 会 。大きなながしもあります。こづか  
34 4 会 ぼうがまけるかもしれない。ぼくが、  
48 2 会 おくにぬしのみことも、「略」とおた  
50 3 会 。かなかなぜみも目がさめて、か  
56 7 会 いえいえ、それもなりません。う  
57 3 会 いえいえ、それもなりません。う  
58 3 会 丘の上にあるのも、ふもとにあるの  
58 4 会 ふもとにあるのもありません。丘の  
60 2 会 あわないと、どこへもいけません。そこ  
60 10 会 わないと、どこへもいけないじゃない  
61 4 会 ほかの子どもたちも、こしをおろして、  
62 5 会 した。「デビッドもそれでいいかい。  
62 10 へ。「略」。みんなも声をそろえてへ  
65 6 会 うみんなはどこへもいけません。「略  
67 6 会 「略」。男の子たちもいきました。「略  
72 2 会 も、はきだすこともできません。やは  
77 8 会 。だから、だれにもひるとよるがあ

四七1手 あげよう。ねぎも あげよう。もうし  
四二75手 「あしたの あさも、また かけっこを  
四三05手 ださんは、きょうも びょうきで 休んで  
四三010手 てがみを 書いてもいいし、えを かい  
四三11手 し、えを かいても いいと思います。  
四三14手 〈略〉。」 かずこさんも、やはり、「みんな」  
四四22手 ように のびる ことも あるし、きゅっと  
四四23手 ゆっと ちぢむ ことも ありました。どの  
四四36手 とびました。けさも 早くから、三十ば  
四四43会 ました。「きょうも、きのうと おなじ  
四四810手 って、べつに 氣にも かけないで とびつ  
四四514手 なりません。だれも、ばらばらになっ  
四四524手 んぶしている がんも おちそうになりま  
四四539手 、この 風が なんと いえない いい 氣  
四四555手 夜は、さいわい、雨も ふらず、風も ふか  
四四555手 、雨も ふらず、風も ふかない、しずか  
四四564手 へ。」「略。」 きず口も だんだん よくなり  
四四565手 んでくる たべものも、おいしく たべる  
四四568会 あさ、出発しても いいよ。ぼくたち  
四四5710手 りばんの がんたちも あつめました。二  
四四6010手 ました。どの がんも どの がんも、夜つ  
四四6010手 がんも どの がんも、夜つゆで からだ  
四四628手 た。さすがの へびも、いきが くるしく  
四四646手 さげたので、みんなも わらいました。「へ  
四四667手 は、上から よんでも 下から よんでも、  
四四668手 でも 下から よんでも、おなじになる こ  
四四702手 りが やむと、なりも とまる。」「へ略。」「  
四四734手 つ紙に 書いて、えも つけて、あそべる  
四四799手 系——「系」の 字も これから「え」を  
四四8210手 つりがねや、十字かも 上げました。ほそ  
四四8210手 。ほそい ろうそくも 立てました。弟が、  
四四832会 た。弟が、「これも 上げて ちょうだい

四九二 二 まっ黒くはないかもしれないが、どう  
 四九三 四 かに降る。右にも左にも、むこうに  
 四九三 四 降る。右にも左にも、むこうにもこっ  
 四九三 四 左にも、むこうにもこっちにも、どこ  
 四九三 四 こうにもこっちにも、どこにも降る。  
 四九三 四 こっちにも、どこにも降る。風にふかれ  
 四九四 一 がかおにかかるのもわすれて、高い高  
 四一〇 八 ふきながら、なんどもおじぎをします。  
 四一〇 七 会 ちがいいな。波もしずかだ。」かめ「  
 四一〇 七 会 お礼の申しようもございません。ど  
 四一三 二 のぼめん である人も、三のぼめんとお  
 四一三 二 である人も、三のぼめんとお  
 四一四 二 会 りがとう。おどりももうたくさんです  
 四一四 五 会 とひめさま、なにもかもじゅうぶんで  
 四一四 五 会 めさま、なにもかもじゅうぶんでござ  
 四一五 四 会 も、うちのことも氣にかかりますの  
 四一五 九 会 なんのおかまいもできませんでした。  
 四一九 一 會 えつたら、だれも知らない人ばかり  
 四二〇 五 おがみえます。本もよめます。字も書  
 四二〇 六 本もよめます。字も書けます。たった  
 四二二 三 会 までは、なん百年も、なん千年も、人々  
 四二二 三 会 百年も、なん千年も、人々は不自由な  
 五六五 おこし、水道の水にもなり、川はだんだん  
 五七二 一 水をいれ、はたけにも水をまいていく。  
 五一〇 一 会 な海だこと、お船もみえますね。」「略  
 五一五 三 書いた手紙です。私も、いまから旅にでか  
 五二〇 一 れはじめました。私もその人の手ににぎら  
 五二三 一 会 。」「略。」「それもあるけど。」「略。  
 五二四 五 会 。」「略。」「それもあるけど。そうした  
 五二四 九 会 っちゃん、あなたもおかけなさいな。』  
 五二五 九 会 っちゃん、あなたもおかけなさいな。』  
 五二七 六 会 っちゃん、あなたもおかけなさいな。』  
 五二七 六 会 わからなかったかもしれない。でもい

五二九 六 会 、とても持てそうもない物、一つは小さ  
 五三〇 二 会 うぶです。ほくにも持てそうですから。  
 五三〇 二 会 てです。まえからも、やりたいと思つて  
 五三二 二 会 んです。これからも、いつもやりたいと  
 五三二 五 会 。おや、むこうからも長い、長い貨物列車  
 五三三 八 会 。どのえんとつからも、けむりが、むくむ  
 五三六 三 会 動かすのです。ガスも石炭からとれるし、  
 五三六 四 会 いろいろのくすりも石炭からとれます。  
 五三八 六 会 りました。」「ぼくも、三年生を受け持つ  
 五三九 七 会 す。茶色の木のもみえます。このきれ  
 五三九 九 会 では、さくらの花も、なしの花も、すも  
 五三九 一〇 会 の花も、なしの花も、すももの花も、すも  
 五三九 一〇 会 の花も、すももの花も、うめの花も、りん  
 五三九 一〇 会 の花も、うめの花も、りんごの花も、い  
 五四〇 一 会 花も、りんごの花も、いっぺんにさきだ  
 五四一 一 会 とういます。けさも、まきばにだしてや  
 五四三 三 会 ました。そちらでも、ほたるはとびます  
 五四四 四 会 ひとりで通るときも、みんな通るとき  
 五四五 五 会 、みんな通るときも、たんぼぼがさいて  
 五四六 六 会 青い海。きてきも鳴らさず 船がい  
 五四九 九 会 いさつをしていく人もあります。まさこが  
 五四九 一 会 と、日がしずんでまもない空に、大きな星  
 五四九 四 会 やりますと、まさこも、まるくふとった手  
 五四九 一〇 会 つばみたいなのもみえる。きれいだこ  
 五四九 一〇 会 るまでに、どの星もみんなみてしまいた  
 五四九 一 会 した。するとおの、」「略。」「いいいま  
 五四九 二 会 はるおも、「ぼくも。」といいました。  
 五四九 八 会 てさきました。どれも空色です。あやこは  
 五五二 一 会 大きな花を、三つもさかせたのは、だあ  
 五五二 六 会 なって、「あやこも、このきゅうりも、  
 五五二 六 会 も、このきゅうりも、あさがおの花も  
 五五二 六 会 も、あさがおの花もおなじだよ。」とい

五六六 六 会 まえひとりの力でもなければ、おとうさ  
 五六七 七 会 おかあさんの力でもない。」「——」「略  
 五六九 九 会 」「おとうさんも、おかあさんも、こ  
 五六九 九 会 んも、おかあさんも、こうして、まいに  
 五六九 九 会 めて、おけのつもの、もらってくればよ  
 五六九 一〇 会 けなんて、とくにもならない。もう一ど  
 五六九 一〇 会 た。めしつかいたちもいました。おじいさ  
 五七一〇 一〇 会 ん、これであなたもまんぞくでしょう。  
 五七二 四 会 は金持のおくさんもういなくなった、女王  
 五七二 八 会 ようなあるきかたも、口のききかたも知  
 五七二 八 会 も、口のききかたも知らないで——國じ  
 五七四 二 会 は、りっぱなけいもついています。おじ  
 五七四 四 会 、これで、あなたもまんぞくでござい  
 五七四 八 会 、おじいさんには目もくれないで、けらい  
 五七四 一〇 会 た。それから一週間もたったころ、おばあ  
 五七五 二 会 で。わたしは女王もいなくなった。こん  
 五七五 七 会 いさんは、口ごたえもできず、力のない足  
 五七五 九 会 りました。かおよりも大きな花です。先生  
 五七五 九 会 きました。かべいたもふきました。竹のさ  
 五八〇 七 会 らいました。ガラスもきれいになって、そ  
 五八二 二 会 木 きようは五人も休みました。」「どう  
 五八二 四 会 て、私たちの教室にもおいでになりました  
 五八二 一〇 会 。」「わしは、三つも四つもあるかと思つ  
 五八二 一〇 会 した、三つも四つもあるかと思つて  
 五八二 一〇 会 しいわ。目が四つもあつちゃ。」「略。  
 五八二 一〇 会 いいおびだ。わしもほしいな。ちよつと  
 五八二 一〇 会 ものか、このわしも小さいときは、オギ  
 五八二 一〇 会 略。」「ひばりかもしれないよ。」「略  
 五八二 一〇 会 んでした。ひばりでもありませんでした。  
 五八二 一〇 会 中には、ひわのむれもありました。さんち  
 五八二 一〇 会 んなふうには、自分でもさえずりはじめまし  
 五八二 一〇 会 きはじめると、ひわもよろこんで、」「略」

五〇二 一 「略。」と、ひわもまねをします。かえ  
 五〇三 三 うからは、あくる日もやってきました。そ  
 五〇五 三 した。そのつぎの日もやってきました。そ  
 五〇五 九 三 この鳥は、いくつもげいができるのね。  
 五〇五 一〇 ちゃんのおかさんも、ひわをほめました  
 五〇六 五 きました。旅のひわも、大よろこびで、声  
 五〇六 八 三 のひわが、「きみも、いっしょにむこう  
 六四 五 るな音や、みたこともないような物が、ご  
 六五 五 や、さまざまの道具も、おなじ台の上に  
 六六 七 三 、それらはかたちも大きさもそれぞれち  
 六六 七 六 へかたちも大きさもそれぞれちがつては  
 六六 一〇 三 にたつのに、どれもこれも不足はなさそ  
 六六 一〇 六 のに、どれもこれも不足はなさそうであ  
 六六 一〇 六 くて、なんの役にもたちそうにない。あ  
 六六 一〇 九 がっかりした。ねじもがっかりした。その  
 六六 一〇 九 けんだ。時計屋さんも喜んだ。しかし、い  
 六六 一〇 九 ねじは、「自分もほんとうに役にたつ  
 六六 一四 三 た。けれども、だれもきてはくれません。  
 六六 一六 一〇 んだので、かりうどもびっくりして、「略  
 六六 一六 一四 たいこのうちがいもあるよ。じつにゆか  
 六六 一六 一四 す」「こんな楽しさも知らないで、氣のど  
 六六 一六 一四 「今夜はつものかもしれない。」あり三  
 六六 一六 一四 てあたたまることできるし、たべもの  
 六六 一六 一四 きるし、たべものもじゅうぶなべられ  
 六六 一六 一四 ねてきます。ぼうしもかぶらず、がいとう  
 六六 一六 一四 かぶらず、がいとうもきていません。きり  
 六六 一六 一四 りす「すこしでもいいから、わけてく  
 六六 一六 一四 ざいます。」なんどもお札をいってたちさ  
 六六 一六 一四 えんりよしくなくてもいいのよ。さあ、み  
 六六 一六 一四 んやおかさんにもわからないんだって  
 六六 一六 一四 『とか、なんべんもなんべんもさけんで  
 六六 一六 一四 んべんもなんべんもさけんでいたよ。』

六五〇 四 三 空。考えごとでもできそうな、ああ  
 六五〇 八 三 。きたくないこともきえそうな、ああ  
 六五〇 一〇 三 るい晩でした。屋根も、木の葉も、石ころ  
 六五〇 一〇 三 た。屋根も、木の葉も、石ころも、みんな  
 六五〇 一〇 三 、木の葉も、石ころも、みんなきれいに光  
 六五〇 一〇 三 でとんでいくようにもみえます。「略。」  
 六五〇 一〇 三 「略。」と、みちこも感心しました。それ  
 六五〇 一〇 三 す。おもしろいことも、おかしいことも書  
 六五〇 一〇 三 とも、おかしいことも書きます。どうぞ、  
 六五〇 一〇 三 たやことわざの中にも、このことあては  
 六五〇 一〇 三 いられている。わたしもせきがでたらいいな  
 六五〇 一〇 三 うにして、どこまでもお話をつづけてみま  
 六五〇 一〇 三 いたのです。まんがもいれました。一組の  
 六五〇 一〇 三 クロスワーズパズルもこしらえました。こ  
 六五〇 一〇 三 ました。ことば遊びも書きました。この字  
 六五〇 一〇 三 どもの名や家の場所も書きました。かべ新  
 六五〇 一〇 三 まを作りました。目もはなも口もつけまし  
 六五〇 一〇 三 しました。目もはなも口もつけました。「へ  
 六五〇 一〇 三 した。目もはなも口もつけました。「略」  
 六五〇 一〇 三 「略。」「略。」「お話をしたら、なおおもし  
 六五〇 一〇 三 ら、お話もするかもしれないよ。」「へ  
 六五〇 一〇 三 いが、死んでいとも思えない。死んでい  
 六五〇 一〇 三 に元氣のいい顔つきもしていないはずだ  
 六五〇 一〇 三 略。」「風なんかも。」「略。」「略。」  
 六五〇 一〇 三 「雪だるまは動きもしないし、息もして  
 六五〇 一〇 三 きもしないし、息もしていませんね。」  
 六五〇 一〇 三 から命がある。うしろまもそうだ。風や  
 六五〇 一〇 三 がある。うしろまもそうだ。風や、自動  
 六五〇 一〇 三 うは、息をすることも自分の力ではないこ  
 六五〇 一〇 三 う。朝から一ぴきもつれないなんて――  
 六五〇 一〇 三 みこと「にいさんちやつぱりえものがな

六九二 一〇 三 りばりなので、私も困ってしまいました  
 六九二 一〇 三 ていた、たいも喜び、おめでたい。  
 六九二 一〇 三 ここから百メートルもはなれている、向こ  
 六九二 一〇 三 遠鏡が、できるかも知れない。」こう思  
 六九二 一〇 三 の家のせたく物もみえますよ。あ、人  
 六九二 一〇 三 のようだ。さつきも、「略。」というの  
 六九二 一〇 三 ったのである。ぼくも、もちろんわらった  
 六九二 一〇 三 ある。そこで、ぼくもひとつまねをしてや  
 六九二 一〇 三 なのと思った。みんなあまりわらってくれ  
 六九二 一〇 三 といってみた。これもはなから声がぬけて  
 六九二 一〇 三 ってみたら、これらははなの音であること  
 六九二 一〇 三 しまった。それよりも、五十音について、  
 六九二 一〇 三 た。だれのたこよりもよくあがりました。  
 六九二 一〇 三 わる口をいったものも、「略。」といつて  
 六九二 一〇 三 左にゆれると、自分もいっしょに首をふり  
 六九二 一〇 三 した。はりつけるのも、まがっているのも  
 六九二 一〇 三 とれたね。ぼくにもちようだい。ぼく、  
 六九二 一〇 三 「略。」「略。」おにも、とんとこ、とんと  
 六九二 一〇 三 れました。「ぼくも、かけっここのなかま  
 六九二 一〇 三 、おつてしまってもいい。」うさぎさん  
 六九二 一〇 三 ころです。しかさんも負けてはいません。  
 六九二 一〇 三 るしてくるみこみありません。とらさ  
 六九二 一〇 三 した。山を、いくつもの、いくつものこえまし  
 六九二 一〇 三 、いくつもの、いくつものこえまし。谷川に  
 六九二 一〇 三 光った。校庭のつゆもいっぺんに光った。  
 六九二 一〇 三 まどがあいて、教室も目がさめた。わらい  
 六九二 一〇 三 えんどうの花が、風もないのにゆれている  
 六九二 一〇 三 く子ども、なんども手をふりながら、先  
 六九二 一〇 三 かしの木は、きょうもそんなことを考えた  
 六九二 一〇 三 こえる。バケツの音もする。水の音もする  
 六九二 一〇 三 の音もする。水の音もする。学校のにおい  
 六九二 一〇 三 教室のまどは、どこもまぶたをとじる。す



七94 会 もう、四十五年にもなる。あの日からき  
 七115 手」ということばにも、いろいろなつかい  
 七110 手をうつ」の「手」も、「手をあわせる」  
 七110 あわせる」の「手」も、これと同じつかい  
 七128 「や「豆の手」なども、同じです。「略」  
 七131 「手」ということばも、さまざまなのはた  
 七211 会 「あつ、こつちにも。」女の子四「あつち  
 七212 会 の子四「あつちにも。」先生」とまってい  
 七237 会 「母」そう、それもお勉強ですね。あな  
 七241 会 おかあさん。先生も、あおむしをかって  
 七321 会 「母」おかあさんも、こんなところをみ  
 七346 こもうとする男の人もあり、足をふまれて  
 七347 おこっている女の人もありました。私と弟  
 七358 会 ちへは、もう二どもいったことがあるの  
 七359 会 それに、乗るかえもないし、二時間ほど  
 七368 ぐうしろのおばさんも、「略」と、心配  
 七3710 ただひとり、わらいもせずに、両方の手で  
 七388 、ひとあしすすむにも、よいいではありま  
 七438 会 だすぎたことかもしれないが、この  
 七442 まった。私のまえにもぼうしがきた。私も  
 七442 もぼうしがきた。私も喜んで、いくらかの  
 七453 会 もりでひいたのでもありません。ただ、  
 七468 た。ちょうど、汽車もとまった。青年は、  
 七4610 「であった。駅の名も美しくよまれた。  
 七479 していますと、文章も、だんだんはつきり  
 七488 大会があった。ぼくも、せんしゅになつて  
 七496 しあいをした。これも勝った。さいごに、  
 七503 どの学校のせんしゅも、みんな、運動場に  
 七517 でてしまった。ぼくもあてられた。ひがし  
 七549 ると、たかやま先生も組の友だちも、みん  
 七549 ま先生も組の友だちも、みんな、にこにこ  
 七559 ことばは、ちりほどもあつてはなりません

七607 の実。いまに、一つもなくなるだろう。ま  
 七617 が鳴くと、あつちでもこつちでも鳴く。こ  
 七617 あつちでもこつちでも鳴く。こんなに、か  
 七624 てみたり——どの花も、みんな空を向いて  
 七653 えている。あつちでもこつちでも、だつこ  
 七653 あつちでもこつちでも、だつこく機。麦の  
 七672 である。炭を切る音も小鳥の声も、夕がた  
 七672 を切る音も小鳥の声も、夕がたになつてい  
 七704 うしろに、月は、音もなく、のっそりとい  
 七713 りとぬらした。うまもうまかたも、同じよ  
 七713 た。うまもうまかたも、同じように。ぬま  
 七726 、ほたるだ。だあれもない。うまが、水  
 七756 会 ない。」乙「木一本もみえない。」そこへ、  
 七789 会 いいえ、みたのでも、きいたのでもあり  
 七789 会 でも、きいたのでもありません。」ふた  
 七818 会 びつこであることも知っていました。し  
 七828 会 なにか、そちらにも、いいぶんがあるか  
 七8411 会 人「それはほかでもありません。道に、  
 七853 会 ない。もう帰つてもよろしい。」旅人は、  
 七856 会 人をうたがったのも、むりはない。けれ  
 七903 らうように、うさぎも、まえ足で、耳や顔  
 七929 たら、白は2cm、黒も2cm、茶は1・5cm  
 七992 りました。耳の長さも計りました。耳の長  
 八45 けませんよ。いぬでもねこでもありません  
 八45 よ。いぬでもねこでもありません。鳥——  
 八45 ません。鳥——それも、日本どくどくの、  
 八56 いったほうがいいかもしれません。なぜな  
 八62 りだつたのです。私も、すっかりひきこま  
 八66 んなれて、指さきへもかたへもとまるよう  
 八66 、指さきへもかたへもとまるようになった  
 八67 ばかりか、頭の上にも乗り、口さきのめし  
 八67 、口さきのめしつづもつづくようになり

八83 は、同じ日本の中でも、土地土地でほおじ  
 八88 がいだろうと思う人もありましようが、そ  
 八94 ちの家のうち、中でも茶のまほど、すぎな  
 八99 びょうもののようにも思えましようが、ど  
 八117 。すると、あわれにも、くちばしから血を  
 八123 、もうどうすることもできませんから、つ  
 八135 それから十年、いまも、私はピオのことが  
 八147 ましたので、寒い冬もぶじにこすことがで  
 八157 した。地の中はどこもまつくらです。せみ  
 八162 く、あたりの木の根ものびています。だか  
 八172 よう。それは、だれも教えてくれたことで  
 八184 え一二センチ歩くにも、トンネルをほつて  
 八187 ちの大てきのすずめもねこもやつてこない  
 八187 てきのすずめもねこもやつてこないから、  
 八188 ぶらげみでは、七年もかからないと、親に  
 八197 いて不自由だし、目もよくはみえないらし  
 八214 とさがりました。足もでました。ただ、腹  
 八229 とのび、からだの色もこくなつていきます  
 八239 ぶるとふるえて、色も、もようも、はつき  
 八242 えて、色も、もようも、はつきりとしてき  
 八245 いのあおぎりの木でも、ほかのあぶらぎ  
 八253 かに鳴きたてたせみも、やがて、秋になる  
 八254 でしまつて、あたりもひっそりとしずかに  
 八268 の大きなそり橋を音もなく渡つて、草花の  
 八288 の美しい光に、天帝もすっかりおみとれに  
 八318 ました。けんぎゅうも、はたけにでてはた  
 八3410 ん。五日や二十日もありません。五ヶ月  
 八3410 。五ヶ月や八ヶ月でもありません。「光年」  
 八353 よう。二十光年の星もあり、三十光年の星  
 八353 あり、三十光年の星もあります。あのたな  
 八359 ります。百光年の星もあり、一千光年の星  
 八359 一千光年の星のむれもあり、一万光年の星

八三5 あり、一万光年の星もあります。それど  
 八三6 ろか、十萬光年の星もちらばっています。  
 八三7 川をみると、なんともいえない大きなふか  
 八三8 わいひとりの王女もあって、なにひとつ  
 八三9 がねならば、わしもつむのだが。」とお  
 八四0 になりました。それもこがねになりました  
 八四1 なさいました。着物もこがねになりました  
 八四2 うとなさると、これもこがねのさかなにな  
 八四3 になりました。これもこがねのたまごにな  
 八四4 になりました。王女はなんの返事もしません。王女は、  
 八四5 じゅうのこがねよりもたいせつであつたか  
 八四6 たりなかつたり、金もあり、からだもりつ  
 八四7 、金もあり、からだもりつばで、なんの不  
 八四8 ばで、なんの不自由もなくくらししているか  
 八四9 ませんでした。王子も、なんとかして父の  
 八五0 らいて、晩ごはんもいただいた。あとは  
 八五1 ヤツの持ちあわせもございせん。」と  
 八五2 した。その家の人も、「幸福」がきたと  
 八五3 はまた、その家でもごめんをこうむりま  
 八五4 した。その家の人も「幸福」がきたとは  
 八五5 、たくあん一きれにも、人の心のおくは知  
 八五6 おもしろい。勉強もそのとおりだ。」と  
 八五7 たずねてくれるものも少ないし、ほかのあ  
 八五8 と、どのたまごからも小さなひなの首がで  
 八五9 まごだよ。わたしも、一どそれだまご  
 八六〇 五日はすわることもできますから。」へ  
 八六一 という、ひなたたちも一わづつとびこんだ  
 八六二 みにくいあひるの子も、いっしょになつて  
 八六三 いのいいのをみてもわかる。これはわた  
 八六四 ください。だれにもわるいことをしない  
 八六五 くおよぐといつてもいい。大きくなれば  
 八六六 きくなれば美しくもなるでしょう。たま

八七〇 なく、にわとりからもぶたれたり、つつ  
 八七一 たほうがいいかさえも、わからなかつた。  
 八七二 びたつた。「これも自分がみにくいばか  
 八七三 ませてもらいたいと思つたが、それもゆ  
 八七四 とも思つたが、それもゆるしてもらえそう  
 八七五 ゆるしてもらえそうもなかつた。それから  
 八七六 やつてきた。どちらもたまごからはいだし  
 八七七 ごからはいだしてまもないものであつた。  
 八七八 しあわせにあうかもしれないよ。」この  
 八七九 がっている木の枝にものぼつていた。青い  
 八八〇 にくいので、いぬもかみつこうとしない  
 八八一 は、おきあがる氣にもなれなかつた。なん  
 八八二 なかつた。なん時間もたつてから、ようや  
 八八三 ひるの子は立つこともできず、すわりこん  
 八八四 はあひるのたまごもたべられる。おすで  
 八八五 へさしのべ、自分でもおどろくほどへんな  
 八八六 の子は、あの鳥の名も、どこへとんでいっ  
 八八七 ったのかということも知らなかつた。しか  
 八八八 つかしく思つたよりも、あの鳥をなつかし  
 八八九 られたまま、身動きもせずたおれてしまつ  
 九〇〇 で話すにはあまりにもかわいそうである。  
 九〇一 ものが、おくめんもなく近づいていくの  
 九〇二 ら、ころされるかもしれない。しかし、  
 九〇三 、ほかの子どもたちも、「略」と喜んで  
 九〇四 などとは、ゆめにも思わなかつた。」七  
 九〇五 たさない種もみからも、やつとめがでてき  
 九〇六 いきます。どここの田も、たんぎくがたにで  
 九〇七 。よいお天気で、風もなくあつた日でした  
 九〇八 28度。どのなえからも、すこしずつ新しい  
 九〇九 りました。どのなえも生き生きとしていま  
 九一〇 。花のさいているほもみつけました。やく

九一〇 九 くは、白くてにおいもなく目だちません。  
 九一〇 八 22度。どのいねのほも、すっかり黄色にな  
 九一〇 七 、大きなかぶは30本もありました。こんど  
 九一〇 六 、やく1500つぶもみができたわけで  
 九一〇 五 がいねこきをした人もいました。ぼうのあ  
 九一〇 四 したが、くだけた米もできました。ほし  
 九一〇 三 ら、二色のときよりも、もっとちがつた感  
 九一〇 二 に、音の組みあわせも、いろいろな氣持を  
 九一〇 一 さらと流れる小川ともなり、ちらちらと光  
 九一〇 〇 らちらと光るいけともなり、また廣い海と  
 九〇九 九 なり、また廣い海ともなります。さらに、  
 九〇九 八 う。色の組みあわせも、音の組みあわせも  
 九〇九 七 も、音の組みあわせも、おたがいにとけあ  
 九〇九 六 ことばの組みあわせも、それぞれがつた  
 九〇九 五 情景を写しだすこともできるという話がお  
 九〇九 四 とびこんだときの音もあらわした。おしま  
 九〇九 三 である。風の音よりも、もっとおもしろい  
 九〇九 二 によつて、水の音にもなり、風の音にもな  
 九〇九 一 にもなり、風の音にもなり、雪の降るよう  
 九〇八 〇 、雪の降るようすにもなるのは、ふしぎで  
 九〇七 九 ある。こんなときにも、たいこをつかう。  
 九〇七 八 す。ときには、十ばも二十ばも、ずらりと  
 九〇七 七 には、十ばも二十ばも、ずらりとならんで  
 九〇七 六 の中には、親つばめもいますが、ことし生  
 九〇七 五 をおしんでいるのかも知れません。これか  
 九〇七 四 話しあっているのかも知れません。やがて  
 九〇七 三 きょうから四千キロもあるフィリピンで、  
 九〇七 二 ヨーロッパのつばめも同じように、ヨーロ  
 九〇七 一 、遠くアフリカまでもいって、冬ごしをし  
 九〇六 〇 つばめは、鳥の中でも、たいへん早くどぶ  
 九〇五 九 です。汽車や自動車もかなわないくらいの  
 九〇五 八 をひといきにとぶのも、けつしてふしぎで

九一三 とにつづく。一、二も たかぎの落した物  
九三七 らくすると、たかぎもさがし物のようすで  
九〇〇 七 わらいだす。たかぎもわらう。たかぎし  
九〇一 略。やまだ「ぼくもそうさ。」たかぎ「き  
九〇一五 金 さ。」やまだ「ぼくもわらかったよ。」た  
九〇一九 金 う。それで、ぼくも負けまいと思つたん  
九〇二六 金 い。」たかぎ「してもいいさ。」やまだ「そ  
九〇二七 金 い。まだ「そう、してもいいね。」たかぎ「じ  
九〇六 一 られる。いい先生も、ずつとうしろの方  
九〇七 五 一 場で、ジャンプ台もみえる。みんなは喜  
九〇九 一 しい早さに、からだもスキーも一つになつ  
九〇九 一 に、からだもスキーも一つになつて、ビュ  
九〇九 八 つておきあがるものもある。にこにこわら  
九一一 一 、三百五十メートルも登つたところで、つ  
九一一 二 をされた。ぼくたちも、みんなつえをふつ  
九一一 二 んだ。四十メートルも空中をとんで、先生  
九一一 五 ですくつて、いくどもうまそうに飲んでか  
九一二 〇 金 私たちの村の用水も、このまつ川からひ  
九一二 五 そのもののうまさにもよるが、たてる湯の  
九一二 五 ままで味わたつたこともないような、ふしぎ  
九一二 八 は急流だし、雨の日も風の日もある。さか  
九一二 八 し、雨の日も風の日もある。さかのぼるの  
九一二 九 ある。さかのぼるのもたやすくなかつた。  
九一二 九 しずおか縣のさかいもすぎ、ながの縣には  
九一二 八 景色で名高いところもすぎて、四十キロあ  
九一二 八 て、四十キロあまりもきてしまった。こここ  
九一二 九 ると、てんりゅう川もよほど水かさが増つ  
九一二 〇 のしたには、まぎれもないいい味のはつき  
九一二 〇 があつて川べりに道もあつたが、いまはそ  
九一二 七 つたが、いまはそれもなくつた、大きなそ  
九一二 七 つ林におおわれた道もない谷まになつた。  
九一二 〇 と、それこそまぎれもないうまい水であつ

39 12 されたために死ぬものもあつた。たとえば、  
 40 1 たとえ、はきだしもせず、死にもしないものでも、あ  
 40 1 きだしもせず、死にもしないものでも、あ  
 40 3 。同じことをなんどもくり返してみたところ、  
 40 5 る。それが、くる年もくる年も、うまくい  
 40 5 が、くる年もくる年も、うまくいかなかつ  
 41 1 ずむ幸吉を、なんどもはげました。ある年  
 41 5 は、まったく考えてもみなかったことであ  
 42 6 や、海の深さのこともわかり、しおの流れ  
 42 7 さのよいわるいなども、はつきりしてきた  
 42 11 この光明を喜んだのもつかのま、幸吉の心  
 43 2 、じつに八十五万にもおよんだ。しかし、  
 43 12 金。「うめ、おまえも喜んでくれ。やつと  
 44 4 いた。よる年なみにも負けず、研究を重ね  
 44 9 さいわいに、赤しおもよせてこなかった。  
 44 9 に大きなかわりかたもなく、四年めになつ  
 44 12 いていくと、どれにも眞珠が、きよらかに  
 47 1 金 たわたしは、星にもあたらないでし  
 48 1 せんでした。四十分もかかったのではない  
 48 5 、べつにいそぐこともありませんでしたの  
 51 4 「ハイ」と、なんどもくり返しました。い  
 55 1 。七五三の記念写真も、思いではな  
 55 11 した。なんと、わけもなく、すらすらと書  
 56 2 。すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書  
 56 3 していくように、私も、ここで、いままで  
 60 2 金 て、あかちゃんにも、みせてあげて。」  
 60 6 とおっしゃった。私も、「略。」とい  
 61 3 ありました。あしたもあさっても、せいく  
 61 3 。あしたもあさっても、せいくらべをし  
 63 3 や、ほかのしぱいとも、いろいろちがうと  
 63 11 能は、めんの藝術ともいわれ、ヨーロッパ  
 64 2 や、庭園や、建築にも、外国とはおもむき

11 64 3 が、能は、その中でも、もっとも日本らし  
11 64 5 ています。みなさんも、大きくなったら、  
11 64 10 できているといつてもよく、それをみてい  
11 64 11 わかります。ことばも、能は、ゆう美です  
11 65 10 もらえば、くらしにもお金がかかり、着物  
11 66 7 くる風にあたっても、たちまち死ぬとい  
11 66 9 用心して、そばへもよらぬことだ。わか  
11 67 2 のへやの方へは、顔も向けないようにして  
11 67 4 に、からだにさわりもしないのだから、自  
11 67 5 のだから、自分たちも、そつといつてみよ  
11 68 8 が、太郎かじゃよりも、ずっとおくびよう  
11 70 2 した。べつにどつきもたたず、かえって、  
11 70 10 「ひきとめるひまもなく、太郎かじゃは  
11 71 3 ほうりだして、自分も指をつっこみまし  
11 73 1 ました。次郎かじゃも、そのまねをして、  
11 74 4 文 ぐえども死にもせず、ふたくちくえ  
11 74 5 文 ぐえども死にもせず、みくち、よく  
11 74 8 文 ども、死なれもせず。」太郎かじゃ  
11 4 7 んとつが、なん本も立っているのがみえ  
11 4 9 から運んでくるのもみえる。なによりお  
11 5 4 て楽しむ。きょうも、みんなは話に花を  
11 5 10 「略。」「ぼくもきみに賛成だ。ぼく  
11 6 7 りで、べつに用もないようだが、ポー  
11 8 1 ぼくはからだもいいし、息もつづく  
11 8 1 だもいし、息もつづく。コックスの  
11 10 8 トップをこぐ人もいるだろう。」「略  
11 13 1 らっている。休みもなく、はてしもなく  
11 13 1 みもなく、はてしもなく、ゆるやかにう  
11 14 8 太陽の下で、せみも鳴き、ちょうも舞い  
11 14 8 みも鳴き、ちょうも舞い、まっさおな海  
11 14 9 い、まっさおな海もわらい、たんぼぼの  
11 14 10 たんぼぼのわた毛も遠くとんでいく。

11 16 8 は、どんな困難とも戦う、そのうで。ひ  
11 16 10 さな子のささやきも、ききもらさない、  
11 17 3 は、いばらの道をもふみわたしたその足。  
11 17 10 の泉に、かなしみもいたみも、あとなく  
11 17 10 かなしみもいたみも、あとなくぬぐわれ  
11 17 12 ぬぐわれます。朝も、晝も、夜も、流れ  
11 17 12 れます。朝も、晝も、夜も、流れやまぬ  
11 17 12 。朝も、晝も、夜も、流れやまぬ愛のし  
11 19 11 その日のくらしにも困るようになりまし  
11 20 10 お金をもうけたりもしました。金次郎が  
11 21 1 って、どの家からも、おとなの男の人が  
11 21 8 って、おとなよりもよいに土や砂を運  
11 22 3 じの切れている人もあります。金次郎は  
11 23 4 んなに病気がちでも、父親の生きている  
11 23 6 が、いまはどうにもなりません。母親は  
11 23 9 文 、これでわたしも、じゅうぶん働けま  
11 23 10 氣よくいった母親も、子どもをよそへや  
11 25 10 もつかれたようすもなく、かえって、そ  
11 25 11 えて、その体格もりっぱになつていき  
11 27 3 が、金次郎は耳にもいれず、それを続け  
11 27 8 に十二文はすむ者もありましたが、金次  
11 27 9 、その十二文さえありませんでした。  
11 27 11 をころして、だれもないふうをしてい  
11 27 12 ちは、こんなにもびんぼうでした。と  
11 28 3 たわずかの田や畑も、流されてしまいま  
11 31 1 木々のつぼみも草のめも、日々に  
11 31 1 つぼみも草のめも、日々に色づきふ  
11 33 9 ぼたる追う夜も重なつて、麦のと  
11 35 5 文 、晝の休みもあせがでる。まば  
11 36 3 文 ぶばりこのうえもなく、秋のみのり  
11 36 4 文 、秋のみのりも思われる。ひと日  
11 36 5 文 ひと日のあせもおさまつて、夕風

11 37 1 文 ぎの花ふく朝風も、音さえすずしく  
11 37 4 文 くみのり いもふとつてくるようす  
11 37 6 文 くなり、くりもばらばら落ちだした  
11 37 7 文 かけるもずの音も、すむ秋空によく  
11 38 2 文 みた、いねもことなくとりれた  
11 38 5 文 、ゆききの人もえ顔して、その足  
11 38 6 文 、その足どりのいそいそと。かき  
11 38 10 文 けが、かおりも高くはえてくる。  
11 39 1 文 るし、はじの葉も、赤く黄色く色づ  
11 39 8 文 た。冬の用意もしだいに進み、あ  
11 42 3 文 もうそうちくも重荷にたえず、つ  
11 42 5 文 落す。ことしも作はよいだろう。  
11 42 7 文 におい、うめもほころび、こちふけ  
11 42 8 文 ちふけば、春も日さきに近づいた。  
11 47 8 。うちではバターもつくつたし、こむぎ  
11 47 9 、やわらかいパンもやいた。おかあさん  
11 49 2 れから、えんばくもつくります。ぼくは  
11 49 5 つくります。やぎもかいます。やぎ小屋  
11 50 1 れたクラーク先生もおっしゃった。「略  
11 52 7 けれども、その足も動かすことはできな  
11 53 4 の耳にきこえそうもない。乗客はおたが  
11 53 6 文 さんは、「電車もなみだをこぼしてい  
11 53 10 あつていた人たちも、きゆうになごやか  
11 54 8 文 」「略。」「どれみみなうまいことばだ  
11 54 8 文 、私は、「電車もなみだをこぼしてい  
11 58 6 文 」「略。」「いくどもくり返しているうち  
11 62 12 文 らん。『はい』もいいにくいことばで  
11 64 10 、自分たちのみ子もあつて、家をあげる  
11 68 1 のようにみえる者もあれば、びつくりで  
11 68 3 をみつめている者もありました。また、  
11 68 3 にうなっている者もありました。大きな  
11 69 11 せんでした。こうもかわればかわるもの

1170 4 した。息をつくのもやつのようでした  
 1171 4 「病人は、身動きもしないで、苦しそう  
 1171 9 会 うさんのようすもなにかわかるだろ  
 1176 2 といっぺんすることでもできませんでしたか  
 1178 9 そうして、二日めも、三日めも、四日め  
 1178 9 二日めも、三日めも、四日めもすぎまし  
 1178 9 三日めも、四日めもすぎました。すこし  
 1179 1 のパンとチーズも、ほとんどたべませ  
 1179 2 つとしたため息にも、ちよつとした目つ  
 1179 3 つとした目つきにも、ふるえながら氣を  
 1180 7 るように、いくどもいくども、むりにく  
 1180 7 、いくどもいくども、むりにくちびるを  
 1182 7 、胸がせまって息もつけませんでした。  
 1183 1 たあとで、いくども少年にほおずりして  
 1183 12 会 いがけないこともあるものだ。」少年  
 1186 8 会 なっていて、口もきけなかったのです  
 1187 3 会 「もういくらでもないくてもいいでし  
 1187 3 会 くらもないくてもいいでしょう。」と、  
 1188 4 しました。その日も、その晩も、ずつと  
 1188 4 その日も、その晩も、ずつとつきそつて  
 1188 5 た。そのつぎの日も、一日ずつとそばに  
 1188 8 会 夜はもうだめかもしれない。」とい  
 1188 10 て、ちよつとのまも、目を病人からはな  
 1189 1 の目にうかぶこともありませんが、それ  
 1189 1 りましたが、それも、だんだん小さく、  
 1189 1 つけて、なんの苦もなく立てていまし  
 115 12 会 みなさん、これも人のしたあとでは、  
 115 12 会 、なんのぞうさもないこととございま  
 1114 会 子どもはひとりもいません。もしけが  
 114 3 らたれさがったのもいい。まだ青々とし  
 114 4 くのぞいているのもいい。だが、根もと  
 114 5 だれているところもいい。文雄は、あれ

1216 10 けてみると、思いもよらない色になって  
 1217 2 会 あのだくろの色もかけてないや。」文  
 1217 10 会 「あなたの声もたいそうよくおなり  
 1218 3 会 「ぼくにはだれも教えてくれるものが  
 1218 9 会 なりの草むらでも、遠くの草むらでも  
 1218 10 会 遠くの草むらでも、ピッピッという音  
 1218 12 会 、じょうずなのもあるし、へたなもの  
 1218 12 会 るし、へたなものもある。毎晩鳴いてい  
 1219 2 会 このあいだの晩も、ピアノの先生が、  
 1219 2 会 わたしはなん年もなん年も生きていま  
 1219 9 会 なん年もなん年も生きていますからね  
 1219 9 会 「絵をかくことも、いっしょうけんめ  
 1221 1 会 ころは、わたしも、ずつと大きな木に  
 1221 4 会 「自分には父もある。母もある。ま  
 1222 2 会 は父もある。母もある。まだわかい。  
 1222 2 会 だわかい。先生もあるし、友だちもあ  
 1222 3 会 あるし、友だちもある。どんな絵の大  
 1223 3 会 げているといつても、いっすぎではあり  
 1223 6 目みたとき、天にもものぼるほどうれし  
 1224 7 は、まだ、うんこもしつこいえま  
 1224 10 、うんこもしつこいえま  
 1224 10 、うんこもしつこいえま  
 1224 12 、ちよつときいてもわかりません。姉だ  
 1225 1 ています。わたしも早くそれを覚えたい  
 1225 1 会 っていた民ちゃんも、よこれていないほ  
 1225 8 いまにもう失敗もなくなるようにして  
 1225 11 会 いいえ、それよりもなによりも、私を愛  
 1232 12 会 れよりもなによりも、私を愛するために  
 1232 12 会 に、なんのこともわからないままに、  
 1234 3 こしばかりの動詞も知りました。けれど  
 1234 6 会 っけからいく週間もたつてからのことで  
 1234 7 た。私は、身動きもせず、立つたままで  
 1237 2 の多かったこの日もくれて、小さなベッ  
 1239 1

1240 2 ました。みることもできず、きくことも  
 1240 3 できず、きくこともできず、話すことも  
 1240 3 できず、話すこともできないので、氣持  
 1240 4 くもちになったのもむりはありません。  
 1241 11 いけません。先生も、「略。」といのり  
 1244 1 会 動いているのかもしれないよ。」「略  
 1244 8 会 トル以上のものであるが、まるでたま  
 1245 2 会 んだが、まゆ毛も、目も、口も動かし  
 1245 2 会 、まゆ毛も、目も、口も動かし、とき  
 1245 2 会 毛も、目も、口も動かし、ときには、  
 1245 3 会 にとびだすこともある。人形はものを  
 1246 3 会 あのところは影絵もあつたよ。」「略」。  
 1246 6 会 たが、アジアでもヨーロッパでも、り  
 1246 6 会 もヨーロッパでも、りっぱな影絵し  
 1246 11 会 なく、動物などもでてくる。それが音  
 1247 5 会 は、かならず詩もあれば、絵もある。  
 1247 5 会 詩もあれば、絵もある。音楽もある。  
 1247 5 会 絵もある。音楽もある。命のない人形  
 1247 7 会 そうとする望みもあるのだ。」「略」。  
 1247 7 会 よ。こうえんでも教室でも、どこでも  
 1248 7 会 えんでも教室でも、どこでもやれるか  
 1248 7 会 室でも、どこでもやれるからね。きみ  
 1248 7 会 るからね。きみもひとつ、作ってみる  
 1248 8 会 (4) 首のほうからまぶせてまるくして  
 1250 7 ひたいやあごの形も、古新聞で作って、  
 1250 12 ところは、なんともいえない暖かい感じ  
 1255 3 会 にもとづいたものもあるが、昔からいい  
 1255 7 会 有名になったものもあるが、ただ人々の  
 1255 8 会 いってしまふものもある。それで、おじ  
 1255 10 山がある。どちらもけつしてたやすくは  
 1257 5 ち、赤いたすきもかいがいしく、朝か  
 1259 11 と、さすがの太陽も、まねかれるまに  
 1260 11

十二 60 12 、のこりの田植えも無事にすんで、長者  
十二 61 3 しまってあとかたもなく、きのう植えた  
十二 62 1 判になって、だれもかれもかりにいくよ  
十二 62 1 って、だれもかれもかりにいくようにな  
十二 63 8 た人にみられるのもこまる。八郎は思い  
十二 65 2 より細い。毛よりもやわらかだ。その細  
十二 67 6 しよじて、二十も三十も続いている。  
十二 67 6 れて、二十も三十も続いている。五十も  
十二 67 7 続いている。五十も六十も続いている。  
十二 67 7 いる。五十も六十も続いている。のこぎ  
十二 68 1 いと、なんの役にもたない。のこぎり  
十二 68 1 のまるいのこぎりも、大きなさしわし  
十二 68 10 住みこんであげてもいいけれども、芭蕉  
十二 70 8 きだというし、家もせまいので、自分は  
十二 70 9 である子どもたちも、同じ氣持でした。  
十二 71 11 だにも降ってきもしないのに、「略」  
十二 71 12 どもたちで、どれも身なりはきれいで  
十二 72 8 どもたちで、どれも身なりはきれいで  
十二 73 3 〇やあ、おじさんも手傳つてあげよう。  
十二 73 11 ていく方に、自分もいっしょにかけだし  
十二 74 8 てくれたし、まきもたくさんとってきて  
十二 74 10 れの大きな入れ物もかなり重いので、二  
十二 74 12 二三日は困ることもありません。ふだん  
十二 75 3 夜は、すべての音も雪にうずめられたよ  
十二 78 9 本人らしいところもあるので、「略」。  
十二 80 7 〇。「いうまでもなく、日本ですよ。  
十二 81 1 いう國をみたこともなく、また日本語を  
十二 81 5 であります、私もどうしても勝たなけ  
十二 81 7 きました。三時間もぶつとおしに戦いま  
十二 81 8 いました。なんどもコートでたおれまし  
十二 83 9 まりました。目にもとまらぬボールが、  
十二 84 4 が勝ち、第二回めやはり清水選手の勝  
十二 84 12 、続いて第四回めもチルデン選手の勝

十二 85 10 す。チルデン選手もおうえん者たち  
十二 85 10 のおうえん者たちも、もうあきらめてい  
十二 89 2 、また自分の誠意も通じない。自分が話  
十二 89 7 とでは、いいかたもかわってくるであろ  
十二 89 12 いやしめることにもなるからである。ど  
十二 90 3 ばは、すこしの力も発きしないからねん  
十二 90 6 の面影ということもできよう。(二)「  
十二 91 10 ちがいない。秋子も同じように、「略」  
十二 92 10 れちがつてくるのも、やはりこのため  
十二 93 8 く手をいれることもできるし、なんども  
十二 93 9 できるし、なんども書きなおすことがで  
十二 94 10 心にえがき、自分もそんなところにいっ  
十二 95 4 を思いだす。だれも話し相手がないので  
十二 96 6 いときの写真などもあるでしょう。その  
十二 96 9 は悲しいことなどもあるでしょう。次の  
十二 97 5 ろ、なんのかわりもない貝ですが、いま  
十二 97 6 いまから三四千年もまえの貝です。四年  
十二 97 10 貝は、三百種類にもありますが、古代  
十二 99 5 ります。石のおももあります。しかの角  
十二 99 8 どで作ったつり針もあります。また、土  
十二 99 9 ます。また、土器もあります。これは、  
十二 100 1 んだりするときにもつかったことでしょ  
十二 100 4 器といえます。形も、かめや、はちや、  
十二 100 10 。それは、もうもぐくかんたんで、形  
十二 100 10 かんたんで、形もたいへんよくまとま  
十二 102 1 さい。これを見て、平和を愛した古代  
十二 104 9 うかのかつこうにも、ほうおうという鳥  
十二 105 5 やかぶりのものなども、いまのものどずい  
十二 105 10 たやお屋らしいものもあります。これは、  
十二 109 8 です。いんさつ機も外國から渡ってきて  
十二 110 10 をはめこんだものもあります。黒うるし  
十二 110 11 いるのは、なんともいえない美しさです

十二 114 1 して、遠いところも近くなり、世界はだ  
十三 4 5 枝のあみ目の先にも、はやふつくらと、  
十三 4 9 。その、まだ目にもとまらぬ、小さな木  
十三 5 6 のしま目もようにもちらちらとして、あ  
十三 5 9 にしずんだものにも、春は、希望の帰っ  
十三 6 2 。ひばりやつばめも、やがて、遠い國か  
十三 6 9 。やがて、かれらもせいぞろいして、か  
十三 7 2 かな午前。どこもしれぬ方角の、遠い  
十三 7 3 ているからすの声も、ほんとうにのんび  
十三 8 10 て、これをいくどもくり返してたしかめ  
十三 10 7 へ移って困った人もあれば、わるいとい  
十三 10 8 うのよくなった人もある。同じ名まえの  
十三 10 8 。同じ名まえの人も世の中には多いが、  
十三 10 11 ことは、いうまでもない。日本には、毎  
十三 11 3 すこしのつながりもなく、原因と結果と  
十三 11 4 因と結果との関係もないのに、一つのこ  
十三 12 9 にしずみます。月も、東の空から西の空  
十三 13 2 になつて、東洋でも西洋でも、天は動き  
十三 13 2 、東洋でも西洋でも、天は動き、地はじ  
十三 13 9 かり、また、地球もまるい形をしたもの  
十三 13 11 つだ、ということもわかりました。つま  
十三 15 5 と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬の  
十三 15 5 秋・冬のあるわけも、すっかりわかった  
十三 15 9 ました。ガリレオも、十三年ばかりは、  
十三 15 12 だされて、自分でも信じてはならぬ、人  
十三 16 1 てはならぬ、人にも説いてはならぬと  
十三 16 2 オは、年をとつてもいたし、めくらにも  
十三 16 2 いたし、めくらにもなりかけていたので  
十三 17 4 、鉱山があるのでなく、いい港がある  
十三 17 4 いい港があるのでなく、わが九州ほど  
十三 17 8 といわれるこの國も、千八百六十四年に  
十三 19 9 マルクの半分以上もあつて、その三分の

十四四十九のだらうという人もありますが、それ  
 十四三十が、そればかりとも思われません。かり  
 十四三十一つで、日本はよくもわるくもなるのです  
 十四三十九本はよくもわるくもなるのです。あなた  
 十四三十二という人があるかもしれません。天上の  
 十四三二といふ思っている人もあるでしょう。けれ  
 十四三二つたのです。宗教も、科学も、哲学も、  
 十四三二す。宗教も、科学も、哲学も、ふかまっ  
 十四三二も、科学も、哲学も、ふかまっ  
 十四三二きているといつてもいすぎではありま  
 十四三二くの、二十億年も、かかるほどの廣さ  
 十四三十四くらべては、太陽もごく小さなのです  
 十四三十五、バクテリアよりも、もつともつと小さ  
 十四三十五のに感じられるかもしれません。大うち  
 十四三十五は、バクテリアにもおとるほどの小さな  
 十四三十五そのバクテリアにもおとる小さな人間が  
 十四三十五のは、うちゅうにも負けないくらい廣大  
 十四三十七ま、日々の生活にもつらい思いをしてい  
 十四三十七あるかということも、しぜんにわかつて  
 十四三十八える、わたしにも聞える。」三の人「明  
 十四四十一た。」一の人「山もはつきり見えてきた  
 十四四十一た。」他人のためにもことばをもて、なや  
 十四四十二る他人のためにも。そうして、なんで  
 十四四十二な汽船が、十ばいもある定期船につきあ  
 十四四十五ンク・マッケンナも、しずんでいく船か  
 十四四十五めてなきさけぶ声も、いつか聞えなくな  
 十四四十五で、しかも、調子もみだれていなければ  
 十四四十六ければ、ふるえてもいません。まるで、  
 十四四十六ひたっていることも、わすれてしまった  
 十四四十六ほどでした。寒さも、つかれも、どこか  
 十四四十六寒さも、つかれも、どこかへけしとん  
 十四四十六そうして、自分もどうせ助からないも



十四504 して、マッケンナも、その歌を歌って  
十四505 いたおじょうさんも、そのほかの婦人た  
十四505 のほかの婦人たちも、みんなすくいあげ  
十四509 美しい歌は、いまも、われわれの耳にひ  
十四529 こんな、十キロもあるような大きな  
十四5411 ところ、土もかたいし、石ころな  
十四5412 し、石ころなども、ごろごろしていま  
十四552 吸いとって、夜も晝も送ってあげるの  
十四552 とって、夜も晝も送ってあげるのは、  
十四557 「ほかに、だれもいませんから、私が  
十四598 とは、かたときもおわすれになれない  
十四5912 たら、実は一つもつかなかったのです  
十四603 ものだといってもいいのです。しかし  
十四609 した。「略」。花も、葉も、つるも、首  
十四609 「略」。花も、葉も、つるも、首をひね  
十四609 花も、葉も、つるも、首をひねって考え  
十四613 私たちは、はえもしなければ、大きく  
十四613 ければ、大きくもならなかったかもし  
十四613 ならなかったかもしれない。」つるも、  
十四614 た。「略」。つるも、うなずいて、「略  
十四615 、だれのものとも、簡単にはいえませ  
十四617 いい種を、來年もわすれずにまいても  
十四619 あげてしまっても、さしつかえないと  
十四611 がいいました。花も、葉も、根も、みん  
十四611 ました。花も、葉も、根も、みんな賛成  
十四611 。花も、葉も、根も、みんな賛成しまし  
十四624 なんのおもしろみもなく、ふしぎもない  
十四624 みもなく、ふしぎもないようですが、よ  
十四631 これは、いうまでもなく、熱い水蒸気が  
十四645 ふつうけんび鏡でも見えないほどの、た  
十四656 氣の温度によってもちがいますが、おほ  
十四661 ゆらして、いくつものうずになり、それ

十四677 からなんメートルもある、高い柱の形に  
十四688 くて、うずの高さも、四キロとか八キロ  
十四692 うすのちがったのもあります。だから、  
十四693 す。だから、どれもこれもみんな、茶わ  
十四693 から、どれもこれもみんな、茶わんの湯  
十四706 んのおぜんの上でもやれますから、よく  
十四707 らんなさい。それも、お湯が熱いほど、  
十四718 動くのを見ていても、いくらかわかるは  
十四711 は、湯は表面からもひえます。そうして  
十四711 のひえかたがどこも同じではないので、  
十四725 て、湯の、中までも熱いところと、わり  
十四731 す。しかし、それも、前の温度のむらと  
十四748 いうようなことにも関係してきます。そ  
十四756 のほうが、森よりも、日光のためによけ  
十四805 傳えられているものもあるかもしれません  
十四805 ているものもあるかもしれません。それは  
十四806 。それは、なん回もなん回も、あるいは  
十四806 、なん回もなん回も、あるいは、なん代  
十四806 あるいは、なん代もなん代もやってみた  
十四806 、なん代もなん代もやってみた結果、と  
十四809 のになったものとも考えられます。(二)  
十四811 とらず。石の上にも三年。一事が万事。  
十四818 さきのつえ。さるも木から落ちる。親し  
十四819 親しきなかにも礼儀あり。しゅにま  
十四822 れば光なし。ちりもつもれば山となる。  
十四859 の映画は、どちらにも雪にえんのあるもの  
十四863 ねんに写生するもの、一ぴきのこん虫を  
十四864 かかって調べるもの、ごくさいな感情  
十四865 一首の歌をよむもの、同じ心の現われで  
十四866 。「雪國」の映画も、けっしてわるいも  
十四868 えば、ふぶきなどもその一つである。風  
十四875 表情をあつかっても、おもしろいと思う

十四8710 。やがて第三の人も通り、第四、第五の  
十四8711 、第四、第五の人も、同じ足あとをたよ  
十四8811 ごろである。半年も雪にとざされていた  
十四888 章は、どのように書きあらわされる。  
十四898 てくる。寒いことも寒い、また暗さも  
十四902 寒い、また暗さも暗かった。「略」。な  
十四903 なかった。一はこも賣ってはいなかった  
十四925 らの家へ帰ることもできなかった。まだ  
十四927 かった。まだ一銭ももうけてはいないの  
十四934 分のまき毛のことも、雪のことも考えな  
十四934 ことも、雪のことも考えなかった。美し  
十四9410 めであった。両手もまた、寒さでほとん  
十四977 。ああ、そのときもとき、ちょうどマッ  
十四985 を照らし、いく百もの小さな人形が見お  
十四1011 れて、もう、寒さも、ひもじさも、なみ  
十四1011 寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ  
十四1012 もじさも、なみだもない國へ、上の方へ  
十五52 とき人とても、声の行くえの見  
十五56 末ふたたびも、友の心にあらわ  
十五71 の水一枝の影もあざむかず うしは  
十五151 ろきてわが身も光るばかりなり大き  
十五157 なるなにごともしなばらの花ふとの  
十五221 ると、三メートルもあるような羽をひろ  
十五248 身のおふないこともわすれて、思わず鳥  
十五259 、さすがの大わしも、十五六の少年に上  
十五2512 なって、羽ばたきも苦しげに、しだいし  
十五264 落されないものでもない。一こくも早く  
十五264 でもない。一こくも早く谷底の地面へお  
十五275 さわがず、あばれもせず、じっとしてい  
十五275 います。もう呼吸もなくなったのかと、  
十五298 て、きずのいたみもかまわず、おそろし  
十五337 まここでもありません。目の前

十五339 のまっ白な山までも、朝日の中のこの勇  
 十五347 、記おくのためにも必要な方法である。  
 十五351 などであんだひももつかい、色のちがつ  
 十五352 を結びつけることも行われた。それから  
 十五354 つけてしめすことも行われた。これらの  
 十五355 を絵にうつすことも行われた。この絵の  
 十五3511 アラビアあたりにも、これにた文字が  
 十五3512 字があった。漢字も、もとは事物の形を  
 十五375 わせて表わすこともくふうされた。たと  
 十五383 をあてて読むこともした。このように、  
 十五389 かの訓のあるものもある。たとえば、「  
 十五3811 考えてみただけでも、このことがすぐ理  
 十五416 マ字といわれるのもそのためである。ロ  
 十五4110 ー。日本のことばも、ローマ字で書くこ  
 十五426 ローマ字の教育にも努力している。しか  
 十五427 、こんなに三種類も四種類もの文字をつ  
 十五428 に三種類も四種類もの文字をつかってい  
 十五4410 「と、あいさつともつかず、返事ともつ  
 十五4410 もつかず、返事ともつかない答えかたを  
 十五456 で、日本の手工業も、外国から新しい方  
 十五459 めにやって来たのも、そのころのこと  
 十五461 いた。ひくい屋根も、あけはなした店も  
 十五461 、あけはなした店も、のき先にかかって  
 十五462 もしろいかんばんも、かれには、みなめ  
 十五465 いままで見たこともないみことな焼物で  
 十五4610 が、まだほかにありますか。」「略  
 十五4710 そのお庭焼の中でも、「色なべしま」と  
 十五482 絵をつける赤絵屋もあったが、これはは  
 十五4810 かし、そのしごとと簡単にできあがるも  
 十五505 ほかの外国人にも話してあげましよう  
 十五513 イムスという新聞も発行した。しかしな  
 十五549 へ」と、私が一言も発しないうちに先手

十五5412 世界の学者がだれものぞんでいるカーネ  
 十五557 かくのおたずねもむだになるようなわ  
 十五563 、富士山の高さも不明であった。そこ  
 十五572 きみは室を二つともっているようだが  
 十五6011 そるべきなものもなく、わがままいっ  
 十五613 った手紙のどれにも、「略」と、必ず  
 十五615 てあったのを見て、その愛されかたが  
 十五655 の思い出は、いまも私の胸にやきついて  
 十五683 ンとたたいた。音もなくドアがあいて、  
 十五699 は、私を京都までもつれて来て、朝夕か  
 十五6911 とたずねられたのもそのはずだ。いまそ  
 十五744 こになんのけじめもない。兄と弟とのち  
 十五753 はにくしみよりも強い。」と、力をこ  
 十五755 。——ああ、忘れもしない、満面べに  
 十五784 ってももらえないかもしれない。けれども  
 十五788 は、他人にとっても眞実だからである。  
 十五799 子どもさんたちにも、お目にかかったこ  
 十五8212 ねこは、ひとことも口をきかず、これも  
 十五8212 口をきかず、これも、右手の方のおくへ  
 十五834 っただれの目にも見える『幸福』ども  
 十五837 こんでいないともかぎらない。だから  
 十五8310 あそこへ行ってもいいの。光「いいと  
 十五8311 人たちは下等でもあり、たいていはま  
 十五845 る。ちようづめもある。小ひつじの足  
 十五847 うしのかんぞうもある。」パン「いかに  
 十五853 間のなにもものをもおさえている。いや  
 十五854 このなにもものをもおさえている。あの  
 十五865 。小さなおかしもしないの。光「み  
 十五888 ているし、だれもそれに立ち向かうも  
 十五901 、ちよつとのまも行かないのです。  
 十五903 ん、あなたがたも、あの鳥、どこにか  
 十五909 そいつは、一どもわたしたちのテーブ

十五915 、すこしの休みもなく、飲む、たべる  
 十五9210 それからさとうも、パンも、だれが行  
 十五9210 さとうも、パンも、だれが行けといっ  
 十五933 チロー、おまえもすぐ来い。」いぬぶ  
 十五935 ときは、だれにもかまわていられませ  
 十五938 いとますることもできませんからね。  
 十五974 チル「話をしてもいいの。光「まだだ  
 十五984 のは、地の上でも、天の上でも、いち  
 十五984 でも、天の上でも、いちばん美しいも  
 十五999 にいる子をだれも知らないなんて、そ  
 十五1018 「ぼくのうちに『幸福』がいるの。  
 十五10211 いるのは、だれもふり向いてくれない  
 十五1039 まのすべてよりもりつぱで、おとも  
 十五1049 よう。なによりも、まず『大きな喜び  
 十五1098 。くらべるものもない『母の愛の喜び  
 十五10912 にいたの。思いもかけなかったよ。私  
 十五11010 ここでは、なにもかも見えるのですか  
 十五11010 では、なにもかも見えるのですからね  
 十五1128 うなおかあさんもなければ、きりよう  
 十五1129 りいなおかあさんもないし、年をとった  
 十五11210 ったおかあさんもないのさ。おかあさ  
 十五11211 は、喜びの中でも、いちばん美しい喜  
 十五1135 それから、これもおかあさんの手だ。  
 十五11410 いるなら、ぼくもここにいたいや。」  
 十五11411 ことですよ。私も下へ行くのですよ。  
 十五11411 気がついた。あれもいたい、これもい  
 十五1215 もいたい、これもいたいと思った。  
 十五1219 た。それはなんともいえない、せつない  
 十五1227 当番ですが、私にも書かせてください。  
 (終助) 2 も  
 九1154 着ぶくれて歩かされいし女の子ばたん  
 とたおれそのままなくも

九118 ㊦ ㊦ ほおずきを口にふくみて鳴らすごとかわずは鳴くも夏のあさ夜を

も 2 モ も

四80 1 も——ものの花のさくころ。

六112 4 ㊦ 「モ」といつてみたら、これらもはなの音であることがわかった。

もう (副) 191 もう

一11 10 ㊦ もう 一どやりましょう。

一12 6 ㊦ もう いいかい。

一13 2 ㊦ もう いいかい。

一13 4 ㊦ もう いいかい。

一13 5 ㊦ もう いいよ。

一52 2 もう あさでした。

一56 7 おべんとうをたべて、ちよつとうとうとすると、きしやはもうついでにいました。

二30 2 ㊦ ぶうちゃんはしんばいして、もう 一どかぞえてみました。

二43 6 ㊦ さあ、もうすこしのぼろう。

二64 7 ㊦ もう、『冬の國』もすぎていく。

二70 2 ㊦ もうじき『春の國』だ。

三44 10 もう ひと足で りくへ あがろうというとき、

三65 6 もう みんなはどこへも いけません。

三76 2 みんなで さがしまわりましたが、ゆかの 上には もうみえませんでした。

三113 5 もう、ひきとめる ことも どう すること できません。

三115 2 ㊦ 「もうすこし おまちください。」

四22 4 ㊦ もうすこしで つかまりそうになつたとき、またわの中ににげこみました。

四24 5 ㊦ みっちゃんがいなくなつてから、もう 半年も たちますね。

四27 1 ㊦ もう しばらくく ないて くれたら、かこからはなして あげるよ。

四34 4 みんなは、もう 一ど、かずこさんの 文をよみなおしました。

四46 5 ㊦ わがまはもう よすが いいよ。

四53 6 ㊦ 「もうすぐだ。」

四56 6 ㊦ 「もうだいじょうぶだよ。」

四58 8 けれども、もう 一わが みえません。

四62 2 かっちゃん、もう 一ど 林のおくをさがしに いきました。

四100 10 ㊦ もう、だいじょうぶ。

四103 8 ㊦ もうすっかり 元氣になつたの。

四106 6 ㊦ もうじきで ございます。

四113 8 ㊦ もうじゅうぶん いただきました。

四114 2 ㊦ おどりも もう たくさんです。

四114 9 ㊦ あまり 長くなりますので、もう、おいとましよう と思います。

五10 5 ㊦ もう 明かるくなつた。

五14 3 ㊦ 「にいさん、もうおきていいの。」

五25 1 ㊦ ぼくは、もう 大きいんですから。

五43 1 ㊦ 一日じゅうてつだいをして、うちに帰るころは、もう、あたりはくらくらしています。

五46 10 帰りに、また通つたら、もう 鳴いてはいなかつた。

五55 2 三十分ぐらいいしかたつていなかつたのに、もうすっきりくらくらなつていて、

五55 11 もう、たくさん、子どもや町の人々が、あつまっていました。

五63 9 ㊦ いまは、もうこんなに大きくなつた。

五67 5 ㊦ うちのおけは、もう、すっかりこわれてしまつているんだもの。

五68 10 ㊦ もう 一ど金のさかなのところへいって、

家をもらつておいで。

五70 3 ㊦ ひやくしようなんか、もういやになつたから、お金持のおくさんになりたいて。

五70 10 ㊦ もうひやくしようはいやになつたから、お金持のおくさんになりたいていのです。

五73 5 ㊦ おばあさんは、もう金持のおくさんはいやだ、女王になりたいといっています。

五76 4 ㊦ うちのおばあさんは、もう女王はいやだといっています。

五96 6 夏休みがすむころには、ひなはもう、かごの中をとびまわっていました。

五97 1 ㊦ 「じゃあ、もうすこしね。」

五99 9 ㊦ 「もう、元氣になつたようですね。」

六9 1 ㊦ ああいうねじはもうなくなつて、あれ一つしかないのだ。

六13 6 もうすこしで口が水にとどきそうになつたとき、足がつるとすべつて、

六39 5 ㊦ ぼく、もう帰れないんだ。

六40 6 ㊦ 帰るといつたつて、あんな遠いところ——でも、もう一どあの村に帰りたいなあ。

六55 9 動かないと思つてみた月は、もうさつきの枝のあいだにはなくて、

六101 2 こう思いつくと、ぼくは、もう、じつとしていられなくなつた。

六101 9 つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐる

とまいた。

六110 10 新しいことがあたまにうかんだので、もう

そんなことはどうでもよくなつてしまつた。

六127 6 ㊦ 「もう、いいかい。」

六127 9 ㊦ 「もう、いいかい。」

六127 11 ㊦ 「もう、いいかい。」

六128 1 ㊦ 「もう、いいよ。」

六136 11 そこには、もううさぎさんたちはいませんでした。  
 六138 3 会 「ここまできたら、もう安心だね。」  
 六140 3 うさぎさんたちは、もうにげようと思ってもにげることはできません。  
 六141 3 それは、もう一ぴきのとらさんでした。  
 六141 11 一ぴきのとらさんが、いきなり、もう一ぴきのとらさんにとびかかりました。  
 七68 8 会 もう帰る子がある。  
 七94 4 会 もう、四十五年にもなる。  
 七239 9 会 もう、おさらいがすんだから、あおむしのせわをしよう。  
 七29 11 会 きのう、学校から帰ってみると、あおむしは、もう黄色なさなぎにかわっていた。  
 七34 4 会 もうすこし、中へはいれませんか。  
 七35 8 会 おばさんのうちへは、もう二どもいったことがあるのですもの。  
 七36 1 会 「もうすこし、中へいれてくださいませんか。」  
 七36 4 会 「さぶろうさん、もうすこし、がまんしていらつしやい。」  
 七63 3 ばくちく花火が、パンパン、もうくらくなっている。  
 七68 1 会 もう一つは、〈略〉、だんだん、その人の顔ににせていくやりかたであります。  
 七85 3 会 もう帰ってもよろしい。  
 七85 8 会 もう、うたがいははれたことと思う。  
 七96 7 7 ひきの子うさぎのうち、5 ひきはねずみ色、1 ひきは白、もう1 ひきは黒でした。  
 八11 8 目さえあけたりとじたりして、からだをふるわせてもう虫の息です。  
 八12 3 すえの女の子などは、目をなきはらしまし

たが、もうどうすることもできませんから、  
 八20 4 せみの子たちは、れいのふしぎなかしこさで、もう大きくなりきったことを知ります。  
 八22 2 もうすっかりくらくらしました。  
 八33 10 星のきよりになりますと、これでは、もうまにあいません。  
 八42 7 会 もし、ひめが生き返るなら、わしはもうこがねなどはいらない。  
 八47 5 日がくれましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。  
 八58 8 会 さあ、もう一曲がりだ。  
 八60 10 けれども、親あひるは、ひながでてくるまえに、もうつかれきっていた。  
 八62 5 会 わたしは、もうほんとうにくたびれた。  
 八64 6 会 でも、もうすこしだいてみましょう。  
 八68 1 会 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくいあひるの子の首すじにかみついた。  
 八97 2 会 もう、なえが、2 cm から3 cm にのびました。  
 八100 3 これで、もうだいじょうぶでしょう。  
 八103 4 3 時間めの終りに開きはじまりましたが、お晝の時間には、もう閉じてしまっていました。  
 九15 6 会 もう大きさは親つばめと同じですが、  
 九16 10 十一月のはじめになれば、もうほとんどすがたをみせなくなってしまうです。  
 九24 8 日本に春がくると思うと、もう矢もたてもたまず、北をさしてすすむのです。  
 九31 2 会 こちらへきてから、もう四ヶ月になりました。  
 九31 4 会 いまはもうかきの葉もすっかり落ちつくして、秋も終り近くなりました。  
 九41 11 手 いつのまにどこへ渡っていったのか、いまはもういなくなりました。

九46 6 会 もう、遠くの花々のいただきに、白い雪のぼうしが見えます。  
 九48 10 けれども、いちろうが目を見ましたときは、もうすっかり明かるくなっていました。  
 九50 7 いちろうは、すこしいきますと、そこはもう、「ふえふきのたき」でした。  
 九51 6 会 まあ、もうすこしいってみよう。  
 九52 8 会 まあ、もうすこしいってみよう。  
 九53 8 会 まあ、もうすこしいってみよう。  
 九53 10 りすはもういませんでした。  
 九54 1 谷川にそった道は、もうほそくなってきえてしまいました。  
 九63 1 草の中から、どんぐりどもがきらきら光ってとびだして、もうワアワアっていました。  
 九63 6 みると、やまねこは、もう、いつか黒い、長いしゅすの服を着て、  
 九63 10 会 裁判も、もうきょうで三日めだぞ。  
 九66 2 会 裁判も、もうきょうで三日めだぞ。  
 九67 4 会 裁判も、もうきょうで三日めだぞ。  
 九75 3 「やまねこ拜」というのがきは、もうきませんでした。  
 九78 4 会 もうすこしで貝づかに着くというところで、先生は一けん農家にたちよられました。  
 九80 2 私たちは、もう、ほってみたくてうずうずしていました。  
 九86 1 会 もう、むだ口をきく人は、ひとりもありませんでした。  
 九86 8 会 いずれ学校へ帰ってから、もう一ど整りしましょう。  
 九90 2 会 もういいたら——。  
 九90 9 会 「もうきみとは遊ばないからな。」  
 九90 11 会 もういいたら——

九一九 面白いじゃないか、そんな話——  
九九一 よし、じゃあ、あいこになるように、もう一つなぐってやる。

九〇四 とうたくさんだ。

九〇二 きみ、もうよろよ。

九〇二 とうひと息。

九〇一 先生、もうすべらしてください。

九〇一 待て、待て、もうすこし上までいこう。

九〇六 先生、もういいでしょう。

九一五 そのみごとなすべりぶりにみとれていると、先生たちは、もう目のまえにこられた。

九二八 念のため、もつと上流の本流の水を飲んでみると、もうそれはただの水であつた。

九二六 それでとうとう終りであつた。

九三六 「いや、もう、おまえさんをたべやしないよ。」

九三九 「わたし、おかあさんにひと目あつたら、もう、命はほしいとは思いません。」

九四一 月はもう頭の上までできていました。

九四七 もう夜ふけですよ。

九四六 白ばらの花は、もう話しかけなくなりまして。

九四八 みにくくと思つて自分のからだも、もうみにくくとは思えなくなりました。

二二一 「もうじきですよ。」

三三八 佐吉は、もう、じつとしていられなくなり、

六一五 もう、たけのこは、私のせいをすぎて、おにいさんのせいより高くなりました。

六一八 もう、先生のせいより高くなりました。

六二五 もう、親竹と同じくらいに高くなって、風にゆれていました。

六九七 それなら、もう、ふたりとも、どつきに

あたつて死んでいるはずじゃないか。

二二四 「もうおそいから。」

二五八 「おたがいにつめて、座席にもうひとり。」

二七五 さっきの看護婦と、もうひとりの看護人とがついていました。

二七六 「略。」と、医者、もう一ど少年のかたに手をかけながら答えました。

二八〇 もうすこしのあいだですから。

二八九 ぼく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにさせてください。

二八八 ここへつれてきたときには、もうすっかりわけがわからなくなっていて、

二八三 「もういくらでもないでもないでしよう。」

二八八 「今夜はもうだめかもしれない。」

二九四 おいの正男ちゃんは、五つですから、もうひとり遊びができますが、

二九五 いまにもう失敗もなくなるようにしてみせます。

二七五 いまそこにいたかと思うと、もう次のへやにはいつているというように、

三二〇 もう、めばえそめたそのなつかしい葉や、花の上を、私の指は「略」なでています。

三二九 ケラーは、もうサリバン先生なしには、生きていきません。

三二五 おには約束をまもって、そののちはもう田畑を荒らすようなことはなくなった。

三二七 もうあとわずかというところで、日ははや西の山に傾いて、くれそになつてきた。

三二七 「先生、もうおやすみですか。」

三二五 チルデン選手もそのおうえん者たちも、

もうあきらめてるときでした。

三二九 ここでは、どこかの子どもが、もう、頭をつるつるにそられている。

三三五 その右の方に、もうひとりの子どもがよりかかっている絵です。

三五四 「それなら、もうすこし大きいのがあるよ。」

三六三 もうじきお目にかかれます。

三六四 もうすこしすれば、ごいっしょに一月をくらせるのだ、

三六六 茶わんの湯げなどのばあいだと、もう、茶わんのすぐ上から大きなうずができて、それが、かなり早くまわりながら、のぼっていきます。

三七七 これが、もうひとまわり大じかけになつて、

三八三 一つは「雪國」というのであり、もう一つは「雪」というのであつた。

三九三 もう一つのほうは、どこかの男の子がひろつて行つてしまった。

三九六 またそうしないではいられなくなって、もう一本のマッチをとってかべでこすつた。

三九七 女の子は、もう一本の、第三番めのマッチをすつた。

三九九 女の子は、またもう一本のマッチを、そばのたばの中からひきだした。

四〇二 そのマッチの火の中で、もうとつくにわかれて神さまのおそばへ行つたおばあさんを見た。

四〇四 もう行っちゃいや。

四〇五 地面から高くなれて、もう、寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、

四二四 いまそれをとめなければ、もうその女の子は、どこへ持って行かれるかわかりません。

十五275 もう呼吸もなくなったのかと、そのことがまた、少年の氣にかかってきました。

十五2710 もう、《略》、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなっていました。

十五281 もうたまらなくなつたのか、

十五3212 氣がつくと、もう自分のまわりには、おぜいのひつじかいが集まって来ており、

十五4611 《いいえ、もうこれだけです。》

十五5711 《そのころ、もう熱心なクリスチャンになつていたが、

十五5911 《きょうは、もうこれではごとはやめだ。》

十五988 《もう時間がないのだからね。》

十五9811 《ごらん、もう行つてしまった。》

十五992 また、もう一つの「幸福」のむれ、《略》、廣間の中にかげこんで来て、

十五1048 《もうよしでしょう。》

十五1106 《私は、もう年をとることはないのだからね。》

十五1128 《もう、びんぼうなおかあさんもなければ、きりょうのわるいおかあさんもないし、年をとつたおかあさんもないのさ。》

十五11811 《そうしたら、私は、もうなにもおそれず帰つて來ます。》

もう《感》2 もう

九656 もうみんなガヤガヤ、ガヤガヤいって、

十五895 《わたしたちは、ただもう、おまえさんがたを待っていたのです。》

もうあがつこう 《「盲啞学校」(名) 1 もうあ学校

十197 もうあ学校の教室である。》

もうあきょういく 《「盲啞教育」(名) 1 もうあ教育

十二406 もうあ教育に経験のあるサリバン先生にきていただくことにしました。》

もうけもの《儲物》(名) 1 もうけもの八789 《これは、たいしたもうけものだよ。》

もうける《儲》(下) 3 もうける《一ヶ》

十一2010 父親のすきなものをかうために、自分ではらじを作つて、お金をもうけたりしました。

十一243 《ひとりぐらゐ育てるお金は、わたしが山へいって木を切つてきてもうけますよ。》

十四928 まだ一銭ももうけてはいないので、父親が、きつとひどくしかるにきまつていた。

もうし《孟子》(人名) 4 孟子 孟子

十二82 孟子がまだ子どものころでした。

十二88 そのとき、母ははたを織つていましたが、孟子の顔を見ると、つと立つて、

十二810 孟子がびっくりしていると、母は、《略》ぬのを、小がたなでたち切つてしまいました。

十二91 孟子はおどろいて、《略》とたずねますと、母は、《略》といいました。

もうしあげる《申上》(下) 3 もうしあげる

申しあげる《一ヶ》

三1171 《略》と申しあげました。

六911 《海の神さまに、申しあげます。》

七8210 《はい、申しあげます。》

もうしで《申出》(名) 2 申し出で

十五575 《それはおもしろいと、教授の申し出でをさつそく承知して、

十五581 《そのかわり日本語を教えてください、その申し出でを承知して、私はすぐに授業にかかった。》

もうしで《申出》(下) 1 申しでる《一ヶ》

九221 航空会社では、お金をとらずにつばめを運ぶことを申しでました。

もうしぶん《申分》(名) 1 申しぶん

八296 その目といい、ふえの音といい、申しぶんのいけだかさがこもっています。

もうしよう《申様》(名) 1 申しよう

四110 《ほんとうに お礼の 申しようも ございせん。》

もうしわけ《申訳》(名) 2 申しわけ

六849 《つれないどころか、申しわけのないことをしてしまいました。》

六858 《申しわけがありません。》

もうしわけなさ《申訳無》(名) 1 申しわけなさ

十7310 《あまりの申しわけなさに、ふたりとも、命をすてておわびをしようと考え、

もうしわたし《申渡》(名) 1 申しわたし

九692 《申しわたした。》

もうしわたす《申渡》(五) 1 申しわたす《一シ》

九691 黄色のじんばおりをちよつとだして、どんぐりどもに申しわたしました。

もうす《申》(五) 6 申す《一シ》

四1303 《それは、天人のはごろもと 申しまして、

四1331 《ああ、これは はずかしい ことを 申しました。》

九6710 やまねこがいちろうにそつと申しました。

十四524 《それでは、座長の根さんのご指名で、私から申します。》

十四547 《では、おさきに申します。》

十四558 《「ほかに、だれもいませんから、私が申します。」

もうせん《毛氈》(名) 1 もうせん

三937 やわらかな もうせんを しいた ような し

ばふ、みどり色につやつやと 光つた しばふ。

もうぜん《猛然》(形状) 1 もう然

十二8410 もう然とたちなおって、電光のような  
ボールをうちだしました。

もうそうちく 「孟宗竹」(名) 1 もうそうちく

十一423 鯛 もうそうちくも重荷にたえず、つばき  
の上にぼたぼた落す。

もうふ 「毛布」(名) 2 もうふ

四527 ちょうど、一まいのもうふのようになっ  
て、

十二16 看護婦がもうふをほしている。

もうもう 「濛濛」(形状) 3 もうもう

三367 かげがもうもうとたっています。

五324 まっ黒なけむりをもうもうとはいいて、どん  
どん走っています。

九116 はげしい制動をかけられると、もうもうと  
雪けむりが立つ。

もえあがる 「燃上」(五) 5 もえあがる 《一ツ・  
一リール》

十二763 やがていろいろには、パチパチとしばがも  
えあがります。

十四9511 ろの中には、美しい火がもえあがり、  
十四968 それがゆらゆらともえあがると、まあ、

なんとというふしぎなことだろう。

十四9711 ほのおが明かるくもえあがった。

十四10011 マッチは、はなやかにもえあがった。  
もえさかる 「燃盛」(五) 1 もえさかる 《一ル》

十四955 その小さなほのおが、その子には、もえ  
さかる大きなほのおのように思われた。

もえたつ 「燃立」(五) 2 もえたつ 《一ターツツ》  
六268 あり一は、ろの火を赤くもえたたせませす。

十一3710 薔薇に火とさくまんじゅしゃげ 庭に  
もえたつはげいとう。

もえつくす 「燃尽」(五) 3 もえつくす 《一シ》

十四964 女の子は、手にもえつくしたマッチを  
持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。

十四978 ああ、そのときもとき、ちょうどマッチ  
はもえつくしてしまつて、

十四988 と、そのとき、マッチはもえつくしてし  
まった。

もえつづける 「燃続」(下) 2 もえ続ける 《一  
ケ》

十四959 それがもえ続けている間、大きなろの前  
にすわっていた。

十四989 そのたぐさんのろうそくはもえ続けてい  
て、それが、高く、高く、しだいにのぼつて、

もえる 「萌」(下) 1 もえる 《一エル》  
九249 その小さな胸には、わか葉のもえる日本の

春の美しさを思いうかべているのでしょうか。  
もえる 「燃」(下) 4 もえる 《一エーエル》

三365 火がもえています。  
四1236 もえている 火をもつて あるく かわ

りに、わたくしをもつてあるきます。  
五351 ガスこんろの青い火は、ガスがもえている

のです。  
十三36 「略」とさとしたが、佐吉のもえるよ

うな研究熱は、どうすることもできなかった。  
モールス 「人名」 1 モールス

十二9810 アメリカのモールスという学者が、東  
京の大森の貝つかを発見してからのことであり

ます。  
もがく 「薬掻」(五) 3 もがく 《一イーク・一  
ケ》

四626 みると、なかまのがんが、へびからぬけ  
だそうとして、もがいているところですよ。

九8910 ふたりともむきになって、友だちの手から  
ぬけたそうともがく。

九1472 力いっぱいもがけば、《略》くちばしから  
ころげ落ちることができたかもしれませぬ。

もく 「木」(名) 10 木

五813 七月十四日 木

七905 5月31日 (木) 晴 28度

七912 6月28日 (木) 雨 28度

七932 8月2日 (木) くもりのち晴 29度

七944 9月6日 (木) くもりのち晴 29度

七965 11月22日 (木) くもり 17度

七982 11月29日 (木) 雨 13度

八1001 7月12日 (木) 晴 28度

八1069 10月25日 (木) 晴 23度

八1085 11月15日 (木) 晴 17度

もくざい 「木材」(名) 4 木材  
七681 だいいりせきや木材をけずっていつて、

十三241 親子の発見と努力によつてもたらされた、  
よい結果は、木材だけにとどまりませぬ。

十三2411 木材があたえられたうえに、いい氣候が  
あたえられました。

十三2510 ところが、ここに、木材よりも、農作物  
よりも、とうといものが生き返りました。

もくさんする 「目算」(サ変) 1 目算する 《一  
シ》

十五565 駿河湾の海岸線をながめ、その角度を  
目算して紙上計算してみたが、

もくせい 「木星」(名) 1 木星  
十三138 火星や金星・木星などのような星は、太

陽のまわりを、大きく輪をえがいて、  
もくせい 「木星」(名) 1 きんもくせい

もくたん 「木炭」(名) 1 木炭  
十二163 そんなところをはつきりつかまえたのも

のだと思って、しきりに木炭を動かしていた。  
もぐもぐさせる (下二) 1 もぐもぐさせる 《一  
セ》

六34 10 口をもぐもぐさせている——声がでないの  
である。

もくもくもく (副) 1 もくもくもく

四94 3 もくもくもくと、えんとつからさすが  
とぶように、

もぐりこむ『潜込』(五) 3 もぐりこむ 《一ム・  
一モ・一ン》

四219 手 わたくしは、ただしさんをねらって、  
わの中へもぐりこもうとしました。

八20 2 大きくなるにつれて、だんだん地のそこふ  
かくもぐりこんでいきます。

十一52 3 あふれそうな乗客にまじって、どうやら  
乗車口へもぐりこむことができた。

もぐる『潜』(五) 8 もぐる 《一ッ・一リ》

八9 8 そこにすわっている私のひざのあいだにも  
ぐったり頭をつっこんだります。

八15 10 自分の小さなまえ足でトンネルをほりなが  
ら、さぐりさぐりもぐっていきます。

八15 5 それに、水の中へもぐってそこへいくと、  
それはさっぱりしますよ。

八17 5 水の上をおよいだり、もぐったりするの  
がいい氣持かどうか。

八83 5 そうして、およいだりもぐったりした。  
八84 11 そうして、はくちようたちがみえなくなる  
と、すぐ水のどんぞこまでもぐっていった。

九48 4 ねどこにもぐってからも、《略》や、その  
めんどろだという裁判のようすなどを考えて、

十54 3 きんぎょが一びき、すいすいというてきた  
かと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。

もくろく『課名』15 もくろく

一2 1 もくろく

二2 1 もくろく

三2 1 もくろく

四2 1 もくろく

五2 1 もくろく

六2 1 もくろく

七2 1 もくろく

八2 1 もくろく

九2 1 もくろく

十2 1 もくろく

十一2 1 もくろく

十二2 1 もくろく

十三2 1 もくろく

十四2 1 もくろく

十五2 1 もくろく

もけい『模倣』(名) 1 もけい  
三33 6 花の大きなもけいがありました。  
もさもさする(サ変) 1 もさもさする 《一シ》  
四14 6 むこうぎしの、すすきの もさもさしてい  
るところから、小鳥がとびたつた。

もし『若』(副) 27 もし

三106 5 5 かし、かぐやひめを ごてんに つれて  
きたら、おまえにくらいを さずけて やろう。

四5 3 もし、人がなくなつたときには、やはり  
ここに とどけます。

六9 6 6 「こんなところにころげおちてしまつて、  
もし、みつからなかつたら。」

六15 9 6 6 もし、あの木の葉の船が流れてこなかっ  
たら、どうなつていたかしない。

六134 1 1 しかさんは、もし自分が勝つたら、このし  
かの角で、うさぎさんたちをつきあげるといふの

です。

七82 8 8 もしあるなら、ここで、はつきりいうが  
いい。

八42 6 6 もし、ひめが生き返るなら、わしはもう  
こがねなどはいらぬ。

九14 8 8 もし、きく人の心が高ければ、それだけ音  
樂のねうちが生きてくることになる。

九80 8 8 もし、手あたりしだいにやつて、ぐあい  
よくなくなかをほりあてたらいいが、

十30 2 2 もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、  
《略》わけをよく考えていつてみようと思います。

十39 3 3 もし、母貝の中に、核をさしいれること  
ができたなら、眞珠が発生するにちがいない。

十二11 4 4 もしけがでもしてはかわいそうですか  
らね。

十二57 11 11 もしそれができなかったら、これからの  
ちは、けつして村へでてきてはならない、

十二58 1 1 もしそれができたら、毎年ひとりずつ、  
おにに人間をくわせてやるというのであつた。

十二82 4 4 もし、この決勝戦に勝つことができたなら、  
《略》、はじめてもらうことになります。

十二88 9 9 もし、そのわけにかなわないことをすれ  
ば、たいへんおかしいことになるばかりでなく、

十三23 2 2 2 もしある時期になつて、小もみを切り  
はらつてしまつたら、大もみは土地をひとりじめ  
して、生長するにちがひありません。

十四12 1 1 1 もしこわれたら、そちらでわけなくか  
わりをお見つけになれるでしょう。

十四15 1 1 1 おかあさんが、もし、かなしいお氣持  
になられたときには、

十四37 8 8 もし、くしゃくしゃするようなことが  
あつたら、どうか天上の星を見あげてください。



- 十四568 ⑤ もし、つるの私がとちゅうで切れたりしたら、〈略〉かれて、くさってしまいます。
- 十四579 ⑤ もし、私、つまり太陽がなかったら、どうなると思います。
- 十四611 ⑤ もし、あの人間がいなかったら、
- 十四642 ⑤ もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということが、
- 十四701 ⑤ もし、表面にちゃんとふたでもしておけば、ひやされるのは、おもに、まわりの茶わんにふれた部分だけになります。
- 十五262 ⑤ もしこのわしが、その舞いおるとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、
- 十五265 ⑤ もしまたとちゅうで、このわしが大きなくちばしで女の子の頭でもつつけば、
- もし(感) 1 もし
- 十四95 ⑤ もし、それは、わたくしのきものでございます。
- もし「文字」(名) 26 文字 エジプトもじ・えもじ・ギリシアもじ・フェニキアもじ
- 七121 ⑤ 「だいぶ手があがった。」このときの「手」は、文字を書くことをさしていますが、
- 七131 ⑤ 「手」ということが、文字を書くことになってきたでしょう。
- 九73 ⑤ このことばを耳にしたり、文字でよんだりしますと、夜のしずかなけしきを思いだします。
- 九174 ⑤ その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。
- 十二335 ⑤ 「人形」という文字をつづられました。
- 十二414 ⑤ 手のひらに文字を書くことから、
- 十二942 ⑤ 「赤とんぼ」という文字をとおして、〈略〉赤とんぼを、心の中にえがきます。
- 十二946 ⑤ それは文字のおかけである。

- 十二1036 ⑤ クロスワーズパズルのようにならんだ文字があつたりして、おもしろいお金です。
- 十二1129 ⑤ 表紙の文字は、「かいたいず」と読みます。
- 十三341 ⑤ れんは、めたい文句や、詩の一節であるが、みな、りっぱな文字で書かれてある。
- 十三351 ⑤ それが、だんだん大きくなって、文字であることがわかり、
- 十三352 ⑤ その文字の意味がわかってくると、いっそうその美しさが胸にきざまれる。
- 十三353 ⑤ 文字の國といわれるのも、いわれのないことではない。
- 十三454 ⑤ ですから、文字にあらわれていないあいでのことばを考えて、
- 十四216 ⑤ 「略」とかいいたが、先生のお書きになる文字に目をそそいだ。
- 十五346 ⑤ それをその場にいない人や、遠くにいる人に知らせるためには、文字に書くか、
- 十五357 ⑤ この絵のだんだんりやくされてきたものが、文字というものになった。
- 十五3511 ⑤ 中部アラビアあたりにも、これにた文字があつた。
- 十五375 ⑤ また、それまでに作られた文字を組みあわせて表わすこともくふうされた。
- 十五378 ⑤ 「枝・板」など、その文字の左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に関係のあることを表わし、
- 十五4010 ⑤ トルコ・インドネシア・フィリピンなど、世界の大半につかわれている文字である。
- 十五421 ⑤ ローマ字は世界的な文字であるから、
- 十五425 ⑤ いま日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種の文字をつかつており、

- 十五428 ⑤ 世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかつている國があろうか。
- 十五721 ⑤ 勝海舟の筆になる「新島襄之墓」という五つの文字をきざんだそのおくつき。
- もしのはじめ (題名) 2 文字のはじめ
- 十五31 ⑤ 文字のはじめ
- 十五342 ⑤ 文字のはじめ
- もしのはなし (課名) 2 文字の話
- 十五211 ⑤ 三 文字の話……………三十四
- 十五341 ⑤ 三 文字の話
- もしもし(感) 9 もし、もし、もしもし
- 二342 ⑤ もしもし、ちよつと そのぞうというものに、さわらせてくれませんか。
- 四65 ⑤ 「もしもし。」と声をかけて、話ができます。
- 六871 ⑤ もしもし、あなたは、どうしてないていらつしやるのですか。
- 七758 ⑤ もし、もし。
- 七845 ⑤ もしもし、それなら、荷物をつけていることが、どうしてわかつたのでしょうか。
- 十二68 ⑤ 「もしもし。」こういって戸をたたきますと、
- 十二177 ⑤ もしもし。
- 十三379 ⑤ もしもし………そうです。
- 十三404 ⑤ もしもし、五千二十五番ですか。
- もしや「若」(副) 3 もしや
- 六1124 ⑤ ここで、もしやと思つて、はなをつまんで「マ」、「メ」といつてみたら、
- 七763 ⑤ もしや、あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていらいつしやるのではありませんか。
- 十一655 ⑤ 少年は、もしやわるい知らせをききはし

まいかと、おそろしさにふるえながら、  
もず「鵲」(名) 1 もず

十一 377 園 こずえをかけるもずの音も、すむ秋空  
によくひびく。

もたらす「竇」(五) 2 もたらす《一サーシ》

十二 392 この日が自分にもたらした喜びを思い返  
していたときの私ほど幸福な子どもを発見するこ  
とは、むずかしいでしょう。

十三 2312 ダルガス親子の発見と努力によってもた  
らされた、よい結果は、木材だけにとどまりませ  
ん。

もたれあう「凭合」(五) 1 もたれあう《一ツ》

一 516 よにんはもたれあって、ぐうぐうとねて  
しまいました。

もたれかかゝる「凭掛」(五) 1 もたれかか  
る《一ツ》

五 236 園 それで、どこかのおばあさんのよこのと  
ころに、もたれかかっていると、

もたゝれる「凭」(下二) 2 もたれる《一レ》

一 645 わたくしは、そこに あった こしかけに  
もたれて、うとうとしました。

八 575 小船にいきついて、それにもたれて、いま  
歩いてきた足あとをみると、

もち「持」 ↓うけもち・おかねもち・かねもち・か  
んしゃくもち・こころもち・じしよもち

もち「餅」(名) 1 もち ↓おもち

二 171 たいいももち——ちくおんき

もちあげる「持上」(下二) 3 もちあげる 持ち  
あげる《一ゲーゲル》

六 248 「略」と、かけ声をかけて持ちあげま  
す。

十 508 いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかを

かくようなかっこうをしました。

十五 1021 園 かべをたたき落し、屋根をもちあげる  
ほどの喜びをこしらえているのですよ。

もちあわせ「持合」(名) 1 持ちあわせ

八 495 園 わたしには、あいにく、一まいのシャツ  
の持ちあわせもございません。

もちいる「用」(上二) 2 用いる《一イール》

八 339 ふだん、私たちは、メートルという単位を  
用いてきよりを計りますが、

十五 344 私たちは、自分の考えを表わすのに、こ  
とばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。

もちかゝえる「持替」(下二) 2 持ちかえる《一  
エ》

九 285 文 園 持ちかえしせんこう花火のゆれている  
十五 3011 少年は、すばやく短刀を持ちかえた右手  
で、その石を取るが早い、

もちだす「持出」(五) 6 もちだす 持ちだす  
《一シ》

六 733 「略」と、とんでもない話をもちだし  
たので、みんながわらいました。

十二 5710 村の人たちは困りはて、おにに向かって、  
一つの難題をもちだした。

十二 766 芭蕉は、えんがわにいつてなにか持ちだ  
してきました。

十四 633 この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだ  
して、日光を湯げにあて、

十四 6910 それを日なたへ持ちだして、じかに日光  
をあて、茶わんのそこをよく見てごらんさい。

十五 574 園 青年をとまらせて、そのせわをしては  
くれまいかと、やぶからぼうの話をもちだした。

もちつき「餅搗」(名) 2 もちつき

四 1257 十二月はもちつき。

十一 414 園 もちつきすませて、しめなわをはり、  
一夜明ければうれしいはつ日。

もちつづける「持続」(下二) 1 もちつづける  
《一ケ》

十 633 どこにでも、その美しいものを、すなおに  
感じとる心を、もちつづけたいものである。

もちもの「課名」2 もちもの

一 27 六 もちもの……十四

一 141 六 もちもの

もちもの「持物」(名) 4 もちもの

一 142 わたくしのもちもの

一 452 園 「もちものをしるべるのだよ。」

一 4510 おんなの人たちが、ながい みをふり  
ふり、もちものをしらべています。

四 72 人々のたいせつな もちものを まもって  
くれます。

もちろん「勿論」(副) 12 もちろん

六 727 もちろん生きているとは思われないが、死ん  
でいるとも思えない。

六 10510 ぼくも、もちろんわらった。

八 132 ころしたのは、もちろんあやまちですが、  
十一 109 園 もちろんさ。

十二 3312 そのとき、私は、もちろん、ことばをつ  
かっていることや、そんなものがこの世にあるこ  
とさえ知らず、

十二 411 もちろん、サリバン先生に手をひかれ、  
ふたりがひとりのようになって、勉強をはじめた  
のです。

十二 446 園 もちろん人が動かすんだがね。

十二 9911 もちろん、水をくんだり運んだりすると  
きにもつかったことでしょう。

十四 524 園 もちろん、このかばちゃは私のもので

す。

十四65 5 もちろん、これは、まわりの空気の温度によってもちがいますが、

十五102 12 図 『青空の幸福』で、もちろん青い色の着物を着ていますし、

十五105 10 図 もちろん。

もつ「持」(五) 145 モツ もつ 持つ 《ター・チー・ツ・ツ・テ》 ムうけもつ・おもつ・くちびるにうたをもて・こころにたいようをもて・ささげもつ

— 30 1 もつ、にぎる、なげる。

— 30 7 この手で、なにをもったでしょう。

— 31 1 この手で、なにをもつでしょう。

— 46 9 おおきなむしめがねをもったおじいさんが、(略)、わたくしちをよびました。

— 47 9 おとうさんのもっていた四かくなかみに、まるいおおきなはんをおしてくれました。

— 48 8 おとうさんは、うしろのおきやくさんのもつをもつてあげました。

— 55 7 図 「あなたはそのたまをもっていますか。」

— 55 8 図 「ここにもっています。」

— 61 9 図 「でも、わたくしがもったら、ただのいしころになってしまわないかしら。」

— 36 7 図 おしまいのめくらは、しっぽをもつていました。

— 47 9 手に大きなりんごをもっています。

— 49 5 じろうは、よろこんで、りんごをもつてとびまわります。

— 15 1 はんたかも おしやかさまのはちをもつて、でしの中にまじっていました。

— 15 10 はちをもった手が、するするとおしや

かさまの目のまえにのびてきました。

— 72 1 そこで、バーバラは、だいどころからほうきをもつてきてはきました。

— 111 9 おじいさんの家のまわりは、弓矢をもった人たちで、いくえにもとりかこまれ、

— 41 6 図 おかしをしっかり手にもつてねんねした。

— 41 7 図 わたしが手ぬぐいをもつて、おふろへいくのがみえるの。

— 54 6 ほうたいをもつていたがらが、手早くくるくるとまきつけました。

— 85 4 おかあさんが、かごにみかんをいれて、もつていらっしやいました。

— 116 5 かめがたまてばこをもつてきます。

— 116 10 うらしまは、たまてばこを手にもつて、

— 123 6 図 もえている火をもつてあるくかわりに、わたくしをもつてあるきます。

— 123 7 図 わたくしをもつてあるきます。

— 128 6 図 もつてかえつて、うちのたからにしよう。

— 128 10 りょうしは、そのきものをもつていこうとします。

— 130 1 図 もつてかえつて、うちのたからにしようと思います。

— 29 4 図 どこかのおじさんが、荷物を二つ持たせて、あせをふきふきあるいていました。

— 29 9 図 ついでですから、一つ持っていてあげましょう。

— 30 5 図 小さいわりに、なかなかおもったのですが、ぼくは、かたへのせて持っていました。

— 68 9 おじいさんが帰ってみると、おばあさんは、新しいおけを持っていました。

— 578 6 ひまわりの花は、いけださんが自分のうちのにわから、持ってきてくれたのです。

— 585 4 りょうかんさんはこういいながら、ほうきを持って、木の葉をはきよせました。

— 16 2 そのとき、ありのまえをひとりのかりうどが弓矢を持って通りました。

— 22 8 図 そんな大きな物を持てさ。

— 30 4 あり一が、おくの方からみつをびんにいれてもつてきます。

— 50 2 図 すんだ青さをもちながら、ときにはくもる畫の空。

— 78 4 図 たとえ動かない木でも、草でも、命をもっているのだよ。

— 82 8 図 このつりざおを持ていくがいい。

— 82 9 図 にいさんはこの弓と矢を持ていらっしやい。

— 99 10 左の手に、めがねのたまをもつて、目から遠くはなした。

— 100 4 右の手に虫めがねをもつて、のぞいてみた。

— 113 7 一ぎょう一ぎょうは、なにか、ほかのぎょうとはちがった性質をもっているにちがいない。

— 115 3 図 「ちよつと糸を持たせて。」

— 115 5 糸を持ったただしちゃんは、「(略)。」といてにこにこしました。

— 120 10 図 かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃんのところへ持ていってあげるんだ。

— 123 3 図 「このくるみを持ていって、山のとっぺんでたべよう。」

— 12 2 これは、持つところということになります。

— 66 5 うら山に、みかんを持って遊びにきています。

— 86 4 黒いうさぎと、白いうさぎと、茶色のうさぎを、かごにいて持ていらっしやいました。

- 七93 首のところを持って、かごの中へいれたら、キューと、高く鳴きました。
- 八64 その一わを買い、小さなボールばこにいらてもらって、だいに持って帰りました。
- 八89 ほおじろ自身、國々のなまりのようなことばをもっているのだそうです。
- 八67 虫は、小さいけれど、親せみによくにて、ほそいとがった口をもっています。
- 八40 6 窓 「さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん美しい庭をもつことができる。」
- 八79 5 そればかりでなく、ねこやにわとりとはまったくがった考えをもっていた。
- 八84 2 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっていた。
- 八85 4 どうして、あの鳥のもっているような美しさをもたらなどと望むことができよう。
- 八85 5 美しさをもたらなどと
- 九14 8 それがわからないのは、その高さを受けられるだけの心持をもっていないからであろう。
- 九23 8 人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた大きなできごとでした。
- 九37 1 小さい妹のために、くわの葉につつんで持って帰ったこともありました。
- 九47 7 囲 とび道具を持たないでください。
- 九55 7 男が、ひざをまげて、手に皮のむちを持つて、だまってこつちをみていたのです。
- 九72 7 窓 どんぐりを二リットル早く持つてこい。
- 九75 1 いちろうは、自分のうちのまえに、どんぐりをいれたますを持つて立っていました。
- 九76 4 シャベルや移植などを持つて、角のむきみ屋のところに集まっていました。
- 九78 9 主人も、くわや、ふごや、かごなどを持つてきて、かしてくれました。

- 九86 7 窓 それから、道具を集めて、めいめい持ってきた物があるか、おしらべなさい。
- 九94 3 たかき しばらくして持つているすみに気がつき、
- 十9 5 知らない外国人どうしても、こんなに親しみをもちことができるものかと思いました。
- 十11 10 ひろい集めた落ち葉を持つてきて、おとうさんにくれるようになりました。
- 十24 6 工員たちは、さくがん機やつるはしを持つて、石炭をほっている。
- 十30 5 なんでも、そのもとのことをしらべていくような心がけを、もちたいと思います。
- 十31 7 自分のもっているいいところを、えんりよしないであらわし、
- 十32 1 無責任な、ひきような考えをもちたくはありません。
- 十32 6 自分のつとめをはたすだけの勇気を、もちたいと考えます。
- 十44 8 幸吉は、自信をもって母貝を海中にはなつた。
- 十49 6 窓 オスワリ シタ——スイトウ モツテ——オモタイカラ モツテ イッテ アゲルノヨ——
- 十49 7 窓 スイトウ モツテ——オモタイカラ モツテ イッテ アゲルノヨ——ワンワン タッタ——
- 十53 7 そのとき、いままでかたにかけていたすいとうをはずして、手に持つといいます。
- 十53 7 かたにかけると重いから手に持つのだと、ませたことをいって、歩きだしました。
- 十64 5 自分たちの國が持つているこのよい藝術を味わうことを、喜ぶだろうと思います。
- 十70 11 太郎かじやは、すばやく指をつつこんで、

- すぐそれを、口に持つていきました。
- 十一9 4 窓 そういわれて、自信をもって、よしやろうということができたなら、うれしい。
- 十一22 1 これを持つて、朝早く工事場へいきました。
- 十一33 7 鯛 だいこんの花にあかつきの 色ただよえば勇ましく、すき・くわ持つて野にいそぐ。
- 十一50 2 窓 「青年よ、大きな望みをもて。」
- 十一64 12 長男にいづらかのお金を持たせ、父親の看病のために、ナポリへよこしたのです。
- 十一68 6 看護婦がふたり、手にくすりびんを持つて、へやを歩きまわっていました。
- 十一76 5 看護婦がなにか飲み物を持つてくると、コップなりさじなりをその手から取って、
- 十一78 12 看護婦が持つてきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、ほとんどたべませんでした。
- 十一81 3 ちやうど、少年がそういうほかない希望をもつて、いっしんに看護していたときでした。
- 十一91 7 窓 これを病院の記念に持つていらつしやい。
- 十二12 1 土人のひとりが、書物というものはなにかすばらしい力をもっているのだと考えました。
- 十二27 7 立ちはじめには、物を持たせると立つことができると、だれかがいったことを
- 十二27 10 窓 「民ちゃん、これ持つて学校へいきましようね。」
- 十二27 11 「略略。」といって、民ちゃんに持たせてみました。
- 十二29 3 こんなふうにして、毎朝おべんとうをこしらえて持たせているうちに、
- 十二34 9 ある日、私が新しい人形を持つて遊んでいますと、





十三207 もっともむずかしいのは、あれ地に木を植えることです。

十五192 山々のうち、もっとも高い山の一つに、ユングフラウという美しい山があります。

十五428 日本のことばをもっとも正しく、もっとも簡単に書き表わす方法がないものであろうか。

十五429 もっとも正しく、もっとも簡単に十五589 室友ホランド先生、自然科学にもっともきょうみを有し、

もっとも「尤」(接) 1 もっとも

十四691 もっとも、らい雨のできたは、(略)、だいぶようすのちがつたのもあります。

もて (格助) 2 もてをもち

十五171 文 わが祖國、やがて立つべし。きみたちのそのまともなるひとみもて。

十五185 文 ああ、日本、まさに立つべし。きみたちのそのやわらかきたなごころもて。

もてはやす 「持離」(五) 1 もてはやす 《一サ》十二113 まき絵は、日本のすぐれた工藝品の一つで、古くから外國人にもてはやされてきました。

もてる 「持」(下二) 2 持てる 《一テ》十五295 一つは大きくて、ぼくなんか、とても持てそうもない物、

十五302 文 ぼくにも持てそうですから。モデル (名) 1 モデル

十四261 図画工作の時間によくいう、デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、

もと 「元」(名) 16 もと

三4810 白うさがそのとおりにしますと、からだはすぐもとのようになりました。

五997 「三日すると、ひわは、もとのように元氣になつて、かごの中をとびまわっていました。

六112 さつそくピンセットでねじをはさみあげて、だいじにもとのふたガラスの中へ入れた。

九517 たきは、またもとのようにふえをふきつづけました。

十402 はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もとのままになっていた。

十6910 文 さあ、もとの場所において、あつちへいこう。

十一201 なんとかして、からだをじょうぶにして、身代をもとのようにしたいものだ、

十一301 親類の家からでて、もとの自分の家に帰り、一家をふたたびおこすことができました。

十一453 弟は、さつさともとの自分の席にもどり、そこからでなおして進みました。

十一8710 少年がベッドのそばのもとの場所に帰ると、病人はほつとしたようにみえました。

十三532 もとの先生から、一まいの絵はがきをいただきました。

十四184 文 バケツは、もとは英語だつてね。十四227 文 いや、いまは日本語にちがいないが、

もとは、外國のことばさ。十四232 文 「それでは、これらのことばは、もとはどこの國のことばだったのだろう。」

十五3512 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、

十五3712 「海」を「カイ」というようにもとの中國の発音にしたがつた読みかたをしたが、

もと 「本」(名) 22 もと 本 ↓ あしもと・おおもと・きもと・たけうら・くちもと・てもと・ねもと・ひともと・みみもと・めもと

八341 そこで、もっと大きな單位をもとにして計ります。

八953 水をとにかえるときにみたらもみのもとのほうがすこしふくらんでいました。

八956 もみのもとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。

八1023 葉のついているもとのところから、黄みどりのほがでました。

十304 なんでも、そのもとのことをしらべていくような心がけを、もちたいと思います。

十364 いままでの失敗のもとをとりのぞいて、新しい設計図をこしらえあげた。

十461 そのち、幸吉は、日ごろそんけいしていたエジソンのもとをたずねて、

十一297 この一ぴょうをもとにして、困っている人にかしてやつたり、

十三1112 まっすぐなことや曲がつたことは、知識をもととして考えなければならぬ。

十三131 こういううぶな考えかたがもとになつて、十四774 「木もとと竹うら」ということわざを教えてください。

十四776 木を割るときには、もとのほうから割る方がいい、

十四7710 竹を割るとき、もとのほうから割ろうとすると、

十四785 竹の先のほうから割ってみると、もともと、きれいにまっすぐに割ることができました。

十四793 もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、

十四796 ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもととか、わからないことでした。

十四798 文 しずむほうがもとだよ。

十四7910 「木もとと竹うら」という簡単なことを、知っているのといないのでは、

十四823 燈台もと暗し。  
 十五373 「もと」とか、「すえ」とかいう考えを表わすことにした。  
 十五374 いまの「本」「末」とかいう字はそれである。  
 十五595 「略」と、一言のもとにしりぞけようとした。  
 もどき ↓うめもどき  
 もど・す 「戻」(五) 1 もどす 《ーシ》↓ひきもどす  
 八32 はたおりひめを天の川の東の岸のごてんにもどしてしまい、  
 もとすえ 「本末」(名) 1 もと末  
 十五56 歌のもと末 ふたたびも、友の心にあられぬ。  
 もとづく 「基」(五) 2 もとづく 《ーイ》  
 十二556 傳説には、正しい歴史にもとづいたものもあるが、  
 十五385 中國の発音にもとづいた漢字の読みかたを「音」といい、  
 もとどおり 「元通」(名) 2 もとどおり  
 八438 きっともとどおりになるでしょう。  
 十三182 いかにして、國運をもとどおりにするか、もとめもとめる 「求求」(下) 1 求め求める  
 《ーメ》  
 九126 茶人はすこしもくっせず、求め求めて、いつか、いまのしずおか縣のさかいもすぎ、  
 もとめる 「求」(下) 7 もとめる 求める 《ーメーメル》 ↓いずみをもとめて・かいもとめる・さがしもとめる・ひかりをもとめて・もとめもとめる  
 八279 それは、天帝のひとりむすめのはたおりひ

めのすがたを、もとめておいでになるのです。  
 十416 かれは、新しく母貝を求めてきて、やりなおしにかかった。  
 十三167 「略」と信じて、死ぬまで眞理を求めていたのです。  
 十三224 ユートランドのあれ地から建築用材を求めるダルガスの熱望は、実現されません。  
 十四458 助けを求めてなきさけぶ声も、いつか聞えなくなりました。  
 十五627 「略」といって、おじさんはおばさんに助け船を求められた。  
 十五117 私、それは長いこと、あなたを求めている「正義であることの喜び」でございます。  
 もともと 「元元」(副) 4 もともと  
 六108 はながつまつたために発音ができなくなるような音は、もともとはなから声のするような音にちがいない。  
 十三181 もともとせまい、小さな國ですのに、そのもつともよい土地を失いました。  
 十四277 長いあいだつかっているうちに、もともとの日本語のように思われてきたのだ。  
 十五372 木は、もともと形をうつしてできたものであるが、  
 もとやま 「本山」(地名) 1 本山  
 十二574 秋田縣の男鹿半島に、神山、本山という二つの山がある。  
 もとより 「固」(副) 3 もとより  
 十二59 やってみましたが、もとより立とうはずがありません。  
 十二552 先祖代々住みなれた土地はもとよりのこと、自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。

十三117 もとより世の中には、科学的研究によっても、まだ知られていないことはたくさんあるが、もどり ↓あともどりする  
 もどる 「戻」(五) 11 もどる 《ーッーリ》 ↓まいもどる  
 六389 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどってきかかしの近くにとまる。  
 七445 車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふたび、しらがの老人のところにもどった。  
 七548 式をすませてもどつてくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、にこにこしていた。  
 九243 果をつくったつばめは、來年また、同じ果へもどつてくるというのです。  
 九569 やまねこさまは、いますぐにここへもどつておいでになるよ。  
 十522 門からもどつてきて、道にでたとき、あとをふり向きました。  
 十一453 弟は、さつさともとの自分の席にもどり、そこからでなおして進みました。  
 十二84 母親がなつかしくなり、会いたくなったので、学校から家へもどってきました。  
 十二601 さすがの太陽も、まねかれるままに空の中ほどもどってきた。  
 十二778 すこしばかり手ならしをしてから、休けい場にもどつてくると、  
 十三347 ふと氣がついて、子どもたちは、あわてて家にもどつて行ったりする。  
 もの 「物」(名) 456 もの 物 ↓あみもの・いきもの・いれもの・うつくしいもの・うつくしいもの・みるよろこび・うりもの・えまきもの・えもの・おくりもの・おちやそのもの・おとというもの・おりもの・かけもの・かざりもの・かぶりもの・かんが



えもの・きもの・くだもの・こわいものしらず・さがしもの・しなもの・すりもの・せともの・せんたくもの・たからもの・たてもの・たべもの・なつてみたいもの・なにももの・なりもの・のみもの・はいきゅうもの・はきもの・はもの・ひとつのものでも・ふこうそのもの・ほりもの・ほんもの・まがいもの・みもの・みんなのもの・もうけもの・もちもの・やきもの・わすれもの

一四六 一 うだの、あぶないものはみんなとりあ  
一六〇 六 。はねちゃんも、ものをはつきりいう  
二七五 二 ことばのつくものを、あつめてみ  
二一〇 一 二 と、そうでないものとに、わけたら  
二一〇 五 二 と、そのほかのものとに、わけたら  
二一〇 九 二 、「目にみえるものと、みえないも  
二一〇 九 二 のと、みえないものとに、わけたら  
二一二 四 二 た。かたちのたものをならべてみま  
二一七 六 二 おなかからだすものはなかに。」「略  
二一七 七 二 、かわくとぬぐものはなかに。」「略  
二一八 五 二 きものをきるものはなかに。」「略  
二一九 一 二 一ぺんしかないものはなかに。」「略  
二一九 三 二 いとにきにいるものはなかに。」「略  
二一九 四 二 いても、みえるものはなかに。」「三  
二二五 五 二 は、ぞうというものをみたことが  
二二五 六 二 のぞうというものに、さわらせて  
二二五 八 二 して、とがったものじゃないか。」三  
二二五 八 二 なへびみたいなものをさ。」といまし  
二二五 八 二 ことばをつかうものではないよ。」た  
二二五 八 二 わるく、そのうえ、ものがよくいえませ  
二二五 八 二 っ、いろいろとものをおしえること  
二二五 八 二 らうまれてくるものだということが  
二二五 八 二 『なき声のわかるものは、そのなき声  
二二五 八 二 』。』できあがったものをうしろのかべ

三二七 七 二 いで、こまったものだ。」「略。」「へ  
三二七 九 二 んとかならないものかなあ。」あちら  
三二七 五 二 を、切つていいものでしょうか。」と  
三二七 六 二 、はこのようなものをこしらえてい  
三二七 一 二 さんのおへやのものは、みんな大き  
三二七 九 二 た、ぴかぴかしたものがあつます。「へ  
三二七 九 二 はしはみんなのものです。ばしやも  
三二七 六 二 ポストもみんなのものです。うちの人  
三二七 四 二 しゃばもみんなのものです。このでん  
三二七 五 二 しゃばもみんなのものです。このし  
三二七 六 二 しばふもみんなのものです。やわらかな  
三二七 一 二 月さまもみんなのものです。あのまっ白な  
三二七 二 二 な雲もみんなのものです。よるのほしも、  
三二七 三 二 の風も、みんなのものです。十二一  
三二七 四 二 紙で、いろいろなものを、おることが  
三二七 五 二 すが、紙にかいたものは、いつまでも  
三二七 八 二 とうにたのしいものですよ。」とお  
三二七 四 二 それからというものは、おじいさんの  
三二七 七 二 目でもあいたいものだ。」といつて、  
三二七 四 二 めにもらいたいものだ。」と思つて、  
三二七 八 二 町からだいたいものがここにどき  
三二七 五 二 なしには書けるものではないですね。  
三二七 八 二 口をおさえたものがありました。  
三二七 五 二 お。ぬ。ぬれたものはほせ。る。  
三二七 九 二 や。山より高いものはな。ま。  
三二七 四 二 め。目にみえるもの、みえないもの。  
三二七 五 二 るもの、みえないもの。み。右と左  
三二七 三 二 どうしても、白いものではない。雪が  
三二七 四 二 、黒い、こまかいものがとんでいる。  
三二七 五 二 雪のたねがあるものだ。降っている  
三二七 二 二 う。こんな小さなものですが、これが  
三二七 七 二 ほそい糸のようなものは、なんでしょう。

四二二 二 二 水で生まれたものです。それから、  
四二二 七 二 の枝に、きれいなものが、かかつてい  
四二二 四 二 は、ご用のないものでございます。  
四二二 一 二 のしるしのついたもの。」「略。」「略  
四二二 三 二 ところがなかったものだから、それであ  
四二二 六 二 も持てそうもない物、一つは小さくてか  
四二二 九 二 さくてかるそうな物です。そこで、ぼく  
四二二 一〇 二 のつばみtainなものもみえる。きれ  
四二二 一〇 二 の星つてきれいなものね。」「略。」私  
四二二 二 二 い。じゆくさないものをたべないように  
四二二 六 二 「小鳥でも感心なものだ、新しいことを  
四二二 五 二 たこともないような物が、ごたごたと耳に  
四二二 九 二 がてしごと台の上のものをあれこれといじ  
四二二 三 二 あつい日中の道を、ものを運びながら歩い  
四二二 八 二 す。」そんな大きな物を持ってさ。」あり  
四二二 五 二 たり、海みtainなものさ。ほう、また、  
四二二 八 二 は、おびみtainなものが向こうの山の方  
四二二 七 二 な集まつて、どんなものにしようかといろ  
四二二 九 二 やつとつぎのようなものができあがりまし  
四二二 三 二 のことあてはまるものがみつかりまし  
四二二 二 二 いちばん力つよいものはなかに。二上  
四二二 四 二 下にすれば上になるものはなかに。三は  
四二二 五 二 り、休むときは立つものはなかに。このな  
四二二 六 二 四まいはりあわせたものです。そんなに大  
四二二 七 二 さん。生きていくものには、みんな命と  
四二二 八 二 、みんな命というものがあつますよ。そ  
四二二 九 二 。「命つて、動くものでしょうか。」「へ  
四二二 一〇 二 ら、わかりそうなものだがな。」学校へ  
四二二 一〇 二 なつたりしているものは、みんな生きも  
四二二 一〇 二 考えた。命のあるものは、日に日にそだ  
四二二 一〇 二 とが、たいへん近いもののように思われま  
四二二 一〇 二 そううまくつれるものではないよ。でも

六九六 〇。「これは、いいものがみつかった。」  
 六〇二 五 のぞいてみた。長い物がぼんやりみえる。  
 六〇八 九 ぼくは、いままで、ものをいうときに、声  
 六一二 一 しくは、五十音というものは、一年生のとき  
 六一三 二 ったかなをならべたもの「ぐらいに思つて  
 六一三 四 考えたうえで作つたものであることがわか  
 六一四 五 た。こだな。こんなものがあるものか。  
 七一〇 六 渡しもりのようなものだ。」しゅくちゅ  
 七一四 三 略。」「すばらしいものを手にいれたね。  
 七二五 四 ばあいを、しめしたものです。「略。」「へ  
 七二九 八 をきているようなものだと思つた。ぼく  
 七四七 七 なかなか、いきつくものではありません。  
 七四七 八 は、心の鏡のようなものです。心がはつき  
 七五五 八 のない宝石のようなものでありますから、  
 七六三 四 きつて、まきつくものがなくなつた豆の  
 七七四 九 しながら、なにか、ものをさがして歩いて  
 七七五 三 て、どこへいったものかしら。」ふたり  
 八七七 七 声は、ことに美しいものです。まるで、一  
 八八二 一 りました。かわいいたものをなくしたばかり  
 八八三 三 信用してくれていたものを、あやまちのた  
 八八三 四 は、いいようのないものでした。それから  
 八八六 一〇 さにすがつたようなもので、とりついたが  
 八八八 九 す。同じ地中に住むものでも、こがねむし  
 八八八 三 ほんとうにおかしなものです。皮がこわば  
 八八八 三 しの手にさわつたものが、みんなこがね  
 八八八 七 〇、こがねになつたものにふりかけなさい  
 八八八 六 やすやすとみつかるものではありません。  
 八八八 二 たとみえて、いやなものでも家のまえに立  
 八八八 四 の心のおくは知れるものです。それをうれ  
 八八八 一〇 た。「世界は廣いものだなあ。」と、ひ  
 八八八 四 〇、そうだ、そんなものはほつておいて、  
 八八八 四 しこいものたちがものをいっているとき

八八二 五 げるときは、喜ぶものですよ。あたたか  
 八八二 一〇 はみんなそうしたものだよ。まあ、たま  
 八八四 四 の子は、ころされるものと思ひながら、水  
 八八四 四 をとりまくりつばなの中にも、しみじみ  
 八八四 七 い、白いめのようなものがでました。これ  
 八八四 八 みると、毛のようなものがたくさんはえて  
 八八四 八 みた、中に、青いものがまるくふくらん  
 八八四 五 ぐ、もみすりをするものではないと思ひま  
 八八四 九 感じがこもっているものです。この音と、  
 八八四 七 、いくらかちがつたものがあらわれてくる  
 八八四 二 わせだと、すぐ心にもを思ひうかべるこ  
 八八四 三 などほけつしてするものではないが、やは  
 八八四 五 をたたく。音というものは、情景をあらわ  
 八八四 六 らわすことができるものらしい。いい音楽  
 八八四 六 しをつけてはなしたものだといふことがわ  
 八八四 二 方ではんしょくしたもの、秋には、南ヨ  
 八八四 一 じんばおりのような物を着て、みどり色の  
 八八四 八 、こがね色のまいるものが、ぴかぴか光つ  
 八八四 二 ところ、白い物がちらちらとみえる  
 八八四 一 〇 ほとと、そういうものがみつかることが  
 八八四 三 にか、せきふらしい物、土器らしい物、た  
 八八四 四 しい物、土器らしい物、ただのわり石のよ  
 八八四 四 だのわり石のような物などがたまつていま  
 八八四 三 〇。「骨で作つたものらしいよ。ぼく、  
 八八四 一 のかけらみたいなものがあるじゃないか  
 八八四 四 、貝づからでる物では、いちばん多い  
 八八四 一 〇 さんのひろつた物の中に、いのししや  
 八八四 一 〇 の道具につかつた物があつたでしょう。  
 八八四 四 ます。石で作つたもの、それには石の矢  
 八八四 六 ちくだいて作つた物で、つるつるみがか  
 八八四 七 石のようにみえる物もあります。それか  
 八八四 九 らがと思うような物ですが、これはたい

九八五 一〇 これはたいせつな物だから、どんな小さ  
 九八五 二 らべ、へんだと思ふ物は、みなかごの中に  
 九八五 七 いめい持ってきた物があるか、おしらべ  
 九八五 三 も、たかぎの落した物を集める。三たか  
 九八五 四 る。しかし、自分の物ではないので、それ  
 九八五 九 いあげるが、自分の物ではないので、なお  
 九八五 六 泉をさがしたものだと思つた。茶人は  
 九八五 八 この二三日というものは、ちつともか  
 九八五 一 〇 〇いことをしてきたものだろう。くもは、  
 九八五 五 さ。いまも、美しいものはどこにでもある  
 九八五 七 こえてくる。美しいものは、いまも、どこ  
 九八五 九 〇。ただ、その美しいものを、すなおに感じ  
 九八五 二 にも、その美しいものを、すなおに感じ  
 九八五 三 を、もちつづけたものである。心がけひ  
 九八五 六 をもつことができるものかと思ひました。  
 九八五 二 、手ぬぐいのようなものをかぶつた女の人  
 九八五 八 を話すかとたずねるものだから、「略」  
 九八五 六 の身のまわりにあるものを、よくしらべて  
 九八五 一 〇 〇 私、同じものをみるにしても、  
 九八五 一 〇 〇 ても、どうしてそのものがこうなつたかと  
 九八五 三 るように、できないものでしょうか。ぼく  
 九八五 四 なるようにできないものでしょうか。学校  
 九八五 三 〇 ころようになりたいものです。いつも、全  
 九八五 一 〇 人間の衣食住というものは、みんなたいせ  
 九八五 一 〇 、みんなたいせつなものであるから、ぬの  
 九八五 一 〇 つとして、日本製のものは、なかつたから  
 九八五 一 〇 が、思うように動くものは、なかなか生ま  
 九八五 一 〇 「略。」「えらいものだ。」といつてほ  
 九八五 一 〇 すことはできないものだろうか。」「一つ  
 九八五 一 〇 ぎでもなんでもないものであつた。眞珠母  
 九八五 一 〇 、砂のような小さなものがいりこみ、それ  
 九八五 一 〇 すと、ひとつになるものではなかつた。だ

十 39 12 しいれたために死ぬものもあつた。たとえ  
 十 40 1 せず、死にもしないものでも、あとで開い  
 十 45 6 であるが、日本産のものは、ことに名高い  
 十 48 3 なく、道ばたにあるものを、なんでもみつ  
 十 54 10 でまた、いろいろなものをながめるのです  
 十 55 7 こととは、ちがつたものになります。どう  
 十 62 8 なさんは、能というものをみたことがあり  
 十 63 2 しぐさをしたりするものですが、かぶきや  
 十 64 3 ちがつたおもしろいものが、たくさんあり  
 十 64 4 ぐれたところのあるものとなっています。  
 十 64 7 しょに、狂言というものが演じられます。  
 十 65 1 、狂言の中の有名なものです。狂言には、  
 十 67 2 した。でも、こわいものはかえつてみた  
 十 70 3 いがして、黒っぽいものはいっていまし  
 十 8 4 ちばんりっぱなものだと思う。「略  
 十 16 4 天と地にかがやくものの中で、いちばん  
 十 19 7 ると、氣持よく、物をわけてやったり  
 十 20 1 とのようになりたいものだ、ほねをお  
 十 20 7 た、父親のすきなものを買うために、自  
 十 29 6 まりの米を自分のものにするのででき  
 十 69 11 もかわればかわるものか——これが父親  
 十 75 11 うかよくしたいものだ。力をおとさず  
 十 80 2 いに、すこしずつものがわかりかけるよ  
 十 80 6 た。また、なにかものをいおうともし  
 十 84 1 ないこともあるものだ。少年は二  
 十 88 12 動かし、なにかものをいいたげにし  
 十 91 5 になにもあげることがありません。こ  
 十 7 12 の思いをたくしたものであります。  
 十 10 10 とりだしてみせたものは、ガラスのかけ  
 十 10 12 さは、「こんなものをひろつて、どう  
 十 11 11 りが、書物というものはなにかすばらし  
 十 12 1 い力をもっているものだと考えました。

十 16 3 きりつかまえたものだと思つて、しき  
 十 16 7 ゆずつてもらつたもので、子どもにはり  
 十 21 6 ようになりたいものです。「略」。「  
 十 24 9 うにしてやりたいものです。民ちゃんは  
 十 24 11 うにしてやりたいものです。民ちゃんは  
 十 24 11 んは、ぼつぼつものをいにかけていま  
 十 26 1 う。いそがしいものだから、ついしつ  
 十 26 5 、なにかとりつく物があるとすぐに立ち  
 十 27 4 すとなかなか早いものです。いまそこに  
 十 27 7 立ちはじめには、物を持たせると立つこ  
 十 31 7 、私はなんとなくものを待つ氣持で、じ  
 十 32 11 心の目をあらゆるものに向けて開いてく  
 十 34 1 ることや、そんなものがこの世にあるこ  
 十 34 6 した。けれども、物にはそれぞれ名まえ  
 十 35 3 中にはいつているものであることを、は  
 十 37 4 しらわすれていたものを思いだすような  
 十 37 6 うなあるふしぎなものを感しました。こ  
 十 37 7 るふしぎな冷たいものの名であることを  
 十 37 11 。こうして私は、物にはみな名まえのあ  
 十 37 12 にふれるあらゆるものが、生命をもつて  
 十 39 8 日本語になおしたものです。よんでわか  
 十 40 5 して、すこしでももののわかる子どもに  
 十 40 10 「ことば」というものをわからせること  
 十 44 8 メートル以上のものもあるが、まるで  
 十 44 10 、そんな大きなものを、どうして動か  
 十 44 11 れる人がいて、ものによつては、三人  
 十 45 3 もある。人形はものをいわないが、そ  
 十 45 12 か、指でつかうもの、ぼうでつかうも  
 十 45 12 、ぼうでつかうもの、糸であやつるも  
 十 45 12 、糸であやつるものなど、いろいろな種  
 十 46 2 ころ、よくみたものだ。あのころは  
 十 46 7 いる。ジャワのものはとくに有名だね

十 47 1 な國にいろんなものがあるんですね。  
 十 47 3 、なにか美しいものであらわそうとす  
 十 48 7 かすのは楽しいものだ。こうえんで  
 十 55 3 暖かい感じのするものである。なつかし  
 十 55 6 歴史にもつづいたものもあるが、昔から  
 十 55 7 れたというだけのもののほうが多い。ま  
 十 55 8 れて有名になったものもあるが、ただ人  
 十 55 10 えていつてしまふものもある。それで、  
 十 56 5 は、世界に共通なものさもある。次にい  
 十 61 9 。それからというのは、いり用のとき  
 十 65 3 の細いやわらかなものが、地をうがち岩  
 十 65 6 のさをさえざるものはなにもない。お  
 十 68 4 る。大きなやわらかい物を切るのこぎりは  
 十 68 5 小さなやわらかい物を切るのこぎりは  
 十 73 5 小さなつづぶつもの落ちてきて、子  
 十 76 5 だが、みせるものがあるよ。」芭蕉  
 十 76 11 火をたけよきものみせん雪まろげ  
 十 84 9 このままおされるものではないですね。  
 十 86 4 ふたたびはげしいものになっていきまし  
 十 94 8 めいめいちがつたものが思いだされてく  
 十 99 2 貝づからでたものをならべてみまし  
 十 99 10 物をいれるためのものですが、もちろん  
 十 100 4 ちや、いろいろのものがあつて、じょ  
 十 101 6 からほりだされたものです。赤色のすや  
 十 102 4 などをごしらえたものがあります。夢  
 十 102 10 りまえに作られたものであります。夢殿  
 十 105 5 のなども、いまのものといふんちがつ  
 十 107 3 、とくにすぐれたものの一つです。さあ  
 十 108 7 のとして代表的なものです。能面 こ  
 十 110 9 ようをあらわしたものです。また、なま  
 十 110 10 などをはめこんだものもあります。黒う  
 十 111 8 時代の人のかいたもので、浮世絵といひ

十二112 2 のとおりりっぱなものとなって生まれた  
 十二112 8 、日本で出版したものです。表紙の文字  
 十二113 1 めてしっかりとしたものとなりました。こ  
 十二113 4 でなしとげられるものではありません。  
 十二113 9 京横浜間を走ったものであります。汽車  
 十三8 7 。知識には、浅いものと深いものがある  
 十三8 7 、浅いものと深いものがあるが、その深  
 十三8 7 、その深く進んだものを科学的知識とい  
 十三9 9 とを、知るようなものである。知識が開  
 十三11 6 果の関係の簡単なものは、普通の知識に  
 十三11 7 られ、むずかしいものは、科学的研究に  
 十三12 10 す。地面は平らなもので、日や月が、東  
 十三13 10 もまるい形をしたもので、火星などと同  
 十三14 7 もその焦点に在るものだ、ということ  
 十三14 12 とおり、天は動くものではない、地球が  
 十三19 2 、つるぎで失ったものを、すきでとり返  
 十三24 6 そのほかわずかのものにすぎませんでし  
 十三24 9 作物で、できないものはないまでになり  
 十三25 10 よりも、とうとういものが生き返りました  
 十三28 4 おだんごのようなものをこしらえたり、  
 十三28 7 には、いろいろなものがある。まず、も  
 十三28 11 な毛ぬきのようなものを持ち、かた手に  
 十三33 1 ちばん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪  
 十三42 2 がある。見せたいものだって……なにを  
 十三54 1 画家のかいたもので、『いすによる  
 十四8 5 たちよりふかいものなんですから。私  
 十四13 1 めもりのようなものがついていて、ど  
 十四15 7 ては、どうしたものか、ちよつと私に  
 十四16 12 にかそういったものがご入用のときは  
 十四25 4 にかかんできた。ものとことばが、いつ  
 十四25 6 らのちも、新しいものが世の中にできて  
 十四25 7 、新しく生まれるものであることが、考

十四28 5 来語辞典というものもあるから、それ  
 十四29 2 に見てもらいたいものがあるのです。見  
 十四29 3 かにしまつてあるもののように聞えるか  
 十四29 4 けつてそういうものではないですね。  
 十四29 5 、自由に見られるものなのです。それは  
 十四30 3 も、自分の身近なものしか見ないで、遠  
 十四30 4 か見ないで、遠いもの、大きなものに心  
 十四30 4 遠いもの、大きなものに心をくばること  
 十四30 8 持までちよつぱなものになつてしまつた  
 十四31 9 す。あなたがたのものをみる目、ものを  
 十四31 10 のものを見る目、ものを考える力が大き  
 十四34 3 、うちゅうというものは、どこまで廣  
 十四34 5 してはてしないものではないですね。  
 十四34 10 太陽もごく小さなものです。地球などに  
 十四34 11 、ごくごく小さなものです。したがつて  
 十四35 1 つとつと小さなものに感じられるかも  
 十四35 3 とるほどの小さなものでしょう。しかし  
 十四35 7 、人間の力というものは、うちゅうにも  
 十四35 8 大で、すばらしいものだということがで  
 十四45 9 ました。すべてのものが、ことごとく波  
 十四48 2 美しい声がだせるものだと思います。  
 十四48 3 どうせ助からないものなら、こういう美  
 十四48 4 、死んでいきたいものだと思います。  
 十四48 6 ようしに流れ出たものらしい一本の大き  
 十四51 6 ぼちゃはだれのものか。』という話し  
 十四52 4 かぼちゃは私のものです。私の花がさ  
 十四52 12 ふくれただけのものです。だから、そ  
 十四53 1 は、私たち花のものだということはどう  
 十四54 3 やは、全部私のものだと思います。」「  
 十四54 9 、送つてあげたものです。みなさんの  
 十四55 5 ぼちゃは、私のものだと思います。」「  
 十四56 4 しらえになつたものでも、私が運んで

十四57 2 やは、全部私のものだと思います。」「  
 十四57 11 やは熱帯地方のものです。それがこの  
 十四58 6 ぼんたいせつなものは、私たち水です  
 十四59 4 いちばんじみなものです。しかし、土  
 十四60 2 、みんなぼくのものだといつてもいい  
 十四61 5 ちゃは、だれのものとも、簡単にはい  
 十四61 6 いて、みんなのものです。しかし、い  
 十四63 3 きりと同じようなものです。この茶わん  
 十四63 9 のと、にたようなものです。この色につ  
 十四64 1 づくのしんになるものがあつて、そのま  
 十四64 4 。そのしんになるものは、ふつうけんび  
 十四64 6 かいちりのようなものです。空気中には  
 十四64 8 た、ちりのようなものばかりがのこつて  
 十四65 10 かなかおもしろいものです。せんこうの  
 十四67 7 たつまきのようなものになつて、地面か  
 十四67 10 こるうずのようなもので、もつと大じか  
 十四67 11 もつと大じかけなものがあつて、それ  
 十四68 12 、よほどよくにたものと思つてさしつか  
 十四69 5 たがいによくにたものであるという一つ  
 十四71 6 れと、同じようなものになるわけです。  
 十四72 12 と、ちらちらしたものが見えることがあ  
 十四73 8 た、きりするようなものがひと皮かぶさつ  
 十四75 3 たいへんあぶないものです。とつ風とい  
 十四75 4 す。とつ風というものがそれです。たと  
 十四76 4 風とよばれているもので、晝間は海から  
 十四79 12 九と、にたようなものだと思います。  
 十四80 9 いい、氣のきいたものになつたものとも  
 十四80 9 いたものになつたものとも考えられます  
 十四81 12 十色。すきこそものじようずなれ。  
 十四83 5 すを、映画にしたものである。雪が降り  
 十四83 9 、とりあつたものである。「雪」と  
 十四83 10 雪の景色を写したのではなく、雪の一

十四 84 1 らえて映画にしたものである。ただ一ひ  
 十四 84 11 るようにしくんだものであった。空から  
 十四 85 8 は、うまくいったものだ。このように、  
 十四 85 9 も雪にえんのあるものであるが、私はあ  
 十四 86 2 心なしにはできるものではない。野原の  
 十四 86 6 、けっしてわるいものとは思わないが、  
 十四 88 8 ず方向がちがったものであろうか。雪國  
 十四 88 9 でいちばん楽しいものは、なんといつて  
 十四 90 8 上ぐつは、母親のものであったので、この  
 十五 20 12 中の生活は、見るもの聞くものがことごと  
 十五 20 12 は、見るもの聞くものがことごとくめず  
 十五 21 1 、ゆかいな楽しいものでした。朝ぎりの  
 十五 26 3 上へでもとまろうものなら、それこそた  
 十五 26 4 らふり落されないものでもない。一こく  
 十五 35 7 りやくされてきたものが、文字というも  
 十五 35 7 のが、文字というものの起りとなった。  
 十五 35 10 絵文字とよばれるものがあつた。中部ア  
 十五 36 1 いに形のきまつたものとなり、今日のよ  
 十五 36 5 物の形をうつしたもので発達したもの  
 十五 36 5 ものから発達したものであるが、形のな  
 十五 36 6 あるが、形のないものは、この方法では  
 十五 36 7 数という形のないものを表わすのに、線  
 十五 37 2 をうつしてできたものであるが、それ  
 十五 38 9 くつかの音のあるものがあり、またいく  
 十五 38 9 くつかの訓のあるものもある。たとえば  
 十五 39 6 分をとって作ったもので、たとえば、「  
 十五 39 9 の全体をくずしたもので、たとえば、「  
 十五 39 10 のから作りだしたものである。かなは、  
 十五 41 2 プト文字から出たものである。このエジ  
 十五 42 9 表わす方法がないものであろうか。私た  
 十五 45 4 ので、それまでのものの考えかたや商賣  
 十五 46 3 、みなめずらしいものばかりであった。

十五 46 10 いた。「こんなものが、まだほかにも  
 十五 47 2 いて、まのかるもので。」プリンクリ  
 十五 47 10 る、色のはいつたものが、いちばんすぐ  
 十五 48 10 簡単にできあがるものではなく、白く焼  
 十五 48 10 白く焼けるはずのものが黒くなったり、  
 十五 49 3 て、思いどおりのものを作るのでき  
 十五 50 3 日本から美しいものが一つ消えてしま  
 十五 51 6 のふでになったものである。主人は、  
 十五 55 12 おしをしていたものだ。そのころ日本  
 十五 59 9 舞いこんで来たものだ。それなら裏の  
 十五 59 10 ければならないものがたくさんある。  
 十五 65 12 れから車のついたものは送ってくださる  
 十五 73 3 たアマスト時代のもので、京都時代のも  
 十五 73 3 もの、京都時代のもので、なつかしい数々  
 十五 78 7 として眞実であるものは、他人にとって  
 十五 82 3 た大廣間のようなものあらわれます。  
 十五 83 2 あんなにうまいものをたくさんたべて  
 十五 86 7 うよ。人というものは、自分のしなけ  
 十五 86 9 ければならないものだ。ていねいに  
 十五 87 10 ていないときに物を飲む幸福」と、『  
 十五 87 10 へらないときに物をたべる幸福』で、  
 十五 90 12 う。もつといいものがありますよ。わ  
 十五 92 12 ン口にいっぱい物を入れながら、「略  
 十五 93 1 ってもらいたいのですね。」チルチ  
 十五 93 4 ルのすみで、「物をたべているときは  
 十五 94 12 たちはやと、物の眞実を見ることが  
 十五 96 1 たち、たくさんいたものだ。それを、『  
 十五 98 4 もの幸福というものは、地の上でも、  
 十五 98 5 いちばん美しいものに見えるものだけ  
 十五 98 5 いものに見えるものだからね。』チル  
 十五 99 10 そんなことあるのですか。』チルチ  
 十五 102 7 ばんたいせつなものです。こんどあつ

十五 104 5 弟ぶんのようなのですからね。その  
 十五 106 9 うに、はじめなものになってしまふの  
 十五 106 11 。その後、『ものわかる喜び』が  
 十五 106 12 兄弟の『なにものものわからない幸福  
 十五 107 5 つきあっていたものだから、すっかり  
 十五 107 9 いちばん美しいものがいなくなつてし  
 十五 107 10 中に、『美しいものを見る喜び』がい  
 十五 109 1 いちばん純潔なものでしょう。『幸福  
 十五 109 7 です。くらべるものもない『母の愛の  
 十五 112 6 さ。人間というものは、目を閉じてい  
 十五 117 8 ですか。私は『物のわかる喜び』で  
 十五 117 9 自分たち以上のもので、見えないので  
 十五 118 1 たちの影以上のもので見えないので  
 十五 118 3 ている『美しいものを見る喜び』で  
 十五 118 4 ちのゆめ以上のものは、見られないの  
 十五 119 6 にいたします。』『物のわかる喜び』「光  
 十五 119 6 物の『者』(名) 83 もの 者 見あわてもの・おく  
 びょうもの・おろかももの・げんきもの・こうふくも  
 の・しあわせもの・にんきもの・のけものあつか  
 い・ひねくれもの・わかもの  
 一 12 2 かくれんぼするもの、よつといで。  
 一 61 2 ここに いる ものは、みんな、たまを  
 ひろったなかまですよ。  
 二 32 10 ほかのものがいいました。  
 三 110 3 ほんとうは、わたくしは 月の 世界の  
 ものでございます。  
 三 116 6 おつきのものにおたずねになりました。  
 三 116 7 おつきのものは、『略。』ともうしあげ  
 ました。  
 三 117 6 おつきのものは、そのとおりにしました。  
 四 50 7 ほかのものは、あとになり、さきにな  
 りして、はげましはげまし、さげました。

四51 だれも、ばらばらになって、にげようとするものはありません。

四65 1 会 からだがじゅうぶんではないから、あのものがじゅんじゅんにたすけていこう。

六95 会 「それでは、自分のようなものでも、役にたつことがあるのかしら。」

六183 ハーモニカをふいているもの、オルガンをひいているもの、たいこをたたいているもの、

六184 オルガンをひいているもの、

六184 たいこをたたいているもの、

六185 シロフォンをたたいているもの、そのうしろに合唱隊がならんで、うたをうたっています。

六278 会 はたらかないものには、この楽しさ、この喜びはあじわえないだろう。

六567 私たち一組のものは、みんな集まって、どんなものにしようかという相談しました。

六581 どうぞ、みなさんの氣づいたことは、なんでも、かかりのものにお知らせください。

六659 このなぞの答がわかった人は、紙に書いてかべ新聞がかりのものにだしてください。

六945 会 みなものにならずねるが、だれか、このかたのつりばりをとっていったものはないか。

六949 会 つりばりをとっていったものはないか。

六956 会 だれか知っているものはないか。

六1148 わる口をいったものも、「略。」といって感心しました。

六133 1 会 勝ったものになにもないなんて話はない。

七51 1 会 のこったものがふんとうした。

七854 裁判官は、ふたりのものに向かって、

八115 茶のまにいたうちじゅうのものがびっくりして、いそいでピオをひろいあげました。

八299 会 私は、けんぎゅうというものです。

八451 「わたしの病氣をなおしてくれたものには、國の半分をわけてやる。」

八456 そこへ、王さまの病氣をなおすいうものがでてきました。

八462 会 そのほんとうに幸福なものをさがしてきてほしい。

八482 会 世の中にわしより幸福なものはあるまい。

八512 まずしいこじきのようなものが家のまににいるのを見て、「略。」とたずねました。

八531 まずしいこじきのようなものがきて、

八541 その家の人がでてみると、まずしいこじきのようなものが、おもてに立っていました。

八611 たずねてくれるものも少ないし、

八652 それは、ひどく大きなからだで、たいへんみにくいものであった。

八654 会 ほかのものは、一わだつてこんなすがたをしていない。

八694 会 それに、ほかのものと同じようによくし、

八695 会 いや、ほかのものよりうまくおよくと

八733 どちらもたまごからはいだしてまもないものであった。

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

八894 会 私のようなみつともないものが、おくめ

九1098 にこにこわらいながらおりてくるもの、ま

九1099 まじめな顔でやってくるものなどさまざまである。

九131 会 わたしは、そんなにこわいものではない

十175 会 だれもわかるものはありません。

十333 村じゅうの者から氣ちがいあつかいにされるのを見て、父は、「略。」とさとしたが、

十407 村や町の者は、幸吉のむだばねをあざけり、そのゆめのような考えをわらった。

十409 まわりの者から、どんなにあざけられ、からかわれても、

十656 めうえのいばつたものに対してもおそれず、そうかといって、なにをしてもにくまれない、

十一82 会 乗り組んでいる者が、みんなそろって、一つの生きものみたいに進んでいく。

十一278 中には、正月だというので、そのうえに十二文はずむ者もありましたが、

十一643 家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。

十一681 死人のようにみえる者もあれば、

十一683 大きくみ開いた目をあけて、じつと空間をみつめている者もありました。

十一683 また、子どものようにうなっている者もありました。

十二721 船の上でわかれを告げたことや、家族の者が、その旅に楽しい希望をかけていたことや、

十二183 会 ぼくにはだれも教えてくれるものがあります。

十二756 トントン、トントンと入口をたたく者が

十三59 長くかなしみにしずんだものにも、春は、希望の帰ってくるとき。

十三31 鳴りものをつかわないで、呼び声でやって来る者もある。

十四48 まずしいもの、〈略〉の中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

十四48 まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、

十四48 ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

十四47 おそらくは、自分と同じように、船からなげだされたものでしょう。

十四57 高い声でわらいながら、どやどやとはいってきたものがあります。

十五23 だれか、その大わしのせの上へ、がけの中ほどからとびついたものがあります。

十五32 血まなこになって目の前てきを相手にしているものには、なんにも耳にはいりません。

十五44 私ハハギンスというのですが、じつは、私のプリンクリーじいさんがね——

十五48 細工人、画工、ちようこ師、下ばたらしの者などが、三十数人かかえられていた。

十五49 このような美術品を買い求めるようなものは、ほとんどいなかった。

十五51 じつは、私は今右衛門のまごにあたるものです。

十五75 神は、みずから助くる者を助く。

十五83 あの人たちは下等でもあり、たいていはまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、

十五87 失礼ですが、この中のおもなものをこそしようかいたしましょう。

十五88 口は耳まででかいているし、だれもそれ

に立ち向かうものはないのですよ。

十五96 私たちに用のあるものは、どうせこつちを通るのだから。

十五96 ほかの者にまで会っているひまはないよ。

十五106 天使のようなすがたをした者が、きらきら光る着物を着て、そろそろとやって来ます。

もの(終助) 23 もの

一50 お月さんのくにのきしゃだもの。

一62 あなたも、おとうさんも、おかあさんも、みんないい人ですもの。

二32 わたしたちはめくらだもの、みることもなかできないよ。

二42 だって、だれかがばかにするんだもの。

三28 あのいきおいのいいくすのきでつくったふねだもの、

三65 だって、もりへでたいんだもの。

三65 「たきへでたいんだもの。」

四44 ぼくは、きのうは一ばんおしまいだつたもの。

四97 だって、ぼくたちがつかまえたのだもの。

五27 電車のおかげで、あんな遠いところまで、一日でいって帰ってきたのですもの。

五61 わたしが水をやったんですもの。

五67 うちのおけは、もう、すっかりこわれてしまっているんだもの。

五94 「かわいそうだもの、ひろっていかけてみよう。」

六39 なかまがわるい虫をとってそだてたいねを、こんどは、あなたがたがまもるんですもの。

七35 おばさんのうちへは、もう二どもいった

ことがあるのですもの。

八82 ものごとを教えてもらえる人たちのなかまいるしたんだもの。

九18 いっしょに歩いているうちに、きゆうにつかみあいをはじめるんだもの。

十三39 だって、おばさんたら、お客さんなんておっしゃるんだもの……

十五91 それがこの世のすべてですもの。

十五99 会ったおぼえがないもの。

十五102 たべたり、飲んだり、目をさましたり、息をしたりして、くらしているのですもの。

十五105 ぼくたちは、よくいっしょに遊ぶのですもの。

十五110 でも、あなたは、うちのおかあさんになにしているけれども、ずっときれいだもの。

ものうり「物売」(名) 1 もの賣り

十三28 まず、もの賣りが鳴らして来る鳴りもの音がおもしろい。

ものおと「物音」(名) 5 もの音

十三28 遠くの方からびいてくる、いろいろなもの音に、耳をかたむけたりしているのである。

十三28 もの音には、いろいろなものがある。

十三32 このように、いろいろなもの音がびくびくが、

十三43 うらの方で、もの音がする。

十四89 耳を地べたに近づけて、なにかもの音でも聞こうとしたりする。

ものおぼえ「物覚」(名) 1 ものおぼえ

三11 はんたかものはものおぼえがわるく、そのうえ、ものがよくいえますんでした。

ものか(終助) 7 ものか

五90 なにかおかしいものか、

六32 4 ㊦ 「これぐらいの風にまけるものか。」  
 六114 5 ㊦ こんなものがあるものか。  
 六141 10 ㊦ 「やるものか。」  
 七4 11 ㊦ 「にがすものか、にがすものか。」  
 七4 11 ㊦ 「にがすものか、にがすものか。」  
 十一 62 4 ㊦ このくらいのことがかわいいものかと、自分からさきになって渡ってしまったのです。  
 ものかげ 「物陰」(名) 1 ものかげ  
 十二 25 6 そとさえ寒くなければ、ものかげへつれていって、用をたさるようにしました。  
 ものがたり 「物語」(名) 3 ものがたり 物語 ↓ イソップものがたり・げんじものがたり・たなばたものがたり・むかしものがたり  
 四88 5 ㊦ すずめ親子のものがたり。  
 七97 ㊦ 春には春の話、秋には秋のものがたり。  
 十五 29 11 昔の物語に出てくる英ゆうのように、このただけしい相手を待ちかまえていました。  
 ものがたる 「物語」(五) 2 物語る 《ツール》  
 十二 77 5 日本とメキシコの国旗が美しくひるがえって、きょうの戦いを物語っています。  
 十五 59 6 ことばみじかにその関係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、  
 ものごろ 「物心」(名) 1 もの心  
 十二 40 12 だんだんちえがつき、もの心がついて、学校にいこうになりました。  
 ものごと 「物事」(名) 4 ものごと 物事  
 八82 6 ㊦ へやにはいつてさ、ものごとを教えてもらえる人たちのなかまいりをしたんだもの。  
 十二 47 10 ㊦ 便利とか不便だけで物事を考えないところに、  
 十三 93 ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、

十四 89 9 読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたくながめた人によって書かれた文である。  
 ものさし 「物差」(名) 1 ものさし  
 四41 5 ものさしで きちんと そろえたようになつてとんだら、  
 ものずき 「物好」(形状) 1 ものずき  
 十五 57 4 ㊦ ものずきな私は、それはおもしろいと、教授の申し出でをさっそく承知して、  
 ものすこい 「物凄」(形) 3 ものすこい 《ーイ》  
 八74 2 ものすこい鳥うちがはじまったのである。  
 十一 61 ㊦ オールがぎゅうぎゅうとしなつて、船は、ものすこいスピードで走るだらう。  
 十四 86 11 このものすこいありさまを映画化することは、たやすいことではあるまいが、  
 ものすこさ 「物凄」(名) 1 ものすこさ  
 十二 84 7 まほうつかいのようになつて、大きなチルデン選手を追いつめるものすこさは、  
 ものたち 「者達」(名) 1 ものたち  
 八80 4 ㊦ かしこいものたちがものをいっているときに、自分の考えなどはいえないのだよ。  
 ものの (接助) 1 ものの  
 七34 8 私と弟のさぶろうは、乗るには乗ったものの、動くことさえできません。  
 もののわかるよろこび 「物分喜」(話手) 2 物のわから喜び  
 十五 117 6 物のわか「あなたは『光』なんですね。  
 十五 118 6 物のわか「さあ、そのベールをおとってください。  
 ものほしさお 「物干」(名) 1 物ほしさお  
 九15 2 つばめが電線や物ほしさおに五六ばぐらいならんでとまっているのを、よくみかけます。  
 ものわらい 「物笑」(名) 1 ものわらい  
 五72 9 ㊦ 女王さまのようなあるきかたも、口のき

きかたも知らないで——國じゅうのものわらいになるよ。  
 もはや 「最早」(副) 1 もはや  
 十三 21 2 ユートランドのあれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていませんでした。  
 もみ 「粃」(名) 12 もみ したねもみ・たねもみひたし  
 八94 5 やく3・6dlのもみを、水の中にひたしました。  
 八94 5 ういたもみがあつたので、手ですくってみますと、かるいもみともみがらばかりでした。  
 八94 6 かるいもみともみがらばかりでした。  
 八95 3 水をとにかえるときにみたらもみのものさほうがすこしふくらんでいました。  
 八95 6 もみのものさほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものがでました。  
 八106 6 もみの数をしらべてみました。  
 八106 8 1つぶの種もみから、やく1500つぶももみができたわけです。  
 八108 2 こんどは、もみとごみをわけました。  
 八108 4 もみをむしろの上にひろげてほしました。  
 八108 6 天氣のよい日に2日ほしたら、もみがよくかわきました。  
 八108 8 いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこすつてもみがらはじきました。  
 八109 2 のこつていたもみを、1日、日光にかんかんほして、すぐにもみすりをしてみました。  
 もみ 「縦」(名) 8 もみ ↓ おおもみ・こもみ  
 十三 17 2 みどりの牧場と、もみと、しらかばの森林と、近海の漁場のほかには、  
 十三 20 11 そこで思いついたのは、ノルウェー産の



もみの木でありました。

十三20 12 実際に試験してみると、もみの木はえ  
るが、数年ならずしてかれてしまいました。

十三21 8 これをノルウェー産のもみの間に植えて  
みると、両種のもみは、たがいにならんで生長し  
十三21 9 両種のもみは、たがいにならんで生長し  
年がたつてもかれないで、よくしげりました。

十三22 4 もみは、ある大きさまでのびると、そこ  
で生長をとめました。

十三22 11 かれは、もみの生長について、大きな発  
見をしました。

十三23 11 ユートランドのあれ地には、おいしげつ  
たもみの林が見られるようになりました。

もみがら 〔榎〕(名) 2 もみがら

八94 6 ういたもみがあつたので、手ですくつてみ  
ますと、かるいもみともみがらばかりでした。

八108 9 いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴ  
リこすつてもみがらはじきました。

もみくちや 〔揉〕(形状) 1 もみくちや

十一52 10 一停留所ごとに、おる人と乗る人とが  
もみくちやになった。

もみじ 〔紅葉〕(名) 4 もみじ ↓はじもみじ

二22 1 先生、わたしたち、もみじのはっぱで、  
いろはあそびをしました。

三79 1 五人の子どもが、もみじの こかげのす  
なばで あそんでいます。

七66 2 もみじがまっかで、山のいもをほっている  
人が二三人。

十二92 4 りすをみつめて追いかけたこと、もみじ  
の枝をとってきたこと——

もみじば 〔紅葉〕(名) 1 もみじ葉

十一40 1 山のもみじ葉みなちりはてて、青くし

げるはまつ・すぎ・ひのき。

もみすり 〔榎摺〕(名) 4 もみすり

八108 7 きょうはもみすりをしました。

八109 3 のこつていたもみを、1日、日光にかんか  
んほして、すぐにもみすりをしてみました。

八109 5 ほしてすぐ、もみすりをするものではない  
と思ひました。

十一39 9 冬の用意もしだいに進み、あとはもみ  
すりするばかり。

もみまき 〔榎蒔〕(名) 1 もみまき

八96 1 きょうは、お天気がいいので、もみまきを  
しました。

もむ 〔揉〕(五) 4 もむ 《—ン》

六139 5 五ひきのうさぎさんたちは、あせをふいた  
り、ねころんだり、足をもんだりしていました。

十一79 3 父親のちよつとしたため息にも、ちよつ  
とした目つきにも、ふるえながら氣をもらんで、

十二49 10 ほかのはよくもんでのばしておく。  
十二50 4 首のところだけのこして、もんだ紙にの  
りをつけないで、上から上からかぶせる。

もも 〔桃〕(名) 3 もも

四80 1 もも——ももの花のさくころ。

十一31 4 続くひよりにさくらがさいて、野山を  
かざると、もも赤く 畑にさいて、

十五88 5 ふたりとも手はパンのしんだし、目は  
もものジャムですよ。

ももいろ 〔桃色〕(名) 4 もも色 ↓うすももいろ

三38 1 うさぎの目は もも色の かわいらしい  
目です。

三82 6 「わたしの もも色、みえないわ。」  
十57 6 白と、もも色と、こいもも色がさきまし  
た。

十57 6 こいもも色がさきました。

もや 〔靄〕(名) 2 もや

七65 7 もやのかかったおきの島、ボンボン船がで  
かけていく。

七70 5 もやが深いから、遠いような、近いような、  
月明かりだ。

もゆ 〔萌〕(下二) 1 もゆ 《—ユル》

十五11 4 わか草のはつかにもゆる庭に来てす  
ずめあさりとなりへとびぬ

もよう 〔模様〕(名) 10 もよう ↓しまめもよう・  
しまもよう

八24 2 せみの羽は、ぶるぶるとふるえて、色も、  
もようも、はつきりとしてきます。

十29 10 もようをみたときには、《略》、それをさが  
してみようと思います。

十29 11 そのもようが、どんな単位からなりたつて  
いるか、それをさがしてみようと思います。

十二100 2 土器には、なわ目のもようがあるので、  
じょうもん式土器といえます。

十二100 9 それは、もようもごくかんたんで、形も  
たいへんよくまとまっています。

十二110 9 うるしをぬつたうえに、金や銀のこなを  
まいて、もようをあらわしたものです。

十四70 1 みょうなゆらゆらした光った線や、うす  
暗い線が、不規則なもようのようになって、

十四70 7 それも、お湯が熱いほど、もようがはっ  
きりします。

十四72 9 そのため、さきにいったようなもよう  
が見えるのです。

十四73 10 このふしぎなもようがなんであるかとい  
うことは、

もん 〔文〕 ↓じゅうにもん・ひやくもん

もよおし「催(名) 1 もよおし

十五五五(1) 鹿鳴館というクラブがあり、おかしなもよおしをしていたものだ。

もらう「貰(五) 60 もらう『イー・ウー・エー・オー・ツ・ワ』↓おもらう

二五三(7) とうとう、おかあさんは、さちこからりんごをもらいます。

二五四(3) 「ああ、そのりんご、いちろうにいさんからもらったのです。」

三八〇(1) 雨にぼくのいどを いっぱいにしてもらうんだから。

三〇四(3) 「どうかして、あんなにきれいな人がおよめにもらいたいものだ。」

四二九(6) となりのうちから、うさぎをもらってくることかな。

四三〇(2) 「くみの人みんな」にきいてもらいたいといって、文を書きました。

四三八(4) たろうさんは、なぜぶどうをもらわないで、かえたのでしょうか。

四八五(6) みんなはよろこんでもらいました。

四一〇五(10) つれていってもらおうかな。

四二一(1) では、みんなに おもしろい おどりを おどってもらいましょう。

五二八(8) きつぷをはいけんさせてもらいます。

五二五(6) 切手をはってもらおうのです。

五二八(7) ぼく、こんな本をもらいました。

五二八(10) むこうの店に品物をとどけて、受けとりをもらって帰ってくるとちゅう、

五二八(11) よその人からもらったんです。

五三〇(3) 小さいほうの荷物を、わたししてもらいました。

紙を書いてもらって、

五四三(5) ぼくはねえさんから、よくうたをおしえてもらいました。

五六七(1) 海へ帰してくれ、お礼はいくらでもあげるといったが、わしはお礼などもらわなかった。

五六七(4) どうしてお礼をもらわなかったの。

五七五(5) せめて、おけの一つも、もらってくればよかったのに。

五八二(1) もう一ど金のさかなのところへいって、家をもらっておいで。

六〇三(9) ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。

七三〇(4) いま、にいさんに日記をよんでももらっていたところよ。

七四〇(5) 三郎は、だれかにゆずってもらった座席の上に立って、

七四二(4) うまよ、そんな大きななりをして、子どものように、からだまであらってもらっているのか。

七九四(4) さあ、けいさつしょへ、いっしょにいってもらおう。

七九六(4) いや、あちらで、あかしをたててもらおう。

七九八(5) 白うさぎが9ひきと、黒うさぎを1ひきもらいました。

八六三(3) その一わを買い、小さなボールぼこにいれてもらって、だいに持って帰りました。

八三一(4) 天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにももらいました。

八四六(3) そうして、そのシャツをもらってくるように。

八七二(10) ぬまの水をのませてもらいたいとも思ったが、それもゆるしてもらえそうもなかった。

八七九(3) そこで、あひるの子は、三週間ばかりため

しにおいてもらった。

八九二(5) おかあさんのところへ走っていった、もらってきたパンやおかしをなげてよこした。

九三五(4) そうして、近所からわけてもらったさつまいものなえを、手わけして植えていきました。

九四五(1) 「小公子」をよんでもらいました。

九七八(7) 「きょうは、このかたの畑をすこしほらせてもらうことにします。」

九一〇二(4) ねえ、きみ、うちによって、ねえさんにそのボタンをつけてもらわない。

一一一(2) おとうさんが、休み茶屋のまえにこしかけて、コーヒーをわけてもらっていますと、

一六五(9) おかみさんをもらえば、くらしにもお金がかかり、

一一一(56) ついせんだって、大学生に頼んで乗せてもらったうれしさで、

一一一(117) 頼んで乗せてもらおう。

一一一(237) 母親は、金次郎と相談して、すえの子どもを親類にもらってもらいました。

一一一(238) 親類にもらってもらいました。

一一一(242) おかあさん、とみちゃんを返してもらいましょう。

一一一(248) 「そんなら、今夜いって、返してもらってきましょう。」

一一一(256) 遠い山へいって、しばをかったり木を切ったりして、村の人を買ってもらいました。

一二一(167) これは、絵のすきだったおじさんからゆずってもらったもので、

一二一(825) 世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらうことになります。

一三六(14) やむを得ず自分の説はあやまりであったということにして、ゆるしてもらいました。

十三229 ㊦ 「ダルガス、おまえがくれるといった材木を、さあ早くもらいたい。」  
 十三425 ㊦ そう、二つあるのならもうよ……  
 十四292 あなたがたに見てもらいたいものがあるのです。  
 十四292 見てもらいたいなどという、  
 十四617 ㊦ いちばんいい種を、來年もわずれずにまいてもらうことができさえすれば、  
 十五551 カーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらうことで、  
 十五559 ㊦ きょうはきみがまだ生まれないころの日本の話をさせてもらおう。  
 十五931 ㊦ 「ぎょうぎのいいことばをつかってもらいたいんですね。」  
 十五1131 ㊦ おかあさんたちが悲しそうな顔をしているときでも、ほおずりをしてもらえば、  
 もらえる [貰] (下二) 6 もらえる 《—エ—エール》  
 一545 ㊦ そうして、たまがひろえたら、お月さんのくにのなかまにいられてもらえます。  
 一554 ㊦ きれいなたまがひろえたら、またお月さんのくにへいられてもらえます。  
 八721 ㊦ めまの水をのませてもらいたいとも思ったが、それもゆるしてもらえそうもなかった。  
 八826 ㊦ ものごとを教えてもらえる人たちのなまじりをしたんだもの。  
 十二715 先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、  
 十五784 はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。  
 もらす ↓ききもらす  
 もり [守] ↓おもり・こもり・わたしもり

もり [盛] ↓めもり  
 もり [森] (名) 29 もり 森 ↓うえのもり  
 三6310 みずうみを右へいけばもりへです。  
 三657 ㊦ だって、もりへでたいんだもの。  
 三682 雲は、もりの方へしずかにしずかにとんでいます。  
 三688 ㊦ もりの方。  
 三691 ㊦ 「もりの方。」  
 三695 ㊦ 「はじめにもりへいって、それからたきへでようね。」  
 六407 森や、小川や、いな田などの、きれいな、楽しかった思い出が、うかんではきていく。  
 六1043 ㊦ 森の木のきれいなこと。  
 六13710 長い森をくぐりました。  
 八583 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺の屋根や停車場が目についた。  
 八606 田や野原のまわりには、大きな森があり、森の中には深いみずうみがあった。  
 八606 森の中には深いみずうみがあった。  
 八838 森の木がこがね色や茶色になった。  
 九326 ㊦ ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、  
 九543 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木の方へ、新しい小さな道がついていました。  
 九552 まわりは、りっぱなオリーブ色のかやの木の森でかこまれていました。  
 九634 すずの音は、かやの森にガラランガララン、ガラランといひびき、  
 九1476 深い森のそばをどびました。  
 十三477 午前の森に、しかがすわっている。  
 十三492 みどりの森が、喜びの声でわらい、波だつ小川が、わらいながら走っていく。

十四755 森と畑とのさかいのようなどころですと、  
 十四756 畑のほうで、森よりも、日光のためによけいあたためられるので、  
 十四759 畑では空気がのぼり、森ではくだつていきます。  
 十四7510 畑の上からとんできて、森の上へかかる、と、  
 十五125 ㊦ ガラス戸の外は月あかし森の上に白雪長くたなびける見ゆ  
 十五131 ㊦ あさき夜の月影清み森をなすすぎのこぬれの高きひくき見ゆ  
 十五377 「木」を二つならべて「林」、三つ重ねて「森」が作られた。  
 十五797 美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、町や、家や森や、山をながめたり、  
 十五1031 ㊦ 『森の幸福』で、みどりの着物を着ています。  
 もり [鉅] (名) 1 もり  
 九852 ㊦ それには、こんな針や、もりなどがあります。  
 もりあがる [盛上] (五) 1 もりあがる 《—ツ》  
 九492 まわりの山は、(略)、きれいにもりあがって、まっさおな空の下にならんでいます。  
 もりたせんせい [森田先生] (人名) 1 森田先生  
 十五12210 石井先生の手品や、森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合奏など、  
 もりたてる [守立] (下二) 1 もりたてる 《—テ》  
 十二1153 このような歩みをたどってきた日本を、これからどうもりたてていけばいいでしょうか。  
 もる [盛] (五) 1 もる 《—ツ》  
 六2011 テーブルには、お茶が用意してあり、くだ

ものが、たくさんおさらにもってあります。

もれる 「漏」(下) 3 もれる 《一レ》ひこもれば

六〇八 8 はなのあなから息がもれないようにして、「ナ」、「ノ」、《略》といつてみた。

一二三 九 午後の日光は、げんかんをおおったすいかずらのしげみをもれて、

一五八 四 この赤絵製作の方法が他にももれないように、保護されていた。

もん 「門」(名) 12 門 ひこもん  
三二五 七 しかたがありませんから、はんたかは門のそとにのこりました。

三六九 九 あれは門のそとにいますので、

六八七 九 そのそばには、大きな木が立っています。

六八八 七 海のごてんの門のまえに、大きな木が立っている。

六九一 三 門の木の上に、りっぱな木がいらっしやいます。

一五二 八 よその家の門の中へ、はいっていきこうとします。

一五二 一 門からもどってきて、道にでたとき、あとをふり向きしました。

一二〇 八 仁王さまは寺の門に立って、ほとけさまをおまもりします。

一三三 九 ホートンに面した家々の門には、「れん」が書かれています。

一三三 五 正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。

一五六 四 門を出て十メートルとは行かないうちに、一五二 三 はじめてこの学校の門をくぐったときのこと、はつきりうかんできた。

もん 「物」(名) 5 もん

五五七 一〇 へんなもんだな。

九一〇 七 ぼくがあんまりじまん話をするもんだから

九一〇 一 じまん話をはじめると、自分がいちばんりっぱだと思ふもんだね。

一三三 一 電話番号が書いてあったもんだから

一三三 七 ぼくの学用品を、ぼくひとりであつたもんだから

九一〇 一〇 いいとも、だれがきみなんと遊ぶもんか

もんく 「文句」(名) 4 もんく 文句  
六九一 一〇 たいへんきれいなもんくをいいましたね。

九一〇 四 「それから、はがきのもんくですが、これからは、《略》と書いていいでしょうか。」

九一〇 一 それでは、もんくはいままでのとおりにしましう。

一三三 一〇 れんは、めでたい文句や、詩の一節であるが、みな、りっぱな文字で書かれています。

もんじ ひじゅうもんじ・まいちもんじ  
もんしろちよう 「課名」 2 もんしろちよう

七二 四 三 もんしろちよう……十六  
七二 一 三 もんしろちよう

もんしろちよう 「紋白蝶」(名) 1 もんしろちよう  
七二 二 もんしろちようのおたんじようね。

モンズーン (名) 1 モンズーン  
一四七 九 アジア大陸と太平洋との間におけると、

もんぜん 「門前」(名) 1 門前  
一五二 一 学校のいきかえりにその門前を通つても、

新島家の窓は、かたくとざされてあった。

もんだい 「問題」(名) 8 問題  
六八五 五 とにかく、命のことはむずかしい大きな問題だね。

一三三 八 これが、デンマルクの愛國者たちの心をくだいた、もつとも大きな問題でありました。

一三三 五 「自然は、このむずかしい問題を、かならず解決してくれるにちがいない。」

一三三 二 一 しかし、問題はまだのこっています。

一四四 五 さつきから問題になっている養分だつて、みんな私がわけてあげたのです。

一四四 四 熱さとつめたさとのむら、どうなるかということは、ただ、茶わんのときだけの問題ではなく、

一四四 一〇 そうなると、いろいろの実用上の問題とえんがつながってきます。

一五二 一〇 私たちは、この問題をもつとよく考えてみよう。

もんどろ 〇おしもんどろ  
もんどろらう 「翻筋打」(五) 1 もんどろらう

《一ツ》  
六三 五 かかし、一どははねあげられるが、もんどろらう、また、ひげの中におちる。

もんばん 「門番」(名) 3 門ばん  
一三三 三 ごてんのいり口まできますと、門ばんが

はんたかをみて、  
一三三 六 ナボリの大きな病院の門ばんのまえへ

いって、一通の手紙をみせ、父親をたずねました。

一六五 一 門ばんは、その手紙をひと目みてから、看護人と呼んで、

## や

や 〔矢〕(名) 6 矢 ヽゆみや

三112 8 けらいたちは、弓に 矢を つがえました。

六16 4 そのかりうどは、きゅうに歩くのをやめて、弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

六17 2 はとが下の方をみますと、かりうどが矢をつがえているではありませんか。

六82 9 〔会〕 にいさんはこの弓と矢を持っていらっしやい。

九24 8 日本に春がくると思うと、もう矢もたてもたまらず、北をさしてすすむのです。

十五5 5 〔文〕 遠くそののち かの木に、矢はまだおれで とどまりぬ。

や 〔夜〕 ヽじゅうごや・じゅうさんやさん

や 〔屋〕 ヽあかえや・あめやさん・いかけや・いしやさん・いとや・いとやさん・いわや・おけやさん・おもちゃやさん・かぐのいわや・かじや・かじやさん・くさや・ことりや・さかなやさん・さみしがりや・さわぎやども・しゃしんや・とけいや・とけいやさん・とこや・となりや・はなや・パンや・ほおじろや・まんじゅうや・むきみや・やおや・やおやさん・やすみぢや・わがや・わらや

や (係助) 4 や

四45 10 〔会〕 あとからなにか おつかけて きやしな

六84 5 〔会〕 小鳥一わとれやしな。

六131 3 〔会〕 ぼくはきつねに追われてなんかいやしな

や (並助) 305 や

九136 6 〔会〕 「いや、もう、おまえさんをたべやしな

いよ。」

一59 10 いぶつのおだんごや、おもちゃを、ごちそ

二14 7 あそびました。赤や 青や むらさきの

二14 7 びました。赤や 青や むらさきの たまが

二60 6 〔会〕 ら、このつくえや こしかけを、かわ

三19 6 して、その かたちや 色をよくしらべ

三28 10 は、たくさんの 米や、麦や、豆をつん

三28 10 くさんの 米や、麦や、豆をつんで、海

三33 6 〔会〕 ありました。青色や ちや色のくすりび

三33 8 〔会〕 いました。お米や 豆をいれた、みほ

三79 2 。すなで、トンネルや、いどや、家や、道

三79 2 、トンネルや、いどや、家や、道を こし

三79 2 ネルや、いどや、家や、道を こしらえて

三91 8 人の かいたてがみや はがきを、ここに

三94 7 できます。ピアノや ふくすけをおる

三95 2 できます。きつねや、だましぶねや、紙

三95 2 つねや、だましぶねや、紙ふうせんなども

三99 1 ころでも、紙は、字や えをはこんでく

三100 4 んはまいにち、のや 山へ竹をとりに

四5 1 。こうえんのせわや、どうろのそうじ

四5 8 んきよくです。手紙や 小づつみなどをお

四50 4 ほかの がんは、右や 左から かつちゃん

四82 7 色紙で おったつるや、ふうせんをさげ

四82 10 た 小さなつりがねや、十字かもさげま

四107 6 〔会〕 す。」うらしま「赤や き色で きれいだね

四113 3 と、うらしまは、父や 母のことを思い

五7 5 ながれていく。汽船や 荷船がとおる。下水

五7 6 がとおる。下水の水やうんがの水、きたな

五22 3 おあいて、おもちゃ、まっ白にこなふ

五24 7 〔会〕 たせ、不自由な人や、女や、子どもたち

五24 7 〔会〕 不自由な人や、女や、子どもたちをすわ

五32 7 やってきます。材木や、石炭や、お米を、

五32 7 ます。材木や、石炭や、お米を、たくさん

五33 4 荷物の中に、おり物や、お茶や、しんじゅ

五33 4 に、おり物や、お茶や、しんじゅなどがは

五34 2 す。ここで、きかいや、ひりょうなど、た

五34 2 ころにかけたかまやなべから、ゆげがふ

五36 2 。この石炭が、汽車や 汽船を走らせ、工場

五36 9 よう。みなれない木や、草や、動物がみえ

五36 9 みなれない木や、草や、動物がみえますね

五49 8 〔文〕 たし船、かふんやそよ風のせてでる。

五50 1 〔文〕 てでる。 子どもや 荷物のせてでる。

五56 1 、たくさん、子どもや 町の人々が、あつま

五63 11 〔文〕 略。」「あさが おやきゅうりは、自分ひ

五64 1 〔会〕 しは、おとうさんやおかあさんの力で、

五64 6 〔会〕 れば、おとうさんやおかあさんの力でも

五82 6 ま水をのまないことや、ねるまえにたべな

五82 6 まえにたべないことや、日のかんかんてる

五89 3 〔文〕 みれば、うりやなすびの花ざかり。

五107 6 、ハーモニカのまねや、さんちゃんの本を

六4 4 たが、いろいろな音や、みたこともないよ

六5 1 には小さなしんぼうや、は車や、ぜんまい

六5 1 なしんぼうや、は車や、ぜんまいなどがな

六5 2 ならんでいる。きりや、ねじまわしや、ピ

六5 3 きりや、ねじまわしや、ピンセットや、小

六5 3 わしや、ピンセットや、小さなつちや、さ

六5 4 ットや、小さなつちや、さまざまの道具も

六5 6 いる。まわりのかべや ガラス戸などには、

六6 2 じは、これらの道具や 時計をあこれとみ

六37 10 豆つぶほどの自動車や 電車が、ひっきりな

六40 7 わりに、村の子どもや、森や、小川や、い

六40 7 、村の子どもや、森や、小川や、いな田な

六四七 どもや、森や、小川や、いな田などの、き  
 六四三 ばめのむれ。三八山や、みずうみや、はた  
 六四三 三八山や、みずうみや、はたけの上をひと  
 六四六 会 す「おとうさんやおかあさんにもわか  
 六一二 一五いろはがたやことわざの中にも、  
 六六二 学校の子どものかずや、一ばん遠くから通  
 六六三 っている子どもの名や家の場所も書きまし  
 六七〇 もうまもそうだ。風や、自動車や、水車は  
 六七〇 うだ。風や、自動車や、水車は、動いてい  
 六八六 会 日山へいって、鳥やけものをとっていま  
 六八三 会 なんでも、「ナ」や「ノ」のつくことば  
 六八四 があったら、「ダ」や「ド」にいかえれ  
 六八七 会 た。たこが青空で右や左にゆれると、自分  
 六八七 会 と、それに、たこ糸やのりなどです。紙は  
 七二七 うに立ててある、竹や木のことをいうので  
 七二八 「きゅうりの手」や「豆の手」なども、  
 七二八 一つは、だいいせきや木材をけずっていつ  
 七二八 ぎでも、くもった日や雨降りの日は、きら  
 七二八 ぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました  
 七二八 会 、南はきゅうしゅうやそのさきの島々まで  
 八四六 か、自分から指さきやくちびるへとびあが  
 八六八 とえば、近所のねこやのらねこが通りかか  
 八八六 かけてきて、かかとや足の指をつついた  
 八八六 会 。ピオのゆうかんさや、りこうさや、ちゃ  
 八八六 会 かんさや、りこうさや、ちゃめぶりや、お  
 八八六 会 うさや、ちゃめぶりや、おかしさなどは、  
 八八六 会 のでも、こがねむしや、かぶとむしの子ど  
 八八六 会 もたちは、つみごえやこえ土の中に生みつ  
 八八六 会 まが夏だということや、よい天気がつづい  
 八八六 会 いらしいので、ねこや、すずめにみつけれ  
 八八六 会 のきよりは、二十分や三十分ではありませ  
 八八六 会 はありません。五日や二十日でもありませ

八三四 ありません。五ヶ月や八ヶ月でもありませ  
 八四〇 て、そこらの木の葉や花にみんな手をおふ  
 八五三 みると、足もとの森や林の中に、みえがく  
 八五三 会 がくれにお寺の屋根や停車場が目についた  
 八六六 きまわっていた。田や野原のまわりには、  
 八六六 会 足をつかうようすや、あのしせいといい  
 八七三 まいには、自分の兄や姉からまで、「略」  
 八七五 をにげていった。田や野原をこえて、どん  
 八七五 ばかりでなく、ねこやにわとりとはまった  
 八八三 会 おまえさん、ねこやおばあさんよりかし  
 八八三 会 の木の葉がこがね色や茶色になった。雲は  
 八八三 会 った。雲は、あられや雪で重くなつてひく  
 八八三 会 もがきて、水にパンや麦をなげてくれた。  
 八八三 会 、もらつてきたパンやおかしをなげてよこ  
 八八三 会 ころ、つばめが電線や物ほしざおに五六ば  
 八八三 会 くとぶ鳥です。汽車や自動車もかなわない  
 八八三 会 、ときには、あらしや、そのほかの思いが  
 八八三 会 たちまち、そのかたや、頭や、手にとまり  
 八八三 会 ち、そのかたや、頭や、手にとまりました  
 八八三 会 たほどでした。汽車や飛行機で送られた数  
 八八三 会 、いまでも、先生やみなさんのことを、  
 八八三 会 す。ぼくは、先生やみなさんといっしょ  
 八八三 会 のうえ、くまざさやいろいろな名も知ら  
 八八三 会 ルもある高いすぎやまつのはえていと  
 八八三 会 した。下では、兄や、母や、おばが、「へ  
 八八三 会 下では、兄や、母や、おばが、「略」。  
 八八三 会 。山には、つぐみや、ひわがきました。  
 八八三 会 どきました。母やおばがくわをいれる  
 八八三 会 この家にも、二本や三本はあります。ぼ  
 八八三 会 して遊びます。母やおばまで子どものよ  
 八八三 会 このにやあとした顔や、そのめんどうだと  
 八八三 会 をはなれました。木ややぶが、けむりのよ

九七六 めいめい、シャベルや移植どてなどを持つ  
 九七六 、リヤカーに、はこやかごなどをのせてお  
 九七六 きました。平らな畑やたんぼの向こうに、  
 九七六 略。」主人も、くわや、ふごや、かごなど  
 九七六 人も、くわや、ふごや、かごなどを持って  
 九七六 会 われたりした道具や、たべたけものの骨  
 九七六 会 たべたけものの骨や、角などを、ここへ  
 九七六 会 ことにしよう。貝や石ころは、どれか一  
 九七六 会 の中に、いのししやしかの角などに手を  
 九七六 会 れには、こんな針や、もりなどがあ  
 九七六 会 いるやまだのかばんやほうしをひろつてあ  
 九七六 会 っ、うまそうな水や名高いいど水をため  
 九七六 会 で感じられる。右岸や左岸では、その味が  
 九七六 会 のほし場。まえかけや、しきふや、ハンケ  
 九七六 会 まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、  
 九七六 会 たちは、さくがん機やつるはしを持つて、  
 九七六 会 くれば、その鳴き声や、とまりかたや、動  
 九七六 会 き声や、とまりかたや、動きかたや、羽の  
 九七六 会 りかたや、動きかたや、羽の色や、形など  
 九七六 会 動きかたや、羽の色や、形などを、こまか  
 九七六 会 れば、そののびかたや、花のさきかたや、  
 九七六 会 たや、花のさきかたや、実のなりかたなど  
 九七六 会 はなく、雪のようすや、星の世界なども、  
 九七六 会 思います。もし、弟や妹がけんかでもはじ  
 九七六 会 どうをみてやり、兄や姉の手助けとなりた  
 九七六 会 たいと思います。父や母のために、いつも  
 九七六 会 くいかなかった。村や町の者は、幸吉のむ  
 九七六 会 うどよい海水の温度や、海の深さのことも  
 九七六 会 、しおの流れの早さや、えさのよいわるい  
 九七六 会 て、オーストラリアや南洋の島々であるが  
 九七六 会 ました。そのけむりやほのおがおもしろい  
 九七六 会 人でも、おじいさんやおとうさんがおうた

十 63 3 ものですが、かぶきや、ほかのしほいとも  
 十 63 6 ときには、おしろいやべにでけしようにし  
 十 64 2 います。日本の絵画や、庭園や、建築にも  
 十 64 2 日本の絵画や、庭園や、建築にも、外国と  
 十 64 9 て、狂言は、ひにくや、あてこすりや、す  
 十 64 9 にくや、あてこすりや、すつばぬきや、ひ  
 十 64 9 すりや、すつばぬきや、ひやかしなどで、  
 十 19 10 わ川の大水で、田や畑をみんな流された  
 十 21 8 よりもよけいに土や砂を運ぶほどでした  
 十 28 3 ていたわずかの田や畑も、流されてしま  
 十 53 3 大きな声だが、雨や風の音のために、乗  
 十 56 5 轡 かげよ。花火やほたる、とんぼの  
 十 57 4 轡 る。はちみつやいちご、青うめ・  
 十 72 1 かれを告げたことや、家族の者が、その  
 十 72 1 をかけていたことや、手紙の着いたとき  
 十 78 2 を――母親のことや、妹たちのことや、  
 十 78 2 や、妹たちのことや、父親の帰りを待ち  
 十 80 5 べながら、飲み物やくすりを、少年の手  
 十 82 8 んでした。看護婦や、看護人や、助手が  
 十 82 8 看護婦や、看護人や、助手がかけよって  
 十 23 5 ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちと  
 十 23 10 して、さつまいもや野菜を作ったりして  
 十 31 10 そのなつかしい葉や、花の上を、私の指  
 十 33 12 つかっていることや、そんなものがこの  
 十 46 11 間には、顔の色やくらしがたがどんな  
 十 47 2 動かして、喜びや、悲しみや、傳説や  
 十 47 6 喜びや、悲しみや、傳説や、歴史や  
 十 47 6 悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞  
 十 47 6 、傳説や、歴史やを美しく舞台にあ  
 十 47 11 、人間の美しさやおもしろさが生まれ  
 十 48 4 間みたいに不平やわがままをいわない

十 50 11 てとめる。(6) 鼻や耳、ひたいやあごの  
 十 50 11 (6) 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞  
 十 53 11 て、つかう人の顔や頭がみえないように  
 十 54 5 した 1 つくえやいすを重ねて、つか  
 十 54 10 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家  
 十 54 10 やいたぎれで、木や家を作っておく。  
 十 55 4 る。なつかしい山や、おもむきのある川  
 十 56 1 れで、おじいさんやおばあさんからき  
 十 57 9 あらわれては、田や畑を荒らすので、村  
 十 61 8 この岩屋からぜんやわんなどの家具の  
 十 66 10 上に、みごとに草や木がしげつていく。  
 十 72 6 る船大工の子どもや、のりをとりでる  
 十 73 5 きて、子どもたちや、芭蕉の足もとに落  
 十 88 2 のまわりのようすや、ゆきがかりや、音  
 十 88 2 すや、ゆきがかりや、音声や身ぶりによ  
 十 88 3 きがかりや、音声や身ぶりによって、い  
 十 90 11 へいったこと、弟やいぬをつれていった  
 十 92 7 、おそらく、太郎や秋子と同じではなか  
 十 92 8 、めいめいの生活や経験が同じでないた  
 十 93 4 ら、ことばづかいやいいあらわしかたに  
 十 95 11 、読み手の思いでや心持にかかれて、  
 十 95 12 の人その人の生活や経験によって生かさ  
 十 96 4 がたのおとうさんや、おじいさんや、ひ  
 十 96 4 んや、おじいさんや、ひいおじいさんの  
 十 96 9 。なつかしいことや、楽しいことや、と  
 十 96 9 とや、楽しいことや、ときには悲しいこ  
 十 100 4 ます。形も、かめや、はちや、いろいろ  
 十 100 4 も、かめや、はちや、いろいろのものが  
 十 101 8 トルほどあり、男や女のいろいろなすが  
 十 101 8 しています。手首やむねなどには、まが  
 十 102 3 、このほか、うまや、いぬや、鳥などを  
 十 102 3 か、うまや、いぬや、鳥などをこしらえ

十 104 8 ますが、屋根の形や左右にのびたろうか  
 十 105 4 この人たちの着物やかぶりものなども、  
 十 106 11 土ひょうは、はぎやすきがさきみだれ  
 十 108 10 う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶり  
 十 108 10 きかたや、身ぶりや、手ぶりによって、  
 十 110 9 めったうえに、金や銀のこなをまいて、  
 十 110 10 す。また、なまりや貝などをはめこんだ  
 十 110 11 うるしの中に、銀や貝が光をはなってい  
 十 115 11 とき。新しい勇氣や空想をもって、春は  
 十 13 6 2 げる季節。ひばりやつばめも、やがて、  
 十 13 6 5 たんぽぽ、わらびや、ふきや、たけのこ  
 十 13 6 5 、わらびや、ふきや、たけのこや、ちょ  
 十 13 6 6 ふきや、たけのこや、ちょうや、はち、  
 十 13 6 7 けのこや、ちょうや、はち、へびや、と  
 十 13 6 7 うや、はち、へびや、とかげや、青がえ  
 十 13 6 7 、へびや、とかげや、青がえる。やがて  
 十 13 9 3 因と結果との関係や、その間に行われる  
 十 13 10 6 て、その人の性質や運命をきめたりして  
 十 13 11 11 ている。よいことやわるいこと、まっす  
 十 13 11 11 、まっすぐなことや曲がったことは、知  
 十 13 12 10 平らなもので、日や月が、東から西へま  
 十 13 13 8 見しました。火星や金星・木星などのよ  
 十 13 14 9 らいいろいろな発見や発明をしました。自  
 十 13 19 4 よく、國土の地質や地味を研究しました  
 十 13 27 2 上から、えんじゅや、やなぎや、ねむの  
 十 13 27 2 んじゅや、やなぎや、ねむのきの枝など  
 十 13 28 2 べつに、おもちゃや絵本などを持って遊  
 十 13 28 2 しかける赤いすや、せんめん器や、道  
 十 13 28 9 すや、せんめん器や、道具を入れた赤い  
 十 13 28 9 をとりまく。黄色や、赤や、白の糸たば  
 十 13 29 8 まく。黄色や、赤や、白の糸たばがくり  
 十 13 29 8 は、めでたい文句や、詩の一節であるが  
 十 34 10

十三 42 10 会 よ……おじさんやおばさんよろしく  
 十三 56 2 会 として、その着物やはだの色の美しいの  
 十三 61 1 会 れないが、深みやしんけんさは、どう  
 十四 9 1 会 かあさんの生活や、私たちの生活のこ  
 十四 19 1 会 「では、バケツやカーテンなどは、日  
 十四 26 5 会 に、また、チフスやトラホームは、ドイ  
 十四 32 12 会 みなさんは、地球や金星などのわく星が  
 十四 52 6 会 つきません。根や、つるや、葉のない  
 十四 52 6 会 ん。根や、つるや、葉のないかぼちゃ  
 十四 55 12 会 かりで、花さんや、葉さんや、根さん  
 十四 55 12 会 さんや、葉さんや、根さんのような、  
 十四 56 2 会 った地の中の水や養分でも、葉さんが  
 十四 56 6 会 のあたるところや、高いところがおす  
 十四 58 1 会 さつき、葉さんや根さんは、養分のこ  
 十四 61 11 会 「「略」と、日や、土や、水などがい  
 十四 61 11 会 」。と、日や、土や、水などがいいま  
 十四 63 2 会 ので、ちょうど雲やきりと同じようなも  
 十四 63 7 会 にじのような、赤や青の色がついていま  
 十四 67 4 会 湯げは、えんの下やかきねのすきまから  
 十四 67 10 会 よう。茶わんの上や、庭さきでおこるう  
 十四 69 12 会 ゆらした光った線や、うす暗い線が、不  
 十四 72 11 会 あたっているかべや屋根をすかして見る  
 十四 73 1 会 がたつのは、かべや屋根が熱せられると  
 十四 74 5 会 く、たとえば、湖や海の水が、冬になっ  
 十四 86 12 会 、ばんそうの音楽や、場面の組みあわせ  
 十五 20 10 会 どもたちは、両親や家庭教師につれられ  
 十五 34 4 会 わすのに、ことばや、身ぶりや、手まね  
 十五 34 4 会 ことばや、身ぶりや、手まねなどを用い  
 十五 34 5 会 その場にはない人や、遠くにいる人に知  
 十五 34 8 会 で、その結びかたや、なわの色や、なわ  
 十五 34 9 会 かたや、なわの色や、なわの太さなどに  
 十五 35 1 会 た。また、木の皮や、あさなわなどであ

十五 35 2 会 、色のちがった貝や、じゅずだまを結び  
 十五 35 3 会 れから、ぼうきれや、石や、貝がらなど  
 十五 35 3 会 、ぼうきれや、石や、貝がらなどに、は  
 十五 39 4 会 に便利なかたかなや、ひらがなを作りだ  
 十五 40 2 会 の有名な源氏物語や枕草子などは、すべ  
 十五 43 5 会 ざられてあるさらやちを、しげしげと  
 十五 45 4 会 のものの考えかたや商賣では、ふだんの  
 十五 48 12 会 。職人のちんぎんや材料のお金をはらう  
 十五 49 11 会 いて、作品を東京や箱根へ賣りだすこと  
 十五 56 1 会 十五 56 1 会 の中で、富士山や磐梯山のいただきを  
 十五 66 9 会 むかえた私は、母や多くの弟妹たちをあ  
 十五 79 6 会 おたずねして、町や、家や森や、山をな  
 十五 79 6 会 ねして、町や、家や森や、山をながめ  
 十五 79 7 会 て、町や、家や森や、山をながめたり、  
 十五 82 4 会 が、けだものの肉や、ふしぎなくだもの  
 十五 82 5 会 だものを、水がめや、ひっくりかえった  
 十五 82 8 会 ていて、びろうどや、にしきにくるまり  
 十五 101 11 会 るかってさ。戸や窓のやぶれるほど、  
 十五 122 9 会 てくださった校歌や、石井先生の手品や  
 十五 122 10 会 、石井先生の手品や、森田先生と西野先  
 や (終助) 14 会  
 四 64 2 会 どうでもいいや。  
 六 24 2 会 まあいよいよ、こないといきにあそぼな  
 いで、いつあそぼうというんだね。  
 六 133 9 会 「なにもいらないや。」  
 八 11 9 会 「ピオや、ピオちゃん。」  
 八 42 1 会 「おお、かわいいひめや。」  
 九 134 8 会 ちょうどいいや。  
 十二 17 3 会 あのだくろの色もかけてないや。  
 十五 96 3 会 でもいいや。  
 十五 96 3 会 あれだけ残ってればいいや。  
 十五 109 11 会 チルチルや、それから、ミチルや。

十五 109 11 会 チルチルや、それから、ミチルや。  
 十五 114 9 会 ぼく、うちへ帰りたいや。  
 十五 114 10 会 おかあさん、ここにいないなら、ぼくも  
 十五 115 3 会 ここにいたいや。  
 十五 115 3 会 チルチルや、おまえは、いまだけ天国  
 十五 115 3 会 に来ていると思っているけれど、  
 や (間助) 9 会  
 九 26 5 文 麦ふむやみだれし麦の夕日かげ  
 九 27 1 文 しがらしや子ぶたのはなもかわきけり  
 九 27 3 文 すみきったボールの音や秋の風  
 九 28 3 文 親のまたくぐる子うしや草の花  
 九 117 6 文 ふくじゅそうのはちをおきかうるおさ  
 な子やえんがわの上にくる日を追いて  
 九 118 2 文 ふくじゅそうのつぼみいとおしむおさ  
 な子や夜はいろりの火にあてており  
 十二 72 1 文 雪やこんこん、あられやこんこん。  
 十二 72 1 文 雪やこんこん、あられやこんこん。  
 十五 75 5 文 さい晩や火のご豊かの汽車けむり  
 や 1 会  
 四 77 9 会 山より高いものはなに。  
 やあ (感) 8 会  
 二 65 10 会 やあ、かすみがたなびいている。  
 三 4 3 会 やあ。  
 三 4 4 会 やあ。  
 五 78 1 会 やあ、きれいですね。  
 六 114 9 会 やあ、よくあがる。  
 九 106 10 会 「やあ、うさぎ、うさぎ。」  
 十二 73 7 会 「やあ、あられた、あられた。」  
 十五 94 9 会 やあ、なんてきれいなところだろう。  
 やえ 1 会 下なえやえ  
 やえこ (人名) 2 会 やえ子  
 十五 62 5 会 やえ子、満ぼうがまた、おくの手をだ



したよ、よわったなあ。

十五647 ㊦ やえ子、ぼくのステッキを持っておくれ。

やえざくら 「八重桜」(名) 1 やえざくら

226 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえざくらの花。

やおや 「八百屋」(名) 1 やお屋

十二105 10 くだものをならべたやお屋らしいのもあります。

やおやさん 「八百屋」(名) 1 やお屋さん

172 ㊦ 太郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。

やか 1 あざやか・おだやか・かるやか・さわやか・なごやか・にぎやか・こやか・はなやか・まめやか・ゆるやか

やがて 「驪」(副) 34 やがて

四479 一列になってとんでいきましたが、やがて、まつばのようなかたちになりました。

六78 ふたりはそこらを見まわしていたが、男の子は、やがてしごと台の上のものをあれこれといじりはじめた。

六711 女の子はただじっとみつめていたが、やがてこの小さなねじをみつけて、

六113 それをいじっていたが、やがて、ピンセットでねじをはさんで、きかいのあなにさしこみ、

六138 1 しかさんは、いつのまにかはぐれてしまいました。やがて、うさぎさんたちは、大きな岩のところになりました。

七521 のこったものがふんとうした。やがて、「略」と、ふえがひびいた。

八154 地面におりた虫たちは、やがて、思い思いにやわらかいところをさがして、地の中にかくれ

てしまいました。

八234 しばらくそのままのしせいで動きません。やがておきなおったかと思うと、からだはすっかり皮からはなれていました。

八251 ㊦ ㊦ やがて死ぬけしきはみえずせみの声と、むかしの人がうたっています。

八253 死ぬことなど考えられないほどにぎやかに鳴きたてたせみも、やがて、秋になると、みんな死んでしまつて、

八282 馬車はふたたび走りだして、草原をよこぎっていつてしまいました。やがて、大きな天の川にさしかかりました。

九169 やがて、九月のなかばをすぎると、つばめは、そろそろ日本をさつていき、

九951 受けとりにくい氣持でいるが、やがて思いきつて、たかぎのそばにより、だまつたままそれをとりあげる。

九1095 急停止すると、ぱつと雪けむりが立ち、あせばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。やがて、

十人、二十人、つぎつぎにすべりはじめた。

九1211 水は、さらさらと走つて、やがて、すぐ下のすこし大きな川に流れこんでいた。

十342 いまのようなぬのの織りかたをしていたのでは、やがて、困るときがくるにちがいない。

十一1511 教室の高いところの窓ガラスが、一まいこわれていて、やがて、小鳥たちは、そこから遠い空へにげていった。

十一2912 三年めには、二十ぴょうの米をとることができました。やがて、金次郎は、親類の家から

でて、もとの自分の家に帰り、一家をふたたびおこすことができました。

十一303 いろいろのことを身につけて、やがて、

村をすくい、多くの人からうやまわれるようになりました。

十一814 ドアのとくに足音がきこえて、やがて、「略」という声がきこえました。

十一8512 父親は、じつと少年をみつめていたが、やがてまた、病人の方をみました。

十一903 医者は、病人の上にしばらくのあいだうつむいていましたが、やがてからだをまつすぐに立てました。

十二763 やがていろいろには、パチパチとしばがもえあがります。

十三62 ひばりやつばめも、やがて、遠い國からここに帰つて来て、

十三69 へびや、とかげや、青がえる。やがて、かれらもせいぞろいして、かげろうのたいまつをたいて、おしよせて来る。

十三522 おとなになつて、いまもそうだ。やがて老いても、そのように。

十四501 おじょうさんの歌をたよりに、マッケンナがおよいで行つたように、やがて、一そうの

ボートが、やみをぬつて助けにきてくれました。

十四8710 第二の人が歩いて行く。やがて第三の人

も通り、

十五178 ㊦ ㊦ わが祖國、やがて立つべし。

十五492 このしごとはやめなかった。やがて、思いどおりのものを作ることのできる日がきた。

十五729 ピッツバーグの町を走り出た自動車は、やがてこう外のすばらしい家のげんかんに横づけ

になった。

十五732 しきりにさがしものをしておられたが、やがてすがたをあらわした博士の手には、〈略〉、なつかしい数々の写真があった。

十五73 9 家の中はがらんとしていた。やがてお昼  
どきになったので、廣い食堂にみちびかれ、  
十五119 6 ふたりは長いあいだきあいます。やが  
てはなれて顔をあげますと、ふたりの目にはなみ  
だが光っていました。

やかましーい「喧」(形) 4 やかましい「ーイ」

五108 10 製材所ができて、のこぎりのやかましい音  
が、あさからばんまでひびきました。

九65 9 ㊦ やかましい、ここをなんと心える。

九66 11 ㊦ だまれ、やかましい。

九67 8 ㊦ やかましい。

やかん「葉缶」(名) 1 やかん

三36 8 ㊦ 大きなろに、大きな やかんが かかっ  
ています。

やき ↓いまえもんやき・おにわやき・すみやきこ  
や・すやき・まるやき

やぎ「山羊」(名) 8 やぎ ↓めやぎ

二27 1 ㊦ 二ひきの やぎが、そのはしの まん  
中であいました。

二27 6 ㊦ 一ひきの やぎがいました。

二27 10 ㊦ べつの やぎがいました。

二28 2 ㊦ やぎと やぎと、せまい はしの 上  
で、  
つのおしあっていました。

二28 2 ㊦ やぎと やぎと、

七8 9 やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をな  
がめている。

九56 2 みえない方の目は、白くびくびくうごき、  
足もひどく曲がってやぎのようですし、

十一49 5 やぎもかいます。

やぎこや「山羊小屋」(名) 2 やぎ小屋

七4 3 中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、  
ぼうつとあらわれる。

十一49 6 やぎ小屋のまわりには、おかあさんのお  
すきなライラックを植えましょう。

やきす・てる「焼捨」(下) 1 やきすてる「ーテ  
ヨ」

三117 4 ㊦ 「その山の上で、ふしのくすりと手  
紙をやきすてよ。」

やきつく「焼付」(五) 1 やきつく「ーイ」

十五65 6 思い出は、いまでも私の胸にやきついてい  
る。

やきとり「焼鳥」(名) 1 やき鳥

十四93 8 ㊦ 「あれはやき鳥だろうか。」

やきもの「焼物」(名) 9 焼物

十五44 3 ㊦ 古い焼物そっくりですね。

十五44 9 ㊦ 「たいへん焼物がおすきようですが、  
あなたは――」

十五46 5 いままで見たこともないみごとな焼物で  
あったからである。

十五47 6 有田に焼物がはじめられたのは、いまか  
ら三百三十年ばかりまえのことである。

十五47 9 自分の家でつかう食器とか、おくりもの  
にする焼物とかを作らせていたが、

十五48 7 ひとりでこの焼物を作ることは、むずか  
しいことであった。

十五50 2 ㊦ この焼物をやめれば、日本から美しい  
ものが一つ消えてしまうことになります。

十五50 11 プリンクリーは、日本の美しい焼物にひ  
きつけられていろいろな焼物を集めた。

十五50 12 いろいろな焼物を集めた。

やく「役」(名) 11 役 ↓おやく

六6 3 あれはなんの役にたつのだろう、これは  
《略》のだらうなどと考えているうちに、

六6 9 ㊦ 世の中の役にたつのに、どれもこれも不

足はなさそうである。

六6 11 ㊦ ただ自分だけがこのように小さくて、な  
んの役にもたちそうにない。

六9 5 ㊦ 「それでは、自分のようなものでも、役  
にたつことがあるのかしら。」

六12 9 ㊦ 自分もほんとうに役にたっているのだ。

九39 2 ㊦ 高い木をみつけると、兄かぼくのぼる  
役をひきうけました。

十63 7 おしろいやべにでけしようにして、その役  
らしく顔をこしらえあげるのですが、

十一21 5 金次郎は、《略》、働きつけているので、  
役にたたないことはありませんでした。

十二68 1 いつもやすりをかけて右と左によじって  
おかないと、なんの役にもたない。

十二69 4 しかし、いつも勉強してみがきをかけて  
いないと、じき、役にたたなくなる。

十四12 3 ㊦ それに、ランプは、かさなしでもりっ  
ぱに役にたちます。

やく「薬」(名) 1 やく

八102 9 やくは、白くてにおいもなく目だちません。

やく「焼」(五) 10 やく 焼く「ーイ・カ・  
ク」

三117 7 ふしのくすりを やいたけむりが、山の  
上から《略》たちのぼっていました。

七14 4 「そんなに、手をやかせるな。」

十一47 9 うちではバターもつくったし、こむぎこ  
で、おいしい、やわらかいパンもやいた。

十一47 10 おかあさんがパンをやくそばで、ぼくは、  
いつも本を読んでいた。

十二62 11 八郎はその魚をとってやいてたべた。

十四97 1 やいた鳥が――それこそほんとうのまる  
やきの鳥が、ほかほかとあたたかいきをたてて、

十四974 そのやいた鳥は、肉を切るナイフとホークとをせなかに立てたまま、  
 十五471 ときどき焼いては、この店に持って来ますが、なにぶん作るのにてまのかかるもので。  
 十五486 いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、  
 十五489 赤絵の技術をどうかして残したいと考え、自分でまず、焼くしごからはじめた。  
 やくさんじゅうねん 「約三十年」(名) 1 やく三十年  
 八356 今夜のはたおり星の光は、やく三十年ほどまえに発した光だというわけになります。  
 やくさんてんろくデシリットル (名) 1 やく3・6 dl  
 八945 やく3・6 dlのものを、水の中にひたしました。  
 やくしゃ 「役者」(名) 2 役者  
 十632 役者が美しい舞を舞ったり、さまざまなしぐさをしたりするのですが、  
 十635 ふつうのしはいでは、役者がおじいさんになったり、むすめになったり、  
 やくじゅうにへいほうメートル (名) 2 やく12平方m  
 八995 やく12平方mに150かぶばかり植えました。  
 八1096 やく12平方mの土地で、41のげん米がとれました。  
 やくじゅうまんば 「約十万羽」(名) 1 約十万は九191 約十万ばのつばめが、きゅうに落ちてきたことがあります。  
 やくしょ ↓しやくしよ  
 やくせんこひやくつぶ 「約千五百粒」(名) 1 やく

15000つぶ  
 八1068 ですから、1つぶの種もみから、やく1500つぶもみができたわけです。  
 やくそく 「約束」(名) 3 やくそく 約そく  
 六2311 せっかくですが、わたしたちはみんな、はたらくやくそくをしているのです。  
 六242 是たらくやくそくだって。  
 十二5812 おには約そくをまもって、そののちはもう田畑を荒らすようなことはなくなつた。  
 やくだつ 「役立」(五) 1 役だつ 《一ツ》  
 十五421 発音のこまかなところまで書き表わすことができて、標準語の教育に役だつ。  
 やくにひやくまんにん 「約二百万人」(名) 1 約二百万人  
 十三1012 日本には、毎年、約二百万人の人が生まれるが、  
 やくば ↓まちやくば  
 やくはちふんにじゅうびよう 「約八分二十秒」(名) 1 やく八分二十秒  
 八346 光が、地球にとどくまでには、やく八分二十秒ばかりかかることになります。  
 やくはちまんきゅうせんば 「約八万九千羽」(名) 1 約八万九千ば  
 九231 この合計は、約八万九千ばです。  
 やくめ 「役目」(名) 1 役目  
 六69 ひとかどの役目をつとめて、世の中の役にたつのに、どれもこれも不足はなさそうである。  
 やくよんキロ (名) 1 約四キロ  
 十二593 鳥取の西方約四キロのところに、まわり十二キロの湖がある。  
 やぐるま 「矢車」(名) 1 矢車  
 十一332 かきのわか葉に日の照るころは、矢車

からからこいのぼり、村のわら屋の庭に立つ。  
 やくわり 「役割」(名) 1 役わり  
 十378 日本の新しい出発にあたって、この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであらう。  
 やけ ↓ゆうやけ・ゆうやけぐも・ゆうやけこやけ  
 やけど 「火傷」(名) 1 やけど  
 十五1137 おまけに、いつかランプをつけるときやけどをしたあとであるよ。  
 やける 「焼」(下) 3 やける 焼ける 《一ケ・ケル》  
 四692 「竹やぶやけた。」  
 十三417 それに、うちはやけなかったから、本だってたくさんある。  
 十五4810 白く焼けるはずのものが黒くなったり、黄色くなったりして、失敗に失敗を重ねていった。  
 やさい 「野菜」(名) 2 やさい 野菜  
 二172 きしやしやしんや やさい いなご ごま  
 十二2310 荒地を三アールばかりかいこんして、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、  
 やさし 「優」(形) 1 やさし 《一シク》  
 十五175 花そだてつつあきなくて、つづれ着るとも、失うな、やさしく清きなが心。  
 やさしい 「易」(形) 2 やさしい 《一イ》  
 十一597 『はい』『いいえ』やさしいことばではありませんか。  
 十一598 「やさしいようだが、なかなかいいにくいことばだよ。」  
 やさしい 「優」(形) 10 やさしい 《一イ・ク》  
 ↓おやさしさ  
 一467 おんなの人がやさしくいいました。  
 一608 まきげちゃんも、おともだちとなかの

いい、やさしい になりました。

568 「略。」とやさしくいつて、はなしてやりました。

9143 いままた、ばらの花のやさしいことをきくこともできた。

11710 かなしい思いにしみながら、やさしい父親のことをいろいろと思い返していました。

11729 看護婦はやさしくいきました。

11883 手をさすったり、やさしく話しかけたり、しっかりするようにとはげましたりしました。

118812 また、やさしい色がその目にうかぶこともありましたが、

12102 このやさしいのびのびした顔をごらんなさい。

141002 おばあさんは、いつものように、やさしく、しんせつなようすをしていた。

やしき 「屋敷」(名) 2 やしき

9433 ぼくたちのかりてゐるやしきのまわりにも、大きなかきの木が三本あります。

12238 やしきがすこし廣いし、

やしなう 「養」(五) 4 やしなう 養う 《一イ・ウ・ツ・ワ》

11182 流れやまぬ愛のしみずに、うるおされ、やしなわれて、のびていく命のわが葉。

12663 おおづなのようなたくましい根が、深くのびてみさをささえ、廣くのびて枝をやしな

うにたる地力さえ、のこしていませんでした。

15604 新島のおじさんが、やまいを札幌のこう外に養っていたのは、

やしり 「鏝」(名) 1 矢じり

9854 石で作ったもの、それには石の矢じり、

おもりなどいろいろあります。

やすい 「安」(形) 1 安い 《一イ》

15469 ねだんのあまりに安いにおどろいた。

やすい 「易」 ①うけやすい・うたいやすい・おやすい・さめやすい・たやすい・ねっしやうい

やすみ 「休」(名) 3 休み ①おひるやすみ・おやすみ・なつやすみ・ひとやすみ・ひとやすみする

11131 休みもなく、はてしもなく、ゆるやかにうつ波の聲は、

11355 庭にかがやくひまわりの花、あぶらぜみの声さわがしく、晝の休みもあせがでる。

15915 わたしたちは、すこしの休みもなく、飲む、たべる、ねむる、

やすみぢや 「休茶屋」(名) 2 休み茶屋

1017 橋のたもとで休み茶屋へは、おとうさんもよくいつてこしかけました。

1111 おとうさんが、休み茶屋のまえにこしかけて、コーヒーをわかつてもらっていますと、

やすむ 「休」(五) 14 やすむ 休む 《一マ・ミ・ム・モ・モン》 ①おやすみくださる・おやすみなさる

2396 ⑥ すこし 休もうか。

2398 ⑥ ええ、休みましょう。

4258 ⑥ でも、雨がふると、どこかで 休んでいると思います。

4306 ⑥ にしださんは、きょうもびようきで休んでいます。

4892 ⑥ 「さあ、やすもうよ。」と親すずめ。

4894 ⑥ 「やすみしょう。」と、子すずめが、

5814 きょうは五人も休みました。

5821 ⑥ どうして、きょうはこんなに休んだので

しょう。

5978 さんちゃんのおうちのまつの木にとまったり、かえでの枝で休んだりしていききました。

6656 はたらくときはよこになり、休むときは立つものはなかに。

6135 五ひきのうさぎさんたちは、ここでゆっくり休むことにしました。

8729 あひるの子は、このあしの中で、横になって休みたいと思った。

11216 ほかの人たちは休んだりむだ話をしてゐるのに、金次郎は、すこしも休まず働くので、

11217 金次郎は、すこしも休まず働くので、やすめる 「休」(下) 1 休める 《一メル》

11794 心を休めるような希望と、胸をこおらせるような失望とのあいだで、

やすやす 「易易」(副) 2 やすやす

8466 ほんとうに幸福な人は、やすやすとみつかるものではありません。

1399 理論と実際とは、そうやすやすと、ひとつになるものではなかった。

やすらか 「安」(形状) 1 安らか

14912 子どものことを思って、安らかに生きていくのだと、思いたいです。

やすり 「鏝」(名) 1 やすり

12679 のこぎりは、いつもやすりをかけて右と左によじっておかないと、

やすせおとろえる 「瘦衰」(下) 1 やせおとろえる 《一エ》

13204 切りとるばかりで手入れをおこたつたために、土地は、年を追ってやせおとろえ、

やすこける 「瘦」(下) 1 やせこける 《一ケ》

11671 目を右に左に向けて、青ざめた、やすこ

けた顔をしている病人たちをみまわしました。

やつ「奴」(名) 3 やつ

九69 4 園 てんてんてんてんてんてん、頭のつぶれたよう  
なやつが、いちばんえらいのだ。

十32 9 園 はたばかりいじっていて、おかしなやつ  
だ。

十五105 2 園 「このらんぼうなやつ、いったいなん  
だい。」

やつ「八」(名) 5 やつつ 八つ ↓ななつやつ  
つ

一11 3 園 ななつ、やつつ、このつ、とお、  
一11 7 園 ななつ、やつつ、このつ、とお、

十一14 いずれも、八つばかりの子どもたちでした。  
十二49 9 古新聞を二まいとも八つに切つて、その

うち一まいだけを正方形にする。  
十五20 6 ひとり男の子で八つ、ひとりは女の子

で四つになるかわいい子どもたちでした。  
やつで「八手」(名) 1 やつで

十一112 プラタナスの葉の大きいのは、やつでほど  
もありました。

やつてくる「来」(カ変) 48 やつてくる やつ  
て来る「キークル・コ」

三74 1 園 「これ、どこからやつてきたの。」  
三75 2 園 「お日さまの光は お日さまから やつ

てきたのね。」  
四55 2 島には かりうどは きません、大きな

へびが やつてくる ことがあります。  
五32 6 おや、むこうからも長い、長い貨物列車が

やつてきます。  
五67 8 あくる日、おじいさんは海へやつてきまし

た。  
五69 1 おじいさんは海へやつてきました。

五70 6 おじいさんは、また海へやつてきました。

五72 11 おじいさんは、とぼとぼと海へやつてきま  
した。

五75 9 おじいさんは、口ごたえもできず、力のな  
い足どりで、海へやつてきました。

五103 1 かえでの木につるしておくと、いろいろな  
鳥がやつてきます。

五104 7 どこからか、しじゅうからがやつてきて、  
「略。」と、いい声で鳴いて、

五105 3 しじゅうからは、あくる日もやつてきまし  
た。

五105 4 そのつぎの日もやつてきました。  
五105 11 秋になると、また、わたり鳥がやつてきま

した。  
六93 3 園 それで、いまここへやつてきたところで

す。  
六121 9 そこへ、おさるさんがやつてきました。

七5 10 つぎからつぎへと、子どもたちがやつてく  
る。

七9 9 園 毎年、新しく入学した子どもたちが、わ  
たしのそばへやつてきた。

七75 7 そこへ、ひとりの旅人がやつてくる。  
八14 8 暑い夏がやつてくると、たまごは、はじめ

てかえりました。  
八18 8 親たちの大てきのすずめもねこもやつてこ

ないから、安全です。  
八70 6 「略。」といって、顔をまっかにして

やつてきた。  
八72 3 こうして、大きなぬまのあるところへやつ

てきた。  
八73 2 すると、そこへ二わのがんがやつてきた。

八76 9 くれがたになつて、あひるの子は、ある小

さなひやくしよの小屋へやつてきた。

八84 1 草むらから、大きなりっぱな鳥の一むれが  
やつてきた。

九62 1 園 ありのようにやつてくる。

九109 9 にここをわらいながらおりてくるもの、ま  
じめな顔でやつてくるものなどさまざまである。

十一27 6 たいこをたたいて、家から家へやつてき  
ます。

十二12 2 リビングストーンがちよつとそとにでかけ  
たるすにやつてきて、その書物を手にとりました。

十三28 10 せんめん器や、道具を入れた赤いはこを、  
てんびんぼうでかついでやつて来る。

十三29 5 でんでんだいこのような、ブリキのつづ  
みを鳴らしてやつて来る。

十三30 8 その中で、いちばんさわがしくて、大き  
な音をたててやつて来るのは、さるまわしである。

十三31 11 鳴りものをつかわないで、呼び声でやつ  
て来る者もある。

十三32 3 春は、なえ賣りがやつて来る。

十三32 4 夏は、きんぎよ賣りがやつて来る。  
十三32 7 アイスクリーム賣りがやつて来る。

十三32 9 秋には、なつめ賣りがやつて来る。  
十三32 9 ぶどう賣りもやつて来る。

十三59 12 園 見物の人が、かわりばんこにやつて来  
て、あいているときがなかったよ。

十五31 4 大わしは、《略》、ぱつと一まず舞いたち  
ましたが、まだこりないでやつて来ました。

十五45 9 プリンクリーが、《略》を教えるために  
やつて来たのも、そのころのことであった。

十五57 2 園 ところがある日のこと、せんばいの教  
授がやつて来て、  
十五85 11 大きなおなかを両手にかかえて、たいぎ

そうに、子どもたちの方へやって来ました。  
 十五958 かわいらしい幸福たちがやって来た。  
 十五967 小さな子がやって来た。  
 十五1044 まもなくやって来る明かるい『大きな喜び』の兄弟ぶんのようなものですからね。  
 十五1057 天使のようなすがたをした者が、きらきら光る着物を着て、そろそろとやって来ます。

やとと (副) 30 やとと

一505 やとときがついたの。

三263 長いあいだかかって、やとと切りたおすことができました。

四534 やとと高い山のみねをこえました。

五139 やととついた。

五194 二日めのあさ、やとと汽車からおろされ、  
 五583 まだみていたいようでしたが、やとと目をはなして、ばんをごろうさんにゆずりました。

五995 水をふきかけたり、くすりをつけてやとりしますと、やとと生き返りました。

六84 やととつまんだと思うと、すぐにおとししました。

六361 大すぎの上にやとととまったかし。

六568 手わけをして、やととつぎのようなものができるようになりました。

六119 やととできたので、

六119/1 「やととできましたよ。」

六142 やととしずかな廣い野原にでました。

八762 しばらくして、やととひっそりした。

八974 ひたさない種もみからも、やととめがでてきました。

九352 ぼくたちの畑がようやくいかんされて、

三日めにやとと、うねを十三本つくりました。

九396 足もとの枝をおろして、やととおりてく

ると、からだじゅうがあせです。  
 九6511 どんぐりどもはやととしずまりました。  
 九7111 しばらくひげをひねったまま下を向いていました。やととあきらめていいました。  
 十365 そこでやとと、思いどおりの機械ができた。

十4312 やとと眞円眞珠ができたよ。

十524 やとと歩きはじめました。

十一522 やとと一台の電車がとまった。

十一618 父にきびしくただされて、太郎は、やとときょうのことを、ありのままにうちあげた。

十一704 息をつくのもやととのようでした。

十一845 「略。」とだけ、やとといいました。

十三321 やとと目がさめたころ、(略)その声を聞くのは、ゆめの中の声のように思われる。

十四6012 ああ、やとと思いだした。

十五9412 私たちはやとと、物の眞実を見ることができるとだよ。

十五1082 金色の雲の中に、つま先で立って、

やとと見えるくらいのところにいる人、だれなの。

やとと (副) 21 やとと

一469 おじいさんが、やととばかりながいみみをふりふり、わたくしをよびました。

一578 やととばかりおみみなおらないのね。

一623 どなたが おもちになっても、たまは

やととばかりたまでです。

二306 やととばかり十一ぴきしかいません。

二311 やととばかり十一ぴきしかいません。

二314 けれども、やととばかり一ぴきたりません。

三106 「略。」といって、かぐやひめは

やととばかりきませんでした。

六552 「やととばかり雲が走っているんだね。」

六847 にいさんもやととばかりえものがなかったんですか。  
 七57 やととばかりあの男の子だった。  
 九601 やととばかりやまねこの耳は立ってとがつているな、と思いがらみていると、  
 九754 やととばかり、(略)いいといえよよかったと、

いちろうはときどき思うのです。

十一85 だがね、やととばかり、いちばんだいじで、

むずかしいのは、コックスだろ。

十二204 「やととばかり容易じゃないですね。」

十二464 「影絵ってやととばかり人形のしびい

か。」

十三564 これでも、本物にくらべたら、やととばかり、月と太陽みたいにちがうといってもいいな。

十三585 「じゃあ、やととばかり、おじさんみたいに、旅行して来なくちゃだめですね。」

十四554 だから、私は、やととばかりそのかぼちゃは、私のものだと思います。

十四589 この大きなかぼちゃは、ずいぶんかた

いようですが、やととばかり、この大部分は水です。

十四989 けれども、やととばかり、そのたくさんのろ

うそくはもえ続けていて、

十五1015 あなたは、やととばかり、なんにも知らないのですね。

やとと (副) 1 やとと

九122 舟をやととてこぎのぼりながら、ところどころでその水でお茶をたてる。

やととた (題名) 2 矢と歌

十五23 矢と歌

十五42 矢と歌

やどり 1 あまやどり

やどる (宿) (五) 2 やどる 《一ツ

十44 11 はたして、眞円眞珠がやどっていた。  
十五60 6 恩師クラーク博士の精神のやどっている  
札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、  
やなぎ「柳」(名) 4 やなぎ

三57 2 園 うたをわすれたカナリやは、やなぎの  
むちでぶちましょか。

十一32 5 園 岸のやなぎのほわたがとんで、麦のは  
しりほかがよく上を、

十三27 2 土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、  
ねむのきの枝などが、ずっとのびだしている。

十三36 5 やなぎのわたが、どこからともなくたく  
さん舞ってくる。

やね「屋根」(名) 25 やね 屋根 ↓おやね・かわ  
らやね・わらやね

三35 4 園 やねのところで、すずめがないてい  
ます。

三52 8 園 いなかのやねのペンペンぐさは、  
「略。」といました。

三111 10 やねの上まで、人でいっぱいになりま  
した。

四23 1 手 やねも、かべも、はしらもかきました。  
四106 10 園 むこうに光ったやねが、みえるでしょ  
う。

六37 3 とがった屋根にひっかかっているかかし。  
六38 5 園 おかあさん、なんでしょう。あの屋根に  
とまっているのは。

六38 8 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、ま  
た、もどってきてかかしの近くにとまる。

六42 8 つばめのむれ、屋根の上にひとかたまりに  
なる。

六51 2 屋根も、木の葉も、石ころも、みんなきれ  
いに光っていました。

六100 5 どこかの屋根が、めがねのたまいっぱいに  
ひろがって、

六100 10 それは、ここから百メートルもはなれてい  
る、向こうの家の屋根であつた。

六102 8 屋根だ。

七5 6 こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこ  
えて、うすべに色の空にきえた。

八58 4 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺  
の屋根や停車場が目についた。

九116 4 園 屋根の雪かきおとしる少年の顔の明  
かるさ日のでる中に

十二23 5 ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちと  
いっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、

十二104 5 屋根のかざりにほうおうがついているか  
らだといわれていますが、

十二104 7 屋根の形や左右にのびたろうかのかっこ  
うにも、

十四72 11 かべや屋根をすかして見ると、ちらちら  
したものが見えることがあります。

十四73 1 かべや屋根が熱せられると、  
十五12 3 園 ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブ  
リキの屋根に月うつる見ゆ

十五13 5 園 照る月の位置かわりけん鳥かごの屋  
根にうつりし影なくなりぬ

十五46 1 ひくい屋根も、あけはなした店も、のき  
先にかかっているおもしろいかんばんも、

十五102 1 園 かべをたたき落し、屋根をもちあげる  
ほどの喜びをこしらえているのですよ。

やねうら「屋根裏」(名) 2 屋根うら

十四90 7 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出  
たときは、上ぐつを足にひっかけていた。

十四92 6 思いきって、その屋根うらの家へ帰るこ

ともできなかった。

やのね「矢根」(名) 1 矢の根  
十二99 3 石の矢の根があります。

やは(係助) 1 やは

十五5 3 園 いかに目ざとき 人とても、声の行  
くえの 見えんやは。

やはり「矢張」(副) 23 やはり  
三12 3 やはりかしこくなりません。

三72 3 やはりゆかにのこっています。  
四5 4 もし、人がなくなったときには、やはり  
ここにとどけます。

四31 4 かずこさんも、やはり、「みんな」に知ら  
せたいといつて、

五38 4 そのかたは、ほっかいどうで、やはり先生  
をしていらっしゃるのです。

六76 6 この手が動かないから、やはり雪だるまは  
命がないのかなと思いました。

八30 11 けんぎゅうは、やはりふえに心をうばわれ  
ていました。

八46 11 けらいたちは、足をぼうにしてさがしまわ  
りましたが、やはりみあたりませんでした。

九14 4 ゆめからさめるときには、音などはけし  
てするものではないが、やはりたいこをたたたく。

九24 4 いろいろな方法でこのことをしらべてみま  
すと、やはりそうであることがわかりました。

九141 1 あたりには、やはりばらの花のにおいがし  
ていました。

十15 3 フランスだって、きれいなところもあり、  
きたないところもあり、日本も、やはりそのとお  
りですから。

十51 8 やはり、いぬは、ふり向かないので、  
十一86 6 園 やはり外国から帰ったばかりで、

十一 86 12 病人は、やはりじつと少年の方をみていました。

十二 76 1 会 友だちがほしくなるのはやはりこんな晩だ。

十二 84 4 第一回は七―五で清水選手が勝ち、第二回めもやはり清水選手の勝となりました。

十二 92 10 書かれたことがそれぞれがってくるのも、やはりこのためである。

十三 16 6 会 「やはり地球はまわる。」と信じて、死ぬまで眞理を求めていたのです。

十四 50 2 ポートが、やみをぬって助けにきてくれました。やはり、その美しい声を手がかりにして。

十五 97 12 会 ここだって、どこだって、やはり、お金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

十五 98 11 会 やはり時間がおしいのだよ。

十五 117 12 会 幸福なんですけれど、やはり、私たちの影以上のものは見えないのです。

やはん 「夜半」(名) 1 夜半

九 21 8 その夜半には、また一台の貨物自動車が、五千ばのつばめをつんできました。

やぶ 「藪」(名) 5 やぶ じこやぶ・たけやぶ

四 62 4 しずかな やぶの ところで、はばたきの音がきこえます。

六 130 9 うさぎさんたちは、そのまま向こうのやぶの方へいってしまいました。

六 135 8 ささの中、やぶの中をとんでいきます。

九 73 11 木ややぶが、けむりのようにぐらぐらゆれました。

十一 32 2 園 しとしとと降る春雨に、やぶのたけのこすくすくのびて、

やぶうぐいす 「藪鶯」(名) 1 やぶうぐいす

五 46 3 やぶうぐいす

やぶからぼう 「藪樵」(形状) 1 やぶからぼう

十五 57 4 会 その一つに日本の青年をとまらせて、そのせわをしてはくれまいかと、やぶからぼうの話を持ちだした。

やぶる 「破」(五) 1 やぶる 《―ツ》

五 91 5 みると、ざしきのまん中のたたみをやぶって、のびているたけのこがありました。

やぶれる 「破」(下) 4 やぶれる 《―レ・―ル》

九 129 10 ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもは、やぶれたところをつくろいかけた。

九 133 10 あみは、すっかりやぶれて、くもはそのまま地面に落ちました。

十四 73 9 それが、ちょうどさけめのようにたて横にやぶれて、そこだけがとう明に見えます。

十五 101 11 会 戸や窓のやぶれるほど、いっぱい『幸福』でつまっているじゃないの。

やぶれる 「敗」(下) 4 敗れる 《―レ》

十三 117 9 ドイツオーストリア二國との戦いに敗れ、

十三 118 5 戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣はしずみ、その活動はおとろえました。

十三 18 6 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れない國民こそ、眞にすぐれた國民でしょう。

十三 18 6 精神的に敗れない國民こそ、

やま 「山」(名) 11 やま 山 じうらやま・おくやま・かみやま・こやま・つみねやま・のやま・ふじのやま・もとやま

一 40 2 山の つつじが さいた。

一 62 8 山の うえから、おおきな お月さんがでるところでした。

二 20 7 ほしよる ゆめ 山川 かな ふね

二 37 5 会 学校から かえる とき、くにざかいの

山に、ゆきがふっているのをみつけました。

二 37 8 園 山から 小ぞうがとんできた。

二 38 7 とろろ 山の 中

二 39 2 たろうと おとうさんが、山へ のぼって きます。

三 4 5 会 山。

三 4 6 会 山、山。

三 4 6 会 山、山。

三 4 9 会 山の 山びこ。

三 5 2 会 あかるい 山。

三 5 3 会 山の あの色。

三 54 7 園 山が あれた、海が あれた、かぜであれた。

三 56 3 園 カナリヤ うたを わすれた カナリヤは、うしろの 山に すてましょか。

三 96 2 にわの 花も、空の 雲も、とおい 山も、ちかい 家も、かく ことが できます。

三 100 4 おじいさんは まいにち、のや 山へ 竹をとりに きました。

三 100 7 おじいさんが、だれよりも はやく 山に いった。

三 116 5 会 天に いちばん ちかい 山は どこか。

三 116 8 会 するがにある 山が いちばん みやこにも ちかく、天にも ちかい そうです。

三 117 3 会 「その 山の上で、ふしの くすりと 手紙を やきすてよ。」

三 117 7 くすりを やいた けむりが、山の上から いつまでも いつまでも たちのぼっていました。

三 117 9 それで、この 山の名を、「ふじの 山」という ようになりました。

四 23 6 手 その ときは、山へ くりひろい いきましようね。



四28 山に いって、くりひろいをする ことかな。

四47 山はたけをこえ、のはらをすぎると、高い山のそばにきました。

四48 その山のふもとには、大きな木がしげっているの、そこをよけてとびました。

四48 山の上を高くとびこえて、たににさしかかったとき、

四53 目のまえに、高い、高い山がそびえていました。

四53 なかまは、この山のむこうにあるみずうみのところへいこうと話していました。

四54 やつと高い山のみねをこえました。

四76 た——高い山、ひくいたに

四77 や——山より高いものはなに。

四86 山は大雪、日はくれる。

五43 山に雨が降る、きりがおきる、

五47 山から川のかんぼが生まれる。

五48 山のとっぺんのすぐちかいところ、小さいたにまに、小さいいずみ、

五51 小さいたにまに、小さいながれ山から川のかんぼが生まれる。

五56 川は山からかけおきる。

五510 いわの上からとびおいて、さかなとジャブジャブはしゃいで、川は山からかけおきる。

五171 そこは私たちの山です。

五361 ほりだされた石炭が、山のようにつまれています。

五393 山のとっぺんには、まだ雪がのこっています。

五395 山の木がではじめました。

五892 高い山からたにそこみれば、うりやな

すびの花ざかり。

五896 うらの山から海べをみれば、波にうかんださどが島。

五937 むこうの山から、大きな月がのぼってくるころでした。

五942 さんちゃん、友だちと、山へわらびをとりにいきました。

五988 あした山へつれていって、はなそうと思っているのです。

五1004 山へはなしてやりたかったんだけど。

六341 山のかげにかくれて、ここからはみえないよ。

六394 あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだ、ど、ぼく、もう帰れないんだ。

六433 山や、みずうみや、はたけの上をひとかたまりになってとぶつばめのむれ。

六448 目をさましたときには、おびみtainなものが向こうの山の方へとんでいったんだよ。

六475 やまが、草屋ののきまでたれて、かきはずなり、夕がらす。

六674 お友だちと遊ぼうと思って、山の谷を歩いていきました。

六806 私は毎日山へいって、鳥やけものをとっていますね。

六817 そのかわり、にいさんは山へいらっしやって。

六826 わたしは山へいこう。

六1234 「このくるみを持っていって、山のとっぺんでたべよう。」

六1323 決勝点は、あの山のとっぺんにしよう。

六1333 「あの山のとっぺんさ。」

六1334 あの山のとっぺんか。

六135 しかさんは、のっそりと立って、山の方をみあげました。

六142 山を、いくつも、いくつもこえました。

六1428 谷川にそって、山のふもとにでてきました。

八241 朝日が山の上にのぼって、

八581 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけしきが目のまえにひらけてくる。

八593 すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。

八595 あの山にのぼったら、もっと大きなけしきみえるだろう。

八596 山の上には、青い空がすきとおるようにすんでいる。

九811 「山」「けむり」「絵はがき」「港」

九322 おとなといっしょに畑にでたり、山へたきをとりにいったりするので、

九325 ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、

九3211 秋晴れのすみきった空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中にうつって、

九361 たきぎをとりにいく山は、ぼくの家からは十五分ほど登るのですが、

九367 たきぎをせおって山からおるとき、

九369 山へ登るほそ道の両がわに、

九373 ぼくははじめ、山へたきぎをとりにいくのが、すきではありませんでした。

九382 かれ枝ならば、だれの山の木の枝でも、おってよいことになっています。

九408 はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。

九413 秋になって、ぼくは山へいくのが楽しみになりました。

九四六(三) 山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつかるからです。

九四二(三) 山には、つぐみや、ひわがきました。

九四一(一) まわりの山は、みんな、たつたいまできたばかりのように、きれいにありあがって、

九二七(四) 南なら、あつちの山の中だ。

九七六(一) みるまに、貝がらの山が家のまえにできま

す。

九四四(一) ぼくたち四十人は、のだ先生といしい先生

につれられて、山のスキー場へいった。

九四七(四) ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤き

かにいてすぎの山しずか

九四二(一) 私は父につれられて、近くの高い山に登つ

た。

二二五 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえ

ざくらの花。

二四二 みるまに、トロツコにつまれる石炭の山。

二五九(一) ごはんをたべてから、山の方へいって、た

くさん取ってきた。

二四九 長いかだを組んで、材木を遠くの山か

ら運んでくるのもみえる。

二二四(三) ひとりぐらい育てるお金は、わたしが

山へいって木を切ってきたもうけますよ。

二二五 遠い山へいって、しばをかったり木を

切ったりして、村の人に買ってもらいました。

二二六(一) まきをとり山へいく、そのいき帰りに、

いつもその本を手からはなさず、

二二八(三) きんもくせい、〈略〉、ちれば山にはま

つたけが、かおりも高くはえてくる。

二四一(四) 山のもみじ葉みなちりはてて、青くし

げるはまつ・すぎ・ひのき。

二四三(三) さとはしぐれがしとしと降るに、ふも

との小屋はみぞれして、うらの山には白雪つもる。

二四六(一) あの山のすがたが、小さいころのことを、

いろいろと思ひださせる。

二五五(一) なつかしい山や、おもむきのある川など

があるためばかりではない。

二五七(一) 秋田縣の男鹿半島に、神山、本山という

二つの山がある。

二六〇(一) もうあとわずかというところで、日はは

や西の山に傾いて、くれそうになってきた。

二六二(一) ある日のこと、八郎が山でしごとをして

いると、のどがかわいてきた。

二九〇(一) 天氣のよかったこと、山へいったこと、

弟やいぬをつれていったこと、

二四八(一) 山の湖水のほとり、「ます」小屋のラン

プが、きゆうに暗くなりました。

二四四(一) 山もはつきり見えてきた。

二五八(一) ちりもつもれば山となる。

二五八(二) みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山ふか

く

二五二(一) 月が出る山の家にうしをつないだ木

二五九(一) 山々のうち、もつとも高い山の一つに、

ユングフラウという美しい山があります。

二五九(一) 美しい山があります。

二五九(一) その中で、一だんと高くそびえているの

が、このユングフラウの山です。

二六二(一) このヨーロッパの高い山の中の生活は、

見るもの聞くものがごとくめずらしく、

二六二(一) けわしい山が、むらさきがかつた大空の

下に、わらうようにそびえているのでした。

二六二(一) 山の上の方に、また下の方にちらばって

いるひつじのむれを追いでもするように、

二六三(一) ユングフラウのまっ白な山までも、〈略〉

勇ましい少年をほめたたえているようでした。

二五八(一) 「山」を「やま」、

二五八(一) 山のいただきに立った私は、〈略〉駿

河湾の海岸線をながめ、

二五九(一) あなたがたのお國を親しくおたずねして、

町や、家や森や、山をながめたり、

やまい「病」(名) 1 やまい

二六〇(一) 新島のおじさんが、やまいを札幌のこう

外に養っていたのは、明治二十年の夏であった。

やまいち「山姥」(名) 1 山いちご

九三六(一) まっかな、かわいらしい山いちごの実が、

こぼれたように雑草の中にありました。

やまし「山師」(名) 1 やまし

二四八(一) かれを氣ちがいとよび、やましとさえいの

しるようになった。

やまだ「話手」 23 やまだ

九八八(一) やまだ「いやだいい。」

九八八(一) やまだ「はなしてくれつたら、

九八八(一) やまだ「じょうぎだらう。」

九八八(一) やまだ「なんだ。」

九八八(一) やまだ「落したんじやない。

九八八(一) やまだ「首、いたいのか。」

九八八(一) やまだ「つかなくたって、いいよ。」

九八八(一) やまだ「なにかいいこだ。」

九八八(一) やまだ「ぼくだって、

九八八(一) やまだ「でも、きみはひどいよ。

九八八(一) やまだ「そりゃあ——」

九八八(一) やまだ「そりゃそうさ。」

九八八(一) やまだ「よし、じゃあ、

九八八(一) やまだ「ぼくもそうさ。」

九八八(一) やまだ「かんにんするかい。」

九八八(一) やまだ「ぼくもわるかったよ。」

九一〇 七 やまだ「つまらないことさ。」  
 九一〇 二 やまだ「友だちにまで心配させて——」  
 九一〇 五 やまだ「けんかの話をするのかい。」  
 九一〇 七 やまだ「そう、してもいいね。」  
 九一〇 九 やまだ「首は——」  
 九一〇 一 一 やまだ たかぎの首をのぞきながら、「でも、みてあげよう。」  
 九一〇 二 やまだ「いこう。」  
 やまだ「人名」22 やまだ  
 九一〇 五 人 たかぎ・やまだ  
 九一〇 八 たかぎとやまだが左右にひきわけられたところである。  
 九一〇 五 たかぎには友だちの一、二、三、やまだには四、五、六、  
 九一〇 四 やまだをかこんでいる友だちに、「略。」  
 九一〇 七 やまだの手をひっぱって、「略。」  
 九一〇 九 やまだ ひっぱられながら、「略。」  
 九一〇 一 一 やまだのせなかをおしながらさる。  
 九一〇 二 そのほかの友だちが、落ちていっているやまだのかばんやぼうしをひろってあとにつづく。  
 九一〇 二 やまだ、さがし物のようすで地面をみながらでてる。  
 九一〇 一 一 そこへやまだが帰ってくる。  
 九一〇 八 やまだ、はなれたまま、たかぎの手もとをみている。  
 九一〇 四 やまだ わざとたかぎの顔をみないようにして、「略。」  
 九一〇 六 たかぎ、ちよつとやまだの方をみるが、  
 九一〇 一〇 やまだ、おこつていきかけるが、思いなおして、さつきすてたじょうぎをひろってくる。  
 九一〇 一 一 やまだ たかぎのまえにじょうぎをつきだして、「略。」

九一〇 三 やまだの顔をみると、きゆうにまたつんと  
 なつて、だまつてそれを取り、かばんにいれる。  
 九一〇 五 そのあいだに、やまだがいきかける。  
 九一〇 二 やまだ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする。  
 九一〇 五 やまだ、みせまいとしてからだをねじってかくす。  
 九一〇 九 やまだ ちよつとたかぎをみて、  
 九一〇 四 たかぎ、うしろの木をひとまわりして、そつとやまだに近づく。  
 九一〇 六 やまだ、思わずわらいだす。  
 やまだくん「人名」4 やまだくん  
 九一〇 八 さあ、やまだくん、これでひきわけだ。  
 九一〇 七 ね、やまだくん。  
 九一〇 六 「さあ、きみたち、やまだくんをつれていけよ。」  
 九一〇 七 「いこうよ、やまだくん。」  
 やまとえ「題名」1 大和絵  
 九一〇 一 一 大和絵  
 やまとえ「大和絵」(名) 1 大和絵  
 九一〇 一 一 これは、(略)町の風景で、大和絵でやわらかにかきあらわされています。  
 やまねこ「山猫」(名) 36 やまねこ じどんぐりとやまねこ  
 九一〇 七 やまねこ 拝  
 九一〇 五 やまねこのにやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のようすなどを考えて、  
 九一〇 七 やまねこがここを通らなかつたかい。  
 九一〇 九 「やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方へとんでいきましたよ。」  
 九一〇 二 やまねこがここを通らなかつたかい。  
 九一〇 四 「やまねこなら、さつき馬車で、西の方

へとんでいきましたよ。」  
 九一〇 一 一 やまねこがここを通らなかつたかい。  
 九一〇 三 「やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方へとんでいきました。」  
 九一〇 三 やまねこがここを通らなかつたかい。  
 九一〇 六 「やまねこなら、けさまだくらくらいうちに、馬車で、南の方へとんでいきましたよ。」  
 九一〇 六 「あなたはやまねこを知りませんか。」  
 九一〇 一 一 ふり返つてみますと、そこに、やまねこが、(略)立っていました。  
 九一〇 一 一 やつぱりやまねこの耳は立つてとがっているな、と思ひながらみていると、  
 九一〇 三 やまねこは、ひげをぴんとひっぱって、腹をつきだしていいました。  
 九一〇 六 「(略)。」やまねこは、大いそぎでぎょしゃにいいつけました。  
 九一〇 九 大きなかまとりだして、ザックザックとやまねこのまえのところの草をかりました。  
 九一〇 六 やまねこは、もう、いつか黒い、長いしゅすの服を着て、  
 九一〇 一 一 やまねこがすこし心配そうに、それでもむりにいばつていいますと、  
 九一〇 八 そこで、やまねこがさげびました。  
 九一〇 一 一 やまねこはぴんとひげをひねつていいました。  
 た。  
 九一〇 一 一 やまねこがさげびました。  
 九一〇 二 やまねこが、ひげをひねつていいました。  
 九一〇 七 やまねこがさげびました。  
 九一〇 一〇 やまねこがいちろうにそつと申しました。  
 九一〇 七 やまねこは、なるほどというようにうなずいて、それから、いかにも氣どつたようすで、  
 九一〇 七 そこで、やまねこは、黒いしゅすの服をぬ

一  
40  
1  
十七  
山の  
つつじ

九409(手) 下の方の山道を、しよいこをつけたおと

や・む 〔止〕 (五) 7 やむ 《一・マ・一・ミ・一・ム・一・ン》

↓ながれやむ・ふりやむ

- 二14 2 あめが やんで、にじが できました。
- 四70 2 ボンボンどけいと とく。こころは、ふりが やむと、なりもとまる。
- 五46 7 たちどまると、鳴き声が やんだ。
- 十三16 3 やむを得ず自分の説はあやまりであったという ことにして、ゆるしてもらいました。
- 十三24 8 夏、しもがおりののはまったくやみ、十三34 5 ほのぼのとゆれ動くかげ絵は、子どもの心をひきつけてやまない。
- 十四87 4 ふぶきの やんだあとの、雪の野原の表情をあつかっても、おもしろいと思う。
- やめ 「止」(名) 1 やめ
- 十五59 11 窓 きょうは、もうこれでしごとはやめだ。
- や・める 「止」(下) 17 やめる 《一メー・メレ》
- 二21 5 窓 しまいまで みていたいとおもいましたが、かねが なったので、やめて きました。
- 二50 1 けれども、それを やめて、しばらく かんがえます。
- 二51 4 きゅうに おどりを やめて、しずかになります。
- 三108 2 窓 では、つれていくのは やめよう。
- 四39 9 窓 さくらの 枝を おろうとしたとき、おじさんの ことばに 気が ついて やめました。
- 六16 4 そのかりうどは、きゅうに 歩くのを やめて、弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。
- 六51 6 三人は遊ぶのを やめて、空をみあげました。
- 七42 4 しかし、青年は、ひく手を やめないで、いっしんにひきつづけていた。
- 九71 7 窓 それは、やめたほうがいいでしょう。
- 九80 11 窓 あっちこちほってみて、なんにもみつからないと、だめだと思って やめてしまおう。
- 九12 10 つれの人は、この茶人ほど熱心ではないか

- ら、やめて帰ろうといった。
- 十二15 10 文雄は、それをとりのけるのを やめて、また下がきにかかった。
- 十二35 5 先生は失望して、一時やめていらっしやいましたが、
- 十三31 6 さるは、とちゅうできよんとんとして やめてしまったり、とんでもないべつのことを演じたりする。
- 十四17 7 窓 きょうはこれでお話を やめます。
- 十五49 2 やりかけたこのしごとは やめなかつた。
- 十五50 2 窓 この焼物を やめれば、日本から美しいものが一つ消えてしまう ことになります。
- やよいしきどき 「弥生式土器」(名) 2 やよい式土器
- 十二100 8 じょうもん式土器のほかに、やよい式土器というのがあります。
- 十二101 1 東京の やよい町から発見されたので、やよい式土器という名まえがつけられています。
- やよいちよう 「弥生町」(地名) 1 やよい町
- 十二100 12 この式の土器は、はじめ、東京の やよい町から発見されたので、
- やら (副助) 3 やら
- 四135 1 窓 一つの まにやら 天人は、春の かすみにつつまれて。
- 六4 6 ごたごたと耳にはいり、目にはいるばかりで、なにがなにやら、さっぱりわからなかつた。
- 十一35 9 窓 たきと落ちくる大ゆうだちに、いまの暑さはどこへやら。
- やら (並助) 9 やら
- 六98 6 窓 めでた、めでたとさかなたち、みんな であうやら、うたうやら。
- 六98 6 窓 みんな であうやら、うたうやら。

- 八11 10 みんなあわてて、口々によんで、元氣づけるやら、くすりをのませるやら、
- 八11 11 くすりをのませるやら、あたためるやら――あらゆる手あてをつくりましたが、
- 八11 11 くすりをのませるやら、あたためるやら
- 十一40 7 窓 ほしたかぼちゃは赤やら黄やら、にわとりどもはひなたぼこ。
- 十一40 7 窓 ほしたかぼちゃは赤やら黄やら、きみに見せなければならぬものがたくさんある。
- 十五59 9 窓 裏の写真やら、当時の日記やら、きみ 裏の写真やら、当時の日記やら、
- 十五59 9 窓 裏の写真やら、当時の日記やら、きみ 裏の写真やら、当時の日記やら、
- やりか・ける 「遣掛」(下) 1 やりかける 《ケ》
- 十五49 1 それでも、やりかけたこのしごとは やめなかつた。
- やりかた 「遣方」(名) 6 やりかた
- 七67 5 人の顔をちようこくするのに、二つの やりかたがあります。
- 七67 9 ねんどでだんだん肉づけをし、しだいに、その人の顔に せていく やりかたです。
- 七68 2 けずっていつて、だんだん、その人の顔に せていく やりかたであります。
- 七68 3 まえの やりかたは、ちようど、文章をくわしく書きたすの に ています。
- 七68 4 あとの やりかたは、文章をきりつめていく のと同じです。
- 七68 6 やりかたはいろいろですが、ねらいどころは一つです。
- やりなおし (題名) 2 やりなおし
- 十一3 2 やりなおし
- 十一43 2 やりなおし
- やりなおし 「遣直」(名) 2 やりなおし

416 かれは、新しく母員を求めてきて、やりなおしにかかった。

1589 4 会 みんなえん会のやりなおしをするところです。

やりなおす 「遺直」(五) 1 やりなおす 《—シ》  
1146 3 まちがったとき、思いきってやりなおした、その勇気を頼もしく思いました。

やる 「遣」(五) 147 やる 《—ッ—ラ—リ—ル—

—レ—ロ》いれやる・おいやる・おやる

1110 会 もう一どやりましょう。

244 5 会 よろしい、ではやりましますよ。

245 6 会 「おじさん、こんどは、わたくしがやって みましようか。」

245 8 会 「ほう、なにをやるかな。」

254 8 会 おかさんは、三人のあたまを、しずかになでて やります。

260 7 会 このつくえやこしかけを、かわいがって やりましようね。

261 3 会 みんなでかんがえて、やりましよう。

311 6 会 はんたかをりっぱな人にして やりたいと、おおもいになりました。

311 8 会 そこで、まいにち かしこい でしをひとりずつ、はんたかのところへ やって、

364 9 会 はじめに 右か 左か どちらかへ やらなければ。

392 3 会 かみきれを いったり する 小さな 子がいたら、とめて やりましよう。

3106 6 会 もし、かぐやひめを ごてんに つれてきたら、おまえにくらいを さずけて やろう。

432 6 手 その生徒さんは、すぐひもで げたのはなおを 上げて やりました。

449 10 会 かつちゃんが、いまの てっぽうで やられ

たということが わかりました。

454 5 会 これを うけとった 一わが、きず口を ていねいに あらって やりました。

455 1 会 みんなが かわるがわる、つめたい 水で、

あたまを ひやして やりました。

499 8 会 うらしまは、おかねを 子どもたちの 手に、それぞれ わたして やります。

517 11 会 とんでもないところに やられるかと思つて、びくびくしているところだよ。

530 8 会 きみは、ときどき、こういうことをやるのかね。

530 10 会 まえからも、やりたいたと思つて いました が、なかなか できなかったのです。

531 2 会 これからも、いつも やりたいと思ひます。

541 2 手 けさも、まきばにだして やりました。

553 4 会 手をたたいて やりますと、まさこも、まるくふとった手をたたきました。

561 5 会 わたしが水をやったんですもの。

563 1 会 こやしをやったり、手をやったりしたじゃありませんか。

563 1 会 こやしをやったり、手をやったりしたじゃありませんか。

563 3 会 せわはして やりました。

566 8 会 「へ略。」とやさしくいつて、はなして やりました。

567 2 会 そうして、青い海へはなして やったよ。

575 5 会 あのひろい海で、金のさかなをけらいにして やりたい。

591 9 会 それで、手おけの水をかけて やると、たけのこがよろこんで、のびるわ、のびるわ。

592 2 会 ゆかいなをはがして、たたみのまん中に あなをあけて やったら、それ、このとおり、

595 5 会 たまごのきみですりえをこしらえて、たべさせて やりました。

595 9 会 おとうさん、ひとりだとべるようになるまで、かって やりましようね。

596 9 会 かごからだして、にがして やりましようか。

599 5 会 さんちゃんたちが水をふきかけたり、くすりをつけて やったりしますと、

5100 4 会 いつまでもかわいがってやるよ。

5100 4 会 山へはなして やりたかったんだけど。

614 10 会 はとは、いそいで木の葉をとって、ありのそばにおとして やりました。

622 10 会 ここでいっしょに音楽会をやるうじやないか。

679 3 会 どんどん やっているでしよう。

679 8 会 息と同じように、あなたがねむっているときでも、どんどん やっていますよ。

6106 6 会 そこで、ぼくもひとつまねをして やろうと思つた。

6110 8 会 よし、あしたはうまく やって、みんなをわらわせて みせるぞと思つたが、

6113 9 会 弟のまねをして みんなをわらわせて やろう などという 氣持は、

6113 11 会 新しく 思いついたことを みんなに話して、びっくりさせて やろうと 考えたからである。

6122 6 会 うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、ぼんぼんとおさるさんになげて やりました。

6129 11 会 きみたちが、ここでわいわい やっている は、すぐぼくが、きつねにみつかつて しまふから、

6132 1 会 「よし、やろう。」

6137 6 会 角でついてやる。

6141 10 会 「やるものか。」

七123 「あさがおに手をやりましょう。」  
 七139 「この手でやってみよう。」  
 七221 子ずめにやるのさ。  
 七241 ぼくは、びんの中をそうじして、砂に水をやるから。  
 七243 兄は、しくびんの中の砂に水をやる。  
 七2910 ぼくは、学校から帰ると、だいこんのはっぱを、とりかえてやるのが楽しんだ。  
 七331 ここからだして、庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょうね。  
 七489 ぼくも、せんしゅになつて、いっしょうけんめいにやった。  
 七4810 はじめに、ひがし村の学校とやった。  
 七498 さいごに、町の学校とやることになった。  
 七509 「しっかりとやれ。」と、元気づけてくださった。  
 七525 むちゅうでやっていると、「略。」と鳴った。  
 七529 第二回めは、にし村の学校とやることになった。  
 七534 みんな元気でやるんだ。  
 七538 「しっかりとやれ。」  
 七615 まよったせみが、かきの木につきあたって、バタバタやって、にげていった。  
 七868 草をやったら、3びきとも、せつせとたべました。  
 七873 きょうは、れんげそうとなたねの葉をやりました。  
 七882 にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白が、けんかをしてたべました。  
 七885 はこべとおおほこをやったら、にんじんをやったときのよう、喜んでたべました。

七885 にんじんをやったときのよう、  
 七888 うさは、新しい草をいれてやると、それほどばかりたべて、  
 七914 なるべく、こくるいをするようにして、ぬれた草はやらぬように注意しています。  
 七914 ぬれた草はやらぬように  
 七917 私が麦をやったら、白いうさは、(略)、黒いうさぎの上に乗って、たべました。  
 七952 寒くなったので、むしろで戸をこしらえてやりました。  
 八711 「(略)」とほめたり、なでてやったり、「(略)」と、きいてみたりするのです。  
 八92 ときたまそとのろじへだしてやっても、すぐまいもどつてきます。  
 八128 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばきの木の根もとにうめてやりました。  
 八1210 「ピオのはか」と書いた、小さなせきを立ててやりました。  
 八291 むすめのために、りっぱなむこをさがしてやる。  
 八327 「では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやる。」  
 八451 「わたしの病氣をなおしてくれたものには、國の半分をわけてやる。」  
 八574 よし、あれを目じるしにしてやってみよう。  
 八619 みどりは目のためにいいから、親あひるはみただけみさせてやった。  
 八641 どんなにしても思ひきつてはいるようにしてやるのができなかった。  
 八645 そんなものはほっておいて、ほかの子どもに、およぐことを教えてやるがいいよ。  
 八656 なにしろ、水にいれてやらなければなら

まい。  
 八1012 ずっと日でりがつづいたので、水をやるとうれしそうです。  
 九3811 母たちもぼくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけてやる方法を知らなかったの、  
 九456 ぼくは、おとうさんのやっていたパン屋のしごとを、しんけんにやろうと思っています。  
 九457 しんけんにやろうと思っています。  
 九5110 たくさんの白いきのが、ドッテコドッテコと、へんな樂隊をやっていました。  
 九771 いまでもこうやって、人は貝をたべています。  
 九809 手あたりしだいにやって、ぐあいよくなにかをほりあてたらしいが、  
 九827 いっしょうけんめいやってみよう。  
 九892 まだやるのか。  
 九893 やるとも。  
 九898 はなしてくれつたら、ぼくはやるよ。  
 九899 ぼくだってやるよ。  
 九989 じょうぎひろってやったじゃないか。  
 九9810 ぼくだって、すみをみつめてやったじゃないか。  
 九1001 よし、じゃあ、あいこになるように、もう一つなぐってやる。  
 十84 そのなにかまいりをして、なわをまわしてやったこともありました。  
 十117 おとうさんが、子どものすきそうなおかしを、一ふくろやったのがはじまりで、  
 十308 家では、弟たちのめんどろをみてやり、兄や姉の手助けになりたいと思います。  
 十335 ほかのことを考えないで、みっちりしごとをやってくれ。

十二  
15  
8  
会  
そのままにしておいてやろう。

十四 806 なん回もなん回も、あるいは、なん代も

わらかにかきあらわされています。



やわらかい〔柔〕(形) 8 やわらかい《—イ—

ーク》

七977 そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。

八155 地面においた虫たちは、やがて、思い思いにやわらかいところをさがして、

八225 すると、中から、みずみずしい、やわらかい、せみのからだはみだしてきました。

十一479 うちではバターもつくつたし、こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。

十二685 小さなやわらかい物を切るのこぎりのは、小さくてうすい。

十二8512 清水選手は、ボールをやわらかくして、《略》、送ってやったのであります。

十四1055 ほかのおがゆれたりしないとか、光をずっとやわらかくするために小さなかさがあると

か  
十四1235 成さは、光をへいきんさせ、もつとやわらかくするためなのです。

やわらかし〔柔〕(形) 1 やわらかし《—キ》

十五184文 読みたちのそのやわらかきたなごころもて。

やわらかなボール〔題名〕 1 やわらかなボール

十二821 やわらかなボール

やわらぐ〔和〕(五) 1 やわらぐ《—イ》

ゆ

ゆ〔油〕 ↓きはつゆ

ゆ〔湯〕(名) 24 湯 ↓おゆ・ちゃんゆ

九1215 茶のうまさば、お茶そのもののうまさにもよるが、たてる湯のうまさがいちいちである。

十二8710 ふろ場の中で湯をかきまわしている父に、こういわれたら、

十四623 中には、熱い湯がいっぱいはいつております。

十四627 ただ一ぱいのこの湯でも、《略》のすきな人には、なかなかおもしろい見ものです。

十四6210 第一に、湯の表面からは、白い湯げがたっています。

十四6411 茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。

十四651 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、

十四653 反対に、湯がぬるいと、いきおいがよいわけです。

十四654 湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろいろ自分でためしてみると、おもしろいでしょう。

十四6811 茶わんの湯と、《略》とは、よほどよくにたものと思つてさしつかえありません。

十四693 だから、どれもこれもみんな、茶わんの湯にくらべるのはむりですが、

十四697 湯げのお話はこのくらいにして、こんどは、湯のほうを見ることにしましょう。

十四699 白い茶わんにはいつてゐる湯は、《略》、べつにかわつたようすはなにもありませんが、

十四709 湯の表面の茶わんのまわりから、熱がにげるためだと思つていいのです。

十四711 そうなると、茶わんに接したところでは、湯は、ひえて重くなり、

の動くのを見ていても、いくらわかるはずで

十四719 しかし、茶わんの湯を、ふたをしないで、おいたばあいには、湯は表面からもひえます。

十四7110 湯は表面からもひえます。

十四723 湯の表面には、水のおりてるところと、のぼつてるところとがほうぼうにできます。

十四724 湯の、中までも熱いところと、わりあいにぬるいところが、いろいろに入りみだれて

十四735 熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかして見ると、

十四737 湯のおもてに、にじの色のついた、きりのようなものがひと皮かぶさつており、

十四741 湯がひえるときにできる、熱さをつめたさとのむらだが、どうなるかということは、

十四7611 茶わんの湯のお話は、すればまだいくらでもあります。

ゆ 1 ゆ

四793 ゆ—ゆうべみたゆめ。

ゆう ↓あさゆう

ゆうあい〔友愛〕(名) 1 友愛

十五808 友愛の精神が、もつともつとひろがつていきますように。

ゆうあかり〔夕明〕(名) 1 夕明かり

六482 ませたくびだす子うまの顔に、かきはすずなり、夕明かり。

ゆうがお〔夕顔〕(名) 1 ゆうがおが二216 先生、ゆうがおがこんなに大きくなりまし

ゆうかせ〔夕風〕(名) 1 夕風

十一366 夕風ふけたいこ鳴り、清い歌声あちこちと、こよい楽しいばんおどり。

ゆうがた〔夕方〕(名) 11 ゆうがた 夕がた

四一六 3 ゆうがた、水くみにでた。  
 四二四 6 ㊦ きのうの ゆうがた、〈略〉と、あのい  
 けのそばまでさんぼしてきました。  
 四八六 2 ゆうがた、まつの木の枝は、まがるほど  
 雪に つもられて、だまっている。  
 五二二 2 ある日のゆうがたでした。  
 七六二 炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになっ  
 ている。  
 九四二 おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、  
 いちろうのうちにきました。  
 九四七 5 ある日の夕がた、このくもは、木と木のあ  
 いだに、巢をかけました。  
 一一一七 9 夕がた、コップを病人の口もとにつけた  
 ときに、  
 一一八八 7 夕がたの回しんのときに、医者は、  
 「略。」といいました。  
 一三二八 朝になると、日は東の空からのぼり、夕  
 がたになると、西の空にしずみます。  
 一五三三 7 ㊦ それから、夕がたになると、  
 ゆうがらす 「夕鳥」(名) 1 夕がらす  
 六四七 ㊦ やまが、草屋ののきまでたれて、かきは  
 ずなり、夕がらす。  
 ゆうかかさ 「勇敢」(名) 1 ゆうかかさ  
 八一〇 7 ピオのゆうかかさや、りこうさや、ちやめ  
 ぶりや、おかしさなどは、  
 ゆうき 「勇氣」(名) 9 勇氣  
 一三二 6 人をうやまうとともに、自分のつとめをは  
 たすだけの勇氣を、もちたいと考えます。  
 一三六 3 かれは、勇氣をふるいおこして、夜も晝も  
 なく考えとおし、  
 一四六 3 まちがったとき、思いきってやりなおし  
 た、その勇氣を頼もしく思いました。

一一六二 6 ㊦ 『いいえ』といいきるには、ほんとう  
 の勇氣がいる。  
 一一六七 少年は、勇氣をふるいおこして、その後  
 からついていきながら、  
 一一七五 3 そのとき、少年は、勇氣をふるいおこし  
 てたずねました。  
 一三二五 11 新しい勇氣や空想をもって、春は、また  
 楽しい船出のほぬのを、高くかかげる季節。  
 一四八八 9 ㊦ なにも、勇氣をだしてわすれてしまお  
 うと思いいなるにはおよびません。  
 一四四六 6 ㊦ くちびるに歌をもて、勇氣を失うな。  
 ゆうぎ 「課名」 2 ゆうぎ  
 一三二 十 ゆうぎ……二二一  
 一三一 十 ゆうぎ  
 ゆうぎ 「遊戯」(名) 1 ゆうぎ  
 一三二 2 それから、このうたの ゆうぎを、みんな  
 が かってに かんがえて おどりました。  
 ゆうぐれ 「夕暮」(名) 5 夕ぐれ  
 一六二 2 雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近いこ  
 ろ。  
 一七六 5 私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそと  
 をながめた。  
 一八二〇 9 せみの子は、〈略〉、あたりのくらくなりか  
 けた夕ぐれをみはからって、  
 一八三〇 10 ある夕ぐれ、太陽が美しくしずむときで  
 あった。  
 一一四〇 3 ㊦ 夕ぐれ寒くふくこがらしは、黄色くか  
 れたくぬぎ葉鳴らす。  
 ゆうごはん 「夕御飯」(名) 5 ゆうごはん 夕ごは  
 ん  
 一三六九 五人の子どもはゆうごはんをたべてい  
 ました。

五五二 5 ゆうごはんをまつあいだ、私は、まさこを  
 うば車に乗せて、はるおと大通りにでました。  
 五九三 5 ㊦ どれどれ、ゆうごはんでもたこうかな。  
 六二六 6 ㊦ さ、そろそろ夕ごはんにしようか。  
 一四七〇 5 夕ごはんのおぜんの上でもやれますから、  
 よく見てごらんさい。  
 ゆうす 「有」(サ変) 1 有す 《一シ》  
 一五五八 9 ㊦ 室友ホランド先生、自然科学にもっと  
 もきょうみを有し、〈略〉等をこのんで勉強す。  
 ゆうだち 「夕立」(名) 1 ゆうだち ↓おおうだ  
 ち  
 四六八 8 ゆうだちと かけて、なんととく。  
 ユートランド 「地名」 13 ユートランド  
 一三一九 5 ユートランドのあれ地と戦い、これを豊  
 かな土地にしようとする大計画をたてました。  
 一三一九 9 ユートランドは、デンマルクの半分以上  
 もあつて、  
 一三二〇 2 ユートランドの平野には、八百年あまり  
 前には、よくしげった森林がありました。  
 一三二〇 11 これなら、ユートランドのあれ地にも育  
 つだらうと思つて、実際に試験してみると、  
 一三二一 1 ユートランドのあれ地は、もはや、この  
 強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていま  
 せんでした。  
 一三二一 10 ユートランドのあれ野には、年ごとに、  
 みどりの野が廣がりました。  
 一三二二 3 ユートランドのあれ地から建築用材を求  
 めるダルガスの熱望は、実現されません。  
 一三二三 10 ユートランドのあれ地には、おいしげつ  
 たもみの林が見られるようになりました。  
 一三二四 1 第一、ユートランドの氣候が、そのよい  
 感化を受けました。

十三243 ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はと  
きに、しもさえ見ることがあったのです。

十三245 そのころ、ユートランドの農夫のつくつ  
た農作物は、

十三2410 ユートランドのあれ地は、大もみの林が  
しげったために、こえた田園となりました。

十三257 とうとう、ユートランドは生まれかわり  
ました。

ゆうはん「夕飯」(名) 1 夕はん  
十一351「いねはそだつし、あぜまめのびて、ふ  
くす風は夕はんよし。

ゆうひ「夕日」(名) 2 夕日  
九1185「金色の小さき鳥のかたちしていちよう  
ちるなり丘の夕日に

十二865 夕日はすっかりおちてしまいました。  
ゆうび「優美」(形状) 1 ゆう美

十6412 ことばも、能は、ゆう美ですが、狂言はそ  
うではありません。

ゆうひかげ「夕日影」(名) 1 夕日かげ  
九265「麦ふむやみだれし麦の夕日かげ

ゆうびん「郵便」(名) 2 ゆうびん 郵便  
三91「郵便

五206「ゆうびん」  
ゆうびんきよく「郵便局」(名) 3 ゆうびんきよく

四56 こは ゆうびんきよくです。  
五161 まもなく、私たちは、ゆうびんきよくの大

きなはこの中にはいました。  
五196 やつと汽車からおろされ、自動車につみこ

まれて、ある町のゆうびんきよくにつきました。  
ゆうびんないれぐち「郵便投入口」(名) 1 ゆう

びんないれ口  
四911 ゆうびんないれ口のまわりをさつさと

はく。

ゆうべ「昨夜」(名) 9 ゆうべ  
一394 ゆうべ、おもしろいゆめをみました。

一395 ゆうべ、おとうさんときしやにのつて、  
お月さんのところへいったゆめをみました。

二553 ゆうべ、ねどこにはいつてから、こんな  
ことをかんがえました。

二602 おはなしをきいたとき、わたくしは、ふ  
と、ゆうべのゆめをおもいだしました。

四438 ゆうべは、ぬまのきしの、よしのきれい  
にしげったところで、ねむったのでした。

四793 ゆうべ—ゆうべみたゆめ。  
六752「どうだ、ゆうべの命のこと、わかった

かい。」  
十一512 ゆうべからの大あらしは、けさになって

もまだ続いていた。  
十四184「ゆうべ、にいさんに聞いたよ。

ゆうめい「有名」(形状) 5 有名  
十651 つぎの「ぶす」は、狂言の中の有名なもの

です。  
十二468「ジャワのものはとくに有名だね。

十二558 また、文章に書きつづられて有名になっ  
たものもあるが、

十五402 あの名な源氏物語や枕草子などは、  
十五541 あの名な「ちようるいずふ」の著者ダ

ブリー・ジェー・ホランド博士、  
ゆうやけ「課名」 2 夕やけ

九28 四 夕やけ……二十六  
九261 四 夕やけ

ゆうやけ「夕焼」(名) 5 夕やけ  
六379 ずっと下にみえる夕やけの大通りを、(略)

が、ひっきりなしにゆききしている。

六4010 夕やけがばら色にくくなる。

七89 やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をな  
がめている。

九292「下雲へ下雲へ夕やけうつりさる  
十四43 朝明けの空、夕やけの空の美しさ、

ゆうやけぐも「夕焼雲」(名) 1 夕やけ雲  
六3611 夕やけ雲がうかんでいる。

ゆうやけこやけ「課名」 2 ゆうやけこやけ  
一311 九 ゆうやけこやけ……十八

一181 九 ゆうやけこやけ  
ゆうやけこやけ(名) 1 ゆうやけこやけ

一182「ゆうやけこやけ。  
ゆうゆう「悠悠」(副) 1 ゆうゆう

九13211 ゆうゆうととんで、にげていくみつばちの  
うしろすがたをみていましたが、

ゆえ「故」(名) 1 ゆえ  
十五65「六つほどの子がおよぐゆえ水わかな

ゆか「床」(名) 7 ゆか  
三702 そのとき、ピーターはふと、ゆかの 上に

なにか あるのを みつけました。  
三707 ゆかの 上に、なにか、長い、光った、び

かびかしたものが あります。  
三723 やはり ゆかに のこっています。

三762 みんなで さがしまわりましたが、ゆかの  
上には もう みえませんでした。

五806 ゆかをきれいにふきました。  
十二358 とうとうかんしゃくをおこして、新しい

人形を手にとって、ゆかにたたきつけました。  
十四976 ゆかの 上を よたよた歩いて、その女の子

の方へ ずっと よって くる ではないか。  
ゆかい「愉快」(名) 1 ゆかい

十五105「『とてもたまらなくなるゆかい』です

よ。

ゆかい 「愉快」(形状) 10 ゆかい

六117 かいちゅう時計が、たちまち、ゆかいそうにカチカチと音をたてはじめた。

六195 じつにゆかいだ。

九469 あの廣い学校の運動場で、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。

九113 林をぬって長いきよりをするの、ほんとうにゆかいであった。

十二359 そうして私は、くだけた人形のかけらを足さきを感じながら、ゆかに思いました。

十三494 空氣までが、わたしたちのゆかいなじょうだんでわらい、

十三503 さあ、元氣でゆかに、手をつなぎましょう。

十四514 ひさしぶりにごちそうをたべて、たいへんゆかいです。

十五211 山の中の生活は、見るもの聞くものがごとくくめずらしく、ゆかいな楽しいものでした。

十五757 日本へ帰ったら、新島夫人にきょうのゆかいな会見のてんまつを傳えてくれといながら、

ゆかいた 「床板」(名) 1 ゆかいた

五921 ゆかいたをはがして、たたみのまん中にあなをあけてやったら、それ、このとおり、

ゆがむ 「歪」(五) 1 ゆがむ 《一》

十四882 その一すじの道をながめると、一直線ではなく、くねくねとゆがんでいる。

ゆがめる 「歪」(下) 1 ゆがめる 《一》

十四59 すなおな心は、まずしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

ゆき (課名) 2 雪

四33 九雪……八十六

四861 九雪

ゆき 「雪」(名) 84 ゆき 雪はおおゆき・こなゆき・こゆき・しらゆき

一324 — かぜ — あめ — ゆき — きた —

二204 からす かぜ ゆき あめ かさまんと

二376 学校から かえる とき、くにざかいの山に、ゆきがふっているのをみつめました。

四7810 あ——雨、ゆき、あられ。

四863 ゆうがた、まつの木、枝は、まがるほど雪に つもられて、だまっている。

四875 雪が降るのだろうか。

四883 ちらちらと雪が降る。

四897 すずめ親子のねたあとは、さらさらと雪の音。

四898 雪だという、あさ早くはねおきて、そとにとびだして、雪かきをなさる おじさん。

四921 降った雪はまっ白だ。

四921 しかし、降ってくる雪は、まっ黒だ。

四924 雪が降りだすと、ぼくはまどからかおをだして空のほうをみあげて、

四931 まどからかおをだして空のほうをみあげて、降ってくる雪をながめる。

四938 降ってくる雪はみんな黒い。

四941 雪が かおにかかるのも わすれて、高い空のまん中をみあげる。

四953 よくも あんなに雪の たねがあるものだ。

四954 降っている雪を上からみると、白くて、黒くはない。

四955 大きな雪、小さな雪、雪のかたちはきまっていない。

四955 大きな雪、小さな雪、

四955 雪のかたちはきまっていない。

五394 山のてっぺんには、まだ雪のこつています。

五394 けれども、中ほどから下は、雪がありません。

六262 雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近いころ。

六263 「雪が降ってきた。」

六307 雪がたくさん降ってきます。

六583 雪の朝

六584 このあいだ雪の降った朝、

六586 一年生の子が、学校にぐる道で、はき物に雪がついてころびました。

六683 「雪のかたち」を五つばかり、きれいに写真しました。

六749 「雪は。」

八593 すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。

八839 雲は、あられや雪で重くなってひくくたれていた。

八874 おりよく戸があいていたので、あひるの子は、雪の中の草むらへはいりこんだ。

九125 もっとおもしろいと思ったのは、雪の降ってくるのをあらわしたひびきである。

九127 いかにも雪がしんと降りしきっているような気がした。

九1210 水の音にもなり、風の音にもなり、雪の降るようすにもなるのは、ふしぎである。

九466 もう、遠くの山々のいただきに、白い雪のぼうしがみえます。

九1059 スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくき

こえる。

九一〇 急停止すると、ぱつと雪けむりが立ち、あせばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。

九一六 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえがきながら、小鳥のようにおりてくる。

九二二 お書になったので、雪の上で楽しくおべんとうをたべた。

九二四 屋根の雪かきおとしいる少年の顔の明かるさ日のでる中に

九二八 おく山の雪がとけてそのまましみてきたかと思われようにつめたかった。

九三二 動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思ひます。

九三九 芭蕉はからだがよくいので、寒さは身にこたえましたが、雪をみるのが楽しみです。

九四一 芭蕉は、くもった空をおおきながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。

九四二 雪やこんこん、あられやこんこん。」などと、はやしてていました。

九四四 「みんなは、雪が降ったら、なにをして遊ぶの。」

九四六 芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれがたから降ってきました。

九四八 その夜は、すべての音も雪にうずめられたようになさでした。

九五〇 そのしんとしたしずかさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の句を考えました。

九五二 先生、今夜の雪の句はいかがですか。

九五四 それは、赤いおぼんの上に、雪をまるめてこしらえたうさぎでした。

九五六 心に太陽をもて、あらしがふこうが、雪がふろうが。

一四八二 雪の映画を二つ見た。

一四八三 一つは「雪國」というのであり、もう一つは「雪」というのであった。

一四八四 「雪國」は、北國の人たちが雪と戦っているようすを、映画にしたものである。

一四八五 雪が降りだしてから、だんだんつもるようす、深い雪の中で生活している人々、

一四八六 深い雪の中で生活している人々、

一四八七 「雪」というのは、雪の景色を写したものではなく、

一四八八 雪の景色を写したのではなく、

一四八九 雪の景色を写したのではなく、雪の一ひらをとらえて映画にしたものである。

一四九〇 ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、まことにきれいな形をしていること、

一四九一 一ひら一ひらの雪が、それぞれがったけつしようをしていること、

一四九二 その美しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ降ってくることを写している。

一四九三 どうして雪のけつしようができるか、どんなばあいに、どのようなけつしようになるか、

一四九四 さまざまな條件によって、雪のけつしようがちがうわけを、映画的手法によって、

一四九五 空から降ってきた雪の一ひらを受けとって、それをくわしく観察してみると、

一四九六 その雪が、どこで、どのようにしてできたか、どんな天空を旅して降ってきたか、

一四九七 「雪は、空からのお手紙です。」

一四九八 一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、

一四九九 このように、二つの映画は、どちらも雪にえんのあるものであるが、

一五〇一 ふんだんに降ってくる雪の中から、一ひらの雪をとらえて、

一五〇二 一ひらの雪をとらえて、

一五〇三 風にあおられた雪のむれが、道を消し、木をおり、汽車を立ちおうじようさせ、

一五〇四 ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情をあつかつても、おもしろいと思う。

一五〇五 半年も雪にとざされていた地上に、ぽちつと黒い土が見えはじめたときの喜びは、

一五〇六 雪はひっきりなしに降ってくる。

一五〇七 雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわりを、花かんむりのようにくまどつた。

一五〇八 その小さなマツチ賣りのむすめは、自分のまき毛のことも、雪のことも考えなかった。

一五〇九 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴか光るさらをならべたテーブルが見えた。

一五一〇 首府のベルンの町からながめると、まっ白に雪をいたたく山々がならび立っています。

一五一一 一つまちがえ、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落ちこむのでした。

一五一二 まわりには、鳥の白い羽が雪のようにとびちりました。

ゆきかえる「行帰」(四) 1 ゆきかえる《ル》

一五一三 月照らす上野の森を見つければ家ゆるがして汽車ゆきかえる

ゆきがかり「行掛」(名) 1 ゆきがかり

一五一四 ことばは、《略》、ゆきがかりや、音声や身ぶりによって、いろいろにその意味がかわる。

ゆきかき「雪掻」(名) 1 雪かき

一五一五 あさ早くはねおきて、そとにとびだして、雪かきをなさる おじいさん。

ゆきき「行来」(名) 1 ゆきき

十一 38 5 村道に立つ大のぼり、ゆききの人もえ  
顔して、その足どりもいそいそと。

ゆきき・する 「行来」 (サ変) 2 ゆききする 《一  
シ》

六 37 11 タやけの大通りを、豆つぶほどの自動車や  
電車が、ひっきりなしにゆききしている。

十二 83 10 目にもとまらぬボールが、ネットの上を  
右に左にと、ゆききしました。

ゆきぐに (題名) 3 雪國

十四 83 2 一つは「雪國」というのであり、もう一  
つは「雪」というのであった。

十四 83 4 「雪國」は、北國の人たちが雪と戦って  
いるようすを、映画にしたものである。

十四 86 6 「雪國」の映画も、けっしてわるいもの  
とは思わないが、

ゆきぐに 「雪國」 (名) 2 雪國

十四 83 8 それをうれしそうに見ている雪國の子ど  
もなど、

十四 88 9 雪國でいちばん楽しいものは、なんと  
いっても、春さきの雪どけごろである。

ゆきけむり 「雪煙」 (名) 4 雪けむり

九 109 3 急停止すると、ぱっと雪けむりが立ち、あ  
せばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。

九 109 10 みんなが急停止をすると、雪けむりが一ど  
にあがった。

九 110 7 はげしい制動をかけられると、もうもうと  
雪けむりが立つ。

ゆきだるま 「雪達磨」 (名) 16 雪だるま

六 70 3 ごろうは、妹のはるえといっしょになって、  
大きな雪だるまを作りました。

六 70 5 国 「にいさん、この雪だるま、歩きだしそ

うね。」

六 70 8 国 雪だるま、どんなお話をするだろう。

六 71 2 国 「いま、この雪だるまが、お話をすれば  
いいって、いつていたところよ。」

六 71 10 国 雪だるまはお話はいらないけれども、はる  
えさんが、なにかお話をしなうたらどう。

六 72 3 国 「雪だるま、きつと喜びますよ。」

六 72 6 国 いったい、あの雪だるまは、死んでいるの  
か、生きているのか。

六 73 2 国 「雪だるまのことです。」

六 73 6 国 雪だるまは生きているのでしょうか、死  
んでいるのでしょうか。

六 75 10 国 学校へいくとき、雪だるまのかたのところ  
に、まつの枝をつけました。

六 76 6 国 この手が動かないから、やはり雪だるまは  
命がないのかなと思いました。

六 77 6 国 「雪だるまは動きもしないし、息もして  
いませんね。」

六 77 7 国 「雪だるま、雪だるまは生きものではな  
いからね。」

六 77 7 国 雪だるまは生きものではないからね。

九 109 7 国 とちゅうでころんで、雪だるまになつてお  
きあがるものもある。

十二 73 2 国 「雪だるまを作るの。」

ゆきち 国 ふくくざわゆきち

ゆきづま 国 「行詰」 (五) 1 ゆきづまる 《一ツ》

十 55 8 国 どうして、こんなふうなゆきづまってきた  
のでしょうか。

十四 83 7 深い雪の中で生活している人々、春の光  
がさしそめて、雪どけ水が流れだすところ、

ゆきのえいが (課名) 2 雪の映画

十四 3 7 九 雪の映画……八十三

ゆきまろげ (課名) 2 雪まろげ

十二 3 4 八 雪まろげ……七十

十二 70 1 八 雪まろげ

ゆきまろげ 「雪丸」 (名) 1 雪まろげ

十二 76 11 国 きみ火をたけよきものみせん雪まろ  
げ

ゆく (行) (四) 2 ゆく 《一ク・一ケ》 ふうすれ  
ゆく

九 114 2 文 国 いもうとの小さき歩みいそがせてちよ  
紙かいにゆく月夜かな

九 115 5 文 国 赤いぬの一びきゆけばこの町のそここ  
こよりぞいぬのあらわる

ゆくえ (行方) (名) 2 ゆくえ 行くえ けつりば  
りのゆくえ

十四 45 3 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、  
船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

十五 5 3 文 国 いかにも目ざとく人とても、声の行  
くえの見えるや。

ゆくさき (行先) (名) 3 ゆくさき

五 15 4 ゆくさきはむねのところに書いてあります  
から、まちがいはありません。

五 17 10 国 わたしは、ちゃんとゆくさきは知ってい  
るが、

九 17 1 つばめのゆくさきは、遠い南の海のかなた  
です。

ゆくすえ (行末) (名) 2 ゆくすえ 行く末

十 35 7 国 日本のゆくすえをどうするのか。

十五46〔文〕 ときいきおいに まなこすら、その行く末を見ざりけり。

ゆくて 「行手」(名) 2 ゆくて ゆく手

七142 「ゆく手に、まつの木が立っています。」

九1258 大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、まつ林におおれた道もない谷まになった。

ゆげ 「湯気」(名) 13 ゆげ 湯げ

三367〔会〕 ゆげがもうもうとたっています。

四916 ひとときはいて、うちにあがつておいでになると、ひたいから ゆげが たつ。

五3410 ガスこんろにかけたかまやなべから、ゆげがふきでています。

十四6210 第一に、湯の表面からは、白い湯げがたっています。

十四634 この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだして、日光を湯げにあて、

十四637 日光にすかして見ると、湯げの中に、にじのような、赤や青の色がついています。

十四6411 茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。

十四651 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、

十四658 つぎに、湯げがのぼるときには、いろいろのうずができます。

十四665 茶わんの湯げなどのばあいだと、もう、茶わんのすぐ上から大きなうずができて、

十四672 土のしめついているところへ日光があたつて、そこから白い湯げがたつことがよくあります。

十四674 湯げは、(略)、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、また、たちのぼります。

十四697 湯げのお話はこのくらいにして、こんどは、湯のほうを見ることにしましょう。

ゆさぶる 「揺振」(五) 1 ゆさぶる 《一ツ》

十二751 ふだんは筑波おろしがさわがしく、雨戸をゆさぶったり、

ゆじま 「湯島」(地名) 1 湯島

十二572 そのとき落ちた土くれが、有明海の中にある湯島であるという。

ゆずる 「襲」(人名) 1 襲 ↓にいじまゆずる・にいじまゆずるのはか

十五599〔会〕 襲の写真やら、当時の日記やら、きみに見せなければならぬものがたくさんある。

ゆずる 「譲」(五) 6 ゆずる 《一ツ・ラーリ》

五571 はるおにさいそくされて、ばんをゆずりました。

五584 まだみていたいようでしたが、やつと目をはなして、ばんをごろうさんにゆずりました。

七405 三郎は、だれかにゆずってもらった座席の上に立って、

十一547〔会〕 「ゆずられたときの氣持でゆずりましょう。」

十一547〔会〕 「ゆずられたときの氣持でゆずりましょう。」

十二167 おじさんからゆずってもらったもので、子どもにはりっぱすぎるほどだった。

ゆたか 「豊」(形状) 5 ゆたか 豊か

三296 たくさんの 村々は、だんだん ゆたかになつていったという事です。

十六6 われわれは、どんなにでも毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができると。

十三196 ユートランドのあれ地と戦い、これを豊かな土地にしようとする大計画をたてました。

十四5712〔会〕 それがこの日本でできるためには、私が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。

十五75〔文〕 さい晩や火のこ豊かの汽車けむり

ゆだん 「油断」(名) 3 ゆだん

十二276 もう次のへやにはいっているというように、すこしもゆだんができません。

十二296〔会〕 ゆだんができませんわ。

十五319 羽風で空氣がゆれ動き、ちよつとでもゆだんをすれば、それにふきとばされ、

ゆたんぼ 「湯湯婆」(名) 1 ゆたんぼ

六635 弟がせきがでるので、おかあさんはゆたんぼをいれている。

ゆっくり (副) 16 ゆっくり

一485〔会〕 ごじゆんにゆっくりおのりください。

一513〔会〕 みなさん、どうか ゆっくり おやすみください。

三971 はやくかくことも、ゆっくりかくこともできます。

四111〔会〕 どうぞ ゆっくり あそんでいってくださいませ。

五68 野原をゆっくりあるいていく、

五74 川は大きくなると、ゆっくりとながれていく。

六217 そのとき、しもてから、ありが三びき、ゆっくりでできます。

六1314〔会〕 このあたにかいトンネルで、今夜、ゆっくりとねむりたかったのさ。

六1385 五ひきのうさぎさんたちは、ここでゆっくり休むことにしました。

六1435〔会〕 安心して、ゆっくりおあがりなさい。

九6011〔会〕 まあ、ゆっくりお休みください。

九803〔会〕 まあ、おちついて、ゆっくりしごとにかかりましょう。

十256 坂道を、ゆっくりとした足どりで、家に帰ってくる。

十二37 手に、はじめのはゆっくりと、次には早く、「水」という字を書いてくださいました。

十三29 荷車をひきながら、ゆっくり歩いて来る。  
十五87 「みたされたきよえいの幸福」ゆっくりとくなく。

ゆったり (副) 3 ゆったり

五40 白くてゆったりとさく、ひんのいい花です。

八90 そうして、羽をひろげてゆったりと近づいてきた。

十五23 そのがけの下の方へゆったりとんで行く大きなやまわしのためにつかまれて、

ゆでたまご 「茹卵」(名) 1 ゆでたまご

十二53 コロンブスは、つと立って、テーブルの上のゆでたまごをとり、「略」といいました。

ゆでる 「茹」(下) 1 ゆでる 《一デ》

十二91 帰っておかあさんにゆでていただいたこと、みんなでたべたこと——

ユニホーム (名) 1 ユニホーム

十二77 時間がせまったので、私はユニホームをつけて、練習のためにコートにできました。

ゆのみ 「湯飲」(名) 3 ゆのみ 湯飲み

十73 次郎かじやは力があまり、茶だなの湯飲みをはねとばして、こなみじんにいたしました。

十二35 「ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しんだあとした。

十二35 「ゆのみ」が道具で、「水」がその中にはいっているものであることを、

ゆのみちゃん 「湯飲茶碗」(名) 2 湯飲み茶碗  
十72 おまえは、だんながだいじにしているあの湯飲み茶碗を、庭石にたたきつける。

十72 ずっしりと重い、大きな湯飲み茶碗を、

ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。ゆび [指] (名) 13 指 小指・なか指・ひとさし指

八74 それでもきかなければ、指で追ったりしました。

八10 歩いているとき、追いかけてきて、かかとや足の指をつついたりするのです。

九47 字はへたで、すみもがさがさして指につくくらいでした。

十70 太郎かじやは、すばやく指をつつこんで、すぐそれを、口に持っていきました。

十71 きゆうにいきおいづき、せんすをほうりだして、自分も指をつつこみました。

十71 ふたりは、かわりばんこに指をつつこみしました。

十二32 そのなつかしい葉や、花の上を、私の指はまったくわをわすれてなでていました。

十二33 私は、すぐこの指の遊びがおもしろくなつて、それをまねようと思いました。

十二34 ただ、さるの人まねのように指を動かすだけでした。

十二37 私は、身動きもせず、立ったままで、全身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。

十二45 指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろ種類がある。

十二52 あなの両わきを切りこんで、手さきをまめるめ、指の線をほる。

十五104 鼻を指ではじいたり、ひら手でたたいたり、《略》氣ちがいのようにはねまわります。

ゆびおり [指折] (副) 1 指おり

十五56 指おり数えと数十年の昔になるが、ゆびさき [指先] (名) 7 ゆびさき 指さき 指先

六83 男の子はゆびさきでそれをつまもうとしたが、あまり小さいのでつまめなかった。

八59 かごの中から、一わずつかみだしては指さきへとまらせたり、かたへ乗せたり、

八66 だんだんたばかりか、頭の上にも乗るようになったばかりか、頭の上にも乗る、

八68 自分から指さきやくちびるへとびあがり、とびついて、じょうずにえさをとったり、

十19 ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上をすべっていく。

十二33 二階から母のところへかけおり、指さきで人形という字をつづつてみせました。

十三38 その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるくるまわしながら、楽しそうなようす。

ゆびさす [指差] (五) 7 ゆびさす 指さす 《一サシ》

三10 上と 下とを ゆびさして、 お立ちになつていらつしやる。

十二11 老人は廣場の方を指さして、「略。」と答えました。

十四39 一人はるか遠くの方を指さして、《略》。

十五69 指さされるままに、顔をあげてへき面を見あげると、おじさんの大きな写真があった。

十五88 チルチル、すこし横の方に立っているひとりの「幸福」を指さして、

十五91 ふとった幸福「光」を指さしながら、チルチルに向かって、《略》。

十五116 チルチル つつましくすこしさがっている「光」を指さしながら、《略》。

ゆびにんぎょう [指人形] (名) 1 指人形  
十二49 指人形の作りかた



ゆびわ [指輪] (名) 1 指わ

十五113 6 小さな指わをはめている。

ゆみ [弓] (名) 3 弓

三112 8 けらいたちは、弓に矢をつがえました。

六16 4 そのかりうどは、きゆうに歩くのをやめて、弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

六82 9 園に いさんはこの弓と矢を持っていらっしやい。

ゆみがた [弓形] (名) 1 弓形

十一70 2 ただ、ひたいと弓形をしたまゆとのほかには、どこといって父親らしいところはありませんでした。

ゆみなり [弓形] (名) 1 弓なり

六119 4 よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりにまげるのですから、めんどろでした。

ゆみや [弓矢] (名) 3 弓矢

三111 9 おじいさんの家のまわりは、弓矢をもった人たちで、いくえにもとりかこまれ、

六16 2 そのとき、ありのまゑをひとりのかりうどが弓矢を持って通りました。

六84 6 園さ、弓矢を返すよ。

ゆめ [夢] (名) 25 ゆめ

一39 3 ゆめをみました。

一39 4 ゆうべ、おもしろいゆめをみました。

一39 6 ゆうべ、おとうさんとときしやにのつて、お月さんのところへいったゆめをみました。

二20 7 はなほしよるゆめ山川

二56 8 ゆめに、ひろいのはらをみました。

二60 2 おはなしをきいたとき、わたくしは、ふと、ゆうべのゆめをおもいだしました。

四79 3 ゆ—ゆうべみたゆめ。

四111 7 園まるでゆめのようだ。

八93 11 園こんな幸福があらうなどは、ゆめにも思わなかった。

九14 1 しばいで、ゆめをみていた人が、にわかに目をさます場面を演ずることがある。

九14 2 ゆめからさめるときには、音などはけつしてするものではないが、やはりたいこをたたく。

九138 2 くもの小さなことが、ゆめでもみるように思いだされてきました。

九142 9 園「なんとみじかいゆめだろう。」

九142 10 くもは、いまみたばかりのゆめを、なんともなんとも思い返しました。

九144 2 それから、いいゆめをみることもできた。

十38 2 天然眞珠をてのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者があつた。

十38 10 園「このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。」

十40 7 村や町の者は、幸吉のむだばねをあざけり、そのゆめのような考えをわらつた。

十45 1 大きなゆめは実現された。

十317 4 ゆめのように、眞理のように、白雲をかにまとった小山をめぐつて、聞えてくる。

十319 11 これをこえた土地とするのが、ダルガスのゆめであります。

十319 11 このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかありません。

十332 2 目がさめたころ、遠いところを通るその声を聞くのは、ゆめの中の声のように思われる。

十四39 2 園ゆめがさめた。

十四39 2 園長いゆめがさめた。

ゆめいじよう [夢以上] (名) 1 ゆめ

十五118 4 園私たちは、幸福なんですけれど、私たちがゆめ以上のものは、見られないのです。

ゆめとつくえ [課色] 2 ゆめとつくえ

二3 4 八 ゆめとつくえ………五十五

二55 1 八 ゆめとつくえ

ゆめどののかんのん (題名) 1 夢殿の観音

十二102 5 夢殿の観音

音

十二102 11 夢殿の観音といつて、いまでも、多くの

人々からたつとばれている作品です。

ゆめにも [夢] (副) 1 ゆめにも

十43 8 ゆめにもわすれられない眞円眞珠が、光っているではないか。

ゆらゆら (副) 1 ゆらゆら

十四96 8 それがゆらゆらともえあがると、まあ、なんというふしぎなことだろう。

ゆらゆらする (サ変) 2 ゆらゆらする 《—シ》

十四66 1 けむりがゆらゆらして、いくつものうずになり、それがだんだんに廣がり、

十四69 12 みようなゆらゆらした光った線や、うす暗い線が、不規則なもようのようになって、

ゆらら (副) 1 ゆらら

十五14 2 園大きなるべにばらのひと花思わぬをゆららにあかく開き満ちたる

ゆら・れる [揺] (下二) 1 ゆられる 《—レル》

八97 8 なえが朝風にゆられるようになりました。

ゆり [百合] (名) 1 ゆり

二23 4 園はねのいたんだ大きなちようちよが、けさも、ゆりの花にきていましたよ。

ゆりいす [揺椅子] (名) 1 ゆりいす

十一48 1 ぼくのいすは、小さなゆりいすで、その下に、いつもかいねこのメリーがいた。

ゆりかご [揺籠] (名) 1 ゆりかご

十四916 その男の子は、これは人形のゆりかごに  
はもってこいだと思つたのであろう。

ゆりこ〔話手〕2 ゆりこ

三64 ゆりこ「春。」

三68 ゆりこ「どこもさくら。」

ゆる〔揺〕(下二)3 ゆる《—ルル—レ》

九114〔文〕 水ぐるま近きびぎにすこしゆれすこ

しゆれいるこでまりの花

十五146〔文〕 風くればらはたちまち火となれり

ゆれにゆるるか照りそう風に

十五146〔文〕 ゆれにゆるるか照りそう風に

ゆるい〔緩〕(形)1 ゆるい 《—イ》

九41〔手〕 思わぬところに炭やき小屋があつて、ゆ

るいけむりのあがるのがみえました。

ゆるがす〔揺〕(四)1 ゆるがす 《—シ》

十五137〔文〕 月照らす上野の森を見つゝあれば家

ゆるがして汽車ゆきかえる

ゆるがせ〔忽〕(名)1 ゆるがせ

十34〔手〕 ぬのを織るしごとと、けつしてゆるがせに

してはおかれない。

ゆるす〔許〕(五)11 ゆるす 《—サ—シ—ス》

四98〔文〕 でも、ゆるしておやり。

六86〔文〕 にいさん、ゆるしてください。

六86〔文〕 いや、ゆるすことはできない。

六140〔手〕 助けてくださいと、お願いしたところで、

ゆるしてくれるみこみありません。

六141〔文〕 よこどりすると、ゆるさないぞ。

八32〔文〕 「では、七月七日の一日だけ、けんぎゅ

うとあうことをゆるしてやろう。」

八72〔手〕 ぬまの水をのませてもらいたいとも思つた

が、それもゆるしてもらえそうもなかった。

十一85〔文〕 あの人、いま、ひどくわるいんですか

ら、ゆるしてください。

十三16〔手〕 やむを得ず自分の説はあやまりであつた

というこににして、ゆるしてもらいました。

十五48〔手〕 はん主からゆるされた十六人だけが、有

田に赤絵町を作つて住み、

十五60〔手〕 札幌独立教会をつかさどつていた私の父

とは、心をゆるした間がらのこととて、

ゆるめる〔緩〕(下二)2 ゆるめる 《—メ—メル》

四62〔手〕 さすがのへびも、いきがくるしくなつ

たので、力をゆるめました。

十五31〔手〕 ちょっとでも氣をゆるめると、鳥のくち

ばしでつき殺されます。

ゆるやか〔緩〕(形状)3 ゆるやか

七36〔手〕 なんだか、まわりがすこしゆるやかになり、

からだがらくになったような氣がしました。

十一13〔手〕 はてしもなく、ゆるやかにうつ波の声は、

われわれの心をあらうようにきこえる。

十四70〔手〕 光つた線や、うす暗い線が、《略》、ゆる

やかに動いているのに氣がつくでしょう。

ゆれ〔揺〕↓おおゆれ

ゆれいる〔揺居〕(上二)1 ゆれいる 《—イル》

九114〔文〕 水ぐるま近きびぎにすこしゆれすこ

しゆれいるこでまりの花

ゆれうごく〔揺動〕(五)2 ゆれ動く 《—キ—ク》

十三34〔手〕 ほのぼのとゆれ動かかけ絵は、子どもの

心をひきつけてやまない。

十五31〔手〕 羽風で空氣がゆれ動き、ちよつとでもゆ

だんをすれば、それにふきとばされ、

ゆれる〔揺〕(下二)28 ゆれる 《—レ—レル》

三50〔文〕 かなかなぜも 目が さめて、 かせに

ゆれゆれ さきました。

三50〔文〕 かせにゆれゆれ さきました。

四134〔文〕 右に 左に ひらひらと、 ゆれる たもと

が うつくしい。

五50〔文〕 のたりのたりとわたし船、おもさにゆれ

ゆれ岸をでる。

五50〔文〕 おもさにゆれゆれ岸をでる。

六31〔手〕 いねが波のようにゆれる。

六32〔手〕 木が大ゆれにゆれる。

六115〔手〕 たこが青空で右や左にゆれると、

七67 えんどうの花が、風もないのにゆれている。

七35〔手〕 汽車がゆれるたびに、前後からおされて、

さぶろうは、だんだん頭を私によせ、

七41〔手〕 青年のからだはゆれていたが、ひく手にく

るいはなかった。

七59〔手〕 なにかの花びらが、くもの巣にかかつてゆ

れている。

七62〔手〕 さくらの木が、ぬれてゆれている。

七66〔手〕 青々とはれて、すすきすこしゆれている。

九27〔文〕 秋風にプールの水がゆれている

九28〔文〕 持ちかえしせんこう花火のゆれている

九40〔手〕 なたをふりおろすたびに、すぎの木は大

きくゆれました。

九53〔手〕 ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、と

なりのぶなの葉がちよつと光つただけでした。

九74〔手〕 木やぶが、けむりのようににぐらぐらゆれ

ました。

九129〔手〕 そのとき、あみがにわかにゆれました。

九130〔手〕 風が思いだしたようにふいてくるので、あ

みがゆれ、くももいっしょにゆれました。

九130〔手〕 くももいっしょにゆれました。

十21〔手〕 まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、

風にゆれている。

十 62 5 もう、親竹と同じくらいに高くなって、風にゆれていました。

十一 47 4 津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆれて、

十一 48 5 アカシヤの花が風にゆれ、畑では、いちごがでさかりだった。

十三 29 12 歩いて行くと荷がゆれて、しぜんにふんどうがどらにあたる。

十四 10 4 国 ほのおがゆれたりしないとか、光をずっとやわらかくするために小さなかさがあると

ユングフラウ (地名) 4 ユングフラウ

十五 19 3 山々のうち、もっとも高い山の一つに、ユングフラウという美しい山があります。

十五 19 6 その中で、一だんと高くそびえているのが、このユングフラウの山です。

十五 20 4 このユングフラウの山中のホテルに、アメリカ人の一家族が来て、

十五 33 8 大きなユングフラウのまっ白な山までも、

《略》少年をほめたたえているようでした。

よ

よ [世] (名) 3 世 ↓ このよ

十 42 9 ひとまずこれを加工して、かざり物として、ともかく、世にだすようになった。

十四 5 7 おさないころから、人の世の苦しみいろいろとなめていたからのことでした。

十五 80 5 それ以前は、おたがい他國のこと

はわからず、世をすごしてきたばかりでなく、

よ [夜] (名) 15 夜 ↓ あさよ・つきよ・つくよ・みじかよ

三 109 6 十五夜がちかくなつたある夜、かぐやひめは、とうとう声をたててなきだしました。

四 55 5 その夜は、さいわい、雨もふらず、風もふかない、しずかな、星の光る夜でした。

六 78 1 その夜、ごろうはおとうさんに、この考えついたことを話しました。

九 27 2 国 月の夜をわが家のありしあたりまで

十一 33 9 国 ほたる追う夜も重なつて、麦のとりいれことなくすめば、はい色雲が空うちおおい、

十一 61 8 その夜、また父にきびしくただされて、

《略》きょうのことを、ありのままにうちあげた。

十一 93 3 夜は明けかけていました。

十二 58 5 おには、これを承知して、ある夜、石だんをきずきました。

十二 75 3 その夜は、すべての音も雪にうずめられたようにならずにさでした。

十三 33 10 月が出ていれば、出ていたで美しく、星の夜であれば、またさらに美しい。

十三 34 5 夜のふけるのも知らないで、見とれてしまふ。

十四 38 7 国 「夜が明ける。」

十四 39 3 国 夜が明ける。

十五 13 1 文 国 あさき夜の月影清み森をなすすぎのこぬれの高きひくき見ゆ

十五 13 3 文 国 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸の外明らかに月ふけわたる

よ (終助) 43 ヨ よ

一 12 4 国 じゃんけんぽんよ、あいこでしょ。

一 13 1 国 かい。まあだだよ。もういいかい。

一 13 3 国 かい。まあだだよ。もういいかい。

一 13 5 国 い。もういいよ。六 もちもの

一 42 2 、わたしがいますよ。みんなもうごい

一 42 3 もうごいていますよ。木もはえていま

一 42 4 木もはえていますよ。せんせいの目の

一 43 8 国 くへいくんだよ。いそいででかけ

一 44 3 国 わたしおるすいよ。ふたりでいって

一 45 3 国 をしらべるのだよ。」こんなこえが

一 46 6 国 すと、「いいですよ。さあ、あちらの

一 52 6 国 はあまの川ですよ。そら、ところどこ

一 53 1 国 だいやもんどですよ。」《略》。と、わ

一 53 7 国 だいやもんどですよ。しんせつないい

一 61 3 国 ったなかなですよ。」おじいさんがこ

一 62 3 国 っぱりたまですよ。」といって、わた

一 63 3 国 ちのおくにですよ。それであんなに

一 65 8 国 ひかっていますよ。」といって、おか

一 65 8 国 。まだありますよ。」《あかい》。あ

一 65 8 国 きていましたよ。」《略》。《略》。

一 23 5 国 ました。」いやだよ。きみこそどいて

一 27 8 国 なんかできないよ。」と、ほかのもの

一 32 9 国 ました。『ちがうよ。つるつるして、と

一 35 6 国 ちわににているよ。』と、いいました。

一 36 1 国 うものではないよ。」たろう「だって、

一 42 1 国 なくいうからだだよ。おまえがきれい

一 42 5 国 、ではやりますよ。さあ、いぬだよ。

一 44 5 国 よ。さあ、いぬだよ。わん、わん、わん

一 44 6 国 ます。「ここですよ、さちこさん。」さ

一 52 6 国 のおとうさんだよ。」と、いって、にこ

一 58 5 国 れをつかいますよ。ですから、この

一 60 6 国 、春の音がするよ。」みんなは、小さ

一 67 1 国 あ、うぐいすさんよ。」みんな「うぐい

一 69 8 国 さんよ。」と、いって、わかつたかい。」

一 13 5 国 一 13 5 国

三59 5 会 うみへおりようよ。」と、デビッドが  
 三59 7 会 いいます。「だめよ、だめよ。」と、ジ  
 三59 7 会 ー。「だめよ、だめよ。」と、ジュデーが  
 三59 9 会 いいます。「いいよ、いいよ。」と、デ  
 三59 9 会 ー。「いいよ、いいよ。」と、デビッドが  
 三61 7 会 ずうみへいこうよ。」と、いいました。  
 三64 7 会 んにはいけないよ。右手と左手をは  
 三66 5 会 にきいてみようよ。」と、いいました。  
 三70 4 会 れ、あれごらんよ。」ピーターは大声  
 三72 8 会 ました。「ちがうよ。」みんながいいま  
 三73 2 会 ました。「ちがうよ。」みんながこたえ  
 三73 5 会 「略。」「ちがうよ。」「略。」「略。」  
 三73 7 会 「略。」「ちがうよ。」「略。」「略。」  
 三76 4 会 ってしまったのよ。」おかあさんがお  
 三76 8 会 國へいくんですよ。」「略。」「こんど  
 三77 1 会 をあげるんですよ。」「略。」「略。」  
 三78 6 会 かえってきますよ。だれにもお日さ  
 三78 8 会 いあさあえますよ。」にじ 五人の  
 三79 10 会 ました。「だめだよ。雨にぼくのいど  
 三83 7 会 ました。「みえたよ。」「略。」と、マ  
 三84 1 会 いに光らせるのよ。」だんだんにじも  
 三84 5 会 つけて、「ごらんよ。」と、いいました。  
 三99 8 会 のしいものですよ。」とおっしゃいま  
 四18 7 会 、「ああ、かるいよ。」とおっしゃった  
 四27 3 手 はなしてあげるよ。」たろうさんは、「  
 四37 10 会 てはいけませんよ。」という声でし  
 四43 1 会 っちゃあこまるよ。」「略。」「かんは、  
 四44 7 会 それはいけないよ。」といったのは、  
 四45 1 会 しまいはつらいよ。」「略。」「略。」  
 四45 5 会 「でもじゃないよ。おしまいは気が  
 四45 7 会 もね、つらいんだよ。」「略。」「略。」  
 四45 10 会 きけんせんばんだよ。あとからなにか

四46 5 会 もうよすがいいよ。おとといは、一ぼ  
 四46 8 会 うは ちがうんだよ。」「略。」「略。」  
 四51 8 会 「略。」「たのむよ。」「略。」「かっち  
 四56 1 会 が、気がついたよ。」「略。」「略。」  
 四56 6 会 だいじようぶだよ。」「略。」「略。」  
 四56 8 会 出発してもいいよ。ぼくたちのたび  
 四58 5 会 よきようをするよ。ねているうちに  
 四60 1 会 へ。」「知りませんよ。」「略。」「略。」  
 四78 3 会 ふ——ふけふけ風よ、たこあがれ。こ  
 四84 1 会 らんこしているよ。」といったので、  
 四88 8 会 そいでかえったよ。からすのかんた  
 四89 2 会 さあ、やすもうよ。」と親すずめ。  
 四96 8 会 なでころがそうよ。」みんな「よいしょ  
 四98 9 会 がしてあそぼうよ。」子ども「でも  
 四104 7 会 にはおよばないよ。元氣になつてよ  
 四111 8 会 もこうなのですよ。」うらしま「すばら  
 四116 7 会 てはいけませんよ。」うらしま「これは  
 五8 4 会 「略。」「かっつたよ。さあ、改札口へい  
 五8 6 会 車がいってきだよ。」シュ、シュ、  
 五9 4 会 んが、乗ってきたよ。じろう、せきをあ  
 五9 11 会 ん、海がみえるよ。」「略。」「略。」  
 五10 3 会 ー。「トンネルですよ。」こは、みなさん  
 五10 4 会 ったトンネルですよ。」「略。」「略。」  
 五11 8 会 も氣をつけているよ。ほら、あそこをこ  
 五12 1 会 へ。」「シグナルだよ。あれをみて、汽車  
 五12 3 会 ぼうや、ここですよ。おりましよう。ど  
 五13 5 会 「だいじようぶだよ。」「略。」「略。」  
 五14 1 会 から、おるんだよ。」シュ、シュ、  
 五14 4 会 ー。「略。」「いいよ。」「略。」「略。」  
 五16 4 会 ばんにはいるんだよ。」といって、私た  
 五17 7 会 ら、なお心配ですよ。」「略。」「そのう  
 五18 1 会 しているところだよ。」そのうちに、き

五20 8 会 んから手紙がきたよ。」みつおさんがよ  
 五27 4 会 あの人に行ったのよ。」「略。」「略。」  
 五30 1 会 いから、まあいいよ。」「略。」「といっ  
 五31 8 会 が書いてありますよ。」と、いって、ぼく  
 五44 5 会 とだ。世界の友よ、手をつなぎ、な  
 五44 6 会 くとんであそぼうよ。明かるい世界の  
 五44 8 会 のうたをうたおうよ。ぼくら、日本の  
 五45 6 会 の花ぞのかざろうよ。ぼくら、日本の  
 五46 2 会 ずかな空で光ろうよ。やぶうぐいす  
 五55 7 会 うで星をみせますよ。いってみませんか  
 五56 3 会 光っている星ですよ。」私は、「略。」  
 五56 5 会 みつけた二ばん星よ。あれ土星というの  
 五56 6 会 あれ土星というのよ。」じゅんぼんがき  
 五57 9 会 「略。」「星ですよ。」「略。」「また、  
 五59 10 会 がおがさきましたよ。」と、いいました。「  
 五62 9 会 がおとおなじですよ。たねはおかあさん  
 五62 11 会 力ではありませんよ。」「略。」「略。」  
 五63 4 会 いではありませんよ。」おとうさんは、  
 五63 6 会 おの花もおなじだよ。」と、いって、おわ  
 五66 10 会 のさかなをとったよ。それが、海へ帰し  
 五67 2 会 へはなしてやったよ。」おぼあさんは、「  
 五68 7 会 けができていますよ。」おじいさんが帰  
 五72 9 会 ものわらいになるよ。」「略。」「おじい  
 五73 8 会 は女王になりますよ。」と、いいました。  
 五83 5 会 ですか、写しますよ。」とおっしゃった  
 五85 10 会 はあとからきますよ。」「略。」「そのと  
 五87 2 会 も、目は二つですよ。」「略。」「略。」  
 五87 4 会 るかと思つていたよ。あはははは。」「へ  
 五88 5 会 おび——かわいいよ。」「略。」「略。」  
 五88 6 会 あら、おかしいわよ。」「略。」「子ども  
 五89 1 会 うたをうたうのだよ。高い山からたに  
 五90 6 会 おじぎをするのだよ。」「略。」「略。」

五90 9 会 ヤアとないたのだよ。それからな、おか  
五90 11 会 さんになったのだよ。」こういつてから、  
五91 9 会 略。』というのだよ。それで、手おけの  
五92 1 会 ツンとうったのだよ。そこで、ゆかいな  
五92 6 会 たけのごはんだよ。」「略。」「略。」「  
五92 7 会 さん、ちがいますよ。ごはんの中にたけ  
五92 8 会 けのごはんですよ。」「略。」「略。」「  
五92 10 会 たけのごはんだよ。」「略。」「略。」「  
五92 11 会 」。」「ちがいますよ。」「略。」「わから  
五94 8 会 ばりかもしれないよ。」「略。」「略。」「  
五96 2 会 い。ひわの子ですよ。ほんとうは、まひ  
五96 4 会 声でさえずりますよ。」「と、となりのお  
五96 11 会 くことはできませんよ。」「略。」「そう  
五98 6 会 ざりはじめましたよ。このままかつてお  
五99 11 会 てやれなくなつたよ。」「おとうさんに  
五100 3 会 れからぼくの子だよ。いつまでもかわい  
五100 4 会 かわいがつてやるよ。山へはなしてやり  
五106 8 会 うへとんでいこうよ。空はひろくておも  
五106 9 会 ろくておもしろいよ。』といいました。」「  
五107 5 会 」。」「いろいろあるよ。」「そういつて、ハ  
五108 2 会 ちのさんちゃんだよ。ちつともこわいこ  
五108 3 会 つしよにあそぼうよ。」「かごの中のひわ  
六19 4 会 のうちがいもあるよ。じつにゆかいだ。  
六21 10 会 、ありさんがきたよ。」「バイオリンの「大き  
六24 6 会 きりぎりす」  
六24 11 会 にはたらくのですよ。さあ、おそくなる  
六34 2 会 なありさんたちだよ。」「オルガンの「小さな  
六36 4 会 きりぎりす」  
六39 8 会 こからはみえないよ。」「14 風がふく。雲  
六41 9 会 、またふいてくるよ。早く、早く、あつ  
六42 4 会 しごとはこれからよ。わたしたちのなか  
六44 2 会 しなくてもいいのよ。さあ、みなさん、  
ほら、みてごらんよ。ほんとうにあのか

六449会　とんでいったんだよ。」「子がらす二「なん  
六453会　んもさげんでいたよ。」「43「へのへのも  
六5211会　雲が走っているのよ。」「と、みちこがい  
六538会　くのがよくわかるよ。」「《略》。」「ふみお  
六546会　ほら、よくわかるよ。」「と、手まねきを  
六713会　いっていたところよ。」「これをきいて、  
六715会　るかも知れませんか。」「《略》。」「と、は  
六723会　、きつと喜びますよ。」「その日、晩ごは  
六743会　うものがありますよ。」「それを考えたらわ  
六748会　あれはちがいますよ。」「《略》。」「《略》。  
六765会　「こううは、「手だよ。」「といひながら、  
六784会　をもっているのだよ。」「とにかく、命のこ  
六792会　りではありませんよ。」「ほら、左のむねの  
六794会　ぞうのこどうですよ。」「あなたが、それを  
六798会　きんやっていますよ。」「こううは、いつ  
六819会　んなこと、いやだよ。」「ほおりの「たった一  
六825会　れるものではないよ。」「でも、つってみる  
六846会　。さ、弓矢を返すよ。」「ほおりの「にいさん  
六1042会　たく物もみえますよ。」「あ、人がこっちを  
六1072会　ヒコキといえるよ。」「といったので、  
六11911会　やつとできましたよ。」「といっておみせ  
六1206会　、すぐはがれますよ。」「そうとかわかし  
六1224会　ました。」「あげるよ。」「お受けなさい。」「  
六12310会　をわっているんだよ。」「《略》。」「《略》。  
六1246会　さん、さ、あげるよ。」「おあがり。」「りす  
六1261会　こしらえて遊ぼうよ。」「《略》。」「五ひき  
六1281会　。」「もう、いいよ。」「おにも、とんと  
六1299会　いかけてくるんだよ。」「——」「《略》。」「  
六1303会　にしたいんだよ。」「たぬきさんが、  
六1331会　。」「《略》。」「いいよ。おはいり。」「《略》。  
六1337会　ん、ただ遊ぶんだよ。」「《略》。」「《略》。  
六1373手　たちが勝ちましたよ。」「けれども、あなた

六四三(会) ずかなところですよ。安心して、ゆつく  
七一一(会) 手がよごれていますよ。」「略。」「略。  
七一九(会) 。」先生「あぶないよ。川に落ちないよう  
七二一(会) づめがおりてきたよ。」兄「しずかにして  
七二三(会) んの葉をみているよ。」ささやくように、  
七二七(会) ら、にげちゃったよ。」「はるお「ねえ、に  
七二三(会) 話していたんですよ。」母「そう、それも  
七二五(会) わってきたんですよ。」母「はつぱと同じ  
七二六(会) からないためですよ。」兄「あ、そうか。  
七二七(会) ぎになったのですよ。先生は、おおむし  
七二九(会) え、生きていますよ。これから、どうか  
七二八(会) てで遊んでいますよ。」兄「おかあさん。  
七三〇(会) らっていたところよ。きょう、先生にほ  
七三二(会) は、はじめてですよ。もんしろちやうの  
七三四(会) きっと、とびだすよ。さあ、はるお、お  
七三六(会) たって、だめですよ。」むりにわりこも  
七三七(会) 「略。」「だめだよ。とてもはいれない  
七三六(会) 」。四年生の楽しさよ。さくらの花をしら  
七三九(会) えずつている。うまよ、そんな大きななり  
七四〇(会) がわらっていたんだよ。みんな、集まれ、  
七四一(会) 「かた目なんですよ。」旅人は、思いだ  
七四二(会) んしてはいけませんよ。いぬでもねこでも  
七四三(会) 廣がつているのだよ。さあ、みんなそろ  
七四四(会) 長くかかるのですよ。なかなかわれない  
七四五(会) ちやうのたまごだよ。わたしも、一どそ  
七五六(会) ひなには苦労したよ。なにしろ、水をこ  
七五七(会) 教えてやるがいいよ。」「略。」「略。  
七五八(会) つきたくなるんだよ。」年よりのあひる  
七五九(会) になっただけですよ。」といったかぼつ  
七六〇(会) から、氣にいったよ。どうだ、われわれ  
七六一(会) あうかもしれないよ。」「このときである。  
七六二(会) したもうけものだよ。これからはあひる

八〇五 会 だはいえないのだよ。」それで、あひる  
 八二二 会 ことを考えるのだよ。のを鳴らすか、  
 八三三 会 なくなってしまうよ。」「略。」「略。」  
 八五五 会 はさっぱりしますよ。」「略。」「略。」  
 八八六 会 気がくるったのだよ。ねこにきいてこら  
 八八四 会 ぼれてはいけないよ。人がしんせつにし  
 八八五 会 は、喜ぶものですよ。あたかなへやに  
 八八九 会 さ。ほんとうですよ。おまえさんのため  
 八八九 会 思っているのですよ。いやなことをい  
 八八二 会 なそうしたものだよ。まあ、たまごを生  
 八八三 会 、かつておいでよ。」そこで、あひる  
 八九一 会 に新しいのがあるよ。」とさけんだ。す  
 九二五 会 めてつばめをみたよ。」といて喜びま  
 九四九 会 とんでいきましたよ。」と答えました。「  
 九五七 会 とんでいきましたよ。」「略。」たきは、  
 九五七 会 とんでいきましたよ。」「略。」りすは  
 九五七 会 っておいでになるよ。きみは、いちろう  
 九五七 会 うまいようでしたよ。」といました。  
 九五八 会 大学の四年生ですよ。」すると、男は、  
 九五九 会 わしが書いたのだよ。」いちろうは、お  
 九五九 会 さまのぎよしやだよ。」といました。  
 九六四 会 。「大きなことだよ。大きなのいちは  
 九六四 会 ちばんえらいんだよ。わたしがいちはん  
 九六四 会 ちばんえらいんだよ。」「略。」「略。」  
 九六五 会 。「いや、ちがうよ。わたしのほうがよ  
 九六五 会 。せいの高いのだよ。せいの高いことな  
 九六五 会 の高いことなんだよ。」「略。」もうみ  
 九六五 会 あいの強いものだよ。おしあいてきめ  
 九六五 会 いしてきめるんだよ。」もうみんなガヤ  
 九六六 会 「略。」「ちがうよ。大きなことだよ。  
 九六八 会 よ。大きなことだよ。」ガヤガヤ、ガヤ  
 九七〇 会 なんかいりませんよ。」「略。」「略。」

九七六 会 らいく貝つかですよ。」先生について、  
 九八二 会 こは貝ばかりですよ。」口々にこんなこ  
 九八三 会 作ったものらしいよ。ぼく、先生におた  
 九八二 会 「略。」「だめだよ、きみ。」——けん  
 九八七 会 ている。「よせよ、たかぎくん。」四  
 九八四 会 るとも。「三」よせよ。どうしたんだい。  
 九八六 会 りが。「五」へんだよ。ふたりとも——さ  
 九八七 会 げんにして帰ろうよ。ね、やまだくん。  
 九八八 会 たら、ぼくはやるよ。」たかぎ「ぼくだっ  
 九八九 会 「ぼくだってやるよ。さあこい。」ふた  
 九八九 会 四「みともないよ。学校の帰りじゃな  
 九九〇 会 かぎくん、帰ろうよ。」やまだをかこん  
 九九〇 会 くんをつれていけよ。」六「うん。」やま  
 九九〇 会 ぼって、「いこうよ、やまだくん。」や  
 九九一 会 「びっくりしたよ。いっしょに歩いて  
 九九一 会 かぎくん、いこうよ。」友だち、たかぎ  
 九九一 会 なくたつて、いいよ。」たかぎ「でも、あ  
 九九六 会 も、きみはひどいよ。このボタンをみた  
 九九六 会 きみ、もうよそうよ。」やまだ「かにん  
 九九六 会 ぼくもわるかったよ。」たかぎ「いったい  
 九九六 会 「だいいようぶだよ。さあ、いこう。」  
 九九六 会 、「さあ、おるよ。」というあいずを  
 九九六 会 、名高い泉なんだよ。」水は大きなころ  
 九九六 会 んをみたくなったよ。」「略。」「略。」  
 九九六 会 んをたべやしないよ。」「略。」「——」  
 九九六 会 「もう夜ふけですよ。おやすみなさいな  
 九九六 会 のではありませんよ。」おとうさんがい  
 九九六 会 おった青い色ですよ。」と、おとうさん  
 九九六 会 スのことばを話すよ。」と、おとうさん  
 九九六 会 えました。「太郎よ、フランスでは、さ  
 九九六 会 光を写してみますよ。」という先生の声  
 九九六 会 、にじがでているよ。」窓をのぞく子ど

一〇二二 会 「もうじきですよ。」「略。」12 ひと  
 一〇四三 会 眞田眞珠ができたよ。」かれは、五つぶ  
 一〇四九 会 ワ——クツケルヨ——フツテ——ハイ  
 一〇四九 会 ——ハイテクノヨ——ワンワンチャン  
 一〇四九 会 イツテアゲルノヨ——ワンワンタツ  
 一〇四九 会 た。「クツケルヨ」は、足をせなかに  
 一〇五〇 会 かに「くつつけるよ。」というのです。  
 一〇五二 会 テハイテクノヨ」と、おとなびたこ  
 一〇六四 会 せいくらべをしますよ。もう、たけのこは  
 一〇六六 会 どの『ぶす』だよ。」「略。」「略。」  
 一〇七〇 会 そうにみえるのだよ。」「略。」ひきと  
 一〇七八 会 がうれいんだよ。」「略。」「略。」  
 一〇八八 会 すいせんしようよ。きみは、ぼくらの  
 一〇九七 会 船が通っていくよ。あれはどこへいく  
 一一〇九 会 長になるだろうよ。」「略。」「略。」  
 一一一三 会 るにちがいないよ。」「略。」と、ふ  
 一一一七 会 勝ったポートだよ。頼んで乗せてもら  
 一一二三 会 うぶん働けますよ。」元氣よくいった  
 一一二四 会 きてもうけますよ。」金次郎は、自分  
 一一四五 会 まかさなかつた弟よ。大ぜいの目のまえ  
 一一四六 会 へ。」とさけんだ弟よ。まちがったとき、  
 一一五〇 会 やった。「青年よ、大きな望みをもて  
 一一五三 会 車は動かせんよ。」とさけんだ。大  
 一一五五 会 あしの葉のふえよ。すずむし、小む  
 一一五六 会 プリズムのかけよ。火花やほたる、  
 一一五九 会 ばを知っているよ。」と答えた。「略  
 一一五九 会 にくいことばだよ。」あくる日、太郎  
 一一六八 会 おとうさんですよ。」といました。  
 一一七〇 会 た。「ぼくですよ。わかりませんか。  
 一一七〇 会 か。チチロですよ。チチロがいなか  
 一一七〇 会 ってきたんですよ。おかあさんがよこ  
 一一七二 会 んの子ですよ。おとうさんの子ど

十一 71 3 会  
ものチチロですよ。」病人は、身動き  
ずにいるがいいよ。」少年は、もっと  
十一 75 11 会  
かりするんですよ。しつかりするんで  
十一 80 10 会  
かりするんですよ。もうすこしのあい  
十一 80 10 会  
たかわからないよ。これ、チチロ。い  
十一 83 6 会  
ようぶになったよ。それで、おかあさ  
十一 83 9 会  
なかったのですよ。たぶん、遠いとこ  
十一 86 9 会  
いるようですよ。」病人は、やはり  
十一 86 11 会  
心していましたよ。」「略。」「略。」  
十一 19 4 会  
がいつてましたよ。どうしてこのざく  
十一 20 8 会  
なと思いましたが、あれがあれば、ど  
十一 20 11 会  
つしやいましたよ。」(三)「略。」  
十一 21 12 会  
へんな進歩ですよ。いまにもう失敗も  
十一 25 11 会  
まででていたのよ。」「略。」「わたし  
十一 29 8 会  
話がありましたよ。」「略。」「略。」  
十一 43 9 会  
のかもしれないよ。」「略。」「略。」  
十一 44 1 会  
人形だつてあるよ。」雄くんは、人形  
十一 44 4 会  
いるように動くよ。」「略。」「略。」  
十一 44 9 会  
楽しい気がするよ。」「略。」「略。」  
十一 45 9 会  
よくみたものだよ。あのころは影絵も  
十一 46 2 会  
は影絵もあつたよ。」「略。」「略。」  
十一 46 3 会  
は楽しいものだよ。こうえんでも教室  
十一 48 7 会  
つてみるといいよ。」「略。」「略。」  
十一 48 8 会  
せるものがあるよ。」芭蕉は、えんが  
十一 76 5 会  
ルイス生まれだよ。」こう、私がたた  
十一 80 2 会  
なく、日本ですよ。」と、ことに「ジ  
十一 80 7 会  
て考える、「人生よ、長くそこにあれ。  
十一 7 8  
行つてくださいよ……ええ、一ど、三  
十一 38 7 会  
と思つたんですよ。だって、おばさん  
十一 39 8 会  
……でもよかつたよ。みんなで心配して  
十一 40 10 会  
り返して読んだよ。電話番号が書いて  
十一 41 1 会  
……かまわないよ。ぼくがある。な  
十一 41 3 会

十三413会。なんでもあるよ。いっしょにつかえ  
 十三414会。につかえばいいよ……うん、氣のどく  
 十三416会。りしているんだよ。ぼくの学用品を、  
 十三421会。っと早くおいでよ。話がうんとある。  
 十三424会。に……いらないよ。せっかくの記念品  
 十三425会。いたほうがいいよ……うん、うん……  
 十三425会。るのならもうよ……うん……へえ……  
 十三429会。みの顔が見たいよ。きょうはとまるだ  
 十三4210会。しみにしているよ……おじさんやおば  
 十三506。うじに行つて来るよ。ちよつと落ち葉を  
 十三511。まえに行つて来るよ。母うしのそばに立  
 十三514。と、よろけるんだよ。すぐ帰つて来るん  
 十三555会。大きいがあるよ。」といつて、一ま  
 十三568会。にかざつてあるよ。ラファエルは、ウ  
 十三5910会。なりつばな絵だよ。わたしが行つたと  
 十三601会。ときがなかったよ。」ぼくは、それを  
 十三616会。したのはえらいよ。こんなことを考え  
 十四185会。いさんに聞いたよ。」といった。する  
 十四284会。くさん出てくるよ。それから、外來語  
 十四412会。由。」一の人「友よ、友よ。この美しい  
 十四412会。の人「友よ、友よ。この美しい朝をむ  
 十四5311会。あげたからですよ。私は、せっかく花  
 十四543会。かせたからですよ。だから、このかぼ  
 十四583会。なくて、私ですよ。そういうことを考  
 十四5811会。でいけるですよ。それから、空から  
 十四5812会。れだつて水ですよ。あのかわききつた  
 十四601会。なかったのですよ。だから、あのかぼ  
 十四605会。とはいいませんよ。あなたがたは、ど  
 十四798会。むほうがもとだよ。」と教えてくれま  
 十四9812会。がやく小さな星よ、おまえはいつたい  
 十五94会。夜となり。うまよ人間のかさから耳を  
 十五162文韻。し。少年たちよ、野にはたらきて、

十五 16 9 文 顔。少女たちよ、花そだてつつあき  
十五 57 10 金の人物だったよ。そのころ、もう熱  
十五 58 4 金 なした新島襄だよ。」自分から話した  
十五 62 6 金 くの手をだしたよ、よわったなあ。」  
十五 62 12 金 っているですよ。なんとかしなければ  
十五 63 1 金 はあがりませんよ。」「略。」おじさ  
十五 65 1 金 ん、早く歩いてよ。」と命令した。暑  
十五 68 5 金 、満ぼうが来たよ。」と、家の人によ  
十五 68 12 金 んのおへやですよ。あれをごらん。」  
十五 71 1 金 になったですよ。そのペンをにぎっ  
十五 71 2 金 なれたペンですよ。ああ、満ぼうがい  
十五 71 11 金 がまいましたよ。」といって、私を  
十五 72 3 金 、「満ぼうですよ。」と、おばさんは  
十五 75 10 金 よくひきうけたよ。」とささやかれた。  
十五 76 1 金 は、ひきうけたよ。」といったされた。  
十五 81 4 金 ー くだいななよ。平ぼんななよ。平  
十五 81 5 金 れよ。平ぼんななよ。平ぼんにしていだ  
十五 81 6 金 にしていだいななよ。空氣または日光の  
十五 81 8 金 ごとく平ぼんななよ。 — 内村鑑三 —  
十五 83 5 金 『幸福』どもだよ。どうもあんまりあ  
十五 83 9 金 してはいけないよ。ほんの形だけでも  
十五 84 1 金 わるくないんだよ。」ミチル「なんてき  
十五 85 12 金 わいことはなないよ。あいそのいい人た  
十五 86 3 金 けてはいけないよ。でないと、かんじ  
十五 86 6 金 んな、あぶないよ。おまえの氣持をく  
十五 86 7 金 くじいてしまふよ。人というものは、  
十五 86 9 金 ならないものだよ。ていねいに、しか  
十五 88 6 金 ものじゃムですよ。さて、いちばんお  
十五 88 8 金 のはないのですよ。」「はちききそうな  
十五 89 11 金 とつてありますよ。」チルチル「いいえ  
十五 90 12 金 もがありますよ。わたしたちの生活  
十五 91 2 金 るといいのですよ。」チルチル「なにを

十五 92 5 会 光さん、ごらんよ。みんなは、テープ  
十五 92 6 会 すわりこんでるよ。」光「呼び返しなさ  
十五 93 5 会 にも聞えませんか。」さとう おじよう  
十五 93 10 会 りはできませんよ。さあ、みんなで、  
十五 94 3 会 なさい。いまだよ。」チルチルは、「光  
十五 94 11 会 ころにいるのだよ。ちがつたように思  
十五 95 1 会 とができるのだよ。ダイヤモンドの光  
十五 95 2 会 の精を見るのだよ。」「ぼらの目ざめ」  
十五 95 11 会 んな知っているよ」チルチル「なんて  
十五 96 1 会 さんいたものだよ。それを、『ふとっ  
十五 96 2 会 にあわせたのだよ。』チルチル「でもい  
十五 96 6 会 けられないのだよ。」チルチル「小さな  
十五 96 7 会 て行つて会おうよ。」光「むだなことだ  
十五 96 8 会 「むだなことだよ。私たちに用のある  
十五 96 10 会 いるひまはないよ。」小さな「幸福」  
十五 97 3 会 どもの幸福」だよ。」チルチル「話をし  
十五 97 5 会 の。」光「まだだよ。あれは、歌を歌つ  
十五 97 6 会 はできないのだよ。」チルチルはねま  
十五 98 1 会 ずと多いのだよ。」チルチル「どこに  
十五 98 3 会 ことはできないよ。子どもの幸福とい  
十五 98 8 会 てもいけませんよ。もう時間がないの  
十五 98 12 会 間がおしいのだよ。なにしろ、子ども  
十五 100 11 会 たちだけでですよ。ぼくたちは、いつ  
十五 100 12 会 りにいるのですよ。ぼくたちは、あな  
十五 101 3 会 た。思い出したよ。でも、きみたちの  
十五 101 6 会 福のかしらですよ。それから、これは  
十五 101 7 会 幸福」どもですよ。」チルチル「ぼくの  
十五 102 2 会 えているのですよ。でも、ぼくたちが  
十五 105 5 会 るゆかい」ですよ。」せの高い、美し  
十五 105 8 会 きな喜び」ですよ。」チルチル「きみ、  
十五 107 2 会 の兄弟にあったよ。『ふとった幸福』  
十五 108 4 会 きな喜び」ですよ。まあ、どうあな

十五 108 6 会 だ小さすぎますよ。」チルチル「それか  
十五 108 12 会 えているのですよ。その『喜び』は、  
十五 109 12 会 もかけなかったよ。私、きょう、ここ  
十五 110 1 会 はさびしかったよ。ふたりとも、おか  
十五 110 3 会 中にありませんよ。」チルチル「でも、  
十五 110 8 会 とがますのですよ。おまえがにつこり  
十五 110 9 会 なくなるのですよ——うちにいると、  
十五 111 6 会 で織つたのですよ。おまえたちがほお  
十五 112 5 会 物を着ているのよ。けれど、人間には  
十五 112 8 会 お金持なのですよ。もう、びんぼうな  
十五 112 11 会 い喜びなんですよ。それに、おかあさ  
十五 113 2 会 てしまうのですよ。」チルチル「ああ、  
十五 113 7 会 たあとまであるよ。でも、ずっと色が  
十五 113 9 会 流れだすようだよ。ここでは、うちに  
十五 113 11 会 は同じことですよ。まあ、おまえ、見  
十五 114 3 会 まですつくりだよ。でも、うちにいる  
十五 114 6 会 ひまがないのだよ。さあ、これで、お  
十五 114 11 会 は同じことですよ。私も下へ行くので  
十五 114 12 会 下へ行くのですよ。小さな家に帰るの  
十五 115 6 会 家にいるのですよ。おかあさんがこの  
十五 115 7 会 國にいるのですよ。おかあさんに、ふ  
十五 115 11 会 りはありませんよ。どんな子だって、  
十五 115 12 会 てはなりませんよ。でも、おまえたち  
十五 116 7 会 ことがなかったよ。あの人、おまえ  
十五 117 1 会 しているのですよ。」母の愛「あの人、  
十五 117 4 会 、いらつしやいよ。みんな早くいらつ  
十五 117 7 会 くらつしやいよ。『光』がとうとう  
十五 117 12 会 りませんでしたよ。あなた、この私が  
十五 119 12 会 だまっておいでよ、いい子だから。」  
十五 120 8 会 かわいい弟たちよ、妹たちよ。みんな  
十五 120 8 会 たちよ、妹たちよ。みんな元気で、こ  
十五 124 4 会 校門のかしの木よ、母校よ、ばんざい

十五 124 5 会 かの木よ、母校よ、ばんざい。——草  
よ 1 よ  
四 76 3 よ——よみ書きそろばん。  
よあけ〔課名〕2 夜明け  
十四 2 5 四 夜明け……三十八  
十四 38 1 四 夜明け  
よあけ〔夜明〕〔名〕7 よあけ 夜明け  
三 49 5 韻 よあけにばあとまつき色、つゆをふ  
くんでさきました。  
七 4 2 夜明けの風が流れてくる。  
九 147 7 夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりと  
しらみかけてきました。  
十四 38 4 韻 「ああ、聞える、夜明けの音楽が聞え  
る。」  
十四 38 10 韻 夜明けの足音、しずかな夜明け。  
十四 38 10 韻 夜明けの足音、しずかな夜明け。  
十四 39 8 韻 なんとさわやかな夜明けだろう。  
よあし 11 みあしよあし  
よい〔感〕12 よい  
五 89 4 韻 あれは、よいよいよい。  
五 89 4 韻 あれは、よいよいよい。  
五 89 4 韻 あれは、よいよいよい。  
五 89 4 韻 あれは、よいよいよい。  
五 89 5 韻 これは、よいよいよい。  
五 89 5 韻 これは、よいよいよい。  
五 89 5 韻 これは、よいよいよい。  
五 89 5 韻 これは、よいよいよい。  
五 89 8 韻 あれは、よいよいよい。  
五 89 8 韻 あれは、よいよいよい。  
五 89 8 韻 あれは、よいよいよい。  
五 89 8 韻 あれは、よいよいよい。  
五 89 9 韻 これは、よいよいよい。  
五 89 9 韻 これは、よいよいよい。  
五 89 9 韻 これは、よいよいよい。  
五 89 9 韻 これは、よいよいよい。  
よい〔良〕〔形〕102 よい 《イー・ウー・カッー



カローク・サ』『こころよい・すべりよい

- 一228 「の미를 いけば」のところは、げんきよくあるきました。
- 一4810 よにんが むきあって、なかよく こしをかけた。
- 二438 たろうは げんきよくあるきました。
- 二684 「しゅしゅしゅしゅ」を、いっそう げんきよくいう。
- 二713 いきおいよく 走る きもち。
- 三268 「くりぬいて、ふねをつくるがよい。」
- 三331 ぎようぎよく むかいあっています。
- 三469 「それなら、海の水をあびて、ねているがよい。」
- 三488 早く川の水でからだをあらって、がまのほをしいて、その上にねるがよい。
- 四334 男の子は、それをはいて、元氣よくかけていってしまいました。
- 四3910 みんな よかった。
- 四434 がんは、おたがいに いましめあって、ぎようぎよく 空をとびました。
- 四476 あさの 風は、氣もちよく、がんの むなげにあたりました。
- 四564 きず口も だんだん よくなり、
- 四567 ほんとに よかったね、かつちゃん。
- 四635 「ああ、よかった、よかった。」
- 四635 「ああ、よかった、よかった。」
- 四815 星の きれいな この よるを、みんな で なかよく あそびましょう。
- 四1012 ちようど ここを とおりかかって よかったね。
- 四1048 元氣に なって よかったね。
- 四1276 けしきに みとれながら あるいて います

と、どこからか、よいにおいが して きます。

- 五244 そう、それは よかったね。
- 五256 それからは、みんなに こにこして、友だちの ように なかよくな ってきました。
- 五446 世界の 友よ、手をつなぎ、なかよく こんで あそぼうよ。
- 五455 みんな なかよく さきそろうい 世界の 花ぞのかざろうよ。
- 五461 みんな なかよく きらきらと、しずかな 空で 光ろうよ。
- 五675 せめて、おけの一つも、もらって くれ ば よかったのに。
- 五923 それ、このとおり、いせいよくの びるわ、の びるわ。
- 五958 ああ、よかった。
- 六2611 夏の あいだに、こんなに たきぎを あつめて おいて、 よかったね。
- 六1067 なにか よい おりは ないかと思 っていたら、
- 六11010 新しい ことが あたまに うかんだので、もう そんな ことは どうでも よくな ってしまった。
- 六1384 「よかった、よかった。」
- 六1384 「よかった、よかった。」
- 七2911 それは よかったね。
- 七375 人ごみの うすぐらい 中で、さぶろうは、元氣よく こっと、私を みあげました。
- 七419 かる やかな しらべは、朝の 光の ように 氣持よく、車中の すみから すみまで 流れた。
- 七665 よい 天氣。
- 七996 母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭を そろえて、 なかよく にんじんを たべて いました。
- 七997 よいぐあいに、みんな 元氣よく そだ っている ので、安心 しました。

七998 みんな 元氣よく そだ っている ので、

- 八207 いまが 夏だ という ことや、よい 天氣が つづいて いる ことなどを 知ります。
- 八447 王さまは、ご病氣を なさ けて 〈略〉、いくら 手をつく しても、よく おなり になり ません。
- 八944 品種は、あじの よい「農林1ごう」という のだ そうです。
- 八991 よい 天氣で、風も なく あつい 日でした。
- 八1007 根が 横へは るので、廣い ところの ほうが 育ちが よい と思 いました。
- 八1014 みんな で 植えた なえが、いきおい よく 育 っ て いきます。
- 八1086 天氣の よい 日に2日 ほしたら、もみ が よく かわ きました。
- 九2010 協会では、おおいそぎで、その 家をつ ばめ たちの ために ぐあ いよく つくり なお しました。
- 九383 かれ 枝なら ば、だれの 山の 木の 枝でも、お っ て よい ことにな っています。
- 九391 枝ぶりの よい かれ 枝の たくさん ついて いる 高い 木を みつけると、
- 九443 この 色が よい とか、こちらの 色が よい と かい っ て なが めて います。
- 九444 こちらの 色が よい と かい っ て
- 九468 天氣の よい 日は、〈略〉、先生 と みな さん が、ゆかいに 遊ん で いる だろ うと思 います。
- 九709 かねたい ちろう どの と書 いて、こちらを 裁判所 と しますが、よう ござ いますか。
- 九725 やまね こは、さけの 頭で なく て まあ よか った という ふう に、口 早に ぎよし やに い ました。
- 九754 「〈略〉」と 書い て も い い とい えば よか った と、いちろう は と きど き 思 う の だ 。
- 九809 もし、手 あたり しい に や っ て、ぐあ い

よくなにかをほりあてたらしいが、  
九八三(会) それがよさそうだね。

九八二(会) なかなかおりしたら、よくなった。

九八三(会) ふたり、なかよくかたを組みながらさる。

九八四(会) まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、

スキーをするには、ちょうどよかった。

九八五(会) スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくきこえる。

一〇六(会) そのあたりは、フランスの國道にそった景色のよいところですから、

一〇七(会) 学校では、組の友だちとなかよくして、助けあつていきたいと思ひます。

一〇八(会) 眞珠貝にちようどよい海水の温度や、海の深さのことわかり、

一〇九(会) みなさんも、《略》このよい藝術を味わうことを、喜ぶだろうと思ひます。

一〇一〇(会) 狂言は、《略》や、すっぱぬきや、ひやかしなどで、できているといつてもよく、

一〇一一(会) 頼みにくると、氣持よく、物をわけてやつたり、お金をかしてやつたりしました。

一〇一二(会) 元氣よくいった母親も、《略》、夜になると、ため息ばかりついてねむれません。

一〇一三(会) ことしも作はよいだろう。

一〇一四(会) きみがいれば、きつとよくなるから。

一〇一五(会) どうかよくしたいものだ。

一〇一六(会) 医者は一どきてみて、いくらかよくなつたように思ひました。

一〇一七(会) すこしよくなるかと思へば、思ひがけなくまたわるくなつたりで、

一〇一八(会) あなたの声もたいそうよくおなりではありませんか。

一〇一九(会) すんだことをかえりみて、來年はもっと

ともっとよくなつたいと考えることができます。

一〇二〇(会) 冷たい水がいきおいよく流れているあいだに、

一〇二一(会) 天氣のよかつたこと、山へいったこと、弟やいぬをつれていったこと、

一〇二二(会) 移轉をするのに、方角がよいとかわるゐるとかい、

一〇二三(会) 名まえの字画を数えて、運がよいとかわるゐるとかきめたり、

一〇二四(会) よいといつた方角へ移つて困つた人もあれば、

一〇二五(会) わるゐといつた方角へこして、つごうのよくなつた人もある。

一〇二六(会) よいことやわるゐること、《略》ことは、知識をもととして考えなければならぬ。

一〇二七(会) もともとせまい、小さな國ですのに、そのもつともよい土地を失ひました。

一〇二八(会) 親子の発見と努力によつてもたらされた、よい結果は、木材だけにどまりません。

一〇二九(会) 第一、ユートランドの氣候が、そのよい感化を受けました。

一〇三〇(会) かた手には、鉄ぼうをにぎつていて、ときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく。

一〇三一(会) 星がばらまかれて、一つ一つがかがやく美しさは、なんといつたらよからう。

一〇三二(会) うん……よかつたなあ。

一〇三三(会) うん、うん……でもよかつたよ。

一〇三四(会) よかつたね。

一〇三五(会) よかつたなあ……

一〇三六(会) 赤いところが黒くなつたりするので、どうもよくない。

一〇三七(会) 色のあるのは、その点はよいが、すり

がうまくいかないから、また困る。

一〇三八(会) 日本は景色のよい國で、花がたえずさいていたために、

一〇三九(会) 世界全体を見わたすことをわすれていたのは、よくないことでした。

一〇四〇(会) あなたがたの考えひとつで、日本はよくもわるくもなるのです。

一〇四一(会) みんな氣持よく、のびのびと深呼吸をする。

一〇四二(会) ほんのたつた一本のマツチで、火をともすことができたならば、どんなによからうか。

一〇四三(会) チルチルがふと見ると、かれらはみんなとなくよくテーブルについて、

一〇四四(会) その歌を耳にしながら、もつと下級生をかわいがつておけばよかつたなと思つた。

よいしょ(感) 4 よいしょ

一〇四五(会) よいしょ、よいしょ。かけ声をかけながら、みんなでかめをころがします。

一〇四六(会) よいしょ、よいしょ。

一〇四七(会) ひきあげてみよう。よいしょ

七三九(会) 「よいしょ。」

よいわるい 「良悪」(名) 1 よいわるい

一〇四八(会) しおの流れの早さや、えさのよいわるいなども、はつきりしてきた。

よう 「用」(名) 9 用 じよう

五七二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五七三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五七四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五七五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五七六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五七七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五七八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五七九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五八九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

五九九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六〇九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六一九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六二九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六三九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六四九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六五九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六六九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六七九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六八九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

六九九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七〇九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七一九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七二九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三〇(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三一(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三二(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三三(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三四(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三五(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三六(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三七(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三八(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

七三九(会) 「なんの用ですか、おじいさん。」

十二257 そとさえ寒くなければ、ものかげへつれていて、用をたさせるようにしました。  
 十五968 ⑤ 私たちに用のあるものは、どうせこっちを通るのだから。  
 十五1145 ⑤ うちにいるとね、あんまり用が多すぎて、ひまがないのだよ。  
 よう ①「洋」 ↓たいへいよう  
 よう ②「様」 ↓いいよう・しよう・たとえよう・もうしよう  
 よう ③「様」 (形状) 604 ヨウ よう ↓さよう  
 一233 りょうてをはねのようにうごかしまし  
 一236 あてて、らっぱのようにしました。「く  
 一386 こうからころげるようにはしって きま  
 一451 ⑤ 「けんさがあるようですね。」「略。」  
 二642 りょううでを車のようになごかす。(一  
 二714 んとおくになるように、小さくする。  
 三154 ⑤ 「おまえさんのような おろかものは、  
 三203 こくばんにつぎのような ことをおかし  
 三228 空のくもとどくようになりました。  
 三257 ⑤ は、「日のあたるようにするには 切る  
 三278 きって、鳥のとぶように 走るではあり  
 三286 ⑤ たりまえさ。鳥のように 早いふねだか  
 三317 ⑤ 十五だん あがるようになつています  
 三356 ⑤ 六年生が、はこのよう なものをこしら  
 三378 ⑤ からだをつけるようにして、ねてい  
 三392 ⑤ 六 かえり道 海のような 空で、ひばり  
 三408 なくても たべたいようです。かぜがふ  
 三4810 らだは すぐもとのよう になりました。  
 三776 ⑤ どもが あそべるように、光をあげに  
 三814 すると、色リボンのように にじが 空に  
 三888 フ。キーン。こまのよう にまわる。まわ  
 三937 もうせんを したよう なしぼふ、みど

三1027 した。また、小人のようだった おひめさ  
 三1036 ⑤ 人たちは、「光るよう にうつくしいか  
 三1059 かぐやひめのいうようには、だれもす  
 三1093 っと かんがえこむよう になりました。  
 三1179 ふじの山」というよう になりました。  
 四76 火事がおこらないように、また、わるい  
 四78 うきが はやらないように、氣をつけて  
 四92 の町にはめこんだようです。ここは、町  
 四194 ⑤ しには できないように、文も あいて  
 四202 にきめて、つぎのよう な文を書きまし  
 四255 ⑤ んが そばにくるよう な氣がします。  
 四256 ⑤ にすわっているよう です。わたくしは  
 四266 ⑤ は、おひめさまのよう ですね。」たみお  
 四315 といつて、つぎのよう な文を書きまし  
 四368 といつて、つぎのよう な話をしました  
 四415 きちんとそろえたよう になってとんだ  
 四416 がってつりばりのよう になったりしま  
 四418 、空をひっかけるよう になりました。  
 四421 なりました。ゴムのよう にのびる ことも  
 四424 ありました。どのよう に列のかたちを  
 四479 、やがて、まつばのよう なかたちになり  
 四494 石ころか なにかのよう におちていきま  
 四527 一まいの もうふのよう になって、かつ  
 四565 、おいしく たべるよう になりました。「  
 四644 つちゃん、わびるよう にちよこんとあ  
 四734 つけて、あそべるよう にこしらえるこ  
 四745 うさん。は——花のよう にきれいな心。  
 四753 れ。り——りんごのよう な赤いほお。ぬ  
 四769 ーつめは のぼさぬよう に。ね——ねずみ  
 四786 んびつを なめないよう に。て——てん  
 四797 右と左とちがえぬよう に。し——しもの  
 四881 、ちぢまって いるよう です。ちらちら

四943 つからすが とぶように、黒い、こまか  
 四1117 ⑤ 。まるで ゆめのようにだ。」かめ「りゅう  
 四1217 いる、ほそい糸のよう なものは なんて  
 五255 ⑤ めっこをして いるよう だったのに、それ  
 五256 ⑤ こして、友だちのよう になかよくなつて  
 五316 ⑤ これには、きみのよう ないい子どもこ  
 五361 された石炭が、山のよう につまれています  
 五372 のけしきです。このよう な木が、たおれて  
 五466 た。「略。」というよう にきこえた。たち  
 五572 かげんが わからないよう です。「略。」私  
 五583 は、まだみて いたいよう でしたが、やつと  
 五586 ⑤ の中にういて いるよう だ。」「略。」「へ  
 五603 ⑤ こきゅうして いるよう にみえますね。」  
 五638 ⑤ りいたのが、はうよう になり、立つよう  
 五639 ⑤ ようになり、立つよう になり、あるくよ  
 五639 ⑤ うになり、あるくよう になって、いまは  
 五727 ⑤ かね。女王さまのよう なあるきかたも、  
 五793 書きました。つぎのよう な文が、はりださ  
 五799 かげぼうしが、魚のよう におよいでいます  
 五7910 がわきあがつてくるよう です。「略。」  
 五7911 すべりだいをすべるよう に、らくらくと流  
 五823 ⑤ いものを たべないよう になること、夜は  
 五865 ⑤ 「略。」と、うたのよう にふしをつけてよ  
 五944 元氣がなく、死んだよう になっておちてい  
 五956 ひなは、みちがえるよう に元氣がでて、だ  
 五958 ⑤ 、ひとりで とべるよう になるまで、かつ  
 五968 ⑤ わは自由にとべるよう になりましたね。  
 五9610 ⑤ 「まだすこし早いよう だ。自分でえさを  
 五997 と、ひわは、もとのよう に元氣になつて、  
 五999 ⑤ う、元氣になつたよう ですね。」「略。」  
 五1051 ⑤ 略。」と、本をよむよう なひとりごとをい  
 五1052 。ひわは、感心したよう に、いつまでもそ

五105 5 りそのまねができるようになりました。い  
 五106 5 略。」と、せきこむように、さかんに鳴き  
 六4 5 や、みたこともないような物が、ごたごた  
 六6 11 会 だ自分だけがこのように小さくて、なん  
 六9 5 会 それでは、自分のようなものでも、役に  
 六11 6 と、いままで死んだようになっていたかい  
 六14 11 した。木の葉は船のようになって、ありの  
 六31 5 しい風。いねが波のようにゆれる。2 か  
 六32 8 。糸の切れたこのように、空にすいこま  
 六36 6 、あつ。」19 おれるようにあたまを地につ  
 六37 6 さきから、雨だれのようなみだがこぼれ  
 六41 3 だから、つむじ風のように、列をつくつた  
 六43 1 て、町の上を列車のようにとぶつばめのむ  
 六43 7 いく。それをつつむようにして日がくれる  
 六49 9 楽しいことがあるような、ああ、さわ  
 六52 9 いそぎでとんでいくようにもみえます。「へ  
 六56 8 して、やつとつぎのようなものができあが  
 六57 7 ます。みんなが喜ぶようなことを書きます  
 六60 5 会 トガ——七 アルヨウナ——五 アアサ  
 六66 6 を書くのです。そのようにして、どこまで  
 六69 6 れいに、むだのないようにへんしゅうする  
 六79 6 会 しょう。息と同じように、あなたがねむ  
 六79 11 たいへん近いもののように思われました。  
 六93 2 会 海のごてんへいくようにと教えてくださ  
 六93 7 会 ここへよび集めるように。」女「はい。」  
 六100 7 て、ついそこにあるようにみえるではない  
 六101 8 とまいて、動かないようにした。これで、  
 六103 7 かあさんをひっぱるようにして、つれてき  
 六105 1 は、「リイサン」のようだ。さつきも、「へ  
 六106 2 いうことばを、そのようにいったことがあ  
 六108 3 発音ができなくなるような音は、もともと  
 六108 5 とはなから声のであるような音にちがいない

六108 7 まつても発音できるような音は、はなから  
 六109 7 なから声がでているような気がする。そこ  
 六109 8 なから息がもれないようにして、「ナ」、「  
 六109 11 「ダ」といつているようだ。弟は、こんな  
 六111 8 から声がぬけているようだ。ねんのために  
 六135 7 しかさんとは、風のように走りだしました  
 六137 1 切りかぶに、つぎのようなことが、赤いク  
 六139 8 へ。」と、われがねのような声をたてました  
 六141 2 それこそかみなりのような声がひびきまし  
 七5 11 いちどに花がさいたようだ。あちこちのま  
 七8 5 てくる。しおがひくように、子どもたちが  
 七9 6 会 ラビアンナイトのように、いろいろな話  
 七10 6 会 とは、渡しもりのようなものだ。」しゅ  
 七12 6 おのつるがまきつくように立ててある、竹  
 七13 6 略。」「へ略。」「このようなきの「手」は  
 七13 10 まなはたらきをするように、「手」という  
 七14 6 「略。」「手にとるようによくわかる。」  
 七15 8 だの名まえに、このような、いろいろなつ  
 七19 1 会 よ。川に落ちないように。」男の子三こ  
 七22 4 いるよ。」「ささやくように、はるお」にい  
 七24 6 会 の。」「兄」かれないようににさ。」「はるお感  
 七24 7 会 」「はるお感心したようにに、「へ略。」「兄」  
 七27 4 会 な自分でしらべると、おっしゃっ  
 七29 4 会 轉車のチューブのようにふわふわした、  
 七29 8 会 れみのをきているようなものだと思つた  
 七31 9 会 みどりをとかしたような、美しい羽です  
 七35 5 、さぶろうをかばうように両手をつつぱり  
 七36 5 うぞぶじにつきますようにと、心の中でい  
 七37 1 らだがらくになったような気がしました。  
 七39 11 をメデシンボールのように送られていくう  
 七41 2 まみれたみつばちのようになって、汽車で  
 七41 9 しらべは、朝の光のように氣持よく、車中

七47 8 。文章は、心の鏡のようなものです。心が  
 七52 8 が勝った。うれしいような、すまないよう  
 七52 8 いような、すまないような氣持がした。第  
 七55 8 じりけのない宝石のようなものであります  
 七60 2 考え考え歩きまわるような、大きなあり。  
 七70 6 やが深いから、遠いような、近いような、  
 七70 7 、遠いような、近いような、月明かりだ。  
 七71 3 もうまかたも、同じように。ぬまの上を、  
 七72 3 りをして、子どものように、からだまであ  
 七75 11 会 さがしておいでのようにだ——「甲」そ  
 七77 1 「旅人は、思いだすようなふうをして、旅  
 七88 5 じんをやったときのよう、喜んでたばま  
 七90 2 、ねこが顔をあらうように、うさぎも、ま  
 七91 4 く、こくるいをやるようにして、ぬれた草  
 七91 5 ぬれた草はやらぬように注意しています  
 七95 7 の方に、わらが果のようになふくらんでいて  
 七95 8 、その中に、わたのようなふわふわした毛  
 八4 9 私のうちにかわれるようになったかといえ  
 八6 6 へもかたへもとまるようになったばかりか  
 八6 7 めしつづもつづくようになりました。そ  
 八7 8 福を予言してくれるようです。思わずおき  
 八8 9 身、國々のなまりのようなことばをもつて  
 八9 5 ところはないというように——庭さきにい  
 八9 9 もおくびょうもののようにも思えましよう  
 八14 10 どある、白いうじのようなうちゅうが、  
 八16 10 のちぶさにすがつたようなもので、とりつ  
 八17 5 ちちをのむのと同じように、しぜんそな  
 八17 9 よわよわしいうじのようなかたちをしてい  
 八23 1 虫はぐつとそり返るようになり、頭をうし  
 八24 10 にぎやかな音楽会のようになりました。  
 八27 6 して、なにかさがすようになさいました。  
 八33 3 さなりあつて、あのように、ぼうつとした

八三三 うつとした銀の川のような光をはなっている。  
 八三三 な光をはなっているようにみえるのです。  
 八三九 八、たしかにそのようになるでしょう。  
 八四三 ツをもらってくるように。」と、おいしい  
 八五三 、まずしいこじきのようななりをしました  
 八五二 、まずしいこじきのように鳴きました。「  
 八五二 しい声で追いたてたように顔をしかめて、  
 八五二 。まずしいこじきのようなものがきて、に  
 八五一 、まずしいこじきのようなものが、おもて  
 八五三 がきたとは知らないようでしたが、なさけ  
 八五三 みると、みちがえるように、まっすぐな、  
 八五五 すると、おもちゃのように小さな汽車が、  
 八五九 青い空がすきとおるようになんていふ。飛  
 八六四 思いきってはいるようになんていふことが  
 八六四 。人にふまれないように、それからねこ  
 八六四 ほかのものと同じようになんていふ、いや  
 八七四 風を受けた船のほのようになんていふくら  
 八七六 木のあいだから雲のようになんていふ。  
 八七三 、それを自分の子のようにかわいがった。  
 八八二 八、いやなことをいうようだが、それは、い  
 八八六 子は、水の上を車のようになんていふまわり  
 八八五 ああ、鳥のもっているような美しさをもった  
 八八五 こおってしまわないように、水の中をおよ  
 八八五 こおってしまわないように、いつも足をつ  
 八八九 八、いこう。私のようになんていふもの  
 八九五 のほうから、はりのようにほそい、白いめ  
 八九五 にほそい、白いめのようなものがでました  
 八九六 まって、むらぬいようになんていふ。ひ  
 八九八 えが朝風にゆられるようになんていふ。黄  
 八九五 よく根をはって育つように、小石をひろい  
 八九六 から、水がきれいなように氣をつけましょ

八四二 八、がねでみると、毛のようなのがたくさん  
 八四二 に、日がよくあたるようにきちんとかけま  
 八四二 をあらわすのと同じように、音の組みあわ  
 八四二 つくりあげると同じように、ことばの組み  
 八四二 波の音をきいているようであつた。つぎに  
 八四二 と降りしきっているような氣がした。ただ  
 八四二 ら相談でもしているようにみえます。まも  
 八四二 ッパのつばめも同じように、ヨーロッパの  
 八四二 は、それから毎日のように、アルプスをこ  
 八四二 くにいった油絵のように美しくかがやい  
 八四二 うで、たこの足のようになんていふ。たこの足のよ  
 八四二 の実が、こぼれたように雑草の中にあり  
 八四二 雨の降ったあとのようにぬれていきます。  
 八四二 けて、ひつかけるようにして、下から力  
 八四二 おぼろで子どものように、かきの葉を一  
 八四二 セドリック少年のようになんていふ、子どものころ  
 八四二 とに注意を向けるようになんていふ。わかれ  
 八四二 いまできたばかりのようになんていふ。きれいに  
 八四二 そこから水がふえるように鳴つてとびだし  
 八四二 たきは、またものようにふえをふきつづ  
 八四二 どく曲がつてやぎのようですし、ことに、  
 八四二 さきは、しゃもじのようになんていふ。わた  
 八四二 はなかなかうまいようですし。」とい  
 八四二 んで、顔じゅう口のようになんていふ。にたにた  
 八四二 黄色なじんばおりのような物を着て、みど  
 八四二 チパチしおのはねるような音をききました  
 八四二 、きたな。ありのようになんていふ。お  
 八四二 が日あたりがいいようだから、そこんと  
 八四二 はちの巣をついたようで、わけがわから  
 八四二 は、なるほどというようになんていふ。そ  
 八四二 て、頭のつぶれたようなやつが、いちば

九四一 ややぶが、けむりのようにぐらぐらゆれま  
 九四一 いって、待っているようにとおっしゃった  
 九四一 かまが、おくれないうちに歩いていきまし  
 九四一 物、ただのわり石のようになんていふ。た  
 九四一 、ただのわり石のようになんていふ。物も  
 九四一 のかけらがとるような物ですが、これ  
 九四一 たかぎの顔をみないようになんていふ。「略」  
 九四一 あ、あ、いこになるようになんていふ。もう一つな  
 九四一 の方から追いたてたようになんていふ。百五  
 九四一 かつそうをしようだ。ふもとへきて  
 九四一 がきながら、小鳥のようになんていふ。と  
 九四一 てきたかと思われようになんていふ。と  
 九四一 うまかった。あまいようになんていふ。す  
 九四一 いようになんていふ。すずしいようになんていふ。  
 九四一 、氣の晴れ晴れするようになんていふ。略  
 九四一 帰道で、父は次のような話をしてくれ  
 九四一 味わったこともないようになんていふ。ふしぎな味  
 九四一 つきりと感じられるようになんていふ。「略」  
 九四一 た。風が思ひだしたようになんていふ。と  
 九四一 とが、ゆめでもみるように思ひだされて  
 九四一 らの花がとんでいくようになんていふ。くもは、と  
 九四一 音楽がきこえてくるようだ。どこからきこ  
 九四一 んの顔をのぞきこむようになんていふ。こ  
 九四一 いました。みあげるように高いプラタナス  
 九四一 黄色い葉が、毎日のように落ちました。三  
 九四一 うさんのそばへくるようになんていふ。ひ  
 九四一 おとうさんにくれるようになんていふ。プ  
 九四一 岸には、手ぬぐいのようになんていふ。か  
 九四一 さを、思ひうかべるようになんていふ。フ  
 九四一 おまえたに話すようなことばが、思  
 九四一 のきから、たきのように落ちる雨水。そ  
 九四一 かたか、なぜ、このようなあまかたをしな

十 30 4 うと思います。このように、なんでも、そ  
 十 30 4 ことをしらべていくような心がけを、もち  
 十 30 11 めいわくをかけないようにしたいと考えま  
 十 31 2 の中が明かるくなるように、できないもの  
 十 31 4 な楽しい氣持になるようにできないもので  
 十 31 6 のわる口をいわないようにしたいし、自分  
 十 31 12 どうでもいいというような、無責任な、ひ  
 十 32 3 あることを、ほころぶようになりたいもので  
 十 33 6 たが、佐吉のもえるような研究熱は、どう  
 十 34 1 おかれたい。いまのようなぬのの織りかた  
 十 34 8 、機械の力で動かすようにしたかった。機  
 十 35 3 機械は、生きもののよう動いていた。か  
 十 35 9 てみた。だが、思うように動くものは、な  
 十 37 2 、國內につかわれるようになったが、かれ  
 十 38 7 珠母貝の中に、砂のような小さなものがい  
 十 40 7 ざけり、そのゆめのような考えをわらった  
 十 41 8 ましとさえのしるようになった。うめは  
 十 42 8 思いどおりに取れるようになったので、ひ  
 十 42 9 ともかく、世にだすようになった。この光  
 十 43 9 それこそ氣ちがいのようになって、死目を  
 十 48 6 ので、妹の氣のすむようにして、つれてい  
 十 50 9 げて、せなかをかくようなかつこうをしま  
 十 50 10 いぬは、くしゃみのようなことをして、「  
 十 51 10 かないので、たべるように、「オハナシシ  
 十 56 3 新しく成長していくように、私も、ここで  
 十 66 12 ろしいどくで、死ぬようなことになっては  
 十 67 2 へは、顔も向けられないようになってしま  
 十 68 1 は、それをあいつのようにして、ぬき足さ  
 十 67 6 べつに用もないようだが、ボートの向  
 十 113 3 われの心をあらうようにきこえる。おり  
 十 113 7 旅してきた旅人のような氣持のする日だ  
 十 119 12 のくらしにも困るようになってしまった。し

十 20 1 て、身代をもとのようにしたいものだ  
 十 25 1 人、わかれたいようにしましようね。  
 十 30 3 からうやまわれるようになりまし  
 十 44 4 よに呼ばれているようです。みんな読み  
 十 44 9 、自分が呼ばれたような氣がしました。  
 十 45 8 いて、さざげ持つようにしながら、席に  
 十 49 3 おとうさんと同じように、ちちうしをか  
 十 49 10 さんに、負けないように働きます。日本  
 十 52 8 歯ざしりでもするように車の音をたてて  
 十 54 1 車の中に、つぎのようなひょう語がかか  
 十 55 4 たらんとうむしのように、みずすまし  
 十 55 5 みずすましのようになつ、一つ一つは  
 十 58 8 すらすらといえるようになった。太郎は  
 十 59 8 、「やさしいようだが、なかなかい  
 十 61 2 な、ぬれねずみのようになって家に帰っ  
 十 62 6 いる。おまえのようになつて家に帰っ  
 十 62 7 すると命を失うようなあぶないときで  
 十 65 2 ころへつれていくようにといいました。  
 十 66 4 、ふと思いだしたように、「略」とい  
 十 68 1 。中には、死人のようにみえる者もあれ  
 十 68 2 びつくりでもしたように、大きくみ開い  
 十 68 3 。また、子どものようにうなづいてる者  
 十 69 9 いくらかわかつたようでしたが、くちび  
 十 70 4 つくのもやつつのようでした。「略」。  
 十 76 7 したが、わかつたようなうすはしませ  
 十 77 2 かりかけでもしたようにみえました。少  
 十 77 3 少年のいたわるような声のひびきをき  
 十 77 3 きくと、感謝するような色が、そのひと  
 十 77 4 とのあいだうかぶようにみえました。そ  
 十 77 5 いおうとでもするように、すこしくちび  
 十 77 8 な看護人をさがすようにみえました。医  
 十 77 9 くらからよくなったように思うといいまし

十 77 11 うかんだのをみたような氣がしました。  
 十 78 5 で、しっかりとするようにと病人をはげま  
 十 78 8 をかたむけているようにみえたからです  
 十 79 4 んで、心を休めるような希望と、胸をこ  
 十 79 5 、胸をこおらせるような失望とのあいだ  
 十 80 3 のがわかりかけるようにみえたことで  
 十 80 5 なければ飲まないようになりまし。ま  
 十 80 6 うとでもしているように、いくどもいく  
 十 86 4 「あなたと同じように、いなかのかた  
 十 87 11 病人はほんとにようにみえました。で  
 十 88 4 り、しっかりとするようにとはげましたり  
 十 89 10 手をにぎりしめたような氣がしました。  
 十 118 1 とうにおかしいようでしたけれど――  
 十 119 1 ずになつていくようです。「略」。  
 十 120 2 することができるようになりました。「  
 十 120 6 がすこしもないようになつたのです。  
 十 120 7 けれども、思うようにいきません。」「  
 十 120 10 しはまた、あのような絵のぐがあらば  
 十 121 6 たくさんつけるようになりたいもので  
 十 124 9 とかして早く歩くようにしてやりたいも  
 十 124 11 ん。早く、いえるようにしてやりたいも  
 十 125 7 て、用をたさるるようになりました。はじ  
 十 125 10 わたしに知らせるようになってました。「へ  
 十 125 12 失敗もなくするようにしてみせます。  
 十 127 4 。たいへんおそいようですが、いざりだ  
 十 127 6 いていっているというように、すこしもゆだ  
 十 129 4 三足四足と歩けるようになりました。あ  
 十 130 4 ろ白いぬをかうようになりましたが、  
 十 132 2 した。私は、どのようなおどろきとふし  
 十 134 2 、さるの人まねのように指を動かすだけ  
 十 137 5 たものを思ひだすような、めばえてこよ  
 十 137 5 はたらきといったようなあるふしぎなも

十二 38 1 もって動いているように感じはじめまし  
十二 38 3 で、すべてをみるようになったからです  
十二 39 9 す。よんでわかるように、ケラーは、め  
十二 40 12 いて、学校にいくようになりました。も  
十二 41 2 ふたりがひとりのようになって、勉強を  
十二 41 7 ば」をとりかわすようになりました。ケ  
十二 44 9 ㊦ がはいっているように動くよ。」「略  
十二 45 3 ㊦ り鼻がてんぐのようにとびだすことも  
十二 45 9 ㊦ 別世界にいったような楽しい気がする  
十二 54 1 顔や頭がみえないようにする。3 人  
十二 54 2 形がかたむかないように、話すときは人  
十二 56 4 みると、よくにたようなのが、あちらこ  
十二 58 12 もう田畑を荒らすようなことはなくなっ  
十二 62 1 かれもかりにいくようになった。その中  
十二 66 1 ない。おおづなのようなたくましい根が  
十二 66 5 細い根が、つなのようにからみあって、  
十二 67 4 はは、いぬの歯のようにとがって、一つ  
十二 68 6 い。糸のこは糸のように細く、ひきまわ  
十二 70 8 あげたい。下男のように住みこんであげ  
十二 71 3 りしました。このようにして芭蕉につか  
十二 75 3 雪にうずめられたようにならずかざした  
十二 76 10 ふたりは子どものようにわらいました。  
十二 80 3 私がたたみかけるようにたずねたとき、  
十二 81 7 ました。火のでるようなはげしい試合が  
十二 83 5 人たちは、われるようなはく手をふたり  
十二 83 12 もった生きもののようになって、はねと  
十二 84 2 両選手はとぶ鳥のようにかけまわりまし  
十二 84 6 、まほうつかいのようになって、大きな  
十二 84 10 なおって、電光のようなボールをうちだ  
十二 86 10 ばらく、あらしのようなはく手をおしみ  
十二 88 8 それによくかなうようにしなくてはなら  
十二 89 3 ようすによくあうように、氣をつけて話

十二 90 2 をして、おうむのようになえていたの  
十二 91 10 ない。秋子も同じように、「略。」と書  
十二 93 1 、だれにでも同じようにわかり、同じよ  
十二 93 1 うにわかり、同じように通じる力をもっ  
十二 93 6 み手によくわかるようにくふうすること  
十二 94 5 略。」「このようにままとると、だ  
十二 98 2 くさんたべていたようです。このほか魚  
十二 98 8 たべました。このように、古い時代のこ  
十二 103 6 スワーズパズルのようにならんだ文字が  
十二 108 11 面は、生きものののように、いろいろな表  
十二 110 2 とで、日本はこのような心をとりにいれ  
十二 114 2 んだん小さくなるような氣がします。  
十二 115 2 終りました。このような歩みをたどって  
十二 118 2 どもたちのむねのうちに。その、まだ目  
十二 118 2 に見えぬかすみのようにたなびいている  
十二 118 2 りとして、ゆめのうちに、眞理のよう  
十二 118 2 のように、眞理のうちに、白雲をかたに  
十二 118 2 めしべにつかないようなくふうと、いま  
十二 118 2 ま一つ、よくつくようなくふうをして、  
十二 118 2 ないことを、知るようなものである。知  
十二 118 2 えられない。このように、道理にあわな  
十二 118 2 とり去ってしまいうようになれば、日本の  
十二 118 2 西へまわっているように思われます。こ  
十二 118 2 てもかたづかないようなことが、目に  
十二 118 2 金星・木星などのような星は、太陽のま  
十二 118 2 、火星などと同じように、太陽のまわり  
十二 118 2 みの林が見られるようになりました。ダ  
十二 118 2 、ついに、今日のような平和國家をうち  
十二 118 2 ンが、あみの目のように通じている。ホ  
十二 118 2 一本のトンネルのようになって、どこま  
十二 118 2 ったところもないような、このホートン  
十二 118 2 、土でおだんごのようなものをこしらえ

十三 28 11 、大きな毛ぬきのようなものを持ち、か  
十三 29 1 「と、あとをひくようなひびきをする。  
十三 29 5 でんでんたいこのような、ブリキのつづ  
十三 29 6 るやかな、はずむような音をたてる。ど  
十三 31 2 、ジャツ」というように聞える。これ  
十三 32 2 、ゆめの中の声のように思われる。春は  
十三 32 11 うと、トンネルのようなホートンには、  
十三 32 12 びきわたる。このように、いろいろなも  
十三 33 11 、なんきんだまのような星がばらまかれ  
十三 34 12 だ美しいかざりのような氣持で、れんを  
十三 42 7 ㊦ 。手紙がだせるようになったら、いっ  
十三 43 3 のことばを味わうように、生きて帰っ  
十三 45 9 りようすがわかるように、くふうします  
十三 45 10 せなかを向けないように、顔の表情がよ  
十三 45 10 表情がよく見えるようにすることも、た  
十三 46 6 。ああ、ヨットのようだ。チューリッ  
十三 52 2 て老いても、そのように。そうでなけれ  
十三 52 8 、むすばれていくように。七 ある画  
十三 57 7 絵を目の前に見るようなうすさをなさい  
十四 10 3 ㊦ 。くぎへかけるようにしたほうがいい  
十四 13 1 ㊦ 小さなめもりのようなものがついてい  
十四 15 3 ㊦ おしてくださるようになりたいいま  
十四 15 8 ㊦ さんのおすきなようになさってください  
十四 17 4 ㊦ が、目に見えるような氣がします。ど  
十四 18 3 ㊦ さんが、思いだしたように、「略。」とい  
十四 20 7 ㊦ そうして、つぎのようなことばはその一  
十四 27 8 ㊦ からの日本語のように思われてきたの  
十四 28 7 ㊦ な樂しきをもったような氣持になって、  
十四 29 3 ㊦ まってあるもののように聞えるかもしれ  
十四 29 8 ㊦ もつていなかったようです。ですから、  
十四 31 1 ㊦ 國でもあるかのように考えて、世界全  
十四 32 1 ㊦ たがたに星を見るようにすすめましたが

十四 35 12 界にひきこまれるような気がします。ま  
 十四 37 8 くしゃくしゃするようなことがあったら  
 十四 45 9 のまれてしまったように、死のしずけさ  
 十四 46 4 つともちがわないうな歌いかたです。  
 十四 46 12 り、よみがえったような氣持になりました。  
 十四 47 4 くは、自分と同じように、船からなげだ  
 十四 48 12 が力をおとさないように、寒さに氣を失  
 十四 49 1 ら手をはなさないように、こうして元氣  
 十四 50 1 がおよいで行ったように、やがて、一そ  
 十四 50 10 耳にひびいてくるように感じられるでは  
 十四 52 10 、「十キロもあるような大きなかぼちゃ  
 十四 53 7 、「ごぞんじないようですね。それは、  
 十四 54 9 、「みなさんのように、明かるい地の  
 十四 56 1 、「んや、根さんのような、特別なはたら  
 十四 56 7 、「ころがおすきなようですが、そこへつ  
 十四 57 1 、「がたがたかれないようにしてあげたので  
 十四 57 9 、「としか考えないようですが、もし、私  
 十四 58 9 、「ずいぶんかたいようですが、やっぱり  
 十四 62 5 、「く、ふしぎもないようですが、よく氣を  
 十四 63 3 、「ど雲やきりと同じようなものです。この  
 十四 63 7 、「げの中に、にじのような、赤や青の色が  
 十四 63 9 、「見えるのと、にたようなものです。この  
 十四 64 5 、「んこまかいちりのようなものです。空氣  
 十四 64 8 、「まいった、ちりのようなものばかりがの  
 十四 64 10 、「りが廣がついているように見えるそうです  
 十四 67 7 、「ようどたつまきのようなものになって、  
 十四 67 10 、「きでおこるうずのようなもので、もっと  
 十四 69 1 、「たは、いまいったようなばあいばかりで  
 十四 69 4 、「ったく関係のないようなことがらが、原  
 十四 70 1 、「不規則なようなようになって、ゆるや  
 十四 71 6 、「水の流れと、同じようなものになるわけ  
 十四 72 8 、「に、その光が同じようにならず、むらに

十四 72 9 、「に、さきにいったようなものが見える  
 十四 73 8 、「のついた、きりのようなものがひと皮か  
 十四 73 9 、「ちようどさけめのようにたて横にやぶれ  
 十四 73 11 、「くわかつていないようです。しかし、そ  
 十四 74 8 、「がおこるかというようなことにも関係し  
 十四 75 5 、「と畑とのさかいのようなどころですと、  
 十四 76 2 、「です。これと同じような氣流のじゅんか  
 十四 76 6 、「ます。これと同じようなことが、山腹と  
 十四 79 12 、「数の九九と、にたようなものだと思います  
 十四 80 8 、「えるうちに、あのような、短くて調子の  
 十四 84 7 、「なばあいに、どのようなけつしようにな  
 十四 84 10 、「って、よくわかるようにしくんだもので  
 十四 85 1 、「が、どこで、どのようにしてできたか、  
 十四 85 9 、「ったものだ。このように、二つの映画は  
 十四 86 7 、「場面が発見されるように思われる。たと  
 十四 89 8 、「て、文章は、どのように書きあらわさ  
 十四 89 9 、「らわされる。どのような文章でも、読む  
 十四 93 2 、「を、花かんむりのようにくまどった。け  
 十四 95 6 、「る大きなほのおのように思われた。これ  
 十四 96 1 、「めを喜びむかえるようにおどりあがった  
 十四 96 9 、「は、かべがきぬのようになうすくなって、  
 十四 96 12 、「とができた。雪のようにまっ白なぬのを  
 十四 98 10 、「って、大空の星のようにかがやくのを見  
 十四 100 1 、「さんは、いつものように、やさしく、し  
 十四 102 1 、「おそべへ行くかのようにのぼって行った  
 十五 21 2 、「白い雲のわきたつように、すべり出るま  
 十五 21 5 、「少女の立っているようなけわしい山が、  
 十五 21 6 、「空の下に、わらうようにそびえているの  
 十五 21 7 、「家族は、いつものように散歩に出ました  
 十五 22 2 、「れを追いでもするようにな、とかく家庭教  
 十五 22 7 、「らしがふき起ったような音がしました。  
 十五 22 11 、「三メートルもあるような羽をひろげた大

十五 23 3 、「草の上へひれふすように、思わずたおれ  
 十五 24 1 、「の腹をしめつけるようにしています。だ  
 十五 25 3 、「だが下へ落ちないように、その上帯をか  
 十五 25 12 、「、下の方へ落ちるように舞いおりて行き  
 十五 26 11 、「からさがしているような氣持で、少年は  
 十五 27 10 、「ずんずん、落ちるように、下へ下へとお  
 十五 27 12 、「黒い点かなにかのようには見えなくな  
 十五 28 2 、「の重荷をふり落すように、ある岩角のす  
 十五 28 12 、「後へひっくり返すようにするいきおいで  
 十五 29 11 、「出てくる英ゆうのように、このただけ  
 十五 30 4 、「白い下羽が、綿のように一面にちりまし  
 十五 30 6 、「きな風をまき起すようにして、少年の周  
 十五 30 9 、「の子を後にかばうようにして、すこしあ  
 十五 31 11 、「鳥の白い羽が雪のようにとびちりました  
 十五 32 10 、「は、空中をころぶように、くるくる舞い  
 十五 33 10 、「ほめたたえているようでした。三 文  
 十五 36 2 、「のとなり、今日のようになったといわれ  
 十五 36 4 、「字は、いまいったように、はじめ、事物  
 十五 37 12 、「を「カイ」というようにもとの中國の発  
 十五 38 4 、「こともした。このように、日本では一つ  
 十五 39 5 、「らがなを作りだすようになった。かたか  
 十五 39 7 、「「カ」などと書くようになった。ひらが  
 十五 39 8 、「がなはかたかなのように漢字の一部分を  
 十五 39 9 、「「は「仁」というように、漢字の全体を  
 十五 40 2 、「つすことができるようになった。あの有  
 十五 41 1 、「は、まえにいったように、その大もとを  
 十五 41 5 、「に移って、現在のようになつた。ロ  
 十五 42 2 、「人々に親しまれるようになるであらう。  
 十五 44 9 、「焼物がおすきのようですが、あなたは  
 十五 45 7 、「道をたどっていくようになった。ハギン  
 十五 48 4 、「法が他にもれないように、保護されてい  
 十五 49 6 、「た。しかし、このような美術品を買い求



十五497 術品を買い求めるようなものは、ほとんど  
十五5211 ド博士をたずねるようにおっしゃった  
十五554 争中で費用が思うようにつかえないこと  
十五556 。そうしてつぎのように語った。「まあ、  
十五557 会 ねもむだになるようなわけだが、それ  
十五558 会 つももっているようだが、その一つに  
十五572 会 同志社をわが子のように、だいに胸に  
十五603 だ。おじさんのようにきれいになった  
十五6311 会 り、すぐ、小鳥のようにとびだした。「へ  
十五642 目からは、たまのようなみだが流れ出  
十五679 れでたけというように、しゅもくがそ  
十五681 くては見えないようにおなりになった  
十五7012 会 おぼさんは、昔のように私をひざにのせ  
十五718 つきあいができるようになったのは、わ  
十五802 ろがっていきますように。そう思いなが  
十五809 ずかしく思われるようになることをいの  
十五8012 でできた大廣間のようなものがあらわれ  
十五822 、こつちを見たようだ。」とうとう  
十五859 会 福』で、なしのようなおなかをしてい  
十五876 会 で、みんな魚のようにつんぽだし、『  
十五881 会 は、こうもりのように目が見えない。  
十五882 会 ったことはないようです。というのは  
十五9010 会 はや目がまわるようだ。」チルチル「そ  
十五916 会 は、「光」のいうように、ダイヤモンド  
十五944 だよ。ちがったように思うのは目のせ  
十五9411 会 かの神さまのような、金びかの着物  
十五103 会 『の兄弟ぶんのようなのですからね  
十五1045 会 わんぱくこぞうのようなのが、聞きとれ  
十五10410 りして氣ちがいのようにはねまわります  
十五1051 、美しい、天使のようすがたをした者  
十五1056 幸』そのもののように、みじめなもの  
十五1068 会

十五1138 会 ら光が流れだすようだよ。ここでは、  
十五1139 会 ちにいるときのようにな、しごとをしな  
十五1152 会 から、どういうように私を見なければ  
十五1224 やった。うれしいような、楽しいような  
十五1224 会 いろいろな、楽しいような、悲しいような  
十五1224 会 いろいろな、悲しいような氣持をだいて、  
十五1224 会 よう（終助）7 よう  
二412 会 ぼく、たろうだよ。  
二413 会 たらうだよ。  
二414 会 ぼくがたらうだよ。  
二415 会 たらうだよ。  
二432 会 ぼくがわるかったよう。  
二433 会 わるかったよう。  
二706 会 「はあい、ここですよ。」  
よう（助動）165 よう《ヨウ》  
一439 会 いそいででかけよう。  
二309 会 それでは、わたしがかぞえてみよう。  
二312 会 こんどは、ぼくがかぞえてみよう。  
二499 会 それから、じろうは、りんごをたべよう  
とします。  
二508 会 「あげよう。」  
二703 会 よんでみよう。  
二125 会 「では、わたしがはなしをしてみよ  
う。」  
二1610 会 この はちを わたくしにとどけようと  
して、手をこまでのぼしたのです。  
二253 会 この 木を切ることにしよう。  
二287 会 鳥のように早いふねだから、はやとり  
という 名をつけよう。  
三437 会 きみの なかまと ぼくの なかまと、  
どっちが多いか、くらべてみようではないか。  
三592 会 「ねえ、大きな 木の ところまでの

ぼって みよう。」  
三594 会 「いや、みずうみへ おりようよ。」  
三665 会 「どっちへいったら いいか、風にき  
いてみようよ。」  
三695 会 「はじめに もりへ いって、それから  
たきへ であうね。」  
三7010 会 「なんだかつまんでみよう。」  
三717 会 「わたしがはきだしてあげよう。」  
三1008 会 「どれ、ひとしごとしよう。」  
三1082 会 では、つれていくのはやめよう。  
三1147 会 天人が はごろもを きせようとすると、  
かぐやひめは、「略。」といって、  
四214 会 ねこの わたくしは、どの ねずみを つ  
かまえようかと 考えました。  
四271 会 きみの だいすきな きゅうりを あげよ  
う。  
四271 会 ねぎも あげよう。  
四275 会 あしたの あさも、また かけっこをし  
ようね。  
四276 会 林の むこうの 一本道まで、かけっこを  
しようね。  
四308 会 それで、 みんなで なにか おみまいを  
しようでは ありませんか。  
四312 会 わたくしは、うちの にわに さいてい  
る コスモスの 花を あげようと思ひます。  
四444 会 「きょうも、きのうと おなじじゅんば  
んにならんとぶ ことにしよう。」  
四474 会 「かっちゃんがそう いうなら、十五ば  
んめに して、とぶ ことにしようじゃないか。」  
四514 会 だれも、ばらばらになつて、にげようと  
するものは ありません。  
四525 会 「きけんな ところを 早く はなれよ

う。」  
 四六三 会 あすのあさ、出発しよう。  
 四六三 会 「さあ、でかけよう。」  
 四六九 会 じゃあ、かつちゃんは、三ばんめにしよう。  
 四七六 一 わ——わからないことはしらべよう。  
 四九七 会 どうしよう。  
 四九九 二 会 この人にうってあげようか。  
 四九九 三 会 うん、そうしよう。  
 四一〇四 会 お礼に りゆうぐうへ おつれしようと思つて、ここまで まいりました。  
 四一〇四 会 あまり 長くなりますので、もう、おいとましようと思ひます。  
 四一〇八 会 もつて かえつて、うちの たからにしよう。  
 四一三〇 二 会 もつて かえつて、うちの たからにしようと思ひます。  
 五三八 手 きみの受持の子どもたちに、それを送つてあげよう。  
 五八八 会 きょうは、おにんぎょうのおもりのしかたをしてみせてあげよう。  
 五九一 会 「かわいそうだもの、ひろつていつて、かつてみよう。」  
 五九三 会 「すりえをこしらえて、たべさせてみよう。」  
 六二〇 五 会 さあ、ひと休みしようではありませんか。  
 六二〇 七 会 そうしよう、そうしよう。  
 六二〇 八 会 そうしよう、そうしよう。  
 六二四 六 会 さあ、おそくなるからでかけよう。  
 六二六 六 会 さ、そろそろ夕ごはんにしようか。  
 六二六 七 会 そうしよう。  
 六二八 五 まあ、おねがいしてみよう。

六三〇 一 会 どうしよう。  
 六三〇 三 会 花のみつをわけてあげよう。  
 六五六 七 私たち一組のものは、みんな集まつて、どんなものにするかといういろいろ相談しました。  
 六七二 二 会 「だるまさんのうたをつくつて、うたつてあげようか。」  
 六八三 七 会 ひきあげてみよう。  
 六八四 三 会 どうしよう。  
 六八八 九 会 のぼつてみよう。  
 六九〇 三 会 そのさかさまにみえるけしきを、大きくしてみようと思つて、  
 六一〇六 二 会 「作つてあげようか。」  
 六一二二 二 会 うさぎさんたちは、おさるさんにみんなまつかさあげようと、話しあいました。  
 六一二四 四 会 「このくるみを持つていつて、山のてっぺんでたべよう。」  
 六一二四 四 会 「りすさんは、くるみがだいすきだそうだから、あげようか。」  
 六一二四 五 会 「あげよう。」  
 六一二四 九 会 「こんどは、なにをしようか。」  
 六一二六 七 会 「そっちのあなと、こっちのあなとつづけようか。」  
 六一二六 八 会 「つづけよう。」  
 六一二六 一〇 会 「ここで、かくれんぼしよう。」  
 六一二六 一一 会 「しよう、しよう。」  
 六一二六 一二 会 「しよう、しよう。」  
 六一二六 一二 会 新しいおにがきまつて、またはじめようとしたとき、  
 六一三二 四 会 決勝点は、あの山のでつぺんにしよう。  
 六一三三 六 会 「なにかかけようじゃないか。」  
 六一三三 八 会 なにかかけよう。  
 六一三三 二 会 さ、はじめよう。

六一四〇 三 うさぎさんたちは、もうにげようと思つてもにげることはできません。  
 六一四一 七 会 おれが、いまたべようとしていたところだ。  
 七一三 四 「いますこし、手をいれてみよう。」  
 七一三 九 「この手でやつてみよう。」  
 七一六 七 会 じゃあ、でかけよう。  
 七一七 三 会 さあ、出発しよう。  
 七二三 一〇 会 もう、おさらいがすんだから、あおむしのせわをしよう。  
 七三八 一一 会 「さあ、リレーにしよう。」  
 七九二 一〇 会 そうじをしようと思つて、首のところを持つて、かごの中へいれたら、  
 八三〇 二 会 天帝は、ひとつこの男のうでをためてみようと考えて、  
 八三七 五 もつとたくさんこがねを集めようと願つておいでになりました。  
 八四〇 三 着物を着ようとなさいました。  
 八五六 四 ぼくは、砂地の上にまっすぐな足あとをつけてみようと思つて歩きだした。  
 八五七 二 しつかり目あてをみさだめて歩いてみよう。  
 八五七 四 よし、あれを目じるしにしてやつてみよう。  
 八七九 一 会 おすでなければいいが、まあ、かつておいてみよう。  
 八八五 五 どうして、あの鳥のもっているような美しさをもつたらなどと思ふことがきよう。  
 八八六 一一 子どもたちは、あひるの子をつかまえようとして、  
 九五〇 二 会 とにかく、もつといつてみよう。  
 九五一 六 会 けれども、まあ、もうすこしいつてみよう。  
 九五二 八 会 まあ、もうすこしいつてみよう。

九53 9 ㊦ けれども、まあ、もうすこしいってみよう。

九81 5 ㊦ まず、一メートルぐらいのはばで、東西に四五十メートルほってみることにしよう。

九82 7 ㊦ いっしょうけんめいやってみよう。

九83 5 ㊦ ぼく、先生におたずねしてみよう。

九97 3 ㊦ やまだ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする。

九102 11 ㊦ 「でも、みてあげよう。」

九105 3 ㊦ さあ、でかけよう。

九132 1 ㊦ くもは、ふといつなをとりだして、みつばちのからだをしぼりつけようとした。

九132 2 ㊦ みつばちは、そのつなをさけてにげようとしたが、どうしても手足がうまく動きません。

九134 11 ㊦ 大きな口をあいてたべようとしたとき、ちようちよは、「略。」と頼みました。

九140 10 ㊦ くもは、おなががすいているのに気がつき、また、あみをかけようと考えました。

九141 6 ㊦ 「今夜は、ばらのかけでねむることにしようかな。」

九147 9 ㊦ 自分の命は、つばめさんにあげよう。

十27 10 ㊦ そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たんねんにみようと思います。

十30 1 ㊦ そのもようが、どんな単位からなりたっているか、それをさがしてみようと思います。

十30 3 ㊦ どうしてそんなことになったか、そのわけをよく考えていってみようと思います。

十51 6 ㊦ いぬは、まばたきをしたきりで、そのパンをたべようとしません。

十52 2 ㊦ 「ワンワンチャン」と、こちらを向かせようとしたら、

十52 3 ㊦ でかけようといいだしたりしていましたが、

やつと歩きはじめました。

十67 5 ㊦ 自分たちも、そつといってみようというこ

とになりました。

十69 9 ㊦ 「ふたを取ってみようか。」

十70 5 ㊦ ひとつ、たべてみようじゃないか。

十73 10 ㊦ あまりの申しわけなさに、ふたりとも、命をすてておわびをしようと考え、

十18 8 ㊦ ぼくらですいせんしようよ。

十113 10 ㊦ 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよう。

十142 9 ㊦ どれ植えつけの用意をしよう。

十144 3 ㊦ それをみよう、父兄の人たちは、自分の席で立ちあがります。

十187 6 ㊦ わたしは、これからすぐにうちへ帰って、おかあさんを安心させてあげよう。

十124 12 ㊦ くちた草をとりのけようすると、大きなえんまこおろぎが一びき頭をだしていた。

十123 7 ㊦ 私は、すぐこの指の遊びがおもしろくなつて、それをまねようとした。

十123 12 ㊦ 字をつづりながら、二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。

十123 5 ㊦ 二つの人形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。

十123 5 ㊦ めばえてこようとする心のはたらきと

いったようなあるふしぎなものを感しました。

十123 6 ㊦ 走りよってかけらをひろいあげ、それをつぎあわせようとしたがだめでした。

十124 10 ㊦ 簡単な人形の作りかたを教えてあげよう。

十125 6 ㊦ 次にいくつかの例をあげてみよう。

十123 3 ㊦ 「じゃあ、おじさんも手傳つてあげよう。」

十二73 8 ㊦ 子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようしますが、

十二82 10 ㊦ 清水選手の試合を見物しよう、方々の

國の人々が、そのコートを目がけて集まりました。

十二90 6 ㊦ 話すことばは、その場その場にあらわれるその人の面影ということもできよう。

十三19 6 ㊦ ユートランドのあれ地と戦い、これを豊かな土地にしようとする大計画をたてました。

十三58 11 ㊦ それはそうとして、ラファエルのかいたマドンナのかわたつたのを見せてあげよう。

十四6 5 ㊦ おかあさんちよとお話をしようと思ひます。

十四14 11 ㊦ 自分としては、力のかぎりおかあさんを幸福にしておあげしよう。

十四20 1 ㊦ そうじがすんだら、そのことについて話をしよう。

十四29 10 ㊦ 天上の花を見ようとはしなかったのだらうという人もありますが、

十四39 6 ㊦ 深呼吸をしよう。

十四41 2 ㊦ この美しい朝をむかえよう。

十四41 3 ㊦ この光を全身にあびよう。

十四42 8 ㊦ なにがこようと、平氣じゃないか。

十四43 7 ㊦ なにがこようと、平氣じゃないか。

十四77 3 ㊦ 私が、木を割ったり、竹を割ったりして、なにかこしらえようとしていると、

十四94 8 ㊦ 両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で重ねて、どうかして、あたためようとした。

十五31 2 ㊦ ねらいのはずれようはあります。

十五38 11 ㊦ ちよつと考えてみただけでも、このことがすぐ理解されよう。

十五42 10 ㊦ 私たちは、この問題をもっとよく考えてみよう。

十五509 ㊦ 「よし、どんなにお金に困っても、どんなに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。」  
十五5610 ㊦ 私が始めて会った日本人について話をしなげよう。

十五5812 ㊦ なお語り続けようとする博士をさえぎって、「略。」と、ありし昔を語ろうとした。

十五595 ㊦ 「略。」と、一言のもとにしりぞけようとした。

十五6112 ㊦ 「満ぼろ、いいところへつれて行ってあげるから、さあ、出かけよう。」

十五666 ㊦ 満ぼろの心から、どうして新島のおじさんのすがたが消えうせよう。

十五727 ㊦ 「略。」と呼びかけようとしたが、声が出なかった。

十五743 ㊦ 自分の子女は、その性質がどんなにちがっていても、かわいことはみな同じで

十五839 ㊦ ほんの形だけでも、廣間の方をさがしてみよう。

十五10810 ㊦ ほかの人たちはなにをしようとしているの。

十五10812 ㊦ いま来ようとする新しい『喜び』をむかえているのですよ。

ようい「用意」(名) 8 ようい 用意  
三1158 ㊦ そこで、よういの車にのって、しずかに

天へのぼっていききました。  
四209 ㊦ さあ、用意はいいですか。

四579 ㊦ すっかり用意ができると、みはりばんのがんたちもあつめました。

七5011 ㊦ 「略。」と、用意のふえが鳴った。

十一398 ㊦ 冬の用意もしだいに進み、あとはもみすりするばかり。  
十一429 ㊦ どれ植えつけの用意をしよう。

十二2610 ㊦ ちゃぶ台をだして、食事の用意などをしていると、とりついてぐんぐんおしって、  
十五619 ㊦ おじさんとおばさんが外出の用意をととのえて、「略。」と、私をうながした。

ようい「容易」(形状) 5 ようい 容易  
四522 ㊦ おもいかつちゃんをかつきながら空をとぶのは、よいなことではありません。

七389 ㊦ しかし、弟の手をひいているので、ひとあしすすむにも、よいではありません。

八1611 ㊦ とりついたがさいご、よいにそれからはなれません。

八196 ㊦ せみの子たちは、たいへん生長がおそくて、よいに大きくなりません。

十二204 ㊦ 「やっぱり容易じゃないですね。」

ようい「用意」(感) 2 ようい  
六1326 ㊦ 「よいい。」

六1354 ㊦ 「よいい、どん。」

ようい「用意」(サ変) 1 用意する 《—シ》  
六2010 ㊦ テーブルには、お茶が用意してあり、くだものが、たくさんおさらにもってあります。

ようき「陽気」(形状) 1 陽気  
十五994 ㊦ 「略。」と歌い、子どもたちをとりまいて、陽気なおどりをします。

ようさい ㊦ けんちくようざい  
ようじ「用事」(名) 8 用事

九448 ㊦ この夏、一ど、用事でおばがそちらにでかけるとき、ばくもついていたのでした。

九4410 ㊦ いそぐ用事だったので、先生にだけお目にかかってすぐ帰りました。

九714 ㊦ ㊦ これからは、用事これあるにつき、明日出頭すべし、と書いていいでしょうか。

十六62 ㊦ あるとき、このだんなは、用事で、となり

村までいかなければなりませんでした。  
十三5411 ㊦ ちょうど、おじさんは、用事がなく、しよさいで、本を読んでいらつしやいました。

十五526 ㊦ 書きあげた論文を持って、その出版の用事かたがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった。

十五5411 ㊦ 私がこの博物館をたずねたおもな用事は、《略》自分の論文を出版してもらうことで、

十五552 ㊦ あいさつを終って、用事をきりだすと、ようしや《容赦》(名) 1 ようしや

六1375 ㊦ ようしやはならない。

ようしよく ㊦ しんじゅがいようしよく  
ようしよくしんじゅ 「養殖真珠」(名) 2 養殖真珠

十459 ㊦ かつて、パリーの真珠商たちが、幸吉の手になる養殖真珠は、まがいものであるといった。

十462 ㊦ エジソンのもとをたずねて、養殖真珠のつくりかたを、こまごまと話した。

ようしよくしんじゅはつめい「養殖真珠発明」(名) 1 養殖真珠発明

十4612 ㊦ 養殖真珠発明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とするならば、

ようじん「用心」(名) 1 用心  
四7910 ㊦ ひ——火の用心。

ようじんする「用心」(サ変) 1 用心する 《—シ》  
十668 ㊦ ふたりとも用心して、そばへもよらぬことだ。

ようじんぶかい「用心深」(形) 1 用心ぶかい  
《—イ》

八534 ㊦ その家のにわとりは、用心ぶかい声をだして鳴きました。

ようす「様子」(名) 42 ようす  
三321 ㊦ 一だんあがるごとに、あたりのよう

すが かわります。

三109 5 月が うつくしく なると、 かぐやひめの  
ようすは いっそう かなしそうに みえました。

四131 8 天人の しおれた、この ようすを みて、  
五38 9 ㊦ そうすれば、こちらの ようすが、いろい  
ろとわかるだろう。

七48 4 二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人  
に、はつきりと、その ようすが わかります。

七77 4 この ようすを、甲乙ふたりが みてとって、  
なにか、こそ こそ ささやきあう。

八32 5 天帝は、この ようすを ごらんになって、  
八66 9 ㊦ あもうまく 足をつかう ようすや、あの し  
せい の いいのを みても わかる。

八99 5 二とおりにして、くきの 数の ふえる ようす  
を みる こと に しました。

八103 2 朝、花の ようすを みに いきましたら、まだ  
さいて いま せん でした。

九12 10 その うちかた に よって、〈略〉にも なり、  
雪の 降る ようす にも なる のは、ふしぎ である。

九48 7 その めんどろ だ という 裁判の ようす などを  
考えて、おそく まで ねむれ ませんでした。

九68 9 やまね こは、〈略〉、いかに も 氣 だ った よう  
す で、しゅすの 着物の えりを 開いて、

九93 2 やまだ、さが し物の ようす で 地面を みな ぐ  
ら で て くる。

九93 7 しばらく すると、たかぎ も さが し物の よう  
す で て くる。

十28 4 動植物 だけ ではなく、雪の ようす や、星の  
世界 など も、しらべ て いきたい と思 います。

十一25 10 金次郎は、すこしも つかれた ようす も な  
く、〈略〉 体格 も りっぱになっ て いきました。

十一37 4 ㊦ さやまめ・とうきび よく みの り いも

も ふと っ て くる ようす。

十一71 9 ㊦ 「そう すれば、おとう さんの ようす も  
なん と かわかる だろう。」

十一76 8 病人は、とき とき 少年の 方 を みましたが、  
わ かつ た よう な ようす は し ま せん でした。

十一84 2 少年は 二こと 三こと ことば を は さん で、  
家族の ようす を 話 そう と しま した が、

十一86 11 ㊦ 同 じ 年 ぐ ら い の む す こ が い る ら し く、  
自 分 の む す こ だ と 思 い こ ん で い る よう す で す よ。

十二10 4 その ようす を み て い た じゅん さ が、老 人  
の そば に よ っ て きて、「〈略〉。」

十二35 11 先生 が かけ ら を い ろ ろ の か た す み に は き  
よ せ て お い で な っ て い る よう す を 感 じ ま した が、

十二88 2 その とき の ま わ り の よう す や、ゆき が か  
り や、音 声 や 身 ぶ り に よ っ て、

十二89 3 話 を す る と き に は、その 場 の よう す に よ  
く あ う よう に、氣 を つ け て 話 さ な け れ ば な ら ない。

十二93 3 書 く こ と は、話 す こ と ち が っ て、その  
場 の よう す が 相 手 に み え ない か ら、

十二94 4 「〈略〉。」で 動 い て い る よう す が す ぐ わ  
か る。

十三38 12 その 間 に、ぼう し を ぬ ぎ、指 先 で くる くる  
ま わ し な が ら、樂 し そう な よう す。

十三45 2 声 と 動 き だ け で、四 人 と そ れ ぞ れ 話 を し  
て い る よう す を、見 せ な く て は な り ま せん。

十三45 8 そう して、三 郎 く ん の こ と ば だ け で、  
す っ か り よう す が わ か る よう に、く ふ う し ま す。

十三57 7 目 を 細 く し て、あ り あ り と そ の 絵 を 目 の  
前 に 見 る よう な よう す を な さ い ま した。

十四69 2 い ま い っ た よう な ば あ い ば か り で な く、  
だ い ぶ よう す の ち が っ た の も あ り ま す。

十四69 10 はい っ て い る 湯 は、日 か げ で 見 て は、べ

つ に かわ っ た よう す は な に も あ り ま せん が、

十四83 4 「雪 國」は、北 國 の 人 た ち が 雪 と 戦 っ て  
い る よう す を、映 画 に し た も の だ ー。

十四83 6 雪 が 降 り だ し て か ら、だ ん だ ん つ も る よ  
う す、深 い 雪 の 中 で 生 活 し て い る 人 た ち、

十四85 6 一 ひ ら の 雪 に よ っ て、は る か に 高 い 天 空  
の よう す が、こ ま こ ま と わ か る と す れ ば、

十四100 2 お ば あ さん は、い つ も の よう に、や さ し  
く、し ん せ つ な よう す を し て い た。

十四100 3 け れ ど も、前 よ り は も っ と 樂 し そう な よ  
う す を し て い た。

十五45 3 長 い し き た り が、明 治 に な っ て す っ か り  
よ う す を 変 え て し ま っ た の で、

十五58 6 遠 い 昔 を 思 い 出 し て、ひ と り そ の と き の  
思 い 出 に ふ け っ て い ら れ る よう す だ っ た。

十五75 12 博 士 は、そ の こ と ば の 意 味 を と き か ね て  
い た 私 の よう す を 見 て、大 き な 声 で わ ら わ れ、

ようすい「用水」(名) 1 用水  
九120 10 ㊦ 私 た ち の 村 の 用 水 も、こ の ま つ 川 か ら ひ  
い て あ る の だ。

ようだい「容体」(名) 1 ようだい  
十一80 1 よう だ い が わ る くな っ た の か か わ ら ず、

ようちえん「幼稚園」(名) 3 ようちえん ようち  
園

四31 8 ㊦ む こ う で ようちえん の 男 の 子 が ない  
て い ま した。

十一43 3 よう ち 園 の 卒 業 式 が あ り ま した。

十一43 7 よう ち 園 の 子 ど も た ち は、そ の ま え に お  
と な し く こ し け っ て い ま す。

ようちゅう「幼虫」(名) 1 ようちゅう  
八14 10 二ミリ ほど あ る、白 い う じ の よう な よう  
ち ゅう が、は い だ し て、

ようふく 「洋服」(名) 1 ようふく

四718 ようふくとげた。

ようぶん 「養分」(名) 10 養分

十四531 暑い日に照らされながら、せっせと養分をこしらえて、送ってあげたからですよ。

十四541 あれは、私たちの養分をこしらえる力をかまわずに、

十四547 さつき、葉さんは養分のことをおっしゃいましたが、

十四551 細い根をのぼして、水と養分を吸いとり、夜も晝も送ってあげるの、

十四562 根さんが、せっかく吸ってくださった地の中の水や養分でも、

十四564 日の光にあてたり、空気をお吸いになって、養分におこしらえになったものでも、

十四581 さつき、葉さんや根さんは、養分のことをいっていらっしやいましたが、

十四582 それを養分につくるのは、葉さんではなくて、私ですよ。

十四5810 いまのお話の養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。

十四596 さつきから問題になっている養分だって、みんな私がわけてあげたのです。

ようむき 「用回」(名) 1 用むき

十五863 でないと、かんじんな用むきをわすれてしまふからね。

ようやく 「漸」(副) 3 ようやく

八764 なん時間もたってから、ようやくあたりをみまわし、

九351 小さなぼくたちの畑がようやくかいこんされて、

十五324 ようやく道を見つけて、この鳥と少年と

の戦っている岩角近くまで来ました。

ヨーロッパ (地名) 6 ヨーロッパ じきたヨーロッパ

九1711 日本のつばめは、こんなふうには渡っていきませんが、ヨーロッパのつばめも同じように、

九181 ヨーロッパの北の方ではんしょくしたものが、《略》、遠くアフリカまでもいって、

十6311 能は、めんの藝術ともいわれ、ヨーロッパの大むかしにさかえた、ギリシアの、同じめんの藝術とくらべて、研究されています。

十二466 アジアでもヨーロッパでも、りっぱな影絵しばいができている。

十五192 ヨーロッパのアルプスの山々のうち、もっとも高い山の一つに、

十五2012 このヨーロッパの高い山の中の生活は、見るもの聞くものがごとくめずらしく、

よかせ 「夜風」(名) 1 夜風

八2311 虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれしそうです。

よきよう 「余興」(名) 2 よきよう

四585 ぼく、よきようをするよ。

十四515 それで、よきように、『《略》』という話しあいをやってみたら、

よく 「欲」(名) 1 よく

十四604 ぼくは、そんなよくのふかい、身がってなことはいけませんよ。

よく 「良」(副) 161 よく じおりよく・しゅびよく

一575 たろうさん、よくいらっしやいました。

一612 たろうさん、よくごぞんじですね。

一648 「まあ、たろうさんのよくねていること。」

二65 かんがえてごらんさい。

二73 よくおもいつきましたね。

二395 よくこままでのぼった。

二5710 みると、わたくしの おじいさんに よくにたかたでした。

三114 はんたかはものおぼえがわるく、そのうえ、ものがよくいえませんでした。

三196 手わけして、そのかたちや色をよくしらべることにしました。

三355 その声がよくひびきます。

四89 よくみがいたまるいかがみを、この町にはめこんだようです。

四173 お星さん、よく光るね。

四233 あのまどから、にいさんとよく星をみましたね。

四269 きみはよくなくね。

四483 よく木の かげからねらいうちをさるからです。

四1105 よくおいでくださいました。

四1174 よくわかりました。

四1282 りようしは、そぼへよって、よくみます。

五405 この花がよくさく年は、ほう年だといひます。

五422 けれども、お手紙でよくわかります。

五435 ぼくはねえさんから、よくうたをおしえてもらいました。

五437 ですから、花ばたけで、よくいっしょにうたいました。

五6210 こんなによくできたのは、おかあさんの力ではありませんよ。

五812 ガラスもきれいになって、そとのけしきがよくみえました。

五1001 よくみると、ねこにひっかかれた羽がぶら

りとなって、半分しかひろげられません。

五100 5 さんちゃん、ひわによくいつてきかせました。

六19 1 なかなかよくあったね。

六19 3 こんなのよくあうと、たいこのうちがいもあるよ。

六53 8 お月さまがずんずん動いていくのがよくわかるよ。

六54 6 ほら、よくわかるよ。

六55 3 「こうするとよくわかるのね。」

六68 5 それは、むしめがねでよくみながら書いたのです。

六71 1 「まあ、よくできたのね。」

六78 3 よく考えた。

六103 10 まあ、よくみえるね。

六104 1 さかさまでも、よくみえるでしょう。

六113 1 ぼくは、五十音というものは、一年生のときにならったからよく知っているが、

六114 7 あげてみると、なかなかよくあがりました。

六114 7 だれのたこよりもよくあがりました。

六114 9 やあ、よくあがる。

六115 6 「よくひつばるな。」

六117 7 のりは、ごはんつぶをよくねると、いいのりができました。

六120 2 「まあ、よくできましたね。」

七13 8 それとよくにたつかいかたで、「まいの手」といったり、「略」とかいったりします。

七14 6 「手にとるようによくわかる。」

七17 2 よくおぼえていたね。

七17 2 風のない日は、ちょうちよがよくでるのだったね。

七18 4 よくみのつてから、油をとるんだからね。

七20 4 よく知っているね。

七21 4 とまっているちょうちよが、どんなかっこうをして、みつをすうか、よくごらん。

七28 9 あおむしがさなぎになったところを書いたのが、よくできたつて。

七52 10 このときは、ぼくらのほうのボールが、よくあいてにあたつて、

七60 6 よく落ちるかきの実。

七81 3 この人は、私どものらくだのことについて、それはよく知っております。

七82 6 ふたりのいうことは、よくわかった。

七85 2 よしよし、よくわかった。

七89 7 よく晴れた日には、とても元氣があります。

七90 2 よくみていたら、ねこが顔をあらうように、うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました。

七95 6 よくみると、おくの方に、わらが巣のようにふくらんでいて、

八16 6 虫は、小さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいとがった口をもっています。

八21 4 目もよくはみえないらしいので、ねこや、すずめにみつけれたらたいへんです。

八50 2 けれども、それでは人の心がよくわかりません。

八50 6 そんなまずしいなりをしていても、それでも、自分をよくむかえてくれる人があったら、

八55 3 「幸福」には、その家の人の心がよくわかりました。

八67 1 よくみればきれいな子なのだ。

八84 2 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっていた。

八96 4 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎ

て、あとでなえがよくとれないそうです。

八98 5 いねがよく根をはって育つように、

八107 1 じょうぶに作ったいねかけに、日がよくあたるようにきちんとかけました。

八108 2 ぼうのあいだにいねをはさんでこいたらよくとれました。

八108 6 天気の良い日に2日ほしたら、もみがよくかわきました。

九12 1 よくきいていると、たしかに風の音になる。

九15 3 つばめが電線や物ほしざおに五六ぼぐらいならんでとまっているのを、よくみかけます。

九40 1 足もとをよくみて、氣をつけてね。

九60 8 きょうはよくきてくださいました。

九61 8 よくみると、これはみんな赤いズボンをはいたどんぐりで、

九79 3 ここが、このあいだからよくお話していた貝づかです。

九83 8 よくみつけたね。

九83 8 あとでよくみてあげるから、かごにいれてとっておきなさい。

九134 7 おかしいなと、ふしぎに思つてよくみると、それは白いちようちよでした。

十10 7 橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんもよくいつてこしかけました。

十14 4 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。

十27 6 自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。

十29 5 なぜ、このようなあみかたをしなければならなかったのか、よく考えてみたいと思います。

十30 3 どうしてそんなことになったか、そのわけをよく考えていつてみようと思います。

十36 6 ためしてみると、はたしてよく動いた。

- 十 36 9 ㊦ 「よくやった。」
- 十 49 12 そのときのいきさつを知っている私には、このことばの意味がよくわかります。
- 十 64 11 それをみていると、世の中のうらおもてがよくわかります。
- 十 65 2 狂言には、よく、太郎かじやと次郎かじやが、現われます。
- 十 66 4 ㊦ 「よくするをするのだぞ。」
- 十 8 9 ㊦ きみは、ぼくらの心持をよく知っている。
- 十 11 8 ㊦ ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやなことなど、きみはなんでもよくわかつています。
- 十 11 9 りえもんは、からだがよくわかつて、よく働けませんでした。
- 十 20 6 だから、金次郎は、子どものときから、家の手つだいをしてよく働きました。
- 十 37 3 ㊦ さやまめ・とうきびよくみのり いももふとってくるようす。
- 十 37 8 ㊦ こずえをかけるもずの音も、すむ秋空によくひびく。
- 十 47 7 みんなちちうしで、ぼくによくなれていて。
- 十 70 8 ㊦ よくみてください。
- 十 88 9 チチロは、いよいよよくせわをして、ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでした。
- 十 118 11 ㊦ みんな自分たちのなかまだなと思っただよきいてみると、
- 十 246 2 ㊦ 文樂よりもっと古くからあったし、おじさんの子どものころ、よくみたものだ。
- 十 249 10 ほかのはよくもんでのぼしておく。
- 十 251 2 日本紙を細長く切って、一まい一まいに

- よくのりをつけてはりかためる。
- 十 251 4 よくかわかしてから、絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬる。
- 十 256 4 傳説を廣く全國で調べてみると、よくにたようなのが、あちらこちらで発見される。
- 十 259 6 一代二代はいい人で、よくさかえたが、三代めの長者は、〈略〉わがまをしましめた。
- 十 275 10 ㊦ 「こんなに降るのによくきたな。」
- 十 278 8 かわいい少年だったので、よくみていますと、どこかしら日本人らしいところもあるので、
- 十 288 6 簡単なことばでも、相手の人のいうことばのわけをよくききわけて、
- 十 288 7 ことばのわけをよくききわけて、それによくかなうようにしなくてはならない。
- 十 288 12 相手の人のいっていることばをよくききわけ、のみこまなければならぬ。
- 十 289 3 その場のようすによくあうように、氣をつけて話さなければならぬ。
- 十 293 5 前後の続きぐあいをよく考えて、ことばを選び、
- 十 293 6 ひとりがってんでなく、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。
- 十 293 8 文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんども書きなおすことができる。
- 十 2100 11 それは、もようもごくかんたんで、形もたいへんよくまとまっています。
- 十 2102 2 これをみても、平和を愛した古代の人たちの氣持がよくわかるではありませんか。
- 十 219 7 かふんがめしべにつかないようなくふうと、いま一つ、よくつくようなくふうをして、
- 十 219 8 かふんがめしべにつくときはよくみのも、つかないときはみられないことを、

- 十 217 10 シュレスウィヒとホルスタインという、作物のよくできる二州をとられました。
- 十 219 4 みぞをほったりするときに、よく、國土の地質や地味を研究しましたが、
- 十 220 2 ユーランドの平野には、八百年あまり前には、よくしげった森林がありました。
- 十 221 10 両種のもみは、たがいにならんで生長し、年がたつてもかれないで、よくしげりました。
- 十 232 11 トンネルのようなホートンには、それが、ふしぎなほどよくひびきわたる。
- 十 245 10 顔の表情がよく見えるようにすることも、たいせつなことです。
- 十 255 1 ㊦ ああ、よく来たね。
- 十 257 5 ㊦ おけのそこにかいたという小さな絵だが、じつによくかけている。
- 十 257 8 ㊦ ぼくには、よくわかりませんが、〈略〉いかにもおかあさんらしいと思うのです。
- 十 257 11 ㊦ いかにも、おかあさんの喜びという心持が、よく出ているね。
- 十 259 8 ㊦ キリストのおかあさんという感じが、よく出ているんじゃないでしょうか。
- 十 260 10 ㊦ ぼくには、そのうまさがよくわからなけれど。
- 十 261 1 ふるさとにのこした母へ送ったつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。
- 十 261 7 ㊦ よく説明しておもらいになるといいと思います。
- 十 268 8 音楽の時間によくつかう、〈略〉、そのほか、コーラスとか、ソナタとかいうことばは、
- 十 261 11 また、図画工作の時間によくいう、デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、
- 十 286 6 ㊦ 外來語辞典というものもあるから、そ



れを調べると、なおいっそうよくわかるだろう。

十四482 こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。

十四625 よく氣をつけて見ていると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、

十四6411 茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。

十四651 しめきつたへやで、人の動きまわらないときだと、ことによくわかります。

十四659 これがまた、よく見ていると、なかなかおもしろいものです。

十四6610 これとよくにたうずで、もつと大きなのが、庭の上などにできることがあります。

十四673 土のしめつてるところへ日光があたつて、そこから白い湯げがたつことがよくあります。

十四673 そういうときに、よく氣をつけて見えてごらん下さい。

十四6812 こうしたら雨のばあいとは、よほどよくにたものと思つてさしつかえありません。

十四695 おたがいによくにたものであるという一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

十四6911 それを日なたへ持ちだして、じかに日光をあて、茶わんのそこをよく見てごらん下さい。

十四705 これは、夜、電燈の光をあてて見ると、もつとよく、あざやかに見えます。

十四707 夕ごはんのおぜんの上でもやれますから、よく見てごらん下さい。

十四715 よく理科の本などにある、〈略〉ときの水の流れと、同じようなものになるわけです。

十四7311 もようがなんであるかということは、まだ、あまりよくわかっていないようです。

十四842 ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、

まことにきれいな形をしていること、

十四8410 映画的手法によつて、よくわかるようにしくんだものであった。

十五4210 私たちは、この問題をもつとよく考えてみよう。

十五5010 よくわかりました。

十五5910 新島のおじさんなら、私はよく知っています。

十五10510 ぼくたちは、よくいっしょに遊ぶのですもの。

十五1093 まあ、よくごらん下さい。

十五1095 あなたの二つの目をたましいのどん底におちつけて、よくごらん下さい。

十五11510 おまえたちは、おかあさんをよく覚えて、だいにじにすることをわすれてはなりませんよ。

よくじつ「翌日」(名) 1 よく日物がちゃんとそろつてならんでいた。

よくち「四口」(名) 1 よくち

十四746「文圃」(名) ふたくちくえども死にもせず、みくち、よくち、ぶすはくえども、死なれもせず。

よくも「善」(副) 1 よくも

四953 よくも あんなに雪の たねがある ものだ。

よけい「余計」(形状) 5 よけい

七558 よけいなことは、ちりほどもあつてはなりません。

八811 それを知つてから、よけいにピオがすきになりました。

九959 よけいなおせっかいさ。

十一218 すこしも休まず働くので、かえつて、おとなよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十四757 畑のほうが、森よりも、日光のためによ

けいあたためられるので、

よける「避」(下二) 1 よける「一ヶ」

四483 その山のふもとには、大きな木がしげっているの、そこをよけてとびました。

よげんする「予言」(サ変) 1 予言する「一シ」

八78 まるで、一日の幸福を予言してくれるようです。

よこ「横」(名) 20 よこ 横↓たてよこ

二547 おかあさんのよこに、三人が立ちます。

五235 それで、どこかのおばあさんのよこのところに、もたれかかっていると、

六656 はたらくときはよこになり、休むときは立つものはなかに。

七379 上を向くと、私のよこのわかい男の人が、〈略〉、両方の手でまどわくをおしています。

八491 ひとりの男が、いまにもごろりと横になろうとしているところでした。

八569 かもめが目について、それに氣をとられて、わきみをしたあたりが横にそれている。

八724 あひるの子は、ここで一晚横になった。

八729 あひるの子は、このあしの中で、横になつて休みたいと思つた。

八876 そこで、つかれきつて横になっていた。

八882 ひばりが歌いだしたとき、あひるの子は、ぬまの草むらの中で横になっていた。

八1006 根が横へはるの、廣いところのほうで育ちがよいと思ひました。

九1418 くもはからだを小さくまるめて、ころっと横になりました。

十531 すると、さっきの黒いいぬが、ごろんと、地べたに横になつてねそべっていました。

十二497 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。

十四649 横からすかして見ると、ちょうど、けむりが廣がっているように見えるそうです。

十四675 湯げは、〈略〉、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、また、たちのぼります。

十四782 はじめにまん中になたをいれても、きつと、とちゅうから横の方へそれてしまつて、

十五368 数という形のないものを表わすのに、線を横に一本引いたり、二本引いたりした。

十五369 線を横に引いて、「・」をその線のうえにおいたり、したにおいたりして表わした。

十五8810 チルチル、すこし横の方に立っているひとりの「幸福」を指さして、

よこいと「横糸」(名)2 横糸

十346 はじめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、たて糸のあいだをぬつていく横糸であつた。

十346 横糸はおさによつて、右から左、左から右へといききするのであるが、

よこがお「横顔」(名)1 横顔

十195 先生の横顔。

よこぎる「横切」(五)5 よこぎる 横ぎる

《ーツール》

八281 馬車はふたたび走りだして、草原をよこぎってしまいました。

十236 自轉車に乗った中学生が、ふたりづれでなの花畑を横ぎる。

十四881 ぼつりぼつりとするした足あとが、廣野を横ぎる一すじの道となる。

十四9010 二台の荷馬車が来たので、それをさけるために、急いで道を横ぎったときに、

十四993 その星が落ちるとき、空を横ぎって長い

光のおをひいた。

よこす「寄越」(五)3 よこす 《ーシ》

八926 おかあさんのところへ走っていつて、もらってきたパンやおかしをなげてよこした。

十一6412 長男にいくらかのお金を持たせ、父親の看病のために、ナポリへよこしたのです。

十一708 窓 おかあさんがよこしたんです。

よこす「汚」(四五)2 よこす 《ーサース》

三939 「よこさずにかわいがってください。」

十五165 窓 野にはたらきて、土ほこり顔よこすとも、わするるな、明かるくするながえ顔。

よこだき「横抱」(名)1 よこだき

七545 ぼくはよこだきに受けとめた。

よこたわる「横」(五)2 よこたわる 横たわる

《ーツーリ》

六55 ピンセットや、小さなつちや、さまざまの道具も、おなじ台の上によこたわっている。

十二391 できごとの多かつたこの日もくれて、小さなベッドに横たわりながら、

よこつけ「横付」(名)2 横つけ

十五601 げんかんに出て、横つけにしてあつたりっぱな自動車に、ためらう私をおしこみ、

十五7210 自動車は、やがてこう外のすばらしい家のげんかんに横つけになった。

よこつちよ「横」(名)1 横つちよ

十五10810 なぜ横つちよを向いたままでいるの。

よこどりする「横取」(サ変)1 よこどりする

《ースル》

六1417 窓 よこどりすると、ゆるさないぞ。

よこはま ひとくきょうよこはまかん

よこぼね「横骨」(名)3 よこ骨

六1189 骨は、たて骨とよこ骨の二本です。

六1194 それから、よこ骨。

六1194 よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりにまげるのですから、めんどうでした。

よこみち「横道」(名)1 よこ道

三423 みよこさんが、左のかたからはなれて、麦ばたけのよこ道をかえりました。

よこめ「横目」(名)1 横目

九567 その男は、横目でいろいろの顔をみて、口を曲げて、にやとわらっていました。

よこれる「汚」(下)2 よこれる 《ーレ》

七112 「手がよこれていますよ。」

十二258 よこれていないほうが氣持がいいので、

《略》、わたしに知らせようになりました。

よし「葦」(名)1 よし

四439 ゆうべは、ぬまのきしの、よしのきれいにしげったところで、ねむつたのです。

よし「縦」(副)1 よし

十四435 日々の苦勞に、よし心配がたえなくとも、くちびるに歌をもて。

よし(感)11 ようし よし

四432 窓 「よし、よし。」がんは、おたがいにましめあつて、ぎょうぎよく空をとびました。

四432 窓 「よし、よし。」

四598 窓 「よし、ぼくがさがしてくる。」

六1108 よし、あしたはうまくやつて、みんなをわらわせてみせるぞと思つたが、

六1321 窓 「よし、やろう。」

八573 よし、あれを目じるしにしてやつてみよう。

九734 窓 「よし、早く馬車のしたくをしる。」

九9910 窓 よし、じゃあ、あいこになるように、もう一つなぐつてやる。

九1088 窓 「ようし、ここからすべりたいものはす

べってよろしい。」

十一94回 そういわれて、自信をもって、よしやろうということができた、うれしい。

十五50回 「よし、どんなにお金に困っても、どんなに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。」

よし「良」(形) 2 よし《一キ》↓なかよし・なかよしこよし

十二76回 文 積み火をたけよきものみせん雪まろげ

十五12回 文 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸のともを見ればよきつくよなり

よし「四時」(名) 1 四時

十三39回 文 あいたいな、早く……はい、四時ね。

よしお「人名」 4 よしお

六51回 ふみおと、よしおと、みちこの三人が、かげふみをして遊んでいました。

六52回 「略」と、よしおがいました。

六54回 よしおとみちこが「略」「略」とい

いあっているのをききながら、

六55回 よしおが大きな声をだしました。

よしおくん「人名」 1 よしおくん

六53回

よしおくんはお月さまが走っているとい

ったね。

よしきた(感) 4 よしきた

四51回 「よしきた。」

七39回 「よいしょ」「よしきた。」「それっ。」

と、送ってくれました。

十67回 せんすであおいで、風を向こうへやってくれ。」「よしきた。」

十一9回 けれども、ぼくにはなかなか、よしきたとはいえない。

よしきり「葦切」(名) 1 よしきり

四15回 「みんな、しずかに——よしきりがな

くから。」

よしこさん「人名」 6 よしこさん

一33回 よしこさんのかいたことば。

一36回 「よしこさんは。」

二8回 よしこさんが、「略」と、へんなこえでいったので、みんなわらいました。

二16回 まことさん よしこさん はととまと

二20回 よしこさん まことさん みちこさん

二22回 よしこさんのは、『いろはにほ』しかないのに、

よしこちゃん「人名」 1 よしこちゃん

十58回 おとなりのよしこちゃんと、なお子ちゃんに、三たばずつあげました。

よしたまう「止給」(五) 1 よしたまう《一エ》

九88回 「おい、よしたまえ。」

よしよし(感) 3 よしよし

五29回 ———よしよし。

七85回 よしよし、よくわかった。

十五63回 よしよし。

よじる「振」(五) 1 よじる《一ッ》

十二67回 のこぎりののは、いつもやすりをかけて右と左によじっておかないと、

よじれる「振」(下) 1 よじれる《一レ》

十二67回 のこぎりののは、いぬの歯のようにと

がって、一つおきに右と左にすこしよじれて、

よす「止」(五) 7 よす《一シースーセーソ》

四46回 わがまはもう よすが いいよ。

九88回 「よせたら。」

九88回 よせよ、たかぎくん。

九89回 よせよ。

九102回 きみ、もうよそうよ。

十70回 それだけはよしてくれ。

十五104回 もうよしまししょう。

よせかける「寄掛」(下) 1 よせかける《一

ケ》

十五30回 少年が女の子を後にかばうようにして、

すこしあらずさつて、岩角へ身をよせかけたとき、

よせる「寄」(下) 4 よせる《一セ》↑うちよ

せる・おしよせる・はきよせる・ひきよせる

七35回 汽車がゆれるたびに、前後からおされて、さぶろうは、だんだん頭を私によせ、

七64回 しずかに波がよせている。

十43回 そのうえ、ふたたび、赤しおがよせてきた。

十44回 さいわいに、赤しおもよせてこなかった。

よそ「余所」(名) 13 よそ

三76回 「丘をこえてね、よその國へいくんですよ。」

三76回 「じゃあ、お日さまはよその國でなにをするの。」

三77回 「よその國の子どもたちに光をあげるのですよ。」

三77回 お日さまは、よその國の子どもがあそべるように、光をあげにいくのです。

三78回 「よその子どもたちがわたしの お日

さまをとってしまふのはいや。」

五28回 受けとりをもらって帰ってくるとちゅう、

よその人からもらったんです。

八78回 朝になって、よそからきたあひるの子は、

すぐにみつけれれた。

十33回 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、

佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

十49回 よその人には、なんのことか、おそらくわ

からないでしょうが、

十525 五六歩いったかと思うと、よそのおばさんが、あかちゃんをおんぶして、そばを通りました。  
十528 妹は、〈略〉、よその家の門の中へ、はいって、いこうとします。

十一2310 母親も、子どもをよそへやってから、夜になると、ため息ばかりついてねわれません。  
十四804 自分たちの祖先が発見したのではなく、よその民族から教えられて、

よそめ 「余所目」(名) 1 よそ目

十四328 よそ目には、星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、

よそら 「夜空」(名) 4 夜空

四747 ほ——星のきれいな 夜空。

六439 青黒い夜空に大きな三日月さま。

七92 星のちらばった青い夜空は、子どものクレ

ヨン画と同じだ。

十三3311 青みがかった明かるい夜空に、なんきんだまのような星がばらまかれて、

よたよた (副) 1 よたよた

十四976 ゆかの上をよたよた歩いて、その女の子の方へずつとよってくるではないか。

よちよち (副) 2 よちよち

十213 そのあとから、小さな子どもが、よちよちと歩いてくる。

十二283 民ちゃんはうれしそうにいつて、その包みをとあげると、よちよちと立ちあがりました。

よつ 「四」(名) 1 四つ

十二1063 四つに組んだ大ずもう。

よっか ぐくがつよっか・じゅうにがつよっか・はちがつよっか

よっかめ 「四日目」(名) 1 四日め

十一789 そうして、二日めも、三日めも、四日め

もすぎました。

よっちゃんたち 「人名」 1 よっちゃんたち

七601 よっちゃんたちの話し声がする。

よつつ 「四」(名) 8 よつつ 四つ ぐみつつよつつ

一112 ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、

一116 ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、

三449 一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、

五873 わしは、三つも四つもあるかと思っ

たよ。

五876 「おかしいわ。目が四つもあっちゃ。」

十四7812 はじめ、うらのほうをかく四つに割

て、あとは、十文字の小さな木ぎれを

十五206 ひとり男の子で八つ、ひとり女の子

で四つになるかわいい子どもたちでした。

十五609 私は、そのときちょうど四つのいたずら

ざかりであった。

ヨット (名) 1 ヨット

十三466 ああ、ヨットのようだ。

よっぽど 「余程」(副) 2 よっぽど

九651 わたしのほうがよっぽど大きいって、きのう判事さん

がおっしゃったじゃないか。

十五8410 私よりよっぽど大きい。

よつゆ 「夜露」(名) 4 夜つゆ

四6010 どのがなんもどのがなんも、夜つゆで

だがびつしりぬれていました。

五44 山に雨が降る、きりがおきる、夜は夜つゆ

がおきる。

七107 夜つゆがおりにきた。

九1458 くもが、月の光にちらりちらりと光りながら落ちてくる夜つゆをみていると、

よどおし 「夜通」(名) 1 夜どおし

十一893 その晩、少年は夜どおしそばについて、病人をみまもっていました。

よなか 「夜中」(名) 4 よなか 夜なか 夜中

一434 よなかに 目を あけると、おとうさんがそばに たっていました。

三1125 夜中になつて、〈略〉ほど、あたりがあ

かるくなりました。

九206 自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわ

りきっているつばめたちを運んできました。

十二438 いただいた童話の本に、人形が夜中に

集まっておどります話がありましたよ。

よにん 「四人」(名) 10 よにん 四人

一4810 よにんが むきあって、なかよく こしを

かけました。

一516 よにんは もたれあって、ぐうぐうとねて

しまいました。

四963 てる人 うらしまたろう 子ども 四人

四965 四人の 子どもが、一びきのかめをとり

まいて、あそんでいます

九861 四人が話しあつてしらべ、へんだと思う物

は、みなかごの中にいれておきました。

十一251 「どんなことがあつても、親子四人、

わかれないうちにしましなうね。」

十一257 そのお金は多くはありませんでしたが、

四人が生きていくにはじゅうぶんでした。

十三4410 舞台に出ている人は、四人のひと話をし

ているわけです。

十三4412 ところが、この四人の声は、見ている人

には聞えません。

十三451 声と動きだけで、四人とそれぞれ話をし

ているようすを、見せなくてはなりません。

よにんめ 「四人目」(名) 2 四人め

二35 10 四人めのめくらは、耳にさわって、  
七39 10 三人め、四人めと、高いところをメデシン  
ボールのように送られていくうちに、

よねん 「四年」(名) 2 四年

二59 7 四年の人たちも、五年の人たちも、六  
年の人たちも、そのまえの人たちも、

十40 5 しかも、核をさしいれてから、眞珠になる  
までには、少くとも四年はかかる。

よねんせい 「四年生」(名) 6 四年生

七62 3 四年生の楽しさよ。

九58 5 四年生だってあんなには書けないでし  
う。

九58 7 四年生というのは、小学校の四年生だ  
ろう。」

九58 7 小学校の四年生だろう。

九58 10 「いいえ、大学の四年生ですよ。」

十二97 7 四年生のとき習った貝づかのことを思い  
だしてください。

よねんめ 「四年目」(名) 1 四年め

十44 10 海水の温度に大きなかわりかたもなく、四  
年めになった。

よのなか 「世中」(名) 16 世の中

三103 5 世の中の人たちは、「略」といって、  
まいにちまいばんあつまってきて、

六69 9 世の中の役にたつのに、どれもこれも不  
足はなさそうである。

八48 2 世の中にわしより幸福なものはあるまい。  
九45 4 子どものころから、世の中のことに注意

を向けるようにといわれました。

十64 11 それをみてみると、世の中のうらおもてが、  
よくわかります。

十二69 8 あつみと廣さがなかったら、正しくりつ

ばに世の中をわたることができない。

十三9 11 むかしは、星を見て世の中がみだれると  
いったり、

十三10 8 同じ名まえの人も世の中には多いが、

十三11 8 もとより世の中には、科学的研究によつ  
ても、まだ知られていないことはたくさんあるが、

十三12 2 理由のないことを信ずる迷信は、今日、  
世の中にどれほど害をなしているかしかない。

十四9 2 この世の中には、まだ幸福がのこつて  
いる、

十四25 6 これからのちも、新しいものが世の中  
できてくると、

十四82 11 世の中は、三日見ぬまのさくらかな。  
十五83 4 あれがこの世の中でいちばんふとつた

だれの目にも見える『幸福』どもだよ。

十五96 4 この世の中には、人が思うよりもつと  
たくさん、幸福はあるのだから。

十五110 3 なにが幸福といって、これほどの幸福  
は、世の中にありませんよ。

よばん 「四番」(名) 2 四ばん

十一58 8 ぼくは、大きくなったら、三ばんか四  
ばんをこぐんだ。

十一10 5 三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくた  
ち強い男の子だ。

よばんほし 「四番星」(名) 1 四ばん星

五54 4 それより、ほら、もつともつと高いとこ  
ろに、四ばん星——赤い星。

よばんめ 「四番目」(名) 2 四ばんめ

七93 3 朝、いってみたら、右から四ばんめのへや  
に、子うさぎが4ひき生まれていました。

七93 8 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへ  
やに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

よびあつめる 「呼集」(下二) 1 よび集める 《一  
メル》

六93 7 魚どもを、みんなここへよび集めるよう  
に。

よびかえしなさる 「呼返」(五) 1 呼び返しなさ  
る 《一イ》

十五92 7 呼び返しなさい。

よびかけ 「呼掛」(名) 1 よびかけ

二61 2 これはよびかけです。

よびかける 「呼掛」(下二) 7 よびかける 呼び  
かける 《一ケ》

四103 1 かめがよびかけても、うらしまは、《略》  
ので、氣がつかません。

八58 6 《略》と、汽車によびかけた。

十五64 10 《略》と、にこやかにわらいながら  
私によびかけた。

十五68 6 《略》と、家の人によびかけながら、  
おもわずとびこんだ私をだきしめた。

十五69 4 その口もとがほころんで声さわやかに  
《略》とよびかけそうであった。

十五72 4 おばさんはふたたび呼びかけた。

十五72 7 《略》と呼びかけようとしたが、声  
が出なかった。

よびこえ 「呼声」(名) 2 呼び声

十三31 11 鳴りものをつかわないで、呼び声でやっ  
て来る者もある。

十三32 10 たとえ、鳴りものであらうと、呼び声で  
あらうと、

よびだす 「呼出」(五) 2 呼びだす 《一サ・一シ》

十三15 8 ガリレオを呼びだし、その説を人に教え  
てはならない、といいました。

十三15 12 ガリレオは、ローマに呼びだされて、

「略」、人にも説いてはならぬといわれました。  
よびたてゐる「呼立」(下二) 1 呼びたてゐる「一  
テ」

十五897 園 あのとおり、さわぎやどもが、おまえ  
さんがたを呼びたてゐるでしょう。

よびとめる「呼止」(下二) 2 よびとめる 呼び  
とめる「一メ」

九532 いちろうは、すぐ手まねきして、それをよ  
びとめて、「略」とたずねました。

十89 道でおとうさんを呼びとめて、「略」、おと  
うさんにわけてくれる少女もありました。

よびなれる「呼慣」(下二) 1 呼びなれる「一  
レ」

十一9211 五日のあいだ呼びなれていた名が、しぜ  
んと口にはよびてきました。

よぶ「呼」(五) 37 よぶ 呼ぶ「一バ・ビー・  
ブ・ポー・ン」

一4410 かくせいきがよんで います。

一4610 おじいさんが、やつぱり ながい みみを  
ふりふり、わたくしたちをよびました。

二545 こういって、いちろうを よびます。

二703 園 よんで みよう。

三1063 園 「それほど きれいなのなら、ごてんに  
よびたい。」

五679 おじいさんが金のさかなをよびますと、す  
ぐできて、「略」ときました。

五692 おじいさんが金のさかなをよびますと、お  
よいできてきました。

五708 おじいさんが金のさかなをよびますと、金  
のさかながよいできました。

五732 おじいさんが金のさかなをよびますと、金  
のさかなは、「略」とたずねました。

五751 それから一週間もたったころ、おばあさん  
は、おじいさんをよんでいいました。

五761 おじいさんは金のさかなをよびました。

五857 「略」とよびながら、走ってきました。

五865 「略」と、うたのようにふしをつけてよ  
びながら、ひとり子どもがきます。

五1085 かごの中のひわは、なかまをよびました。

六222 ありさん、ありさん。」よばれても、あり  
たちは気がつきません。

六9310 園 魚どもをよんでまいました。

六961 園 「それでは、たいをちよつとここへよん  
できてくれないか。」

八610 「略」とよんでひざをたたくと、ひざ  
の上にとび乗ったり、

八1110 みんなあわてて、口々によんで、元氣づけ  
るやら、くすりをのませるやら、

十2510 「略」と呼ぶ声。

十418 かれを氣ちがいとよび、やましとさえのの  
しるようになった。

十一444 子どもと父兄と、いっしよに呼ばれてい  
るようです。

十一447 総代の名が、ひととき高く呼ばれました。

十一449 私は、自分が呼ばれたような氣がしまし  
た。

十一651 門ばんは、その手紙をひと目みてから、  
看護人と呼んで、

十一9210 「略」といって、名をなんと呼ぼう  
かと思っているうち、

十二332 先生は、お着きになったあくる朝、私を  
おへやに呼んで、一つの人形をくださいました。

十三3112 朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ歩  
いて来る。

十三406 園 はい、真ちゃん……真二を呼んでいた  
だきたいのです……はい。

十四333 この一むれの星を、ふつう太陽系とよん  
でいます。

十四763 それは、海陸風とよばれているもので、

十五2612 少年は、ときどき大きな声をだして人々  
を呼んだり、

十五3510 アフリカのエジプトには、そうした絵文  
字とよばれるものがあつた。

十五683 「略」とよんだつもりで、私はかね  
をカーンとたたいた。

十五861 園 きつと、おまえさんたちを、ごちそう  
によぼうというのだらう。

十五1049 園 『大きな喜び』を呼びにやりましょう。

十五1173 ほかの『大きな喜び』たちを呼ぶ。

よふけ「夜更」(名) 1 夜ふけ

九1437 園 もう夜ふけですよ。

よべ「昨夜」(名) 1 よべ

十一422 園 よべの大雪まだ降りやまぬ。

よほど「余程」(副) 3 よほど

九12310 ここまでくると、てんりゅう川もよほど水  
かさかへっていた。

十二198 園 そこへいくと、こおろぎさんよりよほ  
どいいのです。

十四6812 茶わんの湯と、「略」とは、よほどよく  
にたものと思つてさしつかえありません。

よみ「読」(名) 1 よみ

四763 よよみ書きそろばん。

よみあげる「読上」(下二) 2 読みあげる「一  
ゲ」

十一445 みんな読みあげられてから、おめんじよ  
うをいただくことになりました。

十五737 つくえに白線をひいて「國境」をつくつ

たあたりを、声高らかに読みあげられた。

よみおわる 「読終」(五) 1 読み終る 《一ル》

十三402 読み終ると、また電話口に行き、電話をかける。

よみがえる 「蘇」(五) 1 よみがえる 《一ッ》

十四4612 すっかり、よみがえったような気持になりました。

よみかき (課名) 2 よみかき

一28 七 よみかき……十五

一151 七 よみかき

よみかき (題名) 1 よみかき

六718 はるえは、まえに「こくこ」でならった

「よみかき」のところを、ふと思いだしました。

よみかた 「読方」(名) 5 読みかた

十五381 「海」を「カイ」というようにもとの中國の発音にしたがった読みかたをしたが、

十五385 中國の発音にもついた漢字の読みかたを「音」といい、

十五386 日本のことばによる読みかたを訓という

十五388 たいていの漢字には、この音と訓のふたとおりの性質のちがった読みかたがある。

十五3810 「上・下・生」などの読みかたをちよつと考えてみただけでも、《略》理解されよう。

よみせ 「夜店」(名) 1 夜店

八55 ひとりの小鳥屋が、夜店をひろげていました。

よみつづける 「読続」(下一) 1 読み続ける 《一ケ》

十一292 これを油にかえて、本を読み続けました。

よみて 「読手」(名) 3 読み手

十二936 ひとりがつてんでなく、読み手によくわ

かるようにくふうすることがたいせつである。

十二959 こんな短い文であるが、読み手によって《略》ちがったことを心の中に思いうかべる。

十二9511 いったん読まれてしまうと、読み手の思いでや心持にとかされて、

よみとる 「読取」(五) 1 読みとる 《一リ》

十四365 むかしからすぐれた人たちは、星の光の中からふかい思想を読みとりました。

よみなおす 「読直」(五) 1 よみなおす 《一シ》

四345 みんなは、もう一ど、かずこさんの文をよみなおしました。

よむ 「詠」(五) 1 よむ 《一ム》

十四865 ごくささいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

よむ 「読」(五) 47 よむ 読む 《一マ・ミ・ム・モ・ン》

よむ 「読」(五) 47 よむ 読む 《一マ・ミ・ム・モ・ン》

一152 じをよむときには、くちをつかいます。

一178 だれがよむでしょう。

二522 おかあさんが、いすに こしかけて、本をよんでいらっしやいます。

三308 あとで、できた作文を、ひとりびとりよみました。

四667 上から よんでも 下から よんでも、おなじになることばを考えだす あそびです。

四667 上から よんでも 下から よんでも、おなじになることばを考えだす あそびです。

五10011 「《略》。」と、へんな声でさえずって、さ

五1051 本をよむようなひとりごとをいいました。

五1076 ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つきからつきへときかせました。

七219 きしもとくんが、弟のはるおくと、ふたりで、本をよんでいる。

七292 喜んでみましょうか。

七293 喜んでようだい。

七304 いま、にいさんに日記をよんでももらって

七4610 駅の名も美しくよまれた。

七483 二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人に、はつきりと、そのようすがわかります。

八84 同じ日本の中でも、土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。

九73 このことばを耳にしたり、文字でよんだりますと、夜のしずかなけしきを思いだします。

九451 「小公子」をよんでもらいました。

十193 「ことばの愛」を読んでいる声が、きこえてくる。

十194 ひとりの子どもが、立って本を読んでいる。

十196 「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる声がきこえる。

十198 ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字を読んでいる。

十一266 その一まいめをめぐって、くり返しくり返し読んでみると、

十一269 金次郎は、それを読むとうれしくなり、いっしんに勉強がしたくなりました。

十一2611 いつもその本を手からはなさず、くり返しくり返し、大声で読みながら歩きました。

十一4711 おかあさんがパンをやくそばで、ぼくは、いつも本を読んでいた。

十二1110 ある日、リビングストーンが木かげで書物を読んでいた。

十二399 よんでわかるように、ケラーは、めくらで、そのうえつんぽでした。

十二946 このようにまると、だれでも読んで、

すぐにそのわけがわかる。

十二94 7 ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいちがったものと思いだされてくる。

十二95 11 いったん読まれてしまうと、読み手の思いでや心持にとかされて、

十二112 10 「かいたいず」と読みます。

十三8 4 知識は、人から教えられたり、自分で本を読んだり、《略》して、しだいにまじっていく。

十三40 2 眞ちゃんが書きのこしていた手紙を、とりだして読む。

十三40 8 その間、かた手に持ったさっきの手紙をくり返して読む。

十三40 12 四十日の旅じゃつかれただろう……うん、読んだ。

十三41 1 念んべんもくり返して読んだよ。

十三41 8 念いっしょに読もう。

十三43 1 また、手紙を読みながら、舞台のまん中に出て来る。

十三43 2 三郎手紙を読みながら、

十三54 11 ちょうど、おじさんは、用事がなくしよさいで、本を読んでいらつしやいました。

十四89 9 読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたかくながめた人によって書かれた文である。

十五38 3 その漢字の意味にあった日本語をあてて読むこともした。

十五38 4 このように、日本では一つの漢字をふたとおりに読んできたが、

十五57 12 念ある日のこと、せい書をギリシア語で読みたいといひだした。

十五121 2 私が答辞を読んだ。

十五121 6 読んでいるうちに先生がたに対する感謝の念があふれてきた。

よめ ひとよめ

よめる「読」(下二) 1 よめる 《一メ》

四120 5 本もよめます。

よめ「四方」(名) 1 よめ

十三6 11 そのさかな春のきざしは、よめにあらわれて、

より ひとしより

より(格助) 60 より ひととより

三25 7 念「日のあたるようにするには 切るよりほかにしかたがあるまい。」

三51 2 念石より かたいのみのさき、のみよりつよいうでさきで、かつちんかつちん石を切る。

三51 3 念のみより つよいうでさきで、

三100 6 おじいさんが、だれよりも はやく 山にいつて、

三107 6 念ひようばんよりも ずっと うつくしい。

四77 9 や 山より 高いものはなに。

五54 3 念それより、ほら、もつともつと高いところに、四ばん星——赤い星。

五77 9 かおよりも大きな花です。

五107 3 念こうしていつまでも、ここにいるよりしかたがないのさ。

六113 10 それよりも、《略》みんなに話して、びっくりさせてやろうと考えたからである。

六114 7 だれのたこよりもよくあがりました。

七17 7 念このまえより、なの花がへっているわ。

七30 1 念弟が、ぼくよりさきに、それをみつけた。

七32 9 念おかあさん、花よりきれいな。

八56 6 小鳥屋というより、ほおじろ屋といったほうがいいかもしれません。

八42 5 王女は、王さまにとっては、世界じゅうの

こがねよりもたいせつであつたからです。

八48 2 念世の中にわしより幸福なものはあるまい。

八56 8 まえのよりはまっすぐだが、

八69 6 念いや、ほかのものよりうまくおよぐといつてもいい。

八82 3 念おまえさん、ねこやおばあさんよりかしこいとは思っていないだろうね。

八85 3 しかし、いままでにだれをなつかしく思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。

八88 4 まえより強く空気をうち、とぶことができた。

八89 8 念冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがましだ。

九54 4 二色のときよりも、もつとちがった感じがするにちがひありません。

九12 5 風の音よりも、もつとおもしろいと思ったのは、

九32 3 念まえより元気で、からだもしつかりしてきました。

九115 5 念赤いぬの一びきゆけばこの町のそこここよりぞいぬのあらわる

九133 1 それより、自分のからだははれてくるし、いたいし、苦しくてどうにもなりませんでした。

十61 7 もう、たけのこは、私のせいをすぎて、おにいさんのせいより高くなりました。

十61 11 たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きくなります。

十68 8 次郎かじゃのほうが、太郎かじゃよりも、ずっとおくびよう者でした。

十一4 10 なによりおもしろいのは、大学のボートがいつもここで練習していることだ。

十一21 8 金次郎は、《略》、かえって、おとなより



もよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十二198 図 そこへいくと、こおろぎさんよりほ  
どいいのです。

十二3212 私心の目をあらゆるものに向けて開い  
てくださるため、いいえ、それよりもなによりも  
私を愛するためにきてくださった——そのかたの  
両うでの中に強くだきあげられました。

十二3212 それよりもなによりも、

十二461 図 あやつりは文楽よりもっと古くから  
あったし、

十二4712 図 時間をかけて絵をかくより、写真のほ  
うがずっと便利なわけだけれど、

十二651 根のさきは毛より細い。

十二652 毛よりもやわらかだ。

十二715 先生の近くにいればこそ、毎日教えても  
らえるので、これがなによりうれいしと、

十二1155 それは、民主主義ということばをほん  
うに生かしていくよりほかに道はありません。

十三125 日本の國は、今日よりまだまだ進むこと  
であらう。

十三2510 ところが、ここに、木材よりも、農作物  
よりも、とうといものが生き返りました。

十三2510 木材よりも、農作物よりも、

十三428 図 ……うん、おみやげより、早くきみの  
顔が見たいよ。

十四85 図 なにしろ、私たちよりふかいものなん  
ですから。

十四1511 図 そうすれば、おあいしに行く日のくる  
まで、いままでより時間が早くたつでしょうから。

十四351 人間などは、バクテリアよりも、もっと  
もっと小さなものに感じられるかもしれません。

十四756 畑のほうが、森よりも、日光のためによ

けいあためられるので、

十四1003 けれども、前よりはもっと楽しそうなよ  
うずをしていた。

十五196 これは、富士山よりはすこし高く、四千  
百七十メートルばかりの高さがありますが、

十五753 図 「愛はにくしみよりも強い。」

十五8410 図 私よりよっぽど大きい。

十五964 図 この世の中には、人が思うよりもっと  
たくさん、幸福はあるのだから。

十五9712 図 どこだって、やはり、お金持よりびん  
ぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

十五992 もう一つの「幸福」のむれ、まえよりは  
すこしせの高いのが、廣間の中かけこんで来て、

十五1039 図 『日ぐれの幸福』で、世界じゅうの王  
さまのすべてよりもりっぱで、

十五1049 図 なによりも、まず『大きな喜び』を呼  
びにやりました。

十五1144 図 でも、うちにいるときよりか、ずっと  
お話がうまいな。

よりあつまる 「寄集」(五) 1 より集まる  
《一ツ》

八453 ちえのある人たちは、みんなより集まって、  
《略》、相談をはじめました。

よりかかると 「寄掛」(五) 1 よりかかると 《一ツ》  
十三535 その右の方に、もうひとりの子どもがよ  
りかかっている絵です。

より 「夜」(名) 39 よる 夜 ↓あさからよるま  
で・とりいれまつのよる

一626 よるになると、おどりがはじまりました。

二207 ねえさんはなほしよる ゆめ山川  
三223 たいへんないきおいで、ひるもよるも、  
ぐんぐんと のびて いきました。

三778 図 だから、だれにもひるとよるがある  
のです。

三943 よるのほしも、あさの風も、みんなの  
ものです。

四556 さいわい、雨もふらず、風もふかない、  
しずかな、星の光る夜でした。

四606 そのうちに、夜になってしまいました。

四814 図 星のきれいなこのよるを、みんな  
なかよくあそびましょう。

四843 そのつぎの日の夜、お友だちがあつま  
りました。

四1337 図 黒いころものそろいでまえば、月  
はまっ黒、やみの夜。

五44 山に雨が降る、きりがおりる、夜は夜つゆ  
がおりる。

五587 図 「ほんとに、夜の星ってきれいなもの  
ね。」

五823 図 夜は、はらまきをきちんとして、ねびえ  
をふせぐこと、それから――

六507 図 くらければこそ光る星、ねむりをふらす  
夜の空。

六509 図 きたないこともきえそう、ああ、おご  
そかな夜の空。

六10710 夜、勉強をすましてから、  
八361 夜になって天の川をみると、なんともい  
えない大きなふかい感じにうたれます。

九74 このことばを耳にしたり、文字でよんだ  
りしますと、夜のしずかなけしきを思いだします。

九1183 図 ふくじゅそうのつぼみいとおしむおさ  
な子や夜はいろりの火にあてており

十44 青空の美しさ、朝明けの空、夕やけの空の  
美しさ、月の夜、星の夜の美しさ。

- 十44 月の夜、星の夜の美しさ。  
 十363 かれは、勇氣をふるいおこして、夜も晝もなく考えとおし、  
 十一1712 朝も、晝も、夜も、  
 十一2310 母親も、子どもをよそへやってから、夜になると、ため息ばかりついてねわれません。  
 十一258 夜になると、また、なわをなったりわらじを作ったりしました。  
 十一289 そのうえ、夜おそくこっそりと勉強を続けました。  
 十一2810 夜の勉強には油がいらいます。  
 十一7611 夜になると、少年は、へやのすみにいすを二つならべて、その上でねむりました。  
 十三155 これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。  
 十三244 ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はとくに、しもさえ見ることがあったのです。  
 十三338 夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからないほどである。  
 十四135 夜をどうしてすごしておいででしょうか、お知らせください。  
 十四171 夜が長すぎはしませんか。  
 十四452 千九百二十年十月の、ある月のない夜の事です。  
 十四481 こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。  
 十四551 水と養分とを吸いにとって、夜も晝も送ってあげるの、たいへんなほねおりです。  
 十四703 これは、夜、電燈の光をあてて見ると、もつとよく、あざやかに見えます。  
 十四764 晝間は海から陸へ、夜は反対に陸から海

- へとふきます。  
 十四904 〔因〕「なんと暗い、寒い夜だろう。」  
 よる 〔因〕(五) 56 よる 《ーッ・ラー・リー・ール》  
 五158 汽車のきつぷは、遠い、近いによって、ねだんがちがいますが、  
 九103 たいこのたたきかたによって、いろいろな心持をあらわすことができるし、  
 九129 ただ一つのたいこが、そのうちかたによって、水の音にもなり、風の音にもなり、  
 九175 それによると、〔略〕、しるしをつけてはなしたものだということがわかりました。  
 九1215 茶のうまさは、お茶そのもののうまさにもよるが、たてる湯のうまさがいちいちである。  
 十346 横糸はおさによって、右から左、左から右へといききするのであるが、  
 十348 これを人の手によらず、機械の力で動かすようにしたかった。  
 十4112 これは、まえにさしいれておいた核によって発生した半円眞珠であることが、わかった。  
 十4511 世界の学者の研究によって、天然眞珠とまったく同じであることが、明らかにされた。  
 十6310 それぞれの人物によって、それぞれのめんがあります。  
 十二4010 ケラーに「ことば」というものをわからせることによって、そのまっ暗なさびしい心を明かるくすることに成功しました。  
 十二416 手と手をにぎりあい、そのにぎりかたによって「ことば」をとにかわすようになりました。  
 十二4411 ものによっては、三人がかりで一つの人形を動かすんだ。  
 十二883 ことばは、〔略〕ゆきがかりや、音声や身ぶりによって、いろいろにその意味がかわる。

- 十二959 読み手によって、三人三よう、それぞれちがったことを心の中に思いうかべる。  
 十二9512 その人その人の生活や経験によって生かされてくる。  
 十二10810 身ぶりや、手ぶりによって、このお面は、〔略〕、いろいろな表情をあらわします。  
 十二11211 この本によって、日本の医学は、はじめてしっかりしたものとなりました。  
 十三106 生まれた年によって、その人の性質や運命をきめたりしている。  
 十三116 原因・結果の関係の簡単なものは、普通の知識によって知られ、  
 十三117 むずかしいものは、科学的研究によって調べられる。  
 十三118 もとより世の中には、科学的研究によっても、まだ知られていないことはたくさんあるが、  
 十三121 そうして、人は、道理によって動かなければならない。  
 十三121 知識によらず道理によらず、いたずらに理由のないことを信ずる迷信は、  
 十三121 知識によらず道理によらず、  
 十三227 その生長は、これによってはたされなかつたのであります。  
 十三239 植物学上の事実が、ダルガス親子によって、発見されたのであります。  
 十三2312 親子の発見と努力によってもたらされた、よい結果は、木材だけにとどまりません。  
 十三258 戦いによって失われたシュレスウィヒとホルスタインとは、すでにつぐなわれて、  
 十三263 がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、祖國を生き返らせ、  
 十三304 同じ大きさのどらでも、そのうちかたに

よって、調子がちがう。

十三45 5 あいてのことばを考えて、それによって、

「……」を時間的に短くしたり長くしたりして、

十四32 10 人間は、星によってみちびかれ、

十四32 10 星によってみちびかれ、星によって生き

ているといつてもいいすぎではありません。

十四34 5 博士の話によると、うちゅうは、けつし

てはてしないものではありません。

十四36 7 聞くところによると、キューリー夫人は、

《略》、先生から、星をつかめといわれ、

十四63 6 ばあいにより、つぶがあまり大きくない

ときには、

十四65 6 もちろん、これは、まわりの空氣の温度

によってもちがいますが、

十四68 11 見かたによつては、《略》、よほどよくに

たものと思つてさしつかえありません。

十四80 2 ことによると、なん百年という前からつ

くられて、

十四84 9 さまざまな條件によつて、雪のけつしよ

うがちがうわけを、

十四84 10 映画的手法によつて、よくわかるように

しくんだものであった。

十四85 5 こんなことばによつて、映画は私たちに

説明してくれた。

十四85 6 一ひらの雪によつて、はるかに高い天空

のようすが、こまごまとわかとすれば、

十四87 1 説明のことばなどによつて、かなり生き

生きと表現することができそうである。

十四89 5 こんな場面を、映画独特の手法によつて、

おもしろく編集できないだろうか。

十四89 7 それをとりあつかう人によつて、文章は、

どのような書きあらわされる。

十四89 10 読む人の心がひかれるのは、ものごとを

あたたくながめた人によつて書かれた文である。

十五34 9 その結びかたや、なわの色や、なわの太

さなどによつて、いろいろな考えを表わした。

十五38 6 日本のことばによる読みかたを訓という

十五38 8 字によつては、いくつかの音のあるもの

があり、またいくつかの訓のあるものもある。

十五40 3 源氏物語や枕草子などは、すべてこの

かなによつて書かれた作品である。

十五51 11 祖父たちの間に結ばれた心が、《略》、ま

ごたちによつてふたたび結ばれることになった。

十五66 7 なくなつた新島のおじさんがいい残され

た願ひによつて、私の父は、《略》、京都にすまい

を移すことになった。

十五74 6 それによつて兄が特権を興えられねばな

らないという理由はすこしもない。

十五83 6 ことによるとちよいとでも、この人た

ちのなかにまよいこんでいないともかぎらない。

よる「寄」(五) 15 よる《——ラー——ル》

あゆみよる・おたちよる・かけよる・たちよる・

ちかよる・はしりよる

一12 3 かくれんぼするもの、よつといで。

二34 10 六人のめくらたちは、おそろおそろぞ

うのそばによつてきました。

四126 5 白いはまべのまつ原に、波がよつた

りかえつたり。

四128 1 りようしは、そばへよつて、よくみます。

四134 7 白いはまべのまつ原に、波がよつた

り、かえつたり。

八25 6 せみの死がいは、ありたちがよつてたかつ

てひいていきますが、

九95 1 やがて思いきつて、たかぎのそばにより、

だまつたままそれを取りあげる。

九102 4 ———ねえ、きみ、うちによつて、ねえさ

んにそのボタンをつけてもらわない。

十44 4 よる年なみにも負けず、研究を重ねたすえ、

十66 9 ふたりとも用心して、そばへもよらぬこ

とだ。

十二10 5 ようすをみていたじゅんさが、老人のそ

ばによつてきて、「《略》。」とたずねました。

十二16 10 カンパスの上にぬりつけてみると、思い

もよらない色になってしまう。

十三54 1 『いすによるマドンナ』といわれてい

ます。

十三57 4 『いすによるマドンナ』は、おけのそ

こにかいたという小さな絵だが、

十四97 6 ゆかの上をよたよた歩いて、その女の子

の方へずっとよつてくるではないか。

よるける (下) 2 よろける 《——ケ——ケル》

十三51 3 まだあかんぼうで、母うしがしたでなめ

ると、よろけるんだよ。

十五82 6 歌を歌つたり、ぶつかつたり、よろけた

り、ねむりこけたりしています。

よるこばしい「喜」(形) 1 喜ばしい 《——》

八93 9 わかいはくちようは、そのほそ長い首をあ

げて、心のそこから喜ばしうにさげんだ。

よるこび「喜」(名) 39 喜び ↓うつくしいものを

みるよるこび・おおきなよるこびたち・おおよろこ

び・せいぎであることのよるこび・もののわかるよ

るこび

六19 6 みどりの木の葉は喜びにみち、きよらか

な風は、われわれの音楽をはめてくれる。

六25 8 楽しみはいよいよくわわり、喜びはさら

にたかまる。

六二七九 回はたらないものには、この楽しさ、この喜びはあじわえないだろう。

八八八 これは、ほんとうにきれいで、春の喜びがみちあふれていた。

一二三三 私ほどもらしい喜びと得意さに大はしゃぎで、二階から母のところへかけおり、

一二三七 私のたましいを目ざめさせ、光と希望と喜びとを與えることになったのです。

一二三九 この日が自分にもたらした喜びを思い返していたときの私ほど幸福な子どもを

一二四七 喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。

一三九二 みどりの森が、喜びの声でわらい、波だつ小川が、わらいながら走っていく。

一三五一 いかに、おかあさんの喜びという心持が、よく出ているね。

一四四一 喜びの光。

一四四四 喜びにみちてかがやく光。

一四八九 地上に、ぼちっと黒い土が見えはじめたときの喜びは、たとえようがない。

一五三三 そのときの少年の喜び、そのときの女の子の両親の喜び、

一五三六 そのときの女の子の両親の喜び、

一五九三 幸福どもは、喜びの声をあげながら、いやがる子どもたちをひきずって行くとする。

一五九四 ぼくたちは、〈略〉、屋根をもちあげるほどの喜びをこしらえているのですよ。

一五九四 『大きな喜び』の兄弟ぶんのようなのですからね。

一五九四 『大きな喜び』を呼びにやりましょう。

一五九四 『大きな喜び』ですよ。

一五九四 『正義であることの大きな喜び』で、

〈略〉ときに、いつもにっこりしています。

一五九三 『善人であることの大きな喜び』で、

一五九四 幸福なですが、いちばん悲しそうです。

一五九四 『しごとをしあげる喜び』が、『考えることの喜び』のとなりになります。

一五九四 『考えることの喜び』のとなりになります。

一五九四 『もののわかる喜び』が立っています。

一五九四 『いちばん大きな喜び』の中に、『美しいものを見る喜び』がいます。

一五九四 『愛することの大きな喜び』ですよ。

一五九四 『喜び』をむかえているのですよ。

一五九四 『純潔なものでしょう。』

一五九四 『おかあさんの喜び』です。

一五九四 『母の愛の喜び』です。

一五九四 『母の愛の喜び』を手をたいてむかえます。

一五九四 『母の愛の喜び』は、喜びの中でも、いちばん美しい喜びなんです。

一五九四 『おかしな私たちの愛は、喜びの中でも、いちばん美しい喜びなんです。』

一五九四 『物のわかる喜び』で、

一五九四 『正義であることの喜び』で、

一五九四 『美しいものを見る喜び』で、

一五九四 『物のわかる喜び』、「光」の方へ行き、

ふたりは長いあいだきあいます。

「喜」

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』

一五九四 『喜』は、人がまだ知らずにいる『喜』



六36<sup>10</sup> 風の音がよくなる。

八46<sup>7</sup> 金持だと思うとからだがよわかったり、からだがいよいよぶだとちえがたりなかつたり、

十65<sup>5</sup> へまをやったり、だまされたりなど、よわい人間のしそうなことを、なんでもやります。

十一19<sup>9</sup> りえもんは、からだがよわくて、よく働けませんでした。

十二71<sup>8</sup> 芭蕉はからだがいよいよ、寒さは身にこたえましたが、雪をみるのが楽しみでした。

十四65<sup>4</sup> 反対に、湯がぬるいと、いきおいがよわいわけです。

よわむし「弱虫」(名) 3 よわ虫

十一62<sup>2</sup> はじめ、ぼくがことわると、よわ虫だといってわらうのです。

十一62<sup>5</sup> なるほど、よわ虫だ。

十一62<sup>6</sup> おまえのようなよわ虫には、〈略〉あぶないときでも、いいですこのできないほど、

『いいえ』ということばはいにくいのだ。

よわよわしい「弱弱」(形) 1 よわよわしい「イ」

八17<sup>8</sup> 虫は、はじめは、白い、よわよわしいうじのようなかたちをしています。

よわりきる「弱切」(五) 1 よわりきる「一ッ」

九20<sup>6</sup> 自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわりきっているつばめたちを運んできました。

よわる「弱」(五) 3 よわる「一ッ」

六29<sup>7</sup> お元氣どころか、このとおりすっかりよわって。

十五62<sup>6</sup> やえ子、満ぼろがまた、おくの手をだしたよ、よわったなあ。

十五64<sup>7</sup> よわったなあ。

よんかげつ「四箇月」(名) 2 四ヶ月

九31<sup>2</sup> こちらへきてから、もう四ヶ月になりました。

十二82<sup>2</sup> 五月、六月、七月、八月の四ヶ月にわたって、

よんキロ(名) 2 四キロ

九76<sup>2</sup> みんなで、学校から四キロほどある貝づかへいきました。

十四68<sup>8</sup> うずの高さも、四キロとか八キロとかいうのだから、そういう、いろいろなかかったことがおこるのです。

よんキログラム(名) 1 4 kg

七98<sup>8</sup> 母うさぎは4 kg、子うさぎは、おもいで320 g、かるいので260 gでした。

よんくみ「四組」(名) 3 四くみ 四組

三18<sup>5</sup> 四くみは鳥の名をあつめました。

三21<sup>3</sup> 四くみの人たちに。

四71<sup>7</sup> 四組の「ふくびき」。

よんじつキロあまり(名) 1 四十キロあまり

九123<sup>8</sup> てんりゆうきょうという景色で名高いところもすぎて、四十キロあまりもきてしまった。

よんしゅるい「四種類」(名) 1 四種類

十五42<sup>7</sup> 世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかっている國があろうか。

よんぼ「四歩」(名) 1 四歩

十一44<sup>10</sup> 弟は、すこし大またで四歩ほどまゑに進みました。

よんまい「四枚」(名) 1 四まい

六69<sup>4</sup> かべ新聞の大きさは、わら半紙を四まいはりあわせたものです。

よんリットル(名) 1 4 l

八109<sup>6</sup> やく12平方mの土地で、4 lのげん米がとれました。

ら

ら しかれら・こどもら・これら・それら・ぼくら・われら

ら 1 ら

四77<sup>2</sup> ら——ラジオのお話ききましょう。

らい「雷」(名) 1 らい

十一35<sup>7</sup> まばゆく光るいなすまに、続いてひびくらの音。

らいう「雷雨」(名) 4 らい雨

十四67<sup>11</sup> それは、らい雨のときに、空中におこっている大きなうずです。

十四68<sup>11</sup> 茶わんの湯と、こうしたらい雨のぼあいとは、よほどよくにたものと思つてさしつかえありません。

十四69<sup>1</sup> らい雨のできかたは、〈略〉、だいぶようすのちがつたのもあります。

十四69<sup>6</sup> 一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

らいきやく「来客」(名) 1 来客

十四46<sup>2</sup> 大ぜいの来客を前にして、客間で歌っているのと、〈略〉ちがわないような歌いかたです。

らいぎよ「雷魚」(名) 3 らいぎよ

九33<sup>4</sup> それから、らいぎよもいます。

九33<sup>4</sup> らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだんへつてきたそうです。

九33<sup>9</sup> らいぎよは、大きなのになると、三十センチあまりもあります。

らいしゅう「来週」(名) 1 来週

六56<sup>2</sup> 私の学級では、来週から、かべ新聞を発行

することにしました。

ライト ↓ヘッドライト

らいねん「来年」(名) 5 来年

六115 5 ただしちゃんは、海外からひきあげてきた

子で、来年小学校へあがります。

九24 3 ある家ののき下で巣をつくったつばめは、

来年また、同じ巣へもどってくるというのです。

十二19 10 傘だことをかえりみて、来年はもつ

ともしっかりと考えると考えることができます。

十二21 7 傘 来年とか、さ来年とか、それからもつ

とさきのことをおしやつたりすると、

十四61 7 傘 いちばんいい種を、来年もわすれずに

まいてもらうことができさえすれば、

ライラック (名) 1 ライラック

十一49 7 やぎ小屋のまわりには、おかあさんのお

すきなライラックを植えましょう。

らか ↓あきらか・おほか・きよらか・たからか・

やすらか・やわからか

らく「楽」(形状) 6 らく

四45 5 傘 おしまいは気がらくでいいからって、

いったじやないか。

四45 7 傘 気がらくにはらくさ。

四45 7 傘 気がらくにはらくさ。

六97 2 傘 あ、これですっかりらくになりました。

七37 1 なんだか、まわりがすこしゆるやかになり、

からだがかくになったような気がしました。

九147 10 こう決心がつくと、くもは、すっかりらく

な気持ちになりました。

らくえん「楽園」(名) 2 楽園

十三17 8 世界の楽園といわれるこの國も、〈略〉、

ドイツオーストリア二國との戦いに敗れ、

十四102 7 その子がどんなに幸福に、神さまの楽園

の中で、元日をむかえているかを知らないのだ。

らくだ「駱駝」(名) 19 らくだ ↓にげたらくだ

七76 3 傘 あなたがたは、らくだをにがして、それ

をさがしていらつしやるのではありませんか。

七76 8 傘 そのらくだは、かた目ではありませんか。

七77 6 傘 そうそう、そのらくだは、まえ歯が二三

本ぬけてはいませんか。

七78 6 傘 いや、わたしは、そのらくだをみたので

はありません。

七78 11 傘 あなたは、そのらくだを、どこかへつれ

ていったのにそういない。

七80 3 傘 私どもは、麦をつけたらくだをつれて、

さばくを通っていましたが、

七80 7 傘 目がさめてみると、らくだがいません。

七80 11 傘 らくだをにがしたのではないか。

七81 3 傘 この人は、私どものらくだのことについ

て、それはよく知っております。

七81 5 傘 だいいち、らくだがかた目であることを

知っていました。

七81 6 傘 そのとおり、私どものらくだは、かた目

でございます。

七81 8 傘 らくだがびっこであることも知っていま

した。

七81 11 傘 らくだのまえ歯が、二三本ぬけているこ

とまで。

七82 4 傘 らくだをぬすんだのは、この男にちがい

ありません。

七82 11 傘 私がさばくを旅していますと、砂の上に

らくだの足あとがつづいていました。

七83 1 傘 それで、このらくだはどこからにげて

きたのではないかと、思ったのです。

七83 3 傘 それから、そのらくだがかた目だという

ことは、どうしてわかったのかね。

七85 2 傘 らくだは、あなたがぬすんだのではない。

七85 9 傘 早くいつてらくだをさがしなさい。

らくらく「楽楽」(副) 1 らくらく

五79 11 波が、すべりだいをすべるように、らくら

くと流れていきます。

ラケット (名) 1 ラケット

十四21 9 テニス、ピンポン、ラケット、スキー、

らしい(助動) 38 らしい《ラシイ・ラシク》↓お

とこらしい・こどもらしい・にっぽんらしい・にん

げんらしい

四47 2 傘 そこらが「ぼん 安全らしい。

五94 7 傘 「すずめの子らしいね。」

五99 10 傘 この鳥はとべなくなつたらしい。

六28 11 傘 おや、だれかたずねてきたらしい。

六83 6 傘 大きな魚らしい。

六109 4 「かむ」の「ム」がいいにくいらしい。

七46 6 縣道らしい白っぽい道、

八9 1 ピオのほうでも、その氣になつたらしく、

八21 4 皮がこわばつていて不自由だし、目もよく

はみえないらしいので、

八24 4 黒いところは黒く、茶色のところは茶色に

なつて、いかにもあぶらげみらしくなります。

九14 6 音というものは、情景をあらわすばかりで

なく、心持まであらわすことができるものらしい。

九71 3 とうとう決心したらしく、

九77 5 傘 むかしといつても大むかしのことだが、

貝などをおもにたべていたときがあつたらしい。

九82 3 せきふらしい物、土器らしい物、ただのわ

り石のような物などがたまっています。

九82 4 土器らしい物、

九82 5 傘 先生のところは、いろいろでるらしいぞ。

九二九〇 「それ、これはせきふらしいぞ。」

九三三〇 骨で作ったものらしいよ。

九四六 こんどは負けたらしくたちどまつて待つて  
いる。

九三八 首がいたいらしく、手でさすっている。

九四七 っぱめは、麦畑らしい土地の上をとびまし  
た。

九五二 この返事に、少年も満足したらしく、《略》  
の美しさを、思いうかべるようにいいました。

五二二 「オハナシシテ」という心らしいのです。

五四八 そのけむりやほのおがおもしろいらしく、

六三 七 おもしろいやべにでけしようにして、その役  
らしく顔をこしらえあげるのですが、

六一三 三 いなかの人らしいひとりの少年が、

六一七 三 どこといつて父親らしいところはありま  
せんでした。

六一八 二 二 どうやら、あなたのむすこさんと同じ  
年ぐらいのむすこがいるらしく、

二七六 八 なんてんの実が、赤く、うさぎの目らし  
くいれてありました。

二七七 九 休けい場にもどつてくると、中国人らし  
い十一の兄弟にサインを頼まれました。

二七八 九 よくみていますと、どこかしら日本人ら  
しいところもあるので、

二八八 八 皮さいくの店らしく、なにかの毛皮がひ  
ろげてあります。

二九〇 二 くだものをならべたやお屋らしいのもあ  
ります。

三〇五 六 「……」を時間的に短くしたり長くした  
りして、電話の話らしくしなければなりません。

三〇九 九 そのマリアは、たいへん美しくて、い  
かにもおかあさんらしいと思うのです。

三三九 五 老人のぼうさんらしい人が、その前にひ  
れふしている絵でした。

三四八 六 船がしずむひょうしに流れ出たものらし  
い一本の大きなるたに、

三五九 六 さとう おじようざらしく、《略》。

ラジウム (名) 一 ラジウム

三四七 一 夫人は、《略》、その感動から研究を進め  
て、ついにラジウムを発見したのです。

ラジオ (名) 一 一 ラジオ らじお

一六六 らじおも ねむりました。

四七四 ラジオと かけて なんと とき。

四七二 ら——ラジオのお話 ききましよう。

六三七 ラジオの音楽。

七九 一 そこからラジオがきこえてくる。

七五三 あさがおの花が、ラジオの音楽をきいてい  
ます。

九一〇 二 このあいだ、ラジオで、「劇場音楽の話」  
をきいた。

九二九 五 二 さるすべりラジオのほかにも声もなし

四二九 九 ラケット、スキー、ラジオ、ニュース、

四二四 二 二 たとえば、ラジオといっしょに、「ラジ  
オ」ということばがはいり、

四二四 二 「ラジオ」ということばがはいり、

らっぱ 「喇叭」(名) 二 ラッパ らっぱ

一三 五 「うたをうたえば」では、くちに てを  
あてて、らっぱのようにしました。

一三六 二 花よめ行列のラッパの音が、どこかでひ  
びく。

ラファエル (人名) 一 一 ラファエル

一三三 二 三 これは、いまから五百年ほど前に、イ  
タリアのラファエルという画家のかいたもので、

一三六 八 ラファエルは、ウルピノというところ

で生まれ、

一三三 一 三 ミケランジェロとラファエルは、前後  
して、そこからローマに出て、

一三三 三 中でも、ラファエルは、マドンナの像  
をかくことが得意だった。

一三三 九 三 それはそうとして、ラファエルのかい  
たマドンナのかわったのを見せてあげよう。

一三三 一二 三 うまさからいうと、ラファエルのほう  
がうまいかもしれないが、

一三三 一六 三 でも、ラファエルのうまさは、普通の  
人にもわかるだろうね。

一三三 一七 三 《ラレ・ラレル》

一四六 二 二 かたなだの、てっぽうだの、あぶないも  
のは みんなとりあげられてしまいました。

一五八 六 おりれば みずうみへでられますし、

一五八 七 のぼれば 大きな 木の ある ところへで  
られます。

四三 四 先生に こう たずねられて、みんなは、も  
う 一ど、かずさんの文をよみなおしました。

四二八 八 『あげられませんか』というわけです。

四二四 三 三 それから、みんなの手で そだてられ、

五二六 二 ポストにいれられると、友だちといっしょ  
になりました。

五二八 二 二 そこで、私たちは、じようぶなふくろにい  
れられて、かぎをかけられました。

五二八 二 二 かぎをかけられました。

五二八 二 二 こんどは、また、かばんの中にいれられま  
した。

五二八 二 二 大むかしのたいようのねつが、かたちをか  
え、石炭の中にたくわえられていて、

五二八 二 二 よくみると、ねこにひっつかれた羽がぶら  
りとなつて、半分しかひろげられません。



六277(金) こうしてあたたまることもできるし、た  
べものもじゅうぶなべられるというわけだ。  
六328 かかしが風にまきあげられる。  
六345 かかし、一どはねあげられるが、もんど  
りうって、また、ひげの中におちる。  
六368 高くふきあげられて、空にきえていくか  
し——  
六731 おとうさんにたずねられて、  
六1012 こう思いつくと、ぼくは、もう、じつとし  
ていられなくなった。  
六1208(金) いま、きつねに追いかけてるんだ。  
六1347 自分たちは、あの大きなすどい角で、つ  
きあげられてしまわなければなりません。  
六1401(金) おいしい肉がたべられる。  
七113 「手がつけられません。」  
七287(金) 國語の時間に、先生にほめられたの。  
七296(金) それは、すずめたちにたべられないため  
だと、おかさんが教えてくださった。  
七305(金) きょう、先生にほめられたんですって。  
七516 ぼくらのほうが、どんどんあてられて、セ  
ンターまで、外野にでてしまった。  
七517 ぼくもあてられた。  
七592 まだ、みがきあげられたことばということ  
はできません。  
八65 その晩から家族のひとりになり、あくる日、  
ピオという名がつけられました。  
八135 それから十年、いまも、私はピオのことが  
わすれられません。  
八143 夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に生  
みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。  
八1811 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、  
つみごえやこえ土の中に生みつけられて、

八215 ねこや、すずめにみつけれたいへん  
です。  
八253 死ぬことなど考えられないほどにぎやかに  
鳴きたてたせみも、  
八604 野原にはかれ草がつみあげられ、このと  
りは、長い赤い足をして歩きまわっていた。  
八678 親あひるにつれられたひなたが通って  
くと、  
八786 朝になって、よそからきたあひるの子は、  
すぐにみつけれられた。  
八7811(金) これからはあひるのたまごもたべられる。  
八861 つかれはてて、こおりの中にとじこめられ  
たまま、身動きもせずたおれてしまった。  
八865 あひるの子はまたいじめられるかと思つて、  
八896(金) なかまに追いかけられたり、にわとりに  
ぶたれたり、女の子につきのけられたり、  
八897(金) 女の子につきのけられたり、  
八933 そのむかし、いじめられたり、あざけられ  
たりしたときのことを考えた。  
八1049 葉のうらに、青黒いなかのたまごが生み  
つけられていました。  
九45 そばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは  
感じられなかった明かるさがあらわれます。  
九111 水の音をたいこであらわすことなどは、  
ちよつと考えられないが、  
九2011 へやはいそいであたためられ、  
九2311 たいへんありがたいことだといわずにはい  
られません。  
九394(金) 下からどんなに大きな声で話しかけられ  
ても、きこえないときがあります。  
九884 たかぎとやまだが左右にひきわけられたと  
ころである。

九1043 ぼくたち四十人は、のだ先生といしい先生  
につれられて、山のスキー場へいった。  
九1055 のだ先生が先頭に立たれ、いしい先生は、  
みんなのあとからこられた。  
九1061 「《略》。」と、大きな声をかけられる。  
九1106 そのみごとなすべりぶりにみとれてみると、  
先生たちは、もう目のまえにこられた。  
九1106 はげしい制動をかけられると、もうもうと  
雪けむりが立つ。  
九1192 私は父につれられて、近くの高い山に登っ  
た。  
九1221 それで茶をたててみると、いままで味わっ  
たこともないような、ふしぎな味が感じられた。  
九1224 すると、いい味は、もつと遠いところで感  
じられる。  
九1241 ここで茶人のしたには、まぎれもないいい  
味はつきりと感じられるようになった。  
九1324 ぐずぐずしている、そのままたべられる  
ので、《略》、ちくりとつきさしました。  
十710 こんなにうるさくついてこられたときには、  
おとうさんも困りましたので、  
十358 佐吉は、もう、じつとしていられなくなり、  
十374 そこでさらに、七年間のくふうがつづけら  
れ、みごとに、自動織機ができたが、  
十384 眞珠は、海のそこらまにひろいあげら  
れる、ふしぎな宝石とされてきたが、  
十425 それから、眞珠貝養殖の科学的研究がつづ  
けられた。  
十438 ゆめにもわすれられない眞田眞珠が、光っ  
ているではないか。  
十647 能といっしょに、狂言というものが演じら  
れます。

- 十一177 いいことと、正しいことは、おかあさま、あなたの目から教えられました。
- 十一286 金次郎は親類のまんべさんのところに、あずけられることになりました。
- 十一445 みんな読みあげられてから、おめんじょうをいただくことになりました。
- 十一541 このごろ、電車の中に、つぎのようなひょう語がかかげられているのをみた。
- 十一606 かたくとめられていたのである。
- 十一608 が、いま、友だちからすすめられて、ことうりかねてしまった。
- 十一612 さいわい近くの田で働いていた村の人たちに助けられて、
- 十一611金 ぼくは、とめられているから渡らない。
- 十一809 少年は希望に力づけられながら、
- 十二331 そのかたの両うでの中に強くだきあげられました。
- 十二557 傳説には、〈略〉、昔からいい伝えられたというだけのもののほうが多い。
- 十二559 ただ人々のあいだで語り伝えられているだけで、
- 十二611 それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。
- 十二638 また人にみられるのもこまる。
- 十二753 その夜は、すべての音も雪にうずめられたようなしずかさでした。
- 十二751金 おひとりですらどうしていられるかと思うと、どうしてもこずにはいられませんでした。
- 十二7512金 こずにはいられませんでした。
- 十二1012 東京のやよい町から発見されたので、やよい式土器という名まえがつけられています。
- 十二1134 一つの時代でもなみなみのどりよくでな

- しとげられるものではありません。
- 十三83 知識は、人から教えられたり、自分で本を読んだり、〈略〉、しだいにましていく。
- 十三111 これらの人がみな同じ性質をもち、同じ運命をたどるとは、考えられない。
- 十三117 むずかしいものは、科学的研究によって調べられる。
- 十三1510 だまっていられず、本を書いて、地動説を強くとなえました。
- 十三2311 ユートランドのあれ地には、おいしげったもみの林が見られるようになりました。
- 十三2411 木材があたえられたうえに、いい氣候があたえられました。
- 十三2412 いい氣候があたえられました。
- 十三298 黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげられ、にぎやかな話が続く。
- 十三357 正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。
- 十三443 しばいは、かならず、ふたり以上の会話から組みたてられています。
- 十四59 すなおな心は、まずしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。
- 十四67国 たって以来、一分間も、おかあさんのことを考えないではいられませんでした。
- 十四195 田中さんが答えられないでいると、
- 十四212 先生は、つぎつぎと書き続けられた。
- 十四2411 日本になかった品物が、外国から伝えられたときに、
- 十四251 「タバコ」ということが、伝えられたということがわかった。
- 十四258 ことばも、それにつれて、新しく生まれるものであることが、考えられる。

- 十四2712金 「どうすれば、外国からきたことばが調べられますか。」
- 十四295 だれでも、どこからでも、自由に見られるものなのです。
- 十四351 人間などは、バクテリアよりも、もっともっと小さなものに感じられるかもしれません。
- 十四443金 そうして、なんでもこんなにほがらからいられるのか、それを、こう話してやるのだ。
- 十四505 みんなすくいあげられました。
- 十四5010 美しい歌は、いまも、われわれの耳にひびいてくるように感じられるではありませんか。
- 十四681 陸地の上のどこかの一地方が、日光のために、特別にあためられると、
- 十四731 かべや屋根が熱せられると、
- 十四751 地面の空氣が、日光のためにあためられてできるときのむらは、
- 十四757 畑のほうが、森よりも、日光のためによいあいあためられるので、
- 十四767 これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。
- 十四804 よその民族から教えられて、それからいい伝えられているものもあるかもしれません。
- 十四805 それからいい伝えられているもの
- 十四809 あのような、短くて調子のいい、氣のきいたものになったものとも考えられます。
- 十四966 女の子は、またそうしないではいられなくなつて、
- 十五2010 このふたりの子どもたちは、両親や家庭教師につれられて、散歩に出て来るのでした。
- 十五2011 ニューヨークの大都会で育てられた子どもたちには、
- 十五218 ふたりの子どもは家庭教師につれられて、

十五25 大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなつて、  
 十五27 下の方にいる女の子を元気づけるために「略。」といわずにはいられませんでした。  
 十五37 漢字が中國から日本に伝えられたのは、千七百年ほどまえであるが、  
 十五45 すすめられたいすにかけて、楽しそうに語りだした。  
 十五47 有田に焼物のはじめられたのは、いまから三百三十年ばかりまえのことである。  
 十五48 細工人、画工、ちようこく師、下ばたき者などが、三十数人かえられていた。  
 十五50 ブリンクリーは、日本の美しい焼物にひきつけられていろいろな焼物を集めた。  
 十五55 恩師ジョルダン博士は、そのためのはずを早くからすすめていた。  
 十五58 遠い昔を思い出して、ひとりそのときの思い出にふけていられるようすだった。  
 十五61 私は、札幌の創成川の岸にあった家につれられて行つても、  
 十五62 「略。」といつて、おじさんはおばさんに助け船を求められた。  
 十五64 おじさんとおばさんはそのあとを追つて出て來られたが、  
 十五65 秋たけてりんごのみのころ、おじさんとおばさんは京都へひきあげられたが、  
 十五66 十の春をむかえた私は、《略》、ひとり父につれられて、景色の美しい京都に移つた。  
 十五69 おじさんが日夜ふでをとっていられたという大きなつくえの上に、  
 十五69 手紙のたびごとに、どうしているかとたずねられたのもそのはずだ。

十五73 つくえに白線をひいて「國境」をつくつたあたりを、声高らかに読みあげられた。  
 十五74 兄が特権を與えられねばならないという理由はすこしもない。  
 十五89 わたしは、とてもいちいちしょうかいしてはいられない。  
 十五93 物をたべているときは、だれにもかまっていられません。  
 十五95 ダイヤモンドの光にたえられる幸福の精を見るのだよ。  
 十五96 ふつうの人間には、それが見つけられないのだよ。  
 十五103 外へ出ればいつでも、この『幸福』たちは見られます。  
 十五115 でも、おまえたちは、どうしてここまであがつて來られたの。  
 十五118 私たちは、幸福なのですけれど、私たちのゆめ以上のものは、見られないのです。  
 らん 〔欄〕(名) 1 らん  
 六18 毎朝、このらんに、その日の朝の温度を書きつけましよう。  
 らんざつ 〔乱雑〕(名) 1 らんざつ  
 十五12 毎日の生活のらんざつとあわただしさの中に、それを失っている。  
 ランドセル (名) 2 ランドセル  
 十四20 ナイフ、ゴム、ランドセル、ピアノ、  
 十四23 ゴム、ランドセル、コーヒー、コレラ、  
 ランネルスドルフ (地名) 1 ランネルスドルフ  
 九19 近くのランネルスドルフというところから、  
 《略》知らせてきました。  
 ランプ (名) 13 ランプ ①アルコールランプ  
 十三48 「ます」小屋のランプが、きゆうに暗く

なりました。  
 十四10 ランプとコーヒー入れとは、あす、送らせませす。  
 十四10 ランプについては、いろいろいいことを教えてくれました。  
 十四11 おかあさん、いま、ランプとコーヒー入れを送らせました。  
 十四11 このランプは、石油でもきはつ油でも、どちらをおつかいになつてもかまいません。  
 十四11 ランプはかべにおかけなさい。  
 十四12 それに、ランプは、かきなしでもりっぱに役にたちます。  
 十四12 私の友だちで、母親が十年このかた、この式のランプをつかつているというのが、  
 十四12 その友だちの母親は、このランプに満足しているそうです。  
 十四16 ランプがお氣にいつて、うれしく思いました。  
 十五12 ガラス戸の外につくよをながむれどランプの影のうつりて見えず  
 十五12 紙をもてランプおえばガラス戸の外につくよの明らけく見ゆ  
 十五13 おまけに、いつかランプをつけるときやけどをしたあとまであるよ。  
 らんぼう 〔乱暴〕(名) 1 らんぼう  
 十24 「このうえそんならんぼうをしては、いっそうしかられるじやないか。」  
 らんぼう 〔乱暴〕(形状) 2 らんぼう  
 六35 なんてらんぼうな風なんだろう。  
 十五15 このらんぼうなやつ、いったいなんだい。

り

り (助動) 6 り 《リル》

九286 [文] 大空にのびかたむける冬木かな

九293 [文] うらがれにおろされ立てる子どもかな

九302 [文] まえ向けるすずめは白し朝ぐもり

十五125 [文] ガラス戸の外は月あかし森の上に白

雲長くたなびける見ゆ

十五146 [文] 風くればばらはたちまち火となれり

ゆれにゆるるか照りそう風に

十五167 [文] 土ほこり顔よごすとも、わするるな、

明かるくすめるながえ顔。

り 1 り

四753 り—りんごのような 赤いほお。

りいさん 1 リイサン

六104 [文] 「リイサン」のようだ。

りえもん (人名) 3 りえもん

十一195 その子どもに、りえもんという人があり

ましたが、たいへん情ぶかい人でした。

十一199 りえもんは、からだがよくわくて、よく働

けませんでした。

十一1912 りえもんは、なんとかして、からだを

じょうぶにして、《略》と、ほねをおつていまし

た。

りか [理科] (名) 2 りか 理科

四116 しゃかい、さんすう、りか、おんがく、

十四115 理科の本などにある、ピーカーのそこを

アルコーランプで熱したときの水の流れと、

りかい—する [理解] (サ変) 1 理解する 《—サ》

十五3811 ちょっと考えてみただけでも、このこと  
がすぐ理解されよう。

りき [利器] (名) 1 利器

九239 飛行機という文明の利器が、このしごとに

つかわれたということを、

りく [陸] (名) 5 りく 陸

三432 白うさが、島から りくへ

いつてみたいと思いました。

三446 [文] りくまでならんで みたまえ。

三4410 もう ひと足で りくへ あがろうとい

とき、

十四764 書間は海から陸へ、夜は反対に陸から海

へとふきます。

十四764 夜は反対に陸から海へとふきます。

りくち [陸地] (名) 3 陸地

十二410 [文] 「大洋を西へ西へと航海して陸地に

あつたのが、それほどの手がらだらうか。」

十四6712 陸地の上のどこかの一地方が、日光のた

めに、特別にあたためられると、

十四763 気流のじゅんかんが、もっと大じかけに、

陸地と海との間に行われております。

りこう [利口] (形状) 2 りこう

八810 なんとりこうな、土地にかんけいのふかい

鳥だらうと、

八819 [文] 世界じゅうで、あの人ほどりこうな人は

ありはしないから。

りこうさ [利口] (名) 1 りこうさ

八107 ビオのゆうかんさや、りこうさや、ちゃめ

ぶりや、おかしさなどは、

りす [栗鼠] (名) 8 りす

三341 [文] そこに、はくせいの りすが、二ひき

のつていました。

三526 [文] りすはしらかばの木にはねて、「高い、  
高い。」といいました。

九531 一本のくるみの木のこずえを、りすが、

びよんびよんとんでいました。

九533 [文] おい、りす。

九534 りすは、木の上からひたいに手をかざして、

いちろうをみながら答えました。

九539 [文] りす、ありがとう。

九5310 りすはもういませんでした。

十二923 りすをみつめて追いかけたこと、もみじ

の枝をとってきたこと——

りすさん [栗鼠] (名) 5 りすさん

四5910 [文] 「りすさん、がんのなかまを みかけな

かったかい。」

六1237 カチン、カチンとわっていると、そこへ

ちよろちよると、りすさんがきました。

六1244 [文] 「りすさんは、くるみがいすきだそう

だから、あげようか。」

六1246 [文] りすさん、さ、あげるよ。

六1247 りすさんは、両手に、くるみをにぎって、

おいしそうにたべました。

リズム (名) 1 リズム

十四268 音楽の時間によくつかう、リズムとか、

ハーモニ—とか、

りそう [理想] (名) 2 理想

十二225 [文] 高い理想をめざして、いっしょうけん

めいけいこをすることだ。

十三198 かれは、科学者であり、理想を実現する

誠意にみちていました。

リックサック (名) 2 リックサック

九1051 ぼくたちは、リックサックをせおって、ス

キーをつけ、

十三418 ㊦ ああ、リックサクも二つある。

りったいかん 「立体感」(名) 1 立体感

十二172 ㊦ すこしも立体感がない。

リットル ↓さんてんごデシリットル・にリットル・

やくさんてんろくデシリットル・よんリットル

りっぱ 「立派」(形状) 53 りっぱ

三115 はんたかをりっぱな人にしてやりたい

と、おおもいになりました。

三464 そのとき、みなのりっぱなかたがた

が大ぜいおとりになって、

三1052 どんなりっぱな人のねがいを、みん

なことわってしまいました。

四403 ㊦ あなたがたは、これから、りっぱなこ

とばにいろいろであうでしょう。

五6910 おじいさんが帰ると、りっぱな家がたつて

いました。

五741 そばには、りっぱなけいもついています。

六898 ㊦ まあ、りっぱなかたが、水にうつてい

るわ。

六913 ㊦ 門の木のうに、りっぱなかたがいらっ

しゃいます。

六914 ㊦ 木の上に、りっぱなかたが。

八291 ㊦ むすめのために、りっぱなむこをさがし

てやろう。

八468 金もあり、からだもりっぱで、なんの不自

由もなくくらししているかと思うと、

八841 草むらから、大きなりっぱな鳥の一むれが

やってきた。

八914 いまは、その身をとりまくりっぱなもの

の中に、しみじみと幸福をさつたのである。

九551 まわりは、りっぱなオリーブ色のかやの木

の森でかこまれていました。

九1010 ㊦ じまん話をはじめると、自分がいちばん

りっぱだと思ふんだね。

九1074 のだ先生がつえでさされる方をみると、な

るほどりっぱなスキー場で、

十3111 ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっ

ぱにそのつとめをはたし、

十353 そのりっぱな機械をみて、

十3612 その織機をあやつつて、りっぱにぬのを

織つてみせたのは、佐吉の母であつた。

十722 いきなり、とこのまのりっぱなけものを

ひきさきました。

十一510 ㊦ ぼくは、父にいたら、せいの高いりっ

ぱなからだになるだろう。

十一84 ㊦ これこそ、いちばんりっぱなものだと

思う。

十一911 ㊦ しかし、りっぱなコックスは、いつか

りっぱな船長になるだろうよ。

十一912 ㊦ いつかりっぱな船長になるだろうよ。

十一101 ㊦ 「じゃあ、りっぱな整調は、りっぱな

運轉をする人になるだろうね。」

十一101 ㊦ りっぱな運轉をする人になるだろうね。

十一112 ㊦ 「いい整調が、りっぱに日本じゅうの

足なみをそろえてくれるにちがいないよ。」

十一194 働くことがすきで、一代でりっぱな身代

をこしらえました。

十一2511 かえつて、その体格もりっぱになつてい

きました。

十一266 りっぱな人になるためには、学問をしな

くてはならないと書いてありました。

十二213 ㊦ 文雄さんがりっぱな絵かきになるころ

は、わたしも、ずっと大きな木になつて、

十二215 ㊦ 美しいりっぱな実をたくさんつけるよ

うになりたいものです。

十二3910 こんなりっぱな文章が書けるといふこと

は、なんとすばらしいことではありませんか。

十二423 そののち、ヘレン・ケラーは、大学を

りっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。

十二447 ㊦ 日本には、文楽といつて、りっぱな人

形しばいがある。

十二466 ㊦ アジアでもヨーロッパでも、りっぱな

影絵しばいできている。

十二698 それにあつみと廣さがなかったら、正し

くりっぱに世の中をわたることができない。

十二829 みるからにりっぱな体格は、小さな清水

選手のおよぶところではありません。

十二1026 この美しい、りっぱなほとけさまは、

十二1099 いんさつ機も外國から渡つてきていまし

たから、こんなりっぱな本ができました。

十二1122 三人がひとつに心をあわせた美しさは、

このとおりりっぱなものとなつて生まれたのです。

十三3411 れんは、めでたい文句や、詩の一節であ

るが、みな、りっぱな文字で書かれてある。

十三5910 ㊦ この絵は、たいへん大きなりっぱな絵

だよ。

十三614 ㊦ 自由にふでをふるつて、りっぱな作品

をたくさんのかしたのはいえらいよ。

十四122 ㊦ それに、ランプは、かさなしでもりっ

ぱに役にたちます。

十四3112 日本は、見ちがえるほどりっぱな國に

なつていくのです。

十四565 ㊦ 私が運んであげなかったら、りっぱな

かぼちゃの実にはなりません。

十四1012 こんなにせいが高く、りっぱで、美しく、

そうして、しんせつに見えたことは、

十五53 目ざすりっぱな博物館に自動車を持ちつ  
け、  
十五60 げんかんに出て、横づけにしてあった  
りっぱな自動車に、ためらう私をおしこみ、  
十五66 1 りっぱなむしや人形にそえて、《略》を  
二まい、満ほうへと名ざしで送ってくださった。  
十五87 7 図 このとおり、りっぱな、ふくれあがっ  
た顔をしています。  
十五103 9 図 世界じゅうの王さまのすべてよりも  
りっぱで、  
りっぱすぎる 《立派通》(上) 1 りっぱすぎる  
《ギル》  
十二16 7 おじさんからゆずってもらったもので、  
子どもにはりっぱすぎるほどだった。  
りねん 《理念》(名) 1 理念  
十五74 12 それで、世界平和、人間平等という理念  
が、ここからわいてくるのだ——  
リビングストン 《人名》 3 リビングストン  
十二11 9 書物 リビングストンが南アフリカを探  
けんしていたときの話です。  
十二11 10 ある日、リビングストンが木かげで書物  
を読んでいた。  
十二12 2 リビングストンがちょっとそとにでかけ  
たるすにやってくる、  
リボン 《名》 1 リボン いろいろなリボン  
三72 10 図 「ぎんのリボンかしら。」  
リヤカー 《名》 4 リヤカー  
九76 8 先生が、リヤカーに、はこやかごなどをの  
せておいでになりました。  
九86 6 図 かごをこのリヤカーにつみなさい。  
九86 9 帰りは、みんなかわるがわるリヤカーをお  
して歩きました。

十四21 4 オートバイ、リヤカー、ハンドル。  
りやくす 《略》(五) 1 りやくす 《一サ》  
十五35 7 この絵のだんだんりやくされてきたもの  
が、文字というものの起りとなった。  
りゅう 《電》(名) 1 龍  
四66 図 龍  
りゅう 《理由》(名) 2 理由  
十三12 2 知識によらず道理によらず、いたずらに  
理由のないことを信ずる迷信は、  
十五74 7 それによつて兄が特権を與えられねばな  
らないという理由はすこしもない。  
りゅうがくせい 《留学生》(名) 1 留学生 じにつ  
ぼんりゅうがくせいだいいちごう  
十五52 4 そのころ留学生としてアメリカのスタン  
フォード大学に学んでいた私は、  
りゅうぐう 《竜宮》(名) 8 りゅうぐう  
四104 9 図 お礼に りゅうぐうへ おつれしようと  
思つて、ここまでまいりました。  
四105 3 図 なに、りゅうぐうだつて。  
四105 6 図 りゅうぐうは、ほんとうにきれいなと  
ころでございませう。  
四106 5 図 りゅうぐうは、まだとおいの。  
四107 3 図 あれが りゅうぐうの 門で ございま  
す。  
四108 4 図 ところ りゅうぐう  
四108 8 図 こが りゅうぐうで ございませう。  
四111 8 図 りゅうぐうはいつも ころなのですよ。  
りゅうず 《竜頭》(名) 1 りゅうず  
六11 6 りゅうずをまわすと、《略》 かいちゅう時  
計が、たちまち、ゆかいそうにカチカチと  
りょう 《量》(名) 1 量  
十四84 8 空中の温度の変化、風の関係、水蒸氣の

量、高度など、さまざまな条件によつて、  
りょうあし 《両足》(名) 6 両足  
十二107 9 大きな目、のびた手さき、しっかりふま  
えた両足、どこをみても、力があふれています。  
十四94 6 女の子は、両足を——そのあわれな、小  
さな、赤く、青くなつた両足をそろえて、  
十四94 7 赤く、青くなつた両足をそろえて、  
十五24 1 わしのせにしがみついて、両足で鳥の腹  
をしめつけるようにしています。  
十五24 12 少年は、大わしのせにとびつき、その上  
へ乗りうつて、両足で鳥の腹をしめつけ、  
十五25 7 上からぎゅうぎゅうとおしつけ、両足で  
いっそうはげしく鳥の腹をしめつけました。  
りょううで 《両腕》(名) 2 りょううで 両うで  
二64 2 りょううでを 車のようにうごかす。  
十二33 1 そのかたの両うでの中に強くだきあげら  
れました。  
りょうかた 《両肩》(名) 1 両かた  
十四93 1 その子のきれいなかみの毛は、両かたに  
まつわりつき、  
りょうがわ 《両側》(名) 3 両がわ  
九36 9 図 山へ登るほそ道の両がわに、《略》の 実  
が、こぼれたように雑草の中にありました。  
十三27 1 あまり廣くもない道の両がわの土べいの  
上から、  
十三29 11 前の荷の上に、小さなだらをぶらさげ、  
その両がわに、ふんどうをつるしておく。  
りょうかんさん 《課名》 2 りょうかんさん  
五36 11 りょうかんさん……八十五  
五85 1 十一 りょうかんさん  
りょうかんさん 《良寛》(人名) 14 りょうかんさん  
五85 4 りょうかんさんはこういいながら、ほうき

を持って、木の葉をはきよせました。

五86 ㊦ 「りょうかんさん。」

五85 6 ㊦ 「りょうかんさん。」とよびながら、走ってきました。

五86 3 ㊦ 「りょうかんさん、りょうかんさん、おしょうさんのりょうかんさん。」

五86 3 ㊦ りょうかんさん、りょうかんさん、おしょうさんのりょうかんさん。

五86 7 りょうかんさんは、ほうきの手をためて、

五86 10 ㊦ 「りょうかんさん、このおにんぎょう、かわいいでしょう。」

五88 9 子どもたちが、みんな、りょうかんさんのまわりにあつまりました。

五90 1 ㊦ りょうかんさん、いま、『さどが島』とおうたいになったとき、おじぎをなさいましたね。

五91 1 こういつてから、りょうかんさんは、『略』と、おくざしきにつれていきました。

五92 7 ㊦ あら、りょうかんさん、ちがいますよ。

五93 3 りょうかんさんは、帰っていく子どもたちをみおくってから、

五93 9 りょうかんさんは、いつまでも月にみとれていました。

りょうし「漁師」(話手) 10 りょうし

四127 3 りょうし「きょうはいいいお天だ。

四127 9 りょうし「あれはなんだろう。」

四128 3 りょうし「きものだな。

四128 10 りょうし「いや、これは、わたくしがひろったのです。

四131 1 りょうし「天人のはごろもなら、なおさらお返しはできません。

四131 5 りょうし「いや、返せません。」

四131 9 りょうし「お氣のどくですから、はごろも

をお返しいたしましたよう。

四132 3 りょうし「おまちください。

四132 7 りょうし「といて、はごろもをお返ししたら、

四133 1 りょうし「ああ、これははずかしいことを申しました。

りょうし「漁師」(名) 6 りょうし

四126 2 である人 りょうし 天人

四127 1 ひとりの りょうしが、みほのまつ原へでてきます。

四128 1 りょうしは、そばへよって、よくみます。

四128 9 りょうしは、そのきものをもつていこうとします。

四133 2 りょうしははごろもを返します。

十二72 7 そのあたりにいるのは、『略』や、のりをとりでるりょうしの子どもたちで、

りょうし「両者」(名) 1 両者

十五60 8 父とは、心をゆるした間がらのこととて、

十五60 8 両者のつきあいはかなりひんばんであった。

りょうし「両親」(名) 1 両親

十三21 9 両親のふみは、たがいにならんで生長し、

年がたつてもかれないで、よくしげりました。

りょうし「両親」(名) 6 両親

十二40 5 ケラーの両親は、『略』、すこしでももの

のわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

十五20 5 両親と子どもふたり、

十五20 10 このふたりの子どもたちは、両親や家庭教師につれられて、散歩に出て来るのでした。

十五23 6 先生が第一にさわぎだす、両親があわててあたりをかける。

十五33 6 そのときの女の子の両親の喜び、

十五102 9 ㊦ これは、『両親を愛する幸福』で、

りょうしんたち「両親達」(名) 1 両親たち

十五32 3 少女の両親たちが、そのへんにいたひつ

じかいたちを頼んで、大急ぎでおりて来たのです。

りょうし「利用」(サ変) 1 利用する「ーシ」

十五41 8 この二十六字のローマ字を利用して、『略』多くの國々のことばが書き表わされている。

りょうせんしゅ「両選手」(名) 5 両選手

十二83 3 そこへ両選手があらわれしました。

十二84 1 一つのボールを中心にして、両選手はとぶ鳥のようにかけまわりました。

十二86 5 つぎつぎと、両選手はしのぎをけずって戦いました。

十二86 8 ネットをはさんで、両選手はかたいあく手をかわしました。

十二86 9 心おきなく戦いぬいた両選手のために、

りょうて「両手」(名) 17 りょうて 両手

一23 3 そこで、りょうてをはねのようにうごかししました。

六124 7 りすさんは、両手に、くるみをにぎって、

おいしそうにたべました。

七35 6 私は、ありったけの力をだして、さぶろうをかばうように両手をつっぱりました。

七46 3 青年は、アコーデオンを、両手でぐっとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。

七79 7 ふたりは、旅人の両手をとる。

九111 8 両手をひろげて高くとばれるすがたは、なんと

という勇ましきであらう。

十21 4 母親が、両手をのぼしてついでくる。

十25 9 立ちどまって、両手をひろげて深呼吸。

十72 12 太郎かじやは、きゆうに両手で顔をおおい、

おいおい大声をあげてなきだしました。

十一45 7 だんをあげ、両手をずっとさしのべて、

おめんじょうをいただいて、  
 十二327 私は、〈略〉、それが母だとばかり思いこんで、両手をさししました。  
 十四419 みんな、両手をのぼせ。  
 十四9410 両手もまた、寒さでほとんどこごえていた。  
 十四9410 その両手をあたためるために、〈略〉一本のマッチで、火をともしることができたならば、  
 十四954 女の子は、その上へ、小さなつめた両手をさしのべた。  
 十四987 女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。  
 十五8510 「いちばんふとった幸福」が、テーブルをはなれて、大きなおなかを両手にかかえて、  
 りょうにん じょうりょうにん  
 りょうばね 〔両羽〕(名) 1 両羽  
 十五306 わしは、〈略〉、こんどは両羽をあおりたて、大きな風をまき起すようにして、  
 りょうほう 〔両方〕(名) 4 りょう方 両方  
 三647 〔両方〕(名) 4 りょう方 両方  
 六532 ふみおは、両方のいうことをきいていいました。  
 七3710 男の人が、ただひとり、わらいもせず、  
 両方の手でまどわくをおしています。  
 八1064 両方をくらべてみて、あまりちがわないことがわかりました。  
 りょうほうとも 〔両方共〕(名) 3 両方とも  
 六1122 この二つは、両方とも、マミムメモという一ぎょうの中にはいつている。  
 九9311 両方ともあいてに気がつくが、わざと知らないふりをしてる。  
 十五299 両方とも必死の戦いです。  
 りょううわき 〔両脇〕(名) 2 両わき

九162 口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえるのさえあります。  
 十二524 あなの両わきを切りこんで、手さきをまめるめ、指の線をほる。  
 りょうこう 〔旅行〕(名) 1 旅行  
 七435 けれども、きょうは、楽しい旅行をしてあります。  
 りょうこうする 〔旅行〕(サ変) 1 旅行する「—シ」  
 十三586 〔「じゃあ、やっぱり、おじさんみたいに、旅行して来なくちゃだめですね。」  
 りりりりりりり (感) 1 りりりりりりり  
 三875 りりりりりりり。  
 りりりりりり (感) 1 りりりりりり  
 五1094 チュイン、チュイン、りりりりりり。  
 りりりりりりり (感) 1 りりりりりり、りりり、りりり  
 五1093 りりり、りりり、りりり。  
 リレー (名) 1 リレー  
 七3811 〔「さあ、リレーにしよう。」  
 りろん 〔理論〕(名) 1 理論  
 十398 理論と実際とは、そうやすやすと、ひとつになるものではなかった。  
 りん じいちゃん  
 りんご 〔林檎〕(名) 22 りんご  
 二132 おばさんのうちから、大きなりんごをみつついただきました。  
 二203 ただおさんまりりんご かきからす  
 二477 〔「このおいしそうなりんご。」  
 二478 手に大きなりんごをもっています。  
 二481 うれしそうに、そのりんごを、高くさしあげたりにおいをかいだりします。

二488 いちろうは、りんごをだして、じろうの手にわたします。  
 二495 じろうは、よろこんで、りんごをもってとびまわります。  
 二499 じろうは、りんごをたべようとします。  
 二506 じろうは、大きなりんごをさちこにわたします。  
 二507 〔「まあ、きれいなりんご。」  
 二512 さちこは、りんごをだいたり、ほおにつけたり、おどったりします。  
 二528 大きなりんごを、おかあさんにあげます。  
 二529 おかあさんは、本をおいて、りんごを手にとります。  
 二532 またさちこに、りんごをかえます。  
 二536 とうとう、おかあさんは、さちこからりんごをもらいます。  
 二538 〔「このりんご、じろうにいさんにいただいたの。」  
 二543 〔「ああ、そのりんご、いちろうにいさんからもらったのです。」  
 四261 〔「りんご」にお話をするつもりで書きました。  
 四753 りんごのような赤いほお。  
 五3910 こちらでは、〈略〉、うめの花も、りんごの花も、いっぺんにさきだします。  
 六212 美しいぶどうに、かがやくりんご、楽しいわれらきりぎりすの生活——  
 十五657 秋たけてりんごのみのころ、  
 りんごさん 〔林檎〕(名) 3 りんごさん  
 四263 りんごさんのほったの赤いこと。  
 四263 りんごさんのかおのまるいこと。  
 四264 りんごさんは、どこへいってもきれい



ね。

りんじゅう 「臨終」(名) 1 りんじゅう  
 十一 89 6 画 「いよいよりんじゅうだ。」

## る

る (助動) 4 る 《レ》

九 29 3 画 うらがれにおろされ立てる子どもかな  
 九 115 3 画 着ぶくれて歩かされいし女の子ばたん  
 とたおれそのままなくも  
 十 74 8 画 ふたくちくえども死にもせず、みく  
 ち、よくち、ぶすはくえども、死なれもせず。  
 十五 6 4 画 家を出て手をひかれたるまつりかな  
 る 1 る  
 四 75 6 画 るすいはしつかり氣をつけて。  
 ルイ (人名) 4 ルイ

十四 9 6 画 あなたのルイは、  
 十四 11 2 画 あなたのルイから  
 十四 13 8 画 ルイ パリ、千九百七年四月十六日  
 十四 17 9 画 あなたのルイ  
 るい じゅうるいずふ  
 ルイフィリップ (人名) 1 ルイ・フィリップ  
 十四 4 3 画 フランスのルイ・フィリップの名は、  
 《略》、私たちの心をうつのです。  
 るう (感) 1 ルウウ  
 三 87 4 画 ルウウ。  
 るす 「留守」(名) 3 るす じおるす  
 四 69 6 画 「るすをする。」  
 十 66 4 画 「よくるすをするのだぞ。」  
 十二 12 2 画 リビングストンがちょっとそとにでかけ

たるすにやってきて、

るすい 「留守居」(名) 1 るすい じおるすい  
 四 75 6 画 るすいはしつかり氣をつけて。

## れ

れ 1 れ

四 76 5 画 れ れんげの花がひらいた。  
 れい 「礼」 じおれい  
 れい 「例」(名) 5 れい 例 じいちれい  
 八 20 3 画 せみの子たちは、れいのふしぎなかしこさ  
 で、もう大きくなりきったことを知ります。  
 八 24 5 画 れいのあおぎりの木でも、ほかのあぶらぜ  
 みが「略。」と鳴きはじめました。  
 九 10 8 画 その例として、まず、水の音をとりあつ  
 かった。  
 十二 56 6 画 次にいくつかの例をあげてみよう。  
 十四 69 6 画 おたがいによくにたものであるという一  
 つの例に、らい雨をあげてみたのです。  
 れい 「霊」(名) 1 れい

十 44 1 画 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめの  
 れいにささげて、その成功をしらせた。  
 れいぎ 「礼儀」(名) 1 礼儀  
 十四 81 9 画 親しきなにも礼儀あり。  
 れいねん 「例年」(名) 1 例年  
 十一 27 5 画 お正月がくると、例年のことで、だいか  
 ぐらがまわってきました。  
 レース (名) 1 レース  
 十一 11 6 画 このあいだのレースで勝ったボートだ  
 よ。

レオナルドダビンチ (人名) 1 レオナルド・ダ  
 ビンチ

十三 56 10 画 レオナルド・ダ・ビンチだの、ミケラ  
 ンジェロだのという天才の集まっていた、美術の  
 中心のフロレンスで、

れきし 「歴史」(名) 4 歴史

十二 47 6 画 喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを  
 美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。  
 十二 55 6 画 傳説には、正しい歴史にもとづいたもの  
 もあるが、

十五 51 1 画 日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、  
 十五 80 1 画 歴史の上で、いろいろな國の人々の間に、  
 友だちとして心のかよったおつきあいができるよ  
 うになったのは、

レグホンたち (名) 1 レグホンたち

十三 48 7 画 とやへ追われて行く、白いレグホンたち。

レコード (名) 1 レコード

十四 21 10 画 ニュース、レコード、チフス、コレラ、

れつ 「列」(名) 9 列 じいちれつ・にれつ

四 42 4 画 列の たちを かえても、ばらばらに  
 なってしまふことはありませんでした。

四 42 7 画 「きみ、列をはなれちゃだめじゃな  
 いか。」

四 52 6 画 二十九わのがんは、列をきれいに つく  
 るどころではありません。

四 65 6 画 がんの列は、そのきれいな雲の中に、  
 みえなくなっていました。

六 41 3 画 つむじ風のように、列をつくったつばめの  
 むれが、かかしの方へとんでくる。

六 42 11 画 かかしが列のまん中はいっている。

六 43 6 画 その列が空にすいこまれていく。

九 105 7 画 はじめは二列ですんだが、谷あいでは一

列になつたので、ずいぶん列が長かつた。  
九〇八<sup>11</sup> ぼくたち三四人は、列をはなれて、ま一文  
字にすべりおりました。

れっしや「列車」(名) 1 列車もかもつれっしや  
六四三<sup>1</sup> しずんでいくお日さまをおつて、町の上を  
列車のようにとぶつばめのむれ。

れはじめる (助動) 1 れはじめる 《レハジメ》  
五二〇<sup>1</sup> 私のなかまは、一けん一けんにくばられは  
じめました。

れる (助動) 36 れる 《レ・レル》 ↓ あいされかた  
一七五<sup>1</sup> 、どんなえがかれるでしょう。どんな  
一七六<sup>1</sup> 。どんなじがかれるでしょう。だれが  
三四四<sup>4</sup> はうまくだまされたな。ぼくは海を  
三七八<sup>7</sup> お日さまはとられませんか。雲さえで  
三八〇<sup>5</sup> ちゃめちゃんにされちゃった。」と、マ  
三一一<sup>10</sup> えにもとりかこまれ、やねの上まで、  
三二二<sup>6</sup> 十もでたかと思われるほど、あたりが  
四一六<sup>5</sup> ンが、月にてらされて、水をくむ。く  
四三三<sup>1</sup> ン。こまでいわれても、まだ、なんの  
四三九<sup>2</sup> のことが思ひだされてきました。「略」  
四四五<sup>9</sup> ン。「どりのこされるかと思つてさ。  
四四八<sup>4</sup> らねらいうちをされるからです。山の  
四四九<sup>10</sup> のてっぽうでやられたということが  
四五一<sup>1</sup> た。下からねらわれていたときには、  
四五四<sup>8</sup> ねのつけねをうたれていました。かっ  
四六三<sup>9</sup> 「略」。こういわれて、かつちゃんは、  
四八七<sup>7</sup> 子どもにうたわれて、きょうは、エ  
四八六<sup>4</sup> るほど雪につもられて、だまっている。  
四九三<sup>6</sup> も降る。風にかれて、うずをまいて、  
四九五<sup>6</sup> いない。風にかれてとんでいるうち  
四一三<sup>2</sup> かな。かすみにつつまれて。かもめすいす  
五六三<sup>3</sup> くなる。ダムにせかれていけになり、水力

五八八<sup>1</sup> ないところによられるかと思つて、びく  
五九二<sup>2</sup> たちは、汽車につまれて、どんどん、南へ  
五九三<sup>3</sup> んどん、南へはこばれました。二日めのあ  
五九五<sup>5</sup> っと汽車からおろされ、自動車につみこま  
五九六<sup>6</sup> 、自動車につみこまれて、ある町のゆうび  
五九八<sup>8</sup> ふくろの中からだされて、ほつとして  
六〇二<sup>2</sup> その人の手ににぎられながら、あちらこち  
六〇七<sup>7</sup> 家のげんかんにおかれました。「略」。み  
六二二<sup>5</sup> たいへんかわいがられました。しかし、き  
六三六<sup>1</sup> だします。ほりだされた石炭が、山のよう  
六三六<sup>1</sup> が、山のようにつまれています。この石炭  
五七九<sup>3</sup> はるおにさいそくされて、ばんをゆずりま  
五八三<sup>10</sup> うな文が、はりだされました。「略」。一  
五八三<sup>10</sup> そこをパチリと写されました。七月十六  
五九〇<sup>1</sup> 「おとうさんにいわれて、よくみると、ね  
六〇二<sup>2</sup> と、ねこにひつかかれた羽がぶらりととなつ  
六四二<sup>2</sup> この中にしまいこまれていた、小さな鉄の  
六四三<sup>3</sup> ピンセットにはさまれて、明かるいところ  
六四三<sup>3</sup> かるいところへだされた。ねじは、おどろ  
六四八<sup>8</sup> かった。自分のおかれていますのは、しごと  
六六三<sup>3</sup> どんなどころにおかれるのだろうかなどと考  
六六六<sup>6</sup> の葉の船は波に流されて、川の岸につきま  
六六七<sup>7</sup> た。とは、ねらわれていることを知らず  
六二二<sup>2</sup> 、ありさん。」よばれても、あたりは氣  
六三九<sup>9</sup> のすが風にあおられる。3 雲がちぎれ  
六四二<sup>2</sup> ぼうしがふきとばされる。顔のうしろを雲  
六四九<sup>9</sup> うに、空にすいこまれていくかし。10  
六五三<sup>3</sup> ひげの雲が風に流されている。13 風を受  
六六四<sup>4</sup> 雲のひげがあおられて長くのびる。かか  
六三九<sup>2</sup> かし「ふきとばされたんです。きょうの  
六四四<sup>4</sup> てさる。30 のこされたかかしの大写真。  
六四六<sup>6</sup> の列が空にすいこまれていく。それをつつ

六七五<sup>3</sup> ら、「略」。ときかれて、ごろうは、「略  
六七九<sup>11</sup> いもののように思われました。八 つり  
六八四<sup>3</sup> 、つりばりをとられた。どうしよう。困  
六八五<sup>3</sup> りばりを魚にとられてしまいました。」  
六八五<sup>3</sup> 「ほりの」とられたつて。「ほりの」は  
六八五<sup>3</sup> りばりは魚にとられてしまふし、にいさ  
六八七<sup>4</sup> いさんにはしかられるし、困つてないて  
六九二<sup>7</sup> 、つりばりをとられてしまったのです。  
六九三<sup>3</sup> くはきつねに追われてなんかいやしない  
七三六<sup>6</sup> どんないみにつかわれているのでしよう。  
七三六<sup>6</sup> 人もあり、足をふまれて、おこっている女  
七三六<sup>6</sup> びに、前後からおされて、さぶろうは、だ  
七三五<sup>2</sup> てしまふかと、思われるほどでした。私は  
七三五<sup>2</sup> ボールのように送られていくうちに、にこ  
七四二<sup>2</sup> ら、腹までふりまかれて、ちようど、かふ  
七四二<sup>2</sup> は、しみじみときかれた。汽車はトンネル  
七四五<sup>7</sup> あいだにとりかわされた。おしまいに、青  
七四六<sup>11</sup> 駅の名も美しくよまれた。五 作文 (一  
七五三<sup>3</sup> が、「略」。といわれた。ぼくらのほうの  
七五七<sup>7</sup> にはつきりとえがかれた一つのかたちは、  
八四八<sup>8</sup> くさんいる鳥といわれるほおじろです。ど  
八四九<sup>9</sup> オが私のうちにかわれるようになったかと  
八六二<sup>2</sup> 、すっかりひきこまれて、しばらく見物し  
八六一<sup>1</sup> りふえに心をうばわれていました。天帝は  
八三三<sup>3</sup> というでまえにうたれて、むすめのむこに  
八三六<sup>6</sup> いことがそうぞうされます。私たちの、た  
八三六<sup>6</sup> なふかい感じにうたれます。しかも、この  
八三六<sup>6</sup> たいどうしてたもたれているのでしよう。  
八五六<sup>3</sup> しい砂地がみわたされた。ぼくは、砂地の  
八五六<sup>3</sup> て、それに氣をとられて、わきみをしたあ  
八六三<sup>7</sup> 一どそれでだまされたことがあつてね、  
八六四<sup>4</sup> いてね。人にふまれないように、それか

八七〇 三 まからわる口をいわれるばかりでなく、に  
八七〇 三 にわとりからもぶたれたり、つつつかれた  
八七〇 三 たれたり、つつつかれたりした。しちめん  
八七〇 九 なからしかりとばされるので、しみじみと  
八七〇 四 かは、ねこにくわれてしまえばいい。」  
八七〇 五 で、「略。」といわれた。親あひるですら  
八七〇 七 あひるにはかみつかれ、にわとりにはこず  
八七〇 八 りにはこずきまわされ、えさをくれるむす  
八七〇 八 めには足でけとばされた。そこで、みにく  
八七〇 六 けものあつかいにされた。(四) 秋がき  
八七〇 五 のだから、ころされるかもしれない。し  
八七〇 六 、にわとりにぶたれたり、女の子につき  
八七〇 八 、あの鳥にころされたほうがましだ。」  
八七〇 四 ひるの子は、ころされるものと思ひながら  
八七〇 三 られたり、あざけられたりしたときのこと  
八七〇 五 ちばん美しいといわれる身のうえになった  
八七〇 二 りがねがはりまわされて、つぼめたちのと  
八七〇 一 まるところがつくられました。いく千とい  
八七〇 一 ぼめがはじめて運ばれてきたのは、九月十  
八七〇 二 汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつ  
八七〇 三 このしごとにつかわれたということ、た  
八七〇 一 に帰ってくるといわれています。つまり、  
八七〇 一 といけないといわれて、ほねをおりまし  
八七〇 一 うやくかいこんされて、三日めにやつと  
八七〇 四 るしみが、せかれて、たきになり流れ  
八七〇 四 「略。」などいわれたが、ぼくはがんば  
八七〇 五 けるようにといわれました。ぼくは、お  
八七〇 三 やの木の森でかこまれていました。その草  
八七〇 三 車が、ひっぱりだされました。そうして、  
八七〇 五 んの農家にたちよられました。しばらくし  
八七〇 六 、つるつるみがかれていないから、ただ  
八七〇 五 ようにみじかく思われました。「略。」帰

八八八 一〇 やだ。」と、つかまれている手をふりはな  
八九〇 九 「やまだ ひっぱられながら、「略。」た  
八九〇 九 ぼくは二つなぐられて、三つきみをなく  
八九〇 四 だ先生が先頭に立たれ、いしい先生は、み  
八九〇 四 「略。」とさげられた。その声にはげま  
八九〇 五 。その声にはげまされて、ぼくたちは、い  
八九〇 三 だ先生がつえでさされる方をみると、なる  
八九〇 三 いたでるようになされた。百五十メートル  
八九〇 三 が、「略。」といわれた。ぼくたち三四人  
八九〇 二 へ上へと登っていかれたが、三百五十メー  
八九〇 二 「というあいずをされた。ぼくたちは、み  
八九〇 二 いしい先生がすべられる。そのみごとなす  
八九〇 二 いしい先生がすべられるところである。た  
八九〇 二 をひろげて高くとぼれるすがたは、なんと  
八九〇 二 は、のだ先生がとぼれるばんである。先生  
八九〇 二 をして、すべりだされた。すばらしい早さ  
八九〇 二 生は地上の人となられた。お書になったの  
八九〇 二 そこに小石でかこまれた美しい泉があつた  
八九〇 二 しみてきたかと思われようにつめたかつ  
八九〇 二 ぎ、まつ林におおわれた道もない谷まにな  
八九〇 二 らだも、つなにかれそうになりました。  
八九〇 二 うもりの羽にたたかれました。あみは、す  
八九〇 二 みました。こう頼まれると、だまっていたべ  
八九〇 二 に、「略。」といわれて、きゆうになつた  
八九〇 二 みるように思ひだされてきました。「略」  
八九〇 二 、みつばちにさされて、苦しんだことも  
八九〇 二 ころからたたき落されたが、たまたま、あ  
八九〇 二 そらおそろしく思われてきました。白ばら  
八九〇 二 このつばめにひろわれました。くもは、つ  
八九〇 二 めの口ばしにはさまれたまま、空をとんで  
八九〇 二 、お友だちにさされても、どうしてもお  
八九〇 二 分の國のことをきかれたときは、おとうさ

十二〇 八 七色の光が写しだされる。「略。」十  
十二二 九 。きれいにたがやされた畑。田をならして  
十二四 二 に、トロッコにつまめる石炭の山。おしだ  
十二五 一 石炭の山。おしだされてくるトロッコ。ご  
十二八 九 ふしぎなことにうたれ、美しさにおどろく  
十二九 七 ときは、組みあわされた一音一音のことも  
十三二 一〇 こういつてあざけられた。佐吉は、父の大  
十三三 三 ちがいあつかいにされるのを見て、父は、  
十三四 一 るがせにしてはおかれぬ。いまのような  
十三四 一 めのがずんずん織られていくからである。  
十三五 一 にはくらん会が開かれた。佐吉は、上京し  
十三六 一 らはますますわかれて、だれひとりあい  
十三七 二 機は、國內につかわれるようになったが、  
十三七 二 ゆうの人から愛される眞珠、これを、人  
十三八 五 、ふしぎな宝石とされてきたが、しらべて  
十三九 一 王として世界に知られた御木幸吉であつ  
四十 九 、どんなにあざけられ、からかわれても、  
四十 九 ざけられ、からかわれても、その助力者と  
四四 一 大きなゆめは実現された。今日、眞珠の産  
四四 二 ことが、明らかにされた。そのち、幸吉  
四四 二 めんの藝術ともいわれ、ヨーロッパの大む  
四六 一 とくらべて、研究されています。日本の絵  
四六 一 をやつたり、だまされたりなど、よい人  
四六 七 なにをしてもにくまれぬ、おもしろい人  
四六 八 ちまち死ぬといわれるくらいだ。ふたり  
四七 八 どんな目にあわされるかわからない。」  
四七 八 、いっそうしかられるじやないか。「へ  
四七 八 「こう、さしずをされて、しかたなく、ず  
四七 三 なは、あつげにとられてたずねました。太  
四九 四 へ。」「そういわれて、自信をもつて、  
四九 四 、あとなくぬぐわれます。朝も、晝も、  
四九 四 みずに、うるおされ、やしなわれて、の

十一 18 2 おされ、やしなわれて、のびていく命の  
 十一 19 10 や畑をみんな流されたりしましたので、  
 十一 28 3 の田や畑も、流されてしまいました。こ  
 十一 30 3 の人からうやまわれるようになりました  
 十一 36 4 韻 のみのりも思われる。ひとりのあせ  
 十一 44 4 、いっしょに呼ばれているようです。み  
 十一 44 7 ひときわ高く呼ばれました。弟の名でし  
 十一 44 9 私は、自分が呼ばれたような気がしまし  
 十一 50 1 に農学校をつくられたクラーク先生もお  
 十一 51 4 みんなふさぎられ、へちまの葉は、み  
 十一 51 8 まった。雨にうたれながら、電車のくる  
 十一 52 4 で、おしたりおされたりしなければなら  
 十一 54 7 韻 略。」「ゆずられたときの氣持でゆず  
 十一 61 8 にきびしくただされて、太郎は、やっと  
 十一 69 2 ふとんの上におかれたまま動かずにいる  
 十一 69 12 とは、とても思われませんでした。かみ  
 十一 73 9 たいへん長く思われました。医者がすぐ  
 十一 81 9 が、看護婦に送られながら、そのへやに  
 十一 83 4 韻 ろへつれていかれたのだな。わたしは  
 十二 33 5 という文字をつづられました。私は、すぐ  
 十二 35 3 えるために苦しめたのですが、私は、  
 十二 35 12 原因がとりのぞかれたという満足を覚え  
 十二 36 7 まいにおいにひかれて、庭の小道をおり  
 十二 38 9 しみに胸をさされました。私はその日  
 十二 41 1 ン先生に手をひかれ、ふたりがひとりの  
 十二 41 12 韻 ーさんがすぐわれるのです。どうぞ神  
 十二 44 11 韻 形つかいといわれる人がいて、ものに  
 十二 55 6 あいだにおりこまれているからである。  
 十二 55 8 文章に書きつづられて有名になったもの  
 十二 56 5 らこちらで発見される。その中には、世  
 十二 60 11 の太陽も、まねかれるままに空の中ほど  
 十二 77 9 弟にサインを頼まれました。その少年た

十二 78 7 なふうにはげまされたことはありません  
 十二 83 1 まっ白い線のひかれたコートには、日ざ  
 十二 84 9 す。このままおされるものではありません  
 十二 87 6 いる父にこういわれたら、バケツか、じ  
 十二 87 8 けた父にこういわれたら、水さしに水を  
 十二 87 10 いる父にこういわれたら、手おけに水を  
 十二 89 11 ばの力がうしなわれていく。それは自分  
 十二 91 9 の中にたたみこまれているにちがいない  
 十二 92 1 の中にたたみこまれていることは、太郎  
 十二 92 2 の友だちにさそわれていったこと、くり  
 十二 92 5 んなことがふくまれている。ほかの人が  
 十二 92 9 で書いても、書かれたことがそれぞれち  
 十二 92 11 かし、たたみこまれているなかみはそれ  
 十二 93 10 、ことばがみがかれてくる。(三)「赤  
 十二 94 8 たものが思いだされてくる。太郎は、秋  
 十二 94 12 だす。弟にせがまれて、赤とんぼをとり  
 十二 95 11 る。いったん読まれてしまうと、読み手  
 十二 95 11 でや心持にとかかれて、その人その人の  
 十二 95 12 験によつて生かされてくる。十一 あ  
 十二 96 8 まさまに思いだされるでしょう。なつか  
 十二 101 1 よい町から発見されたので、やよい式土  
 十二 101 5 はかからほりだされたものです。赤色の  
 十二 102 9 ばかりまえに作られたものであります。  
 十二 102 11 人々からたつとばれている作品です。  
 十二 103 3 に、はじめて作られた日本のお金です。  
 十二 104 3 年ほどまえに作られた平等院という建物  
 十二 104 7 いるからだといわれていますが、屋根の  
 十二 106 1 かにかきあらわされています。絵巻物  
 十二 108 6 のは運慶だといわれています。ふたつと  
 十二 111 4 國人にもはやされてきました。浮世  
 十二 112 11 か、ほとんど知られていなかったのです  
 十三 11 7 知識によつて知られ、むずかしいものは

十三 11 8 っても、まだ知られていないことはたく  
 十三 12 11 ているように思われます。こういううぶ  
 十三 15 12 ローマに呼びだされて、自分でも信じて  
 十三 16 1 はならぬといわれました。ガリレオは  
 十三 17 8 世界の樂園といわれるこの國も、千八百  
 十三 17 10 できる二州をとられました。もともとせ  
 十三 18 5 敗れ、國はけずられ、國民の意氣はし  
 十三 21 4 れがためにくじかれることなく、「略」  
 十三 22 1 、みごとに実現されました。そこで、デ  
 十三 22 4 の熱望は、実現されません。もみは、あ  
 十三 22 6 かれるのはふせがれましたが、その生長  
 十三 22 7 れによつてはたされなかったのでありま  
 十三 23 10 によつて、発見されたのであります。こ  
 十三 23 12 によつてもたらされた、よい結果は、木  
 十三 25 3 大水の害がのぞかれたので、すたれた都  
 十三 25 7 たるところにしかれました。とうとう、  
 十三 25 8 戦いによつて失われたシュレスウィヒと  
 十三 25 9 、すでにつぐなわれて、なおあまりある  
 十三 29 3 をつるつるにそられている。糸屋が来る  
 十三 32 2 の声のように思われる。春は、なえ賣り  
 十三 33 8 で、はなをつままれてもわからないほど  
 十三 33 11 うな星がばらまかれて、一つ一つがかが  
 十三 34 10 「れん」が書かれてある。れんは、め  
 十三 34 11 っぱな文字で書かれてある。小さな子ど  
 十三 35 3 しさが胸にきざまれる。文字の國といわ  
 十三 35 3 。文字の國といわれるのも、いわれのな  
 十三 48 7 いる。とやへ追われて行く、白いレグホ  
 十三 52 8 日一日と、むすばれていくように。七  
 十三 54 1 韻 ドンナ」といわれています。これを見  
 十三 56 3 いのおどろかされました。「略。」「ハ  
 十三 59 3 韻 ドンナ」といわれている。これはどう  
 十四 4 2 名のわが國に知られている人は、けっし

十四 6 1 にもよくうかがわれます。老いた母を思  
 十四 14 12 手 んなことが思われてくるのです。おか  
 十四 15 1 手 いお氣持になられたときには、自分に  
 十四 24 1 会 ジア語だといわれている。そのほかの  
 十四 27 1 いうことが想像される。それから、ふと  
 十四 27 8 会 語のように思われてきたのだ。」とお  
 十四 30 1 ればかりとも思われません。かりにそれ  
 十四 32 6 す。こよみが作られたのです。天文学が  
 十四 32 10 によってみちびかれ、星によって生きて  
 十四 33 5 、ぎんが系といわれる星の大きな集まり  
 十四 35 12 い世界にひきこまれるような氣がします  
 十四 36 10 星をつかめといわれ、そのことばにふか  
 十四 39 1 会 りが、たち切られる。「五の人のゆめが  
 十四 45 5 船からほうりだされて、黒い波の間をお  
 十四 45 9 とごとく波にのまれてしまったように、  
 十四 47 5 、船からなげだされたものでしょう。た  
 十四 47 8 かえって波にのまれてしまったのに、こ  
 十四 48 3 う美しい歌に送られて、死んでいきたい  
 十四 53 9 会 暑い日に照らされながら、せつせと養  
 十四 68 3 たい空氣におおわれた地方があると、あ  
 十四 70 11 ておけば、ひやされるのは、おもに、ま  
 十四 75 12 の方へおしおろされるかたむきがありま  
 十四 76 3 と海との間に行われております。それは  
 十四 76 4 は、海陸風とよばれているもので、書間  
 十四 80 2 いう前からつくられて、子に、まごにと  
 十四 80 7 つの眞理だと思われたので、そのことを  
 十四 85 10 の映画に心をひかれた。ふんだんに降つ  
 十四 86 7 ろい場面が発見されるように思われる。  
 十四 86 8 されるように思われる。たとえば、ふぶ  
 十四 86 9 ある。風にあおられた雪のむれが、道を  
 十四 88 5 るのか。風にふかれたからであろうか。  
 十四 88 12 半年も雪にとざされていた地上に、ぼち

十四 89 8 にも書きあらわされる。どのような文章  
 十四 89 9 読む人の心がひかれるのは、ものごとを  
 十四 89 10 た人によって書かれた文である。十  
 十四 95 6 のおのように思われた。これは、魔法の  
 十四 97 3 ブルの一方におかれてあった。そのとき  
 十四 98 1 れが美しくかざられていた。たくさんの  
 十四 100 12 るくはないと思われくらいであった。  
 十五 23 7 のつめにつかまれて、女の子はばたば  
 十五 24 7 どこへ持って行かれるかわかりません。  
 十五 25 10 少年に上からおされるので、その重さに  
 十五 26 4 のせからふり落されないものでもない。  
 十五 26 7 がをするか、殺される心配がある。そん  
 十五 27 3 ろが、下につかまれている女の子は、あ  
 十五 31 10 それにふきとばされ、ちよつとでも氣を  
 十五 31 11 ちばしでつき殺されます。まわりには、  
 十五 33 2 父親のうでにだかれた女の子は、にこに  
 十五 35 2 つけることも行われた。それから、ぼう  
 十五 35 4 しめすことも行われた。これらの表わし  
 十五 35 6 うつすことも行われた。この絵のだんだ  
 十五 35 7 だんだんりやくされてきたものが、文字  
 十五 35 10 した絵文字とよばれるものがあつた。中  
 十五 36 2 うになつたといわれている。漢子 漢  
 十五 37 5 、それまでに作られた文字を組みあわせ  
 十五 37 6 すこともくふうされた。たとえば、「日」  
 十五 37 6 せて「明」が作られ、「木」を二つなら  
 十五 37 7 ねて「森」が作られた。「枝・板」など、  
 十五 38 11 ことがすぐ理解されよう。かな 日本  
 十五 40 3 かなによって書かれた作品である。しか  
 十五 40 10 界の大半につかわれている文字である。  
 十五 41 6 。ローマ字といわれるのもそのためであ  
 十五 41 9 とばが書き表わされている。日本のこと  
 十五 42 2 界の人々に親しまれるようになるであろ

十五 43 5 ウインドにかざられてあるさらやはちを  
 十五 45 9 日本政府から頼まれて、鉄ぼうのうしか  
 十五 47 4 店の主人は、きかれるままに語りだした  
 十五 47 10 なべしま」といわれる、色のはいっつも  
 十五 48 3 はん主からゆるされた十六人だけが、有  
 十五 48 4 いように、保護されていた。ところが明  
 十五 51 10 父たちの間に結ばれた心が、なん十年の  
 十五 52 1 ってふたたび結ばれることになった。  
 十五 53 6 、守衛にみちびかれておくまつた館長室  
 十五 56 3 会 三角測量が行われていなかったので、  
 十五 59 2 会 そうかわいがられたのですから。」と、  
 十五 59 12 と、あつけにとられていたタイプストを  
 十五 64 1 た。「略。」だされたくつを見て、にこ  
 十五 65 4 せをふきふき歩かれた新島のおじさんと  
 十五 66 7 じさんがいい残された願いによって、私  
 十五 67 1 さんは廣島におられて、学校のいきかえ  
 十五 67 2 は、かたくとざされてあつた。そのうち  
 十五 67 11 で窓のあけはなれた新島家をおとすれ  
 十五 69 1 「略。」と指さされるままに、顔をあげ  
 十五 69 8 私の写真がかざられてあるではないか。  
 十五 70 11 会 さんは、年とられてから目がわるくな  
 十五 73 1 しものをしておられたが、やがてすがた  
 十五 73 4 かい思い出にうたれている私の目の前で  
 十五 73 10 食堂にみちびかれ、博士とたつたふた  
 十五 73 12 してその名を知られていた老博士は、き  
 十五 74 1 熱意をこめて語られた。——親の目から  
 十五 75 5 の鼻先につきだされた。——ああ、忘れ  
 十五 75 6 べにをさして語られたホランド博士のあ  
 十五 75 11 略。」とささやかれた。博士は、そのこ  
 十五 75 12 大きな声でわらわれ、こんどははつきり  
 十五 76 2 略。」といいたされた。ああ、新島のお  
 十五 76 9 外なあいさつをされた。そうして、これ

十五76 10 語の一つだといわれた。五 その人の  
十五79 11 本が、いつもおかれてあります。歴史の  
十五80 12 がはるかしく思われるようになることを  
十五87 7 ⑤ これが『みたされたきよえいの幸福』  
十五87 8 ます。(みたされたきよえいの幸福)  
十五90 1 ⑤ つとのまも行かれないうです。ぼくた  
十五94 5 美しい光に照らされます。チルチル「  
十五99 7 ⑤ んだん人に知られてくるね。(幸福に  
十五105 12 ⑤ 正がしかえしされたときに、いつもに  
十五106 8 ⑤ れにうつちやられると、ぼくたちは、  
十五110 2 ⑤ かあさんにだかれておくれ。なにが幸  
十五120 3 のことが思い出されてきた。はじめてこ  
れん ⑤ (名) 3 れん

十三34 9 家々の門には、「れん」が書かれてある。  
十三34 10 れんは、めでたい文句や、詩の一節であ  
るが、みな、りっぱな文字で書かれてある。  
十三35 1 小さな子どもは、〈略〉、ただ美しいかざ  
りのような氣持で、れんをながめている。

れんぎよう ⑤ (名) 1 れんぎよう

十一31 5 ⑤ もも赤く 畑にさいて、れんぎようは、  
かきねを黄色にそめていく。

れんげ ⑤ (名) 4 れんげ

一九5 ⑤ れんげのはな ひらいた。

一20 3 ⑤ れんげのはな つぼんだ。

四76 5 ⑤ れんげの花が ひらいた。

十五10 1 ⑤ れんげつみて子という母の黒いこ  
もり

れんげそう ⑤ (名) 2 れんげそう

三9 3 ⑤ すみれ、たんぽぽ、れんげそう、花の  
おやねが うつくしい。

七87 2 きょうは、れんげそうとなたねの葉をやり  
ました。

れんしゅう ⑤ (名) 1 練習

十二77 7 時間がせまったので、私はユニホームを  
つけて、練習のためにコートにでました。

れんしゅうする ⑤ (サ変) 1 練習する 《一  
シ》

十一5 1 なによりおもしろいのは、大学のボート  
がいつもここで練習していることだ。

れんらく ⑤ (名) 1 れんらく

七53 10 センターが、外野のセンターにれんらくを  
とって、どんどん、あてにあてた。

## ろ

ろ ⑤ (名) 6 ろ

三36 8 ⑤ 大きなろに、大きなやかんがかっ  
ています。

四71 3 こころは、『ろ』の上にある。

六26 8 あり一は、ろの火を赤くもえたせです。

十四95 9 それがもえ続けている間、大きなろの前  
にすわっていた。

十四95 10 そのろの中には、美しい火がもえあがり、  
十四96 3 とすると、そのとき、ほのおは消えてし  
まい、ろはなくなりました。

ろ ⑤ (名) 1 ろ

四74 3 ろ——ろを こぐせんどろさん。

ろ ⑤ (名) 2 ろ

四71 4 『ろ』の字と かけてなにとく。  
四74 3 ろ——ろを こぐせんどろさん。  
ろ ⑤ (名) 5 ろろか じわたりろろか  
三31 1 ⑤ こころはろろかです。

七79 ⑤ ろろかをすうと通ってみたり、かいだ  
んをトントンあがってみたり、

七57 3 ろろかを曲がったら、ふっと、風がふいて  
きた。

十一67 1 ふたりは、はしごだんをのぼって、長い  
ろろかのはずれまで歩いていきました。

十二104 8 屋根の形や左右にのびたろろかのかっこ  
うにも、

ろうじん ⑤ (名) 15 老人

七42 10 みると、しらがの老人である。

七43 3 車中の人たちは、みんなこの老人をみた。  
七43 11 そこで、老人は、自分のかぶっていたぼう  
しを、そばの人の手に渡した。

七44 5 車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふた  
たび、しらがの老人のところにどった。

七44 5 老人は、「〈略〉。」といって、青年のまえに  
すすみでた。

七45 6 そういつてから、老人にぼうしを返した。  
十四4 3 そのころ、幸吉は、すでにしらがの老人に  
なっていた。

十一73 11 医者、せいの高い、すこしがんだ、  
まじめな顔をした老人でした。

十二9 11 ひとりのみずばらしい身なりをした老人  
が、〈略〉ひろってポケットにいれていました。

十二10 4 ようすをみていたじゅんさが、老人のそ  
ばによつてきて、「〈略〉。」とたずねました。

十二10 8 老人は、ほおえみながらポケットに手  
いれましたが、

十二11 2 老人は廣場の方を指さして、「〈略〉。」と  
答えました。

十二11 7 この老人は、ペスタロッツという人でし  
た。

十三59 5 老人のぼうさんらしい人が、その前にひ  
れふしている絵でした。  
十四51 8 こういひだしたのは、根のしるしをつけ  
た老人でした。  
ろうしんし 「老紳士」(名) 1 老しん士  
十五53 12 私の目に映じたのは、〈略〉しらがの老  
しん士のすがたであった。  
ろうそく 「蠟燭」(名) 3 ろうそく  
四82 10 ほそい ろうそくも立てました。  
十四98 2 たくさんの小さなろうそくが、みどりの  
枝の間からかがやいて、  
十四98 9 そのたくさんのろうそくはもえ続けてい  
て、  
ろうはくし 「老博士」(名) 3 老博士  
十五73 12 平和主義の旗がしらとしてその名を知ら  
れていた老博士は、〈略〉熱意をこめて語られた。  
十五75 1 テーブルをたたいて立ちあがった老博士  
は、〈略〉右手を大きくふりまわし、  
十五75 8 自動車のドアに手をかけた老博士が、さ  
らに、「略。」とささやかれた。  
ろうふじん 「老婦人」(名) 2 老婦人  
十五67 5 私がだんをおりるのを待ちかまえていた  
老婦人が、〈略〉、しっかりと私をだきしめた。  
十五68 4 ドアがあいて、半身をだした老婦人が、  
〈略〉、おもわずとびこんだ私をだきしめた。  
ローマ 「地名」 3 ローマ  
十三15 12 そのため、ガリレオは、ローマに呼びだ  
されて、  
十三57 1 図 ミケランジェロとラファエルは、前後  
して、そこからローマに出て、  
十五41 5 それから、そのギリシア文字がローマに  
移って、現在のような形になった。

ローマジ 「題名」 2 ローマ字  
十五3 4 ローマ字  
十五40 7 ローマ字  
ローマジ (名) 11 ローマ字  
三97 6 ローマ字を かくこともできます。  
十二109 11 日本のことばになおしてローマ字で書い  
てあります。  
十五40 8 ローマ字は、アメリカ・イギリス〈略〉  
など、世界の大半につかわれている文字である。  
十五41 1 ローマ字は、〈略〉、その大もとをたずね  
れば、エジプト文字から出たものである。  
十五41 6 ローマ字といわれるのもそのためである。  
十五41 7 ローマ字は、全部で二十六字である。  
十五41 8 この二十六字のローマ字を利用して、  
十五41 10 日本のことばも、ローマ字で書くことが  
できる。  
十五41 11 ローマ字をつかうと、〈略〉、発音のこま  
かなところまで書き表わすことができ、  
十五42 1 ローマ字は世界的の文字であるから、  
十五42 6 そのうえ、ローマ字の教育にも努力して  
いる。  
ローマンこう (名) 1 ローマン号  
十四44 10 ローマン号という小さな汽船が、〈略〉、  
ちんぼつしてしまいました。  
ろく 「課名」 31 六  
一2 3 二なのはな……六  
一2 7 六 もちもの……十四  
一14 1 六 もちもの  
二3 2 六 山びこ……三十八  
二38 1 六 山びこ  
三2 7 六 かえり道……三十九  
三39 1 六 かえり道

四2 7 六 ことばあそび……六十六  
四66 1 六 ことばあそび  
五3 1 六 まどをあけると……四十四  
五44 1 六 まどをあけると  
六3 1 六 かべ新聞……五十六  
六56 1 六 かべ新聞  
七3 7 六 月明かり……六十九  
七69 1 六 月明かり  
八3 5 六 みにくいあひるの子……六十  
八60 1 六 みにくいあひるの子  
九3 2 六 どんぐりとやまねこ……四十七  
九47 1 六 どんぐりとやまねこ  
十3 4 六 私の妹……四十七  
十一3 4 六 私の妹  
十一51 1 六 雨の中……五十一  
十二3 2 六 雨の中  
十二55 1 六 傳説……五十五  
十三3 1 六 傳説  
十三46 1 六 そよ風……四十六  
十四3 2 六 そよ風  
十四51 1 六 とりいれまつりの夜……五十一  
十五3 10 六 とりいれまつりの夜  
十五82 1 六 幸福の園……八十二  
ろく 「話手」 1 六  
九90 7 六 「うん。」  
ろく 「題名」 1 六  
一51 9 (六)  
四70 図 6  
六32 4 6  
六64 図 6

八八図 6  
 九八五 たかぎには友だちの一、二、三、やまだに  
 は四、五、六、  
 十一六 6  
 十一一四 6  
 十一五五 6  
 十二五〇 (6) 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新  
 聞で作って、のりどとめる。  
 ろくがつ 「六月」(名) 2 六月  
 四二四 六月は つゆ。  
 十二八二 五月、六月、七月、八月の四ヶ月にわ  
 たって、  
 ろくがつじゅうごにち 「六月十五日」(名) 1 6月  
 一五 日  
 八九三 6月15日 (金) くもり 24度 田植えのこ  
 ろになった  
 ろくがつじゅうさんち 「六月十三日」(名) 1 6  
 月13日  
 八九七 6月13日 (水) 晴 27度  
 ろくがつじゅうごにち 「六月二十五日」(名) 1  
 6月25日  
 七九〇 6月25日 (日) 晴 27度  
 ろくがつじゅうしちにち 「六月二十七日」(名) 1  
 6月27日  
 八九八 6月27日 (水) 晴 28度  
 ろくがつじゅうはちにち 「六月二十八日」(名) 1  
 6月28日  
 七九二 6月28日 (水) 雨 28度  
 ろくじごろ 「六時頃」(名) 1 六時ごろ  
 十三四二 六時ごろ……もつと早くおいでよ。  
 ろくじゅう (課名) 1 六十  
 八三五 六みにくいあひるの子……六十

ろくじゅう 「六十七」(名) 1 六十  
 十二六七 五十も六十も続いている。  
 ろくじゅういち (課名) 1 六十一  
 二三五 九 春をむかえに……六十一  
 ろくじゅうく (課名) 1 六十九  
 七三七 六 月明かり……六十九  
 ろくじゅうご (課名) 1 六十五  
 五三四 九 金のさかな……六十五  
 ろくじゅうさん (課名) 1 六十三  
 十一三七 九 父の看病……六十三  
 ろくじゅうし (課名) 1 六十四  
 十二三三 七 みえない力……六十四  
 ろくじゅうに (課名) 2 六十二  
 十三八 七 ぶす……六十二  
 十四三三 七 茶わんの湯……六十二  
 ろくじゅうにちめ 「六十日」(名) 1 60日め  
 八二五 田植えをした日から、ちようど60日です。  
 ろくじゅうろく (課名) 1 六十六  
 四二七 六 ことばあそび……六十六  
 ろくセンチメートル (名) 1 6 cm  
 七九三 耳の長さは、白と黒は5 cm、ねずみ色は6  
 cmでした。  
 ろくだい 「六台」(名) 1 六台  
 九二四 そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではま  
 にあわず、さらに二台の自動車を加えました。  
 ろくにん 「六人」(名) 3 六人  
 二三三 六 あるところに、六人のめくらがあり  
 ました。  
 二三四 六 六人のめくらが、ぞうつかいにたのみ  
 ました。  
 二四九 六 六人のめくらたちは、おそろおそろぞ  
 うのそばによつてきました。

ろくねん 「六年」(名) 1 六年  
 二五八 五年の人たちも、六年の人たちも、そ  
 のまえの人たちも、これをつかいました。  
 ろくねんせい 「六年生」(名) 1 六年生  
 三三六 六 こうさくしつでは、六年生が、はこのよ  
 うなものをこしらえていました。  
 ろくのばめん (題名) 2 六のばめん  
 二五八 六のばめん  
 六九七 六のばめん  
 ろくめいかん 「鹿鳴館」(名) 1 鹿鳴館  
 十五五五 鹿鳴館というクラブがあり、おかしな  
 もよしをしていたものだ。  
 ろじ 「路地」(名) 2 ろじ  
 八九二 ときたまそとのろじへだしてやっても、す  
 ぐまいもどつてきます。  
 八九二 ろじどころか、庭の木にとまらせても長く  
 はいません。  
 ロダン (人名) 1 ロダン  
 十五七九 すなおなれ。——ロダン——  
 ろつかねん 「六簡年」(名) 1 六か年  
 十五二五 楽しい六か年の思い出を残してくれたこ  
 の運動場、この校舎、あの農園、  
 ろつびき 「六匹」(名) 3 六びき  
 二二八 一 びき、二 びき、三 びき、四 びき、五 び  
 き、六 びき、七 びき、八 びき、九 びき、十 びき、  
 二四四 六 びき、  
 八四七 いなごが6びきほいました。  
 ろっぽん 「六本」(名) 2 六本  
 六四七 はりがねが六本あることまでわかる。  
 八四七 大きくなるにつれて、六本の足がだんだん  
 強くなり、  
 ろっぽんあし 「六本足」(名) 1 六本足



八212 あめ色をした六本足の虫が、こしを高くして、ひょっくりひょっくり歩いていくのは、

ろばた「炬燵」(名) 1 ろばた

二168 めじろ——ろばたたいいもち——

ろんぶん「論文」(名) 3 論文

十五525 私は、一年半の努力の結果、しゅびよく書きあげた論文を持って、

十五5412 カーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらうことで、

十五761「きみの論文を、カーネギーで出版することは、ひきうけたよ。」

ろんぶんかんこう「論文刊行」(名) 1 論文刊行  
十五555 ホランド博士は、〈略〉、それとなく論文刊行のむずかしいことをにおわせた。

## わ

わ「羽」↓いちまんば・いちわ・いっせんろっ  
びやっぱ・くひやくくじっぱ・ごせんば・ごまんば・ごろくわ・ごろっぱ・さんじっぱ・さんじゅうくわ・さんば・じっぱ・じゅうまんばあまり・にさんば・にじっぱ・にじゅうくわ・にじゅうごわ・にじゅうしちわ・にじゅうろくわ・にせんば・にひやっぱ・にまんごせんば・にわ・やくじゅうまんば・やくはちまんきゅうせんば

わ「輪」(名) 16 わ 輪 ↓うでわ・はなわ・みずわ・ゆびわ

一641 わたくしも、わのなかにはいって、おはなばたけをおどりまわりました。

三84「わになろう。」

三85「わになろう。」

三86「大きな大きなわになれ。」

四204「みんなで手をつないで、わをつくりました。」

四205「ねずみが三びき、わの中にはいり、

ねこが二ひき、わのそとにでました。」

四206「わのそとにでました。」

四216「ねずみたちは、わの中できよろきよろしています。」

四219「わたくしは、ただしさんをねらって、

わの中へもぐりこもうとしました。」

四222「ねずみたちは、あわててわのそとへにげました。」

四225「もうすこしで、つかまりそうになったとき、またわの中ににげこみました。」

七743 そうして、ぐるりとわをかけ。

十三139 星は、太陽のまわりを、大きく輪をえがいて、まわっていることがわかり、

十三154 だえん形のきまった輪をえがいて、一年に一回、太陽のまわりをまわります。

十三313 まるく輪になったその中で、さるがさまざまな藝をする。

十五9612 子どもたちのまわりで、わになっておどります。

わ(終助) 24 ワ わ

三827「わたしのものも色、みえないわ。」

五533「えらいわね。」

五5310「三ばん星は、ねえさんがみつけないわ。」

五876「おかしいわ。」

五886「あら、おかしいわよ。」

五9110「それで、手おけの水をかけてやると、たけのこがよるこんで、のびるわ、のびるわ。」

五9110「のびるわ、のびるわ。」

五923「まん中にあなをあけてやったら、それ、

このとおり、いせいよくのびるわ、のびるわ。」

五923「いせいよくのびるわ、のびるわ。」

六5210「お月さまじゃないわ。」

六707「お話もしたら、なおもしろいわねえ。」

六716「でも、こんな口じゃ、だめだわ。」

六8910「まあ、りっぱなすが、水にうつっているわ。」

七177「このまえより、なの花がへっているわ。」

七332「それがいいわ。」

十491「アンヨ ナメテルワ——」

十493「ワンワン——ミテルワ ウシロ——」

十494「アカチャン ネテルワ——」

十495「ワンワンチャン ネテルワ——」

十507「アンヨ ナメテルワ」

十527「アカチャン ネテルワ」

十532「ワンワンチャン ネテルワ」

十二296「ゆだんができないわ。」

十四199「手おけ、手おけはちょっとおかしいわね。」

わ 2 わ

四7510「わ——わからないことはしらべよう。」

四75「わ

ワーズ ↓クロスワーズパズル

わあ「(感) 2 ワアッ わあッ

七543「ワアッ。」という声がおこった。

八586「わあッ。」と、汽車によびかけた。

わあわあ(副) 2 ワアワア

九6110「ワアワアとみんなにかいていっているのです。」

九631「草の中から、どんぐりどもがぎらぎら光ってとびだして、もうワアワアっていました。」

わあわあ (感) 1 わあ、わあ

四〇〇二回 「わあ、わあ。」

わいわい (副) 1 わいわい

六二四二回 きみたちが、ここでわいわいやつていては、すぐぼくが、きつねにみつかつてしまうから、

わおん 「和音」(名) 2 和音

一三六 一つの和音を耳にしたときは、

一三六二 はとがむれになってとんで来ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、

わが 「我」(連体) 8 わが

九一六二回 階上のわが電燈のきえにけりみわたす家々みなまくらなり

一三二七 わが九州ほどの本國と、三つの島からなっている、小さな、しずかな國であります。

一四四二 名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、けつして少なくはありません。

一五四三回 空にはなちし わがそ矢は、あわれいずこに 落ちにけん。

一五四七回 空にとなえし わが歌は、あわれいずこに 落ちにけん。

一五五二回 おどろきてわが身も光るばかりなり大きなぼらの花照りかえる

一五五七回 わが祖國、やがて立つべし。

一五六三 同志社をわが子のように、だいに胸にだいてはぐくみ育てていた新島のおじさんが、

わかい 「若」(形) 22 わかい 《イ・イク》

四一九回 白いけむりがたちのぼり、元氣でわかいうらしまは、みるみるしらがの おじいさん。

五二四回 ところが、ぼくのまえに、まつばづえをついた、わかい人がいるんです。

七三九 私のよこのわかい男の人が、《略》、両方の

手でまどわくをおしています。

七三八 そのわかい男の人が、「《略》。」といったかと思うと、いきなりさぶろうをだきあげ、

八二四 このわかいあぶらぜみは、きゅうに元氣になつて、そろそろ歩きだしました。

八二九 すると、黒うしにまたがり、ふえをふいてくる、わかい男にであいました。

八三九 わかいはくちようは、そのほそ長い首をあけて、心のそこから喜ばしそうにさげんだ。

一六三 役者がおじいさんになつたり、むすめになつたり、わかい男になつたりするときは、

一六三 おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

一六三 わかい男のめん、わかい女のめんと、

のわらうのを見たことがあります。

一五二九回 おまえがにっこりするたびに、わかくなるのですよ——

わかくさ 「題名」 2 わか草

一五二六 わか草

一五二六 わか草

わかくさ 「若草」(名) 1 わか草

一五二六回 わか草のはつかにもゆる庭に来てすずめあさりとなりへとびぬ

わかさ 「若」(名) 2 わかさ

一三六三回 二十二か三のわかさで、せんばいをしてい

十五二七回 毎日、新しい力と、わかさと幸福とがますのですよ。

わがしょうがい 「題名」 1 わが生がい

一三三九回 これは、ヘレン・ケラーというアメリカの女の人が書いた「わが生がい」の一せつを、日本語になおしたものです。

わかす 「沸」(五) 1 わかす 《一シ》

一三二二回 おとうさんが、休み茶屋のまえにこしかけて、コーヒーをわかつてもらっていますと、

わかば 「若葉」(名) 4 わか葉

九二四回 その小さな胸には、わか葉のもえる日本の春の美しさを感じうかべているのでしょう。

一三二 流れやまぬ愛のしみに、うるおされ、やしなわれて、のびていく命のわか葉。

一三三回 げんげがさいて、なの花ちつて、かきのわか葉に日の照るころは、

一三三回 はい色雲が空うちおおい、青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。

わがまま 「我儘」(名) 4 わがまま

四四六回 わがままはもうよすががいいよ。



ら、わかりそうなものだがな。」  
 六77(会) 「わかった、わかった。」  
 六77(会) 「わかった、わかった。」  
 六102(7) はりがねが六本あることまでわかる。  
 六112(1) ナニヌネノという一ぎょうは、ぜんぶはな  
 の音でできていることがわかった。  
 六112(5) 「モ」といつてみたら、これらもはなの音  
 であることがわかった。  
 六112(10) みんなはなから声のする音ではないことが  
 わかった。  
 六113(4) 音の性質を考えたうえで作ったものである  
 ことがわかって、びっくりしてしまった。  
 六113(5) かんたんにはわからないが、〈略〉ちがっ  
 た性質をもっているにちがいない。  
 六133(4(会)) わかった。  
 七14(6) 「手にとるようによくわかる。」  
 七25(10(会)) どうして、はっぱと同じ色になるのか、  
 わかりますか。  
 七26(1(会)) にいちゃん、わからないのかい。  
 七48(4) 一回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人  
 に、はつきりと、そのようすがわかります。  
 七82(6(会)) ふたりのいうことは、よくわかった。  
 七83(4(会)) それから、そのらくだがかた目だという  
 ことは、どうしてわかったのかね。  
 七83(10(会)) では、まえ歯のぬけているということは、  
 なぜわかったのか。  
 七84(6(会)) もしもし、それなら、荷物をつけている  
 ことが、どうしてわかったのでしょうか。  
 七84(7(会)) それが麦だということが、なぜわかった  
 のでしょう。  
 七85(2(会)) よしよし、よくわかった。  
 八50(2) けれども、それでは人の心がよくわかりま

せん。  
 八55(3) 「幸福」には、その家の人の心がよくわ  
 かりました。  
 八66(11(会)) あのうまく足をつかうようすや、あのし  
 せいのいいのをみてもわかる。  
 八70(8) あひるの子は、立っていたほうがいいか、  
 歩いていたほうがいいかさえも、わからなかった。  
 八76(10) 小屋はひどくあれていて、どっちにたおれ  
 るかわからなかった。  
 八82(1(会)) おまえさんのいうことがわからないって。  
 八82(2(会)) じゃあ、だれにわかるのかね。  
 八88(5) どうしてこんなになったのかわからないう  
 ちに、大きな庭の中にきていた。  
 八93(1) どうしていいのかわからないので、つばさ  
 の中に頭をかくした。  
 八106(5) 両方をくらべてみて、あまりちがわないこ  
 とがわかりました。  
 九14(7) いい音楽をきいても、それがわからないの  
 は、  
 九17(6) ころみに、しるしをつけてはなしたもの  
 だということがわかりました。  
 九24(5) いろいろな方法でこのことをしらべてみま  
 すと、やはりそうであることがわかりました。  
 九40(10(会)) おとなの人が、男か女かわからないが、  
 下を向いて登ってくるのがみえます。  
 九42(3(手)) そのほか、名のわからない美しい小鳥が  
 たくさんいます。  
 九46(3(手)) ぼくにはまだ、セドリツクほどわかりま  
 せん。  
 九65(7) まるではちの巣をつついたようで、わけが  
 わからなくなりました。  
 九66(9) ガヤガヤ、ガヤガヤ、また、なにがなんだ

かわからなくなりました。  
 九80(8(会)) それはちょっとわかりませんね。  
 九123(3) 大きな支流が流れこむところへくると、と  
 きどきあまい水の味がわからなくなってしまう。  
 九131(1) それは、みつばちであることが、くもには  
 すぐわかりました。  
 九139(11(会)) わかった、わかった。  
 九139(11(会)) わかった、わかった。  
 九143(9) くもは、なんといつて返事をしていないか  
 わからないので、そのままだまっていました。  
 十17(5(会)) だれもわかるものがありません。  
 十28(8) 観察すればするほど、自然のおもしろさも  
 わかり、そのふしぎなことにうたれ、  
 十38(9) 眞珠質がまきつき、年とともに大きくなっ  
 て、天然眞珠となることがわかったからである。  
 十42(1) これは、まえにさしいられておいた核によつ  
 て発生した半円眞珠であることが、わかった。  
 十42(6) 眞珠貝にちようどよい海水の温度や、海の  
 深さのこともわかり、  
 十49(10) よその人には、なんのことか、おそろくわ  
 からないでしょうが、  
 十49(12) そのときのいきさつを知っている私には、  
 このことばの意味がよくわかります。  
 十64(11) それをみていると、世の中のうらおもてが、  
 よくわかります。  
 十66(9(会)) わかったか。  
 十66(10(会)) わかりました。  
 十71(9(会)) だんなが帰ったら、どんな目にあわされ  
 るかわからない。  
 十11(8(会)) ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやな  
 ことなど、きみはなんでもよくわかつている。  
 十11(9(会)) ただ、わかつているだけではなしに、

いつもそのうえを考えていて、

十一 69 病人はしげしげと少年をみつめて、いくらかわかったようでしたが、

十一 70 7 ㊦ わかりません。

十一 70 9 ㊦ ぼくがわかりませんか。

十一 71 9 ㊦ 「そうすれば、おとうさんのようすもなんとかわかるだろう。」

十一 75 10 ㊦ 「けれど、ぼくってことがわからないんです。」

十一 76 7 病人は、ときどき少年の方をみましたが、わかったようなうすはしませんでした。

十一 78 1 少なくとも、いくらかわかるであろうと思うと、

十一 78 5 たとえわからなかったとしても、

十一 83 6 ㊦ 手紙がきたとき、おまえがこないから、どんなにがつかりしていたかわからないよ。

十一 86 8 ㊦ ここへつれてきたときには、もうすっかりわけがわからなくなっていて、

十一 7 6 道灌は、その花の枝の手にはしましたが、なんのこともだかその意味がわかりません。

十一 7 8 それからのちになって、道灌は少女の心がわかりました。

十二 24 12 民ちゃん、ぼつぼつものをいいかけていますが、ちよっときいてもわかりません。

十二 25 1 姉だけにわかるへんなことをぼをいっていません。

十二 25 9 ときどき、わからないことばで、わたしに知らせるようになりました。

十二 34 3 なんのこともわからないままに、〈略〉など、たくさんのことばをつづることを覚え、

十二 34 11 二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。

十二 35 6 こんどは、二つの人形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。

十二 37 11 こうして私は、物にはみな名まえのあることがわかったのです。

十二 38 8 自分のしたことがわかったので、

十二 39 9 よんでわかるように、ケラーは、めくらで、そのうえつんぽでした。

十二 40 5 両親は、なんとかして、すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

十二 40 8 サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくのには、

十二 40 10 ケラーに「ことば」というものをわからせることによって、

十二 88 11 おかしなことになるばかりでなく、そのことばがわかったとはいえないことになる。

十二 93 1 ことばは、だれにでも同じようにわかり、同じように通じる力をもっている。

十二 93 6 ひとりがつてんでなく、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。

十二 94 4 動いているようすがすぐわかる。

十二 94 6 このようにまると、だれでも読んで、すぐにそのわけがわかる。

十二 98 10 このように、古い時代のことがはつきりわかるいとぐちとなったのは、

十二 102 2 これをみても、平和を愛した古代の人たちの氣持がよくわかるではありませんか。

十二 113 2 この本を日本語になおすのには、どれほど苦心したかわかりません。

十三 13 9 太陽のまわりを、大きく輪をえがいて、まわっていることがわかり、

十三 13 11 太陽のまわりをまわっている星の一つだ、ということもわかりました。

十三 15 6 夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。

十三 30 6 それぞれ子どもたちにはすぐわかる。

十三 33 8 夜のホーントンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからないほどである。

十三 34 12 小さな子どもは、絵も字もわからないころから、〈略〉、れんをながめている。

十三 35 2 それが、だんだん大きくなって、文字であることがわかり、

十三 35 2 その文字の意味がわかってくると、いっそうその美しさが胸にきざまれる。

十三 45 8 そうして、三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわかるように、くふうします。

十三 54 4 そのおかあさんがマリアだということは、すぐにわかりました。

十三 57 8 ㊦ ぼくには、よくわかりませんが、

十三 57 12 ㊦ 絵は、写真で見ただけでは、明暗はかなりわかるが、色がわからない。

十三 57 12 ㊦ 色がわからない。

十三 60 10 ㊦ ぼくには、そのうまさがよくわからないけれど。

十三 61 2 ㊦ でも、ラファエルのうまさは、普通の人にもわかるだろうね。

十四 17 5 ㊦ どの時間になにをしていらっしやるか、この私にはわかるのです。

十四 25 2 「タバコ」ということばが、伝えられたということがわかった。

十四 28 2 ㊦ それは、國語辞典をひいてみると、だいたいわかる。

十四 28 6 ㊦ 外來語辞典というものもあるから、それを調べると、なおいっそうよくわかるだろう。

十四 34 7 二十億光年——わかりますか。

十四378 しなければならぬことは、なんであるかということも、しぜんにわかってくるはずです。  
 十四453 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、船客十四人のゆくえがわからなくなりました。  
 十四473 歌っている人は、どういふ人かわかりませんが、  
 十四508 おしいことに、歌を歌ったおじょうさんの名まえがわかりません。  
 十四508 たとい、名まえはわからなくても、  
 十四5410 明かるい地の上でくらしているかたには、土の中のことばわからないでしょう。  
 十四575 頭のぼうしで、日、水、土、はちたちだといふことがわかりました。  
 十四644 もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということが、学者の研究でわかってきました。  
 十四6412 茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。  
 十四651 しめきつたへやで、人の動きまわらないときだと、ことによくわかります。  
 十四657 空気の温度によってもちがいますが、おおよそのけんとうは、わかるだろうと思います。  
 十四718 うかんでいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずで。  
 十四7311 もようがなんであるかといふことは、まだ、あまりよくわかっていないようです。  
 十四796 ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもとか、わからないことでした。  
 十四8410 雪のけつしょうがちがうわけを、〈略〉、よくわかるようにしくんだものであった。  
 十四857 一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかとすれば、

十四9112 自分の足だか、ひとの足だか、わからないくらいだった。  
 十五247 いまそれをとめなければ、もうその女の子は、どこへ持って行かれるかわかりません。  
 十五501 よくわかりました。  
 十五546 良かった、良かった。  
 十五546 良かった、良かった。  
 十五615 「〈略〉。」と、必ず書きそえてあったのを見て、その愛されかたがわかう。  
 十五784 はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。  
 十五804 それ以前は、おたがい他國々のことはわからず、世をすごしてきたばかりでなく、  
 十五882 『なんにもわからないという幸福』は、こうもりのように目が見えない。  
 十五9810 あの子たちが青い鳥を持っていけないことは、わかつているのだからねえ。  
 十五1013 ぼく、わかった。  
 十五1028 こんどあつたら、わかるでしょう。  
 十五10611 『もののわかる喜び』が立っています、が、  
 十五10612 あれは、いつでも、兄弟の『なんにももののわからない幸福』をさがしているのです。  
 十五1148 あの小さな家に帰って、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだろうね。  
 十五1153 わかったかね。  
 十五1162 いつもたずねあぐんでいた道が、どうしてわかったの。  
 十五1178 私は『物のわかる喜び』でございます。  
 十五1196 「物のわかる喜び」、「光」の方へ行き、ふたりは長いあいだきあいます。  
 わかる (下二) ↓とびわかる

わかれ 「別」(名) 3 わかれ 別れ ↓おわかれ  
 十一712 去年、みおくっていつて、最後に船の上でわかれを告げたことや、  
 十五528 博士は、別れに際して、各地の大学者たちへのていねいなしょうかい状をくださったうえ、  
 十五766 停車場まで送ってくださった博士のこう意をふかく謝して、別れの手をさしのべると、  
 わか・れる 「分」(下二) 10 わかれる 《レ》 ↓おわかれる  
 三307 みんなはあちらこちらに わかれました。  
 四337 わかれていきました。  
 四957 風になつたり わかれました、  
 六555 それから、三人はわかれて、それぞれ家へ帰りました。  
 七215 ひとりびとり、ばらばらにわかれて、そとね。  
 八219 地表から一メートルほどのぼったところに、小枝がわかれていました。  
 九886 そのほか数人が、それぞれにわかれてふたりをひきとめている。  
 十一251 「どんなことがあつても、親子四人、わかれないうにしましうね。」  
 十四9912 そのマッチの火の中で、もうとつくにわかれて神さまのおそばへ行つたおばあさんを見た。  
 十五486 いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、  
 わかわかしい 「若若」(形) 1 わかわかしい 《一イ》  
 十四4010 わかわかしい世紀のひびき。  
 わき 「脇」(名) 6 わき ↓こわき・りょうわき  
 三159 でしたちはそのわきにならびました。

三427 ぼくは、学校どうぐをわきにかかえて、  
 どんどん 走って かえりました。

四492 かっちゃんは、十五ばんめから わきにそ  
 れたかと思うと、

六116 たろうさんが、わきから、「略。」ときき  
 ました。

十547 「イコウ」ときめてあるきかけると、道の  
 わきで、たき火をしていました。

十一90 ちよつとわきのほうにいつていた看護婦  
 が、

わきあがる 「沸上」(五) 2 わきあがる 《一ツ》  
 五79 10 「川から水がわきあがってくるようです。」

十三46 細い、細い小枝のあみ目の先にも、はや  
 ふくらと、季節の命はわきあがって、

わきあふれる 「沸溢」(下二) 1 わきあふれる  
 《一レル》

十一179 おかあさまの胸に、わきあふれるなくさ  
 めの泉に、《略》も、あとなくぬぐわれます。

わきだす 「湧出」(五) 1 わきだす 《一シ》  
 九120 1 水は大きなごろごろした石ころのあいだか  
 ら、ブツブツと音をたててわきだして、

わきたつ 「沸立」(五) 1 わきたつ 《一ツ》  
 十五212 朝ぎりの中から、白い雲のわきたつよう  
 に、すべり出るまっ白なひつじのむれ、

わき・でる 「湧出」(下二) 2 わき・でる 《一デル》  
 九1216 なんとかしてうまい水のわきでる泉をさが  
 したしたいものと思った。

九126 谷川をさらにさかのぼると、岩まからちよ  
 ろちよるとわきでる泉があつて、

わきのした 「脇下」(名) 1 わきの下  
 十一635 いなかの人らしいひとりの少年が、《略》、  
 わきの下に着物の包みをかかえながら、

わきみ 「脇見」(名) 1 わきみ

八569 かもめが目について、それに氣をとられて、  
 わきみをしたあたりが横にそれている。

わく 「粹」ひまどわく

わく 「沸」(五) 1 わく 《一イ》  
 三366 おゆがわいています。

わく 「湧」(五) 3 わく 《一イ》  
 五522 ひつじになって わいてくる、わいてく  
 る。

五523 わいてくる、わいてくる。  
 十五74 世界平和、人間平等という理念が、ここ  
 からわいてくるのだ——

わくせい 「惑星」(名) 2 わく星  
 十三145 そういう星——これをわく星といいます  
 が——の空にえがく道は、だえん形であつて、

十四32 地球や金星などのわく星が、太陽を中心  
 として回轉していることを知っています。

わくわくする (サ変) 1 わくわくする 《一スル》  
 十一644 それを思うと、ぼくは胸がわくわくす  
 る。

わけ 「分」ひてわけ・てわけする・とりわけ・ひき  
 わけ・もうしわけ・もうしわけなさ

わけ 「訳」(名) 50 わけ

一353 「そのわけは。」

三109 おじいさんとおばあさんはおどろいて、  
 そのわけをたずねました。

四319 どのかの 中学校の 女の 生徒さんがき  
 て、なっているわけを ききました。

四72 「にやあ・わん」という わけです。

四725 これは、『はなをふく。』という わけで  
 す。

四728 『あげられません』という わけです。

四73 「ひびにつける。」という わけです。

五26 「はるこさん、いま改札口の人にありが  
 とうっていったのは、どういうわけ。」

六277 そのおかげでさ、《略》もできるし、た  
 べものもじゅうぶなべられるというわけだ。

六596 そのわけがわかりました。

六728 死んでいたら、ころがってたおれるわけだ  
 し、目だつてつぶつてしまふだろうし、

六1048 ねつはないので、ねているわけではない。  
 六1077 そんなことばでも発音できないわけではな  
 い。

六1081 そのわけは、すぐけんとうがついた。  
 六1102 これなら、弟のまねなんかわけはないぞと  
 思った。

六1104 「夕」や「下」にいいかえればいいわけだ。  
 七857 けれども、いまの答で、知っていたわけ  
 がはつきりしたでしょう。

八356 今夜のはたおり星の光は、やく三十年ほど  
 まえに発した光だというわけになります。

八492 王子は、いままでのわけをこの男に話しま  
 した。

八1068 ですから、1つぶの種もみから、やく15  
 00つぶもみができたわけです。

九657 まるではちの巣をつついたようで、わけが  
 わからなくなりました。

九134 くもは、長い手をのぼして、わけなく白い  
 ちようちよをとらえました。

九136 こう頼まれると、だまつてたべしまふわ  
 けにもいきません。

十303 どうしてそんなことになったか、そのわけ  
 をよく考えていってみようと思います。

十38 「このわけをあてはめれば、自分のゆめ

も、実現できないことはあるまい。」

十398 うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功するわけであったが、

十4311 八十五万から五つぶの眞珠が取れたわけである。

十521 とうとう、くるつと、うしろを向いてしまったわけです。

十5511 なんと、わけもなく、すらすらと書いていくことでしょう。

十一868 今こへつれてきたときには、もうすっかりわけがわからなくなっていて、

十二408 サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくのには、

十二4612 それが音楽や歌にあわせてしばいをするわけだ。

十二481 絵のぐをつかつて時間をかけて絵をかくより、写真のほうがずっと便利なわけだけれど、

十二886 簡単なことばでも、相手の人のいうことばのわけをよくききかけて、

十二889 そのわけにかなわないことをすれば、たいへんおかしいことになるばかりでなく、

十二946 このようにままとすると、だれでも読んですぐにそのわけがわかる。

十三155 これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。

十三156 春・夏・秋・冬のあるわけも、

十三283 遊ぶといつても、べつに、おもちゃや絵本などを持って遊ぶわけではない。

十三4411 舞台に出てゐる人は、四人のひと話をしているわけだ。

十三454 三郎くんのことばの間に、あいてがなに

かいつているわけですか。

十四121 手 もしこわれたら、そちらでわけなくかわりをお見つけになれるでしょう。

十四654 反対に、湯がぬるいと、いきおいがよいわけだ。

十四717 アルコールランプで熱したときの水の流れると、同じようなものになるわけだ。

十四8410 雪のけつしょうがちがうわけを、〈略〉、よくわかるようにしくんだものであった。

十五558 今まあ、そのようなありさまで、せっかくのおたずねもむだになるようなわけだが、

十五567 今そんなわけで、私と日本とはふかい関係があるのだが、

十五583 つまり、私はかれのギリシア語の先生で、かれは私の日本語の先生というわけだが、

十五1067 今そういうわけで、あれにうちやられると、〈略〉はじめなものになってしまうのです。

十五1079 今ぼくたちのなかまから、いちばん美しいものがいなくなってしまうわけですからね。

わけかた 〔分方〕(名) 1 わけかた

二117 わけてゐるうちに、そのわけかたが、いろいろにかわつていきました。

わけでも 〔別〕(副) 1 わけても

九257 わけても、〈略〉帰ってきたつばめをむかえる人の心は、どんなにうれいことでしょう。

わけなさる 〔分〕(五) 1 わけなさる

三212 川にゐる魚と海にゐる魚とをわけなさい。

わける 〔分〕(下) 22 わける

二101 今「人のなど、そうでないもの」とに、

わけたらいいとおもいます。」

二106 今「くさのなど、とりのなど、そのほかのものに、わけたらいいとおもいます。」

二109 今「目にみえるものと、みえないもの、わけたらいいとおもいます。」

二112 今「では、めいめいのかんがえどおりに、わけてごらんない。」

二116 そうして、ひとりびとりのかんがえどおりにわけてみました。

二117 わけてゐるうちに、そのわけかたが、いろいろにかわつていきました。

五185 今〈略〉と、東の方へいく友だちを、それぞれひとかたまりにわけてくれました。

五849 いのうえさんは、國語の本にでていることばを、五十音にわけてみるといいました。

六299 今すこしでもいいから、わけてください。

六303 今花のみつをわけてあげよう。

八451 今「わたしの病氣をなおしてくれたものには、國の半分をわけてやる。」

八507 よくむかえてくれる人があつたら、その人のところへ幸福をわけておいてくるつもりでした。

八556 それをうれしく思つて、その家へ、幸福をわけておいていきました。

八992 なわしろからとつたなえをみんなでわけました。

八1082 こんどは、もみとごみをわけました。

九354 近所からわけてもらつたさつまいものなえを、手わけして植えていきました。

十811 今「〈略〉。」といひながら、おとうさんにわけてくれる少女もありました。

十97 少女のわけてくれたくりは、むじやきな心からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。



1205 ㊦ 「さあ、その白いかべに、プリズムでわけた光を写してみますよ。」

12010 ㊦ 白っぽくみえる太陽の光線ですが、わけてみると、こんなにさまざまな色になります。

11197 村の人たちが困って頼みになると、気持ちよく、物をわけてやったり、

14596 ㊦ さっきから問題になっている養分だつて、みんな私がわけてあげたのです。

わざ ㊦ にんげんわざ

わざと ㊦ (副) 2 わざと

941 両方ともあいてに氣がつくが、わざと知らないふりをしている。

954 やまだ わざとたかぎの顔をみないようにして、「略。」

わさび ㊦ (名) 1 わさび

11575 ㊦ はちみつやいちご、青うめ・わさび、にがい、にがいくすり、一つ一つしみる。

わざわざ ㊦ (副) 3 わざわざ

5149 ㊦ 「おぼさん、わざわざきてくださって、すみません。」

1275 わざわざ遠くにでかけなくても、ふだん自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。

12471 ㊦ わざわざ絵のぐをつかって時間をかけて絵をかくより、写真のほうがずっと便利なのだけだ、

わし ㊦ (名) 6 わし ㊦ おおわし・おおわしにのったはなし・やまわし

152312 その人は、いっしょうけんめいにわしのせにしがみついて、

15245 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて来ました。

15262 もしこのわしが、その舞いおりるとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、

15266 もしまたとちゅうで、このわしが大きなくちばしで女の子の頭でもつつけば、

15304 わしの白い下羽が、綿のように一面にちりました。

15305 わしは、羽音はげしくすこし舞いたつたかと思うと、こんどは両羽をあおりたて、

わし ㊦ (代名) 12 わし

56610 ㊦ わしは、きょう、金のさかなをとつたよ。

56611 ㊦ おれはいくらでもあげるといったが、わしはおれなどもらわなかった。

5873 ㊦ わしは、三つも四つもあるかと思つていたよ。

58710 ㊦ わしもほしいな。

5904 ㊦ わしのおかあさんはな、ずっとまえに、さどが島においでなされたことがあった。

5908 ㊦ このわしも小さいときは、オギヤア、オギヤアとないたのだよ。

8378 ㊦ 「この花が、みたとおりのこがねならば、わしもつむのだが。」

8427 ㊦ もし、ひめが生き返るなら、わしはもうこがねなどはいらない。

8482 ㊦ 世の中にわしより幸福なものはあるまい。8482 ㊦ ほんとうにわしは幸福ものだ。

9592 ㊦ あのはがきは、わしが書いたのだよ。9596 ㊦ わしはやまねこさまのぎよしやだよ。

ワシントン ㊦ (地名) 1 ワシントン

15532 ナイガラのたきをながめ、ボストン、ニューヨーク、ワシントンと無事に旅を進めて、

わすか ㊦ (僅) (形状) 11 わすか  
749 あぶなかったが、わすかのちがいで勝った。

8191 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、  
〈略〉、わすか二三ヶ月で大きくなって、

8194 ほそいくだのさきから、木の根のしるをわすかずつつているせみの子たちは、

15411 わすかのことはですが、この中には、妹のすがたが、ありありとうかんでいます。

11279 そんなわすかな金がないということはいえません。

11283 さかわ川がまたあふれて、のこつていたわすかの田や畑も、流されてしまいました。

12607 もうあとわすかというところで、日ははや西の山に傾いて、くれそうになってきた。

12867 わすかな点のちがいで、清水選手の負けとなりました。

13246 農作物は、じゃがいも・くろむぎ、そのほかわすかのものにすぎませんでした。

15499 ただわすかに外國人がこれに目をとめて買うことがあるということを聞いて、

15566 ㊦ その際算出した高さは、実測の結果とわすか十フィートしかちがわなかった。

わする ㊦ (忘) (下) 1 わする ㊦ 《ルル》

15166 ㊦ 野にはたらきて、土ほこり顔よすとも、わするるな、明かるくすめるながえ顔。

わすれもの ㊦ (忘物) (名) 1 わすれもの  
5139 ㊦ わすれものはないか、じろう。

わす・れる ㊦ (忘) (下) 34 わすれる ㊦ 忘れる ㊦ 《レ・レル》 ㊦ おわすれねがう・おわすれる

3562 ㊦ うたをわすれたカナリヤは、うしろの山にすてましょか。

3565 ㊦ うたを わすれた カナリヤは、せどのこやぶに いけましょか。  
3571 ㊦ うたをわすれたカナリヤは、やなぎの

むちでぶちましょか。

三574 罇 うたをわすれたカナリヤは、ぞうげのふねにぎんのかい、月夜の海にうかべれば、三577 罇 月夜の海にうかべれば、わすれたうたを思いだす。

四94 雪が かおにかかるのも わすれて、高い高い空のまん中を みあげる。

七239 罇 あ、わすれていた。

八135 それから十年、いまでも、私はピオのことがわすれられません。

八317 はたおりひめは、あまりうれいので、はたをおることをわすれてしまいました。

八849 あひるの子は、あの美しい、しあわせなはくちようをわすれることはできなかった。

九247 つばめは、けっして自分の國をわすれません。

九316 手 ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわすれたことはありません。

九142 罇 「まあ、おまえは、わたしをわすれたのかい。」

十325 いつも、全体の中の部分、部分があつての全体、というつながりをわすれないで、

十438 ゆめにもわすれられない眞田眞珠が、光っているではないか。

十一549 「〈略〉。」といった、しゃしようさんのことをわすれることができない。

十二313 私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな日は、

十二321 なつかしい葉や、花の上を、私の指はまったくわすれてなでていました。

十二374 なにかしらわすれていたものを思いだすような、〈略〉あるふしぎなものを感じました。

十二812 私はいまでも、あのときのことをわすれることができません。

十四89 罇 なにも、勇氣をだしてわすれてしまおうとお思いになるにはおよびません。

十四811 手 おかあさんにしても、私にしても、とてもわすれることのできないのは、

十四312 世界全体を見わたすことをわすれていたのは、よくないことでした。

十四4611 自分が水の中にひたっていることも、わすれてしまったほどでした。

十四597 罇 ほかのことはわすれても、この土のことは、かたときもおわすれにたないでしょう。

十四617 罇 いちばんいい種を、來年もわすれずにまいてももうことができさえすれば、

十五248 ひつじかいは、身のおぶないこともわすれて、思わず鳥のせにとびついたのでした。

十五665 せつくがくるごとにその人形をかざって、ありし日をしのぶことをわすれなかった満ぼうの心から、

十五755 —ああ、忘れもしない、満面べにをさして語られたホランド博士のあの熱情のことば。

十五851 罇 だが、おまえさんたちは、あのさとうがしをわすれたのじゃないかな。

十五855 罇 あのさとうがしをわすれたのじゃないかね。

十五863 罇 でないと、かんじんな用むきをわすれてしまふからね。

十五115 罇 おまえたちは、おかあさんをよく覚えて、だいいじにすることをわすれてはなりませんよ。

十五128 きょうの感謝会はわすれることはできません——

わた「綿」(名)5 わた 綿↓ほわた

七958 その中に、わたのようなふわふわした毛が、いっぱいはいっていました。

八124 つめたくなったからだをわたにつつんで、小ばこにいれて、〈略〉うめてやりました。

十三365 やなぎのわたが、どこからともなくたくさん舞ってくる。

十三366 小さな光ったわたが、土べいのかたすみにたまる。

十五304 わしの白い下羽が、綿のように一面にちらしました。

わたくし「私」(代名)335 わたくし 私

一142 。六もちもの わたくしのもちもの。

一224 て おどりました。わたくしは、「おてて

一352 罇 略。」「〈略〉。」「わたくしははなにな

一472 た。おじいさんは、わたくしをむしめが

一488 ってあげました。わたくしは、おばあさ

一534 略。」「〈略〉。」と、わたくしがいったと

一562 とつとりだして、わたくしにみせまし

一573 げちゃん、みんな わたくしのうちにい

一579 (九)「〈略〉。」「わたくしは、かたほう

一619 罇 ました。「でも、わたくしはもつたら、

一624 略。」「と、わたくしの手にたま

一6310 た。おとうさんも、わたくしも、わのな

一642 どりまわりました。わたくしは、「みんな

一645 いました。「〈略〉。」「わたくしは、そこに

一659 て、おかあさんは、わたくしをひざのう

一225 罇 しかないので、わたくしは、『いろ

一456 罇 さん、こんどは、わたくしがやってみ

一555 かんがえました。わたくしには、おとう

一574 とんでいました。わたくしは、「みんな

一579 きました。みると、わたくしのおじいさ

一582 にたかたでした。わたくしは、おもわず

二601 しをきいたとき、わたくしは、ふと、ゆ  
三169 会 で、このはちを わたくしにとどけよ  
三315 会 した。「略。」「わたくしは かいだん  
三347 会 していました。わたくしも、早く大  
三379 会 目を ひらいて わたくしを みます。  
三912 走って いきます。わたくしは、学校へ  
三1049 会 かぐやひめは、「わたくしは だれの と  
三1102 会 が、ほんとうは、わたくしは 月の 世界  
三11310 会 には 月を みて、わたくしの ことを 思  
四206 会 この 一びきは、わたくしです。先生が  
四213 会 ました。ねこの わたくしは、どのね  
四217 会 ろして います。わたくしは、ただしさ  
四225 会 ました。そこを、わたくしが うまく つ  
四256 会 いる ようです。わたくしは、みっちゃ  
四287 きました。「いま、わたくしが したいと  
四311 会 いと 思います。わたくしは、うちの  
四317 会 つて いました。わたくしがかさを さ  
四328 会 しゃ ふる ので、わたくしは、かさを  
四3210 会 た。そのとき、わたくしは、「略。」  
四335 会 女の 生徒さんは わたくしに、『略。』  
四369 会 話を しました。「わたくしが、きのう、  
四372 会 して いました。わたくしは、たたく  
四377 会 た。そのとき、わたくしの 口をおさ  
四381 会 いう 声でした。わたくしは、だまっ  
四823 会 るこび。(一) わたくしは、ねえさん  
四11710 会 ようなら。」かめ「わたくしが また、お  
四1221 会 なぜ でしょう。「わたくしは でんきで  
四126 会 。でんきゅうは わたくしのかおです。  
四1231 会 こと でしょう。「わたくしは マッチで  
四1231 会 は マッチです。わたくしが この 世に  
四1237 会 るく かわりに、わたくしをもって あ  
四1295 会 「もし、それは、わたくしの きもので

五152 「略。」(二) 私は、としおさんが、  
五153 て書いた手紙です。私も、いまから旅にで  
五158 んがちがいますが、私は、三十銭でどこへ  
五1911 乗って 走りました。私の なかまは、一けん  
五201 られはじめました。私もその人の手ににぎ  
五207 りました。「略。」私は、その家のげんか  
五209 さんがよろこんで、私を手にとりあげまし  
五209 にとりあげました。私は、ぶじに、としお  
五402 会 が美しくなると、私は、なんだか、ぼん  
五404 会 しい 気が します。私の すきな花は、こぶ  
五421 会 らべて あります。私は、まだ、ほっかい  
五427 会 はじまりました。私は、なえはこびをし  
五428 会 ます。つばめが、私の すぐ目のまえを、  
五525 はんを まつ あいだ、私は、まさこを うば車  
五5510 てく ださ いました。私は、おかあさんに こ  
五564 会 いました。「略。」私は、「略。」じゅん  
五574 ようです。「略。」私は、こういって、は  
五594 会 。五562 会 。六 かべ新聞 私の 学級では、来週か  
五593 会 です。七と五と 私は、きのう、おもし  
五614 会 れが わかったとき、私は おもしろくて なり  
五806 会 いらっ しゃるが、私は 毎日山へいって、  
五813 会 きよう 一日だけ、私につりを させてく だ  
五875 会 。五921 会 すか。」ほおりの「私は、ほでりのみこと  
五9211 会 つりばりなので、私も 困って しまいまし  
五931 会 たが あらわれて、私に 海のごてんへい く  
五205 会 るね。」きしもと「私の うちでは、だいこ  
五348 の人も ありました。私と弟の さぶろうは、  
五3410 とさえて できません。私は、さぶろうの手を  
五3410 ぎり、さぶろうは、私の からだに すがりつ  
五352 うは、だんだん 頭を 私によせ、おしまいに

七353 せ、おしまいは、私とさぶろうとは、ま  
七355 われる ほどでした。私は、ありったけの力  
七363 会 。「略。」「略。」私は、ほんとうに 困っ  
七365 会 いました。「略。」私は そういって、どう  
七371 うな 気が しました。私は、さぶろうのかた  
七375 元氣よくに こつと、私を みあげました。だ  
七379 、ふと上を 向くと、私の よこの わかい男の  
七381 会 くれて いたのです。私は、思わず、「略」  
七385 てく れましたので、私は、人と人の あいだ  
七399 ちめて、心配 そうに 私の方を みて いました  
七404 おく っていました。私は、いそいで、さぶ  
七407 会 つて、「略。」と、私を手を ねきして いま  
七408 まねき しています。私は、さぶろうの方に  
七411 会 ました。(二) 私は、ロ・ロ・ロを、  
七4111 たが、旅を してきた 私には、しみじみとき  
七442 その 中に たまった。私の まえにも ぼうし が  
七442 会 にも ぼうし が きた。私も 喜んで、いくら か  
七465 ペラの 序曲 である。私は、汽車の まどから  
七8210 会 、申し あげます。私が さばくを 旅して い  
七917 日(月) 晴 26度 私が 表を やったら、白  
八42 うど十年ほど まえ、私の うちに、ピオとい  
八49 。どうして、ピオが 私の うちに かわれる よ  
八62 かり だったのです。私も、すっかり ひきこ  
八97 そこに すわ っている 私の ひざの あいだにも  
八1211 したばかりでなく、私は、ピオの 信頼を う  
八135 から十年、いまでも、私は ピオのことが わす  
八299 会 たず ねました。「私は、けんぎゅうとい  
八8110 会 。八832 会 強 するのだね。」私は、廣い 世界へで た  
八893 会 み あげて きた。「私は、あの けだかい鳥  
八893 会 へとんでいこう。私の ような みつとも な  
八9310 会 うに さげんだ。「私が まだ みにくい あひ

九六四六(会) です。そうして、わたくしがいちばんと  
 九八三六 「「略」。」「略」。」私はかけていて、先  
 九八九二 十のころであつた。私は父につれられて、  
 九八九六 そうに飲んでから、私にいった。「略」。  
 九八二〇 と流れだしていた。私は手をいれて、それ  
 九二九一 ません。(二) 私は、同じものをみる  
 一四七五 の妹、妹のことば 私は、きのう、三つに  
 一四八五 りしたからでした。私は、べつにいそぐこ  
 一四八八 ました。ためしに、私は、妹のいつている  
 一四九一 きさつを知っている私には、このことばの  
 一五〇七 テルワ」といって、私に知らせたのです。  
 一五二二 で遊んでいたいと、私にねだったり、その  
 一五二九 しします。そのとき、私をふり向いて、「ゴ  
 一五五五 い世界、このごろ、私は、作文がすらすら  
 一五六三 長していくように、私も、ここで、いまま  
 一五六八 の作文、ふくろう 私は、遊び時間にふく  
 一五八二 ばずつあげました。私は、のこったのを  
 一五九二 ました。お月見 私に、「略」。」といっ  
 一六〇六 「とおっしゃった。私も、「略」。」といっ  
 一六一二 本はえてきました。私は、たけのこのそば  
 一六一六 もう、たけのこは、私のせいをすぎて、お  
 一七三六(会) 遊んでいました。私が負けて、ドサリと  
 一八七 次郎、これから、私の調べた二宮金次郎  
 一四三 四 が卒業するので、私が、母にかわつてで  
 一四四 九 。弟の名でした。私は、自分が呼ばれた  
 一四五 九 席に着きました。私はほつとしました。  
 一五一六 なつてしまつた。私は、かさをさして電  
 一五二六 かさのしずくが、私のくつの上にばたば  
 一五四八 ばだ。けれども、私は、「略」。」といっ  
 一五三三 求めて (一) 私の一生を通じて、わ  
 一五三三 七年の三月三日、私が満七さいになる三  
 一五三七 。この日の午後、私はなんとなくものを

一二三九 もれて、みあげる私の顔に降りそそいで  
 一二三二 一 葉や、花の上を、私の指はまったくわれ  
 一二三二 一 なでていました。私は、どのようなおど  
 一二三二 二 どろきとふしぎが私を待っているのか、  
 一二三二 四 りませんでした。私は、近づいてくる足  
 一二三二 一〇 のしゅん間には、私は、先生——私の心  
 一二三二 一〇 、私は、先生——私の心の目をあらゆる  
 一二三二 一〇 りもなによりも、私を愛するためきて  
 一二三二 二 なたあくる朝、私をおへやに呼んで、  
 一二三三 三 くださいました。私がしばらくその人形  
 一二三三 四 ますと、先生は、私の手に、「人形」と  
 一二三三 六 つづられました。私は、すぐこの指の遊  
 一二三三 九 づれましたとき、私は子どもらしい喜び  
 一二三三 一二 した。そのとき、私は、もちろん、こと  
 一二三四 四 からないままに、私は、「ピン」「コップ  
 一二三四 九 でした。ある日、私が新しい人形を持つ  
 一二三四 一〇 かの大きな人形を私のひざの上において  
 一二三四 一〇 じ名であることを私にわからせようとな  
 一二三四 一〇 その日はすでに、私は、「ゆのみ」と「  
 一二三五 一 まれたのですが、私は、いつまでたつて  
 一二三五 四 となさいました。私は、とうとうかんし  
 一二三五 七 ました。そうして私は、くだけた人形の  
 一二三五 八 いに思いました。私は、先生がかけらを  
 一二三五 一〇 くださったので、私は暖かい日なたにで  
 一二三六 二 したので、先生は私の手をといての口の下  
 一二三六 一 一 くださいました。私は、身動きもせず、  
 一二三七 二 ころがとつぜん、私は、なにかしらわす  
 一二三七 四 生きた一ことが、私のたましいを目ざめ  
 一二三七 九 のです。こうして私は、物にはみな名ま  
 一二三七 一 一 わかつたのです。私の手にふれるあらゆ  
 一二三八 四 やに帰るとすぐ、私は、自分がこわした  
 一二三八 七 たがだめでした。私の目にはなみだがい

一二三八 一〇 をさされました。私はその日、たくさん  
 一二三九 三 返していたときの私ほど幸福な子どもを  
 一二三九 四 かしいでしょう。私は、生まれてはじめ  
 一二四一 一 二 先生も、「私が命がけでせわをす  
 一二四一 一 二 ス選手キンゼーと私とが、いよいよ試合  
 一二四一 一 二 がせまつたので、私はユニホームをつけ  
 一二四一 一 二 った頼みました。私は、その少年の持つ  
 一二四一 一 二 「といいました。私は、いままで試合の  
 一二四一 一 二 「略」。」こう、私がたたみかけるよう  
 一二四一 一 二 手でありましたが、私もどうしても勝たな  
 一二四一 一 二 ては戦いました。私はスタンドから一心  
 一二四一 一 二 とができました。私はいまでも、あのと  
 一二四一 一 二 うと思います。私は短い旅をしたあと  
 一二四一 一 二 わかれていますから私がいちばんつらかつ  
 一二四一 一 二 んのお写真を、私は、いつも自分のそ  
 一二四一 一 二 します。それは私にとって、このうえ  
 一二四一 一 二 なんです。私には決心がつかまし  
 一二四一 一 二 さんにしても、私にしても、とてもわ  
 一二四一 一 二 、妹にしても、私にしても、心からお  
 一二四一 一 二 ないことです。私は、おあさんが、  
 一二四一 一 二 です。これは、私の友だちで、母親が  
 一二四一 一 二 るつくえの上、私の前においてありま  
 一二四一 一 二 一四一四(会) おあさんと私とは、おたがいに、  
 一二四一 一 二 やさしさこそ、私にとつては、いちば  
 一二四一 一 二 のか、ちよつと私にはわかりかねます  
 一二四一 一 二 思っています。私がそばにいないこと  
 一二四一 一 二 さい。あなたが私を思ってくださると  
 一二四一 一 二 くださるとき、私もおあさんのこと  
 一二四一 一 二 らせてください。私には、おあさんの  
 一二四一 一 二 しゃるか、この私にはわかるのです。  
 一二四一 一 二 んが、「先生、私は、これはみんな、  
 一二四一 一 二 いてるうちに、私は、どうしてこんな

十四 24 6 てきた。それで、私は、「略。」とおた  
 十四 25 3 ことがわかった。私は、このお話から、  
 十四 27 10 とおっしゃった。私は、自由研究で、外  
 十四 28 7 ねした。「略。」私は、なにか大きな樂  
 十四 32 1 くのです。さて、私は、あなたがたに星  
 十四 52 3 さんのご指名で、私から申します。もち  
 十四 52 4 会 このかぼちゃは私のものです。私の花  
 十四 52 5 会 私のものです。私の花がさかなかった  
 十四 53 8 会 すね。それは、私が、いつも日あたり  
 十四 53 11 会 たからですよ。私は、せっかく花が開  
 十四 54 3 会 ぼちゃは、全部私のものだと思います  
 十四 54 8 会 、大部分、根の私が、土の中から吸い  
 十四 55 4 会 です。だから、私は、やっぱりそのか  
 十四 55 5 会 のかぼちゃは、私のものだと思います  
 十四 55 8 会 いませんか、私が申します。」おと  
 十四 55 11 会 いいました。「私は、こんなに長いば  
 十四 56 4 会 ったものでも、私が運んであげなかつ  
 十四 56 8 会 げるのは、この私です。もし、つるの  
 十四 56 8 会 。もし、つるの私がとちゅうで切れた  
 十四 56 11 会 ごらんさない、私のこの足を、手を。  
 十四 56 12 会 きていますが、私は、いっしょうけん  
 十四 57 1 会 です。だから、私は、そのかぼちゃは  
 十四 57 2 会 ぼちゃは、全部私のものだと思います  
 十四 57 9 会 ですが、もし、私、つまり太陽がなか  
 十四 57 12 会 きるためには、私が熱と光とをゆたか  
 十四 58 3 会 ンではなくて、私ですよ。そういうこ  
 十四 59 6 会 だって、みんな私がわけてあげたので  
 十四 77 3 竹うら (一) 私、木を割ったり、  
 十四 77 9 いう教えでした。私はすぐにこれをため  
 十四 85 10 るものであるが、私はあとのほうの映画  
 十五 27 1 会 心しておいで、私がいますぐってあげ  
 十五 44 11 会 失礼しました。私はハギンスというも

十五 44 12 会 すが、じつは、私のプリンクリーじい  
 十五 50 4 会 とです。品物は私が買い上げましょう  
 十五 50 5 会 よう。どうか、私のことを今右衛門  
 十五 51 9 会 たか。じつは、私は今右衛門のまごに  
 十五 52 5 会 大学に学んでいた私は、一年半の努力の  
 十五 53 6 会 長室の前に立った私は、しばしためらっ  
 十五 53 10 会 に室内にはいった私の目に映じたのは、  
 十五 54 3 会 することができた私は、なんとというしあ  
 十五 54 4 会 ずかに歩みよる私が手にしているしよ  
 十五 54 9 会 で、「略。」と、私が一言も発しないう  
 十五 54 11 会 めるのであった。私がこの博物館をたず  
 十五 55 9 会 せてもらおう。私が日本をおとずれた  
 十五 56 2 会 会会員であった私がはじめてだろう。  
 十五 56 4 会 ただきに立った私は、小手をかざして  
 十五 56 7 会 そんなわけで、私と日本とはふかい関  
 十五 56 10 会 でもいおうか、私がはじめて会った日  
 十五 56 11 会 の昔になるが、私がまだわかつてアマ  
 十五 57 5 会 た。ものずきな私は、それはおもしろ  
 十五 58 2 会 でを承知して、私はすぐに授業にかか  
 十五 58 2 会 った。つまり、私はかれのギリシア語  
 十五 58 3 会 先生で、かれは私の日本語の先生とい  
 十五 58 11 会 いう名を耳にした私は、とびあがらんば  
 十五 59 1 会 おじさんなら、私はよく知っています  
 十五 59 1 会 知っています。私は小さいとき、その  
 十五 59 6 会 その関係を物語る私の顔を、あなのあく  
 十五 60 1 会 動車に、ためらう私をおしこみ、一路目  
 十五 60 7 会 つかさどっていた私の父とは、心をゆる  
 十五 60 9 会 「でとおっていた私は、そのときちよう  
 十五 61 2 会 「略。」といって私をかわいがった。京  
 十五 61 7 会 かを知らなかった私は、札幌の創成川の  
 十五 62 1 会 て、「略。」と、私をうながした。いそ  
 十五 62 2 会 ぐつをちらと見た私は、たちまちふくれ

十五 62 9 会 な声でうったえる私のくりごとを耳にし  
 十五 64 1 会 こにことわらった私は、それを足先につ  
 十五 64 5 会 行かないうちに、私は、道のまん中で、  
 十五 64 10 会 かにわらいながら私によびかけた。見る  
 十五 64 10 会 かけた。見るなり私は、おじさんの廣い  
 十五 65 3 会 びしい夏の日に、私をせにおいながら、  
 十五 65 5 会 思い出は、いまま私の胸にやきついてい  
 十五 65 9 会 ごとなおもちゃを私に送ってくださった  
 十五 65 10 会 ださった。喜んだ私は、朝早くからそれ  
 十五 66 7 会 た願いによって、私の父は、同志社を守  
 十五 66 9 会 十の春をむかえた私は、母や多くの弟妹  
 十五 67 4 会 校の生徒であった私は、そのクリスマスマ  
 十五 67 4 会 てきをふいたが、私がだんをおりるのを  
 十五 67 7 会 けんで、しつかと私をだきしめた。ああ  
 十五 67 8 会 しい顔をあおいだ私の目からは、たまの  
 十五 67 10 会 あったあくる日、私は、ひさしぶりで窓  
 十五 68 3 会 よんだつもりで、私はかねをカーンとた  
 十五 68 6 会 もわずとびこんだ私をだきしめた。なつ  
 十五 68 9 会 がら、しやにむに私をおく深くひき入れ  
 十五 68 11 会 、主なき書さいへ私をみちびいた。「略  
 十五 69 8 会 せた満ぼう時代の私の写真がさがられて  
 十五 69 9 会 島のおじさんは、私を京都までもつれて  
 十五 70 2 会 に見入りながら、私は無言で頭をびよこ  
 十五 71 8 会 んは、昔のように私をひざにのせた。町  
 十五 71 12 会 略。」といって、私をひきよせた。勝海  
 十五 72 5 会 たび呼びかけた。私は、「略。」と呼び  
 十五 72 11 会 ド博士は、客間に私をみちびき、自分は  
 十五 73 4 会 出にうたれて私の目の前で、博士は  
 十五 75 4 会 のにぎりこぶしを私の鼻先につきだされ  
 十五 75 12 会 をときかねていた私のようすを見て、大  
 十五 76 5 会 くださったのだ。私は、停車場まで送っ  
 十五 79 3 会 —— ロダン —— 私には、あなたがた日

十五 79 5 といいますのは、私は、あの美しいあな  
 十五 79 10 があるからです。私のつくえの上には、  
 十五 80 10 ながら、年よりの私は、日本の小学校の  
 十五 84 10 かな。私よりよっぽど大きい  
 十五 109 12 けなかつたよ。私、きょう、ここに  
 十五 110 6 あり。私、もう年をとるこ  
 十五 111 8 をするたびに、私の着物に、月と日の  
 十五 112 4 いえ、いいえ。私は、いつだってこの  
 十五 114 6 おまえたち、私に会ったのだから、  
 十五 114 7 家に帰って、私がぼろぼろの着物を  
 十五 114 11 じことですよ。私も下へ行くのですよ  
 十五 115 2 どういうように私を見なければならな  
 十五 115 5 れど、おまえと私とが、かわいがりあ  
 十五 116 7 光さ。」母の愛「私、あの人を見たこと  
 十五 117 7 あなた、この私がわかりですか。  
 十五 117 7 わかりですか。私は『物のわがかりな喜び  
 十五 117 10 』。正義である。私をござんじですか。  
 十五 117 10 ぞんじですか。私は、それは長いこと  
 十五 118 2 喜び「あなた、私をござんじですか。  
 十五 118 2 ぞんじですか。私は、あなたをすいて  
 十五 118 8 「みなさん、私は神さまのおい  
 十五 118 10 そうしたら、私は、もうなにもおそ  
 十五 119 2 「あなたは、私の子どもたちに、そ  
 十五 119 4 「略」。光「私は、愛しあう人た  
 十五 120 2 思った。「略」。私が答辞を読んだ。け  
 十五 122 7 日記当番ですが、私にも書かせてくださ  
 わたくしたち「私達」(代名) 64 わたくしたち 私  
 たち  
 一 45 6 だんだん わたくしたちの ばんが ちかづ  
 きました。  
 一 46 4 わたくしたちの ばんが きました。  
 一 46 10 おおきな むしめがねをもった おじいさ

んが、〈略〉、わたくしたちをよびました。  
 三 33 2 はきものがきちんとそろって、わたく  
 したちの かえるのをまっています。  
 四 11 1 ここは わたくしたちの 学校です。  
 五 16 5 「略」といって、私たちをみんなかば  
 んにいました。  
 五 16 11 まもなく、私たちは、ゆうびんきよくの 大  
 きなはこの中はいりました。  
 五 17 1 そこは私たちの山です。  
 五 18 2 そのうちに、きよくの人が、私たちをかた  
 はしからしらべていって、  
 五 18 10 そこで、私たちは、じょうぶなふくろにい  
 れられて、かぎをかけられました。  
 五 19 2 私たちは、汽車につまれて、どんどん、南  
 へはこばれました。  
 五 36 5 私たちは、石炭なしには、くらすことがで  
 きません。  
 五 37 8 いまそれが、私たちのために、生き返って  
 はたらいっているのです。  
 五 58 9 私たちは、まもなく帰ってきました。  
 五 82 10 そうして、私たちの教室にもおいでになり  
 ました。  
 五 83 2 おひる休みのとき、私たちは、運動場にあ  
 つまって、先生をまんな中にしてなりました。  
 六 56 7 私たち 一組のものは、みんな集まって、ど  
 んなものにしようかという相談しました。  
 六 57 3 こんど私たちの学級で、かべ新聞を発行す  
 ることになりました。  
 六 58 10 この人は、私たちの組のまともとさんです。  
 六 137 3 しかさん、私たちが勝ちましたよ。  
 七 15 8 私たちのからだの名まえに、このような、  
 いろいろなつかいかたがあるのは、

七 37 11 私たちのために、せいっぱいの力で、す  
 きまをこしらえてくれていたのです。  
 七 86 3 私たちは、うさぎをかうことになりました。  
 七 86 5 私たちで、めかたを計りました。  
 八 9 3 私たちの家のうち、中でも茶のまほど、す  
 きな、安心なところはないうように——  
 八 10 3 おこつたりすると、赤い口をあけて、私た  
 ちをおどしたりかんだりします。  
 八 33 7 私たちの、ただ「遠い」という考えだけで  
 は、〈略〉、おしはかることはできません。  
 八 33 9 ふだん、私たちは、メートルという単位を  
 用いてきよりを計りますが、  
 九 80 2 私たちは、もう、ほってみたいくうずうず  
 していました。  
 九 82 8 私たちは、だんだんしんけんになってほり  
 ました。  
 九 120 10 私たちの村の用水も、このまつ川からひ  
 いてあるのだ。  
 十 47 9 私たちの足では十二三分のところですが、  
 妹にはそうはいきませんでした。  
 十三 6 4 ひばりやつばめも、〈略〉帰って来て、  
 私たちの頭上にとびかい、歌うだろう。  
 十四 4 5 フィリップの名は、すこしちがつた特別  
 なひびきをもって、私たちの心をうつのです。  
 十四 5 1 私たちを心のそこから動かし、  
 十四 6 2 母を思う子の真情は、遠く海をこえて、  
 私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。  
 十四 7 8 私たちは、おとうさんのために、心か  
 らの思い出をまもることにしましょう。  
 十四 7 11 おとうさんのご一生は、私たちにとつ  
 ての手本になってくれるでしょう。  
 十四 8 5 私たちよりふかいものなんですから。

十四91手 おかあさんの生活や、私たちの生活のことをお考えになって、

十四204 私たちのつかっていることばの中で、外国からはいってきたことばが、

十四222 私たちは、あまり多いにおどろいた。

十四221 カボチャも、外国語であつたとお話しになったので、私たちは、いよいよおどろいた。

十四5212 会 それは、私たち花のものだということ

はうたがいありません。

十四541 会 私たちの養分をこしらえる力をかまわずに、

十四586 会 生きものに、いちばんたいせつなものは、私たち水です。

十四612 会 私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。

十四855 こんなことばによって、映画は私たちに説明してくれた。

十五343 私たちは、自分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。

十五4210 私たちは、この問題をもっとよく考えてみよう。

十五8011 あなたがたの時代がきたときには、私たちの時代がはやくしく思われるようになることをいのです。

十五8310 会 私たち、あそこへ行ってもいいの。

十五9412 会 私たちはやと、物の眞実を見ることが

できるのだよ。

十五959 会 私たちをあんないに來た。

十五968 会 私たちに用のあるものは、どうせこ

ちを通るのだから。

十五1172 会 あの人、私たちが、あの人をずいぶん待ちわびていることを、知らないのだろう。

十五1176 会 私たちは、ちつとも知りませんでしたよ。

十五1178 会 私たちは、それは幸福ですけれど、自分たち以上のものは、見えないのです。

十五11712 会 私たちは、それは幸福なんですけれど、

十五11712 会 やはり、私たちの影以上のものは見えないのです。

十五1183 会 私たちは、幸福なのですけれど、私たちのゆめ以上のものは、見られないのです。

十五1184 会 私たちのゆめ以上のものは、

十五1186 会 私たちは、強くて、純潔です。

十五1205 在校生たちがみんな、私たちのために送別の歌を歌ってくれた。

わたくしたちじしん 「私達自身」(代名) 1 私たち自身

十四52 私たち自身の生活を思わずふり返らせないではない強い眞実の力が、

わたくしども 「私共」(代名) 5 私ども

七1310 私どもの手が、さまざまはたらきをするように、

七803 会 私どもは、麦をつけたらくだをつれて、さばくを通っていました。

七812 会 この人は、私どものらくだのことについて、それはよく知っております。

七816 会 そのとおり、私どものらくだは、かた目でございます。

十735 会 じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうをとって遊んでいました。

わたくしのいもうと 「課名」 2 私の妹

十34 六 私の妹……四十七

十473 六 私の妹

わたくしのたび 「課名」 2 私の旅

五23 二 私の旅……八

五81 二 私の旅

わたげ 「綿毛」(名) 2 わた毛

十一124 たんぽぽのわた毛が遠くとんでいく日だ。

十一1410 ちやうも舞い、まっさおな海もわらい、

たんぽぽのわた毛も遠くとんでいく。

わたし 「渡」 ↓さしわたし・もうしわたし

わたし 「私」(代名) 110 わたし

—422— せんせいの 目の なかに、わたしがいますよ。

—443 会— たろうさん、わたし おるすいよ。

—309 会— それでは、わたしが かぞえて みよう。

—585 会— わたしは、おまえのおじいさんのおとうさんだよ。

—3125 会— では、わたしが はなしをして みよう。

—3717 会— 「わたしが はきだして あげよう。」

—3783 会— 「よその 子どもたちが わたしのお日さまをとってしまふのはいや。」

—3826 会— 「わたしの もも色、みえないわ。」

—31017 会— 「これは わたしに さずかった子に ちがいない。」

—4154 会— かくれんぼしたら、わたしが おになつた。

—4157 会— えつ子が わたしの せなかで ねんねした。

—4158 会— わたしの せなかにか おをつけて ねんねした。

—4174 会— わたしが 手ぬぐいをもって、おふろへいくのが みえるの。

—4517 会— 「わたしが おんぶしましょう。」

—4984 会— そうだ、わたしに この かめを うって くないか。

四四九〇 いや、これは、わたしが ひろったので  
す。

五一六 〇 「わたしは、かごしままで。」

五二七 〇 「わたしのはこんな小さな字だから、な  
お心配ですよ。」

五二八 〇 このわたしのをごらん。

五二九 〇 わたしは、ちゃんとゆくさきは知ってい  
るが、

五三〇 〇 わたしが水をやったんですもの。

五三二 〇 わたしは、おとうさんやおかあさんの力  
で、大きくなったと思います。

五三三 〇 おじいさん、わたしを海へはなしてくだ  
さい。

五三六 〇 わたしは、ひやくしようなんか、もうい  
やになったから、

五三七 〇 わたしは金持のおくさんみいやになった、  
女王にならいたってたのんでくれ。

五三九 〇 わたしは女王みいやになった。

五四〇 〇 雲のおじさん、わたしのたんぼはどこで  
しょう。

五四二 〇 書いても書いても書きたりぬ、わたしの  
心の小人たち、いつもでてくる小人たち。

五四四 〇 わたしもせきがでたらいいなあ。

五四六 〇 わたしは山へいこう。

五四七 〇 わたしをうえてくれた卒業生たちは、ど  
こにどうしているだろう。

五四八 〇 あの日からきょうまで、わたしのみたこ  
と、きいたことを話したら、いくつあるだろう。

五四九 〇 毎年、新しく入学した子どもたちが、わ  
たしのそばへやってきた。

五五〇 〇 毎年、新しい卒業生たちが、わたしのそ  
ばからさっていった。

七四三 〇 わたしにちょっと話をさせてください。

七四四 〇 わたしは、終戦後、いつも心さびしい旅  
をしていました。

七四五 〇 でも、わたしは、こんなことになるうと  
は、思っていませんでした。

七四六 〇 「それでは、お礼にわたしのいちばんと  
くいな曲を、一曲ひきましよう。」

七四七 〇 つむじ風が、わたしのまえを走っていく。

七四八 〇 いや、わたしは、そのらくだをみたので  
はありません。

七四九 〇 「わたしの手にさわったものが、みんな  
こがねになったら。」

七五〇 〇 「さあ、わたしは、世界じゅうでいちば  
ん美しい庭をもつことができます。」

七五一 〇 「いや、いや、わたしは、こんなかなし  
いことはありません。」

七五二 〇 「わたしの病気をなおしてくれたものには、  
國の半分をわけてやる。」

七五三 〇 わたしには、あいにく、一まいのシャツ  
の持ちあわせもありません。

七五四 〇 わたしは、『びんぼう』でございます。

七五五 〇 わたしは、『びんぼう』でございます。

七五六 〇 わたしは、『びんぼう』でございます。

七五七 〇 わたしは、もうほんとうにくたびれた。

七五八 〇 わたしも、一どそれだまされたことが  
あってね、そのひなには苦労したよ。

七五九 〇 わたしは、『略』。とないたり、  
八六〇 〇 これはわたしの子だ。

八六一 〇 わたしについておいで、大きな世界の鳥  
小屋へつれていってあげるからね。

八六二 〇 だが、わたしのそばにくっついてね。  
八六三 〇 わたしのことはいわないとしても、

九六四 〇 いちばんまるいのはわたしです。

九六五 〇 わたしがいちばん大きいから、わたしが  
いちばんえらいんだよ。

九六六 〇 わたしがいちばん大きいから、わたしが  
いちばんえらいんだよ。

九六七 〇 わたしのほうがよっぽど大きいって、き  
のう判事さんがおっしゃったじゃないか。

九六八 〇 どうかこれから、わたしの裁判所のめい  
よ判事になってください。

九六九 〇 わたしの人格にかかりますから。

九七〇 〇 わたしは、なんにも説明しなかったが、  
九七一 〇 「わたし一どでいいから、お月さんのと  
ころへいきたいと思っています。」

九七二 〇 「なんだか、わたしも、おかあさんをみ  
たくなったよ。」

九七三 〇 だから、わたしをたべてもいいと思って  
いるんだけど。

九七四 〇 「わたし、おかあさんにひと目あったら、  
もう、命はほしいとは思いません。」

九七五 〇 わたしの顔ばかりみて、おかしいこと。  
九七六 〇 「まあ、おまえは、わたしをわすれたの  
かい。」

九七七 〇 「わたしは、おまえのおかあさんじゃな  
いかね。」

九七八 〇 おいで、わたしといっしょにお話をして  
おくれ。

九七九 〇 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、  
わたしは、自分の國にのこしておいてきました。

九八〇 〇 わたしは、そんなにこわいものではない  
ませんよ。

九八一 〇 わたしは、『略』、自分の國のことばのあ  
りがたみを知りました。



十465 ㊦ わたしが、研究所でどうしてもできなかったことが、二つあります。

十471 ㊦ 作製に失敗したわたしは、星にもあたらないでしょう。

十167 ㊦ わたしをまもるためには、どんな困難とも戦う、そのうで。

十172 ㊦ わたしのためには、いばらの道をもふみかけたその足。

十174 ㊦ いま、わたしが知っているいいことと、正しいことは、〈略〉から教えられました。

十184 ㊦ わたしの幸福は、おかあさまのえ顔から生まれます。

十227 ㊦ わたしがみなさんのお役にたたないですみません。

十239 ㊦ 「ねえ、金次郎、これでわたしも、じゅうぶん働けますよ。」

十243 ㊦ ひとりぐらい育てるお金は、わたしが山へいって木を切ってきてもうけますよ。

十6611 ㊦ 「わたしについておいで。」

十834 ㊦ わたしはまた、〈略〉、どんなにがっかりしていたかわからないよ。

十838 ㊦ わたしは、これこのとおり、すっかりじょうぶになったよ。

十8311 ㊦ わたしは、いま退院するところだ。

十875 ㊦ わたしは、これからすぐにうちへ帰って、おかあさんを安心させてあげよう。

十195 ㊦ わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがっておいでだろうと思いました——

十198 ㊦ わたしはなん年もなん年も生きていますからね。

十205 ㊦ わたしはこんなところがすこしもないようにしたいのです。

十2010 ㊦ わたしはまた、あのような絵のぐがあらばいいなと思いましたよ。

十214 ㊦ わたしも、ずつと大きな木になって、

十224 ㊦ わたしには、かわいいいめいとおにいあたります。

十247 ㊦ わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にもものぼるほどうれしかったのです。

十251 ㊦ わたしも早くそれを覚えたいと思います。

十253 ㊦ 学校から帰ってくると、わたしは民ちゃんの子もりをひき受けます。

十255 ㊦ わたしは時間をはかつては、〈略〉へつれていって、用をたさるようにしました。

十259 ㊦ ときどき、わからないことばで、わたしに知らせるようになりました。

十278 ㊦ わたしはおべんとうの包みをこしらえて、

十297 ㊦ 民ちゃんがひとりでおかって口から地面において、わたしのげたをひっかけ、

十2911 ㊦ わたしはそういうながら、

十518 ㊦ わたしの心は、にじを見るとおどる。

十525 ㊦ わたしは望ましい、

十526 ㊦ わたしは望ましい、わたしの日々が、自然をしたう心で、一日一日と、むすばれていくように。

十5910 ㊦ わたしが行ったとき、この絵の前には、

十385 ㊦ 一台の長いすがおいであつたが、

十385 ㊦ 「聞える、わたしにも聞える。」

十1004 ㊦ おばあちゃん、わたしのおばあちゃん。

十873 ㊦ わたしは、幸福なままでいちばんふとつた『お金持の幸福』です。

十875 ㊦ これが、わたしのむこの『地所持の幸福』で、なしのようなおなかをしています。

十898 ㊦ わたしは、とてもいちいちしようかい

してはいられない。

わたしおわる 「渡終」(五) 1 渡し終る 《ール》

七104 ㊦ 渡し終ると、またひき返して、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。

わたしたち 「私達」(代名) 15 わたしたち

二221 ㊦ 先生、わたしたち、もみじのはっぱで、いろはあそびをしました。

二328 ㊦ わたしたちはめくらだもの、みることもなかなかできないよ。

六2311 ㊦ せっかくですが、わたしたちはみんな、はたらくやくそくをしているのです。

六245 ㊦ でも、わたしたちは、はたらけるとときにはたらくのですよ。

六398 ㊦ わたしたちのなかがわるい虫をとってそだてたいねを、

十三494 ㊦ 空氣までが、わたしたちのゆかいなじょうだんでわらい、

十三501 ㊦ わたしたちが、さくらんぼと、くるみのごちそうをならべると、

十四395 ㊦ わたしたちの、楽しい朝がくる。

十四408 ㊦ わたしたちの朝だ。

十四418 ㊦ わたしたちの前に、朝がきた。

十五895 ㊦ わたしたちは、ただもう、おまえさんがたを待っていたのです。

十五909 ㊦ とにかく、そいつは、一どもわたしたちのテーブルのぼったことはいけません。

十五912 ㊦ わたしたちの生活のなかまにはいって、

十五911 ㊦ わたしたちのすることを、みんな見るといいのですよ。

十五914 ㊦ わたしたちは、すこしの休みもなく、飲む、たべる、ねむる、

わたしのころはにじをみるとおどる 「題名」 2

わたしの心はにじを見るとおどる

十三三九 わたしの心はにじを見るとおどる

十三五十六 わたしの心はにじを見るとおどる

わたしのたみちゃん (課名) 2 わたしの民ちゃん

わたしの民ちゃん

十二二四 三 わたしの民ちゃん………二十三

十二二三 三 わたしの民ちゃん

わたしぶね (題名) 1 わたし船

五四九三 わたし船

わたしぶね (渡船) (名) 4 わたし船 渡し船

五四九四 渡りのたりとわたし船、なの花ざかり

の岸をでる。

五四九七 渡りのたりとわたし船、かふんやそよ

風のせてでる。

五四二〇 渡りのたりとわたし船、おもさにゆれ

ゆれ岸をでる。

七二〇二 渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、

こっちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。

わたしもり (渡守) (名) 2 渡しもり

七二〇二 渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、

こっちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。

七二〇六 先生のおしごとは、渡しもりのようなも

のだ。

わたす (渡) (五) 14 わたす 渡す 《―サーシ》

よいわたす・かけわたす・ながめわたす・みわた

す・もうしわたす

二四八 いちろうは、りんごをだして、じろうの

手にわたします。

二五〇 じろうは、大きなりんごを さちこにわ

たします。

三二〇九 どうかして、かぐやひめを月の世界の

人にわたさないくふうはあるまいか。

三二一五 きていたうわぎをぬいで、おばあさん

にわたしました。

四九九八 うらしまは、おかねを子どもたちの手に、

それぞれわたしてやります。

五二六四 はるこさんは、きつぷを改札の女の人にわ

たしながら、

五三〇三 小さいほうの荷物を、わたしてもらいま

した。

五五四 まさこをおかあさんにわたして、食事をす

ませてから、《略》、家のまえにでてみました。

六二八 《略》。》といつてわたし。

六三〇 それをきりぎりすにわたします。

七三九 おじさんは、わらいながらさぶろうを受け

とつて、つぎの人に渡しました。

七四四 老人は、自分のかぶつていたぼうしを、そ

ばの人の手に渡した。

七五二 ぼくは、しつかり受けとめて、すぐセン

ターに渡した。

一一九四 そうして、それを少年に渡しながらい

ました。

わたりだす (渡出) (五) 1 渡りだす 《―シ》

一一六〇 そうして、いっしょにその一本橋を渡り

だした。

わたりどり (渡鳥) (名) 3 わたり鳥 渡り鳥

五九三 まいにち、わたり鳥のむれがとんできます。

五二五 秋になると、また、わたり鳥がやってきま

した。

八三七 どうだ、われわれといっしょにでかけて、

渡り鳥になる考えはないかね。

わたりろうか (渡廊下) (名) 1 渡りろうか

七八三 渡りろうかをとる足音がきこえる。

わたる (渡) (五) 24 わたる 渡る 《―ツ―ラ

ーリール》 じはれわたる・ひびきわたる・ふけわ

たる

二二八 十二ひきのぶたが、そろって川をわ

たりました。

二二九 あさいところをわたりました。

二二九 きてをつけてわたりましたから、みんな

むこうのきしにつきました。

二二九 みんなわたったはずなのに、どうし

たのだらう。

三二九 そののち、はやとりは、たくさんの米や、

麦や、豆をつんで、海をわたりました。

三三九 《略》。》とかぞえながら、わたって

きました。

三三九 ぼくは海をわたってきたかったのだ。

六二五 こちからまわっていくと、みんなはあち

らへこつそりわたりました。

六二九 うさぎさんたちは、谷をわたり、みねを一

つこえました。

六四四 あの谷をわたるときに、ちゃんとみつ

たのだ。

七二八 子どもたちは、小さな橋を渡る。

七四二 乗客は、高いところを渡っていくさぶろう

を、おもしろそうに、みおくっていました。

七四四 ぼうしは、つぎつぎと人々の手を渡し、お

金がその中にたまった。

八二八 馬車は、七色の大きなそり橋を音もなく

渡って、

九二九 日本のつばめは、こんなふうにな渡ってい

ますが、

九四九 いつのまにどこへ渡っていったのか、い

まはもういなくなりました。

九四九 いつのまにかががが渡ってきました。

十一 60 5 ㊦ 「あの橋はあぶないから、けっして渡ってはいけない。」

十一 61 6 ㊦ まえからあぶないといっておいた、あの橋を渡ったのではないかね。

十一 61 11 ㊦ ぼくは、とめられているから渡らない。十一 62 4 ㊦ このくらいのがこわいものかと、自分からさきになって渡ってしまったのです。

十二 69 8 それにあつみと廣さがなかったら、正しくりっぱに世の中をわたることができない。

十二 82 2 五月、六月、七月、八月の四ヶ月にわたって、

十二 109 8 いんさつ機も外国から渡ってきていたから、こんなりっぱな本ができました。

わっ (感) 1 わっ

十五 23 2 ㊦ 「わっ。」という声をたてて、わっと (副) 1 わっと

七 37 8 「略。」といったので、みんながわっとわりました。

わにざめ ㊦ (名) 5 わにざめ

三 43 4 ある日、はまべにでてみると、わにざめがいましたので、

三 43 8 わにざめは、「略。」といって、すぐになかまを大ぜいつれてきました。

三 44 8 わにざめは、白うさぎのいうとおりにならびました。

三 45 8 わにざめはそれをきくと、たいそうおこりました。

三 46 1 いちばんしまいにいたわにざめが、白うさぎをつかまえて、

わび ↓おわび  
わびる ㊦ (上) 1 わびる 《一ビル》 ↓おわ

びいたす

四 64 4 かっちゃん、わびるように ちょこんとあたまをさげたので、みんなもわりました。

わら ㊦ (名) 4 わら

七 92 5 だすときに、わらを足でけったりして、あばれました。

七 95 7 よくみると、おくの方に、わらが果のようにふくらんでいて、

七 96 2 7 ひきの生まれたばかりの子うさぎは、わらの中の毛の中で、元気に動いています。

十一 22 1 毎晩、家に帰ってくると、《略》、わらをたいてわらじを作りました。

わらい ㊦ (名) 4 わらい ↓おわらい・ものわらい

十五 76 6 博士は満面ににこやかなわらいをたたえながら、

十五 88 7 ㊦ さて、いちばんおしまいに、ここにいるのは、『はちきれそうなわらい』で、

十五 88 9 「はちきれそうなわらい」が、腹をかかえながらおじぎをする。

十五 94 1 「はちきれそうなわらい」は、光のこし

のあたりを、力まかせにおさえました。

わらいがお ㊦ (名) 2 わらい顔

六 118 1 いろいろ考えましたが、ただしちゃん

のわらい顔をかくことにしました。

七 74 2 きゆうに、にっこりわらい顔になって、次郎かじやといっしょに歌いだしました。

わらいか・ける ㊦ (下) 1 わらいかける 《一ケ》

十四 98 7 いく百もの小さな人形が見おろして、

マッパ賣りのむすめを見てわらいかけた。

る 《一レル》

十五 100 10 ほかの「幸福」ども、どっとわらいくずれる。

わらいこえ ㊦ (名) 1 わらい声

七 6 1 わらい声がはじける。

わらいこける ㊦ (下) 2 わらいこける 《一ケ》

十五 85 7 ㊦ わらいこけている。

十五 96 11 小さな「幸福」のむれ、ふざけたり、わらいこけたりしながら、

わらいだす ㊦ (出) (五) 5 わらいだす 《一ス》

五 83 8 「略。」とわらいだしたので、みんな、

いっぺんにわらってしまいました。

九 58 3 いちろうは、思わずわらいだしながら返事をしました。

九 100 7 やまだ、思わずわらいだす。

十三 49 5 みどりの丘が、その声でわらいだす。

十五 62 10 小さな声でうったえる私のくりごとを耳にしたおばさんは、腹をかかえてわらいだした。

わらいのうた ㊦ (題名) 2 わらいの歌

十三 3 7 わらいの歌

十三 49 1 わらいの歌

わらう ㊦ (五) 72 わらう 《一イ・ウ・ツ・

一ワ》 ↓あざわらう・おわらう

一 28 2 ひとつのかおが、わらったり、ないたり、

おこったり、よろこんだり、かんがえたり、

一 50 8 おとうさんも おきやくさんも、みんなわらいました。

二 8 3 「略。」と、へんなこえでいったので、

みんな わらいました。

二 37 1 ㊦ ぞうつかいは、わらいながらいったし

まいりました。

三45 7 「略。」と、いってわらいました。

四63 10 かつちゃん、きまりわるそうに、にこにこわらいました。

四64 6 かつちゃんが、わびるように、ちょこんとあたまをさげたので、みんなもわらいました。

四84 2 ねえさんがわらいました。

四85 9 みんながわらいました。

五57 6 あたりの人がわらいました。

五57 11 また、みんながわらいました。

五81 1 みんなわらいました。

五83 9 みんな、いっぺんにわらってしまいました。

六71 4 これをきいて、ねえさんはわらいました。

六73 4 「略。」と、とんでもない話を持ち出したので、みんながわらいました。

六105 10 ぼくも、もちろんわらった。

六107 1 みんなもあまりわらってくれない。

六110 6 それでぼくは、思わず声をたててわらってしまった。

六110 8 よし、あしたはうまくやって、みんなをわらわせてみせるぞと思ったが、

六113 8 弟のまねをしてみんなをわらわせてやろうなどという気持は、どこかへふっとんでしまった。

六114 6 「略。」と、いってわらいました。

六130 11 「略。」と、大声でわらいました。

七15 1 「腹をかかえてわらった。」

七37 8 「略。」と、いって、みんながわつとわらいました。

七37 10 わかい男の人が、ただひとり、わらいもせずに、両方の手でまどわくをおしています。

七39 4 おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人に渡しました。

七40 1 とうとう、うれしそうに、声をたててわらいました。

七44 10 青年はにっこりわらった。

七73 6 ぼたんでもさいているのかと思ったら、まあ、子どもがわらっていたんだよ。

八13 10 たかが一わの小鳥のことをと、わらわないでください。

八87 1 あひるの子をつかまえようとして、ころげまわって、わらったりさげんたりした。

九56 8 その男は、横目でいちろうの顔をみて、口を曲げて、にやとわらっていました。

九59 1 男は、また喜んで、顔じゅう口のようにして、にたにたわらっていました。

九68 1 いちろうはわらって答えました。

九71 6 いちろうはわらっていました。

九100 8 たかぎもわらう。

九109 8 にこにこわらいながらおりてくるもの、まじめな顔でやってくるものなどさまざまである。

九141 10 上をみると、わらっているではありませんか。

十12 6 おとうさんのそばへきて、さまざまのことを話しかけたり、わらったりしました。

十25 11 その声をきいて、にっこりとわらう顔。

十36 1 世間からはますますわらわれて、だれひとりあいてにしてくれなくなり、

十40 8 村や町の者は、幸吉のむだばねをあざけり、そのゆめのような考えをわらった。

十50 11 妹は、わらいながら、「フツ」と、ひとりごとをいいました。

十112 9 まっさおな海は、太陽の下でわらっている。

十114 9 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちょう

も舞い、まっさおな海もわらい、

十一59 2 父はにこにこわらいながら、「略。」と答えた。

十一62 2 ぼくがことわると、よわ虫だといってわらうのです。

十二73 10 芭蕉は、にっこりわらって立っていました。

十二76 10 ふたりは子どものようにわらいました。

十二78 11 ふたりの少年は、にっこりとわらって、「略。」とはっきり答えました。

十三38 5 (わらって) いらぬ。

十三39 7 早く帰ってくださいね……(わらう)。

十三41 11 ねえ……(わらって) いいじゃないか。

十三49 2 みどりの森が、喜びの声でわらい、波だつ小川が、わらいながら走っていく。

十三49 3 波だつ小川が、わらいながら走っていく。

十三49 4 空気が、わたしたちのゆかいなじょうだんでわらい、

十三49 6 牧場が、生き生きしたみどりでわらい、

きりぎりすが、楽しい景色の中でわらう。

十三49 7 きりぎりすが、楽しい景色の中でわらう。

十三49 9 メアリとスーザンとエミリとが、かわい

い口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわらう。

十三50 2 その木のかげで、きれいな鳥がわらっている。

十四40 3 ばら色にわらっている。

十四57 3 つるがこういったとき、高い声でわらいながら、どやどやといってきたものがあります。

十五21 5 けわしい山が、むらさきがかかった大空の下に、わらうようにそびえているのです。

十五33 2 父親のうでにだかれた女の子は、にこにこわらって、

十五64 1 だされたくつを見て、にこにことわら

た私は、

十五64 10

「略。」と、にこやかにわらいながら

私によびかけた。

十五75 12 博士は、そのことばの意味をときかねて

いた私のようなを見て、大きな声でわらわれ、

十五97 6 ㊦ あれは、歌を歌ったり、おどりをお

どったり、わらったりするけれど、

十五97 8 ㊦ まあ、あのふとった子のわらうことは

どうです。

十五101 9 「幸福」たちは、みなどつとわらいます。

十五101 12 ㊦ ぼくたちは、わらったり、歌を歌った

り、

十五106 2 ㊦ でもぼくは、まだわかいから、あの人

のわらうのを見たことはありません。

わらじ ㊦ 草鞋 (名) 5 わらじ

十一20 9 父親のすきなものをかうために、自分で

わらじを作つて、お金をもうけたりもしました。

十一22 1 毎晩、家に帰つてくると、㊦ 略、わらを

たいてわらじを作ることになりました。

十一22 2 たくさんの人の中には、わらじの切れて

いる人もあります。

十一22 4 金次郎はわらじをさしだしていいました。

十一25 8 夜になると、また、なわをなつたりわら

じを作つたりしました。

わらしこと ㊦ 糞仕事 (名) 1 わらしこと

九26 3 ㊦ 上ばきを自分でつくるわらしこと

わらばんし ㊦ 糞半紙 (名) 1 わら半紙

六69 4 かべ新聞の大きさは、わら半紙を四まいは

りあわせたものです。

わらび ㊦ 蕨 (名) 2 わらび

五94 2 さんちゃん、友だちと、山へわらびをと

りにいきました。

十三6 5 すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、

わらや ㊦ 蕨屋 (名) 1 わら屋

十一33 3 ㊦ かきのわか葉に日の照るころは、矢車

からからこいのぼり、村のわら屋の庭に立つ。

わらやね ㊦ 蕨屋根 (名) 1 わら屋根

十18 8 わら屋根ののきから、たきのように落ちる

雨水。

わり ㊦ 割 (名) 2 わり ㄱ やくわり

五30 4 ㊦ その荷物は小さいわりに、なかなかおも

かったのですが、

十一21 4 金次郎は、年のわりにからだが大きかつ

たし、

わりあい ㊦ 割合 (副) 3 わりあい

十四68 3 そういう地方のまわりに、わりあいにつ

めたい空気におおわれた地方があると、

十四71 12 そのまわりの、わりあいに熱い表面の水

が、そのあとへ向かつて流れ、

十四72 5 湯の、中までも熱いところと、わりあい

にぬるいところが、いろいろに入りみだれて

わりいし ㊦ 割石 (名) 2 わり石

九82 4 せきふらしい物、土器らしい物、ただのわ

り石のような物などがたまっていきます。

九85 6 ㊦ つるつるみがかれていないから、ただの

わり石のようにみえる物もあります。

わりこむ ㊦ 割込 (五) 1 わりこむ ㊦ モ

七34 6 わりにわりこもうとする男の人もあり、足

をふまれて、おこっている女の人もありました。

わる ㊦ 割 (五) 18 わる 割る ㊦ ツール・

ロ

六123 1 うさぎさんは、くるみをひろつて、石で

わつてたべることにしました。

六123 6 そういいながら、カチン、カチンとわつて

いと、

六123 10 ㊦ 「くるみをわっているんだよ。」

六124 1 ㊦ 「石でたたいて、わっているのさ。」

八104 3 二つにわつてみたら、中に、青いものがま

るくふくらんでいました。

十四77 3 私が、木を割つたり、竹を割つたりして、

なにかしらえようとしていると、

十四77 3 木を割つたり、竹を割つたりして、

十四77 6 木を割るときには、もとのほうから割る

がいい、

十四77 7 もとのほうから割るがいい、

十四77 7 竹を割るときには、うらのほうから割る

がいいという教えでした。

十四77 7 うらのほうから割るがいいという

十四77 10 竹を割るとき、もとのほうから割ろうと

すると、

十四77 10 もとのほうから割ろうとすると、

十四78 3 一方は太く、一方は細くなつて、まつす

ぐに割ることができなかつたのに、

十四78 5 竹の先のほうから割つてみると、もとま

で、きれいにまつすぐに割ることができました。

十四78 7 まつすぐに割ることができました。

十四79 1 うらのほうをかるく四つに割つて、

十四79 2 十文字の小さな木ぎれをはさんで、チヨ

ンチョンとたたいて、みごとに割っていました。

わるい ㊦ 悪 (形) 46 わるい ㊦ イー・カツ・

ーク ㄱ よいわるい

一53 9 ㊦ いじのわるいけんかずきの人がひろ

うと、ただのいじころになつてしまします。

二43 2 ㊦ ぼくがわるかつたよう。

二43 3 ㊦ わるかつたよう。

三113 ほんたかはものおぼえがわるく、そのう  
え、ものがよくいえませんでした。  
三103 2 きもちの わるい ときでも、はらの たつ  
ときでも、  
四77 わるい びょうきが はやらないように、氣  
をつけてくれます。  
四63 9 こう いわれて、かつちゃん、きまりわ  
る そうに にこにこ わりました。  
六12 6 ぐあいのわるかったのは、そのためでし  
た。  
六23 2 わるい ことはいわない。  
六39 8 わたしたちのなかがわるい虫をとって  
そだてたいねを、  
七91 3 このごろは天氣がわるいので、うさぎは、  
元氣がありません。  
八72 2 あまりテーブルの上でぎょうぎのわるいま  
ねをすると、  
八68 3 だれにもわるい ことをしないのですから  
八71 2 それからのちは、わるくなるばかりであつ  
た。  
九19 2 その年は氣候がわるくて、九月のごろ、  
きゆうに十二月の氣候と同じ寒さになり、  
九37 6 じめじめした足もとがきみがわるく、  
九56 4 いちろうは、きみがわるかったのですが、  
なるべくおちついてたずねました。  
九101 5 ぼくもわるかったよ。  
九145 3 ふしくれた手、とがった足、うすきみのわ  
る いかたち、  
十13 11 あんないなかはつまらないと、わるくいう  
旅人もありますが、  
十一62 11 「なんだか氣まりがわるくて、そうい  
えなかったのです。」

十一65 5 もしやわるい知らせをききはしまいかと、  
十一66 8 たいへんわるいのでしょうか。  
十一72 10 それでよくがきたのですが、どこがわ  
る いのでしょうか。  
十一75 7 だいぶんわるいけれど、まだ望みがあ  
る。  
十一78 10 すこしよくなるかと思えば、思いがけな  
くまたわるくなったりで、  
十一79 9 ところが、五目めに、病人はにわかにな  
る くなりました。  
十一80 1 ようだいがわるくなったにもかかわらず、  
十一85 7 あの人、いま、ひどくわるいんですか  
ら、ゆるしてください。  
十一88 6 病人はますますわるくなるばかりでした。  
十二62 2 その中にわるい人がいて、かりた家具を  
かりっぱなしにして返さなかった。  
十三10 1 きつねがつくとか、からの鳴き声がわ  
る いから不幸があるなどといった。  
十三10 4 移轉するのに、方角がよいとかわるい  
とかいい、  
十三10 5 名まえの字画を数えて、運がよいとかわ  
る いとかきめたり、  
十三10 7 わるい といった方角へこして、つごうの  
よくなった人もある。  
十三11 11 よいことやわるいこと、まっすぐなこと  
や曲がったことは、  
十四31 8 あなたがたの考えひとつで、日本はよく  
もわるくもなるのです。  
十四45 10 そのきみのわるいしずけさの中から、  
十四86 6 「雪國」の映画も、けっしてわるいもの  
とは思われないが、  
十五70 11 おじさんは、年とられてから目がわる

くなつてね、  
十五83 12 あの人たちは下等でもあり、たいてい  
はまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、  
十五83 12 たいていはまあ、育ちのわるいものば  
かりだけれど、人はわるくないんだよ。  
十五91 11 「あの、育ちのわるいわかい女はだれ  
だね。」  
十五107 4 あれはわるくなつてしまったのです。  
十五107 5 わるい なかまとききあつていたものだ  
から、すっかりくさつてしまったのですね。  
十五112 9 きりょうのわるいおかあさんもないし、  
年をとったおかあさんもないのさ。  
わるくち 「悪口」(名) 4 わる口  
六114 7 わる口をいったものも、「略」といって  
感心しました。  
八70 2 みにくいあひるの子は、あひるのなかまか  
らわる口をいわれるばかりでなく、  
十31 6 かげで人のわる口をいわないようにしたい  
し、  
十41 9 うめは、いつもこのわる口のたてとなつて、  
幸吉をかばい、  
わるちえ 「悪知恵」(名) 1 わるちえ  
十71 11 太郎かじやのほうは、氣が強いばかりでな  
く、わるちえがあつたから、  
ワルツ (名) 1 ワルツ  
七41 6 かれは、むねに、大きなびかぴかしたア  
コーデオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。  
われ 「我」(名) 1 われ  
十二32 1 そのなつかしい葉や、花の上を、私の指  
はまったくわれをわすれてなでていました。  
われ 「割」 じわれする  
われ 「我」(代名) 1 われ

十五85文 読みわれ口そそぐ朝のそここの小  
流れ

われがね 「割鐘」(名) 1 われがね

六138 8 「略」と、われがねのような声をたて  
ました。

われめ 「割目」(名) 1 われめ

八223 あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、  
われめができました。

われら 「我等」(代名) 1 われら

六212 美しいぶどうに、かがやくりんご、樂し  
いわれらきりぎりすの生活——

われる 「割」(下二) 8 われる 割れる 《レ  
—レ》

六123 11 「かたくて、うまくわれないうらう。」

八614 とうとう、一つ一つたまごがわれた。

八62 10 なかなかわれないうらう。

八63 1 1 「われないうらうたまごはどれかね。」

八64 10 それから二三日して、とうとうその大きな  
たまごがわれた。

十9 1 あのとげとげしたいががわれて、じゅくし  
たくりの葉の落ちるころでしたから。

十二83 5 スタンドの人たちは、われるようなはく  
手をふたりに送りました。

十四79 4 もとのほうを上にして、上からはものを  
うちこむと、まっすぐに割れて、

われわれ 「我我」(代名) 12 われわれ

六19 8 6 みどりの木の葉は喜びにみち、きよらか  
な風は、われわれの音楽をほめてくれる。

六25 6 6 われわれは、おおいにうたおう。

八73 6 6 どうだ、われわれといっしょにでかけて、  
渡り鳥になる考えはないかね。

十五10 ただ、その美しいものを、すなおに感じと

る心を、われわれは失っている。

十62 われわれは、《略》美しいものを、すなお  
に感じとる心を、もちつづけたいものである。

十65 われわれは、どんなにでも毎日の生活を、  
ゆたかに、楽しくすることができ。

十一133 はてしもなく、ゆるやかにうつつ波の声は、  
われわれの心をあらうようにきこえる。

十一136 ああ、われわれみんな、遠い國から旅し  
てきた旅人のような氣持のする日だ。

十四509 いまも、われわれの耳にひびいてくるよ  
うに感じられるではありませんか。

十四769 われわれが冬期に受ける北西の風と、夏  
季の南がかった風になるのです。

十五19 10 深い深い谷の上を、登山電車がわれわれ  
を運んでいってくれます。

十五802 心のかよったおつきあいができるように  
なったのは、われわれが最初であります。

わん 「腕」(名) 1 わん

十二618 ふとしたことから、この岩屋からぜんや  
わんなどの家具のすることを知った。

わん 「灣」 1 湾するがわん・ペルシアわん

わんばくこぞう 「腕白小僧」(名) 1 わんばくこぞ  
う

十五104 10 黒の肉じゅばんを着たわんばくこぞうの  
ようなのが、聞きとれないさげび声をたてて、

わんわん (名) 7 ワンワン

十48 11 1 クロイ ワンワン——

十49 2 2 ワンワン——

十49 7 7 ワンワン タッタ——

十50 2 2 「クロイ ワンワン」

十二30 1 1 「オソト、ワンワン、クロイ。」

十二30 8 8 チロイ、ワンワン、チャッポ——

十二30 10 10 ワンワン、ゲタナイ、アンヨ、  
イタイ、イタイ。

わんわんちゃん (名) 8 ワンワンちゃん

十48 12 12 キタナイ ワンワンちゃん——

十49 3 3 ワンワンちゃん——

十49 5 5 ワンワンちゃん ネテルワ——

十49 5 5 ワンワンちゃん タッチシタ——

十50 4 4 「キタナイ ワンワンちゃん」といった  
のは、そのためです。

十52 2 2 「ワンワンちゃん」と、こちらを向かせ  
ようとしたり、

十53 2 2 「ワンワンちゃん ネテルワ」といつて  
いると、いぬがもっくおきました。

十53 3 3 「ワンワンちゃん タッチシタ」といつ  
て喜びました。

わんわんわん (感) 1 わん、わん、わん

二44 7 7 わん、わん、わん。

わんわんわんわん (感) 2 わんわん、わんわん

二62 3 3 わんわん、わんわん。

三87 1 わんわん、わんわん。

を

を (格助) 445 を 1 いずみをもとめて・いねをそだ  
てて・うたをうたうきりぎりす・うつくしいものを

みるよろこび・くちびるにうたをもて・ここにた  
いようをもて・じゃがいもをつくり・はだをかぶ

のかい・はるをむかえに・ひかりをもとめて・まど  
をあけると・わたしのころはにじをみるとおどる

一42 2 2 いいこ おはなをかざる、みんな

84 罫 ひらいて、てをうって、むすんで  
 87 罫 ひらいて、てをうって、そのてを  
 88 罫 って、そのてをうえに。四 たま  
 107 罫 にはいったたまをかぞえましょう。  
 108 罫 に、しろいたまをかぞえましょう。  
 115 罫 は、あかいたまをかぞえましょう。  
 152 七 よみかき じをよむ ときには、く  
 153 む ときには、くちをつかいます。めも  
 161 も つかいます。じを かく ときには、て  
 162 かく ときには、てをつかいます。えん  
 213 罫 ないで、のみちを いけば、みんな  
 216 罫 なって、うたをうたえば、くつが  
 221 つないで」のうたをうたいました。そ  
 222 このうたのゆうぎを、みんなが かって  
 226 、おともだちとてをつなぎました。「の  
 227 罫 ました。「のみちを いけば」のところ  
 233 。そこで、りょうてをはねのようにうご  
 235 罫 しました。「うたをうたえば」では、  
 235 「では、くちにてをあてて、らっぱの  
 238 る」では、あしぶみをしました。「はれた  
 2310 がなる」では、てをうえにさしあげま  
 253 まきする人、いえをたてる人、さかな  
 254 たてる人、さかなをとる人、きしやを  
 255 とる人、きしやはしらせる人。「へ  
 288 罫 、その目でなをみましたか。「略  
 289 罫 そのみみでなをききましたか。」  
 307 。この手で、なをもったでしょう。  
 311 。この手で、なをもつでしょう。こ  
 321 もいでしたことばを、つきつぎとかい  
 355 罫 なって、おへやをかざりたいからで  
 361 罫 じゅうのおふねをうかべたいからで  
 367 罫 とまって、うたをうたいたいからで

374 そよそよとのはらをふきます。川がな  
 378 川が、うちのまををさらさらとながれ  
 393 さきました。ゆめをみました。ゆうべ、  
 394 、おもしろいゆめをみました。ゆうべ、  
 396 ころへいったゆめをみました。十七  
 413 。でんとうのしたを、くろくすうつと  
 434 一「よなかに目をあけると、おとう  
 452 罫 略。」「もちものをしらべるのだよ。」  
 459 は、しろいきものをきた おんなの人  
 459 ちが、ながい みをふりふり、もちも  
 4510 ふりふり、もちものをしらべています。  
 465 きました。かばんをあけてなかをみ  
 465 ばんをあけてなかをみせますと、「略  
 468 ぎのへやで、こしを かけてまってい  
 469 おきなむしめがねをもった おじいさん  
 4610 っぱりながい みをふりふり、わたく  
 4610 ふり、わたくしたちをよびました。おじ  
 472 いさんは、わたくしをむしめがねで、のぞ  
 481 るい おおきな はんを おしてくれました  
 487 やくさんのにもつをもつて あげました  
 488 、おばあさんの 手をとつて あげました  
 4810 て、なかよくこしを かけました。へや  
 494 しょうさんが ふえを ふきました。きし  
 525 「略。」「ひとりごとをいうと、となりの  
 528 へ。」「おとうさんも 目をあけました。「略  
 556 罫 なたはそのたまをもっていますか。  
 561 ある だいやもんとを ひとつとりだして  
 565 (八) おべんとうを たべて、ちよつと  
 574 ら かけおきて、手をとりました。「  
 5710 しろちゃんのみをみて きました。  
 583 罫 さんがくろいぬをおつてくださらな  
 588 といつて、おれいを いいました。それ

5910 おだんごや、おもちを、ごちそうしてく  
 606 罫 ねちゃんも、ものを はっきりいうい  
 609 じいさんは おれいを いいました。「略  
 610 罫 で だいやもんとを ひろつて きたので  
 613 罫 は、みんな、たまを ひろつた なかまで  
 615 から だいやもんとを とりだして、「略  
 616 罫 りだして、「これを たろうさんにさし  
 624 たくしの 手に たまを おしつけました。  
 639 れて、みんなが 手をとつて おどりまし  
 641 って、おはなばたけを おどりまわりまし  
 642 「みんな いいこ」を、おおきなこえで  
 6410 おもわず ぽけつとを さぐりました。「へ  
 659 あさんは、わたくしを ひざのうえにだ  
 643 罫 』の つくことばを、みんなであつめ  
 588 罫 「「お友だちの なを かんがえて、ごら  
 75 罫 とばの つくものを、あつめて みまし  
 85 い」の つくことばを あつめました。そ  
 88 え」の つくことばを あつめました。お  
 89 お」の つくことばを あつめました。あ  
 91 。あつめたことばを、みんな かきとめ  
 93 三「先生が、それを ごらんになって、  
 115 とつひとつ ことばを かきつけました。  
 122 えにつき 木のはを ならべて みました  
 124 かたちの いたものを ならべて みました  
 126 ました。ちがったものを ならべて みました  
 132 ら、大きな りんごを みつ ついた だきま  
 134 ンだけ みどりいろを していました。お  
 145 した。しゃぼんだまを ふいて あそびまし  
 163 ちが、ことばあそびを しました。はじめ  
 164 はじめに しりとりを しました。ただお  
 175 二「かんがえものを して あそびました  
 177 罫 「ぬれた きものを きて、かわくとぬ



185 会 どう、赤いきものをきるものはなあ  
 201 会 もいついたことばをじゅんじゅんにつ  
 212 会 大きなくもがすをにかけていました。  
 223 会 で、いろはあそびをしました。よしこ  
 229 会 、すのおそうじをするので、はとを  
 231 会 するので、はとをだいていたら、た  
 248 会 らうんどうかいをするのですね。」  
 252 会 んぼんに、おはなしをしてきました。き  
 282 会 しの上で、つのおしあつていまし  
 288 会 が、そろって川をわたりました。あ  
 289 会 。あさいところをわたりました。き  
 291 会 わたりました。きをつけてわたりまし  
 294 会 がってから、かずをかぞえてみました  
 319 会 いて、大さわぎをしました。」(四  
 325 会 ぞうというものをみたことがある  
 337 会 。こんなはなしをしていると、どし  
 339 会 。ちよつとそこをどいてください。  
 348 会 といつて、ぞうをとめました。六人  
 351 会 、ぞうのおなかをなでて、こうい  
 363 会 のめくらは、足をなでて、「略。」  
 367 会 めくらは、しっぽをもつていました  
 371 会 りかつてなことをいうので、ぞうつ  
 376 会 がふつているのをみつめました。『  
 399 会 』。たろうは、あせをふきながら、あた  
 401 会 、あたりのけしきをながめます。どこ  
 410 会 きたないことばをつかうものでは  
 444 会 もまた、かげえをして、みせてくだ  
 452 会 、とび。くちばしをごらん。」「略。」「  
 453 会 く、せんどろさんをみせてください。  
 455 会 のさおで、ふねをこぎます。」「略。」「  
 458 会 へ。」「ほう、なにをやるかな。」「略。」「  
 4510 会 の上にこむまりをのせているね。」「

478 会 手に大きなりんごをもっていきます。う  
 481 会 うに、そのりんごを、高くさしあげた  
 481 会 しあげたりにおいをかいだりします。  
 484 会 どまります。うしろをふりかえつて手ま  
 484 会 かえつて手まねきをします。二のば  
 488 会 いちろうは、りんごをだして、じろうの  
 495 会 よろこんで、りんごをもつてとびまわり  
 499 会 、じろうは、りんごをたべようとします  
 501 会 す。けれども、それをやめて、しばらく  
 501 会 んがえます。うしろをふりかえつて、手  
 502 会 かえつて、手まねきをします。四のば  
 506 会 は、大きなりんごをさちにわたしま  
 512 会 さちこは、りんごをだいたり、ほおに  
 514 会 。きゅうにおどりをやめて、しずかに  
 522 会 にこしかけて、本をよんでいらつしや  
 528 会 す。大きなりんごを、おかあさんにあ  
 529 会 。おかあさんは、本をおいて、りんごを  
 529 会 をおいて、りんごを手にとります  
 532 会 さちこに、りんごをかえます。さち  
 536 会 さちこからりんごをもらいます。」「略  
 541 会 、さちこは、じろうを手まねきします。  
 545 会 いて、いちろうをよびます。いちろ  
 548 会 は、三人のあたまを、しずかになでて  
 553 会 から、こんなことをかんがえました。  
 553 会 よう。こんなことをかんがえている  
 563 会 に、ひろいのほらをみました。なの花  
 569 会 「みんないいこ」をうたいながら、あ  
 575 会 、こんなおはなしをなさいました。」「  
 588 会 れでばんきょうをしました。三年生  
 594 会 人たちも、これをつかいました。」「こ  
 5910 会 こまでおはなしをきいたとき、わた  
 601 会 と、ゆうべのゆめをおもいだしました。  
 602 会

605 会 。そうして、これをつかいますよ。で  
 606 会 くえやこしかけを、かわいがつてや  
 615 会 しょう。」「さあ、春をむかえにでかけま  
 642 会 なる。りょううでを車のようになうごか  
 666 会 しゅしゅしゅしゅ」を、きゅうにしずか  
 673 会 しゅしゅしゅしゅ」をつづけながら、春  
 674 会 つづけながら、春をさがす。そのとき  
 683 会 しゅしゅしゅしゅ」を、いっそうげんき  
 687 会 。「みんな、きき耳をたてる。」「しゅしゅ  
 82 会 いさむ。」「さあ、手をつなごう。」「みんな  
 83 会 ころ。」「みんな手をつなごう。」「たつお  
 101 会 ま。上と下とをゆびさして、お立  
 115 会 うかしてはんたかをりっぱな人にし  
 117 会 にちかしこいでしをひとりずつ、はん  
 118 会 、いろいろとものをおしえることに  
 125 会 わたしがはなしをしてみよう。」「と  
 126 会 しやつて、はんたかをおよびになりまし  
 127 会 たくさんのことをおぼえなくてもよ  
 128 会 。ただひとことをしっかりとおぼえ  
 1210 会 へ。」「はんたかは目をかがやかせて、お  
 131 会 やかさまのおかおをみつめました。」「へ  
 133 会 きたないことばをつかわないという  
 137 会 は、このひとことを心の中にしま  
 149 会 はたくさんのでしをつれて、王さまの  
 151 会 しやかさまのはちをもつて、でしの中  
 153 会 門ばんがはんたかをみて、「略。」「と  
 154 会 ろかものは、こをとおすことはで  
 1510 会 ぎなことには、はちをもった手が、する  
 162 会 てきました。それをみたごてんの人  
 169 会 ので、このはちをわたくしにとどけ  
 1610 会 ようとして、手をこまでのばした  
 173 会 は、すぐはんたかをおよびになりまし

三182 一くみは花の名をあつめました。二  
 三183 。二くみは虫の名をあつめました。三  
 三184 。三くみは魚の名をあつめました。四  
 三185 。四くみは鳥の名をあつめました。花  
 三195 つめたことばにえをかきそえました。  
 三196 、そのかたちや色をよくしらべるこ  
 三201 とにしました。えをかいいていくうち  
 三203 つぎのようなことをおかきになりまし  
 三212 と海にいる魚とをわけなさい。『四く  
 三214 のは、そのなき声をかきなさい。』で  
 三216 できあがつたものをうしろのかべに  
 三251 て、この大きな木をみあげました。あ  
 三253 がない。この木を切ることにしよ  
 三255 こんな大きな木を、切つていいもの  
 三265 、切りたおした木を、どうするかとい  
 三268 「くりぬいて、ふねをつくるがよい。」  
 三2610 、大ぜいのだいくをあつめて、ふねを  
 三2610 をあつめて、ふねをつくることにな  
 三276 いことです。かいをそろえてひとかき  
 三277 ろえてひとかき水をかくと、ふねはな  
 三278 はななつの大なみをのりきつて、鳥の  
 三287 やとりという名をつけよう。』とい  
 三291 の米や、麦や、豆をつんで、海をわた  
 三291 、豆をつんで、海をわたりました。そ  
 三302 うだいで、作文をすることに  
 三308 とで、できた作文を、ひとりびとりよ  
 三315 くしはかいだんをかきます。かいだ  
 三333 たちのかえるのをまっています。『  
 三338 した。お米や豆をいれた、みほんの  
 三344 、花のしゃせいをしていました。ま  
 三346 まって、しゃせいをしていました。わ  
 三348 んなきれいな花をかきたいとおもい

三356 このようなものをこしらえていまし  
 三357 いました。かななをつかつている人  
 三359 ります。のこぎりをひいている人も  
 三361 かなづちで、くぎをうっている人も  
 三373 「略。」「うさぎをかつてあるとこ  
 三376 なあみにからだをつけるようにして  
 三379 す。ときどき目をひらいてわたくし  
 三379 らいてわたくしをみます。うさぎの  
 三382 目です。しょうかをうたっている声  
 三393 くらにはくさはら道があるいてかえりま  
 三402 ん。ぼくらはかたをくんで、くさはら  
 三402 くんで、くさはら道があるいてかえりま  
 三404 ばかりのしょうかを、大声でうたいな  
 三423 麦ばたけのよこ道をかえりました。『  
 三427 ぼくは、学校どうぐをわきにかかえて、  
 三441 て、すぐになかまを大ぜいつれてき  
 三442 。白うさはそれをみて、「略。』と  
 三445 ちのせなかの上を、かぞえながらと  
 三454 たな。ぼくは海をわたつてきたかっ  
 三458 。わにざめはそれをきくと、たいそう  
 三461 にざめが、白うさをつかまえて、から  
 三462 えて、からだのけをみんなむしりとつ  
 三468 がいままでのことをはなしますと、そ  
 三469 れなら、海の水をあびて、ねている  
 三471 ぎはすぐ海の水をあびました。する  
 三471 たのおもいふくろをせおっていらつし  
 三485 はいまままでのことをはなしました。『  
 三486 川の水でからだをあらって、がまの  
 三487 って、がまのほをしいて、その上に  
 三496 まつき色、つゆをふくんでさきまし  
 三506 ちゃんかっちゃん石を切る。めがねを  
 三507 切る。めがねをかけて石を切る、

三507 がねをかけて石を切る、目もとを  
 三508 切る、目もとをすえて石を切る、  
 三508 もとをすえて石を切る、あせをな  
 三509 を切る、あせをながして石を切  
 三509 せをながして石を切る。かっちゃん  
 三511 ちゃんかっちゃん石を切る。石よりか  
 三514 ちゃんかっちゃん石を切る。かっちゃん  
 三518 ちゃんかっちゃん石を切る。高い高い  
 三522 カナリヤうたをわすれたカナリヤ  
 三565 うたをわすれたカナリヤ  
 三571 うたをわすれたカナリヤ  
 三574 うたをわすれたカナリヤ  
 三577 わすれたうたを思いだす。九五  
 三612 はえんがわにこしをおろして、どうき  
 三614 子どもたちも、こしをおろして、まっ  
 三6210 略。』みんなも声をそろえてへんじを  
 三6210 をそろえてへんじをしました。みんな  
 三633 くあそんでから丘をおりてみずうみへ  
 三639 こしかけて、ボートをおこぎになりまし  
 三639 りました。みずうみを右へいけばも  
 三647 よ。右手と左手をはんたいにこいだ  
 三648 、ぐるぐるまわりをするばかりだ。は  
 三655 とうさんは、ボートをこいでぐるぐる  
 三662 たぐるぐるまわりをなさいました。そ  
 三677 た。『じゃあ、雲をみてーらん。そう  
 三679 ので、みんなは空をみあげました。青  
 三699 どもはゆうごはんをたべていました。  
 三703 上になにかあるのをみつめました。『  
 三721 どころからほうきをもってきてはき  
 三743 、光のとおり道をさがしてみましょ  
 三745 で、みんなはいすをおりて、その光の  
 三745 りて、その光の中にあるいていって、

三747 ㊦ ん。あの丘の上を。」おかあさんがお  
 三749 た。みんなはそこをみました。お日さ  
 三753 ㊦ どうなるか、きをつけてみていなさ  
 三7510 ㊦。ピーターが大声をあげました。みんな  
 三768 ㊦ たずねます。「丘をこえてね、よその  
 三769 ㊦ よその國でなにをするの。」こんどは  
 三771 ㊦ 子どもたちに光をあげるのですよ。」  
 三776 ㊦ そべるように、光をあげにいくのです  
 三783 ㊦ たしのお日さまをとってしまふのは  
 三793 ㊦ 、いどや、家や、道をこしらえています  
 三794 ㊦ で、だれひとり、上をみたりまわりを  
 三794 ㊦ 上をみたりまわりをみたりするひま  
 三797 ㊦ した。みんなは空をながめました。雨  
 三7910 ㊦ 雨にぼくのいどをいっぱいにして  
 三812 ㊦ のうちに、雲は雨をつれて、空をすす  
 三812 ㊦ は雨をつれて、空をすすんでいきまし  
 三8310 ㊦ 、雨のつぶつぶをしゃぼんだまみた  
 三843 ㊦ あまだれがあるのをみつけて、「略」。  
 三891 ㊦ 耳できいたひびきを、かきとって、みま  
 三913 ㊦ かえるときにここをとおります。この  
 三918 ㊦ たてがみや、はがきを、ここに いれます。  
 三922 ㊦ に いれます。くさをちぎって いれたり  
 三922 ㊦ いれたり、かみきれをいれたりする小  
 三924 ㊦ 花は、みんなの心をたのしませてくれ  
 三926 ㊦ せてくれます。「花をもらないでくださ  
 三937 ㊦ わらかなもうせんをしいたようなしほ  
 三945 ㊦ 、いろいろなものをおることができ  
 三947 ㊦ ができます。ふねをおることもでき  
 三951 ㊦ ピアノや、ふくすけをおることもでき  
 三957 ㊦ まいの紙に、えをかくことができ  
 三966 ㊦ まいの紙に、字をかくことができ  
 三973 ㊦ できます。ひらがなをかくことも、かた

三974 ㊦ ことも、かたかなをかくこともでき  
 三975 ㊦ できます。かん字をかくこともでき  
 三976 ㊦ できます。ローマ字をかくこともでき  
 三985 ㊦ の紙にかいたえを、どこにかざりま  
 三987 ㊦ う。紙にかいた字を、どこへ おくって  
 三991 ㊦ も、紙は、字やえをはこんでくれます  
 三997 ㊦ なってから、それを見るのは、ほんと  
 三1004 ㊦ にち、のや山へ竹をとりにいきました  
 三1009 ㊦ 《略》。」と、竹やぶをみまわして います  
 三1012 ㊦ に思っ、その竹を切つてみますと、  
 三1031 ㊦ やひめ」という名をつけました。おじ  
 三1033 ㊦ かぐやひめのかおをみると、すぐなお  
 三1039 ㊦ さんの家のまわりをとりまきました。  
 三1042 ㊦ どでも かぐやひめをみた人たちは、「へ  
 三1052 ㊦ っぱな人のねがいをも、みんなことわ  
 三1057 ㊦ もむずかしいことをいって、それがで  
 三1062 ㊦ だん 高くなったのを、みかどがおきき  
 三1065 ㊦ もし、かぐやひめをごてんに つれて  
 三1066 ㊦ おまえにくらいをさずけてやろう。  
 三1068 ㊦ やひめにこのことをつたえてたびたび  
 三1083 ㊦ めは、またすがたをあらわしました。  
 三1088 ㊦ らたびたび お手紙をくださいましたの  
 三1089 ㊦ のたびに、ごへんじをさしあげて おりま  
 三1092 ㊦ 、かぐやひめは、空をながめてはためい  
 三1092 ㊦ がめてはためいきをつき、じつと かん  
 三1097 ㊦ めは、とうとう 声をたてて なきだしま  
 三1098 ㊦ ろいて、そのわけを たずねました。か  
 三1107 ㊦ いがけないことをばをきいて、おじいさ  
 三1109 ㊦ して、かぐやひめを月の世界の人に  
 三1114 ㊦ みかどがこのことを おききになつて、  
 三1119 ㊦ のまわりは、弓矢をもった人たちで、  
 三1123 ㊦ かりと かぐやひめをだいて いました。

三1124 ㊦ そのいり口で ばんを していました。夜  
 三1128 ㊦ いたちは、弓に矢をつがえました。と  
 三1129 ㊦ なくなつて、なにをする こともでき  
 三1138 ㊦ いて、こうこうを したいと思いまし  
 三11310 ㊦ めて 月夜には 月をみて、わたくしの  
 三1141 ㊦ わたくしのことを 思いだして くださ  
 三1143 ㊦ 、きていたうわぎをぬいで、おぼあさ  
 三1147 ㊦ 。天人が はごろもを きせようとすると  
 三1154 ㊦ 紙とふしのくすりを のこしました。天  
 三1155 ㊦ やひめには ごろもを きせました。かぐ  
 三1161 ㊦ までも、かぐやひめをおわすれになる  
 三1163 ㊦ かえつて かなしみを、ます たねになる  
 三1174 ㊦ のくすりと 手紙を やきすてよ。」と  
 三1177 ㊦ と、ふしのくすりを やいたけむりが、  
 三1179 ㊦ れで、この山の 名を、「ふじの山」と  
 四58 ㊦ 紙や 小づつみなどをおくつて くれます  
 四61 ㊦ ときには、でんぼうを うつて くれます。  
 四64 ㊦ ときには、でんわを とりついで くれま  
 四65 ㊦ す。「略。」と 声を かけて、話が でき  
 四67 ㊦ 界じゅうの 人の心をつなぐ糸を、まい  
 四68 ㊦ の心をつなぐ糸を、まいにち あつか  
 四72 ㊦ いせつなもちものを まもつて くれます  
 四74 ㊦ たいせつな からだを まもつて くれます  
 四79 ㊦ やらないように、氣をつ けて くれます。  
 四83 ㊦ くれます。まい子を うちまで おくりと  
 四91 ㊦ いたまの かがみを、この 町にはめこ  
 四118 ㊦ などの べんきょうを します。こはえ  
 四143 ㊦ が、かぶのはっぱを たべて いる。風が  
 四156 ㊦ れていた。たまごを 生んで いるのを  
 四156 ㊦ ごを 生んで いるのを みていた。えつ子  
 四158 ㊦ しの せなかに かおをつ けて ねんねした  
 四161 ㊦ ねんねした。おかしを しっかり 手にも

四六五 にてらされて、水をくむ。くろいかげ  
 四七四 わたしが手ぬぐいをもって、おふろへ  
 四七八 かあさんが、石うすをひいていらつしゃ  
 四九二 会 なあいて「文を書くことは、お話  
 四九二 会 くことは、お話をすることとおなじ  
 四九七 れぞれあいての人をきめてから、文を  
 四九七 をきめてから、文を書きました。まさ  
 四二〇 一 んは、あいての人を「おかあさん」に  
 四二〇 二 、つぎのような文を書きました。「さつ  
 四二〇 三 などねこねずみをしてあそびました  
 四二〇 四 た。みんなで手をつないで、わをつ  
 四二〇 四 をつないで、わをつくりました。ね  
 四二一 四 は、どのねずみをつかまえたか  
 四二一 八 しは、ただしさんをねらって、わの中  
 四二二 五 こみました。そこを、わたくしがうま  
 四二二 七 さん」にあてて文を書きました。「略  
 四二二 八 した。「きのうえをかきました。なん  
 四二二 九 い。ぼくのうちをかいだのです。や  
 四二三 三 いさんとよく星をみましたね。にい  
 四二四 九 げにうめもどきをとってきました。  
 四二五 三 つちゃんのことを、みんなでお話し  
 四二五 四 ありません。お話をすると、みっちゃ  
 四二五 五 がします。お花をかざると、そこに  
 四二五 七 みつちゃんが空をとんでいるだろう  
 四二六 一 、「りんご」にお話をするつもりで書  
 四二六 七 は、「きりぎりす」をあいてに書きまし  
 四二七 一 すきなきゅうりをあげよう。ねぎも  
 四二七 五 、またかけっこをしようね。林のむ  
 四二七 六 道まで、かけっこをしようね。」としお  
 四二八 一 さんは、「雲」に話をするつもりで書  
 四二八 一 きれいだな。ぼくのをせてくれなにか  
 四二八 四 よしさんは、じぶんをあいてに書くこ

四二八 九 いって、くりひろいすることかな。ぶ  
 四二九 五 もほりのてつだいをすることかな。と  
 四二九 六 うちから、うさぎをもらってくるこ  
 四二九 九 はつきりした返事をしてくれない。」  
 四三〇 三 たいといつて、文を書きました。「略  
 四三〇 八 になにかおみまいをしようではありま  
 四三〇 一〇 せんか。おてがみを書いてもいいし、  
 四三一 一 てもいいし、えをかいてもいいと  
 四三一 二 るコスモスの花をあげようと思いま  
 四三一 五 、つぎのような文を書きました。「きの  
 四三一 七 わたくしがかさをさしていくと、む  
 四三二 一 ないでいるわけをききました。男の  
 四三二 六 でげたのはなおを上げてやりました  
 四三二 九 わたくしは、かさをさしかけてあげま  
 四三三 二 うさんのことを思い出しました。  
 四三三 三 、男の子は、それをはいて、元氣よく  
 四三四 五 、かずさんの文をよみなおしました。  
 四三五 四 のげたのはなおを上げるあいだ、か  
 四三五 四 るあいだ、かさをさしてあげたので  
 四三六 八 、つぎのような話をしました。「略」。  
 四三六 一〇 ぶどうだなの下をとおりました。そ  
 四三七 五 さんに、「ぶどうをください。」とい  
 四三七 七 、わたくしの口をおさえたものが  
 四三七 一〇 。「いやしいまねをしてはいけません  
 四三八 四 は、なぜぶどうをもらわないで、か  
 四三九 四 た。「先生、ありをころそうとした  
 四三九 五 いさんのことを思い出して、ころ  
 四三九 七 生、さくらの枝をおろうとしたと  
 四四〇 三 北へむかってたびをつづけていました  
 四四〇 八 なりになって、空をひっかけるように  
 四四二 四 ように列のかたちをかえても、ぼらば  
 四四二 七 した。「きみ、列をはなれちゃだめじ

四四三 五 、ぎょうぎよく空をとびました。けさ  
 四四三 七 三十ばのがんは目をさしました。ゆ  
 四四四 一〇 なりました。はたけをこえ、のはらをす  
 四四四 一〇 けをこえ、のはらをすぎると、高い山  
 四四四 三 ているので、そこをよけてとびました  
 四四四 四 げからねらいうちをされるからです。  
 四四四 五 からです。山の上を高くとびこえて、  
 四四四 八 が、「略」と、声をたてました。ほか  
 四四四 九 んは、また、みんなをだましてびつくり  
 四四五 三 んのおちていくのを、下からうけとめ  
 四四五 四 左からかつちゃんをだきかかえました。  
 四五〇 六 かつちゃん、元氣をだせ。」ほかのも  
 四五一 三 いまは、かつちゃんをたすけなければな  
 四五二 一 おもいかつちゃんをかつきながら空を  
 四五二 一 かつきながら空をとぶのは、よい  
 四五二 五 きげんなところを早くはなれよう。  
 四五二 六 九わのがんは、列をきれいにつくるど  
 四五二 八 なって、かつちゃんをささえながら、で  
 四五三 四 と高い山のみねをこえました。「略  
 四五三 八 てきました。あせをいっばいかいて  
 四五四 四 うみのきれいな水をくむと、これをう  
 四五四 四 水をくむと、これをうけとった一わが  
 四五四 五 た一わが、きず口をていねいにあらつ  
 四五四 六 りました。ほろたいをもっていたがん  
 四五四 八 は、はねのつけねをうたれていました  
 四五五 一 たい水で、あたまをひやしてやりまし  
 四五五 四 こちでみはりばんをしました。その夜  
 四五五 一〇 さがつて、まぶたをすこしひらきまし  
 四五七 二 あがつてはばたきをしたので、みんな  
 四五七 五 ゃんの全快いいをしようというこ  
 四五七 七 のすきなおだんごを作りました。くだ  
 四五七 八 りました。くだものをあつめたり、花を

四578 をあつめたり、花をかざったりしまし  
 四583 は、みんなのかおをみて、にこにこし  
 四585 金 「ぼく、よきようをするよ。ねている  
 四5910 金 、がんのなかまをみかけなかったか  
 四602 金 、がんのなかまをみなかったかい。」  
 四612 かりのがんが、口をひらいて、「へ略」  
 四613 金 。ともかく食事をすませて。「みんな  
 四615 へ」みんなははしをとりました。かつ  
 四617 金 、どうぞなかまをたすけてください  
 四618 略。と、おいのりをしました。二十九  
 四619 わのがんが、食事をすませると、「へ略  
 四621 のがんが、みんなを元気づけました。  
 四623 う一ど林のおくをさがしにいきまし  
 四629 くなったので、力をゆるめました。そ  
 四632 んは、なかまの手をとって、いそいで  
 四634 た。みんなは、それをみて、およろこ  
 四636 のしいあさごはんをたべました。「へ略  
 四645 ちよこんとあたまをさげたので、みん  
 四654 は、みずうみの島をとびたちました。  
 四663 いいにくいことをばをみつめて、それを  
 四664 をみつめて、それをまちがえないで、  
 四671 なじになることをばを考えたあそびで  
 四675 とばあそびのたねをたくさんこしらえ  
 四696 へ。「へ略」。「るすをする。「三組の「  
 四721 のねこと、いぬとをあげます。『にやあ  
 四724 人には、ハンケチをあげます。これは、  
 四725 す。これは、『はなをふく。』というわ  
 四727 へ。』『へ略。』これをひいた人には、な  
 四7210 には、につきちょうをあげます。『へ略。』  
 四732 「いろはがるた」を考えました。たく  
 四734 できました。これをあつ紙に書いて、  
 四743 一ばん。ろ——ろをこぐせんどうさん

四751 。ち——小さな人をかわいがれ。りー  
 四757 すいはしつかり氣をつけて。を——「  
 四775 はこれから「い」をつかう。の——の  
 四778 —くじやくのまねをするからす。や—  
 四786 り。え——えんぴつをなめないように。  
 四788 —てんでん手まりをつきましよう。あ  
 四799 もこれから「え」をつかう。ひ——火  
 四814 金 れいなこのよるを、みんなでなかよ  
 四825 、クリスマスツリーをつくりました。ま  
 四826 た。まつの木を枝を立てて、色紙でお  
 四828 つるや、ふうせんをさげました。ぎん  
 四833 った。一まいのえをだしました。それ  
 四837 ました。赤いふくをきて、三かくぼう  
 四837 きて、三かくぼうしをかぶり、まっ白な  
 四837 まっ白なあごひげをつけたサンタクロ  
 四838 ーがりました。それをまつ枝のさき  
 四839 たんじょうのお話をしました。二ばん  
 四846 もしろい紙しばいをしました。三ばん  
 四848 ーさんが、しょうかをうたいました。す  
 四849 でトランプあそびをしました。そのと  
 四852 が、かごにみかんをいれて、もってい  
 四853 っている。だいこんをぬいていると、み  
 四865 とびだして、雪かきをなさるおじいさん  
 四899 子どもたちのことを思つて、おもての  
 四907 、おもてのとおりをさつさとはく。し  
 四908 つする人のことを思つて、ゆうびん  
 四911 げいれ口のまわりをさつさとく。ひ  
 四912 くはまどからかおをだして空のほう  
 四924 だして空のほうをみあげて、降って  
 四931 て、降ってくる雪をながめる。降る、  
 四931 にふかれて、うずをまいて、どんどん  
 四936 高い空のまん中をみあげる。もくも

四954 だ。降っている雪を上からみると、白  
 四965 が、一びきのかめをとりまいて、あそ  
 四967 金 ども「このかめをころがして、あそ  
 四972 よいしょ。」かけ声をかけながら、みん  
 四972 ら、みんなでかめをころがします。そ  
 四976 しろいから、かめをころがしているの  
 四978 しま「そんなことをしてはいけない。  
 四985 金 たしにこのかめをうってくれないか  
 四994 金 さん。このかめをうりましょう。」う  
 四997 うらしまは、おかねを子どもたちの手に  
 四1005 「うらしまは、かめをだきおこして、せ  
 四1005 きおこして、せなかをさすって、うらし  
 四1008 めは、手でなみだをふきながら、なん  
 四1009 、なんどもおじぎをします。うらしま  
 四1011 金 。ちようどこをとおるかかってよ  
 四1014 金 たね。さあ、元氣をだしておかえり。  
 四1017 ていねいにおじぎをして、海の方へ  
 四10110 めのうしろすがたをみおくりまします。  
 四1025 まが、海べでつりをしています。そこ  
 四1031 、いっしんにつりをしているの、氣  
 四1043 金 で、いのちびろいをいたしました。き  
 四1063 は、うらしまの手をとって、そこらを  
 四1063 をとって、そこらをぐるぐるとあるき  
 四1086 、かめがうらしまをあんないしてはい  
 四1106 金 は、うちのかめをおたすけください  
 四1115 魚たちはごちそうをはこんできます。  
 四11110 金 もしろいおどりをおどってもらいま  
 四1128 、おもしろい。」手をたたいてよろこび  
 四1133 は、父や母のことを思いだして、きゅ  
 四1139 金 きやかなおどりをして、ごらんにい  
 四1143 金 かかわったことをして、おなぐさめ  
 四1161 金 んたのしい思いをさせていただきます

五24 6 会 といつて、みんなを立たせ、不自由な人  
五24 7 会 女や、子どもたちをすわらせました。そ  
五24 10 会 『といつて、せきをすこしあけてくれま  
五25 4 会 まるでにらめっこをしているようだった  
五25 10 きていたおねえさんをみつめました。〔へ略  
五26 4 るこさんは、きつぷを改札の女の人にわた  
五26 7 って、かるくあたたまをさげて、そこをでま  
五26 8 たまをさげて、そこをでました。〔へ略〕  
五27 9 んきくんは、電車をおりてから、元氣に  
五28 4 んは、店でそろばんをはじいていました。  
五28 7 会 「ぼく、こんな本をもらいました。」「へ  
五28 9 会 むこうの店に品物をとどけて、受けとり  
五28 10 会 だけで、受けとりをもらつて帰つてくる  
五29 1 会 「まあ、受けとりをおみせ。――よしよ  
五29 3 会 こうなんです。店をですこしくると、  
五29 4 会 おじさんが、荷物を二つ持つて、あせを  
五29 4 会 二つ持つて、あせをふきふきあるいてい  
五30 3 会 小さいほうの荷物を、わたししてもらいま  
五30 8 会 き、こういうことをやるのかね。』とき  
五31 4 会 ランクからこの本をだして、『略。』と  
五32 4 す。まっ黒なけむりをもうもうとはいいて、  
五32 7 木や、石炭や、お米を、たくさんつんでい  
五32 9 。この汽車は、なにをたいて走っているの  
五33 3 がったりして、荷物をつみこんでいます。  
五34 3 ど、たいせつな品物を作っています。この  
五34 4 。この工場のきかいを動かしている力は、  
五34 7 で、ごはんのしたくをしていらつしやいま  
五35 3 るのでしょうか。なにをしているところだし  
五35 4 よう。これは、石炭をほつているところで  
五35 7 んに、きかいで石炭をくずしてとつていま  
五36 2 石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場のきか  
五36 2 らせ、工場のきかいを動かすのです。ガス

五376 うのねつが、かたちをかえ、石炭の中にした  
 五384 どうで、やはり先生をしていらっしやるの  
 五386 手 「ぼくも、三年生を受け持っている。こ  
 五387 手 どもたちに、手紙を書いてもらって、き  
 五388 手 どもたちに、それを送ってあげよう。そ  
 五397 手 のきれいなけしきを、みなさんにおみせ  
 五413 手 びはじめた草の上を、うれしそうにある  
 五415 手 うしは、小川の岸をとことこ走りました  
 五417 手 ち、たくさんちをしばります。」(二三  
 五428 手 私は、なえはこびをしています。つばめ  
 五429 手 私のすぐ目のまえを、いったりきたりし  
 五431 手 日じゅうてつだいを、うちに帰るこ  
 五432 手 、はじめてはたるをみかけました。そち  
 五435 手 んから、よくうたをおしえてもらいまし  
 五4310 手 ンです。そのたねをこんどお送りします  
 五445 手 世界の友よ、手をつなぎ、なかよく  
 五448 手 で、平和のうたをうたおうよ。ぼく  
 五465 手 うらの竹やぶのそばを通ったら、おくの方  
 五482 手 つけた、きれいな花を。いつ通っても、い  
 五486 手 どをあけると、まどをあけると、いまのぼ  
 五492 手 た。あさの光に、身をきよめるのはうれし  
 五495 手 なの花ざかりの岸をでる。子うしが水  
 五496 手 子うしが水のむ岸をでる。のたりのた  
 五503 手 もさにゆれゆれ岸をでる。かげをちら  
 五504 手 岸をでる。かげをちらして岸をでる。  
 五504 手 かげをちらして岸をでる。海べ、がけ  
 五513 手 黒いかげ。島をとりまく、青い海、  
 五525 手 七 星 ゆうごはんをまつあいだ、私は、  
 五526 手 いだ、私は、まさこをうば車に乗せて、は  
 五529 手 略。と、あいさつをしていく人もありま  
 五531 手 というので、西の方をみると、日がしずん  
 五534 手 略。と、手をつたいてやりますと

五535 、まるくふとった手をたたきました。「略  
 五537 、はるおが、東の空をみながいいました  
 五5311 ういながら西の方をみると、小さな星が  
 五549 。それから、あたりをみまわしましたが、  
 五5410 かるくて、つぎの星をみつけることは、で  
 五5411 せんでした。まさこをおかあさんにわたし  
 五5411 んにわたして、食事をすませてから、また  
 五555 手 「と、西の空をみましたが、わかれ  
 五557 手 うえんきようで星をみせますよ。いつて  
 五5510 かあさんにこのことをいって、ごろうさん  
 五5510 いって、ごろうさんをさそって、はるおと  
 五571 いそくされて、ばんをゆずりました。はる  
 五574 手 、はるおのかたをそとおさえました  
 五576 手 「あんまり大きな声をだしたので、あたり  
 五583 手 でしたが、やっと目をなして、ばんをこ  
 五584 手 目をなして、ばんをごろうさんにゆずり  
 五594 手 、いまみてきた土星を、紙にいていねにか  
 五599 手 す。あやこは、それをみつめて、「略。」「  
 五605 手 。おまえが、たねをまいたのでしたね。  
 五608 手 いたのです。たねをまいたから、こんな  
 五615 手 せん。わたしが水をやったんですもの。  
 五617 手 まいにちあつるのをのぼしたのは、だれ  
 五6110 手 」。あつるのぼみをこしらえたのは、だ  
 五621 手 こんなに大きな花を、三つもさかせたの  
 五623 手 「――「花の色を空色にそめてくれた  
 五626 手 めてとれたきゅうりをたべました。「略」  
 五631 手 かあさん。こやしをやったり、手をやっ  
 五631 手 しをやったり、手をやったりしたじゃあ  
 五635 手 とうさんは、この話をそばでおきになっ  
 五657 手 んは、あみでさかなをとり、おばあさんは  
 五657 手 、おばあさんは、糸をつむいでくらしてい  
 五6510 手 んは、海にでてあみをなげました。すると

五663 手 じいさん、わたしを海へはなしてくださ  
 五669 手 に、このふしぎな話をしました。「略。」「  
 五6610 手 よう、金のさかなをとったよ。それが、  
 五674 手 「、どうしてお礼をもらわなかったの。  
 五679 手 いさんが金のさかなをよびますと、すぐで  
 五689 手 さんは、新しいおけを持っていました。と  
 五6811 手 ころへいって、家をもらっておいで。」  
 五692 手 いさんが金のさかなをよびますと、およい  
 五708 手 いさんが金のさかなをよびますと、金のさ  
 五713 手 んは、けがわのふくをきて、ぴかぴか光る  
 五714 手 ぴかぴか光るずきんをかぶり、金のうでわ  
 五715 手 かぶり、金のうでわをはめ、赤いくつをは  
 五715 手 わをはめ、赤いくつをはいていました。め  
 五711 手 さんは、おじいさんをうま小屋のしごと  
 五731 手 いさんが金のさかなをよびますと、金のさ  
 五751 手 さんは、おじいさんをよんでいました。  
 五755 手 海で、金のさかなをけらいにしてやりた  
 五761 手 いさんは金のさかなをよびました。金のさ  
 五767 手 ろい海で、あなたをけらいにしたいとい  
 五7610 手 っぽでピシャリと音をさせて、海の中へお  
 五7810 手 校のはたけのむこうを流れている小川のと  
 五791 手 した。そして、川をみて氣のついたこと  
 五792 手 みて氣のついたことを書きました。つぎの  
 五7911 手 「波が、すべりだいをすべるように、らく  
 五804 手 」。略。」「水の音をきいていたら、せな  
 五806 手 きようは大そうじをしました。ゆかをき  
 五806 手 じをしました。ゆかをきいていふきました  
 五807 手 。竹のさきにほうきをむすびつけて、てん  
 五808 手 んじょうのくものすをはいました。むす  
 五822 手 んな、からだに氣をつけてください。じ  
 五822 手 じゅくさいものをたべないようにする  
 五823 手 、夜は、はらまきをきんとして、ねび

五82<sup>4</sup> 傘 んとして、ねびえをふせぐこと、それが  
五82<sup>5</sup> 。みんなは、なま水をのまないことや、ね  
五82<sup>7</sup> あそばないことなどを、話しあいました。  
五82<sup>9</sup> のお友だちが、学校をみにいらつしやいま  
五83<sup>1</sup> だちが、記念に写真を書きたいとおつしや  
五83<sup>3</sup> にあつまつて、先生をまん中にしてならび  
五83<sup>10</sup> しました。そこをパチリと写されまし  
五84<sup>2</sup> 土 夏休みになにをするか、みんなで話  
五84<sup>3</sup> かぎくんは、え日記を書くといいました。  
五84<sup>4</sup> なかさんは、おしぼをたくさん作るといい  
五84<sup>5</sup> 。ささきくんは、星をしらべるといいまし  
五84<sup>6</sup> んの家で、海の作文を書くんだといって、  
五84<sup>8</sup> 本にでていることばを、五十音にわけてみ  
五85<sup>2</sup> 傘 るまでに、そこらをきれいにそうじして  
五85<sup>4</sup> いいながら、ほうきを持って、木の葉をは  
五85<sup>5</sup> きを持って、木の葉をはきよせました。そ  
五86<sup>5</sup> 、うたのようにふしをつけてよびながら、  
五86<sup>7</sup> さんは、ほうきの手をとめて、「へ略。」「へ  
五87<sup>9</sup> 傘 きれいな赤いおびをしめている。いいお  
五88<sup>2</sup> 傘 うさんが赤いおびをおしめになると、へ  
五88<sup>7</sup> 傘 のおもりのしかたをしてみせてあげよう  
五89<sup>1</sup> 傘 、それから、うたをうたうのだよ。高  
五89<sup>6</sup> 傘 らの山から海べをみれば、波にうか  
五90<sup>2</sup> 傘 ったとき、おじぎをなさいましたね。あ  
五90<sup>5</sup> 傘 れでな、さどが島をうたうときには、い  
五90<sup>6</sup> 傘 、いつでもおじぎをするのだよ。」「へ略  
五90<sup>10</sup> 傘 かあさんのおちちをコップコップといた  
五91<sup>4</sup> 傘 れ、このたけのこをごらん。」みると、  
五91<sup>5</sup> きのまん中のたたみをやぶつて、のびてい  
五91<sup>7</sup> 傘 えんの下にあたまをだしたので、「へ略」  
五91<sup>8</sup> 傘 たずねると、「水をください。」という  
五91<sup>9</sup> 傘 れで、手おけの水をかけてやると、たけ

五91<sup>11</sup> 傘 のいたで、あたまをコッソんとうつたのだ  
五92<sup>1</sup> 傘 そこで、ゆかいたをはがして、たたみの  
五92<sup>2</sup> 傘 みのまん中にあなをあけてやつたら、そ  
五93<sup>4</sup> 傘 っていく子どもたちをみおくつてから、「へ  
五93<sup>6</sup> 」といって、手おけをさげて、うらのいど  
五94<sup>2</sup> だちと、山へわらびをとりにいきました。  
五94<sup>3</sup> 傘 、一わの小鳥のひなをひろいました。ひな  
五95<sup>3</sup> 傘 さんが、「すりえをこしらえて、たべさ  
五95<sup>4</sup> まごのきみですりえをこしらえて、たべさ  
五96<sup>6</sup> なはもう、かごの中をとびまわっています  
五96<sup>10</sup> 傘 うだ。自分でえさをとったり、遠いところ  
五98<sup>5</sup> ばんはじめに、それをおかあさんがききつ  
五99<sup>1</sup> しのびこんで、ひわをとろうとしていまし  
五99<sup>3</sup> 傘 かのところに行けがをして、ころがつてい  
五99<sup>4</sup> さんちゃんたちが水をふきかけたり、くす  
五99<sup>5</sup> きかけたり、くすりをつけてやつたりしま  
五99<sup>7</sup> になつて、かごの中をとびまわっています  
五100<sup>8</sup> ちゃんがんばきょうをはじめると、ひわは  
五100<sup>11</sup> て、さんちゃんの本をよむ声をまねます。  
五100<sup>11</sup> ちゃんの本をよむ声をまねます。さんちゃ  
五101<sup>2</sup> やんが、ハーモニカをふきはじめると、ひ  
五101<sup>7</sup> ようけんめいにまねをします。鳥かごは、  
五102<sup>2</sup> ときどききて、水道をつかいます。水が、  
五102<sup>4</sup> ジャージャーと、音をたてて流れているの  
五102<sup>5</sup> たてて流れているのをきいて、ひわは、そ  
五102<sup>6</sup> 、ひわは、そのまねをして、「へ略。」と、  
五102<sup>9</sup> あさんが、せんたくをしますと「へ略。」  
五102<sup>11</sup> 傘。」「と、ひわもまねをします。かえでの木  
五105<sup>1</sup> に、「へ略。」と、本をよむようなひとりが  
五105<sup>1</sup> むようなひとりとごをいいました。ひわは  
五105<sup>2</sup> 、いつまでもその声をきいていました。し  
五105<sup>7</sup> は、いつもそのまねをしては、ひとりよろ

五105<sup>10</sup> おかさんも、ひわをほめました。秋にな  
五106<sup>3</sup> した。ひわは、それを見ると、「へ略。」と  
五106<sup>6</sup> 、大よろこびで、声をあわせてうたいまし  
五107<sup>6</sup> や、さんちゃんの本をよむまねなどを、つ  
五107<sup>7</sup> の本をよむまねなどを、つぎからつぎへと  
五107<sup>11</sup> るこびで、「へ略。」をはじめました。「へ略  
五108<sup>5</sup> 中のひわは、なまをよびました。けれど  
五109<sup>5</sup> 、へ略。」と、まねをしました。「へ略。」  
五109<sup>6</sup> 傘 のだ、新しいことをどんどんおぼえてい  
五109<sup>8</sup> とうさんのほめるのをきいて、さんちゃん  
六4<sup>4</sup> 、おどろいてあたりをみまわしたが、いろ  
六6<sup>2</sup> これらの道具や時計をあれこれとみくらべ  
六6<sup>8</sup> 傘 てはいるが、どれをみても大きくてえら  
六6<sup>9</sup> 傘 。ひとかどの役目をつとめて、世の中の  
六7<sup>7</sup> る。ふたりはそこらをみまわしていたが、  
六7<sup>9</sup> しごと台の上のものをあれこれといじりは  
六8<sup>1</sup> がてこの小さなねじをみつつけて、「へ略。」  
六8<sup>3</sup> 子はゆびさきでそれをつまもうとしたが、  
六8<sup>5</sup> もたちは思わずにおをみあわせた。ねじは  
六8<sup>9</sup> がら、しごと台の上をみて、だしておいた  
六8<sup>11</sup> 傘 だ、しごと台の上をかきまわしたのは。  
六9<sup>4</sup> 傘 へ略。」ねじはこれをきいて、とびあがる  
六10<sup>2</sup> いたたいようがおをだしたので、日光が  
六10<sup>5</sup> ると、ねじがその光を受けて、ピカリと光  
六10<sup>7</sup> で、ふさぎこんで下をみつめていた女の子  
六11<sup>1</sup> くピンセットでねじをはさみあげて、だい  
六11<sup>3</sup> つかいちゃう時計をだしてそれをいじつ  
六11<sup>3</sup> う時計をだしてそれをいじついていたが、や  
六11<sup>4</sup> 、ピンセットでねじをはさんで、きかいの  
六11<sup>6</sup> ととめた。りゅうずをまわすと、いままで  
六11<sup>7</sup> そうにカチカチと音をたてはじめた。ねじ  
六11<sup>10</sup> んは、しあげた時計をちよっと耳にあてて



六133 た。あつい日中の道を、ものを運びながら  
六133 い日中の道を、ものを運びながら歩いてく  
六136 岸で、うつむいて水をのもうとしました。  
六141 「。」「ありは大きな声をだしてさげました  
六147 つづけました。それを一わのほとがみつ  
六149 は、いそいで木の葉をとって、ありのそば  
六151 なって、ありのそばを流れました。「略」  
六161 から木の葉におれいをいしました。そのと  
六162 のとき、ありのまえをひとりのかりうど  
六162 りのかりうどが弓矢を持って通りました。  
六164 は、きゆうに歩くのをやめて、弓に矢をつ  
六164 のをやめて、弓に矢をつがえて、木の上を  
六165 をつがえて、木の上をねらいました。木の  
六167 ねらわれていることを知らずにいました。  
六171 略」と、大きな声をたてました。その声  
六172 たてました。その声をきいて、はとが下の  
六172 いて、はとが下の方をみますと、かりうど  
六173 すと、かりうどが矢をつがえているではあ  
六178 あつまって、音楽会をしています。あるき  
六181 ぎりすはバイオリンをひいています。ある  
六182 きりぎりすはチェロをひいています。ある  
六183 るきりぎりすはふえをひいています。その  
六183 のほか、ハーモニカをふいているもの、オ  
六184 いるもの、オルガンをひいているもの、た  
六184 ているもの、たいこをたたいているもの、  
六185 るもの、シロフォンをたたいているもの、  
六186 隊がならんで、うたをうたっています。ま  
六186 、しきしゃがタクトをいっしんにふって  
六1810 んぞくそうにしき台をおりてきて、あせを  
六1810 をおりてきて、あせをふきます。バイオリ  
六198 、「われわれの音楽をほめてくれる。」ふ  
六1910 ンきいれなもんくをいいましたね。こん

六201 いて、この夏の日を楽しもうではないか  
六211 な、楽しそうにそれをたべます。オルガン  
六214 「。」「こんなことばをみんな喜んできい  
六218 きます。大きな荷物を、力をあわせて運ん  
六218 。大きな荷物を、力をあわせて運ん  
六228 「そんな大きな物を持ってさ。」あり三  
六2210 いっしょに音楽会をやるうじゃないか。  
六235 ぎりす シロフォンをひとたきたたいて  
六237 ぎりす バイオリンをちよっとひいて、「へ  
六239 きりぎりす たいこをドンドンとたたいて  
六239 「ぼくがひょうしをとってあげる。ここ  
六241 はたらくやくそくをしているのです。」  
六247 いて、あり一、二をさそい、大きな荷物  
六247 さそい、大きな荷物を、「略」と、かけ  
六247 へ」と、かけ声をかけて持ちあげます  
六248 んなにぎやかに音楽をはじめます。二の  
六259 り一まどからそとをみて、「略」。あり  
六263 「あり一は、ろの火を赤くもえたせす  
六268 、「こんなにたきをあつめておいて、よ  
六288 きりぎりす一が、戸をトントンとたたき  
六291 あり一、二が戸の方をみています。あり三  
六293 り三「おはいり。」戸をあけて、きりぎり  
六295 ていねいにおしぎをしなが、「略」。  
六303 あり三「花のみつをわけてあげよう。」  
六304 、おくの方からみつをびんにいれてもつて  
六305 もってきます。それをきりぎりすにわた  
六307 す。「なんどもお礼をいってたちさります  
六326 される。顔のうしろを雲がとぶ。8 いね  
六3210 すからとびだし、空をみあげる。11 おか  
六331 あさんがすが、羽をさか立てて、子がら  
六331 か立てて、子がらすをすにひきもどす。12  
六335 されている。13 風を受けるたびに雲のか

六3410 くなったりする。口をもぐもぐさせている  
六366 おれるようにあたたま地につけるすぎの木  
六3710 える夕やけの大通りを、豆つぶほどの自動  
六383 子つばめがかかしをみつける。子つばめ  
六388 つばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、も  
六395 ないんだ。」なみだをぼろぼろこぼす。親  
六398 なかがわるい虫をとってそだてたいね  
六399 っそだてたいねを、こんどは、あなた  
六403 親つばめ、子つばめをつれてさる。30 の  
六413 むじ風のように、列をつくったつばめのむ  
六4110 め「みんなできみをおんぶするんだ。」  
六4210 一列にビルディングをはなれる。かかしが  
六431 ずんでいくお日さまをおつて、町の上を列  
六431 まをおつて、町の上を列車のようにとぶ  
六434 うみや、はたけの上をひとかたまりにな  
六437 こまれていく。それをつつむようにして日  
六447 っつて——ぼくが目をさましたときには、  
六455 「のかかしが、むねをはって、目をむいて  
六455 、むねをはって、目をむいて、たんぽをみ  
六456 目をむいて、たんぽをみわたしている。か  
六502 空。すんだ青さをもちながら、とき  
六507 光る星、ねむりをふらす夜の空。き  
六514 の三人が、かげふみをして遊んでいました  
六516 した。三人は遊ぶのをやめて、空をみあげ  
六516 遊ぶのをやめて、空をみあげました。月は  
六526 けれども、じつと月をみつめてみると、月  
六532 は、両方のいうことをきいていました。  
六535 略。「お月さまをじつとみていてごら  
六537 へ。」でもね、雲をじつとみていてごら  
六539 だなあ。お月さまをみていると雲が動い  
六5310 動いていくし、雲をみているとお月さま  
六541 は、こういて、空をみあげました。よし

六543 といひあつてゐるのをききながら、ふみお  
六545 しばらく枝ごしに月をみていましたが、「へ  
六547 略」と、手まねきをしました。ふたりは  
六549 立って、お月さまを枝のあいだからみて  
六551 。よしおが大きな声をだしました。「略」  
六556 おがねるまえにそとをみると、空はいつの  
六558 みおはさっきのことを思いだして、また、  
六5510 いだにはなくて、木をずっとはずれてしま  
六562 来週から、かべ新聞を発行することにしま  
六566 じゅんにへんしゅうをすることにきめまし  
六568 談しました。手わけをして、やっとなつぎの  
六574 の学級で、かべ新聞を発行することになり  
六576 お知らせしたいことを書きます。みんなが  
六577 なが喜ぶようなことを書きます。みんなの  
六578 んなのしらべたことをはつぷようします。  
六587 。そのひょうしに足をいたため、歩けなく  
六588 くなりました。そこを通りかかった人が、  
六599 です。「空のうた」をしらべてみました。  
六608 、まえにならったのを思いだして書いてみ  
六619 、その日の朝の温度を書きつけましょう。  
六635 かあさんはゆたんぽをいれている。わたし  
六637 でたらいいなあ。手をあらって、しゃぼん  
六637 あらって、しゃぼんを水の上へおいたら、  
六641 にあげたら、あぶくをだしておこった。ど  
六662 づき話の第一かいめを書きます。第二号を  
六663 を書きます。第二号をつくる人たちは、こ  
六663 、このお話のつづきを書いてください。第  
六665 てくください。第三号をつくる人は、またそ  
六665 人は、またそのつづきを書くのです。そのよ  
六668 から、かつてにづきを考えてください。  
六674 うと思つて、山の谷を歩いていきました。

六679 うと、さるは子ぐまをみてこわがつて、「へ  
六683 か、「雪のかたち」を五つばかり、きれい  
六684 写生しました。それを切りとつて新聞には  
六694 大きな、わら半紙を四まいはりあわせた  
六695 ありませんが、これをじょうずにくぎつて  
六703 て、大きな雪だるまを作りました。目もは  
六708 るま、どんなお話をするだろう。「そこ  
六712 雪だるまが、お話をすべいいって、い  
六714 略」「略」。これをきいて、ねえさんは  
六718 よみかき」のところを、ふと思ひだしまし  
六711 なが、なにかお話をしてあげたらどう。  
六722 だるまさんのうたをつくつて、うたつて  
六724 「その日、晩ごはんをたべながら、ごろう  
六724 ごろうはこんなことを考えました。いった  
六7211 「ごろう、なにを考えたんだい。なんだ  
六733 と、とんでもない話をもちだしたので、み  
六743 ありますよ。それを考えたらわかるじや  
六749 略」。こんなことをつづきからつづへと考  
六7510 ところ、まつの枝をつきました。はるえ  
六762 した。はるえはそれを見て、「略」ととき  
六769 たちは動いたり息をしたりするから、生  
六7611 ゆうにそんなことをきいたりして。「へ  
六772 きのうから、それを考えているんです。  
六779 いぬは動くし、いきをするから命がある。  
六7710 は、動いていても息をしないから、命がな  
六781 この考えついたことを話しました。すると  
六784 でも、草でも、命をもっているのだよ。  
六7811 した。ごろうは、息をすることも自分の力  
六7811 分の力ではないことをきいて、なるほどと  
六793 むねのところに手をあててごらんさい  
六795 あなだが、それを動かそうと思つて動  
六7910 た「あさがおの花」を思いだしました。そ

六805 毎日海へでて、魚をとつていらつしやる  
六806 って、鳥やけものをとつていますね。」  
六814 日だけ、私につりをさせてくださいませ  
六824 「あの大きなたいをつつてみたいのです  
六828 と」「このつりざおを持っていくがいい。  
六829 さんはこの弓と矢を持っていらいつしや  
六839 のみことはつりざおをひきあげる。糸がぶ  
六842 まった。大きいのをにがした。あ、つり  
六843 た。あ、つりばりをとられた。どうしよ  
六846 しない。さ、弓矢を返すよ。」  
六851 しわけのないことをしてしまいました。  
六853 みこと「つりばりを魚にとられてしま  
六8511 だいいじなつりばりをなくしてしまふなん  
六875 は、私がいいことを教えてあげましよう  
六883 、きつといいことを教えてくださるでし  
六888 おりのみことは、木をみあげて、  
六891 「木にのぼつて、下をみる。  
六896 でてきて、いどの水をくもうとする。いど  
六897 うとする。いどの水をみて、女「まあ、り  
六8911 るわ。」女の人は木をみあげながら、おじ  
六901 あげながら、おじぎをする。  
六902 が、そのいどの水を一ぱいください。」  
六904 い。」女の人は、水をくんで、ほおりのみ  
六908 面に、海の神がこしをかけていらつしやる  
六916 「では、そのかたをこちらへごあんない  
六917 く、ほおりのみことをあんないしてでてく  
六9110 りのみことは、こしをかける。海の神「あ  
六925 じつは、海でつりをしていたら、つりば  
六926 いたら、つりばりをとられてしまったの  
六929 海の神「つりばりを。」  
六931 ました。そこへ年をとったかたがあらわ  
六937 、海の神「魚どもを、みんなここへよび

六九三 九 「女の人は、魚たちをたくさんつれてでて  
六九三 一〇 くる。女」魚どもをよんでまいりました  
六九四 八 会 のかたのつりばりをとっていったものは  
六九五 一 会 「それでは、たいをちよつとここへよん  
六九六 三 「女の人は、たいをつれてでてくる。た  
六九六 五 会 のかたのつりばりを知らないか。」たい  
六九六 六 会 だから、つりばりをのどにかけまして、  
六九六 一〇 会 どうか、つりばりをとっておやり。」女  
六九七 一 女「はい。」つりばりをとる。たい「あ、こ  
六九七 三 「女の人はずりばりを水であらって、海の  
六九七 一〇 う。」魚たちが合唱をする。みことは、そ  
六九七 一〇 れにあわせておどりをおどる。だいに  
六九八 三 つくえのひきだしをかたづけしていると、  
六九九 七 、ぼくは、この二つをかさねたりべつべつ  
六九九 七 りして、つくえの上をみたりそのけしき  
六九九 八 みたりそのけしきをのぞいたりしていた  
六九九 九 と、おもしろいことを発見した。左の手に  
六九九 一〇 手に、めがねのたまを持て、目から遠く  
七〇〇 二 さまにみえるけしきを、大きくしてみよう  
七〇〇 四 、右の手に虫めがねを持って、のぞいてみ  
七〇〇 四 った。ぼくは画用紙をとりだした。そうし  
七〇〇 四 うして、その一まいをぐるぐるとうまいた。  
七〇〇 六 しに、めがねのたまをはめた。きちんとは  
七〇〇 七 ったとき、また紙を糸できりきりとま  
七〇〇 九 もう一まいの画用紙を、ぐるぐるとま  
七〇一 一 したのは、虫めがねをとりつけた。こうし  
七〇一 四 くはこうひとりごとをいいながら、そとを  
七〇二 四 をいいながら、そとをのぞいてみた。長い  
七〇二 五 みえる。二つのつづをのぼしたりちぢめた  
七〇二 八 でわかる。もっと下をみる。屋根だ。し  
七〇二 九 うじのあいだから顔をだしている。いそい  
七〇三 一 「おかあさんは、目をまるくして、」(略)

六〇三 三 会 おさん。大きな声をして。」(「略。」)ぼ  
六〇三 六 ぼくは、おかあさんをひっぱるようにして  
六〇三 八 して、ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。  
六〇四 二 会 。あ、人がこっちをみている。森の木の  
六〇四 四 るがわるこの望遠鏡をのぞいて楽しんだ。  
六〇五 二 会 。さつきも、「紙をちようだい。」とい  
六〇五 六 、みんなで大わらいをした。弟のことばを  
六〇五 七 をした。弟のことばをまねて、「略。」と  
六〇五 八 会 をまねて、「はなをかむのかい。」とい  
六〇六 一 会 、まねに、「はなをかむ。」ということ  
六〇六 二 略。」ということばを、そのようにいった  
六〇六 四 まだいいわなということばを、さきにいったから  
六〇六 六 、ぼくもひとつまねをしてやろうと思った  
六〇七 一〇 。ぼくは、夜、勉強をすましてから、ひと  
六〇八 九 は、いままで、ものをいうときに、声は  
六〇八 一 一 でないかということを、考えたことがなか  
六〇九 六 「ム」と自分で声をだしていつてみると  
六〇九 七 ぼくは、自分ではなをつまんで、はなのあ  
六〇九 一〇 なた。自分ではなをつまんで、「ナ」と  
六〇九 一〇 でぼくは、思わず声をたててわらってしま  
六〇九 一〇 まくやうて、みんなをわらわてみせるぞ  
六〇九 一〇 こで、あらためて声をだして「ヌ」といっ  
六〇九 一〇 ねんのために、はなをつまんで、「ヌ」と  
六〇九 一〇 しやと思つて、はなをつまんで、「マ」、「メ  
六〇九 一〇 は、「ちがつたかなをならべたもの」ぐら  
六〇九 一〇 一つ一つの音の性質を考えうえで作つた  
六〇九 一〇 うとはちがつた性質をもっているにちがい  
六〇九 一〇 考えると、弟のまねをしてみんなをわらわ  
六〇九 一〇 のまねをしてみんなをわらわてやろうな  
六〇九 一〇 しく思いついたことをみんなに話して、び  
六〇九 一〇 おじさんからたこをいただきます。ま  
六〇九 一〇 がりました。わる口をいったもの、(「略

六〇五 三 会 ら、「ちよつと糸を持たせて。」といい  
六〇五 五 校へあがります。糸を持ったただしちゃん  
六〇五 八 自分もいっしょに首をふりながら、しっか  
六〇五 八 ながら、しっか糸をにぎっています。(「  
六〇五 一〇 、ほんとうは、たこを作るのはじめてで  
六〇五 一〇 へ帰つて、そのたこをみて、作りかたを考  
六〇五 一〇 こをみて、作りかたを考えてみました。材  
六〇五 一〇 のりは、ごはんつぶをよくねると、いいの  
六〇五 一〇 した。はじめに半紙をま四角に切りました  
六〇五 一〇 した。「なんの絵をかこうか。」とい  
六〇五 一〇 しちゃんのを顔をかくことにしました  
六〇五 一〇 した。クレヨンで色をつけ、バックをむら  
六〇五 一〇 で色をつけ、バックをむらさき色にぬりつ  
六〇五 一〇 すじにあわせてひごを切り、小さな紙で上  
六〇五 一〇 紙で上と下とまん中をはりつけました。そ  
六〇五 一〇 ろいろとまげぐあいをしらべ、ちようどい  
六〇五 一〇 うどいい長さにひごを切りました。はりつ  
六〇五 一〇 かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃん  
六〇五 一〇 つかさで、まりなげをししたり、フットボー  
六〇五 一〇 たり、フットボールをししたりして遊びまし  
六〇五 一〇 ん、そのまつかささくれないか。」うさ  
六〇五 一〇 んにみんなまつかさあげようと、話しあ  
六〇五 一〇 なたは、まつかさ一つ一つ、ぽんぽん  
六〇五 一〇 しながら、まつかさを受けとりました。う  
六〇五 一〇 さぎさんは、くるみをひろって、石でわつ  
六〇五 一〇 た。「このくるみを持っていて、山の  
六〇五 一〇 (「略。」「くるみをわっているんだよ。  
六〇五 一〇 は、両手に、くるみをにぎって、おいしそ  
六〇五 一〇 「こんどは、なにをしようか。」(「略。」「  
六〇五 一〇 (「略。」「あなをほつて、トンネルを  
六〇五 一〇 ほつて、トンネルをこしらえて遊ぼうよ  
六〇五 一〇 は、めいめいにあなをはりはじめました。

六126 5 ては、うしろ足で土をはじぎました。  
 六127 3 きな声でじゃんけんをして、おにをきめま  
 六127 4 んけんをして、おにをきめました。おにが  
 六127 5 ました。おにが、目をつぶって、「略。」  
 六127 8 とことトンネルの中を走っていきました。  
 六128 3 ました。おにの足音をきいて、四ひきのう  
 六128 7 たちは、おかしいのをがまんしながら、「ヘ  
 六128 10 ンネルのさか道に足をすべらせて、ころこ  
 六129 4 た。たぬきさんは毛をぬらしてなにかあわ  
 六130 11 しましました。それをみて、たぬきさんは  
 六131 7 まるくならんで、話をしました。「略。」  
 六131 8 会。「こんどはなにをして遊ぼう。」「略  
 六133 5 りと立って、山の方をみあげました。「へ略  
 六134 2 で、うさぎさんたちをつきあげるとい  
 六134 3 会 負けたら、この角を、おつてしまつても  
 六134 9 たところで、あの角をおるなどということ  
 六134 10 とはできません。角をとったところで、な  
 六135 5 」と、元氣のいい声をかけました。五ひき  
 六135 8 ささの中、やぶの中をとんでいきます。の  
 六135 10 きます。のぼりざかを走るの、うさぎさ  
 六136 2 けてはいません。角をふりたてふりたて走  
 六136 9 こりながら、びっこをひきひき、てっぺん  
 六137 5 会。「なんだと、ひとをばかにしている。よ  
 六137 7 さぎさんたちのあとを、どんどん追いか  
 六137 9 さぎさんたちは、谷をわたり、みねを一つ  
 六137 9 、谷をわたり、みねを一つこえました。長  
 六137 10 こえました。長い森をくぐりました。その  
 六138 8 んたちは、そのことをすこしも知りません  
 六138 9 。とらさんは、晝ねをしていたのですが、  
 六139 1 があまりガヤガヤ話をするので、目をさま  
 六139 1 ヤ話をするので、目をさましてしまいまし  
 六139 3 らさんは、そつと首をのぼして、うさぎさ

六139 3 うさぎさんたちの方をのぞきました。五ひ  
 六139 4 ぎさんたちは、あせをふいたり、ねころん  
 六139 5 、ねころんだり、足をもんだりしていまし  
 六139 8 われがねのような声をたてました。うさぎ  
 六140 7 せん。とらさんが手をのぼして、一ひきの  
 六140 7 うさぎさんのせなかをおさえました。うさ  
 六140 10 、神さまにおいのりをしました。そのとき  
 六141 4 会 れたがさきにうさぎをみつけたのだ。あの  
 六141 4 会 けたのだ。あの谷をわたるときに、ちゃ  
 六141 5 会 。そこから、あとをつけてきたのだ。」  
 六141 9 会。「略。」「なにを。」「略。」「ぴき  
 六142 2 さんが、つかみあいをはじめました。上に  
 六142 4 さぎさんたちは、手をつないで、そこをに  
 六142 4 手をつないで、そこをにげだしました。ど  
 六142 7 どんにげました。山を、いくつも、いくつ  
 六143 1 いすきなクローバーをたべました。みつば  
 六143 8 つばちさんのことばを、たいへんありがた  
 七4 7 門のかしの木は、目をさまして、しずかに  
 七4 8 ずかにしんこきゅうをした。「略。」かし  
 七4 10 、子どもたちのことを、まず思うかべる  
 七5 1 会 の子かな。かばんをカチャカチャ鳴らし  
 七5 5 りしながら、光の中をおよいでいたが、こ  
 七5 6 り高くとんで、屋根をこえて、うすべに色  
 七5 8 会 きようは、ぼうしをかぶっているな。赤  
 七5 9 た。「略。」かばんをカチャカチャ鳴らし  
 七6 9 会 。一年生だ。手をつないで校門をでて  
 七6 9 会 手をつないで校門をでていく子ども、か  
 七7 1 会 いく子ども、かたを組んで話しながらで  
 七7 4 会 ったばかりの唱歌を、大きな声で歌って  
 七7 5 会 ども、なんども手をふりながら、先生に  
 七7 7 会 先生にさようならをして走って帰る子ど  
 七7 9 会 ったら、学校の中を、ちよつとひとまわ

七7 9 会 するのだ。ろうかをすうつと通つてみた  
 七7 10 会 みたり、かいだんをトントンあがつてみ  
 七7 11 会 みたり、こうどうをのぞいてみたり、み  
 七8 2 きようもそんなことを考えた。そうじが  
 七8 3 まった。渡りろうかをとる足音がきこえ  
 七8 6 どは、どこもまぶたをとる。すずめが、  
 七8 9 そうに、夕やけの空をながめている。しゅ  
 七9 3 会 同じだ。「わたしをうえてくれた卒業生  
 七9 5 会 こと、きいたことを話したら、いくつあ  
 七10 3 会 向こうの岸へ、船をこいでいく。渡し終  
 七10 5 会 て、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運  
 七10 8 かしの木は、あくびを一つして、しめつぽ  
 七10 8 しめつぽくなつた葉をふるわせ、それから  
 七11 7 じょうずなできばえをみたとき、感心して  
 七11 7 感心して、思わず手をたたきます。このと  
 七11 9 「手」は、てのひらをさしています。「手  
 七11 9 さしています。「手をうつ」の「手」も、  
 七11 9 「の「手」も、「手をあわせる」の「手」  
 七11 10 た、「あさがおに手をやりましょう。」と  
 七12 3 ある、竹や木のことをいいます。「きゅ  
 七12 7 じです。「手ならいをはじめましょう。」  
 七12 9 きの「手」は、文字を書くことをさしてい  
 七12 11 は、文字を書くことをさしていますが、ど  
 七12 11 いふことが、文字を書くことになつてき  
 七13 1 たのでしょう。「手をつくす。」「略。」  
 七13 3 「いますこし、手をはいてみよう。」「へ  
 七13 4 「略。」「新しく手をつけた。」このよう  
 七13 5 さまざまなはたらきをするように、「手」  
 七13 10 さまざまなはたらきをしてくれます。つぎ  
 七13 11 「すばらしいものを手にいれたね。」「へ  
 七14 3 へ。」「そんなに、手をやかせるな。」「略  
 七14 4 せん。」「略。」「腹をたてるな。」「略。  
 七14 10

七151 略。「略」。腹をかかえてわらった。  
 七153 「腹」ということばを、いろいろにつか  
 七153 ろにつかたばあいを、しめたものです  
 七155 す。「略」。「はなをならす」。「略」。「  
 七156 略」。「略」。「口をだすな」。「略」。「  
 七168 略」。「略」。「口をだすな」。「略」。「  
 七183 先生「そんなに実をとっちゃいけない。  
 七185 みのつてから、油をとるんだからね。て  
 七198 もたちは、小さな橋を渡る。男の子四「先  
 七205 ちでは、だいこんを、庭に二十本うえた  
 七206 。そのうち、たねをとるために、一本だ  
 七207 ど、こんな白い花をつけています。」先  
 七213 、どんなかつこうをして、みつをすうか  
 七214 ころをして、みつをすうか、よくごらん  
 七219 んと、ふたりで、本をよんでいる。日曜日  
 七222 で、庭のはたけの中を歩く。兄「すずめが、  
 七223 が、だいこんの葉をみているよ。」ささ  
 七227 、あまり大きな声をだすから、にげちゃ  
 七229 の。」兄「おおむしをさがしにくるのさ。  
 七2210 はるお「おおむしをとって、どうするの  
 七231 すずめ、おおむしをたべるの。」兄「だい  
 七234 てるの。おさらいを早くすませてから、  
 七236 、おおむしのことを、話していたんです  
 七238 いくびんのなっぱを、とりかえしましたか  
 七2310 、おおむしのせわをしよう。はるお、だ  
 七2310 お、だいこんの葉をまいとつてきてね  
 七2311 ぼくは、びんの中をそうじして、砂に水  
 七241 うじして、砂に水をやるから。」はるお  
 七242 おは、だいこんの葉をとってくる。兄は、  
 七243 くびんの中の砂に水をやる。はるお「はい、  
 七244 どうして、葉を砂の中に立てるの。  
 七249 きくなつたおおむしを、新しい葉にうつす

七2411 先生も、おおむしをかつていらつしやる  
 七252 ましたね。たまごをとつてしらべてから  
 七254 ください。日記帳をみながら。」日記  
 七255 ますから。」日記帳をみながら、兄「たま  
 七276 先生は、いいことをおっしゃいましたね  
 七278 ね。」はるお「さなをふしぎそうにみなが  
 七2711 、さつそく、これを写生しておこう。」  
 七289 ぎになったところを書いたのが、よくで  
 七298 しは、かくれみのをきているようなもの  
 七299 だいこんのはっぱを、とりかえてやるの  
 七301 よりさきに、それをみつけた。」そこへ、  
 七304 にいさんに日記をよんでもらつていた  
 七308 げなく、しくびんをみる。兄「おやっ、  
 七310 あさん。」大きな声をたてる。母「どうし  
 七311 。そんな大きな声をだしたりして。」は  
 七319 いえのぐにみどりをととしたような、美  
 七3111 こと。」兄「あの羽をしぼつたら、きれい  
 七321 も、こんなところをみるのは、はじめて  
 七323 じょうね。」兄「羽をふるわせている。」  
 七326 るお「おや、ひげをはやしてる。」兄「ほ  
 七335 ばかりのちようちよを、しくびんからと  
 七337 母は、ふたりの兄弟をながめている。明か  
 七346 る男の人もあり、足をふまれて、おこつて  
 七3410 私は、さぶろうの手をしっかりとにぎり、さ  
 七352 ろうは、だんだん頭を私によせ、おしまい  
 七355 は、ありつた力の力をだして、さぶろうを  
 七355 をだして、さぶろうをかばうように両手を  
 七356 をかばうように両手をつぱりました。家  
 七357 つぱりました。家をでるとき、おかあさ  
 七3511 けあって、さぶろうをつれてきたのでした  
 七372 さぶろうのかたに手をかけて、「略。」と  
 七375 氣よくにこつと、私をみあげました。だれ

七379 。そのとき、ふと上を向くと、私のよこの  
 七3710 両方の手でまどわくをおしています。私た  
 七3711 ばいの力で、すきまをこしらえてくれてい  
 七383 ず、「略。」と、頭をさげました。「略」  
 七386 は、人と人のあいだをかきわけていこうと  
 七387 た。しかし、弟の手をひいているので、ひ  
 七392 、いきなりさぶろうをだきあげ、となりの  
 七395 らいながらさぶろうを受けとつて、つぎの  
 七399 め、さぶろうは、足をちぢめて、心配そう  
 七399 、心配そうに私の方をみていましたが、三  
 七3910 人めと、高いところをメデシンボールのよ  
 七401 、うれしそうに、声をたててわらいました  
 七402 乗客は、高いところを渡つていくさぶろう  
 七402 渡つていくさぶろうを、おもしろそうに、  
 七404 で、さぶろうのあとを追いかけてました。三  
 七407 て、「略。」と、私を手まねきしています  
 七409 ちに、心の中でお礼をいしました。(二)  
 七411 私は、ロ・ロ・を、頭から、首すじか  
 七414 しゅがおこつた。目をさますと、向こうの  
 七416 かけたアコーデオンをだいて、ワルツの曲  
 七416 だいて、ワルツの曲をひきはじめた。汽車  
 七4110 て日本の子もりうたをひきはじめた。ごく  
 七4111 た曲であつたが、旅をしてきた私には、し  
 七424 し、青年は、ひく手をやめないで、いつし  
 七427 けていた。トンネルをでたとき、向こうの  
 七4210 略。」と、大きな声をだした人があつた。  
 七432 たしにちよつと話をさせてください。」  
 七433 は、みんなこの老人をみた。「略。」はく  
 七434 つも心ざしい旅行をしていました。けれ  
 七435 うは、楽しい音楽をきかせてくださる心  
 七436 さんが、楽しい音楽をきかせてくださる心  
 七437 せてくださる心持を、ほんとうにありが

七四三(会) のかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞ  
 七四三(会) かぶつていたぼうしを、そばの人の手に渡  
 七四四(会) つぎつぎと人々の手を渡り、お金がある中  
 七四四(会) で、いくらのお金をそれにくわえた。車  
 七四四(会) れにくわえた。車中をひとまわりすると、  
 七四六(会) は、「ごあいさつをします。」といって、  
 七四五(会) で、ちょっとことを切った。「略。」そ  
 七四五(会) から、老人にぼうしを返した。それから、  
 七四五(会) 「といって、おじぎをした。「略。」これ  
 七四五(会) ちばんとくいな曲を、一曲ひきましよう  
 七四六(会) した。「略。」これをきいて、みんなは、  
 七四六(会) なは、またはくしゅをした。青年は、アコ  
 七四六(会) 年は、アコードオンを、両手でぐつとひろ  
 七四六(会) 、夕ぐれに近いそとをながめた。黄みが  
 七四六(会) い白っぽい道、そこを自轉車に乗って走る  
 七四六(会) っ、アコードオンを黒ぬりのケースにお  
 七四七(会) っ、思っていることを、はっきり書きあら  
 七四八(会) 二回めに書いたのを、くらべてごらん  
 七四八(会) し村の学校としあいをした。これも勝った  
 七四九(会) 動場に整列して、式をあげた。はじめに、  
 七五〇(会) の学校とが、しあいをすることになった。  
 七五〇(会) が、「じゃんけんをして、いいほうのボ  
 七五一(会) いほうのボールをつかうことになった  
 七五一(会) くのほうのボールをつかうことになった  
 七五一(会) 「略。」と、大声をたてる。のこったも  
 七五二(会) ずで、ぼくらは場所をこうたいした。すぐ  
 七五三(会) センターにれんらくをとって、どんどん、  
 七五三(会) のセンターは、ぼくをねらった。ボールが  
 七五四(会) 集まって、終りの式をした。ぼくは、うれ  
 七五四(会) きどきしていた。式をすませてどどつてく  
 七五五(会) のはんたいに、ふでをいれるほど、かえつ  
 七五五(会) 運動場で、たいそうをしています。一年生

七五七(会) 風が、わたしのまえを走っていく。紙が、  
 七五七(会) 紙が、くるくるまをいしてとんでいる。ろ  
 七五七(会) とんでいる。ろうかを曲がったら、ふつと  
 七五七(会) つついている。ほたるを三びき、つかまえた  
 七五八(会) つばめがちゅう返りをした。あさがおの花  
 七五八(会) 花が、ラジオの音楽をきいています。ほそ  
 七五八(会) り。スリッパのへりをひとまわりして、帰  
 七五八(会) いるのかしら。すみをすっている。めじろ  
 七五八(会) しさよ。さくらの花をしらべてみたり  
 七五八(会) どの花も、みんな空を向いている。日がて  
 七五八(会) みんな、おべんとうをたべている。ふえの  
 七五八(会) まっかたで、山のいもをほっている人が二三  
 七五八(会) 。うら山に、みかんを持って遊びにきてい  
 七五八(会) とんほしてある。炭を切る音も小鳥の声も  
 七五八(会) 。(三) 人の顔をちようこくするの  
 七五八(会) つは、はじめ骨組みをこしらえておいて、  
 七五八(会) どでだんだん肉づけをし、しだいに、その  
 七五八(会) 、だいいせきや木材をけずっていく、だ  
 七五八(会) は、ちようど、文章をくわしく書きたすの  
 七五八(会) のやりかたは、文章をきりつめていくのと  
 七五八(会) す。心に思ったことを、はっきりと写しだ  
 七五八(会) うじ、それがすむのをまっていたのか、す  
 七五八(会) じように。ぬまの上を、にわか雨が通る。  
 七五八(会) 、そんな大きな雨をして、子どものよう  
 七五八(会) うまが、水のおいおいをいっている。ぼさぼ  
 七五八(会) うして、ぐるりとわをかけ。いま、まっふ  
 七五八(会) ふたりが、あちこちをみまわしながら、な  
 七五八(会) がら、なにか、ものをさがして歩いてくる  
 七五八(会) たりそろって、遠くをみまわす。甲「砂の  
 七五八(会) たがたは、らくだをにがして、それをさ  
 七五八(会) をにがして、それをさがしていらつしや  
 七五八(会) 思いだすようなふうをして、旅人「そうし

七七八(会) 考える。このようすを、甲乙ふたりがみて  
 七七八(会) しは、そのらくだをみたものではありませ  
 七七八(会) 「ふたりは、また顔をみあわせていたが、  
 七七八(会) たは、そのらくだを、どこかへつれてい  
 七七八(会) あちらで、あかしをたててもらおう。」  
 七七八(会) たりは、旅人の両手をとる。むりにつれて  
 七七八(会) 甲「私どもは、麦をつけたらくだをつれ  
 七七八(会) 麦をつけたらくだをつれて、さばくを通  
 七七八(会) をつれて、さばくを通つていきましたが、  
 七七八(会) おどろいて、方々をさがして歩きました  
 七七八(会) うから、『らくだをにがしたのではない  
 七七八(会) 判官「どんなことを、知っているのかね  
 七七八(会) かた目であることを知っていました。そ  
 七七八(会) 左の足の短いことを、ちゃんと知ってい  
 七七八(会) か。」「甲乙「らくだをぬすんだのは、この  
 七七八(会) どうぞ、おさばきを願ひします。」裁  
 七七八(会) くわかった。」旅人を見て、裁判官「なに  
 七七八(会) ます。私がさばくを旅していますと、砂  
 七七八(会) たのか。」「旅人「草をくいとつたあとをみ  
 七七八(会) をくいとつたあとをみますと、かみきれ  
 七七八(会) 、それなら、荷物をつけていることが、  
 七七八(会) 裁判官「どの、それを、しらべていただき  
 七七八(会) たりが、あの旅人をうたがったのも、む  
 七七八(会) 早くいつてらくだをさがさない。あま  
 七七八(会) 私たちは、うさぎをかうことになりまし  
 七七八(会) ぎと、茶色のうさぎを、かごにいれて持  
 七七八(会) 。私たちで、めかたを計りました。黒うさ  
 七七八(会) (四) 晴 20度 草をやったら、3びきと  
 七七八(会) 。うさぎはどんな草を、いちばん喜んでた  
 七七八(会) げそうとなたねの葉をやりました。4月  
 七七八(会) ん。いつも、どこかを動かしています。  
 七七八(会) うさぎは、にんじんを、とても喜んでたべ



八248 しました。はばたきをして、すつととびた  
 八268 七色の大きなそり橋を音もなく渡って、草  
 八271 には、星のかんむりをつけたむすめたちが  
 八273 に歌ったり、花つみをしたりして遊んでい  
 八275 た。天帝は、あたりをみまわして、なにか  
 八278 たおりひめのすがたを、もとめておいでに  
 八281 び走りだして、草原をよこぎっていつてし  
 八284 た。川岸にそって車を走らせていくと、林  
 八285 中から、はたをおる音がひびいてき  
 八287 が、いっしんにはたをおっていました。そ  
 八291 くに、りっぱなむこをさがしてやろう。」  
 八293 とへで、また馬車を走らせて、天の川の  
 八293 て、天の川の西の岸を通っていらつしやい  
 八294 しにまたがり、ふえをふいてくる、わかい  
 八302 ひとつこの男のうでをためしてみようと考  
 八303 しのしっぽのあたりを一つきおつきになり  
 八307 はおちついて、ふえをふきつつけていまし  
 八309 ぎゅうは、うしの首をかるくポンポンとた  
 八311 った、おとなしく草をたべはじめました。  
 八311 は、やはりふえに心をうばわれていました  
 八316 うれしいので、はたをおることをわすれて  
 八317 で、はたをおることをわすれてしまいまし  
 八321 つづけました。それを見た天帝は、たいへ  
 八322 った、はたおりひめを天の川の東の岸のご  
 八323 しまい、けんぎゅうを西の岸に帰しておし  
 八324 りひめは、毎日をはたをおりながらなまし  
 八325 天帝は、このようすをくらんになって、「へ  
 八326 ぎゅうとあうことをゆるしてやろう。」  
 八3210 うしに乗って、ふえをふいてきました。ふ  
 八334 た銀の川のような光をはなっているように  
 八339 メートルという単位を用いてきよりを計り  
 八339 単位を用いてきよりを計りますが、星のき

八341 、もつと大きな単位をもとにして計ります  
 八344 かってとどくきよりをさしていいいます。光  
 八345 度は、一秒間に地球を七まわり半します。  
 八3410 りません。「光年」を単位として計算しな  
 八361 。夜になって天の川をみると、なんともい  
 八375 ったとくさんこがねを集めようと願ってお  
 八377 こがね色のたんぽぽをつんでくると、王さ  
 八381 宝ぐらの中で、宝物をかぞえておいでにな  
 八403 になりました。着物を着ようとなさいまし  
 八406 いちばん美しい庭をもつことができる。  
 八408 「こんなひとりごとをおっしゃって、そこ  
 八409 の葉や花にみんな手をおふれになりました  
 八411 王さまは、朝ごはんをめしあがろうとなさ  
 八411 した。まずコーヒーをおのみになろうとす  
 八412 わりました。さかなをめしあがろうとなさ  
 八414 になりました。たまごをおとりになりました  
 八431 水と、どちらをえらびますか。」へ  
 八437 は、庭のいけの水をすくって、こがねに  
 八439 そいで庭のいけの水をすくって、王女のか  
 八445 。王さまは、ご病気をなさって長いことお  
 八447 ましたが、いくら手をつくしても、よくお  
 八4410 は、「わたしの病気をなおしてくれたいもの  
 八451 ものには、國の半分をわけてやる。」とい  
 八452 略。」というおふれを、おだしになりました  
 八453 になりました。これをきいて、ちえのある  
 八454 たら王さまのご病気をなおすことができる  
 八455 ができると、相談をはじめました。けれ  
 八456 こへ、王さまの病気をなおすというものが  
 八458 んとうに幸福な人をみつくて、その人の  
 八459 の着ているシャツを王さまにお着せする  
 八461 した。「略。」これをきいて、王さまはた  
 八461 さっそくけらいたちを集めて、「略。」と

八462 とうに幸福なものをさがしてきてほしい  
 八463 して、そのシャツをもらってくるように  
 八4611 けらいたちは、足をばうにしてさがしま  
 八472 んとかして父の病気をなおしたいと考えて  
 八473 と考えて、幸福な人をさがしにでかけまし  
 八478 た。その小屋のそばを通りかかったときで  
 八4710 まって、その声に耳をうけたむけました。「へ  
 八484 。略。」王子は手をうって、「略。」と  
 八492 は、いままでのわけをこの男に話しました  
 八4910 せんから、どこの家をとずねても、みんな  
 八503 こじきのようななりをしました。だれかが  
 八506 そんなまずしいなりをしていても、それで  
 八506 も、それでも、自分をよくむかえてくれる  
 八507 の人のところへ幸福をわけておいでくるつ  
 八509 が、いろいろな家をとずねていきますと  
 八512 が家のまえにいるのをみて、「略。」とた  
 八517 その家の人は、戸をピシャンとしましてし  
 八5110 は、さっそくごめんをこうむりました。こ  
 八522 えに立ったように顔をつきかめて、「略。」  
 八5210 の人はふかいため息をつきました。それか  
 八531 あるにわとりに氣をつけました。まずし  
 八532 のがきて、にわとりをぬすんでいきはしな  
 八534 りは、用心ぶかい声をだして鳴きました。  
 八536 その家でもごめんをこうむりました。こ  
 八545 その方からおむすびを一つにぎってきて、  
 八547 て、「さあ、これをおあがり。」といっ  
 八551 うさは、高いびきをかいて、さも楽しそ  
 八551 さも楽しそうに晝ねをしていました。「幸  
 八556 れるものです。それをうれしく思って、そ  
 八556 て、その家へ、幸福をわけておいていきま  
 八564 にまっすぐな足あとをつけてみようと思っ  
 八567 うにみえるまつの木を目あてにして歩きだ



八五六 について、それに氣をとられて、わきみを  
 八五九 をとられて、わきみをしたあたりが横にそ  
 八五七 だ。しっかり目あてをみさだめて歩いてみ  
 八五四 がある。よし、あれを目じるしにしてやっ  
 八五五 ま歩いてきた足あとをみると、みちがえる  
 八五七 おじいさんにその話をしたら、おじいさん  
 八五八 へいった。山のおねを曲がるたびに、美し  
 八五三 までのぼってきた方をふり返ってみると、  
 八五五 さな汽車が、けむりをはいて走ってくる。  
 八五八 ってくる。みんな手をあげて、「へ略。」と  
 八五八 とつづいて。下をみると、大きな川が  
 八五二 えつけてある望遠鏡をのぞいてみた。する  
 八五九 と思った。そのことを先生に話してみたら  
 八六〇 とりは、長い赤い足をして歩きまわってい  
 八六〇 た。それは、たまごをかえしているのであ  
 八六一 の葉の下で、あたりをみまわした。みどり  
 八六二 へ。」と、ひとりごとをいって、こしをおろ  
 八六二 ごとをいって、こしをおろした。「略。」  
 八六三 よ。なにしろ、水をこわがるのだから、  
 八六四 た。どれ、たまごをみせてごらん。はは  
 八六五 もに、およくことを教えてやるがいいよ  
 八六三 るは、じつとその子をながめた。「略。」  
 八六五 ってこんなすがたをしていない。ほんと  
 八六八 太陽は、ごぼうの上ををらしていた。親あ  
 八六九 あひるは、そのひなをみんなつれて、水の  
 八六六 はひなたちの頭の上を流れたが、すぐにう  
 八六九 。「あのうまく足をつかうようすや、あ  
 八六六 のしせいなのいいのをみてもわかる。これ  
 八六四 それからねこに氣をつけてね。」そこで、  
 八六四 わの鳥が、「あれをみるがいい。あそこ  
 八六四 にいるあひるの子をさ。なんというかつ  
 八六三 れにもわるいことをしないのですから。

八六八 るは、「あの一わをのけたほかは、みん  
 八七〇 のなからわらう口をいわれるばかりでな  
 八七〇 ちめんちょうは、風を受けた船のほのよう  
 八七〇 のほのようからだをふくらませて向かつ  
 八七〇 略。」といって、顔をまっかにしてやつて  
 八七一 ずきまわされ、えさをくれるむすめには足  
 八七一 ひるの子は、かきねをとびこえてにげだし  
 八七二 った。そうして、目をふさいだが、またさ  
 八七二 して、新しいなまをみた。「略。」と、  
 八七二 た。また、ぬまの水をのませてもらいたい  
 八七四 のまわりにまぢぶせをしていた。あしの上  
 八七四 なあひるの子はきもをつぶした。頭をねじ  
 八七四 きもをつぶした。頭をねじ曲げてつばさの  
 八七四 く光っていた。はなをあひるの子のそばに  
 八七五 そばにつきつけて歯をむいた。それからピ  
 八七五 ひるの子は、ため息をついた。「略。」し  
 八七六 ひきつづいて火ぶたをきつた。しばらくし  
 八七六 ら、ようやくあたりをみまわし、それから  
 八七六 きるだけ早くぬま地をにげていった。田や  
 八七六 ていった。田や野原をこえて、どんどん走  
 八七六 すこしあいているのをみつけたので、そこ  
 八七七 た。ねこは、せなかをまるくしたり、のど  
 八七七 まるくしたり、のどを鳴らしたり、火花を  
 八七七 を鳴らしたり、火花をだすことさえできた  
 八七八 かいが、いいたまごを生んだ。おぼあさん  
 八七八 おぼあさんは、それを自分の子のようにか  
 八七八 られた。ねこはのどを鳴らし、にわとりは  
 八七九 ったくちがった考えをもっていた。にわと  
 八七九 えさんは、たまごを生むことができるか  
 八七九 、お願いだから口をださないでほしいね  
 八八〇 まえさん、せなかをまるくしたり、のど  
 八八〇 るくしたり、のどを鳴らしたり、火花を

八八〇 鳴らしたり、火花をだしたりすることが  
 八八〇 いものたちがものをいっているときに、  
 八八〇 ときに思わずその話をした。「略。」と、  
 八八〇 おまえさん、なにを考えているの。」と、  
 八八〇 から、そんなことを考えているのだよ。のど  
 八八〇 えるのだよ。のどを鳴らすか、たまごを  
 八八〇 鳴らすか、たまごを生みなさい。そうす  
 八八〇 ても、水の上をおよぐのは、いい氣  
 八八〇 づてごらん。水の上をおよいだり、もぐつ  
 八八〇 ってさ、ものごとを教えてもらえる人た  
 八八〇 たちのなまこまりをしただもの。それ  
 八八〇 おまえさんのためを思っているのですよ  
 八八〇 すよ。いやなことをいうようだが、それ  
 八八〇 よ。まあ、たまごを生むか、のどを鳴ら  
 八八〇 ぐを生むか、のどを鳴らしたり、火花を  
 八八〇 鳴らしたり、火花をだすことを、せいだ  
 八八〇 、火花をだすことを、せいだして勉強す  
 八八〇 長くてよく曲がる首をもっていた。それは  
 八八〇 ちようはみごとな羽を廣げ、この寒い國か  
 八八〇 あひるの子は、それをみて、ふしぎな氣持  
 八八〇 ひるの子は、水の上を車のようにくるくる  
 八八〇 くるまわり、その首をはくちようの方へさ  
 八八〇 ほどへんな大きな声をだした。あひるの子  
 八八〇 あわせなはくちようをわすれることはでき  
 八八〇 し、いままでにだれをなつかしく思ったよ  
 八八〇 ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。  
 八八〇 ているような美しさをもらったなどと望む  
 八八〇 ないように、水の中をおよぎまわらなけれ  
 八八〇 いように、いつも足をつかっているなければ  
 八八〇 かった。あひるの子をみつめて、木ぐつで  
 八八〇 て、木ぐつでこおりをくだき、うちへつれ  
 八八〇 で、おかみさんは手をたたいておこった。

八八六 十 た。おかみさんは声をはりあげ、火ばしで  
 八八六 十 火ばしであひるの子をうった。子どもたち  
 八八六 十 たちは、あひるの子をつかまえようとして  
 八八三 三 ひるの子は、つばさをばたつかせることが  
 八八四 四 。まえより強く空気をうち、とぶことがで  
 八八四 十 くるようは、つばさをサラサラと鳴らし、  
 八八八 十 らし、かるく水の上をおよいでいた。あひ  
 八八九 一 は、そのみごとに鳥を知っていた。そうし  
 八八九 七 会 ゆうひもじい思いをしたりするよりは、  
 八八九 十 ちょうはあひるの子をみた。そうして、羽  
 八八九 十 みた。そうして、羽をひろげてゆつたりと  
 八八五 五 ながら、水の上に頭をたれた。そのとたん  
 八八八 八 たのうつつているのをみた。それは、ぶか  
 八九〇 八 しさとふしあわせとをかえて喜んで。い  
 八九一 三 だ。いまは、その身をとりまくりつばなも  
 八九一 四 に、しみじみと幸福をさとしたのである。  
 八九一 八 きて、水にパンや麦をなげてくれた。いち  
 八九二 二 。子どもたちは、手をたいておどりまわ  
 八九二 五 てきたパンやおかしをなげてよこした。み  
 八九二 九 略。」というと、年をとったはくちようが  
 八九二 十 一のまえにきて頭をさげた。新しいはく  
 八九三 二 で、つばさの中に頭をかくした。ほんとう  
 八九三 四 たりしたときのことを考えた。それが、い  
 八九三 六 くらやうのまえに枝をたれた。太陽はあた  
 八九三 八 ばさがサラサラと音をたてた。わかいはく  
 八九三 九 は、そのほそ長い首をあげて、心のそこか  
 八九四 三 うは、種もみひたしをしました。品種は、  
 八九四 五 やく3・6dlのもみを、水の中にひたしま  
 八九四 八 らばかりでした。水をいっぱいいれ、ふた  
 八九四 八 いっぱいいれ、ふたをして日かげにおき、  
 八九四 九 におき、ときどき水をとりかえました。こ  
 八九五 二 例 晴 20度 水をとりかえるときにみ

八九六 一 いいので、もみまきをしました。種もみひ  
 八九六 二 した。種もみひたしをしてから、ちょうど  
 八九六 三 はんごになわしろをきめ、そのさかいに  
 八九六 三 そのさかいにしろしをつけた。土をあ  
 八九六 三 しをつけた。土をあまり深くほると、  
 八九六 五 うです。水のすむのをまて、むらのない  
 八九六 六 。ひたさない種もみをまいたところには、  
 八九六 七 には、べつにしろしをつけておきました。  
 八九八 四 ったので、しろかきをしました。いねがよ  
 八九八 五 した。いねがよく根をはって育つように、  
 八九八 五 て育つように、小石をひろい、土のかたま  
 八九八 五 ろい、土のかたまをくだいてこまかくし  
 八九九 二 しろからとったなえをみんなでわけました  
 八九九 二 わけました。あいだを30cmぐらいずつあけ  
 八九九 五 の数のふえるようすをみることにしました  
 八九九 六 がきれないように気をつけましょう。7  
 八九〇 二 がつづいたので、水をやるとうれしそうで  
 八九〇 五 ていきます。5かぶをのこして、ほとんど  
 八九二 四 ができました。田植えをした日から、ちょう  
 八九二 七 ました。ほの1つぶを虫めがねでみると、  
 八九三 二 度 朝、花のようすをみにいきましたら、  
 八九四 一 ねの花のすんだあとをさわってみると、い  
 八九五 一 た。みんな虫とりをしました。いねは、  
 八九五 八 黄色になつておじぎをしています。1かぶ  
 八九五 九 。1かぶのくきの数を数えてみますと、大  
 八九六 一 どは1かぶのほの数をみんなでしらべてみ  
 八九六 四 ぐらいでした。両方をくらべてみて、あま  
 八九六 六 りました。もみの数をしらべてみました。  
 八九六 十 晴 23度 いねかりをしました。いねを根  
 八九六 十 りをしました。いねを根もとからかりとり  
 八九七 四 晴 19度 いねこきをしました。いねこき  
 八九七 四 た。いねこきかきをつかわずに、手でい

八九八 一 ずに、手でいねこきをした人もいました。  
 八九八 一 ぼうのあいだにいねをはさんでこいたらよ  
 八九八 二 んどは、もみとごみをわけました。風のく  
 八九八 三 いのところからごみをふきとばさせます。  
 八九八 四 とばさせます。もみをむしろの上にひろげ  
 八九八 七 。きょうはもみすりをしました。きかいが  
 八九八 八 いたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこす  
 八九八 九 リこすつもみからをはじきました。きれ  
 八九九 二 のこつていたもみを、1日、日光にかん  
 八九九 三 て、すぐにもみすりをしてみました。どん  
 八九九 五 してすぐ、もみすりをするものではないと  
 九四〇 三 一、白い紙に赤い色をぬりますと、明かる  
 九四〇 四 赤い色のそばに黄色をぬりますと、赤い色  
 九四〇 七 かわりに、みどり色をぬってみると、また  
 九四〇 九 かわりに、むらさき色をぬったら、どうなる  
 九四一 二 きのかわりに、茶色をぬったら、どうなる  
 九四一 五 ん。四色、五色と数をましていけば、その  
 九四一 十 の音と、ほかの音とをいっしょにひいてみ  
 九四二 五 トとか、ほかの楽器を、いっしょにあわせ  
 九四二 六 らどうでしょう。音をうまくあわせると、  
 九四二 九 が、さまざまの感じをあらわすのと同じよ  
 九四三 一 も、いろいろな氣持をあらわします。(三  
 九四三 三 ります。このことばを耳にしたり、文字で  
 九四三 四 夜のしずかなけしきを思いだします。この  
 九四三 五 「水」ということばをそえたら、どうい  
 九四三 六 う、どういうけしきを思いだしますか。「  
 九四三 八 の声」ということばを加えたらどうでしょ  
 九四四 一 あって、一つの感じをつくりあげると同じ  
 九四四 六 ちがつた新しい思いをおこさせます。「風」  
 九四四 七 ばに、ほかのことばをつけてみましょう。  
 九四四 九 みましよう。「風」を「朝風」として、こ  
 九四八 十 にいろいろなことばをつけてみましょう。

九 九 一、いろいろなことを組みあわせてみまし  
 九 九 二だと、すぐ心にものを思いうかべることが  
 九 一 〇 二、「劇場音楽の話」をきいた。その中で、  
 九 一 〇 四て、いろいろな心持をあらわすことができ  
 九 一 〇 五た、さまざまな情景を写しだすこともでき  
 九 一 〇 八して、まず、水の音をとりあつかった。水  
 九 一 〇 九あつかった。水の音をたいてあらわすこ  
 九 一 一 三じめに、川の水の音をたいてきかせてく  
 九 一 一 七波のくだけるところをきかせてくれた。ド  
 九 一 一 八にうちよせる波の音をきいているようであ  
 九 一 一 九た。つぎに、風の音をたいた。風といえ  
 九 一 一 一 わしているが、それをたいこであらわす  
 九 一 二 二る風であり、竹やぶを流れてくる風であり  
 九 一 二 三風であり、町の通りを、電線を、はたを、  
 九 一 二 三、町の通りを、電線を、はたを、せんとく  
 九 一 二 三りを、電線を、はたを、せんとく物をふい  
 九 一 二 三はたを、せんとく物をふいている風である  
 九 一 二 六の降ってくるところをあらわしたひびきで  
 九 一 二 六びきである。たいこを、ひくく、こまかく  
 九 一 四 一る。しばいで、ゆめをみていた人が、にわ  
 九 一 四 一た人が、にわかによめをみても、にわか  
 九 一 四 二かに目をさます場面を演ずることがある。  
 九 一 四 二なときにも、たいこをつかう。ゆめからさ  
 九 一 四 四いが、やはりたいこをたたく。音というも  
 九 一 四 五というものは、情景をあらわすばかりでな  
 九 一 四 七のらしい。いい音楽をきいても、それがわ  
 九 一 四 七ないのは、その高さを受けいれるだけの心  
 九 一 四 八けいれるだけの心持をもっていないからで  
 九 一 五 三んどまっているのを、よくみかけます。  
 九 一 六 4が、ならんでいるのをみると、なにかしら  
 九 一 六 6ない日本に、なごりをおしんでいるのかも  
 九 一 六 7とする遠い國のことを、話しあっているの

九 一 六 9がて、九月のなかばをすぎると、つばめは  
 九 一 六 一 〇めは、そろそろ日本をさつていき、十一月  
 九 一 六 一 一もうほとんどがたをみせなくなつてしま  
 九 一 七 3え、子どもがつばめをつかまえました。す  
 九 一 七 4の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞ  
 九 一 七 6ころろみに、しるしをつけてはなしたのも  
 九 一 七 9島々から、さらに海をこえて、遠いオース  
 九 一 八 2には、南ヨーロッパを通つて、遠くアフリ  
 九 一 八 3でもいって、冬ごしをします。つばめは、  
 九 一 八 6ら、なん百キロの海をひといきにとぶのも  
 九 一 九 7て、電話でこのことを知らせてきました。  
 九 一 九 8喜んでつばめのせわをする返事をしました  
 九 一 九 8めのせわをする返事をしました。それと同  
 九 一 九 8でいるつばめのせわをすることを、新聞に  
 九 一 九 一 〇めのせわをすることを、新聞に廣告しまし  
 九 一 九 一 〇いへんなはんきようをまきおこしました。  
 九 一 九 一 一かわいそうなつばめをすくえ。」という運  
 九 二 〇 1にかかつて、つばめを集めていることを知  
 九 二 〇 3めを集めていることを知らせました。  
 九 二 〇 4ました。そのつばめを運ぶのに六台の自動  
 九 二 〇 5さらに二台の自動車を加えました。そうし  
 九 二 〇 7っているつばめたちを運んできました。さ  
 九 二 〇 9おいそぎで、その家をつばめたちのために  
 九 二 一 2うつばめたちは、人をおそれず、へやには  
 九 二 一 2が、五千ばのつばめをつんできました。そ  
 九 二 一 9運ぶために、飛行機をつかうことにしまし  
 九 二 一 一 航空会社では、お金をとらずにつばめを運  
 九 二 一 一 金をとらずにつばめを運ぶことを申しでま  
 九 二 二 1につばめを運ぶことを申しでました。つば  
 九 二 二 1しでました。つばめをのせた飛行機は、そ  
 九 二 二 2のように、アルプスをこえてヴェニスへと  
 九 二 二 5あたたくした貨車を一つつけて送ったほ

九 二 三 2受けて送ったつばめを加えると、十万ばあ  
 九 二 三 7、どんなに高い教養をもっているかを世界  
 九 二 三 8教養をもっているかを世界じゅうに知らせ  
 九 二 三 一 〇かわれたということ、たいへんありがた  
 九 二 四 2ある家のき下で巣をつくったつばめは、  
 九 二 四 4るな方法でこのことをしらべてみますと、  
 九 二 四 7、けつして自分の國をわすれません。日本  
 九 二 四 8たてもたまらず、北をさしてすすむのです  
 九 二 四 一 〇る日本の春の美しさを思いうかべているの  
 九 二 五 3お客の帰ってくるのをまちががれています  
 九 二 五 4りつばめのすがたをみた人は、きつと、  
 九 二 五 六、はじめてつばめをみたよ。」といつて  
 九 二 五 8と帰ってきたつばめをむかえる人の心は、  
 九 二 六 3かやの中 上ばきを自分でつくるわらし  
 九 二 七 2きけり 月の夜をわが家のありしあた  
 九 二 九 一 文 木かな かい道をききちととどぼつ  
 九 三 〇 一 文 し くれていく果をはるくものあお向き  
 九 三 一 6 やみなさんのことを、一日もわすれたこ  
 九 三 一 7 せん。先生のことを思うと、みなさんが  
 九 三 二 2 たり、山へたきぎをとりにつたりする  
 九 三 二 7 ですが、家のまえをちよつとでると、は  
 九 三 四 4 こんのおてつだいをしました。ちよまを  
 九 三 四 5 しました。ちよまを植えた一アールあま  
 九 三 四 9 ートルあまりも根をはっていました。ま  
 九 三 四 一 一 といわれて、ほねをおりました。小さな  
 九 三 五 2 めにやつと、うねを十三本つくりました  
 九 三 五 5 さつまいものなえを、手わけして植えて  
 九 三 六 一 けでした。たきぎをとりにかく山は、ぼ  
 九 三 六 4 岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみずが  
 九 三 六 5 になつて、村の中を通り、田んぼに落ち  
 九 三 六 7 のあいだ、たきぎをせおつて山からおり  
 九 三 六 八 いって、頭から水をあびるのが楽しみで

九三三 じめ、山へたきぎをとりに行くのが、す  
 九三八 ざおのさきにかまをくりつけて、ひっ  
 九三八 にして、下から力をいれてひきおろしま  
 九三八 其の竹ざおにかまをつけてやる方法を知  
 九三九 をつけてやる方法を知らなかったのだ、  
 九三九 ついては高い木をみつけると、兄かば  
 九三九 かばくがのぼる役をひきうけました。八  
 九三九 の上で、なただけをおろすのは気がつか  
 九三九 。上の方のかれ枝をじゅんじゅんにた  
 九三六 落し、足もとの枝をおろして、やっとお  
 九四〇 ばが、「足もとをよくみて、氣をつけ  
 九四〇 をよくみて、氣をつけてね。氣をつけ  
 九四〇 をつけてね。氣をつけてね。」とか、「  
 九四〇 せんでした。なたをふりおろすたびに、  
 九四〇 ら、ぼくはあたりをみまわしますと、は  
 九四〇 湖が半分ばかり顔をみせていました。ま  
 九四〇 た、下の方の山道を、しよいこをつけた  
 九四〇 山道を、しよいこをつけたおとなの人が  
 九四〇 わからないが、下を向いて登ってくるの  
 九四二 ころ、畑のいもをほりおこしました。  
 九四二 こんなした畑のいもをほりおこすのは、樂  
 九四二 みんなでいもほりをしました。大きなう  
 九四二 地われしているのをほりおこすとき、胸  
 九四二 。母やおばがくわをいれるあとから、ぼ  
 九四二 ゆうになつていもをひろいました。こち  
 九四三 三つ落ちていもをみたときは、思わず  
 九四三 ために、母がかわをむいて竹ぐしにとお  
 九四四 。妹は、かきの葉を「略。」といつて  
 九四四 めては、ままごとをして遊びます。母や  
 九四四 ように、かきの葉を「まいまいならべ  
 九四六 りになつていもをみると、いまにもの  
 九四五 ばに、「小公子」をよんでもらいました

九四五 中のことに注意を向けるようにといわ  
 九四五 たパン屋のしごとを、しんけんにやろう  
 九四五 大きくなって農業をするために、いま知  
 九四五 いの家でみならいてしています。「小公  
 九四六 、せんきよのことを話していますけれど  
 九四六 先生、「小公子」をみなさんにお話して  
 九四六 ぼくは、この手紙を数日もまえから、喜  
 九四六 ちらの山々の景色を思い出します。天氣  
 九四七 、めんどろな裁判をしますから、おいで  
 九四七 なさい。とび道具を持たないでください  
 九四八 せんでした。はがきをそつと学校のかばん  
 九四八 まつて、うちじゅうを、とんだりはねたり  
 九四八 う裁判のようすなどを考えて、おそくまで  
 九四八 ども、いちろうが目をさましたときは、も  
 九四九 は、いそいでごはんをたべて、谷川にそつ  
 九四九 、谷川にそつた小道を、上の方へ登つてい  
 九四九 の木はバラバラと実を落しました。いちろ  
 九四九 いちろうはくりの木をみあげて、「略。」  
 九四九 。やまねこがここを通らなかつたかい。  
 九五〇 は、だまつてまた実をバラバラと落しまし  
 九五二 。やまねこがここを通らなかつたかい。  
 九五二 たもとのようにふえをふきつづけました。  
 九五二 テコと、へんな樂隊をやっていました。い  
 九五二 いちろうは、からだをかがめて、「略。」  
 九五二 。やまねこがここを通らなかつたかい。  
 九五二 た。いちろうは、首をひねりました。「略  
 九五二 テコと、へんな樂隊をつづけていました。  
 九五二 くるみの木のこずえを、りすが、ぴよんぴ  
 九五二 手まねきして、それをよびとめて、「略」  
 九五三 。やまねこがここを通らなかつたかい。  
 九五三 の上からひたいに手をかざして、いちろう  
 九五三 かざして、いちろうをみながら答えました

九五五 いちろうは、その道を登っていきました。  
 九五五 た。いちろうは、顔をまっかにして、あせ  
 九五五 まっかにして、あせをほとほと落しながら  
 九五五 落しながら、その坂を登りますと、にわか  
 九五五 つこの男が、ひざをまげて、手に皮のむ  
 九五五 げて、手に皮のむちを持って、だまつてこ  
 九五五 て、だまつてこちをみていたのです。い  
 九五六 あなたはやまねこを知りませんか。」す  
 九五六 横目でいちろうの顔をみて、口を曲げて、  
 九五六 ろうの顔をみて、口を曲げて、にやつとわ  
 九五七 も、どうしてそれを知っていますか。」  
 九五七 それなら、はがきをみたらう。「略」。  
 九五七 略。」と、男は、下を向いて、かなしそ  
 九五七 。男は、喜んで、息をハアハアさせて、耳  
 九五七 になり、着物のえりを廣げて、からだに風  
 九五七 廣げて、からだに風をいれながら、「略」  
 九五七 らいだしながら返事をしました。「略」。  
 九五八 、男はまたいやな顔をしました。「略」。  
 九五八 ろうは、おかしいのをこらえて、「略」。  
 九五九 いていねいなおじぎをしました。いちろう  
 九五九 んばおりのような物を着て、みどり色の目  
 九六〇 着て、みどり色の目をまんまるにして立っ  
 九六〇 、やまねこは、ひげをびんとひっぱつて、  
 九六〇 んとひっぱつて、腹をつきだしていいまし  
 九六〇 、あなたのお考えをうかがいたいと思  
 九六〇 おのはねるような首をききました。びっく  
 九六〇 はみんな赤いズボンをはいたどんぐりで、  
 九六二 い、さあ早くベルを鳴らせ。きょうは、  
 九六二 、そこんこの草をかれ。」やまねこは、  
 九六二 こしから大きなかまとりだして、ザック  
 九六二 のまえのところの草をかりました。そこへ  
 九六三 は、こんどは、すずをガランガラン、ガラ

九六三 七 い、長いしゆすの服を着て、どんぐりども  
 九六三 八 、こんどは、草むらをむちで二三べん、ヒ  
 九六三 一〇 げんになかなおりをしたらどうだ。」や  
 九六五 七 か、まるではちの巣をつついたようで、わ  
 九六五 九 いかましい、ここをなんと心える。しず  
 九六五 一〇 ぐ。ぎよしやがむちをヒユパチツと鳴ら  
 九六五 一一 まねこはぴんとひげをひねっていいました  
 九六六 三 げんになかなおりをしたらどうだ。」す  
 九六六 一七 いかましい。ここをなんと心える。しず  
 九六七 二 「ぎよしやが、むちをヒユパチツと鳴ら  
 九六七 三 。やまねこが、ひげをひねっていいました  
 九六七 五 げんになかなおりをしたらどうだ。」「い  
 九六七 八 いかましい。ここをなんと心える。しず  
 九六七 九 ぐ。ぎよしやがむちをヒユパチツと鳴ら  
 九六八 一〇 しゆすの着物のえりを開いて、黄色のじん  
 九六八 一一 、黄色のじんばおりをちよつとだして、ど  
 九六九 七 は、黒いしゆすの服をぬいで、ひたいのあ  
 九六九 八 いで、ひたいのあせをぬぐいながら、いち  
 九六九 八 がら、いちろうの手をとりました。ぎよし  
 九六九 九 で、五六べん、むちをヒユパチツ、ヒユ  
 九六九 一〇 ほどのひどい裁判を、まるで一分半でか  
 九七〇 九 合と書いて、こちらを裁判所としますが、  
 九七一 二 うに、しばらくひげをひねって、目をばち  
 九七一 二 ひげをひねって、目をばちばちさせていま  
 九七一 一〇 うに、しばらくひげをひねったまま下を向  
 九七一 一〇 げをひねったまま下を向いていました。が、  
 九七二 七 合した。「どんぐりを二リットル早く持つ  
 九七二 九 、さっきのどんぐりをますにいれて、はか  
 九七三 二 くのびがあつて、目をつぶって、半分あく  
 九七三 三 ぶって、半分あくびをしながらいいました  
 九七三 四 合早く馬車のしたくをしろ。」白い、大き  
 九七三 一〇 やはどんぐりのますを馬車の中にいれまし

九七三 一一 パチツ。馬車は草地をはなれました。木や  
 九七四 二 、こがねのどんぐりをみ、やまねこは、と  
 九七四 四 ぼけた顔つきで遠くをみていました。馬車  
 九七五 一 のまえに、どんぐりをいれたますを持つて  
 九七五 一 ぐりをいれたますを持つて立っていました  
 九七六 四 ベルや移植ごてなどを持って、角のむきみ  
 九七六 六 たりで、せつせと目をこじあけて、むきみ  
 九七六 七 こじあけて、むきみをつくっていました。  
 九七六 八 に、はこやかごなどをせておいでになり  
 九七七 二 合うやつて、人は目をたべています。むか  
 九七七 四 合ことだが、貝などをおもにたべていたと  
 九七七 五 合しい。その貝がらをすてたところが、き  
 九七八 七 合は、このかたの畑をすこしほらせてもら  
 九七八 九 、ふごや、かごなどを持つてきて、かして  
 九七八 一一 と、先生はステッキを深く土の中へお立て  
 九七九 九 合の骨や、角などを、ここへすてました  
 九七九 一〇 合た。それで、ここをほると、そういうも  
 九八〇 五 合ありそうなどころをほってみます。」「へ  
 九八〇 九 合ぐあいよくなにかをほりあてた方がいいが  
 九八一 一 合こか一つのところをきめて、廣く深くほ  
 九八一 一一 「口々にこんなことをいうのを、先生は、  
 九八一 一一 こんなことをいうのを、先生は、耳にもお  
 九八二 二 合くらは、ときどき手をとめて、そこをのぞ  
 九八二 二 合き手をとめて、そこをのぞきにいつてみる  
 九八四 六 合だれもかれも、あせを流し、顔をまっかに  
 九八四 六 合も、あせを流し、顔をまっかにしてほつて  
 九八四 八 合た。みんなはほる手をとめました。〔略〕  
 九八四 一〇 合いろいろなことを知っているとと思いま  
 九八五 一 合しかの角などに手を加えて、なにかの道  
 九八六 一 合う。」「もう、むだ口をきく人は、ひとりも  
 九八六 六 合れませんでした。「かごをこのリヤカーにつみ  
 九八六 六 合。それから、道具を集めて、めいめい持

九八六 九 わるがわるリヤカーをおして歩きました。  
 九八八 三 合〔略〕。」「けんかをとめる声がつづく。  
 九八八 六 合れにわかれてふたりをひきとめている。一  
 九八八 九 合だい。」「と、たかぎをにらみつける。たか  
 九八八 一〇 合、つかまれている手をふりはなそうとする  
 九九〇 一 合がく。みんなでそれをおしとめる。」「も  
 九九〇 四 合帰ろうよ。」「やまだをかこんでいる友だち  
 九九〇 六 合たち、やまだくんをつれていけよ。」「六  
 九九〇 七 合「うん。」「やまだの手をひっぱって、〔略〕  
 九九〇 一一 と、やまだのせなかをおしながらさる。そ  
 九九一 二 合だのかばんやぼうしをひろつてあとにつづ  
 九九一 三 合、たかぎの落した物を集める。三たかぎ  
 九九一 五 合たかぎの服のほりをほらいながら、〔略〕  
 九九一 八 合ゆうにつかみあいをはじめるんだもの。  
 九九一 一一 合。」「友だち、たかぎをかこみながらさる。  
 九九二 五 合「でとまる。うしろを向いてじゃんけんを  
 九九二 六 合を向いてじゃんけんをする。こんどは負け  
 九九二 一一 合る。またじゃんけんをする。こうして、ふ  
 九九三 一 合じゅんじゅんに舞台をさる。しばらく、間  
 九九三 二 合し物のようすで地面をみながらでてくる。  
 九九三 四 合イドの三角じょうぎをひろいあげる。しか  
 九九三 四 合ではないので、それを舞台のおくにあげす  
 九九三 九 合のうちに新しいすみをひろいあげるが、自  
 九九三 九 合いので、なおあたりをさがしている。そこ  
 九九四 一 合わざと知らないふりをしてる。たかぎ  
 九九四 一 合ま、たかぎの手もとをみている。さがして  
 九九四 九 合、だまつたままそれととりあげる。そうし  
 九九五 二 合るが、舞台はして足をとめる。やまだわ  
 九九五 三 合わざとたかぎの顔をみないようにして、  
 九九五 四 合て、「きみはなにをなくしたんだ。」た  
 九九五 六 合ちよつとやまだの方をみるが、返事をしな  
 九九五 六 合の方をみるが、返事をしないでさがし物を



九二六 三 な谷川がある。そこをくんで飲んでみると  
九二六 五 った。そこで、谷川をさらにさかのぼると  
九二六 七 った。茶人は、そこをほりくぼめ、小石で  
九二六 七 くぼめ、小石でどてをつくり、泉をくんで  
九二六 七 どてをつくり、泉をくんでつれの茶人と  
九二六 八 と木のあいだに、巢をかけました。「略」  
九二九 三 もは、その子もり歌を耳にしながら、光る  
九二九 三 にしながら、光る星をみあげていました。  
九二九 五 きつとなつてその方をみつめました。あぶ  
九二九 五 ました。あぶが、足をひっかけて、ブンブ  
九二九 八 力いっぱい羽ばたきをして、すいとにげて  
九二九 九 、あみに大きなあなをあけてしまいました  
九二九 一〇 ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもは  
九二九 一〇 は、やぶれたところをつくろいかけました  
九三〇 一 」。と、くもは、足をふんばって身がまえ  
九三〇 二 ふんばって身がまえをしました。星はだん  
九三〇 五 くもが、じいっと息をころして待っている  
九三〇 五 ばちは、くものあみを知らないで、まっす  
九三〇 六 くもは、ふといつなをとりにだして、みつば  
九三〇 六 、みつばちのからだをしぼりつけようと  
九三〇 六 つばちは、そのつなをさけてにげようと  
九三〇 六 つばちはだいい針をだして、くもをねら  
九三〇 六 な針をだして、くもをねらって、ちくりと  
九三〇 六 、みつばちは、つなをほいて、あみをく  
九三〇 六 なをほいて、あみをくい切って、にげて  
九三〇 六 ばちのうしろすがたをみていましたが、く  
九三〇 六 した。しばらく、目をつぶってしずかに  
九三〇 六 略」。思わずそちらをみると、くもりは  
九三〇 六 ようきななかつこうをして、こちらにとん  
九三〇 六 のです。いいにおいのかいであると、いつ  
九三〇 六 」。くもは、長い手をのばして、わけなく

九三4 なく白いちようちよをとらえました。大き  
九三5 えました。大きな口をあいてたべようとし  
九三6 ん——くもは、首をねじって上の方をみ  
九三7 首をねじって上の方をみあげました。いま  
九三8 〽。「おかあさんをさがしてくるのです  
九三9 あさんといふことばを、長いこと耳にした  
九四〇 うか、おかあさんをさがしにきたいの  
九四一 しも、おかあさんをみたくなったよ。」「  
九四二 くもは、ちようちよを手ばなしました。」「へ  
九四三 にもたべないことをちゃんと知っていま  
九四四 。だから、わたしをたべてもいいと思つ  
九四五 もう、おかえさんをたべやしないよ。」「  
九四六 「それまで、命を助けておいてくださ  
九四七 は、うれしそうに羽をととのえました。そ  
九四八 れから、まっ白な羽をひろげたかと思うと  
九四九 んでいくちようちよをみ送りながら、「略  
九五〇 〽。」と、ひとりごとをいいました。くもは  
九五一 がつき、また、あみをかけようと考えまし  
九五二 れで、そのまま手足をちぢめて、じっとす  
九五三 略。」「くもはからだを小さくまるめて、こ  
九五四 横になりました。目をつむると、だれかが  
九五五 だれかが、くもの頭をなでています。上を  
九五六 をなでています。上をみると、わらってい  
九五七 くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげ  
九五八 おまえは、わたしをわすれたのかい。」「  
九五九 きいて、くもは、手をうんとのぼして、と  
九六〇 まみたばかりのゆめを、なんともなげとも  
九六一 、なんといつて返事をしていかわからな  
九六二 それから、いいゆめをみることもできた。  
九六三 花のやさしいことばをきくこともできた。  
九六四 もは、これらのことを一つ一つ思いだして  
九六五 んとしずかなくらしをしているのだらう。

九四七 とおだやかなくらしをしているのだろう。  
九四八 とあらっばいくらしをしていることだろうか  
九四九 、なんとひどいことをしてきたものだろう  
九五〇 は、そつと自分の手をのぼし足をのぼして  
九五一 自分の手をのぼし足をのぼしてみました。  
九五二 ら落ちてくる夜つゆをみていると、風がふ  
九五三 はさまれたまま、空をとんでいきました。  
九五四 表畑らしい土地の上をとびました。湖の岸  
九五五 びました。湖の岸べをとびました。深い森  
九五六 した。深い森のそばをとびました。夜明け  
九五七 〈略〉。」そんなことをくもは思いました。  
九五八 。高い木が大きく枝をはって、わかめをだ  
九五九 枝をはって、わかめをだしかけたこずえの  
九六〇 が、かすかに耳もとをすぎます。耳をすま  
九六一 耳もとをすぎる。耳をすまずと、なにか、  
九六二 だ、その美しいものを、すなおに感じとる  
九六三 すなおに感じとる心を、われわれは失って  
九六四 だしさの中に、それを失っている。しかし  
九六五 も、その美しいものを、すなおに感じとる  
九六六 すなおに感じとる心を、もちづづけたいも  
九六七 なにでも毎日の生活を、ゆたかに、楽しく  
九六八 ないのです。日本人をみたことがない子ども  
九六九 なが通るたびに、目をまるくしました。お  
九七〇 んの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけ  
九七一 に、おとうさんの顔をのぞきこむようにし  
九七二 ましたので、子どもをさせて通ったことも  
九七三 もたちが、なわとびをして遊んでいたりと  
九七四 と、そのなかまいりをして、なわをまわし  
九七五 まいをして、なわをまわしてやったこと  
九七六 は、道でおとうさん呼びとめて、「〈略〉  
九七七 は、「日本人、くりをおあがり。」とい

十八〇

19 5 も、こんなに親しみをもちことができるも  
 10 3 という川が、その下を流れていました。岸  
 10 11 人の少女は、その葉をひろい集めて、橋の  
 11 2 しかけて、コーヒーをわかしもらって  
 11 7 のすきそうなおかしを、一ふくろやったの  
 11 10 ひろい集めた落ち葉を持ってきて、おと  
 12 2 園るべく、小さな葉をくれませんか。」と、  
 12 3 ら、少女たちは、手をとりあってとんでい  
 12 4 でいて、小さなをえらんで、ひろって  
 12 6 て、さまざまなことを話しかけたり、わら  
 12 10 少女が、おとうさんをみてそういました  
 12 11 といっしょにお話をしてくれ。ちょう  
 12 12 年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の  
 13 4 、三人の少女に、歌を歌ってほしいと頼み  
 13 5 きた小歌のあることを、おとうさんは、き  
 13 8 おいてあるテールをかくんで、いなかの  
 13 8 こんで、いなかの歌を歌ってきかせてくれ  
 14 2 んぐいのようなものをかぶった女のたち  
 14 3 、ならんでせんたくをしていました。フラ  
 14 9 ばへきて、あいさつをしてから、「略。」  
 15 5 しょうじきにその答をしましたら、少年は  
 15 6 、さらにこんなことをいしました。「略。」  
 15 9 、おとうさんが、力をいれて答えました。  
 16 1 、日本の海の美しさを、思いうかべるよう  
 16 2 ら、自分の國のことをきかれたときは、お  
 16 7 國ではどんなことを話すかとたずねるも  
 16 9 園 イギリスのことを話すよ。」と、おと  
 17 9 園 とばのありがたみを知りました。おまえ  
 17 10 園 な心にも、ことばを愛することを知って  
 17 10 園 とばを愛することを知って、勉強したら  
 18 10 園 その下で、雨やどりをしているにわたりの  
 19 3 園 る。「ことばの愛」を読んでいる声が、き

19 4 子どもが、立って本を読んでいる。友だち  
 19 6 の愛」のつぎの一節を読んでいる声がきこ  
 19 8 すわったまま、点字を読んでいる。ほかの  
 19 9 、すばやく点字の上をすべっていく。7  
 19 11 がひびいてくる。窓をあける女の先生。「へ  
 20 3 いる。「にじの歌」を歌う子どもの声。9  
 20 6 園 リズムでわけた光を写してみますよ。」  
 21 2 ゆれている。その下を、あひるがならんで  
 21 4 くる。母親が、両手をのばしてついでくる  
 21 6 き。看護婦がもうふをほしている。男の子  
 21 9 略。」窓に花のはちをおきながら、「略」  
 21 11 ながら、「略。」窓をのぞく子どものはれ  
 22 3 は、水えのぐで写生をしている。光る白い  
 22 8 といっしょに種まきをしている。きれいに  
 22 10 たがやされた畑。田をならしている農夫。  
 22 11 とりの友だちは、妹をつれて、つみの上  
 22 12 つつみの上でつみ草をしている。「春の小  
 23 5 、「こくご」の文を大きな声で歌う。自  
 23 6 たりづれでなの花畑を横ぎる。16 ひとり  
 24 2 風景。エレベーターをあやつる大きな車輪  
 24 3 っている。トロッコをおして、炭坑にはい  
 24 6 くんが機械やつるはしを持って、石炭をほ  
 24 7 はしを持って、石炭をほっている。19 あ  
 25 3 とりの工員がしごとをすませて、坑内から  
 25 3 しい日光。22 坂道を、ゆっくりとした足  
 25 6 立ちどまって、両手をひろげて深呼吸。23  
 25 9 「と呼ぶ声。その声をきいて、にっこりと  
 25 11 くる。工員は男の子をだきあげる。ふたり  
 26 5 しそうな顔。日の光をいっぱい受けた。  
 26 7 んだ「自然の観察」を、ずっとつづけてい  
 27 3 のまわりにあるものを、よくしらべてみる  
 27 6 らべてみる心がまえを、つくりたいと思

27 8 、羽の色や、形などを、こまかにしらべた  
 27 10 、実のなりかたなどを、たんねんにみよう  
 27 11 た、くもがのきに巣をかけることがあれば  
 28 1 、巣のはりかたなどを、しらべておきたい  
 29 1 園 私は、同じものをみるにしても、どう  
 29 2 なったかということ、考えてしらべたい  
 29 4 このようなあみかたをしなければならなか  
 29 6 。また、一つの和音を耳にしたときは、組  
 29 10 たいのです。もようをみたときには、その  
 30 1 たっているか、それをさがしてみようと思  
 30 3 なったか、そのわけをよく考えていってみ  
 30 4 も、そのものとをくらべていくような  
 30 5 ていくような心がけを、もちたいと思いま  
 30 8 、弟たちのめんどろをみてやり、兄や姉の  
 30 11 人たちに、めいわくをかけないようにした  
 31 6 。かげで人のわる口をいわないようにした  
 31 7 っているいいところを、えんりよしないで  
 31 8 友だちのいいところを、すなおに学んでい  
 31 9 いと思います。自分をえらそうにみせかけ  
 31 9 にみせかけたり、人をだましたりしないで  
 31 11 りっぱにそのつとめをはたし、自分ひとり  
 32 1 な、ひきょうな考えをもちたくはありません  
 32 2 いひとりであることを、ほこるようになり  
 32 5 体、というつながりをわすれないで、あい  
 32 5 ないで、あいての人をうやまうとともに、  
 32 6 もに、自分のつとめをはたすだけの勇氣を  
 32 6 をはたすだけの勇氣を、もちたいと考えま  
 33 1 、父の木工のしごとを助けてはたらい  
 33 2 園 あれば、機械のことをしらべつづけてい  
 33 3 園 あつかいにされるのをみて、父は、「略」  
 33 4 園 れだ。ほかのことを考えないで、みっち  
 33 5 園 、みっちりしごとをやってくれ。」とさ



十 33 7 で、父は、佐吉の心をいれかえさせるため  
 十 33 8 させるために、佐吉をよその大工の家に  
 十 33 9 いだに立って、佐吉をはげましたり、なぐ  
 十 33 12 のであるから、ぬのを織るしごと、けつ  
 十 34 1 うなぬのの織りかたをしていたのでは、や  
 十 34 3 のうちに、早く織機を進歩させておかなけ  
 十 34 5 佐吉が、はじめに目をつけたのは、ぬのを  
 十 34 5 をつけたのは、ぬのを織るとき、たて糸の  
 十 34 6 き、たて糸のあいだをぬっていく横糸であ  
 十 34 7 るのであるが、これを人の手によらず、機  
 十 34 11 ていったが、小学校をでただけのかれには  
 十 35 4 、そのりっぱな機械をみて、感心すると  
 十 35 7 図。日本のゆくすえをどうするのか。」佐  
 十 35 8 れなくなり、設計図をひいては組みたて、  
 十 35 12 らという一台の機械を作りあげた。これも  
 十 36 3 くる。かれは、勇氣をふるいおこして、夜  
 十 36 4 ままでの失敗のもとをとりのぞいて、新し  
 十 36 4 いて、新しい設計図をこしらえあげた。そ  
 十 36 7 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく  
 十 36 8 、ふしぎな機械に目をみはりながら、「略  
 十 36 11 運轉の日、その織機をあやつって、りっぱ  
 十 36 12 っ、りっぱにぬのを織ってみせたのは、  
 十 37 3 ず、すぐ、動力機械を作ることにとりかか  
 十 37 8 れほど大きな役わりをはたすことであらう  
 十 37 10 図 される眞珠、これを、人工で作りますこ  
 十 38 2 「一つぶの天然眞珠をてのひらにのせて、  
 十 38 2 のせて、大きなゆめをえがいていた、ひと  
 十 38 10 図 ある。「このわけをあてはめれば、自分  
 十 38 12 眞珠貝の研究に全力をつくした。このわか  
 十 39 3 図、母貝の中に、核をさしいれることがで  
 十 39 5 、あわつぷほどの核をこしらえて、それを  
 十 39 6 をこしらえて、それを、母貝の体内にさし

十 39 11 ち、母貝は、その核をそとにはきだして、  
 十 39 12 なかった。また、核をさしいれたために死  
 十 40 3 っていた。同じことをなんどもくり返して  
 十 40 4 はない。しかも、核をさしいれてから、眞  
 十 40 7 は、幸吉のむだばねをあざけり、そのゆめ  
 十 40 8 のゆめのような考えをわらった。まわりの  
 十 41 1 、失望にしずむ幸吉を、なんどもはげまし  
 十 41 6 かれは、新しく母貝を求めてきて、やりな  
 十 41 7 はげしくなり、かれを氣がいとよび、や  
 十 41 9 たてとなつて、幸吉をかばい、苦しみにた  
 十 41 10 にたえて、なん年かをすごした。あるとき  
 十 41 11 、うめが、母貝の中をしらべているうちに  
 十 41 11 一つの半円形の眞珠を発見した。これは、  
 十 42 9 ので、ひとまずこれを加工して、かざり物  
 十 42 11 になった。この光明を喜んだのもつかのま  
 十 42 12 ったうめが、この世をさつてしまった。そ  
 十 43 4 。研究のため、死貝を一つ一つ、ていねい  
 十 43 9 ようになつて、死貝をどんどんみていった  
 十 44 1 れは、五つぶの眞珠をいまはなきうめのれ  
 十 44 2 ささげて、その成功をしらせた。そのころ  
 十 44 4 みにも負けず、研究を重ねたすえ、ついに  
 十 44 4 ねたすえ、ついに核をさしいれるときに、  
 十 44 5 母貝のがいうまくを切り取ってきて、一  
 十 44 6 てきて、一種の手術をほどくことを発見  
 十 44 6 手術をほどくことを発見した。「略。」  
 十 44 8 略。幸吉は、自信をもって母貝を海中に  
 十 44 8 、自信をもって母貝を海中にはなつた。さ  
 十 44 10 った。幸吉は、望みをかけた第一の母貝を  
 十 44 10 をかけた第一の母貝を開いてみた。はたし  
 十 44 12 。第二、第三と母貝を開いていくと、どれ  
 十 45 3 シア湾、セイロン島をはじめとして、オー  
 十 46 2 いたエジソンのもとをたずねて、養殖眞珠

十 46 2 殖眞珠のつくりかたを、こまごまと話した  
 十 46 10 図 た。あなたが自然をあいてとして、眞珠  
 十 46 10 図 いてとして、眞珠を世界の人人にあたえ  
 十 46 11 図 とに、心から敬意をささげます。養殖眞  
 十 46 12 図 い、あなたの光明を太陽とするならば、  
 十 47 6 二年三月月になる妹をつれて、さんぽにで  
 十 48 3 、道ばたにあるものを、なんでもみつくて  
 十 48 9 のいつていることばを、紙きれに書きとめ  
 十 49 11 そのときのいきさつを知っている私には、  
 十 50 6 黒いぬは、まえ足をあげたかと思うと、  
 十 50 6 かと思うと、その足をなめたので、妹はび  
 十 50 8 。いぬは、うしろ足をもちあげて、せなか  
 十 50 8 もちあげて、せなかをかくようなかつこう  
 十 50 9 かくようなかつこうをしました。「クツチ  
 十 50 9 ツケルヨ」は、足をせなかに「略。」  
 十 50 11 しやみのようなことをして、「フツ」と息  
 十 50 11 して、「フツ」と息をはきました。妹は、  
 十 50 12 テ」と、ひとりごとをいきました。母がこ  
 十 51 2 えてくださったパンを、ふくろからとりだ  
 十 51 5 。いぬは、まばたきをしたりで、そのパ  
 十 51 6 たきりで、そのパンをたべようとしません  
 十 51 12 、くるつと、うしろを向いてしまったわけ  
 十 52 2 チャン」と、こちらを向かせようとしたり  
 十 52 5 さんが、あかちゃんをおんぶして、そばを  
 十 52 6 をおんぶして、そばを通りました。みると  
 十 52 9 ます。そのとき、私をふり向いて、「ゴメ  
 十 52 10 と、おとなびたことをいきました。門から  
 十 52 12 道にでたとき、あとをふり向きました。す  
 十 53 5 ちいち、いぬの動作をことばにして喜びま  
 十 53 6 かけていたすいとうをはずして、手に持つ  
 十 53 8 のだと、ませたことをいって、歩きだしま  
 十 54 1 つかまって、水の中をのぞきました。きん

十545 タノ」は、そのことをいいあらわしています  
 十547 道のわきで、たき火をしていました。その  
 十5410 た、いろいろなものをながめるのです。わ  
 十553 、ふと、こんなことを考えました。新し  
 十5511 なにげなく妹の作文をみました。なんと、  
 十563 した。かいこが、皮をぬいで新しく成長し  
 十564 ままでの作文のからをぬぎさって、新しい  
 十568 遊び時間にふくろうをみにいきました。そ  
 十569 、ふくろうのからだを手でいじりました。  
 十5610 た。ふくろうは、目をくりくりさせて、と  
 十584 っ、いちようの葉をたくさん落してくだ  
 十5812 。私は、のこったのをおし葉にしました。  
 十594 ㊦ さんが、「ごはんをたべてから、すすき  
 十594 ㊦ べてから、すすきを取っておいで。」と  
 十596 っしゃった。ごはんをたべてから、山の方  
 十599 。えんがわにつくえをだして、その上にす  
 十5911 て、その上にすすきをかざった。月がでて  
 十603 さんが、あかちゃんをだっこして、おもて  
 十608 いて、月の方へ手をやったら、あかちゃ  
 十612 いて、せいくらべをししたら、はなのこ  
 十613 っても、せいくらべをしますよ。もう、た  
 十616 けのこは、私のせいをすぎて、おにいさん  
 十623 、二階の窓からそとをみたら、大きな竹が  
 十628 はんは、能というものをみたことがあります  
 十628 とがありますか。能を知らない人でも、お  
 十631 うたいになるうたいを、きいたことがある  
 十632 て、役者が美しい舞を舞ったり、さまざま  
 十632 、さまざまなしぐさをしたりするものです  
 十636 いやべにでけしょうをして、その役らしく  
 十637 て、その役らしく顔をこしらえあげるので  
 十638 能のほうでは、めんをつけます。おじいさ  
 十646 っているこのよい藝術を味わうことを、喜ぶ

十646 い藝術を味わうことを、喜ぶだろうと思  
 十648 れます。狂言はめんをつけません。そうし  
 十648 して、能が、美しさを現わそうとするのと  
 十6410 いてもよく、それをみていると、世の中  
 十653 だんなのねこかぶりをあべいたり、いたず  
 十653 ばいたり、いたずらをしたり、また、とん  
 十654 、とんでもないへまをやったり、だまされ  
 十655 人間のしそうなことを、なんでもやります  
 十656 うかといつて、なにをしてもにくまれな  
 十659 ました。おかみさんをもらえば、くらしに  
 十6510 お金がかかり、着物をきせたり、おこづか  
 十6511 せたり、おこづかいをやったりしなければ  
 十664 ㊦ 男に、「よくるすをするのだぞ。」とい  
 十6611 と次郎かじやは、声をそろえて返事をしま  
 十6611 、声をそろえて返事をしました。そんなお  
 十676 ㊦ でも、風がどつきを運んできてはたいへ  
 十677 ㊦ すであおいで、風を向こうへやってくれ  
 十679 らぬきとつたせんすを、さらりと開きまし  
 十681 ㊦ 「ふたりは、それをあいずのようにして  
 十683 いきて、からかみをひきあげました。「へ  
 十683 いよいよ、おしいれをあげるときになると  
 十6812 るかっこうで、こしをうしろにひき、せん  
 十6812 き、せんすの手だけをまえにつきだして、  
 十693 、一つのまるいつばをみつ、へやのまん  
 十699 ㊦ 「へ略」。「ふたを取ってみようか。」「  
 十702 「思いついて、ふたをあけてみました。ベ  
 十7010 じやは、すばやく指をつつこんで、すぐそ  
 十7011 っこんで、すぐそれを、口に持っていきま  
 十712 きおいつき、せんすをほうりだして、自分  
 十713 りだして、自分も指をつっこみました。」「  
 十715 、かわりばんこに指をつっこみました。そ  
 十723 のりっぱなかけものをひききました。」「

十724 ㊦ えそんならんぼうをしては、いっそうし  
 十727 ㊦ あの湯飲み茶碗を、庭石にたたきつけ  
 十728 略。」「こう、さしずをされて、しかたなく  
 十729 大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガ  
 十7212 、きゅうに両手で顔をおおい、おおいおい大  
 十7212 おい、おおい大声をあげてなきだしまし  
 十731 かじやも、そのまねをして、おおいおいなき  
 十735 ㊦ 私どもは、すもうをとって遊んでいまし  
 十737 ㊦ いせつなかけものを、あのとおりひきさ  
 十739 ㊦ 、茶だなの湯飲みをはねとばして、こな  
 十7310 ㊦ 、ふたりとも、命をすてておわびをしよ  
 十7310 ㊦ 命をすてておわびをしようと考え、それ  
 十7312 ㊦ そろしい『ぶす』をたべて死ぬのが、い  
 十749 かじやは、こんな歌を歌いながらにげだ  
 十143 て、そこからおきをながめると、大きな  
 十144 きな汽船がけむりをはいて、長いかけを  
 十145 はいて、長いかけをひいて通っていくの  
 十146 えるし、川上の方をながめると、近くの  
 十148 える。長いいかだを組んで、材木を遠く  
 十148 だを組んで、材木を遠くの山から運んで  
 十152 も砂原で、すもうをとったり、おにごっ  
 十153 たり、おにごっこをしたりして遊んでい  
 十154 ると、そのボートをながめては、いろいろ  
 十154 は、いろいろな話をしあって楽しむ。き  
 十155 、みんなは話に花をさかせている。つい  
 十158 ㊦ 三ばんか四ばんをこぐんだ。力まかせ  
 十159 ㊦ に、長いオールをこいぐいとこいでみ  
 十1512 ㊦ ん、長いオールをこいだら、オールが  
 十162 ㊦ るうちにあいてをぬいてしまふ。それ  
 十163 ㊦ てしまふ。それを思うと、ぼくは胸が  
 十168 ㊦ 、ボートの向きをかえたりひき返そう  
 十174 ㊦ 略。』ぼくが力をいれて、一本バック

十一 75 ㊦ て、一本バックをやると、ボートは向  
 十一 75 ㊦ 、ボートは向きをかえて、あぶない  
 十一 72 ㊦ すわって、整調をやってみないな。ぼ  
 十一 87 ㊦ ど、ぼくはきみをコックスにせいせん  
 十一 89 ㊦ 、ぼくらの心持をよく知っている。ぼ  
 十一 91 ㊦ いつもそのうえを考えていて、いいこ  
 十一 92 ㊦ いて、いいことをはつきりきめる。ぼ  
 十一 94 ㊦ いわれて、自信をもって、よしやろう  
 十一 97 ㊦ 「略。」「おきを大きな船が通って  
 十一 101 ㊦ 、りっぱな運轉をする人になるだろう  
 十一 105 ㊦ 三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくた  
 十一 107 ㊦ 、ひとりで責任をしょって立つ、トッ  
 十一 107 ㊦ て立つ、トップをこぐ人もいるだろう  
 十一 107 ㊦ コックスが日本を正しい方へつれてい  
 十一 112 ㊦ じゅうの足なみをそろえてくれるにち  
 十一 13 ㊦ は、われわれの心をあらうようにきこえ  
 十一 13 ㊦ えの音は、長くおをひいて消えていく。  
 十一 13 ㊦ でも小鳥の鳴く声をきいていよう。あれ  
 十一 14 ㊦ んなめいめいの歌を歌う。一つの太陽の  
 十一 14 ㊦ ながめいめいの歌を歌っている。一つの  
 十一 15 ㊦ 先生がオルガンをおひきになると、オ  
 十一 15 ㊦ ぼくたちの頭の上を、まわりはじめる。  
 十一 16 ㊦ の愛です。わたしをまもるためには、ど  
 十一 17 ㊦ には、いばらの道をもふみわたその足  
 十一 18 ㊦ 二宮金次郎のことをお話します。二宮金  
 十一 19 ㊦ 代でりっぱな身代をこしらえました。そ  
 十一 19 ㊦ と、氣持よく、物をわけてやったり、お  
 十一 19 ㊦ てやったり、お金をかしてやったりしま  
 十一 19 ㊦ の大水で、田や畑をみんな流されたりし  
 十一 20 ㊦ とかして、からだをじょうぶにして、身  
 十一 20 ㊦ うぶにして、身代をもとのようにしたい  
 十一 20 ㊦ いものだと、ほねをおっていました。そ

十一 20 ㊦ ら、家の手つだいをしてよく働きました  
 十一 20 ㊦ 父親のすきなものをかうために、自分で  
 十一 20 ㊦ に、自分でわらじを作って、お金をもう  
 十一 20 ㊦ じを作って、お金をもうけたりもしまし  
 十一 21 ㊦ は休んだりむだ話をしているのに、金次  
 十一 21 ㊦ もよけいに土や砂を運ぶほどでした。し  
 十一 21 ㊦ 金次郎はいいことを考えつきました。毎  
 十一 22 ㊦ ていながら、わらをたたいてわらじを作  
 十一 22 ㊦ をたたいてわらじを作ることになりました  
 十一 22 ㊦ にしました。これを持って、朝早く工事  
 十一 22 ㊦ 。金次郎はわらじをさしだしていいまし  
 十一 22 ㊦ おじさん、これをはいてください。わ  
 十一 23 ㊦ て、すえの子どもを親類にもらってもら  
 十一 23 ㊦ た母親も、子どもをよそへやってから、  
 十一 24 ㊦ ん、とみちゃんを返してもらいましょ  
 十一 24 ㊦ が山へいって木を切ってきてもうけま  
 十一 24 ㊦ 郎は、自分の考えをくり返し話して、母  
 十一 24 ㊦ 郎は、子どもをつれてきました。そ  
 十一 25 ㊦ 山へいって、しぼをかったり木を切った  
 十一 25 ㊦ しぼをかったり木を切ったりして、村の  
 十一 25 ㊦ ると、また、なわをなったりわらじを作  
 十一 25 ㊦ をなったりわらじを作ったりしました。  
 十一 25 ㊦ てたおれるところを、金次郎は、すこし  
 十一 25 ㊦ 郎は、一さつの本をみつめました。それ  
 十一 26 ㊦ た。その一まいめをめぐって、くり返し  
 十一 26 ㊦ るためには、学問をしなくてはならない  
 十一 26 ㊦ 。金次郎は、それを読むとうれしくなり  
 十一 26 ㊦ なりました。まきをとり山へいく、そ  
 十一 26 ㊦ に、いつもその本を手からはなさず、く  
 十一 27 ㊦ は、こう、うわさをしましたが、金次郎  
 十一 27 ㊦ にもいれず、それを続けました。お正月  
 十一 27 ㊦ きました。たいこをたたいて、家から家

十一 27 ㊦ と、おもしろい藝をしてみせてくれます  
 十一 27 ㊦ 親と相談して、戸をしめきって、息をこ  
 十一 27 ㊦ をしめきって、息をこころして、だれもい  
 十一 27 ㊦ だれもないふうをしていました。金次  
 十一 28 ㊦ くこっそりと勉強を続けました。夜の勉  
 十一 28 ㊦ います。その油を自分でとりたいたいと思  
 十一 28 ㊦ りのあぶらの種をかりて、かわらへい  
 十一 29 ㊦ つきました。これを油にかえて、本を読  
 十一 29 ㊦ を油にかえて、本を読み続けました。金  
 十一 29 ㊦ おいたいねのなえをひろって、大水でい  
 十一 29 ㊦ びょうあまりの米を自分のものにするこ  
 十一 29 ㊦ た。この一びょうをもとにして、困って  
 十一 29 ㊦ り、植えるところをふやしていったりす  
 十一 29 ㊦ 、二十びょうの米をとることができまし  
 十一 30 ㊦ の家に帰り、一家をふたたびおこすこと  
 十一 30 ㊦ 。いろいろのことを身につけて、やがて  
 十一 30 ㊦ けて、やがて、村をすくい、多くの人が  
 十一 31 ㊦ さいて、野山をかざると、もも赤く  
 十一 31 ㊦ うは、かきねを黄色にそめていく。  
 十一 32 ㊦ むしが、つのをふりあげのぼりだす  
 十一 32 ㊦ りほかがやく上を、海へこえてきたつ  
 十一 33 ㊦ 短か夜しらむを待ちかねて、だい  
 十一 36 ㊦ へやら。くわをかついで田をみまわ  
 十一 36 ㊦ わをかついで田をみまわれば、日は  
 十一 37 ㊦ した。こずえをかけるもずの音も、  
 十一 39 ㊦ 、冬のしたくをとりいそぐ。村人の  
 十一 39 ㊦ そぐ。村人の目をなぐさめる。冬  
 十一 41 ㊦ せて、しめなわをはり、一夜明けけれ  
 十一 41 ㊦ ころびあいさつをする。池にむすぶ  
 十一 42 ㊦ 植えつけの用意をしよう。五 新し  
 十一 43 ㊦ は、赤いうめの花をいけた、大きなかび  
 十一 43 ㊦ 業する子どもの名をお読みあげになりま

十一 44 2 な元氣のいい返事をして立ちます。それ  
 十一 44 3 て立ちます。それをみよう、父兄の人  
 十一 44 5 ら、おめんじょうをいただくことになり  
 十一 45 6 まえにでて、だんをあげ、両手をずっ  
 十一 45 7 んをあげ、両手をずっとさしのべて、  
 十一 45 7 て、おめんじょうをいただいて、ささげ  
 十一 45 10 うして、弟の心持を頼もしく思いました  
 十一 46 3 おした、その勇氣を頼もしく思いました  
 十一 46 6 りに、じゃがいもをみると、ぼくは、北  
 十一 46 7 、北海道のいなかを思いだす。みわたす  
 十一 46 11 小さいころのことを、いろいろ思いだ  
 十一 47 2 。ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたの  
 十一 47 10 おかあさんがパンをやくそばで、ぼくは  
 十一 47 11 ぼくは、いつも本を読んでいた。ぼくの  
 十一 49 1 って、じゃがいもをつくります。それか  
 十一 49 3 ように、ちちうしをかって、自分でパタ  
 十一 49 4 て、自分でバターをつくります。やぎも  
 十一 49 8 すきなライラックを植えましょう。おと  
 十一 50 1 さつばろに農学校をつくられたクラーク  
 十一 50 2 会 よ、大きな望みをもて。」ぼくは、大  
 十一 50 4 海道へじゃがいもをつくりにいこう。お  
 十一 50 5 こう。おかあさんをおつれして。デンマ  
 十一 50 6 ルクの農業のことを勉強して、ぼくは、  
 十一 51 6 った。私は、かさをさして電車の停留所  
 十一 51 8 いので、すぐかさをさして待てました。  
 十一 51 9 ら、電車のくるのを待っていた。電車は  
 十一 51 10 が、みな満員の札をさげて、とまらずに  
 十一 52 8 するように車の音をたてて、あらしの中  
 十一 52 9 てて、あらしの中をつき進んでいく。一  
 十一 52 12 「略。」と、声をかけた。「略。」と  
 十一 53 6 会 「電車もなみだをこぼしています。そ  
 十一 53 9 った。そのことをきいて、そこの乗

十一 54 2 かげられてゐるのをみた。「略。」「略  
 十一 54 9 会 「電車もなみだをこぼしています。」  
 十一 54 9 ようさんのことをわすれることができ  
 十一 57 8 みる。ことばをつづろ。じゅずだ  
 十一 59 3 会 いにくいことばを知っているよ。」と  
 十一 59 11 会 遠いから、近道をしよう。」と、正男  
 十一 60 10 しよにその一本橋を渡りだした。すると  
 十一 61 6 会 おいた、あの橋を渡ったのではないか  
 十一 61 9 つときょうのことを、ありのままにうち  
 十一 62 7 会 よつとすると命を失うようなあぶない  
 十一 62 9 会 また、このことをたずねたとき、なぜ  
 十一 63 5 の下に着物の包みをかかえながら、ナポ  
 十一 63 6 って、一通の手紙をみせ、父親をたずね  
 十一 63 7 手紙をみせ、父親をたずねました。少年  
 十一 63 8 考えふかそうな目をしていました。少年  
 十一 63 10 は、去年、しごとをさがしにフランスへ  
 十一 64 4 にかんたんな手紙を書いて、帰ったこと  
 十一 64 8 院にはいったことを知らせました。母親  
 十一 64 10 親は、その知らせをみるとがっかりしま  
 十一 64 11 み子もあって、家をあけることができな  
 十一 64 11 いにくらかのお金を持たせ、父親の看病  
 十一 64 11 ぼんは、その手紙をひと目みてから、看  
 十一 65 1 みてから、看護人と呼んで、少年をその  
 十一 65 1 人と呼んで、少年をその父親のところへ  
 十一 65 2 しやわるい知らせをききはしまいかと、  
 十一 65 5 えながら、その名をいいました。しかし  
 十一 65 6 人は、そういう名を思い出せませんでし  
 十一 65 7 は、ますます不安をおぼえながら答えま  
 十一 65 11 看護人は、少年をながめて、それには  
 十一 66 10 りは、はしごだんをのぼって、長いろろ  
 十一 67 1 た。少年は、勇氣をふるいおこして、そ  
 十一 67 9 、おどおどした目を右に左に向けて、青

十一 67 11 た、やせこけた顔をしている病人たちを  
 十一 67 12 している病人たちをみまわしました。中  
 十一 68 2 大きくみ開いた目をあけて、じつと空間  
 十一 68 2 けて、じつと空間をみつめている者もあ  
 十一 68 6 、手にくすりびんを持って、へやを歩き  
 十一 68 6 んを持って、へやを歩きまわっていました  
 十一 68 8 まって、カーテンをあけて、「略。」と  
 十一 69 1 一 少年は包みを下におくと、頭を病  
 十一 69 1 を下におくと、頭を病人のかたのところ  
 十一 69 2 かずにいる、うでをつかみました。病人  
 十一 69 5 した。少年は、身をおこして父親の方を  
 十一 69 6 おこして父親の方をみました。すると、  
 十一 69 8 はしげしげと少年をみつめて、いくらか  
 十一 70 2 だ、ひたいと弓形をしたまゆとのほかに  
 十一 70 4 ませんでした。息をつくのもやつとのよ  
 十一 70 11 いっしんに少年をみつめたあとで、目  
 十一 70 11 つめたあとで、目を閉じました。「略」  
 十一 71 4 で、苦しうに息を続けていました。少  
 十一 71 5 た。少年は、いすをひきよせて、目を父  
 十一 71 5 をひきよせて、目を父親の顔からはなさ  
 十一 71 6 なさないで、こしをおろして待っていました  
 十一 71 11 さしい父親のことをいろいろと思い返し  
 十一 71 12 に船の上でわかれを告げたことや、家族  
 十一 72 1 の旅に楽しい希望をかけていたことや、  
 十一 72 2 親がどんなにか力をおとしたことなど  
 十一 73 4 が、ひとりの助手をつれて、へやの向こ  
 十一 73 7 たちは、しんさつをはじめて、一つ一つ  
 十一 73 10 んだ、まじめな顔をした老人でした。医  
 十一 73 11 だとなりのベッドをはなれないうちに、  
 十一 74 1 した。医者は少年をみました。「略。」  
 十一 74 5 した。医者は、手を少年のかたにかけま  
 十一 74 7 かがんで、みやくをみたり、ひたいにさ

十一 75 2 どのりのてあてを続けなさい。」その  
 十一 75 3 き、少年は、勇氣をふるいおこしてたず  
 十一 75 6 ど少年のかたに手をかけながら答えまし  
 十一 75 8 望みがある。氣をつけておあげなさい  
 十一 75 11 たいものだ。力をおとさずにいるがい  
 十一 76 3 ら、病人のふとんをなおしたり、ときど  
 十一 76 4 ってみたり、はいを追ったり、うなるた  
 十一 76 5 婦がなにか飲み物を持ってくると、コッ  
 十一 76 5 ップなりさじなりをその手から取って、  
 十一 76 6 婦にかわってそれを飲ませたりしました  
 十一 76 7 ととき少年の方をみましたが、わかっ  
 十一 76 8 ても、ハンカチを目にあてているとき  
 十一 76 11 へやのすみにいすを二つならべて、その  
 十一 77 1 なんと、また看病をはじめました。その  
 十一 77 3 ような声のひびきをきくと、感謝するよ  
 十一 77 6 、すこしくちびるを動かしました。ちょ  
 十一 77 7 ったあとでは、目を開いたときに、その  
 十一 77 8 その小さな看護人をさがすようにみえま  
 十一 77 10 。夕がた、コップを病人の口もとにつけ  
 十一 77 11 えみがうかんだのをみたような氣がしま  
 十一 77 12 で、少年は、自分をなぐさめて望みをか  
 十一 77 12 をなぐさめて望みをかけはじめました。  
 十一 78 2 、いろいろのことを――母親のことや、  
 十一 78 3 とや、父親の帰りを待ちこがれていたこ  
 十一 78 3 れていたことなどを――それからそれへ  
 十一 78 5 するようにと病人をはげしました。た  
 十一 78 8 うしに、じっと耳をかたむけているよう  
 十一 79 3 、ふるえながら氣をもらんで、心を休める  
 十一 79 4 ら氣をもんで、心を休めるような希望と  
 十一 79 5 ような希望と、胸をこおらせるような失  
 十一 79 11 いわんばかりに頭をふりました。少年は  
 十一 79 11 すにぐったりと身を落して、すすりなき

十一 79 12 、ただ一つ、少年をなぐさめることがあ  
 十一 80 3 んしっかりした目を少年の上にすえて、  
 十一 80 4 、うれしそうな色を顔にうかべながら、  
 十一 80 5 、飲み物やくすりを、少年の手からでな  
 十一 80 6 また、なにかものをいおうとでもしてい  
 十一 80 7 、むりにくちびるを動かそうとしました  
 十一 80 9 きなり病人のうでをつかんで、「略略」  
 十一 81 3 いうはかない希望をもつて、いっしんに  
 十一 81 6 ででかけたさげびを、じっとおさえなが  
 十一 81 8 にあつくほうたいをししたひとりの男が、  
 十一 81 10 、するどいさげびをあげて、その場に立  
 十一 81 11 して、ひと目少年をみると、こんどはか  
 十一 82 1 どはかれがさげびを發しました。「略略」  
 十一 82 10 。少年は、まだ声をだすことができませ  
 十一 83 1 、じっと病人の方をみつめたあとで、い  
 十一 83 5 、「チチロをやりました。」って  
 十一 84 2 こと三こととばをはさんで、家族のよ  
 十一 84 2 で、家族のようすを話そうとしましたが  
 十一 84 7 、「父親は、少年を自分の方へひっぱり  
 十一 84 8 返って、病人の方をみました。「略略」  
 十一 84 11 、また、病人の方をながめました。病人  
 十一 84 12 は、そのとき、目を開いて、じっと少年  
 十一 84 12 いて、じっと少年をみつめました。する  
 十一 85 5 、いつでもぼくをみています。ぼく、  
 十一 85 6 の人におくすりを飲ませてあげるの  
 十一 85 10 、あんなにぼくをみています。どうか  
 十一 85 12 親は、じっと少年をみつめていました  
 十一 86 1 てまた、病人の方をみました。「略略」  
 十一 86 12 りじっと少年の方をみていました。父親  
 十一 87 5 て、おかあさんを安心させてあげよう  
 十一 87 11 チチロはまた看護をはじめました。その  
 十一 88 2 た、病人に飲み物を飲ませたり、ふとん

十一 88 3 ませたり、ふとんをなおしたり、手をさ  
 十一 88 3 をなおしたり、手をさすったり、やさし  
 十一 88 9 いよいよよくせわをして、ちよつとのま  
 十一 88 10 よつとのまも、目を病人からはなしませ  
 十一 88 11 はしげしげと少年をみつめながら、とき  
 十一 88 11 きむりにくちびるを動かして、なにかも  
 十一 88 12 して、なにかものをいいたげにしました  
 十一 89 3 ばについて、病人をみまもっていました  
 十一 89 5 、看護婦と看護人をつれてはいってきま  
 十一 89 8 。少年は病人の手をにぎりました。病人  
 十一 89 8 した。病人は、目を開いて少年をじっと  
 十一 89 8 、目を開いて少年をじっとみて、そうし  
 十一 89 9 そうして、また目を閉じました。そのと  
 十一 89 10 、病人が自分の手をにぎりしめたような  
 十一 89 12 た。「ぼくの手をにぎった。」と、少  
 十一 90 3 が、やがてからだをまっすぐに立てまし  
 十一 90 3 看護婦が十字かぞうをかべからはずしまし  
 十一 90 10 。神さまがききをまもってくださいだ  
 十一 91 1 なすみれの花たばを、ベッドの上のコッ  
 十一 91 3 。そうして、それを少年に渡しながらい  
 十一 91 6 りません。これを病院の記念に持って  
 十一 91 10 一方の手で花たばを取りながら、一方の  
 十一 91 11 ら、一方の手で目をふきました。「略略」  
 十一 91 12 、ぼく、遠い道を歩いていくんですか  
 十一 92 2 ういって、すみれをベッドの上にとらし  
 十一 92 10 、「といて、名をなんと呼ぼうかと思  
 十一 93 1 小さな着物の包みを小わきにかかえまし  
 十一 94 3 ンブスがアメリカを發見して帰ったとき  
 十一 94 8 コロンブスの成功を祝しますと、ひとり  
 十一 94 10 の男が、「大洋を西へ西へと航海して  
 十一 95 3 らいました。これをきいたコロンブスは  
 十一 95 4 の上のゆでたまごをとり、「略略」とい

十二五五 みにこのたまごをテーブルの上を立て  
 十二五八 ためにこんなことをいいたのかと思  
 十二五九 ンとたまごのはしをテーブルにうちつけ  
 十二六六 たので、近くの家をたずねて雨具をかり  
 十二六六 家をたずねて雨具をかりすることにしまし  
 十二六九 ム。こういって戸をたたきますと、おく  
 十二七一 おります。雨具をかりたいのですが。  
 十二七二 した。少女はなにを思ったのか、ふと庭  
 十二七三 なやまぶきの一枝をおつてきて、それを  
 十二七三 おつてきて、それをしずかにさしだし  
 十二七五 灌は、その花の枝を手にはしましたが、  
 十二七六 とやまぶきの花とをみくらべるばかりで  
 十二七六 歌に、少女の思いをたくしたものであり  
 十二八三 のころでした。家をはなれて勉強にでか  
 十二八七 のとき、母ははたを織っていました。が、  
 十二八八 したが、孟子の顔を見ると、つと立って  
 十二八九 にあった小がたなをとりあげました。孟  
 十二九一 り続けていたぬのを、小がたなでたち切  
 十二九七 ちようど、織物をちゅうとでたち切る  
 十二九八 すばらしい身なりをした老人が、道路を  
 十二一〇 した老人が、道路をうろうろとみまわし  
 十二一〇 さがしては、それをひろってポケットに  
 十二一〇 した。そのようすをみていたじゅんさが  
 十二一〇 てきて、「なにをひろっているのです  
 十二一〇 がらポケットに手をいれましたが、とり  
 十二一〇 「こんなものをひろって、どうする  
 十二一〇 、老人は廣場の方を指さして、「略。」  
 十二一三 いる子どもたちをこらなさい。くつ  
 十二一三 んなさい。くつをはいている子どもは  
 十二一三 トンが南アフリカを探けんしていたとき  
 十二一三 ンが木かげで書物を読んでいました。そ  
 十二一三 でいました。それをみた土人のひとりが

十二一二 にかすばらしい力をもっているものだ  
 十二一二 てきて、その書物を手に取りました。そ  
 十二一二 そうして、ページをはぎとって、たべて  
 十二一二 たすみに三きやくをすえ、がかを立てて  
 十二一二 やくをすえ、がかを立てて写生をはじめ  
 十二一二 がかを立てて写生をはじめた。そこには  
 十二一二 夏じゅう美しい花をつけていたが、あら  
 十二一二 ていたが、根もとをかこうと決心した。  
 十二一二 、いよいよ下がきをかきはじめた。しか  
 十二一二 夏のころ、草とりをしてつみ重ねておい  
 十二一二 かった。「これをとりかたづけてやろ  
 十二一二 略。」ひとりごとをいいながら文雄が、  
 十二一二 が、そのくちた草をとりつけようとす  
 十二一二 おろぎが一びき頭をだしていた。そうし  
 十二一二 うして、文雄が手をのばすと、すばやく  
 十二一二 ム。文雄は、それをとりのけるのをやめ  
 十二一二 れをとりのけるのをやめて、また下がき  
 十二一二 た。だいたいの形をしつかりとつかんで  
 十二一二 葉、そんなところをはつきりつかまえた  
 十二一二 て、しきりに木炭を動かしていた。下が  
 十二一二 ムから絵のぐをだして、色をぬりは  
 十二一二 のぐをだして、色をぬりはじめた。これ  
 十二一二 かけて、またふでをとってかきはじめた  
 十二一二 。はじめ短い羽を動かしてピッピッと  
 十二一二 だつて、ふと羽を動かしてみたら、ピ  
 十二一二 たの鳴く声に耳をかたむけて、たいへ  
 十二一二 ただつてその実をそんなに美しくなさ  
 十二一二 年とすんだことをかえりみて、來年は  
 十二一二 ら、はじめて実をつけた三年は、青  
 十二一二 いつも美しい実をならせることができ  
 十二一二 ほら、そこで絵をかく文雄さん  
 十二一二 「略。」「絵をかくことも、いっし

十二二五 しいりっぱな実をたくさんつけるよう  
 十二二五 っとさきのおしやつたりする  
 十二二五 るので、人の心を動かすのだから、あ  
 十二二五 、一心にけいこをして、じょうずにな  
 十二二五 こだ。高い理想をめざして、いっしょ  
 十二二五 けんめいけいこをすることだ。」文雄  
 十二二五 しています。母をはじめ、うちの人た  
 十二二五 家内じゅうが歓声をあげているといっ  
 十二二五 ういうときのことを考えて、近所の荒れ  
 十二二五 て、近所の荒地を三ノアールばかりか  
 十二二五 さつまいもや野菜を作ったりしていたの  
 十二二五 わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天  
 十二二五 のです。民ちゃんをなんとかして早く歩  
 十二二五 は、ぼつぼつものをいいかけています  
 十二二五 かるへんなことをいっています。わた  
 十二二五 わたしも早くそれを覚えたいと思いま  
 十二二五 民ちゃんの子もりをひき受けます。姉が  
 十二二五 で、おしめカパーをさせたまはつてお  
 十二二五 んは平氣でそこらをはいまわっています  
 十二二五 す。わたしは時間をはかつては、そとさ  
 十二二五 つれていって、用をたさせるようにしま  
 十二二五 して、そのまわりをぐるぐると歩きます  
 十二二五 きます。ちやぶ台をだして、食事の用意  
 十二二五 、食事の用意などをしていっていると、とりつ  
 十二二五 になると、すぐに手をついて、いざり歩  
 十二二五 なります。かた足をなげだして、おしり  
 十二二五 ちはじめには、物を持たせると立つこと  
 十二二五 れかがいったことを思いました。そ  
 十二二五 おべんとうの包みをこしらえて、「略」  
 十二二五 いって、その包みをとりあげると、よち  
 十二二五 「略。」たもとをひいてやると、民  
 十二二五 、毎朝おべんとうをこしらえて持たせて

十二二九<sup>7</sup> ㊦、わたしのげたをひっかけて、正男の  
十二二九<sup>8</sup> ㊦て、正男のあとを追っかけて道までで  
十二二九<sup>9</sup> ㊦いつそんなことを覚えたんでしょう。  
十二二九<sup>12</sup> ㊦くなった民ちゃんをだいてやろうとする  
十二二九<sup>12</sup> ㊦とすると、かぶりをふって、「略。」と  
十二三〇<sup>4</sup> ㊦このごろ白いぬをかうようになりまし  
十二三〇<sup>6</sup> ㊦ゃんは、そのことをいうのでしょうか。「へ  
十二三〇<sup>3</sup> ㊦（一）私の一生を通じて、わすれるこ  
十二三〇<sup>7</sup> ㊦はなんとなくものを持つ気持で、じっと  
十二三〇<sup>8</sup> ㊦日光は、げんかんをおおったすいかずら  
十二三〇<sup>9</sup> ㊦いかずらのしげみをもれて、みあげる私  
十二三〇<sup>1</sup> ㊦しい葉や、花の上を、私の指はまったく  
十二三〇<sup>1</sup> ㊦指はまったくわれをわすれてなでていま  
十二三二<sup>2</sup> ㊦ろきとふしぎが私を待っているのか、す  
十二三二<sup>2</sup> ㊦近づいてくる足音を感じましたので、そ  
十二三二<sup>7</sup> ㊦思いこんで、両手をさしました。だ  
十二三二<sup>8</sup> ㊦た。だれかがそれをとらえました。そう  
十二三二<sup>11</sup> ㊦生——私の心の目をあらゆるものに向け  
十二三二<sup>12</sup> ㊦もなによりも、私を愛するためにきてく  
十二三三<sup>2</sup> ㊦ったあくる朝、私をおへやに呼んで、一  
十二三三<sup>3</sup> ㊦んで、一つの人形をくださいました。私  
十二三三<sup>5</sup> ㊦人形」という文字をつづられました。私  
十二三三<sup>7</sup> ㊦ろくなつて、それをまねようとした  
十二三三<sup>11</sup> ㊦きで人形という字をつづつてみせました  
十二三三<sup>12</sup> ㊦もちろん、ことばをつかっていることや  
十二三四<sup>2</sup> ㊦人まねのように指を動かすだけでした。  
十二三四<sup>4</sup> ㊦たくさんのことばをつづることを覚え  
十二三四<sup>5</sup> ㊦とばをつづることを覚え、「すわる」「立  
十二三四<sup>7</sup> ㊦名まえのあることを知ったのは、先生が  
十二三四<sup>9</sup> ㊦、私が新しい人形を持って遊んでいます  
十二三四<sup>10</sup> ㊦ほかの大きな人形を私のひざの上におい  
十二三四<sup>11</sup> ㊦「人形」という字をつづりながら、二つ

十二三四<sup>11</sup> ㊦同じ名であることを私にわからせようと  
十二三五<sup>3</sup> ㊦るものであることを、はつきり教えるた  
十二三五<sup>6</sup> ㊦名まえであることをわからせようとなさ  
十二三五<sup>7</sup> ㊦うとかんしゃくをおこして、新しい人  
十二三五<sup>8</sup> ㊦して、新しい人形を手にとつて、ゆかに  
十二三五<sup>9</sup> ㊦けた人形のかげらを足さきに感じながら  
十二三五<sup>10</sup> ㊦は、先生がかげらをいろりのかたすみにな  
十二三五<sup>11</sup> ㊦なつていうようすを感じましたが、ただ  
十二三五<sup>12</sup> ㊦かれたという満足を覚えたばかりでし  
十二三六<sup>1</sup> ㊦て、先生がぼうしを持ってきてくださ  
十二三六<sup>4</sup> ㊦りは、いどの小屋をおおっているすいか  
十二三六<sup>8</sup> ㊦かれて、庭の小道をおりていきました。  
十二三六<sup>11</sup> ㊦した。だれかが水をくみあげていました  
十二三六<sup>11</sup> ㊦で、先生は私の手をといたの口の下へやり  
十二三七<sup>1</sup> ㊦、「水」という字を書いてくださいまし  
十二三七<sup>3</sup> ㊦まで、全身の注意を先生の指の動きにそ  
十二三七<sup>4</sup> ㊦わすれていたものを思い出すような、め  
十二三七<sup>6</sup> ㊦あるふしぎなものを感しました。このと  
十二三七<sup>7</sup> ㊦自分のかた手の上を流れているふしぎな  
十二三七<sup>8</sup> ㊦のの名であることを知りました。この生  
十二三七<sup>9</sup> ㊦が、私のたましいを目ざめさせ、光と希  
十二三七<sup>10</sup> ㊦光と希望と喜びとを興えることになった  
十二三七<sup>12</sup> ㊦ゆるものが、生命をもつて動いているよ  
十二三八<sup>2</sup> ㊦しい目で、すべてをみるようになったか  
十二三八<sup>4</sup> ㊦わした人形のことを思い出して、いろり  
十二三八<sup>5</sup> ㊦走りよつてかけらをひろいあげ、それを  
十二三八<sup>6</sup> ㊦ひろいあげ、それをつぎあわせようと  
十二三八<sup>9</sup> ㊦心と悲しみとに胸をさされました。私は  
十二三八<sup>10</sup> ㊦たくさんのことばを覚ええました。全部覚  
十二三八<sup>12</sup> ㊦とばがあつたことを思い出します。でき  
十二三九<sup>2</sup> ㊦にもたらした喜びを思い返していたとき  
十二三九<sup>3</sup> ㊦ほど幸福な子どもを発見することは、む

十二三九<sup>4</sup> ㊦たるべき新しい日を持つことを知りまし  
十二三九<sup>5</sup> ㊦しい日を持つことを知りました。（二）  
十二三九<sup>8</sup> ㊦生がい」の一せつを、日本語におした  
十二四〇<sup>2</sup> ㊦き、きくはたらきを失いました。みるこ  
十二四〇<sup>9</sup> ㊦わからないケラーをしつけていくのには  
十二四〇<sup>10</sup> ㊦とば」というものをわからせることによ  
十二四〇<sup>11</sup> ㊦つ暗なさびしい心を明かるくすることに  
十二四〇<sup>11</sup> ㊦サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひ  
十二四一<sup>1</sup> ㊦うになつて、勉強をはじめたのです。手  
十二四一<sup>3</sup> ㊦。手のひらに文字を書くことから、進ん  
十二四一<sup>4</sup> ㊦、進んで、手と手をにぎりあい、そのに  
十二四一<sup>5</sup> ㊦よつて「ことば」をとりかわすようにな  
十二四一<sup>7</sup> ㊦が命がけでせわをすれば、ケラーさん  
十二四一<sup>12</sup> ㊦のりながら、一生をケラーのためにささ  
十二四二<sup>2</sup> ㊦・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業  
十二四二<sup>3</sup> ㊦バン先生のケラーを思ふ愛情とが、一つ  
十二四四<sup>4</sup> ㊦は、人形しほいをみたことがあるかね  
十二四四<sup>5</sup> ㊦、人形がしほいをするんですか。「へ  
十二四四<sup>10</sup> ㊦んな大きなものを、どうして動かすん  
十二四四<sup>12</sup> ㊦りで一つの人形を動かすんだ。からだ  
十二四四<sup>12</sup> ㊦らだ全体と右手を受け持つ人、左手だ  
十二四五<sup>2</sup> ㊦ときには、したをだしたり鼻がでんぐ  
十二四五<sup>4</sup> ㊦る。人形はものをいえないが、そのか  
十二四五<sup>6</sup> ㊦あわせてしほいをするんだ。「略」。  
十二四六<sup>8</sup> ㊦有名だね。牛皮を切りぬいて、美しい  
十二四六<sup>10</sup> ㊦ある。これに光をあてて影絵にしてみ  
十二四六<sup>12</sup> ㊦あわせてしほいをするわけだ。「略  
十二四七<sup>3</sup> ㊦、心にあることを、なにか美しいもの  
十二四七<sup>5</sup> ㊦。命のない人形を思うままに動かして  
十二四七<sup>6</sup> ㊦傳説や、歴史やを美しく舞台にあらわ  
十二四七<sup>10</sup> ㊦不便だけで物事を考えないところに、  
十二四七<sup>12</sup> ㊦わざわざ絵のぐをつかって時間をかけ

十二 47 12 ⑤ をつかって時間をかけて絵をかくより  
 十二 47 12 ⑥ 時間をかけて絵をかくより、写真のほ  
 十二 48 3 ⑤ 氣でやれる。空をとんだり、すがたを  
 十二 48 3 ⑥ んだり、すがたを消したり。それに、  
 十二 48 4 ⑤ 不平やわがまをいわないからね。「  
 十二 48 10 ⑤ 人形の作りかたを教えてあげよう。お  
 十二 49 7 ⑤ (1) 古はがきを横にまいて、ひとさ  
 十二 49 7 指のふとさのつつを作り、のりでとめる  
 十二 49 9 ⑤ める。(2) 古新聞を二まいとも八つに切  
 十二 49 10 ⑤ のうち一まいだけを正方形にする。ほか  
 十二 50 2 ⑤ 形の一まいにのりをつけてつつかあぶせ  
 十二 50 4 ⑤ 、もんだ紙にのりをつけないで、上から  
 十二 50 9 ⑤ つた古新聞にのりをつけてとめ。(6) 鼻  
 十二 51 2 ⑤ める。(7) 日本紙を細長く切って、一ま  
 十二 51 2 ⑤ いまいよくのりをつけてはりかためる  
 十二 51 4 ⑤ ら、絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬ  
 十二 51 5 ⑤ をかいたり頭の毛をぬる。3 手の作  
 十二 52 2 ⑤ 。(1) いたぎれを、はば二センチ、長  
 十二 52 3 ⑤ て、まん中にあなをあける。(2) あなの  
 十二 52 4 ⑤ (2) あなの両わきを切りこんで、手さき  
 十二 52 5 ⑤ りこんで、手さきをまるめ、指の線をほ  
 十二 52 6 ⑤ をまるめ、指の線をほる。4 着物の  
 十二 52 9 ⑤ た。(1) 古ぎれを、はば二十二センチ  
 十二 52 10 ⑤ の形に切る。これを二まい作る。(2) 二  
 十二 52 11 ⑤ 図の点線のところをぬう。(3) 顔は、着  
 十二 53 2 ⑤ かさにいれて、首を着物にぬいつける。  
 十二 53 4 ⑤ は、手さきのほうをいれて、穴に糸を通  
 十二 53 5 ⑤ をいれて、穴に糸を通してぬいつける。  
 十二 53 6 ⑤ ける。(5) 顔と手をつけた着物を裏返す  
 十二 53 6 ⑤ と手をつけた着物を裏返すとできあがる  
 十二 53 9 ⑤ 1 ひとさし指を首の中にいれ、おや  
 十二 53 9 ⑤ 、おや指となか指を、そでの中、いたの

十二 53 11 ⑤ 。2 人形だけを舞台へだして、つか  
 十二 54 2 ⑤ すときは人形の顔を前後に動かす。三  
 十二 54 6 ⑤ 1 つくえやいすを重ねて、つかう人の  
 十二 54 8 ⑤ のかくれるところを作り、まくでかくす  
 十二 54 10 ⑤ たぎれで、木や家を作っておく。六  
 十二 56 1 ⑤ さんかきいた話を思いだして、書きの  
 十二 56 4 ⑤ ことである。傳説を聞く全国で調べてみ  
 十二 56 6 ⑤ 次にくつつかの例をあげてみよう。み  
 十二 56 9 ⑤ て、ひなたぼっこをしながら、まえの海  
 十二 56 9 ⑤ ら、まえの海で顔をあらうのを楽しみ  
 十二 56 10 ⑤ 海で顔をあらうのを楽しみにしていた。  
 十二 56 11 ⑤ は、みそ五郎が畑をうったときのくわの  
 十二 57 9 ⑤ われては、田や畑を荒らすので、村の人  
 十二 57 10 ⑤ づつ、おにに人間をくわせてやるとい  
 十二 57 11 ⑤ ずつ、おにに人間をくわせてやるとい  
 十二 58 2 ⑤ た。おには、これを承知して、ある夜、  
 十二 58 4 ⑤ 、ある夜、石だんをききだした。なに  
 十二 58 5 ⑤ おどろいてすがたを消してしまった。お  
 十二 58 11 ⑤ た。おには約そくをまもって、そののち  
 十二 58 12 ⑤ ののちはもう田畑を荒らすようなことは  
 十二 59 7 ⑤ 者は、先祖のことを鼻にかけて、わがま  
 十二 59 8 ⑤ かけて、わがまをまはしはじめた。ある年  
 十二 60 2 ⑤ なん干アールの田をききよう一日で植えて  
 十二 60 4 ⑤ ので、おとめの数をまして、田植え歌勇  
 十二 60 6 ⑤ からこのありさまをながめて、得意にな  
 十二 60 10 ⑤ 日のまるのおおぎをあげて、しずみかけ  
 十二 60 10 ⑤ 、しずみかけた日をさしたまねくと、さす  
 十二 61 9 ⑤ の家具のであることを知った。それからと  
 十二 62 2 ⑤ いて、かりた家具をかりっぱなしにして  
 十二 62 7 ⑤ 木こりがいた。名を八郎といつた。ある  
 十二 62 8 ⑤ 八郎が山でしごとをしていると、のどが

十二 62 10 ⑤ かわいてきた。水を飲もうと思って小川  
 十二 62 11 ⑤ る。八郎はその魚をとってやいてたべた  
 十二 63 2 ⑤ そこでまた川の水を飲んだ。いくら飲ん  
 十二 63 7 ⑤ 母にそのからだをみせるにはしのびな  
 十二 65 4 ⑤ らかなものが、地をうがち岩をおしわけ  
 十二 65 4 ⑤ が、地をうがち岩をおしわけ、深く廣く  
 十二 65 6 ⑤ びていく根のさきをささえるものはない  
 十二 66 2 ⑤ 、深くのびてみきをささえ、廣くのびて  
 十二 66 3 ⑤ え、廣くのびて枝をやしない、それから  
 十二 66 6 ⑤ からみあって、葉を育て花をさかせる。  
 十二 66 6 ⑤ 葉を育て花をさかせる。根はみえ  
 十二 67 9 ⑤ は、いつもやすりをかけて右と左によじ  
 十二 68 3 ⑤ こぎりには、あつみをもっている。大き  
 十二 68 4 ⑤ 。大きなかたい物を切るのこぎりののは  
 十二 68 5 ⑤ さなやわらかい物を切るのこぎりののは  
 十二 68 8 ⑤ ざりは、廣いはばをもっている。こびき  
 十二 68 10 ⑤ 大きなざりはしをもっている。はたら  
 十二 69 2 ⑤ きのある人は、はをもったのこぎりに  
 十二 69 3 ⑤ も勉強してみがきをかけていないと、じ  
 十二 69 8 ⑤ くりっぱに世の中をわたることができな  
 十二 70 4 ⑤ たが、芭蕉のことをきいてから、その弟  
 十二 70 5 ⑤ そうして、はい句を勉強することに心を  
 十二 70 5 ⑤ 勉強することに心をきめました。曾良は  
 十二 70 7 ⑤ いろいろお手傳いをしてあげた。下男  
 十二 70 10 ⑤ その近所に別に家をかりて住むことにし  
 十二 71 2 ⑤ ちに、いどころ水をくみあげたり、ごは  
 十二 71 2 ⑤ あげたり、ごはんをたいいたりしました。  
 十二 71 3 ⑤ ないと、近所へ木をひろいにいたりし  
 十二 71 4 ⑤ がら、はい句の話をきくのでした。先生  
 十二 71 9 ⑤ たえましたが、雪をみるのが楽しみでし  
 十二 71 9 ⑤ 蕉は、くもった空をおおきながら、雪が  
 十二 72 7 ⑤ の子どもや、のりをとりでるりようし



十二731 降ったら、なにをして遊ぶの。「略  
十二732 略。」「雪だるまを作るの。」「略。」  
十二734 略。」話をしているうちに、パ  
十二738 たちは、小さな手をしゃくしにして、受  
十二746 したが、曾良が水をたくさんくんでおい  
十二751 さわがしく、雨戸をゆさぶったり、大川  
十二754 の中に、芭蕉は心をすませ、雪の句を考  
十二755 をすませ、雪の句を考えました。トント  
十二756 、トントンと入口をたたく者があります  
十二759 す。芭蕉はすぐ戸をあけました。「略」  
十二761 晩だ。まあ、火をたきつけておくれ。  
十二767 おぼんの上に、雪をまるめてこしらえた  
十二7611 文 釜 た。きみ火をたけよきものみせん  
十二773 が、いよいよ試合をする日のことでした  
十二775 て、きょうの戦いを物語っています。ス  
十二777 、私はユニホームをつけて、練習のため  
十二778 しばらく手ならしをしてから、休けい場  
十二779 二の兄弟にサインを頼まりました。その  
十二781 じょうずにえい語をつかって頼みました  
十二782 の持っていたペンをかりて、サインをし  
十二782 をかりて、サインをしてやりました。少  
十二784 少年たちは、これを見て、うれしそうに  
十二793 合 たちは、日本語を知っているの。「へ  
十二7912 合 合には、どちらをおうえんするの。キ  
十二809 ということばに力をいれて答えました。  
十二8011 ぜ、そんなことをきくのか。」という  
十二811 た。日本という國をみたこともなく、ま  
十二811 なく、また日本語をすこしも話せないこ  
十二812 ために、勝つことをいのつてくれている  
十二813 てくれていることを知って、胸がいっぱ  
十二810 いる二少年のことを思つては、ふるいた  
十二812 、あのときのことをわすれることができ

十二823 ケ國のテニス選手をなぎたおした清水選  
十二825 れ、デビスカップを、日本では、はじめ  
十二8210 の清水選手の試合を見物しようと、方々  
十二8211 々が、そのコートを目がけて集まりまし  
十二836 れるようななく手をふたりに送りました  
十二8310 ルが、ネットの上を右に左にと、ゆきき  
十二841 た。一つのボールを中心に、両選手  
十二843 りました。かたずをのんで試合をみてい  
十二843 たずをのんで試合をみていううちに、早  
十二847 きなチルデン選手を追いつめるものすご  
十二8411 光のようなボールをうちだしました。第  
十二852 いよいよ手にあせをにぎりました。ここ  
十二855 デン選手はかた足をふみすべらせてしま  
十二858 なりました。相手を一きよにうちのめす  
十二8612 水選手は、ボールをやわらかくして、し  
十二865 、両選手はしのぎをけずって戦いました  
十二868 りました。ネットをはさんで、両選手は  
十二868 手はかたいあく手をおしませんでした。心お  
十二8610 しのようなく手をおしませんでした  
十二874 合 父が、「水を持っておいで。」と  
十二876 で植え木の手入れをしている父にこうい  
十二877 か、じょうろに水をいっぱいいれて持っ  
十二878 いくだろう。手紙を書こうとして、すず  
十二878 して、すずりばこをあけた父にこうい  
十二879 たら、水さしに水をいれて持つていくだ  
十二8710 。ふる場の中で湯をかきまわしている父  
十二881 たら、手おけに水をいっぱいくんで持っ  
十二884 合 がかわる。「水を持っておいで。」と  
十二886 いうことばのわけをよくききわけて、そ  
十二8810 になわなないことをすれば、たいへんお  
十二8812 いことになる。話をきくときには、相手  
十二8812 いっていることばをよくききわけ、のみ

十二892 、相手の人に満足を与えることができな  
十二893 くない。自分が話をするときには、その  
十二894 くあうように、氣をつけて話さなければ  
十二896 とうに感謝の心持をこめていうときと、  
十二8911 習慣としてことばをつかえば、ことばの  
十二8912 それは自分の生活を軽はずかにし、相手の  
十二8912 くに、相手の人をやしめることに  
十二902 でも、ただ口まねをして、おうむのよう  
十二909 、こういう短い文を書いた。太郎はこの  
十二9010 、さまざまな氣持をこめているにちがい  
十二911 たこと、弟やいぬをつれていったこと、  
十二913 カサカサと落ち葉をふんでいったこと、  
十二923 あったこと、りすをみつめて追いかけた  
十二924 こと、もみじの枝をとってきたこと――  
十二926 人がこれと同じ文を書いたとしても、そ  
十二931 じょうに通じる力をもっている。そこに  
十二935 には、いっそう氣をつけなくてはならな  
十二935 前後の続きぐあいをよく考えて、ことば  
十二936 く考えて、ことばを選び、ひとりがつて  
十二938 いせつである。文を書くときには、よく  
十二938 ときには、よく手をはたかせることもでき  
十二939 ことができる。文をなおすことはつまり  
十二939 すことはつまり心を練ることになる。心  
十二9310 ることになる。心を練るほど、ことばが  
十二942 んぼ」という文字をとおして、すいすい  
十二943 かわい赤とんぼを、心の中にえがきだ  
十二947 る。ところがこれを読んだ人々の心には  
十二948 郎は、秋の青い空を赤とんぼがむれてと  
十二949 てとんでいる景色を思い、すすきの野原  
十二949 い、すすきの野原を心にえがき、自分も  
十二9411 のいまごろのことをふと思いだす。弟に  
十二9412 まれて、赤とんぼをとりにつけたが、

十二 95 1 ぽはとらずに、花を手にいっぱいつんで  
 十二 95 2 つんで帰ったことを思う。秋子は、おと  
 十二 95 4 てきたときのことを思いだす。だれも話  
 十二 95 7 ぽが自分のまわりをとんでいた。「略」  
 十二 95 10 ぞれちがつたことを心の中に思いうかべ  
 十二 96 7 よう。その写真帳をひろげてみると、あ  
 十二 97 2 でしょうか。これを見て、どんなことを  
 十二 97 2 みて、どんなことを感じるでしょう。  
 十二 97 7 った貝づかのことを思いだしてください  
 十二 98 1 み、あかにしなどをたくさんたべていた  
 十二 98 6 ぐろ、かつおなどをたべました。このよ  
 十二 98 11 京の大森の貝づかを発見してからのこと  
 十二 99 2 づかからでたものをならべてみましょう  
 十二 99 10 す。これは、食物をいれるためのもので  
 十二 99 11 が、もちろん、水をくんだり運んだりす  
 十二 101 9 いろいろなすがたをあらわしています。  
 十二 102 1 いのびのびした顔をこらんなさい。これ  
 十二 102 1 らんなさい。これを見て、平和を愛し  
 十二 102 2 れをみても、平和を愛した古代の人たち  
 十二 102 3 、いぬや、鳥などをこしらえたものがあ  
 十二 105 2 和絵。絵の中ほどをこらんなさい。大き  
 十二 105 3 さい。大きなけたをはいた女の人が、お  
 十二 105 3 女の人が、おともをふたりつれていま  
 十二 105 9 ります。くだものをならべたやお屋らし  
 十二 106 4 るは、うさぎの耳をくわえて、得意の足  
 十二 106 5 て、得意の足かけをしました。うさぎは  
 十二 106 9 が、うしろから手をふり足をふって、お  
 十二 106 9 ろから手をふり足をふって、おうえんを  
 十二 106 10 ふって、おうえんをはじめました。土ひ  
 十二 107 9 まえた両足、どこをみても、力があふれ  
 十二 108 3 っ、ほとけさまをおまもりします。右  
 十二 108 4 す。右の仁王さまをほったのは運慶だと

十二 108 11 、いろいろな表情をあらわします。室町  
 十二 109 6 お話ですが、これをキリスト教の宣教師  
 十二 110 2 本はこのような心をとりいれて、どん  
 十二 110 8 いうのは、うるしをぬつたうえに、金や  
 十二 110 9 に、金や銀のこなをまいて、もようをあ  
 十二 110 9 をまいて、もようをあらわしたものです  
 十二 110 10 、なまりや貝などをはめこんだものもあ  
 十二 110 11 中に、銀や貝が光をはなっているのは、  
 十二 111 9 絵は、版画で、絵をかく人と、それを木  
 十二 111 10 をかく人と、それを木にほりつける人と  
 十二 112 1 三人がひとつに心をあわせた美しさは、  
 十二 112 5 という人体のことを絵いりで説明した本  
 十二 112 6 いりで説明した本を、いまから百八十年  
 十二 113 1 りました。この本を日本語になおすのに  
 十二 113 3 せん。新しい学問をきり開いていくとき  
 十二 113 9 日本で東京横浜間を走ったものでありま  
 十二 114 6 、いろいろなことを相談します。平和な  
 十二 114 7 す。平和な国日本を作るために、また、  
 十二 114 8 、また、文化國家をきずくために。こん  
 十二 115 2 れで、日本の面影を写した写真帳が終り  
 十二 115 3 。このような歩みをたどってきた日本を  
 十二 115 3 たどってきた日本を、これからどうも  
 十二 115 5 主義ということばをほんとうに生かして  
 十二 115 6 りません。ことばを生かすということは  
 十二 116 3 やきのこずえの方を。そのこずえの、細  
 十二 116 4 って、まるで、息をこらしてしずかにし  
 十二 116 7 、おたがいひじをつつきあって、こと  
 十二 116 8 くと、するどい角をのぞかせた。長くか  
 十二 116 11 新しい勇氣や空想をもつて、春は、また  
 十二 116 12 しい船出のほぬのを、高くかかげる季節  
 十二 117 10 げろうのたいまつをたいて、おしよせて  
 十二 117 5 理のように、白雲をかたにまどった小山

十三 7 5 たにまどった小山をめぐって、聞えてく  
 十三 8 4 れたり、自分で本を読んだり、考えたり  
 十三 8 5 て、自分のつとめをはたしていくために  
 十三 8 6 いくために、知識をますことは、たいせ  
 十三 8 8 の深く進んだものを科学的知識という。  
 十三 8 8 深い、正しい知識を得るには、考えたり  
 十三 8 9 また、種々の器械をつかって観察したり  
 十三 8 10 そうして、これをいくどもくり返して  
 十三 9 1 すでに知ったことを材料として、考えを  
 十三 9 1 材料として、考えをおし進め、種々のこ  
 十三 9 2 のことがらの関係を明らかにして、きま  
 十三 9 2 て、きまつた法則を知る。いいかえれば  
 十三 9 4 間に行われる法則を知って、ととのつた  
 十三 9 5 さらに進んだ研究をする土台にするので  
 十三 9 7 つくようなくふうをして、その実験を重  
 十三 9 8 をして、その実験を重ね、かふんがめし  
 十三 9 9 はみられないことを、知るようなもので  
 十三 9 9 る。むかしは、星を見て世の中がみだれ  
 十三 10 11 た。たとえば、移轉をするのに、方角がよ  
 十三 10 4 い、名まえの字画を数えて、運がよいと  
 十三 10 5 の人の性質や運命をきめたりしている。  
 十三 10 6 は、幸福なくらしをし、ある人は、たい  
 十三 10 9 る。漢字で名まえを書かぬ國の人々など  
 十三 11 10 人がみな同じ性質をもち、同じ運命をた  
 十三 11 11 をもち、同じ運命をたどるとは、考えら  
 十三 11 1 理にあわないことを信ずるのを、迷信と  
 十三 11 2 いことを信ずるのを、迷信という。一つ  
 十三 11 10 因と結果との関係を調べきわめている。  
 十三 11 12 ったことは、知識をもととして考えなけ  
 十三 12 2 に理由のないことを信ずる迷信は、今日  
 十三 12 3 の中にどれほど害をなしているかしれな  
 十三 12 4 かしいない。知識を廣め、学問を研究し

十三124 知識を廣め、學問を研究して、迷信をま  
十三124 を研究して、迷信をまったく去つて  
十三137 が、だんだんそれを発見しました。火星  
十三138 は、太陽のまわりを、大きく輪をえがい  
十三139 わりを、大きく輪をえがいて、まわつて  
十三1310 、地球もまるい形をしたもので、火星な  
十三1310 に、太陽のまわりをまわっている星の一  
十三1312 てきました。これを最初にいじだしたの  
十三145 ういう星——これをわく星といいますが  
十三147 のだ、ということを見しました。その  
十三1410 いろな発見や発明をしました。自分で望  
十三1410 た。自分で望遠鏡を組み立てて、それで  
十三1410 てて、それで天体を觀察し、数学でこま  
十三1412 くのだということ、明らかにしました  
十三153 轉といて、自轉をしながら、だえん形  
十三154 ん形のきまつた輪をえがいて、一年に一  
十三154 回、太陽のまわりをまわります。これ  
十三157 たちは、天動説を信じていましたので  
十三158 たので、ガリレオを呼びだし、その説を  
十三158 呼びだし、その説を人に教えてはならな  
十三1510 は、だまつて研究を続けていきましたが、  
十三1510 書いていられず、本を書いて、地動説を強  
十三1511 を書いて、地動説を強くとなえました。  
十三162 。ガリレオは、年をとつてもいたし、め  
十三163 ていたので、やむを得ず自分の説はあや  
十三165 く害のため、考えをかえてしまったのか  
十三167 て、死ぬまで眞理を求めていたのです。  
十三176 しいおとぎばなしを、世界の子どもたち  
十三1710 のよくできる二州をとられました。も  
十三182 もっともよい土地を失いました。です  
十三182 いかにして、國運をもとどおりにする  
十三183 の愛國者たちの心をくだいた、もっとも

十三189 おしという大事業をなしとげて、さかえ  
十三1811 。このとき、希望をいだいてたちあが  
十三191 に國運回復の計画をたて、その顔にほ  
十三191 その顔にほほえみをたたえて、つるぎで  
十三192 るぎで失つたものを、すきでとり返そう  
十三193 は、戦いの間、橋をかけたり、道路をつ  
十三193 をかけたり、道路をつくつたり、みぞを  
十三194 つくつたり、みぞをほつたりするとき  
十三194 國土の地質や地味を研究しましたが、こ  
十三195 った土地の大部分をしめるユートランド  
十三196 れ地と戦い、これを豊かな土地にしよう  
十三196 ようとする大計画をたてました。ダル  
十三198 学者であり、理想を実現する誠意にみち  
十三1910 であります。これをこえた土地とするの  
十三1911 ります。このゆめを実現するために、ダ  
十三203 るばかりで手入れをおこたつたために、  
十三204 めに、土地は、年を追つてやせおとろえ  
十三206 ったのです。これを生かすのは、みぞを  
十三206 生かすのは、みぞをほつて水をそそぎ、  
十三206 、みぞをほつて水をそそぎ、平野の雑草  
十三206 そぎ、平野の雑草をかりとり、じゃがい  
十三207 じゃがいもか牧草を植えることにありま  
十三208 のは、あれ地に木を植えることです。ダ  
十三208 ことについて研究を重ねました。そこ  
十三210 はや、この強い木をやしなうにたる地力  
十三212 十三215 〇 むずかしい問題を、かならず解決して  
十三216 十三216 〇 と、熱心に研究を続けました。そうし  
十三217 ルプス産の小さな木を移植してみたらどう  
十三218 ありました。これをノルウェー産のとも  
十三223 れ地から建築用材を求めるダルガスの熱  
十三225 ると、そこで生長をとめました。アル  
十三226 ルプス産の小さな木を植えたので、か

十三228 〇 るといった材木を、さあ早くもらいた  
十三2210 ルガスは、父の質を受けて、植物の研究  
十三2212 いて、大きな発見をしました。わかいダ  
十三232 〇 きつと、小もみをいつまでも、大も  
十三233 〇 なつて、小もみを切りはらつてしま  
十三234 〇 、大もみは土地をひとりじめして、生  
十三236 〇 いたルガスの意見を、実際にためして  
十三238 は、大もみの生長をうながす力をもつて  
十三238 生長をうながす力をもっているが、そ  
十三238 っているが、それをこえろと、かえつて  
十三242 が、そのよい感化を受けました。しげ  
十三251 ふき送る砂ぼこりをふせぎ、さらに、北  
十三252 〇 北海特有の砂丘を、海岸近くでくいと  
十三262 〇 えた國民は、希望をとり返し、誠実な研  
十三263 によつて、あれ地をみどりの野とし、祖  
十三263 りの野とし、祖國を生き返らせ、ついに  
十三264 のような平和國家をうち建てました。  
十三268 家も、高い土べいを立てめぐらしている  
十三272 〇 ろして、日だまりを楽しみ、夏は夏で、  
十三281 〇 た土べいの日かげを選び、風の通り場  
十三282 〇 もちやや絵本などを持って遊ぶわけ  
十三283 〇 はない。そのへんを走つたり、地面に  
十三283 〇 たり、地面にこしをおろして、あなを  
十三284 〇 をおろして、あなをほつたり、土でお  
十三284 〇 んごのようなものをこしらえたり、遠  
十三285 〇 るなものに、耳をかたむけたりして  
十三2810 〇 んめん器や、道具を入れた赤いこを、  
十三2810 〇 を入れた赤いこを、てんびんぼうで  
十三2811 〇 ぬきのようなものを持ち、かた手には、  
十三2812 〇 た手には、鉄ぼうをぎぎぎぎぎぎぎ  
十三2812 〇 ときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおい  
十三291 〇 ユーン」と、あとをひくようなひび

十三 29 3 どもが、もう、頭をつるつるにそられて  
 十三 29 4 糸屋が来る。荷車をひきながら、ゆっく  
 十三 29 5 、ブリキのつづみを鳴らしてやって来る  
 十三 29 7 、はずむような音をたてる。どこからと  
 十三 29 8 て来て、糸屋さんを取りまく。黄色や、  
 十三 29 10 、いろいろな道具を入れた荷をかついで  
 十三 29 10 な道具を入れた荷をかついでいる。前の  
 十三 29 11 上に、小さなどらをつぶらさげ、その両が  
 十三 29 12 がわに、ふんどうをつるしておく。歩い  
 十三 30 1 、かわいらしい音をたてる。どらにも、  
 十三 30 8 しくて、大きな音をたててやって来るの  
 十三 31 1 で、きゅうにどらをおさえるので、「ジ  
 十三 31 3 うに聞える。これを聞きつけて、子ども  
 十三 31 4 るがさまざまな藝をする。三國志とか、  
 十三 31 5 むかしものがたりをやるつもりなのだが  
 十三 31 7 もないべつのことを演じたりする。それ  
 十三 31 8 るまわしは、さるをつかたり、せりふ  
 十三 31 9 かったり、せりふをいったり、はやしを  
 十三 31 9 いったり、はやしをいれたりしなければ  
 十三 31 11 がしい。鳴りものをつかわないで、呼び  
 十三 32 1 ころ、遠いところを通るその声を聞くの  
 十三 32 2 ころを通るその声を聞くのは、ゆめの中  
 十三 32 4 図 さあ、きんぎょをお買いなさい。大き  
 十三 32 5 略。」こんなことをいって通る。アイス  
 十三 33 1 親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であ  
 十三 33 2 いけん一けん、水を運んで行かなければ  
 十三 33 3 い。大きな水おけをのせた一輪車が、「  
 十三 33 4 、かん高いひびきをたてる。だから、車  
 十三 33 6 音がすずしい氣持をおこさせ、冬の日に  
 十三 33 7 むざむとした氣持をおこさせる。夜のホ  
 十三 33 8 っ暗なので、はなをつままれてもわから  
 十三 34 2 に、かげ絵の舞台をこしらえて、そこで

十三 34 4 絵は、子どもの心をひきつけてやまない  
 十三 35 1 うな氣持で、れんをながめている。それ  
 十三 35 9 どり、正月氣分を味わう。早春になる  
 十三 35 10 てきて、ホーントンをにぎわわせる。これ  
 十三 35 11 れは、はとにふえをむすびつけてとぼす  
 十三 35 12 るが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴  
 十三 36 2 がおのずから和音をふくみ、それこそ天  
 十三 36 8 どもたちは、それをつかもうとして追い  
 十三 36 9 いかける。大通りを、ぶたがぞろぞろと  
 十三 37 7 。三郎が、ぼうしをかぶったままとびこ  
 十三 37 7 んで来て、受話器をとる。三郎「もしも  
 十三 38 2 図 あさん、配給物を取りに行ったんじゃ  
 十三 38 10 ださい。(受話器を持ったまま、待つて  
 十三 38 11 その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるく  
 十三 39 5 い。(つくえの方をちらちら見る。)今  
 十三 39 11 「三郎は、受話器をかけ、電話口から、  
 十三 40 1 よって、ひきだしをあける。真ちゃんが  
 十三 40 2 こしていった手紙を、とりだして読む。  
 十三 40 3 話口に行き、電話をかける。三郎「もし  
 十三 40 6 図 ちゃん……真二を呼んでいただきたい  
 十三 40 7 (電話のかかるのを待っている。その間  
 十三 40 7 ったさっきの手紙をくり返して読む。)  
 十三 41 6 図 。ぼくの学用品を、ぼくひとりでつか  
 十三 41 10 図 どの日曜、きみをお客さんにして、ハ  
 十三 42 2 図 だって……なにを……それきみにくれ  
 十三 42 8 図 に、お札の手紙を書こうね……うん、  
 十三 42 11 なら。」(受話器をおく。)また、手紙  
 十三 43 1 く。)また、手紙を読みながら、舞台の  
 十三 43 2 来る。三郎手紙を読みながら、「生き  
 十三 43 2 した——か。(顔をあげて、そのことば  
 十三 43 3 げて、そのことばを味わうように)生  
 十三 44 1 「子どもしばい」をするための注意し

十三 44 11 は、四人のひと話をしているわけです。  
 十三 45 1 四人とそれぞれ話をしているようすを、  
 十三 45 2 をしているようすを、見せなくてはなら  
 十三 45 5 いあいてのことばを考えて、それによっ  
 十三 45 5 よって、「……」を時間的に短くしたり  
 十三 45 7 あいてのいうことを聞いて、それから三  
 十三 45 7 三郎くんのことばをいい、そうして、三  
 十三 45 10 見物人にせなかを向けられないように、顔  
 十三 46 4 りが、ちやうの羽をひいて行く。ああ、  
 十三 47 5 にひっそりと、客をむかえた赤いへや。  
 十三 47 10 。はるかな谷川を聞いているその耳も  
 十三 48 6 短日 かれぎくをたいしている。とやへ  
 十三 49 9 とが、かわいい口をまるくして、ハ・ハ  
 十三 50 1 くるみのごちそうをならべると、その木  
 十三 50 3 氣でゆかいに、手をつなぎましょう。う  
 十三 50 4 れしいハ・ハ・ヒを、合唱しましょう。  
 十三 50 6 牧場 牧場の泉を、そうじに行つて来  
 十三 50 7 。ちよっと落ち葉をかきのけるだけだ。  
 十三 51 1 来たまえ。子うしをつかまえて行つて来  
 十三 51 1 たしの心は、にじを見るとおどる。おさ  
 十三 51 8 しの日々が、自然をしたらう心で、一日一  
 十三 52 7 一まいの絵はがきをいただきました。絵  
 十三 53 2 わいあいあちゃんをだいていて、その右  
 十三 53 5 ています。これを見て、どう思います  
 十三 54 2 国 ぼくは、その絵を見ると、そのあかち  
 十三 54 3 「ぼくは、その氣持を、だれかに話してみ  
 十三 54 6 ました。その氣持を、だれかに話してみ  
 十三 54 9 わかいころ、世界をまわって来た人です  
 十三 54 10 、この絵も、本物をくらんになつてい  
 十三 54 11 、しよさいで、本を読んでいらつしやい  
 十三 55 3 ただいた絵はがきをだして見せますと、  
 十三 55 6 って、一まいの絵をひきだしから出して  
 十三 55 9 ぼくは、絵はがきをそのすりのとくら

十三 56 9 会 から絵のけいこをして、たいへんじょ  
 十三 57 2 会 に出て、へき画をかいたり、美しいし  
 十三 57 2 会 いしょう像などを、たくさんかいた。  
 十三 57 3 会 、マドンナの像をかくことが得意だっ  
 十三 57 6 会 ういいながら、目を細くして、ありあり  
 十三 57 7 会 ありありとその絵を目の前に見るような  
 十三 57 7 会 見るようなようすをなさいました。「略  
 十三 58 10 会 ナのかわたつたのを見せてあげよう。」  
 十三 59 4 会 マリアがキリストをだいて立っている  
 十三 60 2 会 へ。ぼくは、それを聞きながら、目をあ  
 十三 60 3 会 を聞きながら、目をあげて、かべにかか  
 十三 60 6 会 ている一まいの絵を見ました。「略。」  
 十三 61 4 会 さで、せんばいをしので大家になり  
 十三 61 4 会 り、自由にふでをふるって、りっぱな  
 十三 61 5 会 、りっぱな作品をたくさんのかしたの  
 十三 61 6 会 よ。こんなことを考えて、きみも勉強  
 十三 61 7 会 て、きみも勉強を続けるんだね。きつ  
 十三 61 9 会 、この絵はがきを送ってくださったん  
 十四 4 4 会 った特別なひびきをもって、私たちの心  
 十四 4 5 会 った、私たちの心をうつのです。なぜで  
 十四 4 9 会 ての心のとうとさをみつけたのです。そ  
 十四 4 10 会 しい人々の苦しみを、自分もともに苦し  
 十四 5 2 会 たしかに、私たちを心のそこから動かし  
 十四 5 2 会 私たち自身の生活を思わずふり返らせな  
 十四 5 7 会 、人の世の苦しみをいろいろとなめてい  
 十四 5 11 会 れは、かれが、父を失った直後、文学修  
 十四 6 1 会 れます。老いた母を思う子の真情は、遠  
 十四 6 2 会 の真情は、遠く海をこえて、私たちの胸  
 十四 6 5 会 とちよっとお話をしようと思います。  
 十四 6 6 会 す。私は短い旅をしたあとで、七時に  
 十四 6 7 会 かあさんのことを考えないではいられ  
 十四 7 1 会 どもたちのことを考えになつてくだ

十四 7 10 会 心からの思い出をまもることにしまし  
 十四 7 12 会 うさんのお写真、私は、いつも自分  
 十四 8 2 会 さんのおことばを思いだすことにしま  
 十四 8 6 会 した。つらいのをがまんして生きてい  
 十四 8 9 会 。なにも、勇気をだしてわすれてしま  
 十四 8 12 会 。けれども、力をだしてしごとのこと  
 十四 8 12 会 てしごとのことをお考えになるのです  
 十四 9 1 会 ちの生活のことをお考えになつて、こ  
 十四 9 3 会 からおかあさんを愛しているからだ  
 十四 9 5 会 からおかあさんが力をおとしておしま  
 十四 9 6 会 んかなしい思いをしなければならませ  
 十四 9 7 会 めに、おからだをおいためになるなん  
 十四 9 7 会 かりしたかくごをおきめになり、自分  
 十四 9 11 会 めになり、自分を愛してくれる子ども  
 十四 9 11 会 どもたちのことを思つて、安らかに生  
 十四 10 2 会 ろいろいいことを教えてくれました。  
 十四 10 4 会 しないとか、光をずっとやわらかくす  
 十四 10 6 会 は、つかいかたを書いた小さな書きつ  
 十四 10 11 会 間ごとにお手紙をさしあげましょう。  
 十四 10 12 会 かあさんのことを思っているのです。  
 十四 11 5 会 コヒー入れとを送らせました。この  
 十四 11 6 会 油でも、どちらをおつかいになつても  
 十四 11 7 会 。が、きはつ油をおつかいになつたほ  
 十四 11 9 会 んなさい。調子をととのえるには、ど  
 十四 11 10 会 えるには、どうをあらちちらにまわ  
 十四 11 11 会 よに小さなかさを送りました。たぶん  
 十四 12 1 会 わけなくかわりをお見つけになれるで  
 十四 12 3 会 す。かさは、光をへいきんさせ、もつ  
 十四 12 6 会 この式のランプをつかっているという  
 十四 13 2 会 こまでコヒーを入れていいのか、お  
 十四 13 4 会 らコヒーこしをとったとき、それを  
 十四 13 4 会 ったとき、それをのせるためなのです

十四 13 5 会 かあさんのことを思つております。夜  
 十四 13 5 会 ております。夜をどうしてすごしてお  
 十四 13 7 会 れます。あなたを思うすべての心をか  
 十四 13 7 会 思うすべての心をかたむけて、さよう  
 十四 13 10 会 かあさんのことを思っています。あな  
 十四 13 11 会 いま、この手紙を書いているつくえの  
 十四 14 7 会 、あなたのことを思うとき、「略。」  
 十四 14 10 会 つしよに一月をくらせるのだ、自分  
 十四 14 11 会 りおかあさんを幸福にしておあげし  
 十四 15 2 会 あるということをお考えになつて、力  
 十四 15 2 会 えになつて、力をとりなしておくだ  
 十四 15 10 会 らたびたび手紙をあげることにしまし  
 十四 16 1 会 、このまごころを書いてお送りして、  
 十四 16 5 会 い。あなたが私を思つてくださるとき  
 十四 16 6 会 かあさんのことを思っている。ラン  
 十四 17 5 会 どの時間になにをしていらっしゃるか  
 十四 17 7 会 うはこれでお話をやめます。が、近い  
 十四 18 2 会 学校で、そうじをしているとき、高山  
 十四 18 7 会 すると、窓ガラスをふいていた田中さん  
 十四 18 10 会 といった。これを聞いていた野村さん  
 十四 19 12 会 った。みんなの話をお聞きになつて、「へ  
 十四 20 1 会 ことについて話をしよう。」とおつし  
 十四 20 3 会 なは急いでそうじをすませた。みんなが  
 十四 20 6 会 まじっていることをくわしく話してくだ  
 十四 21 6 会 きになる文字に目をそそいだ。先生は、  
 十四 24 3 会 略。」先生のお話を聞いていたうちに、  
 十四 24 10 会 れは、外国と交通をして、日本になかっ  
 十四 27 4 会 、先生にそのことをおたずねすると、先  
 十四 27 5 会 とえば、『漢語をつかう。』などとい  
 十四 27 11 会 洋からきたことばをできるだけたくさん  
 十四 28 2 会 れは、國語辞典をひいてみると、だい  
 十四 28 5 会 あるから、それを調べると、なおいっ

十四 28 7 にか大きな楽しみをもったような氣持に  
 十四 29 7 あまり星に親しみをもっていなかったよ  
 十四 29 10 ために、天上の花を見ようとはしなかつ  
 十四 30 5 、大きなものに心をくばることがたりな  
 十四 31 2 考えて、世界全体を見わたすことをわす  
 十四 31 2 体を見わたすことをわすれていたのは、  
 十四 31 10 あなたがたのものをみる目、ものを考え  
 十四 31 10 のを見る目、ものを考える力が大きな  
 十四 32 1 、あなたがたに星を見るようにすすめま  
 十四 32 2 回、中には、「星を見わたすことになる  
 十四 32 5 う。けれども、星をこまかく観察したこ  
 十四 32 12 のわく星が、太陽を中心として回轉して  
 十四 33 1 回轉していることを知っています。この  
 十四 33 2 。この一むれの星を、ふつう太陽系とよ  
 十四 33 7 というのは、地球をとりまいてる天の  
 十四 35 5 間が、引力の法則を発見したり、うちゅ  
 十四 35 6 うちゅの大きさを計算したりするでは  
 十四 35 6 りませんか。これを思えば、人間の力と  
 十四 35 9 い、あの天上の星を。まあ、なんとい  
 十四 35 11 じいっと大空の星をながめていると、は  
 十四 36 3 ない詩です。教えを説かない教えです。  
 十四 36 5 中からふかい思想を読みとりました。さ  
 十四 36 6 た。さまざまな術を発達させました。聞  
 十四 36 9 に、先生から、星をつかめといわれ、そ  
 十四 36 11 とばにふかい感動を受けたということ  
 十四 37 1 その感動から研究を進めて、ついにラジ  
 十四 37 1 、ついにラジウムを発見したのです。み  
 十四 37 3 活にもつらい思いをしています。そん  
 十四 37 4 はいけません。心を大きくもってください  
 十四 37 5 ださい。世界全体を、人類全体を、そ  
 十四 37 5 全体を、人類全体を、そうして、うちゅ  
 十四 37 5 て、うちゅ全体をながめわたす大きな

十四 37 6 めわたす大きな目をもってください。そ  
 十四 37 9 、どうか天上の星を見あげてください。  
 十四 37 10 、あなたがたに力をあたえてくれるにち  
 十四 38 3 人」の見ている方を遠く見つめる。「略  
 十四 39 6 五の人」深呼吸をしよう。「みんな氣  
 十四 39 7 のびのびと深呼吸をする。一の人」なん  
 十四 39 9 はるか遠くの方を指さして、「略」。  
 十四 41 2 この美しい朝をむかえよう。二の  
 十四 41 3 二人の人」この光を全身にあびよう。  
 十四 41 9 「みんな、両手をのばせ。」みんな「胸  
 十四 41 10 せ。」みんな「胸をはれ。」みんな空を  
 十四 41 11 はれ。」みんな空をあおぐ。美しい音楽  
 十四 42 3 もて。心に太陽をもて、あらしがふこ  
 十四 42 7 うが、心に太陽をもて。そうすりや、  
 十四 43 2 くちびるに歌をもて、ほがらかな調  
 十四 43 6 くちびるに歌をもて。そうすりや、  
 十四 44 1 ためにもことばをもて、なやみ、苦し  
 十四 44 4 れるのか、それを、こう話してやるの  
 十四 44 5 くちびるに歌をもて、勇氣を失うな  
 十四 44 6 歌をもて、勇氣を失うな。心に太陽を  
 十四 44 7 うな。心に太陽をもて、そうすりや、  
 十四 45 5 れて、黒い波の間をおよいでいました。  
 十四 45 6 、いったい、なにをしているのだろう。  
 十四 45 8 せんでした。助けを求めてなきさげぶ声  
 十四 46 3 で、大ぜいの來客を前にして、客間で歌  
 十四 46 8 までにどれだけ歌を聞いたかしれませ  
 十四 46 9 と歌のありがたさを味わったことはあり  
 十四 48 5 。かれは、歌の声をたよりに、その方に  
 十四 48 8 つて、立ちおよぎをしていました。歌を  
 十四 48 8 していました。歌を歌っているのは、そ  
 十四 48 10 です。頭から大波をかぶっても、平氣で  
 十四 48 11 っても、平氣で歌を続けていました。助

十四 48 11 。助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人  
 十四 48 12 かの婦人たちが力をおとさないように、  
 十四 48 12 ように、寒さに氣を失って、まるたから  
 十四 49 1 て、まるたから手をはなさないように、  
 十四 49 2 に、こうして元氣をつけていたのです。  
 十四 49 3 す。「心に太陽をもて、くちびるに歌  
 十四 49 4 くちびるに歌をもて。」このおじょ  
 十四 49 5 うさんは、この歌を知っていたかどうか  
 十四 49 8 らい、この歌の心を生かした人は少ない  
 十四 49 10 ほんとうにこの歌を歌った人というべき  
 十四 49 12 おじょうさんの歌をたよりに、マッケン  
 十四 50 2 のボートが、やみをぬって助けにきてく  
 十四 50 3 り、その美しい声を手がかりにして。そ  
 十四 50 4 ケンナも、その歌を歌っていたおじょう  
 十四 50 7 おしいことに、歌を歌ったおじょうさん  
 十四 51 4 ぶりにごちそうをたべて、たいへんゆ  
 十四 51 6 という話しあいをやってみたら、おも  
 十四 51 8 のは、根のしるしをつけた老人でした。  
 十四 53 4 ずに自分のことを主張なさいましたね  
 十四 53 10 、せつせと養分をこしらえて、送って  
 十四 54 1 のかぼちゃの花を見えています。あれは  
 十四 54 1 をこしらえる力をこしらえる力をかま  
 十四 54 2 が、かってに花をさかしたからです。よ  
 十四 54 7 んは養分のことをおっしゃいましたが  
 十四 54 12 。そこへ細い根をのぼして、水と養分  
 十四 55 1 て、水と養分とを吸いとって、夜も晝  
 十四 56 3 葉さんが、それを日の光にあてたり、  
 十四 56 3 あてたり、空氣をお吸いになって、養  
 十四 56 11 い、私のこの足を、手を。こんなに大  
 十四 56 11 のこの足を、手を。こんなに大きなき  
 十四 56 12 うけんめいそれをおおして、あなたが

十四 57 7 ㊦ んかってなことをいってしまいましたね。  
 十四 57 12 ㊦ は、私が熱と光とをゆたかに送ってやっ  
 十四 58 1 ㊦ は、養分のことをいっていらっしやい  
 十四 58 2 ㊦ ましたが、それを養分につくるのは、  
 十四 58 3 ㊦ 。そういうことを考えてみたことがあ  
 十四 59 1 ㊦ が助かったことを考えてごらんない  
 十四 59 11 ㊦ わって、かふんをなかだちしてあげな  
 十四 60 9 葉も、つるも、首をひねって考えていま  
 十四 61 2 ㊦ その人間がせわをしてくれなかったら  
 十四 61 7 ㊦ いちばんいい種を、來年もわすれずに  
 十四 62 5 うですが、よく氣をつけて見ていると、  
 十四 62 8 でも、自然の現象を観察し、研究するこ  
 十四 63 3 です。この茶わんをえんがわの日なたへ  
 十四 63 4 持ちだして、日光を湯げにあて、向こう  
 十四 64 11 んからあがる湯げをよく見ると、湯が熱  
 十四 65 4 けです。湯の温度を計る寒暖計があるな  
 十四 67 3 うときに、よく氣をつけて見ていると、  
 十四 67 8 早さで回轉するのを見ることがあるでし  
 十四 69 6 つの例に、らい雨をあげてみたのです。  
 十四 69 7 んどは、湯のほうを見ることにしましょ  
 十四 69 10 りませんが、それを日なたへ持ちだして  
 十四 69 11 して、じかに日光をあて、茶わんのそこ  
 十四 69 11 て、茶わんのそこをよく見てごらんなさ  
 十四 70 4 は、夜、電燈の光をあてて見ると、もっ  
 十四 71 6 、ピーカーのそこをアルコールランプで  
 十四 71 8 くずなどの動くのを見ていても、いくら  
 十四 71 9 かし、茶わんの湯を、ふたをしないで  
 十四 71 9 わんの湯を、ふたをしないでおいっぱあ  
 十四 72 6 ます。これに日光をあてると、熱いとこ  
 十四 72 8 て、茶わんのそこを照らします。そのた  
 十四 72 11 ているかべや屋根をすかして見ると、ち  
 十四 73 4 氣流のむらが、光をおり曲げるためのな

十四 73 6 茶わんの湯の表面を、日光にすかして見  
 十四 77 3 (一) 私が、木を割ったり、竹を割つ  
 十四 77 3 木を割ったり、竹を割ったりして、なに  
 十四 77 4 「ということわざを覚えてくれました。  
 十四 77 6 なことわざは、木を割るときには、もど  
 十四 77 7 ら割るがいい、竹を割るときには、うら  
 十四 77 9 。私はすぐにこれをためしてみましたが  
 十四 77 10 とおりでした。竹を割るとき、もとのほ  
 十四 78 1 めにまん中になたをいれても、きつと、  
 十四 78 1 た。そのうち、氣をつけて、おけ屋さん  
 十四 78 9 やっているところを見ると、はじめ、う  
 十四 78 11 じめ、うらのほうをかるく四つに割って  
 十四 78 12 字の小さな木ぎれをはさんで、チョンチ  
 十四 79 1 対に、もとのほうを上にして、上からは  
 十四 79 3 て、上からはものをうちこむと、まっす  
 十四 79 4 でした。そのことを友だちに話すと、「へ  
 十四 79 7 という簡単なことを、知っているのとい  
 十四 79 10 だれが、そのことを発見したのでしょう  
 十四 80 1 たので、そのことをほかの人々に伝える  
 十四 80 8 。一事が万事。牛を追う。うり二つ。お  
 十四 81 3 ぬかにくぎ。ぼろを着ても心はにしき。  
 十四 82 8 の映画 雪の映画を二つ見た。一つは「  
 十四 83 2 戦っているようすを、映画にしたもので  
 十四 83 5 だすところ、それをうれしそうに見てい  
 十四 83 7 的に、じゅんじよをおって、とりあつか  
 十四 83 8 うのは、雪の景色を写したものではなく  
 十四 83 10 なく、雪の一ひらをとりえて映画にした  
 十四 84 1 ことにきれいな形をしていること、しか  
 十四 84 2 がったけつしょうを写していること、その  
 十四 84 3 ってくることなどを写している。また、  
 十四 84 5 ようがちがうわけを、映画的手法によっ  
 十四 84 10 てきた雪の一ひらを受けとって、それを

十四 84 12 受けとって、それをくわしく観察してみ  
 十四 85 2 たか、どんな天空を旅して降ってきたか  
 十四 85 10 のほうの映画に心をひかれた。ふんだん  
 十四 85 11 から、一ひらの雪をとらえて、それをい  
 十四 85 11 をとらえて、それをいろいろな角度から  
 十四 86 2 中で、一本の草花を見いだして、それを  
 十四 86 3 見いだして、それをたんねんに写生する  
 十四 86 3 、一びきのこん虫をながねんかかって調  
 十四 86 4 ごくささいな感情をひろいあげて、一首  
 十四 86 4 あげて、一首の歌をよむのも、同じ心の  
 十四 86 9 た雪のむれが、道を消し、木をおり、汽  
 十四 86 9 が、道を消し、木をおり、汽車を立ちお  
 十四 86 9 、木をおり、汽車を立ちおうじようさせ  
 十四 86 9 うじようさせ、人をたおし、こごえ死に  
 十四 86 10 のすごいありさまを映画化することは、  
 十四 87 5 、雪の野原の表情をあつかっても、おも  
 十四 87 7 となつた廣い野原を、第一の人が歩いて  
 十四 87 9 。その人の足あとをしるべに、第二の人  
 十四 87 11 人も、同じ足あとをたよりに通って行く  
 十四 88 1 足あとが、廣野を横ぎる一すじの道と  
 十四 88 2 。その一すじの道をながめると、一直線  
 十四 88 7 心の中で考えごとをしていて、思わず方  
 十四 89 3 がんで土のにおいのかいだり、てのひら  
 十四 89 4 なでてみたり、耳を地べたに近づけて、  
 十四 89 5 する。こんな場面を、映画独特の手法に  
 十四 89 7 の作文でも、それをとりあつかう人によ  
 十四 89 10 るのは、ものごとをあたたかくながめた  
 十四 90 5 りの女の子は、町をあらこちら歩きな  
 十四 90 7 い屋根うらのへやを出たときは、上ぐつ  
 十四 90 7 たときは、上ぐつを足にひっかけた  
 十四 90 10 が来たので、それをさけるために、急い  
 十四 90 10 ために、急いで道を横ぎったときに、そ

十四 92 3 子は、まだマッチをすこしも賣つてはい  
 十四 92 11 て、こゝえて、身をひきずつて歩いて  
 十四 93 2 小さな顔のまわりを、花かんむりのよう  
 十四 93 5 ともった家々の前を、そろそろとかなし  
 十四 93 7 。女の子は、窓々をおして、ちらちら  
 十四 93 8 やくともしびの光を見た。おいしそうな  
 十四 93 8 いしそうなにおいをかいだ。「略。」ひ  
 十四 93 9 ので、そんなことを思った。ただひと目  
 十四 93 10 の光とごちそうとを見るだけでも、満足  
 十四 93 11 ッチの小さなたばを一つ持っていた。ぼ  
 十四 94 1 なにか、それで火をともしてみたかつた  
 十四 94 4 ちよつとした、身をかくす場所を見つ  
 十四 94 5 、身をかくす場所を見つけた。そうして  
 十四 94 7 。女の子は、両足を――そのあわれな、  
 十四 94 7 、青くなつた両足をそろえて、ぼろぼろ  
 十四 94 10 ていた。その両手をあたためるために、  
 十四 94 12 本のマッチで、火をともしることができ  
 十四 95 1 子は一本のマッチをとりだした。かべに  
 十四 95 2 こすりつけて、火をつけた。まあ、なん  
 十四 95 4 さなつめたい両手をさしのべた。その小  
 十四 96 1 ッチ賣りのむすめを喜びむかえるよう  
 十四 96 2 さな、つめたい足を、かがやくほのおの  
 十四 96 4 えつくしたマッチを持って、つめたく、  
 十四 96 6 もう一本のマッチをとつてかべでこす  
 十四 96 10 の子は、中のへやをすつかり見とおすこ  
 十四 96 12 うにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴか光る  
 十四 96 12 ぴかぴか光るさらをならべたテーブルが  
 十四 97 2 とあたたかいきをたてて、テーブルの  
 十四 97 4 のやいた鳥は、肉を切るナイフとホーク  
 十四 97 5 ナイフとホークとをせなかに立てたまま  
 十四 97 6 おりて、ゆかの上をよたよた歩いて、そ  
 十四 97 10 第三番めのマッチをすった。ほのおが明

十四 98 5 ちかと女の子の上を照らし、いく百もの  
 十四 98 7 ッチ賣りのむすめを見てわらいかけた。  
 十四 98 7 、人形の方へ両手をさしのべた。と、そ  
 十四 98 11 ようにかがやくのを見た。たしかにそれ  
 十四 99 2 るい星が落ちるのを見た。その星が落ち  
 十四 99 3 が落ちるとき、空を横ぎつて長い光のお  
 十四 99 3 ぎつて長い光のおをひいた。「略。」と  
 十四 99 10 もう一本のマッチを、そばのたばの中か  
 十四 100 1 行つたおばあさんを見た。おばあさんは  
 十四 100 2 しんせつなようすをしていた。けれども  
 十四 100 3 楽しそうなようすをしていた。「略。」  
 十四 100 5 と、女の子は、声をあげた。そうして、  
 十四 100 7 中であつたマッチをみんな一時につけた  
 十四 101 6 あさんは、女の子をうでにかかえて、ふ  
 十四 102 3 た小さなながいを見つけたとき、「略」  
 十四 102 6 ふしぎなまぼろしを知らないのだ。人々  
 十四 102 7 樂園の中で、元日をむかえているかを知  
 十四 102 8 をむかえているかを知らないのだ。も  
 十五 4 6 文 其の行く末を見ざりけり。空に  
 十五 6 2 文 だいたいは実をたれ時計はカチカチ  
 十五 6 4 文 ようなら 家を出て手をひかれたる  
 十五 6 4 文 家を出て手をひかれたるまつりか  
 十五 7 2 文 のの大きな耳をむけぬ みんなてき  
 十五 7 6 文 めく牛馬朝日を織るあきつ みかん  
 十五 8 2 文 こうと手ぶくろをぬぐ山ふかく さく  
 十五 8 3 文 くら人が人が子を歩かせて かわずだ  
 十五 9 2 文 花 こどもら手をつないだ中を日ぐれ  
 十五 9 2 文 手をつないだ中を日ぐれのうまが通る  
 十五 9 3 文 はまの子ら火をたく青き月夜となり  
 十五 9 4 文 間のかさから耳をだして まんじゅし  
 十五 10 2 文 山の家にうしをつないだ木 わか草  
 十五 10 8 文 木の赤きめをふくかきの上に小さ

十五 12 1 文 ス戸ののを見ればよきつくよな  
 十五 12 6 文 の外のつくよをながむれどランプの  
 十五 13 1 文 の月影清み森をなすすぎのこぬれの  
 十五 13 7 文 らす上野の森を見つあれば家ゆる  
 十五 14 4 文 満ちたる 目をあけてつくづく見れ  
 十五 19 4 ると、まっ白に雪をいたたく山々がなら  
 十五 19 8 ているけいしや面を、あるいは、氷河が  
 十五 19 9 氷河が無言の流れをきざんでいる深い深  
 十五 19 9 る深い深い谷の上を、登山電車がわれわ  
 十五 19 10 山電車がわれわれを運んでいつてくれま  
 十五 20 8 、この子どもたちをせわする、ひとりの  
 十五 21 4 上に、まっ白な服をつけた少女の立つて  
 十五 21 9 、めずらしい草花をつみながら、がけの  
 十五 21 9 ながら、がけの上をそろそろと歩いてい  
 十五 21 10 。男の子は、小石を見つけては深い谷の  
 十五 21 11 れがコトコトと音をたてて下の方まで落  
 十五 21 11 まで落ちていくのを、おもしろそうに見  
 十五 22 2 いるひつじのむれを追いてもするよう  
 十五 22 10 てその音の方へ顔を向けて見ると、三メ  
 十五 22 12 ルもあるような羽をひろげた大きな一わ  
 十五 23 1 サアツという羽音をたてて、空中に風を  
 十五 23 1 たてて、空中に風をまき起して、みんな  
 十五 23 2 「略。」という声をたてて、みんな草の  
 十五 23 6 があわててあたりを駆けまわる。見ると  
 十五 24 1 て、両足で鳥の腹をしめつけるようにし  
 十五 24 4 しげっている場所を見つけて、そこへひ  
 十五 24 4 て、そこへひつじをつれておりて来てい  
 十五 24 5 がひとりの女の子をつかんで舞いおりて  
 十五 24 6 ました。いまそれをとめなければ、もう  
 十五 24 12 て、両足で鳥の腹をしめつけ、上体をび  
 十五 24 12 しめつけ、上体をびつたりと鳥のせに  
 十五 25 1 のつばさのつけねをつかみ、左手を長く



15 25 2 ねをつかみ、左手を長くのばして、鳥が  
 15 25 4 ように、その上帯をかたくぎったので  
 15 25 8 うはげしく鳥の腹をしめつけました。す  
 15 26 7 つけば、大けがをするか、殺される心  
 15 26 11 が、安全な着陸地を上からさがしている  
 15 26 12 ととき大きな声をだして人々を呼んだ  
 15 26 12 な声をだして人々を呼んだり、とくに下  
 15 27 1 の方にいる女の子を元気づけるために「  
 15 27 8 の冷たい空気の中を、アルプスの深い谷  
 15 27 8 プスの深い谷の中を、大わしは、少年を  
 15 27 9 、大わしは、少年をせにのせ、少女を下  
 15 27 9 をせにのせ、少女を下にさげて、ずんず  
 15 28 1 サアツという羽音をさせたかと思うと、  
 15 28 2 たのか、その重荷をふり落すように、あ  
 15 28 3 き地のあるところを目がけておりて行き  
 15 28 8 けたままで、右手をはなして、手早く、  
 15 28 9 にさしていた短刀をぬいて、鳥がそのあ  
 15 28 10 がそのあき地へ身をおろすかおろさない  
 15 28 11 うちに、鳥のせ骨をさけて一つつき通  
 15 28 12 つきつき通し、鳥を後へひっくり返すよ  
 15 29 3 かんでいた女の子をはなして、おおむけ  
 15 29 6 、すばやく女の子を自分のせなにかく  
 15 29 10 年は、右手に短刀をふりかざし、左手で  
 15 29 11 し、左手で女の子をかばい、昔の物語に  
 15 29 12 たけだけしい相手を待ちかまえていまし  
 15 30 1 いげきで少年の頭をくだこうと、向かっ  
 15 30 2 ども、ひらりと身をかわした少年は、身  
 15 30 3 わした少年は、身をかわすと同時に、右  
 15 30 6 と、こんどは両羽をあおりたて、大きな  
 15 30 6 りたて、大きな風をまき起すようにして  
 15 30 7 して、少年の周囲をおおい包むいきおい  
 15 30 9 す。少年が女の子を後にかばうようにし

15 30 10 さって、岩角へ身をよせかけたとき、ち  
 15 30 11 は、すばやく短刀を持ちかえた右手で、  
 15 30 12 た右手で、その石を取るが早い、目の  
 15 31 1 たこのあくまの胸をめがけて、全身の力  
 15 31 1 がけて、全身の力をこめて投げつけまし  
 15 31 8 に、鳥はさけび声をたてて、苦しまざれ  
 15 31 9 よつともゆだんをすれば、それにふき  
 15 31 10 、ちよつとも気をゆるめると、鳥のく  
 15 31 12 その中で、女の子を後にかばいながら、  
 15 32 1 少年は苦しい戦いを続けていました。そ  
 15 32 4 たひつじかいたちを頼んで、大急ぎでお  
 15 32 4 です。ようやく道を見つけて、この鳥と  
 15 32 7 って目の前のてきを相手にしているもの  
 15 32 10 た大わしは、空中をころぶように、くる  
 15 32 10 に、くるくる舞いをして、下の方へ、谷  
 15 33 3 分のすくい主へ手をさしだしていました  
 15 33 10 この勇ましい少年をほめたたえているよ  
 15 34 3 ちは、自分の考えを表わすのに、ことば  
 15 34 4 りや、手まねなどを用いる。けれども、  
 15 34 5 。けれども、それをその場にはない人や  
 15 34 6 特別の表わしかたをしなければならぬ  
 15 34 8 で大昔には、なわを結んで、その結びか  
 15 34 9 、いろいろな考えを表わした。また、木  
 15 35 2 目や、じゅずだまを結びつけることも行  
 15 35 3 ものなどですししをつけてしめすことも  
 15 35 5 ともに、事物の形を絵にうつすことも行  
 15 35 12 、もとは事物の形を表わした絵文字から  
 15 36 5 はじめ、事物の形をうつしたのから発  
 15 36 7 という形のものを表わすのに、線を横  
 15 36 7 を表わすのに、線を横に一本引いたり、  
 15 36 9 した」という考えを表わすのに、線を  
 15 36 9 表わすのに、線を横に引いて、「・」

15 36 9 に引いて、「・」をその線のうえにおい  
 15 37 2 木は、もともと形をうつしてできたもの  
 15 37 3 あるが、それに線を加えて、「もと」と  
 15 37 3 え」とかいう考えを表わすことにした。  
 15 37 5 でに作られた文字を組みあわせて表わす  
 15 37 6 「日」と「月」をあわせて「明」が作  
 15 37 6 が作られ、「木」を二つならべて「林」  
 15 37 8 字の左側に「木」を書いて、「えだ・い  
 15 37 9 に関係のあることを表わし、字の右側に  
 15 37 9 側に、「支・反」をおいて、「シ・ハン」  
 15 37 10 ・ハン」という音をしめしたりした。漢  
 15 37 12 日本では、「山」を「サン」、「海」を「  
 15 37 12 を「サン」、「海」を「カイ」というよう  
 15 38 1 たがった読みかたをしたが、一方、「山」  
 15 38 1 が、一方「山」を「やま」、「海」を「  
 15 38 2 を「やま」、「海」を「うみ」などとか  
 15 38 2 味にあった日本語をあてて読むこともし  
 15 38 4 本では一つの漢字をふたとおりに読んで  
 15 38 4 た漢字の読みかたを「音」といい、日本  
 15 38 5 ばによる読みかたを訓という。それで、  
 15 38 6 「などの読みかたをちよつと考えてみた  
 15 38 10 から傳わった漢字をつかっているうちに  
 15 39 2 漢字から、日本語を表わすのに便利なか  
 15 39 3 かなや、ひらがなを作りだすようになって  
 15 39 4 なは漢字の一部分をとって作ったもので  
 15 39 6 うに漢字の一部分をとったのではなく、  
 15 39 8 うに、漢字の全体をくずしたのから作  
 15 39 9 で、日本のことばを、たやすくしかも自  
 15 40 1 までは漢字の長所をいかして、かなに漢  
 15 40 4 して、かなに漢字をてきとうにまぜるの  
 15 40 4 うに、その大もとをたずねれば、エジブ  
 15 41 1 十六字のローマ字を利用して、発音のち

15411 できる。ローマ字をつかうと、字数が少  
 15425 との三種類の文字をつかつており、その  
 15428 も四種類もの文字をつかつている國があ  
 15428 か。日本のことばをもっとも正しく、も  
 154210 たちは、この問題をもっとよく考えてみ  
 15433 まぶしい日の光をさけながら、銀座通  
 15433 ながら、銀座通りをアメリカの一しよ  
 15435 てあるさらやはちを、しげしげとのぞき  
 154310 れは、かるくドアをおしあげながら、「へ  
 154410 つかない答えかたをした。「いや、これ  
 15453 てすっかりようすを変えてしまったので  
 15456 國から新しい方法を学んで、つぎつぎと  
 15457 と近代的工業の道をたどっていくように  
 15459 鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって  
 154511 えた日本語で、町をひとりで散歩してい  
 15464 まいの赤絵のはちを手にとつて、かれは  
 15473 そうに赤絵のはちをながめながら、その  
 15474 ら、その話のさきをうながした。店の主  
 15479 のにする焼物とかを作らせていたが、そ  
 15482 そのほかに、色絵をつける赤絵屋もあつ  
 15483 が、有田に赤絵町を作つて住み、この赤  
 15486 がわかれてしごとをしていたため、ひと  
 15487 ひとりでこの焼物を作ることは、むずか  
 15488 ぐれた赤絵の技術をどうかして残したい  
 154811 して、失敗に失敗を重ねていった。職人  
 154812 ぎんや材料のお金をはらうために、家の  
 154812 ために、家の道具を賣らなければならな  
 15494 思いどおりのものを作るのでできる日  
 15496 このような美術品を買い求めるようなも  
 154910 外國人がこれに目をとめて買うことがあ  
 154911 があるということを知り、作品を東京  
 154911 とを聞いて、作品を東京や箱根へ賣りだ

15502 さい。この焼物をやめれば、日本から  
 15505 かの、私のことばを今右衛門さんに傳え  
 15507 る。「略」。これを耳にした今右衛門は  
 15509 この赤絵の技術を続けよう。」と決心  
 15510 このしごとに熱情をこめた。そのときか  
 15512 ていろいろな焼物を集めた。また、日本  
 15511 ていろいろの研究を進め、日本の歴史を  
 15511 進め、日本の歴史を書いたり、辞書を作  
 15511 を書いたり、辞書を作つたり、日本人の  
 15515 十二巻という大作を著わした。また、名  
 15517 主人は、新しい茶をハギンスにすすめな  
 155110 「と、自分のことをうちあげた。祖父た  
 155111 、なん十年の月日をへだてて、いま、ま  
 15525 く書きあげた論文を持つて、その出版の  
 15529 いなしようかい状をくださったうえ、い  
 155210 、いろいろはせずしておいたから、ぜ  
 155211 館長ホランド博士をたずねるようにとお  
 15532 ナイヤガラのをきながめ、ポストン、  
 15533 ントンと無事に旅を進めて、カーネギー  
 15535 な博物館に自動車を持ちつけ、守衛にみ  
 15537 めらつたのち、意を決して大きなドアを  
 15537 決して大きなドアをコツコツとノックし  
 155310 わに大きなデスクをすえ、そばにいるタ  
 155311 ストになにごとかをいながらうたせて  
 15545 しょうかい状に目をそそいで、「略」。し  
 15549 ないうちに先手をうって、かたわらに  
 155410 わらにあつたすすめるのであつた  
 155411 。私がこの博物館をたずねたおもな用事  
 155412 として自分の論文を出版してもらふこと  
 15552 そのためのはずを早くからすすめられ  
 15552 ていた。あいさつを終つて、用事をきり  
 15552 つを終つて、用事をきりだすと、話に聞

15555 のむずかしいことをおわせた。そうし  
 15559 ころの日本の話をさせてもらおう。私  
 15559 おう。私が日本をおとすところは、  
 155510 は、西洋の文化をとり入れることがさ  
 155511 かしなまよおしをしていたものだ。そ  
 155512 。そのころ日本をたずねた外人の中で  
 15561 梯山のいただきをきわめたのは、アメ  
 15564 った私は、小手をかざして足の下にひ  
 15565 駿河湾の海岸線をながめ、その角度を  
 15565 がめ、その角度を目算して紙上計算し  
 155610 本人について話をしあげよう。そう  
 155612 スト大学の助手をつとめていたころ、  
 15571 で二間続きの室をつかつていた。とこ  
 15572 来て、きみは室を二つももっているよ  
 15573 つに日本の青年をとまらせて、そのせ  
 15573 せて、そのせわをしてはくれまいかと  
 15574 ぶからぼうの話をもちだした。ものず  
 15575 教授の申し出でをさつそく承知して、  
 15576 見る東洋の青年をひきとつたが、室は  
 15578 にチヨークで線をひき、向こうは日本  
 155712 のこと、せい書をギリシア語で読みた  
 15581 のかわり日本語を教えてくれと、その  
 15582 、その申し出でを承知して、私はすぐ  
 15584 こそ、のちに名をなした新島襄だよ。  
 15585 ド博士は、遠い昔を思い出して、ひとり  
 15589 ともききょうみを有し、化学、生理、  
 155810 、鉱物、地質等をこのんで勉学す。」  
 155811 「新島襄という名を耳にした私は、とび  
 155812 けようとする博士をさえぎつて、「略」  
 15593 」。と、ありし昔を語ろうとした。する  
 15596 みじかにその関係を物語る私の顔を、あ  
 15596 係を物語る私の顔を、あなのあくほど見

十五 59 12 ているタイピストをしり目に、げんかん  
 十五 60 1 車に、ためらう私をおしこみ、一路自  
 十五 60 2 一路自たくへと車を走らせた。同志社を  
 十五 60 3 走らせた。同志社をわが子のように、だ  
 十五 60 4 じさんが、やまいを札幌のこう外に養っ  
 十五 60 6 札幌農学校の教師をしながら、恩師クラ  
 十五 60 7 いる札幌独立教会をつかさどっていた私  
 十五 60 7 た私の父とは、心をゆるした間がらのこ  
 十五 60 10 生まれて父母の愛を一身に集めていた身  
 十五 61 3 略。」といって私をかわいがった。京都  
 十五 61 5 きそえてあったのを見ても、その愛され  
 十五 61 6 らいかたであるかを知らなかった私は、  
 十五 61 9 さんが外出の用意をととのえて、「略」  
 十五 62 1 「略」と、私をうながした。いそい  
 十五 62 2 る大小二つのくつをちらと見た私は、た  
 十五 62 3 くれあがってだだをこねだした。「略」  
 十五 62 6 又、おくの手をだしたよ、よわった  
 十五 62 7 おばさんに助け船を求められた。「略」  
 十五 62 9 える私のくりごとを耳にしたおばさんは  
 十五 62 10 たおばさんは、腹をかかえてわらいだし  
 十五 63 5 んと着ていた上着をかなぐりすてて、か  
 十五 63 7 た手に小さなくつを持ち、かた手に大き  
 十五 63 8 手に大きなブラシをつかんで、力のかぎ  
 十五 63 10 力のかぎりみがきをかけた。「略」だ  
 十五 64 1 「だされたくつを見て、にこにこわ  
 十五 64 1 らった私は、それを足先につかけるな  
 十五 64 4 ばさんはそのあとを追って出て来られた  
 十五 64 5 て来られたが、門を出て十メートルとは  
 十五 64 7 ぼくのステッキを持っておくれ。」お  
 十五 64 8 がんで、自分のせをたたきながら、「略  
 十五 64 11 た。そうして、足をばたばたさせながら  
 十五 65 3 しい夏の日に、私をせにおいながら、あ

十五 65 3 おいながら、あせをふきふき歩かれた新  
 十五 65 4 じさんと、日がさをさしかけながらつい  
 十五 65 9 みごとなおもちゃを私に送ってくださっ  
 十五 65 10 、朝早くからそれをガラガラとひきまわ  
 十五 65 11 、家の人のねむりをさまたげてしかたが  
 十五 66 1 、くじょうの手紙を京都へ送ったりした  
 十五 66 2 入りの大きな写真を二まい、満ぼうへと  
 十五 66 4 るごとにその人形をかざって、ありし日  
 十五 66 5 ざって、ありし日をしのぶことをわすれ  
 十五 66 5 し日をしのぶことをわすれなかつた満は  
 十五 66 8 私の父は、同志社を守り育てるために、  
 十五 66 8 ために、北海の地をすてて、京都にすま  
 十五 66 9 て、京都にすまいを移すことになった。  
 十五 66 9 になった。十の春をむかえた私は、母や  
 十五 66 10 や多くの弟妹たちをあとに残し、ひとり  
 十五 67 1 かえりにその門前を通つても、新島家の  
 十五 67 4 スに得意の銀てきをふいたが、私がだん  
 十五 67 5 いたが、私がだんをおりるのを待ちかま  
 十五 67 5 がだんをおりるのを待ちかまえていた老  
 十五 67 7 んで、しつかと私をだきしめた。ああ、  
 十五 67 8 そのなつかしい顔をあおいだ私の目から  
 十五 67 11 はなれた新島家をおとすれた。おどる  
 十五 67 11 ずれた。おどる胸をおさえながらたどり  
 十五 68 3 もりで、私はかねをカーンとたたいた。  
 十五 68 4 アがあいて、半身をだした老婦人が、「へ  
 十五 68 6 わずとびこんだ私をだきしめた。なつか  
 十五 68 6 さんは目になみだをためながら、しやに  
 十五 68 8 ら、しやにむに私をおく深くひき入れた  
 十五 68 9 主なき書さいへ私をみちびいた。「略」  
 十五 68 11 やですよ。あれをごらん。」と指ささ  
 十五 69 1 されるままに、顔をあげてへき面を見あ  
 十五 69 1 顔をあげてへき面を見あげると、おじさ

十五 69 5 。「つくえの上をごらん。」おばさん  
 十五 69 6 さんのことばに目をうつすと、おじさん  
 十五 69 6 じさんが日夜ふでをとっていられたとい  
 十五 69 7 くえの上に、くつをみがかせた満ぼう時  
 十五 69 9 のおじさんは、私を京都までもつれて来  
 十五 69 12 こうしておじさんを見あげているのに、  
 十五 70 2 ら、私は無言で頭をびよこんとさげた。  
 十五 70 4 あえぬなみだに目をくもらせたおばさん  
 十五 71 1 ですよ。そのペンをにぎってごらん。お  
 十五 71 2 うがいにこしをかけて、ペンをにぎ  
 十五 71 2 をかけて、ペンをにぎっている。この  
 十五 71 3 て、おばさんは声をくもらせた。それか  
 十五 71 4 うしておじさんを喜ばせましようね。  
 十五 71 8 は、昔のように私をひざにのせた。町の  
 十五 71 12 といつて、私をひきよせた。勝海舟  
 十五 72 1 という五つの文字をきざんだそのおくつ  
 十五 72 2 つき。はか石に水をそそぎながら、「略  
 十五 72 7 った。しずかに頭をさげた。ピツツパー  
 十五 72 9 ピツツパーの町を走り出た自動車は、  
 十五 72 10 けになった。ドアをおして、つかつかと  
 十五 72 11 博士は、客間に私をみちびき、自分は書  
 十五 73 1 きりにさがしものをしておられたが、や  
 十五 73 2 が、やがてすがたをあらわした博士の手  
 十五 73 6 「といって、日記をくりひろげ、つくえ  
 十五 73 6 げ、つくえに白線をひいて「國境」をつ  
 十五 73 6 をひいて「國境」をつくったあたりを、  
 十五 73 7 をつくったあたりを、声高らかに読みあ  
 十五 73 9 の家族たちは暑さをどこかにさけて、家  
 十五 73 11 り、しずかに食事をしたが、平和主義の  
 十五 73 12 しらとしてその名を知られていた老博士  
 十五 74 1 かたについて熱意をこめて語られた。

十五746 によって兄が特権を與えられねばならな  
 十五748 はすべて同じ教育をほどこし、同じ機会  
 十五748 どし、同じ機会を與えて、社会に果だ  
 十五751 ーと、テールをたたいて立ちあがっ  
 十五752 フィッシュナイフをにぎった右手を大き  
 十五752 フをにぎった右手を大きくふりまわし、  
 十五754 「略」と、力をこめてさげびながら  
 十五754 そのにぎりこぶしを私の鼻先につきださ  
 十五755 しない、満面べにをさして語られたホラ  
 十五758 な会見のてんまつを傳えてくれといいな  
 十五758 自動車のドアに手をかけた老博士が、さ  
 十五758 そのことばの意味をとしかねていた私の  
 十五7512 ていた私のようすを見て、大きな声でわ  
 十五761 、「きみの論文を、カーネギーで出版  
 十五763 、いまなお満ぼうを守っていてくださ  
 十五765 った博士のこう意をふかく謝して、別  
 十五766 謝して、別れの手をさしのべると、博士  
 十五767 にこやかなわらいをたたえながら、「略  
 十五769 、意外なあいさつをされた。そうして、  
 十五773 きょうのできごとを、あすまでのぼすな  
 十五775 ずから助くる者を助く。——フランク  
 十五782 いても、その発表をためらってはならな  
 十五7810 らである。人の心をひくために、しかめ  
 十五7810 に、しかめつつらをしてたり、みょうな身  
 十五7811 、みょうな身ぶりをしてはならない。す  
 十五794 に、このあいさつを送るだけの特別の権  
 十五796 あなたがたのお國を親しくおたずねして  
 十五797 や、家や森や、山をながめたり、また、  
 十五798 景から、自分の國を愛するということを  
 十五798 愛するということを学んでいる日本の子  
 十五805 とはわからず、世をすごしてきたばかり  
 十五8011 はるかなあいさつを送り、あなたがたの

十五8012 るようになることをいいます。——ア  
 十五812 は、人のうえに人をつくらず、人のした  
 十五812 ず、人のしたに人をつくらず。——福沢  
 十五824 ふしぎなくだものを、水がめや、ひく  
 十五826 とさわいり、歌を歌ったり、ぶつかっ  
 十五828 珠だの、宝石だのを、頭にいっぱいつけ  
 十五8211 手の前の方に、光をとりまいてかたまっ  
 十五8212 は、ひとことも口をきかず、これも、右  
 十五831 行つて、黒いまくをあけて、すがたをか  
 十五831 をあけて、すがたをかくしてしまいま  
 十五832 なにうまいものをたくさんたべて、う  
 十五838 、ダイヤモンドを、まわしてはいけな  
 十五839 ても、廣間の方をさがしてみよう。  
 十五8412 あのさとうがしをわすれたのじゃない  
 十五852 いるさとうがしを。いつてみれば、す  
 十五853 廣間のなにものをもおさえている。い  
 十五854 どこのなにものをもおさえている。あ  
 十五855 あのさとうがしをわすれたのじゃない  
 十五856 、幸福そうな顔をしているなあ。あれ  
 十五856 こけている。歌を歌っている。なんだ  
 十五859 人たち、こつちを見たようだ。」と  
 十五8510 福」が、テールをはなれて、大きなお  
 十五8510 て、大きなおなかを両手にかかえて、た  
 十五861 おまえさんたちを、ごちそうによぼう  
 十五862 のだろ。それを受けてはいけない。  
 十五863 んじんな用むきをわすれてしまふから  
 十五866 。おまえの氣持をくじいてしまふよ。  
 十五8611 テルチルの方へ手をさしだしながら、ふ  
 十五871 、あなた、ぼくを知っているの。あな  
 十五874 中のおもなものをごしようかいいたし  
 十五876 のようなおなかをしています。これが  
 十五878 くれあがった顔をしています。(「略

十五8710 いないときに物を飲む幸福」と、『腹  
 十五8710 らないときに物をたべる幸福』で、ふ  
 十五8712 ろしながらおじぎをする。これは『な  
 十五889 なわらい』が、腹をかえながらおじぎ  
 十五889 かえながらおじぎをする。テルチル、す  
 十五8810 ひとりの「幸福」を指さして、テルチル  
 十五8811 ないで、せなかをむけているのはだれ  
 十五893 。(テルチルの手をにぎりながら)ま  
 十五894 会のやりなおしをするところです。こ  
 十五896 おまえさんがたを待っていたのです。  
 十五897 おまえさんがたを呼びたてているでし  
 十五8910 たる子どもに手をだしながら)さあ、  
 十五903 のです。青い鳥をさがしているのです  
 十五907 いつかそんな話をしていたっけ。なん  
 十五9010 うのは、その鳥をあまり上等とは思わ  
 十五911 たちのすること、みんな見るとい  
 十五913 テルチル「なにをするのです。」ふと  
 十五914 、いつもしごとをしないことです。わ  
 十五911 った幸福「光」を指さしながら、テル  
 十五921 「略」。こんな話をしているのに、「ふ  
 十五922 、さとうと、パンをときつけて、えん  
 十五9211 た。そこでなにをしているんだ。」パ  
 十五9212 口にいったい物を入れながら、「略」  
 十五9212 ぎのいいことばをつかってももらいた  
 十五932 なまいきなことをいうな。なにかおま  
 十五934 のすみで、「物をたべているときは、  
 十五937 つかくおまえをいいたきながら、そ  
 十五939 え。さあ、きみを待っているのだ。お  
 十五9312 どもは、喜びの声をあげながら、いやが  
 十五9312 やがる子どもたちをひきずって行こうと  
 十五941 光のこしのあたりを、力まかせにおさ  
 十五943 「ダイヤモンドをまわしなさい。いま

十五 94 4 に、ダイヤモンドをまわします。舞台は  
 十五 94 6 もがにげて行くのを見ながら、「略。」  
 十五 94 9 チルチル そこを見まわして、「略」  
 十五 94 12 っと、物の眞実を見ることができの  
 十五 95 2 られる幸福の精を見るのだよ。「ばら  
 十五 95 9 て来た。私たちをあんないに来た。」  
 十五 95 10 ル「あの子たちを知っているの。」光  
 十五 96 1 ものだよ。それを、『ふとった幸福』  
 十五 96 9 、どうせこっちを通るのだから。ほか  
 十五 97 4 「チルチル」話をしてもいいの。」光  
 十五 97 5 よ。あれは、歌を歌ったり、おどりを  
 十五 97 5 ったり、おどりをおどったり、わらっ  
 十五 97 9 らしいほったをしてののたろう。  
 十五 97 10 かわいらしい服を着ているのたろう。  
 十五 98 3 の。」光「それを見かけることはでき  
 十五 98 9 子たちが青い鳥を持っていないことは  
 十五 99 3 、あったけの声をほりあげて、「略」  
 十五 99 4 歌い、子どもたちをとりまいて、陽氣な  
 十五 99 4 て、陽氣なおどりをします。幸福「こん  
 十五 99 6 ル「また、ぼくを知っている子がいる  
 十五 99 9 福」きみ、ぼくを知らないの。ここに  
 十五 99 9 。ここにいる子をだれも知らないなん  
 十五 101 1 、飲んだり、目をさましたり、息をし  
 十五 101 2 さましたり、息をしたりして、くらし  
 十五 101 4 みたちの名まえを聞かせてくれたまえ  
 十五 101 12 わらったり、歌を歌ったり、かべをた  
 十五 102 1 歌ったり、かべをたたき落し、屋根を  
 十五 102 1 たき落し、屋根をもちあげるほどの喜  
 十五 102 2 げるほどの喜びをこしらえているので  
 十五 102 3 ぼくたちがなにをしても、あなた  
 十五 102 5 一に、ぼく自身をしようかします。  
 十五 102 9 これは、『両親を愛する幸福』で、ね

十五 102 10 ねずみ色の着物を着て、いつでもすこ  
 十五 102 12 ん青い色の着物を着ていますし、これ  
 十五 103 1 、みどりの着物を着ています。外へ出  
 十五 103 4 モンド色の着物を着ていますし、これ  
 十五 103 5 青いたまの色をしています。」チル  
 十五 103 9 ともに「星の出を見ることの幸福」が  
 十五 103 10 、金びかの着物を着てついています。  
 十五 103 12 幸福」で、眞珠をいっぱいつけていま  
 十五 104 2 さき色のマントを開きます。それから  
 十五 104 3 いっとういいのをしようかしません  
 十五 104 9 『大きな喜び』を呼びにやりましよう  
 十五 104 10 、黒の肉じゅばんを着たわんぱくこぞう  
 十五 104 11 とれないさけび声をたてて、なにかにぶ  
 十五 104 12 づいて来ます。鼻を指ではじいたり、ひ  
 十五 105 6 使のようなすがたをした者が、きらきら  
 十五 105 6 きらきら光る着物を着て、そろそろや  
 十五 106 2 の人のわらうのを見たことがありませ  
 十五 106 5 不幸」に行くのをとめることは、なか  
 十五 106 6 しろ、『不幸』をなくさめてやること  
 十五 106 9 には、『しごとをしあげる喜び』が、  
 十五 106 12 からない幸福」をさがしているのです  
 十五 107 6 ね。でも、それを妹にいつてはいけま  
 十五 107 11 、『美しいものを見る喜び』がいま  
 十五 107 11 、毎日ぼくたちを照らす光に、二つ三  
 十五 107 12 づつ新しい光線を加えていくのです。  
 十五 108 5 みたって、あれをすっかり見るには、  
 十五 108 7 の方に、パールをかぶったままで、ち  
 十五 108 10 の人たちはなにをしようとしているの  
 十五 108 11 。なぜ横つちよを向いたままにいるの  
 十五 108 12 新しい『喜び』をむかえているのです  
 十五 109 3 た、あの子の人を知らないのですか。  
 十五 109 4 あなたの二つの目をたましいのどん底に

十五 109 5 あの人、あなたを見えています。そら、  
 十五 109 6 ます。そら、手をひろげてこちらへか  
 十五 109 9 「母の愛の喜び」を手をたたいてむかえ  
 十五 109 9 の愛の喜び」を手をたたいてむかえ  
 十五 110 6 。私は、もう年をとることはないのだ  
 十五 111 7 たちがほおずりをするたびに、私の着  
 十五 112 1 た。いつもそれをどこにしまっている  
 十五 112 2 とうさんがかぎをかけたあの戸だなの  
 十五 112 4 だってこの着物を着ているのよ。けれ  
 十五 112 6 いうものは、目を閉じていると、なん  
 十五 112 7 だって、子どもをかわいがるときには  
 十五 112 10 んもないし、年をとったおかあさんも  
 十五 112 12 が悲しそうな顔をしているときでも、  
 十五 113 1 でも、ほおずりをしてもらえば、すぐ  
 十五 113 6 だ。小さな指をはめてみる。おまけ  
 十五 113 7 、いつかランプをつけるとときやけどを  
 十五 113 7 けるとときやけどをしたあとまであるよ  
 十五 113 10 ように、しごとをししないの。」母の愛  
 十五 113 12 でおまえのせわをしているときは、い  
 十五 114 8 ぼろぼろの着物を着ていても、わかる  
 十五 115 2 ういうように私を見なければならな  
 十五 115 2 らないか、それを、はつきりとさとの  
 十五 115 10 は、おかあさんをよく覚えて、だいい  
 十五 115 11 いじにすることをわすれてはなりません  
 十五 116 3 がっている「光」を指さしながら、「略  
 十五 116 7 愛「私、あの人を見ることがなかった  
 十五 116 8 まえたちふたりをかわいがって、たい  
 十五 116 9 で、あんなに顔をかくしているの。あ  
 十五 116 10 の。あの人、顔を見せることはないの  
 十五 116 11 まりははつきり顔を見せると、『幸福』  
 十五 117 2 たちが、あの人をずいぶん待ちわびて  
 十五 117 3 わびていることを、知らないのたろう

十五117 3 大きな喜び「たちを呼ぶ。」みなさん、  
 十五117 10 正義である「私をごんじですか。私  
 十五117 11 こと、あなたを求めている『正義で  
 十五118 2 び「あなた、私をごんじですか。私  
 十五118 2 〇。私は、あなたをすいている『美しい  
 十五118 3 〇。美しいものを見る喜び』でござい  
 十五118 6 〇。あ、そのペールをおとりください。私  
 十五118 8 いよいよペールをかぶって、「略」。  
 十五118 9 〇。まのおいつけを守っているのです。  
 十五119 1 〇。われるあすの日を待ちながら、「母の  
 十五119 2 略」。「母の愛光をだきながら、「略」  
 十五119 7 やがてはなれて顔をあげますと、ふたり  
 十五119 8 かの「喜び」たちを見ながら「おや、み  
 十五119 10 〇。いっばいなみだをためているの。」光  
 十五120 2 〇。校長先生のお話を聞いていると、ずっ  
 十五120 4 〇。めてこの学校の門をくぐったときのこと  
 十五120 5 〇。のために送別の歌を歌ってくれた。その  
 十五120 6 〇。てくれた。その歌を耳にしながらか、もっ  
 十五120 6 〇。ら、もっと下級生をかわいがっておけ  
 十五120 8 〇。氣で、この学校を愛してくれ。」私が  
 十五121 2 〇。〈略〉。「私が答辞を読んだ。けれども、  
 十五121 12 〇。と、教室でお別れをした。先生は、「略  
 十五122 4 〇。悲しいような氣持をだいて、この日記の  
 十五122 5 〇。、この日記のふでをおこう。——高橋  
 十五123 2 〇。先生がたのご幸福をおいのりいたします  
 十五123 5 〇。い六か年の思い出を残してくれたこの運  
 十五123 10 〇。あった。「心に花をかざれ。」——丸山  
 十五124 3 〇。い旅の門出、希望をもって。校門のかし  
 を (接助) 1 を  
 十五14 2 〇。大きなるべにばらのひと花思わぬを  
 を ゆららにあかく開き満ちたる

四75 8 を——「を」の字は、ことばのあとに  
 つく。  
 四75 8 を——「を」の字は、ことばのあとに  
 つく。  
 をもて (格助) 1 をもて  
 十五12 8 〇。紙をもてランプおおえばガラス戸の  
 外のつくよの明らけく見ゆ

ん

ん (準助) 1 〇。ん  
 一43 8 〇。さあ、お月さんのくにへいくんだよ。  
 二42 3 〇。だって、だれかがばかにするんだもの。  
 三65 7 〇。だって、もうへでたいんだもの。  
 三65 9 〇。たきへでたいんだもの。  
 三76 8 〇。「丘をこえてね、よその國へいくん  
 ですよ。」  
 三80 1 〇。雨にぼくのいどをいっばいにし  
 てもらうんだから。  
 四45 3 〇。かっちゃんがおしまいにしてくれ  
 ていったから、そうしたんじゃないか。  
 四45 7 〇。でもね、つらいんだよ。  
 四46 8 〇。「おとといは、そんな氣もちだったけ  
 れど、きょうはちがうんだよ。」  
 四46 9 〇。「さあ、きょうは、どのへんになら  
 たいというんだね。」  
 四58 6 〇。ねているうちに、いいこと考えた  
 だ。  
 四58 10 〇。「どうしたんだらう。」  
 五14 1 〇。「とまってから、おるんだよ。」

五16 4 〇。「さあ、このかばんにはいるんだよ。」  
 五17 3 〇。ぼくは遠いところへいくんだけど、あて  
 名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。  
 五23 4 〇。帰りの電車はとてこんでいたんです。  
 五23 11 〇。かけさせてくれたんです。  
 五24 2 〇。ところが、ぼくのまえに、まつぼつえを  
 ついた、わかい人がいるんです。  
 五25 1 〇。ぼくは、もう大きいんですから。  
 五25 7 〇。ほんとうは、それでうれしかったんです。  
 五28 5 〇。ぼく、きょう、とてうれしかったです。  
 五28 11 〇。よその人からもらったんです。  
 五29 3 〇。それはこうなんです。  
 五31 1 〇。ぼくにはすこしおもかったです、と  
 てうれしかったです。  
 五31 1 〇。とてもうれしかったです。  
 五31 10 〇。それで、ほんとうにうれしかったです。  
 五61 5 〇。わたしが水をやったんですもの。  
 五67 6 〇。うちのおけは、もう、すっかりこわれて  
 しまっているんだもの。  
 五84 7 〇。いとうくんは、海岸のおじさんの家で、海  
 の作文を書くんだといって、よろこんでいました。  
 五100 4 〇。山へはなしてやりたかったんだけど。  
 六22 9 〇。うちへ帰るところなんです。  
 六24 3 〇。まあいいや、こないだのときにあそばな  
 いで、いつあそばうというんだね。  
 六24 4 〇。楽しむために生きているんじゃないか。  
 六35 2 〇。なんてらんぼうな風なんだらう。  
 六39 2 〇。ふきとばされたんです。  
 六39 5 〇。あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけ  
 ど、ぼく、もう帰れないんだ。  
 六39 10 〇。なかがわるい虫をとってそだてたいね  
 を、こんどは、あなたがたがまもるんですもの。

六四一(会) みんなできみをおんぶするんだ。  
 六四四(会) うん——だけど、いったいだれがつれて  
 帰ったんだろうね。  
 六四七(会) おとうさんやおかあさんにもわからない  
 んだって——  
 六四九(会) おびみないなものが向こうの山の方へと  
 んでいったんだよ。  
 六五三(会) いっただいどっちなんだろう。  
 六五五(会) 「やっぱり雲が走っているんだね。」  
 六五七(会) ごろう、なにを考えているんだね。  
 六五八(会) 「だいいち、おまえが生きているんだか  
 ら、わかりそうなものだな。」  
 六六〇(会) 「先生、ぼくたちは動いたり息をし  
 するから、生きているんですよ。」  
 六六二(会) きうから、それを考えているんです。  
 六六三(会) ぼくたちは、だんだん大きくなるから、  
 生きているんですよ。  
 六六四(会) 風や、自動車や、水車は、動いていても息  
 をしないから、命がないんだと、  
 六六五(会) にいさんもやっぱりえものがなかったん  
 ですか。  
 六六六(会) 「はな」といっているんだなと思うと、  
 きゆうにおかしくなった。  
 六六七(会) かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃ  
 んのところへ持っていくってあげるんだ。  
 六六八(会) 「くるみをわっているんだよ。」  
 六六九(会) ぼく、くるみだいすきなんだ。  
 六七〇(会) いま、きつねに追いかけてられているんだ。  
 六七二(会) きつねがおこって、追いかけてくるんだ  
 よ。  
 六七三(会) ぼくひとり、じつとしずかにしていたい  
 んだよ。

六七四(会) うきぎたちは、なんてひとがいいんだろ  
 う。  
 六七五(会) ぼくはきつねに追われてなんかいやしな  
 いんだ。  
 六七六(会) 「しかさん、ただ遊ぶんだよ。」  
 六七七(会) ただ遊ぶんじゃ、おもしろくない。  
 六七八(会) 先生、この実はなににするんですか。  
 六七九(会) よくみのつてから、油をとるんだからね。  
 七八〇(会) てんぶらは、これであげるんだ。  
 七八一(会) このまえたときは、風が強かったから、  
 ちようちよがでなかったんですね。  
 七八二(会) 先生、風の日は、ちようちよは、どこに  
 かくれているんですか。  
 七八三(会) 私のうちでは、だいいんを、庭に二十本  
 うえたんです。  
 七八四(会) それで知っているんだね。  
 七八五(会) おかあさん、あおむしのことを、話して  
 いたんですよ。  
 七八六(会) それから十日すぎて、からだは黒っぽ  
 かったのが、青くかわってきたんですよ。  
 七八七(会) きよう、先生にほめられたんですよ。  
 七八八(会) どうしたんです。  
 七八九(会) みんな元気です。  
 七九〇(会) みんなでもさいているのかと思つたら、ま  
 あ、子どもがわらわっていたんだよ。  
 七九一(会) かた目なんですよ。  
 七九二(会) 「あんまり大きすぎてみつともないから、  
 かみつきたくなるんだよ。」  
 七九三(会) あれは美しくありませんが、たちはほ  
 んとうにいいんですよ。  
 七九四(会) ものごとを教えてもらえる人たちのなか  
 まいりをしたんだもの。

七九五(会) できたんです。  
 七九六(会) 大きながいちばんえらいんだよ。  
 七九七(会) わたしがいちばん大きいから、わたしが  
 いちばんえらいんだよ。  
 七九八(会) せいの高いことなんだよ。  
 七九九(会) おしあいてきめるんだよ。  
 八〇〇(会) なんといつたつて、頭のとがったものが、  
 いちばんえらいんです。  
 八〇一(会) どうしたんだい。  
 八〇二(会) いっしょに歩いているうちに、きゆうに  
 つかみあいをはじめるんだもの。  
 八〇三(会) 「きみはなにをなくしたんだ。」  
 八〇四(会) 落したんじゃない。  
 八〇五(会) きみがむしりとったんじゃないか。  
 八〇六(会) いっただい、なんでけんかを始めたんだ  
 ろう。  
 八〇七(会) それで、ぼくも負けまいと思つたんだ。  
 八〇八(会) これは、名高い泉なんだよ。  
 八〇九(会) だから、わたしをたべてもいいと思つて  
 いるんだけど。  
 八一〇(会) ぼくは、大きくなったら、三ばんか四  
 ばんをこぐんだ。  
 八一一(会) ぼく、これがうれしいんだよ。  
 八一二(会) ぼくらは、きみについていきさえすれ  
 ば、だいいようぶだと思ふんだ。  
 八一三(会) きつと遠くへいくんだらう。  
 八一四(会) どうなんでしょう。  
 八一五(会) チチロがいなからできたんですよ。  
 八一六(会) おかあさんがよこしたんですよ。  
 八一七(会) いっただい、どうしたんですか。  
 八一八(会) 「ぼくの父はどうしたんでしょう。」  
 八一九(会) 「けれど、ぼくってことがわからない

んです。」

十一 80 10 ㊤ おとうさん、しっかりするんですよ。

十一 80 10 ㊤ しっかりするんですよ。

十一 85 3 ㊤ ぼく、いけないんです。

十一 85 8 ㊤ あの人、いま、ひどくわるいんですから、ゆるしてください。

十一 85 9 ㊤ ぼく、とても思いきれないんです。

十一 86 7 ㊤ ちょうどあなたが入院したと同じ日に、入院したんです。

十一 92 1 ㊤ 「だけど、ぼく、遠い道を歩いていくんですから、しぼんでしまいます。」

十二 15 6 ㊤ これは、こおろぎの果なんだな。

十二 18 6 ㊤ これが鳴るんだなと思ってやっているうちに、だんだんおもしろくなったのです。

十二 20 9 ㊤ どうしてこのさくろはこんなに美しいんだらうって。

十二 29 9 ㊤ でも、いつそんなことを覚えてたんでしょう。

十二 43 6 ㊤ とこのまの人形が、動きだしそうな気がするんだけど——

十二 44 5 ㊤ 「人形しばいって、人形がしばいをするんですか。」

十二 44 6 ㊤ もちろん人が動かすんだがね。

十二 44 10 ㊤ 「へえ、そんな大きなものを、どうして動かすんでしょう。」

十二 44 12 ㊤ ものによっては、三人がかりで一つの人形を動かすんだ。

十二 45 2 ㊤ 右手を受け持つ人、左手だけの人、足だけの人と、それぞれ手わけしているんだが、

十二 45 6 ㊤ あれにあらわしてしばいをするんだ。

十二 45 10 ㊤ 「文楽のほかにもまだあるんですか。」

十二 47 1 ㊤ 「人形しばいって、いろんな國にいろ

んなものがあるんですね。」

十三 38 2 ㊤ ……おかあさん、配給物を取りに行きたんじやないでしょうか。

十三 39 2 ㊤ ……マンシュウの真ちゃんが、帰って来たんですか……

十三 39 3 ㊤ え、うちに来たんですか……

十三 39 8 ㊤ だれかと思ったんですよ。

十三 39 9 ㊤ だって、おばさんたら、お客さんなんておっしゃるんだもの……

十三 40 9 ㊤ きよう、うちに来たんだって……

十三 41 6 ㊤ いまどこの家でも二けんぶんも、三けんぶんもの人が、寝とまりしているんだよ。

十三 41 12 ㊤ それで今晩来るんだらう。

十三 43 8 ㊤ おかあさん、真ちゃんが帰って来たんだってね。

十三 50 9 ㊤ すぐ帰って来るんだから、きみも来たまえ。

十三 51 2 ㊤ 母うしのそばに立ってるんだが、まだあかんぼうで、

十三 51 3 ㊤ まだあかんぼうで、母うしがしたでなめると、よろけるんだよ。

十三 51 5 ㊤ すぐ帰って来るんだから、きみも来たまえ。

十三 59 8 ㊤ キリストのおかあさんという感じが、よく出ているんじやないでしょうか。

十三 61 7 ㊤ こんなことを考えて、きみも勉強を続けるんだね。

十三 61 9 ㊤ きつと先生も、そんなお氣持で、この絵はがきを送ってくださったんだらう。

十四 8 5 ㊤ なにしろ、私たちよりふかいものなんですから。

十四 19 2 ㊤ 「では、バケツやカーテンなどは、日

本語で、なんといっていたんでしよう。」

十五 84 1 ㊤ たいていはまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、人はわるくないんだよ。

十五 92 11 ㊤ そこでなにをしているんだ。

十五 100 7 ㊤ この人、まだぼくたちに会ったことがないんだってさ。

十五 102 4 ㊤ なにをしても、あなたには、なんにも見えないし、なんにも聞えないんだなあ。

十五 112 11 ㊤ おかあさんたちの愛は、喜びの中でも、いちばん美しい喜びなんです。

十五 117 6 ㊤ 「光」なんです。

十五 117 12 ㊤ 私たちは、それは幸福なんですけれど、

「意志推量」(助動) 5 ン

十一 79 11 ㊤ 医者、まったくくだめだといわんばかりに頭をふりました。

十二 74 1 ㊤ いざ子ども走りあるかんたまあられ

十二 76 11 ㊤ きみ火をたけよきものみせん雪まろ

十五 53 ㊤ いかにも目ざととき人とても、声の行くえの見えんやは。

十五 58 11 ㊤ 新島襄という名を耳にした私は、と

びあがらんばかりにおどろいた。

「打消」(助動) ㊤ ン

一 30 6 ㊤ ほかにありませんか。この手で、な

一 58 6 ㊤ たかわかりません。あなたはいのち

二 9 6 ㊤ ことはできませんか。とおたずねに

二 24 6 ㊤ はきがつきませんでした。「略」。

二 30 6 ㊤ ぴきしかいません。『略』。『略』。

二 31 1 ㊤ ぴきしかいません。『略』。『略』。

二 31 4 ㊤ ぴきたりません。十二ひきのぶた

二 34 3 ㊤ らせてくれませんか。『略』。『と、

二 55 7 ㊤ おいでになりません。いまはおいでに



二五七 おいでになりませんが、まえにはおい  
 二五八 ちがいます。それは、どんな  
 三二四 のがよいえませんでした。おしやかさ  
 三二五 なにもおぼえません。二年すぎました。  
 三二六 なにもおぼえません。三年になりました。  
 三二七 かしこくなりません。おしやかさは、  
 三二八 おしてはくれません。しかたがありま  
 三二九 しかたがありませんから、はんたかは  
 三三〇 走るではありませんか。「略」。「略」  
 三三一 たくてたまりません。はまべでしくし  
 三三二 それはなりません。うたをわすれた  
 三三三 それもなりません。うたをわすれた  
 三三四 それもなりません。うたをわすれた  
 三三五 るのでもありません。丘のちょうどな  
 三三六 どこへもいけません。そこへちょうど  
 三三七 どこへもいけません。「略」。「略」  
 三三八 むことはできません。「略」。「略」  
 三三九 すこともできません。やはりゆかにの  
 三四〇 にはもうみえませんでした。「略」。「略」  
 三四一 まはとられません。雲さえでいてい  
 三四二 るひまもありませんでした。にわかに  
 三四三 よめにいけません。いつまでもおじ  
 三四四 ることができます。かぐやひめ  
 三四五 やつぱりききませんでした。みかどは、  
 三四六 ければなりません。「こたええした  
 三四七 ることもできません。かぐやひめは、お  
 三四八 ることができます。そうして、  
 三四九 のではありません。「先生がこうお  
 三五十 い日はありません。お話をすると、  
 三五一 うではありませんか。おてがみを書  
 三五二 ことはありませんか。「先生にこう  
 三五三 つに気がつきません。「略」。「ここまで

四三二 とだかわかりません。「略」。「略」  
 四三三 ようがありませんでした。思いきつて  
 四三四 してはいけませんよ。」という声で  
 四三五 して、ころしませんでした。「略」。「  
 四三六 うことはありませんでした。「略」。「  
 四三七 なければなりません。だれも、ばらばら  
 四三八 るものはありません。「略」。「略」  
 四三九 ことではありません。どうかすると、  
 四四〇 ころではありません。ちょうど、一まい  
 四四一 かりうどはきませんが、大きなへびが  
 四四二 う一わがみえませんが、「略」。「略」  
 四四三 略」。「知りませんよ」。「略」。「略」  
 四四四 鳥さん、知りませんか。「略」。「その  
 四四五 へ」。「ぞんじません」。「そのうちに、夜  
 四四六 、なにもあげません。『あげられませ  
 四四七 ん。『あげられません』というわけです  
 四四八 で、気がつきません。かめは、すぐそ  
 四四九 うもございません。どうぞゆっくり  
 四五〇 ではございませんか。「うらしま」でも  
 四五一 まいもできませんでした。「うらしま」  
 四五二 ってはいけませんよ。「うらしま」これ  
 四五三 ことができます。でんきゅうはわ  
 四五四 返しはできません。國のたからにい  
 四五五 ことができます。どうぞ、お返し  
 四五六 「いや、返せません」。「天人は、かなし  
 四五七 ていただけませんか」。「天人」それでは  
 四五八 ことができます。「りようし」とい  
 四五九 ことを知りません。「りようし」ああ、  
 五〇〇 略」。「ありません」。「略」。「シュ、  
 五〇一 さって、すみません」。「(一) 私は、と  
 五〇二 まちがいはありません。けれども、このま  
 五〇三 までは旅はできません。切手をはってもら

五一九 ちる心配はありません。私たちは、汽車に  
 五二〇 れだけではありません。いちろうさんが家  
 五二一 ったかもしれない。でもいいの。」  
 五二二 らすことができます。では、石炭は、ど  
 五二三 は、雪がありません。山の木のめがでは  
 五二四 たことはありません。けれども、お手紙  
 五二五 ることは、できませんでした。まさこをお  
 五二六 したが、わかりませんでした。そこへ、受  
 五二七 よ。いつてみませんか。」と、さそって  
 五二八 いことはありません。わたしが水をやっ  
 五二九 の力ではありませんよ。「略」。「略」  
 五三〇 したじやありませんか。「略」。「おと  
 五三一 せいではありませんよ」。「おとうさんは、  
 五三二 ているではありませんか。そばには、りっ  
 五三三 すずめではありませんでした。ひばりでも  
 五三四 ひばりでもありませんでした。あたまから  
 五三五 しかひろげられません。「略」。「さんちや  
 五三六 れもきてはくれませんか」。「略」。「ありは、  
 五三七 ているではありませんか。「略」。「とい  
 五三八 、二どとありませんね」。「しきしや」お  
 五三九 ようではありませんか。「みんな」そうし  
 五四〇 たちは気がつきません。きりぎりす「ありさ  
 五四一 いとうもきていません。きりぎりす」「ま  
 五四二 ふしぎでたまりませんでした。ふみおはふ  
 五四三 もしろくてなりませんでした。また、ふし  
 五四四 、ふしぎでなりませんでした。みなさん、  
 五四五 楽しみではありませんか。お話の題はべつ  
 五四六 題はべつにきめませんが、かってにつぎ  
 五四七 に大きくはありませんが、これをしよう  
 五四八 するかもしれませんよ」。「略」。「と、  
 五四九 かるじやありませんか。」とおしやい  
 五五〇 んとうがつきません。」と答えました。「

六七六 息もしていませんね。「略」。「略」  
 六七九 かりではありませんよ。ほら、左のむね  
 六八五 せてくださいませんか。そのかわり、に  
 六八九 いいえ、つれませんでした。つれないど  
 六八八 しわけがありません。どんなことでもし  
 六八五 みことすみませんが、そのいどの水を  
 六九二 まいっておりません。「海神」そうか。  
 六九四 魚「ぞんじません。」魚「とりませ  
 六九四 魚「ぞんじません。」魚「ちつともぞ  
 六九四 魚「ぞんじません。」魚「ちつともぞ  
 六九五 つともぞんじません。」海神「それはお  
 六九六 りではございませんか。」<sup>ほおりの</sup>「あ、こ  
 六九七 れしくてたまりませんでした。十一 う  
 六九八 かさんにかいません。そうすると、自分  
 六九八 わなければなりません。しかさんに勝った  
 六九八 いうことはできません。角をとったところ  
 六九八 んも負けてはいません。角をふりたてふり  
 六九八 ぎさんたちはいませんでした。そうして、  
 六九八 たの角はおりません。うさぎたち。「へ  
 六九八 をすこしも知りませんでした。とらさんは  
 六九八 げることはできません。助けてくださいと  
 六九八 るみこみもあります。とらさんが手をの  
 六九八 「手がつけられません。」「略」。「同じ」  
 六九八 人の手ではありません。これは、持つこと  
 六九八 のことではありません。あさがおのつるが  
 六九八 「ただではありません。」「略」。「略」。  
 六九八 しろいではありませんか。三 もんしろ  
 六九八 うは風がありませんから、ちようちよが  
 六九八 、中へはいれませんか。」「略」。「むり  
 六九八 くことさえてできません。私は、さぶらうの  
 六九八 れてくださいませんか。」「略」。「私は、  
 六九八 へいれてやれませんかしら。」と、心配  
 六九八 よういではありません。そのとき、そのわ

七四三 たかはぞんじませんが、楽しい音楽をき  
 七四三 ことももしれません。このかんしゃの  
 七四三 は、思っています。また、こん  
 七四三 たのでもありません。ただ、たいくつま  
 七四三 くものではありません。文章は、心の鏡の  
 七四三 のくもりはとれません。つぎに、「ドッ  
 七四三 きるとはかぎりません。そのほんたいに、  
 七四三 もあつてはなりません。五年生が、運動場  
 七四三 いうことはできません。つぎのほうでし  
 七四三 ことにほかありません。六 月明かり  
 七四三 るのではありませんか。」「ふたりは、び  
 七四三 た目ではありませんか。」「ふたりは、な  
 七四三 本ぬけてはいませんか。」「ふたりは、い  
 七四三 にちがいありません。」「甲「どこでみまし  
 七四三 たのではありません。」「甲「え、でも、そ  
 七四三 んじではありませんか。」「乙「それとも、  
 七四三 たのでもありません。」「ふたりは、また  
 七四三 、らくだがいけません。おどろいて、方々  
 七四三 が、みあたりません。そのとき、この人  
 七四三 いるじやありませんか。」「甲「らくだを  
 七四三 にちがいありません。どうぞ、おさばき  
 七四三 足あとがみえませんか。それで、このらく  
 七四三 ほかでもありません。道に、麦がこぼれ  
 七四三 もじつとしていません。いつも、どこかを  
 七四三 、ちつともたべません。五月二十二日 (火)  
 七四三 は、元氣がありません。なるべく、こくる  
 七四三 たが、草はたべませんでした。十一月二十六日  
 七四三 けて、のませませんでした。うさぎは、  
 七四三 てんしてはいけません。いぬでもねこで  
 七四三 もねこでもありません。鳥——それも、日  
 七四三 がいいかもしれません。なぜなら、ほおじ  
 七四三 せても長くはいません。私たちの家のうち

八九六 といったらありません。びっくりして茶の  
 八九六 いても書ききれません。小さな家で、小さ  
 八九六 することもできませんから、つめたくなっ  
 八九六 かなしくてなりません。ころしたの  
 八九六 とがわすれられませんか。ことに、町はずれ  
 八九六 それからはなれませんか。虫たちは、どうし  
 八九六 たことではあります。人間のあかんぼが  
 八九六 なくてはありません。それでたいそうほ  
 八九六 いに大きくなります。あぶらぎみでは、  
 八九六 のしせいで動きません。やがておきなおつ  
 八九六 ども、みあたりませんでした。馬車はふた  
 八九六 かることはできません。ふだん、私たちは  
 八九六 、もうまにありません。そこで、もつと大  
 八九六 三十分ではあります。五日や二十日でも  
 八九六 二十日でもありません。五ヶ月や八ヶ月で  
 八九六 八ヶ月でもありません。「光年」を単位と  
 八九六 足なことはあります。したが、もつとた  
 八九六 なんの返事もありません。王女は、かたいこ  
 八九六 いことはあります。「略」。「略」。  
 八九六 くおなりになります。王さまは、「略」  
 八九六 という考えはできません。そこへ、王  
 八九六 るものではあります。金持だと思ふとか  
 八九六 やはりみあたりませんでした。王子も、な  
 八九六 わせもありません。」「と答えました。  
 八九六 くない人はありませんから、どここの家をつ  
 八九六 るにちがいありません。けれども、それで  
 八九六 心がよくわかりません。そこで、「幸福」  
 八九六 がきたとは知りませんから、まずしいこじ  
 八九六 美しくはありませんが、たちはほんとう  
 八九六 は、まだがでません。五月二十一日 (月)  
 八九六 いもなく目だちません。九月四日 (火)  
 八九六 、まださいていませんでした。三時間めの

八〇三 花は、一日開きませんでした。 9月14日  
九五五 るにちがいありません。 四色、五色と数を  
九六八 るにちがいありません。 色の組みあわせが  
九六二 めほどこくありません。 口ばしの両わきが  
九六七 いるのかもしれません。 これからいこうと  
九六八 いるのかもしれません。 やがて、九月のな  
九八六 ふしぎではあります。 しかし、その中に  
九八九 ないともかぎりません。 しょうわ六年の秋  
九二三 わずにはいられません。 むかしから、つば  
九二四 分の國をわすれません。 日本に春がくると  
九三七 たことはありません。 先生のことを思う  
九三九 おかわりありませんか。 みなさんもお元  
九三七 すきではあります。 だいいち、  
九四四 んばってありませんでした。 木が動くの  
九四五 かたき落せませんでした。 なたをふり  
九四三 クほどわかりません。 先生、「小公子」  
九四九 れしくてたまりませんでした。 はがきをそ  
九四八 そくまでねむれませんでした。 けれども  
九五〇 「りすはもういまして。 ただ、くる  
九五六 まねこを知りませんか。」すると、その  
九七三 きてくさいませんか。 そのたびに  
九七六 礼なんかいらませんか。 「略」。「略」  
九七〇 ええ、かまいません。」といいますと、  
九七三 がきは、もうきませんでした。 やつぱり、  
九八〇 よつとわかりませんね。 もし、手あたり  
九八六 、ひとりもありませんでした。 四人が話し  
九八九 べってはいけませんか。 「略」。「略」  
九八三 はることはできませんでした。 星が光りだ  
九八五 もり歌もきこえませんでした。 風が思いだ  
九八二 足がうまく動きません。 そのうちにみつば  
九八三 することもできません。 それより、自分の  
九八三 てどうにもなりませんでした。 しばらく、

九八五 うわけにもいきません。 「略」。「略」。  
九八七 みたいと思いませんか。 「略」。「略」  
九八九 したことはありませんでした。 また、口に  
九八七 したことはありませんでした。 いま、ちょ  
九八八 しいとは思いませんか。 「略」。「略」  
九八八 だか気がすみません。 それで、そのま  
九八八 ているではありませんか。 くもは、ふしぎ  
九八八 なかなかぬれません。 「略」。「略」こう話し  
九八八 できたかもしれません。 けれども、べつに  
九八八 げだそうとはしませんでした。 つばめは、  
九八八 さな葉をくれませんか。 と、おとうさ  
九八八 ものではあります。 おとうさんが  
九八八 もたちではあります。 あんないな  
九八八 とばでは通じません。 「略」。「略」なんてい  
九八八 るものがあります。 そういう遠い國へ  
九八八 くにはちがいありません。 (二) 私は、同  
九八八 もちたくはありません。 ぼくは、この学校  
九八八 にはそうはいきませんでした。 四十分もか  
九八八 そぐこともありませんでした。 妹の氣  
九八八 をたべようとします。 「イライナイ」と  
九八八 言はめんをつけません。 そうして、能が、  
九八八 はそうではあります。 つぎの「ぶす」は  
九八八 かなければなりません。 でかけると  
九八八 て、よく働けません。 そのうえ、  
九八八 いことはあります。 それどころ  
九八八 いで、すみません。 どうかそのかわり  
九八八 は受けてくれませんでした。 おしまい  
九八八 どうにもなりません。 母親は、金次郎と  
九八八 ついてぬれませんか。 「略」。「略」  
九八八 は多くはあります。 四人が生  
九八八 文さえありません。 そんなわ  
九八八 うことはいえませんが。 母親と相談して、

九八八 かりではありません。 いろいろのことを  
九八八 どはまちがいませんでした。 園長さんの  
九八八 電車は動かせんよ。」とさげんだ。  
九八八 ばではあります。 「略」。「略」あ  
九八八 名を思いだせませんでした。 「年よりの  
九八八 病人は動きませんでした。 少年は、身  
九八八 ちびるは動きませんでした。 こうもかわ  
九八八 とも思われませんでした。 かみの毛は  
九八八 とろはあります。 息をつくの  
九八八 よ。 わかりませんか。 チチロです。  
九八八 くがわかりませんか。 なんとかひとこ  
九八八 りはごさいません。 と、看護婦は答  
九八八 ったが、いえませんでした。 医者はいっ  
九八八 ることもできませんでした。 病人の  
九八八 なようすはしませんでした。 でも、ハン  
九八八 ほとんどたべませんでした。 少年は、父  
九八八 って息もつけませんでした。 看護婦や、  
九八八 すことができませんでした。 「略」。「略」  
九八八 こしもわかりませんでした。 チチロはま  
九八八 人からはしませんでした。 病人はしげ  
九八八 ものがありません。 これを病院の記念  
九八八 うはががあります。 このときコロンブ  
九八八 意味がわかります。 少女とやまぶきの  
九八八 ひとりもいません。 もしけがでもして  
九八八 ものがありません。 せんだって、ふと  
九八八 ようにいけません。 「略」。「略」  
九八八 すぎではあります。 やしきがすこし廣  
九八八 ることはあります。 ふたりのまごとい  
九八八 で、まだ歩けません。 発育がたいへんお  
九八八 っっこいえます。 早く、いえるよう  
九八八 いてもわかりません。 姉だけにわかるへ  
九八八 とはまだできません。 たった九十センチ

十二 27 6 ゆだんができません。立ちはじめには、  
 十二 32 3 すこしも知りませんでした。私は、近づ  
 十二 35 4 も区別ができませんでした。先生は失望  
 十二 38 11 部覚えてはいませんが、その中には、「  
 十二 39 11 ことではありませんか。ケラーは、生ま  
 十二 40 4 もむりはありません。ケラーの両親は、  
 十二 41 11 、生きていけません。先生も、「略。」  
 十二 74 12 ることもありません。ふだんは筑波おろ  
 十二 75 12 にはいられませんでした。「略。」  
 十二 78 8 たことはありませんでした。あまりかわ  
 十二 79 8 きたくありません。「略。」  
 十二 81 12 ることができます。やわらかなボー  
 十二 82 10 ころではありません。それでも、この清  
 十二 84 8 すことができます。しかし、さすがに  
 十二 84 10 ものではありません。もう然とたちなお  
 十二 86 10 く手をおしませんでした。十 こと  
 十二 102 2 かるではありませんか。はにわには、こ  
 十二 110 6 そうではありません。江戸時代にできた  
 十二 113 2 したかわかりません。新しい学問をきり  
 十二 113 4 ものではありません。汽車第一号 な  
 十二 113 6 汽車ではありませんか。これは、汽車第  
 十二 115 6 かに道はあります。ことばを生かすと  
 十二 115 2 一種ではありません。自轉といつて、一  
 十二 116 6 なことはありませんでした。「略。」と  
 十二 119 8 想家ではありません。かれは、科学者で  
 十二 20 1 二つしかありません。その第一は水で、  
 十二 21 3 、のこしていませんでした。しかし、ダ  
 十二 22 4 は、実現されません。もみは、ある大き  
 十二 23 4 ちがいありません。」といいました。  
 十二 24 1 けにとどまりません。第一、ユートラン  
 十三 24 6 のものにすぎませんでしたが、植林が成  
 十三 44 12 る人には聞えませんか。そこで、三郎くん

十三 45 2 なくてはなりません。そこに、このしば  
 十三 45 6 なければなりません。あいてのいうこと  
 十三 54 8 かきではありませんが、絵がすきで、そ  
 十三 57 8 よくわかりませんが、そのマリアは、  
 十四 4 3 少なくともありません。けれども、フラン  
 十四 5 9 られたりはしませんでした。こうしたフ  
 十四 6 3 くるではありませんか。パリ、千九  
 十四 6 7 ではいられませんでした。なつかしい  
 十四 8 4 ければなりません。じゅみょうにも負  
 十四 8 5 ければなりません。なにしろ、私たち  
 十四 8 10 にはおよびません。なにしろ、おかあ  
 十四 9 4 ければなりません。おかあさん、いま  
 十四 9 7 ければなりません。かなしみのために  
 十四 10 9 ことはあります。いたってべんりに  
 十四 11 7 てもかまいません。が、きはつ油をお  
 十四 17 1 長すぎはしませんか。おひとりでさび  
 十四 17 2 思いになりますか。どんなにしてい  
 十四 29 4 えるかもしれません。これはけつして  
 十四 29 5 ものではありません。だれでも、どこか  
 十四 29 9 はあまりありません。日本は景色のよい  
 十四 30 2 りとも思われません。かりにそれがほん  
 十四 30 11 なくてはなりません。なんでも日本、日  
 十四 31 5 はたつていけません。あなたがたは、こ  
 十四 32 3 あるかもしれません。天上の星とあなた  
 十四 32 11 すぎではあります。みなさんは、地球  
 十四 32 12 そうではあります。あのぎんが系に負  
 十四 34 4 、想像がつきません。しかし、アインシ  
 十四 34 6 ものではあります。博士の計算では、  
 十四 35 2 れるかもしれません。大うちゅうから見  
 十四 35 4 むことはあります。そのバクテリアに  
 十四 35 6 するではあります。これを思えば、  
 十四 37 3 たれてはいけません。ひくつになつては

十四 37 4 なつてはいけません。心を大きくもつて  
 十四 37 10 にちがいありません。四 夜明け 一  
 十四 45 7 が氣ではあります。助けを求め  
 十四 46 2 ふるえてもいません。まるで、大ぜいの  
 十四 46 8 聞いたかもしませんが、このときぐらい  
 十四 46 9 たことはあります。なんだか、  
 十四 47 3 う人かわかりませんが、おそらくは、自  
 十四 49 6 かどうかわかりません。しかし、このおじ  
 十四 50 8 まえがわかりません。しかし、たとい、  
 十四 50 10 れるではあります。六 とりいれ  
 十四 52 6 、実はつきません。根や、つるや、葉  
 十四 52 7 ちゃはあります。ただ、それだけでは実  
 十四 52 7 は実はつきません。花、とりわけ、め  
 十四 53 1 たがいありません。「略。」葉は、  
 十四 55 7 、だれもいませんから、私が申します  
 十四 56 1 一つございせん。しかし、根さんが  
 十四 56 5 実にはなりません。また、花さんでも  
 十四 60 5 ことはいいません。あなたがたは、  
 十四 61 6 単にはいえません。公平にいつて、  
 十四 68 12 つかえありません。もつとも、らい雨  
 十四 69 10 はなにもありませんが、それを日なたへ  
 十四 79 5 ることがあります。ただ、困るのは、  
 十四 80 5 あるかもしれません。それは、なん回も  
 十五 23 5 すがたが見えせん。先生が第一にさわ  
 十五 23 8 いるではあります。さあたいへんだ  
 十五 24 7 れるかわかりません。そう思うと、勇ま  
 十五 27 2 ずにはいられません。ところが、  
 十五 31 2 うはずはあります。大わしは、この思  
 十五 32 7 も耳にはいりません。ふいに「略。」  
 十五 33 8 うまでもありません。目の前の美しい、  
 十五 44 3 焼じゃありません。古い焼物そつく  
 十五 63 1 しはあがりませんよ。「略。」おじ

十五 90 1 会 どうにすみませんが、ちよつとのまも  
十五 93 5 会 っていられません。なにも聞えません  
十五 93 5 会 なにも聞えませんよ。」さとう おじよ  
十五 93 8 会 こともできませんからね。」<sup>ふとっ</sup>「ほ  
十五 93 10 会 わりはできませんよ。さあ、みんな  
十五 98 8 会 してもいけませんよ。もう時間がない  
十五 104 3 会 ようかいしませんでした。まもなくや  
十五 106 2 会 ことがありません。その後にいるのは  
十五 107 7 会 ってはいけません。すると、あの女は  
十五 110 3 会 の中にありませんよ。」チルチル「でも  
十五 115 7 会 たりはありませんよ。どんな子だっ  
十五 115 11 会 れてはなりませんよ。でも、おまえた  
十五 117 7 会 っとも知りませんでしたよ。あなた、  
十五 122 8 会 ることはできません——先生がたがみん

# 付 録

|   |                              |     |
|---|------------------------------|-----|
| 1 | 課名一覧                         | 970 |
| 2 | 文字のある挿絵一覧                    | 973 |
| 3 | 音図                           | 974 |
| 4 | 漢字一覧(提出順)                    | 975 |
| 5 | 漢字一覧(五十音順)                   | 982 |
| 6 | 『こくご』『国語』(みんないいこ<br>読本) 修正経過 | 991 |

第六期国定読本全十五冊に収められた課名を各巻の巻頭にある目録によって示した。

|        |            |  |  |
|--------|------------|--|--|
| 1 課名一覧 |            | 第六期国定読本全十五冊に収められた課名を各巻の巻頭にある目録によって示した。 |  |
| 十七     | 山のつつじ      | 四十                                     |  |
| 十六     | だんだんくわしくなる | 三十七                                    |  |
| 十五     | なつてみたいもの   | 三十四                                    |  |
| 十四     | ひとつのことばから  | 三十一                                    |  |
| 十三     | 手と足        | 二十九                                    |  |
| 十二     | 人のかお       | 二十七                                    |  |
| 十一     | あいさつ       | 二十四                                    |  |
| 十      | ゆうぎ        | 二十一                                    |  |
| 九      | ゆうやけこやけ    | 十八                                     |  |
| 八      | あさのこくぼん    | 十七                                     |  |
| 七      | よみかき       | 十五                                     |  |
| 六      | もちもの       | 十四                                     |  |
| 五      | かくれんぼ      | 十二                                     |  |
| 四      | たまいれ       | 九                                      |  |
| 三      | むすんでひらいて   | 八                                      |  |
| 二      | なのはな       | 六                                      |  |
| 一      | みんないいこ     | 四                                      |  |
| 巻一     | 課名         |  |  |
| 十八     | お月さんのくに    | 四十三                                    |  |
| 七      | 白うさぎ       | 四十三                                    |  |
| 八      | 高い高い       | 四十九                                    |  |
| 九      | 五人の子ども     | 五十八                                    |  |
| 十      | ひびき        | 八十五                                    |  |
| 十一     | みんなのもの     | 九十                                     |  |
| 十二     | 一まいの紙      | 九十四                                    |  |
| 十三     | かぐやひめ      | 百                                      |  |
| 巻四     |            |  |  |
| 一      | この町        | 四                                      |  |
| 二      | にわとり       | 十四                                     |  |
| 三      | いろいろなあいて   | 十九                                     |  |
| 四      | 心に生きているこ   | と                                      |  |
| 五      | と          | 三十四                                    |  |
| 六      | がんのなかま     | 四十一                                    |  |
| 七      | ことばあそび     | 六十六                                    |  |
| 八      | いろはがるた     | 七十四                                    |  |
| 九      | クリスマス      | 八十一                                    |  |
| 十      | 雪          | 八十六                                    |  |
| 十一     | うらしまたろう    | 九十六                                    |  |
| 十二     | 一つのもので     | 百二十                                    |  |
| 十三     | 四季         | 百二十四                                   |  |
| 巻五     | はごろも       | 百二十六                                   |  |
| 一      | 川のうた       | 四                                      |  |
| 二      | 私の旅        | 八                                      |  |
| 三      | ありがとう      | 二十一                                    |  |
| 四      | 石炭         | 三十二                                    |  |
| 五      | 心と心        | 三十八                                    |  |
| 六      | まどをあけると    | 四十四                                    |  |
| 七      | 星          | 五十二                                    |  |
| 八      | あさがおの花     | 五十九                                    |  |
| 九      | 金のさかな      | 六十五                                    |  |
| 十      | 学級日記から     | 七十七                                    |  |
| 十一     | りょうかんさん    | 八十五                                    |  |
| 十二     | ひわの子       | 九十四                                    |  |
| 巻六     |            |  |  |
| 一      | 小さなねじ      | 四                                      |  |
| 二      | イソップものがたり  | 十三                                     |  |
| 三      | ありとはと      |  |  |
| 四      | ありときりぎりす   |  |  |
| 五      | かかし        | 三十一                                    |  |
| 六      | 空のうた       | 四十六                                    |  |
| 七      | 月と雲        | 五十一                                    |  |
| 八      | かべ新聞       | 五十六                                    |  |
| 九      | だれの力       | 七十                                     |  |
| 十      | つりばりのゆくえ   | 八十                                     |  |
| 十一     | ぼくの発明      | 九十九                                    |  |
| 十二     | (一)        |  |  |
| 十三     | (二)        |  |  |
| 十四     | たこ         | 百十四                                    |  |
| 十五     | うさぎさん      | 百二十一                                   |  |

[illegible]



|     |            |     |     |           |     |            |
|-----|------------|-----|-----|-----------|-----|------------|
| 十   | ことばのはたらき   | 八十七 | 三   | 星の光       | 二十九 | かな         |
| 十一  | ある写真帳      | 九十六 | 四   | 夜明け       | 三十八 | ローマ字       |
| 十二  | ある写真帳      | 九十六 | 五   | 心に太陽をもて   | 四十二 | 日本語の書き表わしか |
| 十三  | ある写真帳      | 九十六 | 六   | 心に太陽をもて   | 四十二 | た          |
| 一   | しずかな午前     | 四   | 七   | くちびるに歌をもて | 四十三 | めぐりあい      |
| 二   | 眞理         | 八   | 八   | とりいれまつりの夜 | 五十一 | 赤絵のはち      |
| 三   | 智識と迷信      |     | 九   | 茶わんの湯     | 六十二 | 熱情のことば     |
| 四   | ガリレオ       |     | 十   | 木もと竹うら    | 七十七 | その人のことば    |
| 五   | みどりの野      | 十七  | 十一  | (一)       |     | 幸福の園       |
| 六   | ホートン風景     | 二十六 | 十二  | (二)       |     | 最後の学級日記    |
| 七   | 電話         | 三十七 | 十三  | 雪の映画      | 八十三 |            |
| 八   | そよ風        | 四十六 | 十四  | マッチ賣りのむすめ | 九十  |            |
| 九   | 土          |     | 十五  | まさになつべし   | 四   |            |
| 十   | チューリップ     |     | 十六  | 矢と歌       | 四   |            |
| 十一  | しき         |     | 十七  | まさになつべし   | 四   |            |
| 十二  | きり         |     | 十八  | 朝ざくら      | 四   |            |
| 十三  | 短日         |     | 十九  | みかん       | 四   |            |
| 十四  | わらいの歌      |     | 二十  | わか草       | 四   |            |
| 十五  | 牧場         |     | 二十一 | 月夜        | 四   |            |
| 十六  | わたしの心はにじを見 |     | 二十二 | ばらの花      | 四   |            |
| 十七  | るとおどる      |     | 二十三 | まさに立つべし   | 四   |            |
| 十八  | ある画像       | 五十三 | 二十四 | 大わしに乗った話  | 十九  |            |
| 十九  | ある画像       | 五十三 | 二十五 | 文字の話      | 三十四 |            |
| 二十  | ある画像       | 五十三 | 二十六 | 文字のはじめ    | 三十四 |            |
| 二十一 | ある画像       | 五十三 | 二十七 | 漢字        | 三十四 |            |
| 二十二 | ある画像       | 五十三 | 二十八 | 漢字        | 三十四 |            |
| 二十三 | ある画像       | 五十三 | 二十九 | 漢字        | 三十四 |            |
| 二十四 | ある画像       | 五十三 | 三十  | 漢字        | 三十四 |            |
| 二十五 | ある画像       | 五十三 | 三十一 | 漢字        | 三十四 |            |
| 二十六 | ある画像       | 五十三 | 三十二 | 漢字        | 三十四 |            |
| 二十七 | ある画像       | 五十三 | 三十三 | 漢字        | 三十四 |            |
| 二十八 | ある画像       | 五十三 | 三十四 | 漢字        | 三十四 |            |
| 二十九 | ある画像       | 五十三 | 三十五 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十  | ある画像       | 五十三 | 三十六 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十一 | ある画像       | 五十三 | 三十七 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十二 | ある画像       | 五十三 | 三十八 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十三 | ある画像       | 五十三 | 三十九 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十四 | ある画像       | 五十三 | 四十  | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十五 | ある画像       | 五十三 | 四十一 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十六 | ある画像       | 五十三 | 四十二 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十七 | ある画像       | 五十三 | 四十三 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十八 | ある画像       | 五十三 | 四十四 | 漢字        | 三十四 |            |
| 三十九 | ある画像       | 五十三 | 四十五 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十  | ある画像       | 五十三 | 四十六 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十一 | ある画像       | 五十三 | 四十七 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十二 | ある画像       | 五十三 | 四十八 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十三 | ある画像       | 五十三 | 四十九 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十四 | ある画像       | 五十三 | 五十  | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十五 | ある画像       | 五十三 | 五十一 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十六 | ある画像       | 五十三 | 五十二 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十七 | ある画像       | 五十三 | 五十三 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十八 | ある画像       | 五十三 | 五十四 | 漢字        | 三十四 |            |
| 四十九 | ある画像       | 五十三 | 五十五 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十  | ある画像       | 五十三 | 五十六 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十一 | ある画像       | 五十三 | 五十七 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十二 | ある画像       | 五十三 | 五十八 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十三 | ある画像       | 五十三 | 五十九 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十四 | ある画像       | 五十三 | 六十  | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十五 | ある画像       | 五十三 | 六十一 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十六 | ある画像       | 五十三 | 六十二 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十七 | ある画像       | 五十三 | 六十三 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十八 | ある画像       | 五十三 | 六十四 | 漢字        | 三十四 |            |
| 五十九 | ある画像       | 五十三 | 六十五 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十  | ある画像       | 五十三 | 六十六 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十一 | ある画像       | 五十三 | 六十七 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十二 | ある画像       | 五十三 | 六十八 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十三 | ある画像       | 五十三 | 六十九 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十四 | ある画像       | 五十三 | 七十  | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十五 | ある画像       | 五十三 | 七十一 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十六 | ある画像       | 五十三 | 七十二 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十七 | ある画像       | 五十三 | 七十三 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十八 | ある画像       | 五十三 | 七十四 | 漢字        | 三十四 |            |
| 六十九 | ある画像       | 五十三 | 七十五 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十  | ある画像       | 五十三 | 七十六 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十一 | ある画像       | 五十三 | 七十七 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十二 | ある画像       | 五十三 | 七十八 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十三 | ある画像       | 五十三 | 七十九 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十四 | ある画像       | 五十三 | 八十  | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十五 | ある画像       | 五十三 | 八十一 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十六 | ある画像       | 五十三 | 八十二 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十七 | ある画像       | 五十三 | 八十三 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十八 | ある画像       | 五十三 | 八十四 | 漢字        | 三十四 |            |
| 七十九 | ある画像       | 五十三 | 八十五 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十  | ある画像       | 五十三 | 八十六 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十一 | ある画像       | 五十三 | 八十七 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十二 | ある画像       | 五十三 | 八十八 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十三 | ある画像       | 五十三 | 八十九 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十四 | ある画像       | 五十三 | 九十  | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十五 | ある画像       | 五十三 | 九十一 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十六 | ある画像       | 五十三 | 九十二 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十七 | ある画像       | 五十三 | 九十三 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十八 | ある画像       | 五十三 | 九十四 | 漢字        | 三十四 |            |
| 八十九 | ある画像       | 五十三 | 九十五 | 漢字        | 三十四 |            |
| 九十  | ある画像       | 五十三 | 九十六 | 漢字        | 三十四 |            |

## 2 文字のある挿絵一覧

第六期国定読本の挿絵のうち、用語採集の対象とした文字のある挿絵の所在と、その挿絵の簡略な説明を記した。

巻・ページ (課名) 内容

- 三・91 (みんなの もの) 郵便ポスト。胴に「郵便」の文字がある。
- 三・99 (一まいの 紙) 習字の半紙。「は」「こ」の文字がある。
- 四・66 (ことばあそび) 凧をあげる子供たち。字凧に「龍」の文字がある。
- 四・70 (ことばあそび) 時計。文字盤に1から12の文字がある。
- 四・70 (ことばあそび) いろりと鉄瓶。絵の右上に「い」の文字がある。
- 四・75 (いろはがるた) かるたの「わ」の絵札。
- 六・31 (かかし) 田で風に吹かれるかかし。顔に「へのへのもへ」の文字がある。
- 六・34 (かかし) 風に飛ばされるかかし。顔に「へのへのへ」の文字がある。
- 六・35 (かかし) 木にひっかかったかかし。顔に「へのへのへ」の文字がある。
- 六・37 (かかし) ビルの屋根にひっかかったかかし。顔に「へのへのへ」の文字がある。
- 六・38 (かかし) 燕と話すかかし。顔に「へのへのもへ」の文字がある。
- 六・42 (かかし) 燕に運ばれるかかし。顔に「へのへの」の文字がある。

- 六・45 (かかし) 田に立つかかし。顔に「へのへのもへ」の文字がある。
- 六・61 (かべ新聞) 寒暖計を見る子供。寒暖計にFとCの文字がある。
- 六・64 (かべ新聞) 時計を見る子供。文字盤に1から12の文字がある。
- 七・95 (うさぎ日記) 子兎の絵。横に説明の文がある。
- 八・15 (あぶらぜみ) 油蟬の幼虫の図。1と2の番号が付けられている。
- 八・17〜19 (あぶらぜみ) 油蟬の幼虫の図。3から8に至る番号が付けられている。
- 十一・11 (川口の子どもたち) ボート内の人員配置図。各人に1から8までの番号が付けられ、「トップ」「調整」などの名称が記されている。
- 十一・56 (一つ一つつろ) 時計。文字盤に1から12までの文字がある。
- 十一・58 (いにくいことば) 話をする父と子。吹出しに「ナمامミナマメ」「ナمامギナガゴメ」などの文字がある。
- 十二・53 (人形しばい) 指人形の着物の型紙。「30センチ」「4センチ」などの記述がある。
- 十二・54 (人形しばい) 指人形の舞台の説明図。
- 十二・112 (ある写真帳) 本の表紙。表題に「解體圖」の文字がある。

## 3 音図

第六期国定読本にあげられている五十音図を写真版で示した。今回は音図のみで、いろははない。

五十音図(平仮名) (巻一66・67ページ)

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ん | わ | ら | や | ま | は | な | た | さ | か | あ |
|   | ゐ | り | い | み | ひ | に | ち | し | き | い |
|   | う | る | ゆ | む | ふ | ぬ | つ | す | く | う |
|   | ゑ | れ | え | め | へ | ね | て | せ | け | え |
|   | を | ろ | よ | も | ほ | の | と | そ | こ | お |

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |   |   |   |   |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|---|---|---|---|
| びゃ | びゃ | ぢゃ | ぎゃ | りゃ | みゃ | ひゃ | にゃ | ぢゃ | しゃ | きゃ | ば | ば | だ | ざ | が |
| びゅ | びゅ | ぢゅ | ぎゅ | りゅ | みゅ | ひゅ | にゅ | ぢゅ | しゅ | きゅ | ぶ | ぶ | ぢ | じ | ぎ |
| びょ | びょ | ぢょ | ぎょ | りょ | みょ | ひょ | にょ | ぢょ | しょ | きょ | ぼ | ぼ | て | ぜ | げ |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ン | ワ | ラ | ヤ | マ | ハ | ナ | タ | サ | カ | ア |
|   | ヰ | リ | イ | ミ | ヒ | ニ | チ | シ | キ | イ |
|   | ウ | ル | ユ | ム | フ | ヌ | ツ | ス | ク | ウ |
|   | エ | レ | エ | メ | ヘ | ネ | テ | セ | ケ | エ |
|   | ヲ | ロ | ヨ | モ | ホ | ノ | ト | ソ | コ | オ |

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |   |   |   |   |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|---|---|---|---|
| ビャ | ビャ | ヂャ | ジャ | ギャ | リャ | ミャ | ヒャ | ニャ | チャ | シャ | キャ | バ | バ | ダ | ザ | ガ |
| ビュ | ビュ | ヂュ | ジュ | ギュ | リュ | ミュ | ヒュ | ニュ | チュ | シュ | キュ | ビ | ビ | ヂ | ジ | ギ |
| ビョ | ビョ | ヂョ | ジョ | ギョ | リョ | ミョ | ヒョ | ニョ | チョ | ショ | キョ | ブ | ブ | ヅ | ズ | グ |
|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    | ベ | ベ | デ | ゼ | ゲ |
|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    | ボ | ボ | ド | ゾ | ゴ |

五十音図(片仮名) (巻三118・119ページ)

第一期と異なり、第五期・第六期国定読本においては、欄外に新出漢字または読替漢字を掲げていないが、コンピュータ処理によって同様のものを作成したので、それを提出順に示す。読み替えとして提出されるものは、二字分、下げて示す。

巻二(新出30読み替え4)  
2・5 先

竹長休高声色空 校学耳 中 水花下上青赤大小生友  
小 四十 人

卷三(新出51

30 29 28 27 26 25 23 23 22 21 18 18 18 18 15 14 13 10 8 8 8 8 7 7 5  
2 1 10 6 2 3 8 4 9 2 5 4 3 2 3 7 7 7 10 9 8 7 5 4 10

作豆麦早百切米村方海 魚虫名門王心鳥北南西東白 光 読み替え 國冬車春年立本走  
四 小 11

112 112 111 111 110 110 109 109 103 96 94 87 79 79 67 66 63 63 58 58 57 50 44 44 44 44 44 44 43 43 43 39 36 31 31 30  
9 5 9 9 3 3 6 1 5 6 5 2 7 2 7 5 7 6 3 1 6 5 9 9 9 9 9 6 3 2 1 5 2 2 2

力 矢弓界      世字紙音雨家雲風女男丘子夜石      多思島道火左右文  
十      世夜年      五四三二一

卷四(新出) 47

67 61 57 57 55 47 47 44 44 42 39 33 31 31 29 27 24 21 20 20 19 17 13 7 7 7 6 6 4 4 4 4 113 113  
 4 3 7 5 6 2 2 1 1 4 7 4 9 9 9 6 5 5 9 9 2 3 6 9 6 6 8 6 4 3 1 3 1

正食 快 全安発出列枝元徒 返林半考意用書星 氣事 糸話知 町 読み替え 戸天  
作 夜 中 生 火 生 11

6 6 6 6 4 4 133 130 126 125 124 124 123 123 123 123 121 113 113 110 106 104 92 88 87 86 83 83 79 76 74 67 67  
 5 4 4 4 6 5 4 5 3 2 6 1 4 4 4 3 3 3 3 10 7 4 2 5 5 1 4 1 10 8 6 7 4  
 卷五 (新出 68)

電 土草 読み替え 30  
 都 原秋夏季由自不干苦母父申波礼黒親降雪 弟 品 組  
 道 力水 返 山 心 日 月

32 32 32 29 29 28 28 28 28 21 21 21 21 19 19 19 15 15 15 11 11 10 10 8 8 8 8 7 7 7 7 6 6  
 6 1 1 4 4 10 9 9 3 9 7 4 4 5 4 4 8 7 7 6 6 5 3 8 4 4 1 1 6 5 5 5 9 7

貨炭 持 受物 店帰 点終動 銭近遠駅配明労乗札改旅私 荷船汽 野  
 石 物 品 出 日二 下船 車

77 77 74 74 72 70 68 65 65 63 60 56 56 55 55 53 53 51 49 46 46 44 44 43 42 41 40 38 36 34 34 34 33 32 32  
 6 4 11 11 5 3 3 3 1 11 5 2 2 7 2 9 9 6 2 7 5 4 4 6 6 5 2 8 9 4 1 1 4 7 7

級入間週 新住金 写 今分 身鳴通和平屋田岸美送 場工茶 材  
 女金 分 星土 東南鳴 物動 木

11 10 9 9 6 6 5 4 4 4 4 108 108 108 105 100 94 84 84 84 84 84 84 83 83 83 83 79 78 78 78 78 77 77  
 9 3 6 2 10 3 5 8 7 7 2 11 9 9 1 2 4 8 8 8 6 6 2 1 1 1 9 10 7 7 3 7 6  
 卷六 (新出 83)

活 喜 役具台計 鉄 読み替え 20  
 光 町足 時 近 所製感羽死 語 運 眞念葉流室教時 記  
 音 國岸海 写 月

56 56 56 56 56 56 56 56 53 51 51 50 48 46 43 40 37 36 36 31 31 27 26 19 18 18 18 18 18 17 17 13 13 13  
 8 8 7 4 4 2 2 1 1 2 4 2 3 6 3 10 7 6 6 3 7 7 3 2 10 9 7 5 5 5 8 8 9 4 3

談相集号第行來聞 両遊晩晝絵寒朝森 地根向顔毎夕 隊唱合会樂助歩  
 新 雨 樂上終 運

107 107 106 106 102 101 100 100 100 99 99 96 94 92 90 87 87 84 80 79 78 76 74 70 69 69 69 67 66 65 63 61 61 61 61  
 10 10 9 8 7 4 11 11 11 4 1 7 1 10 8 9 5 3 3 6 5 9 2 2 4 3 2 4 8 8 3 8 8 7 7

強勉機飛柱画鏡 望古見 病兄面神 困願同問息命妹 谷題答銀度温暖  
 遠 苦 教 紙場通 寒

9 9 9 8 8 7 7 7 5 5 4 卷七(新出52) 140 139 138 134 134 133 132 132 129 129 126 126 122 122 117 115 115 114 114 113 113 113  
 8 3 3 10 3 4 3 1 4 3 2 1 9 1 3 1 10 3 3 8 4 9 9 10 10 3 8 4 2 2 3 3 2  
 業卒黄渡 歌 舍庭 読み替え29 肉 岩負 勝決追毛廣深落実料首外骨角質性以  
 入 歌 組庭 地 角勝

46 45 44 43 43 42 42 41 41 40 40 40 40 40 40 35 35 33 33 32 29 27 27 26 26 25 25 23 21 19 19 18 16 14 12  
 4 7 8 5 4 10 10 6 5 5 5 5 5 2 2 2 2 5 5 4 4 11 11 7 7 6 4 11 9 8 2 5 7 9 11

序 矢 戰 老曲 席座郎 客 頭前 轉察觀後午 帳砂曜橋 油 腹  
 答 旅 人 青 三 乘 弟兄空 七 強 長 文

94 91 88 87 86 86 79 79 79 79 79 77 77 74 74 67 64 59 58 57 55 54 50 50 49 49 48 48 48 48 47 47 46 46 46  
 6 5 7 7 5 2 10 10 9 9 9 6 2 7 7 2 4 5 5 3 8 8 4 3 4 1 6 6 2 1 8 4 10 10 6

暑注 晴廷法官判裁齒短乙甲 巢 宝胸式整内 郡 回 章線 縣  
 日日計 炭音 柱曲 野 六 大鏡 北

34 34 33 33 33 26 26 26 26 20 17 15 15 14 13 12 12 11 8 8 7 7 7 7 6 6 5 5 5 4 4 4 4 卷八(新出45)  
 5 4 9 9 2 7 5 4 4 1 5 3 11 11 3 11 11 11 7 9 3 8 8 8 8 4 3 9 7 2 4 4 3 読み替え23  
 秒速位單万 帝馬 表 皮 頼信血 言予福幸族買指賣 洋 者  
 七 頭天 間小大 生 身土 家 西

109 105 104 104 103 103 99 98 94 94 94 94 86 86 86 86 85 83 71 61 58 58 54 49 47 40 38 38 36 34 34 34 34 34 34  
 6 9 6 6 4 3 4 4 4 3 3 1 6 6 2 2 5 9 3 1 4 4 5 1 2 3 10 1 3 9 9 6 6 5 5

害閉開数植 種育乳牛夫農 重姉少停寺 横 着満 陽太算球  
 米数虫 林種 望 所 子 宝正十二

30 29 28 26 23 23 23 23 23 23 22 21 21 21 20 19 19 19 19 19 19 19 14 10 10 10 10 9 8 8 6 5 3  
 5 4 1 3 9 9 7 4 2 1 11 11 11 8 1 10 10 9 7 6 2 1 2 8 5 5 2 3 11 1 5 3 7

卷九(新出  
52)

燈 利 養次園 社航 民告 協候約演例景情劇 港加器 求  
 步 重上 明 合一 着 廣同話 重 色

読み替え  
(39)

93 88 88 87 87 85 84 83 81 78 77 76 76 76 76 71 70 63 54 47 46 46 46 46 46 45 45 41 36 36 36 36 33 32 32  
 1 4 4 8 8 8 9 2 4 5 8 4 4 3 3 5 7 7 8 7 7 7 5 5 1 2 1 9 11 10 10 1 7 8 1

舞類説針 主 移待 格服坂拜 公 味 雜登貝湖烟  
 間右左台 西 平植 角明 色景日数八少 白 草

17 16 15 14 9 9 8 7 5 3 140 136 129 124 124 122 122 122 122 122 121 121 121 119 119 116 111 110 109 109 108 104  
 4 7 1 8 12 5 9 1 10 2 3 3 8 10 10 11 11 9 6 4 2 10 5 3 5 1 2 10 6 3 3 11 8

卷十(新出  
66)

商節 呼愛 織 探難 熱支 舟 湯 飲泉階勇制止急  
 通太問 親 失 舞頼羽求 困 右 流 次 文集

読み替え  
(37)

33 33 32 32 32 32 32 32 31 31 31 27 27 27 27 25 25 25 24 24 24 24 24 24 23 21 21 21 21 20 20 20 19 19 18  
 6 1 10 10 10 6 4 4 12 12 12 8 3 3 3 9 9 9 5 4 3 2 1 1 11 6 6 6 5 4 1 1 11 3 3

研 吉佐豊 部体任責無 然 吸 現員輪 坑漁婦護看院 形円窓読暗  
 工 勇 形 自学 呼深下 風 暗

43 42 42 42 42 42 40 40 39 39 39 39 39 39 39 39 38 38 38 37 37 37 36 36 35 35 35 35 34 34 34 33 33 33 33  
 10 9 8 5 5 5 10 10 9 9 8 8 8 3 1 1 10 7 2 9 2 1 11 1 8 8 2 2 12 8 3 12 11 11 6

取的科殖 際論理功成核 御 珠 才試敗図設館京想械進 衣究  
 現加 者助 本 実母然 力 織住

13 8 8 7 7 7 5 5 5 4 71 66 65 65 65 64 64 64 64 63 62 62 59 54 53 49 46 45 45 45 45 44 44  
 5 1 1 12 7 7 10 1 1 5 4 4 6 1 1 12 2 2 2 11 7 7 1 3 4 12 11 11 3 3 2 6 6  
 消 令調 賛習練 等 対 有 築建 藝狂能 敬 湾産術  
 糸 進向 上 男 名 美 絵 見水作味 明島 手  
 卷十一(新出33 読み替え22)

59 59 59 59 58 54 51 51 47 47 47 46 46 44 44 44 41 38 38 33 30 30 30 30 27 23 19 19 19 19 19 18 18 16 16  
 9 9 9 9 9 4 10 6 2 2 2 10 10 7 3 3 8 4 3 1 7 7 7 5 4 7 6 4 3 1 1 7 7 8 5

雄 得謝 留峽輕津士富総 池 照 梅紅 続 代働奈 宮 清  
 一男正 札 兄父 村豊 白 田 親情 神 調戦

24 23 23 23 23 23 20 20 19 17 13 11 10 8 8 7 7 7 6 6 4 4 4 83 72 71 71 71 70 67 64 63 63  
 6 10 9 6 6 1 4 4 3 2 3 8 1 4 2 12 10 10 3 3 6 6 1 11 1 12 12 7 2 10 1 10 5  
 菜荒 飲 易容散 路 孟 悲 灌 賀祝 退希 最医 陸去包  
 育 声 民 立文書 会 古 八 太 行 告 形後  
 卷十二(新出79 読み替え48)

55 55 55 55 53 53 50 49 48 48 47 47 47 47 47 46 45 45 45 43 42 40 40 37 37 36 36 35 35 35 35 34 33 25  
 9 7 7 2 6 5 8 10 10 3 10 8 6 6 6 5 3 10 4 3 8 3 6 6 12 10 12 2 11 11 4 4 6 3 2

昔祖裏穴細 簡 便史歴傳詩影 鼻童績驗経 與冷 因 別区詞 覚  
 語傳 正 消事 樂家 命 暖 原 形



77 77 77 77 75 75 72 70 70 70 70 70 62 62 62 62 61 61 60 60 59 59 59 58 58 58 57 57 56 56 56 56 56 55  
 8 4 3 3 1 1 6 5 4 3 2 2 2 7 7 6 1 7 7 12 8 5 3 2 12 4 4 4 1 11 9 9 8 5 10

旗 選 筑 句 州良蕉芭瀬奥 評峯徳 傾里 承鹿 唐岳仙 共順  
 休 合 波 船 弟 十 無 鳥湖畑知 有 雲

115 114 114 114 113 112 111 111 110 109 109 108 107 107 107 107 106 105 105 104 104 104 102 102 97 93 93 90 89 89 89 82 82  
 5 9 7 3 7 3 9 5 6 6 6 11 5 2 2 1 1 2 1 1 3 3 1 5 5 7 9 6 5 12 10 2 7 3

義憲化議治解版浮江師宣 仁倉鎌僧 卷 堂殿夢 慣誠  
 室 鳥 和大建平 習練選面輕 相清

17 17 17 17 17 16 15 14 14 14 13 13 13 12 11 11 10 10 10 9 9 9 9 9 9 8 8 8 8 7 6 6 4 3  
 9 9 3 3 2 1 2 7 1 1 12 12 9 4 6 3 10 7 5 3 3 3 2 2 2 8 7 2 2 5 4 3 5 6

賠 鉦 牧 焦紀 初反 普他漢 果結則係関 浅迷識  
 敗 森 説晝 世 輪去 移画間 得 聞頭來先短

卷十三(新出33)  
 読み替え33

3 56 53 52 41 40 39 38 37 36 35 35 31 31 31 29 28 26 26 25 25 25 25 25 23 23 20 19 19 18 18 18 17  
 7 12 1 2 5 6 4 1 7 11 10 6 4 4 3 12 9 7 7 4 4 1 1 1 12 3 2 6 1 11 6 6 9

映 達像 寢 番給 志 床 市 特努期 復軍 精償  
 老 二 受行早春遊 聞行 路小 都丘砂 前豊 神

卷十四(新出32)  
 読み替え19

76 76 71 70 63 62 62 57 57 54 53 52 45 45 44 36 35 34 34 33 33 32 32 28 28 24 20 18 11 9 5 5 5 5 5  
 6 6 1 1 1 8 2 11 6 8 5 3 4 4 11 5 5 6 4 8 3 8 7 2 2 10 3 4 6 12 12 12 11 11 10

接規蒸象 帶 張 險保定 引億博 系哲宗典辞交 英 職 修直純  
 谷腹 熱 外吸 指 思 内 急 油安 係

24 22 19 19 19 19 19 14 13 11 10 10 7 7 7 4 4 3  
9 7 9 9 9 9 3 3 5 2 8 4 4 4 1 6 6 5  
起 河氷府 置 板 残 末 編独 件條 量変儀 割  
千 登言 満 病出 星 枝 行表 元 首 高 牛万太 冬

卷十五(新出68読み替え49)

51 49 48 47 45 45 44 44 44 41 41 41 40 40 40 39 38 37 36 36 34 34 34 33 31 30 30 30 29 28 28 26 26 26 24  
4 11 8 11 8 4 2 1 1 12 12 5 2 2 2 9 6 8 8 1 8 7 4 3 2 7 6 4 6 12 9 11 7 5 10

箱枝 政 燒衛 準標在枕氏源 訓側 要 投囲周綿必 刀 殺底  
卷 細 賣 今 仁 引変結 用主 後 着 氷

65 61 61 60 60 59 58 58 58 58 57 56 56 56 56 56 56 55 55 55 55 55 54 54 53 53 52 52 52 52 52 52 51  
8 7 5 4 4 9 8 7 5 4 4 2 12 12 5 5 2 1 1 11 11 3 3 1 12 1 5 5 9 8 8 7 7 6 5

樽創 幌当 應 襄 授宿寄 駿測梯磬 費爭恩刊 守狀各 諸著  
必養 友 出 新 目 鳴鹿 著衛 別魚眞

124 123 120 120 109 108 106 105 102 102 85 82 81 81 81 81 75 74 74 74 73 73 72 72 72 72 68 66 66  
2 8 5 2 1 1 3 6 6 6 1 2 9 9 3 3 5 11 9 6 11 6 1 1 1 1 11 10 8

課 潔 善使康健栄 鑑論沢忘 権 境墓之筆  
門 送修 金 園三 姉願 旗 舟主妹守

## 5 漢字一覽 (五十音順)

第六期国定読本の新出漢字および読み替え漢字を、代表音訓によって五十音順に排列し、読本に用いられている音訓と、その提出熟語・提出箇所を示す。ただし、読本自体が、四期までのように欄外に新出・読み替えの文字を掲げるとか、編纂趣意書や教師用書(五期)で読みを示すなどのことをしていないため、この表の持つ意味は五期までとは異なる。すなわち、担当者らの判断で読んだ結果をまとめただけである。一つの漢字に二つ以上の音訓が出現する場合は、出現順にあげる。音は片仮名、訓は平仮名で示し、熟字訓には( )を付ける。

| 漢字    | 提出音訓   | 提出熟語  | 巻・ページ  |
|-------|--------|-------|--------|
| 員     | イン     | 工員    | 十・24   |
| 一     | かず     | 一雄    | 十一・59  |
|       | (ついたら) | 十月一日  | 九・22   |
|       | ひとつ    |       | 三・44   |
| 育     | イチ     | 十一    | 一・11   |
| 医     | イク     | 発育    | 十二・24  |
| 衣     | そだてる   | 医者    | 八・94   |
|       | イ      | 衣食住   | 十一・71  |
|       | イ      |       | 十・33   |
| 移     | うつる    |       | 十三・10  |
| 易     | イ      | 移植    | 九・76   |
| 意     | イ      | 容易    | 十二・20  |
| 困     | イ      | 用意    | 四・20   |
| 位     | イ      | 周囲    | 十五・30  |
| 以     | イ      | 単位    | 八・33   |
|       | イ      | 以上    | 六・113  |
| 暗     | アン     | 暗室    | 十・20   |
|       | くらい    |       | 十・18   |
|       | やすらか   |       | 十四・9   |
| 安     | アン     | 安全    | 四・47   |
| 愛     | アイ     |       | 十・7    |
| 漢字    | 提出音訓   | 提出熟語  | 巻・ページ  |
| 引     | イン     | 原因    | 十二・35  |
| 因     | イン     | 引力    | 十四・35  |
| 飲     | ひく     |       | 十五・36  |
| 院     | のむ     | 病院    | 九・119  |
| 右     | イン     |       | 十・21   |
| 羽     | みぎ     | 左右    | 三・31   |
|       | ユウ     | 右岸    | 九・88   |
|       | ウ      | 羽ばたき  | 九・122  |
| 雨     | はね     |       | 五・100  |
|       | は      |       | 九・129  |
|       | あめ     | 雨だれ   | 三・79   |
| 運     | あま     | 運動場   | 六・37   |
|       | ウン     |       | 五・83   |
| 雲     | はこぶ    | 雲仙岳   | 六・13   |
|       | くも     |       | 三・67   |
|       | ウン     | 雲仙岳   | 十二・56  |
| 影     | かげ     | 影絵    | 十二・46  |
| 映     | エイ     | 映画    | 十四・3   |
| 栄     | エイ     | 光栄    | 十四・85  |
| 英     | エイ     | 英語    | 十四・18  |
| 衛     | エ      | 今右衛門焼 | 十五・44  |
| 果科    | カ      | 結果    | 十三・9   |
|       | カ      | 科学的研究 | 十・42   |
|       | ケ      | 一家    | 十二・45  |
|       | カ      | 一家    | 八・5    |
| 家     | いえ     |       | 三・79   |
| 夏     | なつ     |       | 四・124  |
| 加     | カ      | 加工    | 十・42   |
| 化     | くわえる   |       | 九・8    |
|       | カ      | 文化國家  | 十二・114 |
|       | カ      | 地下水   | 十・24   |
| 下     | ゲ      | 下水    | 五・7    |
|       | した     |       | 二・18   |
|       | ね      |       | 七・64   |
|       | オン     | 五十音   | 五・84   |
|       | おと     |       | 三・87   |
| 音     | オン     | 温度    | 六・61   |
| 温     | オン     | 恩師    | 十五・55  |
| 乙     | オツ     |       | 七・74   |
| 屋     | や      | 花屋    | 五・43   |
|       | オク     | 黄色    | 十四・34  |
| 億     | オク     | 二十億光年 | 七・8    |
| 黄     | キ      |       | 三・14   |
| 王     | オウ     |       | 八・49   |
| 横     | よこ     | 慶應三年  | 十五・58  |
| 應     | オウ     | 奥瀬村   | 十二・62  |
| 奥     | (おいらせ) | 望遠鏡   | 六・100  |
|       | エン     |       | 五・15   |
| 遠     | とおい    |       | 九・14   |
| 演     | エン     |       | 十五・82  |
| 園     | エン     | 動物園   | 九・23   |
| 円     | エン     | 半円形   | 十・20   |
| 駅     | エキ     | 守衛    | 十五・53  |
| 覚核格各害 | カク     | おぼえる  | 十二・25  |
|       | カク     | 人格    | 十・39   |
|       | カク     | 各地    | 九・70   |
|       | ガイ     | 害虫    | 十五・52  |
| 害     | そと     |       | 八・104  |
|       | ガイ     | 海外    | 十四・57  |
| 外     | かい     |       | 六・115  |
| 貝     | カイ     |       | 九・33   |
| 階     | ひらく    |       | 九・116  |
| 開     | カイ     | 階上    | 八・103  |
|       | エ      | 絵本    | 十・64   |
| 絵     | カイ     | 世界    | 六・48   |
| 界     | カイ     | 海岸    | 三・110  |
|       | うみ     |       | 五・84   |
| 海     | カイ     |       | 三・21   |
| 械     | カイ     | 機械    | 十・34   |
| 改     | カイ     | 改札口   | 五・8    |
| 快     | カイ     | 全快    | 四・57   |
| 回     | カイ     | 二回    | 七・48   |
| 解     | カイ     | 解体図   | 十二・112 |
|       | あう     | 音楽会   | 十二・8   |
| 会     | カイ     | 祝賀会   | 十六・17  |
| 賀     | ガ      |       | 十二・4   |
|       | カク     | 字画    | 十三・10  |
| 画     | ガ      | 貨物列車  | 六・101  |
| 貨     | カ      | 第一課   | 十五・32  |
| 課     | カ      | 荷船    | 十五・123 |
| 荷     | に      |       | 五・7    |
| 花     | はな     |       | 二・23   |
|       | カ      | 火事    | 四・7    |
| 火     | ひ      |       | 三・36   |
| 河     | カ      | 氷河    | 十五・19  |
| 歌     | うたう    | 唱歌    | 七・7    |

| 館 関   |       |       |       |      | 間 鑑 観 簡 看 灌 漢 欽 慣 感 官 |        |        |       |       | 卷 刊 寒 鎌 活 割 |       |       |       |       | 樂 岳 學 角 |        |        |       |       |
|-------|-------|-------|-------|------|-----------------------|--------|--------|-------|-------|-------------|-------|-------|-------|-------|---------|--------|--------|-------|-------|
| カン    | カン    | あいだ   | ま     | ケン   | カン                    | カン     | カン     | カン    | カン    | カン          | カン    | カン    | カン    | カン    | カン      | カン     | カン     | カン    | カン    |
| 機械館   | 関係    |       | 人間    | 一週間  | 内村鑑三                  | 観祭日記   | 簡単     | 看護婦   | 太田道灌  | 漢字          | 欽声    | 習慣    | 感心    | 裁判官   | 二卷      | 日本美術史十 | 絵巻物    | 刊行物   | 寒暖計   |
| 十・35  | 十三・9  | 十三・9  | 九・93  | 八・17 | 五・74                  | 十五・81  | 十二・27  | 十二・48 | 十二・21 | 十二・6        | 十二・10 | 十二・23 | 十二・89 | 五・105 | 七・79    | 十五・51  | 十二・106 | 十五・54 | 六・61  |
| 十・35  | 十三・9  | 十三・9  | 九・93  | 八・17 | 五・74                  | 十五・81  | 十二・27  | 十二・48 | 十二・21 | 十二・6        | 十二・10 | 十二・23 | 十二・89 | 五・105 | 七・79    | 十五・51  | 十二・106 | 十五・54 | 六・61  |
| 吸     | 休     | 丘     | 客     | 吉    | 議                     | 義      | 技      | 儀     | 起     | 記           | 規     | 紀     | 季     | 汽     | 氣       | 帰      | 機      | 期     | 旗     |
| すう    | キユウ   | キユウ   | やすむ   | キユウ  | おか                    | キヤク    | ギ      | ギ     | ギ     | おこる         | キ     | キ     | キ     | キ     | キ       | かえる    | キ      | キ     | はた    |
| 深呼吸   |       | 砂丘    |       | 乗客   | 豊田佐吉                  | 議事堂    | 民主主義   | 技術    | 礼儀    | 学級日記        | 不規則   | 十六世紀  | 四季    | 汽船    |         | 飛行機    | 時期     | 國旗    | 希望    |
| 十四・54 | 十二・77 | 十三・25 | 十三・39 | 七・40 | 十二・32                 | 十二・114 | 十二・115 | 十五・48 | 十四・81 | 十五・22       | 十四・70 | 十三・14 | 四・124 | 五・7   | 四・7     | 五・21   | 六・106  | 十三・73 | 十二・77 |
| 十四・54 | 十二・77 | 十三・25 | 十三・39 | 七・40 | 十二・32                 | 十二・114 | 十二・115 | 十五・48 | 十四・81 | 十五・22       | 十四・70 | 十三・14 | 四・124 | 五・7   | 四・7     | 五・21   | 六・106  | 十三・73 | 十二・77 |
| 曲業    | 鏡     | 胸     | 狂     | 橋    | 教                     | 強      | 峽      | 境     | 協     | 共           | 京     | 魚     | 魚     | 去     | 牛       | 給      | 級      | 究     | 球     |
| キョク   | ギョウ   | かがみ   | キョウ   | むね   | キョウ                   | おしえる   | キョウ    | つよい   | キョウ   | キョウ         | キョウ   | ギョ    | うお    | ギョ    | さる      | キョ     | うし     | ギユウ   | キユウ   |
| 卒業生   | 望遠鏡   | 狂言    |       | 教室   | 勉強                    | 津軽海峡   | 國境     | 協会    | 共通    | 上京          | 魚類学者  | 漁船    | 去年    | 牛乳    | 配給物     | 学級日記   | 研究熱    | 地球    | 探求    |
| 七・41  | 七・9   | 七・47  | 六・100 | 七・54 | 七・62                  | 七・19   | 六・87   | 五・78  | 七・19  | 七・107       | 十一・47 | 十五・73 | 九・19  | 十二・56 | 十三・35   | 十五・52  | 三・18   | 十三・23 | 十二・12 |
| 七・41  | 七・9   | 七・47  | 六・100 | 七・54 | 七・62                  | 七・19   | 六・87   | 五・78  | 七・19  | 七・107       | 十一・47 | 十五・73 | 九・19  | 十二・56 | 十三・35   | 十五・52  | 三・18   | 十三・23 | 十二・12 |
| 経系    | 景     | 敬     |       | 形    | 兄                     | 傾      | 係      | 郡     | 軍     | 訓           | 空     | 具     | 苦     | 区     | 句       | 九      | 銀      | 金     | 近     |
| ケイ    | ケイ    | (けしき) | ケイ    | ケイ   | ギョウ                   | かた     | かたち    | ケイ    | ケイ    | (きょうだい)     | ケイ    | グン    | グン    | クン    | クウ      | そら     | グ      | くるしむ  | ク     |
| 経験    | 太陽系   | 景色    | 情景    | 敬意   | 人形                    | 弓形     | 半円形    | 父兄    | 兄弟    |             | 関係    | 軍人    | 空氣    | 道具    | 苦心      | 區別     | 金色     | 金持    | 近所    |
| 十二・40 | 十四・33 | 九・46  | 九・10  | 十・46 | 十二・33                 | 十一・70  | 十・27   | 十・20  | 十一・44 | 七・33        | 六・92  | 十二・60 | 十四・5  | 十三・9  | 七・48    | 十三・18  | 十五・38  | 七・32  | 二・37  |
| 十二・40 | 十四・33 | 九・46  | 九・10  | 十・46 | 十二・33                 | 十一・70  | 十・27   | 十・20  | 十一・44 | 七・33        | 六・92  | 十二・60 | 十四・5  | 十三・9  | 七・48    | 十三・18  | 十五・38  | 七・32  | 二・37  |

| 計      | 輕     | 藝     | 劇     | 決     | 潔      | 穴     | 結     | 血     | 月     | 件     | 健     | 建     | 憲     | 権      | 研      | 縣      | 見     | 險     | 驗     | 元     | 原     | 源     | 現     |        |
|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| ケイ     | はかる   | ケイ    | ゲイ    | ゲキ    | ケツ     | ケツ    | あな    | ケツ    | むすぶ   | ち     | つき    | ガツ    | ゲツ    | ケン     | ケン     | ケン     | ケン    | ケン    | ケン    | ケン    | みる    | ケン    | ケン    | あらわれる  |
| 時計屋    | 津軽海峡  | 藝術    | 劇場音楽  | 決勝点   | 純潔     | 結果    |       |       | 正月    | 條件    | 健康    | 建築    | 建物    | 憲法     | 特権     | 研究熱    | 縣道    | 発見    | 月見    | 保険会社  | 經驗    | 元氣    | 原因    |        |
| 六・四    | 七・八六  | 十二・八九 | 十一・四七 | 十二・八六 | 十五・一〇九 | 十二・五三 | 十三・九  | 十五・三三 | 八・一一  | 一・三九  | 四・六七  | 五・七七  | 十四・八四 | 十五・一〇二 | 十二・一〇四 | 十二・一〇四 | 十五・七四 | 七・四六  | 六・九九  | 十・五九  | 十四・四五 | 十二・四〇 | 十四・三三 | 十二・三三  |
| 言      | 古     | 呼     | 戸     | 湖     | 五      | 午     | 後     | 御     | 語     | 護     | 交     | 候     | 光     | 公      | 功      | 口      | 向     | 坑     | 工     | 幸     | 廣     |       |       |        |
| ゲン     | ゴン    | コ     | よぶ    | みずうみ  | コ      | ゴ     | ゴ     | み     | ゴ     | うしろ   | かたる   | ゴ     | み     | み      | み      | み      | み     | み     | み     | み     | み     | み     | み     |        |
| 廣告     | 無言    | 古歌    | 深呼吸   | 湖山    |        | 午後    | 午後    | 御木本幸吉 | 國語    | 看護婦   | 交通    | 氣候    | 日光    | 小公子    | 成功     | 方向     | 炭坑    | 工場町   | 大工    | 幸福    |       |       |       |        |
| 九・一九   | 十五・一九 | 十二・七  | 十・八   | 九・三二  | 十二・五九  | 一・一二  | 三・四四  | 七・二六  | 七・二六  | 十一・六七 | 十五・二八 | 十・三九  | 五・八四  | 十二・五五  | 十・二一   | 十四・二四  | 九・一九  | 三・五   | 六・一〇  | 九・四五  | 十・三九  | 一・二七  | 六・三一  | 十一・七   |
| 根      | 江     | 港     | 甲     | 紅     | 考      | 航     | 荒     | 行     | 鉦     | 降     | 高     | 号     | 合     | 告      | 國      | 骨      | 今     | 困     | 根     |       |       |       |       |        |
| コウ     | コウ    | え     | みなと   | コウ    | かんがえる  | コウ    | あれる   | おこない  | いく    | ギョウ   | ゆく    | コウ    | ふる    | たかい    | コウ     | ゴウ     | ガツ    | ゴウ    | あう    | コウ    | つげる   | くに    | コク    | くろ     |
| 健康     | 学校    | 江戸時代  | 紅梅    | 航空会社  | 発行     | 行列    | 鉦山    | 高度    | 新聞第一号 | 合唱隊   | 合計    | 試合    | 廣告    | 國語     | 今夜     | 今右衛門焼  | 困難    |       |       |       |       |       |       |        |
| 十五・一〇二 | 十二・三七 | 九・八   | 十一・七四 | 四・二一  | 九・二一   | 十二・二三 | 六・五六  | 十二・四  | 十三・二九 | 十三・三六 | 十五・四  | 十三・一七 | 四・八七  | 二・三九   | 十四・八四  | 六・五六   | 九・一八  | 十二・二三 | 九・一七  | 十一・七四 | 二・六四  | 五・八四  | 四・九二  | 六・一一四  |
| 佐      | 左     | 砂     | 座     | 最     | 才      | 細     | 菜     | 裁     | 際     | 在     | 材     | 坂     | 作     | 察      | 札      | 殺      | 三     | 山     | 散     | 産     | 算     |       |       |        |
| サ      | ひだり   | すな    | サ     | ザ     | サイ     | サイ    | サイ    | サイ    | サイ    | サイ    | サイ    | ザイ    | ザイ    | サカ     | サク     | つくる    | サ     | サツ    | サツ    | ころす   | ザツ    | サン    | みつ    | （さぶろう） |
| 豊田佐吉   | 左右    | 砂丘    | 座席    | 最後    | 二十四才   | 細長い   | 細工人   | 野菜    | 裁判官   | 實際    | 現在    | 材木    | 作文    | 動作     | 觀察日記   | 改札口    | 雜草    | 三郎    | 散歩    | 産地    | 計算    |       |       |        |
| 十・三二   | 三・三一  | 七・二三  | 十三・二五 | 七・四〇  | 十一・七一  | 十二・五〇 | 十五・四七 | 十二・二三 | 七・七九  | 十・三九  | 十五・四一 | 五・三二  | 九・五四  | 三・三〇   | 四・五七   | 十・五三   | 七・二七  | 五・八   | 十一・五一 | 十五・二六 | 九・三六  | 一・二   | 三・四四  | 七・四〇   |

|          |           |           |           |          |           |            |           |            |           |           |           |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |
|----------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|------------|-----------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|------------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|------------|-----------|----------|
| 齒        | 試         | 詩         | 詞         | 紙        | 糸         | 私          | 氏         | 死          | 止         | 枝         | 支         | 指         | 思         | 志         | 師         | 市         | 子         | 姉        | 士         |            |           |          |           | 四         | 史         | 使         | 残         |           |          |           |            |           |          |
| は        | シ         | シ         | シ         | シ        | か         | シ          | いと        | わたくし       | しぬ        | シ         | えだ        | シ         | ゆび        | シ         | おも        | シ         | シ         | シ        | こ         | シ          | あね        | シ        | よ         | よ         | シ         | シ         | の         |           |          |           |            |           |          |
|          | 試運轉       |           | 動詞        | 半紙       | 一糸        |            | 源氏物語      | 急停止        | 一枝        | 支流        | 指名        | 思想        | 三國志       | 宣教師       | 都市        | 王子        | 兄弟姉妹      | 富士       | 四くみ       | 四人         | 歴史        | 天使       |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |
| 七・<br>77 | 十・<br>36  | 十二・<br>47 | 十二・<br>34 | 六・<br>69 | 三・<br>94  | 十一・<br>8   | 四・<br>6   | 五・<br>8    | 十五・<br>40 | 五・<br>94  | 九・<br>109 | 十五・<br>7  | 四・<br>39  | 九・<br>122 | 十四・<br>52 | 八・<br>5   | 十四・<br>36 | 三・<br>43 | 十三・<br>31 | 十二・<br>109 | 十三・<br>25 | 八・<br>47 | 三・<br>58  | 十五・<br>74 | 十一・<br>46 | 三・<br>44  | 三・<br>18  | 二・<br>35  | 一・<br>9  | 十二・<br>47 | 十五・<br>105 | 十五・<br>7  |          |
| 社        | 写         | 舍         | 実         | 質        | 室         | 失          |           |            |           | 七         | 識         | 式         | 鹿         | 辞         | 自         | 耳         | 治         |          | 次         | 時          | 持         | 寺        | 字         | 事         |           |           |           |           |          |           |            |           |          |
| シャ       | うつす       | シャ        | ジツ        | み        | シツ        | むろ         | シツ        | うしなう       | シツ        | なな        | (なのなか)    | シキ        | シキ        | シキ        | シキ        | シキ        | シキ        | シキ       | シキ        | シキ         | シキ        | シキ       | シキ        | シキ        | シキ        | シキ        | シキ        | シキ        | シキ       | シキ        | シキ         | シキ        |          |
| 航空会社     | 写生        | 校舎        | 実現        | 性質       | 室町時代      | 教室         | 失礼        | 七色         | 七日        | 知識        | 鹿鳴館       | 男鹿半島      | 國語辞典      | 自然        | 不自由       | 明治五年      | 第一次世界大戦   | 時計屋      | 時間        |            |           |          |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |
| 九・<br>21 | 五・<br>83  | 五・<br>60  | 七・<br>5   | 十・<br>38 | 六・<br>122 | 十二・<br>113 | 五・<br>78  | 十・<br>5    | 七・<br>44  | 八・<br>26  | 七・<br>25  | 一・<br>15  | 十三・<br>8  | 七・<br>50  | 十五・<br>55 | 十二・<br>57 | 十四・<br>28 | 十・<br>27 | 四・<br>123 | 二・<br>35   | 九・<br>121 | 九・<br>23 | 六・<br>4   | 五・<br>78  | 五・<br>29  | 八・<br>58  | 三・<br>96  | 十二・<br>47 | 四・<br>7  |           |            |           |          |
| 週        | 舟         | 習         | 終         | 秋        | 修         | 州          | 宗         | 周          | 授         | 受         | 首         | 種         | 珠         | 手         | 守         | 取         |           |          |           |            |           |          |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |
| シユウ      | ふね        | シユウ       | おわる       | シユウ      | あき        | シユウ        | シユウ       | シユウ        | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ      | シユウ       | シユウ        | シユウ       | シユウ      | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ       | シユウ      | シユウ       | シユウ        | シユウ       |          |
| 一週間      | 勝海舟       | 練習        | 終点        | 修業式      | 文学修業      | 信州         | 宗教        | 周回         | 教授        | 受話器       | 一首        | 品種        | 真珠        | 手術        | 守衛        | すくい主      | 主人        | 水車       | 感謝        | 助力者        | 人気者       |          |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |
| 五・<br>74 | 十五・<br>72 | 九・<br>122 | 十二・<br>97 | 十一・<br>5 | 六・<br>18  | 五・<br>21   | 四・<br>125 | 十五・<br>120 | 十四・<br>5  | 十二・<br>70 | 十四・<br>32 | 十五・<br>30 | 十五・<br>57 | 十三・<br>37 | 五・<br>28  | 十四・<br>86 | 六・<br>115 | 八・<br>94 | 八・<br>94  | 十・<br>37   | 十・<br>44  | 一・<br>29 | 十五・<br>66 | 十五・<br>53 | 十・<br>42  | 十五・<br>68 | 十五・<br>33 | 九・<br>78  | 五・<br>6  | 二・<br>64  | 十一・<br>54  | 十・<br>40  | 八・<br>4  |
| 助        | 諸         | 書         | 暑         | 所        | 初         | 順          | 純         | 準          | 駿         | 春         | 術         |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |
| ジョ       | たすける      | シヨ        | シヨ        | かく       | あつい       | ところ        | シヨ        | シヨ         | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン      | ジュン       | ジュン        | ジュン       | ジュン      | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン       | ジュン      | ジュン       | ジュン        | ジュン       |          |
| 助力者      | 東部諸州      | 書物        | 台所        | 製材所      | 最初        | 純真         | 標準語       | 駿河湾        | 手術        |           |           |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |           |           |           |           |           |           |          |           |            |           |          |
| 十・<br>40 | 六・<br>13  | 十五・<br>52 | 十二・<br>11 | 四・<br>19 | 七・<br>94  | 八・<br>54   | 五・<br>108 | 十三・<br>13  | 十二・<br>55 | 十四・<br>5  | 十五・<br>41 | 十五・<br>56 | 十三・<br>35 | 二・<br>61  | 十・<br>44  | 十五・<br>58 | 十五・<br>10 | 五・<br>21 | 四・<br>44  | 十二・<br>4   | 十五・<br>56 | 九・<br>28 | 九・<br>9   | 八・<br>83  | 十二・<br>62 | 八・<br>34  | 三・<br>112 | 二・<br>29  | 一・<br>11 | 十・<br>33  | 五・<br>65   | 九・<br>104 | 六・<br>56 |

| 女                 | 序                   | 償                   | 勝                   | 商                   | 唱                   | 小                  | 少                  | 床承消                | 焼                  | 焦                  | 照                     | 章                 | 蕉                  | 象                  | 上                  | 乗                   | 場                  |
|-------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-----------------------|-------------------|--------------------|--------------------|--------------------|---------------------|--------------------|
| おんな<br>ジョ<br>三・63 | 女王<br>序曲<br>七・72    | 賠償<br>ジョウ<br>六・132  | 決勝点<br>ジョウ<br>六・133 | 商業学校<br>ジョウ<br>十・14 | 合唱隊<br>ジョウ<br>六・18  | こ<br>ちいさい<br>二・11  | 小ぞう<br>二・37        | 小川<br>三・7          | 大小<br>八・15         | 小路<br>十三・26        | (こうじ)<br>すくない<br>八・61 | 少年<br>九・45        | 床屋<br>十三・28        | 承知<br>十二・58        | 消える<br>十一・13       | けす<br>十二・48         | やく<br>今右衛門焼        |
| 情                 | 條                   | 状                   | 蒸                   | 裏                   | 植                   | 殖                  | 織                  | 職                  | 色                  | 食                  | 信                     | 寝                 | 心                  | 新                  | 森                  | 深                   | 申                  |
| ジョウ<br>なげ<br>九・10 | ジョウ<br>ジョウ<br>十一・19 | ジョウ<br>ジョウ<br>十四・84 | ジョウ<br>ジョウ<br>十五・52 | ジョウ<br>ジョウ<br>十四・63 | ジョウ<br>ジョウ<br>十五・58 | ジョウ<br>ジョウ<br>八・98 | ジョウ<br>ジョウ<br>九・76 | ジョウ<br>ジョウ<br>十・42 | ジョウ<br>ジョウ<br>十・33 | ジョウ<br>ジョウ<br>十四・5 | ジョウ<br>ジョウ<br>二・37    | ジョウ<br>ジョウ<br>九・5 | ジョウ<br>ジョウ<br>九・46 | ジョウ<br>ジョウ<br>四・61 | ジョウ<br>ジョウ<br>八・12 | ジョウ<br>ジョウ<br>十三・41 | ジョウ<br>ジョウ<br>三・13 |
| 情景                | 條件                  | 水蒸氣                 | 新島襄                 | 田植                  | 移植                  | 養殖                 | 自動織機               | 三色                 | 景色                 | 食事                 | 信頼                    | 用心                | 新聞                 | 新島襄                | 森林                 | 深呼吸                 | 写真                 |
| 九・10              | 十一・19               | 十四・84               | 十五・52               | 十四・63               | 十五・58               | 八・98               | 九・76               | 十・42               | 十・33               | 十四・5               | 二・37                  | 九・5               | 九・46               | 四・61               | 八・12               | 十三・41               | 三・13               |
| 身                 | 進                   | 針                   | 人                   | 仁                   | 図                   | 水                  | 数                  | 世                  | 瀬                  | 性                  | 成                     | 政                 | 整                  | 星                  | 晴                  | 正                   | 身                  |
| したしみ              | シン                  | シン                  | すすむ                 | はり                  | ニ                   | ジン                 | ズ                  | みず                 | スイ                 | みな                 | かず                    | かぞえる              | スウ                 | セ                  | セイ                 | セイ                  | セイ                 |
| 親類                | 自身                  | 進歩                  | 五人                  | 老人                  | 仁王                  | 設計図                | 水力電氣               | 水そこ                | 奥瀬村                | 制動                 | 性質                    | 成功                | 日本政府               | 土星                 | 明星                 | 正月                  | 親類                 |
| 十一・9              | 五・49                | 八・8                 | 十・34                | 十一・7                | 九・83                | 一・25               | 二・25               | 七・42               | 十二・107             | 十五・39              | 十・35                  | 二・24              | 五・6                | 十・54               | 八・99               | 九・105               | 三・103              |
| 清                 | 生                   | 精                   | 声                   | 製                   | 西                   | 誠                  | 青                  | 席                  | 昔                  | 石                  | 績                     | 責                 | 赤                  | 切                  | 接                  | 設                   | 節                  |
| まぎ                | セイ                  | きよらか                | (しみず)               | うまれる                | いきる                 | ショウ                | こえ                 | セイ                 | セイ                 | にし                 | セイ                    | サイ                | セイ                 | あお                 | セイ                 | セキ                  | むかし                |
| 正男                | 正方形                 | 清水選手                | 先生                  | 一生                  | 精神的                 | 歎声                 | 製材所                | 西洋                 | 東西                 | 誠意                 | 青年                    | 座席                | 石炭                 | 成績                 | 無責任                | 設計図                 | 季節                 |
| 十一・59             | 十二・49               | 十一・16               | 十二・82               | 四・4                 | 四・13                | 八・13               | 十三・18              | 二・38               | 十二・23              | 五・108              | 三・8                   | 八・4               | 九・81               | 十二・89              | 二・14               | 七・41                | 七・40               |

|                        |                                   |                            |                            |                 |                |                |  |                |               |          |      |       |       |      |       |      |       |      |        |       |       |      |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
|------------------------|-----------------------------------|----------------------------|----------------------------|-----------------|----------------|----------------|--|----------------|---------------|----------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|------|--------|-------|-------|------|-------|-------|--------|-------|--------|------|------|-------|------|-------|------|
| 相争巢                    | 早想倉創僧                             | 組祖全                        | 然善                         | 前銭              | 選              | 船線浅泉           | 戦川宣  | 千              |               |          |      |       |       |      |       |      |       |      |        |       |       |      |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
| ソウ<br>ソウ<br>す          | ソウ<br>は<br>や<br>い<br><br>ソウ<br>ソウ | くら<br>ソウ<br>ソウ<br>くむ<br>くみ | ゼン<br>ネン<br>ゼン<br>ゼン<br>まえ | ゼン<br>セン<br>えらぶ | セン<br>ふな<br>ふね | セン<br>ふね<br>セン | あ<br>さい<br>い<br>づ<br>み<br>た<br>た<br>か<br>う | セン<br>かわ<br>セン | ち<br>セン<br>さき |          |      |       |       |      |       |      |       |      |        |       |       |      |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
| 相談                     | 戦争中                               | 空想                         | 鎌倉時代                       | 鳥羽僧正            | 一組             | 先祖             | 天然眞珠                                       | 善人             | 自然            | 三十銭      | 前後   | 選手    | 荷船    | 汽船   | 東北本線  | 終戦後  | 宣教師   | 千ひろ  | 千年     |       |       |      |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
| 六・五五                   | 七・五九                              | 十三・三七                      | 十・三三                       | 十二・一〇七          | 四・六七           | 十二・五五          | 十・三八                                       | 十五・一〇六         | 十三・二〇         | 七・三五     | 五・一五 | 十二・九三 | 十二・七二 | 五・七  | 七・四六  | 十三・八 | 十一・一六 | 七・四三 | 十二・一〇九 | 十五・二四 | 四・一二三 | 十三・四 |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
| 代隊退待帯対体                | 太多他                               | 村卒続族速                      | 足測息則側像                     | 送走              | 草総窓            |                |  |                |               |          |      |       |       |      |       |      |       |      |        |       |       |      |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
| ダイ<br>タイ<br>タイ         | まつ<br>タイ<br>タイ                    | タイ<br>ふとい<br>(おおた)         | タ<br>タイ<br>おおい             | ソン<br>むら<br>ソツ  | ゾク<br>つづける     | ソク<br>ソク<br>ソク | あし<br>ソク                                   | いき<br>ソク       | かわ<br>ソク      | ゾウ<br>ソウ | おくる  | はしる   | ソウ    | くさ   | ソウ    | あい   | まいど   | あい   | まいど    | まいど   | まいど   | まいど  |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
| 一代                     | 合唱隊                               | 退院                         | 熱帯地方                       | 全体              | 太田道灌           | 太郎             | 太陽   | 村道             | 卒業生           | 速度       | 家族   | 不足    | 三角測量  | 法則   | 左側    | 画像   | 送別    | 雑草   | 総代     | 相手    | 相手    | 相手   |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
| 十一・一九                  | 六・一八                              | 八・八三                       | 九・七六                       | 十四・五七           | 十・六五           | 十・三二           | 十四・七八                                      | 十二・六           | 十・一六          | 八・三四     | 三・四三 | 十一・三八 | 三・二三  | 七・九  | 十一・二七 | 八・六  | 八・三四  | 六・六  | 一・二九   | 十五・五六 | 六・七六  | 十三・九 | 十五・三七 | 十三・五三 | 十五・一三〇 | 五・三八  | 二・五〇   | 九・三六 | 五・四  | 十一・四四 | 十・一九 | 十二・八二 |      |
| 筑竹築置池地知談男暖短炭探單樽谷達沢題第大台 | (つくば)                             | たけ                         | チク                         | チ               | ジ              | チ              | チ  | しる             | ダン            | お        | ナン   | あたたかい | ダン    | タン   | みじかい  | すみ   | タン    | タン   | タン     | たる    | コク    | たに   | タツ    | さわ    | ダイ     | ダイ    | (やまと)  | ダイ   | タイ   | タイ    | おおい  | タイ    | ダイ   |
| 筑波                     | 建築                                | 位置                         | 地面                         | 承知              | 相談             | 正男             | 下男   | 寒暖計            | 短日            | 探求       | 石炭   | 單位    | 小樽    | 山谷風  | 上達    | 福沢諭吉 | 新聞第一号 | 大会   | 大小     | 大会    | 舞台    | 舞台   | 舞台    | 舞台    | 舞台     | 舞台    | 舞台     | 舞台   | 舞台   | 舞台    | 舞台   | 舞台    | 舞台   |
| 十二・七五                  | 二・四五                              | 十・六四                       | 十五・一三                      | 十一・四一           | 六・一三           | 六・三六           | 十二・五八                                      | 四・四            | 六・五六          | 十一・五九    | 十・六六 | 三・六三  | 十二・三六 | 六・六一 | 七・七七  | 七・六七 | 五・三二  | 九・一四 | 八・三三   | 十五・六五 | 十四・七六 | 六・六七 | 十三・五六 | 十五・八一 | 六・六六   | 六・五六  | 十二・一〇五 | 八・一五 | 七・四八 | 二・一三  | 九・八七 | 六・四   |      |
| 停通追津直鳥長調町朝張帳著虫注柱畫中着茶   | テイ                                | ツウ                         | かよう                        | とおる             | おう             | つ              | チヨク  | (とぼ)           | (とつとり)        | とり       | チヨウ  | しらべる  | チヨウ   | まち   | あさ    | チヨウ  | チヨウ   | チヨウ  | あらわす   | チュウ   | むし    | チュウ  | はしら   | チュウ   | ひる     | チュウ   | なか     | チャク  | つき   | チャ    | チャ   | チャ    |      |
| 停車場                    |                                   |                            |                            |                 |                |                |  |                |               |          |      |       |       |      |       |      |       |      |        |       |       |      |       |       |        |       |        |      |      |       |      |       |      |
| 八・五八                   | 十・一七                              | 六・六九                       | 五・四六                       | 六・一三            | 十一・四七          | 十四・五           | 十二・一〇七                                     | 十二・五九          | 三・一〇          | 七・一六     | 二・四五 | 十一・一八 | 十一・七  | 六・九  | 四・四   | 六・四三 | 十四・五三 | 七・二五 | 十五・五四  | 十五・五一 | 八・一〇四 | 三・一八 | 七・九一  | 七・五八  | 六・一〇二  | 十三・一五 | 六・五〇   | 四・三一 | 二・二六 | 十五・二六 | 九・二一 | 八・四〇  | 五・三三 |



|       |       |       |        |        |        |       |       |
|-------|-------|-------|--------|--------|--------|-------|-------|
| 度努    | 都     | 登渡徒電  | 田殿     | 傳点轉店   | 天典鉄哲的梯 | 弟廷    | 庭底帝定  |
| ド     | ト     | ト     | ト      | デン     | テン     | テイ    | テイ    |
| 努力    | 都市    | 登山電車  | わたる    | デン     | あま     | おとうと  | 定期船   |
| 六・61  | 十三・25 | 十五・19 | 九・36   | 十二・55  | 八・26   | 四・83  | 十四・44 |
| 徳     | 得     | 道童堂   | 同      | 動働     | 頭豆     | 答等当燈湯 | 東投    |
| トク    | トク    | トク    | トク     | トク     | トク     | トク    | トク    |
| 徳島縣   | 得意    | 水道    | 童話     | 同時     | 自動車    | 頭上    | 四頭    |
| 十二・61 | 十三・8  | 十一・58 | 五・6    | 十二・104 | 九・19   | 六・34  | 五・19  |
| 能     | 之     | 念     | 年      | 熱任     | 入乳     | 日肉    | 二難    |
| ノウ    | ノ     | ネン    | ネン     | ネン     | ニウ     | ニウ    | ニウ    |
| 新島襄之墓 | 記念    | 二年生   | 熱心     | 無責任    | 入学     | 入口    | 牛乳    |
| 十・62  | 十五・72 | 五・83  | 三・109  | 二・59   | 十四・62  | 九・31  | 七・86  |
| 磐番    | 晩版    | 板反半判  | 発      | 八      | 畑箱麦    | 白博賠   | 賣買梅配  |
| パン    | パン    | パン    | パン     | パン     | パン     | パン    | パン    |
| 磐梯山   | 二番    | 版     | 反      | 半      | 判      | 出     | 八重    |
| 十五・56 | 十三・39 | 六・51  | 十二・111 | 十五・10  | 十三・13  | 四・24  | 七・79  |
| 波農    | 波     | 農     | 波      | 農      | 波      | 農     | 波     |
| ノウ    | ノウ    | ノウ    | ノウ     | ノウ     | ノウ     | ノウ    | ノウ    |
| 農夫    | 波     | 農     | 波      | 農      | 波      | 農     | 波     |
| 八・86  | 四・106 | 十二・75 | 十二・70  | 八・26   | 九・47   | 十・36  | 十三・17 |

|       |        |       |       |       |        |       |       |       |       |       |        |      |       |       |       |       |       |       |      |       |       |       |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
|-------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 舞負    | 父浮     | 普府    | 富婦    | 夫不    | 品秒     | 病評    | 表     | 氷標    | 百筆    | 必鼻    | 美飛     | 費皮   | 悲     |       |       |       |       |       |      |       |       |       |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| まう    | まける    | フ     | ち     | う     | フ      | フ     | フ     | フ     | フ     | フ     | うつくしい  | ヒ    | かなし   |       |       |       |       |       |      |       |       |       |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| 舞台    | 父兄     | 浮世絵   | 普通    | 首府    | 富士     | 看護婦   | 農夫    | 不自由   | 品物    | 学用品   | 一秒間    | 病氣   | 評判    | 地表    | 氷河    | 標準語   | 百人    | 必死    | 飛行機  | 費用    | かわ    | かなし   |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| 九・140 | 九・87   | 六・134 | 十一・44 | 四・113 | 十二・111 | 十三・11 | 十五・19 | 十一・46 | 十・21  | 八・86  | 四・123  | 五・28 | 四・76  | 八・34  | 十五・11 | 六・94  | 十二・62 | 十五・3  | 八・20 | 十五・24 | 十五・19 | 十五・41 | 三・26 | 十五・72 | 十五・61 | 十五・29 | 十二・45 | 十・64   | 五・40  | 六・106 | 十五・55 | 八・14  | 十二・7  |
| 便     | 返編     | 変     | 別     | 米閉    | 平      | 聞     | 文     | 分     | 物     | 腹福    | 服復     | 風部   |       |       |       |       |       |       |      |       |       |       |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| ベン    | かえす    | ヘン    | ヘン    | かわる   | ヘン     | わかれ   | ベツ    | マイ    | こめ    | とじる   | ビョウ    | たいら  | ヘイ    | きく    | きこえる  | ブン    | ふみ    | モン    | (もじ) | ブン    | ブン    | ブン    | ブツ   | モツ    | もの    | フク    | はら    | フク     | フク    | フウ    | かぜ    | ブ     |       |
| 便利    | 返事     | 編集    | 変化    | 区別    | げん米    | 平等院   | 平和    | 新聞    | 文雄    | 一文字   | 文字     | 作文   | 自分    | 三十分   | 動物    | 荷物    | 品物    | 山腹    | 幸福   | 國運回復  | 風景    | 部分    |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| 十二・47 | 四・130  | 四・29  | 十四・89 | 十五・36 | 十四・84  | 十五・52 | 十二・35 | 八・109 | 三・23  | 八・103 | 十二・104 | 九・77 | 五・44  | 十三・31 | 十三・7  | 六・56  | 十二・13 | 九・108 | 七・12 | 三・30  | 五・63  | 五・55  | 五・36 | 五・29  | 五・28  | 十四・76 | 七・14  | 八・7    | 九・63  | 十三・19 | 十・24  | 三・66  | 十・32  |
| 満     | 万末     | 枕     | 毎     | 妹     | 本幌     | 牧     | 北     | 望忘    | 豊法    | 方峯    | 宝包     | 母    | 墓     | 歩保    | 勉     |       |       |       |      |       |       |       |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| マン    | パン     | マン    | すえ    | まくら   | マイ     | マイ    | いもうと  | もと    | ホン    | ほろ    | ボク     | ホク   | きた    | のぞむ   | ボウ    | わすれる  | ゆたか   | ホウ    | とよ   | ホウ    | ホウ    | みね    | たから  | ホウ    | つつみ   | ボ     | はは    | はか     | あゆむ   | あるく   | ホン    | ベン    |       |
| 満足    | 万事     | 枕草子   | 毎日    | 弟妹    | 御木本幸吉  | 札幌    | 牧場    | 東北本線  | 望遠鏡   | 豊年    | 豊田佐吉   | 法廷   | 四方    | 津峯山   | 寶石    | 眞珠母貝  | 新島襄之墓 | 保険会社  | 勉強   |       |       |       |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| 八・38  | 十四・81  | 八・33  | 十五・4  | 十五・40 | 十六・27  | 十五・66 | 十六・70 | 十・39  | 二・52  | 十五・60 | 十三・17  | 七・46 | 三・8   | 八・85  | 六・100 | 十五・75 | 十三・19 | 十一・38 | 十・32 | 七・79  | 三・22  | 十二・61 | 八・38 | 七・55  | 十一・63 | 十・38  | 四・113 | 十五・72  | 九・30  | 六・13  | 十四・45 | 六・107 |       |
| 夜     | 門      | 問     | 目     | 木毛    | 孟      | 面綿    | 鳴迷    | 明     | 命     | 名     | 無夢     | 民    | 味     |       |       |       |       |       |      |       |       |       |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| よ     | かど     | モン    | とい    | モン    | モク     | め     | モク    | き     | け     | モウ    | おも     | メン   | わた    | メイ    | なる    | なく    | メイ    | あきらか  | ミヨウ  | メイ    | あかるい  | メイ    | いのち  | メイ    | な     | ブ     | ム     | ゆめ     | たみ    | ミン    | ミ     | あじ    | みちる   |
| 月夜    | 門出     | 問題    | 目算    | 材木    | 孟子     | 面影    | 正面    | 鹿鳴館   | 迷信    | 明日    | 文明     | 生命   | 有名    | 無事    | 無責任   | 夢殿    | 民ちゃん  | 全國民   | 意味   |       |       |       |      |       |       |       |       |        |       |       |       |       |       |
| 三・57  | 十五・124 | 三・15  | 十・15  | 六・78  | 十五・56  | 一・27  | 五・32  | 一・36  | 六・129 | 十二・8  | 十二・90  | 六・90 | 十五・30 | 十五・55 | 五・51  | 五・46  | 十三・8  | 十・45  | 九・71 | 九・23  | 五・10  | 十二・37 | 六・74 | 十・65  | 三・18  | 十二・60 | 十・31  | 十二・102 | 十二・23 | 九・20  | 十・49  | 九・36  | 十五・14 |

[illegible]

## 6 『いっく』『国語』

## (みんないいこ読本) 修正経過

国語読本『いっく』『国語』は昭和二十二年度から全学年で使用された。はじめの二年間にあたる昭和二十二年度と二十三年度は、他に国語教科書がなかったため、全国の小学生が、もれなく使用したことになる。文部省著作の、唯一の国語教科書であることから、民間の教科書と併存するかたちとなった昭和二十四年度以降とは切り離して考え、昭和二十二年・二十三年度の『いっく』『国語』を第六期国定読本として取り扱った。

昭和二十二年度使用本と二十三年度使用本の間の修正の有無はまだ知られていない。そこで『いっく』から『国語 第六学年中』までの十四巻について異同の実態を調査した。〔第六学年下〕は昭和二十三年から供給され始めている。

昭和二十二年度使用本と二十三年度使用本の特定は奥付に記載された日付により判断した。調査した教科書は、次のAとBを付したもので、Aが昭和二十二年度使用本と判断して本書で底本としているもの、Bが二十三年度使用本と判断したものである。Bが二十三年度使用本であると判断したのは、●印を付した二十四年度使用本と推定される本を確認することができたことによるが、『いっく』『国語』はこの確認ができなかった。

## A いっく 一

昭和二十二年二月二十日翻刻印刷 昭和二十二年三月十五日翻刻発行 昭和二十二年二月二十日文部省検査済 東京書籍 芦沢節氏蔵本

## B いっく 一

昭和二十二年十一月二十七日修正印刷 昭和二十二年十二月二十五日修正発行 昭和二十二年十一月十七日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本 (昭和二十三年度用第一次発行)の印刷あり。

●(使用年度を昭和二十四年度以降と推定させる奥付がある本は、まだ見ていない。)

## いっく 二

## A いっく 二

昭和二十二年九月三十日翻刻印刷 昭和二十二年十月十日翻刻発行 昭和二十二年九月三十日文部省検査済 東京書籍 芦沢節氏蔵本 昭和二十三年六月六日修正印刷 昭和二十三年六月三十日修正発行 昭和二十三年六月六日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本

## B いっく 二

●(使用年度を昭和二十四年度以降と推定させる奥付がある本は、まだ見ていない。)

## いっく 三

## A いっく 三

昭和二十二年二月二十一日翻刻印刷 昭和二十二年三月十五日翻刻発行 昭和二十二年二月二十一日文部省検査済 東京書籍 芦沢節氏蔵本

## B いっく 三

昭和二十二年十一月三十日修正印刷 昭和二十二年十二月二十五日修正発行 昭和二十二年十一月十七日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本 (昭和二十三年度用第一次発行)の印刷あり。

## ● いっく 三

昭和二十四年一月十三日修正翻刻印刷 昭和二十四年二月十日修正翻刻発行 昭和二十四

## こくご 四

## A こくご 四

年二月十日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本

昭和二十二年十月十四日翻刻印刷 昭和二十二年十月二十五日翻刻発行 昭和二十二年十月十四日文部省検査済 東京書籍 芦沢節氏蔵本

## B こくご 四

昭和二十三年六月六日修正印刷 昭和二十三年六月三十日修正発行 昭和二十三年六月六日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本  
昭和二十四年六月十五日修正翻刻印刷 昭和二十四年七月二十五日修正翻刻発行 昭和二十四年六月二日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本

## ● こくご 四

## 国語 第三学年上

## A 国語 第三学年上

昭和二十二年三月三日翻刻印刷 昭和二十二年三月二十日翻刻発行 昭和二十二年三月三日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本

## B 国語 第三学年上

昭和二十二年十二月八日修正印刷 昭和二十三年一月十日修正発行 昭和二十二年十一月十七日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本（昭和二十三年度用第一次発行）の印刷あり。

## ● 国語 第三学年上

昭和二十四年一月十五日修正翻刻印刷 昭和二十四年一月二十五日修正翻刻発行 昭和二十四年一月二十五日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本

## 国語 第三学年下

## A 国語 第三学年下

昭和二十二年十一月七日翻刻印刷 昭和二十二年十一月二十五日翻刻発行 昭和二十二年十一月七日文部省検査済 日本書籍 国立教育研究所蔵本

## B 国語 第三学年下

昭和二十三年八月六日修正印刷 昭和二十三年八月三十日修正発行 昭和二十三年八月六日文部省検査済 日本書籍 芦沢節氏蔵本  
昭和二十四年六月五日修正翻刻印刷 昭和二十四年六月三十日修正翻刻発行 昭和二十四年六月三十日文部省検査済 日本書籍 財団法人教科書研究センター蔵本

## ● 国語 第三学年下

## 国語 第四学年上

## A 国語 第四学年上

昭和二十二年三月五日翻刻印刷 昭和二十二年三月三十一日翻刻発行 昭和二十二年三月五日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本

## B 国語 第四学年上

昭和二十二年十二月一日修正印刷 昭和二十二年十二月二十日修正発行 昭和二十二年十一月十七日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本（昭和二十三年度用第一次発行）の印刷あり。

## ● 国語 第四学年上

昭和二十三年十一月一日修正翻刻印刷 昭和二十三年十二月八日修正翻刻発行 昭和二十三年十二月八日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本（昭和二十四年度第一次発行）の印刷あり。

## 国語 第四学年中

## A 国語 第四学年中

昭和二十二年五月三十一日翻刻印刷 昭和二十二年七月五日翻刻発行 昭和二十二年五月

三十一日文部省検査済 東京書籍 国立教育研究所蔵本

B 国語 第四学年中

● 国語 第四学年中

昭和二十三年四月二日修正印刷 昭和二十三年四月二十五日修正発行 昭和二十三年四月二日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本  
昭和二十四年六月一日修正翻刻印刷 昭和二十四年六月二十五日修正翻刻発行 昭和二十四年五月十七日文部省検査済 東京書籍 財団法人教科書研究センター蔵本

国語 第四学年下

A 国語 第四学年下

昭和二十二年十二月十八日翻刻印刷 昭和二十三年一月十日翻刻発行 昭和二十二年十二月十八日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本

B 国語 第四学年下

● 国語 第四学年下

昭和二十三年八月六日修正印刷 昭和二十三年八月三十日修正発行 昭和二十三年八月六日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本  
昭和二十四年八月五日修正翻刻印刷 昭和二十四年八月二十五日修正翻刻発行 昭和二十四年六月二日文部省検査済 東京書籍 財団法人教科書研究センター蔵本

国語 第五学年上

A 国語 第五学年上

昭和二十二年三月十一日翻刻印刷 昭和二十二年三月二十日翻刻発行 昭和二十二年三月十一日文部省検査済 東京書籍 芦沢節氏蔵本

B 国語 第五学年上

昭和二十二年十二月十三日修正印刷 昭和二十二年十二月二十五日修正発行 昭和二十二年

年十一月十七日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本（昭和二十三年度用第一次発行）の印刷あり。）

● 国語 第五学年上

昭和二十三年十二月二十五日修正翻刻印刷 昭和二十四年一月十日修正翻刻発行 昭和二十四年一月十日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本（昭和二十四年度第一次発行）の印刷あり。）

国語 第五学年中

A 国語 第五学年中

昭和二十二年六月三十日翻刻印刷 昭和二十二年七月二十日翻刻発行 昭和二十二年六月三十日文部省検査済 東京書籍 芦沢節氏蔵本

B 国語 第五学年中

● 国語 第五学年中

昭和二十三年四月二日修正印刷 昭和二十三年四月二十五日修正発行 昭和二十三年四月二日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本  
昭和二十四年六月一日修正翻刻印刷 昭和二十四年六月二十五日修正翻刻発行 昭和二十四年五月十七日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本

国語 第五学年下

A 国語 第五学年下

昭和二十三年一月七日翻刻印刷 昭和二十三年一月三十日翻刻発行 昭和二十三年一月七日文部省検査済 日本書籍 国立教育研究所蔵本

B 国語 第五学年下

昭和二十三年八月十八日修正印刷 昭和二十三年九月十日修正発行 昭和二十三年八月十八日文部省検査済 日本書籍 芦沢節氏蔵本

## ● 国語 第五学年下

昭和二十四年八月二十日修正翻刻印刷 昭和二十四年九月十日修正翻刻発行 昭和二十四年九月十日文部省検査済 日本書籍 財団法人教科書研究センター蔵本

## ● 国語 第六学年上

## A 国語 第六学年上

昭和二十二年三月二十日翻刻印刷 昭和二十二年四月十日翻刻発行 昭和二十二年三月二十日文部省検査済 東京書籍 芦沢節氏蔵本 昭和二十三年一月六日修正印刷 昭和二十三年一月二十日修正発行 昭和二十二年十一月十七日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本（昭和二十三年度用第一次発行）の印刷あり。）

## ● 国語 第六学年上

昭和二十三年十二月二十五日修正翻刻印刷 昭和二十四年一月十日修正翻刻発行 昭和二十四年一月十日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本

## ● 国語 第六学年中

## A 国語 第六学年中

昭和二十二年九月六日翻刻印刷 昭和二十二年九月二十日翻刻発行 昭和二十二年九月六日文部省検査済 東京書籍 芦沢節氏蔵本

## B 国語 第六学年中

昭和二十三年六月六日修正印刷 昭和二十三年六月二十五日修正発行 昭和二十三年六月六日文部省検査済 東京書籍 筑波大学蔵本

## ● 国語 第六学年中

昭和二十四年六月一日修正翻刻印刷 昭和二十四年六月二十五日修正翻刻発行 昭和二十四年五月十八日文部省検査済 東京書籍 東書文庫蔵本

## 一 異同一覧

第六期の教科書は、用紙・印刷の事情により、句読点をはじめとする符号の脱落が多い。ここでは修正によるものか印刷上の違いかが明らかにできないものは取り上げなかった。

本書では底本に昭和二十二年使用本を用いているが、一部、誤植と思われるもので二十三年度に改められているものは、二十三年度使用本にしたがっている。この箇所については、表中で＊を付して示した。

巻末の新出漢字の一覧表の異同は、次の「二」に別にまとめた。

修正に関わる事柄を次にあげる。

○全体的には、二十二年度使用本における分かち書き・送りがな・使用漢字の不統一の修正、内容を正しくするための修正が多い。

○誤植の訂正では、『国語 第三学年下』四十七ページの「ませた」が二十三年度に「ませに」に修正された例がある。

○『国語 第五学年下』六十八ページでは、二十二年度使用本で一行目の「なんの役にもたたない。」がそっくりぬけているが、二十三年度使用本で修正された。

○『国語 第三学年上』十五ページの「三十銭」から「おなじりよう金」の修正は、郵便料金の改訂による。封書の料金は、昭和二十一年七月二十五日から三十銭であったのが、二十二年四月一日に一円二十銭に改訂され、二十三年七月十日からは五円になった。

○『国語 第四学年中』の「五ヶ月」をはじめとする「ヶ」は「か」に改められたものが多いが、昭和二十三年度使用本にも「ヶ」をのこしているものもある。

○挿し絵自体の修正は『国語 第四学年中』二十二ページにみられるが、二枚の挿し絵の入れ替えが『国語 第四学年下』以降、数箇所みられる。二十三年度使用本の位置が本文に沿っているものである。

| ページ | 行 |
|-----|---|
| 22  | 9 |
| 14  | 8 |

昭和二十二年  
度使用本  
おまねきに  
あずかりました。

昭和二十三年  
度使用本  
おまねきを  
うけました。

## 『くく』 三』

| ページ | 行 |
|-----|---|
| 68  | 9 |
| 67  | 4 |
| 52  | 1 |
| 40  | 6 |

昭和二十二年  
度使用本  
ほうい  
くらくなり

昭和二十三年  
度使用本  
ほういでも  
くらくなり

## 『くく』 二』

| ページ | 行  |
|-----|----|
| 45  | 10 |
| 14  | 2  |

昭和二十二年  
度使用本  
もちもの。  
しらべています。

昭和二十三年  
度使用本  
もちもの。  
しらべています。

## 『くく』 一』

○『国語 第五学年下』では写真の入れ替えと裏焼きの修正がある。二十二年  
度使用本では、百七ページに東大寺南大門の金剛力士立像  
(昨形)の裏焼きの写真を、百八ページに東大寺南大門の金剛力士立  
像(阿形)の裏焼きの写真をのせているが、二十三年度使用本では  
裏焼きを修正し、昨形と阿形を入れ替えた。同百十ページ詩絵書棚  
の写真も二十二年度使用本で裏焼きであったのが二十三年度使用本  
では修正された。

○二十二年度使用本と二十三年度使用本のあいだの異同で、二十三年  
度使用本が常に正しいとは限らない。たとえば『国語 第四学年下』  
二十三年度使用本七十五ページの冒頭には、誤って同じ本の九十八  
ページ十一行目がそっくりそのまま印刷されている。

| ページ | 行  |
|-----|----|
| 96  | 4  |
| 64  | 11 |
| 32  | 8  |
| 32  | 7  |
| 19  | 4  |
| 18  | 11 |
| 16  | 3  |
| 15  | 8  |
| 14  | 6  |

昭和二十二年  
度使用本  
改札口  
三十銭  
配たつをする人  
かきをかけられました。  
二日めのあさ  
お米を  
います  
だれのおかげだろ  
う。さあ、考  
えてこ  
らん。  
ほんとうは、ま  
ひわというの  
ですが、ふつ  
うは、ひわ、ひ  
わといってい  
ます。  
いまいに、

昭和二十三年  
度使用本  
改札がかり  
おなじりよう  
金  
あつめる人  
しっかりと、  
ふうをされま  
した。  
つぎのあさ  
お米などを  
いるのです  
だれのおかげ  
だろ  
う。  
こんなに、げ  
んきでそだつ  
たのだから、  
いまいに、も  
っと羽色もき  
れいになり、

## 『国語 第三学年上』

| ページ | 行 |
|-----|---|
| 122 | 2 |
| 103 | 4 |
| 97  | 3 |
| 77  | 1 |
| 16  | 7 |

昭和二十二年  
度使用本  
ついで  
なつ  
ころがし  
ます  
「うらしまさ  
ん」(行頭にあ  
る)  
みんなの手  
で

昭和二十三年  
度使用本  
できてる  
夏  
ころがしま  
す  
「うら」ま  
では三行め  
みんなの  
手  
で

## 『くく』 四』

| ページ | 行  |
|-----|----|
| 108 | 6  |
| 57  | 3  |
| 46  | 8  |
| 31  | 10 |
| 29  | 3  |

昭和二十二年  
度使用本  
そのま  
ま  
それ  
も  
なり  
ませ  
ん  
その  
かた  
がた  
は  
その  
ま  
ま

昭和二十三年  
度使用本  
そのま  
ま  
それは  
かわ  
いそ  
う  
だん  
を  
(なし)  
おかけ  
で



## 『国語 第三学年下』

| ページ | 行      |                    |                   |
|-----|--------|--------------------|-------------------|
| 70  | 3<br>4 | 昭和二十二年<br>度使用本     | 昭和二十三年<br>度使用本    |
| 47  | 8      | 〔行頭、一字分<br>下げていない〕 | 〔行頭、一字分<br>下げてある〕 |
| 7   | 1<br>2 | まぜた                | まぜに               |
| 70  | 3<br>4 | 目もはなも口も            | 目もはなも、口も          |

## 『国語 第四学年上』

| ページ | 行      |                |                |
|-----|--------|----------------|----------------|
| 40  | 5      | 昭和二十二年<br>度使用本 | 昭和二十三年<br>度使用本 |
| 68  | 7<br>8 | 三郎は            | さぶろうは          |
| 98  | 7      | にほかなりませ<br>ん   | なのです           |
| 68  | 7<br>8 | 20日め           | 21日め           |

## 『国語 第四学年中』

| ページ | 行      |                     |                              |
|-----|--------|---------------------|------------------------------|
| 14  | 3      | 昭和二十二年<br>度使用本      | 昭和二十三年<br>度使用本               |
| 14  | 5      | せどのあおぎり<br>の木       | 庭のまつの木<br>のかれ枝               |
| 14  | 5      | 親ぜみが、あの<br>ほそくどがった口 | 親ぜみのほらの<br>さきにあるほそく<br>どがったく |
| 14  | 10     | あおぎり                | まつ                           |
| 16  | 1      | あおぎり                | まつの木                         |
| 18  | 7<br>8 | すずめもねこも             | すずめなども                       |
| 18  | 8      | こないから               | こないの                         |
| 19  | 1      | わすか二三ヶ月<br>で        | 二年で                          |
| 21  | 5      | ねこや、すずめ<br>に        | ひきがえるなど<br>に                 |
| 21  | 6      | ささだけ                | くわの木                         |
| 21  | 10     | まえ足                 | 足                            |
| 22  | 絵      | 〔虫が枝に乗る<br>かたち〕     | 〔虫が枝にぶら<br>さがるかたち〕           |
| 23  | 絵      | 〔虫が皮に乗る<br>かたち〕     | 〔虫が皮にぶら<br>さがるかたち〕           |
| 24  | 3      | してきます               | しています                        |
| 24  | 5      | あおぎり                | まつ                           |

## 『国語 第四学年下』

| ページ | 行  |         |         |
|-----|----|---------|---------|
| 25  | 4  | 秋       | 秋のすえ    |
| 25  | 7  | ささだけ    | 枝のさき    |
| 29  | 3  | 西の岸     | 東の岸     |
| 32  | 2  | 東の岸     | 西の岸     |
| 32  | 3  | 西の岸     | 東の岸     |
| 34  | 10 | 五ヶ月や八ヶ月 | 五か月や八か月 |
| 35  | 5  | 二九・五光年  | 二十七光年   |
| 35  | 6  | やく三十年   | 二十七年    |
| 58  | 6  | 「わあつ。」  | 「ワアッ。」  |
| 64  | 2  | ないたり    | 鳴いたり    |
| 99  | 1  | あつい日    | 暑い日     |
| 99  | 3  | あけ、     | あけて、    |
| 102 | 5  | 60日め    | 57日め    |

## 『国語 第四学年下』

| ページ | 行         |                          |  |
|-----|-----------|--------------------------|--|
| 26  | 2         | 昭和二十二年<br>度使用本           | 昭和二十三年<br>度使用本                           |
| 26  | 5         | かあさんがぼん<br>やりみえるかや<br>の中 | 麦ふむやみだ<br>れし麦の夕日か<br>げ                   |
| 26  | 5         | 麦ふむやみだ<br>れし麦の夕日か<br>げ   | かあさんがぼん<br>やりみえるかや<br>の中                 |
| 61  | 絵         | 〔たばこを吸う<br>やまねこ〕         | 〔少年とどんぐり〕                                |
| 75  | 0         |                          | たかき「だから、<br>あいこだ。」〔98<br>ページ11行めと<br>重複〕 |
| 95  | 8         | やま                       | *やまだ                                     |
| 98  | 9         | じょうぎ                     | すみを                                      |
| 98  | 10        | すみを                      | じょうぎを                                    |
| 115 | 上辺の<br>模様 | 〔実がなつたつ<br>るのデザイン〕       | 〔花のデザイン〕                                 |
| 116 | 〃         | 〔花のデザイン〕                 | 〔実がなつたつ<br>るのデザイン〕                       |
| 117 | 〃         | 〔実がなつたつ<br>るのデザイン〕       | 〔花のデザイン〕                                 |
| 118 | 〃         | 〔花のデザイン〕                 | 〔実がなつたつ<br>るのデザイン〕                       |

## 『国語 第五学年上』

| ページ | 行 |                |                |
|-----|---|----------------|----------------|
| 14  | 2 | 昭和二十二年使用本      | 昭和二十三年使用本      |
| 28  | 絵 | 〔編み物をする女の子〕    | 〔くもの巣を見あげる男の子〕 |
| 29  | 絵 | 〔くもの巣を見あげる男の子〕 | 〔編み物をする女の子〕    |
| 34  | 6 | 横糸はおさによって、     | 横糸はひによって、      |
| 40  | 5 | 少くとも           | 少くとも           |

## 『国語 第五学年中』

| ページ | 行  |   |  |
|-----|----|---|--|
| 6   | 5  | 昭和二十二年使用本   | 昭和二十三年使用本  |
| 6   | 5  | ぼくはトップ  | ぼくは、パウ   |
| 7   | 3  | トップ   | パウ   |
| 10  | 7  | トップ   | パウ   |
| 11  | 4  | 「ピリピリ。」と、ふえが鳴って、ふいに大きな、勇ましいかけ声が聞えて、                       | パウ   |
| 11  | 図  | トップ   | パウ   |
| 27  | 8  | 百文はらうと、おもしろい藝をしてみせてください。中には、正月だというので、そのうえに十二文はずむ者もありましたが、 | どこの家でも、百文だして、おもしろい舞を舞わせましたが、舞わせない家でも、十二文あたえるのがならわしでした。 |
| 27  | 10 | 十二文さえありませんでした。そんなわずかな                                     | 十二文さえありませんでした。けれども、そんなわずかな                             |
| 39  | 5  | 冬   | (9行めに移動)   |
| 46  | 6  | 北海道   | 北海道  |

## 『国語 第五学年下』

| ページ | 行 |                |                  |
|-----|---|----------------|------------------|
| 13  | 3 | 昭和二十二年使用本      | 昭和二十三年使用本        |
| 17  | 4 | 三きやくをすえ、がかを立てて | がかを立て、木のかぶにこしかけて |
|     |   | 三きやく           | 木のかぶ             |

## 『国語 第六学年上』

| ページ | 行  |                      |                        |
|-----|----|----------------------|------------------------|
| 23  | 3  | 兄                    | 義理の兄                   |
| 24  | 5  | 一年三ヶ月                | 一年三ヶ月                  |
| 31  | 5  | 三ヶ月                  | 三ヶ月                    |
| 48  | 7  | こうえんでも教室でも、          | こうえんでも、教室でも、           |
| 61  | 7  | 津峯                   | 津峯                     |
| 68  | 0  | (なし)                 | *なんの役にもたない。            |
| 82  | 2  | 四ヶ月                  | 四ヶ月                    |
| 82  | 2  | 十一ヶ国                 | 十一ヶ国                   |
| 98  | 10 | モールスト                | *モールス                  |
| 104 | 2  | 作られた                 | *作られた                  |
| 107 | 写  | 〔金剛力士立像(吡形)。実物の左右反転〕 | 〔二十二年度本108ページの写真の左右反転〕 |
| 108 | 写  | 〔金剛力士立像(阿形)。実物の左右反転〕 | 〔二十二年度本107ページの写真の左右反転〕 |
| 108 | 4  | 右                    | 上                      |
| 110 | 写  | 〔二十二年度本の左右反転〕        |                        |

## 『国語 第六学年上』

| ページ | 行  |                |              |
|-----|----|----------------|--------------|
| 2   | 4  | 智識             | 知識           |
| 7   | 8  | 「人生よ、長くそこにあれ。」 | 「人生よ、長くそこにあれ |
| 14  | 7  | いつもその焦点に       | その焦点の一つに     |
| 19  | 1  | ほほえみ           | ほおえみ         |
| 26  | 6  | ペキン            | ペーピン         |
| 27  | 11 | 少い             | 少ない          |
| 33  | 2  | ペキン            | ペーピン         |
| 49  | 9  | ハ・ハ・ヒ          | ハ・ハ・ハイ       |
| 50  | 4  | ハ・ハ・ヒ          | ハ・ハ・ハイ       |
| 53  | 1  | 七 ある画像         | 〔題名抜け〕       |

## 『国語 第六学年中』

| ページ     | 行                 | 昭和二十二年<br>度使用本 | 昭和二十三年<br>度使用本    |
|---------|-------------------|----------------|-------------------|
| 4<br>41 | ルイ・フィリップ          |                | シャルル・ルイ・フィリップ     |
| 25<br>1 | 「タバコ」ということばが、     |                | 「タバコ」ということばが、     |
| 25<br>8 | 「ことばのおたんじょう」などという |                | 「ことばのおたんじょう」などという |
| 27<br>7 | 長いあいだ             |                | 長い間               |
| 38<br>2 | いい音がする。           |                | 音がする。             |
| 38<br>4 | ああ、聞える、           |                | 聞える、              |
| 38<br>7 | 立ちあがって、           |                | （削除）              |
| 57<br>絵 | 「三角帽子をかぶった人の絵」    |                | 「冠をつけた、ひげの老人の絵」   |
| 58<br>絵 | 「冠をつけた、ひげの老人の絵」   |                | 「三角帽子をかぶった人の絵」    |

## 二 新出漢字の一覧表の異同

| 書名       | 「異同な<br>し」○印 | 22年度用<br>にあり、<br>23年度用<br>にない字 | 22年度用<br>になく、<br>23年度用<br>にある字 | 23年度用<br>で、○で<br>囲んである<br>字 | 23年度用<br>で追加<br>された文章 |
|----------|--------------|--------------------------------|--------------------------------|-----------------------------|-----------------------|
| こくご一     | ○            |                                |                                |                             |                       |
| こくご二     | ○            |                                |                                |                             |                       |
| こくご三     | ○            |                                |                                |                             |                       |
| こくご四     |              | 夏 <sup>(124)</sup> ※1          | 夏 <sup>(7)</sup>               | 枝降                          | 別記(1)                 |
| 国語 第三学年上 |              | なし                             | 労                              | 晩暖困骨                        | (2)                   |
| 国語 第三学年下 |              | なし                             | なし                             |                             |                       |
| 国語 第四学年上 | ○            |                                |                                |                             |                       |
| 国語 第四学年中 |              | なし                             | なし                             | 頼帝乳閉                        | (3)                   |
| 国語 第四学年下 |              | 横                              | なし                             | 劇針舞泉探                       | (4)                   |
| 国語 第五学年上 |              | 着 ※2                           | 看                              |                             |                       |
| 国語 第五学年中 |              | なし                             | なし                             | 紅梅                          | (5)                   |
| 国語 第五学年下 |              | 義 <sup>(115)</sup>             | 義 <sup>(23)</sup>              | 荒與影簡裏卷                      | (6)                   |
| 国語 第六学年上 | ○            |                                | なし                             | 哲蒸割條                        | (7)                   |
| 国語 第六学年中 |              |                                |                                |                             |                       |

## 別記

(1) ○のしるしのついたかん字は、とう用かん字べつびょう(きょういくかん字)にないかん字です。

(2) ○でつんだかん字は、「とう用かん字べつ表」(教育かん字)にはいつていないかん字です。

(3) (2)に同じ。

(4) (2)に同じ。

(5) ○でつんだかん字は、「とう用かん字別表」(教育かん字)にはいつていないかん字です。

(6) (5)に同じ。

(7) ○でつんだかん字は、「当用漢字別表」(教育漢字)にはいつていない漢字です。

※1 ( )内の数字は掲出ページを示すもの。以下、「義」以外では省略。

※2 「看」の誤植。

## (参考) 提出された漢字と当用漢字別表との関係

第六期底本で提出された漢字(『国定読本用語総覧10』『解説』参照)と昭和二十三年二月告示の「当用漢字別表」(教育漢字)との関係は次の通りである。(ここでは現行の字体で示す。)

## 1 当用漢字別表外字

## a 新出漢字の一覧表に提出してある字(五九字)

豆丘弓矢 (こくご三)

枝降 (こくご四)

札羽 (国語 第三学年上)

晩暖困骨 (国語 第三学年中)

渡腹砂座胸宝巢甲乙裁廷 (国語 第四学年上)

頼帝乳閉

(国語 第四学年中)

劇針舞泉探

(国語 第四学年下)

呼窓看坑吸珠核殖灣狂

(国語 第五学年上)

紅梅

(国語 第五学年中)

荒与影簡裏卷

(国語 第五学年下)

焦賠償

(国語 第六学年上)

哲蒸割儀映

(国語 第六学年中)

江

(国語 第六学年下)

## b 新出漢字の一覧表にはなく本文に振り仮名なしで出現する字(八字)

舟

(国語 第四学年下)

穴昔傾

(国語 第五学年下)

普床寝

(国語 第六学年上)

忘

(国語 第六学年下)

## c 挿し絵にだけ出現する字(二字)

郵

(こく) 三)

龍

(こく) 四)

## 2 教育漢字

## a 新出漢字の一覧表になく本文に振り仮名なしで出現する字(十七字)

勞

(国語 第三学年上)

者重

(国語 第四学年中)

輪取

(国語 第五学年上)

退

(国語 第五学年中)

鼻慣

(国語 第五学年下)

定

(国語 第六学年中)

政著状守筆使善課

(国語 第六学年下)

## b 新出漢字の一覧表になく本文に振り仮名付きで出現する字(十二字)

京

(国語 第五学年上)

宮富

(国語 第五学年中)

徳良倉治

(国語 第五学年下)

志

(国語 第六学年上)

氏応創墓

(国語 第六学年下)

## c 新出漢字の一覧表にも本文にも提出されない字(二十七字)

悪庄案委胃異遺壹印永泳宮益液延塩央往可仮何価過我芽菰革確額株完  
 勸幹管眼基貴疑逆久旧救居挙許供競局極玉均勤禁君群型欠犬券兼檢絹  
 限減蔽己固故個庫誤后孝効厚皇耕構興講穀混査差再災妻採済祭財罪昨  
 策刷参蚕酸仕司至始視資示似兒借釈弱酒需収拾就衆従述処除招昭称証  
 賞常臣推是省勢聖静税積折古絶專素造増蔵俗属率存孫尊損打貸態団断  
 忠貯丁賜質低提程適敵展討党統銅導毒届式認燃納派破倍犯飯比否肥非  
 備俵票貧付布武副複仏粉奮兵陞辺弁補放報防買暴未脈務盟訳葉輪余預  
 様浴欲律略領緑臨連録

## 後 記 ——— 編集の経過と担当者

第六期国定読本『こくご』『國語』（いわゆる みんないいこ読本）の総索引作成作業は、平成五年五月から開始された。第一期、第二期はカードを利用した手作業方式であったが、第三期からはコンピュータ利用方式に切り換え、文脈の長さ指定の半自動化など、次第に効率化を進めてきた。さらに五期からは一部をKWICにすることにより、一層の省力化を行った。それが利用者の方々にとって大きな不便にならないことを念じている。

期を追って用例数が増え、第五期がおそらく最高になるものと思つたところ、予期に反して第六期はさらに一千例ほど上回った。第一期の約四倍の用例を二巻に収めるために、極力文脈を切り詰めてきたが、その欠を補うために平成三年からフロッピー版本文の頒布を開始した。手作業で用語総覧を作成した二期と二期についても底本の機械可読化を行い、今回の六期を加えて、一六期すべての本文を提供することが可能になった。これまでのところ、要求件数は百数十件である。

「用語総覧10」と「同11」の二巻からなる第六期国定読本用語総覧には

見出し 九、六一四

参照見出し（後要素） 六五七

用例 一二六、九三五

が収録されている。用例数が多いわりに異なり語数は少なく、戦前と戦後の差が際立っている。この点は漢字についても同様である。

残るは巻12（総集編）のみであるが、これについては未確定ながらほぼ以下の内容を予定している。

一 書物 第一六期のすべての見出しと期ごとの出現頻度を収めた語彙表。

## 二 電子ファイル（CD-ROM）

- (1) 右と同内容の語彙表  
(2) 一六期のすべての文脈付き用例を五十音順、出典番号順に配列したもの（KWIC形式）

第六期に関する作業にたずさわったのは次の通りである。

国語辞典編集室室長 木村睦子

同調査員 林大・貝美代子・久池井紀子・山田雅一・乾とね

また、アルバイタの犬飼芳子・木村睦子・高比良富江・小川民がこの作業を助けた。

（平成八年四月 木村睦子記す）

# CONCORDANCE 11 TO KOKUTEI TOKUHON

1. CONCORDANCE 11 is the result of work done by the Section for Dictionary Research of the NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE.
2. CONCORDANCE 11 is published as part of the basic research materials to be used for the Historical Japanese Dictionary being planned.
3. Computer-aided concordance making was adopted from Vol.4 in the series of concordances to *Kokutei Tokuhon*, and an optical character reader was also used.
4. *Kokutei Tokuhon* was a series of Japanese textbooks edited six times by the Ministry of Education. These were used in all elementary schools nationwide for 45 school years from April 1904 to March 1949.
5. CONCORDANCE 11 covers the sixth *Kokutei Tokuhon*. The original textbooks in fifteen volumes were used for the six grades of compulsory education from April 1947 to March 1949.
6. The sixth *Kokutei Tokuhon* was revised at least once. The texts chosen for CONCORDANCE 11 are the earliest versions used in 1947, and are now in the possession of three organs and one person separately.
7. CONCORDANCE 11 covers the latter half of the vocabulary of the sixth *Kokutei Tokuhon* or words from *TE* (㇏) to *N* (㇏); the first half of the words from *A* (あ) to *TU* (㇏) is covered by CONCORDANCE 10.
8. The number of words and quotations in CONCORDANCE 10 and 11 is as follows:
  - 9,614 entry words;
  - 657 reference words (second element of compounds); and
  - 126,935 quotations.
9. Information on the sixth series *Kokutei Tokuhon* is explained in the introduction in CONCORDANCE 10. The appendix in CONCORDANCE 11 contains lists of *kanji*, explanations of illustrations containing letters, and the process of text-book revision.

国立国語研究所 国語辞典編集資料11

国定読本用語総覧11 第六期 てゝん

平成八年六月

国立国語研究所

〒一一五 東京都北区西が丘三丁目九番一四号

電話 (〇三) 三九〇〇三二一 (代表)

本書の市販品発行所

〒一〇一 東京都千代田区三崎町二丁目二十二番十四号

電話 (〇三) 三三三〇九四二

株式会社 三省堂

© The National Language Research Institute 1996  
Printed in Japan

UDC (075.2) 001.86: 809.56 NDC 375.933